『G』の日記

アゴン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気が付いたら『Ｇ』に乗ってた!?

これはぶっ飛んだ状況に晒されながらも何とか懸命に生きていこうとする青年が記された日記の物語である。

今作品は破界篇からスタート。勘違い要素は若干としてあます。

目次

破界篇

その1 …… 1
その2 …… 11
その3 …… 20
その4 …… 30
その5 …… 43
その6 …… 56
その7 …… 67
その8 …… 76
その⑨ …… 88
その10 …… 98
その11 …… 108

幕章

その12 …… 120
その13 …… 132
その14 …… 145
その15 …… 153
その16 …… 167
その17 …… 176
その18 …… 190

幕間その1 …… 206
幕間その2 …… 215
幕間その3 …… 227

主人公台詞集＋α ～破界篇～ …… 238

主人公台詞集＋α　～再世篇～　250
主人公台詞集＋α　～再世篇・2～　265
◇主人公紹介　279
再世篇
その19　284
その20　297
その21　307
その22　319
その23　328
その24　339
その25　351
その26　367
その27　381
その28　396
その29　416
その30　431
その31　447
その32　462
その33　474
その34　490
その35　503
その36　512
その37　524
その38　536

その39 548
その40 561
その41 572
その42 584
その43 596
その44 606
その45 616
その46 627
その47 640
その48 649
その49 前編 662
その49 後編 686
その50 702
その51 716
その52 前編 728
その52 中編 740
その52 後編 753
その53 前編（仮） 764
その53 中編 772
その53 後編 788
その54 803
その55 814
その56 824
その57 835
その58 851
その59 前編 864

その59 後編 875
その60 889
その61 901
その62 前編 914
その62 後編 923
その63 934
その64 942
その65 950
その66 957
その67 965
その68 977
その69 986
その70 997
その71 1011
幕章Ⅱ
番外編 〜リモネシア恋模様〜 1025
幕間その1（仮） 1035
幕間その2（仮） 1043
幕間その3 1051
時獄篇
その72 1058
その73 1064
その74 1073
その75 1081
その76 1089

その77 98
その78 106
その79 111
その80 119
その81 前編 121
その81 後編 129
その82 131
その83 142
その84 153
その85 165
その86 173
その87 180
その88 187
その89 198
その90 206
その91 219
その92 228
その93 238
その94 248
その95 257
その96 268
その97 277
その98 289
その99 295
その100 301
その101 312

その102 ―― 349
その103 ―― 363
その104 前編 ―― 373
その104 後編 ―― 382
その105 ―― 402
幕間 ―― 425
その106 ―― 433
その107 ―― 445
クリスマス番外編　ご注文は蒼スマですか？ ―― 460
その108 ―― 466
その109 ―― 478
その110 ―― 488

幕章Ⅲ
その111 ―― 500
その112 ―― 511
その113 ―― 521
その114 ―― 534
特殊台詞集＋α ―― 548
閑話 ―― 571
連獄篇
その115 ―― 576
その116 ―― 584
その117 ―― 592
その118 ―― 607
その119 ―― 621

その120 ―― 640
その121 ―― 654
その122 ―― 661
その123 ―― 669
その124 ―― 679
その125 ―― 690
その126 ―― 700
その127 ―― 708
その128 ―― 719
予告 ―― 733
天獄篇
その129 ―― 740
その130 ―― 751
その131 ―― 765
その132 ―― 776
その133 ―― 785
その134 ―― 798
その135 ―― 808
その136 ―― 820
その137 ―― 832
その138 ―― 840
その139 ―― 847
その140 ―― 856
その141 ―― 865
その142 ―― 874
その143 ―― 881

その144 ―― 1887
その145 ―― 1900
その146 ―― 1919
その147 前編 ―― 1922
その147 後編 ―― 1933
その148 ―― 1953
その149 ―― 1967
その150 ―― 1977
その151 ―― 1992
その152 ―― 2004
その153 ―― 2013
その154 ―― 2012
その155 ―― 2031
その156 ―― 2043
その157 ―― 2052
その158 ―― 2065
その159 ―― 2078
その160 ―― 2084
その161 ―― 2092
その162 ―― 2100
その163 ―― 2110
その164 ―― 2117
その165 ―― 2134
その166 ―― 2149
その167 ―― 2159
その168 ―― 2174

その168.5 183
その169 194
その170 204
その171 211
その172 219
特別編　その??? 223
その173 238
その174 248
その175 261
その176 270
その177 278
その178 287
その179 292
その180 304
その181 323
その182 325
その183 334
嘘予告 348
その184 353
その185 365
その186 390
その187 373
その188 403
その189 434
その190 446
その191 457

その203
その202
その201
その200
if
その199
その198
その197
その196
その195
その194
その193
その192

2626261325942578256825572541252825152502249224852476

その215
その214
その213
その212
その211
その210
その209
その208
その207
その206
その205
その204.5
その204

2800278727792760274327312721271426972684267326642642

その216 ―― 24
その217 ―― 28
その218 ―― 37
その219 ―― 28
その220 ―― 28
その221 ―― 32
その222 ―― 28
その223 ―― 29
その224 ―― 34
その225 ―― 29
その226 ―― 45
その227 ―― 29
その228 ―― 29
その229 ―― 76
◇主人公&機体紹介 ―― 89
その230 ―― 29
その231 ―― 14
その232 ―― 30
その233 ―― 63
その234 ―― 30
その235 ―― 41
その236 ―― 30
その237 ―― 41
その238 ―― 30
その239 ―― 41
その240 ―― 30
その241 ―― 41
その242 ―― 30
その243 ―― 41
その244 ―― 30
その245 ―― 41
その246 ―― 30
その247 ―― 41
その248 ―― 30
その249 ―― 41
その250 ―― 30
その251 ―― 41
その252 ―― 30
その253 ―― 41
その254 ―― 30
その255 ―― 41
その256 ―― 30
その257 ―― 41
その258 ―― 30
その259 ―― 41
その260 ―― 30
その261 ―― 41
その262 ―― 30
その263 ―― 41
その264 ―― 30
その265 ―― 41
その266 ―― 30
その267 ―― 41
その268 ―― 30
その269 ―― 41
その270 ―― 30
その271 ―― 41
その272 ―― 30
その273 ―― 41
その274 ―― 30
その275 ―― 41
その276 ―― 30
その277 ―― 41
その278 ―― 30
その279 ―― 41
その280 ―― 30
その281 ―― 41
その282 ―― 30
その283 ―― 41
その284 ―― 30
その285 ―― 41
その286 ―― 30
その287 ―― 41
その288 ―― 30
その289 ―― 41
その290 ―― 30
その291 ―― 41
その292 ―― 30
その293 ―― 41
その294 ―― 30
その295 ―― 41
その296 ―― 30
その297 ―― 41
その298 ―― 30
その299 ―― 41
その300 ―― 30
その301 ―― 41
その302 ―― 30
その303 ―― 41
その304 ―― 30

破界篇
その1

○月×日

普段は日記を付けない自分だが、事態が事態なのでこれを機会に日記をこまめに書く事にした。

まずは状況を見直そう。……そう、確かいつものように大学の講義を終え、友人と一緒に帰り一人暮らしのアパートに帰宅。ここまでは覚えている。

問題はその後だ。バイトに備えて少しばかり仮眠を取って目を開けてみれば――――見知らぬコックピットの中にいた。

訳が分からないって？　大丈夫、俺も一ミクロンも理解出来ていない。じゃあ何故そんなに冷静かって？　知ってた？　人間て自分の理解能力から外れた出来事を前にすると返って冷静になれるものなんだぜ？　心理学の先生辺りがそんな事言ってた。

そして何故そこがコックピットなのか……まぁ、簡単な話、そうとしか言えないというのが正直な所だ。

操縦桿らしきものから複雑そうなコンソールパネル、そして目の前に広がるのは全面に映し出された巨大モニター。

ガンダムとかでよく見る全天式な感じだが、真後ろとかはまだ確認していないのでそこら辺はまだ不明だが……うん、やっぱコックピットとしか言いようがないや。

……何故自分が此処にいるのか、分からない事だらけだが、一つだけ分かった事がある。それは日記を書く前、混乱しながら辺りのコンソールパネルを触った時、モニターに映し出され形式番号と機体名を見たとき、俺は軽く絶望した。

〝ＤＣＡＭ－００　グランゾン〟

それが、現在自分が乗る機体である。

……訳が分からないよ。

○月◇日

グランゾンのコックピットて、意外と寝心地良いんですね。流石シュウ博士、細かい所にも拘っていらっしゃる。

……はい、バカ言ってる場合じゃなかったね。けど現実逃避していないと心がへし折れそうなんだ。分かってくれバァーニィ。

昨日日記を書き終えた後、コックピットハッチを開けて外に出て見ればモニター越しで見た映像と同じ広大な砂漠が広がっていました。そして振り返った先で凶悪な面構えのグラたんに再び絶望、夢であって欲しかった自分の願望は粉々に砕かれてしまった。

〝グランゾン〟スーパーロボット大戦で知られる対異星人用のアーマードモジュール。その機体性能はある機体と本気で戦わせれば宇宙が終わるとされる程の性能で、単機だけで戦場を支配出来るとされるチート機体である。

積み込んだ動力源は対消滅エンジンだとかブラックホールエンジンだとか、色々物騒なシステムを積んでたりとヤバ気要素てんこ盛りなこの機体、ただそれだけ危険なモノを積んでいる事もあり、先ほども言ったように機体性能は本当にチート化している。

まず速さ。全長27メートルと85トンの重量の為に瞬間的な速さこそないが、最高速度は魔装機神屈指の速さを誇るサイバスターを上回り、火力は最大出力を出したら下手すれば銀河が終わってしまうふざけた性能である。

他にも色々チート要素はあるが、それもこれも全てシュウ＝シラカワ博士がこのグランゾンの本来の搭乗者である事が大きい。

スパロボ自体はαシリーズとあとは携帯ゲーム機（割と最近の）位しか知らない為、詳しくは説明できないが、グランゾンはシュウ博士と数名の博士号を持つ天才科学者達に

よって設計、生み出されるが破壊神ヴォル……ヴァルクスス？　ヴォルクルスだっけ？

……まぁ、そんな名前の邪神に半分操り人形みたいにされた状態でグランゾンを強奪。時折暗躍し、時折スーパーロボット軍団と敵対したりと割と重要な役割を担った人物と機体とされている。

最近ではシュウ博士はラ・ギアスと呼ばれる異世界の王族だったって話が出ていたりして色々驚き要素があったりしている人物だ。

さてそんな色々凄い話が絡んだこのグランゾンとそれに乗り込んでしまっている自分だが……うん、本当にどうしよう。

グランゾンに乗り込んでいたりしているからシュウ博士に憑依してしまったのかと危惧したが、残念な事にグランゾンの装甲の反射に映っていたのは凡人面の見慣れた自分の顔でした。これで俺もイケメンの仲間入りだと何気に期待しただけにちょっぴり残念だと思ったのは内緒である。

けれどそれの為に余計に分からないことが増えた。何故自分がここにいてグランゾンのコックピットに居座っているのか、そしてシュウ博士もこの世界にいたりしているのか……。

前半は早いところ究明したい所だが後半は……うん、止めよう。もしあの人がこの世界にいるのなら、あの人にとって自分はグランゾンを強奪した盗人とされる。

いつの間にか乗っていたのを強奪したと言うのは変な話かもしれないが、そんな理屈が通らないのもシュウ博士の怖い所である。
ならば自分のやるべき事は一つ。自分が今いるこの世界の事を早急に調べ上げ、シュウ博士を探しだし、グランゾンの返上と心の底からの謝罪と元の世界に帰るために全力を尽くすのみ。
問題はこのグランゾンをどうするか……（日記はここで途切れている）

○月△日
昨日は日記が途中で終わってしまった。が、それも無理もない事だろうと心の内で言い訳しておく。
だっていきなり〝フラッグ〟が襲ってきたんだもん！　ビックリするのも仕方ないじゃん！　……いや、実際は襲われたというよりも警告みたいな感じで通信回線に入ってきただけなんだけどね。
つーかこの世界の事があのフラッグのお陰で一気に分かってしまった。よりにもよってガンダム００の世界とか、戦々恐々の思いである。
危うく捕まりそうになったが、そこは流石のグランゾン。バーニア噴かせたかと思っ

た瞬間爆発的な加速で一気にフラッグを置き去りにして離脱成功。
グランゾンを意のままに動かせた事に自分もテンションが上がりまくり「クククク……」と意味深な笑みが漏れてしまった。
え？　何故グランゾンを動かせたかって？　それがもう自分でも何が何やら、フラッグに呼び掛けられた時、混乱しながら操縦桿を握り締めるとアラ不思議、グランゾンの操縦方法が次から次へと頭の中へ浮かび上がって来るではありませんか。
勿論武器の使い方も動かし方と同時に頭に叩き込まれたが……けど、そんなもの使うつもりは今の所ない、だって無人機とかなら兎も角いきなり戦えとかそんなの出来るわけないじゃない。
怖いし。つかフラッグに呼び止められただけで逃げ出す自分に戦う度胸なんぞある訳がない。つか実際、自分はグランゾンに乗ってて何故か操り方を知っているだけの素人だ。
そしてこのグランゾンの本来の持ち主であるシュウ博士は戦いの介入を嫌う人だ。下手な戦いでグランゾンに傷を付けるものならそれこそシュウ博士に宇宙から存在を抹消させられる。
シュウ焉の銀河。最近はそう呼ばれている博士に命を狙われたとあっては、安心して寝ることも出来やしない。ひとまず日本に行こう。ここがガンダム００の世界だと言

うのなら日本も当然ある筈。
いい加減腹も減ってきた。グランゾンを隠したら食料を調達する事にしよう。
ただ、あのフラッグの乗ってた人。割と聞き覚えのある声なんだけど……誰だっけ？

◇

「見たか、カタギリ」
『あぁ、凄い機体だな。あの巨体でアレ程の加速……興味深いマシーンだ』
「ああ、噂のスーパーロボットとも違う様だし、男としてあの機体には少しばかり興味がある。……しかし」
『？』

「あの機体を駆る者、些か危険な臭いがする」
『……根拠は？』
「声を聞いたのだ」
『声を？　あの機体のパイロットかい？』
「恐らくはそうだろう。通信越しでほんの僅かな笑い声しか聞き取れなかったが、その声色から底知れぬ〝ナニか〟を感じた」
まるで此方の全てを見透かした――――暗く、深い奈落を思わせる不気味な笑い声。
ユニオンのエース、グラハム＝エーカーは地平線の彼方へ消えた蒼く禍々しい機体に、今後訪れる世界の暗雲を直感ながら感じ取った。

◇

○月□日
ユニオンのフラッグから死に物狂いで逃げ延びて翌日、自分は高性能チート機体であるグランゾンを使ってネットワークに介入し、この世界に関する情報を集めてみた。

それによる結果は……この世界は想像以上に混沌としているという事だ。
ユニオンや人類革新連盟、ＡＥＵという三大国家の存在は昨日のフラッグとの邂逅で明らかになっている。だが、問題はそれだけではなかった。
まずユニオンはとある大国との合併を果たしている。〝神聖ブリタニア帝国〟そう、あのブリタニアだ。
他の二国もそれぞれ何らかの組織と絡んでいるみたいだし、加えて次元獣とかいう不可思議な怪物も確認されている。
大時空振動とそれによる多元世界。これらが原因で複数の世界が融合してしまったとされるこの地球には他にも異質な部分がある。
まず日本。エリア１１と呼ばれる国と日本と呼ばれる国、二つの日本が存在している。
加えて月も二つで片方は陰月と称され、時空による歪みの所為で調査が不可能とされている。
他にも暗黒大陸と呼ばれる未知の大陸が存在したりと色々問題を抱えているこの世界で既に自分のお腹は一杯である。
……そうそう、お腹一杯という事で思い出したがあれから無事自分は食料を確保できた。場所はエリア１１にあるとあるスラム街。グランゾンと身につけた衣服以外戸籍

も何もない自分は残されたお金でその日の食料を調達。
スラム街にある廃棄された人気のない倉庫にグランゾンを隠してコックピットで食事した。
今の自分が持つ通貨でも使える事に驚いたが、それよりも問題は明日からだ。既にお金も尽きた為に食料を買うことも出来ないし、何より命の危険がこの世界には常に付きまとっている。
ていうか、食料を購入した際の周囲の目がコエエ、スラム街って初めて来たものだから萎縮した自分は格好の獲物に見えたのだろう。途中送って貰った赤い髪のバンダナ女性に出会わなければ身包みごと……いや、命すら取られていた事だろう。
いつかまたどこかで改めてお礼をしたい所だが、まずは自分の身を何とかしなければ……。
いっそグランゾンで買い物してみるか？　……止めておこう、色々な意味でダメになる気がする。
でも買い物籠を持ったグランゾンが買い物をする姿を想像して……少し笑ってしまった。
あぁ、どうかこれが夢でありますように。目が醒めたら自分の部屋で起きられますように、そう願いながら今日の日記は終了する事にする。

その2

○月A日

この多元世界と呼ばれる異世界に来てから数日、相変わらず忙しなくバタバタしているがここで一つ朗報が入ったので追記しておく。

ここまで無一文の戸籍無しで端から見れば怪しさ全開の自分だが、どうにかここエリア11でお金を稼ぐ方法を見つけた。

雑用係として雇用してくれたゴウトさんには本当に感謝している。……凄まじくこき使ってくれるが。

元々エリア11のシンジュクゲットーには犯罪者や密業者など多くの不審者で賑わう吹き溜まりとなっているようで、自分の様な輩は珍しくないらしい。

流石に住まいは提供してくれなかったが……まぁ、給料が貰えるだけでも有り難く思った方がいいだろう。グランゾンのコックピットも今では自分の生活空間の一部となっているのだから……。

そんなゴウトさんの仕事はバトリング試合の組みの際のスポンサーで、腕の良いアー

マードトルーパー（通称ＡＴ）乗りやナイトメアフレーム（通称ＫＭＦ）乗りを見つけては短期契約をし、十全なバックアップを約束する代わりに試合報酬の分け前を頂くという商売をしている。

商魂逞しいゴウトさんに感心しながら、一方で自分は慣れない仕事に日中殆どゴウトさんに怒鳴られていた。

ＡＴのパーツ整備が甘いとか入荷したパーツのチェックが遅いとか、怒られる事は多々あったがそれでも自分はそれとなく充実した時間が送れたと思う。

色々危険がある所だけどゴウトさんはこの界隈では結構顔の広い人間らしく、最初の時と比べて自分を危険な眼差しで睨んでくる輩は大分減った事が自分の中で一番嬉しい事だ。

まぁ、商売敵のココナやバニラには度々イジられるのが玉に瑕なのだが……けど、自分がいた世界でもこういった人間関係はあったし、何より自分も悪くないと思っている為さほど気にした事はない。

やはり人間には適度なお付き合いも必要なのだと改めて思った日々でした。

ただ、ゴウトさん達やアストラギウス、ＡＴとかの話を聞くとな～んか忘れている気がするのはなんでだろう？

確か……き、き、キリ……キリト？　いや違うな。キリヤ？　カリヤだっけ？　――

―（以下むせる男の名前に付いて一人議論が続く）

○月α日

更に数日後。ゴウトさんから預けられた仕事にも大分慣れ、この日も順調に仕事内容を消化してあと少しで終わる所で意外な来客がやってきた。

それは以前、自分をグランゾンのある廃棄工場近くまで送ってくれたあの勇ましい紅髪のバンダナ少女だった。

改めてお礼を言ったときに名前を教えて貰い、ああやっぱりなと思ってしまった自分はやはりこの世界についてまだ馴染めていないのだろう。

〝紅月カレン〟エリア11を……旧日本をブリタニアに奪還すべくレジスタンス組織の一つである扇グループに所属し、兄の意志を受け継ぎながら戦う紅蓮の少女。最初に気付いた時は勢い余ってサインを強請ろうと思ったが、出会って間もない相手にサインを強請るのは流石にアレなので自粛した。

なんでもバトリングに参加し、レジスタンスの資金を集めながら自身のＫＭＦの操縦技術向上の為に活用しているとか。

しかも彼女のＫＭＦが赤い事から対戦相手から赤い悪魔として恐れられているとか……赤い彗星と連邦の白い悪魔の両方の名を持っているとは流石はカレン＝サン。

なんて言ったら確実に後で〝チンッ！〟されるから言わないけどね。
ゴウトさんも久し振りのお得意さまに張り切って契約を交わしている。自分もゴウトさんに言われてすぐ様カレンちゃんの駆るＫＭＦの整備に乗り出した。
そうそう、呼び方の件だが年上にさん付けで呼ばれるのは抵抗があるからと呼び方を変えて欲しいといわれたのでカレンちゃんと呼ぶようにした。本人を前にそう言ったら何故か蹴られたけど、この方が呼びやすくなったので以降はちゃん付けで呼びたいと思う。
それにしてもバトリングかぁ、それに参加できれば自分も結構なお金を稼げたり出来るのだろうか？　……いや、無理だな。あのグランゾンではバトリングで戦うには狭すぎるし、下手したらゲットーごと吹き飛ばしてしまう。
自分にもっと操縦技術があれば手加減も出来ただろうが……てか、あの機体に手加減とか出来たっけ？
兎も角、帰ったらグランゾンのコックピットに内蔵されたシミュレーションで色々と試してみようと思う。

○月Ω日

今日、スンゴい人達を目の当たりにした。まずは〝キリコ＝キュービィー〟異能生存体として知られる不死身の男。そのむっつり具合とむせかえる程の硝煙の臭いを纏わせた男に思わず俺も「むせる！」と叫んでしまった。

当然ゴウトさんやバニラ達からは白い目で見られたが……何、悔いは無い。

寧ろキリコさんに名前を覚えて貰った事実が大きすぎてもう俺のアドレナリンはドッパドパである。

え？　お前最近まで忘れてただろうって？　ち、違げぇし、忘れてたんじゃねぇし。アレだ、きっと何らかの組織が俺の脳内に封印処理を施したんだ。組織の連中の仕業なんだ！　俺は悪くねぇぇ！

――――――（以下字が汚い）

漸く落ち着いたので執筆を再開する。兎に角キリコという男の凄さを直感で感じ取ったゴウトさんはキリコさんをＡＴに搭乗させ、商売を始めた。

対戦相手は赤い悪魔として知られるカレンちゃん。最初こそは危うい戦闘だったが徐々にキリコの方が圧し始めた時、アクシデントが起きた。

なんとアストラギウス傭兵崩れと警察隊がいきなり押し寄せてきたのだ。慌てて自分とゴウトさんは身を潜め、事の成り行きを見守っていると二体のガンダムが参戦。傭兵と警察隊をあっという間に撃退してみせた。

まさかコロニー側のガンダムまで出てきた事に素直に驚いたが、そう言えばグランゾンで色々調べた時にそれらしい資料があったなと今更ながら思い出す。
いやだってさ、つい先日〝ソレスタルビーイング〟の犯行声明で世界中が大騒ぎなんだもの、てっきりガンダムは彼等だけかと思ってたんだもの、忘れちゃっても仕方ないよね。
ともあれそんな出来事があって仕事は中断。今日はその場で解散となった。

○月Ｇ日
……今、俺の手にはゴウトさんから手渡された今までのバイトの代金を握り締めている。
今何が起きているのか分からないが銃声やら悲鳴やらが聞こえてくる事から、どうやらシンジュクゲットーはかなりマズい状況に陥っているのだろう。
いつも通りにゴウトさんの所に顔を出してみれば、真剣な顔で扇さん達と話し合っている皆に思わず面食らってしまった。
そしてそんな自分に気付いたゴウトさんが自分の手に今まで働いた分だと言って、今月の給料を握り締めさせた。
まだ給料日は先だっていうのに、昼飯代の分は引いておくと言っていたのに、自分の

手に握られたお金の金額は自分が想像していた以上に多かった。
「これを持って早くゲットーから逃げろ」そう言ってきたゴウトさんに理由を尋ねると、どうやらエリア11を統括するブリタニア軍が特殊な毒ガスを開発、これを全ゲットーにぶちまけるという情報を入手したという。
愕然とした。まさかこの時かと自分の中で何か崩れた様な錯覚に陥った。
どこかで安堵していた。異能生存体やガンダム達がいるからこんな事にもならないと、どこかで安堵していたのだ。
そして、そんな自分の前で先ほど見知らぬ誰かがブリタニアの兵士に撃たれる光景を目の当たりにしてしまった。
手が震える。こうして日記を書くことでしか平静を保てない自分が恨めしい。
……いや、これが普通なのだ。見知らぬ誰かが撃たれ、次は自分かもしれないと思って恐怖で震えるのは何ら不思議な事じゃない。
もうこの世界に馴染めていないとか悠長な事を言っている場合じゃない。ゴウトさんの言うように早急に逃げなくては……。
自分はただの素人だ。ちょっとこの機体を動かせるだけの……ちっぽけな人間だ。
だから逃げる。その事自体自分に負い目はないし負うつもりもない。
カレン達が戦っている隙を狙って自分は悠々とこのグランゾンで逃げる事にする。

――――ただし。

「どうせ逃げるなら、まっすぐに突き進んでぶち抜いてやる」

そう言って俺は日記を横に置き、操縦桿を握り締めた。

◇

――――拠点車両。作戦の指揮官とその補佐役達が乗り込んでいる移動要塞で、一人の男性の声がブリッジに響きわたる。

「ええい！　まだ見つからんのか！」

「も、申し訳ございません殿下。テロリスト共の反抗が激しく、依然として確かな情報が

入ってきておりません……」
「言い訳はよい！　テロリストなぞ物量で押しつぶせ！　何のためにアストラギウスの野蛮人共に協力を求めたのだ！」
「は、ははぁ！」
部下の不甲斐ない報告にブリタニア皇子であるクロヴィスは苛立ちを募らせていた。
このままでは私の皇族としての立場が危うい。何としても〝例のモノ〟を発見せねば……。
そんな焦りと苛立ちの募ったクロヴィスの前にあるモノが映像として目の前に映し出されていた。
「く、クロヴィス殿下！　アレを！」
「何だ……アレは？」
攻撃が鳴り止まないゲットーから現れる影、それを目にした時クロヴィスはその風貌から並々ならぬナニかを感じ取った。
蒼く禍々しい巨大な魔神。〝グランゾン〟
その姿に誰もが畏怖を感じた瞬間だった。

その3

○月C日

何とか無事にブリタニアの包囲網の突破に成功して、更に数日。自分は現在、暗黒大陸と呼ばれる未開拓の大地を踏み締めている。

時空振動の影響で次元の断層によって阻まれていた大地なんだけど、なんか以前起きた次元震の所為でその断層がなくなったぽいんだよね。

本当はグランゾンの力でこじ開けるつもりだったのだけれど……まぁグランゾンを無駄に消費させる事もなくなったからこれはこれで良かったんだけどね。

しかし、次元震が起きただのクロヴィス暗殺の真犯人ゼロの出現だのと、ホントこの世界は目まぐるしく回るよね。

その間自分は来もしない追っ手の軍の影にビクビクしながらも、ゴウトさんから渡された賃金でちまちまと食いつないでいました。

その中でふとした拍子に露店で買ってしまった一品がある。それは———仮面だ。

万が一機体から降りた際に人に見られては事なので正体を隠すために買ったものな

のだが……これ、細部とか微妙に違うけどぱっと見ゼロの仮面と似てるんだよね。

顔全体を覆い隠せるフルフェイスなタイプの仮面はこれしかないから仕方ないが……ゼロはよくこんなの被っていられるよな。中はスッゲームシムシするし、長時間被っていると汗だくで目が染みる。

もしかしたら彼はこれに自分なりのアレンジを加えているのかも……顔の一部が開いたり出来るみたいだし、案外その辺りは彼自身の手製だったりして。

そして今、ブリタニア側はクロヴィス殿下が暗殺された事実以外特に目立った情報は流されていない。グランゾンの存在が明るみに出ていないのが逆に不気味さを漂わせているが、ここはグランゾンと自分の存在が明るみに出なかった事を安心して前向きに受け入れる事にしよう。

ただ、この世界には色々とくせ者が多くいそうだから気を抜くことは出来ない。だからこそ逃亡先としてここ暗黒大陸を選んだのだ。

……だが、かれこれここを探索して数時間。目にしたものは広い荒野と時折見かける森林や湿地帯程度で人の存在は未だ確認出来ていない。もしかしたらこの大陸に人は住んで――――（日記はここで途切れている）

○月T日

……やっちまった。あれほどグランゾンで無意味に戦う事はしないと誓ったのに、とうとうそれを破ってしまった。

日記を書いている途中、いきなり攻撃してきた複数の機体に思わず反射で攻撃してしまった。

〝グランビーム〟グランゾンの持つ武器の中でも最弱の威力とされる兵装だが、襲ってきた機体を纏めて貫く程に高威力で馬の顔をしたロボットは花火の様に爆散。残った他の機体達はそんなグランゾンを恐れてそそくさと逃げていった。

その事にコックピットで盛大な溜息を吐き出して安堵するが、これでいよいよマズい事になった。

もしこの世界にシュウ博士がいたら自分はなんと言って詫びればいいのだろう。元の世界に帰るにはシュウ博士の協力も仰ぎたかったのにこれでは自分の望む状況と全くの真逆に突き進んでいるようだ。

……少し落ち着こう。大丈夫、シュウ博士は本来穏やかな気質の人って言われているし、事情を話して真摯にお願いすればあしらう事はあっても無碍にはしない筈。

それに無抵抗でやられたとあってはシュウ博士とグランゾンの名に傷が付くかもしれないし、今回は自己防衛として納得する事にしよう。

やや現実逃避に思われるが、そうでも思わないとやってられないのが今の自分の心境

である。

そして一度破ってしまえばそれはもう誓いでも何でもなくただの拘りでしかない。だったら下手に戦う事を否定せず、自身の身に危険や脅威と見なしたモノが迫った時、ある程度抵抗する事も辞さない事にしよう。

先ほども述べたがここは色々と厄介な世界のようだ。どこで誰が見ていたり利用しようと考える輩がいるかも分からないし、今後はもう少し警戒心を持って考え、行動する事にしよう。

○月W日

漸く人に会えた。丸二日も探して見つけた村はリットナー村と呼ばれる集落だった。最初こそはいきなり現れた余所者の自分に酷く警戒されていたがダヤッカと呼ばれる村長とリーロンさんと話すと途端に受け入れてくれた。

長い間次元の壁で閉ざされていた世界の中で、幾度となく〝ガンメン〟と呼ばれるロボットと戦ってきた事で、外からやってきた自分に過剰に反応してしまったの事。

自分もいきなり襲われたりしたから気持ちは分かるし、何よりいきなり自分のような見知らぬ輩が村に近付いたのであっては彼等の境遇からして仕方ない事だと思い、気に

しなくていいと言うとそれを皮切りに村の人達とも仲良くなれた。
ただ、リーロンさんに必要以上に迫られた事が怖かった。確かに外から来たとされる自分に何らかの興味を抱くのは分からなくもないが、此方をみながら微笑まないで欲しい。
あれ完全に人を見る目じゃねーよ。研究対象を見る目だよ。
あ、蛇足だがここに来る前にグランゾンはキチンと隠しました。リットナー村から少し離れた谷に座らせる形で待機させています。
ただでさえガンメンにピリピリしている村なんだ。ここでグランゾンを見られたら大騒ぎになることは確実だ。
リットナー村の皆さんに見つからないよう祈りつつ、自分も寝ることにする。

□月J日
ダヤッカさんの所で寝泊まりしていた自分の所に、綺麗な女の子が起こしにきた。彼女はヨーコ＝リットナーと名乗り、ココにいる以上自分にも働けと言い、近くの湿地帯に狩りの付き添いを命じてきた。
いや、そりゃ俺も何かしら手伝いたいとは思ったよ？　けどさ、幾ら何でも野生の動

物相手にいきなり狩れというのは無理だと思う。
つーかこの大陸の動物不思議過ぎ、葡萄の体をしたカバとか見たこと無い生き物ばかりなんだもの、生物界の学者さん達コイツ等見たら卒倒するんじゃね？
そして大した役にも立てずに狩りは終了。ヨーコちゃんから言われた「アナタ、もう少し鍛えた方がいいわよ」発言に地味に傷つきながら今後自分も何かしら鍛えた方がいいかなと思い、今日の所はこれで終わりにする。
それにしても、ヨーコちゃん達を見ていると何か忘れているような気がするが……まぁ気のせいだろう。

□月H日
俺は今、二日振りにグランゾンのコックピット内で日記を綴っている。
ここでの生活にも慣れ始め、ヨーコちゃんの狩りの手伝いやリーロンさんの機械弄りに参加してこの村でも段々と仲間と認められてきた頃、奴等は現れた。
〝ガンメン〟編隊を組んでリットナー村に襲撃してきた奴等を今はヨーコちゃん一人で何とかくい止め、村へ近付けさせないよう遠くへ誘導している。
ヨーコちゃんに追い付くため、そして助け出す為、俺は再びグランゾンを駆る。
今度は反射的にではなく自分の意志で戦う。だが覚悟は持たない。俺が今すべきは

襲い来る脅威を速やかに排除し、出来る限り早く事態を終わらせる事である。
覚悟など持たない。覚悟なんぞ何故奴等に対して持たなければならないのか……これが俺の意地だと理解し、今日の日記はこれで中断させて貰う。

◇

「あ、アニキ～！　数が多すぎるよ～！」
「ちっ！　待ち伏せとはしゃらくせぇ真似しやがって！」
広大な荒野に飛び出た二人の男と地上からやってきた一人の少女、襲いかかって来た巨大なガンメンを地上から飛び出した拍子に撃破に成功するも、そこで待ち受けていた

更なる巨大ガンメンの軍勢に穴掘りの少年は既にその心は折れていた。
「もう少し頑張って！　今シュウジの奴が村の皆を呼びに行ってるから！」
「あぁん？　誰だそいつ？」
「うちの村の居候！　アタシと違って正真正銘、外からの来訪者よ！」
少女の言葉に男はへっと鼻で笑う。だがそれは彼女に対する嘲笑ではない。未知の世界が確実に存在する事に対しての歓喜の笑みである。
故に、男は高々と目の前のガンメン達に向かって吼えた。
「おうおうおうおうおう！　そこでデカ面晒しているガンメン共！　さっきから俺達を見下しやがって、俺達を誰だと思っていやがる！」
絶体絶命な状況に対し、一歩も引こうとしない男に少年とヨーコは絶句する。まるで恐れを知らない豪気な気迫、その堂々とした佇まいにガンメン達は呆気に取られ、少年とヨーコ同様言葉を失っていた。
だが、そんなものは次にガンメンが動き出すまでの時間稼ぎでしかなかった。手にした巨大な棍棒が振り上げられ、少年達に向かって振り下ろされようとしたその時。
ソイツは現れた。
「な、なんだぁぁっ!?」
突然横から現れた蒼いナニか。それがガンメンを吹き飛ばした時、流石の男も驚きの

声を上げる。
蒼いソレが目の前に降り立つと、少年達は絶句した。
蒼く、深い巨人。まるで魔神の様な禍々しさに穴掘りの少年は自身の体の震えが止まらなかった。
逃げなければ。そう少年の本能が囁くが、目の前の魔神の所為で指一つ動けはしない。
ここまでか。ヨーコが手にした超電導ライフルを手に最後の悪足掻きをしてやろうかと思い立った時、魔神は少年達とは予想外の行動に出た。
魔神は倒れたガンメンを鷲掴みにすると、他のガンメンに向かって投げつけたのだ。
なんという力、魔神のその体躯に似合った力に驚くが次の瞬間、彼等は度肝を抜かれる事になる。
魔神の額が光ったと思った瞬間、魔神の額から一筋の光が放たれ、ガンメン達を諸共吹き飛ばし、撃破してしまったのだ。
残されたガンメンは魔神の力に圧され、蜘蛛の子を散らすように撤退、少年達は訳が分からないまま目の前の魔神に助けられた事となった。
だが、その事実に納得できない男がいた。地下のジーハ村出身、カミナである。
「おいお前！　一体どこの野郎だ！　外の世界じゃお前みたいのがうじゃうじゃいんの

かよ！」
「ちょ、アニキ!?」
「何やってんのよアンタ!?」
突然のカミナの行動に驚愕する少年とヨーコ、必死に止めろと言ってはいるが、それでもカミナのキラキラと輝く好奇心を止める事は無かった。
魔神と向き合うこと数十秒、すると魔神は少年達に興味がなさそうに踵を返すと、背中から紫炎の炎を噴かせ、瞬く間にその場から去っていった。
取り残された少年達。逃げられた事に騒ぎ立つカミナを抑えながら次に彼等が出くわしたのは〝ソレスタルビーイング〟と名乗る外からの来訪者達だった。

その4

□月β日

リットナー村から飛び出して二日、未だ自分は暗黒大陸から出ずに留まっている。

本来ならガンメン達を撃退した後、グランゾンを谷に隠してそれとなくヨーコちゃん達と合流するつもりだったのだが、思わぬ来客の登場にあの場から逃げる羽目になってしまった。

モニターに映し出された一隻の艦、それがソレスタルビーイングの輸送船〝プトレマイオス〟だと知った瞬間、自分の思考は逃げる事で頭が一杯だった。

でも逃げる際に本物のプトレマイオスを見てちょっと感動してしまったが、それは仕方ない事だと言い訳しておく。

ともあれ、あの場にいたら厄介な事態になるだろうと直感のままに離脱した自分の判断は間違いなかったと思いたい。

というか、世間でテロリストと認定されているソレスタルビーイングと一緒に行動してしまえば、それこそ自分が望む未来が完全に途絶えてしまう。

だから、これでいいのだ。リットナー村から逃げる様に出てきてしまった自分だが、

この選択が正しかったのだと……そう思いながら今回の日記は終了する事にする。

……あぁ、ヨーコちゃんの作った葡萄カバのステーキ、美味かったなぁ。

□月K日

いい加減何か食べなきゃヤバいと思い、慣れないやり方で野生動物と格闘していると、黒の兄妹と名乗る自称獣人ハンターと遭遇。彼等に助けて貰った事でどうにか命を繋ぐ事が出来た。

黒の兄妹はキタンさんを筆頭にキヨウさん、キノンちゃん、キヤルちゃんという四人兄妹で、彼等は獣人ハンターのグループでキタンさんが長男という事でリーダーを務めており、他の三姉妹もそんなキタンさんを頼りにしながら獣人達と日夜戦っているという。

自己紹介をしてくれた彼等にご丁寧にどうもと返しながら、自分は外から来た旅の者ですと自身の紹介と共にそう応えると、キヨウさん達がびっくりするほどに食らいついてきた。

自分達以外の人間とは久しく会っていなく、獣人ばかりと戦ってきた彼女達にとって自分は未知の存在に見えたのだろう。密着してくるキヨウさん達の柔らかい体の感触に鼻の下を伸ばしていると……滅茶苦茶怖い顔をしたキタンさんがジッと自分を睨ん

でいるのが見え、少し自重しようと思いました。
え？　今度はグランゾンどこに置いてきたって？　ここから少し離れた森に寝かせています。この大陸の住民は基本的に地下で住んでいるらしく、滅多に人が来ないみたいなので何気に人目を気にしてビクビクする必要はないと思い内心でかなり安堵しています。
空に輝く満天の星空を眺めつつ、自分もそろそろ寝る事にする。
つーかキタンさんイビキマジうるせぇ。

□月J日
疲れた。今日は本っっっ当に疲れた。朝早くキタンさんに叩き起こされたかと思ったらいきなり狩りに駆り出され、豚の頭をした不思議生き物に跨がり、大草原を駆け走った。
つか豚ってあんな早く走り回るのね。何度も振り落とされ地面に落下する自分を見かねて、キタンさんが俺を子分にしてやると言い出してきた。
何度も丁重にお断りしようとしたがそこは野生児、此方の話を全く聞かず、自分はなすがままに黒の兄弟の子分にされてしまった。
キヨウさんも長女なのに止める素振りもなく、ニコニコと笑っているだけ、キヤル

ちゃんに至っては末っ子だった事もあって自分より下の子分が出来た為にノリノリで背中を叩いてくるし。

唯一抵抗を示していたのは次女のキノンちゃん。人見知りである為、外から来た自分に少しばかり警戒していたが、自分が不思議豚を乗りこなせていないと見ると、私も上手く乗れないんだと言って話しかけてくれるようになった。

ホント、ここまでで終われればヤンチャの野生児に巻き込まれた現代人と笑い話で終わるのだが、そうは問屋が卸さなかった。

彼等が名乗る獣人ハンター、それはガンメンを狩る事を意味していた。

無論素手で、どこから調達してきたのか火炎瓶を片手に不思議豚を駆りながら、一機のガンメンを翻弄する様は我ながら唖然としたものだ。

その後は自分までガンメン狩りに駆り出され、今までで一番死ぬ思いをした。ホント、野生児の力マジ侮れねぇ……。

けど、そこで不思議なモノを見た。翻弄したガンメンは操縦不可にまで追い込まれ、仰向けに倒れるのを見て俺達は勝ち鬨を上げた時、ソイツは現れた。

毛むくじゃらの人間……いや、あれは人間とは呼べない別の種族だった。キタンはあれが獣人といったが、成る程。ガンメンを操っていたのは普通の人間ではなく獣人と呼ばれる別の種族だったのか。

人間じゃない彼等が何故ガンメンというロボを操っているのか、何故ここの人間達は地下深く押し込められるような形で息を潜めながら生活しているのか。

今更ながらの疑問に悩んでいると、キタンさんはすぐさま別の獣人を狩るぞと言いだし、不思議豚に乗って再び大地を駆け巡った。

結局最後まで乗りこなせなかったが、今回で自分は結構打たれ強くなったと思う。

割と本気でそう思う。よく骨とか折らなかったな俺。

□月Ｍ日

自分がこの世界にきてそろそろ一ヶ月が過ぎ、自分は今日も今日とて黒の兄妹の子分として頑張りました。

相変わらず不思議豚は乗りこなせていないが、振り落とされた直後には受け身をとって次の瞬間には再び不思議豚に跨がるほどには成長した。キタンさんからは別方向に成長した自分に呆れた言葉を送ってきたが、これも褒め言葉として受け取っている。

そして元の世界で一人暮らしだった為か、家事を一通りこなせる自分は黒の兄妹の食事係として日々邁進している。

流石に肉を焼いて食べるだけという食生活はアレなので、時々は釣ってきた魚を買い貯めしておいた調味料で味付けし、蒸したりしながら食べている。

いつもと変わった味付けに黒の兄妹の皆は全員惚れ込み、今では彼等の胃袋は自分が握っていると言っても過言ではない。

キタンさん達にシゴかれたお陰で体力は前と比べて大分付いてきたし、体にも少しだが筋肉が付いた気がする。

何より気力が充実している為、今ではキタンさんの無茶振りにもある程度は応えられるようになっている。

キヨウさん達という若く綺麗な女性とも出会えたし、暗黒大陸に来てから遂に自分にも運が巡って来たのではないだろうか？

獣人ハンターというガンメン狩りは流石に大変だが……今の自分はゴウトさんの所で働いていた時よりも充実していると思う。

あ、別にゴウトさんの事を嫌っている訳ではないから勘違いしないで欲しい。ゴウトさんも自分の恩人である事には変わりないし、感謝もしている。

久し振りに騒がしくも楽しい日々を送れた事をキタンさん達に感謝しながら、今日はこれで終了とする。

□月Ｖ日

……幸せな日々はそう長く続かないと昔のどこかの偉い人がそんな事言ってた気が

する。

昨日までは今日という日が来るのを心待ちにしていたのに今は最悪の気分だ。

今、グランゾンのコックピットで負傷したキャルちゃんの容態を見ながら書いている。日記なんぞ書いている場合じゃないと思われるが、こうでもしていないと沸き上がる感情でどうにかなりそうなのだ。

獣人ハンターを生業としているキタンさん。以前何故獣人ハンターなんて危ない事をしているのかと聞いたら、それは地下に引っ込んでいる他の人間達に対しての狼煙なんだそうだ。

人間は負けていない。ガンメンという脅威が自分達を支配しようとしていても人間はそれに屈しないという意志の表れなんだそうだ。

ガンメンはモビルスーツ同様に兵器だ。戦う為の戦闘機械であり、通常なら人間なんてどう足掻いても勝てっこない代物なのだ。

けれど、キタンさんはそれに反発した。だったらここで死ぬのかと？　空を見ずに、風を知らず、空に浮かぶ星々を一度も目にしないまま一生を終えるのかと、それに反発したキタンさんは同じ気持ちの姉妹達を連れて村を出た。

この世界を他の連中にも見せてやりたい。そんな思いで獣人ハンターを始めたキタンさんの言葉に自分はただ聞き入れる事しか出来なかった。

ただ一言、凄いですねと口にする自分にキタンさんは「当たり前だ！」と胸を張って言い切った。素直に人を尊敬したのはいつ以来だろう。

もう少しここで黒の兄妹と一緒にいてみよう。そう思った矢先、奴等が現れた。

ガンメン。今までの規模とは桁違いの軍勢が押し寄せてきたのだ。しかも、航空戦力を大量に投入してきて……。

いきなり放った奴等の爆撃によってキタンさん達とはぐれ、黒の兄妹の安否で分かっているのは自分の膝の上で気絶しているキヤルちゃんだけだ。

キタンさん達の事も心配だが、今はそれよりも今の状況について考えなければならない。

奴等を束ねるのは〝神速のシトマンドラ〟螺旋四天王の一人と呼ばれる獣人達の幹部だ。

今も隠れている自分達に向けて出てこいと、出てこなければこの一帯ごと爆撃で吹き飛ばすと脅してくる。

もう逃げ場がない。喩え名乗り出なくても奴等は宣言通りこの一帯を爆撃で吹き飛ばすだろう。そうなっては周辺の村も巻き添えを喰らって壊滅してしまう。

……キタンさんの獣人ハンターがやりすぎたのか、それともグランゾンと自分が原因なのか、具体的な事は何も分からないが。

今、自分がやるべき事はここで大人しく殺される事じゃない。
もうじきキャルちゃんが目を覚ます。俺は買ってから一度も使っていない仮面に手を伸ばし、覆いかぶせる様に顔に嵌め込んだ。

◇

「シトマンドラ様！　人間達の反応が見当たりません！」
「フンッ、裸猿どもめ、調子に乗るからだ」
――――――爆撃地点の上空。巨大飛行要塞空母型ガンメン〝ダイガンテン〟そこのブリッジの玉座に似た席に座るのは獣人の中でも神速と呼ばれる男だった。

爆撃し、舞い上がった砂塵の中を見つめながら四天王の一角であるシトマンドラはつまらなそうに呟く。

たかが人間。踏みつぶされ、自分達の娯楽の一つでしかない猿。狩るのは自分達であり狩られるのは地中で暮らす人間達である事を断言するシトマンドラは退屈そうな態度を崩さず、流れ作業の様に部下に指示を出す。

二度目の爆撃、それにより周囲の人間達の村ごと壊滅させようと決定したシトマンドラは爆撃開始の合図を出そうとした瞬間。

「し、シトマンドラ様！」

「何だ？　騒々しい……」

「ぜ、前方に機影を確認！　これは――例の〝魔神〟です！」

ガタリッ　部下からの報告に目を見開かせて立ち上がったシトマンドラが目にしたのは砂塵の中から現れる蒼き魔神、グランゾンだった。

その風貌、その風格、まさに魔神と呼ぶに相応しい。

シトマンドラの口角が吊り上がる。それは数百年の間一度も見えなかった強者との邂逅に胸を躍らせた瞬間でもあった。

シトマンドラはブリッジを後にする。どちらへと尋ねてくる部下に鼻で笑いながら

「これより魔神狩りを始める。総員戦闘準備！　私もシュザックで出る！」

久方振りの強敵、自らの美しさを追究するシトマンドラは自ら前線に出ることなど滅多になかった。

あの蒼い魔神に何らかの美的要素があったのかは知らないが、獣人達はそれを追及するような真似はしない。

何せ四天王が本気になったのだ。目の前の魔神が幾ら強力でもその末路を変える事は出来やしない。

精々戦いに巻き込まれないよう気を付けよう。獣人達は互いに見やると無言で頷き、ソレを暗黙の了解とした。

◇

――馴染む。

今までただ動かし方しか知らなかった青年は、自身の陥った危機的状況を前にしながらも不思議と落ち着いていた。

今までの生活でもう荒事にも耐性が付いてしまったのか分からないが、いやに落ち着いている自分がいることに青年は逆に戸惑っていた。

押し寄せてくる爆撃の雨を避け、その最中に攻撃してくるガンメンの一撃をグランゾンの豪腕で受け、投げ飛ばすと同時にグランゾンの額から光の矢を放ち、ガンメンを爆散させる。

「アンタ、一体なんなのさ!」

目を覚ました少女が青年に食って掛かる。彼女がここまで興奮するのも無理もない事だ。突然爆撃されたかと思えば兄達と離れ離れで、気が付いたら仮面を被った奇妙な輩が一緒にいるのだ。これを警戒するなと言う方が無理である。

だが、少女の質問に男は応えない。それは返事する余裕がない故の無言なのだが、仮面を付けている為、少女には青年の必死さが伝わる事はない。

ただ一言。

「喋るな、舌を噛むぞ」

無愛想の一言、それに抗議しようとした次の瞬間、機体は大きく揺れ動き、少女はその衝撃に悲鳴を挙げることすら出来なかった。

目の前には空を飛ぶガンメンの軍勢。自分の置かれた状況を理解してしまった少女は悔しく思いながら仮面の言うことに従った。
（流石にグランビームだけじゃ削り切れないか……アレ、使ってみるか）
まるで自分が別の誰かになるような錯覚。それを真に受けながらも男は自分でも驚く程の冷静さを保ち、新たな武装の名を口にする。
「現れろ。〝グランワームソード〟」
魔神の前の空間が歪みだし、一振りの大剣が姿を現した。
剣を握り、空を走る魔神。グランゾンが剣を握り締めた腕を振り下ろした瞬間。
巨大飛行空母は、左の翼を丸ごと切り裂かれた。

その5

□月X日

人生初めての修羅場を潜り抜けて三日、暗黒大陸を抜け出し、どうにか落ち着ける場所にやってきたので日記を再度始めようと思う。

まず、グランゾンの武装の一つである〝グランワームソード〟で相手の飛行要塞を切りつけた後、襲ってきたガンメンの軍勢と戦い、更には幹部らしきガンメンまでもが出てきてもうダメかと思われた時、彼等が現れた。

〝ソレスタルビーイング〟紛争根絶を掲げる彼等の介入のおかげで戦場は一変し、ガンメン達も飛行要塞が半分破壊されたり態勢を崩された事で戦闘続行は厳しくなり、撤退を余儀なくされた。

どうにか乗り越えたと安堵する自分に今度はソレスタルビーイングのガンダム達が此方に銃口を向けてきた時は……本当に心臓が飛び出るかと思った。

相手側は何も言わない自分に苛立ちを募らせて時折ドスの効いた声で話してくるが、此方は銃口を突きつけられた所為でマトモに言葉が出なかったのだ。そこら辺は察してほしい。

というか、何故ソレスタルビーイングにゲッターがいるの？　しかも中の人ってあれじゃん、キタンさん達以上に獣じみた竜馬さんじゃん。

マジ怖かったよ。声だけしか聞いていないのに本気で泣きそうになったよ。今回の件であの人に目を付けられていないかどうか、それが原因で自分の人生が大きく変わりそうな気がする……。

しかもなんかもう一機ほど見たことない機体があったんだけど……なんか戦闘の最中此方を随時見ていた様な気がする。

殺気とかそんなんじゃなく、こう……値踏みするみたいに舐め回す様な視線ってヤツ。一体あれはなんだったのだろう？

そしてそれとは別に自分と彼等の間に流れる空気は緊迫したものだった。このまま彼等と戦うのかと内心ガクブルだった自分を救ってくれたのは……意外にもカミナの兄貴でした。

コイツは以前俺達を助けてくれたのだと弁明してくれるカミナさん、俺はこの人を心の兄貴と認めたね。そんなカミナさんの一言で場の空気は少し柔らかくなった。お陰でキャルちゃんも無事解放させてあげられた事だし言うことなしである。

あ、序でにキタンさん達も無事だった事も追記しておく。キタンさん達は最初の爆撃で吹き飛んだ後、近くの村に落下して難を逃れていたらしいのだ。

黒の兄妹は野生の力強さだけでなく強運の持ち主でもあるらしい。そんな彼等に大事な妹さんを返し、グランゾンのバーニアを一気に噴かせて離脱。

直線的な速さにはやはり誰も付いてこれないのか、後を追おうとする機体がチラホラ見かけたが、そこは流石のグランゾン。追ってくる機体を突き放し、自分はあっという間に暗黒大陸を抜け出したのだ。

で、今はどこで何をしているのかと言うと……リモネシアという海の綺麗な国で、居酒屋のバイト店員として働いています。

そしてお馴染みになってきているグランゾンの隠し場所は……バイト先が海沿いであることで海中に隠しております。

海水で痛んだりしないか……それだけが不安ですたい。

◇

――暗黒大陸、プトレマイオス内。
ソレスタルビーイングの移動拠点として知られるプトレマイオスのブリッジ。そこではガンダムマイスターとグレン団を自称するメンバーが揃って議論を交わしていた。
話の内容はただ一つ、先日現れた蒼い魔神の有無である。
「一体奴は何者なんだろうね。何が目的でガンメン達と敵対しているのかな?」
「いや、別にガンメンに限ったって話ではないと思うぜ、コロニー側のガンダム連中の話によれば奴はエリア11にも姿を現してブリタニア軍を蹴散らしたみたいだしな」
「正体、目的共に不明。オマケに瞬時に戦場から離脱できるあの速さ、奴から話を聞くのは並大抵の事じゃなさそうだな」
「何れにせよ、奴に未知数な力があるのなら我々は奴に対して武力による介入を施さねばならない」
「そうだな、ティエリアの言うとおりだ。だが、今はその奴さんとは会っていないんだ。奴の事は会ってからその時考えればいいじゃねぇか」
「クロウ=ブルースト。貴様はこんな時に何を呑気な事を……」
「そう言うなティエリア、コイツの事だ。どうせ例の魔神との戦闘データで幾らか稼げた事に喜んでるんだろ」
「流石スナイパー、鋭いな。その通り!　実はさっきチーフから連絡きてな、興味深い機

体だから次もこの機体のデータをとって来てくれたらボーナス出してくれるって約束してきたんだよ！　いやぁ、遂に俺にもツキが回ってきたみたいだぜ！　まさに魔神様々だ！」
「君って男は、本当にどうしようもないね」
ソレスタルビーイングのメンバーの辛辣な言葉にもめげず、クロウと呼ばれる男はご機嫌に笑っていた。
噂の魔神もこの男の前では金づるも同然。遂には魔神を拝みだすクロウをスナイパー担当の青年が突っ込みを入れた所で、ブリッジに一人の女性が入ってくる。
「みんな、たった今ボートマンから連絡が入ったわ。これより私達はフロンティア船団に向かったグループと合流します」
「フロンティア船団って……確かコロニーのガンダムメンバーが向かった所だよな？もしかして向こうとの協力体制がもう敷かれたのか？」
「その事についても向こうで話すわ。ひとまず暗黒大陸をでます。グレン団の皆さんはどうする？」
「当然、俺達も付いてくぜ姐さん！　見たこともねぇ世界が待ってんだ。行かない手はないぜ！」
「俺もいってみたいな。世界ってのがなんなのかこの目で見てみたいし」

「なら、俺達黒の兄妹はここで別れる事になるな。カミナ、さっき言ったこと、忘れるんじゃねぇぞ」
「あぁ、シュウジって奴を探しとけって話だろ？　序でに探しておいてやるよ」
「カミナ、本当に頼んだよ。アイツはアタシ等の大事な子分なんだから」
「わぁってるよ。このカミナ様に任しとけ！」
一時の別れ、そして約束を交わしながらソレスタルビーイングは新たな仲間と共に暗黒大陸を後にする。

◇

◇月Ｅ日
いやー、リモネシアって本当に綺麗な所だよね。海は綺麗だし、空は青いし、太陽は

眩しいし、良い感じの観葉植物が更に常夏の気分を駆り立ててくれる。
元いた世界でも接客のバイトで慣れているから躓く事なくやっていけているし、店長も良い人だし、何より住み込みなのが一番嬉しい。
一番お世話になっているからその分働かされる事になっているけど、暗黒大陸で鍛えられた自分にはさほど苦にならず、寧ろ足りないとばかりに率先して与えられた仕事をこなしていた。
おかげでバイト代も弾んで貰えたし、これは次のバイトもやる気が出ると言うものだ。暗黒大陸でのあの修羅場が嘘の様に思える。
……ただ、幾つか気になる事もある。リットナー村のダヤッカさん達とヨーコちゃん、そして黒の兄妹の皆。
どちらも碌に別れの挨拶も出来ずに別れてしまったので、自分の頭の片隅には時折あの人達の事を考えてしまっている。
ヨーコちゃん、怒っているだろうなぁ。助けを呼んでくると言っておいて結局は何もしてこなかったのだから、向こうからしたら逃げた卑怯者とか思われてそう。
黒の兄妹達についてもそうだ。そんな余裕はないからといって何も言わずに姿を消したんじゃ心配させてしまっている事だろう。
本当ならキヤルちゃんをグランゾンから降ろす際に一言礼を言うつもりだったけど、

近くにソレスタルビーイングがいたものだからそれも叶わなかった。
もし彼等に自分の存在が知られたらきっと色々厄介な事になっている事だろう。結局、自分は怖くて何も言えなかったのだ。
……いつか、ほとぼりが冷めたら改めて暗黒大陸に向かい皆に謝ろうと思う。
そう胸に誓いながら今日の日記は終了とする。

◇月R日
今日は仕事の途中で凄い人がお店にやってきた。リモネシア外務大臣のシオニー＝レジス大臣。若くして一国の大臣となった彼女は意外にも下戸で、お酒を幾分か呑んだら今度は自分に対して愚痴をこぼしてきたのだ。
最初はお仕事があるからと席を外したかったのだが、店長が付き合ってやれとの事で仕事は一時中断、僭越ながら自分が外務大臣の愚痴に付き合って上げることにした。
いやー、女の人ってため込むと色々酷くなるのね。マシンガンの如く吐き出される愚痴の数々に自分は終始圧倒されっぱなしだった。
やれ各国の連中が小賢しいとか、大国連中は自国の領土を広げる事しか考えないとか、しまいにはブリタニア皇帝をロール頭呼ばわりしていたりする。

お酒を煽る様に飲む彼女をどうにか止めようと声を掛けると、今度は自分にまでその怒りをぶつけてきたのだ。

銀色の髪を乱しながら最終的には泣き喚いてしまう彼女をさすりながら、自分はつい口走ってしまった。

知った様な口を利いてしまい怒られるのかなと思いきや、シオニーさんはそれから落ち着きを取り戻し、少し恥ずかしそうに店を後にした。

個人的な感想だが、彼女には頑張って欲しいと思う。だって若くして国の為に頑張ろうとしているのだ。大国を相手に戦っている彼女を心の内で応援しながら、今日はこれで終わりたいと思う。

◇月L日

今日も頑張るぞと仕事に励んでいたら、シオニー大臣がお店にやってきた。

その事に驚きながら対応すると、昨日はありがとうとお礼をいってきたのだ。何でも自分の愚痴を聞いただけでなく、真摯に応えてくれた自分のお陰で気持ち的に少し楽になったらしい。

外務大臣てのは肩書き的にもの凄くハードな仕事だろうからストレスが溜まるから

仕方ない。シオニーさんだって人間なんだし、たまにはあれ位発散させた方がいいと思う。

いつでも愚痴を聞きますのでいつでも来て下さいと言うと、シオニーさんは少し戸惑いながら頷き、ＳＰの人達と一緒に帰って行った。

その時の髪を弄って照れ臭そうにしているシオニーさんはちょっと可愛らしいと思ってしまった。

ここまでで終わればそれなりに良い話で終わるのだが、今日はそれだけでは終わらなかった。

店長に言われて買い出しに出かけると、道中で変な人と出会ったのだ。

名前はアイム＝ライアード。初対面なのにやけに馴れ馴れしい男だったのが最初の印象だった。

なんか回りくどい喋り方だし、変に芝居掛かっている。アナタの力が必要なんです～と両手を広げて言ってきた時は思わず冷めた目で見てしまった。

此方に協力してくれれば貴方の願いを叶えますよとか、言ってきたが自分は丁寧にお断りしますとだけ言って返しておいた。

別れの際に不気味な目で見られて背筋に悪寒が走ってきたが、こういう手合いは隙を見せるとそこに入り込んでくるから此方も視線を外さずに彼の目を見続けた。

大体、願いを叶えるとか何処のドラゴン〇ールだよ。どちらかと言えば汚れた聖杯みたいな目をしたライアードはまた会いましょうの一言だけ残して去っていった。

しっかし、あの男は本当に何者だろう？　一々言ってる事が前振りっぽくて苛々するし……こう、変な感じがするし。

分かり易くいえば〝ゲロ以下の臭いがプンプンする〟そんな男だった。

また会っちゃうのかな。いやだなー、あんな男の話をするぐらいならシオニーさんの愚痴を聞く方が万倍ましである。

◇月#日

今日は久し振りの休日。リモネシアの町並みを観光気分でブラブラしていると、偶然にもシオニーさんとばったり出くわした。

偶然ですねと言うとそうねと返してくれる辺り、この間と比べると結構柔らかい人になっていた。やはり立場が立場なだけに誰かに愚痴とか話を聞いて貰えたりしていないのだろう。

気持ちだけでも貢献できた事を嬉しく思っていると、シオニーさんはこれからフロンティア船団にいって大統領政府と話をしてくると言ってきた。

流石外務大臣、その若さで大統領とご対面するとは……いち凡人でしかない自分には真似できない行動力だ。

でも、こんな事を自分なんかに話していいのかと訊ねると、近い内にメディアに公表するから構わないと言ってきた。

頑張って下さいねと言うと、近い内にまた店に伺うわと返され、その場はそれでお開きにした。

シオニーさんて努力家だなぁ、ああやって早い内に行動を起こして大国との政治の遣り取りで上手く立ち回ってたりしてるんだろうなぁ。

出来る女ってのはそれだけで格好いいものだ。自分もあんな人間になりたいなと思いつつ、本日の目的を達成する為にその場を後にする。

少し間が空いてしまった。今自分はグランゾンのコックピットでシュミレーターを使い操縦技術を自分なりに磨いていた。

やはりグランゾンの性能は色々と凄い。素人の自分が動かしても大抵の相手にはそうそう遅れは取らない。

だが、やはりそれでも自分が素人というのは拙い。これから何らかのトラブルに見舞われた時、一人で窮地を脱出するのは難しくなるからだ。

先日の暗黒大陸の時はソレスタルビーイングの介入のお陰で窮地を脱したが、そんな偶然が毎回訪れるとは限らない。

今後いかなる事態に陥っても一人でどうにか切り抜ける事が出来る様にするのが今の自分の目標である。

無論、それはシュウ博士を見つけるまでの話だが……そういう術は身につけておいて損をすることはないだろう。

だけど、一つ気になる事がある。本来ならグランゾンはシュウ博士程の天才でないとその性能を十全に活用する事は出来ないのだ。

だというのに、何故自分はシミュレーションとはいえ〝ワームスマッシャー〟まで扱える様になってしまっているのだろうか？

最近、コレに乗ってるとやけに頭の中がクリアになる時があるが……グランゾンって学習機能とか付いてたりしたっけ？

その６

◇月Ｆ日

今日も仕事に精を出していると、不機嫌オーラ全開のシオニー外務大臣が店に訪れてきた。

この間までどことなく機嫌良かったものだから気になって訊いてみたら、近い内にここリモネシアでとある映画の撮影が行われると言うのだ。

それの何処が悪いことなのですかと訊くと、まるで自分の国が観光位しか取り柄がないみたいだと強く言い返してきたのだ。

なんでも、訪れる撮影のメンバーは最近別世界の宇宙から時空震動で現れたフロンティア船団の人達らしく、その撮影メンバーの大部分が若い人達で構成され、年相応にキャピキャピしているその人達に苛立ちを感じているのだとか。

……まぁ分からない事もない。シオニーさんは若くして外務大臣という役職に就いた事で、若い時代の青春とは縁遠い立場になってしまっているのだから。

けど、だからといって相手を逆恨みをする様な真似は良くないと思う。シオニーさん

が苦労して大臣の座に就けた様に、そのフロンティア船団の人達だって何らかの苦労をしている筈なのだ。

若くして国の代表になれたシオニーさんの事を自分は尊敬している、あまり知った事を言いたくはないが、ここは国交を司る大臣として、広い心で迎えてやるのが良いのではないだろうか。

すると自分の言葉に耳を傾けてくれたのか、シオニーさんは俯きながら頷いた……が、表情を見せない所を見ると、やはりまだ気持ち的に思う所があるのだろう。

けれど、今回の事はある意味チャンスなのかもしれない。今回のその映画の撮影とやらに積極的に協力すれば、それはリモネシアの世界に対する良い宣伝になるのかも知れないのだから。

そうなれば映画の撮影場所に興味を持った人達がリモネシアに観光に来るかもしれないし、その時に上手く対応すれば国連から悪い目で見られる事はないと思う。

何事も前向きに考えてみた方がいいと、そうすれば気分も少しは晴れやかになりますよと、そう言うとシオニーさんは終始俯いたまま「そうね」と掠れる声で呟いていた。

流石に口が過ぎたかな、最近顔を合わせるものだからどこか友人感覚で接していた気もするから、これは怒られるかなと覚悟していたが、帰り際にお酒の所為かほんのり頬を紅くさせたシオニーさんがありがとうと感謝してきた事から、どうやら彼女との関係

は悪くなっていない様で安心した。

◇月V日

どうやら今日が撮影の日だったらしく、居酒屋でしかなかったウチの店もスタッフさん達の拠り所として、午前から営業している。

フロンティア船団の〝S，M，S〟という部隊の人達も来ていたし、バルキリーも結構な数を見かけたから、相当な規模の映画になりそうだなと今から期待する思いだ。

というか、バルキリーの搭乗者達は皆揃いも揃って若い、全員が自分よりも年下ばかりだった。十代でも戦闘機に乗れたりするんだなと思う一方、観光気分で盛り上がっている彼等を見て、少しばかりモヤモヤした気持ちにもなったりした。

そりゃシオニーさんも荒れる訳だ。けれど先日彼女に対してあれほど大口叩いたのだ、彼女のこれからの仕事を少しでも軽減させる為に、自分も出来るだけの事をしようと張り切って頑張ろうと思う。

――そろそろ休憩時間が終わりそうなので、日記は一度中断する。

午後も仕事に励んでいると、これまたエラい人が店にやってきた。その名も〝シエリ

ル＝ノーム〟銀河の妖精と謳われるこの人は初対面の人にもハキハキとしている。彼女は自分をウェイターとして呼び出し、ここのオススメメニューを寄越せと殆ど命令口調で言ってきた。

そんな時、ボディーガードの人がやってきてシェリルさんを戒めていたのだが……いやー、凄い美人さんだった。声がちょっと太くて体格がガッシリしてた気がしたけど、それが全く気にならない程に綺麗な人だった。

美女二人も前にしていては緊張してしまうもので、自分はシェリルさんの言われたオーダーを担当の者に伝える為に一度厨房に引っ込んだのだが……その時、イヤな連中が姿を現した。

〝次元獣〟次元の向こうから現れる災害の獣、その群が此方に近付いているという話を受けて、自分はシェリルさんと近くで突然の事態に混乱している緑の髪の少女――――ランカ＝リーさんを連れて近くのシェルターに避難させた。

そして自分はというと、グランゾンを置いてある海底付近でいつでも出られるよう準備していた。物陰に隠れていたとはいえ、すぐ近くでスーパーロボット達が戦っているのにそれを平然と見学出来ている辺り、　自分にも相当な度胸が付いてきたなと実感してしまう。

そして、自分の心配は結局は杞憂に終わり次元獣は殆ど全滅。白い牛みたいな次元獣

だけはどこかへと逃げていったが、スーパーロボット達が帰投していく様を見て、危険がなくなったと思った自分は深く安堵し、店に戻ってシェリルさんからリクエストされた料理を作る作業に戻った。

因みに料理の名は激辛麻婆豆腐。その辛さに一部の人から絶大な人気を誇る一品である。そして何気に自分の得意料理でもある。

ボディーガードの人は口から火を吐いてぶっ倒れた。ミシェルとかいう軟派な人も試しに食べてみるが、火を吐く代わりに眼鏡が割れてダウン。その場は一時期カオスな空気となった。

……そんなに辛いかな？　美味しいのに。

×月I日

突然だが、そろそろここを発とうと思う。暫くここで働いた事で資金は結構溜まったし、当分の生活には困らない位には稼げたと思う。

既に店長には話した。流れ者の自分にここまで良くしてくれた店長を裏切るような事をして大変心苦しいが、自分には目的がある。

シュウ博士を探し出してグランゾンの返還、そして自分を元の世界に返してくれるよう説得する事。

……ぶっちゃけて言えば最近この事に若干諦め掛けている自分がいるが、せめてシュウ博士の存在の有無だけでも確認しないとグランゾンの扱いに悩んでしまう。

だから明日にでもリモネシアから出ようと思う。当てのない旅になるが、既にこんな経験はこれで三回目、寧ろマトモな別れを言ってから旅立つのでこれまでよりは大分マシだと思う。

店長にはやるべき事があるからこれ以上いられないと伝えた。そんな不義理とも言える自分の言葉を店長は「部屋はそのままにしておいてやる」とだけ言ってきた。

……久し振りに泣いたと思う。店長の暖かさに、背中で語る男の姿に自分は静かに泣きながらまた来ますとだけ返し、店を後にした。

気持ちの良い人だった。将来働くのだったらあんな人の所で働きたいなと思いつつ、明日グランゾンの所へ向かう事にする。

……けど、一つだけ心残りがあった。結局あれから一度もシオニーさんは店に来ることなく、別れも言えないままだ。

店長の方から言っておくとあったが、やはり名残惜しいモノがある。せめて次に逢う時はその事をキチンと謝りながらシオニーさんの愚痴を肴にお酒を一緒に飲めたらなと思う。

まだ未成年だけど……ま、いいか。こういう時はノリと勢いが大事である。明日の店

長との再度の別れの際、店長もシオニーさんの愚痴を訊いてやって欲しいという台詞を考えつつ就寝に入る。

×月N日

リモネシアを離れて数日、最初の頃とは違って落ち着いてこの世界を見ることが出来たが……想像以上に混沌とした世界情勢に思わず目を覆いたくなった。

次元獣はまだ分かる。アレは次元震が主な原因で唐突に出現する謂わば災害だ。暴れ回る災害を前に人々が怯えるのも分かる。自分もそれとなく見つけてはグランゾンで撃破している。

だが、問題はそれ以外だ。〝ＷＬＦ〟とかいう世界なんちゃら戦線とかいう組織を筆頭に多くのテロリストが現在の世界情勢に反感を抱き暴れ回ったり、それを小国達が便乗してアストラギウスの傭兵を雇ったりして戦火を拡大。日々、世界のどこかでは必ずといって良いほど戦争が行われていた。

そして大国は大国で、自身の領土を獲得する為に毎日画策を練る為だけに軍備を強化していたりする。

まぁそんな訳で、軍は戦火を鎮圧するのに少しばかり後手後手で、テロリスト達が好き勝手ばかりするもんだから……ちょっとイラッとしてしまってね。

やっちゃいました。えぇ、その時そこにいたテロリスト達を一機残らずグランゾンでやっちゃいました★

はい、反省はしています。以前もう少し考えてから行動すると言っておいて、衝動的にテロリスト達を攻撃しちゃいました。

しかもその時の騒動を聞きつけて人革連の軍隊に追いかけ回されたりしました。

……特にピンクのティエレンにはこれでもかって追いかけ回されました。

まぁ、グランゾンの推進力を以てすれば逃げ切ることは容易いんだけどね。

お陰でワームスマッシャーも実戦で使えるようになったし、操縦技術の経験にもなれたから一石二鳥である。

……はい。調子に乗ってすみません。以後もっと気を付けます。

さて、そんな慌ただしい毎日を過ごしている自分だが、先日、ある物が自分の目に止まったので思い切って買ってみました。

白いロングコート。偶々洋服店にあったから買ってみたけど……いいよねコレ、白い生地がシュウ博士ぽくてコスプレしている気分になる。

ロングだから体格も隠せるし、これで仮面を被ってみれば……うん、普通に不審者だこれ。

つかコートと仮面って合わないのな。違和感バリバリの格好に苦笑いがこぼれたぞ。

さて、そんなこんなで世界を巡ってみたのだけど、シュウ博士の存在は今の所確認できていない。やはりどこか大きい研究所とかで話を聞くしかないのかな。
けどそんなコネなんぞ自分にはある訳ないし、下手に軍施設に向かおうとすればすぐさま不審者として逮捕されてしまう。
やはりもう一度グランゾンの力でネットに介入し、ポツポツと情報を集めるしかないのか……。
いっその事、噂のＺＥＸＩＳに会って話し合ってみるのも手なのか――。

◇

「さっきからドカンドカンと、一体何なんだ？」
現在地中に隠れていた自分は、さっきから上の方から聞こえてくる大きな爆発と振動に、これでは日記を書く事に集中できないと悪態を吐く。
もしかしてどこかの国が演習に来ているのか？　だとすればいい加減ここから離れ

た方がいいのかもしれない。

グランゾンは目立つ機体だ。目撃されたらしつこい程に追われる事だろう。何とか一瞬の離脱を試みようと、自分はグランゾンと一緒に地中から出てみると……。

「……ふぁっ!?」

目の前の光景に思わず変な声が出てしまった。見渡す限りの軍兵器、砂漠を埋め尽くさんばかりの機体の数に、自分は全身から血の気が引いていく音を聞いた気がした。

瞬間、砲撃の雨が此方に降り注いでくる。ヤバいと思い〝歪曲フィールド〟をグランゾンに纏わせ、最初の攻撃を何とか退ける。

よく見れば軍隊の中にフラッグやティエレン、イナクトの機体もあるし……しかもその中にはいつぞやのピンク色のティエレンの姿もある。

他にも赤いイナクトや白いＫＭＦ、黒くて如何にも精鋭っぽいフラッグ集団、そしてトドメには後ろで最近噂のスーパーロボット軍団が控えているではないか。

突然すぎる事態に目を回すがもうじき三大国家＋αからの一斉攻撃が再び襲ってくる。ここでやられる訳にはいかない。そう思った次の瞬間、俺はある武装を起動させ……。

「……グラビトロンカノン、発射!」

高重力の雨が降り注ぎ、全ての軍隊を地に叩き伏せた。

少しやりすぎた感があるが、下は砂漠だし……大丈夫だよね？

その7

それは、彼等にとっては唐突な出来事だった。〝ＷＬＦ（世界解放戦線）〟という国際テロリスト達の基地情報を入手した新部隊〝ＺＥＸＩＳ〟はコレを掃討する為にアザディスタン付近の砂漠地帯に直行。

抵抗するテロリスト達を退け、基地を壊滅状態にまで追い詰めたＺＥＸＩＳ、しかしそれは三大国家の連合軍によって仕組まれた罠だった。

圧倒的物量と軍の挟撃によりＺＥＸＩＳが絶対絶命の窮地に立たされた時――――奴が現れた。

「スメラギさん！　周囲に強大なエネルギー反応を感知、これは……地中からです！」

「何ですって!?」

これ程までにない強大なエネルギー反応の出現に、プトレマイオスの艦長であるスメラギ＝李＝ノリエガを始めとしたクルー全員が驚愕した時、その驚きは更なる驚愕によって塗り潰される。

地響きと共に地中から姿を現したのは、最近話題になっているも、その目的、正体共

に謎に包まれた〝魔神〟だった。
戦場が凍り付いた。突然現れた正体不明の魔神の出現により、戦場にいる誰もがその瞬間、行動を停止したのだ。
だが、〝不幸〟にもそれに抗う者がいた。幾度となくガンダムと戦ってきたＡＥＵの若きエース、パトリック＝コーラサワーだ。
彼の放つイナクトのライフルを皮切りに、周囲の機体も魔神に向けて一斉砲撃を浴びせた。たった一機に連合の大部隊が砲撃を浴びせている光景は、凄惨を通り越して一種の悪夢だった。
爆発と轟音、それによって舞い上がる砂塵と煙にＺＥＸＩＳの面々も圧倒された。
だが、煙が晴れた頃と同時に見えた無傷の魔神を前に、誰もが息を呑み込んで絶句した。
――魔神の胸部が妖しく輝く。その光を見た瞬間、スメラギは瞬時に危険を察知し、他のＺＥＸＩＳメンバーに後退を命じた。
「全機後退！　あの魔神から可能な限り離れるのよ！」
魔神の出現に浮き足立った軍の隙を突いての撤退。有無を言わせないスメラギの指示に、ＺＥＸＩＳの面々は抗議の声を上げることなくこれを承認、マクロス・クォーターと共に戦域を離脱しようとした時、ＺＥＸＩＳはスメラギの判断が正しかった事を思い

知る。
砂漠を覆い尽くす程に拡大した連合の軍隊が、一瞬にして地に伏したのだ。魔神に跪く様に、魔神に命乞いをする様に。
異常な光景だった。世界の圧倒的物量をたった一機によってねじ伏せている光景に、その場にいた全員が悪い夢を見ている気分になった。
イナクトが、フラッグが、ＫＭＦが、ＯＺのＭＳが、たった一機によって無力化された。地に叩きつけられた事で多くの機体は損傷、或いは大破し、全ての戦闘行動が不可能とされていた。
あと僅かでも後退指示が遅れていれば、今頃は連合軍の様に地に這い蹲って行動不能にされていた事だろう。
――その光景を前に唖然としながらも、プトレマイオスとクォーターの艦長は速やかに現在の領域の離脱を宣言。各機はこの指示に従ってそれぞれの艦に戻ってその場から離脱する。
内心で深く安堵するスメラギだが、次の瞬間、背筋に言いし難い悪寒を感じた。
「す、スメラギさん……」
「フェルト、どうしたの？」
「ぐ、グランゾンと名乗る機体から文による通信が届いています」

「……っ！」

プトレマイオスの乗組員であるフェルトの言葉を耳にして、スメラギは背後の光学カメラをモニターに移すことを指示、そして次の瞬間……。

「……一体、何が目的なの」

追従するように後ろから追いかけてくる魔神――――グランゾンにスメラギはイヤな汗が止まらなかった。

そして、送りつけてきた文通信には――――

『話をしよう』

たった一言そう書かれているが、その文面には此方の追及を一切受け付けない凄みを感じた。

既に背後から狙われている以上断る事も出来ないスメラギは、クォーターの艦長と短い遣り取りを経て、グランゾンの指示通りに付近の孤島で身を隠しながら話し合いに応じる事にした。

一緒に降り立つ蒼き魔神を見据えながら、スメラギは言いようがない不安に駆り立てられていた。

◇

――――やべぇ、どうしよう。

ＺＥＸＩＳの皆が我先にとばかりに逃げていくから、居たたまれなくなった自分も勢いで追いかけてしまった。

今、俺はとある孤島でマクロス・クォーターの格納庫にいるんだけど……皆グランゾンを囲んでメッチャこっち見てる。

しかも中にはあの竜馬さんやカミナの兄貴、黒の騎士団のゼロまでグランゾンの足下に集まっているもんだからスゲー出づらい。何か子供も興味深そうにしているし……ホントどうしよう。

そりゃゲッターを始めとした色々なスーパーロボットがいるんだから彼等の後ろには世界に名高い様々な博士がいたりするし、その中の誰かに話を聞けばシュウ博士の居

所も分かるのではないのかと思ったりもしたけれど……やっぱりいきなりこうした出会い方は不味いよなぁ。

やっぱどこかで一度ちゃんと話をした方が良かったのかなぁ、暗黒大陸の時は思いっきり逃げ出してたし……。

けど、それはもう言っても始まらないから今更言いっこなしである。

というか俺、さっき慌てて通信送ったけど誤字とかなかったよね？　ちゃんと『話をしましょう』になってたよね？　〝鼻しおしお〟とか訳分からない文脈になってないよね？

どれもこれも今更過ぎる悩みだが、ここまで来てはもう後戻りは出来ない。向こうもそろそろ痺れを切らす頃だろうし、俺は仮面とコートを羽織ってスーパーロボットを駆るパイロット達の前に降りたったけど……。

うん、やっぱゼロと被るわこれ、仮面越しでもゼロが驚く様子が見て取れる。

此方もそんな話せる事はないし、手短に済ませようとプトレマイオスの艦長とクォーターの艦長二人と格納庫で面と向かって話をする事にした。

片や歴戦の強者を思わせる強面の艦長、対してテロリストの片棒を担ぐソレスタルビーイングの現場指揮者として活躍するのは、強面の艦長とは対照的なグラマーなお姉さん。

思わず鼻の下が延びてしまうが、仮面を被っている為にバレる事はない。けど、それ以上に周囲の視線がキツいので引き締めて話をする。

まずは此方から、呼びつけておいたのはこっちなのだから礼儀としてワビを入れるのは当然だよね。

「まずは礼を言わせて頂きたい。この度はいきなり此方の要望に応えて貰い、話し合いの場を設けて下さり感謝します。ＺＥＸＩＳの皆さん」

出来るだけ刺激しないように下からの姿勢で話し掛けるが……あれ？　なんか周囲の視線の強さが三割程増してね？　竜馬さんなんか「ケッ、」て舌打ちしたんですけど？

何か間違えたか？　そんな俺の疑問は余所に向こうからの紹介に自分の視線が自然と二人の艦長に向けられる。

「いえ、それには及びません。噂の魔神殿とこうして対面出来るのであれば我々にとっても望む所です」

魔神かぁ、まぁそんな感じの見た目だし、そう思われるのは仕方ないよね、一部の人には重力の魔神とか呼ばれたりしているし……。

けれど話も長引かせるのも悪いし、ここの人達にはそれぞれ機体の整備があるから長いことここに居座るのは止めておこう。

「シュウという博士号を持った人間を知りませんか？」そんな台詞を口に出す前にジェ

フリー艦長に遮られ……。

「自己紹介がまだでしたな。私はマクロス・クォーターの艦長を務めさせて頂いているジェフリーと……」

「プトレマイオスの艦長、スメラギです。……えっと」

丁寧に自己紹介をしてくれるスメラギさんとジェフリー艦長、お二人の紹介にこれはどうもと軽く会釈する一方、自分の思考が一瞬停止してしまった。

……あれ？　そういや俺この時なんて言えば良いんだ？　素直に本名を名乗るの？

いやいや無理無理！　すぐそこでヨーコちゃん達がこっち見てるもの、カレンちゃんが疑わしそうにこっち見てるもの！　本名晒した瞬間面倒事になるのは目に見えているものぉぉぉぉっ!!

ヤヴァイ、焦りで汗がダラダラと流れる中、俺はひたすら偽名に思考を巡らせた。

様々な偽名候補が脳内で浮かんでは消えていくが、どれもしっくり来るモノはなく、時間が無情に過ぎていくばかり。

二人の艦長の目が細くなる。その視線に居心地が悪くなった時、ふとある名前が俺の中で閃いた。

いや、これは名前ではなく呼称だ。人らしくないネーミングだが、今はこれで誤魔化すしかない。

「……蒼のカリスマ」
「えっ？」
「なに？」
「私は蒼のカリスマ、自由を求め返還を求める者です。以後、お見知り置きを」

その後、簡単な会話を二、三回繰り返した後、俺は逃げるようにグランゾンのコックピットに乗り込みＺＥＸＩＳから離脱。
自分のあまりのネーミングセンスのなさに、俺はグランゾンの中で悶死していた。
あぁ、これが黒歴史か……！

その８

×月○日

人生最大の汚点を晒したけれど、どうにか立ち上がる事が出来た自分は現在、とある場所に向けてグランゾンを海底で走らせている。

先日ＺＥＸＩＳの艦長二人と話をした結果、シュウ博士の存在こそ確認できなかったが、この世界における何人かの博士を紹介して貰える事に成功した。

まずはゲッター線の権威である早乙女博士、主な研究内容はゲッター線にまつわるものとゲッター線を狙うとされるインベーダーについてだ。

インベーダーは無造作に人間を襲ってきたりする割にその生体と目的が明らかにされていないモノだから、次元獣と並んで厄介な害獣とされている。

自分も何度か交戦した事があるから分かるが……いやーグロいね、奴らの溶解液を防ぐ為に歪曲フィールドを至近距離で展開してた為に目の前でグシャリとなったのを目の当たりにした時は、暫く肉系の食べ物は食べれなかった。

おかげでベジタリアンに目覚めるかと思ったよ全く。

次にコロニー側のガンダムを開発した各博士達だが……どうやら現在はどこかに身を隠したのか身元が分からず、連絡すら出来ないらしい。

そしてロボット学の権威とされ、あの兜十蔵博士の友人とされる三博士と光子力研究所で勤務している弓教授なのだが……遠巻きにもの凄く此方を睨んでくる甲児くんとさやかちゃんが怖くて聞くのを断念。

いや、怖がっている場合じゃないと言うのは分かるよ？　けどさ、あの悪魔みたいに凄んでくる甲児君を前に弓教授の居場所とか聞けるわけないじゃん。

つかさり気なくさやかちゃんも甲児君にくっついてたし……何？　あの二人って既にそういう関係なの？　俺はまだ彼女どころかこの世界にきてマトモな友人いないのに？

……まぁ俺には黒の兄妹の皆がいるしぃ？　心の中にはカミナの兄貴がいるしぃ？

全っっ然羨ましくなんかないしぃぃ？　ボッチじゃないしぃぃ？

――――（以下ボッチの嫉み妬みのオンパレード）

落ち着いたのでもう一度執筆を続ける。今の所シュウ博士の事について有益な話が聞けそうなのはゲッター線の早乙女博士と、スコート・ラボという場所で研究しているトライア博士だ。

詳しい話はお二人が口を堅く閉ざした為に聞き出せなかったが、その辺りはグランゾンのネットワーク介入で調べ上げられるから良しとしておこう。

別れ際にちゃんとお礼も言ったし、そんなイヤなイメージは持たれなかったと思うけど……大丈夫かな？　あの時の自分は色々混乱していて何をやらかしたのか全く覚えていないんだけど、なにか失礼な事していないかな？

既にいきなり呼び止めておいて一方的に話をするだけして切り上げた事が失礼以外のなにものでもない気がするが……うん、これ以上考えるのは止めよう。胃が痛くなってくる。

だからこの疲れを癒すためにリモネシアに行って観光を満喫しようと思う。これからの事について色々考えを纏めなきゃいけないし……それに、最近俺頑張ってたしこれくらいはいいよね？

〝たまには現実から逃避したっていいじゃない！　人間だもの！〟　ｂｙ蒼のカリスマ

……やっぱ、これはないよなぁ。〝蒼の〟って、〝カリスマ〟って……数日前の自分を殴り飛ばしてやりたい所だ。

今更だけど、このネーム変えたり出来ないかな。

◇

リモネシア付近の孤島で就寝し、珍しく寝過ごしてしまった俺は今度こそリモネシアに向かうべくグランゾンを発進、これからどう動こうか色々考えた時、それは起こった。
〝時空震動〟次元震よりも規模の大きい空間の揺れをリモネシアから観測した俺はイヤな予感を感じたままリモネシアに向かうと、信じられない光景に我が目を疑った。
「なんだ、これ？　いったいどういう事だよ」
そこにあったのはリモネシアという小さな国ではなく、ただ巨大に広がったクレーターがあるだけだった。
町もなく、森もなく、青かった海も、澄んだ空も灰色に染まり、人の……否、生命の鼓動も感じさせられない死の世界だった。
あるのは疲弊した様子のスーパーロボット達とクレーターの中央付近で佇む人の形をした次元獣と騎士を連想させる二機のロボットと趣味の悪い機体……そして、今までに見たことのない次元獣達と巨大な戦艦だけだった。

何故こんな事になっている？　店長は？　シオニーさんは？　この国にいる人達は？　そんな混乱の渦の真っ只中にいる自分にあのイヤな声をした男から音声通信が入ってきた。

『おや、まさか貴方まで此方に来るとは……いやはや、今日は色々と記念となる日のようですねぇ、魔神殿？　いや、蒼のカリスマ殿？』

「……お前は」

『そうですね、お互いここは初対面ですので改めて名乗りましょう。私の名はアイム＝ライアード、そして我が愛機アリエティスです。以後お見知り置きを』

胡散臭そうに、そして嫌味ったらしく自己紹介を垂れる男は、人の神経を逆撫でするように機体と一緒に頭を下げてくる。

「お前が、こんな事をしたのか？」

『私が？　いえいえ、この惨状は全てあの御方が顕現した余波によって生まれたもの。そこに悪気もなければ悪意などある筈がありません』

操縦桿を握る手が震える。頭のそこからフツフツと沸き上がる感情の波に押し潰され掛けた時、今まで黙っていた人の形をした獣が宙に浮かんで俺の前にまで現れた。

『ほう？　今度は歯応えのありそうな奴が出てきたじゃねぇか？　おいアイム、コイツは俺にやらせろ』

『落ち着き下さい我らが王よ、アナタはこの世界に顕現されてまだ日が浅い。我々と、そしてアナタ様の望みを叶えるため、ここは少しご自重下さい』

『コイツと戦えりゃそれだけで記憶が戻りそうな気もするが……良いだろう。折角上物の獲物候補が二つも現れたんだ。ここは見逃してやるよ』

まるで品定めの様な視線。自分を獲物と断ずる王と呼ばれる男の鼻で笑う様を見て、頭の中で急速に沸き立つ何かを覚えた。

そして次の瞬間、グランゾンのモニターが何かを捉えた。拡大して目の前に広げてみると――――。

「……っ!?」

時空震動の衝撃でバラバラになった家屋、その付近には自分がついこの間まで働いていた店の看板と……

血塗れの店長が横たわっていた。

「――――このやろぉぉぉぉっっっっっっっ!!!!!」

瞬時にワームホールを展開しグランワームソードを取り出す、目の前にいる存在を消し去る為に、殺意を乗せた一撃を化け物に向けて振り下ろす。

一瞬だけ驚きを見せる化け物だが、次の瞬間にはニタリと笑い、体を捻る事で俺の一撃をかわして見せた。

初めてだ。こんなにまで誰かを殺したいと思うのは、こんなにまで殺してやりたいと願うのは……。

『今のは良い一撃だ。殺意が乗ってやがる。あと一瞬速ければ俺を殺れたのになぁ……』

そういって僅かに掠め、出血した腕を舐めとりながらほくそ笑む化け物に俺は構わず

二撃目を放とうとするが……。
『王よ、ここは私達にお任せ下され！』
『我らの王を狙う不躾者は、我らの手によって葬ります故』
『あぁ？　手ぇ出してんじゃねぇよ。コイツは俺の獲物だと言った筈だぜ？』
　化け物の凄みを含めた物言いに味方すら震えているが、アイムだけはやれやれと肩を竦めてガイオウに進言するように背後にアリエティスを近付ける。
『良いではありませんか王よ、そこの魔神はアナタ様が認められた者、であるならばいずれアナタの前に立つのは当然、収穫というのは時に待つことも重要だと思いますが？』
『……チッ、まぁいい。だがやるなら徹底的にやれよ。鉄ってのは熱い時に打っておかねぇと意味ねぇからな』
『お任せ下さい王よ！　魔神の頚は勝利と共に持ち帰りましょうぞ！　往くぞマルグリット！』
『……はっ！』
　何処かへ行こうとする化け物を追撃しようとするが、目の前に立ち塞がる二機のロボットに行く手を遮られてしまう。
　邪魔だ。そう思って剣をデカい方の奴に振り下ろすが……簡単に防がれてしまった。
『ぬぅっ！　これほどまでに重い一撃とは……流石魔神と言った所か、しかぁぁし！』

「っ！」

『このシュバル＝レプテールとエメラルダンを相手にするには踏み込みが足りんわぁぁぁっ！』

デカブツの持った槍に振り払われ、強制的に後ろに下がらされると、上空に複数の紅い宝石が浮かんでおり――。

『往け！　小さき射手達よ！』

細くも鋭い光の矢が、一斉に降りかかってきた。

歪曲フィールドで防ぐが、デカブツと白い奴。両者の連携された猛撃に徐々に圧され始めていた。

それだけでは終わらず、あの化け物が残したとされる新たな次元獣達までもがグランゾンと自分を押し潰そうと襲いかかってきた。

――――視界がクリアになる。あれほどまでに荒れ狂っていた思考は穏やかな水面の様に静かになり、あれほどまでに荒かった剣捌きが目の前のマシンと打ち合う度に洗練されていく。

次第に今度は相手の動きまで読みとれる様になっていく、相手の動きを真似て今度は自分の動きへと昇華させていく。

コピーでもなく複製でもない。一度見た技を自分のモノにしていく。一体いつ自分にはこれほどまでに操縦技術が備わったのだろう？　そんな疑問を感じる一方で、今度は先程ファンネルもどきを撃ってきた白い奴にお返しとばかりにワームスマッシャーを叩き込んだ。

『きゃぁぁぁぁっ!?』

『マルグリット!?　……おのれぇ、まさかこの乱戦の最中こうまで此方に狙いを付けてくるとは、奴は本物の魔神か!?』

受ける。避けるのではなく相手の動きの流れを読んで受けて次の瞬間別の方向に受け流し、同時に隙を突いて相手の懐に返し刀で突き破る。

徐々に体に馴染んできた新しい近接戦闘の操縦技術と倒れ伏して消えていく次元獣を横目に、この場を離脱しようとする奴らが見えた。

その判断は正しい。彼等の目的が足止めだとするのならば既に十分にその役目は果

たされた。化け物の姿は何処にもなく、あの巨大戦艦も余程高度な技術を使われているのか、グランゾンの索敵にも掛からない。

既にこの場での戦闘は終わった。――だが。

「ククク……まさかそちらから仕掛けておいて逃げるという話はないだろう？」

グランゾンに命じてある武装の使用を解除する。目の前に現れる複数のワームホール。それを逃げていく彼等に狙いを合わせる様に向ける。

「この武器は空間と時間、全てを歪曲し、破壊する。……さぁ、覚悟はできたか？」

口角がつり上がる。頭の中は怒りと殺意で満ちていながら、それをどこかで嘲笑う自分がいる。

「〝ディストリオン……ブレイク〟！」

怒りを乗せて、殺意を乗せて放った光はリモネシアの大地を喰らい、海を割り、空を切り裂いた。

そこにいた次元獣の全てを呑み込みながら突き進む閃光は、やがて光の爆発となって海上で天を衝く柱となった。

『やれやれ、手の掛かる男ですね。アナタも』

どこかであの人の呆れた声が聞こえた気がした。

その⑨

×月◇日

あれから暫く時間が経って、漸く落ち着く事が出来たので日記の執筆を再開する。

あの後、世界は大いに荒れた。リモネシアに現れた連中は新帝国インペリウムを名乗り、その頂点には次元獣を統べる破界の王、〝ガイオウ〟が世界に向けて宣戦布告を宣言。次元獣を使って暴れ回る奴らを世界各国のお偉いさん方は今も状況の対応に追われ、右往左往している頃だろう。

オマケに新帝国インペリウムの外務大臣がシオニーさんと来たものだ。しかもあの人が宣戦布告を宣言したのだから、人間どう変わるのか分からないものである。

世界中が色々と回っているその合間……俺は、特に何もしなかった。シュウ博士の探索もせず、他の博士達に話を聞くこともせず、ただ俺は亡くなった店長の亡骸をリモネシアの生き残りの人々と共に埋葬する事しかしなかった。

あの時空震動でリモネシアの多くの人間が死んだ。老人も子供も男も女も関係なく、沢山の人達が死んだ。生き残った数少ない国民の人達は国を捨てて隣国へ逃げ去った。

今ここにいるのはそんな逃げる事をしなかった僅かな老人と子供達だけだ。死人の様な顔をした彼等に俺なんかが何か言えるわけもなく、時間だけが無情に過ぎていった。

×月〇日

そう言えば、あの時聞こえた声は何だったのだろうか？　何処かで聞き覚えがある気がするが……どうでもいいか、今の自分には関係のない事だ。

既にグランゾンの存在は先の砂漠と今回のリモネシアの件で完全に世界中に知れ渡った事だろう。　何せテレビで〝謎の魔神現る！〟とデカデカと放送されていたのだから、有名になったものである。

最近、体に力が入らない。人の死を見るのは昔……病気で亡くなった婆ちゃんの時以来だからなのか。胸の何かがぽっかりと空いたみたいだった。

食べ物も満足に喉を通らない。どうせ食べられないなら食料の無駄になるのでお年寄りや子供達に分けてやる方が賢明である。

体に力が入らない。これが心身共に疲れ切った人間の状態なのか……

もうこの日記を書くのも億劫になってきた。

……俺、このまま死ぬのかな？

×月Z日

相変わらずインペリウムは好き勝手に暴れ回り、その所為で傷ついた隣国を今度は別の国が国土を広げる為に侵攻を始める。まるで弱った獲物に群がるようなハイエナだと思いながらも、その時まで何も感じる事はなかった。

尤も、この国を破壊した者の一人である自分が言えた事ではないが……因みに、幸か不幸かリモネシアは隣国から狙われる事がなかった。目立った資源もなく、国としての機能が働いていないリモネシアには侵攻する意味もないのだろう。

何せ人口が百にも満たない国だ。世界中の誰もがリモネシアの事など頭にないのだろう。

そして俺も、その時まではそんな世界などどうでも良かった。何に対してもやる気など出ないし、いっそ死んだ方がいいのでは？　と、そんな事も考える様になった。

覚束無い足取りでこの日自分がやってきたのは……店長達が埋葬された簡易墓地だった。ただ亡骸を土に埋めて、分かり易く木を建てただけの簡単な作り、どれが誰の墓だったのか――――今はもう分からない。

けれど、店長の墓だけはどれなのか分かった。彼の墓前に座り、枯れた声で色々話をし、体力の限界が来たのか、そこで横になった時――――変な奴が現れた。

〝アサキム＝ドーウィン〟漆黒の出で立ちに血の様な朱い眼をしたその男を前に、俺はソイツが自分の前に現れた死神だと錯覚した。

何やら「この程度か……」とか、「これなら泳がす価値もないか……」等と好き放題呟いた後、奴は徐に剣を取り出し、俺の所へゆっくりと歩み寄ってきた。

せめて痛みを感じないように殺してくれと願うが、生憎相手は死神だ。此方の都合など聞き入れはしないだろう。

けれど、それで楽になるのなら安いものか、そう思って眼を閉じたとき、今度は別の人に助けられた。

男の人は〝不動〟と名乗り、自分を死神から助け出した後、皆の所へ連れて行かれた。

何で俺を助けたのか、そう言うと不動さんは別に俺を助けるつもりなどなかったらしい。偶々近くを通りかかり、自分を捜していた子供達に頼まれたから連れてきたに過ぎないと。

……正直、余計なお世話だと思った。この世界に意味もなく連れ出され、訳の分からない化け物達と戦わされ、親しい人達、多くの人間が死んでいくのを目の当たりにして、もう俺は色々と限界が来ていた。

そんな時だ。子供達から手渡された一杯のスープ、なんの工夫もない野菜をベースにした簡単なスープ。それは先日子供達と老人達に教えた俺の前いた世界の郷土料理

だった。

――――美味かった。今まで食べ慣れた筈なのに、食べ飽きたモノなのに、俺はスープを啜る手を止められなかった。

そんな俺を見て、子供達は笑った。この間まで自分の住んでいた国が壊され、泣いてばかりいた子供達が満面の笑顔で笑っていたのだ。

老人達が言った。この子達が笑えているのは俺のお陰だと、俺が生きる事の辛さと楽しさを教えてくれたのだと、老人達はそう言って子供達同様笑って見せた。

……俺が何をした？　俺がしてきた事なんて残った森林を使って雨風を凌ぐだけの簡単なセーフハウスを作った事と、何とか無事だったテレビやラジオ等の機械の整備位だ。

それも俺一人じゃない。ここにいる老人達と子供達の手を借りて漸く出来た事だ。それに、そうしたのはリモネシアという国を壊した自分の罪悪感がそうさせただけだ。

なのに、皆はそれでもありがとうと言ってきたのだ。

今、俺が生きているのはこれまで出会った人達のお陰だ。ゴウトさんから機械弄りのノウハウを、ヨーコちゃんやリットナー村の皆からは木々を応用した罠やセーフハウスの作り方を、黒の兄妹からは生きようとする意志を、それぞれが俺の中で俺の糧として確かに存在している。

――――泣いた。それはもう無様に泣いた。大の男が声を上げてわんわん泣いた。鼻水と涙でグシャグシャになった酷い顔を見ても、皆は何も言わず、ずっと笑っていてくれた。

この日食べたスープの味を俺は生涯忘れる事はないだろう。

×月γ日

今、俺はコックピットにいる。もう乗ることはないと思っていたこの場所で、海底の様子を眺めながら日記を綴っている。

昨日、漸く食べ物を口にし、少しばかり力を取り戻したのか、体には幾分か力が戻っている。

気分も昨日までとは違って少しばかり晴れやかだし、体の方は嘘のように軽い。まだ全快とは言えない状態だが、一度の戦闘位なら何とか耐えられるだろう。

……今朝、意外な人と顔を合わせた。それはこの国のトップだった人、リモネシア大統領だった。

彼は自分に会いに来るなりいきなり頭を下げてきた。申し訳ないと、何もしなくて済まなかったと、此方の制止の言葉も聞かず、何度も頭を下げてくる大統領に自分は居たたまれなくなり、遂には騒ぎを聞きつけてきた皆が何事かと顔を覗かせてきた。

その後、落ち着いた大統領（名前聞きそびれた）の話によると、あの日、ガイオウが現れた日に執務室にいた大統領はシオニーさんから銃口を向けられ、危うく殺される所だったらしいのだ。

……俄には信じられずに目を見開いてしまうが、続きを聞いている内にやはりシオニーさんは優しい女性なのだなと安堵する。

向けられた銃口からは銃弾は出ず、代わりに空砲の音だけが辺りに響き、シェルターに避難するように指示を出して部屋を後にしたのだという。

恐らくは近くに誰かがいたのだろう。銃声を鳴らした事で大統領の殺害を意図的に相手に知らせ、やるべき事をやったとされるシオニーさんを見て、ソイツは死体を確認せずに大統領府を後にしたのだとか。

シェルターによって難を逃れた大統領は暫くはリモネシアを離れていたのだが、自国の国民が心配になって戻ってきたのだとか……。

うん、今更過ぎる話だが大統領を責める権利は自分にはない。そもそも何で自分に謝りに来たのだと聞くと、何でも周囲の住民から話を聞くと自分がこの国の代表なのだとか……。

勘弁して欲しい。偶々若い男性がいないから必然的に色々手伝ったり指示しただけで自分は特別な事など何一つしていないのだ。

けれど大統領という比較的若い人がこの地に訪れたのは僥倖だ。彼を村の皆に預け、俺は自分がすべき事をやる為にもう一度この国から踏み出す事を決めた。

一部の老人達には話を通している。子供達には……お土産を約束する事でなんとか受け入れて貰えた。

ケリを付ける。インペリウム帝国とガイオウ、そしてシオニーさんともう一度話をする為に、俺は再びグランゾンを駆る。

グランゾンに乗る少し前、グランゾンを置いた場所に向かう為に歩いていると、不動さんと出会った。

お前は何者だ？　そう不敵に笑いながら問うてくる彼に何故か俺は自信満々に答えてしまった。

なんかまた黒歴史が増えた気がするが……細かい事は気にしない。

ひとまず今日の日記はこれまでだ。後は明日、俺が生きてたら続きを書こうと思う。

が、その前に一つだけ、言い訳代わりとして書いておく。

――――すみません博士、このグランゾンはもう暫く貸して貰います

◇

日記を横に置き、操縦桿を握り締めてグランゾンを海上へと浮上させていく。海面から出て、宙に浮かぶグランゾン、その最中モニターにある人物の姿が見える。
不動さんだ。此方を笑みを浮かべながら見つめてくる彼に自然と自分も笑みが出る。

『魔神を駆る者よ、お前は何者だ？』
『……俺は、蒼のカリスマだ。それ以上でも以下でもない』
まったく、相変わらず酷いネーミングだ。だがこれでいい、ダサい位のが自分には丁度いいのだ。お陰で適度に笑えてリラックス出来る。
さぁ、行こう。今の自分は謎の男蒼のカリスマだ。〝白河修司〟という名は今は横に置いておこう。
グランゾンのバーニアに火を灯す。不動さんから教えて貰った座標に向かって、俺は

意気込みを込めて叫んだ。

「グランゾン、出るぞ！」

目的地はサンクキングダム。俺はたった一人の決戦の決意を持ちながら、かの地へと向かう。

ただ、この時一つ問題点があった。

……サンクキングダムって、どこだっけ？

その１０

〝サンクキングダム〟その昔、ヒイロ＝ユイの思想を元に完全平和主義を謳った王国。平和を愛し、世界の繁栄を願った国は世界のエゴによって押し潰され、その国の存在は歴史から抹消された。

だが、そんな国に再び危機が迫ろうとしていた。インペリウム帝国の猛威に晒され、この国は地球上からの消滅の危機にあった。

国連は動かない。何故ならどの国も世界中に撒き散らされた次元獣の対処の為にそれ処ではないと言うが、実際は存在しない国に自国の戦力を無駄に浪費するのを嫌がった為だ。

そしてインペリウム帝国の後始末はとある部隊に一任する事になる。〝ＺＥＸＩＳ〟ソレスタルビーイングや黒の騎士団というテロリスト集団を始めとしたスーパーロボット軍団。

別世界の〝ＺＥＵＴＨ〟という特殊部隊を新たに戦力を加えた事により、各世界の重鎮達は彼等にインペリウム帝国の対処を命じた。

各国の重鎮達の思惑を理解しながらも、彼等は敢えてそれに乗る。利用される為ではない、全ては世界をより平和に近付ける為に彼等は戦う。
自分の意志で、自身の決意と共に……一行はサンクキングダムへと向かった。

◇

「ぐぁぁぁっ!!」
「クロウ!」
サンクキングダム。そこでインペリウム帝国と激闘を繰り広げていたＺＥＸＩＳだったが、アークセイバーの一人であるシュバル＝レプテールが駆るエメラルダンの猛攻によって、ＺＥＸＩＳの勢いは押され気味にあった。
しかもその最中、部隊の要の一つであるブラスタが大破。新種の次元獣と二機のアー

クセイバーの猛威により、ＺＥＸＩＳは徐々に窮地へと追い込まれていた。
「チィッ、これじゃ埒があかねぇ。シモン！　俺達のドリルで一気に風穴空けるぞ！」
「分かったよ兄貴！」
「グレンラガンだけ任せるわけにもいかねぇ、斗牙！　俺達も行くぜ！」
「分かった！」
「キラ、俺達で突破口を開くぞ！」
「うん、アスラン！」
　追い込まれながらも士気を高め続ける彼等は流石歴戦の勇士と言えた。新種の次元獣の猛攻を凌ぎ、避け、隙を付いての反撃。これまでの戦いを経てＺＥＸＩＳとＺＥＵＴＨ、共に成長し、進化していった。
「いいねぇこの感じ、熱くなって来たじゃない！」
「スザク、ＹＦ―５０５ポイント目掛けて撃て！　カレン！　次元獣をその隙に輻射波動で討て！」
「了解！」
「分かってる！」
「ヒイロ＝ユイ！　私の後に奴を撃て！」
「……了解」

敵対していた者達が一時的に手を取り合い、強大な敵に立ち向かう為に共に戦う姿は……皮肉にもサンクキングダムが理想としていた世界の姿でもあった。

ほんの僅かな合間の共闘、互いに思うところはあるものの、今は目の前の敵を倒すために互いに協力しあう。

世界の枠を越えても尚繋がるモノ、それは確かに存在するものだとクォーターの艦長、ジェフリーは確信する。

この調子ならインペリウム帝国の打倒も近い。ガイオウの力は未だ未知数だが、やれない事はないと誰もが思った時。

「――――っ！　新たな機影を確認！　これは……ぐ、グランゾンです！」

マクロス・クォーターのオペレーターからの報告と同時に、上空から現れる蒼き魔神の出現により戦場は凍り付いた。

深い蒼、魔神と呼ぶに相応しい風貌と力を有した第三者の介入によりＺＥＸＩＳとＺＥＵＴＨ、インペリウム帝国も彼の者の登場に視線が釘付けとなっていた。

「グランゾン、この戦場に介入するつもりか！　リモネシアの時といい、奴は何を考えている！」

蒼き魔神――グランゾンを駆る蒼のカリスマの事を思い出すジェフリーは苦々しく呟いた。

砂漠で連合軍を無力化させた事といい、リモネシアでガイオウ一人に危機に陥った時といい、奴の行動は不確かなものばかりだ。

「……まさか、我々に味方をしているつもりなの？」

唯一可能性がありそうな答えに、スメラギはそんなバカなと否定しながらもその言葉を口にする。

最初はボートマン……エルガン＝ローディックからの使者かと思った。彼は国連に身を置きながら未だ謎の多い人物だ。グランゾンの様な隠し玉があると言われても不思議ではない。

だが、その可能性をエルガン自身が否定したのだ。あんな機体は知らないと、冷静で物事に対して堂々している彼が、珍しく目を丸くして知らないと言ったのだ。

――嘘も言っている様子はなかった。なら一体目の前の魔神は何なのか、一向に答えの出ない難問に頭を悩ませている合間、グランゾンはサンクキングダムの大地に降りたった。

『おのれぇ、また出会したな魔神！　今度こそ貴様を打ち倒し、ガイオウ様への手土産にしてくれる！』

シュバルの駆るエメラルダンが標的をグランゾンに絞る。双槍を携え、背中からのバーニアを噴かせて飛び出してくる。その突進力と破壊力は凶暴な闘牛を思わせる。

だが、目の前の魔神は華麗に闘牛を捌くマタドールではない。建築物を破壊しながら突っ込んでくるエメラルダンを、グランゾンは凶悪な剣を異空間から取り出し、真っ向から受け止めたのだ。

『っ、何だと!』

機体の大きさはエメラルダンの方が上だ。それ故に超重量級の重さを誇り、そこから繰り出される一撃は先のブラスタと同じで並の機体ならそれだけで粉砕される一撃だった。

『こ奴、まさかここまでの力を有していたとは……っ!　以前あの島国で戦った時とはまるで別人ではないか!』

『そういう貴方は前より迫力が欠けているな?』

『っ!』

『隙あり、だな』

魔神からの音声通信にほんの僅か動揺してしまうシュバル。近接戦闘において一瞬の油断も命取りであることを知る彼はすぐさま回避しようと機体を動かすが……。

それよりも速く、魔神の一撃がエメラルダンを切り裂いた。背中に収容されていた武装ごと片腕を切り落とされ、駆動部にも損害が出た事により、エメラルダンは事実上戦闘不能。

エメラルダンのコックピットの中で、シュバルは苦々しくコンソールを叩く。
……戦場が静まりかえる。理性の無い筈の次元獣達ですら、目の前のスーパーロボット達にではなく魔神を警戒している。
アークセイバーの一角が呆気なく崩された事実にＺＥＸＩＳとインペリウム、そのどちらもが目を剥いて言葉を失っていた。
ただ一人、破界の王とされるガイオウだけは愉快に口元を歪めていた。

◇

……やっべー、マジどうしよう。サンクキングダムを探すためにアチコチ飛び回っ

ていたらすっかり遅くなってしまった。
そして漸く見つけたと思ったら、噂のＺＥＸＩＳとインペリウムが先に戦ってたし、これじゃ俺が乱入者じゃん。
一人で戦うつもりだったからこれはこれで嬉しいけど、これでは空気の読めない奴みたいじゃん。ＺＥＸＩＳの皆引いてるじゃん、完全に色々ぶち壊しだよ俺。
しかもこの間のデカい奴も勢いに乗って倒しちゃったし……つーか、今の人何気に手を抜いたよね？　リモネシアで戦った時とはまるで攻撃に鋭さがなかったからビックリした。
……さて、後は残っているのは次元獣共と白い奴、そしてガイオウだったな。
あのデカい戦艦は敵性標的から排除。あそこにはシオニーさんも乗っているのだから流れ弾が当たらないよう気を付けねば……。
残りの次元獣は他のスーパーロボット達が相手をすることにして……。俺はここで仮面を被りオープンチャンネルと映像回線を開いてスーパーロボット軍団の皆に伝える。
『敵はまだ残ってます。ご助力しますよＺＥＸＩＳ』
『蒼のカリスマ……貴殿は何の為にここに来た？』
何の為か、そう言えばこれまでそういうものを抱いた事はなかったな。当時の慌てて

ばかりの自分を思い出し、自然と笑みが零れる。
『ククク……、以前も言った筈ですよ。私は自由を求めると。彼等がいると私も色々困るのでね』
　早いところリモネシアに帰って復興のお手伝いをせねば、あと子供達にお菓子を買ってあげなきゃいけないし……。
　少しばかりの沈黙。悩んだ様子を見せるジェフリー艦長は一度だけ頷くと、共闘の了承を伝えてきた。
『……了解した。貴殿が此方に危害を加えない限り、敵対しないことを約束しよう』
　少し言葉に刺がある気もするが……まぁ仕方ないだろう。怪しさＭＡＸの自分がいきなり参戦しようというのだ。部隊を指揮する身としては当然だよね。
　ただ、ジェフリー艦長の判断が気に入らないのか、部隊の人達の何人かが滅茶苦茶ブーイングしてきた。竜馬さん辺りなのかなと思って其方に視線を向ければ、新顔らしきロボットの数体が此方に警戒と敵意を向けている。
　え？　なんでそんな怒ってるの？　この間の砂漠での出来事まだ怒ってるの？　いやでもあの時はキミ達いなかったよね？
　何故ここまで自分が敵視されてるのか、自分自身でも理解出来ないまま呆然としていると、インペリウム帝国の母艦である巨大戦艦から……奴が現れた。

『ハーッハッハッハ！　まさかテメェの方から来てくれるとはなぁ、歓迎するぜぇ？　グランゾン！』

『――――ガイオウ』

自身を巨人に姿を変え、玉座の様な次元獣を呼び出して腰を下ろすガイオウ。

ここがターニングポイントだ。目の前の脅威を叩き潰すことで前に進むことを決めた俺は、グランゾンのバーニアを点火させ、破界の王に向かって突撃する。

……さぁ、いい加減腹を括るとするか！

『フフフ、その調子で頼むぞグランゾン。オリジン・ローへの道を開く為に』

その１１

大気が震えた。

魔神の一撃とそれを破界の王が防いだ衝撃によりサンクキングダムの上空に浮かんでいた雲は消し飛び、炸裂した破裂音が建物の窓を破壊していく。

『良い一撃だ。殺意は込められ、敵意に満ちている。まさに相手を殺す為の攻撃だ』

『……』

自身の機体（？）である〝ゲールティラン〟玉座を模した次元獣に座り、グランゾンの一撃を受けたガイオウは相手を讃えながらほくそ笑む。

確かにグランゾンの攻撃は当たった。が、それはガイオウの座す玉座の部分のみ、制御の中枢と思われる中央の人型こそが奴の本体と見た魔神の操者は、仮面の奥で舌を打つ。

『気迫も充実しているみたいだな。そうだ、その気でなければ俺を殺る事なんざ出来はしないぜ？』

『……前から思ってたが』

『あ？』
『意外と、お喋りなんだな』
『……くはっ！』
言葉の奥から滲み出る怒り、魔神を駆る者の内側はマグマの如く煮え滾っている事だろう。
だが、それ以上に冷静を保っている。それは全て目の前にいる自分を倒す為、殺す為にしているモノ。
ガイオウは嬉しくなった。それはもう腹の奥底から嬉しくなった。
『そうだ。戦士というものはそうでなければつまらん！　良いぞ魔神！　その調子で俺をもっと熱くさせろ！　お前との闘争が俺の記憶の糧となる！』
『……フッ！』
斬撃が再びゲールティランに向けて振り下ろされる。だが、今度は当たらず、巨体でありながらゲールティランは俊敏に機体を横に捻り、グランゾンの横に移動する。
『そら、今度はこっちの番だぁっ！』
人型の怪物の一撃がグランゾンを襲う。直撃する瞬間、剣を盾に直撃を防いだグランゾンは機体を大きく後退させてしまう。
（……流石に、重いな）

伊達に破界の王は名乗っていない。これまで受けた事のない重い一撃に、蒼のカリスマと名乗る青年の頬からは冷たい汗が流れる。

確かに直撃すれば如何にグランゾンだろうと危機に陥るだろう。

（なら、当たらなければどうと言うことはないと言うわけだ）

内心は冷や汗ダラダラものだというのに、口元だけは不敵に歪む。バーニアを噴かせ、紫炎の火を灯したかと思われた瞬間、信じられない加速でグランゾンはゲールティランへと肉薄する。

『ははははっ！　良いなその負けん気の強さは！　だが……っ！』

正面からでは先程の二の舞だぞ。そう続けようとしたガイオウの前から、突如としてグランゾンの姿が消えた。

『奴め、どこに消え……ぬぐっ!?』

突然襲いかかってくる背後からの衝撃、見ればそこには消えた筈のグランゾンが自分の横を通り過ぎていく姿が垣間見えた。

奴の背中が見えた。攻撃を仕掛けようとするガイオウだが、ゲールティランが反応する前にグランゾンは突然開いた穴の様なモノに吸い込まれ、再び姿を消す。

そして次の瞬間――。

『ぐぅっ!?　バカな、次は左からだと!?』

前から来たと思えば後ろ、今度は左、突発的に現れては攻撃をしてくるグランゾンの見えない動きにガイオウは翻弄されつつあった。

それからもグランゾンの攻撃は続く。左から下から、右から上から、右斜め上から左斜め下へと、出てきては現れて出てきては現れるグランゾンの猛攻に、ゲールティランの玉座の部分は瞬く間に削られていく。

動揺を隠せないガイオウ。そんな彼の耳にグランゾンからの講義の声が聞こえてきた。

『ワームホールとはそれ自体は異空間に過ぎず、此方からも、そして其方からも干渉する事は叶わない。だが、重力による干渉を制する事で異空間を自在に開閉し、移動と攻撃の合間を省く事が可能。……そしてそれはこのグランゾンの力を以てすれば――――造作もない事なのだよ』

耳元で笑みを囁かれているような不快感。良いようになぶってくれるグランゾンに極大な怒りを吐き出しながら、ガイオウは吼える。

『この野郎がぁぁぁぁっ!!』

人型と玉座の怪物が吼える。先程よりも巨大な雄叫びに遠巻きに見ていたＺＥＸＩＳ達もビリビリと痛いほどの迫力を受ける。

『これ見よがしに説教垂れてんじゃ、ねぇぇぇっ!!』

ガイオウはゲールティランに命じて背後にある空間に向けて殴りつける。何もない空間、だがそこには今まで何度も目撃してきた空間の穴が顔を出していた。

これまでに一方的に攻撃を受けたガイオウだが、その最中、彼は本能でグランゾンの攻撃のタイミングを覚え始めていた。奴の姿が消え、そして攻撃してくるまでのタイムラグ。そこに狙いを定めたガイオウは直感と本能に従い、後ろへと攻撃するという選択をした。

そしてそれは見事的中……したかに、思えたが。

『なん……だと?』

腕を突き出したゲールティランに待っていたのは――――光。眩いほどの光の槍がゲールティランを、ガイオウを撃ち抜こうと全方向から襲いかかってきた。

バカな、そう思ったガイオウの視界にある機体の姿が映る。先程まで彼を攻撃していたグランゾンが何事もなく宙に浮かんでいるのだ。

『……ワームスマッシャー』

魔神の腕が横に凪ぐ。それが一斉攻撃の合図となり、ゲールティランに無数の光の槍が突き刺さる。

『ヌグァァァァァッ!!』

破界の王の断末魔に次元獣達も動揺したのか、それぞれ身を震わせる様に後ずさる。

そして、今まで戦っていた筈のＺＥＸＩＳ、そしてアークセイバーの一人にしてパールネイルのパイロットであるマルグリット＝ピステールも、呆然とその光景を目の当たりにしていた。

ガイオウが圧されている。自分達の攻撃をモノともしなかったあのガイオウが、たった一機によって圧倒されてしまっている。

（あの魔神は……一体なんなのだ！）

リモネシアで一度交戦したが、それでもあれほど凄まじくはなかった。嘗て自分達の世界にいた騎士達で相手をすればどうにか抑え込める程度、だが今はその程度では収まらない。

あのグランゾンという機体には一体どれだけの力と技術が内封されているのか、疑問に思考を沈めたマルグリットが我に返ったのは、海面に身を落とすゲールティランを見た時だ。

『……流石にタフだな。あれだけの攻撃を叩き込んだのに、まだ動けるか』

『……フンッ、確かに今のは効いた。お前の力は俺の予想を遙かに上回る。しかし！』

ガイオウがゲールティランに力を注ぎ込むと同時にゲールティランの損傷箇所が瞬く間に癒えていく。

グランゾンの猛攻によって傷ついた筈の機体が癒えていくのを見て、グランゾンの操

者は仮面の奥で大量の汗を流していた。
（……マジかよ。あれだけぶち込んだのにそんな早く回復されちゃ俺の立つ瀬ねぇよ！）
　このままでは攻守交代で今度は此方が危ない、奴の猛攻を防ぐだけの技量は今の自分にはまだないのだ。今ので決めたかっただけに悔しい。操縦桿を握る手に力が込められる……と、その時だった。
（……え？）
　モニターに映るお知らせの文字。何かと思い開いて見れば、そこには〝あの〟武装の使用制限が解除されていた。
　そして、同時に被った仮面の奥で蒼のカリスマと名乗る男は口を歪める。
『さぁて、それじゃ第二ラウンドを始めるかぁ』
『……いや、もうこれでお終りにしよう』
『……何だと？』
　魔神からの唐突な申し出に眉を潜めるガイオウ。ここまで盛り上げておいて切り上げるのか？　そう思ったとき、グランゾンから想像を絶する程のエネルギーが溢れ出した。
　両腕に集まる六つの珠。魔神の胸部が展開した時、紫と黒が混じった禍々しい球体が

出現する。

やがて六つの珠が一つに集まったとき、破界の王は言いし難い悪寒に襲われる。

『収束されたマイクロブラックホールには、特殊な解が存在する』

『剥き出しの特異点は、時空そのものを蝕むのだ』

まるで呪文。これまでの戦闘を記録しているクォーターのオペレーターは、グランゾンの異常な重力変動を前にふとそう思う。

やがて時空を蝕み始める黒い球体は地面を食い破る様に広がり、近くにいたダモン級の次元獣を喰らい尽くしていく。

『――――総員、後退せよ!』

ジェフリーの直感任せの指示が戦場にいる全員に行き渡る。そこに反論の余地などありはせず、各々が各々のやり方で離脱していく。

グレートアクシオンの姿はもうない。既にガイオウが出撃した時点で彼らは戦域から離脱していたのだ。

黒い球体が肥大していく。蒼のカリスマ自らがマイクロブラックホールと呼ぶそれは、彼が掲げたと同時に膨張し……。

『何人も、重力崩壊からは逃れられん!』

遂に、重力崩壊の臨界点に突入した時。

『さぁ、事象の地平に消え失せるがいい』

『ブラックホールクラスター、発射！』

魔神はブラックホールとなった球体を破界の王目掛けて発射する。

海水ごと地面を抉り、突き進んでくる球体。迫り来るソレを前にしたとき。

『う、うぉぉおおおおおっ!!』

ガイオウは玉座を捨て離脱。人型だけとなったゲールティランは直前に回避に成功するが……。

玉座であるゲールティランの一部だったものは黒い球体に呑み込まれ、空高く打ち上げられていく。

そして、僅かな停滞と重力の圧縮が行われた次の瞬間、周辺地域一帯を呑み込み――

――光が、溢れた。

衝撃と轟音。地球が揺さぶられていると錯覚するほどの衝撃に……。

『……少し、やりすぎたかな？』

一人、誰もいなくなった王国で呟いた。

◇

×月@日
いやー、まさかブラックホールクラスター（略してＢＨＣ）があそこまで威力があるとは思わなかった。自分なりに撃った後の事を考えて撃つ間際に威力調整を施したんだけど……それでもあそこまでとは思わなかったんだテヘペロ★
……うん、ホントすまないと思ってます。反省もしてます。もう地球上では絶対撃た

ない事を誓います。

あれからあの辺一体の環境観察は続けているけど、重力干渉による変動は起きていないし、周辺の隣国からは特に重力異常などは観測されていない。

津波も起きる様子もないし、どうやらＢＨＣによる弊害は今の所はないようだ。

うん、だからといって二度と撃つつもりはないけどね。あれはもう宇宙とか周りに影響が出ない場所で撃つ代物だよ。

ただ一つだけ言い訳させて貰うが、あの武装しかガイオウを倒す手段が無かったというのは本当だ。アレほど攻撃を受けておいてまさか回復するとは、流石に予想外だった。

しかも結局ガイオウには逃げられるし……今後はもっとちゃんと当てられるよう腕を磨くしかないか。

今はグランゾンの整備もしなくちゃいけないし、少し短めだが今日の所はこれで終わろうと思う。

……あ、そうそう、今自分はＺＥＸＩＳのマクロス・クォーターの居住区にいます！　暫くここでＺＥＸＩＳのメンバーとして頑張りたいと思います。詳しいことはまた後ほど……。

いやー、最初仮面付けてたからどうなる事かと思ったけど、意外となんとかなるもん

だね。

そんじゃ、明日も早いので今度こそこれで終わり。

……友達、出来るかなぁ。

その１２

×月&日

今日も色々あったがこの間の件もあるので、眠気を押し殺しながら頑張って書こうと思う。

さて、まずは何故自分がＺＥＸＩＳに身を寄せているのかと言うと、簡単に言えばグランゾンの整備がしたかったのだ。

度重なる戦闘とＢＨＣという切り札まで使った為、いい加減グランゾンにも休ませてやろうと思い、どこか整備環境が整った所はないかなとサンクキングダムから離脱後に人気の無い所をウロウロしていると、偶然ＺＥＸＩＳと鉢合わせた。

これも何かの縁と思い、以前よりも気を使いながら話し掛けてみると、幾分か時間が経過した頃、クォーターの艦長であるジェフリー艦長が自分達の所に来て良いと返事を貰った。

そしてそのままここクォーターにお世話になっているのだが、いやー凄いね。ＳＭＳって民間の会社が運営している部隊って聞いてたけど、中の設備を改めて見ると凄い

綺麗にされていた。

以前は緊張でそれ処ではなかったから、何だか嬉しいものだ。スタッフさん達もグランゾンの整備を手伝うと言ってくれるし……ホント、この怪しさ全開の自分によくつき合ってくれるものだよ。その優しさに仮面越しから涙が流れそうだった。

けれど、整備の人達も疲れが溜まっていたのかグランゾンの整備に取り掛かろうとした時、倒れて眠ってしまったのだ。

イアンさんも眠りこけてしまうし……これが戦場が日常のＺＥＸＩＳか、パイロットだけでなくそのスタッフさん達も日々大変な思いをしているのだなと、この時改めて知った。

ひとまずイアンさん達を格納庫の側に寝かせ、自分はグランゾンの整備に向かった。ゴウトさんから整備のノウハウを教えて貰っていたし、後は自分のやり方でグランゾンに日々の感謝を込めて万全に仕上げてやるだけ。

そう意気込んでグランゾンの整備に取り掛かったのだが……何というか、変なのだ。

被弾した覚えは無いから傷らしいものが無いのは納得できるけど……どこも損傷した形跡がないのだ。

普通機械というのは使えば使うほど何処かしら減ったり磨耗したりするものだ。それはグランゾンといえど例外ではない筈。

なのに消耗した形跡が欠片もない。確かにグランゾンはエネルギーの回復や機体の修復機能が密かに備わっていると聞いた事があるけれど……完全な無傷の状態なんて事が有り得るのだろうか？

ここら辺はシュウ博士に直接聞かないと分からない。そう思って今日は機体箇所のチェックをしてグランゾンを綺麗に洗ってやる事にした。

流石に海やら荒野やらと色んな所に放置していただけに所々汚い箇所があった為、今日はグランゾンを徹底的に洗浄する事にした。

ツナギに着替えて（仮面はそのまま）グランゾンを洗っている最中、ザンボット３のパイロットである勝平君が自分の所にやってきた。

軽く挨拶をしてみるが、勝平君は驚いた様子で格納庫から逃げていくのは少しばかりショックだった。……まぁ、幾らロボット乗りとはいえ彼は子供なのだ。自分の様な不審者にいきなり声を掛けられればあんな態度もとると言うものだ。

その後、無事にグランゾンの洗浄と機体箇所のチェックも終わり、未だに寝ているイアンさんを起こして用意された居住区の一室に戻る。

その途中、引きつった顔のイアンさんの顔が印象的だったが、何か変なこと言ったかな？

体調の事を心配したつもりだったけど……もしかしてイアンさんは整備士としての

プロ意識で休むことを拒んでいるのだろうか？

それはいけない。何事も体が基本だ。イアンさんという腕の良い整備士が倒れたとあってはそれは部隊の損失に他ならない。近い内に何か元気の出る料理でも振る舞おうかと思う。

自分は居候の身だ。最低限のお手伝いを心掛けながら今日はお終いにしようと思う。

あ、因みにカミナさんからグレン団に入れと誘いが来ました。

凄い嬉しかったけどその場では返事を濁した。何せまだ自分はインペリウムと完全な決着を果たしていないのだ。少なくともそれが終わるまで何処かに付こうというつもりはない。

それに、まだ自分はリモネシアの皆との約束を果たしていないのだ。せめてそれが果たされるまで返事は保留という事にしておく。

……キタンさん達、元気かなぁ。

△月／日

一言で言えば、今日は色々驚かせられた。何でもクロウさんの機体であるブラスタを修理する為にスコート・ラボに戻るというのだ。

天才科学者の一人と会える機会が来たと言うことで自分も同行、ラボに向かう道中で

クロウさんから色々聞かされたりしたけど、ホント面白い人だわ。
自分も冗談のつもりである言葉を口にしたのだが……その所為でクロウさんのテンションはがた落ち、ラボに着くまでずっと無言だった。
流石に『近い将来、貴方の借金は倍になるでしょう』なんて発言は拙かったな。唯でさえ借金というものは憂鬱になるものだ。今後はもっと言葉を選ぶ事にしよう。
今度何かご馳走する事を約束し、何とかテンションを取り戻したクロウさん。たどり着いたラボの中で待ち受けていたのは、エスターと呼ばれる女の子と狐の仮面を持った着物の女性だった。
この着物の女性がスコートさん。若くして研究所の一つを丸々受け持った色々凄い人です。
早速話を聞かせて貰おうとしたが、生憎自分はクロウさんのついで、メインである彼を差し置いては失礼と思った自分はエスターちゃんに操縦の指導を行った。
何故そんな事になったのかは知らないが、今の自分はグランゾンを駆る蒼のカリスマだ。その腕を疑われた以上乗ってあげるのがパイロットとしての矜持というものだろう。
……内心ドキドキものでしたけどね！　アクシオンとか乗った事のない機体の指導なんて出来る筈がないと思ってたけど、最初に見せた自分の手本が良かったのか、その

後のエスターちゃんは割と素直に自分の指導を聞き入れてくれた。
つーか、シミュレーションとはいえ普通にグランゾン以外の機体を動かせた事にびっくりだわ。案外やれるものなのね。
そんなこんながあって漸く出てきたクロウさん。今度は自分の番だと彼がエスターちゃんと話している間に済ませようと博士の名前を出した時。空気も読まずに奴らが来た。
インペリウム、けれどシオニーさんがいるであろうグレートアクシオンの機影は確認できなかった。来たのは白い奴とアイムとかいう奴が乗るアリエティス、そして複数の次元獣達だった。
先日の仕返しに来たのか奴らは次元獣を引き連れて強襲、いきなりラボを攻撃してきやがった。
そしてエスターちゃんはインペリウム……いや、一緒に現れた白い次元獣に何らかの恨みがあるのかブラスタに乗り込んで単独で出撃、あわや撃墜の危機に瀕した。
流石にグランゾンを持ってきていない自分では無理だと、そう思っていたのだが……自分はあることについて思い出す。
確かシュウ博士とグランゾンって脳波システムで繋がってたりしたよね？　遠隔操作も出来たという事だし、ダメもとで呼んでみるが……来ちゃったよ。

そしてそのままブラスタを援護、クロウさんはすぐ様エスターちゃんと乗り換えて戦線に加わる。

自分が次元獣とアリエティス、クロウさんが白い奴と白い次元獣それぞれを相手してこれを撃退。どうにか乗り越える事ができ、白い次元獣に関しては撃破する事も出来た。

何でもあの次元獣はエスターちゃんの村の仇だったらしく、撃破した後エスターちゃんはクロウさんに抱きついていた。

そうそう、その時クロウさんの機体から奇妙なエネルギーを観測した。ＺＥＵＴＨとかいう別世界の人達からの話によると、クロウさんの機体の動力源はスフィアなんじゃないかと言われている。

スフィア。確か俺を殺そうとしたアサキムもスフィアがどうとか言ってた気がする。あの時は意識も朧気だったからよく覚えてないけど……。

そして最後に……これは余談なのだが、クォーターに帰投する際に格納庫のハンガーが見えた。どうも自分が呼んだときに呼応してハンガーをこじ開けてしまったらしいのだ。

やべぇ、もしハンガーを壊した事への請求書とか来たらどうしよう。俺もクロウさんと同じように借金持ちになるのだろうか。

今の所そんな様子はないから良いが……もし請求書が送られてきたらロジャーさんに相談しようと思う。

あの人交渉人らしいし、何らかのアドバイスをしてくれるかもしれない。

借金の重責に震えながらも今日の所は終了する。

あ、そうそう。今更だけどスコートさんから話を聞くことが出来ました。

結果はそんな奴知らないの一言で終了。本格的に手掛かりがなくなって、ホントどうしようかなと思ったりしている。

まだインペリウムの連中とは決着を付けられていないままだし、焦らずに頑張ろうと思う。

△月＊日

今日は近頃地球に侵攻しているギシン星人達と戦闘した。何でもタケル君はスンゴい超能力の持ち主らしいが、同時にズール皇帝と深い関係にあるらしいのだ。

人の出生なんて人それぞれなんだし、そもそも蒼のカリスマなんて名乗っている自分が人を怪しむ道理などないのでそれは置いておく。

で、重要なのはここからなのだが、どうやら相手側の指揮官機にタケル君のお兄さんが乗っているという事なのだ。

どうもズール皇帝に洗脳されているらしく、説得を試みるから助けて欲しいと頼んできたのだ。

お兄さんを助ける為と自分も参加する事にした。そもそもグランゾンは対異星人用に開発された機体だ。ここぞとばかりに自分は出撃したのだが……。

だ～れも来ない。敵どころか味方さえも自分に近付こうとしなかった。え？　もしかして俺無視されてる？

……べ、別に寂しくなんかないんだからね！　通信ではカミナの兄貴が時折声掛けてくれたし、全然寂しくなんかないんだから！

まぁ、お陰で自分には殆どやることがなく、偶に此方にやってくる敵機を撃ち落とすだけで、特に変わった事はしていない。

その後、タケル君はお兄さんと話をしたけど、良いところで逃げられる。落ち込むタケル君を自分なりに励ましながら今日はそれで終わりとなった。

……それにしてもタケル君か、どこぞの恋愛原子核とかじゃないだろうな？

△月Σ日

最近、ルウちゃんにカウンセリングを受けようか本気で悩む俺がいる。

あ、ルウちゃんというのはＤチームの専属カウンセラーで、心に不安や問題を抱える

負担を心理的に軽くしてあげる役目を担ってくれている。
そこで何故自分が出てくるのかというと……最近、自分が部隊から浮いている気がするのだ。
そりゃハンガーを壊したり問題もあるように思えるさ、けどさ、もっと皆フランクになっても良いと思うんだ。
ゼロを見てみ！　俺と対して変わらない格好してるのに皆それなりに柔らかい態度で接してるんだよ！　なのにそこへ俺が行くと途端に場の空気が悪くなるんだよ？
訳が分からないよ！（――以下、ボッチ喚き散らし中）

……まぁいいよ。別に親しくしてくれるのはカミナの兄貴だけじゃないし。赤木さんとかクロウさんとか、レントン君とか他にもスザク君とか？……えーと、色々いるし！
もう俺の中ではマブ達だもんね！　ズッ友だもんね！　一人じゃないもんね！　寂しくないもんね！　やーいやーい！
（――以下ボッチの幼児退行につき省く）

……さて、色々発散した事で話を進めよう。今、ＺＥＸＩＳは暗黒大陸に向けて移動

している。
何でも暗黒大陸を統べるロージェノムが螺旋四天王の一人を国外に向けて進軍させているという。
これを退治すべくＺＥＸＩＳは暗黒大陸に向かうという。……暗黒大陸かぁ、懐かしいな。
キタンさん達無事かな。今度はちゃんと謝りに行きたいな。
さて、明日も早いから今日はこれで眠るとします。おやすみなさい。
……そう言えば、あのエルガンっておっさん。話の最中やたらこっち見てた気がするけど……一体何だったんだろう？
もしかして俺の仮面が欲しいとか？　……まさかね。

◇

――マクロス・クォーター　ブリッジ。

「……彼は、もう眠ったのかね？」
「はい、変わりなく、いつものように仮面を付けたまま熟睡しています」
「……彼を監視して暫く経つが、中々尻尾を掴ませんな」
「ソレスタルビーイング、ヒイロ達、そしてゼロもそれとなくアプローチしていますが、今の所はなんの成果も上げられていないようです」
「赤木はそんな奴には思えないと言っていますが、ＺＥＵＴＨの懸念もあります。彼らの不安が払拭するまで監視は怠らない方が良いかと思います」
「うむ、なら今後も監視は順次交代を繰り返しながら行うとしよう」

その１３

△月☆日

……やはり、人の死というものは何度見ても慣れないものである。

グレン団の団長、カミナの死。これは自分だけでなくＺＥＸＩＳ全体でも大きな打撃となった事だろう。戦力的な意味ではなく、精神の……心の支えとして。

最初は順調だった。襲い来るガンメン達もその中に混じってティンプとかいう奇妙な奴もいたりしたが、それでも戦力の集まったＺＥＸＩＳの相手にはならなかった。

途中インベーダーの横槍もあったが、概ね作戦は順調に進みこのまま螺旋四天王も倒せるかと……そう思われたが。

螺旋四天王の一人、チミルフの決死の強襲にグレンラガンは大破、危うく撃墜にまで追い詰められた。

けど、カミナは最期の力を振り絞りチミルフを撃破。奴の乗っていた移動要塞を手に入れ、自分達は一応勝利という形でその時の戦いを終えた。

大切なモノを失う事と引き換えに――――。

……戦場というものは端的に言えば殺し合いだ。そこにどんな事情があれどその事

実は変わらない。だから殺しもする日もあれば殺される日もある。

――なんて言えば割り切った大人と思えるだろうが、生憎自分はまだ成人前だ。変に大人ぶるのは似合わないし、するつもりもない。

本来ならこの後キタンさん達に改めて挨拶をするつもりだったのだが……今はとてもそんな気分じゃない。

それに、カミナさんの弟分であるシモン君、彼の方が今は心配だ。大丈夫だろうか？

後で様子を見に行こうと思い、早いと思うが今回はこれで終了させてもらう。

◇

「やぁ、シモン君」

「……」

マクロス・クォーターの居住区の一室。泥で作られた無数のカミナを模した像の中に、生気を失った目をしたシモンがいた。

そこに蒼のカリスマが一人で来たものだからシモンは視線だけを向けるが、すぐに視

線を外し、無造作に泥を掘り続ける。
どうせまた自分を説得とか考えているのだろう。ここ数日グレンラガンで戦ってもマトモに動かせなかった自分は既に戦力外の通達が来ている。
どうせお払い箱になるのなら、ここで好き勝手にしていた方がいい。
「そんな事をしてもカミナは帰ってこないぞ」「元気だせ！」「こんな奴がカミナの跡を継ぐのか」最近自分の所に来るのはこんな人達ばかりだ。
勿論中には真剣に心配してくれる人もいる。……だけど今は何もする気が起きない。
ヨーコも表面上は吹っ切れた様子で戦っているのに、未だに自分はこの殻から抜け出せずにいる。蒼のカリスマが来るのは意外だったが、どうせ碌な事は言いやしない。
シモンは後ろに立つ不審者をそう決めつけた。……しかし。
「ほう、中々上手く出来てるな。髪型といいサングラスといい、君はカミナの事を良く見ていたのだな」
謎の仮面の男はあろう事か部屋へと入り、シモンの作ったカミナの像を見て感心したように感想を口にしていた。
「ふむ、その掘削ドリルでよくもまぁここまで見事に作れるモノだ。君には芸術家の才能もあるのやもしれん」
「……」

正直、目の前の男に戸惑った。ここに来るのは皆励ましや叱責を言いに来る人ばかりだったから、全然違う対応をしてくる仮面の男にシモンは暫し面食らった。

だが、それ以上に腹がたった。結局何が言いたいのだと、遠回しに自分をバカにしに来たのではないかと、そう思ってしまったシモンはいつも以上に尖った口調で言い放つ。

「……言いたいことがないんなら出て行ってくれよ」

「ん？」

「アンタ、自分の立場ってのを少しは理解したら？　何で監視されてる奴がノコノコこんな所に来てるんだよ。見つかったらただじゃ済まないよ？」

我ながら酷い言い方だ。それもかなりひねくれた態度、こうまで突き返したら誰だって怒るだろうし、最低でも少しは態度は変える筈。このままこいつを不愉快にさせ、ここから出て行かせようとする心算だったのだが……。

「……え？　マジで？　監視されてたの？　俺？」

「……は？」

今、何か凄いモノを見たような気がした。まさかあのヒイロやソレスタルビーイングの面々が幾ら探りを入れても堂々としていた蒼のカリスマが、自分の一言で酷く狼狽したのだ。それも恐らくは素を丸出しで……。

追及したくなったが、本人は咳払いで誤魔化しているみたいなので、何となく聞くのは止めようと思った。

「ま、まぁ私の事は置いといて……さて、何しに来たかと言うとだな。実は君と折り入って少し話をしたくなったのさ」

「……話？　別に話をする必要はないよ。大した話なんてないし」

「そうかな？　君はＺＥＸＩＳの一人……いや、大グレン団の一員だ。カミナと一番近かった君ならば彼について色々話せる事があるんじゃないのかな？」

何やら小馬鹿にしてくるような物言いが仮面の分だけムカついたのだが、何も話さないとカミナの事は何も知らないと思われそうだったから、シモンは渋々ながらカミナとの話をポツポツとだが話し始めた。

カミナとの出会いの話、ガンメン――――ラガンを掘り当てた時の話、カミナが俺と一緒に外に出ようと、地上という未知の世界に行こうと言った話。

凡そ数時間に及ぶカミナとの冒険活劇の話、気が付けばシモンの瞳に光と力が戻り始めていた。

「――――成る程、流石は大グレン団の頭領。中々興味深い冒険譚だった」

「なぁ、アンタは一体何がしたかったんだ？　俺の話を聞いて、何を知りたかったんだ？」

結局この男は何が言いたいのか、それが分からないシモンは訝しげに思いながら問いかけると。
「……カミナは死んだ。もういない」
「っ！」
「この事実は変わらんし、お前がどう足掻こうと覆る事はない。死んだ人間は絶対に生き返ったりはしないのだから……」
「……」
「だが、カミナが君に残したモノは消えない。君自身がカミナを忘れない限り」
「アニキが……俺に残したもの？」
一体それはなんだろう？　新たに出てきた疑問に頭を捻るシモン。すると、仮面の男は立ち上がり、気は済んだとばかりに部屋を後にする。
「忘れるな、君の中にある宇宙。それはカミナの宇宙でもあるのだから」
そんな分かりづらい抽象的な台詞を残して、蒼のカリスマは通路の奥へ去っていく。
奇妙な男から変わった人。彼に対するランクを内心で変えながらシモンは自問自答を繰り返す。
その晩、夕飯時に顔を出したシモンによってＺＥＸＩＳが活気づいたのは別の話。
ただ……。

「……そっか、俺ってば監視されてたのね。いや、分かりますけどね。俺怪しいし、ぱっと見変質者だし、この格好で街歩いてたら絶対職質されるし――――」

真実を知った事により、この日蒼のカリスマは自室でブツブツと呟きながらその日の夕食も部屋で一人で食べていた。

仮面の中が塩水で溢れ出す。そんな悲しい……一時の夜の事だった。

◇

△月＃日

今日は、少しだけ嬉しい事があった。

シモン君が立ち直った。それも前よりも強く、大きくなって立ち上がれた。切っ掛けは色々あるんだろうけど、最大の功労者はニアちゃんで間違いないだろう。

ニアちゃんは螺旋王の娘と名乗っていたから最初は皆に警戒されていたけど、その後

色々あってシモン君の復活に大きく貢献。心配していた身としては喜ばしい限りである。

それと、シモン君を励ます気だったDチームも戦闘中テンションが上がりまくって覚醒。獣みたいな形態のダンクーガとなって襲ってきたガンメンを粉砕していた。

他にもイマージュとか色々気になる事はあるのにシモン君の復活ぶりにそれ処ではなくなった。無論戦闘を終了した後もダイグレンの格納庫は大はしゃぎだ。

あ、ダイグレンっていうのはシモン達が乗った戦艦型のガンメンで、チミルフが乗っていたダイガンザンを改修したものである。

誰もが盛り上がっている中、自分も遠巻きにそれを見つめていると、ニアちゃんがチョコチョコと自分の方へ歩み寄り……。

『お父様が貴方の事を探していましたよ』

と、爆弾発言をかましてくれたのだ。

や、ニアちゃんは悪くないよ？　彼女はただ思った事を口にしているだけだ。

けどさ、それでも自分は思わずにはいられないのよ。

何でボスクラスの奴らが俺に目をつけるかなぁ！

え？　既にグランゾンに乗っているお前が言うなって？　ほっとけ！

まぁ螺旋王の方はシモン君に任せよう。娘さんを貰う婿的な意味で、仲人にはクロウ

さんね。
シモン君も立ち直れたし、ヨーコちゃんも吹っ切れたみたいだし、自分もそろそろ今後の事を考えようと思う。

△月◎日
今朝、国連の方から自分とグランゾンの引き渡しの要請が突き付けられてきたらしい。
明らかに三大国家からの政治的圧力が原因なのだろうが、それにしても露骨である。まぁ尤も彼らがそれを受け入れるとは思えないし？　当分は大丈夫だとは思うけどね。
けど、あの砂漠で国連軍を一方的に無力化してしまった事が原因で世界中から目の敵にされているようだから、こういった事態が来るのは何となく分かっていたけどね。
因みに、その時巻き込まれていたスザク君なんだけど……何とも微妙な表情で苦笑いしていた。
ランスロットの開発者であるロイド伯爵はそりゃあもう憤慨していたとか、今はそんな様子はなく自分ともそれとなく話してくれるし。
ただ、時折人を実験動物を見るような目で見るのは勘弁して欲しい。リーロンさんの

件でああいう目はホント苦手となってしまったのだ。

話を戻すが、主に危険度的な意味で自分……というよりもグランゾンか。あの機体が黒の騎士団やソレスタルビーイングよりも高いらしいとか、その事実に自分は呆れればいいのか怒ればいいのか、間違っても喜ぶ事ではないと思う。

本当ならもう暫くＺＥＸＩＳと共に行動したかったけど、あまりここにいては彼等にも迷惑が掛かる。インペリウムとはまだ決着も付けていないし、彼等といればその機会も増やせると思ったから今まで一緒にいたのだが、そろそろ潮時だと思う。

明日の朝、日の出と共にここから去ろうと思う。既にジェフリー艦長には話を通したし、ハッチは開けておくと言ってたから行動はすぐに起こせそうだ。

それに……ね、あんまり此方を監視させてばかりで戦力を割くような真似はさせたくないし、これからの戦いはより激しさを増していく事だろう。

なんだか界震とかいう現象も起こり始めているっていうし、世界はまた目まぐるしく動くだろうから。

さて、いい加減眠らないと明日も早い。取り敢えず明日の寝床はどうしようかと思いつつ、今日の所は終わるとする。

……そういや、今までずっと仮面を付けたまま生活してたから分からなかったけど、最近髪が変色している気がする。

紫色とか、この仮面にそんな色使われていないんだけどな……まさか、脱色!?
禿げたりしないだろうな。

△月§日
ＺＥＸＩＳから別れて数日、今日の俺は久しぶりに激怒プンプン丸である。
や、冗談抜きで、ホンキで怒り心頭の自分が居たりします。悪ふざけをしとかないと平静が保てない自分はまだまだ未熟なのだろう。
――――〝スローネ〟ＺＥＸＩＳに参加したソレスタルビーイングに代わって武力介入を始めた新たな三機のガンダムなのだが……こいつ等、どう考えても従来のソレスタルビーイングが行ってきた武力介入の仕方がおかしいのだ。
インペリウムとか紛争地帯への介入ではなく、民間の軍事施設とか、とあるユニオンの基地とか、まるで政治的に都合の悪そうな施設ばかり狙っていやがるのだ。
トドメに今度はとあるパーティー会場にビーム攻撃をぶち込みやがった。なんでも軍に資金を援助していたりする人があそこにはいたらしいが、だからといって武装も何もない唯のパーティーに攻撃を仕掛けるか？
事情を知らない人からすればそれもソレスタルビーイングの仕業だと思われるだろう。それが自分にはどうしても我慢できない。

確かに世間様からすれば彼等は〝悪〟だろう。だけど、この世界の為に、自分達なりに頑張ろうとしている人達の一人なのだ。

そりゃやり方は大部分の人が否定するだろうさ、自分も「それはおかしくね？」と思ったりする事もある。

けど、そんな事までしないと分かってくれない世界の方は全く悪くないのか？　彼等だけを責めればそれでいいのか？

俺はそんな事したくない。ここでそんな事を認めてしまえば……あの日、自分の為にスープを作ってくれた子供達に顔向け出来なくなる。

だから、これから彼等を問い詰めようと思う。なんの為にあんな事をしたのか、……もし、満足のいかない答えが返ってきた時。

その時は……少しばかりＯＨＡＮＡＳＨＩしようと思う。

何事も対話って必要だよね。

あ、因みにグランゾンの隠し場所ですけど、もう隠す場所に悩む必要はなくなりました。

〝ワームホール〟所謂重力の底に収容可能となったので現在グランゾンはそこで待機させています。勿論蒼のカリスマの衣装一式も一緒です。

これで、最近は身軽な行動が出来て色んな所を見て回っています。

現在自分が滞在しているのは日本の熱海、〝くろがね屋〟という旅館にお世話になっている。

露天のお風呂なのでオススメしますよ。……強面な人が多いけど。

その１４

△月　日

えー、先日スローネの人達とＯＨＡＮＡＳＨＩをしようと色々アチコチさまよってた自分なのですが……既に事が進んでいた後でした。

とある小さな孤島で待機していたスローネ、声をかけようと蒼のカリスマ姿で近付こうとしたのだけれど……接触する前に刹那君の駆るエクシアが強襲、続いてデュナメスとヴァーチェも出張ってきた事により、完全に出るタイミングを逃した自分は岩の影に隠れながら見ているだけにしときました。

少々出オチ感がしたけれど……まぁ彼等が出張ってきたのなら自分の出る幕はないだろう。ソレスタルビーイングもスローネ達の勝手な振る舞いに苛立ちを募らせていたみたいだし、先の民間への意味の無い攻撃で彼等の怒りも相当なものだ。

そして怒りを露わにしたかのようなソレスタルビーイングの連携と猛攻、スローネ達も追い詰められ、いよいよかって時に民間軍事会社〝ＰＭＣ〟が乱入してきてスローネ達を取り逃してしまった。

状況的に不利になった刹那君達を助けようと自分もグランゾンを呼ぼうとしたのだが、ここでマクロス・クォーターとプトレマイオスが到着、先行していた刹那君達を援護する為、ＺＥＸＩＳ達も戦場に参加する。

……再び出るタイミングを逃した自分なのだが、うん。仕方ない。だって彼処で出て行ったら完全に自分が邪魔者になるもの。や、戦いに邪魔もクソもないんだけどね。

スローネ達も完全に見失ってしまうし……仕方ないから自分は戦いが終わるまで岩場の影で隠れる事にしました。

そしてくろがね屋に戻った直後、安さんにどこへ行かれたのか聞かれたので「知り合いとバカンスへ」とだけ言っていた。

……拙い。最近ボッチが本格化している気がする。食事の時も一人だし、この世界に来て友人らしき人もいない。

もしかして、このまま俺一人のまま？　……い、いやいやいや！　まだ黒の兄妹の皆がいるし！　リモネシアへ帰れば子供達もいるし！　ボッチじゃないし！

……カミナのアニキ、オラに元気を分けてくれぇ。

△月α日

最近、インペリウムの姿が一向に見えない。姿を見せては次元獣をばら撒くだけばら

撒いて姿を消すものだから、自分が追い付くのは決まって奴らの姿が消えた後だ。
次元獣を放っておく訳にもいかないし、自分が次元獣を狩るしかなく、ここの所は次元獣とばかり戦っている。
時折軍の方と鉢合わせをする時があるが、その時は一緒に戦ったりしている。……まぁ殆どがマトモに共闘せず、自分諸とも攻撃してきたりするのだが……。
まぁ分かるよ？　俺不審者だし、軍の人達には以前の砂漠でアレしちゃったし、恨まれても仕方ないよ？
けどさ、せめて次元獣が来たとき位は一緒に戦おうよ、市民を守るために戦えよ、なんの為の軍だよ。
声を大にして訴えたい所だが、軍の中には良心のある人もいるのでここは我慢。例えばＯＺのホワイトファングことゼクス＝マーキスさんとフラッグファイターのグラハム＝エーカーさん。
そして、ＡＥＵのエースことパトリック＝コーラサワーさんだ。
この三人……とくにコーラサワーさんは戦場で出会えば自分ではなく次元獣の方へ果敢に向かっていくのだ。
自分の方を攻撃してくる連中には「そんな暇あるなら次元獣をやれよ！」と怒鳴ったりしているし、民間人を守ったり避難させたりする事を第一に考えている。

ホント軍人の鑑だわ。世界中の人がコーラサワーさんみたいになれば争いは減るんじゃないか？　割とマジでそう思う。

勿論ゼクスさんやグラハムさんも良い所あるよ。砂漠では機体諸とも地面に叩き潰しちゃったのに、次元獣との戦いではそれとは抜きに進んで手伝ってくれたりする。

先程も言ったが、インペリウムとか次元獣とか、インベーダーとか獣人とか、人類にとって脅威となる存在は多いのに、他の軍の人は良く自分と戦ってられる余裕があるよな。

……あれ？　もしかして、俺も人類の脅威に認定されちゃってたりする？

ま、マサカネー。

△月Ω日

今日、酷くショックのデカいニュースが流れていた。

〝血染めのユフィ〟新聞の見出しにデカデカと記載されたその写真と記事の内容に、自分はこの時眩暈を起こしそうになった。

そっか、ゼロ……彼は止められなかったか。ＺＥＸＩＳもいたし、自分がＺＥＸＩＳにいた頃、時たま声を掛けてきたりするものだからそれとなく注意していたのだけれど……駄目だったか。

スザク君、ゼロ、この二人の関係は今後大きく揺らぐ事になるだろう。もしその時に自分がその場にいた時は……最悪の結末にならないようそれとなく助ける事にしよう。

今はインペリウムの存在があるから分からないが、全てが一段落した時、エリア11は激しく荒れる事だろう。

――――自分はその時どうするのだろう？　介入するのか？　それとも傍観するのか？

今はまだ何とも言えない。だが、その時が来た時に対して心構えはしておいた方がいいのかもしれない。

ユーフェミア皇女殿下。世界中の人々が彼女を非難しているが、自分は――自己満足になるかもしれないが――黙祷を捧げる事にする。

γ月β日

インペリウムの脅威に遂に世界の三大国家が軍事同盟を締結。人類の敵と万全な状態で戦う準備をする為、世界は表向きは統一された。

これによって世界が平和に向かえばいいのだが、裏にはまだまだきな臭い匂いがプンプンするので安心できない。

だが、これで一つ上の段階に移動した事は事実。三つの大国が手を組んで物事に当た

る事を選んだので、軍備は増強。インペリウムの次元獣やインベーダーといった人類の敵との交戦は今の所互角以上に盛り返している。

世界も動き出しているし、そろそろ自分も動こうと思う。ついでにギシン星人やインベーダー退治も兼ねて、インペリウムの捜索を再開したい所。

だが、どうも向こうは自分の事を避けている節がある。ガイオウの力をまだ取り戻していないのが原因の一つであると思うが、それ以上にシオニーさんの事が気掛かりだ。

早く会って話がしたい。彼女の真意はどうであれリモネシアにはシオニーさんの力が必要なのだ。愚痴も聞く、文句も聞こう、だからどうか自棄だけは起こさないで欲しい。

最近インベーダーの出現率が上昇している。何かが起こる前触れかもしれない。

お菊さんに明日辺りにチェックアウトの旨を伝え、今日は終わりとする。

どうでもいい話だがお菊さんて滅茶苦茶素早いのね、お年寄りなのに……。一瞬目を疑ったよ。

何でも甲児君の特訓を引き受けているのだとか、バイトのボス君から話を聞くとそんな感じだった。

試しに自分もやってみようかなと挑戦してみるけど……いやー、無理だね。正攻法じゃとてもじゃないが敵わない。

かくれんぼの要領で気配を殺しながら近付いて漸く捕まえられる程度。昔からかくれんぼは得意だったからその時はすんなり捕まえられたけど。

お菊さん達にはかなり驚かれたけど……まぁ、いきなり背後から出てきたら誰だって驚くだろう。

この時たまたま外にいた女将のつばささんからこの旅館で働かないかとスカウトされた。正直その申し出は嬉しかったけど、断らせて戴いた。

というか、お年寄りを後ろから抱き抱えただけでスカウトするとか、旅館の経営者の基準とか色々おかしくね？

クロスさんも何が嬉しいのか仕切りに背中を叩いてくるし、あの人の手で叩かれるとチョー痛いんだよね。鉄か何かで出来てるんじゃないかあの人。

まぁお世話になった旅館だし、悪く言うのは気分が悪いからこの話はこれでお終い。

さて、次は何処に行こうかと思い悩むが、実は昨日から決まっている。

早乙女研究所。最近インベーダーが騒がしいし、これに乗じてインペリウムも何か仕掛けてくるかもしれない。

そして、早乙女博士にはシュウ＝シラカワ博士について知っているかどうか聞き出さなければならないし、いずれ聞かなければならないのなら早い内に済ませてしまうのがいいだろう。

そろそろ人気のない時間帯。グランゾンに乗り込む準備の為、今回はこれで終わりとする。

――さっきの話だが、お菊さんが自分に気付かなかったのって、もしかして自分の存在感がないからとか？

……まさかね。もしそうだとしたら俺、泣くよ？

その１５

γ月Ｖ日

大変だった。早乙女研究所に向かったらインベーダーが大量に現れるわ、真ドラゴンとかいうゲッターロボの集合体が現れたり大量のゲッターロボが現れたり、それに釣られて暗黒大陸の獣人達が押し掛けてきたり、ホント色々あって大変だった。

しかもＺＥＸＩＳもやってくるし、一人旅をしている身としてはあの時は場違い感が半端なくて居心地が悪かったなぁ。

まぁシモン君の活躍や竜馬さん達が真ゲッターに乗れたり、ＺＥＸＩＳの皆が真ドラゴンと戦った事でどうにか事態は収束し、その場はそれで終わりとなった。

危機的状況を脱せた事からそれ自体はいいんだけど、その後早乙女博士の行方は不明となり、自分はシュウ博士について話を聞くことは叶わなかった。

踏んだり蹴ったりな日だったが、一つ良いことがある。それは螺旋四天王の一人、シトマンドラと決着を付けられた事だ。尤も、トドメをさしてはいないが……。

暗黒大陸で自分とやり合って以来、向こうも自分の事を探していたらしく、自分を見かけると奴は自身が乗る機体の機動力を最大限に生かして襲いかかってきた。
向こうも形振り構っていられないのか、部下達と一緒に押し寄せてくる。ちょっと面倒だなと思った時、意外な人物が援護してくれた。
シモン君とキタンさん、そしてキャルちゃんとヨーコちゃんである。相手側のガンメンを吸収して飛行移動が可能となったグレンラガンと、キャルちゃんのガンメンと合体して武装を施したキタンさんのキングキタン。
ダヤッカさんが乗っていたダヤッカイザーをヨーコちゃんが乗った事で改修されたヨーコＭタンク、それぞれが自分とシトマンドラを一対一で戦えるよう援護してくれた。
何でもシモン君は自分を励ましてくれた礼を返したいのと、キタンさんは妹を助けて貰った借りがあるからとか、ヨーコちゃんは何も言わなかったけどそれでも自分は嬉しかった。
……ホント、嬉しかったなぁ。マトモに共闘してくれたのはゼクスさんやグラハムさん、そしてコーラサワーさんくらいしかいなかったからあの時は本当に嬉しかった。ちょっと涙ぐんでしまったのは内緒だ。
そして、そんな彼等のおかげで自分はシトマンドラとの戦いに集中できた為、これを

撃破。敵機を撃破しただけでシトマンドラはしぶとく逃げていったが、今はこれで十分だろう。

そして自分がシトマンドラを倒す頃には向こうも片付いたようで、そのまま自分は離脱。一体何しに来たんだと自問しながらその場を離脱した。

あ、一応シモン君達にはちゃんとお礼も言ったからそこら辺は安心して欲しい。もし彼等が来てくれなかったら面倒臭くなって〝グラビトロンカノン〟で諸共押しつぶしてしまったと思うから。

取り敢えず自分にとって因縁めいた相手だったから倒せて良かった。……けど、少しばかり気になる事がある。

シトマンドラってあんなに弱かったっけ？　前戦った時はもっと速くて周りと連携が取れててもっと厄介な印象があったのだけれど……。

あ、そうか。シモン君達が周りの敵を片付けてくれたから上手く立ち回れたんだ。成る程、そう思えば納得だ。

ガイオウとエメラルダンとか、アイムのアリエティスとか色々戦ったから自分もそれなりに上手くなれたのだろうけど、それだけでは螺旋四天王の一人を圧倒するなんて出来た話だと思ったんだ。

シトマンドラも自身が強いだけじゃなく、周囲の機体と連携を取れたからこそ、薄い

装甲の癖にあそこまで大胆に動けたのだろう。
やはり戦いにおいて連携というのは必要だな。今回の戦いでよりそれを実感出来た自分でした。
……連携、かぁ。

◇

――――日本・熱海。くろがね屋前。
「女将、皆、そろそろここは戦場になる。早い所避難してくれ」
ギシン星人の司令官であるマーグの最後の決闘を挑まれたＺＥＸＩＳは彼の場所の指定もあり、ここ熱海を決戦の場を選んだ。

もうじきここも戦場に変わる。被害は出ないよう最大限に努力するＺＥＸＩＳだが、現実はどうなるか分からない。既に避難命令を出している為住民達は避難先へ移動を開始している。

そんな中、兜甲児は唯一避難する意志を見せないくろがね屋の面々に早く逃げろと警告しに来たのだが……。

「何言ってるのさ、私らがここを離れたら誰がくろがね屋を守るんだい」

「坊ちゃん。ここはアタシ等の城なんだ。誰かに言われた程度でおいそれと手放す訳には行かないんだよ」

「け、けど！」

自分の警告など意にも介さない女将であるつばさとお菊の物言いに、甲児はそれでも危険だと食い下がる。

尤も、彼等にはそのような心配はするだけ無駄な理由があるのだが、彼等の正体と実力をまだお菊しか知らない甲児には無理もない話である。

クロスも安も先生も動こうとしない。そろそろマクロスへの帰投時間が迫っているのにどうしたモノかと思われた時、何か思い出したのか安が手を叩いて語り出す。

「避難といえば女将、以前この旅館に泊まった珍客の事、覚えてますかい？」

「珍客？」

「あぁ、覚えているさ。何せアイツはお菊さんから一本取った男だからね。思わず私も驚いてしまったよ」
「……はぁ!?」
　つばさからの発言に甲児は信じられないと叫ぶ。何せこのお菊はくろがね屋のくせ者の中でも屈指の実力者とされる猛者だ。剣の達人とされる先生ですらその素早く且つトリッキーな動きに付いてこれないのだから。
　それなのに何処の誰とも知らない奴がお菊から一本取った？　未だに自分は触れる事すら出来ないと言うのに、つばさのその一言が原因で避難勧告の事など頭から吹き飛ばされてしまった。
「そ、そいつは？　どんな奴だったんだ？」
「そうさねぇ、確かシュウジとかいう旅人だったか……」
「し、シュウジだって!?」
「何だ甲児、あの珍客の事知ってるのか？」
「し、知ってるというかなんと言うか……カレンがエリア１１――――旧日本で少し一緒だったみたいな事言ってたし。ヨーコやキタン、黒の兄妹の話だと暗黒大陸にいたとか……」
　ポツリポツリとシュウジなる人物について語る甲児、彼も人から聞いた話である為に

イマイチ要領の得ない話となったが、話を聞いたクロスと安は成る程なと頷きながら納得していた。
「エリア11に暗黒大陸、今はそのどちらもが危険地帯として知られる場所だ」
「そんな危険地帯を一人で生き抜くたぁ、成る程、あの珍客のヘタレた姿からは信じられねぇ猛者の臭いがしたのはそういう事かい」
「え？　え？　ど、どういう事？」
「いいかい坊ちゃん。人というのは今でこそ地球の生命体の頂点と言われているけど、その根っこは動物となんら変わらない本能が眠っているんだよ」
「本能……」
「危険地帯にいればそれだけで五感が鋭くなる。命の危機に瀕したらそれだけで人間の底力が解放される。恐らくシュウジとやらはそう言った環境に自らを追い詰めて己の力を高めたのだろうよ」
お菊が得意げに話すシュウジという人物像。本当ならここで違うと否定したりするのだが、生憎甲児にはそれを否定するだけの材料が無かった。
〝チームD〟ダンクーガを駆る葵達は、自身の内に秘めた野生という本能を目覚めさせて戦っている。
元レッドショルダーのキリコだって多くの修羅場を潜り抜けた猛者だ。命懸けの戦

場で生き抜いた彼だからこそ、あそこまで見事に戦えるのだろう。
　なら、そのシュウジもそうなのか？　自ら危険地帯に飛び込む事で力を高めているのなら……一体、何の為に。
「しっかし、聞けば聞くほどおっそろしい奴だなぁ。あんな人畜無害な顔しておいて中身は命の遣り取りが大好きなイカレヤローとはよ」
「そんでもって気配を隠す時は俺たちでも悟られない凄腕ときたもんだ。俺も時々アイツに後ろを取られた事がある」
「……」
「あれま、先生もですかい？　いよいよきな臭くなってきたなそのシュウジって奴は」
「ま、あくまで今までのは俺達の憶測に過ぎない。が、一応気には止めておいてもいいんじゃねぇか？」
「あ、あぁ……」
　くろがね屋の五人衆からシュウジに関する思いがけない情報を得た甲児だが、あまりにも自分の想像とはかけ離れた人物像に戸惑いが隠せなかった。
　結局くろがね屋の皆を避難させる事も出来ず、決戦の時刻となってしまう。慌ててマクロスへ帰投する甲児の後ろ姿を見て、安は悪戯が成功した子供の様に笑みを漏らす。
「いやー、相変わらず甲児の奴は面白いなぁ、俺達の話を真面目に受け取るもんだから歯

止めがきかねぇや」
「あんまし苛めるなよ？　もしアイツ等がシュウジって奴を見つけたとき騒ぎになったら俺らも巻き込まれるぞ」
「へへ、そん時はそん時でまた楽しめばいいさ」
「お喋りもそこまでにしな。そろそろ戦闘の始まりだ。アタシ等は後ろに下がって事の顛末を見守るよ」
「「へいっ！」」
つばさに言われ、素直にその場から去っていく安とクロス。そんな彼等をヤレヤレと肩を竦めながら自分も下がろうとした時、つばさはある違和感に気付く。
（……しかし妙だね。暗黒大陸といえば次元震の影響で今まで誰も踏み入れられなかった未踏の地。そこが開かれたと知られたのはまだつい最近だ。そんな所をただの旅人が直後に踏み入れられるものかい）
恐らくはこの事は他の面々も怪しんでいる事だろう。何の支援も無く単独で暗黒大陸に踏み入れる事といい、エリア11から単独で抜け出せた事といい、そしてあのお菊から気配を悟られずに後ろに回り込められる技術、どれもこれもただの旅人には過ぎたスキルだ。
（……もし、またウチに来た時は何かしら探りを入れた方がいいのかもねぇ？）

〝シュウジ〟この男に何かがあると直感で感じ取った女将、錦織つばさは心の内でその人物に対する警戒レベルを上げた。

「――――いっきし！　な、何だ今の悪寒は？　風邪かな？」

◇

γ月×日

シュウ博士の情報も取れなくなって数日、インペリウムの存在も中々掴めなくなっている今日この頃。そろそろ自分は視点を一度地球から外すべきなのではないかと本気で考え中である。

どこへ行っても次元獣やインベーダー、イマージュばかりで、インペリウムの存在は

尻尾どころか影すら捕まえていない。

もしかして連中は自分がワームホールにグランゾンを隠している様に、もっと別の場所に姿を眩ましているのかもしれない。例えば……次元の狭間とか？

破界の王だし、それくらいは出来るだろうし……というか、自分は奴らに付いて何一つ知らないんだよな。そもそも次元獣は何なのかさえ知らないし。

アイムの奴はスフィアとか持ってるとか言ってるし、本当訳の分からない事ばかりである。

だがそんな事を言っている場合ではない、この間ニュースでやってたが、先日ＺＥＸＩＳとギシン星人が熱海で戦闘を繰り広げたようなのだ。

結果はＺＥＸＩＳの勝利で終わったが、ギシン星人の親玉であるズール皇帝は未だ健在。まだまだ気を抜くには許されない状況だ。

三大国家の同盟軍もどうやら新型機を開発したらしく、次元獣等の外敵からの被害は段々小さくなりつつある。

そう言えば例のスローネの連中はどうなったのだろう？　あれ以来姿を見せていないが……また良からぬ事を考えているのではないだろうか？

とまぁ、話が大分逸れてきたのでいい加減戻そうと思う。次に自分が向かうべき所……ずばり〝宇宙〟である。

この世界に来てから宇宙にだけは向かっていない。もしインペリウムの連中がいるのなら地球に留まったままでは手が出せない。

グランゾンなら単騎でも大気圏離脱が出来そうだからそこら辺は心配していない。

心配なのは何を隠そう、自分自身の事だ。

だって宇宙だよ？　俺の居た世界では宇宙飛行士が何年もの適正試験や訓練を積み重ねて漸く行けるかどうかって所だよ？　それに比べて俺はパンピーよ？　ちょっと前までグランゾンどころか車すら運転しなかった男よ？　自転車オンリーな一般人ですよ？

それがいきなり宇宙とか、色んなモノをバカにしている気がしてしょうがない。まぁぶっちゃけ怖いしね、宇宙。

だから行くならせめて宇宙服とか宇宙に合わせた特殊スーツとか欲しかったんだけど……露店に売ってる訳がないからどうしようもないね！

あるのは蒼のカリスマ時に被る仮面くらい。おいおい、こんなんで一体どうしろと？

シュウ博士は特に宇宙服とか着ないで大気圏離脱したっぽいけど、よくあんな軽装で宇宙上がれるよね？

けど、もし本当に連中が宇宙にいるのならそろそろ覚悟を決めねばなるまい。

ひとまず明日までに覚悟を決める事にして今日は眠らせて貰う。

あ、因みに今自分は日本のお台場にあるビジネスホテルにいます。

……うん、どうでもいい話だったわ。

◇

「うーん、今日はこんなものかぁ。さて、明日も早いし、そろそろ寝るかな」

時刻は既に夜中を回り、空も暗闇に閉ざされた時間帯。明日には生身で宇宙に出る怖さを克服せねばならないので、早い所就寝しようと部屋の電気を消そうとするが……。

コンコンと、ノックの音が聞こえた。こんな時間に誰だろう？　そう思いながらドアに付いている覗き穴を見てみると……。

「夜分遅く申し訳ない。私はサンドマン。友人の頼みで君に必要なモノを持ってきた。ここを開けて貰えないだろうか？」

……なんか、やたらダンディなおじさんがドアの前で突っ立ってた。

……え？　本気で誰？
ひとまず、チェーンロックを掛けて警察に通報を入れる準備だけはしとくかな。

その16

γ月J日

ハロー、皆さんお元気ですか？　あれから一日が経過した今日、現在自分はとうとう地球圏から離脱してグランゾンと共に宇宙にいます。

昨夜、いきなりダンディーなおじさんが押し掛けてきたと思いあわや警察に通報するかと思ったけど、冷静に話してみればなんとダンディーおじさんことサンドマンさんはあの不動さんのお友達なんだとか。

やっぱ渋いおじさんにはこういうダンディーおじさんが友人同士だったりするのねとか、妙な事を考えたりもしたが、それはさておきと自分はこのままじゃ色々気まずいと思い、蒼のカリスマの姿へと着替えてサンドマンさんを部屋に招き入れた。

都内のビジネスホテルにダンディーなおじさんと仮面を被った不審者な蒼のカリスマ（笑）が面と向かって座っている様は、かなりシュールな光景だったろう。

何も出さないのはアレなのでインスタントコーヒーを出してみた。見た感じ高貴な

出の人っぽいからこういうのは飲まないのかと思ったけど、意外にも彼はこれを戴き、飲み干しただけでなく美味しかったとお世辞まで言ってくれた。

単なるインスタントコーヒーなのになんという紳士、律儀に礼を言ってくる目の前の紳士おじさんに、これが大人の余裕という奴なのかと一人で衝撃を受けてました。

さて、その後チョロッとだけ話をした後、サンドマンさんは手にしたスーツケースを自分の目の前に置き、開かれた中身を見て……俺は驚きが隠せなかった。

そこにはもう一着の蒼のカリスマの変装一式が詰め込まれていた。若干デザインが違ってたりするが、仮面に施された深い蒼を強調としたデザインと赤いラインが刻まれたソレは、どこかグランゾンを連想させる。

しかもサンドマンさんが言うにはこれは宇宙だけじゃなく深海やマグマ、防弾や防塵対応等々、あらゆる環境と状況に対応できる優れモノだとか。

オマケに素材は特殊な物質で出来ている為に羽の様に軽いときた。

あまりの高性能な宇宙服に驚きを隠しながらこれはなんだと訊ねて見ると、何でもこれは不動さんからのプレゼントなのだとか。これを聞いた時、最近色々頑張っている自分に対するご褒美なのだと、自分は勝手ながらそう解釈した。

不動さん。前から思ってたけどホンマええ人や。以前は余計なお世話とか日記に書いてたりその年で不思議キャラとかどうよ？　とか思ってたりしたけれど、この場を借

りて謝罪&感謝を示したいと思う。

不動さんありがとう！　そして失礼な事言ってゴメンナサイ！

その後、自分に渡すものだけ渡したサンドマンさんは自分が新たな変装一式を受け取るのを確認すると、にこやかに微笑みながら部屋を後にした。

彼が出て行ったのを確認した後、自分はそれとなく渡された変装服を着てみると……うん、着心地や格好は兎も角、サイズまでピッタリだった事にビックリしたわ。

まぁフリーサイズとか言ってたし、自分の体に合わせてスーツが変異したのだろう。この世界ってそういう機能が発達してそうだし。

というか、サンドマンさんは自分の正体を知ってたりするのだろうか？　そこら辺だけハッキリさせなかったから少し不安だが……まぁ、不動さんの友人だって言うし心配はいらないだろう。

何故不動さんの友達なら安心だって？　だってあの人口堅そうじゃん。話したとしても絶対核心な所は上手い具合に誤魔化すでしょ。

もし不動さんが自分の事を言いふらす様な人だったら、自分は今頃世界から標的にされて地球で安心して暮らせなくなっていた所だ。

後でスーツを調べてみたけど、発信器とか盗聴器の類は付けられてなかったし、やっぱり杞憂だと思う。

まぁ、今度不動さんに会ったらお礼の序でに聞いておこう。こういうのはやっぱり直接聞いた方が手っ取り早いしね。

さて、慣れない宇宙に慣れる為にも少し移動しようと思う。近くにはフロンティア船団やコロニーがあるし、見つかる前に退散するとしよう。

追記として書くが、旧蒼のカリスマの変装一式は別に捨ててはいない。ワームホールの中で大切に保管しています。

勿論、通常時ではあの格好で宇宙ではこの格好と使い分けて着ようとも思っている。この時の自分はそんな最新の服装を前にテンションがやや上がっており、いつもより少し夜更かししてしまった。

……けど、冷静に考えてみたら変装の服で喜んだりするのはもしかして自分だけだったりする？　と、何故か虚しくなって落ち込んでしまったりする。

γ月Ｉ日

宇宙というのは常に暗闇だから時間という感覚が曖昧になってくるよね。あと無重力。重力が無いというのは何とも不思議な感覚で、地球に降りたったジオン軍が体が重いとか色々言ってた事を思い出す。

さて、今日は何が起きたのかというと……なんと、バジュラとかいう甲殻の虫を連想

させる地球外生命体との戦闘でした。
幼虫っぽい奴とかカブト虫みたいな甲殻を纏ったモノ、さらには蟷螂とクワガタを融合させた見るからに戦闘に特化した奴とか次から次へと押し寄せてきた時は流石にチョッピリ焦った。
何せ群を成して押し寄せてくるのだから通常の機体ではその軍勢に呑み込まれておしまいだろう。
だが、そこは流石のグランゾン。押し寄せてくるバジュラの群を〝グラビトロンカノン〟で纏めて圧壊させたり、〝ワームスマッシャー〟で残らず串刺しにしたりと、数の暴力を個の暴力でねじ伏せてました。
やっぱグランゾンやべぇなと、改めてこの機体を畏れたり、一緒に戦ってくれたりしてくれてありがとうと礼を言ったりしながら再び放浪。
畏れたり、一緒に戦ってくれたりしてくれてありがとうと礼を言ったりしながら再び放浪。
なんか時折月の方から奇妙なロボットが攻撃してきたりするけれど、これも問題なく撃破。だが、出てくるのはそんなバジュラや正体不明のロボット群ばかりで、肝心のインペリウムは一切出てこない。
次元獣すら出てこないし、これは外したかな？　と思われた時、フロンティア船団の

方角から一機のバルキリーが飛んできた。
機体名はＶＦ―２７γ〝ルシファー〟で操縦者はブレラ＝スターンさん。何故自分に接触してきたのかと訊ねると彼の機体を介して別の人から通信が入ってきた。
その人はグレイス＝オコナーさん。かのシェリル＝ノームさんのマネージャーで、最近は売り出し始めたランカ＝リーさんの育成を手掛けたりしていたりと、その筋では有名なやり手の人。
何でも自分に協力して欲しいという話で、その代わりそれなりの支援をしてくれるという事。
流石に色々嘘くさいなぁとは思う一方、食料などが尽きてきた為に一度地球に戻ろうかと検討していた所だったので、彼女の申し出は有り難かった。
その後、秘密のルートでフロンティア船団に入港（でいいのか？）した後グレイスさんと出会い、ひとまず話は明日と言うことで自分は高級感の漂うホテルのスイートルームに案内された。
話によれば隣はシェリルさんやランカさんもよく使う部屋があるらしく、芸能関係と無縁だった自分は緊張し、仮面越しでソワソワしていた。
まぁ、実際会うことはなかったんだけどね。そりゃそうだ。ワザワザ怪しさ全開である今の自分が有名歌手である彼女たちに会える道理はない。

……何だか虚しくなってきたので今日はこれで終わろうと思う。
そしてこれもどうでもいい話だが、ＺＥＸＩＳで蒼のカリスマ姿で過ごしていた所為か、仮面を付けたままでも熟睡出来るようになった。
いやぁ、人間慣れるとどうとでもなるものだね。

◇

――――今、俺は久方振りに怒りを覚えている。握り締めた操縦桿の手には鈍い痛みが広がり、耳には仮面越しからでも聞こえる歯を食いしばる音が聞こえてくる。
朝、目が覚めると自分はホテルのスイートルームではなく、どことも知らない地下にいた。周囲は強化を施された人間に囲まれており、一体どうしたと混乱する自分の前に

現れたのは下卑た笑みを浮かべたグレイス＝オコナー。
彼女の言い放った一言に俺は目の前が真っ白になった。「シェリル＝ノームとランカ＝リーを攫った誘拐犯になって貰う」と。
彼女がそう言いきると同時に強化人間……いや、サイボーグに抑えつけられ、身動きを封じられてしまう。
自分が大人しく捕まった事を確認したグレイスは通信で誰かと話した後、自分を誘拐犯に仕立て上げた後、インプラント化して傀儡とすると言った。
あぁ、やっぱりまだ俺には色々足りなかったのだろう。警戒心とか相手を疑う事とか、今まで平和な世界で過ごしていた為に培ってきた物が見事俺を窮地に陥れた。
その後、俺はグランゾンを呼び出し爆発と同時にフロンティア船団から離脱。途中ブレラさんと同じルシファー機が追いかけてきたが容赦なく撃墜。
爆散していく機体に目もくれず、俺はグランゾンを二人が誘拐されたとされる地点にまで走らせた。
そこはバジュラの巣とされる地点だが……関係ない。二人を回収した後はＢＨＣで諸共消してやろうかと思い現地へと向かったのだが……。
――――全て、遅かった。
『応えろ！　蒼のカリスマ！　貴様がランカを、シェリルを攫った張本人なのか!?』

向けられた多くの銃口。激闘があったであろうその地で、俺はＺＥＸＩＳと向かい合う。

ネット回線に繋げば、既に地球圏に自分の指名手配が施されている。……やられた。どうやらアイツ等は最初からこれが目当てで自分に接近してきたようだ。

頭の中が怒りという熱で沸騰しそうになる。けど、心の底まで冷え切った自分はＺＥＸＩＳというスーパーロボット軍団と向かい合い……。

『さて、アナタがそう思うのならそうなのでしょう。アナタの中ではね』

そう、挑発紛いな言葉を口にする。

グレイス＝オコナー、そしてその裏で繋がる者よ。

いつか、お前達には報いを受けさせる。

――――『私』とこのグランゾンを利用した報いを、必ず。

その１７

最初に引き金を引いたのはＺＥＸＩＳか、それとも自分だったのか、今となっては分からない。

ただ、この時の自分は騙された事やいきなり銃口を向けられた事が重なり、冷静ではなかったと思う。あの時、リモネシアで店長が死んだ時の様な、頭が真っ白になる程怒り狂ってはいないが、それでも冷静とは程遠い状態だった事は自覚している。

『貴様！　何の為に二人を攫ったりした!?　何故二人をバジュラの巣に押し込んだんだ！』

『少しはご自分の頭で考えなさい早乙女アルトさん。なんでもねぇねぇと聞くだけで答えてくれるほど、世界は甘くありませんよ?』

『っ、　この野郎！』

隊列から飛び出して突っ込んでくるのはＳ，Ｍ，Ｓでエースの実力を身に付け始めてきた早乙女アルトとそのバルキリー。その直情的な性格、個人的には嫌いではないが……。

『折角の高機動の機体だというのに、真っ正面からくるのは……あまり、感心しませんよ

？』

今、彼のバルキリーが装備しているものはトルネードパックと呼ばれる高機動と加速速度の向上を目的とした強襲型の装備だ。

扱いは難しく、彼以外扱える者はオズマ＝リー少佐位なもので、それを使いこなす早乙女アルトはまさしくエースに相応しい実力を兼ねている事だろう。

『ワームスマッシャー』

『そんなもの！』

縦横無尽に放たれる光の槍をトルネードパックの性能を最大限に生かして避けるアルト、そして遂にグランゾンの間合いに入り込んだ。

『貰った！』

『ええ、戴きますよ』

瞬間、バルキリーの動きが完全に停止した。まだエネルギーは尽きていないのにどうして動けなくなったのか、混乱しながら操縦桿を動かすアルトの耳に、蒼のカリスマの不気味な囁きが響く。

『どうやら、忘れてしまったようですね。私が一体どのような手段を用いて三大国家の軍勢を無力化したのかを……』

重力というものは全ての物質に作用する法則であり〝力〟でもある。しかし、この無

重力空間として知られる宇宙空間では重力の干渉は受け付けず、また重力や空気抵抗を受け付けない事から、彼等の乗るバルキリーは最大限にその性能を発揮する事が可能。

けれど、何事も例外がある。その例外こそが重力の魔神として知られるグランゾンだ。

『さて、このままアナタを機体ごと圧壊しても良いのですが……如何します？』

『ち、畜生……』

『アルト！　くそ、あのバカ！』

一太刀処か銃弾の一発当てる事すらままならなかった。機体性能の差もそうだが、何より乗っている者の力量が違っていた。

エースの一人を赤子の様に扱うグランゾンとその操縦者である蒼のカリスマ。あのガイオウを一蹴するその実力と底知れない不気味さに、指揮官兼パイロットであるゼロは仮面の奥で嫌な汗が頬を伝って流れるのを感じた。

『全機距離を取れ！　バルディオスは亜空間ジャンプに突入し、各機体はその援護を！　奴の背後を取りその隙に乗じて攻撃を開始！　奴に反撃の間を与えるな！』

ゼロの指示に全部隊の士気が高まる。仲間をいいようにやられた事により頭に血が昇った彼等は、ゼロの指示通りに行動を開始する。

だが、そんな部隊に待ったを掛ける比較的冷静な人間がいた。交渉人として知られる

ロジャー＝スミスとダイターン３のパイロットの破嵐万丈、そしてνガンダムを駆るアムロ＝レイだ。
『待つんだゼロ、彼にはまだ攻撃しない方がいい！』
『せめて彼から話を聞いてからでも遅くはない。彼が敵と認識するにはまだ早計だと思うぞ』
『俺達は今バジュラの女王と戦った事と二人を誘拐された事実に気持ちが高ぶった状態だ。少し落ち着いた方がいい』
『……確かに、あなた方の言うとおりだ。全機後退せよ』
ＺＥＸＩＳの中でも冷静な態度と思考の持ち主として知られる彼等の言葉とあっては無視も出来ない。幾分か冷静を取り戻したゼロは今にも突っかかりそうな面々に後退を命じ、再び今回の事態について模索していく。
だが、止められた方は納得がいかないのか、不満たらたらの様子でロジャーや万丈、アムロに通信越しで抗議の声を投げかけた。
『何で止めるんだよ万丈の兄ちゃん！　ソイツがシェリルさんとランカさんを攫った犯人だってあのマネージャーさんが言ってたじゃないか！』
『そうだよ！　それにコイツは砂漠の時正規軍の連中を俺達ごと叩き潰そうとしたじゃんか！』

『だが、結果的に我々はそのお陰で窮地を脱せた。リモネシアでインペリウムに追い詰められた時も、彼がいなければもっと多くの被害を出していただろう』
『けど、それも何か狙いがあるかもって！』
『それでも、我々は彼によって助けられた事も事実だ』
『うぐっ』
　不満を声を漏らす彼等をクワトロ大尉が押さえ込む。その一方で冷静さを取り戻したそれぞれのパイロット達は渋々ながら攻撃態勢を解除し、ロックオンマーカーをグランゾンから外していく。
『クワトロ大尉の言う通りだ。今回の件はまだ不透明な所が多い。もう一度冷静になって考えるのも必要だと思うよ』
『そういう訳だシン、いい加減剣を彼に向けるのは止めるんだ』
『わ、分かってますよ』
　キラ＝ヤマト、アスラン＝ザラ、そしてシン＝アスカと徐々に冷静さを取り戻していくＺＥＸＩＳ達。彼等が戦闘行動を停止した事により一触即発だった空気が静まり返り、グランゾンを駆る蒼のカリスマも必然的に頭から血の気が引いていった。
『グランゾン……いや、蒼のカリスマ殿、貴殿に対して無礼な対応を取った事、部隊の代表として謝罪させて戴きたい』

『……冷静な対応、感謝します。ジェフリー艦長』

通信画面から頭を下げてくるジェフリー艦長の姿を見た時、そこで漸く我に返った蒼のカリスマは平静を装いながら返事を返す。

相変わらず不遜な態度に文句を言いたくなるＺＥＸＩＳの若きメンバー達。だが、一度戦闘行為を停止した今、蒸し返すのは非常に不味いという事もあり、勝平やワッ太を始めとした子供グループはグッと我慢する事で何とか耐えた。

重力の檻からアルトとバルキリーが解放される。機体ダメージを受けながらも何とか航行は可能となっているバルキリーはそのままクォーターへ帰投。向き合う形となったグランゾンとＺＥＸＩＳ、緊迫した空気の中、先に言葉を口にしたのはジェフリー艦長だった。

『度重なる無礼を承知でお聞きしたいのだが、貴殿がシェリル＝ノームとランカ＝リーを誘拐した犯人なのですかな？』

『ここで私が違うと答えた所で、アナタ方は素直に納得するのですか？』

ジェフリーからの質問を即答で返す蒼のカリスマ。艦長に対し無礼な態度を取る彼に一同再び怒りを覚え掛けるが、言い返す事も出来ないのもまた事実だ。

何せつい先程まで蒼のカリスマを誘拐犯の犯人として断定していた所だ。ロジャーや万丈、アムロが待ったを掛けていなかったら、今頃はグランゾンと全面衝突をしてい

たのかもしれない。
　だが、それを差し引いても蒼のカリスマが怪しいと思うのは当然だ。その正体、目的と共に不明な癖に、手にした力は計り知れないほどに強大で凶悪ときたものだ。そんな存在を警戒するなと言う方が土台無理な話である。
『私から言うことはありません。所詮信じるのはアナタ方次第、今回の件はＺＥＸＩＳの皆さんの想像にお任せしますよ』
　そんな彼等の心情を察してか、蒼のカリスマはそれだけを言い残すと、グランゾンのバーニアを噴かせて何処かへ飛び立ってしまう。
　後を追おうにもグランゾンの出鱈目な加速に付いていける機体など今のＺＥＸＩＳには存在せず、部隊内は気まずい空気に包まれた。
『ったく！　相変わらず嫌味ったらしい奴だぜ！』
『だが、結局奴の目的はなんだったんだ？』
『分からないけど、もしかして……本当に犯人はアイツじゃないのかもしれない』
『あらシモン、アナタあの仮面男の肩を持つの？　憧れのランカが攫われたのに……』
『そういう訳じゃないけど、ただ……そう思うだけなんだ』
『……そう』
（俺は信じたくない。あの時俺を励ましてくれたあの人が自分の為に誰かを傷つけるな

んて……）

『俺も、犯人はアイツじゃないと思うな』

『赤木君、一応聞くけど根拠は？』

『以前、ダイガードの整備を手伝ってくれた事があるんだ。進んで誰かの為に手伝ってくれる奴が悪いことに手を染めるとは思えないんだ』

『ちょっと待て、お前あんな得体の知れない奴にダイガードを整備させたのか!?』

『道理であの頃のダイガードは調子がいいなとは思ってたけど……赤木君、どうして黙ってたの？』

『え？　いやその、確か報告書に書いてあったと思うんだけど……』

『そんな事全然書いて無かったわよ！』

『お前、またポカやらかしたな。あーあ、残業決定だな』

『ええっ!?』

今頃聞かされる赤木の話を皮切りに、彼のうっかりに盛り上がるＺＥＸＩＳ。そんな中、彼等のまとめ役としても知られるアムロ＝レイは、納得しかねる顔でプトレマイオスへの帰投準備に差し掛かっていた。

『アムロ大尉』

『カミーユか』

　そんなνガンダムのコックピットでカミーユ＝ビダンからの通信が入る。モニターに映し出される彼の表情も複雑そうに歪んでいた。
『カミーユ、お前も感じたか。奴の背後にいた〝何か〟を』
『はい。……ただ、奇妙なんです』
『あぁ、奴の……蒼のカリスマが抱いていたのは怒りだ。けれど、その背後にあったアレは今まで俺達が感じたものとは何かが違った』
『冷たい悪意でもなければ暗い邪気でもなかった。……アムロ大尉、一体アレはなんなのでしょう?』
『俺にも分からない。だが、今後も奴は要注意人物として警戒する必要があるという事は確かだと俺は思う』
　ニュータイプの勘といえばいいのだろうか。蒼のカリスマと、その背後にいる何かに警戒を強めるアムロ。
　だが、その何かからは明確な意志が伝わってこない。悪意もなく、敵意もなく、ただ傍観し、何かを見ているかの様な感覚。
　こちらを観察しているのか？　いや、それにしては不愉快な感覚はしない。何せ自分達に向けられていないのだ。――ただ、何故かソレからは暖かみのある奇妙な感覚を覚えるのもまた事実だ。

だからこそ、ニュータイプの素質として高い可能性を示したカミーユはそれを人一倍感じ取って戸惑っているのだろう。かく言うアムロもそれを感じ取ってトリガーを引くのを躊躇った一人だ。

結局、あの感覚は何だったのだろう。まるで親が子を見守るような感覚。一体それは誰に？　何に対して？

（まさか、アレは蒼のカリスマを見守っているというのか？）

結局、アムロも蒼のカリスマの目的、そしてその背後にいる〝何か〟の意志を明確に知る事もなく、ＺＥＸＩＳはその場から離脱。

後日、ギシン星人の総帥ズール皇帝と死闘を繰り広げ、更にそこから世界の悪意と対面する事になる。

◇

γ月０日

ＺＥＸＩＳと一触即発な空気となって数日。相変わらず自分は宇宙をさまよい、宛のない旅を続けております。

その間のトイレは何してたんだって？　そこら辺にある今は使われてない廃棄コロニーで済ませてますが？　あそこって電力が死んでたり色々大変だけど、ちょろっと電圧盤を弄くれば一時的に電力を蘇らす事くらい訳ないさ。尤も、精々１０分程度しか持たないから済ませる時は急がなきゃいけないけどね。

あー、それにしてもこの間は色々やらかしたなぁ。よりにもよってＺＥＸＩＳに喧嘩売るとか、向こうも自分の事完全に敵視しているよなぁ。

あの時騙された事や銃口向けられたショックでカーッとなっちゃったけど、彼等が自分の事を疑うのも無理ないよなぁ。

幸い戦闘には至らなかったから互いに被害が出なかったから良かったものの、もしあのまま戦闘が行われていたら……今頃蜂の巣になってたよなぁ。

確かにこっちはグランゾンに乗っているけど、向こうはゲッターを始めとしたスーパーロボットが一杯いたし、なにより彼等には凄腕のエースパイロットがゴロゴロいるのだ。

特にアムロ大尉、あの人にはグランゾンに乗ってても勝てる気があんまりしなかった

よ。

けど、流石はベテランの人だ。自分に攻撃しそうになった彼等を率先して止める様は、やはりこの人がＺＥＸＩＳのまとめ役だなと呑気に感心したりするほどだ。

ロジャーさんや万丈さんも助け船出してくれるし、流石は紳士として知られる人達だ。頼りになる。

けど、あー本当どうしよう。今更冷静になって考えてみたら俺って相当失礼な事言ってたよね？

しかも、何気に自分も攻撃する気満々だったし、つかアルトさんに攻撃してたし。

あーあ、今度あの人達と会ったら敵認定されるんだろうなぁ。……なんか、段々取り返しの付かない事に足突っ込んでる気がしてならない。主にボッチ的な意味で。

つーか、本当に俺ボッチになるかも、あのババ……グレイスの企みに乗せられまんまと罠にはまったし、その所為で一躍俺は世界から追われる身だし、今後地球にいる時は自分＝蒼のカリスマって事に一層気を付けないといけないし。

え？　それにしては落ち着いてるって？　知ってた？　こういうのを諦めの境地っていうんだよ？

……なんか、疲れてきたな。早くリモネシアに帰って皆の作ったご飯で癒されたい。

その為には早い所シオニーさん保護したい所だけど……シオニーさんとインペリウムは一体何処にいるんだろ？

あー、駄目だ。ホント今日は疲れたわ。明日の事は明日考える事にして今日はもう寝よう。

最近、グランゾンの中で眠ることが多い。この世界に来たばかりの頃を思い出し、少し懐かしくなった。

あれからもう半年近く経つのか。早いものである。

近くにお月様もある事だし、一人月見をしながら眠りに付こうと思う。

……最近、この一人って言葉に反応してしまう自分がいる。

◇

――――さて、この状況を自分はどう解釈すればいいのだろう？

目が覚めた時、自分の前にある光景を目にした時、眠気は虚空の彼方に消し飛び、すぐさまグランゾンを戦闘態勢に移行させる。

目の前にあるのは無数の次元獣と要塞みたいに馬鹿でかい次元獣と……。

「よぉ、久し振りだなぁグランゾン。今まで逃げ回ってて悪かったな」

不敵な顔で自分を見下ろす破界の王がそこにいた。

危険な状態。そう、非常に危険な事態だ。呑気に眠りこけていた間に自分は絶対絶命の危機に陥ってしまっていた。

けど、嗚呼。やはりこの時の自分は焦っていたのだろう。突然の事態、思考が纏まらない状況、そんな中で自分が口にした一言は……。

『……おはようございました』

誰かぁぁぁぁ！　俺を殴ってぇぇぇぇっ

その１８

――――陰月。

時空震動の影響により二つとなった月の片割れ。その近海宙域に二つの巨大なエネルギーを有した存在が相対していた。

〝ガイオウ〟リモネシアで起こった時空震動によって召喚された破界の王。次元獣達を従え、世界中を混沌の渦に叩き込んだソレは、まさしく破界の王と呼ぶに相応しいだろう。

そして、そんな世界の脅威と呼ばれる存在と真っ正面から向き合う存在がいた。

〝グランゾン〟とそれを操る謎の仮面の男〝蒼のカリスマ〟その出自、目的、全てが謎に包まれた存在。

グランゾンという強大な力を操り、当時の三大国家の軍隊を一瞬にして無力化した事件は世界に対して大きな衝撃を与え、唯でさえ脅威だというのにグランゾンを駆る蒼のカリスマの目的が不明という事が相まって、ある意味ではガイオウよりも危険視されている。

次元獣を従える破界の王〝ガイオウ〟

存在と目的、その全てが謎に包まれた〝グランゾン〟と〝蒼のカリスマ〟

この二つの存在は在り方や行動原理も当然異なっているが、ある一点においては共通する事実がある。

それは、その気になったらどちらも世界を滅ぼせるだけの力を持っているということ。彼等が本気を出せばその日の内に地球は破壊し尽くされてしまうという事実。

グランゾンは〝力〟で、ガイオウは〝能力〟で、それぞれ人類を滅亡に追い込む術を持っている。そんな強大な存在が相対するように睨み合っているのだ。

誰も手が出せない緊迫した状況、そんな空気の中で先に口を開いたのはグランゾンに乗る蒼のカリスマだった。

『まさか、お前達の方から出てくるとはな……だが、分からないな。どうして寝込みを襲わなかったんだ？』

『こっちはオメェにやられた傷を癒す為に逃げ回っていただけだ。こっちは最初から万全な状態に戻り、戦えるようになった時はこっちから会いに来るつもりだったさ』

『どうだか、そっちにはあのアイム＝ライアードがいる。奴の事だから此方を背後から襲うなんて事は常に考えていると思うが？』

アイム＝ライアードとはそれこそ数回しか出会わなかった仲だが、それでも充分理解出来る程に胡散臭かった。

奴の話す言葉、仕草、その全てが嘘くさく見えたのだ。ガイオウにその気はなくても、エメラルダンやパールネイルのパイロットをけしかけて次元獣達を引き連れて奇襲するなんて真似は平然としそうである。

現に今、グランゾンは無数の次元獣達によって囲まれている。中には未だに記録にない超巨大な次元獣まで出張ってくる始末。

寝込みを襲わなかっだけマシだと思うが、それでも数の暴力がある分、現状ではグランゾン側の方が不利であることには変わりない。

だが、そんな蒼のカリスマの考えを見越したのか、ガイオウは悪戯が成功した子供の様ににたりと笑う。

『安心しな。コイツ等にはまだ手をださせねぇよ。俺とお前の戦いは余計な手出し抜きでやり合いたいからな』

『……そうかよ』

『そしてもう一つ朗報だ。アイムの奴は死んだぜ。南極でＺＥＸＩＳにやられたらしいぜ』

『……あ、そう』

アイムが死んだ。内心でインペリウム攻略の為には奴が一番厄介だと思っていただけに、ガイオウから聞かされたその一言に彼の心労が幾分か減った気がした。

残りのパールネイルやエメラルダンが出てこないのが気掛かりだが、今は目の前のガイオウを倒すことに集中しよう。

操縦桿を握り締める手に力が籠もる。ワームホールから凶悪な剣を取り出すグランゾンに対し、ガイオウは人型の怪物と玉座を模した〝ゲールティラン〟に取り込まれる様に乗り込んでいく。

集中力が増していく。徐々に視界が広まっていくその感覚に緊張感も最高値に高まった時。

『それに面白いモノが見れたしな。魔神を駆るお前がまさかあんな寝言を口にするなんて……ククク、〝おはようございました〟ってお前』

『……』

燃えさかる炎に大量の水をぶっかけられた様な感覚、ここでそれを言うのかと仮面の奥で目元がヒクついた。

だが、次の瞬間――。

『さて、そろそろお喋りはお終いだ。早い所勝負を決めないとあの外務大臣気取りの女が死んじまうからな』

『……なに？』

『言い忘れてたが、あの女には件のＺＥＸＩＳの相手をさせている。俺の次元獣を貸し

てやっているが……さて、いつまで保つか――――』

言い切る前にゲールティランが弾け飛ぶ。何が起こったと考える前にガイオウの口元が嬉しそうに歪む。

前を見れば腕を突き出したグランゾンの姿があった。ワームホールを使い、瞬間移動の様に瞬時に間合いに潜り込んで直接殴りかかってきたのだ。

分かる。あの機体の中で、仮面の奥底で怒りに燃えたぎる男がいる事実に、ガイオウは嬉しくてたまらなくなった。

『……いいねぇ、やっぱりお前との戦いは心躍る！　最高だぜグランゾン！　蒼のカリスマ！』

『ガイオォォォォォォォォッ!!!』

剣を持ち、突っ込んでくるグランゾン。怒りのボルテージが臨界に達した魔神を見つめ、ガイオウは破顔の笑みで迎え撃つ。

広大な宇宙の中で一つの光が爆散した。

◇

やっぱりコイツは嫌いだ。開かれたモニターの大画面に映し出されるゲールティランを前に、自分は苦々しく舌を打つ。

リモネシアを破壊し、店長を殺し、そして今も俺をおちょくり挑発してくる。

グランゾンの剣、〝グランワームソード〟が奴の機体の玉座部分を削り取る事に成功するが、次の瞬間にはその部分は再生されていた。

『どうしたぁ！　その程度の攻撃じゃ、この俺は殺れねぇぞ！』

大声で挑発してくるガイオウに苛立ちと焦りが募ってくる。早くコイツを倒し、シオニーさんを助けなければと思うほど、自分の焦りが連動し、グランゾンに無駄な動きを強制させてしまう。

『ンダその大振りは！　舐めてるのかぁぁっ!!』

ゲールティランから発する衝撃波、唯の衝撃の波でしかないソレはグランゾンの〝歪曲フィールド〟を破り、その攻撃をモロに受けてしまう。

この世界にきて初めての被弾、グランゾンからは被弾したアラームが鳴るが被害状況は軽微。まだまだ戦える範疇だし、時間が経てば回復するだろうが……問題は別の方にある。

シオニーさんを早く助けねばと思えば思うほど、自分の操縦がグランゾンを迷わせてしまう。

済まないとグランゾンに対して内心で謝るも、依然として状況は変わらず、ガイオウの攻撃の前に俺は防戦一方となっていた。

『オラオラどうしたぁ！　こんなモンで音を上げてるんじゃねぇぞ！』

『こ、のヤロォォォォ!!』

ガイオウの猛攻の最中に見せる僅かな隙、それにタイミングを合わせて再びグランゾンの間合いに持ち込んで、制御の中枢を担う人型に向けて振り下ろそうとするが……。

『残念だったなぁ、そこは俺の間合いだ』

『っ!?』

単なる制御装置かと思われた人型が玉座から立ち上がり、グランゾンに向けて拳を振り抜いてきた。

慌てて剣で防ぐが、以前受けたモノより格段に重く鋭い一撃に自分とグランゾンは防御ごと吹き飛ばされ、近くの廃コロニーに叩きつけられてしまう。
衝撃により機体の内部が揺さぶられ、吐瀉物を吐き出してしまう。
今まで受けたことのない一撃にグランゾンは先程よりも大きなアラームを鳴らしている。
機体に損傷はない。ダメージが深刻なのは……自分の方だ。
――強い。以前サンクキングダムで戦った時よりも数段強くなっている。今の今まで隠していたのか？　それとも、力を取り戻していた時に何らかの処置が施されているのか。
理由は分からないが、このままでは自分は負ける。このグランゾンの力を最大限に活かせないまま、一方的になぶられて殺されるのか。
『……つまんねぇな。以前のお前はこの程度ではなかった筈なんだがなぁ、興ざめだ。あわよくばお前を次元獣にして俺のモノにしてやろうかと思ったのだが――やめだ』
『……』
『終いだ。せめて楽に死ねるよう、その魂ごと砕いてやるよ』
迫り来るガイオウ、一時離れようと操縦桿を握り締めるが、握った手からは力が感じられず、ぶるぶると震えるだけだった。

……あぁ、そうか。俺は今恐怖を感じているんだ。リモネシアで味わった怒りや虚しさ、その後に来る虚脱感とは違う〝死〟という感覚に、本能から恐れているんだ。

以前、死んでも良いと思っていたのに、いざ本物の死が迫るとなると途端に死にたくないと本能が叫んでいるのか。

なんて都合のいい人間なのだろうか。それとも、元から覚悟というモノがない俺では、ここまで来たのが間違いだったのではないだろうか？

グランゾンという力を得たことでいい気になって、結局自分は何も出来てはいないじゃないか。不動さんに助けられ、ゴウトさんやキタンさん達に教えられ、結局自分は最後まで何も出来なかったではないか。

店長も死なせ、シオニーさんも助けられず……ここで、終わっていく。

中途半端だなぁ、機械の整備やロボットを動かせる程度で、何かを出来る気になっていた。そんな調子に乗った自分など、あのグレイスの前では格好の獲物でしかなかったのだろう。

ホント無様だ。リモネシアの皆の仇と息巻いて飛び出して、結果何も出来ずに終わるのか。

『……死ね』

振り抜かれた拳。迫り来る死を目前に……俺は。

〝約束ですよ？〟

『――――っ！』

『……ほう？』

気付いたら、グランゾンを動かし、握り締めた剣で奴の腕を切断していた。

訳が分からなかった。先程まであんなに怖がって震えていた手が、今は何ともなく操縦桿を握り締めている。

あれほど焦りで狭まっていた視野が、嘘の様にクリアになっていく。

一体何故？　そう自問する自分の脳裏にある場面が思い浮かんだ。それはいつぞやのリモネシアにある店長の店で、慣れないお酒で酔っていた彼女の愚痴を聞いていた時のことだ。

『……そっか、そうだったな。俺はまだ戦う理由があった』

いつか交わした約束。そして、もうじきそれが達成出来る。その時まで後もう１０分もない。

『なぁ、ガイオウ。アンタ知ってるか？　お酒の飲酒は二十歳からってのが俺のいた世界では常識なんだ』

『いや、知らんが？』

『そして、ついでに教えといてやる。俺はまだ未成年だ。お酒の飲める年まではあと一歳ほど足りない。が、その制限があと１０分程で解除されるんだよ』

『コイツは驚いた。あの蒼のカリスマがまさかの未成年だったとは……コレはニュース

になるぜ』

『そうだろう？　冥土の土産には充分過ぎる土産話だ。――――だから』

〝ここで、ケリにしよう〟

その一言で、ガイオウの覇気が一気に昂るのを感じた。自分のその言葉に奴は全身で嬉しさをアピールし、楽しそうに力を解放していく。

『蒼のカリスマ、お前にはホント楽しませて貰った。だから、礼代わりに俺の全霊をお前に見せてこの闘争に終止符を打たせて貰う』

奴の姿が変貌していく。黄金の玉座は銀色の王に吸収されるように呑み込まれ、やがて破界の王は銀色の翼を生やして俺の前に降りたった。

……今までとは桁違いの迫力に俺は笑みがこぼれた。この時の笑みがなんだったのか、結局自分は思い出せなかった。

けど、それは恐怖から来るものではないと断言できる。なぜなら、その時の自分の頭の中には、あの時交わした約束を果たす事しか頭にはなかったのだから。

『……なぁグランゾン。俺はお前の本当の主じゃない。お前の本当の乗り手はもっと凄

い人なんだ。俺なんかじゃ足下にも届かない凄く強くておっかない人が――――』

ガイオウが少しずつ離れていく。恐らくは自身が放つ最も強い一撃を放つ為に準備をしているのだろう。

『俺なんかが乗っていてさぞかし不満に思っているだろうけど……もう少し、付き合ってくれないか？』

自分の問いにグランゾンがモニターに全システムオールグリーンの表示を示してくれる。それがこの機体の返事だと思うと……なんだか嬉しくなった。

『ありがとう、グランゾン――――さぁ、行くぞ！』

グランゾンの胸部が開く。圧縮し、凝縮されていく重力変動によって生み出されるのは、特殊な解を持つマイクロブラックホール。

重力崩壊の渦に巻き込まれる次元獣を横目に、俺はグランゾンの出力を更に上げていく。

サンクキングダムの時とは違う本気の一撃。今、自分の前にあるのは差し詰め黒い太陽だ。

それに対し、変貌したガイオウのゲールティランは銀色の太陽だ。

まったく、何で自分はこんなボスクラスの奴と一対一で命懸けの勝負を挑む羽目になったのか。

だが、今はそんな事はどうでもいい。迫り来る銀の太陽に向けて俺は今放てる最大限の一撃を叩き込んだ。

『ブラックホールクラスター、発射!』

周囲の次元獣を巻き込みながら突き進む黒い太陽は直後、銀色の太陽と正面から激突し。

光が、陰月をも巻き込みながら広がっていった。

◇

一体、どうして俺はこの世界に来たのだろう？
何故、俺はグランゾンと共にいるのだろう？　結局その問題は何一つ解決出来ず、未だに俺はこの混沌とした世界を生きていかねばならない。
色々無くしたものもあるし、これからも悲しい出来事が自分を待ち受けている事だろう。
だけど、今はそれでもいいと思っている自分がいる。
――――だって
『――――うぇ、ひぐ、ゴメンナサイ。グス、ゴメンナサイ。リモネシアを、皆を壊して……ごめんなさい』
自分が取り返したいと願うモノが、今。俺の手に帰ってきたのだから――――。
γ月Ａ日。この日を境に後に破界事変と呼ばれる戦いは終局し……。
俺はとうとう二十歳になった。

シオニーさんも取り戻せたし、俺も飲酒が出来る歳になった事で一安心なのだが……
一つ、困った事がある。

子供達と約束したお菓子、買ってないや。

……どうしよう。

幕章
幕間その１

――――陰月。

そこに待ち受けるインペリウムとの最終決戦、破界の王ガイオウ達と決着を付ける為にＺＥＸＩＳは幾度も窮地と危機を乗り越え、遂にここまで来た。

爆炎をあげるグレートアクシオン。ガイオウに預けられた次元獣は全てＺＥＸＩＳに倒され、インペリウムそのものと言える巨大戦艦はその機能の全てを停止し、いよいよ……帝国が終わりの時を迎えようとしていた。

グレートアクシオンのブリッジ。元リモネシアの外務大臣シオニー＝レジスは、炎に包まれつつあるその場所で、彼女は嘆く気力も無くし、目の前に揺らめく炎を見つめていた。

『……私、どうしてこんな所に来たんだろう』

全ては祖国の為だった。大国に呑まれ、属国として生きていくのではなく、リモネシアはリモネシアとして立派に生きていける事を証明したかった。

大国に支配された世界で祖国の平和と繁栄を望み、奔走していた日々。……だけど、どこかで間違っていたのだろう。愛していた祖国は自らの手で消し、ガイオウとアイム＝ライアードの影に怯え、いつの間にか威を借る張り子の独裁者となってしまっていた。

アイム＝ライアードの指示に従い、言われるまま世界を蹂躙した今、彼女の居られる場所は何処にもない。それが自業自得と知りながらも、シオニーは何故と自問せずにはいられなかった。

過去を振り返り、何処で間違ったか振り返る最中、シオニーはある出来事を思い出し、宇宙服のメット越しにクスリと笑みを浮かべる。

『あぁ……でも、あの時だけは楽しかったなぁ』

プロジェクト・ウズメを発動させる数日前、リモネシアでは滅多に訪れない居酒屋。あの頃の自分は仕事の忙しさと責務、重圧によって精神的に参っていた。

だから魔が差したのだろう。お酒を飲んで一時だけでも楽になろうと、彼女は珍しくその暖簾を潜った。

その時出会ったのが自らを旅人だと自称する青年、シユウジ＝シラカワだった。ヘラヘラ笑う彼を最初は気に入らないと嫌っていた。

けど、自分の愚痴を真剣に聞き入れて、酔っていた自分の事をまるで気にしないよう

に振る舞う彼に、自分はいつの間にか声を大にして叫んでいた。
いや、寧ろ罵倒していたと言っても良い。何の苦労も知らず、呑気に旅なんてしているシュウジを嫉妬し、妬んだのだ。あの時は慣れないお酒を飲んだ為に朧気にしか覚えていないが……それでも、随分酷い事を言ったと思う。
けど、そんな自分の言葉を彼は受け止めてくれた。行き場のない苛立ちを、理不尽な八つ当たりを、彼は真剣な顔で受け止めてくれた。
〝俺はまだガキですから、アナタの苦労は分かりません。けど、生まれ故郷の為に頑張るアナタを俺は尊敬します〟
顔を合わせられなかった。若造がと、世間を知らない子供がと、知った事を口にする目の前の男が益々気に入らなかった。
……いや、本当は違う。嬉しかったんだ。初めて尊敬するなんて言われて、そんな事言われたらなんて言えばいいか分からなくて、憎まれ口を叩いて誤魔化すので精一杯だった。
赤くなった頬を酒の所為にして逃げる事しか出来なかった自分は、やはりこの時から卑怯者だったのだろう。
けど、それでも良かった。彼の所で飲むお酒は気分だけでなく心の底から軽くなれた。また明日も頑張ろうと元気を貰えた。

彼自身は未成年である為、一緒に飲むことは出来なかったが、それでも成人したらここに飲みに来ますと言ってくれた。

つくづく、生意気だと思いながらそれを嬉しく思う自分がいる事に気付いたのは……プロジェクト・ウズメの発動当日の日だった。

自分の選択が国を滅ぼし、自分の決断があの店を壊した。彼と一緒に飲むと決めたあの店を、自分の手で消してしまった。

結局、自分は道化のまま終わるのだろう。アイムに利用され、ガイオウには捨て駒にされ、ＺＥＸＩＳの足止めを命じられたままに実行する。

『でも、これが私の罰ならそれも仕方ないかな』

渇いた笑みを浮かべながら、シオニーは誰もいないブリッジで一人膝を抱いて目を瞑る。せめて楽しかった頃の夢に包まれながら死んで逝きたいと、彼女はそう願いながら瞼を閉じた。

……が。

『か、艦長！　後方から高エネルギー反応が急速接近！　これは……グランゾンです！』

『ナニィッ!?』

辛うじて生きていた通信機器、そこから発せられるＺＥＸＩＳ達の驚きの声が上がっていく。何だと思い、顔を上げたシオニーが目にしたモノは……。

『ひっ』

既に目の前に迫った魔神の姿。所々損傷してはいるものの、その禍々しさは未だ健在。サンクキングダムであのガイオウを一方的に蹂躙した様子は、シオニーにとってガイオウ以上にトラウマとなっていた。

それを目の当たりにしたシオニーが悲鳴を上げるのは仕方がない事だと思う。少しばかりチビってしまってもしょうがない事だと思う。

恐怖で身が竦む。魔神が自分を握り締めようとブリッジにその手を突き入れて来た時は、気絶しなかった自分を褒め称えて欲しい所だ。

このまま握り潰されるのか。覚悟もままならなかったシオニーだが、意外にも魔神はそのような事はせず、寧ろ炎や瓦礫に押し潰されないよう包み込むと、そのまま離脱。後ろで何か言っているＺＥＸＩＳを無視してシオニー＝レジスは訳が分からないまま戦場から離脱する事になった。

……結局、自分は最後まで何も出来ないままだった。死ぬこともなく、だけどその事に深く安心している自分がいる事に気付いたシオニーは、惨めな自分を消すように延々と謝罪の言葉を呟いていた。

その最中、魔神の彼女を見る目が――――どこか優しかったように見えた。

◇

「やぁ、今回は色々惜しかったね。グレイス＝オコナー」
『慰めならいらないわ。結果を出せなかった事は事実ですもの、笑いたければ笑っても結構よ』
「そんな事はしないさ。あの魔神を相手に出し抜こうとする君の胆力をボクは素直に賞賛するよ」
『それはどうもありがとう。褒め言葉として受け取っておくわ』
「さて、ひとまずガイオウは滅んだ事だし、僕たちもそろそろ舞台を整えるとしようじゃないか」

『そうね。……ではミスター、機会があればまた次にでも』
「そうだね。その時を待っているよ」
何も見えない暗闇の空間、唯一灯りとなっているモニターを消し、彼は一人楽しそうに口元を歪ませる。
「……フフフ、ダメだよグレイス＝オコナー。あの魔神を御するにはまだ人間の域を出ていない君では不可能だ。そう、あの魔神を制するのはこのボク」
〝イノベイター〟なのだから……。
暗闇の中、金色の瞳が妖しく輝いていた。

◇

「……私、どうして」

波の立つ海岸。砂浜に降りたったシオニーは混乱の中に叩き込まれていた。

何故自分は生きているのか。何故魔神は自分を助けたのか、何故魔神は……リモネシアに連れてきたのか。

答えを知るものは誰もいない。魔神も自分をリモネシアに置いた後、何処かへ飛び去ってしまった。

何故、何故と口ずさむシオニー。既に太陽は水平線の彼方に沈み始め、夕陽の光が彼女とリモネシアを包み込む。

分からないとただ呟くシオニー、壊れたラジオの如く繰り返す疑問に誰も返す事はなかった。

だが、そんな彼女に足音が近付いてくる。……誰だろうか？　背後から近付いてくる人間に心当たりがないシオニーは疲れ切った表情で振り返ると――。

「……あ」

涙が、こぼれた。

一滴だった涙は途端に川となり、彼女の頬を伝ってポロポロと流れ落ちていく。

そんなシオニーの前にその人物は慌てふためく、変わってないその人を前にシオニーはただただ涙を流し……。

「えっと、俺が言うのもおかしいけど……お帰りなさい。シオニーさん」
「う、うぅ……うぁぁぁぁぁぁあっ」
遂に、堰を切った様に泣き出した。いつぞやの誰かさんの様に無様に、涙と鼻水でグシャグシャになりながらみっともなく泣き喚く彼女を、青年は自分がして貰った時の様に側に寄り添った。
彼女の涙が止まるまで……ずっと。

後に、世界は公表する。新帝国インペリウムと名乗るテロ集団は国連に属する部隊が撃破。ガイオウは滅び、インペリウムの筆頭政務官シオニー＝レジスは死亡と。
だが、その後に旧リモネシアにある小さな学校に彼女に酷似した女性教師がいるという噂が一時的に広まるが、誰もその事実を確認したモノはおらず、噂はすぐに収まった。
ただ、その噂に乗せられ、冷やかし気分でリモネシアに訪れた観光客は暫くの間、魔神と青いツナギ姿の仮面男に追いかけ回される悪夢を見る事になるとかならないとか……。

幕間その2

α月G日

〝破界事変〟そう呼ばれる戦いが終わり数ヶ月、ソレスタルビーイングの崩壊や黒の騎士団の壊滅、そしてゼロの死を始めとした大きな出来事もひとまず収束し始め、世界は表向きには平和な毎日を送っていた。

そんな時代が激しく揺れ動いている最中、自分はリモネシアで復興作業の手伝いをしている。建物を始めとした土木関係の仕事、使える電気製品の整備や老人達に対する福祉設備の調整。やるべき仕事が多すぎて連日てんてこ舞いの日々である。

子供達も老人達も、皆率先して手伝ってくれるのは有り難い。特に女性の皆さんには朝昼晩といつも食事の方を任せて貰っているから力仕事を担当する男性陣達は大助かり、子供達も自分等が出来ることを自ら探して手伝ってくれるから、結構助けて貰ったりしている。

そんな毎日があるため、黒の騎士団とソレスタルビーイングの危機に助けに行ける筈もなく、結局はどちらの組織も壊滅という結果に幕を閉じた。

まぁ彼等の事はあまり心配していない。ゼロに対してもそうだが、ソレスタルビーイングの面々はそう簡単にやられはしないと確信できる。新型に囲まれたといっても彼等もＺＥＸＩＳのメンバーだ。仮にそこでやられたとしても、再び起つ機会をゆっくり待っている事だろう。

黒の騎士団に関してもそうだ。今の所主だったメンバーは捕まっているが、ゼロの右腕として知られるカレンちゃんが捕まったという話は聞いていない。噂では何処かの紛争地域に隠れ、今もゼロ復活の機会を狙っているとか。

そして暗黒大陸。インペリウム討伐後、螺旋王が亡くなった後に地下に追い込まれた村人達と獣人達の今後をどうするか検討すべく、グレン団とゲッターチームは暗黒大陸に赴いたのだが、そこで意外な奴が現れた。

真ドラゴン。早乙女研究所に現れたあの怪物がインベーダーを引き連れて暗黒大陸に姿を現したのだ。当然グレン団とゲッターチームはこれに対抗し激闘を繰り広げるのだが、真ドラゴンの力を恐れて地球連邦政府は暗黒大陸に強力な重陽子ミサイルを発射、真ドラゴンを暗黒大陸ごと消し飛ばそうとしたのだ。

だがその時に時空震動が発生。重陽子ミサイルは消滅し暗黒大陸は無事だったが、その時の時空震動が原因で大陸周囲の次元境界線は歪曲し、暗黒大陸は再び外界から接触を拒む地となってしまった。

どれもこれも世界情勢を揺るがす騒動だが、破界事変の後にまるで予め用意されていた様に事は進んでいった。

まず三つの大国を始めとした数々の国が地球連邦の名の下に統一、先程も述べた通り表向きは平和な世界となりつつあった。

が、実際の所は単なる地球連邦は看板に過ぎず、各国の行政は今も変わることなく歪なものとなっている。ブリタニアに支配された植民地エリア、地球圏に言われるがままのスペースコロニー達。

破界事変を教訓にと謳ってはいるが、結局は何も知らない市民達に対する誤魔化しに過ぎない……と、不動さんが言ってた。

やけに詳しいなと思った？　残念、全ては不動さんがソースだったのさ！

いやだって自分は世界情勢に目を向ける余裕ないし、不動さん時々遊び来るし、子供達の遊び相手になってくれているから悪いこと言えないし、仕方ないじゃない。

しかも、世界が統一とか言ってる割には地球連邦からのお誘いの言葉が一向に来ないし。や、別に良いんだけどね。地球連邦は色々きな臭いし、変な奴らの企みに巻き込まれるのは困るし。

あ、けどあのグレイスにはいつか相応の報いは受けさせます。これ決定事項ですのであしからず。

その為にグランゾンの整備やら調整やら夜中にしているんだけど……うん。まだそういう訳にはいかないよね。

まだまだ普通に生活するには障害が多いし、自分がこの国から発つにはその辺りをもう少し整えてからの方がいい。

不動さんも暇があれば手伝ってくれると言ってるし、焦らずこつこつとやっていこうと思う。

α月Ｖ日

そうそう、言い忘れていたけどシオニーさんの事は皆受け入れてもらえる様になりました。

最初こそは国を滅茶苦茶にした事で殺される事も厭わなかったシオニーさんだったが、いざ謝罪と同時に頭を下げると、皆さほど怒った様子はなく彼女を迎え入れてくれた。

皆もシオニーさんばかりに責務を負わせた事に負い目があったようで、彼女にとやかく言う者はいなかった。ただ、大統領さん（名前忘れた）は土下座する勢いで謝ってきたことが少し……うざかった。

いや、別に悪いことじゃないよ？　大統領も大統領なりに反省していたし、シオニー

さんもそれを受け入れたし、……たださ、鼻水を擦り付けるように膝に抱きつくのはどうかと思う。シオニーさんスゲー顔引きつってたもん。

え？　お前も鼻水垂らして泣いてただろうって？　そんなログ俺の所にはないなぁ。

と、まぁそんなこんながあって、今彼女は〝シオ〟としてここリモネシアで一から頑張っている。外務大臣という立場から解放されて肉体労働に勤しんでいる彼女は、四苦八苦しながらも輝いていた。

α月J日

今日は幾つか報告する事がある。まず一つ目は資金だ。リモネシアには既に国庫というものは存在せず、日々その日その日で調達したものでやりくりしているのだが……ここへ来て支援するなどと言い出す人間が出てきたのだ。

その名も〝カルロス＝アクシオン＝Ｊｒ．〟今はない世界最大企業のアクシオン財団の総裁で元インペリウム帝国の一員だった男だ。

金にモノを言わせて好き勝手する人間だと聞いてきたが、そんな人間が一体何故リモネシアの資金援助に名乗りを上げたのか。

理由を聞いてみれば何でも当時インペリウム帝国の一員だった彼がある日問答無用にシオさんから死刑判決を言い渡されたのだとか。その後の戦いでドサクサに紛れて

インペリウムから抜け出したのだが、処刑どころか追っ手の一つも寄越さず、当時のカルロスは唖然としたのだとか。

『ボクを騙すなんてシオニーちゃんの癖に生意気だ！』そう彼は吐き捨てその時の〝仕返し〟という事でリモネシアを個人的に援助する結論に至ったとか……。

なんとも面ど……もとい、ひねくれた人だなぁと思いつつ援助を承諾。その後彼は定期的に物資をリモネシアに秘密裏に搬送する様になった。何故秘密裏なのかは地球連邦から目を付けられれば面倒だからだという。まぁ、元とはいえインペリウムの一人がリモネシアに援助していると知れれば確かに問題だろうと思うから別にいいんだけどね。

あ、それと援助を承諾したのは自分ではありません。自分はあくまで相談者の一人であるからそういった決定権はないのである。

今リモネシアで立場のある人物を仮として担っていてくれているのが、老人達の中でも冷静に物事を見てくれる〝ガモン〟さんである。

厳つい顔付きで威厳もあるし、誰を相手にしても堂々としている姿勢は仮とはいえ充分人の上に立てるカリスマ性を持っていた。

シオさんもそんなガモンさんを見本としている部分があるらしく、良く人前で緊張しない方法を教えて貰っているとか。

そしてもう一つ報告すべき事があるのだが……正直、自分は戸惑っている。今日、ここリモネシアで生活したいとある人物が外からやってきたのだ。

その人の名は〝フィカーツィア＝ラトロワ〟さん。元人革連の軍人さんで階級は中佐、とある部隊を任されたお偉いさんであり。

……店長の、奥さんだった人だ。

元々店長はラトロワさんと一緒に人革連の軍人だったのだが、ある時息子をテロで無くし、それが原因で軍から離れ、ここリモネシアで酒場を始めたのだという。

そして、ラトロワさんが言うには自分はどこか息子と似ているという。

……正直、戸惑った。だから店長は俺に何かと世話を焼いてくれたのか？　息子に似ているからと、そんな理由を付けて。

真相は分からない。けど、これだけは言える。俺はあの人の息子でもないし、赤の他人でしかない。

けど、あの頃の自分をなんの疑いもしないで雇ってくれた事、自分の我が侭を受け入れてくれた事、その事実は変わらないし、店長には本当に感謝していると。

そう言葉にすると、ラトロワさんは唯一言、ありがとうとだけ言ってその場を後にした。

……その時の後ろ姿は女性特有の細さが現れているが、何処かあの時の店長と重なっ

て見えた。

α月Ｍ日

ラトロワさんという新たな仲間が加わり、リモネシアは一層活気に溢れた。老人達だけじゃなく子供達にまで人気なのは……偏に彼女が軍人だった割に気さくな人格者だという事が大きいだろう。

ま、まぁ凄い美人さんだし。ロシア人だけあって肌は白いし、スタイルも抜群で面倒見も良いと来ている。子供達も懐いている事だし、軍人で凄腕のＭＳのパイロットとは思えない御人である。

そんな人気者の彼女なのだが一つ問題があったりする。それは……シオさんとの衝突だ。

度々仕事場で顔を合わせればやれひ弱だの、軟弱だのと挑発の言葉を投げ掛ける。

最初はシオさんも言い返していたのだが、彼女が店長の奥さんだと知ると何も言い返す事は出来なかった。……原因は、やはりカラミティ・バースの件だろう。

最初は自分もフォローしていたのだが、シオさんは必要ないの一点張り。ラトロワさんも挑発を止めないものだから仕事場は時々険悪な雰囲気に包まれる。

まぁ確かにシオさんは力が強い方ではないし、時々ドジやったりするがやる気のある

人だ。皆もそれを認めているから彼女を助けたりしている。
だが、ラトロワさんはそれを良しとせず、仕切に彼女を挑発している。流石に酷い言葉を口にする時は自分が止めに入るが、ラトロワさんはシオさんに対する挑発は止めなかった。
どうにかならないものかと大統領に相談してみるが、こればかりはどうにもならないと両手を上げてお手上げ侍と言ってきた。
それに苛立ち、感情任せに殴りつけなかった自分は少し大人になったのだと思う。
けど、いい加減何とかしないと。どうにかしてラトロワさんとシオさんを和解出来ないかとラトロワさんをジッと見ていると、何故かシオさんが落ち込んでいた。
……あれは何だったのだろう？

α月O日
今日、またまた仲間が増えた。なんとその人物もラトロワさんと同じく元人革連の軍人で、自分より年下の少年少女達である。
何でも人革連のジャール大隊とかいう部隊でラトロワさんはそのまとめ役。地球圏の軍隊が一つに統一される事に伴いコレを機に軍から抜けてラトロワさんを追って来

たのだという。

懐かれてますねというと、ラトロワさんは頭を抱えて苦笑い。自分としては子供達の相手役として、何よりリモネシアが活気づいてきたから嬉しかったのだけれど……何故か、滅茶苦茶敵視されてます。

特にナスターシャちゃん。軍では若くして大尉という地位にいた女性なんだけど、仕事についてラトロワさんに近付いたらそれだけで人が殺せそうな程睨んでくる。何か用かとそれとなく聞いても別にとだけ返して取り付く島もない。

ラトロワさんから聞いた所によるとジャール大隊は紛争やテロ、次元獣によって両親を失った子供達ばかりで構成されており、ラトロワさんが実質の親代わりだったとの事。

しかも皆がなまじパイロットとして優秀なものだから周囲からの目は厳しく、喩え戦果を挙げたとしても中央の連中の手柄と横取りされた事が多かったのだとか。

ロシアの荒熊〝セルゲイ＝スミルノフ〟や中には気を許せる大人もいたが、軍が統一される事に伴い思い切って軍を辞める事にしたのだとか。

スミルノフさんも子供が戦場に出ることには不満があったらしく彼等の脱退を承認、ラトロワさんを通じてリモネシアに向かう手助けをしてくれたのだとか。

ていうかラトロワさんも来て欲しかったんじゃないか。と、自分がそう口にすると照

れ隠しに小突かれてしまった。

けど、これで分かった事がある。つまりナスターシャちゃんを初めとした彼等は親代わりだったラトロワさんが居なくなる事を恐れたのだ。

そしてそんな彼女に近付く自分をラトロワさんを自分達から奪った敵だと認識。なんとも微笑ましい限りである。

だが、原因が分かれば対策は出来る。可能な限りラトロワさんと一緒に仕事をさせればいいのだ。彼等だって元々は軍人だし、体力は老人組の皆と比べればかなりあるだろう。

これで少しはシオさんを初めとした女性組の負担が軽減出来る。自分も自身の仕事に専念できるし、良いことづくめである。

良し、今日は皆の歓迎を兼ねて久し振りに自分が料理をする事にしよう。美味いものを食べればきっとジャール組の子らも心を開いてくれる。

……と、思っていたのだが、何故か皆一口だけで撃沈。ナスターシャちゃんに至っては白目になって気絶していた。

ラトロワさんも悶絶していたし……何故だ？　今回の麻婆豆腐は自信作だったのに

――他の皆？　平然と食べてますが何か？

あ、あと毎度の如く不動さんが遊びにきてました。ラトロワさんの背後に音もなく

立ったりして脅かしたりするものだから、案外あの人も暇人なのかもしれない。

幕間その3

α月A日

地球連邦政府。三つの大国を初めとした国々を統一した事によって誕生した新政府。表向きは破界事変による災害復興と貧困に喘ぐ小国の援助を謳ってはいるが、実際は武力によって従わせる過激なやり方を強いる地上げ屋紛いの事をしているという。

そんな現政府に抗う為〝カタロン〟なる反抗組織が存在するが、そんなカタロンは世界からすればテロリスト集団と変わらず、何も知らない市民からは疎まれる存在となっている。

しかもそんなテロリスト達の鎮圧を名目に地球連邦は正規軍の他に〝アロウズ〟なる軍隊を設立、その強大な軍事力によって反抗組織は次々と壊滅させられているという。

しかも質が悪いことにアロウズ、もしくは現政府に都合の悪い情報は全て情報統制によって規制、或いは捏造され、市民には嘘の情報を流しているとの事。

まぁこれも全部不動さんの受け売りなんだけどね。相変わらず自分はリモネシアで

労働の汗を流しています。

ラトロワさんやジャール組の活躍のお陰で復興は着実に進んでいる。お陰で老人達の負担も軽くなり、子供達は労働の他に遊ぶ時間も取れるようになった。

やっぱり年頃の子供達はノビノビと遊んでいる方がいいよね。最近じゃシオさんも暇がある時は子供達に勉強を教えていたりする所を見かけるし、案外教師なんて仕事も向いているのかもしれない。

不動さん？　あの人は一人ココナッツジュース飲んでたよ。一応以前言った通り手伝う事は手伝ってくれるし、この間も立派な一軒家を一人で建ててたし……ホント何者だあのおっさん。

と、まぁここまでくれば変わりない報告程度で終わるのだが、実は一つ問題が発生した。

なんと、あのラトロワさんの挑発に遂にシオさんがプッツンしたそうなのだ。退役したとはいえ元は中佐の地位にまで就いていたラトロワさんに掴み掛かろうとした所を見たときは肝を冷やしたものだ。

訳を聞いて見れば、ラトロワさんのとある一言がシオさんの逆鱗に触れ、今度はお返しとばかりにシオさんも挑発仕返したのだという。

しかもその内容が亡くなったラトロワさんの息子さんに関する話だった様で、まさか

シオさんから言い返されると思わなかったのか、ラトロワさんは動揺し、シオさんはこれまでのお返しとばかりに色々言い返したのだとか。

因みにラトロワさんの挑発はシオさんのリモネシアに対する一言が事の発端の原因となったそうだ。シオさんは国の為に身を粉にして頑張ってきた人だ。それは彼女の誇りでもあるし、自分もよく知っている事だ。

それをバカにしたとあれば自分も言いたい事はあるが、自分はあくまで相談役。そしてリモネシア復興の一員に過ぎない。どうにか二人の怒りを鎮めようと、自分はあの手この手で和解するように言い含めようとしたのだが……結果、どちらも引きはしなかった。しかも、隊長であるラトロワさんが罵倒された事により、ジャール組の皆も剣呑な雰囲気を醸し出すようになってしまった。

このままではリモネシア分断の危機に陥る。どうしたものかと頭を悩ませていた時、不動さんは余計な……いや、名案を一つ提示してくれた。

〝ここまで亀裂が入れば修復は不可能。ならばいっそ粉々にしてしまえ〟と。最初は何言ってんだコイツ？　と疑問に思ってしまったが、砕けた捉え方をすれば簡単なものだった。

要するに勝負をすればいいのだ。互いに全力でぶつかる事によってお互いを認めさせるという原始的且つこの上なく分かり易い方法。

だが、その勝負の内容が問題だった。本当は公平に勝負の内容を出し合い、勝ち点の多い方が勝者という事にしたかったのだが……あのおっさん、不動さんが勝手に決めてしまったのだ。

しかも内容は戦闘技能の勝負。オマケにラトロワさん達はジャール組を引き連れての参戦となった。

対する此方はシオさんと自分、大統領に数名の子供達とガモンさん。ただの一般人が軍人達に勝てる訳ないだろう！　そう抗議しても不動さんは聞き入れる事なく、勝負は明日の明朝と共に開始される事となった。

当然、銃の扱いなんぞしたことがない自分は勿論、ガモンさんは銃を使うのを嫌って素手でやると言い張り、シオさんに関しては運動音痴と自ら告白、既に敗色が濃厚となった状態で明日を迎える事になった。

だが、ただで負けるのは癪なので少しは噛みつこうと思う。友人をバカにされて平然としていられる程、自分は大人しくないのだ。

……あれ？　もしかして俺、何気に初めて〝友人〟って言葉使った？

α月Ｗ日

はてさて、遂にジャール大隊との決戦日となったこの日、審判役を買って出た不動さ

んがルールを説明、その内容は至ってシンプルなものだった。
戦いの舞台はこのリモネシア全土。ただし海面に足を着けたら失格、それぞれ大将をジャール側がラトロワさん、自分側の大将をシオさんとし、大将がやられたりどちらか一方の部隊が全滅したら負けという比較的簡単なものだった。
なお、最も懸念していた武器の事だったのだが……獲物となる武器は短刀で、刃は潰し、先っぽは吸盤となっている安全仕様のものだった。子供達に銃なんて危険なモノは持たせられないと思っていただけに、不動さんの健全な対応に安堵したものだ。
だが、これで勝負は益々こちらが不利となってしまった。引き金が引けば撃ち出される銃と違い、短刀では直接ラトロワさんと接近戦をしなければならない。軍を抜けたとはいえ未だジャール大隊を引き連れていたラトロワ元中佐の実力は凄まじい、記録の上ではソレスタルビーイングが出てくるまで彼女の撃墜スコアは、あのセルゲイ＝スミルノフさんを上回るというのだ。
色々不安要素が目白押しなこの勝負だが、こうなってしまっては仕方ない。なにせシオさん自身が負けたくないと言っているのだ。自分も彼女側に付いている以上、シオさんの為に全力を尽くそうと意気込み、遂に勝負は開幕した。
互いに一歩も譲らない激闘、己の誇りを懸け、復興の毎日だった癒し代わりに行われた余興は、昼前には決着。

結果は……なんと奇跡的に引き分け。最終的には大将同士勝負となり、胸元にそれぞれの短刀の吸盤がくっつき、勝敗の行方は痛み分けで幕を下ろした。

細かい詳細は省くが……まぁ、端的に言えば此方の作戦勝ち、いや、この場合は作戦分けと言った方が適切かな？

まずは子供達でジャール大隊を攪乱、もしくは時間稼ぎとして遊撃してもらい、その隙に自分は仕込みを済ませる。相手は子供といっても幾たびの戦場を潜り抜けてきたプロだ。此方の小細工など完全に読まれてしまう。

だが、それはあくまで陽動。目的は自分とシオさんの姿を彼等から僅かでも逸らせる事にある。数々の罠を仕掛け、そして看破された結果、彼等をリモネシア南部にある森に陽動し、自分はジャール大隊の心臓部近くに潜り込む事ができた。

向こうも此方が民間人であることで手を抜いていたのだろう。まさか自分の真後ろに自分達よりも一回りも大きい俺がいることとは思わなかっただろう。

知ってた？　かくれんぼは離れて隠れるよりも相手側の近くに潜んでいた方が逃げ延びる可能性は高いんだよ？

気配もそうだけど、そこに呼吸と動作を追う側と同調させれば喩えピッタリとくっつかれてもバレる心配は殆どない。

そこに暗闇という状況が加わればもう怖いもんなしである。尤も、向こうも集団で行

動した為、バレるのは早かったけどね。
しかもラトロワさんに、だ。流石はバリバリの軍隊で大隊を率いていただけはある。此方の読みはまんまと看破された。
けど、世の中には分かってても回避できない策がある。黒の騎士団のゼロは念入りな仕込みとパフォーマンスで状況をひっくり返してみるが、此方は相手の心理を突いて部隊を混乱させる事にある。
何せ自分の後ろにターゲットの一人がいたのだ。不動さんだけではなく自分まで悟られずに背後に回れるものだから、ジャール組の面々はそれは驚いた事だろう。
今でもナスターシャちゃんの驚愕の表情が目に浮かぶ。リモネシアの森という俺達にとって有利な場所に上手く誘導させた事といい、向こうはそれなりに面食らった事だろう。
見事に混乱した大隊を抜け出し、その間際にジャール組の一人、ヤーコフ君に短刀を投げつけ見事命中。メンバーの一人が自分にやられた事により部隊はより混乱の中に叩き込まれた。
けど、そこは流石のジャール大隊。隊長であるラトロワさんの号令に従い、混乱に陥った部隊は途端に落ち着きを取り戻し、隊列を整えて自分を追い詰め始めた。
今でも思い出すと身震いする。統率された部隊があぁも恐ろしいものだとは……一

人である自分には分からない恐怖でしたよ全く。
大統領も援護に駆けつけてくれたけど、ジャール大隊の集中攻撃に敢えなく撃沈、このまま自分も袋叩きにあうのだろうかと覚悟を決めた時――――奴が現れた。
ガモンさん。老人の中でも比較的若い方である彼は自分とジャール大隊の間に割り込んだ瞬間、信じられないモノを見せつけた。
一瞬分身したかと思えば、次の瞬間ラトロワさん除く全員が地に叩き伏せられた。何が起きたか分からなかったが、後に他の老人の人達から聞いた話によると、ガモンさんは昔〝人越拳神〟やら〝ケンカ百段〟の異名を持つ凄腕の空手の達人だったらしい。
当時、動乱の時代だった世の中を一人で駆け抜け、その際に潰した軍の基地は一つや二つでは済まなかったらしい。
不動さんもガモンさんの業のキレを絶賛していたし、ホント驚いているばかりである。けれど、そんなガモンさんも所謂武人の矜持というものがあるのか、それ以降は決して手を出さず、シオさんとラトロワさんとの勝負の行方は見守る事だけに徹している。
え？　その間お前は何してたって？　言ったじゃないラトロワさん以外〝全員〟だって。
当然自分も二人の戦いには参加せず、事態を見守る事だけにしておきました。という

か、達人の攻撃を受けて受け身を取り、且つ意識を持っていた自分を誰か褒めて欲しい。
ガモンさんも意外そうに驚いたし……ま、自分も破界事変の頃は色々学んでいるのだ。コレくらいは出来て当然だと思いたい。
そしてその後のラトロワさんとシオさんとの勝負の行方は先ほども言ったように引き分け、終始ラトロワさんが繰り出す体術に圧倒されてはいたが、シオさんも太陽を目くらましに使ったり、周囲のモノを使って戦って見せた。
もうホント、その時のシオさんに自分は見入ってたね、碌に動けない癖にそれでも元軍人に食らいつく姿勢、絶対に負けられないという意志が感じられた。
そんで激闘の末、互いに投げつけた短刀が互いの胸元に同時に命中、勝負の行方は引き分けに終わった。
攪乱にあてがった子供達もジャール組の皆に優しくあしらわれたようで、それぞれが悔しそうにしていても、怪我をしている者は一人もいなかった。
そしてその後、今まで仲の悪かったラトロワさんとシオさんの二人もコレを機に和解。不動さんの目論見どおり事が進んでいった。
後から聞いた話によると、シオさんは時折思い詰めた表情をしていたらしく、それを目にしたラトロワさんが自分一人で背負い込んでいる気になっている彼女が気に入らなく、色々辛く当たってしまった原因だったらしい。

シオさんもシオさんでやはりカラミティ・バースの件でまだ気にしている所もあるらしく、あの事件で巻き込んで死なせた店長の事を含め……やはり色々悩んでいたようだ。

まぁ、当事者の一人である彼女からしてみれば完全に吹っ切れる事は無理な話だろう。けど、だからこそラトロワさんはそんなシオさんが気に入らなかったと言った。

そこからは二人も色々話し合い、先程も述べた様に和解する事ができた。直接その場を見た訳じゃないから断言は出来ないが、以前と比べて二人の仲が柔らかくなった事は確かだ。

これを機に、ジャール組との蟠りもなくなって欲しい所である。

俺？　俺の方は距離を縮める所か溝が深まりましたが？　あんな音もなく近付いてくるなんてキモいとか、ストーカー野郎とか、犯罪者予備軍とか色々言われましたけど何か？

その話はひとまず置いて……今日、遂にシオさんと以前から約束していた事を果たす時が来ました。

なんと、あの不動さんが今日の健闘を讃えてお酒を振る舞ってくれたのだ。タダで上物のお酒が呑めると言うことでお年寄り組も賑わい、子供達が寝静まった後、静かに酒盛りを開催した。

自分がこの世界に来て早くも一年が過ぎ、今後自分はどうするべきかと悩んでいると、シオさんがずっとここにいればいいと言ってくれた。

確かにそれも一つの可能性だ。シュウ博士の居場所も特定できず、元の世界に戻れないと知ったとき、案外自分はその事を受け入れられるかもしれない。

けど、もし帰る方法が見つかった時、自分はどうするのだろう。そして、その時が来たら自分はどんな選択をするのだろう。

今はまだ分からない。今後この世界はまた色々忙しくなるだろうし、〝その時〟が来るまでこんな憶測は無意味かもしれない。

だったら、今はこの時を楽しもう。元の世界がどうであれ、自分にとっては今この世界が自分が生きる世界なのだから……。

余談だが、ラトロワさんは随分酒癖が悪い人なんだな。酔っぱらって絡んできた時はホント焦ったよ。女性特有の柔らかさに悶え、その後は不機嫌になったシオさんのご機嫌取りに勤しむハメになったのだから……。

大人の付き合いというのは、意外と大変である。

主人公台詞集＋α　～破界篇～

～主人公台詞集～

◇破界篇

○その１　初戦闘時

「うわわわ!?　く、来るな来るな来るなぁぁぁっ!!」

被弾

「あ、当たったのか!?」

被弾（中破）

「なんかさっきからビービー音なってるんだけど？　大丈夫だよねこれ？　爆発しないよねこれ!?」

○その２　エリア１１包囲網突破戦

攻撃

「邪魔だ、どけぇぇぇっ!!」

被弾

「ヒイッ!?　調子に乗ってすんません！」
　回避
「え？　嘘、俺……今避けたの？」
　○その３　ＶＳガンメン（獣人）
　攻撃
「ヨーコちゃん達を守る為だ。やってやる！」
　被弾
「くっ、この程度で退くかよ！」
　回避
「おっし、どうにか避けられた。次！」
　○その４　ＶＳシトマンドラ
　攻撃
「コイツ、今までの奴とは明らかに違う！　……俺に出来るのか？　いや、やるしかない！」
　攻撃２
　キャル「お、おい。敵が来てるぞ！」
　主人公「分かっている！　あまり喋るなよ。舌噛むぞ！」

被弾
キャル「お、おい。大丈夫なのか？」
主人公「大丈夫だ。問題ない」
被弾（中破）
キャル「ホントに大丈夫なのかこれ!?」
主人公「……一番良い逃げ道を頼む」
回避
キャル「おっし避けた！」
主人公「今度は、此方から仕掛ける！」
○その８　ＶＳアンノウン集（後のパールネイル）
攻撃
「邪魔すんな！　そこをどけぇ!!」
被弾
「グランゾンが、その程度の攻撃に怯むかよ！」
ＶＳアンノウン（後のエメラルダン）
攻撃
「お前なんざ用はねぇ！　邪魔なんだよ!!」

被弾
「チィ！　重てぇ、これが連中の力か！」
ＶＳアンノウン（後のアリエティス）
攻撃
「よくも店長を、店を、リモネシアを壊してくれたな！　お前等は絶対に許さねぇ!!」
被弾
「まだだ、この程度じゃ止まらねぇぞ！」
ＶＳアンノウン（後のゲールティラン）
攻撃
「店長の仇！　お前が何だろうと関係ねぇ！　くたばりやがれぇぇ!!」
被弾
「耐えろグランゾン！　ここで終わる訳にはいかないんだ！」
○その１１　ＶＳパールネイル
攻撃
「あの時の白い奴か、邪魔をするなら容赦はしない！」
被弾
「コイツ、この程度だったか？　……いや、これは戸惑っているのか？」

ＶＳエメラルダン
攻撃
「……何だろう、前の時のような覇気が感じない。何を企んでいるんだ？」
被弾
「軽い。やっぱり何か企んでいるのか？」
ＶＳゲールティラン
攻撃
「ガイオウだか何だか知らないが、お前を放って置くわけにはいかない。ここで仕留めさせてもらう！」
被弾
「クソッ、やっぱり強い。ここからが正念場だ」
ＶＳグレートアクシオン
攻撃
「待ってろシオニーさん、今助ける！」
被弾
「その程度の攻撃に、グランゾンが怯むかよ！」
○その１２　ＶＳズール皇帝の手下

攻撃
蒼のカリスマ（以下蒼）「私の前に現れたのが、運の尽きですよ。ククク……」
被弾
蒼「ククク……。遠慮はいりませんよ。全力で掛かってきなさい」
○その１２　ＶＳアリエティス
攻撃
「クロウさんの所には行かせない。悪いが足止めさせてもらう」
ＶＳパールファング
攻撃
蒼「ほう、前とは様子が違いますね……」
ＶＳモビーディック
攻撃
蒼「次元獣とは何度か戦いますが、コレは異質ですね。……毛並みが白い所為でしょうか？」
被弾
「成る程、馬力もあるようですね。直撃は避けるように注意しましょうか」

○その１３　ＶＳガンメン（獣人）
攻撃
蒼「知っていますか？　人も獣も、躾に最も効果的なのは〝痛み〟なのですよ」
ＶＳインベーダー
攻撃
蒼「宇宙からの侵略者、その傍若無人な振る舞いは許すわけにはいきませんね」
ＶＳガンメン（チミルフ）
攻撃
蒼「螺旋四天王の一人ですか。あの鳥人間といい、獣人という種族は種類が豊富なんですね。……キリンとかいないかな」
防御
蒼「成る程、ゴリラだけあってパワーは本物のようですね。では、此方も本腰を入れるとしましょう」
○その１４　ＶＳｅｔｃ．
攻撃
蒼「私達の前に立つとは……運がなかったですね」
被弾

蒼「この程度の攻撃では、グランゾンは揺るぎませんよ」
○その１８　ＶＳゲールティラン（真）
攻撃
「今までの相手とは何もかもが桁違いだ。これがアイツの本気って事かよ！」
被弾
「くっ、流石に強い。けど、負けるわけにはいかねぇ！」
被弾（中破）
「損傷箇所チェック！　まだだ、まだやれる！　そうだろう、グランゾン！」
撃破時
「店長、仇は取りましたよ……」
撃破時その２
「お前の暴れっぷりもここまでだ」
撃破時その３
「じゃあなガイオウ、あの世で店長に侘び入れときな」

～中断メッセージ～

主「お？　ここで一旦終わるのか？」
主「本当はもう少しプレイして欲しい所だけど、プレイヤーの皆には元気でいて欲しいからな。うん、仕方ないよな」
主「あ、もしかして喉乾いたとか？　お菓子とか欲しいなら言ってくれよ？　欲しいものがあったら出来るだけ応えるからさ」
主「だからね……早く戻ってきてくれよぉ～、一人は寂しいんだよぉ～（号泣）」
クロウ「ゞ（・ω・、）」

嘘予告

突然ラ・ギアスに巻き起こる異変。突如現れる未確認の敵、ラ・ギアスの人々やヴォルクルス教団問わず襲いかかる脅威に、地底の世界は混沌の渦に閉ざされる。
「大尉、このままでは押し切られます！」
「クソッ！　我々には何も出来ないのか……」
「増援、また来ます！」
窮地に陥るとある一団。危機に瀕し、全滅も免れないと思ったその時、意外な人物が

助けに入ってきた。
「お久しぶりですねテュッティ」
「貴方は、シュウ!?」
　嘗て、世界を混乱に陥れ、マサキ達と幾度となく対立してきた男、シュウ＝シラカワ。彼の率いる新たな魔装機軍団が再びラ・ギアスの地に戦いの嵐を巻き起こす事になる。
　新たな機体、新たな仲間、……そして。
「嘘……でしょ?」
「そんなバカな。奴の、シュウのグランゾンは現在修復に追われている筈だ!」
　虚空より現れるもう一機のグランゾン。彼の登場により、世界はより混乱の中へと叩き落とされる事となる。
「初めましてシュウ＝シラカワ殿」
「そう堅くなる必要はありませんよ。蒼のカリスマ……いえ、シュウジ＝シラカワ。貴方の事を私は歓迎します。それと、私の前では変に肩肘を張る必要はありませんよ。特に、このような二人きりのときは、ね」
「あ、そっスか?　いやぁすみません。なんか俺の方もよく分からない内にこの世界に跳ばされちゃって……元の世界に戻る為、俺も協力させて下さい」
　別の平行世界からの来訪者、シュウジ＝シラカワ。彼の参戦により、世界の巡りは加

速する。
「やいシュウ！　テメエ、今度は一体何を考え……て、シュウじゃないだと!?」
「シュウ博士だと思った？　残念、シュウジ君でした！」
「何だか一周回って面白い奴ニャね」
　加わる仲間と新たな絆、戸惑いながらも脅威に向かって手を組む彼らの前に、果たして何が待っているのか。

魔装機神Ｆ～二つの魔神～

「さぁ、事象の地平に消え去りなさい！」
「さぁ、事象の地平に消え去るがいい！」

ラ・ギアスに二つの魔神が降臨する。

～とあるボッチの授業風景～

シュウジ「ねぇ博士」
シュウ「ん？　どうかしましたか？」

シュウジ「なんかあの二人から、メッチャ視線を感じるんだけど？　ていうか、なんか殺意混じってるんですけど？　どうすればいいですかね？」
モニカ「シュウ様、最近彼ばっかり相手している……」
サフィーネ「シュウジの癖にシュウ様を独り占めするなんて！」
シュウジ「……ね？」
シュウ「そんな事よりも、貴方にはまだまだ学んで貰いたい事がありますからね。さ、次は使い魔召喚の儀についてレクチャーしましょう」
シュウジ「まさかの無視ですかそうですか」

主人公台詞集＋α　～再世篇～

～主人公戦闘台詞集～

◇再世篇

○基本台詞

攻撃

その1

「さて、始めるとしようか。グランゾン」

その2

「グランゾンの力、見せてやるよ」

その3

「攻撃とは、こうするものだ！」

攻撃（蒼のカリスマ時――以下蒼）

その1

蒼「その程度の機動兵器では、私とグランゾンの相手にはなりませんよ？」

その2

蒼「私達の前に立つとは……運が悪かったですね」
その3
蒼「グランゾンの力、その身でもって知りなさい！」

被弾
その1
「っと、食らったか。気を引き締めないと」
その2
「あまり攻撃を受けるのは避けたいな。博士に怒られそうだ」
その3
「っ、今のは効いたな」
被弾（蒼）
その1
「ふむ、避けるまでもありませんね」
その2
「この程度の攻撃ではグランゾンは揺るぎませんよ」
その3

「よもやここまで私達を追いつめるとは……見事です」
　回避
　その１
「よっと、うし。回避成功」
　その２
「見えた！　……いや、ちょっと危なかったかな？」
　その３
「見える！　俺にも敵が見える！　……すんません。調子に乗りすぎました」
　回避（蒼）
　その１
「ククク、当たりませんよ」
　その２
「残念。ハズレです」
　その３
「今のは惜しかったですね」

○その２３　ＶＳパールネイル

攻撃
「アンタと戦うのはサンクキングタム以来か……」
蒼「アナタは油断ならない相手ですからね。此方も全力でお相手させて貰いますよ」
被弾
「随分と軽い攻撃だな、やる気あんのか？」
蒼「戦う気がないのなら下がりなさい。此方はまだ手加減というモノを知らないのですから」
回避
「読みやすい。この人ってこんな遅かったっけ？」
蒼「……誘い？　それともブラフですか？」

○その２５　ＶＳガンメン
攻撃
「ヨーコちゃんの大事な場所、守ってみせなくちゃな」
「ここを荒らす訳にはいかない。速攻で終わらせるぞ！」

○その２８　ＶＳ国連＋α

攻撃
「お前等、絶対に許さねぇ。ジワジワとなぶり殺しにしてやる！」
「リモネシアを、皆の故郷を壊しやがって、ただで帰れると思うなよ!!」

○その２８（シュウ＝シラカワ）
攻撃
「ククク……久々のこの感覚。懐かしいですね」
「成る程、これが帝国最強の騎士ですか。ま、初戦の相手としては丁度よいでしょう」
「あっさりと沈まないで下さいね国連最強の皆さん。さぁ、始めますよ！」
被弾
「避ける必要もないですね」
「ククク、どうしました？　まさかこの程度で終わりではないですよね？」
「その程度の攻撃ではグランゾンには届きませんよ？」
「帝国最強の力はこの程度なのですか？」
「どうしましたイノベイド、人類の管理者達よ。もっとその力を私に見せて下さい」
回避
「どこを狙っているんです？　私はここですよ？」

「遅いですよ」
「やれやれ、これではお話になりませんね」

反撃
「先に手を出したのはアナタですからね？　……ククク」
「報いを受けなさい」
「さぁ、地獄はこれからですよ」
○その３４　ＶＳパールファング
攻撃
蒼「貴女の相手をしている暇はないのでね。失せなさい」

○その３８　ＶＳバジュラ
蒼「超時空生命体バジュラ、私の推測が正しければ彼女の目的は……」

その４０　ＶＳインベーダー＆真ドラゴン
攻撃
蒼「宇宙の破壊魔、アナタ達の存在を許す訳にはいきません」

「真ドラゴン、破界事変の時も見たけどやっぱデカいな……」
被弾
「っ、流石は真ドラゴン。パワーは凄まじいな」
回避
「今の攻撃、当たってたらヤバかったな」

ＶＳ　次元獣＆パールファング
攻撃
「もう、謝ったって許さねぇ。塵も残さねぇ、お前達の存在をこの世界から消してやる！」
被弾
「ヌルいんだよ！　そんな攻撃でグランゾンが揺らぐか！」
回避
「どこを狙ってる！　俺はここだ！」

その４１　ＶＳユーサー
蒼「あの時、私の手を取っていればこんな事には……いや、最早そんな事を言って

も意味などありはしませんか」

○その４３　ＶＳ機械獣軍団＆Ｄｒ．ヘル

攻撃

「機械獣か、そういや何気にコイツ等と戦うのは初めてなんだよな」

「仲間が一緒の共同戦線、いつもとは違う戦況にみ　な　ぎ　っ　て　き　た！」

蒼「Ｄｒ．ヘル。アナタの目的はなんであれ、このグランゾンを前にして、ただで済むとは思わないことです」

被弾

「仲間がいると思うと頑張れる。これが集団戦闘の補正か!?」

回避

「仲間がいると思うと機体が軽い。こんな気持ちで戦うの初めて」

援護防御（カレン）

「カレンちゃん危ない！」

蒼「油断しすぎですよ」

援護防御（ヨーコ）

「ヨーコちゃん、前に出すぎだ！」

蒼「少し下がった方が宜しいですよ」
援護防御（キタン）
「キタンさん、突っ込み過ぎ！」
蒼「少しは周りも見てくださいね」

○その４４　ＶＳムゲ＆その他
攻撃
「亡者か……その手の話は苦手だからさっさと終わらせよう」
「ムゲ＝ゾルバトス、人間サイズの癖になんて威圧感だ」

○その４９（前編）　ＶＳインベーダー＆ムガン
攻撃
「この厄介な時に厄介な連中が来るとはな、ホンッと腹立つ！」
蒼「こういう戦いでこそグランゾンの真価が発揮されるのです」
被弾
「損傷は軽微、まだやれる！」
回避

「当たるかよ、そんな攻撃！」

ＶＳアサキム

攻撃

「事ある毎に邪魔してきやがって、いい加減鬱陶しいんだよ！」

「前から思ってたけど、お前実は構ってちゃんだろ？」

被弾

「くそ、早い！」

「このまま後手に回るのは不味いな。何とかしなくちゃ！」

回避

「そう何度も当たってやるかよ！」

○その４９（後編）ＶＳアンチスパイラルの軍勢

攻撃

「新たな……いや、本来の力を取り戻したグランゾンの力、見せつけてやろうじゃないか！」

「行くぜグランゾン！　俺達の力を、宇宙の支配者様に見せつけてやろうぜ！」

「どんなデカブツ相手でも退く気はねぇ。真っ正面から叩き潰してやる！」
被弾
「よし、この程度ならまだやれる！」
回避
「デカくて厄介だが……避けれない事はない！」

～中断メッセージ～
その１
主「ねぇ、正太郎君。君ってそのコントローラーで鉄人を動かしてるんだよね？」
正「え？　はい。そうですね。それが何か？」
主「そのコントローラーさ、指紋センサーとかつけないの？　敵さんに奪われたりしたら厄介だろうし、そういう予防対策はした方がいいと思うんだけど？」
正「……」
その２
シュナイゼル「やぁ、今回もご苦労だったね。今後の戦いに備えて今はゆっくり休むといい」

トレーズ「今紅茶を用意させよう。なに、我が友の数少ない協力者であるプレイヤーである君に対する当然の報酬さ、気にしないでくれたまえ」
シュ「出きることならゲームをクリアした後も彼とは良い関係を続けて欲しい。彼の為に、そして君自身の為にも……ね」
トレ「では、良い一時を。君の帰りを我々は待っているよ」

その3
主「遂に始まりました再世篇！　舞台は破界篇の頃から一年後の物語！　新たな仲間や敵が続々と登場し、再び揺れ動く世界！」
主「果たして正義のスーパーロボット軍団は地球の平穏を取り戻せるのか!?　そして、私に友達は出来るのでしょうか!?　第二次スーパーロボット大戦Z～再世篇～　お楽しみに！」

――その一発の銃声が、帝国の運命を変えた。
鉄血宰相の暗殺、帝都を武力制圧した貴族連合、内戦で燃え上がる帝国内で様々な陰謀が交差する中、有角の若獅子達が立ち上がる一方で……一人の魔人が行動を開始した。
「さぁて、リィン君達もひとまず無事みたいだし、俺もそろそろ動くとしようかな」
嘗て、士官学院の用務員だった男は己の平穏を取り戻す為、孤軍奮闘、仮面を被り、単身でゼムリア大陸を往く。
あくまで裏方として、各方面で頑張る若者達の為に色々手助けするだけの旅……なのに。
「成る程、アナタが噂の魔人ですか。我等の身内にも魔人と呼ばれる者がいますが、アナタはまた違う様ですね。我がマスターの妨げになるのか否か、試させて貰います。――ハァァァッ!!」
「いやいやいや、何でそうなるんだよ。アンタのマスターなんて知らないし興味もないからって話聞けやぁぁぁ!!」
道中で遭遇した鋼の女性、成り行きで彼女と戦い、そして死闘の果てに彼女の兜を割り、どうにか勝利した結果、《身喰らう蛇》なる秘密結社に狙われる事になる。
クロスベル自治州、そこで体験する散々な出来事に男は心折られ、傷心のまま内戦渦

巻く帝国に戻ることに……。

このまま大人しく時が過ぎるのを待つが、生憎世界は男を放って置くことはしなかった。

「へぇ、お前あの鋼に勝ったんかよ。……なぁ、その力、俺にも見せてくれよ」

「何だるそうな顔して物騒な事言ってんだよ俺もう戦いとかやなんだよ傷つくし痛いし良いことないし皆から疎まれるしホント泣きたい気分ってだから話聞けぇぇぇっ!!」

炎の魔人に挑まれ、選択肢のない男はなすがまま再び死闘を演じる。互いに死力を尽くし、片や狂喜し、片や半泣きの大死闘。大気は燃え、大地は砕かれ、その地の地形が変わり果てた頃に勝敗は男の勝利で幕を下ろした。

この戦いにより帝国全土に知れ渡る男の存在。何処にも行く場所がなくなった男は果たして平穏を手に入れる事が出来るのか!?

英雄伝説シリーズスピンオフ作品

《孤高(ボッチ)の軌跡》

「皆に紹介しよう。新たな執行者にして私の友を」

(……どうしてこうなった???)

ぼっちの行く末に目を背けるな。

主人公台詞集＋α　～再世篇・２～

～主人公戦闘台詞集～

その５２・前編　ＶＳモビルドール軍

攻撃

「様子見はしない。最初から飛ばしていくぞ！」

防御

「この程度の攻撃じゃ、グランゾンは揺るがないぞ」

回避

「俺も、大分コイツの扱いに慣れてきたな」

その５２・後編　ＶＳアイム
攻撃
「まさか分身とはな、厄介な能力ばかり覚えやがって！」
防御
「幾らスフィアが凄くても、この程度じゃあな」
回避
「……遊んでるのか？」

その６２・後編　ＶＳバジュラ女王（グレイス＋α）
攻撃
「この日を待ちわびたぞ、グレイス＝オコナー……ククク、楽しみだなぁ」
「舞台は整ったぞグレイス＝オコナー。神を僭称するのなら、その力、見せてみろよ」
蒼「私に見つかったのが運の尽きですよ、グレイス＝オコナー」
蒼「ククク……漸く私の願いが叶いそうですね」
防御
「この程度か、あまりがっかりさせるなよ」
蒼「無駄ですよ。その程度の攻撃ではグランゾンは揺るぎません」

回避
「当たると思ったか？　残念だったな」
蒼「どんな気持ちですか？　起死回生の一撃があっさりと避けられた感想は？」

その６６　ＶＳアンブローン
攻撃
「お前達の事情なんか知った事じゃない。今まで地球やリモネシアに行ってきた蛮行、利子付けて返してやるよ！」
蒼「逃げても構いませんよ。尤も、逃がしはしませんがね」
防御
「……」
蒼「……ククク」
回避
「当たらないな。そんな攻撃！」
蒼「当たる必要もないですね」

その６９　ＶＳアサキム

攻撃
「毎回毎回出てくる度に邪魔しやがって！　いい加減うんざりなんだよ！」
蒼「ストーカー……いや、まさか」
シュウ「やれやれ、このしつこさ。彼を連想させますね」
防御
「相変わらず鋭い攻撃だな」
「ちっ、いいの貰っちまった」
回避
「見えた！」
蒼「そう毎回、やらせはしませんよ！」

その７０　ＶＳガイオウ（次元将モード）
攻撃
「これで正真正銘最期の勝負、手加減無しでいくぞぉぉっ!!」
「グランゾン、俺は奴に勝ちたい。力を貸してくれ！」
「終わらせるぞガイオウ。次元の将とか破界の王とか関係ない。俺とお前との因縁を！」

防御

「こんなもんかよ！　手を抜いてるなら、次で終わらせるぞ！」

回避

「どうした！　寝ぼけてんのか!?」

「当たってたまるかよ！」

～縮退砲～

「終わらせよう。破界事変から続くこの因縁を、この一撃で!!」

「相転移出力……最大限」

「縮退圧……増大」

「重力崩壊臨界点……突破」

「見せてやるよガイオウ。コレが俺とグランゾンの放てる最高の一撃だ！」

「縮退砲……発射!!」

◇援護防御＆援護攻撃

シュウジ→ルルーシュ

防御
「危ないぞ、ルルーシュ君」
「ナナリーちゃんを悲しませるな！」
「前に出すぎだ！」
攻撃
「流石、良い位置だ」
シュウジ→スザク
防御
「スザク君、前に出過ぎだぞ」
「余計なお世話かもしれないけど……」
「ま、コレくらいはね」
攻撃
「続けていくぞ！」
シュウジ→Ｃ．Ｃ．
「Ｃ．Ｃ．さん、危ない！」
「もっと自分を大事にしてくれ」
「もう歳なんだから……」

攻撃
「このチャンス、逃さない！」
シュウジ→ジェレミア
「ジェレミア卿、前に出すぎですよ」
「忠義の壁！　……なんちて」
「幾らサイボーグでも直撃はマズいでしょ！」
攻撃
「受けよ、忠義の嵐！　……なんちて」
シュウジ→ジノ
「気持ちは分かるけど焦るなよ」
「防御なら任せな」
攻撃
「マルチロックというものを見せてやろう」
シュウジ→アーニャ
「念の為、というものがあってだね」
「ナナリーちゃんの友達を、傷つける訳にはいかないからね」
「中華連邦（大きいお友達）から殺気が!?」

攻撃
「デカいの、もう一発追加でーす」
防御
ルルーシュ→シュウジ
「世話の掛ける奴！」
「えぇい、何故俺が貴様の尻拭いなど！」
「下がってろ！」
攻撃
「取り敢えず、流石とだけ言っておこう」
「魔神の後の魔王。ふっ、心得ているじゃないか」
スザク→シュウジ
防御
「グランゾンはやらせない！」
「グランゾンを失う訳には！」
「シュウジさん、ここは自分に！」
攻撃
「グランゾンに続く！」

C．C．→シュウジ
「下がってろボッチ」
「手間を掛けさせるなよボッチ」
「ボッチ……言ってみただけだ」
攻撃
「仕方ない。合わせてやるか」
ジェレミア→シュウジ
防御
「忠義の壁！」
「我が忠義、破れると思うな！」
攻撃
「続けて受けよ、忠義の嵐！」
ジノ→シュウジ
防御
「援護って、この人に必要か？」
「一応チームだからな」
「グランゾンの隙は俺が埋める！」

攻撃
「ざ～んねん。まだ私がいるんだよな」
アーニャ→シュウジ
防御
「グランゾン守る。……念のため」
「グランゾン、邪魔」
「シュウジ、邪魔」
攻撃
「もう一発」
「まだ終わらない」
「どーん」

――――以上再世篇最終話までの戦闘台詞集でした。

――――私、一体何の為にここにいるんだろ。

ＩＳ学園に所属する一年、更識簪。優秀過ぎる姉を持つが故に、彼女の心は鬱屈し、日々姉の影に脅えていた。

唯一の男性ＩＳ操縦者である織斑一夏の登場により、自身の機体の開発は後回しにされ、遂には放置された彼女は自棄気味に自身の専用機を開発しようとするも、結果……上手く行くことはなかった。

鬱屈な毎日、閉塞する日常、何もかもが嫌になったとき……一人の青年が少女の前に現れた。

「君が更識簪ちゃん？　初めまして、倉持研から派遣されました。白河修司です」

「……気やすく、名前をよばないで」

埋まらない溝、最初は憎しみの対象ですらあった修司だが、ＩＳ学園が謎の機体ゴーレムに襲撃された時が切っ掛けで、二人の関係が大きく変わる事になる。

「どうして、貴方はそこまで私を気に掛けるの？　お姉ちゃんに頼まれたから？」

「何でかな、自分でも分からないけど、一人でいる君を放ってはおけなかった。それだけじゃダメかな？」
「そんな……」
「それにさ、見てみたいんだよ。君が君自身の翼で飛び立てる姿を、俺は特等席で見てみたいんだ」
　互いにパートナーとして認めた二人、教え教われ、助け助けられ、やがて少女の翼は……空に舞う事となる。
　――――しかし。
「ふうん、なんか生意気じゃん？　お前」
世界の意志（篠ノ之束）が二人に向けて牙を向ける。
　主役はお前じゃない。世界が、天災が、少女と青年に力の渦となって押し寄せる。
「申し訳ないけど、これも仕事なのでね。覚悟して貰うわよ」
「ヒャハハハハ！　楽しませろよクソガキィィッ!!」
「織斑一夏の前に、お前を殺す」
　迫り来る亡国機業、悪意が人の形となって溢れた時。

『――――いい加減にしろよ』

怒れる蒼き魔神が……目を覚ます。

混沌とする世界。人々が恐怖し、絶望に打ちひしがれた時。

「……私、行くよ」

少女は空を飛ぶ。

「止めて簪ちゃん！　そんな事をしたら貴女は！」

「でも、それでもいかなきゃ。私の翼をあの人にも見て欲しいから。だからお姉ちゃん、見ててね」

〝――――私の、変身を〟

泣き虫だった少女、ヒーローに憧れた少女が……世界を、そしてパートナーを救う為に……空を舞う。

劇場版《インフィニット・ストラトス》～成層圏の彼方へ～
近日公開（嘘）。
ヒーローを目指した少女はこの日、宇宙（ソラ）を翔ける。

◇主人公紹介

～主人公紹介～

◇名前

白河　修司

シュウジ＝シラカワ

◇人物紹介

とある普通の中流家庭で育った青年。ある日を境にグランゾンに乗り、多元世界に降り立ってしまった異邦人の放浪者。

破界事変の頃はエリア１１から始まり、暗黒大陸、日本、そして宇宙に進出するなどグランゾンの本来の持ち主であるシュウ＝シラカワを探して旅を続けている。

またグランゾンと自分の関連性を誤魔化す為、ＺＥＸＩＳと合流した際に蒼のカリスマと自ら名乗り、黒歴史と様々なフラグを量産し、ラスボスへの道を無自覚に邁進している。

現在はリモネシアを現在自分の帰るべき場所と見定め、そこに手を出す者は割と容赦

しない。基本的に脳天気且つ天然気質な人格であるがグランゾンに乗ってからは少々変わり、自分を利用したり騙そうとしたりする人間にはそれなりのケジメを付けさせる苛烈さも持ち合わせるようになった。

目上の人や敬うべき人には敬語を使って敬意を表しているが、どういうわけかその全てが裏目に出てしまい多くの人に誤解を受けさせてしまっている。

未だシュウ博士を探しだして自分の元の世界に帰る術を模索しているが、前者は兎も角後者はさほど拘ってはいない模様。最悪リモネシアを自分の骨を埋める場所にしてその際は破界事変の時世話になった店長を真似て居酒屋、若しくは喫茶店でも開こうかなと密かに未来設計を立てている。

多元世界に来てから最初の頃は何も出来ない状態だったが、ゴウトやヨーコ、黒の兄妹達と出会い徐々に様々なスキルを持ち合わせる様になる。

機体の整備は本人無自覚に専門技師を上回る腕を持っている為ＺＥＸＩＳの一部の人間からは好評の声も上がっている。また暗黒大陸で培った罠を駆使して狩りもある程度可能、黒の兄妹達からは体力面で鍛えられた為、専門的な人物（竜馬を始めとしたトンでも人間）程では無いにしろ、それなりの身体能力と体力を持ち合わせている。

しかし、それらとは抜きに一つだけある得意な分野が存在する。本人はこれを〝かくれんぼモード〟と呼称し、これのお陰で小学校は六年連続かくれんぼの覇者となった。

（その内三回は忘れられていた）

この能力（？）を一度発動させれば例外を除いて見つけるのは不可能とされている。〝くろがね五人衆〟と呼ばれる超人達もこの時の主人公の気配に気付く事は出来なかった。

物事に対しては真摯に受け止めようとする気質がある所為か、人からの教えを素直に受け止め、自分のモノにしようとする為に物覚えが早く、またそれを昇華させる力が無自覚に備わっている。

特にグランゾンに乗ってからはその部分が強くなり、一度戦っただけでアークセイバーの一人、シュバルの攻撃を見様見真似でモノにし、そこにグランゾンの力も加わって圧倒するようになり、破界事変終盤には〝ブラックホールクラスター〟を完全に制御可能とし、破界の王ガイオウをこれで打ち倒した。

現在は今度こそシュウ＝シラカワの存在と自分とグランゾンとの関連性の謎を解き明かす為、再び世界を巡る旅に出る。

因みに現在友達募集中。希望がある人は後にリモネシア復興部にまでご連絡ください。

尚、冷やかしや悪意のある人には漏れなく黒い飴玉をプレゼント、事象の彼方にまでぶっ飛ぶ美味しさです。

◇精神コマンド
加速、必中、鉄壁、気合、魂、覚醒

◇パイロット能力
『ボッチの底力』
気力が１３０にまで高まった時、機体の移動能力が２上がり、パイロットのパラメーターに５０％補正が加わる。また、エースボーナス取得時は能力発動の気力必要１３０が１１０に変更。

◇機体能力
グランゾンの機体能力ＨＰ、ＭＰ回復（小）がフル改造されたら（中）に変わり、歪曲フィールドに掛かるコストが０になる。

◇備考

一人暮らしが長かった為、家事の一通りをこなすことが可能。掃除に洗濯、料理にと幅広く活動でき、料理面に関しては中々の腕前で黒の兄妹の胃袋を鷲掴みにした程。

得意料理は麻婆豆腐。激辛だが慣れればやみつきになる逸品。リモネシア復興の際は良く手料理を振る舞い、住民達を元気にさせていた。

再世篇
その１９

α月Ｙ日
今日も朝からリモネシア復興の為の労働に勤しんでいた時、不動さんは唐突に自分に言った。
〝このままで良いのか？〟そう言われたとき俺は何のことかと戸惑ったが……違う、俺は不動さんの言葉の意味に気付きたくなかったんだ。
グランゾンと自分の事、そしてシュウ博士の事、それらの謎を謎のままにしていいのかと、不動さんはそれらを見越してああいう言い方をしたのだろう。
尤も、流石にグランゾンに関する事は詳しくは知らないだろうが……知らないよね？
あの人は不敵な笑みで誤魔化すから判断が付かないが、まぁそこら辺は放っておこう。考えてはキリがない。
確かに、自分も一度は考えた。まだあやふやな事が多いのにこのままにしていいのか

？　シュウ博士にグランゾンを返さなくていいのか？　と、時折そんな事ばかり考えてしまう。

けど、今が一番大事な時期だ。復興の士気も高まり、ラトロワさんやシオさんとの蟠りも今は完全になくなり、ジャール組もリモネシア復興に大きく活躍している今、若手の自分が抜け出す訳にはいかない。

一応自分が抜けた時の事を考え、ヤーコフ君やナスターシャちゃんには自分の持てる技術を教えてはいるが、自分の教え方が悪いのか中々上手くいかない。

電気系統設備の点検と整備、使い古された充電機器の再利用、その他にもカルロスさんが流してくる各物資の点検と搬入。それら全てを教えるにはまだまだ時間が足りない。

いや、資材点検や物資発注の書類の類はシオさんがいればどうにかなるだろう。彼女は元とはいえ外務大臣の席に就いていた人だ。この程度の書類点検は寧ろ自分より正確にこなしてくれるだろう。

ただ、その所為で彼女が楽しみにしている子供達への授業の時間が減らされるのは……心苦しい。子供達もシオさんの授業は楽しみにしているらしく、その光景は働いている自分達への癒しにもなっているのだ。

特に老人組の皆さんはリモネシアの未来を憂いていた為にシオさんの授業風景を見

て、今後のリモネシアの未来に安堵している節が見られる。
だから、もう暫くここリモネシアにいて復興のお手伝いをしたいのだが……時代がそれを許そうとはしなかった。
今日の昼、ラトロワさんの所に一人の軍人がやってきた。〝アンドレイ＝スミルノフ〟あのロシアの荒熊、セルゲイ＝スミルノフさんの息子さんだ。
しかも彼、あのアロウズに所属しているらしく、ラトロワさんをアロウズに召集しようとリモネシアにまでやってきたらしいのだ。
無論ラトロワさんはコレを拒否、その後アンドレイ君は説得を試みるが立ちはだかるジャール組によって阻まれ、ラトロワさんの勧誘を断念し彼自身が所属する部隊基地に帰投していった。
だが、その際また来ますと言い残したので、恐らくはまた来るつもりなのだろう。ラトロワさんは女性だが若くして中佐という立場にまで昇りつめ、凄腕のパイロットとして知られるロシアの戦女神だ。軍が統一され、アロウズという部隊が設立した今でも、彼女の力は軍を抜けた今でも引く手数多なのだろう。
ラトロワさんがアロウズに出頭するとは思えない。けど、アロウズというのは手段を選ばないという話で有名だ。下手に抵抗を続けていれば反抗勢力としてリモネシアごと焼かれるかもしれない。

その時の対応策としても自分……いや、グランゾンの力は必要になる。幾ら彼等の機体が太陽炉搭載の最新機体だとしても、様々なブラックボックスで作り上げられたグランゾンの敵ではない。どれだけの数の軍隊が押し寄せてきても、グランゾンだけならどうにでも対処出来るだろう。

そうグランゾン〝だけ〟なら……そのグランゾンを動かせるのは今の所自分だけであり、リモネシア全土を守るというのは不可能に近い。

それに、グランゾンの力を完全に発揮するとリモネシアをも巻き込んでしまう可能性がある。下手をしたらリモネシアを今度は自分が消してしまいかねないからだ。

問題はそれだけじゃない。今、何たらプロジェクトで話題になっているランカ＝リーとシェリル＝ノーム、そしてエイーダ＝ロッサをプロデュースしている〝グレイス＝オコナー〟奴が蒼のカリスマとして動く際に非常に厄介な存在になっているのも、自分が動けない理由となっている。

破界事変で二人の歌姫を誘拐したとされる蒼のカリスマは今も世界中で指名手配されている。ゼロに続いて二人目の仮面の男だ。この仮面のお陰で世間ではゼロの影武者、もしくはゼロを裏で操っていた黒幕なんて噂がネットでは流れている程だ。

ゼロがなんの目的もなく誘拐なんてセコイ真似なんかするかよ、しかも蒼のカリスマがゼロを操っていただって？　黒の騎士団の面々からすれば笑えない冗談に聞こえる

だろう。
　無論自分もゴメンだ。そもそもやっていないのに噂だけでドンドンデカい扱いを受けなければならないのだ。胃が痛んで仕方ないわ！
　と、まぁ色々理由を述べてみたが、これが今自分が動くことは出来ない訳である。不動さんは明日リモネシアから発つみたいだし、決意表明として不動さんにはもう暫くここに留まる旨を伝えておこう。
　……いや、嘘だ。全てはリモネシアから離れたくない自分がそれっぽい理由を並べて正当化しようとしているだけだ。
　ここはいい。一度は滅びかけた国だが、今は一人一人が建て直そうと必死に頑張っている。助け合い、喜び合い、決して裕福ではない日々だが……皆がそれを受け入れ、頑張ろうと奮闘している。
　今まで一人でいる事が多かったから、皆といることに依存してしまっているんだろう。これを腑抜けというのなら、自分は今最高潮に堕落しているのだろう。
　けど、それでもいいじゃないかと自分は思う。人は一人では生きていけないし、いざ危機が訪れればグランゾンと自分で叩けばいい。
　シオさんも身近で守れるし、店長の奥さん、ラトロワさん達だって守れる。そうだ、それがいい。グランゾンをシュウ博士に返すのはもう少し後にしたって遅くはない。大

体、本当に博士にとってグランゾンが大事なら向こうから探しに来てもいい筈だ。
世界中に蒼のカリスマとグランゾンの事がバラされているのだ。どんな田舎に住んでたって知らない事はないだろう。
だから俺は悪くない。そう意気込んでもやはりどこか引っかかって落ち着かない自分がいる。感じる必要のない罪悪感に縛られながら果たしてこのままでいいのかと自問しながら――――（日記はここで途切れている）

α月K日
今、自分はグランゾンのコックピットにいる。もしこの日記を読んでいる人がいたら、自分を風見鶏などと言って罵倒する事だろう。
反論はしない。事実俺はラトロワさんに蹴りをいれられるまでこれからの決意を固められないでいたからだ。
ホント、情けない話である。結局自分は誰かに後押しされないと決断一つできないヘタレ野郎なのだと、昨夜ラトロワさんに身を以て教えられた。
実はもう既に自分が何らかの理由で悩んでいることは殆どの皆に知られているようで、仕事中ため息ばかり吐く自分を見て心配だったとか。

ラトロワさんやジャール組の皆からは鬱陶しいと思われていたそうだけど……そろそろ俺泣いていいかな？　年頃の子供だからといっても、自分も少し前まで子供気分だったのだ。少しは遠慮してくれないと心が擦り切れてしまう。

……いや、子供なのは今も同じかな。結局は誰かに言われなければ行動に移せないのだ。子供だと言われても仕方のない事だろう。

散々グチグチ悩んで、結局は動く事を決めた。リモネシアの皆からすれば、俺は厄介者でしかないだろう。実際、ラトロワさんからもそんな感じの言葉を受けた。

〝ここは前を進むと決めた者が集う場所、半人前のお前のいるべき場所ではない〟

半人前……実際その通りだ。自分のやりたい事を誤魔化していてウダウダしている自分は、半人前で十分だ。

ラトロワさんには感謝している。進んでそう言ってくれた事に、裏では皆の事を説得していてくれた事に、心から礼を言いたい。

けど、それは後回し。全部終わらせてから面と向かって感謝の言葉を自分で伝えよう、そしてその時に自分の事を全て皆に話そうと思う。

受け入れられるかは別として、話すべきだと俺は思う。

そして明朝、自分はいつぞやの時と同じく皆がまだ目を覚まさない内にリモネシアを後にした。ガモンさんやラトロワさんにはそれとなく伝えていたが……シオさんにだ

けは伝えなかった。

目を覚ましたら、きっと彼女は自分のことを許さないだろう。彼女からすれば俺は裏切り者、今まで一緒に過ごしてきてたのに急に出て行くのだ。それは今まで信用してくれた彼女に対する裏切りに他ならない。

だから、全ての謎を解き明かして自分が納得できる結果を得るまで、俺はリモネシアには戻らないと決めた。

長い旅になるのか、それとも短い旅になるかは分からない。ただ、俺はその時一つの決断を迫られる事になるだろう。

俺とグランゾン、そしてシュウ博士。これらの関係を解き明かした時……俺は、果たしてこの世界にいられるのかどうか。

願わくば、自分にとって最良の結果になることを願い、今日の日記はこれで終わりにする。

◇

リモネシア海岸付近。ラトロワとガモンは先程まで旅人がいた方角を見つめ、黄昏ていた。
「本当に良かったのか？　あ奴を行かせて、お主にとっては息子のようだと思っていたとワシは考えていたのじゃが……」
「バカを言うな。奴の様なウジウジした息子なんぞ、こっちから願い下げだ。今回奴を送り出したのはその軟弱な性根を叩き直す為のモノ、次に会った時は……まぁ、少しはマシな顔になっている事を期待するさ」
「成る程、流石はジャール大隊のお母さん。なんだかんだ言って、結局は息子が心配で仕方がないと言うわけか」
「無駄話はここまでだ。早いところ皆を起こすぞ。今日は旧市街地方面にある瓦礫の撤去作業だ。早い内に手を付けなければ徹夜作業になる。頼りにしているぞ、ガモン殿？」
「やれやれ、年寄り使いの荒い女じゃ、ロシアの荒熊は男だと聞いとったが……」
「ふん、……さて、聞いての通りだシオ。奴らを叩き起こし作業を開始するぞ」
「っ！」
突然声を上げてシオの名を呼ぶラトロワ。すると、背後の物影からオズオズと戸惑い

ながらシオが現れた。
「何だその顔は？　もしや奴に告白するつもりだったのか？　残念だが一足遅かったな」
「なっ！　何言ってるのよ！　私は別にそんなんじゃ……」
「そうか、ならば此方も都合が良い。さぁ、寄宿舎に向かうぞ。奴の抜けた穴は大きい、全員が起床した後、改めて役割分担を決める。行くぞ」
「ちょ、待ちなさいよ！」
ズンズンと先を行くラトロワをシオが追っていく、そんな彼女達を見送りながらガモンはある違和感を気付く。
「はて、好都合とは一体なんの事――――て、まさか……」
頭に浮かんだ一つの可能性。それを流石に無いと思いながらガモンも二人の後を追い、その日の作業に取り掛かるのだった。

◇

B月@日

えー、どうも皆さんおはようございます。散々ヘタレておきながら結局は外に出ることを決めたいい加減なダメ人間、シュウジ＝シラカワです。

え？　いきなりの自虐は鬱陶しいから止めろって？　ＨＡＨＡＨＡ、そんな事は言いっこ無しだぜジョニー、今俺の気持ちはダイヤモンドブルーなんだ。少しくらい愚痴ってもいいだろう？　日記ってのはそういうものだろう？

さて、おふざけはこれくらいにして本題に入ろう。自分とグランゾンの秘密を探る為、世界中を旅して回っていた自分は新たな情報を求める為に敢えて危険地帯と知られるアザディスタンに向かい、途中に今後の行動における細かな方針と食料の調達の為にとある村に寄ったのだけれど、その時現れたアロウズに済し崩し的に捕まってしまった。

何でもこの村にはカタロンの構成員が潜伏していたらしく、この辺では見かけない自分もカタロンの一員ではないかと疑惑を掛けられ、弁明もする暇もなく連れ去られてし

まった。

そして、今自分がいるのはアロウズが所有する収容所の一つで、しかもそこにはナイトオブセブンこと〝枢木スザク〟君もいる訳で、現在自分は事情聴取の順番待ちで独房に入れられている。

下手に抵抗すれば銃殺は免れない。今は大人しくするしかないのだが……さて、どうしたものだろう。

スザク君が来るまで俺もただの旅人だって説明したのだが、やはり聞き入れては貰えない。身分を改める為に色々調べられたりはしたが、自分は怪しいモノは持ち合わせていないし、精々食料と水と……あとはカメラ位しか持っていない。

なんでカメラを持っているのかというと……えっと、恥ずかしながらカメラ＝旅人という歪んだ知識故の弊害だとしか言えない。

幾ら旅人だからって何も持たないでいるのもどうかなぁと思うし、カメラとか持って観光で～とか誤魔化せばある程度は納得させられるかなぁとは思ったけど、流石にそこまでは甘くなかった。

ソレスタルビーイングの件で世界中がテロに対して過剰に反応しているから、こういった事態は考えなくもなかったが……立ち寄った村が悪かった。まさかあそこにカタロンのメンバーがいるとは、正直そこまで予測できなかった。

え？　そんな状況にいるのになんで日記なんて書いていられるんだって？　普通にワームホールに隠し持ってますがなにか？　今の自分はどこぞのスキマ妖怪の如くワームホールを自在に開閉できたりするのが可能となっているのだ。日記位の出し入れはお茶の子さいさいである。

これもグランゾンのお陰だからあまり無闇に使ったりしたくないんだけどね。日記は最早自分の一部となりつつあるのだ。

さて、そろそろ事情聴取の番が回って来そうだし、今日の所はこれで終わりにする。

……なんか出だしから雲行きが怪しくなっているが、気を取り直して頑張っていこうと思う。

あ、今更ですがここではシュウジ＝シラカワと名乗る事にしています。その方が分かり易いし、シュウ博士もこの名前を見たら少しは興味を引いてくれるかなーと思い、以後はこういう名乗りにしておこうと思います。

因みに、漢字で書くと〝白河修司〟になります。

では、生きてたらまた会いましょう。

……割とアグレッシブになったな、俺。

その２０

B月C日

アロウズの収容所に監禁されてから二日、人権無視ギリギリの扱いを受けていながら、どうにか生き延びる事ができた今日。漸く事情聴取の番が自分の所に回ってきたので、久しぶりに暗闇の部屋から抜けだす事ができた。

事情聴取の相手は枢木スザク君、あのナイトオブセブンが自ら自分を相手にするのかと思いきや、彼が聴取するのは別の相手、自分と同じ境遇でここに閉じ込められたという沙慈＝クロスロード君。

年齢の割には大人びた好青年であり、自分の待遇に大きな不満を持っているようだ。まぁそれは分かる。いきなり訳も分からず犯罪者扱いで投獄されたとあっては不満もある事だろう。尋問される少し前、控え室みたいな所で二人一緒にぶち込まれたから、その時簡単に話してみたのだけれど、やはり彼がカタロンという組織に属せるとは思えない……色んな意味で。

彼は宇宙で働き、いずれ宇宙に上がってくる恋人を待つために頑張っているんだとか……前のソレスタルビーイングが武力介入を行った際、彼の恋人も巻き込まれ、両親は

二人とも亡くなったというのだ。
恐らくは……いや、ほぼ間違いなく〝スローネ〟の連中だろう。やはりあの時、下手に空気なんか読まずに徹底的に潰すべきだったかと、今更ながら後悔する。
クロスロード君も既に両親を亡くしており、唯一の肉親だったお姉さんもソレスタルビーイングに関わったばかりに死亡したと言う。怒りに身を震わせる彼に対し、俺は何も言えなかった。
その感情は間違ってはいないと思う。誰だって理不尽な局面を前にすれば怒るし、喚きもする。ただ、そう言うのを溜め込んでしまえば、自分は勿論、周囲にいる人間すら巻き込んでしまう。
だから、いつかその感情を早い内に爆発させた方がいい。ここを出て、自由になったら何かに対してでもいいからその鬱屈した思いをぶちまければいいと、大人ぶってそんな事を言ってみた。
そして感情をぶち撒けた後でも気持ちが収まらないのであれば、後に残った〝どうして〟という疑問を解消させればいい。
どうして恋人があんな目に、どうして姉が死なねばならなかったのか。その疑問の答えに携わった時、同時に君は答えを得ると。
なんて、そんな大人ブったムズ痒くなる言葉を語ってしまい悶えそうになるが、意外

にもクロスロード君はこれを受け入れてくれた。
時にはマジになってアドバイスするものだと思いながら、自分とクロスロード君はそれぞれの担当が待つ尋問室に連れられた。
クロスロード君の担当がスザク君だとすれば、自分の相手は一体誰なのだろう？　せめて少し位話が分かる相手だといいなぁ、ここの連中、自分の言うことを信じないで殴ってばかりなんだもの。
いい加減本気でグランゾン呼び出そうかとこの時まで思っていたのだが、意外な事にその時の事情聴取と言う名の尋問はすんなり行われ、すんなり終わった。
この時尋問しにきたのは〝ソーマ＝ピーリス〟さん。綺麗な銀髪と透き通った肌が特徴的な乙女な軍人さんだった。
しかもその横にはアンドレイ君の姿もあり、リモネシアで自分の事を知っていた彼は少し訝しげに自分を見てきたが、事情を説明すれば意外にも話を聞き入れてくれた。
ソーマさんも自分の目的と押収した荷物を改めて検査したりしたが、調べられたのはその位で、後は此方に任せて部屋で待機しなさいとだけ言われて終わった。
もしかして自分の言葉を信じて貰えたのだろうか？　今までのアロウズとは違い話の分かりそうな人達だったから期待したい所なのだが……（――――日記はここで途切れている）

Ｂ月＊日

今日、どうにか自分の言い分が認められ、遂に釈放される事になりました。シュウジ＝シラカワです。

いやー、人間やっぱり誠意を持って話せば分かってくれるものなんですねぇ。今回でそれが良く分かったよ。

実は昨日、日記を部屋の中で書いていた途中でソレスタルビーイングが自分のいる収容所に奇襲を仕掛けてきたのだ。しかもその時機会を伺っていたらしいカタロンもこの時のタイミングを見計らって強襲、収容所は一時パニックと化した。

何でもここの施設にソレスタルビーイングのメンバーが捕まっていたらしく、各ガンダム達は収容所に配備されていたＭＳ部隊を相手に奮戦。〝アヘッド〟と称されるアロウズの主力機部隊を相手に戦う様は遠くから見ていてもハラハラした。

何せそのガンダムの中には明らかにギリギリで稼働している大破直前の機体もあったからだ。〝エクシア〟新型機で構成されたアロウズ部隊に対して、刹那君の駆るエクシアは撃墜寸前だった。

オマケにナイトオブセブンのスザク君も戦線に出てきちゃうし、これは厳しいかと思った。

……正直、この時自分もグランゾンで出てくれば良かったのではないかと今も思ったりしている。蒼のカリスマとしてグランゾンと共に出てくれば、取り敢えずその場はどうにでもなっただろう。

だが、問題はその後だ。幾らその場でアロウズを殲滅しても後の選択が自分の行動を大きく狭めていたと思う。

単体で動くにしてもどこでアロウズが目を光らせているのか分からないし、ソレスタルビーイングと行動を共にしても、歌姫二人を拉致した疑惑がある蒼のカリスマではすんなりと受け入れては貰えないだろう。

その時の話を説明をするにしても、今は時間が足りない。誤解を全て解く頃にはアロウズの追撃部隊が来てしまう。

結局、その時の戦闘はソレスタルビーイングと駆けつけてきた他のガンダム達や黒の騎士団の紅蓮、スコープドックと黄色いブラスタ（？）の参戦によって戦況は打開され、刹那君も新たなガンダム〝ダブルオー〟に乗ってスザク君を迎撃、戦場から離脱する事ができた。

収容所の中もカタロン達が暴れた事によりボロボロ、自分のいた部屋は収容所の一番奥の位置にあるため、揺れはしても誰かがここに押し入って来ることはなかった。

ま、おかげで悠々と元ＺＥＸＩＳメンバーの戦い振りを観戦できたから別に良かった

んだけどね。
そしてその後は再びソーマさんが訪れて色々質問された後釈放となった。……カメラだけは没収されたけどね。
けど、不思議な事を聞くものだ。〝どうして逃げなかった？〟なんて……そんなんで本当に逃げたら自分が悪いって事認めてるようなものじゃないか。
そんな事をすれば即座に指名手配され、蒼のカリスマ処かシュウジ＝シラカワとしても動けなくなる。そんな分かり切った事実に思わず吹き出しちゃったよ。
……すみません、先日まではそんな事考えてました。殴り殺されるのはイヤでいざというときはグランゾンで一撃離脱するつもりでいました。
と、ともあれ、これで一応自由の身である。自身の誠意ある態度によって掴んだ勝利なのだから、ここは悠々と胸を張って収容所から出て行こうと思う。
それにしてもあの黄色いブラスタ、形はクロウさんの機体と似ていたけど……誰が乗ってたんだ？

◇

ソレスタルビーイングと黒の騎士団との戦いを終えたアロウズは、収容施設を破壊された事によりその施設を放棄、別の部隊に合流する為の対応に追われていた。
今回の戦闘で戦線に赴いたソーマ＝ピーリスとアンドレイ＝スミルノフは、機能を停止した施設を前にし、人員に命令を下している。
その最中、先程釈放した人物に気になる点があるのか、アンドレイはピーリスに進言する。
「中尉、本当に彼を釈放しても宜しかったのですか？」
「アンドレイ少尉か、宜しかったも何も、彼には特に怪しまれる要素はなかった。特に背後関係などもなかったし、これ以上彼をここに拘束しても得られるものはなかっただろう。少尉もその事に同意したから彼の釈放に異論はなかったのではないのか？」
「その事については否定しません。確かに中尉が言う様に、彼には特に目立った経歴もありません。時空震動に巻き込まれ、一人でこの世界に来たことも、そして旅をしている事も嘘ではないでしょう」
「では、何が気になると？」
「……凄み、です」

「何？」
「ソレスタルビーイングが奇襲し、カタロンが強襲した時、彼はここから脱出出来る時間など幾らでもあったと思います。彼のいる独房はこの施設で最も深い所にありますが、同時にその時は我々の思考の死角にあります。事実、自分は戦闘中そこまで気が回りませんでした」
「……それは」
　そうだろう。と、ピーリスは言葉を続けようとしたが……止めた。確かに彼は戦闘中に自ら逃げ出す事は出来ただろう。
　だが、その先にあるのは暗い逃亡生活だ。カタロンの構成員でもないのにそんな事をすれば忽ち指名手配され、彼の行く先は悲惨な末路になっていた事だろう。
　だが、逆に言えば後ろめたい事など何一つないから逃げ出さずにいたのだろう。だからこそ彼は独房の中でもああも堂々としていたのだ。
　独房の中で他のアロウズの軍人に殴られながらも、顔を腫らしながらもそれを意にも介さず、堂々とした態度と姿勢を崩さず、暗闇の奥底で不敵に笑う彼。
「……いずれにしても、今私達に課せられているのは次の任務だ。行くぞ、アンドレイ少尉」
「はっ！」

一瞬脳裏に浮かんだ不敵な笑みを振り払うようにピーリスは首を横に振った後、アンドレイと共に母艦に向かう。

その途中――――。

『シュウジ＝シラカワ、何故君は他の者達のように逃げ出したりしなかった？　ここは確かに収容所の中でも奥深い位置にあるが、戦闘中の我々はそこまでの警備にまで気が回らなかった。その混乱に乗じて逃げ出す事は考えなかったのか？』

独房の奥に座っている彼にそんな質問をした時、ピーリスも僅かながら感じた。背中に冷たい氷を突っ込まれたかの様な……奇妙な威圧感を。

『ククク……いや、失礼。まさかそんな質問をされるとは思わず、つい笑ってしまいました。気に障ったのなら謝りましょう』

『そんなものは必要ない。で、何故なんだ？』

『何故？　そんな事決まっているじゃあないですか。それは――――』

〝そんな事、必要ないからですよ〟

あの時は自分の身の潔白に絶対の自信があるからだと思った。実際、彼は時空震動に

よって巻き込まれた所を除いては、普通の市民とはなんら変わりない。
だが、あの不敵な笑みが頭から消えない。此方の意図している事を全て見抜いている様な彼の態度が気になって離れない。
シュウジ＝シラカワ、もしあの言葉の裏に別の真意があるとすれば……それは。
「こうなる事を全て見透かしていたと言うのか。ソレスタルビーイングが現れる事も、ＺＥＸＩＳの面々が再び集い始めている事も、だとすれば……奴は一体」
シュウジ＝シラカワ。超兵として生まれたソーマ＝ピーリスは己の直感に従い、その男を得体の知れない人物として認識を改めるのだった。

その21

――――ソレスタルビーイング格納庫。

アロウズの収容所に捕まっていたアレルヤ＝ハプティズム、そして同じ収容所に捕まっていた沙慈＝クロスロードを救出していた一行は、次の目的地であるエリア11へと向かっていた。

その最中、嘗て日本で潜伏中だった刹那＝F＝セイエイがソレスタルビーイングのメンバーだと沙慈が知り、世界がこのような形に歪んだのは君達の所為だと激しく罵倒。その憤りぶりに当事者である刹那や黒の騎士団の一人であるカレンは、何も言い返す事が出来ないでいた。

そして、再び沙慈が部屋から出てきて刹那達の前に立つ。やはりあの程度では彼の怒りは収まらないのかと、周囲の人間が危ぶまれた時。

意外にも沙慈は怒りを爆発させる事はなく、各ガンダムの整備メンテをイアン＝ヴァスティと共に始めるのだった。

予想外の行動に面食らう一同、昨日とは打って変わって落ち着いている沙慈に元同級生であるカレンは戸惑い、その後一通り整備を終えた沙慈に話を聞いてみた。
「え、えっと……沙慈、怒ってないの？」
「正直、今も納得していない所は多いよ。言いたい事も沢山ある。僕がイアンさんに頼んで整備を手伝っているのはそんな気持ちを少しでも紛らわせたいからさ。……けど、ある人に言われたんだ。ある程度感情を爆発させたら、次にどうしてそうなったのかを考えてみなさいって」
「ある人？」
「うん。カレンや刹那、ここにいる人達がそれぞれ戦う理由を持っている。そして、その理由を持つようになったのは何故なのか、その答えに辿り着いた時、僕も一つの答えを得られるだろうって、その人は言ったんだ。僕は知りたい、どうしてルイスはあんな目に遭って、どうして姉さんは死ななくちゃならなかったのか……その答えを知りたい。――あの人はそれが世界と向き合う事なんだって、そう教えてくれた」
「……不思議な事を言うのねその人は。ねぇ沙慈、その人の名前、何だったか覚えてる？」
「ちょっと胡散臭い言葉使いだったけど、悪い人には見えなかったからね。一応聞いておいたよ、確か……シュウジ＝シラカワさん、だったかな？」

「「「シュウジ＝シラカワ!?」」」

「え？　え？　な、なに？」

沙慈から聞かされる人物の名にカレンだけではなく周囲の人間も反応する。ここまで反応されるとは思わなかった沙慈は目を丸くさせて驚くが、その後、カレンからその後のシュウジ＝シラカワなる人物の行方について問い詰められ、沙慈は散々な目に遭うが、割愛させてもらう。

「ねえ、そのシュウジって奴は一体なんなの？」

「あぁ、エスターさんはご存じなかったですね。シュウジ＝シラカワさんは僕も実際会った事はないんですが、なんでも随分奇特な御人らしいのです」

シュウジ＝シラカワなる人物について初めて耳にした次元獣バスターのエスター＝エルハスは、隣に立つカトルに聞いてみた。

しかし、カトルからの説明でもイマイチ要領を得ないエスター、名前ばかりで謎に満ちたシュウジの人物像に頭を唸らせる彼女に、死神と名高いデュオ＝マックスウェルが話に加わった。

「エリア11に暗黒大陸、リモネシアに日本と、色んな所に現れる奇妙な奴でさ、オマケにそいつあのくろがね五人衆から一目置かれていたらしい」

「あ、それ知ってる。とんでも化け物五人衆でしょ？　クロウが言ってた」

「あの野郎、自分で首を絞める様な真似を……まぁそれは置いといて、その五人衆の目を欺ける程奴の身を隠す術は異常だったらしい。何せあのお菊とかいう婆さんの後ろを容易く取れる奴だ。生半可な修羅場ではそんな術は身につけられねぇよ」
「まるで不動司令のようだってアポロ君も言ってましたね」
「要するにだ。シュウジ＝シラカワって奴は俺らの中じゃ〝蒼のカリスマ〟と並んで胡散臭い奴として通っている。お前も難しく考えないでその位の認識でいいと思うぜ」
「デュオ、またそんないい加減な……」
　デュオのいい加減な説明に呆れるカトル、残されたエスターは何か疑問に思ったのか、少し考える素振りを見せ……。
（そういや、私に操縦技術を教えてくれた蒼のカリスマ、あいつも結構胡散臭かったっけ。……悪い奴には思えなかったし、案外そのシュウジ＝シラカワって奴と同一人物だったり――）
「いやぁ、まさかねぇ～。流石のアタシもそれはないと思うわ～。胡散臭い所が共通点とか、幾ら何でも安直過ぎるでしょ」
「エスターさん？　どうかしました？」
「ううん、なんでもない」
　一瞬だけ思い浮かんだ答え。だが、すぐさまそれはないと断じたエスターはすぐに思

考を切り替え、次の目的地であるエリア１１に付くまでの合間、カレンに頼んでシミュレーションを行うのだった。

◇

Ｊ月Ｏ日
どーも、最近髪の先が紫色っぽくなってハゲへの前兆か!?　などと戦々恐々の日々を過ごしているシュウジです。
いやね、なーんか最近髪の先っちょが気になるんですよ。確か以前仮面を取った時に確認したんだけど、その時はうっすらとしか確認出来なかったし、リモネシアで大人しくしていた頃は普通に黒髪に戻っていたから気に留めていなかったのだけれど、ここ最

近になってまた紫色になってきているから少し不安になっているんだよね。
アロウズの収容所に捕まっていた時は色々ストレス溜まる思いをしたからなー、アレが原因で髪の色素とか落ちたのかなぁ。
黒髪に混じった紫、ちょっとダークヒーローっぽくて格好いいかもしれないけど、イメチェンとしてそれはどうよ？
自分、服装とかそういう事はあまり詳しくないから分からないけど、多分……ないんじゃないかなぁ。
近い内にまた髪が紫色っぽくなるのか、そしてそれはハゲへの第一歩になるのか、不安でしかたありません。
まぁ髪への不安は置いといて現状報告を書くことにする。今現在自分はアザディスタンを抜け、フランスへと向かおうとしています。
予想していた事とはいえ、アザディスタンではシュウ博士に関する情報は何も得られず、治安の悪さもあってアザディスタンの首都には一日だけ泊まり、次の日にはこの国から去ることにしました。
本当はもっと根深く調べたかったのだけれど、どうやら地球連邦はこの国を吸収しようと色々策を巡らせているらしいのだ。
当然地球連邦が動くという事はその傘下にあるアロウズも動くと言う事、先日捕まっ

たばかりの身としてはあまり関わりたくない連中なので、再び彼等が訪れる前に移動した方が安全だと判断した。

それに一つの国で虱潰しに探すよりも、世界中を巡りながら広く浅く探した方がいい時もある。どこかの地で観光に洒落込んでいたらバッタリとそこでシュウ博士に出会すかもしれない。

……流石にそれは楽観的だとは思う。が、一つの場所にずっと留まっても情報が集まるとは限らないのもまた事実。

アザディスタンにはまた後日訪れる事にして、自分は次の国に向けて英気を養う事にする。主に殴られた治療とか。

アロウズの連中、人を殴るだけ殴っておいて謝罪の一つもない。ソーマさんは申し訳なさそうにしてたけどね。

さて、次はフランス料理……もとい、シュウ博士の情報を今度こそ得られるものだと信じて、今日の所は終了したいと思う。

貨物列車って荷物ばかりが置かれたイメージあるけど、意外と乗り心地いいよね。寝床もあるし、今回は割といい旅になりそう。

J月@日

フランス料理っておしゃれなだけじゃなく味も中々だよね。今まで食べたことのない味付けだったから新鮮で美味しさと同時に楽しめた。

アロウズの連中に殴られた所も、今は腫れも引いて痛みもなくなり、天気も晴れと良好、絶好の旅日和である。

ひとまず今日の寝床も確保出来たし、後は博士の情報に付いて探し求めるのみである。このままアザディスタンの時の様に足を使って探してもいいが、単純な人探しではシュウ博士の居場所を特定出来そうにないので、今回は別の視点から情報を模索したいと思う。

まずこの世界。大時空震動によって混ざり合ったこの世界は多元世界と呼ばれ、世界と世界を繋ぐ次元境界線となるものが常に揺らいでいる状態となっており、時折次元震や規模の大きい時空震動が起きたりして、別の世界の地形が存在する事になっている。

嘗てユニオンとブリタニア帝国が一緒の地点で共存していたり、二つの月や日本が存在したりするなども時空震動が大きな原因を担っていると言われている。

そしてそれは地形丸ごとという訳ではなく、人単位で跳ばされてくるということも珍しくはない話で、この世界には数例とはいえ実例が存在している。

かく言う自分もその一人だと認識しているのだが……気が付いたらグランゾンのコックピットにいたって、一体どんな間違いが起こればそんな状況になるのだろうか？

その辺りが未だ謎である。

そしてシュウ博士の事だが、もしこの時空震動が関わってくるのであれば、博士はそもそもこの世界に存在しているのかどうかすら疑問に思えてくる。

時空震動や次元震は偶発且つ突発に発生する事象だ。もし博士がそれに巻き込まれて別の世界に跳ばされたのだとすれば、シュウ博士が自分とグランゾンに対して何のアクションも起こさない事が説明され、自分の今回の旅そのものが無駄という結果に終わってしまう。

と、普通に考えれば博士を捜し出すのは絶望的に思われるが、そこは天下のシュウ博士、次元震や時空震動に巻き込まれようと独自の力で戻ってきそうだから怖い。

もし本当にシュウ博士がこの世界にいなければそれはそれで問題無しと言う事になるが……まぁ、確かに楽観的過ぎる考えではあると自分でもそう思う。

これはあくまで自分の考えに過ぎないし、極論過ぎる考え方だ。やはり情報を探すにしてももっと専門的な知識が欲しい所である。

取り敢えずこの推測は置いておくとして、自分はこれから足を使って情報を得ようと思う。有益な話が聞ければ明日以降に書くつもりでいる為、今日はこれで終わりとする。

◇

――――――一体、何がどうしてこうなったのだろう？　昨日、自分はシュウ博士やそれに纏わる有益な情報を探す為にフランスの街を駆け巡っていただけの筈。

駆け巡ったと言っても、別に走り回った訳ではない。情報の集まりそうな酒場やちょっと危険な臭いがする――所謂裏家業の人と少しばかり話をしたぐらいである。

裏家業の人と関わっておいてこんな事を言うのもアレだが、ちゃんと安全な橋を渡った健全なやり方だ。……まぁ、おかげで旅の資金が少しばかり減ったが、いざとなれば日雇いのバイトで稼ぐつもりだったから別にそれはかまわない。

ただ、やはりその後がいけなかったんだろうなぁ。色々考え事をしながら歩いていたから、すれ違い様に人とぶつかってしまった。

いや、ちゃんと謝りましたよ？　ぶつかった瞬間に謝る位は、……けどね、そのぶつかった人が拙かったの。

どんな人とぶつかったのかって？　ヒント、〝皇族〟

もうね、謝った瞬間叫びたくなったよ。どうしてアンタがここにいるんだよと、聞けば外交の関係の仕事でたまたまこの国に来ていたらしく、しかも珍しく時間が空いた為にたまには外を歩こうと思って外出したらしい。

護衛は何してんだよ!?　そう思った時は既にＳＰの皆さんに囲まれました。しかも中にはナイトオブラウンズのナンバー3と6さんが。

さて、もうお分かりの人もいるかと思います。自分がぶつかった人物、その人の名は……。

「おや？　なんだか食が進まないらしいが……ここの料理は口に合わなかったかな？」

「……イエ、ソンナコトハゴザイマセン」

シュナイゼル＝エル＝ブリタニア様でしたー。

有名人と出会うなんてー、シュウジ感激ー♪

……誰か、助けてくれ。

その２２

Ｊ月Ｗ日

……眠い。ただひたすら眠い。

昨日、道端で外出中だったシュナイゼル殿下とすれ違い様にぶつかってしまい、どういう訳か一緒に食事をする事になった自分は、その後何やら殿下に気に入られたらしく、現在は殿下が滞在している高級感の漂うホテルの一室にいる。

もうね、どうしてこうなったとしか言いようがない。アレかな、やっぱ考え事をしながら歩くのは危ないって言う警告なのかな。

注意一秒怪我一生。ぶつかったのは自動車ではなく人だったけど。――しかもその人、核兵器なんて目じゃないくらい超重要人物なんだけどね。

〝シュナイゼル＝エル＝ブリタニア〟神聖ブリタニア帝国の第二皇子とされ、ブリタニアの宰相を務めており、実質ブリタニアの実権はこの人が担っているとも言っても過言ではない程の御人で、地球連邦政府の中でも多大な発言権と影響力をもったそれはもう偉い人なのである。

そんなお方が何故自分の様な小市民に興味を引いたのかは分からないが、早いところこの場から脱したい思いである。

だってあのシュナイゼルだよ？　腹の読み合いでは右に出る者がいないほど思考と策略に秀でた御人だよ？　面と向かっているだけで胃が痛くなる思いだわ。

最初は自分も断ったよ？　ぶつかってしまった非礼に食事をご馳走させて欲しいと言ってきた時は驚いたけど、流石に一庶民がブリタニア皇族と一緒にお食事ってだけでも抵抗感が凄まじいのに、自分が旅人だと言うとその言葉に反応して今度はその旅の話を聞きたいと言ってきやがったのだ。

……もう一度言う。最初、自分はこの誘いを断りました。唯でさえ〝グレイス＝オコナー〟の所為で余所様の所で睡眠を取ることにトラウマ持ってるのに、腹の読み合いで勝てる気のしないシュナイゼル殿下と同じ宿屋に泊まるとか――――神経がすり減る思いだよ全く。

ただ、ナイトオブラウンズの３と６の子が意外にも親しみやすい人だったのは驚いた事だった。一度戦場に出れば一騎当千と呼ばれる彼等ナイトオブラウンズだが、戦場ではない日常の時は結構フレンドリーに話しかけてくる気安い人だった。

特に３のジノ＝ヴァインベルグ。貴族出身の身でありながら庶民の生活に興味津々のご様子で、シュナイゼル殿下同様自分が旅人だと知ると割と頻繁に声を掛けてくれ

る。

6のアーニャ＝アールストレイムは物静かな子だけれど、記念と写真を撮ったりしたので別に人見知りな訳ではないと思う。一応は受け答えもしてくれるし、嫌われているわけではない……と、思いたい。

そしてナイトオブラウンズが二人もいるという事があって、護衛に絶対の自信があるのか自分の反対の意志は封殺され、あれよあれよと現在の状況へと相成ってしまった。

部屋に通され、せめてこのまま何も起こらなければいいなと、そう思っていた自分の考えはあっさり否定され、お付きのカノンという文官の人からシュナイゼル殿下の呼び出しで部屋に向かわされ……そこで待っていたのは寝間着姿のシュナイゼル殿下だった。

一体何の用かと首を捻った自分とシュナイゼル殿下の間に置かれた一つのチェス盤。自分の旅の話をただ聞くだけでは味気ないという事で、チェスを打ちながら話をしようと言う事らしいのだ。

あのシュナイゼル殿下とチェスを打ったとあれば、それはちょっとした自慢話になる。此方はグランゾンや蒼のカリスマに関する話をしなければ良いだけだし、流石に初対面の相手を蒼のカリスマと結びつける事は不可能だろう。……不可能だよね？

ただ、シュナイゼル殿下の提案には一つ穴がある。それは自分がチェスなど一度もし

たことのない未経験者という事だ。
その事を告げると、シュナイゼル殿下はルールを教えながら打とうと言い出し、これに自分も乗った。カノンさんから差し出される飲み物を口にしながら打ったチェスは、なんとも言えないセレブ感を味わえた。
チェスの結果は二勝二敗の引き分け。意外にチェスの楽しさにのめり込んでついつい打ち込んでしまった。
念のために言っておくが、二回も彼に勝てたのは自分という初心者に対してシュナイゼル殿下が手を抜いてくれただけなのだ。
一度目はルールが今一つ理解出来ずに惨敗、二回目はルールを把握し、どうにか打てるようになって勝利、三回目は色々駆け引きというモノが繰り広げられて敗北し、四回目はシュナイゼル殿下が気を利かせてくれて勝たせてくれた。
だって明らかに罠っぽい駒とか仕掛けのありそうな駒とかこれみよがしに置いてあるんだもの、シュナイゼル殿下がワザと負けようとしてくれたのは確定的に明らかである。
チェスを打ちながらの会話も、自分が旅をしていた時の話やその時のアクシデントを話題にしたりと、それなりに盛り上がりはしたが、シュナイゼル殿下は蒼のカリスマについて質問してくる事はなかった。

もっと突っ込んだ話で動揺を誘ってくるのかと思ったのだけれど、そんな事はなかった為逆に肩透かしになるが、寧ろそれが良いリラックスとなって、チェスを打つ合間は集中してやれた。

その後、楽しい時間を過ごせたシュナイゼル殿下に礼を言い、自室へと戻ったのだが……やはり眠りに就ける事はなく、その日の夜はベッドに潜りながらもずっと周囲の警戒に気を配っていて、眠る事は叶わなかった。

そろそろチェックアウトの時間だし、彼等とはここで別れ、再び情報集めの旅を始めたいと思う。その際、眠気を悟らせないように気を付けながら……欠伸なんて見られた日には目も当てられないからな。

さて、次はどこに行こうかな？

やはりここは〝ス〟繋がりでイギリスかな？

◇

「シュウジ＝シラカワか、中々興味深い青年だったな」
「珍しいですね。殿下が他人に興味を示すとは……」
「そうかな？　いや、そうなのだろう。私自身もトレーズ閣下以外と会話して有意義だと思えたのは随分久し振りだ。それに、彼の呑み込みの早さは驚嘆に値するからね。機会があれば是非もう一度一局打ちたい所だよ」
「お戯れを……」
「フフフ……」
　文官のカノンの嗜めを微笑みを浮かべて誤魔化すシュナイゼル。その笑みに込められた意味は、長年付き添った者でもその真意を確かめる事は出来ない。
　唯、一つ言える事はあのシュナイゼルが、一人の人間相手に深く関心を抱いているという事。
　手を抜いたとはいえ、チェスで負けたのは一体いつ以来だろう。昨晩部屋で行われた小さな死闘を思い返しながら、シュナイゼルは用意された車に乗り込み、ホテルを後にした。
「今度は、本気で打って見ようかな」

◇

Ｊ月Ｄ日

……最近、いやな噂を耳にする。リモネシアの方で未確認の機体が目撃されたという情報をよく聞くのだ。

詳しくは分からないが、リモネシアに向かうＺＥＸＩＳメンバーを目撃したという話をネット上で良く聞く。中には戦闘もあったのではないかという話もチラホラ出てくるものだから、此方としては心臓が握り締められる思いだ。

しかも厄介な事にリモネシアにはまだ情報端末の機器が設置されていない。皆の安全を確かめる術がない今、自分はこれから急いでリモネシアに帰ろうと思う。

謎を解き明かすまで帰らないと決めていたが、そうも言うていられない。最悪の場合、蒼のカリスマとしてリモネシアの安否を確かめるまでだ。

イギリスに来てまだ満足に調査を進められていないのが心残りだが、今はリモネシアの安否を確かめるのが最優先。海底を通って行けばグランゾンの存在も知られる可能性は低くなる筈。

短くなってしまったが急を要するため、今回はこれで終わろうと思う。

Ｊ月Ｖ日

どうやら、自分の考えは杞憂に終わったようだ。リモネシアの遙か上空からモニター越しで確認した所、戦場の痕跡こそは見られたものの、被害らしきモノは殆ど見受けられなかったからだ。

何故戦いがあったのに被害が無かったのか、それは彼等が戦ったとされる場所がカラミティ・バースの発生した場所だからだ。

あそこはリモネシアの首都があった所だが、復興現場として拠点を置いた場所はもっと離れた場所にあり、流れ弾で建物が損壊する事はあっても人的被害は皆無だった。

遠望モードで確認してもそれらしき被害はどこにもない。ラトロワさんやシオさん、ジャール組の皆も元気でやっている。恐らくは被害が出ないようＺＥＸＩＳ達が頑張ってくれたのだろう。

ただ、一度リモネシアが戦場になった事で復興作業は一時中断、脅えてしまった子供達を安心させようと皆が奮闘している姿が見えた。

脅えてしまった子供達には申し訳ないが、怪我が無いことに今は安心しようと思う。

……が、一つ今回の旅に目的をもう一個追加しようと思う。

誰だか知らないが、今のリモネシアを戦場にするなんて……その謎のロボット集団とやらには少しばかり話をしないといけないと思う。

グランゾンの威を借る自分が言うのもなんだが、巻き込まれて怖い思いをした子供達の借りを最低でも１０倍返しで返そうと思う。

と、言うわけでこれからは博士の情報を集めると同時に、その謎のロボット集団の行方を追いたいと思う。

なんだか二足の草鞋みたいで格好付かないが、自分なりに頑張ろう。

それと、今回グランゾンで移動した所為か海底を移動したにも関わらずアロウズと遭遇。あわや戦闘になるところだったけど、お得意の即座離脱により逃げ切る事が出来た。

幸い今回は人目に付かなかった為噂にはなっても正体が特定される事はないだろう。

……捜索隊とか結成されないよな？

その２３

Ｊ月＃日

先日、リモネシアに現れたとされる謎のロボット集団の正体が明らかになった。世界中のメディアをジャックし、宣戦布告の形で現れた新勢力〝インサラウム〟

自ら聖王と名乗るユーサー＝インサラウムは聖インサラウム王国の第一皇子。突如として現れる別次元からの来訪に世界はそれなりに驚いた。

それなりにというのは元々多元世界と言われるこの御時世、異世界からの来訪者というのはザラにあるからだ。尤も、現れていきなり宣戦布告される事は今までにない事態である為、何も知らない市民達はそれは驚いた事だろう。

事実、自分も驚きを隠せなかったが、インペリウムの時で幾分か異世界からの来訪者というのに耐性がついていた為、すぐに落ち着きを取り戻すことができた。

インサラウムは宣戦布告の表明を世界中に叩きつけた後、直ぐに姿を消して行方を眩ませている。

異世界からの来訪者だけに次元の壁を越えて出現出来る術があるようで、グランゾンの索敵でも引っかかる事はない。ガイオウも似たような力を使っていたし、これも次元力という未知のエネルギーが成せる業なのだろう。

けど、次元力というモノはそもそも何なのだろう。仮説として考えられるモノが一つ、それは次元というモノを〝世界〟或いは〝星〟に見立てた場合の話だ。

地球には既に様々なエネルギーが存在している。一般的に使われている風力、水力、地熱、化石燃料の代わりに今は太陽光エネルギーなんてものがあったり、更には光子力エネルギーやゲッター線なんてものまで存在している。

他にも様々なエネルギーが存在するこの星だが、対する次元力というのは確かな一つとして存在しているモノとする。それは……〝星〟

惑星そのものを一個のエネルギーとして抽出すれば、それは次元力として扱う事が可能。

何故星から抽出したエネルギーが次元力として扱われるのか、それを説明すると宇宙や恒星、多元世界に関する話にまで発展し、少しばかり話が長くなるので割愛させて頂く。

だがこの次元力。もし自分の仮説通りに星から生み出すのならかなりマズい事になる。何せ星からエネルギーという名の血液を抽出する事になるのだ。

星は宇宙の中で最も生命力のある生命体、しかし決して無限ではない。人間が献血し過ぎれば貧血で倒れる様に、星だってエネルギーを吸い続けられればいずれは死に至ってしまう。

星が死に瀕するなんて自分は見たこともないから想像できないが……碌な結末にならないという事だけは言える。

ガイオウの様に自ら次元力を発せられる規格外な化け物ならまだしも、インサラウムの連中も次元力を統べる技術を確立しているのだろうか？

仮にもし今の自分の仮説が正しいのなら、インサラウムの目的、そしてこの世界に宣戦布告という形で訪れた理由が何となく見えてくる。

ホント、相変わらず忙しなく回る世界だこと。果たしてインサラウムの連中に対して地球政府はどう動くのか、どうせ碌な事にはならないだろうと思いながら今日の所はこれで終了する事にする。

……改めて今回の日記を読み返すと、何だかやけに専門的な話になってきているな。

大学にいたころは論文を書くだけで精一杯だった自分が懐かしい。

Ｊ月Ω日

イギリスでの調査を一通り終えた後、次の目的地はどこにしようかなと悩んでいた

時、奴らが現れた。

〝インサラウム〟先日の宣戦布告に合わせ早速連中は攻撃を仕掛けて来やがった。しかも戦略的価値のない唯の街に……。

今、取った宿屋のテレビで流れているニュースによると街のど真ん中に巨大なクレーターを作り上げると同時にドーム型の建造物を打ち立てているようなのだ。

ネットで確認しても話題はインサラウムと例のドーム型の建造物で持ちきり、中にはインサラウムの秘密兵器なのだという声も上がっている。

実際、あれはある意味では兵器なのだろう。ニュースで流れている断片的な映像だから詳しくは分からなかったが……アレってもしかして自分が仮説を立てた次元力を吸い出す機械って奴？

――――やべぇ、変な所でフラグを建てちまった。なんてバカやってる場合じゃないので、これから自分はグランゾンと共に現場に向かおうと思う。幸いというべきかは分からないが、今自分のいる街は例の現場から比較的近い位置にあり、住民や宿の人達は皆避難しているから人目に付くことは殆どない。

宿屋には既にチェックアウトとして処理して貰い、今自分はこの宿にいない事になっている。部屋に監視カメラの類は無かったし、盗聴器も見あたらなかったが、念には念を入れて人目のない所に隠れて蒼のカリスマに変身、その後グランゾンと共に現場へと

急行しようと思う。
……分かってたけどやっぱりアロウズは出てこないのね。ホントに軍隊なのかよと、ボヤくのは内心とこの日記の中だけにしておく。

◇

『クハハハ！　無駄じゃ無駄じゃ！　幾ら貴様等が攻撃しようと〝ＺＯＮＥ〟には傷一つ付けられん！』
『クソッ！　何なんだよあのドーム型の奴は！　さっきから目一杯打ち込んでいるのに　　　

インサラウムの母艦から周辺一帯に響き渡る老婆の蔑んだ声、何をしても無駄という老婆の言葉にＺＥＸＩＳ達の士気が徐々に落ちていく。
そして、そんな彼らに追い打ちを仕掛けるように、操られる様に施された〝特殊次元獣〟と王国に仕える〝アークセイバー〟が攻撃を仕掛ける。
破壊出来ない兵器と押し寄せてくる敵の軍勢を前にＺＥＸＩＳ達の退路が少しずつ塞がれ始めた時。空から無数の光の槍が次元獣達に降り注がれた。
突然の出来事に敵味方が唖然とした時、上空から蒼の魔神〝グランゾン〟が姿を現した。
『な、なんじゃあ!?』
『奴は！　拙い、殿下！　お下がり下さい！』
『ま、マルグリット、あ、アレは一体なんだ?』
『アレは以前殿下に申し上げた蒼き魔神〝グランゾン〟あの破界の王と単騎で真っ正面からやり合った化け物です!』
『あ、アレがシュバルの言ってた……』
上空から現れる魔神の姿に聖王機に乗った皇子、ユーサーは戦慄し、恐怖を覚えた。
なんて禍々しさと威圧感。当時、決死の覚悟でインペリウムの……いや、ガイオウの情報を流していたシュバルの報告の中にあった魔神の話を思い出したユーサーはそれ

が何一つ間違っていなかった事を確信し、聖王機の中で体を抑えながら身震いしていた。
　聖王機の横に立っていた白の機体。パールネイルが王を庇う様に前に立つ。誰もが動きを止めた息苦しい空気の中、魔神がインサラウムの前に降り立った。
『初めまして、インサラウムの若き王よ』
『き、貴殿は……何者だ？　何故このような所に』
『私は蒼のカリスマ。故あって名を明かす事は出来ませんが……それよりも、お聞きしたい事があります。何故あなた方はこのような真似をしたのです？』
『え？　そ、それは……』
『見た所、あのドーム型の建造物は星のエネルギーを抽出するモノ、確かに星から生み出される次元力は膨大でしょうが、代わりにこの星が死にます。何故こんな真似までして侵略行為を続けるのです？』
『あ……う……』
『今ならまだ間に合います。武装を解き、降伏するのです。幸いにもＺＥＸＩＳの皆さんは話の通じない方ではありません。事情を話せば非難はされても無碍にされる事はないでしょう』
『アイツ、何を勝手な！』

『奴の目的は皆目見当も付かないが、確かにここで互いに武装を解けば被害は最小限に抑えられる。時間は掛かるが和平の道のりも開ける事だろう』

ＺＥＸＩＳ達から上がる不満の声、いきなり現れて場を仕切り始めた蒼のカリスマに苛立ちを覚える者もいるが、ジェフリー艦長だけはこれが最後の交渉の場だと冷静に目の前の光景を眺めていた。

やり方自体は乱暴だが、グランゾンという強力な力を前にしてはインサラウムも無視は出来ない。蒼のカリスマの目的はやはり見当も付かないが、今は彼こそがこの戦場の支配者だ。

ＺＥＸＩＳも沈黙して蒼のカリスマの交渉を見守る中……聖王機に搭乗したユーサーが口を開きかけた。

『なりませぬ殿下！　そのような得体の知れない輩の甘言に耳を貸してはなりませぬ！』

口を開いて言葉を紡ぎかけた時、横から飛び込んでくる老婆の叫びがそれを許さなかった。

『マルグリットよ、そのまま殿下を守れぃ！　アークセイバーよ、貴様等の力で以て殿下を誑かす不届き者を討ち取るのじゃ！』

『『『はっ！』』』

『蒼の魔神よ、貴様の目的は知らないが殿下のお側に近付けさせはせん！』
『我らアークセイバーの剣、その身でとくと味わえ！』
　周囲を囲み、タイミングを合わせての一斉攻撃。薙ぎ払うかのようなエネルギーの光弾、鋭い突きから繰り出される突撃攻撃、騎士と呼ばれるに相応しい攻撃の嵐の中。
『歪曲フィールド、展開』
　魔神を駆るその一言によって、全てが防がれた。光弾は微塵も残らず消し飛び、槍は歪曲された空間にひしゃげて消滅、自分達の攻撃が一切届かなかった事に絶望するアークセイバー。
　そして、次の瞬間。
『〝グラビトロンカノン〟発射』
　誇りも覚悟も、その全てが無意味だとあざ笑う様に、パールネイルを含めた騎士達は地面へと叩きつけられた。
　残されたのは聖王機と母艦のみ、自分の楯として、刃として頼りにしてきた騎士達が悉く地に伏した光景を前にユーサー＝インサラウムは呼吸も忘れ、青ざめた表情で見つめていた。
『ユーサー＝インサラウム殿下』
『っ!?』

『もう一度言います。投降なさい。引き返せるのは今だけですよ。もし、私の言い分が聞き入れられない時は……』

『インペリウムと、同じ末路を辿ってもらう事になりますよ?』

もう、何も言えなかった。このままではマルグリットもアークセイバーも殺される。今殺されていないのは目の前の魔神がそうしないだけだ。

降伏しよう。目の前の魔神に戦意を完全に失った皇子は矜持を捨て、せめて皆を助けて貰おうと言葉を発しようとする。

宰相のアンプローンも何も言わない。恐らくは自分と同様この状況に絶句しているのだろう。

ユーサー＝インサラウムはこの時、再び叩きのめされた。ＺＥＸＩＳにでも破界の王にでもなく、たった一機の魔神に……。

『……こ、こうふ』

その時だった。突如空の彼方から黒い物体が飛来してきて、蒼き魔神に斬りかかっ

た。
『残念だが、それ以上はやらせないよ。蒼き魔神〝グランゾン〟よ』
それは目にも映らぬ速さだった。鴉の様な出で立ちでありながらその速さは疾風、黒い風と思わせるその疾さに、魔神は空間を歪ませて凶悪な剣を取り出し、向かいくる鴉と打ち合った。
『その声は……アサキム＝ドーウィンか！』
魔神と鴉。二つの存在のぶつかり合いはＺＥＸＩＳすら手の出せる状況ではなくなった。
二つの巨大な存在がせめぎ合う中、重力の檻から抜け出せた騎士達と共にインサラウムは撤退。ＺＯＮＥも後に止められたと知り、彼らにとってはこの上なく幸先の悪いスタートとなるのだった。

その２４

Ｊ月β日

……この間から溜息ばかりでる毎日だが、起こってしまった事実は変えられないので、憂鬱な気分だが報告代わりに今日も日記を書こうと思う。

先日、ＺＯＮＥと呼ばれる建造物と共にインサラウムが侵攻してきた際に、自分は即興ながらある計画を打ち立てた。

〝和解〟。色々無理のある案だったが、これが最も血の流れない平和なやり方なのだと自分は思う。最初こそは集団レベルで烏合の集程度ならばグランゾンで即座に仕置きに掛かろうと思っていたが、王国と言われているだけあって彼等の軍事力は中々のものだと見受けられる。

何せＺＯＮＥという巨大な次元力抽出装置まで建造できるのだ。こと次元力に関する技術力だけなら地球より上回っているかもしれない。

それに向こうは次元獣を操る術を持っている。ガイオウにしか操れないとされていた次元獣がインサラウムの技術で従っているという事実は連邦政府にとっても中々衝撃的な話なのではないだろうか？

無論、連邦だって無力な訳じゃない。いざという時はアロウズだって動かせるし、その〝裏に潜む連中〟だってインサラウムの科学技術には興味を持つ筈。和解という手段を選べば、取り敢えずインサラウムと地球連邦の衝突は避けられるのだ。

地球とインサラウムが互いにぶつかり合った時、双方とも無事では済まないだろう。唯でさえ未だ地球側はインベーダーやバジュラ、地球外知的生命体からの脅威に晒されているのだ。問題を増やさず効率良く解消させるには、この二つの世界が手を取り合う必要があった。

地球を戦いの舞台にしてしまう以上、リモネシアにも戦火が及ぶ可能性がある。それだけは避けたい自分としては何としてもこの和解を成功させたかった。

それなのに……あのアサキムの野郎、横からいきなり現れて全てを台無しにしやがった。

奴の所為でインサラウムには逃げられ、ＺＯＮＥも発動してしまい、周囲の大地が死んでしまった。

木も草もない、ただ白い砂となった大地。初めて死に瀕した大地を見て俺は言葉を失った。

結局、ＺＯＮＥを止めたのはＺＥＸＩＳのある一体の機体。初めて見る機体だから新顔かなと思った時、その機体はドームの中に吸い込まれる様にＺＯＮＥに取り込まれ、

その機能を停止させた。
それを見届けるとアサキムは苛立つ含み笑いを残して離脱。その凄まじい速さで瞬く間にグランゾンの索敵範囲から逃れ、完全に行方を眩ませていった。
……正直、弄ばれたのだと思う。自分の剣の攻撃を奴は終始余裕で受けきってみせた。その気になれば打ち返せる攻撃を奴は足止めという目的の為だけに手を抜いたのだ。
対する此方は奴の奔放かつ速すぎる動きについて行くだけで精一杯、ワームスマッシャーを撃つ暇も与えては貰えなかった。
結局最後まで奴の動きを完全に捉える事は出来ず、ＺＥＸＩＳを除いて唯一残った自分も、謝罪の言葉を残して情けなくその場から離脱する事しか出来なかった。
望まない形だったとはいえ、それなりに長い間パイロットやってた自分としては結構頭に来る事実だった。だが、事実は事実として受け入れ、自分を精進させていこうと思う。
……けど、何度考えても解せない。何故アサキムはあのタイミングで介入してきたのだろうか？
まさか通りすがりの偶然という事は流石にないだろう。
やはり奴なりの目的があるのだろうか？　以前、自分を殺しに来たときも何やらブツ

ブツ言ってたし、好からぬ事を考えているのは明白だろう。
今後も、奴の事は注意して旅を進めようと思う。次の目的地は中華連邦だから気持ちも切り替えて頑張ろう。
……そういや、散々アサキム言った所為で思い出したのだが、奴の乗る機体って魔装機神に似てね？
それも魔装機神の中でも有名な〝彼〟の機体に何処となく似てる気がする……自分の考え過ぎだろうか？

J月×日
……幸せというものは歩いてこない。だから人は幸せに向かって歩いて行くのだと昔誰かが言ってた気がする。
けど、自分の場合は幸せに向かって歩いていっても、幸せの方はマスドライバーを使って宇宙に逃げていってる様な気がする。
今日、辿り着いた中華連邦でシュウ博士の事やその他諸々の話を聞いていた最中、ばったりと再び出会ってしまった。
〝シュナイゼル＝エル＝ブリタニア〟神聖ブリタニア帝国の第二皇子が、何の因果か

再び自分の前に現れたのだ。

何でも中華連邦のお姫様と第一皇子オデュッセウス殿下の結婚式がある為その披露宴に招待されたのだとか。それを耳にした時、いや、どう考えてもアンタの仕業でしょ、なんて言葉が出掛かったが、口を両手で抑えて賢明に堪えた。

現在百万人の旧日本人が蓬莱島と呼ばれる人工島に住んでおり、中華連邦の領域に滞在しているという。蓬莱島は黒の騎士団の拠点の一つとして上げられる場所だ。大方そっちの方を封じようと画策したのだろう。

その後、フランスでの時と同様に自分もシュナイゼル殿下達の泊まるホテルにどうかなと誘われたが……やんわりと断らせて貰った。

いや、もうホント勘弁して頂きたい。余所様の所で眠るだけでも体が拒絶反応を起こすのに、この世界で最も重要なポストに座る人と同じ宿屋に泊まるとか、ストレスと緊張で胃にワームホールが出来る思いだ。

ただ、皇族の人の頼みを断るのだから此方としては荒波立てずに終わらせたい。この時自分は急な用があるとその場を誤魔化し、次に出会ったら誘いを受けますと言って場を濁し、その場から速やかに立ち去った。

何故シュナイゼル殿下が自分という一庶民を相手にそこまで拘るのかは知らないが、あまり関わり合いにはなりたくない。友達を選り好みするのは良くないが、腹の中を探

り合う関係はもっと良くないと自分は思うのです。
しっかし、大宦官とやらも中々エグい事をする。要するにその天子とかいうお姫様を生け贄に、自分達はブリタニアでの立場を確立しようという魂胆が見え見えではないか。
大変ですねとシュナイゼル殿下を労う言葉を吐くと、何故か殿下に「やはり君は聡明だな」と褒められた。や、別に褒められる様な話じゃないから。単にそう言った事を〝知っている〟だけの話だから。
そう、自分はそう言った話を知っている。なのに……何だろう。最近そう言った情報が曖昧になってきている。
単にこの世界にきて色々あったからど忘れしたのだと思うが……なんだろう、そんな事を考えていると眠たくなってくる。
見れば時計も１２時を回っている。明日も朝早いから今日の所はこれでお終いにしようと思う。

◇

……一体全体、何がどうしてこうなった？　今朝まで自分は中華連邦のとある街で地道に情報収集に勤しんでいた筈。

切っ掛けがあったのは———そう、情報探しに一段落をいれようと昼食を摂る為に街の料理店に入ろうとした時、偶然を装ってやってきたナイトオブラウンズの二人、ジノ君とアーニャちゃんに出会った時だ。

この時に気付くべきだった。二人がただ庶民の味を満喫する為に街に繰り出したのではなく、自分を探して捕まえる為に来たのだと。料理店に一緒に入って満足気に食べているものだからこれで終わりなのだとすっかり油断した。

お礼に夕食は此方が奢ると言って聞かないジノ君、アーニャちゃんはひたすら写真を撮るだけで何もせず、自分はなされるがままに車に入れられ、半分拉致られた形で連れてかれた。

んで、そこで待ち受けていたのは満面の笑みを浮かべるシュナイゼル殿下。その顔に

コークスクリューブローを叩き込みたくなった俺は間違っているだろうか？

そして現在、結婚式が執り行われる朱禁城にて、自分は場違いと思いながら会場の隅っこで大人しくしております。

先程からジノ君が自分を呼ぶ姿を目撃しているが……やめて欲しい。これ以上自分を衆目に晒さないでくれ。

そんな自分の気持ちなど聞き入れて貰える筈もなく、ジノ君は今も自分を捜している。だが残念、今の自分はかくれんぼモードで人混みの中で身を隠している為、そうそう見つかる事はない。

呼んでいるジノ君には申し訳ないが、ここで自分は一人結婚式の披露宴を眺めていようと思う。

しっかし、普段は着ない所為かこの黒のスーツ、結構着づらいな。ドレスコードに引っ掛からないようシュナイゼル殿下御自ら手配したものらしいから悪いモノではない筈なんだけど……。

というか、朱禁城に入る前に着替えの部屋とか用意されたし……なに？　外堀埋められているのか俺？

しかもこの服、どうやら素材は超一級品のようだし、値段は怖くて聞けないが……高級車数台分とか言わないよな？

もし破いたり汚したりしたらどうしよう。そんな緊張感を持ったおかげで此方は服を汚さないよう常に気を張らなければならない状態。人とぶつかってジュースでもぶち撒けられた日には、自分の人生は借金街道まっしぐら間違いなしだ。

いや、シュナイゼル殿下がそんなセコい真似をするとは思えないが、それでも気になる所が庶民の性である。

はっ！　もしやシュナイゼル殿下はこれが狙い!?　庶民の感性を利用して自分の身動きを封じるなんてシュナイゼル……恐ろしい人！　――――うん、ただこれが言いたかっただけ、他意はない。

はてさてそんなこんなで時刻はそろそろ夕飯時、いつもなら宿屋でご飯を食べていただけに、今の自分は腹ペコ状態だ。

服にソースを付けないよう最低限マナーに気を付けながら一口パクリ。うん、美味い。流石は世界が注目する婚約の場だけあって出される料理も一級品だ。

……タッパーとかでお持ち帰りとか出来ないかな？　ワームホールにこっそり入れればバレないか？　そんな事を考えながら唸っていた次の瞬間、何やら人垣の向こうから騒ぎが聞こえてきた。

何だろうと顔を覗かせると、そこにはゼロと紅月カレンちゃんがシュナイゼル殿下に向き合う形で姿を見せていた。スザク君が割って入っている事から、どうやら彼等は呼

ばれていない客人らしい。
　自分も本当は呼ばれてないんだけどね！　おかげでスタッフの人達はてんてこ舞いだった事だろう。面倒をかけたお詫びにせめて問題を起こさないよう隅っこで気配を消していたのだけれど……何も問題起こしてないよね？
　……ていうか、今気付いたんだけど、この会場、ＺＥＸＩＳのメンバーが結構きているよね？　見掛けは会場のスタッフの格好に着替えているから今まで気付かなかったけど、ソレスタルビーイングの面々もチラホラ見かけるし、向こうではクロウさんが隙を見計らっては料理を摘まみ食いしている。もしかしてまだ借金を返済できていないのだろうか？
　折角の祝いの席だというのにゼロと出くわすとは、ホント今日は厄日だわ。と、そんな事を考えていると。
「――――では、私の代打ちの打ち手を紹介しよう。私の友人、シュウジ＝シラカワだ」
　気が付けば、いつの間にか皆が自分を見ていた。
　え？　な、なんぞ？

◇

人垣が割れ、その中心で悠然と佇む人物に、ソレスタルビーイングを始めとしたＺＥＸＩＳの侵入組は目を見開いた。

破界事変から名前として知るだけで、実際その姿を見る者は殆どいなかったＺＥＸＩＳ達。だが、今回衆目に晒された中で彼という人物を目撃する事になる。

〝シュウジ＝シラカワ〟エリア１１や暗黒大陸でその姿を言葉としてしか伝わらなかった人物。

そんな彼が今、人垣の中を堂々とした態度で歩き出し、シュナイゼルの横に立ち。

「殿下、私になにかご用ですか？」

「あぁ、いきなり呼びつけてしまって済まないね。頼みと言うのは他でもない。私の代わりに彼と一局打ってくれないか？」

「私が？　ゼロと？　……ククク、あまりお戯れが過ぎるのではないのですか？　シュナイゼル」

式場の全員が注目するなか、シュウジ＝シラカワのシュナイゼルに対する呼び捨てに周囲がざわめきだす。普通なら不敬の罪で極刑の筈なのに、当のシュナイゼルはニコニコと微笑むだけ。

まさか、本当にシュナイゼルとシュウジ＝シラカワは繋がっていた!?　知られざる事実を前にカレンは動揺が隠せなかった。

すると、ふとシュウジと目が合う。ジッと見てくる彼の瞳にカレンは負けてなるものかと睨むが、返ってきたのは――――。

「お久しぶりです紅月カレンさん。以前はエリア11で大変お世話になりました」

満面の笑顔と共に返される言葉、その一言に周囲の人間は更にざわめき立ち、ナイトオブラウンズの枢木スザクですら驚愕の顔をしている。

読めない。目の前の男の考えが何一つ理解出来ない。黒の騎士団の総帥とされるゼロですら、シュウジ＝シラカワの真意が読みとれないでいた。

今、この場を支配しているのはゼロでもなければシュナイゼルでもない。得体の知れない謎の男、シュウジ＝シラカワだった。

その２５

Ｊ月Ｃ日

どうにかゼロとのチェス勝負を乗り切った自分は、その後に起こったハプニングのドサクサに紛れて朱禁城を後にし、現在暗黒大陸に向けてグランゾンと共に海底を進んでおります。

今思い出しても冷や汗が出る。あの観衆の中で黒の騎士団の総帥ゼロと向かい合った時は緊張感で頭がどうにかなりそうだった。その所為でチェス勝負も良く覚えてなかったし、気が付いたら自分の方が負けそうになっていた。

もうね、やっちまったなと思ったよ。しかもあの時の周囲のどよめいた声によると自分の方からああいった状況を作り出してしまったようだったし、それまでは互角の勝負だったらしいけど……その時は色々終わったなと覚悟したよ。皇族の面子は丸潰しにしてしまうわ、周囲からの視線がとんでもなくイタいわで、もう溶けて無くなってしまいたい気持ちだったわ。

けど、奇妙な事にそれ以降ゼロは何もしてこなかったんだよね。あと一手駒を動かせ

ば向こうの勝ちでスザク君を獲得出来たのに、一向に駒を動かす素振りを見せなかった。

もしかして、自分が誤って王の駒を下げたのを理解してくれたのかな？　もしそうならゼロって意外と気配りの出来る子？　ふとそんなことを思い、その時は周囲の空気を壊す覚悟でやり直しを要求した。

だが、その次の瞬間突然乱入者が登場、星刻っていう中華連邦の武官の人が今回の婚儀に異議を申し立てると同時に、大宦官に反旗を翻した。

混乱する披露宴、突如剣を以て乱入してきた星刻にその場は混乱の渦に叩き込まれるが、二人目の乱入者によって場はより混迷としたモノとなってしまう。

五飛君。ごひじゃないよ？　ウーフェイ君ね。その彼も星刻と一緒に大暴れするのだからもう大変。大宦官に仕える武官程度では相手にならず、出席していた貴族の皆さんは大宦官達に避難誘導され、自分もそれに紛れて避難する事にした。

シュナイゼル殿下はナイトオブラウンズと一緒にいるから大丈夫だろうし、彼の事だからゼロの考えを予測して既に行動に移している事だろう。

流石に庶民の自分が殿下と一緒に戦場に出るのは不味いので、これを機に朱禁城から離脱。着ていたスーツも用意された部屋で着替え直してそこに置いてきた。

念のために確認したが、汚れた所や破けた箇所は見当たらない。一応臭いを消すため

にファ〇リーズをしてきたが……あったのねファブ〇ーズ、それが一番驚いたよ。

そして朱禁城から離れて街中を歩いていた時、至る所で

そして朱禁城から離れて街中を歩いていた時、至る所でクーデターが起こっていて、詰め所等が押し掛ける人達で溢れかえっていた。

何でも大宦官のこれまでの悪事が全て暴露され、それを聞いていた市民達が怒りを爆発させ、予め反旗を起こす予定だった人達と一緒に各政府機関に押し入っているのだとか。しかも主に怒りを露わにしているのが天子様についての事ばかり。

やれ「天子さまマジ天使」、「天子さまは愛でるモノ」、「イエス天子様！　ノータッチ！」、「天子さまペロペロ」など、天子様を替えのある駒代わりと口にした大宦官はこの上なく怒りを買ったらしいのだ。

……まぁ、天子様は可愛らしいと思うよ？　皆が怒るのも良く分かるし理解も出来る。けど、ソッチは駄目だろう。特に最後の方、絶対に狙っているだろう。

もしかして星刻って人もそんな類の人だったりするのかな？　流石にそれはないと思いたいが……兎に角、大宦官は討たれ、新たな時代を迎える事になった中華連邦、その行く末に期待と僅かな不安を抱きながら今日はこんな感じで終わりたいと思う。

そういえば朱禁城から出て行く途中刹那君を見かけたけど……彼、大きくなったねぇ。普通一年やそこらであんなに成長するのは有り得ないけど、普通あんなに育つも

のかね？　最近の子は育ち盛りなのかな？

Ｊ月Ｌ日

さて、今回は何故自分が暗黒大陸に向かうのか改めて説明しようと思う。尤も、その理由はごく単純で明確な話だが、やはりこういうのは細かく書いた方がいいと思い、この日記に記そうと思う。

理由は破界事変の時、グレン団のカミナが敵の奇襲により命を落としてまだ日が浅かった頃。落ち込んでいたシモン君を立ち直らせた少女、ニアちゃんからのある一言が原因だったりする。

『お父様が貴方を探してましたよ』と、蒼のカリスマ時の自分に言ってきたのを日記を読み返している内に見つけたのが、今回の目的地を選んだ理由の一つだ。

螺旋王ロージェノム。ニアちゃんから言われた当初は厄介事は勘弁と避けて通ってきたが、今更になって気になったのが本音である。

尤も、ロージェノムは既にシモン君達が倒したらしいから話を聞くことは出来そうにない。けど、もしかしたらロージェノムと一緒にいた獣人がまだいるかもしれないので、取り敢えず今はそれに希望を託すことにする。

それに、今回行き先を暗黒大陸にしたのはまだ他に理由がある。その理由とは……ヨーコちゃんや黒の兄妹達の事に関してだ。どちらもマトモに別れも言えず、無用な心配をさせてしまった事がある。特にヨーコちゃんに付いては助けを呼びに行くと嘘を吐いてそれっきりだ。

リモネシアで復興に勤しんだ日々の合間、時折思い浮かぶ彼等の事。謝りたいと当時は思ってもそれを実行に移すだけの度胸はなかった。

だから今回はロージェノムの事はついでとし、暗黒大陸での旅路は心配をかけた皆に謝罪をしに行く旅にしようと思う。

今は時空震動の影響で再び閉ざされた世界になっているが、そこはグランゾンの力でこじ開けようと思う。当然騒ぎになるだろうけど……そこは自分が招く出来事だから上手くやっていこうと思う。

取り敢えず今日は近くの洞窟で一泊しようと思う。下は岩でゴツゴツしてて痛いが、こんな事もあろうかと荷物の中に寝袋も持っているので、取り敢えず眠ることは出来る。

何だって準備がいいって？　それは当然、何せ先日買ったばかりの新品だ。暗黒大陸に次の行き先を決めた時、事前に買っておいたのだ。

当時、暗黒大陸にいた頃は寝袋もなくそのまま岩の上でゴロ寝していたから、何だか

懐かしくなる。懐かしいと言えばその頃は毎晩キタンさんのイビキが五月蠅くて難儀した記憶がある。

早く会って謝り、またあの頃みたいな関係に戻りたいなと思いつつ、今回は終わりにする。

Ｖ月@日

ビビった。今日は朝から驚きの大連発の日だった。外からの轟音、爆音に目を覚まし、洞窟から出てきて見れば、なんと暗黒大陸を囲んでいた時空の壁が綺麗さっぱり無くなっていたのだ。

しかもその時空の壁があったとされる近くにはＺＥＸＩＳと……何だろう、インペリウムの時とインサラウムの時に見かけた白い機体の黒バージョンが対立し、更にはインペリウムの母艦であるグレートアクシオンが背後に控えていた。

確かグレートアクシオンってＺＥＸＩＳが破壊したんじゃなかったっけ？　そんな事を寝ぼけ眼で考えている内に巨大戦艦と白かった黒い奴――ややこしいから黒い奴で――は何がしたかったのかそのまま何処かへと消えていき、ＺＥＸＩＳ達もその場から動こうとしない。

これをチャンスと見た自分は破界事変の時と同様一番乗りで暗黒大陸へ足を踏み入

れるのだった。

途中、やたら手入れされてた農園とそこから野菜をちょろまかそうとしたティンプとモミアゲ、あと変なオッサンの三人を見かけたので、一番乗りをする代わりにコイツ等を撃退してやった。

何をしたって？　背後から近づいて脅しを何回かやっただけ、大した事はしていない。しかしあのおっさん、強面の割には結構小心者というか……カン＝ユーだったか？

何だか親近感が湧いた。

自分も結構ビビりだからね。何となくそんなシンパシーを彼から感じた。

V月β日

暗黒大陸を旅して三日、遂に俺はグレン団のある人物と遭遇した。その人はカミナシティから遠く離れた小さな孤島、コレハナ島という島にある学校に教師という形で赴任していた。

その人物の名は――――ヨーコ＝リットナー……いや、今はヨマコ先生と呼んだ方が適切だろうか。

時空震動で外界から切り離されたこの大陸。俺達のいた世界では一年しか流れなかった歳月が、ここでは十年もの時が流れていたのだという。

俄には信じられないが、先程も述べたカミナシティがその証拠。十年もの歳月を掛けて嘗てロージェノムの城だった場所は人間と獣人が共存するカミナシティとやらに姿を変え、そこに地球連邦とは別系統な新政府が誕生していた。

シモン君はそのカミナシティを建てた人物で、今や大統領の地位にいるお偉いさん。キタンさんや当時の大グレン団の面々もそこで政府に身を置き、それぞれ与えられたポストで日々の平和を守っているのだとか。

まだそのカミナシティには行っていないので何とも言えないが、ヨーコちゃん曰く堅苦しそうだ。元々が自由奔放な日々を送っていただけに型に嵌まった生活はイヤなようだ。

カミナシティを出て、暫く奔放の日々を送っていたらこの島と島の住民に出会い、様々な経緯があって現在のように教師をする事になったという。

……十年か、長いなぁ。ほんの一年前までは妹みたいな娘だと思っていたのが、再会したら自分より年上の立派なレディになっていたのだから、寂しいような嬉しいような複雑な気分だった。

んで、昔話もそこそこにしていよいよ本題。俺からしたら一年前、ヨマコちゃんにとっては十年前の出来事だ。助けを呼ぶと言っておいて実は逃げ出した自分を許して欲しいと、それが自己満足だと承知しながら謝罪したのだが……彼女は全く取り合って

くれなかった。
心の何処かで期待していた。ヨマコちゃん……いや、ヨーコちゃんは活発な娘だからきっと気にも留めないで水に流してくれると、無意識の内に思いこんでいた。
自分の謝罪すら耳にしないで、彼女は無情な張り手一発だけ自分に向けて放ち、その後の彼女は何も言わずに校舎に戻り、職務を続けた。
残された自分はと言うと近くの民家に宿泊させて貰う事にして、腫れた頬と頭を冷やしながら考えて、もう一度明日話をする事にした。
自分は彼女を裏切った。幾ら月日が経とうが彼女の中ではその事実は変わらない。だったら自分はもう一度彼女と向き合わなければならない。
その為には自分は何度もぶたれようと思う。そして、自分の全てを彼女に話そうと思う。あの時、自分は何をしていたのかを……。
取り敢えず今日の話は以上。決意が鈍らない内に早いところ寝てしまおうと思う。
しっかし、ここの家の人達はなんというか……随分アレな一家だったな。確か満艦飾とか言ったっけ？　堂々と闇医者名乗るとか、普通に有り得ないだろ。車直しただけで泊まらせてくれたし。
いや、別にいいんだけどね。悪い人には見えないし……言動はアレだけど。つーか、普通に車があった事が何気に一番驚いた。

◇

昨日、十年ぶりにアイツと会えた。

〝シュウジ＝シラカワ〟十年前にリットナー村に突然現れた外からの人間。当時村の皆はガンメン達の回し者なんかじゃないのかと無駄に警戒していた事を思い出す。

彼は、外から来たと言うこと以外は特に私達と変わらない普通の人間で、当時の私は自分達以外に人間がまだ大勢居ることに感激し、感動した。

歓迎を込めて狩りにも連れて行ってあげた時もあったが、最初の頃は狩りの一つもできず、よく泣き言を口にしていた気がする。激励代わりにもう少し鍛えるよう発破をか

けたつもりが、余計に落ち込ませた事も十年経った今も覚えている。
アイツは良く私達を驚かせていた。何せいつもはリーロンに任せっきりだったライフルの手入れをシュウジの奴が行った時はいつもより精度が上がっていたのだ。おかげでリーロンも自分以外で機械に詳しいシュウジと仕事の合間によく話をしてたっけ。
狩りの時に使用する罠も、木々を使って雨宿りする程度の簡単な家造りも、アイツは瞬く間に覚えて更にそれを昇華させた。
中でも彼の作る料理は絶品で、村の皆も彼が手料理を振る舞う度に小躍りするほど喜んだ。当然私も嬉しかった。……女の私より美味い料理を作れることに少し嫉妬してしまったりしたのも、今はもう良い思い出だ。
……一つだけ気になるのは十年前、ガンメン達が複数体で襲ってきた時だ。彼はその時村の皆を連れてくると言ってそれ以降行方を眩まし、当時の私達は途中で何かあったのではないかと心配で村の皆と一緒に辺りを探しにいったものだ。
その後、キタンやキヨウ達黒の兄妹達と行動を共にしていたりと色んな所で彼の名前を耳にするから、取り敢えず無事なのだと知り安心した。
勿論最初は怒りもした。自分達を見捨て、一人逃げた彼に私を始めとした村の皆は激怒したものだ。けど、リーロンだけは違った。リーロンは村の近くで彼を見たというのだ。

恐らくは村のある谷と別の谷を間違えたのだろう。自分達もガンメン達の目から逃れる為に、同じ地形が複数ある土地を選んで数日毎に移動したりしていた。
村の者でしか分からない印の上に、狩りの帰りは良く一緒に帰ってたから教えるのも忘れていたし、リーロンは間違えるのも当然だと言っていた。
だから当時の事については私達にも非があるのだ。それ以降皆はシュウジの事を悪く言う事は無かったし、寧ろ彼は私達に多くのモノを残してくれた。機械の整備の仕方も分かり易く教えてくれたし、私に料理を教えてくれたりもした。
だから今度会ったら謝ろうと思ったのだが、結局この日までそれを口にする事はなかった。
十年前と変わらない格好だった。髪だけはうっすらと紫掛かっているように見えたけど、それ以外は十年前と同じ、助けを呼んでくると言ったきり姿を見せなかった彼が、私の前に現れたのだ。
出会ってすぐに〝ちゃん〟呼ばわり、相変わらずの年下扱い。こっちはもう十年も時間が経って、年もこっちの方が上なのにアイツは変わらず私を妹のように扱った。
しかも生徒達が見てる前で綺麗になったねなんて口にするモノだから思わず手が出てしまった。見る見る落ち込んでしまう彼に私は何も言えず、逃げるように校舎に戻る事しか出来なかった私は、端から見れば酷い女に見えるだろう。

彼は近くの民家に宿泊しているという。小さな村だ。こういう話はすぐ住民の皆の耳に入るから厄介だ。

きっと、明日も来るのだろう。いや、来て欲しい。今日の事も謝りたいし、此方の事ばかり話して彼の事を何も聞いていない。

ちゃんと謝ろう。そしてちゃんと話をしよう。シュウジ兄さん。だらしなくて、ヘタレだけど、何事にも一生懸命なシュウジ兄さん。

ヨーコはあれから大人になりました。そんな私の話を聞いて欲しくて、貴方の話が聞きたくて……だから、きっと来てくれるよね？

ダヤッカ？　彼は兄というより……お父さんかな？　もしくは叔父さん？

リーロンは……お母さんだったり？

そういやダヤッカって結婚したんだっけ？　近い内に顔出した方がいいのかなぁ。

◇

その日、いつもと変わりのない朝に私は気が抜けていた。
ガンメン。螺旋王との戦いで散り散りになった奴の元配下達が、村の食料を狙ってガンメンに乗って押し寄せてきたのだ。
子供達は今、安全な所に避難して貰っている。私は手にした愛用のライフルを手に奴らを蹴散らそうとするけど……。
「駄目だよヨーコちゃん。君は戦ってはいけない」
いつの間にか私の後ろに立っていた彼が、私の道を遮るように前に立つ。
「……何のつもり？」
「今の君は教師だ。先生の君が暴力を振る様を生徒達に見せるのは忍びない。ここは、一つ俺に任せて貰えないか？」
「何を言っているの！　十年前にも似たような事を言って貴方は逃げたじゃない！　私は生徒の皆を守る義務がある。そこを退いて！」
「……確かに、俺は逃げた。そう言われても仕方がない事をした。けど――いや、だからこそ俺は今、本当の事を君に見せたいと思う」
そう言って彼は〝奴〟を出現させる。幾度となく私達の前に現れては窮地を脱する

手助けをしてくれて、けれどそれ以上に謎めいた存在である奴を……魔神が、何もなかった筈の空間をねじ曲げて私の前に姿を現した。
「そんな……アナタ、だったの？」
私は言葉を失った。あの日、私達を見捨てて一人逃げたと思っていた彼が……。
「さぁ、君は生徒の所へ向かうといい。露払いは俺……いや、私が引き受けた」
仮面を被ると彼は魔神に乗り込み、ガンメン達を瞬殺。その後は私に何も言わず、言い訳もしないで空の彼方へと消えていった。
……どうして、何も言わないのよ。
「シュウジ……」
消えていった魔神。彼が飛び立った方角へ向かいながら、一言呟く事しか今の私にはできなかった。

その後、コレハナ島の女教師ヨマコはあることを決心。一時的に教師活動を停止。島を後にする事になる。
旅立つ前に彼女の残した一言にはこんなメッセージが残されていた。

『説教してやらないといけない相手が出来た。ちょっと出かけて風穴開けてくる』
と。

その２６

Ｖ月Ｇ日

先日、勢い余ってヨーコちゃんに正体を明かしてしまった自分だが、これはこれで良かったのではないかと思う。

幾ら言葉で取り繕っても、あの日自分が逃げたという事には変わりない。実際あの後すぐ逃げたしね、周りの制止の言葉を聞かずに……。

ヨーコちゃんの言うとおり、俺は嘘つきだ。だからあの日何をしていたのか真摯に伝えるべきだと思いあんな事をしたし、後悔もしていない。

それにこれは勘だが、彼女は人の秘密をペラペラ喋る人間ではないと思う。今後もしヨーコちゃんがＺＥＸＩＳの人達と合流し、参加しても自分の事は秘密にしていてくれるだろうと思う。

根拠はないが……しいて言うなら彼女が生徒の皆に慕われている事かな。村の人達からも好かれているみたいだし、裏表の無い人で彼女の持つ明るさが皆を、村を元気付けている。

そんな彼女なら喩え蒼のカリスマの正体でもおいそれと誰かに話すことはないと思

う。都合の良い言い方だが、自分はそんな彼女を信じている。
もしヨーコちゃんがＺＥＸＩＳの人達に自分の正体を話すとしても、別にそれはそれで構わない。その時は情報が出回る前に自分がグレイス＝オコナーとそれに連なる連中を叩けば良いだけだ。
さて、過去の話はこれくらいにして、次は現在の話をしよう。あの後コレハナ島から離脱した自分はカミナシティに向かい、新政府に勤務しているとされるキタンさん達の行方を追った。
テッペリン自体が元々大きいだけにカミナシティも規模の大きな街並みとなっており、最初こそは彼等を探すのは困難を極めると思われたが、意外とあっさりある人物と出会した。
キタンさんだ。公園のベンチでカミナ像を見上げていた所を見つけ、久し振りと互いに挨拶を交わしてジュースを奢って貰った。
本人は休憩時間だと言っていたけど……どうみてもサボりなのだが、キタンさんのプライドの為に黙っておくことにする。一応俺の恩人さんだからね、一応は。
公園で色々話していた後、キタンさんは紹介したい連中がいると言われ半ば無理矢理自分を連れていき、辿り着いた一軒家の中へ入ると、懐かしい顔ぶれが揃っていた。
ダヤッカさんとキヨウさん、そしてキヤルちゃんだった。三人とも自分の顔を見るや

否や、揃って驚きの声を上げてくれてその後歓迎してくれた。
ダヤッカさんとキョウさんの二人は結婚し、既に子供を身ごもっていた。それだけでも驚きなのに、キヤルちゃんに至ってはとある大手ＩＴ企業の社長兼カミナシティの売れっ子アイドルとして活躍しており、この家もダヤッカさん達が結婚する事を記念して贈ったものらしいのだ。
当然自分は驚いた。けど、それ以上に十年という歳月を改めて思い知らされ、少しナーバスにもなった。そんな自分の気落ちに反応したのか、次の瞬間からキタンさんの痛烈なローキックが俺のケツに炸裂し、こんなめでたい日にしょぼくれるなと怒られた。
その後、成り行きでダヤッカさん達夫婦の家で宴会騒ぎを起こすのだが……いや、俺は断ったよ？　夫婦水入らずな家庭に自分の様な余所者がいるのは空気を読まずにも程があると思ったのだが、ダヤッカさんとキョウさんは別に気にするなと進んで泊まるように言ってくれた。――良い人過ぎるだろこの夫婦、別の意味で不安だわ！
しかもその後の自分の謝罪など軽く流してしまうし、彼等が細かいことは気にしない人間だというけれど……これはこれで複雑な心境だ。ヨーコちゃんの時は頬を叩かれるまで怒られたのに――や、気にしないというのなら別にいいんですけどね。
キヨウさんの料理も美味しかった。何でも自分の料理を真似してみようかとアレコ

レ試していたようなのだ。十年経った今でも自分の事がこうして覚えていられるのは何とも感慨深いものだ。

その後、皆と夜遅くまでどんちゃん騒ぎ（主にキタンさんがだが）になり、夜更けに火照った顔を冷まそうと外に出た時、キヤルちゃんから衝撃的な告白を告げられた。『私の秘書兼マネージャーになれ』。そう口にした彼女の目はこの上なく真剣なモノだった。

嘗て、俺は黒の兄妹の子分だった。あの頃の自分は毎日が大変で――今もだが――とても未来の事を考える余裕などなかった。もし、あの時のまま自分が黒の兄妹と共に行動していたら、一体どんな未来を迎えていたのだろう？　この暗黒大陸の中で十年も過ごしていたら、きっと自分の中の何もかもが変わっていたに違いない。

ダヤッカさんの様に結婚していたりするのか、キヤルちゃんの秘書やマネージャーになって一緒に会社興しと芸能業界に精を出していたのか、キタンさんと一緒に新政府で働いていたのか……可能性の数だけ未来が視えてしまう。

キヤルちゃんの誘いは嬉しかった。一瞬揺らいでしまったのもあったし、それもいいかもと思う自分がいたりもした。

けど、駄目なのだ。今の自分にはやるべき事がある。それを片付けない以上、俺は中途半端な答えを出すわけにはいかない。

キャルちゃんの誘いを……断った。彼女の目を見て、逸らさないでそう応える事しか、自分には出来なかった。

どうして、と。そう声を震わせる彼女にやるべき事があるとだけ答えた。

歯を食いしばった。自分の事をそこまで買ってくれていたキャルちゃんを裏切る形で答えてしまった俺は、ヨーコちゃんの時の様に殴られるのを想定し、歯を食いしばって耐えようとした。

が、返ってきたのは掠れた声と……見事なまでのハイキック。いっそ惚れ惚れするような痛烈な一撃に俺は星になりかけ、一瞬川の向こうでカミナの兄貴とソレスタルビーイングのスナイパーさんが手を振る姿を幻視した。

その後、自分はキャルちゃんに介抱され、取り敢えずはこれで許してやるとの事。……正直、勘弁して欲しかった。またあのような痛恨の一撃を受けてしまったら、今度こそ自分もカミナの兄貴と同じ所に逝ってしまう。

書いてみて思ったが、何気に今回の一件が一番命の危機に瀕してたんじゃないのか？

ガイオウとの戦いの最中にだってこんな事は起こり得なかったんだけど……止めよう。これ以上考えると自分の中の何かが崩壊してしまいそうで怖い。

兎も角、改めて許しを得られた自分は明日の事を少し考えながら眠ろうと思う。あと、顔を見せていない相手はリーロンさんだけなのだが、あの人は政府の地下にある研

究施設から抜け出さず、日々研究の毎日なのだという。
流石に政府の極秘機関には入れそうにないし、リーロンさんへの顔出しは諦めるしかないか。キタンさんは何とかしてやると言ってくれたが……もしかして、リーロンさんを呼び出してくれるつもりなのだろうか？
確かにそれだと有り難いが、リーロンさんの仕事を邪魔するようで気が引ける。無理だったら良いですよと予め断っておいたが、キタンさんは任せろの一点張りで此方の話を聞こうとしない。
酒で酔っているキタンさんを眺めつつ、明日の事は結局明日に持ち越す事になり、自分も今日はもう休むことにする。
それにしても、キヤルちゃんは未だに子分が欲しくて仕方ないのか。大企業の社長さんとかアイドルを兼任していたりと色々凄くなってはいるが、そこら辺は変わってなくて何だか安心した。

Ｖ月Ｙ日
今日は、少し大変な出来事が起こった。まず最初にカミナシティのシモン君が戦闘拡大の罪として逮捕され、今日の夕方頃刑務所へといれられた。
理由としては時空震動によって隔たれていた次元の壁が消えた事によって暗黒大陸

へと進出してきたアロウズが武力を駆使し、力ずくで従えようと強攻策を取り、カミナシティに攻撃を仕掛けてきた。

これに怒りを覚えたシモン君はロシウ君の制止を振り切って戦闘に出てこれを撃退。ＺＥＸＩＳ達も既にこの街に来ていたらしく、彼等と共に後に出てきたインベーダーをも駆逐、ひとまず脅威を拭い去る事は出来た。

けれどカミナシティで総司令官という立場に身を置いたシモン君が、勝手な行動を取った事で市民を危険に晒したという事でロシウ君はシモン君を逮捕。十年前とはまるで別人な彼と、彼に付き従うキノンちゃんの変貌ぶりに唖然とした。……俺のことも気付いていた筈なのに無視されたし。

シモン君の事も気掛かりだが、今は自分の方を専念させて貰う。何せあのロージェノムからグランゾンに関する話を漸く耳にする事が出来たからだ。

事の経緯はこうだ。朝眠っていた自分を突然叩き起こしに来たキタンさん。何事かと思い訊ねてみると、これから自分をリーロンさんの所に連れて行くと言い出したのだ。

政府の極秘機関の場所なのに自分みたいな一般人が入っても良いのかと聞いても、「俺は黒の兄妹の長男キタン様だぞ！」の一言でねじ伏せられる。

そんなの関係ないんじゃ……そんな自分の疑問などお構いなしにキタンさんは自分

を連れてテッペリンの中を進み、地下へと進む。
その途中様々な身分審査を警備の人に尋ねられたりしたが、キタンさんは「俺の子分だ！」とだけ言って全ての検問をこじ開けてしまう。無理を通して道理を蹴っ飛ばすというのがグレン団の掟にあったようだが、キタンさんの場合理不尽を押し付けてねじ伏せている感がする。
兎も角、そんな経緯があって遂に自分は政府の地下の研究所へ足を踏み入れることに成功するのだが、そこにはリーロンさんの姿や他の職員の人達の姿も見当たらず、あるのは筒状に覆われた何かがあるだけだった。
キタンさんもコレには予想外だったのか、珍しく狼狽していると……その時、緊急警報のサイレンが鳴り響いた。先程述べたアロウズの襲来である。
キタンさんは取り敢えずここは安全だからお前はここに居ろと言い残し、一足早く地上へと戻っていった。その間自分もそこらの机の下に身を潜めて置こうかと思われた時、それは起こった。
地上の戦闘の影響の所為か、突如筒状に覆われたソレは殻が割れた様に開かれ、中から緑色の液体の混じった試験管らしきモノが出てきたのだ。
そして、その中にあったのは……生首。しかもそれは螺旋王ロージェノムのモノだった。いや、正しくはロージェノムの細胞から作り出されたロージェノムのクローンと

言った方が正しい。

そんな彼は自分を見るなり、開口一番にこう言った『お前は何者だ』と。当然何を言っているのか理解出来なかった俺だが、次に彼が口にした言葉で何が言いたいのか理解した。

〝魔神グランゾン〟アレは元々別の人間が所有していた筈の機動兵器であり、お前が持ち得る筈のないものなのだと、彼は言った。

当然、自分は問いただした。シュウ＝シラカワ博士を知っているのかと、彼の居場所の有無を問い詰めたのだが、彼はそれらに一切答えず、代わりに奇妙な単語を残していった。

〝黒歴史〟そして〝黒の叡智〟片方は自分でも知っているモノだが、どうやらこの場合意味合いが異なるらしい。黒の叡智に関しては初めて知る名称だから自分としては訳の分からない話である。

もっと彼から話を聞きたかったのだが、それ以降彼は語る事なく、電源が落ちた様に眠りに付いた。肝心な話が聞けず、どうしようもなくなった自分は研究所から逃げる様にその場を後にした。幸いアロウズ達やインベーダーの襲来で警備は手薄となり、騒ぎに乗じてテッペリンから抜け出す事が出来た。

……今、俺はダヤッカさん達の家の前にいる。後ろにはＺＥＸＩＳの母艦の一つであ

るマクロス・クォーターが浮かんでいる。恐らくはロシウ君と今後の事について話があるのだろう。ダヤッカさんやキャルちゃんが見当たらないから二人もマクロスの所にいるのだろう。

自分も、これを最後に暗黒大陸を後にする。結局はシモン君と話をする事は叶わなかったが……何、彼の事だ。きっと今回も皆と一緒にこの危機を乗り越える事だろう。それに、彼が知る俺は蒼のカリスマの方の俺だ。シュウジ＝シラカワとしての俺が話しに向かっても、彼を混乱させるだけ。

仮に蒼のカリスマの姿で会いに行ったら、余計に警戒させてしまう事だろう。それは此方としても望む所ではない。

……また、別れの言えない別れになってしまうな。けれど悲観に思うことはない。今回の旅で情報は得られたし、次の目的地もそろそろ決めようと思う。

〝神聖ブリタニア帝国〟あそこも中々胡散臭そうな所だが、これ以上の情報を求めるのなら少しばかり危険な道も覚悟しなければならないだろう。

最悪の場合、蒼のカリスマとして世界と戦う事も視野に入れるべきなのかもしれない。ここ最近色んな所で騒ぎが起きてるから、そろそろ……覚悟をすべきなのかもしれない。

〝黒歴史〟そして〝黒の叡智〟今後の博士捜索の鍵はこれらが主軸になりそうだ。

◇

「……あら？　今、誰か居たような気がしたのだけれど、気の所為だったかしら？」
玄関の向こうで人の気配を感じ取ったキヨウは開けた玄関先で首を傾げる。その時目に入った、足下に落ちていた一枚の紙切れを手にし、途端に頬を緩めて微笑みを浮かべた。
そこへ……。
「キヨウーーーーっ！」
「あらヨーコ、久し振りね。元気だ――」
「ええお陰様で元気よキヨウもダヤッカとの結婚おめでとう＆妊娠おめでとう末永くお幸せにあとそして今ここにシュウジのバカがいなかった!?」
「え？　ええ、ありが……とう？」

怒濤の気迫で迫ってきたヨーコに戸惑うキョウ。ゼハゼハと息を荒げる彼女にどうしたのかと疑問を抱くキョウ。そんな彼女たちの背後からダヤッカ達が後を追いかけてきた。

「どうしたんだヨーコ、アイツがここに来ているのがそんなに意外か？　確かに奴とは十年ぶりの再会で喜ばしいと思うが、何もそこまで殺気立たなくてもいいんじゃ……」

「違うわよ！　いい！　アイツは、アイツはねぇ！　～～～～っ!!!」

言えなかった。今ここで蒼のカリスマの正体をバラしたら彼を敵視するＺＥＸＩＳのメンバーにも知れ渡ってしまう。彼らを疑う訳ではないが、そこから更に情報が漏れたりしたら世界中がシュウジを敵視して、指名手配にでもされたりしたら今度こそ彼の居場所が世界からなくなってしまう。

唯でさえ自分達を守ってくれていたという大きすぎる借りがあるのに、そんな事をしてしまったら彼に合わせる顔がなくなってしまう。

歯痒く思いながら口を閉ざすヨーコ、そんな彼女を訝しげに首を傾げるダヤッカとキョウだが、キョウの手にした紙切れを見てヨーコはふと我に返る。

「……所でキョウ、それ何？　手紙？」

「あ、これ？　ふふ、彼ってば中々多才の持ち主なのね。私びっくりしちゃった」

「何々？　へぇ～。アイツこんな才能があったのか。確かに頭良さそうだものなぁ、手

先も器用だし」

「一家に一人は欲しいわね」

紙の内容を見て微笑ましく笑う夫婦、何だと思い横から覗き込んだヨーコは次の瞬間、夫婦とは対照的な憤怒の形相となった。

『また来ます』そう一言書かれた文章とデカデカと描かれたダヤッカ達の集合の絵、まるで写真の様にリアルに描かれた内容に誰もが微笑む場面だが。

〝ヨーコ〟だけその絵に描かれていなかった。キタンを始めとした黒の兄妹、ダヤッカやリーロンまでもがいるのにその中にはヨーコの姿はなかった。

(あんの紫バカ！　今度あったらあの胡散臭い仮面をひっ剥がして脳天に風穴開けてやる！)

やや八つ当たりな怒りだと思いながらも、ヨーコは新たに決意する。とても生徒の前に出す形相ではなかった。

怒りを露わにするヨーコ、丁寧に描かれた絵に微笑む夫婦。そんな彼らの姿を遠巻きに一人の少女が空を見上げて笑っていた。

(今回は逃しちゃったけど、次は覚悟しときなよ。アンタを私の子分にする事、まだ諦めちゃいないんだからね)

チャームポイントの八重歯を見せて微笑む少女。風が彼らを撫でるように優しく吹

いた。

◇

「えっきし！　何だ風邪かぁ？　一人旅の風邪は厄介なのに参ったな。風邪薬どこへやったっけ……」

とある空の下で鼻水を垂らした青年がいたとか。

因みに、ヨーコの〝ヨマコ先生〟として描かれた絵がとある民家に置きっぱなしになっている事に気付くのは、今回の旅が終わってからだったそうな。

その27

V月I日

今日、ブリタニアに向かう途中で面白い人と遭遇した。〝ランド＝トラビス〟と名乗る暑苦しい笑顔が印象的なその人はビーター・サービスと呼ばれる修理屋で、時空震動に巻き込まれてこの世界に訪れた来訪者だと言うのだ。

出会った経緯もそんな修理関係の話で、ブリタニアに向かう列車に乗り、優雅な旅の最中に列車が突然トラブルを起こして運行停止。数百人の人々が立ち往生した時、そこに彼が獅子を模したスーパーロボットと共に現れた。

手頃な料金で直してやると列車の運転手の人と交渉、普通ならば専門の人に任せる所なのだが、その専門の人が此方に到着するのは三日以降になりそうだったので渋々彼の申し出を了承。最初こそは彼に任せてもいいのかと大勢の人々が不安に抱いた事だろう。

けど、彼の鮮やかな手並みと体格からは似合わない繊細な手捌きが、自分を含めた乗客達の度肝を抜いた。素人の人にも分かるほどの巧みな手の動かし、工具を操る巧妙な手の動きやボルトを締める力強さは最早芸術の域だ。人は見かけによらないと改めて

実感させられた。

助手のメールちゃんという女の子もランドさんの的確な指示で動き、時には事前に工具を取り出したりと見事に息の合った活躍を見せてくれた。

このまま行けば無事列車も動かせそうだと安堵したが、少しここで問題が起きた。何でも列車が止まった原因は電子配列盤に異常があり、それの影響で列車は止まったというのだ。

脱線させないよう列車を操った運転手の人の操縦の腕も見事だし、原因を短時間で見抜いたランドさんも凄い腕の持ち主だと思う。彼が今まで行っていたのは緊急停止の際に歪んだ車輪と機関部の応急処置で、しかも原因の配列盤の事はもっと前から分かっていたらしい。

ただ、普通の電子配列盤なら兎も角、今回この列車に施された電子機器はこの世界に来たばかりで、詳しくは知り得ないランドさんだと修理の時間が長くなりそうなのだという。

下手すれば丸一日掛かるかもと言われ、多くの乗客が肩を落とした時、自分が力になれるかもと思って手伝いの名乗りを上げた。最初こそは大丈夫かと心配されたが、こういう工学は自分も最近覚え始めているので大丈夫だと返し、作業は再開した。

ランドさんは自前の機体を使って列車の駆動部を整備、一方で自分は配列盤の方を見

ていたのだが、すぐに原因が分かり作業は捗った。
この電子配列盤、確かに中々のもので新品だが、肝心な最適化を済ませておらず初期設定のままなのだ。運転していた人は昔ながらのベテランさんで、その人に聞いてみると、こんなシステムが施されていたのは聞いていないと言うのだ。
そのシステムというのは全自動システムというもので、言うなれば発進から停止、ダイヤル通りの運行など、今まで人がやっていたものを機械が自動で行うという代物なのだ。
そんなモノが搭載されている事など露ほども知らなかった運転手は突然起こった急停止に驚愕し、急いで自然停止させるよう手腕を発揮、見事列車を被害最小限に押し留めたのだ。
……なんというかまぁ、そんなシステムを積んだ所為で脱線を起こし掛けるとか、本末転倒な気がする話だ。しかも運転手の人に教えていないとか、それが職務怠慢のレベルでは済まない大事故に繋がると何故分からないのだろう？
兎も角、その後自分は配列盤の異常を直し、その際に乗客の一人であるとある会社員からノートＰＣを拝借し、序でにあるプログラムをこのシステムに送り込んだ。
それも手動システム。単に全自動から手動に変わるという簡単なシステムだが、これを本来全自動しかなかったシステムと連結させて自動と手動、二つの動かし方を可能と

した列車に昇華させることが出来た。
尚、自動システムの方も少しは手を加え、状況に無理に合わせるのではなく、的確に適応した行動を取れるトレースシステムを投入。簡単に言えば新人の人からベテランの人に合わせて幅広く応用の利く補助輪の様なものだ。
ベテランさんからはその操縦技術を学び、新人さんにそれを最適に教え伝える。謂わば列車の教室だ。時間が無くてこの程度の簡単なプログラムしか造られなかったが、今度この列車に乗るときはもっと精度の高いモノをプレゼントしようと思う。
けど、自分のやり方はとても褒められるものではなく、これでは強盗みたいなものなので、自分は今まで使っていた全自動システムもバックアップとして取ることにした。
その際例の会社員の人からメモリーカードを貰ったのだが……何故か崇められた。何で？　しかもメモリーもタダで譲ってくれたし、良いのかな？　アレ結構良いものだからそれなりに値段のするものだし。
しかも譲ってくれる条件がその時自分が造ったプログラムをそのまま保存しておいてと言うものだし……いや、別にいいよ？　俺もここの所金銭問題で悩んでたし、その分のお金が浮いて俺も嬉しいし。
その後、ランドさんの方も整備を終え、駆動テストを行った後再出発。ランドさんも一応見届けるという形で次の駅まで随伴してくれた。

そして特に問題も起きる事はなく、二時間の遅れで列車は到着。ひとまずこれで何とかなったなと思った時、ランドさんから呼び出しを受けた。何でも自分のプログラム構築していた際の行程をさり気なく見ていたそうなのだ。

まだまだ拙い腕なので恥ずかしいのだが、ランドさんの方はその若さで大したもんだと褒めてくれた。誰かに褒められるなんて滅多にないから戸惑ったけれど、悪い気はしないから受け取っておく事にした。

その後、ランドさんからの誘いを受けてとある居酒屋へ。奢るぞと言ってくれたランドさんに最初はどうするか迷ったけど、別に急ぎの旅じゃないし、夜も耽ってきたから別にいいかと彼の誘いを受ける事にした。

仕事の後の一杯は格別だとビールをジョッキで一気に飲み干すランドさん。自分は大した仕事はしていないからあまり注文はしないよう心がけたのだが、そんな自分の気持ちなどお見通しなのか、ランドさんはドンドン注文してジャンジャン自分に酒を注いできた。

それからはランドさんの修理屋としての話を聞きながら酒を呑んだりツマミを食したり、結構楽しい時間を過ごした後、自分はある質問をした。

メールちゃんの事だ。兄妹で修理屋しているんですか？　と訊ねたらランドさんは目線を逸らしてそんなものだと言う。何だか気になる言い回しだなと思いもしたが、余

所様に突っ込んだ話をするのも失礼なので、この話題は早々に切り上げて別の話をする事になった。その間、メールちゃんは詰まらなそうにスルメをチューチューと吸ってたり、一人寂しそうにしていたのが印象的だった。

そしてその後、すっかり遅くなったので自分達はその場で解散。それぞれ宿屋を探す為に互いに別れを告げた。

一期一会、これも旅の醍醐味かと奢ってくれたランドさんにお礼を言い、その場を去ろうとしたのだが……次の瞬間、メールちゃんから驚きの台詞が飛び出してきた。

〝ダーリン〟ランドさんの背中で眠りながらそう呟くメールちゃんに自分達は固まった。少し気まずい雰囲気になりながらも改めて解散、自分は聞かなかった事にしてその場を後にした。

まぁ、人の趣向は人それぞれだ。互いの合意の上だと言うならば自分からは何も言うまい。けれど、もし次に会うことがあれば、とある場所に観光することをお勧めする。

〝中華連邦〟きっと二人にとっても住みやすい国だろうと思い、今日の所は終了する。

Ｖ月Ｆ日

……今日、久し振りに複雑な心境を覚えた。ブリタニアへの国境も近くなり、少し休

もうかと立ち寄った街で……〝奴〟に会った。

〝ガイオウ〟破界事変の際、その脅威な力で世界を混沌に叩き込んだ破界の王。陰月付近の宙域で倒した筈の奴が、平然とホットドックを頬張りながら公園のベンチに座ってやがった。

サングラスを掛けて変装のつもりだろうが、俺には此方を小馬鹿にしているとしか思えなかった。驚きと苛立ちの感情を抑え、奴に何故生きていると問いただしたら、奴は俺の質問を無視して「久し振りだな蒼いの」などと友達感覚で声を掛けて来やがった。

向こうが蒼のカリスマの正体を知っていた事に少なからず動揺するが、今はそれ処じゃない。不敵な笑みを浮かべる奴を俺はもう一度問うた。

だが、それでも奴は此方の質問に答える事無く、黙々とホットドックを頬張り……それを「平和の味だ」と評価した。

何を言っているのか最初は分からなかったが、その時から俺は奴に違和感を感じた。……殺意や敵意がまるでないのだ。破界事変の時のような誰彼構わず暴れ回っていたあの時の奴とは何やら身に纏う雰囲気が違っていた。

そんな奴に俺も肩透かしになり、言いたいことも山ほどあったが……まぁ、あの時の様に暴れ回る素振りなど微塵も感じなかったので、取り敢えず無視を決め込む事にした。

近くにあったホットドックを買って食べようとしたのだが……あの野郎、事もあろうか俺からホットドックを奪いやがった。買う金がねぇと言っていたが、そんな事は理由にならない。返してもらおうとあの手この手で奪い返そうとしたが、流石に破界の王と呼ばれていただけあって生身ではまるで勝ち目がなかった。

もう一度……いや、今度こそＢＨＣで塵も残さず消滅させてやろうかと思ったが、それじゃあ色々負ける事になるのでグッと堪える。

子供みたいに笑う奴に呆れながら、俺は思った。本当にコイツはガイオウなのか？と。

敵意もなく、殺意もなく、ただ平和を満喫する厳ついおっさんに見えるのは俺の見間違いだろうか？

結局俺は奴から話を聞き出せる事はなく、寧ろ奴から色々質問されてしまった。……内容は美味い飯はどこかとどの国の料理が美味かったのかと、もっぱら食い物ばかりの話で面食らってしまったが。

その後も特にコレと言った会話もなく、今日の宿を取るためにその場を後にするが……奴の、ガイオウの黄昏た横顔が何だか印象的に見えた。

懐かしの故郷を想うような、死に別れた親を思いだしているような……そんな顔。尤も、奴に親というものが存在しているのならみてみたいものだが……。

◇

――今、俺はグランゾンに乗り、リモネシアに向けて急行している。

今朝、目を覚ましていよいよブリタニア領土に入ろうかって時に、ガイオウの奴が自分の所にいきなり現れてこう言ったのだ。

「今すぐリモネシアに戻れ」と、最初は何言ってんだと思いながら疑問符を頭に浮かべるが、奴の真剣な表情に自分は何も言えなくなり、取り敢えず街の郊外にある森の中にグランゾンを呼び出し、リモネシア付近の状況を観測し――絶句した。

リモネシア全体を覆い隠すように重力力場が変動し、次元境界線が歪んでいたのだ。

時空震動、このタイミングで起きる災害に俺はいっそ作為を感じた。

ガイオウに確認を取る間もなく、俺はグランゾンを発進させ、人目も気にせず飛び出した。

……イヤな予感がする。頭の中に浮かぶ一年前のあの時を払拭しようと頭を横に振り、グランゾンを更に加速させた。

見えた！　リモネシアを視認出来る距離で近付いた俺はモニターに拡大表示させ、次の瞬間に俺が目にしたのは……。

紅い炎に包まれたリモネシアの島だった。

◇

『クソッ、なんだって俺がこんな焼き討ちの様な事をしなくちゃならないんだよ……』

『あらぁん？　だめよぉウェインちゃん。仕事の選り好みをしちゃあ。これもアンブ

ローンお婆ちゃんからのオーダーですもの。キチンとこなしてこそプロってものでしょ？』

燃えるリモネシアの大地に立つ二体の巨人と無数の次元獣達。炎に包まれる大地を見て、エメラルダンの同型機〝サフィアーダ〟に搭乗するウェイン＝リプテールは、目の前の身の毛の弥立つ所業に苦虫をかみ砕いた顔で吐き捨てる。

対する黒いパールネイル……もとい、〝パールファング〟を駆るマリリン＝キャットは、キャンプファイヤーをするかの如く目の前の惨劇を楽しんでいる。

同じ人間とは思えないやり方。残虐にして冷酷なやり口。全てを灰にする彼女達の部隊の名は……ファイヤ・バグ。螢とは縁遠い業火を放つ彼女達を、ウェインは生涯受け入れることはないと心の底から思った。

だが、そんな奴らの片棒を既に自分も担いでいる。ハイナイトと呼ばれ、王を守護する筈の自分達が盗賊紛いのゲスへと成り下がってしまっている事に内心落胆する。

（……せめて、ここにいた人間達を避難させている事が唯一の救いか）

『さてさて、本当にこんなんで噂の魔神ちゃんは来てくれるのかし――』

瞬間、上空から何かが降り立ち、砂塵を巻き上げる。吹き荒れる砂の嵐の中、現れたのは――彼女達が待ち望んでいたとされる蒼き魔神〝グランゾン〟

獲物が網に掛かった。口元を喜びに歪ませてマリリンは背後の次元獣に命令を下す。

『キャッハハ♪　大物が掛かった！　ヤッダー信じられない。この程度の小火で魔神様が網に掛かってくれるなんてマリリン感激ー♪　さぁギガアダモンちゃん達、やっちゃってー♪』

愉快痛快と楽しさを露わにしながら、次元獣達に命令を下すマリリン。次元獣達もその命令に反する事なく、従順に従い、一直線に魔神に向かって進撃する。

コレまでとは違う異彩を放つ次元獣達。インサラウムの次元力の技術で生み出された人造次元獣達は時に次元の壁を破って魔神の背後に周り、時には横、下、上と縦横無尽に襲いかかる。

流石の魔神も手を出す暇はない。そう思われた瞬間。

『……』

いつの間にか手にしていた一振りの剣。それを横に回るようにして薙いだ瞬間、無数の次元獣が横に両断。そのまま光となって消えていった。

――言葉を失う。あれほどの次元獣達を一刀の元に消し去る事なんて想像していなかったマリリンとウェインは、開いた口が塞がらなかった。

……そして。

『……なよ』

『……あ？』

『な、何？　通常回線を開いてきたの？』

彼らは知る事になる。

怒りに染まった魔神が、どれほど恐ろしい事になるのかを。

そして、再び世界は震撼する。魔神の凄まじさに。

『生きて帰れると思うなよ。貴様等ぁぁぁっ!!』

〝魔神激昂〟これから起きる出来事を人々は後にそう語る事になる。

『どうですかミスターリボンズ。私の情報は正しかったでしょう？』

「……確かに、今回は君の言うとおりだったよ。アイム＝ライアード。けどね、あんまり僕の前でそういう態度は止めたほうがいい。君の本心が逆に丸見えだよ」

『失礼しました。……では、これで失礼を』

「色々問題のありそうな奴だったねリボンズ。それで？　予定通りに進めるのかい？」
「そうだね。彼があの島に固執しているのはこれで明らかになったし、チャンスともなった。――さぁ始めるとしよう」
〝魔神封印作戦〟そのコードが発信された時、リモネシアを中心に世界中の各勢力が姿を現した。
『まさか、本当に魔神とやりあえるなんてなぁ？　さぁ、魔神よ。お前の一番大切なモノをみせてくれぇ』
『……ジノ、アーニャ、準備はいいか？』
『本音を言えば気が進まないが、皇帝陛下直々のご命令なら仕方ないさ』
『けど、リモネシアも同罪。アイツ等、魔神を隠してた』
『……ガンダムが来ているのを期待していたが、これでは私刑ではないか』
『ゴネるのは無しにして下さいよＭｒ．ブシドー。今回の作戦にワンマンアーミーの権利は通用しませんから』
『アレがリボンズのお気に入りの魔神？　へぇー、妬けちゃうわ』

遂に、世界が魔神を捉えた。魔神を殲滅すべく、魔神を捕獲すべく、様々な勢力が間違った形で集う事になる。

怒り狂う魔神。その中で――――

〝シラカワシステム起動シークエンス開始〟

もう一つの胎動が静かに脈打っていた。

その２８

――燃える。全てが燃える。

これまで必死に積み上げてきたモノが、音を立てて崩れ落ちる。皆と積み上げてきた村が……壊れていく。

決して楽な日々ではなかった。重い瓦礫の撤去作業。慣れない土木工事に何度も痛い目に遭いながらも、それでもこの国を立て直そうと皆必死に頑張ってきた。

周囲の大国がリモネシアを無視し、カルロス氏を除いた全ての人間がリモネシアを無かった国に仕立て上げようとしながらも、それでも皆は笑いながら支え合ってきた。

……誰が壊した。怒りに思考を染め、自分とグランゾンを囲む此処にいる全ての者を睨む。

誰がやった？　国連か？　ブリタニアか？　アロウズか？　それともインサラウムか？　はたまた、ここにはいない別の誰かが裏で悪巧みをしているのか。

どうでもいい。今自分がやるべき事は犯人の有無を問い詰める事じゃない。……一人残らず、機体の破片一つも残さず叩き潰す事。

「……グランゾン、出力最大限。誰一人逃がさん。全て消してやる」

自分の言葉に呼応するようにグランゾンから全システムオールグリーンの表示がモニターに映し出される。相変わらず良い機体だ。ガイオウと最後に戦ったシチュエーションと同じ返事を返された事に、うっすらと笑みが零れる。

さぁ、懺悔しろ。赦しを乞え、命乞いをし、みっともなく生にしがみつけ。

それらの悉くを、今度は俺がお前達がしてきたように踏み潰してやる。

カラミティ・バース以降覚える事の無かった殺意を胸に、俺はグランゾンのスラスターに火を付けた。

最初の標的は……黒い奴。奴に向けて俺は剣を振り下ろした。

◇

『つ、いきなりやってくれるじゃない。魔神ちゃん！』

振り下ろされたグランゾンの一撃を皮一枚で避けたパールファングことマリリン。振り抜かれた魔神の一撃は地面を割り、砂塵を大きく巻き上げた。
確かに凄まじい一撃だ。マトモに受ければインサラウムの次元科学を使って造り上げたこの機体でもただでは済まないだろう。
だが……。
『隙だらけなのよぉぉぉっ！』
大振りの一撃だった為、グランゾンの動作に大きな隙が生まれる。そこを狙うマリリンはパールファングの武装の一つであるランドスピナーを回転させ、攻守交代とばかりに攻めに転じる……が。
『後ろに跳べ化け猫！　それはまだ奴の間合いだ！』
『っ!?』
ウェインの言葉に反応して咄嗟に後ろに跳んだ瞬間、自分のいた場所に無数の光の槍が突き刺さる。
冷や汗が出た。間一髪避けられた事に対してもだが、激昂して見境がなくなったと思われていた魔神が恐ろしくクレバーに徹している事実にマリリンはイヤな汗が噴き出るのを止められなかった。
魔神の眼が自分を射抜く。それだけでマリリンは心臓を鷲掴みされた錯覚に陥り、呼

吸が荒くなり操縦桿を握る手が震えた。
……いつ以来だ。自分がこれほどまでに恐怖を感じたのは。長い戦いの日々の中、自分が嘗て戦場で味わった戦いの恐怖にマリリンは改めて実感する。
魔神の名を冠するのは伊達じゃない。此方にゆっくりと振り向くグランゾンにマリリンの乾いた笑みがコックピット内に響きわたる。
来る。剣を携え、再び近付いてくる魔神にどう対処すべきか悩んだ瞬間。ウェインの駆るサフィアーダが二機の間に割って入り、グランゾンに立ち向かう形で前に出た。
『化け猫！　貴様は俺を援護しろ。奴の相手は俺がする！』
『り、了解よん！』
ウェインの言葉に異論を挟む余地などなく、マリリンは指示通りに機体を下がらせ、パールネイルと同じ武装である小さき射手達を向かわせる。
対するウェインはサフィアーダの巨体を生かして無理矢理接近戦に移る。先程の大振りを見る限り近接戦闘なら此方に分があるとみたウェインはそのまま押し切ろうと試みるが……。
『嘘だろう？　何でビクともしねぇんだ!?』
ウェインの乗るサフィアーダは彼の師匠であるシュバルのエメラルダンと同型機。しかし、エメラルダンよりも後に誕生したこの機体はエメラルダンのデータを元により

精度の高い仕上がりになっている。
パワー、スピード、それら全てがエメラルダンよりも上回っているのにグランゾンを押し潰す処か一歩も下がらせてはいない。
どういう事だ!?　混乱する彼に通常回線を通じて声が届いてきた。
『……機体といい攻撃のノリといい、シュバルのおっさんに縁のある奴だったか?』
『っ!?』
『もしそうなら一応聞いてやる。何でこんな真似をした?』
一瞬、聞こえてきた言葉に背筋に悪寒が走る。これまで純粋な殺意など今まで戦ってきた中で数える程しかない。
やはりガイオウを倒したのは伊達ではないか。そんな考えが頭の中で浮かんだ。
『どうやら、アンタがこの地に縁があるというのは本当らしいな。何故この土地に拘るのかはしらないが……これが、俺達の戦いだからだ』
『……そうか』
『蔑みたければそうしろ。罵倒も受け入れる。けどな、そうでもしないといけないのがウチの事情だ。これがなぁ!』
サフィアーダのブーストに更に炎が灯る。鍔迫り合いの中、漸くここまで来てグランゾンが下がり始めたと思われた時。

『別に、お前等の事情は知った事じゃない。理由がどうあれ、お前等を叩き潰す事に変わりはない』

興味なさそうな呟きが聞こえた後、横に一閃。スラスターだけじゃなく、機関部まで両断されたサフィアーダは力なく倒れそのまま機能を停止する。

『……今の一撃、師匠と同じ……』

そこまで呟いてウェインは意識を手放した。ハイナイトの一人があっさりとやられた事実に終始近くで眺めていたマリリンは息を呑む。

だが、お陰で隙が出来た。一人倒した事で気が抜けているグランゾンにマリリンは、ビット達を背後から一斉射撃で爆発的加速の源であるスラスターを破壊しようと試みるが……。

『ワームスマッシャー』

ビット達の上から閃光の槍が降り注げられ、小さき射手達は一瞬にして全滅。此方の行動を全て読み切ったかの様な行動にマリリンの額から流れる汗の量が一層多くなる。

『……終いか?』

魔神から若い男の声が聞こえてくる。底知れぬ怒りを感じさせる男の声色にマリリンの頬がひくついた。

恐怖で心が折れそうになる。戦いに身を投じて長い時間を過ごしてきた彼女だが、久し振りに本気で怖くなってきた。

だが、これで終わる訳にはいかない。

『女の子には……やっぱりお花が似合うものよね』

『……あぁ？』

『受けなさい、ブルーム・イン・ヘェェェェルッ!!』

ランドスピナーを結合させ、一つの武器に変形させる。そこから発せられるエネルギーが放つ緋色はまるで血のような紅い一輪のバラ。

黒い茨から解き放たれたバラは一直線に魔神に向かっていく。避ける素振りも見せないグランゾンに一瞬訝しげになるマリリン。

そして……。

『悪いが、俺の好きな花はタンポポでな。この手のバラは趣味じゃない』

起死回生の一撃も魔神の放つ剣の一撃によって無惨に散る。横に両断されたランドスピナーはコントロールを失い、共に上空をさまよい爆散。

此方の最後の手が潰された事により戦意喪失となるマリリン、違いすぎた。機体性能もそうだが、何より搭乗者の格が違いすぎた。

破界の王ガイオウ。世界の脅威と謳われた怪物を葬ったとされるこの魔神も正しく

化け物だ。……認識が甘かった。この化け物と真っ正面で戦うには全ての戦力を此処に投入する必要があった。

どうする？　既に思考を戦闘から逃走に切り替えているマリリンはこの状況から脱する術を模索するが……。

『命乞いの言葉なら聞いてやる。聞くだけだがな』

既に、王手は掛けられた。逃げ場などなく、離脱する隙もなく、いよいよ追い詰められたマリリン。死に対する恐怖など既に遠い昔に捨ててきた。殺さなければ殺される世界を生き抜いてきた彼女は、いっそ自爆でもしてやろうかと考えた時。

横からオレンジ色の閃光がグランゾンに目掛けて放射。歪曲フィールドによって直撃する事などなかったが、魔神の注意を逸らす事が出来た。

コレにより一瞬の隙を生じた事をマリリンは見逃さなかった。グランゾンの横をすり抜けてサフィアーダを回収。即座にこの場から離脱を試みる。

当然逃がすものかとグランゾンはワームスマッシャーを放とうとするが、無数のミサイルが頭上を覆い尽くさんばかりに降り注いできた事に気付きコレを断念。

これ以上リモネシアを傷付ける訳には行かない。優先順位をすぐに変え、魔神はワームスマッシャーを再び展開。押し寄せるミサイルの群を全て打ち落とした時。

『……高エネルギー反応だと？　上から？　っ、まさか!?』

頭上から光が瞬き、次の瞬間……巨大な閃光がグランゾン目掛けて放たれた。

◇

――――衛生軌道上。オービタルリング付近にあるとある宙域。そこにアロウズの艦隊指揮官を任されたアーサー＝グッドマン准将は目の前のモニターに映し出された光景を前にして愉悦に頬を緩ませていた。

「ふん、何が魔神だ。確かに奴の力は凄まじいが所詮は一機、やりようなど幾らでもある。……しかし、流石は〝メメントモリ〟凄まじい威力ではないか」

笑みを浮かべながら横にある戦略兵器を目にするグッドマン。反抗組織を国ごと一掃するために生み出された〝メメントモリ〟はまさに世界を恒久平和に導く為の効率

的な手段と言える。
　これを受けてしまえばどんな奴が相手でも敵ではない。そう確信したグッドマンにオペレーターから信じられない報せが届く。
「じ、准将！」
「なんだ？　騒々しい、報告は可及的速やかに……」
「そ、それが……魔神、今も健在！　メメントモリの攻撃を防いでいます！」
「なにいっ!?」
　有り得ない報告に席を立つ。改めてモニターを凝視すると、そこには確かにメメントモリの閃光を真っ正面から受け止めているグランゾンの姿があった。
　その光景に艦内が騒然となる。言葉も無くして呆然としていた准将だが、ここへきて我を取り戻し、すぐさまオペレーターに次なる指示を伝える。
「な、何をしている！　すぐにもう次の発射を急がせろ！」
「で、ですが一度撃ってしまえばチャージに時間が……」
「ならばもう一基を使用するまでだ。既に許可は取ってある。急げ！」
　艦隊のすぐ近くに設置されてあるもう一つのメメントモリ。既に発射態勢にあったソレは准将の指示から一分も足らずに稼働し、第二撃目の光がグランゾンに降り注げられた。

◇

――――視界が白くなる。気が遠くなるほどの衝撃に揺さぶられ、今の俺は意識を手放さないだけで精一杯だった。

天から降り注げられる巨大な光。放たれた距離や受けている威力から察するに恐らく衛生軌道上の戦略クラスの巨大な兵器からの攻撃なのだろう。

歪曲フィールドで堪えてはいるが、このままでは機体ではなく俺の方が先に参ってしまう。一度目の攻撃は耐えられたが、次の二撃目の衝撃に俺の意識は根っこから削ぎ落とされそうになっていた。

……避ければいいという選択肢は自分にはなかった。今自分がこの場を離れれば今度こそリモネシアは崩壊してしまう。それだけはどうしても避けたくて俺はこの攻撃を受ける事を選んだ。

『……やらせるかよ。これ以上、あの島を壊させて……たまるものかよぉぉぉおっ!!』

強がりの混じった叫びがグランゾンのコックピットに響く。こんな声が出せるのかとどこか他人事に考えていた時、今まで襲ってきた衝撃が収まった。

耐えきった。リモネシアを守れた事に安堵し、頬が緩んだこの時俺は間違いなく隙を晒していた。そんな自分を奴らが見逃す筈もなく。

『いただいたぞー　魔神！』

『ぐうっ!?』

衝撃が襲う。見るといつの間にここまで接近を許してしまったのか、今までの疑似太陽炉搭載型とは明らかに違う機体に蹴り飛ばされてしまった。

立て直さなければ、スラスターを噴射して態勢を整えようとした所に、再び痛烈な衝撃が自分を襲った。

見れば、すぐそこで銃を此方に向けている白のＫＭＦ〝ランスロット〟が見えた。

『蒼のカリスマ、赦しは請わないよ』

もう一度態勢を立て直す。このままだと良い的だ。ワームホールを使い一時距離を

開けようと操縦桿を動かそうとするが……動かない!?
どういう事だ!?　急いで原因を調べた俺が目にしたものは……〝シラカワシステム〟なる奇妙なプログラムだった。
モニターに移したそのプログラムの横にはカウントらしき数字が表示されている。
混乱に陥った俺に、更なる脅威が容赦なく降り注いできた。
『蒼のカリスマよ！　喩え貴様が相手だろうとこれには耐え切れまい！』
白い……戦闘機？　いや、モビルアーマーか!?　迫り来る白のＭＡからワイヤーらしきモノが射出され、それがグランゾンの両腕に巻き付くと、高圧力の電流がグランゾンを通して俺に流れ込んできた。
『がぁぁぁぁあっ!?』
――体が熱い、脳が焼き付く。電気椅子に掛けられた死刑囚はこんな気持ちなのかと、強烈な痛みに神経が焼き切れそうになる。
激しい痛みの中、薄れゆく意識の中で俺は目の前のカウントダウンがゼロになると同時に……。

『やれやれ、相変わらず甘い男ですね。島など気にしなければこの程度の相手にアナタが遅れを取るはずもないのに……まぁ、だからこそ私の半身に相応しいとも言えるのですが』

そんな、どこかで聞いた事のある声を耳にしながら俺の意識はそこで途絶えた。

〝シラカワシステム起動〟

◇

「……なにが、どうなっている？」

アーサー＝グッドマンは混乱の中に叩き込まれていた。
メメントモリは撃たれ、魔神の動きは完全に封じられ、あとはいけ好かない蒼のカリスマを殺せば労せず魔神を確保出来た。
事実、途中まで全てが此方の目論見どおりの展開だった。メメントモリを二つ共撃ったという一部予定が異なった部分があったが、それ意外は順調に事が進んでいた。
エース級の実力を誇るワンマンアーミーとブリタニアの最大戦力である皇帝直属の部隊ナイトオブラウンズ。彼等の猛攻に魔神は手も足も出せなかった。
あと少し、あと少しで魔神を封殺出来ると思われた時、突然奴の動きに変化が起こった。防戦一方だった奴の動きが唐突に変化し、次の瞬間には……地上部隊の全てが無力化されていた。
それもワザと生かしてあるように、敢えて殺さない程度に威力を抑えられている。それを証拠にナイトオブラウンズの面々がそれぞれやっとの思いで圧壊された機体から抜け出している。
だが、肝心の奴の姿がどこにもいない。どこにいったとモニターを凝視しているアーサー＝グッドマン達の前に……お探しの魔神が姿を現した。
『彼等との決着は我が半身自身が付けるべきモノ、私が手を下すまでもないので今は見逃しますが……アナタはそう言う訳にもいきませんね。アーサー＝グッドマン准将殿

？』
『ば、バカな!?　何故貴様がここにっ!?』
『認識が甘いので正しにきました。私達とこのグランゾンには距離という概念が存在しません。少なくともこの地球圏では私の行けない場所などどこにもありませんよ』
『な……なん、だと？』
『私達を討ちたいのであれば、最低でも冥王星から狙撃なさい。でなければ手痛い反撃を受ける事になりますよ？』
　このように。と、魔神が手を横に振るうと同時にグッドマン准将が乗る巡洋艦以外の艦が空間から突如として放たれた光の槍に貫かれて爆散。一瞬にして他の艦が落とされた事実にグッドマンの表情が瞬く間に青ざめていく。
『ま、待ってくれ！　私は命令で……そう！　命令に従っただけなのだ！　悪意はない！　の、望みはなんだ!?　可能な限りかなえよう！　あの島にももう手を出さない！　だ、だから……!』
『見苦しいですよ。アナタも軍人であるならば命令に殉じ、大人しく運命を受け入れなさい』
　必死の命乞いも通じず、死刑を宣告されたグッドマンは体裁を気にする余裕もなく、己の身の安全を確保するために艦のブリッジから逃げ出した。

◇

そんな彼の意志とは別に、魔神の胸部が展開され、両腕にそれぞれ三つの球体が出現し、胸の中心部には漆黒の球体が浮かび上がっていた。

『事象の地平に近づけば、相対時間は遅くなります。そちらにとっては一瞬ですが、此方では永遠です。……理解出来ましたか？』

蒼の魔神が球体を掲げる。六つの球体が一つのマイクロブラックホール　に吸い込まれ、肥大化され、重力の力場に異常数値が検出されるようになる。

『さぁ、報いを受けなさい。ブラックホールクラスター、発射！』

重力崩壊から何者も逃れられない。放たれたブラックホールは逃げようとしたグッドマン諸共呑み込み、二基のメメントモリすら抉り、やがて地球圏の外れまで飛び上がった所で爆発。

アロウズの准将は断末魔の叫びも上げることなく宇宙へ消えていった。

新たに出現したＺＯＮＥをランドという犠牲を払うことで停止させたＺＥＸＩＳ達はクロウのブラスタに積まれたスフィア対策としてスコート・ラボに向かっていた。

だが、その途中アロウズがリモネシアに強襲している情報を受け、蛮行に走る彼等を止める為にリモネシアに向かったのだが……そこで、彼等は信じられない光景を目の当たりにする。

アロウズの精鋭が、ナイトオブラウンズ達が、その機体を無惨に圧壊させて海に沈んでいた。海洋艦隊も全滅しており、自分達があれほど苦戦した世界の最高戦力達が、一方的に壊滅させられた事実に誰もが言葉を失った。

そんな彼等の前に魔神ことグランゾンが降りたった。相も変わらず出鱈目な力に約一名程除いて全員が戦慄を覚えた時、ジェフリーが意を決してグランゾンに呼びかけた。

ＳＯＵＮＤＯＮＬＹと書かれた文字の向こうから発せられる声、聴き慣れた胡散臭い

蒼のカリスマの声にカミーユは訝しげに眉を寄せる。
『お久しぶりですねＺＥＸＩＳの皆さん。今日は一体どのようなご用件です？』
『……ここでアロウズ達のリモネシアに対する強襲があったのだと報告があったのだが、君がこれらの惨劇を生み出したのかね？』
『惨劇とは大袈裟ですね。確かに海洋艦隊は全滅しましたが、ナイトオブラウンズを初めとしたエースの皆さんは皆無事です。彼が怒りのまま暴れていたらここはもっと悲惨な光景になっていた筈ですよ』
『……彼、だと？　まさかお前は蒼のカリスマじゃないのか!?』
　カミーユの言葉にＺＥＸＩＳ全体が揺らぎ出す。どういうことなのか理解出来ない話に誰もが混乱した時、通信越しから不気味な笑いが聞こえてきた。
『……ククク、流石はカミーユ＝ビダン。私と彼の違いを早速見抜きましたか』
『そんな、シュウジじゃないの？　だったら、アンタは一体誰なのよ!?』
『待てヨーコ、お前今なんて言った!?　アイツが、蒼のカリスマがシュウジだと!?』
　ヨーコの迂闊な一言にＺＥＸＩＳ内で激震が走る。騒ぎ出す彼等を微笑みながら、グランゾンのパイロットは音声だけの通信から映像込みのモノに切り替えてきた。
　そして、映し出される彼者の姿に言葉を失う。紫色の頭髪、不敵な笑み、見た目こそはシュウジと同じなのに目の前の存在は全く異なる雰囲気を纏っていた。

『名乗りが遅れて申し訳ありません。私の名はシュウ＝シラカワ、故あって彼の体を借りている者です』

そんな名乗りを最後にグランゾンは離脱。起こりすぎた出来事にＺＥＸＩＳは頭を抱える事になる。

その２９

〝蒼のカリスマ〟その名が世界中に知れ渡る事になるのは破界事変の終盤、二人の歌姫の誘拐という事件がきっかけだった。

フロンティア船団の歌姫達、ランカ＝リーとシェリル＝ノーム。この二人をバジュラの巣に誘拐したとされる事件はコロニー、地球問わず全ての人間に衝撃を与えた。

当時、攫われた二人はその時の記憶がないという話だったが、彼女達のマネージャーであるグレイス＝オコナーが証言し、蒼のカリスマの犯人説は揺るぎないものとなった。

世界中に知られる事になる蒼のカリスマ、その存在と目的、全てが謎に包まれた彼の人物像は人々に良くも悪くも刺激を与えた。

特にその仮面の姿から当初は黒の騎士団の総帥、ゼロの影武者や寧ろ彼こそが真の親玉など、一時期は突拍子もない噂がネット上で盛り上がる事もあった。

しかし、そんな蒼のカリスマの傍らにはある兵器が存在する。〝グランゾン〟蒼のカリスマと同じ深い蒼を主色にしたその機体は、正しく魔神と呼ぶに相応しい力を備えて

いた。

アザディスタン付近の砂漠に展開していた当時の三大国家の全ての軍の無力化、単騎でインペリウムと戦い、壊滅に追い込んだとされる脅威の力。

そして今回、魔神を封印しようと世界の戦力の半分近くを投入した大規模作戦。アロウズの精鋭達やナイトオブラウンズの四人、更に衛星軌道上に用意された戦略クラスの兵器二つを使用する事で行われた作戦。

勝つ自信はあった。当然魔神の破壊を目論んだ今回の作戦は、誰もが地球側の勝利に他ならないと確信していた。

一年前とは段違いに発達した技術。疑似太陽炉を用いた事でアロウズの軍事力は大幅に向上し、常に新たな兵器が生み出される時代に発展した。

ブリタニアのＫＭＦも時代が進んだ事でその機体性能を大幅に底上げし、陸を駆け回るまでが限界だったのに、今では空だけでなく宇宙にまで進出するようになった。

そしてその最新の技術を惜しみなく投入された機体に乗るのは帝国最強の騎士、ナイトオブラウンズ。それも四人が今回の作戦に参加する事になった。

人材、技術、そして数。一年前の時とは何もかもが違う戦力に、当時作戦に関わった者達全員が勝利を確信した。

そんな彼等の待ち望んだ結果は……惨敗という無惨な報告だった。

油断もない、慢心もなかった。ただ、心の何処かで〝これなら〟という隙があった。奴と戦うには全世界の全戦力を投入すべきだった。

…いや、結果は変わるまい。どう足掻いた所で人が魔神に適う道理はなかったのだ。後にこの事件は〝魔神激昂〟と呼ばれ、後の世代でも人々の間で語り継がれる事になる。

やがて魔神はインベーダーや次元獣以上の災厄と見なされ、蒼のカリスマも〝魔人〟の名を冠する事になる。

魔神を操る魔人。〝リモネシアを焼き〟アロウズを叩きのめした映像は世界中に回る事になり、人々に恐怖を植え付ける事になる。

◇

「アイツがリモネシアを焼いた？　ふざけた事言ってんじゃないわよ！」
マクロス・クォーターにある居住区、そこにある憩いの場として設けられた場所で、新聞紙を床に叩き付けながらヨーコが叫んだ。
興奮気味で吼える彼女を隣に座っていたルゥが宥める。そんな彼女を一瞥した後、この場に集った者達のまとめ役として買って出たアスランが話を進めた。
「もう一度話を纏めよう。俺達が〝黒のカリスマ〟の一人として思い込んでいた〝蒼のカリスマ〟それは俺達がこの世界で度々耳にしたシュウジ＝シラカワで間違いないな？」
アスランのその言葉に全員が頷き返す。〝黒のカリスマ〟嘗てＺＥＵＴＨ達のいた世界でネット上で話題を振り撒いていた人物。その正体の名はジ＝エーデル＝ベルナル、自分が面白おかしい世界にする為というそれだけの理由で、世界を混乱の中に陥れた愉快犯。
黒の叡智となるモノに触れ、驚愕な手法でＺＥＵＴＨを窮地に追い込んだ彼は、結局はＺＥＵＴＨの底力に負けて消滅する事になる。
ＺＥＵＴＨはそんな黒のカリスマと蒼のカリスマは関わりのある人物だと思いこみ、これまで警戒し、中には敵視している者もいた。
だが、それは違うとヨーコは断じた。先のリモネシアでの出来事といい、一度冷静に

なって蒼のカリスマに関する情報をまとめる必要があると判断し、リモネシアを覆った炎を鎮火させた後、付近の近海で艦を停泊させ、ヨーコを中心に話し合いを始めた。

蒼のカリスマの正体、そしてシュウジの事、彼がどういった人物だったのか彼女が話すに連れて、少しずつ警戒を解く者もいれば、未だに警戒したままのものもいる。

確かにシュウジは悪い人間ではないのかもしれない。だが良い人間を演じて騙そうとする人間を数多く見てきた彼等からすれば、素直に受け入れる事ができないのもまた事実だ。

アイム＝ライアードやジ＝エーデル＝ベルナル、人を騙す事に優れた者達の狡猾さを身に染みて知っているＺＥＵＴＨ側からすれば、シュウジ＝シラカワもまた疑うべき人間の一人。

ヨーコの話を全面的に信じている者が居るとすれば、シモンとキタンの二名のみ、嘗て自分の事を励ましたり、妹を助けてくれた借りがある彼等からすれば、シュウジ＝シラカワという人間は信じてみたい人種に入る。

「だから！　アイツはそんな悪巧みをするような甲斐性の持つ人間じゃないの！　ビビりでヘタレなごく普通な人間なの！　カレンだって知ってるでしょう！　アイツがドンだけへたれなのか！」

「え？　う、うん……確かにそうだったけど」

中々信じてくれない皆に苛立つ声を上げるヨーコ。埒が開かないと今度は自分と同じシュウジという人間を知るカレンに同意を求めた。

だが、望んだ返事とはほど遠い曖昧な声にヨーコの表情が曇る。カレンもヨーコの言葉を疑うつもりもない。何せ最初に会った時は、彼女の言うヘタレがこれでもかと具現化された姿だったのだ。周囲の荒くれ共に怯えながらゲットーの町を歩く彼の姿を今も思い出せる。

けれど、それ以上に印象的なのは朱禁城で出会った時の事。不敵な笑みを浮かべながらゼロと互角のチェス勝負を繰り広げる彼の姿の方が、印象としては強烈だった。

少数の人間しかシュウジを信じられないと思う中、意外な人物が会話に割って入る。黒の騎士団の総帥ゼロだ。

「……シュウ＝シラカワ。確かに彼はそう名乗った。なら、可能性としてもう一つ別の考えがこれで浮かんでくる」

「？　どういう意味だ？　ゼロ」

「簡単に言えば、今シュウジ＝シラカワはシュウ＝シラカワなる人物の支配下におかれており、自ら行動出来ない状態にあるとするならば、彼の蒼のカリスマとしての行動もある程度理解できるという事だ」

「つまり、蒼のカリスマの時はシュウ＝シラカワが人格として活動しており、そうで無い

時はシュウジ＝シラカワとして動いていると？」
「そうなるな。そしてこれも推測だが、それら全ての鍵を握るのは……」
「グランゾン。あの機体が二つの人格を入れ換える装置だというのなら、確かに一応辻褄は合うな」
　ゼロの話に頷くカミーユ。だが、これらはあくまで全て推測に過ぎない。勿論鵜呑みにはしないし、かといって無視する訳にもいかない。
「結局は、何も分からない事だらけなのか……」
　シュウジとシュウの関連性、本当にシュウに支配されているのか？　目的はなんなのか、それらが全く解明されていない現状では誰も確信に至れる筈もない。
　そんな中、一人の少年が手を挙げる。ＩＣＰＯの一員であり鉄人２８号を操る少年、金田正太郎だった。
「あの、一つ気になる事があるのですけど、良いですか？」
「気になる事？」
「はい。そもそもどうしてアロウズはリモネシアを標的に選んだのでしょう？　それにそこへ現れるグランゾンのタイミングも不自然だし……これってリモネシアを焼いた事によってグランゾンをおびき寄せたと言った方が自然と思えるのは僕だけでしょうか？」

正太郎の言葉に黙り込む一同、確かにそれも気になる話だ。あの時現れたグランゾンのタイミングは自然に遭遇したというより、寧ろ誘い出されたと言った方が正しいと思える。

思えばカラミティ・バースの時もそうだった。ガイオウの出現とほぼ同時に現れたグランゾン。ガイオウと蒼のカリスマに何らかの関係性があるのかと当時は思い込んでいたが、実際は別なのかもしれない。

蒼のカリスマがリモネシアに何らかの思い入れがある？　新たな疑惑に全員の頭に疑問符が浮かんだ時、ブリッジから連絡が入る。

『リモネシアの難民、全て収容しました。生活班の皆さんは至急支援物資の搬送をお願いします』

その通信連絡を耳にした非戦闘員の生活班はこれで失礼しますと挨拶だけ残してその場を後にする。残った他の面々もひとまずは今後も蒼のカリスマとグランゾンには注意しようという結論で、その場は解散となった。

納得しかねる様子で去っていくヨーコ、そんな彼女をカレンが宥める姿を後目に、唯一残ったカミーユは一人物思いに耽る。

（……本当にシュウ＝シラカワはシュウジなる人物の人格を支配しているのか？　アレはどちらかと言うと眠ったシュウジの代わりに出てきたと言った方が正しいんじゃな

いのか？）

最後の通信でシュウ＝シラカワと対面したカミーユは奇妙な違和感を感じた。あの時の彼は確かにこの上なく胡散臭かったが、別段悪意やそう言った類の邪念は感じる事は無かった。

そう、破界事変の時初めて相対した彼から感じ取ったものとまるで変わっていないのだ。子の成長を見守るような親の視線、蒼のカリスマの背後から感じたモノと同じモノをあのシュウから感じ取れた。

（……やはり、俺だけでは結論を出すことは難しい。アムロ大尉、早く此方に合流してくれ、もしこのまま擦れ違ったままだと、いつか取り返しのつかない事態になりそうです）

答えの見えない謎。一人で答えを出すには危険すぎる謎にカミーユは行き詰まり、カミーユは今は此処にはいない人物との邂逅を望んでいた。

◇

『さて、まずは自己紹介から始めましょうか？　私の名はシュウ＝シラカワ。アナタがずっと探していた人物です』

……えー、初めましてシュウ＝サン。俺の名はシュウジ＝シラカワです。てか、ここは一体どこよ？　なんか星々が見えたり銀河っぽいものまで見えるんすけど……何これ？　集合無意識の中？

『ほう？　初見で此処がどこだか察しましたか。確かに似ていますが……残念ながら正確には違います。ですが僅かな情報でそこまで言い当てるその聡明さには敬意を評しましょう』

やべぇ、なんか知らないがいきなりあのシュウ博士に褒められた。嬉しいけど適当に言葉を言った此方としては凄い複雑な心境。

というか、あれから自分はどうなったのだろう？　そして、リモネシアの皆は無事なのだろうか。シュウ博士が何故自分の目の前にいるのかも疑問だが、まずは其方の方を解消させたい。

『そうですね。では端的に説明しましょう。まずはあの島にいた人々は結果的には無事

です。炎にやられ火傷を負った負傷者もいますが、死傷者や重傷者は見受けられません。皆、ＺＥＸＩＳの人達から手厚い保護を受けていますよ』

シュウ博士のその言葉に俺は深く安堵した。よかった。あの炎の中で皆脱出できたんだ。一番知りたかった情報に、俺の肩にのし掛かっていた重りがスーッと軽くなる錯覚を覚えた。

ＺＥＸＩＳに保護されたというのも安堵した理由の大きい所、彼等に保護されたと言うのなら、今後皆が人質に取られる事は殆ど無いだろう。唯一心配なのはシオさんに関してだけど……そこは皆が何とかしてくれると思い、触れるのはやめておく。

『その言い分だと、どうやら心得ているようですね？　アナタがもうあの島に関わる事は二度と出来ないという事が』

……そうだ。シュウ博士の言うとおり、俺はもうリモネシアに関わる事は出来ない。何せ世界中に知られてしまったのだ。リモネシアと自分、蒼のカリスマが何らかの関わりがあるという事を。

次に自分が近付けば今度こそ世界はリモネシアに敵意を示す。唯でさえ一部の連中には自分のことがバレそうになっているのに、もし近付いたりしてその事を誰かに見られれば、それはもうリモネシアの終わりを意味してしまう。

漸く落ち着ける場所を見つけたのに、やっと自分の帰れる場所を見つけたのに……世

の中、中々上手く回らないものである。
寂しい。けど、悲しくはない。自分の帰る場所はなくなってもシオさん達の場所はまだ残ったままだ。あの空からの戦略兵器の攻撃も一瞬たりとも通さなかったし、戦いの傷はそれほど残さなかった筈だ。
後は皆が何とかしてくれる。勝手な言い分だけど彼等ならあそこからでもリモネシアを立て直せる事を信じている。
対して、自分に出来ることは限られている。再びアロウズやブリタニアの背後にいる連中が何かしでかす前に、俺が早い内に終わらせてやる事。
そして、その為に必要なのはシュウ博士、アナタの持つグランゾンの存在が必要不可欠だ！
だから頼む！　もう暫く俺にあの機体を貸してくれ！
不思議空間の中、シュウ博士に深々と頭を下げる。断られる事が確実なのは重々承知だが、それでも今はこの人の力とグランゾンが必要なんだ。
恐らく、俺がグランゾンを動かせたのもこの人のお陰なのだろう。この人がグランゾンに何かを仕込ませた事でこの短時間の内にエースと言われる人達と戦えるようにしてくれたに違いない。
……俺が頭を下げ続けてどれ位たっただろう？　不思議空間の所為で時間の感覚が

無くなっている今、シュウ博士の返ってくる反応に何時間も経過している様な錯覚を覚えていると――呆れた様な深い溜息が聞こえてきた。

何だと思い顔を上げると、そこには頭を抑えながらやれやれと首を横に振る博士の姿が……え？　どしたの？

『全く、まさか今までそんな事で悩んでいたとは、てっきり帰る方法を教えてくれとせがんで来るかと思ったのに……まぁ、いいでしょう。私の望む返答も頂きました。要するにアナタは自分を利用した輩に報復をしたいと、そう言うのですね？』

……え？　そ、そうなるのかな？　確かに向こうは自分がリモネシアに来ることを予測して待ちかまえていたみたいだし、そいつ等を叩き潰すと言うことはそう言うことに……なっちゃうのかな？

『では、二つの勘違いを正す事で今回の邂逅は終える事にしましょう。利用してくるモノは何人たりとも許さない。ククク……流石は私の半身、嬉しい事を言ってくれますねぇ』

……あれ？　今さらりととんでも無いこと言わなかった？　え？　半身？　ど、どどどどういう事だってばよ!?

激しく狼狽する自分の言葉にシュウ博士は耳を貸すこともなく、博士は二つの事実を俺に突きつけた。

『まず一つ目、アナタの操縦技術は確かに私がキッカケとして与えたモノ、ですがそれだけです。そして二つ目、そのグランゾンは私のではなく、アナタのグランゾンという事』

……はい？

『では、次の機会にまた逢いましょう。近い内に、必ず』

博士のその言葉を最後に、強制的に俺の意識は遠のいていった。

その最中、僅かだけど耳にした。

『頑張りなさい。シュウジ＝シラカワ、私の因子を最も色濃く受け継いだ男よ』

その声はどこまでも優しく、どこまでも透き通って聞こえた。

◇

……今のは、夢だったのだろうか？　眠りから目が覚めた自分はベッドから降りて

辺りを見渡して現状の確認を急ぐ。て、あれ？　ちょっと待って、おかしくない？　何で俺ベッドの上にいるの？　そこは普通グランゾンのコックピットにいるものじゃないの？

しかもこの部屋、なんかスゲェんだけど。装飾とか余計な飾りはないけど、一つ一つの家具がメッチャ品質がいいの。もうそこらのスイートホテルなんぞ目じゃない位に凄いの。何これ？　どこかの一流ホテル？　星幾つあるの？

尽きない疑問に整理できない状況に混乱する中、扉が開かれ、一人の男性が部屋へと入ってきた。ホテルのボーイさんかなと思った次の瞬間、俺の思考は完全に凍り付いた。

だって、その人は……。

「どうやら目が覚めたようだね。私の事は覚えているかな？　蒼のカリスマ、……いや、シュウジ＝シラカワ君？」

ＯＺの一番偉い人、エレガント閣下と名高いトレーズ＝クシュリナーダさんじゃないですかヤダー♪

つか、正体ばれてるぅぅぅぅぅっ!?

その３０

Ｋ月Ｔ日

何だかこの日記を書くのも久し振りに感じるが、取り敢えず落ち着いてきたところなので再び執筆を再開しようと思う。

まず最初に自分ことシュウジ＝シラカワについてですが……バレてしまっています。自分が蒼のカリスマだって事とグランゾンのパイロットだと言うことが、まるっと全てお見通しになっていました。

しかもその相手がエレガント閣下で知られるトレーズ閣下に……もうね、俺の人生デッドエンドかと思ったよ。これで世界中の人々に自分の存在がバレて行き場無しのボッチルートまっしぐら確定かと思ったよ。

けれど、あの後幾ら情報を調べても自分＝蒼のカリスマの情報を得た事がない。ネットで探してもそんな話は欠片も出てこなかった。

不思議がる自分にトレーズ閣下は言った。「誰かに公言するような真似はしないから安心しなさい」と、勿論最初は信じなかったよ？　幾らトレーズ閣下が人格者でも……いや、人格者だからこそ自分という存在は許せないものなのではないだろうか？

既に世間では自分はインベーダーや次元獣以上の災厄として認定されている。奴等の情報操作でリモネシアを焼いたのは俺だとされているから、世界からみた自分は悪魔にしか見えないだろう。

……まぁ、確かにリモネシアを焼いた事実を俺に押し付けた連中のやり方には頭に来るよ？　頭に来るけど――――ぶっちゃけその方が自分にとっても都合が良いんだよね。

何せ向こうから自分とリモネシアの関連性を否定しているのだ。これで地球連邦はリモネシアを意味もなく攻撃することは出来ない。もし仮に攻撃したら、その時は彼等の信頼の失墜を意味しているからだ。

唯でさえ世界の現戦力の半数近くが削られたのだ。情報統制で数を誤魔化したとしてもグランゾンに敗北したという事実は変わらない。

実際、ネット上ではグランゾンがアロウズ艦隊を蹂躙している映像がアチコチで出回っている。すぐに運営などが映像の削除の対応に追われているが、人々の口を直接閉ざす術は持っていない。

噂が広まり、疑問を抱かれ始める連邦はそう簡単に動くことは出来ない。唯でさえ全戦力の半数近くを消失させたのだ。軍備を整える為には時間がまだまだ全然足りない。しかも他の勢力に対する牽制もしなくてはならないのだから、地球連邦政府の連中は対応に追われて自分を追う処の話ではないだろう。

リモネシアにももうあれほど大規模な干渉行為はしてこないだろうし、島の皆がＺＥＸＩＳに保護されているのなら、連中もおいそれと手を出すことはできない筈。これが今自分が安心している理由の全てだ。

……と、随分と逸れてしまった所で話を戻そうと思う。何故トレーズ閣下が自分を匿うのか、それは――――直接シュウ博士から話を聞いたらしいのだ。

もうドッと疲れたよ。自分が意識を失っている合間に色々手を回していたみたいだし、トレーズ閣下はそれらを全て承知の上で自分を匿っている事から既にそこに自分の話を挟む余地は無かった。

そんな疲れた自分に閣下から渡される一杯の紅茶、あれを飲んだらヤケに気持ちが落ち着いた。紅茶に使われるハーブは高ぶった気持ちを落ち着かせる効能があるらしいが……成る程、確かに気持ちが落ち着く一杯だ。

その後トレーズ閣下の計らいで暫くここで厄介になることになり、食事も出して貰った後は暫く閣下と談笑し、この日はこれで終了となった。

……今更ながら思うのだが、俺ってばかなり失礼な事してない？　閣下に紅茶を淹れてもらったり、食事まで賄って貰えるとか、どこのＶＩＰ待遇だよ。

今更ながら手が震えてきた。俺、ここではどんな扱いになるんだ？　唯の客人に対してというのも手厚過ぎる歓迎だよね？

よし、考えるのは止めよう。庶民が何を考えたって無駄というものが世の中には存在するのだ。うん、そうしよう。

取り敢えず今の自分は少し情報を纏める時間が欲しい。取り敢えず今は体を休めることを専念し、今日の所はこれで終わろうと思う。

……寝る前に鏡を見つけたのだが、俺の髪は前以上に紫掛かっていた。コレがシュウ博士の言う因子に関わる事なのだろうか。

K月☆日

さて、今日は昨夜に言ったとおり、情報収集に勤しもうと張り切る自分だったが、朝目覚めると同時に執事の人が自分に一着の服を渡してきた。どれもこれも凄く高級感のある素材で出来ており、白のロングコートなんて自分が露天で買った嘗ての代物とは天と地程に価値が違うモノだ。

値札も無かったし、着心地の良さから相当質の良い生地で作られたのだと思うが、何でこんなモノを着なくてはならないのかと俺は気が気でなかった。執事さんが言うには閣下からのご厚意なのだそうだ。

……重てぇ、こんな厚意を受けとる事がこれまでなかった自分としては、閣下の気遣

いがもの凄く重かった。グランゾンの〝グラビトロンカノン〟で沈んだ連中もこんな気持ちになっていたのだろうか。

ひとまずそれに着替えた後、執事さんの案内の元に執務室へ案内された自分はそこで昨日会った閣下と出会う。ひとまず失礼の無いようにまずは朝の挨拶から始めたのだが……スゲー眩しい笑顔と一緒に挨拶を返された。

これがエレガントの力か！　なんてバカな事を考えながら早速渡された服の事を訊ねたのだが……なんと、オーダーしたのはシュウ博士からだったらしい。

何してくれてんの!?　と叫ぶ余地などなく、庶民である自分は冷や汗だらだらモノで大事にしますとだけ返して受け取る事にした。いやね、シュウ博士も閣下も悪気がないのは分かるけど、正直こういうのはホント勘弁して欲しい。今度こそ胃にワームホールが開いてしまいそうなんだ。

まぁ、そんな話はひとまず置いといて、まず自分はシュウ博士だった頃の自分とトレーズ閣下との出会いの経緯について話を聞かせて貰った。

話を聞く限り、閣下はＯＺの総帥から事実上追放され、自宅で謹慎中だった時、執務室に突然乱入者が入ってきたらしいのだ。

その乱入者がシュウ博士で、面白い話を聞かせる代わりに自分を少しの間匿って欲しいとのこと、その時に序でとばかりに服を頼んだりしたらしいのだ。

……俺、もうゴールしていいかなぁ？　なんでそんな盗賊紛いな事しちゃうのぉ？　しかも面白い話とか完全に俺に丸投げしちゃってるじゃん。無茶ぶりってレベルじゃねーんだけどぉ!?（―――以下、ボッチの泣き喚きの文字が乱立中）

―――兎に角、閣下の退屈さを紛らわす事を理由に人身御供扱いされた俺は、その場は苦笑いを浮かべ執務室を後にするしか出来なかった。その際、楽しみにしているよと笑う閣下が自分には怒っているように見えた。……近い内、夜逃げする準備した方がいいのかもしれない。

執務室で閣下とそんなやりとりを終えた後、俺は昨夜と同じく執事さんにお願いして小型の情報端末を拝借して、……自分が眠っている合間、何があったのかを調べる為にある程度覚悟して蒼のカリスマとグランゾンの事についてネットダイブを繰り返したのだが……結果はやはり昨日と同じだった。

これ以上この事を調べても有益のある情報を得られる様子もないので、ひとまずこの話は置いといて、今はある仮定の話を進めようと思う。

お題は、アロウズの背後にいる連中は自分の正体を知っているか否か。

端的に言えば十中八九バレていると思う。それもただ蒼のカリスマの正体が自分だという事ではない。〝リモネシアに思い入れのある自分が蒼のカリスマだと言うことを知っている〟という事だ。

ただリモネシアに関わりのある人物が蒼のカリスマという事だけで、彼処までの大部隊を用意させるには説得力が足りない。もっと確信的な情報を絶対条件にしなければ大胆な行動は取れない筈。

だが、問題は誰が自分の正体を知っているかだ。グレイス＝オコナーはあくまで蒼のカリスマとしての自分しか知らない筈。それ以外の連中にバレる様な事はしていない筈だ。

ヨーコちゃんについても同様だ。彼女が人の秘密をおいそれと暴露する人ではないことは断じられるし、信じられるからこそ自分はコレハナ島で自ら正体を教えたのだ。

では一体誰が？　そう思った時、ある人物の名が頭に浮かんだ。日記を読み返して調べて見たら……いた。自分の正体を知ってそうで且つ秘密裏に行動していそうな奴が。

〝アイム＝ライアード〟リモネシアで初めて遭遇した奴は、まるで俺の事を知っているような口振りで近付いてきた。

もし奴があの時既に蒼のカリスマの正体に気付いていたのなら、あぁも馴れ馴れしく近付いてきたのも何となく理解できる。それにコイツの二枚舌ならそこらの組織に潜り込む事なんて容易い作業だろう。

だが、ここで一つ問題があった。もし奴が俺の正体を知っているのであれば、決定的なアリバイがその仮定を否定する事になる。

破界事変の時、南極に現れた大量のイマージュの出現と同時に現れた奴は当時のＺＥＸＩＳにより敗北、死亡したとされている。

当時、インペリウムの頭目だったガイオウ自身が俺にそう言ったのだ。アイムは死んだのだと。

あの時のガイオウに嘘をついている素振りは無かった。何より奴の性格上必要のない嘘は付かない奴だと俺は思う。根拠はない、強いて言うなれば実際相対した者の勘としか言いようがなかった。

これでは俺の仮定も中途半端に終わる。けど、それでは余りにも俺の気持ちが収まらないので、無茶苦茶だが更なる仮定をぶち込んでみることにした。

もし、あのアイム＝ライアードにガイオウの目を誤魔化すほどの超常の力を有しているのなら、それなら少しは説明が付く。

例えば……そう、どこぞの大嘘憑きの様に自分の死んだ事を嘘にしてしまえる力……とか、そんなものが実在するのならガイオウの目を欺く事だって出来るのではないだろうか？

根拠は依然としてない。だが、どうしても奴のあの鼻に付く嘘っぽい喋り方が気になるのだ。最初は自分の心理を相手に読ませないブラフか何かかと思うのだが、シュナイゼル殿下の全く読めないポーカーフェイスと比べるととても陳腐に思えてしまう。

シュナイゼル殿下のポーカーフェイスを自然と混じることで相手に目の錯覚を起こさせる擬態とするならば、対するアイム＝ライアードは科学技術の全てを使って無理矢理見えなくする光学迷彩の様なもの。

陳腐というより……そう、無粋に思えてしまうのだ。何でもかんでも優れた力で解決してしまおうという考えが滲み出る嘘が奴の一端に思える。

けれど、そんな力が本当にあるのか？　……いや、ある。これも推測の域を出ない仮定だが、そんな凄い力を有するモノが確かに存在している。

〝スフィア〟確かこれはクロウさんの乗るブラスタにも搭載されていると前に一度聞いた事がある。

アサキムもあのＺＯＮＥが最初に現れた街で一度やり合った時、スフィアがどうたらと言っていた気がする。

そのスフィアが何なのかは知らないが、少なくとも普通のエネルギーではない事は確かだ。ゲッター線とも光子力エネルギーとも違う別のエネルギー、それは一体何なのか。

そして最終的にアイムの奴が生きているのなら、何故俺の事を世界中にバラさない？

人の弱みをここぞとばかり狙いそうな奴が、何のアクションも見せないのも不気味だ。そもそも……（日記はここで途切れている）

Ｋ月β日

昨日、日記を書いている途中トレーズさんの邪魔が入った。何でも自分の仕事が終えたから私の鍛錬につき合って欲しいとの事。

トレーズさんは剣の使い手だ。自分の様な素人では相手にならないと最初は断ったのだけれど、ならば無手で相手をしようと強引に連れていかれた。

道場らしき荘厳な場所で行われたトレーズさんとの組み手は……一方的な展開から始まった。

というか、あの人空手とか柔術とか日本の武術も一通りこなせたのね。お陰で自分の体のアチコチに痣が出来て酷い有様だ。

尤も、やられていたのは最初だけ、次第にトレーズさんの動きに付いていけるようになった俺は仕返しとばかりにトレーズさんに殴り返した。

正直腹が立っていた。いきなり人を呼びつけておいて一方的に殴られるのは癪に障るし、しかも終始見下した態度、俺は相手が元とはいえＯＺの総帥相手に思いっ切り拳を振り抜いた。

勿論最初こそは当たらなかったし、逆にカウンターを貰う始末。けど先程もいった様に俺も彼の動きに少しずつ付いていけるようになり、此方の攻撃も当たる様になった。

そこからは唯の殴り合い、技もクソもない単純な殴り合い。何でこんな事してるんだっけ？　と、そんな事を考える内に俺とトレーズさんとの喧嘩は唐突に幕を降ろした。

クロスカウンターによる相打ち、漫画みたいな終わり方に俺達は暫く笑いが止まらなかった。

そして、お互い頭を冷やした後、俺は訊ねた。何でこんな事をしたのかと。

そう言って彼が返してきたのは「男の友情は拳で語るモノだと聞いた」と返してきた。その情報源はどこからですかと訊ねると、以前屋敷に訊ねてきた不動さんという人物からだそうだ。

……不動さん、アンタ仮にも閣下相手に何してくれてんの？　というか何でトレーズさんにそんな情報与えた!?

後から聞いた話だと、ここにシュウジと名乗る青年が近い内に来るから、その時にこの手法を取るといいと勧められたそうだ。なんであのオッサンは俺が……いや、博士が来るのを予見していたんだ？　ホント何者だあの人。

それで、その言葉通り自分が来たものだから謹慎中の身だったトレーズさんは大感激。これはもう殴り合うしかないと意気込んだそうだ。

これも中々楽しいものだと笑うトレーズさん。俺もこの人の顔面に何発か入れて顔

を腫らしているのに、相変わらずエレガントです。
で、その後自分たちは道場で少し話をした。内容は単純にして複雑、現状の世界についてだ。
当然歪んでいると俺は答えた。別に真実が必ずしも世界の為になるとは思わないが、それでも今の地球連邦のやり方には腹の立つ部分が多い。いちいちやり方が姑息だし、都合の悪い情報は全て別の相手に押し付ける。そんなやり方だから反抗勢力なんて生まれてしまうのだ。
しかもインベーダーを始めとした宇宙からの侵略者も地球を狙っているのに、ホントアホかと言いたい。
だから地球圏内で今も争いが絶えないんだと愚痴をこぼすと、トレーズさんは言った。「戦いは本当に悪なのかと」
それに思わずこう言った。戦いに善も悪もあるものかよと、あのトレーズ＝クシュリナーダに啖呵を切った。
戦いとは命と命の奪い合い、殺し合いの別称だ。そこに善悪の挟む余地はない。殺した相手は一方的に自身が正義だと主張し、殺された方は罵られる。遙か古より人間のみが続ける行いだ。
苛烈にして熾烈、その凄惨さ故に人々は恐怖し、そして……平和の尊さを知る。もし

戦いを勝利や敗北以外で決着を着けるのなら、それは戦いに巻き込まれた第三者が止めるか互いに武器を収めるしかない。

それが出来ないから、今も戦争が続いている。そう答えるとトレーズさんは俺を試すように訊ねてきた「君は敗者になりたいのか？」と。

いや知らんし。第一、俺は戦いなんて基本的に嫌いな人種だ。平和万歳。平和を謳歌して畳の上で大往生で逝きたいものである。

だが、その前にやらねばならない事がある。リモネシアを焼いた連中と人を陥れた奴を一人残らず叩き潰す。敗者とか勝者とか、それを語る余裕など今の自分にはないのだ。

ただ、もし敗北する事で誰かに何かを伝えようとするというのなら、俺は多分軽蔑や称賛とは別の感情を抱くと思う。何せ、敗者に価値を見いだす人の言うことだ。俺程度の人間が彼の考えを計ることなど出来やしない。

そう言うとトレーズさんは満足そうに笑ってくれた。君と話せて良かったと、トレーズさんは笑いながら俺の手を取って俺を友だと呼んでくれた。

しかも向こうも自分のことを閣下ではなくもっと気安く呼んで欲しいと許しを貰えた。いやー、人生何が起こるか分からないモノである。

……最後までエレガントな人だったなぁ。ああいうのがカリスマだと言うのなら、あ

そこまで器が大きいのも納得できる。

今、俺はトレーズさんの屋敷を出てある所に向かっている。この世界で最も標高の高い建造物の一つである軌道エレベーターのあるアフリカタワーである。

視点の高い場所に行けば考えも広くなるかなぁなんて安直な考えのもと、俺はタワーへと向かった。

……トレーズさん。何気に俺がこの世界に来て初めて向こうから友達だと言ってくれた人。俺はあの人の事を生涯忘れないと思う。

え？　シュナイゼル殿下はどうしたって？　……あー、いや。別に忘れてなかったよ？　ただ友達というか知り合いというか……うん、他意はないよ。

ホントダヨ？

◇

「……シュウジ＝シラカワ、その身にもう一つの人格を宿した魔人なる青年よ。君との出会いは私の人生の中で大きな糧となった。感謝しよう」

シュウジが屋敷を後にする様を執務室から眺めるトレーズは微笑む。

良い時間を過ごした。長い間人と接してきた中で、彼と過ごした僅か数時間の相対は、彼の人生の中でも大きな跡を残した。

無理矢理道場に連れて行き、最初こそは一方的にやられる彼だったが、驚くべき学習能力で此方の動きを読み取り、自分のモノへと昇華させていた。

大したモノだと、トレーズは思った。勉学にしても戦いにしても、あそこまで真摯に受け止める者は嘗ての友人以外に見ることのなかったトレーズとしては、シュウジとの殴り合いは心地よささえ覚えた。

頑張って欲しい。今後彼に訪れる困難を想像したトレーズは、去り行く青年の背中に心の内でエールを送る。

その時、執務室のドアが開かれ、一人の少年がズカズカと乗り込んできた。そんな少年の態度にもトレーズは笑みを絶やす事なく振り返る。

「トレーズ＝クシュリナーダ、俺に一体何の用だ」

「……ヒイロ＝ユイ、君に渡したいモノがある」

そう言って執務室を後にしようとするトレーズだが、一度だけ名残惜しそうに振り返る。

『俺は戦いの善し悪しなんて分かりません。実際戦争に巻き込まれて多くの人間が死んでいきます。……俺は戦争を肯定できません。けど、誰かの為に戦う兵士まで否定する事も、俺にはできません』

（充分だ。その言葉が聞けただけで私は君と出会えた事に意味を見いだせるよ）

（さらばだ。シュウジ＝シラカワ、私の数少ない友よ。もし叶うのであれば、次にまみえる場は戦場以外の所で会いたいものだ）

もう、道は引き返せない。今後自分の往く道を見据えながら、トレーズはヒイロと共に地下へと降りていった。

その31

――――ブリタニア、帝都ペンドラゴン。皇族や多くの貴族達が住まう地、いつもはその豪華絢爛さと賑わいで活気づいていた街が、今は嘘のように静まり返っている。まるで何かに怯えているように過ごす彼等は、常にある存在の名を口にしていた。

〝魔神〟グランゾン。地球連邦の直属の部隊であるアロウズとブリタニア帝国最強の騎士、ナイトオブラウンズを完膚無きまでに叩きのめした脅威の怪物。

そして〝魔人〟蒼のカリスマ。魔人と魔神、二つの強大な存在に叩きのめされた事により世界……中でもブリタニアのショックの大きさは計り知れなかった。

最強の騎士であるナイトオブラウンズが四人も参加したのに惨敗、彼等の力を良く知る貴族や皇族はその結果に打ちのめされていた。

ナイトオブラウンズが集うキャメロット。先の作戦でどうにか生き残る事が出来た彼等の報告により、ナイトオブラウンズ達は声を失って俯いていた。

「……戦闘データ、見せてもらったわ。凄まじいのね、例の魔神は」

「正直、勝てる気がしなかった。相手がデカくて機動や初動は此方が圧倒的有利になっ

ていたのに、まるで歯が立たなかったよ」
「気付いたら、後ろに立ってた」
　ナイトオブラウンズのＮｏ．６と３、ジノとアーニャの口から語られる魔神の底なしの強さ、当事者だけあって震えながら語る二人の説明からは、魔神の恐ろしさが嫌でも伝わってくる。
「……奴は、ルキアーノはどうした？」
「ブラッドリー卿なら、戻ってくるなりずっとトレーニング室に籠もっているわ。奴自身は次こそ魔神を仕留めると意気込んでいるけれど……正直言って、奴の怖さを紛らわしているようにしか見えないわ」
「……そうか」
　作戦に参加したナイトオブラウンズの全員が恐怖を刷り込ませられている。歴戦の強者であり帝国最強の名に相応しい実力を有した騎士達が悉く戦意を折られている。
　同じナイトオブラウンズのモニカは彼等のことを最初は軽蔑した。オメオメ負けたまま逃げ帰ってくる彼等を内心で罵倒した。
　だが、奴と戦った機体の中で比較的に損害の少ないモルドレッドから検出された戦闘データを目の当たりにし、モニカは言葉を失った。
　無限に降り注がれる光の槍の雨、有無を言わさず機体を圧壊させる高重力の圧力。魔

神の手にした剣は一振りするだけで何体もの機体を巻き込んで両断し、持ち前の機動力で陽動をしかけたトリスタンの背後にいつの間にか佇んでいたという。

理解も抵抗も出来ないままやられていく艦隊。その中でもナイトオブラウンズをワザと生かしておくのは魔人なりの優しさのつもりなのだろうか？

それとも、殺す価値すら見いだせられないまま放置されたのであれば、ナイトオブラウンズの評価は地に落ちる事になる。

モルドレッドのハドロン砲で攻撃しても通らないバリアー。いや、そもそも衛星戦略兵器の〝メメントモリ〟でも貫けない機体相手にどうやって攻撃を通せば良いのだ。

火力、装甲、どんなに離れても次の瞬間には距離を詰められる加速力と自在に場所を移動出来る瞬間移動能力と戦略兵器でも通さないバリアー。そしてトドメにそれらを完全に使いこなしている技量、こんな化け物相手にどう戦えばいいのだ。

ラウンズの間に沈黙が流れる。せめて魔人、魔神のどちらかに何らかの欠点があればそこから突き崩して活路を見出す事も出来るが、そのどちらも依然として謎のままだ。

破界事変の頃から分からない蒼のカリスマの目的、何度も戦場に現れているのに全く解明出来ない魔神のブラックボックス。

どちらも破界事変の一年が経過した今でも分からない難題。果たして、こんな怪物相手に地球連邦は戦えるのだろうか？

もし、奴が悪意を持っている存在なのだとするなら……その時、地球に住む全ての生命は選択を迫られる事になる。

〝支配〟か〝破滅〟か、嘗て自分達がエリア１１を始めとして行ってきた侵略行為を、まさか自分達に問われると思わなかった彼等は、それ以降もなにも話さず俯いていた。

◇

エリア１１。総督府の執務室。

「あの、本当に大丈夫なのですかスザクさん。怪我をしているなら無理しないで下さいね」

「僕なら大丈夫だよナナリー、怪我はどこもしてないし、体は至って良好だし、当分は戦

いに出ることはないよ」
「そうですか。それは良かったです」
ナナリー総督の微笑みに枢木スザクも自然と笑みが浮かぶ。先のリモネシアの戦いで大破寸前にまで追い込まれたランスロットは、現在ロイド伯爵の元で大急ぎで修理されている。
そのお陰で暫く前線に出ることは無くなったスザクは、ナナリー総督と共に書類整理に追われていた。幼なじみとの和やかな時間、仕事の最中という制限の中ではあるが、落ち着いて過ごせるスザクの表情は穏やかだった。
しかし、ある出来事を思い出し、スザクの心に影が落ちる。
『赦す赦さないなどと、傲慢な話なのですよ』
リモネシアでグランゾンと戦ったときに聞こえてきたあの言葉、それはまるで自分の事を見透かされているように思えた。
何が分かる！　戦いの最中でそう叫ぼうとした次の瞬間、魔人から発せられる言葉にスザクは何も言えなくなった。
『それに、赦しは請わないなどとアナタは言いますが、それはアナタの本音の裏返しなのでは？』
『な、なにっ!?』

『丸見えなのですよ。アナタの考えている程度は……誰かに赦して欲しいのなら、まずアナタから対話を持ちかけなさい』

その後、グランゾンの圧倒的なまでの戦闘力に呑み込まれ、ランスロットは海に叩きつけられて戦闘不能に陥った。

……これ以上ない程に叩きのめされた。想いも、力も、全てが奴に通用しなかった。

（間違っていたのは俺の方なのか？　いや、それだけはない筈だ。ユフィを殺し、ずっと俺やナナリーを騙していたアイツこそが――！）

「スザクさん？」

負の感情が沸き上がる。胸の奥底から沸き上がってくる憎悪にスザクの表情が歪んだとき、ナナリーの心配そうな声が彼を現実に引き戻した。

「……あ、あぁごめんナナリー、ボーッとしてた。それで、何か話が？」

「い、いえ、そんな大した話では……スザクさんこそ大丈夫なのですか？　何だか気分が悪そうでしたから心配で……」

心配そうに顔を歪ませるナナリーに、スザクはしまったと内心で焦る。彼女は幼い頃に事件に巻き込まれた所為で足と目を不自由にさせているが、その代わりとして良く相手の気持ちを見透かす時がある。

もし自分の気持ちを彼女に読まれたら、今度こそ自分はナナリーに向き合えなくな

る。それだけを阻止すべくスザクは冷静さを取り戻し、優しい枢木スザクの仮面を被ってナナリーに向き直る。
「ちょっと難しい書類に当たってね、でももう解消したから大丈夫だよ。それよりもナナリーこそ僕に聞きたい事があったんじゃないのかな？」
「えっと、そうなんですけど……スザクさん、怒りません？」
「怒らないさ」
　自分のわざとらしい演技に吐き気がする。だが、それを悟られないよう懸命に仮面で感情を殺すスザクはオズオズと話しづらそうにしているナナリーを促した。
「あの、今話題になっている蒼のカリスマという人についてなんですけど、本当にその人って悪い人なんですか？」
「……え？」
「世の中の人達は皆彼の事を恐れたり敵視していますけど、本当に皆さんが言うように悪い人なのか……ちょっと良く分からないんです」
「どうして……そう思うんだい？」
「――インペリウムが現れた頃、当時の人達は怯えていました。増える次元獣、押し寄せるインベーダー、世界の人々が泣いていたばかりの頃、蒼のカリスマは率先してそれらと戦っていたと噂で聞いた事があります」

「……けど、それは襲われた街の金品を略奪する為だって地球連邦は言っていたけど？」
「ワザワザ金品を得るために次元獣とその度に戦うのですか？」
「……それは」
　言えなかった。本当は次元獣やインベーダーと戦うだけで、その後は金品略奪どころか人々がお礼を口にする前にどこかへ消えていったというのが正しいのだと、枢木スザクは口にしなかった。
　全ては現地球連邦の情報操作によるもの、グランゾンが戦った内容も当時はその国の軍隊がグランゾン諸共撃退したのだと嘘の情報を流している。
　当時そこに住んでいた人々にも厳しい箝口令を強いている為に正しい情報は流されておらず、当時グランゾンが現れた地域には全て魔神の印象を悪くするための偽情報で溢れている。
　そんな徹底された情報統制の中、噂だけとはいえ耳にするナナリーにスザクは何も言えなかった。
　偽りの情報で溢れている中、真実だけを耳にするナナリー。そんな彼女に動揺するスザクだが、ナナリーは続けて話を続ける。
「私、いつか蒼のカリスマさんとお話してみたいです。美味しい紅茶を飲んで気持ちも落ち着けばきっと楽しい時間が過ごせると思うのです」

「……そう、だね。そうなるといいね」
「はい」
眩しい程の笑顔を向けてくるナナリーにスザクは絞り出すように答える事しか出来なかった。
何が正しくて何が間違っているのか、枢木スザクの頭は執務の時間が終わるその時まで頭の中で巡り回っていた。

◇

――――黒の騎士団移動拠点・斑鳩。
「ゼロー、リモネシアの避難民に関する調査票を持ってきたわよー？」
「あぁ、そこに置いておいてくれ」

ゼロのプライベートルームとして活用されている執務室。カレンが紙束を持って部屋に入ると、チェス盤を前に座り込むゼロが仮面を外していた。
「ちょっとルルーシュ、仮面なんか外してていいの？　私じゃなかったらどうする気よ」
「今俺達を除いたＺＥＸＩＳのメンバーは全員休憩所で雑談中だ。此方に誰かが此方にくるのは後１０分は先だ」
カレンの指摘に即座に返す。そんなルルーシュの素っ気ない態度に少しばかり苛立つカレンだが、ルルーシュが視線を落としているチェス盤を見て表情を変える。
「それって、この間の中華連邦での？」
「あぁ、その時の盤状を再現していたんだ……奴に繋がる情報を探る為にな」
「え？　そ、そんなのでシュウジの事が分かるの？」
「チェスや将棋といったボードゲームはその時の戦略で相手の考えがそのまま反映される事が多い。中には相手に読まれないよう幾つかブラフを混ぜる奴もいるが……それよりも、調査の方はどうだった？」
露骨に話を逸らすルルーシュに不思議に思うカレンだが、此方が調べた情報が欲しいというルルーシュに異を唱える事はなく、一度はテーブルに置いた紙束を再び手にとってルルーシュに手渡した。
既にリモネシアと蒼のカリスマ……シュウジ＝シラカワとの間に何らかの関係性が

あると践んだルルーシュは、蒼のカリスマの正体を伏せたままリモネシアの避難民にシュウジについて聞き込むようカレンに命令していたのだ。
「はいコレ、言っておくけど殆どの内容が私やヨーコのモノと同じよ。ヘタレでお人好し、中には物知り博士なんて呼んでいる子もいたけど総じてアイツに対する評価は同じ……本当にそんなのが役に立つの？」
「なんだ？　カレンは気にならないのか？　噂の蒼のカリスマの正体が嘗て自分達を守ってくれた魔神だと知って、本当はときめいてたりするんじゃないのか？」
「し、Ｃ．Ｃ．!?　アンタいつの間に!?」
「私はずっと前からここにいたぞ」
　向こうのソファーから身を乗り出して現れる緑髪の少女の突然の登場に、オーバーリアクションで驚くカレン。悪戯に成功したことで気分を良くした少女はそのまま、やらしい笑みを浮かべてカレンに問いかけた。
「確か、奴と魔神が最初に現れたのはトーキョー租界の時だったな。魔神がブリタニアのＫＭＦを蹴散らしながら突き進むその光景に当時の連中はさぞ呆気に取られただろうな。おまけにリモネシアやサンクキングダムでは危機に瀕した私達を助けに来たというし、奇人変人の類より白馬の王子様みたいではないか」
「乗っているのは馬ではなく魔神だがな」

人形を抱き締めながらゴロゴロするＣ．Ｃ．にルルーシュが鋭く突っ込みを入れる。面白くないとふて寝するＣ．Ｃ．を無視し、ルルーシュは書類に目を通す。
「……確かに、この情報からはシュウジ＝シラカワに不審な所は見受けられない。なら、やはりあのシュウ＝シラカワなる人格が彼を支配して操っているという可能性が大きくなるな」
「そいつがシュウジを操っているのね」
「あくまで可能性だ。シュウ＝シラカワにシュウジが協力している可能性も捨てきれない今、結論を出すにはまだ早い。騎士団のメンバーや他のＺＥＸＩＳ達には引き続き警戒対象として様子見する事を伝えておいてくれ」
「分かったわ」
蒼のカリスマの時のシュウジが別の人格に支配されている状態を可能性として知り得たカレンは息巻いて部屋を後にする。
残されたルルーシュは一人静かに思案する。だが、その表情は考えれば考える程に怒りに染まり、瞳の奥では憤怒の炎が燃えさかっていた。
（俺が奴とチェスを打った時、奴はチェス盤どころか俺すら見ていなかった）
盤上に置かれたチェスの駒の配置、そこにはあと一手で黒が白に打ち勝てる状況になっている。

ただし、それは互いの知恵を比べ合って出来た状況ではない。一方的に、そしてこれ以上ない程に巧妙に誘導された結果に生み出されたものだ。

（シュウジ＝シラカワ、奴の目には終始俺など眼中になかった！　チェス盤すら見ずに、ただチェスの駒を動かしていただけだ。それなのに……！）

嘗て、ルルーシュ＝ヴィ＝ブリタニアにはチェスで戦ってどうしても勝てない相手が存在した。それこそがブリタニアの皇位継承権第二位、シュナイゼル＝エル＝ブリタニアだ。

だが、そのシュナイゼルでさえ相手と盤上の駒を無視する事はなかった。無論競い合う相手には敬意を評する彼なりの礼儀もあるのだろう。

奴が無礼なだけなのか？　いや違う。何度も言うように奴は〝相手や盤上の駒すら見ないでチェスを打っただけ〟だ。

向かい合って打っていたのに、シュウジ＝シラカワの瞳には何も映っていなかった。見る価値もない。そう言われたようで、ルルーシュは久し振りに仮面の奥で激怒した。

そしてその結果、奴の手の内など全く読めない内に互角に持ち込まされ、挙げ句の果てにシュナイゼルに自分に関する情報を渡してしまった。

（シュウジ＝シラカワ。お前が何者だろうと最早関係ない。俺を侮った事、いつか後悔させてやる！）

瞳の奥でリベンジに燃えるルルーシュ。それをソファーに寝ころんだままのＣ．Ｃ．はどこか嬉しそうに頬を弛めていた。

様々な者から様々な視点で見られた一人の人間、蒼のカリスマことシュウジ＝シラカワ。

さて、色んな人達から注目されている当の本人はというと――――――。

◇

ハローエヴリバディ♪　皆元気かなー？　私シュウジ＝シラカワは、現在アフリカタワーに昇って宇宙を間近で観察しておりますー♪

いやぁ、まさかこんな形で宇宙に出られるなんて本当生きている内は何が起こるか分からないものですねー、宇宙服も着ないで大気圏を突破出来るなんてシュウジ感激ー♪

え？　いきなりのハイテンションがウザいって？　おいおいそれは言わない約束だろジョニー、こんなノリでなきゃやっていられない状況ってのが人生の世の常だろ？　ＨＡＨＡＨＡ。

――――いや、もうね。ホントお腹一杯なんだわ。アロウズに捕まった事と良い、今回の旅は初っぱなから色々あって少し静かな場所で考えたいかなーって思ってさ。

ほら、宇宙って静かなイメージあるじゃん。インスピレーションとか高まって意外なひらめきとか出て来そうじゃん。

……なのにさぁ。

「現地球連邦政府と交渉する為、申し訳ないが諸君達は人質となって貰う！　極力手荒な真似はしたくないのでどうか大人しく従って欲しい！」

なんで、行く先々でトラブルに巡りあうのかなあ。

俺、呪われてんのかな？

その３２

さて、アフリカタワーを観光気分で訪れた自分は現在、テロリスト達の人質となって低軌道ステーションのど真ん中で、他の客員の人達と一緒に大人しく座らされています。旅の行く先々でトラブルに巻き込まれている感がする俺は、自身が呪われているのではないかともの凄く落ち込んだ。

だが、嘆くだけでは状況が変わる事はないしいつまでも悲観している訳にもいかないので、開き直るつもりで今は状況の再確認を行い気分を紛らわせようと思う。

客員を人質に取り低軌道ステーションを占領したとされるテロリスト達、彼等の親玉とされるパング＝ハーキュリーと名乗る人は元地球連邦の軍人さんで、昨今のアロウズのやり方に異議を唱えるべく、今回の騒動を起こしたらしいのだ。

で、世界の重要拠点の一つであるアフリカタワーにある低軌道ステーションを占領して、人質を使って地球連邦政府にアロウズの解体を要求するのだとか。

……まぁ、気持ちは分かるよ。アイツ等のやり方は腑が煮え返る位ムカつくし、しかも都合の悪いことは全部人に押し付けるし、自分らは全く悪くないと惚けているのだか

ら苛つくのは仕方ないと思う。

実際、破界事変の頃に次元獣やインベーダーを俺とグランゾンで倒していた事実をこれでもかとねじ曲げてくれたしね。……別に見返りを求めていた訳じゃないからそれは構わないんだけどね。けど、その所為で多くの人間に無茶な箝口令を強いたりして小さな子供達にまで強制させる様は非常に宜しくないと思う。

え？　よくそんな情報知ってるなって？　世界を旅して回る身としてはそんな光景幾らでも目の当たりにしているから、嫌でも知ってしまうものなのだよ。

この間なんか、街中でアロウズの軍人が泣いている子供にまで手を上げようとするから、つい間に割って入ってしまったし……何でも蒼のカリスマを悪く言うなと連中に逆らったのがその時の騒ぎの原因らしいのだ。しかもその子は当時、次元獣に家族が襲われそうになっている所を魔神に助けられたのだという。

その時は代わりに俺が殴られる事で事なきを得たけど……いやぁ嬉しいものだね。子供一人にでも分かってもらえるのって、ボッチの自分にはこの上ない励みになる。

……とまぁ、そんな事が世界各地で起きている為にそのハーキュリーさんが立ち上がったというのだが、気持ちは分かる。激しく同意できる。俺個人としては諸手を上げて応援してあげたい所だけど――――正直言って今回のやり方は悪手でしかないと思うんだよね。

アロウズの連中の最も厄介な所は自分達が絶対に正しいと思い込んでいる所と、その為には手段を選ばない所にある。

今ここに大勢の客員がいるが、下手したら連中は本来人質である彼等民間人ですら反政府勢力として片付けて、ハーキュリーさん達諸共消すかもしれないのだ。

大方ハーキュリーさんの狙いとしては、今後のアロウズの対応でここにいる客員達に現連邦政府のやり方を教えてやろうとしているのが狙いなのだろうが……ちょっと見通しが甘いよね。

まぁ〝軍人は民間人を守るモノ〟という正しい認識を持っているが故の隙なのだが、これぱかりは仕方ない。

さて、ここまで状況を改めて今後の自分の行動なのだけれど……普通はここで大人しくしているべきなんだろうね。

だって俺元々は普通の人間だし、今は魔人なんて呼ばれていたりするけれど、本当はそんなモノから程遠いどこにでもいる普通の民間人だ。

……最近普通という言葉を良く使うが、決して自称じゃないことを付け加えておく。

さて、散々言い訳しておいてなんだが、そろそろ行動に移ろうと思う。

え？　お前普通なんじゃなかったのかって？　その通り、俺自身は普通の人間だ。けど、トイレに行っている合間に魔人に変身したらそれは普通とは呼ばないだろう？

意味が分からない？　あれだよ、梅干し食べて変身する某ヒーローと同じ原理だよ。あっちは電話ボックスで変身するし、どちらかと言うと俺はヒーローじゃなくて怪人の類なんだけどね。

「あ、あのー……スミマセン。ちょっと良いですか？」

「む？　どうした？　顔色が悪いぞ？」

「と、トイレに行ってきても……宜しいですか？」

「……仕方あるまい。俺もついて行く事になるが、それで良いな？」

ハーキュリーさんという人物について行くと覚悟を決めただけあって、テロリストという烙印を押されても紳士的な軍人の人。

その人に内心で謝罪しながら、彼と共に一度トイレに向かった。

それから１０分後、トイレに行って帰ってこない二人の様子を見に行くと、同志の一人が便座カバーの上に座って気絶している姿を発見される。

◇

「さて、連邦政府のお偉いさんは此方側の要求に応えてくれるかね」
「さてな、どちらにせよここを守るのが俺達の仕事だ。絶対に完遂させるぞ」
「あぁ、無論そのつもりだ」
　低軌道ステーション管制室前。扉の前に立って陣取っている二人の元軍人の彼等には、並々ならぬ覇気が感じ取れる。
　蟻の一匹も通さない。現地球連邦政府を変える為、ハーキュリーに付いていくと覚悟を決めた二人には確固たる決意がその全身からにじみ出ていた。
　喩え次元獣が相手でも絶対に後ろに下がらない。そんな気概で立つ彼等の視界にある場違いな物体が入ってきた。
「……なぁ」
「任務中だぞ。集中しろ」

「いや、けどさアレって……ダンボールだよな？」
通路の隅に置かれた一個のダンボール、先程まではあんなものは影も形も無かったのに、現に今はそこにポンと置かれている。
「……あれって、罠のつもりなのか？」
「どこかの子供の悪戯だろ。ったく、他の連中はなにやっているんだ」
「兎に角、あれをそのままにして置く訳にはいかないだろう。片付けるついでに叱ってくるよ」
「すぐに終わらせろよ」
やむを得ないとその場を一時だけと離れる元軍人の青年、近付くにつれてダンボールが大人一人は入る大きさだと認識した時、青年の頬が僅かにひくつく。
「おいおい、一体何人の子供が入っているんだよ。幾らそんなつもりは無いとはいえ俺達はテロリストだぞ。もう少し危機感を持っても――」
そこまで言い掛けて青年の動きは停止し、同時に言葉が失った。開けたダンボールの中にいたのは茶目っ気の過ぎる子供達ではなく、今世界中で魔人と恐れられている――。
「あ、蒼のカリ――っ!?」
そこまで言い掛けた時、青年は魔人の手に顔を捕まれ、問答無用の勢いでダンボール

の中に引きずり込まれていった。
仲間がダンボールの中に引きずり込まれる様を見て銃の引き金を引こうとするが、ここは低軌道ステーション。万が一施設の重要部分に当たれば、その瞬間に大惨事が引き起こされる。
撃ちたくても撃てない悔しさに駆られ、もう一人の青年も致し方ないと思いながらもその場を離れる。
急いで後を追うが既にダンボールの姿はなく、気配も感じられなかった。奇妙な静けさだけが辺りに充満した。
……嫌な予感がする。人でも次元獣でもなく、もっとおぞましい何かと戦っている様な気分に嫌な汗が頬を伝って流れ落ちる。
そういえば、最近観たＳＦ映画にあんな感じのモンスターが出てきたなと考えた瞬間。
「お仕事、ご苦労様です」
背後から聞こえてきた声、その声に反応してすぐさま距離を開けようとするが首に腕らしきものが絡みつき……。
そこで青年の意識は暗闇に包まれ、魔人の足音は遠ざかっていった。

◇

「いい加減目を覚ませハーキュリー、こんな事をしても連中の情報統制の闇に葬られるだけだ！」
「それでも、誰かがやらねばならんのだ。何もせずに現状を静観していたら、世界は歪んだままに固定されてしまう。それだけは阻止せねばならないと何故分からんのだセルゲイ」
低軌道ステーション管制室。ステーションの全容が表示される大モニターの前で二人の男性の言い合いが響きわたる。片や今回のテロの主犯格である元連邦の軍人、パング＝ハーキュリー。
そしてもう片方が嘗てロシアの荒熊として知られたセルゲイ＝スミルノフ。今回のテロを止める為、ハーキュリーの親友でもあるセルゲイは彼の凶行を止めるべく連邦からの使者として低軌道ステーションに潜入、ハーキュリーの説得を試みた。

対するハーキュリーも昔共に戦った戦友を無碍に扱う事はせず快く迎え入れたが、セルゲイの説得には全く耳を貸さずに投降の意志を見せなかった。
「それになセルゲイ、仮に私達が投降したとしても政府……いや、アロウズは我々を赦しはしない。反政府勢力の一つとして、何も残さず始末するだろう」
「……」
「奴等の情報統制は徹底している。私が幾らここで連中のやり方に異議を唱えても結局は連中に思い通りの情報に変えられてしまう事だろう。だがな、幾ら徹底された情報管理でも間近で実態を目撃した人々の目や耳は閉じれないものだ」
「ハーキュリー、お前は……まさか!?」
そこまで口にするハーキュリーにセルゲイは全て理解した。何故今回の騒動に万を超える人質を取らねばならないのか、それは彼等に今後行われる政府の対応をその耳と目で体感させる事にあった。
幾ら政府が情報統制を徹底しても人が実際に目にした光景までもが誤魔化せる事は叶わない。セルゲイの読みが当たった事によりハーキュリーの笑みが深くなった。
「今の世界を生み出したのは今を生きる我々に他ならない。だからこそ私は無関係を貫く市民達の目を覚まさせてやらねばならないのだ」
「だからと言って、何の抵抗も出来ない市民を巻き込むのか！　ハーキュリー！」

セルゲイもハーキュリーの主張が理解出来ない事はなかった。破界事変以降世界は戦いを恐れ過ぎる余り、自ら立ち上がる事を放棄してしまっている。
戦いが善とは言わない。だが、この歪んだ世界で間違った情報を信じて生きる人々の様子がとてもマトモな人間の生活にも思えなかった。
まるで家畜。夢も生き方も死に方も、何もかもが決められたこの世界で、果たして人類は生きているといえるのだろうか。
……言い返せない。平和の尊さとそれ故の危うさを知るセルゲイはハーキュリーの言い分に何も言えなくなった。
自分では彼を止められない。そう思われた時、扉の方から第三者の声が聞こえてきた。
「ですが、その考えには大きな落とし穴が存在していますよ。パング＝ハーキュリー殿」
「「「っ!?」」」
突然聞こえてきた声に振り返ると、管制室の全員が息を呑んだ。
魔人〝蒼のカリスマ〟この世界で最も危険だと言われている怪物が目の前にいる事実にハーキュリーとセルゲイは揃って銃を魔人に向ける。
「貴様、見張りの者はどうした？　それに、どうやってここまでこれた？」
「見張りの人達はこれまで出会ってきた人達同様、少しばかり眠ってもらっています。

尤も、気絶させた程度ですので後数分もすれば目を覚ます事でしょう」
「バカな!?　彼等は私の同志の中でも精鋭の集団だぞ！　そんな彼等を全員……化け物か貴様」
「そんな訳ないでしょう。見張りの地点を見て私の進行方向の妨げになる人達だけを選んで不意打ちしたに過ぎませんよ」
　まるで大したことはないと言うような口振りだが、目の前の魔人が尋常じゃない腕の持ち主だという事は二人を始めとした管制室全員が理解した。
　ここに来るまでに邪魔な人間だけを排除してきたと言うが、物音を立てればそれだけで蒼のカリスマの存在は明らかになる。要所だけを狙って無力化したと言っても相手は銃器を手にした軍人だ。そんな彼等を相手に素手で打ち倒すなんて真似、とてもできる芸当ではない。
　しかも見張りの配置は基本的に距離を短めに設定している。それを誰にも気配を悟られず一つずつポイントを的確に無力化するなんて普通ならあり得ないワザだ。
　目の前の仮面の男は、やはり魔人なのだと誰もが確信した。
　そんな彼等に魔人こと蒼のカリスマは人差し指を立てて……。
「そんな事よりも、セルゲイ＝スミルノフさん。パング＝ハーキュリーさん、そして貴方達を含めたテロリストの皆さんにお願いがあります」

〝ここは一つ、私と協力しませんか？〟

カリスマから告げられる〝お願い〟に再び全員が言葉を失った。

その３３

衛星軌道上。オービタルリング周辺に展開されたアロウズ艦隊、低軌道ステーションをジャックされた報せを受けた彼等は現場から離れた宙域で待機、まるで何かを待ちわびるように動こうとしなかった。
「全く、連邦軍のお馬鹿さん達にも困ったものです。大人しく我々アロウズの言いなりになっていればいいものを……」
艦隊を束ねる為に今回の任務を任されたのはアーバ＝リント中佐。先のアーサー＝グッドマンが戦死された事を受け、進んで今回の任務の参加を受け持った。
全ては世界の恒久平和の為、表向きはそう言っているが……。
（ンフフフ、准将が亡くなったお陰で晴れて私も昇格となりました。これで私の出世の道も安泰、それもこれも皆あの魔神のお陰。全く、魔神様々ですよ）
己の欲求と快楽を満たす為、敢えて今回の作戦に参加するリント中佐。その瞳にどす黒い欲望の光を宿らせ、モニターに映る低軌道ステーションを眺めて……。
（准将も愚かな事をしたものです。当時の任務はメメントモリを奴に当てる事、戦おう

とせずにいち早く戦域を離脱する事がもっとも利口だというのに……）

亡き准将の最期を無様と内心で罵るリント中佐、彼等の間には部下と上司という間柄であっても仲間という認識は持たなかった。

全ては恒久平和実現の為という建前を使っての蹂躙、それを行う事こそが彼にとって重要な事。

「中佐、別働隊から報告がありました。オートマトンをキルモードでの投入が完了との事です」

「了解しました。……メメントモリの修復は？」

「出力は最大４０％と大幅に低下しておりますが、発射可能です」

「よろしい。ならばチャージを完了させ次第発射させます。彼等は既に反政府勢力、躊躇は無用ですよ。ンフフフ……」

嫌らしい笑みを浮かべて舌なめずりをするリント中佐。その視線の先にはテロリストの他に大勢の民間人を乗せた低軌道ステーションがあった。

◇

――――低軌道ステーションに機械の駆動音が響き渡る。まるで何かを探し回る様に通路を這うモノ達の名は〝オートマトン〟

災害救助や人間が適応出来ない環境で人類の代わりに活躍すると期待されていた彼等は今、その人間を殺す為に低軌道ステーションの内部を移動していた。

オートマトンは〝キルモード〟に設定され、それはカタロンを始めとした反政府勢力、地下や廃コロニーの中へＭＳの代わりに潜入し、容赦なく人を撃ち殺す悪魔のシステムとなっていた。

テロリストを民間人諸とも殺すために動く現在のオートマトンは差し詰め死神。黒の体を滑らせ、幾重にも分かれて近付く死の列。

一人も逃がしはしない。そう定められた命令の下で二体のオートマトンが次の角を曲がった時。

――――っ!?

電流が走る。何が起きたかと状況を分析する前にオートマトンは機能を停止し、その

活動を完全に無力化してしまう。
　そしてオートマトンが動き出すのを見計らって頭上から一人の蒼い影が舞い落ちる。目にも留まらない早業でオートマトンの装甲の一つを剥がし、その中から見える接続部らしき箇所にメモリースティックらしきモノを打ち込み、もう片方のオートマトンにも同じ様にメモリースティックを打ち込む。
　やがて機能を回復させて動き出すオートマトンだが、その反応はこれまでとまるで違って見えた。すぐ近くに標的と定められた人間がいるのに、攻撃はおろか寧ろ懐いた犬の様にその人物の周りを回っているではないか。
「さて、この二機のキルモードは解除されました。安全ですので出て来ても構いませんよ」
　蒼い影――否、蒼のカリスマのその一言に今まで物影に隠れていた元軍人だったテロリスト達が顔を出す。その中には今回の首謀者であるパング＝ハーキュリーの姿もあり、蒼のカリスマのデタラメな行動力に彼を含めた全員が言葉を失って呆然としていた。
「貴様、一体……何をした？」
「ん？　見て分かりませんか？　ハッキングによる行動の上書きをしたんですよ。そんな事よりも、これでやり方は分かったでしょう？　皆さんも随時行動に移って下さい。

このオートマトンはあなた方の指示に従って行動するように仕込みました。以後はこの二機を使いながら上手く立ち回り、他のオートマトンも可能な限り無力化して下さい」

蒼のカリスマはその言葉だけ残すと、単身でステーションの奥へと姿を消す。残されたハーキュリー達も事前に伝わったオートマトンを無力化する作業に移るべく、行動を開始した。

◇

さて、色々準備時間に手間取ったけど、これで漸くステーションに侵入してきたオートマトンの対応に集中出来る。

あの後、ハーキュリーさんとスミルノフさんに協力を求めた自分は二人にある提案を出した。内容はそんな複雑なものではなく至って単純。

人質の人と共に脱出する事。最初は自分の言葉に難色を示していたが、アロウズの前に人質の意味はないと懇切丁寧に教えてあげると、ハーキュリーさんは肩を落として落ち込むが、すぐに状況と現状を受け入れ、自分の案を飲んでくれた。

スミルノフさんも自分に幾つか聞きたい事があったようだが、事態が事態なのでそこは自重し、人質を逃がす為の作業に取り掛かってくれた。荒熊という割には大人しく協力してくれるなと思ったのは内緒だ。

さて、そんな事よりも今回の人質の脱出作戦の主な概要を説明したいと思う。普通なら人質を軌道エレベーターに乗せて即座に地上に降ろすべきだと思われるが、残念だがそれは出来ない。

理由としては先程無力化したオートマトンが脱出できない原因の一つとして挙げられる。アロウズの連中はオートマトンをキルモードにしてステーションに投入してきた為、下手に動くことは出来ない。

しかも数が３０を超える為、一つ一つ相手にしていてはステーションは戦場になり、市民が巻き込まれる危険性が高くなる。

そんな事態を避ける為に自分が提案したものはただ一つ、〝倒すのは面倒だからいっそ仲間に引き入れる作戦〟である。

内容は作戦名そのまま、特殊な電磁波で一時的に機能を停止したオートマトンに予め

用意していたウイルスを流し込み、命令内容を消すという単純な作業だ。
で、その特殊な電磁波とやらを作るのに必要だったのが、市民なら誰もが持っている携帯電話だ。病院でよく言われたりするでしょ？　携帯の使用はお控え下さいって。
病院には病気や怪我を治す器具や機械が多く置かれている施設だ。そこでは僅かな電波もそれらの道具を使った際に悪影響になり得る事があるから、病院関係者の人たちは事前に携帯の使用を制限する旨を伝えたりする。
要するに、携帯の電波を利用してオートマトンに指示を送っているアロウズとの通信を阻害して、次にオートマトンそのものの活動を停止させ、その間にウイルスを注入。労せず強力な兵器を入手したと言うわけ。
勿論携帯電話にそんな物騒な機能は搭載されていない。その辺りは自分の手が加わっているが、オートマトン一つを止める際には通信阻害用と活動停止用、合わせて二つの携帯が必要とされている。
が、その辺りは人質の皆さんから協力を戴いたので何とかクリアー、予め外との連絡を絶つためにテロリストの皆さんが携帯電話を没収していたのだ。
……携帯電話かぁ、この世界に来てから一度も使ってないな俺。そんな金ないから当然だけど。
閑話休題。

そしてオートマトンを止める際に使われるウイルスは、以前使用した列車のプログラムを応用して何とか短時間で作り上げることができた。

運が良いのか悪いのか、以前列車に乗り合わせていた会社員の人も低軌道ステーションに来ていたのだ。こんな所で巡り会えるとは思えず、思わず苦笑いしたのは内緒だ。

そうやって自作で作り上げた阻害用の携帯、停止用の携帯、そしてウイルス注入用のメモリースティックは限られた時間の中どうにか投入されたオートマトンの半分に迫る量を作ることが出来た。

流石に五分やそこらでは投入されたオートマトンの分全てに対して作るのは無理だったが、これで残りのオートマトンの対応にも負担は激減される事だろう。

対オートマトンの隊と市民の安全確保の隊に分かれた片方の問題はこれで解決された事になる。

さて、後は市民達に対しての方なのだが、此方は下手な案は出さず、敢えて正攻法で対応する事にした。

幾ら安全が考慮されているとはいえここは宇宙に造られたステーションだ。当然緊急用の宇宙服は用意されている筈。

スミルノフさんを隊長に残りのテロリストの人達には、そんな市民達に宇宙服を渡す単純な作業になっている。

単純と口では軽く言えるが、市民の数は万に迫り、数十人しかいないテロリスト達では対応に時間が掛かるのはどうしようもない事だ。
テロリストの言うことに市民は満足に動くことは出来ない。そこで政府からの使者としてステーションに訪れたスミルノフさんを中心に市民を説得、協力的になってもらう事で宇宙服に全員が着替え終える時間を短縮させる事にした。
政府からの使者ともなれば市民からの信頼は厚い。ハーキュリーさんでは首謀者として論外だし、自分に至っては……不気味がられるのがオチだ。
ともあれこれで準備は終えた。後は皆がそれぞれ上手くやってくれるのを祈るだけ……。
「と、早速連絡がきたか」
渡された通信装置から連絡の合図が鳴る。状況はどうなったかなと内心少し不安に思いながら通信装置を入れると――――。
『こちらスミルノフ。市民達への宇宙服の着用を終わらせた』
『ハーキュリーだ。此方もオートマトンの機能を停止させた』
両方からそれぞれの役割を終了したという報告を耳にした俺は思わず頬が弛んだ。流石昔からの戦友同士は息が合う。
ハーキュリーさん達が向かった先でもドンパチの音は聞こえなくなったし、どうやら

本当にオートマトンを片付け終えたようだ。
ならば次の指示を伝える為に一度スミルノフさんに合流しよう。そうハーキュリーさんに伝えるとすんなりと言うことに従って了解の返事を戴いた。
俺ってもしかして指揮官の才能もあったりして……はい、すみません。調子に乗りました。
さて、次の指示を伝えるべく俺も急いでスミルノフさんの所に合流しよう。もし、自分の推測が正しければマジで時間がなさそうだからな……。

◇

「リント中佐、メメントモリのチャージが間もなく完了します」
「よろしい。カウントダウンを開始なさい」
「了解。カウントダウン開始」
モニターに映し出されるメメントモリ発射のカウントダウンの数字に、リントの顔が

愉悦に歪む。戦いとは殲滅と蹂躙にこそ楽しみがあるとされる彼には、これから起こる悲劇が溜まらなく嬉しく思えるのだ。

人が泣き喚きながら死んでいく様、それを間近で見物することが出来ないのが唯一の不満だが、今はそんな事が気にならない程に気分が高揚していた。

これから起きる未曾有の悲劇を自分の手で引き起こせる。万に迫る人間達を合法的に処分できる悦楽にリントは涎が出るのを必死に我慢していた。

（蒼のカリスマも甘いですねぇ。メメントモリの破壊を確認しないだなんて……お陰で私の人生最高の瞬間が巡ってきたじゃあありませんかぁ）

先のリモネシア強襲の際、魔神の凄まじい反撃によって大打撃を受けたアロウズ。衛星兵器も破壊され、今後は反政府勢力や鬱陶しいＺＥＸＩＳに後手に回るのかと思われた矢先に起きた低軌道ステーションの占領事件。

これでテロリストを葬れば再び世界の主導権はアロウズが握る事になる。そしてそのスパイスとしてとある悲劇を引き出せば、世論もアロウズに味方する事だろう。

真実など何も知らない市民に伝える必要はない。必要なのはアロウズという地球唯一の勢力が絶対的組織として君臨すればいいのだ。

カウントダウンがゼロになる。その瞬間リントは己の欲望が最大限に膨らみ、それを爆発させるようにメメントモリを発射させた。

オレンジ色の極光が低軌道ステーションのタワーを抉る。タワーの外壁がパージされ、地上へ落下する映像を目にした時、リントはこみ上げる悦を抑える事が出来ず……。

「ンフ、ンフフフ……アーハッハッハッハ！」

笑った。これでもかと盛大に笑い出した。自分の手で引き起こした光景が、タワーの中で惨めに死んでいく人間が、それを想像するだけで彼は笑いを止める事が出来なかった。

何て凄い光景なのだろう。そう思いながらモニターを眺め、再び笑い始めた時……。

『随分楽しそうに笑っているじゃないか？　ええ？　リント少佐？　いや、今は昇格して中佐だったかな？』

笑いが……止まった。聞いたことの無い声、けれどその声の主が誰なのか何となく察しが付いたリントは恐る恐る隣の方へ視線を向ける。

いる筈がない。こんな所に奴がいる筈がない。そう思い込みながら彼が振り向いた先にいたのは――――。

『データ上でしか見たことがなかったが、実際見ると面白い髪型をしているな。アンタ』

アロウズの全戦力を単騎で半分近くにまで壊滅させた化け物、〝魔神〟グランゾンがそこに立っていた。

――――喉が乾く、息が乱れる。先程の笑っていた顔の筋肉が嘘のように凍り付く。

見下ろされる魔神を前にリントは自身の震える体を抑えるので精一杯だった。
「な、何故貴様がここにいる！　リモネシアでの件以降ずっと姿を眩ましていた貴様が何故今になって！」
『……魔人が人の常識の範疇に収まると思うのか？』
「……っ!?」
言葉が出ない。数多くの戦場に立たされて敵対してきた多くの人間から恨み辛みの言葉を聞かされて来たが、これほど圧力のある存在を前にしたのは初めてだ。
汗が止まらない。目の前の魔神を相手にどう生き残るか考え、リントが掠れる様な声で絞り出したセリフは……グッドマンと同じ醜い命乞いだった。
「た、頼む。いや頼みます！　私を見逃して下さい！　アナタの望みは何だって叶えます！　そ、そうだ今後アロウズの活動内容も全部アナタにお話しします！　い、いいや、私がアナタの仲間になります！　これでも私は指揮官として名を馳せた者、アナタの足でまといには――――」
『――もう、いい』
「……へ？」
『俺からお前に言える言葉はもう、ない。哀れすぎて……言葉が、見つからない』
艦隊を包み込むように空間が歪む。そこから覗かせる無数の光を前にリントはその

目を恐怖に歪ませ。

『……ワームスマッシャー』

次の瞬間、リントを始めとしたアロウズ艦隊はまとめて光の槍に貫かれ、メメントモリごと爆散。

今度こそ、地球を脅かす衛星兵器は形も残らず全て消滅。グランゾンは興味もなさそうにその場を離脱、低軌道ステーションへと引き返していった。

◇

戦略兵器と思われる厄介な代物を今度こそ破壊した自分は、改めて低軌道ステーションの民間人を今後どうするのかと考える。

既にタワーは先の兵器の為に半壊し、パージされた多くのピラーが地上に降り注がれ

ている。早くピラーの破壊を実行したい所だが、ここを疎かに出来ないのもまた事実だ。

人質の皆を軌道エレベーターに乗せず、宇宙服を着させたまま待機させるまでは正解だったが、このままでは人質の人達がこの宙域で漂流する事になる。

それに、今はハーキュリーさん達がそれぞれ機体に乗って周囲を警戒しているが、次にまたアロウズの艦隊が押し寄せてきたら此方は非常に拙い事になる。

向こうは事実を知る市民が邪魔だと思っているから容赦なく攻撃してくるけど、此方はそうもいかない。自分がグランゾンで蹴散らそうにもグランゾンでは力が大きすぎて、最悪攻撃の余波で被害を受けてしまう。

……やはり、ここはスミルノフさんに頼んでフロンティア船団に頼る他ないのか。個人的にフロンティア船団には近付きたくないのだが、そうも言ってられない。

よしやるか！　いっそ開き直って虎の巣の中に突っ込む勢いで決断した俺がスミルノフさんに通信を入れようとした時、一体の機影を確認した。

もう増援が来たのか!?　焦る俺の前に現れたのは白い機体のガンダム、νガンダムとアムロ大尉だった。秘匿回線で通信を入れてくるアムロさんに応える為に回線を開くと、モニターの向こうにパイロットスーツに身を包んだアムロさんが映し出された。

『蒼のカリスマ……いや、シュウジ＝シラカワで間違いないな』

『……敢えて私の正体については聞きません。今は時間がないから手短にお願いします。何用ですか？』

『ここは俺が何とかする。お前は早く下に向かいピラーを破壊してくれ……頼む』

アムロ大尉直々のお願いに思わず面食らうが、先も言った様に今は時間がない。この場はアムロさんに任せる事にして、俺はピラーの降り注ぐ地上へとグランゾンを走らせた。

『……やはり、俺は奴が邪悪だとは思えん。カミーユ、お前の憂いはもしかしたら早い内に決着が付くかもしれないぞ』

地上へ真っ直ぐ降下していく魔神を見て、アムロはどこか嬉しそうに笑っていた。

その３４

三つの軌道エレベーターの一つであるアフリカタワー。人類の英知の結晶と知られるこの建造物とその周辺地域が今、未曾有の危機に瀕していた。
アフリカタワーの半壊、それによって大量のピラーがタワーよりパージされ、地上へと降り注がれる。
大気圏外からのピラーは大気圏によって燃え尽きるがそれ以外のピラーは健在している為、タワーの周辺地域には無数の瓦礫の雨が降り注がれる事になる。
その地域にはタワーに勤める従業員やその家族達が多く住んでいる区域もある。突然の事態にパニックと化した住民達は軍の誘導の下、速やかに避難を開始した。
そんな事態を目の当たりにし、被害を最小限に食い止めようとＺＥＸＩＳもこれに参加。航空可能な機体のみという制限された場所でピラーに対する防衛行動が開始される。
『くそう！　数が多すぎる！』
『泣き言を言う暇があったら一つでも多くピラーを落とす！　この下にはここに住む人達の帰る場所があるのよ！』

『分かってるよ！』

だが、そんな彼等も無数のピラーの前に徐々に追い詰められていた。撃ち落としても次の瞬間には現れる大量のピラー、一つでも落としてはならないと思えば思うほど精神的に追い詰められる彼等は、通常の戦闘の倍以上疲弊し、破壊しても破壊しても出てくるピラーの数に苦戦を強いられていた。

『ＺＥＸＩＳが、ガンダムが目の前にいるのに、何でこんな事を……！』

『ぼやいてんじゃねぇぞ准尉！　俺達軍人は民間人を守るためにいるんだろうが！』

『は、はい！』

そんな中、意外な存在が彼等の援護に出て来た。本来なら敵対する立場であった部隊、〝アロウズ〟少人数とはいえ彼等がピラーを破壊する為に戦う様は、ＺＥＸＩＳの面々には大きな衝撃を与えた。

そして正規軍もピラー破壊の援護に回り、その中には〝ガンダムエピオン〟を駆るゼクス＝マーキスの姿もあった。

『これ以上、地上はやらせはせん！　ＺＥＸＩＳ、今は何も言わず共に戦場に立たせて欲しい！』

『すげぇ、世界中から応援が駆けつけてくるぞ！』

『これなら、ピラー破壊の漏らしもなくなりそうかも！』

『ディアナ様、一度この場で月光蝶を使いましたが、今回はもう使用する事はないようです』

――タワー崩壊の危機という未曾有の大災害を前に皮肉にも一つに纏まりつつある世界に、ＺＥＸＩＳは言いようの無い気持ちの高ぶりを感じた。

このままならピラーの全破壊も可能かもしれない。そう思われた時、漆黒の悪意が防衛戦に姿を現した。

『はぁーい♪　フラフラちゃんとＺＥＸＩＳのみんなー、元気にしてたかなー♪』

『マリリン！　テメェ何しに来やがった!?』

『そんなの決まっているじゃない。都合の良いときにだけ手を組んじゃうお馬鹿な貴方達に対する――――お邪魔虫よん♪』

無数の次元獣と共に姿を現したパールファングとマリリン＝キャットの乱入に、元部下だったクロウが叫ぶ。怒りを露わにする彼を邪悪な笑みで以て応えるマリリンは次の瞬間、宣言通りピラー破壊の妨害を開始した。

次元獣とインサラウムの無人偵察機による妨害攻撃、唯でさえピラー破壊に手が放せないＺＥＸＩＳ達は横からの攻撃に対応仕切れず、幾つもの攻撃に直撃してしまい、瞬く間に危機に陥ってしまう。

『テメェ！　いらねぇ邪魔してんじゃねぇよ！』

そんなマリリンに怒りを爆発させ、突撃してくる機体があった。アロウズに自ら志願する事で大切な人を守ると決めた元ＡＥＵのエース、パトリック＝コーラサワーだ。

ピラーを破壊しながらパールファングに肉薄するコーラサワーのジンクス、まさか格下相手から攻撃を受けるとは思わなかったとマリリンはその涼しい表情を憤怒の色へと変貌させる。

『雑魚風情が、粋がるんじゃないよ！』

『ぐぉっ!?』

『死んじゃいなぁ！』

ランドスピナーで機体の腕を切り落とし、体勢を崩された所へ足蹴にされた事でコーラサワーは地上へと落下する。が、彼も破界事変を生き残ってきた猛者だ。それが運であれ自身が生き残る為の術は体の奥底に染み着いている。

擬似太陽炉を稼働させ、機体の姿勢を安定させる。どうにか窮地を脱したかと思われた瞬間。

『ギシャァァァッ!!』

『っ!?』

目の前にブルダモン級の次元獣が迫っていた。その口を開き、凶悪な牙が迫り来る中、僚機達からの声が聞こえてくる。

『少尉！』

（や、やべぇ！　俺、ここで死んじまうのか!?　まだ大佐とキッスもしてないのに！）

死の間際に思い浮かぶのは最愛の人、あの眼鏡の奥から見える綺麗な瞳に惹かれて今日まで生きてきたのに……。

不死身のコーラサワーもここまでか、想いを寄せているカティ＝マネキン大佐に心の内で愛を叫んだ時。

――空から、光の槍が降り注いだ。

『『『っ!?』』』

コーラサワーに迫っていた次元獣も周囲のピラー諸共貫かれて爆散していく。その突然の光景にその場にいる誰もが一瞬言葉を失うが、ＺＥＸＩＳだけは光の槍を放った者が誰なのか察することができ、無意識に上を見上げた。

『こんな時にこんな所に、一体なにしに来やがった！』

『蒼のカリスマ！』

落下してくるピラーの群から姿を現す蒼の魔神〝グランゾン〟と蒼のカリスマ。彼の登場に誰もが注目するが……。

『私に気を取られる暇があるのですか？』

『何っ!?』

『今は口ではなく手を動かしなさい』
まるで此方を意識していない言動にＺＥＸＩＳの何名かは不満を露わにしているが、蒼のカリスマが言うように今はピラーの破壊が最優先。
それぞれがピラー破壊の防衛に回る中、グランゾンに無数の次元獣が押し寄せてくる。
『アッハッハッハァ！　こんな所で出逢うなんて奇遇ねぇ魔神ちゃん。リモネシアでの借り、ここで返させてもらうわ！』
次元獣の群の隙間から見える黒い機体に蒼のカリスマの心中が冷たくなる。だが、今はピラーの破壊が何よりも優先されるこの場において奴に拘るのは拙い。
そう思いながらグランゾンの胸部を展開し、周囲に幾つもの空間の穴を開くと……。
『ワームスマッシャー、発射』
その穴に散らばるように光を何度も放ち、次の瞬間……。
次元獣を含め、落下してくるピラーの大半が光の槍によって貫かれた。
『……は、はぁぁぁぁっ!?』
『何だ……今の!?』
『奴が、やったのか!?』
落下してくるピラーの枚数は大小含めて数万はくだらない数があった。それがたっ

た一度の攻撃で過半数が消滅した事実にＺＥＸＩＳは勿論、敵味方を含めた全員が戦慄した。

これが魔神の力、そう思いながら今も降ってくるピラーに対応する彼等は、再び信じられないモノを目の当たりにする。

『――――重力干渉による誤差修正、ターゲットマルチロック……ワームスマッシャー！』

再び放たれる閃光、それと同時に万を超えるピラーを一度に一斉に破壊し、消滅させていく。

その光景に半ば呆然としながらも、ＺＥＸＩＳ達は続行してピラーの破壊とインサラウムの尖兵であるマリリンの対応に集中するのだった。

◇

ピラーの破壊を開始して一時間。全てのピラーを破壊し終えた自分は仮面を外し、額

から流れる汗を拭って一息入れていた。
あれから次元獣とインサラウムの連中もどこかへ消えていったし、被害も最小限に抑えられた事で自分は半分気が抜けていた。
というのも、連続してワームスマッシャーのマルチロックシステムを一度に何度も使用した為、それによる精神疲労が今回一番キツかった。
６５０００を超える標的に同時攻撃が可能なグランゾン。それらを四回も連続して使うとなると重力誤差による修正とか、周囲の機体を巻き込まないようにする為の計算等で大忙しな為、状況も合わさって精神的疲労が半端ないのだ。
尤も、それは自分がグランゾンを扱うのにまだ未熟なだけなのだが……やっぱシュウ博士は平然な顔をして何度もワームスマッシャーを撃てたりするのかな？　そりゃあの人がグランゾンを操れば地球も消滅するよ。
改めて思い知るシュウ＝シラカワという人物の凄まじさに驚嘆を覚えていると、周囲の機体の何れかから通信が入ってきた。仮面を被り直してモニターに通信回線を開くと、破界事変で一緒に戦った事のあるパトリック＝コーラサワーの笑顔が飛び込んできた。
『よお蒼いの！　久し振りだなー。今回はお前の援護に助けられたよ。サンキューな』
『いえいえ、此方も貴方の支援攻撃は大変助かりました。流石は元ＡＥＵのエース、マネ

キン大佐も鼻が高い事でしょう』
　画面の向こうでイヤーと照れるコーラサワーさん。うん、ホントいい人だよねこの人。アロウズは今の所外道な連中しか見かけてないからアレだけど、コーラサワーさんの様な人もいるのなら彼等に対する考えも少し改めた方がいいのかもしれない。
　つーかこの人ホント腕がいいよね。此方がピラーを破壊する為のロックに時間を割いている中、近付いてくる次元獣を的確に迎撃してくれるし、しかもそのお陰で自分は余計な迎撃行動を取る事もなく、スムーズにピラーの破壊に専念できたのだから。
　破界事変の頃もその実力と強運で何度も修羅場を経験しながら無傷で生き抜いたというし、ある意味キリコさんと同じレベルの人間だよね。本当尊敬するわ。
　と、そんな仕事終わりのサラリーマンの様な会話を暫く楽しんだ後、近付いてくる機影が確認された。何だと思い振り返ると、二体のアロウズの機体が此方に銃口を向けていた。
『蒼のカリスマ！　今回の惨劇はお前が引き起こしたものなのか!?』
『……』
　物凄い剣幕で怒鳴ってくる声に思わず声が詰まる。……正直に言えば、今回の騒動に置いて自分の立場はイエスともノーとも言える微妙な所なんだよね。
　だってハーキュリーさん達に事の占領後にあれこれ指示したのは事実だし、アロウズ

の戦略兵器の場所を特定する為にワザと撃たせた事もある。グランゾンで攻撃を防ぐ手もあったけどそれでは相手に次の行動を許してしまうし、低軌道ステーションに残した市民達を戦闘に巻き込んでしまう危険性があったのでこの案は断念した。

結果的に被害らしい被害は出なかったが、今回の騒動の一因は自分にもある為に目の前の人からの追求に強く反論する事は出来なかった。

そんな時、今まで音信不通だったインカムから通信の音が鳴る。捨てるのも抵抗があったので持っていたのだが、まさか連絡が来るとは思わなかったので突然の発信音に驚きながらインカムを手にして見ると……そこから聞こえてきたスミルノフさんの連絡に自分は一つ名案を思いついた。

案と言っても大した話ではない。スミルノフさんの報告を目の前の彼等に伝わるよう話すだけだ。

『……セルゲイ＝スミルノフ。彼は今フロンティア船団に民間人の救援を要請し、今船団に民間人と共に保護をしてもらっている所です。真実を知りたいのであれば彼の話を聞くといい』

『アイツが、父が関わっているのか!?　今回のテロも父の友人が首謀者だと聞くが……まさか父も!?』

『信じる信じないかは貴方次第です。尤も、そうやって物事を決めつけるようでは到底

真実には辿り着けないでしょうが……』
『何だと!?』
『恒久平和。確かにそれは人類が目指すべき一つの到達点、それを大儀と掲げるあなた方はさぞかし崇高な理念で動いているのでしょう』
『貴様、何が言いたい!?』
『覚えておきなさい。理念も理想も所詮は人が生み出したモノ、何が正しくて間違っているなど、人の数と視点、解釈でどうとでも変わるのです。精々偽りの世界に呑み込まれないよう気を付ける事ですね』
　さて、らしい事をいって挑発した所でそろそろ自分もこの場から離脱する事にしよう。そういってグランゾンのバーニアに火を噴かした瞬間、通信が突然入ってくる。
　通信先は……Ｚガンダム。カミーユ＝ビダンからの秘匿回線通信だった。
『待ってくれ蒼のカリスマ……いや、シュウジ＝シラカワ！　何故お前が今回の騒ぎに介入した！　お前が出て来たのはもしかして衛星兵器の完全な破壊が目的なんじゃないのか!?』
『……アムロ大尉に宜しく伝えて下さい。彼のお陰で私も自分の不始末を拭う事が出来ました』
『――――っ！　やはり、お前は！』

『では、ご機嫌よう。……リモネシアの皆を、宜しく頼む』

ほんの僅かなやりとりの中、最後に出した自分の言葉にカミーユ君の目が大きく開かれたのを見て、俺は仮面の奥で笑みを浮かべながらグランゾンと共にアフリカタワーを後にした。

後に、アフリカの悲劇と呼ばれるこの出来事はアロウズの情報操作により、蒼のカリスマただ一人に仕向けられた事だと報じられ、全ての罪が彼に向けられる事になる。

大半の人々がその情報に踊らされる中、当時低軌道ステーションで人質となっていたある子供だけはとあるメディアからの取材を受けた際、そんな事はないと頑なにその事実を否定した。

『魔人さんはね、かくれんぼが得意なの！』

そう言ってとある週刊誌に記載された子供の背景には、ダンボールで作られた魔神の

姿があった。
　また、今回の騒動の後でアロウズのアンドレイ＝スミルノフの行方が不明になり、現在行方を捜査中。時同じくして軍を抜けたセルゲイ＝スミルノフもその後行方を眩ませており、関連性を詳しく調べている模様。

その３５

K月×日

なんだかここ最近あんまり日記を書いていない気がするが、一度止めてしまうと怠け癖が付いてしまいそうなので、暫くは日記を綴る日々を送りたいと思う。

さて、アフリカタワーでの悲劇は起きた災害の規模の割には被害はそれほど大きくならず、負傷者はいても死傷者はゼロと、人的被害は最小限に留まったという奇跡が起きた。

タワーからパージされ、落下してくる無数のピラーもほぼ全てが地上には落ちず、自治体が上手く立ち回れば、早くて一週間程で住める環境にまで整えられるという。

グランゾンで頑張って良かった。今まで住んでいた場所が無くなるというのは精神的に大きくダメージを受けるモノだから、ピラーを全て破壊出来た事は本当に良かったと思う。

ただ例の如く、地球連邦は今回の事件の全てを自分こと〝蒼のカリスマ〟に擦り付けて、市民からの非難を避ける小賢しい手を使っていたりする。

別に分かっていた事だし、今更その程度で怒る気もしないけど、いい加減そろそろ別のやり方を模索しないとこれまでの嘘が一気にバレる気がするのは自分の気の所為だろうか？

まぁ、その時の政府の対応を楽しみにする事にして、次の話に移ろう。内容はズバリ、蒼のカリスマに対する世間の反応だ。

今まで自分なりに必死に行動していたけれど、あまり省みる事はなかった為、アフリカタワーの一件から落ち着いた今日、思い切って調べてみたのだ。

何だか気恥ずかしいと思いながら近くのネカフェで蒼のカリスマをググッてみると……なんと１０００件を超える蒼のカリスマの記事が掲載されていたのだ。

しかも中には破界事変の頃から自分を追っている人もいるらしく、中には〝ダンクーガは戦場に必要か？〟の著書で知られるイザベル＝クロンカイト女氏の名前もあるからビックリ、俺ってこんな有名だったのねと今更ながらな感想を抱いていた。

他にも黒の騎士団の総帥ゼロとは兄弟の間柄とか、地球連邦の影の支配者説とか、様々な噂が飛び交う中、一際気になる話が出て来た。

記事の内容は歴代の賞金首について、ここ数年で巨額の賞金が掛けられた犯罪者がリストアップされている所謂裏の記事と言える話なのだが……なんと、多くの賞金が掛けられた賞金首の中で蒼のカリスマが単独トップを貫いていた。

賞金の額は５０００億。国家予算並の賞金に自分は笑えばいいのか泣けばいいのか分からなくなり、それを最後にネカフェで蒼のカリスマに関する情報を探すのは止めにした。

因みにゼロは自分と少し間を開けての二位、ＺＥＸＩＳに協力しているからという理由で危険性は低めに設定してあるらしい。

つーか、ここでもボッチな俺って……しょーもない情報に踊らされている自覚はあるが、やはりこういうのは中々ショックだ。せめて眠る事で今日の日記は終わる事にする。

言い忘れていた。今回の本来の首謀者であるパング＝ハーキュリーさんを初めとするテログループの人達は、蒼のカリスマに脅されて仕方なく共謀したという事になっており、軍を辞職させる事で責任を取らせる形となった。

しかもその後行方を眩ましてどこかの反政府勢力に身を隠しているなんて噂を耳にしている。世界の統一に忙しいのも分かるけどさ、こういった面が今の地球連邦の脆さを露わにしているみたいだ。

最近では女王リリーナも頑張っているみたいだし、意外と早く現政府の政権は変わるんじゃないかなと楽観視してみる。

Ｋ月Ｇ日

……今日、久し振りにいけ好かない奴と遭遇した。〝ガイオウ〟破界の王と恐れられていた奴と街中を歩いていた最中に遭遇、ホットドックを片手にニコニコ笑いながら声を掛けて来やがった。

しかも街中で「蒼いの！」なんて呼ぶものだから思わず奴にハイキックをかましてやった。尤も、奴はてんで効いた様子はなかったけど……つーか、蹴った足の方がダメージが大きかったってどゆこと？　次元獣の王だけあってその体は鋼という訳か。

何度無視しても話し掛けてくる奴に仕方なく対応していると、今度は意外な人物が声を掛けてきた。

〝カルロス＝アクシオン＝Ｊｒ．〟嘗てリモネシアに資金や物資を支援してくれた恩人で、その人がガイオウとつるんでいるのを目の当たりにした自分は相当驚いた事だと思う。

しかも向こうは自分が蒼のカリスマだと言うことは知っていたらしく、一緒に食事でもどうかと誘ってきたのだ。しかも来ないと色々バラすという素敵な脅し文句も一緒に……。

此方も色々話を聞きたかった為に誘いを受けたのだが、カルロスさんは此方の話をてんで聞こうとしなかった。

折角これまで援助していてくれたのにリモネシアを焼かれてしまい申し訳ない。と、謝罪しても空気を読めの一言で一蹴されてしまった。カルロスさんは旅をしていた自分の話にしか興味が無かったようで、蒼のカリスマ時の自分の話を聞いて終始ニヤニヤしているのが印象的だった。

結局その後、連れられた料理店ではそれらしい話はなく、もっぱら談笑ばかり。ガイオウはバクバクと出された料理を食べるだけでちっとも会話に参加してこない。……別に話すことなど何もないのだけれど。

ただ、別れ際にこれからどこ行くのか訊ねられてこれから行く場所を教えると、カルロスさんは笑顔で「頑張ってね」と応援してきた。

あの笑顔にはどんな意味があるのだろう。そして、あの二人はなんの為に行動を共にしているのだろう。結局その辺りは聞き出す事は出来ず、二人が人混みの中に消えていくのを見送る事しか出来なかった。

因みにカルロスさんが自分の事を知っていた理由だが、やはりガイオウの奴が口を滑らせていたらしい。ピザ二つで買収されるとか、懸賞金５０００億の自分の立場が形無しである。

金持ちのカルロスさんに口止め料とか払える訳もなく、その時の自分は酷く焦った。けれどカルロスさんは自分に脅しをしてくる事などなく、「あの蒼のカリスマを驚かせ

た事、それだけで満足した」とだけ言って、それ以降自分に関する話をする事はなかった。

本当なら釘を刺しとく意味で言い含めておく必要があると思うが、何故かあの二人はそんな真似をするとは思えず、自分もそれ以上話す事はなかった。

……カルロス氏は兎も角ガイオウにすら抱く奇妙な信頼感。嘗て戦った敵を相手に何をバカなと否定しながら、今日の所は終了する事にする。

明日向かうのはエリア１１。色々気を付けながら寝ることにする。

Ｋ月Ｗ日

――今日、少し不思議な出来事が起こった。なんと蒼のカリスマである自分に、お願いと称して依頼を出してくるお嬢ちゃんと遭遇したのだ。

事の発端はお昼過ぎ、何らかの情報がないかとエリア１１の裏の顔、ゲットーにまで足を運んだのだが、そこで黒の騎士団とブリタニア軍の戦闘に巻き込まれてしまった。

何故ＺＥＸＩＳの面々ではなく黒の騎士団がエリア１１に来ていたのかは分からないが、彼等が単独で動いている以上ＺＥＸＩＳの権限は通用せず、ブリタニアは容赦なく襲ってきたというのが今回の戦闘の切っ掛けだろう。

しかも戦場にはナイトオブラウンズの１０の機体も見え、戦場はより苛烈となった。

クロウさんのブラスタや他のＺＥＸＩＳの面々が駆けつけるまで押されていた黒の騎士団。しかも戦闘の中伏兵だったもう一人のラウンズ、枢木スザク君のランスロットが乱入してきて横腹を突かれた形で攻撃されたカレンちゃんの紅蓮は不覚を取られ戦闘不能、ブリタニア軍に連れ去られてしまった。

本当は自分も助けに向かいたかったけど、その頃の自分は別の所で動ける状態じゃなかったのだ。

一応ここエリア１１では正式な手段で来ているが、ゲットーはブラックリベリオンの時もあり、観光客や普通の人間は立ち入り禁止の区画となっている。当然そのままの格好で人目に付けば怪しまれるので、「だったら最初から怪しい格好で入ればいいじゃん」という単純な考えで蒼のカリスマ状態でゲットーに侵入していた自分は、ある修羅場に出くわした。

ゲットーの中でも開けた場所、公園と思わしき場所に二人の男女が向かい合っていた。服装からして学生らしい二人なのだが、何やら物々しい雰囲気だった。

何やら「ルルを……！」とか「私も混ぜて！」とか、女の子の必死な言葉に男の子の方は何も言わず、いきなり銃口を女の子に突きつけたのだ。

痴情のもつれによる喧嘩にしては行きすぎると判断した自分は、二人の間に割って入る。その際に今にも発砲しそうだった少年の手に飛礫を当て、怯んだ隙に銃を蹴り飛ば

した。

その後、自分の説得をどうにか聞き入れてもらった彼は渋々とゲットーから立ち去っていった。いやー、男女の間による痴情のもつれというのはこんなにもデンジャラスなものなのか。今まで生きてきた人生の中で彼女なんかいた試しのなかった自分は、青春も怖いものだなとシミジミ思いながらその場から去ろうとしたのだが……なんと、その時に助けた女性から助けてもらった事への感謝の後、私の大切な人を守って欲しいと言われたのだ。

イマイチ要領の得ない話だが、何でも黒の騎士団のゼロと、それに連なる人達を守って欲しいというのだ。何故そこでゼロが出てくるのかは分からないが、涙目で必死に訴えてくる少女の願いを無碍には出来ないので取り敢えず了承する事にし、女の子を租界の入り口まで送ってあげた。

――――改めて思うけどゼロに連なる人達を守れって事は、要するに黒の騎士団を守れって事なのだろうか？　つまりそれはブリタニア軍に連れ去られたカレンちゃんを助けてくれって事？

後で調べた情報によるとカレンちゃんは破界事変の頃、アッシュフォード学園という学校でレジスタンスと学生をしていたと言うし……もしかしてそれ関連？

だとしたら俺、今度はエリア１１の政庁に侵入する事になるの？　確かカレンちゃん

はそこに連れ去られたみたいだし。

まぁ、夜中に忍び込んだらいけなくもないけど……あそこって今ラウンズが最低一人いるよね？　ラウンズって化け物みたいに身体能力高いって聞くけど、そいつらと生身で戦えって事？

今更ながら安請け合いした事を軽く後悔する。けれど涙目で頼み込んでくる女の子の願いを無碍にするのもどうかと思うし、取り敢えず頑張ってみようと思う。

ゲットーに入る前に目的の情報を入手しておいて良かったと思いながら、今日の所は終わりにしようと思う。

え？　何を調べていたんだって？　トゥインクルプロジェクトのシェリル＝ノームの今後の話。なんでも近い内、今まで休養していたシェリルがサンクキングダムで女王リリーナと共に来訪し、歌を披露する予定なのだとか。

そこには当然あの女もくる。シェリル＝ノームのマネージャーにしてプロジェクトの責任者、グレイス＝オコナーが。

標的の一人が漸く仕留められそうなのでその時を楽しみにしながら眠ることにする。

その３６

　エリア１１の政庁にある執務室、ブリタニア皇女の一人であるナナリー皇女殿下は、夜の帳が落ち始めた今も懸命に書類の山と戦い続けていた。
　点字に書かれた文字の羅列、そこを指でなぞりながら書類の内容を一枚一枚確認する作業は中々に神経を使うものであり、今後のエリア１１を良くする為の重要な内容ならば、幼い少女には並々ならぬ重圧となっている事だろう。
　それでもエリア１１という国を良くし、イレヴンと呼ばれる元日本人の人達の生活を良くする為に必要なものだと理解しているナナリー皇女は、額に浮かぶ小さな汗を拭いながら最後の書類にサインを印す。
「……ふう、出来ました」
「本日の公務、全て終了しました。――――お疲れ様ナナリー、ちょっと疲れたかな？」
「確かに少し疲れましたけど、私なら大丈夫です。スザクさんこそ私の為に付き合わせてしまってごめんなさい」
　側に控えていた枢木スザクに書類を渡しながら微笑むナナリー。その人に感謝の意味を込められた笑顔を向けられ、ラウンズの一人であるスザクの表情もまた笑顔に弛

む。

「気にしないで、僕の方の仕事は修理の終えたランスロットの調整だけだったし、元々今日はナナリーの手伝いに来るつもりだったから――さて、今日はもう一段落した事だしお茶にしよっか。今日はいい茶葉が手に入ったからナナリーにご馳走するよ、ちょっと待っててね」

そう言いながらスザクは執務室の戸棚に入った茶葉と急須を取り出して、備え付けられた簡易の給水器に手を伸ばす。その際、何か思い詰めた様子のナナリーが茶葉の袋を開こうとしたスザクに待ったを掛ける。

「――あの、スザクさん。カレンさんの事なんですけど……やはり話をさせてはもらえないんですか？」

「……」

ナナリーからのその一言にスザクの手が止まる。黒の騎士団の右腕、紅月カレンの捕縛の事は既に政庁中に伝わっている。当然ナナリーの耳にも入っている事だろう。

嘗てカレンとナナリー、そしてスザクは同じ学び舎で同じ生徒会に属していた学友だ。お互いに友人だと思っていただけに、カレンが黒の騎士団に属していたという報せは、当時のナナリーに大きな衝撃を与えた。

その彼女が今、捕らわれた形で政庁にいる。黒の騎士団に属しているとはいえ、彼女

もＺＥＸＩＳの一員だ。そう簡単に刑罰は下されないだろうが、それでもその前に一度は話がしたい。牢獄の中ではなく、友人として話がしたいと、スザクに申し入れるが……。

「……ゴメンねナナリー。まだ彼女から聴取を終えてないから会わせる訳にはいかないんだ」

「そう……ですか」

「けど、もう少し待って欲しい。そうだね、少しでよければ明日にでも面会の時間は作ってもらえるよう僕の方から頼んでみるよ」

「本当ですか？　ありがとうございます！」

最初こそは面会を断られて落ち込むが、明日なら大丈夫だという言葉に、ナナリーの表情は満開の花の様な笑顔となって咲き誇る。

その眩しく微笑む彼女の笑みをスザクは愛しそうに笑みを返す。お茶の入った日本独自の湯飲み椀、それをナナリーの前に置くと、そっと優しくナナリーの手を沿えて椀を包ませるように持たせた。

「お茶が入ったよ。熱いから気を付けてね」

「はい、ありがとうございます。スザクさん」

「じゃ、ちょっと僕はこれで失礼するよ。すぐ戻ってくるから待っててね」

そう言ってスザクは執務室にナナリーを置いて部屋を後にする。恐らくは先程渡した書類の提出と、先程言ったカレンとの面会による予定調整の打ち合わせに向かったのだろう。

悪いことをした。自分の我が侭に付き合わせてしまった事を悔む一方で、ナナリーの心の内にはある不安が広がっていた。

お茶をこぼさないよう優しく支える手つき、気配りといい言葉といい、側で支えてくれるスザクの態度は、昔と変わらない優しいままの彼だ。だが……いや、だからこそ戸惑う。あんなに優しかった彼の手が、何故あんなにも冷たくなっていたのか。

手の温度や触った感触から感じる冷たさではない。心の奥底から冷え込んだモノを確かにあの時ナナリーは感じた。

何故あんなにも冷たくなるのか、自分の知るスザクとは何もかもが違うという事実にナナリーが戸惑う中、扉を叩くノックが聞こえてきた。

誰だろうか。もしかしたら渡した書類になにか不備があったのかもしれない。そう思いナナリーは扉の向こうにいる者を部屋に通すと……。

「……貴方は、誰ですか?」

今まで聞いたことのない足音にナナリーの表情が曇る。目が見えない代わりに周囲の音である程度の状況を認識出来るようになったナナリーは、眉を寄せて不信感を露わ

にする。
部屋に入ってきた者の足音はこれまで聞いてきた者とはどれも違う響きだった。一歩ずつ近付いてきている不審者にナナリーは車椅子を動かして逃げようとするが、後ろには壁が控えており彼女の逃げ場はどこにもなかった。
迫り来る足音に怯えながらも、総督として態度を崩さないよう凛とした態度で応えるナナリー。彼女の脳裏には、世界の平和を願って戦うリリーナ＝ピースクラフトとマリナ＝イスマイールの姿が浮かんでいた。
「……何者です」
今一度、今度は恐怖と戦いながら侵入者に問い詰める。すると不審者はその場で立ち止まり、それ以上近付いてくる事はなかった。
そして――――。
「お初にお目に掛かりますナナリー皇女殿下。私は蒼のカリスマという者、故あって貴方にお願いしたい事があって参上致しました」
目の前の存在から告げられる言葉に、ナナリーは一瞬息が止まった。

◇

ドーモ皆さんご機嫌よう。昨今、蒼のカリスマは人外説が濃厚になりつつある日々に憂鬱になっているシュウジこと蒼のカリスマです。現在私はエリア11の政庁総督府にお邪魔しており、あのナナリー皇女殿下を前にしております。

例の学生の女の子、確かシャーリーって言ったかな？　その子の願いを叶える為に現在ここに捕まっているカレンちゃんの救出にきているのだけど……いやー流石政庁だけあって警備が厳重、所狭しと警備の人がいるものだからもう大変。ダンボールがなかったらもう二人程バトッていたかもしれない。

ここへ来るまでに既に二人ほどノシてしまったから気付かれるのも時間の問題だ。急いでカレンちゃんの所に向かわなければならないのだけど……ここで少し問題が起こった。

ナイトオブラウンズの一人である枢木スザク君が現在カレンちゃんのいる特殊独房エリアへと向かっているのだ。その様子をモニター室（先程の二人はここでノシた）か

ら見ていた自分は流石にどうしようか焦った。
　如何に体力がついてきたとはいえ、あのラウンズ相手に真っ正面から生身で挑むのは無謀過ぎる。せめて暗闇という状況なら自分にも勝機があるかもしれないが、ここはブリタニアが管理する政庁だ。都合良く停電になる事なんて有り得ない。
　勿論停電させ、混乱に乗じてカレンちゃんを助け出そうとも考えたけれど、それでは騒ぎが大きくなるし、下手をしなくてもＫＭＦが出張ってくる。そうなれば自分もグランゾンを出さねばならないしそうなったらこのトウキョウ租界が炎に包まれる。
　それだけは自分としても避けたい所だし、ここはカレンちゃんやシャーリー嬢の思い出の地でもあるから、あまり傷付けるような事はしたくない。
　あーでもないこーでもないと悩んでいる内に閃いた事があるのだが、これはナナリー皇女の力も必要とされているので、ダメもとで一人になった所を見計らって執務室にまで来たけれど……うん、普通に可愛らしい女の子だよねナナリー総督って。中華連邦にいたら天子ちゃんに次ぐ人気者になるに違いない。
　そんなアホな事を考えている合間に、ナナリー総督は不信感を露わにしているのでいい加減名乗る事にした。最初こそは自分の事を警戒していたけれど、話すにつれて態度も柔らかくなり、会話を重ねる毎に彼女は自分の話を落ち着いて聞いてくれるようになった。

その時の話の内容というのが破界事変の頃、自分が次元獣やらインベーダーやらと戦っていた頃の話で、どうして誰も頼んでいないのに戦ったのかとひたすら質問責めにあっていた。

あの頃の自分はインペリウムを追っていただけで、別に助ける為に戦っていた訳じゃない。ただ目に付いたから戦っただけだ――なんて少し冷たく言ってみると、軽蔑されるどころか何やら尊敬された。

何だか色々勘違いされているようだけどそれを訂正する時間などなく、自分はナナリー総督からあるモノを拝借して急いで執務室を後にした。

その際に手を握られていきなり涙を流してきたから焦ったけど、あれはどういう意味だったのだろう？

◇

――――蒼のカリスマ。魔人と畏れられ、世界中から敵視されている彼を……私は生涯忘れないと誓う。

誰からも認められず、世界中から非難され、罵倒され、全ての人間から嫌われているであろうその人を、私は決して忘れません。

全ての罪を背負わされても、世界から弾き出されても、名も知らない誰かの為に戦う。あの人は多分……そういう人なんだと思います。

手を握った時、私は直感的に悟りました。あぁ、この人は私達と何も変わらない人間なんだって。

あの暖かい手を私は忘れない。お兄様と似ていて、けれど嘘吐きな彼を……私は忘れない。

蒼のカリスマさん。いつか私の目が見える様になった時、その仮面の奥にある素顔が見えるよう、今度は私からお誘いさせてもらいますね。

頑張って下さい。優しくてヘタレな魔人さん。

……所で、〝ヘタレ〟って何の事でしょう？　アーニャさんが言うには優柔不断な殿方を指すようですが。

え？　どうして蒼のカリスマがヘタレと思ったのかですか？　……うーん、女の子の

勘でしょうか？

◇

政庁にある独房区。その中にある特殊な牢屋として知られるその場所に、紅月カレンは投獄されていた。

身に纏っているのは窮屈な囚人服ではなく、貴族などが着用する豪華なドレス。周囲には特殊な素材で作られた防弾ガラスで囲まれており、彼女の容姿からまるでガラスに囲まれた人形のようだった。

その狭い空間の中心にある椅子に座り、不機嫌全開に目の前の人物を睨むカレン。彼女の視界にはこのガラスの囲いで唯一開いた空間とその先に佇む帝国最強の騎士、枢木スザクの姿があった。

「……それで？　帝国最強の騎士様が一体私に何のご用？」

「ゼロの正体は誰だ？」
　スザクの単刀直入過ぎる問いに、カレンは鼻で笑って返す。誰が教えるものか、そう態度で示す彼女にスザクの冷ややかな視線が突き刺さる。
「……もう一度聞く、ゼロは誰だ？」
「逆に聞くけど、私がその質問に答えると思う？　私達の敵であるアンタに」
　スザクの冷たい視線に対し、カレンは燃え盛る怒りの目で睨み返す。同じ日本人でありながら日本人と敵対し、ゼロを帝国に売った男を許すことなど到底出来やしない。殺したい程憎い。視線と態度でそう示すカレンを前にそれでもスザクは態度を変える事なく、懐からあるものを取り出した。
　それを目にした時、カレンの表情が一変する。何故ならそれは、このエリア１１に蔓延する何よりも強い麻薬なのだから。
　〝リフレイン〟幸せだった頃にトリップできるという劇薬に、嘗てカレンの母もこの薬の中毒者となってしまった。その薬を手に近付いてくるスザクにカレンは顔を真っ青にして後退る。
「止めてよ、そんなもの、私の前に出さないでよ！」
「これで話してもらうぞ。ゼロを、ルルーシュの事を！」
　抵抗するカレンの手を取り、無理矢理組み敷くスザク。その目に涙を滲ませる彼女に

リフレインの先端が触れようとした時。

（――――お兄ちゃん！）

脳裏に嘗ての最愛の兄が思い浮かんだ瞬間、それは起こった。

「ぐっ！」

スザクが手にしていたリフレインが何者かが投げつけた飛礫によって弾かれた事で地面に落ち、砕けた瓶からはリフレインの液体が床に飛び散った。

何者だ!?　そう叫びながら振り返った先で佇む第三者にスザクは勿論カレンも驚愕する。

「バカな、何故、何故お前がここに!?」

「さて、その質問になんと答えればいいのか私も悩む所なのですが……そこにいる紅月カレンさん。彼女を渡せば話さない事もないですよ？」

「……シュウジ」

隣のスザクに聞こえないよう呟くカレン。けれど……何故だろう。

「……フッ」

仮面の奥底で彼が笑った気がした。

その３７

――――エリア１１を統括する政庁総督府。ブリタニアに反逆を目論む輩を投獄する場所に特殊な箇所が存在する。ブリタニア人でありながらブリタニアに反旗を翻した者、中でも貴族出身の者を投獄する場所に二人の人間が相対するように向き合っていた。

片方は帝国最強の騎士、ナイトオブラウンズのＮｏ．７として知られる枢木スザク。ブリタニア皇帝を守護すべく選ばれた騎士とされる枢木は、目の前の存在を怒りの形相で睨みつけていた。

ナイトオブセブンのスザクの睨みを前にしても全く動じた様子のない男、それこそがスザクを前に相対する者の一人、仮面の男〝蒼のカリスマ〟だ。

先のリモネシアでその力を徹底的に見せつけられた事で全世界にその恐ろしさを刻みつけた魔神を操る魔人、世界の半分の戦力を破壊しても未だその全貌を明らかにしていない。同じ仮面でも組織を使って世界と戦うゼロとは違い、目の前の存在は一人で世界を圧倒する力を持っている。

握り締めた手に汗が滲む。果たして自分一人で抑えられるのか。不安と恐怖の感情

がスザクの中に混ざり、額に大粒の汗を流す。
「そこをどいてくれないかな枢木卿。君と戦うつもりはない。そこにいる紅月カレンさんを引き渡してくれれば私は潔くこの場から離れよう」
「それは出来ない。自分はナイトオブラウンズの一人だ。敵を相手に退くわけにはいかない。特に、世界の大逆人であるお前を前にしている以上尚更だ。……それに、お前のその言葉のどれを信じろというんだ！」
「我が愛機、グランゾンでこの政庁に乗り込んでいない事実。ワザワザここの警備網を潜って来ている時点で私に敵対する意志は無いと示していたのだが……意外と頭が固いようだ。若い内にそれでは後々苦労するぞ、少年」
「黙れ！」
目の前の魔人の余計なお世話とも言える説教が終わった瞬間、スザクは地面を蹴って瞬く間に蒼のカリスマとの距離を詰めていく。そして、奴の懐に入った瞬間――。
「もらった！」
片足を軸に、上段回し蹴りが放たれる。喩え魔人でもこれを受ければ何かしらのアクションを起こす。それを見越した上で今度は確実な体技で圧倒する。
スザクの頭の中で目の前の魔人を倒すプロセスが組み込まれる中――信じられない事が起きた。

〝回し受け〟日本の空手における防御の技がスザクの足を捉え、次の瞬間には弾き飛ばされていた。宙に舞うスザクを見てカレンの表情も驚愕に染まる。

空中で体勢を整えて地面に着地するスザクだが、その表情はカレンと同じ驚愕となっており、次の攻撃を仕掛ける事はしなかった。

自分の攻撃を初見で見破り、尚且つあしらう様に払いのける目の前の魔人に、スザクは改めて戦慄する。心のどこかで否定していた。あの蒼のカリスマがワザワザ捕虜一人の為に政庁に乗り込んでくる事は有り得ないと、恐らくは黒の騎士団の誰かによる名前を借りての愚行なのだと、どこかでそう思っていた。

だが、改めて確信する。この男こそが世界を恐怖の底に叩き込んだ怪物の中の怪物、蒼のカリスマなのだと。幼い頃から鍛えてきて、ラウンズとなった今では体術だけは誰にも負けないと自負してきた自分の技が全く通用しない。その事実がスザクに重圧としてのし掛かる。

〝逃げろ！〟嘗てゼロのギアスによって掛けられた〝生きろ！〟という呪いが、この場から逃げる事を強く命令してくる。

だが、逃げる訳にはいかない。ラウンズとしての立場でもそうだが、今ここにはナナリーがいる。彼女を残して自分だけ逃げる訳にはいかないと、スザクは理性でもって蒼のカリスマの前に立ちはだかる。

理性と本能の狭間で息苦しくなる最中、一向に向こうは攻撃してくる様子は無かった。
「……何故、攻撃してこない」
「言った筈だよ。私には君達に危害を加える意志はないと、……これは最後通告だ。今すぐこの場を引いてナナリー総督の所に戻りなさい」
「――――っ！」
重圧が重くなる。仮面越しからでも分かる濃厚なプレッシャーを前に、スザクの呼吸は荒くなる。脳裏でリモネシアでの恐怖が蘇る中、それでも逃げるわけにはいかないと、スザクは足に力を込めて魔人を睨みつける。
そんな彼に蒼のカリスマはヤレヤレと首を振って嘆息し、スザクに向けてあるものを投げ渡す。足元まで転がってきたそれを目にした瞬間、枢木の目は大きく見開かれた。
「これは、ナナリーの！」
「そう、それはナナリー総督が付けていたブローチですよ。中々見事な装飾でしたので少し拝借しました」
「貴様、ナナリーに何をした！」
「それが知りたいのなら早く彼女の元へ向かったらどうです？　急がないと……大変な事になりますよ？」

「っ！　き、貴様ぁぁぁっ！」
仮面の奥底で笑っているだろう蒼のカリスマに、スザクの怒りが沸き上がる。目の前の存在を今すぐ叩き潰してやりたいが、ナナリーをこれ以上一人にする訳にはいかない。
「此方枢木、特殊独房エリアに侵入者を発見！　繰り返す！　独房エリアに蒼のカリスマ出現！　直ちに警備体制を敷き直し蒼のカリスマの捕縛を最優先とせよ！」
耳元に付けていたインカムを起動させて政庁中に報せると、スザクは地に落ちたブローチを拾い上げるとナナリーの元へ駆けていった。
スザクの姿が遠くなるのを見て、蒼のカリスマから深いため息が漏れる。一安心と言うように溜息を吐き出す彼を見て、カレンは目の前の魔人がやはり自分の知る人間だと確信した。
緊急警報のサイレンが鳴る。政庁中に響き渡る警報と遠くから聞こえてくる複数の足音、もうすぐ警備の者が大勢で押し寄せて来るであろう事態を前に。
「さて、ここにはもう用ないし、そろそろ帰るとするかな」
仮面の男はそう言ってカレンの前へと歩み寄って手を伸ばし……。
「さぁ、行こうかカレンちゃん」
「……シュウジの癖に生意気よ」

カレンは少し躊躇した後、遠慮がちにその手を取った。

◇

ハロー、今晩は。帝国最強の騎士を相手にハッタリや口先でどうにか乗り切る事が出来た蒼のカリスマことシュウジ＝シラカワでっす。

いやー、最初はどうなる事かと焦ったけど、やっぱああいう場面で仮面を被ってるのって凄くアドバンテージが高いよね。表情が見えないってのはそれだけで相手に不安を煽らせるものだから、ああいう緊迫した状況では効果覿面だ。

ただ、いきなり蹴りを放ってきた時は内心メチャ焦ったけどね。一度の行動で十メートルはあった距離を詰めてくるとか、彼も大概人間離れしてるよな。

けれど此方も唯でやられる訳にはいかない。リモネシアで復興作業に励んでいた頃、

ガモンさんから一通りの型は教えてもらってたし、この間のトレーズさんとの組み手（という名の殴り合い）で大体のやり方を覚える事が出来た。

回し受けもその組み手の中で何度もやってきたし、相手が殴りかかってきた瞬間に出せる位の腕にはなれた。ただそれでもスザク君の蹴りは速くて重かったから、受けた方の手は暫く痺れて使い物にならなくなったけどね。

その後は事前にナナリー総督から貸してもらったブローチを渡し、一芝居を打ってスザク君を遠ざければこっちのモノ。予め用意していた脱出ルートを使って逃げるという簡単な作業となります。

尤も、途中でカレンちゃんの愛機である紅蓮の回収をしていたりしたから言うほど余裕では無かったけど、何事も思わぬ事態と言うモノは存在するものだ。その時は自分が紅蓮のシステムの立ち上げに携わったけどね。

〝紅蓮聖天八極式〟カレンちゃんが捕まっている合間にブリタニアの技術者達によって改修されたその機体は、以前よりもずっと性能が上がっていて、乗り込んで操った当初のカレンちゃんは凄く驚いていた。

しかも背中にはエナジーウィングなる特殊装備が施されており、機動性もグンと上がっていて自分も驚いた。

ブリタニアの技術者の中にはあんな腕のいい人もいるのか、今度色々教えを請いたい

ものである。

そして脱出方法なのだが、紅蓮のシステム立ち上げに手間取ってしまい、近くにまでブリタニア兵が来ていたモノだから、紅蓮が起動した瞬間先にカレンちゃんを逃がしました。

その後、カレンちゃんが突き破った壁から自分も飛び降りて、グランゾンを呼び出してお得意の一撃離脱で一気にエリア１１を抜け出したのである。……地上１００メートル以上からのダイブは何気に今までで一番怖かった。お股がヒュンッてなったのはここだけの話である。

……え？　そんな事よりもナナリー総督に何をしたかって？　別に何もしてませんよ？　先も言った通り自分は彼女からブローチを借りただけ、それ以外の事は一切していない。

というか、手を出したら別の意味で殺されそう。中華連邦にいる多くの紳士達の手によっていつか謀殺されそうで怖い。

なら何故大変な事になるなんて言ったかだって？　そりゃ大変な事になるよ。主に俺が。

だってあそこには多くの警備兵ともう一人ラウンズがいるんだよ？　急がないとそいつらに囲まれてデッドエンドまっしぐらだもの、急ぐのも当然だ。

先程カレンちゃんにその事について追求されて上の通りに答えたら……なんと腹黒と言われてしまった。

あの程度で腹黒とか、ゼロの右腕だった人物からとは思えない暴論である。自分程度の策略が腹黒だったらシュナイゼル殿下の腹はどうなんだって感じである。黒を通り越したナニカにしか思えねぇよ。

さて、そんな呑気な会話をしている自分たちは現在エリア１１から離れたとある無人島にいます。急に紅蓮を動かしたモノだから、どこか異常をきたしていないか見なくてはいけないからね。

道具は幾つか政庁から逃げ出した時にパクってきたので整備は問題なく行っております。……向こうも紅蓮を奪ったからこれでおあいこだよね？

……あと、これは今更どうでも良いことなのだけれど――――自分の正体バレてました。何でもヨーコちゃんが口を滑らせた時聞いたのだとか。

ヨーコちゃん、君仮にも教師でしょ、誰かに教えるのではなく口を滑らせたって……ちょっとあんまりなんじゃね？　しかもカレンちゃんだけじゃなく、ＺＥＸＩＳ全体に知れ渡っているとか、今後あの人達と会ったら俺どんな顔すりゃいいのよ？

ま、おかげで仮面を被りながら作業に取り掛かる事にならなくて済むし、別に構わないんだけどね。

……現実逃避している訳じゃないよ？　ホントだよ？

◇

――私の前で紅蓮の整備をしているのは世界中で指名手配されている大逆人、蒼のカリスマと呼ばれる魔人その人だ。

グランゾンと呼ばれる魔神が最初に目撃されたのは……まだ、黒の騎士団も出来ていなかった頃。レジスタンスとして活動し、一日一日を死に物狂いで生きてきた私達にとって、嘗て無い衝撃を与えた。

ただ真っ直ぐ突き進んだだけでブリタニアの陣営を崩した突破力を始め、三大国家の軍隊を一瞬にして無力化させた事やインペリウムの軍勢を相手に一歩も引かなかった

事、更には破界の王ガイオウと正面から戦った光景は今も鮮烈に思い出せる。
……未だに信じられない。あの世界中を騒がせている蒼のカリスマが、目の前で油塗れになって紅蓮を整備している光景を、私はまだ実感出来ていなかった。
だって、まるであの頃と変わってないんだもの。ゴウトさんに怒鳴られながら働く彼の姿が、今も重なって見える。
だから私はこう言った。私達と一緒に来て戦って欲しいと、仮面を脱ぎ捨てて世界の為に戦って欲しいと、私はあの頃と変わらぬ彼にそう誘いを掛けた。
答えは――――返されなかった。此方の質問にただ笑っているだけの彼に私はそれ以上追求する事はなかった。
きっと、彼は分かっているのだろう。自分がＺＥＸＩＳに参加する事でどれだけ皆に迷惑を掛ける事になるのかを。
蒼のカリスマは今や、インベーダーや次元獣以上の災厄として認定されている。そんな存在がＺＥＸＩＳと一緒にいるのを知られたら私達の立場が悪くなる。世界にとって悪だと思われている彼が参入する事は、ＺＥＸＩＳが世界にとっての悪と言うようなものだから……。
今回の事で私は確信した。蒼のカリスマ……いや、シュウジ＝シラカワなる人間は世界の敵にはなり得ない。魔神という力を手にしただけの――――ただの人間なのだと。

だけど、情報統制の徹底された今の世の中じゃ、どんなに正しいことを叫んでも理解されることはない。それを承知の上で彼は一人で戦う事を選んだ。

彼はもう一人で戦う以外に道はない。なら私はそんな彼の孤独を一日でも早く終わらせる為に、彼以上に戦ってみせよう。

いつか彼が、彼自ら仮面を取る日を願って、私はまた戦おう。紅蓮と一緒に。

「よし、これで出力は安定っと、カレンちゃん、俺達も行こうか。ＺＥＸＩＳの皆もそろそろサンクキングダムに着く頃だろうし……」

「了解。んじゃ、アンタの整備した紅蓮で大活躍をするとしますか。ブリタニアに手を加えられたのは癪に障るけど、これならアンタのグランゾンにもそろそろ勝てるんじゃない？」

「や、それはない」

生意気な所も変わらない。しれっとした顔で否定するシュウジに蹴りを入れて、私はもう一度願った。

いつか、コイツと一緒に何かを守る為に戦いたいなと、そう……胸に秘めて。

その３８

――――サンクキングダム。完全平和主義を唱えたが故に世界から消された悲劇の王国。破界事変の時もインペリウムの襲来によって消滅の危機に瀕したが、その時は当時のＺＥＸＩＳと魔神グランゾンが撃退したおかげで難を逃れる事が出来た。

そんな多くの悲劇が起きたこの王国でその血筋たるリリーナ＝ピースクラフトとローム・フェラ財団の代表であるデルマイユ公が平和について対談している中、ある異変が起きた。

バジュラの襲来。今まで宇宙にしか出現しなかったバジュラがサンクキングダムに姿を現したのだ。この緊急事態に当然ＺＥＸＩＳも出撃、バジュラの迎撃に当たった。

緊迫した状況が続き、遂にバジュラによる恐怖に耐えられなくなったデルマイユ公は、リリーナと付き添いのシェリルを置いて、用意しておいた航空機に乗り込み一人脱出を試みる。

だが、バジュラの猛攻を唯の航空機が抜けられる筈もなく、デルマイユ公は一人脱出したが為に一人空で散る事となった。

数の多いバジュラにさえ手を焼いているのに、更にモビルドールの軍勢とインサラウ

ムからの次元獣の群が送り込まれ、ＺＥＸＩＳは窮地に立たされていた。
倒しても倒してもきりのない敵の軍勢、加えてマクロス・クォーターが異常な重力力場を感知し、それがディメンション・イーターだと発覚。サンクキングダムそのものが消滅する危機に、ＺＥＸＩＳは更に追い詰められてしまう。
『コイツ等、なんだっていきなりこんなに出てくるんだよ！』
『出現するタイミングの良さといい、恐らくは此方の動きを何者かが監視しているのか、だとすれば一体誰が……』
『ゼロっ！　そっちに行ったぞ！』
『っ！』
一瞬、刹那的な瞬間に今回の首謀者について思案していたゼロの前に、ギガ・アダモンの刃が襲いかかる。蜃気楼の絶対守護領域で直撃を防ぐが、相手は超重量の重さを誇る怪物だ。直撃を防いでも巨大な次元獣の重圧に、ゼロは機体諸共地面に叩き付けられる。
『ぐはっ！　くそ、なんて無様な！』
戦いの最中に意識を割く自分の愚かさに毒づくゼロだが、今はそんな事を気にしている場合ではない。
ギガ・アダモンが未だに自分を押し潰そうとしている中で障壁を解く訳にはいかな

い。だが、蜃気楼の攻撃である〝拡散構造相転移砲〟は障壁を一部展開させないと使用できない。

（クソ、こうも密着された状態ではハドロン砲も使えん！）

ＺＥＸＩＳの中でも小型機動兵器であるＫＭＦでは、障壁を解いた瞬間次元獣の重量に潰されミンチとなってしまう。守護領域を維持するだけで手一杯のゼロは近くのＺＥＸＩＳメンバーに援護を求めるが、皆目の前の敵に行く手を遮られ、助けに行くことが出来なくなっていた。

いつまでこの状態が続く？　目の前でキバをちらつかせる化け物にゼロの背筋に冷たい汗が流れ落ちた。このままでは拙い、忍び寄る危機にゼロの思考が焦り始めた時。

『ゼロッ！』

紅い稲妻が次元獣に迫ったと思われた瞬間、ギガ･アダモンは弾ける様に吹き飛んだ。

巨大な次元獣が吹き飛んだ事に唖然となるゼロ。その仮面の奥で呆けた表情になる彼の前に、真紅のＫＭＦが降りたった。

『皆、待たせてごめんなさい。紅月カレン、ただいまを以て戦線に復帰します！』

攫われていた筈のカレンの突然の参戦に驚きながらも歓喜するＺＥＸＩＳの面々、心強い味方の登場に士気は上がるが、それをかき消すように次元獣とバジュラの群は一斉に紅蓮に襲いかかる。

『逃げろ紅月！』
『そこにいたら危険だ！』
新たな敵を前に群がるように襲い来るバジュラと次元獣の軍勢、それらを前に動こうとしない紅蓮に全員が逃げろと呼び掛ける。
そんな彼等に対して何の反応も示さないカレン。一体どうしたのだと誰もが疑問に思った瞬間。
『今よ！』
空に無数の穴が突然開き、そこから降り注がれた光の槍がバジュラと次元獣達を纏めて貫いた。その光景に誰もが上空を見上げて絶句し、言葉を失う中、カレンだけは笑みを浮かべていた。
『ヤレヤレ、自ら囮役を買って出るとは……私でなければ巻き込まれて諸共串刺しになってましたよ？』
『いいじゃない、アンタはそれが出来る。だから私の案に乗った。でしょ？』
『もうこんな事は無しでお願いしますよ。……心臓に悪すぎる』
通信越しでニヒヒと笑うカレンと、疲れた様に首を横に振る魔人。まるで友人のような遣り取りの二人に、ＺＥＸＩＳは暫く呆然としていた。

◇

はてさて、カレンちゃんの困った囮作戦も無事にこなせた事で戦局も大きく変わり、その後の次元獣とモビルドールとバジュラはＺＥＸＩＳとの協力で楽に撃退する事が出来た。

その後、何やら重力力場に異常数値が検出されたのだけれど、次の瞬間にはイマージュが現れて彼等が光ったと思われた時、重力力場の数値は平常値に戻っていた。

後から聞いた話だとサンクキングダムの地下にはディメンション・イーターなる大量破壊兵器が埋もれており、あと少しで王国諸共消滅していたという危機的状況だったらしいのだ。

〝ディメンション・イーター〟確かそれって、マクロス船団側が開発した、擬似ブラックホールを模した空間ごと破壊する兵器じゃなかったっけ？

なんでそんなモノがあるのかと疑問に思ったが……恐らく、奴の仕業だろう。〝グレイス＝オコナー〟アイドル達をプロデュースする裏側で色々きな臭い事をしているあの女が、今回の件にも一枚噛んでいる……いや、寧ろ首謀者とすら思える。

何故そんな確信的に言えるのかって？　実は今、自分は機体から降りてサンクキングダムのとある廃墟で、ＺＥＸＩＳの中でも冷静で視野の広い人物とされるアムロ＝レイさんとカミーユ＝ビダン君、この二人と情報交換をしているからだ。

戦闘も終わり、本当ならこのまま周辺にいると思われるグレイスの捜索に向かおうとしたのだが、アムロさんとカミーユ君のそれぞれから呼び出しを受け、このような対談を行う事になった。

今、この場には自分を含め三人しかいない。他の皆には艦で待機してもらっている。これは二人の要求に対し自分から出したささやかな要求だ。

無論ここでの話は艦で待機している他のＺＥＸＩＳメンバーにも伝えてもらう事になっているし、彼等と顔を合わすのは今はまだ抵抗があるからこういう処置をしてもらっているだけ、そんな中で今自分達が話しているのは破界事変の時、自分が世界中に指名手配される事になった原因である二人のアイドルの誘拐事件の話だ。

「……では、破界事変の頃に騒がれたランカ＝リーとシェリル＝ノームの二人が誘拐された事件、君はやはり関与していないんだな」

「今更の事だというのは承知しています。ですが今説明した通り、私は彼女達に手を出した記憶は一切ありません。見かけたといってもテレビやネットで彼女達の活躍を眺める程度ですし……」
「では、何故あの時すぐにそう言わなかった？　確かにあの頃の俺達は連戦に次ぐ連戦でいきり立っていたが、それでも冷静な者もいたはずだ。その人に頼ればお前だって……」
「あの時の自分はグレイス＝オコナーの罠から逃げ出していたばかりの頃でしたからね。精神的に参っていた事もあったし……正直、余裕がなかったのですよ」
　言われて懐かしい気持ちと共に蘇る忌まわしい記憶に腹が立ってくる。自分を騙し、ＺＥＸＩＳと戦わせ、あわよくば共倒れを狙っていた奴の姑息なやり方は、今思い出してもむかっ腹が立つ。
　今回は戦闘に巻き込まれた事もあって逃がしてしまったが、有益な情報も手に入れた事だし、次に会った時は事象の彼方へ消し飛ばしてやろうと思う。
　そんな事を考えていると奇妙な視線を感じた。何だと思い振り返ってみれば、アムロさんとカミーユ君がそれぞれ生暖かい目で此方を見ていた。
「……何か？」
「あぁ、済まない。気を悪くしないでくれ、ただお前のその口振りが意外だなと思ってた

らつい、な」
「騙されて腹が立ったり、混乱した状況で銃口を向けられて驚いたり苛ついたり……人間らしい君の話を聞いてたら何だか気が抜けてしまって」
「失敬な。私は人間だよ。君達と何ら変わりないつもりだったが……」
「では、その仮面を取ったらどうだ？　我々は既にシュウ＝シラカワを通して君の素顔を見ている。今更隠す必要はないと思うが？」
「そうしたいのは山々だが、生憎此方も意地がある。全ての厄介事を片付けるまで人前でおいそれと仮面を外す訳にもいかない」
「……そうか、やはりカレンの言うように決意は堅いみたいだな。なら俺達と共に来るという選択もない、という事だな」
　何やらウンウンと頷くアムロさん達だが、此方はとある単語に仮面の奥で表情が固まった。……え？　今なんて言ったの？　一緒に戦う？　まさかのスカウト!?
　突然の言葉に思考が固まるが、そんな事をしている内に二人はドンドン話を進め……。
「今回の共闘は今までにない大きな収穫があった。ギャラクシー船団への疑惑、エウレカの安否、そして何より……アナタという人間が少しだけ分かったよ」
「次に会うときは戦場ではなく、穏やかな平和な時に会いたいものだ。蒼のカリスマ

……いや、シュウジ＝シラカワ。君という男の疑惑は此方の方で晴らしておこう」
そう言って二人は満足そうに微笑んでその場から去っていった。そんな彼等を自分はただ手を振って見送る事しか出来なかった。
……俺、もしかしてチャンスを棒に振った？　遠くへ行ってしまうＺＥＸＩＳの一行を見つめながら俺は仮面の奥で一人、涙を流していた。

◇

Ｋ月Ｘ日
ＺＥＸＩＳに参加出来そうだったのに自らチャンスを逃してしまった事は色んな意味で痛手だが、今は有益な情報を得られた事で良しという事にする。
ただ、ＺＥＸＩＳはすぐに別の場所に向かわなければならないからアムロさん達との会話時間は極めて短く、それほど多くの情報を交換する事は出来なかった。

けれど先程も言ったように交換した情報は有益なものが多かった。例えばアロウズの裏に潜む〝イノベイター〟なる連中の存在も、アムロさん達からの情報で知り得る事が出来た。

連中はヴェーダというイオリア＝シュヘンベルグの計画の中枢を担う特別なシステムを支配していると思われ、そのヴェーダを使ってこれまで世界の情報を操って来たのだという。

世界を支配しているとか偉そうな事いっているけど、結局は他人の力頼りかよという野暮な言葉は控えるとして、イノベイターという存在が明らかになった事で、この地球の裏に潜む連中の事が何となく分かってきた。

アロウズを使って反政府勢力を潰そうとするイノベイター、アイドルをプロデュースする一方で世界にとって重要な人間を消そうとするグレイス＝オコナー、この二つの存在は共に裏で繋がっているのだと自分は推測する。

思い込みだと思われがちだが根拠はある。何でもシェリル＝ノームはグレイス＝オコナーと同じ、ギャラクシー船団の出身だというのだ。

無論シェリル＝ノームは白だと思う。何せ彼女もサンクキングダムにいたというのにディメンション・イーターで諸共消そうというのだ。もし彼女に利用価値があるというのなら、彼女を始末するような事はしない筈だ。

勿論シェリルがグレイスと何らかの繋がりがあるという事は、可能性として存在している。だが、彼女が病で伏せているのに見舞いにすら来ないだなんて、少し違和感を覚える。今まで付き合ってきたアイドルとマネージャーという二人の間柄という意味もあるが、この場合利用するか否かの話になる。

もしシェリルに利用する価値がないのだとすれば、既にグレイス＝オコナーは別の存在に利用価値を見出した事になる。

その存在こそが、超時空シンデレラで知られるランカ＝リーだ。数あるアイドルを手掛けている中、彼女ばかりが活躍しているのは贔屓という言葉を抜きにしても怪しい。

同じアイドルだったエイーダを突然卒業と称して辞めさせたり、シェリルに関する情報を休止の報せ以降何も開示させてないのも露骨に怪しい。自分があの女に騙された事で気付いた事が幾つもあるが、もしそうでなかったら奴の存在を疑問に思う事があっただろうか。

兎に角、今後の指針もある程度固まってきたので、今回はひとまずこれで終了する事にする。

そうそう、恒例になりつつある今回自分が寝泊まりでお世話になっている場所は、なんととある一家のキャンプにお邪魔させてもらっています。

カミシロ一家。自分が久し振りに狩りをしている時偶然知り合ったワイルドなご家

族。現在は大黒柱のお父さんに綺麗なお姉さん、そして長男のヒビキ君と一緒に生活しております。

……しっかしカミシロ（父）って何者？　大きな獣相手に素手で戦うとか――人間やめてね？

その３９

K月α日

カミシロ家の皆さんにお世話になってから数日、まだ一週間も経っていないのに世界は大きく変動した。二日ほど前に地球全ての情報網がジャックされ、テレビやラジオの全てのメディアがアロウズの今までの悪行を突然流したのだ。

突然の事態に連邦政府は市民に落ち着くよう呼び掛けているが、今までとは違うリアルな情報を前に市民達の混乱は収まる様子はない。

今まで自分達を騙していた政府に怒りや戸惑いを露わにする市民、やがて騒動はパニックを引き起こし、余計な争いの原因になるかもしれない。

だというのに、ここカミシロ家の皆さんは今日も変わらず平常運転。元々俗世から離れた環境で過ごしている為か最初こそは驚いてはいたが、それ以降は特に変わった事はなく、落ち着いて日々を過ごしている。

彼等が今住んでいる所はアルプス山脈の麓にあるとあるコテージ。恵まれた自然に囲まれて生活している為か、ここでは落ち着いて今起きている物事に対して、広い視野で見ることが出来る。

例えば前回推測したグレイス＝オコナーとイノベイターなる連中に関してもそう、ここで生活したおかげか、割と落ち着いて考える事が出来た。

グレイス＝オコナーがランカ＝リーに対して何らかの価値を見出したのは事実だろう。シェリル＝ノームに代わって何が出来るのかはまだ分からないが、この二人の共通点は歌う事にある。恐らくは〝歌〟こそが奴らに関する重要なヒントに成り得る事だろう。

……歌と言うことで一人大事な人物を忘れていた。〝熱気バサラ〟有名バンドのファイヤーボンバーのボーカルで、その声には特殊なフォールド波が検出されているという話を何かの情報誌で目にした事がある。

ここカミシロ家のラジオからも時折バサラの歌声を耳にすることがあるから思い出したが、もしかしてグレイス＝オコナーの目的は、その歌声に独自の〝波〟を出す人間の選別にあるのではないだろうか？

それならエイーダさんというアイドルを辞めさせた事にも説明がつくし、〝波〟が出せなくなったシェリル＝ノームを切り捨てたと推測すれば、一応辻褄が合う。

そして、シェリルに代わってその〝波〟を出している人物こそがランカ＝リーという事になる。しかもシェリルよりも強い〝波〟を出すという事が分かっているのなら、グレイスが彼女に対して拘っている事も納得できる。

ただ、問題はその〝波〟を使って何をするかだ。熱気バサラは嘗て、その歌と歌にもたらされる〝波〟を使って、プロトデビルンなる存在を撃退したという。なら、グレイスもその〝波〟を使って何らかの存在を撃退しようというのか？　あの女が人類の為に外敵を追い払うなんて想像しにくい。どちらかというと、その外敵を操って人類を支配すると考える方が自然だ。

例えば、あの女に従うブレラ＝スターンの様な、インプラント化を施したサイボーグの様な……と、ちょっと待った。インプラント化したサイボーグの様に……操る？

そう言えば、あの女は破界事変の時に自分をインプラント化して従わせると言った。もし奴の目的が本当に人類を支配する事ならば、インプラント化ともう一つの存在でそのカラクリを解き明かす事が出来る。

〝バジュラ〟フォールド波を体内から出す事によってあらゆる時空、次元の壁を越えて出現する力があり、そのフォールド波を使って群と交信し、連携し、独自の進化を辿っているバジュラなら、グレイスの目的にピッタリの存在なのではないだろうか？

破界事変の頃、ランカ＝リーはその歌声でバジュラの動きを乱したと聞く。彼女の歌声がバジュラにも影響を及ぼすなら、あの女の考えている事も大雑把だが予見出来る。

恐らくあの女は、バジュラを操る術を探しているのではないだろうか？　ランカ＝リーの歌、インプラント化された人類、そしてバジュラ、これらを使って奴が成す大業

はただ一つ〝人類の統括〟だ。

ランカ＝リーを熱心にプロデュースしているのも、バジュラを乱す歌声に隠された〝波〟の秘密を分析しているのなら、全てに説明がつく。

……ただ、これはアイムの時と同じ、殆どが自分の仮説から来る推測だ。証拠も根拠もない以上決めつけることは出来ない。せめてアムロ大尉やカミーユ君にだけでも話を聞いて貰いたい所だけど、今の彼等は混乱する世界の対策に追われて、それどころじゃないだろう。

やはり自分がグレイスに手を下すしかないか。蒼のカリスマにまた新たな悪行が一つ追加される事になるが……いや、今更気にする必要はないか。

だってあのワイズマンとかいう奴、アロウズの悪行は殆ど包み隠さず流しているけど、自分こと蒼のカリスマに関する情報は全くノータッチなんだもの、おかげで蒼のカリスマの汚名は返上される事なく今も畏れられ、世界中の敵として見られております。

……泣けるで。

K月γ日

今日、カミシロ（父）さん達と一緒に狩りをする事になった。自分もこれまでヨーコちゃんやリットナー村の皆に教えてもらっていたから狩りには自信があり一緒に参加

する事になったのだが……カミシロさん達の張る罠はどれも精巧さがずば抜けており、カミシロ（父）――面倒だから以後おじさんで――の仕掛けた罠は自分でも注意深く見ていないと判別出来ないくらい精密且つ綿密に仕掛けられていた。

自分もそれなりに罠には自信があるのだが、彼等のやり方を見ているとプロとアマの違いを見せつけられている様な気がして……若干凹んだ。

おじさんは我流にしては中々だと褒めてくれたが、それでも捕まえた獣の数の差で彼等との実力差を認めざるを得ないので、正直慰めにならなかった。その際にヒビキ君のドヤ顔にちょっぴりイラッときたのは内緒だ。

因みにこの日、動物は生態系の関係もあって余分な殺生はしないと心得るようおじさんから教わった。時空震動の影響もあって生体に異常をきたしている動物もいるらしく、なるべくその生態系に影響を及ぼさない程度に気を付けるようにとも教わった。

そして食事の後、居候なのだから水汲みくらい自分がやろうとカミシロ（姉）――先と同じ理由で以後姐さんと呼ぶ事にする――さんに教えてもらった近くの川まで水汲みをしていると、途中おじさんに呼び止められ、息子のヒビキ君と組み手をするようお願いされた。

何でも、おじさんはヒビキ君にジークンドーなる武術を教えており、偶には親子での組み手ではなく、違う相手との組み手の方が刺激になるだろうというのだ。

まぁ自分もカミシロ家の人達にはお世話になっているし、大抵の事なら喜んで手を貸すが……組み手って、ホント武闘派だなここの一家は。姐さんも何気に武術やってるし、結構荒事には慣れている家族なのかな？

そんなこんなで半分巻き込まれる形でヒビキ君と組み手をしたのだが……結果的には自分の全勝となった。何故結果的と言葉を濁すのか、それは自分が実力で勝ったのではなく、駆け引きでヒビキ君から勝利をもぎ取ったに過ぎないからだ。

ヒビキ君は直進的な子だ。良くも悪くも真っ直ぐな少年に、少しばかり挑発して動きを単調にしてやれば、自分程度の腕でも十分対応できる。

当然卑怯だと思う。けれどジークンドーという武術は奇妙な動きの癖に攻撃が鋭く、初めて戦う自分としては防御に徹する他ないのだ。

しかも一撃一撃がやたらと重いし、下手したらラウンズクラスの実力なんじゃないかなと思う程の腕だ。今の自分程度の実力では防いだり捌いたりするので手一杯だ。

そこで攻撃の合間に少しだけ相手を煽り、僅かに見せた隙を突いて勝利する。当然ヒビキ君からは狡いと非難されたが、意外にもおじさんの反応は真逆だった。

限られた状況の中で可能な限りの手段を以て勝利する。それ自体は悪くないし、相手の隙を突くのが上手いと褒められた位だ。

その後もグヌヌと悔しさを露わにしているヒビキ君と組み手をし、自分も手を合わせている内にジークンドーの動きをある程度見切る事が出来たので、以降は挑発しなくてもヒビキ君と渡り合える様になった。

今回の事で改めて認められた自分はその後姐さんの得意料理をご馳走してもらい、その後も楽しく過ごす事が出来た。

ただ、ヒビキ君だけはふてくされた様子で自分を睨んでいた事が気になったが……あの頃の年の子はあんなものだとおじさんに言われ、取り敢えず今日はそっとしておく事にした。

K月F日

ここの所忙しくてすっかり忘れかけていたが、そう言えば自分の操るグランゾンは自分専用だという事を思い出した。今はもう朧気でしか思い出せないが、あの不思議空間にいた博士は確かに、自分が乗ったグランゾンは自分のモノだと言った。

世界をたった一機で滅亡に追い込む機体が自分専用だという事実に戸惑いと驚きを隠しきれないが、博士自身がそう言う以上事実として受け止めるしかないので……まぁ、良しとする。

俺専用というグランゾンと今後どう付き合っていくのかは課題として置いとくことにして、取り敢えず今まで通り自分の我が侭に付き合ってくれている事に感謝しながら大事に扱っていこうと思う。

そして自分と博士が入れ替わる際に起動したと思われる〝シラカワシステム〟なるプログラムもあれ以降動いた様子はない。……尤も、アレに関しては大凡の推測が出来ているので別に気にしてはいないんだけどね。

そんな事よりも今日は久々に良い事が起きた。この間まであれほど毛嫌いしていたヒビキ君が、遂に自分の事を認めてくれたのだ。

事の発端はこの間と同じように狩りをする時だ。自分もカミシロ家の独特の狩りの仕方を教わった事もあり、今回は自分とヒビキ君、おじさんと姐さんの二手に分かれて狩りをする事になった。

おじさんからすれば仲直りの機会をくれたチャンスを与えたつもりだったのだろうけど、相変わらずヒビキ君はツンケンした態度、このまま自分と彼の関係が拗れたままで終わるのかと不安に思った時、獰猛な獣が飛び出してきた。

〝グリズリー〟熊の中でも最も強い力と巨体を誇る動物だが、この時のコイツは少し様子が違っていた。以前も話したと思うが、多元世界と呼ばれるこの世界では時空震動の影響で、その生態に影響を受けている個体も稀に存在しているという。

今回出会したグリズリーはそんな影響を受けた稀少な存在だというが、その気性は凄まじく荒く、巨木を一撃で粉砕するという出鱈目な力を有していた。

こんなモノが人里に降りたら大変な事になる。俺とヒビキ君でグリズリー（希少種）と急遽戦う事になった。あらゆる罠を駆使して動きを止めようとするが、グリズリーは巨体の癖に俊敏で、仮に罠に掛かっても鋭い爪と牙で瞬く間に仕掛けた罠が破壊されてしまった。

グランゾンを出して踏み潰そうかと考えたが、ヒビキ君がこうも近くにいては呼び出すことも出来ない。仕方なく肉弾戦で応戦するが、戦いの最中ヒビキ君が負傷した。

足を怪我した為に動けなくなったヒビキ君。今彼が襲われたら一溜まりもないので、彼に近付けさせないよう自分はグリズリーの標的を自分に向けさせた。

あの時の自分は夢中でグリズリーと戦っていたから気付かなかったが、今思えばアレは自分が死にそうになった瞬間トップ５に入ると思う。因みにトップ３にはキヤルちゃんの蹴りがランクインしております。

グリズリーの攻撃を避け続ける一方、この時自分はある事に気付いた。確か熊とは分厚い肉や毛で覆われていて人間で倒すには不可能と言われているが、そんな熊にも急所と呼ばれる弱点が存在している。

〝眉間〟人体も急所の一つに数えられる箇所だが、熊を狩猟する際は眉間を狙うとい

いと昔何かの漫画で読んだ事がある。殆ど一か八かの勝負だったが、この時の自分はあちこち体を打ち付けた事で体力的に限界が来ていた為、形振り構わずある一撃を熊の眉間に目掛けて打ち込んだ。

〝捻り貫き手〟ガモンさんから教わった奥義の一つで、決して人に向けてはならないと教わった抜き手。肩から指先にまで気血を練り込まなければ放つ側にもリスクを有する危険な技だが、偶然にもおじさんからヒビキ君との組み手の際に気を練るというやり方を教えてもらえたので実践する事ができた。

眉間を撃ち抜かれた事で死んだグリズリー。生きるか死ぬかの最中だったとはいえ悪い事をしたなとその時は思ったが、何でも地元の住民が言うにはあのグリズリーは、村に訪れては家畜や農作物だけでなく、人すら襲う凶暴な奴だったのだとか。実際あのグリズリーに襲われて犠牲になった人は何人もいた為に、今回倒されたと聞いた地元の人達は諸手を挙げて大喜びだった。

今まで悩まされてきたグリズリー討伐の話に村は総出で祝う事になり、自分もそこにお呼ばれする事になった。体は打ち身や打撲でボロボロだが、おじさんが言うには骨や内臓に異常は見当たらないから暫く安静にすれば大丈夫だと言われた。

体に対する心配もなくなった事で村の宴会に参加する事になった自分は、その後ヒビキ君から呼び出しを受けた。何だと思い約束の場所に来てみると、そこには松葉杖をつ

いたヒビキ君が待っていた。
呼び出しの内容は、今まで自分に対して失礼な態度を取った事に対する謝罪と、グリズリーから助けてもらった事に対しての礼だった。何でも自分があの希少種グリズリーを屠った時の瞬間を目撃し、その時の凄まじさに感動したのだとか。
……正直引いた。いや、別にヒビキ君は悪い子じゃないよ？　ちゃんと話せば分かってくれる良い子だけど、その時の自分のテンションはグリズリーと命の遣り取りをしたことで体力の疲弊と命を繋いだ事への安心感、そして腹一杯ご馳走を食べた事での満腹感で眠たかったので、自分はその後の彼の話を殆ど聞く事はなく、簡単な相槌を打つ事しか出来なかった。
何だか呼び方に拘るような話だった気がするが……まぁ今更聞き返すのも何なので敢えてスルーする事にする。
……そう言えば今思い出したのだが、確か熊の弱点云々を思い出す際に思い浮かんだあの漫画、確かボクシング漫画だった気がする。
主人公とライバルの試合が流れた所までは読んだのだけれど、あの後どうなったんだろう。もの凄く気になってきた。

◇

そしてグリズリー希少種討伐から数日後、怪我を完治した俺は再び旅立つ為、カミシロさん達と別れの挨拶をすることにした。
「カミシロさん、姐さん、ヒビキ君。短い間でしたけどお世話になりました」
「君との生活の日々は私達にとっても意義のある毎日だった。今後の君の旅路の無事を祈っておくよ」
「また遊びに来てね。待ってるわ」
「シュウジ兄さんもどうか気を付けて、俺も腕を磨いてまたアナタと拳を交えるのを楽しみにしておきますから」
拳をグッと握り、キラキラとした目で見てくるヒビキ君に苦笑いを浮かべながら、カミシロ家を後にする。
というか、ヒビキ君さり気なく俺を兄呼ばわりしてたけど、あれどういう意味なのだろう？　……あれか？　武道でいう兄弟子みたいな感じで慕われていると思えば良いのかな？

あのグリズリー討伐の一件以降、どうも自分を憧れの対象として見ている節があるし……ま、悪い気分はしないから別にいいんだけどね。

さて、次はどこへ行こう。取り敢えず日本に行ってくろがね屋でまた温泉に浸かるのも悪くない。そう思っていたが……。

『き、緊急速報です！　ただいま入りましたニュースによりますと現在インベーダーの大群が日本の富士周辺に向かっているとの事！　い、一体この世界はどうなってしまうのでしょうか!?』

――――どうやら、次の行き先は日本で確定する事になりそうだ。

その４０

日本、富士周辺。

インベーダーの襲来、それに伴って出現する真ドラゴン。異形の者達を従える様にそびえ立つ真ドラゴンに世界中の人間達が恐怖する。

終末を呼ぶ邪神。富士の山頂付近で佇む真ドラゴンを人々はそう呼んだ。世界の終わりだと、地球の終焉だと、人々が口ずさむ中、ある地球連邦の部隊が現場で戦っていた。

その部隊こそがＺＥＸＩＳ、混迷する地球に唯一残された希望である。連邦政府の情報統制に伴ってその存在は政府直轄の部隊の一つとして片付けられるが、その部隊に結集された力は既に国家を凌駕している。

そんな彼等は誰に頼まれたわけではなく、自分自身の意志で戦う事を選んだ。大切な人や故郷を、愛する人を守る為に戦う姿は正しく鋼の勇者だ。

しかし、そんな彼等を追い詰めるべく更なる勢力が介入してきた。先日人類に対し絶滅システムなるプログラムが起動した事を告げた〝アンチスパイラル〟そのメッセンジャーとして選ばれたニアが、ムガンと呼ばれる兵器を大群で率いてＺＥＸＩＳに攻撃

を仕掛けてきた。
『クッ、止めるんだニア！　今がどれだけ危険な状況なのか分かっているのか！』
『全ては我々アンチスパイラルが定めた事によるもの、その決定が覆る事はありません』
『ホンット、嫌な女になったものね！　ニア！』
　ムガンと大グレン団達による激闘、倒しても倒してもキリがないアンチスパイラルの軍勢。しかも、唯でさえ厄介な状況だというのに……。
『ふはははは！　いよいよ世界最後の日が訪れようとしている。竜馬、隼人、弁慶！　貴様等も我が真ドラゴンに葬られミチルと同じくあの世に逝くがよい！』
『ジジイ！　あんまり調子に乗ってるんじゃねぇぞ！』
『だが、このままでは此方の方が不利になる。早いところケリを付けねば拙いことになるぞ！』
『だが、こんな八方塞がりの中で一体どうすりゃあ……！』
　凶悪なインベーダーと戦いながら真ドラゴンを牽制、更にはムガンとの戦いにも意識を割かなくてはならない中、ＺＥＸＩＳは徐々に追い詰められていった。
　戦いの最中、ゲッターチームが有していた移動要塞タワーは真ドラゴンにぶつけた際に大破。そのお陰か真ドラゴンの活動を停止させる事は出来たが、最後までタワーに残っていた敷島博士はタワー爆発と共に消え、機能が停止した筈の真ドラゴンからは、

早乙女博士を始めとした初代ゲッターチームがゲッタードラゴンに乗り込んで襲いかかってきた。
　真ゲッターに乗り込んで応戦する竜馬達だが、如何せん相手は一人ではない。ゲッタードラゴンに加え多くのインベーダーに襲われる中、彼等は現状を維持するだけで精一杯だった。
　前門のインベーダーとゲッタードラゴン、後門にはアンチスパイラルの尖兵ムガンという挟まれた状況の中、アクエリオンのパイロットであるアポロの様子が豹変する。
『……来る』
『あ、アポロ?』
『一体何が来るというのだ。こんな時に!』
『重力の魔神よ、お前もこの戦いに参戦するのか……』
　豹変し、意味深な言葉を口にするアポロにシルヴィアとシリウスが唖然とする中、突如、アンチスパイラル側のムガンの軍勢が光の槍にて貫かれ、一斉に爆散し消え失せる。
　突然の出来事に敵味方問わず全員が言葉を失う中、ＺＥＸＩＳだけは彼の登場を予見した次の瞬間、予想通り重力の魔神グランゾンが、遙か上空から姿を現した。
『蒼のカリスマだと!?　何故テメェが……』
『随分と苦戦しているようなので加勢しに来たのですが……お邪魔でしたかな?』

相も変わらずいきなりの登場で戦場をひっかき回す蒼のカリスマ。普段はここでＺＥＸＩＳ達から不満の声が上がる所なのだが、今回の彼等の態度は意外な程に大人しかった。
『本当に来てくれるとはな。だが、今の局面で来てくれるのは有り難い』
『アテにさせてもらいますよ。シュウジさん』
『カミーユ君、今の私は蒼のカリスマとしてここに来ています。本名の方は控えめにお願いしますよ』
『了解です』
アムロとカミーユ、二人が参戦を受け入れてくれた事を皮切りに、他のＺＥＸＩＳの面々は特に言うこともなくグランゾンの参戦を迎え入れた。
『さて、人の惑星に土足で暴れ回る無礼者と湧き出てくる害虫達には早急にご退場を願うことにしましょう。――ワームスマッシャー！』
再び降り注がれる無数の光の槍、魔神の盛大な援護射撃を切っ掛けにＺＥＸＩＳはこの勢いに乗って一気に攻勢に移りインベーダーとアンチスパイラルを撃退、インベーダーに寄生されていた早乙女博士を介錯する事で解放し、地球に迫っていた脅威は取り敢えず拭う事が出来た。

◇

インベーダーとアンチスパイラル、二つの脅威をＺＥＸＩＳと共に振り払うことで取り敢えず勝利を獲得した自分は……素直に勝利を喜べないでいた。

真ドラゴンも機能を停止した事で取り敢えず危険性はないが、その後のＺＥＸＩＳからの通信で俺の心境に余裕は無くなりつつあった。

――――リモネシアにＺＯＮＥが設置された。その事実だけでも腸が煮えくり返る思いなのに、そこにインサラウムの軍勢が大群で陣を敷いているというのだから、本当に頭に来る思いだ。

そんな自分は現在リモネシアに向けて急行中。途中でヨーコちゃんやキタンさん、カレンちゃん達に呼び止められたが、その言葉に耳も貸さずにあの戦場から飛び出してしまっていた。

一体、奴らは何度リモネシアを破壊すれば気が済むのか。頭の中が爆発しそうな怒りに駆られたまま、俺はリモネシアに向けてグランゾンを走らせる。

――――見えてきた！　リモネシアの島が見え、変わらず残っていた島に俺はその時は安堵したが……次の瞬間に見えたＺＯＮＥと我が物顔でそこに居座るインサラウムと次元獣の姿に、俺は頭の中でプッツンと音がしたのが聞こえた。

ワームスマッシャー。誰一人逃がしはしないつもりで放った光の槍は、インサラウムの機動兵器と次元獣達を諸共貫き、爆散して消え散って逝く。

突然の事態に相手は驚いた様子だったが、そんな事はお構いなしに俺はグランワームソードを取り出し、いつぞや見かけた黒い奴に向けて剣を振り下ろした。

『やっぱりアンタね！　殿下の邪魔はさせないよん！』

自分の強襲を予め予見していたのか、自分の姿を捉えた黒い奴の行動は早かった。振り下ろされた自分の攻撃を、両脇に携えたコマの様な武器を回転させて防いでみせたのだ。

『ここにＺＯＮＥを設置すればアンタも自ずと出てくるっていうアンブローンお婆ちゃんの読みは正しかったみたいねん。さぁ、覚悟なさい！』

成る程、やはり何度か同じ相手と戦うと此方の行動もある程度予想されるものか。と、そんな事を呑気に考えていた瞬間、突然機体に衝撃が襲った。

何だと思い辺りを見渡すが辺りの次元獣達は何も攻撃してきた様子はない。一体どこからの攻撃だと思った時、ＺＯＮＥの近くに今まで見たことのない巨大な次元獣が鎮座していた。

『アッハハ♪　どう？　アンブローンお婆ちゃんの自信作ルーク・アダモンの次元過重弾のお味は？　とってもエキセントリックで衝撃的でしょ？』

目の前の黒い奴が高々と笑いながらあのデカ物の事を話してくる。〝次元過重弾〟その名称からして、次元力に関わった事で生み出された新たな攻撃方法なのだろう。攻撃してきた素振りやモーションを見せなかった事から、恐らくは従来の兵器とは全く別物の武器と考えた方がいいのだろう。

グランゾンのモニターからは僅かに検証された時空震動のみ、本当にささやかな程度の情報だが、先の黒い奴の話のお陰で大体のカラクリは理解出来た。

要するにあのデカ物は極小の時空震動を発生させる事によって見えない弾丸、即ち次元過重弾を撃ち出しているのだろう。見えもしないし攻撃するモーションも必要ないから、攻撃の出所が分からない。成る程、確かに単なるカラクリとしては良く考えている。分かっていながら避ける事が出来ない攻撃というのは例外なく厄介なモノなのだから。

だが、それでも考えが足りない。分かっていてもどうする事が出来ない攻撃が可能な

のは何も自分達に限っての話ではない。この俺とグランゾンもまたそれに似た〝どうしようもない攻撃〟を繰り出す事が可能なのだから。
見えない攻撃がそんなにも厄介というのなら、此方も見えない攻撃をすればいい。例えば……そう、重力だって目に見えないだろう？
『グラビトロンカノン、発射』
グランゾンの放つ高重力の雨、それにより次元獣や騎士気取りの機動兵器、多くの無人機や小型艦船は圧壊し、悲鳴を上げる間もなく粉砕される。ただし、この時自分は敢えて黒い奴にだけは当てないようにしている。
ただペシャンコにされただけで終わらせる程、俺の怒りは安くはない。光の槍で串刺しにして何処にも影響のない所にまで運んだ後、事象の彼方へ消してやる。
そう思い一歩歩き出した瞬間、再び機体に衝撃が襲う。どうやら重力の雨に耐えたルーク・アダモンが、グランゾンに次元過重弾を当ててきたのだろう。
見た目同様耐久力のある奴だ。今グランゾンが受けた攻撃はそんな自分の見通しの甘さによるところだ。怒りに我を忘れ、視界の狭まった自分を内心で叱咤し、冷静を取り戻す。
（済まないグランゾン、余計な攻撃を受けさせた）
歪曲フィールドで防いではいるが、それでも攻撃を受けたことには変わりない。あの

シュウ博士からグランゾンを渡されている以上、生半可な戦いは許されない。
それに、一度自分は思い知った筈だ。我を忘れた事により自分は、前のリモネシア事件で気を失う大失態をやらかしていることを。
二度も博士が助けてくれるとは限らない。自分一人で戦いを続けている以上、下手な慢心は己の首を締め上げる事になる。
冷えた頭でルーク・アダモンを見据える。どうやら向こうはまだ次元過重弾の発射体勢には入っていない様子。ならばと自分はグランゾンのブースターに火を灯す。
『ルーク・アダモンちゃんの所にはいかせないわよん！』
だが、そんな自分の行く手を遮る様に黒い奴が前に立つ。既にグランゾンは動き出している。このままでは奴とぶつかりルーク・アダモンに攻撃の隙を与える事になってしまう。
……と、普通はそう思うだろう。だが、グランゾンの移動手段は何もブースターによる超加速だけではない。
『なっ!?　バカな、消えただと!?』
〝ワームホール〟剣やワームスマッシャーで攻撃する際に使う時空間の穴。それは何も攻撃の為だけに使うモノではない。
破界事変の頃にも自分はガイオウに似たような攻撃を与えた事がある。今の自分な

らあの時繰り出した技よりもより精度が上がっている筈。
黒い奴が自分を見失っている間、俺はルーク・アダモンの背後に回り込み剣による一撃をお見舞いする。続いて第二第三と攻撃を繰り出しているが、実はここで前とは少し違う出来事が起きる。
破界事変の時、サンクキングダムでガイオウに放ったこの技、実はまだ未完成な状態なのだ。攻撃と移動の合間を無くしての連続攻撃だが、本来は連続ではなく〝同時〟に近付ける事がこの技の本質である。
攻撃した次の瞬間には既に別の攻撃を相手に当てている。１秒から０．１秒、０．１から０．０１、０．０１から０．００１と限りなく同時に近付け、やがては……。
『ウソ……でしょう?』
見ているモノからすれば複数のグランゾンが同時攻撃している光景を見せつけられる事になるだろう。そして、この時に忘れてはいけないのが――――。
『ワームスマッシャー、発射!』
ワームスマッシャーにより包囲を敷き、相手に僅かな逃げ道も残さない徹底した攻撃、差し詰め〝グランゾン・乱舞の太刀〟とでも命名しておこう。
爆散するルーク・アダモン。自分の開発していた技が完成した事に喜びたい所だが、今はインサラウムの連中を叩き出すのが先決だ。残った黒い奴を倒そうと改めて奴と

向き直る。向こうも腹を括ったのか、前とは違い逃げ出そうとはしない。
いい度胸だとグランゾンを前に進めた時、横から近付いてきている機影に俺はグランゾンを向けると。
『そこまでだ魔神よ！　次は余が――ユーサー＝インサラウムが相手になる！』
白と王冠が特徴的な機体、インサラウムの皇子様が自分の前に立ちはだかった。

その４１

もうウンザリだ。カラミティ・バースでリモネシアは破壊され、漸く復興が形となって来たのにアロウズとブリタニアに焼かれ、今度はインサラウムという侵略者にＺＯＮＥという兵器を設置される。

一体、世界は何故ここまでリモネシアを目の敵にするのか。――もし神という者が存在し、リモネシアに対してそうするよう仕向けているのなら……俺は、神を殺す事も厭わない。

だが、それはひとまず後回し。今更になって出てきた王冠野郎に俺は敵意を持って答えた。

『インサラウムの皇子が一体何のようだ？　それに今聞いた限りでは……今度はアンタが俺の相手をすると言ったか？』

『それがそなたの本性か、ウェインの言っていた事は真であったか。苛烈にして熾烈、分かり易いが故に凄まじい。……問いに答えよう、そうだ。余がそなたの相手をし、この地球への侵略の足掛かりとさせてもらう』

今までと違いどこか覇気を思わせる皇子に違和感を覚えるが、今はどうでもいい。敵

の大将が出てきたのであればそれらを粉砕してやるまで、グランワームソードを取り出し、皇子の乗る機体と相対する。

しかし、次の瞬間自分を囲むように無数の次元獣が出現した。てっきり一騎打ちだと思っていただけに気の抜ける事をしてくれるインサラウムに対して不満を募らせていると、王冠機体から皇子の苦々しい声が聞こえてくる。

『アンブローンか、余計なことを……済まない魔神よ。一騎打ちのつもりが余計な邪魔が入った』

『別に構わん。どっちにしろこの程度ではハンデにもならないからな。おら、気にしないで打って来いよ』

背後から襲いかかってくる次元獣に振り向きもしないでワームスマッシャーを撃ち込み、爆散する連中を無視しながら皇子に対し分かり易い挑発をする。

通信の向こうから皇子の息を呑む音が聞こえてくるが、覚悟を決めたのか皇子は雄叫びを挙げながら向かって突っ込んできた。

『はぁあぁぁぁあっ!!』

振り下ろしてくる刃を此方も剣で受け止める。受けた一撃は確かに鋭く重いが……それだけだ。シュバルのおっさんやガイオウの様な迫力は微塵も感じられなかった。

教本通りの戦い。皇子の剣の使い方はまさにそんな感じだ。二撃、三撃と立て続けに

打ってくる攻撃を受け止めて次に大振りになった瞬間、奴に向けて横薙に振り払った。
『ぐぅぅぅっ！』
　自分の反撃を受けて大きく仰け反る皇子の機体。このチャンスを逃してたまるかと追撃を仕掛けようとするが、周囲の次元獣が皇子を守ろうと押し寄せてきた。
　鬱陶しいと剣で振り払い、何匹か屠るが、それでも次元獣達は怯むことなく数で押し寄せてくる。
『……グラビトロンカノン、発射』
『ぐ、あぁぁぁぁっ!!』
　面倒になってきたので周辺一帯を高重力の雨で叩き潰す。降り注ぐ重力の雨に耐えきれなくなった次元獣は次から次へと圧壊して消滅していく、そんな中、皇子の機体の他に奇妙な次元獣がグランゾンの攻撃に耐えていた。
　黄色い次元獣。しかもその中で最も非力とされるダモン級の次元獣がグランゾンの高重力に耐えているのだ。ギガ・アダモンや他の次元獣が耐えきれず消滅する中、その次元獣だけが耐えていたので不思議に思った時、突然通信回線に別の声が割って入ってきた。
『ダメだシュウジ！　それ以上攻撃しちゃダメだ！』
　声の主は……カレンちゃんだった。通信の入ってきた方角へ視線を向けると、カレン

ちゃんの紅蓮を筆頭に、ＺＥＸＩＳの面々がリモネシアに向かって接近している。
『邪魔しないでくれカレンちゃん。今はコイツ等を始末する大事な場面なんだ。後でちゃんと事情も説明する。だから今は――』
『違う！　違うんだ！　その黄色い次元獣は……エスターなんだよ！』
『――っ！』
息を呑んだ。あの黄色い次元獣がエスターちゃんだと知らされた俺はそんなバカなと疑いながら、脳裏である光景がフラッシュバックする。
そう言えば、今回の騒動が始まった最初の頃はクロウさんのブラスタを黄色くさせた機体を見かけた様な気がする。もしかして、あれにエスターちゃんが乗っていたのか!?
瞬時に俺はグラビトロンカノンの攻撃を止め、エスターちゃんらしき次元獣に向き直る。瀕死の状態なのかピクピクと痙攣を起こしてはいるが、ギリギリの所で押し留まったのか消滅は免れている。
その事に安堵した瞬間、背後から衝撃が走った。歪曲フィールドで防いだ為損傷はしていないが、それでも此方の意識の外から攻撃してきた奴は相当の実力者に違いない。
一体誰が？　そう思いながら振り向いた瞬間、俺は以前自分が立てた仮説が正しかった事を確信した。
『今の攻撃を防ぎますか。流石は魔神グランゾンと蒼のカリスマですね。いや、シュウ

ジ＝シラカワと呼んだ方がいいですかな？』
『……やっぱり生きていたか、アイム＝ライアード！』
　趣味の悪い装飾の機体と鼻につく独特な言葉遣い、全てが嘘で包まれた狂言者、アイム＝ライアードが奴の愛機であるアリエティスと共にＺＯＮＥの近くに佇んでいた。
『その口振りだと私の力がどういうモノなのか理解出来ている様ですね。流石は魔人と呼ばれるお方だ』
『御託はいい、お前を倒す事に変わりはねぇんだからよ』
『私を倒す？　何故？　私アナタに何か粗相をしましたかね？』
『惚けるつもりならそうしろ。だがな、此方はお前が出てきた瞬間に色々確信してるんだよ。お前が裏でアロウズの黒幕と通じている事もな！』
『成る程、どうやら私が予想していた以上に見抜いているご様子だ。ある一点だけ見落としてはいますが……まぁ、こればかりは知る術がないので除外、それ以外の点では見事と言っておきましょう』
　アリエティスで拍手をしながらあからさまに挑発してくるアイム、その苛立つ奴の態度に俺は必死に殴りたい衝動を抑えた。
　今の奴は危険だ。破界事変の頃と比べて力を増している奴と戦うにはもう少し情報が必要だ。そう思いながら立ち上がってくる皇子とアイムを同時にどう戦うか模索し

ていた時、隣に青と銀の混ざった機体が降り立ってきた。
『やっと追い付いたぜ蒼のカリスマ、自分が世話になった場所を壊されて腹が立つのは分かるが、あんましカッカするな。奴の思う壺になるからよ』
通信でそう言ってきたのは、ＺＥＸＩＳの中でも比較的友好な関係だったクロウさんだった。軌道エレベーターの時もそうだったが、どうやら彼は新しい機体で戦ってきたようだ。羽振りも良さそうだし、遂に借金も返済できたのかな？
クロウさんのブラスタがリモネシアに降りたったのを皮切りに、ＺＥＸＩＳの面々が次々と島に上陸してきた。次元獣も既に黄色い次元獣を除いて全て消滅し、今この場にいるのはＺＥＸＩＳと自分、そして皇子とアイムだけとなっている。
『アイム、色々とテメェには聞きたい事がある。いい加減観念するんだな』
『それには及びませんよクロウ＝ブルースト。私の事について知りたいのなら寧ろそこの魔人さんから聞くと良いでしょう。何せ満足な情報もなく私の存在と力を見抜いたお方なのですから』
銃口をアイムに向けるクロウさん。だが、アイムの話す内容が驚くべき事実だったのか、周りのＺＥＸＩＳから驚愕の言葉が出てきている。
『話を逸らそうとしてんじゃねぇよ。お前、さっきある一点が足りないって言ったな……まさか、インサラウムの奴らにもちょっかい出してたのか？』

『フフフフ、本当に聡明な方ですねアナタは…ええそうです。インサラウムの宰相アンブローンに次元科学を進めるよう提案したのは何を隠そう私です』

その事実に皇子と俺を除いた全員が絶句する。攻撃してきたタイミングといい、姿を現した事といい、恐らくアイムはあの皇子に何らかの力の発露を促しているのではないか？

インサラウムの機体は殆ど次元科学を施されたものだと聞く。次元科学に関わっているのなら、あの皇子の機体にだって何らかの仕掛けが施されている筈。

もしかしたらアイムはそれを狙っている？　確認したい所だが、今はそれよりも大事な事がある。

『で、お前は一体何の為に出てきた？　まさか大人しく叩き潰されに来た訳でもないだろう』

『ふふふ、ご名答。つくづくアナタは厄介なお人です……よ！』

俺の質問に奴の機体がＺＯＮＥに触れた瞬間、ＺＯＮＥが活動を開始した。揺れ動く大気、捻れる空間に時空震動の予兆を感じた俺は変わらずアイムを睨み付ける。

『……これが、お前のやりたかった事か？』

『シュウジ＝シラカワ、アナタは私に予想以上の力を見せた。以前リモネシアでお会いしたときは取るに足らないただの人間でしたが……今はそうは思わない。スフィアも

なく、黒の叡智にすら触れてもいないのにその力は最早危険すぎる。よって、ここにいるＺＥＸＩＳごと時空震動で別次元に飛ばす事で私の勝ちとさせて頂きます』

……成る程、奴の言いたいことは分かる。戦って勝てない、または危険な相手に無傷で勝つには〝戦わない事〟が最も有力な手段である。

自分に手出しできない所に跳ばしてしまえば、仮に再び相対してもその頃には既に自分達を上回る力を手にしているという算段だ。

つまり、奴がこの場に姿を晒した時は既に奴の勝ちは決まっていた事になる。確かにこれは上手い手だし、俺は素直に感心する。

――――だが、この作戦には穴がある。それは、ここに自分とグランゾンがいる事だ。確かにＺＯＮＥは頑強だ。周囲に次元の壁を隔てる事で最強の防御力を有しており、ＺＥＸＩＳの攻撃を持ってしても罅一つ入らない。

けれど、その次元の壁諸共ＺＯＮＥを消し飛ばす手段があるならばどうだろうか？

動揺するＺＥＸＩＳの面々を後目に、俺はグランゾンの胸部を展開させてあの攻撃を放つ準備を始める。

『シュウジ、何をするつもりなの!?』

『カレンちゃん、そしてＺＥＸＩＳの皆さんは急ぎこの場から離脱して下さい。ＺＯＮＥの破壊は私の方で何とかしておきます』

『破壊だと！　まさか……止めろシュウジ＝シラカワ！　アレを撃てばＺＯＮＥどころかリモネシアだって！』

破界事変の時、初めてＢＨＣを目にした事を思い出したのか、アムロ大尉から攻撃中止の通信が入ってくる。カレンちゃんやヨーコちゃん達からも今すぐ止めろと言ってくるが……止める気はない。

だって、このままこのＺＯＮＥを放置すれば次元力を引き出されて地球は死の星となってしまう。リモネシアを壊すのは……本当に、本当に忍びないけれど、ＺＯＮＥを破壊できるのは自分しかいない。自分だけしかこの状況を打破できないのであれば――やるしかない。

シオさん、ラトロワさん、ガモンさん、ジャール組やリモネシアの皆には……永遠に許されない事だろう。けれど、それでも皆が生きているのなら俺はそれでよかった。

さぁ、始めよう。地球上で二度と撃つつもりはないと約束した誓いを破り、俺はグランゾンでマイクロブラックホールを生成する準備に取り掛かる。

――だが、思いもよらない乱入者がそれを許さなかった。

『ダメだよーシュウジ君、そういうのってただの自己満足な思い込みでしかないんだよ？』

『――――え？』

『君にそんな役割は似合わないよ。魔人は魔人らしく、堂々と構えて皆から畏れられてなきゃつまらないもの』

どこかで聞いたことのある声、歪曲していく空間の中、自分が見たものは……。

『じゃあね、ボッチな魔人君。君の世界に対する足掻きっぷりは見ていて飽きなかったよ』

にこやかに微笑むカルロスさんの姿だった。

ＺＯＮＥにシャトルが激突する。その時、眩いばかりの光が自分とＺＥＸＩＳ達を包み込み、俺の意識はそこで途絶えた。

◇

――――ここは、どこだろう？　見渡す限りの白い景色、グランゾンのモニター越しに見える奇妙な光景に俺はただ呆気に取られていた。
大気を調べて問題ないことを確認すると、俺はグランゾンから降りて改めて周囲を調べ始めた。
白く、生命の鼓動を感じさせない無機質な世界。手にした小石すら砕けて砂になる様を見たとき、俺はＺＯＮＥで死にかけた大地を思い出す。
ＺＯＮＥ。そういえば自分はリモネシアに設置されたアレを壊すためにブラックホールクラスターを撃とうとした。けど、それは別の誰かによって遮られてしまい、次の瞬間にはシャトルがぶつかり、ＺＯＮＥから光が溢れて現在に至る。……所々あやふやな点はあるが状況を纏めるに、自分はもしかしたらアイムの目論見どおり転移されたのだろうか。
だとしたら自分は帰れるのだろうか。この死んだ大地で生涯を過ごすことを考えると……ゾッとする話だ。
どうにかして戻ろう。アテはないがここにただいるだけよりずっとマシだ。そう思い一歩歩み出すと……。
「お前がここにいるという事は、カルロスの奴は上手くやったみたいだな」

その声に自分は反射的に反応する。最早聞き慣れたその声に俺は敵意を抱いて振り向くと……。

「よぉ蒼いの、この間ぶりだな」

ホットドッグを片手に破界の王がそこに立っていた。

色々聞きたい事はあるが、取り敢えず一言。

「そのホットドッグ、どこに売ってたの？」

その４２

――――マクロス・クォーター住居区。マルグリット＝ピステールの情報提供と案内の下、ＺＥＸＩＳはエウレカとエスターの奪還を果たす為、聖王都インサラウムへ向かう事になり、避難民として回収した僅か百人足らずのリモネシアの住民に今後の行動を伝える為、伝令係となったヨーコとカレンが彼等の代表達に話を通しに来ていた。

「――――と、以上で私達はこれより聖王都インサラウムへ向かいます。戦闘になると思いますので皆さんは部屋で待機していて下さい」

「了解した。……けれど済まないね。度重なる戦闘で疲れているのにワザワザこっちにまで気を遣わせてしまって」

「気にしないで下さい。私達もラトロワさんを始めとしたリモネシアの人達には生活面で支えられていますし、私達の戦いに巻き込んでしまった事もありますし……」

「それこそ気にしないでほしい話だ。今の世界に完全に安全な場所など存在しない。寧ろ地球圏最強の部隊と名高いＺＥＸＩＳに保護してもらった事が私達にとって最大の幸運さ」

戦いに巻き込んでしまって申し訳ない。そんなカレンの思いをラトロワは笑い飛ば

して気にするなと言う。そんな彼女の豪快さに気持ちを軽くさせてもらった一方、ヨーコはラトロワの隣にいるある人物に声を掛ける。

「えっと、そちらのシオさんの方は大丈夫ですか？　未だに顔の包帯が取れないようですし、火傷が酷いなら医務室に連れて行きますけど？」

顔を包帯で覆ったシオと呼ばれる女性。リモネシアから脱出する際に顔に火傷を負ったとされる彼女は、顔にこれでもかと包帯を巻いて素顔を隠してしまっている。

余程顔が酷い事になっているのだろうか、それともリモネシアが焼かれて心理的ショックが原因なのか、未だにシオは包帯を解こうとしない。それを気遣ってヨーコは刺激しない程度に声を掛けるが、当の本人は声を掛けられた事に大袈裟に反応し、首と手を振ってヨーコの申し出を断った。

「あぁ、コイツは人見知りも激しくてな。怪我の方は大分よくなってきたが、如何せん故郷が二度焼かれた光景を目の当たりにしたんだ。もう少しそっとしてやってくれないか」

「ご、ごめんなさい。無神経な事を聞いて……」

「いや、助けてもらっておいて勝手な事を言う私達こそ失礼した。此方も出来る限り協力する。なにかあったら言ってくれ」

「分かりました。では、これで……」

失礼します。そういってその場を後にする二人を見送ってラトロワとシオも部屋へと戻る。後で他の皆にも今回の事を伝えようと部屋の通信機を借りようとした時、今まで黙していたシオがラトロワに掴み掛かってきた。
「アンタ！　何だってあんな事言ったのよ!?　あれじゃあ私は心に病を抱えた痛い奴と思われるじゃない！」
「何をそんなに怒る？　お前が彼等に顔を見せる事が出来ないというから手伝ってやっただけだろう」
「だからって、もう少しまともに言えなかったの!?」
「落ち着け、ひとまずこれでお前のその姿についてとやかく言われる事はないだろ。あの一件で人見知りが悪化したと言えば暫くはお前に声を掛けてきたりする奴はいなくなる。その間に何か新しい言い訳でも考えておくんだな」
「ぐぅ……」
ラトロワの言葉にぐぅの音ぐらいしか出なくなったシオは渋々と引き下がる。嘗てインペリウムの大臣として世界を敵に回してきた自分が、何の因果かＺＥＸＩＳの世話になる事になってしまった。
素顔を隠すために包帯で顔を隠し、様々な理由で誤魔化してきたが、その度に良心は痛み、今回も善意からの申し出を嘘で断った事で、シオの良心と胃は追い詰められて

いった。

今回で暫くは大丈夫だと思うが、その間にまた言い訳を考えなければならない。良心と胃の痛みに苛まされながらシオはぐったりとした様子で、備え付けのベッドに座り込む。

早いところ戦いが終わってリモネシアに帰りたい。アロウズ達の所為で町は滅茶苦茶になってはいるが、それでも生まれ故郷で眠りたい。そう願った時、頭の中である光景が思い浮かぶ。

天から降り注ぐ光を魔神が押し留める光景、まるでリモネシアを守っているようなその光景を、ボートの上でシオはただ呆然と眺めていた。

何故世界に畏れられている魔神がリモネシアを守ろうとしているのか……いや、問題はそれだけじゃない。破界事変の頃、陰月でＺＥＸＩＳとの戦いで敗れた時も魔神は自分を守ってくれた。

一体何故？　その疑問は全く解消される事なく今日という日を迎えている。何故魔神は自分を助け、リモネシアを守ろうとしたのか。

（ねぇシュウジ、アナタは今どこにいるの？　アイムは生きていたけど、代わりにカルロスが死んだ。私、もう訳が分からないよ）

混乱する思考の中、リモネシアの為に奮闘した青年を思い出す。ここにはいない彼の

事を思いながら、シオを乗せたマクロス・クォーターは聖王都インサラウムへと進路を向けていた。

◇

「んだぁ？　お前まぁだこの間俺が奪ったホットドッグの事根に持ってるのか？　意外としつこい奴だな」
「ちげぇよ、ビックリしてつい勢いで聞いちまっただけだよ。人を勝手にいやしんぼにするな」
　相変わらずの神出鬼没なコイツについ変な事を聞いてしまった。コイツといい不動さんといい神出鬼没というスキルが流行っているのだろうか？　いや、それはないと思

いたい。
そんな事よりもまずは情報収集だ。コイツに構っていては時間があっという間に過ぎてしまう。ここには自分しかいないのか、それともＺＥＸＩＳも来ているのか分からないが、兎に角周辺を探索してみよう。
近くに置いてあるグランゾンに向けて歩き出した時、ホットドッグを食べ終わったガイオウが意味深な言葉で俺を引き留めた。
「……ここは、嘗て俺が破界した世界。インサラウムのいた世界だ」
「――――何だと？」
その後、奴は淡々と語りだした。自分がこの世界に召喚され手当たり次第に破壊の限りを尽くした事、それに対抗したインサラウムと激しい戦いを繰り広げた事、皇子の父を殺した事、向かってきた騎士達を悉く次元獣と化し、手下にした事。
他にもインサラウムはＺＯＮＥを使って最後に自滅した事など、破界事変の頃には知りもしなかった事実を淡々と告げられ、俺は暫く考えを纏めるのに脳を回転させていた。
「んじゃ何か？　インサラウムの連中はお前にやられて次元力を引き出そうとした結果、世界ごと自分の居場所を無くしてまだ次元力に満ちている地球に侵略しに来たと？　そういう事なのか？」

「まぁ、大体そんな所だな」
「ふざけんなよ。完全にこっちはとばっちりじゃねぇか。しかも原因の半分はお前とか、やっぱ疫病神だわお前」
「ハッ、破界の王を疫病神呼ばわりする奴もお前ぐらいだろうぜ」
ガハハと笑うガイオウを放置し、自分は再び思案に耽る。ガイオウの話を聞いた為か、事の成り立ちを何となく理解出来た。
ガイオウはインサラウムによる次元科学の実験の最中に召喚された。そしてアンブローン＝ジウスに次元科学を勧めたのはアイム＝ライアード、奴の誑かしによって次元科学は禁忌の領域に踏み込みガイオウを呼び出し、抵抗しようとアレコレやっていた内に、今度は自分達の手で故郷を滅亡に追い込んでしまったという事か。
……なんというか、色々巡りすぎて笑えない。誘惑に屈したアンブローンが悪いのか、それとも元凶たるアイムが悪いのか、少し頭が混乱する。
まぁ、要するにどっちも悪いのだ。そいつ等がどんな事情を抱えているのかは知らないが、その事でリモネシアを焼かれた事を許す理由にはならない。
今まで自分を利用したグレイス＝オコナーにばかり気を向けていたが、今後は奴も俺の仕返しリストに載せる事にしよう。そもそも、リモネシアが焼かれた原因はアイムの野郎にあるらしいし、寧ろ奴に対する優先順位はグレイスより高くした方がいいのかも

しれない。
そろそろ動こう。何やら向こうから大きな音が響いてくるし、もしかしたらＺＥＸＩＳが戦っているのかもしれない。
……けれど、一つだけ聞きたい事があった。俺はガイオウに向き直り、あの時――ＺＯＮＥに向かっていったカルロスさんは幻だったのか、それだけはどうしても知りたくて俺はガイオウに訊ねた。
「……なぁ、ガイオウ。お前カルロスさんと一緒じゃなかったのか？」
「――カルロスの奴なら死んだよ。お前もその瞬間を見届けた筈だ」
「……そう、か」
それ以上は……何も言えなかった。リモネシアの復興に無償で手を貸してくれたカルロスさん。あの人がどういう人物だったのかは知らないけど、それでも自分はあの人に何も返す事が出来なかった。
リモネシアを焼かれた時も、俺は彼に対して謝る事も出来なかった。胸の内に広がる寂しさと後悔を押し込むように空を見上げるが……そこには青空はなく、気が滅入るほどの灰色の空が広がっていた。
「行くならとっとと行け。俺もそろそろ動かなくてはならんからな。お前ともここでお別れだ」

「うっせ、なに友達同士の別れみたいに振る舞ってんだよ。言われなくても行くってんだよ」
そう捨て台詞を吐き出しながら、今度こそ俺はグランゾンに乗り込む。その際にモニターに映る奴の顔は――――いつか自分が見た黄昏ているモノだった。
結局、アイツの真意は聞き出せなかった。気にならないと言えば嘘になるが、今の自分にはやるべき事があるので、奴の事は気に留めず爆音のする方向へとグランゾンを走らせるのだった。

「……今まで、友だと思った連中はみんな俺の前から消えていった。多くの同士、仲間、それらが戦場へ消えていく中、お前だけは俺の前からいなくならなかったな」
去っていくグランゾンを見つめながら、破界の王と呼ばれる男は寂しそうに……けれど、嬉しそうに頬を吊り上げて。
「じゃあな、俺の最期の〝悪友〟お前と一緒に喰った飯は……美味かったぜ」
その呟きは誰にも聞こえる事無く、ガイオウは一陣の風が吹いた瞬間、その場から姿を消した。

◇

W月Ω日

インサラウムの連中のいた世界をどうにか切り抜け、元の（？）世界に戻ってこれた自分は、報告を兼ねて日記を記す事にする。

……正直、あまり理解出来ていない。いや、理解したくないと言った方が正しいのかな。ＺＯＮＥに呑み込まれていくインサラウムや最後のナイトオブナイツであるウェインの勇姿、他にもエスターちゃんが人間に戻れた事ややっぱりアイムの野郎が黒幕だった事やイマージュが助けてくれたなど、数多くの出来事があったのに――今の俺

の頭にはガイオウのあの寂しそうな笑顔がチラついてくる。
アイツはインサラウムの皇子によって倒された。〝尽きぬ水瓶〟のスフィアの力を解放した聖王機の一撃がガイオウを倒したのだ。
別にあの程度でやられるような奴ではない事を俺は知っている。故にそのうち顔を出すと思うが……その時、アイツはまた俺の敵になる事だろう。
アイツは破界の王だ。破界事変の頃は世界を滅茶苦茶にし、リモネシアを壊した悪魔だ。それは……それだけは変わらない。
けど、ふと思う時がある。もしかしてアイツは戦いとはもっと別の――――別の何かを求めていたんじゃないだろうか。
ホットドッグを美味そうに食べたり、どうでもいい世間話で会話をしたり、カルロスさんと一緒にいた時のアイツは、破界事変の頃のような殺意や敵意など微塵も持ち合わせていなかった。
なぁ、ガイオウ。お前って利用されていただけなんじゃないか？　アイムの野郎にいいように利用されて、頭にキてるんじゃないのか？
お前って――――何の為に生まれてきたんだよ。
……ちょっと湿っぽくなった。明日も早いし、そろそろ扉の方も限界に差し掛かってきたので、今日はそろそろ終了しようと思う。

え？　お前は今どこにいるのかだって？　いやー……実はね、時空震動で転移しようとした時、イマージュさん達が気を利かしてくれたのか、自分をソレスタルビーイングの格納庫に転移させてくれたんですよ。

それでスメラギさんのお誘いもあって少しの合間お世話になろうかなぁって思って部屋をお借りしていたら――――カレンちゃんとヨーコちゃんが押し掛けてきたのでござる。

鬼気迫る勢いでしたので俺は部屋に閉じこもり、部屋に特製のプログラムでロックをかけたのだけれど、二人とも今度は力ずくで押し通ろうとしております。

無理を通して道理を蹴っ飛ばす。成る程それは格言だと思うが、もう少しスマートに物事を解決できないモノか。

というかヨーコちゃん、君マクロス・クォーターにいた筈なのに何故ワザワザ此方にくる。アナタ教師なのだから少しは慎ましさを持ちなさい。

なんて言っても聞き入れて貰えず、扉は今も悲鳴を上げている。

そろそろ怖くなってきたのでどこかに隠れようかとおも（――――日記はここで途切れている）

その４３

Ｗ月＊日

先日、ヨーコちゃんとカレンちゃんの追跡をダンボールで逃げ切り、結局グランゾンのコックピットで眠ることになったシュウジ＝シラカワです。

現在自分たちは、イマージュ達のお陰でインサラウムの世界から脱出できている。一眠りした自分はプトレマイオス２の艦長であるスメラギさんと話し合ったのだが、その中で暫くＺＥＸＩＳに世話にならないかと申し出を受けた。

いろいろと世界を騒がせている自分を置いていてはＺＥＸＩＳとして拙いのではないのかと思ったが、ソレスタルビーイングもＺＥＸＩＳに参加している時点で似たようなものだとスメラギさんから言い返されてしまった。

それにクラッシャー隊を組織した大塚長官なる人物が、近い内にＺＥＸＩＳに関する極秘作戦を開始するという話が出てきている。それが成功すれば、今まで極秘の部隊として活動してきたＺＥＸＩＳが、正しい情報を世界に発信できるという。

そうなれば自分こと蒼のカリスマやグランゾンに対する負のイメージも払拭出来るかもしれない。そう提案してくるスメラギさんに俺はそれでも首を縦に振らなかった。

いやさ、気持ちは嬉しいし本音なら自分もＺＥＸＩＳに参加したいよ？　けどさ、負い目ってものが自分にもあるわけなのですよ。

破界事変の頃から何度も衝突した事もあったし、中には戦闘になりそうな危険な時もあった。簡単に割り切っていい話じゃないと思う。と、そんな風にあれこれ悩んでいた自分にスメラギさんは一枚の紙切れを渡してきた。

何だろうと思って紙に書かれた文字を読み通してみれば、そこには安くはない請求額が書かれていた。それを目にした瞬間自分は嘗て無い危機感を覚え、スメラギさんにこれは何だと訊ねると……。

『破壊した扉の修理費よ♪』

ものスッゴイ良い笑顔でそう言われた。アレはヨーコちゃんとカレンちゃんが破壊したのであって自分は無実なのでは!?　なんて正当な主張をしても向こうは聞く耳も持たない。ならば交渉人であるロジャー氏に弁護してもらおうと考えるが、彼はクォーターの方に乗っているため助けてくれる事はない。

……どうやら向こうは最初からこうする気だったらしい。アムロさんとカミーユ君を始めとした男性陣はスメラギさんの強引なやり方にドン引きだった事から無関係なようだけれど、カレンちゃんとヨーコちゃんは向こうでハイタッチしていた。

女って怖い。そう親身に思い知った自分は肩を落としながら暫くＺＥＸＩＳに参加

する事を決め、彼等と共に戦う事になった。特に同じ借金仲間であるクロウさんとは意気投合の仲である。

女の恐ろしさ、そして借金という立場、これが世の中の厳しさかと、俺はクロウさんと共に砂糖の入った水で愚痴を交わしていた。

Ｄｒ．ヘルの機械獣軍団と決戦を挑む四日前の出来事でした。

Ｗ月ν日

明日、いよいよＤｒ．ヘルが定めた決戦の日である。皆それぞれ思う所があるのか、あちこちでこれまでに戦った機械獣軍団とＤｒ．ヘルについて語っていた。

特に甲児君はお祖父ちゃんの仇を討てると気合いを入れている。空回りしていないか少し不安だが、彼も破界事変を経験して成長した人間だ。きっと彼は彼自身の手で、Ｄｒ．ヘルとの因縁を絶つ事が出来るだろう。

……というか、何気に俺って機械獣と戦うの今回が初めてなんだよね。タロス像とかいう機械獣の雑魚兵とは何度か戦った事があるんだけど、次元獣やインベーターと比べるとかなり頻度が少ないレアな奴らだ。

しかもあのタロス像って奴の中にはインベーター並にキモい寄生虫みたいなのが入っているし、Ｄｒ．ヘルはあんなのを量産しているのかと内心で苦手意識を持ってた

りしていた。

そんなＤｒ．ヘルと明日、決着を付ける事になる。悪の組織の一つと決着する事になるというだけあって、皆気合いを入れて気持ちを整えたりしていた。

そんな彼等を見ている一方で、ＺＥＸＩＳという組織はこうして結束を高めているのかなーと思ったりしていた。……今までこういうのとは縁がなかったから少し新鮮な気持ちである。

別に一人が寂しいとかそんな気持ちは一切無い。普段見慣れない光景に少し戸惑っただけであり、寂しかったり皆とどう接すればいいのか分からないことは断じてない。

コミュ障とは全く別の感傷である為、強く言っておくことにする。

……さて、皆が戦う気持ちを高めている一方、自分は一人格納庫をウロウロしていたら、早乙女アルトさんが自分に声を掛けてきた。

破界事変の頃、二人のアイドルを誘拐した事で自分を犯人と決めつけて悪かったと謝罪してきたのだ。自分のグレイス＝オコナーの調査関連の話がアムロ大尉からＺＥＸＩＳの皆にも伝わり、自分は誘拐犯ではない事を知って謝りたかったとアルトさんは言う。

自分も分かって貰えた事、それだけで嬉しかったからアルトさんの謝罪を受け入れたが、ここで一つ問題が起こった。

なんと、アルトさんは女の子ではなく男の子だったのだ。知られざる真実を前に自分は愕然とし、アルト君は憤慨し、付き添いのミシェル君は腹筋が崩壊して悶絶していた。

混沌と化した格納庫、取り敢えずアルト君に謝って事なきを得た自分は、カレンちゃんからある質問をされた。

リモネシアの人達に自分の事を話さなくて良いのかと、そう訊ねてくるカレンちゃんに俺は、まだそれは出来ないと返した。

まだ俺には決着を付けなければならない相手がいる。インサラウムの連中とアイム＝ライアード、そしてグレイス＝オコナーとアロウズの裏に潜むイノベイター。これら全てを叩き潰す事、それができた時こそ初めて自分はこの仮面を皆の前で外す事が出来る。

最近は連中をどう追い詰めるか考えただけで笑みが零れる。この時も自分のそんな笑みが出ていたのか、カレンちゃんやアルト君達から引かれていた。

そういう事で今の自分はまだ皆の前に顔を出すわけにはいかない。クォーターにいるであろう皆にも自分の事は教えないで欲しいと頼み込み、その場はそれで終わった。

……夜、ＺＥＸＩＳの機体整備を終えた頃。黒の騎士団の母艦の斑鳩に赴いていた自分は、彼等の総帥であるゼロと出くわした。何でも中華連邦での対局の決着がまだだったという事で、明日の決戦を前に、自分の指揮官としての能力をみたいという理由を付

けて、この日二回程ゼロとチェスを打った。
自分に指揮官としての能力なんてあるわけないのに、そんな自分の言葉などゼロが聞き入れてくれる訳もなく、自分はチェスを打つことになった。
結果は一勝一敗の引き分け、久し振りにしては妥当な対局の結果に自分は満足していたが、ゼロの方はそうでもなかったのか、チェス盤をウンウン唸っていつまでも眺めていた。もしかしたらゼロは、チェスやこういった盤上のゲームには妥協を許さないタイプなのかもしれない。
その後、自分はゼロの部屋から抜け出すと途中でカレンちゃんと出会った。明日はいよいよＤｒ．ヘルとの決戦、緊張しているのかと訊ねると、カレンちゃんは破界事変の頃から馴れっこだと返してきた。
まだ年齢は女子高生だというのに、頼もしかったり寂しかったりと複雑な心境を抱いたが、カレンちゃんはそんな事を気にも留めないで笑っていた。
その後、幾つか談笑に花を咲かせていた時、不意にカレンちゃんから質問された事がある。今まで一人で戦って来て不安に思うことは無かったのかと、寂しかったり、逃げ出したいと思った時はなかったのかと、彼女は真っ直ぐ自分を見てそんな事を訊ねてきた。
そんな彼女の問いに、俺は思わず笑ってしまった。だって今更過ぎる話だもの、笑っ

てしまうのは仕方がない。けれどカレンちゃんは真面目な話で笑い出した俺が許せなかったのか、顔を赤くして怒り始めた。

怒ったカレンちゃんの怒りを鎮めるために、自分は破界事変の時からの話を正直に話した。無論自分がこの世界に来た経緯は適当に誤魔化したけど、それ以外は正直に話した。

エリア１１で油まみれになりながら働いた事、暗黒大陸で死に物狂いで生き抜いた事、リモネシアである人にお世話になり、そして死んでしまった事、落ち込んで生きる気力を無くした俺を子供たちや老人の皆が助けてくれた事、戦う理由を自分なりに見つけた事、それ以降の出来事も話している内に夢中になり、気付けば零時を過ぎていた。

流石に語りすぎたかなと振り返ると、そこには目を腫らしたカレンちゃんがいた。ビックリしてどうしたのと訊ねると、カレンちゃんは何でもないと言って去ってしまった。

……もしかして、自分の話で余計な気を遣わせてしまったのだろうか？　明日はいよいよ決戦だというのに悪いことをしてしまった。追い掛けてフォローをしようと思ったのだが、何故か四聖剣の千葉さんとラクシャータさんに止められてしまい、自分はそのままプトレマイオス２に戻されてしまった。

千葉さんは此方でフォローしておくから気にするなと言ってくれたが、果たして大丈

夫なのだろうか。ラクシャータさんは終始ニヤニヤしっぱなしだし、もう訳が分からないよ。

Ｗ月卍日

碌に睡眠時間も取れず寝不足気味だった自分だが、今更一晩眠らなかっただけで体調を崩すことはなく、今回のＤｒ．ヘルとの決戦を向かえる事になった。

結果は自分達の勝利でＤｒ．ヘルとの戦いに終止符を打つ事になった。なったのだが……正直、ちょっとやりすぎてしまった感のある戦いだった。

だってさ、皆良い感じにそれぞれポジションを取っていたしさ、敵さんの位置もちょうど一直線に並んでいたし、これはチャンスだと思ってついやってしまったんだ。

〝ディストリオンブレイク〟ＢＨＣに次ぐ高威力の武装をぶっ放した事により相手の陣地は総崩れ、ＺＥＸＩＳの皆も半分が戸惑う中、自分は内心でやっちまったと呟いていた。

だってさ、光子力研究所の周辺ってばＤｒ．ヘルが決戦の場として選んだだけにやたらと広くてさ、ここならどんなに暴れても大丈夫だと言うものだから自分もついつい張

り切ってしまったんだよ。
なんだか幹部の一人であるブロッケン伯爵も消し飛んだっぽいし、巻き込まれたピグマン子爵もボロボロになった姿で光子力研究所に向かう最中に刑事の格好をしたおっさんに撃たれてたし。……俺、余計な事しちゃったかな？
けれど甲児君にとって宿命の敵とも言えるあしゅら男爵だけは甲児君が決着を付けた。その後、出てきたＤｒ．ヘルと全ての機械獣を相手にＺＥＸＩＳと＋αな自分が参戦したことで見事撃破、所々危ない場面もあったけれど、光子力研究所が本当の姿を見せたりあしゅら男爵がＤｒ．ヘルを裏切り、まさかの助っ人になったり、様々な経緯があって遂にＤｒ．ヘルを倒す事が出来た。
〝地獄王ゴードン〟Ｄｒ．ヘルの墓標が燃えて散っていく中、Ｄｒ．ヘルは最期に自分に何やら意味深な視線を送りつけてきた気がしたのだが……あれは気の所為なのだろうか。
まぁ、今更気にしても仕方ない。明日も早いし久し振りにグランゾンの整備をしたいので、今日の所はこれで終了する事にする。
所で、自分はどうやって扉の修理費を払えば良いのだろう。今回の戦闘によって得られた資金は全てＺＥＸＩＳが管理するっぽいし……扉を自分で直すのはありだろうか？

あぁそれと、昨夜のカレンちゃんの件でだが、どうやらあの後千葉さんが上手い具合に話を付けてくれたらしく、カレンちゃんはいつもと変わらずに小柄ながらも紅蓮の強さを見せつけてくれました。

いやー、最初は不安だっただけに彼女の活躍を間近で見られて安心した。やたら自分の周囲の敵を倒していくのが少し気にはなったが、アレはカレンちゃんなりの大丈夫だという意志の表れなのかもしれない。

やっぱり活動的な女の子は行動で示すものなのだなと感心する一方、少し不安要素が出来てしまった。黒の騎士団の副指令である扇さんの自分を見る目が、時々怖くなる時があるのだ。

こう、妹を彼氏に取られまいと威嚇する兄のような……そういやゼロもチェスを打ってた際にカレンちゃんの救出する時の話をした時、ナナリー総督の話を出した途端雰囲気が変わった気がする。

お陰でその隙を突いてその時に一勝を収めたのだが……一体あれはどうしたのだろう。聞くのも怖いのでこの話はこれでお終いにしようと思う。

その４４

Ｗ月β日

明日、日本でトゥウィンクルプロジェクトのコンサートが開かれるという事で、アイドル達を護衛する事になったＺＥＸＩＳ達と自分はコンサート会場のすぐ近くで待機しており、その最中ＺＥＸＩＳの面々はある話題で持ちきりとなっていた。

早乙女アルトとランカ＝リー、そしてシェリル＝ノームの間で繰り広げられる三角関係、果たしてアルト君はどちらの女性を選ぶのかという話。

アルト君は確かに美形だし最前線で戦う度胸もある。猛者揃いのＺＥＸＩＳの中でもエースの実力を持った彼ならば、それはモテる事だろう。三角関係というものは少しでもバランスを崩せばＢＡＤＥＮＤ直行の難しい人間関係だが、ここには事情を知った人間が多くいるみたいだし、彼等ならきっと上手くフォローしてくれるだろう。

〝ｎｉｃｅ　ｂｏａｔ．〟な結末にならないよう、自分は離れた位置で彼等の関係を祈る事にする。その後竹尾ゼネラルカンパニーの木下さんから現在のアイドルの中で誰のファンですかと訊ねられ、自分はファイヤーボンバーとだけ答えた。勿論ランカちゃんやシェリルさんの歌も好きだが、ササラさんの歌が自分には一番グッとくるの

だ。自分は結構悩んだりした時もあるので、彼の歌からは何度も元気を貰えた。
自分がＺＥＸＩＳに参加してからは余計にその歌を聴かせてもらえる機会が増えたので、ファンとしては役得した気分である。Ｓ．Ｍ．Ｓのリーダーであるオズマさんもファイヤーボンバーの熱狂的なファンという事で、その時が来れば是非話を聞きたい所だ。
さて、本当はこのままほんわかとした会話で終わらせたい所だが、そうもいかないのが現実の厳しい所、ランカ＝リーの活動しているトゥウィンクルプロジェクトは、あのグレイス＝オコナーが手掛けたプロジェクトだ。裏で奴が何か企んでいるのではないのかと疑問に思いジェフリー艦長に相談したのだが……どうやら、奴は既に行方を眩ましていたようだ。
表向きは体調不良という事で姿を消しており、現在はランカちゃんの所属する事務所がトゥウィンクルプロジェクトを担当しているらしいのだが、自分はそれが奴の次の行動を開始したのだという証に思えた。
アムロさん達に伝えたグレイス＝オコナーの話はジェフリー艦長の耳にも届いているらしく、自分の話もすんなりと受け入れてもらえた。何でもジェフリー艦長も個人的にグレイス＝オコナーに対して不審に思う点が幾つかあるらしく、オズマさんが秘密裏にグレイスに対する調査を行っているのだとか。

あの人がマクロス・クォーターにいないのはその為か。用意周到なジェフリー艦長に成る程なと感心しながら俯いていると、艦長からそこまで独自で調べられる君は大したモノだと褒められた。

別に大した話じゃない。自分がグレイスを不審に思ったのは奴が自分を利用しようとしたからだ。奴に報復すべく行った殆ど憶測と当てずっぽうによる推測に過ぎず、今回は偶々それで当たりを引いたに過ぎない。と、そんな感じに伝えると、ジェフリー艦長は呆れた様に溜息を吐いてた。

不思議に思う自分だが、今はそんな事はどうでもいいのでスルーする。グレイス＝オコナーに関してはオズマさんが持ち帰る情報次第という事で保留となっているが、ジェフリー艦長自身はグレイスの事をほぼ黒として見ているらしく、今後は奴の動向に注意するよう各艦長に伝える事で今回はそれで話を終える事にした。

え？　何でお前はジェフリー艦長とそんな話をしているのかって？　いやね、実はジェフリー艦長ってああ見えてサーフィンが得意らしいんだよ。自分もリモネシアにいた頃は復興作業の合間や終わりによくサーフィンをしていたものだ。……誰もやる人がいなくて殆ど一人だったけどね。と、そんな話から始まった談笑の最後も今度は自分にもサーフィンを教えて下さいと約束を取り付けた事で終わりにし、自分はブリッジを後にした。

そして、その後の自分はＺＥＸＩＳの面々の機体を調整、整備の手伝いをさせてもらったりした。プトレマイオス２（以降トレミー）の扉を壊した件で少しでも貢献できるよう自分なりに努力しているのだが、如何せんここは戦いが常であるＺＥＸＩＳだ。機体の消耗は凄まじく、直しても直しても次から次へと新たな問題箇所を見つけてしまう。

ロジャーさんは、扉を破壊した事は君をＺＥＸＩＳに参加させる為の方便なのだから休むようにと言ってくれた。けれど、それを抜きにしても酷い。連戦に続く連戦だから仕方のない事かもしれないが、それでもこれからはもっと手強い相手と戦わなくてはならないのだ。整備に手を抜くわけにも行かないので、ロジャーさんにはそれでも自分も壊した原因の一つですとその言葉をやんわりと断った。

仕事人だなと呆れながらも機体整備を手伝ってくれたロジャーさんはマジ紳士、ドロシーさんも毒舌ながらもおにぎりを用意してくれたりと従者ップリを発揮してくれた。

その後はイアンさんを始めとした整備士の方達、並びにハロ達の手伝いもあってＺＥＸＩＳの機体は全て万全にしておいた。いやー、働くって素晴らしいね。会場の下見から戻ってきたＺＥＸＩＳの面々は自分の機体を見るなり驚いてた。

そんな彼等を見て自分は意外と整備士に向いているのではないのかと思ったりした。整備の基礎を叩き込んでくれたゴウトさんには本当に心から感謝しています。

あ、勿論グランゾンの整備もちゃんとやりましたよ。自分の大事な専用機だからな、心を込めて整備しようと思う。

ただ一つ気になる事があるのだが、勝平君だけは自分の整備士の格好を見るなり逃げてしまった。一体どうしたのだろう？

Ｗ月Ｑ日

……今日、久し振りに奴と遭遇した。コンサートの途中ランカちゃんと獣戦機隊の沙羅さんが誘拐され、二人を助け出そうと変貌した中央情報局に救出メンバーの一人として潜入した時、奴と遭遇した。

グレイス＝オコナー。今まで身を潜めていた奴がこの時になって出てきた事に俺は警戒しながらも歓喜した。漸く本願の一つが果たせる。奴は自分を世界の敵として仕立て上げた張本人だが、実のところもうそれ自体に怒りはさほど感じてはいない。何せ情報統制が常となっている世の中だ。仮に破界事変の時に奴の策略に乗らなくても、いずれ自分は世界の敵となっていただろう。

けれど、だからといって奴が自分を利用した事実は変わらない。奴をここで捕縛して企みの全てを吐かせてやろうと思ったが、厄介な奴が邪魔してきた。

〝ゲシュタルト〟暗黒の王と名乗る奴は超能力というオカルト攻撃で此方の邪魔を

してきた。手からビームやら衝撃波なるものを出して自分の邪魔をし、その合間にグレイスに逃げられてしまった。

邪魔された事による怒りで奴を殴り飛ばしたが、そのマスクの上からでは表情を読みとる事は出来ず、今度は分身して数の暴力で攻めて来やがった。

分身の半分を倒した所で後から来たタケル君と合流。なんでもゲシュタルト自体が凄まじい超能力の使い手でここにいる連中全てが超能力による分身なのだという。

まんまと騙された自分をゲシュタルト（分身）はバカめと嘲笑う。グレイスを逃がしてしまい頭に血が昇っていた自分はプッツンして、ここでまたガモンさんから教わった奥義を出してしまった。

〝猛羅総拳突き〟空手のあらゆる突きを〝刹那的に繰り出す〟奥義、捻り貫手と違い殺傷能力はそれほど高くはないが、それでもゲシュタルトの幻を全て消し飛ばす事は出来た。分身という事だけあって衝撃には弱いのか、どれもこれも呆気なく消えていく分身に自分はこんな奴に手こずったのかと悔しくなった。

タケル君の方はバラの騎士という人物に助けられたらしく、どうにか窮地を脱する事が出来たらしい。救援に駆けつけたロゼさんも一緒の所を見ると、どうやら本当にゲシュタルトを撃退出来たようだ。お互い無事で何よりだと言うと、何故かタケル君は引きつった笑みを浮かべていた。ロゼさんも白目になって気絶していたし、余程ゲシュタ

ルトとの戦いが熾烈だったのだろう。
獣戦機隊の人達も沙羅さんを救出できたようで、残った救出対象はランカちゃんだけとなった。急いで救出に向かいたいと思ったが、外での戦闘が激しさを増してきた所で救出はアルト君に任せ、自分達も戦線に参加する。
その後はムゲ＝ゾルバドスなる怨念使いと戦い、これに勝利した。……え？　呆気無さ過ぎる？　だって自分は湧き出てくる雑魚とばかり戦っていたのだもの、仕方ないじゃない。
Ｄｒ．ヘルとの戦いを教訓に前に出過ぎる戦いは控え、皆が敵の大将の撃破に専念出来るよう、湧き出てくる雑魚を一掃していました。
ムゲが言うにはムゲ自身がいる限り敵は無限に出てくるという事なので、自分はＺＥＸＩＳの皆に寄り付かないようずっとワームスマッシャーで貫いていました。
自分のやった事がワームスマッシャーで敵を貫くだけの簡単なお仕事だなんて言わないで欲しい。これでも皆を巻き込まないよう計算して撃っているのだからそれなりに神経を使うのだ。尤も、アフリカタワーの時とは違い落ち着いて計算出来たのでそれほど疲れはしなかったけどね。お陰でワームスマッシャーの雨も途切れる事なく打ち続ける事が出来た。
勿論自分だけが戦った訳じゃない、アムロさんやカミーユ君等のＺＥＸＩＳの面々は

ワームスマッシャーに耐えた怪獣みたいなロボットに止めを差したり、自分に近付いてくる連中はカレンちゃんやヨーコちゃん、キタンさんが片付けくれた。

これぞチームプレイ！　今まで体感する事の無かった結束感に自分は嬉し涙を仮面の奥で流していました。しかもバサラさんがそんな自分を祝福するかのように歌うモノだから号泣必死である。

そして、そんな自分の援護の甲斐あってか、葵さんのダンクーガと忍さんのダンクーガによる同時攻撃でムゲを撃破、再び地球を危機から救う事が出来た。

本当は諸手を挙げて喜びたかったのだが、ランカちゃんがどこかに行方を眩ましたという事で素直に喜ぶ事が出来なかった。何でもランカちゃんはバジュラの幼体を飼っていたらしく、その子を故郷に返すべく旅立ったのだとか。

グレイス＝オコナーとの決着の日も近い。その事をどこかで確信していたのか、ランカちゃんの行方不明の話を聞いてもさほど驚く事はなかった。

それに、何も悲観的な話ばかりじゃない。大塚長官の策がこの戦いで発令して自分達ＺＥＸＩＳの戦いが全世界に配信される事になったのだ。今まで秘匿されてきた連邦の一部隊が陽の光に当たる事によって、これまでの彼等の正当性が世論によって確固たるものとなった。

その中には自分の事も含まれており、今まで世界の悪として囁かれていた魔神が、実

は世界の為に戦っていた。そんな事実に全市民は驚き、ちょっとしたパニックになっているという。

そんな衝撃的な話が世界中に飛び交う中、もっと大きな衝撃が地球を襲う事になる。

〝地球連邦代表であるリリーナ＝ピースクラフトの解任〟今まで地球を支えてきた彼女の解任に世界は動揺し、更にブリタニアの皇帝であるシャルル＝ジ＝ブリタニアが地球連邦の代表になるという事実に、世界は再び変動する事になる。

特にゼロはこの事実に思う所があったのか、シャルル皇帝の地球連邦代表就任という話に誰よりも動揺していた。

果たして世界はどう動くのか、シャルル皇帝の独特な演説を耳にしながら今日の所は終わりにしたいと思う。

……あ、そうそう。この間から悩みの種だった扉の修理費に関する話だけど、先日自分が全ての機体を整備した事が幸いし、全額返済する事が出来ました。しかもそのお礼という事で、お金も貰えちゃったりしました。

スメラギさんは少ないけれどと言っていたけれど、ＺＥＸＩＳは普段が戦いの毎日で整備や武装の供給がある為にそんな余裕はあまり無いはず。それなのに特別手当を貰えるなんて思っておらず、自分は飛び上がるのを必死に堪えてスメラギさんから受け取った。

大事に使おう。そう思いながら自分は特別手当と掛かれた封筒をグランゾンのコックピットにしまう事にしました。え？　何故グランゾンに仕舞うのかだって？　だって普段グランゾンはワームホールに仕舞っていますもの、これ以上安心できる場所はそうない。そうでしょ？

その４５

Ｗ月γ日

先のシャルル皇帝の地球連邦代表就任以来、世界は歪んだ形で動き始めていた。アロウズは反連邦組織を悉く弾圧し、女王リリーナの完全平和主義とは真逆のやり方に世界中の人々が怯えていた。

世論なんてお構いなしの強攻策、しかもそれが強引なシャルル皇帝のやり方にＺＥＸＩＳ内の誰もが反感を覚えた。

女王リリーナという人々の心の柱となっていた彼女が解任された事で、ブリタニア皇帝のカリスマに民衆は怯えながらも彼に縋るしか無かった。そんな中、ブリタニア皇帝は黒の騎士団の発祥の地であるエリア１１を粛清対象とし、そこに残る反連邦組織を徹底的に潰すことを露わにした。

エリア１１に集まるブリタニア最強の騎士、ナイトオブラウンズとアロウズの軍勢が再び集い始める中、ＺＥＸＩＳは次の目的地をエリア１１に定めた。

勿論自分も出るつもりだった。リモネシアの時のような一方的な弾圧をまたもや一

方的なやり方で粛清しようとする。脳裏でリモネシアの焼かれる光景を思い出し、絶対にそうはさせないと意気込んでいたが、アムロさんに今回は出ない方がいいと釘を刺されてしまった。

当然自分はこれに反発した。連中を許す訳にはいかない。リモネシアの時のような悲劇を繰り返させてなるものかと息巻いたが、アムロさんの次の一言でグゥの音も出なくなった。

『お前の機体は強力過ぎる。感情を暴走させたまま動いたら、今度はお前が連中と同じになってしまうぞ』

アムロさんの言うようにグランゾンの力は強大だ。その気になればエリア１１に集まったラウンズやアロウズを租界ごと消滅させる事など容易い事、けれどそれはリモネシアやアフリカタワー以上の大災害を引き起こしてしまうという意味でもある。

日本でのムゲ＝ゾルバドスとの戦いで、グランゾンの印象は破界事変の頃と比べると大分マシになってきている。アイドル二人の誘拐事件の話も一部では別の犯人がいるのでは？　なんて話が出てきているし、近い内に自分とグランゾンが世界から認めてもらえる日も近いかもしれない。

誰かの為に戦えるほど自分は高尚な精神の持ち主ではない、どちらかと言えば自分は自分さえ良ければそれでいいと考えたりする自分勝手な人種だ。けれど、ＺＥＸＩＳに

参加している以上彼等に迷惑を掛ける訳にもいかない。それに、もし自分が感情のままに租界で暴れたら、それこそ自分はリモネシアの皆と顔を合わせられなくなる。

アムロさんの言う事に従い、エリア１１の戦闘は参加しない事にする。代わりにそれ以外でのバックアップはやらせてもらいます。なんて、偉そうな事を言ってもアムロさんは不快感なんて微塵も見せず、寧ろ笑顔で宜しく頼むと肩を叩かれた。

やっぱああいう人が大人なんだなぁ、自分なんて冷静なフリなんてしていてもカッとなるとつい周りが見えなくなってしまうんだよなぁ。この悪い癖を早く直したいと思いつつ、自分は格納庫に向かって皆の機体を整備する事にする。

……そういえば、あれからゼロは姿を見せていない。何でもエリア１１でやるべき事があると言って先にエリア１１に向かっているらしい。またなんか悪巧みでもしてるのかな？

そういえばって事でもう一つ思い出した事がある。確か以前エリア１１に来たとき、シャーリー＝フェネットなる女の子から「ゼロとゼロに連なる全ての人を守って欲しい」と頼まれていたのだった。アレってまだ有効だったりしないのかな？

個人的な願いだし部隊という枠に収まっている以上自分も組織に従わなければならない立場だが、シャーリー嬢の願いを無碍にするのも忍びない。

誰かに相談しようにも出来る相手がいない。いっそ各艦長の人達に話そうかなと

思った時、格納庫でカレンちゃんを見つけた。
カレンちゃんは破界事変よりも前からエリア11のアッシュフォード学園に在籍してたって言うし、もしかしたらシャーリー嬢の事も何か知っているのかもしれない。一縷の望みを懸けて話してみたら、なんとカレンちゃんはシャーリー嬢と同じクラスの友達だったと言うではないか。
これを機会にシャーリー嬢との交わした約束の内容を話してみたら、カレンちゃんは一瞬神妙な顔付きになる。けれど次の瞬間何か思いついたのかカレンちゃんはポツポツとある事を話し始めた。
実は、現在エリア11の総督であるナナリー皇女殿下もアッシュフォード学園に在籍していた事があり、そしてゼロとナナリー皇女は親しい間柄だという事を告げられる。
もしかしてゼロはナナリー皇女に何らかの思い入れがあるのか？　だとしたら中華連邦に移住する事を勧めるが、どうやら事はそんな単純な話ではないらしい。
カレンちゃんはゼロの秘密を知っているようだがそれを無理矢理聞き出すのは忍びない。故に自分も先行してエリア11に向かうと伝えると、カレンちゃんは笑顔でありがとうと言ってくれた。
やー、若い女の子から礼を言われるのは嬉しいものである。各艦長やＺＥＸＩＳの皆からはカレンちゃんの方から話してもらう事にして、自分もエリア11に向かう事にし

た。

だが、ここで一つ問題が起きる。グランゾンはワームホールに仕舞いっぱなしで出せば皆に気付かれる。気付かれたら事情を話さなくてはならないし、ＺＥＸＩＳがエリア１１に来ることを考えるとあまり悠長してはいられない。けれど今ＺＥＸＩＳがいるのは太平洋の上空、つまり……海の上にいるんだよね。

仕方がないからカミーユ君にも協力してもらい、小型のボートで向かう事になった。……え？　お前泳いでいけるだろうって？　バカ言ってはいけない。唯の人間が海のど真ん中から泳いでいける訳がないだろう。この日記だってボートの上で書いているものなのだから……。

さて、そろそろエリア１１の港に着く頃だ。日記はこれまでにして、自分は索敵から逃れる為に潜水行動に移る事にする。

Ｗ月Ｖ日

既に租界ではナイトオブラウンズ達の迎撃体勢が整えられており、ＺＥＸＩＳ達を迎え撃つ気満々である彼等を後目に、自分は久し振りに素顔で潜入活動をしている。

現在は既に街の人達の避難が開始されているのか、人の気配はあまりしない。見かけても軍人ばかりが目立つこの租界では迂闊に動くことは出来ないでいる。

そんな租界で今の所誰にも見つかっていない事を察すると、どうやらダンボールでの潜入は成功したといっても良いだろう。

取り敢えずシャーリー嬢を探す為、まずはアッシュフォード学園を探索、途中軍人らしき人達と擦れ違ったが得意のかくれんぼモードでやり過ごし、アッシュフォード学園の生徒会室にまで辿り着く事に成功。学生名簿を調べ租界での彼女の住所を入手、避難しているだろうけど念の為という事で彼女の家まで行ってみたら……なんといました。

玄関先で落ち込んだようにうずくまるシャーリー嬢、周囲に人影がいないことを確認し蒼のカリスマに変身、先日の自分に対して出した依頼をもう一度確認するべく話しかけたら、案の定驚かれました。

どうにか落ち着かせた自分は改めて彼女に質問した。どうして自分に、ゼロとゼロに関係している人達を守って欲しいと頼んだのか、と。暫く彼女は沈黙した後、誰にも言わないという約束の下で話を聞く事になった。

彼女から渡された一枚の写真、そこには生徒会と呼ばれるメンバーが、学園をバックに映し出されている。何でもゼロはシャーリー嬢やカレンちゃんと同じアッシュフォード学園の生徒でブリタニア人、そしてあのナナリー総督の兄なのだという。ブリタニア皇族のナナリー総督、その兄ということはゼロもまたブリタニア皇族という事になる。

少年の名はルルーシュ＝ランペルージ、写真にも映っている線の細い男子生徒。何らかの理由があって学生や黒の騎士団の総帥をやっていたのだろうが、問題はそこじゃない。そんなルルーシュ少年に何故シャーリー嬢は肩入れしているのかと訊ねると……なんと、シャーリー嬢はルルーシュ少年の事が好きなのだという。好きな人の為に何かしてやりたい、そう言うものではないのかと聞き返してくる彼女に自分は、それはそうだと苦笑いを浮かべながら答えた。

ゼロに関する全ての謎を理解した自分は、改めてシャーリー嬢に質問した。自分との契約は続行なのかと、そんな自分の問いかけにシャーリー嬢は当然と即答した。

気の強いお嬢さんだ。学友のカレンちゃんといいこの世界の女性は皆こうなのだろうか。シャーリー嬢を避難先近くまで送った後、自分は今夜再び総督府に潜入する事を決意する。

ナナリー総督は全盲で足の自由が利かない少女だが、芯のある少女だ。ナイトオブラウンズやアロウズ達が戦うからといって、市民を置いて逃げるような人ではないだろう。彼女の性分から政庁で留まる事だろうと思い、戦闘が始まると同時に自分は政庁へと潜入し、彼女と再び面会する事にした。

自分なら戦いの余波から彼女を守れるし、いざとなったらグランゾンのコックピットへ一緒に乗り込んで安全な所まで避難させてやればいい。……そうすると中華連邦の

紳士達の反応が怖い所だが背に腹は代えられない。

後はルルーシュ少年に関する話だが……本人の行方が分からない以上下手に動くことは出来ない。取り敢えずはシャーリー嬢の願いを叶える為に今夜上手く立ち回ろうと思う。

ＺＥＸＩＳの皆には暫く単独行動を取らせてもらうよう話を通しておいた。カミーユ君やカレンちゃんも上手く話しておくと言ってくれたし、これで今日は自分の思い通りに動く事が出来る。

……え？　どうして通信出来たかって？　そりゃブリタニア兵の駐屯所から通信機をお借りしましたけど？　本当なら自作しても良かったのだけれど、そんな暇は無いので取り敢えず現地調達しました。

通信を入れていた合間、ブリタニア兵の皆さんには少しばかり眠ってもらっただけだから心配しないで欲しい。

◇

――――今、俺は目の前に広がる空の光景に呆然としていた。混乱する自分を落ち着かせながら、気を失うまで何をしていたか懸命に思い出してみる。

確か俺はシャーリー嬢からの願いを叶える為に政庁に乗り込み、再びナナリー総督と面会しようとしていた。当然侵入者である自分を放置するわけもなく警護に当たっていた警備兵と鉢合わせした事もあったが、外が戦場である為に警備の人間はさほど多くなく、自分程度でも容易く対処できた。

ナナリー総督を探している内に咲世子さんというルルーシュ……いや、ゼロの従者っぽい人と遭遇したり、ロロというこの間の切れやすい若者と再会したりしたけれど、此方の事情をそれとなく話すと咲世子さんは承知したと認めてくれた。ロロ君だけは此方を終始親の仇を見るようで目で見てきたから落ち着かなかったけれど、そんな事を気にしている暇もなく俺達は散開し、ナナリー総督の捜索に当たった。

激しさを増していく外の戦闘に急かされ、政庁内を探し回ったとき……そうだ。思い

出した。

確か、自分は突如差し込んできた光に呑み込まれたんだった。あまりの突然の事だったので選択の余儀なく開いたワームホールに飛び込んで、そこで意識が途切れたんだ。

ワームホールは異空間。どこに繋がるか分からず目的地を設定しなければ宇宙空間や海底、或いは壁の中だったりと危険な場所に出てしまう可能性が凄まじく高い為、イチかバチかの賭けにでも出ない限り、ワームホールに生身で飛び込む真似なんて絶対にしてはいけない転移方法だ。

けれど、今回はそんな転移が奇跡的にも上手く行ったのか、自分は五体満足で地面に倒れている。起き上がって状況を調べようとするが……どうやらここは無人島らしい。人の姿は見当たらないし文明の臭いは毛ほどもしない。

どうにかしてＺＥＸＩＳと連絡を取りたい所だが、生憎通信手段がない。グランゾンを呼び出して合流しようかと考えたが、まだ戦闘が続いているかもしれないし、相手に刺激を与えるわけにもいかない。

ひとまず自分がどこにいるのか、それだけでもハッキリさせようと蒼のカリスマの格好に着替え直してアチコチ歩き回っていたら……なんだか、奇妙な遺跡に辿り着いた。

……え？　何これ？

デッカい扉みたいなのもあるし、不用意に触って壊してしまっては拙いのでひとまず

ここの調査は後回しにして、別の所へ探索しようとしたら……。
「うおっ眩し！」
突然扉から光が放たれ、意識が揺らいで視界が定まらなくなっていく。――――そして、次の瞬間自分が目にしたのは……。
「ほう、かの魔人までもがここに来るとはぁ、流石に予想外だったぞぉ」
「蒼のカリスマだと!?　バカな、奴は死んだ筈じゃあ！」
「やはり、生きていたか」
なにやら広々とした空間に出ており、目の前には……ロール頭で有名なブリタニア皇帝とルルーシュ君、そしてスザク君やＣ．Ｃ．さん、見知らぬ黒髪の女性が対峙するように向き合っていた。しかも向こうではＺＥＸＩＳが戦っているし、何が起きてるん？
「……フッ」
訳が分からない状況にふと笑いが出てしまった。

その46

人間というものは突飛な出来事を前にすると、その思考を停止させ、考える事を放棄するという。滅多な事では人間一人の思考を停止させる事など有り得ないのだが、現在自分はそんな突飛な出来事と目の前に広がる光景に、一瞬だけれど考える事をやめていました。

だってさ、さっきまで無人島にいたんだよ？　奇妙な遺跡を前に驚いたけれど、それ以外はなんて事無い自然に囲まれていたんだよ？

それなのに……なによこれ？　何でいつの間にか俺ってばこんな夕焼けに染まる空の下で石垣の上に立っているのよ？　何でルルーシュ少年やスザク君がブリタニア皇帝と黒髪の女性と対峙してるのよ？　しかも皆さんこっちを凝視しているし、Ｃ．Ｃ．さんだけは落ち着いた様子でこっち見てるけど……何これ？　どうすればいいのよ？

何か向こうではＺＥＸＩＳが戦っているし、マジどうなってるのこれ？

「蒼のカリスマ、フレイヤに巻き込まれて死んだと聞いていたけれど……やはり、生きて

いたのか」
　混乱する自分の思考を更に追い詰める言葉がスザク君から放たれる。……え？　フレイヤ？　ていうか俺、死亡扱いされているの？
　フレイヤとはもしかしてあの桜色の光の事だろうか。話の内容からして唯の兵器ではなさそうだし……もしかしてメメントモリに次ぐ戦略兵器が開発されたのだろうか？
　そしてそれに巻き込まれたとされる自分は死亡していたと思われていた？　……なんてこったい。
「ゼロに続くもう一人の仮面の男よ、貴様が何故ここにいるのかは今は問うまい。しかぁし、我等の悲願であるラグナレクの接続の邪魔はさせんぞぉ」
　ブリタニア皇帝からのそんな言葉に自分の思考は現実に引き戻される。……どうでもいいけど、この人の声って腹に響くよね。
　つうかラグナレクの接続って何？　……いや、自分は確かその言葉を知っている。知っている筈なんだけど――――ダメだ。思い出せない。
　最近、昔の事が思い出せなくなってきている。自分がどこの何者でどんな人生を歩んできたのかは思い出せるけど、それに纏わる思い出というものが要所要所で抜け落ちている気がする。

ブリタニア皇帝のラグナレクという言葉に引っかかる部分があるが……どうしてもそれが思い出せない。

いや、ラグナレクという言葉自体は知っている。北欧神話の中で記される終末を意味する言葉だ。神々との戦いによって世界は終焉し、新たに世界が創られるという話。昔自分もそういうモノに憧れた時があったのでそういう知識は存在する。

「ラグナレク……終末ですか。ではシャルル皇帝、あなたはこの世界を終わらせて次は一体どのようにするおつもりで？」

「嘘の無い世界。世界の全てから嘘を無くし、ありのままの世界に造り変えるぅ。賢しい貴様の事だ。その口振りだと我等の計画の事も全て知っているのだろうなぁ」

いえ、全く欠片もご存知ありません。こっちはただ気になったから質問しただけなのにそんなドヤ顔で言われても困るんスけど？

「神を終わらせる――成る程、世界を造り変えると豪語するアナタにとっては皇帝としての責務……いや、全てが俗事なのでしょうね」

「ふん、遠回しに嫌味を言う事でワシを揺さぶるつもりかぁ？　笑止！　蒼のカリスマ……いや、シュウジ＝シラカワよ、貴様も我が愚息ルルーシュと同じ自身を偽る愚か者よ、世界を創造する事の何たるかを分からぬ貴様ではワシに勝つ事はできん！」

何となくらしい言葉で場の空気を持たせてみると、シャルル皇帝は両腕を広げて空を

仰いだ。前々から思ってたけどこの人一々言葉遣いが大仰なんだよね。皇帝だから仕方がないんだろうけど……。

つーか、さり気なくこの人も俺の事知ってたよ。得体の知れない皇帝様だったから覚悟はしてたんだけど、最近自分の身バレの頻度が高い気がする。

先程から変わらないドヤ顔の皇帝陛下、そんな彼のドヤ顔に疲れた溜息をこぼした時、ふと自分の立ち位置に気付き、内心で焦り始めた。

――――俺、ちょっと出しゃばり過ぎじゃね？　最初訳分からない所に来てしまったが為に気付くのが遅れたけれど、今俺がいる位置ってちょうどブリタニア皇帝とルルーシュ少年達の間に立っているんだよね。

ルルーシュ少年からすれば俺はいきなり現れて場を乱す厄介者にしか映らないだろうし、もしかしたら「いきなり現れてなに言ってんのコイツ？」みたいに思われているのかもしれない。

ヤベェ、こうして別視点から見るとまるで空気を読めない人間じゃん。仮面の内部で湧き出てくる汗に不快感を感じる間もなく、俺は急いでこの場をルルーシュ君に譲ろうと言葉を繋げる。

「ククク……アナタでも勝つ負けるなんて言葉を使うのですね。全てを俗事と切り捨てて置きながらまだ己を棄てきれずにいる」

「……何がいいたい？」
「世界を終わらすと言っておきながら世界にまだ未練がある。そんな人間らしいアナタが、少し好ましく思えただけですよ」
「貴様ぁ……」
鋭い眼光で睨んでくる皇帝から逃げるように背を向けて、自分は後ろに控えたルルーシュ君の肩に手を置き、バトンを渡す。
「ここから先は君の戦いだ。決着を付けてくるといい」
「お前に言われるまでもない。俺はその為に此処に来ているのだから……」
いきなり出て来て場を乱したものだから怒られるかなと不安に思っていたけれど、ルルーシュ君はそんな事を言うこともなくブリタニア皇帝の前に歩み出る。スザク君やＣ．Ｃ．さんもそんなルルーシュ君の後に続く中、俺は離れた所で一人考えていた。
（……これから、どうしよう）
ルルーシュ君に死んでいたと思われていた自分、ＺＥＸＩＳの皆も自分が死亡したと思っているのだろうか？　遠くで敵ＫＭＦと戦うカレンちゃんの紅蓮に手を振ってみるけれど、一向に此方に気付く素振りはない。というか、本当にここはどういう所なんだろう？　夕焼けみたいな風景がどこまでも続いている感じがして規模は把握できないけれど、夕焼けは黄昏と呼ぶ事もあるので無難に〝黄昏の間〟とかだったりして。

ラグナレクも黄昏という意味もあるみたいだし、案外シャレ関係で繋がっているのかも、そんなアホな事を考えている内にいつの間かシャルル皇帝と黒髪の女性の下半分が消えそうになっていました。

近くにあったグネグネしている奴も崩壊しているし……これ、ルルーシュ君が勝ったという事で考えても良いのかな？　それに向こうも戦闘が終了したみたいだし、勝ちでいいよね。

「この賢しい愚か者がぁぁっ！　ここでワシを拒めばその先にあるのは絶望の未来ぞ！　その事を分かっているのかぁ！」

「だとしても俺はお前達の造る世界を否定する。消え失せろ！」

ルルーシュ君のその言葉が引き金となり、上半身まで消えていたシャルル皇帝と黒髪の女性は断末魔と共に光に呑まれて消失、ＺＥＸＩＳの皆も混乱の様子の中、次の瞬間には別の光に呑まれて消えていった。あの様子だと皇帝達とは違い、元の世界に戻っていったのだろう。

（……皆、気付いてくれたかな）

場の空気を読んでグランゾンは敢えて出さなかったが、それが間違いじゃない事を願う。ブリタニア皇帝との決着を付けられた事で取り敢えず一段落したかと思われたが、彼等は何やら物騒な事を話し始めた。

「お前達、これからどうするんだ？」
「決まっている。ルルーシュはゼロ、ユフィの仇だ」
「だから？」
　何やら凄まじく険悪の雰囲気、今にも殺し合いが始まりそうな空気を今度は敢えて読まず、自分は間に割って入る。
「さて、何やら物騒な話をしていますが、取り敢えずここから出ましょう。難しい話をするのはお互い落ち着いて話し合ってからでも遅くはないでしょう」
「……そう言えばお前がいたな。気配が全く感じられなかったから分からなかった」
「俺もだ。この間の政庁への単独潜入といい、蒼のカリスマ……お前の目的は何なんだ？」
「その事を話すのも含めて、今はここから出ることを優先しましょう。Ｃ．Ｃ．さん、アナタならここから出ることが出来るのではありませんか？」
「私の事もお見通しと言うことか。……お前、本当に何者なんだ？」
「別にお見通しという訳ではありませんよ。知ってる事を知ってるだけ」
「食えない奴だよ、全く」
　自分の精一杯の誤魔化しにＣ．Ｃ．さんは肩を竦めて、俺達の一歩前に出る。彼女の額から紅い光が瞬いたかと思われた時、自分の視界は突然揺らぎ、意識が一瞬途絶えた。

◇

――どうやら元の場所に戻れたようだ。意識を繋げられる様になった俺は、遺跡の中から出て辺りを見渡す。ＺＥＸＩＳの皆の艦が見えない事から、どうやら別の所に転移させられたようだ。

さてこれからどうしよう。取り敢えず皆を探して合流しようかと今後の方針を決めようとしていた時、今まで黙っていたスザク君とルルーシュ君が、先程よりも一回り大きな険悪の雰囲気を醸し出して遺跡の入り口で向き合っていた。

ただならぬ雰囲気に近くのＣ．Ｃ．さんにどうしたのかと訊ねると、何でも二人は昔は親友同士だったらしいが、一つの過ちの所為で関係は拗れに拗れ、今や互いに互いを

殺したい程憎んでいるのだとか。

どうしたら親友同士がそこまで関係を悪化させるのか、なんて疑問に思っても仕方がないので互いに落ち着くよう説得を試みるが……。

「貴様には関係ないだろう！」

「引っ込んでいろ！」

……ちょっと二人とも興奮状態の為か話が噛み合わないので少し大人しくさせる事にした。スザク君には延髄切りとショートアッパー、ルルーシュ君は細身なのでスープレックスホールドで黙らせ、その後落ち着きを取り戻した二人から話を聞く事にした。

話が長かったが簡潔に纏めると、何でもルルーシュ君は〝ギアス〟というＣ．Ｃ．さんから得た不思議な力でブリタニアを倒すため、ナナリー総督の居場所を創る為、黒の騎士団を造りＺＥＸＩＳに参加し、世界と戦ってきたという。

〝ギアス〟やっぱり引っ掛かる事はあるけれど思い出すことは出来ない。これ以上この事については悩んでも解決出来そうにないので、後にでも日記を読み直す事にして話を進める。

で、ギアスを使って途中までは順調に進んだけれど……ある時そのギアスの力が暴走し、無意識の内にトンでもない命令を下してしまったのだという。

それが破界事変でユーフェミア皇女の起こした惨劇、通称〝虐殺皇女〟の話だ。それ

を聞いた瞬間、スザク君は手にした剣を血が滲み出る程握りしめていた。
その後もブリタニアと戦い、ブラックリベリオンでは黒の騎士団が敗れ、ルルーシュ君はスザク君の手でブリタニア皇帝の前に引きずり出され、黒の騎士団の総帥を捕らえた報酬としてスザク君はナイトオブラウンズの地位に付いたという。
そしてそれからはＣ．Ｃ．さんの手引きもあり、ゼロとして再び立ち上がったルルーシュ君。ＺＥＸＩＳで幾つもの戦いを経てここまでこれたのだが、此処へ来て更なる事態が発生した。
シュナイゼル＝エル＝ブリタニア。エリア１１でＺＥＸＩＳがブリタニアやアロウズと戦い、そしてフレイヤの使用でトウキョウ租界が壊滅した時、彼等の所に奴が来訪し、ルルーシュの存在を暴いたのだという。
危うくシュナイゼルに引き渡されそうになった所をロロ君……ランペルージとしてのルルーシュ君の弟が、文字通り命を懸けて助けてくれたのだという。彼もギアスの使い手だったが、彼のギアスは心臓に負担を大きく掛けるため、彼はギアスの使いすぎで死亡、この島の南西の位置に埋葬したという。
そしてここでブリタニア皇帝と戦い勝利した。そこまで至る道程を聞いていたら既に外は暗くなっており、夕日も水平線の下に沈もうとしていた。
長い話を聞いて一息つきたい所だけれど、まだ彼からは聞きたい話がある。休みたい

気持ちを押し殺して俺は彼に一つ問うた。
「それで、君はこれからどうする？　ブリタニア皇帝を倒して本懐を遂げたけれど引き返せる場所がない」
「……俺は、これまで数え切れない程の罪を重ねてきた。ナナリーがいない今、俺に出来る事は限られている。混迷するこの世界を正す為、全ての憎しみは俺が――――」
「はいこのバカちんがー」
「バカちん!?」
何だか重苦しい空気の中でトンでもない事を口走ろうとしたので思わず素で遮ってしまった。いきなり罵倒されるとは思わなかったのか、ルルーシュ君は目を見開いて絶句している。
イヤだって実際そうじゃない？　何で世界の全ての憎しみをルルーシュ君一人で背負う話になるの？　〝この世、全ての悪〟にでもなりたいの？　一見それで全部片付けるような言い回しだけどさ、それって後の人達に全部丸投げしてるようなモノじゃない。
それに全ての悪事を自分に集中させる様な事を言ってるけれど、今の世界になったのは何もルルーシュ君一人の責任じゃない。アロウズに加担してやりたい放題だったスザク君もそうだし、更に言えばそんなアロウズの存在を認め、彼等の実情を見ようとし

なかった世界中の人間も同罪みたいなものだ。
　リモネシアが焼かれた事だって自分という存在がいたからああなった。自分が仕返しにイノベイターやグレイス＝オコナーを探しているのも半分は八つ当たりみたいなものだ。
　それなのにルルーシュ君一人に悪いことを全部押し付けるのは……流石に都合が良すぎるのではないだろうか？　というか、個人的にその結末は正直腹立つ。
「だったら、だったら俺はどうすればいい！　ユフィを殺し、多くの人間の人生を歪ませてきた俺には最早この命を差し出すことでしか贖える方法しかない。なのにそれを奪われたら……俺には、どうする事も出来ないじゃないか！」
「別に死ぬ事だけが罪滅ぼしな訳ないでしょ？　勿論これからの君の人生は一生後ろ指を刺されるものになるだろうけれど、贖罪って寧ろそういうモノなんじゃないの？」
　何だかスゲェ説教臭ぇ事言ってるけど、こうでも言わないとこの子自分の考えのままに行動しそうだからなぁ。シャーリー嬢との約束もあるし、何としてもそんな考えは思い留まってもらわなくては。
　けれどＺＥＸＩＳの皆も結構アッサリしてるのね。ギアスという力に怯えるのは分かるけれど事情も知らずに追放するとか、正直チョッピリがっかりした。
　……イヤ、この場合はそんな状況に追い込んだシュナイゼルの手腕に戦慄を覚えるべ

きか、黒の騎士団の総帥をここまで一方的に追い込む彼は流石ブリタニアの宰相閣下と言うべきか。兎に角この話は後回しにして、ひとまずルルーシュ君のフォローに徹する事にしよう。さっきからこの子落ち込み具合が半端ないのよね。

「……それに君と君に連なる全ての人達を守るよう、実はあるお嬢さんから言われていてね。その約束を守る為にも君には死なれては困るんだよ」

「……え？」

「シャーリー＝フェネット。確か君のガールフレンドだったかな？」

「シャーリーが!?」

ルルーシュ君の聞き返す問いに自分はそうだと簡単に返す。すると先程より顔色を良くしたが、今度は何も言わず黙り込んでしまう。

恐らくは頭の中で色々葛藤しているのだろう。そんな風に思い悩ませているのは自分の所為でもあるので、俺は彼等にある提案を提示した。

「……まぁ、いきなりそんな事を言われても君も混乱する事だろう。かといって俺も約束があるから君を死なせる訳にもいかない。だから、これならどうだろう？」

「な、何を？」

「俺と、一緒に来ないか？　勿論スザク君とC．C．さんも一緒に」

差し出した自分の手を見て、三人は目を丸くしていた。

その４７

神根島。自分が辿り着いたそんな名称の無人島から脱出し、取り敢えず色々世界を見て回ろうという話になり、現在自分達は各国の観光名所を巡っております。

ＺＥＸＩＳにも戻れず、ブリタニアからも追われる身となっている自分達。けれどシュナイゼルの指示なのかルルーシュ君の顔は割れてはおらず、今の所は比較的平和な時間を過ごせている。

けれど油断してはいけない。相手はあのシュナイゼル殿下だ。どこで伏兵を忍ばせているか分からない以上、気を抜く訳にはいかない。

スザク君もナイトオブセブンだっただけに顔は世界中の人に知られている為、迂闊に外を出歩く訳にはいかない。

そこで自分はＣ．Ｃ．さんの協力の下、二人にある変装術を施した。世界を、そしてシュナイゼルの目を誤魔化すのに必要なもの、それは……。

「……おい、シュウジ＝シラカワ」

「ん？　どうしたのルルちゃん」

「その呼び方は止めろ！　……こんな風にアチコチ俺達を連れ回して、一体何を考えて

いる」
「え？　別に何も？」
「何も!?　ブリタニアとエリア11を除いて様々な国を渡り歩いて何も考えていないというのか!?　有り得ない……今まで俺はアナタを底の知れないトンでもない化け物かと思っていたが、とんだ思い違いのようだ」
「言葉遣いが戻っているぞルルーシュ、今のお前は〝女〟なんだ。ちゃんとそれらしく振る舞え」
「黙れ魔女！」
　そう、C．C．さんの言うとおり今ルルーシュ君には女装をしてもらっている。あのゼロが、ブリタニア皇族の一人がまさか女装をしているとは流石に思えまい。そんな普通は信じられない落とし穴だが、それだけではシュナイゼルの目を誤魔化しきれないかもしれない。そこで……。
「ルルーシュ、恥を忍んでいるのは君だけじゃない。俺も……私だって耐えているのよ」
　仄かに頬を朱に染めて恥を堪えているスザク君。言葉遣いは女性を演じられているが、体格と態度の所為でキワモノの域を出れないでいる。
　ナイトオブセブンですらも女装、流石にこれは読めないと思うが此方の裏を読むことに長けているのがシュナイゼルという男だ。どれだけ「これなら！」と確信しても不安

を覚えてしまう。そこで更に自分は一計を案じた。
「二人とも、今は恥を捨てなさい。恥と常識を投げ飛ばしてこそ、人はより高みへと昇れるのよ」
「そんな高みなど私が消し飛ばしてやる！　というかその言葉遣いを止めろぉ！　気色悪い!!」
　二人だけ女装させてはインパクトに欠ける。そこでこの俺自ら女装する事で今度こそシュナイゼルの目から抜け出す事に成功する。
　だが、まだ足りない。確かにこれでならシュナイゼルの目から逃れる事は可能だろう。しかし彼の側にはカノンという文官がいる事を忘れてはならない。一度しか面識の無い間柄だが、シュナイゼルという人物の側近を勤めている人だ。しかもあの人の特性上自分達の変装が看破される可能性が極めて高い。故に、ここは保険としてもう一つ策を投入。
「しかし、私にも男装をさせるとはな……ルルーシュはコイツをバカと言うが、私は一周回って天才的に思えてきたぞ」
「Ｃ．Ｃ．さん、そこは〝私〟ではなく〝俺〟もしくは〝オラ〟と言って頂かなくては困りますわ」
「何と戦っているんだアナタは……」

男を女、女を男に入れ替えて相手の思惑を混乱させる。これぞ対シュナイゼルに自分が案じた〝男女逆転の計〟である。……多少やりすぎな感は否めないがそうでないと戦えないのがシュナイゼルという男である。

因みにスザク君には活発な女性のイメージを、ルルーシュ君は清楚なお嬢様を、自分はビン底眼鏡のがり勉女、そしてC・C・さんにはチョイ悪風な青年の格好をそれぞれしてもらっている。髪とかはウィッグなるモノを活用し、C・C・さんはカツラを使って髪型を変えているし、彼女のメイクテクによって益々自分達はソレらしくなっている。

……というか、ルルーシュ君の格好が似合いすぎて困る。性別間違えて生まれてきたんじゃないかと疑ってしまうくらい似合っている為、顔を合わせた時チョッピリ引いた。や、勿論良い意味でだよ?

お陰で周囲からはそんな怪しむ視線は感じられないし、寧ろルルーシュ君が防波堤の役割となって自分達にあまり視線が来なくなっている位だ。

「しかし、お前のやる事は突飛だな。幾らシュナイゼルや連邦の目から逃れる為とはいえ、グランゾンの跳躍で移動するとは……お前の前には常識という言葉はなさそうだ」

「常識とは投げ捨てるモノ、とある緑巫女さんも仰っていた言葉です。型にハマれば相手の思う壺、時には型を脱ぎ捨てる事もまた必要なのですよ」

「なに良い事言った風な雰囲気を出しているんだ。お陰で俺達は移動のたびにすし詰め状態となり、毎回酷い思いをしている。少しは遠慮という言葉を覚えて欲しいものだ」

「けれどルーシュ、彼があの魔神を使ったお陰で見つかった事がないのも事実だ。ブリタニアも追っ手を出している様子はないし、今は大人しく従うしかないんじゃないか？」

自分の場を和ませるジョークも華麗にスルー。真面目な様子で話し合う二人に自分は恥ずかしさと虚しさを噛みしめながら再び歩き始める。

ブリタニア……いや、シュナイゼルは今の所此方に干渉している節はない。その理由に、グランゾンのワームホールを利用しながらの突発的な移動能力によって、行方を追いきれない事が一つとして挙げられる事だろう。

方向性も何もないただ気分だけで行き先を決める日々、もしシュナイゼルがルルーシュ君達を追っているのならば、その突発的な行動に少しは頭を悩ませてくれれば御の字、そのまま混乱してくれれば嬉しいが……精々時間稼ぎ位にしかならないと思う。

デメリットとしては自分こと蒼のカリスマとグランゾンがルルーシュ君の味方になっていると思われる事だが……まぁ、そこら辺は仕方ないと思えるし、放っておく事しか出来ないだろう。

それよりも気になる事がある。自分達で世界を巡って一週間近く経過しても、地球連

邦政府の部隊であるＺＥＸＩＳの話が一向に耳に入ってこないのだ。大塚長官の作戦で世界に知られる事になったＺＥＸＩＳの存在、今や世界の誰もが知ることになる部隊なのに、一週間何も活躍していないのは少し変に思える。

ＺＥＸＩＳは地球を代表する最強の部隊だ。ゲッターやマジンガーを始めに多くのスーパーロボット、ガンダムに搭乗する選りすぐりのパイロット達。ムゲ＝ゾルバトス以降名前を知られるようになった彼等は世界中にその行動を知られるようになっていった。

これまで戦ってきた彼等が忽然と姿を消す事も疑問に思うが、影の功労者であるＺＥＸＩＳの不在が世界に対し不安を抱かせている所も少しながらある。もし彼等がいない時にインベーダーやアンチスパイラルが攻めてきたら、地球連邦は戦えるのだろうか。リモネシアでの一件で大幅に削られた戦力は、未だ立て直せずにいると聞く。

勿論その時は自分もグランゾンと共に戦うつもりだが、自分だけでは限界がある。ルルーシュ君達にも協力を仰ぎたい所だが、その前にまず彼等の機体を何とかしなくてはならないのが、目下自分達が問題にしている課題だ。

ルルーシュ君の蜃気楼は環境さえ整えば自分が整備、修復させる事が出来るが、Ｃ．Ｃ．さんやスザク君の機体は……ちょっと直すのは難しいかもしれない。

三人の機体はそれぞれグランゾンと同じワームホールに収納しているが、Ｃ．Ｃ．さ

んの機体は戦闘のダメージが酷くて大破状態。スザク君のランスロットに至っては、良く形を保てているなと感心する程に酷い状態だ。ここまで来ると最早直すよりも、新しい機体に乗り換えた方がいいのかもしれない。

「……ねぇスザちゃん、アナタのランスロットってブリタニアの偉い技術者さんに作ってもらったのよねぇ？」

「え？　え、えぇ、そうでございますですのことよ」

「スザク、言葉遣いが崩壊しているぞ。何語だそれは……」

スザク君の話によれば、ランスロットという機体は元々は〝特派〟と呼ばれるブリタニアの技術部――更に詳しく言えば、そこの開発主任であるロイド伯爵なる人物がランスロットを設計し、開発したと言われている。

現在ブリタニア本国には、そんなランスロットの発展型である第９世代のＫＭＦがロールアウト間近なのだという。それを聞かされた時、自分はブリタニア本国から強奪しようかなと考えたが、流石にそれでは敵を作りすぎるので却下する事に……。

本音なら彼等にも手伝って欲しい所だけれど、シャーリー嬢との約束を守らなければならない以上無理を言うわけにもいかない。しかしＺＥＸＩＳが不在の今、インベーダーやアンチスパイラルと戦うにはグランゾンの力は必須。しかしルルーシュ君達を放って戦場に赴くのも気が引ける。

彼等の自由意志も尊重したいし、けれど約束の件もある。一人であーだこーだと悩んでいる内にふと自身の脳裏にある案を思いついた。……けれど、これって責任放棄にも繋がるのではないか？　後ろで騒いでいる三人をひとまず放置し、数分に渡って悩んだ末に自分が出した結論は……。

「まさか君の方から連絡し、しかも頼ってくれるとは……嬉しいよ我が友よ」
「いえ、此方の急な呼び掛けに答えて下さりありがとうございます」
イギリスにある、とある郊外の屋敷。その人物は嫌な顔一つしないで自分達を招き入れてくれた。爽やかな笑顔で屋敷の中へと案内してくれる彼に、ルルーシュ君とスザク君は唖然とした表情で固まっている。唯一Ｃ．Ｃ．さんはいつも通りの態度だったけ

れど、時折自分を意外な風に見つめてくる視線は一体どういう意味なのだろう。
「今この屋敷には私に通ずる者達は誰一人いない。私も一個人として君と接している故、どうか君もいつも通りに接してくれたまえ」
「……イヤ、ホントすみません。こんな形でトレーズさんの所にお世話になるのは気が引けたんだけど、けれどどんなに考えても俺が頼れるのはトレーズさん位しかいないから」
「それこそ無用な心配と言うものだ。友に頼られるのは私にとっても至上の喜び、それがかの魔人と謡われている君からの頼みならば尚更だよ」
　……今、俺はルルーシュ君達からは責任を放棄した嫌な人間と思われている事だろう。けれど、今はそれらを無視して敢えて言わせて頂きたい。
「……俺を対等な友人として扱ってくれるトレーズさんマジエレガント」
　もうホント、この人以上に出来た人間と出会える機会は……もうないんじゃなかろうか？
「色々話を聞きたい所だが、まずは着替えを用意しよう。……取り敢えず男物と女物、どちらを用意させれば良いのかな？」
　と、やはり爽やかな笑顔でそう言ってくる閣下に今更気付く。そういや自分達、今も女装したままでした。

その４８

Ｗ月Ｌ日

シャーリー嬢から頼まれた、ゼロことルルーシュ少年とそれに連なる者達の身を守るという約束を果たす為、自分は自分を友だと認めてくれたトレーズさんの所にお邪魔する事になった。友人を都合の良い道具みたいに扱うやり方に罪悪感を感じていたのだけど、トレーズさんはそんな些細な事など気にするなと笑って許してくれた。

相変わらずの懐の大きさに感激していたが、どうやら世界の状況は思った以上に芳しくないようだ。地球連邦代表であるシャルル皇帝の不在、インベーダーやアンチスパイラルの出現頻度の多さ、更にはインサラウムの尖兵である次元獣も世界中の様々な所に局地的に出現、多すぎる地球の脅威に政府は現状の対応に大忙しの様子。

世界中を旅している最中でも思ったが、観光に赴く様々な土地で心の底から笑っている人間は少なかった。皆感情を表に出さずに平常心を装っているが、いつインベーダーを始めとした侵略者達に襲われないか毎日不安の日々を過ごしている為、暗い表情で下を向く人が多い。

今は女王リリーナが連邦の代表代理となり、彼女の采配によって市民は取り敢えず冷

静さを保っている様子だが、その均衡がいつ崩れるか分からない以上、彼女も内心不安に思っている事だろう。

軍事力の面ではリモネシアの件で半分に削がれていても、現状で最も戦力を有するアロウズも次元獣やインベーダーの対処を行っているが、その裏では今も反政府勢力に対して弾圧を行っているようだ。

カタロンはハーキュリー氏を筆頭にアチコチで侵略者達の被害を受けた住民達の援助を行ってたりなど、此方も世界を変える為に変わらず頑張っている様子。というかハーキュリーさんやっぱりカタロンにいたのね。噂で聞いただけで事実かどうか分からず不安だったけれど、元気でいるようで取り敢えず安心した。

そして唯一安心出来たのが、コロニー側の主導者であるミリアルド＝ピースクラフト。彼が率いるホワイトファングが地球に攻撃を加えず、インベーダーやアンチスパイラルのムガンを相手に戦っているという。あちらもあちらで難のある相手だが、今の状況は市民達にとって心強い味方となっている事だろう。

トレーズさんの屋敷で厄介になって半日、案内された部屋で一時の休息を得られた自分達は、ひとまず今後の事を話し合うべく一度広間に集まった。これからはトレーズさんの所でお世話になるのか、それとも自分と共にインベーダー等の侵略者相手に戦うのかという話。

彼等……というか、スザク君とルルーシュ君は即座に後者を返答した。何でも自分がトイレで部屋を開けていた合間に二人で話し合ったらしく、なんでも〝自分達のやってきた事は到底許される事ではない。喩え後ろ指を刺される事になろうと誰かの為に戦っていきたい〟との事。

少々気負い過ぎな気もするが、最初の時の様な一人が人柱になる事で世界を纏める様なやり方を取るよりはマシだと思い、取り敢えず二人には頑張れとエールを送った。

C．C．さんはルルーシュ君の共犯者という事で彼の方針に特に何も言うことはなかったが、二人に気付かれないように微笑んでいた。君も笑うんだねと少しからかったら「黙れボッチ」と返されてしまった。ボボボボッチちゃうわ！

ルルーシュ君達が自ら戦う事を決めたのであれば、自分から言えることは何もない。勿論、シャーリー嬢との約束を守る為に自分も可能な限り援護するし、いざとなったらワームホールに無理矢理詰め込むつもりだ。

けれどここで一つ問題がある。彼等のやる気は大変結構だが、ルルーシュ君達の機体はどれも酷い有様だ。ルルーシュ君の蜃気楼だけは設備さえどうにかすれば大丈夫だが、生憎この屋敷にはそんな設備は当然ない。スザク君やC．C．さんの機体に至っては修復不可能の所にまで来ている為、手出ししようがない。

今後の方針が決まっても出来る事が限られている。二人とも歯痒い思いをしている

だろうけど、今日は気持ちを落ち着かせる事に専念してゆっくりと休んで欲しいと思う。

……所で、Ｃ．Ｃ．さんはどうしてあんなにもピザが好物なのだろうか。旅の最中で一度手作りのピザをご馳走したが、あんなものはピザではないと憤慨されてしまった。

そんなにダメかな麻婆ピザ、美味いんだけどなぁ……。

それと、今更で略式ではあるが、ルルーシュ君の弟であったロロ君に哀悼と謝罪を行っておこうと思う。シャーリー嬢との約束も中途半端なモノになってしまったが、以降はもっと気を引き締めて行こうと思う。

ロロ君、済まなかった。

Ｗ月Ｔ日

今日はこの日に色々な出会いがあった。まず一つ目に紹介しておきたいのがロイド＝アスプルンド伯爵、ブリタニア帝国における随一の科学者でランスロットの開発主任だった人だ。

その出会いは昨日行われた話し合いでスザク君とＣ．Ｃ．さんの機体について悩んでいた所、そこに興味津々なトレーズさんも加わってきた事から始まった。最初は唯でさえこの屋敷で厄介になっているのにこれ以上迷惑は掛けられないと断ったのだが、ト

レーズさんのエレガントスマイルによって自分の話は無用な心配と言うことで却下された。……この人、結構茶目っ気があるのね。

そんな訳で半ば強制的にスザク君達の機体について話すことになったのだが、説明するにつれてトレーズさんはうんうんと頷き、どこか良い施設は無いものかと訊ねたら、何故か素晴らしい程のエレガントドヤ顔をされた。

不思議がる自分達を余所に、良いところに案内しようと言うトレーズさんの後をホイホイと付いていく俺達。案内された屋敷の中にある、とある行き止まりに最初は戸惑うが、トレーズさんが壁に手を触れた瞬間に壁が左右に割れ、奥からエレベーターが出現した。

隠し扉とエレベーターに男心が擽られる中、地下へと降り立った自分達が目にしたのは……広々とした地下施設。その奥にはブリタニアの航空艦も置かれており、そこでロイドさん達と出会ったのだ。

なんでもブリタニアの宰相であるシュナイゼルが本国で着々と準備を進めているらしく、巨大な建造物にフレイヤ弾頭をこれでもかと詰め込んでいるようなのだ。ロイドさん達はそんなシュナイゼルに付いていけなくなり、研究成果のＫＭＦを航空艦に乗せて本国から脱出。追われている最中でトレーズさんの部隊に保護され、秘密裏にここで匿っているという。

顔に似合わず大胆なロイドさん、対するシュナイゼルの方は明らかに良からぬ事を企んでいそうだが、今はまだその事実を問いただしに行く訳にはいかない。今の自分達はトレーズさんの所でお世話になっている身だ。ここで出て行ってブリタニア本国にまで乗り込んでいけば、トレーズさんにまで迷惑を掛けてしまう。

それに彼の事だ。ロイドさんがトレーズさんの所で身を隠しているという事は既に知っている事だろう。万が一この屋敷の周辺に監視者が配置されているならば自分達の存在も知られている可能性もある。

ルルーシュ君もこれには同意してくれた。シュナイゼルの用意周到さは尋常ではない。下手をして身動きを封じられては適わないので、せめてＺＥＸＩＳ達が動き出すまで自分達も大人しくしておいた方がいいだろう。

その間何もしないというのもアレなので、ＺＥＸＩＳ達が動き出す合間、自分もやるべき事はしておこうと思う。

ロイドさん達の本国から奪取してきたとされる第９世代ＫＭＦ〝ランスロット・アルビオン〟スザク君専用であるこの機体を自分も手伝う事でより完成度を高めたいと思う。

といってもあくまでお手伝い程度だ。ランスロット・アルビオンの最終調整にチョコチョコと手を加えるだけ。勿論ロイドさんからは許可を得ていますよ？　ただ、本国で

も機密扱いの機体の為かアルビオンに触れる代わりにグランゾンについて何か一つだけでも教えて欲しいと言われた。

別に隠すつもりもないし、例の〝シラカワシステム〟に付いては知られる筈もないから構わない。故にグランゾンの動力炉とされる対消滅エンジンの事を話したら……何故かドン引きされた。

いや分かるけどね。自爆しようものなら地球が消滅しかねない破壊力を持つ対消滅エンジン。皆が警戒するのも無理はない。トレーズさんだけは笑っていたけどね。

そんなやりとりの後、ランスロット・アルビオンの最終調整に入る。ロイドさんの専門知識と自分の整備、ルルーシュ君の計算能力とスザク君の身体能力を打ち込まれて遂に完成したランスロット・アルビオン。予想していたよりも遙かに性能が高くなってしまった事に助手のセシルさんは苦笑い。

これなら例の紅蓮とも渡り合えるとロイドさんは喜んでいた。どうやらカレンちゃんの操る紅蓮も想定された性能はより大きく向上しているらしく、ロイドさんは結構悔しい思いをしていたようだ。

……カレンちゃんも紅蓮の性能の高さに驚いていたとか言っていたけれど、まさか自分の所為じゃないよね？　確かに彼女を総督府から脱出する際に紅蓮を弄った事はあったけど、それだってエナジーウィングや各部出力調整にチョッピリ手を加えただけ

だよ？

あの後だって紅蓮はＺＥＸＩＳの整備スタッフに何度も手を入れられた筈だし……うん、きっと気の所為だね。

ジト目で睨んでくるロイドさんから逃げ、その後はトレーズさんから頼まれた機体に手を加える準備に入った。

トレーズさんも戦うのですかと訊ねると、彼は念の為と誤魔化す様に笑うだけ、ＭＳを念の為に保有するトレーズさんの考えている事はイマイチよく分からないが、お世話になっている身としては断る訳にもいかない。

トールギスの発展型と思われるこの機体を万全以上に仕上げる事で、トレーズさんへの恩義に報いる事にしよう。既に各部システムの最終チェックは済んでいる。後はトレーズさんがこの機体に火を入れれば〝トールギスⅡ〟は完全なモノになるだろう。

今日は良く働いたと思う。体の疲労を明日に持ち込む訳にもいかないので、セシルさんの用意したおにぎりを食べて休もうと思う。

Ｗ月@日

トレーズさんの屋敷に厄介になって一週間。その間Ｃ．Ｃ．さんの機体を新たに組

み直した事やルルーシュ君の蜃気楼、セシルさんの料理の腕にトレーズさんもエレガントスマイルを崩した等の日々があったが、未だにＺＥＸＩＳ達の反応は確認できていない。世界各地で戦いの火が広がり始めているのに、正義感の強い彼等が何もしないというのは流石におかしい。これはもう故意に隠れているのではなく、ＺＥＸＩＳの人達は何らかの事情で地球圏に〝存在していない〟と考えた方がいいのかもしれない。

原因は恐らくブリタニア皇帝とルルーシュ君が舌戦を交わしたあの黄昏の間（名称はＣ．Ｃ．さんから聞いた）での出来事が原因だろう。光に包まれて姿を消した彼等は先に元の世界に戻ったと思い込んでいたが、どうやらその考えは間違っていたようだ。

あそこは時間がねじ曲がった異質な空間。彼等の後から外に出た自分達が元の世界にその時間通りに戻れたとしてもＺＥＸＩＳもそうだという保証はない。Ｃ．Ｃ．さんの話を加味して自分とロイドさん、ルルーシュ君はＺＥＸＩＳ達はまだ黄昏の間から出て来れていないものだと推測する。

だったら彼等が来るまで待っていればいい。最初はそう思っていたが、昨日アンチスパイラルのメッセンジャーとなってしまったニアちゃんが、人類に向けてトンでもない宣告を告げてきた事により、そんな呑気な事は言えなくなった。

〝陰月を地球に落とす〟ただ一言そう告げたニアちゃんは、冷酷な眼差しと死刑宣告だけを残して地球に突然現れ、そして消えていった。

同時に陰月が移動を始め、地球に向かって落ちてきている事実に世界中の人々がパニックを起こした。当然一部の富裕層の人々は宇宙に逃げようと画策していたが、地球連邦政府から告げられる話によりそれも叶わなくなった。

〝大規模インベーダー群の接近〟ネオ・プラネッツ付近に突然現れた今までとは次元が違う規模の侵略者達の襲来。地球にも、そして宇宙にも逃げ場の無い人々は混乱し、絶望し、そして抗う気力を失ってしまった。

達観した様子で落ちてくる月を見上げる人々、神に祈りを捧げる人々、人類の殆どが生きる事を諦めてしまっている中、リリーナさんだけは人々に諦めないでと呼び掛けている。現在地球連邦は総力を挙げて迎撃体勢を整えているらしいが、トレーズさんの話ではそれでも勝率は０．０００１％にも満たないらしい。

まさに万に一つも勝ち目の無い戦い。陰月にはアンチスパイラルの勢力も展開されるだろうから人類側の勝算は更に小さくなってしまう。

まさに絶望。一縷の望みもないこの状況に人類の殆どが諦めている中、それでもと足掻く人々の姿があった。それは気晴らしに外へ少し出かけていた時の話。

その人は絶望に沈んだ人達に暖かいスープを配ったり、困っている人を助けたり、自分に出来る精一杯の事をしていた。

その人の名はマリナ＝イスマイールさん。アザディスタン王国の第一皇女で国を焼

かれ、行方を眩ましていたお姫様、自分と同じ大事な居場所を焼かれた経緯のある彼女は額に大粒の汗を流して人々の為に尽くしていた。

何故そんな事をしているのかと訊ねると、これしかないからと彼女は応えた。自分の出来る事の少なさを痛感しながら、それでもと足掻く彼女の姿によって、徐々に人々は無表情だった顔に感情を取り戻していった。

インベーダーやアンチスパイラルに対して自分達は無力だ。けれど、マリナさんの様にそれでもと抗う人々の様子は言葉に出来ない尊さに溢れていた。

その後、マリナさんから渡された一杯のスープを飲み干した。初めて味わうスープだけれど懐かしく、暖かい気持ちになれるスープ。その味は破界事変の頃、子供達が作ってくれたあのスープにどこか似ていた。

あのスープによって後押しされた俺は、前々から考えていたある事を決めた。俺のグランゾンの奥底に眠る〝シラカワシステム〟あれから一切起動する様子のなかったあのプログラムを、今度は自分から呼び起こそうと思う。

アレの概要は何となく理解できる。シラカワシステムとは恐らくはグランゾンの〝真の姿〟であるアレに深く関わるものなのだろう。トレーズさんにお願いして、皆には少し遠出に出掛けているという事にしてもらっている。

今、俺は屋敷から離れた森の中でグランゾンと共にいる。

これからシステムを起動させて、もう一度あの不思議空間でシュウ博士と会って話をする。その先に何が待ち構えているのかは分からないが、今日の日記は一度ここらで中断し、システムを起動して何らかの成果があったらまた書こうと思う。

――――やべぇ。色々情報が多すぎてどうすればいいか分からないや。シラカワシステムの起動後、予想通りシュウ博士と出会えた俺は今地球圏に訪れる危機を救う為の方法を請い、その方法とそれらに関する話を幾つか聞く事ができた。

その最中に出て来たのが１２の鍵、太極、黒の叡智。これらのキーワードがこの世界の命運を握っていると博士は言うが、今の自分にはこれらを冷静に分析している暇はない。

兎に角、一番重要である〝アレ〟に至るまでのやり方は教わった。後は自分の運に文字通り全てを掛けるしかない。

陰月の落下の阻止とアンチスパイラルの掃討、インベーダー群の対処、俺達はこれら全てを明日こなさなくてはならない。
既に皆には準備してもらっている。ロイドさん達もブリタニア航空艦を改造し、宇宙での運行を可能にしてまで付いてくると言ってくれた。
トレーズさんには地球は任せておけと言われた。あの人の事を信じて、今は出来る限りの事を尽くそうと思う。
ルルーシュ君の蜃気楼、Ｃ．Ｃ．さんのランスロット・フロンティア、そしてスザク君のランスロット・アルビオンと自分のグランゾン。
明日、自分達は死地に赴く。嘗て無い規模の戦いに自分達も〝それでも〟と足掻こうと思う。

ＺＥＸＩＳが行方不明となってから二週間、地球は嘗て無い危機に陥っていた。インベーダーの軍勢、アンチスパイラルと陰月の落下、これら全てを相手に戦うには今のグランゾンと自分には荷が重い。
〝ネオ〟そこに至った時、自分達は絶望の中に光を見出せるかもしれない。

その４９　前編

広いリビング空間、大画面に映し出された映像を前に一人悠々とソファーに座る男がいた。男の名は〝リボンズ＝アルマーク〟地球連邦政府の直轄部隊であるアロウズを裏で操っていた張本人で、ソレスタルビーイングの計画中枢を担う〝ヴェーダ〟を掌握し、世界を思うがままに操り、イノベイター達のリーダー格でもある人物。

その人物が、映像に映し出されている人々の様子を眺め一人悦に入る。絶望に打ちひしがれる人類を目の当たりにしながらも彼の瞳は愉悦に満ちていた。

そんな彼に一人の青年が近づく。ソレスタルビーイングのガンダムマイスターのティエリア＝アーデに瓜二つの顔を持つ彼の名はリジェネ＝レジェッタ。

「随分楽しそうだね。リボンズ」

「人類が漸く自らの罪を理解する時が来たんだ。彼等には僕も随分手こずらされたからね、嬉しくもなるさ」

背後から近付いてくるリジェネ＝レジェッタをリボンズは振り返りもせずに応える。彼等の思考は脳量子波と呼ばれる特殊な仕組みで任意に繋がる事が可能である。故に隠し事など創造主たるリボンズに出来る筈もなく、リジェネはあるがままの質問を彼に

訊ねた。
「けれどいいのかい？　反螺旋族は地球を滅ぼすつもりだよ。コロニーにいる人類だってインベーダーの群に襲われれば一巻の終わりだ。守るべき人類がいなくなれば僕達の存在意義もなくなってしまうんじゃないかな？」
「インベーダーは兎も角、反螺旋族の目的は人類よりも地球の破壊を優先しているみたいだからね。彼等の目的が達成されれば後は僕が残された人類を統一すればいいだけだよ。……それに」
一部の人間、ＺＥＸＩＳを始めとした反政府組織によって手こずらされたイノベイター達は、自分達の有用性が理解される時が来るまで地球圏から離れ、その様子を伺ってきた。
そして訪れた人類存亡の危機、地球に住む全ての人間は助かる見込みのない捨て石の様なもの、残されたコロニー側を自分達の力で治めればそれはイオリア＝シュヘンベルグの計画達成にも繋がってくる。
自分の有用性とイオリア計画の代理、世界を担う役割が遂に自分の所に回ってきた。頭の中で世界統一による恒久的平和への実現をシミュレートするリボンズ、インベーダーに対する備えも着実に進んでいる。仮に現在の地球連邦の軍が敗れたとしても、地球圏には奴がいる。

「……グランゾン。例の魔神さんは今回の戦いに出て来てくれるかな？」
リジェネの口から告げられる魔神の名にリボンズの眉は寄せられ、口元が一瞬歪んで見えた。〝グランゾン〟そして〝蒼のカリスマ〟この二つの存在はリボンズにとってＺＥＸＩＳやワイズマンよりも厄介な存在となっていた。一向に行方の掴めない奔放さ、リモネシアで見せた圧倒的過ぎる戦闘能力、彼の存在はリボンズにとって最大の悩みの種でもあった。
けれど、もうそれに悩む必要はない。アンチスパイラルとインベーダー達が出張って来た以上、奴も必ず戦場に出てくるはず。グランゾンの力は未だに計り知れない部分があるが、それでも今回の戦いでは魔神も相応のダメージを受ける事だろう。
陰月の落下とインベーダー、そしてアンチスパイラルとの戦い。ＺＥＸＩＳが不在の今、戦いの軸となるグランゾンに掛かる負担は凄まじいものだ。
下手をすれば撃墜、もし上手く生き残れたとしても満身創痍なのは明白。けれどそれだけ暴れればインベーダー達の被害も相当なモノだろう。後は自分がコロニーの人類を管理し、アンチスパイラルに手出しさせないことを約束させれば、リボンズは自身の有用性を確固たるものにする事が出来る。
「さぁ、精々頑張って戦ってくれ、蒼き魔神よ。君の頑張り次第で今後の人類の立場が大きく変わるのだからね」

フフフと笑うリボンズ。邪悪な笑みを浮かべるリボンズに溜息を吐きながら、リジェネは部屋を後にした。

また、フロンティア船団の機関部。人目のないその場所で一人の女性が嬉しそうに笑みを浮かべていた。

「ウフフ、遂にバジュラの母星を見つけたわ。ありがとうリトルクィーン。そしてサヨウナラ、蒼のカリスマさん。アナタの道化ップリは見てて楽しかったわよ」

眼鏡をかけ直し、グレイス＝オコナーは不敵な笑みを残してその場から姿を消した。

◇

――――地球圏陰月周辺宙域にある最終防衛ライン。そこでは地球の命運を懸けた最終決戦の戦いが行われていた。

アンチスパイラルのメッセンジャー、ニアの宣告通り陰月と呼ばれる二つの月の片割れはゆっくりとした速度でありながら、着実に地球との距離を縮めている。
膨大な質量で落ちてくる月の落下、それを阻止しようと連邦政府の直属部隊、アロウズとミリアルド＝ピースクラフトを筆頭にホワイトファングが部隊を展開して迎撃行動に当たっているが、何分相手は規格外にも程があるデカブツであり、その周辺には無数のアンチスパイラルの軍勢が控えている。
更に次から次へとインベーダーも押し寄せて来るものだから、アロウズとホワイトファングの戦力は戦闘開始から一時間も経たずに二割近く削られてしまっていた。
「これ以上はやらせん！　ぬぉおぉっ!!」
ホワイトファングのリーダー、ミリアルド＝ピースクラフトの駆るガンダムエピオンが前線より更に前にでる。携えたビームサーベルをより巨大化させて放たれる必殺の斬撃はアンチスパイラルのムガンとインベーダーの群をまとめて両断する。
爆散するムガンとインベーダー、手応えは確かに感じるが、それよりも数が多すぎるとミリアルドは舌打ちを打ちながら再びエピオンを走らせる。
アロウズもホワイトファングも今だけは互いに協力して戦っているが、それでも戦力の差は歴然。倒しても倒しても沸いて出てくる敵の群に全部隊の士気は低下の傾向にあった。

このままでは拙い。後方の部隊にもっと援護射撃を行うよう通信で指示を飛ばすが、次の瞬間一部の隊の陣形が崩れ、そこにインベーダーが雪崩れ込んでしまった。
エピオンを加速させ、地球はやらせまいとするミリアルドだが、彼の行く手をムガンの群が阻む。このままでは地球が危ない。彼の脳裏に最愛の妹の姿が過ぎったとき……。
『ワームスマッシャー!』
無数の光の槍がインベーダー達に向けて降り注がれた。爆散し、宇宙の暗闇に消えていくインベーダー、突然の出来事に全部隊が唖然とした時……奴が現れた。
『遅れてしまい申し訳ありません。加勢しますよ。ミリアルド=ピースクラフトさん』
『蒼のカリスマ、何故貴様がここにいる』
誰もが思う疑問をミリアルドは呟く。そんな彼の問いに通信画面に映る仮面の男は愚問とばかりに鼻で笑い。
『なに、大した話ではありません。帰る所を失ったら皆困るでしょう? 私もその一人に過ぎないだけですよ』
そう答える蒼のカリスマ、未だに混乱する者がいる中、魔神グランゾンは迫り来るインベーダーとムガンの群に向き直り……。
『ディストリオン……ブレイク!』

極大の閃光を撃ち放った。光に巻き込まれ、消滅していくインベーダー達。無数の敵の陣形に穴を開けた。それを契機にその場にいる全員が我を取り戻し、侵略者達に対する攻撃を再開した。

『さて、いよいよ決戦です。皆さん、覚悟はいいですか？』

蒼のカリスマからそんな言葉が出たとき、魔神の背後の空間が歪曲し、異空間らしき所から複数の機影と航空艦が姿を現した。

『当然だ。この戦いで奇跡を起こし勝利をもぎ取ってみせよう』

『俺は生きる。生きて皆の未来を守ってみせる！』

『やれやれ、まさか私がこんな戦場に駆り出されるとは、長生きはするものだな』

蒼の魔神に並び立つ様に佇む黒と白、そして桜色のＫＭＦの出現に近くの部隊は戸惑いを見せる。特に黒の騎士団の総帥であるゼロとナイトオブラウンズの枢木スザクが一緒に出てくる事で更に驚きは大きなものになるが、今はそれどころではない為に皆インベーダー達に対する攻撃を再開する。

突然現れる魔神とゼロとナイトオブラウンズ、疑問が多く残る話だが、今は心強い味方としてミリアルドを始めとした人類側は彼等を受け入れる事にした。

魔神の増援。グランゾンの参戦により絶望的だった戦線に光が灯る。世界の脅威が一転して希望となるが、同時にミリアルドはそれが皮肉に思えた。

◇

自分達が戦線に参加して早三十分、未だ前線は崩されておらず、ホワイトファングやアロウズの部隊も今の所戦線を維持して戦えている。

自分とスザク君が敵の前線を叩く事によって向こうの陣形に穴を開け、崩れた所を目掛けて他の部隊が切り込むというやり方は思いの外効果的だった。

ルルーシュ君……いや、ゼロはそんな崩れた箇所に相転移砲をぶち込んだり、時には他の部隊に攻め込むよう指示を飛ばしていた。黒の騎士団の総帥に命令権はないと反感に思う者が当然いたが、そこはミリアルドさんの判断で任せて貰う事になった。

的確なゼロの指示と彼を守るC．C．さん。スザク君のランスロットも絶好調であ

ることからこのまま行けば何とかなるかもと思われたとき、遂にインベーダーが本腰を入れ始めてきた。

巨大なワーム型のインベーダー。戦艦すら丸呑みしてしまう程に巨大な奴等の登場に前線は混乱しかけた。その時は自分のグランゾンの〝ディストリオンブレイク〟で周囲のインベーダー諸共消滅させたが、それでも奴等の数は尋常では無かった。

陰月も徐々に近付き始めているし、ここで自分はロイドさんに頼み〝アヴァロン〟からこちら側の切り札を発射するよう要請した。

〝フレイヤ弾頭〟トウキョウ租界を壊滅に追い込んだ戦略兵器でその威力は折り紙付き、しかも今回はリミッターを外しての使用だったのでインベーダーは次々と桜色の光に呑み込まれていった。

フレイヤ弾頭は元々開発者の意向の下で使用制限を懸けており、リミッターを外すことはないと思われていた。けれど今は地球存亡の危機、しかもそれが絶対的な敵意を持った侵略者であるならば容赦をする必要はない。

このフレイヤ弾頭の製造で戦線に参加する事が遅れてしまったが、これでその遅れを取り戻したと思いたい。

リミッターを外されたフレイヤ弾頭の効果範囲は凡そ１００km、知性の無いインベーダーではフレイヤ弾頭から逃れる術はない。

けれど友軍を巻き込む訳にもいかない為、使用する際はルルーシュ君の状況把握能力が鍵となっている。友軍を巻き込まず、且つ有効的にフレイヤ弾頭を使える場所を見極める仕事は、彼にとっては精神が削られる作業だろう。

けれど、お陰で戦況は再び五分に持って来れた。後はフレイヤ弾頭が弾切れになる前にインベーダーだけでも全滅させたい所。

『ブラックホールクラスター、発射!』

自分も出し惜しみはせず、最初から全力で攻撃を加える。スザク君も取りこぼしの敵をすかさず撃破していくし、この組み合わせは案外嵌まっているのかもしれない。

スザク君のランスロットによる圧倒的機動力による攪乱と攻撃、自分とグランゾンの制圧力とゼロの蜃気楼による状況の把握と分析、それによる計算能力。C.C.さんはそんなゼロを守り、蜃気楼から送られた発射座標を下にロイドさん達はアヴァロンからフレイヤ弾頭を発射させて、インベーダーやムガン達を駆逐していく。

これによって徐々にだが戦況は人類側が押し始めてきた。自分もこのまま押し切ろうとグランゾンを走らせようとした時、ミリアルドさんから通信が入ってきた。

『どうしましたミリアルドさん。何かありましたか?』

『あぁ、拙い事になった。アンチスパイラルとかいう連中、私達が押し始めたのを見計らって陰月の落下速度を速めてきた!』

『っ！』

ミリアルドさんからの報告に息を呑んだ。見てみれば確かに陰月の落下速度は速くなっており、みるみるうちに地球との距離を詰めていっている。

このままでは拙い。あれでは二時間も足らずに陰月は地球と衝突してしまう。そんな事はさせないと俺はミリアルドさんに通信を返した。

『ミリアルドさん。直ちに陰月周辺の部隊を撤退させ周辺のインベーダーの対応に当たらせて下さい』

『まさか、陰月を破壊するつもりか!?　確かにお前の機体とあの戦略兵器なら可能かもしれんが……』

『いえ、破壊はしません。仮に破壊したとしても、落ちてくる月の破片によって地球は壊滅的な打撃を受けてしまいます。インベーダーやアンチスパイラルを相手にしながらそこまでの対応は現戦力では不可能でしょう』

『では、どうするつもりだ?』

『……陰月を、押し返します。ミリアルドさんは至急陰月周辺の部隊に撤退の指示を！』

『ま、待て！』

陰月を押し返す。ただそれだけを告げて俺はミリアルドさんの制止の呼び掛けにも答えず、落下していく陰月に向かってグランゾンを走らせる。

その最中にルルーシュ君達にも連絡を入れ、巻き込まれないよう気を付ける事を伝え終えると、俺達は陰月の正面へと辿り着いた。

既に周辺には機影はない。どうやらミリアルドさんが自分の要求を聞き入れてくれたようだ。これならグランゾンの力をフルに使っても巻き込まれる心配はない。

改めて目の前のデカブツを見据える。〝月〟自分がいた世界でもお馴染みとなっている地球の衛星、それが落ちてくると改めて実感すると、操縦桿の握る手が僅かに震えてきた。

深呼吸をして呼吸を整える。何度か呼吸を整える内に陰月と呼ばれるソレは部分的に削られる様に表面が削ぎ落とされ、それはまるでカボチャのオバケの顔のようだった。ギザギザに裂けた口からは機械の様なモノが見える。どうやらこの陰月と呼ばれる衛星だったモノは人工物だったようだ。

この世界の新たな発見に笑みが零れる。緊張により高鳴った心臓が落ち着いた所で俺は改めてグランゾンの出力を上げ、重力制御にパワーを回す。

そして……。

『月の一つや二つ、グランゾンで押し返してやる!』

グランゾンの掲げた両腕から発せられる重力力場の波に陰月の落下速度が軽減する。グランゾンは重力の魔神と呼ばれるマシンだ。この程度の事なら造作もない筈。

　このまま一気に押し返してやろうかと思ったが、流石に衛星規模の質量は堪えるのか、グランゾンの出力が思ったより上がらない。
　このままではじり貧になる。どうする？　ミリアルドさんの言うように月を破壊するか？　月を押し返すのが難しいと分かった今、決断は早い内に済ませた方がいい。
　と、そんな時だ。横から襲い来る衝撃にグランゾンの体勢が崩れる。慌てて立て直した自分達の前にはいつぞやの時と同様、鴉の様な黒い機体が剣を片手に佇んでいた。
『久し振りだね蒼き魔神グランゾン。そして蒼のカリスマ……いや、シュウジ＝シラカワと呼んだ方がいいかな？』
『アサキム＝ドーウィン！　またお前か！』
『悪いけど邪魔をさせてもらうよ。君とその機体は僕の目的の最大の障害になりつつあるからね。――刈り取らせてもらう』
『いきなり出てきて何を訳の分からない事を……！』
　前振りもなく、いきなり現れたアサキム。こんな事をしている場合ではないが、此方の事情を考えている様な奴ではないので自分も応戦する事になった。
　相変わらず素早い動き。シュロウガと呼ばれる奴の機体は以前戦ったあの時よりも更に速くなっていた。
　けれど、此方も以前とは違う筈。捉える事は出来なくても向こうが自分という標的を

狙っているのなら此方にも分があるというモノ。
『戴くよ！』
『こっちがな！』
　背後から切りかかるシュロウガにグランゾンは１８０。体勢を回転させ、手にした剣で振り払う。パワーでは此方が上なのか、アサキムとシュロウガは咄嗟に剣で防御するも衝撃までは緩和出来ず、ゴム鞠の様に後ろに吹き飛ばされる。
『……成る程、どうやら以前よりもずっとその機体を使いこなしているようだね。これでは並のスフィアリアクターでも太刀打ち出来そうにないな』
『だったら引っ込んでてくれないか？　こっちはお前の相手をしている暇はないんだ』
『……そうだね。ならばそうさせて貰うよ。今回は君がどれだけ力を上げたか見たかっただけだし……それに、どう足掻いても君に次は無さそうだ。何せ、もうすぐ〝彼〟が来る頃だからね』
『……何だと？』
　意味深な言葉を口にするアサキム。相変わらず何考えているか分からない奴だが、一つだけ確かな事実が存在する。
　コイツは俺の敵だ。口振りが癪に障るのもそうだが何故だかコイツとは相容れない気がする。色々気になる所はあるが今はコイツを相手にしている場合じゃない。早く

月の破壊行動に移らなければ……。

グランゾンのワームホールで一気に元の場所へ戻ろうと空間に穴を開ける。そして、いざ飛び込もうとした時――――そこで俺の意識は途切れた。

『魔神よ。お前の健闘もこれまでだ』

圧倒的存在感を感じさせる声、その声を耳にした時、グランゾンとシュウジ＝シラカワの姿は周辺宙域から姿を消した。

◇

『……う、うん？』

意識が覚醒する。閉じられた視界が開かれ、そこがグランゾンのコックピットだと認識した自分は瞬間的にモニターを弄り、グランゾンに状況の確認を急がせる。

一体自分に何が起きた？　あれから地球はどうなったのか、陰月やインベーダーは撃退出来たのか、ルルーシュ君達は無事なのか。思いつく限りのやり方で外部に連絡を取ろうとするが、モニターに映し出されるＮＯＳＩＧＮＡＬの文字に俺は言葉を失った。

『何だよこれ、どういう事なんだよ』

混乱する自分を深呼吸で落ち着かせながら、もう一度グランゾンで周囲の状況を調べる。すると、信じられない事実がグランゾンを通して自分に突きつけられてきた。

まず、ここは地球周辺の宙域ではない。……いや、周囲の天体を調べた限り、どうやらここは太陽系ですらない未知の空間のようだ。どうして自分はこんな所にいるのか、自分の身に何が起こったのかもう一度思い返してみると、眠っていた意識の奥底に桁違いの存在感を醸し出す声を聞いたのを思い出す。

ワームホールを開き、陰月に接近しようとした瞬間に聞こえた声、あの声の主が自分に何かしたのだと確信すると、そんな自分の答えを待ちわびた様に俺とグランゾンの前に黒いヒトの様なモノが現れた。

『まずは歓迎の挨拶をしておくとしよう。ようこそ、蒼き魔神よ。私はアンチスパイラ

ル。お前達人類を殲滅する存在だ』
〝アンチスパイラル〟地球人類を殲滅させると言い放つソイツは確かにそれだけの力が備わっていると、自分はこの瞬間感じ取った。
何せ奴はあの一瞬でグランゾンとワームホールの間に割り込み、ここへ連れてくるデタラメな存在だ。……しかも、コイツの存在感はまさしく規格外、恐らくはこの空間を作りだしたのも奴の力の一端に過ぎないのだろう。
〝宇宙を作り出す〟そんな神同然の力を有する奴と正面から向き合う自分は頬に嫌な汗が流れる。拭うことも出来ず相手の一挙一動を注意深く観察していると、アンチスパイラルは感心したように言葉を紡いだ。
『ほう、我々の力を正しく理解しただけでなくこの隔絶宇宙の事も悟るとは……流石は魔神と言った所か、餌を撒いただけの事はある』
『餌、だと？』
『そうだ。お前達の言う陰月も破壊魔達を差し向けたのも全てはお前という存在を釣り上げるための餌でしかない』
『衛星や馬鹿でかい化け物達を差し向けておいて餌扱いとか、これは光栄に思うべきなのか？』
『お前とそのマシンの存在は剰りにも危険だ。下手に〝奴ら〟の目に止まって手を組ま

れたりすれば面倒な事になるのでな、貴様はここで確実に消滅してもらう』

反螺旋族がそう言うと、周囲から唐突にインベーダー達が出現する。またデカい蟲達が相手。しかも一人でしなくてはならないと思うと気が滅入ってくる。

だが、奴の手札はそれだけではなかった。無数に現れる手や足の様なもの、それぞれに顔の付いた不気味なソイツ等はワーム型のインベーダーと同等以上に巨大だった。

しかもソイツ等の後ろには星よりもデカい顔の船みたいなモノまで控えている。見た目のデザイン的に手足達と同じモノだと思われるが……もしかしてアレもアンチスパイラルの尖兵なのだろうか？

冗談じゃない。あんなモノが地球に攻めてきたら今度こそ人類はお終いだ。逃げられる様なモノでもないし、連中が動き出す前に俺は〝シラカワシステム〟の起動準備に入る。

『さて、これだけでもお前達を消すことは可能だが、念には念をいれようか』

アンチスパイラルが指をパチンと鳴らすと、今度は見た事もない化け物達が姿を現した。インベーダー達と似たような性質の様だが、連中が何者かは最早問題ではない。

宇宙空間を埋め尽くすほどの軍勢。地球付近で戦った規模とは次元が違いすぎる光景に俺は瞬時に決意した。

この状況を打破するにはやはり〝アレ〟の力が必要だ。既にシラカワシステムは起

動開始の準備を整えており、後は自分が起動する為のスイッチを押すだけ。
『さらばだ。魔神よ、消えるがいい！』
アンチスパイラルのその言葉を契機に、無量大数にも等しい軍勢が押し寄せてくる。死の津波を前に俺はシラカワシステムを起動させ、瞬間。意識を手放した。

◇

――――――意識が遠くなる。足下から自分という存在が無くなっていく様な感覚、自分の中にあるシュウ＝シラカワという因子を意図的に目覚めさせるというのはこういう事なのか。
自分が無くなる。その感覚に最初は恐怖を感じたりしたが、今はもうそんな感情すら無くなっていくのが分かる。シュウジ＝シラカワという人格が消滅するというのに、そ

んな事も他人事の様に思える。

　どんどんシュウジとしての記憶が消えゆく中、ふと先日博士と交わした会話が思い浮かぶ。

『いいですか。グランゾンの真の姿を解放するという事は貴方の中に眠る私の因子を意図的に高めるという事です。私の因子を高めるという事は貴方の存在を消すという事に他なりません。私はこれまで貴方がそうならない為に少しずつ因子を高めてきました。今の貴方なら四割の確率で成功する事でしょう』

『……四割。自分という存在を賭けるには分が悪いッスね』

『……止めますか？　今なら貴方だけでも地球圏から逃げ出す事が可能ですよ？　何なら元の世界に帰る方法もお教えしますが？』

『いや、それはまだ後にするよ。あの世界にきて散々な目にあったけど、やっぱそれなりに思い入れがあるし……それに』

『それに？』

『俺、まだこの世界に何も返せていないんスよ。焼かれたリモネシアをまた建て直さないといけないし、ゴウトさんにも礼を言えていない。キタンさん達やヨーコちゃんにもはっきり謝ってもいないし、クロウさんからはお前の所為で借金が倍になったって難癖付けられてるし、ランドさんとまた飲みに行く約束をしちゃったし、グレイス＝オコ

ナーや裏で小細工してきたイノベイターともＯＨＡＮＡＳＨＩしてない訳だし、アイムの奴とも決着を付けなくちゃならない。と、結構やる事多いんスよ』

何だかしょーもない話ばかりだった気がする。けれど、そんな下らないと思われる話が俺にとっては代え難い大事なものだ。後半三つはモロ私怨だが、やられたらやり返すのがシラカワ流だ。十倍返しか百倍返しになるのかはその時のテンションによるが……。

『……ククク、成る程確かにそれは下らない話ですね。先の女装といい、貴方は本当に面白い人だ。――ならば歯を食いしばって耐えて見せなさい。私の因子を制し、見事〝ネオ〟に至りなさい。貴方にとって掛け替えのない下らない日常の為に』

下らない。博士は口ではそう言うがその表情はどこか嬉しそうに見えた。何度も頼ってすみません。この時の俺は内心で感謝と謝罪をして、お返しとばかりにトンでもない事を口走った。

『そういう訳なんで、〝アレ〟もらいます。図々しいとは思いますけど、何分こっちも大変なので……』

『構いませんよ。私の因子を跳ね返したのならばあの機体を操るのに最低限の資格はあるという事、精々振り回されないよう頑張りなさい。――貴方の〝ネオ〟との共演、楽しみにしていますよ』

そういって博士は微笑みながら自分の前から姿を消した。

――――そうだ。自分にはまだやらなくてはならない事があった。こんな所で寝ている場合じゃない。

博士は、シュウ＝シラカワはシュウジとして戦う事を許してくれた。任せてくれた以上、歯を食いしばって耐えてみせなきゃ、あの人に顔向け出来なくなる。

――――――だから！

「グランゾン、俺に力を貸せ!!」

朧気な意識から目を覚ました瞬間、俺が目にしたのは……。

『全システム、オールグリーン。〝ネオ〟起動します』

まるで自分が起きるのを分かっていたかの様な対応に、俺は仮面の奥で吹き出してしまった。

◇

衝撃が疾る。魔神に群がる侵略者達は悉く弾け飛び、インベーダー達は肉片となって消滅する。

『――何だと?』

自称宇宙の守護者は仰ぎ見る。この宇宙の中で抵抗など意味はなさないというのに、弾け飛ぶ破壊魔達の前にアンチスパイラルは空虚な瞳を見開かせて驚愕していた。

先程の姿よりも禍々しくなった姿。形も大きくなり、背中に取り付けられた日輪によって、魔神の姿は神々しくすら思える。

アンチスパイラルは理解する。これこそが奴の本当の姿なのだと、目覚めさせてはならない魔神の誕生にアンチスパイラルの表情が歪む。

『――さて、時間も限られている事だし早々に片を付けるとしよう』

『貴様ぁ……』

孤立無援。誰の助けも期待出来ない中でシュウジは仮面を脱ぎ捨て、完全な紫色となった髪をかきあげる。

状況は未だ絶対的不利。それでもシュウジは操縦桿を握り締めて頬を僅かに吊り上げる。

『ここなら誰かを巻き込む心配はない。さぁ、暴れるとしようか。〝ネオ・グランゾン〟！』

魔神の瞳が紫炎の光を放つ。異空間から出てくる大剣を手に、迫り来る大型インベーダーを前に――――一閃。

薙払いの一撃が周囲のインベーダー諸共両断した。

爆散するインベーダー群。その中でアンチスパイラルは、怒りに歪んだその表情を更なる憤怒によって歪ませる。

さぁ、見せつけろ。刻み込め、これが世界が目覚めさせた。

――――魔神（ネオ・グランゾン）の真の姿だ。

その４９　後編

地球圏周辺宙域。落ちてくる陰月の落下と迫り来るアンチスパイラルとインベーダー達の軍勢に、逃げる事も出来ないと悟った連邦政府はこれらを退ける為、全ての戦力を用いての徹底抗戦に乗り出した。

コロニー側の主戦力であるホワイトファングも地球の次は自分達の番だと思い全部隊を投入。事実上人類側の総戦力が地球の宙域に集まる事になった。

憎み、戦い合う地球とコロニーが皮肉にもこの時だけは手を組んだ。これなら人類も負けることはない、誰もがそう楽観視する中……地獄が彼等に襲い掛かってきた。

『フレイヤ弾頭の数、残り僅かです!』

『こっちももうすぐ弾切れだ。どうするルルーシュ。今の内に逃げる算段を立てておくか?』

『バカを言え。仮に逃げるとしても何処へ逃げるつもりだ?　奴らの目的は人類の殲滅、ならば地の果てまで逃げようと同じ事だ』

加勢に現れたルルーシュ達もその表情を徐々に曇らせる。圧倒的すぎる物量、巨大インベーダーはフレイヤ弾頭を乱発した為にあらかた片付いたが、それでも戦力の差は未

だ大きい。ムガン勢力も減るどころか寧ろドンドン増えていき、数にモノを言わせた侵略者達の戦法に、蜃気楼内部でコンソールを叩くルルーシュの額に大粒の汗が流れ落ちている。

（既に此方の戦力の半数近くが奴らに喰われている。フレイヤ弾頭も残り僅かとなっている以上、無闇に乱発する訳にもいかん。だが、このままでは最終防衛線が突破される！）

どうすればいい。追い詰められた思考の中で必死に逆転の手を考えるルルーシュ。ホワイトファング側も消耗率が高くなり、ＭＳは次々と撃墜され、複数の戦艦もインベーダーに喰われながら爆発し、宇宙の塵へと消えていく。

倒しても倒しても減らない敵の数にルルーシュも焦りが募る。スザクの駆るランスロットもそろそろエナジーが切れそうだと通信が入ってきて、いよいよ窮地に立たされようとしていた彼等に――――更なる絶望の報せが舞い込んできた。

『っ！　ウソ、そんな……冗談でしょう？』

『アヴァロン、どうした!?』

突然通信回線に入ってくるアヴァロンのオペレーターであるセシルの悲痛に満ちた声にルルーシュは訊ねる。その様子から尋常でない事態である事を察したルルーシュはセシルに落ち着くよう呼び掛け、話を聞くことにした。

そして――――。

『……あ、蒼のカリスマと、並びにグランゾンの反応が――――消失しました』

『何だと!?』

告げられる事実にルルーシュ達は凍り付く、スザクも驚愕し、Ｃ．Ｃ．さえも驚きで表情を固めた。奴が、あの魔神が負けたというのか。信じられないと呟くルルーシュだが、どんなに通信回線を繋ごうとしてもグランゾンと繋がる事はなかった。

あの魔神はこの戦いでは必要不可欠な存在、フレイヤ弾頭以上の切り札を失った事実に誰もが打ちひしがれていたが……。

『ざぁ～んねんでした。彼はまだ生きているよ』

蜃気楼の通信にロイド＝アスプルンドの声が割って入ってくる。

『ど、どういう事ですかロイドさん。だって、今セシルさんは彼の……グランゾンの反応が消失したって』

『あぁそれね、こっちの勘違い。何だか彼は行方を眩ましていてね。彼の機体からワームホールを展開する際に発する重力場の異常数値を検出したから、恐らくはどこかに転移したんだろうね』

『転移って、こんな時に一体どこへ!?』

『奴が今いなくなった事は大きな痛手だが、放棄して逃げるような奴ではない。今は

我々の出来る事をやるしかない！』

『わ、分かった！』

色々言いたい事はあるようだが、ルルーシュの必死の説得にスザクは戸惑いながらも了承。グランゾンの不在という大きな穴を埋めるのは大変な事だが、今はそんな泣き言を言っていられる状況ではない。

そうしている内に戦闘時間は一時間経過し、そろそろフレイヤ弾頭も残り僅かとなった。残された選択肢は限られている中、ルルーシュはここで全てを出し切るか迷う。これだけの数の敵を相手にして、その上陰月の落下も阻止しなければならない。

（果たして出来るのか？　この少なくなった戦力で、全ての対応が可能なのか!?）

限られた時間の中でルルーシュは迷う。だが、最早そんな猶予も許されなくなり、いよいよ勝負に出ようかと各部隊に連絡を入れようとした――　その時。

『ルルーシュ、左後方より新たな機影を確認。これは……ＺＥＸＩＳだ！』

『どうやら連中、今更こちら側に戻って来れたようだな』

『なにっ!?　そうか、ならばスザクよ。お前は先にアヴァロンへ戻り、今の内にエナジーフィラーを交換しておけ。Ｃ．Ｃ．はそのまま私を守り、スザクが戻って来次第一緒にアヴァロンへ戻るぞ！』

『了解した！』

『やれやれ、援軍が来たと分かればすぐ強気になる。分かり易いな、お前は』

Ｃ．Ｃ．の皮肉にも今は動じず、ルルーシュはスザクに一時交代を命ずる。後ろに下がっていくランスロットの代わりに、今度は荷電粒子砲の束がインベーダー達に向けて放たれる。

遠く離れた位置だというのにその派手な花火のお陰で彼等が来てくれたのが分かる。崩され掛けた陣営がＺＥＸＩＳの出現に伴って修復されていく。

グランゾンの穴が思わぬ形で埋まった事にルルーシュは仮面の奥で静かに笑う。

（早く戻ってこいシュウジ＝シラカワ！　でないとお前の見せ場が丸ごと無くなってしまうぞ！）

◇

――――外から閉ざされた隔絶宇宙。何人も干渉する事も触れることも許されない、人工的に生み出された別の外宇宙。そんな桁外れの力を有するアンチスパイラルと呼ばれるこの宇宙の創造主は、目の前の光景から目を逸らす事が出来なかった。

今、この宇宙には様々な怪物達で溢れている。餓える破壊魔や火の時代に現れた宇宙怪獣なるもの、更にはアンチスパイラルの主戦力である〝ハスタグライ〟〝パダ〟〝アシュタンガ〟等を無数に向かわせているのだ。

たった一つの存在相手に余りに過剰な戦力。無量大数に等しい軍勢が一つの存在をかき消す為に動いている。その事実だけでも信じられないというのに、目の前の魔神はそんな数をまるでモノともせずに蹴散らしていく。

『ネオグラン……ビーィィィムッ!』

魔神の額から一筋の閃光が放たれる。それに触れ、或いは巻き込まれた破壊魔達は蒸発するように消滅し、群の中に巨大な空洞を作り上げる。

すぐにその穴を埋めようと破壊魔達は次から次へと魔神に襲い掛かるが、手にした剣を横に薙いだ瞬間、破壊魔達は横に両断され、爆発と共に消滅する。

舞い上がる爆炎の中から姿を現す魔神。禍々しさと神々しさを併せ持ち、新たな姿と

なった魔神はこれまでとは次元が違うほどに変わっていた。
『グラビトロンカノン、発射！』
奴が武器を放つ度に破壊魔達が空間ごと破壊される。圧壊し、粉砕され、消滅していく破壊魔達を前に黒いヒト……アンチスパイラルは忌々しそうに空虚な目を鋭くさせる。
そんな魔神の所に巨大な手足が雪崩れ込む。パダ級とハスタグライ級の群がそのサイズと質量を活かし、物量で魔神を押し潰そうと一気に襲いかかる。
『――っ！』
違いすぎるサイズの差とそれによる物量での強襲。これには流石の魔神も手が出せないのか、抵抗することなく空間の下へと押し込まれる。
このままどこかの惑星にぶつけて終わらせるのか、巨大な手足達が魔神を彼方へと運ぼうとする……が。
『……ククク、ワームスマッシャー！』
パダ級とハスタグライ級達が揃って内側から光の槍によって貫かれ、爆散して消滅する。これまで多くの螺旋族を絶望に叩き込んだ軍勢が瞬く間に消されていく。未だ破壊魔達は減る様子はないが、向こうも特に目立った疲れは見せていない。
だったらこれならどうだと、アンチスパイラルは二体のアシュタンガ級に魔神撃破の

命令を下す。それを了承したアシュタンガは近くにあった惑星を鷲掴みにすると、魔神に向けて投げ放ってきた。

最早何でもありすぎる光景。星をまるで野球ボールの様に投げ付けてくる規格外の化け物に魔神を操る魔人は、晒した素顔でアングリと口を開かせる。

だが、次の瞬間彼の口元が不敵に歪む。絶望の欠片も感じられない不貞不貞しい態度の笑み。けれど当然アンチスパイラルからはそんな彼の様子など分かる筈もない。

迫り来る星々の数。ここまでの規模の戦いになるともう機体の速さなんて関係無くなってくる。避けられる所なんて見当たらないと分かると、魔神はその背中に背負った日輪を輝かせ、星々達に向けて剣を突き立てた。

『……なんだと?』

その光景にアンチスパイラルは目を丸くする。魔神にもうすぐぶつかりそうだった星々が、奴に剣を向けられた瞬間動かなくなったのだ。

『そら、返すぞ!』

魔神が剣を横に薙ぐのと同時に星々はアシュタンガに向かって跳ね返るように突き進んでいく。投げ込まれた天体全てが返された事によりアシュタンガは避ける暇もなく星々の海に呑み込まれ爆発。人知を超えた戦いが繰り広げられ、遂にアレだけの数のいた破壊魔や宇宙の怪獣、そして自分の手足達が全滅させられた。

　その事実にアンチスパイラルは更に表情を憤怒に染め上げる。これまでの戦いとは違いたった一つの存在にこうも手こずらされた事に、アンチスパイラルは己の不手際に憤りを感じていた。
　そんな彼の前に魔神が降り立つ。ワームホールを開いて造作もなく距離の概念を消し飛ばす目の前の魔神をアンチスパイラルは彼を自らの障害と認めた。
　たが、魔神を駆る魔人、蒼のカリスマことシュウジ＝シラカワはめんどくさそうな声を上げてこう言った。
『……なぁ、もうこれで止めにしない？』
『なんだと？』
『イヤだってアンタさっきから俺の方を見てるだけでちっとも自分から動こうとしないんだもの。俺を潰す気ないんだったらいい加減返してくれないかな？　早く戻って皆と合流したいんだよ』
　まるで今までの戦いで飽きたと言うような魔人の物言いにアンチスパイラルが面食らう。溜息と共に吐き出されるシュウジの不満は、やがてアンチスパイラルの琴線に触れ……。
『……どうやら、今のを片付けただけで随分調子に乗っているようだから言っておく。この隔絶宇宙の中において我々の力は絶対だ。故に！』

瞬間、先程以上の数のインベーダー達が過程を省いて、いきなりネオ・グランゾンを囲むように出現する。〝光あれ〟嘗てそう言って世界に光を灯した神のように力を際限なく揮うアンチスパイラルに、シュウジは何も反応を示さずに周囲を見渡す。

『この程度の事など我々にとっては造作もないこと。理解したか？　これが貴様と私達の力の差だ！』

そう言ってアンチスパイラルは全ての者達に魔神破壊の命令を下す。餓える破壊魔と宇宙怪獣、そして更なる力を得たアシュタンガ達は今度こそグランゾンを潰そうと一斉に襲いかかる。

――――と、そんな時だ。

『……分かった、ならば自力で出ることにしよう』

グランゾンの各部位が光を放ち始めると、魔神はゆっくりとその場から上昇する。魔神を破壊しようとインベーダー達は構わず追いかけるが……。

『さぁ、これで終幕だ』

魔神から放たれる衝撃波にインベーダー達は吹き飛ばされる。突然の魔神の力の急な上昇にアンチスパイラルが目を見開いた瞬間、グランゾンの背中にある後光〝バリオン創出ヘイロウ〟が輝きを放った。

『相転移出力、最大限。縮退圧、増大……』

まるで呪文を唱えるように言葉を紡ぐ魔人。奴から異常な重力の変動を感じたアンチスパイラルはまさかと更に目を剥いた。

『重力崩壊臨界点、突破……』

魔神の胸部が開き、そこから覗かせる三つの球体が輝きを放つと、今度は三つの黒球が出現し、それらを一つにしようと周囲の空間ごと重力の圧縮を開始した。

星が、大気が、重力が、時間すらもその一点に凝縮し、圧縮されていく。あり得ない。あんなモノを創り出すには最低でも恒星の８倍のエネルギーを必要とする桁違いの代物だ。

そんなバカなと否定するアンチスパイラルだが、魔人ことシュウジはそんな彼を見透かした様に言葉を紡ぎ出す。

『確かに、この状態の縮退星を創り出すには太陽の八倍のエネルギーを必要とする事だろう。アンタの気持ちは理解できる。しかし――』

〝このネオ・グランゾンの力をもってすれば、造作もない事なのだよ〟

瞬間、空虚なアンチスパイラルの瞳に映ったのは神々しい光の中に浮かぶ魔神の姿。一瞬その姿に見惚れてしまったアンチスパイラルは、次の瞬間その表情を驚愕の色に染め上げ――そして。

『縮退砲、発射！』

落ちてくる超重力の塊がインベーダー達の中心に落とされる。その球体を目にしたアンチスパイラルはすぐさま転移、効果範囲から逃れる為にその場から逃げ出した。

重力力場の嵐がインベーダー達を巻き込む様に広がり、次の瞬間――。

天地開闢の一撃が数光年に渡って広がり、インベーダー達は星々の海ごと……塵すら残さず溶けていった。

〝近い内、こちらから出向いてやるさ。その時こそケリを付けよう〟

魔神の放った一撃により隔絶宇宙の一部が崩壊する。その最中アンチスパイラルは確かに魔人からの挑戦状を受け取った。

『良いだろう。ならばその時こそお前を完全に抹消してやろう。待っているぞ、シュウジ＝シラカワ！』

◇

ふぃー、一時はどうなるかと思ったけど、何とかなって良かったぁ。俺のグランゾンも遂にネオへと至れた事だし、これで博士も一応俺の事認めてくれるようになるかなぁ。

なんだかあの人にはお世話になってばかりだし、今度会う時は何かお礼を用意した方

がいいのかもしれないなぁ。

けど、あんな不思議空間でお礼とか渡せるのか？　やってみない事は分からないし、今度お中元の品を持ってコックピットに乗り込んでみようかな。

……え？　今お前は何処にいるんだって？　はい。どうやらあの一撃で隔絶宇宙とかいう空間の一部が崩壊したお陰か、どうにか元の世界に戻る事が出来ました。あの時自分が消えたと思われる座標にそのまま戻ってこれたから間違いないと思う。

どうやらここのインベーダー達も引き上げた様だし、地球も無事みたいだし、陰月の姿も無いことからどうやらルルーシュ君達が上手くやってくれ――――

『シュウジ！　シュウジ!!　こんの、返事くらいしなさいよ！　どうしてアンタがそこにいるの？　なんでルルーシュ達がアンタと一緒に行動してるのよ！　答えなさい！　聞こえているんでしょ!?』

――――どうやら、自分が現実逃避出来るのはここまでのようだ。先程から通信の向こうで騒いでいるカレンちゃんを始め、ヨーコちゃんやキタンさん達ＺＥＸＩＳの面々が自分に事情説明を求める通信を一方的に叩きつけてくる。まさか彼等が戻っているとは欠片も予想出来なかった自分はカレンちゃん達からの通信を切って、アヴァロンにいるルルーシュ君達に助言を求めた。

『……どうしよう？』

『知るか。というか俺もお前に対して言いたいことがある。さっさと戻って生け贄になれ』

『少しは言葉に優しさを持とうよ!?』

ふてくされた表情で通信を切るルルーシュ君。その後ろではスザク君やセシルさんの苦笑いの姿が確認できたから、どうやら彼等は全員無事のようだ。

……取り敢えず、今日の所は自分達の勝ちという事にしておこう。一部とはいえ奴の宇宙を破壊したのだから当分は此方に手出ししない筈だ。

そう思うと安心して眠たくなってきた。グランゾンはここに来る前に戻しておいたし、他の連中には自分に切り札が残されている事を知られていない筈だ。――アサキムの奴は微妙だけど。

兎に角、今は眠ろう。自分という存在を賭けたりトンでもない化け物達を相手にしたりしたものだから流石に疲れた。

未だにコックピットに鳴り響くＺＥＸＩＳからの通信をＢＧＭに俺は少しばかりグランゾンの中で休息を取ることにした。

その最中――。

『お疲れさまです。今はゆっくりと休みなさい。我が半身、シュウジ＝シラカワよ』

優しい声色で博士が自分にそう言ってくれた気がした。

その５０

　アンチスパイラルとインベーダー、そして陰月による地球圏滅亡の危機から既に一日が経過し、全ての脅威から地球圏を守れた人類側は勝利の感傷に浸りながら、それぞれの陣営に引き返していった。
　アロウズは地球に、ホワイトファングとそれを率いるミリアルド＝ピースクラフトは拠点コロニーへと引き返していく。互いに協力して戦った仲ではあるが、地球側とコロニー側の隔たりが取り払われた訳ではない。一時共に戦った彼等は再び敵同士に戻る事だろう。
　だけど、せめて今だけは同じ人類同士戦うのは止めよう。そう思った両陣営の指揮官達は、互いに不干渉を貫く事でせめてもの礼儀とした。今回の戦いで大きく疲弊した事で二つの陣営に属する兵士達は文句を口にする気力も無く、早々に各母艦へと引き返していった。
　取り敢えず第二の大規模戦闘が避けられた事に見守っていたＺＥＸＩＳの面々は安堵の溜息を漏らし、今度は現在の地球の状況と情報を集める事にした。何せ気が付いたら時が二週間も進んでおり、あの夕焼けの世界から脱出できたと思ったらいつの間にか

地球圏が窮地に立たされていたのだ。
一部の勢力が大型インベーダーを駆逐した事と、ＺＥＸＩＳの面々が戦線に参加した事で戦況は大きく覆り、後に増援として出てきた新手のムガンも、グレンラガンが暗黒大陸から浮上してきた巨大戦艦と合体した事でこれらを粉砕。その後も陰月を止め、本当の姿に戻した頃には残ったインベーダー達も駆逐されていた。
本来の姿を取り戻した陰月――――超弩級戦艦は別の空間へと姿を消した。静寂に包まれる宇宙空間、地球圏を救う事が出来たＺＥＸＩＳは少しばかり喜んでいたが……。
「……で？　何でアンタがルルーシュ達と一緒にいるわけ？　しかもワザワザ死んだフリをしてまで私達を騙すとか、そこら辺の事も含めて説明して欲しいんだけど？」
「え、えぇっとぉ……」
ＺＥＸＩＳが属する艦とは別の航空艦〝アヴァロン〟そこで自分こと蒼のカリスマは、現在押し掛けてきたカレンちゃん達によって格納庫の壁際に追い詰められているとです。
あの後、アヴァロンの格納庫に戻ってグランゾンの中で少し休息を取ったら、どうやら自分が思っていた以上に疲労していたのか、目を覚ましたらなんと……丸一日経過していたらしいのだ。しかもその間にルルーシュ君達が彼女達を招き入れたというのだ

から驚きは倍である。
　グランゾンのコックピットから出るまでその事を教えてもらえなかった自分は、待ち構えていたカレンちゃん達に捕まり現在に至るという。というかカレンちゃん近いッス、年甲斐もなくドキドキするじゃないか。無論恐怖的な意味で。
　だってカレンちゃんの今の顔メッチャ怖いんだもの。額に青筋立てて本気で怒っているし、下手に言い訳したらコロコロされそうなんだもの。パイロットスーツで体のラインが出ていて艶っぽい筈なのに、彼女から醸し出されるオーラの所為でそうは思えない不思議。
　しかも向こうではヨーコちゃんがライフルを磨いて此方に照準合わせているし、それ弾入ってないよね？　仮に入っていたとしても絶対に撃たないよね!?
「……フフ」
（ヒッ!?）
　１０年の時を経て大人っぽくなったヨーコちゃん。彼女の微笑みは見る者の視線を奪う魔性の笑みだったが……何故だろうか、その笑みを目の当たりにした自分には恐怖しか感じない。
　彼女達を招き入れるとか、なんて事をしてくれたんだ。恨みがましく格納庫の端っこに居座っているルルーシュ君達を見るが、ルルーシュ君達はアムロさん達と話している

からか、此方に気付いていない。

「……フンッ」

いや違う！　彼は、ルルーシュ君は自分の視線に気付きながらその上で無視していた！　だって今コッチを見たもの！　見たけど見ないフリをしたもの！

同じく自分の視線に気付いたセシルさんやスザク君達は苦笑いを浮かべて口パクでドンマイと言ってくれているが、C．C．さんはだけはザマァ（笑）と言いたそうに笑っていた。……前から思ってたけどルルーシュ君とC．C．さんって俺に対して妙に冷たくない？

そりゃあさ、肝心なところで姿を消した自分は彼等からすれば役立たずにしか見えないと思うけどさ、コッチはコッチで大変な思いをしてきたんだ。言い訳の一つくらいさせてくれたっていいじゃない。

「シュウジぃ？　聞こえてなかったのかしら？　話の途中で考え事なんて失礼だと思わない？　ん？」

そんな現実逃避をしている内に迫っているカレンちゃんの迫力が三割ほど増した気がする。おかしい、今の自分は蒼のカリスマとして仮面を被っている筈なのに何故俺が考え事をしているとわかったのだ？

あぁそうか。カレンちゃんはゼロの右腕として活躍してきた人間だから、同じ仮面を

被った自分の事も少しは分かると言うことか。成る程納得。
……なんて言ってる場合じゃねぇや。額に青筋を浮かべて、苛立ちを募らせているカレンちゃんに軽く死の恐怖を感じる。というかカレンちゃん、気付いていないだろうけど女の子がしていい顔じゃないよそれ、芸の領域に入っちゃってるよ？
怖すぎて若干ホラー気味になっているカレンちゃんから目を逸らして数分、前からはカレンちゃんが、そのカレンちゃんの更に後ろからはヨーコちゃんにそれぞれ狙われ、彼女達の迫力に怖くなり、いい加減泣きそうになりかけた時、そんな自分の前に救世主が現れた。
「シュウジ＝シラカワ……いや、今は蒼のカリスマか。ジェフリー艦長達が君と話がしたいみたいなんだ。申し訳ないがブリッジに案内してくれないか？」
「勿論構いませんよ。さ、こちらです」
話しかけてくれたアムロさんがマジでこの時は救世主に思えた。彼が訊ねて来てくれた事を切っ掛けに包囲網から抜け出せた自分は、アムロ大尉と共にアヴァロンのブリッジに向かった。その際にＣ．Ｃ．さんがカレンちゃんに声を掛けて話をしていたみたいだけど……変なことは言ってないよね？
あの人何気にＳっ気あるからなぁ、カレンちゃんに変な事を言って焚き付けたりしないだろうか……まぁ状況が状況だし、流石のＣ．Ｃ．さんも自重してくれるだろう。

「知ってるかカレン、あの男はな……実はナナリーにまで手を出しているのだそうだぞ」
「なあっ!?　あんの変態仮面、とうとうそっちの道にまで手をだしたのか!?」
「しかも中華連邦では天子の姿に見惚れていたとも言っていたな。いやはや、見た目によらず随分守備範囲の広い奴じゃないか。流石は魔人と言った所か？」
「シュウジ＝シラカワ、絶対許すまじ！」
「その話、詳しく聞かせてもらおうかしら？　」
「ヨーコ＝リットナー、お前も知りたいか？　なら私の部屋に案内してやろう。アイツ等の話は長いからな。存分に聞かせてやるさ」

……何だか一瞬凄まじい悪寒を感じたのだが、気の所為だろうか？

◇

Ｆ月Ｚ日

ＺＥＸＩＳ達とその日限りの共闘から一夜明け。自分達は現在、地球のとある海中にアヴァロンで潜伏していた。このアヴァロンは唯一自分達の足となっている航空艦なので、そこら辺の改修は済ませてある。二日程で仕上げた突貫工事だったが、問題のある報告がない所をみると、どうやら順調に運航は出来ているようだ。

さて、まずは何故最初に〝共闘〟という言葉が出てきたのか、そこから説明しようと思う。あの後アムロ大尉を連れ、アヴァロンのブリッジに戻った自分達はジェフリー艦長達とモニター越しで対談。ちょっとした報告会となった。

自分達は二週間の出来事だったけれど、彼等からすれば元の世界に戻ってきたら地球の危機に直面していたのだ。多少は混乱している事だと思い自分はこの二週間世界で何が起きたのかを掻い摘まんで説明した。向こうもあの戦いで陰月内部に進入し、そこで待ち構えていたアンチスパイラルの尖兵と戦い、これに勝利した事でひとまず陰月の落下を食い止めることが出来た事やニアちゃんがメッセンジャーから解放された事など、自分が姿を消していた合間の出来事を事細かく説明してくれた。

自分が消えていた合間、皆にはどこで何をしていたのかは聞かれる事は無かった。

ジェフリー艦長が自分の意思を尊重して聞かないようにしてくれたのかは定かではないが、今は少し後悔している。

取り敢えずあの黒人間ことアンチスパイラルは此方に暫くの間手出ししてくる事はなさそうだが、それでも奴の持つ力は強大だ。せめてその時の情報を少しでも話して置こうかと思ったのだけれど、そこで空気も読まず敵が攻めてきた。

突然起こる時空震動。次元境界線が歪曲し、別の時空間に引き込まれた自分達とＺＥＸＩＳ。そこで待ち受けていたのは倒した筈のムゲ＝ゾルバトスと、破界事変の頃にタケル君が倒したズール皇帝だった。

何でもタケル君をこれまで苦しめてきたゲシュタルトの正体がズール皇帝で、暗黒の王であるムゲも奴の持つ次元力によって復活、度重なる激闘に疲弊したＺＥＸＩＳを狙って仕掛けてきたのだろうけど……。自分こと蒼のカリスマとグランゾンが一緒にいるとは思わなかったのか、自分達が出てきた瞬間何やら驚いていた。

戦っている最中で「奴の所から抜け出したのか!?」「何者だ貴様は!?」とか言ってたりしたから、恐らく連中はアンチスパイラルを結構詳しく知っているのだろう。

そしてＺＥＸＩＳとこの時に共闘し、バラの騎士……いや、タケル君のお兄さんであるマーグの助力のお陰でタケル君はデビルリングを破壊。蝕まれていた命を快復させるとゴットマーズは金色に輝き、ズール皇帝を今度こそ完全に消滅させた。

ムゲ＝ゾルバトスの方も忍さんと葵さんによるダンクーガのコンビネーション攻撃で粉砕されていた。今回の戦いでも雑魚の相手をしていた自分とグランゾンだが、真の姿であるネオへ至った為か出力が上がっており、いつもより簡単に雑魚敵を片付ける事が出来た。

二つの脅威を今度こそ消滅させた事で元の時空に戻った自分達はもう一度落ち着いて話をする事にしたのだが、ここにきて一つ問題が発生した。

問題と言っても、戦闘終了の直後、自分にだけ送られてきたある通信によるものだけれど……ちょっとシャレにならないんだよなぁ。

嘗てゼロ……ルルーシュ君が作り上げた組織、黒の騎士団の新しいトップとなった扇さんが自分に通信を送ってきたのだ。

その内容がゼロことルルーシュ君には気を付けろと言うものばかり。彼がルルーシュ君の持つギアスの力に不安を感じるのは分かるが、彼のしつこさもあり、オマケにその時の自分は戦闘時の興奮状態になっていたようで、少しばかり言葉を強めにして説教みたいな話をしてしまった。

その所為でＺＥＸＩＳ達とはまた微妙な空気になってしまったし……うわぁ、もうホントどうしよう。

自分の感情的な言葉でルルーシュ君達にも迷惑が掛かってしまったし、なんて謝れば

いいんだろう。しかもカレンちゃんから聞いた話だとゼロを追放したのは黒の騎士団の独断で、ＺＥＸＩＳの人達は寧ろゼロ君を擁護していたようじゃないか。

恥ずかしい。穴があったら入りたい。結局あの後は喧嘩別れするみたいにあの場から離脱して地球に戻って来たわけなのだけれど……絶対印象は最悪になっただろうなぁ。

今度ＺＥＸＩＳに会ったら謝っておこう、その時までにはカレンちゃんとヨーコちゃんに対する言い訳も考えておいた方がいいかもしれない。

……何について言い訳すればいいんだ？

◇

アヴァロン内格納庫。機体の整備も終わり、人気の無くなったその場所でルルーシュは素顔のまま蜃気楼の前に立っていた。

「……」

思い出すのは先の戦いの終わりに聞かされた、扇要とシュウジ＝シラカワとの舌戦。通信越しとはいえ嘗ての部下からの敵意ある言葉に、ルルーシュはそれが自分の業なのだと知りながら肩身の狭い思いをしていた。

嘗てルルーシュは許されない事を何度も繰り返してきた。絶対遵守の力であるギアスを用いて何度もその人の人生を歪めてきた。自分の目的の為に他人を利用して、初恋だった人も死なせ、親友だった者の信念も歪ませた。

黒の騎士団を騙し、ＺＥＸＩＳを騙し、自分すらも騙してきた人生。だから、彼から口に出される罵倒はその罰の一つでもあった。

これが自分のしてきた事なのだと、ルルーシュは歯を食いしばって耐えてみせた。仮面の奥でルルーシュは無表情に徹して彼等の話をただ耳にしていた。裁判を受ける被告人の様に、罪状を告げられる罪人の様に、ルルーシュはただひたすら耐えていた。

と、そんな時だ。今まで扇だけの声が聞こえてきた通信に別の声が混じってきたのは……。

『裏切り……ねぇ。果たして彼は皆さんを本当に裏切ったのでしょうか？』

『な、なに？』

『昔、とある王が言いました。裏切りというものは、同じ道を歩んでおきながら後ろから

刺すような行為をそう言うのだと。話を聞く限り、どうも私は彼が裏切っていたとは思えないんです』

『だ、だがゼロは、ルルーシュという男はこれまで数え切れない人達の人生をギアスで歪めてきた！　その罪は計り知れないぞ！』

『そのギアスの力に便乗してあなた方の組織はそこまで大きくなった。確かに事情を一つも話さなかった彼も悪いでしょうが、かといって一方的に切り捨てるのとはまた違うと思うのは……私だけでしょうか？』

『な、ならお前はその男を、ルルーシュを信じるというのか！　ユーフェミア皇女を殺し、罪を押しつけてきた彼を！』

『当たり前でしょう？　彼は私の仲間であり友人です。それに、彼はその事について深く反省しています。勿論、それは謝って許される事ではないので今後は彼も贖罪の為に世界平和に尽力する事でしょう。それでも疑うのであれば、その時の彼の生き方に注目してみなさい。尤も、一つの事実だけにこだわって真実を見誤ってしまう貴方では到底無理そうですがね……』

……庇って貰ったのは一体何時以来だろう。言葉の使い方一つ一つは丁寧だったけれど、あの時の彼の言葉には確かな怒りが込められていた。

「アイツが、俺の為に怒ってくれたのか？　何故だ。一体、なんの為に……」

どんなに考えても答えは出ない。いや、本当は出ているのに認めたくないのが本心だった。その事が無性に腹立たしくなり、悔しくなって手を握る。と、その時だ。
「あれ？　ルルーシュ君じゃん。どしたの？　眠れないのかい？」
「ホワァァァッ!?」
突然の本人の登場にルルーシュの声が裏返る。シュウジもシュウジで突然奇声を上げるルルーシュに驚きながら後退る。
「び、びっくりするなぁ。そんなに大声を出して……」
「あ、いやその……済まない」
「いや別に謝る事じゃないけど……本当どうしたの？　何か悪いものでも食べた？」
「う、五月蠅い！　俺に構うな！　――もう寝る！」
気遣ってくる目の前の男、戦いの時とは違いバカ丸出しのその姿勢にルルーシュは何も言う気が起きず、むしゃくしゃする気持ちのまま格納庫を後にする。
その彼の後ろ姿を見送って、シュウジは首を傾げた。
「……何だったんだ、今のは」
「やれやれ、女だけでなく男すら落とすとは……本当に変態だな、お前は」
「いきなり出てきて酷くない!?」
突然背後から現れたＣ．Ｃ．に冷たい言葉を投げ付けられたシュウジは一人、格納庫

でうなだれる。

「訳が分からないよぉ」

その５１

Ｆ月Ｒ日

先の人類の存亡を懸けた戦いから数日、陰月も無くなりインベーダー等の侵略者達を退けた事で世界中の人達は大きな盛り上がりを見せていた。地球も助かり、人類も救われた事で安堵した人々は皆それぞれ生きる事の大切さを学んだ事だと思う。

その時の戦いでＺＥＸＩＳの事も知られており、彼等が来てから戦況が大きく変わったのだと知った市民達は彼等を英雄と讃え、賞賛した。

生憎自分達の事は欠片も触れられなかったが……まぁ、自分はあの戦場で急に行方を眩ませていたから仕方がない。寧ろ卑怯者扱いされなかった事だけでも良しとしよう。

事情があったとはいえ、自分はあの時あの戦場にいなかった。自分が抜けた事で被害が大きくなったのだと思うと……やるせなくなる。

けど、今はウジウジ悩むのは止めておく。ルルーシュ君にも先程その事で怒られたし、このアヴァロンの中では四番目の年長者だ。もっとしっかりして彼等の保護者として頑張ろうと思う。

あ、年長者といっても艦の中では自分は比較的若い方だ。セシルさんの前で年の話を

すると怒られるから言わないがセシルさんが三番目でロイドさんが二番目の年長者なのだという。

そして一番の年長者は誰かと言うと――――なんと、あのC．C．さんだった。外見の所為で分からなかったけど、彼女は不老不死の存在らしく、若い容姿とは裏腹に膨大な時間の中を生きてきたのだという。ルルーシュ君に怒られた時、序でとばかりに教えてくれた。

しかもその時、お前よりも数十倍は年上だとドヤ顔で言ってくるものだから、自分は思わず口にしてしまった。

『そんな歳で大丈夫ですか？　C．C．お婆ちゃん』と、その後に彼女をお年寄り扱いをしていたらルルーシュ君は爆笑し、艦内は笑いの渦に包まれた。自分としては善意のつもりで気遣っていただけなのだが、どうやら自分はC．C．さんの地雷を踏み抜いてしまったようだ。

その後もC．C．さんの事を思って部隊編成の見直しを真面目に検討していたら、C．C．さんは顔を真っ赤にして余計なお世話だと叫び、自室に戻っていった。

怒らせるつもりはなかったので悪い事をしてしまった。彼女は今も部屋の中で引きこもっているらしく、取り付く島が無い為、後日手作りピザを持って改めて謝りに行こうと思う。

セシルさんからも女性を年齢で弄るのは失礼だと怒られてしまったし、もう少しその辺の事を理解しようと思う。

ロイドさんはそこら辺の知識は概念として知っているようだし、彼から少し学んでみようと思う。……何故かセシルさんから止められたけど。

……だいぶ内容が逸れてしまったので話を戻すが、あの戦い――隔絶宇宙での死闘を経て、アンチスパイラルは取り敢えず地球圏から手を引いたと見なした自分は、ズール皇帝達との戦いの後、シモン君に通信でその事をそれとなく伝えておいた。

シモン君は自分もアンチスパイラルと戦っていた事に驚いていたが、自分の話を伝え終える頃にはいつもの勝ち気な笑みで『任せろ！』と頼もしく返してくれた。

あの気弱な少年がよくここまで成長したなと、感心しながら自分はシモン君にその事を伝え終えるとＺＥＸＩＳとは別れる事にした。彼等は今頃拠点に戻って機体の修復と整備作業に追われている頃だろう。

自分達がＺＥＸＩＳから離れる直前、少しの合間ルルーシュ君達と話し合ったのだが、やはり今更戻るのは抵抗がある為、彼等と共に戦う事はしなかった。けれど、未だこの世界には多くの戦火の種が存在する為、次の戦いがすぐ控えている。もしその戦場で出会えた時は敵対しないで出来るだけ協力しようとだけ告げて自分達はＺＥＸＩＳから離れていった。

その際、カレンちゃんとヨーコちゃんが通信で何か言っていたようだけど……怖かったので通信拒否しました。

その事を考えれば気が重くなるだろうけど、彼等は激戦の連続だったのでこれを機に少しは休んで欲しい所――――（日記はここで途絶えている）

F月S日

昨夜、いつもの日記を書いている途中でアイツが……シュナイゼルの奴が全世界に向けて宣戦布告を宣言した。その全世界に向けた放送を聞いて自分は驚いている一方で、やっぱりこのタイミングで仕掛けてきたのかとどこか感心していた。

ルルーシュ君からも聞いたが、あの男は自分が絶対に負けない所で戦っているのだという。今回の宣戦布告も陰月との戦いでアロウズやホワイトファングの戦力が疲弊した所を突いてきた。こうも上手く漁夫の利を狙い、且つそれを各陣営に知られないよう立ち回る手腕は流石だと思いたい。

しかも、奴は自ら皇帝を名乗るのではなく、別の者を皇帝の座に就かせて自分は本来の役割に徹する気でいる。

シャルル＝ジ＝ブリタニアがいなくなり、新たな皇帝の座に就いたのは……ナナリー＝ヴィ＝ブリタニア。嘗てエリア11の総督として赴任してきた皇女であり、ルルー

シュ君の実の妹だ。
何故彼女がブリタニアの皇帝となってしまっているのか、色々向こうも事情があるのだろうが恐らくはルルーシュ君――いや、ゼロに対する牽制と見た方がいいだろう。事実、ルルーシュ君はナナリー元総督の生存に酷く動揺していた。
最愛の妹が生きていた事、けれどその妹が世界に対して大きな敵となってしまった事、複雑に絡み合うルルーシュ君の心境は自分程度では計り知れない。
シュナイゼルの奴はナナリー元総督を皇帝に仕立て上げるだけじゃなく、自分達が保有する戦力を世界中に見せつける事で各勢力の戦意をへし折っていった。
空を埋め尽くそうと広がるＫＭＦとモビルドールの軍勢。しかもその中にはナイトオブラウンズの全員が参戦していた。ジノ君やアーニャちゃんも部隊の隊長格として参戦。二人が前線に出て来ることを知り、今度はスザク君が表情を曇らせていた。
モビルドールとは最近アロウズでも主力となりつつある、人が乗る必要のない無人機の事で、戦いによる恐怖もなければ感情もないスペシャルなシステムとして知られる代物だが、トレーズさんはコレを、戦いの実態を人々に伝えられなくなると言って酷く毛嫌いしていた。
しかもそのモビルドールはデストロイと呼ばれる戦略兵器級の力を有するトンでもない機体が主で、それが大群で押し寄せてくるのだ。その圧倒的な戦力に世界の人々は

再び不安に包まれた日々を送っている。

しかも、そんな人々に止めを刺すような報告が周囲を索敵警戒をしていたセシルさんから告げられる。なんでも大部隊の後方には巨大飛行要塞が浮かんでおり、ゆっくりとエリア１１に向かっているようなのだ。まるで誰かの挑戦を待っているように……。

恐らくはＺＥＸＩＳに対して挑発しているのだろう。ＺＥＸＩＳの中には黒の騎士団も入っており、彼等はエリア１１を故郷にしている者達だ。自分達の故郷にそんな大軍が押し寄せてきていると知れば、すぐにでも駆け付けたいと思うだろう。

だが、ＺＥＸＩＳは度重なる連戦で疲労しており、また機体の損傷も大きい。万全な状態になってエリア１１に向かうにはどうしても時間が足りない。ならば自分達が向かうしかないと思ったのだが、ルルーシュ君とスザク君は未だ自分の気持ちを立て直してはいなかった。表向きでは強がっているけれど、彼等の瞳からはいつも宿っていた強い意志が失われていた。

しかも、シュナイゼルはあの巨大飛行要塞にフレイヤ弾頭を搭載させているのか、桜色の爆発を蓬莱島付近で観測したという話も出てきた。今は脅しのつもりのようだが、いつまた向こうがフレイヤ弾頭を打ち込んでくるか分からない以上、早い内に何とかしなくてはならないだろう。

やはり自分一人でも行くしかないか。相手がシュナイゼルだからどんな手段を使っ

て来るか分からない以上、単独での行動は危険だが戦意の無い彼等を無理に連れて行くわけにもいかない。というか、シャーリー嬢との約束の為には彼等を戦場に連れて行く事自体間違っているのだけどね。

だけど、今回は陰月での戦いとは違い、世界の命運は賭けていても存亡の危機には至っていない。戦いに大小の区別を付けるつもりはないが、少なくとも今回は彼等にとって戦いの意味が違う。実の妹と今まで共に戦ってきた仲間を相手に戦うのでは、ルルーシュ君達の感じる重みが違う。

彼等が迷っている時、此方に合流したいという酔狂な者が現れた。その人は嘗てオレンジと呼ばれていたブリタニア人ことジェレミア＝ゴットバルトさん。先の陰月での戦闘でルルーシュ君の生存を確認した彼は生身のまま海底に潜り、自分達の居場所を自力で突き止めたのだと言う。彼はコレを〝忠義の力〟と呼んでいたけれど、だからといって深海を泳いで来るとか……溢れすぎだろ忠義パワー。本人は半分は機械で出来ていると言っていたけれど、それでも無茶過ぎるだろ忠義パワー。しかも半分は機械って、それ要するにサイボーグって事やないかい。しかも防水加工は既に施されているとか自慢気に話されても、コッチは戸惑ってばかりだっての忠義パワー。

彼はブリタニア皇族……しかも憧れだった人の息子という事でルルーシュ君に忠誠を誓っており、本来は仕えるのはブリタニア軍だと言うのに、彼はルルーシュ君に付い

ていくとばかり言っている。いや、別に構わないけどね。

そんなジェレミアさんはナナリーちゃんについて大まかな事情を説明してくれた。情報源である咲世子さんが言うには、エリア11で発見したナナリーちゃんは影武者で、本物は別ルートで既にシュナイゼルが逃がしていたと言うのだ。

やはりシュナイゼルはそこら辺も策を講じていたか、相変わらずの用意周到振りに自分は呆れるばかりだった。

……というか、今までスルーしていたから気付かなかったけど、ナナリーちゃんってば自分と同じように他の人達から死んでいたと思われていたのね。驚いているルルーシュ君達を見て逆に自分の方がえっ？　と驚いてしまったよ。

だってあの時の戦場ではシュナイゼルの奴もいたって聞くし、アイツの事だからナナリーちゃんの事は事前に何とかしているものだとばかり思っていた。

まぁその後色々あってそんな可能性が頭の中から消えていたというのなら話は分かるし、自分もナナリーちゃんの姿をこの目で見るまではその事を忘れていたので、この件に関してはこれまでにしておく。

そんな貴重な情報を持ってきてくれたジェレミアさん。彼が言うには情報を提供してくれた咲世子さんはその時に負った怪我が未だ完治しておらず、無理をさせる訳にもいかないという事で、中華連邦の星刻さんの部下に預かってもらっているのだという。

ジェレミアさんからの話を聞いて暫くルルーシュ君は悩んでいたが、先に立ち直ったスザク君が叱責して彼を無理矢理にでも立ち直らせた。

この時スザク君は弱さを捨てたとか言っていたけれど、それに少しおかしいと思った自分はまたこの時余計な事を言ってしまった。

けれどそのお陰か、スザク君は思い詰めた表情が和らぎ、少し気が楽になったと口にした。他の面々も自分の事をやたらと褒めてくるが、自分は思った事をただ口にしただけなので内心凄く恥ずかしかった。

ともあれ、自分達の思いは決まった。後はシュナイゼルを止めるために大軍勢を前に決戦に挑むだけ。

ジェレミアさんの機体も今の所は順調だ。アヴァロンのデータに保存されていた機体設計図をそのまま組み合わせただけなので機体バランスの調整が必要だが……まぁ、向こうにはち合わせるまでには間に合うだろう。

以前、中華連邦でシュナイゼルは自分を友人と言ってくれた。ならば、自分も友人として奴の前に立とうと思う。友達を止めるのは友達の役目、嘗てゼロに対するスザク君がそうであったように。

今の二人はギクシャクする所はあるけれど、それでも今は共に戦う仲間として認め合っている。自分もシュナイゼルとはそういう関係でいたいとおもう。……凄く腹黒

いけど。

一週間後、自分達はエリア11でシュナイゼルの軍勢に対して決戦を挑む。その場所は……富士周辺、旧日本を象徴とする場所。そこで自分達は衝突する事になる。それまでに自分もやる事はやっておこうと思う。

◇

太平洋海上・ダモクレス内にある居住区の一室。

「カノン。先程の指示通り、フジ周辺の近隣住民の避難は済んでいるかい？」

「はっ、既に近隣の住民は県外、もしくは外国に避難させております。その後の報せでは特に残った住民はおらず、フジ周辺に人一人いないとの事です」

「そうか、ありがとうカノン。下がってくれて構わないよ」

「……あの、その前に一つ聞いても宜しいですか？　何故ワザワザフジ周辺なのです？　現在世界中の軍隊は先の戦いで大いに疲弊し、戦力が乏しいと聞いております。対して我が軍は〝彼等〟の助力もあって戦力も充実しており、この大軍を前にしてはどの勢力も手出ししにくい状況かと。なのにフジ周辺に人払いを済ませて戦の準備をなさるなんて……いったいそこで何が待っているというのです？」

「……カノン。今この世界で最も強い部隊はどこか知っているかい？」

「それは……やはりＺＥＸＩＳなのではないでしょうか？　あの部隊には多種多様の機体が揃っていますし、数々の脅威を退けた実績もあります。先の陰月での戦いでも彼等の登場によって戦況は大きく変わったと聞きます――もしかして、殿下は彼等が来るとお思いで？」

「……そうだね。そう思ってくれても構わないよ。どちらにしても答えは一週間後、そこに訪れた時にはっきりするからね」

「分かりました。では殿下、お休みなさいませ」

シュナイゼルに一通りの報告を済ませたカノンは部屋を後にする。残されたシュナイゼルは手元に置いてあるチェスの白いキングの駒を取り、一人ほくそ笑む。

「さて、果たして私は魔神に勝てるのだろうか。不安は尽きないが……なに、やれることはやっておこう。フフフ、私をこんな気持ちにさせるとは君はつくづく面白い人間だ」

シュナイゼルの前にあるテーブルとそこに置いてあるチェスの盤。その盤の上には無数の白い駒が並び立っており、それらに相対するのは黒い駒――ではなく、特注で作られた蒼いキングの駒。

「さぁ、始めるとしよう蒼のカリスマ。いや、シュウジ＝シラカワ。私が初めて挑む強者よ、私は全力でもって君に相対しよう」

蒼のキングに微笑みかけ、シュナイゼルは蒼いキングに白のキングを置く。白と蒼、王と魔神。二つの存在がエリア１１でぶつかり合う。

その５２　前編

エリア１１、フジ周辺。旧日本に於けるこの地は、嘗てサクラダイト鉱石が世界でも随一の生産量を誇り、当時の旧日本の新たなエネルギーを採掘する開拓地となっていた。

そのサクラダイト鉱石を巡ってブリタニアは旧日本に戦争を仕掛け、その圧倒的な力で旧日本を力ずくで叩き潰し、理不尽な役割を押し付けるようになっていった。〝極東事変〟長く続く旧日本の、イレブンと呼ばれる旧日本人の長い暗黒時代の始まりである。

ブリタニアと旧日本、互いに因縁深いこの地で一つの大軍隊が押し寄せてきていた。地を抉りながら突き進む巨大モビルスーツ、〝デストロイ〟本来この世界には無いはずの戦略級の兵器であるその機体が大挙を成して地を進み、上空には空を埋め尽くそうと広がっているＫＭＦの群。

その他にデストロイ以外にモビルドールシステムを搭載したＭＳの大軍、まるでこれ

から世界を相手に戦争を仕掛けるような布陣に、全世界の誰もが注目していた。
圧倒的軍勢の中、後方に控えるように聳え立つ浮遊の城。ダモクレスと呼ばれる飛行要塞、これこそが世界に宣戦布告したシュナイゼルの本陣であり切り札でもある。
コントロール室でただ静かに自陣の布陣の様子を映したモニターを見つめるシュナイゼル。そんな彼を不思議に思った元ジャーナリストのディートハルトは、彼の様子を怪訝に思いシュナイゼルに問い掛けた。
「あ、あの殿下、一体この地で何を待っておられるのです？　今世界中の勢力が疲弊している今、殿下が世界を治めるチャンスなのだと私は思うのですが……国連本部に向かわなくて宜しいのですか？」
エリア11のこの地に来てから、まるで誰かを待っている様に進軍を停止させるシュナイゼルが、ディートハルトにはどうしても理解できなかった。先の陰月の戦いで、世界に存在する各勢力の戦力はすぐには回復出来ない程に疲弊し、削られている。
そんな状況の中、イノベイター達に悟られないよう綿密に練り上げられてきた今回の電撃作戦。他の勢力が回復出来ていない今こそシュナイゼルが世界を掴む好機だというのに、その当の本人が興味も無さそうに頬杖を突いて画面を眺めるばかり。
あのＺＥＸＩＳも戦線に出られない今こそが絶好のチャンスだというのに、本人がそのチャンスを潰している。いい加減声も荒げてしまいそうだと今まで大人しくしてい

たディートハルトが、遂に我慢の限界に達した時。
　オペレーターの一人が前方から機影を感知したという報告があった。
「殿下、六時の方向より機影を確認しました。これは……あ、アヴァロンです！　我がブリタニア軍の元航空艦アヴァロンが真っ正面から近付いてきております！」
「……遂に来たか。やれやれ、待ち合わせ時間に遅れるとは、彼には女心が理解出来ないと見えるね」
　オペレーターの報告にシュナイゼルの頬が吊り上がる。その様子に目を見開いたカノンは以前シュナイゼルと交わしたあの会話を思い出し、次の瞬間まさかと目を剥いてモニターを凝視する。
　アヴァロンから出て来る四つの機影。モニターを光学カメラに切り替え、目の前に現れる四つの機体を確認した時、シュナイゼルを除いた全員が驚愕に表情を歪ませた。
　黒の騎士団の総帥、ゼロの操る機体〝蜃気楼〟嘗てナイトオブラウンズとして名を馳せ、ブリタニアに忠誠を誓っていた筈の……通称裏切りの騎士と呼ばれる枢木スザクの操る〝ランスロット〟しかもその機体は第９世代と呼ばれており、現存するどのＫＭＦを凌駕する性能を持つ機体が蜃気楼と並び立つ様に宙に浮かんでいる。
　そしてその背後にはピンク色のランスロットと奇っ怪な形をした巨大ＫＭＦ。オレンジ色に施されたカラーリングからブリタニアの騎士達はまさかと戦慄する。

「殿下、まさか彼等が殿下の仰る敵ですか？　なら、何もここまで戦力を有する必要はなかったのでは？」

彼等の登場は確かに驚かされる。まさか行方不明だった枢木スザクとゼロが手を組んでシュナイゼルの前に立ちふさがるとは思わなかった。だが、それでも彼等の戦力はたったの四機。数で圧倒する此方の軍と比較しても負ける要素が何一つ見当たらない以上、カノンの心配は杞憂に終わった。……と、思われたが。

「違うね、間違っているよカノン。私が待っていたのは彼等じゃない。確かにルルーシュ達が出て来るのは予想外だったが、それでも許容の範囲内だよ」

「殿下？　一体何を？」

笑みを浮かべながらモニターを見つめるシュナイゼル。彼の頬に一筋の汗が流れた時、カノンは呆然としながらモニターの映像に向き直り、そして……先程以上に大きく目を見開かせた。

モニターに映し出される四つの機影、そこに新たな機影が加わった時、シュナイゼル軍はまさかと息を呑んだ。

四体の機体の前に現れる蒼い機体。禍々しく、そして猛々しい魔神の姿に戦場の空気が一気に凍り付く。世界の半分の戦力を破壊し、ブリタニアやアロウズに甚大な被害を齎した怪物〝グランゾン〟

魔神が彼等の前に降り立った。

◇

エリア１１にあるフジ周辺。どうにか全ての準備を終えた自分達はシュナイゼル軍のいるフジに辿り着く事が出来た。準備に手間取ってしまい来るのが少し遅れてしまった為、既にシュナイゼル軍はフジを通り過ぎた後かと焦ってしまったけれど、そんな事がなくて取り敢えず一安心。

周辺の住民も既に避難が終えているのか人っ子一人見当たらず、これでここが戦場になっても民間人が巻き込まれる事はない。もしかしてシュナイゼルが予め避難するよう指示をしていたのかな？

『やれやれ、覚悟はしていたがまさかこれほどまでとは……本当に私達だけで大丈夫なのか？』

目の前に広がる大軍勢を前に、Ｃ．Ｃ．さんがうんざりとした表情で通信を開いてくる。モビルドールシステムを搭載したデストロイを始め、数多く存在するＭＳ達。空にはそんなＭＳに劣らないもの凄い数のＫＭＦが此方に銃口を向けている。天と地を埋め尽くす程の軍勢に対し此方は僅か五体、確かにこれは中々厳しい状況だが……まぁ、何とかするしかないだろう。

『確かに戦力の差はありますが、それでも陰月での戦いに比べたら大分マシですよ。加えて月の落下という追い詰められた状況でもないわけですし、少しは肩の力を抜いて行きましょう』

『バカかお前は。相手はインベーダーやアンチスパイラルの尖兵達とは違って自ら考える知能を持ち、更にあのシュナイゼルが率いる軍勢だぞ。そんな甘い考えでは奴の搦め手に翻弄されるのが落ちだな』

勿論シュナイゼルの動向には最善の注意を払うつもりだが……別にそこまでキツい言い方しなくてもいいじゃん。ちょっと緊迫した空気を和ませようとしただけじゃん。最近ルルーシュ君てば自分に対する容赦が無くなってきている気がする。

けれど、確かに相手がシュナイゼルなだけに注意は常に向けておいた方がいいだろ

う。肩の力を抜いてとは言ったが、相手が相手なだけにここはもう少し気を張り詰めて行くとしよう。

　被った仮面の奥で目を瞑り、軽く深呼吸を繰り返す。そうしている内に今度はスザク君から通信が入り、神妙な顔付きで自分に提案を出してきた。

『シュウジさん。いや、蒼のカリスマ。ジノとアーニャ、ナイトオブラウンズの相手は僕に任せてはくれないか？』

『それは助かりますが、大丈夫ですか？　そのお二人は貴方とご同輩なのでしょう？　しかもナイトオブラウンズの中にはあのナイトオブワンもいるようですし、貴方に掛かる負担が大きくなりますが……』

『構わない。けれど、どうか二人には手を出さないで欲しい。彼等とは僕がちゃんと向き合わなければならないから……』

　通信越しでも分かるスザク君の固い決意に、自分は分かりましたと了承する。スザク君にとってジノ君やアーニャちゃんはラウンズの中でも歳の近い者同士。よく一緒に連んだり、休みの日には遊んだりしたこともあるのだろう。ラウンズに入って共に過ごしてきた仲間として、彼にも思う所はあるのかもしれない。なら、彼等の相手はスザク君に任せた方がいいだろう。

　時間もいよいよ迫ってきた。目の前の軍勢も此方に向かって徐々に近付いている事

だし、自分は昨日皆で立てた作戦プランの概要をもう一度再確認する。
『……では、そろそろこちらも動くとしましょう。ルルーシュ君、例の少女から譲って貰ったデータは?』
『既に準備は完了している。後は向こうがフレイヤ弾頭を撃ってきた所を見計らって瞬時に入力、その時はスザクとタイミングを合わせたいのだが……』
『任せて、その時までには間に合わせる』
『宜しい。ならばジェレミア卿と自分が先陣を切り、C．C．おば――ゲフンゲフン、C．C．さんはルルーシュ君の援護を、アヴァロンは出来るだけ離れ状況の伝達だけは怠らないようお願いします』
『フレイヤ弾頭はどうする~?』
『使いません。てか、使ったら拙いでしょ。此方までフレイヤを使ったらそれこそ向こうは際限なくフレイヤ弾頭を容赦なく使ってきます。此方の持つフレイヤはあくまで抑止力として扱って下さい』
『了解しました』
『承知。見せて差し上げよう。我が忠義の嵐を!』
『おいボッチ、貴様今なにを言い掛けた?』
ブリタニアとの事実上最後の決戦。目の前の大軍勢の前に気負った者は一人もいな

い中、自分はグランゾンのコックピット内で操縦桿を握りしめる。
　――そして、遂にシュナイゼルの軍が動き始めた。押し寄せてくる敵の軍勢、デストロイの群が、地上の部隊が動くと、土煙が舞い上がり、空を茶色に染め上げていく。
　圧倒的。デストロイという黒い壁の向こうにも続く敵の軍勢に普通ならそれだけで相手の戦意は砕かれる事だろう。無数のモビルドールにブリタニアの軍、更にそれらをまとめるナイトオブラウンズの存在と軍隊の全てを束ねるシュナイゼル。
　生半可な軍では対抗する事も難しい軍勢に対し、此方はたったの五機。到底勝てる見込みの無い戦いだが……なに、心配することはない。
　此方には黒の騎士団の元総帥であるゼロと、ナイトオブラウンズの一人であったスザク君。そして忠義パワーという理不尽で人間ではないナニカになりつつあるジェレミアさん。
　Ｃ．Ｃ．さんもＫＭＦの扱いはＺＥＸＩＳでは四聖剣に次ぐ実力者と聞いているし、なにより……頼れる相棒グランゾンがいる。博士から言われた自分の専用機、これまで何度も共に修羅場を越え、助けとなってくれた愛機。今回も頼りにさせて貰うと呟き、改めて眼前の軍勢を睨みつける。
　シュナイゼルを止める。こんな戦いをするアイツをブン殴ってでも止めてみせる。仮にも皇子相手に何を言っているのかと思われるが、自分は既にあのトレーズ閣下と殴

り合いをしているのだ。皇族だろうが皇帝だろうが今更関係ない話である。
『では……いきますよ！』
自分の戦闘開始の合図を切っ掛けにルルーシュ君達の機体は隠れるように自分とグランゾンの後ろに下がる。眼前に広がるデストロイ、巨大な黒い壁が迫り来る光景に……。
『この武器は空間と時間、全てを歪曲し、破壊する。……さぁ、覚悟は出来たか？』
『ディストリオン……ブレイク！』
自分はグランゾンの胸部部分を展開し、極光の槍を敵陣営に向けて叩き込んだ。光に呑み込まれ、爆散していく敵機体。敵の陣形のド真ん中に風穴を開けた。
オープニングは此方が先制。敵陣形に穴を開けた事を皮切りにルルーシュ君達も行動を開始する。相手が膨大な戦力を有するに対し此方はたったの五機、戦力差では圧倒的に此方が不利だが、戦い方によってはまだやりようがある。
『ではルルーシュ君、露払いは私に任せて君達はシュナイゼルを……いや、ナナリー皇女を頼む』
『無論そのつもりだ。お前も、下手を打つんじゃないぞ』
『スザク君、ナイトオブワンは手強いぞ。心して掛かるといい』
『あぁ、分かっている。そっちも気を付けて！』

ルルーシュ君を先頭に敵陣営のど真ん中を往くＫＭＦ達。そう、ここでの自分の役割は囮。敵を多く引きつけてその上で暴れ回り相手の戦力を削いでいく。そしてその合間にルルーシュ君達はダモクレスがフレイヤ弾頭を迂闊に打ち出せない所にまで接近し、タイミングを見計らいながら戦う事になる。

暴れ回るだけでいい自分に対し、ルルーシュ君達の役割はシビアなものだ。だが、今は彼等に任せるしかない。……いよいよ危なくなった時は〝ネオ〟になるのも辞さない覚悟で、自分はルルーシュ君達の後を追おうとするモビルドール達の先回りをして立ちはだかる。

『ここから先は通しはしない。さぁ、始めるとしようじゃないか！』

自分という存在を障害と認めたモビルドール達が一直線に自分に向かってくる。相変わらず一人で戦う事になってしまっているが、今はこの戦法が最も有効なのだと理解し、自分もモビルドールの群に向かって突貫するのだった。

――――本音を言えば、チョッピリ寂しかった。

『ククク、遂にこの時がきましたか。私の因子が高ぶり、最も強い力を得られるこの時が！　蒼き魔神グランゾン、そして蒼のカリスマ、貴方達はここで果ててもらうとしましょう。この私のスフィアの力によってね……ククク』

フジの山頂付近で嘘吐きの羊が笑みを零す。

その５２　中編

――――爆発が、響く。轟音が、轟く。

エリア１１という旧日本の地、時空震動で二つに分かたれた二つの内の片割れの地。ブリタニア帝国によって支配されたこの地で、国全体を揺さぶる程の轟音がフジの周辺地域より発せられていた。

『――――』

モビルドールシステムを搭載された無人の機動兵器、デストロイが目の前の魔神に向けて一斉射撃を行う。大地を穿ち、深々と旧日本の地を割るその威力は最早戦略兵器級の威力を持っていた。

デストロイ一機だけで街一つを占拠できる制圧力を持つ。それが、地を埋め尽くすほど存在していると知れば、誰だって戦意を失うだろう。

だが、目の前の〝蒼〟は違った。深い蒼、深海を思わせる暗い闇色に近いソレは、デストロイという黒の巨人の攻撃を受けても傷どころか塵一つ付いてはいなかった。

デストロイはモビルドールシステムを搭載された無人機、故に目の前の存在に対する

畏怖は感じないし、そもそも人間が乗っていない為、感情で動くことは絶対に有り得ない。

舞い上がる砂塵の中で佇む蒼き魔神。その姿を認識するとデストロイは再び胸部にエネルギーを収束させる。しかし――――。

『――――フッ！』

魔神の目が一瞬光ったと思われた瞬間、デストロイの足は横に切り裂かれ、黒の巨人は収束させたエネルギーをあらぬ方向に打ち込み、空を見上げながら倒れる。

その時、新たに煌めく二振りの縦横の斬撃がデストロイの胴体を四つに切り裂く。魔神の追い打ちを受けた巨人はそのまま物言わぬ鉄屑に成り下がり、爆発と共に砕け散った。

『フンッ！』

そして魔神は手にした剣をそのまま握り締め、横に薙ぎ払う。その攻撃を受け、周囲にいるＭＳ達をまとめて両断。爆砕させて見せた。

だが、どんなに凄まじい力を見せつけた所で感情の無い機械人形が怯む筈もなく、モビルドールの機械人形は魔神の周囲を固め、一斉に集中砲火を浴びせた。遠距離から近距離、お構いなしに弾丸、ミサイルの雨を降り注がせるモビルドール達。そんな中で魔神は――――。

『ワームスマッシャー』
ただ一言、武装の名を呟き魔神の胸部が輝いた瞬間、集中砲火を浴びせてきたモビルドール達を光の槍でまとめて刺し貫いた。
上から下から、左から右から、縦横無尽に広がるワームホールを危険察知能力の無い機械人形に読める筈もなく、無抵抗に魔神の放つ光の槍に貫かれて爆散していく。
周囲の機体を巻き込んでの爆発はより強い爆発となって戦場を炎で染め上げる。舞い上がる炎、爆風に乗って灰色の空へと消えていく火の粉、凄惨たるその光景の中で未だ無傷の魔神が佇んでいた。
『……さて、コッチの方は上手く行っているけれど、ルルーシュ君達は上手くやってくれているかな?』
既にシュナイゼル軍の三割を削る事に成功したグランゾン、その魔神を操る魔人として知られる蒼のカリスマ改めシュウジ＝シラカワは、目の前に広がるＭＳだったものの残骸を眺めながら仮面の奥で一人呟く。
戦闘開始となって既に三十分。敵を引き付ける役として戦場を掻き乱しているが、如何せん此方は剣とワームスマッシャーのみでの戦いだ。戦いの効率も今までと比べて悪くなっている。
ディストリオンブレイクという高威力の武装は旧日本を深く傷付けてしまう恐れが

あるので、最初の時以降使っていない。比較的自然に優しいグラビトロンカノンも、あんまり乱発してはこの地の地層に影響を及ぼす可能性があるため使用はなるべく控えるべきだと考え、シュウジは出来る限り剣による接近戦とワームスマッシャーでの支援射撃（自分に対してだが……）だけを心掛けて戦っている。

尤も、先の陰月での戦いで〝ネオ〟に至った為か出力も上がり、二つの武装だけでも十分対応可能だから問題はない。

『……あ、グランビーム発射！』

今、思い出した様にグランビームを発射し、列となったモビルドールを貫く。二つから三つに戦闘手段が増えた事で先程よりも戦いやすくなり、空を飛ぶＫＭＦ達を撃ち落としながらシュウジはアヴァロンにいるセシル達に通信を繋ぐ。

『セシルさん聞こえますか？　此方はグランゾン。現在敵勢力の三割を削りました。他のモビルドール達の位置、及びゼロ達の状況を教えて下さい』

『はい。現在ゼロとＣ．Ｃ．、並びに枢木スザクとジェレミア機の全機がダモクレス付近の位置でＫＭＦ達と交戦中、フレイヤ弾頭が発射されていない所をみると、やはり彼等のいる位置がダモクレスの懐となっているようです。尚、モビルドールについてですが此方もグランゾンに群がる様に接近しています』

『了解しました。此方はこのままモビルドールの殲滅に移行します。此方が片付き次

第、私も彼等の所に向かいます。また、彼等がナイトオブラウンズと接敵しても作戦を続行するよう伝えて下さい』

『了解です。御武運を……』

此方を心配してくれる口振りを最後にアヴァロンとの通信を一度切る。そうしている合間にも敵は次々と此方に向かって押し寄せており、残り僅かとなったデストロイを盾にモビルドール達は前進してくる。

そんな連中に対し、シュウジはグランゾンと共にもう一度突貫する。主砲を発射するデストロイの胸部にグランワームソードを投擲し、黒い巨人の胴体に風穴を開ける。そしてそのままシュウジはグランゾンのスラスターに火を入れて超加速と共に残りのデストロイと肉薄する。投擲したグランワームソードをワームホールを開いて手元に呼び寄せ、グランゾンの手に握らせると共に跳躍。デストロイの頭上にまで飛び上がった所で……。

『チェストオオッ!』

勢いを乗せて剣を叩き付けてデストロイを両断。そのまま他のモビルドール達も纏めてワームスマッシャーで一掃し、シュナイゼルの軍隊を着実に減らしていく。

この調子ならルルーシュ達との合流も近い。勢いに乗ってこのまま敵を全滅してみせようかなと意気込んだ矢先、突然ダモクレスから通信が送られてくる。何だと思い回

線を繋いでみれば、そこには相変わらず何を考えているのか分からない笑みを浮かべたシュナイゼルが映し出されていた。
『やぁ、こうして君と話をするのは中華連邦の時以来だね。シュウジ』
『……やっぱり俺の正体を分かっていたか』
　自分の正体が見破られたというのに比較的に落ち着いた様子で対応するシュウジ。これまでに多くの人から自分の正体を知られた事である程度の耐性を得る事が出来た彼は、仮面の奥でも冷静な表情でモニター越しの皇子に視線を向ける。
『いやはや、流石はブリタニアとアロウズの混合部隊を単騎で壊滅させた魔神だ。その戦い振りにまずは賞賛の言葉を送らせてもらうよ』
『そんな社交辞令よりも降伏宣言をして欲しい所だな。……アンタも薄々は分かっているんだろ？　アンタとアンタの軍じゃ俺には勝てないって』
『……』
　シュウジの指摘にシュナイゼルは何も言い返さない、何故ならシュウジの言葉が真実だからだ。蒼のカリスマ――――否、シュウジ＝シラカワとその愛機グランゾンは、単騎でありながら地球最強の独立部隊〝ＺＥＸＩＳ〟と同等以上の戦力を有しているからだ。
　彼が単騎で暴れたりしないのは、ダモクレスにいるナナリーを助けると決意するル

ルーシュ達の意思を尊重したのと、旧日本の大地を必要以上に壊さないと決めた配慮によるもの。もしグランゾンが本来の力を発揮し、全ての敵を殲滅する事を目的に行動していたら……シュナイゼルの軍は魔神一機に半刻も経たずに全滅していた事だろう。

故に、シュウジはシュナイゼルに申し込む。戦闘を止め、直ちに投降しろと。ダモクレスとフレイヤ弾頭を放棄し、此方に降れと、半ば脅し気味にシュナイゼルに申し込む。

『もう止めようぜシュナイゼル。アンタは俺を友達だと言ってくれた。社交辞令とは分かっているけど、中華連邦でああ言ってくれた時、俺は嬉しかった。俺は友達相手に力を揮いたくはない。頼む、降伏してくれ』

説得というよりも懇願するかのように、シュウジはシュナイゼルに降伏するよう呼び掛ける。この世界に来て早一年以上が経過し、漸く出来た大事な友人とこれ以上戦いたくないと言うシュウジに対し……。

『ふ、フフフ……やはり私の思った通りの人間だね、君は』

『……なに？』

シュナイゼルは不気味な微笑みと共にシュウジの説得をはねのけた。表情を変えず、絶えず微笑みを浮かべているシュナイゼルを訝しげに思った時――後方の安全圏に下がっている筈のアヴァロンから火の手が上がった。

『な、何だと!?』

バカな!? と、シュウジは内心で叫ぶ。あそこには敵影の姿なんてなかった。アヴァロンに向かおうとしていた機体は全て自分達が叩き落とした筈。信じられない光景を目の当たりにして目を見開くシュウジだが、現実はアヴァロンが炎を上げながら墜落していく事実から変わらない。考えるよりも先にグランゾンを走らせ、アヴァロンを重力制御でゆっくりと地上に降ろすと、シュウジはアヴァロンに対して通信を開いて呼び掛ける。

『アヴァロン、アヴァロン！ 応答してくれ！ セシルさん、ロイドさん、大丈夫ですか!? 返事をしてくれ！』

『あ、アイタタタ……うん、何とかコッチは無事～。うえ、頭切っちゃった』

『私達は何とか無事よ。アヴァロンもエンジン部分を少しやられただけだから、急いで消火作業に入れば大丈夫だと思うわ。……けど、残念ながら今回の戦線には復帰出来そうにないみたい。ごめんなさい』

ロイドとセシルの無事を知らせる報告にシュウジは安堵するが、どうにも解せない。シュナイゼルの軍は自分達が戦っているもので全てのようだったし、増援の気配もない。一体どこからの攻撃なのだと辺りを見渡した時、シュウジはその目を驚愕に見開く事になる。

『インサラウムの無人偵察機……だと?』

アヴァロンを攻撃したとされる位置に見える白い機体、それがインサラウムの無人偵察機だと知るとシュウジはグランビームを発射し無人機を破壊、仮面越しで睨みながらモニターの向こう側にいるシュナイゼルを睨みつけた。

仮面を被っていても分かる蒼のカリスマの怒気、それを前にしてシュナイゼルの隣に控えるディートハルトは頬をひきつらせるが、当の本人はその笑みをより深く、その瞳をより細くさせて蒼のカリスマを見つめている。

『シュウジ。私はね、どうしても君に勝ちたいんだ。最強と言われる君を、私の予想を悉く覆してきた君を、私はこの手で超えたくなったんだ。その為なら、私は喜んで地球の敵とも手を交わそう。そして、君に勝つためなら君自身の美徳をも利用しよう』

『俺の……美徳だと？』

『君は、君自身が思っているよりもずっと優しい人間だと言う事に気付いているかね？大事なモノを守る為なら自分に罪が被ろうが構わない。そんな事を思った事は……一度や二度程度じゃないんじゃないかな？　事実、君は世界から徐々に認められつつあるのに君自身は何も言わない。何故なら、君は大事なモノを守れるなら他はどうなっても構わないという無頓着な部分があるからだ』

（そ、そうだったの？）

シュナイゼルから聞かされる自分の人物像をシュウジは他人事に聞いていた。確か

に身に覚えのある事が幾つかあるだけに否定仕切れないが、それでも数回しか会った事のない人間に対してこうも冷静に分析するシュナイゼルにシュウジは内心で若干引いていた。

『自分よりも他人を優先する傾向のある君が、果たしてこの状況で彼等を見過ごせるか？　答えは否だ。喩え相手が何者だろうと、君は誰かの為に戦える、戦えてしまう。だからこそ、私はそこに勝機を見出すしかなかった』

無人偵察機の群がアヴァロンごと魔神に攻撃を仕掛けてくる。槍を携えて突貫してくる連中をシュウジは舌打ちをしながらワームスマッシャーを放ち、インサラウムの尖兵を撃破していく。

だが、奴等の増援はこれだけでは終わらなかった。無人偵察機を全機破壊した途端、今度は次元獣の群がアヴァロンとグランゾンを囲むように出現する。

ギガ・アダモンなど上級の人工次元獣の姿はなかったが数が多い。今まで倒してきたモビルドール達の数を埋め合わせる程の数の次元獣達の群を、シュウジはウンザリとした気持ちで眺めていた。

『シュウジ、君の力は確かに強い。アロウズの戦略兵器を防いだ事、世界を相手に一歩も引かない所、その強さは現在の地球人類の枠組みを越え始めている。だから私は君の強さとは無縁の所で戦うしかなかった。君の人間としての本質、そこを見抜き、突くしか

なかった。嘗て無い戦い方に流石の私も苦労したよ。君は自分より他者を優先とする人間だ。今の時世ではそれは尊い人種なのだろう、だが、その人間では個は救えても世界は救えない。――だから』

『――ゴチャゴチャと、ちょっと五月蠅いよお前』

『っ！』

アヴァロンという枷を使用し、魔神に勝利するまであと一歩、漸く掴みかけた王手への一手が、グランゾンから放たれる強力な重力操作によって次元獣諸共粉砕される。

恐らくは破界事変で引き起こした当時の国連軍を全滅させたような高重力を発生させたのだろう。アヴァロンだけはその影響を受けず、インサラウムの尖兵だけが圧壊されゆく光景に、シュナイゼルは頬から汗を流して息を呑んだ。

『さっきから聞いているとさ、俺の事を俺以上に分かった様に言ってるけどさ、それってそんな大事な事か？　他人が大事？　別にそんな大袈裟な話じゃないだろ。満員電車に乗って、お年寄りに席を譲ったり、木の枝に引っかかった風船を取ってやる位の……そんな誰にでも出来そうな話だろ？　お前さ、スゲェ難しい事を言っているけどさ、実は結構バカだろ？』

『――っ！』

シュウジからシュナイゼルに言うバカの一言。その言葉を耳にしたシュナイゼル達

は絶句し、セシルは卒倒しかけ、ロイドは爆笑する。混沌とした空気の中、グランゾンは手にした剣をダモクレスのいる方向に突きつけ、一言付け加える。

『待ってろ。今そっちに行ってその固い頭を叩いて直してやる。友達のよしみだ。力の加減は八割程度に抑えてやるよ』

そこまで言い切ったシュウジはシュナイゼルの通信を切る。これ以上互いに語る言葉はない。続きは自分がダモクレスに乗り込んでからだと、シュウジは襲い来る次元獣達に向き直る。

不敵に笑い、再びグランゾンの胸部を開いてエネルギーを収束させる。もう一度ワームスマッシャーで同時攻撃を与えてやろうと発射体勢に入ったとき――背後から、衝撃が貫いた。

『――なんだ?』

歪曲フィールドを展開していたおかげでダメージは通らなかった。シュウジは今の状況にデジャヴを感じ、辺りを見渡すが……次元獣やモビルドールの大軍以外目立つ所はなかった。

もしかしてまた別の援軍か? シュナイゼルが相手だからその可能性も考えられるが、それはないとシュウジは断言する。何故なら……似ているからだ。リモネシアにＺＯＮＥを置かれ、インサラウムに対して怒りを覚えた時、奴はこうして自分の油断を突

いてきている。
『いるんだろ？　出てこいよ、アイム＝ライアード！』
『フフフフ、流石は魔人蒼のカリスマ。私のやる事は全てお見通しという事ですか。ですが、その聡明ぶりもここまでです』
シュウジの呼び掛けに対し、地面から生える様に姿を現すアイム＝ライアードとその愛機〝アリエティス〟だが、その様子はコレまでと違っていた。
グランゾンを囲む１２の影、それらが全てがアイムの駆るアリエティスだと認識するシュウジは言葉を失って面食らう。
〝偽りの黒羊〟嘘吐き男の駆るマシンが魔神に向けて一斉攻撃を開始する。

その５２　後編

――――シュナイゼル軍中枢。シュウジとグランゾンを囮に本陣へと突き進むゼロ達、魔神と恐れられる彼等の力のお陰でモビルドール達を引き付ける事に成功した彼等は、ダモクレスがフレイヤ弾頭が使えない位置まで移動し、ブリタニア軍のＫＭＦと激戦を繰り広げていた。

圧倒的物量でゼロ達を追い詰めるシュナイゼル軍。しかし、その物量を彼等はスザクのランスロットとゼロの蜃気楼、力と知によって悉く撃退していく。

ランスロットが凄まじい戦闘能力を発揮して敵ＫＭＦを破壊し、ジェレミアとＣ・Ｃ．が敵を誘導した所で蜃気楼が相転移砲で一掃。これを何度も繰り返している内に敵の数は減っていき、遂に目立った戦力を有しているのはナイトオブラウンズだけとなった。

帝国最強の騎士達の最後の戦い。戦闘は苛烈を極め、戦いはナイトオブラウンズのナイトオブワンことビスマルクとスザクを中心とした激闘へ移っていく。ダモクレスのフレイヤ弾頭の効果範囲に入らないよう、ゼロがスザクに指示を出し、状況を常に分析

する。そんなゼロを守る為にジェレミアとＣ．Ｃ．が援護に回っているが、相手は帝国最強の騎士だ。そう簡単に事が上手く運ぶわけがない。

ジェレミアとＣ．Ｃ．、対するジノとアーニャ、この四人の戦いもビスマルクとスザク同様に刃を重ねる毎に激しさを増していく。互角の戦いをしている様に見えるが、やはり相手がラウンズだけに中々押し通す事が出来ない。何か策を講じねばと思考を巡らせた時、ゼロの駆る蜃気楼にアヴァロンの〝ＬＯＳＴ〟の文字が出て来た事に、彼等の胸中に暗雲が広がっていった。

『アヴァロンが撃墜されただと!?』

『そんな……セシルさん！　ロイドさん！　返事をして下さい！』

ゼロ達……特に、スザクは動揺が隠せなかった。ブリタニア軍に所属していた頃から何かとお世話になった特派の人達はスザクにとっては恩人とも呼べる人達だ。その人達の安否を確認する為通信を開いて確認するが、目の前の相手がそれを許す道理はなかった。

『枢木スザク！　貴様はナイトオブワンになる事が目的だと言ったな。だが、私こそが唯一のナイトオブワン！　裏切り続けた貴様が適う道理はない！』

『くっ！』

『スザク！　今は余計な事は考えるな！』

『で、でも！』
『今は奴を、シュウジ＝シラカワを信じるしかない！　為すべき事を成す為に俺達は負けられないんだ！』
『く、分かった！　今は目の前の相手に集中する！』
今すぐロイド達の下へ向かいたいが、状況がそれを許さない。それが分かっているからこそスザクもゼロの言葉に従うしかなかった。
何故アヴァロンが落とされたのか、あのグランゾンが近くにいながら防げなかった事実。いったいどんな手を使ってあの魔神から母艦を落としたのか、改めて思い知る実兄シュナイゼルの手腕に戦慄を覚えながら、ゼロは再びスザク達に指示を飛ばす。
と、そんな時だ。突然ダモクレスから通信が入り、ゼロは仮面の奥で目を見開かせる。このタイミングで仕掛けてくるのはシュナイゼル以外有り得ない。この戦闘の中で奴の話を聞くのは危険を被るが、今は時間稼ぎの意味を込めて付き合うしかない。
通信回線を開き、目の前のモニターにシュナイゼルの顔が浮かび上がる。やはり現れた実の兄に、ゼロは表情を険しくして相対する。
『やぁ、久し振りだねルルーシュ。仮面を被って人を騙すのは相変わらず楽しいみたいだね』
『一体何のご用でしょうか？　私は貴方とはダモクレスで会うまで顔を合わせるつもり

はなかったのですが？』
『なに、その前にどうしても君と話がしたいと言う人がいてね。彼女の頼みとなれば断るのは出来ないんだ。――――さぁ、ナナリー。お兄さんと存分に話をしなさい』
『っ!?』
　目の前に映し出される最愛の妹、足と目の光を失い、ゼロ――否、ルルーシュにとって全ての行動の原点となった彼女。
『ゼロ……いえ、お兄さま。私は貴方にお聞きしたいことがあります』
　第９９代皇帝ナナリー＝ヴィ＝ブリタニア。ルルーシュにとって何よりも代え難い存在が、彼の壁となって立ちはだかる。

◇

『ふ、フフフフ、流石は魔神グランゾン。この程度の数では相手になりませんか』

『……』

ルルーシュ達が追い詰められている一方、後方でモビルドール達とインサラウムの先兵を相手に戦っていた魔神グランゾンとシュウジ＝シラカワ。インサラウムという予期せぬ増援にも対処し、着実に敵の数を減らしていった彼等は、更なる増援に客観的に追い詰められていた。

地球にガイオウを呼び寄せてリモネシアを破壊し、裏で今回の戦いを操っていた黒幕の一角、アイム＝ライアード。

インサラウムを破滅へと導き、そしてまたこの世界でも己の好き放題に暗躍する男と相対し、シュウジは冷静さを装いながらも、仮面の奥の瞳には怒りの炎をたぎらせていた。

グランゾンの周辺に転がる無数のロボットの残骸。それら全てがアイムの乗るアリエティスと同じ姿であり、同じ機体能力を有していた。

〝スフィア〟未だ謎の多い未知のエネルギー機関だが、今のシュウジにはどうでも良いことだった。目の前にグレイスやイノベイターと並ぶ自身の敵がいる。ならば……やることは一つしかない。

スフィアの支配下から解かれ、光へと還っていくアリエティスの残骸を踏み砕きなが

ら、シュウジはグランゾンを前に進ませる。
その先にいるアイムを倒すべく、グランゾンに剣を握らせ、バーニアを噴かせて一気に間合いを詰めようとするが……。
『良いのですか？　貴方の後ろには大切なお仲間がいるのでしょう？　離れてしまって大丈夫なのですか？』
頬を緩ませ、厭らしい笑みを浮かべるアイムにシュウジのコメカミに青筋が浮かぶ。それと同時に復活したアリエティスの分身とインサラウムの無人偵察機がアヴァロンに向けて一斉に攻撃を仕掛けてきた。
消火作業に追われて動けないロイド達。迫り来る敵の攻撃にシュウジは振り返る素振りも見せず――――。
『ワームスマッシャー』
呟く、その瞬間アリエティスの分身とインサラウムの無人偵察機が光の槍に貫かれて爆散。同時にエンジンの修復に成功したロイドがブレイズルミナスを展開させ、爆発の衝撃も防ぐ事が出来た。
振り返りもせずに破壊される自身の分身。まるで眼中に無いと言いたげな目の前の魔神達にアイムの表情が……僅かに、苛立ちに歪む。
『確かにお前の言うとおり、ロイドさん達を放って戦っているのは拙いかも知れない。

けどな、俺の直感が言ってるんだよ。ロイドさん達を庇って戦うよりも今のお前を背にする方がずっと拙いってよ』
『ほう？　何故そう思うのです？』
『前から思ってた。お前の口から紡がれる言葉は殆ど信用のない嘘ばかり。加えて破界事変の時にお前は南極で死んだとされてきた。その後ＺＥＸＩＳでスフィアなる存在を聞いた時はまさかと思ってきたけれど、今のお前の力を見て確信した。お前の機体の動力炉であるスフィアは〝嘘を司る〟スフィアなんだろ？』
『……』
『死んだ事さえ嘘に出来る。そんなトンでもない力なら破界事変以降も誰かに姿を見られる事もなく立ち回る事だって容易い筈だ。胡散臭いお前の事だ。どうせ自分以外の誰かになりすまして来たんだろ？』
『貴方がそれを言いますか？　蒼のカリスマという自分以外の存在になりすまし、今まで他者を欺いて来た貴方が！』
本体であるアイムのアリエティスが腕から赤い刃を生やしてグランゾンに切りかかる。宝石の様に輝いておきながら、血の様に禍々しい輝きを放っている。その刃を受け止めた瞬間、衝撃が迸り、拡散し、大地を深く抉る。
受け止めてシュウジも理解した、このスフィアから生まれる力は厄介だと。自身の身

に覆い被さるように来る圧力、ガイオウと似ているが微妙に違う。目の前のアイム……いや、スフィアから発する力がこれほどのものなのかと実感しながらも、シュウジはグランゾンを通してアイムとアリエティスを振り解く。

『どうですか？　私のスフィア〝偽りの黒羊〟から発せられる力の胎動は？　感じますでしょう？　凄まじいでしょう？　最早貴方の魔神程度では相手になりません。水天の涙は乙女の瞳より流れ落ち、黒き獅子は女神の慈愛に包まれる。黄金の天秤に支えられた巨蟹は水瓶に沈みながら黄昏の夕日の世界を想う――――あらるきゅりうあ＊＊＊＊＃§＆＃§＃＊』

『な、何だぁ？』

先程の嫌味ったらしい態度から一変。アイムの感情と機体の出力が上がったと思われた瞬間、突然訳の分からない言葉を喋りだし、遂には笑い出した。

発狂した様に笑い出すアイムをシュウジは不気味に感じる。すると、今まで光となって消えた筈のアイムの分身達が巻き戻されるビデオ映像の様に再生され、復元していく。

これもスフィアの力か、物理法則を無視した力を見ながら、シュウジは再び現れるアイム達を前に一度深呼吸をする。

この分ではどんなに倒してもキリがない。本体であるアリエティスを倒し、元を断と

うとするが……それを読んでいたのか、今度も１２の分身達がシュウジに向かって一斉に攻撃を仕掛けてきた。いや、その中にはアイム本人も紛れ込んでいる為、実質１３対１。数からして圧倒的に不利な状況、避ければ近くにいるアヴァロンにまで被害が及んでしまう為、やむなく受ける事を選択したシュウジはグランゾンに剣を盾代わりにするよう命じ、１３もの攻撃を受けきるよう指示した。

襲い来る刃の嵐、一つ一つがグランゾンの装甲を削ろうとしてくるが、生憎グランゾンも陰月での戦闘を経て出力が上昇しており、歪曲フィールドは更に強固となっている。迫り来る死の刃を浴びておきながらも、遂に無傷同然で耐えきって見せたグランゾン。僅かに見えたアイム達の攻撃の合間の隙を突き、今度は此方の番だとシュウジは目の前の空間にワームホールを展開させる。

『アイム、お前言ったよな？　俺は仮面を被って人を騙してるって、確かにその通りだよ。俺は自分がグランゾンに乗っている事を知られるのが嫌で蒼のカリスマなんてダッサイ名称を名乗ることになった。……けどな』

無数のワームホールがアイムとアリエティス達の周囲に展開される。そこから現れては消え、現れては消えるを繰り返していく内に、グランゾンの姿はやがて二つ四つと増え始め……。

『今の俺は、結構この格好が気に入ってんだよ！　好きでこの格好してるんだ！　人の

趣味に他人がイチイチ口出ししてんじゃねぇぇぇっ！』
『がっあぁぁぁぁっ!?』

魔神グランゾンによる乱舞の剣撃。無数に湧き出るグランゾンの攻撃を受け、最後には光の槍で刺し貫かれるアリエティス達は爆発して消滅。本体であるアイムとアリエティス（真）もボロボロの姿となって地面に落下。シュウジはアリエティスが唯の鉄屑に成り下がった状態を目の当たりにするが、念の為にと奴から目を離さないようゆっくりと下がりながらアヴァロンに近付き、ロイド達と通信を繋いだ。
『どうですかロイドさん。アヴァロン、動かせそうですか?』
『そんな急には無理。今漸く消火作業が終わって防御システムを作動させた所、戦闘にはどうやっても間に合わないよ』
『いえ、無事ならそれだけで構いません。寧ろその場で防御に徹することを専念して下さい。幸いここはフレイヤ弾頭の射程範囲外の様ですし、余波だけ気を付けてくれれば……』
『そ、そんな事よりも……アレ、やっつけたんですか?』
『セシル君、それ今言うと色々拙いと思うんだけど……』
残骸となったアリエティスを見てアイムを倒したのかと思ったセシルだが、彼女がそ

の一言を口にした瞬間、アリエティスの胸部付近から眩い光が放たれ、次の瞬間には……無傷のアリエティスがその場に立っていた。

倒した筈なのに次の瞬間には無傷にまで再生されている。修復とかそんなレベルの話じゃない事象を目の当たりにし、シュウジは勘弁しろと内心呟く。

『理解していただけましたか？　既に次のステージに達しつつある私の力の前には如何に魔神といえど無力。貴方では所詮かませ犬程度の役割にしかならないのですよ』

力で勝っていても、無限に思える奴の力の前では今の自分とグランゾンでは無理がある。このまま戦えばいずれは封殺されてしまう以上、手段は選んではいられない。

〝ネオ〟アンチスパイラルと戦った事で得られたグランゾンの本来の力を発揮させる。そうすることで一気に畳み掛けてしまおうとシュウジがその詠唱を唱えようとした……その時。

『蒼き魔神よ、悪いけれど彼のスフィアは僕が狩らせて貰う。手出しは無用だよ』

突如、空から飛来してくる黒い影。鴉を模した機動兵器がグランゾンとアリエティスの間に割って入って来た。

アサキム＝ドーウィンとシュロウガ。彼等の乱入により戦線は更に混迷する事になる。

その５３　前編（仮）

『……いきなり出て来ておいて随分勝手な事を口にするじゃないか。ええ？　アサキム＝ドーウィン』

アイム＝ライアードという乱入者によって混乱しつつある戦場。唯でさえシュウジとグランゾンが手を焼いている所に、アサキム＝ドーウィンという新たな乱入者の出現により、戦線はより混迷していく。

アイムのアリエティス、アサキムのシュロウガ、そしてシュウジのグランゾン。この三機の機体による三竦みの様な状況を、遠くでアヴァロンを修理しているロイドとセシルは生唾を呑んで見つめていた。

いつ戦い始めてもおかしくない。そんな張り詰めた空気の中、シュウジはアサキムを問い詰める。遠回しに邪魔をするなと言うシュウジに、アサキムは笑みを浮かべて答えて見せた。

『悪いが、今の君では彼の相手にはならないよ。彼の使うスフィアは〝嘘〟を司る代物

だ。仮に超火力で粉砕したとしても、次の瞬間には再生しているだろうさ』

『……』

『尤も、真の姿に戻れば話は別だけれどね。如何にスフィアといえど天地開闢の一撃には耐えきれないだろう。けどね、だからこそ困るんだ。全てのスフィアはいずれ僕が狩るモノ、太極に至る前に欠片を壊されてしまったら、僕の道も閉ざされてしまうからね。それだけは防がないといけない』

『お前、やっぱり……』

知っていたのか。〝ネオ〟へと至り、新たな力を手にしていた事を。知られていた事に対し、シュウジは動揺する事なく睨み付ける。

相変わらず此方の事はお見通しな奴を気に入らないと思いながらも、シュウジは焦らずシュロウガの動きを警戒する。

元より目の前の男と機体はアイムよりよほど得体の知れない存在だ。何を考えても無駄というのなら、どんな奇襲を仕掛けられても対応出来るよう常に気を張っていた方が賢明だ。

『フフフ、呪われし放浪者よ。アナタにそれが出来ますか？　大罪を犯し、死ぬことも許されない罪人のアナタにこの高まった力を持つ私を葬ることなど――』

『……確かにね。君の因子の高まりは予想を上回っていたよ。しかし、何事も絶対は存

在しない。君も知っているだろう？　スフィアにはそれぞれ因果関係が存在している。インサラウムの皇子とクロウ＝ブルーストがそうであるように』

『っ！』

『あの皇子とクロウさんに……因果関係だと？』

不敵な笑みをこぼしながら説明するアサキムにアイムの表情が僅かに曇る。スフィアに関する新たな謎にシュウジが混乱する中、シュロウガから光が放たれる。

『君のスフィアを狩る前に、まずは君に罰を与えよう。〝知りたがる山羊〟よ、奴の嘘を暴け！』

光が強烈に放たれシュウジが目を眩ました次の瞬間、シュウジの目の前にはある映像（ヴィジョン）が映し出される。どこかの研究機関の一室かと思われるその場所に、奴はいた。

『イヤだ、今のポジションを失うのはいやだ！　折角嘘を吐いてまでこの席に座れたというのに、それを失うなんてイヤだ!!』

そこには自分の知るアイム＝ライアードではなく、ハーマル＝アルゴーと呼ばれる青年がみっともなく喚いている姿が映し出されていた。より高い地位に登り詰める為、他者より優遇されたい為に、嘘を吐き、嘘を続け、その果てに得たスフィアの力。

〝偽りの黒羊〟嘘を重ねることによって戻る事が出来なくなった男、それがアイム＝ライアードの正体だった。

ほんの一瞬の出来事。刹那的な合間に見ていた映像が終わると、そこには凄まじい力を発揮していたアイム＝ライアードの姿などなく……

『ち、違うんです教授、私は完璧な人間なのです。う、嘘など吐いておりません！　私の言う事を信じて下さい！』

必死に過去に縋るハーマル＝アルゴーの姿があった。嘘や虚飾を祓い、強制的に真実を暴く〝知りたがる山羊〟これがアサキムの持つスフィアの力なのかと、シュウジは仮面の奥で一滴の汗を流す。

相反するスフィアの力で力を失ったアイム。今こそスフィアを狩る時だとアサキムはシュロウガを走らせようとするが……。

『やらせん！　我がインサラウムの仇である奴は私が討たせてもらう！』

新たに現れる別の機体。インサラウムの王であるユーサーの突然の乱入にシュウジやアサキムが一瞬驚くが、その合間にユーサーの聖王機はアイムのアリエティスの間合いにまで踏み込み。

『我が民達の怒り、思い知るがいい!!』

『っ!!!』

一閃。横に薙いだ一撃にアリエティスは両断され、アイムは悲鳴をあげる事なく機体の爆発と共に消滅していった。呆気ない幕切れに一瞬惚けてしまうが、インサラウムの

親玉が出て来た事により状況は更に緊迫したモノとなる。
息継ぐ暇もない。そう思いながらも、シュウジはアサキムとユーサー、それぞれの動きを見逃さないよう警戒を続けている。
するとどうだろうか、爆散するアリエティスから淡く光る何かが出てくると、聖王機に吸い込まれる様に消えていくではないか。あの光がスフィアと呼ばれるモノなのだろうか？　初めて目の当たりにするスフィアというものにシュウジが驚いていると、グランゾンのモニターがある部隊の接近を感知する。
（これは……ＺＥＸＩＳか。まだ完全に機体調整が終わっていない筈なのに無茶をする）
だが、正義感の強い彼等の事だ。世界の命運を握る戦いが起こっていると言うのならば、黙って見ている事なんて出来はしないのだろう。
『我が民達よ。ひとまず、我等の祖国の仇は討った。今は眠るといい』
『見事でしたよ陛下、ユーサー＝インサラウム。アナタが彼を討った事によりアナタの世界の民は安心して眠れる事でしょう。アナタのスフィアの覚醒には彼も随分と手間取ったみたいだからね』
『こんな、こんなものの為に我が国が、民達が……』
『だけど気にする事はない。それはアイム＝ライアードがやらなくても僕がやっていた

事だ。どちらにせよ、君の国が滅亡する事には変わりはないよ』
『この、悪鬼めが！』
『……』
　ケタケタと笑いながら挑発するアサキムにユーサーは憎悪を持って睨みつける。一つの国を滅ぼす事になんの抵抗も感じていないアサキムを悪鬼と呼ぶユーサーは間違っていない。シュウジも内心でアサキムを軽蔑しながら見つめていると、ここにはもう用がないのか、アサキムはシュロウガのバーニアに火を灯し始めた。
『では、またお会いしようユーサー＝インサラウム。次に会う時は君のスフィア〝尽きぬ水瓶〟と〝偽りの黒羊〟を狩ることにしよう。……そして』
『……あ？』
『魔神グランゾンとシュウジ＝シラカワ、君達との決着も近い内に付けるとしよう。僕がこの呪いから解き放たれる為に……』
　それだけを残してアサキムとシュロウガは戦場から離脱する。音よりも速く去っていく奴に声を掛ける暇もなく、残されたユーサーとシュウジはその場で立ち尽くす事しか出来なかった。
『……では、私も引くとしよう。蒼き魔神よ、そなた達とも何れ決着を付けよう』
　ほんの僅かな合間睨み合う両者、先に視線を逸らしたユーサーは仇を討てたことで目

的を達成出来た為、アサキム同様その場から去ろうとするが……。
『待てよ』
『……』
　シュウジによって呼び止められてしまう。自分の知る蒼のカリスマとはまるで違う雰囲気にユーサーは何となく気になったので聖王機の足を止めるが、次の瞬間、前以上の覇気を纏う魔神に一瞬寒気を感じた。
『……お前が皇子で、今は王様で、それがどんなに大変で決意の要る立場なのかは俺には分からない。けどな、どうしてもお前に言っておきたい事がある』
『……』
『覚悟って言葉はあくまで言葉に過ぎない。何でもやっていいという免罪符じゃないって事、覚えておけよ』
『……覚えておこう』
　シュウジから告げられる警告を受け、刻む様に頷くユーサー。次元転移で去ろうとする彼を追おうとせずに見送りながら、シュウジは消え行く聖王機とユーサーの背中を見つめ続けていた。
　と、そんな時だ。ふと感じた視線に振り返ると、一瞬赤い髪とデカい図体が特徴な〝奴〟の姿が見えた気がした。だがそこには何もなく、何の変哲もない大地があるだけ。

気の所為だったのだろうか？　幻を見た自分に疲れているのかと不安に思ったその時、ダモクレスの方角から大規模なエネルギー値を観測し、次の瞬間桜色の光が戦場の一部を呑み込んだ。
『今の、フレイヤ弾頭か！』
『ランスロット、蜃気楼、ジークフリート、そしてフロンティアの全機の無事を確認、ですが！』
『殿下がその気になった以上、長引かせるのは危険じゃないかな？』
『分かりました。では自分も敵を殲滅しながらルルーシュ君達と合流します。ロイドさん達はその間にアヴァロンの修復を急がせて下さい。場合によっては戦域からの離脱も視野に入れての行動を』
『はいは～い』
『了解です』
　ロイド達に最後の指示を伝えると急いでバーニアを噴かせ、ルルーシュ達と合流すべくグランゾンを加速させる。アサキムやユーサー、そしてスフィアと、色々考える事が増えた気がするが、今はそんな事を言っている場合ではない。
　この戦いを止める。友人であるシュナイゼルを止める為、シュウジは残りの敵戦力を潰しながら彼等の元へ急ぐのだった。

その５３　中編

エリア１１のフジ周辺。蒼のカリスマであるシュウジ＝シラカワと彼の操るグランゾンを筆頭に、シュナイゼル軍に決戦を挑む事になったゼロ達。圧倒的戦力差があったにも関わらず食らいつき、遂に相手戦力の半数を叩く事に成功した。

グランゾンという強力な囮を使った事もあるが、ゼロの知略とスザクの戦術、そしてそんな二人を守る様に戦うジェレミアとＣ．Ｃ．の活躍もあり、四機という少数精鋭でシュナイゼルの軍勢と対等に戦える様になっていた。

不利になればその度に底力を振り絞って立ち上がるゼロ達、その活躍もあって遂に戦いは最終局面を迎えようとしていた。そんな中、遂にシュナイゼルが最後の切り札を切ってきた。

ダモクレスに搭載されたフレイヤ弾頭を用いての攻撃。直撃はなくとも余波だけで機体にダメージを与えかねない衝撃に、ゼロが築き上げた陣形が僅かに崩れ始める。

『シュナイゼル、このタイミングでフレイヤ弾頭を使ってきたか！』

『拙いな、今のフレイヤの衝撃で効果範囲領域まで押し出されてしまったぞ』
　強引な手段でごり押ししてくるシュナイゼルにゼロは仮面の奥で表情を歪ませる。早く陣形を立て直してダモクレスの懐まで潜り込もうと指示を飛ばすゼロだが、そんな事はさせないとばかりに帝国最強の騎士達が襲い掛かる。
『アナタの相手は私』
『モルドレッドか！　こんな時に！』
『ゼロ様！』
『おっと、アナタの相手は私がさせていただこう。ジェレミア卿』
『ラウンズか、いつにも増してしつこいな』
　蜃気楼をハドロン砲で追い込んでいくアーニャのモルドレッド、助けに行こうとするジェレミアとC．C．だが、二人の前にジノのトリスタンが立ちはだかる。
『今回が我々ラウンズの最後の戦場になりそうなのでな、未だ私の胸中に迷いはあるが、それでもラウンズとしての意地がある。魔神が来る前に君達を先に片付けさせてもらう！　ブリタニアの為に、そして、私の騎士道を貫く為に！』
『成る程、それが君の忠義という訳か。ならば私も相応の覚悟を持ってお相手しよう。ゼロ様の為に、受けよ！　忠義の嵐！』
　トリスタンの下にジェレミアのジークフリートが突貫していく。この隙にゼロの下

へ急ごうとするＣ．Ｃ．だったが、ジェレミアだけでは抑えきれないのか、トリスタンのハーケンがＣ．Ｃ．に向けて放たれていく。

『行かせないよお嬢さん。紅月カレンじゃないのが些か不服だが、ここは戦場だ。そして戦場である以上、我々の敵であるなら容赦はしない！』

『やれやれ、カレンと私を比べられても困るな。それに、奴に言われなかったか？　しつこい奴は嫌われると！』

本当ならゼロの下へ駆け付けたい所だが、状況がそれを許さない。仕方ないと内心で舌打ちをしながら、Ｃ．Ｃ．もトリスタンに向けてフロンティアを走らせる。青とオレンジとピンク、それぞれの機体色が戦場を駆け巡る一方で、ナイトオブワンことビスマルクとスザクの戦いが佳境を迎えていた。

弾ける白と紫のＫＭＦ。一見互角に見える戦いだが、戦局は僅かにスザクが押されていた。機体性能ではランスロットが上回っているのに、ここぞという所で返される。まるで動きが読まれているかの様に対応してくるビスマルクにスザクは額から冷や汗を流していた。

『どうして、僕の動きが!?』

『我がギアスは未来を読む！　如何に機体性能が優れていようと、我が目から逃れる術はない！　しかし、まさかマリアンヌ様以外にこの目を使うことになるとはな！』

『ぐっ！』

ビスマルクもギアス能力者という新たな事実に驚くが、今はそれどころじゃない。このまま行けば如何にランスロットが優れていようとパイロットの差で追い込まれてしまう。ここまで来て負けてなるものかと思っても、その上で動きが読まれては意味がない。

と、そんな時だ。スザクがビスマルクと戦っている最中、コックピット内にあるモニターにダモクレスからの強制通信が割って入ってくる。それは先程からゼロの蜃気楼に通信を入れてきているナナリーとゼロの会話内容だった。

『ゼロ。アナタに聞きたい事があります。どうして黒の騎士団なんて組織を作り上げたのです？　どうして今の世界を壊そうと戦いを始めたのですか？』

『……簡単な事だ。それは今の世界が間違っているからだ。強者が弱者を虐げ、踏みにじり、一方的に搾取する。ブリタニアがそうだったように、三大国家、そして国連、アロウズも、世界が誰かを傷つけるという事実が私にとって許されない事だからだ。そして、それはアナタにも言えることだ。第９９代目皇帝ナナリー＝ヴィ＝ブリタニア、フレイヤ弾頭という力で人を縛り付ける行為を私は絶対に認めはしない！』

『ならば、ギアスという力はどうなのです？　アナタは力で縛る事は許されないと仰いますが、アナタはこれまでギアスという力で人の意志をねじ曲げてきました。それは力

で人を縛り付けるよりもずっと卑劣な行為なのではないのですか？』
『……成る程、確かにアナタの言うとおり。私はこれまで多くの人の人生を変え、運命を歪めてきた。もし世界が私を許さないというのなら潔く罰も受けましょう。しかし、今はその時ではない！　消えていった数多の命に報いる為にも私は止まる訳にはいかない！』
『っ！　卑怯です！　アナタはそうやって一人でなんでも分かったフリをして、嘘を吐いて、騙して、上からモノを言う。そんな人の言葉を今更どうやって信じろというのです！』
ゼロの決意の籠もった言葉にナナリーが激しく反応する。最愛の兄に騙され、嘘を吐かれ、それでも信じたいという彼女の思いには深い怒りと悲しみが込められていた。
自分の所為で兄が起こした。ギアスという力を手にし、黒の騎士団という組織を作り、ＺＥＸＩＳに参加し、戦い、そして世界を壊していった。
全ては足が動けなくなり、目が見えなくなった自分の所為だ。弱い自分の所為で兄は罪を作り、重ね、遂にはユーフェミアやクロヴィスという腹違いの兄妹さえも殺させてしまった。
これ以上兄に罪を重ねて欲しくない。そう思ってせめて決着は自分の手で付けようと、シュナイゼルからダモクレスの鍵を受け取った。ゼロ――否、ルルーシュに譲れ

ない決意があるように、ナナリーにもまた譲れない思いがあった。

『……確かに、これまでの私は上から人を見る事が数多くあった。人を駒と見定め、結果さえ良ければそれでいいと思った。その為に多くの犠牲を払い、ＺＥＸＩＳすらも私の駒にしようとした。けれど、戦いの最中で私は気づいた。戦いは人を傷つけ、破壊する。だけど壊しているのは人で直すのもまた人なのだと。結果は確かに重要だ。けれどそれと同じ位過程もまた大事なのだと、私は漸く理解した。何をもってその過程が正しいかは分からない。けれど、今の私には分かる。喩えどんな理由があろうとも、アナタのやり方は間違っていると！　世界が明日を迎える為に、ナナリー＝ヴィ＝ブリタニア。アナタは私が止める。止めてみせる！』

『……お兄さ――』

　最後の一言を呟く前にナナリーとの通信が途切れる。恐らくはルルーシュが自分で切ったのだろうが、それでもナナリーの悲しげな表情が瞼から消える事はなかった。

『スザク、聞こえるか？』

『……あぁ』

『俺は、お前に対して決して許されない罪を犯した。お前に対してだけじゃない、世界中の人間から許されない罪を、俺は繰り返してきた』

『俺も、何度も君を裏切った。皇帝に君を売り、ラウンズになって、ナナリーを利用し、君を苦しめた。アロウズに加担して、立場を利用して、俺は何度も許されないことをしてきた』

『けれど、……いや、だからこそ俺達は生きながらこの罪を贖わなければならない。生きる事も戦いなのだと――――悔しいが、俺は奴との出会いで理解した』

『時たま、とんでもないことに巻き込んだりするけどね。女装とか』

全くだと、モニターの向こうでルルーシュは仮面の奥で嘆息する。ムカつく奴だと、ふざけた奴だと思いながらも、それでもルルーシュは彼の事を認めていた。無自覚に他人を巻き込み、翻弄し、バカの様にはしゃぐ、端から見ればなんてことないただの人間のようで……。

けれど、そんな人間がたった一人で世界と向き合い、罪を擦り付けられても戦い続け、そんな彼の姿勢がスザクとルルーシュの二人の中に、ある事を刻みつけた。

〝生き続ける〟喩えどんなに無様でも、最後まで生き抜いて世界の為に戦っていく。どんなに非難罵倒を言われても、どんな結末が待っていようと、最期の瞬間まで罪を償い、生き続ける。

彼と共に世界を巡ってルルーシュは見た。世界の人々は不安に駆られ、怯え、苦しみながらも、それでも明日が欲しいと願っている。

旅の中で出会った人々を通じて、スザクは知った。嘘や偽りで人を騙しても、その人の本質が変わる事はない。ユーフェミアという大切な人が失われても、親友との絆が壊れても、やり直す事が出来るという事を。

〝許されない事なんてきっとない。許されないのは……きっと、その人が許したくないだけなんだよ〟

自分に人を許す大切さと難しさを教えてくれた学友の言葉を思い出す。人を許すのは難しいけれど、それでも彼女はルルーシュを許す事が出来た。

今の自分にはまだ難しい事かもしれない。けれど、この瞬間だけは彼を……親友を信じてみたいと思う。嘘で塗り固めた親友を、それでも明日を願う親友を、もう一度――。

『スザク、世界が明日を迎える為にも、俺達が明日を願う為にも――』

『あぁ、その為にも俺達は――』

『『生きる!!』』

信じる為に、〝生きる〟と決めた。

『な、何!? 機体性能がここにきて更に上がっただと!?』

突然の機体性能の著しい向上にビスマルクの目が大きく見開く。前とは違う飛行速度、前とは違う旋回機動、機体だけではなくパイロットも変わったかの様にランスロッ

トから繰り出される一撃が鋭く、そして重くなった。
ランスロットの剣によりビスマルクのギャラハッドが大きく仰け反る。隙を見せてはならないとすぐに体勢を整えるが……追撃はこなかった。
不思議に思うビスマルクだが、次の瞬間真っ正面から向かってくるランスロットの行動にビスマルクの頬がつり上がる。
『正面だと？　舐められたモノだな！』
正面から来ればギアスの力から逃れられると思ったのだろう。浅はかな、そう思いながらビスマルクは剣であるエクスカリバーを振りかぶり、迫るランスロットに合わせて振り抜いた。
正面だろうと自分の未来予知のギアスからは逃れられない。どんなに機体性能が上がろうとも、真っ正面からくる以上対策は取りやすい。寧ろ鬼籍に入ったのは貴様だと、ビスマルクは己の勝利を確信する。
……だが。
『ば、バカな……』
ここへ来て、更に速くなったランスロット。その速さに一瞬だけ対応の遅れたビスマルクはエクスカリバーと機体諸共、ランスロットの剣によって両断される。
（帝国最強の、唯一のナイトオブワンが破れるとは……奴は、ナイトオブワンすら越える

ナイトオブゼロとでも言うのか）

『マリアンヌ様……』

信じられないモノを見た。そう言いたげな表情のままビスマルクはギャラハッドと共に爆散。帝国最強の騎士、その更に頂点に君臨するブリタニアの騎士が敗北した瞬間だった。

戦況が一変する。帝国最強の騎士であるビスマルクの敗北により、ブリタニア軍は動揺し、著しく士気を低下させる。シュナイゼル軍の実質の大黒柱だった男の損失により、残ったラウンズであるジノとアーニャも驚き、動揺した。

『ヴァルトシュタイン卿が、やられた!?』

『スザク、急に強くなった?』

ナイトオブワンの敗北という事実に、僅かに隙を見せてしまった二人。ルルーシュは蜃気楼を高速飛行形態に変形させ、モルドレットの間合いから抜け出した。ジェレミアもジークフリートを突進させてトリスタンを体当たりで吹き飛ばすと、蜃気楼と入れ違う様にモルドレットの前に立った。

瞬く間に変わった戦況、C・C・はランスロット・フロンティアを蜃気楼の近くにまで走らせると、モニターでダモクレスの周囲に展開されているブレイズルミナスが解除されているのを認識し、急いでルルーシュに通信を送った。

『拙いぞルルーシュ、シュナイゼルの奴はこちらに向けてフレイヤ弾頭を撃とうとしているぞ！』
『シュナイゼルめ、ここで撃てばダモクレスにも被害が及ぶというのに、遂に形振り構わなくなったか！』
今、彼らの前にはダモクレスの砲塔が向けられている。そこからフレイヤ弾頭を発射すればルルーシュ達は勿論ダモクレスにまで被害が及ぶ筈だ。それでも構わないのか、ダモクレスからフレイヤ弾頭が発射され、桜色の光が圧縮を開始した。
このままでは全員がフレイヤ弾頭による爆発で諸共消し飛ばされてしまう。目の前で輝きを放つフレイヤを前にルルーシュは切り札であるあるモノの使用を決意した。
機体に取り付けられた一本の槍、そこにプログラムを入力すると近くで待機しているスザクを呼び寄せた。
『スザク！』
『分かってる！』
蜃気楼から渡される槍を手に、ランスロットは眩い光を放つフレイヤに向けて投擲した。一寸の狂いもなく光の中心部分に投げ込まれて槍はそのまま融解し、フレイヤの光と共に消滅した。
一瞬惚けてしまうシュナイゼル軍。爆発間近だと思われたフレイヤ弾頭がランス

ロットが投擲した槍と接触した途端に変化を起こし、爆発することなく消滅してしまった。

未だ理解出来ていないシュナイゼル軍に対し、ルルーシュは心の底で安堵した。ここにはいない元学友の手伝いもあって作られた対フレイヤ弾頭の消滅プログラム。彼女の協力とスザクとのコンビネーションがなければ成り立たなかった現在の状況に、ルルーシュは内心で感謝した。

（感謝するニーナ、君のお陰でフレイヤ弾頭を封じる事が出来た！）

自分を憎んでいながら、それでも協力してくれたニーナという少女に惜しみない感謝をするが、時間は既に残されていない。フレイヤ弾頭発射の為に開いたブレイズルミナスの穴はルルーシュ達の侵入を察して再び閉じようとしている。

そうはさせるか。ルルーシュは蜃気楼を駆り、絶対守護領域を展開することでブレイズルミナスの修復を妨ぎ、そこへスザクとC．C．を通し、自身もダモクレスの内部へと突入する。

ダモクレスにルルーシュ達が突入した為、飛行型の要塞は防御の為に展開していたブレイズルミナスを解除し、ブリタニア軍を招き寄せようとするが、彼等の前に忠義の徒であるジェレミア＝ゴットバルトが立ちはだかった。

全ては主であるルルーシュに忠義を通す為、ジェレミアは未だ数の多いブリタニア軍

に対し単騎での殿を努めようとしていた。
『ここを通りたければ、私を倒して行くがいい。ただし、その為にはこのジェレミア＝ゴットバルトの忠義の嵐を見事受けきってみせよ！』
一機たりとも行かせはしない。その気迫の前にブリタニア軍の戦意は更に縮み始め……。
『漸く追い付きました。待たせてしまい申し訳ありません。ジェレミア卿』
蒼き魔神、グランゾンも参戦。目の前にはたった二機しかいないのに……何故だか、もの凄く高くて分厚い壁が出来た様な気がした。

◇

――――ダモクレス内部。

飛行要塞の頂上付近。日本風に言えば天守閣と呼べる部分に彼等はいた。ブリタニアの第二皇子であるシュナイゼルと第二皇女のコーネリア、シュナイゼルの文官であるカノンと元ジャーナリストであるディートハルト。

そして、彼等の中心に立つ第９９代ブリタニア皇帝であるナナリー＝ヴィ＝ブリタニア。彼等と相対する為に現れたのは黒の騎士団の元総帥ゼロ。

ここに来る合間、待ち構えていた敵の兵によってスザクと分断され、仕方なく単独でここに来ることになったゼロは事実上の孤立。誰からも助けを求められない状況の中、一人で彼等と対峙する事になった。

「残念だったねゼロ。いや、我が弟ルルーシュ。枢木スザクと分断された今、君に勝ち目はない。フレイヤを無力化した事は予想外だったけれど、その快進撃もここまでだ。ダモクレスの内部に侵入した事で勝機を得たつもりのようだけれど、逆に君達はこれで逃げられなくなった」

「……成る程、私を捕まえた後ダモクレスをフレイヤで自爆させようという事ですか。しかし宜しいのですか？　そうなればアナタも死ぬ事になりますが？」

「決死の覚悟を持っているのが自分だけだと思わない方がいい。この戦いを始めた時から私は命を捨てる覚悟をとうにしている。君達と共に朽ちる事で新しい時代を迎えようじゃないか」
　微笑みと共に懐から取り出した銃口をルルーシュに向ける。狙いを定めて外さないシュナイゼルにルルーシュは仮面越しにフッと笑みをこぼした。
「成る程、死ぬ覚悟は出来ていると仰るか。しかし、生憎私にはそんな覚悟などありはしない。ここで死ぬつもりも、死なせるつもりもない」
「みっともないな。自分の罪とは向き合わず、無様に生き恥を晒すつもりかい？」
「あぁ、その通りだ。無様に生きていき、その上で世界の為に戦う。アナタには詭弁としか聞こえないようだが、私はこの道を往く事を決めた。故に、私はまだ死ぬわけにはいかない」
「……そうか、では私がその道を閉ざしてあげよう。兄として、そしてブリタニア皇族として、君を倒す事で君の犯してきた罪の精算を果たす事にしよう」
　手にした銃の引き金に指を掛ける。無情に、そして冷徹に引き金を引こうとするシュナイゼルにゼロは言葉を口にした。
「……命を捨てるか、以前の私にもそんな覚悟があった。どんな事をしても世界を破壊し、新たに造り直そうと何度も考えた。しかし、その度に肉体言語で教えられたよ。命

を捨てる暇があったら、その命で何かを為せ、そういってアイツは私にプロレス技を仕掛けてきた。さて、アナタの場合はどうだろう？」

「……なに？」

ゼロの言葉を訝しげに思った時、シュナイゼルの肩がポンポンと叩かれる。何だと思い振り返り、そこで彼が見たモノは……。

「ヤッホ♪」

もう一人の仮面の男、蒼のカリスマがそこにいた。まるで友人と会った様な軽快な口調、仮面越しでも笑っていると分かる彼の姿を目の当たりにした次の瞬間――。

「ちょっと痛いから歯、食い縛れよ？」

握り拳が目の前に広がった瞬間、シュナイゼルの頬を衝撃と痛みが貫き――彼の意識は一瞬途切れる事になる。

ブリタニアの第二皇子、シュナイゼル＝エル＝ブリタニア。ブリタニア帝国の宰相と呼ばれる彼は錐揉み回転をしながら宙を舞った。

その５３　後編

ズドゴン！

空間に重い打撃音が響き渡り、その次の瞬間全員が目にした光景に誰もが言葉を失った。ダモクレス内の天守閣部分に設置された庭園で、ゼロと目の見えないナナリーを除いた全ての人間が声も出せずに呆然としていた。

頬を殴られ、宙を舞うシュナイゼル。綺麗な放物線を描き、地面に落下するまでディートハルトにカノン、そしてコーネリアの三人は目をこれでもかと剥いて驚きを露わにしていた。

地面に落ち、ピクピクと痙攣するシュナイゼル。恐る恐る振り返った彼等が目にしたのは、ゼロと同じく仮面を被って己の素性を隠した男、蒼のカリスマが拳にプスプスと煙を立ち上らせて佇んでいた。

何故奴がここにいるのか、混乱する思考の中そこまで考えが纏まらないコーネリア達。そんな彼女達の気持ちを代弁するかの様に、ゼロが言葉を発した。

「随分早かったな、蒼のカリスマ。外の戦力はもう粗方片付いたのか？」

「いや、実はＺＥＸＩＳ達が途中で参戦してきてね。ラウンズを倒した後は彼等に任せ

てきた」
「ジェレミアは？」
「何でもラウンズのＮｏ．６がギアスを掛けられているみたいな事を言っていたからね、彼女をギアスの呪縛から解放した後はアヴァロンの方に連れて行って様子を見るつもりみたいだよ」
「そうか。で？　何故お前は一人でここまでこれた？　この要塞内部にはまだ数百という兵がいた筈……いや、お前にこの話をしても無駄だな。結果お前はここにいる。それだけで納得する事にしよう」
「いや、私の方が納得できないのだけれど……」
　一番肝心な事を勝手な理屈で納得するゼロ。そんな彼に、同じく仮面を被る蒼のカリスマは何やら不満気な様子。そんな親しい間柄の様に会話をする二人に、文官であるカノンはいち早く我を取り戻し、蒼のカリスマに向けて銃を抜き放った。
「貴様、よくも殿下を！」
　そんな彼の一言により漸く我に戻ったディートハルトとコーネリア、二人もゼロと蒼のカリスマにそれぞれ銃を向けるが、向けられた本人達は気にした様子もなく会話を続けている。
「しかし、あれは幾ら何でもやりすぎてはないのか？　……下手をすると死んでいたぞ」

「死ぬ覚悟があるという人間ならあれはあれで本望だろう？　……まぁ、ちゃんと手は抜いたさ、二割程は。それにこっちはあのトレーズ閣下と殴り合った事もある。今更皇族の一人や二人殴っても、大して臆したりしないよ」

「……」

ブリタニア皇族の中でも最も皇帝に近いとされてきた人物を殴り倒して、悪びれた様子のない蒼のカリスマ。だが、その前に語られるトレーズと殴り合ったという話を初めて耳にするゼロは言葉を失い、先程のコーネリア達と同様絶句していた。

トレーズと言えばＯＺの元総帥であり、世界に大きな影響力を持った人間だ。その人物と平然と殴り合いをしていたと語る目の前の男に、ゼロは何だか頭が痛くなってきた。つくづく目の前の男が分からない。蒼のカリスマ……いや、シュウジ＝シラカワという男がこれまでこの世界をどの様にして生きてきたのか、尽きない悩みに頭を痛めていると、倒れていたシュナイゼルが反応を示した。

ピクリと指を動かして目を覚ました後、ゆっくりと起き上がる。頬を大きく腫らして何が起きたか分からず混乱しているシュナイゼルに、蒼のカリスマは銃口が向けられているにも関わらず、彼の元へ歩み寄った。

「よぉ、目、覚めたみたいだな」

「私は……そうか、私は負けたのか」

蒼のカリスマとしてではなく、シュウジとしてシュナイゼルの元へ歩み寄り、未だ立ち上がれていないシュナイゼルに近付くと、シュウジは彼と同じ視線の高さになるよう身を屈めた。

何となく自分がどうなったのか、ゆっくりと思い出したシュナイゼルは苦笑いを浮かべると共にうなだれる。

「ここに来る途中でダモクレスの自爆装置は解除してきた。ここに駆けつけてくる予定の他の兵力もスザク君とC．C．さんが対応しているし、それももうじき片が付く。シュナイゼル＝エル＝ブリタニア、アンタの負けだ」

「フフフ、意外と容赦がないんだね、君は」

抵抗は無駄だと遠回しに囁くシュウジに、シュナイゼルは乾いた笑みを浮かべた。漸く見つけた勝ちたいと願った相手には一蹴され、再び目的を見失ったシュナイゼルはその瞳に光を失い、力なく笑い続ける。

目的もなく、執着もなく、あるのは人に求められ、それに応えるだけの器。それが自分の本質なのだと、シュナイゼルはシュウジと出会うことで理解した。けれど同時に、そんな自分を変えられる切っ掛けを見つける事が出来た。

シュウジ＝シラカワという人物と出会う事で、己の本質を知り、それを変えたいと願った。空っぽの器ではなく、中身のあるナニカになりたいと、シュナイゼルは願った。

その為に国連への宣戦布告という餌で彼を招き、自分の全てを駆けて彼に挑んだが……結果は敗北。

どんなに手を尽くしても、インサラウムという地球人類の敵側の力を借りるという手段を選ばないやり方を持ってしても、目の前の魔人には届かなかった。漸く見つけた目標が遙か遠く感じる。これほどまでに力の違いを見せつけられたシュナイゼルは……ただ一言、今回の戦争を引き起こしたけじめとしてある言葉を口にした。

「――――殺したまえ」

「……あ？」

「私には今回の戦争を引き起こした責がある。君という人間に打ち勝ちたいが為にナナリーを利用し、多くの人間を巻き込み、死なせていった。敗北した私にはそれらの責任をとる義務がある」

「……」

己の欲を満たす為、目的を達成する為に他者を巻き込んだ。大きすぎる罪を自身の命でもって精算しようと死を覚悟し、目を瞑る。そんなシュナイゼルにシュウジは呆れた様に溜息を吐き、やれやれと肩を竦めた。

「なんでかなぁ、どうして頭の良い人間ってのはこう難しい事ばっかり考えるかな？もう少し肩の力を抜いて物事を考えてもいいと俺は思うんだけどなぁ」

「……え？」
「以前にもそこのゼロに言ったけどさ、責任という言葉で命を捨てる事でそれらを片付けようとするのって、一見筋を通しているみたいだけど実はスゲェ汚い事なんだと思うのよ。だって自分が死んだらその後の事はどうするつもりだよ？　他の連中に任せて自分はハイさようならって、それは虫が良すぎるんじゃね？　本当に責任感じてるのなら、簡単に放り投げないで自分なりに償っていけよ」
「……」
「あ～、それになんだ。アンタが俺に勝ちたくてこの戦争を始めたと言うのなら、俺も少しくらい手を貸すよ。それに勝負したいというのならまた相手してやる。こんなまどろっこしいやり方じゃなく、もっと別の方法で」
「別の……方法？」
「チェスとか将棋とか、オセロを始めとしたテーブルゲーム、他にも釣りやボウリング、カラオケの点数を競ったり、そんな庶民なら皆知ってそうなものでさ。戦争なんて物騒なやり方じゃなくたって、俺個人と勝負したいのなら方法は探せば幾らでもあるんだよ」
「それは……気付かなかったな」
「マジで？　……やっぱ皇族ってそういうの厳しいんだな。兎に角、今回の一見で色々

ケジメをつけたらさ、その時は相手をしてやるよ。チェスでもオセロでも、トコトン付き合ってやるからよ」

「……ありがとう」

敵わない。容易く人の覚悟を壊し、次の道を指し示す彼に、シュナイゼルは心底自身の負けを痛感した。友人として自分の前に立ちはだかり、友人として自分を殴り止め、友人として対話してくれた。

どれもこれも嘗ての自分では得られなかった事に、シュナイゼルは敗北しながらも、どこか満足感を感じていた。

シュナイゼルとシュウジ、二人の対話が終わりを迎えた頃、ゼロと、彼の元に辿り着いたスザクとＣ．Ｃ．は、コーネリアとナナリーを前に最後の問答を迎えようとしていた。

「お兄さま……いえ、ゼロ。アナタは贖罪を続けると仰いましたね。嘘を吐き続け、人を騙し、偽り、操り、時にはそのギアスで人を無理矢理従わせてきた。――ユーフェミアお姉さまのように、そんなアナタに最早味方する者はいません。後ろ指を指され、決して救われる事のないその道を、アナタは往くのですね？」

「無論です。私はもうこの道から逃げるつもりはありません。全ての罪が赦される時が来るまで、私はゼロであり続ける。ナナリー陛下、もう二度とルルーシュ＝ヴィ＝ブリ

タニアがアナタの前に現れる事はないでしょう」
　それは別れの言葉だった。許されるはずのない贖罪の為に今後の己の人生をゼロとして生き続ける事を決めたルルーシュは、この瞬間をもってその名を捨て、実の妹の前で兄妹の縁を切ることにした。
　ナナリーの目尻に涙を溜める。それでも泣きはしないと気丈に振る舞いながら、彼女は……閉じていた目を開けた。
「っ!?」
「ナナリー、目が……」
「……シャルルのギアスを破ったのか」
　ギアスという絶対の力をたった一人の幼い少女が破った事実にルルーシュやスザク、C．C．すらも驚愕に目を見開いた。
　自分の罪から逃げない。そんな兄の強い意志に反応し、ナナリーも今後の自分の人生から逃げ出さないと心に誓った。その決意の下、前皇帝だったシャルルのギアスを破ったナナリーは、兄と同じ紫色の瞳で彼等を見据えた。
「……私は、世界に蔓延する憎しみをこのダモクレスに集めようと考えました。フレイヤという爆弾を用いて、人を従え、ギアス以上の力(ギアス)で無理矢理屈服させる。憎しみの象徴となる事で、人々の意志を一つにまとめようとしました」

（ナナリー、お前は……）

ナナリーの口にする〝憎しみの象徴〟それが嘗て自分が考えていた鎮魂歌（レクイエム）そのままだと気付いたルルーシュは、彼女に対する考えを改めた。

目の前にいる少女は自分が守らなければならない弱い存在ではない。一人で考え、自立し、世界に対して深い考えを持ち、そして……それに見合うだけの覚悟を手にしていた一人の女性だ。

いつの間にか自分の手元から完全に飛び立っていたナナリーに、ルルーシュは仮面越しに笑みを浮かべる。もう自分の助けなんて必要ない、強い決意と覚悟を持つ彼女にルルーシュは嬉しさと寂しさを味わう事になった。

「ですが、それはあまりにも勝手過ぎる考えです。世界の業を一人の人間が抱えられる筈がない。世界の業を抱えるには一人一人の人間が罪と向き合わなければならない。最後に私はアナタにそう教わりました――――お兄さま」

目元から一筋の涙を流し、仮面の男に笑いかける。最後になる兄への想いを口にするが……ゼロは、遂にその想いに応える事はなかった。

「枢木よ、お前はどうなのだ？　今後ルルーシュ……いや、ゼロと共にするのなら、お前はユフィの騎士として納得できたのか？」

「……正直、僕もよく分かりません。ゼロを、彼を信じたいのか、それとも許したくない

のか――――けど、今は少しでも彼を理解したいと思います。素直じゃなく、天の邪鬼みたいな男ですが、それでも僕は信じてみたい。彼と、もう一度やり直す為に。ユフィも、多分そう思っているんじゃないかなと思います」

「ふん、まるで私よりユフィを知っている様な口振りだな。――――もう良い。ユフィの汚名が晴れるのであれば、お前の気持ちなんぞどうでも良い。ゼロと共にどこへなりとも行くが良い」

コーネリアのその言葉に、スザクはありがとうございますと礼を言う。彼女もゼロを憎んでいた。最愛の妹を操り、殺し、虐殺の皇女として蔑まれる事に憤慨し、スザク以上にルルーシュを憎んでいた。

無論、今も納得はしていない。だが、自分も戦場で数多の命を奪ってきた人間であるならば、覚悟を決めた二人にとやかく言える筋合いはない。アロウズの非人道的なやり方のお陰か、ユーフェミアの汚名は世界から消えつつある。それにギアス饗団の本拠地が壊滅した以上、真実が晒される日も近い。そう思いコーネリアはこれ以上二人にとやかく言うのを止めた。

ひとまずの決着を終え、C・C・が安堵の溜息を零す。すると、シュナイゼルを担いだ蒼のカリスマがゼロ達に近付きながら声を掛けた。

「そっちも終わった？」

「あぁ、今終えた所だ」
「なら、さっさとここから出よう。自爆は解除したけど、まだこのダモクレスには大量のフレイヤ弾頭が乗せられている。早い内に脱出してこの要塞をどうするか考えよう」
「あぁ、そうだな」
「んじゃ、俺がシュナイゼルを運ぶとして……後の連中はどうする？　一応ここの兵士達はワームホールで無理矢理専用の脱出艇に乗せて逃がしたけど……」
「本当に用意周到だなお前は。そうだな、私がナナリー陛下を運び、スザクがディートハルト、Ｃ．Ｃ．がコーネリアとそこの文官を運べばいいだろう」
「うわ、さり気なく妹を守るとか……流石シスコンやる事に隙がねぇ」
「黙れ、単にナナリー陛下を乗せるには私の蜃気楼が一番安全と思っての選択だ。断じてお前に触れさせてなるものかとか、最後に存分に陛下の温もりに包まれていたいとか微塵も考えてない。あぁ、考えてないともさ！」
「実は未練タラタラだろお前!?　何、覚悟決めたんじゃねぇの!?」
　目の前で繰り広げられる仮面の男同士の醜い論争。こんな時にまで変わらない二人にＣ．Ｃ．は呆れ、スザクは苦笑い、コーネリア達は唖然としていた。
「フフフ、それがアナタの素なんですね。蒼のカリスマさん。いえ、シュウジさんと呼んだ方がいいでしょうか？」

「構いませんよ。てか、俺の事覚えていてくれてたんだ」
「勿論、アナタの事はあれからもずっと気にしていましたから――――兄を、ゼロを守ってくれて……ありがとうございます」
「まぁ、自分としては彼女の願いを聞き入れただけですし、そんな礼を言われる必要はないですよ」
「彼女？」
「今回の一件が終わったら、君も母校に一度帰ってみるといい。きっと、君達を待っていてくれる人間が必ず迎えに来てくれるからさ」
「はい、そうですね。近い内に必ず」
　きっと、この後の彼女は戦争を引き起こしたブリタニアの最後の皇帝の責任として様々な人間から非難され、政治的に裁かれる事だろう。そこには兄であるルルーシュの助けはないし、その後も彼女は可能な限り償っていくしかない。
　けれど、一人じゃない。彼女にはマリナ＝イスマイールやリリーナ＝ピースクラフトを始めとした数多くの友人が存在している。誰かの為に涙を流し、本当の意味で他人に感謝出来る彼女の事は、きっと人々も分かってくれる事だろう。
　勿論、その時は自分も手伝おう。シュナイゼルやコーネリアにも今後のナナリーの支えとなってもらわねばならないし、その際はゼロも影ながら手助けしてくれるだろう。

てゆーか絶対するだろう。シスコンだし、本人は何を言ったとしても最後は何かと面倒見るだろうと思うのは……果たして自分だけだろうか？

「……なんだ？　何故私を見る？」

「いや別に……それじゃ、そろそろ本当に行くとしましょうか。早くここから出ないとＺＥＸＩＳの人達まで乗り込んできそうだ」

「さっきからやたら落ち着きがないと思ったら、成る程それが理由か。よし、じゃあ私は通信で奴等にお前の居場所を知らせてやるとしよう。特に紅髪の二人にはリアルタイムで教えてやらねばな」

「止めて!?　あの二人なんだか最近俺を見る目に殺気籠もってるの分かってる!?　しかも最近は人の事ロリコン呼ばわりしてくるし、酷い目にあってるんだから！」

「因みに、二人にロリコン疑惑を植え付けたのはこの私だ」

「まさかの元凶発見!?　ねぇ、前から思ってたけどＣ．Ｃ．さんって俺のこと嫌い？　ねぇ嫌いでしょ？　この際だからはっきり言ってくれないかなぁ!?」

世界で最も恐れられている魔人が少女一人に翻弄されている。その様子をやはりコーネリアやカノンが呆然と眺めているも、ナナリーはクスクスと静かに笑っていた。

最初は憎み合った彼等も蓋を開けてみればこの通り、なんだか終始振り回されっぱなしだなと思いながらも、ゼロはこれはこれでいいと思えた。

さぁ戻ろう。ダモクレスから脱出し、早急にこの要塞をどうにかせねばと考えながら、一行は庭園を後にしようとする。

しかし……。

「……何だ、これは？」

「ディートハルト？」

「こんな、こんな下らない三文芝居の為に、私はここにいるのか？　違う、断じて違う!!」

「ディートハルト、何を!?」

元ジャーナリストであるディートハルトだけは、この結末に異議を唱えた。ゼロに向けられた銃口、絞られる引き金。撃鉄が打たれようとした僅かな瞬間――――。

「ダメェッ!!」

「っ！　ナナリーッ!!」

ゼロを守ろうと、ナナリーが車椅子から飛び出してディートハルトの前に出る。そんな彼女にルルーシュが飛びつこうとするが、間に合わない。

カノンやコーネリアがディートハルトを撃とうと銃を取り出すが、それでも既に引き金に指を掛けているディートハルトには届かない。

そして、銃声が庭園に響いた時、彼等が目にしたのは……。

「……シュウ、ジ？」

銃声と共に体から血を噴き出すシュウジの姿だった。

その５４

――――血飛沫が舞う。何もかもがスローモーションに映り、ゼロとナナリーはその瞳をこれでもかと見開いて目の前の光景をただ呆然と眺めながら、ほんの数瞬前の出来事を思い出す。

ナナリーとコーネリア、そしてシュナイゼルとも決着を付けた一行はこれで全てが終わったと安心しきっていた。後はそれぞれを丁重に扱い、しかるべき所に預ける事で今回の騒動に幕を引こうと考えていた。

だが、そんなゼロのプランは一人の発狂した人間の手によって呆気なく崩される。〝ディートハルト〟黒の騎士団を立ち上げて間もない頃に情報担当として任された、ブリタニアの中でも主義者と呼ばれる人間に分類される人物。彼は終始ゼロに対して、妄想とも呼べる思想を抱いていた。

全ては世界という舞台で己の劇を完成させる為、ゼロやシュナイゼルという世界でも数少ない〝役者〟にディートハルトは心を躍らせていた。ゼロには混沌、シュナイゼルには虚無と、それぞれが抱く異常性にディートハルトは心を躍らせていた。

なのに、目の前で繰り広げられる詰まらない三文芝居とやらせよりも酷い喜劇を見せ

つけられ、彼の我慢の限界は一瞬にして振り切られる。手にした銃でゼロに狙いを定め引き金を引く。

そんなゼロをナナリーが庇うが、構うものかとディートハルトは引き金を引いた。撃鉄が打ち込まれ、銃口から放たれる弾丸は真っ直ぐナナリーへと向かっていく。このまま彼女を撃ち抜こうと迫る弾丸の前に……更なる壁が立ちはだかった。

蒼のカリスマ。ゼロよりも世界に混沌と破壊を行ってきた彼の者が、ゼロを庇うナナリーの前に立ち塞がった。放たれた弾丸は軌道変更なんて出来るはずもなく、そのまま蒼のカリスマの腹部に命中、血飛沫を撒き散らしながら体を傾ける目の前の蒼のカリスマに、ディートハルトは今まで感じたことの無い悦を得ていた。

あの蒼のカリスマを、自分が仕留めた。シュナイゼルでもゼロでも、国連やＺＥＸＩＳでもない。ディートハルト＝リートという一人の人間が成し遂げたのだ。

その事実に悦を感じ、絶望に染まる少女達の顔を見て、ディートハルトは絶頂（エクスタシー）すら抱いていた。

うつ伏せになって倒れようとする蒼のカリスマ。次の瞬間にはカノンやコーネリアに撃ち殺されるだろうが、それでも構わない。最後の最後で自身の劇が完成された事に、ディートハルトはこの上ない満足感に包まれていた。

そら、倒れるぞ。世界で最も強い存在と言われてきたこの男が、間もなく自分の手で

倒れ伏すぞ。刹那とも呼べる合間、ディートハルトは倒れる蒼のカリスマに合わせて最期に喜びの雄叫びを上げようとしていた……瞬間。

ダンッ。と、地面から伝わってくる音と衝撃にディートハルトの表情は固まった。倒れるかと思われたその人物は右足を前に出して踏み留まっており、仮面の顔を彼に向けていたのだ。

ディートハルトの表情が恐怖に歪む。何故？　だって、どうして？　そんな疑問に思考が包まれる中、目の前の存在はディートハルトに向かって飛び出していった。地面を這うように迫り来る仮面、まるで巨大な蛇を前にしている様な感覚に囚われたディートハルトは一心不乱に銃を乱射した。

「く、くるな、来るなぁぁぁっ!!!!」

一発、そして二発と蒼のカリスマに向かって銃を撃ち込むが、蛇行しながら迫ってくる蒼い蛇には当たらず、ディートハルトの表情は更に歪なものとなる。

そして、遂に間合いに入り込まれた。至近距離にまで迫ってきた蒼い蛇に手にした銃を手刀で払いのけられ、ディートハルトは銃を無理矢理手放されてしまった。

そして同時に立ち上がり、右拳を脇に引き絞る様に構える蒼のカリスマを別角度から見ていたスザクは、目を見開きながら彼の次の行動を予測する。

アレは空手の中でも最も代表的な型。スザクも嘗て藤堂から学び、そして何度も打ち

放ってきた一撃。恐らくは紅月カレンも習っているだろうその型の名は――――。

「――――ダッ!!」

〝正拳突き〟地を踏みしめ、短い咆哮と共にその一撃を放った。衝撃に胸元を抉られ、肋骨を砕かれ、ディートハルトは口から血の混じった吐瀉物を強制的に吐き出された。

シュナイゼルの時とは段違いの衝撃に貫かれ、飛び上がり、背後にある玉座を砕きながらもまだ吹き飛び――――そして、遂には庭園を包んだ特殊強化防壁を突き破り、ディートハルトはダモクレスの外へと飛び立っていった。

残されたのは、呆然と眺めて固まっているゼロ達。蒼のカリスマが撃たれ、倒れそうになるまでの僅かな合間に起こった出来事に、誰もが言葉を失っていた。

穴の開いた庭園。隙間風が入ってきてナナリーがクシャミをした事で我に返ったゼロは、正拳突きを撃ち込んだ姿勢のまま動かない蒼のカリスマに声を掛ける。

銃で撃たれて大丈夫なのか？　微動だにしない彼に近付こうとした瞬間……。

「……ガフッ」

蒼のカリスマ……いや、シュウジ＝シラカワは口から血を吐き出し倒れ込んだ。やはり魔人でも銃で撃たれれば不味かった。早急に手当が必要だと察したゼロはスザクとシュナイゼルの協力の下、急いでダモクレスを後にした。

◇

Ｆ月Ｏ日

シュナイゼルとの戦いから二日、どうにか生きていた自分は今日も頑張って日記を書くことにする。さて、先ずは自分の体調の事について報告しようと思う。

ディートハルトの撃った銃弾はナナリーちゃんに向かって放たれていた。位置的にスザク君よりも自分の方が近かった為、自分が楯になるしかなかったのだが……突然の出来事に死を覚悟する暇もなかった為、自分は咄嗟にある秘伝の技で致命傷を避ける事にした。

その名も〝内臓上げ〟その名の通り体の内部にある各内臓を自分の助骨内部に押し上げる荒技で、動乱の時代ガモンさんがよく使用していた最後の回避術なのだそうだ。

咄嗟の事なので上手く出来るか心配だったが、どうにか成功させる事が出来たようだ。倒れそうになる様に装った為に貫通した弾は上に飛び出して失速、その後も誰かに当たるような事はなかったし……。

本来は何度も練習して体に慣れさせる必要がある技なのだが、自分はあの時初めて……しかもいきなり使用した為、内臓に負担が掛かって血を吐き出し、軽いショック症状となって倒れてしまった。

まぁ逆に言えばダメージと言えるものはその程度なので、アヴァロンに運び込まれた後は割と早く目を覚ますことが出来た。その際に見た彼等の怒りと呆れ、そしてドン引きのＣ．Ｃ．さんの眼差しがヤケに印象に残ったのだが……忘れよう。不死身より不死身らしいとか、何気にキツい事言われた記憶が蘇ってしまう。

と、そんな訳で無事生還した訳なのだが、如何せん身体が銃弾で撃ち抜かれたのだ。セシルさんからは暫く安静にするよう強く言われてしまった。

まぁ確かに致命傷は避けられたと言っても此方は荒技で身体を酷使してしまった訳だし、撃たれた箇所は焼き鏝（ごて）を押しつけられた様に熱を持っているから念の為に戦闘行為は控える事になったし、それは別に構わないのだが……問題はカレンちゃんとヨーコちゃんだ。

二人とも自分が撃たれたと言うことでその時は通信でやたら自分の事を心配してくれていたらしく、一時はアヴァロンに乗り込み、自分の様子を一通り看ていってくれたようなのだ。

そして彼女達が去った後に自分が目覚めた訳なのだが……なんというか、まだ自分が目を覚ました事を彼女達に伝えていないらしいのだ。

てっきりセシルさん辺りがやっといてくれたと思ったのだが……そこら辺は自分でやっときなさいと何故か怒られた。いやね、俺も最初いち早く無事だという事を伝えようとしたのだけれど、C．C．さんから渡された端末、そこに記録されてある映像を見た所為で、凄く気まずくなってしまったんだよね。

その映像ってのが自分が丁度意識を無くしていた時で、自分は集中治療のベッドに寝かせられ、その隣でカレンちゃんとヨーコちゃんがいたのだけれど……これがもう凄かった。

どうしてアンタは無茶ばかりするのよ！　とか、死なないでよ！　とか、あの二人が泣き顔で言うものだからさぁ大変。ヨーコちゃんに至ってはカミナの兄貴を思い出したのか、顔面蒼白でうなだれていた。

まぁ仕方ないよね。その時の俺の格好血塗れだし、出血で死ぬかもしれないと思われても仕方ないよね。白のロングコートを着ていた所為でより派手に見えた事だろうし、

彼女達が勘違いをするのも頷ける。
　実際目が覚めてから暫くは少し貧血気味で動けなかったし……あ、関係ないけどその日の夕飯は失った血を補う為に自分だけステーキでした。ウェヒヒ。
　なんてアホな事言ってる場合じゃなく、そんな端から見れば死にかけの自分は彼女達にもの凄く不安を与えたのか、ＺＥＸＩＳに戻る際は普段の活発な姿からは想像できない程に落ち込んでいた。
　さて、そんな心配していた人間が数日経たない内に復活し、あまつさえ呑気にステーキなんて喰ってたと知ったら……果たしてどうなるのでしょう？
　……知りたくねぇ。てか、あの映像見たらその時横になっていた自分の顔、さほど悪くないように見えるのは自分だけ？　オレンジ色のケースに包まれていたから気付かなかったとか、そんなオチじゃないよね？　そりゃ皆から呆れられる訳だよ。死ぬかもしれないと思われた人間が一日程度で快復したと知ったら色々台無しだよ。
　道理でステーキを食べていたらナナリーちゃんに怒られた訳だよ。その時は彼女の言っている事がよく分からなくて終始ポカンとしていたけど……あの時の自分を殴りつけてやりたいわ。
　そんな訳で未だ彼女達に連絡を入れていないのだが……正直言って怖いので、ＺＥＸＩＳのジェフリー艦長とスメラギさんのプトレマイオスにそれぞれ暗号通信で取り敢

えず無事と送っておいた。

あの二人なら日を見て彼女達に伝えてくれるだろう。その際にカミーユ君とアムロさんが仲介人になってくれたら尚宜しい。あの二人は何となく人間関係で相談し易いし、頼りになる。特にアムロ大尉の方は人生経験が豊富なのか、的確なアドバイスをしてくれそうなイメージがある。……イメージだけだが。

ともあれ、自分は最低限の筋を通したと思うのでこの話はこれでお終い。次はナナリーちゃん達について説明しようと思う。

まずはシュナイゼルとナナリーちゃんの件なのだが、最初は今回の戦い、騒ぎを起こした罪として国連に引き渡そうかと本人達の希望もあって一時は考えたんだけれど、未だアロウズの連中の影響が色濃く残る今の国連に引き渡すのは抵抗があるので却下した。幸い国連はまだ陰月での戦いの後のゴタゴタが片付いていないのか、未だに連中の動きは確認されていない。

信用出来る人物としてリリーナさんに彼等を預かってもらおうと思い、現在ルルーシュ君達が各方面にリリーナさんとの面会を求めているのだが……一向にちゃんとした答えはもらえていない。

何やら焦臭い感じがしてきたが、今はルルーシュ君達の情報収集の結果を待つしかない。リリーナさんとの連絡が繋がるまでの合間はシュナイゼルとナナリーちゃん、カノ

ンさんとコーネリア殿下は暫くアヴァロンで預かる事になった。
そしてもう一つ報告があり、ナイトオブラウンズのジノ君とアーニャちゃん、二人も皇女と皇子、そして皇帝陛下を護ると言う事で自分達と合流する事になった。
特にアーニャちゃんは自分をギアスから解放してくれたと言うことでジェレミアさんに借りを返したいという。……良かったねジェレミアさん。中華連邦にいけるよ。
二人とスザク君との蟠りは取り敢えず無いらしい。互いに戦場に立ち、互いに命を奪い合ったが為に憎しみという感情はないらしい。……まぁ、そんなジノ君の機体を破壊したのは自分なんだけどね。
そんな訳で二人は今後自分達の所で活動し、世界の為に戦うのだという。そんな二人の熱意に応える為、傷が治り次第自分はロイドさんと共に二人の機体を治してやろうと約束した。尤も、既にロイドさんがモルドレットの修理に取り掛かっている為、自分も急いで身体を治さなければと思う。
整備……いや、改修か。ジノ君の機体は自分が壊したので責任もってトリスタンの改修を行うことにした。
さて、恐らくはこれで最後になるのかな？　最大の問題であるダモクレスの処理なのだが、これも自分の怪我が治り次第速やかに執り行いたいと思う。シュナイゼルはあのダモクレスを衛星軌道上に打ち上げる事で世界を支配しようと考えていたらしいので、

今回はそれを利用し、誰にも迷惑が掛からない衛生軌道上でＢＨＣを使用し、諸共消滅させようと思う。
ディストリオンブレイクでも破壊可能だが、それだとダモクレスに搭載されているフレイヤにまで引火しかねないので却下。地上に影響を及ばされないよう宇宙にまで上がった所でＢＨＣで消す事にする。
さて、今回はこれで終わりにしようと思う。身体を休める為、そしてヨーコちゃんとカレンちゃんに対する言い訳を考えながら、今日は眠りたいと――――（日記はここで途切れている）

その５５

Ｆ月Ｒ日

大変な事が起きた。ダモクレスが突如上空から降り注いできた光によって跡形もなく消し飛んでしまった。いや、それは別に構わない。自分とグランゾンでやる予定だった事を代わりにやってくれただけなのだから、ダモクレスを破壊してくれた事自体は特に気にする必要はない。問題は別の所だ。

〝ホワイトファング〟コロニー側の代表とも呼べる彼等が遂に動きを見せてきた。ミリアルド＝ピースクラフトを筆頭にとんでもない兵器を拵えて、シュナイゼルに続いて世界に対して宣戦布告を宣言してきたのだ。

しかも彼等の手中にはリリーナさんが囚われているらしく、道理で彼女に連絡が繋がらない訳だと思った。だが、そんな悠長な事を言っている場合じゃない。何故なら彼等はダモクレスを超える〝リーブラ〟と呼ばれる巨大兵器を有しているのだ。宇宙にいながら地球に向けてどの標的にも命中させられる精度、そしてその標的を完全に破壊出

来る火力、どれもがメメントモリ以上の脅威であり、ダモクレスを凌駕する有用性を持ち合わせている。

そんな地球上どこにいても狙ってくるとんでも兵器が相手では、地球の防衛機能なんて意味を為さない。もし次に国連本部を直接狙ってくるのなら、地球は再び大混乱に陥ってしまう。

すぐさま自分達も向かいたいのだが、ダモクレスを監視するという目的で近くに待機していたのが災いし、アヴァロンの飛行の動力源であるフロートユニットにダメージを受けてしまった為、航行が難しくなってしまった。唯でさえ先の戦いでダメージを受けた所に今回の衝撃、受けた被害状況は思ったよりも酷く、ロイドさんは一度徹底的に直さないと無理と言っていた。自分も見させて貰ったが……確かにあれは酷い。応急処置した箇所へもろに負担を掛けさせてしまった為、無理な航空は危険だと思った。

そんな自分達は現在アヴァロンを地上に降ろし、今後の行動を考えている。現在自分は少し休憩しようと提案し皆の輪から抜け出しており、自室で日記を綴っている。

こんな事をしている場合じゃないと思うが、やはり一度身についた習慣からは中々抜け出せないのか、こうして日記を書いている方が気持ちを落ち着かせる事が出来るので、今更止める事はできない。

シュナイゼルとゼロが今後のミリアルドの行動を予想した結果、次の様な事が分かっ

た。ミリアルド＝ピースクラフトが率いるホワイトファング、そしてその彼等の要の兵器であるリーブラは恐らくは連射機能が搭載されていないという事。

もしあのリーブラに連射機能が搭載されているのであれば、今頃地球は蜂の巣にされているとシュナイゼルは語る。ミリアルドという人間性を考慮し、ゼロは敢えて連射しないと予想しているが、どちらにせよ次にリーブラのあんな砲撃を許したら、地球は危うくなるので意味は為さない。

今頃はＺＥＸＩＳが彼等を止める為に宇宙に上がっている頃だ。自分達も早い所追い付かなければならないのだが、ここで一つ問題がある。シュナイゼル達を置いていっては善からぬ考えを持った輩が近付いてくる可能性がある為、何人か護衛として置いていくしかない。戦力が下がる事は些か拙いが、そこは自分とグランゾンでカバーするしかない。

ナナリーちゃんは自分が戦場に行くことに少し不満があるようで、何やら反対するような言葉を口にしていたが……まぁ腹に風穴開いた人間がホイホイ戦場に自ら向かうと言っているのだ。心優しい彼女からすれば、それは糾弾に値する行為なのだろう。

つか、自分で書いていてちょっと引いた。ほんの一年半前まではただのパンピーでしかなかった自分が、今では自分から戦場に向かおうとか、拳銃に撃たれても割と平然としているとか……仮に元の世界に戻ったとしたら、俺って元の生活に戻れるのかな？

ちょっと心配。

それに、〝ネオ〟に至った事で強制的に博士の因子を高めた副作用なのか、俺の髪は博士の様に紫色に染まってしまっている。親や学友の皆には気分転換のイメチェンと言い訳すれば通用するかもだけれど……今まで髪なんか染めた事がなかったから両親は怪しく思うんじゃないだろうか。

ルルーシュ君達の前では基本仮面で顔を覆っていたから反応は薄かったけど……シオさんやリモネシアの皆にも相当怪しく思われるんだろうなぁ。

カレンちゃん達は自分が撃たれた事で相当テンパっていたらしいからそれどころじゃなかったみたいだけど、もし気付かれたりしたらどうしよう。イメチェンで誤魔化しきれるかな？

それに博士の因子を高めた副作用はこれだけじゃない。以前日記に記した読み返しの件なのだが……幾ら読み返しても思い返す事が何もないのだ。寧ろ未来予知に似た発言を書いている自分に不気味さを持つほどに……。

今の所はそんな知識の部分だけが抜け落ちてしまっているようだから別に気にする必要はないが、万が一記憶まで消えてしまったら流石に困るので、これからも日記は出来るだけこまめに書いていこうと思う。博士にも今度時間が空いたら早急に訊きに行くとしよう。不安すぎて夜も眠れん。

ともあれ、自分達の今後の動きは大体決まっている。後はグランゾンのワームホールを使い、皆をホワイトファングの拠点まで転移させるのが大まかな作戦だ。シュナイゼルやナナリーちゃん達はジノ君とアーニャちゃんに任せて、自分達は自分達に出来る事をやろうと思う。

ＺＥＸＩＳが宇宙に上がってホワイトファングと決戦に挑むのは凡そ一日とちょい。その短い時間の合間にジノ君達の機体の修理と改修を急がなければならない。その為にも――――――（日記はここで途切れている）

Ｆ月Ｔ日

……今、俺は皆を置いて一人グランゾンのコックピットに乗り込み、宇宙空間を漂っている。グランゾンの転移能力なら一瞬にして目的地に到達する事が可能であり、ＺＥＸＩＳ達よりも早くこの場に駆けつけている。

辺りはモビルスーツで溢れており、規模的には先のシュナイゼル達との戦闘と同様……或いはそれ以上の戦力がここに集まっているみたいだ。けれど、その戦力の中にはモビルドールの姿はない。純粋に人と人同士の戦いで決着を付けるつもりなのだと、いよいよ総力戦なのだと自分は思った。

本当なら今頃皆と一緒にホワイトファングの拠点に乗り込んでいる筈なのだが、あれから自室に通信が送られてきて、その内容にそれどころではなくなってしまったのだ。皆には申し訳ないと思う。けど、送ってきた場所と人物の名を出されては、自分も無視する訳には行かなかった。

〝トレーズ＝クシュリナーダ〟自分の事を友人と言い、自分もまた数少ない友達と認識している彼が、宇宙戦艦リーブラから送りつけてきたのだ。

最初、この通信は何かの冗談だと思った。自分に地球は任せろと言ってくれたあの人が、今度は地球に向けて引き金を引こうとしている。その事実を俺は最初認めようとしなかった。トレーズさんの名を騙る何者かが自分を惑わせようとしているのだと、その時の自分はそう思った。

けれど、それが現実なのだ。通信の後に再びホワイトファングの宣戦布告の映像が世界中に流れ、その内容と映し出された人物を前に、俺はその事実を受け入れる事しか出来なかった。

宣戦布告の内容は今より二十四時間後、此方の要求を呑まなかった事に対し、彼等は無造作にリーブラの主砲を地球に向けて撃ち放つと脅してきたのだ。そこにこれは脅しではないと釘を刺してくるトレーズさんに、俺は呆然と見ている事しか出来なかった。そんなトレーズさんはミリアルド＝ピースクラフトの補佐的立場として、彼と同様

に地球に向けて牙を向けている。
　この時……いや今もか。俺の胸中にはトレーズさんに対する疑問の感情しかなかった。どうしてだと、何故こんな事を始めたのかと、尽きない疑問に頭を悩ませていた時、ある一つの解が自分の脳裏に浮かび上がってきた。それを確かめる為に自分はルルーシュ君達を残し、通信内容に記してあったリーブラの近接宙域座標に転移する事にした。
　先程までアヴァロンからの通信がグランゾンのコックピットに鳴り響いていた。……皆には悪い事をしてしまったが、今回は自分の私用による行動なのであまり巻き込みたくはなかった。故に、グランゾンの通信機能を一時的にカット、皆からの通信は遮断する事にした。
　それに、これはトレーズさんの望みでもある。〝一人で来て欲しい〟今までトレーズさんには頼りっぱなしだった為、自分としてはこれに応えない訳にはいかなかった。友人として自分を招待してくれるのなら、自分もまたそれに応えなくてはならない。血塗れのロングコートは必死に洗い流した結果、どうにか元に戻す事が出来たし、これなら彼の前に出ても恥ずかしくないだろう。
　――今、リーブラの門が開いた。ホワイトファングの大部隊に囲まれながら宇宙戦艦の中へと入っていく。久し振りに顔を合わせる友達に自分は仮面を被り、蒼のカリス

マとしてグランゾンから降りる事にした。

◇

――――宇宙戦艦リーブラのブリッジ。
「まさか、本当に蒼のカリスマが来てくれるとはな、トレーズ。君の人脈には本当に呆れるばかりだよ」
「そういう言葉は適してはいないな、彼は私の友人だ。駒でもなければ部下でもない。対等の存在として認めている」
「……そうか、無粋な事を言って済まなかった」
ホワイトファングのリーダーであるミリアルド＝ピースクラフトと、ＯＺの元総帥ト

レーズ＝クシュリナーダ。互いに友人同士であり、歴史に名を刻む事になる彼等は、モニターに映し出されている格納庫で鎮座する魔神を見て、談笑じみた会話を交わしている。

　トレーズの言葉は怒っている様に見られるが口調は至って穏やか、ミリアルドの真摯な謝罪に対して彼は気にするなと笑顔で返す。

　そんな彼等の背後の扉が開かれ、ブリッジに一人の兵士と共に仮面を被った魔人が姿を現す。案内人である兵士は綺麗な敬礼をした後、ブリッジから出て行った。

「やぁ、良く来てくれた我が友よ。傷の方はもう大丈夫なのかな？」

「……トレーズさん。答えてくれ、どうしてアンタはこんな事をしでかした。何のために地球に攻撃する？」

　歓迎と魔人を気遣う言葉、社交辞令などではなく、本気で蒼のカリスマの身を案じているトレーズに対し、魔人は全身から滲み出てくる僅かな怒りでもって応えた。

　そんな魔人をトレーズは不愉快には微塵も思わなかった。彼が怒りを感じるのは当然だ。何せ地球は任せろと言っておきながら自身は今その地球と敵対しているのだ。彼からすれば自分は裏切りに等しい事をしているのだろう。

　だが、それでも変わらない口調で言葉を交わしているのは、それでも自分の事を友達として接しているからなのだろう。目の前の友人の義理堅さにトレーズは笑顔で持っ

て応えた。
「君をここに呼んだのは他でもない。これから始まる戦いを君に見届けて欲しいのだ。人類最後の闘争の醜さと凄惨さを、君に見ていてもらいたい」
目の前のトレーズの言葉に魔人はたじろいだ。恐らくはその仮面の奥で、彼は驚きの表情となっている事だろう。
あぁ、やはり私の友人は優しい。理解者にはなれなかったが……それでも、目の前の友人と友達になれた事は僥倖だ。
トレーズ＝クシュリナーダは、動揺する魔人を優しい目で見つめ、微笑んでいた。

その５６

「見届け人になって欲しい……だと？　トレーズさん、それは一体どういう意味です？」
「そのままの意味だ。これから始まる私達とＺＥＸＩＳの戦いをどうか手出しする事無く、君にはその結末を見ていて欲しいのだ」
「友人が殺し合いするのを黙って見ていろと？　トレーズさん、俺がそんな事に納得すると……本気で思っているんですか？」
　目の前の蒼のカリスマから発せられる怒気。世界から恐れられ、畏怖の象徴として人々に知られている彼が、こんなトレーズの言葉に動揺し、そして怒っている。魔人と恐れられている存在が人間らしい感情を剥き出しにしている事に、ミリアルドは少なからず驚いていた。
　けれど、そんな怒りを露わにしている仮面の男に対し、トレーズは微笑みを崩さない。それは目の前の人間が本気でトレーズという人間を想っているからに他ならないからだ。友人だから本気で怒り、友人だから止める為に、約束通りここまで一人で来た。
　そんな人として当たり前の感性を持つ仮面の男――――シュウジに、トレーズは心から感謝し、だからこそこの願いを聞き届けて欲しいと本気で思っていた。

「無論、納得してくれるとは思っていない。だが理解して欲しい。戦争というものがどういうモノなのか、戦いという行為が何を生み出すのか、私は地球とコロニー問わず、全ての人々に問わなくてはならない」
「それは貴方一人で決めて良い話じゃない。喩え正しい事を言っても、こんな強引なやり方では……誰も認めはしない」
「君も、認めはしないと?」
少し寂しそうに目を細めるトレーズに、シュウジは仮面の奥で更に怒りを募らせる。どうして頭の良い奴はこうも融通の利かない奴が多いのか。
トレーズ＝クシュリナーダという人間は良くも悪くも優秀過ぎる人間だ。誰よりも世界を大事に想い、人の生き死にを尊び、戦いの凄惨さを理解し、人そのものを愛している。
そして、同時に優しさだけでは世界を救えないという悲しい現実も受け入れている。人はそう簡単には分かり合えない事実も理解していて、世界の醜さも知っている。
だからこそ、世界は知らなければならない。戦争という行為がどれほど愚かな事なのかと、戦いという行動が、どれほど人々の胸に深く悲しみを刻み込むのかを、全ての人間は知らなくてはならない。トレーズ＝クシュリナーダはその事実を誰よりも重く認識していた。

「トレーズさん。何も貴方一人がそんな重たいモノを背負う必要はないんだ。世界は変わってくれる。人も、世界も、きっと分かってくれる。そんな急いで答えを出す必要はないんだ」

確かにトレーズの言うことも一理ある。世界中の人々が戦いの悲惨さから目を背け続け、その結果生まれたのが、アロウズという強行部隊なのだ。〝何でもいいから早く世界を平和にしてくれ〟破界事変を経て、そんな身勝手な願いから生まれた歪みは、より大きな歪みとなって世界を覆い尽くしていた。

今の世界は間違っている。そう声高に叫んでも誰も耳を傾けず、目を向けなかったのが今の世界だ。そんな人々の目を覚まさせるにはより凄惨な戦いを見せつけなくてはならないと、トレーズは考えたのだろう。

だが、そんな世界が今変わりつつある。ＺＥＸＩＳを始めとしたカタロンや反政府組織、アフリカタワーの件で生き残った人々が真実を語り、ワイズマンの情報操作によって世界は真実に目を向けようとしている。

遅かれ早かれ現政府は瓦解し、世界は近い内に生まれ変わる事だろう。そんな世界を前に、本当にこの戦いは必要なモノなのだろうか？

ナナリーも嘗てはトレーズと似たような事を考えていた。ダモクレスを世界の憎しみの象徴として君臨させ、平和の尊さを人々に伝えたいという彼女の願いと、トレーズ

の戦争による問いかけは非常に似ている。
故に、シュウジはそんなやり方を認めたくはなかった。一部の人間に全てを押しつけて、後は投げ出そうとするやり方をシュウジは認めたくはなかった。今の世界をおかしくさせたのは世界中の人間だ。ならば、人類の全てが責任を負わなければ筋が通らない。
言葉を重ね、何度もそんな言葉を口にするシュウジに対し、トレーズは笑顔を浮かべるが……その首は縦に動く事はなかった。
「……シュウジ、我が友よ。確かに君の言うとおり、今の世界を作ったのは今を生きる全ての人類に他ならない。ならばその世界の歪みを正すのも人類の役割であることも理解できる。そうなった時、我々の力が必要になってくるという事も、十分承知している」
「ならっ！」
「だが、……いや、だからこそ人類は見つめなければならない。戦争という悲惨さを、戦いという凄惨さを、何かを守るために戦う人の尊さを、虚しさを、今の人類は知らなければならない。――――それに」
「？」
「そうでもしないと、世界は近い内に〝奴等〟によって再び歪められる。そうなる前に、人類は目を覚ます必要があるのだよ」

「奴等？　トレーズさん、アナタは一体何を言っている？」
　トレーズの口から出て来た〝奴等〟という言葉、意味深に聞こえてくるそれは、まるでこれまで出会ってきた連中とは全く別物の様に思えてくる。イノベイターでもグレイス＝オコナーでもない、裏で世界を操る輩がまだ他に存在するというのか。
　隣で聞いていたミリアルドも意外そうに驚いている。その様子から察するに、どうやらトレーズの言う〝奴等〟の存在は彼にも知られていないようだ。
　一体そいつ等は何なのか、疑問に思うシュウジだが、その疑問は解消される事はなかった。
「さて、私からの話はこれで終わりだ。シュウジ＝シラカワ、我が友よ。君の返答を聞かせてもらえないだろうか？」
「――――ッ！」
　トレーズ＝クシュリナーダの表情から笑顔が消える。自分の前では決して絶やさなかった微笑みが消えた事にシュウジは戸惑いを隠せないでいた。表情を変えただけではなく、そこから溢れてくる迫力にシュウジは呑まれつつあった。
　アサキムやアイムの様な不気味さでもなく、ガイオウの様な熾烈で苛烈な殺意でもない。それはＯＺの総帥として君臨し、世界について常に考えていた人間のカリスマ性、〝覇気〟と呼ばれるモノが一気に解放され、シュウジという人間に対して発せられてい

る。
　これが世界の頂点に君臨する人間の纏うモノか、目の前の本物のカリスマという存在に、シュウジは自分の〝カリスマ〟という名が改めて滑稽に思えた。
　思わず後退りそうになる足を……踏みとどめる。そして、シュウジは拳を握って身構えた。明らかな敵対行動、トレーズの言葉に対し態度で応えるシュウジ。
　魔人が構えた事によりブリッジ内の空気が張り詰める。今にも襲い掛かって来そうなシュウジにミリアルドは一歩前に出るが……手を出して止めてくるトレーズに制止される。
　手を出すなと言うのだろう。横目でそう言ってくる親友に対し、ミリアルドは肩を竦めて後ろに下がった。
「成る程、それが君の答えか」
「トレーズさん、俺はアナタを止める。アナタと、そこのミリアルドさんも止めて戦いを始める前に終わらせる。……俺は所詮一般人だからアナタを理解する事はできないけど、それでも、友達としてアナタを止めてみせる」
「ふっ、確かに君は私の理解者には成り得なかった。しかし、それでも君は私の友人である事には変わりない。――――さぁ、来るがいい」
　腰に携えた剣に手を添え、トレーズの覇気が一層に強まってくる。息苦しささえ覚え

る迫力に、シュウジは呑まれるモノかと必死に抵抗する。一分か、十分か、相対する刹那の時間がシュウジの感覚を狂わせる。

シュウジの頬から汗が流れ落ちた……瞬間、シュウジの足が鉄の地面を踏み抜き、トレーズとの距離を一瞬で詰めた。その速さにミリアルドも驚くが、それ以上に驚愕していたのはトレーズの方だった。屋敷で初めて出会い、初めて殴り合ったあの日より遙かに成長を遂げた友人に、トレーズは驚愕の中に嬉しさを感じ取っていた。

（そうか、君は私との殴り合いを経てここまで強くなったのか。ならばあの日、シュウ＝シラカワから託された想いは……無駄では無かったという事だな）

目の前にシュウジの拳が迫ってくる。恐ろしい速度で、殺人的な威力を込められた拳を前に、トレーズは目を瞑る。

そして、トレーズの前髪にシュウジの拳が触れた瞬間――――。

「流石だな」

シュウジは右肩から血を噴き出し、地に倒れ伏していた。

「――――ッ!!!」

鋭く、それでいて速い。目にも映らぬ剣速にシュウジは痛みよりも驚愕に目を見開いていた。トレーズは元々剣の達人として知られる人物、その彼が放った居合いにも似た剣捌きに、シュウジは驚きを隠せないでいた。

剣を握るとこれ程までに強いのか。この世界に来てそれなりに体力も付いてきたし、ガモンという達人の元で教えを請う事もあったが……それでも敵わない。所詮は素人の付け焼き刃なのかと、シュウジは仮面の奥で自嘲気味に笑うが、それでも構わないと立ち上がろうとする。

元より敵うとは思っていない。相手は一人でＯＺという組織を纏め上げ、シュナイゼルと同格の世界の頂点に君臨する人間だ。

シュナイゼルとはベクトルが違うが、それでも強者である事に違いはない。だが、そんな事はシュウジにとってどうでも良かった。

〝友達を止める〟結局の所、シュウジの今回の行動原理の全てはソレだった。自分の事を友人と呼ぶ、シュウジにとって数少ない友人を死なせたくないという一心で、シュウジは痛む身体に鞭を打って立ち上がる。

肩から腕、そして手へと滴り落ちる血液。右肩を切り裂かれた事で右腕に力が入らなくなったが、構うものかとシュウジは握り拳を作る。自分の願いはトレーズの規模の大きい願いとは違い、俗世的で自分勝手な内容だが……それでも、嘘はなかった。

嘘もなく偽りもないシュウジ、そんな彼の思いを――――トレーズは横に薙いだ一閃でシュウジの身体ごと切り裂いた。

血を噴き出し、再び地に倒れ伏す。糸が切れた人形の様に崩れ落ちるシュウジに、トレーズは何も言うことはなかった。血溜まりに沈むシュウジ、しかし彼にはまだ息があった。最初の一撃同様、トレーズの攻撃はワザと致命傷を避ける様に放たれていたからだ。

そんなトレーズにミリアルドは何も言わず、二人はシュウジに簡単な応急処置を施す。最初から殺す気などなかった。トレーズは包帯を巻いたシュウジを近くの壁に寄りかからせ、気絶したシュウジに微笑みを浮かべる。

三人しかいないブリッジ、すると突然扉が開き、一人の人間が入ってくる。ゼロや蒼のカリスマと同様仮面で素顔を隠すその人物の名は……通称〝Ｍｒ．ブシドー〟軍人の制服に武士の様な羽織を纏った奇抜な格好をする人物だが、ブリッジに入った途端その目を大きく見開いて驚愕を露わにする。

「トレーズ閣下、もうじきＺＥＸＩＳが来る。至急用意を……と、これは一体？」

「ちょうど良い所に来てくれた。Ｍｒ．ブシドー、彼を医務室まで運び、丁重に手当をしてやってくれないか」
「それは構いませんが……いえ、余計な詮索は止めておきましょう。あなた方は迷っていた私に手を伸ばしてくれた。ならば私はその恩義に報いる為、あなた方の指示には全て従いましょう」
「済まないね。それと、彼の治療を終え次第彼の身柄はバルジに移しておいて欲しい。あそこならば戦いが終わるまで手出しされる事はないだろう」
「承知した」
「最後にもう一つ、彼の仮面の奥は決して覗かない事。治療同様、此方にも重く置いておいて欲しい」
「御意」
　トレーズの指示に従い、ブシドーはシュウジを担ぎブリッジを後にする。ブリッジの一部が鮮血に染まっている中で、ミリアルドはトレーズに一つ訊ねた。
「……しかし、驚いたな。お前の剣の腕がまさかここまで上がっていたとは」
「ふっ、彼と殴り合った後、少々山に籠もっていてね。一ヶ月程自然と戯れていた」
　まるで良い思い出を話すように語るトレーズに、ミリアルドは若干頬をひきつらせた。魔人と恐れられる蒼のカリスマを実力でねじ伏せる。その事実にミリアルドは頼

もしさを通り越し、少し怖くなった。
「だが、彼に勝てたのはほんの一瞬の差だ。彼の身体の傷が完全に治っていたら、倒れていたのは……私だったろう」
「何？」
　シュウジの身体は報告であった通り、ディートハルトからの銃撃によりその身に怪我を抱えていた。殆ど完治していたとはいえ、十全でない。ほんの僅かに引きつった身体が一瞬固まった。あの一瞬がなければ、今頃地に伏せていたのは自分の方だった事だろう。
　そうなればきっと、未来は大きく変わっていた。その〝もし〟をトレーズは目を瞑って連想するが、それは淡い幻想に過ぎないとすぐに現実に思考を切り替える。
　――――既に、幕は開こうとしている。そろそろＺＥＸＩＳが此方に辿り着く頃合いだと、トレーズはブリッジを後にする。
「さぁ、愚かな人類の戦いにフィナーレを飾ろうではないか」
　これから起こる戦いは、人々に深く刻まれる事になる。凄惨さと愚かしさと人類の業、それらを世界に見せつける事で、トレーズは人々に問いを投げ掛ける。
　トレーズ＝クシュリナーダ。誰よりも世界を憂い、人を愛した青年は、世界の為にその牙を突き立てる。

その57

「……う、うん？」

「あ、気が付きましたか？」

痛みが、全身に広がっていく。灼ける様な熱さが身体に浸透し、ズキリと痛む感覚によって意識が暗闇の底から覚醒する。

重い瞼を開けると、目の前には見知らぬ天井が広がっていた。しかも体勢から察するに、どうやら自分は呑気に寝ていたようだ。状況を確認する為に首を動かし、辺りを見渡してみる。機械的な部屋、人工的な空間、どうやらこの部屋には自分と顔を覗き込んで心配そうに見つめてくる美人さんしかいないようだ。

栗色の長い髪、凛とした顔付きだけれど、優しさも感じる女性、少女としての幼さも少し見えるけれど、それでも芯の通った強さも目の前の女性から感じ取れた。そう、まるであのカリスマ女王、リリーナ＝ピースクラフトの様な――――。

なんて、そんな訳がない。現在彼女はホワイトファングに拉致られており、自分の目の前にいるわけがない。きっとこれは幻覚なのだと、自分の事を心配そうに見つめてくる女性の頬に手を当てた。

ああ、暖かいなあ。血を流した所為か身体から少しばかり熱を失った自分は手のひらから伝わってくる女性の頬の温もりが心地よかった。まるで本物のようだと、自分は女性の頬に手を添え続けた。

……つーか、幻覚に熱とか持ってなくね？　つーか、触れる事なんて出来なくね？今更な疑問に自分は恐る恐る目を開くと、そこには照れ臭そうに頬を朱に染めている女性がいる。

しかも何だろ。この人、何だかリリーナさんに似てね？　つーか、ご本人様じゃね？

それを自覚した時、自分は顔からダラダラと嫌な汗が流れ落ちるのを感じた。

そして――――。

「あ、あの……大丈夫ですか？　酷い怪我をしていたものでしたから、あの、私が見えていますか？　私の声、聞こえていますか？　私はリリーナ。アナタは……蒼のカリスマさん、ですよね？　意識はハッキリしていますか？　……困ったわ。仮面を被っているから分からないわ」

自らそう名乗るリリーナさん。彼女が本物のリリーナ＝ピースクラフトだと認識した自分は、どうしようかと混乱する思考の中で……。

「お、おはようございました……」

ガチガチに固まりながら、自分はゆっくりと身体を起こした。一時の合間とはいえ、

寝ぼけていたとはいえ、地球圏の代表と言える人物になんて事をしたのだと、シュウジは仮面の奥で滝の様な汗を流す。

その際に自分が高そうなベッドの上で寝かされていた事に気付くが、今のシュウジにはどうでもいい情報なので無視をする。

セクシャルハラスメントに厳しい昨今、シュウジは自身がその対象にならないか内心で焦った。何せ彼は童貞（チェリー）、女の子とはキスどころかマトモに手を繋いだ事すらないシュウジとしては、気安く触った事をリリーナが不快に思っていないかで、非常に不安に思っていた。

しかし、リリーナはそんな自分とは対照的に落ち着いており、特に言及するような事はせずに咳払いを一つすると、別人の様に表情を引き締めた。これが地球の代表の椅子に座った者の気骨というモノか、シュウジは凛とした表情で自分を見つめてくるリリーナを芯のある強い女性だなと思った。

「えっと、蒼のカリスマ……さん、で、宜しいでしょうか？　お体の方はもう大丈夫なのですか？」

自分の事を蒼のカリスマと呼ばれ、今頃になって自分が仮面を被ったままだと気付く。何だかんだ言いながら、この仮面が身体の一部になりつつある事に、シュウジは仮面の奥で苦笑する。

「ご心配をお掛けしたようで、申し訳ありませんリリーナ様。身体の方は……何とかと言った所でしょうか。無理は出来ませんが、取り敢えずは大丈夫です。それよりも、アナタには幾つか訊きたい事があるのですが……質問しても宜しいでしょうか？」

真剣な表情となるリリーナに対しシュウジも真剣な顔付きとなり、彼女に幾つか質問を問いかける。自分はいつここに運ばれてきたのか、ここは一体どこなのか、そして……ホワイトファングとＺＥＸＩＳの戦いはどうなっているのか、それら全てを話し、そして彼女から質問の全てを返されると、シュウジは苦笑いの表情から一変させ、歯を食いしばり悔しさを露わにする。

自分がここに運び込まれたのが二時間前。自分と同様仮面を付け、武士の出で立ちをした青年が数人の部下と共に部屋へと入り、ここにベッドと共にシュウジを置いていったという。そして、ここは〝バルジ〟宇宙要塞と呼ばれ、コロニーを支配する負の象徴。ここに運び込まれたのは自分達を戦火から守る為の配慮なのか……。

そして、現在ＺＥＸＩＳとホワイトファングは交戦中。ここはバルジの中でも安全を考慮された作りになっているのか、振動や雑音は殆ど耳に入ってこない。通信手段も此方からでは受け付けられないようで、助けを呼ぶことも出来ないし、扉も堅く閉じられている事から抜け出す事も出来ないという。

状況は八方塞がり。逃げ出すことも助け出す事も出来ない状況に、シュウジはリリー

ナとは別の所で焦り、悩んでいた。このままではトレーズが危ない。今回の戦いに己の全てを懸けて挑むつもりなのだと先の相対で知ったシュウジは急いでベッドから立ち上がろうとする。

しかし肩と胴体、二つの箇所から同時に吹き出てくる痛みにシュウジは地に膝を付いてしまう。無理はしないで下さいと叫んでくるリリーナに対し、それでもシュウジは部屋から抜け出そうと立ち上がり、扉へと一歩ずつ近付いていく。

（クソッ、トレーズさんめ、ワザと致命傷から外しやがったな。それでいて人間の痛覚に最も響く怪我の付け方をしてきているし、この傷はここで大人しくしてろっていうメッセージなんかね）

気が利きすぎる友人に苦笑いがこぼれる。だが、この程度で諦める程、自分は大人ではない。肩を抑え、胴体の傷の痛みに耐えながらシュウジは扉の前に立つが、リリーナの言うとおり、本来なら自動開閉する扉がウンともスンとも言わない。軽く扉に触れてみるが、それだけでも分かる扉の徹底した強固振りに、シュウジは仮面の奥で舌を打つ。

傷が開くのを承知で力ずくでブチ破るか？　ここで悠長にしている今も、トレーズはＺＥＸＩＳと決死の死闘を繰り広げている。それを止める為にも決断は早い内にしなくてはならない。……と、そんな事を考えた瞬間、目の前の堅く閉ざされた扉が開かれた。

あれほど堅牢だった扉があっさりと開いた事に唖然とするが、次に部屋に入ってくる女性にリリーナは表情を少しばかり険しくさせる。敵意とも呼べる彼女の瞳に映っていたのは……。

「やはり目覚めていたか、蒼のカリスマ。悪いがお前に拒否権はない。トレーズ様の願いを叶える為にも、お前はここで大人しくしていて貰う」

レディ＝アン。トレーズの懐刀とも呼べる彼女が、銃を片手にシュウジの前に立ちふさがった。

その容貌は美しく、けれど刀剣の様に研ぎ澄まされた敵意と殺意を醸し出していた。そんな彼女を前に……。

（え？　……誰？）

シュウジは突然出て来た美人さんに目を丸くさせていた。

◇

――――光が、弾ける。広大な宇宙の中で、ＺＥＸＩＳはホワイトファングの総司令であるミリアルド＝ピースクラフトとその補佐、トレーズ＝クシュリナーダに最後の戦いを挑んでいた。

そんな彼等の前に立ちふさがる無数のＭＳ。本来ならモビルドールシステムを搭載されている筈の機体群。モビルドールという厄介なシステムを載せた機体が膨大な数となって押し寄せる。それがこれまでＺＥＸＩＳが体験してきた敵のやり方だった。

だが、ホワイトファングはそんなやり方を取らなかった。人間が起こした戦いは同じ人間の手で幕を降ろさなければならない。その理念の下、トレーズはモビルドールシステムという人が生み出したモノを否定し、兵士という人間で以てＺＥＸＩＳを相手取る選択を選んだ。

何かを略奪する訳ではない、他人を無意味に傷付ける訳ではない。ＺＥＸＩＳの皆が相手をしているのはミリアルドとトレーズ、二人の人間の意志と理念に共感し、彼等の為に戦いたいと願った者達だ。ＺＥＸＩＳ同様に大事なモノの為に戦う彼等の気迫は一人一人が凄まじいものだった。相手がスーパーロボットだろうが、小型のＫＭＦやスコープドッグなどお構い無しに、彼等の猛攻はＺＥＸＩＳ達に容赦なく襲い掛かる。

だが、この程度でどうにかなるほどＺＥＸＩＳも甘くはない。破界事変の頃より戦い続けてきた彼等には、ホワイトファングの攻撃は苛烈であるが、耐えきれないモノではなかった。

ホワイトファングの攻撃は一つ一つが重い。攻撃の重みではなく、攻撃をしてくる兵士一人一人の心が彼等の身体に重くのし掛かってきているのだ。確かに彼等は強い。コロニーを地球から解放させる為、全ての兵士が己の意志で決死の戦いを挑んできている。

その気迫と覚悟に、最初はＺＥＸＩＳの誰もが戸惑った。だが、だからといってここで止まる訳にもいかなかった。世界から戦いを無くすため、誰かの幸せを理不尽に壊されない為、ＺＥＸＩＳは戦う。矛盾している事は承知の上で、けれど彼等の想いに嘘はない。負けられない戦いを繰り広げていく内に、徐々に戦況はＺＥＸＩＳ側へと傾く。削られていくホワイトファングの兵力。そして、ヒイロ＝ユイの乗るウィングゼロがバルジに向かって突撃した時、すれ違うようにリーブラから二機の機体が姿を現した。

トレーズの駆るトールギスⅡとミリアルドの操るガンダムエピオン、そしてＭｒ．ブシドーのスサノオと複数の部下を連れてＺＥＸＩＳの前に出てきた彼等を、ＺＥＸＩＳは最後の戦いを前に各々の思いをぶつけた。

こんな戦いは止めろと、無意味な戦いだと、それぞれトレーズ達を止める為に説得の言葉を口にしているが……その全てが彼等に届く事はなかった。

そして、遂に始まるホワイトファングとの最後の戦い。ガンダムチームを筆頭にＺＥＸＩＳはトレーズに先制攻撃を仕掛けるが……。

『さぁ、往くぞＺＥＸＩＳ。人類の戦いにフィナーレを飾ろうではないか！』

トレーズの乗るトールギスⅡの圧倒的な加速力に、エース級の実力を持ったＺＥＸＩＳの面々が驚く事となる。

速すぎる。トールギスⅡはトールギスのデータを元に造り上げられおり、そのトールギス自体の機体性能も従来のＭＳを凌駕しているのは実際対峙した皆が理解できる。だが、それでもあのトールギスⅡは異常だった。殺人的な加速力、デタラメな機動性、搭乗者の安全性など一切考えられていない機体にＺＥＸＩＳの面々は驚愕していた。

だが、一番驚いているのはそんな搭乗者にすら死をもたらす機体を、十全に乗りこなすトレーズの存在だ。あれほどの機体に乗っていながらＧに身体を蝕まれてはおらず、寧ろ足りないとばかりにドンドン機体速度を上げていく。

『嘘だろオイ、バルキリーでも追い付けないなんて、どんなエンジン積んでるんだよ!?』

バルキリーに乗るアルトからの驚愕すべき事実にＺＥＸＩＳは更に驚きに包まれる。部隊の中でも随一の速さを持つバルキリーでも追い付けない。一体どんなマッドサイ

エンティストが関われればあんなデタラメ機体が出来上がるのだろうか？
翻弄されるＺＥＸＩＳ達だが、いつまでも驚いてばかりいても仕方ない。バルキリーでも追い付けない速さを見せつけるトールギスⅡにスーパーロボットの真ゲッターが真っ正面から立ち塞がった。
『エレガント閣下、アンタの快進撃もこれまでだ。隼人！』
『おう！』
赤の真ゲッター１から、白の真ゲッター２へと瞬時に変形する。三つの機体から成り立つロボットが息を合わせればこうも見事な合体変形を成し遂げるのかと、トレーズは戦いの中でありながら笑みを零す。
『行くぞ、トレーズ＝クシュリナーダ！　ドリル、ハリケェェェェン!!』
ゲッター２のドリルから放たれる人工の竜巻、その威力はＭＳ程度の装甲ならば簡単に抉り、細切れにしていく。だが、それは直撃すればの話である。当然トレーズは機体を動かして回避させる。友人の手が加わり、本来の機体性能から大きく向上させられたこのトールギスⅡは自分が思った以上に動かす事が出来る。過敏過ぎる反応性は搭乗者の技術に比例して反応し、まるで自身の手足の様に動いてくれる。
人機一体。そのコンセプトでこの機体に携わった友人に感謝の念を抱きながら、トレーズは次なる攻撃に備える。白だったゲッター２が再び分離し、今度は黄色い機体、

ゲッター3へと変形させる。
『そこだ！　ゲッターミサイル！』
　無数のミサイルを飛ばし、弾幕で此方の動きを封じようとするゲッターチーム、対侵略者用に開発された機体だけあってその火力は凄まじいモノを感じる。一発でも当たればお終いだなと思う一方、トレーズの笑みは崩れる事はなかった。
　放たれたミサイルがトールギスⅡという一点に向かってくる。そして、全てのミサイルが纏まった瞬間、トレーズはトールギスⅡの肩に装着されたドーバーガンを手に、ミサイル群に向けて撃ち放った。
　ドーバーガンの弾に当たり爆発し、それに伴って誘爆していくミサイル群。爆発の衝撃が押し寄せてくる前に離脱するが、舞い上がる煙をかき消し、一筋の緑色の光がトールギスⅡに向けて放たれた。
『ゲッタービーィィィムッ!!』
　ゲッター3からゲッター1に早変わり、此方に向けて攻撃を仕掛けてくる。巨大な機体に似合わず俊敏で流麗なモノだと、トレーズは心の底から感心した。しかし、そんなゲッターの連続攻撃もトレーズの表情を崩すには至らない。まるで知っていた様に予め回避運動を取っていたトレーズは、造作もないという様にゲッターの攻撃を避けてみせる。ここまでしたのに掠りもしないトールギスⅡに、ゲッターチームの要である流竜

馬は舌打ちをする。
　それからもトールギスⅡとトレーズを止める為に、様々なスーパーロボットが攻撃に加わった。ロジャーのビッグオー、万丈のダイターン３とワッ太のトライダーＧ７、そこへ更に勝平少年のザンボット３も加わってのコンビネーション攻撃、他にもゴッドシグマやバルディオス、ゴッドマーズの怒濤の連撃も、トレーズの操るトールギスⅡには届かなかった。
　ならばトリッキーな動きで対抗しようと桂のオーガスとキングゲイナーが囲むが、追い込む事は出来ても傷一つ付ける事は出来なかった。狙撃も当たらず、寧ろ手痛い反撃を受けたりと、ＺＥＸＩＳはたった一機を相手に苦戦を強いられていた。
　そんな中、一機の赤いＫＭＦがトールギスⅡに強襲する。近付いてくる機体に当然トレーズは気付いているが、一機で挑んでくる事に嬉しさを感じた彼は敢えてその人物との一騎打ちを受け入れた。
　その人物の名は紅月カレン。愛機である紅蓮を操りながら、彼女はトレーズへと肉薄する。
『トレーズ＝クシュリナーダ！　アンタの快進撃もこれまでだよ！　五飛に代わってアンタを止める！』
『黒の騎士団。ゼロの右腕たる君が相手か、相手としては申し分ない。……だが、君では

彼の代わりに成り得ないよ。そして逆も然り、君の代わりもまたどこにも存在しない』
『何を訳の分からない事を！』
間合いに詰め寄った所を見計らって、カレンは紅蓮を動かし、左手に高周波振動剣〝MVS〟を持たせ、トールギスⅡに斬り掛かる。当然読んでいたトレーズは最小限の動きで避けて見せるが、カレンの本命は別にあった。
輻射波動。回避行動を行った瞬間を見計らってカレンは紅蓮の右腕に真紅のエネルギーの塊を纏わせる。これなら避けられない。直に叩き込もうとする紅蓮にトレーズは……。
『……フフ、良い動きだ』
その顔に笑みを浮かばせ、ビームサーベルで紅蓮の右手に集まるエネルギーを真っ向から防いだ。まさかこの至近距離で防がれるとは思わなかった。カレンは目を大きく見開いて驚愕するが……。
『良い機体だ。どうやら君の機体には他にはない別の者の想いが込められているようだ。あの枢木スザクのランスロットと同じモノがその機体から感じられる』
『あんな奴と一緒にするな！　私の紅蓮はラクシャータさんとアイツの、シュウジの奴の手が加わった最高の相棒なんだ！』
トレーズの言葉にカレンは反論する。最近はどうかは分からないが、破界事変の頃か

ら嫌っていた奴と同じと言われてカレンは良い気持ちはしなかった。自分の紅蓮は一度ブリタニアに鹵獲され、勝手に弄られた。機体性能は上がっていてもブリタニアによって強化された機体に乗るという事実が、彼女の胸の奥で引っかかっていた。

だが、その事実もシュウジという人物が新たに手を加えた事で彼女の気持ちの引っかかりは取れた。油まみれになりながらも必死に自分の為に紅蓮に付きっきりの彼が、エリア１１にいた頃と変わらずにいてくれて……。

今は魔人などと呼ばれて世界から恐れられていても、誰かの為に戦う彼がカレンにとって自慢であった。

だからカレンは吼える。奴と一緒にするなと、リフレインを用いて自分を自白させるような奴と一緒にするなと、カレンは雄叫びと共に紅蓮の出力を上げる。

だが……。

『成る程、その機体も我が友の手が加えられた機体か。道理で私のトールギスⅡと同じモノを感じる訳だ』

『――――え？　あぐっ!?』

『済まないな、隙だらけだ』

トレーズの口から出てくるその言葉にカレンは呆けてしまう。シュウジを友と言うトレーズの言動に動揺してしまったカレンは、トールギスⅡの蹴りに直撃してしまう。

間合いから突き放され、カレンはすぐに紅蓮を立て直そうとするが、それよりも早くトールギスⅡのドーバーガンの銃口が向けられていた。
回避は不可能、ならば防ぐまでだとカレンは輻射波動による障壁を展開する。放たれる弾丸、直撃は防いだが衝撃にコックピット内は揺さぶられ、カレンは悲鳴を上げる事も出来ずにいた。
『紅月カレン、君の勇姿を私は忘れない』
吹き飛ぶ紅蓮にトールギスⅡが追撃を仕掛ける。その踏み込みの速さにその場にいた者は殆ど反応する事が出来なかった。唯一反応できたクロウ＝ブルーストがリ・ブラスタの狙撃でトールギスⅡの行く手を阻もうとするが、華麗に避けられてしまう。
このままではカレンが危ない。エスターや藤堂がトレーズの後を追うが、如何せん機体速度が違いすぎる。そうこうしている内にトールギスⅡは紅蓮に追い付き、その手にビームサーベルを持ち――その手は迷いなく振り下ろされた。
必殺の一撃が紅蓮のコックピットに向けて放たれる。衝撃で意識を揺さぶられたカレンは歪んだ視界の中、呆然とその様子を眺めていた。
（シュウジ、アンタって……友達いたんだ）
そんな事を考えながら目の前の光に呑み込まれかけた時、一つの機影が横から割って入ってきた。その両腕にそれぞれ龍を従えたガンダム。そのガンダムの横やりにト

レーズは友人と出会えた様に微笑んだ。
『漸く来てくれたか、我が最大の理解者――――五飛よ』
『トレーズ、貴様はこの俺が倒す！』
広大な宇宙の中で、再び……光が弾けた。

その５８

宇宙要塞バルジの周辺宙域。ホワイトファングが挑む最後の戦い、死力を尽くして戦う彼等に対し、ＺＥＸＩＳもまた死力を尽くして応戦した。

気迫も覚悟も、これまでの敵とは段違いの相手にＺＥＸＩＳは最初こそ戸惑ったが……彼等もホワイトファング同様に相応の気持ちを持ってこの戦いに臨み、挑んだ。

世界にリアルタイムで発信される事と知りながら、人間の愚かさを見せ付けようと画策するイノベイターの策略に敢えて乗り、ＺＥＸＩＳとホワイトファングの両者は最後の戦いを繰り広げていた。

そんな中、ＺＥＸＩＳは宇宙戦艦リーブラから出撃してくる機体に苦戦を強いられている。ホワイトファングのリーダーであるミリアルド＝ピースクラフトの駆るガンダムエピオン。

Ｍｒ．ブシドーと名乗り、これまでアロウズの――――イノベイターの下でＺＥＸＩＳと幾度となく戦った彼は、擬似太陽炉搭載型ＭＳであるスサノオを操り、ソレスタルビーイングと戦い。

そして、ＯＺの元総帥でありロームフェラ財団の幹部だった男、トレーズ＝クシュリ

ナーダの機体トールギスⅡの出現により、ＺＥＸＩＳ側に傾いていた戦局の流れが再び変わり始めた。

宇宙要塞バルジ。コロニー支配の象徴と呼ばれるその周辺宙域で繰り広げられる死闘。光が弾け、その度に命が散っていく戦場で彼等は戦い続けた。悲しみでもなく怒りでもなく、己に課せられた使命の為に戦い、守るべきモノの為に光と共に消えていく戦場に、世界中の人々はテレビに映し出されているその映像を前に、罵声も罵倒もせず、静かにその行方を見守っていた。

涙を流しても、それでも目を背けてはならないと誰もがその光景を見つめ続けていた。大人も子供も関係なく、人類全てがこの戦いを見守り続ける中、二つの機体が激突した。緑色のガンダムと青と白のカラーリングを施されたＭＳ、それぞれの得物で唾斬り合う二機はそれぞれ違った感情を抱きながら、激しくなる戦場を駆け巡る。

『どうしたのかね五飛、君の実力はそんなものだったのかな？』

『黙れトレーズ！　貴様を打ち倒し、今回の戦いを起こした責任を取ってもらうぞ！』

『ならば、その刃で私を止めてみせるといい。君も自身の正義を語るのなら、己の行動で示してくれ』

『貴様ぁっ！』

交差する青と緑の機体、五飛の操るアルトロンガンダムがビームトライデントでト

レーズのトールギスⅡに斬り掛かるが、その異常な機動性と加速力によって避けられ、アルトロンの攻撃は虚しく空を切る。

瞬間、コックピットに鳴り響くロックオンアラートに五飛の顔が凍り付く。そんなバカなと否定しながら振り返ると、そこには此方の攻撃を避けたトールギスⅡの姿があった。ドーバーガンを向けられ、五飛は額から大粒の汗が流れる。瞬間、トールギスⅡから向けられていた銃口より光が放たれ、勢いは落ちる事なくアルトロンの背後に着弾しようとしていた。

だが、この時五飛が無意識に咄嗟の行動をした事が幸いし、放たれた弾丸は振り向こうとしたアルトロンガンダムの左肩に被弾。元々左肩には楯が装着されており、実質アルトロンは無傷でトールギスⅡの攻撃を防ぐ事が出来た。

けれど、この程度で気を抜く事は許されない。追撃を恐れた五飛はアルトロンガンダムを操り、少しばかりその場から離れる。だが、トールギスⅡからの追撃は来なかった。戦いに優雅さや美しさを見出すトレーズだが、戦いの中で勝機を見逃す程甘い男ではない。その事に訝しげに思う五飛だが、トールギスⅡ周辺を囲う白い物体により、何故彼が追撃を仕掛けてこないのか納得がいった。

『五飛、今の奴を相手に一人で戦うのは危険だ』

『私達も加勢させてもらう。納得出来ないだろうが理解して欲しい』

『アムロ＝レイ、それにクワトロ＝バジーナもか』
挟み込むように現れる白と金の機体。それぞれライフルをトールギスⅡに向けているが、今の所撃つ様子はない。アムロに至ってはフィンファンネルでトールギスⅡを囲んでいるというのに、仕掛ける素振りは微塵も見せていない。
まるで撃っても避けられるのを分かっているかの様な……ニュータイプの感覚が撃っても無駄だと告げているのか、アムロはνガンダムをそこから動かそうとはしなかった。
そんな時、トールギスⅡから笑みが聞こえてくる。こんな時に何を笑っているのか、不謹慎な態度を取るトレーズに五飛は苛立ちと悔しさを露わにする。
『……五飛。私は君に一つ謝らなければならない事がある。一対一の戦いを君は望んでいたようだけれど、実は私は一人で君と戦っていた訳ではないのだよ』
『……何だと?』
いきなり頓知な事を言い出すトレーズに五飛は訳が分からないといった様子で眉を寄せる。彼の口から告げられるその言葉をクワトロとアムロも不思議に思うが……実際、目の前のトールギスⅡは一機だけだ。
これまでも五飛はずっとトールギスⅡとトレーズだけと戦っていた。その間にホワイトファングの兵士達による横槍は無かったし、ミリアルドやＭｒ．ブシドーもそれ

ぞれの戦いをしているだけで、加勢した様子は一度もない。
一体何を言っているのかと不思議に思う五飛達だが、トレーズはやはり笑みを浮かべ、分からないのも無理はないと話を進めた。
『私の乗る機体、トールギスⅡは我が友達二人による手助けのお陰で成り立っている。機体のデータはゼクス……いや、ミリアルドの嘗て愛機であったトールギスを参考にし、もう一人の友であるシュウジがこの機体の仕上げに手を加えてくれた。彼等のお陰で完成されたこの機体は正しく私達三人の力の結晶。つまり五飛、我が友よ、君は最初から私達三人を相手に一人で戦っていたと言うわけだ。――騙し討ちの様な真似をして、済まなかった』
トレーズの謝罪に五飛達は面食らう。確かに彼の言うようにトールギスⅡは様々な人の手が加えられた特別な機体だ。嘗てライトニング・カウントが駆ったトールギスの戦闘データを下に組み上げられた機体、更にそこへシュウジ＝シラカワという優れた技術者が手を加えた事により、トールギスⅡの機体性能は使い手を選ぶ代わりに、本来よりも遙かに高性能な戦闘力を有する事になった。
その機体を十二分に引き出せる様になっているのは紛れもなくトレーズの実力。だが、彼は単騎で挑んでくる者に対し、些かアンフェアを感じているという。
トールギスⅡを操るのはトレーズの力、だがそのトールギスⅡは二人の友人の手に

よって生まれたモノ、その事に関してトレーズは感謝をしているが、同時に敵対者に対する躊躇を抱いてしまっていた。

これではあまりにも失礼だ。敵対する者に対しても、そして自分自身に対しても、トレーズは五飛との一騎打ちの最中に己を叱咤していた。そこへ現れたクワトロ＝バジーナとアムロ＝レイ、彼等の登場によりトレーズは己の内に刺さっていた楔が抜け落ちる感覚を感じた。

トレーズは感謝する。目の前の敵対者に、トレーズは謝罪する。未だ迷っていた己の心の未熟に対して……。

これで三対三、対等な立場となった事でトレーズは心の内で今度こそ遠慮はしないと決意し、誓う。最大限の礼儀と誇りを持って、トレーズは目の前の敵を屠る事にした。

気迫も威圧感も前とは違う。これがトレーズ＝クシュリナーダの本気かと、アムロとクワトロは警戒を最大限に高める。これからが本当の戦いだと、そう気持ちを新たにする一方で……。

『……ふざけるなよ、トレーズ。お前はどこまで他人を見下せば気が済むんだ!!』

五飛は激昂する。訳の分からない理屈で自己満足し、訳の分からない言い分で他者を惑わそうとする。そういうやり方を心の底から軽蔑する五飛は目の前のトレーズに対し、最大限の殺意をぶつけた。

だが、そんな五飛の殺意も彼の笑顔を崩すまでには至らない。トールギスⅡのコックピットで不敵に微笑むトレーズに五飛はアルトロンのスラスターに火を噴かし、一直線に斬り掛かっていく。

アムロとクワトロはそれぞれ援護射撃でトールギスⅡの動きを牽制するが、トレーズはそれをあざ笑うかのようにトールギスⅡを操り、二人の援護射撃の射線をかいくぐる。

『っ!?』

『さぁ、第二ラウンドを始めよう。私を失望させないでくれよ？　ＺＥＸＩＳ！』

これまでとは速さも機動性も違う。桁違いの性能に五飛は面食らうが、そんな隙も与えないとばかりにトレーズはアルトロンの懐に潜り込み、彼に向けて蹴りを放った。

蹴り飛ばされて体勢を崩すアルトロン、今度こそ追撃を仕掛けるトールギスⅡだが、そこにνガンダムのファンネルと百式のライフルによる弾幕が向けられる。

だが、それでもトールギスⅡには当たらない。百式の誘い込む為の射撃も敢えて踏み込んで避け、そこで待ち受けていたファンネルによる縦横無尽の攻撃もトレーズは全て〝見てから〟回避した。

デタラメな機動性、デタラメな加速力、唯一の欠点である火力不足もその手数と速さによって補われてしまう。これがトレーズ＝クシュリナーダの本気か、自身の攻撃を避

けられた事に戦慄を覚えるクワトロとアムロだが、唯一五飛だけは闘志を絶やさずにいた。

『こ、のぉおっ!!』

崩された体勢を無理矢理に戻し、所々から火花を散らしながらも五飛はトレーズを迎え撃つ。アルトロンのトライデントとトールギスⅡのサーベル、二つのエネルギーの衝突により両者の間で激しく火花が弾け飛ぶ。

『そうとも、そうでなくてはいかん。五飛よ、我が最大の理解者よ。どうか君の手でこの戦いに終止符を打ってくれ！』

『トレーズゥゥゥウッ!!』

微笑む者と激昂する者、様々な意志を抱きながら戦いは第二幕へと移行する。

◇

――――宇宙要塞バルジ・内部。トレーズによって斬られたシュウジはホワイトファングの手厚い手当を受け、コロニー支配の象徴と知られるこのバルジで、リリーナ＝ピースクラフトと共に幽閉されていた。

意識が回復し、今度こそトレーズを止めようとバルジからの脱出を試みるシュウジだが、彼の前に一人の女性が立ちはだかった。

レディ＝アン。嘗てトレーズの懐刀と恐れられた彼女が銃を片手にシュウジの前に立つ。意外な人物の登場にリリーナは言葉を失うが、シュウジの方は誰だか分からず軽く混乱していた。

（レディ＝アン、なんかどこかで訊いた話だけど……そういや、コロニー側との交渉で地球連邦から遣わされた平和の交渉人とかだった人だっけ？）

これまでの旅の中で見聞きした情報の中にそんな人物がいたことを今更ながら思い出す。自分とは接点が欠片も無かった為に、今の今までその僅かな記憶は忘却の彼方に消し飛んでいた。

シュウジは蒼のカリスマとして、目の前の女性にそこを退いて欲しいと願い出るが、レディ特佐はその要望に応える事はなかった。
「レディ＝アン特佐、申し訳ないがそこを退いては頂けないか？　今の私は急ぎの用事があってね」
「言った筈だ。貴様に拒否権はない。お前はここで大人しくしてもらい、トレーズ閣下の願いを聞き入れてもらう」
「その様子だと、貴方も彼の目的を知っている様ですね」
シュウジの言葉にレディ＝アンは当然だと返す。そして、更なる敵意を募らせて銃を突き付けてくる彼女にリリーナは止めなさいと止めようとするが、二人はそこから一歩も動く事はなかった。
「蒼のカリスマ、何故貴様があの方の友人と呼ばれているのかは知らんが、閣下から直々に任された以上、喩え貴様であってもここから出す訳にはいかない。死にたくなければ大人しくしていろ」
「貴方がどれほどトレーズ閣下を慕っているかは私には計り知れませんが……成る程、流石は彼の懐刀と呼ばれるお方、その忠誠心はジェレミア卿とも渡り合えそうだ」
「……バカにしているのか貴様は」
目を細め、敵意どころか殺意すら滲み出てくるレディに、蒼のカリスマはまさかと肩

を竦める。

「ですが、貴方に譲れないものがあるように、私にも譲れないモノがあります。――もう一度言います。そこを退きなさい。今の私にはあまり余裕がありませんからね、女性といえど……あまり、優しく出来ませんよ？」

仮面の奥で鈍く光る瞳、そこから感じ取れるハッキリとした怒気に、レディは冷静さを装いながらも戦慄を覚えた。

この男がどんな存在であれ、破界事変から続く戦乱を単独で生き抜いてきた猛者だ。一人でインペリウムと対立し、一人で世界と対立し……そして今、魔人と恐れられる存在が自分の前に立っている。そんな化け物を相手では瞬き一つも許されない。レディ特佐の緊張感が高まる一方――――。

（参ったなぁ、この人想像以上に頑固だ。説得するのは少し無理っぽいな。あんまり暴れると傷も開きそうだし、どうにかしてここから脱出しないと……）

蒼のカリスマは仮面で表情が読みとれないことを良いことに、部屋からどう逃げ出すか算段を立てていた。とは言え、この部屋から出ていけるのは目の前にある扉のみ。通気口位しか出られそうに無いことを確認すると、蒼のカリスマは別の方法で抜け出せないか脳内で模索する。

ワームホールを開いてグランゾンを呼び出すか？　却下。ここでグランゾンを出し

てしまったらリリーナにまで被害が及ぶ。

捻り貫き手で壁に穴を開けるか？　保留。壁を壊して脱出するにもまずは目の前の女性をどうにかしなくてはならない。

他にも何処かの端末に繋いでハッキングを試みたり、強攻策を考えたりする事はあったが、どれもこれも目の前のレディ＝アンという一人の人間によって阻まれ、蒼のカリスマの案は断念せざるを得なくなっている。

目の前の女性は自分の一挙一動を全て監視している。もし不審な行動を僅かでも見せれば彼女の手に持つ拳銃から容赦なく鉛玉をプレゼントされる事だろう。そうなれば敵対は免れず、最悪の場合彼はリリーナさんの前で殺人現場を見せ付ける事になるだろう。

レディ＝アンはトレーズの懐刀と呼ばれる存在、友人の大事な人を死なせる事は流石にしたくないが、いつまでもここに大人しくしている訳にもいかない。だが、行動を起こすにしても僅かばかりの〝間〟が必要とされる以上、蒼のカリスマ――――シュウジの選択肢は必然と狭められてしまう。

いったいどうする？　このままでは自分はトレーズを止める事も見届ける事も出来ないまま終わってしまう。どうにかしてこの状況から脱したいと思ったとき、それは突然起こった。

リリーナのいる場所とは反対の壁が爆発。壁を吹き飛ばす為の火薬の量が多かったのか、彼等のいる部屋は瞬く間に煙で蔓延する。

その最中、レディ特佐は見た。部屋を破って侵入してきたヒイロ＝ユイの姿と、その隙を突かれて手に持っていた銃が蒼のカリスマによって払われる瞬間を――。

「し、しまっ――――」

次の瞬間、うなじから伝わってくる衝撃にレディ＝アンの意識は強制的に閉ざされた。煙の中からリリーナの下に駆け寄ったヒイロ＝ユイが目にしたのは、無傷で座り込んでいるリリーナと床に倒れ伏しているレディ＝アン、そして――――。

血塗れの白いロングコートを肩に掛けて部屋を後にする仮面の男の後ろ姿だった。

その５９　前編

駆ける。宇宙要塞バルジ内部で愛機グランゾンを呼び出すべく、血塗れのコートを羽織った蒼のカリスマ――いや、シュウジ＝シラカワは広々とした場所を求めて要塞内部の通路を走り抜ける。

狭い所で呼び出しては内部にまだいるリリーナ達にどんな影響が及ぶか分からない為に自重せざるを得なかったが、既に戦いが始まって幾分の時が過ぎている。シュウジは内心焦りながらグランゾンの呼び出しの是非を悩んでいた。

（クソッ！　大体広すぎるんだよこの要塞！　何でこんな広い癖に案内板の一つもないんだよ！　迷ったりする奴絶対いるだろ！）

コロニー並に巨大な建築物の癖に案内板の一つも見当たらない。その不便さに嘆くシュウジだが、どんなに愚痴を叩いても時間は止まる事はない。限られた時間が更に無くなっていく……。そんな時、シュウジはある一つの決断をした。

「こうなったらもう手段は選んでいられないな。悪いなトレーズさん、この要塞のツケはアンタに支払ってもらうからな！」

どうやらリリーナ達以外にこの要塞内部に人はいないようだ。人気の無い通路で立ち止まり、シュウジは壁に向けて拳を放った。

殴りつけられた壁は爆発した様に弾け飛び、そこから隣の通路が見えている。隣の通路に移ると今度は蹴りで壁を破り、次もまた同じように壁を破り、シュウジは要塞の外壁に向かって駆け抜ける。

この要塞バルジがどんなに入り組んでいようと宇宙空間に漂う一隻の船である事には変わりない。何枚も壊していけば必ず外壁に辿り着き、その先はトレーズ達が戦っている宇宙が待っている。

こんな無理矢理な方法では傷が開く事は確実だが、シュウジは構う事なく要塞内部の壁を破り続けた。既に要塞内部では緊急事態を告げるアラームが鳴り響いているが、先も述べた通り警備兵の姿は見えてこない。このまま抜け出してやるとふらつく足に力を込めて、シュウジは更に目の前の壁を蹴り破いた。

と、そんな時だ。壁を破り、一瞬だけ目の前の煙に包まれ、視界に突如黒い刀剣が現れるとシュウジに斬り掛かってきた。

突然の事に驚くが、足がふらついていた事が幸いし、その刀剣は仮面の頬部分を掠めるだけに終わった。転がる様にして剣が飛び出してきた場所から離れ、シュウジは煙の中にいる人物を睨みつける。

やがて煙は晴れ、その中にいた人物が姿を現した時、シュウジはその表情を仮面の奥で怒りに染め上げる。
「久しぶりだねシュウジ＝シラカワ。こうして面と向き合って話をするのはリモネシアの時以来かな？」
「……前々から思ってたが、お前って結構粘着質だよな。なに？　ストーカーなの？」
黒衣を纏った死神、アサキム＝ドーウィン。シュウジにとって鬼門になりつつある男が、再び目の前に現れた。
「――――フッ」
奴の手にした黒い剣が濃厚な殺意と共に振り下ろされる。鋭く、そして速い剣筋だが、見えない訳じゃない。痛む体に鞭を打ちながら、シュウジは後ろに跳んでアサキムの剣を避ける。
そして、お返しとばかりに床に足を着けた衝撃をバネに反動の付いた回し蹴りを放つが、アサキムは不敵な笑みを浮かべて回避する。まるで影の様に揺らぐ奴の姿に惑わされそうになるが、シュウジは震脚で床を踏み抜き、下の階へと逃げる。今ここで奴と戦っても何の意味もない。奴から逃げ延びてトレーズの所へ向かうのが先だと落ちた先の通路でシュウジは再び駆け抜けようとするが…。
「がっ、……クソッ、今のやり合いの所為で体の傷が開いたか」

右肩から響く鋭い痛みに顔が歪む。見れば巻き付いた包帯が赤く染め上がり、そこから血が滲み出していた。

体が動く内に急がなければと、痛む肩に手を当てて耐えながら狭い通路を往くシュウジ。だが、そんな彼をあざ笑いながら黒い死神は目の前に現れた。

「どうしたんだい魔人。随分しおらしいじゃないか」

「ウッセェよ。こっちは今お前の相手をしている暇はないんだ。また今度相手してやるから、構ってちゃんは日を改めてまた来な」

「フフフ、強がりもそこまで言えたなら上出来だ。友に斬られながらもまだ友の為に足掻こうとする。……成る程、それも確かに一つの友情だ」

「お前、まさかトレーズさんに頼まれて———」

目の前のアサキムの意味深な言葉に最悪の事態が脳裏に浮かぶ。もしこんな奴がトレーズの協力者となっているのなら色んな意味で自分の心はへし折れる事になる。それを危惧するシュウジだが、アサキムは首を横に振ってこれを否定する。

「まさか、僕はただ君の存在を確かめる為に来ただけに過ぎない。———シュウ＝シラカワ。彼の因子を色濃く受け継いだ君を、ね」

「……何となく気にはしていたけど、まさか本当に博士の事を知っているとはな。それも黒歴史関連から来る話なのか？　それとも黒の叡智とやらか？」

「ほう？　もうそこまで情報を得ていたのか。取り敢えず流石と言っておこう。だが、今の君ではそれ以上の話は今後知り得ないだろう。――どうだい？　僕をねじ伏せて力付くで聞き出してみるかい？」
「言った筈だ。今こっちはすこぶる忙しいんだ。お前みたいな構ってちゃんに付き合ってやる暇はないんだ――よっ!!」
床を踏み抜いてアサキムに肉薄する。開いていた距離を瞬く間に詰めてくるシュウジにアサキムは一瞬驚いた表情を見せるが、次の瞬間には深い悦の笑みを浮かべ、シュウジの接近戦に応戦する。
間合いに踏み込んでくるシュウジに向けて黒い剣が閃光となって斬り掛かる。横に薙ぐ一閃をシュウジは身を屈めて回避する。彼の背後にある両脇の壁が切り裂かれるが、そんな事はお構いなしにシュウジはアサキムの横に回り込んだ。
「――フッ！」
短い呼吸と共に放たれる正拳突き、たかが人の身から放たれる一撃にアサキムは笑顔で受け止めてやろうと頬を吊り上げるが、その拳から感じ取れる圧力に悪寒を感じ取りすぐさま回避する。彼が操る機体同様、アサキムは俊敏な疾で横に避ける。
瞬間、壁に拳が触れた箇所が粉微塵となって吹き飛ぶ。あれを喰らったら痛そうだと、アサキムは苦笑いを浮かべながら煙の中で佇む仮面の男を見つめる。その頬には

うっすらと汗が流れ落ちていた。
「フフフ、まさか肉体面でも成長していたとはね。それもシュウ＝シラカワの因子のお陰かな？」
「さぁな、何せ教えてくれた人が凄い人ばかりだったからな。仮に博士の因子のお陰だとしても、切っ掛けをくれた事を感謝するまでさ」
「……その結果、今後どんな目に遭っても君は果たしてその姿勢を保てるかな？」
「あぁ？」
「隙あり、だよ」
「っ!?」
奴から感じるおぞましい程の殺気にシュウジの体が僅かに竦む。心の底から沸き上がる恐怖に背後に回るアサキムへの反応が遅れたシュウジに、彼の放つ一撃が直撃してしまう。
しかも直撃した箇所はトレーズに切り裂かれた所と同じ右肩であり、傷が開くどころか更に抉られた事にシュウジは苦悶の表情を仮面の奥で晒した。
ビシャリと、辺りに血液が付着する。ボタボタと流れ落ちる血がシュウジの足下で池を作る。血と共に流れ出る意識を何とか繋ぎ止めながら、シュウジは膝を折ることなく堪えてみせる。そんな彼の姿にアサキムは思いの外驚いたように言葉を紡いだ。

「まさか今のを耐えてみせるとはね。こればっかりは驚いた。素直に賞賛させてもらうよ」
「はぁっ……はぁっ……はぁっ」
「けど、これまでだね。今の攻撃を受けた所為で君の力は使い果たした。血を流しすぎた今の君は意識を保つのも億劫なんじゃないかな？」
　笑みを浮かべてくるアサキムにシュウジは何も言い返す事ができなかった。トレーズに付けられた傷、血を流した事により体力は失われ、今はアサキムによって更に血を流してしまっている。
　しかも胸元に付けられた傷まで開き始めてきた。既に体中の感覚が麻痺し始め、意識が朦朧としてきている。今の自分が立っているのか寝ているのかすら曖昧になってきている所に……アサキムが目の前にまで迫ってきていた。
「因子を高めて更なる力を付け、君は強くなったつもりでいたみたいだけれど……君は何も変わっていない、あの時と同じだ。膝を屈し、ただ死を待つだけだった頃の君と……唯一違うのは今の君は立っている事だが、それだけだ」
「……」
「さようならだ。孤独の魔人、君の旅路はここで終わる」
　同情、憐れみ、そんな瞳を宿しながら、アサキムはシュウジの頭を仮面ごと割ろうと、

手にした黒剣を振り下ろす。
アサキムの剣が仮面に触れる。その僅かな刹那の合間、シュウジの中にある記号（ワード）が浮かび上がる。
孤独、孤高、一人、ボッチ、連想される言葉が映像となり、シュウジの脳裏に浮かび上がる。それはごく最近のものであり、思い返せば嫌でも思い出す光景。
生と死の狭間、その一瞬の出来事にシュウジが思い出したのは……。
『このボッチ（笑）』
最近知り合えた、緑髪の魔女の姿だった。
清々しい笑顔と共に言い放つ無情の言葉。本人は何気ない一言のつもりが、シュウジの心にはトラウマ級に穿たれた一言でもあるそれは、彼のある感情の爆発を誘うのだった。
「だ……れ、が」
「？」
「誰がぁ、ボッチだオラァァァッ!!」
シュウジの怒髪天を突く怒りに要塞内部の全てが震える。破界事変から溜まってきた鬱憤の発露に、アサキムは何が起きたのかと面食らう。
怒りのままに震脚を打ち、床を破壊し、アサキム共々下へと落ちていく。次に二人が

出てきたのはこれまでとはまるで違う広々とした空間、要塞バルジの格納庫だった。
崩れた瓦礫を足場に、アサキムはシュウジに斬り掛かる。シュウジの感情の爆発に戸惑ってしまったが、そんな事は今となってはどうでもいい。剣を手に瓦礫から瓦礫へと飛び移るアサキムは、再びシュウジに黒剣を振り下ろす。飛び掛かるアサキムに対しシュウジは宙に浮かび続けている。
これで終わりだ。そう己の勝ちを確信するアサキムは――――次の瞬間、その表情を驚愕の色に染め上げる。
「――――バカな」
そこにいた筈のシュウジの姿が何処にも見当たらない。そんなバカなと呟くアサキムが目にしたのは、〝空中を蹴って無理矢理移動する〟シュウジの姿だった。
〝空中三角跳び〟ガモンから教わった内臓上げの上をゆく荒技の使用にシュウジの足が悲鳴を上げる。脹ら脛から聞こえてくるブチリと筋肉が引き裂かれる音に表情を歪めても、シュウジは構わず蹴りを放つ。
空中を蹴っての跳び蹴り、物理法則も糞もないデタラメな攻撃方法にアサキムは驚愕する。が、咄嗟の判断で防御の姿勢を取るのは流石の一言。剣を楯に防ごうとするアサキムだが、シュウジの蹴りはその防御ごとアサキムを吹き飛ばした。
壁に叩き付けられて血反吐をブチ撒ける。衝撃に意識が強制的に途切れ、視界が歪ん

だその時、既にシュウジは目の前にまで迫っていた。
避けなければ、しかし動かない体に表情を歪ませる。身動きが取れなくなり、シュウジの次なる攻撃を受ける事しか出来ないと悟るアサキムは、フッと笑みを零した。
（悔しいと感じるのは一体いつ以来だろう。こんな自分にまだ人間らしさが残っていたなんて――ホント、つくづく嫌な奴だよ、君は）
もしかしたら、自分は彼に対してどこか羨ましく思っていたのかもしれない。そう思いながらアサキムは目を閉じ――。
（――だけど、僕の勝ちだ）
「そこで寝てろぉ！　猛羅総拳突きぃぃぃっ!!」
拳の弾幕がアサキムを呑み込んでいった。
降り注がれる拳の雨、やがて雨は嵐となり、暴風となって格納庫の巨大な壁に穴を開けていく。全ての突きを放ち終えたシュウジは力尽きて瓦礫と共に落下、その後に残るのは大きく穴の開いた壁と、幾重もの壁を破られて宇宙空間を覗かせる穴があるだけだった。
既にアサキムの姿はない。これで漸くトレーズの所へ往けるとシュウジは瓦礫に埋もれた状態から抜け出して、グランゾンを呼び出す。
既に空気が漏れている。その為に早いところグランゾンに乗り込まなければならな

いが、その途中で何度も全身を襲う激痛に苛まされる。薄れ掛ける意識を気力で繋ぎ止めながら、シュウジは漏れ出す空気に煽られながらも、グランゾンのコックピットにどうにか乗り込む事ができた。

アサキムの言葉やあの後のリリーナの待遇が気になる所だが、今はそんな事を気にしている余裕はない。急いでトレーズを止めようとシュウジが操縦桿を握り締めた瞬間――――。

『シラカワシステム、起動します』

「っ!?」

シュウジの意識は待ったの声を上げる間もなく、容赦なく途切れる事になる。

その５９　後編

――――光が、弾ける。閃光が、駆け抜ける。ホワイトファングとＺＥＸＩＳ、両者の戦いは宇宙戦艦リーブラを破壊した後、更なる激しさを増していった。

コロニー側のガンダムを作り上げた五人の博士、彼等が後の事をＺＥＸＩＳに託すと、彼等はリーブラを自爆させ、自らの意志で宇宙戦艦ごと宇宙に散った。

それに合わせてリリーナを救出したヒイロも戦線に参戦、ホワイトファングとＺＥＸＩＳの第二ラウンドは事実上最後の戦いとなった。

Ｍｒ．ブシドーの駆るスサノオは刹那が、ガンダムエピオンを操るミリアルドはヒイロが相手をし、激戦を繰り広げる中……遂に、戦いは終局へと傾いた。

刹那のダブルオーライザーがスサノオを倒し、ヒイロのウイングガンダムゼロの一撃がガンダムエピオンを撃ち抜いた。戦力の要だった内の二つが撃墜され、ホワイトファングの戦意はへし折られる。

特に、ホワイトファングのリーダーだったミリアルドが敗れた事実に、彼等の戦意は無くなったも同然だった。

ホワイトファングの戦力も様々な機体を有し、様々な危機を乗り越えてきたＺＥＸＩＳには敵わない。地に落ちたホワイトファングの兵士達には……もはや戦い続ける意思などなかった。

だが、そんな中でも戦い続ける男がいた。それは戦線に出てきておきながら未だ一度の被弾も許していない脅威の機体、トールギスⅡとそれを十全以上に操るトレーズ＝クシュリナーダだった。

バルディオスの亜空間からの攻撃も、ゴッドシグマの剣撃も、ダブルダンクーガ達による挟撃も、アクエリオンの無限パンチすらも、トレーズの駆るトールギスⅡには掠りもしない。

スーパーロボット達の攻撃が当たらないのなら、今度はモビルスーツ隊の面々がそのトールギスⅡを追い詰めようとするが、違いすぎる機体の速さに追い付ける者は限られていた。

デスティニーとジャスティスのライフル、フリーダムのドラグーンによる波状攻撃も当たらず、エックスのサテライトキャノンやターンＡの月光蝶による攻撃も、味方の中で乱戦状態の今では撃つ事は出来ない。

ＺＥＸＩＳ対トールギスⅡ。多対一という圧倒的に不利な状況の中、そんな中でも冷静に戦場を駆け抜けるトレーズに誰もが戦慄した。

だが、そんなトレーズに唯一対抗しうる者達がいた。機体性能の差に翻弄されながらも、卓越した操縦技術で食らいつく金色の機体――――百式を扱うクワトロ＝バジーナと、搭載されたサイコフレームをフルに扱いながらトールギスⅡの行動範囲を徐々に狭めていくνガンダムのパイロット、アムロ＝レイ。

そして、トレーズの最大の理解者であると言われている五飛の駆るアルトロンガンダム。三機の機体と三人の攻撃により、トールギスⅡの行動軌道が微かだが歪み始めていた。

バルキリーの速度でもスーパーロボットのパワーでもない。彼等の戦いは乗っているパイロットの技量そのものを競うかのようだった。

凄惨な戦場の筈なのにどこか美しさが感じられる。突出するトールギスⅡを追っていく彼等の戦闘がＺＥＸＩＳの面々には終わり無き演舞（ワルツ）に見えた。

『トレーズ、お前程の男がこんな手を使う事になるとはな！』

『それは買い被りというものだよアムロ。私は君が思っているような人間ではないよ。偽善で傲慢、私の本質は旧暦の悪しき独裁者達と何ら変わりない』

『そこまで分かっていながら、何故！』

νガンダムのライフルがトールギスⅡに目掛けて放たれる。三つに分かれる紫色の槍は寸分違わず標的に向けて突き進むが、トールギスⅡは左手に持ったビームサーベル

で悉くそれらを切り払う。
『だが、そんな私にもやらねばならないこと位は熟知しているさ』
『それでこの戦いを引き起こしたというのか！　だとするならば、私は……！』
　後ろに下がるνガンダムに合わせ、今度は百式がビームサーベルを持ってトールギスⅡに肉薄する。νガンダムの援護射撃を受けながらの見事なコンビネーションを前に、トレーズは予め知っていたかの様にこれを対応した。
　ビームサーベルで挑んでくるクワトロに対し、トレーズもビームサーベルで応戦する。ぶつかり合う光の剣が火花を散らせ、二機の間を激しく照らし出す。
『クワトロ＝バジーナ。……いや、シャア＝アズナブルよ。貴方にも分かる筈だ。情報に踊らされ、目を瞑ってきた世界が目を覚ますには、現実を直視させるしかないと』
『だが、それでは……』
『トレーズゥゥゥッ!!』
　トレーズの言葉にクワトロは動揺し、口ごもる。彼の言い分も正しいと理解しているクワトロとしては、面と向かって否定する事は難しい。自身の出自から見てトレーズとクワトロの両者は、それぞれ似た部分があるのかも知れない。
　だが、そんな時に第三者がクワトロの迷いを断ち切る様に現れる。三つ叉の武器を手に突進してくるのは、双頭の龍を従えたアルトロンを駆る五飛だった。

相変わらず単騎で戦いを挑んでくる五飛に対し、トレーズも嬉々として迎え撃つ。百式を蹴りで突き飛ばし、アルトロンのビームトライデントをビームサーベルで受け止め、二機の間に再び激しい火花が散り始める。

『トレーズ、幾らお前が言葉で事実を飾ろうとも真実は変わらない！　世界に現実を直視させるだと？　何様のつもりだ！　世界の王にでもなったつもりか！』

ぶつかり合う刃と刃、交差しながらも尚打ち合い、五飛は更なる想いを言葉としてトレーズにぶつける。

『世界は貴様一人の所有物ではない！　今を生きる人間が今の世界を歪めたのならば、それを正すのも人間の役割だ！　貴様のしていることは人間の尊厳を奪うという事だと理解しているのか!?』

『――――ふ、フフフ』

『っ、何がおかしい！』

『いや、済まないね。つい先ほども私の友人から似たような事を言われてね。それを思い出してしまった故に……つい、噴き出してしまった』

済まない。と、トレーズがそう言い切る前に五飛がアルトロンを動かし、トールギスⅡに切りかかる。戦いの最中に笑うトレーズに怒りが沸き上がるが、トールギスⅡはそんな突然の攻撃も横に逸れるだけという簡単な動作のみで回避する。

やはり、感情任せに戦っても勝てる相手ではない。ＺＥＸＩＳを相手に一人で戦い、彼等を相手取り、更には翻弄してみせるトレーズの技量は……既に、幾多の戦場をくぐり抜けてきた自分よりも遙か高みに位置している。

このままでは何度刃を交えた所で勝てる見込みはない。故に今は感情を押し殺し、神経を集中させて五飛はトレーズとトールギスⅡを見据え――――。

『……トレーズ、一つ聞きたい。お前は今回の戦いでどれだけ多くの人間が死んでいったか――――理解出来ているのか？』

『無論、昨日までの時点で９９万９８７５人だ』

『……っ』

自身の質問に即答で応えるトレーズに、五飛は息を呑んだ。自らが犯した罪を正しく認識し、それでも己の道を突き進もうとする覚悟。今更ながら感じる目の前の人間の大きさに、五飛は操縦桿を握り締めて怒りを露わにする。

『――――アムロ＝レイ、クワトロ＝バジーナ。もう一度、奴と戦うチャンスをくれ』

『構わないが……やれるのか？』

『何度も言った筈だ。奴は……俺が倒す！』

『……了解した』

それだけ聡明でいながら、それだけ広い視野と正しい見方を持っていながら、誰より

も愚かな道を選ぶトレーズを五飛は許せなかった。
だが、既に対話の時は終わっている。もう言葉を交える必要も無くなったのだと、五飛は無言で武器を携える。そして、対するトレーズもこれが五飛との最後の戦いなのだと理解し、ビームサーベルを構える。
ホワイトファングの兵士達やＺＥＸＩＳの面々も固唾を呑んで見守る中……遂に、両者が動いた。
バーニアを噴かせて突進してくるトールギスⅡ。その殺人的な加速に振り回される事なく、性能以上の力を引き出すトレーズの力量は流石の一言。
そしてトレーズ自身も自分に攻撃は当たらないという確信があった。それは決して驕りや慢心ではなく、二人の友が手掛けてくれた機体への絶対的な信頼からくるものだった。
瞬く間に両者の距離が詰まっていく。牽制と援護を兼ね備えたアムロとクワトロの射撃を回避しながら、トレーズは頭の中で己の勝利の方程式を構築する。
迫り来る光の槍をギリギリまで引き付けながら回避し、すれ違い様にアルトロンを切り裂く。単純でシンプルな図式だがそれ故に効果的、これで決着だと思われたその時、トレーズの座るコックピットに僅かな衝撃が伝わってきた。
『っ!?』

その事実にトレーズは初めて目を見開いて驚愕を露わにする。これまで彼がＺＥＸＩＳの攻撃を避けてきたのは自身の力を彼等に見せつける為だけではない。トールギスⅡの機体設計の事情で、一度でも当たることは許されない事だったからだ。

トールギスⅡの機動性と加速はＭＳの中でも異常な程に突出している。その秘密は装甲の薄さにあった。

凄まじい加速を誇り、驚愕するほどの回避性能を有していても、彼の乗るトールギスⅡの機体装甲は薄い。軽量化による機動性能と加速度を上げる為の処置だったが、それがここへ来て裏目に出てしまっていた。

激戦に次ぐ激戦、ＺＥＸＩＳという地球最後の部隊を相手に大立ち回りをし、その結果……トールギスⅡの機体の耐久力は限界に達していた。

度重なる加速と無茶な機動、自身の操縦に遂にトールギスⅡが耐えきれなくなったのだ。だが、これは手を加えたシュウジの責任ではない。全ては退く事を忘れ、戦い続けた己に非があるのだ。友人の手によって生み出されたこの機体がどれだけ凄いモノなのか、それを教えてやりたくて年甲斐もなくハシャいだ己の所為だ。

（私の友は凄いのだと、そう見せびらかすように戦っていた。……何とも、滑稽な話じゃないか）

そしてそんな自分の隙を突き、機体に一撃を入れてきたアムロ＝レイは、まさにエースの技と言えるモノだった。何度も自分と刃を交えていく内に此方の動きを把握したのだろう。クワトロ＝バジーナとの息を合わせた連係攻撃も見事の一言に尽きた。
（あぁ、済まないな友よ。私の不手際でこの機体を壊す事になってしまった……）
掠めた箇所はトールギスⅡの生命線とも言えるブースターだった。反応が鈍くなった今の機体では迫り来る光の槍を捌く事は出来ない。
申し訳なさそうに俯くシュウジの姿が目に浮かぶ。そんな彼にトレーズは再び笑みを零し、迫り来るビームトライデントを――――受け入れた。
『トレーズ！』
『見事だ五飛、そしてＺＥＸＩＳ。君達と戦えた事を私は誇りに思うよ』
コックピット付近を貫かれトールギスⅡの機体が爆発する。
――――暗闇の宇宙で一つの光が弾けた。

◇

「――――う、ん」
「お、漸く目が覚めたか。この寝坊助め」
前髪を撫でる心地良い風、地獄にしては生温いなと一瞬笑ってしまうトレーズだが、次の瞬間聞こえてきた声にまさかと思い、その瞼をゆっくりと開く。
開かれた視界に映し出されたのは……とある浜辺。辺りは夜の帳が降りている所為で暗闇に包まれている中、満天の星空が明かりとなっている為、横にいる友人に気が付く事が出来た。
――――何故？　その言葉を発する前に、友は疲れた様に溜息を吐きながら言葉を紡いだ。
「全く、骨が折れたんだぜ？　ＺＥＸＩＳに気付かれないようにアソコから抜け出すの。お陰でアンタに付けられた傷が開いちゃったよ」
どうしてくれる？　責めるような口振りでジト目の視線を投げ掛けてくる友（シュウジ）に、ト

レーズは苦笑いで済まないとだけ答えた。
既に体を蝕む痛みは感じない。既にそんな境界を越えている今となっては……もう、そんなものを感じる必要はないのだから。
体の至る所からは血が流れ、五感の感覚も既にない。今こうして目を開けて意識を保っていられるのも奇跡としか言いようがない。
「ったく、アンタもシュナイゼルもどうして頭の良い奴は皆ややこしいことを進んで実行するかなぁ。付き合うこっちの身にもなってくれよ」
「フフ、そういいながらキチンと応えてくれる辺り、君は結構義理堅いのだな」
「うっせ」
故に、トレーズは気付く。機体の爆発に巻き込まれた自身の体は既に手遅れであり、自分は……もう長くはないということに。
そんな事を感じさせないよう、隣の友人は明るい声を崩さないよう努めていた。一人で死なせないと、一人のまま逝かせはしないと、悪態を吐きながらも側から離れようとしない友人に、トレーズはこの時、言葉にならないモノを感じ取った。
「大体さぁ、アンタ等頭が良いけどさぁ、結構向こう見ずな所あるよね。頑固っつーか意志が強いっつーか、そういうの今時流行らないからね。今時の若者はそういうの苦手だから、今度からはそこら辺も考慮して行動を移しなさい。いいですねトレーズ君」

「く、ハハハ……そうだな。次からはそうする事にしよう。世話を掛けて済まないな、シラカワ先生」

先生ぶったフザケた態度に思わず笑みが零れる。こんな時でも人は笑えるものなのだなと、トレーズは空を見上げた。

――もう、起き上がる力もない。寝たきりの状態で時折意識がぶつ切りになるのを自覚しながらも、トレーズは友人との語らいを楽しんだ。

「……なぁ、シュウジ。聞かせてはくれないだろうか」

「ん？　何を？」

「君の世界……君が、もといた世界の事、平和な日々を過ごしたという君の国の事を……聞かせてはもらえないだろうか」

「……あぁ、勿論だとも」

死を待つ自分の為に彼は語る。嘗て自身がいたとされる世界と、そこで過ごした日々の事を……。

ありふれた日常。怠惰に思える日々を送りながらもささやかな刺激のある毎日。学校帰りにカラオケに寄り、友達と一緒に笑い、家族の待つ家へと帰る。

父と語らい、母と笑う。当然楽しい事ばかりじゃないが……それでも、人並みの幸せに溢れた日々だった。

ついこの間まで自分がいた世界。今でも鮮明に思い出せるが……シュウジにはどこか、遠い世界での出来事の様に思えた。

そんな中、トレーズは口にする。いつか、そんな世界を見てみたい。徐々に力を失っていた彼には……もう、唇を動かす力も残されてはいなかった。

聞こえてはいないその言葉を、シュウジは笑顔で応える。

「――――当たり前だろ。いつかシュナイゼルの奴と一緒に連れてってやるよ」

――――嗚呼、それは楽しみだ。そんな日が来ることを待ち焦がれた。学校帰りに同じ道を歩き、友人達と一緒にありふれた日々を過ごす。そんな情景を幻視しながら……トレーズは静かに瞼を閉じた。

自分は多くの人の命を奪った。多くの人の人生を歪ませた。――――後悔はない。元より自分には後悔する資格すらありはしないのだから。

けれど、最後まで自分を友だと受け入れ、こうして看取ってくれるシュウジに――――

「ありが……とう」

トレーズは心の底からの感謝の言葉を呟き――――二度と覚めぬ眠りについた。

『世界中の皆さん、ご覧になられたでしょうか。これが戦争です。私達がこれまで目を背けてきた戦争です。どうか、今回の事を忘れないで下さい。戦争の愚かしさを忘れないで下さい。そして、世界を変えられるのはこの世界に生きる私達自身だという事も……どうか忘れないで下さい』

近くの海岸で留めておいたグランゾンの通信からレディ＝アンの世界中に向けられたメッセージが広がっていく。そんな中、無人島にいる一人の青年はこの日、大切な友人を一人……失った。

彼の啜り泣く声は止むことはない。やがて日は昇り朝日が水平線の向こうから顔を出し、青年を照らし出す。

ホワイトファングとの戦いが終わり、大切な友人を失っても、今日もまた世界は回る。

その６０

――私を恨んでくれても構いませんよ。

は？　何ですかいきなり……。

――貴方のグランゾンに搭載された〝シラカワシステム〟アレは貴方の意識レベルの急激な低下、そして生命維持が必要だと判断された時、例外として強制的に作動します。その間の貴方の意識は深層心理の奥深くに凍結され、補助要員として私が表の人格として現れます。

……え？　じゃあ俺ってもしかして二重人格者みたいなもんなの？

――厳密には違いますが、そう認識して戴いても構いません。詳しい内容はまだ話せないので伏せて頂きますが、貴方の害になるような事はないと断言しておきます。

……いえ、本人の意思の有無を聞かずに作動してしまうシステムなど、貴方にとっては害悪でしかありませんか。

……。

――シュウジ＝シラカワ。貴方には私を責める権利があります。貴方の意思をね

じ曲げ、友を見殺しにした原因となったのは私です。詭弁ではありますが、貴方の自由を奪った事に対する謝罪をどうかさせて欲しい。

……その必要はないですって博士。俺は別に貴方を恨んでいるつもりはない。俺がこうして生きていられるのは貴方がグランゾンを俺に与えてくれた事なんだ。最初はどうあれ、今俺がここにいるのは間違いなく貴方のお陰、だから恨むなんて筋違いな事はしない。ただ……。

――……ただ？

トレーズさんと……もっと色々話をしたかったなぁって思ってさ。

――……。

んじゃ、俺往くよ。まだやり残している事があるからさ、また色々世話になると思うけど、その時はまた宜しくお願いしますね。

――……ええ、精々頑張ってきなさい。

それじゃ、行ってきます。

――……いってらっしゃい。

◇

Z月＊日

前回のシュウ博士によるシラカワシステムを介しての介入は、生命の危機的状況に陥っていた自分の意識を強制的シャットアウトするものだった。

自分のグランゾンには万が一の時、搭乗者の生命を守る為に生命維持装置なるものが搭載され、シラカワシステムが作動している合間は、自分はその生命維持装置によって最低限の行動が出来るまで強制的に切られ、結果的に自分はトレーズさんを見殺す事になった。

システムに眠らされている合間、例の不思議空間で博士と会い、恨んでくれと言われたが……正直そんな気分にはなれなかった。

だって見殺しにしたのは自分であって博士じゃない。自分があの時トレーズさんを止められなかったのが最大の原因だし、止めようと思って殴りかかっても返り討ちに合う始末。全く、情けないといったらありゃしない話である。

それに、そんな事でウジウジしていたらトレーズさんにまでヘタレ呼ばわりされてし

まう。後悔するのは後回しにして、これからの話をしていこうと思う。
トレーズさんを埋葬して早一日、グランゾンのコックピット内で養生していた自分に、突然外部からの大音量による呼び掛けが響いてきた。
あまりの大音量、もはや公害になりつつある騒音に目を覚ますと、水平線上に浮かぶ一隻の航空艦が此方に向かって近付いてきていた。
ブリタニア帝国の航空戦艦〝アヴァロン〟その姿を目撃した時、そういやエリア１１に置きっぱなしだったなとルルーシュ君の文句の叫びを耳にしながらそんな事を思った。
未だに痛む体を動かし、グランゾンを操縦してどうにかアヴァロンに乗り込み、グランゾンから降りると、待ちかまえていた皆が自分の姿を見るなり言葉を失う面々を見たときは……不謹慎だが吹き出してしまった。
スザク君とセシルさんからは怒られ、ロイドさんとシュナイゼルには呆れられ、ルルーシュ君からはバカめと罵倒され、カノンさんにも深々と溜息を吐かれたし、Ｃ．Ｃ．さんからはこれだからボッチはと侮蔑され、ナナリーちゃんに至っては泣かれてしまった。
周りから酷く非難される中、ジェレミアさんだけは自分の味方でいてくれたのが唯一の救いでした。流石は忠義の騎士、仲間に対するフォローも見事なものである。

……まぁ、一人で勝手に出て行って、半分死人みたいな状態で戻ってきたのだ。唯でさえ怪我人だった自分が更に重傷を負って帰ってくれば、そりゃ当然反応はああもなるだろう、皆様のお怒りはごもっともである。その後の自分は問答無用で医務室にある治療用のベッドに寝かされる。まさかこんな短時間に二度もコレにお世話になるとは思わなかったと冗談混じりにそんな事を口にすると、セシルさんにもの凄い剣幕で睨まれた。……うん、全面的に俺が悪いねスミマセン。

というか、心配してくれていた事に今更ながら嬉しくなってきた。破界事変の頃は怪我しようが死にかけようが心配してくれる人間なんていなかったから……。

それはそれとして問題だった治療の方だが、グランゾンで少し療養した為か回復は早く、治療用ベッドで眠っている期間は一日程度で済んだ。セシルさんからは絶対安静だと言われたけれど、残念ながらその言葉に従う訳には行かなかった。

自分がアヴァロンから離れていた合間、ルルーシュ君達は独自の情報源で世界の動きについてあれこれ調べ回っていたようなのだ。———自分が留守にしていたのは一日程度だったのに熱心なものだなと感心する。

ルルーシュ君達が入手したという情報は、ネオ・プラネッツ宙域にバジュラの母星と思われる星があるというものだった。その情報を寄越してくれたのは……なんと、セルゲイさんとアンドレイさんというスミルノフ親子だったというのだ。

あのアフリカタワーでの一件以来行方不明だった彼等は軍とアロウズ、それぞれの組織から抜け出した後、人知れず世界を巡っていたのだという。

世界を見て回って色々考える事があったのか、アンドレイさんの顔付きが少し変わったとシュナイゼルは言う。当時は下手に挑発した事を言った為に不安に思っていたが、それは杞憂に終わったようでホッとする。

さて、そんな二人が軍とアロウズに見つからないようにする為に世界中を旅して回っていた最中、ちょっとした機会でフロンティア船団に乗り込んだ際に船団内部にある喫茶店に立ち寄った時、彼等は聞いたという。

フロンティア船団の大統領の側近と呼ばれる三島何某という人物が、怪しい男と密談を交わしていたのだという。その喫茶店では余りに浮いている二人にスミルノフ親子は怪しいと睨んだのだが、何せ相手はフロンティア船団の政府関係者。軍から抜け出した身としては公に聞き込みをする訳にもいかず、遠くから聞き耳を立てるしかなかった。

しかも相手の警戒度の高さから、此方も観光客として振る舞わなければならないし、密談の内容を聞き取るのに相当手こずったのだという。相手に気取られないよう注意払いながら漸く手にしたのは〝バジュラ〟〝母星〟〝ネオ・プラネッツ〟の三つの単語情報のみ。以前からグレイス＝オコナーの情報を集めていた自分は遂に奴の計画が最

終段階に移行したのだと察する事が出来た。

本当は今すぐにでもネオ・プラネッツに向かいたい所だが、今日一日だけは大人しくしてくれと全員から釘を刺されてしまっている。現在は体調も良くなったので自分の部屋で日記を綴る事を許して貰っているが、それでも時間制限が付いており、もし一分でも遅くなれば即座に強制連行させるつもりらしい。

しかも部屋の前にはスザク君が常時待機しているし、これ怪我人に対する扱いじゃないよね？　囚人に対する扱いだよね？　……おかしいでしょ色々と。

けれど、そんな風にさせてしまっている原因は自分なので文句は言わない。それに、奴の計画が最終段階に移っている以上、奴がもう逃げ回る事はない。

今頃ＺＥＸＩＳはネオ・プラネッツに向けて進軍している事だろう。自分達が向かうときは恐らくは戦場のど真ん中、少々危険要素を孕んでいるが……なに、問題はない。

明日は決戦。自分の中にある蟠りと決着を付けるべく、今日は早めに休もうとする。

――――最後に一言だけ書かせて欲しい。トレーズさん。貴方の友達になれて……俺、とても嬉しかったです。

この想いを忘れない為にこの言葉を日記に記す。

◇

――――地球・リモネシア。

一体何故この世界はリモネシアという小さな島国にこうまで残酷なのだろうか。カラミティ・バースで国が壊れ、折角復興が進んでも……連邦政府の思惑によって今まで積み上げてきたモノを破壊され、再び国土が焼かれた。更にはインサラウムの侵略行為によりリモネシアの大地にＺＯＮＥという謎の建築物まで建てられる始末。

破界事変の時と合わせてこれで三度目、壊された故郷の大地でリモネシアの民達は再びこの島国へと戻ってきていた。

これまでＺＥＸＩＳで世話になっていた彼等だったが、陰月の騒動以降今後は更なる戦闘の激化が予想されるとしたジェフリーは各艦長達と相談、これによりリモネシアの

住民を地球へ置いていこうと決断するのだった。
グランゾンによって半壊滅状態となったアロウズももう手を出してこないだろうと判断した彼等はリモネシアの住民達に事情を説明し、艦から降りて貰うよう説得した。
艦長達の丁寧な説明と真摯な対応によりリモネシアの人々は荒れる事はなかったが、彼等の意外な注文に各艦長らは別の意味で頭を悩ませる事になる。
〝リモネシア〟に返して欲しい。そう願い出る彼等に艦長達は困惑するが、彼等の強い要望によりコレを承諾。リモネシアの人々を故郷に返す事にした。
――破壊された町、焼かれた畑、砕かれた仮設施設。何もかもが無くなったこの国で、再びリモネシアの人々は降り立った。
何もないこの地で、再び人は動き始めた。もう一度建て直そうと、皆が住んでいたあの街を……もう一度蘇らせる為に。
（シュウジ、皆帰ってきたよ。また無くなっちゃったけど、もう一度建て直す為に……リモネシアを再建する為に、帰ってきたよ）
誰もが復興作業に取り掛かる中、シオ――いや、シオニー＝レジスは想う。ここにはいないもう一人の人間の事を……。
（皆、待ってるよ。貴方が帰ってくるのを……待ってるよ――ねえ、シュウジ）
「帰ってきて……くれるよね？」

彼女の言葉に応える者はなく、波の音だけがリモネシアの大地に響いていた。

◇

翌日。傷も塞がり、一応は万全の状態となった自分は、アヴァロン内の通路を歩く。目の前にある扉が開かれ、そこを潜るとアヴァロンのブリッジにたどり着く。

そこにはスザク君とＣ．Ｃ．さん、セシルさんにロイドさん……そして、仮面を被ってゼロの姿となっているルルーシュ君がブリッジで待ち構えていた。

自分は彼等に問う。本当に付いてくるのか？　これから目的地に向かうのは、自分が世界から狙われる切っ掛けを作った奴に対する報復だ。ＺＥＸＩＳと共倒れになるようけしかけ、自分とグランゾンを利用しようとした報いを受けさせる為のものだ。

トレーズさんの時とは違う本当の意味での私事。自分の都合に付き合う必要はない

んだぞ。と、そう口にする自分の言葉に対し、ルルーシュ君達は今更だと即答する。
彼等もまた、 自分の都合で戦いに向かうといった。そこまで言われては何も言えない自分は、無理はするなと保護者気取りでそう言うだけで精一杯。
ロイドさんもセシルさんもここまで来たのだから最後まで付き合うと言い、艦内に残る事にした。巻き込んでしまって済まないと謝罪すると、セシルさんは気にしないでと返し、ロイドさんはそれよりも早く行こうと急かしてきた。
踵を返して皆と一緒にブリッジを後にしようとする。それぞれの機体が置かれている格納庫に向かうべくブリッジから出て行こうとするが、その際にセシルさんから一着の白いロングコートを手渡される。
それはトレーズさんからプレゼントだと渡された物だった。斬られたり、銃で撃ち抜かれたりしたことから所々破損個所はあるけれど、血の痕の無い真っ白な状態へと戻っていたコートに自分は感激した。
既にナナリーちゃんとシュナイゼル達は艦から降りて貰っている。これから向かう先はこれまでとは比にならないほど危険な戦場になる為だ。
最初は自分のこの提案に渋っていたナナリーちゃんだが、度重なる説得により何とか納得させ、無事に地球に帰ってくることを条件にアヴァロンから降りて貰う事になった。

その際にジェレミアさんも護衛の為に降りて貰う事になっている。忠義を誓ったルルーシュ君の願いでもあり、ジェレミアさんは二つ返事でこれを了承。嘗てオレンジと呼ばれ、軍から外された惨めな軍人は皇族を守る心強い剣となった。

ジェレミアさんが抜けた事で、実質この艦に残された戦力は四機だけとなっている。だが、負ける気はない。負ける気がしない。今ここにいるのは帝国最強の騎士だった男と、己の知略で世界を壊そうとした男がいる。……負ける要因は何一つなかった。

「さぁ、行こうか」

セシルさんから渡されたコートを羽織り、ブリッジを後にする。三人の仲間を引き連れて仮面を被った自分は、今度こそ奴と決着を付けるべく、愛機のいる格納庫へと向かう。

――――あぁ、楽しみだなぁ。

長らく待ち望んでいた展開を前に、自分のテンションは早くも最高潮となっていた。

その61

〝ネオ・プラネッツ〟時空震動の影響で地球とは異なった星々が存在する宙域。クエント星や様々な文明を持つ星々が存在するその宙域の奥深くに、バジュラの母星が存在していた。

知性も理性も持たず、人類に対して敵対行動をとり続けてきたバジュラ。次元の壁を越えてまで出現する超時空生命体に人類は追い詰められる事になったのだが……フロンティア船団に属するとある人物の報告により、事態は好転する事になる。

レオン＝三島。マクロス・フロンティア新統合政府の重鎮で大統領政府の主席補佐官、フロンティア船団内で実質のＮｏ．２である彼は、大統領にある情報を公開した。

〝バジュラの母星〟超時空生命体であるバジュラ達の母星を発見したと語る三島はそこに住まうバジュラの女王を討伐し、そこを船団の拠点にしようと提案。これまで旅を続けるしかなかった船団、その立場故に苦労を強いられてきた大統領は、三島のこの

甘言に乗ることとなる。
バジュラの対抗策として用意されたシェリル＝ノームの歌。バジュラ側に付いたとされるランカ＝リーに対抗すべく戦場というステージに立つこととなる。
最初はシェリルの歌によってバジュラ達を混乱させる事に成功していたが、ランカの歌声が宇宙に響いた時、シェリルの歌はランカの歌に圧倒され、陣形を取り戻したバジュラの猛反撃により、統合軍は瞬く間に壊滅状態へと追い込まれてしまった。
そこへ現れるＺＥＸＩＳ達。今まで情報を集める為に世界各地を放浪していたオズマと合流した彼等は、その情報を元に三島を告発。バジュラと繋がりがあったギャラクシー船団、そしてそのギャラクシー船団と通じていた三島はその場で取り押さえられる事となり、戦いの影で現大統領を暗殺し、自分がフロンティア船団の代表に君臨しようと画策していた三島の野望は、この時呆気なく崩れ去ってしまうのだった。
遂に始まるＺＥＸＩＳとバジュラの決戦。度重なる激闘に疲弊の色が濃い彼等だが、持ち前の気力の強さで乗り切ろうと力を揮う。
だが、そんな彼等に横槍を入れてくる者達がいた。イノベイター――――いや、イノベイド達の率いる傀儡達がＺＥＸＩＳに対し後ろから攻撃を仕掛けてきたのだ。超巨大航空艦〝ソレスタルビーイング〟と、無数のモビルスーツを引き連れた彼等の参入に、ＺＥＸＩＳは窮地に陥る事になる。

『クソッ！　ランカ、待ってろよ。今助けに行くからな！』
　ギャラクシー船団の旗艦〝バトルギャラクシー〟そこで幽閉されているランカを助けるべく宇宙を駆けるアルトだが、バジュラ達の放つ弾幕によって近付く事が出来ない。
『刹那、頼む。ルイスを助ける為に力を貸してくれ！』
『あぁ、そのつもりだ！』
『うううぅあああああっ!!　サァァジィィィッ!!』
　一方、アロウズの傘下に入り、今はイノベイド達の手先となってしまったルイス＝ハレヴィ。彼女を止めるべく戦闘を続ける刹那だが、相手は新型のモビルアーマーに乗り込み、狂戦士となってしまった者だ。下手に手を出してしまえば此方が落とされてしまう。かといって全力で対処すれば今度はルイスを落としかねない。彼女の駆るモビルアーマー〝レグナント〟機体から発せられる曲がる粒子砲を避けるも、刹那は着実に追い込まれていた。
　助ける者を助けるべく力を尽くそうとするＺＥＸＩＳ達。だが、そんな彼等の尽力する様をあざ笑うかの様にバジュラの母星、そしてソレスタルビーイング号から更なる増援が押し掛けてきた。
　母星からは無数の戦艦と新種のバジュラが、ソレスタルビーイング号からは特攻兵器

と思われる機動兵器がトランザムを用いてＺＥＸＩＳに襲い掛かる。
『オラオラァ！　テメェがあの男の弟ならちったぁ楽しませろよぉ！』
『がっ、貴様！』
『艦長！　プトレマイオスに特攻兵器が集中して押し寄せています！』
『我が艦を前に出せ！　プトレマイオスの楯となり態勢を整えさせるぞ！』
　押し寄せてくる軍勢、止まない弾幕、激戦の連続に疲弊していた所に容赦なく降り注げられる敵の攻撃……そして、ソレスタルビーイング号から放たれる極光により、ＺＥＸＩＳの置かれた状況は更に追い詰められる事になる。
『敵超大型艦からのエネルギー反応、来ます！』
『面舵一杯！　総員、対ショックに備えろ！』
　ＺＥＸＩＳの陣形を崩す巨大な光。緋色に輝く光は射線上にいる味方すら厭わず、容赦なくＺＥＸＩＳに襲い掛かる。直撃こそしなかったものの衝撃によりダメージを負った機体は少なくはない。急いで各機体に一度艦に戻って修復作業を受けるよう指示を飛ばすが……敵は、そんな暇など与えないとばかりに攻め立てる。
『アッハハ、逃がしはしないよ！』
『お前はここで落とす！』
　陣形が崩れた所にアロウズのモビルスーツ、ガラッゾとガデッサが無数の特攻兵器を

従えてダブルオーライザーへ攻撃を仕掛けてきた。
『クッ、こんな時に！』
『刹那！』
多勢に無勢な状況に陥ってしまう刹那にガンダムチームの各機は援護に向かおうとするが、バジュラと特攻兵器、二つの脅威によって阻まれてしまう。
『ランカの邪魔はさせない。貴様は死ね』
『お前は、ブレラだと!?』
『消え失せろ！』
『ぐぁっ！　クソォオ、ランカァァァッ!!』
更なる敵の増援、止まらない攻撃。ここが正念場だと分かっていても、度重なる戦闘による疲労がパイロット達の肩に重くのし掛かる。このままでは取り返しの付かない状況にまで陥ってしまう。下手をすれば全滅もあり得る状況に誰もが焦り始めたとき、〝彼等〟は突然現れた。
『刹那、沙慈、無事か!?』
『……え？　これって』
『ランスロット＝アルビオン、枢木スザクか！』
『おっと、動くなよ。外れるからな』

『Ｃ．Ｃ．!?　アンタまで!?』
『と、言うことは……』
『無論、私もいるぞ。――相転移砲、発射！』
襲い掛かるイノベイド達を払いのける白い機影、続くピンク色のランスロットが紅蓮に押し寄せてくる敵を撃ち抜き、蜃気楼の広範囲攻撃がバジュラと特攻兵器をまとめて吹き飛ばす。
――そして。
『さぁ、舞台は整いましたよ。いい加減に出て来たらどうですか？　グレイス＝オコナー』
戦場のど真ん中に降り立つ蒼き魔神〝グランゾン〟バジュラの母星を前に現れた最強の魔神の登場に敵味方問わず、全ての人間は息を呑んだ。

◇

蒼き魔神〝グランゾン〟現在の地球圏で最も強力な機動兵器の登場に、これまで爆発と轟音で溢れていた戦場が一瞬にして静まりかえっていた。

地球の全戦力の半分を破壊した魔神。敵じゃないと分かっていながらも、ＺＥＸＩＳの面々は緊張で体が震えていた。

敵であるイノベイド達もそうだ。たった一機に一方的に蹂躙され、何もできないままやられた彼等の記憶は、屈辱以外の何ものでもなかった。

だが、それ以上に深く刻まれた恐怖の記憶がイノベイド達を攻撃に移させない。手を出した瞬間やられると理解した彼等は、仕掛けようとも動けずにいた。

だが、バジュラだけは別だった。魔神の登場に畏れ、体が竦んで動けなくなったイノベイド達とは対照的に彼等はまるで飼い主に待ったを言われた猟犬の様に大人しくなっている。あれだけ猛威を揮っていたバトルギャラクシーも、今は嘘のように黙している。

――一体、何がどうなっている？　誰もが疑問を抱くが、シュウジ――いや、蒼のカリスマはＺＥＸＩＳ達には目もくれず、バジュラの母星を睨みつける。

バトルギャラクシーをまるで眼中にしていない。目の前に存在する巨大な人型兵器を前に全く動揺を見せない彼は、バトルギャラクシーの更に奥にいるであろう黒幕を呼

び掛けた次の瞬間――――星が震えた。
『……ウフフフ、アハハハハハ！』
　甲高い笑い声と共にバジュラの母星から現れるソレ。バトルギャラクシーよりも遙かに巨大なソレはバジュラの女王と呼ばれる存在だった。
女王（クイーン）の頭部と思われる部分から声が響いてくる。宇宙空間なのに響いてくるその声は……グレイス＝オコナーのものだった。
『あらあら、誰かと思えばいつぞやのうっかり仮面じゃない。私達に何かご用かな？』
『その節は大変お世話になりました。今回貴方をお伺いしたのは他でもありません。いつぞやの借りを返す為に……グレイス＝オコナー、貴方を消しに来ました』
　これまでとはまるで違う。敵意剥き出しで今にも攻撃しそうなグランゾンと蒼のカリスマの態度に、ＺＥＸＩＳ達は戦慄する。だが、そんな彼等とは対照的に女王に寄生するグレイス＝オコナーはその余裕な態度は崩さない。
『ウフフフ、果たしてお前如きに出来るのかしら。バジュラの女王と融合した事で神にも等しい力を手に入れたこの私に！』
　時空を越え、次元の壁を破ることすら可能なバジュラ達を女王と融合する事によって支配する事に成功したグレイス＝オコナー。最早歌など必要ない、この力で銀河全てを支配してやろうと意気込む彼女に……魔人はつまらなそうに吐き捨てる。

『神……ですか。星一つを手にしただけで全てを掌握出来るほど、世界は甘くありませんよ』
『ほざきなさい。魔人と呼ばれていようがお前は所詮人間に毛が生えた程度の存在、その程度の器では私には疎か〝彼〟にすら届きはしないわ』
『その物言いは少々癪に障るな。グレイス＝オコナー、君がその力を手に入れたのは半分は僕のお陰だと言うことを忘れないでもらいたいな』
背後にある大型艦からも聞こえてくる声、この声の主こそがイノベイド達の親玉であり、リモネシアにアロウズ達を向かわせた張本人なのだと、魔人はこの時悟る。
『それは失礼をしましたわ。ごめんなさい、お詫びとしてそこに転がっている魔神を手土産にしたいのだけれど？』
『……少し人間よりも高みに到達したからといって調子に乗らない方がいい。その機体はいずれ僕のモノにするつもりだったんだ。君の手を煩わせるつもりはないよ』
『あらそう？　無理しなくてもいいのよ？』
グランゾンを挟んで黒幕同士の罵り合い、端から見れば巨大な殺気同士をぶつけ合っている彼等に対し、ＺＥＸＩＳはいつ攻撃を再開してもいいようにそれぞれ機体を臨戦態勢に移らせる。
そんな中、魔人はイノベイドの親玉に問う。以前リモネシアを焼いたのはお前なのか

と。

イノベイドは応えた。その通りだと、含み笑いで蒼のカリスマの問いに応え――――。

『あぁ、もしかして君がここにきたのはアレかい？　復讐のつもりなのかな？　意外だよ。君はもう少し賢い人間だと思っていたのに……意外と俗世に染まっているんだね。まぁ、あのトレーズの友人なんてやっている人間だ。器の大きさなんてたかがしれてるか』

己の行動理由のみならず、世界の為に散っていたトレーズすらも罵倒する。その傍若無人な振る舞いにＺＥＸＩＳの面々は怒りを露わにするが、言われた蒼のカリスマは以前と無反応のままだ。

その無反応につまらなくなったのか、グレイス＝オコナーとイノベイド達の首領であるリボンズ＝アルマークは攻撃を開始させる。バジュラと特攻兵器が大挙と成して押し寄せてくる中、魔人は静かにそれを受け入れる。

特攻兵器の自爆とバジュラ達の攻撃、数の暴力に飲み込まれていくグランゾンを助け出そうとＺＥＸＩＳとルルーシュ達は動くが、戦争屋（アリーアル＝サーシェス）と狂戦士（ルイス＝ハレヴィ）、更に改造人間であるブレラとイノベイド達が彼らの行く手を遮った。

このままではいけない。カレンが機体を加速させてグランゾンの下に駆けつけようとするが、無数に湧き出てくるバジュラ達により包囲網から抜け出せずにいた。

無抵抗のまま攻撃を受けるグランゾン。早くそこから逃げろとカレンは叫ぶが、声が届いていないのか、魔神はその場から動こうとしない。

そして……。

『さぁ、受けなさい。神にも等しき我が一撃を!』

バジュラの女王から放たれる極大の光、虹色に輝くそれは宇宙の闇を切り裂き、射線上にいるバジュラ諸共グランゾンを呑み込んだ。

ソレスタルビーイング号の超荷電粒子砲と同等、或いはそれ以上の威力を誇る女王の一撃。その攻撃によりＺＥＸＩＳの陣形は総崩れとなり、後方に控えるフロンティア船団を掠める。

凄まじい一撃に再び沈黙する戦場、直撃したとされるグランゾンの姿は舞い上がる煙の中で未だ確認できていない。果たして彼は無事なのか……。

『そんな……グランゾンの反応、消失しました』

『嘘、そんな……嘘よ。嘘だと言ってよ……シュウジィィーーーッ!!』

機体の反応が無くなったと通信で告げてくるオペレーターにカレンの慟哭が響きわたる。余りにも呆気ない魔人の死に誰もが唖然とする中、女王に寄生するグレイスは高々と笑う。

『アハハハハハ!　見たか!　コレが女王の力だ!　銀河を統べ、全ての生命体を支配

する神の力だ！　さぁＺＥＸＩＳよ、有象無象よ、我に従え！　我に怯え、敬うがいい!!』

宇宙に響きわたる女王の笑い。最早自分に敵はいないと、グレイスはそう確信した時

――――――

誰もが言葉を失う中、魔人は口にする。

『これが、魔神の真の姿(ネオ・グランゾン)です。――もう、貴方達に勝ち目はありませんよ』

仮面の奥底で、魔人シュウジ＝シラカワは満面の笑みで微笑んでいた。

――さぁ、地獄の幕開けだ。

神を自称する者達よ、知るがいい。コレが神を殺す魔神の姿だ。

その６２　前編

『ネオ・グランゾン……だって？』

静まり返る宇宙、戦場である筈のその場所で、誰かがそんな事を呟いた。

戦場の中央に佇む蒼い機体。魔神と呼ばれていたその機体は、日輪を背負い、これまでとは全く異質の姿となってそこに応現していた。

前よりも一回り大きくなった魔神、ネオ・グランゾンと呼ばれるその機体は搭乗する主の操縦に従い、銀河の支配を目論む蟲の女王へと近付いた。

バジュラの女王に寄生するグレイス＝オコナーは息を呑む。嘗ては科学に携わった事がある彼女がその頭脳で以ってしても、目の前の魔神が何なのか理解出来なかった。

ただ理解していることは一つだけ、これ以上目の前の存在に関わるのは危険だという事のみ。女王を通して兵隊のバジュラ達に目の前の魔神を消し去るよう指示を出すと、バジュラ達は何の疑いも持たず魔神に群を為して押し寄せていく。

超時空生命体バジュラ、その生態と脅威度の高さは人類の天敵と呼ばれる存在。しかし、彼らの司令塔でもあるバジュラ女王を手中に収めれば、人類の天敵は自分の忠実な

隷となる。

物量で魔神を攻め落とせ、目障りな奴を思うまま蹂躙せよと命ずるグレイス＝オコナー、その表情は歓喜とも憎悪とも呼びがたい異質なモノへと化していた。

そんな彼女の表情が――――。

『ワームスマッシャー』

次の瞬間、凍り付く事になる。魔神を操る魔人が呟いた瞬間、現在ＺＥＸＩＳ達のいる宙域を覆う程に出現したバジュラの群が……一瞬の内に光の槍に貫かれ、爆散し、消え失せていく。

鎧袖一触。いや、事実触れてさえいない魔神に一瞬にして全滅させられたバジュラ達。あれだけの数のバジュラが屠られた事に、グレイス＝オコナーは……いや、〝グレイス〟達は更にその表情を怒りと苛立ちで歪ませる。

自分は神に等しい存在だ。バジュラを支配し、次元時空を越えられる存在となった自分達は、まさにこの銀河の支配者なのだ。そう信じて疑わない彼女達は更にバジュラ達を戦場に投入した。

再び星を覆うほどの数となるバジュラの軍勢、中には大型戦艦を模したバジュラの姿も見かけるが、魔人は構うものかとグランゾンを動かす。

いっそ目の前にいる邪魔なデカブツ（バトルギャラクシー）も一緒に沈めてしまおうか、そんな事を考えてい

ると……。
『待ってくれ！』
『？』
　突然隣に現れるバルキリーに意識がそちらに向く。何だと思い振り向くと、モニターに必死な形相で訴えてくる早乙女アルトの姿が映し出されていた。
『今あのデカブツの中にはランカがいるんだ！　俺が必ず助け出すから、どうかそれまでアイツには手を出さないでくれ！』
『……』
　必死に頼み込んでくるアルトに魔人蒼のカリスマは無言で頷く。それを見届けるとアルトは済まないと邪魔をしたことに対する謝罪をし、バトルギャラクシーに向けて吶喊していき、それを皮切りに戦場が再び動き出す。
『また性懲りもなく！』
　そこにギャラクシー船団に改造されたサイボーグ、ブレラ＝スターンが阻もうとする。肉体の大半を機械にしたことで自ら機体と一体と化したＶＦ－２７γ〝ルシファー〟が物理法則を無視した機動でアルトに迫る。
　並のバルキリーでは手に負えない機動と加速。あのトールギスⅡと同等以上の性能を誇るルシファーにアルトは苦戦を強いられていた。このままではいずれ追いつめら

れてしまう。そうなる前にバトルギャラクシーに取り付きたいのに、立ちはだかるモノが多すぎる現状では、それも叶わない。

そして、そんなアルトに更なる壁が立ちはだかる。魔神の登場により一時的に混乱していたバトルギャラクシーが、再び活動を始めたのだ。弾幕をまき散らしながら暴れ回るバトルギャラクシー、そして背後から押し寄せてくるルシファーにアルトは遂に追い詰められようとしていた。

味方の援護も届かない。既に戦闘を再開する今では、自分の力でどうにかするしかない。

迫り来るバトルギャラクシーの攻撃、コックピットに鳴り響くロックオンアラート。このままではやられるとアルトが表情を曇らせた時。

『やれやれ、この程度で音を上げてどうするのです。ランカ＝リーを助けるのでしょう？』

――――止まる。停止する。見上げるほどに巨大な質量の塊である筈のバトルギャラクシーが、機械の悲鳴を鳴らせて無理矢理停止されている。……いや、バトルギャラクシーだけではない。今まで恐ろしい速さで追尾していたルシファーまでもが、何の動きも出来ずにその場で停止している。

『……ば、バカな』

『あまり抵抗しないほうがいいですよ。今の私は気が立っていますからね。今余計な事をされると勢い余って――――プチッと潰しちゃうからな』

言葉の端で素へと戻る蒼のカリスマ。巨大な質量の塊を片手間でありながら強制的に抑え込むその光景は、見ている者全てを唖然とさせていた。

『呆けている場合ですか。そら、早く行きなさい。大事な人が待っているのでしょう?』

『あ、あぁ、悪い。助かった!』

背後にいる魔神に対し言いたい事も聞きたい事も山程あるが、今はランカを助け出すのが先決。アルトはバトルギャラクシーの胸元に弾を撃ち込み、バトルギャラクシー内部へと突入する。

このままアルトがランカを連れ出すまで抑え込んでおこうか。バトルギャラクシーの背後で佇むバジュラの女王の動きを観察しながら、蒼のカリスマは次の行動をどうするか悩んでいた時、背後から巨大なオレンジ色の閃光がグランゾンに降り注いできた。

『……』

グランゾンを包み込む歪曲フィールド、それによってオレンジ色の閃光が直撃する事はない。しかし、次の瞬間には再び巨大な閃光がネオ・グランゾンに向けて放たれてきた。

先程とは比べものにはならない威力、衝撃によってコックピット内が揺れ動く中、蒼

のカリスマは静かに閃光が来る方角を見つめていた。
光の先に見えるのは超大型艦であるソレスタルビーイング。その艦に搭載された超大型荷電粒子砲による攻撃だと分かった瞬間、再びバジュラ側から攻撃が再開した。
左右からの同時攻撃。飽和状態となったその場でグランゾンは動きを止めていると、それを見て身動きが取れないでいると勘違いをしたイノベイド達が揃って攻撃を開始した。
『アッハハハハ！　見なよリボンズ、アイツあんな大口叩いておきながら身動き一つ出来ないでいるよ！』
『貴様の存在は目障りだ。ここで落とさせて貰う！』
降り注がれる光の矢、雨となって降ってくる光学兵器の攻撃にグランゾンは爆発の中へと消えていく。このままあの魔神が終わってしまうのか、……いや、それはない。
――イヤな予感がする。すぐにこのグランゾンから離れた方がいいと判断したゼロは、スメラギを通してグランゾンの周囲にいるＺＥＸＩＳに退避命令を下す。混乱しながらも指示に従い、グランゾンからＺＥＸＩＳが離れた時、それは起こった。
『――分子間引力をも超える高重力、耐えられるかな？　グラビトロンカノン』
まるでＺＥＸＩＳ達が自分から離れる事を待っていたかの様にグランゾンは動き出す。広範囲に渡って広がる高重力の嵐によって、バジュラ達や特攻兵器、イノベイド達

の機体は悉く圧壊されてゆく。
光学兵器も歪曲し、重力の圧力に耐えきれず消滅し、ソレスタルビーイングから放たれる荷電粒子砲も有無を謂わさず遮られてしまう。
出鱈目過ぎる。そう誰もが思っても、魔神の反撃は止まる事はなかった。
『さて、リボンズ＝アルマーク。賢しい事を考える貴方の事だ。どうせ遠く離れた所から攻撃すれば手も足も出ないと思ったのでしょう。小賢しいとは思いますが……事実、それは正しい判断です。その位置に陣取られてしまえば、並の攻撃では届く事はありません。アクエリオンや射程のある攻撃を持った機体にも、そんな暇を与えなければ意味はない。確かにそれはＺＥＸＩＳ達と戦う上で必要な手段でしょう』
『……』
蒼のカリスマのその言葉にリボンズは押し黙る。ソレスタルビーイングはバジュラの母星から少しばかり離れた位置に存在する為、ＺＥＸＩＳの攻撃が届かない位置にある。故に、彼らが艦に取り付いてこなければ自分達の勝利は揺るぎないものだった。
しかし、それを目の前の魔神はその有用性を簡単に打ち消してしまう。
『しかし、このグランゾンにはそもそも射程という概念が存在しません。……何故なら』
瞬間、ソレスタルビーイングに搭載された荷電粒子砲の砲台が光の槍によって刺し貫かれてしまう。爆散し、宇宙に散り行く虎の子の砲台。それを目の当たりにしたリボン

ズは驚愕に目を見開き、次の瞬間にはその表情を憤怒の色に染め上げる。
『私の攻撃が届くのは私が認識出来る範囲全てとなっています。距離を開けて時間稼ぎをしても無駄ですよ』
　目の前の大型艦から放たれる鋭い殺気、それを受けながらも魔人は淡々とした態度を崩さない。と、そんな時、バトルギャラクシーの中から一機のバルキリーが飛び出してきた。
『此方アルト、ただ今ランカを救出！　マクロス・クォーター、着艦の許可を！』
　ランカを抱え、バトルギャラクシーから飛び出していく。歌姫が連れ去られた事で怒ったのか、バトルギャラクシーは更なる弾幕を広げ、周囲にいるバジュラ諸共攻撃を開始した。
　唯でさえ針鼠の様な弾幕が隙間が無くなるほどに狭まっていく。鋭く、そして分厚くなったバトルギャラクシーの弾幕に、グランゾンは再びバジュラ側に向き直る。
『さて、歌姫がいなくなった事ですし、私も本腰を入れることにしよう。――――さぁ、暴れるぞ。グランゾン』
　日輪を背負う蒼き魔神の眼が妖しく輝く。瞬間、グランゾンの胸部が展開し、そこには破界事変以来見ることのなかった黒い球体が生成されていた。
『多数の特異点から生まれるロシュ限界は、万物悉く原子の塵へと化します』

頭上に掲げられる黒い球体、それは蒼のカリスマの咒言に思われる言霊により、大きくなり、強大なモノへと変わっていく。
『さぁ、事象の地平に消え去りなさい。ブラックホールクラスター……発射！』
魔神から放たれる黒き球体。ソレがバトルギャラクシーに触れた瞬間、バトルギャラクシーは分解し、圧壊し、消滅してゆく。やがて、バトルギャラクシーが事象の地平に消え去った事で、背後に聳えるバジュラの女王が魔神の前に引きずり出される事になる。
『これで、貴方の顔がよく見える様になりましたね。…成る程、寄生虫らしい醜い姿だ。貴方という存在に相応しい格好だ』
『シュウジ＝シラカワ、貴様！』
『おや？　怒りましたか？　それは申し訳ない。私としては事実を口にしただけなのですが、……けれど』

〝頭にキているのは、こっちも同じなんだよ〟

怒れる魔神の猛攻はまだまだ終わらない。

その６２　後編

――――圧倒的。様々な因子が蠢き、要素が充満するこの戦場で、その存在は一際異彩を放っていた。支配していると言ってもいい。様々な不確定、不安定材料が飛び交う戦場で、その存在……蒼き魔神はそれら全ての因子、要素、そして戦場の空気全てを支配していた。

ネオ・グランゾン。唯でさえ手が付けられなかったグランゾンの進化系の機体。その力は無数に湧き出てくるバジュラの軍勢を瞬く間に退け、イノベイドとバジュラのそれぞれの陣営から集中砲火を受けても平然とその場に佇んでおり、そして止めには巨大な質量の塊であるバトルギャラクシーを一撃で破壊、その存在を原子の一粒も残さず完全に消滅させていた。

その力、まさに無双。その姿、正しく魔神。日輪を背負う事で更なる力を得たグランゾン、そしてその操者である魔人蒼のカリスマはバジュラの女王に寄生するグレイス＝オコナーを、冷ややかな目で見下ろしていた。

『これで邪魔者はいなくなりました。さぁ、貴方の力を見せて下さい。グレイス＝オコナー、貴方の力を、神と自称するその力の程を。私はその全てを真っ正面から悉く破壊してみせましょう』

『小僧が、図に乗って！』

魔人の挑発に女王が憤る。空間を震わせる程の巨大な雄叫びと共にバジュラの女王に光が宿り……。

『ならば見せてやろう。これがプロトカルチャーすら戦慄した一撃、銀河を統べる神の一撃だ！』

極大の光が放たれる。バトルギャラクシーの主砲とは比較にならない閃光が、周囲のバジュラ諸共グランゾンを呑み込んだ。宇宙空間が歪曲するほどに巨大なエネルギー、その奔流に巻き込まれれば如何に魔神といえど無事ではすまない。

『……バカな』

無傷。ダメージが通るどころか傷一つ付いていない魔神にグレイス＝オコナーはただ驚愕するほか無かった。そんな彼女の様を見て、魔人は仮面の奥でほくそ笑む。

『別に驚く必要はないでしょう。貴方の攻撃が私に届く直前、ワームホールで回避したに過ぎません。で？　銀河を支配する神様がまさかこの程度で終わったり……しないよな？』

『シュウジ、シラカワァァァ!!』

激昂した女王が更なるエネルギーを凝縮させて魔神に向けて放つ。先程よりも強大で、先程よりも巨大なエネルギーの奔流が、渦となって魔神に押し寄せてくる。

極大の光。それを前にして魔人は動揺を見せず、仮面の奥で笑みを深めると、目の前に異空間の扉を開く。またワームホールに逃げ込むのかと邪推するグレイスだが、魔神はその中に逃げ込もうとせず、異空間の中に腕を突き入れ、ある物を取り出してきた。

手にしたのは――――剣。魔剣の類と思わせるその剣は魔神が振り下ろした瞬間、迫り来る極大の閃光を一刀の下に両断してみせた。

『バカな、一度ならず二度までも、我が一撃は星をも穿つ筈。それなのに何故!?』

『この剣には少々細工を施していましてね。超重力による干渉波を微弱ながら纏わせているのです。これならば貴方が寄生する女王バジュラの纏う次元断層による防御壁にも干渉できます』

『っ!?』

『気付かれないと思いましたか？　女王バジュラと共に出現する際、既に我がグランゾンは次元干渉における異常数値を検出しています。大言壮語を語っておきながら実質は絶対な防御壁で固めている。そういう所が小物っぽいのですよ』

『――――――っ!!』

『ですが如何なる事象、物質にも干渉できる重力からは逃れる事は出来ません』

剣を携え、女王を見下ろす蒼のカリスマと蒼き魔神グランゾン。己の攻撃手段を悉く看破されていく事実にグレイス〝達〟は怒りを尚増幅させる。己の攻撃も防がれ、自身を覆う防御壁も見破られて対応策を取られ、着実に追い詰められた彼女達が次に取った手段は……バジュラに指示を出し、圧倒的物量で応戦する事だけだった。

またコレか。似たような戦法で仕掛けてくるグレイスに呆れ混じりの溜息が零れる。このまま迎撃しても、向こうは何度でもバジュラをけしかけて此方に向かって来させるだろう。

バジュラ達は謂わば操られた傀儡だ。奴の思惑をねじ伏せる為にも、バジュラ達をグレイス等の支配から解き放つのは必要な事なのだが、如何せんそこまでの手立ては魔人は用意していない。

バジュラ達を支配という呪縛から解放させるには、バジュラの生態を完全に理解する必要がある。このまま一方的に蹂躙し、グレイス達を叩き潰したとしても蒼のカリスマ――――シュウジにとって、完全な形での報復完了とは成り得ない。

どうしたものかと仮面の奥で暢気に熟考する魔人、そんな彼の前に突然赤いバルキリーに乗ったロックシンガー、熱気バサラがバジュラの群に向かって突っ込んでいった。

『バジュラ、俺の歌を聴けぇぇぇっ!!』

戦場に広がっていくバサラの歌声、それを聴いたバジュラは僅かな動揺を見せ陣形を崩したが、次の瞬間には元の状態へと戻り、バサラを狙って押し寄せてくる。

だが、この時蒼のカリスマは見逃さなかった。バサラが歌を歌ったと同時にバジュラの腹部から発せられる特殊な波動、〝フォールドクォーツ波〟を。

グランゾンのモニターに出されるバジュラ達の生態系図。それを目にした時、蒼のカリスマは成る程なと納得する。この時点ではまだ仮説でしかなかったモノ、しかし次の瞬間、戦場に響き渡る音楽が流れ出た途端、シュウジの考えは確信へと変わった。

『さぁ、行くわよ!　私の歌を聴けぇぇぇっ!』

『みんな、抱きしめて!　銀河の、果てまで!』

ランカ＝リーとシェリル＝ノームの歌声が宇宙に響き渡る。その純真な想いに満たされた歌声は、支配されていたバジュラ達に浸透し、グレイス＝オコナー達の呪縛から解放されていった。

『バカな!　用済みとなったリトルクィーンの歌声が女王の支配から解き放つだなんて!』

『成る程、流石は超時空生命体であるバジュラだ。生命体としての常識をこうも簡単に覆すとは……流石の私も驚きを禁じ得ませんね』

『っ！』

『理解出来ていないようでしたので説明してあげましょう。バジュラという生き物は頭部にこそ神経系の集束部分は確認されていますが、別にそれ自体は重要な器官ではありません。喩え頭を撃ち抜かれようが生命活動を自律させる。貴方はこれを女王バジュラが支配するが故の構成なのだと、バジュラという生態系の仕組みなのだと考えをまとめた様ですが……実際は違います』

『なんだ、一体それは……何だというのだ!?』

『別に、そんな大した話ではありません。我々人間も〝心〟が何処に存在するのか定義出来ないように……バジュラもまたソレと同じ、ただそれだけの話なのですよ』

『心……だと？　そんな、そんな不確かなモノの為に、我らの計画が!?』

『その不確かなモノを粗末に扱った結果が今です。グレイス＝オコナーよ、そして亡霊共よ。今こそ我が報復の時。――――終幕の時だ』

バジュラの女王を覆っていた次元の壁が、ランカとシェリル、二人の歌声によってかき消される。それを見計らい魔神が無数の光の槍で女王バジュラの首を撃ち貫き、胴体から頭部が切り離される。

そんなバカなと、自分達の計画が音を立てて崩れていく様を耳にしていた一方で、グレイス＝オコナーは目の前の魔神の姿に視線が釘付けになっていた。

『相転移出力、最大限……』

魔神の背負う日輪が、目映い光を放つ。

『縮退圧、増大……』

瞬間、魔神の頭上にワームホールが形成され、戦場を包み込む程に広がった時、次の瞬間にはグレイス＝オコナーと魔神ネオ・グランゾンはＺＥＸＩＳ達の前から姿を消していた。

◇

――――何だ、これは？

ネオ・グランゾンの開いたワームホールに呑み込まれ、気が付いたら見知らぬ大地に

佇んでいた。突拍子な状況に追い込まれ、女王バジュラの頭部に寄生しているグレイス＝オコナーは目の前の状況にただ呆然としていた。

理解出来ない。理解出来ない理解出来ない理解出来ない

大気が乱れ、大地が崩れる。時間が乱れ、光が歪む。あらゆる事象が欠落し、世界を構成するあらゆる系が崩壊する。

『――――お前達の存在を、この宇宙から抹消してやろう』

魔人の口調が変わる。今までの蒼のカリスマとしての丁寧な言葉遣いではなく、素朴で乱暴なシュウジ＝シラカワとしての言葉。それを耳にした時、グレイスは目を見開きながら悟った。

〝自分達は、手を出してはならない存在に手を出した〟

大気、重力、光、それら全てが一つの黒点に集約された時、魔神の前に一つの事象が完成された。

『さぁ、眠るがいい……』

三つの黒が集約された事により爆発が起こり、厚い覆われた雲に穴が開く。降り注がれる光の中でグレイス＝オコナーが目にしたモノは……。

『縮退砲……発射！』

自らを称していた存在。〝神〟の姿がそこにあった。

あぁ、そうか。あの魔神を目にした時から嫌な予感がしていたが、ここへきてグレイスはそれがなんなのか理解出来た。

（神様が相手じゃ、そりゃ敵わないわよね）

笑みがこぼれる。達観しながらも涙を流し、笑みを浮かべるグレイスが最期に見たのは……世界を再世させる光の奔流だった。

◇

『何が……起きた。グレイス＝オコナーは、何処へ消えた!?』

超大型艦、ソレスタルビーイングに乗るイノベイド達の頭目であるリボンズ＝アルマークは戦慄する。先程まで存在が確認されていたグレイス＝オコナーの反応が突然消えた事に、彼の心境は大きく掻き乱されていた。

魔神が突然開いた巨大なワームホール。それを目の前にした時はどこかに転移されるのかと思われたが、消えたのは魔神グランゾンとグレイス＝オコナーの姿のみ。気が付けばグレイスの存在は跡形もなく消え去り、我に返ったリボンズが目にしたのは、ワームホールの中から悠々と出てくるグランゾンの姿だけだった。

魔神にリボンズは言った。何をしたのかと。その問いに対し……。

『さて、これで私の目的の半分は達成された。……次は、お前だ。リボンズ＝アルマーク』

振り返りながら魔神は己の名を口ずさむのだった。

その仮面の奥で、魔人は一人ほくそ笑む。

魔人の魔神による蹂躙は……まだ終わらない。

その６３

Ｚ月α日

――――――スッキリした。今日起きた出来事はまさにこの一言に尽きるだろう。破界事変の頃から続く因縁を自らの手で幕を下ろせたのだ。鬱憤を晴らせた事で自分の気分は最高潮に高まり、『トロピカルヤッホォーイ！』と奇声を挙げてしまう程に喜んでしまった。無論、その時は奇声を挙げる前に通信関係を一切切ってあったから誰かに聴かれる事もないし、変人呼ばわりもされることはないけどね。

しかし、リボンズ＝アルマーク。彼も色んな意味で救われない男だったな。自らを神と称しておきながら、やり方や考え方は奴の言う〝愚かな人類〟と何一つ変わらないという事に最期まで気付かなかったのだから……。

グレイス＝オコナーを屠った後、バジュラ達を奴らの支配から解放したＺＥＸＩＳは、シェリルさんとランカちゃん、そして熱気バサラによる歌声によって和解。その後も続く戦いに巻き込まれないよう、彼等は女王バジュラと共に母星へと帰って行った。

残されたのは超大型艦の〝ゾレスタルビーイング〟とリボンズ＝アルマークに従う連中だけ、ガガとかいう特攻兵器もグランゾンのワームスマッシャーやグラビトロンカ

ノンで蹂躙し、イノベイド達も一通り片付け、勢いのまま全滅させてやろうかなと考えていると、デッカい機体通称〝レグナント〟と呼ばれるモビルアーマーが、自分とグランゾンに襲い掛かってきた。

曲がるビームという少々変わった攻撃を仕掛けて来たけれども、メメントモリと比べたら威力も大した事もなく、歪曲フィールドを頼りに押し切ろうとしたのだけれど、意外な人物がストップをかけてきた。

沙慈＝クロスロード君と刹那＝F＝セイエイ君、彼等二人が言うにはレグナントには沙慈君のガールフレンドであるルイスちゃんが搭乗しており、現在リボンズ＝アルマークに洗脳され、支配下に置かれてしまっていると言うのだ。

流石に拙いと思い手を止めたのだが、如何せんネオ・グランゾンの力は絶大で今の自分では手加減という細かいやり方が上手く出来ないでいる。その為、刹那君等が止めてくれなかったら今頃ルイスちゃんは、グレイス＝オコナーと同じ結末を辿ることになっていただろう。

同じ学び舎にいたルルーシュ君とスザク君からも怒られてしまったし、自分の怒りメーターも急降下。それどころか、知り合いのガールフレンドを知らなかったとはいえ殺そうとしていた自分に、今更ながら自己嫌悪した。

けれど、リボンズ＝アルマークの洗脳が余程強く働いているのか、動かないレグナン

トの中でルイスちゃんは暴れていた。このままではルイスちゃんの命が危ないと思ったその時、刹那君の駆るダブルオーライザーから翡翠色の鮮やかな光が溢れてきた。
ソレスタルビーイングを包み込む程の大きな光の奔流、その光はアムロ大尉曰く〝刹那君の心の光〟なのだという。暖かく慈しみのある光に触れていると、何だか気持ちが安らいで行くようだった。
後でルルーシュ君から聞いた話だと、あの光はどうやら人の心を繋ぐ特殊な量子の粒の集合体らしく、あの光に触れた人間は周囲の人間と誤解なく心で繋がる事が出来るらしい。その光に触れた事によりルルーシュ君はスザク君の事を理解し、スザク君もまたルルーシュ君の抱えてきた気持ちに触れる事が出来たようだ。
未だ確執が完全に拭い切れていない二人だけれど、コレを機にまた新しく関係を発展させる事が出来ればいいなと思う。
……けれど、何故だろう。アレだけ広範囲に量子が広がったと言うのに、何故か自分だけは誰かの心に触れる事はなかった。
え？　もしかしてＧＮ粒子って俺のこと避けてるの？　人なら兎も角粒子にまで避けられるとか、俺どうすればいいの？
……まぁ、それはさておいて、そんな刹那君の心の光によってリボンズ＝アルマークの洗脳から解放されたルイスちゃんは、気絶はしたけれど無事ＺＥＸＩＳに保護され

た。大破状態のレグナントを抱えて一度艦に戻った後、刹那君は沙慈君を下ろして戦線に復帰、再び戦場を駆け抜けていった。

そんな彼の前に現れたリボンズ＝アルマーク。自分の名前を付けたリボーンズガンダムなる機体に乗り、ＺＥＸＩＳ相手に吶喊してきた。

流石にイノベイドの親玉だけあって乗っている機体性能は高く、刹那君のダブルオーライザー同様ツインドライヴを搭載しており、トランザムを使用した攻撃はガンダム軍団を翻弄する迄に至っていた。

その最中、奴は自分こそが人類と地球圏を統括するに相応しい存在だとか、下等な人間風情がとかモノ凄い上から目線でそんな言葉を吐いていた為、思わず自分も口出ししていた。

口喧嘩……と、いうには少々大人気ないような気もするが、何せ奴はリモネシアを焼いた連中の親玉、その時の俺は遠慮なしに色々言い続けた。

その内容は……まぁ、えげつないのも含まれているので詳細には説明しないが、要は相手の矛盾点を徹底的に突けばいいのだ。ああいう手合いは色々小難しい事を言う割に沸点が低く、それでいて狼狽し易い。散々暴言を吐く奴に、俺はあくまで冷静に言葉の槍で奴を突き続けた。

自分の言葉に徐々に追い詰められていき、奴は言った。自分の有用性は絶対である

と、純粋種となった刹那君に勝利する事で、その立場を揺るぎないモノにする事が目的なのだと。

そんな彼の叫びにも自分は答えた。お前のコレまでの選択がお前自身を追い込んだのだと。

リボンズ＝アルマークはイノベイド達の中でも飛び抜けて優秀だ。ヴェーダを掌握し、世界を地球連邦という形で統一し、アロウズという自治軍隊を設立させた。やり方はどうであれ、その優秀さは誰もが認める程だ。

なのに、彼は道から外れてしまった。自分のやる事が全て正しいと信じ、疑わず、己の選択肢で世界を操る。それが奴自身が言った愚かな人類と何ら変わりない事だと知らずに……。

もし、本当に自らの有用性を認めて欲しいのならば、奴はＺＥＸＩＳと敵対する必要はなかった。陰月落下事件の時、インベーダーやアンチスパイラルの軍勢が迫った時は、傍観せずに人類の為に行動を起こすべきだった。

奴がここまで追い詰められたのはＺＥＸＩＳでもなければ自分でもない。ここまで選択を間違えて省みる事の無かった己自身なのだと、自分は止めにそう呟いた。

そんな自分の言葉を聞いたリボンズは半ば発狂し、嘘だと連呼しながら自分に攻撃を仕掛けてきた。が、立ちはだかる刹那君のダブルオーライザーによりリボーンズガンダ

ムは撃墜、リボンズ＝アルマークは絶望に満ちた声で機体と共に宇宙に消えていった。
自分の存在を否定され、その原因となったのが自分自身なのだと、最期までそれを認める事が出来ずにこの世を去った。
――――現在、ＺＥＸＩＳはソレスタルビーイングに乗り込み、監禁されているとされているエルガン＝ローディックなる人の所へ向かっている。彼は破界事変以降ずっとリボンズ＝アルマークに捕まっていたらしく、ソレスタルビーイングに潜入したティエリア君が発見。既に彼は銃で撃たれて虫の息の状態のようだ。
どうやら追い詰められたリボンズが逆上し、諭そうとしたエルガンに八つ当たり気味に発砲したらしい。……最後までムカつく奴だと、ここに書いておく。
俺も一度くらい顔を合わせたいのだが、面識が殆どない自分が向かっても彼を困らせるだけだろう。彼の残した言葉はＺＥＸＩＳから聞き出す事にして、今回の日記は終了したいと思う。
自分もまだ付けられた傷が完全に癒えていない状態だ。セシルさんの言いつけを守る為にも今日は早めに眠る事にしよう。
……ネオ・グランゾン、アレについても皆色々聞きたいだろうしね。なんて説明すればいいのやら。

◇

「んーー、と。こんな所かな」

――――――アヴァロン内にある部屋。割り当てられた部屋で本日の日記を書き終えたシュウジは部屋のベッドに横たわる。自分の目的も終え、己の体を万全にする為、シュウジは休みながら今後の事を思案する。

「はぁ、結局あの後ルルーシュ君達だけおいて先に帰っちゃったし、皆怒ってるよなぁ。一応スザク君には先に戻ってるって言っておいたけれど……ジノ君とアーニャ君は留守番は退屈だと文句言ってきてるし、ホントリーダー役って面倒だよなぁ」

巻き込んだ以上しょうがないなと諦めながらも、どこか腑に落ちないでいるシュウジはブツブツと文句を零し続ける。シュナイゼルとの戦いを経験に本陣であるアヴァロンを手薄にするのは得策ではないと判断したシュウジは、戦闘宙域から離れた位置にア

ヴァロンを置き、ナイトオブラウンズだったジノとアーニャを艦の護衛に残した。
前と違い奇襲される事はなかったが、かえってそれが二人を不満にさせる原因にもなった。これが若さかと元気ハツラツな二人を思いだし、やれやれと溜息をこぼすと……部屋にある通信機に光が灯る。
通信機の音に体を起こすシュウジ。何だと思い通信回線を開いた瞬間、そこに書かれたある一文にシュウジは目を丸くさせる事になる。
送られた一通のメッセージ、そこに書かれた内容は――――。

〝サイデリアル　に　気を付けろ〟

発信源はソレスタルビーイング、発信者はエルガン＝ローディック。ＺＥＸＩＳの面々がソレスタルビーイングから離れた直後の出来事だった。

その６４

Ｚ月β日

〝サイデリアル〟エルガン＝ローディックが自分宛に送ってきた最期のメッセージ。ＺＥＸＩＳがソレスタルビーイングから離れた時に見計らって送られたそのメッセージ、タイミングから察するに、どうやらこのメッセージはＺＥＸＩＳにはまだ伏せておくべきものだろうと自分は解釈する。

聞けばエルガン＝ローディック氏は思慮の深い人物のようで、意味の無い行動はしないとされている。となれば、自分にしか届けられていないこの〝サイデリアル〟という単語も、なにかしらの意味があることは明白だ。

組織の名前なのか、それとも兵器の類なのか。今の所は分からない事が多いが、故人が最期に……しかも自分に対してのみ伝えてきた内容である為、この事は自分の胸中に深く刻み込んで置くことにする。

さて、そんなこんなで亡くなったエルガン氏に黙祷を捧げる一方で、自分達はこれからＺＥＸＩＳに合流し、今後の事を話し合うこととなっている。

正直気は進まないが、ルルーシュ君達も呼んでいるとあれば無視する訳にもいかな

い。向こうも自分の愛機であるグランゾンに対して色々聞きたい事があるだろうし、その事に関する誤魔化しも考えなければならない。

……やっぱ、テンションに任せてネオになるもんじゃあないな。これから自分に降りかかる質問責めに対し、俺は憂鬱な気分が拭えない。

まぁ、後悔はしてないんだけどね。

Ｚ月γ日

そろそろ、この戦いも終わりに近付いてきているのかもしれない。昨日のインベーダーとの決戦を終えた後、自分達とＺＥＸＩＳの前に、インサラウムの王であるユーサーが自ら最後の決戦を宣告してきた。

場所は火星。指定してきた場所こそは意外なものだったが、そこに巨大なＺＯＮＥが建設されている以上無視は出来ない。そこで待っているとされる連中との決着を付ける為に自分もＺＥＸＩＳと合流し、火星に向かう事を決意した。

無論、ルルーシュ君やスザク君も了承済みだ。他にもインベーダー戦で目覚ましい活躍を見せたジノ君やアーニャちゃんも参戦する事を強く望んでいるんだし、ロイドさんとセシルさんもここまで来たら最後まで付き合うと腹を括ってくれた。

当然、自分もやる気満々である。リモネシアでの因縁を終わらせる為にも本気でもって奴と戦うつもりだ。傷も癒えて来た事だし、今度は最初からネオで戦ってもいいのかもしれない。

決戦の日は三日後、その頃には体も万全となっているだろうし、その時が来るのを今から待ち遠しい位だ。

――忘れていたが、ネオ・グランゾンについての説明は先のインベーダーの襲来により阻まれた事もあり、ＺＥＸＩＳの人達には上手い具合に誤魔化す事が出来た。

説明するのも面倒なのでそれはそれで嬉しい事なのだが、後で追求されるのも困るのでジェフリー艦長だけには、ネオ・グランゾンは自分の切り札であるとだけ通信で伝えておいた。

蒼のカリスマとして振る舞っていた為か、向こうからはそれ以上追及される事はなかった。ただ、一番危惧していたヨーコちゃんとカレンちゃんによる二人の追及が無かった事が意外で少し戸惑ったが、流石に戦闘中に考え事をしている余裕はないのか、インベーダー戦以降も自分に説明を要求してくることはなかった。

そうそう、インベーダー戦でのジノ君とアーニャちゃんの活躍もそうだけれど、ルルーシュ君とスザク君の遣り取りも前と比べて大分角が取れてきた様に思えてきた。

元々二人の間にあった溝は、互いの隠し事や些細なすれ違いから生まれたものである

為、ＧＮ粒子に触れて互いの気持ちを知る事が出来た今、二人はお互いに分かり合い、今後は以前の様な関係に戻れるよう努力する事だろう。

ユーフェミア皇女殿下を殺したこと、ナイトオブラウンズとして数々の非情な行いをしてきた事、お互い許されない事をしてきた二人だけれど、自分は応援していきたいと思う。

そんな訳で和解した二人、保護者気分で見守っていた自分だが、ここへ来て手痛いしっぺ返しを受ける事になる。

ルルーシュ君からのネオ・グランゾンに関する質問責め、アレは何だと聞いてくる彼に対し、俺は笑って誤魔化す事しか出来なかった。まさかＺＥＸＩＳからではなく身内から質問責めされるとは思わなかったが……おっかしいな、俺言わなかったっけ？

ルルーシュ君は聞いていないと言うけれど、自分はそんな筈はないと思う。後でグランゾンの通信ログを見直した結果、最初辺りにそれらしい言葉が記されてあった。

『そろそろ本気だす』

……まぁ、嘘は言ってないよね。うん、言ってない。俺は悪くないとここに記しつつ、今回の日記を終了させてもらうとする。

ＰＳ．

最近Ｃ．Ｃ．さんから事ある度にボッチ呼ばわりされている。そろそろ怒ってもい

いだろうか？

◇

――――火星、インサラウム母艦内部。
華やかに彩られた皇室、その部屋にインサラウムの若き王〝ユーサー＝インサラウム〟とファイヤバグの元リーダー、マリリン＝キャットが一つのテーブルに座していた。
「ぐ、……ムゥウ」
「殿下、大丈夫ですか？」
胸を抑え、苦悶の表情でうずくまる王にマリリンは背中に手を置き、身を寄せる。彼女の表情にあるのは焦り。王に忠誠を誓う彼女は、苦しむ王を前に無力な自分を内心で蔑んでいた。

やがてスフィアという力の苦しみに耐え抜いた王は額に大玉の汗を流し、呼吸を乱しながら顔を上げる。

〝尽きぬ水瓶〟と〝偽りの黒羊〟二つのスフィアを持つことにより凄まじい力を得た聖王機はまさに無敵。尽きぬ水瓶を完全な形で解放した事により聖王機の剣を引き抜いたとされる今ならば、あの悪鬼であるガイオウにすら打ち勝てるだろう。

事実、ガイオウは一度ユーサーの手によって討たれた。あれで終わりとは到底思えないが、それでも奴と互角以上に渡り合えた事は事実。数日後に迫るＺＥＸＩＳとの決戦でも大きな力となることだろう。

だが、その巨大な力は聖王機を通し、所有者であるユーサー自身を蝕んでいた。生身である人間の限界、あと何回も戦えるか分からない状態となった今、ユーサーは己の計画を成就させる為、手段は選ばないだろう。

そして、その手段を選んだ先には多くの命を巻き込む事になる。覚悟を決めた事とはいえ、戸惑ってしまうのは……それはユーサーがまだ優しさを失っていない証なのだろう。

ユーサーは自分の顔を心配そうな顔で覗き込むマリリンを見る。素顔と年齢の差が大きく異なる彼女だが、心配そうに此方を見るその表情は年端もいかぬ乙女に見えた。

故に、王は問う。本当に良かったのかと。

即、乙女は答える。当然であると。
その問答が全てだった。その問答を最後に二人から言葉は消え、ただ静かに寄り添っていた。
（三日後に全てが決まる。我が命とインサラウムの民の運命、余の全てを持ってして挑むことにしよう）
数々の難敵を打ち倒してきたＺＥＸＩＳ、そしてただ一機で世界と戦ってきた蒼き二つのマジン。それらを相手に三日後、火星にて見える。
最早小細工は不要、後は死力を尽くすのみ。己の役目を前にユーサーはマリリンの腕の中で静かに目を閉じるのだった。

――――――そして。

『さて、破界事変以来の戦だ。確かめさせて貰うぜ、シュウジ＝シラカワ。テメェがオレの後を継ぐ〝次元の将〟に相応しいか否かをな』

遙か宇宙の彼方で、銀色の太陽はほくそ笑む。

その６５

――――――火星。

太陽系に存在し地球に近しい性質を持つとされる太陽系第四の惑星。荒れ果てた広大な大地、人の手が加わっていない未開の地で、あるモノが建造されていた。

〝ＺＯＮＥ〟インサラウム国が保有する次元力を星から抽出する装置であり、次元力を吸い出す対価にその星を死の星へと変える最悪の超常の兵器。これまでの地球に設置されたモノとは違い、火星に置かれたＺＯＮＥは巨大なものだった。

一つの大都市並に巨大なその装置。青く輝くドーム状の結晶体はただ静かに空の向こうからやってくる一団を見据えていた。

幾度となく地球の危機を救い、世界の裏に隠れていた巨悪を討ち果たし、世界最強の部隊と呼び声の高いスーパーロボット軍団〝ＺＥＸＩＳ〟

既に艦から出撃し、戦闘態勢を整えた彼等は己の分身である機体と共に火星の大地に降り立ち、そんな彼等から少し離れた位置に別の一団が降り立った。

黒の騎士団の元総帥ゼロと元帝国最強の騎士、枢木スザクを始めとしたナイトオブラ

ウンズと桜色のランスロットを駆る魔女Ｃ．Ｃ．。
そして、そんな一団を纏め上げる事実上彼等のトップ、蒼き魔神ことグランゾンと破界事変から騒がれる希代のテロリスト〝蒼のカリスマ〟
ＺＥＸＩＳと共に火星に降り立った彼等は周囲に気を配りながら辺りを見渡すと、リーダー格である蒼のカリスマにそれぞれ通信を送り始める。
『見た所、あのデカい奴以外敵性反応はないな』
『伏兵、どこかに隠れてる？』
『それはないだろう。彼は自ら決戦を伝えに来たんだ。丁寧に日時まで教えに来た位だ。今更騙し討ちする必要もないんじゃないかな』
『少しばかり短絡的過ぎる考え方だが、相手の気質を考えれば確かにそうだろう。……警戒を強める事に違いはないが』
『全く、この捻くれ坊やは口を開けばこうだ。で、お前はどう考えてるんだ？　蒼のカリスマ殿？』
挑発的な口調で魔人を試す魔女、端から見ればハラハラものの遣り取りだが、魔人と恐れられる蒼のカリスマはそんな事気にもしないでいつもの態度で応えた。
『いずれにしてもここが決戦の地である事には変わりありません。彼等が奇襲を仕掛けてこようが、正面から来ようが私のやる事はただ一つです』

淡々としながら、それでもその言葉に明確な怒りを滲ませている事に気付いたのは魔女ことＣ．Ｃ．のみだった。長年生きることを強いられてきた彼女は様々な人間を相手にしてきており、それ故に仮面を被っていようと言葉の隅に隠された魔人の感情に気付くことが出来ていた。

そして、その彼女の思案通り蒼のカリスマは怒りを滾らせていた。リモネシアを焼き、ＺＯＮＥというデカ物（ブツ）まで建設し、リモネシアを死の大地にしようとした連中を、今回の戦いで漸く討ち果たす事が出来る。今まで冷静を装ってきた彼だが、その胸中の奥底ではグレイス＝オコナーに対する憤怒に近しい感情を抱いていたのだった。

現在の魔人の駆るグランゾンは例のネオと化してはいないが、相手側の対応次第では躊躇なくその力を揮う事になるだろう。バジュラとイノベイターの二つの軍勢を相手に蹂躙を果たしたネオ・グランゾンの力は絶大。果たしてそんな怪物を相手に、ユーサー＝インサラウムはどう戦おうというのだろうか。

そんな時。各機体の索敵レーダーに反応が感知され、次の瞬間インサラウム最後の軍勢が姿を現した。無数の人工次元獣とアークセイバー達、そしてインサラウムの母艦であるパレスインサラウム。母艦まで出張って来たのを確認し、ＺＥＸＩＳ達はここが最後の決戦地だという事を確信した。

『どうやら、奴（やつ）さん達の言うことは本気だったらしい』

『あぁ、ドイツもコイツも覚悟を決めた様な顔をしてやがる。……手強いぜ、これは』
アークセイバー達の放つ静かな闘気、機体を通して滲み出てくる彼等の覇気に、ＺＥＸＩＳの面々も覚悟を決める。
『フフフ、よくぞここまで来たな。この世界の最強の戦士達よ』
『こ、この声って！』
『アンブローン＝ジウスか』
インサラウムの宰相、アンブローン＝ジウスの登場により戦場は更なる緊張に包まれる。アイム＝ライアードに唆され、地球を侵略しようとした事実上インサラウム側の黒幕。
己の知識的欲求を満たすために幾度となく王であるユーサーの死を望んできたアンブローン。そんな老婆がこの決戦の場に自ら前線に出て来るのはＺＥＸＩＳ達からすれば意外に思えた。
『インサラウムのＮｏ．２が出て来るとはな、ユーサーの奴はどうした』
『ふん、貴様等の相手などこの婆だけで十分。殿下のお手を煩わせるまでもないというだけじゃよ』
『……へぇ、随分強気じゃねぇか。その程度の戦力で俺達とやり合おうってのかよ』
真ゲッターの搭乗者である竜馬の言葉を皮切りにＺＥＸＩＳの面々の気合も高まっ

ていく。インベーダーにアンチスパイラル、暗黒の王と様々な脅威から地球を守ってきた彼等にとって、インサラウムの軍勢は危険なモノだが脅威とは成り得なかった。
真ドラゴン、大型艦と融合する事が可能となったグレンラガン。数多の激闘を経て強くなってきた彼等の前には、インサラウムの戦力だけで構成された軍勢程度では今更足止め程度にしかならなかった。
ジェラウドやウェイン、ハイナイトと呼ばれるインサラウム側の強者がいなくなった今、それは揺るぎない事実となっていた。そして、そんなインサラウムの不利を決定付けているのが――――蒼き魔神グランゾンの存在である。
このままでは足止め程度にしかならない。自分達の不利を覆すには、日頃から研究を進めていた〝アレ〟を使うしかない。
既に覚悟は決まっている。アンブローンはパレスインサラウムに搭載されたあるシステムを起動させようとするが、その前に一度戦場に佇む魔神を見つめた。
（蒼き魔神グランゾン。……口惜しいのぉ、アレだけの存在を次元獣に出来たら殿下の心強い獣へとなれたであろうに……）
僅かに残った心残り、それを首を横に振って捨て去ったアンブローンはパレスインサラウムに組み込んだシステムを起動させ、自ら母艦と共に次元獣へと変異していくのだった。

これまでとは全く桁違いの存在感を放つ次元獣〝エクサ・アダモン〟パレスインサラウムと共に次元獣へと変異したアンブローンは、自らの自意識を核に最強の人造次元獣を誕生させるのだった。

『アンブローンおば様。その覚悟、しかと見させて頂きました』

そんなエクサ・アダモンの背後に現れる黒い影、パールファングを操るのは元ファイヤバグのリーダーでありクロウ＝ブルーストの上司だった女性、マリリン＝キャットだった。

地球では最悪の放火魔として知られる彼女だが、次元獣となったアンブローンを見つめる目は慈しみで満ちていた。愛する殿下の為に身も心も差し出した一人の女性の最期の在り方に、マリリンは心の底から敬意を評していた。

『意外だぜマリリン。まさかお前が最後まで残っていようとはな』

『ウフフ、そういうフラフラちゃんも意外ね。私から逃げ出した癖に余程そこが居心地いいのかしらん？』

『まぁな。お前ん所の肥溜めみたいな所よりは遙かに居心地がいいのは断言出来るぜ』

クロウの言葉にマリリンは仮面を被る。残忍で冷徹、狡猾にて残虐、最悪の放火魔であるもう一人の自分の仮面（ペルソナ）を。

『さぁ、これで舞台は整ったわ。始めましょう。ＺＥＸＩＳと魔神御一行様。このマリ

リン＝キャット、盛大にもてなして差し上げましょう』

仮面を被った黒猫が妖しく微笑む。その言葉を皮切りに今回の争乱における最後の戦いが開始されるのだった。

その６６

――――ＺＥＸＩＳとインサラウム。火星で行われる今回の争乱を締めくくる最後の戦いは、熾烈を極めると誰もが予想していた。

次元力という未だ謎の多いが無尽蔵とも言えるエネルギーを利用し、独自の文明と軍事力を築き上げてきたインサラウム。対するＺＥＸＩＳはゲッターロボやマジンガーＺ、ガンダムやＫＭＦ等様々な機体で構成された、一見寄せ集めの部隊に見える集団だが、その実力は各々がエース級の力を有しており、機体サイズが異なっていながらも彼等の連携練度は凄まじく高かった。

スーパーロボット達を先頭にスコープドックやＭＳが露払いを行い、互いに助け助けられの関係を築き、その力はアークセイバーやギガ・アダモンといった上位次元獣を寄せ付けないモノとなっていた。

アムロの駆るνガンダム、竜馬達の操る真ゲッターや重量級のビッグオー、彼等の操縦技術や機体性能はアークセイバー達に決して引けは取ってはおらず、特に操縦技術ではＺＥＸＩＳの中でも群を抜いているアムロは、その技術でもってアークセイバーや次元獣達と真っ正面から戦い続けていた。

そんな彼に負けじと若きパイロット達も応戦する。アルトは新たな翼であるデュランダルを駆って戦場を舞い、純粋種に覚醒した刹那はダブルオーライザーで次元獣を圧倒していく。

彼等の戦いぶりは勇猛果敢、アークセイバーや次元獣達を薙ぎ倒していく様は正しく地球最強の部隊と呼べただろう。

だが、そんな地球最強の部隊であるＺＥＸＩＳに対し――――。

『おや？　何やら攻撃の手が止まっている様ですが……まさかこの程度で終わりとは言わないでしょうね。え？　インサラウムの誉れ高き騎士達よ』

無数の機体の残骸の中心に佇む蒼き魔神。禍々しき剣を地面に突き立て、悠然と立つグランゾンに、インサラウムの面々は恐怖を感じずにはいられなかった。

個々の力を連携して最大限に力を発揮するＺＥＸＩＳに対し、己の力だけで戦場を往くグランゾン。仲間である筈のゼロ達を置いて一人蹂躙を始める魔神に誰もが呆然となってしまっていた。

――――蹂躙。そう、蹂躙だ。連携でアークセイバー達を圧倒するＺＥＸＩＳに対し、グランゾンの戦いは最早戦いとは呼べない程に苛烈で、熾烈で、そして……一切の容赦がなかった。

自ら戦場のど真ん中に突っ込み、間髪入れずに高重力の雨を叩きつけ、敵機体を圧壊

させていく。耐えた者にはワームスマッシャーという無数の光の槍を縦横無尽に降り注がせて、機体諸共爆散させていく。

それでも襲い来る次元獣やアークセイバー達には手にした大剣によって両断。その繰り返しによりグランゾンを囲んでいた無数のアークセイバーと次元獣達は屍と化し、消滅していった。

やりすぎだ。グランゾンの鬼の様な戦いぶりに心臓の強いＺＥＸＩＳの面々ですら戦慄を覚えていた。だが、そんな魔神の戦いぶりを目の当たりにしても誰も咎める事はしなかった。

いや、出来なかったと言った方が正しい。機体の奥底から滲み出てくる魔人の憤怒の炎。それは大切なモノを踏みにじられた者の特有の怒りだったからだ。

この時、遠巻きでグランゾンの様子を眺めていたヨーコやカレンといった魔人の素性を知る者は確信する。彼は……シュウジ＝シラカワは今〝キレている〟のだと。

リモネシアは彼にとって大切な場所だった。そこを焼き討ちし、更にはＺＯＮＥという危険な代物を取り付けたのだ。彼が怒るのも当然といえるだろう。

そんな怒りに満ちているのに彼はグランゾンを例の姿、〝ネオ〟と化してはいない。ネオとなれば今すぐにでも決着は付きそうなモノなのに、そうしないのは彼なりの慈悲のつもりなのだろうか。

　既にインサラウムの全戦力の八割は片付いた。消滅していく次元獣達を見て、黒い機体であるパールファングのパイロットであるマリリンは乾いた笑みと共に口を開いた。
『ふ、フフフ、ＺＥＸＩＳの戦力を侮った訳じゃないけれど、まさかここまで一方的にやられるなんてね。特にそこの魔神ちゃん、本来なら貴方はゲストとしてのスポット参加なのにちょっと前にでしゃばり過ぎじゃないかしらん？』
　口調は変わらないものの、マリリンの口から発せられる言葉からは覇気が感じられなかった。本気で激怒した魔神の力を見せつけられ、僅かに動揺してしまっているのだろうか。
　だが、そんな彼女の心境は関係なしに魔人、蒼のカリスマは言葉を紡ぐ。
『……知らないな』
『……え？』
『アナタ達が何を企んでいようと、何を狙っていようと私には関係のない事。……アナタ達は既に二度も私の大事なモノに手を出した。地球連邦と裏で手を組み、姑息な手段を用いてリモネシアを焼き、挙げ句の果てにＺＯＮＥというふざけた代物まで植え付ける始末。――――余りにも度し難い』
『故に、私は決めました。あなた方が何をしようが、それこそ命乞いをしようがお構いなしに叩き潰すと、弁明も聞きません謝罪も求めません。逃げるのも止めません、抵抗す

るのも構いませんし寧ろそちらの方が大歓迎です。私はそんな悉くを叩き潰し、あなた達を原子の塵へと還しましょう』

淡々と語りながらもそこから感じられる凄まじい殺気に、一部の面々は身をひきつらせる。これが本気で怒った魔人の迫力か、戦慄を覚えるＺＥＸＩＳの面々。しかし、カレンとヨーコは自分の知る彼の姿とは余りにも違う事に、戸惑いを感じずにはいられなかった。

蒼のカリスマ……いや、シュウジ＝シラカワの人格は普段こそ穏やか且つ温厚なモノ、それこそ人から罵倒されようが貶められようが大抵の事は笑って流す人間だ。

別に彼が大物という訳ではない。誰にでも基準というモノが存在し、シュウジもまたそんな普通の人間と同じ基準という認識を持っている。そんな彼が怒るのは、偏にインサラウムがそんな彼の基準を大きく超えた事をしでかしたのが原因だ。

故に、怒れる魔神は粛々と執行を開始する。手にした大剣を手に魔神は一歩ずつパールファングの所に歩み寄る。

だが、そんな彼の前に一つの機体が割り込んできた。クロウ＝ブルーストの愛機であるリ・ブラスタだ。

『……なんのつもりですか？　クロウさん』

『悪いがそいつは俺が仕留めなきゃいけない相手だ。お前さんの気持ちは理解できる

が、ここは譲ってくれないか』
『――そいつはリモネシアを焼いた連中の一人だ。そんな奴を前に我慢しろというのか？』
『勿論承知の上だ。けどな、それでもここは譲って欲しいんだよ。嘗て同じ部隊にいた……奴の部下としてケジメを付ける為にもな』
『……』
『頼む。ここは退いてくれ』
　通信越しから聞こえてくるクロウの真摯な願いに、シュウジは毒気を抜かれた様に深い溜息を零す。相手はリモネシアを焼いた張本人の一人だが、大本は別にいる。連中の親玉であるユーサーを倒してこそ報復は完了するのだと自分に言い聞かせ、シュウジはこの場をクロウに預ける事にした。
『――分かりました。では代わりにユーサー＝インサラウムの方は私に譲って……』
『させるカァァァァァッ!!!!』
『――ッ!?』
　一瞬の間に生まれた隙。刹那の合間に出来た気の緩みに呼応して、突如巨大な次元獣であるエクサ・アダモンがグランゾンに向かって突進を仕掛けてきた。
　リ・ブラスタを押し退けて、魔神だけを狙って押し寄せてくる巨大次元獣エクサ・ア

ダモン。歪曲フィールドのおかげで機体にダメージはないが、質量の差や咄嗟の出来事によりグランゾンは押し負けてしまう。
『殿下のテきィィッ！　滅びロォォォッ!!』
『チィッ、コイツ、自我がない癖に！』
　自らを次元獣の核にしたことにより自我を失ったアンブローン＝ジウス。エクサ・アダモンのコアとなった事により超常の力を手にした彼女はグランゾンを最大の敵である事を認識し、王であるユーサーの身を守る為、自身諸共火星圏から引き離していく。
　火星圏から引き離され、再び宇宙へと出るグランゾンとエクサ・アダモン。手にしたグランワームソードでエクサ・アダモンを引っ剥がすと、間髪入れずにグランゾンは胸部装甲を展開、胸元に黒の球体を出現させる。
『――――事象の地平に近付けば、相対時間は遅くなる。そちらでは一瞬だろうが此方では永遠だ。……理解出来たか？』
『ウバァァァッ!!』
　引き離されたグランゾンとの距離を死に物狂いで食らいつこうとするエクサ・アダモン。王であるユーサーの下へは行かせないと、身を挺して魔神に挑むが……。
『事象の地平に消え失せろ。ブラックホールクラスター、発射！』
『アァァァァァッ！　でん、かぁぁ……』

魔神から放たれる剥き出しの特異点、極小のブラックホールにエクサ・アダモンは成す統べなく呑み込まれていく。
やがて肉片の一つも残さずに呑み込まれたエクサ・アダモン。事象の彼方に跳ばされ、宇宙空間に静寂が戻るのを見計らうと、シュウジはグランゾンを火星に向けさせ、スラスターに火を灯す。
ユーサーと最後の戦いをし、今回の争乱に幕を下ろさせる。破界事変から続く黒幕を全て倒し、残ったのはインサラウムのみ。
これで全部終わらせる。そう意気込むシュウジの耳に聞き慣れた言葉が響いてきた。
『悪いが、お前にはもう暫くここで足止めさせて貰うぜ』
『っ!?』
忘れたくても忘れられない存在感に満ちた声、一体何処からだと索敵を開始する彼とグランゾンの前に現れるのは……光輝く黄金の次元獣の群だった。

その67

破界事変から続く戦乱の時代。激動の裏で蠢いていた闇達を討ち果たした地球最強の部隊〝ＺＥＸＩＳ〟彼等の活躍によりもうじき平穏の時を迎えようとしていた地球圏だったが、最後に彼等に挑む者達が現れた。

〝聖インサラウム王国〟別の次元、別の世界からの来訪者である彼等はアイム＝ライアードの奸計に巻き込まれ、破界の王ガイオウに破れ、滅びた自分達の世界を捨て、新天地であるこの世界の地球に侵略者として現れた。

スフィアを巡る争いに巻き込まれ、自分達の世界を捨て去ったインサラウムの人々。最早後戻りは出来ない所まで来ていた彼等の王は最期の戦場を前に、静かに目を閉じてこれまで己が行ってきた数々の愚行を思い返していた。

一体どこで間違えたのだろう。思い当たる事は多々あるが、最大の原因の一つは己自身に他ならないだろう。

アンブローン一人に政権を委ね、差し伸べられた手も払いのけ、他者に言われるがま

ま、己の責務を果たさなかった事、それこそが王である自分の最大の過ちだ。
せめてもの報いとアイム＝ライアードを自分の手で討った所で自分の罪が贖えるとは思わない。だが、これから行われる最期の戦いでインサラウムの民達の行く末は切り開く。
ただそれだけの思いを胸に、インサラウム国王ユーサー＝インサラウムは火星の地でＺＥＸＩＳ達と対峙する。
『よくもここまで来たものだ。だが、貴様等の快進撃もここまでだぞ、ＺＥＸＩＳ！』
『ユーサー＝インサラウム、やっぱりやり合うつもりか！』
『当然だ。二つのスフィアを使いこなしつつある今、最早余に敵はいない。有象無象の雑兵共よ、覚悟するがいい！』
〝尽きぬ水瓶〟と〝偽りの黒羊〟のスフィアからもたらされる力の恩恵は大きい。聖王機であるジ・インサーから溢れ出る力の衝動は、これまでとは桁違いのモノとなっている。これなら残り自分だけとなったこの戦場でも、ＺＥＸＩＳ相手に大立ち回りが出来る事だろう。
だが、それを引き替えにユーサーの肉体に掛かる負荷は大きい。一瞬でも気を抜けば意識は途切れ、視界も時々酷く歪になる。自分の命がもうじき消える事を自覚しながらも、ユーサーは懸命に耐えて見せた。

『さぁ、始めようではないかＺＥＸＩＳ！　ソナタ達と余、どちらがこの世界を統べる者に相応しいか……いざ勝負！』

『……上等だぜユーサー＝インサラウム。お前さんの最期の意地、付き合ってやろうじゃないか！』

　ユーサーのその言葉を口火にインサラウムとＺＥＸＩＳの最後の戦いが幕を開ける。全ては己の不始末を払い、民達に道を示すだけ、気力と死力、残された力を振り絞りながら、ユーサーはジ・インサーと共に戦場を掛けた。

（マリリン殿、アンブローン、ウェイン、ジェラウド、そして余の為に散ってくれたインサラウムの騎士達よ。願わくば、どうか最期に余の力となってくれ！）

　最早今の自分にはなにもない。アンブローンとマリリンは先に逝き、残されたのは自分のみ。裸の王と理解しながらもユーサーは己の最期の使命に殉じる為、たった一人の戦い――――最終決戦を開始する。

◇

『ワームスマッシャー!!』

火星圏から少し離れた宙域。エクサ・アダモンとなったアンブローンにより宇宙へ強制的に連れてこられたグランゾンは、目の前の金色に輝く獣の群に向かって無数の光の槍を放つ。

次元獣が張る特殊な防壁、次元干渉のD・フォルトを光の槍で容易く撃ち貫くと、金色の次元獣は悉く爆発し、消滅していった。

色だけ違う雑魚、最初こそは金色の次元獣に対し蒼のカリスマことシュウジはそんな風に思っていたが、中には光の槍をはねのけて迫ってくる次元獣に、その考えは間違っている事を思い知らされる。

『成る程、これまでの次元獣とは違うという事か……しかし!』

迫り来る次元獣を異空間から取り出したグランワームソードで両断する。手応えからしてこれまでの次元獣とは明らかに違う事を確信するシュウジだが、そんな事などお構いなしに次元獣に剣を振るう。

確かにこの次元獣達はこれまでと違って明らかに異質だ。防御も堅ければ俊敏さも増している。力の方も恐らくは上がっている事だろう。

油断ならない相手だ。――しかし。

『力を得ているのは……何もお前達だけじゃない』

シュウジ＝シラカワの駆るグランゾン、この機体もまたネオという力を得て本来の力を取り戻している。そんなグランゾンを相手に〝奴〟の尖兵に過ぎない次元獣が……果たして相手になるのだろうか？

答えは――――否である。

『収束されたマイクロブラックホールには、特殊な解が存在する。剥き出しの特異点は時空そのものを蝕むのだ』

『何人たりとも、重力崩壊からは逃れられん！　ブラックホールクラスター……発射！』

撃ち出されるグランゾンの必殺の一撃。その射線上に存在する次元獣達は悉く重力崩壊に呑み込まれ、塵芥も残さずに消滅していった。

撃ち出された先に在る要塞型次元獣〝リヴァイダモン〟黄金色に輝く怪物は漆黒のエネルギーの塊に呑み込まれ、周辺の次元獣諸共消し飛んだ。

今の一撃により殆どの大型次元獣は消滅。残るは大した力の持たないモノばかりだが、シュウジはそんな次元獣達に攻撃はせず、深い溜息と共に奴の名を口にした。

『……いい加減、姿を見せたらどうなんだ？　ガイオウ』

次元獣と自分達以外存在しない筈の人物の名を呼ぶ。本来なら虚しく響いていくだ

けな筈なのだが、グランゾンの前の空間が突如として歪みだし、その奥から玉座の次元獣に座る破界の王、ガイオウが姿を現した。
『クッハッハッハッハ！　まさか本当に見つけられるとはな。どうやら前の時とは比較にならない程力をましているようだな。嬉しいぜ、シュウジ』
『お前があの一撃程度でやられるとは思わなかったからな。……それで、一体お前はなんのつもりでここにきた』
『お前との決着を付ける為……じゃ、納得しねぇか？』
『……』
　頬を吊り上げ、不敵に笑うガイオウにシュウジは黙り込む。……確かに、ガイオウは自分にとって敵とも呼べる存在だ。その目的や思想はどうであれ、自分と奴の間には決して埋まらない筈の溝が出来ているのだから……。
　けれど、脳裏に浮かんでくるホットドックを頬張るガイオウを見て、シュウジの奴に対する印象は変わっていった。
　ホットドックを初めとしたファーストフードを幸せの味と呼び、道を歩く人々を慈しむような目で見ていたり、人に余計なお節介を焼いたり、旅を楽しみ、人生を謳歌するガイオウの姿は……シュウジには極々普通の人間に見えた。
　だから、本来ならここで問い詰めるべきなのだろう。何故だと、こんな事をする意味

はなんだと、――――お前とは戦いたくないと、そんな事を言えば良かったのだろう。
しかし、シュウジはそんな事は口にしない。

――――何故なら。

『いいぜ、ならトコトンまで付き合ってやる！　かかってこいよ、ガイオウ!!』
『なら付き合って貰うぜシュウジ＝シラカワ！　このガイオウ、次元の将の最期の喧嘩に!!』
『『上等!!』』
不敵に笑うガイオウの顔には悲哀と希望に満ちたモノ――――宇宙要塞バルジで見たトレーズと同じ表情をしていたのだから……。
火星近海宙域、二つの巨大なエネルギーが最後の戦いを飾るべく激突する。

◇

『ぐっ、ま、まさか……これほどとは』

『殿下！』

火星の大地、巨大ＺＯＮＥの前で行われる聖インサラウム王国との最後の戦いは、聖王機ジ・インサーが地に膝を付く事によって幕を下ろした。

二つのスフィアを用いて嘗て無い力でＺＥＸＩＳを相手に圧倒するユーサーだったが、逆境に強いＺＥＸＩＳの反撃と、スフィアの力に耐えきれなくなった事により、ユーサーは戦闘不能。動かなくなった聖王機を前に、ＺＥＸＩＳ達は自分達の勝利を確信した。

搭乗者が力尽きた事により動かなくなった聖王機、崩れ落ちるジ・インサーに、嘗ての忠臣マルグリットが主であるユーサーを助け起こす為に、パールネイルで聖王機を支えた。

『殿下、ご無事ですか⁉　しっかりして下さい！』

『マルグリット、こんな余を……まだ、主と呼んでくれるのか？』

『当たり前です！　喩え裏切り者だと呼ばれようと、私はアナタを……！』

それ以上は、何も言えなかった。ボロボロになった聖王機を前に感極まったマルグリットは口元を手で抑え、ポロポロと涙を零し、泣き声を出さないようにするだけで精一杯だった。

元来、ユーサーという男は争い事から縁遠い人間だった。誰よりも優しく、誰よりも他人を思いやれる彼は正しく王の器足り得ていた。戦火を広げる覇者としてではなく、民から……そして忠臣達から慕われる彼はまさしく統治者として足る人間だった。

一体、どこで歯車は狂ってしまったのだろう。命が燃え尽きようとしているユーサーを前に、マルグリットはただ謝る事しかできなかった。

『殿下、申し訳ありません。あの時、私が皆を、インサラウムを守る事が出来れば……』

『……泣くな。マルグリットよ。綺麗なソナタの顔が台無しだぞ。私は愚かな王。民の声に耳を傾けず、ただ無意味に戦火を広げた愚者だ。罵倒こそすれ、同情の涙は必要ないぞ』

『いいえ、いいえ！　アナタは優しいお方です。アナタがいたから私は今まで戦ってこれた。アナタがいたからインサラウムは……！』

涙を流しながらマルグリットは自嘲の笑みを浮かべるユーサーを否定する。アナタがいたからインサラウムはここまで生き残れたのだと、アナタがいたからインサラウムの民はガイオウに居場所を破壊されても希望を絶やさずにいてくれた。

これまでユーサーはやり方を違えても、その事実は変わらない。

――――嗚呼、これで終わった。自らの使命に殉じ、満足したように目を細めるユーサー。これでもう思い残す事はないと静かに目を閉じた……その時。

『見事だったよ。ユーサー＝インサラウム、けれど残念。狩りの時間だ』

『っ!?』

音もなく、気配もなく、そいつは現れた。手にした剣を携え、漆黒の死神はユーサーの背後に現れた。

『アサキム、テメェ!!』

『尽きぬ水瓶のスフィア、いただくよ』

迫り来る黒い影、アサキムからユーサーを守ろうとするマルグリットだが、次の瞬間ユーサー自身の手によってパールネイルは横に突き飛ばされてしまう。

殿下！　そう口にした時、ユーサーは笑いながら目の前の死神を見据えた。漸く大事な人を一人、守る事が出来た。ここへ来てその想いが果たされた時、ユーサーは笑って死を受け入れた。

『全く、油断も隙もありゃしないな』

目の前の光景に誰もが言葉を失った。ＺＥＸＩＳやマルグリット、アサキム……そして、ユーサーも、目の前に立つ魔神を見て、絶句していた。

『……どう、して？』

最初に言葉を紡いだのはユーサーだった。彼から憎まれていた筈の自分が、その彼自身の手によって守られている事実に、ユーサーは理解出来なかった。

その問いに魔人は応えない。目の前の死神を振り払う様に剣を振るうと、次の瞬間、彼はその剣をアサキムと……その背後に佇む破界の王に向けて突きつけた。

『お互い、ウォーミングアップはここまでにしとこうか』

『だな、んじゃ……第二ラウンド、始めるとするかぁ!!』

『マハーカーラ解放!!』

『ヴィシュカーラ解放!!』

『オン・マケイシヴァラヤ・ソワカ！』

『ウオオオオオッ!!』
高まる二機の覇気。魔人が言葉を紡ぐと魔神は日輪を背負い真の姿を露わにし。
破界の王が全ての力を解放させると、玉座の次元獣と融合し、白銀の姿を顕現させる。
『アサキム＝ドーウィン、そしてガイオウ、いい加減俺達の因縁もここまでにしとこうぜ！』
『……いいだろう。望むところだ』
『ハハハッ！　楽しくなってきたぜ！』
白銀の王と蒼き魔神、そして黒の死神。破界事変から続く因縁に今、終止符が打たれようとしていた。

その６８

火星で行われていたインサラウムとＺＥＸＩＳ。今回の争乱の最後の戦いを締めくくる戦いは意外な形で継続される事になった。

スフィアを狩る呪われた放浪者アサキム＝ドーウィン。ＺＥＸＩＳとインサラウム国王であるユーサーの戦いに紛れ、尽きぬ水瓶を狙っていたこの男。疲弊しきり、満足に動くことも出来ない彼の状態を見計らっての奇襲。突然過ぎる強襲に誰もが反応出来なかった。

スフィアが狩られ、アサキムの手に奪われようとした時、奴らが現れた。〝蒼き魔神グランゾン〟と〝破界の王ガイオウ〟火星圏の外側から戦っていた両者達の介入により、この地での最終決戦はアサキムを巻き込んで更なる激闘の幕を上げていた。

「こ、これって……援護とかしなきゃいけないのか？」

目の前の戦いを前にＺＥＸＩＳの一人、ガロードは呟く様にその言葉をもらす。繰り広げられる三体の機体による壮絶な戦い。真の姿を現した破界の王、ガイオウは玉座型

の次元獣と融合し、翼の生えた白銀の人型へと変貌している。
本来の力を発揮し、超絶な力で戦う様はまさに圧巻の一言。一撃でも直撃してしまえば塵芥も残らず消滅してしまう。
そんなガイオウに対しアサキムは持ち前の速さで翻弄。〝知りたがる山羊〟と〝夢見る双魚〟二つのスフィアを持ち合わせている事により常軌を逸した力を手にしたアサキムは機体を疾風の如く加速させ、ガイオウの攻撃を避けている。
手にした魔王剣でガイオウの機体を切り刻むが、凄まじい回復能力で瞬時に受けた傷を修復させる。この驚異的な能力でガイオウはお構いなしにアサキムのシュロウガに殴りかかる。
パワーはガイオウ、スピードはアサキム。両者一歩も引かない戦いだが、ここに第三の戦力が介入する事により戦況は大きく変わる事になる。
グランゾン。破界事変の頃より存在するガイオウと並ぶ謎の多いその機体、背中に日輪を背負い、これまでとは明らかに異質な存在となった蒼き魔神に誰もが言葉を失った。
互角に渡り合うアサキムとガイオウの間に割って入り、手にした禍々しい剣で白銀の王と真っ正面から打ち合う。
両者が激突する度に火星の大地は砕かれ、火星の空は裂かれる。ガイオウの拳とグラ

ンゾンの剣、それぞれの一撃が星を揺るがす程激しい打ち合いをする中、アサキムは打ち合う両者に向けて攻撃を仕掛ける。

シュロウガの機体から出現する小さなソレ。使い魔（ファミリア）らしき武器を前に魔神の乗り手であるシュウジは一瞬目を見開くが、次の瞬間にはグランゾンをワームホールで移動させ、瞬時にシュロウガの背後に回り込んだ。

振り抜かれる剣、それを寸での所で避けるシュロウガ。どうせ避けられると分かっていたシュウジは異空間を通して撃ち出されるワームスマッシャーでシュロウガの行動を狭めさせる。

縦横無尽、全方位から繰り出される光の槍をアサキムはシュロウガを更に加速させ、僅かな隙間を目掛けて飛翔していく。

一つでも間違えれば即串刺しになる状況の中を、アサキムは笑顔を浮かべて突破する。初めて目撃するワームスマッシャーを破った瞬間にＺＥＸＩＳの面々は目を大きく見開かせるが……。

『残念、ここから先は行き止まりだ』

目の前に先回りされていたガイオウの出現に、アサキムは悔しげに舌打ちをする。これまで仕掛けてきたワームスマッシャーは全てブラフ、ガイオウの前に誘き出すための誘導に過ぎない事を悟ったアサキムはシュロウガの手に剣を持たせ防御の体勢をとる。

『砕けろォォォッ!!』

打ち出されるガイオウの拳、防いだ瞬間伝わってくる衝撃を緩和仕切れず、アサキムはシュロウガと共に地面へと叩き落とされる。

砂塵を巻き上げた地面に向けて追い打ちを仕掛けようとするガイオウだが、横から現れるグランゾンによる剣の一撃により、追撃は叶わず弾き飛ばされる事となる。

一分にも満たない攻防。だが、それと比例し戦いの舞台となっている火星の大地はＺＯＮＥのある所以外は悲惨なモノへとなっていた。

荒野だった大地は陥没し、裂け目が広がり、天空は三者のぶつかり合いの衝撃によって荒れに荒れている。たった三機の機体が激突しただけで火星という星が荒れ果てたという現実を前にＺＥＸＩＳは不用意な手出しはせず、彼等の戦いを見守る事しかしなかった。

いや、出来なかったという方が正しい。彼等の戦いは熾烈を極めている為手出し出来ないという事もあるが、同時に手出ししてはいけないという意志が感じられたからだ。

ニュータイプとしての第六感でもＧＮ粒子や脳量子波での思考接続でもない。彼等から感じられる気迫が手出しは無用だと訴えてきているのだ。

アサキムのシュロウガを挟んで向かい合う蒼き魔神（ネオ・グランゾン）と破界の……いや、次元の将ガイオウ。本来の使命を思い出しながらも、ガイオウはこの闘争が楽しくて仕方がなく、そ

の顔には満面の笑みが零れていた。
『クハハハッ！　堪らないなオイ。破界の王と呼ばれていた俺がまさか圧されるとはな、前の時よりも随分力が増しているじゃねぇか、テメェの魔神は』
『ヌかせよ。お前だって破界事変の頃より数段パワーが上がっているじゃねぇか。あの時陰月で戦った時は手を抜いていたのかよ』
蒼のカリスマ――――いや、シュウジの口から零れる破界事変の裏側の戦いの真相を耳にしたＺＥＸＩＳは騒然となった。
予想はしていた。インペリウムの移動拠点であるグレードアクシオンと破界事変最後の決戦を繰り広げている最中、陰月から離れた宙域からは凄まじいエネルギーを感知していたのだから……。
だが、実際その事実を耳にしてＺＥＸＩＳは改めて驚嘆する。そして、シュウジ＝シラカワ本来の人格と性格を知るカレンとヨーコは複雑そうに表情を歪めていた。
インペリウムを始めとした人類の脅威と戦い、希代のテロリストの汚名を被せられ、世界中の人間から敵視されても、たった一人で戦い続ける。
人は一人では生きてゆけない。前と今回、両方の戦いを通して知った彼女達は、一人で戦い続けるシュウジの姿が……酷く、歪に見えた。
いつか、彼のそんな戦いの日々が終わることを願うヨーコとカレン。恐らくは地球で

魔人一行の帰りを待つナナリーも同じ気持ちだろう。
　尤も、彼が一人で戦うのは半分自業自得なのは秘密である。本来ならＺＥＸＩＳの面々と助けたり助けられたり、そんな友情的なやりとりを本人が切実に願っている事を彼女達は知る由もなかった。
　そんな彼女達の想いに気付く筈もなく、彼等のやりとりは続いた。
『あの頃の俺はまだ記憶を取り戻して間もなかったからな、本来の力を十全に扱い切れなかった。……とはいえ、テメェとやりあった時は八割程マジだったんだぜ？　それなのに真っ正面から叩き潰されるとは思わなくてな～、ショックだったぜ　思わず復活するのを躊躇った位だ』
『してもらわなくても結構だよこっちは、そのまま永久に寝てればいいモノを』
『連れないこと言うなよ。……なんだ？　もしかしてまぁだホットドック取られたこと根に持ってんのか？　いけねぇなぁ、ネチっこい男は嫌われるぞ？』
『はっ、言ってろ』
　殺し合いをしているとは思えない程の軽口の言い合い。まるで悪友同士の会話に聞いているＺＥＸＩＳ達は呆然とするが、彼等の放つ殺気は本物。これ以上火星の大地が破壊される前に何とかしなくてはと彼等が思考を巡らせた時、再び彼等は動き始めた。
『さて、楽しい談笑もここまでにして……そろそろ終わらせるか』

『……だな』

これで言葉を尽くすのは終わり。この一手で全てが決まる。ＺＥＸＩＳが固唾を呑んで見守る中、シュウジはネオ・グランゾンの胸部装甲を展開させる。

『収束されたマイクロブラックホールには特殊な解が存在する』

魔神の両腕に集まる総数六つの球、それらがグランゾンの胸元に収束されると、球体は禍々しい輝きを放ち、漆黒の大玉となって顕現する。

『剥き出しの特異点は、時空そのものを蝕むのだ』

臨界点を越えつつある重力の渦。大地を抉る重力の奔流に巻き込まれないよう、ＺＥＸＩＳは後退を余儀なくされる。

『何人も、重力崩壊からは逃れられん！』

そして、必殺の一撃が放たれようとした――――その時。

『悪いが、させないよ』

背後に回り込んだ黒い影、アサキムの駆るシュロウガが、手にした刃で以てグランゾンを貫いた。

（……え？）

その光景にカレンの思考は停止する。ホンの一瞬前まではガイオウの前にいたシュロウガがグランゾンの背後に回り込み、その剣でグランゾンを貫いているのだ。

有り得ない。そう思いながらも膝を付いて崩れるグランゾンを前に、ＺＥＸＩＳ達は信じられない現実を直視する。

『特異点を自在に操り、そして武装にする君のグランゾンの力は確かに脅威的だ。その力を前にしてしまえば如何なる速さも君達には届かない。……しかし』

『太極の欠片でもあるスフィアを二つ所持し、且つ使いこなしつつある僕の前では、その力は意味を成さないよ』

微笑みを浮かべながら崩れるグランゾンを見つめるアサキム。

これで憂いは断たれた。後はガイオウの相手を適当に済ませ、残ったスフィアリアクターを狩る。アサキムの思考は既に次の段階へと達していた。

――――しかし。

『おやおや、戦闘中の余所見は関心しませんよ』

『……なに？』

次の瞬間、横からの途方もない衝撃にシュロウガは吹き飛んでいく。何が起こった？

アサキムは衝撃のあった方に視線を向けると……。

『全く、まさかこの場面で私を出させるとは、我が半身も思った以上にがめついですね。まぁ、この前の借りを返すという意味では、ちょうど良かったのかもしれませんね』

『……バカな』

『う、嘘だろ』
『おいおいおいおい、勘弁してくれよ……』
今し方背後から刺して倒した筈の魔神ネオ・グランゾン。
その圧倒的とも言える機体が三体。アサキムの前に姿を現した。
誰もが理解出来なかった。ＺＥＸＩＳもアサキムも、ガイオウですら、信じられない様子で呆然としている中で。
『さて、皆さんは遍在という言葉をご存じでしょうか?』
魔神の中でシュウ＝シラカワは笑みを浮かべるのだった。

その６９

その光景に誰もが絶句した。その姿に誰もが呆然となった。
アサキムもガイオウも、瀕死の状態のユーサーも、ユーサーの側に寄り添うマルグリットも、そして……地球最強の部隊であるＺＥＸＩＳも、眼前の風景を前に言葉を失っていた。
アサキムとガイオウ、彼等の前に現れる日輪を背負う三つの機体。それは今し方アサキムが背後から貫いた筈の蒼き魔神ネオ・グランゾンだった。
幻だと、最初は誰もがそう考えた。あり得る筈がない。あってたまるかと、誰もが目の前の現実を否定した。
たった一機で地球の全戦力の半分を破壊し、バジュラの女王とイノベイドの大群を相手に蹂躙の限りを尽くした恐るべき魔神が、そんなモノが三機もいる筈がない。
いてたまるか。
『残念ですが、これは現実です。幾ら頭で否定しても覆る事はありませんよ』
そんな彼等の思考を読みとった様に、魔神を操る者は言葉を口にする。夢でもない、

幻でもない。否定する皆の気持ちを現実で以て無理矢理事実を直視させるその者は、魔神のコックピット内で静かに微笑んでいた。

『……シュウジとは別の奴だな、テメェが噂のシュウ＝シラカワって奴か？』

『私もアナタの事は知識でしか知り得ませんでしたよ。破界の王ガイオウ……いえ、記憶を取り戻したからこの場合は次元将ガイオウと呼ぶべきですかね？』

『はっ、俺の事も承知の上かよ。……で？　シュウジの保護者みたいな奴がなんの用だ？』

『本来なら私の出る幕ではありませんが、半身の方が少しばかり策を弄するみたいですからね。彼の方の準備が完了するまで暫しの間私が代わりにお相手することにしました』

『それでワザワザ分身まで出して出張って来たって訳かよ』

『分身……確かにそう思われても仕方ないですが、その認識は誤りです。全て本物、左も右も、全てが本物の私であり、彼等もまた私なのです』

分身かと思われていた他二体の魔神。彼等まで本物と言われた事に、ＺＥＸＩＳにいる元ＺＥＵＴＨのメンバーは驚愕の表情となって言葉を口にする。

『全部本物って、それじゃあまるで……』

『奴もジ＝エーデル＝ベルナルと同じ様に黒の英知に触れているのか』

　嘗て自分達のいた世界で戦った最後の敵、ジ＝エーデルなる人物と戦った事を思い出したＺＥＵＴＨの面々は、シュウに問い掛ける様に言葉を紡ぐ。それを耳にしたシュウは正解だと言いたげに口端を吊り上げた。
『残念ながら、我が半身はまだそこまでの段階には至っていません。知識もまだまだ不足してますし、何より黒の英知に触れても折れない気概がない。最近は肉体的成長に伴い精神面でも成長しているようですが……それでもまだ足りません。瞬時にＺＯＮＥとグランゾンのパイプラインを構築したのは見事ですが、今の彼では精々質量を持った分身を作るのが関の山でしょうね』
　シュウのその言葉に全員が倒れたグランゾンを見やる。すると、背後から貫かれたグランゾンは爆発する事なく、まるで硝子細工の様に砕け散り、火星の空へと溶けていった。
　そして次に今まで沈黙していたＺＯＮＥが活動を始めているではないか、理解の及ばないＺＥＸＩＳに説明するようにシュウは更に言葉を続けた。
『尤も、そのＺＯＮＥとグランゾンとのラインを繋げた事により、この遍在が使える様になったのですけれどね』
『……成る程な、次元力を吸い上げるあのデカブツとテメェのグランゾンを繋げる事で、擬似的にスフィアに近い力を手に入れたって訳かよ』

『その通り、ですがこの遍在には使用限界時間がありましてね。この星が死ぬ迄に終わらせたいのが正直な気持ちで――――』

と、その時だ。黒い死神が疾風となり隙を見せている魔神へと刃を持って肉薄する。隙だらけ且つ厄介極まりない存在の抹消の為に、アサキムはシュロウガの最大加速を以てグランゾンに切りかかる。

が、その刃は魔神に届く事はなかった。魔神を穿つ為に振り抜いた剣は魔神の持つ禍々しい大剣によって阻まれていたからだ。

まるでこちらの行動を見透かしたかの様な対応性、アサキムの攻撃を受け止めながらシュウは横目でアサキムを見て、呆れ混じりのため息を零した。

『全く、人が話をしている間に仕掛けてくるのは些か無粋ではありませんか？　アサキム＝ドーウィン』

『……』

『確かに君と〝彼〟はよく似ている。機体だけの話ではなくその魂が……ですが、それだけです。私にはアナタとの明確な面識はありませんが……さて、アナタはどうなのでしょうね？』

クククと笑いながら問うシュウにアサキムは無言の憎悪を機体越しに彼に叩きつけた。普段は何を考えているのか分からないアサキムだったが、ここへきて明確な感情を

露わにしている。
　その事実にＺＥＸＩＳ達は気付く事はなかった。激しい憤怒を顕しているアサキムだが、シュウはこれを淡々と受け止めながら……。
『答えないのならそれで構いませんよ。どちらにしても私のやるべき事に変わりはありませんからね』
『っ！』
『では、始めましょうか』
　受けていたシュロウガの刃を、グランゾンはその剛腕で以て弾き飛ばす。上空に吹き飛ばされながらも、アサキムはシュロウガを巧みに操り、即座に体勢を整え、グランゾンに肉薄しようとスラスターに火を灯らせる。
『遅いですよ』
　だが、ワームホールを使用しての転移……所謂瞬間移動を扱えるグランゾンからは逃れる事は叶わなかった。しかもそれだけではない。グランゾンのパイロットがシュウジからシュウに変わった所為か、ワームホールが開いて閉じるまでのタイムラグが格段に早くなっているのだ。
　その動作はシュウジと比べて最早別格。高速や音速、光速といった〝速さ〟ではなく、シュウが行っているのは点から点への移動。完全なる瞬間移動のそれである。

一切の無駄を廃したグランゾンの動き。それはこれまでのシュウジの戦い方とは似ても似つかないモノだった。

シュロウガの動きを完璧に捉え、背後に回り込んだグランゾンの一撃がシュロウガに叩き込まれる。

『チィッ！』

しかし、シュロウガの速さもまた異常だった。グランゾンの振り抜かれた剣が当たる直前、彼はシュロウガを高速飛行形態に変形してこれを回避させると、瞬く間にその場から離脱。次の瞬間には反撃の体勢を整え、グランゾンに向けて攻撃を再会した。

『いいだろう。深淵の知識者よ、そんなに知りたいのなら、僕の絶望を教えてやる！』

バード形態となったシュロウガに禍々しい光が宿る。黒く、淀んだその光は浸食する様に空間に広がり、グランゾンを呑み込もうと迫ってくる。

迫り来る凶鳥。それを前にしたとき、シュウの笑みが一層深くなる。

『見れば見るほど〝彼〟と似てますね。もしアナタが〝彼〟なのだとすれば、私こそが決着を付けるべき相手なのでしょうが……残念ながら、その役割は私ではない。アナタの相手をするべきは……我が半身、シュウジ＝シラカワです』

『さて、そろそろお膳立てはいいでしょう。後は任せましたよ。――シュウジ』

眼前にまで迫る凶鳥。それを前にしたとき……。

『待たせたな』

彼の思考が、人格が、シュウからシュウジへと切り替わる。

『っ!?!?』

突如襲い来る衝撃にアサキムの表情が歪む。見れば今まで呆然と佇んでいただけの他二体のグランゾンが、シュロウガを囲むように周囲にいるではないか。

遍在により生まれた〝存在する者達〟その全てが事実であり、故に全てが本物である三体の魔神。シュウの言う準備を終えた事により、シュウジの攻撃が始まる。

そして、次の瞬間、アサキムは信じられないモノを目の当たりにすることになる。

『見せてやるよアサキム。俺と、俺のグランゾンと一緒に鍛えてきた一撃を！』

三体のグランゾンがワームホールに入り、シュロウガの死角にそれぞれ飛び込んでくる。咄嗟に防御の姿勢に入るが、繰り出されるグランゾンの同時攻撃により、シュロウガは為す術もなく吹き飛ばされてしまう。

『まだまだぁ！』

再びワームホールに入り、死角に出てくるグランゾン達。一度見せた技が二度も通用するものかとアサキムは待ち構えの姿勢を取り、カウンターの準備に入る。

だが……。

『バカな……』

ワームホールから出てきた六機　のグランゾン。六つの繰り出される攻撃に再びシュロウガは宙に舞う。

更に１２、１８と、増え続けるグランゾンにＺＥＸＩＳ達は呆然と吹き飛ぶシュロウガを眺め続け……そして。

『我流真伝〝乱舞の太刀〟！』

遂には３０にもなるグランゾンとその分身達による攻撃が、シュロウガに叩き込まれる事になる。

ＺＯＮＥに磔される形で叩き込まれたシュロウガはズタボロとなり、暫くは動けそう

にもなかった。このまま止めとなるのか？　そう思われた時。
『アサキム、前々から思ってたけどお前って普通の人間じゃないんだよな？』
『……だったら、どうする？』
『お前の考えている事はよく分からない。けれど、影で俺や他の人達を付け狙うようであれば……放っておくわけにはいかない』
『なら、僕を殺すかい？　けれどそれは無駄な事だよ。僕は死ぬことも許されない呪われた放浪者だ。仮にここで殺されたとしても、僕は再び蘇る』
『……』
『さぁ、僕を殺すといい。そして一時の平穏を味わうがいい。けれど忘れるな。この世に太極が、そしてスフィアが存在する限り、僕は何度でも蘇る』
怨念混じりに呟くアサキム。その憎悪に満ちた言葉を、シュウジは悪い笑みを浮かべながら受け止めた。
一体なんだ？　不敵に笑うシュウジを訝しげに思った時、それは起きた。
磔にされているＺＯＮＥから発せられる光。それが強く輝き始めると、シュロウガはＺＯＮＥの中に徐々に沈んでいくではないか。
何が起きている？　混乱するアサキムの思考の中に聞き覚えの声達が割って入ってきた。

『悪いなアサキム。お前の悪巧みもここまでだ』
『アナタの悲しい旅路は、ここで終わらせます！』
『ランド＝トラビスにセツコ＝オハラだと!?』
『テメェはここで終わりだアサキム』
『スフィアを狙う悪鬼よ、この地で眠るがいい！』
　ランド、セツコ、クロウ、そしてユーサー。四人のスフィアの持ち主がＺＯＮＥを囲む様に機体を置き、それぞれのスフィアを解放している。これを意味するモノは……その事を悟った時、アサキムは否定の憤怒ではなく、肯定の笑みを浮かべながらその事実を受け入れるのだった。
『そうか、四人の持つそれぞれのスフィアで以て。僕をこの火星のＺＯＮＥに封印するつもりか』
『ＺＯＮＥの暴走を止める時、セツコさんとランドさんがそれぞれ身を挺して止めたという話は既に耳にしていてね、スフィアの持ち主がＺＯＮＥをその身と引き替えに止められるのであるなら、その逆も可能じゃないかと思っただけだ』
『……まさか、僕やガイオウと戦っていた合間にその作戦を?』
『流石にお前等を相手に無防備ではいられないからな。こちらも裏技を使わせて貰った。……さぁ、これでお終いだ。アサキム』

『あぁ、完全にしてやられたよ。けれど、こんな終わり方でも悪くないと、そう思える自分がいる。……どうしてかな？』

アサキムのその問いに答えるモノはいなく、彼はシュロウガと共にＺＯＮＥの奥深くへ封印される事になった。

四人のスフィアリアクターと三機のグランゾンによる封印。その強固に施された封印は並の者では到底開かないモノとなっている。

……気が付けば、グランゾンは元の一機だけとなっていた。ＺＯＮＥを停止させた事により遍在の力を失ったグランゾン達は、まるで霧の様に消えて無くなっていた。

静まり返る火星の大地。これで漸く舞台は整ったと思いながら……。

『さて、待たせたな。ガイオウ』

シュウジはガイオウと最後の戦いを始めようとしていた。

その７０

――――奴に最初に抱いたのは憎しみと怒り、そして殺意だった。お世話になった国と人を理不尽に奪い、平然とした態度でリモネシアの大地を踏む奴の姿を見たときに抱いた感情の渦は今でも覚えている。

今でもそうだ。俺は奴の事は嫌いだし、一発ぶん殴ってやりたいと何度も思ったりしている。理不尽の権化とも呼べる奴は俺にとって最大の天敵とも言えた。

リモネシアを壊し、店長を始めとした多くの人の命を奪い、シオニーさんの人生を狂わせた奴を……俺は、きっと許す事は出来ないだろう。それが喩え、アイム＝ライアードという黒幕が裏で操っていたのだとしても。

その頃だろうか。自分の行動に理由と意味を持ちだしたのは……。もし、奴がリモネシアに現れなければ、俺は今頃どうなっていたのだろう。

リモネシアに永住していた？　それともシュウ博士に頼んで元の世界に帰っていた

？　どちらにしても、今の自分よりは比較的穏やかに時を過ごしていた事だろう。
けれど、一つ確かな事がある。奴がリモネシアに現れなければ、今の俺はここにはいなかった事だ。奴が来なければ、俺はもっと別の生き方をしていた筈だ。
感謝はしない。元より、俺達の関係はそんなモノなど必要としていない。
――――ただ、一つ言うとすれば。
前にカルロスさんと交えた食事は……思いの外美味かった。
あの一時に関してだけは礼を言ってもいいのかもしれない。

なぁ、ガイオウ。お前は……そんな生き方で満足したのか？　次元の将だとかに囚われて、戦いを強いられるその生き方で。
俺は……イヤだね。

◇

今回の争乱の最後の舞台として選ばれた火星。地球より離れた場所にあるその大地で二つの巨大な力が、正面から幾度となくぶつかり合う。

『オオオオオオオオオッ!!!!』

『ラァァァァッ!!』

ぶつかり合う鋼と鋼、拳と剣が打ち合う度に火星の天地が揺れる。足場となっている大地は砕かれ、彼等の頭上には二機の魔神によって雲は吹き飛ばされ、雲一つない空が広がっていた。

一体、あれからどれだけ打ち合っているのだろう。アサキムがＺＯＮＥに封印されて時間はそれほど経っていないのに、目の前の戦いを見守るＺＥＸＩＳには数刻の時間が流れた様に感じた。

互いに一歩も譲らない激闘。本来なら加勢した方がいいのかもしれない状況なのに、誰もがその様な行動は取らなかった。

彼等の胸中に渦巻く理由は様々だろうが、総じて思いは同じだった。

【二人の戦いを邪魔をしてはならない】幼い子供や理性溢れる大人、野生に満ちた者、様々な人物達で構成されているＺＥＸＩＳにいる全員が、その思いで一つとなっていた。

『ホラホラどしたぁ！　折角ネオとやらに成ったってのにまるで手応えを感じてねぇぞぉ！』

『ハッ、お前相手にイチイチムキになってられるかよ！』

『言うじゃねぇか、前の時は怖くて震えていた奴がよく言うぜ！』

『そのガクブルしていた奴に逆転負けした奴はどこの誰だったかなぁ！』

剣と拳、互いに持つ得物で命の奪い合いをしておきながら、そのやりとりはまるで親しい友人同士の様であった。

いや、それは友人というよりも悪友と呼べるモノなのかもしれない。気の知れた相手に対して遠慮のないやり取りをする様に、二人の言葉はより白熱したものへと変化していく。

『分かってねぇなぁ。アレは俺が勝たせてやったんだよ。漸く独り立ちした雛鳥相手に本気を出すほど、俺は野暮じゃねぇよ！』

『破界の王ともあろう者が言い訳かよ。そういうのをなんて言うか知ってるか？　みっともねぇって言うんだよ！』

再びぶつかり合う剣と拳。二機の超常の力を持つ機体の衝突により大地は悲鳴を上げ、行き場の無くなった衝撃は火星の地を蹂躙していく。

隆起する大地、引き裂かれ、崩れゆく大地。変わっていく大地を前に二人の戦いは激しさを増していく。

『どしたぁ！　そんなモンかよ魔神の力ってのは！　ここまで来て出し惜しみなんざしてんじゃねぇぞ！』

『チィィッ!!　この野郎、前よりも力を増してやがる！』

ここへ来て更に力を高めていくガイオウ。白銀の肉体が熱を持って紅くなり、まるで怒り狂う鬼の様だ。翼を羽ばたかせ、飛翔するガイオウ。そんな彼を追ってシュウジもグランゾンを駆って空へと飛び立っていく。

舞台は地上から大気圏……宙と地の狭間へと移行するが、その最中でも二人の激突は続いていく。

『撃ち抜け、ワームスマッシャー！』

ぶつかり合う激闘の最中、グランゾンは胸部に光を灯し、ガイオウに向けて無数の光の槍を放つ。縦横無尽、逃げ場などない光の槍の群を前に……。

『しゃらくせぇ!!』

ガイオウは雄叫びを上げながらその両手両足で打ち落としていく。反螺旋族（アンチスパイラル）との戦

いでは星をも越える相手を串刺しにした光の槍を、ガイオウは力で打ち払っていく。その事実にシュウジは驚きもしたが、相手は世界そのものを破壊する化け物。この程度で動揺してはいられないと瞬時に気持ちを切り替える。

『今度はこっちの番だ。歯ぁ食いしばれよ！』

その時、ガイオウからお返しとばかりに反撃の拳を放ってくる。振り抜かれた拳を今のシュウジには避ける術はなく、グランワームソードを楯に防御の姿勢に入る。

『ぐっ、うぅぅぅっ!!』

グランゾンを通して響いてくる衝撃。熱や光は感じないが、衝撃そのものはこれまで受けてきた攻撃とは比較にならない。メメントモリやバジュラの女王ですら届かなかった衝撃がシュウジの体を容赦なく貫いていく。

だが、その一撃に屈する事は無かった。ガイオウから放たれる渾身の一撃をシュウジは耐えきって見せたのだ。

『せらぁぁぁぁっ!!』

『っ!?』

耐えきった。自分の放てる最大限の一撃を耐えた事に驚愕を顕すガイオウ。その隙を突き、シュウジは返し刀の一閃を見舞い、ガイオウの肉体に傷を入れた。

高重力の力場を纏わせての一撃、何物にも干渉出来るグランゾンの重力の一撃はガイ

オウの修復機能を阻害し、刻まれた傷は治ろうとしなかった。

だが、そんな事は寧ろ喜びの様にガイオウの顔に笑みが浮かぶ。トコトン戦いが好きなのだとシュウジはその笑みを見て解釈しガイオウの反撃に備えるが、その様子はなく、ガイオウはシュウジに刻まれた傷を撫でた。

『――――ククク。あぁ、楽しいなぁ。まさかこんな楽しい喧嘩が出来るなんて、あの頃の俺には想像も出来なかったぜ』

『殺し合いを喧嘩とか、つくづくイカレてんなお前』

『かもな、けど。それは別に普段からって訳じゃねぇ。俺だってたまには人並みの平穏ってヤツを味わいたくもなるさ』

『……』

その言葉を聞いて、シュウジは以前カルロスを交えて食事した時を思い出した。当たり前の様に食べ物を口にし、それが美味いと笑い出す。破界の王と呼ばれる者が普通の人と変わらず日常を過ごす光景、ただそれだけを耳にすればそれは途轍もなく違和感に聞こえる事だろう。しかし、シュウジはそうは思わなかった。

何故なら、あの時のガイオウは正しく人間だったからだ。普通に日々を満喫し、普通に日常を謳歌する。当たり前の時間とその時のガイオウの姿が今とは別とばかりにしっくりとしていたからだ。

以前、ガイオウはホットドックを口にしていた。平和の味だと、それは平和の尊さと脆さを知っている者の台詞だ。
だから、シュウジは思う。もしかしたら、ガイオウは破界の王などではなく、自分達と何ら変わりない――――。
『それ以上は無粋の極みだぜ。シュウジ』
『っ！』
自分の思考が読まれ、ハッと我に返る。見ればガイオウはこれ以上ない真剣な表情でコチラを睨みつけていた。
それ以上考える事は許さないと、余計な事は考えるなと、そう無言で訴えてくるガイオウにシュウジはこれ以上考える事はやめた。
そうだ。理由はどうあれ奴はリモネシアを一度破壊したのだ。店長を殺し、多くの人々を殺した奴を許す訳にはいかない。……いや、放っておく訳にはいかなかった。
故に――――。
『ガイオウ』
『あ？』
『これで、お終いにしよう』
これで終わりにしよう。そう思いを込めて、シュウジはグランゾンに力を漲らせる。

それを見てガイオウも……。

『……いいぜ、コレでシメにしようか』

自分の言うとおりに迷いを捨てたシュウジに全身全霊の一撃で応える事にする。

互いにもう言葉はない。罵り合う言葉も、思いやる台詞もいらない。ただ目の前の障害を排除する為に、二人はそれぞれ必殺の一撃を放とうとする。

『シュウジ＝シラカワ、お前に無限を見せてやろう！　――――ハァアッ!!』

ガイオウが裂帛の気合いと共に雄叫びを上げると、周囲の空間に罅が入り、硝子細工の様に砕け散る。何だと思い見てみれば、そこにはアンチスパイラルと戦った時の様な別の宇宙空間が広がっていた。

突然の出来事に驚愕するシュウジ。為す術なくガイオウの宇宙に呑み込まれると、そこには無限に広がる大宇宙が広がっていた。

その中心に佇む銀色の太陽。そこから感じられる脅威のエネルギーの奔流にシュウジは一瞬避ける事を考える。

だが、それは無意味だと察する。何故ならここは奴が生み出した宇宙だからだ。喩え避けたとしても次の瞬間には直撃を受ける。――――ならば。

（耐えてみせるしかない）

既に迷いはない。――――否、迷っている場合ではない。相手は宇宙すら生み出す真生

の化け物、自分とグランゾンの耐久力を信じて耐え抜くしか道はない。

――――そして。

『いくぜシュウジ、これが破界の王ガイオウの……全身全霊の一撃だ！』

瞬間、グランゾンとシュウジに嘗てない衝撃が襲ってきた。放たれたのが蹴りなのか拳なのか定かではないが、最早そんな事は問題ではない。

意識が持って行かれそうだ。否、命が、魂が引き裂かれそうな衝撃に耐えながら、シュウジはグランゾンの操縦桿を握りしめる。

楯にした剣に亀裂が入る。グランゾンを通して伝わってくる剣の悲鳴にシュウジは耐えてくれと願い、耐える。

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!　砕けろぉぉぉぉっ!!』

周囲の小惑星を砕きながら、尚止まらないガイオウ。そして遂に最後の衝撃がシュウジとグランゾンを襲った。

ミキリッと、剣に嫌な音が広がってくる。次いで次の瞬間――――。

〝パキャァァァン〟

魔神の愛用していた剣が、乾いた音と共に砕け散った。遙か宇宙の彼方に吹き飛ばし、姿の見えなくなった魔神にガイオウは確信する。

『――――やれやれ、負けちまったか』

ガイオウの頭上に煌めく黄金の日輪。それを背にした魔神が、胸部を展開して佇んでいた。

ガイオウが吹き飛ばしたグランゾンはシュウジが創り出した分身。本家には遠く及ばない粗悪品だが、それでもガイオウの目を一瞬とはいえ欺く事が出来た。

恐らくはグランゾンの剣を砕いた瞬間、あの時に入れ替わっていたのだろう。自分の目を欺ける程精巧な分身を土壇場で創り出したシュウジに、惜しみない賞賛を内心で送りながら……。

『縮退砲……発射!』

ガイオウはその不敵な笑みと共に目の前に広がる天地開闢の光に呑み込まれていった。

『――――なぁ、ガイオウ』
『あん？』
『俺さ、お前の事嫌いだったよ。勝手に人の物は食べるし、遠慮はないし、何より無法過ぎる。自由勝手に生きるお前を、俺はどうしても受け入れ難かった』
『……』
『けど、それはただの嫉妬なんだって、最近は思うようになった。自由であること、その大変さは俺も少しは分かるつもりだから』
『……そうかよ』
『なぁガイオウ』
『あ？』
『またいつか、一緒にホットドックを食べよう。カルロスさんや色んな人と一緒に、同じ空の下で……また』
『……あぁ、そうだな。その時を楽しみにしておくぜ』
『あぁ、それじゃ……』
『あぁ、そんじゃ……』

〝あばよ。悪友（ダチ公）〟

後に〝再世戦争〟と呼ばれる大戦は、火星で行われた決戦を最後に終幕。また、インサラウムの王であるユーサー＝インサラウムも後の事を騎士達に託し死去、インサラウムの民達は火星に移住。インサラウム騎士達筆頭であるマルグリットの指揮の下、インサラウムの民達は移住する際の建設作業に取り掛かる事になる。

新しく生まれ変わった国連はコレに協力する事にし、互いに友好な関係を築いていく

ことを約束した。
尚、再世戦争最後の舞台である火星での戦い。後に人々はこう語る事になる、
〝触らぬ魔神に祟り無し〟
また、その張本人である魔神と魔人は未だ行方は知れず。それを人々は魔人は火星での戦いで死んだと噂をしているが……その真相は定かではない。

その71

火星での決戦を終えて早数日。破界事変から続く動乱の爪痕は未だ癒えることはないが、それでも地球では穏やかな日々を過ごしていた。

平穏の時。長らく人々が待ち望んでいた平和の時間、その中で世界は…緩やかに廻っていた。

そして、今回の動乱を収めた地球最強の部隊ＺＥＸＩＳの面々も、各々の場所で平和を享受していた。

傷付いた街の復興作業の手伝いや食料の足りない地域への配給。相変わらず彼等の取り巻く環境は目まぐるしいが、それでも戦いが終わった事により彼等の顔付きは穏やかなモノだった。

そして、そんな地球の為に戦ってきた彼等も……遂に、解散の時を迎えようとしていた。〝ＺＥＵＴＨ〟嘗て時空振動で異世界から転移してきた彼等はＺＥＸＩＳに協力し、共に戦ってきたが、〝アビス〟が閉じるのはもう間もないという事により、急遽解散会を開く事となった。

〝アビス〟というのはネオ・プラネッツより少し離れた宙域にある時空の穴の名称であり、その穴を通っていけばＺＥＵＴＨは元の世界に帰れるのだという。
流石に一日二日で閉じる事はないが、いつまた時空振動が起きてアビスが閉じるか分からない。故にクラッシャー隊の長官兼ＺＥＸＩＳの後見人である大塚茂氏は、日本にある基地を貸し切っての催し会を開くこととなった。
「しっかし、これでＺＥＸＩＳも解散かぁ。何だか寂しくなるな」
「チームＤの皆さんは本来の職業に戻られるんですよね？」
「そうね。私はモデルの仕事もあるし、くららは刑事、ジョニーはエイーダと一緒に芸能界に復帰するのよね？」
「そうですね。前の時と同じ僕はエイーダと一緒に頑張っていくつもりですよ」
「ヘェヘェ、良いですなぁリアルが充実している人は、もういいですっての。御馳走様だっつーの！」
「僻まないの朔哉、みっともないわよ。……で、正太郎の方もやっぱりＩＣＰＯに？」
「はい。大塚長官からは暫く休むよう言われているんですが、それが終わり次第戻りたいと思います」
「そう。じゃあもしどこかの現場ではち合わせたら、その時は宜しくね」
「はい。その時は是非」

「太郎は凄いなー、小学校の宿題をやりながらＩＣＰＯの仕事もこなしちゃうんだもんなー」
「ワッ太だって小学生をしながら社長を頑張ってるじゃないか」
「それはほら、俺には専務や砂原ちゃんがいるから……」
「ほほほ、嬉しいこと言ってくれますね」
「フフ、それなら明日の三時のオヤツは奮発して、ホットケーキにでもしましょうか。蜂蜜をたっぷりかけた甘～いヤツを」
「そうですそうです！　折角大塚長官から特別手当が出ましたのですから、パーッとやりましょパーッと！」
　これまでの事、これからの事。それぞれ思い思いの話に華を咲かせている各々。激戦に次ぐ激戦を経験し、張り詰めていた糸を漸く緩める事が出来た彼等は、その表情に笑顔を浮かべていた。
　ほんの一部を除いて……。
「……」
「あー……カレン？」
　会場の隅でチビチビとジュースを啜るカレン。明らかに不満タラタラ不機嫌オーラ全開の彼女だが、そんな彼女にアルトが勇気を持って話しかける。カレンはジト目で見

るだけで何も言いはしなかったが、流石に祝いの席で自分だけふてくされるのは拙いと思ったのか、カレンは溜息を吐くと首を横に振り、話しかけたアルトに謝罪した。
「……ゴメン。ちょっとカリカリしてた」
「あぁ、まぁ……分かってくれたなら別にいいんだ。折角の催しだからな、皆で楽しんだ方がお前も気も紛れるだろ？」
「……」
「……やっぱ、アイツの事か？」
「……うん」
〝シュウジ＝シラカワ〟破界事変から今回の争乱までＺＥＸＩＳが表立って戦っている合間、蒼のカリスマとして裏で一人、様々な陰謀と戦ってきた者。
火星での最終決戦、ガイオウとの最後の戦い以降行方を眩ませた彼は、再び世界から姿を消した。流石に死んではいないだろうが、何も言わずに姿を消した彼の事をカレンは少なからず不満に思っていた。
一言くらいあっても良いのに、そう愚痴をこぼす彼女に二人の歌姫が歩み寄ってきた。
「はぁーいカレン。楽しんでる？」
「シェリル、それにランカも」

「こんにちはカレンさん。……あの、どうかしたんですか？　表情が暗いみたいですけど」
「どうせ例の魔人さまに恋い焦がれてるんでしょ」
「なっ、別に恋い焦がれてなんか……！」
　シェリルの挑発にまんまと乗せられたカレンはその顔を朱色に染めて狼狽する。からかうつもりが想像以上の反応を返してくるカレンに、シェリルは面白い玩具を見つけた様に頬を歪める。
　女王様モード全開のシェリル、このままいけば壮大な弄りがカレンに押し寄せる事を経験から察したアルトは話題を変えた。
「そ、そういえばカレン。ゼロ達は来ていないのか？　アイツ等も今日にこの会をやることは知ってるんだろ？」
「え？　あ、うん……多分知ってると思う。けど来ないわ。アイツ自身ＺＥＸＩＳには負い目があるっぽいし、今頃どこかで息を潜めているんじゃない？」
「あら？　一緒に戦ってきた仲間に対してちょっと冷たいんじゃない？」
「知った事じゃないわよ。勝手に憎み合って勝手に和解して、……ホント、アイツ等も大概にして欲しいわ」
　あ、これ地雷踏んだ。一人ブツブツと呪詛のように不満を垂れ流すカレンにアルトは

やっちまったと後悔する。
　ネオ・プラネッツで繰り広げたバジュラの軍勢とイノベイド達との決戦の際、刹那のダブルオーが放ったＧＮ粒子の輝きにより心が繋がり、互いの本心を知り得たルルーシュとスザクは和解。もう一度自分達の関係をやり直そうと二人は約束した。
　その様子を見ていたカレンは言い様がない疎外感を覚えた。本当なら自分も彼等に対して何かしら言いたい事があったのに、分かり合った彼等を見て……掛ける言葉を失ってしまった。
「ま、まぁ別にこれが今生の別れって訳じゃないんだ。どこかで会ったときその気持ちをぶつければいいんじゃないか？」
　この男逃げおった。自分にカレンの気持ちが向かわないよう上手く標的を逸らしたアルトに、ランカとシェリルの冷ややかな視線が突き刺さる。
　それもそうねと、一応の納得をしてくれたカレン。そんな彼女の下に赤いポニーテールが特徴的な大グレン団のメンバー、ヨーコが歩み寄ってきた。
「そうね。アルトの言うとおりよカレン。もしその胸の内に蟠りがあるのなら、次に会った時にぶつければいいのよ」
「ヨーコ……」
「私もぶつけるわ。次にアイツに会ったら背後から鉛玉をぶつけるつもりでね。……フ

フフ」

あ、この人もアカン。手にしたスナイパーライフルを前に不敵に微笑むヨーコを見て、アルトはどこかで生きている魔人の身を案じるのだった。

◇

――――エリア11。ブリタニア帝国に支配され、植民地と化していた旧日本。十年以上に渡るブリタニア帝国からの支配を受けていたこの国が、世界が統合される事を機にその支配から解放されようとしていた。

そんな中、ここ旧日本にあるアッシュフォード学園に数名の男女が、今は誰もいない校門前で佇んでいた。

「ルルーシュ、本当にいいのかい？　僕達だけ皆の所に向かわなくて」
「行った所で歓迎されるとは思えないな。精々ヤツの居場所について質問されるだけだろ。俺はそんなのはゴメンだ。ヤツの不始末は奴自身の手で付けさせる。それが筋というものだろう」
　隣に控えるスザクの問いにルルーシュはあっけらかんと応える。確かにそれも一因だが、ＺＥＸＩＳを抜けた今、自分は彼等に率先して関わる事はないと思い込んでいるのが最大の要因となっていた。
　そんな強情なルルーシュにスザクは苦笑う。相変わらず頑固な友達だと、それがルルーシュなりの彼に対する気配りなのだと知りつつも、それが嬉しく思えた。
「そもそも、あの戦いの後何も言わずに去ったのが元々の原因だ。アレの所為で俺達はＺＥＸＩＳに捕まり、余計な労力を消費されたんだ。寧ろ報いを受けるべきだ」
「それはいい。その時はあの魔人を徹底的に虐めてやろうじゃないか。手を貸すぞルルーシュ」
「Ｃ．Ｃ．、君も煽らないの」
　二人を窘めるも、魔王と魔女の二人は魔人を貶める計画に夢中となり、全くスザクの話を聞こうとしない。似た者同士の二人に嘆息すると、学園の方から見知った女子がアッシュフォードの制服を着て此方にやってきた。

「何の悪巧みをしているのかな？　この捻くれ者は」
「……シャーリー？」
「どうして、君が？」
　目の前の元クラスメイトにスザクとルルーシュが面食らう。何故彼女がここにいるのか、休校状態のアッシュフォード学園を前にルルーシュが僅かに動揺しながらシャーリーが目の前にいる要因を模索していると。
「私が呼んだのだよ」
「お久しぶりです。シャーリーさん」
「っ!?」
　動揺していたルルーシュの耳に聞き慣れた声が届いた事により、彼の思考は混乱のどん底に落とされる。持ち合わせのゼロの仮面を慌てた様子で被ったルルーシュは恐る恐ると後ろに振り返ると……。
「ナナリー!?　それに……」
「シュナイゼルだと!?　何故アナタがここにいる!?」
　本当なら国連本部にいるはずの二人、そんな彼等が揃って目の前にいる事実に、ルルーシュは半分キレながら問いただした。
「なに、今回は偶然だよ。ナナリーはもうすぐ国連に身を置く事になる。そうなれば一

人で簡単に動く事は出来なくなってしまう。見納めという意味を込めて彼女と学舎に足を運んでみたら――――」
「偶々ルル達がいたって訳」
　何だかもの凄く納得がいかない気がするが、今はそんな話をしている場合じゃない。ルルーシュは仮面のまま暫し考え事をしていると、割り切った様に溜息を零し、シャーリーに向き直った。
「……シャーリー、遅れてしまって申し訳ないが、ここで改めて礼を言わせて欲しい」
「え？」
「君が奴を……蒼のカリスマに話を通してくれたお陰で私は道を間違えたまま終わらずに済んだ。ありがとう」
「ううん。そんな事気にしなくていいよ。私はただあの人に必死にお願いをしただけだもの。まさか聞いてくれるとは思わなかったけど」
「それでも、私は君のお陰で生きながらえた。大切な人達をこの手で奪ってきた私だが、これからはその償いをしながら生きていこうと思う」
　償いという言葉を聞いてナナリーの顔が僅かに曇る。ゼロ……ルルーシュはこれまで数え切れない罪を重ねてきた。ギアスで人の意志をねじ曲げ、殺し、奪ってきた。ユーフェミアを始めとした多くの人々の命を……その目で命じ、実行してきた。

故に、最早人並みの幸せなんて望まない。自身の罪がもうそんなモノを許さないまでに大きくなってしまっている。だから、この学園に来たのも偏に自分の気持ちに区切りをつけるためだった。

幸せだった日々をここに置いていく事に、その決意をする為に――――。

けれど。

「ん、そっか。なら私は待ってるよ。アナタが自分を赦せる時が来るまで、私はずっと待ってる」

「……シャーリー」

「だから、絶対ここに帰ってきなさい。私の言いたい事は……それだけだから」

微笑みを浮かべながら自分の帰りを待っていてくれると口にするシャーリーに、ルルーシュは何も言えなかった。

やはり彼女は強い。こんな自分を最期まで待ち続けると言ってくれた彼女に対し……。

「あり……がとう」

ルルーシュは涙混じりの言葉を紡ぐだけで精一杯だった。

（やれやれ、この分だと私のお守りはそう遠くない内に必要なくなるかもしれんな）

そんな彼女たちを見て、翡翠の魔女は微笑む。

（王の力は人を孤独にする……か、今回は随分と違う形となったが、ま、別にいいだろう。こんな結末も偶には悪くない）
（さて、例のボッチ様はどこで何をしているのやら……）

◇

――――リモネシア。破界事変と今回の争乱、二度に渡って傷つけられ世界から見放された国。誰もいない筈の国、世界から除外されるのを待つばかりのこの国で……今、少しずつ変化が起きようとしていた。

「シオ先生ー！　こっちこっちー！」
「早く行かないと遅刻しちゃうよー！」
「はーい。今行くわ」
　波打ち際の先を歩く数人の子供達、彼等の笑みに先生と呼ばれた女性も吊られて笑顔で応える。
　……未だ、この国につけられた傷痕は深い。完全に以前と同じ姿を取り戻すのは、まだまだ時間が掛かるだろう。
　しかしそれを知りながらも、この国の人達は絶望してはいなかった。〝生きる〟事の尊さと難しさ、それを破界事変から続く争乱を生き抜き、学んできた彼らにはもう簡単な事では諦めないという強い想いが息づいていたから。
　壊れた建物も施設も、また一から作り直せばいい。喩え世界から見放されても、ここにいる皆で頑張ればいい。そんな思いの積み重ねで、今のリモネシアは最低限人が住める程度の環境まで整える事が出来た。
　ラトロワを始めとしたジャール大隊の子供達、ガモンを中心とした老人グループ、皆それぞれ出来ることをやり続け、一歩ずつ前と同じリモネシアに戻ろうとしている。
　まだまだ時間は掛かるだろうけど、それでもリモネシアに生きる人々の目には希望の灯火が力強く宿っている。

いつか、ここにはいない誰かを迎える為に……今日も彼女達はこの世界で生きていく。

（シュウジ、私達ずっと待ってるから。アナタが帰ってきてくれるその日を……ずっと）

優しい面持ちで空を見上げるシオ。風が彼女の髪を揺らした時。

遙か青空の彼方を――――蒼き魔神が飛翔した。

第二次スーパーロボット大戦Ｚ～再世篇～

完結。

幕章Ⅱ
番外編　～リモネシア恋模様～

Z月V日

今日は何だか気分的にも最高に良い為、久し振りに日記を書くことにする。

今日、私達の所に彼が帰ってきた。

シュウジ。再世戦争と呼ばれる争いが起きると同時にリモネシアから姿を消した彼が、引きつった笑顔を浮かべて帰ってきたのだ。

誰もが彼の帰還に喜んだ。ガモンさんやラトロワ、ジャール隊の子達もそれぞれの表現の仕方であったが、彼の帰りを快く迎えてくれた。

勿論、私もその一人だ。彼が旅をしていた合間、どこで何をしているかは気にはなったが、そんな事を質問する無粋な輩はここにはいない。

今は、ただ彼との再会に喜びを感じたい。そう思っている自分がいる。

お帰りなさい、シュウジ。

Z月f日

帰ってきて一日しか経ってないのに、シュウジは旅の疲れを癒す間もなくリモネシアの復興作業に没頭している。もう少し休めばいいのに本人は「体を動かした方が気分がいい」と言って聞かないし……まぁ、リモネシアの為に尽力してくれるのは私としても有り難いから否定しないけれど……彼はもう少し隙を見せてもいいと思う。

作業の方の彼は……相変わらず凄いの一言に尽きた。焼かれた村に一人突っ込んでいくと思いきや、使える資材を探しだし、それを元に前と同じ建物を建てようとしてくれる。

その一時間後には建物が完成し、更にその一時間後には人が住める木造の家が出来上がっていた。本人は有り合わせの資材で使ったから耐震強度が少し不安だと言っていたけれど、それでも十分過ぎる出来映えだった。

雨風を凌げるだけではなく、簡単な電力発電を造り上げてしまうのは流石と言える。

……というか、シュウジの奴、前にも増してパワーアップし過ぎではないだろうか？

なに電力発電って？　何で数時間足らずに立派な一軒家が出来上がってんの？　何で一人で立派なログハウス作っちゃってんの？

前はガモンさんや他の人と一緒に、それこそ丸一日掛けて漸く一軒出来上がるという

のに――――いや、それも十分可笑しいが――――旅から帰ってきた彼は何だか以前よりも頼もしく見えた。

本人は大した事はないと言うが、それでも凄いものだ。というか、彼は何でここまで出来てあんな風に自分を卑下出来るのだろうか。

試しにジャール隊の一人が聞いてみた所、何でも「不動さんと比べれば自分程度まだまだ」なのだという。

……比較対象がおかしいと思うのは私だけだろうか？　あの人の場合余所見をしている合間に複数の家を建てている人だから、私としてはシュウジはあんな風に人外さんになって欲しくはない。

いや、既に手遅れなのかもしれない。何せ家一軒建てるのに自分の手で全てを行っているのだから。

ノコギリやトンカチ等、そう言った機材を使わず自分の手で作る。デッカい木を蹴りで折り、手刀で綺麗に切り分ける様を見た時は思わず目を疑った。あのラトロワですら目を飛び出す程見開いていたのだ、驚くのは当然だろう。

唯一ガモンさんだけは漸くその域まで来たかと一人感慨深そうに頷いていた。……そう言えば、この人も人の領域から踏み外しているんだったのを思い出した。

以前リモネシアを再び焼かれた際、ＺＥＸＩＳに保護して貰っていたのだが、その際

にガモンさんはＺＥＸＩＳの一部の面々に対し〝特別講習〟なるものを開いた。
選りすぐりのパイロットで構成された部隊〝ＺＥＸＩＳ〟単純な戦力では地球最強の力を有する彼等が、たった一人の老人相手に翻弄されているのを目の当たりにした時は……もう、色々とお腹一杯になった。
軍人や野生の獣の様な人、幾度と激戦の繰り広げていた戦いのプロが一人の老人にコテンパンにされてるのを見て……その時の私は自身の胃に穴が開かないか本気で心配する日々を送っていた。
もしかしたら、シュウジが人の道を踏み外しているのはガモンさんが原因なのかもしれない。護身術という事で彼から空手を習っているとシュウジ本人から聞いた事があったが……まさか、ここまで変わるとは思ってもみなかった。
というか、予想できるか。出来てたまるか！
もしかしたら、彼もいつかあんな風になってしまうのだろうか？　そう思うと……少し複雑だ。

Ｚ月α日
最近、国連の方から度々幹部らしい人物が来訪してくる。内容は何でも新たに世界情勢が再編される事に伴って、ここリモネシアも新しく生まれ変わる国連に参加して欲し

いという話らしいのだ。
はっきり言って白々しいと思う。破界事変から全く反応を示さず、あろう事かリモネシアを再び焼いた連中が今更になって何を言ってるんだ。
この時の私は怒りでどうにかなりそうだった。国連からやってきたというその人はリリーナ＝ドーリアンの使いだと言っていたが……どんな人間の思惑であれ、私としてはそう簡単に国連を信じる訳にはいかなかった。
もう殆どアレルギー症状である。外務大臣を務めていた頃からずっと抱えていた私のコンプレックス、甘い言葉で自分達を政治に利用するのか、そう思うと他国のお偉い連中が皆汚く見えてしまう。――――私を含めて。
直さなくてはならないなと思っても、こればかりはどうしようもない。
ひとまず、来訪してきた国連の人にはシュウジとガモンさんが対応し、今日の所は引き上げて欲しいと告げて帰って貰った。
あの様子では近い内にまた来るだろうが、その時までは此方も答えを決めていた方がいいのかもしれない。尤も、百人足らずの国を国と言えるのかは定かではないが……。
というか、彼――――シュウジの国連の人に対する対応がまるで為政者のソレだった。
本人は友人の真似事だと自嘲していたが……ぶっちゃけ、凄まじく胡散臭かった。素は唯の男の人なのに……どうしてああなった？

Z月β日

以前、シュウジはガモンさんの様に人外になるのかと危惧していたが……どうやら既に手遅れだったようだ。

今日、復興作業を一段落終えた私達は腹ごなしという事を含めてある余興を始めた。といっても、実際はただ二人の組み手を見ているだけなのだが……。

その組み手というのがシュウジとガモンさん、二人による手合わせだった。元々ガモンさんの教え子らしいシュウジが武術の達人であるガモンさんにどこまで付いていけるようになったのか、血の気の多いジャール隊の子達が提案したこの余興は予想以上の大波乱を巻き起こす事になった。

まず、始まるや否や私達の前で構えた二人の姿が消えた。何でも特殊な歩法で瞬間的に移動を加速させていると二人はいうのだが……もう、この時点で色々おかしかった。だって二人が拳を合わせる度に砂浜が割れるんだもの、その余波で海を割るし、序でに海の上を走ってたし……もう何がなんだか分からないよ。

子供達は二人の戦いをアトラクションか何かと勘違いをしていたらしく終始楽しそうに騒いでいた。対するジャール隊の皆はというと……大半が白目剥いて気絶していた。

特にナスターシャは酷かった。白目を剥いて涎を垂らし、ビクンビクンと痙攣したりと女の子がしていい表情をしていなかった。

まぁ、目の前で空中ジャンプとか物理法則を越えた動きをする二人を前にすれば、誰だって現実逃避の一つくらいしたくなるだろう。

その後も二人のビックリ人間による催しは続いた。拳を分裂させたり、蹴りで海を割ったり、挙げ句の果てには分身の術みたいなものまで繰り出したり、そこらのアクション映画では到底味わえない臨場感を体験したりして、二人による余興は続いた。

実際は一時間にも満たない短い遣り取りだったが、これ以上は環境破壊に繋がるとされ、二人の組み手は終わった。シュウジが肩で息をする一方、ガモンさんは少しばかり汗を流していた程度、二人の実力差が明確に分かる結果で終わったが、ガモンさんが言うにはもうじきシュウジも自分と同じ所までたどり着くらしいのだ。

それを聞いたシュウジは満面な笑みでガモンさんに礼を言い、今回の余興はこれで終わりとなった。

……なんというか、やっぱり彼も男の子なんだな。笑みを浮かべる彼を見て、私はそう思った。

――――ふと思った。彼が、シュウジが自身に対する評価が異様に低いのは……もしかして不動さんやガモンさんの所為ではないだろうか？

Z月γ日

……やってしまった。酒の席での出来事とはいえ、自分はなんて事をしてしまったのだ。

全ての原因は焼かれた筈の村から発見されたお酒、このまま捨ててしまうのは勿体ないと、ラトロワの提案の下で開かれた静かな酒宴。日々の疲れを少しでも癒せるよう僅かばかりのアルコールで大人の夜を楽しんだ時の事。

皆、良い感じで酔っていたのだろう。久々のお酒で気分も良くなり、平穏な時の中で自由となった開放感。誰もが微睡みに呑まれ掛けた時、それは起こった。

ラトロワ。ジャール大隊の隊長でロシア出身の元軍人が、あろう事かシュウジに詰め寄っていやがったのだ。豊満な胸をこれでもかと押し付けてこれ見よがしに誘惑して……今思い出してもむかっ腹が立つ!!

大体、なんであの女はシュウジにああも積極的なんだ。前の時はそんな素振りなんて微塵も見せなかったじゃないか。

――――その時は、そんな考えで頭が一杯だった。しかも迫るラトロワに満更でもなさそうに鼻の下を伸ばしているシュウジがまた気に入らなくて……。

つい、その場の勢いで彼にキスをしてしまった。

自分を見て欲しいと、そんな浅ましい気持ちで無理矢理奪った口付け、その場が一瞬にして静まり返り、ラトロワの口笛で我に返った時、全ては手遅れとなっていた。

目をコレでもかと見開いて絶句しているシュウジ。顔を真っ赤にしてパクパクと口を開いたり閉じたりする彼を見て……私は。

もう一度、キスをしてしまった。

――――うん。もう死んだ方がいいね、私。

敢えて言い訳をさせて貰えるならば……そう、彼が全ていけないのだ。

だって普段は皆に頼られ、皆の為に頑張り、誰が相手でも毅然としていて、その上もの凄く強い彼が、キス一つでああも慌てふためいているのだ。母性本能を刺激され、つい暴走してしまった私は……多分悪くない。

しかも、あの様子からして彼は初めてだったのだろう。（私もだが）そう思うとなんだか……興奮して酔いが醒めてしまう。

結局あの後、私はその場から逃げ出したのだが……もう、本当にどうしたら良いのだろう。

ラトロワからすれば生娘のような反応だと笑うだろうが、実際私にそう言った経験はない。戸惑うのも仕方がないというものだ。

未だに彼の唇の感触が残っている。……あぁ、明日からどんな顔して彼に会えばいいのだろう。

Z月N日

式って、どこで挙げればいいのかな？

幕間その1（仮）

？月！日

ガイオウ……いや、再世戦争と呼ばれる戦いが終わってから数ヶ月。現在自分がいるこの世界は、慌ただしくありながら平和な日々を送っている。

闘うべき相手がいないという事でＺＥＸＩＳもその組織を解体し、元ＺＥＵＴＨのメンバーだった人達はネオ・プラネッツの付近にある〝アビス〟と呼ばれる時空の穴を通って彼等は帰って行った。

互いが互いの世界へと戻り、きっとまた会えると約束しながら別れる彼等の姿は、きっと儚くもあり尊いものなのだろう。

俺はその場にいなかったから分からなかったけどな！

いやだってガイオウと最後にやりあった直後、何故か俺だけ地球に吹き飛ばされたんだもの。しかも太平洋のど真ん中、お陰で戦いが終わった皆との挨拶も碌にできなかった。

もしかしてガイオウの奴、最期の力を振り絞って俺を地球まで吹き飛ばしたのだろうか？　だとしたらアイツは死ぬ間際まで俺に嫌がらせをしていたと言うことになる。

ホンッと、ムカつく奴だ。最期の最期で勝ち逃げしやがって、これでは借りを返したくても返せないではないか。お陰でルルーシュ君達とも顔を合わせ辛くなったし、ほんと余計な事をしてくれたよ。

まぁ、奴に対する愚痴は言っても無駄なので今回は最近起きた出来事をまとめていきたいと思う。

自分が地球に戻ってきて数日後、恐らくはＺＥＵＴＨとＺＥＸＩＳが別れた頃、突然世界は大きな時空振動に見舞われてしまった。当時はグランゾンのコックピットにいた自分だが、次元境界線の異常な歪曲反応に焦り、リモネシアを守る為に近くの海底に潜んでいた程だ。

で、その時空振動が起きた結果に出来たのがＺＥＵＴＨ側とＺＥＸＩＳ側、二つの世界が入り混じった異質な世界だった。

……うん、言いたい事は山程あるが、取り敢えず要点だけ説明すると、大きな時空振動が起こり、二つの地球が一つに纏まった。という事だ。

……絶対何者かの意志が拘わってるだろコレ。なんでこんなタイミング良く時空振動が起きてタイミング良くこの二つの世界が融合しちゃうんだよ。おかしいだろ色々。

お陰で宇宙にはコロニーやらアクシズやらが出てきているし……や、それ自体は別にいいんだよ？　観光名所が増えたと思えばそんな悪い気はしないしね。リモネシアやシオさん達も無事みたいだし、これについて自分からは特に文句はない。

ただ、先も記した通りこの世界が〝何者かの意志〟が拘わって出来たものだとするなら、文句はなくとも胸中は少し複雑な心境というのが正直な話だ。

二つの世界の融合、コレまでにない大規模な時空振動に当然現地球連邦は慌てたが、各官僚の人達も流石に時空振動には慣れた所為か、この事態に対し向こうの政府とも上手く話し合いをし、政府機関を統一する事で話はまとまった。

人々も最初は驚きこそしても、政府の対応が迅速だった為にさほど混乱せず、今は平穏に過ごしている。

ＵＣＷとＡＤＷ、二つの世界が融合した事により生まれた世界は今の所、平穏な日々を続けている。

因みに分かり易く言うとＵＣＷがＺＥＵＴＨのいた世界で、ＡＤＷがＺＥＸＩＳのいた世界という風に区別されている。こういう理屈でいうと自分はどうやらＡＤＷ出身の人間のようだ。

……これで、蒼のカリスマの印象が少しでも薄まればいいんだけど。未だに賞金首として指名手配されているとか、どゆことなの？

？月α日

今日、バイトの給金を貰えた自分は世間が注目しているとある映画を観に行った。面白そうな題材を主軸にしており自分も楽しみにしていたが、各映画館は毎日満員御礼、席も殆どが予約制になっており中々観る事は叶わなかったが、今日は運良く一席空いていたので自分は観る事が出来た。

題材となっているのはＺＥＸＩＳが宇宙からの侵略者やアロウズといった連中と戦い、勝利していくという映画で、内容は兎も角ＺＥＸＩＳがメインとなっていると知って、ずっと気になっていたのだ。

そして上映が始まって三時間、感想の方はというと……まぁ、実際こんなモノだよな、て感じだ。

２００メートル級の光の巨人となるマジンガーが敵を薙ぎ倒し、バルキリーも殆どが量産型みたいなモノで、着ぐるみみたいな格好でマシンガンをバカスカ撃っていた。

これだけでも突っ込み所満載なのに、ソレスタルビーイングの面々のキャスティングが出てきた時は、はっきり言って度肝を抜かれた。

だって、刹那君役の子が凄い熱血なんだもの。マイケルって名前で出てたけど、赤木さんもかくやって感じの熱血ブリだった。

ティエリア君はムサいおっさんになってたし、ロックオンさんはメガネの博士君みたいな感じになってて、アレルヤ君に至っては可愛い女の子キャラになっていた。
トドメにはダブルオーライザーも何だか勇者ロボみたいになってたし、実際を知る者としてはすっごい複雑な心境となってしまった。
違うから、トランザムライザーは皆の力を貰って放つ技じゃないから。というか技じゃなくて武器だから！　そんな自分の心の叫びは上映終了まで止むことはなく、映画館から出る際は酷く疲れてしまっていた。
……因みにこれは噂だが、どうやらＺＥＸＩＳのあの映画にはスピンオフ作品が存在しているらしく、しかもその映画は蒼のカリスマが主人公とされているらしいのだ。
まさか自分が主人公となっている映画があるとは思わなかったが、現在もテロリストとして恐れられている蒼のカリスマが銀幕デビューを飾るのは些か問題があるとされ、殆どの映画館では上映されていないとの事。
まぁ、そりゃそうだよね。幾ら情報が報じられて人々に真実が伝わる様になっても蒼のカリスマがテロリストである事実は変わらない。自分もそこら辺の自覚はあって割り切っているから別に構わないのだが、なんとどこかの裏路地ではその映画が上映されているらしく、マニアの中では既にチケットにプレミアが付いているとの事。
つか、マニアって何だよ。それはＺＥＸＩＳのマニアって事で俺のマニアじゃないん

だよな？　そんな疑問に思う自分に受付の人は何を勘違いをしたのか、特別と称して自分にその映画のパンフレットを渡してきたのだ。

今はパラパラと捲っただけでそんなに詳しく見てないからなんとも言えないが……なんというか、この映画もＺＥＸＩＳの奴と同様相当胡散臭いものである。

自分をモデルにした主人公は金髪朱眼のどこぞの吸血鬼みたいな風貌だし、人物紹介のページにはスタイリッシュなポージングを取っている。

そして蒼のカリスマたる肝心の仮面の方もなんか石みたいな材質で作られてるし、どこら辺が蒼？　って此方も突っ込み要素満載である。

つーか何？　俺って吸血鬼扱いなの？　パンフレットを見ている限りではどうやら普段は裏世界を牛耳る悪で俺は仮面を被って吸血鬼と化しており、グランゾンはそんな自分を守る為の眷属兼剣というらしいのだ。

それで色々悪事を働く悪者を俺より悪事働いてんじゃねぇー！　って感じで敵を倒していくのが、この映画の話らしい。……なにこのツンデレキャラ。

んで、もしこの二つの映画が好評だった場合、今度はこの二つの映画を一つにまとめて三部作の長編を制作しようという噂が、既に映画業界に出回っているとの事。

……正直に言わせて貰う。止めた方がいい。

？月※日

今日、久し振りに知り合いから連絡が届いた。

〝シュナイゼル＝エル＝ブリタニア〟嘗てのブリタニア帝国の宰相閣下は現在は連邦の相談役として活動しており、暇なんだか忙しいんだか分からない日々を送っているらしい。

そのシュナイゼル、俺の友達はどこから情報を得たのか分からないが、俺が現在働いているバイト先に直接電話してきやがった。まぁ普通は驚く所だろうが、相手がシュナイゼルという事で納得し、彼の話を聞いた。

何でも、現在の地球連邦には〝地球至上主義〟という一派が水面下で色々と暗躍しているらしく、他にも〝アマルガム〟とかいうテロ組織や宇宙でも様々な組織が静かにだが動き出しているとの事だ。

〝アマルガム〟そう言えば再世戦争の頃、あまり見かけない機体が時々強襲仕掛けてきたっけ。当時は世界なんたら解放戦線の残党が自分の首を狙ってきたものだと思っていたけれど、もしかしたら違っていたのかもしれない。

地球至上主義に関しては……正直どうでもいい。どうせそいつ等だって背後にいる連中の言われるがままの状態だろうし、奴らを幾ら調べた所でトカゲの尻尾切りをさせられるのがオチだろう。尤も、連中がリモネシアに関わるというのならその限りではな

いが。

……世界が動き出す。相変わらずこの言葉には不穏な空気しか感じられないが、やれる奴がいるならばやるしかないのだろう。

近い内に俺も動いた方がいいのかもしれない。物凄く怖いし不安だが……まぁ、なるようになるしかないだろう。

このバイトもそろそろ潮時かもしれない。ボン太くんの着ぐるみは割と好きだったんだけどなぁ。

「おーい、そろそろ休憩終わりだぞー」

「ふもっふ！」

幕間その２（仮）

？月？日

ＵＣＷとＡＤＷ、二つの世界が混じり合って生まれたこの世界。元いた世界に戻るという本来の目的は記憶の隅に追いやってしまっている自分は、今日も今日とてここ多元世界で生きている。

シュナイゼルからの情報で各方面が不穏な動きを見せていると聞かされた俺は、その裏に潜む何かを突き止めるべく、昨日までお世話になったバイト先を辞めて再び世界諸国を巡る旅に出ている。

と言っても、まだまだ資金が心許ないので未だ日本から出ていけてないんだけどね。前みたいにグランゾンで移動する事も考えたけれど、あの手段が使えるのはまだ世界が複数の国に別れていた混迷の時代だから使えた裏技であって、統一された今のご時世ではあまり勧められるやり方ではない。

それに、グランゾンと自分は未だ世界から敵と見なされている存在だ。迂闊な行動で下手に世界を刺激してしまったら、不穏な活動を続けている連中に口実を与えてしまう

切っ掛けになりかねない。折角現政府の人達が頑張っているのに、自分が台無しにしてしまったらあまりにも忍びない。まだこの世界に何が起きているのか判明していない内は大人しくしていようと思う。

それはそれとして、まずは資金の調達だ。何事も行動を起こす為には先立つものが必要になってくる。世界諸国を巡る為にお金を必要とした自分は、とある高校で用務員の仕事に就く事になった。

その高校の名は〝陣代高校〟学園都市と呼ばれる学区内にある高校の一つで、現在自分は住み込みでこの学校の整備をやらせて戴いている。この学校の正規用務員である大貫さんと一緒に仕事に励ませて貰っている。

大貫さんも初めて用務員という職場に就いた自分に懇切丁寧に教えてくれる事もあり、初日だというのに随分仕事が捗った。大貫さんは若いのに大したモノだと褒めてくれるが、これは大貫さんの指導が凄く上手かったお陰だと自分は考えている。

しかもこの大貫さん、見た目の割にかなり腕の立つ御仁らしく、自分の体捌きを観察するだけで自分がガモンさんの弟子だという事に気が付いたらしいのだ。

聞く所によると、大貫さんはその昔に随分ヤンチャをしていたらしく、若い頃はガモンさんと一緒になって暴れ回っては世間様に迷惑を掛けていたと語る。あの頃の自分は若かったと、そう語る大貫さんの目はどことなく寂しそうに見えた。

ガモンさんと旧知の仲であったと語る大貫さん、もう数十年も顔を合わせておらず、お互い何処にいるか分からないという事で、自分は大貫さんにガモンさんの現在の居場所についてそれとなく教える事にした。

現在はリモネシアで復興の手伝いをしているだろうガモンさんの事を伝えると、大貫さんは一瞬だけ目を見開いて、そうかそうかと嬉しそうに頷いて見せた。

昔の友人が今も元気に生きている。その事を知った大貫さんは笑顔を見せてくれた。自分も大貫さんが元気になってくれた事を嬉しく思い、この日はお酒を嗜みつつ大貫さんの昔話に付き合う事になった。

ただ、酒の酔いが回って来たのか、時折ブツブツと宿直室の押入に向かって独り言を呟く大貫さんの横顔が……ちょっぴり怖かった。

やれあの時の恨みとか、以前の借りを返すとか、一体あの二人の間に何が起こったというのだろう？　……余計な事だとは理解しつつ、そう思わずにはいられないシュウジ＝シラカワでした。

？月??日

陣代高校の学生って、結構個性的な子が多いよね。ラグビー部なのに乙女チックとか、やたら高貴な雰囲気が漂う生徒会長とか、他にも多種多様な生徒達が多く在籍して

いて見てて飽きない。

今日も実戦的な空手を目指してトレーニングをしている三兄弟と出くわしたし、この学校の生徒達は本当に面白い。部長の子も今時珍しい熱血漢な少年だし、自分が空手を嗜んでいると知ると目の色を変えて試合を申し込んで来た。

今日は用務員の仕事を粗方片付けたから暇だったので少しばかり相手をしたのだが……自分の何処が気に入ったのか、自分が知ることを一通り教えるとみんなして弟子入りしたいと騒ぐものだからさぁ大変、しつこく頼んでくる彼らに自分や大貫さんはかなり苦労する事になった。

大貫さんから何とかしなさいと苦情が来てしまったし、自分が蒔いた種なので期間限定という形で彼とは一時的な師弟関係になる事となった。

師弟関係といっても、自分が教えるのはあくまでガモンさんから教えて貰った事をそのまま伝えるだけ、取り敢えず今日は山の麓まで往復で走る事にした。片道ほんの４０キロ程度の短い道程、取り敢えず体を慣らす位なら丁度いい距離だろう。

その後は自分と軽く組み手をしてその日は終了。実戦的な戦いを望むのならまずはその実戦に耐えうるだけの体力を身につけなければならない。

そしてその後は頭の天辺から足の指先まで自在に動けるよう訓練を施す。型や技を教えるのはそこからだ。四人とも見掛け通り根性のある子達だし、自分より強くなるの

は時間の問題だろう。今回彼らが疲弊していたのも馴れない特訓に体が疲れただけ、一週間もすれば嫌でも体が慣れる事だろう。

今日の事を大貫さんに報告すると、青春じゃなと笑ってくれた。自分もなんだかんだで人に教えるのは愉しいし、明日も頑張って彼等と一緒に鍛えていこうと思う。勿論、用務員の仕事も疎かにはしない。

資金が溜まるまで暫くここに留まるつもりだし、その間はきっちりかっちり公私を切り替えていこうと思う。

？月※日

ここ最近、なんだか視線を感じる。自意識過剰に思われるかもしれないが、此方は世界のテロリストとして世に知れ渡ってしまった人間だ。常日頃からそういったモノに敏感になってしまうのも仕方ないと言い訳しておく。

どこで何をしていても絶える事のない視線、監視されている事にいい加減ウンザリしてきた自分は休み時間の合間にその視線の主に不満の言葉を叩きつけた。

と言っても、授業に使われない空き教室からその視線の主がいるであろうその先へ、それっぽい事言っただけなんだけどね。端から見れば怪しさ全開で、不審者感丸出しの間抜けにしか見えないと思う。

けど、その甲斐あってそれ以降視線は感じる事はなかった。やはり誰かが自分を見ていたようだけど……まぁ今は良いだろう。自分に用があるという事は近い内向こうから自分の所に来るだろうから。

そんな事よりも、今は実戦空手部の子達の面倒を見る方を優先しなければ。もうすぐ資金が溜まる頃だし、そろそろこのバイトの潮時も近い。これは予め大貫さんにも伝えていた事だが、ここで働かせて貰っている以上手を抜くことは許されない。

明日も気合いを入れて頑張っていこうと思う。

◇

「――――以上でクルツ＝ウェーバー軍曹からの報告は終了となります」
「ご苦労様ですマデューカスさん。それで、ウェーバー軍曹はその後の様子はどうですか？」
「ハッ、先程まで酷く動揺していたようですが、今は落ち着きを取り戻しているそうです。心配は無用かと……」
「……そうですか。けれど、無茶はしないようにと伝えてください。相手はあの魔人、一片たりとも隙を見せてはなりませんから」
「イエス、マム。引き続き警戒態勢を続けるよう、伝令をだしておきます」
「宜しくお願いします」
　マデューカスと呼ばれた初老の男性が目の前の少女に対して敬礼をし、ブリッジを後にする。残された銀髪の少女は目の前に映し出されるモニターに視線を戻し、その視線を鋭くさせた。
（――ＥＣＳを看破してのこの行動、やはりあの魔人は私達の技術力の遙か上の力を持っている。彼もウィスパード？　……いいえ、それは有り得ない。ウィスパードは特定の条件が必要、彼はそのどれにも当てはまらない筈、ならどうして？）
　加速する思案、行き詰まる回答、得られない答えを前に少女は首を振って再び目の前のモニターを睨みつける。

「彼の目的がなんであろうと、私達のやるべき事は変わらない。シュウジ＝シラカワ、喩えアナタが相手でも」

そうまっすぐ前を見据える彼女の瞳には強い意志が宿っていた。揺るぎのない覚悟、決意とも呼べる意志を持つ彼女の前に立つのは……。

『貴様、見ているな！』

ＥＣＳという不可視のバリアを展開している筈の此方を完全に捉えている魔人の様子が映し出されていた。

幕間その3

？月Ω日

陣代高校で用務員として働いて早二週間、ここでは実りの多い毎日を過ごさせて貰っている。理事長さんも良い人だし、生徒の子達も親切だし、仕事で分からない事を聞けば嫌な顔一つしないで教えてくる大貫さん等、社会人としての青春を謳歌している。

椿君率いる空手部の子達との放課後での触れ合いも、今では自分の楽しみの一つになっている。最初は悲鳴を上げるだけだった彼等も、持ち前の根性と努力によって徐々に自分の指導に付いてこられる様になったし、今後も彼等の成長ぶりには期待したい所である。

けど、そろそろここでの生活も終わりにしなければならない。というのも、ここの所の世界情勢がどうも落ち着きがないからだ。

新世時空振動によって融合されて生まれた新たな世界、新たに赤い海という特徴的な要素を含んだこの世界には不安に思える所が多々ある。

〝ネオ・ジオン〟と呼ばれるＵＣＷからの宇宙移民団、彼等もプラントと通じて何やら不穏な動きを見せているみたいだし、今も地球連邦とピリピリと小競り合いを続けているみたいなのだ。

そんな地球連邦も〝地球至上主義〟とかいうちょっとアレな集団が台頭してきている上に、〝アマルガム〟という此方も全貌が明らかにされていない組織が裏で暗躍している様子。

個人的にはもう厄介事に関わるのはごめんだが、そうも言っていられないのが現状だ。……それに、混沌としていながらもこの世界はトレーズさんが心から愛し、守ろうとした世界だ。彼の友人を名乗る以上、何もしない訳にもいかないだろう。

それにもう一つ気になる事がある。それは再世戦争の時にエルガン＝ローディック氏から告げられたとある一言が自分の頭にこびり付いて離れない。

〝サイデリアル〟恐らくは何らかの組織名だろうその言葉に、俺はここ最近眠れぬ日々を送っている。一体この言葉にどんな意味が込められているのだろうか？　それを探る為にも自分は近い内に動き出す必要がある。

既に大貫さんや理事長、生徒会長には話を通している。明日にはここを立ち去るつもりなので事実上今日で用務員の仕事は終了、椿君達にも勝手ながら今日で実戦空手の指導は打ち切りにさせて貰った。

その際に必死に引き止めてくれた椿君、後ろにいた三兄弟が苦笑いしていた事に少しばかり引っかかったが、それでも自分の事を必要としてくれる彼等にちょっぴり涙腺が緩んでしまった。

勝手な自分を雇用してくれた理事長、何も知らない自分を甲斐甲斐しく面倒見てくれた大貫さん、生徒会長さんも色々と世話になったし、椿君達からは人を教える際に必要な大切な事を学ばせて貰った。

この学校には人を育てるのに大事なモノが沢山詰まっている。リモネシアのように居心地が良いこの場所を守る為にも頑張っていこうと思う。

――――追伸。どうやら自分が学校を去る時教育実習生、つまり先生の卵が陣代高校に擦れ違いに赴任してくるそうなのだ。この学校は良い所だ。きっとその実習生さんにとって掛け替えのない大切な日々になることだろう。

追伸の追伸。今し方入った情報だが、何だか明日教育実習生の人以外に新しく転校生がやってくるそうなのだ。彼等が来る頃には既に自分はこの学校にはいないのでなんとも悔しい事なのだが、自分にはやるべき事があるのでここは我慢する事にする。

どちらも男性なのか女性なのか分からないが、ここは面白い学園なのでどうか思う存分青春を謳歌してほしい所である。

？月（。ω。）日

陣代高校を後にして日本から離れた自分は現在、とある無人島に来ている。静かで何もない所だが、今後の行動指針を決める為に静かな所で考えたかった自分は、親友の墓の前でこの報告を兼ねて日記を綴っている。

今、世界は再び暗雲の時代を迎えようとしている。様々な組織が様々な動きを始める中、自分はこれからどういった行動をすればいいのか。

墓の下にいるトレーズさんに聞いても答えが返ってくる筈がなく、近くの海岸からさざ波の音だけが耳に入ってくる。まぁ、分からないというのはいつもの事なので半分愚痴みたいな話になったんだけどね。

アマルガム、地球至上主義、ネオ・ジオン、プラント、そしてサイデリアル。これらの組織がいつどのような行動を取るのか全く見当が付かないが、取り敢えず状況に合わせて自分の判断で行動しようと思う。

シュナイゼルも独自に色々探ってくれているみたいだし、少なくとも破界事変や再世戦争の時の様に一人で行動する訳ではないのだ。頼れる所は頼って自分の出来る事をしていこうと思う。

まずは……そうだな。取り敢えず中東方面に向かおうと思う。あそこは〝戦いこそ万物の原理〟という珍妙な教義が主流となっている〝マーティアル〟という宗教結社

が存在している。これはＵＮと呼ばれるネットワークから得られた情報だが、どうやらその宗教組織は裏で色んな組織と通じている節が見え隠れするのだ。

全ての全容を明らかにする。――とは到底無理だが、彼等と接触すればある程度の情報を得られる事だろう。自分から厄介事に首を突っ込んでいる気がしなくもないが、思い返せば最初の頃に当時エリア１だった旧日本にいた事を考えれば今更な気もする。

ともあれ、これで取り敢えずの目的地は定まった。今日はこれから目的地に向かう事にするため、今日の日記はこれで終了とする。

◇

「――――さて、そろそろ日も暮れてきたし、夜には向こうに着きたいから今日の所はこれで終わりにするか」

潮風に揺れる紫色の髪を掻きながら、シュウジは日記をしまい立ち上がる。彼の前には木で作られた簡易な墓が建てられているが、そこにはあるべき筈の名前は彫られていなかった。

所謂無縁仏。誰かも分からない人間が埋められたとされる墓、しかしそれは敢えて付けられなかったものであり、シュウジが決めた事でもあった。

墓の下にいる者、トレーズ＝クシュリナーダは戦争という許されない事をした。それは本人が死しても尚消える事のない罪であり、それはシュウジとトレーズ自身も承知していた事だった。

故にシュウジはトレーズに罰を与えた。名前が書かれていない墓に埋める事でトレーズという存在を世界から消したのだ。いつか遠い未来、トレーズという男の存在は時と共に忘れ去られる事だろう。その時にトレーズがここにいたという痕跡を残してはならない。

彼は最後まで世界の敵として存在する事を覚悟していた。彼の悪行は決して許されない事であり、彼自身もまたそれを自覚し、覚悟していた。

故に、シュウジは罰を与えた。彼の存在がこれ以上世界に知られる事がないように、彼が安心して眠っていられるように……。

「……じゃあ、そろそろ行くよ。俺に出来る事なんてたかが知れてるけど、それでも俺は

アンタの友達でいたいから」

別れ様にシュウジは言葉を紡ぐ。その顔に少しばかりの寂しさと悲しさを混ぜて……。

「それじゃあトレーズさん。行ってきます」

シュウジは踵を返して背後に控えていた己の愛機に歩み寄る。跪いて主の搭乗を待つ魔神に触れたシュウジは一度だけ墓の方へと振り返った。

そこにはやはり誰もいない。けれどシュウジだけには何かが見えたのか、その口元には笑みが浮かんでいた。

愛機に乗り込み、仮面を被る。只人から魔人へと変身したシュウジは今度こそ、振り返る事なく無人島を後にする。

風が、無人島の木々を揺らす。その中でひっそりと聳える名も知らない墓の隣には――。

魔人が好む二つのタンポポが咲いていた。

時獄篇
その７２

／月／日

マーティアルなる組織とそれに連なる者達の調査の為に中東方面へと乗り込んで二日、取り敢えず現段階で分かっている事を書いていこうと思う。

まず、マーティアルはその組織だけでなく、アマルガムといった別組織の手も借りて、順調に組織の規模を拡大しているようだ。戦いが全てと教義しているだけあって、支部の教会に複数のＡＴやらアームスレイヴ（略してＡＳ）が配備されてあるし、連中には相当な資金が集まっているようだ。

そしてこのマーティアルなる宗教結社にもトップと呼ばれる存在はいるらしく、そいつは法王……つまりはマーティアルの教義を教え説く人物が事実上のマーティアルのトップという事になる。しかしこの法王というのは世襲制ではなく、意外にも多数決といった民主的なやり方で次代のトップを決めているようなのだ。

戦いを教えとして活動しているのだから、てっきり幹部同士が戦ってその中で一番強い者が教皇になるのかと思っていたから、ちょっぴり肩透かししてしまった。……まぁ、裏では汚い事を色々やってるんだろうけどね知らないけど。

マーティアルの支部の一教会に訪れて既に二日経過しているが……もうね、色々と限界だわ。ここら辺一帯はあまりにも戦いに染まっている。右を向けども左を向けども戦い戦いと口にする人々にいい加減ウンザリしてくる。一般人である自分にとっては何とも頭が痛くなる光景だ。

これ以上有益な情報は得られないだろうし、そろそろここから離れるべきだろう。何やらここの所物騒な連中も集まってきているみたいだし。

あの顔に傷がある男……ガウルンって言ったっけ？　他にも秩序の盾とかいうマーティアルお抱えの戦闘集団がいる事だし、感づかれる前にずらかろうと思――――――

（日記はここで途切れている）

／月α日

ヤバかった。まさか自分以外にもここに侵入してきた奴がいるとは思わなかった。お陰で戦闘に巻き込まれてしまい、谷底なんかに落ちてしまうなど得難い経験を体験してしまったではないか。

まぁ実際は爆発に巻き込まれた様に見せかけて自分から飛び降りただけなんだけどね。そんなデンジャーな目に遭ったお陰で何とか追っ手を撒けたからいいんだけど。……いや、よかないか。

つーか、あのＡＴマジなんなの？　見かけない機体だったから戸惑ったという事もあったけど、それにしたってあの性能は異常だろ。従来のＡＴとは比べ物にならないぞアレ、もしかしてあの機体を有している部隊が例の〝秩序の盾〟とかいうマーティアル自慢の部隊なのだろうか？　あんな連中が一機だけじゃなく四機編成で追撃してくるとか、悪夢としか言いようがないだろ。

しかもこの時にこれまた奇妙なＡＳも一緒になって追いかけてくるし……つーか、あの機体も大概おかしな機体だよね。何あのヘンテコシステム、アサルトライフルで幾ら撃ってもバリアみたいなので防がれるんだけど？　インチキシステムもいい加減にしろって話である。そんな奴等を相手に馴れないスコープドッグで足止め位しか出来なかった自分だが、割と善戦した方ではないだろうか？

グランゾンで相手をするならば話は別だが、今ここで騒ぎを起こすのは個人的には拙いので、近くにあったスコープドッグで脱出を試みた。結果は最初に記した通り、殆ど何も出来ずに終わった自分は、奴等によって崖っぷちに追い詰められてしまった。

危うく殺され掛けた自分だが、自らスコープドッグごと崖に飛び降りる事で奴等からの追撃を回避し、ついでにこの時乗っていた機体を自爆させる事で身投げの自殺を演出してみせた。この時既に機体から脱出した自分はグランゾンを呼び出すことで、特に傷を負うことなくあそこの一帯から抜け出す事に成功した。短いつき合いだったとは言え、あのスコープドッグには悪いことをしてしまった。

……こう箇条書きにすればイマイチ実感が湧いてこないが、今思い返すと割とハードな日々を送ってるな俺。最近ハリウッドのアクションスターでもやっていけるんじゃね？　等と考える自分がいる。

つーかホント、連中なんなのかな？　明らかに普通じゃないＡＴと明らかに普通じゃないシステムを積んだＡＳ、自分が掴んだ連中の尻尾は自分が思ってる以上に長そうだ。

／月β日

昨日マーティアルの支部教会で激しい戦闘を繰り広げた自分は体力回復と治療の為に、今日一日は海底でグランゾンと共にゆっくり過ごす事にした。

治療といっても連中と戦闘した時、肩を少し掠っただけなんだけどね。流石はＡＴ乗りの棺桶と呼ばれるスコープドッグだ見事なまでの紙装甲である。……いや、機体の装

甲の隙間を的確に狙ってきた連中が凄まじかっただけか。
つーか良く生き残れたな俺。戦いのプロ、それもその組織の精鋭相手にグランゾン無しで生き残るとか割と運に恵まれているのかもしれない。そう言えば再世戦争の頃に不死身である事で有名なコーラサワーさんと一緒に戦った事があるから、もしかしたら彼の加護やら恩恵が自分を守ってくれたのかもしれない。今度どこかで出会ったらそれとなく礼を言った方がいいかもしれない。
しかし、アマルガムといいマーティアルといい、最近の機動兵器というのはどうも突飛なモノが多い気がする。まぁ、デタラメ具合で言うのならＺＥＸＩＳも人のこと言えないから何とも言えないんだけどね、特にアクエリオンとか。
取り敢えずアマルガムとマーティアル、この二つの組織が裏で繋がっているという事実が判明しただけでも良しとしておこう。特にアマルガムの方では奇妙なカラクリを搭載させたＡＳを開発している事も知られたのだから、初めての調査にしては上々の成果と言えるだろう。
ただ、この情報を活用出来る手段がないんだけど……どうしよう。シュナイゼルとかにこの事を知らせても駄目だろうなぁ、アイツ最近ナナリーちゃんの助手みたいな仕事で忙しいみたいだし、下手に情報を与えたらナナリーちゃんにまで危害が及ぶ可能性が出てくる。

地球連邦には地球至上主義を掲げる輩が潜んでいる様だし、何とももどかしい事である。

いっその事宇宙に出てみようかな？　まだネオ・ジオンと地球連邦が真っ正面から対立していない事から、今が彼等の情報を入手する数少ないチャンスなのかもしれない。

グランゾンのワームホールを介しての転移なら誰かに目撃される事もないし、民間のコロニーなら派手なドンパチは早々起こらないだろう。

そうと決まれば善は急げ。傷が治り次第行動することを決めた自分は治癒を高める為に今日の日記はここまでにする。

その７３

／月日

中東方面でマーティアルとアマルガム、それぞれ二つの組織の尖兵達とやり合って負傷し、その後どうにか傷を癒す事が出来た自分はネオ・ジオンとプラントの動きを探るべく、グランゾンと共に宇宙へ赴いていた。

ネオ・ジオンやプラントの動きを探るべく自分が訪れたのはインダストリアル７と呼ばれる民間のコロニー、宇宙工学を学びに来た学生とかコロニー建設業者の人達が多くいる、ごく普通の工業コロニーだ。

本当ならグランゾンで侵入するのではなく、ちゃんとした手続きの下でこのコロニーに訪れたかったのだが、ネオ・ジオンと地球連邦が小競り合いを続ける現在の状況では無駄に時間が取られそうだった為、仕方なく無断でここに来る事になってしまった。

勿論、侵入する際は細心の注意を払っている。コロニー側の監視カメラや警戒カメラの類は事前に用意しておいたダミー映像ですり替えておいたし、グランゾンも自分がコロニーに取り付くと同時にワームホールへ収納しておいたから、早々誰かに見られるという事はない筈。

このコロニーに訪れて三日程経過しているが、自分の事が話題に上がっていない事から、多分自分達の事は知られていない筈。まぁ、万が一知られて騒ぎになっても困るし、情報の方もそこそこ集まったからそろそろお暇させて貰うけどね。

今回集まった情報の多くはネオ・ジオンに関する事なんだけど、やはり民間にはそこまで情報は出回っていないのか、あまり有益になる様な情報は得られなかった。けれど今回このコロニーを伺ったのはネオ・ジオンの今後について市民の人から生の声が聞きたかったからだし、そちらの方は結構聞けたからこれはこれで良しという事にしておこう。

で、今回市民の人達と世間話という事で話を聞いた所によると、やはり地球連邦と小競り合いをしている事は不可解に思っているらしく、殆どの人達が今後の世界情勢に不安を抱いていた。

まぁそらそうだよなぁ。ネオ・ジオンって新世時空振動が起こる前……つまりＵＣＷではそこで大きな戦争を起こしていたって話だし、それを体験している人からすれば冗談ではないって思っている事だろう。

というか、そもそもなんでネオ・ジオンは現在の地球連邦をああも毛嫌いしているのだろう？　そりゃ戦争をしていた相手と宜しくやるのは面白くないと考える人間はどちらも少なからずいるだろうが、それでも上手く立ち回ろうとするのが指導者の正しい

やり方なのではないのか？　政治の事はあまり詳しくないので何とも言えないが、少なくとも戦争という行いは間違っている筈。

やはり、地球至上主義を掲げる連中が関係してくるのかなぁ？　けど、ネオ・ジオンにはハマーン＝カーンという文武共に秀でた女性指導者がいると聞く、そんな人が組織の舵を握っているのなら早々迂闊な事はしないと思うんだけどなぁ。

この場合、地球至上主義とやらの連中の方を怪しむべきなのだろうか？　ネオ・ジオンと連邦、どちらも一枚岩ではなさそうだから何とも言えないけど、ひとまずネオ・ジオンの方は後回しにしても良さそうだ。

いや、この場合は地球至上主義の奴等の方が気になると言った方が正しいか、何だか連中の動きには裏があるように見える。奴等の実質のまとめ役であるサイガス准将も何らかの指示を受けて動いている節があるようだし、連中の方がもっと根深いモノがあるかもしれない。

それがネオ・ジオンと対立する原因になっていると考えれば、彼等が小競り合いしている理由も少しは理解できるかもしれない。……まぁ、結局は自分の推測と直感による所が大きい推論なので、あまりアテにはしないけどね。

それはさておき、今回このインダストリアル７に赴いた時、意外な人物と再会できた。沙慈＝クロスロード君、どうやら彼も宇宙工学を学ぶためにインダストリアルにある学

校で勉強を頑張っているようだ。

遠巻きから見ていたが、ここの学生と仲良くやっているようだし、時々聞こえてくる話から察するに恋人のルイスさんも元気でやっているみたいだ。特にルイスさん、知らなかった事とは言え再世戦争で一度彼女を殺し掛けている自分としては、仲睦まじそうな二人にホッとする心境である。

それ以上話を盗み聞きするのは拙いと思い彼等から離れた自分は再び情報を集めたのだが、上記にも記した通りこれ以上の情報はなく、仕方なく近くのビジネスホテルに戻る事にした。

その際にやたら身なりの良い初老の男性とぶつかったんだけど……大丈夫かな？すぐさま謝ったし、向こうも気にするなと言ってくれたから良いんだけど、高貴な人と拘わると色々アレな事になるから此方としては気が気でない。

ぶつかったあの人、確かカーディアス＝ビストさんだったかな？　後から調べた所によればビスト財団という有名な財閥の二代目当主様らしいし、後から難癖付けられたりしないだろうか？　……流石に被害妄想が過ぎるか。二、三しか会話しなかったけど、個人的な印象はさほど悪くない。聡明そうな人柄だったし、多分悪い人ではないのだろう。

どうやらビスト財団はこのコロニーの大株主みたいだし、迷惑を掛けない内にここか

ら離れた方がいいかもしれない。
まぁ、今回の出来事を纏めると大体こんな所だろう。明日からまた別の所へ行って情報も集めなければならないから早い内に休んでおこうと思う。
しかし、新世時空振動の影響でまだら模様の宇宙で無くなるとは思わなかった。これまでの時空振動は幾ら起きても宇宙の景色まで変わる事はなかったのに、不思議なモノである。まぁ、この時空振動が人為的に引き起こされたモノであれば話は別だけどね。
今後はこの宇宙と新世時空振動についても調べなければならないのでこれからはもっと忙しくなるだろう。

／月※日
――――今、自分はネオ・ジオンの軽巡洋艦であるムサカに客として乗っている。周囲は誰もおらず警備の者もいないから日記を書いているが、それでも自分は警戒を緩めず今も周囲の動きを気配で察知している状態だ。何故自分がネオ・ジオンの艦に乗っているのか、事の始めは数時間前まで遡る。
インダストリアル７で情報を集めていた自分がそろそろここから離れようと思いグランゾンに乗り込んだ時、コックピットから重力場の異常数値を感知したのだ。
異常と言っても微々たるモノ、多元世界であるこの世界なら時空振動により多少の重

力変動は珍しくないので以前までの自分なら無視する所だった。しかし、新世時空振動により次元境界線が安定し、そうそう時空振動は起こらなくなった今の世界で、このような数値を感知するのはおかしい。愛機であるグランゾンの性能と自分の直感を信じた自分は、感知した場所を探るとワームホールでその場所へ転移した。

そこで自分が見たモノは……少しずつ時間が停止していくリモネシアの皆だった。

それは端から見れば何の差異もない微々たるモノだろう。しかし、時間のズレは確実に地球を蝕んでいる。俺はすぐさまグランゾンの感知システムを総動員させて調べ尽くし、原因を割り当てた。

幾つもの検証を重ねて調べた結果、一年もしない内に地球の時間は停止し、全ての人類もその成長を止めるという結論が出た。

頭がどうにかなりそうだった。地球……いや、この世界に生きる全ての人間が止まるという現実を前に自分の思考は暫く停止し、その直後には溢れんばかりの怒りがこみ上げてきた。

どこの誰かは知らないが随分勝手な事をしてくれる。この時までの俺は冷静ではなく、怒りのままグランゾンを稼動させ、この〝時の牢獄〟を破壊しようとした。

グランゾンは重力を操る魔神、時の牢獄も今ならネオにもなる事もなく破れるかもしれない。そう思い自分は地球の近海で、他の組織に自分の事が知られるのを覚悟した上

でブラックホールを生成しようとした時、ナナイ＝ミゲルと呼ばれる女性が通信を寄越してきたのだ。

ムサカに乗った彼女が自分に寄越してきた通信内容は、暫くの間ここで待っていて欲しいという事。本当なら今すぐにでもあの忌々しい牢獄を破壊してやりたい所だ。

けれど、あのタイミングでネオ・ジオンが自分に接触してきたのも気掛かりだ。もしかするとネオ・ジオンには自分の事やあの牢獄の事を知っている人間がいるのかもしれない。今の自分には圧倒的に情報が足りていないのもまた事実。あの牢獄を破壊するのはもう少し様子を見た方がいいのかもしれない。

やはり、日記というのは良いものだ。自分の心の内を文面として吐き出すだけでも随分気分が変わってくる。

……誰かが近付いてくる。そろそろ自分を呼びつけた者と対面できると思うので今日の日記はひとまずこれで終わりにしようと思う。

◇

「お待たせしました。Ｍｒ．蒼のカリスマ」
「……いえ、それで？　私を呼び止めた理由はなんです？　まさか、私をネオ・ジオンに抱え込もうという心算ですか？」
「……私の口からはなんとも、全てはこの御方から伺って下さるようお願いします」
そう言って仮面の男の前に出されるのは一台のノートパソコン。電源の入った画面を蒼のカリスマに向けるようテーブルの上に置くと、ナナイ＝ミゲルは失礼しますと頭を下げ、部屋から出て行った。
一体なんなのだと蒼のカリスマが首を傾げた時、モニターに一人の男が映し出された。
『モニター越しとはいえ、こうして面と向かって話すのは何気に初めてだな。蒼のカリスマ』
「……その声、クワトロ大尉ですか？」
『今の私はシャア＝アズナブル。ネオ・ジオンの総帥の席に座する者だよ』

モニターの向こう側で笑みを浮かべる男に、蒼のカリスマはその仮面の奥で僅かに目を見開かせた。

その７４

／月＊日

ネオ・ジオンの総帥、シャア＝アズナブル。ＵＣＷで起こった一年戦争では当時ジオン軍で、アムロ大尉と何度も激戦を繰り広げた、赤い彗星の異名を持つパイロット。

破界事変と再世戦争、二つの大きな戦争で何度か同じ戦場に立った事はあるが、それはあくまで彼がクワトロ＝バジーナを名乗っていた頃の話だ。シャア＝アズナブルとして、しかもネオ・ジオンの総帥として、モニター越しとは言え自分と相対する彼に、自分は少なからず驚いていた。

そもそもどうして自分があの宙域にいる事を知っていたのか。最初にその事を彼に尋ねて見ると、何でもトライア博士が自分ならここに来るだろうという話を聞いていたらしいのだ。

トライア博士はロボット工学とエネルギー工学の権威であり、更には超時空物理学の第一人者だ。確かにスフィアを使ったクロウさんの機体を作り上げた彼女なら、グラン

ゾンがどういうモノなのかある程度理解出来るだろうし、それに伴って自分がどのポイントに現れるか見当も付くだろう。

しかし、トライア博士とシャア＝アズナブルの間に何故繋がりがあるのだろう。当然その事も聞いてみたのだが、それは話せないとキッパリと断られてしまった。

で、そこから話は本題に進もうとした時、彼は自分に単刀直入に訊ねて来た。自分ならあの時の牢獄は破壊できるのかと。

結論を言えば可能だ。今はまだ時の流れの差異がそんなに激しくないし、進行も緩やかな為に、今なら通常形態のグランゾンでも充分に対応可能だ。

その事を伝えるとシャア総帥は両腕を組み、暫く考えに耽っていた。時間的には一分も経過していない僅かな時間だったが、相手が相手なだけにその時の自分の時間の流れは最高潮に達し、緊張感の所為で途轍もなく遅く感じた。

そしてその後、シャア総帥は自分に時の牢獄の破壊は待って欲しいという頼み込みをしてきたのだ。当然自分は反対した。何故人類の未来を閉ざすような牢獄をみすみす見逃さなければならないのか、時が止まると言う事は子供はその成長を止め、永遠に子供として生きていき、お腹に赤子を孕んだ妊婦は一生自分の子供を見ることなく死んでいくのだ。

ネバーランド処の話ではない。時の牢獄が完成した時、地球はその名の通り地獄と化

す。劇的な変化や見た目が変わる訳ではないから自覚はないかもしれないが、それはもはや死んでいないというだけの話だ。そんな未来が後一年もしない内に迫ってきている。

この時の俺は内心怒りでどうにかなりそうだった。折角再び動き出したリモネシアの皆をこんな形で終わらせようとする誰かに、そしてそんな未来を知った上で待てと言ってくる目の前の男に。俺は突っかかる事を堪えるだけで精一杯だった。

けれど、そんな怒りもその直後に萎える事になる。何せ、モニター越しとはいえ組織のトップとも言える男が自分に頭を下げているのだ。頼むと、深々と頭を下げてそう言ってくるシャア＝アズナブルに、自分は何も言えなくなってしまっていた。

自分の知るクワトロ＝バジーナは戦いだけでなく頭もキレてＺＥＸＩＳの皆が頼れる頭脳担当の人だった。しかもその後の話で知ったのだが、なんでも破界事変や再世戦争では一時期トレーズさんの所でお世話になっていたらしく、あの人から色々学ばせて貰っていたと聞いた。

そんな人がネオ・ジオンの総帥という立場に立っているのはきっと相当深い理由があるのだろう。これでまたどこかの誰かさんの様にライバルと決着を着けたいとか抜かしたらＢＨＣをブッパする所だが、彼の様子を見る限りその様子はなさそうだ。

きっと、彼の目的もこの時の牢獄に関する事なのだろう。彼の真意を汲むことで納得

する事にした自分は、いよいよという時になったら容赦なく時の牢獄を破壊すると、条件付きで承諾する事にした。

で、その後自分とシャア総帥はそれぞれ新世時空振動による情報を交換していたのだけれど、この時に面白い情報を彼からもたらされた。

〝クロノ〟何だか聞く限り怪しく思えるその組織は、どうやら地球連邦の深い所に根を降ろしているらしく、しかもソイツ等は地球至上主義の連中を裏で糸を引いている可能性がかなり高いというのだ。

ネオ・ジオンが連邦と小競り合いを続けるのは、そのクロノという連中を表に引きずり出して叩く事が理由の一つらしい。

けど、そろそろ小競り合いなんて規模じゃなくなるかもしれない。最近の様子を聞く限りじゃ、どうもこの人そろそろ本格的に地球連邦と対立するつもりのようだ。

個人的には地球至上主義の連中がどうなろうと知った事じゃないが、流石に知り合いが戦争を起こそうというのはちょっとアレなので無駄を承知で止めようとしたのだが……これまたそれは出来ないと断られてしまった。

今の彼はどことなくトレーズさんと似ているが、あの時とは状況が違う。だからといって戦争をする奴を見逃す理由にはならないが、今のシャア＝アズナブルにはそこまで頑なになる理由があるのかもしれない。

どちらにしても今の自分ではどうする事も出来ない。このままネオ・ジオンに乗り込んで先手必勝とばかりに叩くのもアリと言えばアリかもしれないが、それでは今後の行動に大きく支障をきたす恐れがある。

まぁ、もしシャア＝アズナブルが地球連邦に対し宣戦布告をするのならその時に自分に出来る事をするしかないだろう。取り敢えずこれから行く先で連邦とネオ・ジオンが戦闘していたら、取り敢えず両成敗って事でどちらも叩いておく事にしよう。

その後も自分とシャア総帥の情報交換は続き、取り敢えずお互いの立場は敵対する事にはならない事になった。自分も見知った顔とやり合うのは気が引けるし、なにより赤い彗星と戦うのは実力的な意味でも気が引ける。

さて、そんなこんなで一応互いの事ははっきりさせた事だし、当分の間はネオ・ジオンの事は静観してもいいだろう。シャア総帥も自分がエルガン氏から知らされたサイデリアルについて調べるつもりだし、取り敢えず彼等に関してはこれで終わりにしてもいいだろう。

ただ、通信が終わる際向こうの扉から覗かせた、あの仮面の男が少し気になった。何だか雰囲気がシャア総帥に似ていたし、もしかしたら彼に双子の弟とかいたりするのだろうか？　もしくはクローンとか。

……やめておこう。今のは流石に不謹慎過ぎる。隣の部屋にはナナイ女史がいる事

だし、今日はこれで大人しくしておこう。

Ｋ月（、・ω・、）日

ナナイ女史の案内のもと、地球圏へ戻ってきた自分はグランゾンを駆って日本の南、即ち沖縄へと来ていた。降り立ったポイントが偶然にもここに近かったし、ここの所気を張りつめていたから休憩も兼ねて、沖縄の街並みを散策していた。

沖縄はリモネシアと同じ南の島だから何となく似た雰囲気を感じる。ラトロワさんやシオさん達は元気かなと考え事をしていると、意外な人物と遭遇した。

カミシロ＝ヒビキ君。再世戦争の頃にお世話になったカミシロ一家の長男で、とても前向きで負けず嫌いな将来有望の若者。どうやら修学旅行で沖縄に来ているらしく、今は部活動のゴミ拾いをしているのだそうだ。

沖縄に来てまでゴミ拾いとか、相変わらず面白い子だ。……ただ、前とは違って何だか元気が無いように見えたのが少し気になった。自分と話をする時は以前と変わらない様子だったが、何だか辛い事を我慢しているみたいだった。

本人に尋ねて見ても何でもないの一言で終わらせてしまう。まぁ、嫌がる事を無理に聞くのもアレだし、仕方ないと言えば仕方ない。

しかし、オジサンと姐さんには自分も世話になったし、自分からしたら放っておけな

いのもまた事実。今後またどこかで顔を合わせる事もあるだろうし、その時は気軽に声を掛けて前みたいに組み手をしてもいいかもしれない。

◇

「……シュウジさん、元気そうだったな。良かった」
「どうしたヒビキ、不審な人物でも見かけたか？」
シュウジとの別れを告げ、学友の所へと戻るヒビキ。同じ学友の相良宗介からの言葉に苦笑いを浮かべながら、違うと答えた。
「ちょっと昔の知り合いと出逢ってな。少し話し込んで来ただけだ」

「ヒビキの知り合いか。お前ってジークンドーとかいう武術を親父さんから学んでるんだよな？　もしかしてそれ関連？」
「まぁな、その人は空手の達人でな。何度か手合わせした事があるんだけど、それはもう凄い人だった」
「へー、お前がそこまで言うなんてな。本当に凄い人なんだな」
「あぁ、一度も勝てなかったからな。俺をあそこまで叩きのめせる人なんて父さん以外知らなかった」
　ヒビキの珍しい昔語りにボランティア部の面々は興味深そうに聞いている。そんな時、教育実習生の女性が早く来なさいと声を掛ける。
「やっべ、スズネ先生がお冠だ！　早く戻ろうぜ」
「分かった」
　自分達の名前を呼んでいる教師見習いの下へ急ぐ面々、そんな中ヒビキは一度だけ振り返り。
「シュウジさん。また、会えるかな？」
　嘗て知り合った自分の兄貴分の事を思い出し、再び皆の所へ駆けていくのだった。
　蒼き魔人と禁忌に触れた少年、二人の再会は……近い。

その７５

Ｉ月&日

人生とは山あり谷ありの起伏が激しいモノが常だとされているが、自分の場合は谷と呼ばれるモノが異様に深い気がしてならない。

沖縄でヒビキ君という顔馴染みの子と出逢った自分はその後沖縄の街並みを見て回り、これからの活動の為に英気を養っていた。アマルガムやマーティアル、ネオ・ジオンにクロノ、そしてサイデリアル、これらの組織の動きを調べるに伴って考えを纏めるという意味を込めて、この沖縄で少しばかりの休息をとっていたのだが……。

もう一体何故にどうしてこうなったのか、飛行機を囲んでいるＡＳを見て俺は溜息が出る思いだった。そりやさ、久し振りの解放感に調子に乗った所もありましたよ？　裏社会で蠢く秘密結社達の事を考えるとからしい言い訳をしながら、マンゴープリンを頬張ってましたよ？　でもさ、少し位ゆとりもあってもいいじゃない。ネオ・ジオンと地球連邦との今後とか、アマルガムやマーティアルの目的とか考えるべき事は沢山あるけども、たまには休む事を優先してもいいじゃない。なのに何故ハイジャックという恐ろ

しい事態に遭遇しなくてはならないのか。再世戦争の時もそうだったが、マジでお祓いしてもらった方がいいかもしれない。

まぁ、嘆いていても状況が変わる訳ではないので、取り敢えず状況の説明を掻い摘まんで書いておこう。先も記した通り、今自分が乗っているこの飛行機は複数のテロリスト達によって占拠されている。外も複数のＡＳが徘徊しているし、今自分達がいるのも日本では見かけない軍事基地だ。恐らくはインドネシア諸島の何れかだと思われる。

つーか、これ間違いなくアマルガムの仕業だわ。先程チラリと見たのだがテロリスト達の中にガウルンがいたからほぼ間違いないだろう。見た感じここの連中のトップみたいだし、マーティアルとか裏組織に通じているアマルガムならこの程度の事はやってのけるのだろう。ホント、行く先々で厄介事に巻き込まれるよな俺って。

しかし、だとしても連中の目的はなんだ？　幾ら組織の力を借りているとはいえ飛行機一機を丸々人質にするのは奴らにとってもノーリスクって訳じゃないはず、ここまで大掛かりにするのには必ず理由があると思うのだが、今の段階ではそれをハッキリさせる情報がない。

取り敢えず、状況が変わるまで自分は大人しくしておこう。今ここには自分の様な一般客だけでなく、陣代高校からの修学旅行生も乗っているのだ。下手に騒ぎを起こして彼等を危険に巻き込む訳にはいかない。

幸い向こうは自分が蒼のカリスマである事に気が付いていないみたいだし、怯える乗客の一人として振る舞っておこう。その方が後々動きやすくなる。
や、別に平気な訳じゃないからね？　勿論内心ではガクブルしてますよ？　ただこういった状況に多少耐性が付いてきただけだから――――

どうやら、アマルガムと言う連中は自分が想像していたモノよりずっとブラックな連中のようだ。いや、テロリストにブラックも何もないんだけどね。
今自分がいるのは基地から離れた密林地帯、どうにかグランゾン抜きで修羅場から潜り抜けた自分は、人一人よじ登れる程の大きな木の上で基地の様子を伺っている。
あれからはや数十分、色々とありすぎて軽く混乱しているが、日記を通して少しずつ情報を整理していこうと思う。
まず最初にあれからガウルンは一人の少女を連れて飛行機から出て行った。千鳥かなめちゃん、青い長髪が特徴的な面倒見の良い女の子。陣代高校で用務員のバイトをしていた時、勝手が分からない自分を良くフォローしてくれた良い子だ。

当然、自分は彼女を助けようとした。世話になった彼女をどうにかして助けようと無理を承知で動こうとしたが、そんな自分よりも早く行動を始めた者がいた。頬に傷のある黒髪の男子生徒、彼の行動のお陰でテロリストに無謀にも掴み掛かった女性教師は無事だったが、代わりに千鳥ちゃんは奴らに連れて行かれてしまった。

どうにかして彼女を助け出そうと思考を巡らせた時、外から爆発音が聞こえて来た。何事かと窓の方を見てみたら、複数の爆発が基地中に広がっていった。タイミングや他のテロリスト達の慌てぶりを見て、この騒ぎが対テロ組織の部隊のモノだと察した自分は人知れず貨物室へと向かい、千鳥ちゃん奪還の為に外へ出た。

途中貨物室に置かれていた爆弾を解除した自分は蒼のカリスマへと着替えて行動を開始したのだが、この時にまたもや懐かしい人物に遭遇した。

キリコ＝キュービィーさん。元ＺＥＸＩＳにいた彼がここにいた事は素直に驚いたが、どうやら今はミスリルとやらの組織に雇われているらしく、今回もこうして人質の奪還作戦に駆り出されていたのだという。

〝ミスリル〟最初は水銀関係でアマルガムに関連する組織かと思ったけど、どうやら違う様だ。自分はその後に合流してきたヒイロ君やデュオ君達と共に、人質の救出作戦に協力する事になった。

そこで自分は再びあの黒髪の少年に出逢った。頬に傷のあるその少年の名は相良宗

介君。彼はミスリルの傭兵らしく、上司から命令を受けて千鳥ちゃんの護衛に当たっていたらしいのだ。

アマルガムといいミスリルといい、何故一介の女子高生でしかない千鳥ちゃんにそこまで執拗になるのか、気になる話だが今は皆の救出を優先とする事でひとまず散開し、連中の攪乱に回った。

偶然にも基地内で段ボールを発見した自分はその特性を活かしてテロリスト達を行動不能、或いは再起不能にしていった。他の面々も上手く行動したらしく飛行機の人質達は皆解放され、送られてきた輸送機に乗せられて窮地を脱していた。今にして思えばアレもミスリルからの支援なのだろう。

で、その後宗介君は千鳥ちゃんを救出し、基地の外へと脱出。それを見送った後別方向から脱出した自分は、ここで嫌な奴と遭遇する。

マーティアルの支部教会でやり合った奇妙なＡＳ、乗り手は恐らくガウルンなのだろう。奴の機体に搭載された奇妙な力場の所為で、ＡＴに乗って攪乱していたキリコさんが追い詰められてしまった。

そこへ駆けつける様にして現れたのがマクロス・クォーターを旗艦にした部隊、元ＺＥＸＩＳの面々だった。どうやら彼等はミスリルとは協力関係にあるらしく、部隊の中にはＡＳらしい機体も混ざっている。

その後は空から降ってきた白いＡＳに宗介君が乗り込み、ガウルンのＡＳと戦闘を開始した。途中まではやはりガウルンの機体に搭載されたシステムに圧され気味だったけど、宗介君の白いＡＳにも似たようなシステムが載せられていたのか、土壇場で奴のＡＳと似たような力場を発生させて窮地を脱し、一気に奴を倒してみせた。

土壇場の逆転勝ち、そして千鳥ちゃんや皆の無事に安堵するが、謎は増えるばかりだった。何故アマルガムは彼女を狙うのかとか、あのシステムは何なのかとか、色々あるが取り敢えず大至急問いただしたい事がある。

彼等はどうして二組編成で行動しているのだろうか？　破界事変や再世戦争の時とかそんな様子全然なかったよね？　なに？　俺に対する当てつけなの？……まぁ、色々あったが取り敢えず皆が無事だったという事で良しとしておこう。

そしてあの新顔の青い機体、挙動は落ち着きが無かったが動き自体は悪く無かった。乗り手の方も思い切りが良かったし、あのまま経験を積めば強くなる事だろう。

それに青っていうのがミソだよね。なんてどうでもいい事を考えながら今日の日記は終了する。

Ｐ月（・д・）日

先日の怒濤のハイジャックから数日が経ち、世界各所で情報集めに専念していた自分

だが、今日奇妙な連中に襲われた。

奇妙というのは言葉の綾で、実際はギシン星人を中心にした異星人の連中で、唐突に起こった時空振動からいきなり目の前に姿を現したのだ。しかも何も言わずに攻撃してきた為グランゾンに乗っていた自分はそのまま応戦、十分も掛からず殲滅した。

規模もそんなに無かったから大した相手では無かったのだが、機体の爆発に巻き込まれるギシン星人の一人が妙な事を言っていた。

〝宇宙魔王〟名前を聞く限り連中の親玉らしい者、これまでズール皇帝とかムゲといった連中もいたから、もしかしたらその宇宙魔王とかいうのもソイツ等と同じ暗黒側の存在なのだろうか。

察するに今回送り込んできた異星人達は自分の力を知るための斥候部隊なのだろう。無駄にスケールが大きい名前だし、もしかしたら今この瞬間にもどこかで自分を見ているのかもしれない。

あ～、やだやだ。どうしてこうも厄介事というのは尽きないのだろうか。ホント、勘弁してもらいたい所である。

……というか、今思い出したのだけれどアンチスパイラルってまだ様子見しているのかな？　奴らなら時の牢獄位簡単に破って攻めてきそうなモノなんだけど、まぁ、こちらとしてはそれで構わないんだけどね。

あ～、リモネシアに帰りたい。

その76

Ⅱ月＝日

異星人達の襲撃を退けて早数日、現在自分は第3新東京市で情報収集を行っている最中である。この第3新東京市は新世時空振動で新たに融合した第三の世界から来訪してきたモノで、この街にいる殆どの人達は皆そこの世界の出身である為、新世時空振動が起こった直後はそれなりに混乱は起きたらしい。

けれど、当時の地球連邦政府の対応のお陰で、この街の暮らしは早々に安定した事で人々の不安は払拭され、この世界に早い段階で馴れていった。この時の政府の対応は見事だったと当時の評論家がそんな事を言っていた気がする。

で、そこで自分はここ最近の世界情勢について調査していたのだが、その途中でまたもや騒ぎに巻き込まれてしまう事になった。

人らしい形をした巨大なナニカ。〝使徒〟と呼ばれるソレは突然とこの街に現れた。避難警報の報せが鳴り響き、人々が慌てて逃げていく最中、地下から巨大な紫色のロボが現れ、使徒と戦闘を始めたのだ。

しかし、紫色のロボのパイロットは新人なのかその挙動は落ち着きがなく、あっと言う間に窮地に追い込まれてしまうのだから個人的に見ていられなくなり、グランゾンを呼び出して助太刀しようとも考えたのだが、後から現れる元ＺＥＸＩＳの面々が現れて紫色のロボとの協力の下、使徒の撃破に成功した。

その様子を街から離れた位置で見ていた自分は安堵し、安心したのだが、ここへ来て更なる疑問点が増えた。

何でもあの紫のロボは〝ＥＶＡ〟と呼ばれる代物であり、第３新東京市の地下深くにある〝ＮＥＲＶ〟と呼ばれる組織によって管理されているのだとか、正直こちらもかなり胡散臭い組織である。や、不法侵入して情報を一部分だけとはいえ抜き取った自分に言える事はないんだけどね。

紫のロボット……ＥＶＡ初号機、アレも元ＺＥＸＩＳのメンツに参加するみたいだし、取り敢えずはアマルガムの様な組織ではなさそうだ。どうやら例の使徒を倒すにはＥＶＡの力が必要になるみたいだし、今後は彼等との連携は必要不可欠になる事だろう。

……連携かぁ。良いよね、背中を預けられる相棒がいるってのは。最近また一人でいる事が多くなっている自分としては羨ましい限りである。

Ｉ月＃日

今日、自分はとある喫茶店である人物と顔を合わせる事になった。なんでもその人はシュナイゼルの遣いとして各地を転々とし、自分と同じく情報収集に勤しんでいたのだとか。

その人の名はカノンさん。元ブリタニアの文官として知られ、シュナイゼルの右腕だった人だ。今はナナリーちゃんの後見人兼サポート役であるシュナイゼルの手足となって、裏で暗躍している組織の情報を集める諜報活動を行っているのだとか。

そんな人が街中で偶然自分に出逢うのはちょっと不自然に思った。何せ今の自分は陣代高校の時とは違い特定の場所に留まっておらず、宇宙規模で各所を転々と渡り歩いていたからそう簡単に居場所を突き止められる筈がないのだ。少し気になった為その事を訊ねてみると、自分ならそろそろ動き出す頃だろうと事前に行き先を把握し、そこを絞り込んでカノンさんに行かせていたのだという。

なんというか、相変わらずの腹黒さに安心するが、その先から聞かされるカノンさんからの話に自分は真剣にならざるを得なかった。

〝インダストリアル７〟以前宇宙に上がった時に立ち寄った民間の工業コロニーに、ネオ・ジオンが強襲を仕掛けたのだという。しかも強襲してきた部隊の中には赤を強調する機体が確認されており、今宇宙では緊迫した空気に包まれているのだという。

赤い機体と聞いて真っ先に思い浮かべるのが、赤い彗星ことネオ・ジオンの総帥たるシャア総帥だ。モニター越しとは言え聡明そうな彼がそんな事をしでかすとは到底思えない。早速飛び出してくる特ダネの情報に頭を抱えそうになるが、カノンさんから告げられる話はこれだけでは終わらなかった。

〝Ｘ―１８９９９コロニー〟そこで行われる地球連邦の演習の最中、マリーメイア軍と呼ばれる私設武装組織が一同に決起したのだという。

それまでの話の中に演習に参加していたパイロット達が突然暴徒化したとか、元ＺＥＸＩＳの面々がそれを止めたとか色々聞かされたが、カノンさんが語るマリーメイアという少女の事に俺は頭が一杯になっていた。

マリーメイア＝クシュリナーダ。俺の友人であるトレーズさんと同じ姓を名乗る彼女に俺はまさかとカノンさんに訊ねると、カノンさんは静かに頷いた。

トレーズさんに娘がいた。その事実だけでも大きすぎるのに、その娘がマリーメイア軍の象徴として担がれている。これまでの案件とは違う意味で大き過ぎる問題に、俺は頭を抱えたくなった。

戦いを止めようと自ら悪として世界に牙をむけたトレーズさん。そのトレーズさんの娘さんが再び戦争を起こそうと軍を立ち上げて、世界に宣戦布告をしている。

――――この時、既に俺の中でやる事は決まっていた。しかし行動を移すにしても今

の自分では移動手段が余りにも少なすぎる。グランゾンで転移するにしても、そう何度も使っていたらいずれ他の組織に感づかれてしまう。

どうしたものかと頭を悩ませていると、カノンさんはフッと笑みを浮かべて、自分に地図を渡してきた。

『明日、この場所へ来てほしい』そう地図に書かれているポイントには、嘗て自分がお世話になったトレーズさんの屋敷の座標が書かれていた。

これで自分から伝えられる事は全て伝えたと、カノンさんは喫茶店を後にする。その際に自分が注文した紅茶まで支払ってくれる事に感謝しながら、自分はその地図を握りしめるのだった。

一体、シュナイゼルの奴は何を考えているのだろうか？　そんな事を考えながら今日の日記は終了する事にする。

◇

「やぁ、久し振りだねシュウジ。相変わらず元気そうでなによりだよ」
「そっちも、相変わらず腹黒い事を考えてそうな顔してんな」
　翌日、カノンさんから渡された地図を手に、俺は指定場所であるトレーズさんの屋敷へ訪れた。玄関先で待ち構えていたシュナイゼルに軽い挨拶を済ませた後、俺はここを指定してきたシュナイゼルの真意を訊ねた。
「ふふ、そう焦らないでくれ。今案内するから」
「案内するからって、いいのかよ？　この屋敷って確か再世戦争の重要物件として連邦に差し押さえになってるんだろ？」
「なに、こんな私でも連邦の末端に名を連ねる者だ。先の戦争の後にそれなりの功績を出してみたらある程度の融通は利いてね。今この屋敷は私が管理するという名目の下、好きに扱わせて貰っているのさ」
　サラリとなんてこと無いようにいう奴だが、きっとその背景では様々な政治的やりとりがあったのだろう。シュナイゼルの事だし、きっとえげつない方法で半ば強奪したの

だろうと何となく察したが、この件に付いて口出しするのは止めておこう。
「けれど、その状態維持もここの所難しくなってきている。君も地球至上主義を掲げる者達の事は……」
「噂程度にはな」
　地球至上主義。その名の通り、地球こそが人類にとって至上のゆりかごだと語る連中はコロニーやプラント、ネオ・ジオンといった宇宙移民の人々をこれでもかと敵視している。連中のトップであるサイガス准将とやらも目的の為には手段を選ばないあくどい奴だと聞いている。
　シュナイゼルがこの事を口にするという事は、恐らくここの管理について連中がしつこく介入してくるのだろう。トレーズさんはＺＥＸＩＳの、人類の敵になるべくホワイトファングに付いた人間だ。なにも知らない連中……それこそ地球至上主義の奴らから見れば、トレーズさんのした事は地球人類の裏切りに見えた事なのだろう。
「ふっ、やはり友というのは良いものだな。何も語らず、ただこうして並び歩いているだけで相手の考える事が手に取る様に分かる」
「いきなり何言ってんのお前」
「脳量子波やらニュータイプでなくとも他人というのは分かり合えるという事だよ」
　いや、俺にはお前の考えている事良く分かってねぇけどな。なんて事は口にしないで

俺はシュナイゼルの後を追う。
　そして突き当たった通路の壁に差し掛かると、扉が開かれ地下へと通じるエレベーターが姿を現す。一体何を見せようと言うのだろう。シュナイゼルの行動に今一つ理解出来ていない自分に再びシュナイゼルが口を開く。
「カノンから聞いていると思うが、マリーメイア軍。君は彼等の……いや、彼女の事をどう思う？」
「……どうって？」
「彼女は今や現地球政府の敵対者だ。近い内になんらかの行動に移るだろうし、それに伴い政府もこれに対処する際に大部隊を投入する事だろう。君も既に目の当たりにしているだろう？　嘗てのＺＥＸＩＳの面々が再び集まりつつあることを」
「……」
　シュナイゼルの言うとおり、マリーメイアはその意志の有無に関わらず地球連邦の敵となる。それに伴い、地球最強の部隊であるＺＥＸＩＳの皆も彼女を叩くべく動く事だろう。そうなれば激戦は必至、友人の娘であるマリーメイアもその命が危ぶまれるだろう。
　だったら、自分のやるべき事……いや、やりたい事は決まっている。
「取り敢えず、マリーメイアに会ってみるよ。トレーズさんの娘がどんな子なのか気に

なるし、なによりあの二股眉毛が受け継がれているのか激しく気になる」
「……ふっ、天の邪鬼め」
なにやらぼそりとシュナイゼルが呟いているが、気にしない事にした。
「だが、そんな君にならコレを贈るのは丁度良いのかもしれないな」
そう言っている内に地下の格納庫へと辿り着き、エレベーターの扉が開かれる。光が射し込んできた先に待ち構えていたのは……。
「君の愛機であるグランゾン、確かにその力は凄まじいが強力過ぎるが故に目立ってしまう。情報収集の段階である今の君には手頃な移動手段が必要だろう？」
「まさか、回収されていたなんて……」
目の前に鎮座する機体。それを目の当たりにした俺は、きっと酷く驚いているに違いない。隣ではしてやったりな顔のシュナイゼルが視界の隅に入り込んできているのだから。
だが、それは無理もない事だと思う。――何故なら。
〝トールギスⅡ〟嘗ててのトレーズさんの愛機が俺の前に佇んでいたのだから。

その７７

⊕月／日

〝トールギスⅡ〟先の再世戦争の際に地球人類の敵となるべくトレーズさんが駆ったトールギス系列のＭＳ。けれどＺＥＸＩＳとの最後の戦いを繰り広げた際、この機体は破壊されたモノだと聞いている。

それが何故？　当然疑問に思う自分にシュナイゼルの奴は得意げに話した。何でも彼のお抱えだったロイド博士が自分が手掛けたとされるこの機体に興味を持ち、人知れず秘密裏に回収して、今日まで修復作業に専念していたのだという。

別に自分が手掛けた訳じゃないんだけどね。トールギスはコロニーの……つまりはヒイロ君達のガンダムのプロトタイプの様な機体であり、トールギスⅡはそんなトールギスのノウハウを受け継いだ機体だ。機体自体は既に組み上がっていたし、自分が弄ったのは精々機動性や加速性能といったシステム面のモノ、まぁ確かにそれ以外にもトレーズさんと一緒にアレコレ弄り回したが、別にロイド博士が注目する程の事ではない

と思う。

しかし、こうしてトールギスⅡはロイド博士のお陰で蘇ったのだ。感謝こそはしても余計な詮索は無粋というモノだろう。

シュナイゼルはこれを、グランゾンとは別にもう一つの自分の機体として受け取って欲しいと言った。少しばかり躊躇する自分だが、特に断る理由もない為に俺はこの機体を有り難く受け取る事にした。それに、この機体をこのままここに置いておけば地球至上主義の連中に接収されるだろうし、そうなれば再世戦争のモビルドールの様に奴らの操り人形にされる危険性もある。

それだけは断固として阻止せねばならない。そういった意味を含めてトールギスⅡを受け取った自分はそのまま機体に乗り込み、各システムの最終チェックに入った。

元ブリタニアの最高の技術者であるロイド博士が直しただけあって、機体の状態は最高の仕上がりとなっていた。機体性能もトレーズさんが乗った時と全くと言って良いほど変わらなかったし、機動誤差もコンマミリ単位にまで修正されていた。

ただ、あの戦いでトールギスに搭載されていた武装は全て破壊された状態にあり、直したばかりのこの機体には武装らしきものは何もなく、殆ど丸腰状態なのだという。

そこでロイドさんはトールギスⅡの性能を最大限に高める為に、新たに武装を作る事にしたのだという。左右の肩にそれぞれドーバーガンと高出力ビームサーベルを搭載

した盾を装備し、更に背中には大出力のスラスターが載っけられている。加速性能を損なわずに防御面にまで手を加えるのだから、本当に頭が下がる思いである。

やはりロイド博士は凄い人だ。プリン伯爵の異名を持つ博士の凄さを改めて実感した自分は機体を自分に合わせてシステムチェックを完了させ、自分は機体を発進させようとする。その際にシュナイゼルの奴から上から目線の頑張れエールを受け取り、ブースターに火を灯してトレーズさんの屋敷を後にした。

で、一通り機体を飛ばしてとある無人島にいるのだが……やー、トールギスⅡってばマジぱねぇ、単純な速さだけならグランゾンに匹敵するんじゃねぇのか？　いやマジで。

旋回速度も申し分ない程に速いし、この分なら火力面の方も期待出来るのかもしれない。あとはこの機体を使いこなし、自分のモノにするだけである。この機体はトレーズさんとシュナイゼル、そしてロイドさんの想いが込められた機体だ。それくらいやってのけなければ寧ろ彼等に対して失礼というものだろう。

俄然やる気が出てきた自分は、シュナイゼルから餞別代わりに受け取った整備品でトールギスⅡ改（仮）を磨き上げるのだった。

ただ、トールギスをワームホールに……グランゾンの隣に収納する際、何だかグランゾンにジト目で睨まれた気がした。

や、違うからね？　これは別に浮気とかそんなんじゃないから。友人から友人の形見を受け取っただけだから、そんな疚しいモノじゃないから、うん。

……一体俺は何の言い訳をしているのだろう？

⊕月＊日

今日は安定した筈の次元境界線が歪曲し、久し振りに時空振動が起こった。時の牢獄の完成に伴って時空は安定してきていると聞くが、もしかしたらそうでもないのかな？

いや、時空振動自体が早々に起こるものじゃないんだけどね本当なら。

まぁそれは良いとして、今回の時空振動によって融合された世界……というか街は、何だか初っ端から騒がしく、いきなり正体不明のロボットによって襲撃されていた。

なんか数も多いし、この世界の防衛隊らしいロボット達も追い詰められていた事から、自分はトールギスⅡ改（仮）を駆って出撃、マーティアル教会支部以来となるグランゾン以外の機体で戦闘に参加した。

結果は快勝。機体性能もさることながら相手が無人機だった事から特に苦戦する事もなく、連中を叩く事に成功したのだが、ここで突然獣のようなロボットが街に出現した。

この時奴が自分に狙いを定めていれば結果は代わったのだろうが、獣ロボットは自分

にではなく、一緒に戦っていた巨大ロボに狙いを定めたのだ。
奴の苛烈な攻撃によってロボットはその形を保ってられずに分離、一機は市民がいるであろう市街地へと墜落していった。
これ以上好きにさせないとトールギスⅡと共に獣ロボットに肉薄するが、これまで経験したことのない相手に、自分は動きを制限させる事しか出来なかった。
けれどそんな時、市街地に墜落した機体が復活し、突然自分達の所に姿を現したのだ。身動きが取れない彼等の所に現れたその機体は眩い光で包み込むと、三位一体の巨大ロボへと合体した。
つーか、アクエリオンだった。細部が違う事から恐らくはアポロ君達のアクエリオンの次世代機と思われるその機体は、本家本元と同じトンデモ力によって獣ロボットを圧倒、見事迎撃をして見せた。
で、その後アクエリオンの二号機からのお礼の通信に耳を傾けていた自分は、この時近付いてくる機体を察知し、それがＺＥＸＩＳ達のモノだと知ると、自分は再びトールギスⅡのスラスターに火を着け、すぐさまその場から離脱していった。
なんか逃げるような形で申し訳ない事をしたけれど、今自分が使っている機体はグランゾンではないのだ。再世戦争の時に敵対した機体が復活したと知れば彼等に余計な警戒を抱かせる事になる。

……ていうか、今更ながら気づいたけど、この機体だと却って見つかると余計に面倒な事になるんじゃね？　トレーズさんのトールギスⅡってあんまし良い印象ないみたいだし。

い、いや。ＵＣＷとＡＤＷが融合した今の世界ならその事に気付く人はそんなにいない筈、今は深刻に考えず、思考を軽くしていこう。幸いＺＥＸＩＳは自分を視認出来ていなかったし、それが出来ない位速く離脱したし、うん。万事問題なしという事にしておこう。

そんな事よりもまさかアクエリオンに兄弟機が造られていた事は驚いた。あの様子だとパイロットの子達は皆エレメント能力者みたいだし、もしかするとアポロ君達の後輩だったりするのかな？

彼等がいると言う事は当然あの人もいるという事だし、再会する時が断然楽しみになってきた。

⊕月α日

転移してきた街がアクエリア市として地球連邦に編入された翌日、アクエリオン二号機が収納された学園――聖天使学園では、新たにこの世界に訪れた人々を歓迎するという事で、簡単なセレモニーが開催される事になった。ランカちゃんやシェリルさんの歌

声によって高まった歓声は離れた市街地にまで聞こえてきて、自分はその盛り上がりぶりを堪能していた。

本音を言うなら自分も学園の方に向かい、ＺＥＸＩＳの面々に見つかる事を覚悟してでもせっかくのセレモニーに参加したかったのだが、この時の自分はある人物に呼び出されており、会場に向かうことが出来なかった。

その人物の名は不動ＺＥＮさん。明らかに不動ＧＥＮさんと知り合いらしきその人は自分と幾つか話をすると、興味深そうに頷いて不敵に微笑んでいた。

つーかＺＥＮさんて不動さんの血縁者なのだろうか？　肌が浅黒い所とか、今一つ要領の得ない言動とかソックリだし、もしかしてこのダブル不動さんは双子の兄弟だったりするのだろうか？　こっちの方がイケメンさんだったけど。

で、その後再び先日襲ってきた連中――ＺＥＮさん曰くアブダクターと言うらしい――が襲撃してきたのだが、ＺＥＸＩＳとアクエリオン二号機、そして時空振動によって転移してきたオーガスと桂木桂さんも参戦した事から、連中をあっさりと迎撃してみせた。

ただ、その後現れたバジュラによって皆混乱しているようだったけど、一体彼等はどうしたのだろうか？　ランカちゃん達の歌声も聞こえていなかったみたいだし、もしかしたら別の群のバジュラだったのだろうか？

また今回も色々と謎が深まる話だった。その後はＺＥＮさんにドーナツを奢って貰い自分達も解散したのだけど、去り際の彼の一言が少し気になった。

〝シンカの果て〟そう口にするＺＥＮさんの顔には、ＧＥＮさん張りの不敵な笑みを浮かべていた。

シンカって、進化の事じゃないの？　相変わらず要領の得ない事を口にする不動さんに困惑しつつ今日の所は終了する。

……しかし、どうしてＺＥＮさんはあんな事を聞いてきたのだろう？　アポロ君達の事とか桂さんの事とか、クロウさんやランドさんの事も執拗に聞いてきたし、もしかして自分があの人達の事を忘れているとでも思ったのだろうか？

いや、よくよく考えればＺＥＮさんとは初対面だし色々聞きたいこともあるんだろう。不動というのだからてっきりＧＥＮさんみたいな何でもありの人かと思ってた。失敗失敗、次は気を付けよう。

その７８

⊕月β日

不動さんの親戚だろう不動ＺＥＮさんと色々話をした数日、現在自分は第３東京市に向けて進路を取り、トールギスⅡと共に行動している。

戦闘や移動手段以外極力使用は控える事にしたが、やはり何度も動かす事によって機体の数ヶ所の部分は摩耗し、エネルギーも幾分か減ってしまっている。このままではいずれ動けなくなってしまうと頭を悩ませていた時、シュナイゼルの奴から通信が入ってきた。

何故自分の場所を知っているのかその時は疑問に思ったが、今自分が乗っているトールギスⅡはシュナイゼルから受け取ったモノ、此方の位置やら通信に既に何らかの細工を施されていると察した自分は、少し気疲れした気分で回線を開いた。

そこに開かれていたのはとある座標ポイント。この時いた位置から近かった為に時間が取られる事もないだろうと向かった先に待っていたのは、人気のない無人島に補給

設備のある輸送機と、それを運んできたジェレミアさんの姿があった。
ジェレミアさん曰く、彼もシュナイゼルの下で影ながら動いて情報を集めていたらしく、ここでトールギスⅡの補給とこれまで集めた情報を自分に伝える為にここで待っていたのだとか。
相変わらずの用意周到さに苦笑いが零れてしまう。けれど今回は奴の善意に甘える事にした自分は少しばかりの休息を取りつつ、ジェレミアさんの話に耳を傾ける事にした。
何でも、日本にある習志野基地のイベント開催中にテロリストが現れたが、乱入してきたボン太君とＺ―ＢＬＵＥが迎撃し、何とか被害は出さずにすんだのだとか。……何故ボン太君が軍のイベントに参加しているの？　とか色々疑問に思う所はあったが、淡々と報告を続けるジェレミアさんに自分は頷く事しか出来なかった。因みに先に出てきたＺ―ＢＬＵＥはＺＥＸＩＳの新しい部隊名らしい。ＺＥＵＴＨといいＺＥＸＩＳといい、やたら部隊の頭文字にＺを入れるよね？　なにかの風習？
その後も幾つか重要な情報を教えて貰った。まず、先日日本に……しかも学園都市である第２東京市に謎の部隊が突然襲いかかってきたのだという。その時はＺ―ＢＬＵＥの活躍のお陰でどうにか撃退できたらしいというのだが、シュナイゼルが言うにはそいつらはＵＧと呼ばれる謎の集団らしく、シュナイゼルによるとどうやら先のＸ―１８

９９９コロニーでの騒動の裏ではコイツらが関わっているらしいのだ。
以前はそんなに気にしていなかったが、当時演習を行っていた連邦軍の人間は理性の利いた軍人らしい軍人で、暴徒化する様な連中ではなかったらしい。
何だか焦臭い話だなと思う自分にジェレミアさんも静かに頷いていた。いいよね、この一体感……なんてアホな事を考えている自分に、ジェレミアさんは更に衝撃的な名前を自分に突きつけてきた。
〝宇宙魔王〟以前絡まれた異星人達を相手した時に耳にしたその言葉に、自分は結構驚いたと思う。どうやらその宇宙魔王は例の宇宙ステーション消失の件と関わっているらしく、その時はＺ―ＢＬＵＥが何とか撃退したらしいけど、姿を現した宇宙魔王の力は相当なモノらしい。宇宙魔王の事を語るジェレミアさんもこの時珍しく緊張した面持ちだった事から、どうやら宇宙魔王というのは相当ヤバい奴らしい。
と、まぁこんな風にジェレミアさんから有力な情報を戴いた自分は、補給と整備が完了したトールギスⅡに乗り込み、改めて第3新東京市に向けて飛び立った。
その際に必要な補給物資をジェレミアさんから受け取ったのだが……どうせなら輸送機を戴いた方が良かったんじゃね？
と、そんな事に気付いたのは無人島から遠く離れた時だった。

⊕月γ日

いやー、使徒って言うのは何であぁもキテレツな輩が多いのね。この間出てきたのが人型で次もこんな感じなのかなーって思っていた所に菱形の浮遊物体とか、驚きってレベルじゃねーぞ！

しかも例の初号機が狙い撃ちにされているし、Ｚ―ＢＬＵＥもまだ到着していないから急遽自分が相手する事になったよ。

で、なし崩し的に菱形の使徒と戦う事になったのだが……もうね、半端ないね使徒。前の奴とは戦ってないから分かんないけど、今回の使徒って奴がどんだけヤバいか、嫌という程味わう事が出来た。

まず武器が通らない。ビームサーベルで切りつけても、ドーバーガンで撃っても、奴の常時張っているバリアの所為で此方の攻撃が殆ど通らないのだ。しかも修復能力が備わっているのか、折角通したダメージが瞬時に回復されてしまう。あれほどのバリアを通して倒すには恐らくグランゾン級の大火力が必要になるだろう。もしくは一点に集中させた光線兵器。

しかも向こうから放たれる光線はかなりの高出力で直撃すれば一撃で落とされているかもしれなかった。まぁ、逆を言えば当たらなければどうという事はないからそれは別にいいんだけどね。実際避けられたし。

結局は初号機が離脱するまでの時間稼ぎしか出来なかったし、自分もその後は逃げる事しか出来なかった。自分の不甲斐なさに歯痒い思いが募っていくが、今はそれよりも初号機の方だ。あの様子だと機体ダメージも大きそうだし、パイロットの子は大丈夫だろうか？　普通あれだけの熱量を受けたら融解し機体は形を持つ事と難しくなってくるけど……そこは秘密主義のＮＥＲＶだけあって、やはり何らかの防御対策が施されているのだろうか？

で、それから時間が経過して今は夜。第３新東京市には大掛かりの仕掛けが幾つも置いてあり、使徒の周辺にはＺ―ＢＬＵＥの面々が配備されている。自分も助太刀出来るよう後方で見つからないよう待機しているが……緊張感がヤバい。なんかもう人類に後はない！　みたいな空気に、初号機のパイロットよりも自分の方が参ってしまいそうである。

配置的にもどうやら今回この作戦の鍵を担っているのは初号機みたいだし、パイロットの子はかなりのプレッシャーに襲われているんだろうなぁ。

以前ＮＥＲＶに付いて調べた資料には初号機のパイロットは１４歳の少年らしいし、気の弱そうな子だからちょっと心配だ。まだ作戦には時間がある様だし、様子見という事で少し見てこようと思う。

◇

「君が初号機のパイロット、碇シンジかな？」
「え？　あ、はい。そうですけど……貴方は？」
「俺はルルーシュ。ゼロと言えば君にも分かるかな？」
「ぜ、ゼロだって!?」
　ヤシマ作戦の前に突如として現れたゼロを名乗る少年に、碇シンジは動揺を露わにする。破壊事変からＺＥＸＩＳの参謀役として数々の死地を潜り抜け、時にはあの蒼のカリスマと共に戦線を駆け抜けた再世戦争を終局に導いた鬼才の軍師。そんなビッグネームの人が何故ここに？　混乱の淵に叩き込まれたシンジが目を見開いた……その

時。
「どこかで見た事のある後ろ姿だと思ったら、君もＺ―ＢＬＵＥに参加していたのですか？　ルルーシュ君？」
「なにっ!?」
「っ!?!?!」
ルルーシュの背後から音もなく現れる仮面の男、その人物を目にした時、シンジの顔はこれでもかと豹変する。
「君が例の初号機のパイロット君かな？　私は蒼のカリスマ、君と少し話がしたかったのだが……お邪魔だったかな？」
魔人蒼のカリスマ。魔神グランゾンと共にこの世界における最強の代名詞、この世界の半分の戦力をたった一機で壊滅させ、敵にしてきた者は例外なく屠り、殲滅してきた脅威の怪物。
ネット上では既に生ける伝説となっている魔人を前に――――。
「……きゅう」
碇シンジは卒倒した。

その７９

「……え？」

白目を剥いて仰向けに倒れる碇シンジ君を見て、つい口から間の抜けた声を出してしまった。突然気を失って倒れるシンジ君に仮面の男は勿論の事、彼の前にいたルルーシュ君も、信じられないといった様子で固まっていた。

一体何がどうしてこうなったのか、混乱する蒼のカリスマの頭に次に浮かんできたのは……このままでは色々拙くね？　というどこか達観したモノだった。

諦めの極地、人はそれを現実逃避という。

「何をしているんだお前はぁぁぁぁっ!?」

「ウェイッ!?」

「これから大事な作戦が始まるというのになんつー事しでかしてくれたんだ！　どうするんだコレ！　どうするんだコレェェッ!?」

「ま、ままま待つんだルルーシュ君。大丈夫、まだそんなに慌てる時間じゃない。人間余

裕を失ったら視野狭くなるぞ？」
「……あと１０分で作戦開始なのにか？」
「起きたまえシンジ君！　世界の未来は君の双肩に掛かっているのだぞ！　つーか人の顔見るなり気絶するとか何気に失礼だぞ君！」
　オメェが仮面被って出てくるからだろうが。ルルーシュはそんなツッコミの言葉を飲み干し、気付けの往復ビンタをシンジに食らわしている蒼のカリスマを見下ろす。
「ヤベェよ。この子目ぇ醒まさない。つかどうしてこんなに叩かれても起きないのこの子？　眠りの深い子なの？　疲れが溜まっていたの？　ていうか俺と面と向かって顔を合わせるのがそんなに衝撃的だったのかよ!?　逆にこっちがショックだわ！」
　既に膨れ上がった風船張りに頬を張らしている碇シンジ、ヒリヒリと熱を帯びて顔は真っ赤になっているというのにその表情は何処か安らかに見えた。
「えへへ～、そんなダメだよ綾波ぃ～、僕たちまだ中学生だよ～」
「どうしようルルえもん！　この子現実から逃げだしちゃった！」
「その元凶を生み出した貴様が何を言う。えぇい貸せ！　今度は俺がやる！」
　お前には任せられないとルルーシュはシンジを蒼のカリスマ――――シュウジから奪い取り、横に寝せる。その後もバケツ一杯の水をぶちまけたりするが、それでも起きる様子のないシンジに二人揃って焦りだした所に更なる追撃が加わった。

『シンジ君、聞こえてる？　こちら本作戦の指揮官葛城ミサトよ。そろそろ作戦開始時間だけどもうＥＶＡに乗っちゃったかな？』

シンジの手元に置かれた通信端末の声に二人の動きが停止する。その額に大粒の汗を幾つも流しながらその通信端末に視線を向けると。

「……」

『もしまだ乗っていないならちょっち聞いてくれないかな。――あんなに怖い思いしたのにまたＥＶＡに乗る決心をしてくれてありがとう。ＮＥＲＶの代表として、そして私個人として貴方にお礼を言わせて頂戴』

思ってた以上に大事な話に二人の流れる汗が加速度的に増えていく。すんませんミサトさん、碇シンジ君は絶賛夢の世界で意中の女の子と乳繰り合ってます。

『貴方には辛い役目を押し付ける事になったけど……忘れないでね。貴方は一人じゃない。甲児君やアルト君、Ｚ―ＢＬＵＥの皆が貴方を守るから。――って、ちょっと聞いてるシンジ君？　流石にノーリアクションだと恥ずかしいんだけど？　シンジ君？』

もしもーしと通信端末の向こうから返事を求めている声に、二人の汗の量は尋常じゃないモノとなる。滝の様に流れる汗を拭う事すらしないで二人は互いの顔を見合わせる。

お互いの目を見て互いにアイコンタクトを取った二人、シュウジが通信に応える事で

時間を稼ぎ、その間にシンジを覚醒させる作戦。高鳴る鼓動を抑えながらシュウジは慎重に端末を手に取り――――。

「もっちろ～ん、頑張らせて戴きますよミサトさん！　大丈夫、今回の作戦は全てこの碇シンジに任せんしゃい！　あんな青い菱形なんて一発でシトメちゃいますよ～！　あ、でもでもやっぱり不安になる事もあると思いますので～、応援してくれると嬉しいかな？」

ニコッ☆と、碇シンジという中学生を成りきったシュウジが最後にそう締めくくると、辺りに静寂が包み込んだ。剰りにも静かな為に時間が止まったかとすら思われたその時――――。

警戒警報の鐘の音が一帯に鳴り響いた。

その後ＮＥＲＶの人間が碇シンジの下へ赴くとそこにはシンジ以外誰もおらず、目を醒ました彼から説明を求めても本人は何も覚えておらず、頬が腫れている事以外を除けば身体に特に問題はなく、作戦は継続する事になった。

記憶の抜け落ちているシンジに不安を覚える一同だったが、そんな彼らに対し碇シンジは晴れやかな気分だった。何だか良い夢を見たらしく気力が充実している少年はそのままＥＶＡに乗り込み作戦開始の合図を待った。

そんな彼らに対し、唯一一部始終を見ていたとある少女は……。

「……こんな時、どんな顔をすればいいの？」

鼻で笑えばいいんじゃね？

様々な思いが重なる今回の戦い、ヤシマ作戦が始まる二分前の出来事だった。

◇

『くそ！　あしゅら男爵め、地球が滅んでも良いっていうのかよ！』

戦場となっている第３新東京市で兜甲児が叫ぶ。今回発令されたヤシマ作戦は事実上人類にとってラストチャンスになる作戦だ。市街地から離れた所にいるシンジとＥＶＡ初号機を守る為に盾という役割を買って出たＺ―ＢＬＵＥだが、作戦開始と同時に現れた機械獣軍団とアブダクターの予想外な襲撃に遭い、Ｚ―ＢＬＵＥは今現在押されている状況にあった。

乱戦となってしまっている第３新東京市、どうにかしてこの混戦を打破しなければならないという状況に陥ったＺ―ＢＬＵＥに、更なる追撃が押し寄せてくる。
『て、敵影接近！　こ、こっちにくる！』
『しまっ!?』
己の機体にいまだ付いてこられずにいたヒビキに複数のアブダクターの無人機が押し寄せてくる。回避行動を取ろうにも未だ操縦に慣れていないヒビキでは間に合う筈もなく、無人機達は群がる様に青い機体――ジェニオンに押し寄せてくる。
直撃コース。無人機の放とうとしているエネルギー弾、ヒビキに決断が迫られたその時、頭上から降り注がれる光の矢が無人機の群をそれぞれ貫き、爆散させた。
今の攻撃はなんなのだと、ヒビキが……Ｚ―ＢＬＵＥの面々が頭上を見上げた時。
『まさか、アレは!?』
『あの報告は本当だったのか……』
夜の空から流星の如く舞い降りる一機の青い機体。それは再世戦争の時に戦った元ＺＥＸＩＳの面々にとっては忘れる事の出来ない機体だった。
〝トールギスⅡ〟武装や細部の部分は違うけれども、再世戦争の際にＯＺの総帥が駆ったとされる機体と瓜二つなＭＳの登場に、Ｚ―ＢＬＵＥの面々は驚きを隠せずにいた。

その８０

⊕月（っ、ω、ｃ）日

ＮＥＲＶとＺ―ＢＬＵＥが力を合わせたヤシマ作戦、アブダクターや機械獣軍団の連中が武力介入してきた事により一時戦線は危うい状況にあったが、彼等の持ち前であるガッツな底力により連中を撃退、菱形の使徒もシンジ君の放った超高出力の電磁砲によりコアを破壊。作戦は無事成功となった。

自分もシンジ君が乗る初号機を守る為に戦線に参加し、後からルルーシュ君ことゼロも蜃気楼と共に作戦に参加した事で盛り返す事に成功したのだが、その後自分はちょっとしたイザコザに巻き込まれてしまったのだ。

巻き込まれたというより、俺が巻き起こしたんだけどね。そりゃ再世戦争で自分達と戦った機体が戦線に乱入したとあれば戸惑いもするさ。……うん、シンジ君を気絶させた事と良い今回の俺ってばまるで役立たずじゃん。今回のヤシマ作戦はルルーシュ君が立てた作戦みたいだし、彼からすれば今回の俺は足を引っ張る厄介な人間でしかなかっただろう。

いやでもさ、まさか顔を合わせただけで気絶するなんて誰も思わないじゃん？　予想なんて出来ないじゃん？　……世間から見た蒼のカリスマってそんなにおっかないイメージ持ってたっけ？　映画化されているとか聞いたから、てっきりもっと親しみやすくなっていると思ってたけど……違うの？

で、全ての敵を撃破し、作戦が終わった所までは良かったんだけど、先も述べた通りこの時ちょっとしたイザコザが起こり、居心地が悪くなった自分は逃げるように第３東京市から離脱したのだ。

だってさ、色んな人が通信を送ってくる中、二人だけ何も言わずにこっち見てるんだもん。ヒイロ君とゼクスさん、一番自分に対して言いたい事があるだろうお二人さんが何も言わずジッと此方を見てるんだもの。居たたまれなくなっても仕方ないじゃない。

もうアレだね。コッチが不穏な動きを見せたら即斬り掛かってくる勢いだったね。特にゼクスさんの乗るトールギスⅢからの視線が個人的にはキツかったですはい。因みに、ゼクスさんは現在大統領直属の部隊に属しているらしく、所謂裏方で世界の役に立とうとしているのだとシュナイゼルから聞いていた。彼の乗っている機体についてもこの時に教えて貰っていました。

そんな訳で、個人的にその場にいる事に辛くなってきた自分はこのままルーシュ君に自分の事を暴露される事を恐れ、トールギスⅡのスラスターを噴かせて即時撤退、煙

に巻く様に逃げ出したのである。

まぁ、ルルーシュ君はああ見えて義理堅い子だし、彼が人の秘密をバラす様な事はそうそうしないと思うし、そこら辺はあまり心配してないけどね。本当はただあそこに居辛かっただけだし。

ともあれ、これで再び一人で戦う事になった自分ですが、めげずに頑張って行こうと思う。

ただ、少し気になった事が一つ。戦線に参加したあの青い機体、何だか知り合いの動きに似ていた気がするけれど……気の所為だろうか？

⊕月@日

今日、シュナイゼルから重要な報せが届いてきた。先のヤシマ作戦での戦いにより摩耗したトールギスⅡの整備をしていた時の事だ。秘匿回線で寄越してきたアイツの通信を開くと、驚くべき内容がシュナイゼルの口から飛び込んできたのだ。

〝マリーメイアの決起〟しかも政府の要人を人質に取ってブリュッセルの施設に立て込んだというシュナイゼルの話をヤケに冷静に聞いている自分がいた。きっと心の何処かでこの日が来ることを分かっていたのだと思う。

けれど、まさか人質としてナナリーちゃんやリリーナちゃんを誘拐していた事は驚い

た。彼女達は先の争乱の事もあり、身柄は厳重な警戒網で囲われていた筈。特にナナリーちゃんの方は元が付くとは言え、ナイトオブラウンズの人が常に護衛に回っていた筈だ。

ジノ＝ヴァインベルグ君、当時の帝国の中でも腕利きの猛者として知られる彼の守りがこうもあっさりと破られるのは少々納得がいかないモノがある。コレにはシュナイゼルも同感していた様だったので彼に訳を訊ねた所、何とも奇妙な話が出て来たのだという。

〝理由は分からない。だがそうしなければいけない気がした〟

この話を聞いた時、彼の正気を疑うよりも先に自分は違和感を感じ、そして同時に怖気を感じた。まるで何かから命令されたかの様にそう呟く彼を見て、シュナイゼルはまるでギアスに掛かったようだと話す。

確かに人を縛り付けるという意味ではギアスこそが有力な説かもしれない。けれどルルーシュ君がそんな事をするとは思えないし、何より妹を危険な目に遭わせる様な真似は絶対にしないと断言できる男だ。そんな彼が今回の事件に関係しているとは思えない。

オマケにこの事例と似たような話を自分は知っている。そう、あのＸ―１８９９９コロニーで起こった騒動と同じ出来事が彼にも起きているのだ。あの時も暴徒化したの

は突然だと聞くし、あの時の聞き取り調査でも暴徒化したパイロットは皆、今のジノ君と似たような事を話していたと耳にしている。

ギアス以外の何か、人を無意識に縛るその力に自分に心当たりはないが……可能性の一つとして提示出来るモノがある。

〝スフィア〟次元力を引き出す機関として知られ、それを手にしたモノには超常的な力を与える摩訶不思議な代物。クロウさんの相棒であるリ・ブラスタにもこのスフィアが動力源として搭載されていると聞く。

そのスフィアの扱いに長けたモノは事象をねじ曲げて無限の力を引き出すらしく、嘗てのアイム＝ライアードもスフィアを扱って自分の死すら嘘にしたという実績を叩き出している。

そのスフィアにどれだけの力が備わっているのか未だに不明な所は多いし、本当に人を操るなんて事が出来るのかも分からない。けれど偽りの黒羊、尽きぬ水瓶、揺れる天秤の共通部分に気が付いた自分としては、今回の件に無関係とは言えないと思えてしまう。

この三つに共通しているのは……ズバリ〝感情〟である。

例えば、揺れる天秤は両脇に添えられた秤に目を向けがちだが、本質はその秤を支える支芯にある。例え気持ちは揺れてもその奥にある意志だけは折れないとそう言う意

味なのだとか。再世戦争の時そう言った話を前にＺＥＸＩＳでチョロッと耳にした事があるから、多分間違いではない筈。

偽りの黒羊も己すら騙す虚栄心が関わっているらしいし、尽きぬ水瓶もスフィアの持ち主であるユーサーの国民に対する尽きる事のない愛がトリガーになっていたらしい。アサキムの持つスフィアの知りたがる山羊も、好奇心という言葉が当てはまる。

この事を踏まえれば、スフィアにはそれぞれ強い感情を引き金にしており、その時の想いの強さによってスフィアの力を引き出すモノだと自分は考える。

そのスフィアの力が他者にまで及ぶのかと訊ねられれば応える事は出来ないが……何分スフィア自体が謎の塊なのだ。そうそう否定する事は出来ないだろう。

以上の事を踏まえ、且つ今回の裏に潜む首謀者の事を考えると、恐らく相手は憎しみとか闘争心とか、そういったモノをトリガーにするスフィア所有者だと個人的に予想する。

シュナイゼルにはスフィアの事を触り程度に話しておいたが、どうやら奴はスフィア関連に関しては何も知らないらしく、自分が話すスフィアの話も終始不思議に首を傾げていた。

アイツならこの位知ってそうなモノだけどなぁ。取り敢えずその時自分はスフィア関連についてはトライア博士に聞けと言って通信を切った。本当ならもう少し情報を

交換しておきたかったが、シュナイゼルから聞かされる地球連邦の動きに自分は急がざるを得なくなった。

なんと、連邦政府はマリーメイア軍のいるブリュッセルにＮ２爆雷を落とす事を決定付けたのだ。恐らくは地球至上主義の連中が関与しているのだろう。あの聡明な大統領が、ナナリーちゃんやリリーナさんが人質に取られる中で、戦略兵器を落とすなんて考えられない。

シュナイゼルが言うにはＮ２爆雷を落とすにはまだ幾分かの猶予があるらしいが、残された時間はそんなに残されていない。自分は今大慌てでブリュッセルに向かっている最中なのである。

恐らくＺ―ＢＬＵＥもブリュッセルに向かっている事だろう。自分も辿り着き次第状況に応じて行動するつもりだ。

なので、一方的ではあるが今回の日記はこれで終了する事にする。

◇

――――ブリュッセル、施設地下。

幾つもの核シェルターで覆われた地下基地の司令室にて、モニターに映し出されているＺ―ＢＬＵＥが自分達の軍勢を相手に苦戦する様を見て、マリーメイア軍の総指揮官であるデキム＝バートンはその表情を悦の笑みに歪める。全ては自分の思惑通りだと、そう信じて疑わない男にリリーナ＝ドーリアンの冷たい声が司令室に響き渡る。

「デキム＝バートン、今すぐ戦闘を停止なさい。こんな戦いを引き起こしてもなんの意味はありませんよ」

周囲に武装した軍人が自分に銃口を向けているが、それでも彼女は意志を弱める事なく、その眼光で今回の件の主犯格であるデキム＝バートンを睨みつける。

しかしそんな彼女の前に立ちふさがる者が現れた。まだ幼い顔つきでありながら既に王者の風格を現している少女、マリーメイア＝クシュリナーダ。自らトレーズの娘であるとする少女が、その無表情のままリリーナの前に立つ。

「リリーナ＝ピースクラフト、先程も仰いましたよ。今のあなた達は人質、ご自分の立場を理解した上で発言しなさいと」
「マリーメイアさん、貴方は、どうしてそこまで」
「それも先程説明しましたよ。ナナリー＝ヴィ＝ブリタニア、私は勝者になるのです。敗者になる事で世界を導こうとした父とは違い、私は勝者となる事で世界を正しい方向へ導こうというのです」
「そんなの、誰も望んでません！」
「私が望んだ事です。私が望み、私が統治する事で世界はより良い方向へ導かれる。何故それが分からないのです」
――あぁ、ダメだ。今の彼女には自分達の言葉では届かない。まるで決められた台詞をそのまま口にするマリーメイアに、ナナリーは唇を噛みしめる。
対するリリーナは、歪んだ思想と思考を植え付けたデキム＝バートンを睨みつける。洗脳に近いやり方で一人の少女を歪めた男を怒りと軽蔑の視線で穿つも、当のデキムは鼻で笑って肩をすくめている。
圧倒的物量を前に徐々に圧され始めるＺ―ＢＬＵＥ、そこへネオ・ジオンの横槍が入り、戦局は更に泥沼化しつつあったその時、地下の司令室に敵影キャッチのアラームが鳴り響く。

「何処からだ？」
「じ、十二時の方角より機影！！　ですが……これは!?」
　これまでとは違い動揺を見せるオペレーターにデキムは訝しむ。一体何がここへ来ているのか。
（まさか、例の魔神か!?）
　デキムの頭に思い浮かぶのは、破界事変と再世戦争でその猛威を揮ったとされる蒼き魔神。当時の地球連邦の半分の戦力を単騎で殲滅したという話は、当時宇宙コロニーにいたデキムにも戦慄と恐怖を与えた。
（だが、その心配はない筈だ！　奴が出て来た時は〝彼等〟が対処するのだと！）
　自分の背後にいる者達の事を考えながらデキムは内心で焦り始める。額から大粒の汗を流し、部下にその機影をモニターに映せと指示を飛ばした時。
「そんな……バカな」
　デキムの表情が驚愕の色で彩られる。
　モニターに大きく映し出された映像の中には、弾幕を潜り抜きながら突貫してくる青い機体。
　――――トールギスⅡの姿が映し出されていた。

その81　前編

――――そう言えば、あの同人弾幕ゲーって新作出たのかな？　目の前に広がる弾丸の壁を回避しながら、俺はトールギスⅡのコックピットでそんな考えが一瞬脳裏を掠めた。

眼前に迫る弾を最小限の動きで回避し、地上へと着地する。その際に周囲の敵の数を軽く索敵してみたのだが……いやぁ、いるわいるわ。同じ機体のあまりの数にちょっと気持ち悪くなってきた。

マリーメイア軍が使用しているのは〝サーペント〟その形状からトロワ君のヘビーアームズを彷彿とさせる機体で、武装はダブルガトリングといった重火器を主にしている。

グランゾンで出れば時間も掛からず直ぐに殲滅出来るが、今自分が乗っているのはト

レーズさんの形見の一つでもあるトールギスⅡだ。いつもの様に突出して敵を粉砕するのではなく、頭を使って戦うべきだろう。

――――尤も。

「この程度の相手に遅れを取るつもりはないがな」

接敵したサーペントの弾幕を潜り抜け、地面を這いながら詰め寄った所に一閃。ビームサーベルを抜いた自分はサーペントの足を切り裂き、行動不能に陥らせた。

今の自分は確かにグランゾンに乗ってはいないし、実際機体性能ではトールギスⅡがグランゾンに勝っている部分は少ないだろう。だが、それがトールギスⅡが戦いに於いて不利な条件だと思うのは間違いである。

「戦いに於いて常に有利に進められるのは兵の数を費やした者……しかし」

背後から押し寄せてくるサーペントの群をそれぞれドーバーガンで頭部や手足を撃ち抜き、機体を行動不能にする。

確かに戦争は数だ。それだけで戦局は有利になるし、勝率もグンと跳ね上がる事だろう。だけど忘れてはならない。戦うのはあくまでパイロット、自ら思考し、行動し、実行する人間だ。戦いという極限の状況に追い詰められた人間は必ず何処かでミスをして、隙と呼ばれる瞬間を生み出す。そこを突けば、戦いは一瞬の合間に終わる時もある。

特に、今の自分はトールギスⅡに乗っている為に動揺している兵士は多く、今倒した

二機も、トレーズさんに自分達が否定されていると思って動揺したのだろう。

少々卑怯なやり方に思えるが、相手は大軍を引き連れているのだ。この程度の搦め手は見逃して欲しい所である。

……つーか、コイツ等の背後って絶対何かいるよね？　バートンって財団はかなり大きい所みたいだけど、一つの都市にこれほどの数のサーペントを配置させるのはちょっと考えられない。

「まぁ、今は余計な詮索をするよりも、目の前の敵を何とかする所から始めようか」

スラスターに火を灯し、再びトールギスⅡを走らせる。すれ違いざまに何機かサーペントを落とした自分は、リリーナさんやナナリーちゃん達のいる施設へと向かうのだった。

◇

「バカな、何故あの機体がここに!?　アレは再世戦争の際に破壊されたと聞いたぞ！」
目の前に映し出されている光景にデキム＝バートンは激しく狼狽し、動揺していた。額に滲み出てくる冷や汗を拭う事もせず、ただモニターに映し出される自軍の機体が破壊される様を目にしていた。
トールギスⅡ、それは再世戦争の際ＯＺの総帥だったトレーズが人類最後の戦いを飾る為に用意した機体。たった一機で当時地球最強の部隊であるＺＥＸＩＳを翻弄し、対等に渡り合ってみせたという逸話は、今も彼の部下だった兵士達が嬉々として語り継いでいる。
そんな機体を最初に見たとき、当然デキムはあの機体を偽物だと判断した。どこかの誰かも知らない輩がトレーズの名を騙っているだけの、ただの虚仮威しだと。
しかし、そんなデキムの予想とは裏腹にトールギスⅡは此方の対空砲撃を一度も掠る事なく回避し、此方の領域に侵入してきた。それだけでも驚愕すべき事実だというのに、トールギスⅡはそのまま加速を止める事なく吶喊し、立ちはだかるサーペントを悉く破壊していく。
しかもパイロットを殺す事なく、戦闘不能にしている事から戦線の士気はがた落ち

し、倒された兵士達は立ち上がる事なく、皆散り散りに逃げていく。
だが、それはある意味当然とも言えた。マリーメイアを旗印に集まった兵士の多くはトレーズを信奉する者達だ。自分達が敬愛していた人物が乗っている機体が敵対し、自分達を否定していると知れば、その戦意は根刮ぎ奪われる事だろう。
……メチャクチャだ。たった一機を相手にここまで翻弄されては、最早戦線を立て直すのは難しいだろう。仮にあの機体が偽物で乗っている者がトレーズではないというのなら、一体誰がそれを証明出来るというのだ。
再世戦争ではたった一機でありながらＺＥＸＩＳに引けを取らなかったとされるトールギスⅡ、その機体に今また一瞬で三機撃破された事実を前にデキムは歯を食いしばり、動揺を隠そうとするだけで精一杯だった。
そんな中、ふと隣を見ると、そこにはモニターをデキム以上に食い入るように見ていたマリーメイアの姿があった。その表情にはデキムのような焦りの色は無く、ただ目の前で戦う父の機体を眺めていた。
「……これが、父のモビルスーツ」
一体、また一体と次々にサーペントを撃破していくトールギスⅡ。多対一という圧倒的不利な状況の中、一歩も引かずに……寧ろ押し返していく父の機体にマリーメイアは目を丸くさせてその様を見つめていた。

「……貴方の父、トレーズ＝クシュリナーダは戦いこそが人間を彩らせると語っていました。戦いに於ける一瞬の刹那、その瞬間にこそ人という種は輝き、散り様は何物にも勝る美しさを持つと、当然その考えには多くの人達が反対し、批判し、拒絶しました」

　そんな誰もがトールギスⅡに視線が奪われる中、リリーナ＝ドーリアンはマリーメイアに語り聞かせていた。

「けれど同時に彼は平和の尊さを理解していました。何故戦いを肯定する彼が平和を理解出来るのか、それは平和が戦いの上に成り立っているからです。だからこそ彼は戦いの正当性を説き、そして戦いの悲惨さを伝えたかったのです」

　トレーズ＝クシュリナーダは望んだ、自分は敗者になりたいと。それは戦いの悲惨さを自らが体現し、証明とし、それが人々の平和の礎になりたいという彼の想いの現れ、即ち――――愛だ。

　彼は戦いを肯定し、戦いの中で生まれる散り様の兵士を慈しみ、そして人類を愛した。いつか自分の愛する人類がシンカを迎える事を信じて。

「彼はやり方を間違えた。彼は先を急ぎすぎた。私は今でも彼を否定しています。けれど、彼の人類に対する愛は紛れもなく本物だった」

「な、なにを……」

「マリーメイア＝クシュリナーダ！」

「っ!?」
「貴方はそんな父の愛に胸を張れますか！　トレーズ＝クシュリナーダの想いに応えられると断言できますか!?」
「あ、あぁ……」
「黙れ小娘がぁぁっ！」
リリーナの語りにマリーメイアは遂に押し黙る。父の大きすぎる愛に、そして深い想いに、マリーメイアは立っている事すら出来ず、その場に座り込んでしまった。
そんな彼女の前にデキム＝バートンが立ち、リリーナに向けて銃口を突きつける。
「思い上がるなよピースクラフトの亡霊が！　人質として大人しくしておれば良いものを！」
「……人質、ですか？」
人質として大人しくしろ。憔悴した表情で銃口を向けるデキムとは対照的に、銃を突きつけられたリリーナは自らの命の危機の前に、不敵に笑って見せた。
何が可笑しい！　そういきり立つデキム、ならば今すぐその綺麗な顔に風穴空けてやると引き金を指を乗せたその時、司令部に通信受信の音が鳴り響く。
何だと思い部下の兵士が回線を開くと、リリーナに馴染みのある声が聞こえてきた。
『こちらヒイロ＝ユイ、マリーメイア軍に通達する。シェルターの防御は完璧か？』

「なんっ……!?」
　それは今マリーメイア軍が総力を挙げて戦っている部隊、Ｚ―ＢＬＵＥのメンバーの一人であるヒイロからの通信であった。敵である筈の彼が一体何の為に通信を寄越してきたのか、疑問と動揺に返信が鈍るデキム、そんな時彼の声を耳にしていたリリーナが代わりに応えた。
「ヒイロ、私はここにいます！　貴方のやり方で貴方の思う形で世界に示しなさい！　トレーズ＝クシュリナーダが何故あの戦いを起こしたのかを！」
「何を!?」
『――――――任務、了解』
　――――瞬間、司令部に凄まじい衝撃が襲ってくる。地中にいる筈なのに、その激しい振動によってデキム達の足場が激しく揺れる。まるで大きい地震に巻き込まれている錯覚に陥りながら、デキムはモニターに映る映像に振り返る。
　外の様子が映し出されている映像、黒の夜空が空を覆う中、一つの光が星の様に瞬いていた。光を抱いて空に浮かぶのは白い翼を持ったモビルスーツ、ウイングガンダムゼロのカスタム機だった。
　今の衝撃はあの機体の持つ大出力の粒子砲によるモノだろう。戦略クラスの兵器でも耐えられる防御壁が揺さぶられるのは驚きだが、それでも障壁が破られる事はないと

安堵したのか、デキムの表情に余裕が生まれ始める。
「は、ははは！　バカめ！　今更そんな兵器でここが突破できると思ったか！」
デキムが乾いた笑みを浮かべるのも束の間、直後に襲われる第二射による衝撃に、再びその表情が焦りに変わる。
「シェルター直撃！　次弾来ます！」
「無駄なことを！」
そう、デキム＝バートンの言うように空に浮かぶガンダムは全て無駄、徒労に終わる。度重なる戦闘と二回続けて放つバスターライフルの反動によって既に機体はボロボロ、更に地上からの弾幕に晒された事により、ウイングガンダムゼロは撃墜寸前のスクラップと化している。
そんな彼の姿にデキムは声を上げて笑い出す。滑稽だと、無様だと、そう蔑む彼の顔は酷く歪んでいた。
だが、次に聞かされる部下からの報せによりその表情に陰りが生まれる。それはこの街に向かって大勢の市民が押し寄せてくるという報告だった。
それは、例え困難に晒されようと戦おうとするＺ―ＢＬＵＥと、無駄だと分かっていながら挑み続ける空に佇むガンダムによる〝戦う姿勢〟そのものに共感したモノだった。

人は、生きているだけで戦っているのだ。それに負けず、未来へ向けての歩みを止めず、突き進む。それこそがトレーズが人類に伝えたかったモノ。

小賢しい。押し寄せてくる市民を鬱陶しいと罵倒するデキムだが次の瞬間、三度目の衝撃が司令部を襲った。

「しぇ、シェルター破損！　突破されます！」

「やめろぉ！　ここにはリリーナがいるんだぞ！」

破れかける自慢のシェルターにデキムの表情が再び焦りに彩られる。ここには人質であるリリーナやナナリーがいる。それでも攻撃を止めようとしないヒイロに、デキムは再びリリーナに銃口を突きつける。

「止めさせろ！　今すぐ奴に攻撃を止めさせろ！」

「……」

デキムの必死な命令にリリーナは応える事無く目を伏せる。けれど巻き込んでしまったナナリーにリリーナは済まないと目で語りかけた。申し訳ないと謝罪の意を示してくるリリーナにナナリーは優しく微笑んだ後、気にするなと首を横に振る。

既に覚悟を決めた二人、これからの世界の為に既に命を捧げる事を決意した彼女達に最早デキムの脅しは通用しなかった。ならば望み通り殺してやるとデキムが引き金に掛けた指を動かそうとした……次の瞬間。

「――だめぇッ！」
「っ!?　この、ガキがぁっ！」
「マリーメイア！」
幼い少女がデキムに銃を撃たせないと掴み掛かる。その事に一瞬面食らうデキムだが、次の瞬間憤怒の顔を浮かべ、マリーメイアを力任せに振り解いた。
初老とはいえ成人男性であるデキムの力に幼いマリーメイアが抗える筈もなく、彼女は壁に叩きつけられ、力なく床に倒れ伏す。
彼女を助けようにも既にマリーメイアには銃が向けられている。此方が一歩でも動こうとしたら即座に彼女を撃つ事だろう。幼い少女に銃口を向けるデキムに侮蔑の念を抱くリリーナ。
「ドイツもコイツも、ワシに逆らいおって、今まで育ててやった恩を仇で返すかマリーメイア！」
「あ、あぅぅ……」
既に、彼女の意識は朧気だった。破壊された筈のトールギスⅡの乱入、リリーナによって知らされた亡き父トレーズの愛の大きさ、そして今自分が起こした矛盾な行動、これらにより生まれた頃から施されてきた洗脳という名の英才教育に縛られた精神が悲鳴を上げ、彼女は既に限界まで追い詰められていた。

そんな彼女を見下ろしながらデキムはほくそ笑む。
「……まぁいい。所詮貴様はワシの木偶、代わりは直ぐに用意出来る」
「――――私は、代わり」
「――――死ね」
突きつけられる代替品という言葉にマリーメイアはその目に涙を滲ませる。涙を流すなんていつ以来だろう、そんな考えが脳裏に浮かんだ時。

〝――――脚破・捻り貫手〟

頭上から蒼いナニカが両者の間に落ちてきた。混沌とした司令部、何事かと叫ぶデキムの声が遠くに聞こえる中。

（……父……様？）

立ち上がった白のコートを見てマリーメイアは父の背中を幻視し、気を失った。

その８１　後編

ヒイロ君って、時折サラリとトンでもない事しでかすよね。施設の遙か上空からツインバスターライフルで撃ち抜いたウイングガンダムゼロを見て、自分はどこかそんな呑気な事を考えていた。

マリーメイア軍とＺ―ＢＵＬＥが戦闘を開始して既に一時間近くが経過し、マリーメイア軍の援軍として駆け付けたネオ・ジオンの連中も引き上げ、戦いは終局へ迎えようとしており、その幕引きとしてヒイロ君のガンダムが空からの攻撃を仕掛けていた。

度重なる戦闘により疲弊しきってしまっているＺ―ＢＵＬＥの面々、補給する事もままならない中大軍のマリーメイア軍を相手にここまで粘れるのは流石と言っていいだろう。そんな中ヒイロ君が行う一撃はこの戦いを終わらせるだけの威力を秘めていた。

コロニーすら破壊してしまうとされるツインバスターの一撃、その衝撃の余波に機体が激しく揺さぶられるが、それでも強固なシェルターを破るまでには至らず、それどころか撃たせまいと地上にいる残りのサーペント達が施設上空にいるウイングゼロに一

斉射撃を浴びせた。
本来ならあの程度の弾幕を避けられないヒイロ君では無いのだが、彼には何か思う所があるのか迫り来る弾幕を回避せず、ヒイロ君のウイングゼロは弾幕を浴び続けた。
その直後に再び放たれるバスターライフルに自分はヒイロ君の狙いが何なのか少しばかり理解した気がした。ヒイロ君の放った二発目の攻撃は最初に放った攻撃を寸分違わず重ねていたのだ。一撃でダメなら重ねて二撃目をぶつける、言うことは簡単だが実戦の中でソレを行うのは途轍もなく難しい筈。それをあっさりとやってのけるヒイロ君には流石としか言いようが無かった。
けれど、二発目を放つまでにサーペント達の攻撃を受けすぎた所為か、ウイングゼロはこの時点で既にボロボロで墜ちるのも時間の問題だった。僚機であるカレンちゃんの紅蓮が輻射波動の障壁で庇っているが、物量で攻めてくるマリーメイア軍を前に、既に連中の攻撃を防ぐだけのエネルギーは残っていなかった。
もう間もなく障壁が破られ、サーペント達の総攻撃を受けるかと思われた時、ウイングゼロから三発目のバスターライフルが放たれた。度重なる戦闘とサーペント達の猛攻、そしてバスターライフルの衝撃によって遂に耐えきれなくなったウイングゼロは三発目のバスターライフル発射を最後に自壊、ヒイロ君は己の機体と共に地へと墜ちていった。

ウイングゼロが地面へと墜ちていく際、カレンちゃんが後を追った事からヒイロ君の事は心配いらないと察した自分は、今まで相手をしていたサーペントの軍勢を振り切り、ウイングゼロの放ったバスターライフルの着弾地点に向けて最後の悪足掻きを始めた。

グランゾンの無尽蔵に近いエネルギー総量に対し、トールギスⅡのエネルギー総量は余りにも少ない。限られた時間でサーペント達を相手にしていたがそれももう限界、一か八かの賭けに乗る為、俺はトールギスⅡと共にバスターライフルの着弾地点へと急いだ。

恐らくヒイロ君はシェルターの向こう側にいるリリーナちゃんを、マリーメイアちゃんやデキムごと吹き飛ばそうとしたのだろう――ナナリーちゃんがいる事を承知の上で。しかしリリーナちゃんもナナリーちゃんも世界の為、人類の未来の為に身も心も捧げる事を誓った女性だ。彼女達ならこれからの未来を切り開く鍵となるＺ―ＢＵＬＥの邪魔になるのなら命を差し出すことも躊躇わない事だろう。それと同じようにヒイロ君もまたそれを知った上でバスターライフルを連射した。

リリーナちゃんとヒイロ君、両者の間にある絆の深さは計り知れない。だけど、だからこそこの二人には言葉を必要としない何かがある。無粋かもしれないが、自分は二人の事をそんな風に考えていた。

でも、結果としてヒイロ君の行動は未遂に終わった。デキム＝バートンを直接倒す事は叶わなかったが、それでも個人的にはこれで良かったと思っている。リリーナちゃんもナナリーちゃんもまだまだこの世界に必要とされる子達だ。今後の為にも彼女達をここで失う訳にはいかない。

まぁ、実際はただあの二人を死なせたくないというのが本音だ。うら若き乙女をむさ苦しい野郎共と一緒に死なせるのは個人的にかなり気に入らない。それに何より、親友の娘を見捨てるなんて事は、俺の中の選択肢に端っから含まれていない。

『おぉぉぉぉぉっ!!』

トールギスⅡのスラスターを噴かせ、最大限に加速しながらバスターライフルの着弾地点へ飛び込む。そこに開かれた大穴を目掛けて突っ込むとすぐさま巨大なシェルターが姿を現した。

ヒイロ君のお陰で剥き出しとなったシェルター、目を凝らしてよく見れば、シェルターの一部分に亀裂が入っているのを確認できた。あそこが狙い目、そう確信した俺は残されたエネルギーをフルに使い、トールギスⅡの肩に搭載されたドーバーガンを亀裂目掛けて撃ち放った。

ヒイロ君が行った重ね掛けの弾幕、自分の狙い通り亀裂に直撃し、シェルターに更なるダメージを与えるが、それでも突破する迄には至らず、どうにかその形を保っている。

……今のでエネルギーは全て使い果たした。ビームサーベルを出せる出力も失ったトールギスⅡは加速の勢いを乗せたままシェルターに向かって落下していく。

『まだ、まだぁぁっ！』

落下する機体の中で、俺はシェルターに向かってトールギスⅡの最後の一撃を放った。握り締めた右拳をそのまま突き出す、なんの捻りもない単なる悪足掻きの一撃。

しかし、その一撃が通った事で亀裂の入ったシェルターが遂に崩壊を始める。あと僅か、あと一撃でシェルターを突破出来ると理解した俺は、その瞬間にトールギスⅡのハッチを開き、コックピットから飛び出した。

――――狙うのはただ一点。頭の天辺から爪先まで気血を練り込んだ俺は、自らを一個の弾丸として見立て、ひび割れるシェルターの収束点に向かって突っ込んだ。

「俺自身が、シメの弾丸だっ!!」

〝人越拳・捻り貫手〟　ガモンさんから教わった一点突破型の必殺の一撃。本来なら基地のシェルターや岩壁など無機物に対する掘削する技で、人に向けてはならないとされる一撃。

今の自分でもこのシェルターは破れる。そう高を括ったのはいいが、どうやら自分が想像していた以上にシェルターは堅く、最後の一撃と放った貫手が二の腕部分まで突っ込んだ所で止まってしまった。

――――思考が停止する。極限の状況の中で詰まった今の自分の現状に、俺は半分他人事の様に感じていた。

今の自分は謂わば最強の盾に阻まれた一振りの槍、この状況の中どうすればいいのかと再び思考を加速させた時、当時ガモンさんから習ったある教えが脳裏に浮かんだ。

『もしこの技が阻まれたらどうするかって？　そんなの決まっておるだろう？　自分よりも強い力で阻まれたら、より強い力で押し通ればいい』

簡単じゃろ？　そう口にする自分の師に苦笑いを浮かべながら、俺はそれもそうですねと心の底から同意する。同時に、俺は自らの膝を振り上げ、シェルターに突き刺さった肘に打ち付けた。

捻り貫手を上回る更なる一撃、〝脚破・捻り貫手〟ガムシャラに打ち込んだ自分の一撃は遂にシェルターの壁を突き破り、そのままデキム＝バートン達のいる所へと落ちていった。

◇

「ば、バカな、何故……何故貴様がここに」
　デキム＝バートンは砂塵の中から現れる人影を前に、銃を握った手を震わせながら問うた。本来ならばいる筈の無い男、何処からどうやってここへ来たのだと疑問で思考を埋め尽くす彼を前に、仮面の男は平然と答えた。
「なに、そんな大層な事はしていません。貴方が見ていた通り上から失礼させてもらっただけですよ。デキム＝バートン氏」
　仮面の男、蒼のカリスマが何気なく語る話に、デキム＝バートンだけでなく周囲に配置されていたデキムの部下達も信じられないと言った様子で絶句していた。モニターに映し出される破壊されたシェルターとシェルターに手を突き刺しているトールギスⅡの映像を見たデキムは、ここで漸く目の前の男が何に乗ってきたのか理解する。
「そうか、貴様が！」
「ええ、トレーズ閣下には生前大変お世話になりましたからね。その恩を少しでも返す

為に今日ここに参上した次第です」
　憤慨するデキムに対し、サラリとトレーズとの関わりを認める蒼のカリスマ。彼は苦虫を噛み潰した様に唸るデキムから視線を外し、ナナリーとリリーナの方へ顔を向けた。

「やぁナナリーちゃん。久しぶり、元気してた？　って、この状況で言える事じゃないか」
「お久しぶりです。カリスマ様、貴方もお元気そうで何よりです」
「何だか慌ただしくてゴメンね、そっちのリリーナちゃんも無事？　怪我とかしてない？」
「え、えぇ……」
「それは良かった。一応そこら辺も考慮していたから大丈夫だとは思ったけど、もし突入してきたのが原因で傷が付いていたなら、ゼクスさんやどっかのシスコンに怒られる所だったからね。だろ？」
「……やはり、気付いていたのか」
　同意を求めるように向こう側の通路に声を掛けると、そこから黒ずくめの仮面の男と、それに付き従う白い少年の姿が現れた。

ルルーシュことゼロと彼の剣である枢木スザク、嘗て破界事変と再世戦争でＺＥＸＩＳと共に世界中に名を連ねる歴戦の猛者達の出現にデキムは目を見開き、周囲の部下達も驚愕を露わにしている。

ナナリーもリリーナも二人の登場に心底驚いていた。誰もが驚きと戸惑いに苛む中、二人は淡々とした足取りで蒼のカリスマに歩み寄った。

「いやね、ここに来る途中君達を見かけたんだよ。落下している最中だったから一瞬しか見えなかったけど、君の姿は特徴的だからね。直ぐに分かったよ。……なんかここに来るまで時間掛かってたみたいだけど、何かあった？」

「……誰の所為でこうなったと思っている。お前の無茶な行動の所為で私が想定したルートは全て潰され、１からこの基地の図面を引く事になったんだぞ。ヤシマ作戦の時といい、本当に私の邪魔ばかりしているな貴様は」

ヤヴェ、この子めっちゃ怒ってなさる。ワナワナと肩を震わせているゼロに彼等がここに至るまでの苦労を何となく察した蒼のカリスマは、横にいるスザクに助けを求めるが、肩を竦めて苦笑いを浮かべているだけのスザクは、暗にどうしようもないと蒼い仮面の男に返す。どうしたものかと蒼のカリスマは悩むが、今はそれ所ではないと今更ながらデキムの方へ向き直る。

「さて、デキム＝バートン。今回の騒動を引き起こした貴方に幾つか訊ねたい事がある

のですが……宜しいですか？」
「な、なに？」
「貴方の背後にいる者、それを教えて頂きたいのです。まぁ、大体の予想はついているので正確には確証を得たいという所なのですが……」
蒼のカリスマは今回のデキム＝バートンがマリーメイアを利用して起こした騒動、その背後にかかわっているのはクロノなのではないかと推測している。地球連邦、つまりはこの世界の代表組織とも呼べる団体の根っこには、自分が予想している以上に混沌としている部分がある。
先の新世時空振動により更に複数の世界が入り乱れる様になった今の地球連邦は一見まとまっているように見るけれど、その実根本的な部分は謎に包まれている。
恐らくはシャア＝アズナブルがネオ・ジオンにいるのも、そこら辺が関わっているのではないかと予想しているが、コレはあくまで憶測が交わった不確定なモノ、確信を得るにはまだまだ情報が必要な部分が多い。
その為にデキムの持つ情報が必要になってくる。ここでデキムの話を聞いておけば例のコロニーでの騒動とその原因と思われるスフィアについても分かる事が多いからだ。
しかし、そんな蒼のカリスマ――――シュウジの目的とは裏腹に……。

「ふ、ふははは！　バカが！　そう簡単に貴様の思い通りに行くと思うなよ！」
デキムは狂気の笑みを浮かべると、手にした拳銃をこめかみに当てて引き金を引き、自らその命を絶つのだった。
蒼のカリスマ。目の前の魔人の恐ろしさを正確に把握しての行動、トールギスⅡというトレーズの忘れ形見が出て来た為に戦線はほぼ瓦解、目の前にいる魔人がその気になれば魔神を何時でも繰り出せる事から最早逆転の手段も再起する時間もないと察したデキム＝バートンは、最後の足掻きとして目の前の魔人からいなくなる方法で彼に一矢報いた。
血の海に沈むデキム＝バートン、その凄惨な死から多くの者が目を背ける中、シュウジだけは静かにその様を見下ろしていた。

その８２

デキム＝バートンが起こした今回の争乱、本人の自害によって幕を引く事になったこの事件は、表向きは国連が鎮圧したという事になる。Ｚ―ＢＵＬＥの決死の行動が世間の皆さんに知られないという事を考えるとなんとも言い難い気持ちになるが、当人達が納得しているので自分からは何も言う事はない。

既にマリーメイア軍の兵士達の多くは散り散りに逃げている。この分だと、再びマリーメイア軍が決起するという事態は二度と起こらない事だろう。

ナナリーちゃんもリリーナちゃんも駆けつけた国連の人達に保護された事から、彼女達の事も安心してもいいだろう。ルルーシュ君も安堵した様に溜息を吐き出していたし……。

というか、そんなに心配だったのならちゃんと顔合わせて話をすればいいのに、相変わらず融通の利かない子である。まぁ、本人にそんな事言ったら確実に怒られるから口には出さないけどね。

「それではレディ＝アンさん、彼女の事を宜しくお願いします」
「……貴様に言われるまでもない」
　今回の戦いが幕を引き、マリーメイア軍が解散された事によりブリュッセルも解放され、自分達は今、地下施設からどうにか抜け出して地上へと戻っていた。
　気絶し、今も眠るマリーメイアを抱きかかえるアンさんに彼女の事を頼むと、アンさんは当然だと言うように返してくる。
　今回の争乱が終わった事をいち早く駆けつけたアンさん、彼女も国連に身を置いていて多忙な身の筈なのに、こうして誰よりも早く事態の把握に努めている所を目にすると、彼女のトレーズさんに対する忠義の深さが伺える。その忠義に徹底する姿はジェレミアさんを思わせる。
　これ以上自分と話すことはないのか、アンさんはマリーメイアさんと共にその場から去ろうとする。が、何か思う所があるのか、数歩歩いた所でアンさんは一度だけ振り返る。
「蒼のカリスマ、貴様に聞きたい事がある」
「トレーズさんの墓所の座標は此方に。目を通した後は速やかに処分する事をお願いします」
「――――スマン」

渡した紙を受け取るとアンさんはそれだけを口にして、今度こそ振り返る事なく去っていった。彼女の気質からどうして自分がトレーズさんの墓を知ってるのかと厳しい追求を受けるのを覚悟していたが、アッサリ引き下がるアンさんに内心はちょっと拍子抜けしていた。

多分、そこら辺はシュナイゼルから話をある程度聞かされていたのだろう。奴もアンさんと同じ国連に身を置いている人間な訳なのだし、立場は異なってもレディ＝アンさんと繋げるパイプは幾つも持っていそうだ。

アイツもトレーズさんとは友達だったみたいだし、アイツの手際の良さと用意周到さを考えると、既にトレーズさんの墓所を把握していると考えてもいいかもしれない。そこまで知っていながら何故自分に訊かせるという回りくどい事をしたのか。あるいは再世戦争の時に自分が殴った事に対する事への意趣返しなのかは定かではないが……まぁ、自分もレディ＝アンさんには教えるつもりだったし、これはこれで良かったと思う。

「彼女、トレーズさんの娘さんなのでしょう？　友達の娘に一言声を掛けなくてもいいんですか？」

「構わないさ、蒼のカリスマである自分は未だ世界の敵として認識されている。そんな男が彼女に近付いているなんて知られれば、忽ち彼女の立場は危うくなる。こうした方

がベストなのさ」
「貴方のそう言う所、ルルーシュにそっくりですね」
そうかな？　と、背後にいるスザク君に返す。本音を言えば彼女に一言くらい挨拶をしておきたかったが、今言った様に蒼のカリスマは世界の共通する脅威として知られている存在だ。そんなモノが彼女に近しい人間だと知られれば今度こそマリーメイアは世界から居場所を無くしてしまう。
それに、彼も……ルルーシュ君も妹であるナナリーちゃんとは一度も言葉を交わす事はしなかったのだ。年下の彼が我慢している以上、年長者である自分が堪えない訳にも行かないだろう。
まぁ、それも地球至上主義やらクロノやらサイデリアルやらを片付けた後はどうにでもなりそうなのでそれほど深く考えていないが……取り敢えず、今は彼女の無事を喜ぶ事にしよう。
（しっかし、見れば見るほどトレーズさんの面影がある娘だっなぁ、目元とかそっくりだった。二股眉毛でなかった所は残念に思うべきか安堵するべきか……）
今回の争乱もひとまず幕を下ろし、マリーメイアの無事を確認できた事からそんな事を考えていると……。
「さて、俺もそろそろ行くとするかな」

「あら？　どこへ行こうと言うのかしら？」
ゾクリ。背後から聞こえてくる聞き慣れた女性の声に、背筋から言い表し難い悪寒に襲われる。声の正体に心当たりのある俺は、己の心にそんな筈はないと必死に呼び掛けながら、ゆっくりと後ろに振り返ると……。
「はぁい。久しぶりね蒼のカリスマさん。再世戦争の火星での決戦以来かしら？」
――――紅い夜叉がいた。

◇

／月γ日
ハロー、エブリワン。皆元気してたかな？　蒼のカリスマことシュウジ＝シラカワお

兄さんだよー。
のっけからテンション高めな自分、ウザいとは思うがどうせこの日記は自分以外読む者などいないので気にしないでおく。
さて、先のデキム＝バートンの起こした争乱から一夜明け、カレンちゃんの手によって強制的にＺ―ＢＵＬＥに連行される事になった自分は、現在ネェル・アーガマにお邪魔させて貰っております。
いやー、まさか大の男をアイアンクローで持ち上げるなんて、カレンちゃんも成長したね。乙女としての成長は欠片も感じられなかったよ。本人を前にこんな事を言ったら確実にチンツされるから言わないけど。
今回の騒動の一件で自分に色々聞きたい事があるだろうＺ―ＢＵＬＥの面々には、今の自分の機体であるトールギスⅡの修復と補給を条件に、ある程度答える事にした。オットー艦長からは勿体ぶるなと言われたけれど、今自分が持っている情報の殆どは、憶測と推測によるモノが多い不確かなモノだ。デキムが自害した所為で情報を確実なモノに出来なかった以上、不必要な情報は却って彼等を混乱させる事になる。
取り敢えず自分が教えたのはアマルガムを始めとした裏組織の連中の事、並びにネオ・ジオンの動きについてだ。尤も、ネオ・ジオンに関してはシャア＝アズナブルの件以外Ｚ―ＢＵＬＥの持つ情報と似たり寄ったりなので、あまり意味はなさそうだったけ

ど。

取り敢えずシャアとの対談については、アムロさんとカミーユ君にそっと話すだけに留めておいた。こちらも自分個人に関する話だったのであまり意味のあるモノだとは思えないから他の人達には話さなかったけど、アムロさんとカミーユ君はシャア……もといクワトロ大尉とはＵＣＷの頃から戦場を共にしていた仲間であった為、自分とシャアの間で話した大体の会話の内容を二人に伝える事にした。

自分の話を聞いて最初は戸惑っている様子のアムロさんだったが、次第に何か納得した様に頷くと自分に礼を言って、カミーユ君と一緒に去っていった。

カミーユ君の方は何だか悩んでいる様に見えたが……アムロさんも一緒にいるんだ。余計な心配は程々にしておこう。

そうそう、自分がトールギスⅡに乗っていた件なんだけど、どうやらＺ―ＢＵＬＥの中には既に乗り手がトレーズさんではないという事に気付いていた人がいたらしいのだ。

ゼクスさんとヒイロ君、特にこの二人はヤシマ作戦の時からトレーズさんではない事に気付いていた様で、自分がトールギスⅡから降りると納得した様に頷いていた。流石トレーズさんが好敵手と認めた人達、その眼力は大したモノである。

この分だと五飛君と遭遇した際一発で見抜かれそうだ。そうなったときの彼の対応

が非常に怖いが……まぁ、なるようにしかならないだろう。
それでトールギスⅡの修復作業なのだが、どうやらシュナイゼルは自分がこうなる事を見越していたらしく、直ぐにＺ―ＢＵＬＥに向けて物資を送るという通信を送ってきたのだ。
相変わらず手際の良い友人に半分呆れつつも、トールギスⅡの部品が届く合間、新顔の面々と顔を合わせる事にしたのだが……なんと、ここであの青いロボットのパイロットが判明したのだ。
ヒビキ君。彼があの青いロボット――ジェニオンのパイロットだと知った時は、仮面越しでも驚いてしまった。成り行きでジェニオンに乗ることになったと語る彼だが、そういう割には戦う事には積極的で、ジェニオンから降りるという意志はなかった。
一体彼に何があったのだろうか？　思い切って訊ねたい所だが、生憎今の自分は蒼のカリスマだ。切羽詰まっている今の彼に素性を明かしても混乱させてしまうだけだろう。幸い彼には実習生の西条先生が付いているし、彼が落ち着いた所でそれとなく話をしてみようと思う。
あとはインダストリアル７にいた学生のバナージ君とか、聖天使学園のエレメント達とかと顔合わせをしたのだけれど、一体自分のどんな噂を聞いたのか、新顔の子達は殆ど自分を見るなり警戒心を露わにしていた。

カイエン君に至っては後ろに立っていただけで敵意剥き出しにされてしまった。まるで不動さんみたいとか言われたりしたけれど、彼等には自分が人外か何かに見えるのだろうか？　軽くショックである。

相良君にもなんかメッチャ警戒されているし……俺、何かしたかなぁ？　けれどシンジ君は以前ヤシマ作戦の時に出会ったからか割と普通に話してくれた。挙動不審になっていたのは彼に人見知りな所があるからだろう。

で、その後は歓迎という意味を込めてヒビキ君とシミュレーターで軽く模擬戦をしたのだけれど、少しやりすぎてしまったのか凹んでしまったヒビキ君を前に、自分はチョッピリ罪悪感に苛まされてしまった。

いやだってさ、この世界に来てからこうした模擬戦というのは初めてだったんだもの。破界事変や再世戦争の頃は遠巻きから見ている事しかできなかったんだもの、仕方ないよね。

その後はバナージ君やリディ少尉、シン君の相手をしたりと、久し振りに楽しい時間を過ごさせて貰った。しかも全勝、バナージ君はまだ自分の機体に慣れてないから仕方ないとして、まさか軍人であるリディ少尉やシン君にまで勝てるとは思わなかった。

まぁ二人とも最初の模擬戦で華を持たせてくれたのだろう。次は実力で勝てるように頑張ろう。未だトールギスⅡの機体を制御しきれていない部分があるから、今後はそ

こら辺を重点的に鍛えていこうと思う。

……それと最後に、Ｚ―ＢＵＬＥに一時的に参加する事になり、新顔の子達ともある程度話はしたのだが、何故かＡＧさんとは上手く会話が出来ないでいる。

次元商人を名乗るＡＧさん。ジェニオンを生み出した会社の下請けみたいな人（？）だと言われているけれど、何故か自分と遭遇する度に慌てて逃げていくのだ。

人見知り、という訳ではなさそうだが、何故自分にだけああもよそよそしいのか。初めて彼のお店に伺った際は普通に対応して貰えたのに……何故だ。

◇

「いやはや、まさかかの有名な蒼のカリスマ様とこうしてお近づきになれるとは、このＡＧ感激の極みです！」
「買い被りですよ。所詮私はテロリスト、褒められる様な事はしていません」
「世界の半分の戦力を瞬殺しておいてこの慎ましさ！　流石は世界最強のボッチ！　そこに痺れる憧れるぅ！」
「……なにやら聞き捨てならない台詞がでてきましたが、まぁいいでしょう。で、この台詞を口にすればいいのですね？」
「はい！　あの蒼のカリスマに宣伝してもらえれば売れ行きも鰻登りというものです！
それでは今日も張り切って――――」

「――――ククククク」
「っ!?」

「ＡＧさん、と言いましたか。今回は我が半身の不手際の為見逃しますが……もし、今後同じ事をすれば」
「あ、アババババババ……」
「分かってますね？」
「ひゃ、ひゃい！」
「アナタの目的も、正体も彼等には伏せておきます。今は同じ部隊に所属する仲間なのです。仲良くとはいいませんが、ある程度協力していきましょう。……ねぇ？」
「ひ、ひぃぃぃっ!!」
「ククククク……」

その８３

／月β日

Ｚ―ＢＬＵＥでお世話になって二日、仮メンバーとして彼等と行動を共にしている自分は、今日も彼等と同じ所で時間を過ごしていた。

シュナイゼルの伝手からトールギスⅡの部品を受け取り、機体整備及び調整をすることで、トールギスⅡは以前と同じ姿を取り戻し、無事戦闘にも復帰出来るようになった。地球至上主義を掲げる連中の目もあっただろうに……それでもシュナイゼルの変わらない手回しの早さには、最早感心を通り越して呆れるばかりである。まぁ、感謝はしてるけどね。

その後、トールギスⅡの完全復活を果たした自分は整備施設を貸してくれたＺ―ＢＬＵＥに報いる為にアレコレ手伝ったりしていた。

例えば生活班の皆さんの手伝い、カレンちゃんやアムロさん達戦闘員を生活で支えるには中々大変で、毎日栄養面に気を遣っていなければならない。更に言えば万年人手不足であるこの部隊は常に生活面では脆い部分があり、時には戦闘員である彼等まで手伝

う事がある。
戦いと生活、そのどちらも大変な事でありどちらも疎かには出来ない重要な部分だ。中には食べ盛りであるワッ太君や正太郎君もいる。そんな彼等を少しでも支える為に自分はあらゆる所から手助けをする事にした。
まずは料理に関する事だ。食事というモノは生活の基本となる所、食材を無駄に余す事なく決して手を抜いてはいけないとオードリーちゃんやクェスちゃんに簡単な料理を教えたりしていた。
二人とも最初はぎこちなかったけれど、徐々に慣れてきたのか最後の方は割と楽しそうにしていた。今回は簡単な味噌汁を教えたけれど、次回からはもう少し難易度を上げてもいいかもしれない。
次にワッ太君や正太郎君と言った学生組にも勉強を見ていたりした。正太郎君は優等生と言われていただけに勉強も出来て宿題もあっという間に終わらせる事が出来たが、問題はワッ太君の方だった。
彼は社長であると同時に遊びたい盛りの小学生だ。勉強に対する意気込みが足りないと周囲の大人から注意を受けたりしていたが、ぶっちゃけそれは間違いである。
勉強したくないというのは即ち勉強に興味が持てていないという事、勉強に興味を持てないという事は即ち教える側に問題があるという事。教師というのは何もただ教え

る事だけが仕事ではないのだ。

今日は取り敢えずワッ太君には、知るという楽しさを知って貰う事にした。彼の興味を引くもの、それらを題材にした勉強会は我ながら上手くやれたと思う。

その後、勉強に対して面白さを見出したワッ太君は、自分やスズネ先生に教えて貰いながら問題を解いていき、時間こそは掛かったモノのワッ太君は遂に一人で宿題をやり遂げる事に成功した。

この時ワッ太君の会社の専務である梅麻呂さんにお礼を言われたけれど、こちらにとっても楽しい時間だった為、その必要はないと返した。

この時に一緒だったシンジ君とも一緒の時間を過ごした事で少し仲良くなれたと思う。未だ自分には挙動不審な所があるけれど、次の機会ではもっと打ち解けていると思う。……時折、彼の保護者であるミサトさんからの視線がキツかったけど、まぁ仮面を被っている奴が教師の真似事をしても警戒心を煽るだけだろう。

その理由もあってか高校生組――というより、新メンバーの子達とは全くと言って良いほど親身に慣れなかった。勉強自体は話を聞いてくれたけどエレメントの子達はサザンカちゃん以外全然相手にしてくれなかったし、相良君に至っては近付いただけで銃を向けられてしまった。この時は周りに子供達がいたので無力化させて貰ったが、それが原因で更に警戒心を抱かれてしまった。

けど、ユノハちゃんとは少しばかりお話が出来た事から決して無駄な時間ではなかった筈だ。彼女は姿を消していた自分に気付かれた事を酷く驚いていたが、姿を消すだけで見つからないという結果に繋がると思うのは早計だと教えてあげた。

カレンちゃんも学校には通えていても再世戦争の頃は殆ど勉強はしていなかったみたいだし、コレを機に単位を取り戻せる様にしてほしい所である。

中々有意義な時間を過ごせて自分も満足していたのだが、何故かスズネ先生は最初の時の様な元気さはなくなり、勉強会が終わる頃には隅でうずくまっていた。

具合でも悪いのだろうか？　声を掛けようにも何故かカレンちゃんやアルト君達からはやめておけと止められてしまった。今も部屋で引きこもっているみたいだし……スズネ先生、大丈夫だろうか？

さて、そんな訳で午前の部だけで中々濃かったが、午後はそれ以上に濃密な時間を過ごせた。

トールギスⅡの性能を完全に引き出す為にシミュレーターによる模擬戦闘を繰り返していたのだが、やはりグランゾンとは勝手が違う所為か、昨日から中々白星を挙げられずにいた。

相手はνガンダム、アムロさんを相手にしたデータ上の戦闘だが、いつも後一歩の所で逆転負けしてしまっている。アムロさんが言うには何でも自分の操縦が少しばかり

問題で機体を振り回している節があるらしく、もう少し機体性能を把握して動かした方が良いというアドバイスを受けた。

振り回されているのではなく振り回している。やはりグランゾンばかりに頼っていた所為で操縦に変な癖でも付いてしまっているのだろうか？　いや、グランゾンとトールギスⅡとはそもそも機体設計から違うから仕方がないと思うんだけどね。

とはいえ、言い訳ばかりしていても仕方ないし、折角アムロさんが貴重な時間を割いて自分にアドバイスをくれたのだから、コレを機に色々と試してみた。

機体性能を正確に把握するには、より機体を知る必要がある。整備員の視点からでは得られないパイロットとしての知識を身につける為に、自分はこの時から様々な機体に乗ってシミュレーターを開始した。

キリコさんが乗るＡＴを始め、カレンちゃんの紅蓮、アルト君達のＶＦシリーズ、シン君やデュオ君達のガンダムといった風に本人達に無理を言って許可を貰い、シミュレーターで使わせて貰った。

特にミスリルのＡＳに乗せて貰うのは苦労した。最新のＡＳなだけあって自分の様な不審者に乗らせるのは気が引けるらしく、マオ曹長は頑なに頷いてくれなかった。まぁ、自分の事を考えれば仕方ないけどね。

けど、それも自分の事は機体内にある監視カメラで監視するという事とデータを取ら

せて貰うという条件で許可を得られた。流石にダンクーガやアクエリオン、ユニコーンを始めとした特殊な素質を必要とする機体、ヒビキ君のジェニオンといった専用機には乗れなかったけれど、大抵の機体にはこれで乗れたと思う。

後は竜馬さんのブラックゲッター位なんだけど……竜馬さん顔が怖いから中々声を掛けにくいんだよね。破界事変の時のトラウマが蘇って来そうでどうにも慣れない？

ＥＶＡに至ってはもうロボットかどうかすら分からない位だし……つか、あれ見る限りロボットじゃなくね？　みんな気にしていない様だけど、何故か気になるんだよね。博士の因子が高まりそこら辺の記憶がどうもあやふやになっている。多分、前の頃の俺はＥＶＡについて何かしら知っていたんだろう。

ともあれ、これだけの機体を操作した事により、メカニックに関してはかなり強くなれたのではないかと思う。特に、ゼクスさんのトールギスⅢに乗れた事で、トールギスⅡの癖もかなり掴めたと思う。

その所為でだいぶ負け越してしまったけど……まぁいいだろう。次は負けないよう精進していこうと思う。

／月Ω日

遂に、この時がやってきた。今日一日を振り返っての反応はまさにコレだった。

ネオ・ジオンの総帥、シャア＝アズナブルが地球連邦に対し宣戦布告を行ったのだ。嘗ての仲間だった人からの戦争宣言に、アムロさんやカミーユ君は動揺を隠しきれずにいた。他の面々も戸惑っているが、長いつき合いだった二人にはかなり重い現実になる事だろう。

相変わらずシャアの思惑は計れないけれど、自分にああまで言ってグランゾンの使用を止めたのだ。きっと何かしらの深い事情があるのだろう。……尤も、ネオ・ジオンがリモネシアに攻撃を加える様な事をすれば、そんな約束は速攻破棄させて貰うけどね。

そんな訳でＺ―ＢＬＵＥはアムロさんの判断の下で行動する事になる。一年戦争の頃からシャアとの因縁が続くアムロさんが出した結論は、ネオ・ジオンの行動に注意しつつ慎重に行動しようという事だった。

どうやらアムロさんは自分の話を吟味した上でこの選択を取ったらしく、その表情も宣戦布告の時よりも幾分か晴れていた。恐らくはシャアの事を信じる気になっているのだろう。

そんなアムロさんの判断に基づき、地球で待機する事になったＺ―ＢＬＵＥだが、ここで自分はこの部隊とは別れる事を艦長達に伝えた。

今朝方、トールギスⅡにシュナイゼルから通信が届いて来たのだ。それも結構物騒な話らしく、どうやら地球至上主義の連中がＺ―ＢＬＵＥに余計なチャチャを入れようと

しているのだとか。
確か、サイガス准将だったか？　そいつが先のデキムが起こした争乱の報告で自分の姿を目撃し、Ｚ―ＢＬＵＥに合流したという情報を得ているらしく、今回も査察という名目の下、かなり強引な手段を用いてきたらしいのだ。
自分の存在が連中に知られればかなり面倒な事になる。それらの事をジェフリー艦長に伝えた自分は、明日の朝にでもこの部隊から去る事にした。状況からして何だか破界事変の時を思い出す。
ヒビキ君とはもっとちゃんと話をしておきたかったし、次に会うときは自分の素性を明かしてもいいのかもしれない。

その８４

@月ｏ（、ω、＊）ｏ日

Ｚ―ＢＬＵＥの下から離れて数日、取り敢えず宇宙で情報収集を試みようとした俺は、トールギスⅡでネオ・ジオンの動きを探るべく、衛星型コロニーのパラオに潜入していた。

本当ならネオ・ジオンの総帥たるシャアに直接情報を聞き出したかったが、相手は組織のトップ。蒼のカリスマである自分が近付いてはネオ・ジオンに余計な刺激を与える事になってしまう為、断念せざるを得なかった。

デキム＝バートンが自決した今、クロノに関する情報を自分が知る中で一番持っていそうな人物がシャアなのだが、今述べた通りシャアの周りには護衛で固められており、以前の様に待ち構えていた形で会わないと話をする事すら困難の様だ。

しかも、彼の隣には必ずと言っていいほどハマーンさんがいるしね。新世時空振動の直後、何かの雑誌や記事で見たことがあるんだけど、いやぁ凄いね。女帝という言葉が

あそこまで似合うのは彼女位のモノではないだろうか？　覇気の強さもコーネリア元皇女殿下以上だし、真っ正面から向き合ったら胃がキリキリしてきそうである。

そんな彼女が常にシャアの隣にいるのではシャアに会いに行くことは叶わない。つーか、彼女に出会したら話し合い処ではなくなりそうだ。つまり、この蒼のカリスマはハマーンという女性に対して非常に苦手意識を持っているのだ。ビビっているともいう。

いやだってさ、彼女の目つきメッチャ怖いんだもの。そこらのチンピラでも震え上がりそうな眼だし、常に彼女の視線を受けているシャアの事を考えると……ちょっと同情してしまう。

そんな訳で直接シャアに訊ねる事はせず、地道にネオ・ジオンの勢力下であるここパラオでそれとなく地道に情報収集を行っていたのだが、やはりここの人達の殆どが緊張と不安でピリピリしていた。

無理もない。自分達のトップが地球連邦に宣戦布告をした以上、パラオにいる彼等だっていつ連邦から攻撃を受けるのか分からないのだ。加えてコロニーは生活するには過酷な環境だ。ミサイル一つで甚大な被害を受けてしまう可能性だってある彼等からすれば、シャアが宣戦布告したその日から戦場のど真ん中にいるような心境なのだろう。

そんな、誰もが緊張に包まれる状態では満足な情報なんて得られる筈もなく、訊ねた彼等に自分が連邦政府の人間では無い事をアピールするだけで精一杯だった。

何とか自分は無関係という事に納得してくれたが、ここに長居する事は出来なくなりそうだ。これ以上余計な疑問疑惑を生まない為にも、今からこのパラオから出て行こうと思う。

……それにしても、ジオンという光か。自分はＵＣＷの人間でも宇宙移民の人間でもないから分からないけど、きっとここにいる人達にとってジオンはとても大事なモノなのだろう。助け合い、譲り合い、分かち合う、そうする事で生きてきた宇宙移民の人達にとってジオンは掛け替えの無い存在なのだろうな。

そんな彼等にとって連邦の地球至上主義の連中は天敵、シャアが連邦に対して敵対姿勢を取ったのも何となく理解出来る気がする。そこら辺の事情を考慮したからアムロさんはあの場ですぐに答えを出さなかったのだろう。

嘗て一緒に戦った戦友。その想いがあるからこそ信じてみたい彼の気持ちがあるような気がするから……。

アムロさんとシャア、この二人に待っている結末には果たしてどんな未来が待ち受けているのだろう。

@月＊日

宇宙側での情報はひとまず置いて、取り敢えず地球に戻る事にした自分だが……この日、奇妙な連中と遭遇した。蝙蝠を模した自律兵器とミイラみたいな人型の無人兵器、後から調べて最近世間を賑わせていた〝ＵＧ〟なる連中と遭遇した自分は、向こうから仕掛けてきた事から応戦、撃退した。

戦っている最中に向こうの指揮官らしき機体が新たに出てきたけど……まさか、女性が出てくるとは思わなかった。音声通信のみでの会話だったし、直接顔を合わせた訳ではないからなんとも言えないけど、声の高さからいって女性で間違いないと思う。

女性と戦う事に一瞬戸惑ってしまうけども、戦いはその一瞬で命を落とす事もあるから一切の容赦を捨ててその指揮官機と戦ったのだけれども、途中から現れた宇宙魔王軍の乱入により戦場は掻き乱され、ＵＧとの戦いは中断、魔王軍の相手を自分に放り投げるや否やそそくさと去っていってしまった。

その後の宇宙魔王軍との戦いも何とか退け、どうにか生き残る事に成功したけれど、指揮官の男が撤退際に不穏な事を口にしていた。

『次は宇宙魔王自らが相手になる』連中の親玉がそろそろ出張ってくるという情報に憂鬱になるが、相手がその気になっているのなら相手をするしかない。名前からして相当ヤバい相手だろうし、そうなったらトールギスⅡでは少々荷が重くなるだろう。

今回の戦いでもかなりの弾薬とかエネルギー、その他諸々激しく消費させてしまったし、オーバーホールを兼ねてそろそろこの機体もシュナイゼルに預け返した方が良いかもしれない。折角アムロさんのアドバイスで機体の扱い方を学んだと言うのに、まるで活かしていない自分の未熟が恨めしい。

勿論、もっと一緒にこの機体で戦っていきたい気持ちもある。だけどグランゾンとは違いこの機体は自己修復機能なんて搭載されていないのだ。自分の無茶で破壊する訳にはいかないし、何よりこの機体はトレーズさんの愛機だ。借り物の機体を自分の我が侭に付き合わせる訳にはいかない。地球に帰ったらすぐにシュナイゼルに預ける事にしようと思う。

そうなったらシャアの奴が色々思い悩みそうだけど……まぁ、そこら辺はどうだっていいだろう。そもそも奴の思惑に乗る必要は無いのだ。自分は自分のやりたいように動くことにしようと思う。

尤も、地球至上主義の連中とクロノ、これらの関係性がハッキリするまであまり無鉄砲な行動は出来ないけどね。

サイデリアルに関する情報もいい加減集めたい所だし、さっきのＵＧや宇宙魔王の事も頭に置いておく必要もある。……つーか、何故その宇宙魔王というのは自分の事を狙ってくるのだろうか？　もしかして、以前螺旋王の時のようにグランゾンに興味を

持っているとか？
俺の自意識過剰な考え……とかじゃないよね？

◇

とある洋風居酒屋店、所謂バーと呼ばれるその店に二人の男女が席を並べていた。洒落た店、それなのに二人しか客のいない店、けれど二人はそんな事など気にも留めずに報告らしい会話を続けていた。
「そうか、奴と戦ったのか」
「あぁ、本来の機体ではないのに凄まじい強さだった。単騎で我らと、そして宇宙の魔王の手先を相手に奮闘するなど、噂に違わない実力者だったよ」
「おっかないねぇ。ま、だからといって俺達が負ける事はないんだけどな」

女性と同じ、軍人の格好をしていながら、酒に溺れる男はグラスを傾けて酒気に酔う。頬は朱く染まり、目尻はトロンと下がっているのにその瞳の奥にある感情は色濃く残っていた。

「魔と恐れられる怪物は天によって滅ぼされる。それは決して覆られない運命の様なモノだ」

空になったグラスを見つめ、男はその口元を厭らしく歪め、不敵に笑みを漏らすのだった。

その８５

@月ν日

サイガス准将の横槍から逃れる為に少し早いけどＺ―ＢＬＵＥと別れ、地球に降りる事になった俺は、シュナイゼルにトールギスⅡを預ける為、彼が指定した座標地点まで向かった。先日ＵＧと宇宙魔王の軍団と戦ったばかりでそんなに時間も経っていないのに、此方が要請した途端瞬く間に受け取り準備を済ませて、合流地点まで用意するという手際の良さは流石と言える事だろう。

最初は自分の報告に対して余りにも返答が早かった為に戸惑ったのだが、どうやらこの時既にナナリーちゃんの周辺警護について編成の見直しを行い、トールギスⅡの回収準備を進めていたというのだ。

どうやら奴は自分がトールギスⅡに無理をさせる事を予め予想していたらしく、通信で顔を合わせた際にそろそろ来る頃合いだったと口にしていた。

ナナリーちゃんとリリーナちゃんの誘拐、及びデキム＝バートンの起こした騒動に関しても自分やＺ―ＢＬＵＥなら必ず片を付けると思っていたようで、戦闘が終了したの

を見計らって一気に片付けてしまったのだという。そう語るアイツの表情は終始ドヤ顔のままだった。

で、その後シュナイゼルが指定してきた座標に向かった。場所は亜熱帯にあるとある無人島、リモネシア及びオーブに距離的に近いその場所で待ちかまえていたのは例の如くジェレミアさんで、クソ暑い所だというのに直立不動で自分の到着を待っていてくれていた。

相変わらずの忠義っぷりに感動する思いだが、彼から告げられる「今後こうした手助けは出来なくなるかもしれない」という言葉に、俺は少なからず衝撃を受けた。

どうやら地球至上主義、即ちサイガス准将の奴がシュナイゼルの自分に対する援助に何かしら気付き始めているらしく、最近は監視の目が厳しい為、こう言った手助けがし辛くなっているという。

直接会った訳ではないから何とも言えないが、サイガス准将というのはそこまで有能な人間なのだろうか。こう言ってはなんだが、シュナイゼルは相手に自分の意図を気付かせない事に関しては誰よりも長けている人間だ。アイツが下手を打つとも思えないし、やっぱりサイガス准将の……いや、地球至上主義の後ろには、アマルガムと同様クロノの連中が控えているのかもしれない。

そんな自分の推測に対しジェレミアさんはその考えは間違っていないと肯定してく

れた。どうやらシュナイゼルも独自にクロノに付いて調べているらしく、色々動いているようだ。相変わらず行動力のある友人に頼もしさを感じるが、相手は未だその全貌を明らかにしていない未知なる連中だ。あまり無茶はしないで欲しいというのが自分の本音である。

尤も、そんなヘマをするような人間じゃないからそんなに心配していないんだけどね、アイツの事だから、きっとクロノに関する重要な情報を集めて自分を驚かせてくれるのだろう。

そんな訳で、ジェレミアさんからシュナイゼルに関する近況を聞いてトールギスⅡを預けた自分は再びグランゾンに乗り込み、情報収集の為に世界を巡る事にするのだった。

そろそろ手持ちの情報では考えが纏まり辛くなってきた。以前遭遇したＵＧやら宇宙魔王の情報を得たいし、何か切っ掛けが欲しい所である。

……所で、どうでもいい話なのだけれど、トールギスⅡをジェレミアさんに渡す際、どうして彼は自分の身体データが欲しいと言ったのだろうか？　何でもロイドさんを始めとした博士号を持つ人達が欲しがっているとの事だけど、正直嫌な予感しかしない。

悪い人達ではないんだけど、皆アクが強い人たちだからなぁ。変な事にならなきゃいいけど。

@月μ日

地球至上主義とクロノ、取り敢えずこの二つは間違いなく繋がっている。先のジェレミアさんとの会話でこの確信を得られた自分は、再びグランゾンと共に世界の諸国を巡って旅をしていた。

と言っても、グランゾンを直接呼び出したりはせず、身の危険が迫ってくる時以外は主に自分一人で行動してるんだけどね。地球至上主義とクロノの繋がりがあると確信した自分は今度はクロノの目的を探ろうとしているのだけれど、相変わらずこれといった実のある情報は得られず、今日まで空振りの日々を送っていた。

個人的にはアマルガム辺りがクロノに繋がっていると思っているんだけど……なかなか尻尾は掴めていない。アマルガムという組織自体が主体性を持たない特殊な組織な為か、クロノ同様にその全貌は明らかにされていない。

変わりに……というのはおかしな話だが、この間妙な奴と遭遇し、済し崩し的に戦う事になった。

〝ミカゲ〟自らを愛の敗北者にして最後の堕天翅と自称するソイツは、自分を見かけるや否や、街中だというのに有無を言わさずいきなり襲いかかってきたのだ。水色の骸骨？　みたいな機動兵器を使って攻撃してきたからグランゾンで迎撃してこれらを撃

破したのだが、一体俺が何をしたというのか、無傷なグランゾンと自分を見て不機嫌さを露わにしていた。

いきなり攻撃してきておいていざ迎撃したら舌打ちしてくるとか、マジ自分勝手過ぎるだろ。堕天翅というのは皆ああいう連中なのだろうか？　……いや、あの様子だとどちらかと言えばグランゾンの方に敵意が向いていたな。深淵者とか、何それ怖い。確かにグランゾンはボス級の力と風貌を兼ね備えた機体だけど、深淵者なんて言われたのは初めてだぞ。

加えてこのグランゾンはシュウ博士から頂いたモノ、あまりそんな無碍にするような言い方は謹んで貰いたい所である。

そんな訳でグランゾンを久し振りに操縦した自分は、ブランクを感じる事なく堕天翅の軍勢を撃退した。しかもトールギスⅡやＺ―ＢＬＵＥで様々な機体に乗って操縦技術について色々学んだ所為か、今まで以上に上手く扱う事に成功した。

特にワームスマッシャーに関しては、殆どロスタイム無しに撃ち続ける事に成功した。これまでは一度撃ったら数秒時間を有していたのに、今では殆ど間を置かずに同時一斉射撃が連続して行える様になった。

同時なのに連続とかおかしい事を言っているかもしれないが、そうとしか表現出来ないのでコレで良しとする。おかげで巻き込まれた街に人的被害は出なかったし、街自体

にも攻撃は殆ど通さずあの青髑髏を倒す事が出来た。
やはり、ドラグーン使いであるキラ君のデータを参考にして良かった。彼のお陰で街は守れたといっても過言ではない。まだＺ―ＢＬＵＥには合流していなかったけど、今度顔を合わせたらそれとなくお礼を言っておこうと思う。

◇

「ふー、こんな所か。時間も結構経ってるし、今日の所はコレで終わりにしとこうかな」
乾燥し、しょぼしょぼしてきた目を瞼越しに指で撫で、今日はコレで終わろうとシュウジは席から立つ。

今彼がいるのは人のいないビジネスホテル。低価格な料金の割には居心地が良く、自販機の種類も多い。久し振りに当たりを引いたと喜びながらシュウジはベッドに横になる。

明日も早い。早い所クロノやサイデリアルの情報を集めて今地球に降りかかろうとする呪いを解かなければならない。決意を新たにしてシュウジが眠りにつこうとした……その時、唐突に扉の方からノックの音が聞こえてきた。

こんな時間に一体誰が。心当たりのない者のノック音に瞬間的に警戒心を高めたシュウジは恐る恐る扉に近付き、扉の向こう側にいる人物を覗き穴越しで見つめると……。

「こんにちは、僕は渚カヲル。君がシュウジ＝シラカワ君で間違いないかな？」

「出来れば早急にここを開けて欲しい。何分、けが人がいるものでな」

銀髪と赤目が特徴的な少年と恩人と同じ名字を持つ褐色肌のおっさんが、それぞれ不敵な微笑みを浮かべて佇んでいた。

その８６

†月（っ，ω、ｃ）日

梅雨の時季も過ぎ、最近は気温も上がり、この世界に来て二度めの夏も近く差し掛かってきた頃、現在自分と元怪我人だったジン君はオーブと呼ばれる国にやってきていた。

先日ビジネスホテルにＺＥＮさんとカヲル君が訪れた際には酷い怪我人を連れてきて何事かと思ったが、どうやらこのジン君、今この世界に侵略しに来ているアブダクターの構成員らしく、訳あって今はアブダクターから抜けているとの事。その際に連中のボスらしき奴から報復の攻撃を受けてしまい、あわや命の危機にまで陥っていたのだという。

そこまで容態が酷いのなら素直に病院に行けと言いたかったが、今述べた通りジン君は敵組織から抜け出してきたばかりの手負いの人間。公的施設に入れておいたら瞬く間に連中の標的に晒されてしまい、その際には多くの無関係の人間を巻き込んでしまうだろう。

そこで彼が一人でも行動出来る位の体力が回復する合間、自分の所で預かって欲しいというのだ。まぁ、確かに自分は一人で行動する事が多いし、ＺＥＮさんには不動繋がりでＧＥＮさんに世話になった事があったから頼みは出来るだけ聞きたい所だが、今自分は宇宙魔王やら先のミカゲとかから狙われているからちょっと危ない状況なんだよね。そんな奴らから目を逃れる為には一時本格的に身を潜める必要がある。

唯でさえ情報収集で遅れが出ているのにこれ以上行動を遅延させる訳には行かない。どうするべきか決められず、悩んでいた自分に決断を促したのはカヲル君だった。

彼が言うには、どうやらクロノは地球至上主義だけでなく、様々な裏組織と繋がっているらしく、数百年も前から世襲制で地球の歴史を裏で操っているらしいのだ。

まぁ、ここまでは自分も予想していた事だからさほど動揺してはいなかったのだが、次にＺＥＮさんから語られる真実に、自分は内心驚きと戸惑いに満ちていた。

クロノという組織はＡＤＷとＵＣＷ、即ち新世時空振動が起こる前の別々の世界でそれぞれ暗躍していたらしく、裏で糸を引いていたらしいのだ。自分が予想していたよりも遙かに大きい規模の組織に唖然となるが、逆にそれだけ規模が大きいと奴らの目的が何となく見えてくる気がする。

クロノが現在一番手を貸しているのは地球至上主義の連中だ。コロニーを敵視している彼等と繋がっているという事は、少なくともクロノは地球至上主義の掲げる思想に

共感しているという事に他ならない。もしコロニーと敵対する意志がクロノにあるのだとすれば、奴等の存在を知るシャア＝アズナブルが地球連邦に宣戦布告した理由も頷ける。

カヲル君から教えて貰った情報のお陰で大分纏まってきた気がする。彼にお礼を述べると彼はにこやかに微笑み、「彼の事を頼んだよ」とだけ言って、ＺＥＮさん共々部屋を後にした。

彼等のお陰で有意義な情報を得られた自分は二人の要望に応えるべく彼の看病を行った。一度死にかけた所為もあって予断が許されない日々が続いたが、三日目には峠を越えたらしく、満身創痍ながらも意識を回復させていた。

最初ジン君は酷く自分を警戒し、敵対姿勢を取っていたけれど、自分の絶え間ない説得と敵対姿勢を取る度に放った良い子眠眠拳（物理）のお陰で敵意はなくなり、最終的には素直に聞き入れてくれるようになった。

取り敢えず自分が敵では無い事は伝わり、意識も回復してある程度動けるようになった彼と共にオーブへ向かい、改めてクロノに関する情報収集を行った。

世界の垣根を越えて存在する組織クロノ、そこまでの大規模な組織を維持するには背後に相当大きな存在が関与している可能性が高い。ＵＣＷからの出身であるオーブの人々に何らかの情報を聞き出せないかと期待して向かった所……面白い話が聞けた。

〝ロゴス〟ＵＣＷにまつわる武器商人達の組織、死の商人たる彼等を母体にした大規模組織〝ブルーコスモス〟青き清浄なる世界の為という思想を掲げる彼等の目的は、当時プラントに住むコーディネーター達の殲滅にあった。

コイツ等の思想は地球至上主義の連中と非常によく似ている。その考え方はまるで、人類が宇宙に進出する事を拒んでいるようだ。

恐らくロゴスにもクロノが関わっているのだろう。まだオーブの人達から聞いた話を推測程度で纏めただけだが、自分はこの考えでほぼ間違いないと睨んでいる。

確証を得るにはもう少しこの件に深くかかわり合いのある人間と話をした方がいいかもしれない。ジン君の件もそろそろどうにかしないといけないし、明日辺り色々決めた方がいいかもしれない。

◇

「……ふぅ、取り敢えず午前の部はこんな所かな」
「お疲れ様ですカガリ様。コーヒーをお持ちしましょうか？　ちょうど良い豆が手に入りましたので」
「そうだな。偶には気分転換も必要か、頼むよ」
部下に書類の束を渡し、一息つくと共にカガリは背もたれ付きの椅子に寄りかかる。父の後を継いで今の席に座る事になった彼女だが、流石尊敬していた父の職務だけあって、連日激務に追われていた。
けれど、ここで嘆く訳にも行かない。愛すべき祖国を守る為、これからも自分は精進していかなければならない。オーブの理念と理想、そしてこの国の民を守る為に妥協する事は許されない。自らやる気を立たせて再び職務に手を着けようとした時――――唐突に扉からノックが聞こえてきた。
部下が戻ってきたのだろうか？　自慢げに話していたコーヒーが飲める事をちゃっかり楽しみにしていたカガリは、扉の向こう側にいるだろう部下に対し、気軽な声でどうぞと部屋に入るよう促した。
キィッと木製特有の音を立てて開かれた扉の向こうに佇む人物を目の当たりにしたカガリは、次の瞬間……驚愕に目を見開く事になる。
「お、お前は!?」

「その様子だと、私の事はご存じの様ですね。カガリ＝ユラ＝アスハ様、お初にお目にかかります。私は蒼のカリスマ。アナタに聞きたい事があり、この場に参上致しました」
　破界事変、再世戦争に渡ってその猛威と暴威を奮ったとされる蒼き魔人蒼のカリスマ。ここまでの警備をモノともせずに潜り抜けてきた卓越した潜伏技能に嘗てゲリラ兵だったカガリは戦慄し、息を呑んだ。
　これが魔人の実力か。音も無しに現れる魔人の出現に内心で動揺するも、国の代表として凛とした態度を崩さないカガリは強気の姿勢のまま魔人を見据える。
「……お前のような奴が、一介の小娘相手に何の用だ？」
「そう警戒する必要はありませんよ。先程も言いましたがここに来たのはアナタに訊ねたい事があるだけです。答えてくだされば すぐにでもここから退散させて頂きますよ」
　クククと仮面の奥で静かに嗤う魔人に言い難い悪寒に襲われる。答えなければどうなるか分からない、不安と恐怖に駆られながら、それでもカガリは屈する事なく蒼のカリスマになんだと訊ねた。
「――――ロゴス、そしてブルーコスモス。これら二つの組織についてアナタが知り得る限りの事を話して欲しいのです」
「なん、だと？」
　魔人から聞かされるその組織名にカガリの思考は停止する。何故今更になってソレ

が出てくるのか、理解出来ないとカガリは蒼のカリスマに訊ね返そうとするが……。

「申し訳ありませんが、余計な詮索は無用に願います。……アナタも余計な火種はこの国に持ち込みたくはないでしょう？」

仮面の奥から見えたギラリと光る眼光にカガリは何も言えなくなった。

◇

†月§日

ビンゴ。昨日のアスハ代表の話を聞いてロゴスとクロノの関連性を確信出来た俺は、現在とある無人島にてこれまで集まった情報を纏めていた。

ブルーコスモスというロゴスを母体にした組織は、やはりプラントや当時ジオンだった頃の宇宙移民の人々に対し、弾圧と言って良い程の攻撃を行っていたのだという。遺

伝子を意図的に改造し、人工的に生み出されたコーディネーター達を宇宙の化け物と蔑んだブルーコスモス。過激な派閥で知られる地球至上主義の連中もこれに似た思想を持っており、クロノの指示の下で動いている。

恐らくはブルーコスモスも地球至上主義も、クロノの手によって生み出された尖兵なのだろう。同じ思想を植え付けられた彼等は地球を第一として、宇宙に進出している彼等を異常な程に疎んでいる。

いくら並行世界は無限に存在しているといってもここまで似た組織と思想を持っているのは天文学的数値に表しても有り得ない。ここまで来ると最早意図的にそうしているとしか思えない。

そもそも何故クロノは宇宙移民に対してこうも忌み嫌うのだろう。アレコレ推測やら憶測を立てて自分なりに考えてみたのだが、こればかりはサッパリ見当が付かなかった。

敢えて推測を立ててみるのなら、理由はＺ―ＢＬＵＥにいるアムロさんなカミーユ君の様なニュータイプの存在が鍵となっている事だろうか。ＡＤＷにもイオリア＝シュヘンベルグが提唱したイノベイターやイノベイドといった宇宙に適応した人間が、事実イノベイターには刹那君が覚醒している事から強ち間違いではない……と、思いたい。

これらを統合して考えを纏めてみると……もしかしたらクロノは人間が次の段階、即

ち進化に至る事を拒もうとしているのだろうか？　理由とか目的とか未だ分からない事が多いが、コーディネーター達も謂わば人工的に進化した種族だと考えれば多少は辻褄は合う。

だとするなら、クロノを作り上げた連中は相当自己中心的な考えを持った連中なのかもしれない。何せ自分たちの都合で地球人類を監視しようというのだ。その自分勝手さはまさに自分か忌み嫌う神みたいなモノ、その傲慢さはあのグレイスやリボンズの比ではない。

……と、まぁ実際は自分の妄想に等しい推測から成り立つ推論だからあまり当てには出来ないが、一応これである程度の情報のマトメは出来た事だと思う。後はエルガン氏から教えて貰ったサイデリアルなる単語とクロノの関連性を導き出すだけである。

そうそう、ＺＥＮさんとカヲル君から預かったジン君は現在オーブにて安静にして貰っている。あそこはリモネシアに似て穏やかな気候に恵まれ、静養するには最適な所、きっと傷の治りにも良い方向へ作用してくれるだろう。あそこにはシュナイゼルの奴も時々視察に訪れるって言うし、縁があればアイツに拾われる事もあり得そうだ。

そんな訳で再び一人で行動しているのだが次の行動指針を決める為にもう一つ頭を捻る必要が――――

◇

「うるっさいな～。今大事な所を書いてるんだから静かにしろよ。一体どこの艦――――って、なんかコレ、デジャヴ？」

日記を書き綴っている最中聞こえてくる戦艦の航空音、どこかで覚えのある既視感に首を傾ける彼の視界に入り込んできたのは、先日別れたばかりのＺ―ＢＬＵＥの戦艦達の姿だった。

どうして彼等がここにいるのか、そんな疑問が頭に浮かんだ時、突如、彼等を呑み込むように光が輝き出した。

「何コレまぶしっ!?」

目が眩む閃光に視界が奪われたシュウジは成す術なく光へと呑み込まれ……次の瞬間にはＺ―ＢＬＵＥ共々、この世界から姿を消していた。

その８７

？月？日

トンネルを潜り抜けたら雪国だった。元いた世界ではよく耳にするフレーズだが、光に包まれたら見知らぬ街に佇んでいたというフレーズは流石に聞いた事がない。

あの日、Ｚ―ＢＬＵＥの面々を見かけた時、突如眩い光が自分を呑み込んだかと思えば、いつの間にかどこかも分からない霧に覆われた街の郊外らしき場所に佇んでいたのだ。突然過ぎる事態に最初は混乱していたのだが、騒いだ所で現状は変わらないので取り敢えず落ち着くことにした自分は、近くの農家の方に事情を説明し、ここがどこなのか話を聞かせて貰う事にした。

農家の人……ゴードン＝ローズウォーター氏は少し認知症を患っているのか、言動に不可解な所があり、最初は自分の事を認識出来ていなかったが、彼の目の前に立つとローズウォーター氏は目を剥いて驚愕した。

いきなり目の前に現れて驚かせて申し訳ないと謝罪し、改めて自己紹介と事情を説

明、自分はローズウォーター氏にここがどこか教えて貰うことにした。
ローズウォーター氏曰く、ここはパラダイムシティと呼ばれており、彼はこの街を記憶――――メモリーを失った街と言っていた。あまりに意味深な彼の言動に追求したくはあったが、相手は認知症を患ったお年寄り、気にはなるがここは自重しようと思い、深く追求するのは止めた。
これは勘だが、多分自分はインサラウムの世界に訪れた時の様な事態に陥っているのだと考えている。あの時はＺＯＮＥという、次元力抽出装置の過剰反応によって引き起こされた現象に巻き込まれたが、今回は恐らく地球の力による時空振動に巻き込まれたのだと自分は思っている。
外部の力によって時が止まりつつある地球はある意味で言えば次元抽出装置そのもの、その力により次元境界線は歪になり、世界の間に隔たる次元の壁を破壊するだけの時空振動を引き起こすモノとなる。
今回自分は運悪くその時空振動に巻き込まれた形になる。……と、言えば納得もいくのだが、そうなると何故Ｚ―ＢＬＵＥはあの時あんな無人島にきていたのだろう？　そこら辺を考えると、やはり自分のこの考えは間違っているかもしれない。
ただ、タイミングを考えればＺ―ＢＬＵＥがあそこにいたのは偶然とは思えないんだよなぁ。もし彼等が狙ってあそこに来ていたのだとすれば、それは時空振動の発生を予

測できたという事に他ならない。
　確かに、時空振動は次元境界線の歪曲の度合いによって感知する事はある程度可能だが、完全な探知は未だ出来ていない筈。疑問や疑惑は尽きないが、どれだけ考えてもこの件に関しては明確な答えは出せないし、今重要なのはそこではないので、取り敢えずこの事は一旦放置しておく。
　で、ローズウォーター氏から話を聞く事が出来た自分はそのお礼として、彼の農園にあるトマトの栽培を手伝う事にした。ローズウォーター氏は気にしなくても良いと遠慮していたが、それでは此方の気が済まないと言い、少し強引に手伝わせて貰った。
　農園にあるトマトはどれもこれも赤く熟しており、とても美味しそうだったが、手伝っておきながら摘まみ食いをする訳にもいかないので、トマトの誘惑に抗いながら最後までトマト栽培を手伝った。
　その後、仕事のお手伝いを終えた自分は改めてローズウォーター氏に礼を言って農園を後にし、今はパラダイムシティのとあるホテルに泊まっている。明日からはあの世界に戻る為の情報集めに忙しくなる事だろう。
　まだこの世界の全容が明らかになっていないから何とも言えないが……なに、何とかなるだろう。それに自分がここにいる事からＺ―ＢＬＵＥもこの街にいる可能性は充分に高い。もしもの時は彼等と協力し、脱出する事を視野に入れてもいいかもしれな

い。

◇

「いがみ合え」

パラダイムシティの中心街。記憶を無くし、時が止まってしまったこの街で、Ｚ―ＢＬＵＥの屈強な戦士達がたった一人の男を相手に膝を付いていた。

目の前にいるのは今回の争乱の黒幕の一人とされている人物。他者の心を操り、無闇に争いを撒き散らすこの男は許されるモノではない。その時までそう憤りと闘志を燃やしていたＺ―ＢＬＵＥの面々だが、男の唐突に紡がれた言葉によって、それらの気持

ちが急速に萎えていった。
　闘志を鈍らせ、感情の急激な切り替えによってＺ―ＢＬＵＥの面々は苦悶の表情を浮かべる。強制的な感情の変動により身動きが取れなくなった彼等は、自らの自我を保つだけで精一杯だった。
「一体、これは……!?」
「闘志が、萎えていく……」
「人間ってのは常に相反する感情を持ち合わせているモノ、喩えそれがどれだけ小さくとも、俺の持つスフィアの前では意味をなさねぇ」
「スフィア、だと?」
「おっと、つい話し過ぎちまったか。残念だがお喋りはここまでだ。これ以上お前等を構っている訳にもいかないのでね。――――ここらで死んで貰う」
　酒を浴びる様に飲み、酒気を常に放っていた男とは思えない程の殺気が男からあふれ出る。その殺気に込められた失意や怒り、諦めといった様々な感情の奔流に、アムロはギョッとした表情で驚愕する。
　飄々とした風体でありながら、内には表現しにくい感情の渦が蠢いている。そんな男がＺ―ＢＬＵＥの一人であるヒビキの前に、銃を片手に歩み寄った。
「特に、お前さんにはここでくたばってもらう。お前の乗るあの機体は余りにも不快だ。

俺達ジェミニスの誇りを汚す偽物にはここで退場してもらう」
「う、くぅぅ……」
「怖いか？　悔しいか？　なら今すぐその苦しみから解放してやるよ。折角の敵を前に残念だが……お前の物語はここで終わりだ。ヒビキ＝カミシロ」
男の手にした銃、その銃口がヒビキの眉間に向けて狙いが定まる。目の前に父と、そして姉の仇がいるというのに、奴の謎の力により闘志をへし折られたヒビキは、心の底から溢れ出る恐怖に身を竦めていた。
悔しい、怖い。二つの大きな感情によって身動きが出来ないでいるヒビキ、遠くから学友である相良宗介の声が聞こえてくるが、それでもヒビキの体を動かすことは出来なかった。
男の手にした銃、引き金に添えられた指が引き絞られる。すぐそこまで来ている死を前にヒビキの恐怖が臨界に達した時。
――――そいつは現れた。
「申し訳ありませんが、彼を死なせる訳にはいきません」
「っ!?」
どこからともなく飛んできた石礫が男の銃を握っていた手に直撃する。小さな礫でありながら強烈な威力を誇るソレは男の表情を苦痛に染め上げ、男の手にしていた銃を

吹き飛ばした。
　誰だ!?　そう声高に叫ぶ男は礫の飛んできた方へ視線を向ける。Ｚ―ＢＬＵＥの面々も男と同じ方向に視線を向けた時、霧の中から一人の男が悠然と現れた。
　蒼のカリスマ。つい先日まで行動を共にしていた男の登場に、Ｚ―ＢＬＵＥ全員が驚愕する。何故奴がここにいる、そんな疑問が頭の中を埋め尽くしていく中、男――――ガドライト＝メオンサムは、憤怒の形相で仮面の男に噛みついた。
「何故テメェがここにいる！　蒼のカリスマ……いや、シュウジ＝シラカワっ!!」
「ほう？　私の事もご存じでしたか。成る程、その様子だと、どうやらあなたは今地球で起きている出来事に深く関わりのある者、あるいはそれに精通している人間の様ですね」
　自らの正体を看破されているにも関わらず、蒼のカリスマ――――シュウジは不敵な笑みを浮かべたまま仮面を取り外す。
「貴方には色々聞きたい事ができました。出来れば私の質問に答えて欲しいのですが……」
「答えると思ってんのか？」
「それはアナタ次第です。……尤も、私としてもそう簡単に話して貰えるとは思っておりませんので、多少強引に話して貰う事になります。――――それに」

先程までふざけた顔つきから一変し、殺意を剥き出しにした男は、懐からナイフを取り出し、軍人らしき独特の構えを取る。
対するシュウジは懐に仮面を仕舞い――――。
「お前には弟分の借りがあるからな。ただで済むと思うなよ」
その表情に僅かばかりの怒りを滲ませるのだった。

その８８

――――パラダイムシティ。とある理由でメモリー（記憶）を失い、霧に覆われた不可思議な街。ある人物の経由でこの世界に訪れたＺ―ＢＬＵＥは今、一人の男の手によって追い詰められていた。

男の名はガドライト＝メオンサム。今世界を騒がせているＵＧと呼ばれる組織のトップである彼の目的を問いただすべく、その身柄を拘束しようとしたＺ―ＢＬＵＥだが、奴の発する奇妙な力の前に成す術なく屈する事になる。

〝いがみ合え〟ただその一言によりＺ―ＢＬＵＥに属する屈強な戦士達の闘争心は挫かれ、誰一人例外なく地に膝を付くことになってしまった。

目の前に家族の仇がいるのに身動き出来ない自分に、ヒビキは怒りと悔しさで胸が張り裂けそうになっていた。酒気に頬を染めるガドライトを見上げ、歯を食いしばる。

ガドライトはそんなヒビキを見下ろして愉快そうに口元を歪める。そして、ここで彼を葬ろうと銃口を突きつけた時、その男は現れた。

蒼のカリスマ――――もとい、仮面を外したシュウジ＝シラカワは僅かな怒りを表情に

浮かべ、突如としてＺ―ＢＬＵＥの前に現れた。
「シュウジ……さん？」
　嘗ては共に過ごし、互いに己の実力を認め合った自分の兄貴分が、世界に名高いテロリストだった事に大きな衝撃を受けた。戸惑いを隠せないヒビキとは対照的に、シュウジ本人は自身の目の前に立つガドライトを鋭い眼光で睨み付けていた。
「……おっかないなぁ、そんな睨まなくたっていいじゃない。俺はただ身の程を弁えないガキに少しばかりお灸を据えようとしただけ。謂わば教育だよ教育、おたくが目くじらを立てるような事は何一つしちゃいないよ」
「……」
「分かった。分かったよ、俺はここからいなくなる。アンタの望む情報も幾つか提示しよう。だからその殺気を抑えてくれ、これじゃあ話し合うことも出来やしない」
「……」
「それに、いつまでもそんなんだと俺もこの力を引っ込める事なんて出来ねぇぞ。アンタも大事な弟分の心を壊されたくないだろ？」
　厭らしく微笑みながらそう言葉を口にするガドライトにシュウジの眉が僅かに動く。ガドライトの力――――即ちスフィアと言うものが何なのか未だ理解し切れていない今のままでは、無闇な行動は控えるべきだろう。

誠に遺憾だが、今は奴の言うことに従った方がいいだろう。と、シュウジが殺気を抑えヒビキの方に振り返ろうとしたその時。

ナイフを手にしたガドライトがシュウジの背後に迫り、その刃を背中に突き立てようとしていた。奴とシュウジの間には数十メートルもの間があった筈だ。それなのに一瞬でその距離を詰めるガドライトの身体能力は、正しく常軌を逸していた。

「シュウジさん、うし――――」

自分の持つ特殊能力に匹敵しうるガドライトの身体能力にヒビキは驚愕し、同時にシュウジに危ないと呼びかける。このままでは次の瞬間、彼はガドライトに殺される。

もう自分の親しい人間が殺される光景は見たくない。必死な形相となってヒビキが声を上げ――――

「上段回し蹴り」

――――瞬間、雷が落ちた様な甲高い音がパラダイムシティの街に響き渡る。その炸裂音に耳を塞ぐ小学生組がなんだなんだと混乱する中、Ｚ―ＢＬＵＥの面々は驚愕に目を見開いていた。

つい先程まで後ろを向いていた筈なのに、いつの間にかガドライトを蹴り飛ばしているシュウジ。その伸ばした足からはプスプスと煙を上げており、蹴り飛ばされたガドライトはシュウジから見て右側の建物に叩き込まれていた。

ガラガラと音を立てて崩れる瓦礫、呉服屋と思われる店の店長が自分の変わり果てた店に呆然としていると、瓦礫の中からボロボロのガドライトが店から這い出てきた。
「……まさかあの間合いから反応できるなんてなぁ。お前さん本当に人間か？」
「そういうお前こそ、妙な能力を使いやがる。それもスフィアの力だってのか？」
服装こそボロボロでありながらもガドライト自身には傷一つ付いてはいない。あれだけ派手に吹っ飛んでおきながら無傷を誇っている奴にＺ―ＢＬＵＥの面々は戦慄を覚えた。
「いいや、コイツは自前さ。俺達ジェミナイの人間……特に男は皮膚を硬質化させる能力があってな。大抵の衝撃や打撃技には滅法強いのよ」
そういって肌を鉛色に染め上げるガドライト。その硬質は高く、彼が近くの街灯に手を置くとまるでゼリーの様に街灯の柱を握り潰した。しかも肌を硬質化させた事により鋭利化されているのか、握り締めた街灯の柱には切り刻まれた痕が刻まれている。
成る程、とシュウジは内心で頷く。全身を硬質化する事が出来るのなら、部分的な硬質化も可能な筈。自分の蹴りが当たる瞬間、部分的に皮膚を硬くさせればダメージも軽減されるという訳だ。無傷なガドライトを見てそんな事を考えていると、ガドライトは再びナイフを片手に持ち、全身を硬質化させて突進してきた。
「シュウジ＝シラカワ、お前は強い。今の一撃を受けて分かった。だから……いや、だか

らこそお前はここで死んでおくべきなんだ」

意味深な言葉を吐きながら突出してくるガドライト。先程の策を弄しての奇襲ではなく真っ向からの攻撃に少しばかり面食らうシュウジだが、それならそれで受けて立つと攻撃型に特化した構え、〝天地上下の構え〟を取る。どんな攻撃にも対応出来るよう五感全てを研ぎ澄ませた時――――。

「いがみ合え」

「っ!?」

ガドライトの放つその一言によりシュウジの闘争心が急速に萎えていく。まるで別の感情に引っ張られる様に戦う意識が無くなっていく。嘗てない感覚に戸惑い、そして感情のバランスが保てなくなったシュウジは構えを解かれ、向かってくる敵に対し無防備な姿を晒してしまう。

再び訪れる危機、続けて放たれるガドライトのスフィアの力、その力によって身動きが取れなくなったシュウジにヒビキが駆け付けようとするが……その距離は絶望的だった。

〝ブースト〟己の機体に乗り込んだ際に培われた特殊能力を駆使しても辿り着けないその距離に、ヒビキは再び絶望に沈みかける。しかし、ここで諦めてはならないと、なけなしの勇気を振り絞りシュウジの下へと駆けていく。

間に合え。内心でそう声高く叫ぶヒビキが次の瞬間目にしたのは――――。
「人越拳――――霞獄」
再び宙を舞うガドライトの姿だった。
「なん……だと?」
その光景に再びＺ―ＢＬＵＥの面々は驚愕する。ガドライトは確かに〝いがみ合え〟と口にし、その効果は間違いなくシュウジの身に降りかかった筈だ。現に、その力によってシュウジの動きは一瞬鈍くなったかに見えた。
ガドライトの力、相反する二つの感情のバランスを崩す力は、防ぎようのない精神攻撃の筈。それを受けていながら、何故奴を打ち負かせる程の実力が発揮できるのか。理解し難いその光景にＺ―ＢＬＵＥだけでなく、吹き飛ばされて地に倒れ伏したガドライトも訳が分からないといった様子で起きあがっていた。……しかも、鼻血を垂れ流しながら。
そんな彼らの反応を見て何かを察したのか、シュウジは自身の理論を語り始めた。
「訳が分からない。そういう表情をしているが……なに、そう難しいモノではないさ。お前の使うスフィアの力の性質は相反する二つの感情に揺さぶりをかけてそのバランスを崩す事にある。感情を持つ事でその効果が発揮されるのならば対応できる手段はただ一つ、感情を意図的に無くせばいいだけの事」

「……なに？」
「無心、無我の境地、明鏡止水、言い方や表現は多々あるが……まぁ、要するに何も考えず目の前の敵を殴り倒せば良い。と言う事だ」
〝理解出来たか？〟そう最後に付け足したシュウジはガドライトに勝ち誇った笑みを浮かべる。屁理屈過ぎるシュウジの超理論にツッコミたくなったヒビキ、そしてそれはガドライトも同じなのか、プルプルと肩を奮わせて怒りをこみ上げさせ……。
「ふざけるなぁ！　何だその超理論は!?　そんなモノでスフィアの力から逃れられると思ってんのか！　ナメるのも大概にしやがれ！」
ガドライトのその反応に思わず頷きそうになった者が何人かいたのは内緒の話である。
「ナメるも何も、事実俺はこうしてお前の前に立っている。別に受け入れる必要はないけどな、言ったろ？　ただでは済まさないと」
「……どこまでも人をコケにしやがって、分かってんのか？　今お前が放った一撃、中々の威力だが俺には通じなかった。そっちこそ理解してんのか？　幾らスフィアの力を屁理屈で防ごうが、お前が俺に勝てないという事実は変わらねぇんだよ！」
そう、ガドライトが吼える様に確かにシュウジでは奴にダメージを与える事は難しい。奴の種族の特徴である硬質化をどうにかしない限り、シュウジにとってはじり貧で

しか無いはずだ。
　しかし、シュウジはそんな事もお見通しなのか、クククと笑みを零す。彼の見せるその不敵な笑みに何人かの人間はその笑みの裏に隠された意図を読み取り、それぞれうわぁとドン引きした様子で見つめていた。
「成る程、それは此方にとっても好都合だ。この程度で終わらせては此方の気が済まないと言うもの。――――そのご自慢の硬質化の能力がどれ程の間その強度を保っていられるのか、検証を兼ねてもう一度試してみよう」
「な、何を言って――――」
「猛羅――――――」

「総拳突き」

ガドライトが何か言葉を紡ごうとした瞬間、彼は押し寄せる拳の弾幕に呑まれ、再び建物の内部へと吹き飛んでいく。それでも収まらない拳の弾幕、漸く彼の攻撃が収まったのは、並び立つ建物群が見るも無惨な光景に変わる頃だった。

「……チッ、逃げたか」

手応えの無さからガドライトが途中から逃げた事を悟ったシュウジは、忌々しいと言った様子で拳を止める。ガラガラと音を立てて崩れる建物群、幸い住人は住んでいなかったのか、悲鳴や断末魔の声は聞こえてこなかった。……恐らくはその辺りも事も考慮して、あのような大技を繰り出したのだろう。

その様子に誰もが言葉を失う。武闘派の多いＺ―ＢＬＵＥが酷く引いている事に気付かないまま、シュウジはヒビキへと向き直り……。

「ヒビキ君」

「は、はいっ！」

「今教えた通り、精神に揺さぶりを仕掛けてくる搦め手使いの輩にはこう言ったやり方が効果的なのは分かった事だと思う。相手が予想以上に打たれ強かったら、更なる攻撃力で上回ればいい。理解出来たかな？」

「あ、はい」

ヒビキの感情の無い返事にシュウジは笑みを浮かべて宜しいと頷く。彼の優しい微

笑みは初めて会った時とはまるで変わっていなかった。

一体どうしてこうなったのか。倒壊仕掛けた建物の数々を見てヒビキは呆然とそんな事を考えていた。

……また、この後シュウジは後から現れる警察の人々に追われる事になり、ここパラダイムシティでも指名手配になるのだが、それは割愛させてもらう。

その８９

○月▼日

ジェミニスと呼ばれる組織のトップ、ガドライトなる男を取り逃して数日、現在自分は不動さんから預かったジン君と共に各国の様子を見て回っている。

当時はガドライトをぶちのめした後にＺ―ＢＬＵＥと合流し、諸々の事情を話そうとしていたのだが、いきなり自分を光が包み込み、ヒビキ君と再会の言葉を交わす間もなくパラダイムシティから弾き出されてしまった。

アレは明らかに何者かの干渉を受けたモノ、当初はその事に結構腹も立てたが、状況が状況なのでそうも言ってられなくなった。現在、この地球に大量のインベーダーが押し寄せてきており、今奴等に対抗出来るのは自分しかいないらしいのだ。

というのも、Ｚ―ＢＬＵＥは未だこちらの世界に戻ってきていないらしく、どうやら以前の黄昏の間の時みたいに彼らはまだパラダイムシティに取り残されているようなのだ。現在の日付は自分がパラダイムシティに跳ばされて約一週間程経過し、黄昏の間の時の事を鑑みれば恐らくもう一週間、Ｚ―ＢＬＵＥの皆はあの街から帰ってこれないだろう。

この事を教えてくれたＺＥＮさんは、現在自分と同じ安いビジネスホテルに滞在している。というか隣の部屋にいる。もうすぐ地球の危機だというのにあの落ち着きぶりは一体なんなのだろうか？　不動という名字の人はやっぱり皆あんな感じなのだろうか。

と、まぁそんな訳で帰ってきて早々侵略者の相手をする事になったのだが、人間を相手にするよりずっと気が楽なのでそこら辺は別にいいんだけどね。それに、連中が相手ならグランゾンの力を十分に発揮できる。

それに連中を叩いた帰り道、ジオンの様子を観察してもいいだろう。アムロさんやカミーユ君辺りは気掛かりにしている事だろうし、Ｚ―ＢＬＵＥが戻ってきた際に新しい情報を仕入れておくのも悪くないだろう。

明日にはここを後にしなくてはならないし、少し早いが今回はこれで終わりにしようと思う。

◇

――――朝、太陽が水平線の向こうから昇り始めた頃、シュウジはこれから出撃する為に砂浜へと足を運び、不動ＺＥＮとジンはそんな彼を見送る為に彼の背後に佇んでいた。

潮風が彼等の髪を撫でる。これからの戦いに備え、準備運動をしているシュウジはそれらを終えた後、よし、と声を出してジン達の方へ振り返る。

「ではＺＥＮさん。ジン君の事はもう良いのですね」

「あぁ、既にこの者の傷は癒えている。後は己の力を最大限に高められるよう仕込むのみ。蒼き魔人よ、ここまで付き合ってくれた事に感謝する」

「いえ、此方こそマトモに面倒を看て上げられず申し訳なかったです。先のジェミニスがオーブに侵攻してきた時も危なかったみたいですし……」

「いや、それはそれで逆に助かったけどね。お陰で女装とかされずに済んだし……もう二度とあんな思いはごめんだし」

「アレ？　ジン君、なにか言った？」

「……いや、なにも」

首を傾げて訊ねてくるシュウジに、ジンはげんなりと疲れた様子でありながら何でもないと返す。思えばシュウジと過ごした日々は、彼にとって精神的にとても過酷な環境だったと言えた。

何せ、彼と共にいる殆どの時間を女装でいたのだ。幾らミカゲの目を誤魔化す為とは言え、ジンは最初コレばかりは冗談だろうと思った。

けれど、女装の案を真剣な表情で語るシュウジに、ジンは意見を言う間もなく女装で過ごす事を義務付けられてしまう事になる。本人曰く、自分が殺し損ねた相手がまさか女として過ごしているとは思わないだろうと語るが、ジンは当時シュウジがどこまで本気か計りかねないでいた。

世界最悪のテロリスト蒼のカリスマ。実は只のバカなんじゃないかと思っていたジンだが、ミカゲの介入は以前の聖天使学園以来来ることはなく、ここ暫くのジンの生活はオーブでの戦闘に巻き込まれた事以外、特に何もなく平穏無事に過ごしていた。

（まさか、本当にあの女装が効いた？　いやまさか、単にミカゲの奴が僕を放置していても構わないと判断したに過ぎないだけ、そうだきっとそうだ）

間違っても〝男女逆転の計〟などというふざけた策に引っかかった訳ではない。ジンがミカゲに対する奇妙な信頼を願っている一方、ＺＥＮとシュウジは互いに話を進めていた。

「じゃあ、そろそろ俺も行きます。ＺＥＮさんも余計なお世話かもしれませんが、どうかお気をつけて」
「うむ、そちらも無用かもしれないが充分に気を付けよ」
「いや、俺普通に戦場に行くんで、普通に危ない所ですから、普通に心配して下さい。最近忘れがちですけど、俺フツーに人間ですから、下手すれば死にますから、そこら辺心配して下さいね？」
「あぁ、そんな話もあったな」
「何で過去形!?　……まぁいいや。取り敢えず俺はこれから宇宙に行きます。ネオ・ジオンの動きも活発になり始めているし、そこら辺の調査もしてくるつもりです。それではＺＥＮさん、不動さんに宜しく伝えておいて下さい。ジン君も、怪我治ったからといってあまり無理しないでね。いざとなったら俺が再世戦争に使ってた女装用の服、使っていいから」
「なにその気遣い、聞いた事ないんだけど？　つか気遣い？　嫌がらせの間違いじゃないの？」
　二人に別れを告げ、シュウジは背後から己の愛機であるグランゾンを呼び出す。空間を歪ませて現れる魔神、その迫力にジンは後退り、ＺＥＮは不敵に笑みを浮かべる。
　太陽が水平線の向こうから顔を出し始めた頃、中立地帯として知られるオーブから最

強の魔神が宇宙に向けて出撃した。
「かの破壊魔には蒼き魔神が相手をする、か。少々予定とは異なるが……これもまた因果、私は喜びを以て彼等を見守るとしよう」
遙か彼方で〝　　〟がいるとも知らずに。

◇

――――パラダイムシティ。霧に覆われ、記憶を失った街から未だ抜け出せないでいたＺ―ＢＬＵＥの面々は、これまでの経緯を改めて考察する為、それぞれの母艦にて考えを纏めていた。
ジェフリーやスメラギ、ブライトといった艦長等がブリッジの通信設備を通して話を纏め、パイロット達はそれぞれの割り当てられた部屋で待機している中、ヒビキ＝カミ

シロは複雑な面持ちで格納庫の隅で座り込んでいた。
「……シュウジさん」
　鬱屈とした表情から吐き出されるのは、自身の兄貴分であるシュウジの名だった。その強さに尊敬し、憧れ、目標としていた彼、しかしその正体は世界を脅かす最悪にして最強（最凶）のテロリスト、蒼のカリスマだった。
　その名は当時田舎暮らしだった自分にも届いてくる程に有名で、たった一機で世界の半分の戦力を壊滅させたという話は、その土地では逸話として語り継がれている。
　そんな色んな意味で凄い蒼のカリスマの正体が、自分が敬っていた人だった。その事実にヒビキは少なからずショックを受けていた。
「ヒビキ君、みーつけた」
「スズネ先生」
「もう、ダメじゃない。艦長さん達からは自室待機だって言われてたのに……」
「……すみません」
「……やっぱり、あの人の事考えてたの？」
「分かります？」
「そりゃあね。それに、それくらい察せないとパートナーとして失格じゃないかしら？」
　隣に座って微笑むパートナーのスズネに、ヒビキも釣られて笑みを浮かべる。彼女と

の遣り取りで幾分か気分が晴れたヒビキは鬱憤を吐き出す様に溜息を吐き出すと、鋼鉄で出来た格納庫の天井を見上げた。
「まさか、ヒビキ君の兄貴分の人が蒼のカリスマだっただなんて……ビックリしちゃったね」
「ええ、驚きました。……というか、今も少しその事実を受け止められていない自分がいます」
「世界を敵に回した最強のテロリスト、だっけ？　私も最初見た時驚いちゃった。映画の奴とは全然別人なんだもの」
「映画って……ＺＥＸＩＳの奴ですか？」
「うぅん。私が観たのはその派生作品、たまたまチケットを持ってたから時間の空いた時にマオさんと一緒に観に行ったんだけど、色々凄い作品だったよ。主人公の蒼のカリスマが石で出来た仮面を被って吸血鬼になる所から始まるんだけど、ダークヒーローって言うのかな？　無駄無駄ァって叫びながら相手役を殴り飛ばしたり、気合いで時を止めたりして大暴れする様は中々痛快だったよ」
「そ、それはまた……」
　スズネの口から語られる映画の内容にヒビキは少し身を引く。しかし、自分の兄貴分がフィクションとはいえ化け物扱いにされている事に同情するも、あまり否定出来ない

自分がいるのもまた事実だった。

「悪党を潰す大悪党、その作品内では終始その呼び名で呼ばれていた主人公だけど、そんな彼にもプライドがあった。決して自分より弱い相手には手を出さず、群れず、己の法則（ルール）に従って戦う。その一本筋の通った生き方は共感こそされなくても拒絶される事はなかった。……ねぇヒビキ君、もしかしたら彼――――シュウジさんもそんな人じゃなかったのかな？」

「……え？」

言われて、ヒビキの脳裏にシュウジと過ごした日々の時を思い出す。当時、出会ったばかりの頃は彼を自分の世界にやってきた異物と認識し、酷く毛嫌いしていた時期があった。

けれど、そんな自分にシュウジは拒絶する事も否定する事もなく、いつも対等に接してくれていた。……そして、凶暴化したグリズリーに襲われた時も自分を見捨てる事なく、たった一人でグリズリーと対峙し、そして打ち勝ってみせた。自分を、守る為に……。

今思い返せばあの頃が一番楽しかったかもしれない。彼と過ごしていた間はあの悪夢を見る事もなかったのだから。

ガドライトと対峙した時も、彼はあの時と同じ怒りに満ちた表情で戦っていた。――そう、蒼のカリスマと恐れられていた男と自分が慕う兄貴分のシュウジは同じ、自分が良く知る人間なのだ。

その事に気付いたヒビキの表情には先程の様な憂いのある顔はしておらず、一つの悩みを払拭した男の顔をしていた。

「スズネ先生、面倒を掛けてしまってすみません」

「謝る必要なんてないわ。私達はパートナー、助け合うのが当然よ。それに、こういうときはもっと別の台詞があるんじゃない？」

「……ありがとう、ございます」

ヒビキの感謝の言葉に満足したのか、スズネは笑顔で宜しいと返すと、一足先に格納庫を後にする。去り行く彼女の背中を見送りながら、ヒビキは背後に立つ己の愛機を見上げた。

「……シュウジさん、いつかアナタと肩を並べて戦えるよう、頑張ります。だから――待っていて下さい」

新たに強い決意を抱きながらヒビキもまた格納庫を後にする。いつか彼の隣に立てる様に、そんな想いを抱く彼を背後で見つめるのは……次元商人を名乗るＡＧだった。

「はてさて、ヒビキさんはあの方の様に強くなると仰いましたが果たしてソレは叶いま

すかねぇ？　何せ相手はあの魔人、追い付くどころか普通なら突き放される所なのですが……まぁ、そこら辺は本人の頑張り次第ですので野暮な事は無しにしておきましょう。――けれどヒビキさん、もし本気で彼の様になるのであれば、私はあまりオススメしませんよ」

何故ならそれは、人であることを捨てるのと同じ意味なのだから。

格納庫を去るヒビキの後ろ姿を見送るＡＧの呟きは誰かに聞かれる事なく、誰もいない格納庫に四散していくのだった。

――一方その頃、当の本人たるシュウジはと言うと。

「ヨーコちゃん、ちょっと落ち着こう。流石に零距離で電磁（ソ）ライフル（レ）は洒落にならないよ？」

「大丈夫よ、本気だから♪　ちゃんとその脳天ぶち抜ける様特訓したから安心して♪」

「何一つ安心出来る要素が見当たらないんだけど!?　楽しい意味を表す筈の〝♪〟が全然楽しさを表していないんだけど!?　恐怖しか抱けないんだけど!?　ちょ、待って、お願いだから話聞いて!?　キタンさん、リーロンさん、ヘループ!!　インベーダーと戦う前に俺の命が終わっちゃうゥゥゥゥっ!!」

とある宇宙宙域、アークグレンと合流した所で絶賛絶体絶命を味わっている最中だった。

その９０

〝アークグレン〟大グレン団が保有する超弩級スペースダイガン。搭乗者最大３０万人とされるこの宇宙船は、現在地球圏に迫り来るとされているインベーダー討伐の為、限られた戦闘員と共に予測されている出現ポイントに向かっていた。

「では、あなた方も不動さんに言われてここへ来たと?」

「ええ、いきなり現れてインベーダーが迫ってくると聞いたときは驚いたけど、ウチの螺旋王ちゃんもその事を感知したらしくてね。Ｚ―ＢＬＵＥが行方不明となっている今、マトモに連中と戦えるのは私達しかいないと判断したロシウが、不動ちゃんから言い渡された座標に赴く決定を下したの」

アークグレンのブリッジ、そこではアークグレンの副艦長兼メカニック長を担当しているリーロンが蒼のカリスマに対し、ここに至るまでの経緯を話していた。

既に大グレン団にまで声をかけていた不動ＺＥＮの周到さに、蒼のカリスマはその仮面の奥で呆れの混じった驚嘆の溜息を漏らす。とはいえ、自分一人で片付けるつもりでいただけに、この助勢は正直有り難い。

ネオ・ジオンの協力が得られそうにない今、蒼のカリスマはこの際細かいことは気にしない事にした。
「しかし、まさかここでお前と合流するとはな。正直驚いたぞ、これならあの宇宙の破壊魔が相手でも何とかなりそうだ」
アークグレンの艦長ダヤッカの言うように、大グレン団にとって蒼のカリスマの参戦は思いがけない戦力となった。再世戦争の時にインベーダーの大軍勢を相手した時も、彼とグランゾンの力は当時の戦況に大きく影響し、ＺＥＸＩＳも後の戦いに余裕を持つことが出来たのだから、彼等の蒼のカリスマに対する期待感は大きい。
「ご謙遜を、このアークグレンにも見た限り相当な防衛、迎撃システムが組み込まれていると聞いています。私がいなくともあなた方だけでどうにか出来そうなものですが……」
「あら、聡いわね。流石は蒼のカリスマって所かしら？　再世戦争の時はそんなに出してないはずのこの艦を見抜くなんて」
「そんな珍しい技能でもないですよ。整備関係に携わっていればそれなりに得られる能力です。……さて、そろそろ目的の座標に到着します。作戦の概要の説明を行いたいのですが……」
「作戦も何も、俺達のやるべき事は変わんないだろうが。な～にカッコつけてんだテ

メェはよ」

　アークグレンのブリッジの扉が開かれて乗り込んでくる複数の男女、先頭を歩く金髪の男性の不敵な笑みを浮かべての登場に、蒼のカリスマもその仮面の奥で頬を弛める。

「そうは言いましてもキタンさん。相手は無尽蔵に等しい戦力を有していたインベーダーです。慎重すぎるというのはないと思いますよ」

「俺達大グレン団はどんな相手だろうと、真っ正面からブッ叩けば良いんだよ」

　あくまで敵対する者とは正面から叩きのめす。キタンの変わらない真っ直ぐな性格に蒼のカリスマ――――いや、シュウジは仮面の奥で苦笑いを浮かべる。けれど、確かに今回はキタンが言うように真っ正面から戦うのが正しい。

　相手が罠や搦め手を使ってくる異星人や知性のある敵ならキタンの正直すぎる戦いは危険だが、今回の手は理性も無ければ知性も無い、破壊する事しか考えない化け物だ。そう言った輩には下手な小細工など通用せず、圧倒的物量で迫ってくる。言葉も交わせず、考えることも出来ない破壊魔が相手なら、こちらも真っ正面から相手した方が良いだろう。

　幸い此方には突破力に優れた大グレン団が味方に付いている。戦力こそは少ないが、そこら辺は自分とグランゾンで補えばいい。そう判断したシュウジは僅かな思考の海から抜け出して二、三回程頷き、キタンに向き直る。

「確かに、キタンさんの言うことも正しい戦法でしょう。ならば私は後方に下がり、支援砲撃で皆さんのサポートに徹します。数少ない戦力で皆さんには負担を掛ける事になりますが……」
「なぁに、そんな事気にする間柄でもねぇ。お前がケツ持ってくれるなら、俺は遠慮なく暴れられるってもんだ」
「まぁ、確かに貴方なら私達全員のフォローをしてくれるとは思うけど……シュウジ、本当にいいの？」
「いいの……と、言いますと？」
「ほら、アンタってこういう戦いの時は率先して前に出てたじゃない。破界事変や再世戦争の時も結構一人で無茶していたみたいだし」
　それは率先して戦っていたのではなく、その時は自分しか戦える人間からいなかっただけである。等と反論したかったシュウジだが、それだと自らボッチである事を自白するようなものなので、シュウジはヨーコの問いに答える事はせずに誤魔化す様に咳払いをすると、それを察したリーロンがこれ見よがしに話を逸らすのだった。
「あら～？　どうしてヨーコがそんな事を知ってるのかしら？　もしかして彼の事が気になって調べてたりしてたの？」
「は、はぁっ!?　そんな訳ないでしょ！　ただ当時のコイツの話を取り上げられていた

情報誌を偶々目にしただけであって別にそんな気にしているとか……」
「あぁ、そういやあの頃は世界中から敵視されてたんだっけ。……ヤバい、思い出したらなんだか鬱になってきた」
「あの蒼のカリスマが落ち込んでいる!?」
「意外とメンドクサい人なのね」
　横からヒソヒソと話しているギミーとダリーの二人の会話に胸を穿たれるシュウジ、そんな彼等を見かねたキタンが声を上げて場の空気を引き締める。
「オラ、いい加減持ち場に戻るぞお前等！　シュウジ、テメェもいつまでも落ち込んでんじゃねぇ！　」
　キタンの喝ある言葉に気を引き締める大グレン団。そんな彼等に吊られてシュウジも立ち直り、彼等と共にブリッジを後にする。
　その後、彼等はインベーダーだけでなく宇宙魔王軍ともやり合う事態に陥るのだが、久し振りに暴れるグランゾンの力によりこれらを撃退し、見事地球圏の防衛に成功するのだった。
　尚、さらにその後に蒼のカリスマがヨーコのパイロットスーツを指摘した事によりひと波乱が起こる事になるのだが、それはまた別のお話。

◇

○月◎日

アークグレンと大グレン団、キタンさん達の協力のお陰で無事にインベーダーを退けた自分達は、現在地球に帰還すべく進路を地球に向けて航路を続けている。

本来なら連中を片付けた後、ネオ・ジオンの動向を調べるべくいち早く地球圏に戻りたかったのだが、インベーダーとの戦闘の最中に起こった幾つものトラブルの為にそれは叶わなくなった。

その原因の一つとして挙げられるのが宇宙魔王の軍勢だ。どうやら連中もあの宙域に用があったらしく、自分達とはち合わせると、連中はインベーダー諸共自分達に攻撃を仕掛けて来やがったのだ。

流石に数が多すぎてキタンさんだけでは負担が大きくなり始めた頃、終始後衛に務めるつもりだった自分が前線に加わろうとした時――――奴が現れた。

〝宇宙魔王〟名前でしか知られていなかった奴等の親玉が遂に自分の前に現れたのだ。ブラックホールと融合する事によって一万二千年前の終末を乗り切ったと語る奴の力は、確かに魔王と名乗るに相応しい力の持ち主だった。

しかも奴はどうやら自分とグランゾンに興味を持っていたらしく、戦闘中自分はずっと奴の相手をする事になり、キタンさん達の援護に行けなくなってしまっていた。ブラックホールと融合した事によりマイナスのオリジン・ローそのものとなっている宇宙魔王との戦いは中々苦戦を強いられ、自分は奴の発するブラックホールに飲み込まれないようにしながら戦うだけで精一杯だった。

ネオ・グランゾンになれば奴にも対等以上に戦えたのだが、そうなる前に事態は動き、自分達の危機はあっと言う間に覆される事になる。

なんと、先の再世戦争で眠りについた筈の真ドラゴン――――號君達が自分達の助勢に駆けつけてきてくれたのだ。ゲッターロボの集合体で対インベーダーの切り札とされる彼等が来てくれたお陰で戦線は覆され、自分も宇宙魔王の相手に集中出来た事により連中を撃退する事に成功した。

まぁ、それでも危ない場面はあったんだけどね。途中アークグレンから、戦闘宙域の

付近に巨大な氷塊が漂っていて、しかもその中に生体反応があると知った時は割とマジで焦った。しかもその時宇宙魔王の奴がブラックホールを発生させてインベーダー諸共自分達を始末しようとするのだからさぁ大変、その時は自分もＢＨＣ（ブラックホール・クラスター）で奴とは別ベクトルの重力の塊を放ち、ぶつける事によって相殺出来たのだが、僅かでもタイミングがズレれば二つのブラックホールが融合し……最悪、太陽系ごと消失させる所だった。

ともあれ、自分と宇宙魔王が派手にやり合った事により巻き添えを食ったインベーダー共は全滅、宇宙魔王の軍勢もその戦力の半数を失った事により撤退、例の生体反応を示していた氷塊もその氷塊ごと回収した事により事なきを得た。

氷塊は全長２００メートルを超える巨大な代物であったが、アークグレン自体が巨大な格納庫を有していた為、そこら辺はさほど問題はなかった。

今は號君達とリーロンさん達が話をしているだろうが、自分はそれに混じらず格納庫で例の氷塊の中にあった巨大な人型機動兵器を調べている。本当なら自分も話に混ざるべきなのだろうが、グランゾンと宇宙魔王との戦いの余波によりヨーコちゃん達の機体は早くもボロボロになってしまっている。大グレン団の機体をあそこまで消耗させてしまった原因は自分にある為、自分はリーロンさんに頼み込み、彼等の機体を責任以て整備する事にした。

しかし、何故だろう。あの巨大ロボットを見ていると何だか頭の奥がモヤモヤする。知っているようで知らない、そんなもどかしさがあの機体を見る度に感じる様になる。

いや、多分あの機体のことを自分は知っていたのだろう。博士の因子を受け入れた事により、自分の記憶は限定的にだが虫食い状態となってしまっているのだから、恐らくあの機体へのもどかしさに関しても、その虫食い状態の記憶に起因するものなのだろう。

何とも言えないもどかしさはあるが、今は別にそれで良い。幸いパイロットの子は冷凍睡眠状態でいただけだったから命に別状もなく、時間を置けば直に目を覚ます事だろう。

――――と、まぁ今回の所はこれで終わりだが、最後にもう一つ気掛かりな事が出来た。宇宙魔王との戦いの際、奴が俺に向けて言ったあの言葉。

〝獣の血、水の交わり、風の行き先、火の文明、そして……太陽の輝き〟一体この言葉を意味するのは一体なんなのだろう？

それに奴が言うには、既に俺は太陽の輝きに近づきつつあると言う。これも意味はよく分からないが、要するに自分は今後も宇宙魔王みたいな輩に絡まれる可能性が大いにあるという事だ。

……まぁ、再世戦争の終わり頃には自分も自覚してたから別にいいんだけどね。アン

チスパイラルにも絡まれたし、ああいう手合いからは逃れられない、戦うしかないと分かってたしね！

――――誰か、俺に安住の時間をくれ。

その９１

　インベーダー、そして宇宙魔王との激闘を制した大グレン団及びシュウジは現在、彼等が乗るアークグレンと共に地球へ向かっていた。かの侵略者達相手に少なくはない損害を受けた大グレン団は、今もアークグレンを修理しながら航路を続けている。
　アークグレン格納庫、機体修復の為にここ数日格納庫に入り浸っていたシュウジはある機体の前に立ち、その機体を眺めていた。
　先の戦いで回収した巨大な氷塊、その中に眠っていた巨大な人型機動兵器とパイロット、今も眠り続けている彼女に代わり、この機体の正体を探るべくシュウジが横たわる巨大ロボットを調べていたのである。
　一通り調べ終わったのか、手元の情報端末に視線を落とすシュウジ。余程興味深いのか、機体の情報を見ていて、偶に感心の声を漏らしていた。
「シュウジ、お疲れさま。差し入れ持ってきたわ」
「ありがとうヨーコちゃん、頂くよ」

カートに乗せられた食料を受け取ったシュウジは、近くにあった椅子に座り食事を摂る。二人分の食料を持ってきたヨーコも自然とシュウジの隣に座り、共に黒い機体を見上げながら食事を摂る事にした。

スタイル抜群のヨーコが隣に座っていながら、全く興味を示す事なく情報端末に目を向けるシュウジ。その事が癪に障ったのか、ヨーコの表情が少しばかり強張る。

「……で、この機体の事、何か分かったの？」

「そうだね。まだ全体の四割程度しか解析してないけど、大体の見当は付いたかな。機体の大きさ、最大出力とその際の規模、そして技術力の高さから見て、この機体は別世界の機動兵器と見て間違いないだろうね」

ムッとした表情と不機嫌な声色、なのにも拘わらずシュウジは変わらず情報端末に視線を落としている。勉強熱心なシュウジにとうとうヨーコは観念したのか、深々と溜息を吐いた。

「そしてもう一つ分かった事、これは機体を調べている内に最初に発見したのだけど、この機体は合体機構が施されていてね、どうやら二人乗りみたいだったんだよ」

「……え？　二人乗りって、私達が見つけた時はあの子しかいなかったじゃない」

そう、ヨーコが言うように、この黒い機体には回収された女の子一人しか搭乗していなかった。けれどシュウジの言葉もまた事実であり、この機体に施されたコックピット

は二つ存在している。
　何故二人乗りの機動兵器に一人しかいないのか、発見された時の損傷具合から見て、激しい戦いに耐えきれず殉職したモノだと思われたが、そう予想するにはもう一つのコックピットは剰りにも綺麗に残されていた。
（最初から彼女しか乗っていなかった？　けれど何の為に？　機体の構造からしてそのもう一人のパイロットがいなければ、この機動兵器は本来の出力の半分も引き出せない筈）
　この黒いロボットが潜り抜けた死線は、破界事変と再世戦争を経験したシュウジから見ても相当なモノだと理解出きる。それこそ、アンチスパイラル級の敵を相手に……今でこそリーロンとシュウジ、そしてアークグレンの設備があって最低限動けて戦える程度にまで修復したが、発見当時その損傷は凄まじいものだった。
　以上の点から様々な事例が予想されるが、それらは所詮シュウジの頭の中の事でしかない。これ以上考えるのは無駄だと察すると、シュウジは漸く情報端末から視線を外し、隣のヨーコに目を向ける。
「所でヨーコちゃん、例の女の子の様子はどう？　勝手に機体を弄ったり調べたりしたからその事について謝りたかったんだけど……」
「彼女ならまだ医務室で眠っているわ。リーロンが言うには冷凍睡眠から無事に蘇生さ

れて休眠状態にあるみたい」
　ヨーコの返事にシュウジはそうかと口ずさみ、渡された食料を平らげる。ひとまずリーロンにこれまで分かった事を報告した方がいいなと判断したシュウジは、格納庫を後にしようと椅子から立ち上がる。
「ご飯、持ってきてくれてありがとうね。ヨーコちゃん、助かったよ」
「え？　あ、うん……」
　それじゃあ。と、そう言って格納庫から出て行くシュウジをヨーコは呼び止める事はせず、静かに去っていく彼の背中をずっと見つめ続けていた。
　シュウジがいなくなった事で静まり返る格納庫、黒い機体を前にして座り込んだヨーコはそのまま膝を抱える。
「ほんと、変わっちゃったな。アイツ」
　思い返すのはまだ自分達の大陸が暗黒大陸と呼ばれていた頃、初めて会った時のシュウジは貧弱でとても頼りがいの無い青年だった。ヘタレ具合で言えば当時のシモンとどっこいどっこいな程に……。
　それが今では世界最強の一角、彼の一面でもある蒼のカリスマに至っては、世間では史上最悪にして最凶のテロリストとしてその存在を知らしめている。彼の操るグランゾンの事も拍車を掛けて、一時期はインベーダーを越える脅威として恐れられ、地球連

邦政府は今もそんな彼に脅えている節がある。
先程の戦闘の時だって、彼は敵の親玉相手に一歩も引かずに戦ってみせた。ブラックホールそのものと言われる宇宙魔王を、彼は一人で撃退したのだ。
（随分、遠い所に行っちゃったなぁ……）
実力的にも、精神的にも強くなったシュウジを見てヨーコは少し寂しそうに笑みを浮かべる。自分が思っている事は今のシュウジを、これまで彼が築き上げてきた努力を否定する事に他ならない。
けれど、それでもヨーコは思う。もし彼が自分達と同じ１０年間を過ごす事ができたなら……一体、どんな関係を築いてこれたのだろう。
無駄だと分かっていながらも、ヨーコはしきりにそんな事ばかり考えていた。
（ヨーコ、やっぱりお前シュウジの事が……）
そんな彼女を物影から覗き込んでしまっている一人の男がいた。キタン、先程までのヨーコとシュウジの遣り取りを見ていた彼は、もどかしい気持ちを抱えたまま、何時までも彼女の後ろ姿を見つめ続けているのだった。
また、そんな彼の後ろでは――――。
（キタンさん、アンタはぁ、アンタって人はぁ……！）
「凱、どうした？　何故泣いている？」

（静かにしなさい號！　今大事な所なんだから！）

真ドラゴンのパイロット達が出たくても出られずにいた。

◇

○月丶（、凵、＃）ノ日

今日、少しばかり嫌な事があった。インベーダーを倒し、地球に帰ろうとしていた自分達に、いきなりネオ・ジオン軍が襲いかかってきたのだ。インベーダーと宇宙魔王、これらの勢力とガチンコ衝突した為に疲弊していた所に容赦の無い攻撃をしてくるネオ・ジオンにちょっぴり苛立ちを覚えた自分はグランゾンで奴等の相手をした。

まぁ、これは別にいい。正式に宣戦布告を発表したネオ・ジオンが相手だったからある程度納得出来るし、途中からルルーシュ君とスザク君がそれぞれの愛機と共に援護に駆けつけてくれたから楽に相手が出来た。

それに向こうも何だかやる気がなかったらしく、戦況が此方に有利に流れてきた所で撤退、そそくさと戦域から離脱していった。

その後も宇宙怪獣と呼ばれる化け物達と戦ったのだが、実はこの時自分は結構焦っていた。何せ宇宙怪獣はアンチスパイラルが保有していた戦力だ。まさか連中が再び動き出したのかとドギマギしていたのだが、思わぬ戦力が加勢してくれた事で状況は好転、一気に連中を叩くことが出来た。

タカヤ＝ノリコちゃん。ガンバスターと呼ばれる例の黒い機体に乗った彼女達が来てくれた事で、戦況は一気に自分達のモノとなり、自分もネオやＢＨＣを使わずに連中を撃退する事が出来た。（因みにこの時にノリコちゃんから、宇宙怪獣やガンバスターの事をさわり程度に教えて貰った。）

で、宇宙怪獣等を倒し取り敢えず地球の危機を防いだ事に安堵した時、奴等が来たのだ。

地球至上主義、サイガス准将が率いる連邦の艦隊が、有無を言わさずガンバスターを寄越せと言って来やがったのだ。

自分達こそがガンバスターを上手く扱える。そう自信満々に応える連中に嫌悪した大グレン団の面々がそれはないだろうと反論すると、連邦の連中、自分達に従わないと世界中の敵に仕立て上げると脅しにかかって来やがった。

久し振りに腹が立った。ムカついた。苛ついた。だから……ついやっちゃったんだ★

いや、手は出してないよ？　向こうが手を出して無いのに此方から仕掛ける訳にもいかないからね。自分がやったのは連中と同じ、少しばかり脅しを掛けただけである。こう、それ以上しつこいと自分が相手をするぞ！　みたいな感じに……。

事前にノリコちゃんが奴等の誘いを断った事もありその効果は絶大、悔しそうに顔を歪めて捨て台詞を吐いて逃げてくサイガス准将を見た時は……正直ザマァと言いたくなった。

けれど、その所為で再び単独行動をしなければならなくなった。連中に脅しを掛けた事により、奴等は自分を今後必要以上に敵視してくる事だろう。もしかしたらクロノを通して連邦を煽るかもしれない。

まぁ、そうなったらなったで構わないけどね。実質今までと変わらないし、もしリモネシアを狙おうモノなら……その時は奴等の言葉を待たずに連邦ごと叩き潰すだけである。尤も、此度の大統領は聡明な人だからあまり心配はしてないけどね、

で、今自分はグランゾンと共に地球に降りている。場所は例の如く深海だが……ここからどうしよう。

ネオ・ジオンの宣戦布告に合わせて地球も騒がしくなってきたし、取り敢えず自分も

あちこち動いていこうかなと思う。

◇

『キング、聞きました？　例の魔人がまた派手にやらかしたみたいですよ』
『あぁ、既に耳にしているよ。相も変わらず彼は好き勝手やっているようだ』
『その割には特に干渉せず傍観してますのね？　クロノとしてその態度は些か問題なのでは？』
『私に出来る事などたかが知れてるよ。仮に手を出した所で恐ろしい逆襲に遭うのは目に見えている。魔なる神を挑発する程、私は命知らずではないよ。……それに』

『それに？』
『神を相手にするのは悪魔、もしくは同じ神である事が相場として決まっている。――もうじき、凶星が満ちるそうだよ』
『凶星？』
『君も知るといい。一万と二千年を越えて行われる神々の戦いを……君の無事を祈っているよ。クイーン』
薄暗がりの中で響きわたる二つの声、やがて男性の声が聞こえなくなると、残された女性はモニター越しで一人笑みを浮かべる。
「神々の戦い、差し詰め黄昏（ラグナロク）と言った所かしら……果たしてこの魔神様はその戦いに生き残る事が出来るかしらね」
別モニターに映し出された蒼い魔神、映像越しに見えるその禍々しさと猛々しさを前に、クイーンと呼ばれる女性は再び妖しく微笑むのだった。

その９２

△月×日

地球連邦軍との小競り合いから数日、今日も今日とて自分は世界各地を巡り、地球に掛けられた時の牢獄を破る為の方法を探していた。

あれから地球連邦……いや、地球至上主義のトップであるサイガス准将は自分の事を目の敵にするようになり、彼の一存で蒼のカリスマは世界の敵として認識されるようになった。

とは言っても、奴がやったのは蒼のカリスマの賞金額を上げたり、情報ネットに自分が悪者だと流す程度のモノで、直接的な被害は実質存在しない。それどころかそれが基となり、例の自分を題材にした映画は更なる希少価値となり、裏では既に映像ディスクとして世に少なからず流れ、その手のマニアの間ではかなりの末端価格となっているらしいのだ。

個人的には何とも言えないが、別に誰が被害を被った訳でもないのでこの件は別に良

い。リモネシアの皆も連邦政府からの余計な干渉を受けた様子も無い事から、どうやら地球至上主義の連中はそこまでの決定権はないようだ。

リモネシアが無事という事で安堵した自分は、上記にも述べた様に再び世界各地を転々とし、様々な情報を集める事にした。途中に立ち寄ったマーティアル教団とアマルガムの区域で連中とイザコザがあったが、その頃には別に奴等に用と呼べるモノも無かった為に圧殺、グランゾンの力で退けてみせた。

その最中に見かけた赤いＡＳ、以前の銀色とは色違いだったが、その戦闘技術はかなりのモノで、例の奇妙な力場を生み出すシステムも、前よりずっと強力なモノになっていた。

増援で出て来た巨大な赤い機体――――恐らくはＡＳだと思われる機体も複数出て来たりと、割と大盤振舞な戦力だったが、グランゾンのグラビトロンカノンで圧壊させ、続いてワームスマッシャーで串刺しにして全滅させた。

教団の楯と呼ばれるマーティアルの主力部隊も同じ様に対処してその場を切り抜けたのだが、例のシステムを搭載した赤いＡＳだけは自分と少しだけ戦闘した後に撤退し、すぐさま戦域から離脱していった。

パイロットの奴はモミアゲがどうのとか言っていたが雑音が酷くて聞き取れなかったけど、……まぁ、そんな重要そうな話ではないのでこの話は止めておく。

と、戦闘面に関しては結構濃厚な日々だったが、時の牢獄に関する話は殆ど手に入らなかった。こうしている今も時の牢獄の進行は進んでいる。早急に手立てを見つけなければならない。

……リモネシアの皆、どうかもう少しだけ待っていて欲しい。皆を元に戻す方法は必ず見つけるから。

△月α日

今日はエタニティ・フラットに対する有力な情報を得ることが出来た。因みにエタニティ・フラットとは自分が呼んでいた時の牢獄の事で、今回の件で情報を多く提供してくれたトライア博士が付けた正式名称でもある。

彼女と出会う事が出来たのは本当に幸運だった。エタニティ・フラットの影響を強く受けてしまっている地域を調べている最中に彼女と出くわしたのだが、どうやら向こうも自分に用があったらしく、情報を交換するという意味合いも込めて彼女と話をする事になったのだ。

ロボット工学、エネルギー工学、並びに超時空物理学の第一人者である彼女が言うには、どうやらこのエタニティ・フラットを解除をするには複数の条件が必要となっているらしく、今はその前準備として各地に話をつけているらしいのだ。

エタニティ・フラットを止めるにはその世界の基盤……中心となっている特異点と大特異点を重ね、人の意志を集めてそれを打ち破る。トライア博士の語る対エタニティ・フラットの計画の概要は大体こんな所で、他にも人の意志を集めるのに必要な処置や細工、また様々な情報を提供して貰った。その情報量は結構な数でちょっとここでは書ききれないので、次の機会に持ち越す事にする。

その後も自分がこれまでの体験から得た情報を彼女に話すと、トライア博士は興味深そうに頷き、礼を言われてその場から解散する事になった。

ただ、去り際にトライア博士は自分の今の身体能力を知りたいと言ってきたので軽く計る事になったのだが、あれは一体何の為なのだろう？　以前ジェレミアさんもロイド伯爵が自分の身体能力を知りたいと言っていたが、何故トライア博士も同じ事を訊ねて来るのだろう？

聞き返してもはぐらかすばかり、しつこく訊ねても相手の機嫌を損ねるだけなので深く聞くことは出来なかったが……まぁ、別にいいだろう。

ロイドさんもトライア博士も根は悪い人ではないし、気にする必要もないだろう。エタニティ・フラットに対する具体的な対策も聞いた事だし、当分の間自分は宇宙魔王を始めとした侵略者とアマルガムといった裏組織に対する遊撃として動いていこうと思う。

……因みにこれはトライア博士に後から言われたのだが、絶対にグランゾンの力で無理に時の牢獄を壊すなと釘を刺されてしまった。

グランゾンの重力を操る力で無理にエタニティ・フラットを破ろうとすると、かなりの高確率で地球は破壊され、その後に起きる時空振動と高重力の所為で、人の住める環境では無くなるらしい。

シュウ博士にも後で訊いてみたのだが、どうやらこの話はマジっぽく、グランゾンのまま……というか、今の自分では六割以上の確率で失敗するらしいのだ。

６０％の確率で地球は滅ぶ。そう言われれば流石に躊躇してしまい、自分は以前から考えていたグランゾンでエタニティ・フラットを破る作戦は控えざるをえなかった。恐らくシャア＝アズナブルもそうなる事を予測していた為に、自分にグランゾンを控えるよう言ってきたのだろう。

だが、エタニティ・フラットが完成するまでもうそんなに時間はない。トライア博士を信用していないという訳ではないが、もし本当にどうしようもなかった時、その時はグランゾンの力でエタニティ・フラットの破壊を試みようと思う。

最後に、これはどうでもいい話だけど、自分が蒼のカリスマだという事がトライア博士にバレていたようだ。恐らくこれはクロウさんを通して耳にしたのだと思われる。

更に驚くべき事にトライア博士も自分の……蒼のカリスマの映画を観ていたらしく、

しかも映像ディスクまで持っているようなのだ。

更にはサインを強請られてしまい蒼のカリスマの姿で握手をする事になってしまった。お付きの助手の人にもサインを求められてしまったし、その時は何とも言えない空気だった。

まぁ、個人的には満更でもなかったし別に良いんだけどね。

さて、取り敢えずエタニティ・フラットに対する情報は一通り集まったので、明日は各敵組織に対する牽制の意味も兼ねて、あちこち回ってみようと思う。

手始めに最初は日本から行こうかな。ここからだと近いし、久し振りに陣代高校の皆の顔を見ていこうと思う。

小野D君やかなめちゃん、大貫さんに生徒会長さん、皆元気にしてるかなぁ？

◇

「僕が思うに世界には二種類の人間がいると思うんだ」
雨が似合う人とそうでない人。そう抽象的に笑う青年は銀色に煌めく長い髪を揺らしながら、陣代高校の女子生徒、千鳥かなめへと歩み寄る。
側に人型の機械を侍らせる彼の背後には先程まで自分を殺そうとしていた人間が、事切れた様子でアスファルトの上で横になっている。
目の当たりにする人の死。自然のモノではなく人為的に引き起こされた殺人を前に、少女の顔は恐怖に歪む。
「い、いや！　来ないで！」
「どうして？　あぁ、もしかして彼女の事を気にしているのかな？　けど、それは仕方がない事だよ。何せこの結末は彼女自身が望んだ事なのだから」
「けど、だからって……殺すこと！」
「やけに僕を非難するんだ。彼も――――相良宗介も人を殺したこともあるというのにね」

「っ!?」
「いや、純粋に人を殺したというのなら彼の方が数段上だ。何せ彼は幼い頃よりその手に銃を持ち、戦場の中にいたのだから」
「けど、それは、アイツが、あいつ自身が望んだ事じゃない！　仕方が無かったのよ！　アイツにはそういう生き方しか……」
「まさか、そんな言い訳が本当に通るとでも思っているのかい？」
「っ!?」
　必死なって紡いだ返しの言葉、それすらもあっさりと破られた事に、千鳥かなめの表情は追い詰められたモノへ変わる。否、事実彼女は追い詰められていた。
　すぐそこまで迫る銀髪の青年、その面影がどこか友人である女艦長と重なった時――
――そいつは現れた。
「成る程、確かに貴方の言うとおり人殺しは所詮人殺し、喩えどんな理由があれどそこに差違はないのでしょうね」
「っ!?」
「ですが、今この場に於いてはそれは通らぬ理屈です。貴方がどれだけ屁理屈を口にしようが、貴方が一人の女の子を脅えさせ、追い詰めている事実は変わりようがありません」

蒼のカリスマ。自分の所属する組織でさえ、その正体は明らかにされていない。破界事変、再世戦争を通して最強の存在である彼が背後に立っていた事実に、銀髪の青年はその瞳を大きく見開かせる。

「さて、一度しか言わないので良く聞いてください。――――今すぐ、その娘から離れろ」

そして奴から途方も無い怒気を感じた瞬間、側に控えていた二体の人型は蒼のカリスマの敵意を瞬時に察知し、その剛腕を生身の人間に向けて振り下ろすのだった。

その９３

〝アラストル〟ゾロアスター教で執行人として知られる復讐を冠するモノ。銀髪の青年が従える二体の人型も何の因果かその名を被り、青年の求めるがままに従っていた。

何故青年がこの人型にその名を付けたのかは定かではないが、その二体の人型ＡＳは正しく執行人だった。機械であるが故に臆せず、心や感情の起伏が無い故に従順、青年の命令に従い目の前の敵を屠るだけ。

今回も同じ、熱源も生体反応も感知させず自分達の背後に回っていた仮面の男を、その剛腕を以て叩き潰す――ただ、それだけで終わる筈だった。

なのに、何故鋼鉄の身である自分が、為す術なく宙に浮かんでいるのだろうか？　何故鋼よりも硬い装甲で覆われている筈の我が身が、ただの人間の手によって貫かれているのだろうか？

理解出来ない。状況、結果、今の現状を何度も解析し、分析しているのにも関わらず、

人型のモニターに映るのは不明の二文字のみ。
訳が分からない。人間でいう極度の混乱状態に陥ったアラストルは最後まで自分の身に起きた出来事を理解出来ず、機能停止。何も言わぬ本物の人形となって雨が降るビルの屋上で事切れるのだった。

◇

「ははは、これは参ったね」
二体ある内の一体がスクラップとなっている様を見て、銀髪の青年は引きつった笑みを浮かべる。本来ならミサイルが直撃しても傷を受けないとされる装甲、それをものともせずまるで障子を突き破る様に容易く貫いた目の前の仮面の男に、青年は怪物と出くわした心境になっていた。

蒼のカリスマ、この世界で最も凶悪で最凶のテロリスト。人型のＡＳに襲われておきながら全くの無傷、その姿に青年だけでなく、その後ろにいるかなめも唖然とさせていた。

「ふむ、結構な手応えを感じましたがまさか機械人形、しかもこの構造は……ＡＳですか。まさかここまでの小型化が進んでいたとは、アマルガムという組織は随分と技術が進んでいるのですね」

二人が呆然とする中、蒼のカリスマは貫いていた腕を振り払い、アラストルだったモノを無造作に放り投げる。横にもう一体のアラストルがいるというのに彼の者の歩みは実に平穏なモノだった。

事実、蒼のカリスマは彼等を敵として認識してはいなかった。確かに人のサイズにまで小型と化したＡＳは脅威だろう。人並み以上に硬い肌、剛腕な腕、常人ならざる脚力。これらを駆使して打ち出される一撃はマトモな人間なら一撃でミンチとなる。

だが、逆に言えば蒼のカリスマにとって脅威となるのはそれだけだった。他にも様々な機能を有しているだろうアラストルを、彼は淡々とした口振りで評価する。

「ですが、戦力として扱うならば今一つですね。ＡＳにとって最大の利点と言えるのはその巨大さとそれに見合った制圧力です。人型と言えばアドバンテージが大きく見られがちですが、実はそうでもないのですよ。機械である以上必ずどこかで限界が生じる

上、電気系統のトラップには脆い一面がある。喩え対策を講じていても衝撃を受ける以上、物量で押されればどうしようもありません」
「そこの銀髪君、恐らく君が彼等を造ったのでしょうから言っておきます。彼等を兵器として扱うのは止めなさい。彼等にはもっと適した場所があると思いますので」
「適した場所……だと？」
「そうです。例えば――――介護施設なんかはどうなのでしょう？　生活が豊かになり、高齢化社会となる世間において介護というのは重要な要素の一つとなっています。お年寄り一人一人に丁寧な対応をするには相当の体力と根気がいる。そこで彼等を導入すれば、介護する側もされる側も負担が軽減されると思うのですよ」
　青年がその頭脳を以てして生み出した傑作の一つを蒼のカリスマはそう評価する。目の前の人型のＡＳがエプロン姿となってお年寄りを介護する場面を想像した蒼のカリスマは、我ながら良いアイデアだとウンウン頷く。
　一方銀髪の青年は自身のプライドが相当に傷つけられたのか、端正な顔立ちの表情を憤怒に歪め、忌々しく蒼のカリスマを睨み付けた。
「――――図に乗るなよ。たかが一機スクラップにした程度で！　アラストル！」
「……っ！」
　今までとは違って怒鳴り散らす銀髪の青年に、かなめは肩を震わせて竦み上がる。そ

して蒼のカリスマも突然激昂し豹変する青年に、僅かに驚きを顕わにした。
背後にいたアラストルのフードがはだけ、展開した胸部、並びに腕部から無数の銃口が出現する。それら全てがガトリングガンのものだと蒼のカリスマが察した瞬間、鉛玉の嵐が降り注がれた。
吐き出される薬莢、止まらない弾丸。地上にいる人間達が騒ぎ始めるも、それでも止まない弾丸の嵐。やがて弾丸の嵐が収まる頃には、蒼のカリスマがいた場所は爆撃の跡の様に凄惨なモノへと変わっていた。
これだけ撃ち尽くせば彼のテロリストも愉快なオブジェクトに早変わり。かなめも両手で口を抑えて悲鳴を堪えて、舞い上がる煙の中に横たわる蒼のカリスマを幻視する。
――――しかし。
「言った筈ですよ。人となったＡＳに最早機動兵器としての価値はない。それはいかな兵器を用いても変わらない事」
アラストルの背後から聞こえてくる声に、かなめと青年の目は大きく見開く事になった。バカな、有り得ないと、幾つもの疑問と驚愕が二人の脳裏を駆け巡る中、蒼のカリスマの声は止むことはなく。
「序でです。ここでもう一つ、機械に対してもう一つ有効な手段がある事をお教えしま

しょう」

アラストルの背中部分にそっと拳を当て――――。

「不動――――砂塵爆っ！」

床を踏み抜いた瞬間、拳を通してアラストルに衝撃と振動が伝わり、アラストルの前部分が吹き飛ぶのだった。

衝撃と振動によって内部をズタズタにされたアラストルは、一機目と同様に何も言わぬガラクタ人形となり、地に這い蹲った。

その光景を目の当たりにした青年は空いた口が塞がらず、その後ろにいるかなめに至っては目元を引き付かせて笑うしかなかった。静まり返る屋上、少し離れた所で身動きの取れないミスリルの女が寒さでクシャミした時。

「と、こんな感じです。全ての造られたモノはどんなに頑強でも振動で揺さぶられてしまえば案外脆いもの――――理解できましたか？」

依然として傷一つ負っていない仮面のテロリスト。平然と講釈を語る彼に、かなめはどことなく戦争バカの軍曹を連想させるのだった。

◇

△月α日

アマルガムの幹部らしい人間と小競り合いをして三日、ここの所の世界情勢が騒がしくなっていた為、今回はグランゾンのコックピットで少し纏めておこうと思う。

まず、プラントにアルテア軍が押し寄せてきた。アルテア軍というのは事ある毎に聖天使学園を襲うアブダクターの事で、その時の自分はそこに居合わせていないから詳しいことは分からないが、どうやらそのプラントにアルテア軍の総司令が仕掛けてきたらしいのだ。

プラントというのは遺伝子を組み替えられた人種、即ちコーディネーターの人達の住処である。何故連中がそこを狙ったのか、色々と情報が混じっていてハッキリとした事は分かっていないが、ある情報だとラクス＝クラインを狙ったのではないかという話がでている。

ラクス＝クラインというのはプラントの歌姫として知れ渡っている反面、為政者として色々と活躍しているとも聞いている。そんな人物を誘拐すれば確かに此方に大きな打撃を与える事になる。が、果たしてそれだけなのだろうか？

以前連中と戦った時は現地の女性を片っ端から攫っていたという事もあったし、なんだか連中には自分では計れない理由を抱えているっぽい。……まぁ、連中の目的がなんであれ、襲ってくる以上相手をするしかないんだけどね。

で、そんな奴等もＺ―ＢＬＵＥの皆によって迎撃され、撤退する事になった。敵の総司令が出てきた為流石に無傷とはいかなかったけど、撃退する事が出来た辺りどうやら何とかなった様だ。

そしてもう一つ、マーティアル教団についてだが、どうやらＺ―ＢＬＵＥは部隊を複数に分けたらしく、教団を無事叩き潰す事が出来た様だ。

奴等とは自分にとって少なからず因縁があった為相手をしたかったのだが、別件があった為動く事が出来なかった。といっても、以前グランゾンでやり合った際にある程度戦力を削いだから、そんなに苦戦する事はなかったと思うけどね。

だけど楽観は出来ないだろう。幾らグランゾンで多少の戦力を削った所でマーティアル教団の戦力は未だ残ったままだ。今回は本部が破壊されたという事で少しは大人しくしていそうだが、暫くするとまた動き出しそうな気がする。

宗教というのは色んな意味で厄介だからなぁ。根が深いモノほど厄介の度合いも変わっていく。

そして最後、これは偶々通りかかった為に詳しく知る事が出来たのだが、どうやらＺ―ＢＬＵＥは遂にあの機械獣軍団との戦いに終止符を打てた様なのだ。

場所は遺跡が数多くあるとある孤島。本当なら自分も混ざりたかったが、再世戦争の時思いっきり邪魔しちゃった事もあり、少し心残りだが今回は遠巻きに見守る事にした。今のＺ―ＢＬＵＥは部隊を分けた少数部隊だ。敵もこれまで以上の規模の為少しばかり苦戦していたみたいだけど、最後は兜甲児君とマジンガーＺが大いに力を奮って機械獣軍団を圧倒、見事押し切る事に成功した。

戦いを終えた後、Ｚ―ＢＬＵＥは孤島から離脱。自分も彼等を見送った後その場から離脱しようとしたのだが……ここで奇妙なモノを拾う事になる。

ブロッケン伯爵。Ｄｒ．ヘルの側近である彼が涙目で助けを求めるモノだから、つい手を差し伸べてしまったのだ。聞くところによると、同じＤｒ．ヘルの部下であるあしゅら男爵に見捨てられ、旗艦共々沈む所だったのだとか。

個人的にはそのまま沈んでも良かったのだが、最後の戦友に裏切られた事がショックだった様で、ここ数日の彼の落ち込みっぷりはかなり酷かった。

何故自分がそんな事を知っているのか。実はこの三日間、自分はブロッケンのメンタ

ルケアに掛かりっきりでマトモに動けなかったのである。先に述べた別件とはまさにこの事である。

――――まぁ、自分でも何やっているんだろと思う。何が悲しくてデュラハン気取りのおっさんを三日三晩慰めなきゃならんのか、可能なら過去に戻って今すぐ海へ放り投げてしまえと言いたい。

一応言い訳としては仕えていた主人を亡くし、唯一の戦友にも見捨てられた彼の境遇を同情した、というのがある。自分も話し相手が欲しかったし、ちょっと魔が差してしまったんだろうなぁ。

そんな訳で現在、ブロッケンは自分と行動を共にしている。本人も機械獣軍団という戦う手段と意味を無くした今、無闇に暴れ回るつもりはないみたいだし、監視の意味を込めて少しの間側に置いてみようと思う。

今、ブロッケンの奴は外にいる。幾らグランゾンのコックピットは広いとはいえ、ムサいおっさんを入れるつもりはない。というか、入れたらシュウ博士に怒られそうだ。

あぁ、忘れる所だった。アマルガムの銀髪君をかなめちゃんの保護を優先する為に逃がした後、通りかかった五飛君に預ける事にした。本当なら自分が責任持って彼女を送り届けたかったのだけど、どうやら彼女には行くべき所があるらしく、五飛君もそこに

行く用事があったから彼に任せる事にしたのだ。
彼は自分にも厳しい人間だし、誠意のある人物だ。対して自分はかなめちゃんからすれば仮面を被った変人、彼女の精神的負担を考えれば当然の判断だろう。
別に正体を明かしても良かったのだが、何だか自分を見て酷く動揺していたし、あまり不安に思わせるのもアレなので自重する事にした。それに急いでいたっぽいしね。引き留めが過ぎるのもまずいだろう。
しかし、五飛君てばどうしてあの時出てこなかったのだろう？　幾ら人型ＡＳが相手でも彼なら対処出来そうなものなのに……もしかして、自分に見せ場を作ってくれたのかな？
ミスリルの工作員の女性さんも気を利かせて気絶したフリなんてしていた上に、後片付けまでさせちゃったしなぁ、こうして見ると何だか自分だけ得したみたいだ。

その９４

△月β日

ブロッケンを旅のお供に加えて数日、相変わらずエタニティ・フラットが止まる様子は無く、この世界の時間停止の刻限は刻一刻と迫りつつあった。

この件に関しては今の所トライア博士に任せるしかないが、エタニティ・フラットの影響力を強く受けているリモネシアの事を考えると焦ってしまう自分がいるのも……また事実だ。

以前トライア博士と出会った街もエタニティ・フラットの影響力を強く受けており、自分達以外の人間が殆ど動いていない状態になっている。恐らくはリモネシアもあの街と同じ状態に陥っているのだろう。

動きが止まった子供達とお年寄り、ラトロワさんやジャール大隊の皆、ガモンさん、そしてシオさん。止まった時間の中で、彼等が自分と全く異なる時間を生きている事を考えると、焦りと苛立ちばかりが募ってくる。

とはいえ、先程も述べた通りこの件に関してはトライア博士に一任するしかない。歯痒い思いだが彼女に任せた以上、自分も信じるしかないのだろう。ここはグッと我慢して耐えるしかない。

ネオ・ジオンの総帥も一応考えはあるみたいだし、ここは彼を信じて待つしか無いだろう。特異点や大特異点に関しても彼に任せるしかないみたいだし。

今は自分に出来る事を探してそれを実行するのみ、未だクロノの全容も暴けていないし、自分は自分でやるべきことをやっていこうと思う。

そしてブロッケンの件についてだが、現在彼はあしゅら男爵に対する気持ちに一応の踏ん切りを付けた為か、ここ暫くは割と良く働いて貰っている。

彼の役目は立ち寄った村や町で簡単な情報収集で、訪れた際には結構な量の情報を集めてきている。元々がＤｒ．ヘルによって生み出されたサイボーグ戦士という事で、俺の作った新しい体を与えたところ、本人のやる気もあって結構重宝している。

旅の資金も彼特有の一発芸、首なしデュラハンのお陰で今の所困る事はない。遊園地などの娯楽施設に立ち寄った時なんかはそのコミカルなキャラが幸いし、ちょっとしたマスコットキャラになる程だ。

ジャンル的に言えばキモカワイイという奴なのだろう。女子高生にチヤホヤされているブロッケンもマンザラでは無さそうに見えた。尤も、その人気ぶりもボン太君が出

て来た事により瓦解したんだけどね。この時調子に乗ってたブロッケンが見るからに落ち込んでいたのだが、その前の調子の乗りっぷりがウザかった為同情はしてないんだけどね。

しかし、あしゅら男爵って奴は一体何がしたかったのだろう？　ブロッケンも再世戦争が終わってからのあしゅら男爵の様子は変わったと言っていたし、Ｄｒ．ヘルとの決戦の時も、敵だったのが急に人が変わった様に態度を変えて甲児君に協力していた。

先の機械獣軍団とＺ―ＢＬＵＥの戦いの時の采配も、今思えば何だか奇妙に感じる。まるで最初から負ける事を想定していた様だった。

……何だか胸騒ぎがする。今後はあしゅら男爵の動向も探った方がいいのかもしれない。出来れば捕らえて目的を吐かせるのが理想的だが、相手はＤｒ．ヘルによって改造を施された怪物、生半可な攻撃では太刀打ち出来ないだろう。

その時になれば最悪あしゅら男爵を倒す事も視野に入れる必要があるが……その時はブロッケンの奴は関わらせない様にしよう。幾ら見捨てられたといっても、あしゅら男爵はブロッケンにとってただ一人の戦友だ。戦友が殺されるような場面を見せるのは酷だろう。

ともあれ、明日も早い。エタニティ・フラットの完成まで残りの猶予がなくなってきている今、自分も行動を進めていこうと思う。

△月γ日

――――甘かった。今日までのあしゅら男爵に対する自分の考えは、まさにこの一言に尽きた。

奴の動向を探っていくに連れてあしゅら男爵の目的がＺ―ＢＬＵＥと……いや、甲児君と決着を付ける事だと分かった自分達は、Ｄｒ．ヘルとの最後の戦いに用いた場所、日本にある光子力研究所へと向かった。

自分達が訪れた頃には既に戦いは決着しており、あしゅら男爵の持つ全ての機械獣は破壊されていた。このまま甲児君の戦いにも決着が付くかと思われたその時……奴等が顕れた。

〝ミケーネ〟遙か太古の時代より存在していたとされる神話の神々があしゅら男爵の手によって復活、その時の衝撃により時の牢獄が一瞬破壊された。

自らを生け贄にする事でミケーネの神々を復活させたあしゅら男爵は絶命し、形も残らず消滅した。ブロッケンは死んだあしゅら男爵に動揺していたが、正直自分はそれどころではなかった。

何せあのＺ―ＢＬＵＥが手も足も出ないで追い詰められていたのだ。神話の神を相手に為す術もなく追い詰められた彼等は、圧倒的とも言える連中の力により心が折れそ

うになっていた。
　ミケーネの神々、特にハーデスと呼ばれる連中のトップが顕れた際に、宇宙魔王やミカゲが顔を出してこの星は諦めると言ったのだ。それだけでも連中の凄まじさは計れる。
　本当はこの時に自分も参戦したかったのだが、倒れていた錦織つばささん……甲児君のお母さんを放っておく事も出来ず、ゼウスというミケーネの神が連中を追い払うまで行動に出る事が出来なかった。
　――今、ミケーネの連中は日本の熱海に侵攻している。先の戦いで大きく消耗した今のＺ―ＢＬＵＥでは、奴等の相手をするのは難しい。
　ならば、自分が行くしかないだろう。地球連邦が軍を派遣して迎撃に向かっているが、人智を超えた相手を前にしては……言っては悪いが、正直時間稼ぎ程度しかできないと思う。
　人類は今、追い詰められている。それは月が落下し、インベーダーの大群が押し寄せてきた時以来の危機的状況だ。そんな追い詰められた状況だからこそ、グランゾンの力が必要になってくる。
　既にブロッケンが現地に急行し、逃げ遅れた人々の救助をしてもらっている。新しい体を得た今のアイツなら、瓦礫に埋もれた市民を助け出す事も可能だろう。

……ミケーネの神々、その力はＺ―ＢＬＵＥを叩きのめす程に強力で、とても手を抜いたり周りの被害を考える余裕なんてないだろう。規模こそはアンチスパイラルに及ばないまでも、決して下に見ていい相手ではない。

けど、だからといって放っておく訳にもいかない。喩え相手が神……いや、神だからこそ俺は退くわけにいかない。ぶっちゃけ、あんな奴ら許せないというのが本心な所だ。

神？　高次元の存在？　奴等について詳しく教えてくれたシュウ博士には本当に申し訳無いが、正直そんな事はどうでも良かった。

ぶっ潰す。俺が奴等に対して抱く気持ちはこれだけだ。神が相手？　上等。だったら俺はグランゾンと共にその傲慢ちきな神を滅ぼすだけである。

◇

――――熱海。海に面しており、温泉宿が数多く点在し、常日頃から人々で賑わっていた活気ある街並み。

旅人や地元の住民問わず、過ごしやすく恵まれていたこの地は……今や見る影もなく、熱海の街は瓦礫と炎に包まれた地獄と化していた。

この世の終わり。終末を思わせる光景と、その中に響く人々の悲鳴と断末魔が熱海に響き渡る。そんな人間たちの叫びを肴に嘲笑う者達がいた。

ミケーネ。神話の神々であるその者達は逃げ惑う人々を見下ろし、嘲笑い、罵倒した。人間風情がと、自分達こそが支配者に相応しいと断じる彼等は、やってきた連邦の戦力ごと熱海を蹂躙した。

暴虐の限りを尽くす彼等の様子は神と言うよりも悪魔に近い。燃え盛る炎の中を闊歩する彼等の力は、正しく超越した存在に相応しかった。

そんな彼等に一つの声が轟く。低く、潜もった声でありながら絶対的な存在感を出しているその者の名は――――ハーデス。ミケーネ神の三大柱の一柱である神の一言に、

これまで騒いでいた神々は静まり返る。

『ここは忌まわしきゼウスの臭いが一際強い。一切の容赦なく、完膚無きまでに破壊せよ』

座していながら放たれるその命令にミケーネの神々は雄叫びを上げる。自分達のトップであるハーデスに忠誠を誓う彼等はその命令に従い、熱海の街を更に破壊しようとした。

と、その時だった。空の向こうから見えた蒼い光にミケーネの神々は注視する。また人間の増援か、半ばウンザリしながらミケーネ神の一人が迎撃しようとした時、それは起こった。

『ワームスマッシャー』

『なっ、あ、ぐ、ぎゃあぁぁぁあっ!!』

突然ミケーネの神が悲鳴を上げたと思ったら、体の内側から無数の光の槍が飛び出し、彼の者の肉体を破壊し尽くしたのだ。内側から破壊された神の一人は断末魔を口にしながら消滅、その光景に他のミケーネ神達に戦慄が走った。

『……ほう?』

ミケーネの神々が狼狽する中、ハーデスだけは熱海の地に降り立つ蒼い機体を興味深そうに注視する。禍々しくも猛々しいその機体から発せられる雰囲気は、これまで出

会ってきたどの鋼の巨人とも違ったのだ。
恐らくは先のＺ―ＢＬＵＥとやらの連中と関連する者なのだろう。だが、その存在は明らかに他とは違う。永い時の中を生きてきたハーデスにとって、目の前のソレはそれだけ興味を引かれるモノだった。
炎の剣を片手にハーデスが立ち上がる。ただそれだけで他のミケーネの神々は落ち着きを取り戻し、それぞれが持つ武器を手にし、蒼き魔神に向き直る。
神が敵として認識した。向けられる神の敵意を前に、常人なら尻込みするだろう。
しかし、男は違った。沸き上がる恐怖よりも怒りの方が遙かに大きいその者は、魔神の中で更なる怒りを募らせる。
『……嫌な事を思い出させやがって、覚悟は出来てるんだろうなぁ!!』
猛る。神の敵意を跳ね返し、空間の穴から剣を取り出した蒼き魔神は主である魔人に従い、単騎で神々に突貫していくのだった。

その９５

日本・連邦所属基地内。ミケーネと戦い、死線をどうにか潜り抜けたＺ―ＢＬＵＥは疲弊した機体と己の体、何より精神を休めるべくラウンジへ集まっていた。

「……甲児の様子は？」

「ついさっき休んだ所。今は休ませてやれって軍医の人が言ってた」

掠れた声でそう口にするサヤカにヒビキはそうかと返事する。〝ミケーネ神〟これまでとは文字通り桁違いの敵の登場に、Ｚ―ＢＬＵＥの面々は気持ち的に参っていた。

その力はまさに神の如く。神々全てが尋常ならざる剛力を有しており、一撃一撃が此方の予想を上回っていた。

今自分達が生きていられるのは単に運が良かっただけ。甲児のマジンガーＺが放った光子力の輝きが、偶然彼等と同じ神であるゼウスを呼び出せたからである。

同じミケーネの神でありながらハーデスと敵対するゼウス。彼の力が自分達を守っ

てくれたお陰で自分達は死なずに済んだのだ。他にも、連中が自分達を手を出す価値が無いと判断したのも大きい理由だが、兎も角今自分達がこうしていられるのは間違いなくゼウス神と、彼を呼び出してくれた甲児のお陰だ。

その甲児はハーデスによる攻撃を受けてしまいマジンガーＺはボロボロ、甲児自身も軽くはないダメージを受け、現在はベッドの上で気を失っている。

圧倒的と呼べるミケーネの神々の力、それを体験したＺ―ＢＬＵＥは肉体だけでなく、精神――――心までもが疲れ切っていた。

「これから俺達、どうすりゃいいんだろ」

竹尾ゼネラルカンパニーの若社長であるワッ太、その口調にはいつもの元気に満ちたものがなく、心底落ち込んだ年相応の少年のそれだった。

〝神〟これまで経験した事のない敵は破界事変や再世戦争とは異なった異質の存在、唯でさえ宇宙魔王や堕天翅のミカゲといった超常の怪物達が跋扈し、エタニティ・フラットの完成までもう猶予がない所まで来ている。

……いや、エタニティ・フラット、時の牢獄に関しては心配ないかもしれない。ミケーネの神々の目的は真戦と呼ばれる戦いに打ち勝ち、バアルを滅ぼす事にある。時の牢獄が完成するのは奴等にとっても見過ごせない事態の筈だ。

尤も、奴等程の存在が地球で大暴れすれば、それだけで地球に大打撃が及び、喩えバ

アルに打ち勝ったとしても、その頃には地球は滅んだ星に変わっている事だろう。
どうにかしなくては、しかし今の自分達では奴等に対抗できるだけの力がない。追い詰められた状況の中、誰もが下を向く中、一人言葉を口にする者がいた。
「どうするもこうするもない。連中は自然災害……台風のようなモノだ。俺達はそいつ等を相手する事なく、ジッと身を潜めていればいい」
ギュネイ＝ガス。ネオ・ジオンからシャアの計らいで編入した臨時のＺ―ＢＬＵＥの一人、彼から発せられる言葉は的確で、誰も反論出来ないものだった。
ギュネイ＝ガスの言う事は正しい。現に連中は今どこかへ姿を消しているのか、今の所被害を受けたという報告は届いていない。何時出て来るのか分からない存在、それともこの世界自体に興味はないのか……いずれにしても、それは確かに台風や地震といった自然災害に近い在り方だった。
「破界事変と再世戦争の頃にもあったんだろ？　次元獣ってどこからともなく現れては暴れ回る厄介者ってのは。ミケーネって連中も別に今すぐ俺達人間を滅ぼすつもりはないみたいだしな。放っておいてもいいんじゃないか？」
「ふざけるな！」
淡々と事実を述べ、クールを装った喋り方をするギュネイにシンが食って掛かる。確かに、次元獣とミケーネは似ている所もあるかもしれない。戦っている最中も終始此方

に興味は無さそうだったし、事実自分達と奴等ではそれくらいの力の差はあった。
けれど、奴等と次元獣とでは規模が違う。力も、欲も、ミケーネの連中の方が何倍も有している。そんな奴等が好き勝手に暴れてしまえば、その地で起きる被害は計り知れないモノとなる。
何より、巻き込まれた人々はどうなる。強大な力に巻き込まれた人々の命や住む場所はどうなる。嘗て戦争に巻き込まれて家族を失ったシン＝アスカにとっては、ギュネイの話はとても容認出来る内容ではなかった。
「奴等の目的はバアルと戦う事、その為の拠点としていつかは地球を狙ってくる！　そうなった時、俺達人間はどうなると思っている！」
「さぁな。精々奴隷として扱ってくれる事を祈るしかないんじゃないか？　連中だってみすみす労働力となるモノを無闇に滅ぼしたりしないだろ」
ギュネイのその一言にシンは頭に血が登るの感じた。逆鱗に触れられた事で咄嗟に拳を握り締め、胸倉を掴むシンだが、それよりも早くギュネイからの言葉が紡がれる。
「だったらどうすりゃあいい。連中相手に手も足も出なかった俺達が、一体どうやって奴等と戦えばいい。死ぬ気で特攻するのか？　それで何が残る。精々自分の気が少しばかり紛れるだけだろうが!!」
「……！」

怒鳴る様に吼えるギュネイにシンは何も言えなくなった。自分勝手に戦い自分勝手に死ねば、後に残される人間には辛い想いを押しつけるだけ。その事を理解しているシンはそれ以上なにも言う事なく、ギュネイの胸倉を乱暴に放すのだった。

再びラウンジは沈黙になる。先程よりも重くなった空気にギュネイは舌打ちし、乱暴に席に座る。誰も喋らなくなったラウンジ、誰もが何も言えなくなった頃、掠れる様な声がラウンジに響いた。

「それでも、それでも俺は……諦めたく、ない」

「バナージ……」

それでもと、そう言い訳する子供の様に口ずさむバナージに視線が集まる。ミケーネの力を知った。宇宙魔王やミカゲ、様々な敵の強大な力を知った。けれど、それでも諦めたくない。振り絞った彼の呟きにそれでもギュネイは認める事はなかった。

「フン、そもそも一体どうやって連中と戦えばいい。連邦の主力部隊だって歯が立たないって聞いてるし、この星の何処にも奴等と戦える奴なんているわけ――――」

「いや、いる！」

ギュネイの言葉を遮ってラウンジに入ってくる一人の男、仮面を被ったゼロの登場に、下に伏せていた面々の顔が一斉に上がった。

「ギュネイ＝ガス、確かに君の言うとおりミケーネの神々の力は我々の予想を上回って

いた。その力は計り知れず、連邦やネオ・ジオンにも太刀打ち出来る者はいないだろう」
「そ、それはそうだろう？　だったら――」
「だが、俺は知っている。喩え一人だろうと……否！　一人だからこそ自ら進んで戦う一人の愚か者の存在を！」
確信に満ちた声色でゼロは言う。彼の言う愚か者という言葉に心当たりがある面々はまさかと思い、その表情を驚愕に染め上げる。
そんな時だった。ラウンジに駆け込むように入ってくるボスが、息も絶え絶えになりながらある報告を彼等に告げる。
「た、大変だ！　熱海に、日本の熱海にミケーネの連中が現れて暴れ回ってやがる！」
「何だと!?」
「しかもそれだけじゃねぇ！　グランゾンが、蒼のカリスマが奴等と戦いを始めやがったらしいんだ！」
ボスからの報告にヒビキを始めとしたＺ―ＢＬＵＥの面々、そしてギュネイ＝ガスが驚きに目を見開かせている中、ゼロ――ルルーシュは不敵な笑みを仮面の奥で浮かべる。
「そうだ！　奴が、シュウジ＝シラカワがこの状況を見過ごす筈がない！」
何故なら、奴は自分達以上に神という存在を毛嫌いしているからだ。

◇

燃え盛る熱海の街で剣戟の音が響く。大気を震わし、地響きを轟かせ、空を揺さぶるその打ち合いに、地元住民の人々は恐怖で震え上がった。

燃える街並み、瓦礫の上で戦う巨人と巨人、打ち合いを続ける中で勝ったのは……蒼き魔神ことグランゾンだった。

「な、ば、ばかなぁぁぁっ!!」

手にしていた剣を腕ごと弾き飛ばされた巨人、ミケーネの神の一柱が断末魔の叫びを

上げ、その瞬間魔神の手にしている大剣で以て真っ二つに両断される。
血飛沫をまき散らし、倒れる頃には消滅する同胞を目の当たりにした他の神々の表情が激変する。神と呼ばれ、太古の昔から存在してきた自分達の同胞が、一人の魔神によって葬られたのだ。
怒りに染まった神々は、一斉に目の前の魔神を迎え撃つ。剣、鎌、斧と様々な獲物を手にした彼等は、全方位から蒼き魔神を討ち倒そうと襲いかかる。
手にしている武器はどれも原始的なモノ、しかし仮にも神と呼ばれる彼等の腕によって揮われるその力は絶大。魔神は襲い来る刃の群を必要最低限の動きで回避、直撃を避ける事に徹した。
しかし、手数も多く、力のある連中の相手をするのは中々骨が折れる作業だ。このままではジリ貧だと魔神を操る魔人が舌打ちをした時、通信に聞き慣れた声が届いてきた。
『シラカワ殿！　住民の避難はただいま完了しましたぞ！』
コックピット内に響いてくる声を耳にしたと同時に魔人蒼のカリスマ――――シュウジは、モニターに浮かぶ座標地図に目を通す。そこには自分以外の生体反応は示しておらず、声の主……ブロッケンの言う通り、ここ熱海一帯の住民達は避難したようだ。
「いい仕事をしたブロッケン。じゃあ、此方もそろそろ本腰を入れる事にしよう」

迎撃に訪れていた連邦軍も既に熱海から離脱し、逃げた住民達の所に向かっている。この分だと彼等によって熱海の人々は無事に回収される事だろう。

ならば、後は目の前の邪神共を駆逐するだけ。シュウジは操縦桿を握る手に力を込め、ミケーネの神々を見据えた。

『たかが人間風情が粋がってくれる！』

『我々に楯突いた事、骨の髄まで後悔させてくれる！』

降りかかる巨大な刃の群、それを真っ正面からグランワームソードで受け止めた瞬間――。

「グラビトロンカノン、発射!!」

分子間引力をも引き裂く高重力の雨を神々に叩きつけた。突然の高重力により膝を付き、地面に這い蹲るミケーネの神々。その表情は驚愕と、恥辱による怒りで染まりきっていた。

『こ、この！　人間風情がぁっ！』

『我らを地に膝を付けた程度でいい気になるなよ！』

猛り、吼える。神と名乗る者達の雄叫びに対してシュウジはただ冷ややかな目で見下ろしていた。

「……神という奴は、どいつもこいつも勝手な事しか言えないのか？」

自らの行いに疑いを持たず、ただ破壊の限りを尽くす。自分達の存在こそ至高であり、他の者達は塵程度にしか思わない。そんなミケーネの神々にシュウジは心の底から軽蔑していた。

「ワームスマッシャー」

紡がれる一言と共に、無数の閃光の槍がミケーネの神々を貫いていく。喩え耐久力が高かろうと内側から攻めてしまえば脆いモノ、この方法で案外容易く倒せるのは最初の奇襲で実証済みだ。

襲いかかってきたミケーネの神々は全て倒し、残るは約半数。奴等の僕らしきタロス像を含めればまだまだ気を抜けない状況だが、シュウジはそれでも負けるつもりはなかった。

連中の親玉であるハーデス神も未だ座した姿勢を解いておらず、寧ろ不気味な笑みを更に深くしていた。奴を倒さない限り地球は未だ危機を脱しているとはいえない。勝負はこれからだと思われた時、ハーデス神が愉快そうに笑いながらシュウジに声を掛けた。

『フフフ、まさか連中の他にもまだこれほどの力を持っていた者がいたとはな。確かにこの世界は太陽の輝きに差し掛かっているのやもしれん。しかもこの力の波動、貴様は既にシンカの道に入ろうとしているな』

（……太陽の輝き、シンカだと？　そういえば宇宙魔王の奴も似たような事を言っていたな）

ハーデスの言葉に心当たりのあるシュウジは内心で一瞬の考えに耽る。〝シンカ〟どうやら自分の知る進化とはニュアンスが違うようだが、今はそんな事に思考を割く訳にはいかない。立ち上がり、その両手に剣を携えるハーデスに、シュウジはグランゾンと共に目の前の敵を見定める。

『先のＺ―ＢＬＵＥとかいう連中もそうだが、貴様は特に放っておくと後々が面倒そうだ。宇宙魔王には悪いが、貴様にはここで消えて貰うとしよう』

「成る程、その傲慢さといい理不尽な物言いといい、確かにお前は神なんだろうさ。けどな、あんまり人間舐めてると……手痛いシッペ返しを食らうぜ」

『フン、ほざくなよ人間がぁ！』

互いに剣を取り、同時に地を蹴る。シュウジはグランゾンのスラスターに火を入れて加速し、勢いを乗せたままグランワームソードを振り抜く。ぶつかり合う剣と剣、その衝撃に瓦礫は吹き飛び、周囲に燃え盛っていた炎も消し飛んでいく。

スピードは確かに此方の方が上だった。なのに、今最大限の一撃を放った自分達の方がハーデスによって押し留められている。

さすがにミケーネの神々を纏めるだけの力はある。マジンガーＺを倒した一撃の重

さを体感するシュウジ、その頬に冷たい汗が流れる。
（やっぱり、こいつも宇宙魔王と同様トンでもない化け物だったか。パワーだけならガイオウに匹敵するんじゃないか!?）
　スラスターの火に幾ら力を注いでも目の前の神はビクともしない。このままではいずれ押し返されると思ったシュウジがネオの力を引き出そうとした時、彼等が現れた。
『そこまでだハーデス！　お前達の相手は俺達がしてやるぜ！』
　ボロボロの姿となったマジンガーＺとＺ―ＢＬＵＥの登場に再び熱海は混沌の時を迎えるのだった。

その９６

△月Ω日

先の熱海での戦い、中々壮絶な戦闘で苦戦を強いられたのだが、後から来たＺ―ＢＬＵＥの皆と共闘したお陰でどうにかミケーネを退ける事が出来た。

マジンガーＺを始めとしてＺ―ＢＬＵＥの面々の機体は傷だらけのボロボロだった事や、ミケーネの勇者を名乗るガラダブラの出現等があり、結構戦況的にはヤバかったと思う。

けれど、その直後やってきた真ドラゴンが、ゲッター線をマジンガーＺに浴びせる事により戦況は急展開。進化を促すエネルギーであるゲッター線を浴びた事によりマジンガーＺは底力を発揮し、ガラダブラを撃破。自分もハーデスとの戦いに専念出来た為、奴等を追い返す事が出来た。

しかし、本当に良いタイミングで来てくれた。Ｚ―ＢＬＵＥが来てくれたお陰でネオを出さずに済んだし、何より熱海が地図から消える事態を避ける事が出来た。

ネオの力は良くも悪くも強力過ぎる。下手をすれば戦いの余波だけで熱海を消してしまっていたかもしれない。ネオ・グランゾンの力が如何に強大なのかは再世戦争を経て学習済みだ。出来る事なら地球圏で使用する事は極力控えたい所だ。

その後、自分はＺ―ＢＬＵＥと合流し、軽く事情説明をする事になったのだが、この時ちょっとしたトラブルがあった。まぁ、大体はブロッケンの事についてなんだけどね。

孤島ごと爆発に呑まれ死んだと思われていたブロッケンに皆結構驚いていたが、自分の懸命な説得と本人の弁解によりどうにか理解してもらい、事前に街の人達を避難させていたという情報もあった為、割とあっさり受け入れて貰えた。

各艦長の挨拶周りを終えた後、用意された部屋に向かおうとした自分だが、この時ちょっとしたイベントが起こった。ヒビキ君からの久し振りの組み手の誘いである。断る理由もなかったから格納庫に向かい何度か手合わせをしたのだが……いやー、ヒビキ君てば強くなったなぁ。

おじさん直伝のジークンドーにも磨きが掛かっていたし、此方の動きにも要所要所で対抗してたし、ちょっぴり冷や冷やする所もあった。

ただ、ブーストアップだっけ？　アレを使用するのは少し頂けないと思った。アレは所謂ドーピングで、使えば使用者に多大な負荷を掛ける諸刃の剣だ。

初見で使用するには決め手になるかもしれないが、あまり過信すると命取りになる。今日の組み手の時だってそれに頼り過ぎた為に折角のチャンスをフイにしてしまったからね。

ヒビキ君はブーストアップが破られた事に酷く驚いていた。……まぁ、自分としてはガモンさんとの組み手で、あの手の速さには慣れているってのもあるんだけどね。

その後は色々世間話をして和気藹々と過ごしていたのだけれど、不意に訊ねたヒビキ君の家族……おじさんと姐さんの話に触れると、急にヒビキ君の態度は変わってしまった。

……先の新世時空振動の際、ヒビキ君の家族が二人とも亡くなった。そう淡々と話すヒビキ君の台詞に俺は何も言えなくなった。

家族を目の前で亡くしたと語るヒビキ君は……とても痛々しかった。あの強かったおじさんと逞しくとも綺麗な女性の姐さん、二人が死んだと話すヒビキ君に、信じたくないと自分は否定したかった。

ヒビキ君は幼い頃に母親を亡くしているという。数少ない肉親である二人を亡くしたヒビキ君は天涯孤独の身の上となってしまった。

自分はそれ以上ヒビキ君に掛ける言葉は見つからず、苦し紛れに一緒に墓参りに行こうくらいのことしか言えなかった。ヒビキ君もそれ以上家族について語る事なく、自分

は自室へと向かった。
　ただ、その際にスズネ先生とすれ違った事から、彼女は多分ヒビキ君を励ましにいったのだと思う。ヒビキ君の担任でありパートナーでもある彼女の言葉なら、ヒビキ君の心にも届く事だろう。
　ただ、その際に少し違和感を感じた。すれ違った際に感じたスズネ先生の視線、何だか鋭かった気がする。態度もなにやら不遜なモノだったし……一体どうしたのだろう？
　ストレスでも溜まってるのかな？　けど、スズネ先生のあの態度、軽く人格が変わっている風だったが、人格が変わる程のストレスってかなりヤバくない？
　この事はカウンセラーのルゥちゃんに報告する事にして今日はこれで終わろうと思う。

■月Δ日
　ミケーネとの戦いで疲弊した心と体、そして機体を直したＺ―ＢＬＵＥはこの日再び行動を開始した。最近、ネオ・ジオンの動きが活発化してきたという話とネルフからエヴァ組に出頭命令が出た事、これらの事情を合わせてまたもや二手に分かれる事になったＺ―ＢＬＵＥに対し、自分とブロッケンは結局どちらかに付いていく事はせず、彼等

の出発に合わせて分かれる事になった。

いや、本当は自分も付いていきたかったよ？　シャア＝アズナブルにも話はあったし、アムロさんから聞かされたもう一人の赤い彗星とやらの人物について気になっていた。エヴァ組に対してだって使徒に対抗する為に自分も手伝いたかったのだが……どうしても外せない用事があり、どちらの誘いも断ったのだ。

用事……というのは私事的なモノで、そんな重要な事ではないかもしれないが、自分にとって大事な事なので今回はそちらを優先させてもらった。

その用事というのが――――リモネシア。現在エタニティ・フラットの影響を強く受けた地域の一つ、願掛けのつもりで皆の顔を見に行きたかったのだ。

多分、近い内に大規模な戦いが始まる。それこそ再世戦争の時とは比べものにならないほどの強大な輩との戦いが……なんて、それっぽい事書いたりしているが、実際はただ皆に会って元気を貰いたいだけなのだ。

今のリモネシアは時の止まった地、恐らく自分が来たことなんて知覚出来ないだろうが……それでも構わない。ラトロワさん、ガモンさん、子供達やお年寄りの、ジャール大隊の皆とシオさん。店長の墓参りにも行きたかったし、これは良い機会かもしれない。

トレーズさんにも色々と報告したかったし、これを機会に心残りを済ませておくのも

いいかもしれない。……いや、死ぬつもりはないけどね。
今日はもうこれで終わりにしよう。明日に備えて早く寝ることにする。

■月Ｚ日

――――――

その97

※月μ日

……先日、少し感情的になり過ぎた自分は今日幾分か落ち着きを取り戻した為、状況整理の意味を込めて改めて日記を書いていこうと思う。

先日、自分がリモネシアに訪れた際に起きた出来事――――それは、自らクロノと名乗る集団による突然の襲撃だった。

本当に突然だった。リモネシアに上陸するその時までグランゾンのスキャニング能力で誰か不審者がいないか念入りに調べたと言うのに、奴等は音もなく自分の周囲を取り囲んでみせたのだ。今思えばこれも連中を束ねている〝〝の力によるモノなのだろう。

……奴に掛けられた呪いの所為で名前を書けないから、今後〝〝は喜び野郎と呼称する。

喜び野郎とその配下は自分に仲間になれと脅してきた。当然自分は断るつもりだっ

た。だが、喜びのクソ野郎は俺が断るのを見越していたのか、俺の目の前で胸糞悪くなる光景を見せつけやがった。

シオさん、ラトロワさん、そしてジャール大隊の皆、エタニティ・フラットの影響による時の牢獄に縛られ、身動き出来ない彼女達を後ろから斬りつけやがったのだ。

……久し振りに殺意が湧いた。いや、実際殺してやろうと思った。何の抵抗も出来ないラトロワさん達を背後から一方的に攻撃した奴等を、喜びのクソ野郎を、ありったけの力で全開で殺してやりたかった。

けれど、喜び野郎は次に動けば子供達を殺すと自分に脅してきた。とびっきりの――それこそ、聖人を思わせる眩しい笑顔と共に。

頭がどうにかなりそうだった。終始微笑みを浮かべながら、命を狩ろうとしている奴に俺は怒りを抱くと同時にどこか不気味さを感じていた。

……結局、俺は奴の言う事に従うしかなかった。行動を共にする事を強制したり、監視を付けられる事はなかったが、その代わり俺は奴の呪いを受ける事になった。

呪いの内容は自分に対し従順になるというもの。受けた人間の命が続く限りこの呪いは解かれる事はなく、また呪いの力はより強力になる。

しかもこの呪いの厄介な所は単に相手を縛る事だけじゃない。時が経つほどに深層心理に侵蝕し、心の底から奴の下僕に成り下がる――――反吐が出る呪いだ。

既に、心のどこかで奴が正しいと感じている自分がいる。これに対抗する為に先日自分は日記に自己嫌悪をありったけ書き殴ったのだが、お陰で少し落ち着く事が出来た。

この呪いは受けた人間の心の隙の大きさに比例して侵蝕の力を強めてくる。怒りに身を任せて暴れればそれこそ奴の思い通りになり、俺は今頃奴を崇拝する傀儡に成り果てていた事だろう。

ホント、ＺＥＮさんには頭が上がらない。彼が駆けつけてくれたお陰で奴等は撤退し、ラトロワさん達の治療も滞りなく行えた。幸い傷は深くなく、治療は滞りなく終わった。時が止まるという特殊な環境下で治療が上手く行くのか不安に思ったが、どうやらＺＥＮさんはエレメントの子達と同じくちょっとした特殊能力も使えるらしく、治療している合間のシオさん達はその時だけ鼓動がちゃんと動いていた。出血の流れが一瞬速くなったのもＺＥＮさんのその能力の影響だと思われる。

ただ、意識だけは止まったままの様で皆自分の事を認識している様子はなかった。ＺＥＮさんの話だと怪我を負った彼女達は自分達が怪我を負った事すら認識できず、痛みを感知しないまま完治するのだという。

一見便利そうな状態に思えるかもしれないが、逆を言えばもし連中の攻撃でシオさん達が致命傷を負えば、最悪自分でも知らない内に死んでいたという事にもなる。……その事を考えるとゾッとするし、今度こそ奴等に対する怒りで本当に我を失ってしまいそ

うだ。
　ＺＥＮさんといいＧＥＮさんといい、不動の名の付く人には本当に頭が上がらない。礼はいらないと彼は言って早足に去っていた。彼は不要と言っていたが、せめて日記の中ではお礼を言っておこうと思う。
　そしてもう一つ、有益な情報を手に入れる事が出来た。ＺＥＮさんが言うにはあの喜び野郎は〝最後の一人〟らしく、他にも奴に似た連中が複数存在しているらしいのだ。
　奴みたいなのが何人もいる事に頭が痛くなるが……それでも知っていれば困ることはないので、この情報は有り難く受け取っておくことにしよう。
　……取り敢えず、今日の所はこれで終わりにしよう。グランゾンのコックピットにいれば比較的心に余裕を持てている気がするし、奴に掛けられた呪いを解く算段を立てなければならない。
　本当なら今頃分かれたＺ―ＢＬＵＥのいずれかの部隊に合流するつもりだったのだが、それは叶いそうにない。取り敢えず、この日の気持ちを忘れない為、最後に日記に記しておこうと思う。
　――――喜び野郎、お前が俺にした事は絶対に忘れない。

※月α日

シラカワ博士からの応答がない。いつもなら自分の声に応えてくれた博士が、何故か今日は幾ら呼んでも返事をしてくれる事はなかった。

代わりにあるのはグランゾンの全天モニターに映し出されたシラカワシステム発動中の点滅のみ、もしかしたら博士は既に自分の状態を察して、自分の深層心理に食い込んでいる呪いに対抗しているのかもしれない。

シラカワシステムの中にはパイロットの生命維持の役割も備わっている。自分が受けた呪い、それが白河修司という本質を失わせると判断したのなら、このシステムが動いているという事も納得できる。

そして、同時に理解する。自分がシュウジという人間でいられるのはグランゾンのコックピット内部だけであり、一度外に出てしまえば、途端に俺は奴の呪いで心が一気に侵蝕されてしまうという事を。

そしてその呪いの強さは博士が食い止めるだけで精一杯な程に強力な事、何度も呼んでいるにも拘わらず反応すら無い事から……多分、間違い無いのだろう。そして、現段階において、自分がこの呪いを解く方法はないという事も。

――――いや、あるにはある。殆ど賭け、それも分が悪すぎる賭けだが、一つだけこの呪いを解く方法が俺にはまだ残されている。

その為に俺は多くの人達の信頼を踏みにじる事になる。多くの人達の気持ちを裏切

る事になる。……トレーズさんやシュナイゼルにも顔向けできなくなる。
けど、やるしかない。怖いし、不安だけど、やるしかないんだ。サイデリアルとクロノ、そして例の〝奴等〟に借りを返す為にも、俺はやり遂げなくてはならない。
俺が奴の呪縛から解放される為に必要なただ一つの方法、それは……。

――――――死ぬことだ。

その９８

※月@日

喜び野郎の呪いを受けて数日、グランゾンのコックピットにいるお陰で呪いの侵蝕はある程度抑えられ、今の所日記を書く余裕も失われていない。

常日頃から旅を続けていただけあって携帯トイレを常に買い置きしておいたから無意味に外に出ることも無く済んでいる。携帯トイレの後始末も袋に包んで纏めて捨てているからコックピット内は一応清潔を保てている。とは言え、汚物をまき散らしているのは事実だから、その内シュウ博士に怒られそうである。

けど、それもこの呪縛を打ち破らない事には始まらない。今自分がこうしている間にも博士はシラカワシステムを通して自分の呪いの侵攻を抑えてくれている。が、それがいつまでも続くとは思えない。この呪いが完全に自分の心を染める前にやるべき事を迅速に行うべきだろう。

自分が動けない代わりに世界各地を回って貰う事にしたブロッケン、彼は現在第三新

東京都市付近に潜伏し、今分かっている情報を集めて貰っている。
そして今、その情報を纏めている所なのだが……どうやら状況は自分が思っていた以上に混沌としている様だ。
二手に分かれたＺ―ＢＬＵＥ。ネオ・ジオンに対して牽制行動を行った彼らは、ダカールにてネオ・ジオンの軍と対立、戦闘を行った。
何でもダカールの議事堂では大統領やリリーナちゃん、マリナ＝イスマイールさんもいたらしく、ジオンはそこを狙って襲ってきたのだと思われる。
というか、これもしかしなくても地球至上主義――――いや、クロノの仕業だよね？
大統領の命が関わって非常に危険な事態だというのに連邦軍が動かないとか、そんなの自分達にとって不都合だと言っているようなものじゃないか。
しかも、当時地球至上主義のトップであるサイガスは大統領諸共ネオ・ジオン軍をＮ２爆雷で殲滅しようなんて考えていたみたいだし、ホントアレな人間だなサイガスってのは。
けれど先に記したＺ―ＢＬＵＥが戦ったお陰で事態は沈静化、ネオ・ジオン軍の中で猛威を揮っていた赤い巨大モビルアーマーもバナージ君とユニコーンの頑張りのお陰で無力化させる事に成功、大統領達も後からやってきた連邦軍に保護され、無事救助された。

しかし、本当地球至上主義――――いや、サイガスの奴は手段を選ばなくなってきたな。クロノという後ろ盾が出来た為か妙に態度もデカくなってきているし……やっぱ以前顔合わせた時に消しとけば良かったかな。

その場にいられなかった事が非常に悔やまれるが……その分分かった事も大きかった為、取り敢えず今はこれで納得しておく事にする。

ブロッケンから聞かされる話から察するに、自分はネオ・ジオンとクロノに明確な繋がりがあるのではないのかと考える。つーか、それしか考えられなかった。

大統領の行動は連邦政府が厳重に管理、情報の規制を設けられている。それは現地に余計な混乱を抑える為と、敵対組織に攻撃を仕掛けられる事を防ぐ為だ。

けれど今回それはなかった。ネオ・ジオンが的確にダカールを襲ってきたのを鑑みるに、随分前からネオ・ジオンとクロノには繋がりが出来ていると自分は考えている。

時期的にはシャア＝アズナブルが地球連邦に停戦協定を結んだ頃……いや、もっと前か？　そのぐらい前には既にクロノとネオ・ジオンの間に何かしらの密約を交わしたのではないだろうか。

尤もシャア総帥……いや、クワトロさんが進んで奴等と組むとは考えにくい。確かに彼の目的の一つにクロノを表舞台に引きずり出す事にあるが、流石に直接奴等と手を組む真似は彼の人間性を考えても無いと思う。

それにもし地球側、それも連邦政府の中枢に根付く秘密結社と協力関係にあるなどとコロニーの人々に知られれば、それだけで大騒ぎになる。道徳論や損得の話を含めても、クワトロさんが連中と手を組む事はないと思う。

では一体誰か？　ハマーンさん……も、ないな。あの人そういうの毛嫌いしそうだし、何よりサイガスの様な人間を俗物と蔑んでいそう。そんな人がクロノと秘密裏に接触しているなんてちょっと想像出来ない。

だとすると、消去法的にも可能性的にもあと残されたのは例のもう一人の赤い彗星かな。直接面と向かって会った事はないけれど、仮にも赤い彗星と呼ばれる位だから相当頭が切れるんだろうし、誰にも悟られずクロノと接触するなんて事も出来そうだ。

そしてその事に気付いているのもクワトロさんっぽいな。あの人もトレーズさんの所で色々学んだとか言ってたし、敢えて内側の敵を泳がせておくというのも考えていそうだ。……もしかしたらクワトロさんは自分が思っている以上にぶっつけ本番な事を考えているかもしれない。

さて、対ネオ・ジオン軍に向かったＺ―ＢＬＵＥに対する考察はこの位にして、次は今度はもう片方の部隊の事について纏めよう。

……というか、こちらの方はかなり複雑化している。向かわせたブロッケンも不用意に近づけない事から状況は詳しく把握出来ていないが、どうやらＥＶＡのパイロットで

あるアスカちゃんが意識不明の重体らしいのだ。

何でも、新しく導入する予定だったＥＶＡ３号機のテスト中に侵蝕型の使徒に襲われ試験場は爆発、遠巻きに見ていたブロッケンも爆発による衝撃により吹き飛ばされ、事態の終始を見届ける事が出来なかったらしいのだ。

恐らく侵蝕型による暴走、それにより３号機は使徒となり、Ｚ―ＢＬＵＥはこれに対処する事になったのだろう。そしてその際に――――。

……自分がいれば状況が変わっていた。なんて傲慢な事は言わないが、それでも当時その場に居合わせられなかった事を悔やまずにはいられなかった。

アスカちゃんとは自分がＺ―ＢＬＵＥと合流していた頃に結構な話をしたりする間柄だった。その内容が全部自分に対する挑戦状というのがアレな話だったが、それでも相手にしてくれる分だけ自分にとってはとても嬉しい事だったのだ。

やたらと自分がＮｏ．１パイロットという事に強い拘りをもっていたり、周りに良く反発したりシンジ君やレイちゃんと衝突してたりしていたけど、彼女には他人を思いやる優しさがあった。

それが今回裏目に出てしまった。ブロッケンから話を聞かされた後、グランゾンの力を使ってＮＥＲＶのネットワークにハッキングをしたのだが、どうやら本来なら３号機にはレイちゃんが乗る予定だったらしく、アスカちゃんは自ら志願したらしいのだ。

多分、彼女なりに思う所があったのだろう。自分以外のＥＶＡパイロットに対し、対抗意識以外の気持ちが芽生え、シンジ君達を想っての行動の果てにあんな事が起きるなんて……間が悪いと言うには剰りにも残酷な結果だ。

幸い最悪の事態にはならなかったが、それでもアスカちゃんは面会謝絶の絶対安静、今もＮＥＲＶの医療設備にて治療中の様子。

……早く元気になって欲しい所だ。彼女には自分も謝らなければならない事があるから。

〝惣流〟本当なら式波である筈の彼女の名字を間違えてしまった事、些細な事かもしれないが、今後彼女が目を覚ました時、コレを機会に話を弾ませてみようと思う。

最後に彼女が元気になることを祈って今日は終わりにしようと思う。

アスカちゃん、早く良くなってね。

※月＊日

今日、久し振りに奴と遭遇した。

〝ジェミニス〟そしてアルテア軍、ジオフロントに襲撃してきた奴等に対し、Ｚ―ＢＬＵＥは窮地に陥りながらも、ダブルオークアンタとシェリルさんとランカちゃんの歌の力によって逆転、見事勝利を飾る事が出来た。

この時自分も参戦したのだが、どうやら戦うだけでも呪縛による侵蝕が速まるらしく、抵抗するだけで精一杯な自分は終始彼等の足を引っ張るだけとなってしまった。

しかもこの時にガドライトに悟られてしまったのか、随分と余裕そうな態度を見せていた。まぁそれでも普段から手を抜いている輩に負ける事はなく、この時は奴との一騎打ちでも押し勝つ事が出来たのだが、恐らく次に戦う際は呪縛の侵蝕の度合い的に勝つことは難しいだろう。

それに不味いことはそれだけでない。時の牢獄を打ち破る為に不動さんに連れてこられたランカちゃんとシェリルさんが、ミカゲの奴によって攫われてしまったのだ。しかもその時にジオフロントの地下深くに眠っていた神話型アクエリオン――――アポロ君達のアクエリオンまでもが奴に奪われてしまった。

今後Ｚ―ＢＬＵＥはランカちゃんとシェリルさん奪還の為に動くと思われる。自分も乗りかけた船という事で一緒に行動する事になった。自分も二人の救出の為に力を貸したいと思うし、アルテア軍の捕虜となったＭＩＸちゃんも助けたいと思う。

だけど、彼等と行動するにはグランゾンから出てくる必要がある。グランゾンに籠もりっぱなしでは要らぬ心配をヒビキ君達に負わせる事になるし、最悪自分の計画が悟られてしまうからだ。Ｚ―ＢＬＵＥにはアムロさんを始めとした勘の鋭い人が多いし、それだけは防がなくてはならない。

……何とか、歯を食いしばって耐えるしかないだろう。幸い自分が蒼のカリスマを名乗っているだけあって普段は仮面を付けてても誰も文句は言わないし（ルルーシュ君も仮面付けてるしね）、　表情を読まれる心配はない。後は自分がどれだけ〝その時〟まで自分を保てるかだ。

ブロッケンは今、自分に代わって世界のあちこちを探索して貰っている。下手をすればアマルガムといった裏組織に狙われる事も有り得るが……何とか頑張って貰うしかない。

ここからが自分にとっての正念場だ。

◇

マクロス・クォーター格納庫、そこではミカゲによって攫われた二人の歌姫を取り戻すべく、Ｚ―ＢＬＵＥの面々が作戦会議を開いていた。
作戦の内容はフォールド波によるアルテア軍の本拠地の探索と、歌い手であるバサラ達の力で以てその道程を切り開くというモノ。しかし、それは言うほど簡単なものではなく、決して成功率の高い内容ではなかった。
これまでの次元科学とは一線を画す難易度、下手をすれば次元の狭間に落ちて永遠にさまよい続けるという大きなリスクを前に皆が決意を固めようとした時――――彼の者が現れた。
「久し振りだねヒビキ、その様子だとこれからの戦いに迷いを抱いているようだね」
「アドヴェント!?　どうしてここに?」
「なに、ちょっとした野暮用だよ。本当ならガドライトとの戦いに手助けしようと思ったのだけれどその必要もなくなったしね。艦長に頼み込んでここに来れるよう誘導して貰ったのさ」
いきなり現れる黒を引き連れた白き衣を纏う青年、その微笑みから不安を和らいで

貰ったヒビキは戸惑いながらも嬉しそうに笑みを浮かべる。
「それで、野暮用とは何だ？　お前がなにも目的もなしにここに来るとは思えないのだが」
「……確かに、時の牢獄が完成するまでもうそんなに時間は残されていない。済まないなゼロ、すぐに目的を済ませて我々は退散する事にしよう」
本当に申し訳ない。そう思わせる彼の態度にゼロは言葉をどもらせる。得体の知れないのは確か、しかしこれまで何度も窮地を救って貰って来た彼からすれば今の自分の態度は恩を仇で返すモノ、流石にそんな真似は出来ないと判断したゼロはそれ以上彼に何も言うことなく、大人しく引き下がる。
そんなゼロを見渡すと、アドヴェントと呼ばれる青年は辺りを見渡し、ある人物を射止めると微笑みを浮かべ――――。
「やぁ、初めまして蒼のカリスマ、君にこうして会えた事に私は喜びを感じているよ」
そう、心から喜び手を差し出してくる彼に対し――――。
「――――初めまして、アドヴェント、私も貴方に会えてとても嬉しいですよ」
仮面を被る蒼の魔人も、応える様に出された手を握り返した。
まるで気安い友人同士の様に握手を交わす二人、周囲の人間が気安い二人にそれぞれの反応を示す中……。

仮面の奥、心の芯根で魔人は最大限の怒りと殺意を滲ませていた。

その９９

∵月γ日

ここ暫く決戦級の戦いが連続して行われた為、日記に触れる事も出来ないでいたが、漸く休める時が来たので、息抜きとコレまでの出来事の報告を兼ねて書いていこうと思う。

まず最初にアルテア軍に突入した自分とＺ―ＢＬＵＥはアルテア軍総司令官であるイズモと対決、ミカゲの奴の横槍があったりと割と苦戦を強いられたが、アンディ君とＭＩＸちゃん、そして死を乗り越えたシュレード君の頑張りのお陰でこれらを撃破した。

アルテア軍と決着を付けた自分達はその直後突然現れた宇宙魔王の息子グーラ君と戦い、その後に控えていた宇宙魔王との決戦となった。

宇宙魔王とミカゲによって奪われた神話型アクエリオン、太陽の翼によって力の大部分を封印されていたと語る宇宙魔王はこの時遂に本当の力を開放し、自分とＺ―ＢＬＵＥを圧倒して見せた。

本当ならこの時点で自分も全力を出すべきだった。ネオになる事で奴に対抗する術を得るつもりだったのだが、先日交わした奴の――――喜びクソ野郎との握手の所為でそうする事が出来なかったのだ。

奴と握手を交わしたその時、喜びのクソ野郎は自分に更なる呪いを、握手を通して流し込んで来やがったのだ。お陰で自分はより奴の呪いを受ける羽目になり、侵攻速度はより強いモノへとなってしまった。

その所為で自分は直接戦闘に参加する事は出来ず、ここ暫くワームスマッシャーによる援護攻撃しか出来なかった。おかげで宇宙魔王には嘲笑の笑みを向けられるわミカゲには舐められるわと散々な目にあった。

まぁ、結局はそのどちらにも勝てたから別に良いんだけどね。宇宙魔王には正太郎君の鉄人、ミカゲにはアクエリオンとアマタ君が、それぞれ太陽の力で連中を退ける事が出来た。

鉄人に施された太陽エネルギー、その全てを開放させての特攻はマイナスの次元力の塊である宇宙魔王には効果覿面で、奴は断末魔と共に鉄人の放つ光に溶けていった。

因みに、これは宇宙魔王の決戦の時に知った事なのだが、どうやらアルテア軍の母星は自分達が住んでいる地球から分かたれた存在で、人間で言うところの双子にあるらしいのだ。

何故アルテアの星と自分達の星が分かれたのか、それは嘗て滅びの時を迎える筈だった地球を救うために、アポロ君達が取った行動の果てに起こった出来事が原因であり、それにより時空震動が引き起こされ、日本が二つあるように地球も二つに分かれたのだという。

何とも壮大な話だが、あの不動さんが言うのだから間違い無いだろう。アルテアと地球、二つの星の真実を知った自分達は宇宙魔王を倒した後、導かれる様に再び転移する事になる。

この時、再びアンチスパイラルのメッセンジャーとなったニアちゃんが現れたのだが、どうやら彼女はアンチスパイラル直々の伝言があったらしく、転移される瞬間自分の所にメッセージを飛ばしてきた。

内容はアンチスパイラルからの決闘書、要約すれば待っているからはよ来いという奴のメッセージに、俺は呪いとは別件で頭が痛くなってきた。無限に等しい力とそれに見合った威厳を持っている割になんか乙女チックだよなアイツ。

グランゾンのモニターに映し出されるアンチスパイラルのメッセージに頭を痛める自分だが、そうこうしている間に次の戦場に到達、そこは以前Ｚ―ＢＬＵＥの転移に巻き込まれた際に訪れたパラダイムシティと呼ばれる所だった。

そこで待っていたのはザ・ビッグと呼ばれるロボット軍団と、ビッグオーの色を反転

させたビッグヴィヌスという機体だった。
なんでもビッグヴィヌスにはロジャーさんの交渉相手が乗っているらしく、彼女の相手は専らロジャーさんが務める事になった。
けれど、目的もなく暴れ回る彼女を止めるのはロジャーさんだけでは難しく、アムロさんやシン君達が援護に回った。
しかし、ビッグヴィヌスの力は極めて特殊かつ凶悪で、攻撃されたモノは例外なく〝消滅〟パラダイムシティの世界から消えてなくなるらしいのだ。
しかも厄介な事にビッグヴィヌスの攻撃はその過程に関わらず必ず当たるというモノで、喩え直撃でなくとも彼女の攻撃を受けた者はこの世界から消えてなくなるというのだ。
過程に関係なく結果だけを具現させる。因果の逆転とか何処の青い槍兵の宝具だよ。絶対必中にして問答無用の一撃死とか、インチキどころの話ではない。
けれど、ここで彼女にとっての誤算が起きた。追い詰められたビッグオーを庇う為にビッグヴィヌスの一撃を受けてしまったのだが、どういう訳か自分は消える事なく、ダメージを受けるだけで済んだのだ。
恐らくビッグヴィヌスの力を防いだのは喜びクソ野郎の呪いの所為なのだろう。奴はおそらく宇宙魔王やミカゲよりも格の高い高次元生命体、それ故に格下の生命体の攻

撃や干渉は受け付けず、ダメージを受ける事もない。
言うなればこれは奴の加護の様なモノなのだろう。奴に守られたと思うと正直反吐が出る思いだし、実際反吐を吐き出した。しかしお陰でビッグヴィヌスの虚を突く事ができ、ロジャーさんも彼女との交渉を成功させる事が出来た。
本当ならここで呪いごと自分を消滅させるつもりで、あわよくば開放されようかなと思ったりしたのだけれど、どうやらそこまで甘くは無かった様だ。消滅させられてたＺ―ＢＬＵＥの面々もロジャーさんが交渉を成功させると元に戻ると言っていたし、少し期待していたのだが……まぁ、仕方ないと言えば仕方ない。
で、その後はミカゲと奴の乗った神話型アクエリオンとミケーネとの決戦なのだが……ぶっちゃけそんな書く事はないんだよなぁ。強いて言うならばＺマジンガーことゼウスさんが出てきて共闘してくれた事くらい。
ハーデスもゼウスとマジンガーの一撃により一応倒れたし、ミカゲの方もアマタ君達の力で退ける事が出来た。……その際にミカゲも自分が今一体どういう状態なのか見抜いたらしく、終始自分を見下していた。
まぁ、結局何が言いたいかと言うと、一連の戦いの中で自分はさほど活躍出来なかったと言うことかな。実際後ろからワームスマッシャーで狙撃していただけだしね。お陰で射撃技能が上がった気がした。

だが、この怒濤の連戦の所為で奴の呪いによる侵蝕がより強くなった気がする。ゼウスさん曰く、自分の呪いを解く方法は存在せず、命が続く限り呪いも続いていくという。そこら辺は予め分かっていた事だから別に大した事ではないが、最近は呪いの影響力が濃く表に出てきた所為か、頭の痛みも酷くなっている。

日記を書けば少しは気を紛れるが、それでも辛いモノは辛い。今日も完徹かな、と空元気を振る舞ってみる。文章でだけど。

けれど、これで大体の連中とは一応の決着を付けた。地球にも無事に帰ってこられたし、後はネオ・ジオンとジェミニス、そしてアンチスパイラルだけである。

そしてそれらを越えた先に、自分の人生最大の山場が待ち受けている。奴に報復する最初の一歩を踏み出す為にも、自分は躊躇う事はしない。

◇

「――――と、今日の所はこんな感じかな」

マクロス・クォーターの一室、割り振られた自室で今日までの出来事を書き終えたシュウジは、椅子の背もたれに寄りかかる様に伸びをする。

備え付けられた時計を見ると時刻は既に深夜を指しており、後数刻程で夜が明ける時間帯となっていた。本当なら眠る時間が無いと嘆く所だが、今の自分には有り難い事、今日もこのまま乗り切ろうと意気込み、横に置いてあった水の入ったコップに手を伸ばした時――――

「あ……ッが……」

彼の者によって植え付けられた呪いがシュウジの内部にて暴れ始めた。完全なる不意打ち、これまでとは程度が違う呪いの奔流に、シュウジはなだれ込むように倒れ伏す。

遠くでコップが割れる音が聞こえるが、そんな事を気にかける余裕はシュウジにはなかった。全身が無数の蟲に這われる様な不快感、胸の奥で彼の者から受けた呪いがシュウジを塗りつぶそうと深く、強く胎動している。

グランゾンをネオへと至らせる時に似たような体験を経験しているが、それとはまるで別物。自我を書き換えるのではなく塗り替える、出来上がったキャンパスに別の絵の具を塗り重ねていく、そんなドス黒い衝動を前にシュウジは堪えるだけで精一杯だっ

た。
早く収まれ、早く収まれ。懇願する様に衝動の沈静化を願うシュウジに反し、呪いは更に強さを増してシュウジを塗りつぶそうとしてくる。
やがて呪いは痛みとなり、頭の中にまで蟲が這ってくる。脳漿をグチャグチャにかき回されているかのような激痛にシュウジは悶え続けた。助けを求める声も出せず、薄暗い自室の中で苦しみ続ける中、それでもシュウジはこの呪いに抗い続けた。
耐えてやる。耐えてみせる。この程度の痛みは飲み干してみせる。目の前で大切な人達を奴に斬りつけられた事を思い出し、怒りを糧にしながら遂にシュウジは呪いの衝動に打ち勝った。
「……はぁッ、はぁッはぁッ、どうだ。勝ったぞ、クソッタレが」
呪いに打ち勝つ頃には既に朝日が昇りつつあった。水溜まりが出来るほどの汗を流し、髪は乱れ、目元には大きな隈を作りながらも、それでもシュウジは呪いに打ち勝ってみせた。
ザマァみろ。満身創痍の状態でありながら不敵な笑みを浮かべるシュウジは自室から見える朝日を眺め、勝ちを誇っていると……。
「これはまた、随分と無様な格好を晒しているじゃないか。いやはや、早起きというのも偶にはしてみるものだな」

背後から聞こえてきた声にシュウジは一瞬固まる。馴れ親しんだ声にまさかと思いながら振り返ると、そこには呆れた様な表情を浮かべた緑の悪魔（シュウジ視点）ことＣ．Ｃ．がドア越しに寄りかかりながら佇んでいた。

一体いつからいたのか、何故彼女がここにいるのか。疲弊しきった状態のシュウジは何とか誤魔化そうと思考を回転させるが、そうしている間にもＣ．Ｃ．はズカズカと部屋へと入ってくる。

「安心しろ。この事は誰かに話したりはしないさ、かの魔人の秘密を知ったんだ。そう易々と誰かに話したりするものか」

と、悪戯を思い付いた風に笑うＣ．Ｃ．にシュウジはぐうの音も言えなくなった。まさに魔女――常日頃からルルーシュが彼女に対して言っていた事をまさか自分が思うことになるとは。どうしたものかと弁明を考え始めた時、Ｃ．Ｃ．の手がシュウジの手を掴む。何だと思い抵抗するも、消耗しきった今のシュウジではＣ．Ｃ．の腕力にすら抵抗出来ず、されるがままに引っ張られる事になる。

こうなってしまってはもう止められない。仕方なくなすがままにされることになったシュウジは大人しく身を任せる事にする。しかし、その結果である今の状態に流石に納得出来なくなり、疑心感を露わにしながら彼女に説明を求めた。

「あの、Ｃ．Ｃ．さん？　これは一体なんでせうか？」

「何って、見て解らんか？　膝枕だ」
　こんな事も解らないのかと小馬鹿にしてくるＣ．Ｃ．に流石のシュウジも苛立ちを感じた。今の自分に彼女のおふざけに付き合えるほどの余裕はない。
　それにもうじきブリーフィングの時間だ。早い所行かないと遅刻してしまう。起きあがろうとするシュウジだが、額に添えられた冷たい手にシュウジは動けなくなってしまう。
「お前は、少し頑張り過ぎだな」
　困った子、そう慈しみの笑みと共に額を撫でてくるＣ．Ｃ．に、シュウジは再び何も言えなくなってしまった。
「……いつから気付いてたんですか？　一応、仮面を被って誤魔化していたつもりなんですけど……」
「相方も似たような仮面を付けているからな。オマケに面倒くさい所も似ているときている。そんな私が気付かないなんて、そっちの方がおかしいと思わないか？」
　そういって先程の微笑みとは違う不敵な笑みを浮かべるＣ．Ｃ．に、シュウジは今度こそ毒気を抜かれる。降参だ。これでは誤魔化しようがないと観念したシュウジは、大人しくＣ．Ｃ．に身を委ねる事にした。
「……お前に掛けられた呪いは一種のギアスの様なモノだ。絶対遵守ほど強制力はな

いものの、その代わり受けたモノに生涯解ける事のない痛みと苦しみを与え続ける」
「そこまで分かるものなんですか？」
　シュウジの問いにＣ．Ｃ．は静かに頷く。恐らくこの呪いを掛けた者は、自分と同じ永遠を得た存在なのだろう。故に気付けた、自分の膝に寝かされているこの男が今、どんな苦しみに苛まされているのかを。
「今お前に触れてみて分かった。このまま症状が進めばお前の心はこの呪いに染められるか、自我諸共砕けるかのどちらかしか道はないだろう。この呪縛から逃れる方法は唯一つ――――」
　死。呪いから逃れられる唯一つの方法、この選択を選べば確かに呪いからも開放されるだろう。けれど、それではどちらを選んでも結果は同じという最悪の結末に他ならない。
　絶望。この呪いを掛けた者は自分を神だと自負しているつもりなのだろうか。人間では決して抗えないと、そう暗に示しているかのように……。
　戦えば戦う程に、抗えば抗う程に呪いは強く大きくなっていく。ならばいっそのこと戦いから離れた場所にコイツを連れて行けばいい。いい加減この男は頑張り過ぎた、だからもう休ませてやろうとＣ．Ｃ．が言葉を紡ごうとした時。
「Ｃ．Ｃ．さん。一つ、俺と約束しませんか？」

「約束？」

まるで此方の意図を察したかの様に、シュウジ自身が彼女の言葉を遮った。

「もしC．C．さんがこの事を皆に黙っていてくれるなら、いつか美味しいピザをご馳走します。それこそC．C．さんがピザを飽きる位に沢山用意しますよ」

そういって笑みを浮かべ、小指を出してくるシュウジに今度はC．C．が息を詰まらせる。この笑顔を前に何か口にする筈の言葉が全て打ち消されてしまった。

既に、この男の気持ちは揺るぎないモノとなっている。本来なら止めるべき言葉を投げ掛ける筈だったC．C．の口は、自然といつもの憎まれ口に戻り……。

「……いいだろう。結んでやるよ、その約束を。けど忘れるな、私は決してピザに飽きる事はない。それは絶対に絶対だ」

不敵に笑うC．C．、呆れと悲しみの混じった笑顔と共に、彼女はシュウジの小指を同じ小指で絡め取り、静かに約束を交わす。

どうか、このボッチに祝福を。C．C．の祈りは誰かに届く事なく、静かに己の胸中に溶けるのだった。

その１００

∵月▪日

宇宙魔王、ミカゲ、ハーデス、パラダイムシティで待ち受けていた神の軍勢と、それらを統括するシステム、これらとの戦いを経て、無事に地球へ戻ってきた自分達が待ち受けていたのはエタニティ・フラット、時の牢獄の完成のカウントダウンが迫っている事とネオ・ジオンとの最後の戦いが迫ってきているというモノだった。

唯でさえしつこいボスラッシュの所為で疲れ切っているというのに、間髪いれずに入ってくるその情報にＺ―ＢＬＵＥは否が応にも対処しなくてはならなかった。幸いにも作戦開始まで数日程度の猶予があったので、その間に補給を済ませたり体を休ませたりする事が出来たのが良かった。

自分もここ最近喜びクソ野郎の呪縛の影響を受けておらず、体の調子も良く、休みの合間皆の機体の整備等を手伝えたり出来たので、割と充実とした時間を過ごせた。

もしかしたら、先日C・C・さんが膝枕をしてくれたのが原因なのだろうか？　C・C・さんもこれで暫くは保つだろうとか言っていたし、事実その日は久し振りにグッスリと眠れた。

しかもその後控えていた作戦会議に自分は出られないと代わりに連絡してくれたみたいだし、どうやら自分は彼女に対して大きな借りを作ってしまったみたいだ。

どうしよう、彼女の事だから自分に借りがある事を知っていればきっと色々と強請られるんだろうなぁ。C・C・さんてば結構無茶ブリしてくるし、一体どんな無理難題を押しつけてくるのか今から不安で仕方がない。

と、そんな訳で今の状態含めて割と平然としていられる自分だが、呪い自体は消えた訳ではない。この状態がいつまで続くか分からない以上、自分は今出来る事の最大限をする事にした。

まず、ブロッケンにはリモネシアに赴いて貰い、時の牢獄が破られるまでの間、シオさん達を守らせる事にした。いつ喜びクソ野郎とその手先であるクロノが、再びリモネシアに訪れるか分からない為である。

それに、奴は当時皆を驚かせるからという理由でリモネシアに連れてきていないし、万が一クロノが襲いかかっても、ブロッケンならば対処出来るだけの力がある。

他にシュナイゼルにも連絡を通しておいた。アイツも連邦に所属している以上、どこ

でクロノの耳が盗み聞きしているか分からない為詳しくは説明出来なかったが、自分の声色を聞いて察してくれたのか、シュナイゼルは特に追及はせず、快く自分の話を聞き入れてくれた。

とは言え、アイツも立場上そう大きく動く事は出来ないだろうし、剰り過度な期待は控えた方がいいだろう。これは連絡を入れた際にシュナイゼルから聞いたのだが、どうやら最近地球至上主義の連中も慌ただしくしている様で、近い内に行動を起こすかもしれないらしいのだ。

ネオ・ジオンとの抗争で連邦内部がピリピリしている中、目立った動きをするのはリスクが高すぎる。下手をすれば地球至上主義……サイガスを通して、クロノに此方の思惑を悟られる危険性がある。

それ故にシュナイゼルは送られる人員は限りがあると言っていたが、人員リストにジェレミアさんの姿があったので文句はなかった。

他にも中華連邦、当時星刻さんの副官だった周香凛（ジョウ＝チャンリン）さんや関羽っぽい人（名前忘れた）、そして嘗て軌道エレベーターで当時のアロウズに対して決起したパング＝ハーキュリーさんの姿もあった。

ジェレミアさんは兎も角、何故中華連邦の人達やパングさんまでいるのだろう。訊ねてみた所によれば、どうやら星刻さんも連邦内部に潜むサイガス一派に対して思う所が

あるらしく、シュナイゼルとはそこら辺の事情が重なって協力関係にあるのだという。
更に詳しく聞けば、何でもサイガスの奴が視察という名目で朱禁城に訪れた際に、天子ちゃんに対して失礼な態度を取ったのだという。……うん、流石は中華連邦の武人星刻さん、忠義心の厚さはジェレミアさんにも負けてないね（白目）
お陰で星刻さんの考えていること大体把握しちゃったよ。病気で前線から身を引いているとはいえ、彼の天子ちゃんに対する想いは全く色褪せてないや。……あの人、その内天子ちゃんへの想いだけで人間辞めたりしないだろうな？
で、パングさんの方はと言うと、再世戦争以降アロウズが解体された事により再び軍人へと戻り、日夜働いていた所をシュナイゼルが引き取ったのだという。パングさんは年老いてはいるものの、現役の頃と同様に行動力を有しており、ジェレミアさんとは別にシュナイゼルが表側で活動する際に、カノンさんと一緒に行動しているのだという。
そんな面々に守られる事になったリモネシアに安堵する。彼等ならきっとクロノが相手でもシオさん達を守ってくれる事だろう。シュナイゼルも今後も頼れとエールと共に送ってくれたし、ホント、頼りになる友人がいて有り難いったらない話である。
――――もうすぐ、宇宙に向けて各艦出発する頃だ。ネオ・ジオンとの最後の戦いに向けて今回はコレで終わりにしようと思う。

◇

――――――リモネシア。エタニティ・フラットの影響を濃く受けて、擬似的に時の止まった世界となったこの地で、シュナイゼルに命を受けた複数の男女が降り立っていた。

「しかし、まさかかのＤｒ．ヘルの手先が今や魔人蒼のカリスマの下僕とはね、面白い巡り合わせがあるものだ」

「ふん、お前達に言われたくないのである。それに今の我が輩はカリスマ殿に命を救われた身、武人として礼に対し礼で応えるのは当然というものだろう」
「成る程、貴殿もまた忠を持つ者であったか。ならばこのジェレミア＝ゴッドバルト、過去の禍根は忘れ友として接しよう」
「ハイハイ、ジェレミアさんもブロッケンもお喋りしないで早く仕事して下さい。住民の名簿の蒐集終わらないでしょ」
　暑苦しく語るジェレミアに香凛は溜息を吐きながら仕事をするよう促す。名簿の蒐集は自分達が守る際に必要な共通の情報源となる。これにより名前と顔を覚える事により、住民達を守る時に迅速な連携が可能となってくるからだ。
「しかし、ブロッケンが蒼のカリスマの下にいる事もそうだが、まさかシュナイゼル卿と彼が友人関係だという事の方が私にとって驚きだ」
「そういえば、ハーキュリーさんは彼と一時作戦行動を共にした事があるのですね」
「そうだな。再世戦争の頃、当時のアロウズに不信感を強く抱いた私は、市民達に現実を見せつける事によって当時の政府に訴えようとした。今思えば随分早まった事をしたと思うが、同時に彼がいてくれて良かったとも思う」
　当時はイノベイド達の手により厳しい情報統制の中、事実を明らかにする事は困難を極めていた。僅かでも政府が反乱分子と見なせば即座に対象を粛清し、殲滅をしてくる

アロウズは、当時の反政府組織にとって絶対打倒の対象であり、恐怖の象徴でもあった。
　そんな世界情勢の中、蒼のカリスマはたった一人でこれに抗い続け、遂には打ち勝ってみせた。勿論、当時の独立部隊であるＺＥＸＩＳも功労者の一つだが、自分のしでかした事に手を貸し、更には全ての罪を押し付けてしまう形となってしまった蒼のカリスマには、ハーキュリーにとって負い目を感じていたのもまた事実だった。
　今回の任務で少しでも恩を返せればいいのだが。と思考するハーキュリーに、周香凛の疑問の声が挙がった。
「おかしいわね。数が合わないわ」
「なにか問題あったか？」
「ねぇブロッケン、あなた間違いなくこの島の住民達の顔と名前を調べたのよね？」
「む？　それはどういう意味であるか？　確かに我が輩は細かい作業は苦手であるが、だからといって手を抜くような卑怯者ではないぞ」
「私からも言わせて貰おう、確かにブロッケンは真面目に仕事をこなしていた。私も付き添っていたし、間違いをしたという事はない筈だ」
　二人の言葉に周香凛は戸惑い、そして困惑する。納得がいかないと画面と睨み合う彼女にハーキュリーも会話に加わった。
「一体、誰がいないというのかね？　不謹慎だが今この島は時の牢獄によって停止され

た世界となっている。誰かが抜け出す事なんて無かったはずだが……」

「それはそうなんですが……」

ハーキュリーの言葉にもやはり納得した様子がない彼女に男性陣も画面に覗き込む。

一体誰がこの島からいなくなってしまっているのかと、住民の顔写真のついたリストを見ると。

〝我聞京四郎〟

一人の老人の写真の横にその人物の日本語の名前が刻まれていた。

その１０１

ネオ・ジオンとの最後の戦い、アマルガムの襲撃を回避し、無事Ｚ―ＢＬＵＥは宇宙へと進出。アクシズで待ち構えていたネオ・ジオンとその総帥、シャア＝アズナブルの決戦が開始された。

アムロの機転によりシャアが特異点である事を知り、彼を退ける事に成功した一行はシャアの思惑を知り、共にエタニティ・フラット――――時の牢獄を打ち破る事を提案する。

しかし、シャアは自身への負い目と搭乗している機体の損傷が激しい為に、一時戦域から離脱していった。アムロが待てと追いかけようとした所に現れたのは、もう一人の赤い彗星として知られるフル＝フロンタルの強襲だった。

更にそこへ現れるジェミニスのトップ、ガドライト＝メオンサムと彼の持つスフィア〝いがみ合う双子〟の力によって、アクシズは地球への落下速度を速める。

既に地球圏付近、地球にぶつかるまで目と鼻の先にまで接近してきているアクシズ、

こんなモノが地球に落ちれば地球は永遠に明けない核の冬に包まれ、命の芽吹かない死の星へと成る事だろう。

既にエタニティ・フラット完成のカウントダウンは進んでいる。追い詰められた状況、嘗てない緊迫とした戦場の中で、Ｚ―ＢＵＬＥの面々はネオ・ジオンとの最後の戦いに挑むのだった。

◇

閃光が迸り、光が瞬く。様々な思惑が交差する戦場の真っ只中で、シュウジ＝シラカワは目の前に立つガドライト＝メオンサムとその愛機を静かに見据えていた。

『どうよ。折角これまで色々画策してきたのに全てが台無しになっていく感覚は？　怒りに打ち振るえているか？　絶望に沈み泣き叫びそうか？　同情はするぜ、だがこれが現実だ。いい加減自覚しようぜ、なぁ、蒼のカリスマさんよ』

声しか伝わってこないガドライトの挑発的な台詞、明らかに此方を見下している奴の言葉にシュウジは反応を見せず、ただ静かにガドライトを注視していた。

ハマーンを初めとしたネオ・ジオン側からの戦力導入と、まさかのアンチスパイラルから無数のムガンとハスタグライ級とパダ級を導入してきており、地球圏近海はまさに大混乱と呼ぶに相応しい状況の中となっている。

そんな混沌とした戦場の中、次元力を扱うガドライトの存在は非常に厄介なモノだ。奴がその気になればアクシズの落下速度を更に速める事も可能だろうし、次元力の力によりエタニティ・フラットに影響を多く及ぼしてしまう可能性も出てくる。そうなってはいよいよ地球に後がなくなってしまう。

無論、そんな次元力の力に対抗出来るだけの力はグランゾンにも備わっている。万全の状態であるならばそれこそアンチスパイラルの戦力ごとガドライトの相手をする事も可能な程に。

だが、それは今は叶わぬ芸当、彼の者から受けた呪いによって、実力の半分も出せないでいる今のシュウジとグランゾンではその力を揮うことは出来はしない。精々、こう

して牽制としてガドライトの前に立つのが精一杯だった。
そして、その事を知っているが故にガドライトは愉快そうに饒舌に語る。
『アンタも大変だろうになぁ、中途半端に力を持っているが為に余計なイザコザに巻き込まれ、目を付けられる。哀れなもんだ。幾ら魔人と恐れられようが天意に逆らえばこの様……ホント、可哀相ったらないぜ』
『だったら、その哀れな魔人など放っておいてとっとと高見の見物に戻ればいいではありませんか』
『そうしたいのは山々だが、生憎それは出来ねぇな。万が一時の牢獄が破れたとありゃあ、それは俺の失態に成りかねないからな』
酒気を帯びた顔でガドライトはほくそ笑む。パラダイムシティにて良いようにボコボコにされた事を根に持つ彼は、ここぞとばかりに目の前の魔人を煽りだす。
無様だと、滑稽だと、続く限りの罵倒を浴びせるガドライトに対し、シュウジは仮面の奥で冷ややかにそれを見つめ続けた。シュウジの沈黙を怒りを堪えているモノだと思い込んだガドライトは更に言葉を続ける。
そんな時、シュウジは徐に口を開いて、思った事を口にする。
『――――まるで、構ってちゃんだな』
『……あぁ？』

　ポロリと無意識に零したその一言にガドライトは表情を強張せる。対してシュウジは言い返した事に対する優越感に浸ってはおらず、自然とこぼれてしまったその一言に寧ろやっちまったと言うように仮面の口元を片手で抑えていた。
　だが、一度言ってしまった事は取り消す事は出来ない。シュウジは今まで考えていた事をポツリ、ポツリと語る事で誤魔化そうとした。
『いやね、お前のこれまでの言動を基にちょっとした推理を考えてたんだ。度々姿を現しては挑発を繰り返し、Ｚ―ＢＬＵＥの反応を見て楽しみ、悦を得ている。何故こんな事をするのか、単に挑発する為だけにしてはやりすぎている気がする。そこでお前の心中には二つの感情が渦巻いていると考えた』
『……っ！』
『お前の胸中で蠢く感情、それは希望と絶望によるモノだと俺は考えた。絶望しているからお前は彼等と遭遇し自分の力が如何に強大か見せつけて、また希望を持つが故にお前はヒビキ君達に対して自らトドメを刺そうとしない』
　この推論に根拠を得られる様になったのはＮＥＲＶ本部での戦闘の時だ。奴は自分達を叩き潰そうとしてもトドメを刺そうとはしなかった。確かにその時はＺ―ＢＬＵＥの底力の事もあって退けたと考えられるが、それは奴が此方を格下であると大きな慢心を抱いた事が大きい。

『矛盾――成る程、それがいがみ合う双子のスフィアの本質か。絶望の中に沈もうと僅かな希望を抱いている限り諦める事はない。お前が酒を呑んで酔っているのはそういう所を誤魔化す為のモノでもあるという訳か』

『……黙れよ』

シュウジの言葉から聞かされるガドライト＝メオンサムの本質、それが事実である事を裏付ける様に、ガドライトは震えた声でシュウジに黙れと口にする。

『大方、お前の星も俺達の様に危機に瀕していたんだろ。話を聞く限りお前のその機体はジェミニスの誇りの象徴でもあるらしいからな』

『黙れ！』

『けれど、お前は負けた。負けた事により絶望に叩き落とされたお前は自分を負かした連中の駒になるしかなかった。残された数少ない同胞を守る為に……』

『黙れ!!』

『けど、差し向けられたこの星でお前は魅せられてしまった。自分の星以上に窮地に晒されながら、それでも足掻き続ける人々が発する光に……それが羨ましくて、妬ましくて、眩しくて、嘗ての祖国を思いだしたお前はそれに縋る様にＺ―ＢＬＵＥに手を出した。――――何だ。マジで構ってちゃんなんだな、お前』

『黙れってんだよぉぉぉっ!!!』

　これまで余裕の表情から一変、鬼気迫る勢いでガドライトは愛機と共にグランゾンに切りかかる。この反応を予め予測していたシュウジは淡々と対処する様にワームホールから剣を取り出し、ガドライトの愛機ジェミニアと肉薄する。
　せめぎ合う剣と刃、スフィアの更なる力に目覚めつつあるガドライトとどうにか互角に持って行かせているシュウジ、競り合う二つの力が行き場を無くして周囲に散らばる中、ガドライトは胸中に沈んだ思いの丈をぶちまけた。
『テメェに何が分かる！　住まう星を壊され、多くの同胞の命が奪われた俺の気持ちが！　与えられてきたばかりのテメェに何が分かるってんだ！』
『知らねぇし知るつもりもねぇよ。けどな、それを理由にした所でお前がこれまでしてきた事は許される事じゃねぇ。それだけは確かだ』
『はっ、だったら俺にどうすればいいって言うんだ？　俺が事情を説明すればテメェ等は受け入れるって言うのかよ？　助けを求めれば必ず助けてくれるって言えるのかよ!?』
　それはまるで懺悔の様だった。助けを求める子供の様だった。どうすれば良いか分からず、闇雲に戦禍をまき散らす事しか出来ないガドライトが初めて漏らした感情に、シュウジはただ静かに聞き入った。
　そして心のどこかでシュウジはガドライトに共感した。もし彼の者が自分を従わせ

る為ではなく、見せしめとしてシオ達を殺したならば、恐らく自分はその時に戻れない所にまで落ちてしまっていたのだろうから。

故にシュウジは思った。どこかで一歩でも道を踏み外してしまっていたら、自分もこの男の様に戦禍をまき散らすだけの存在に成り下がっていたのではないかと。

そして同時に感謝する。この世界に来てから関わってきた全ての人達に、彼等がいたお陰で自分はこうしてここに要られるのだから。

せめぎ合っていた力をシュウジがグランゾンを操る事によって崩させる。鍔競り合いの状態から弾き飛ばされた両者は睨み合う様に向かい合う。

『シュウジさん！』

『ヒビキ君、ここは私達に任せて君達は君達のやるべき事をやりなさい。背後の憂いは私が払いましょう』

『……分かりました。お願いします！』

『負けんじゃねぇぞシュウジ！』

救援に駆けつけようとしたヒビキをシュウジはやんわりと断り、ネオ・ジオンとの決戦に集中させる。他のＺ―ＢＬＵＥも、自分の今の通信を聞いて邪魔をするつもりはなかったのだろう。最後に届いて来たキタンからの一方的な激励に笑みを浮かべながら、シュウジは手にした操縦桿に力を込める。

『ガドライト＝メオンサム、あぁは言ったが、やっぱり俺はお前を許せそうにない。友人の娘（マリーメイア）を巻き込んだり、弟分を痛めつけるお前の言動はどう解釈しても不快しか感じない』

『それはこっちも同じ事だ。魔人？　蒼のカリスマ？　すかした名前で正義の味方を気取り、誰も彼も守れた気になっているテメェを見ていると、堪らなくムカつくんだよぉぉぉ！』

　別に正義の味方を気取った覚えはないし、誰かを守るだなんて自惚れたつもりもない。しかし、今のガドライトにはその言葉は届く筈もなく、シュウジはグランゾンを加速させ、再び真っ正面からジェミニアの剣戟を受け止めるのだった。

◇

∵月⊕日

ネオ・ジオン、そしてガドライト達との決戦から数日、世界はエタニティ・フラットを破り、一時の平穏の日々を過ごしていた。

Ｚ―ＢＬＵＥの奮闘、並びにシャアさんの奇策とトライア博士の用意周到さのお陰で成った時空修復。アクシズの大特異点やシャアさんとフロンタルの二つの特異点の事など結構なドタバタ感はあったものの、皆の協力のお陰で時空修復は完成し、時の牢獄を破る事も成功した。

その最中、地球圏に落ちそうになったアクシズを止めようと、Ｚ―ＢＬＵＥだけでなくネオ・ジオンの人達まで一緒に受け止めようとした事には正直驚いた。これまで憎み合い、争い続けてきた人達が協力して一つの事に立ち向かうのは再世戦争の頃、月が落ちてきた時以来の光景だったので、ちょっと感動した。

本当なら自分もその輪の中に入りたかったが、ガドライトの相手をしていたからその

事も出来ず、時空修復が完成するその時まで、自分は離れた所で見守る事しか出来なかった。

時空修復が完成した事で砕け散ったアクシズ、これからネオ・ジオンはどうなるのか、そしてシャアさんはこれからどうするのかと思っていた頃に奴等が現れた。

地球至上主義、クロノの手先であるサイガスがここぞとばかりに艦隊を引き連れ、ネオ・ジオンの残党に向けて一方的に攻撃してきやがった。……まぁ、自分とグランゾンが割って入った事によって、一撃たりとも通しはしなかったけどね。サイガスと奴に付き従う地球至上主義の連中も、後からやってきたガドライトによって全滅させられていたけどね。

つーか、ガドライトの奴更にスフィアの力を覚醒させやがった。何でも、自分と戦った事でガドライトの意識に変化が生じ、その影響を受けて強くなったのだとか。

おかげで時の牢獄が破られた事に対してさほど狼狽せず、余裕を持ちながら自分達と最後の戦いに挑んで来やがった。

それだけで厄介だというのに、ガドライトは更にスフィアの次元力を使い巨大インベーダーや宇宙怪獣の群を呼び出し、自分とＺ―ＢＬＵＥにけしかけてきたのだ。

戦力、並びに精神力が時空修復の完成によって消耗したＺ―ＢＬＵＥでは厳しい状況となった時、地球から意外な援軍が駆けつけてくれた。

ダヤッカさんとリーロンさん、アークグレンと共に馳せ参じた彼等のお陰で、次元の狭間に仕舞い込んでいたカテドラル・テラ改め超銀河ダイグレンを呼び出す事に成功、これだけでも凄いというのに、シモン君は更なるトンでもをやらかしてくれた。

〝超銀河グレンラガン〟アークグレンとグレンラガン、超銀河ダイグレンが合体した星をも越える大きさとなったスーパーロボットの登場により、部隊の士気は一気に跳ね上がり、ガドライト率いるジェミニスを押し始める様になった。

けど、向こうも相当な覚悟を持っていたのか、ガドライトの奴が副官らしき機体を逃がすと、自分に更に機体の出力を上げて自分達に殴り込んできたのだ。

ジェミニスとガドライトの決戦、戦場の空気も最高潮に達した時、アイツが……例の喜びクソ野郎が現れた。

奴がガドライトに対し挑発的な言葉を口にするとガドライトは激昂、怒りのままに奴の乗る機体を破壊し、喜びクソ野郎ごと爆発させた。

恐らくはガドライトの母星が滅んだ事に関係しているのだろう。いや、あの様子だともしかしたらあの喜びクソ野郎こそが、ガドライトの故郷を壊した張本人かもしれない。

その張本人と出会った事によりガドライトのスフィア、いがみ合う双子のスフィアはその均衡を崩し、ジェニオンにスフィアを奪われる事になる。

何故ジェニオンに他者のスフィアを奪う機能が搭載しているのか、幾つか推論が挙げれるが、今はその時ではないので控えておく。

で、ヒビキ君達によってスフィアを奪われたガドライトは喜びクソ野郎を殺された事による怒りと悲しみに満ちたヒビキ君の一撃により撃破、ガドライトはこれまで自分が起こしてきた事を精算するかの如く、宇宙の中で爆散していった。

……喜びクソ野郎の事を知っている身では非常に複雑な心境だ。あの野郎、自分だけでなくヒビキ君達にも何かしやがったな。あの盲信的に奴の言葉を信用するヒビキ君の姿、自覚こそはないにしても相当入れ込んでいた事が分かる。

あのときは自分も必死に感情を押し殺していたが、正直自分も奴にＢＨＣをぶち込みたくて仕方がなかった。ガドライトの奴が取り乱していなければ、もしかしたら自分が先に手を出していたのかもしれない。

だからという訳ではないが、ここで一つ誓いを立てていこうと思う。そしてこれが恐らくタイミング的に日記に記す最後の機会になりそうだから……。

次はいよいよアンチスパイラルとの決戦が控えている。それを乗り越えば恐らく多元世界に関わる最後の戦いが待ち受けている事だろう。

だから記しておく。奴の呪いを受けていない状態で日記を書く最後のタイミングで自分のやるべき事を書いておこうと思う。

――――――喜びクソ野郎、これから先お前がどれだけの企みを企てていようとも、そして自分の野望が成就しても。

俺の、白河修司の全てを以てして、貴様だけは必ず倒す。

◇

「アンナロッタ様、我々は一体これからどうしたら……」
「分からない。だが、生き延びねばならない。ジェミニスの、我々の命を紡ぐ為にも、私達は立ち止まる訳にはいかんのだ」
　人気のない地球の某所、夜空に浮かぶ星々を見上げながらアンナロッタ＝ストールスは口ずさむ。戦いに敗れ、居場所も行く場所もない自分達に未来はない。
　けれど諦めてはならない。この身に宿している命を守る為にも自分達はここで死ぬ訳にはいかないのだ。気落ちしつつある護衛の部下達を叱責しながらアンナロッタが前に進もうとした時――――。
「残念だが、それは叶わない」
　〝死〟が彼女の前に現れた。サングラスを掛け、白のスーツを身に纏うその男にアンナロッタは、目の前に虚ろな大穴が自分を呑み込もうとする様な錯覚を覚えた。
「アンナロッタ様、お逃げ下さい！」
「ここは我々が！」
　そんな男を前に部下の二人が立ちふさがる。自分達の未来は渡さないと、文字通り命を懸けて飛び出す彼等にアンナロッタは待ったを掛けようとした。
　だが、それよりも速く男の手が剣の様に煌めき、瞬いた。発する声よりも速く手刀を抜いた男は、護衛二人を切り払う。

鮮血が舞い、部下二人は地に落ちる。成す術なく崩れ落ちる部下達にアンナロッタは小さな悲鳴を上げる。
「殺してはいない。少しばかり眠って貰っただけだ。尤も、暫くは貧血で動けそうにないが、な」
「お、お前は……」
「天意によって遣わされた死神……の、様なモノだ。――――アンナロッタ＝ストールス、お前の命を刈る為だけの、な」
淡々と、感情のない冷たい男の一言に、アンナロッタは恐怖に竦む前に逃げ出した。無様であろうと、醜かろうと、この身に宿した命を守る為に決して屈してはならない。ただその一念でアンナロッタは目の前の死から逃げ出そうとした。
しかし――――。
「残念ながら、鬼ごっこは終わりです」
目の前に唐突に現れた一人の影、それを認識した瞬間アンナロッタの体に衝撃が走る。何だと思い視線を下げると心臓近くに腕が深々と突き刺さっているのが見えた。
（ガドライト……ごめん、ね）
薄れゆく意識の中、最愛の人に別れを告げながらアンナロッタは胸元から吹き出す血と共に倒れ、息を引き取った。その様子を追いながら見ていたサングラスの男は警戒心

を抱きながら近付き、アンナロッタの首に指を置いた。
……確かに脈はない。横たわる亡骸となったアンナロッタから視線を外した男は、突然現れた男に視線を向ける。
コイツは何者だ？　いや、自分は知っている。目の前にいる青年は報告で聞かされた魔人と呼ばれる者、何故そんな奴が自分の前に立つ？　疑惑と警戒の色を濃くしたサングラスの男は、青年に言葉を投げ掛けた。
「――――何故、貴様がここにいる。いや、何故こんな真似をする。……シュウジ＝シラカワ」
サングラスの奥に感情を隠しながら、そう問いかけてくる男に対し。
「なに、私も天意に従う身、後輩として貴方の手助けに来ただけですよ」
白のコートに身を包んだ魔人は手に付いた血を払いながら、不敵に嗤うのだった。

その１０２

ネオ・ジオンとの一大決戦から数日、時の牢獄が破られ、世界中の誰もが同じ時を生きられる様になって、人々は自らの生を謳歌した。

幾度もの危機を乗り越え、幾度と無く襲いかかる脅威を退け、崖っぷちの状況に追い詰められながらも諦める事はなく人々は抗い続けた。

その結果、アクシズという大特異点を用いての時空修復は成功し、時の牢獄は破壊された。世界中の人々が望んだのは永遠に停滞した世界ではなく、痛みを伴おうとも前に進む事。大特異点に集められた祈りは時の牢獄を破壊するだけの力となり、見事それを果たす事となった。

しかし、これから先に待ち受けるのは果てしなき闘争。時の牢獄を打ち破った事により、その裏側に潜んでいた者達が動き出すまで、そう時間は掛からない事だろう。

故に、人類は反撃に出る選択を選んだ。ただ待ち構えるのではなく、自ら動くことで未来を勝ち取る事を選んだ人類は、現地球圏最強の部隊であるＺ―ＢＬＵＥに全てを託し、国連はなけなしの戦力を再編させ、防衛機構を確立するのだった。

そんなＺ―ＢＬＵＥが挑むのは、再世戦争からその存在を露わにしていた超常の存在、反螺旋族（アンチスパイラル）。地球圏に対して宣戦布告をしてきたかの怪物に、地球はＺ―ＢＬＵＥという一発の弾丸に全ての希望を乗せるのだった。

◇

「お姉様の写真、こんなに色褪せちゃった」

カテドラル・テラ、超銀河ダイグレンとその名を新たにしたＺ―ＢＬＵＥ旗艦の格納庫ブロック。手にした写真を見てガンバスターのパイロットであるノリコは小さく息を吐く。

Ｚ―ＢＬＵＥがアンチスパイラルの拠点に向かう日にちまであと一日、それまでにやるべき事を済ませるように指示があった為、現在この格納庫ブロックにはノリコ一人しか存在していない。

アンチスパイラルという嘗てない規模を誇る敵を相手に、地球圏最強の部隊であるＺ―ＢＬＵＥにも絶対に勝てるという保証はない。決死の覚悟で挑まなければ勝てない相手、その覚悟を持つために、各艦の艦長達はＺ―ＢＬＵＥ各員に、親族や親しい者達に別れを告げさせる猶予を与える事にした。

しかし、単身時空震動でこの世界にやってきたノリコに別れを告げる相手など存在しなかった。別にそれが原因で覚悟は持てないという事はない。前に自分がいた世界では既に何億という宇宙怪獣と戦っていたノリコにとって、その位の気持ちの整理は出来ている。

ただ、皆と違って別れを告げる相手がいない事に少しばかり寂しくなり、ナーバスになっているだけの事、明日になれば人類の存亡を懸けた決戦が待っている。早く気持ちを整理しなければとノリコが目を瞑った時、一人の男性が声を掛けてきた。

「よぉノリコ、なーに一人で黄昏てやがんだよ」

「え？　き、キタンさん、それに皆も……どうして？　集合時間はまだ丸一日あるのに」

キタンを筆頭に駆け寄ってくるＺ―ＢＬＵＥの面々にノリコは面食らう。まだ出発

時間まで間があるというのにどうしてここへ来たのか、そんな疑問符を頭に浮かべるノリコに、キタンを初めとしたＺ―ＢＬＵＥの面々は笑みを浮かべた。
「やるべき事は大体終わらせたし、最後の一日位は部隊の皆と過ごそうかと思ってたけど、まさか全員来るとは思ってなかったな」
「まぁ、何だかんだで結構付き合い長いからね私達。結構似た思考を持つようになってるんじゃないの？」
　アルトとカレンのその言葉を皮切りに、部隊の間に談笑の華が咲く。未だ状況が理解してないノリコはどういう事だと首を傾げた。
「ま、ここにいる全員がお人好しってこった。お前が独りで寂しがってないか心配してな。ったく、素直じゃねぇ連中だぜ」
「なに言ってんのよ。いの一番にここへ来たのってアンタじゃない、ノリコの様子を見てソワソワしてた癖に、私達が来なかったらずっと様子を見てただけなんじゃないの？」
「え？　そうなんですかキタンさん」
「なっ!?　よ、余計な事言ってんじゃねーよヨーコ！　この俺様がそんな肝っ玉の小せぇ男に見えるのかよ！」
「はいはい。図星突かれたからって怒らないの」

「ンだとぉっ!?」
　おちょくるヨーコに吼えるキタン、二人の間から感じられる昔馴染みの雰囲気に、ノリコは嘗て共に戦った仲間達の事を思い出した。そう言えば自分達も似たような遣り取りをしていたっけ、写真は色褪せても記憶に残された思い出は消えていないことに安堵したノリコは、二人の言い合いを見つめ笑みを浮かべる。
　そんなノリコの様子を見て、言い合っていた二人もやれやれと肩を竦める。これで憂いは無くなった。そう安堵する彼らに一人の男が歩み寄る。
「おや？　私が一番乗りだと思っていたのですがまさかのビリとは……皆さん随分と早いのですね」
　聞き慣れたその声に誰もが一斉に振り返ると、その先には案の定仮面を被った魔人、蒼のカリスマことシュウジ＝シラカワが毅然とした佇まいでそこにいた。
　相変わらず神出鬼没な男だ。ゼロとC．C．が呆れた表情を浮かべていると、部隊のマトメ役であるアムロが笑みを浮かべて歩み寄った。
「まさか本当に来てくれるとはな。ようこそ蒼のカリスマ。部隊を代表して礼を言わせて貰う」
「地球圏存亡の危機となれば、流石の私でも動きますよ。故に礼は必要ありません」
　差し出されたアムロからの握手に蒼のカリスマもこれに応える。地球圏に残された

もう一つの最強戦力である魔人の登場に、Ｚ―ＢＬＵＥの面々の戦意は大きく跳ね上がった。
　何せ破界事変の頃よりその悪名を世に広め、またその力を示し続けてきた怪物が、再び自分達と共に戦うと馳せ参じたのだ。これ以上ない助っ人の登場に頼もしく感じるのは当然と言えるだろう。
　一部の人間を除いて歓迎ムードとなるＺ―ＢＬＵＥ、そんな中ある違和感を感じたアムロは握手を解いて蒼のカリスマに訊ねた。
「所で、ブロッケンはどうした？　アイツは一緒じゃないのか？」
「ええ、彼は地球で待機させるよう命じておきました。負けるつもりはさらさらありませんが、彼には有事の際行動に移るよう指示してあります」
　目の前の魔人の語る有事の際という言葉に、アムロは少しばかり嫌な予感がするも、自分達が負けてしまってはどのみち地球圏に未来はない。故に敢えて聞き流す事にしたのだが……。
「といっても、精々私の知り合い達と一緒に地球圏から離れる様言いつけただけなのですけどね。ここ数日彼には国連の各拠点のマスドライバーと航空艦の位置を覚えさせましたので、いよいよとなったら地球圏から脱出するようにと」
　元々隠す気はなかったのか、あっさりと内容を話す魔人の話にアムロは面食らう。け

れどそれが彼なりの冗談だと察したアムロは、笑みを浮かべて蒼のカリスマの肩を叩く。

「そんな事を言える余裕があるのなら遠慮はいらないな。アテにさせて貰うぞ」

「それは私にですか？　それともグランゾンにですか？」

「無論、両方だ」

その一言に魔人も仮面の奥で笑みを洩らす。言いたいことを言い終えたアムロは、艦長達に伝えてくるとだけいって格納庫ブロックを後にした。

アムロが去った事で蒼のカリスマに数人が集まる。そのどれもが部隊の中で若い世代の子達で、特に小学生組からの信頼が厚いのか、ワッ太からは学校から出された宿題で勉強を教えて欲しいと泣きつかれる程だった。

他にもヒビキや甲児といった高校生組もチラホラ見受けられる。特に甲児は破界、再世戦争と二つの大きな戦いを経てシュウジの人となりを知っている為、あまり抵抗なく接している。

他の面々も口には出さないがシュウジの加入を歓迎していた。相手はあのアンチスパイラル、戦力的にも彼の参戦は申し分はないという事から、誰も余計な口出しせずに静かに彼らの様子を眺めていた。

そんな中、アクエリオンのパイロットであるエレメント達、特に新たに加入したカグ

ラは酷く戸惑った様子でシュウジを睨んでいた。
「ど、どうしたんだよカグラ、そんなに殺気立って、あの人の参加に何か言いたい事でもあるの？」
「……」
アマタの問いかけに応えず、カグラは蒼のカリスマを睨んでいる。その事にムッとしたゼシカは咎める様にカグラに問い詰めた。
「ちょっと、一体どうしたのよ。言いたい事があるならハッキリしなさいよ」
強めに口にするその問い、しかしそれでもカグラの視線は蒼のカリスマから外れる事はなかった。
明らかに様子のおかしいカグラにゼシカとアマタも困惑する。一体彼に何を感じてるのか、ひとまずそっとしておこうと二人はその場を後にする。
（分からねぇ。あの男、シュウジって奴の匂いが全く分からねぇ。こんな事今まで無かったのに、どうなってるんだ俺の鼻は！）
カグラの感じる嗅覚は常人では捉えられないモノを感知する。それが無臭であれなんであれ、人が発する体臭だけでなく、その魂の在り方まで感じ取る程に鋭く、それはカグラの存在を捉えるほどだ。
しかし、今のカグラにはそれが機能していない。別に彼の嗅覚に異常が起こった訳で

はなく、現に彼はミコトの今いる場所を正確に把握できている。
他にも竜馬やロジャー、キラにカミーユといった格納庫ブロックにいるＺ―ＢＬＵＥの面々の居場所も把握できている。
そう、カグラの嗅覚は正常に機能している。いや、寧ろアクエリオンに乗った事によりその能力はより強くなったように感じられる。
……なのに、シュウジ＝シラカワからは何も感じ取れない。甘いのか酸っぱいのか、臭いのかそうでないのか、無臭である事すら判別出来ないでいる。
まるで奴がいる場所だけ世界から切り取られた様に何も感じない。それがどれだけ異常な事なのか、本能で感じ取ったカグラは即座に理解する。
この男は……ヤバい。理由もなく直感的にそう感じたカグラは、シュウジにだけは気を許さない事にした。

◇

「ねぇ」
「あ？」
「キタンはいいの？　アイツの所に行かなくて？　可愛い子分なんでしょ？　声掛けなくていいの？」
カグラがシュウジに対して絶対な敵対心を抱いている一方、ヨーコとキタンはシュウジの下へ駆け寄らず、遠巻きから彼の事を見つめていた。
「バーカ、アイツだってガキじゃねぇんだ。イチイチ言葉にしなくたって俺ら位になりゃ目を見りゃ大概の事は分かるんだよ」
「ふーん、男同士のシンパシーって奴？」

腕を組んでドヤ顔を決めるキタンにヨーコは関心なさそうに呟く。いや、実際はある心境を抱いているが、ここで話すことではないと思っているだけ。
それを察したのかそうでないのか、やや間を置きながらキタンはヨーコに聞き返し

た。
「お、お前だってアイツに話があるんじゃなかったのか？　カレンもアイツの所に行ってるみたいだし、気になるなら行ってきてもいいんだぞ？」
　言われてみると、確かに彼の側にはいつの間にかカレンが立ち、何やら詰め寄っている。もう部隊内では見慣れた光景の為に誰も突っ込む者はいないが、それでも最強と恐れられる魔人が一人の少女によって狼狽している様が面白く、彼の周囲には笑い声が絶えなかった。
　そんな彼らを見て、ヨーコは目を細めた。
「……私さ、アイツの事が放って置けなかった。一人で突っ走って一人で怪我をして、一人で戦い続けるアイツが気が気でなかった。まるでアイツみたいな生き方をしてるから」
「……」
　ヨーコが語る〝アイツ〟それが嘗て大グレン団の鬼リーダーである事を察したキタンは、静かに聞き入れてヨーコに話の続きを促した。
「だから、重ねちゃったんだと思う。性格とか全然違うのに、相手がどんな奴だろうと一歩も引かない所とか、私はシュウジを通してカミナを見ていた」
　けど、それがどれだけ酷い事であるのか、漸くその事に気付いたヨーコは自嘲の笑み

を浮かべて宙を見上げた。
「ホント、私ってば最低だ。アイツは何時だって変わらず私を私として見ていたのに、私はアイツじゃなくアイツを通してカミナを見ていた。未練がましいにも程があるよね」
　ヨーコの言葉に、何処か涙声が混じっている様な気がした。けれどキタンはその事を指摘する事はせず、ハッキリとした口振りで言葉を紡いだ。
「お前がアイツにどう思ってたのかは知らねぇけどよ。それってそんなに悪い事なのかよ」
「……え？」
「お前だって人間だ。そんでもって俺も人間だ。勝手な事を言う事もあるし、気に入らない事があれば喧嘩する事だってある。間違いを起こすのが人間であるならそれを正すことが出来るのもまた人間だ。お前がぶっちゃけるから俺も言うけどよ。俺も腹の中では時々シュウジにムカつく時があるんだぜ」
「……嘘」
「嘘なものかよ。あの野郎は顔が良い癖にその上頭も良く、喧嘩も強くて頼りがいがある。子分として嬉しい限りだが、同じ男として悔しいと思う時がある。……分かるだろ？　嫉妬してるんだよ。俺が、このキタン様が、自分の子分に嫉妬してる。情けねぇったらねぇぜ。――――けどな、俺はそれを恥と思わねぇ。何故なら、俺はアイツが子分

である事が嬉しいと思う事もまた嘘偽りがねぇからだ」
堂々とそう口にするキタンにヨーコは納得した。キタンが自分の気持ちに嘘偽りなく受け入れている様に、自分もまた自分のシュウジを想う気持ちに嘘があったという事が無かったからだ。
喩え亡き想い人を重ねたとしても、彼を心配に想う気持ちに嘘はない。だから、情けなく思う事はあっても、それ自体に間違いはない。
何だか気持ちが軽くなった気がした。意外にもフォローしたキタンに皮肉混じりの礼を言おうと彼の方に振り返ると……。
「キタン？　どうかしたの？」
何故か、そこには先程まで自信満々のキタンはおらず、代わりに酷く戸惑っている様子の彼がいることにヨーコは疑問に思った。
何だと思い彼の視線の先を追うと、そこには仮面を取ったシュウジの姿があった。確かに彼が自ら仮面を取ることに物珍しさを感じるが、かといってそれ以上なにか思う所はない。一体キタンはあのシュウジに何を感じ取ったのか、ヨーコが訊ねると。
「わ、悪い。らしく無いこと言って少しばかり木っ端恥ずかしくなってきた。少し頭冷やしてくるわ」
そう言って格納庫ブロックを後にするキタンにヨーコは不思議に思ったが、特にそれ

以上思う事はなく再びシュウジへと向き直る。
そこにはヒビキ達と談笑する素顔のシュウジがそこにいた。それ自体は何も変わらないし、ヨーコも特に不審に思う所はなかった。
けれど、キタンだけは感じ取った。シュウジが仮面を取る際に見せた無感情の顔を……まるで能面の様なその素顔にキタンは一瞬、アレがシュウジなのが目を疑った。
しかし、それ以降は特に変わった様子は見せず、自分の知るシュウジと全く変わった所などなかった……いっそ見間違いだったと思える程に。
だが、キタンにはそんなシュウジが酷く歪に見えた。まるで何者かに色を塗りつぶされた様に、まるでその事に抗っているように……。
訊ねるべきか、それとも静観すべきなのか、キタンは自ら見たものの正体を突き止めるべく、その後一人で調べたりするのだが。
時間は待ってくれず、時刻は出発の時を迎える事になる。

その１０３

ネオ・ジオンとの戦いを終え、時の牢獄を破壊する事に成功したＺ―ＢＬＵＥ。エタニティ・フラットの完成を阻止した事により時の針を進める道を選んだ彼等の前には、果てしなき戦いの渦が迫っていた。

〝アンチスパイラル〟再世戦争の頃よりその存在を顕わにしていた彼の者が、遂に地球に対して宣戦布告を告げた。時の牢獄を打ち破った事により宇宙怪獣を初めとした脅威に晒される事になった地球は、直ちに軍の再編成を計り、戦力の増強に勤しむ事になった。

外宇宙からの脅威に立ち向かう為、そしてアンチスパイラルに対抗する為、地球連邦政府はこれらに対抗できる唯一の部隊Ｚ―ＢＬＵＥに、アンチスパイラルの拠点に向かう様指示を出した。

そして地球人類の全てを担う事になったＺ―ＢＬＵＥ、背負ったモノの大きさに押し潰される事なく、刻一刻と迫る出発の時間を待ち続けた。

超弩級宇宙航空戦艦〝カテドラル・テラ〟改め超銀河ダイグレン。嘗て陰月だった戦艦からＺ―ＢＬＵＥの旗艦となった艦の中枢付近、そこにある格納庫エリアにてそれぞれの機体に搭乗しているＺ―ＢＬＵＥの面々は、アンチスパイラル拠点に向かうまでの最後の時間を、通信越しで会話を楽しんでいた。

『……所でさぁ、アンチスパイラルの拠点に行くのは分かったけど、具体的にはどうやって行くんだよ』

『話を聞いていなかったのワッ太、さっきから何度も螺旋王さんが説明したじゃないか』

『だってあのおっさんの話長い上に難しいんだもん。俺小学生だぜ？　そんな専門用語連発されても分かる訳ないじゃん』

先程から何度も話をしているだろう元螺旋王の説明を、分からないで切って捨てるワッ太。同級生の度胸ありすぎるその台詞に、正太郎は頭が痛くなるのを感じた。

相変わらず思った事をそのまま口にする奴だと正太郎は呆れるが、同時にそんなワッ太に共感する人達もいた。ボスや甲児、シンジといった中高生組や、赤木をはじめとした一部の大人組も、元螺旋王の専門的すぎる説明に今一つ理解出来ないでいた。

アンチスパイラルのいる場所は通常の空間とは異なる、隔絶宇宙と呼ばれる自分達とは違う宇宙に在る。その為、普通の手段ではその場所を特定する事は疎か、どうやってそこまで向かうのかすら定かではない。

宇宙とは曖昧なモノ、認識出来なければその存在すら把握出来ない事実に一見手詰まりの様に思えるが、ここである意外なモノが、その隔絶宇宙の認識に繋がる特異点となった。それがメッセンジャーであるニアの薬指に填められた指輪である。

シモンから結婚指輪として送られた指輪、それがアンチスパイラルの拠点へ繋がる基点となり、Ｚ―ＢＬＵＥが奴らの拠点に乗り込める要因となり得た。

と、本来ならこの位の説明で事足りたのに、元螺旋王の人格かそれとも親切心からなのか、ワザワザ専門的な話へ発展し、複雑な理論が噛み合ったモノへと変化してしまった。

超時空理論を理解している者ならば納得も理解も出来そうだが、生憎ワッ太は小学生、加えて他の中高生組もそんな専門的知識など持ち合わせておらず、Ｚ―ＢＬＵＥの約半数は困惑の只中にいた。

『なに、そんなに難しく考える必要はありませんよ。要するにシモンさんとニアさんの絆がアンチスパイラルの拠点へ繋がるトンネルとなった。と、いう風に理解していただければ十分ですよ』

『つまり、愛よ。愛』

そんな時、混乱するワッ太達に蒼のカリスマことシュウジが色々省いて改めて説明し、トドメにリーロンが大雑把に纏め上げた。これまで専門的に丁寧に説明していたつ

もりだったロージェノムは少し複雑そうにするが、成る程と理解したワッ太達を見てまぁいいかと押し黙る。
『ふっ、まさかお前が絆という言葉を口にするとはな、違和感がありすぎてシュールだな』
Ｃ．Ｃ．の捻れまくった皮肉がシュウジに投げ掛けられる。基本ボッチ行動が原則となってしまっている彼に、Ｃ．Ｃ．のその一言は心の底に突き刺さる勢いがあった。
通信越しに「グフゥ」というくぐもった声が聞こえる。それが蒼のカリスマの短い悲鳴だと知っているルルーシュはまたかと仮面の奥で嘆息し、スザクは苦笑いを浮かべていた。
『ま、まぁらしくはないというのは自覚してますよ。私自身ある種の抵抗を感じている位ですしね』
『だが、本当にその程度の認識でいいのか？　これから相手をするのはこれまでの敵とは規模的にも桁違いなんだろ？　もう少し専門的な知識を蓄えた方がいいんじゃないのか？』
次に通信越しに声を掛けてきたのは、超銀河ダイグレンの艦長を務めているダヤッカからだった。これから相手をするのはこれまで戦ってきた相手とはその強さの度合いが違う。嘗てない戦いを前に少しでも準備をしておくべきだと語る彼の言葉に、シュウ

ジは確かにと同意する。……しかし。

『ダヤッカさん。貴方の考えている事は理解していますし、同意もします。しかしこれから相手をするのは我々の理解から大きく逸脱した相手、下手に認識を固めすぎると、いざ相手をする際に致命的な隙を見せる事になりますよ』

現在の部隊内においてアンチスパイラルと戦った事のあるのは、嘗て螺旋の戦士だったロージェノムを除いてシュウジただ一人。アンチスパイラルという強大な敵を相手に戦い、生き延びた彼の言葉は、対アンチスパイラル戦において何よりも重要な情報だ。

しかし、シュウジは語らない。いや、語る事が出来ないと言った方が正しい。それは別にシモン達に対して不義理を働いている訳ではなく、どんなに言葉を尽くした所で無駄だからだ。

再世戦争の頃に戦ったアンチスパイラルの軍勢、その規模は星の数よりも多く、また星よりも巨大なモノ、そこに戦略も戦術も意味を為しはしない。

文字通り、敵の拠点まで一直線に突っ切るのみ、グレンラガンのドリルの様に敵陣の真っ只中を一点に突き進む事こそが唯一有効な手段と言える。

その事を既に他の艦長達に話した自分にもう語る事はない。後はこれから起きる戦いに備えて静かに待つのみである。誰もがその時が来るのを待っていると……。

『超螺旋索敵完了、アンチスパイラルのいる隔絶宇宙を捉えることに成功した』

『よぉし、超螺旋エンジン起動！　各艦離れるなよぉ！』

ロージェノムの合図を基に、ダヤッカが各艦にワープする際の準備を呼び掛ける。既に超銀河ダイグレンと隣接している各艦の艦長らが乗組員達に指示を飛ばし、戦闘準備の旨を伝える。

シュウジもグランゾンのコックピット内でゆっくりと目を開け、組んでいた腕を解き、操縦桿を握り締める。

いよいよ奴等との決戦が始まる。再世戦争から続く因縁に決着を付けるべく決意を固めると同時に、超銀河ダイグレンの前にある空間に孔が開き、その向こう側には多元世界の宇宙とは別の空間が広がっていた。

あれがアンチスパイラルの拠点、隔絶宇宙。敵の本拠地とそこで待ち受ける決戦を前にＺ―ＢＬＵＥの面々は息を呑む。

最早、誰も待ったを掛ける者はいない。あるのはアンチスパイラルとの戦いに打ち勝ち、人類を生き延びさせる事だけ。全員の想いが一つになったのを感じ取ったダヤッカは超銀河ダイグレンの発進を促した。

旗艦である超銀河ダイグレンを筆頭に追随する各艦。背後にある地球に振り返る事をせず、必ず帰るという誓いを胸にＺ―ＢＬＵＥはアンチスパイラルの拠点、隔絶宇宙へ乗り込むのだった。

◇

そこは、見渡す限りの大宇宙だった。多元世界の斑模様の宇宙とは別の異質に包まれた空間、星々が煌めく隔絶宇宙に一同は一瞬呆けてしまう。
そんな時だ。超銀河ダイグレンのブリッジにアーテンボローの声が響いた。
『は、裸のデッカい女ァっ!?』
アーテンボローのその声にそんなバカなと視線を向けると、そこには磔にされた巨大

な女性――――ニアが一糸纏わぬ姿でそこにいた。
当然、アレが本物のニアである筈がない。何かに侵食されるかのように体の節々が消えている彼女を見て、激昂に震えたシモンが声を張り上げる。
『出て来いアンチスパイラル！　ニアに何をしやがった！』
体の所々が何かに侵食された様に欠損している。それを受けて苦しんでいる彼女を前に、シモンはこの宇宙の主に声を飛ばす。するとその直後、何もない筈の空間から黒い人影が姿を現した。
『……待っていたぞ、螺旋の戦士達よ。お前達が来るのを待ち望んでいた』
黒い人影、その底知れぬ雰囲気を見に纏うその存在の登場にＺ―ＢＬＵＥの全員が戦慄し、そして理解した。
コイツだ。コイツこそがアンチスパイラル、陰月という星を地球に落とし、地球を壊滅直前まで追い詰めた張本人。
未曾有の怪物を前に各艦長らは他メンバー全員に出撃命令を下す。既に戦いは始まっていると判断した彼等はすぐに戦闘体勢をとり、各々の武装をアンチスパイラルに向けた。
アレは人の形をした怪物、嘗てのガイオウ以上の化け物だ。誰もが緊張に包まれた時、アンチスパイラルは一人の男に目を向ける。

『お前とも久し振りだな。蒼のカリスマ……いや、シュウジ＝シラカワと呼ぶべきか？』
『好きに呼べよ。どちらも俺である事に変わりはないんだからな』
怖気のする虚空の視線を向けられながら、尚平然と受け取るシュウジ。そんな彼の態度にアンチスパイラルはニヤリと口元を歪める。
『あの時の約束の通り、今度はこっちから出向いてやったぞ』
『あぁ、そして漸くあの時の続きが出来る。お前達という不確定要素を消し去り、今度こそこの宇宙に安寧を取り戻してやろう』
そう言いながらアンチスパイラルが手を横に揮うと、それまで無かった空間にこれまで彼が遣わしてきた軍勢が姿を現した。
ムガン、ハスタグライ級、パダ級、そしてアシュタンガ級、他にもインベーダーや宇宙怪獣といった、無限に広がる宇宙を埋め尽くさんと次々現れる超弩級の敵にＺ―ＢＬＵＥは驚愕する。
だが、今更この程度で折れる彼等ではなかった。もとより覚悟の上、全てを承知の上でここに立っている彼等は、迫り来る軍勢を前に一歩たりとも後退してはいない。
『全機、攻撃開始ぃぃぃっ!!』
部隊のまとめ役であるブライトの合図によりＺ―ＢＬＵＥは一斉に攻撃を開始した。アークグレンと合体したアークグレンラガンを筆頭にＺ―ＢＬＵＥが前進する中。

『……ここまで来たのなら出し惜しみはしない。最初から飛ばしていくぞグランゾン、マハーカーラ解放！』

〝――――オン・マケイシヴァラヤ・ソワカ〟

一人部隊から離れたシュウジが、グランゾンの力を解放させるのだった。

その１０４　前編

『ゲッタァァァァ――――』
『バスタァァァ――――』
『光子力――――』
『『ビィィィィーーームッ!!』』

無限に広がる宇宙で、三つの閃光がそれぞれ巨大な槍となり、眼前に広がる群を駆逐していく。

アンチスパイラルとの決戦の舞台としてＺ―ＢＬＵＥが訪れた彼等の本拠地、隔絶宇宙。そこで待ち受けていた無量大数に匹敵する敵の数を前に、Ｚ―ＢＬＵＥは臆する事なく真っ正面から迎え撃つ。

既に退路はなく、進む事でしか活路を見いだせないと悟る彼等は、それぞれ搭乗する愛機に全ての力と信頼を注ぎ込み、目の前の破壊魔達を殲滅していく。

『ガンバスターとゲッターチームはそのまま前進、敵を薙払え！　マジンガー、一旦後退

してゼウスと行動を共にしろ』
『アムロ大尉とシャア大佐はカミーユ君、シン君と一緒に左翼に展開、ロジャー達の援護に回って！』
『了解した！』
『マイスター達は右翼、連携を駆使しつつ宇宙怪獣達を殲滅せよ！』
『了解！』
『この状況だ。狙い撃つ必要はねぇ、ハロ！　片っ端から乱れ撃つぞ！』
『ミダレウツゼ！　ミダレウツゼ！』
　戦力差は歴然、倒しても倒しても津波の如く押し寄せてくる敵の数。武装は磨耗し、弾薬も消耗していく中、それでも諦める事なく、鋼の勇者達は絶望を押し退けていく。
　そして各艦の艦長及び戦術予報士達が圧倒的不利な状況を覆そうと思考を加速させ、各チームの戦力を十二分に発揮させていた。
『敵陣営からの攻撃、来ます！』
『アル、ラムダドライバはまだいけるな!?』
『無論、軍曹がへばらない限り継続可能です』
『それだけ言えれば十分だ。行くぞ！』
『僕も行きます！　ＡＴフィールド、全開！』

横から来るムガンの群の攻撃をアーバレストとＥＶＡが防ぐ。ＡＴフィールドとラムダドライバ、それぞれの機体が持つ特殊技能により防げたのはほんの一瞬の出来事だった。

次の瞬間にはムガンとインベーダー、宇宙怪獣の総攻撃が加わる。しかし、その頃には背後に控えていたＺ―ＢＬＵＥの旗艦〝超銀河ダイグレン〟の艦砲射撃が連中の陣に風穴を空ける。

『うりゃりゃりゃりゃ！　まだまだ行くぜぇ！』

『おいダヤッカ、アーテンボローの奴また悪い癖が……』

『味方に当たらなければ構わん、撃って撃って撃ちまくれぇ！』

超弩級の戦艦から放たれる艦砲射撃に一斉掃射、これにより目の前の敵勢力の八割を消滅させる事に成功するが、しかしそれでも敵の勢いは減る事はなく、それどころか更なる軍勢を以て彼等に押し寄せてくる。

正に総力戦。ここまでくれば後は気力の勝負になってくる。相手が此方を物量でねじ伏せるのが先か、それとも此方がアンチスパイラルの母星を見つけるのが先か、一時も気が休まらない状況が続く中――――。

『グラビトロンカノン――――発射！』

隔絶宇宙に敷き詰められた敵勢力の中心に、突如として大きな穴が穿たれる。超重力

により圧壊された敵の残骸の中心に佇むのは、日輪を背負いし蒼き魔神、ネオ・グランゾンである。

単騎にて敵の中心部に突っ込み、その力で暴れ回るその姿は、魔神というより鬼神の類に見える。手にした剣を振るえば周囲ごと両断し、物量で攻められても降り注がれる閃光と超重力によって全て粉砕されていく。

本来なら単騎で突っ込むのはアンチスパイラルに挑む上では自殺と呼べる行為だ。相手は無尽蔵の戦力を有している怪物、しかしそんな存在を相手に単騎で挑み、そして互角以上に渡り合っているネオ・グランゾンとその搭乗者である蒼のカリスマ――――いや、シュウジ＝シラカワも、アンチスパイラルに匹敵する怪物だった。

圧倒的物量に対して圧倒的な力で対抗するシュウジとグランゾン。マハーカーラを解放したことにより真なる力を呼び覚ました彼等の力に、初めて目撃したヒビキは戦慄を覚えた。

『ヒビキ君、気を抜かないで！』

『っ!?』

相方であるスズネ先生の一言によりヒビキは我に返る。見れば、目の前に巨大ワーム型のインベーダーがその口を開いて迫ってきている。幾らスフィアの力を手に入れたといっても、ヒビキはまだその力を十全に扱えていない。

このままでは呑み込まれる。ヒビキの全身が強張った時、ワーム型インベーダーの内側から無数の光の槍が突き出てくる。

〝ワームスマッシャー〟グランゾンの放つ光の槍が内側からインベーダーを破壊し、消滅させていく。

『ヒビキ君、今この状況の中で他の事に気を取られていると一瞬で死ぬぞ。疲れているのなら大人しく下がっていろ』

グランゾンから聞こえてくるシュウジの言葉にヒビキは震える。通信越しから聞こえてくるシュウジの声がいつもより低く、それでいて冷たかったからだ。

今、自分達が置かれている状況は決して楽観視できるモノではない。少しでも気を抜けば破壊魔達により戦線は食い破られ、戦況は一気に瓦解する。一瞬でも気を抜けない状況の中でやらかした自分の失態に気付いたヒビキは、余計な負担を掛けたシュウジに簡単な謝罪をし、戦闘に集中する。

『すみませんシュウジさん!』

『――――』

しかし、シュウジにはヒビキの声が届いていないのか、返事は返される事はなかった。この戦況だ、流石のシュウジでもそんな余裕はないのだろうと結論付けたヒビキは、相方であるスズネにも謝罪し、他の面々のフォローに回っていく。

いつもより余裕のないシュウジ、しかし、それはヒビキのミスを庇った事による苛立ちではなかった。操縦桿を握る手が震え、全身に底冷えする悪寒が襲い、頭に例の呪縛が染み込んでくる感覚がシュウジから余裕を奪っているのだ。

『くそ、こんな時にまでコレが来るのかよ』

脳髄にまで響いてくる呪いの旋律。以前体感した時以上の強さで自分を蝕んでくる呪いに、シュウジは抗うだけで精一杯となっていた。

呪いに蝕まれた所為で碌に操縦に集中出来ず、愛機の性能も半分以下しか引き出せていない。切り札であるネオを出した上でのこの体たらく、情けない自分にシュウジは更に苛立ちを募らせた。

『グランゾン前方に敵超弩級大型艦が接近中！』

『シュウジ!!』

眼前にアンチスパイラルの戦力であるアシュタンガ級が迫ってきている。触れただけで星すら塵とさせるその巨大さに圧倒されるも、Ｚ―ＢＬＵＥ同様シュウジも退路は存在しない。

故に真っ向から潰すしかないと判断したシュウジはグランゾンの胸部装甲を展開し、マイクロブラックホールを創造させる。

『――――収束されたマイクロブラックホールには特殊な解が存在する。剥き出しの特異

点は空間そのものを蝕むのだ』

生み出すのは何人たりとも逃げる事など叶わない重力崩壊の臨界点。収束されるマイクロブラックホールを圧縮させ、凝縮させた事により周囲の空間を蝕んでいく。

『ブラックホールクラスター、発射！』

打ち出すのは、嘗て宇宙魔王に放った一撃とは比べ物にならない程の力を秘めた黒い太陽。光や空間、時間すらも呑み込むブラックホールを受けたアシュタンガ級は、声を出す間もなく穿たれた空間に呑まれていった。

一撃で星をも超えるアシュタンガ級を屠った事により、Ｚ―ＢＬＵＥの士気は上がる。けれど一部の者達はそんなシュウジを疑問に思い、またある者――今のシュウジの状態をよく知る者、特にＣ．Ｃ．は悲痛な面持ちでグランゾンの背中を見つめていた。

『――――あっ、が、うぐぅぅぅ』

掠れた小さい声がグランゾンのコックピットに響き渡る。ブラックホールクラスターという神経を使う武装を遣ったシュウジは、彼の者から付けられた呪縛により悶え、苦しんでいた。

せめて声だけは漏らしてはならないとシュウジは必死に耐えているが、それでも呪縛の力は弱まる事はなく、寧ろこのまま人格を塗り潰そうと更にその力を増していく。

しかも呪いの所為で操縦に専念出来ていない。本来なら他の巨大ワーム型インベーダーや大型の敵を消滅させていた所をアシュタンガ級しか破壊出来ていない。
ＢＨＣだけではない。他の全武装――――いや、グランゾンそのものがシュウジの状態に連動するように全ての性能を落としている。早いところこの状況を打破しなければ押し切られてしまう。
そして危機的状況はＺ―ＢＬＵＥにも刻一刻と迫っていた。倒しても倒しても途切れる事のないアンチスパイラルの軍勢、気力と体力が続く限り戦えるが彼等の力は無限ではない。
有限と無限、その差は最早天と地どころの話ではない。確たるとした差が自分達には存在していた。追い詰められた自分達に出来る事は一刻も早くアンチスパイラルの母星を見つける事、それこそがＺ―ＢＬＵＥとシュウジが狙う唯一の突破口である。
しかし、それすらも無駄と言う様に事態は更なる展開を迎える。
『な、何だ？　機体の動きが急に鈍く――――』
『う、海だぁ！　黒い海に吸い込まれていくゥゥゥッ!!』
『バカな、宇宙に海があるわけ――――』
Ｚ―ＢＬＵＥの足下に突如現れたのは底の見えない真っ黒な海、宇宙に海という有り得ない状況に誰もが驚愕する中、グランゾンの重力計数が異常数値を示した。

そして、足下の海が何なのかシュウジが理解した瞬間、凄まじい怖気と寒気が彼を襲った。

『これは、ただの海じゃない。コイツは視覚化出来る程に超高密度に覆われた』

重力の――――海だ。

無限の軍勢に引き続き、此方を呑み込もうと現れる重力の海。徐々に追い込まれる状況の最中、Ｚ―ＢＬＵＥのパイロット達の脳裏にある感情が浮かぶ。

その名は――――絶望。静かに忍び寄る巨大な黒い壁を前に彼等は重力の海に呑み込まれた。

その１０４　後編

「一体どうなってんだよ!?」
超銀河ダイグレンの格納庫、突然の事態に理解が追い付いていないパトリックの声が響き渡る。だが、誰も彼の言葉に応える者はおらず、嫌な空気が格納庫に充満する。
「――――状況はどうなっている?」
超銀河ダイグレンの艦長であるダヤッカの声がブリッジに響く。覚えているのはアンチスパイラルの軍勢と死闘を繰り広げていた所まで、そこから先は強い何かに引っ張られる様に体が地面に叩き付けられ、その衝撃に意識を失い今まで気を失っていたのだ。
気が付いた時、ブリッジから見えるのは真っ暗な空間だった。混乱する意識を覚醒させるダヤッカの耳に届いたのは、大グレン団屈指の頭脳を持つリーロンとロージェノムだった。

「恐らく、ここは奴等が生み出した超高重力の海なのだろう。加えて螺旋エネルギーを吸収する性質を持ち合わせている。外に出てしまえば並の機体では一分も保つまい」
「要するに、今の私達は手足をもがれて首を甲羅に引っ込めた亀同然って事ね」
「そんな呑気な……て、それじゃあシモンは!?」
　現在、この超銀河ダイグレンのエネルギーの中枢を担っているのはグレンラガンことシモンだ。他の人とは一線を画す螺旋エネルギーの持ち主であるシモンは、アークグレンとの合体を果たし、この超銀河ダイグレンをも文字通り自らの手足とさせた。
　しかし、その並外れた螺旋エネルギーを持つシモンが、今は己自身の力の為に苦しんでいた。超銀河ダイグレンをも呑み込む重力の海、その強大さは襲い来る重力の負荷に耐えきれず、超銀河グレンラガンはその姿を保てず、戦艦形態へと移行させてしまっている程だ。
　そこへ更に追い打ちを掛けてくる螺旋エネルギーの吸収、力を出せば出すほどにシモンの力は失われ、アンチスパイラルの思う壷に嵌まっていく。
　度重なる負荷の連続にシモンの体力も限界に差し掛かっている。Ｚ―ＢＬＵＥの旗艦且つ主力である超銀河ダイグレンが沈めば、Ｚ―ＢＬＵＥの戦線は瞬く間に瓦解するだろう。
「だが、それでも我々がこうして生きていられるのは、偏にあの男が奮闘しているお蔭だ

ろう」
「あの男?」
　意味深に頭上を見上げるロージェノムに吊られてダヤッカも上を仰ぎ見る。そこにはブリッジの天井ではなく巨大モニターが映し出されており、自分達の真上の状況が映っていた。
　黒い海、重力の海の中で弾ける無数の閃光。弾けては消え、弾けては消えるを繰り返すその光に、ダヤッカは最初それがなんなのか分からず首を傾げるのだが、その光が何なのか理解した瞬間、その目を大きく見開くかせた。
「ま、まさか蒼のカリスマ――――シュウジの奴が戦っているのか!?　たった一人で!?」
「奴の機体は唯一この宙域に適した性能を有している」
「皆の機体を回収する際、アンチスパイラルの軍勢が押し寄せて来てね。無防備な私達を守る為にあの子は自ら殿を務めたのよ」
　自分達の真上で、一人アンチスパイラルの軍勢と戦うシュウジとグランゾン。彼一人を戦わせてなるものかと、ダヤッカはアーテンボローに援護射撃を指示するが、それよりも早くリーロンから待ったを掛けられる。
「止めなさいダヤッカ」
「何でだ。どうして止めるリーロン!」

「先程重力の海に呑まれたと言っただろう。実弾を撃てば放たれた瞬間圧壊し、エネルギー砲を放てば――――」
「螺旋エネルギーである砲撃も吸収されちゃうって訳」
「打つ手はないって言うのか……！」
苦虫を噛み砕いた様に顔を歪めたダヤッカは力任せに艦長席のテーブルを叩く。鈍い音がブリッジに響き渡る中、リーロンのコンソールを叩く音が鳴っていた。
一体何をしているのか、ダヤッカが訊ねようとした時、またもやリーロンが先に口を開く。
「でも、一応活路は見出だしたわ。活路といっても成功率は殆どゼロの博打よりも酷いモノだけど……」
活路。この状況を打破する事を示唆するリーロンに、ダヤッカだけでなく、ロージェノムを除いたブリッジにいる全員の表情が明るくなる。
しかし、その内容が余程キツイモノなのかリーロンの表情は暗く、あまり口に出そうとはしなかった。ロージェノムもリーロンの示す可能性について思う所があるのか、目を閉じて何も言わない。
このままでは時間だけを浪費してしまう。幾らネオ・グランゾンが桁違いの力を有していても、操るシュウジ自身には体力の限界がある。これ以上時間はかけられないとダ

ヤッカが問い詰めようとした時、ブリッジの扉が開かれた。
「リーロン、教えろよ。この状況を打破する秘策ってのよ」
「キタン！」
「キタン、あなた……聞いてたの？」
「いいや、聞いちゃいねぇよ。ただ頭の良いお前の事だ。そろそろ打開策の一つ位は思い付いていると思ってよ」
で？　そう続けるキタンは戸惑うリーロンを見据え。
「教えてくれよ。その秘策ってのよ」
「……本気、なのね」
「弟分があそこで体張って、命張って戦ってるんだ。ここで動けなきゃ――――俺は一生胸を張って歩く事が出来ねぇ。なぁ、頼むよリーロン。アイツにこれ以上カッコ悪い所見せたくねぇんだ」
　譲れない。そう語るキタンの本気の目にリーロンも決意し、遂にその重い口を開くのだった。

◇

「……さて、今ので何体目かな」

爆散していくインベーダーを見下ろして、シュウジはネオグランゾンのコックピットで乾いた笑みを浮かべる。アンチスパイラルが生み出した重力の海の影響により身動きを封じられたＺ―ＢＬＵＥを、アンチスパイラルの軍勢から守る事に徹したシュウジは、これまで無数の敵を相手にし、退けていった。

本来ならワームスマッシャーや重力制御を行って敵を一掃する事も出来た筈、それなのに一体ずつ接近戦に持ち込んでいるのは、偏に自身の状態が原因だった。

シュウジの体力、精神力は共に底を尽きかけている。自身を蝕んでいた呪いは一向に弱まる気配はなく、随時彼を苛ませ続けている。

青ざめを通り越して土気色と化したシュウジの表情、呪いに抗い続けた事による副作用が、遂に己の生命の危機にまで発展しだしているのだ。今のシュウジがネオ・グランゾンを通して出来るのは、手にした大剣で敵を直接的に斬り払う事と、僅かに機能する

重力制御で機体の機動を確保する程度。
　極限状態となったシュウジだが、それでも気を失わず戦い続けていられるのは、皮肉にもアンチスパイラルの軍勢のお蔭でもあった。何体倒しても絶える事なく押し寄せてくるインベーダーや宇宙怪獣、これらの敵の存在がシュウジの気力を絞らせ、絶やさずにいさせたのだ。
「そら、これでぇ……終いっだァっ！」
　横薙ぎに振るったネオグランゾンの大剣が、宇宙怪獣の胴体を切り払う。これで今の一団は片付いたと、そんな状況確認をする間もなく、更なる増援がグランゾンへ押し寄せてきた。
　重力の海に突入して現れるパダ級の群れ、重力に従って向かってくる様子は突進というよりも落下に近い。並の艦よりも巨大なパダの群の直撃を受けたシュウジは、ネオ・グランゾンと共に重力の海の底へ沈んでいく。
『こ、のぉ……水虫がぁ、伝染るンだろうがぁぁっ!!』
　必死の強がりを口にし、心を折れない様に気を強く持ちながら、シュウジは操縦桿を握る手に力を込める。
　両断したパダ級を皮切りに、シュウジは残された力を振り絞る勢いで、向かってくる敵を斬り続けた。がむしゃらに、向こう見ずに、ただ目の前の敵を破壊し続ける。爆散

していくパダ級の爆風により一瞬だけ重力の海から解放されたシュウジは、その勢いを絶えさせてはならないと、必死にネオ・グランゾンを操り続けた。

……気が付く頃には既にパダ級の姿はなく、無惨な残骸だけが辺りを漂っていた。どうやら気を失っていた間に全て倒していたらしい。度重なる敵の襲撃を退けた事にシュウジは安堵をするが――――。

『は、はは。マジかよ。そりゃ順当に言えば次はこうなるだろうけどさ、もう少し休ませてくれてもいいんじゃない？』

シュウジの眼前に映るのは、星をも呑み込みそうな程に巨大なアシュタンガ級の群れだった。

解っていた。このまま戦い続ければいずれはコイツらにぶつかるのは、これまでの流れからある程度察していたシュウジは参ったなと笑みを浮かべる。

〝無駄な事だ〟

絶望を告げるアンチスパイラルの声が、シュウジの耳元で囁いた気がした。

◇

超銀河ダイグレン格納庫区画。広々とした格納庫、この区画で修理と整備がされているのは、大グレン団達の乗るガンメンだった。

整備班達の作業に尽くす声があちこちから聞こえてくる。そんな喧騒の中をキタンは歩いていた。彼が真っ直ぐ歩く方向、そこにあるのは自身の愛機であるキングキタンだった。

機体のあちこちに刻まれた細かな傷痕、それは破界事変、再世戦争といった過去の大戦を潜り抜けた、歴戦の証でもあった。

「テメェとも長い付き合いになったな。ここまでよく付き合ってくれたもんだ。なぁ、相棒」

懐かしむ様に、慈しむ様に見上げるキタンの瞳には、確固たる決意が宿っていた。心残りはない。そう自身に言い聞かせながらキタンは己の愛機に乗り込もうと――――。

「どこ行くつもりよ。キタン」
「……ヨーコか」
直前、背後からのヨーコの声にキタンの足が止まる。振り返って彼女に向き合うと、そこには怒りと悲しみを混ぜた様な顔をしたヨーコがキタンを睨み付けていた。
やっぱりか、長年の付き合いから互いの考えを読める間柄を、今は恨めしく思いながらキタンは頭を掻く。こんな時うまく誤魔化しの言葉を言えればいいのだが、そんな都合の良い言葉を思い付く筈などない。故に、キタンは単純明快にヨーコに告げた。
「ちょっくら行ってくる」
「分かってるの？」
自分が今、何をしようとしているのか。暗にそう訊ねるヨーコにキタンは笑って答えた。
「今俺達の頭の上で、シュウジの奴が一人で戦っている。あのシュウジがだぜ？　ビビリでヘタレなアイツがテメェの命を懸けて戦っているんだ。同じ男として、何よりアイツの兄貴分として……黙って見ている訳にはいかねぇだろ。言うなれば、これは俺の我が儘だ」
「……そっか」
キタンの想い、その事を耳にしたヨーコに最早止める言葉など見付からなかった。こ

れは自分の我が儘だと、そう言って譲らない以上、自分に止められる事など出来やしない。

なら、なんといって彼を送り出せばいいのだろう。決意を固めたこの男にどんな言葉を送ればいいのだろう。何も思い付かない自分を恨めしく思った時、自身の体に何かが抱き付いてきた。

「き、キタン？」

抱き付いてきたのは目の前にいたキタンだった。力強く、逞しい男の腕に抱かれている事にヨーコは、戸惑うと同時に理解した。

「悪い、これも俺の我が儘だ」

震えている。大グレン団の中でも屈指の偉丈夫で知られるキタンの体が震えている。当然だ。戦いで傷付き、死ぬこともある戦場の中で、死に恐怖するのは生命としての本能だ。誰だって怖いに決まっている。

だが、それでも止まらないのが人間だ。キタンの想いを受け取ったヨーコはキタンの背中に手を回し……。

「好きでやっているんでしょ。だったら――――謝らないで」

それはヨーコの心からのエール、彼女の精一杯の応援を受けとったキタンの震えは――――止まっていた。

◇

『あばよダチ公！　なんてキザな台詞は言わねぇ。行ってくるぜ野郎共！』
超銀河ダイグレンの発進口からスペースキングキタンが出撃する。通信から聞こえてくる仲間の制止を振り切りながら彼が目指すのは、重力の海の底に存在する元凶〝デススパイラルマシーン〟だった。
螺旋エネルギーを吸収し、そのエネルギーで高重力を生み出すその存在に向けて、キングキタンは予め用意された超螺旋弾を射ち放つ。
放たれた弾丸は真っ直ぐ突き進み、デススパイラルマシーンを覆っていたバリアフィールドを撃ち破る。ここまでは予定通り、リーロンの計算高さに舌を巻き、キタンは止めのミサイル群をデススパイラルマシーンに叩き込もうとした。
――――しかし。
『くそ、肝心な所で！』
デススパイラルマシーン周辺の重力はこれ迄にないほど強力なものとなっていた。超高重力に晒されたスペースキングキタンはなす術なく圧壊されようとした――――――その刹那。
キタンの表情に笑みがこぼれる。死が間近に迫っているというのに笑みが溢れてしまうのは恐怖を遠ざける逃避なのか……いや、違う。
今、キタンの胸にあるのは寂しさと嬉しさ……そして、満足感だった。

『シュウジィィィッ!!』
『っ!?』
『テメェは、そのまま前に進めぇぇぇっ!!』
それは、自分が兄貴分として彼に贈れる最期のエール。自分がヨーコに勇気付けられたように、今度は自分がアイツに何かを遺す番。
本当は、もっとアイツの成長する姿を見ていたかった。初めて出会った時のように、間近でシュウジの奮闘振りを見ていたかった。
もっと話をしたかった。もっと酒を飲み交わしたかった。今苦しんでいるアイツを傍で支えてやりたかった。
けれど、それは俺の役目じゃない。恐らくそれはシュウジ自身が乗り越えるべき事だと思うから。だからキタンは声を張り上げて伝えた。前に進めと。
短い言葉を吐き捨て、今度こそやり残しを片付けたキタンは、スペースキングキタンからの脱出レバーを引き上げる。
硬い装甲に覆われたスペースキングキタンから飛び出したキングキタンが背負うのは、御守り代わりに拝借したグレンラガンのドリル。
それを右腕部に無理矢理取り付けたキタンは、そのまま一直線にデススパイラルマシーンに特攻していく。

『コイツはシモンの、大グレン団の、人間の――――いや、この俺様の魂だァっ！　テメェ如きに食い尽くせるかぁっ!?』
『キィィィングキタァァァァンッ!!　ギガ、ドリルゥゥゥゥ……ブレェェェェェイクゥゥゥゥ!!!』
それは、命の発露だった。最後の瞬間、螺旋の命として扉を開いたキタンは――――。
『これが螺旋の力かよ。大したもんじゃねぇか。ハ、ハハ……』
デススパイラルマシーンを貫き、無間の闇である重力の海に風穴を開け、光となって消えていった。

◇

『……嘘だろ？』

ネオ・グランゾンのコックピット内。全ての敵を討ち果たしたシュウジは、茫然自失となって呟いた。

目の前のモニターに映る大爆発の映像、それが何なのか、何が原因でそうなったのか理解出来ないでいるシュウジは、震える手で頭を抑える。

いや、本当は解っていた。あの爆発が何なのか、誰の手によって成されたのか。その事を理解しても心が受け入れていないシュウジは、ふざけるなと叫びながら、コックピット内のコンソールを叩く。

『何でアンタが死ぬんだ！　どうして死なきゃ行けない！　アンタは大グレン団の一人で、俺の兄貴分なんだろう！　なのに……どうして！』

重力の海から解放され、再変換された螺旋エネルギーが渦巻く。そんな中でキタンの……兄貴分の死を受け止めきれずにいたシュウジは、嗚咽を漏らしながら涙を溢す。

店長、トレーズ、そしてキタン。もっと話をしたかった。助けてくれた人にちゃんと恩返しをしたかった。悔しさと後悔に胸が締め付けられるシュウジ、そんな時――――奴が現れた。

『哀れだな、蒼き魔人』

圧倒的存在感を感じさせ、脳内に直接響かせてくる声。その声の主に覚えのあるシュ

ウジは目の前を見据える。何もない筈の虚空の宇宙、そこに佇むのは黒い人間……いや、人間だったもののなれの果て。

〝アンチスパイラル〟この隔絶宇宙の主にして、宇宙の守護者を自称する存在。神の如き力を有するアンチスパイラルの登場にシュウジは、操縦桿を握り締めて身構える。

いつでも戦えるように構えるシュウジ、しかし予想に反しアンチスパイラルの態度は穏やかだった。不気味な程に静かなアンチスパイラルに戸惑うが、油断してはいけないと気を引き締める。

『嘗て――再世戦争と呼ばれていた頃のお前は正しく魔人だった。一人でありながら強大で、助けがなくともお前は誰よりも恐ろしい存在だった。この私が認める程に』

『……』

『だが、今のお前にはその強さが見えない。挙げ句の果てには奴等に強襲され、自我を失いかける程に弱く、脆くなってしまった。何故だか分かるか？』

分からない。分かりたくない。淡々と自身について語るアンチスパイラルにシュウジは聞きたくないと耳を抑えるが、直接脳に響いてくるアンチスパイラルの声を防げる筈もなく。

『孤独。それがお前の絶望だ。孤独の中でこそお前の力は最大限に発揮させ、孤独の中でしかお前は生きられない』

『そんな……そんな筈は』

揺らぐ。シュウジの中で大事な何かが揺れ動き、崩れそうになる。

視界が歪み、気を失いそうになる。意識だけはなんとか繋ぎ止めようとシュウジは無意識の抵抗をするが。

『だが、安心するといい。私がお前の絶望を取り払ってやろう。永劫に覚める事のない夢の中でな』

瞬間、シュウジの視界が暗転する。アンチスパイラルの甘い囁きに意識を保てなくなり、遂に手放してしまうのだった。

◇

「お……て」
「……ん～」
「起きて」
「……クー……スー……」
「ちょっと、起きてってば」
「ん～、もう食べられないよ」
「こんの、ベタな寝言言ってないで、さっさと起きろ！　バカシュウジ！」
「ゲブゥゥッ!?」
鳩尾から伝わってくる激的過ぎる衝撃により強制的に目覚めさせられる。
なんだ敵襲か!?　殺意すら感じられた一撃に戦慄を覚えながら辺りを見渡すと、俺は驚愕に目を見開いた。
「俺の……部屋？」
そこにあるのは忘れる筈のない、慣れ親しんだ俺の部屋だった。慣れ親しんだ……そう、当たり前にある俺の部屋だ。

なのに……いや、だからこそ俺は驚いていた。何故ならここは多元世界に来る前の――――〝元の世界〟の俺の部屋だからだ。

「なんで……俺、確かアンチスパイラルと戦って――――」

直前まで覚えている記憶を頼りに状況を思い出そうと試みる。が、それも隣にいる聞き慣れた女性の声によって遮られてしまう。

「ちょっと、起きたんなら早く着替えなさい。講義が二時限目だからって寝過ごすなんてさせないんだから」

その声の主にドキリとしながら振り返る。だって、そんなバカなと、否定の言葉ばかりが頭に浮かぶ自分の目の横にいたのは――――。

「なぁに？　私の顔をジッと見て。あ、もしかしてニコニーにこちゃんに見とれてた？　うふふ、幼馴染を魅了しちゃうなんて、私ってば罪なオ・ン・ナ☆」

昔馴染みの女の子、矢澤にこちゃんが得意気にウンウンと頷いていた。

その１０５

――――幻か？　自身の置かれた状況と目の前の少女を前に、俺はただ混乱するしかなかった。何故、どうしてと瞬きをし、何度目を擦っても消えない幼馴染の幻影を前に呆然としていると少女――――矢澤にこちゃんはやれやれと嘆息し、呆れたと言いたげな態度で口を開いた。

「もう、いい加減呆けてないで、さっさと顔洗って朝ごはん食べちゃってよね」

ぶっきらぼうにそう言い残し部屋を後にするにこちゃん。ツイテールを靡かせながら部屋から出ていく彼女に声を掛ける事も出来ず、にこちゃんの姿が完全に部屋から消える時まで、俺は彼女の背中を見続ける事しか出来なかった。

そしてその後、言われた通り顔を洗って食卓に着いた俺は、にこちゃんと共に朝食を摂った。にこちゃんの家族である矢澤家と白河家では互いにご近所同士で昔から家族間の交流があり、その頃から彼女には良く世話をしてもらっているのだ。特ににこちゃんは妹ちゃんと弟君が三人もいるため面倒見が良く、幼馴染である自分もついでとして面倒を見てもらっていた。

これは年上として情けない話なので、これではイカンと大学に進学した際に独り暮らしを始め、家事もある程度嗜む様になったのだが、にこちゃんの家事スキルは非常に高い事と彼女自身が世話好きな為、こうして今も厄介になってしまっている。他にも独り暮らしの住み処として選んだアパートが、矢澤家から近い位置にあるというのも原因の一つになっている。

今は食べ終えた食器を二人並んで片付けている。世話になってばかりでは不味いと手伝いを申し出た自分は、慣れた手付きでにこちゃんが洗った食器を戸棚へ片していく。

その時、綺麗になった食器に映る自分の姿を見て手が止まる。黒い髪、中肉中背の体格で特徴がないのが特徴の青年、そこに稀代のテロリスト蒼のカリスマの姿はなく、どこにでもいる平凡な大学生〝白河修司〟が映っていた。

「修司、どうかしたの？　手が止まっているけど……」

呆けていた自分の耳ににこちゃんの声が入ってくる。ハッと我に帰ると、心配そうに此方を覗き込んでくるにこちゃんの顔があった。どうやら心配をかけてしまったみたいだ。

「あぁごめん。ちょっとボンヤリしていた」

「もう、また遅くまで深夜アニメ見てたんでしょ。あんまりボンヤリしてるとおば様達

に言いつけてやるんだからね」
「だからゴメンってば」
　プンスカと私怒っていますという風に振る舞うにこちゃん、それが年相応の女の子らしく可愛いくて、とても懐かしくて……ついつい、笑ってしまった。そんな自分の反応を見てますます機嫌を損ねてしまうにこちゃん、彼女に機嫌を直して貰う為に多大な労力を支払う事になるのだが、それすらも心地よく感じられた。まるで、この世界こそが自分の居場所なのだと言う様に――――。
　その後、どうにかにこちゃんの機嫌を直すことに成功した自分は、現在はにこちゃんと共にそれぞれの学び舎に登校している。にこちゃんは近くの女子高へ、自分は大学へそれぞれ向かっている。途中まで道は同じなのでそこまでは肩を並べて通学している、これもまた見馴れた風景だった。
　――――まるで、あの激動の日々こそが夢幻だったかの様に、穏やかで平和な時間だった。
「じゃ、私はこっちだから」
　にこちゃんの指差す方向には彼女が在籍する女子高、古くから建てられている雅とも言える外観をした学園が階段の向こうに聳え立っている。
「あー、でも心配だわ。アンタみたいな唐変木を一人にするなんて……おば様達はどう

してコイツに独り暮らしなんて許したのかしら」
「ひっどいなぁ。そういうにこちゃんだって結構お弁当を忘れたりするじゃん。抜けてるのはお互い様だと思うけど？」
　自分の指摘に羞恥心を感じたのか、これまで余裕ぶった態度のにこちゃんの表情に朱色が混ざる。耳まで赤くなった彼女の顔を見て、堪えきれなくなった自分は堪らず噴き出してしまった。
「も――！　なに笑ってんのよ――！」
「ククク……いや、ゴメンゴメン。悪かったよクク」
「こんのー、フンッ！　良いわよ。アンタになんか私がアイドルになって有名になってもサインなんかやらないんだから！」
　腕を組んでそっぽを向くにこちゃんに、自分はしまったと口を抑える。こうなってしまっては二、三日口を利いてもらえない。そうなるとにこちゃんの不機嫌の理由が矢澤家に伝搬し、更には両親にまで知られる事になる。
　そうなってしまえば両家に於いて自分は孤立無縁の状態になってしまう。両家合わせて女性の比率が高い為に矢澤家、白河家共に女性の方が強いのだ。最近では矢澤家の末っ子である虎太郎君もその事に気が付いたのか、自分がにこちゃん達にフルボッコにされても助けてくれなくなった。

ともあれ、このまま放っておくのは不味いので謝って許してもらおうとする。しかし先程も機嫌を悪くさせてしまっては良くするのは中々難しい事だろう。

どうしよう。彼女に何て言って許してもらおうかと悩む頭を抱えていると――――。

「やぁ二人とも、今日も仲睦まじそうで何よりだ」

聞こえてきた懐かしい声に心臓の音が跳ね上がる。そんなバカな、あり得ない。だってアンタは――――。

「あ！　トレーズさん！　おはようございます！」

信じられない。そんな自分の心境を裏切る様に、にこちゃんは弾んだ声でその人の名を口にする。

「あぁ、おはよう。今日も良き日に恵まれたな」

誰もが見惚れる微笑みを浮かべるトレーズさん。俺の親友の一人がそこにいた。

◇

「こんなものか、地球最強の部隊も――――あっけないものか」

白とも、黒とも付かない灰色の空間。命の鼓動が微塵も感じられない無機質な空間で、黒の存在――――アンチスパイラルは呟く。

彼等、Z―BLUEは確かに強かった。度重なる此方の襲撃をはね除け、陰月の落下を防ぎ、更には時の牢獄を破壊し、遂には自分達の母星が存在する隔絶宇宙にまで足を踏み入れた。

その突破力は凄まじく、その成長速度の度合いも驚く程に速い。認めよう。この者達は確かにこれまでとは違い目を見張るものがある。

しかし、だからこそアンチスパイラルは許容出来ない。このまま成長を……いや、進化を続ければ必ず〝奴等〟が目を付けてくる。このまま先に進むことを許せば総ての宇宙が滅ぶ事になる。

それだけは防がなくてはならない。絶望の未来を守る為にもこれ以上のシンカは止めなくてはならない。これ以上世界を滅びへの道を進ませない為に自分は存在してい

るのだ。
「そう、私こそがこの宇宙を守護する唯一の存在。その為ならどんな罪にもまみれよう」
　虚空のアンチスパイラルに確かな意志が宿る。それこそが彼の覚悟の強さの表れであり、迷いのない事への証明であった。
「――――可哀想な人」
　しかし、そんな彼の想いを一人の女性が優しく否定する。ゆっくりと振り返れば宙に磔にされた女性、ニアがアンチスパイラルを憐れみの目で見下ろしていた。
「誰も信用せず、信頼しないで自分の行動に酔いしれる。貴方のやっている事は全て自分勝手な思い込み、なのにそれすらも気付かないで貴方は――――ッ！」
「言ってくれるな、メッセンジャー風情が」
　自分の手によって生み出された擬似生命体、アンチスパイラルがいなければ存在する事も出来なかった存在。彼からすればニアこそが心底憐れむべき〝モノ〟と言えるだろう。
　そんな彼女から憐れみを受ける。飼い主処か創造者たる自分に牙を立ててくる彼女に、アンチスパイラルは怒りを見せず、ただ静かに真実を告げた。
「お前を救いに来たという螺旋の男も我が多元迷宮にて眠りに落ちている。そこに落ちた者は誰一人として這い上がれはしない。永遠に夢という監獄の中で囚われ続けるだ

ろう……その命が尽きるまで」

人間という生き物は生きていく上で何かを経験し、何かを得て、育み、失い、そして成長して強くなっていく。Ｚ―ＢＬＵＥもその例に漏れず、数々の難関を突破して、今日という日まで強く成長を続けていた。

だが、それこそがアンチスパイラルの用意した罠、多元宇宙迷宮に囚われる要素となる。何かを失ったことで強くなった人間は心根の部分に禍根（しこり）が生まれ、その者に一生付きまとう。

多元宇宙迷宮とは謂わばそんな人間の心根や隙間、心の脆さに付け入ってくるモノ。心が強ければ強い者程迷宮に取り込まれやすく、それ故に抜け出すことは不可能とされている。

可能性があるとかないとかそういう話ではない。〝０〟なのだ。多元宇宙迷宮というアンチスパイラルの最後の慈悲は、慈悲深い故に抜け出すことは絶対に有り得ないとされている。その事が分かっているからアンチスパイラルは余裕の態度を崩すことなく、ニアの言葉を素直に聞き入れているのだ。

「あの人は……あの人達は必ず来ます。貴方を打ち破る為に」

しかし、それでもニアは信じ続けた。人間の可能性の大きさに、幾つもの困難を乗り越えて来た鋼の勇者達の強さを。解体寸前である身で絶対者を睨みつけた。

そんな彼女にアンチスパイラルはフンッと鼻を鳴らし、ニアに向けて手を向ける。途端に全身に痛みが走り、分解される様な苦しみがニアを襲った。

いよいよ自分もこれまでか、痛みによって視界がぼやけ悲鳴を上げることも儘ならないまま覚悟を決めるニア、しかし意外にも痛みはそれ以降押し寄せてくる事はなく、寧ろ何かから解放された清々しさがあった。

次の瞬間彼女に襲ったのはフワリと宙に浮かぶ感覚と、地面に落ちて臀部を強打する衝撃だった。何が起こったのか混乱していると、アンチスパイラルの声が聞こえて来た。

「そこまで奴等を信じているのなら、そこで大人しく見ているといい。人の身となったお前がいつまでその虚勢が続くのか、それはそれで見物でもある」

アンチスパイラルのその言葉にニアは一瞬理解出来なかった。人の身、それはつまりシモンや皆と同じ存在になったという事になるのだろうか？

自分の体を見てそれが事実である事が分かった。抉られ、侵食された手足に傷痕も一切消え去り、これまで自身を蝕んでいた苦痛も嘘のように取り払われている。

だが、一体何故なのだろう。不要である存在なら容赦なく切り捨てるのが目の前の黒い人影の本質でもある筈、そんな彼女の胸中を代弁するかのように、第三者の声が空間に響いた。

「意外だね。君の事だからてっきり切り捨てるものだと思っていたよ」
空間に現れたのは白髪の少年と眼帯をした褐色肌の男性、何れもただの人間ではないと悟ったニアは少しばかり警戒する。
けれど、それも男性から差し出された白い外套を受けとることで四散する。風邪を引くだろ、と紳士的な態度で気遣ってくる彼の態度にすっかり心を赦したニアは、ありがとうと呑気に外套を受け取り、それを羽織った。
「貴様らは……成る程、確かに正しいシンカを果たしている様だな」
「宇宙の守護者たる君にそう言われるのは……光栄、というべきなのかな?」
「誉め言葉序でに応えてやろう。そこにいる……元仮想生命は既に螺旋の力に浸りすぎてバグと化している。そんな存在を我が領域で分解すれば後々余計な要因に繋がる可能性がある。それ故に奴等と同じ存在に作り替えて我等との繋がりを断ち切ったに過ぎん」
「だから、人としての肉体を与えたのかい? 君が一番忌避している螺旋の生命体として」
「……」
それ以上深い意味はないと、アンチスパイラルはそれ以降この話に触れる事はなく、少年もまたその話を掘り起こす事はしなかった。彼等の間に緊迫した空気はあれど、今

すぐ戦いになる様子はない。
「……そんなに、人類の事は信用出来ないかい？」
「己の価値観だけを相手に押し付け、それが叶わなければ直ぐ様争いに持っていく。血で血を洗い、他者を抑圧せねば気がすまない種をどうして信じられる？」
寧ろ、そんな奴等を信じるお前達こそが異常だと、アンチスパイラルは目の前の少年と男性に言い放つ。それに反論出来ないのか、男性も少年も言い返す事なく、肩を竦めた。
アンチスパイラルの語る言葉は全て正しい。人間はいつでも愚かな事を繰り返し、何度奇跡を起こしても根っこの部分が変わる事はなかった。
やがてこの宇宙の真実を知り、災厄を遠ざけるのはこれしかないと察したアンチスパイラルはシンカへと至り、母星を隔絶宇宙へ隠し、宇宙の徹底した管理を行った。
何千、何万もの月日が流れようとアンチスパイラルが顧みる事はない。己の行いこそが正しいと信じて疑わない彼はきっとこれからも変わることはないだろう。……なのに。
「なら、どうして彼等をあのままにしているんだい？　君なら、ああなった彼等を直ぐに終わらせる事だって出来るんだろう？」
「……」

少年が紡いだその言葉にアンチスパイラルは押し黙り、ニアも驚愕した様子で目を見開いていた。

多元迷宮とはアンチスパイラルが生み出した可能性の檻、パラレルワールドの迷宮だ。自ら生み出したモノであるが故に破壊することも可能で、囚われた存在が意味消滅する前に抹消する事も出来る筈。なのに、それが出来ないのは何故か、その答えを聞くよりも先にアンチスパイラル自ら口にする。

「……待っている。のだろうな、私は」

「……え？」

ニアの疑問の呟きは誰かに聞こえる事はない。そしてアンチスパイラルの呟きに反応する者も、またいなかった。

ただ、分かっているのはここにいる誰もが、いない筈の誰かの登場を心待ちにしている。という事だった。

◇

「さて、今日も一日務めを果たした事だし、我々も帰るとしようか」
「あぁ、そうだな。そうしよう」
本日の講義も無事に終わり、辺りが暗くなり始めた時間帯。各サークルの喧騒を耳にしながら、夕日に照らされ赤く焼けた道程をトレーズさんと肩を並べて歩いていく。
何事もなく穏やかな時間だけが過ぎていく。それが当たり前で当然の事の筈なのに、何故かそれが尊くてとても大切な事のように思えた。
「ところで、修司は大学を卒業したら何処の企業に就職するかもう決めたのか？」
「あー、まだ決めていないなぁ。トレーズさんは実家の企業を継ぐんだっけ？」
「……正直、私もまだ決めていない。家の後を継ぐにしても私はまだ何事も経験が足りていないからな。まだ当分は己を磨く必要がある」

「既に株で大儲けしている奴がなに言ってんだよ。大学の学費を全部自腹で支払い済みとか、学生全員見渡してもアンタとシュナイゼル位だろ」
「うむ。彼の在り方も中々興味深い。高貴な血筋の生まれであるにも関わらず、それに驕らず自分という芯を持ち合わせている。似た様な境遇である彼にはとても感心させられる」
　腕を組んでウンウンと頷いているトレーズさんに、俺は乾いた笑いを浮かべるしかなかった。頭脳明晰で身体能力も抜群、顔も良ければ性格も良しときて、トドメに実家の方もかなりの名家という完璧を通り越したバグ野郎で、大学内でもエレガント閣下として女子に絶大な人気を持っている。
　なんでこんな人と友人でいられるのか、彼との付き合いの長くなった今でも割と謎だ。
　因みにシュナイゼルの方もトレーズさんに負けず劣らずの完璧超人だが、こっちの方は割と腹黒かったり、何かと裏で暗躍したり時には自分を利用したりしているのでトレーズさんより容赦のない付き合いが出来たりする。
「そういう君こそ、我々に何度も地に膝を付けさせているじゃないか。私には武術で、シュナイゼルにはチェスで、それぞれ勝ち星を挙げているではないか」
「一回勝つために何百と負け越しているけどね」

　自分のぶっきらぼうな答え方の何処に笑える部分があるのか、トレーズさんはハハハと笑みを溢している。くそぅ、笑い顔もエレガントじゃねぇか。そのイケメン力を少しはこっちにも分けて欲しい。
「まぁ、何はともあれこうして私達は今日もこうして友人として接していられるんだ。願わくばこれからも良き関係を築いていきたいものだ」
　トレーズさんの言うこれからというのは、多分大学卒業という事も含めてという意味なのだろう。遠くを見ているトレーズさんの瞳には僅かな哀愁が漂っていた。
　俺もそうでありたいと願う。そう想いを口にしようとした時、背後から強い衝撃を受けた。何かデカイ者が覆い被さっている。その正体に心当りのある俺は苛立ちを募らせながら声を荒げた。
「っ、テメェ、いい加減後ろから飛び付いてくるのを止めろって前から言ってたよなぁ？　ガイオウ！」
「へっへ～。なんだよお前ら、男二人揃って帰りかぁ？　寂しいねぇ」
　体格の良い赤髪の男の名はガイオウ。俺やトレーズさんとは違う学科で受けている講義も違うのだが、何故だか良くつるむ事がある。トレーズさんはこいつの事も友人として接しているが……正直俺はコイツが苦手だった。なんか獣臭い癖によくちょっかいを出してくるから。

お陰で事ある毎にコイツとは喧嘩している。体格の良いコイツと殴りあったりするものだから、俺も次第と腕っ節が強くなってきている。

力が強くなってきているのは別に構わないけど、ガイオウと喧嘩すると必ず大事になるので教授によく怒られたりするし、にこちゃんに心配を掛けてしまったりと散々な事になってしまう事もあり、ガイオウは自分にとって関わり合いたくない人間だ。

……まぁ、悪人と聞かれればそうではないかもしれない。何だかんだでトレーズさんやシュナイゼルに次いで付き合いが長いし、割と面倒見もよい。この間もバイト先でトラブルに巻き込まれた際に助けて貰った事もあるし、悪い奴ではないと思う。尤も、悪い奴でないってだけで別に良い奴って訳でもない。つーか認めない。ツケばかりでろくに支払わないダメ人間をどうして善人と認められる。

俺とガイオウの仲を一言で言い表すと……悪友というのが一番しっくりくるのかもしれない。

「というか、一体何の用だよ。お前から声を掛けてくる時点で嫌な予感が半端ないんだが？」

「にっしっし、なぁにちょっとお前ん所のバイト先でただ飯食わせて貰いてぇだけだ」

「またかよ、つーかただ飯じゃねぇ！　テメェがツケとか言って払わねぇだけだろ！店長の人の良さに漬け込んで勝手なこと言いやがって、いい加減溜まったツケ払えよ。

じゃないと俺がラトロワさんにどやされるんだぞ！」
「そう硬いこと言うなって」
「硬くねぇよ。お前のオツムが軟らか過ぎんだよ。一昔流行った戦車か！」
ギャーギャーと騒ぎ立てる俺とガイオウ、遠巻きの人間は白い目で此方を見ている。
……あぁ、これでまた暫くの間変人呼ばわりされる。
ガイオウという男の奔放さと厄介さに内心でゲンナリしていると、見かねたトレーズさんが笑みを浮かべ提案してきた。
「なら、今から食べに行くとしよう。ちょうど小腹も空いてきた所だ。修司、確か君も店長に言われているのだろう？」
「……厳密にはラトロワさんから言われたんスけどね。外食する時は余所で使わずウチで落としていけって、それが面接の時の条件だったし」
「ならば支払いは私が持とう。久し振りにあそこの茶屋の味を楽しみたくなった」
「流石エレガント閣下、話が早い！」
「茶屋って……普通に喫茶店なんだけど」
相変わらず何処かズレているトレーズさん、先行く二人を追うように自分もまた足を進めた。
――――穏やかで、平和で、血の匂いなんてしないありふれた日常。忘れかけていた

嘗ての日々。

そうだ。こここそが自分の居場所なんだ。帰る場所が、温もりの感じられるこの場所が自分のいるべき所なんだ。

今までが間違っていた。あの激動の毎日こそがある筈のない夢幻なのだと、俺は二人の後を追って一歩踏み出そうと――――。

「けど、それは多分……違うんだろうな」

――瞬間、自分の足が止まり、同時に周囲の景色も止まっていく。あれほど色鮮やかだった光景が今では灰色に色褪せ、ガラス細工の様に脆く砕け、砂塵となって消えていく。

風景も人も、灰色になって消えていく。残されたのは暗闇に一人ポツンと佇む俺一人だけだった。

分かっていた。どんなに求め、嘆いた所で、嘗ての日々が返ってくる訳じゃない。今まで見ていたモノは、自分が理想とした夢そのものだった。

本音を言えばもう少し微睡んでいたかった。嘗て自分がいた世界でトレーズさん達と共に過ごしていたかった。

けれど、それはまだ許されない。夢の中で微睡み続けるには今の自分にはやる事が多すぎる。それが果たされるまで、自分自身が許さない。

それに何より……。

「いつまでもここで寝ていたら、アンタに蹴り飛ばされそうだ。そうだろう？　キタンさん」

「ンだよ、気付いてやがったのか」

「当然。伊達にアンタの弟分やってませんよ」

振り返った所にいた詰まらなそうにブー垂れるキタンさんに自然と笑みが溢れる。本音を言えば別にキタンさんに叩き起こされるまで待つのも良かったけど、この人のケツキックは本当にキツイからなぁ、どつかれる前に起きれて良かったですハイ。

「ま、いいや。分かっているなら俺から言うことは何もねぇ。とっとと戻ってテメェのやるべき事を果たしてきな」

「ウッス」

突き出されたキタンさんの拳、それに合わせる様に俺もまた拳を突き出した。コツンと軽くぶつかる二つの拳、それが合図となり暗闇だった世界に光が宿る。

現れたのは何処までも青空と荒野が続く世界、その先には俺の愛機であり相棒であるグランゾンが静かに佇んでいた。もうこれ以上此処にいる理由はない。俺はグランゾンに向けて足を進める。

そう、最早語る言葉はない。振り返ることなく進んでいくと……。

「シュウジ！」

「……」

「忘れんなよ！　蒼のカリスマだろうが魔人だろうが、テメェはテメェだ！」

〝テメェを信じる、テメェを信じろ！〟

「――――っ！」

その一言に後押しされた俺は、キタンさんの言葉に応えるように拳を空に向けて突き上げる。涙腺から滲み出てくる熱いモノを必死に抑え、俺はグランゾンの下へ歩み寄る。

辿り着くと、待っていたと言うようにグランゾンの眼が輝きを放つ。やがて俺とグランゾンは光に包まれ、何処までも続く青空へと飛び立っていった。

その時に、懐かしいあの人たちの声が聞こえた気がした。

「行ったか」

「あぁ、行っちまったよ。……良かったのか？　最後にアイツと話さなくて」
「構いやしねぇよ。俺もアイツもそんなしみったれた話は性に合わねぇよ」
それもそうだなとキタンは再び空を見上げる。既にシュウジ達の姿はなく、晴れ晴れとした青空が広がっている。
「さって、俺達はどうする？　やることなんて全くないんだが……」
「なに、急ぐ必要はないさ。我等には時間がある。彼が再び我等を必要とするその時まで思う存分語り尽くそう。幸い、私達には同じ話題がある。そうだろう？」
そう言って笑うトレーズに、キタンとガイオウも笑みを浮かべる。それも良いなと、彼等は荒野を歩いていく。
道なき道、荒野の世界に再び闇が満ちようと、彼等の笑みは尽きることがない。
彼等が語るのは巡る銀河のその果てにある自分達と同じ、青く輝く小さい星で生まれたチッポケな男のデッカイ話――――語り尽くせば、日がまた昇り無明の闇を消していく。

◇

『まさか、本当に多元宇宙迷宮を突破するとはな』
『意外か？』
『いや、貴様ならば或いはとは思っていた。尤も、ここで貴様を消滅させる以上、些細な問題だ』
『成る程、期待通りって訳か。ならその序でに一つ言わせて貰うぜ』
『なに？』
『――――ありがとな。お前のお陰で久し振りにいい夢を見させて貰ったよ』
『……そう、か』
『あぁ、……これで俺も言うことはない。さぁ、始めようぜ！』
『良いだろう。螺旋の男の前に先ずは貴様から消してやる！』

◇

隔絶宇宙。外界と切り離し、アンチスパイラルが生み出した絶対なる世界。規模も本物の宇宙同様に広大に無限に広がっている。

その広大な宇宙で一つの規格外が誕生した。星の集合体である銀河を足場に、ソレは高らかに謳い上げる。

『孤独の輪廻に囚われようと、託された想いが扉を開く！』

『無間の闇に覆われようと、己の魂が光に変える！』

『天も次元も捩じ伏せて、進んで見せる己の道を!!』

〝天元突破ネオ・グランゾン!!〟

遥か宇宙の彼方で最強の魔神が産声を上げた。

幕間

地球。ネオ・ジオンのアクシズ落としと時の牢獄の破壊成功の一件から数日が経過した現在、地球は一応の落ち着きを取り戻しつつあった。

アンチスパイラルという嘗てない巨大な敵を相手に宇宙の彼方へ飛び立ったＺ―ＢＬＵＥ、そんな彼等を見送ったシュナイゼルは、とある場所に向けて足を進めていた。

彼が向かっているのは今は亡き友人が遺した旧トレーズ邸。政治的やり取りの末に正式に連邦政府から預かる事になり、現在はシュナイゼルが所有する物件となっている。地下へ続くエレベーターに乗り込み、シュナイゼルは地下格納庫へ足を踏み入れる。

「やぁやぁ、お待ちしていましたよ殿下。あ、もう殿下じゃないんだっけ？　じゃあシュナちゃんだ」

「もうロイドさん！　失礼ですよ！　申し訳ありませんシュナイゼル様」

「ははは、構わないよセシルさん。もう今のブリタニアに貴族制度は無いんだ。そう畏まる必要はないよ」

地下格納庫に足を踏み入れたシュナイゼルを待っていたのは、これまで以上にフレン

ドリーに接してくるロイドと、それを咎めるセシルだった。既に見慣れたやり取りをいつも通りの対応で軽く流し、シュナイゼルは二人に話を促す。

「それで、例の機体が完成したという報告を受けて来たのだけれど……見せてもらえるかな？」

「はいはいただいま～♪」

シュナイゼルに言われるがまま、クルクルと回転しながらロイドは手元にあるスイッチを押す。すると壁際に立て掛けられた巨大なカーテンが降り、一体のＭＳが姿を表した。

「――――――おぉ」

そのＭＳの佇まいを目の当たりにしたシュナイゼルの口から感嘆の声が漏れる。普段の姿勢からは珍しい反応を示す彼の態度に、ロイドはドヤァと笑みを浮かべた。

その機体は、嘗てトレーズがホワイトファングでの決戦で当時の地球圏最強の部隊であるＺＥＸＩＳを相手に単機で翻弄した規格外の機体、先の大戦でも蒼のカリスマが駆ってマリーメイア軍を相手に大立ち回りをした等の数々の活躍を果たした機体――――〝トールギスⅡ〟に類似した機体が佇んでいた。

類似という表現から察する様に、その機体は傍目から見ても嘗てのトールギスⅡとは少々造形が異なっていた。全体的に丸みを帯びた機体、背中には巨大なバーニア、以前

あった両肩に取り付けられたシールドとレールガンは取り外され、代わりに一丁のライフルが腰に添えられる様に備えられている。

他にも脚部に取り付けられた展開型のバーニアなど見所となる箇所は多々あったが、一番シュナイゼルが興味を持ったのは背中にある部分、背中の左側から見えるＭＳの身の丈と同等に長い長刀だった。

独特の柄と芸術的角度で仰け反った刀身から、その長刀は日本刀であることが分かった。以前の万能型の機体から近接特化型へ様変わりを果たしたトールギスⅡ、その風体は騎士（ナイト）というより闘士（ファイター）に近いものを感じる。

見るからに癖のある機体だ。ＭＳに関してはある程度の知識しかないシュナイゼルでもそれは容易に想像出来た。

「どうやら、注文通りの機体が完成したようだね」

「もう大変だったんですよ～。ラクシャータにはドヤされるし、日本の三博士からは愚痴られるし、ビーリ君から泣きつかれるし、挙げ句の果てにはお狐博士からこれは貸し一つだぞって脅されたりしたんですから～」

「ビーリじゃなくてビリー＝カタギリですよ。それに泣きつかれてもいませんし基本的に三博士やラクシャータさんの愚痴を聞いたのは主に私と弓教授ですから！　そこら辺忘れないでくれません？」

「あれ？　そうだったっけ？」
「モノを忘れない予防法、教えてあげましょうか？」
「いえ、遠慮しておきます」
　ロイドの茶目っ気ある態度に苛立ちを覚えたセシルは、寒気がするほどの素晴らしい笑顔を浮かべる。それが彼女の怒りの表れなのだと長い付き合いを経て理解しているロイドは、額に冷や汗を浮かべて必死に流す。
　彼女の怒りを受けても碌な事にはならないと、ロイドは露骨に話を反らし――――いや、本来の話題に戻った。
「しかし、本当に良かったんですか？　一応注文通りの性能には仕上げましたけど……正直、これを操れる人間は殆どいませんよ」
　真剣な表情でそう言い切るロイド、それについては同意しているのか、後ろの方でセシルはウンウンと頷いている。
「ジェレミア卿が持ち帰ったトールギスⅡの運用データとそのパイロットだった蒼のカリスマ……もとい、シュウジ＝シラカワの身体データを基に改修……いや、改造された近接特化型ＭＳ、単純な性能なら現行するどのＭＳよりも圧倒するスペシャルな機体」
「けれど、その性能故にパイロットには大きな負担を強いる事になります。碌な対Ｇ機能もなく、脱出装置もなく、性能だけを追求した特化機体」

「しかもコックピットには従来の物とはかけ離れたシステムが搭載されている訳だしね。並の人間なら最初の加速段階で失神は確実、仮にそれを耐えてもその後のGに耐えきれず内臓はズタボロ、最悪死に繋がる。乗ってるだけで死んじゃうとかどこぞの歩く棺桶以上の代物だよね～」

からからと笑っているがロイドの目は笑っていない。自分の上司に対する目付きではないが、それも仕方のない事、ロイドは確かに科学に魂を売り渡し、自ら〝壊れている〟と自負しているが、別に殺戮者になりたい訳ではない。ただ自分に興味があるものに対して直向きに向き合い、自身の望むままに没頭したいだけなのだ。

故にロイドは視線で問う。何故自分達にこんな代物を作らせたのか、名だたるロボット工学の学士達を呼び寄せてこんな代物を造らせたのか、パイロットを極端に選ばせるこの機体を誰の為に造らせたのか。

尤も、ロイドには誰の為かなど既に分かっていた。というか、こんな化け物機体を操れる心当たりのある人間など一人しかいない。その事を理解しているからこそ、上記の名学士達もこの機体の改造に協力出来たのだ。

そして、肩を竦めて苦笑いを浮かべるシュナイゼルの口からは予想通りの答えが返ってくる。

「無論、そんな事にはならないさ。彼は……シュウジ＝シラカワは必ずこの機体の性能

を限界まで引き出してくれる」
　その答えにロイドはやれやれと肩を竦め、セシルも苦笑いを浮かべる。
「信じているんですね。彼の事」
「信じている。というのは少し違うかな、どちらかと言えば当然という確信だろう。何せ彼は自分で言った事は必ずやり遂げる男だからね」
「再世戦争の時も、彼ってば宣言通り殴ってきましたものね～」
　当時の事を思い出したのか、堪えきらなくなったロイドは噴き出す様に笑い出す。対するシュナイゼルはその時の衝撃と痛みを思い出し、やや表情を青褪めさせて頬を擦る。
「でも、これからどうします？　機体を完成させたのはいいですけど、肝心なデヴァイサー（シュウジ）がいないのならぶっちゃけ意味ないんじゃない？」
　ロイドの指摘も尤もで、実際問題なのはこれからだった。この機体は性能そのものは非常に優れているが、乗り手であるシュウジは不在。そもそも彼にはグランゾンという、ＭＳとは比較にならない性能を有した機体を所持している。
　以上の理由から、三博士を始めとした協力者の皆さんから愚痴を聞かされる羽目になり、弓教授やセシル、序でにビリーは心労でくたびれる事になった。
「……なに、この機体は謂わば保険さ。彼の愛機は確かに強力だ。過去の戦績から見て

もその事は覆らない事実、しかし――――」
「物事には絶対は存在しない。ですか？」
「その通り、そしてこれから私達が相対する相手はそんな絶対が通用しない存在なのだと私は睨んでいる。……そう、例えるなら」
「私達、クロノのような輩……ですか？」
「っ!?」
　シュナイゼルの背後から聞こえてくる第三者の声に、セシルとロイドは驚愕に目を見開かせる。
「そんな、警備システムは機能している筈！　警報も鳴らずに侵入してくるなんて……」
「こう見えて私、潜入工作は得意分野でしてよ。あの程度の警備網を潜り抜ける位訳ありませんわ」
「尤も、蒼のカリスマ程ではありませんけど」と、付け加えながら声の主、赤いウェーブの髪の女性はシュナイゼル達に近付いてくる。
　そんな彼女に二人は動揺するが、唯一シュナイゼルだけは変わらぬ態度で佇んでいる。何故こうも落ち着いているのか、セシルがシュナイゼルを見遣ると……。
「やぁ、随分と早い到着だね。ツィーネ＝エスピオさん。いや、クロノのクィーンと呼んだ方が良いかな？」

不敵に返すシュナイゼルにロイドやセシルは勿論赤髪の女性――――ツィーネも驚愕に目を見開く。何故シュナイゼルがクロノの構成員を知っているのか、相変わらずの情報網にロイド達は脱帽するが、対するツィーネ本人は驚愕の心境からいち早く立ち直っていた。

「フフ、流石はブリタニアの宰相閣下。私の事なんてお見通しという訳ですか」

「別にお見通しという訳ではないさ。私はただ知っている事を知ってるだけ、現に君がここに来るのを後五分は掛かると思っていたからね。君の実力を見誤っていた結果だ。いやはや、大したものだよ」

「……成る程、どうやら腹の探り合いで貴方に勝とうというのは止めておいた方がよさそうだ。――――ならば単刀直入に言いましょう。シュナイゼル＝エル＝ブリタニア、貴方に選択肢を与えます。今すぐあの機体を私に渡すか、それともアナハイム社……いえ、ビスト財団に接収されるか、選びなさい」

突き出される選択肢、当然ロイドとセシルは突然の事態にそれぞれ動揺を見せるが、シュナイゼルだけは不敵の笑みを浮かべ……。

「違うな。間違っているよ、ツィーネ＝エスピオ」

そう、鋭く切り込むのだった。

その106

――――隔絶宇宙。アンチスパイラルの拠点にして、多元世界の宇宙とは異なった空間に存在する人造の宇宙。

本来の宇宙空間とは異なり、隔絶宇宙における法則はアンチスパイラルが支配している。彼の者が敵を殲滅せよと念じれば無限の軍が永遠に産み出され、逆に祝福を祈ればその者を決して覚める事のない永劫の夢の檻へと誘う。

この宇宙においてアンチスパイラルの力こそが絶対。神の如く強大な力を持つ彼等は、確かに宇宙の守護者と名乗るだけの力を有していると言えるだろう。

悠久の時の中で自分に立ち向かってきた者は全て滅ぼしてきた。それこそが宇宙を護る事に繋がると疑わず……。

それはこれから先、未来永劫変わらぬ事実。アンチスパイラルにとって決して揺るぐ事のない絶対。

しかし、そんな〝絶対〟に今少しばかりの綻びが生まれた。広大な隔絶宇宙の中で誕生したソレは、天も次元も捩じ伏せ、銀河を足下に置いて顕現する。

蒼き魔神〝ネオ・グランゾン〟日輪を背負い、再世戦争の頃にアンチスパイラルの宇宙の一部を破壊し、唯一自分と敵対して生き残った存在が、多元宇宙迷宮を突破し、更なる進化を果たした。

面白い。黒い影――――アンチスパイラルは自身の予想を裏切って現れた存在を見上げ、その口元を三日月の形に歪める。

恐ろしく、おぞましく、それでいて――――無邪気な笑顔。アンチスパイラルの空虚な眼の中に浮かぶ小さく赤い炎、それが魔神を見て僅かに揺れた事に誰も気付く事はなかった。

本人すらも、胸の内から涌き出てくる熱に気づかないまま――――。

◇

日輪を背負い、天も次元も捩じ伏せて、多元宇宙迷宮から相棒であるグランゾンと共に脱出した蒼のカリスマことシュウジ＝シラカワは、目の前の光景に言葉を失っていた。

広大な宇宙という闇の中で浮かぶ無数の星々と銀河、無という虚構の空間に浮かぶ星の煌めきにシュウジは目を奪われていた。綺麗だ。今はそんな場合ではない事は重々承知している。けれど呆然と星々を見上げているシュウジの口からは自然とそんな言葉が出ていた。

『それほど迄に巨大なエネルギーを我が物とするとはな、やはり貴様は最初の時確実に倒しておくべきだったか』

背後から聞こえてくる腹の芯にまで響いてくる声を耳にした瞬間、シュウジの意識は瞬時に切り替わる。ゆっくりと機体と共に振り返り、声の主と相対する。

銀河の海から這い出る様に現れる巨大な機体、無機質で邪悪。見るもの全てに畏怖を抱かせるその姿は、守護者というよりも悪魔に見えた。

しかし、何故だろう。外観や雰囲気は全く違うというのに、シュウジには目の前のソレは、どことなくグレンラガンに似ている様な気がした。

だが、同時にシュウジは理解する。目の前の存在は、自分達と同じ外見や手段を用いる事により、相手を深い絶望に叩き込もうとしている。自分達ではどうあっても勝てる

事はないのだと、無意味で無価値な存在なのだと。そう思わせる為に、ああして直接戦いに赴いて来ていると。

『だが、その憂いも今日ここで終わる。貴様を完全に消滅させた後、序でに螺旋の男とその仲間達を始末する事にしよう』

『はっ、まさかそこまで好評価が戴けるとは思わなかったよ。けどな、彼等を甘く見ていると……痛い目見ることになるぜ』

『なら早々に決着を付け、貴様が認める奴等の実力を確める事にしよう』

それ以上は互いに語る事なく、僅かな時間が流れていく。一秒、十秒、それとも一分か。時間の流れの間隔が曖昧になるほどに集中力が極限に高まった――――瞬間。

『っ!!』

『っ!!』

互いに同時に第一歩を踏み出した。それを皮切りにアンチスパイラルの機体〝グランゼボーマ〟は駆け出し、ネオ・グランゾンもスラスターに火を付けて一気に加速していく。

瞬く間に距離を詰めていく中、ネオ・グランゾンは手にワームソードを取りだし、グランゼボーマは左手を刃に変形していく。

勢いを乗った両者は互いに速度を緩めず、そのまま銀河の中心部分にまで差し迫り

……ぶつかり合った。

弩級を超え、人では到底計り知れない規模となった天元突破級のぶつかり合い、その衝撃は足場の銀河を吹き飛ばすだけで飽き足らず、周囲の星雲系までも破壊していくのだった。

◇

『どうした。その程度か!?』

鍔競り合いの状態で拮抗するグランゾンと奴の機体、単純な力勝負では割といい勝負なのか、俺とネオ・グランゾンは奴の力に負けずに踏ん張っている。

当然、奴さんはまだまだ全力ではないのたろうが……まぁ、それは此方としても同じ事なので軽く流しておく。問題は今の俺の状態だ。

天元突破という嘗てない状態でいる為か、喜びクソ野郎から受けた呪いは今の所感じられない。この特殊な状態に至った事で吹っ切れたと思われたが……どうやら、俺はまだ奴の呪縛から逃れた訳ではないようだ。気分は快調で頭の方もスッキリしている。医学的観点から見れば今の俺は健康優良児そのものだろう。

だが、胸の奥底に眠るヘドロの様な凝り固まった感覚は今も変わらず残っている。恐らくは天元突破を果たした事による一時的な小康状態に陥っているのだろう。奴の呪いは今もなお俺を蝕んで離さない。……マジでしつこすぎるだろ。

ならば、今のやるべき事は一つ。呪いが小康状態となった今の内にアンチスパイラルを片付け、次の段階に進むまでだ。

『ほう、我等を相手に考え事とは、随分余裕ではないか』

『あっ』

眼前に広がる髑髏の顔がグランゾンを通して俺を覗き込んでくる。やっべ、ちょっと意識逸らしすぎた。なんて反省している暇もなく。

『っ!?』

俺とグランゾンはアンチスパイラルから伸びる四つの手によって四肢を絡め取られ、そのまま勢いを付けて投げ飛ばされてしまう。

直ぐ様受け身を取ろうと体勢を整えるが、既に目の前に迫る奴の拳から逃れる術はな

く、俺は手にしてあるグランワームソードの腹でこれを受けて直撃を防ぐ。
再び開かれる俺と奴との距離、お返しとばかりにワームスマッシャーを叩き込むが、奴の全身から放たれるビームの雨でワームスマッシャーは残さず相殺されてしまう。
いや、それどころか奴は全身からビームをブッパしながら側にある銀河を掴み取り――投げ飛ばして来やがった。
『そんなのありかっ!?』
サイズの規模的に問題は無いのかもしれないが、これまで見たことない攻撃に俺は面食らう。ただ、いつまでも呆けている訳にも行かない為、俺はグランワームソードで二つの銀河手裏剣（今命名した）を切り裂いた。
四つに裂かれた銀河はそのまま宛もなく吹き飛び、別の銀河に着弾。瞬間、無数の爆発が隔絶宇宙に広がっていく。その時、俺は奴を一瞬だけ見失ってしまった。爆発に捲き込まれ無いように気を逸らしたほんの僅かな刹那的一瞬、しかしそれが仇となった。
『隙だらけだぞ』
『っ!?』
突然真横から聞こえてきた声に直ぐ様振り返るが、次の瞬間、背後から蹴られたと思わしき衝撃が背中を貫いた。
（嘘だろ!?　一瞬で移動しただと!?）

自分で自問して気付く。そうだ。ここは奴が生み出した隔絶宇宙、外界から切り離し、それによりこの宇宙を支配したこの世界は文字どおり奴の庭――――いや、体内そのものだ。

この隔絶宇宙において奴にとって物理法則なんてあって無いようなモノ、奴の思考一つで奴は背後に迫る事も、遥か彼方から狙い撃つ事も可能となっている訳だ。

インチキ効果もいい加減にしろ！　声を大にして訴えたい所だが、そんな言葉が通じる相手では無いことは分かっている。それに何より奴の目的は此方を絶望のドン底に叩き落とす事にある。そんなせこい手段に手を出したりはしない。

『どうした？　考え事はお終いか？』

『……まぁな、お陰で良い気付けになったよ』

眼前から歩み寄ってくるアンチスパイラルに精一杯の強がりを吐いてみる。けれど、この程度で終わる訳にはいかない。

『あまり失望させるなよ。貴様がその程度で終わらないことは承知している。……さぁ、次の一手を見せてみろ』

『言われなくても！』

奴の挑発に乗り、俺はネオ・グランゾンを加速させて奴に肉薄する。そして間合いに入った瞬間、力の限りグランワームソードを振り抜いた。

『無駄だ』

瞬間、横から聞こえてくる声に鳥肌がたつ。顔だけ振り向くと、四つの手をそれぞれ刃に変形させたアンチスパイラルが此方に向けてその手を降り下ろしている。

防御なんて間に合う筈がない。それにあれだけの質量だ。歪曲フィールドで防いでもダメージは免れない。そう、防御する事だけを考えれば。

『グラビトロンカノン!』

『っ!』

瞬間、超高重力の雨が周囲の銀河を巻き込みながら奴の動きを封じていく。防御がダメなら攻撃すれば良いんじゃないと割と脳筋的思考から繰り出されたこの一撃は、見事にアンチスパイラルの動きを封じることに成功した。

重力はあらゆる事象に干渉する。その謳い文句の通り、グラビトロンカノンに囚われた奴は確率変動による瞬間移動も封じられている。

そして、そんな無防備を晒した状態を無視する筈もなく、俺は返す刀でグランワームソードの一撃を叩き込んだ。振り抜いた一閃はアンチスパイラルの胴体を斬り、額にある球体の部分の一部を斬り飛ばし、その勢いを乗せたままで回転しながらの廻し蹴りを放つ。最初の時の意趣返しを込めての蹴り飛ばしは見事奴の腹部を捉え、アンチスパイラルはそのまま吹き飛んでいく。

本当ならここで追撃しても良さそうなのだが、何故か嫌な予感がした。本能的とも呼べる直感に従いながら、ゆっくりと起き上がる奴の挙動を凝視する。

そして次の瞬間、その判断は正しかったのだと確信する。奴の全身から滲み出す気迫、その正体は……全ての命に対する怒りだった。

『そうやってお前達は、何故抗おうとする？　何故反発する？　何故逆らう？　己の行動を顧みず、何故そこまで前に進んでいられる？』

その問い掛けはアンチスパイラルが自ら己に問いかけ続けたモノのようだった。恐らく既に答えを持っているであろう奴に対し、俺は敢えて自分の答えを言い放った。

『それが、命なんだからじゃねぇの？』

それは、俺の本心からの一言だった。時間が永遠に停滞する、なんて事は無いように、命だってそこに在り続ける限り輝き、前に進み続ける。だからこそ自分達は時の牢獄を打ち破り、時の歩みを進める事を選んだはずだ。

命の意味は止まる事や何かに強制される事じゃない。自分で選び、自分で進むからこそ尊く、眩しく、だからこそ、そこに意味を見出だせるのではないだろうか？

随分らしくなく、恥ずかしい事を語ったけれど、アンチスパイラルの質問に対して言うべきことは言った。さて、次はどうするつもりだとグランワームソードを構え――。

『それこそが滅びへの道、螺旋の限界だ！　その思い上がり、後悔させてやろぉっ!!』
アンチスパイラルの怒号が宇宙に響き渡る。どうやら自分の一言が奴の逆鱗を踏み抜いてしまったらしい。いよいよ最終局面突入かと思われた時、奴は周囲の銀河を軒並み抑え込み、圧縮しはじめた。
そこから生み出される膨大なエネルギー量に愕然とする。グランゾンの索敵から確認できる観測数値は全て測定不能を振り切っており、そのエネルギーは今も爆発的に増えている。
それは宇宙誕生のエネルギー、ビッグバン。
『永劫に続く宇宙創世の劫火に焼かれ、ＤＮＡの一片まで完全消滅、するがいいっ!!』
向けられる宇宙創世のエネルギー、これに対抗出来るのは一つしかない。
『相転移出力――――最大限、縮退圧……増大！』
ネオ・グランゾンの背中に背負う日輪、バリオン創出ヘイロウの最大稼働を確認、膨大なエネルギーの塊が、ネオ・グランゾンを通して周囲に影響を及ぼす。
『重力崩壊臨界点――――突破アッ！』
光、時、空間、重力、星々を巻き込み圧縮されていき、やがて一つの事象がグランゾンの前に出現する。
それは開闢の光、創世と同じく始まりを意味する超新星爆発の具現化。

『インフィニティ、ビッグバン――――』
『縮・退・砲――――』
『ストオオオオムッ!!!!!!』
『発射ァ――――!!』
開闢と創世、始まりを意味する二つのエネルギーがぶつかり合った瞬間、無限の黒に支配された宇宙が――――白に変わった。

その１０７

――静寂の時の中、今まで意識を失っていたシュウジが目を覚まし、その目に写したのは何処までも広がる無限の黒、アンチスパイラルによって生み出された人造の宇宙だった。

やっぱり綺麗だ。星々の煌めきが宇宙という黒のキャンパスの上で瞬いているその光景に、シュウジは未だ覚醒仕切れていない意識の中で微睡み、見惚れていた。

けど、何故自分はここにいるのだろう。そこまで思考が巡った瞬間、瞬く間にシュウジの意識は完全に覚醒し、操縦桿を握り締める。何故自分は此処にいるのか、事の経緯の全てを思い出したシュウジは直ぐに機体の状態と現在の状況の確認を急ぐ。

機体の方……ネオ・グランゾンの状態は完全ではないが概ね無事だった。機体制御も問題ないし、ネオ状態の要であるバリオン創出ヘイロウも殆どダメージは負っていない。

しかし、防御壁である歪曲フィールドを発生させる装置だけは負荷が掛かりすぎたの

か、反応が鈍くなっている。この様子だと、展開する事は出来ても十全の機能を発揮するのは難しいだろう。

ネオ・グランゾンの一部が機能不全に陥った事に不安を覚えるシュウジだが、直ぐにその不安は間違いだという事に思い至り、首を横に振る。開闢と創世、二つの莫大なエネルギーのぶつかり合いの果ての中、こうして無事でいられた事自体幸運なのだ。寧ろ、この程度の損傷で済んだ事に安堵すべきだろう。

と、そんな時だ。グランゾンのコックピットのモニターに見馴れた星が映し出され、それを目の当たりにしたシュウジは驚きに目を丸くさせる。

『あれ……もしかして、地球か？』

外界から閉ざされた隔絶宇宙、アンチスパイラルが支配するこの宇宙に風穴の如く開かれた空間。その先に浮かぶ蒼い星、それは間違いなく自分達の故郷である地球だった。

恐らく……いや、もしかしなくても、先の規格外なエネルギー同士がぶつかり合った事が原因だろう。穿たれた空間の先にある地球を見て安堵するシュウジだが――――。

『ほう、あれがお前達の母星か』

背後から聞こえてくるその声に、シュウジの全身が総毛立つ。心臓が鷲掴みされた様

な感覚、自身の生存本能に突き動かされるまま振り返るシュウジが目にしたのは――――眼前に迫る巨大な拳だった。

反応出来たのは偶然だった。迫り来るアンチスパイラルの一撃を防ぐネオ・グランゾンだが、拳に乗せられた重みに耐えきれず吹き飛び、足場である銀河の上を滑っていく。

グランゾンを通してコックピットにまで衝撃が伝わってくる。揺さぶられ、ぶつけた頭部の皮膚が切れ、生暖かい血液がシュウジの顔を染めていく。

目に己の血が入る危険性を承知しながら、それでもシュウジは眼前の敵を捉えて離さなかった。自分と同様、所々破損していながらそれでも平然としているアンチスパイラルに、シュウジはやっぱりかと苦笑する。

『……やっぱ、やられてなかったか』

『当然だ。あの程度のエネルギーで滅びる私なら、宇宙の守護者など名乗ってはいない。……尤も、お前のしぶとさは些か想定外だったがな』

どうやら、生きていたのはお互い予想出来ていなかったらしい、序に言えば戦いはまだまだ終わる気配はない。四つの腕を再び剣へ変形させるアンチスパイラルに対し、シュウジはただ笑う事しか出来なかった。

シュウジとネオ・グランゾンが有する最強の一撃、縮退砲。天地開闢の一撃を以てしても倒しきれていない相手。その事実の重さはシュウジ自身が良く理解していた。

自分ではコイツを倒す事は出来ない。しかし、それでもシュウジは抗いの姿勢は崩さず、グランワームソードをワームホールから引っ張り出す。

剣を構えるネオ・グランゾン、己の最大の一撃が通用しないという事実を前にして、それでも諦めようとしないシュウジの姿に、アンチスパイラルは苛立ちを募らせる。

『無駄だ。先程の一撃が私に届かなかった以上、最早貴様に勝機はない。大人しく絶望の淵に沈むが良い』

『生憎、そうそう沈んではいられない身でね。あんまり寝惚けていると怖い兄貴分にケツを蹴られるからよ』

『そうか、ならば貴様の望む通りにするが良い。お前の力の悉くを、心の拠り所を、その全てを打ち破ってやろう』

そう言ってアンチスパイラルは再び己の四つ手を刃へと変える。真っ向から迎え撃つと宣言するアンチスパイラルにシュウジは上等だと息巻き、剣を手にアンチスパイラルへ肉薄する。

◇

『ここは……』

そこは無限に煌めく星の海だった。多元宇宙迷宮という脱出不可能とされていた牢獄を突破したＺ―ＢＬＵＥの面々は、その壮大で美しい光景に僅かな合間心奪われていた。

だが、その感傷的な思考も次の瞬間聞こえてきた剣戟の音により切り替わる。誰かが戦っている。その何者かが誰なのか、分かった上で剣戟のする方角を見やる。

そして同時に驚愕する。嘗て地球で猛威を奮っていた蒼き魔神が、髑髏の巨人の前で膝を屈していたのだから……。

『シュウジさん！』
　信じがたい光景を前にヒビキが吼える。心配と驚愕の混じった叫びは、隔絶宇宙を通してシュウジに届く。
『……やぁ、ヒビキ君。それにＺ―ＢＬＵＥの皆さんも…無事あの迷宮から脱出できたんだな』
　多元宇宙迷宮を突破し、天元突破を果たしたＺ―ＢＬＵＥを見てシュウジは安堵の声を漏らす。だが、その声は既に絶え絶えで、他人を気遣う余裕などない癖に、それでもヒビキの無事を喜ぶシュウジの様子は、いっそ痛々しく見えた。
『アンチスパイラル、テメェの相手は俺達だ！　間違えるんじゃねぇ！』
　シモンの怒りの叫びが怒号となって宇宙に木霊する。天も次元も突破し、更なる力を得たグレンラガン。その姿は雄々しく、身に纏う螺旋力の焔は隔絶宇宙を燃やさんと轟々と揺らめいている。
　闘志を剥き出しているＺ―ＢＬＵＥ、そんな彼等に対し、アンチスパイラルは冷ややかに見詰めていた。
『ふん、確かに多元宇宙迷宮を突破しただけあって貴様らの意志の強さはこれ迄の連中とは別格の様だ。だが、今は貴様らの相手をしている暇はない。この男を葬るまでそこで待っていろ』

髑髏の巨人が手を翳した瞬間、何もない筈の宇宙空間から無数のムガン達が姿を現す。しかもそのどれもが自分達と同じ様に天元突破を果たしている。

襲い掛かるアンチスパイラルの軍勢を前に停滞を余儀無くされるＺ―ＢＬＵＥ、彼等の戦いを尻目に、アンチスパイラルは未だ屈しているグランゾンを見下ろした。

『どうだ？　これで理解しただろう。如何に貴様が小細工を仕掛けた所で私という絶対を打ち破る事は出来ない』

『はぁ、はぁ　、……へへ、参ったな。まさか乱舞の太刀がこうもあっさり破られるなんて、自信あったんだけどな』

乾いた笑みを浮かべ精一杯の強がりを見せるシュウジだが、その表情は絶望の色が濃くなっている。縮退砲も通用せず、自身の技である乱舞の太刀による多角同時攻撃も目の前の存在には通用しなかった。

いよいよ持ち出せる手札が尽きた。アンチスパイラルの底知らずの実力にシュウジの心は半ば折れかけていた。……しかしその反面、シュウジの戦う意思は衰えておらず、シュウジは操縦桿を握り締めてネオ・グランゾンを立ち上がらせる。

分かっている筈なのに、勝てる見込みはもうないのに、それでも立ち上がろうとするシュウジとネオ・グランゾンの姿にアンチスパイラルはどうしようもなく苛立ち――――。

『まだ分からないのか。この愚か者がぁぁぁっ!!』
『っ！』
『敵わぬと知りながら立ち上がり、死ぬと分かっていながら抗い、それが美学と錯覚しながらその在り方に酔いしれる。あぁ、不快だ。不快だ不快だ不快だ不快だ不快だ不快だ不快だ不快だ!!　穢らわしい程に!!』
　振り抜かれた拳の乱打、四つの腕から繰り出される乱撃の雨を、シュウジはグランワームソードの腹を楯にして堪え凌ぐ。だが、止むことのない乱撃の応酬に、グランワームソードは徐々に亀裂を刻んでいく。
『貴様にはあるのか！　私を倒し、先へ進む決意が！　覚悟が！　進化の兆しを閉ざし、永劫の時の中で生き続ける事を背負った私達の覚悟に勝る道理が！』
　シュウジの目に映し出されるのはアンチスパイラルの額に備わった星――――アンチスパイラルの母星だった。
　アンチスパイラルは語る。自分達は元々螺旋族だったと、自分達と同じく明日を信じて未来に夢を膨らませていたと。
　しかし、自分達の中に眠る螺旋力の恐ろしさ、そしていつか来る根源的災厄と絶望の未来を知ったが為に彼等は進化の道を断念し、自らを封じ込める結論を下した。
　この決断こそが宇宙を滅びの道から救い出す為の……絶望の未来を回避する為の唯

一の道なのだと。アンチスパイラルはそれだけを信じて、今日まで戦ってきた。
多くの螺旋族を葬ってきた。自身をアンチスパイラルと呼称した彼の者は、全ての命から敵視されても決して折れず、戦ってきた。
悠久の時の中で戦いを続けてきたアンチスパイラル、その覚悟は何物よりも強く、何物よりも硬い。それに対してシュウジはそんな彼等の覚悟に見合うだけの道理があるのか……。
『否、否否否否否否否否否否否否否否否否!!　断じて、否ァァァァッ!!　』
『グゥゥッ!?』
それはないと断じるアンチスパイラルの一撃が遂にグランワームソードを粉砕する。防ぐものを失ったネオ・グランゾンはアンチスパイラルの乱打を一身に受け、再び吹き飛ばしていく。
『シュウジさん!』
『シュウジ!』
膝を尽き、倒れ伏すグランゾン。その光景にヒビキ達は声を張り上げてシュウジの名を呼び続けるが、気絶しているのか返事は返って来なかった。
『決意もなく、道理もなく、覚悟もない。己の本能のままに進む貴様が私に敵う道理など、ある筈がないのだ!』

倒れるネオ・グランゾンにそう掃き捨てると、アンチスパイラルはＺ―ＢＬＵＥに向き直る。これで漸く本来の目的を果たせると、螺旋の男を葬り、進化の萌芽を宿す者達を消し去る事で再びこの宇宙は安寧に保たれる。そらこそが自分の使命だとアンチスパイラルは自身に言い聞かせ、一歩踏み出すが……。

『――――たし、かにな』

『っ！』

『俺は、お前の様に強い決意も覚悟も、ましてや道理なんて持ち合わせてはいない。実際ここまで来るのに結構流されていた節もあったしな』

『貴様、まだ立ち上がれるのか!?』

『けど、それでも〝生きたい〟って思ったんだ。喩え未来がどんなに暗くても、今を精一杯生きていたい。友達とバカやって、好きな人に告白して、フラれて、辛くて、だけど楽しい当たり前の日々を……なぁ、アンチスパイラル。お前は本当にそんな願いも下らないって言えるのかよ』

シュウジのその言葉に、アンチスパイラルは答える事は出来なかった。いや、本来なら出来た筈だった。闇雲に進む可能性の、進化の萌芽がやがて宇宙を滅ぼすと、不必要な命は刈り取らなければならないと。

だが、何故かその台詞はアンチスパイラルの口から出される事はなかった。何故な

ら、それは嘗てアンチスパイラルになる前の自分の夢と同じ――――。
（あぁ、そうか。だから私はこの男にここまで拘って……）
何故自分が目の前の男に苛立ちを募らせていたのか、その答えを知ったアンチスパイラルは背後に立つネオ・グランゾンに向き直る。
この男こそが自分に訪れた最後の試練。この男を完全に消滅させる事で、自身が完全なる反螺旋として完成する事を確信したアンチスパイラルは、己の力の全てを出しきる事を決意する。
『ならば、証明してみせろ。私に打ち勝ち、自らの願いを叶えてみせろ！』
瞬間、アンチスパイラルの機体――――グランゼボーマの体が爆発的に膨れ上がっていき、それに比例して力も増していく。
巨大、ただ巨大だった。天元突破を果たしたグランゾンが塵に見える程に巨大化したグランゼボーマは、その力の全てを左手に集約していく。
『さぁ、見せてみろシュウジ＝シラカワ！　覚悟も決意もなく、道理もない貴様が持つ唯一の意思、その力を私に見せてみろ!!』
それはドリルだった。グレンラガンと同じ、けれど性質が異なる超天元突破級のエネルギーがグランゾンに向けて……。
『反螺旋！　ギガァ、ドリルゥゥ――――ブレェェェイクゥゥゥゥッ!!!』

今、放たれる。
超天元突破の一撃、宇宙を破壊して余りあるエネルギーが、シュウジただ一人目掛けて放たれる。外側から聞こえてくる声がやけに遠くなる錯覚を覚えながら、シュウジは瞬時に決断する。
逃げるのは不可能、しかし迎え撃つのも不可能。縮退砲という切り札が通用しない以上、最早自分に打つ手はない。だったら諦めるのか？　いや、そうじゃない。
『逃げるのも迎え撃つのも出来ないなら、受け止めるしかないよな』
迫り来る天地破界の一撃を前にそう決めたシュウジは、ネオ・グランゾンの操縦桿を握り締め、真っ正面から受け止めるのだった。

◇

――――視界が、白に染まる。音も光も置き去りにして、ただ白の世界が広がっていた。

ネオ・グランゾンの両手が砕ける。握り締めた操縦桿を通して、相棒の砕ける様が伝わってくる。

負けるな。負けないでくれ。そう信じて、願って、祈り続ける俺の想いとは裏腹に、ネオ・グランゾンは瞬く間に砕けていく。

それでも、俺は操縦桿を握り締める手に力を込めるのを止めない。それは単なる意地かもしれないし、ネオ・グランゾンに縋っているだけなのかもしれない。

けれど、そうだとしても俺はこの手を放す事だけはしなかった。喩えアンチスパイラルの言う通りこの先絶望しかないのだとしても、自分達の在り方が宇宙を破滅に導くのだとしても――――。

生きたいという意志もまた、間違ってはいない筈なのだから。

だから……だから！

『俺に力を、貸してくれ！　グランゾン!!』

獣の血
水の交わり
風の行き先
火の文明
数多の可能性と無限の道程を経て……命は――

――太陽の輝きへと至る。

『搭乗者のシンカを確認、シラカワシステム第２段階へ移行します』

クリスマス番外編　ご注文は蒼スマですか?

クリスマス。それはキリスト誕生を祝福する年に一度の恒例行事、多元世界であるこの世界でもそういった風習はある様で、世間はクリスマス一色に彩られていた。

街中を彩ったイルミネーション、目映い程に綺麗な光に照された街道に幾つもの家族らが歩いている。

平和だ。破界時変と再世戦争という大戦を経て漸く掴みとった尊いモノ、多くの犠牲を払って手にした平和は、この世界にとってこの上ない価値のあるモノだろう。

だというのに……何故だろう。腕を組んでイチャイチャしているカップルを見ていると、無性に腹立たしくなるのは。

「あー、縮退ブッパしてぇ……」

無意識にそんな台詞が出てきてしまう程に俺のイライラは募っていたらしい。アッ

チをみてもイチャコラ、コッチを見てもイチャコラ、ラヴい匂いを来れでもかと漂わせているリア充共を見ればそれも仕方がない事だと思う。

現在自分はとある街角にて、サンタの格好をしながらケーキ配りに勤しんでいる。売り上げは上々で、このまま行けばバイト代も期待出来るかもしれない。尤も、お金を手にした所で大した使い道も無いんだけどね。

食糧もまだ備蓄があるし、資金の方も今すぐどうにかなる程切羽詰まった状態ではない。なら何故か、それは単にクリスマスという一大イベントで何もしないで過ごすという、ある意味独り身として一番やっては行けない愚行から逃れる為である。

クリスマスという日に何もしないというのは精神的に頗るキツイ、それはもう心が折れてしまいそうな程に。だからこうしてバイトして少しでも気を紛らわそうとしているのだが……。

(正直、これはこれでキッツイな。これならグランゾンのコックピットに引きこもれば良かった)

自分の視界を覆い尽くす程のカップル共を、俺は死んだ魚の目で眺めていた。体を動かせばクリスマスなんて気にしないと思っていたのに、こんなに苦しいのならグランゾンのコックピットに引きこもり〝クリスマスなんてなかった〟と自己完結出来たというのに……失敗した。

「ねえ、今日これから予定ある?　もし良かったらなんだけど、家でごちそうしようかと思っているんだけど……どうかな?」
「私の家、今日両親帰ってこないの。だから……上がっていかない?」
「なんか寒いね」
「今日は雪が降るらしいからな。ほら、もっとくっ付けよ。風邪引くぞ」
あー、心が縮退するんじゃー。
耳に入ってくる恋人達の会話、彼等のこの後の事を考えると、本気でここら一帯を爆心地に変えてやろうかという考えが浮かんでいる。それこそ火星での戦い並に暴れてやろうかと思った。
ボッチの僻み?　あぁそうとも、本日の俺は一人さ、ボッチさ、誰とも過ごす予定なんざねぇよ!　自分が抱いているこの感情は嫉妬以外の何物でもない。けれどそれ故にリア充には分かるまい。ボッチで過ごす男の業の深さを。
と、今までの自分だったら感情のままに動き盛大にバカをやらかしていただろう。だが今の自分は２０を過ぎた男だ。大人とは言わないが僻み程度で世界を壊す程子供ではない。
ならどうするか、色々悩んだ結果、自分はある行動を開始する事に決めた。
名付けて〝サンタのカリスマでこれまでのイメージを払拭しよう〟作戦。クリスマ

スと言えばサンタ、サンタと言えばプレゼント。知り合いを始めとした多くの子供たちにプレゼントを渡す事で、世間が抱く蒼のカリスマのイメージを払拭しようという作戦だ。

既に蒼のカリスマのクリスマスＶｅｒ．も用意しているし、相方であるグランゾンもトナカイ色に染め上げている。尤も、グランゾンには鼻の部分が無いから赤くしていないが、代わりに額部分の一部を赤く塗る事にした。その結果、グランビームは撃てなくなったけどね。

普段とは違う格好にグランゾンもどこか楽しそうだ。シュウ博士だけは何とも言えない表情で苦笑いしていたけど、一応年に一度という事で納得してくれた。

準備は万端、ルルーシュ君風に言うなら条件は全てクリアされた。後は時間が経過し、子供達が寝静まるのを待つだけである。

「ふふふ、これでもう蒼のカリスマをテロリスト呼ばわりする奴はいないだろう。来年頃には蒼スマと略称され、人々に愛されるユルカワ系になるに違いない。ぐ、グフフフ」

「シュウジさーん、気味悪い声出してないで働いてー」

「あ、スミマセーン」

そして夜は過ぎ、蒼のカリスマことシュウジ＝シラカワは遂に作戦を開始させる。

ある時は小学生社長の所へ、またある時は小学生ＩＣＰＯの所へ、更にはチルドレン

達、元皇女様や親友の愛娘、中華連邦(大きなお友達)のお姫様や高校生組、そしてエレメント達や、挙げ句の果てには海底にいるダナンに搭乗している乙女大佐やルルーシュ達へと、シュウジは考え付く全ての未成年の子供達の所へプレゼントを配った。

警備の突破や居場所はどうやって掴めたかって？　サンタは全ての子供達の希望、不可能などありはしないのだ。

そして……。

「年に一度位は戻ってきてもバチは当たらないよな」

リモネシア。世話になった人達や子供達全てにプレゼントを配り終えたシュウジは、満足気に空の彼方へ飛び立っていった。

◇

――翌日。

「ふぁー、よく寝た。ん？　枕元に何か置かれてる？」

朝の日射しに目を覚ましたシオは枕元に置かれている箱に気付き、開けてみると……。

「なによ……これ」

丁寧に梱包された箱、そこに収まっていたのは……蒼のカリスマの変身キットだった。服のサイズから仮面の大きさ、更にはコートの寸法までその人に合わせて作られており、凄まじい手作り感を醸し出していた。

後にこれは蒼のカリスマプレゼントテロと称され、プレゼントを渡された人達は色んな意味で蒼のカリスマに対し戦慄するのだった。

尚、一部の人間には好評で変身キットを着用していたのは内緒である。

その１０８

永遠に等しい時の間、宇宙を護る為にアンチスパイラルはこれまで数え切れない程の同胞を葬り、宇宙の均衡を保ってきた。

バアル、根源的災厄。そしてその先に待つ絶望の未来。最悪の結末を回避する為に、彼の者は考え付く限りの手段で宇宙の平穏を守ろうとした。

どれだけの怨みをぶつけられようと、どれ程の命を摘み取ろうと、彼の者は疑わず、己の行いこそが善であると信じ続けた。

やがて月日が経ち、感情を、心の在り方というモノも忘却の彼方へ消えていき、己の存在意義すら失い掛けたある時、アンチスパイラルは自身の中で何かが脈動する音を耳にした。

幾千幾万もの怪物の群れの中でたった一機で戦う蒼き魔神。世界から敵視されても、世界に己の居場所が無くとも、己の世界を救うべく戦う。絶望という状況に晒されながらそれでも戦う魔神と、それを操る魔人の姿に何故か目が離せなかった。

螺旋の男という宇宙を滅ぼす要因があることを知っていながら、彼の者は魔人と呼ばれる男の在り方に釘付けになっていた。それと同時に、魔人に対し言い難い苛立ちを募らせていた。

今思えば、羨ましかったのかもしれない。一人でありながら己の意思のまま生きている彼の事を、使命も約束もなく、ただ己の心が命じるままに――――自由に生きる事を。

この時、アンチスパイラルは思った。もし全てに決着が付き、自分達の役目が終わる時が来たのなら……ああいう風に生きて見てもいいのかも知れない。

そんな時は未来永劫訪れはしない。そう決め付けてもアンチスパイラルはその時生まれた感情を、願いを捨てきれずにいた。

◇

『バカな』

アンチスパイラルは信じられないといった様子で呟く。隔絶された宇宙の中で神の如く力を有している彼の口から漏れる言葉は、目の前の事象に対する否定と困惑に染まっていた。

この空間に置ける自分達の力は絶対、法則も事象もこの宇宙で自分に逆らえる者は存在しない。限定的でありながらその力は、外にいる〝奴等〟にも迫るモノだと自負している。

なのに……何故目の前の存在は消滅しない？　自分達の全霊の一撃を受けて尚、ソレは存在していられる？

混乱と戸惑いがアンチスパイラルの思考を埋め尽くす中、彼は見た。自分達の放った一撃の先にある魔神の様子に。

『奴の機体が修復……いや、再生しているだと？』

砕かれた筈の魔神の両腕、量子単位にまで分解されたグランゾンの腕が時間を巻き戻す様に再生していく。時間を巻き戻す、その言葉にハッとしたアンチスパイラルは、その虚の目を大きく見開いた。

『事象の浸食だと!?　この隔絶宇宙を媒体に己の法則を流しているとでもいうのか!?』

この隔絶宇宙には己の意志を現実のものに映し出す性質が存在しており、アンチスパイラルはその性質を己の力の増幅装置として作動させ、この宇宙を自身の描いたモノに

書き換えている。
基本的にはアンチスパイラルに力が傾く様に創られているが、彼の者が元々螺旋族だった為に、その性質はシモンや螺旋の力と同質の力を持つＺ―ＢＬＵＥにも作用し、その結果、彼等も多元宇宙迷宮を脱する程の力を得る事に成功している。
だが、逆を言えばそれだけだ。この隔絶宇宙はアンチスパイラルの力を超えられぬ様に出来ている。それこそ、外界から何らかの力を持ち込まない限りアンチスパイラルの有利は揺るがない――その筈だった。
『我々の法則を己の法則に書き換えるだと!?　それでは、それではまるで――――』
〝太極〟
蝕まれていく自身の法則を前にアンチスパイラルの脳裏にあの言葉が浮かび上がると同時に、グランゼボーマの放つドリルの尖端に皹が入る。
見ると、そこでは完全に修復されたネオ・グランゾンの腕が、グランゼボーマのドリルを止めようと尖端を握り締めていた。
回転するドリルを止めようと力を強めるネオ・グランゾン。魔神の背にある日輪も、ドリルを制止させようとその輝きを強めている。
やがて皹は亀裂となり、そして亀裂はドリル全体へ広がっていく。――――負ける。悠久の時を経て、初めて突き付けられる敗北の二文字を前に、アンチスパイラルは最後

の力を振り絞る。
『ぬうううううっ!!!』
負けてはならない。負けてなるものか。ここで負けを、敗北を認めてしまったら全てが終わってしまう。何より、ここで負けてしまったら今までの自分を否定する事になってしまう。認めてしまったら、もう二度と自分達は立ち上がる事が出来なくなる。
怖い。負けてしまう事が、認めてしまう事が怖くて堪らない。沸き上がる恐怖を払拭する様にアンチスパイラルは己の力を振り絞った……その時だ。
『……やっぱ、スゲェよ。アンタ』
『な……に?』
突然投げ掛けられる魔人からの称賛に、アンチスパイラルは呆けた声を漏らす。この土壇場で、この局面で、まるで戦っているとは思えない落ち着いた声。その言葉に侮蔑等の意味はなく、純然たる賛美の言葉だった。
『一人になって、宇宙を守って、同じ仲間を殺してきて、それをずっと繰り返す……ハッキリ言って正気の沙汰じゃないと俺は思う』
『何を今更……』
『当然、それは誉められたモノじゃないし、実際許されない事だ。万人に聞けば全員がアンタを否定するだろうさ。無論、俺もその一人だ』

『……』

『けどさ、同時に思うんだ。万人に疎まれても、怨まれても、呪われても、それでも戦おうとするアンタの気持ちも……肯定されるべきなんじゃないかなって』

『なにを……言って』

『アンタは頑張ったよ。やり方が強引だっただけで、アンタの気持ちは多分……間違ってはいないんだ』

魔人……シュウジのその一言に、アンチスパイラルの胸の内から暖かい何かが溢れだした。初めて聞かされる肯定の言葉に、彼の者の虚の瞳に熱が入る。

『アンタの間違いはただ一つ、もっと周りを見るべきだった。誰かを頼るべきだった。誰かに……甘える事だったんだよ』

『……甘え、か』

『真面目過ぎたんだよ。アンタも、トレーズさんも、頭が良いから、他人より何でも出来ちまうから、何でもかんでも背負い過ぎて……潰れちまう。アンタ等はもう少し他人に頼っても良かったんだよ』

アンチスパイラルもトレーズも己の信念に従い過ぎた。妥協を許さず、徹底した為、自らを追い詰めてしまった。

それを間違いだと言うつもりはない。けれど、もう少し頼って欲しかった。それだけ

がシュウジの指摘でもあり、心残りでもあった。
『……そう、か。甘えか。確かにそれは盲点だったな』
『アンタにだっていたんだろ？　気を許した友人が、相談に乗ってくれる親友が、一緒にバカやれる悪友が』
『あぁ、そう……だな、いたのかもしれない。もう、覚えてはいないが』
　懐かしむアンチスパイラル。その眼は何も映さない空っぽの虚構のモノではなく、昔を懐かしむヒトそのものだった。
『……シュウジ＝シラカワ』
『あ？』
『お前なら出来るのか？　我々を倒した先にあるのは避けられない運命、絶望の未来だ。それを乗り越えるのは……』
『あぁ、無理だろうな。俺一人なら』
『……あぁ、成る程。そういう事か』
　シュウジの否定の言葉に何かを察したのか、アンチスパイラルは納得し、頷く。彼の者も知っていたのだ。既にシュウジの限界は超えつつあった事を。
『ここまで来ておいて他人に丸投げとは……貴様の言う甘えは随分と無責任なものだな』

『何せ、今日まで色んな人の手を借りて生きてきたんでね。すっかり甘え癖が付いちまった』
『減らず口を……まぁ、そんなお前の言うことだ。たまには信じるのも良いだろう』
『……ありがとな』
ドリルが砕かれ、消えていく。全てを出しきったグランゼボーマは向かってくる魔神を受け入れる様に両手を広げ――。
グランゾンの拳による一撃が宇宙の守護者を貫いた。

『シュウジ＝シラカワ』
『あん？』
『この宇宙、必ず――守れよ』
『あぁ、そんでもってその時は、アンタの力も借りるよ』
『ふ、フフ……死人にすら助力を求めるとは、本当にお前は自由な奴だ』
けど、だからこそ……。
全ては己の傲慢さが原因だった。その事を分かっていながら今日まで使命を果たし

続けてきた彼の者はこの日、初めて受け入れられ、満足したまま彼方へと消えていった。

◇

『やった……のか？』

ネオ・グランゾンの一撃がアンチスパイラルを貫いたと思われた瞬間、爆発と轟音が隔絶宇宙を埋め尽くした。

やがて爆発が収まり、静寂が辺りを包み込む頃、隔絶宇宙に残されたのはＺ―ＢＬＵＥとネオ・グランゾンだけとなった。

人類抹殺を目的としたアンチスパイラルの打倒。それが叶ったのだと知った瞬間、Ｚ―ＢＬＵＥの面々は諸手を上げて喜びの声を張り上げた。
『やった。やったんだな俺達!』
『アンチスパイラルを倒したんだな』
『倒したのがＺ―ＢＬＵＥのメンバーじゃないってのがアレだけど……』
『破界事変や再世戦争の時といい、何だか締まらない終わり方だな』
『何言ってんだよ、ここまで一緒に戦って来たんだ。シュウジの奴もＺ―ＢＬＵＥの一員だろ』
それぞれがそれぞれの形で喜びを顕にしている。そんな中、何人かのメンバーはこの宇宙に蔓延る悪意に過敏に反応していた。
『……』
『？　どうしたシモン』
『なぁ、ヴィラル。本当にこれで終わったと思うか？』
ある者は特有の螺旋の本能で。
『……アムロ、感じるか？』
『あぁ、俺も感じる』
『な、何だ。この嫌な感じは……苦しいなんてモノじゃない。まるで心臓を鷲掴みされ

たような……』
『バナージ、気を確り持て　　呑み込まれるぞ！』
　またある者は直感的に……。
『ウグッ!?』
『ヒビキ君、どうしたの!?』
『こ、この感覚は……』
　またある者は魂に刻まれた傷を基に……。
　それぞれ特異な力を持つ者達が感じた方向に視線を向けると。
『シュウジ、お疲れ様。いつも私達は貴方に助けられてるわね』
『……』
『今日は疲れたでしょ、ゆっくり休んでまた次に備えて頂戴』
　ネオ・グランゾンに近付く紅蓮の姿、それを目の当たりにした瞬間――――。

――――ドクン。

『っ、カレン、ソイツに近付くな！』
『え？』

C．C．の叫びがカレンの耳に入った瞬間……。

『グランワームソード』

剣を手にした魔神が紅蓮ごと少女を切り裂いた。

その刹那、誰もが言葉を失った。誰もが思考を停止した。

時の止まった刹那の合間、地球で……。

「ふ、フフフ、漸く私の祝福を受け入れてくれたか。本当に、本当に喜ばしいよ。シュウジ＝シラカワ」

究極の善意（悪意）が狂喜の笑みを浮かべていた。

その１０９

『カレン！』
ルルーシュのその悲痛な叫びにＺ―ＢＬＵＥの時が漸く動き出す。グランゾンの手に持った剣によってカレンは愛機である紅蓮と共に切り裂かれ、彼等の所まで吹き飛んでいく。
ルルーシュとスザク、蜃気楼とランスロットが吹き飛ぶ紅蓮を抱き抱えると、機体の凄惨な状態に二人は息を飲んだ。
左肩から右脇腹にかけて一刀両断された紅蓮、自慢の輻射波動も両断され、胴体も綺麗に裂かれている。ひび割れたコックピットからは、頭部から血を流しながら気を失っているカレンがグッタリと倒れ伏している。
呼吸が確認している事から命に別状はないようだか……一歩間違えればカレンは死んでいた。その事実を前に、ルルーシュの思考は一気に冷めていく。
『……どういうつもりだ？』

『……』

『どういうつもりだと聞いている。答えろ！　シュウジ＝シラカワ！』

声を張り上げて目の前の魔神に向けて問いを投げ付けるルルーシュ、その瞳には戸惑いと怒りが滲み出ており、そしてそれはＺ―ＢＬＵＥ全体の感情の現れだった。

スザクに目配りさせて紅蓮の回収を求めるルルーシュ、スザクもシュウジに対して問い質したい事はあるが、今はカレンに応急措置を施す方が先だと判断し、紅蓮を抱えて離れていく。

その場から離れるランスロットとすれ違う様に、他のＺ―ＢＬＵＥメンバーが前に出る。皆、彼の者に対して聞きたい事があるのだろう。パイロットの面々は皆、怒りと戸惑いの表情に染まっていた。

剣呑とした空気が隔絶宇宙に広がっていく。そんな中、グランゾンのパイロット――――シュウジ＝シラカワは不敵に笑みを浮かべ、次いで口を開いた。

『どういうつもり……か、ククク、君らしくないな。ゼロ、いや、ルルーシュ＝ヴィ＝ブリタニア。答えは既に結果としてここに出ているじゃあないか。分かりきっている問いを投げ掛けるなんて、君らしくない』

『お前……っ！』

彼の者の口から紡がれるその口振りに、一人を除いたＺ―ＢＬＵＥ全員が理解する。

信じたくない、嘘だ。シュウジという人間に少なからず信頼を置いていた者は、突然の出来事に未だ状況を認識出来ないでいる。

しかし、そんな彼等を嘲笑うかの様に彼の者の口から笑みが零れる。まさかここまで効果覿面だとは思わなかったという風に、彼の者は堪えきれない様に嗤う。

そんなシュウジの態度に全て悟ったのか、兜甲児は爆発しそうな感情を必死に堪えながら低い声色で一言訊ねた。

『……いつから、俺達を騙していた?』

『いつから?　それは一体どこからの話なのでしょう?　月落下阻止の時?　リモネシアでの戦いの時?　インペリウムやインサラウムが侵攻してきた時?　それとも……初めて貴殿方と接触した時ですか?』

『そんな、初めから俺達を騙していたのか!?』

『人聞きの悪い。私はこれまでただの一度も貴方達の仲間になった覚えはありませんよ』

赤木の必死の訴えを、シュウジは冷ややかな視線と共に返す。

『私が貴方達に近付いたのは力を得る為、シンカへの道に至る為利用させて貰ったに過ぎません』

『力を得る為だと?』

『そう。貴方達Ｚ―ＢＬＵＥは常に強者との戦いを強いられてきた。危機的状況に陥るほどその力を爆発させ、如何なる困難をも突破していく。特に大グレン団の皆さんは思い当たる節があるのではないですか？』

他にもゲッター線や光子力といった超エネルギー、ＧＮドライヴやゼロシステム等の人類の叡智が詰まった超システムと様々な動力、機能を有しているＺ―ＢＬＵＥは、自分から見れば巨大な力の塊だとシュウジは語る。

『故に、私は貴殿方に近付いたのです。最も可能性に満ち、最も混沌としていた貴殿方の部隊は非常に優秀で、尚且つ興味深かったですよ』

Ｚ―ＢＬＵＥは自身の期待を良い方向に大きく裏切ってくれたとシュウジは語る。事実、ほんの数年前までは戦う事すら出来なかった者達が、今では地球最強の部隊の一角を担っている。

Ｚ―ＢＬＵＥの成長速度は異常で、尚且つ今も成長を続けている。だからこそシュウジはＺ―ＢＬＵＥを利用することを決めたと、シュウジは語る。

『貴殿方には良くも悪くも力が渦巻いている。ならば私はそれに乗っかり身を任すだけ、お陰で私自身シンカへ至り、厄介だったアンチスパイラルも打ち倒す事が出来ました』

敵対組織の中でも特にアンチスパイラルは厄介な存在だった。あれだけ強大な力を

有していても、本陣である奴等の母星を特定する事が出来なかった。ニアの指に嵌められた指輪がアンチスパイラルの居場所に通じる唯一の存在だと気付いた時は運命を感じた。

『お前は……力を得て、一体何をするつもりなんだ』

力、力と語るシュウジにアムロが疑問の声を投げ掛けて同時に彼の者に意識を集中する。目の前にいる魔人は本当にシュウジなのか、彼の背後にいるシュウの存在を確める様に意識を集めるが……。

（どういう事だ。シュウ＝シラカワの……奴の存在が感じられない）

そして気付く、シュウジの背後にいつもは見守る様に在ったシュウの存在が消えている事に、そして疑問が浮かぶ。今自分達と相対している男は、本当にシュウジ＝シラカワなのだろうか、と。

しかし、今は事実を確認している余裕はない。何故なら……。

『――――ワームスマッシャー』

頭上から無数の光の槍がアムロを含めたＺ―ＢＬＵＥに降り注いできたのだ。突然の奇襲に動揺するＺ―ＢＬＵＥだが、その一撃は警告代わりだったのか、Ｚ―ＢＬＵＥの誰にも当たる事なく暗闇の宇宙に消えていく。

いきなりの攻撃でＺ―ＢＬＵＥの敵対心を煽っていく。端から見れば敵対行動にし

か見えない魔人の行動だが、アムロには何故か別の意図があるように思えた。
『私の目的、その事を語るのならまず私の本来の姿を名乗る必要がありますね』
『本来の姿……だと？』
『蒼のカリスマ、私はこの世界に来たときはそんな風に名乗っていましたが、本当は違います。――――サイデリアルの幹部が一人、シュウジ＝シラカワ。それが私の本当の名であり、本来の私の姿です』
『サイデリアルだって!?』
　これまでの戦いで時折耳にしていたその単語にＺ―ＢＬＵＥは揺れ動く。
『サイデリアルの中でも私は特殊な立場にいましてね。ある程度の自由は許されているのですよ。尤も、特殊過ぎるが故に組織の中でも私の事を知る者は一部しかいませんがね』
『そんな私が課せられた任務、それはこの星の戦力の増強とある程度の繁栄。……そうですね、分かりやすく言うならば来る収穫の為の飼育、といった方が良いでしょうか？』
『飼育、だと!?』
『先程も言いましたが、貴殿方は強くなった。破界事変の頃とは比べられない程に……様々な逆境を乗り越えてきた貴殿方はまさに熟れに熟れた果実と言ってもいい。中でもスフィアリアクター、クロウ＝ブルースト、セツコ＝オハラ、ランド＝トラビスは目

覚ましい成長を遂げてくれた』
『……まるでアサキムみたいな事を言うんだな』
『否定はしませんよ。尤も、彼は折角育てた果実を横取りする盗っ人の様なものですがね』
あまり一緒にして欲しくはない。そう嘆息しながら語るシュウジに対し、Ｚ―ＢＬＵＥの……彼と親しかった者達の多くは怒りによって震えていた。
信じていた信頼を裏切られ、仲間だと思っていたのに裏切られた。その怒りは彼等の力へと変わり、握り締めた操縦幹から己の機体へ浸透させていく。
そんな中、ヒビキだけは未だ混乱の只中にいた。自分が慕っていた兄貴分が仲間を攻撃し、瀕死の状態に追い込んでいる。その事実が彼にとって受け入れ難い現実として押し寄せてくる。
『嘘だ。嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ。シュウジさんが敵だなんて嘘だ。だって、だってシュウジさんは俺にとって目標なんだ。頼もしくて優しくて、誰よりも強くて……そんな人が俺達の敵だなんて――――嘘に、決まってる』
『ヒビキ君っ！』
動揺を通り越して混乱しているヒビキを正気に戻そうと声を掛けるが、彼の様子を見

て言葉が出なくなった。操縦幹を握り締めた手は震え、瞳は視点が定まらず泳いでおり、荒くなった呼吸は軈て過呼吸の状態へと症状が重くなっていく。

徐々に状態が酷くなっていくヒビキ、そんな彼を落ち着かせようと必死に呼び掛けるスズネだが、彼女の言葉はヒビキに届く事はなかった。

『嘘……ですよね、シュウジさんが俺達を騙していただなんて、そんなの嘘ですよね』

――見ていられなかった。嘘だと現実を認めず、藁にも縋る思いでシュウジに助けを求めるヒビキの姿がとても辛く見えた。

どれほど彼を信頼していたのだろう。どれほど彼の者の事を信じていたのだろう。見ていて辛すぎるヒビキをそれでもシュウジは……。

『貴方が私の事をどう思おうが勝手ですが……押し付けるのは止めて頂けますか？　正直――――鬱陶しいですよ』

心底ウンザリした様子で突き放した。

『っ!!!!!』

瞬間、ヒビキ達の乗る機体ジェニオンの内部にあるスフィアが稼働し、エネルギーを発した。放出する莫大なエネルギーを推進材として、ジェニオンは一瞬の内にグランゾンの所へ肉薄する。

そして爆発する感情をそのままにヒビキはジェニオンの拳を見舞う。一瞬の合間に

繰り出されたその一撃は、速さだけ見れば過去最高の一撃だった。
しかし――――。
『なんだ、この拳は？　こんなモノがお前の出せる限界なのか？』
グランゾン……シュウジ＝シラカワはさも当然の様に片手で受け止め。
『なまっちょろいぞォおぉっ!!』
もう片方の手を拳に変えてジェニオンの胴体に叩き込んだ。吹き飛び、足場と化した銀河に何度も激突していく中、悲鳴にならないスズネの叫びがコックピットに鳴り響く。
急いで機体を建て直さねばとヒビキに声を掛けるが、ヒビキは気絶しているらしくスズネの言葉に反応しない。
そして倒れたジェニオンにグランゾンが迫る。その手には紅蓮を破壊した大剣が握り締められており、この後自分達に訪れる瞬間を想像したスズネはその顔を真っ青に青褪める。
『そう言えば、この機体にもスフィアが積まれていたな。元はガドライトのモノらしいが……まぁいい。引きずり出して組織への手土産にしよう』
そう言って魔神が剣を振り上げた瞬間、Ｚ―ＢＬＵＥの艦隊から砲撃が放たれ、グランゾンの行く手を遮っていく。

『総員、グランゾンに攻撃。奴をヒビキに絶対に近付けるな！』
Ｚ―ＢＬＵＥのまとめ役、ブライトのその一言によりＺ―ＢＬＵＥは一斉に動き出す。最早言葉は不要と押し寄せてくる鋼の勇者達を前に……。
『そうか、それが君達の選択か――――いいだろう』
シュウジは向かってくるＺ―ＢＬＵＥに向き直り。
『ならば、ここで君達の旅は終わる。新世界の開闢に散る――――華となれ!!』
押し寄せてくる軍勢を前に真っ正面から受けて立った。

その１１０

――最初の頃、俺はあの人に対してあまり良い印象を持っていなかった。それは再世戦争と呼ばれた頃、世界が動乱の真っ只中にあった時の話。

父に引き取られ、姉と共に生活を始めたばかりの頃の俺は酷く閉鎖的で、肉親以外に心を開かず、誰かと触れ合う事すらしてこなかった。

そんな自分だったが、父からジークンドーを学び、姉と共に技の研鑽に励み、狩りを始めとしたアウトドアな日々を過ごす内に徐々に変わっていった。しかし、そんなある日あの人が現れた。

シュウジ＝シラカワ。旅人を自称するその人は父と意気投合するや否や、暫くウチにいろと父に誘われたのだ。――父の誘いを受け、シュウジさんは暫くの間我が家の居候になるのだが――――正直、この時の自分はシュウジさんの事を快く思ってはいなかった。

父と姉と過ごし、少しずつあの日の悲劇を忘れる事ができ始めたというのに、シュウジさんの存在は当時の俺には、自分の居場所を害する侵略者の様に思えてならなかった。

父と意気投合し、姉とも仲良くなるシュウジさんを見て……俺は怖くなった。自分の居場所がなくなりそうで、自分の大切な人が奪われそうで、それが怖くて堪らなくて、そんな思いを誤魔化す為に……時々俺は酷い暴言をシュウジさんに吐いてしまった。

悪いと思っても昂った感情が素直にシュウジさんに謝る事を赦さなかった。幾ら頭で理解していても、胸から沸き上がってくる自分のドス黒い感情を抑えるので精一杯で、自分ではどうしようもなかった。

シュウジさんとの組手に敗北した事でより高まる不快感、このままではどうにかなりそうだと思った時、それは起こった。

巨大な熊、時空振動により変異した突然変異の個体、近隣の集落を荒らし、当時自分達が住んでいた山の生態系に深刻な被害をもたらしていた害獣。

見上げるほどに巨大な熊、その巨体に似合わず俊敏な動きで徐々に追い詰められた自分は、足を挫いてしまい身動きを取れずにいた。

いや、本当なら逃げ切れた筈だった。けれど眼前に迫る死という恐怖があの日の母の光景を思い出してしまい、俺は動く事が出来なかったんだ。

もうダメかと思った。恐怖で全身が竦み上がり、体が震えて動けない自分を前にあの人が———シュウジさんが助けてくれたんだ。

動けない俺を庇って、必死に戦うシュウジさん。俺が幾ら逃げろと叫んでも聞き入れず、あの巨大な熊と正面から向かいあって殴りあった。

腕の一振りで大木をへし折る巨熊、受ければ致死確定の一撃を流し、捌き、反す彼の体捌きは当時の俺には……いや、今でも眩しく見えた。

そして最後に見た抜き手を最後に熊を見事倒したシュウジさん。動けない自分を背負い、父と姉に合流しようと歩く彼に俺は訊ねた。何故逃げなかったと。

『いやいや、ヒビキ君を置いて逃げられる訳ないでしょ、そんな事をすれば俺、姐さんとオジさんに殺されちまうよ』

『本当にそれが理由なのかよ』

『……』

『あんたは、怖くないのかよ。死ぬのが、目の前で誰かが死ぬことが……怖くないのかよ』

『怖くないわけないだろ』

その時初めて聞いた真剣な口振りのシュウジさんに、俺は言葉を詰まらせた。

『死ぬのが怖くない。そんな事が言えるのはそんな経験をした事の無い奴か本物の狂人

かどちらかだ。本気で死ぬのが怖くないなんて言える奴は殆んどいないさ』
『じゃあ、なんで……』
『理由なんて必要か？』
『え？』
『俺が君を助けたいと思った。あの時は俺しかあのグリズリーと闘える人はいなかったし、何よりヒビキ君を置いて逃げる訳にもいかないって思ったからだ。だから、多分この事に理由とか求めるのは……ちょっと違う気がするんだよ』
助けたいと思ったから、だから見捨てなかったし戦えた。そんな滅茶苦茶な持論を持ち出すシュウジさんが……俺は、眩しくて仕方がなかった。
『まぁ、結局はそんなもんだよ。理由とか理屈とか後から考えれば幾つでも思い浮かぶんだ。だったら、今できる事を全力でやりきった方がいいと思わないか？』
そう笑顔を向けてくるシュウジさんに、俺は今度こそ何も言えなくなった。この人を見ていると、何だか今までこの人に対して抱いていた感情が……何だか酷く幼稚なものだと思えたから。
俺はこの後シュウジさんに謝る事になる。貴方に対してどんな感情を抱いていたのか、どんな風に思っていたか、それらを含めて謝ってみたら……。
『うん、知ってた』

と、笑顔でそう返された。
同時に俺は思った。この人みたいに強く、優しい人間になれるだろうかと。
この時俺は願った。この人の様にいつか誰かを救える様な人間になりたいと……この日救われた俺の様に。
――――そんな、懐かしい夢を見ていた気がする。

◇

「ヒビキ君、ヒビキ君！」
「……あ、う」
聞こえてくるパートナーのスズネの声を耳にして、ヒビキの意識が徐々に回復していく。歪んだ視界が正常に戻り、彼が最初に見たのは此方を心配そうに覗き込んでいる、

涙を目尻に浮かべたスズネの顔だった。
意識を取り戻した自分を見て安堵の表情を浮かべるスズネ、一体自分はどうしたのかと気を失う寸前の出来事を思い出した瞬間、ヒビキの目は大きく見開き、上体を起こしてモニターに映る眼前の光景を目にし――絶句する。
彼の視界の先には、蹂躙されていくＺ―ＢＬＵＥ（仲間達）と、その奥で佇む魔神の姿が映し出されていた。

◇

『どうしました？　もうおしまいですか？　仮にも貴殿方は地球を代表する最強の部隊なのでしょう？　ならば、もう少し抗ってみせてください』
膝を尽き、倒れ、屈するスーパーロボット軍団を前に、シュウジは嘲笑の笑みを浮か

べる。その一方で、後方に控えるネエル・アーガマの艦長オットー＝ミタスは、目を剥く程に驚愕していた。

オットーはこれまで数多くの修羅場を潜り抜けてきた経験により、多少の度胸を付けたつもりでいた。アマルガムやマーティアルを始めとした組織的テロリスト、ミケーネやインベーダーという人外の侵略者、そしてネオ・ジオンとの決戦を経てここ、アンチスパイラルの本拠地に乗り込むまで自分は強く成長できたと思っている。

無論、それはＺ―ＢＬＵＥ全員に言えることだ。バナージやシンジといった子供達も厳しい現実に直面しながらも必死に抗い、それに見合った強さを得ている。時に挫き、時に折れそうになりながら、それでも立ち上がる彼等の姿は大人として、同じ男として誇りに思う。

だから、今回も乗り越えられると思っていた。どんな怪物が相手でも自分達なら大丈夫と、そう信じて疑わなかった。――――――だというのに。

『こんなにも……差があるというのか』

目の前に広がる倒れた鋼の勇者達を前に、オットーはポツリと口にする。それは、目の前の魔神に挑んだＺ―ＢＬＵＥの誰もが抱いた感想だった。

世界を相手に一人で戦ってきた男〝蒼のカリスマ〟改めシュウジ＝シラカワ、そして彼の者の手足であり、従僕であり、刃であり楯である蒼き魔神の真の姿〝ネオ・グラン

ゾン〟。

破界事変から知られているその存在が、現在自分達の敵として立ちはだかっている。未だ敵対する理由やシュウジの真意を図りかねているが、彼の向けてくる敵意は本物。故にＺ―ＢＬＵＥは全力で彼の魔神に挑む決意をしたのだが……結果はご覧の有り様だった。

機動力のあるガンダムやヴァルキリー部隊は魔神の発する重力によりその機動性を奪われ、特機戦力であるスーパーロボット達も常時降り注いでくる光の槍に足止めを受け、身動きが取れない内に魔神の攻撃を受けてしまった。

唯一無傷なのは装甲の薄いＡＴ、それ故に危機能力が他と比べて段違いに高いキリコとそのＡＴだけだった。

彼の異常なまでに高い危機回避能力は事前にネオ・グランゾンの間合いから外れ、重力の雨に囚われずに済んだ。しかし、火力の低いＡＴではネオ・グランゾンの張るバリアを突破するには至らないでいる。

開戦直後に行われた僅かな攻防、それだけで大部分の戦力が削られてしまった事に、オットーは自身が絶望の淵に立たされている錯覚を覚えた。

そんな時、重力の雨に抗いながら立ち上がる者がいた。それは光の神、ゼウスの姿を模した鉄の巨人、マジンガーＺだった。

『やっと立ち上がりましたか。遅いですよ、あのまま返事がなかったらそのまま圧壊していた所ですよ』
『そうかい。そりゃ悪かった……な！』
　のし掛かる重力を振り払い、勢いを載せたままマジンガーを走らせる甲児、額から流れる血を拭いもせず、単身ネオ・グランゾンに殴りかかる。
　ネオ・グランゾンの張る不可視のバリアを突破し、マジンガーの拳が迫る。しかし、それを許す魔神ではなく、即座に反応し先程のヒビキの様に片手で防ぐ。
『ほう、ネオ・グランゾンの歪曲フィールドを強引に突破するとは、流石兜十蔵氏の最高傑作。超合金Ｚの強度は伊達ではありませんね……しかし』
　ゼウスの力と姿を模したマジンガーＺに素直な称賛を贈るシュウジ、しかし次の瞬間ミシミシと金属の軋む音がマジンガーを通して甲児の耳を通す。まさか、甲児が驚愕に目を見開いた瞬間、マジンガーの拳はグランゾンの手によって粉々に握り潰されてしまった。
『たかがミケーネの神に手子摺る様な貴方では、このネオ・グランゾンの相手にはなり得ません』
『っ！』
　拳が握り潰され後退るマジンガー、それを逃さないとグランゾンが剣を片手に迫る。

眼前にまで迫る巨大な剣を前に甲児が覚悟を決めて口を結んだ瞬間、金色の巨人が間に入り、マジンガーに迫る凶刃を防いでみせた。
『ゼウス!』
『甲児、一旦下がるのだ。私が時間を稼ぐ!』
光の巨神、マジンガーの基となったゼウスがグランゾンに肉薄する。サイズ差にモノを言わせて力付くで押し込もうとするゼウス。
『光の巨神、ミケーネの神よ。如何に貴方の力があっても私の前では意味を成しませんよ』
全力で押し込もうとしているのに微動だにしない魔神にゼウスの表情が曇る。そして彼が口にする言葉の意味を理解したゼウスはシュウジから発する殺気に反応し、即座に距離を取る。
『私の殺気に反応しましたか、その察知能力は高く評価しますが……残念ながら、その選択は間違いです』
魔神の胸部装甲が展開し、強大な重力場が隔絶宇宙で荒れ狂う。暴れる重力の渦が一点に収束していくと黒い太陽がグランゾンの腕の中に顕現する。
『例え光であろうともこの一撃から逃れる事は叶わない。――――ブラックホールクラスター……発射ッ!』

肥大化する黒い太陽、光すら呑み込む重力の塊が放たれ、ゼウスへと迫る。幾らシンカを果たしたゼウスでもこの一撃を受けるのは不味い。しかし避けてしまえば背後にいるＺ―ＢＬＵＥが巻き込まれてしまう。

受けるか避けるかの選択肢が迫った瞬間、ゼウスは即座に受ける事を選び覚悟を決めた――――瞬間。

『ゼウス、そこをどけぇっ！』

『っ!?』

背後の声に一瞬振り返るとゼウスは納得した様に跳躍し、黒い太陽を回避する。その先にはゲッターの力を高めている真ゲッターと真ドラゴンの姿があった。

『ストナァァァァサァァァンシャインッ!!』

『ゲッタァァァビィィィムッ!!』

ぶつかり合うゲッター線と重力の渦は互いに貪る様に喰らい合い、光となって轟音と共に散っていく。

軈て満たされた光が晴れると、シュウジの視界には多くのスーパーロボットが立ち上がっていた。その中には、気を失って戦闘不能な状態にあったジェニオンの姿が確認できている。

『ふむ、どうやら先程の一撃でグラビトロンカノンの力が弱まった様ですね。シンカを

果たしたとは言え、まだ私も未熟という訳ですか』

不敵に、そして挑発的に嗤うシュウジにＺ―ＢＬＵＥの怒りのボルテージは静かに上がっていく。しかし、そんな彼等を前にしてもシュウジは余裕の態度を崩さずにいる。

彼にとってこの程度はまだ序の口、故にまだまだ戦いは終わらない。

『さぁ、続きを始めよう。この戦いの勝者こそ新世界の導き手に相応しい。来るがいい、ここがその分岐点、天下分け目の決戦だ』

その言葉を皮切りに再び突っ込んでくるＺ―ＢＬＵＥ、今の攻防で既に容赦を捨てたＺ―ＢＬＵＥは今度こそ自分を殺しに来る。そんな彼等を前に……シュウジはどこか寂しそうに笑っていた。

その１１１

『断空――――弾劾剣ッ!!』

己の全てを込めた獣の機神の一撃、それは獣を超え、人を超え、神へと至るダンクーガの名を受け継いだ、チームＤの渾身の一撃だった。

数多の敵を両断してきたダンクーガの一撃、しかし蒼の魔神グランゾンは手にした剣を片手に容易く受け止めてみせた。

『こっ、のおおっ!!』

『ほう、先程よりも力が増していますね。窮地に陥りながらこれ程の強さに至るのは……流石は獣の血の力といった所でしょうか？』

『……気に入らないね、その余裕ぶった言い方』

『俺達の全力を受けていながら平然としているなんてよ！』

『少し……いえ、大分頭に来ますね』

『おや、気に入りませんか？　私としては最大限の称賛のつもりでしたが……』

『舐めるなっ！』

蒼のカリスマ――――シュウジ＝シラカワの物言いに苛立ちを募らせたチームＤは、沸き上がる気力と共にダンクーガの出力を上げていく。
僅かに後退するグランゾン、この勢いのまま押し通そうとするが……。
『舐めるな……か、それは此方の台詞だ』
『っ!?』
『きゃぁあぁっ!??』
勢いの付いたダンクーガの一撃を魔神は押し返し、更には邪魔だと言わんばかりに蹴り飛ばす。
『ヒトというのは理性と本能が合わさって始めて成り立つ存在（モノ）、本能があるから生きる事に貪欲になり、理性があるから物事の本質を見抜く事が出来るようになる。ただ牙を向けるだけの畜生風情が私に歯向かおう等と……思い上がりも甚だしい！』
ダンクーガの周囲を囲むように展開されるワームホール、無数の空間の穴の全てから光が溢れ、チームＤを貫こうとした時、それを阻むように黒い巨人が割って入ってくる。
それはロジャー＝スミスが操る神の遺産ビッグオーだった。
『シュウジ＝シラカワ、悪いが足止めさせて貰おう』
『貴方一人でですか？　いい度胸と言いたい所ですが……それは無謀というモノですよ』

『無論、そんな事は重々承知しているとも――――アンカー射出！』

ビッグオーが組み付き、アンカーを飛ばしてグランゾンの身動きを封じようとする。無駄な事だと一笑するシュウジだが、両脇から現れる鉄人２８号とトライダーＧ７がしがみついてくる。

常時歪曲フィールドを展開しているネオ・グランゾンに直接掴み掛かる事は自滅に等しい。天元を突破していようともその事実は変わらず、銀河よりも巨大となったワッ太達の機体からギシギシと悲鳴の声を上げ、フレームを歪めている。

幾ら頑丈な機体であろうとも、これ以上ネオ・グランゾンを足止めするのは限界だと悟った時、ロジャー達にアムロ達からの通信が入った。

準備は整った。合図と共に了解したロジャーはタイミングを見計らい、彼等は同時にグランゾンから放れる。彼等の行動を訝しげに思うシュウジ、しかし次の瞬間にはその意図を読み取り、頭上を見上げる。

そこにはアムロのνガンダムを始めとしたガンダム軍団、ヴァルキリー部隊、真ゲッターやガンバスターといった火力特化の機体等が、グランゾンに向けて狙いを定めていた。

『主砲、発射ァッ！』

『ゲッタァァビィィィムッ!!』

『バスタァァァ――――ビィィィムッ!!』

『これでぇっ!』

降り注がれる弾幕と光線の雨、その威力は周囲の星々を砕き、足場となっている銀河をも撃ち抜いていく。

ロジャー達が自滅覚悟で作った時間によって生み出されたＺ―ＢＬＵＥによる一線集中放火、その威力は過去最高のモノとなり、ネオ・グランゾンの歪曲フィールドすら突破できる威力を誇っていた。

これで漸くダメージが通ると誰もが確信した時……Ｚ―ＢＬＵＥの背後から突然弾幕の雨が降り注いできた。何事だと混乱するＺ―ＢＬＵＥ、何処からの攻撃だとバナージが振り返った時、その光景に唖然となった。

無数に浮かぶ黒い孔、まるで此方を狙い定めているかのような空虚の孔から、たった今自分達が撃ち放った攻撃が降り注いでいた。

視線を前に戻せば其処には無傷のグランゾンが佇んでいる。先程と同じ展開、唯一違うとすれば、彼の魔神の周囲には、自分達の背後にある黒い孔が無数に穿たれていたという事だった。

『私のワームホールはあらゆる場所に任意で開く事ができ、あらゆるモノを通させる事が可能となっています。……もしかして、後ろから射つというのは卑怯、などと甘い事

を吐くつもりではないでしょうね？』
論ずるに値しない。暗にそう吐き捨てるシュウジにＺ―ＢＬＵＥに戦慄が走る。これだけやっても傷一つ付かない怪物、これが破界時篇の頃より最強を誇っていた者の強さなのかと、一部の者が心折れ掛けていた時。
『獲物を前に慢心するとは、意外と小物なのだな』
『っ！』
背後から現れるアーバレスト、ランスロット、グレンラガン、ダイガードの四機の強襲に、シュウジの反応が一瞬遅れた。
アーバレストは拳に敵を貫くイメージを乗せ、ランスロットは両手に剣を携え、グレンラガンは必殺のドリルを放ち、ダイガードはそのまま真っ直ぐに直進してくる。
突然の出来事にシュウジの表情が強張る。そしてその瞬間、再び銀河に爆発が轟いた。シュウジもＺ―ＢＬＵＥも想像していなかった奇襲、唯一ルルーシュだけは知った顔で爆発の中を注視している。
軈て爆炎は晴れ、再び隔絶宇宙の景色が広がっていく。晴れていく煙の先にある光景を前に、ルルーシュは周囲の目も憚らず「クソっ！」と悪態を付いた。
片翼と左足をもがれたランスロット、両腕を破壊されたダイガード、爆発の衝撃でグレンラガンは倒れ、アーバレストは渾身の一撃を先のダンクーガの時の様に片手で受け

止められてしまっている。
『今のは流石に驚きました。まさか仲間が攻撃に巻き込まれる事を覚悟した上であの弾幕の中に紛れ込ませるとは、しかも私がワームホールで攻撃を防ぐことを見越した上で……これを指示したのはルルーシュ君辺りかな？』
答えを求める様に訊ねるが、ルルーシュは歯を食い縛るだけで応えはしなかった。しかしそれを正解と受けとったのか、シュウジはクククと笑みを溢す。
『……まだ、だぁぁ！』
アーバレストに備えられた単分子カッター、落としたソレを片手でキャッチすると、相良宗介はグランゾンの喉元向けて突き刺す。
『残念ですが、それは通りません』
しかし、その一撃をシュウジは冷めた目で見下ろし、迫る刃を光の槍で撃ち貫いた。片腕ごと破壊されたアーバレスト、宗介が驚愕に目を見開くが、そんな余裕も与えないと言うように自身の体を浮遊感が襲う。
掴みあげられたアーバレストはそのままグランゾンに放り投げられ、倒れ付しているランスロット等に激突する。
あらゆる手を尽くしてもダメージ一つ通らない魔神、その強大さに絶望の淵に立たされるＺ―ＢＬＵＥだが、対照的にシュウジは上機嫌だった。

『いや、しかし成る程、流石は地球最強の部隊Ｚ―ＢＬＵＥですね。まさか私達が一撃受けてしまうとは……少しばかり見誤っていた様です』

シュウジの言うことに訝しげに思うルルーシュ、注意深くグランゾンを眺めると歪曲フィールドを展開させる装置に不具合が発生しているのか、僅かに火花が散っている様に見える。

『強襲、奇襲、さて次は何か……なんて、聞く必要もないか』

頭上を見上げるグランゾンに吊られ、Ｚ―ＢＬＵＥの面々も上を見上げる。何もないはずの宇宙空間、隔絶宇宙が生み出した暗闇に彼等はいた。

ヒビキ＝カミシロと西条鈴音が搭乗するジェニオン、ガドライトから奪った双子座のスフィアを手に入れ、ジェニオン・ガイへと進化した彼等の機体。

『シュウジさん……行きます！』

『これが、私達の全力！』

『ニーベリング・アナイレーション!!』

ジェニオン・ガイから放たれる次元力の波動、それを確認したシュウジは笑みを浮かべ、ワームホールから剣を取り出す。

『成る程、それが今の君の全力ですか。ならば、私も相応の態度で応えるとしましょう』

『うおおおおおっ!!』

スフィアの力を解放させて一直線に降下してくるジェニオン・ガイ、対するグランゾンもジェニオンに激突する様に一直線に直進する。このままぶつかり合うのか、迫り来る衝撃に備えヒビキと鈴音が覚悟を決めた時。

『我流〝真伝〟乱舞の太刀』

無数に現れる魔神を前にその表情を恐怖に染めあげるのだった。

『やはり、こんなものですか』

『あ……ぐぅ』

ぶつ切りの意識の中でヒビキが耳にするのは落胆と失望の声。そんな彼の足元には四肢を切り裂かれたジェニオンが倒れていた。

ＧＡＩモードも解除され、ただの一機動兵器となったジェニオン。倒れ付した彼等を

見てシュウジは残念と口を開く。
『色々工夫を凝らしてくるから期待していたのですが……まぁ、スフィアを手にしたばかりならこの程度なのでしょう』
期待していた自分が愚かだった。そう言いたげなシュウジに悔しさを覚えるヒビキだが、全身からくる痛みのせいで軽口の一つも言えないでいる。
『それに、今のヒビキ君ではどのみちスフィアを十全に扱う事は出来ないだろうし、ここら辺が妥当な所か』
他の皆はどうしたのか、聞こえてこない彼等の声に嫌な予感を感じたヒビキは辺りを見渡すと、その凄惨な光景に言葉を失った。
翼をもがれたアクエリオン、ガンダムやＫＭＦは所々破壊され、ガンバスターや真ゲッターといった大火力を誇るスーパーロボット達は、光の槍で全身を撃ち抜かれ戦闘不能状態となっている。
唯一キリコが操るＡＴだけは目立った外傷はなく、戦闘を続けられる状態だが、既に持てる弾薬は底を突き、あとは直接攻撃の近接戦闘しか手段が残されていない。
先程までの重力の雨による拘束ではない。真っ正面から挑みＺ―ＢＬＵＥは全ての力を出し切った。……なのに、目の前の魔神には掠り傷程度しか付けられずにある。
大きすぎる力の差、埋めようのない圧倒的格差にヒビキの心は絶望の沼に沈んでい

く。

『さて、それでは改めて君のスフィアを戴くとしましょうか。完全にスフィアを操れていない今なら取り出す事は簡単でしょうからね』

振り上げられる巨大な剣、今度は誰も助ける事は叶わない。押し寄せる死、逃れることのない恐怖にヒビキは身を震わせる。

嫌だ。死にたくない。怖い、助けて。命を持つものならば誰もが抱く恐怖に押し潰されそうになった時。

『――――――』

『……え？』

それは、気のせいだったのかもしれない。恐怖によって耳にした幻聴なのかもしれない。しかしこの時、ヒビキは確かに聞いた。

降り下ろされる刃、迫る凶刃を前に呆然とするヒビキ、このまま直撃を受けるのかと思われた時、金色の剣が魔神の一撃を防いだ。

その者はこの場にいる者、シュウジにとっても予期せぬ人物だった。金色に輝くその者は太陽の翼――――神話型アクエリオン。

『ほう、まさか貴方が出てくるとは……貴方の出番はもう少し先だと思っていましたよ。不動ＺＥＮ』

『……』

不敵に笑みを浮かべる不動とシュウジ、睨み合う両者を傍目にヒビキは呆然と眺めていた。

〝諦めんなよ〟

自分に刃を降り下ろした時、聞こえたのは応援（エール）の言葉。その言葉の真意をヒビキが知るのは、随分後の事になるのだった。

その112

強すぎる。重力を操る魔神を前にＺ―ＢＬＵＥはそんな思いを抱いていた。慢心などしていなかった。覚悟はしていたし、必ず勝つという意気込みもあった。

絶対に負けない。負けるわけにはいかない。嘗て無い強敵を前にＺ―ＢＬＵＥはその全てを賭けて蒼き魔神、グランゾンへ挑んだ。

絶対に負けてはいけなかった。この敗北だけは許されなかった。……だというのに彼等は現在敗北という名の泥沼に嵌まりつつあった。

有利だった戦況は瞬く間に覆り、主戦力であるスーパーロボット軍団は全滅寸前まで追い込まれ、機動力を誇るガンダムやＹＦシリーズ等も魔神の操る超重力によって落とされてしまった。

絶対絶命……いや、もはや打つ手がない状況。作戦も策略も圧倒的な力の前に成す術はなく、ただ蹂躙されるだけとなった。

誰もが絶望に沈んだ――――その時だった。ヒビキに迫る魔神の凶刃を瞬く金色に輝

く一振りの剣が防いだのは。
　それは旧ＺＥＸＩＳ達にとって馴染みのある機体、嘗て同じ戦場で共に戦った頼りになる戦友達が乗っていた機体、一万と二千年の時を越えて甦った太陽の翼。
『神話型……アクエリオン』
　光輝くその機体を見て、アマタはその名を口にする。金色に煌めく太陽の翼が蒼き魔神の一撃を防いでいる。その光景に驚くＺ―ＢＬＵＥは、同時に己の内から沸き上がる力の衝動を感じた。
『まさか、貴方まで表舞台に出てくるとは……流石に予想外でしたよ。不動ＺＥＮ、貴方も私の前に立ちはだかるおつもりですか？』
　機械天使、太陽の翼、嘗て同じ戦場に立ち、その力を目の当たりにして来たシュウジはその口振りに僅かな警戒心を含ませる。目の前の敵は危険、されど脅威にはなり得ない。何故なら目の前の神話の使徒からは欠片ほどの敵意も感じられないからだ。
『……シュウジ＝シラカワ、一つ訊ねたい。進化という在り方に間違いがあると思うか？』
　漸く目の前の存在が口を開いたと思えば、分かりきった質問にシュウジは鼻で嗤う。下らないと、そう吐き捨てる様にシュウジは不動の問いに応えた。
『では、逆にお聞きしましょう。貴方は全ての動植物にお前の進化は間違っていると訊

ねるつもりですか？　それはもはや傲慢を通り越して……滑稽というものではないのですか？』

　進化とはその生命体が生きる為に、種を存続させる為に環境に適応する遺伝子の変化。生きる為に変わる事を論じるのは前提からして間違っている。生命は変わるために生きるのではない。生きるからこそ変わっていくのだとシュウジは語る。

『ふっ、確かに生きる事に対し善悪、正過を問うのもおかしな話だ。……ならばもう一つ問いたい。お前のそのシンカはお前自身が望んだ事なのか？』

『……』

　不動のその問いかけにシュウジは言葉を詰まらせる。シンカ、進化とは違う生命の次なる極致、その至り方と在り方を今回の戦いで知る事となったシュウジは、彼の問いに応えられずにいた。

『――ふっ、それは愚問というものですよ。シンカとは成るべくして至るもの、そこに議論の挟む余地などありはしません』

『……そうか』

　シュウジの答えに納得したのか、不動は笑みを浮かべたまま目を伏せる。そんな彼に対してシュウジが訝しげに思った時――それは起こった。

『――これは、オリジン・ローだと？』

アクエリオンから……いや、神話型アクエリオンから通して流れてくる力の波動にシュウジの目が開く。光輝く暖かな光、それは先のネオ・ジオンとの決戦の時、落下するアクシズを止めようとした時に見せた――――人の、心の光。

『そうか、そういう事か！』

背後にある――――穿たれた隔絶宇宙の先にある蒼い星、地球を見てシュウジは初めて己の過信に気付いた。彼が、不動ＺＥＮがここに来たのは戦う為ではない。彼がこの地に駆け付けたのは地球から希望という光を届ける為にあったのだ。

『シュウジ＝シラカワ、確かにお前の言う通り、進化の形というのは誰かに定められるモノではない。不確かで不安定、そしてそれ故に命に可能性が芽生えてくる。――――シンカもまた然り』

『……』

神話型アクエリオンから溢れでる光を前に、シュウジは語る事なくその光景を眺めている。本来ならここで何らかの行動を起こすはずの彼に、不動は笑みを浮かべる。

軈て光はＺ―ＢＬＵＥを包み込み、吸い込まれるように消えていく。消滅した訳ではない。吸収された光はＺ―ＢＬＵＥの機体から溢れる様に再び輝きを放ち始めた。

『これで、私に出来る最後の応援（エール）は終わった。鋼の勇者達よ、ここから先の創星は……君達次第だ』

そういって神話型アクエリオンはその姿を消していく。光に包まれながら消えていく最中、不動ＺＥＮは最後に蒼き魔神へと向き直り……。

（シュウジ＝シラカワ、君の本当の戦いもここから始まる。……負けるなよ）

シュウジの、彼の者の本当の状態を察している不動はＺ―ＢＬＵＥだけでなく、魔人にまで応援（エール）を送り、隔絶宇宙から消えていった。

残されたのは満身創痍のＺ―ＢＬＵＥと殆ど無傷のグランゾン、静まり返る隔絶宇宙、最初に聞こえてきたのは熱気バサラの歌だった。

『さぁ、サドンデスステージの幕開けだ。寝てる場合じゃねーぞ、お前ら！』

『あぁ、俺達はまだやれる！』

『戦っているのは……俺達だけじゃない！』

『地球にいる皆が、頑張れって言ってくれている。皆も、諦めずに戦っているんだ！』

『だから、私達もっ!!』

『諦める訳にいくもんかぁぁぁっ!!』

光に包まれた事により地球の――人の暖かさを知る事となったＺ―ＢＬＵＥ、その暖かさに後押しされ、彼等は最後の力を振り絞り、遂にその段階へ踏み込む。

ユニコーンとダブルオークアンタから放たれる翠の光、真ゲッターもその輝きに感化され、進化のエネルギーを溢れさせ、それに触れたジェニオンが破壊された機体を一時

的に再生させていく。
　ＥＶＡもダンクーガもＡＳも、無機物有機物問わずその力を示していく。隔絶宇宙を覆う程の光の波動、それらを前にシュウジは凶悪な笑みを浮かべる。
『成る程、擬似的にとは言えこれで貴方達もシンカ……つまり、私と同じ土俵に立てた訳だ。良いだろう、地球全人類が見せたシンカの輝き、この私に示してみろ！』
『シュウジさん！』
『『いくぞおおおおっ!!』』
『さぁ来い！　これが正真正銘の……ファイナルラウンドだ！』
　全人類の願いを託されたＺ―ＢＬＵＥと独り戦い続けた男の――――最終局面が始まった。
『いけ、フィンファンネル！』
『奴を足止めしろ！』
　切り込んできたのは赤と白、宇宙世紀の時代にその名を轟かせる二人のエース。互いの死角を補い宇宙を駆けるその様はまさに彗星と流星、勢いを付けた二機はネオ・グランゾンをファンネルで牽制しながら、魔神の両脇を通り抜けていく。
『うおおおおっ!!』
『あたれぇっ！』

『乱れ打つぜぇっ！』

赤い彗星と白い悪魔に翻弄され、僅かに動きが乱れた魔神の頭上にビームのシャワーが降り注がれる。歪曲フィールドの展開装置が破壊され、未だ修復されていない今の状態のグランゾンでは降り注がれる弾幕を防ぐ手立てはない。

故に後ろに下がるしかない。舌打ちをしながらネオ・グランゾンを後ろに下がらせ、Ｚ―ＢＬＵＥと距離を開ける。まずは背後にいるエース二人から葬ろうと転進させた時、足下から一隻の船が浮上してくる。

『ダナン、急速浮上。後にグランゾンにトマホークをぶち込んでください！』

『アイアイマム！』

唐突な足場の崩壊。銀河を海として認識し、これまでグランゾンに気取られなかったダナンの強襲に、ネオ・グランゾンのバランスが崩れる。そこへ大型のミサイルがネオ・グランゾン目掛けて放たれるが、ネオ・グランゾンはバーニアを噴かせ、体幹を横に回転させる事でこれを回避する。

しかし、そのネオ・グランゾンの行動も予期していたのか、回避地点の所に複数の機影が既に迫っていた。

『合わせるぞ、バナージ！』

『了解です。刹那さん！』

翠に輝く二つの機体、共にガンダムの名を冠する機体がグランゾンに肉薄する。それぞれが託された願いと力を掛け合わせ、蒼き魔神に接近戦を挑む。
可能性の獣と革新された人類、いずれも人としての枠組みから外れつつある二人が、その力で以て魔神に挑む。その機動性と加速で魔神を翻弄しようと試みる二人、しかし魔神はその体格に似合わず俊敏な動きで二人を迎え撃つ。
『……遅いな。私の知ってる剣の使い手は君達よりも遥かに速く動いていたぞ』
『くっ』
『これでも……届かないのか』
『人類の革新者、そして可能性の獣、貴方達を生かしておいたら後に大きな禍根となる。故に、二人にはここで終わってもらいます』
二機の攻撃を軽々とはね除け、魔神は反撃の剣を腰だめに構える。高まる威圧感、体勢が崩され、迫る魔神の一撃にバナージが背筋を凍らせた時、頭上から巨大な光がグランゾンを呑み込んだ。
『目標ネオ・グランゾン、直撃を確認』
『ヒイロさん!』
光が放たれた所へ視線を向ければ翼の生えたガンダム、ウイングゼロがその大火力でネオ・グランゾンを狙い撃ちしていた。

『ぐっ、むぅ……っ!』

ここへ来て直撃するヒイロの一撃、流石に堪えているのか魔人の口からくぐもった声が漏れる。軈てグランゾンを包んでいた光がなくなり、身動きが出来るようになると、グランゾンは頭上にいるガンダムに向けて光の槍を叩き込む。

翼を射抜き銀河の地へ叩き落とす。その事に気が逸らされた彼等が次に目にしたのは……周囲を囲む無数のワームホールだった。

『本物のマルチロックというものを見せてやろう』

瞬間、魔神に肉薄していたガンダム等が光の槍によって撃ち抜かれる。しかし、シンカの戸際に立ち、その力を一時的にとはいえ得られた彼等は、攻撃こそ受けても致命傷にならないよう回避していく。

流石に通じないかと舌打ちするシュウジ、そんな時降り注がれる閃光を回避しながら近付いてくる機影があった。

真ゲッター。その手に凶悪な獲物を握り締めた進化の化身が、無数の光の槍を避けながら近付いてくる。

『おぉぉぉりゃぁぁぁっ!!』

『ッチィィッ!』

グランゾンの剣と真ゲッターの斧、ぶつかり合う剣戟が隔絶宇宙に轟く。宇宙全体を

揺さぶると錯覚する衝撃に耐えきれなくなったネオ・グランゾンが初めて後退する。
ここだ。ネオ・グランゾンが僅かに見せた隙、Ｚ―ＢＬＵＥの全員が掴み取った最初で最後の瞬間。
刹那にも満たないその一瞬、Ｚ―ＢＬＵＥは最後の力を振り絞り、総出でネオ・グランゾンに攻撃を加える。これがラストチャンス、ここを逃せばＺ―ＢＬＵＥに後はない。託された想いと願いが一心に込められたＺ―ＢＬＵＥ最後の攻撃が、蒼き魔神ネオ・グランゾンに降り注がれる。
『ぐっ、ぬぅぅぅ……』
効いている。あの絶対無敗の魔神が自分達の攻撃に怯んでいる。ここで終わらせる。今度こそ終わらせる。シュウジと戦うことになった戸惑いと疑問を横に置いてＺ―ＢＬＵＥ全員が総攻撃を加える。
これで終わりだと、彼等の一撃がネオ・グランゾンに届いた――――瞬間。
『相転移出力――――最大限』
超弩級の重力波が隔絶宇宙を埋め尽くした。

その113

『――――相転移出力、最大限』

魔神の背負う日輪が瞬いた瞬間、隔絶宇宙が悲鳴を上げる。魔神の発する重力波は周囲の星々を消し飛ばし、Ｚ―ＢＬＵＥを吹き飛ばしていく。

何が起こった。突然の出来事に混乱する彼等が次に目にしたのは……終焉の光景だった。

光がネオ・グランゾンに集まっていく。魔神が掲げた両手に集まるのは、超弩級を越えた天元突破の重力の渦、その事を本能で理解したリーロンは愕然とその事実を皆に告げる。

『嘘でしょう、何なの……この、デタラメなエネルギーは!?』

『何か分かったのかリーロン！』

『奴は一体何をしようとしている！』

『隔絶宇宙を呑み込む程の重力崩壊、崩壊と収束が繰り返される先に待つのは……天地

開闢、こんな事人の身で制御出来る代物じゃないわ！』
『もっと分かりやすく説明してくれ！』
『つまり、奴は……天を折り畳んでいるのさ』
『隼人？』
　ゲッターチームの一人、神隼人のかいつまんだ説明に竜馬は混乱する。簡単に説明したと言うがそれでも抽象過ぎる隼人の説明にどういう事だと声を上げる所だったが、大粒の汗を流して青褪める隼人に竜馬は言葉を失った。
　天を折り畳む。その事を理解した者は皆、隼人と同じ反応をしていた。戦術予報師であるスメラギもウィスパードであるテレサ＝テスタロッサも、目の前に起きつつある事象を前に顔を青褪めて絶句していた。
『アレを撃たせてはなりません！　総員グランゾンに向けて攻撃を仕掛けてください！』
　有無を言わさぬテスタロッサの指示に従い、Ｚ―ＢＬＵＥの弾幕がネオ・グランゾンに降り注がれる。頭脳派チームの様子で今のネオ・グランゾンのヤバさに何となく気付いた他の面々も、遠慮なくネオ・グランゾンに攻撃を開始するが……。
『縮退圧……増大』
　更に強まる重力崩壊の波にＺ―ＢＬＵＥの攻撃は悉く弾かれてしまう。クォーター

を始めとした火力特化戦艦の主砲も、スーパーロボット軍団の総攻撃も、ネオ・グランゾンが発する重力波に押され、跡形もなく消し飛んでいく。

膨れ上がるエネルギーは更なる重力崩壊を加速させ、グランゾンを中心にさまざな事象が集約されていく。

『重力崩壊臨界点――突破』

星、光、時間、そして宇宙、隔絶宇宙を形成する要素の全てがグランゾンの前に集約された時、それは顕現する。

『お前達の存在を……この宇宙から抹消してやろう』

魔神の手にあるのは禍々しくも美しい球体、黒く蠢く重力崩壊の結晶、そこに収められた膨大なエネルギーの奔流を前にＺ―ＢＬＵＥは言葉を失う。

アレは創世の光、天地を開闢する滅びの光だ。嘗て光あれと神が言葉にして放った宇宙創世の光が目の前で形となって形成されている光景に、Ｚ―ＢＬＵＥの心は折れ掛け――。

『まだ、だ！　まだ俺は……折れていないぞ！』

そんな自分を振り払う様にヒビキは声を張り上げて叫ぶ。本当は怖くて仕方がないのに、兄貴分と敵対するのが心の底から怖いのに、それでもヒビキは諦めないと叫ぶ。

それは強がりというにはあまりにも弱々しかった。吹けば飛んでいく落ち葉の様に

軽く、押さば倒れる細木の様に脆い、しかしそんな彼の叫びは、皆の心を奮い立たせるには充分なモノを秘めていた。

『そう、だよな』

『折角地球の皆が手を貸してくれてるんだ』

『逃げる訳には……いかないんだ！』

背負った想いに応える為に、与えられた温もりに報いる為、今一度Ｚ―ＢＬＵＥは己の心を奮い立たせる。

そうだ。自分達はこうして何度も立ち上がってきた。幾度の困難を、危機を、窮地を乗り越えてきた。だから、今回もそうだ。

『みんな、アレをやるぞ』

『『『『アレ？』』』』

『決まってるだろ。――――合体だぁっ!!!』

シモンの一言に応じたグレンラガンの全身から無数のドリルが出現する。彼の言葉の意図を理解したＺ―ＢＬＵＥは自らそのドリルへ穿たれにいく。

地球の人類の想いを受け取り、力へ換えてシンカへと至ったＺ―ＢＬＵＥ、しかし既にシンカの果てに到達しつつある魔人には未だ届かない。ならばどうするか――――答えは単純、全ての想いと力を集めて一つにするしかない。

穿たれたドリルを通して様々なエネルギーがグレンラガンに……いや、Ｚ―ＢＬＵＥ全体に流れていく。ゲッター線、光子力、ＧＮ粒子、ラムダドライバ、サイコフィールド、そして――――ヒトの願い。

集められた力はグレンラガンを超巨大な巨人へと変貌させる。それは天元突破を超えた超天元突破の完成である。

グランゾンとグレンラガン、その大きさは正に蟻と恐竜の差となり、体格では大きく有利になる。グレンラガンから溢れてくるエネルギーの奔流に、Ｚ―ＢＬＵＥは体がバラバラに引き裂かれそうになる程の激痛を覚える。

しかし、それでも目の前の魔神に勝てる保証はない。これ程の差があるというのに、未だ勝てる気がしなかった。

改めて魔神と、それを操る魔人に畏怖を抱く。しかし、もう引き返せない。自分達の全てを懸けた一撃、これを以てこの戦いに終止符を打つ。

『超、天元突破アッ！　ギガア、ドリルゥ……ブレエエエイクゥゥゥゥッ!!!』

『縮退砲――――発射』

魔神から放たれる重力の結晶、そこへグレンラガンのドリルが触れた瞬間――――再び隔絶宇宙は白に染まった。

◇

『ぐぅぅぅっ!!』

創世の光、開闢の海をグレンラガンは突き進んでいく。全身から発せられる悲鳴を無視しながら、目の前に佇む魔神に向けて前進する。

届け、届け。Ｚ―ＢＬＵＥの想いが一つになり、その願いが続く限りグレンラガンは前進する。しかし、光の奔流の勢いは未だ弱まらず、容赦なくグレンラガンを食い潰していく。

『まだだ、俺達の心はまだ折れてねぇ、そうだろグレンラガン!』

削れていく愛機にまだいけるとシモンは叫ぶ。グレンラガンもそれに応える様に目

を瞬かせるが、それを嘲笑うかの様に創世の光はグレンラガンを蝕んでいき……。
絶対に折れないと誓ったグレンラガンのドリルが……砕けてしまった。気持ちでは負けてない、耐えられなかったのは、超天元突破を果たした筈のグレンラガンそのものだった。
足りないのか、ここまでやっても、地球全ての想いを乗せた一撃で以てしても足りないのか。光の中をもがいている自分達を見下ろす様に佇むネオ・グランゾンにシモンは悔しさに歯を食い縛った時、グレンラガンから離れる一機の機体があった。
ジェニオン。ＧＡＩモードではないただのジェニオン形態である機体がネオ・グランゾンに向かって飛び出していった。シモンは何をと声を上げる。今のジェニオンではこの創世の光に耐えるのは無理だ。しかし、そんな誰もが思っている事とは裏腹に、ジェニオンは創世の光の中を突き進んでいく。
〝いがみ合う双子のスフィア〟　ガドライトから奪い取ったスフィアがジェニオンの内部で輝いていた。次元力、オリジン・ローに深く関わり合いのあるスフィアの力を使い、ジェニオンはネオ・グランゾンに向けてブースターを噴かせる。
更に……。
『うおぉぉっ!!』
ヒビキの体が蒼く光を帯び、それに合わせジェニオンも加速し、ネオ・グランゾンと

の距離を瞬く間に縮めていく。そして遂にネオ・グランゾンの間合いに詰めた瞬間、壊れてもいいという覚悟と共にヒビキはジェニオンと共に最後の一撃を繰り出す。

それはあの日、シュウジが巨大熊を倒した際に放った必殺の一撃。荒々しくも洗練されたその一撃は、当時のヒビキの脳に強く焼き付いている。自分もあんな風になりたい、そう思って脳裏に刻み込まれたその一撃を真似て、ヒビキは何度もその突きを放った。

父から学んでいたジークンドーを基に編み出された必殺の突き、その名は――――人越拳ねじり貫手。

『届けぇぇぇぇっ!!!』

自分の全てを出し切っての一撃、これが通らなければ……なんて考えず、ヒビキは己の全てを出し切る事に集中した。

（足りないのならかき集めろ、至らないなら振り絞れ！）

０と１の境い目、極限の中の極限、刹那の瞬間を駆け抜け、ジェニオンはネオ・グランゾンとの距離を更に縮め――――。

（っ!?）

思考が凍りつく。極限に集中し、全てが停止して見えるこの世界で構えを見せるネオ・グランゾンにヒビキは目を見開いた。

見れば、既にネオ・グランゾンは此方に向けて拳を振り抜いている。このままでは相討ち、若しくは返り討ちに合うかもしれない。しかし、それでもヒビキは……。

『うぉぉぉぉっ!!』

この極限の瞬間を最後まで駆け抜ける道を選んだ。集中する意識、限界を超えた一撃、故に彼は気付かなかった。――――ジェニオンに当たる直前、ネオ・グランゾンの動きが止まっていた事を。

そして……。

『ヒビキ君、それ人に向けて打っちゃダメなやつだよ』

聞き覚えのある……自分のよく知る彼の声が、聞こえた気がした。

◇

『あ、あぁ……』

黒く染まる隔絶宇宙、静まり返ったその空間でヒビキの声が虚しく響き渡る。

彼の視線の先にはジェニオンの腕で胸を穿たれた魔神、ネオ・グランゾンの姿があった。

『うっ、ぐ……み、見事です。まさか、このネオ・グランゾンを倒すとは』

『シュウジ……さん』

『これで……私も悔いはありません。戦えるだけ、戦いました』

『シュウジさん、どうしてこんな――――』

『全てのものは……いつかは滅ぶ、今度は私の番であった。……ただ、それだけの事です』

『シュウジさんっ！』

『これで私も……全ての鎖から解き放たれる事が……でき……まし……た』

涙を流しながら必死に訴えるヒビキ、どうして、なんでと訊ねる彼に魔人蒼のカリス

マ……いや、シュウジは応えなかった。
これで終わりなのか、ヒビキが悔しさと悲しさで嗚咽を漏らしたとき……ネオ・グランゾンの手がジェニオンの肩に触れた。
『!?』
『ほら……離れな……さい。爆発に……巻き込まれる……前に』
その口調を聞いてヒビキはハッと我に返り確信する。間違いない、今のシュウジは自分がよく知るシュウジだ。
助けなければ、引き剥がされ、距離が開けたグランゾンを……シュウジを助けようとヒビキがジェニオンを動かそうとした時。
『宗介!?』
『止めるんだヒビキ、奴はもう!』
『離してくれ宗介! シュウジさんが、シュウジさんが!!』
グランゾンの下へはいかせないとアーバレストがジェニオンを抑え込む。限界を超えて酷使したジェニオンではアーバレストを振り払う事も出来ず、グランゾンとの距離は更に広がっていく。
『シュウジさん脱出を!』
『……負け……るな……よ、ヒ……ビ……』

掠れていくシュウジ、それが彼の命の灯火が消える間際なのだと悟ったヒビキはがむしゃらに機体を動かしてアーバレストを力任せに振り払った……その時。

シュウジはネオ・グランゾンの発した爆発の中へと……消えていった。

『あ、あぁぁ……あぁぁぁぁ――――――』

爆発し、四散していくネオ・グランゾン。魔神が消えると同時に隔絶宇宙が崩れ、自分達の星、地球のある元の宇宙が姿を現した。

静まり返る部隊、誰もが口を開かない中、ふとヒビキの視界にあるものが映る。ジェニオンの指先に付いた赤い液体、それが誰のものなのかわかった瞬間。

〝うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!!!!〟

無限の宇宙にヒビキの慟哭が鳴り響いた。

その１１４

　Ｚ―ＢＬＵＥの艦隊の一つマクロスクォーターにある医務室、先の戦闘で負傷した各部隊の隊員達が埋め尽くしていたここも今は静かとなり、現在はベッドに横たわる一人の少女が眠っているだけだった。
「……う、うん？」
「カレン、大丈夫？」
「ヨー……コ？」
　隣から聞こえてくる聞き慣れた声により、意識を取り戻したカレンが首だけ横に向ける。声のした方へ視線を向ければ、そこには安堵した様子で笑みを浮かべるヨーコが、ベッドの横に置かれた椅子に腰掛けていた。混乱し、僅かに痛む頭を抑えながら上体を起き上がらせるカレン。
「傷自体はそんなに深くはないから痕にはならないみたいだけど、今の今まで気を失っていたのよ。もう少し安静にしなさい」

宥める様にカレンの肩に手を起き、再び寝かせようとするヨーコ、しかし自分が気を失っていた経緯を思い出したカレンは掴み掛かる様にヨーコにしがみつく。

「シュウジは、アイツは……あの後何があったの!?」

懇願するように、すがり付く様に訊ねてくるカレン、その痛々しい姿にヨーコは一瞬口を開くことを躊躇うが、いずれは彼女も事実を知ることになる。なら早い方がいいかもしれないと、ヨーコはカレンにその後に起きた出来事全てを包み隠さず語る事にした。

両手を強く握り締め、ポツリポツリと真実を語るヨーコ、全てを語り終える頃にはカレンの目には大粒の涙が溢れて……。

「……バカ野郎」

啜り泣く声が人気のない医務室に鳴り響いていた。

◇

「……ヒビキの様子はどうだ？」
「酷いものです。此方から幾ら語りかけても全くの無反応……今も部屋に篭りっきりです」
　戦いを終え、元の宇宙……自分達の住む地球へ帰ってこれたと言うのに格納庫の様子は暗かった。聞こえてくるのは先程の戦いで傷付いた機体を直す整備士達の作業音と声、その誰もが先の戦いに触れようとしなかった。
「無理もないさ、ヒビキにとってシュウジ＝シラカワという男は家族にも等しい存在だったんだ。それなのに、あんな事になって……」
「ワッ太もあの男に結構なついていましたから、立ち直るのにもう暫く掛かりそうですね」
「……そうか」
「くそ、何でだ。何であの人はあんな事を」
「……」
　自分達と敵対し、自分達を裏切ったシュウジ。その衝撃はヒビキだけに留まらず、ワッ太や赤木、そしてシモンといった彼に信頼を寄せていた者達も、その事実に打ちのめされていた。

その事に対して、シンは悔しそうに悪態を溢す。それはＺ―ＢＬＵＥの誰もが抱いている思いであり、同時に彼等の胸中で痼となっていく。

特にヒビキの様子は酷かった。状況で仕方がなかったとはいえ、自らの家族に等しい存在を手にかけてしまったのだ。彼の今の胸中は計り知れない事になっているだろう。今は彼の友人達と、担任教師でありパートナーでもあるスズネに任せるしかない。

誰もが現在の状況で燻っている中、アムロとカミーユは他の面々と心境の様子は違っていた。その内容は当然、シュウジの事である。

確かにシュウジの裏切り行為は衝撃的だったし、自分達にも少なからずショックを与えた。けれど、だからこそ疑問に思う事がある。

何故、あのタイミングで自分達と敵対したのか。結果的には流される形で彼と戦う事になって有耶無耶になってしまったが、彼の言動には些か疑問に思う点が数多く見受けられている。

シュウジという男は慎重な人間だ。グランゾンという絶対的な力を持っていながら、蒼のカリスマと名乗り正体を隠していた事からも程度の深さが伺える。

同時に博識で、知恵と知識を持っている。不十分な情報でグレイス＝オコナーの野望を看破し、そしてその事を自分達に教えてくれたりと、彼には頼りになる事が多くある。無論、それらがブラフという可能性もある。自分達の信用を得るための演技だと断じら

れればそれで終わってしまう程度の根拠、しかしアムロはあの頃のシュウジが自分達を騙す演技をしていたとは……とても思えなかった。
隣にいるカミーユを横目で見ると、彼も同じ気持ちなのか力強く頷いてくれた。ニュータイプとしての直感が強い彼がそう感じているのなら、恐らく自分の考えは間違っていないのだろう。
だが、決定的な確信がある訳じゃない。このまま自分の考えを皆に話しても部隊を困惑させるだけだ。皆を納得させるには、それに伴う確たる根拠が必要になってくる。
と、そんな時だ。アムロの視界に緑色の髪が入ってくる。その人物を目の当たりにした時、アムロの足は反射的に彼女の所へ向かわせた。
「Ｃ．Ｃ．、少しいいか」
「話がある」
「……珍しいな。お前達が私に話し掛けてくるなんて」
自分と同じＣ．Ｃ．に用件のあるルルーシュ……いや、ゼロにアムロは一瞬驚くと、向こうも自分が来ることは想像していなかったのか、少しばかり動揺していた。しかし互いに自分と同じ思いを抱いている事を察したのか、直ぐに落ち着きを取り戻してＣ．Ｃ．へ向き直る。
「まどろっこしいのは抜きにしよう。Ｃ．Ｃ．君に一つ聞きたい事がある」

「ほう、ガンダムチームの纏め役たるアムロ＝レイが私にか？」
「惚けるな。お前は知っているんだろ？　あの男に……シュウジ＝シラカワの身に何があったのかを」
　惚ける仕草をするC．C．をゼロがバッサリと切り捨てる。余裕のない男だとC．C．は笑うが、仮面越しからでも伝わるゼロの本気にC．C．も笑うのを止める。
「……何故、私が知っていると？」
「お前はある意味で一番奴を理解していた。そして私もある程度奴の事は理解している。アイツは慎重だが時には大胆で、ふざけている様で物事の裏まで考えている男だ。そこへ来てあの裏切り行為、何か訳があると考えた方が自然だろう」
「随分奴を信頼してるんだなボーヤ。伊達に再世戦争で一緒に女装した訳ではないか」
「女装？」
「茶化すな。それで……どうなんだC．C．？」
　C．C．から出てきた女装という単語にアムロは目を丸くする。一体どういう事なのだろうかと考えようとする前にゼロがC．C．に詰め寄った。
　一瞬だけ真実を話すべきか悩むC．C．、けれどこの分なら話してしまっても構わないなと思い、彼女が口を開こうとした……その時、艦内に緊急出撃命令のサイレンが鳴り響いた。

急を要するその事態に、アムロ達は後ろ髪を引かれる思いで機体に乗り込んでいく。そして、出撃した彼等が待ち構えていたモノにＺ―ＢＬＵＥは戦慄する事になる。
自分達の本当の戦いはまだ始まったばかりなのだと……。
時の牢獄を撃ち破り、彼等を待ち受けていたのは――――果てなき天の獄炎、神話の果てだった。

◇

『宜しかったのですか、隊長』
『なんの事だ。尸刻』
『シュウジ＝シラカワ、奴に我らの名を騙らせる事です』
『別に、構わん。奴の思惑はどうあれ、既に奴は滅んでいる。我等が構う道理はない』
『では、アンナロッタの件はどうするおつもりで？』
『アンナロッタ＝ストールスは既に死している。それは先にも説明した筈だが？』
『しかし』
『俺が受けた命令はアンナロッタ＝ストールスの抹殺だ。死んでいる人間のその後など、俺の知る所ではない』

『……申し訳ありませんでした』
『気にするな、俺も気にはしない』
『……はい』

◇

『やった！　やったぞ！』
『あの男が、シュウジ＝シラカワが死んだ！』
『あの男が滅んだ今、最早我々を阻むものはいない！　今度こそバジュラを支配し、全宇宙を我等の支配下に置いてやる！』
『今度こそ成し遂げてやる。この宇宙の……神話の果てで生き残るのは……僕達だ！』
『……』

◇

「……シュウジ殿」

時の牢獄が破壊された地球、そこにある小さな島国であるリモネシアで、ブロッケンは一人黄昏ていた。

エタニティ・フラットは破壊され、世界は……人は、時の針が進むことを選んだ。今後訪れるだろう根源的災厄が待っているとしても、それでも人類は未来を歩くことを選択した。

全ての戦いは終局に向かおうとしている。それなのにブロッケンは自身が置かれている状況に納得出来かねている。

自分がシュウジにここで島の住民を守るよう言い伝えられてから数日、時の牢獄が破

壊された今でも彼から連絡が来ることはなかった。
もしかしたら自分は捨てられたのだろうか。やるせない思いと切なさがブロッケンの胸中から込み上げてきた時———。
「そんなに、彼の事が気になるのかしら?」
「っ!」
背後から聞こえてきた声にブロッケンは跳び跳ねる。振り返り、何者かと訊ねた彼の視界に、血の様な紅い髪をした女性が妖艶な笑みを浮かべて、ブロッケンを見下ろしていた。
「ブロッケン伯爵、貴方に一つ選択権を与えてあげる。私と共に来るか、それともここで待っているかを……ね」
「何を……言って」
「もし私と来る気があるのなら……彼に、シュウジ=シラカワに会わせてあげる」
「っ!?」
唐突に突き付けられる選択肢、その内容に驚き、戸惑うブロッケン。どういう事なのかと混乱する彼の意識に入ってきたのは、自分でも目の前の女でもない第三の声だった。
「その話、私も混ぜてもらうわよ」

その声の主、シオの一言にブロッケンの意思も固まる。彼の与えられた命令は島の住民の全ての護衛、その彼女が関わると言った以上、自分も引き下がる訳にはいかない。

決意が固まった二人を見て女――ツィーネ＝エスピオは笑みを浮かべる。

「歓迎するわ。二人とも、さぁ、行きましょうか」

◇

翠。青空の下で波打つ翠の海は何処までも穏やかで静かなものだった。鳥が鳴き、風

が凪ぎ、空は廻る。天気も良好でこの日は正に昼寝日和とも言えた。
「ふぁーあっ、あー、眠ぃ」
「こーら、シャキッとしろよ。そんな眠そうにしていると溺れても助けてやらないぞ」
「けどよぉベローズ、こう風が気持ちいいと眠気が……せめてエイミー達みたいに空を飛べたらなぁ」
「つべこべ言わずさっさと仕事に集中する。私らの稼ぎで船団は潤うんだ。ガロードもそろそろ帰ってくる頃だし、アンタもしっかりしな」
ヘーイと返事する若い男にベローズは尻を叩いて叱咤する。思ってた以上に強烈な一打に男は悲鳴を上げてベローズを睨むが、既にベローズは次の場所へ移動していた。
船団〝ガルガンティア〟そこでサルベージを生業としているベローズ達は、今日も今日とて自分達の仕事をこなしていく。時空振動とやらで別世界に訪れた当時は慌てたものだが、今では既に慣れたもの、異なる文化の存在を認識しながらも無闇に干渉せず、彼等はこれまで通りの生活を続けていた。
今日も日課の仕事をこなしていく。若い衆の人間達を纏めあげるベローズが友人であるリジットに定期的な報告をしにいこうとした時、頭上から聞き慣れた声が聞こえてくる。
「ベローズっ！」

「エイミーか、どうした？　仕事の方はもう終わったのか？」
空から降りてくる少女、エイミーにベローズは笑みを浮かべる。しかし、少女のいつもと違う切羽詰まった様子に、ベローズはそれが尋常ではない事だと長い付き合い故の察し方で理解する。
「お、男の人が、血だらけの男の人が、ひ、漂流して……」
「何だって!?」
エイミーは人に対して嘘を吐くような人間ではない。何より顔を真っ青にしながらも必死に訴えてくるその様子が、紛れもない事実の証拠である。何処だと訊ねるベローズにエイミーは震える体でその方向を指差し、ベローズは持っていたその双眼鏡でエイミーの指差す方角に目を向け――そして、驚愕する。
ユラユラと波打つ場所、そこに浮かぶ一人の男性。木材に身を乗せて微動だにしない血塗れの男を見てベローズは即座に行動に移し、男の人命救助に尽力する。
――時獄の終わりに待つ天の獄、果たして人類はこの戦いを生き残る事が出来るのか。
そして……。

〝ドクン〟

孤高の魔人が往くこの旅路は一体どこへ続いていくのだろうか？

――――第三次スーパーロボット大戦Ｚ　〝時獄篇〟

完結。

幕章Ⅲ
特殊台詞集＋α

対アムロ＝レイ

『蒼のカリスマ……いや、シュウジ＝シラカワ、お前程の男がこんな手を使うとはな！』
『軽蔑しましたか？　怒りに打ち震えましたか？　ですが、それは貴方が抱いた願望に過ぎません。……意外ですね、貴方程の人が他者に自分の理想を押し付けるとは、人類の革新者と言っても所詮は人の子ですか』
『……それは本心か？』
『愚問、私は常に事実だけを口にしています』
（やはり、この男は何かを隠している。何だ？　この言葉の裏でこの男は何を考えている！）

『何を模索しているのかは存じませんが、私を前に考え事は無謀でしかありません。それはアムロ＝レイ、ニュータイプである貴方も例外ではありません』
『くっ、今は奴を止める事が先か！』

対カミーユ＝ビダン
『シュウジさん、何故だ。何故貴方がこんな事を！』
『君はニュータイプなのでしょう？　だったらその特異能力で私の心の内を覗き込むと良い』
『俺は貴方の口から真実を聞きたいんだ！　想いだけじゃ、言葉だけじゃ伝わらない事があるから！』
『ならば引き出して見せなさい。君の全てを以てして私の本音とやらを聞き出すが良い』
（くそ、まさかここまで意固地になるとは……何が貴方をそうさせているんだ！）

対シン＝アスカ
『シュウジさん！　どうしてだ！　どうしてアンタは！』
『裏切られたと？　そう思い込んでいるのならそれは貴方の思い込みでしかありませ

ん。自分の都合とは異なる事態にただ喚き散らすだけなど、単なる子供でしかない。シン＝アスカ、君はただ喚くだけの子供か？』
『っ、だったら俺の全てを以てしてアンタを止める！　そしてヒビキ達に頭を下げさせて謝らせてやる！』
『構いませんよ。尤も、君程度に出来るとは思えませんがね』

対キラ＝ヤマト
『シュウジさん、止めてください！　こんな事はもう！』
『無駄だと？　それを決めるのは君ではないよ。それとも、むざむざ私に殺されて戦いから逃げますか？　スーパーコーディネーター君？』
『くっ、分かりました。ならば僕は貴方を止める為に全力を尽くします！』
『足りんよ。私を力で止めたいと言うのなら……死力を尽くせ！　殺す気で来い！』
『行きます！』

対ヒイロ＝ユイ
『目標確認、ターゲット、シュウジ＝シラカワ！』
『そのゼロシステムで私の行動を予測しますか？　本当は分かっているのではないです

か？　君程度では私に勝つことは不可能だと』
『……今のお前はこれまで戦ってきた奴等と同じだ。全てが自分の手中にあると思い込み、他者を支配しようとしているエゴの塊だ』
『ほう？　ならばどうします？』
『決まっている。俺の未来は俺自身の手で切り開いて見せる。その証として――――』
『シュウジ＝シラカワ、お前を――――殺す！』

対張五飛

『シュウジ＝シラカワ、お前の正義はどこにある！』
『哀れですね。世界を善悪でしか区別出来ない人間というのは……正義？　悪？　そんなモノ、人間が己の価値観を定める為の倫理観の一つでしかありません』
『お前もトレーズと同じだ！　そうやって自分一人が何もかも分かった風に装い、他者を見下す！　お前の様な存在は最早善悪の分類にすら当てはまらん！』
『ではどうしますか？』
『決まっている。お前を倒し、正義の先にあるモノ、平和を掴んで見せる！』

対刹那＝F＝セイエイ

『分からない。シュウジ＝シラカワ、お前は一体何を考えている！』
『そんなに他者を理解出来ない事が不安ですか？　イノベイター、皮肉なモノですね。イオリア＝シュヘンベルグの思想の体現者ともあろう者が……これでは君の為に散った者達も浮かばれませんね』
『何っ!?』
『一つレクチャーしてあげましょう。人間とは元来分かり合えないもの。価値観も、思想も、思考も異なる存在が、文化の全てがいきなり分かり合う事など土台無理な話なのです。イノベイターの力はその内の一つを取り払う手段でしかない。その事を理解出来ていない君では、人類の革新者とは程遠いですよ』
『ならば示して見せる！　手探りでも、困難な道のりでも、たとえ今は届かなくても、必ず、俺は！』

対バナージ＝リンクス

『貴方は、どうしてこんな事をするんですか！　こんな事をする為に貴方は！』
『言葉だけで、思いだけで全てが解決するのなら、戦争など起きません。互いに譲れないものがあるから、感情が、人間としての起伏があるから争いは生まれ、憎しみが生まれる。バナージ＝リンクス、君はこんな世界に於いてもまだそんな事が言えるのですか

？』
『けど、それでも俺は信じたい。人は憎しみだけじゃない。哀しみを、優しさを忘れない人間だからきっと！』
『ならば、それを示してみろ。君の内に眠る可能性を以てして……』
『行くぞユニコーン、お前がただ鍵だけの存在じゃないなら、俺に力を貸してくれ！』

対竹尾ワッ太
『シュウジさん……』
『……』
『俺、楽しかったよ。勉強があんなにも楽しかったなんて……うぅん、本当は知っていたんだ。勉強は本当は楽しかったって事、ただその事を友達と遊べない言い訳にして、今まで逃げてたんだ』
『……』
『けど、それをアンタが教えてくれたんだ。逃げるだけじゃなく、向き合う事の大切さを……だから』
『……』
『俺、逃げないよ。これからの事も、そして……アンタにも！』

『……フッ』

対金田正太郎＆鉄人２８号

『シュウジさん！』

『来ましたか、太陽の使者。いえ、ＩＣＰＯの少年。私を捕まえ、真実を問い質しますか？』

『その前に、まず謝って貰います。皆を騙した事、そして、ヒビキさんや貴方を慕っていた人達を傷付けた事を、真実を問い質すのはその後です』

『成る程、君にとっては真実など大した価値は無いと、そう言うのですね』

『違う！　時には真実よりも大事なモノがあるからだ！　』

対ロジャー＝スミス

『話し合うつもりはないのだね？』

『無論、既に交渉の段階は過ぎ去りました。今の我々に必要なモノは眼前の敵を排除する為の拳銃と弾丸のみ。ロジャー＝スミス、交渉者（ネゴシエーター）である貴方なら理解している筈ですよ』

『……残念だ。君の深い蒼は知的で好ましかったのだがね』

『私も、貴方の何色にも染まらない黒は個人的に好ましかったですよ』
『ならば、最早語るまい。ビッグオー、アァァクション！』

対赤木駿介

『シュウジ！　何でだよ！　何でお前、こんな事してんだよ！』
『よせ赤木、もう今のアイツは言葉で止まる様な奴じゃない！』
『けどよ！　こんなの……あんまりじゃねぇかよ！』
『どうしたヒーロー、もう諦めたのか？　貴方の言う平和とはそんなモノで揺らいでしまう程、軽いものなのか？』
『軽いだと!?　ふざけんな！　大事な事に決まってんだろ！』
『理解出来ませんね。敵を前に躊躇するヒーローなんて聞いた事ありませんよ』
『敵を倒すのがヒーローじゃない。大事な何かを守るのがヒーローなんだ！』
『……ならば、いや。だからこそ私は立ち止まる事は許されない。貴方が望むモノがある様に私にも譲れないモノがある』
『そうかよ。だったら、まずはそんなお前をぶっ飛ばしてその後に聞いてやる！　だから……逃げるんじゃねぇぞ！』
『私を前にそんな事言えるのは貴方位のものですね』

対相良宗介

『相手は兵士として超一級、指揮官としてもトップクラスか』

『オマケに乗っている機体は超絶チートときています。軍曹、直ちに戦域から離脱する事を提案します』

『逃げますか。それも良いでしょう、今の君達では私の相手に足り得ないのは揺るぎ無い事実です。尻尾を巻いて愛しの彼女の所へ逃げるのもいいでしょう』

『よくも言えたものだ。後ろを向いた途端背中を狙い撃ちしてくる卑怯者が！』

『戦う意思もないグズを他の者の邪魔にならないよう速やかに排除してあげる。とも言えますね。で？　結局どうするのです？　戦いますか？　逃げますか？』

『いけません軍曹、口論でも勝てる気がしません』

『だったら足掻けるだけ足掻いてみせるまでだ。行くぞアル！』

『了解』

対早乙女アルト

『ほう、どうやら私に対する畏怖は払拭された様ですね。飛び方に迷いがない』

『当たり前だ！　今の俺の翼は俺一人の力で飛んでいるんじゃない。お前のちゃちな重

力で捉えられると思うなよ！』
『ならば今度は沈めましょう。二度と起き上がることのない、重力の底へ……ね』

対熱気バサラ
『何だよこのシャウトは、こんなのがお前の歌なのかよ！』
『ちょっとバサラ、いきなりなに言ってんのよ！』
『お前の魂の音はこんなものじゃなかった筈だ！　忘れたとは言わせないぜ！』
『……ならば、響かせて見せなさい。貴方の言う歌とやらで私の魂を震わせてみせるがいい！』
『オーケー、なら響かせてやる。俺のハートでお前の冷めた嘘っぱちのシャウトを消し飛ばしてやる！』
『結局、いつもと変わらないという訳か』
『っ！』
『シュウジ＝シラカワ、俺の歌を聴けぇぇぇっ!!』

対飛鷹葵
『なんだろ。こんなヤバイ奴が相手だって言うのに……私、心の底から熱くなってる』

『それは俺も同じだ』
『私も……何だろう。これ』
『恋をした時のようなトキメキと、誰かを愛した時の様な熱さ』
『これが、獣の力……』
『そう、そしてその力を自らのものにしてこそ、ヒトは生命として次の段階を往ける。おめでとう、そしてさようなら。君達のその胸の高鳴りは己の死で以て止めてあげましょう』
『やれるものならやってみなさい！　今の私達に近付いたら火傷じゃすまないわよ！』

対流竜馬
『俺は、多分心の何処かでこうなる事を望んでいたのかもしれない』
『それはゲッター線の導きによるものですか？』
『さぁな。けど、今はっきり言えるのはテメェをぶちのめしたいという衝動だけだ！』
『ふっ、相変わらずの単細胞め』
『ここまでくりゃあ理由なんざいらねぇ。ぶちかませ、竜馬！』
『おうよ！』
『……いいでしょう。貴殿方を打ち破り、進化の力を取り込むのも一興というものだ！』

対兜甲児

『無駄ですよ。如何に光の神の力を受け継いだ処で君では私には勝てません。私の重力は光すらも歪めるのだから』

『生憎、そんなモノで諦める程潔くは無いんでね！　悪いけどトコトン付き合って貰うぜ！』

『いいでしょう。ならば私も全力で君の相手をします。鉄の城の最期、見届けてあげましょう！』

対アマタ＝ソラ

『機械天使、成る程、君達も私に歯向かいますか。身の程を超えた蛮勇は自身を滅ぼすという事を教えてあげましょう』

『気をつけてアマタ君、あの人、今まで会った誰よりも……』

『けど、大丈夫！　俺やミコノさん、皆の力があればあんな奴！』

『愛……ですか。そんなモノ共依存の別称でしかないというのに――――まぁ、ここまで来れたのです。君達の言う愛の力も満更バカには出来ないのでしょうね』

『だったら見せてやる。俺とミコノさんが掴んだ俺達の愛の力を！』

『いいでしょう。ならば見せてみなさい。君達のいう愛の力とやらがどれ程のものなのか、その悉くを我が力で捩じ伏せてやろう！』

対シモン

『もう止めてくれシュウジさん！　そんなアンタを俺はこれ以上見たくない！』

『……』

『アンタは俺にとって恩人だ。アニキが死んだ時、俺に声を掛けてくれた時、俺は前に進む切欠を掴んだ気がした。アンタのお陰で俺はアニキとの思い出を忘れずに済んだんだ。だから！』

『……ならばその恩、貴方の命で支払って貰いましょう』

『本気……なのか？』

『勘違いしないで戴きたい。アレは螺旋力が最も強い貴方をあのまま腐らせるのは忍びないと思い気紛れで起こしたモノ、アンチスパイラルが倒れた今、最早君に価値は無い。そんなに私に恩を返したいというのなら、その命――――私に還しなさい』

『……なら、ぶん殴ってでもアンタを止めてやる！　それがあの日俺を救ってくれた恩の俺なりの返し方だから！』

対ヨーコ＝リットナー

『……シュウジ』

『……』

『私、ずっと言いたかった。アナタと出逢って、アナタに助けられて、嬉しくて、けど悲しくて……ねぇ、どうしてアナタはいつも自分で勝手に決めるの？　どうして、私に……私達に相談してくれなかったの？　そんなに私達って……頼りないの？』

『何を言ってるのか良く分かりませんね』

『……そう、ならここまでね。さようなら、アナタと過ごした思い出は忘れないわ』

『そうですか。自己完結出来た様で何よりです。……なら、消えなさい！』

対タカヤノリコ

『シュウジさん。私は他の人達と違って貴方の事は良く分からない。けど、これだけは言わせて、ガンバスターを直してくれてありがとう！』

『礼は不要ですよ。その機体は火の文明の生き残り、ほんの興味として手を出したに過ぎませんから。ですが、もうその機体を残している理由はない。手を出したケジメとして、貴方には完全に消滅して貰います』

『舐めないで！　炎じゃなくてもガンバスターは、私達は負けないんだから！』

『炎に至れていないその機体で私に勝つと？　思い上がりも甚だしいですね。いいでしょう。その出来損ないがどこまでこのグランゾンに通用するのか、試してみるがいい！』

対キリコ＝キュービィー

『流石、異能生存体。私の攻撃をここまでかわしますか』

『……』

『ですが、幾ら異能の力であっても重力崩壊から逃れる事は叶いません。その時こそキリコ＝キュービィー、貴方の最期です』

『……変わったな』

『？』

『昔のお前……少なくとも初めて会った時のお前の方が今のお前より強く見えた』

『……なに？』

『あの頃のお前ならまだしも、今のお前にやられる訳にはいかない』

対碇シンジ

『騙していたんですか？』

『それは味方であった人間に対して言うべき台詞です。私と君達の道は最初から交わっていなかった。ただそちらが勝手に信じて勝手に裏切られた気になっているだけ、言った筈ですよ。そういう押し付けは非常に不愉快だと』

『……』

『逃げますか？　それもいいでしょう。逃避行動は自己を守る為の大切な要素だ。加えて君は碇ゲンドウの計画の重要なファクターだ。ここで逃げた所で誰も責めはしませんよ』

『……逃げない』

『？』

『逃げちゃ駄目なんだ。どんなに辛くても、苦しくても、逃げた所で何も変わらない。だったら……立ち向かうしかないじゃないか！』

『ならどうします？　その人造兵器で私と戦いますか？　勝ち目がないと分かっていながら』

『そんな事、やってみなきゃ分からないよ！』

『……良く吼えた。ならば来るがいい、君の全力（最強）を私の最強（全力）で捩じ伏せてあげよう』

対ヒビキ＝カミシロ

『シュウジ……さん』
『気を付けてヒビキ君、敵はもう目の前まで来てるのよ！』
『敵？　シュウジさんが……敵？』
『ほう？　この期に及んでまだ現実を直視出来ていませんか。ならば目を背けたまま果てなさい。そうすれば楽にご家族の元まで逝けますよ』
『しっかりしてヒビキ君！　アナタにはまだやるべき事があるんでしょ、だったら、ここで諦めては駄目よ！』
『スズネ先生……』
『残念ですが、君の旅路はここで終わりです。さぁ、君の持つスフィアを私に献上しなさい』
『シュウジさん。俺は……俺はっ！』

対枢木スザク

『シュウジさん、あなた程の人がどうしてこんな事を！』
『何故、どうして、君はいつもそうですね。分からないことに対して大した思考も巡らせず、ただ納得出来ないと喚くだけ。正直言って……君には不快感しか抱けませんでしたよ』

『シュウジさん……っ！』
『消えなさい。今ならば君に掛けられたその呪いごと消滅して差し上げましょう』
『くそっ、どうしようもないのか!?』

対ゼロ

『分かっているのかシュウジ＝シラカワ！　お前のやっている事は！』
『裏切り行為だと？　言った筈ですよ。裏切りというのは同じ道を歩いていながら背後から背中を刺す事だと。私は初めから貴方達の道とは交わっていなかった。ただそれだけの話、裏切り者呼ばわりされる筋合いも道理もありませんよ』
『あぁ、そうだろうな。お前ならそう応えるだろう。だが、それだけで済まないというのが人間だ。その事を骨身に分からせてやる！』
『討っていいのは討たれる覚悟のある奴だけだと、そう言いたいのですか？　残念ですが、貴方程度の実力ではそれは叶いません』
『違うな。間違っているぞシュウジ＝シラカワ、俺はお前を討つつもりはない。俺が抱く思いはその機体からお前を引きずり下ろし、皆の前で土の味を味合わせてやるという事だけだ！』
『それこそ無駄というモノですが……まぁいいでしょう。精々策謀を巡らせなさい。そ

の全てを捩じ伏せてあげましょう』

対Ｃ．Ｃ．

『……やはり、こうなってしまったか』

『来ましたか、呪われた魔女よ。今の私なら貴方の願いを叶える位造作もありません。如何です？　このまま何もかも捨て去って虚無に還ってみては？』

『そうだな。確かにその方が楽なのかもしれん』

『なら……』

『だが、今はまだその時ではない。私にはまだ見届ける義務がある。それに何より……果たすべき約束があるのでな』

『……そっか』

『待っているぞシュウジ＝シラカワ、契約破棄なんぞ許さないからな！』

――――次章予告。

時の牢獄を破り、最後の戦いを制したＺ―ＢＬＵＥを待ち受けていたのは紡がれた世界――――ではなく。

『もう一つの地球……だと？』

翠の星、自分達と同じ太陽系第三惑星……地球だった。

そこから訪れる新たな脅威。星間連合〝サイデリアル〟その圧倒的な力で以て地球は瞬く間に侵攻されてしまい、その七割以上を彼等に支配されてしまった。

これは地球が支配されるまでの数ヶ月間、裏側で語られる天の獄炎に挑む迄の――――連獄の物語である。

『止まれ！　そこの輸送船！　貴様らの行動は新地球皇国の規約に反するモノ、止まらなければ射つぞ！』

「き、来てるわよ！」

「任せるでアール！　逃げ足としぶとさなら我輩の独壇場でアール！」

「流石かのＤｒ．ヘルの側近、色んな意味で頼もしいわね」

『感心してないで何とかしなさいよー!?』

張り巡らされる包囲網、地球圏のどこにも逃げ場所などないこの状況で、一隻の船が

飛び立った。幾度となく窮地に追いやられながら、それでも止まらない彼等の目的の場所は……もう一つの地球、翠の星。
翠の星に訪れた後も際限なく現れるサイデリアル、追い詰められながらも意外な人物達のお陰で何とか生き抜いて見せた一行、その果てに遂に彼等は目的の人物と再会する事になる。
――――しかし。
「嘘よ……そんな、そんなの嘘よ！」
「……申し訳ない。我々も手を尽くしたのだが」
告げられる残酷な宣告、非情な現実を前にしても、それでも敵は彼等を逃そうとはしなかった。
『このギルター＝ベローネが直々に処刑してやる。さぁ罪人どもよ、大人しく頭を垂れるがいい！』
「――――私、待ってるから。貴方が私達を助けてくれる事、信じてるから」
襲い掛かる軍勢、絶望の中で彼女が選択したものは……。
紡がれる願い、絶望の中で残された僅かな希望。果てしない戦いを前に――――。
「やぁ、寝坊助君。気分はどうだい？」
「絶・好・調・である！」

かの魔人(ボッチ)が遂に目を覚ます。

『お前はここで殺す。ボクの憎しみに喰い殺されろ!』

『見せて貰おうか。蒼のカリスマの実力とやらを』

時獄から続く連獄の只中、駆け抜けるのは蒼い閃光。

無間の闇に勝利の光を刻み込め。

次章、第三次スーパーロボット大戦Z～連獄篇～

開幕。

オマケ

対ボン太君

『ふも、ふもるる、ふも!』

『……』

『ふもももも、ふもっふる！　ふもも！』
『……』
『ふも、ふもる、ふもっふー！』
『……フッ』
『っ！』
『ふも、ふももふも、ふもっふる、ふも』
『っ!?』
『ふもももるる、ふもっふる。ふもふ』
『っ!??』
『ふもっふも？』（理解出来ましたか？）

なんだこれ

閑話

「我輩の……新しい身体、でありますか」

地球上にある無人諸島、その中でも人の手が加わっていない人気の無い島で、現在自分はむさ苦しい生首と森の中で相対する様に座っていた。

目の前にいる生首、コイツは嘗て世界征服を目論んだＤｒ．ヘルの側近の一人であるブロッケン伯爵。とある理由でコイツの身……いや、首を預かる事になっている。

「あぁ、アンタもいつまでも生首状態のままでいるのは色々不憫だろ。以前シュナイゼルの奴にトールギスⅡの返却の際に一緒に幾つかパーツを譲って貰ったんだが、生憎グランゾンには不要な代物でな。このまま腐らせるのも勿体無いし、かといって返すのも気が引ける。そこで選ばれたのが――――」

「我輩、でありますか？」

何やら呆然としているブロッケンだが、自分は構う事なく頷いて見せる。さて、先程口にしたパーツ云々の話だが……勿論嘘である。

そもそも、グランゾンに合う予備パーツなどこの世界には存在しない。仮に用意出来たとしても、それを扱えるのはグランゾンの生みの親であるシュウ博士位だ。受け取ったとしても邪魔になるだけだし、精々資金源の足しになる程度だ。

本来なら自分はブロッケンに対して其処までしてやる義理は無いのだが、拾った時の経緯がアレだった訳だし、何より……キモいのだ。

むさ苦しい顔をした生首がピョンピョン跳び跳ねる様は割と本気でホラーだと思う。グランゾンのコックピットに乗っている際も、このむさ苦しい顔が近くにあるのだから堪ったものではない。そのせいかここ最近グランゾンの調子が心なしか悪い気がするし、この問題に対し自分は結構本気で頭を悩ませている。

そんな訳で思い付いたブロッケンの新しい身体製作、シュナイゼルに事細かく事情を説明し、頭を下げながら懇願した自分は、シュナイゼルに呆れられながらも機動兵器のパーツを幾つか分けてもらう事に成功した。軍事パーツの横流しとか普通にヤバい話だというのに快く引き受けたシュナイゼルに、暫く自分は頭が上がらない気がする。

シュナイゼルにだけ任せるのもアレだし、引け目を感じた自分は空いた時間を狙ってテロリストの拠点を襲撃、ＡＳやらスコープドックの残骸を回収したりとパーツ集めに勤しんでいた。

そうして一通り集まったパーツはＭＳ一機分程で、現在この無人島に置かれている。

準備は万端、後はブロッケンの気持ち次第だが……ぶっちゃけそこは無視してもいいと思っている。

つーか断らせねぇ。散々苦労して集めたパーツを無下にさせてたまるものか。ていうか、仮に断ったとしても無理矢理にでも作った身体に縫い合わせてやる。何故にタダでさえ広くないコックピットにむさ苦しいオッサンの生首を置いとかなきゃならんのか。喩え自業自得であってもいい加減ブチギレそうである。

「で、どうする？」

「も、勿論お願いするであります　うぅ、遂にこの肩身の狭い境地から脱出できるのであるな。……ありがとうシュウジ殿！　この大恩、いつか必ずやお返しさせていただきますのである！」

「あぁ、期待しないで待ってるよ」

涙と鼻水を垂れ流しながら礼を言ってくるブロッケンに気付かれないよう隠れて小さくガッツポーズを取る。ともあれ、これでお膳立ては完了した。後はブロッケンの身体をどう作るかだけだ。

シュナイゼルに無理言って手に入れた貴重な機動兵器のパーツ、これらを無駄にしない様、しっかりと計画を立てながら作っていこうと思う。

こら、ブロッケン。うれしいのは分かったから泣きながら跳び跳ねるの止めろ。なん

かネバネバした液体が飛んでくるんだけど!?

そんなこんなでブロッケン魔改造計画が開始され、あっという間に数日が経過した。

「こ、これが我輩の新しい身体」

無人島の波打ち際に立つブロッケン、今の彼はただの生首ではなく、自分ことシュウジ＝シラカワが造り上げたニューボデー（誤字に非ず）を装着している。

赤い軍服を主体に製作したスタイリッシュ且つガッシリとした体格、腰には一振りのサーベルを差しており、切れ味も並の機動兵器ならバターの様に切断出来る鋭さを誇っている。

他にも左腕には小型のガトリングガンを、右腕には男の夢であるロケットパンチと付け替え用のドリルアームが備わっている。

両足にも跳躍力を何倍にも引き上げるギミックを施しているし、おまけに防弾や耐水といった、環境に合わせての防護作用も備えてある。ありとあらゆる状況、環境に対応出来るよう、今の自分が持てる限りの力を使って造り上げた傑作である。

新しい身体を手に入れて舞い上がるブロッケン、外見に似合わず子供の様にはしゃぐ彼を見て、俺は笑みを浮かべて思った。

（ヤベェ、やり過ぎた）

どうやら自分は物造りに嵌まるタイプの様で、気が付いたらあんな代物を造り上げて

しまっていた。何だよ小型のガトリングガンって、何だよドリルって、何だよロケットパンチって！

本来なら胴体手足のある普通の身体にするつもりだったのに、造る事に夢中になりすぎてしまった。ちょっとした機動兵器と化してしまったブロッケンの身体、唯一救いがあるとすれば機動性能がサイズダウンしたＡＳ位な所と、装甲がやや薄い所だろうか。

それでも其処らのスコープドックより耐久力があるのがアレなのだが……我ながらなんちゅうものを造ってしまったのだろうか。

（……けど、まぁいっか。本人は喜んでいるみたいだし、これはこれで悪くない。同じ側近だったあしゅら男爵もマジンガー相手に殴りかかったって聞くし、これくらい許容範囲だろ）

一体何に対しての許容範囲なのだろうか。自身のやっちまった事に対して現実逃避しながら自分は休みに入るのだった。

――――後に、新しい身体を手に入れたブロッケンがとある船団にて大立ち回りをし、大活躍をするらしいのだが、この時の俺は知る由もなかった。

連獄篇
その１１５

自由であるとは自由であるように呪われている事である。

――Ｊ・Ｐ・サルトル。

新世時空振動。数ある世界が一つになった過去類を見ない時空振動、これによりＵＣＷとＡＤＷの二つの地球は統合され、世界は新たな形へと変化する事となった。

新たな出会いと別れ、そして襲い来る脅威。押し寄せてくる侵略者達を撃退し、時の牢獄を破った地球は遂に平穏を取り戻した――かに見えた。

アンチスパイラル、そしてその裏で行われた知られざる決戦。後に時獄戦役と呼ばれるこの戦いを乗り越えたＺ―ＢＬＵＥが目の当たりにしたのは……もう一つの地球だった。

そこから現れる無数のアンノウン、警告も宣告も無しに襲い掛かる彼等は時獄戦役で疲弊していたＺ―ＢＬＵＥ、並びに当時の地球政府を容赦なく蹂躙していき、地球圏の大半を制圧してしまう。

〝星間軍事連合サイデリアル〟そう名乗るアンノウンは地球圏の大半を支配すると同時に、自らを新地球皇国（ガイアエンパイア）を名乗り、早くも地球の支配者である事を告げた。

中央シベリア高原東部に建造された帝都を中心に日々支配圏を広げていくサイデリアル。当然これに地球政府やＺ―ＢＬＵＥは対抗するが、その圧倒的な戦力差を前に彼等は幾度となく撤退を余儀なくされてきた。

既に地球圏の六割が支配されていた。そんな中、一台の輸送機が地球圏から離れていった。

◇

ж月#日

時の牢獄、エタニティ・フラットの破壊から数日、現在私はブロッケンとツィーネ・エスピオの三人でもう一つの地球に向かうために輸送機の中にいる。

時の牢獄を破った事により現れたもう一つの地球、それに照らし合わせたかのように現れる侵略者達、圧倒的な武力で次々に地球圏を支配しているそいつらを、ツィーネはサイデリアルと呼んだ。

明らかに連中について何か知っている風な女、此方の質問を悉く避けて妖艶な笑みで誤魔化すその様は、スパイ映画に出てくる女スパイを思わせる。

この手の女は自分から話さない限り決して情報を吐いたりしない。ツィーネから情報を聞き出すには今の私では難しいだろう。そんな暇があるのならこうして日記を書いてその日に起きた出来事を客観的に見て、現状を冷静に見直していた方がまだ有意義な時間の使い方だと言える。ツィーネの事はまだ理解出来ていないし、納得出来ない点は多いけど、彼に会うためにはこの女に従うしかない。だったら少し位の我慢はするべ

きだ。

――彼、シュウジ＝シラカワは現在もう一つの地球にいる。彼に会って何をするべきなのか、色々分からない部分はあるけれどその時が来るまで日記を書きながら考えを纏めておこうと思う。

ж月♪日

地球圏から一時脱出して早半日、現在私達はサイデリアルのしつこい追撃を何とか巻きながら現在ツィーネの残した座標に向け、なるべく連中に見つからない様慎重に迂回ルートを移動している最中だ。

本来なら彼に会うまで案内をして欲しかった所だけど、いきなり襲い掛かってきたサイデリアルにより事態は急変してしまった。

しつこいサイデリアルの追撃、このままでは落とされる危険性まで出てきた時、彼女は自ら囮役を買って出てくれたのだ。彼に渡すべきだとされるあの機体の他に輸送機に載せていた、色物の機動兵器で。

ツィーネは己の愛機と共にその場を離脱、追撃してくるサイデリアル等の相手をしながら、私達を連中から引き剥がす時間を稼いでくれた。

……正直、あの女は立ち振舞いからして苦手な部類だったが、この時ばかりは彼

女に感謝したいと思う。彼女が戦う意思を見せてくれなかったら、今頃私達は宇宙の藻屑と消えていたのだから。

だから感謝しよう。それが喩え彼女自身の目的を果たす序でなのだとしても、自分達は彼女が作ってくれた時間を有効に活用しなければならない。

ブロッケンが操縦する輸送機のコンソールには、既に彼の居場所を指し示す座標が記されてある。後はあの翠の地球に降りて彼の所まで進むのみ。

そして聞くんだ。彼が……シュウジが一体これまで何をしてきたのかを、そして言うんだ。私の胸中に燻る思いの丈を。

だから、私は諦めない。彼に再び出会えるその日まで私は絶対にこの状況の中でも諦めたりは……しない。

だからシュウジ……待っててね。

◇

――ラース・バビロン。新地球皇国の帝都であり皇国軍の心臓部、その最奥にある玉座にて、サイデリアルの首領にして新地球皇国の皇帝が座していた。
「陛下、ご報告がございます」
「……話せ」
「ハッ、本日未明に件の女が翠の星へ降下したという報せが先程届きました」
「そうか」
臣下からの報告に皇帝は目を伏したまま端的に応える。その事に戸惑う臣下だが、黙したままでも伝わってくる皇帝の覇気により押し黙り、彼の者の次なる言葉を待つ様にその場で膝をつく。その様は皇帝に忠誠を誓う臣下というより、執行者に命乞いをする罪人の様に見えた。
「よい。下がれ」
「は、……ハッ！」
皇帝の言葉に異議を唱える事なく、臣下はそそくさと玉座の間を後にする。命からが

らと言った様子で去っていく臣下を一瞥した皇帝は、己の側に控える彼の存在に向けて声を発した。
「ストラウス」
「――――」
　皇帝の呼び声に答えたのは機械的な声だった。巨大な甲冑をその身に纏い、フルフェイスの仮面を被ったその者は、甲冑の重厚な音を玉座に響かせながら皇帝に向き直る。
「お前に一つ、頼みたい事がある。翠の星に降りたとされるシオニー＝レジスを捕らえよ」
「――――」
「そうだ。決して殺さず、可能な限り傷を付けるな」
「――――」
　皇帝の指示に理解し、了承したストラウスと呼ばれた者は再び重厚な音を立てて玉座から去っていく。鎧の者が玉座から完全に姿を消すと同時に別の声が玉座に響いた。
「なら、僕はサイデリアルの名を騙る罪人の処刑に向かうとしよう」
「……戻ったのか。バルビエル」
　バルビエルと呼ばれた男、化粧を施し、他者を嘲笑うその姿は道化を模した死神を思わせる。

「彼の者は既に滅んだと聞き及んでいる。今更お前が出向く必要があるのか？」
「そうなのかい？　……まぁ、いいや。何度も往復するのも面倒だし、今回僕は関与しない事にするよ。あくまで僕はだけどね」
　思わせ振りな台詞を残しながらバルビエルは去っていく。再び玉座に一人となった皇帝は再び目を瞑りその時を待つ。
「抗ってみせろ地球人。お前達の本当の戦いは……これからだ」

その１１６

火星。再世戦争の頃に当時地球に侵略してきたインサラウムが設けた決戦の地、当時のインサラウムの王であるユーサー＝インサラウムや彼に従ってきた多くの臣下を犠牲にした事により、彼等は漸く安寧を手に入れた。

そんな彼等は現在、唯一のアークセイバーであり火星の入植団団長であるマルグリット＝ピステールと共に、テラフォーミングに尽力していた。

大変ではあった。破界の王のガイオウと蒼き魔神グランゾンとの決戦において火星の一部分は荒廃し、人の住める環境では無くなっていたのだから。テラフォーミングを開始したばかりの彼等の苦労は、計り知れないものがあった。

しかし、それでも戦って大切な人を失うよりはましだと思い、インサラウムの国民は自分達の境遇を受け入れた。時折訪れる地球政府の大使から送られる支援物資によってテラフォーミングも順調に進み、人が住める居住区も日々広がっていった。

この分ならば近い将来、インサラウムの国民全てがこの火星の大地を踏みしめる事も

夢ではないのかもしれない。これまで激動の時代を生き抜いてきた彼等も漸く安心して過ごせる世界が手に入る。これで亡きユーサーと嘗ての同僚達に報いる事ができるとマルグリットが安堵していた時……奴等が現れた。

〝サイデリアル〟時の牢獄を破った直後に現れたもう一つの地球と共に姿を現した謎の侵略者、地球圏の支配を目論む連中が遂に自分達の所にまで攻めいってきたのだ。

何を目的としてこの火星に攻めいるのか、不確かではあるがマルグリットには心当たりがあった。

(恐らく、奴等の目的は殿下の持つスフィアの力。次元力を任意に引き出せるあの力を奪取する為なのだろう)

己の愛機に乗りながらマルグリットは確信し、背後にある霊廟へ視線を向ける。再世戦争の後、亡くなったユーサーを埋葬し、彼の愛機である機体を崖を削って造り上げて祀った簡易な霊廟。そこへ雪崩れ込むようにサイデリアルの戦力が集中してきているのだから其処に気付くのは当然と言えた。

戦力差は歴然、部下達の士気は高くても、圧倒的な物量の前に戦線が覆るのは時間の問題だった。

(だが、奪わせはしない。これ以上我々の大切な者を奪わせてたまるものか!)

ガイオウ、アイム=ライアード、二人の悪鬼によって滅んだ嘗ての故郷、二度とあの

時の様な事は繰り返さない。そう誓いマルグリットが愛機と共に敵陣に突貫を仕掛けた時――――

『悪いが、それはさせないよ』

一陣の黒い風が戦場に吹き荒れた。黒き烈風に巻き込まれたサイデリアルの機動兵器は瞬く間に切り刻まれ、破壊されていく。

やがて全ての敵戦力が破壊された後、黒き烈風は形となってマルグリットの前に姿を現し、その風貌に彼女は驚愕に目を見開いた。

忘れもしない。アレは嘗てアイム＝ライアードとは別に、ユーサーの持つスフィアを狙った狩人の一人。

『何故貴様がここにいる。アサキム＝ドーウィン！』

死神を思わせるその者の名を、マルグリットは戸惑いを隠すように叫ぶ。

マルグリットが戸惑うのも当然だった。何せ目の前にいる男は再世戦争で魔神との戦いに敗れ、当時ユーサーを含めたその場にいるスフィアリアクター達の手によってＺＯＮＥに封印された筈なのだから。

しかし、幾ら頭で否定しても目の前の現実が変わるわけではない。眼前に佇む黒い鴉の動きを一挙一動見逃さないよう警戒を強めた時……奴は動いた。

『さて、それじゃあ狩らせて貰おうか』

『させん！』
　同時に飛び出す両機、速さで圧倒的に遅れを取る筈のパールネイル、性能で負ける部分をパイロットの腕でカバー出来るマルグリットの技術は流石と言えた。――――しかし。
『見事だよ。マルグリット＝ピステール、今の君の動きは僕が知る中でも最高だった。だけど……』
　一瞬だけ交差する白と黒、互いに最大限の一撃だった。マルグリットの放ったその一撃は、最後のアークセイバーとして相応しい威力の乗った一撃だった。
　しかし。
『それでも、今の僕には届かない』
　その一撃で以てしても、黒い鴉に届くことはなかった。己の武器であるランドスピナーごと切断された左腕、以前よりも速さも力も桁違いに上がっているアサキムと彼の操るシュロウガの前に、パールネイルは成す術なく地に膝を付ける。
『本来ならここで君には退場して貰い、愛しの皇子の下へ送ってやるつもりだったが……僕を封印から解き放った者との約束でね。君達を殺さない事にしているんだ』
　そう言いながらアサキムはシュロウガと共にマルグリットの横を通り過ぎ、霊廟の下へ歩み寄る。残された他のインサラウムの兵士達も先程の彼女同様、アサキムを行かせ

はしないと果敢に挑む。
その悉くがシュロウガの振るう刃に切り刻まれ、地に伏していく。しかし驚くべき事に、アサキムに挑んだ者達は負傷こそ負っても命に別状はなかった。その事実に、マルグリットは更なる混乱に叩き込まれる事になる。
混乱するマルグリットを放ってアサキムはシュロウガと共に霊廟の奥へと踏み込む。崖を削っただけの簡単な墓地、その奥底でインサラウムに代々伝わる機動兵器が鎮座していた。
乗り込む主がいなくなり、自身の役割を終えた事に満足したように眠る王の機体、長い間インサラウムの象徴として君臨してきたその存在に向けて……シュロウガは容赦なくその鋭い腕部で王の胸元を貫いた。
『申し訳ないけど、このスフィアは狩らせて貰うよ。役目を終えた者にこんな力なんて無用だろう？』
そう言いながら引き抜いたシュロウガの手には二つのスフィアが淡く輝きを放ち、それをシュロウガはまるで呑み込む様に吸収していった。
『これで僕が持つスフィアは四つ、……漸く見えてきた。天の獄へ至る為の道程が』
己と一体になっていくスフィアを感じながらアサキムは感慨深く呟く。あと少し、あと少しで自分の目的が完遂する。――――だが、そんな時アサキムの脳裏にある懸念が

生まれる。それは嘗てこの地で起きた戦いの記憶、かの蒼き魔神に敗北した鮮烈な記憶だった。

アサキムはこれまで何度も敗北し、消滅し、幾度となく死んできた。そしてその度に蘇り今日まで無様に生き抜いてきた。

それ故に彼にとって勝敗などなんの意味もなかった。……いや、全ての物事に対しアサキムは常に冷めていた。

なのに、あの時戦った彼との一時はアサキムにとってとても――――。

『フッ、らしくないな』

自嘲の笑みを浮かべるアサキム、その笑みの裏に隠された真意に誰も気付く事はなく、黒い鴉はその翼を羽ばたかせて火星の空へと舞い上がった。

◇

ж月π日

サイデリアルの追撃を振りきり、無事に翠の地球に降りて早数日、現在私達はツィーネに渡された座標を頼りに荒野の大地を進んでいる。

この星に降りた当初は目的地から離れた所に不時着した為に結構焦ったが、この輸送機が航空機能を備えていた事とブロッケンが修理作業を素早く終わらせた事で、時間のロスは最低限に抑えられているから、割と落ち着く事が出来ている。

サイデリアルも今の所は出くわしていないし、道中お世話になった喫茶店に物資を分けて貰った為、目的地に辿り着くまでの燃料も心配いらない。

この分だとあと三日程で目的地に辿り着けるだろうとブロッケンは言う。しかしどこにサイデリアルの目があるか分からないので最大限注意しながら進んでいこうと思う。急がば回れ、昔の偉人は上手いこと言ったものである。

……それよりもあの喫茶店にいたアンドロイド、ノノと言ったか、あの子アンドロイドと言う割には何だか人間味に溢れていたな。

別にその事は悪いことじゃない。ただ、此方が物資不足で困っているからと言っていきなり店の物を勝手に渡そうとするお人好し過ぎるところが少し不安になった。

……しかも、雇い主である店長に断りも無しに。

幸い私のポケットマネーで買わせて貰った事で事なきを得たが……あの店、大丈夫だろうか？　まぁ、見ている分には面白いから別にいいのだけれど。

それに何より、困っていた私達を真剣に考えてくれたあの子の姿が何だか彼と被ってしまい、なんだか可笑しくなった。人を笑わせるだけでなく元気をくれるなんて、良く出来たアンドロイドだとつくづく思う。

さぁ、明日も頑張ろう。そう自分にエールを送りつつ今日はこれで終了しようと思う。

その１１７

翠の海。通常の蒼く眩しい海とは異なり、翡翠色に輝く海。その翠の大海原を往くのは、幾つもの船団が固まって出来た巨大船団〝ガルガンティア〟。

その規模は小さな孤島に迫り、そこでは多くの人々が互いに協力し、助け合いながら生活をしている。稀に喧嘩をしたり騒ぎがあったりトラブルに見舞われる事もあるけれど、総じてこのガルガンティアでは平和な一時を過ごしていた。

『どうだガロード、そっちに怪しい奴は見かけなかったか』

「いんや、今の所それらしい奴は見掛けてないぜ。もう一回りしたらそっちに戻らせて貰うよ」

そんな平和で且つ穏やかな海の上を一機の機動兵器が飛んでいく。ガンダムＤＸ、嘗てＺＥＸＩＳのメンバーの一人でもあったガロードは己の愛機と共にガルガンティアを守るため、定期的に行われている哨戒行動の最中にいた。

「ティファ、そっちは何か感じたりしたか？」
「うぅん。今は特に……穏やかで静かで――――とても気持ちのいい日よ」
後ろに座らせているティファにガロードは訊ねた。彼女は通常の人間より悪意や敵意やらに敏感で、ガロードが哨戒に出る度に共に行動している。
「ゴメンなティファ、こんな事に付き合わせて」
「気にしないで、元々私が言い出した事だし……それに、ガロードと一緒にいたかったから」
頬を朱に染め、照れた様子でそう口にするティファにガロードはティファ以上に顔を赤くする。好きな女性の稀に見せる生の感情に当てられた少年は耳まで赤くさせ、しどろもどろになりながら話題を探す。
「そ、それにしても、最近サイデリアルの連中仕掛けて来ないな。いつもだったらそろそろちょっかい出してきてもいい頃なのに……何か企んだりしてるのか？」
必死になって見付けた話題、女性から振られた話を逸らすなんて我ながら情けないと思いつつも、実際重要な話である為、ガロードは真剣な表情で続けた。
「……分からない。けど、あの人が来てから少し変な感じがする」
「あの人って、シュウジさんの事か？　だってあの人は……それに変な感じって？」
「分からない。けど、何か感じるの。怖いようで、でも暖かくて……ごめんなさい。やっ

ぱり上手く言えないわ」
「そっか、でも気にするなよ。ティファがそう言うなら間違いないんだし、別に俺達に危害があるわけじゃないんだろ？　俺はティファの言うこと信じるよ」
「……ガロード」
「それに、もしなにかあってもその時は全力で俺がティファを守るよ。だ、だからティファも俺の事を――――」
会話の流れを切っておいて再び良い雰囲気に持っていこうとするガロード、未成年者でありながら必死にティファにアピールする彼の姿勢は、いっそ清々しく見えた。
あと少しで台詞が決められる、外すことは許せないこの場面で……しかし現実は厳しく、ガロードの決め台詞はコックピットから鳴り響くアラーム音によって掻き消されていく。
一体なんだよ。と、ややブーたれながらモニターに視線を戻すと、すぐ近くにまで熱源反応がある事に気付き、ガロードの思考は一気に戦士のものへ変わっていく。
座席越しからでも伝わってくるガロードの気迫に自然とティファも表情を引き締める。年齢は若くも数々の死線を潜り抜けてきた二人の気迫は歴戦の戦士のソレだった。
ドンドン近付いてくる熱源反応、いつでも先制攻撃が出来る様、身構えている彼等の前に現れたのは一台の輸送船だった。モビルスーツが二機分程乗せられる様なソレな

りに大きな輸送機、最低限の自衛装備以外搭載されていない輸送機を脅威ではないと判断したガロードは、事情を詳しく聞くために武装をしまいながら輸送機の前に躍り出た。
「あー、悪いけどちょっと止まってくれそこの輸送機。あんたらに幾つか聞きたい事がある」
『な、何であるか、この忙しい時に！　用があるなら後にしてほしいである！』
「だから悪いって、ほんの二つ三つ訊ねたい事があるだけだからさ、時間もそんなに掛けないし、協力してくれよ」
酷く慌てている様子の相手に、なるたけ刺激を与えないように話すガロード。その慌てぶりと何処かで聞いた事のある声に一瞬疑問に思うが、気にせず話を続ける。
「ちょっとその荷物を改めさせて欲しいんだ。いや、別にその輸送船の中身が何だろうと取り上げるつもりはないから安心してくれ。ただここから先にある船団は物騒な話題に慣れてなくてな。あまり刺激させたくないんだよ。行き先を教えてくれ。もしあんた達の行く先に心当たりがあったら適当な迂回ルートを用意させてもらう。勿論最短距離な奴を――――」
『いいえ、その必要はないわ』
突然割って入ってきた映像通信にガロードの目は見開いて言葉を失った。それもそ

の筈、何故なら目の前のモニターに映し出されている女性は嘗て自身がＺＥＸＩＳに所属していた頃、陰月で倒した筈の人だったから。
「アンタ、シオニー＝レジスか!?　なんでアンタがここに!?」
『それをここで論じるつもりはないわ。ガンダムのパイロット、今は一刻でも時間が惜しいの。此方の要件を手短に話すからアンタは協力するかしないかだけ答えて頂戴』
「な、なんだよ」
　自分の知るシオニー＝レジスと違い、強気で凛とした彼女の態度に少しばかり戸惑うが、次の瞬間、輸送機から送られてくる座標データに再び目を見開く事になる。
『そこに映し出されている座標、知っているなら案内しなさい』
　送られてきた座標データ、そこに映し出されているポイントは自分達の後方、即ちガルガンティアを指していた。

◇

リモネシアを飛び出し、ツィーネが残してくれた座標データを頼りに翠の地球を降り立って三週間、ブロッケンの予測通り遂に私達は彼が……シュウジがいるとされる場所を特定する事に成功した。

座標が示されているのは翠の海の上、恐らくは孤島か何かだろうと思っていた私達はすぐにその場所に向かう為、輸送機を走らせた。

けど、座標は自分達が予測していた地点とズレており、しかもそのズレは着実に大きくなっていく。もしかして彼は此方に気付いて自ら動いているのかと最初は思った。ドンドン離れていく彼の座標ポイントに焦りを抱いた私達は輸送機の飛行速度を加速させ、彼の下へ急ぐ。

けれど妙だ。もし彼が此方の存在を気付いているのなら此方の事を認識しているなら、そもそも自分達から離れる事はしない筈だ。なのに現に彼は今でも私達から逃れようとゆっくりとだが着実に離れていく。

やはり彼女を全面的に信頼するのは早計だったか、遅すぎる疑念に後悔する一方で輸送機をもっと速く飛ばすようブロッケンに頼んだその時、私達の前に一機のＭＳが姿を現した。

ガンダム。破界事変の頃、当時インペリウムにいた時、何度も衝突した元ＺＥＸＩＳメンバーの一人が乗る、戦略兵器を搭載したバ火力な機体。何故コイツがここにあるのだと驚いてくる私達を余所に、ガンダムのパイロットは穏やかな声色で荷物の中身を見せて欲しいと訊ねてきた。

本当なら従うべきなのだろう。輸送機の中身を見せて警戒心を抱かれても、ここは素直に少年パイロットの言葉に従うべきなのだろう。けれど、ここで足止めされてしまえば今度こそ私は彼の所に辿り着けない……そんな嫌な予感に駆られてしまい、この時の私は正常な判断力が失われていた。

どこからいつ襲ってくるか分からないサイデリアルに恐れ、精神的に疲弊していたという点も確かにあったが、それでもこの時の私は短絡的だった。

けれど、止まる訳にもいかなかった。もしこのガンダムのパイロットが彼のいる場所を知っているのなら、話を通せば聞いてくれるかもしれない。本来ならば決して有り得ない選択肢、だけど私はその可能性に賭けてみたかった。

「聞いて、ガンダムのパイロット。今私達はサイデリアルに追われているの」

『なんだって!?』

「私はある人に会う為、もう一つの地球からここまでやってきた。都合の良い話だと分かっている。破界事変の頃の私を知る貴方なら……許せない部分もあるのでしょう。

でもお願い。私達を通して、私達はこの場所に辿り着かなきゃいけないの。もし貴方が私を許せないというのなら、裁きは後で受けるわ」
「し、シオ殿!?　一体何を――――」
「だからお願い、今は、今だけは私達を見逃して！」
そう言って、画面越しに見える少年パイロットに向けて私は頭を下げた。隣で言葉を失っているブロッケンを余所に、私は必死に懇願して見せた。
浅ましいと思うだろう。狡い女だと思うだろう。破界事変の頃、多くの悪行を重ねてきた私が自分勝手に頼んできているその様は、彼にしてみれば非常に不愉快な事だろう。
だけど、それでも私は彼に会いたかった。どんな風に思われても、怨まれてもそれでも彼に会いたいという気持ちは抑えられなかった。……暫くの間訪れる静寂、自身の心臓の音が煩く聞こえてきた時、ガンダムのパイロットから意外な言葉が聞こえてきた。
『――――付いてこいよ。その座標地点の事はよく知っている』
「……え？」
構えを解き、背中を見せることで敵対する意思は無いと伝えてくる少年パイロットに、私は呆けた声を漏らす。
『別に、アンタを信じた訳じゃない。けど、ティファが言うんだ。今のアンタからは嫌な

感じはしないって、俺は誰よりもティファの事を信じている。だから……それだけさ』

それ以上何か言う事はなく、彼はスラスターを点火させ、遠ざかっていく。恐らくは私達を座標地点の所まで案内してくれるつもりなのだろう。私も内心で礼を言ってこれ以上何かを言うことなく、素直にガンダムの後を追うことにした。

彼の後を追って一時間弱、遂に私達はその場所に辿り着いた。

〝ガルガンティア〟穏やかな翠の海を静かに往く船団、ここに彼がいる。何となくリモネシアと似た雰囲気を感じる。船団の横に取り付いた私達は、やって来た船員らしき人達の誘導に従いながら船の上に足を踏み入れた。

◇

「本当に、彼がここに？」
「あぁ、アンタとあの人がどういう関係かは知らないけど、確かにシュウジ＝シラカワって人ならここにいる」
先頭を歩くガロードを始め、数人の船団員に囲まれながらブロッケンとシオはガルガンティアの中を歩く。
ここに来るまで既にガルガンティア側の代表に話を通したガロードは、代表である船長の指示の下、二人を案内することにした。船団の中で唯一二人の素性を知り、且つシュウジの事を知っている者として案内役となったガロードは淡々と先頭を歩き続けていく。
隣を歩く栗色髪の少女と赤い髪の女性はシュウジとなんの関わりがあるのだろう。そう疑問に思っていると栗色髪の少女が声を掛けてきた。
「え、えっと、始めまして、私エイミーって言います。シオさんってもう一つの地球から来られた人……なん、ですよね？」
「え？　ええ、そうね」
「シオさんの住んでいた所って、やっぱり陸のある所なんですか？」

　エイミーと名乗る少女から訊ねられる自身の事について軽く警戒してしまうシオだが、彼女が邪推ではなく純粋な好奇心である事を察したシオは笑みを浮かべながら答えた。
「ええ、私の故郷はリモネシアと言って、ここと同じのどかで海が綺麗な所よ」
「そうなんですか！　うわー、行ってみたいなー」
「今はちょっと無理だけど、機会があれば是非来てちょうだい。島には貴女くらいの子が沢山いるし、きっと仲良くなれる筈よ」
　笑みを浮かべ、そして自慢気に語るシオにエイミーは目を輝かせている。余程好奇心が旺盛な子なのだろう、ヤンチャな部分もありそうだなと苦笑いを浮かべた時、ガロードの脚が止まった。
「着いたぜ、ここだ」
「っ！」
　扉の前に立ち、ここがそうだと告げるガロードにシオの心臓が跳ね上がる。ここに彼がいる。その思いに駆られて先走りそうな自制心を必死に抑えながら、シオは一歩前に出て扉のドアノブに手を伸ばすと……。
「あの！」
「？」

背後から聞こえてきた声に振り返ると、今まで口を開かなかった赤髪の女性が言葉を口にした。
「アンタがあの男とどういう関係だったかは聞かないし、訊ねない。他の連中にも余計な口を出させないよう強く言っておく。……だから」
気を強く持てよ。そう語る女性の表情は悲しそうに、心底シオを同情している様に見える。エイミーも先程の活発そうな印象から一点、今は酷く落ち込んだ様子で俯いている。様子のおかしい二人、その事に訝しげに思うシオは戸惑いながらもドアノブに手を伸ばし、扉を開いて部屋の中へと入っていく。
まず最初に感じたのは独特な薬品の臭い。内装と部屋の雰囲気からここが医務室のものだと察したシオは部屋の中を進んでいく。
「おぉ、君がシオニー……いや、シオさんでしたか」
「貴方は?」
「私の名はオルダム、この船団で医師をしている者だ。君の事は外にいるガロード君から聞いているよ」
オルダムと名乗る老医師、ガロードから聞いているなら自分がどういう人間か知っている筈なのに、目の前の老医師はそんな事は関係なく穏和に接してくる。
「……彼に、会いたいのだな?」

「はい。私は……私達はその為にここまで来たのですから」
老医師が一瞬だけ見せる鋭い眼光、それが自身を試している様に見えたシオは力強く返答した。それが彼にとって納得のいく答えだったのか、オルダムはソレ以上語る事なく、シオ達を医務室の奥へと案内する。
医務室の奥へと連れてこられたシオ達、そこには医務室を……いや、来るものを拒むように白いカーテンが隔たれていた。
ただのカーテンの筈だった。なのにシオはそれが分厚い壁の様に見えた。一体彼の身に何が起こっているのか、今更ながら不安になっていくシオだが、ここまで来た以上後戻りは出来ない。段々速くなっていく心臓の音、胸元を抑えながらカーテンを開けると……。
「――――――え？」
全身に巻かれた包帯、全身が青白く変質したシュウジがそこにいた。
漸く会えた。言いたいことも聞きたい事も沢山あった。だけど、彼の姿を目にした瞬間、シオの口から最初に出てきたのは呆けた様な一言だけだった。
何故、彼は横たわっているのだろう。何故、彼は身動ぎ一つしていないのだろう。確かに彼は寝相は良い方だったが、それでも身動ぎ一つ位はしていた。
目の前の事にシオの思考が追い付かない。混乱しながらも彼女は彼の近くに歩み寄

り、彼の事を揺さぶる。
「シュウジ？　ねぇ、もうお昼だよ。そろそろ起きないと……らしくないじゃない。いつも誰よりも朝早く起きる貴方が寝坊なんて、ガモンさんが知ったら拳骨モノじゃない」
冗談めかしてシュウジを揺さぶるシオ、しかしこの時気付いてしまった。彼の異様な冷たさと氷の様に固まってしまっている……その状態に。
後でブロッケンの嗚咽の声が聞こえてくる。煩いと、黙れと、内心で叫びながらシオは彼に触れ続ける。
「……済まない。手は尽くしたのだが」
止めろ。
「彼を発見した時、既に彼は瀕死の状態だった」
止めてくれ。
「いや、これも言い訳だ。全ては私の力不足にある。だから、エイミーやベローズには当たらないでやってほしい」
お願いだから……。
「辛いけど、どうか受け入れてほしい。でないと彼自身も可哀想だ」
目の前の現実を否定する。ただそれだけの言葉がシオの脳に駆け巡る。嘘だと、信じ

ないと、目の前に横たわる彼を、それでもシオは呼び続けるが。
「彼の魂はもう、この世にはいない。彼はもう……死んでいるんだ。シオさん」
突き付けられた現実、変えようの無い事実を前に……シオは涙を流しながらその場に崩れ落ちた。
そして同時刻、ガルガンティア周辺にサイデリアルの大規模艦隊が迫ってきていた。

その118

ブロッケンの嗚咽の声が響く医務室、彼以外誰も言葉を漏らさず、音もない静かなこの部屋で、シオはベッドに横たわる、シュウジだったモノの顔を見つめていた。
青褪めた肌、白く生気が感じられない死人のソレ。屍となったシュウジの身体からは生命の鼓動は発せられず、ただ物言わぬ死体だけがシオの前に晒されていた。
どうして、こうなってしまったのか。目の前のシュウジの死を受け止めきれないでいたシオは、混乱する頭を抑えながらポロポロと涙を流す。そんな彼女の前に一冊の手帳が差し出された。
「……え？」
「彼が所持していたモノだ。……恐らくは日記、なのでしょう」
「日……記？」
「安心してくれ、覗いてはいない。本当は弔う際に一緒に処理すべきなのだろうが……

彼を知る貴女になら、託してもいいでしょう」
　渡される日記帳を手にしたシオは渡してきたオルダムを一度だけ一瞥し、恐る恐る日記を開いた。そう言えば彼が何度かこの手帳に色々書いていたのを見た気がする。
　使い古された手帳、そこに書かれた日記の内容、それを読むにつれて……シオの手は震えてきた。
「あ、あぁぁぁぁ……！」
「し、シオ殿、如何なされた!?」
　止まりかけた涙が、再びボロボロ溢して踞るシオにブロッケンは慌てて駆け寄る。酷く動揺している様だ。オルダムは医務室に備えられた鎮静剤を手にしようと棚にある薬品に手を伸ばすが……。
「どうして、どうして貴方なの！　どうして貴方じゃなきゃいけないの！　こんな辛い思いをして、こんなに傷付いて……どうして!?」
　それは慟哭だった。何故、どうしてと彼に対して、シオは声を張り上げてシュウジに訴える。しかし、その訴えは応えられる事はなく、シオの悲痛な叫びは医務室に溶けていく。
「シオ殿、大丈夫であるか?」
「……」

「シオ殿？」
「彼は……魔人なんかじゃなかった」
「え？」
日記の一部を読んだ事によりシュウジの人柄、本質を知ったシオはその事実に打ちのめされていた。
魔人と恐れられた彼、蒼のカリスマとして世界中から危険視されてきた彼、魔神を駆る者、世紀のテロリスト、そのどれもが正解であり、また的外れなモノであった。
本当の彼はそんなモノからは一番遠い、誰よりも普通な……平和な人間だった。そんな事はあの日、リモネシアで初めて会った時から分かっていた筈なのに……。
（私は今まで、彼の何を見てきたの……）
彼の強さに目が眩んで、彼の優しさに甘えて、彼の暖かさに安心して――――。
（彼を殺したのは……私達だ！）
もっと早く気付けば良かった。もっと早く彼の側にいてあげれば良かった。アロウズに襲われたあの日、戦略兵器の攻撃から守ってくれていたあの時、気のせいかで片付けず、彼の素性を知るべきだった。
魔神の強さに魅了され、彼に全てを押し付けた結果……彼を死なせる事になった。
言いたい事があった。怒りたい事があった。話したい事が沢山あった。彼が蒼のカ

リスマだと知った時の衝撃を、彼が今まで独りで戦ってきた事を……謝りたかった。

　ここまでの道程で用意していた沢山の言葉、想いを言葉という形にして伝えたかった。けれど、そんなシオの想いは……二度と届くことはない。

「ゴメン……なさい。ゴメン……ね」

　もう、シオからはそんな謝罪の言葉しか出てこなかった。眠っているシュウジに頭を床に付けて謝るシオ、そんな痛々しい彼女が見てられず、オルダムが頭をあげてほしいと説得しようとした時。

「お、オルダム先生、大変だ！」

「ピニオン、何だと言うのだこんな時に、死者の前だぞ！」

「わ、悪ぃ。けどこっちも大変なんだ！　外見ろよ外！」

　酷く慌てた様子で医務室へと入ってくるピニオンと呼ばれる青年、彼を戒めても全く落ち着く気配のない彼に不思議に思ったオルダムが渋々窓から見える外を目にすると……。

「こ、これは?!」

　空を覆い尽くすほどに展開された艦隊、サイデリアルの主力部隊の登場にオルダムは驚愕に目を見開いた。

何故奴等が此処にいるのか、混乱する思考をすぐに落ち着かせてオルダムは医務室に備わっている船長室との直通の通信機器に手を伸ばすが……。
「悪いが、大人しくしてもらおうか」
ピニオンを押し退けて医務室に入ってくる複数の軍服を着た軍人達により、船長室との連絡手段が断たれてしまう。
「……申し訳ないが、この船団に君達が欲する代物はない。出ていってくれないか」
「安心しろ。少なくとも我々は諸君らに手を出すつもりはない。抵抗しなければ危害を加えないことを約束しよう」
軍人達のリーダー格らしき偉丈夫の男が一歩前に出る。カツカツと音を鳴らせてオルダム達に近付く男はシオの側で立ち止まった。
「私はサイデリアル特殊部隊ハイアデスの副隊長を勤めているダバラーン＝タウだ。貴女が元リモネシア外務大臣、シオニー＝レジスで相違ないな？」
「……」
「我らが皇帝、アウストラリスからの勅命である。貴殿を帝都ラース・バビロンまで連行する」
突然突き付けられる連行命令、理不尽なダバラーンの要求にブロッケンは当然反発しようとする。しかしガルガンティアを囲むサイデリアルの艦隊の数は凄まじく、全ての

主砲が此方に狙いを定めている。僅かでも不穏な動きを見せれば即座に連中の主砲で撃ち抜かれるだろう。

何て用意周到な、此方に存在を感知させずにここまで接近を可能としているサイデリアルの技術力の高さにブロッケンが戦慄を覚えていると……ふと、彼の目に一際目立つ艦が視界に入ってきた。

金と黒で彩られた艦、その存在感からブロッケンはアレこそがサイデリアルの旗艦であることを理解した。恐らくはあの艦が次元力で何かしたのだろう。シュウジによって次元力について触り程度理解しているブロッケンは、ここまで接近を許した理由について分かった気がした。

ガルガンティアの命運はシオの決断に委ねられた。彼女の発する一言でこの船団の行く末が決まる事にオルダムは固唾を呑んで見守っていると……。

「……分かり、ました」

立ち上がったシオは一度だけシュウジに向き直って何かを呟くと、踵を返し彼等に付いていくと口にした。

「し、シオ殿……」

「ブロッケン、ここまで連れてきてくれて、役立たずな私を守ってくれて……ありがとう」

止めようとするが、既に決意を固めた様子の彼女になにも言えなくなってしまうブロッケン、そんな彼の手にシュウジの日記が手渡される。
「これを、彼に返しておいて。私にこの日記を持つ資格はないから……彼と一緒にしてあげて」
お願いね。その言葉を最後にシオはダバラーンと共にガルガンティアから離れていく。彼女がサイデリアルの旗艦に乗り込むと、艦隊は反転し、空の彼方へ消えていく。
その様子をブロッケンは感情を押し殺す様に歯を食い縛りながら見つめる事しか出来なかった。
誰もが安堵した。艦隊の攻撃を受けずに、被害を出さずに事が済んだ事に。……
しかし、彼等は気付かない。既に次の災厄がガルガンティアに迫っている事に。
そしてオルダムは気付かなかった。彼女の背後で眠る彼の者の身体に、僅かな熱が灯り始めた事に。魔人の指先が微かに動いた事に――――。

◇

「我輩は……一体何の為に」

空の彼方へと消えていくサイデリアルの艦隊、連中にシオが連れていかれる様をただ眺める事しか出来ない己の無力さを悔やんだ。

何の為に自分は生き長らえている。シュウジという恩人に恩を返す事も出来ず、シオという恩人の大切な人を守る事も出来ず……一体、自分は何の為にここにいる。

あの日、Ｄｒ．ヘルという主を失ってから何も成長出来ていない。ブロッケンの目元に悔しさの涙が滲んでいく。

と、そんな時だ。医務室の重苦しい空気を吹き飛ばす様な激しい爆発音が、近くから聞こえてきたのだ。何事かと医務室から出たブロッケンが目にしたのは、近くの船体から爆発と炎が上がっている瞬間だった。

何が起きている。戸惑うブロッケンが次に目にしたのは、爆発した所から現れる無数の武装集団だった。それを目の当たりにしたブロッケンは直感で悟る。サイデリアルだと。

結局、連中は最初から約束など守るつもりなどなかったのだ。卑劣な手段を用いてくるサイデリアル、嘗ての自分が良く使っていた手段であるだけに余計にムカッ腹が立ったブロッケンは、怒りのままに武装集団へ突貫していく。

外を見ればガンダムＤＸの姿も見える。恐らくは自ら殿を務めて船団を逃がすつもりなのだろう。ならば自分も自分のやり方で恩人であるシュウジに忠を示すのみ、そう決意したブロッケンが武装集団に殴り込んだ時。

『我が名は抵抗勢力掃討部隊指揮官、ギルター＝ベローネ。愚かな地球人どもよ、今すぐ抵抗を止め、投降するがいい』

光学迷彩を解き、姿を現した艦から他人を見下しきった不快な声が聞こえてきた。嫌な奴だ。今まで姿を隠して勝利を確信したら強気な姿勢で出てきた所を見ると、どうやら自惚れが強い性格の人間なのだろう。サイデリアルにもこんな奴がいるのかとある意味感心した時、ブロッケンの脳裏にある疑問が浮かぶ。

ああ言った手合いの人間は自分が利を得るために手段は選ばないモノ、嘗てＺＥＸＩＳ相手に幾度もそう言った搦め手を使ってきた自分が言うのだ。恐らくは間違いないだろう。では一体何が……と、そんな時だ。

「きゃぁぁぁぁぁっ！」

「っ!?　しまった、既に別働隊が侵入していたのか！」

医務室から聞こえてきた悲鳴、それによりギルターの狙いが何なのか理解したブロッケンは直ぐに踵を返し医務室へ戻ろうとする。しかし、既に武装集団と接触してしまった以上、コイツらをこのまま放置しておく訳にもいかない。

やってしまった。立て続けに起こしてしまった自身の不手際に悔やむブロッケン、しかしそんな暇すら与えないと武装集団はブロッケンに襲いかかっていく。

「く、くそぉぉぉっ!!」

最早悪態を付くしかなかった。せめてコイツらを片付けるまで無事でいてほしい。そんな届かない願いを胸に抱きながら、ブロッケンは腰に差したサーベルを抜くのだった。

◇

「ぐうっ」

「ガハッ!?」

「オルダム先生！　ピニオン！」

圧倒的暴力に殴られ、地面に叩き付けられた二人を前にエイミーの悲痛な叫びが医務室に響き渡る。銃器を装備した武装集団、圧倒的優位な立場にいることを信じて疑わない彼等は我が物顔で医務室へと入っていく。

土足で船団を踏入り、暴力を容赦なく奮ってくる無法者、当然ベローズは反発しようとするが、それを見越した上で連中は倒れ付した二人に銃を突き付ける。

丸腰相手に容赦のない手段を次から次へと取ってくるサイデリアル。そのニヤケた表情からそうやって悔しがる自分達の反応を見て楽しんでいるのだとベローズは理解し、その胸中を怒りで燃やす。

だが、それでも出来ることはない。抵抗すればするほど犠牲となる人間は増えていく。ならば大人しくするしかないとベローズは無理矢理感情を抑えて震える拳を解く。その様子を見て詰まらなそうに吐き捨てるサイデリアルの兵士は興味を失いベローズから視線を外す。

連中の視線の先にいるのはベッドの上で横たわるシュウジの遺体、彼の姿を確認すると兵士達は通信機器を使って上官に進言する。

そして次の命令が下されたのか、兵士の歪んだ口元から了解の言葉が聞こえてくる。一体何をする気なのか、語らぬ遺体に銃口が向けられた時。

「ダメッ！」
今まで震えて動けなかった筈のエイミーがサイデリアルの兵士に飛び付いていく。
「この、クソガキがっ！」
突然の反抗に戸惑うが、それでも兵士である以上自分達の方が力は上、力任せに振りほどいたエイミーを医務室の壁に叩き付けると、兵士はエイミーに向けて銃口を突き付ける。
「エイミー！　やめろ、子供に手を出すんじゃねぇ！」
子供相手でも一切容赦しないサイデリアルの兵士、ベローズは止めろと声を張り上げるが、連中は漸く見れた彼女の反応に愉しそうに嗤いだす。
さぁ、お前も泣き喚け、無様に命乞いをしろ。そうした上で殺してやる。圧倒的な力を前に平伏しろ。そう言い放つ兵士を前に……。
「……可哀想な人」
エイミーは強い意志の籠った瞳で銃を突き付けてくる兵士を見た。その瞳に一瞬だけ気圧されてしまうサイデリアルの兵士、ふざけるなと気圧された事を叫び声で誤魔化そうとしながら、遂に引き金に指を掛けた。
ベローズが逃げろと叫ぶ。ピニオンが震える体で抵抗しようとする。オルダムが逃げなさいと口にする中、引き金が引き絞られていく。

眼前に迫る死。目尻に涙を貯めてそれでも目を背けようとしないエイミー。そんな彼女が次の瞬間目にしたものは……。

「――――――おい」

突然横から聞こえてきた声にエイミーだけが振り向いた瞬間、医務室に破裂音が鳴り響き、彼女に銃口を向けていた兵士がゴム毬の様に吹き飛んでいった。

四人はいたであろうサイデリアルの兵士達を捲き込みながら、ゴム毬となった兵士は壁に叩き付けられる。白目を剥いて気を失っている四人の兵士にベローズ達が呆然としている中。

「折角良い夢見ていたってのに、起きちまったじゃねぇーかこの野郎」

全身包帯だらけの男、つい先程まで死んでいた筈の男が首をコキリと鳴らしながらその場に立っていた。

死人であった筈の人間の突然の復活、有り得ない事態を前にベローズ達は言葉を失っている中。

「えーっと、何だかよく分からないけど……取り敢えず服、貸してもらえません？」

包帯まみれの男、シュウジは自身が包帯だけの全裸状態に気付き、申し訳なく訊ねるのだった。

その119

――――――夢を、見ていた。懐かしい夢を。

幼い頃、大好きだった祖母を病で亡くしたばかりの俺は、当時家の近くにあった公園のブランコにいた。共働きで滅多に家にいない両親、当時の自分にとっては唯一の遊び場であり、暇潰しの場所だった。

帰りが遅くなる度に迎えに来てくれた祖母、しわくちゃの顔をニンマリと笑顔で迎えに来てくれた祖母は、当時の両親に代わり面倒を見てくれており、俺にとって父親の様であり、母親の様な存在だった。

その祖母が死んだ。死というモノが何なのか、当時幼稚園も卒園出来ていなかった自分には理解できず、ただ病院のベッドで横たわる祖母を見つめ続けていた。

泣くことも出来ず、ただ訳が分からなかった。何故祖母は起きないのか、当時の自分は目を覚まさない祖母を不審に思うだけだった。

火葬の日、祖母を燃やそうとする人達に泣き喚きながら食って掛かった事があった。やめてと、お婆ちゃんを燃やすなと、葬式の意味を理解していなかった俺はただ泣き叫び、祖母の名を叫んだ。

そして漸く気付いた。祖母はもう目を覚ます事はないと、祖母のあのしわくちゃな笑顔を見ることは……二度とないのだと。

それから俺はあの公園に通い続けた。ここにいれば祖母が迎えに来てくれるのではないのかと。そんな事は絶対にないと、分かっている癖に……。

生まれて初めて死というモノを目の当たりにした俺は、現実を受け止めきれずに毎日あの公園に足を運び、ブランコに乗り続けた。いつか、祖母が迎えに来てくれるのではないのかと、そう信じて……。

強い風の日、降り頻る雨の日、雪が降り積もる冬の日、来る日も来る日も俺は祖母の迎えを待ち続けた。

初めて両親から叱られた。初めて母が泣く姿を見た。夜遅くまで帰ってこない自分に母は心配して、そして怒り、次にごめんなさいと泣き崩れた。

別に両親に対して不満に思ったりしていない。二人が仕事で忙しいのは分かっていたし、自分の為に頑張ってくれているのだと祖母から教わっていたから、誇らしく思っても不満に思う事はなかった。

けれど、いや、だからこそ自分は認めたくなかった。自分を両親に代わって育ててくれた祖母の死を、優しくてけれど時には厳しく叱り付けた祖母が死んだことを……認めたくなかったんだ。それがたとえ反発という名の甘えなのだとしても、俺は公園に通い続ける事を止めなかった。

それから数日後、俺の前に彼女が現れた。

『ねぇ、アンタいつもそこにいるけど……一人なの？』

『何だよお前、余計なお世話だ。ほっとけよ』

自分よりも小さい女の子、後の幼馴染となる少女との初めての出逢い。この時の俺の態度は我ながら酷いものである。

五月蠅い、話し掛けるな。彼女の遊びの誘いを何度も無下にし、時には突き放し、更には罵倒を浴びせたりした。酷い八つ当たりだ。祖母を失った寂しさを誰かに当たる事で気を紛らせていたこの時の俺は、最悪の一言に尽きた。

だけど、それでも少女は俺に構う事を止めなかった。拒み続ける俺にムキになったのか、それとも別の意図があるのか、何度も一緒に遊ぼうと誘ってくる彼女をそれでも俺は拒み続けた。

いや、違うな。ムキになってたのは俺の方だった。諦める事なく、何度も誘ってくる彼女を煩わしく思い俺は半分自棄になって押し返したんだ。本当は嬉しかった癖に、

ちっぽけなプライドに縋って駄々をこねて、俺は彼女の好意を踏みにじったんだ。
そんな自分に愛想が尽きたのか、その日から彼女が公園に訪れる事はなかった。これで漸く落ち着ける。祖母が迎えに来るのを静かに待ち続ける。そんな強がりな事を口にしながらブランコの鎖を握り締めていたら……数日後、再び彼女はやって来た。
この日は雪が降る寒い日だった。寒さで震える体を縮こまる事で何とか耐えてきた自分の前に現れたのは、自信満々の笑みを浮かべて佇んでいた彼女だった。
『決めた！　アンタをこのニコニーにこちゃんのファン第一号にしてあげる！』
『はぁ？』
小さな体を大きく動かしながらそう言ってくるにこちゃん。一体何をするつもりだと首を傾げる自分が次に見たのは……キラキラと輝く歌姫の姿だった。
歌も振り付けも未熟、音程も時折外しているその様はまさにアイドルを真似するだけのただの子供、稚拙で幼稚、まさにお遊戯――――だけど、自分にはそんなにこちゃんが眩しく見えた。
降り頻る雪も、肌寒い風も、全てが彼女を彩らせる為の演出に過ぎなかった。誰よりも楽しみながら歌う彼女の姿はとても魅力的でそして美しかった。
〝頑張れ〟にこちゃんが歌う歌詞の中に含まれる一節、そう、彼女が歌っているのは相手を思いやり、立ち直らせてくれる応援の歌。そこに込められた意味を理解した俺は

漸くこの日、ブランコから立ち上がったのだ。
（あぁ、そっか……なんで俺、こんな大事な事を忘れてたんだろ）
祖母を亡くしたあの日、俺は挫けてしまった。大切な人を失った事に対して受け入れる事も、抗う事も出来ずに……膝を付いて屈する事しか出来なかった。
けれどこの日、俺は知った。いや、教えて貰ったんだ。抗う事の意味を、頑張る事の大切さを、目の前の……俺よりも小さな女の子から。教わったんだ。
『俺、頑張るよ。だから天国で見ててくれよな――フィーネお婆ちゃん』
この日、俺は初めて己の意思で立ち上がった。

◇

「ええい！　次から次へと出て来おってからに！」

次々と沸いて出てくる武装集団、倒しても倒してもそれでも尚前に出てくる兵士の数に、ブロッケンは半分うんざりしながら手にしたサーベルを降り下ろす。

これで一体何人目だ。百を過ぎてから数えるのを止めたブロッケンは空に浮かぶ艦隊を睨み付ける。ギルター＝ベローネと名乗る指揮官が現れてから繰り返されるゲリラ戦、巨大船団を舞台に始まった戦渦はブロッケンの所だけでなく、至る所で繰り広げられていた。

聞こえてくる怒声と悲鳴、自分達のせいで巻き込まれ、危機に陥った船団の人達に申し訳なく思いながら、ブロッケンは右腕部に備えられたブースターを点火させ、ロケットパンチを繰り出す。

本来なら今すぐにでも駆け付けて船団の人達を救出したい所だが、今連中の戦力が自分の所に集中している今、迂闊にここを離れる訳にはいかない。離れてしまえばここに集まった戦力が一気に船団に雪崩れ込み、待っているのは虐殺――――凄惨な殺戮現場の出来上がりだ。

他の所にも救援に向かいたい。しかし離れる訳にもいかない。もどかしい状況に苛立ちながら再び空を見上げると、そこには多数の機動兵器を相手に単身で奮闘するガン

ダムの姿があった。
あの少年もこの状況の中で良くやる。追い詰められながら、それでもまだ戦意を失わないガンダムの少年を見て、ブロッケンも気概を昂らせる。
しかし、未だ敵の数は多い。増え続ける敵兵、更には昆虫の姿を模したキメラの様な生体兵器までもが敵の中に紛れ込んでいる。
いよいよ状況がヤバくなってきた。危機的状況の中、ブロッケンが覚悟を決めて突貫をしようとしたその時……。
「猛羅――――総拳突き」
拳の弾幕がブロッケンの背後から押し寄せ、ブロッケンを除いた全ての敵兵を蹂躙していった。突然の出来事に目を丸くさせるブロッケン、次いで聞こえてきた声に我に返り、振り返ると――――。
「し、シュウジ……」
一瞬、包帯まみれの男がブロッケンの視界に映ったと思いきや、直後に男の姿は掻き消え、同時に猛烈な突風が辺り一面を襲った。
突然の突風に目を閉ざすブロッケン、やがて風は収まり、辺りが静かになった所で恐る恐る目を開けると。
「……へ？」

地面に這いつくばるように倒れ伏すキメラ兵士と武装集団の兵士、骸となった敵のど真ん中に立つ上半身裸の男にブロッケンは戦慄を覚えた。
（べ、べらぼうに速えぇ……である）
しかし、そんな戦慄も束の間、振り返りその姿を露にした男にブロッケンは目尻から大粒の水滴が溢れだしてくるのを感じた。
「し、ジュウジ殿(どの)ぉぉぉぉぉっ!!」
死んだと思われていた主の姿、理由や理屈などどうでもいいと、復活したシュウジにブロッケンは感嘆の涙と鼻水を撒き散らしながら抱きつこうと――――。
「寄るな暑苦しい」
――――した瞬間、容赦のない目潰し。シュウジの突き出した2本の指がブロッケンの両目にめり込んだ。
「イイッタイメガァァァァッ!!?」
痛みに悶絶し、転げ回るブロッケン。そんな彼を見下ろして……。
「この暑苦しい感じ……思い出した。お前、ブロッケンか」
まるで今思い出したかの様なシュウジの態度、普段の落ち着いた彼とは違い素の状態となっているシュウジに違和感を覚えるブロッケン。そして彼の口振りの意味がどういう事なのか検討がついたブロッケンは、まさかと思うも確信を抱きながらシュウジに

訊ねた。
「シュウジ殿、まさか……記憶が？」
「あぁ、長い間寝ていた所をいきなり起こされたせいか記憶が曖昧な部分が多い。……正直、ちょっと混乱している」
「だ、大丈夫なのでありますか？」
「うーん、多分大丈夫じゃないか？　一時的みたいな感じもするし、何よりお前の顔を見たら思い出せたんだ。案外強い衝撃を受けたら思い出すんじゃないか？」
　自分の事なのにやたら落ち着いているシュウジ、記憶喪失という割と笑えない状況なのに、この胆力は流石と言うべきか。
「そう言えばシュウジ殿、何やらお召し物がいつもと違うような……そのズボンは連中が履いていたものではありませぬか？」
「ん？　あぁこれ？　本当はここの船団の人から借りようと思ったんだけど、よくよく考えたら俺ってばここの人達に世話になってた訳じゃん？　これ以上迷惑かけるのもアレだし、下だけなら其処らの奴からぶんどればいいと思ってさ」
「は、はぁ……」
「でも参っちゃったよ。ぶんどるのはいいけど中々サイズの合うやつがなくてさぁ、船に侵入してきた奴ら全員片っ端から叩きのめす事になっちゃって、ここまで来るのに時

間取られてさ」
　何事もない様に語るシュウジだが、聞かされるブロッケンは信じられないといった様子で耳にしていた。彼の言うことが本当なら、既にこの船団に強襲してきたサイデリアルの尖兵達は全員彼一人にやられたという事なのだから。それも、服が欲しかったからという理由で。
　そう言えば、あれだけ騒がしかった銃声や悲鳴が聞こえてこない。静まり返る船団の様子が、シュウジの語る事が真実だとブロッケンは悟った。
「一応言っておくが、ここの人達は無事だぞ。流石に全員無傷とはいかないが、いずれも軽傷者の範疇に留まっている。後はこれ以上被害が出ないよう、彼処でのさばっている連中を叩き潰すだけだ」
「は、はい！」
　空に浮かぶサイデリアルの部隊を睨み付けて敵意を露にするシュウジ、頼もしすぎるその姿に気後れしてしまうブロッケン。しかし次の瞬間、何か思い出したのか、凛としていたシュウジの顔は徐々に焦りのモノへと変化していく。
「……と、言いたい所なんだけど。悪いブロッケン、俺の力が役立てるのはここまでみたいだ」
「え？　ど、どういう事でありますか？」

「実は俺のグランゾン……今壊れちゃっててさ、とても戦える状態じゃないんだよね」
「……」
「今、取り出せるのはこれくらい。だから今の俺……猛烈に役立たずなんだよね。――――どうしよう？」
ワームホールから取り出した蒼のカリスマの仮面と親友から貰った白のロングコートを手に、シュウジは乾いた笑みを浮かべる。こんなんでどないするんや、と下手な関西弁を口にするシュウジにブロッケンの口元が不敵に歪むと。
「っ、この音、あいつらまたやって来やがったのか」
通路の先から聞こえてくる足音、それが先程倒した連中の増援だと察したシュウジが迎撃しようと前に出る。
しかし、そんなシュウジを遮るようにブロッケンが先に前へ出た。なんのつもりだと眉を顰めるシュウジに渡されたのは……一個の小型端末だった。
「ブロッケン、これは？」
映し出されているのはこの船の見取り図、下へスクロールしていくと端の方に輸送機らしき機影が映り、そこに何かあるのか、蒼い光が点滅していた。
「シュウジ殿のご友人から保険として寄越された代物……お急ぎなされよ、そこにあな

た様の新たな剣が納められているであります」
　早く。急かしてくるブロッケンにシュウジは問うことはせず、端末に記された場所に向けて足を進める。
「……１０分持たせてくれ。その間にケリを付けてくる」
「承知」
　それ以上語ることはない。シュウジは座標の場所へ、ブロッケンは再び敵集団に向けて突撃する。全ては拾ってくれたシュウジに報いる為、ブロッケンはその表情に歓喜の笑みを浮かべて、敵のど真ん中へ斬り込んでいった。

◇

ブロッケンから別れて間もなく、座標の場所、端末に記された地点である輸送機に辿り着いたシュウジは、そこに隠された機体を前に驚きと喜びにうち震えていた。
「まさか、改修されていたのか。シュナイゼルの奴、だから俺の身体データなんか欲しがっていやがったのか」
その機体――――姿を変えたトールギスを前にして、記憶の方も色々と思い出してきたシュウジは不敵な笑みを浮かべながらトールギスの足に触れる。
嘗て自身もロールアウトの際に手を加えた機体、一度目はトレーズで二度目は自分、そして……これで三度目。姿形を変えても尚、自分の為に力を貸してくれるトールギスと友人の思いやりに、シュウジは不覚にも泣きそうになった。
泣いてばかりじゃいられない。早いところ機体に乗り込んで出撃せねば、目尻に溜まる水滴を拭い、コックピットに乗り込んだシュウジを待っていたのは……これまでとはまるで違った奇妙な形をしたコックピットだった。
端的に言えば……座る場所がない。あるのは背中を固定させる姿勢制御らしきものと、銃の形をした端末、そして刀身のない柄が置かれていた。
従来のモノとは明らかに異なったコックピット、戸惑いながら中に入るとセンサーが反応したのか、様々な光がシュウジに向けて照射される。
『バイタリティ、オールグリーン。脳波スキャン……固定、対象をシュウジ＝シラカ

ワである事を断定、パイロット登録……完了しました』
　コックピット内部から聞こえてくる音声、どうやら一連の流れはこの機体に自分の生体データを登録させる為の演出らしい。晴れて自分専用となったこの機体に感慨深い気持ちを抱きながら姿勢制御に身を委ねると、眼前のモニター光が灯り、シュナイゼルの姿が映し出されていた。
『――――やぁ、我が友、シュウジ＝シラカワよ。これを君が見ているということはこの機体は無事に君の物となったわけだね。良かったよ。君以外の人間がこの機体に乗れば自爆装置が作動するからね。安心したよ』
「おいこら」
　サラリと笑えないことを口にするシュナイゼルにツッコむも当然返事は返ってこない。当然だ。何せこれはビデオレター、リアルタイムに流れている映像ではないのだ。
　今はどうなっているか分からない友人からのビデオ、不安に思うが取り敢えずかのビデオの内では元気そうだ。壮健な友人の姿にシュウジは一先ず安心した。
『ほらほら、友人との会話も楽しみたいんだろうけど、今はそれどころじゃないんだろ？　さっさと代わりな』
『えっ？　あ、ちょ……』
　押し退けられながら画面外へと弾き出されるシュナイゼル。彼に代わってモニター

に映るのは次元力を専門に研究している、狐のお面が特徴のトライア博士だった。
なんで博士がここに？　素朴な疑問に首を傾げるシュウジだが、そんな事はお構いなしに彼女の話は進んでいく。
『やぁ、久しぶりだねＭｒ．蒼のカリスマ。いや、今はシュウジ＝シラカワと呼ぶべきか？　まぁそれはどうでも良いことだから放っておくとして……時間がない。単刀直入に言わせて貰うよ』
「……」
『今、地球は未曾有の危機に瀕している。これまでも何度も危機的状況に晒されてきたが、今回のは今までとは違う。私達よりも何倍もの強力な次元力を有した連中が一斉に押し寄せてきたんだ』
トライア博士は語る。〝星間連合サイデリアル〟　彼等が地球に向けて突然押し寄せてきた侵略者だと、このままでは近い将来地球は連中によって滅ぼされると。
『今はＺ―ＢＬＵＥや政府軍が何とか持たせているが、それもいつまで続くか分からない。今はテロリストの手も借りたい位なんだ。だから……頼む、アンタの力も貸してくれ』
画面の向こうでトライア博士が頭を下げる。よく見ると画面の奥では弓教授や、ロボット工学の第一人者として有名な三博士の姿が見えている。

他にも元アロウズの技術者、ロイドさんにセシルさんもいる。どうやらこの機体はトライア博士だけでなく、彼等の手も加わっているようだ。
やがて場面は代わり、再びモニターに映る人が変わる。今度は先程までなに食わぬ顔をしていたロイドさんが、めんどくさそうな顔をして映り込んでいた。
『ねぇ、これ本当に僕も言わなきゃダメ？　僕徹夜明けで眠いんだけど……わ、分かったよ、分かったから手をポキポキさせないでセシル君、怖い、怖いから！　……ふぅ、何で僕がこんな目に』
相変わらず自分の興味の無いことには面倒くさがる人だなぁ。変わっていない知人にシュウジは苦笑いを浮かべた。
『えー、とシュウジ君？　いやシュウジさん？　まぁ何でもいいや。兎に角今君が乗っている機体は今僕達に出来る最大限の改造を施しているスペシャル機体さ、スペックは勿論武装こそ少ないけどその威力は保証付き、並の相手にはまず負けないさ』
けどね。そう続けるロイドさんの目が僅かに鋭くなる。
『これから君が相手にするのはきっといずれも並の相手ではない。何が理由でグランゾンじゃなくこの機体に乗っているのかは知らないけど、簡単にはいかないだろうね』
「……」
『けど、どちらにしても君のやりたい事は変わらないんだろ？　だったら僕から言える

事は何もない。……おめでとう！　晴れて君はこの棺桶のデヴァイサーに選ばれた訳だ。精々、頑張りなよ』

そう言ってロイドさんはセシルさんと思われる人の手に胸ぐらを掴まれながらフェードアウトしていった。恐怖に引き攣りながらもしてやった風なドヤ顔をしていた辺り、どうやら本当に言いたいことを言い切った様だ。

消えていくロイドさんに代わって出てくるシュナイゼル。先程のトライア博士の扱いもあって、澄ましているシュナイゼルの顔を見ているとなんだか笑いが込み上げてきた。

『と、いうわけで協力者の代表格からそれぞれエールを受け取った訳だが……どうかね？　少しはやる気を出してくれたかな？』

「ねーよ」

『ふむ、どうやら気に入ってくれた様だね。私も時間を取って映像を編集した甲斐があったものだよ』

お前が編集してたんかい！　シュナイゼルのドヤ顔に再びツッコミを入れるが、やはり返事は返ってくることはない。

『さて、長くなってしまったが私の話を最後に話は終わろうと思う。……シュウジ、君がどのような経緯で、そこにいるかは定かではない。きっと私では想像も出来ない出来事

が君の身に起こっているのだろう』
「……」
『だが、それでも君に頼みたい。君に願いを聞いてほしい。私達を、地球を……助けてほしい』
　それは、血反吐にまみれた願いだった。自分達の無力さを棚に上げて、シュウジに無責任に押し付けるシュナイゼルはこの時、自身の身勝手さに吐き気がしていた。
　モニター越しでも伝わってくる罪悪感、頭を下げるという今まで見たことがないシュナイゼルの姿を最後に、ビデオレターは終了する。
「違う、間違ってるよシュナイゼル」
　コックピットに光が点る。全天式のモニターを通して外部の様子が映し出され、機体の各部に熱が走っていく。
「俺が皆を守るんじゃない。俺達で皆を守るんだ。今はまだ遠いから手が届かないけど……待ってろ。すぐそっちにいく」
　全システムのオールグリーンが表示され、最後にこの機体の名称が映し出される。
　――思い浮かぶのは自身が目覚める直前、久しく会っていなかったあの人の寂しそうな声。
『――もう、頑張らなくていいよ』

その言葉に秘められた想いは今のシュウジには分からない。一つ確かな事はこのままここで燻っている訳にはいかないと言うこと。

「……ごめんシオさん、俺は――――行くよ」

全身に力を込める。それに呼応するように機体の全体に力が連動していく。

「アメイジングトールギス、出る！」

その叫びにトールギスの瞳が輝く。スラスターを噴かせ、開かれた輸送機の扉から勢い良く発進した蒼のＭＳは天高く空に舞った。

どこまでも、限界なく飛んでいく蒼い機体。偶々その姿を目にした船団の船長はその光に蒼い鴉を幻視した。

その１２０

『ギルター＝ベローネ、貴様、どういうつもりだ？』
「どういうつもり、とは？」
サイデリアルの指揮艦にて、抵抗勢力掃討指揮官を名乗るギルター＝ベローネは、モニター越しでも伝わってくる凄味を利かせて睨み付けてくるダバラーン＝タウに僅かな怯みを見せずに、余裕のある笑みを浮かべていた。
『我々の目的はシオニー＝レジスの連行にある。その目的が達成された今、そこの船団に用は無い筈だ』
所属する部隊は違えどサイデリアル内部にある階級ではダバラーンの方が上、故に遠回しに戦闘は止めて撤退しろとダバラーンは言うが、ギルターはそれに応えず、睨んでくる彼を鼻で笑いながら拒否をした。
「確かに、此方の目的は無事に達成された。それはそれで喜ばしい事です。しかし、私に

課せられた任務は違う。我等サイデリアルに楯突くものには平等に死を、それを実行するのが我々抵抗勢力掃討部隊なのです」

『……』

鼻高々、己の持論によって凄味を増していくダバラーンにギルターは優越感に浸り、目の前にいる上官を下に見ながら続ける。

「私の行動は皇帝陛下のご意志でもあるのです。それを害するという事がどういう事なのか……それが分からない貴方では無いでしょう？」

『貴様、最初からそのつもりで……』

「さて、そろそろそちらは翠の地球の圏外から外れる頃でしょう。此方の方はお任せください。――そうそう、貴方が預けてくれたハイアデスの戦力、丁重に扱わせて貰いますのでその点もご心配なく」

『ギルター＝ベローネ！』

怒声を放ってくるダバラーンの通信を一方的に切断するベローネ、鬱陶しいという風に表情を歪める男は吐き捨てる様に言葉を口にする。

「何が言うことを聞けば手を出さないだ。そんな事をすれば連中が付け上がるという事が解らんのか脳筋めが」

自分よりも上の人間に対して明らかな敵対言動、聞く相手によってはその場で処断さ

れるというのに、ギルター＝ベローネはそんな事などお構いなしに悪態を口にする。
「やはり、サイデリアルの未来を担うには私の様な才能ある人間でなければならない。そうは思わないか？」
己を自讃し、周囲のオペレーターに同意を求めるギルター、立場が上である彼に反論できる者などこの場におらず、必然的に肯定するしかなかった。そんな部下達を見てギルターは満足気に頷いた。
そう、自分の行いこそが正しいのだ。サイデリアルの智将で知られ、いつかは皇帝の座に君臨してやるという野望を抱いている男は、眼下に広がる戦場を眺めて頬杖を付きながら悦にはいる。
やはり戦闘は蹂躙するに限る。自分達に……いや、自分に比肩する者など存在しないのだ。この調子でこの小汚い船団を破壊し、中にいる蒼のカリスマ―――シュウジ＝シラカワとかいう男も序でに消してやる。残る問題は単機で戦っているガンダムだけだが、それも物量で攻め落とせばいい。
仮に持ちこたえていても、既に船団に浸入した斥候部隊が、船内にいる人間を皆殺しにしている事だろう。文明レベル的に向こうには碌な抵抗手段がない。サイデリアルが誇る武力を以てすれば、半刻足らずに殲滅出来るだろう。そうなればガンダムのパイロットも守るべきモノを失った事により戦意を失い、自分に敗北するだろう。今、連中

の命運は自分が握っているのだ。
完璧だ。己の完璧過ぎる作戦と戦術に、ギルターは笑いを堪えるので必死だった。そうだ。これこそ自分の在り方なのだ。以前セツコ＝オハラとその一行に敗走したのは何かの間違いなのだ。
私のやることに間違いない。エゴの塊とも呼べる男は内側から溢れる悦楽を噛み締めていた時、オペレーターの一人から奇妙な報告が飛んできた。
「せ、先行部隊からの通信途絶。反応……ロストしました」
「何だと?」
部下からの報告にギルターの眉間に皺が寄る。自分の完璧な作戦に泥を塗った先行部隊に苛立ちながら指示を飛ばすが……。
「ならばキメラ部隊を投入しろ！　奴等の戦闘能力を以てすれば容易い筈だ。……おのれ弱小集団め、余計な手間をとらせおって！」
「そ、それが……キメラ部隊もその半数が撃破され、残り半数も一人の人間に足止めをされて……」
「な、なんだと!?」
モニターに出せ！　乱雑に飛ばす指示に律儀に従うオペレーター、眼前に映し出された昆虫のキメラ部隊を相手に一人で立ち回る、赤い軍服姿の男の姿にギルターの目は大

きく開かれる。
「な、なんだこの男は?!」
「恐らくは報告にあったＤｒ．ヘルの元配下であるブロッケンかと思われます。バードス島跡地での決戦で敗北した際、島の爆発に巻き込まれて戦死したとありましたが……まさか蒼のカリスマの手下になっていたとは」
　淡々と語る部下の言葉は、憤慨するギルターの耳には入ってこなかった。悉く自分のやり方を邪魔をしてくる存在に苛立ちを隠せなくなったギルターは声を上げて指示を飛ばす。
「デイモーンを一個小隊向かわせろ！　あの薄汚い船を今すぐ叩き落とせ！」
「し、しかしそれでは味方も……」
「口答えをするな！　貴様らは私の命令に従っていればいいのだ！」
　役に立たない部下など必要ない。その台詞にオペレーターは眉を寄せるが、上官の指示である以上無視は出来ない。無人機である蝙蝠に似たデイモーンに命令行動を入力すると、一個小隊規模のデイモーンは一斉にガルガンティアに向けて移動していく。
　当然、ガンダムの……ガロードの妨害はあったが、数で勝っている此方の機体を乱戦の中で全てを撃ち落とす事など出来る筈もなく、残ったデイモーン等はガルガンティアに向けて一直線に突撃していく。

「そうだ。そのまま突っ込んで船を破壊しろ。自分に楯突いた者達がどうなるのかその目で見るがいい！」

愉悦に口元を歪めるギルター、次の瞬間訪れるだろう惨劇に胸を踊らせた時――――

一筋の閃光がデイモーン達を撃ち抜いた。

貫かれ、爆散していくデイモーンにギルターの目が点になる。何が起きた。混乱する彼に追い討ちを掛けるように、この艦の左側に配置した護衛艦が爆発した。

何が起きている。そう叫ぶギルターが次に目にしたのは、炎の中から現れる一機のモビルスーツ。ボロボロのローブを身に纏いながら炎の中に佇むその姿は……まるで、魔人。

「ま、まままさか……!?」

体の芯から震えが来て言葉がでない。恐怖で引き吊るギルター、そんな彼を見据えるように蒼いMSが此方を向いてカメラアイを輝かせる。その迫力に圧されたギルターは短い悲鳴を上げると共に、座っていた椅子から転げ落ちた。

◇

「奇襲成功。これで少しは連中を驚かす事が出来たかな？」
護衛艦らしき艦を一隻撃墜し、奇襲として確かな効果を確信したシュウジは、静まり返る戦場を見て満足そうに頷いた。
「それにしてもロイドさん達、随分と良い仕事をしてくれたな。まさかここまで機敏に反応してくれるなんて……まるで自分の手足みたいに動かせるぞ」
乗り込んだ機体の調子の良さに舌を巻き、自身の動きと寸分違わず連動して稼働する機体にシュウジは素直に驚き、そしてこれを仕上げてくれたロイドを初めとした博士達に感謝した。
これまでのコックピットとは違う新たな操作性のある機体、人と機械の境界線を極限にまで減らした新たなＭＳの可能性、それは今のシュウジにとって革新的とも言える代物だった。まだ起動して一時間も経っていないのに、既に自身の写し身の様に動いてくれるトールギス、その強靭さにシュウジは感動すら覚えた。
唯一評価に濁す点があるとすれば、機能性能の高さに体の方がついてこれていないという事だった。流石に病み上がりには堪える。暫く何も口にしていなかったからシュ

ウジは現在空腹状態という事もあり、機体性能の七割しか引き出せていない。付け加えて……。

「刀……か。俺、日本人だけど刀なんて使った事ないんだよなぁ。どうやって使えばいいんだ？　これ？」

機体の右肩に添える様に取り付けられた長刀。これまでグランゾンに乗っていた時は、斬るというより叩き潰す勢いで振るってきた。しかし、トールギスの有する近接武器は剣ではなく刀、その使用方法はこれまでとは明らかに異なっている。

ただ相手に叩き付ければ良いわけではない。高等な技術を要する武器を前に、どうしたものかな。と、折角の贈り物を手に剥らせているシュウジはふと、隣の艦に目を向ける。見ればその艦だけは矢鱈派手な装飾が施されており、明らかに他の艦とは異なった格好をしている。

……もしかしてここの指揮官が乗っている指揮艦かな？　取り敢えず撃破するなり脅すなりして連中の動きを封じてやろうと、もうひとつの武器であるライフルを向けると――――。

『ヒャッハァーッ!!』

周囲の無人機達を蹴散らしながら突っ込んでくる一隻の艦、５００ｍを優に超える戦艦の突撃に、シュウジは驚きで一瞬目を丸くさせた。

だが、激突する間際には正気に戻り、燃え盛る護衛艦からスラスターを噴かして離れ、突撃してくる戦艦を回避する。すると戦艦は護衛艦をお構いなしに轢き壊し、此方に向かって追尾してきた。

ほぼ直角に旋回する戦艦、その常識では有り得ない戦艦の機動性能に、シュウジは再びギョッと驚愕に目を丸くさせる。

だが、驚いてばかりもいられない。シュウジはトールギスの出力をスラスターに回し、全速力で戦艦から離れようとする。しかし、戦艦の速さも並みではなく、トールギス程のスピードではないにしても食い下がってくる。

離れろと、シュウジはライフルを使って戦艦を撃ち抜く。しかし、攻撃は通っても戦艦が勢いを弱める様子はない。寧ろ先程よりも速くなっている気がする。

どうやら、自分の目の前にいるのは随分とイカれた神経の持ち主らしい。迫り来る戦艦を前にしてシュウジはいきなりの窮地にやれやれと肩を竦め、戦艦から放たれる無数の砲撃とレーザー光線をサーカスの様に掻い潜るのだった。

対して戦艦を操る男、サイデリアルに属する特殊部隊〝ハイアデス〟の隊員は、目の前の常人ならざる動きをする機動兵器に興奮しきっていた。目の前にいるこの男は、これまで出会ってきたどの敵よりも強く、面白いと。

正直、男はここに来るまで失望していた。自分達の直属の上官であるストラウスとダ

バラーンの命令に従ってやって来たのは自分達に碌に反抗出来ていない翠の星、しかもマトモな抵抗も出来ない弱小船団への訪問と来たものだ。

オマケにあのいけすかないギルターのお守りまで任される始末。もしこの世に貧乏クジの星があるのなら今の自分の真上に瞬いているに違いない。そう、思っていた。

自分達の足元にも及ばない弱小船団への厭らしい攻撃、強いものと真っ正面から戦ってこそ生き甲斐を感じられるハイアデスの男が退屈で退屈で死にそうになった時、ソイツは現れた。

蒼い機体、その姿からしてＭＳと思われる機体の登場に、ハイアデスの男は胸が高鳴るのを感じた。燃え盛る護衛艦の中から這い出る様に現れた蒼い機体、デイモーン達を撃破した様子も護衛艦を破壊した所も速くて見えなかった。

――――強者だ。見た瞬間、男は蒼い機体の奴が強いと言う事に気付いた。向こうで戦っているガンダムも相当な手練れだが、純粋な強さではこの蒼い機体の方が別格だ。

その事に誰よりも早く気付いた男は己の愛機であるアルデバルに火を入れる。戦艦規模という巨大さに関わらず、機動兵器並の機動性と運動性を持つハイアデスの主戦力。

特殊な技術によって生み出された人艦一体の戦闘手段、その頑強な装甲と戦艦故の大火力、男はこれら全てを使って目の前の機体を倒すことを決めた。

長く出逢えなかった強者との邂逅に胸を高鳴らせる。それはまるで恋をしている様な感覚だった。

『そらそらどうしたぁ！　逃げるだけじゃ勝てねぇぞブルーマン！　もっと気合い入れろやぁ！』

挑発し、足を止めさせる様に促すも、向こうはそんな事など構わず、此方の攻撃を冷静に掻い潜っていく。

あぁ、なんて鮮やかなのだろう。これまで強い奴は全て上司達に取られていった。溜まっていくフラストレーション、そこで告げられるギルター（バカ）のお守り勧告、男はストレスでどうにかなりそうだった。

そこで出逢えた嘗てない強敵、焦らし焦らされ、漸く巡り会えた自身の宿敵。男は今この瞬間が、自分の全てを出しきる戦場なのだと悟った。

嗚呼、もっと見せろ。もっとお前の力を見せてくれ。未だ追い付けぬ想い人に焦がれながら、男はアルデバルの砲撃を断続的に撃ち続けていく。

永劫に続くかと思われた逃避行、しかしその時は突然訪れる。今まで逃げ続けていた蒼い機体が急に止まり、此方に向き直ってきたのだ。

一体なんのつもりだ　　男は疑問に首を傾げた時、蒼い機体はライフルを仕舞い、一振りの武器を手に取った。

刀、美しさすら感じ取れる一振りの刃、武骨なハイアデスの自分ですら見惚れてしまう刀身が霞に構えられる。その一連の動作で察した男は興奮のボルテージを最高潮に高め、そして振り切れていく。

『最高だ。まさかこんな辺境な星でこんな戦いに巡り会えるなんて……』

来い。そう挑発するようにカメラアイを光らせる蒼い機体を前に――――。

『最っっっ高にイカしてるぜ、お前はァァァッ!!』

男のテンションは爆発する。自身の体を通して昂るエネルギーはそのまま力となり、推進力となる。

小細工なしの真っ向勝負、２０ｍにも満たないＭＳが５００ｍを超える戦艦と打ち合おうとしている。そのイカれた考えに感化され、刺激され、男は今人生最高の瞬間に巡り会えた。

『そうだ、俺はこの時の為に生きて――――』

――――キン。

甲高い金属音を耳にした瞬間、男の視界は左右それぞれ上下に分かれた。

◇

俺は知っている、誰よりも速く刀を振る人を。
その人は誰よりも高潔だった。誰よりも誇り高く、誰よりもかっこ良かった。
そう、俺は知っているんだ。あの日、あの瞬間、トレーズさんが見せてくれたあの一撃を……その速さと重さも。
見ることも叶わない神速の一撃、けれど俺はあの瞬間確かに感じ取ったんだ。
――――思い出せ、お前の友人の一撃は鈍重だったか？
否。
――――お前の友人の一撃は、軽かったか？
否。
――――お前の友人、トレーズの一撃はお前の中に刻まれていないのか？
刻まれたから、受けきったから、分かるし、覚えている。見えなくても、分かるんだ。
イメージするのは、常に最強の友人。
余計な力はいらない。必要なのは、求めるのは斬ったという結果のみ。

迫り来る巨大な戦艦、機動兵器並みに俊敏な機動性と運動性を有する怪物、しかし今はそんな危機感すら必要ない。
巨大戦艦が間合いに入る。瞬間、全ての景色の動きが止まり……俺とトールギスは一つになった。

『最高にクールだったぜ、アンタ』
一刀の元で左右に両断されたアルデバル。爆発する戦艦の中、ハイアデスの男からの呟きが風に乗って飛んでいく。
爆散して散り逝く戦艦、その散り様を背にして――――。
「俺に……いや、俺達に」

〝断てぬモノなし〟

その１２１

？月？日

おはラッキー！　皆元気してるぅー？　久し振りの日記で若干テンションが上がっているシラカワ君だよー！　今現在、自分達はガルガンティアから離れて右も左も分からない海上のど真ん中に来ておりまーす♪

と、まぁ悪ふざけはここまでにして、少し真面目にここまで至るまでの経緯を説明しておこうと思う。まず始めに、自分ことシュウジ＝シラカワは病み上がりの躯でありながらも友人から託されたＡ・（アメイジング）トールギスと共にサイデリアルの尖兵と戦いこれを撃破、どうにか連中を追い払う事が出来た。

流石星間連合と呼ばれるだけあって連合の科学技術の高さに驚いた。５００ｍを超す戦艦が機動兵器張りの機動性を発揮するとか、最初は目を疑ったものだ。オマケに武装も並の戦艦の比じゃないとか、割とマジで焦った。アレが今後の自分の敵となると割かし憂鬱になる。

まぁ、ともあれ無事倒す事も出来たし、世話になったガルガンティアを守る事も出来たので、取り敢えず良しという事にしておこう。そうそう、追い払うで思い出したのだ

が、どうやら向こうの指揮官、ギル何とかって奴が自分の事を目の敵にしているらしいのだ。

らしいというのは自分に直接言いに来た訳ではなく、ガロード君を経由して伝えて来たからだ。何故自分に直接言いに来ないのかと疑問に思うが、恐らくその指揮官の策略の一つなのだろう。自分に姿を見せずに言葉だけ伝えてくるとは、かなりの用心深さの持ち主らしい。

戦いというのは情報一つによって左右される。ギル某は多分そう言った事を熟知した上で、敢えて自分に言葉だけという接触を果たして来たのだろう。サイデリアルの指揮官ギル某、恐ろしい奴！

けれどこれで一つ不安要素はなくなった。奴が自分の事を目の敵にするという事は、少なくともガルガンティアに手を出すことはないだろう。ああ言う手勢は策略家でありながら、激情家の一面も併せ持っている。……プライドが高いとも言うのかもしれない。その手の人間は偏に一つの獲物に対して貪欲になる傾向がある。根拠はないが自分は確信を持てた。

ブロッケンは考え過ぎでは？　と言うが、自分達の戦力の一つが失われた程度であっさりと退却する奴だ。確かにそれだけで判断すれば弱腰のヘタレだと思えるが、逆に言えば自分があの戦艦を撃破した瞬間、奴は自分達の敵だと正しく認識したという事に他

ならない。
恐らく次は自分達を倒すべき敵として襲ってくるだろう。奴の追撃部隊と接触する前にガルガンティアから離れた方がいい、そう思い至った自分達はブロッケンの乗ってきたと言う輸送機と共にガルガンティアを後にした。
本当ならお世話になった船団の人達に恩返しをしたかったが、何せ事態は急を要している。恩を返す為にまた戦禍に巻き込んでは、それこそ恩を仇で返すようなものだ。
急ぎ足で輸送機の発進準備をしていると、褐色肌が特徴の少女、エイミーちゃんと彼女の友人である二人の少女から餞別に食料や包帯、薬やその他日用品を幾つか貰えた。何でも助けて貰った事に対するお返しとかで自分に物資を寄越してきたのだ。
此方は巻き込んだ側というのに、なんと有り難い話だろうか。特にエイミーちゃんは怖い思いをした筈なのに自分に気を遣ってくれるとは……なんて良い子なのだろう。彼女と交際する奴はきっと幸福者だな。
そんなこんなで無事ガルガンティアから離れる事が出来た自分等は、取り敢えず東へ行くことにした。途中までガロード君に護衛して貰い、安全に進むことが出来た。
翠の星、そう呼ばれるもう一つの地球。自分達の頭上には二つの月ともう一つの地球が瞬いていた。

？月？日

翌日、翠の海を抜けて現在陸の上を往く自分達は、取り敢えず今日も東に向けて進むことにした。途中で変な海賊に襲われたりもしたが、まぁ特に脅威になる事もなく、適当にあしらって終わらせたのでそんな書く事はない。

それよりもまだ説明仕切れていない部分があるので、今日はそこら辺を書いていこうと思う。まず自分の愛機であるグランゾンについてだが、破損具合が酷く、修復機能が上手く作動出来ていない。恐らくは先の戦いのせいなのだろう。現時点ではとても戦闘に耐えられるとは思えない。

自分が直してやりたい所だが、グランゾン程の機体となると必要となる設備のレベルも必然的に高くなっていく。当然この輸送機ではそんな事は無理だし、ガルガンティアでもグランゾンを直せる程の機材を用意出来るとは思えない。

だから当分の間、グランゾンをこのまま放置するしかない。……情けない話だが、今の自分ではどうする事も出来ず、悔しいが今はグランゾン自身の修復機能に任せるしかないだろう。

或いはサイデリアルの拠点の一つでも奪えば進展があるかもしれない。優れた科学技術を持つ奴等の事だ。何かしらの手段にはなるかもしれない。

その間は自分自身でどうにかするしかないが……大丈夫だろう。寧ろ自分は今まで

グランゾンに頼りすぎていた。相棒を休ませてたまには自分の力のみで状況を打破して見せよう。まぁ、そうなるには問題は山積みなのだが。

次に俺自身の問題だが、記憶に関する以外特に問題はない。胸元にデカイ傷痕が新たに出来ている事以外目立った外傷もなく、手足も思い通りに動かせている。今まで眠っていた……いや、死んでいただけにやや体力が落ちていたが、何度もトールギスに乗っている内にそれも改善できた。トールギスに乗り込む時は最大限の性能を発揮出来る事だろう。

そしてその記憶についてだが、未だ思い出せない所が多い。何故グランゾンが大破しているのか、何故自分は死んでいたのか、何故蘇る事が出来たのか、思い出せそうで思い出せない。

けど、その中で幾つかハッキリとしている事がある。〝喜びクソ野郎〟日記に記されたこの単語、そしてこの単語に該当する人物。そいつだけは許してはならないと、奴だけはこの手で滅せよと、尋常ならざる怒りがふつふつと沸き上がってきてそれを忘れるなと本能が告げてくる。

そして……シオさん。彼女をサイデリアルから取り戻す。これもまた忘れてはならないモノだ。あの人は俺にとって大切な人の一人、泣かせてしまった事、心配させてしまった事、他にも沢山彼女に対して言うことがある。

以上の事を踏まえて大まかだが二つのやる事が認識できた。一つは喜びクソ野郎なる輩の排除、そして……サイデリアルの壊滅。

何だかシュナイゼルの頼みが序でみたいな扱いだが……まぁ、やる事は同じだから別にいいだろ。

大雑把になったが、目標が出来たので取り敢えず今回はこれで終わりにする。明日も早い、事態の進展に期待しながら眠ろうと思う。

◇

「いやー、こいつに色々書くのも久しぶりだな。いっそ新鮮な感じすらするな」

用意された寝床にて日記を書いていたシュウジは日記を掲げ、手にした手帳を見る。

随分と使い古された手帳だ。これまで自分はどんな想いでこの日記に言葉を書き綴っていたのだろう。

早く思い出したいものだ。未だ思い出せない記憶にもどかしさと楽しみを抱きながら眠りにつこうとした時……ふと、シュウジの脳裏にある疑問がよぎった。

「……そういえば、何で俺、この日記を持ってたんだ？」

尋ねる様に口を開くシュウジ、当たり障りのない筈の疑問、しかし何か引っ掛かる。そうは思っても日記はシュウジの疑問に応える事なく、静かにシュウジの手の中に収まっていた。

その１２２

？月？日

ガルガンティアから離れ、漠然な目的はあれど、具体的な案が思い付かないまま東を往く事数日、連日自分達はレジスタンスの人達対象で日雇いの傭兵紛いの事をしながら、どうにかこうにか食い扶持を稼いでいた。

相手をするサイデリアルの連中も殆どが無人機ばかりで、兵士の奴等は皆大した事はなく、日々連戦連勝だった。最初の時の様な巨大な戦艦とかウヨウヨいるものだと懸念していたが、どうやらサイデリアル全ての部隊に備わっている訳ではないらしい。

とはいえ、相手をしてきたのは奴等の中でも下っ端、末端の更に末端の様な連中だ。取り戻した拠点というのも大した規模ではないし、実際この程度は奴等にとってダメージにもならないだろう。

それにレジスタンスの人達から聞いた話だと、どうやらサイデリアルの主力部隊は蒼の星……即ち、もう一つの地球に向かっているようで、この翠の星には蒼の星程の戦力は割かれていない様なのだ。

だからといって一筋縄ではいかないのもまた事実、サイデリアルの主力一つで此方の星の一個大隊に匹敵する力を有している事を考えれば連中との差が嫌でも分かるというもの。それが分かるからこそレジスタンスの皆さんは慎重に行動しているのだろう。今回は自分達が偶々近くを通り、相手にしたから上手くいっただけであって、本当ならもっと使用される時間と被害が大きかった筈。

サイデリアルの力の底は未だ未知な部分が多い、全貌が明らかになるまでレジスタンスも自分達も慎重な行動を心掛けた方がいいのかもしれない。

しかし、サイデリアルが占拠しているとはいえ、不謹慎に思われるが個人的には随分と過ごしやすい環境だと思う。理由は自分の持つ仮面、自分のもう一つの姿である蒼のカリスマに関してだ。

これも日記を読み返して思い出した事だが、蒼の星……もう一つの地球で語られる蒼のカリスマは世紀のテロリストとして名を馳せており、地方によっては生きた伝説、或いはなまはげ扱いとして語り継がれている。

史上最高額の賞金首、世界戦力の半分を滅ぼした男、そこへ様々な尾ひれが付いて、世間では蒼のカリスマは絶対的な恐怖の象徴となっており、政府の間でも接触禁止（アンタッチャブル）の扱いになっている。

それが原因で殆どの人達には、蒼のカリスマは人々の間で恐れられているのだが

……ここにはそれがないのだ。この意味が分かるか？

最初は仮面のせいで怪しまれたりしたさ、けれどレジスタンスの人達に協力したり、怪我した人達の手当、壊れた建物の修繕、子供達の相手をしたり等の行動をしているにつれ、段々と受け入れて貰っていたのだ。

中でも仲良くなれた人からは蒼さんとフレンドリーに呼ばれたりした。もうね、ここでなら友達百人出来るのも夢じゃない。そう確信したねボカァ。

けれど、今自分のすべき事は友達作りじゃない。先を急ぐ以上、不必要な時間のロスはなるべく抑えた方がいい。本当に、本当に残念だが、彼等との協力関係は長く続く事はなかった。

名残惜しいがこれも旅人としての定め、けれど、もしまた彼等に会うことがあればその時は改めて友人関係になりたいものである。

？月？日

今日も今日とてしがない傭兵稼業、サイデリアルを追い出すために今回もレジスタンスの人達に協力を申し出た自分達だが、今回選んだ拠点は少しばかり勝手が違った。

〝レイライン〟　拠点を通して遥か地平線の彼方まで続く巨大な管の様なモノを、レジスタンスの人達はそう呼んだ。元々はサイデリアルの連中が呼称していたモノで、こ

のレイラインという奴はどうやらこの翠の星全体に及んでいるらしいのだ。
張り巡らしたレイラインはまるで星の血管、一体連中は何が目的でこんな物を作ったのだろう？　何か詳しい事は書かれていないか、自分は再び日記を頼りに記憶のサルベージを行い、そして見付け……いや、思い出す事が出来た。
〝ＺＯＮＥ〟　嘗て侵略者だったインサラウムが蒼の星に施した次元力の抽出装置。彼等は万物全てに宿る次元力は星の力から抽出される事が最も強力にその力を得られると考えられてきた。宇宙の中で最も巨大な生命体とされる星、そこから抽出される次元力は確かに強力で、中でも地球から抽出される次元力は他の星の比ではなく、それを狙って様々な勢力がこぞって集まってくる程だ。
何故地球がそこまで強い力が流れているのか、記憶の欠損もあって断定的とは言えないが、恐らくは星の並びに起因しているものだと考えられている。
これも日記に書かれた内容だが、スフィアと呼ばれる代物はいずれも星座の名前を名称にしたもので、そのどれもが地球から観測できる天体だ。地球と次元力とスフィア、これらの関係性は全く無いとは言えないだろう。これ等の問題は記憶を取り戻すにつれて解決出来るモノだと思う。
そして話は戻してこのレイライン、性質的に先のＺＯＮＥと似ている事から、これも恐らくは次元力を、星の命を吸い出すモノだと思われる。

しかもこのレイラインの場合、パイプの様に目的の所に送られる様に作られている。この点から見てもただ抽出するだけのＺＯＮＥとは違い、サイデリアルの技術力はインサラウムを上回っていると予想される。

ともあれ、これで次の目的地は決まった。レイラインの伸びる方向も丁度東に向いているし、自分達の次の目的地は必然的にレイラインの伸びる方角になった。

レイラインの上に建設されたサイデリアルの拠点はいずれも頑強な要塞だと聞く。恐らく次回は結構な激戦が予想されるだろう。

まぁ、それならそれで内側から壊せば良いだけだけどね。こう見えて自分、かくれんぼとか得意だし何とかなるだろう。ブロッケンの奴はやる気になっていたが、慎重のスタンスは崩さない方向で行こうと思う。

？月？日

……何だろう。結構な激戦を予想し、下手したら死ぬかもしれないと内心ビビってたのに呆気ない事の顛末に正直自分は気が抜けてしまった。

レイラインに沿って往く事数日、時たま襲い来るサイデリアルとその無人機を蹴散らしながら辿り着いたのは、見上げる程に巨大なサイデリアルの拠点だった。

これまでとは配備されている戦力も桁違いだろうと思って内部に侵入、内側から機能

停止にしてやろうと息巻いていたら……なんと、レジスタンスの皆さんがいたじゃああありませんか。

しかも何やら自分の事をご存知の様子、聞いてみると何でも凄腕の傭兵が西からフラッと現れ、東沿いに点在するサイデリアルの拠点を単独で奪い返しているという話が、あちこちに広まっているのだという。

いやぁ、まさか自分が凄腕とか言われるなんて夢にも思わず、この時自分は機体性能のお陰だなんて口が裂けても言えず、取り敢えずレジスタンスの人達の言われるがままにしていました。

そこで出会ったクラヴィアさん。聞けば彼女も記憶喪失の人であり、ここで不器用ながらもレジスタンスの人達と一緒にサイデリアル対策に尽力しているのだとか。

同じ記憶喪失仲間、という事で彼女から色々話を聞くことになった。まずはこのサイデリアルの拠点に付いてたが、彼女が言うには三人の凄腕パイロットの人達のお陰で奪う事が出来たのだとか。

その凄腕パイロットの名前を耳にして、自分の記憶が更に蘇った気がする。クロウ＝ブルースト、セツコ＝オハラ、ランド＝トラビス。三人ともスフィアの持ち主で、嘗てＺＥＸＩＳの所で侵略者達を相手に活躍した人達だ。中でもクロウさんとランドさんとはそれなりの付き合いがあった事も思い出している。

……いや、本当ならもっと上手く思い出せる筈なんですよ。実際日記を読み返していたら思い出す事もあるし、多分この日記を読み漁っていればもっと早く記憶は思い出せると思うんスよ。

けどね、日記の中にある人物の名前、特に二名程が、自分の中にある防衛反応を刺激して来るんだよね。ＺＥＸＩＳ、赤い髪、銃口、アイアンクロー、うっ、頭が……といった感じで、本能が一部の記憶の呼び覚ましを拒んでいるんだよね。

――――ま、まぁ別にいいよね。こうして話したりその人と会ったりすればちゃんと断片的にだけど思い出すし、ガロード君の時もそうだったし、こういうのは焦っちゃ駄目だって婆ちゃんも言ってた。多分。

そんな訳でクラヴィアさんとの会話でまた一つ記憶を取り戻した自分は思い切って彼女達にお願いをしてみた。内容は自分達を宇宙に上げて欲しいという事、マスドライバーもある事で可能ならば自分達を宇宙に上げて欲しいと率直にお願いしたのだけれど、クラヴィアさんはそれは出来ないと断ってきた。

いや、出来ないと断るのではなく、無理だと諦めるように促してきたと言う方が正しい。訊ねた所によるとサイデリアルの軍勢が翠の星の大気圏外付近に部隊を展開、翠の星から出たり降りようとしている者達の壁となって立ち塞がっているのだという。

しかもその指揮官がサイデリアルの幹部クラスらしいのだ。指揮官の名前はギル

ター、因縁のあるこの男の他にもう一人指揮官に付いている者がいるという。
名前はサルなんとか、サイデリアルの特殊部隊アンタレスの副隊長だとか。二人の指揮官が付いているのであれば、恐らく展開されている部隊はかなり分厚いのだろう。
確かにこれでは大気圏突破は難しいだろう。けれど、だからといって諦める理由にはならないし、自分達には蒼の星に辿り着く為の理由がある。
再三の懇願でどうにかマスドライバーの使用を許してくれたクラヴィアさんとレジスタンスの皆さんには感謝の念が絶えない。彼等の協力を無駄にしないためにも明日の大気圏突破、何としても成し遂げなければならない。
一応、策も考えてはいる。策と言ってもおざなりなもので酷く稚拙なものだけど……まぁ、無いよりはいいでしょ。
ブロッケンには明日こそ気合いを入れとけと言って今は休むように言い含んである。自分も明日の激戦に備え、早めに休む事にする。

その１２３

翠の星――――翠の地球と呼ばれる蒼の地球と対を成すもう一つの地球、大気圏外から僅かに離れた衛星軌道上のとある座標、そこではサイデリアルの大部隊が翠の地球に入る者を迎撃する為に、また脱出する者を阻む為に展開されていた。

「では貴方はハイアデスの副隊長の命令を無視し勝手な行動を取った挙げ句、彼等の預りの戦力を失い、オマケに尻尾を巻いて逃げてきたと、そう仰るのですね。ギルターさん？」

『……う、うぅ』

大部隊を統率する指揮艦に搭乗し、頬杖をつきながらモニターの向こうにいるギルターに事の顛末を訊ねているのは、サイデリアルの特殊工作部隊〝アンタレス〟の副隊長、サルディアス＝アクス。その風貌は歴戦の戦士でありながら雰囲気は柔らかく、掴み所のない不気味さを現していた。

刺々しい台詞とは裏腹に口調は柔らかく、まるで幼子を相手にするような口振り、しかしそれが癪に障るのか、画面の向こう側に映るギルター＝ベローネは目の前の上官に対して構うことなく、その表情を怒りで歪めている。

『あ、あの時は仕方なかったのです。相手は碌な武装もない弱小船団と思い込んでいただけで、事前な情報さえあれば戦価は出せていた筈なのです！』

「弱小と侮り、出せる戦力を惜しんだだけでしょうに……ま、良いでしょう。貴方の言う事にも一理ありますからね。死んだ筈の人間が甦るなどと、確かに予測出来る筈もないでしょうから」

『で、では！』

「ボスには私から報告しておきますよ。けどギルターさん、あまり失態は重ねないで下さいね。幾ら寛容（？）なボスでも限度ってモノがありますから」

サルディアスの笑みを含んだ最後の台詞に、ギルターは顔を青くさせながら頷く。サイデリアルの幹部、中でも各部隊の隊長はどれも恐ろしい力を持ち、特に自分達の属するアンタレスの隊長は、己の目的の為なら部下をも死地に追い込むことを厭わないとされている。

このまま失態を重ねれば自分もどうなるか判らない。上の立場を目指す以上ここで躓く訳に行かないのだ。

（私はこんな木っ端で終わる器ではない。反抗勢力を全て掃討し、いつかは幹部……いや、皇帝の座にも辿り着いてやるのだ！　貴様の立場も近い内に喰らってやる。そのニヤケ面をしていられるのも今の内だ！）

（――――なんて考えたりしてるんでしょうねぇ。ホント、分かりやすい人だこと）

モニター越しで思案するギルターの思惑を片手間で看破するサルディアスは、呆れた風に溜め息を溢す。しかし既に脳内で全宇宙の覇者になっているギルターの耳には入っておらず、気持ちの悪い笑みを晒している。

と、そんな時だ。ギルターとサルディアス、それぞれ互いの艦の索敵機能に翠の地球から此方に向かってくる熱源反応が感知された。

「大気圏内から高出力のエネルギーを感知、サイズからして輸送船と思われます」

「モニターに出します」

オペレーターからの報告と同時にモニターに映し出された映像、そこ映る輸送船を目の当たりにしたギルターはその表情を驚愕に、次いで憤怒の形相に染め上げる。

『おのれぇ、この短時間でここまでの侵攻を――――全砲門開けぇ！　あの輸送船を撃ち落とすのだぁ！』

「え？　ちょ、ギルターさん」

『撃てぇぇ！』

輸送船を通して思い浮かぶ忌々しくも恐ろしい蒼の姿、脳裏に刻まれた恐怖という感情を払拭する様にギルターは部下に主砲を撃つ事を強制した。一時の感情に支配され、本能のままに命令を下すギルターの頭には最早輸送船を撃ち落とす事しか頭にない。

当然の如くサルディアスの制止の声など耳には入らず、ギルターの搭乗する艦の主砲は輸送船に向けて発射。巨大な閃光を放ち、光に呑み込まれながら輸送船は爆散、大気圏を突破する前に輸送船は鉄屑となって地表へ落下していった。

『やった。ハハハ、ヒャハハハ！　やってやったぞ！　あの化け物を仕留めてやった！』

モニターの向こうで歓喜の声を上げるギルター、制止を無視し、勝手に攻撃した彼に当然思う所はあるサルディアスだが、翠の地球から脱出を計る輩を阻止するという任務の内容上、ギルターの行動は責められる事ではない。

寧ろ気掛かりなのは輸送船の方だ。もし本当にあの艦に乗っていたのが例の魔人だと言うのなら、何故このタイミングで脱出しようと試みたのか。蒼のカリスマ、かの魔人が報告にある通りの人物だというのなら、何か裏があるのではないだろうか？　それを確かめようにも既に輸送船は爆炎の中へ消えてしまっている。これでは奴の真意も分からないとサルディアスが嘆息したその時、煙となった輸送船――その向こうから突如として蒼い閃光が飛び出してきた。

「っ!?」

歓喜に震えるギルターと違い、即座に出てくる蒼い閃光に気付くサルディアス、周囲の機動兵器であるアンゲロイに迎撃の命令を出そうとするが、それよりも速く蒼い閃光は指揮艦の護衛に付いていたアンゲロイを手にしたライフルで撃ち抜き、サルディアス

の艦に取り付いた。

『ハハハハ……は？』

爆発し、撃墜された自軍の機動兵器を目にした事で漸く我に返ったギルター。モニターに映る友軍の艦、サルディアスの搭乗する指揮艦に取り付いている蒼い機体――――トールギスを目にした瞬間あの光景が脳裏に浮かんできた。

炎の中から現れる蒼、友軍の艦を討ち、更にはハイアデスの戦艦をも両断した規格外の怪物。それはギルターにとって最も恐ろしい存在として脳に深々と刻み込まれていた。

翡翠に煌めく双眸がギルターを射抜く様に見てくる。〝見つけた〟そう言うように双眸を光らせる蒼の怪物に、ギルターの思考は一瞬の内に混乱に突き落とされる。

『う、撃てぇぇ！　撃て撃て撃て撃てぇぇ!!　あの化け物を撃ち落とせぇぇぇ!!』

そこにいる恐怖を払う為にギルターはサルディアスの艦に当たるのを構わずに戦艦の艦砲射撃を開始する。正確な狙い撃ちもままならず、ただ闇雲に放たれる戦艦の弾幕。

当然、MSサイズであるトールギスに当たる事はなく、弾幕はサルディアスの艦を巻き込んでいく。通信でサルディアスが何かを言っているが、先程同様一時の感情に支配されたギルターにその声は届く筈はなく、事態は更に深刻化していく。

碌な指揮も出来ず混乱する戦線、統率するべき指揮系統が滅茶苦茶にされた以上、配下に混乱が感染するのは時間の問題で、当然蒼の魔人はその様子を見逃す事はなかった。

混乱する戦場、その中を縦横無尽に駆け巡る蒼い閃光、その尋常ならざる速さに反応する事も追い付く事も出来ず、迎撃しようにもこの状況では同士討ちの危険性まで出てくる。

未だパニックの淵にいるギルター、そうしている内に既に主戦力の約四割が撃墜されてしまっている。事態を重く見たサルディアスが珍しく声を張り上げ、混乱するギルターを止めたのはそれから数秒後の出来事だった。

『さて、この位でいいでしょう。……そこに乗っている指揮官に告げます。その艦から降り、今すぐ彼方の艦へ移動してください』

気付けば、ギルターの眼前には蒼の機体、Ａ・トールギス（アメイジング）がライフルを手に此方のブリッジに狙いを定めていた。

自身にとって最も畏怖する存在を前に腰を抜かしたギルターは、縋る様に隣のサイデリアルの艦に目を向ける。しかしギルターの艦砲射撃による弾幕でサイデリアルの艦はボロボロ、とても援護できる状態ではなく、オマケに向こうの艦のブリッジにはガルガンティアで見たサイボーグの男が、その手を機関銃に換えてサルディアス達に向けて

いる。
恐らくは最初に向こうに取り付いた際にあのサイボーグを艦内に送り込んだのだろう。手際の速さといい、目の前の怪物の強さと良い、紛れもなく今自分の目の前にいるのは先の戦いで猛威を奮った魔人なのだと、ギルターは漸くここに来て理解する。
しかし、これでも自分はサイデリアルの特殊部隊、アンタレスの小隊長だ。たかが人一人に脅された程度で頷く程、柔では――
『だ、誰が貴様のような輩に、こんな事をしてただで済むと――――』
『今すぐここで果てますか？　私はどちらでも構いませんが』
艦の砲塔の一部が撃ち抜かれ、再び向けられる銃口にギルターは失禁し、這いずり回りながらブリッジを後にした。

◇

？月？日

先のサイデリアルの防衛網を突破して二日、輸送船に変わり新たにサイデリアルの戦艦、それも指揮艦の奪取に成功した自分は損傷箇所も無事に修復し、今のところ問題なく蒼の星……いや、蒼の地球に向けて順調に進んでいた。

しかし、意外とあっさり上手くいったモノだな。指揮する相手がサル某とギルター＝ベローネというからもっと苦戦すると思っていたのだが……剰りにも呆気なくて、逆に罠ではないかと勘繰ってしまう。

輸送船からの奇襲も二度も通じるとは思わなかった。本来なら輸送船を敵陣の真ん中に突っ込んだ所を自爆させて一時的に撹乱し、その隙に脱出、最悪の場合Ａ・トールギス単機で逃げ出そうとしていたんだけどな。最初に撃ってきた事に驚きこそしたが、そのお陰で奇襲のタイミングが出来た訳なのだが……この艦に乗っていた指揮官は実践経験の少ない新人さんなのかな？

ともあれ、相手が下手な指揮官のお陰で助かった。彼がパニクッたお陰で戦線は瓦解し、自分達の付け込む隙も生まれたのだから、此方にとっては感謝しても良いぐらいだ。

ただ、敵艦に単身乗り込んでいたブロッケンは気が気でなかったみたいだけどね。何せ敵の同士討ちによって弾幕に晒されていたんだから、その心臓の悪さは迎え撃ってき

た白兵戦の兵士を相手するよりも凄いものだろう。

唯一気掛かりなのはギルター＝ベローネがいなかった事だ。直接面識を持った訳ではないから判断は出来ないが……もしかしたら何処かで自分達を監視しているのかもしれない。

奴が出てこない事に不気味さを感じるが、今ここで悩んでも仕方がない。今は警戒しつつも先に進もうと思う。

あ、因みに現在この艦の責任者……というか、艦長はブロッケンに任せて貰っている。アイツも一応は正規軍でいう一軍を預かった事のある元将校だし、間違った選出ではないと思う。

艦に残された物資も結構あるし、Ａ．トールギスの整備も暫くは事足りるだろう。……グランゾンの修復が見込める環境でない事が残念な所だが、この際仕方ないだろう。

クラヴィアさんの所の拠点でもグランゾンを直す環境には適さなかったし、やはり本格的な奴等の拠点を奪取する必要がありそうだ。その為にもまずは蒼の星――――蒼の地球に向かいたいと思う。

クラヴィアさん達の協力を無駄にしない為にも、頑張っていこう。

◇

「――――アンジェロ、サイデリアルからの要請（オーダー）が出た。出撃の準備をしておけ」
「ハッ！　了解です。……しかし、宜しいのですか？　連中に言われるがままで」
「なに、これも一つの交渉だ。サイデリアルが取り逃したとされる魔人、それを我々が捕らえれば彼等に対して一枚のカードになる」
　古めかしい屋敷の内部、そこから見える何処までも続く漆黒の宇宙を見て、仮面の男は薄く笑った。
「しかし、よもや死者が甦るとはな。彼もまた器として用意された存在だというのなら――――」
「大佐？」
「見せてもらおうか、蒼のカリスマの実力とやらを」

その１２４

翠の地球と蒼の地球、相対する二つの狭間にある宇宙空間、暗礁宙域とされるデブリの多い空間にて、目映い光が暗闇の宇宙空間を一瞬だけ照らし出す。
その宙域を往くのはＭＳ数十機によって編成されたネオ・ジオン軍、部隊の指揮官に指名されたハマーン＝カーンはその表情を怒りに歪め、自分にこの場を命じた男に悪態を付いていた。
『フル＝フロンタルめ、私を捨て駒に扱うか』
得意な口先で他者を丸め込み、一方的に自身をこの戦場に押し込めた赤い彗星の変わり身……いや、最早赤い彗星本人となりつつある男は、今やネオ・ジオンの総帥として自分達のトップに君臨している。
宇宙世紀の代名詞とも呼べる組織のトップ、総帥ともなれば自分を顎で使うことも可

能だろう。しかしてその実態は、翠の地球から圧倒的な力で蒼の地球に侵略してきた星間連合サイデリアルの末端、謂わば使い走り。自分よりも強い存在を相手に尻尾を振り、依存し、頼りにしなければ保てない現在のネオ・ジオンの体制に、ハマーンは不満を膨らませ続けていた。

しかし、だからと言って今の自分に何が出来る。あの時、地球連邦――Ｚ―ＢＬＵＥに敗れた自分に最早寄るべき場所もない。例え腐りつつあっても自分の居場所はネオ・ジオンにしかないのだ。

『……ふっ、私も奴の事は言えんと言うわけか』

『ハマーン様！』

自嘲するハマーン、そんな彼女に部下であるギュネイ＝ガスからの通信が入り、瞬時に思考を切り替える。どこの組織に所属していようとも今の自分はネオ・ジオンという組織の歯車の一つに過ぎない。歯車は歯車の役目を全うするまで、そう自身に言い聞かせ眼光を鋭くさせて頭上を見上げるハマーンの視界に、一機の蒼いＭＳの姿が映る。

報告にあった機体の発見にハマーンは瞬時に各ＭＳに指示を飛ばす。彼女の指示に従い散開を図ろうとするＭＳ部隊、しかしそれよりも早く蒼の機体が動き出した。

蒼い機体の相対線上にいたギラ・ドーガのパイロットは、自身が狙われている事に気付き装備したライフルを抜こうとするが、その最中に手にしたライフルを腕ごと両断さ

れ、ギラ・ドーガはその機能を停止、爆発の衝撃で頭を打ったパイロットは苦悶の声を上げて意識を失った。

開幕直後に同僚の一人が戦闘不能。その事実に困惑しながらも追撃を避けようと他のギラ・ドーガが蒼いＭＳに向けてライフルを乱射する……が、相対する蒼いＭＳはその尋常ならざる加速力と機動力を以て此方の攻撃を回避していく。

速すぎる。牽制とはいえ此方の攻撃を避け続ける蒼のＭＳの性能と、それを操る乗り手の操縦技術の高さに、遠巻きに見ていたギュネイ＝ガスは戦慄する。

あの蒼いＭＳはワザと此方の攻撃を寸での所で回避し、弾幕を撫でる様に回避しているのだ。通常回避とは相手の攻撃に合わせて行動に移すもの、しかしあの機体はあろう事か、此方の攻撃を見てから回避しているのだ。秒間何百発と飛び交う弾幕の中を……パイロットがニュータイプの素質は持っていない事は知っているが、やっている事はそれ以上の出鱈目である。

蒼い機体のパイロット、蒼のカリスマ……その存在は破界事変から世界に知らしめている。これが魔人の実力なのか、自分の知るトップエースと呼ばれる者達と同等、或いはそれ以上の技量を有している怪物を前に……。

『……嘗めるなよ、俺だって先の大戦を生き残ってきたんだ！』

ギュネイ＝ガスは折れそうな心を自ら奮い起たせて立ち直って見せた。あぁ認めよ

う。この男はアムロやカミーユと同じ自分よりも腕の立つパイロットだ。けど、それが負けていい理由に……折れていい理由にはならない。喩え今この戦場に立っているのがいけ好かない成り代わり(フル＝フロンタル)の思惑の通りだとしても、今の自分はネオ＝ジオンの兵士なのだ。

『いけよファンネル！』

ヤクト・ドーガの肩部サブスラスターから解き放たれる六つの小型な遠隔操作のビーム砲台、それぞれが意思を持つようにバラけながら蒼い機体に向けて飛び交っていく。全方位(オールレンジ)から断続的に繰り出されるビーム攻撃、その挙動の速さと苛烈さからファンネル搭載の機体は単機で一個中隊に匹敵する力を持っているとされている。

しかし、魔人の駆る機体はそんな全方位からの攻撃すらも回避していく。まるで後ろに目が付いている様に、本当にオールドタイプなのかと疑ってしまいがちだが、相手は魔人と評された怪物、これぐらいはやってのけるだろうとギュネイは寧ろ納得した。

ギュネイが魔人を追い、他の部隊のギラ・ドーガも彼に追随していく。弾幕を張りつつ相手を追い詰める物量を有してのゴリ押し。確かに機体の性能とそれを操る魔人の操縦技術は凄まじい。が、所詮は単機、数という力で対抗すれば戦術次第で対抗し、無力化する事も出来るのだ。

そして実際、彼の思惑は当たった。絶え間なく弾幕を張り続ける事で魔人の行動の範

囲を狭め、その機動性を活かしきれない状況に持っていく事に成功しつつある。途中で此方の思惑に気付いたハマーンもギュネイのやり方に賛同し、更にファンネルまで惜しみ無く出して魔人と蒼のＭＳを追い詰めていった。

だが、その最中で受けた此方のダメージも決して軽くはない。あれほどいたギラ・ドーガの数は僅か三機と減り、ファンネルも既に四基落とされており、ハマーンの愛機であるキュベレイのファンネルも半数近く撃ち落とされている。

奴の機体の持っている兵装は接近戦の長刀とライフル一丁のみ、撃てばほぼ必中のライフル、振れば必ず当たる長刀、此方の攻撃を掻い潜り彼方の攻撃は直撃する。挙動の激しいファンネルの動きに真っ向から追尾し、両断する。ギュネイから見てその光景は理不尽や不条理の類いにすら見えた。

たった一機を相手に出してしまった有り得ない損害、しかしその甲斐あって今ギュネイの手には千載一遇の好機、魔人とその機体に一太刀浴びせられる状況が訪れた。

繰り広げられる戦場、その舞台となっている宙域は障害物の多い暗礁地帯。度重なる攻撃に晒され、身動きを制限されてきた蒼のカリスマとその機体が遂に追い詰められたのだ。

蒼い機体の背後に迫る巨大デブリ、進行方向の一つが防がれ、他の場所へ行こうとする魔人を阻む残り僅かなギラ・ドーガとファンネル。

遂に身動きが取れなくなったところまで追い詰めた。ギュネイ＝ガスは言いし難い達成感に浸り、額から溢れでる汗に気付かない。他の部隊の連中もギュネイと同じ思いなのか、大物捕りを果たした事に喜びの声を上げていた。

だが、戦いはまだ終わっていない。相手は過去の大戦を単独で生き抜いてみせた怪物、隙あらば此方の檻など喰い破る事だろう。まだ魔人は本来の愛機である魔神の姿を見せていない、早いところ決着を付けようと、ギュネイがヤクト・ドーガの手に握り締めたライフルを彼奴の機体に向け――――

『下がれ！　ギュネイ＝ガス！』

『っ!!』

ハマーンの声に反応し、咄嗟に機体を下げる。同時に細切れに切り裂かれるヤクト・ドーガのライフルと腕。

何が起きたと唖然とするギュネイの視界に映るのは、デブリごと切り刻まれたギラ・ドーガ達とファンネルの凄惨な光景だった。見ればいつの間にか長刀を抜いていた蒼い機体が、その双眸を輝かせて此方を見つめている。

『まさか、斬ったのか!?　俺達を、デブリごと、一瞬で!?』

油断しているつもりはなかった。慢心している素振りもなかった。元より相手は此方の上を行く怪物だと悟り、始めから一切手は抜いていなかった。

なのに、気が付いたらこの状況になってしまっていた。最早速いとか遅いとかの次元ではない、何か別の力が作用しているとしか思えない状況にギュネイがパニックに陥った時、目の前の蒼の機体から通信が入ってくる。
『まさかここまで追い詰められるとは、流石音に聞くネオ・ジオンの精鋭、危うく落とされる所でした』
『な、何をっ！』
『君がこの部隊のエースですね。丁度良かった。君には聞きたいことがあります。少しの間私と共に来て頂きましょう』
通信から聞かされる魔人からの言葉を耳にした瞬間、全身に衝撃が襲い掛かりギュネイの意識は其処で途切れる事になる。ヤクト・ドーガの胴体にめり込んだＡ・トールギスの蹴り、それを受けたヤクト・ドーガは意識を失ったパイロットと共にその機能を停止させる。
『ギュネイ＝ガス！』
『おっと、ついてこないで下さいね。ハマーン＝カーン、貴女も気絶している部下達を放って戦闘行動を続けたくはないでしょう？』
連れていかれるギュネイをハマーンが後を追うが、蒼のカリスマから聞かされるその言葉に僅かに動揺し、周辺の生体反応を確認する。見ればどのパイロットも怪我こそは

していても死亡してはいない。その事実に不思議に思ったと同時に後方からの報告を耳にした時、ハマーンは蒼のカリスマの狙いを理解した。

『奴め、最初から狙いは時間稼ぎか』

後方で控える部下達から聞かされる、サイデリアルの指揮艦の宙域突破の報告、それは同時に蒼のカリスマの狙い……その答えを導き出していた。

何て事はない。奴は自分達の艦がこの戦闘宙域を脱出する迄の合間、単機で此方の足止めをしていたのだ。言葉だけにすれば簡単に聞こえる単純且つシンプルな内容、しかしその事を悟らせない様に振る舞うというのは口にするほど簡単ではない。下手に自身を追い込めば罠だと勘づかれる恐れもあるし、逆をすればそれは更なる増援を呼ばれる呼び水になりかねない。

上手く此方を引き付け、此方に追い詰めさせたと錯覚させる。戦いというのは力が拮抗するほどに長続きし、同時に相手の思考を麻痺させる。此方の人員を減らさなかったのもその一つ、助ければ助かる兵士達を作る事により、魔人はハマーンからの追撃を逃れる為の枷作りに成功したのだ。

オマケに今、奴の手にはネオ・ジオンの強化人間であるギュネイ＝ガスが人質になっている。時獄戦役で戦力が減ってしまっているネオ＝ジオンとしては、これ以上人員が減ることは避けたい所。

此方の事情に精通し、且つ利用する手際。そのやり方はまるで……。

『――――私に貸しを作ったと言うわけか。気に入らんな』

恐らく、あの男は本物の蒼のカリスマなのだろう。先の更に先を読む眼を持ち、此方に思惑を伝えさせる狡猾さ、そのどれもがハマーンにとって癪に障る出来事だが、同時に蒼のカリスマの復活が事実であることを認めざるを得なくした。

『奴が本物の蒼のカリスマならば、ギュネイの奴は大丈夫だろう。……全く、情けないな』

最後の台詞は誰に対してなのか、損傷した部下達の機体を回収しつつ、ハマーンは後方部隊に合流するのだった。

◇

？月？日

一時はどうなることかと思ったけど、案外どうにかなるものだね。一先ず越えられた

蒼の地球まで続く第一関門の突破に、俺は内心諸手を上げて歓喜する。
いやね、正直今回は焦ったよ。翠の地球から飛び出してここ二日ほど平穏だったからすっかり油断してた。突然鳴り響く警戒音、なんだなんだとブリッジに顔を出せば前方の暗礁宙域から多数の熱源反応、光学カメラで拡大するとネオ・ジオンのＭＳが隊を成して此方に接近してくるではありませんか。
しかも先頭に逐わすのは真っ白いキュベレイ。ネオ・ジオンの女帝ハマーン＝カーン様がいらっしゃるではありませんか。本当に二十代かよと疑いたくなる程の貫禄ある御方の登場に内心焦りで一杯でした。……個人的には現地球圏で一番怖いお人だと思ってますハイ。
そんな御方を筆頭に此方に向かってくるＭＳ部隊、このまま接近を許せば戦闘になることは自明の理、とは言え進路を変えようにも既に部隊を展開されている以上、補足されて追撃になる事は必須。蒼の地球で繰り広げられる戦いを予測するのならここは可能な限り損傷を避けて突破したい。
ならばどうするか……つーか、この場面を乗り越える為の手段はほぼ一つしかない。戦闘を回避するのが無理なら先に此方から仕掛けて時間を稼ぐしかないじゃない！（マミる並）
〝ハマーン様はおっかない人だけど、実は結構お優しい御方の筈作戦〟　きっと気に

入った部下には薔薇とかあげちゃうお人だと信じ、自分は行動を開始、先手必勝の勢いで仕掛けた。

つついたら来るわ来るわ弾幕の雨霰、オマケに其処へファンネルによる全方位の攻撃が加わるのだからさぁ大変、取り敢えずヒット&アウェイ（撃離脱）を繰り返しながら向こうの戦力を削り、どうにか時間を稼ぐ事に成功した。その途中で緑色のネオ・ジオンのエースに追い詰められたりと危ない部分もあったけれども結果的に作戦は成功、オマケにその緑色の機体……ヤクト・ドーガとそのパイロットの鹵獲にも成功し、結果を見れば万々歳な結果である。

現在ヤクト・ドーガは格納庫に保管され整備の最中である。流石サイデリアルの指揮艦ともあって設備は充実、グランゾンの修復こそは難しいけどＭＳを修理する程度には環境が整っている。蒼の地球の圏内に入る頃には万全な状態に戻っているだろう。

その為には出来ることをやるしかない。大変かも知れないが、やり遂げるためにも頑張っていきたいと思う。

その１２５

蒼のカリスマ――――シュウジ＝シラカワが翠の地球でサイデリアルから強奪した指揮艦内、ネオ・ジオンの尖兵たるハマーンから逃げ切り、次はいよいよ蒼の地球への突撃だという時、シュウジは今や側近になりつつあるブロッケンと共に艦内にある一室、応接室と思われる場所にて一人の青年と対面していた。

ギュネイ＝ガス。先ほどのハマーンの部隊と戦闘をした際に機体ごと鹵獲したネオ・ジオンの兵士、そんな彼を前にシュウジは仮面を取り、蒼のカリスマではなくシュウジとして彼の前に姿を現していた。

「……成る程、ネオ・ジオンの内情は今はそんな事に」

「我輩が言うのも何だが、それではまるでサイデリアルの使いパシリの様ではないか」

「まるで、じゃなく。事実その通りさ。ネオ・ジオンはサイデリアルの使いパシリに成り下がり、総帥たるフル＝フロンタルも奴等の傘下に入ることで身の安全を図ろうとしているのさ」

ギュネイから聞き出せた情報に吟味する様に思案するシュウジとは対照的に、ギュネ

イは自嘲の笑みを浮かべている。此方から訊ねた事とは言え、目に見えて落ち込むギュネイになんだかシュウジはいたたまれなくなった。
「そ、それにしても良く質問に答えてくれたね。君はネオ・ジオンの兵士なんだろ？　聞いておいてなんだが……本当に良かったのか？」
「本当に今更だな。――――まぁ、俺は俺なりに時獄戦役を通して色々考えていただけさ。あのＺ―ＢＬＵＥ（お人好し集団）に感化されたのかもな。一応、俺強化人間だし、感受性が人より高いから影響されたのかもしれない」
「だから、俺達に全てを話したと？」
「あぁ、序でに言えばアンタに付いていく事にも決めたよ。あそこまでボロクソにやられたんだ。敗者として勝者に従うってのが道理だ。……それに」
「それに？」
「正直今のネオ・ジオンのやり方には従えない。ハマーン様の下で働けていたから今まで我慢して来られたが……それも、もう限界だ。そこへ丁度アンタに負けてここへ連れてこられた。Ｚ―ＢＬＵＥに合流するのもなんか嫌だったし、ある意味タイミングが良かったと言えるのかもしれないな」
　どこか吹っ切れた様子で笑い、天井を仰ぐギュネイ。ここへ通した時……いや、コックピットから連れ出した時から静かだった彼の様子にシュウジ達は当初は戸惑っ

たが、どうやら自分の気持ちにある程度整理が付いたらしい。
時獄戦役の時にＺ―ＢＬＵＥと行動を共にした事がどうやら彼に少なくはない変革をもたらした様だ。以前の刺々しい印象とは違い、どこか落ち着いた様子のギュネイにシュウジも満足した様に笑みを浮かべる。
「というかさ、アンタってば死んだと噂されていた割にはピンピンしてるじゃないか。やっぱ噂はガセだったのか？」
仮面を取った事により素顔を晒しているシュウジに、今更ながらギュネイは怪しむ。が、別にシュウジが蒼のカリスマであることを疑問に思っている訳ではない。先の暗礁宙域で体験したあの恐ろしいほどの圧迫感、それは時獄戦役で遠巻きに見掛けたグランゾンの戦いぶりを通して見ても遜色の無いものだった。
ギュネイが疑問に思っている事はシュウジの死という話についてだ。何故グランゾンに乗っていないのかは甚だ疑問だが、時獄戦役の時、姿を隠して一時的に別の機体に乗っていた時があったという報告がある。
今回もカモフラージュ、知られたくはない相手から身を隠す為の工作なのではないかと思い、ギュネイは遠回しに質問を投げ掛ける。
「いや、ガセではないよ。確かに俺は一度時獄戦役の時に死んでいる。それは純然たる事実だ」

「……マジ、なのか？」
即答で返ってくるシュウジの返事に、ギュネイは額から汗が流れるのを感じた。背後に控えるブロッケンに視線を向ければ、それを肯定する様に頷く。
「じゃ、じゃあアンタはなんだってその……死んだりしたんだ？　アンタが死ぬような事自体俺達にとって信じられない話なのだが」
「それが思い出せなくてさ。一度死んだ影響なのか記憶が曖昧でさ。……全く思い出せないという訳じゃないんだ。強い衝撃を受けたり、時間を置けば思い出すこともあるんだ」
だが、自分が死んだ瞬間やその経緯、そもそも何故そんな事になったのかは思い出す事はなかった。日記を読めば分かるのではないかと思い決定的であると思われる項を開こうとしても、本能がそれを拒絶しているのか、中々読もうと思えないのだ。
拒絶、というよりまだ必要ではないという感覚。まだその時ではないという様に、その項だけ読む気にはならなかったのだ。
「まぁでも、こんだけ考えても思い出せないんだ。案外しょーもない理由でやられたりしたんだろ。背後からブスリとヤられたり……」
「いや、それはない」
「へ？」

「記憶を無くして自覚していないだろうが、腐ってもアンタは蒼のカリスマだ。世界を震撼させた世紀のテロリスト、そんなアンタがどこの馬の骨とも解らない奴の不意打ちくらいで殺せるなら、蒼の地球の戦力の半分を壊滅なんて出来る訳ないだろう」

時獄戦役の時、ギュネイは見た。燃え上がる熱海の街中、その中心でミケーネの神々を相手に真っ向から剣を打ち合う光景を。それはギュネイにとって偉業であり、また背筋が凍るほどの狂気を感じた。

蒼のカリスマ……シュウジ＝シラカワは強い。本人に自覚があるかは解らないが、その実力はどんなに低く見積もっても、パイロットの技量一つでもＺ―ＢＬＵＥの上位に食い込む程に。

インベーダーにもアンチスパイラルにも遅れを取らない程の力があるグランゾンとシュウジが、何処かで誰にも知られずにやられるなんて事は絶対にない。

グランゾンを倒す事ができるのは彼と同じ、蒼の地球圏最強の一角を担うＺ―ＢＬＵＥ位にしか思えない。だが、アンチスパイラルとの決戦に向かう際にグランゾンも同行していた筈だと、想像できない状況にギュネイが頭を悩ませている一方、シュウジの方も思考に没頭していた。

確かにグランゾンは強い。それこそアンチスパイラルを退け、当時アロウズの最強の戦力を一方的に壊滅させる程度には……。

ネオという切り札も得たことでグランゾンの力は更にイケイケになり、もう誰も手出しは出来ないと思われていた。

なら何故自分は死んだのか……。

（ギュネイ君は自分とグランゾンが侵略者に負けることはないと断言している。仮にそれが本当だとするならば自分は誰に、そしてどうやって殺されたんだ？　……まさか、Ｚ―ＢＬＵＥに？）

それはない。だって自分はＺ―ＢＬＵＥと共にアンチスパイラルの本拠地、隔絶宇宙に向かったのだ。何故共に戦う相手に殺されなければならない。彼等は一部を除けば比較的話の通じる人達だ。それこそ此方からいきなり仕掛けて来ない限り敵対することは――――。

「――――あっ」

カチリと、何かが填まる音が聞こえた。パズルのピースが填まった様に、機械仕掛けの時計に余っていたネジの使い処を見付けた様な……そんな、閃き的な音が耳に響いた。

瞬間、シュウジの視界が真っ赤に染まる。心の内側から沸き上がる感情に心が塗り替えそうになる。ぼやける視界、その中に浮かんでくるのは血塗れになって倒れ付しているリモネシアの人達。

笑い声が聞こえてくる。耳に入ってくる〝サルース〟の声、賛美の声を挙げる集団の奥にいるのは……自分の大切な人達に傷を付け、自分を彼等と戦わせた元凶の姿が口許を歪ませて――――

『あぁ、なんて喜ばしいのだろう』

そう言いながら奴は自分の眼前に手を向けて……。

『君に神の……至高神の祝福があらんことを』

「……ん？」

ふと気付けば周囲がやけに静かになった気がする。なんだと思い周囲を見渡せば、床に尻餅を付いたギュネイとブロッケンがいた。その表情は青褪めており、何だか腰を抜かしているようだ。

大丈夫かと手を差し出せば、ギュネイは戸惑いながらシュウジの手をとって立ち上がる。掌から伝わってくる汗の感じからして、どうやら彼は疲れている様だ。

「さて、そろそろ作戦開始区域に入る頃だ。ギュネイ君、疲れている所悪いけど頼らせて貰うよ」

そう言ってシュウジは応接室を後にする。それに続いてブロッケンも戸惑いながらも応接室を出てシュウジの後を置い、部屋にはギュネイ一人だけとなっていた。

ギュネイは思う。自分はもしかしたら余計な事をしたのかもしれない。自身の浅はかな言葉により目覚めさせてしまった魔人の感情、それは……〝怒り〟。

怒りに満ちた魔人が今後どんな風にして世界に関わるのか。ギュネイは圧倒的な恐怖に支配されていながらも、僅かな好奇心に胸を高鳴らせるのだった。

◇

――――――陣代高校。

サイデリアルにより蒼の地球の七割近くが占拠されつつある現在、現地球政府軍の奮闘によりどうにか平穏を保たれている日本……その学園都市の一画にある陣代高校の生徒達は今日も日々の平和を満喫していた。

放課後の学校で至るところから聞こえてくる生徒達の声、和気藹藹とした雰囲気に包まれ、今日もどうにか平和が続いてくれた事に感謝しながら、陣代高校の用務員である大貫善治は、中庭にある池で自身の大切な鯉に餌を与えていた。

「ふふふ、今日もカトリーヌの鱗が輝いておるわい。元気そうで何よりじゃ」

大きな口を開けて餌を喰らい水中を泳ぐカトリーヌを見て、満足そうに頷く大貫。嘗てある二人の問題児により一時は命の危機にあったカトリーヌだが、以前ここで短期に働いていた用務員の計らいにより作られていたトラップのお陰で、どうにか生き延びる事が出来た。

当時、まだＺ―ＢＬＵＥに所属したばかりのヒビキは、そのトラップの精密さに嘗ての兄貴分の事を連想した。ちなみにこのトラップによって学校内の殆どの生徒達が被害に遭う騒動が起きたため、宗介と一成、そして何故かヒビキの三人が撤去する事になったのだが、それはまた別の話。

ともあれ、経緯は複雑なれど今は元気なカトリーヌを見て大貫は満足だった。これで思い残す事は殆どない、後はサイデリアルなる不届き者等が早いところ地球から出ていく事を願うばかりである。

「なーにを澄ました事を言っとるんじゃ。そんなに気になるのならお主が直接叩き出せば良いだけの話じゃろうが」

突然と背後から聞こえてくる声、それはこの学校では馴染みの無い声であり、同時に大貫にとって忘れたくても忘れられないモノ。

狂喜と歓喜、沸き上がる感情を抑え、瞳孔の開いた眼を背後に向け……。

「――――まさか、そちらから出向いてくるとは思わなかったわい。久し振りじゃのうガモちゃんや」

「その様子じゃあシュウジ君から話は聞いておる様じゃな。息災で何より……尤も、殺して死ぬような男でもないか。――――のう、大ちゃん」

「可々々……」

待ちわびた来訪者、ある意味でカトリーヌよりも愛おしい好敵手（恋敵）との再会に大貫善治の口が三日月状に裂けるのだった。

その１２６

――――陣代高校、用務員室。普段は学校側が雇った用務員である大貫善治しか利用しない学校の一室、その有り様は生活に必要最低限の設備しか設けられない質素で簡素なモノ、しかしこの時、ただの用務員室である筈の部屋はどんな場所よりも危険な魔窟と化していた。

丸いテーブルに置かれた二つの湯呑み椀、そこに注がれた茶を訪問者であるガモンは冷ますように息を吹き掛けると、煽るように一気に飲み干した。

「ふう、良い茶葉じゃのぅ。体の内から暖まってくるわい」

「ここの生徒会長さんはやり手でのぅ。若い身でありながらこの学校の隅々まで気を遣ってくれる。老い耄れであるワシにまで気に掛けてくれるんじゃ、有難いことじゃて」

ガモンとは違い、一口ずつ味わいながら茶を呑む大貫。彼の口にする生徒会長という人物について思い出すガモンは、確かにアレはやり手だなと腕を組んで納得するように頷く。

銀髪でオールバックな生徒会長、学校の長というだけあって中々の風体を持つ彼の姿は、ガモンの眼を以てしても見事だと思わせた。あの堂々たる振る舞い、そして何者か解らぬ自分を学校の敷地内に通す懐の深さと思慮深さ、生まれた世が違っていれば歴史に名を刻んだ大物になれたかもしれない。それがガモンから見た林水敦信という人物の評価だった。

「……それで？」

「む？」

「一体どんな腹づもりでワシの所に顔を出した？　いつぞやの決着を付けに来たと言うのなら是非もない。……相手になるぞ？」

瞬間、用務員室の壁や天井に亀裂が入り、大貫が手にした湯呑み椀が粉々に砕かれる。眼を見開き、口を大きく三日月状に裂けた大貫から放たれる狂気と殺意が、嵐となって部屋に暴れ狂う。窓に皹が入り、部屋全体がギシギシと悲鳴を上げる中、ガモンは苦笑いを浮かべた。

「決着って、あの時の件はもうケリが付いた筈じゃろ。いつまで引き摺っておるんじゃお前は」

「ほう、愛しのキャロルを食い殺しておきながらまだそんな戯言を言い張るとはの。流石は人越拳神、人為らざる者は言うことが違うの」

「お前にだけは言われたくないわい。つーか、愛しのキャロルって……それ昔ワシが空腹で食べたゾウの事か？　動植物に映画女優の名前をつける癖、まだ治ってなかったんかい」

ゲンナリとするガモンは呆れた様にそう口にし、当時の事を振り返る。あの頃、自分達のいた世界が時空振動によって他の世界と融合する前時代の頃、当時まだ若かったガモンは修行と称して世界中を渡り歩き、紛争地域に自ら足を進め傭兵の真似事をしていた。

ある日運悪く食料を切らし、仕方ないと現地調達を目論んだガモンはその時タイミングよくアフリカゾウと遭遇。しかも突然変異した個体なのかその巨体は従来のアフリカゾウを大きく凌駕し、その強さと獰猛さは多種多様の生命体の脅威とされてきた。

しかしそんな事はお構い無しにガモンはアフリカゾウに喰い掛かる。一週間もの間動物性タンパク質を摂っていなかったガモンにとって、小山程の巨体を持つアフリカゾウは食料の山でしかなかった。

当然のごとく勝利したガモンは嬉々としてアフリカゾウを解体、捕食し、今日と明日を生きる糧を得た。

そんな時だ。当時巨大生物をペットにする趣味を持っていた大貫は肉の丸焼きになったアフリカゾウ（故キャロル）を目撃し、瞬時にその感情を爆発させ、怒りをその

ままにガモンへと襲い掛かったのだ。
こうして生まれた二人の因縁、５０年以上前から続くその関係は今も変わらず続いていた。……因みに、当時二人がいた国は内戦で荒れており酷い有様だったが、二人の争いに捲き込まれ、両陣営が壊滅的ダメージを受けた事で内戦は終息し、長らく続いていた紛争地域の一つが終わりを告げた。
その後も二人は出逢う度に死闘を繰り広げ、当時滞在した紛争地域をも捲き込んでいき、その時の軍人達からは銃器や兵器をものともしない二人を悪魔や鬼と呼んで畏れ、紛争に捲き込まれていた地元住民からは力で戦争を終わらせる彼等を神の化身と崇め、奉り、一時期は宗教にまで発展した。
そんな出鱈目な経歴を持つ二人、年老いていながら未だその覇気は衰えておらず、互いに真剣な眼差しで睨み合っている。
一触即発の空気。しかしそんな緊迫した空気も長くは続かず、ガモンがやれやれと溢した溜息と共に四散していく。
「分かった分かった。その件は後日改めて決着を付けるから兎に角今はワシの話を訊け、話が進まんじゃろうが」
「……むぅ」
危うくここへきた目的を忘れかけてしまったガモンは年老いた自分に軽く自己嫌悪

しながら大貫に座る様に促す。大貫もガモンの目的を聞き入れる為に渋々と座りなおすと改めてガモンに何用かと訊ねた。

「……単刀直入に言うぞ。大ちゃんや、最後にワシと組まないか？」

「……はぁ？」

半世紀以上続く因縁、その相手からのいきなりの誘いに大貫はあんぐりと口を開き、呆けた顔を晒してしまうのだった。

◇

――――蒼の地球、翠の地球と並ぶ燦々とした蒼く輝く水の惑星。その軌道衛星上に

はサイデリアルが設けた艦隊が、これでもかという程の数で以て大規模な防衛線を築き上げてきた。

『全く、ギルターの間抜けめ、余計な仕事を増やしてくれたものだ』

その艦隊の一画、指揮官を任されたバルビエル＝ザ＝ニードルは、己の愛機であるアン・アーレスのコックピットで忌々しそうに己の部下の名前を呟く。

翠の地球で起こした不手際、唯でさえストラウスに借しがあるというのに、その上錯乱して味方を捲き込んで攻撃するという大失態。本来なら自らくびり殺してやりたい所だが、生憎まだ奴には役割がある。

どう転んでも降格は免れない失態だが、サイデリアルは通常の軍組織とは異なり基本的に他の部隊へ干渉し合う事はない。故に部隊内に起きた不祥事は、その部隊の長が然るべき処罰を下せば特に何か言われる事はない。

そして今回バルビエルが此処にいるのもその部下の尻拭いをする為である。本来なら下の者がやるべきこの場所での防衛指揮、それがサイデリアルの幹部である自分に回ってきた事に、バルビエルは面白くないといった様子で悪態を付いていた。

ギルターには後でじっくりと言葉で圧力を掛けてやる。バルビエルが己の役立たずな部下にどう追い詰めてやろうかと考えてきた時、それは訪れた。

鳴り響くアラーム音、何事かとバルビエルが通信を飛ばすと、サイデリアルの兵士が

敵機が接近してきていると報告し、その様子の映像をアン・アーレスのモニターに回してくる。

全速力で向かってきているサイデリアルの指揮艦、それが報告にあった魔人が奪取したモノであると理解したバルビエルは全部隊に攻撃開始の合図を伝える。無限に広がる宇宙に無数の閃光がたった一隻の艦に向けて放たれた。

次々と閃光に貫かれる艦、その様子に違和感を感じたバルビエルは何かがおかしいと眉を寄せる。

たった一隻でこの艦隊に突っ込んでくるのは正気とは思えない。しかし別ルートから蒼の地球に降りようとする気配もない。

（まさか、ここで心中するつもりか？　噂の蒼のカリスマとやらも所詮はこの程度か）

例の魔神が使えないというだけでここまで短慮で愚かな遣り方を取るとは……

どうやら自分は魔人を買い被っていたらしい。

ならばお望み通りここで殺してやろうと、バルビエルは火の手が上がる艦に向けて止めの一撃を見舞う。

刃を鞭の様にしならせて繰り出す乱撃、その全てが魔人が乗る艦に直撃し、大規模な爆発がその宙域を覆った。

呆気ない。魔神の力が無ければこの程度なのか。バルビエルが呆れと落胆の溜息を

溢した時――――。

『――――猛羅』

『――――総拳突き!!』

爆炎の中から現れる無数の弾幕、それが何なのか理解するよりも早く、アン・アーレスは弾幕の中へ呑まれていった。

その１２７

「一体何を考えてんだあの男はァァァッ!!」

蒼の地球、衛星軌道上のサイデリアルの防衛戦線の中枢……即ち、敵陣のど真ん中で周囲からの大量の集中砲火の中、修理されたヤクト・ドーガのコックピットでギュネイは悲鳴に似た非難の叫びを上げていた。

上下左右、縦横無尽に降り注がれる砲火の嵐。コックピット内には危険を知らせる接敵信号（ロックオンアラート）が常時鳴り響いている。

背後から迫る敵戦艦の弾幕、それを避け、更には無人機やアンゲロイをライフルやサーベルだけで数体撃破する腕前は流石ネオ・ジオンのエースと言えた。

「何が敵陣を突破できる唯一の方法だ！　唯の特攻じゃないか！」

蒼のカリスマ――――シュウジ＝シラカワが提案した蒼の地球に向けての突入方法、事前にシュウジ本人から詳細に説明を受けたのだが、その内容は何て事ないただの突貫。ギュネイが言うように、特攻以外の何物でもない方法だった。

当然、ギュネイは反対した。何が悲しくてこんな自殺するような真似をしなくてはならないのか。しかしそんなギュネイの反論をシュウジは真っ向から論破する。

圧倒的戦力規模を有するサイデリアルに姑息な手段はかえって悪手に為りかねない。どの様な策を講じても通用しないのなら、いっそのことど真ん中からぶち抜くしかない。

相手は地球総軍を圧倒する物量を所有する星間連合、しかし、だからこそこの強襲は成り立つとシュウジは語る。

サイデリアルは良くも悪くも強大だ。そしてその強大さがある故に連中は此方を侮る傾向が強い。確かに正面突破は自殺行為だ。けど、だからこそ其処に活路がある。敵が強者且つ敵を侮る傲慢さを持つ事を前提の作戦……所謂、死中に活を見出す。という論法である。

暴論且つ出鱈目な作戦、しかし結果として作戦は成立した。ここまで自分達を運んでくれた艦を犠牲にした上での作戦は、現在進行形で今もシュウジ（出鱈目野郎）の視点では順調に進んでいる。

此方を侮った敵の虚を突いた作戦は功を奏し、艦の爆発も敵の撹乱に繋り敵陣の半分にまで突き進んでいる。だが、本番はこれからであり、更に増え続ける弾幕にギュネイは歯を喰い縛りながら堪え忍び、機体の制御に全神経を集中させている。

「お、おいギュネイ殿、もう少し緩やかに機体を動かしてくれぬか、目が、目が回るのであ～る」
「死にたくないなら少し黙ってろ！　一瞬でも動きを間違えれば蜂の巣なんだからな！」
コックピットに備え付けられた台、そこに生首状態で取り付けられたブロッケンから苦悶の声が溢れてくる。そんな事などお構い無しにギュネイは機体操作に集中する。
何故自分がこんなむさ苦しいおっさんを抱き抱えねばならないのか、押し付けてきたシュウジに怨み言を呟きながらギュネイは押し寄せる弾幕の嵐を掻い潜る。
（クソッ、こっちは死ぬほどヤバイってのに肝心のアイツは何処で何を……）
そう言って一瞬、ギュネイの視線は前方……いや、この場合下方にいる筈のシュウジのいる場所に向けられ、そして絶句する。
サイデリアルの幹部らしき機体と正面から殺り合っているＡ・トールギス。周囲を包囲されながらその上で幹部と互角以上に戦っているその光景に、ギュネイは唖然とした。
蹴り、斬り、撃ち、そして殴る。最小限の武器しかない機体でありながら、物理法則を度外視した軌道で動くＡ・トールギス。慣性制御の施されていない機体であんな滅茶苦茶な動きをすれば、中の人間は全身に掛かるＧに耐えきれず死に至る筈、それでも

尚ハチャメチャな軌道を描きながら敵を蹂躙するその姿は、まさに魔人と呼ぶに相応しいものだった。

奴の心配をするのは今この時を以て止めよう。自分の理解を超えた光景を前にして、ギュネイは自らの心が落ち着きを取り戻すのを感じた。

「う、うっぷ。我輩……吐きそう」

「吐いたらマジで外に投げ飛ばすからな」

◇

『よくも、よくも僕のアン・アーレスを殴り飛ばしたな！』

蒼の地球、大気圏に差し掛かり空気との摩擦で機体が急激に熱くなるのを感じながら、シュウジはモニター越しに見える毒々しい機体を前に次の一手について考えてい

た。
現在自分達のいる地点は大気圏と宇宙の間、敵陣の後方部分に位置している。A・トールギスは大気圏突入の事態も想定された機体だ。このまま落ちていけば難なく蒼の地球へ降り立つ事が出来る。
しかし、目の前の幹部らしき機体とそのパイロットがそれを許さない。――――何かある。アン・アーレスと呼ばれる機体から感じられる不気味な力の衝動にシュウジが警戒した時。
『お前は楽に死なせない。アン・アーレスの放つ蠍の毒で悶え苦しみながら死ねぇっ！』
パイロットの男が叫ぶと同時にアン・アーレスから煙が放たれる。赤黒く、禍禍しい色彩を放つ煙は周囲の味方諸共巻き込んでいく。
目眩ましのつもりだろうか？　いや、恐らくこの煙には何らかの仕掛けが施されているのだろう。何をするつもりだと疑問に思った瞬間、シュウジの体に異変が生じる。
『ンフ、ンフフフ。どうだい？　　蠍の毒の味は？　僕のアン・アーレスに搭載されたスフィアは〝怨嗟の魔蠍〟、その力は人の感情の中でも最も色濃い憎悪を増幅させ人の理性を崩壊させるモノ、これでお前は怒りと憎悪に支配された破壊魔になった』
オープンチャンネルで聞こえてくる魔蠍の男の声、挑発的で他者を見下したその声色は、聞くもの全てに苛立ちを覚えさせる。

しかし、魔蠍のスフィアの力によって精神が乱されたであろうシュウジからは何の反応も返ってこない。恐らくは僅かな理性で抗っているのだろう。しかし、スフィアリアクターの中でもサードのステージに至っている自分の力に抗うことなど出来る筈がない。

このまま怒りで発狂し、憎悪に支配されるのを眺めるのも良い。魔人と恐れられていようが所詮は唯の人間、噂の魔神もこの様子では大した事なさそうだ。

『このままお前を憎悪に支配され、周囲に破壊を撒き散らす化け物に仕立てるのも悪くない。……けど、残念ながら僕は忙しい身なんだ。悪いがここで終わらせて貰うよ』

最早勝負は付いた。魔蠍の男は自身の力によって憎悪の化身となった部下達を自身の機体であるアンゲロイごと操り、A．トールギスに向かって特攻させていく。自分にやられた事をそのまま返してやると言う意趣返しを含めたその一撃がトールギスに触れよう――。

――キン。

――とする前に、操られたアンゲロイ達は細切れとなって爆散、宇宙の塵となって消えていく。

『――――なんだと？』

気が付いたらその手に刃を手にしたトールギスを見て、魔蠍の男は驚愕に満ちた声を漏らす。自分の、アン・アーレスによる蠍の毒は確かに目の前の男を蝕んだ筈。蝕まれた精神が元の正常な精神に戻ることなど有り得ない。

ならば、どうして？　疑問と驚愕に打ちのめされた魔蠍の男が混乱すると、トールギスからオープンチャンネルで声が届いてきた。

『怨嗟……か、成る程、確かに憎悪は人の内にある感情の中で最も色濃い感情の一つだ。これに掛かってしまえば大抵の人間は自我を失うだろうよ』

『なっ、貴様、意識があるのか!?』

『だがな、生憎とその手の能力に対処する術を持ち合わせていてね。いがみ合う双子のスフィア、確かアレも人の心のバランスを崩す作用を持った能力があったっけな』

相手が人の心を惑わす力で理性を崩しに掛かるのならその基となる心を、感情を消せば良い。より簡単に言えば……ボーッとしていればいいのだ。０のモノにどれだけ掛けようとも０のモノは揺るがない。

尤も、様々な感情が渦巻く戦場でボーッと思考放棄をしろと言われても、そんな事が出来る人間は限られてくるが……。

自身の技の一つが通用しないことに怒りを募らせる魔蠍、その怒りと憎悪に呼応してアン・アーレスから力の流れが激しくなっていく。

『図に乗るなよ地球人が！　怨嗟の魔蠍の力はこんなものじゃないぞ！』

そう、自分の怒りはこんなものじゃない。嘗て味わった絶望、そこから涌き出てくる怒りと憎しみに比べれば目の前の魔人の感情などたかが知れている。

今度はスフィアリアクターの全力で人格を破壊してやる。そう息巻いて――――。

『――――おい』

『っ！』

瞬間、魔蠍は全身から血の気が引いていくのを感じた。

『さっき、俺を破壊魔にして周囲を捲き込む化け物に仕立てるとか言っていたが……舐めてンのか？　今更、周りに八つ当たりした程度で収まる様なら、とっくに俺の怒りは収まってンだよ』

スフィアの力による心の崩壊。その力は恐ろしく大抵の者は抗えず、されるがままになるだろう。それに抗うには心を空にして受け流す以外ない。

他に方法を模索するのなら、それは心を一色に染め上げる事だろう。何物にも惑わされず、揺るがない意思、それこそが正しくスフィアの力に対抗すべき人の力なのだろう。

だが、シュウジの場合は少し違っていた。揺るがない意思の力、確かにそう呼べるだろうが、今のシュウジの内に秘められている感情は実質一つしか存在しなかった。

〝怒り〟　スフィアに惑わされていたのではなく、そもそもそんなモノが必要ないほ

どにシュウジの内は怒りに染まりきっていた。それこそ、スフィアの力が干渉出来ない程に。

スフィアを凌駕するほどの怒りを内に秘めて、その上で制御しうる強靭な自我、その事実を前に……。

『……ふざけるなよ、僕よりも強い怒りだと？　僕よりも強い怒りを待っている上に、その上にそれを完全に制御できる自我だと？　そんな事、そんな事――――――あっっっって、たまるかァァァァあっ!!』

魔蠍の男、バルビエルはその毒々しい化粧の表情を憤怒に染め上げる。

『許せない、許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない！　僕よりも強い怒りだなんて、そんな事認めるもの――――』

『なに言ってんだよ、お前』

『っ!?』

スフィアの力を高め、全力の一撃を放とうとしたバルビエル。しかし、そんな彼よりも速く、魔人はアン・アーレスの懐に潜り込み。

『感情ってのは、自分の内にだけにあるもんだ。誰かに認めて貰うとか、そういう話じゃねぇだろ』

コツンと、トールギスの拳がアン・アーレスの胴体に触れ――――。

『っ、お前っ！』
『不動――――』
〝砂塵爆〟
『シュウジ……シラカワぁぁぁぁぁっ!!』
衝撃が、アン・アーレスごとバルビエルを貫いた。吹き飛んだアン・アーレスは怨嗟の叫びを上げながらそのまま地表に落下、その姿は見えなくなっていった。
『さて、こっちはこれで終わったな。あとは……』
『シュウジ＝シラカワぁぁぁぁっ!!』
コックピットに響き渡る涙混じりの悲鳴、それがギュネイのモノだと知ったシュウジは頭上を見上げると、そこには大量の残存戦力を連れたヤクト・ドーガがいた。
『お前、すぐこれをどうにかしろ！　俺、俺……もう無理』
『頑張るであるよギュネイ！　我輩も頑張……あっ、やっぱ無理、もう限界……出る』
『やめ、ヤメローッ!?　ここで今吐くのは本気で止めろ！　ゲロまみれの最期とか嫌すぎるぅぅっ!!』
通信から聞こえてくるギュネイ達の声、元気そうな二人に笑みを綻ばせながらシュウジはヤクト・ドーガを掴み、戦場から離脱した。

トールギスの常識外れの速さにサイデリアルも追い付けず、遂にはその姿を見失う。
蒼いトールギスが空を翔るその姿、それはまるで……。

「……流れ星？」
「ラトロワ大佐、何してるんですかぁ？」
「荒熊さんが待ってますよぉ」
「あぁ、済まない。今行く」
暗闇を切り裂く、流星だった。

その１２８

「なんと、大貫殿が学校を去っただと!?」
「生徒会長の話によれば、休職届けを出された様だ。それと大貫さんがいない間、俺達が用務員として働いてほしいだそうだ」
「それは構わないが……しかし、一体何故この御時世に？　今この星はサイ何とかの連中に攻められているのだろう?」
「分からん。が、頼まれた以上やり遂げるべきだろう。シュウジさんが退職された後、我々を鍛えてくださった御方の頼みだ。竜馬さんもここの所忙しそうだし、学校の負担を軽くさせる為にもやらない訳にはいかないだろう」
「うむ、そうだな。では早速生徒会長の所に赴き詳しい事情を聞くとしよう」
「……なんか空手部の人達、随分気合い入ってるね」
　陣代高校２年４組。放課後の教室、個性的な学生が多いことで知られるこの学舎にお

いても、一際異質な三人の空手部員。そんな彼等が真剣な表情で教室を後にする光景を常磐恭子（ときわきょうこ）がデジカメに収める。

「アイツ等が暑苦しいのは何時もの事だろ？　そんな事よりヒビキだよ、アイツ一体どうしたんだよ、ここの所学校休んでばっかりじゃねぇか」

「相良君もそうだけど最近のヒビキ君、様子がおかしいよ。かなちゃん、何か知らない？　このままじゃヒビキ君、本当に進級出来なくなっちゃうよ」

「え？　わ、私？　え、えぇっと……」

突然恭子から話を振られた事に千鳥かなめは狼狽する。今ここにはいないヒビキ、何故彼がいないのか、その理由を知っているかなめは、その事を口にするのを躊躇った。

普段なら女子高生らしからぬ苦笑いで誤魔化す彼女だが、この時は本気で躊躇った。そんな珍しい反応をするかなめに恭子が疑問を感じた直後、今まで黙っていた相良が口を開く。

「――――今、アイツの周りはちょっとゴタゴタしていてな。それが終わったらきっと戻ってくる。……いや、戻ってこさせる」

「相良？」

「だから、もう少し待っていてくれ。プリント、感謝する」

明らかに説明不足な内容、しかし相良の口から感じ取れる重々しい口調に、恭子とオ

ノDも口を出せずにいた。一気に教室内の空気が重くなる。遠巻きに見ていた甲児やアルトも、ばつが悪そうに俯いている。

言えない。言える筈がない。ヒビキが兄として慕っていた者を自らの手で殺めてしまったなど、どんな顔をして言えばいいのか。息苦しささえ覚えてしまう教室内の空気、そこから逃げるように宗介は教室を後にした。

そんな彼を呼び止めようとするも、恭子の手は虚しく空を切る。呼び止めようとしても事情を説明されていない自分達には、一緒に悩むことすら出来ない。

どこか自分達の日常が壊れていくような、そんな錯覚を覚える。寂しくて教室の空気を変える為に無理して笑う恭子、そんな彼女を見て短くごめん、と言葉を残してかなめも宗介の後を追う。

教室を出て廊下の突き当たり、階段を上った所にいた相良に追い付いたかなめ、本来なら何か言うべきなのだろうが、今の彼女には彼に掛けてやるだけの言葉は見付からなかった。

「……俺は、間違っていたのだろうか」

「宗介？」

「あの時、俺はヒビキを、奴の下へ行かせるのを止めた。奴の機体の爆発から……守る為に」

「……」

時獄戦役、アンチスパイラルとの決戦の裏で行われたグランゾンとの死闘。それは当時のＺ―ＢＬＵＥを壊滅状態にまで追い詰める程で、多くの機体は大破状態にあり、彼に勝てたのは奇跡としか言いようがなかった。

その中でもヒビキの乗るジェニオンは損傷が酷かった。当然だ、天地開闢の一撃を単身で受けながら突き進んだのだ。今でこそスフィアの力で修復され、完全に直ってはいるが、当時はほんの少しの衝撃で崩れそうな程にボロボロに朽ち果てていた。

そんな状態でグランゾンの爆発に巻き込んでしまったら今度こそヒビキは、ジェニオンと彼のパートナーである西条涼音も巻き込んで、蒼のカリスマ諸共死んでいただろう。

あの時の宗介の判断は間違ってなかった。間違っていないが……その結果、ヒビキを更に追い詰めてしまった。自身の手で兄貴分を殺めた事実、それが彼の根っこの部分で痼として残り、今も彼は苦しんでいる。

そして現在、彼は敵を倒す為の機械になりつつある。感情も不安定で、碌にスフィアの力を引き出せず、自身を痛めつけ続けている。

涼音のフォローで気持ち的に何とか持たせているが……それも、いつまで続くか分からない。アムロ大尉とカミーユは何か心当たりがあるらしく、ヒビキと接触を図ろ

うとしているが、強く心を閉ざすヒビキに彼等の言葉が届くことはなかった。

――見ていられなかった。自身が親友と認めた男が苦しみ、日増しに堕ちていく様を見るのが。自分の時は散々助けて貰っておきながら、その礼を返すことが出来ない自分の無力さが……堪らなく悔しかった。

あの時、ヒビキを止めた事は間違っていないと今も思う。だがそこから先、どうやって彼を奮い起たせればいいのか分からない。嘗て自分もザイードというヒビキにとってのシュウジ（兄貴分）を手に掛けた事がある。

だが、ヒビキと自分とでは状況が違いすぎる。彼は元々は一般人で自分は傭兵だ。育ってきた環境やそれに対する心構えというモノがまるで違う。

やはり、自分には普通の学生というのは無理なのだろうか。下された命令のまま命を奪ってきた自分と、平穏を生きてきた彼等とでは……。

堂々巡りの思考、泥沼に嵌まりつつあった思考の海でふと軽い衝撃が走った。馴れた傷みと衝撃により思考が強制的に止まり、現実に帰ってきた宗介は頭を擦りながら振り返ると、ハリセンを手に明るい笑みを浮かべる千鳥かなめがいた。

「こーら、またムッツリな顔をしているぞ」

「千鳥……」

「アンタが考えた所で、どうせ碌でもない事になるのは目に見えているんだから、いっそ

止めときなさい」
「しかし、それでは……」
「ヒビキ君に貸しがあって、負い目があると感じるなら、まずは自分に出来る事を探す事から始めなくちゃ。戦場でも何でもそれは同じの筈でしょ？」
「それは……そうだが」
「だったら、ヒビキ君の為にまずはプリントを持って行く！　友達が留年するなんて嫌でしょ？」
「……そうだな。その通りだ」
「卒業するなら、みんな一緒に……留年二人を持ったクラスの委員長なんて私の印象にも影響してくるんだから、しっかりしなさい」
「最後の台詞が無ければ、素直に賛同できたのに……」
　ガハハと笑うかなめに宗介はゲンナリとした様子で俯くが……先程まで胸中を占めていた嫌な空気は既に抜けきっていた。
　相変わらず、ハチャメチャな人だ。そう思いながら宗介は手にしたプリントを手に階段を下りていく。
（……ヒビキ、皆はもう将来のことを考えてそれぞれ行動に移しているぞ。お前は何時まで其処で燻っているつもりだ）

この場にはいない親友の事を想う。……そんな時、宗介の通信機器に緊急事態を報せるアラームが鳴り響く。

見れば端末に書かれているのは出動の二文字、教室に視線を向ければ甲児やアルト、さやか達が真剣な表情で教室から出ていく。その顔は戦士の顔となっていた。

「済まない千鳥、急用が入った」

「うん、気を付けて」

「問題ない。帰ったらプリント答案の答え合わせを頼みたい」

甲児達と共に走り行く宗介の後ろ姿、その光景を忘れないように、かなめは寂しげな表情で見つめ続けていた。

◇

新地球皇国軍、ラース・バビロン。サイデリアルの最重要拠点にしてサイデリアルの皇帝が住まう居城。
その玉座にて皇帝の前に一人の女性が連れ出されていた。全身を甲冑に身を包んだサイデリアルの最高司令官、その後ろに立つ女性に向けて皇帝は口を開く。
「お前が、シオニー＝レジスか？」
「……」
「お前には幾つか聞きたいことがある。なに、話さないからと言ってその命を奪うつもりはない。私は……ただ知りたいのだ」
「……何を、です？」
「シュウジ＝シラカワ。我が盟友であり同じ次元の将だったヴァイシュラバを討ったという彼の者の事、その全てを……」

◇

――――蒼の地球、某所。

「おら早く立て！　貴様らは我等サイデリアルに選ばれた貴重な人材だ。死にたくなければ大人しく言うことに従え！」

サイデリアルの苛烈な侵略攻撃によりその支配下に墜ちた区域、政府軍の戦力もマトモに通じず、サイデリアルの圧倒的な攻撃に成す術なく侵略された町、そこに住まう人々は毎日サイデリアルの兵士によって奴隷のような扱いを強いられてきた。

大人も子供も老人も例外なく強制労働させられ、倒れても鞭を打たれ、決して休まる事を許さなかった。

ある日、やって来たサイデリアルの輸送機、その中で行われた適性診断が終わると、サイデリアルの兵士は下卑た笑みを浮かべてこう言った。

「喜べ諸君。ここにいる君達は全て皇帝陛下に認められた存在、この艦に乗っていけば晴れて諸君は皇国軍の人間、サイデリアルの臣下として生きられる事を約束されるだろう」

この輸送機に乗る者達は認められた。これで過酷な強制労働から解放される。家畜

の様な扱いから抜け出せると知った市民は歓喜の声を上げた。
　そんな中、一組の母子が輸送機から抜け出そうとしているのを兵士の一人が発見、銃口を彼女達に突き付け、止まるよう強制する。
「貴様、何のつもりだ？　皇帝陛下のご意志に背くつもりか？」
「わ、私はどうなっても構いません。だからお願いします。息子だけは、息子だけは見逃してください！」
　幼い息子を後ろに隠し、必死に懇願する母親。彼女は知っているのだ。皇国軍の都、ラース・バビロンに連れていかれた者は全員生きて帰って来ることはない事を……。
　せめて息子だけは其処から逃がさないと。土下座する勢いで頭を下げ、必死に見逃してくれる様頼み込む女性、しかし。
「皇帝陛下の寵愛も理解できぬ愚か者が！」
　サイデリアルの兵士は母親の必死な願いを踏み躙り、女性の顔を蹴り上げた。
「あぐっ!?」
「お母さん！　この、ヤローッ！」
　最愛の母が踏み躙られ、蹴り飛ばされ、血を吐いて倒れ伏す。その光景に怒りを爆発させた少年はその感情のままに武装した兵士に殴りかかる。

子供である少年では兵士である奴等に敵うはずもなく、少年の渾身を込めた掴み掛かりは兵士の蹴りによって無惨に突き飛ばされる事になる。
「……反抗が過ぎるな。良いだろう。そんなに我等に歯向かいたいのであれば先ずはお前を殺し、見せしめにするとしよう」
「や、止めて、子供には手を出さないで！」
息子に銃口を向けられた事により母親の顔に恐怖と絶望が貼り付けられる。彼女にとって息子は希望そのもの、それを奪わないで欲しいと、母親は痛む体に鞭を打ちながら息子の下へ這っていく。
対して少年は目尻に涙を浮かべ、恐怖に抗いながらも兵士を睨み付けていた。恐怖に負けない強い意思、それが何なのか兵士が疑問に思った時、少年の口からある者の名前が紡がれる。
「お前達なんか、お前達なんか、今に蒼のカリスマがやって来てブッ飛ばしてやるんだからな！」
蒼のカリスマ。その名を口にした少年の瞳は何処までも透き通っていて、強く輝いていた。彼の者の登場を信じて疑わない少年は、サイデリアルの兵士達を射抜くように睨み付ける。
僅かに訪れる静寂、誰かが蒼のカリスマと反芻した瞬間、輸送機内に兵士達の笑い声

が機内に響き渡った。
「コイツは驚いた。まさか死んだ人間を信じる奴がいるなんてな。それもこんな子供が」
サイデリアルの兵士が笑っている。その様子に何も言い返せない少年は目尻に溜めた涙を流しながら、バカにするなと声を出して叫んだ。
確かに、蒼のカリスマはテロリストだ。世界はそれを周知の事実とし、その全容を明らかにすることを頑なに拒んだ。
世界が蒼のカリスマという存在を危険と断じた。数々のテロ行為を行い、世界政府に脅威をもたらした世紀の大悪党として。そして彼はアンチスパイラルとの決戦で死亡したと報じられ、それが真実として受け入れられている。
だけど、少年は知っている。蒼のカリスマという人物は本当は誰よりも強く、優しい人なのだと。――――破界事変の頃、当時次元獣によって家を焼かれ、町を壊され、もうダメかと思われた時、彼は魔神と共に駆け付けてくれた。
『お母さんを守ってたのか。……少年、君は強いな。その気持ち、無くすなよ』
世界に敵視されながら、人々に恐怖の象徴として恐れられながらも誰かの為に戦い続けた。少年にとって蒼のカリスマはＺ―ＢＬＵＥよりも格好いい、ヒーローそのものだった。

だから、少年は信じてる。きっといつかあの人はまた困っている人の為に戦ってくれることを……。

「まぁいい、子供一人いなくなった程度、どうという事もあるまい。……やれ」

「だめ、ダク君逃げて！」

だから、自分も戦う。小さくても、弱くても、この恐い人達から逃げないという自分の戦いを。

「僕は、お前達なんかに……負けない！」

「やめてぇぇぇっ!!」

引き絞られる引鉄、母親の絶叫が機内に響き渡り――――。

「よく吼えた。少年、この戦いは君の勝利だ。――――何故ならば」

そいつは現れた。

白いコートを靡かせ、蒼い仮面を被り、兵士の銃身を握り締めたその者は、残った片方の拳を兵士の胴体に捩じ込ませる。

衝撃に貫かれ、勢いよく吹き飛ばされた兵士は、後方に控えた他の兵士諸共、機内の壁に叩き付けられる。
その光景を目にしたとき、少年からは滝のような涙がこれでもかと流れ落ちた。

さぁ、侵略者どもよ。超常の力を持つ怪物どもよ。今のうちに策略策謀を張り巡らせるがいい。ここから先、お前達の企みは何一つ思い通りになることはない。
――――――何故ならば。

「私が来た」

第三次スーパーロボット大戦Ｚ～連獄篇～
完結。

予告

――――ねぇ、覚えてる？　ここで私、アンタに初めて歌を歌ったこと。
冬の寒い日、暗闇の中、この公園で初めて歌を歌ったの。
舞い落ちる雪、吹き抜ける風、スポットライトの代わりに降り注がれる公園の街灯、観客は……アンタ一人だった。
寂しいとか、惨めなんて思わなかったわ。あの頃の私はアンタを笑顔にしてやるって気持ちで一杯だったし、何より――――楽しかった。
あの日から私の全てが決まった。私の歌を聴いて、元気になったアンタを見て、私はアイドルになる事を決めたの。誰かを笑顔にする為、歌を聴いてくれた人達を元気にしたいから……。
あの日、私の夢は決まった。アンタのお陰で私はこの道を進むって決めることが出来た。
だから修司――――聴いて、他の誰でもない。アンタの為に作った私の……矢澤に

このアンタに贈る最後の歌を。

多元の世界。破界と再世、時獄と連獄、度重なる戦乱の果てに到達する新たな次元。
最終にして究極。破界から続いてきた異邦人、シュウジを待つ最後の戦いの舞台――
――その名は。
《天獄》
掃滅せよ、果てなき天の獄炎を。
「蒼のカリスマ、シュウジ＝シラカワ。決着を付けるとしよう。君と僕のこれまでの因縁に、この神話の果てで君の罪（Sin）を裁こう！」
「お前は危険だ。故に……排除する」
「ハッハァ！　こんな良い男を前に余計な言葉は無粋さね。見せてやるよ、アタシらハイアデスの戦い方って奴を！」
「シュウジ＝シラカワ、お前だけは、お前だけは僕の憎しみで呪い殺してやる！」
黒き死神、スフィアリアクター、邪悪なる神々、戦乱は加速し、軈て戦いは全ての並行世界を巻き込んでいく。

そして、その果てに待つ絶対なる者。根源的災厄、宇宙を滅ぼす大災厄を前に、鋼の勇者と魔人は最後の戦いに挑む。
「人間では絶対に辿り着けない極致」
「我々は其処にいるのだ！」
見下し、嘲笑う天の遣い。重力の魔神よ、その力で全てを捩じ伏せろ！
嘗てない規模、多元世界最大最後の戦いが、今、始まる。
そして、その果てに突き付けられる最後の選択。
「さぁ、選びなさい。我が半身シュウジ＝シラカワよ、悠久なる安寧か、永遠の孤独か……」
「……俺、ずっと考えてたんだ。元の世界に帰ったら、何がしたいのか」
第三次スーパーロボット大戦Z～天獄篇～
「――――答えは出た。ありがとうにこちゃん。俺はこれからも……頑張っていけるよ」
『G』の日記、シュウジ＝シラカワの多元世界最後の物語が……始まる。

『私がアナタを抱き締める。私がアナタを――独りにしない』
『アナタの想い、アナタの願い、抱き締めて、包みたいから――私がアナタを抱き締める。だから……負けないで』
負けないよ。シオニーさん、俺は絶対に勝ってみせる。だから……信じて下さい。
『さぁ、友よ。　今こそ我等風となり、光を超越(ごえ)て駆け抜けよう』
あぁ、アンタと一緒なら何処までだって駆け抜けてみせるよ。だから、側にいてくれ、トレーズさん。
『ここに至って、最早言葉は不要。シュウジ＝シラカワ、見せてみろ。この崩壊の中で唯一貴様が持つ命の輝きを！』
分かってるよアンスパさん。アンタの想いも乗せて行くから、手、貸してくれよな。
『分かってるんだろ？　だったら、後は突き抜けるだけだ。ここが正念場だ。気合いを入れろよ！』
当然、最後までキタンさんの蹴りに世話になるようじゃあ、格好つかないもんな。
『テメェの選んだ道だ。振り返るんじゃねぇ。歯を食い縛り、突っ走れ。なぁに、お前な

ら出来る。信じろよ』
信じてるさ。だから、店長も……信じてくれ。
『いやぁ、大変だねぇシュウジ君も。ボッチの身には耐えきれないんじゃない？』
ホント、なんでこうなったんだろうかね。けど、なったもんは仕方ない。手伝って貰うぜ、カルロスさんよ。
『知るかよ。マジメンドクセェ、やるならとっとと終わらせろよ』
このバガイオウ、最後くらいキチッとシメろよ。
『私、待ってるから、アンタが帰ってくるの……ずっと、待ってるから！』
帰るよ。君の所に……だから、待っててくれ。
数多の願いと想いを重ね、――今、俺達は一つになる。
さぁ、これで正真正銘多元世界最後の戦い。派手に行こうぜ。グランゾン[相棒]!!

――――見事。

崩壊する宇宙、全てが闇へと還り、創世に至る時、黒に染められた空間の中で輝きを放つそれに、彼の者は心の底から賞賛の言葉を口にした。
漸く至ったかと楽しみ、今更かと憤怒し、何故こんな時にと哀しむ。されどそれらの感情を押し潰して余りある歓喜が彼の者の胸中で渦巻いていた。
嗚呼、何故こうも人は愚かなのだろう。何故人はここまで綺麗なのだろう。永遠に近い時の中で彼の者は憂い、怒り、哀しんだ。
けれど、今は違う。この崩壊された世界で残されたのは己とここに迫りつつある彼のみ。これから始まる最後の戦いに彼の者は楽しみで、そして喜びに満ち溢れていた。
さぁ来い。私はここにいるぞ。高まる彼の力の奔流を前に、彼の者は高らかに謳い上げる。
『至高の天はここにあり！』
魔人よ。孤高なるモノよ。お前は美しい。そんなお前を私は心の底から愛そう。――故に。
〝――混沌より溢れよ〟
お前の総てを破界しよう。
〝喜びの日！〟

――――語れ。

〝新世界へ至る孤高の物語〟

『行くぞおおおおおっ!!!』

崩壊する大宇宙の中で二つの魂が激突する。

天獄篇
その１２９

――――――――燃える。曾て、いや、ついこの間まで繁栄し、栄えていた街が燃えている。何の理由もなく、ただ理不尽に蹂躙されていく己の故郷を目の当たりにしていた人々は、失われていくその光景に嘆き、悲しみ、ただ絶望に浸ることしか出来なかった。

〝サイデリアル〟　時獄戦役と呼ばれる戦いの直後からその姿を現した、目的も分からない謎の侵略者達の手により、地球の領土はその七割近くを奴等に蹂躙されていった。

逆らう者には死を、そうでないものには強制的な隷属を、曾て無い危機を前に、人々はただ奴等の決定に従うしかなかった。

勿論、ただ蹂躙されるだけを由とせず、抗うために立ち上がった者達もいた。幾度となく危機に苛まされ、滅びを前にしても諦めなかった人々の執念が、サイデリアルを相手に真っ向から立ち向かったのだ。

地球最強の部隊、Ｚ―ＢＬＵＥ。幾度の戦場を越え、幾つもの危機を乗り越えてきた彼等のように、自分達も立ち向かうべきなのだと、街の人々はレジスタンスとして立ち上り、侵略者の尖兵達に戦いを挑んだ。

だがその結果、彼等は全てを失いかけていた。相手はこれまでの相手と同じく、抵抗するだけ事態が好転する、あるいは諦めなければ何とかなると思えるような――――――そんな、甘い考えが通用する相手では無かった。

連中は地球側の戦力、主に無人機を利用して此方に攻撃をしてきている。何故地球側の戦力であるはずの機体が奴等に与しているかは分からないが、同じ地球側の機体であるならば勝ち目があると判断したレジスタンスは、タイミングを見計らい反旗を翻した。

これでいけると思った。無人機とはいえ、直接サイデリアルの戦力が投入されていない今なら、まだ自分達の手だけで何とかなる。数を減らしつつある無人機を前に、レジスタンスの人々は自分達の勝利を確信しつつあった。

自分達はまだ諦めていない。まだ地球（俺達）は負けていないと、サイデリアル達に自分達の意志を示してやる。そして、それが今も各地で戦っている同じ地球人の励みになる。そう信じて戦い続けていた彼等の前に……。

絶望が、舞い降りた。

「嘘……だろ？」

空を覆い尽くすほどの軍勢、これまでの無人機とは違い、奴等の主戦力と思われる人型機動兵器の……その全てが此方に銃口を向けていた。

奴等の放つ最初の攻撃で此方の戦力は全て破壊された。機動兵器に乗って勇ましく戦っていた友人も、皆を逃がそうとしていた愛する女性（ヒト）も、全て奴等の手によって吹き飛ばされてしまった。

「なんでだ。なんで、こんな事をするんだよぉっ！　俺達が、何を、したっていうんだぁっ!!」

奴等の攻撃から運良く……いや、運悪く生き残った男は慟哭の声を張り上げる。何故自分達がこんな目に合わなければならないのか、男の怨みが凝縮された叫びをしかし眼前の外敵は答える事なく、銃口にエネルギーを収束させている。

機動兵器のモノアイが妖しく光る。それが此方を嘲笑っている様で、男にはそれがとても許せなかった。

「チクショウ、チクショウ!!」

地面を叩く男の手から血が滲み出る。そして準備が完了したサイデリアルの第二射が放たれようとした時――――。

蒼い閃光がサイデリアルの機動兵器の群れに突貫し、瞬く間に切り刻んでみせた。
「……へぇあ？」
あまりの光景に男から間の抜けた声が洩れる。あれほどまでに苦戦し、一方的に此方を蹂躙していたサイデリアルの主戦力が、今度は一瞬にして細切れになっていくのだから、そうなるのも無理はない。
サイデリアルを相手に蹂躙する蒼い機体、その風体は何処と無くＯＺの総帥が搭乗したとされるモビルスーツに似ているが、ＵＣＷ出身である男には分かり得ない事だった。
そして、そんな閃光と化している蒼いモビルスーツが撃ち洩らしたと思われるサイデリアルの機体を、ネオ・ジオンのモビルスーツと思われる機体が的確に落としていく。その様子は、ハッチャケる上司のフォローに回る苦労人な部下の様であった。
「ふむ、どうやらシュウジ殿達は間に合った様であるな。我輩も先回りしていた甲斐があって何よりである」
ふと、横から聞きなれぬ声が男の耳に届いてきた。何だろうと思い振り返ると、全身を機械的な鎧に覆った髭の男が、複数人の人間を背負って佇んでいた。
一体、何が起きている？　立て続けに起きた出来事に軽くパニックを起こしている男には、到底理解出来そうになかった。

「ほれ、お主もいつまでボーッとしているでない。立てるのなら急いでここから離れるのであーる。シュウジ殿達の邪魔になるからな」

「あ、あぁ、済まない」

取り敢えず、ここを離れた方が良さそうだ。目の前の鎧の髭男に言われるがままに付いていく男は、その先で死んだと思われていた仲間たちと再会し、再び思考が止まるというのは別の話で――――。

自分達を助けた蒼い機体の操縦者が、世界中を震撼させたあの蒼のカリスマだという事を知り、吃驚仰天にひっくり返るのも……やっぱり別の話になるのであった。

◇

Ｚ月δ日

ＡＤＷ……即ち、蒼の地球に降り立って早数日。現在自分達は地球各所の戦場に遭遇してはレジスタンスと協力し、ゲリラ戦を行う毎日を過ごしていた。

本当なら、遭遇した戦場で何人か捕まえて、目的とか色々と話を聞くべきなんだけど……いやぁ、サイデリアルってのは何処にでも現れるし、割と気の抜けない相手だから、つい全部遠慮なく斬り捨てちゃうんだよね。

ギュネイ君からその事で何回か注意を受けたことがあるんだけど、こればっかりはどうしようもない。何せ連中は僅か数ヵ月足らずで蒼の地球の支配圏、その七割近くを掌握しているのだ。情報を得るのも大事だが、今暫くは連中の動きに注意しながら、慎重に動いた方がいいと自分は思う。

まぁ、遭遇した戦場全てに関与している自分が言っても説得力は無いんだけどね。ギュネイ君もその事については呆れてるけど、もう何も言ってこないし。

でも、度重なる戦闘で何も得られなかった訳ではない。何度も連中と戦闘したお陰で、小型だけど奴等の艦を再びゲットできたし、ブロッケンに新しい身体を作ってやる事もできた。艦という移動手段を手に入れた事で機体の整備も出来る様になったし、何よりこのゲリラ戦で、ギュネイ君の操縦技術も格段に上がってきている。

本人はその事を話す度に疲れきった表情を浮かべているが……まぁ、それも無理

もない。どんなに歴戦の戦士であろうと、戦いが続けば疲れるというもの。
だから明日は久し振りにゆっくりしようと思う。幸い奴等から奪い返したこの街はまだ多くの物資が残されている。復興や街の建て直しはまだまだ先になるだろうが、取り敢えずここの人達が今すぐ飢えに苦しむ事はない。
自分達は戦いに参加した見返りとしてその内の一、二割を譲って戴くだけ。元々通り掛かっただけだし、このくらいの割合で丁度いいだろう。二人からはもう少し貰ってもバチは当たらないと言うが、元々人数は此方が少ないのだ。余り多く貰っても腐らせてしまっては物資の無駄遣いというものだろう。
それに、これから忙しくなるのは彼等の方だ。今一時の平穏を勝ち取っても、すぐにサイデリアルはレジスタンスの彼等を鎮圧しに、再び大軍で押し寄せてくるだろう。そうなった時、真っ先に逃げるためにも、今のうちに物資の分配は済ませた方がいい。
仮に戦うのだとしても物資は多い方がいい。彼等には守るべきものがあるし、それを守る為にも糧となる物は多い方がいいだろう。
邪魔になるのならばそれを奴等への土産にして、命だけは助けて貰うようにするのもいいだろう。連中は銀河の中心部付近から来た者、辺境の星である地球の物品には少なからず興味を持つ筈だ。
そんな訳で明日一日だけここに留まる事にした自分達、何せ今の地球は殆どがサイデ

リアルの支配地域となっている。通信関連のインフラも、その多くが奴等の手に握られてしまっている。
ここ最近の自分達は派手に動きすぎている。連中の目を欺く意味でも明日一日は大人しく過ごした方がいいだろう。

Z月γ日
久し振りにゆっくりした時間を過ごしていたら、ある人物が自分の所に訊ねてきた。
ジェレミア＝ゴットバルトさん。サイボーグと化した自らの足で自分の居場所に辿り着いた彼は、自分に出会うや否や開口一番でこう言ってきた。
〝シュナイゼル殿下とマリーメイア様を助けて欲しい〟　懇願するようにそう言ってきた彼の話を、自分は詳しく聞くことにした。
何でも、現在シュナイゼルとマリーメイアちゃんは貴族連合と名乗る連中に幽閉されており、サイデリアルの基地に隔離されているのだとか。
で、その貴族連合というのは曾てのブリタニアの貴族で、今一度貴族制度を再構築する為にサイデリアルに尻尾を振った連中なのだとか。
曾て再世戦争の時に自分との戦いに破れ、自ら敗北を認めたシュナイゼルは、地球統一を機に、ブリタニアに古くからある貴族制度を撤廃したという事を、当時のバイト中

に聞いた事がある。
　貴族制度の解体に伴い発言力を失った貴族の連中。しかしサイデリアルが地球に攻め込んできたのを切っ掛けに再び成り上がる事を決意し、一部の元皇族を旗印にして元ブリタニアの宰相だったシュナイゼルと、偶々その場面に出会してしまったマリーメイアちゃんを人質に取った……と。ジェレミアさんから聞いた話では大体こんな所である。
　なんというか、まぁ、色んな意味で典型的な奴等だよなぁ。というのが貴族連合と名乗る連中に抱いた感想である。というか、シュナイゼルにしてはらしくない失態だ。それは凡ミスにしてもおかしい程に。
　シュナイゼルは自分は勿論、トレーズさんも認めた切れ者だぞ？　そんなアイツが、自分の失態で親友の形見であるマリーメイアちゃんを捲き込むとか、信じられない話である。
　何かこの話、裏がありそうだ。シュナイゼルがいなくなる事で得する誰かの陰謀が招いたのだとすれば、この事態も幾分か納得出来るのだが……。
　いや、考えるのは今は後回しにしよう。今回の件の黒幕への報復は後回しにし、自分はこれよりマリーメイアちゃんと、序でにシュナイゼルの救出作戦の準備に取り掛かろうと思う。

相手は久し振りに大きな相手になりそうだ。一度死んだ身だけど、今回も死ぬ気で取り掛かろうと思う。

折角真化状態の自分を残機扱いにして蘇ったんだ。精々、暴れてやろうではないか。

まぁ、またギュネイ君に呆れられると思うけどね。仕方ない、自分についてきたのが悪かったと諦めて貰おう。

では、明日も早いので今日はこの辺で終わりにしようと思う。

……そう言えば、自分一回死んだんだった。ヤベェ、どうしよう？

シュナイゼルの事とかで気にしないようにしてたけど、今日ジェレミアさんに指摘されたからすっかり思い出してしまった。

どどど、どうしよう？　ホントどうしよう？　ドッキリとして誤魔化すか？　いや、そんなことをすれば挽き肉にされて蜂の巣にされる。主に二人の紅い修羅から。

特にカレンちゃんから。ヤベェよ、折角生き返ったのに殺される。ヒートエンドされ

ちゃうよ。

……よし、忘れよう。きっと何とかなるさ、アムロさん辺りがきっと庇ってくれる筈さ。自分との戦いの時、何となく此方の異変に気付いてくれたっぽいし、きっとＣ．Ｃ．さんから事情を聞いてくれている筈だし。

うん、きっと大丈夫さ！　希望はある、間違いない！

「シュウジ殿？　その板切れはなんであるか？　ドッキリと書かれている様であるが……」

「……俺の、命綱になるかもしれないモノだ」

（それで余計に自分の首を絞めている事に気付かない辺り、コイツも大概だな）

その130

新地球皇国南米支部（ガイアエンパイア）。数多く点在する皇国拠点の一つ、その基地の奥深くにある独房エリアにて、鞭打の音が響き渡る。

一度や二度では済まない鞭の音が鳴る度に、くぐもった声が漏れる。やがて鞭打は収まり、奴隷の如く見窄らしい格好をした男が全身に鞭で打たれた傷を晒していた。屈辱に満ちた仕打ち、しかし男の眼から光は失われておらず、その目は真っ直ぐに目の前の鞭を持つ女性を見据えて離さない。

「……これだけ痛め付けられてもまだ抵抗する意思があるとは、流石元ブリタニアの宰相閣下ですわね。シュナイゼル」

「……」

声を出す余裕も無いのか、シュナイゼルは女性の言葉に反する事はしなかった。尤

も、ここへ連れてこられて既に一週間近くもの間、今のような拷問の仕打ちを受け続けてきた彼にとって、声は出したくても出せないというのが正しい表現なのかもしれない。

「けど、その強情さもここまでよ。次にいい返事を返して来なければ次はあの小娘を痛め付ける。これは脅しではなくってよ」

僅かに開かれた胸元、左側に刻まれたバラのタトゥー。自分よりも優れている者を甚振(いたぶ)る快感に、女性は愉悦に表情を歪めていた。

「……それは、ダメだ。彼女に手を出すことは、私が許さない」

掠れた声でそう口にするシュナイゼル、死に体でありながら尚も反抗の言葉を洩らしながら、一歩ずつ近付いてくる彼に女性は愉悦の表情から一変、逆鱗に触れた竜の如くその怒りを露にする。

「お前に口答えをする権利などっ!!」

「がはッ……」

繰り出される蹴り、腹部に深々と突き刺さり、吐瀉物を吐き出しながら壁に叩き付けられたシュナイゼルは痛みに耐えられず地べたに沈む。地に額を着けて苦悶の声を出すシュナイゼル、その彼の頭を女性は土足で踏みにじった。

「止めるんだギネヴィア！　それ以上はシュナイゼルが死んでしまう！」

　その時、横からギネヴィアと呼ばれる女性を呼び止めながらその脚に抱き付く者がいた。シュナイゼルと同じ奴隷の格好をした男性、温厚な性格で争い事が苦手とする彼は、曾てのブリタニアの第一皇子オデュッセウス＝ウ＝ブリタニア、数多くいるブリタニア皇族の中でも長兄として知られる人物だった。
「私達は母違いとはいえ実の兄妹だろ！　どうして自分の弟にこんな事が出来る！」
「あらぁ？　その曾ての弟は兄であるクロヴィスを殺したではありませんか？　私だってこんな事はしたくありません。そこの愚弟が素直に頷いてくれれば今すぐここから解放しましょう。無論、貴方も」
「それは……でも、だからってこんなやり方じゃあ、サイデリアルの力を借りてまで貴族制度を復活させようなんて――――」
「その男が！」
「っ!?」
「その男が、蒼のカリスマに敗北した所為でこんな事になったのでしょう!?　新政府確立の為？　悪しき風習の撤廃？　そこの愚弟が勝手に決めた事の為にどうして私が巻き込まれなければならないの！」
「ギネヴィア……」
「貴族制度が無くなり、皇族の意味も無くなった私に残されたのは僅かな財産と家だけ

！　メイドも去り、使用人もいなくなって母上も男と一緒に消えた！　もう嫌なのよ、あの惨めな生活は！　帰りたいのよ、あの頃の輝かしい自分に！」

「そんな事の為に……ギネヴィア、君は」

髪を毟る様に掻き乱し、凄絶な顔で二人を睨むギネヴィア。凄惨にさえ見える彼女の相貌に、オデュッセウスは呆れを通り越して哀れみすら感じた。

再世戦争。破界事変に次いで起きた争乱、シュナイゼルは当時の国連政府を打倒する為、大軍を率いて侵攻していた。全ては地球の人々に安寧の日々をもたらすために起こしたこの侵攻作戦はしかして一人の男の手によって潰える事になる。

それこそが蒼のカリスマ。魔神激昂と呼ばれる事件を境にブリタニアの評価はガタ落ちした。ナイトオブラウンズを含めた大戦力を投入したにも関わらず、たった一機を相手に大敗したその事件は、蒼のカリスマの悪評を揺るぎないものにしたと同時に、ブリタニアの世界に対する影響力を地に叩き落とした。

忌ま忌ましい。何故たかだかテロリスト一人にここまで自分は追い詰められなければならないのか、何故奴に敗北しただけでここまでの屈辱を味わなければならないのか。私はギネヴィアだ。ブリタニアの皇族で、偉くて、何をしても許される。生まれながらの成功者にして強者なのだ。

故に、ギネヴィア＝ド＝ブリタニアは気付かない。その驕りが、他人を厭わず、権力

を自分の力当然と考えるその傲慢さが貴族制度を廃した最大の理由であり、シュナイゼルが危惧した事だというのも、ギネヴィアは理解出来ていなかった。
浅ましく、愚かで、自分勝手な欲望の為に、遂には自分が生まれ、育った星すら侵略者に売り渡すと宣うギネヴィア。彼女にとって価値があるのは過去の栄光であり、その眼には未来など写してはいなかった。
「……いいわ。そこまで強情なら次はあのマリーメイアとかいう小娘に痛い目を見てもらう事にするわ」
「待つんだギネヴィア！」
「それが嫌なら誓う事ね。この私に、ギネヴィア＝ド＝ブリタニアに永遠の服従を、ね。ウフフフ、アハハハハ！」
オデュッセウスの制止の声も聞かず、ギネヴィアは独房を後にする。変わり果てた妹の姿に思うところは当然あるが、今は傷付いたシュナイゼルを介抱するのが先だ。オデュッセウスは馴れない手付きでシュナイゼルを横に寝かせる。本当ならここで濡れた手拭いで打たれた箇所を冷やしたり傷薬を塗って介抱するのだが、生憎ここは牢屋の中、冷たい床が唯一熱くなるシュナイゼルの身体を冷やしてやる癒しとなっていた。
鞭で打たれた痛みと熱で魘されるシュナイゼル。このままでは弟が死んでしまうとオデュッセウスが焦り始めた時、鉄格子の向こうから声が掛けられた。

「おやおや、これはまた随分と悲惨な目に遭いましたねぇ」
「ブラッドリー卿……」
　ブリタニアの騎士、その中でも最上級の実力を誇るブリタニア帝国最強の騎士、ナイトオブラウンズのＮｏ．１０ルキアーノ＝ブラッドリー。曾てブリタニアの吸血鬼と畏怖されていた男が立っていた。
　ギネヴィアと同じくサイデリアルに媚びを売り、地球を売り渡した者。そんな彼が何故ここに、オデュッセウスが柄にもなく警戒すると、肩を竦めたルキアーノが鉄格子の隙間から手拭いを投げ渡した。開いて見るとその中には傷薬と水が包まれており、人一人を癒すには十分な量が含まれていた。
「それで傷を治してやるといい。打たれた箇所は多いが、幸いショック症状には至っていない様子……水で傷を洗い、薬を塗って安静にすればすぐに落ち着く事でしょう」
「ブラッドリー卿、何故、貴方がこれを?」
「おや?　意外に思われますか?　確かに私はブリタニアの吸血鬼と呼ばれた事もある男ですが、何も悪魔ではありません。それに貴方達は大事な人質だ。人質に死なれては我々が困る。だから、これを恩と感じる必要はありませんよ」
　ケラケラと笑うブリタニアの吸血鬼、一瞬罠かと疑うオデュッセウスだが、彼の言い分ではその可能性は低い、疑心暗鬼ながらも言われた通りの処置をシュナイゼルに施す

と、暫くしない内にシュナイゼルの呼吸は緩やかになり、穏やかな表情となって寝息を立てている。

　漸く落ち着いた弟に安堵したオデュッセウスは、濡れた手拭いを額に当てて熱冷ましを施した後、静かに此方の様子を眺めていたルキアーノに向き直る。

「ブラッドリー卿、何故貴方までギネヴィアの言動に賛同したのです。既にブリタニア帝国は無く、ナイトオブラウンズの地位もまた消滅した。騎士として戦う意味も無くなった今、どうして貴方がギネヴィアに……皇族に付き従うのです」

「何やら勘違いをされているようで恐縮ですが、私は別にナイトオブラウンズとしてギネヴィア様に付き従っているのではないのですよ？　私はただ、彼女に付き合っていれば私の目的が達成出来ると思い、手を組んでいるに過ぎません」

「目的……？」

「私はね、奪われたのですよ。再世戦争の頃、初めて魔神と対峙したあの時から、私の大事なモノは奪われたままだ」

　オデュッセウスの問いに己の掌を見詰めながら答えるルキアーノの顔は屈辱と怒りの色に染まり、その瞳には憎悪に似た黒い感情に濁っていた。

「だから、取り戻す。あの日、奴に奪われた全てを今度こそ取り返すために、私は此所に立つと決めた。……そう言う意味では、私の目的はギネヴィア様と一致しているの

でしょうね」
「バカな、蒼のカリスマは先の戦いで既に死んだとサイデリアルの兵士達も言ってたじゃないか！　」
「さて、それはどうでしょう？　私は疑り深い男でね、自分で確かめない限り信じないようにしているのです。……それに」
「？」
「先日、地球の衛星軌道上に配備されていたサイデリアルの軍勢を何者かが突破したという情報を先程聞きましてね。詳しく調べてみたところ、何でも蒼い流星がこの地球に降り立ったというではありませんか」
〝蒼〟　それは魔人と恐れられる蒼のカリスマのパーソナルカラーであり、彼の愛機である魔神の色とされているもの。偶然の一致か、それとも単なる誤情報なのか、各種通信手段もサイデリアルに抑えられている現状では確める手段はない。
ルキアーノは一瞬だけ、横になっているシュナイゼルの方へ視線を向けるが、濡れたタオルに額から目元まで覆われており、表情から彼の反応を読み取る事は出来ない。
尤も、ブリタニアきっての切れ者だったシュナイゼルに探り合いで勝てるとも思えないが……。
まぁいいかと、シュナイゼルから視線を外したルキアーノは独房を後にする。

「まぁ、私の目的とは別に今の私はサイデリアルの犬。ならば犬は犬らしく、大人しく従う他ありません。それでは生きていたらまた会いましょう」

それだけを言い残して去っていくルキアーノ、彼も、彼の背中を見つめ続けているオデュッセウスも、うっすらと笑みを浮かべているシュナイゼルに気付く事はなかった。

Z月（・・ω・、）日

ジェレミアさんからマリーメイアちゃん、序でにシュナイゼルの救出作戦を依頼されてから一週間、現在自分は二人が捕まっているであろう新地球皇国の南米支部付近に来ていた。

早速どんなモノなのか遠巻きに観察したのだが、流石南米大陸を支配している支部の一つだけあって、連中の戦力の集中度合が凄い。特にこの星の重要参考人が捕まってい

るだけあって、機動兵器と同じぐらい基地防衛の為の歩兵がえらい数になっている。
潜入するにしてもまずは突破口を見付けなければ話にならない。……強行突破も出来なくはないが、それだと騒ぎは大きくなるだろうし、何より中にいるマリーメイアちゃんに危害が及ぶ可能性が高い。
彼女はトレーズさんの忘れ形見、絶対に傷なんて付けさせたくはないし、危険な目にも合わせたくない。……シュナイゼル？　別に良いよアイツは。腹黒男と親友の娘、どっちが大事なのかは一目瞭然。寧ろアイツは拷問の一つ位受けて酷い目に遭えばいいとさえ思う。
尤も、アイツがそのくらいでどうにかなるなんて思っていないし、今頃は自分が助けに来るタイミングを見計らって密かに脱出の算段を立てているのではないかとすら思える。
そんな訳で救出の優先順位はマリーメイアちゃん、序でシュナイゼルの順という事にすると、今回の救出作戦のメンバーには伝えている。メンバーは自分とジェレミアさんが潜入、攪乱担当で、ブロッケンとレディ＝アンさんが突入担当となっている。
ギュネイ君は安定の強襲担当、モビルスーツで支部の連中の大部隊を相手にする事で時間稼ぎを担って貰うことにする。勿論、レジスタンスの皆さんの協力もあり、単身で戦わせるつもりはないから安心してほしい。

つーか、今回のレジスタンスの面々が無駄に豪華だ。レディ＝アンさんはマリーメイアのお付きの人だから彼女を助けるために突入部隊に入るのは良いとして、他の面子が何気に凄い人達ばかりだ。

ノネット＝エニアグラム、ドロテア＝エルンスト、モニカ＝クルシェフスキー。何れもブリタニア帝国時代にナイトオブラウンズとしてブリタニア騎士の頂点に君臨していたお三方である。

何でもブリタニア解体以降田舎に帰ったり実家で大人しく暮らしていたが、今回のサイデリアルの侵攻に合わせてこうしちゃいられないと立ち上がり、間に合わせの機体で今まで戦ってきたのだとか。サイデリアルの圧倒的な物量に対し、今日まで戦ってこられたのは彼女達のお陰だと他のレジスタンスの方々は口にしているし、前線から暫く離れた程度でかつての腕前が衰えることはなかったらしい。

実際に彼女達の腕前は拝見した事はないのでなんとも言えないが、皆が言うならば確かなのだろう。期待していますと声を掛けたら、何故か三人して微妙な顔をされた。……なんで？

ともあれ、ギュネイ君一人に敵部隊を相手させることがなくなったから、その点は安心だ。地球に降り立ったここ数日で劇的に腕を上げたとはいえ、自分達が次に相手する規模は大きい。多勢に無勢、無茶な戦場に連続で突っ込むのは下策とも言える。

　その事を思えば元ラウンズの人達の助力を得られるのはとても心強い。彼女達は既にモビルスーツにも熟練した操縦技術を会得しているようだし、きっとギュネイ君の負担も軽くしてくれる筈、後は彼等の活躍と無事を信じて自分の役割を全うするのみである。

　……因みに、自分こと蒼のカリスマ復活の件ですが、レディさんの「お前がそう簡単には死ぬとは思えん」の一言で片付けられました。

　いやね、別にいいんですよ？　レディさんの言うことは一種の信頼の裏返しみたいなものだし、別に軽く流されたからって凹んでないし。

　ま、まぁ兎に角、戦力も整ってきたし、明日はマリーメイアちゃんの救出の為に今日はいつもより早めに就寝しておこうと思う。幸い頼んでおいた潜入用のスペシャルアイテムも手に入った事だし、明日はこれをフルに使ってマリーメイアちゃんを救出しようと思う。

◇

「なぁ、聞いたか？　噂の奴」
「あぁ、何でも蒼のカリスマと名乗る輩があっちこっちで暴れてるって話だろ？」
　新地球皇国、南米支部基地の検問所、そこでは二人の兵士が近頃話題になっている蒼のカリスマなる者について話をしていた。
「死んだ奴が復活、それもこの星で暴れた魔人とか、作り話にしても笑えないな」
「幾ら自分達の星が支配されつつあるからって、何でそんな化け物の話を持ち出すのだろうな。地球人の考えることは俺達には理解できねぇよ」
「違いない」
　蒼のカリスマの復活、それを最初から信じていない兵士は地球人の苦し紛れの作り話と断じ、嘲笑った。
　そんな彼等の近くに一つの人影が近付いていく。ここへ近付くものには容赦なく捕まえろと厳命を受けている二人はこれに気付き、銃口を人影へ突き付ける。
「そこのお前、止まれ！」

「ここへ一体なにしに……き……た？」

突き付けた銃口の先にいる人物、それを目にした瞬間兵士の目が大きく開かれる。目を剥く程大きく見開いた彼等の視線の先には……。

「あの～、私ぃ～、地元の酒屋を営んでいるキャシーと言うもの何ですけどぉ～、サイデリアルの皆さんに差し入れがしたくってぇ～、テキーラ酒を持ってきましたの～、そこを通してくださらなぁ～い？」

やけに筋肉質な女性……否、女装をした怪物（モンスター）がそこにいた。

その１３１

サイデリアル。銀河を中心に存在する勢力の中で尤も強力な力を持つとされる彼等は、その過去に多くの星を征服し、或いは滅ぼしてきた。

水で出来た星があった。ガスやチリ、或いは鉱石のみで構成された星など、多くの星に存在する知的生命体は独自の文明を築き、繁栄していった。

それらを滅ぼしてきたサイデリアル、言い返せば多くの文明を目撃してきた彼等からすれば、辺境に位置する地球は大した事の無いように見えても仕方が無いのかもしれない。

しかし、そんな彼等にも理解出来ないモノがあった。多くの文明を、多くの星を見てきた彼等にさえ目の前にあるソレを理解するには知識が、知恵が足りなかった。

ウネウネと体をくねらせる者、細身でありながら確りとした体つき、薄地の服からアリアリと見える肢体は幾度の修羅場を潜り抜けた肉体が浮かび上がっている。恐らく目の前の存在は多くの戦場を潜り抜けてきた猛者なのだろう。

そんな存在が、明らかに異なった性別の衣服を着用し、媚びた声色で話し掛けてきている。

理解が追い付かない。思考が纏まらない。多くの文明を滅ぼしてきた彼等にとって、目の前にいるソレは予想も想像も出来ない未知のモノだった。

人が未知なるモノと遭遇した時、抱く感情は然程多くはない。知性が、感情がある限り少なからず反応してしまう、そんな彼等が抱いた感情は――――。

「な、ななな何だ!?　何だ!?　何だきき貴様ぁっ!?」

「く、来るな来るな来るなァァァァッ!!」

恐怖。未知のモノ、理解の外側にあるソレと遭遇した彼等は自己防衛にも似た本能に従い、制限の効かない衝動を恐怖という感情で発露した。

「やぁんもう、こんなか弱い女の子に向かってぇ、そんなもの突き出すなんて野暮ったい人達ねぇ～。ダメよ、女の子にはもっと優しくしてあ・げ・な・い・と♪」

総毛立った。眼前に迫りウィンクを飛ばしてくる未確認生命体（UMA）に、兵士達は己の自我が崩壊するのを確かに感じた。

理解が出来ない、したくない、してはいけない。兵士達はアレは人が近付いていけない邪悪なるモノだと確信し、それに対抗する為に彼等は自ら心を捨て、死兵となる事で眼前の化生に対峙する決意をした。

感情の映らない瞳で銃口を向ける兵士、何時引き金を引いても可笑しくはない状況、しかしそれでも目の前のソレは動揺もせず妖しく頬笑む。
「ウフフ、逞しい人達。でも、そういうの……嫌いじゃないわよ」
含みのある言い方、しかし最早我慢が限界だと兵士達の引き金に掛けた指に力が籠る。相手が化け物の類いだとしても所詮は生命体、撃てば殺せると信じて彼等は引き金を引こうとするが、背後から迫るモノに気付かずに……。
「初めまして、ジェレ子です」
兵士達に覆い被さるように現れたソレに今度こそ兵士達は白目を剥く。理解の外側にいる化生、それも二体の出現に兵士達は遂に緊急事態の報せも、応援の救援も出すことなく……。

――――――ピギャー。

「……気絶、しましたか」
倒れ、意識を絶つ事で自我の崩壊を食い止めた二人の兵士、倒れ伏す彼等を見て二人

のＵＭＡ（バカ）は意外そうに見下ろしていた。
「まさか声を掛けただけで気を失うとは、やはり異星人には地球のような文化は無かったようですね。少し分が悪かったですが、この賭けはどうやら私達の勝ちのようです」
「まさか女装をする事で敵の目を欺くとは、流石はシュナイゼル様が友と認めたお方だ。その慧眼ぶりには敬服を抱かざるを得ません」
「なに、今回は彼等が地球とは違う別の星から来たという観点から模索した推察と推論が偶々合致しただけの事、本来なら危険な賭けだというのに、罵倒こそされても褒められる謂れは無いですよ」
「ですが、その賭けに挑んだのは他ならぬ貴方自身だ。シュウジ＝シラカワ……いや、蒼のカリスマ殿、貴方は自分の行動にもう少し自信を持った方が良い」
「フッ、物好きですね貴方も。そうですね、忠義の塊とも言える貴方の言うことだ。ここは素直に受け取っておくとしよう」
　フッと、互いに笑みを浮かべる二人。それはお互いに対する信頼の現れでもあり、これから挑む潜入に対する成功の確信でもあった。最早自分達に怖いものなどいない。後は速やかに基地内部へと潜入し、マリーメイアとシュナイゼルを助け出すだけだ。
　検問所を越え、基地の内部へ潜入する。威風堂々と、自信に満ちた二人が一歩踏み出した時、シュウジ（女装）に一通の通信が入ってくる。

このタイミングで一体何だと、昂る気持ちに水を差されたシュウジは渋々とポケットにしまっていた通信端末を手にとって。

『潜入する前に着替えろバカ共！　そんな格好で基地に潜入したら余計に怪しまれるだろうが!!』

基地の外れで此方の様子をＭＳのコックピットにある遠望カメラで様子見していたギュネイからの容赦ない罵声に、二人は渋々ながら元の格好に着替えるのだった。

「チェー」

『チェーじゃない!!　あぁ、もう嫌だ。何でコイツに付いていこうと思ったんだ。……俺のバカ』

作戦成功の為、基本的に通信は全員に行き渡る様になっている。そんな中、蒼のカリスマと行動を共にしているギュネイ＝ガスは泣きたくなり、同じく一部始終を双眼鏡で見ていたレディ＝アンは絶句し、彼等を挟んで聞いていたラウンズの三人は彼等に掛ける言葉が見付からず、苦笑いを浮かべていた。

◇

――――――南米支部最上階、玉座の間。支配しつつある大地を見渡すように作られたその場所で、マリーメイアはいた。煌めくドレスを身に纏っている彼女は一国の姫君のよう。しかし実際はそうではなく、その空間の中央で両手を縛られ、跪く様に膝を着いている彼女は差し詰め、裁きを言い渡される罪人だった。

玉座に座るのはシュナイゼルやオデュッセウス、ギネヴィアと同じ嘗てはブリタニアの皇族として支配する側だった者。

カリーヌ・ネ・ブリタニア、曾てのブリタニア帝国の第５皇女。彼女は蔑みと憐れみの視線でマリーメイアを見下ろしている。

「今、ギネヴィアお姉様から連絡がありました。私達の兄であるシュナイゼル、並びにオデュッセウスは最後まで私達に従う意思は見せませんでした」

「……」

「故に、お姉様は私にこう指示しました。〝強情な愚弟から説得するのではなく、彼の親友の忘れ形見から従わせなさい〟　流石のお姉様もシュナイゼルお兄様を従わせるの

は無理だったみたいね。だから言ったのに、無駄だって」
　ケラケラと笑うカリーヌ、その手に姉と同じ鞭を手に玉座から立ち上がった彼女は、ゆっくりとマリーメイアの下へ歩み寄る。
「シュナイゼルお兄様はトレーズや蒼のカリスマと出会ってから変わった。何事も執着出来なかったお兄様が初めて執着と呼ばれるものを得た。そんなお兄様を従わせるのはただひとつ、執着の元になっている貴女を利用すれば良いだけ。ギネヴィアお姉様は確かに怒ると怖いけど、その分視野が狭くなる。こんな簡単な事にも気付けないだなんて、お姉様ってばやっぱりちょっと抜けてるわ。ねぇ？　あなたもそう思わない？」
　ピシャンと鞭を打つ音が玉座の間に響く。マリーメイアの横で打たれた鞭は罅となって地面に亀裂を刻んでいる。カリーヌは熟知していた。人はいかにして恐怖するのか、どうやって絶望するのか、追い詰められた人間が最後はどんな行動を取るのか。
　マリーメイアは自分達にとってシュナイゼルを従わせる為の餌でしかない。そしてカリーヌはその餌の重要性を理解していた。マリーメイアという餌が無くなれば、大人しかったシュナイゼルは牙をいつか自分達に向けてくる。それは自分達にとってどんなに危険な事なのか、カリーヌは重々承知していた。
　承知して尚、彼女には余裕があった。何せ彼女にとってマリーメイアは取るに足りない小娘でしかない。頼れる者も、縋る者もない今、彼女にあるのは孤独と絶望しかない。

そこへ自分が飴と鞭を用意してやれば容易く目の前の小娘は御せる。
そうすればシュナイゼルは此方に従うしかなくなり、サイデリアルも彼を従えた自分を無視できなくなる。そうすれば自分の地位は約束されたモノとなり、最早己を脅かすモノは居なくなる。
漸く得られるのだ。何者にも、どんな奴にも脅かされない安寧とした生活が。それを夢見て今まで泥を啜る思いをしてきたカリーヌは、これからの自分に期待を持ちながら目の前のマリーメイアを見下ろした。
最初の鞭の脅しでマリーメイアの心は挫いた。後は甘く囁くだけで自分の目的は達成される。そう思った彼女に……。
「可哀想な人ですね」
「……はぁ？」
微塵も屈していない、力強い意思を宿したマリーメイアの瞳がカリーヌを射抜いていた。
「貴女は、以前の私と同じです。いいように利用され、担がれて、騙されて、唯の旗でしかなかったあの時の私と」
「……なんですって？」
「何も知らなかった。何も考えなかった。ただ言われた通りに、人形でしかなかったあ

の時の私。でも、リリーナ様が教えてくれた」
マリーメイアは語る。時獄戦役の時の自分の事を、デキム＝バートンに操られ、ただそうあるよう振る舞う都合の良い人形だった頃の自分を。
自分の所為で、多くの人間を犠牲にした。なすがままだった自分の所為で沢山の人間の運命を狂わせてしまった。それはもう幼いからと言う理由で許されるモノではなく、マリーメイアは今後その為の罪滅ぼしに追われる人生になるだろう。
しかし、そんな自分に手を差し伸べてくれた人がいる。リリーナやナナリー、レディ＝アン、自分を支えてくれる人が、自分を助けてくれる人が、こんな自分を守ってくれた人がいる。
目を閉じて、瞼の裏に甦るのは白いコートを翻したあの人の後ろ姿。自分の為に、親友の娘という理由の為だけに一つの軍隊を丸々敵に回したあの人。
「貴女にどんな事情があるのか、どのような経緯でそこにいるのかは存じません。ですが、私は貴女の思惑程度に負ける訳には参りません」
会いたい。私はあの人に会いたい。その為にも私はここで終わるわけにはいかない。止まる訳にはいかない。
あの人が死んだ？　そんな訳がない。父が信じたあの人が、父が友と呼んだあの人が、そう簡単に死ぬなんて思えない。

「私はマリーメイア＝クシュリナーダ、私の為に戦ってくれている人のため、私を信じてくれている人の為、徹底的に抗わせて貰います」
　これが私の戦いだと、そう暗に告げるマリーメイア。地に膝を着いて罪人の様に扱われても尚翳らない彼女の眼に、カリーヌはどうしようもない苛立ちに駆られる。
「そう、なら……精々耐えてみせなさいよ！」
　振り抜かれた鞭、勢いよく振り抜かれた鞭はそのままマリーメイアの顔に向けて振り下ろされ……。

「やれやれ、そういう強情な所はお父さんと変わらないな」
　しかし、届くことはなかった。
　カリーヌが振り抜かれた鞭はマリーメイアの顔に届く直前に止められていた。その背中に、その姿にマリーメイアはあの時の姿を思い出し。
「蒼のカリスマ……シュウジの、おじ様！」
　その表情に驚愕と喜びの笑みを浮かべた。

そんな彼女に蒼のカリスマは仮面越しに笑みを浮かべると、カリーヌの方に向き直り。

「さて、諸々言いたい事はあるが、取り敢えず一言で終らせるとしよう。――――――マリーメイアちゃんに手を出して、ただで済むと思うなよ?」

静かに、怒りの感情を発露させるのだった。

その１３２

朧気に覚えているのは時獄戦役の頃、崩れる瓦礫の中に悠然と佇むあの人の後ろ姿。白のコートを翻し、私の前に降り立ったあの人。

蒼のカリスマ、世界で一番凶悪で、恐ろしく、そして……私の為に駆け付けてくれた人で、亡き父トレーズ＝クシュリナーダの親友。

言葉を交わした事はない。姿も、正面から見据えたことは一度もない。でも、デキム＝バートンに言われるがまま、父とは真逆の道を進もうとした私をあの人は止めてくれた。

言葉を交わしたかった。何かを話したかった。譬え言葉に詰まり、上手く話すことが出来なくとも、私はあの人と語らいたかった。私の話を……聞いてほしかった。

蒼のカリスマ、シュウジ＝シラカワ。父の親友で、たった一人で世界と戦い続けた孤高の魔人。時獄戦役で死亡したと聞いた時も私はあの人の生存を信じ続けていた。

いつか、もしまた出逢う事があったなら、今度はお話をしよう。父と、あの人の話を

聞いてそれを羨みながらあの人の話を楽しもう。それを心待ちにする事が今の私が持てる数少ない楽しみの一つなのだから……。

◇

「……嘘、蒼のカリスマ……ですって？」

空っぽに開かれた玉座の間、目の前に現れた蒼い魔人を前にカリーヌは愕然としながらその名を口にする。

蒼のカリスマ。嘗て地球の全戦力の半分を蹂躙し、ブリタニア帝国の評価を地の底へ叩き込んだ男。奴の所為でブリタニアは国連での発言力を失い、その時から自分達の人生は狂い始めてきた。憎くて、憎くて、どんなに憎んでも自分達の胸の奥に灯った憎悪の炎は消えることはない。

しかし、時獄戦役が終わってサイデリアルが地球へ攻めてきた事で状況は変わった。

地球を売り渡し、シュナイゼルを此方に引き込めば自分達の安全は保障され、サイデリアルという組織の内部でもそこそこの地位を約束すると彼等は言った。

漸く、惨めだったあの頃の自分と訣別する事ができる。貴族だった頃の様に、不自由なく日々を過ごす事が出来るのだ。安寧と安心、そして地位によって貪られる贅を再び味わえるのだ。

やっと、やっと得られる自分達の平穏。……なのに、それなのに。

「なんで、何でアンタが出てくるのよ！　どうして生きてるの!!　だって、アンタは――」

カリーヌ＝ネ＝ブリタニアは死んだ筈の魔人に向けて慟哭にも似た叫び声を上げる。手にしていた鞭を放し、後ずさる彼女の表情には憎い怨敵に対する怒りではなく、驚愕と恐怖に歪んでいた。

「……確かに、私は一度死んだ。サイデリアルが世界中に言い触らしたその情報自体は間違いじゃない」

マリーメイアに当たる所だった鞭の先端を掴み、カリーヌが手放した鞭を手元に捲き込んで纏めて引きちぎる。バラバラになった鞭の残骸を見て、短い悲鳴を上げるカリーヌ。

「ただ、私がその後息を吹き返した事を貴女達は知る由もなかった、ただそれだけの話で

す。……まぁ、尤もサイデリアルが貴女達にそこまで情報を与えるとは思えませんがね」
「なによそれ、どういう意味よ！」
「おや、お気付きでない？　連中が貴女達と手を組むと本気で思っているのですか？　サイデリアルにとって元ブリタニア皇女は同盟を組むに値すると？　その気になれば地球を一方的に殲滅出来るほどの戦力を持つ組織がですよ？　……もし、本気でそう思っているのなら、貴女は少し自分の事を過大評価し過ぎていますね」
　やれやれと呆れのため息を溢しているのが仮面越しでも伝わってくる。そんな魔人の態度が癪に障ったカリーヌは激情に顔を歪め、懐に収めていた拳銃を取り出し、蒼のカリスマに銃口を向ける。
「お前さえ、お前さえいなければ、私達は……！」
「何故私に怒りの感情をぶつけてくるのかいまいち理解できませんが……まぁいいでしょう。元より私も貴女方を許すつもりはない。言ったはずだ。マリーメイアちゃんに手を出してただで済むと思うなよ、ってな」
「っ！」
「良いぜ、引けよ、その引き金を。その瞬間俺の拳をアンタの顔面に叩き込んでやる。二度と鏡を見る必要が無いくらいにグチャグチャにしてやるよ」

引き金に掛けた指が震える。拳銃を手にし、外れる事も有り得ないこの至近距離で、しかしカリーヌは目の前に佇む仮面の男に完全に呑まれていた。あれほど迄に滾らせていた憎悪も、消える筈の無かった怒りの炎も蒼い魔人を前にして瞬く間に萎えていく。

「あ、ウァァァァッ!!」

錯乱か、それとも最後にブリタニア帝国の元皇女としての意地か、パニックに陥る思考の中でそれでもカリーヌは目の前の魔人に向けて銃口を突き付けたまま、遂に引き金を引き絞った。

その瞬間、彼女の末路は決定した。撃ち抜かれた銃弾は真っ直ぐに魔人の眉間に向かって突き進んでいく。同時に僅かに首を剃らす事でこれを避けてみせた蒼のカリスマは拳を握り締めてカリーヌの顔面へと振り抜いた。そこに遠慮の文字は無く、また容赦もない。

魔人の拳がカリーヌの顔面へと迫り、そしてめり込もうと――――――。

「待ってくださいおじ様！」

しかし、その拳は元皇女を殺すには至らなかった。鼻先に触れる直前でピタリと止まった拳、行き場を失った力場は玉座の間を蹂躙し、床や外壁に亀裂を刻んでいく。

自分に向けられた拳、そこに込められた威力と殺意を漠然と理解したカリーヌは腰を

抜かし、床に座り込む。そこに出来た水溜まりを見ない振りして蒼のカリスマは視線だけをマリーメイアへ向けた。
「どうして止める？　コイツ等は自分の保身の為に地球を売り渡す様な連中だぞ？　シュナイゼルや君を陥れ、辱しめ、踏み躙ってきた奴等だ。今ここで見逃した所でコイツ等はまた同じことを繰り返す。自分の欲求を満たす為だけにな」
「……そう、ですね。確かにおじ様の言う通りです。ならば、彼女の前にまず私を殴って下さい」
「――――はぁ!?」
「私は嘗て、自分の目的の為に多くの人の人生を狂わせてきました。デキム＝バートンに良いように操られ、考える事を放棄してきました。私は、まだその贖罪が済んでおりません」
　いや、それは違うだろうと蒼のカリスマ――――否、シュウジは否定する。時獄戦役の頃、マリーメイアは確かに多くの人間を犠牲にしてきたかもしれない。
　けれど、それはデキム＝バートンが彼女に洗脳に近い教育を施したからだ。奴が己の為だけにマリーメイアを利用し、トレーズ＝クシュリナーダの名を利用してきた末に起きた事。そしてそれは奴が手練手管に長けた策師だからこそ出来た事、まだ幼いマリーメイアにそれを責めるのは余りにも酷というものだ。

そもそも、それがカリーヌに手を上げない理由にはならない。仮にマリーメイアの言う通りだとしても、それは彼女の理屈なだけであってシュウジの行動を止める理由にはなり得ない。

しかし、シュウジは反論しなかった。マリーメイアの自分を見つめる瞳に嘗ての親友がいたからだ。まるで彼女を通してトレーズがここは任せろと言っているような気がしたからだった。

敵わないなぁ。内心でそう愚痴りながらもシュウジは仮面の奥で笑みを浮かべ……。

「全く強情だなぁ、つくづくお父さん似だよ。君は」

「……おじ様」

「今回、この場は君に預けよう。でも、今回だけだぞ」

「はい、ありがとうございます」

立ち上り、礼儀正しく頭を下げると、マリーメイアはカリーヌのもとへ歩み寄っていく。その様子を微笑ましく見守っていると……。

ネバついた殺気が、玉座の間に充満した。

「ッ!!」

瞬間、その場から駆け出したシュウジがカリーヌとマリーメイアを抱えて跳躍すると、一瞬遅れて無数のナイフが彼女達のいた場所に突き刺さる。離れた所に着地するとジュウジュウと溶け出していく床を一瞥し、直ぐ様シュウジはナイフが飛んできた方向へ睨み付けた。

「……誰だ」

「つれないなぁ、私の事を忘れてしまったのかい？　それとも、一度死んだ所為でまだ記憶が戻っていないのかなぁ？」

玉座の間の角、その影から這い出るように現れたのはオレンジ色の髪をした男、男の羽織る白い外套はブリタニア帝国の最強の騎士であるナイトオブラウンズのモノだった。

「あなたは、ルキアーノ＝ブラッドリー」

カリーヌと共にシュウジの腕の中にいるマリーメイアが呟く。ルキアーノ、その名前を微かだが記憶していたシュウジは二人を床に下ろした後、彼女達を庇うように前に出た。

「ナイトオブラウンズ、ブリタニアの吸血鬼か。そんな貴方が今更私に何の用です？……復讐ですか？」

「復讐？　いいや、違うね。私はただ、私の大事なモノを取り返すだけだ。そしてそれは

お前の大事なモノを一つ残らず吸い殺すことで完遂される」
ブリタニアの吸血鬼が無数に手にしたナイフ、それには強力な毒が塗られているのか、濃い紫色に変色している。
「だからよぉ、蒼のカリスマ。俺の大事なモノを取り返す為に……まずはその命、飛び散らせろオオッ!!」
投擲される無数のナイフ、マリーメイアを背にしているシュウジは避けの選択肢を捨て、真っ正面から立ち向かう事を選ぶのだった。

その133

「……向こうは、そろそろ脱出する頃合いか」
ヤクト・ドーガのコックピット、己の愛機の中で基地に潜入したメンバーからの連絡を待ち続けているギュネイは、時間的に作戦の第二段階……即ち基地から脱出する頃かと予想し、操縦悍を握り締める。
『しかし、意外と静かだな。連中が潜入して既に半刻は経とうとしているのに、警報の一つも鳴らないとは』
『中には攪乱担当の二人もいるのだろう？　なのにこの静けさ……一周回って寧ろ不気味に思える。本当に潜入しているのだろうな、連中は』
通信で聞こえてくるのは自身と同じ遊撃組に組まれた元ナイトオブラウンズ、ノネット＝エニアグラムとドロテア＝エルンストの声だった。

彼女達が怪しむのも無理はない。潜入工作、特に今回の施設への潜入というのは潜入から敵施設に捕捉、発見されるまで長くて三十分とされている。そしてその時間は潜入する人数が多い程に短縮され、危険性も増していく。最初にシュウジとジェレミアが潜入してから既に一時間が経過している。

しかも攪乱担当であるレディ＝アンとブロッケンも既に基地に潜入している筈なのに、だ。とっくに警報が鳴り、内部も外部も敵で溢れてもおかしくないのに、今の所その様子は微塵も感じられていない。

「アンタ等がそう思うのも無理もない。奴が潜入して最初に行うのは基地内部の通信設備と管制室の沈黙だ」

『なに？　沈黙……だと？　その言い方だと破壊による無力化という訳では無さそうだが？』

「あぁ、奴は敢えて通信室と管制室を破壊せず、そこを守る兵士だけを無力化させるんだ」

通信室を破壊せず、そこを陣取る形で基地の内部と外部の連携を敵に知られる事無く遮断し、偽装する事で基地内部の情報を掌握する事で他の潜入メンバーの誘導に成功出来ている。恐らく通信室はジェレミア辺りが担当しているのだろう。

そして外部との連絡手段である通信室を抑えられた事により異変を感じた管制室、し

かし気付いた時には既に遅く、管制室もまた奴によって制圧、無力化させられてしまっている。

気付くという事は既に次の行動が約束されているという事、異変に気付き、動き出した管制室の兵士達が次に目撃するのはいつの間にか部屋内部に侵入していた蒼のカリスマの静かな蹂躙だった。

基地の心臓部、それも二つも掌握された事により今の敵基地は既に陥落寸前、未だ自分達がこうして落ち着いて静観していられるのは偏に奴の――――蒼のカリスマの常識外れな行動力のお陰だろう。

ギュネイの言葉に信じられない様子で呆けている元ナイトオブラウンズ達、そんな彼女達を見て、まるで少し前の自分を見ているようだとギュネイは苦笑いを浮かべる。

当然だ。何せ今言葉にしている自分ですらあまり信じられていないのだから。でも実際その通りだから仕方がない。通信室を占拠し、ほぼ同じ時間で管制室も制圧、先程元ラウンズ達に話したそのままの内容の報告が蒼のカリスマの通信端末から送られてきているのだから。

しかも丁寧に画像付きで。此方に状況を分りやすく伝える為の配慮なのだろうが、それはギュネイにとって、奴の化け物染みた行動力を突き付けられる悪夢の様な一場面を見せ付けられている様だった。

だって、映像に映る通信室と管制室の制圧時間が殆んど同じものなんだもの、なんだよ誤差一分弱って、そんな短時間で制圧できるものなのかよ。そもそもあの二つの部屋って普通距離を置いて作られるものだよな？　そこに行くまで誰にも気付かれずに行けるものなのか？　それも一分そこらで……。

色々疑問は尽きないが、ギュネイはその事に言及するつもりはなかった。……だって聞いても理解出来ないんだもの。蒼のカリスマ――――いや、シュウジ＝シラカワに対して突っ込む事を止めたギュネイは、光の消えた眼でアハハと笑う。

その様を通信画面越しで見ていた三人のラウンズはウワァと内心で声を洩らす。ネオ・ジオンのエースパイロットである彼があそこまで精神が摩耗している事に同情を感じざるを得なかった。これが魔人に関わった者の末路か。三人がギュネイの事を思いやり、この話はここで終わりにしようとした時、それぞれのコックピットに通信が入ってくる。

出撃準備の合図、レディ＝アンから通信が送られてきたと同時に、ギュネイのヤクト・ドーガが敵の接近を感知する。

恐らくは異変を感じたサイデリアルの部隊が様子見に来たのだろう。それに合わせて基地の外部が少しずつだが騒がしくなってきている。

「さて、そろそろこっちも出番だ。お三方、期待してるぜ」

『応ともさ、元とはいえ我々はナイトオブラウンズ』
『伊達にブリタニア帝国の騎士達の頂点にいたわけではないと、この戦場で示して見せよう』
『では……行きますよ！』
大軍を相手に飛び出す四機、突然出てきた彼等に反応出来なかった新地球皇国の兵士達は奇襲を掛けられた事でパニックに陥る。
これで先手は取れた。後は奴等の脱出まで時間を稼ぐだけ。
早くしろよ。そう思いながら基地を一瞥したギュネイはノネット達と共に戦場を駆けていくのだった。

◇

――――――数分前。

「ふは、ふふははは。これが蒼のカリスマの実力か。機動兵器だけでなく生身の実力でもこれ程とは……成る程、魔人と呼ばれるのも納得だ」

玉座の間に呆れにも似たルキアーノの声が響く。手にしていたナイフは殆んど粉砕され、その身は壁に叩き付けられている。満身創痍、しかし彼の者の瞳には以前として強い光が宿っている。諦めている訳ではない、そう感じ取った蒼のカリスマは未だ構えを解かずにいた。

辺りに毒薬の染み込んだナイフの残骸が散乱していて、落ちたその場所では今もナイフに仕込まれた毒が音を立てて玉座の間の床を溶かしていく。それでも蒼のカリスマを中心にナイフはただの一欠片も落ちてはおらず、後ろに控えているマリーメイアとカリーヌには傷一つ無いのは流石と言えた。

護衛対象、そして己にも傷一つ追うこと無く、嘗てのナイトオブラウンズの一人を撃破、単独で、しかも圧倒的不利な状況の中、それでも蒼のカリスマ――――――シュウジはやり遂げてみせた。

だが、全てが上手くいっている訳ではない。元ラウンズであるルキアーノとの戦いを

初めて早5分、一見有利となっているこの状況、しかし事実は異なり、今のシュウジは少しずつだが追い詰められようとしていた。

シュウジを追い詰めているモノの正体、それはこれまで防いできた毒ナイフ……その残骸から漏れ出てくる毒薬だった。大理石で作られた床すらも溶かす毒薬、その毒は床に触れ、気化する事で玉座の間を満たしつつあった。猛毒のガス、それは一呼吸で動物の呼吸器官を強制的に停止させる神経ガスの類である。蒼のカリスマであるシュウジなら耐えられるだろうが、マリーメイアの様な幼子が一度でも吸い込んでしまえばたちどころに神経は麻痺し、一分もしない内に死へ誘われる事だろう。

これは……少し不味いかもしれない。徐々に迫りつつある毒ガスに仮面の奥で舌打ちをした時、玉座の間に続く扉が開かれた。

「蒼のカリスマ！　マリーメイア様はご無事か！」

「レディさんか、その様子だとそっちは無事に目的を達成出来たみたいですね」

「シュナイゼル殿とその兄上殿は既にジェレミア卿と共に脱出させたである！　シュウジ殿も早く此方へ……！」

扉を開けて入ってきたのはシュウジと同じく基地に潜入した攪乱組のレディ＝アンとブロッケンの二人、時間も既に一時間近くが経過しており、異変を感じた外の別基地から様子見として部隊を派遣してくる頃だ。

時間が差し迫ってきている。だが、玉座の間へ突入した二人が目の当たりにした光景はそれ以上に緊迫していた。充満した毒ガス、一息でも吸い込めば絶命は免れない。隅に避難しているシュウジとマリーメイアが脱出するには玉座の間の扉からは離れすぎていた。

これでは手出しできない。いや、サイボーグであるブロッケンならば息を止めれば或いは……だが、それも向こうで笑みを浮かべるルキアーノによって阻まれてしまうだろう。

壁から這い出て、残った最後のナイフを手にしているルキアーノ。その瞳は赤く充血し、何をしでかすか分からない危険性を孕んでいた。

どうすれば良い。時間も迫り、毒ガスも同時に広まり、レディ＝アンの表情に焦りが浮かぶ。このままでは共倒れになると危惧した時だ。

「ったく、仕方ないな。本当はこんなことしたくなかったんだが」

「……おじ様？」

「ごめん、マリーメイアちゃん。先に謝っとくね」

「へ？」

唐突に振り返り謝罪するシュウジに呆けてしまうマリーメイア、何をと尋ねるよりも先に彼女の体はフワリと浮かび、シュウジに担がれていた。

「お、おじ様!?　一体何を……」
「息を止めて目を閉じろ！」
いきなり触れられた事に動揺してしまうが、それも次の瞬間聞こえてくるシュウジの声に萎縮してしまう。言われるがまま目と口を閉じたマリーメイアが次に待っていたのは……。
「ブロッケン、受け……取れぇぇっ!!」
「どっこいしょおぉっ!?」
シュウジによって投げ飛ばされる浮遊感と疾走感だった。突然の事態を前に驚愕しながらも受け止めたブロッケン、彼の腕の中に抱かれているマリーメイアは、目を回して気を失っていながらも無傷で済んでいる。
「蒼のカリスマ、貴様何をっ！」
「そぉれもう一丁！」
トレーズの忘れ形見であるマリーメイアに対する蛮行に沸点が降りきれそうになるレディ、しかし彼女が抗議の声を上げるよりも早く、第二投が投げ渡された。
「ごふぅっ!?」
鳩尾に入る重みと衝撃に女性にあるまじき声が漏れる。一体なんだと視線を下ろしてみれば、そこには目を回した元皇女がいた。

「二人とも、彼女を連れて先に脱出を、俺も後から追い付きますので」
「……言いたいことは色々あるが、それも後回しか。行くぞブロッケン、我々も脱出だ」
「り、了解したのであーる！　シュウジ殿、此方は任せてそちらも脱出を！」
　不平不満はあるが、今はこの基地から脱出するのが最優先、レディ＝アンはブロッケンを引き連れ玉座の間を後にする。
　今この場所に残っているのは魔人と吸血鬼の二人だけ、互いに目の前の標的だけを見据えてその挙動を観察しあっている。
「……しかし意外だな。アンタの事だからブロッケン達を最初に狙いそうなモノなのに、アッサリと見逃すんだな」
「当然だ。私の目的は最初からお前唯一人、サイデリアルに与したのも元皇女様達に従ったのも、こちら側にいた方が目的を達しやすいと判断したからに過ぎない」
「成る程、俺はどうやらよっぽど怨みをアンタから買ったみたいだな。……だが、生憎此方はそちらの怨みに付き合うつもりはない。悪いが、ここで失礼させて貰うよ」
「はっ、この状況でどうやって逃げるつもり――――」
　言い掛けた瞬間、ブリタニアの吸血鬼はその双眼を大きく見開かせる。その時彼が見たのは体を回転させて背後の壁に向かって蹴りを放つ魔人の姿、爆発したかに思える音と衝撃が玉座の間から外に貫いた次の瞬間、外の景色が二人の眼前に広がっていった。

魔人の放つ蹴りによって開けられた穴、それは基地の外壁の一部をもろとも吹き飛ばし、外へ繋がる脱出口となっていた。人並み外れた膂力を見せる蒼のカリスマに流石のルキアーノも言葉を失う。そんな奴の隙を見逃す筈もなく、シュウジは穴の空いた玉座の間から身を翻して飛び出した。

玉座の間は基地の最上階に位置していた場所、そこから飛び降りた所で待っているのは死だけ。毒ガスよりも、吸血鬼よりも明確な死が秒単位で迫ってきている。

地面に叩きつけられれば即死は免れない。しかしシュウジには絶望に染まってはおらず、その表情は不敵な笑みを浮かべていた。

『やれやれ、相変わらず無茶をするな君は、付き合う此方の事も少しは考えて欲しい所だ』

通信端末から聞こえてくる音声、その声を耳にした瞬間、魔人の自信は確信へと変わる。

「良いだろ。こっちもお前の無茶ぶりに散々付き合わせてやったんだ。多少は多目に見ろよ」

『ふっ、それもそうだ』

「……で、そちらの首尾は？」

『既に目の前に届けているよ』

目の前に目を向けると、そこには射出された己の機体、Ａ・アメイジング・トールギスがそこにあった。相変わらずの手際の良さに感心しながら、蒼のカリスマはコックピットを開き、中へと入る。

操縦席に背中を預け、トールギスに火を灯す。地面に激突する直前に起動を完了したトールギスはスラスターを全開にして体勢を整え、地面へと着地する。

見渡せば既に戦いは始まっている様子、少し離れた所でギュネイ達が戦っているのを確認したシュウジは彼等に合流しようとトールギスを動かす。だが次の瞬間巨大な熱源反応が四つ、トールギスの周囲を囲むように現れた。

降り立ってきたのは巨大な赤、それはアマルガムなる組織が開発したベヘモスと呼ばれる巨大ＡＳ、そして彼等を従うように現れる――――ベヘモスと同じ色をした一機のコダールだった。

『何でこんな辺鄙な所まで来てごみ掃除紛いな事をやらされる羽目になるのよ。モミアゲのセットだってしなくちゃいけないのに……あーあ、嫌だ嫌だ。ボクチン早くおうちに帰りたい』

「ベヘモス……そうか、そういえばアマルガムなんて組織もあったんだったな。奴等もサイデリアルと結託したのか」

状況的に、自分の推測は間違っては無さそうだ。そこまで考えた所でシュウジの思考

は切り替わる。
目の前にいるのは四機の巨大ＡＳと指揮官機、何れもラムダドライバなるシステムを搭載された特別な機体だ。グランゾンに乗っていた時とは違い、勝手が異なる相手。
しかしやることは変わらない。目の前に敵が立ち塞がるのなら全てを斬り伏せて押し通るまで。状況的に圧倒的不利な状況で、それでもシュウジは仮面の奥で笑みを崩さない。
『逃がしはしないぞ、蒼のカリスマ。お前は今日ここで私に倒されろ』
背後に降り立つ紫のＫＭＦ、ルキアーノ＝ブラッドリーの駆るパーシヴァルによって状況はさらに悪化。それでも、やはり魔人は動揺する事無く。
「良いぜ、シュナイゼルに俺達の今の強さを見せ付けるチャンスだ。精々暴れてやろうぜ、なぁ！　トールギス!!」
シュウジの叫びに応える様にトールギスの眼が輝きを放つ。スラスターを全開にして彼等は目の前の敵陣に斬り込んでいった。
『蒼のカリスマ……嘘ォッ!?　生きてたの!?』
一機のベヘモスが真っ二つに両断される。その光景を目の当たりにしたモミアゲは、一人悲痛な叫び声を上げた。

その１３４

二つに裂かれた赤い巨体が、空を仰ぎながら地に倒れる。轟音と砂塵を撒き散らしながら沈んでいくその様に、コダールの搭乗者であるゲイツは目を大きく剥かせてこれでもかと見開き、その視界には眼前に佇む蒼い機体を映し出していた。

『おい、おいおい、おいおいおいおい！　何だよこれは！　折角持ってきた貴重なベヘモス一機が速攻でおじゃんってどういう事!?　ただの弱小な反勢力のお掃除じゃなかったのかよ！　てゆーかなんで蒼のカリスマが生きてるのー？　死んだって言ってたじゃん！　こんなの聞いてないよおじちゃんは！』

音声通信から聞こえてくる部下達の動揺の声、それは増援として呼ばれたアマルガムの兵士達だけでなく、周囲の新地球皇国軍の兵士にも及んだ。

組織の要でもあるラムダドライバシステム搭載、それは搭乗者の精神エネルギーを物質世界に介入し、事象に干渉させるモノ。ラムダドライバを通して生み出された精神エネルギーは力場の無い力場を生み出し、自身に迫る事象に対抗する力を与える。

防ぐ時には壁のように己の身を守り、攻撃する時は全てを穿つ弾丸と化して敵を撃ち貫く。そしてそれは防御や攻撃だけでなく、べヘモスという巨体を支える動力源にもなっている。

アマルガムが生み出したＡＳ、べヘモス。悪魔を冠した銘を持つその機体は言ってしまえば全身をラムダドライバという筋肉と鎧で覆われた怪物だ。当然通常の兵器では傷を付けることは勿論、進行を阻むことも出来はしない。ＭＳといった機動兵器でも撃破に至るのは至難の業だろう。

なのに――――それなのに、何故あの蒼い機体は唯の一振りでべヘモスを両断しているのか？　切断面から火花を放ち次の瞬間には爆発、唯の鉄屑と成り果てたべヘモス。燃え盛る炎の中から、モノアイを煌めかせて現れる蒼い機体――――トールギスを前にゲイツはグヌヌとくぐもった声を漏らす。

『た、隊長！　ホントにあれは蒼のカリスマなんですか!?　自分は蒼のカリスマの機体は例の魔神であると聞き及んでいますが……』

『まさか偽者？　奴の名を欲した輩が自らそう名乗っているだけなのでは？』

『こぉのスカポンタン共！　今のを見てまぁだそんな口が叩けるのか！　夢を見るのはママの腹の中だけにしておけ！　次また寝惚けた事ほざいたら奴よりも先に俺がお前らを殺すぞ』

怒気をこれでもかと込めたゲイツの罵倒が部下達に浸透していく。その一方でゲイツもまた部下達と同じ気持ちをその内に抱えていた。

聞いていた話と違う。アマルガムの上層部から伝えて聞いた話では確かに蒼のカリスマは死んだと伝えられている。ここへ呼び出されたのも上層部が今の内にサイデリアルに貸しを作れという指示でやって来たに過ぎない。未だ全貌が明らかにされていない謎の組織、技術、軍事、その全てがこれまでの規模とは一線を画すその力、僅でも恩を売って損はないというその命令に……。

弱小勢力の排除、ゲイツは面倒くさい掃除感覚でやって来たが、その考えは思い付く中でも最悪の形で裏切られてしまった。

目の前にいる蒼い機体、以前見掛けたグランゾンとは違いＭＳの類いであることは理解できる。一見すれば確かに蒼のカリスマだと気付くモノはいないだろう。

だが、ゲイツは覚えている。眼前に立つ機体から発せられる恐ろしいほどの殺気に睨み付けられたこの感覚を、全身の穴という穴から汗が吹き出し、モミアゲが危険信号をこれでもかと発しているこの体験を。

そもそも、ベヘモスをラムダドライバの上から叩き斬る存在など早々いてたまるか。Ｚ―ＢＬＵＥにはスーパーロボット並の力を引き出すＭＳは確かに存在するが、それはごく一部の火力に特化した変態ＭＳのみ、あんなデタラメな力を持つＭＳを扱えるのは

Ｚ―ＢＬＵＥを除いて一人しかいない。
（クソッタレがぁ、どうして俺様の任務って予想外の出来事ばかり起こるんだよぉ！　モウヤダ、ボクちんオウチに帰りたい）
　しかし、それでも普段の調子を崩さない限り彼も流石と言えた。傭兵の中でも極めて特殊な部類に入る彼は目の前に立つ蒼い機体を前に内心で決意する。
（よし、ここは適当に相手して逃げよう。うん！　その方が賢明なのは状況的にも明らかだしネ！）
　ていうか、何が悲しくて地獄から蘇った化け物を相手にしなくてはならないのか。ゲイツのその判断は間違っておらず、彼はその後四機のベヘモスを失うという大失態をやらかしながらも、帰路につくのであった。

◇

『おいシュウジ――――いや、今は蒼のカリスマか。こっちは粗方片付いたぞ。そっちの援護は必要か？』
「いいや、その必要はありませんよ。此方も増援であるベヘモス四機を始末しましたので……まぁ、指揮官機は逃してしまいましたが」
『らしくないな。お前が敵を見逃すなんてな』
「まぁ、相手が相手でしたからね。此方の敵はラムダドライバ搭載型５機に加えて元ラウンズ１機、念の為という事で深追いは自重する事にしました」
（その自重をもっと別の所に出してくれればこっちも助かるんだけどなぁ）
「ん？　何か言いましたか？　報連相は大事ですよ、気になる事があるのなら速やかに話してください」
『何でもないよ。しかしいいのか？　折角ここの基地を叩いたんだ。物資とか色々奪っても良かったんじゃないのか？』
　通信越しで訊ねてくるギュネイだが、蒼のカリスマはそれは必要ないと慎ましく却下する。本来、今回の作戦は勝ち目の薄い博打の様なもの、自分達という別要素が加わった事で何とか達成できた作戦だ。
　マリーメイアとシュナイゼル並びに人質になっていた元皇族一名の救出、止めに首謀

者の一人だった元皇女の確保、最後を除いてそれは今回の作戦の第一目的であり、不可能とされていた目標だったのだ。それが達成された今、この場に長く留まるのは危険というものだろう。

それに、未だサイデリアルの全てが明らかになっていない現在の状況に必要以上の刺激は与えたくないというのもある。相手は地球よりも遥かに技術が進んだ力を有している。次元力の制御や応用、技術転換も向こうが格段に上、下手に反抗して相手をその気にさせてしまえば被害が出るのは此方になってしまう。

今はまだその時ではない。通信画面の向こうにいるギュネイもその事を分かっている様で、特に反論しないまま「了解」と言い残して通信を切る。直後、自分の反対側へ飛び立つ数機の機体を目にした蒼のカリスマは、それが撤退完了の合図だと理解する。今頃マリーメイア達も、先に脱出したシュナイゼルの所に合流している所だろう。

「……さて、そういう訳で此方も撤退させて戴きたいのですが――――まだ、やりますか？」

横で地に膝を着き、槍を突き立てているＫＭＦ――――パーシヴァルを尻目に、蒼のカリスマはその搭乗者であるルキアーノに訊ねる。

アマルガムの横槍であるベヘモス四機と、その指揮官機であるコダール。止めに元帝国最強の騎士が相手とならば、それは正しく死地と呼べるモノだっただろう。しかし、

そんな戦力を以てしても蒼のカリスマとその機体Ａ．トールギスを追い詰める事は出来なかった。

機体もさることながら搭乗している者は破界事変、再世戦争、時獄戦役と度重なる大戦を生き抜き、更にはその中で多くの強敵と戦い、それらを降してきた猛者である。

本人に全くその自覚はないが、その実力は既にエースの範疇には留まらず、操縦技術だけでも凄腕揃いのＺ―ＢＬＵＥの中でも上位に食い込む怪物である。

その怪物が、一切の慢心も抱かずに友によって洗練された機体であるトールギスを駆って戦場を行き交えば、その結果は必然とも言えた。一騎当千、その意味を正しく具現化した猛者、それが今の蒼のカリスマ――――シュウジ＝シラカワである。

その彼が未だルキアーノを相手に仕留めきれていない。それは別に相手を侮っている訳でもなく、ただ単にルキアーノ＝ブラッドリー本人の実力によるものだった。

アマルガムの横槍は確かに予想外の出来事だった。ベヘモス四機というデカブツに加え、恐らくベテランであろう傭兵が乗っている指揮官機も随伴、単純な戦闘力では負ける気はしなかったが、それでもシュウジは彼等との戦いに違和感を感じていた。

それもその筈、絶対に勝つ気でいるルキアーノに対し、コダールの搭乗者であるゲイツは体の良いところで逃げられる様に部下達を盾にしたやり方で戦っていたのだ。戦場では多くの感情、思考、思惑が渦巻くモノ、状況を打破しようと懸命に戦う者がいれ

ば敵を倒そうと必死になる者や自分だけは助かろうと画策する者もいる。今回はそれが如実に表れた最たる例である。

別にその違和感に振り回されていた訳ではない。ただ、シュウジ自身よりもある意味で生き延びる事に秀でたゲイツと、貪欲に自分を殺しにかかっていたルキアーノが奇跡的に噛み合っていたのだ。ベヘモスという巨体の影から攻撃してくるコダールとパーシヴァルの連携攻撃、偶然か、それとも意図的なのかは定かではないが、シュウジにとって彼等の攻撃は自分の動きを阻害する一種の妨害行動であり、やり辛さを強調する攻撃だった。

だが、それでもシュウジはトールギスを信じ、友から渡された機体と共にその状況を打開して見せた。ベヘモスを斬り伏せ、その隙に攻撃してくるコダールに回し蹴りで反撃し、槍を構えて突貫してくるパーシヴァルを刀で反らして殴り飛ばして見せた。

残った二体のベヘモスも速やかに両断してみせた事で打破できたこの状況、指揮官機のコダールを逃がしたのは悔しいが、それでも充分時間を稼ぐことが出来た。後は自分もギュネイ達の所に戻るようこの場から離脱するのみ。

――――だと、そう思ってもどうやら向こうはそうはさせないみたいだ。機体の至る所から火花を散らし、それでも立ち上がるパーシヴァルにシュウジは言い難い圧力を感じた。

『あぁそうだ。これだ。この感覚だ。圧倒的な力に押し潰されそうになるこの虚脱感、俺は漸くここへ辿り着いた――――いや、戻ってきた』

「なに？」

『感謝するよお蒼のカリスマ。お前は俺の大事なものを根刮ぎ奪った悪魔であり、再び俺に機会を与えてくれた神だ。正直、お前には憎悪しかなかったが、今この時のみ素直にありがとうと口にしよう。――――故に、今度こそ俺の大事なモノを取り戻させて貰う』

支離滅裂、少なくともシュウジには理解できない言動を宣うルキアーノ。一体何をするつもりなのか、シュウジは警戒から手にした刀を構えた瞬間、パーシヴァルから予期せぬ力の波動を感じた。

ＫＭＦとＭＳ、その機体差は倍近くに迫り、トールギスとパーシヴァルもその例から外れなかった。端からみれば見上げ見下ろしている両者、しかしシュウジにはパーシヴァルが自分達より何故か大きく見えた。

パーシヴァルから発せられる力の波動、それはシュウジも何度か目の当たりにした事のある力だった。

「この力、この感覚、――――お前、まさかスフィアを!?」

『いいや違う。俺が奴から与えられたのはほんの一部分だけさ。奴曰く、この力は立ち

上がる者の意志に反応して力を増幅させるらしい。逆境に陥れば陥るほど、その時に得られる力は倍増していく。分かるかぁ？　今俺を通してパーシヴァルの力の強さのほどを！』
「立ち上がる者の……意志」
『漸くこの時がきた。蒼のカリスマ！　再世戦争でお前に奪われたモノを奪い返させて貰うぞ！』
「これは……ちょっと不味いかもな」
パーシヴァルから発せられる力は時間が経過していく度に増大していく。思わぬ所から出てくるスフィア所有者の情報に戸惑いながらもシュウジは構えを深くさせ。
『行くぞオオオオッ!!』
「っ！」
襲い掛かる吸血鬼の一撃を正面から受け止めてみせた。

その１３５

――――再世戦争、後にそう呼ばれる争乱の頃。神聖ブリタニア帝国は一人の男の手によって衰退の一途を辿ろうとしていた。

蒼のカリスマ。とある島国に攻め行った際に彼の者の逆鱗に触れたブリタニアと当時の政府軍は、保有する戦力の大部分を失い、ブリタニアは国連での発言力や権力を失う事となった。

その後、シュナイゼルの独断によって行われたエリア１１での蒼のカリスマとその愛機グランゾンとの決戦、止めとばかりに敗北したシュナイゼルは権威の失墜したブリタニアを貴族制度の廃止という形でその長い歴史に幕を下ろした。

ブリタニアの失墜、権威の消失。成る程それは確かにブリタニア帝国民……特に、一部の皇族にとって許しがたい事実だろう。過去の栄冠に縋っていた者達にとって

拠り所となるモノを失う事は生きる意味を無くす事に等しい。力さえあればどんな手段であろうとも彼女達は選ばないだろう。嘗ての生活を、栄華を、再び手に入れる為に。

だが、そんな事は己には関係が無かった。ブリタニアが滅びようが復活しようが、それはルキアーノ＝ブラッドリーにとって毛ほども興味もない話だった。彼が求めるのはただ一つ、〝強さ〟　それだけである。

あの日、彼は自信を、尊厳を、誇りを奪われた。グランゾンという圧倒的な力によって打ちのめされ、それまで手にしていた己の在り方を完膚なきまでに破壊し尽くされてしまった。

圧倒的な力による蹂躙。容赦もなく、遠慮もなく、向かってくる者、逃げる者問わず破壊していく。それなのに死傷者が少なく済んだのは単なる魔人の気紛れか。

ルキアーノは怯えた。震え、竦み、恐怖に心が折れてしまい、……なにより、生きていた己に深い安堵を覚えた。息をし、己の鼓動を感じていた事をこの上なく喜んでしまっていた。それが騎士である自分が死んだ時だったと悟るのはそれから少し経った後の事。

坂を転げ落ちる様だった。トウキョウ租界では部下を死なせ、自分だけはのうのうと生き残り、シュナイゼルが起こした決戦にも機体が無いからという理由で不参加を容認された。

無様、なんたる無様。ブリタニアの吸血鬼と恐れられ、数多くの人間を殺してきた自分が一度の敗北でここまで堕ちたのか。悔しさと情けなさの剰り、何日も眠れなくなり、酒に溺れる時間だけが過ぎていった。

そんな時だ。サイデリアルと呼ばれる組織が地球に侵略を始め、瞬く間に支配領域を拡大していった頃、彼は奴と出会った。

『ほう、堕ちていながらも燻り続けるその魂……成る程、貴様にならこの力を多少だが使いこなせるやもしれんな』

『バルビエル、奴のように復讐心を煽るような芸当は俺には不向き、貴様に預けたのは貴様が折れぬ限り際限なく力を増大させる〝立ち上がる力〟の極一部だ。その力、精々使いこなしてみせるがいい』

与えられたのは身を滅ぼす悪魔の力。使えば使うほど、使用者の肉体を蝕み、やがて灰と化していく。どうやら自分にはこの力を使いこなせるほどの適性はなかったのだろう。だが、自分はそれでも構わなかった。

自分が吸血鬼（ルキアーノ）に戻るには、魔人を打ち倒すには、同じ化け物の力が必要不可欠。ならば躊躇いなど――――ありはしない。

譬えその果てに何も得られないのだとしても、後悔だけはしたくないから。

◇

『あぁァァァァァっ!!』

『っ!』

回転した四連クローが回転し、ブレイズルミナスを纏う事で生まれる流動槍（エネルギースピア）、推進力を最大限に放出させそこから生まれる突進力で相手を串刺しにする。一撃必殺、突けば並み大抵の者を貫く威力のあるパーシヴァルの一槍をトールギスは刀をいなせて逸らし、受け流す。

衝撃も威力も完全に受け流した。それなのに伝わってくる振動の強さに蒼のカリスマは画面の奥で少しばかり目を見開く。今の一撃は明らかにＫＭＦに許された威力ではない、それこそ戦艦の……下手をすればアークグレン級の艦を貫けるモノだった。

今のパーシヴァルは人の手によって生み出された限界値を超えている。技術云々の話ではない、もっと別の力が働いているように感じる。

いや、蒼のカリスマは――――シュウジは知っている。乗手の、パイロットの感情一つで劇的に変化を遂げる力を持つエネルギー源を、その核を知っている。

〝スフィア〟それは所有者の感情の爆発によって発動させる未知の炉心。悲しみや怒り、虚栄心や愛、憎悪や好奇心、人が――――知性体が有するそれぞれの感情を媒体としているそのスフィアは手にした所有者に絶大な力を与え、またスフィアにはそれぞれ星座の名称を冠している。

ガドライト＝メオンサム。彼が双子座のスフィアを所有している事から、サイデリアルもスフィアを持っているのは容易く想像できた。ルキアーノの言う立ち上がる力の意思、恐らく奴に力を与えた輩は対抗心やそれらに因んだスフィアの持ち主である事が予想される。

となると、どうやら事態は思っている以上に不味い事になっているかもしれない。対抗心を元に力を増幅しているならば、此方が有利な状況であればあるほど向こうは対抗心を燃やし、その力を増大させていく。軈てそれは歯止めが効かなくなり、所有者に限界が訪れるか、行けるところにまで行ってしまう可能性がある。

そうなった以上、現在の地球勢力で止められるのは極僅かなものとなる。時獄戦役の時、Ｚ―ＢＬＵＥが一時的に得られた真化の力があれば対応出来たであろうが、恐らく今の彼等にあそこまでの力は残されていないだろう。当然、レジスタンスの皆もああ

なったパーシヴァルを止められる者はいない。
とすれば、やはり自分が相手をするしかない。グランゾンという頼れる愛機がいない今、多少なりとも不安は残る。が、それでも自信はあった。
今自分が乗っているのは友人達が残してくれた機体だ。確かにスフィアの力は強大だが、それに抗う為の力は既に用意されている。後は友人達とトールギスを信じて全霊を込めて刀を振るうだけである。
旋回したパーシヴァルが再び此方に向けて突進してくる。先程よりも加速と威力を乗せて放たれるその一刺しは空気摩擦との影響で焔を纏っている。
対するトールギスは刀を上段に構え、突っ込んでくるパーシヴァルに向けて己の間合いに入った瞬間――――降り下ろした。
火花が散り、轟音が唸る。正面から打ち合った両者の一撃は地表を抉り大気を爆発させた。拮抗する両者、しかしその均衡は長くは続かず、次第にトールギスが押されていく。
『なぁ蒼のカリスマ、お前にとって一番大事なものはなんだぁ?』
次第に追い詰められていく状況、その中で聞こえてきたルキアーノの声。静かに、ただ聞きたいとされる彼の言葉を蒼のカリスマは内心で反芻する。
『まぁ、色々あるな。命だったり、ここにはいない誰かだったり、とてもじゃないが、一

つに絞るなんて事は出来ないな』

だって、人間には生きていく中で大事なものは幾つも出来てしまうものだ。家族や恋人がそうだと答える者がいれば富と名声は命より重いと断じる者もいる。そもそも、一番大事なものは二つ持ってはいけないという法則（ルール）は存在しない。人の意思や思想が人の数だけ違うように、大事なものというのもまた十人十色。

『そもそも、大事なモノに順番や数を決め付けている時点で、なんかおかしいだろ。それ』

『く、はは、クハハハ！　確かになぁ、それもそうだ。人間というのは強欲なモノ、欲しいものや大事なものを際限無く持つというのは当然か』

蒼のカリスマ――――シュウジの答えに気分よくしたルキアーノは上機嫌に笑う。スフィアの力の影響で既に肉体は限界を迎えつつあったが、それでもルキアーノは力を出し切る事に躊躇は無かった。

弾かれるように距離を取るパーシヴァル、押していた状況を自ら擲つ彼等に訝しげに思うシュウジだが、次に彼等から発せられる力の奔流にそれが最後の攻撃の準備だと察する。それも恐らく……死力を尽くしての一撃。

スフィアとは絶大な力を持ち主に与えると同時にその副作用で所有者を苦しめる性質を持つ。乙女座、獅子座、天秤座、シュウジが知るそれぞれのスフィア所有者達も、例

外無くその副作用に苦しめられた経歴を持っている。
そしてルキアーノに施されたスフィアも例外に漏れる事はなかった。際限無く溢れ出る力はパイロットの生気を奪い、機体ごと炭化させていく。左半分炭と化しているパーシヴァルからその事を察したシュウジは、それが力を使いすぎた者の末路だと知り、静かに息を呑む。
恐らく、ルキアーノは正規のスフィア所有者ではないのだろう。あくまでその力の一部をその身に宿しているだけ、ならばその力の継続もあまり長くは持たないのだろう。ルキアーノ＝ブラッドリーが次に仕掛けてくるのはそんな自爆特攻、仮にそれで自分に勝った所で待っているのは、文字通り己の崩壊だけである。
そんなカミカゼ特攻に付き合うのもバカらしい。ここは素直にライフルで牽制し、さっさとこの戦場から離脱するのが懸命だろう。今頃はマリーメイア達もシュナイゼルと合流を果たしている頃合いだろう。
だから、ここで奴に背中を向けるのは恥ではない。自分にはまだやらなければならない事がある。人一人の自爆に付き合ってやる道理なんてない。……そう、その筈なのに。
『まぁ、ここで逃げたらそれは奴の力から逃げるみたいなものだからな。それはちょっといただけない』

シュウジは思う。恐らく、ルキアーノに力を与えたスフィア所有者はサイデリアルの中でも特別な所に立っている者であると。そんな奴の力の一端を感じ、そこから逃げ出した所で、果して自分は奴に勝てるのだろうか？

あぁ、確かに今の自分は万全とは言い難い状態だ。グランゾンも無く、碌に頼れる拠点も無い、大局的に見ればそれは至極真っ当な結論だ。

だが、それを心のどこかで言い訳だと感じる自分がいる。愛機がいないから、頼れる者がいないから、それを言い訳にしている自分がどうしようもなく腹立たしい。

ここで逃げてしまったら、打ち合うのを止めてしまったら、恐らく自分は今後逃げる癖がついてしまう。――――それに何より、あの喜びクソ野郎を完膚なきまでに叩きのめすまでの道のりが遠のいてしまう事が堪らなくムカついて仕方がない。

『……トールギス、少し無茶をするぞ』

付いてこれるか？　そう暗に訊ねるシュウジに応えるようにトールギスの双眸が輝きを放つ。

パーシヴァルから放たれる力の奔流、その全てが槍へと収束されていき……。

『さぁ、お前の命を……飛び散らせろォォォォッ!!』

音を超え、流星となって突き進むパーシヴァル。それを正面に見据えたトールギスは刀を腰だめに構え――――。

『――――獣の血』

その刹那、シュウジとトールギスは完全に一体と化した。流麗に、ただ横凪ぎに振り抜かれた一閃はパーシヴァルを、その背後に聳え立つサイデリアルの支部基地もろとも……両断するのだった。

『――――あぁ、漸く、俺は……』

斬られ、薄れ行く意識の中、ルキアーノは見た。嘗てラウンズとして戦い、戦場を行く己の姿を。あの日以来、忘れてしまった己の在り方を。

相手が誰であろうと牙を剥く、吸血鬼であり、ブリタニア尖兵としての自分。他者を殺し、その命を奪い続けてきた男の姿を――――漸く、取り戻した。

閃光に消えていくルキアーノ。ブリタニアの吸血鬼と呼ばれ、恐れられてきた男は、最後に嘗ての自分を取り戻し、満足した様子でこの世を去っていった。

◇

「……ルキアーノ＝ブラッドリー。その名、覚えておくとしよう」
「陛下？　いかがなされました？」
「いや、何でもない。それよりも、例の者達はどうした？」
「はっ、一人残らず捕らえました。少々怪我を負っていますが、命に別状はありません」
「よい。通せ」
「はっ！」
　地球支配の象徴、ラース・バビロン。新地球皇国軍の総帥が君臨する玉座の間、そこへ連れてこられたのは一人の女性と複数の子供達。パイロットスーツのままここへ連れてこられた彼等は敵対心を最大限にした眼で自分達を見下ろす皇帝を睨み付ける。
「新地球皇国……いや、サイデリアルの親玉があたし達に何の用だ？」
「貴様、無礼であろう！」
　不遜な態度の女性に高官の男が無礼と断じて手を上げる。手を縛られ、抵抗する力も奪われた女性に高官の理不尽な暴力が振るわれる。
　それを引き金に後ろに控えていた子供達の怒りに火が着いた。両手を縛られておき

ながら尚も反発する彼等に高官が腰に差した剣に手を伸ばそうとした時。
「貴様、この玉座を血に染める気か？」
背後からの威圧、押し潰されそうな圧を放つ皇帝に反論する間も無く言葉を失った男は、皇帝に促されるまま玉座を後にした。
残されたのは女性達とその部下である子供達のみ、すると皇帝は静かに目を閉じて。
「まずは此方側の非礼を詫びよう。女、いや、フィカーツィア＝ラトロワ。そしてジャール大隊の戦士達よ」
「……まさか私達の事まで知っていたとはねぇ。それもサイデリアルの力って訳か。それで？　アンタはワザワザ私達を捕らえて何がしたいんだ？　残念ながら私達にそんな大層な価値はないよ」
「お前達に求めるのは二つ、蒼のカリスマ……いや、シュウジ＝シラカワに関する全ての情報、並びに奴を呼び寄せる餌になってもらうことだ」

その１３６

Ｚ月※日

ブリタニアの元皇族であるシュナイゼルと、トレーズさんの忘れ形見であるマリーメイアちゃん達を救出して早数日。現在自分はブロッケンとギュネイ君を連れてはおらず、単独で各地を転々としている。

何故一人なのか、その事を踏まえた上でこれまでの事を整理しようと思う。まずシュナイゼルとマリーメイアちゃんを新地球皇国軍の基地から救出した後、シュナイゼルは自身を中心に部隊を編成。元ブリタニアの宰相であり、軍師としても強力な力を持っているあいつは、その智力と智謀を以て皇国軍と戦う事になっている。

助けたばかりであまり派手な行動は慎んで貰いたい所だが、地球の勢力図は未だ此方側に好転しない状況だ。多少なりとも地球政府側に貢献した方が今後の自分の為になるとシュナイゼルは語る。相変わらず口の減らない奴で安心した。

おまけに相応な拷問を受けた筈なのにケロッとしてやがる。シュナイゼル曰く、再世戦争の時に受けた自分の拳に比べれば何ともないらしいが、それでも言い方というモノがあるだろう。……まぁ、別に心配はしていないから構わないけどさ。

しかし、如何にシュナイゼルが奇策や謀に秀でた軍師だとしても、相手は次元力という強力な力を操る大規模組織だ。元ラウンズのお三方やジェレミア卿が守りについていても、不安は取り除かれる事はない。

戦力は多いに越したことはない、そんな訳でギュネイ君をシュナイゼルに一時的に預けることにした。本人にも一応確認を取ったし、快く承諾してもらったから問題はないのだが……なんだろう、シュナイゼルに預けたい旨を伝えた際の、やけに晴々としたギュネイ君の表情が何故か引っ掛かるのは。

――――ともあれ、シュナイゼルには現在元ラウンズ三名と、元ネオ・ジオンのエースが側に控える事になる。彼等の実力ならば無人機程度に遅れを取ることもないし、幹部クラスの戦力が投入されない限り、早々負ける事はないだろう。尤も、だからと言って常勝でいられる保障もないのだが……まぁ、そこら辺はシュナイゼルの采配に任せよう。アイツならば下手な犠牲を出すことはないだろうし、仮に負けそうになってもそうなる前に決断しそうだしな。

投降して再び捕らえられても、その時はまた救出すればいいし。そうなったら盛大に

煽ってやるとしよう。グヌヌな顔をしたシュナイゼルにＮＤＫと挑発するのもそれはそれで面白そうだ。

次にマリーメイアちゃんだが、正直こっちの方が自分としては心配だ。何せ彼女は自分に出来る事を探すと言って、レディ＝アンさんと一緒に旅に出てしまったのだから。

皇国に攻めいられているこの状況でなんつー無茶な事を言いだすのか。勿論自分は止めようとしたのだが、父親に似て強情なマリーメイアちゃん。私は大丈夫ですの一点張りで此方の話を聞いてくれやしない。これが単なる子供の我が儘なら尻を叩いてでも言い聞かせるのだが、これがそうでもないから質が悪い。

この情勢で自分の出来る事を見つけ、少しでも手助けをしたいと訴えるマリーメイアちゃん。以前の起こした戦いも含め、少しでも事態が好転するように協力したいと申し出る彼女に、自分はそれでも承諾出来かねた。そんな自分に意見を投げ掛けてきたのは意外にもシュナイゼルだった。

シュナイゼル曰く、現在の地球の現状は皇国軍とそれに抗う地球政府軍で混沌としており、戦渦に巻き込まれる危険性はあっても、ピンポイントでマリーメイアちゃんが狙われる事はないという。

そもそも、今回マリーメイアちゃんが捕まったのは皇国軍に寝返ろうとした際にその引き換えとして売り渡そうとした材料に過ぎない。もっと言えば、連中にとってマリー

メイアちゃんはさほど重要な存在ではないらしい。今回起きた出来事は全て自分の身内に起きた不始末で、そこまでの行動力は無いだろうと侮った自分の責任だとシュナイゼルは語る。

そういう問題ではないと自分は勿論反論した。レディさんという頼もしい付き人がいるからって、戦渦に巻き込まれるマリーメイアちゃんを放っておくわけにもいかない。けれど、先にも述べた通り今の地球の勢力図はサイデリアルと地球政府の軍隊で戦争が起きている状況だ。絶対に安全な場所など何処にも存在しないだろう。

本当なら自分の手の届く範囲に彼女を置いておきたかったが、先のルキアーノ＝ブラッドリーとの戦闘の件で、自分の存在は向こうに知れ渡る事になる。連中がどれだけ自分の事を障害と認識しているのかは分からないが、それでも基地一つ潰されてただ黙っている事はないだろう。最悪の場合は幹部クラスの奴が刺客として自分に送られてくるかもしれない。そうなった時、グランゾンの無い今の自分だけではマリーメイアちゃんを守りきれる保証はない。

以上の理由で、不本意だが自分はマリーメイアちゃんの行動を黙認する事にした。シュナイゼルからは過保護だと呆れられたが、マリーメイアちゃんはトレーズさんの一人娘、それは自分にとっても娘も同然であることを意味している。父親面をするつもりはないが、心配する程度の権利はあってもいいだろうと思う。

　そんな訳でマリーメイアちゃんの行動を黙認する代わりに、護衛としてブロッケンを彼女につけることにした。曲がりなりにブロッケンはサイボーグ、最低でも楯位にはなる。それに各地を巡るマリーメイアちゃんと行動を共にすれば、何かしら有益な情報が手に入るかもしれない。先の救出作戦の際に現れたアマルガムの動向とか、最近見かけるマーティアルの残党とか。

　そして念の為にブロッケンには、自分に直通で繋がる通信機を渡しておいた。防水防塵、防盗聴と自分が出来る限りの事を尽くして仕上げたお手製の品である。手掛けた材料はサイデリアルの使う通信機械の部品を拝借したものだから、下手すればブロッケンの現在の体よりも高価な一品だ。いざとなったらこの通信機を使ってもらい、自分を呼び出す手筈となっている。また、同じような通信機をシュナイゼルにも渡している。此方にも何か分かったことがあったら随時連絡するよう、ギュネイ君に言い含めてある。

　そんな訳でマリーメイアちゃんに迫る危機を限りなく考慮した上で、彼女を見送る事になった。あまり自分から危ない事に首を突っ込むなよと忠告をしたが……果たして聞き入れてもらえたかどうか。

　そして最後に、今度逢うその時はトレーズさんの事を話そうという約束をした自分とマリーメイアちゃんはそれぞれ別れて出発、シュナイゼル達から見送られながら現地から飛び立った。

再び一人となった訳だが、まぁ気にする事でもない。いつものことだと割り切り、今日はひとまずこれで終わることにする。

そうそう、忘れていたが今回主犯だった元皇族とシュナイゼルと一緒に囚われていたオデュッセウスさん、彼等は後からやって来る地球政府の人間に引き渡される手筈になっている。主犯格である彼女は地球を売った売国奴、相応の報いを受けることになるだろう。

本当は他にも一人主犯の元皇女がいる筈なのだが……どうやらルキアーノを倒した際に放った自分の一撃が原因で、倒壊した基地の瓦礫に押し潰されていたのだとか。

対してオデュッセウスさんは今回の様な事態に巻き込まれないよう、比較的安全な所へ送られる事になるだとか。そんな様々な経緯を経て幕を下ろした今回の戦い。

今後、自分はサイデリアルについて調べながら各地を転々する事になるだろう。特にルキアーノに力を施した輩、そいつは多分これ迄とは別格な手強い相手になりそうだ。

他にも未だ完全に直しきれていないグランゾンの対処、そして余裕があったらリモネシアの様子も見ておきたい。相変わらずやるべき事は多いが、慌てずに一つずつこなしていこうと思う。

Ｚ月β日

今日、久し振りに時空震動を観測した。それも現在の地球圏で一番の安全地帯とされる日本で。

日本といっても蒼の地球には日本が二つ存在しているからなんと言えばいいか……取り敢えず今は第三新東京にあるＮＥＲＶ本部のある方と言えばいいか。

そんなＮＥＲＶ本部の基地で起きた時空震動、自分は現地にいたわけでもなく、噂を聞いた程度なので詳しくは分からないが、何でもあの時空震動でＮＥＲＶ本部は消失。ＥＶＡもそのパイロットであるシンジ君達もあそこから消えてなくなったらしく、とどめにあの赤い海も無くなったのだとか。

個人的な見識で考えると、シンジ君達は多分自分達の世界に帰ったのだと思う。蒼の地球は度重なる時空震動で世界が重なりあった特異な星だ。恐らくは時空震動を引き起こさせるだけの何かをあそこの地で引き起こし、異物として認識されたシンジ君とその世界だけが蒼の地球から消えたのではないかと考えられる。そう思えば基地やＥＶＡ、そのパイロットだけでなく、赤い海も消えた事に説明がつく筈だ。

何れにしても、シンジ君達がこの世界からいなくなった事実は変わらない。当事者ではない自分には彼等が無事である事と、いつかまた出会える事を楽しみに待ちわびるだけだ。

そして、これも聞いた話だが、どうやらＺ―ＢＬＵＥの青い機体、ジェニオンは結構危ない戦いをしているらしい。何でも、常に前に出て敵を容赦なく叩き潰しているのだとか。

……もしかしなくてもコレ、俺の所為だよね。やっべぇ、思っていた以上にヒビキ君追い詰められてんじゃねぇのコレ。

ど、どどどどうしよう。

◇

「いい加減にしろヒビキ！」

マクロスクォーターの格納庫、そこでは怒り心頭といった様子の早乙女アルトが、同じ部隊で同級生であるヒビキに掴み掛かる。

先の戦いでＮＥＲＶは消失、ＥＶＡも、そのパイロットである碇シンジも消え、残さ

れたのは第三新東京都市を深く抉ったクレーターのみ。敵も撤退し、Ｚ―ＢＬＵＥもその場から退去する事となった。

そんな中アルトがヒビキに突っ掛かるのは、彼に対するアルトなりの元気付けでもあった。時獄戦役の終わりから今日まで意気消沈としていたヒビキは、敵をただ殺す為の機械へとなりつつある。

敵は殺す。それだけが自分の存在意義だというようにただそうあり続けたヒビキは、歪んでいるの一言に尽きた。学校にも顔を出さず、ただ目の前の敵を倒し続けるヒビキ、そんな彼を気遣ってきた彼等だが、それももう限界に迫ってきた。

「一体いつまで引き摺ってるつもりだよ。確かにお前は奴を手に掛けたのかもしれない。けどそれはあの状況じゃ仕方がなかった事だろ。……別に忘れろなんて言わない、けど！　もう少し周りを見てやってくれよ」

怒鳴り、懇願し、遂には泣きそうになるアルト。自ら兄貴分であるシュウジを殺し、それを踏み台にして得られると思った平穏。しかしそれは新たな侵略者サイデリアルを呼び出すだけに終わり、結局戦いは終わることはなかった。

分かっていた事だった。シュウジを倒した事で得られる平穏はなく、寧ろそれは時獄戦役の頃から予感してきた戦いの始まりに過ぎない事など……ヒビキ本人も分かりきっていた。

「……あぁ、すまない。次は気を付ける。後でスズネ先生にも謝っておくよ」
だが、それを心から納得したわけではない。心を許した兄貴分の裏切りと殺害、その事実がヒビキの心を深く傷付けている。
瞳から光を失った目で謝るヒビキ、胸ぐらを掴まれていながら無気力にそう口にする彼に言葉を失ったアルトは何か言うわけでもなく、乱暴に手を放す。ヨロヨロと力なく格納庫から去っていくヒビキを痛々しく見送った彼等は、今後ヒビキをどうするか話し合う。
「……ヒビキの奴、やっぱりまだ立ち直れてないか」
「シンジも以前までヒビキには気遣っていたのにアイツ、全然反応出来ていなかったからな」
「ヒビキ、このまま潰れちまうのか？」
「それは分からん。が、ヒビキをジェニオンから降ろす事も視野に入れた方が良いのかもしれんな」
「そうだね。ヒビキには悪いがアタシ達も自分の事で精一杯なんだ。これ以上余計な荷物を抱えるのは勘弁願いたいよ」
その場にいる誰もがヒビキの事を心配するなか、非情とも言えるオズマとマオの提案にその場にいる全員が凍り付く。

　それは無いだろうと反論する者もいるが、二人の言葉を正しく論破出来る者はいなかった。当然だ。サイデリアルというこれまでとは桁違いな力を持つ組織を相手に、自棄になったままの人間を作戦行動を共にさせるのは、同じ作戦にいる仲間を危険に晒す事。部下を持つ立場にいる彼等にとって、ヒビキの戦力外通告は当然の選択と言えた。
「待ってください」
「宗介……」
　そんな二人に異を唱えるのはアルトと同じ同級生であり、ヒビキと最も親交のある人間、相良宗介だった。
「自分がヒビキのフォローに入ります」
「だからヒビキを部隊から降ろすのを止めろと？　幾らお前とヒビキが親しいからと言って……」
「奴の搭乗している機体、ジェニオンはサイデリアルに対する切り札になり得ます。奴が少しの間へタレているからといってその判断は些か早急だと自分は具申します」
　言い回しは少々乱暴だが、宗介の言うことも一理ある。サイデリアルという次元力に秀でて、更にはスフィアを所有する組織に対抗するには、同じくスフィアを持つヒビキとジェニオンの力が不可欠になる。だが、それを加味しても今のヒビキを戦場に出すのは躊躇われる。

難しい判断だ。マオとオズマ、部隊のまとめ役である二人が頭を悩ませていると、格納庫に艦長であるジェフリーが入室してくる。
「話は難航しているようだな」
「ジェフリー艦長、そちらの話はもう着いたのですか？」
訊ねてくるオズマに、ジェフリーは頷いて肯定する。
「これより我等は翠の星、もう一つの地球へと向かう。各員、速やかに準備に取り掛かれ」
二手に別れるＺ―ＢＬＵＥ。翠の星、そこでヒビキは、殺した筈の兄貴分の足跡をその目で目撃する事になる。

その１３７

Ｚ月＊日

シュナイゼルとマリーメイアちゃん達と別れてから一週間以上経過した今日、自分はほぼ日課になりつつあるサイデリアルとの小競合いを続けながら情報収集に勤しんでいた。

相変わらずサイデリアルの軍勢は規模も力も凄まじく、反皇国軍の勢力はコレといった決定打を打てることもなく日々泥沼の戦いを繰り広げている。そんな中自分がやっている事は精々トールギスの整備品と食糧を戴くために通り過ぎがてら手を貸している程度だ。

因みに、レジスタンスの人達から戴くわけではない。サイデリアルという資源を豊富に所有している輩がいるから貰うついでに蹴散らしているだけである。ただでさえ貧困厳しいレジスタンスの方々から物資を巻き上げるわけにもいかないだろう？

やってる事は完全に追い剥ぎ、もしくは強盗の類いだが、こっちは血生臭い戦争をしているのだ。四の五の言っている場合でも無駄に余裕ぶっている場合でもないのだ。

まぁ、そんな事をしている所為か、最近は皇国軍の連中からナマハゲ扱いされるようになったんだけどね。レジスタンスの人達からも〝妖怪物資おいてけ〟なんて呼ばれてるし。……皇国の連絡は兎も角何故レジスタンスの人達にまで恐れられなければならないのか。そもそも奪ってるのにおいてけと呼ばれるのか、色んな意味で悲しくなってくる。

そんな事もあって、今の所なんとか生きている自分だが、先日、情報整理の為に日記を読み直した時、ある考えが浮かび上がった。〝クロノ〟時獄戦役の頃から度々耳にして来た秘密組織、曾て地球至上主義を唱えたサイガス准将の後ろ楯でブルーコスモスとその母体であるロゴスと深い関わりのある組織。

その秘密組織にマーセナス家なる政治家の一族が深く関わっている可能性が浮上してきた。マーセナス家は確かリディ少尉の実家で、代々そこの家は政治に精通しており、政府とは深い繋がりがあるのだとか。

そして今日、何となくマーセナス家に付いて自分なりに調べてみた結果、なんとマーセナス家は今の世界が出来上がる遥か昔、宇宙世紀の始りに差し掛かった時代に一人の首相を輩出したという事が分かった。それもとんでもなくキナ臭い情報と一緒に……。

その人の名はリカルド＝マーセナス。当時、その世界で地球連邦政府の首相で歴史に

名を刻んだ一人の男でテロリストにその命を奪われた悲劇の人物。自分がマーセナス家とクロノが関わりがあるのかもと疑いを掛けたのもこの事件が根拠となっている。

そもそもクロノはコーディネイターやジオンという宇宙移民に対して敵意にも似た監視を行ってきた。不必要な進化を避けるべく創られた組織、それが先日までの自分のクロノに対する見解だったが、この件でその推測は随分と現実味を帯びてきた。

宇宙移民を監視、束縛し、管理してきたクロノ。並行世界を股に掛けて存在するその組織、恐らくリカルド＝マーセナスはそんなクロノに敵対し、彼等の存在を宇宙世紀の始まりとされるラプラスと呼ばれる宇宙ステーションで知らしめようとしたのだろう。だから、自分達の存在を暴露しようとしたリカルドを危惧し、彼を宇宙ステーションごと葬り去った。

リカルドを葬り、事件を闇に葬った事で安心したクロノだが、この時一つ予想外の出来事が起こった。当時ラプラス爆破のテロリスト、その工作に関わった何者かがリカルド＝マーセナスが秘めていた真相、若しくはその一端に触れ、この世界に関わる大事な何かを知ることになった。

それが、ラプラスの箱。時獄戦役の時、バナージ君の乗るユニコーンが示す宇宙世紀を根底からひっくり返す秘密の箱。それを巡ってネオ・ジオンのフル＝フロンタルと幾度と交戦しているとアムロさんを通して聞いたことがある。

確か、ユニコーンはバナージ君の実家でもあるビスト財団が組み上げた機体だったよな。……そして、宇宙世紀が始まって台頭してきたのもビスト財団だった筈。

この繋がりは偶然の訳がない。恐らくビスト財団は箱の秘密が何なのか知っているのだ。だから宇宙世紀に深い関わりのある場所を座標として指し示すユニコーンを鍵として造り上げ、バナージ君に託した。

そしてマーセナス家もその秘密を知っている。宇宙移民、進化の芽を宿した人類達に対する過剰なまでの監視と束縛をするクロノとそれに関わるマーセナスの家、そしてこの二つに大きく関わっているのがニュータイプ、アムロさんやカミーユ君を始めとした宇宙に進出した人類の新たな可能性。

恐らくラプラスの箱というのはそんなニュータイプに深い関わりのある内容を記したモノなのだろう。そしてクロノの秘密も箱の奥底に隠されていると見た。

今の自分にはあまり関係の無い話だが、放っておく訳にもいかない。恐らくクロノはサイデリアルとも関わりのある組織だ。最悪、下手をしたら連中は手段を問わず箱の存在を闇に葬る可能性がある。

自分が知っていいのかどうか迷う所はあるが、ここは思い切って探してみようと思う。

Ｖ月@日

ラプラスの箱、無粋ながらその秘密をこっそり暴くことにした自分は、取り敢えず心当たりの場所がある宇宙へ向かう為に行動しようとしたのだが、マスドライバーのある基地に潜入したらサイデリアルの幹部らしき人間と遭遇、しかもソイツは一度だけ面識のある尸空だった。

なんで奴がここにいるのか驚いた自分だったが、向こうも一人で基地に潜入した自分に驚いている様で隙だらけだった。向こうが正気に戻る前に鳩尾に拳を捩じ込み意識を奪う事に成功、更に幸運な事に奴と出会した場所は基地の管制室で、奴以外モニターに釘付けだった為、誰にも気付かれる事なく幹部一人を無力化させる事が出来た。

そのまま管制室を制圧、本当ならここで尸空にサイデリアルの目的やらなにやら吐かせてやりたい所だったが、時間的な問題と、以前自分の演技に合わせてくれた事への罪悪感でそれを後回しにした自分は基地内に侵入者に関する嘘の情報を流して混乱に陥れて、サイデリアルの戦艦をマスドライバーに予め発射時間を指定しながら設置し、後は基地近くに置いてあったトールギスに搭乗、そのまま戦艦へ乗り込み、時間通りにマスドライバーを起動させ、色々急ではあったが自分は無事宇宙に飛び出す事に成功した。

その後、衛星軌道上に展開されてたサイデリアルの艦隊に簡単な質疑の受け答えをし

た後、あっさりと通過する事が出来た。この時明らかに幹部らしい金ピカの艦を目撃するのだが、流石に一日に二人も幹部を相手にするのは面倒なのでスルーする事にした。

何だかんだあったが、結局は上手く行ったので、後はサイデリアルに察知されないようシステムに細工をしておくとしよう。

さて、そんな訳で再び宇宙に上がった自分だが、一応の行き先は決めてある。ビスト財団の屋敷があるインダストリアル7、バナージ君がユニコーンを起動させたという因縁のある場所。

ネオ・ジオンとの抗争でスッカリ人気の無くなったその場所、そこに恐らくラプラスの箱にまつわる秘密が眠っている筈。そしてビスト財団の最重要人物も……。

譬え何も無かったのだとしても、最低でもラプラスの箱に連なる情報はある筈。こうなるのだったら時獄戦役の頃、すぐに離れるんじゃなくもう少し調べておけば良かった。まぁ、余計な事をして他勢力に悟られるヘマをしなかったと考えればいいか。

……しかし、意外とはいえまさか敵の幹部二人と遭遇するとは、何だか作為的なモノを感じる。まさかあの二人の背後にはギルター＝ベローネが糸を引いてるんじゃないだろうな？

◇

インダストリアル7、ビスト財団の屋敷がある最奥の場所、幾つもの仕掛けと罠によって構成された屋敷……更にその奥で、一人の老人が生命維持装置のベッドの中で天井に映る蒼き星を見つめていた。
「……そうか、彼等は二手に別れたか」
「はい。一つは翠の星、もう一つの地球に。もう片方は蒼の地球へ降り立つようです」
「今の彼等には奴等と戦えるだけの力が足りない。翠の星へ助力を乞うのは間違いではないな」
「地球にはサイデリアルだけでなくネオ・ジオンも降下したとの情報もあります」
「今が一番苦しい時だな。この老い耄れには祈る事しか出来んが――――」
「ほう？　この混沌とする世界で未だ神に祈りを捧げますか。それは信仰心から来るものですか？　それとも、ただの懇願ですかな？」
「っ!?」
突然聞こえてきた、いない筈の第三者の声。音もなく、影の向こうから這い出るよう

に現れた仮面の男に、付き人の男性は驚愕しながらも拳銃を突き付けた。
「バカな、警備システムは万全の筈、何故警報の一つも鳴らない！」
「いや、さすがは音に聞こえたビスト財団。その警備網は大したモノですよ。サイデリアルから奪った情報端末が無ければ、もっと時間が掛かっていましたよ」
そういって懐から取り出した端末、所々煙を吹き出し、遂にはボンッと音を立てて自壊する。使い果たした端末にあらゆる間の抜けた声を漏らした仮面の男――――蒼のカリスマは再び二人に向き直る。
「……さて、あまり時間は掛けたくないので手短に済ませましょう。貴方がラプラスの箱を持ったビスト財団の宗主殿で間違いありませんね」
「よもやここで、この段階でお前に出会うとはな。蒼の魔人、蒼のカリスマよ。残念だが箱の中身をお前に託す訳にはいかんぞ」
「結構です。そもそも、箱の中身を知る資格は私にはありませんしね。……まぁ、本音を言うと大体の想像はついていますが」
「では、何のためにここへ？」
「クロノの秘密……いえ、ここは敢えてこう訊ねましょうか。ラプラスの箱の底に眠るクロノの教義について、その全てを」
仮面の奥に秘められた鋭い眼光、その光を直視した老人は僅かに目を見開いた。

その１３８

Δ月＊日
インダストリアル７の奥にあるビスト財団の屋敷、そこを通って更に奥にあるメガラニカ中枢、そこで来るべき時を待ち続けているビスト財団の宗主、サイアム＝ビストさんと話をして数日、現在自分はソレスタルビーイング号を探すべく、宇宙を彷徨っていた。
本当ならサイアムさんから直接話を聞きたかったのだが、何でも今教えたら色々台無しになるみたいで、然るべき若者達が訪れるまで口外したくはないのだという。
しかもクロノの教義と呼ばれるモノはラプラスの箱に隠された秘密を暴くと同時に明らかになるので、迂闊に話すことは出来ないとサイアムさんは言う。
別に口にするぐらい良いと思うが、次に彼が語る過去の自分の所業の中で気になる単語（ワード）を耳にした時、自分は納得することになる。
〝テンシ〟　昔、サイアムさんが当時首相であったリカルド＝マーセナスをテロで

ラプラスと呼ばれる宇宙コロニーごと爆破した時に目にしたと言う超常の存在。彼の存在を目にしたサイアムさんはテンシの持つ恐ろしい力を本能で察知し、テンシに悟られないよう協力者と共に秘密を隠してきたのだという。

テンシ、その存在に少なからず関わりのある奴を知っている身としては納得せざるを得ない話だった。しかしそれだけで引き下がるわけにもいかないので、自分はクロノやラプラスの箱以外の情報を彼に求めた。

その内容は先程サイアムさんが供述した協力者の事。同じ目的を持ち、テンシに対抗しようとしたその人物に付いて訊ねた所、意外な人物の名前が出てきた。〝エルガン＝ローディック〟嘗て国連平和理事委員会代表という結構な役職にいた人物。

自分が知る限りでは彼はＺＥＸＩＳというＺ―ＢＬＵＥの母体となった組織を創設し、その後もＺＥＸＩＳの為にアレコレ裏で動いていて、再世戦争の時にはイノベイターであるリボンズ＝アルマークに捕らえられ、最期はリボンズに撃たれて亡くなった人。何故その人の名前が出てくるのか、そもそもエルガンさんは元々はＡＤＷ側の人では無かった筈ではないのか。

サイアムさんがＵＣＷの人間である事は彼自身から聞かされている。自分を混乱させる為のブラフか何かかと疑ったが、彼が自分にそんな事をする意味が無い。よって、自分はサイアムさんの語る話を全て事実である事と受け入れて、その上で考えを纏める

事にする。

そして考えを纏め、今後の方針を定めるためメガラニカを後にしようとする自分だったが、振り返り様に目にした石碑、そこに刻まれた宇宙世紀憲章……その最後に書かれた一文を目にした時、ラプラスの箱の持つ意味とクロノの教義と呼ばれるモノ、その全てを何となく理解してしまった。

あー、これは確かにアカン奴やと、下手な関西弁を内心で溢しながら、失礼しましたとサイアムさんとその付き人さんに頭を下げ、メガラニカとインダストリアル７に施されたシステムの全てを元に戻して自分はその宙域を後にした。

さて、そんな訳で意外な所で意外な情報を手に入れた自分だが、何故ソレスタルビーイング号に行くことに繋がるのか。理由は単純、其処は自分が初めてエルガン氏に関心を示した所であり、彼が自分に死ぬ間際にサイデリアルの事を伝えてきた場所だからだ。

彼はあの頃から……いや、もっと前からサイデリアルに付いて何らかの情報を知っていたのだろう。何故彼が自分にだけサイデリアルの事を知らせてきたのかは疑問に残る所だが、リボンズ＝アルマークが直接拉致る程に重要視する人物だ。恐らくソレスタルビーイング号には外宇宙への探査という目的だけでなく、他にも隠された機能が付いている可能性がある。

例えばソレスタルビーイング号にはヴェーダという量子型演算システムが備わっており、ヴェーダを通して全世界に一つの情報を公開させるとか。

それにサイアムさんはエルガン氏と旧知の間柄だった。だとするなら、ＡＤＷ側の天才科学者であるイオリア＝シュヘンベルグもエルガン氏と何らかの関わりがあるのかもしれない。

……うーん、いつも推測や憶測が多い自分だが、エルガン氏に関する情報をあまり知らない今の自分では、これだと言える確信を持つのは難しいな。だからこそソレスタルビーイング号に向かい、情報を少しでも得ることにしようと思う。

まぁ、当然閉鎖されているだろうがそこはハッキングで。天下の情報管理システムにハッキング仕掛けるのは些か緊張するが、こっちにはサイデリアルから拝借した情報端末が幾つもある。これらを使い潰すつもりで直接ハッキングすれば機密情報の一つや二つ入手出来るだろう。勿論、楽観視するつもりはないけどね。

Δ月δ日

危機一髪、今日の出来事を一つに纏めるならこの一言に尽きるだろう。

サイアム＝ビストさんと繋がりのあったエルガン＝ローディック、彼の事を知る為に多くの情報を管理しているソレスタルビーイング号の中枢を担うヴェーダにハッキン

グを試みようと彼の艦を探していたら、自分が乗艦しているサイデリアルの艦にある人物から通信があった。

自らをクロノのクイーンと名乗る女性と思わしき人物からの一方的な通信、内容も「ソレスタルビーイング号に向かうならここに行きなさい」と短いもの。当然罠かと迷いもしたけど、ソレスタルビーイング号は再世戦争以来その姿を確認したことの無い自分としてはそれ以外頼れるモノが無いのも事実、なし崩しではあるが仕方がないので従う事にした。

送られてきた座標に向かってみると、其処には見た事のある巨大航空艦ソレスタルビーイング号が確かにあった。不思議なことに其処はもぬけの殻だったが、中に入ると同時にサイデリアルの戦艦部隊が到来、しかもその中には地球圏から出ていく際に遭遇したサイデリアルの旗艦らしい金色の艦まであった。

幸い連中とは反対側の所へ艦を停めたので見つかりはしなかったが、見つからない事に越した事は無いので急いでソレスタルビーイング号に潜入、端末を片手に予めスキャンして得た艦内のデータを頼りにヴェーダ内を探索、然程時間を掛けること無くソコへたどり着くことが出来た。

しかしここからが大変だった。ヴェーダにハッキングする所までは順調だったがそこから先、レベル７から先の区画への侵入が結構キツかった。限られた時間という状況

で焦っていたのもあったが、中々有力な情報を得られず、危うく連中に見付かるかと思いちょっとドキドキした。
それから少しして、漸くエルガン＝ローディックに関する情報を得られた自分は直ぐ様ソレスタルビーイング号から脱出、その際にとうとうサイデリアルの幹部に見付かりやむ無く戦闘を繰り広げる羽目になったが、生憎此方は既にやるべき事を終えた身、一通り相手をした後連中を無視してその宙域から離脱してやった。
まぁ、そのお陰で奪ったサイデリアルの艦を再び捨てることになったんだけど、得られた情報に比べれば大した事もないので気にする事はないだろう。地球圏までもうすぐだし、トールギスも地球に降り立つくらいのエネルギーは余裕で残っている。
今頃ソレスタルビーイング号はサイデリアルの支配下に置かれる事になるだろうが、まぁＺ―ＢＬＵＥなら何とかしてくれるだろう。必要とあれば自分も手伝うし。
それまでは端末に記録したエルガン＝ローディックの情報をこれ迄の話と一緒に纏めて考察していこうと思う。

……そう言えば、ソレスタルビーイング号という巨大航空艦を見て思い出したのだが、大グレン団の超巨大戦艦である超銀河ダイグレンはどうしたのだろう？　サイズ

の桁違いの艦だからあれがあればサイデリアルにも早々遅れを取ることは無いと思うのだが――――なんか、嫌な予感がするな。

その139

Δ月Γ日

エルガン＝ローディック。ビスト財団の宗主であるサイアム＝ビストとソレスタルビーイングの創始者であるイオリア＝シュヘンベルク、この二人と深い関わりを持つとされる人物。

ソレスタルビーイング号、その中枢に存在する量子型演算システムであるヴェーダから拝借した情報は、中々興味深い内容だった。

全て説明すると長くなるので諸々省略して大雑把に纏めると、どうやらこのエルガン＝ローディック氏はＡＤＷが時空振動で多元世界になるよりも前に世界がこうなることを予見し、更に無数の並行世界に存在していた可能性が示唆されているのだ。

いわゆる並行世界の同一人物。ドッペルゲンガーやそっくりさんではなく、その世界に於ける個人と同一とされる存在。イオリアの爺さんやサイアム翁と接触をしていたとされるエルガンさんは、世界が異なっていながら同じ存在だったのだろう。

だとしてもおかしな話である。仮にその話が本当だとして、どうしてサイアムさんは異なる世界であるイオリアさんの存在や、エルガンさんの事を知る事が出来たのだろう。仮にＡＤＷのエルガンさんが事情に詳しくても、それをＵＣＷのエルガンさんやサイアムさんに事情を説明するのは、当時の技術力では結構難しい話ではないだろうか。

世界が異なるという事はそこで生きてきた歴史、体験、経験、その全てが違うという事。例え同一の存在だとしても、ＡＤＷのエルガンさんとＵＣＷのエルガンさんとでは生きてきた経緯、経験が違う。並行世界の同一人物というのはその人を表す単語であると同時に、別人である事も示している。

外面は同じでも中身が違う。そんな彼等が、一体どうやって異なる世界でやり取りを行い、事情や情報を共有出来たのだろうか。自分の持つ情報でこれに照らし合わせられるモノは……次元力位だろうか。

次元力。その名の通り次元に干渉する力を持つとされる万能のエネルギー。この力を自在に制する者は正に神の如く、どんな事象も操れる様になるだろう。その最たる例が時獄戦役で一度は自分も到達した〝太極〟なる極致だ。

エルガン＝ローディック、彼も次元力に触れている人間の一人ならば、当時の技術力でも並行世界の自分と交信したり意識を共有していたのかもしれない。もしそうだとするならば、時間や時代を超えて天才達を結び付けることも、全く不可能という事でも

ないのだろう。

サイデリアルや〝テンシ〟に対抗する為に、並行世界に多数存在する天才や財団の宗主に接触したエルガン氏は彼等を同じ志を持つ同志とし、次元力という力で同一人物であるもう一人の自分と交信しながら、各同志との協力関係を築き上げた。その最たる結晶の一つがメガラニカに秘められたラプラスの箱と、ソレスタルビーイング号の中枢、ヴェーダに眠るクロノの教義なのかもしれない。

今思えば、彼等の計画にトレーズさんも一枚噛んでいたのかもしれない。これは推測だが今の地球人類ではサイデリアルやテンシに対抗出来ないと判断し、強制的にでも人類の意識――――いや、この場合は自覚か――――を芽生えさせる為に、ＺＥＸＩＳの戦いの様を世界に見せ付けたのだろう。

多分、あの時トレーズさんが口にした〝奴等〟というのも、テンシを指していたのだと思う。今更だが、どうしてトレーズさんが生き急いでいたのか少し分かった気がする。

振り返って見ると、今回の遠征……遠征？　はかなり上手く行った方だと思う。ビスト財団の宗主に話は聞けたし、ソレスタルビーイング号から得られた情報のお陰で、この世界の事について大分深いところまで知る事が出来た。

ラプラスの箱の秘密は勿論、クロノの教義に付いても大体の想像は出来た。そして全

てを知った上で自分が今後するべき事だが……ぶっちゃけ、あまり考えていない。
いや、考えていないというよりも考える必要が無いと言う方が正しい。蒼の地球に降り立ち、その後はサイデリアルやそれに連なる勢力を叩き、根源的災厄も潰し、サイデリアルとクロノの裏に潜むテンシなる存在を表舞台に引きずり出す。その為には未だ復活仕切れていないグランゾンの修復が急務だ。
そろそろ本格的に自分も戦いに加わるべきだろう。リモネシアの皆も心配だし、戦いの早期終結に向けて動いた方が良いのかもしれない。
もうじき地球の重力圏に入る。纏めはそろそろこの辺にして、降下準備に入ろうと思う。場所は元暗黒大陸、カミナシティから１００㎞離れた郊外だ。
……ヨーコちゃん、いないよネ？

Δ月δ日
――――久しぶりに、怒りでプッツンしそうな一日だった。
自分が降り立った元暗黒大陸、カミナシティから少し離れた場所に着地した自分は早々にカミナシティへと向かい、大統領であるロシウ君に時獄戦役の直後の大グレン団と超銀河ダイグレンの話を聞く為に大統領府へと赴き……そこで、信じられない……いや、信じたくない話を耳にした。

サイデリアルの強襲、そこから街の一部を丸ごと人質にするという電撃的攻撃。超銀河ダイグレンが出てこない事から大体の事情は察していたが、その手際の早さには不謹慎ながら感心してしまう程だ。

サイデリアルが要求してきたのは当然ながら超銀河ダイグレン、人の命には変えられないとニアちゃんの口添えもあって、サイデリアルに奪われる事になった超銀河ダイグレン。ここまでなら単に奪われたら奪い返せばいいと意気込むだけで済む話だが、サイデリアルの連中は人質を解放する直前、トンでもない事を仕出かしてくれた。

スフィアによる感情操作。サイデリアルのある幹部が行った精神攻撃は人質となった街の一部を丸々覆い尽くし、人質となった人達は他の街の人に危害が及ばないよう、街の離れで隔離処置を受けている。

その話を聞いて急いで大統領府に訪れた自分は捲し立てる様にロシウ君と再会、秘書であるキノンちゃんとも再会した自分は話もそこそこにして、隔離された人達の所へ案内してもらう事になった。

忙しい中、それでも時間を作ってくれたロシウ君に感謝しながら隔離施設へと訪れた自分は、そこで見た光景に愕然とした。

スフィアという外部から無理矢理引き出された感情、それは人を廃人に追い詰める程強力で、施設の至る所から人の呻き声が聞こえてくる。まるで地獄と思わせる阿鼻叫喚

の中……俺は苦しむ彼女の姿を見た。
キャルちゃん。黒の兄妹の末っ子である彼女がベッドに横たわり、苦しみ悶えていた。望んでいない感情に苛まされ、周囲に当たり散らさなければ正気を保てない程に呑まれていた彼女を見て、俺は久しぶりに内側から溢れ出てくる激情に内心でだが震えが止まらなかった。
激情を表に出さないよう必死に堪えながら、自分は優しく彼女に呼び掛けた。久しぶりと、出来るだけ明るく振る舞いながら声を掛けた。キャルちゃんも最初はロシウ君達と同様に驚きもしたが、次の瞬間には久しぶりと健気に返事を返してくれた。
本当なら聞きたい事はいっぱいある癖に、苦しくて仕方がない癖に、それでも懸命に笑って自分を気遣ってくれるキャルちゃんに、自分は情けなくも嬉しくなってしまった。
自分という意外な人物と話せた事で一瞬落ち着いた様に見えたキャルちゃん、しかし突発的に発生する感情の発作に自身での抑制が効かず、遂にキャルちゃんは他の患者と同様に暴れてしまう。
現在、隔離施設は慢性的に医者が足りていない。鎮静剤も患者を押さえ付ける看護師の人達も足りない状況、不躾だとは思ったが、この時は自分がキャルちゃんを抑え込む役目を担う事になった。

抱き締めて、落ち着けと呼び掛けても暴れ続けるキャルちゃん。爪を立てて自分に突き刺し、歯で噛み付いてくる彼女にそれでも落ち着くことを願って自分は抑え込んだが、次第に爪が捲れても、歯が折れそうになっても暴れ続けるキャルちゃんが遂に見ていられなくなり、当て身をして強制的に意識を奪い取った。

胸に沸き上がる感情を圧し殺しながら、ロシウ君にキャルちゃん達をこんな事にした奴の名を聞いた自分は、ソイツの名前を絶対に忘れないよう何度も反芻して脳裏に刻み込み、カミナシティを後にした。

現在、大グレン団の人達はそのスフィアリアクターを見つけ、倒すために、アチコチを転々としているらしい。だからヨーコちゃんに会うこともなかったのかと納得する反面、少し安堵した。

今の自分の顔はとてもじゃないが人に見せられるモノではない。シモン君達には早い所Ｚ―ＢＬＵＥに合流して欲しいから、奴の探索は後にしてほしい所だ。

……バルビエル。怨嗟の魔蠍だが何だか知らないが、あまり図に乗るなよ。お前の機体と声は既に知っている。次に面と向かって会う事があるならば、容赦なくその顔面に俺の拳を叩き込んでやる。

と、決意を新たにしたところで今日の日記は終わることにする。

◇

「ゴメンね、シュウジ……ゴメン……ね」
首筋に手刀を当てられ、眠るように意識を手放したキャル。爪が捲れ、血が滴り落ちる彼女の手に優しく、丁寧な応急処置を施したシュウジは昂る感情を抑えながら、背後に立つロシウに声を掛けた。
「……誰だ」
「え？」
「キャルちゃんを、ここにいる皆をこんな事にした奴、ソイツの名前はなんだ」
本人は落ち着いているつもりかもしれない。感情に流されぬよう理性を保っているつもりなのかもしれない。事実、彼は表面上は落ち着き払っていた。

しかし、その能面の様な表情から滲み出る怒りの炎に当てられたロシウは息を呑み、心底畏れ、そして確信する。

魔人蒼のカリスマ――――健在と。

その１４０

――――――翠の星。先の大戦にて時の牢獄を破壊した際に次元の壁を破壊して現れたもう一つの地球。ネルフ本部で起きた時空振動によって蒼と翠、二つの地球の中間地点に跳ばされたＺ―ＢＬＵＥは、これからの皇国との戦いの為に部隊を二つに分け、二つの地球でそれぞれ新たな戦いを始める事となった。

そんな部隊の片割れ、翠の星へ向かったマクロスクォーターとトゥアハー・デ・ダナン。翠の地球に降り立つ際、サイデリアルの幹部のサルディアスに阻まれた一行は予定した北半球から大幅に逸れ、赤道付近にある〝残されの海〟へと降りる。

そこで遭遇した海賊やサイデリアルの部隊と戦う事になった一行は、途中から戦闘に参加したガロードのお陰で窮地を脱し、彼の仲介によって残されの海に存在する船団……ガルガンティア号に案内され、そこに住む人々と交流していく事となった。

「いやー、それにしても良い所に来てくれたなガロード。お陰で助かったぜ」

「まぁ、そっちは連戦の続きで疲れていただろうしな。間に合って良かったぜ。さっきの部隊の中にギルターがいたら余計面倒な事になってたと思うしな」

「ギルター？　誰だそいつ？」
一行をガルガンティアの内部へ案内しながらこれまでの話をしていたガロードとアルト、その時耳にしたギルターという聞き慣れない人物の名前にアルトは何となく気になり、ガロードに聞き返した。
あぁ、ソイツはな――――と、説明しようとしたガロードを遮り、アルトへと詰め寄る一人の少女。ハーイハーイ！　とピョンピョン跳ねてアピールしてくるのは、ガルガンティアの一員であるメルティだった。
「ソイツの名前はギルター＝ベローネ、自分の目的の為ならどんな手段も使ってくる典型的な小悪党だよ！」
「またえらくコテコテな奴だなぁ」
「あぁ、けど本当に嫌な奴でさ。ソイツの仕掛けてきた騙し討ちで一度はこの船団も奴に潰されそうになったんだ」
「ガロードがいたのにか？」
「うん、でも仕方がなかったんだ。あの時ガロードは外の連中を相手にするだけで精一杯で、とても私達を助ける余裕なんて無かった。髭の生えたアルアル言ってたオジさんも頑張って戦ってくれたけど、一人で奴等を相手にするのは大変だったみたいだし……」

　メルティの話す当時の状況、キメラという人工的に生み出された兵器を使い、基本的には非戦闘員で構成されたガルガンティア号を襲うギルター＝ベローネという輩の卑劣さは、この時嫌と言う程彼等に伝わった。
「でも、その時ある人が私達を助けてくれたの！　その人はサイデリアルの連中相手に丸腰で殴り飛ばし、次々と薙ぎ倒して行ったの！」
　トリャー！　と、当時の再現のつもりか拳を振るうメルティの様子を微笑ましく見つめながらも、その事を気になったアルトはどう言うことなのかガロードに訊ねた。
「メルティの言ってる事は本当だ。俺はその頃は哨戒任務に当たっていた時で当時の騒ぎも殆ど外にいたから詳しくは知らないんだが……何でも、死んでた人間が生き返ったらしいんだ」
「何だって？」
「嘘みたいな話だけど本当の事だぜ。現にエイミーはその現場に居合わせたって聞くし、その甦った奴も船団に突入してきた兵士を全員ぶちのめした後はＭＳに乗って外の連中と戦ったしな」
「死んだ奴が生き返り、その上ＭＳで戦闘したと、お前はそう言うのか？」
　剰りにも出鱈目な話にこれ迄静観していた宗介も堪らず口を挟む。その場にいる誰もが同じ気持ちなのか、割り込む宗介に同意するように頷いている。

だが、その事を追求しても埒が明かない。死んだ人間が生き返ったという話は置いといて、ＭＳという言葉が気になったアルトは、ガロードにその機体について話を聞く。

そして……。

「機体が速すぎて型式番号とかは分からなかったけど……あれは多分、トールギスだと思う。それも、再世戦争の時に俺達が戦ったトレーズ＝クシュリナーダの」

その機体の名前を耳にした時、Ｚ―ＢＬＵＥの面々は驚愕に目を見開く事になる。

◇

「たった一人の人間相手にスフィアリアクターが揃いも揃って何て様だよ」

ラース・バビロン。新地球皇国軍の最大拠点、玉座の間の更に奥深くに設けられた円卓の席で、それぞれのスフィアを持つサイデリアルの幹部達が、皇帝含め其処に座して

いた。
嘲笑の笑みを浮かべ、自分以外のスフィアリアクターに挑発するのは〝怨嗟の魔蠍〟のスフィアリアクター、バルビエル。しかし彼の煽りを受けても誰一人動じる事はなかった。
「何だよ、反論無しかよ。お前ら、あの人間に手痛くやられてすっかり怯えてしまったのかい？」
再度挑発するも、やはり誰も反論する者は居なかった。尸空も、全身を鎧で覆った彼の者も、皇帝でさえも目を瞑り黙しているだけだった。何の反応も示さない彼等に、バルビエルは面白くないと舌打ちをする。そんな時、彼等の中でも最も口数の少ない尸空が一言口にした。
「――――事実だからな」
「あぁ？」
「バルビエル、お前の言うことは九割方正しい。俺は奴の侵入に全く気付かず、挙げ句の果てに意識を一時的に奪われた。奴がその気なら今頃俺は奴によって滅ぼされていただろう」
〝沈黙の巨蟹〟のスフィアリアクターである尸空にしては珍しい饒舌振りに面食らうバルビエル、しかし口数は少ないからこそその口から発せられる言葉はどれも真実味

を帯びており、その意味はとてつもなく重い。
スフィアリアクターが屠られる。ただの人間と思われていた存在が次元力を持つ自分達を脅かしている。スフィアを持つ者、特に己を強く特別視しているバルビエルにとって、それは認められない話だった。
なんだそれはと、否定しようとするバルビエルを、皇帝であるアウストラリスが手を出して席を立つバルビエルを制する。
「お前も何か言いたそうだな。ストラウス」
「――――」
「構わん。今この場でのみ、お前の姿を晒すことを許そう」
皇帝に許しを得て静かに頷くストラウスは、自身の顔を覆ったフルフェイスのマスクだけを外す。カチャリと金属音と共に外気に晒されたのは、肩に掛かるほどに伸びた小麦色に輝くブロンドヘアーと、女性の顔だった。
「ふう、やっぱこの鎧暑苦しいわ。もう少し何とかならなかったの？　アウストラリス」
「仕方あるまい。お前の拘束具代わりになるようなモノがそれくらいしかないのだ。その鎧が砕けるまで我慢しろ」
アウストラリスの強制とも言える言い方に、ストラウスだった女性はへーイと気の抜けた返事で返す。しかし、次の瞬間にはその気の抜けた雰囲気は一切無くなり、彼女の

顔に荒々しい闘牛の様な凶暴な笑みが張り付いていた。
「蒼のカリスマ……いや、シュウジ＝シラカワだったかい？　ありゃあ良い、最高だ。こんな立場にいなけりゃ今すぐにでもあの続きをしたいもんさね」
　女性の名はエルーナルーナ＝バーンストラウス。〝欲深な金牛〟のスフィアリアクターである彼女は以前ソレスタルビーイング号で行われた僅かな戦闘を思い出し、その肢体を興奮で奮わせる。
「アイツが魔人と呼ばれる理由が分かった気がするよ。あれは頭のネジが二、三本外れたとかそんな話じゃない。下手すれば何処までも突っ切っちまう、アレはそう言う類いの化け物だ」
　ソレスタルビーイング号での戦いの時は向こうは逃げるだけ、戦闘と呼ばれる行為も数える程度しかなく、それだけで相手の器を計る事は出来ない。が、あの時エルーナルーナは確かに感じた。奴の機体が刀を振るった時の事を……。
　アレは求道の一太刀だった。自分の一撃はこんなものではないと、自分の知るこの一太刀はもっと凄いぞと、何処までも追い求めるその一振りは、エルーナルーナの瞳には一種の芸術に映った。
　気付いた時には、側に控えていた戦艦が一隻両断されていた。圧倒的サイズ差にも関わらず斬り捨てて見せたあの一振りは、今でも彼女の瞼の裏に貼り付いて離れない。

唯でさえ怪物なあの男が、今はまだ万全な状態ではないのだ。本来の機体に乗ったらどれだけの力になるのだろう。その事を思うと、エルーナルーナの乙女に似た思考は止まることはない。

以前、バルビエルの部下に自分の部下を預けた事を思い出し、エルーナルーナは羨む。あんな奴とサシで戦えた部下が羨ましくて仕方がない。生粋の戦闘民族である彼女にとって、強者との戦いは三大欲求にも優る至玉の一時なのだから。

ウットリとあの時の事を思い出して悦に入るエルーナルーナ、そんな彼女に呆れながらバルビエルは、アウストラリスにある提案を出した。

「というかさ、ここに奴の身内がいるんだろ？　だったらマトモにやり合わずソイツ等を使って始末すれば良いだけの話だろ？」

「それはダメだ」

「それは何故？」

「奴等はシュウジ＝シラカワを呼び寄せる撒き餌だ。俺の許しが無い以上、手を出すことは許さん」

「撒き餌は撒いてこそ意味があるモノだと思うけど？」

「……」

バルビエルとアウストラリス、双方が睨み合う一触即発の空気。張り詰めた空気が円

卓とその空間を軋ませると、先に折れたバルビエルがやれやれと肩を竦める。
「まぁ、別に良いさ。僕にはまだやり残した事があるからね。それが片付くまで好きにやらせてもらうさ」
　円卓の席を立ち、その場を後にするバルビエル。彼に釣られて尸空も立ち、エルーナルーナもマスクを被りその場を後にする。残されたアウストラリスは瞑目し……。
「――――順調に力を付けてきているようだな。いや、そうでなくては困る。奴を、ヴァイシュラバを倒した貴様にここで立ち止まって貰われては困る」
　目を開き、天を見上げる彼の瞳に映るのは一体何か……それは、本人にしか分からない。

「な～る。彼処がラース・バビロンね。把握」

その141

Δ月β日

ラース・バビロン。新地球皇国もといサイデリアルの連中が根城にしている総本山、幾多の戦場を潜り抜け単独でその地に赴いた自分は、シオさん達を救出しようと単身奴等の総本山に乗り込もうとした。

本来なら慎重に慎重を重ねて挑むべき案件だが、先日とある人物から得られた情報を耳にした自分はこの時、少しばかり冷静にいられなかった。

その人物の名はセルゲイ＝スミルノフ。再世戦争の頃、当時の正規軍であるアロウズのやり方に付いていけず軍から離れ、以降は息子のアンドレイ君と一緒に世界情勢の情報収集に勤しんでいた。彼等の情報網も中々のモノで、彼等のお陰で倒したはずのグレイス＝オコナー達の動向を知ることもできた。

そんな彼等と偶然鉢合わせた自分は、彼等から得られた情報に唖然とする事になる。ジャール大隊、即ちラトロワさんとあの子供達が、一人残らず新地球皇国に捕らえられ

たと言うのだ。

サイデリアルが地球侵略に押し寄せてきた頃、同じ地球に住む人類として立ち上がることを決意したラトロワさんとジャール大隊の皆はレジスタンスとして各地を巡り、現地の人達と共にサイデリアルと戦っていたのだという。セルゲイさんも現在の地球の状況に静観するのを止め、軍人の一人として息子と共に戦場に返り咲いたのだとか。

何日も続くゲリラ戦、圧倒的不利な状況の中でジャール大隊と合流できたセルゲイさんはアンドレイ君とラトロワさんが率いるジャール大隊と共に一大作戦を踏み切ろうとした。戦力も人員も充分に補給された今が好機と敵拠点の一つに奇襲を仕掛けた時、不運にもサイデリアルの幹部と遭遇、それも圧倒的火力として知られるハイアデスの旗艦と戦闘する事になった。

勝てると思った戦いから一変、逃げる事しか出来なかった戦場で、ラトロワさんが自ら殿になることを志願し、ジャール大隊の皆もラトロワさんと一緒に残り、セルゲイさん達を逃がす事を進んで務めた。

当然セルゲイさんはコレに反対。昔自分の判断で奥さんを亡くした事があると言うセルゲイさんにとって、ラトロワさんの判断は個人的に許容出来ないモノだった。

だが、状況的にラトロワさんの判断が一番その時の状況に合致していた。本当なら意地でも自分が殿を務めようとしたけど、意外にも息子であるアンドレイ君の後押しも

あってラトロワさんの判断を了承。セルゲイさんは負傷者を含めレジスタンスを退避させ戦場から離脱することができた。

アンドレイ君がラトロワさんの判断に従うのは意外だった。本人は数少ない家族である父を失うのが嫌だったと自嘲しているが、彼もあの大戦を生き抜いてきた猛者だ。恐らくは父と同じ戦場を生き抜いてきた事によりモノを見る目というのが養われていたのだろう。無論、本人が言っている様に個人的な感情もあったのだと思う。セルゲイさんはアンドレイ君だけでなくソーマ＝ピーリスさんにとっても大事な父親だ。そこら辺の事情も多分混ざっているのだろう。

セルゲイさんはラトロワさん達を守れなくて済まないと頭を下げてきたが、謝る必要は無いと自分は返した。ラトロワさんは聡明な人だ。歴戦の戦士だった彼女がそう判断したのだって、そうした方が一番多くの人命を守れると考えたからなのだろう。ああいう察しの良い所に自分も救われたことがある。ラトロワさんにとってその時の選択は悔いの無い判断の筈だ。だからセルゲイさんが気に病む必要はない。

尤も、それに自分が納得しているかはまた別の話だ。セルゲイさんの語る当時の状況から仕方の無い判断だったとは思うが、理解と納得は別物。自分はセルゲイさんからの情報を頼りに連中の本拠点であるラース・バビロンへと足を運んだ。

ラトロワさんもジャール大隊もシオさん同様、自分にとってかけがえのない大事な人

だ。あの人達に救われた様に今度は自分が彼女達の助けになる番だと思い、ラース・バビロンへ潜入しようとしたのだが……。

アサキム＝ドーウィン。ラース・バビロンに潜入しようとする直前、奴によって阻まれてしまった。何故火星のＺＯＮＥに封じた筈の奴が自分の前に現れたのかは未だに分からないが、奴と奴の駆るシュロウガによって潜入は中断、おまけにサイデリアルの幹部まで出てくるという最悪の事態に陥ってしまった。

どうにかあの戦場から離脱する事が出来たからこうして日記を書けているが、アサキムの野郎が騒ぎ立てた所為で、唯でさえ厳重だったラース・バビロンの警備が更に頑強な守りに固められてしまった。しかも何やら結界まで張られてしまったらしく、お陰で正攻法で潜入することはほぼ不可能となってしまっている。

しかもどうやらアサキムの方もＺＯＮＥに封じられていた間にスフィア関係で力を蓄えていたらしく、シュロウガの能力が以前と段違いな程に跳ね上がっていた。尤も、成長したのはこっちも同じで遅れを取ることは無かったけどね。シュロウガのスピードにも食い付ける様になったし、剣捌きだけを見ても、俺と奴の実力差はグランゾン抜きで語っても殆ど差異はない筈だ。

寧ろ奴の方が驚いていたっけ、やりあっていた最中に時々耳にする「まさか」とか「既にそこまで……」と、驚愕と悔しさに満ちた奴の言葉を聞くたびに仮面の奥でドヤ

顔していた自分は悪くないと思う。

アサキムの所為で撤退を余儀無くされ、次は正面から突破する事しか手立てがない事実に嫌になってくるが、今の自分の気持ちは比較的穏やかだ。何せ連中の親玉であるサイデリアルの首魁である皇帝から、直接の通信が送られて来たのだ。

『貴様の想い人達は俺が丁重に預かっている。その時が来るまで彼女達の身柄は保障しよう』

音声だけの通信、言葉だけの口約束であったが、そこに打算や策謀の類いは無く、真摯な気持ちが其処に込められていた。依然として全貌が把握できていない上に危険だとは思うが、何処ぞの喜び野郎に捕まるよりは億倍マシと判断し、自分は奴の言葉を取り敢えず信じる事にした。

危険だとは思うが、彼処で無理にでもラース・バビロンに突っ込んでしまったらそれこそシオさん達の身が危なかっただろう。アサキムも自分がラース・バビロンから離れるまでしつこく攻撃してきたし、そもそも潜入自体無理があった。

今回の敗因は冷静になりきれなかった自分の落ち度だ。今回はそれを戒めに大人しく引いておこうと思う。……それにしても、アサキムの封印を解いた奴は本当に余計な事をしてくれたものだ。めんどくさい奴が復活した事により、この星での戦線はより混沌としたモノになるだろう。

だからその時が来るまで、自分は奴にシオさん達を預ける事にした。
――――シオさん、ラトロワさん、ジャール大隊の皆。それまでどうか無事でいてください。

Δ月ω日
今、自分はエリア１１改め新日本へ来ている。ラース・バビロンから離れ、取り敢えず情報収集する事にしたのだが、ここで嫌な情報を耳にする。
新地球皇国の幹部とＺ―ＢＬＵＥの一員であるゼロが、トウキョウにて決戦を仕掛けようとしているらしい。どうやら新地球皇国側の巧妙な策略により、このような状況に追い込まれてしまっているらしいのだ。
今頃はトウキョウでドンパチが繰り広げられている筈。自分も加勢に行きたい所だが、ラース・バビロンの一件で自分は奴等に必要以上に目の敵にされている。別に自分個人が目の敵にされるのは良い、だが自分が出ていく事で状況が複雑化するのは避けたい。
しかし、ゼロが相手にするのはサイデリアルの幹部、即ちスフィアリアクターだ。彼等が奴等の能力を把握しきれていない以上、戦況は圧倒的に不利な状態……恐ら

く、ゼロは敗北する。

そうなった時、撤退する際に殿役が一人でも多く必要になってくる。ソレスタルビーイングもゼロを助けようと動くらしいが、彼等だけでは必要以上に被害を出すかもしれない。

これは実力云々の話ではない。相手の能力を知っているか否かの問題だ。もしゼロが――――ルルーシュ君がサイデリアル側のスフィア能力を知っていれば、こんな事にはならず新日本も守れた筈だ。

やはり、自分も手助けするべきだろう。ルルーシュ君がいると言うことは其処にはスザク君やC．C．さんもいる筈だ。

となれば善は急げ、次の戦場に向けて急ぐことにする。調度蒼のカリスマ以外のカモフラージュ衣装が手に入ったのだ。上手く使うチャンスでもある。

ルルーシュ君、待ってろよ。

◇

『くははははは！　どうだいゼロ？　僕が用意したプレゼントは？　気に入ってくれたかい？』

『……くっ！』

　左目を抑え、踞るルルーシュの瞳にはこうなるよう仕向けたサイデリアルの幹部、バルビエルに対する怒りが色濃く滲んでいた。奴の能力で憎しみに駆られた新日本の住民達、彼等を鎮める為に二度と使う事はないと誓ったギアスを使用してしまった事に、ルルーシュは罪悪感と悔しさに仮面の奥で表情を歪める。

　状況は既に此方の敗北、敵戦力を削った所で焼け石に水、次から次へと送り込んでくる新日本の住民達を前に、ルルーシュとソレスタルビーイングの面々は撤退を余儀無くされた。

『なんだい、もう逃げるのか？　つれないなぁ、もう少し楽しんでいけよ？　なぁ！』

　しかし、そうはさせまいとバルビエルのアン・アーレスが一行に襲いかかる。圧倒的強さを持つバルビエル、殿役としてＣ．Ｃ．が前に出ようとした、その時。

突然の爆発がアン・アーレスを襲った。

『なにっ!?』

完全に意識外からの攻撃、バルビエルもルルーシュも、その場にいる全員が驚きに固まった。一体何処からかと攻撃のあった場所に視線を向けると……。

「ふんもっふる～!!」

ＲＰＧを担いだボン太くんが……そこにいた。

その１４２

Δ月Ω日

トウキョウでルルーシュ君達の攻防戦に協力してから数日、皇国軍からの追撃も無くなり、現在自分は比較的安全圏とされるオーブ……そこのビジネスホテルの一室にて、ボロボロのボン太くんを修繕しながらこの日記を書いている。

ルルーシュ君達は無事にトウキョウから逃げ切ったと思う。戦いの最中に散り散りとなり、彼等の状況を確認することは出来なかったから詳しくは知らないが、ボン太くんに備えておいた通信傍受の器機からは彼等が討たれたという話は聞いていない。

だから大丈夫と楽観視するつもりはないが、彼等も三度に渡って続いてきた大戦を潜り抜けてきた猛者だ。無傷とはいかなくとも大事には至っていない筈だし、あの蠍野郎をキッチリと抑える事が出来たのだ。今は無事だと信じておこう。

しかし、まさかボン太くんにここまでの性能があったとは思わなかった。いや、実際ただの着ぐるみなんだけど、これを着ると何だか力が湧いてくるような気がして、何で

も出来る気がしてくるのだ。実際コレを着ただけで２０ｍ以上の巨大な機動兵器と渡り合えたし……。

なんというか、やたらとテンションが上がるんだよね。普通なら機動兵器を相手に生身で挑むのは自殺行為なのに気分はさながら某怪物狩人、大剣や弓矢の代わりにマシンガンやＲＰＧを使って暴れ回った時は気分良かったし、弾薬尽きて追い詰めたと勘違いした蠍野郎を機体越しに顔面を殴った時は言葉に出来ない爽快感があった。

まぁ、そんな無茶苦茶に暴れた所為でこのボン太くんはボロボロになった訳なのだが……確か、マイアミ警察署に届けられる筈だったんだよねコレ。それがどういう訳かレジスタンスの隠し拠点の隅っこで埃被ってて放置されていたのを自分が譲り受ける事になった。

レジスタンスの人が言うには、このボン太くんは所謂パワードスーツ改造を施した後、警察を始めとした治安組織に犯罪への抑止力として配備される予定だったのだとか。最初はその性能の高さにレジスタンスの人達は期待していたが、皇国軍の苛烈な攻撃の所為で改造計画はご破算、ただの着ぐるみとして残る事になったボン太くんはその後誰にも必要とされる事はなくなり、今日に至るまであの拠点で埃まみれになるまで放置されていたのだとか。

そういうわけで要らないなら頂戴とボン太くんを頂いた自分はコレを着てルルー

シュ君達を援護、彼等が逃げ切れる時間を稼ぐ殿役を務める事となったのだ。
ボン太くんという意外な助っ人の登場にルルーシュ君は戸惑っていたけど、すぐに状況を立て直しその場から離脱していった。気になる点があるとするなら、Ｃ．Ｃ．さんが乗っているであろうピンク色のランスロットが離脱間際にコッチ見ていた事が気になったけど……まさか、バレてないよね？
いや、バレる筈がない。以前働いていたバイトでボン太くんの言葉はマスターしたし、完全になりきっていた。一体何処の誰かと怪しむ事はあってもそれが自分であることを特定する事は不可能の筈！　そう、きっと気の所為だ。Ｃ．Ｃ．さんの訝しむ視線は自分の過剰な自意識の所為だと……そう、思い込む事にする。
ともあれ、前回の戦いでルルーシュ君達を無事に逃がせたし、あの悪趣味な機体の乗り手がバルビエルとかいう蠍野郎だと改めて確認する事が出来た。今回の戦いはそれが分かっただけでも充分に意味があるものだった。
シオさんやラトロワさん達を助ける為にも今は焦らず、ひとつずつ出来る事をこなしていこうと思う。

……しっかし、一体何処の誰なんだろうか。ボン太くんというマスコットキャラ

をパワードスーツに改造しようと考えた頭のおかしい奴は。
きっとコロニーの五博士のような頭のネジが二、三本抜けた人なんだろうなぁ。

√月γ日
またもやボン太くんで出撃する事になった。
ことの始まりは数時間前、日記を書き終えて就寝し、朝頃に目が覚める所から始まった。何と連邦軍の正規軍がオーブにいきなり攻撃を仕掛けてきたのである。
こんな時になんで地球人同士で戦ってるんだよと呆れながら、ボン太くんに着替えた自分は既に戦闘を開始していたキラ君とリディ君と合流。二人ともルルーシュ君達と同様最初こそ戸惑うも、自分が敵ではないと分かってからは協力的となり、連邦軍を攻撃しなんとか撃退する事を成功させた。
……今思えば、あの連邦軍の連中はクロノの部隊だったのかもしれない。やたら動きが機械的だし、何だか薄気味悪いものが連中を通して感じられた。
元々クロノは連邦組織と深い繋がりがある組織だ。時空振動で融合された世界では様々な財閥や勢力が政府に食い込んでいると聞く。恐らくその組織の一つが、オーブに隠された何かを奪うために派遣された尖兵だったのではないだろうか？
まぁ、そこら辺は別にどうでもいい。政府に癒着する組織なんて探せば幾らでも出て

くる。その中でクロノを動かせるだけの影響力を持つ勢力を絞りこんでいけば、今回の戦いの首謀者は簡単に割りだせられる。

問題はその後にやって来た皇国軍だ。奴等、クロノの襲撃に合わせて大部隊を用いて一気に仕掛けてきやがったのだ。

クロノの部隊と皇国軍の大部隊を相手にする事となったキラ君とリディ君、途中でＺ―ＢＬＵＥの片割れが救援に駆け付けてきてくれたが、その頃には既に戦況は悪化の一途を辿っており、オーブは戦火に包まれようとしていた。

そんな時、オーブの代表であるカガリちゃんが突然の降伏宣言を表明。キラ君達を逃がす為、自国民を守るために敗北する道を選んだカガリちゃんの判断は、間違っていないと思う。

その後、キラ君達に想いを託したカガリちゃんは皇国軍を受け入れ、俺達はオーブを後にした。その途中、キラ君が自分に何者かと訊ねて一緒に来ないかと誘ってきたが、自分はボン太くんの言葉でコレを拒否。首を横に振って断る自分に戸惑うキラ君の隙を突いてその場を離脱、自分もオーブを後にすることにした。

……え？　海に入ったら水分を含んだボン太くんの重みで溺れるだろって？

その点なら心配要らない。走ったから思った程ボン太くんは濡れていない。

近くの岩礁に止めておいたトールギスに乗り込んだ自分は、Ｚ―ＢＬＵＥが離れてい

く頃合いを見計らってオーブを離脱する事に成功、新地球皇国許すマジ。決意を新たに今日の日記を書き終える事にする。

√月※日

今日、何だか聞き捨てならない情報を入手した。

いつも通りレジスタンスの人達と協力していた自分だが、皇国軍の拠点に侵入した時、奇妙な話を聞いたのだ。

〝ネオ・アルカトラズに収容された歌姫二人〟この事を聴いた自分は早急に皇国軍の基地を制圧、後の事をレジスタンスの皆さんに任せ、急遽自分はネオ・アルカトラズに向かう事にした。

ネオ・アルカトラズ。難攻不落の要塞で捕虜達を投獄する最悪の監獄。皇国軍の手によってより強固になったその施設を見て、自分はここに彼女達が幽閉されている事を確信した。

ランカちゃんとシェリルちゃん、二人とも地球圏を代表する歌姫であり、Ｚ―ＢＬＵＥにとってもマドンナ的存在、時獄戦役の戦い――――というか、自分の最後の戦いの時以来音沙汰なかった彼女達が、ここに投獄されていたと知った時はまさかと驚いた。てっきり二人ともＺ―ＢＬＵＥに身を寄せていたと思ってたから……。

何故彼女達が彼処に捕まっているかは定かではないが、そうと分かれば実行あるのみ。今回もボン太くんの出番だなと意気込みながら、明日のネオ・アルカトラズ潜入に向けて今日は早めに休むことにする。

その１４３

ネオ・アルカトラズ。ユーラシア大陸の北部近郊に存在する、犯罪者を収容する事を目的に建てられた難攻不落の刑務所。しかしサイデリアルに占領され、刑務所だったこの建物は捕虜達を投獄する収容所と化しており、様々な人間が囚われている。

唯でさえ難攻不落とされた監獄がサイデリアルの技術によって更に凶悪に変貌、収容された人達の多くは脱出不可能とされたこの監獄で絶望に打ちのめされながら、収容部屋にある窓から外の様子を眺めていた。

しかし、そんな状況に陥りながら尚希望を捨てていない者がいた。シェリル＝ノーム、銀河の妖精としてその名を広く知らしめ、その美しい歌声で数多の戦場でＺ―ＢＬＵＥを支えた人物の一人。薄暗い監獄の中、不衛生この上ない部屋で所狭しに歌詞を書き続ける彼女の瞳には、未だ陰りのない強い光が宿っている。

自分達は負けていないのだと、地球はまだサイデリアルに完全に屈してはいないのだと、そう自分に言い聞かせながら歌詞を綴る彼女の姿はさながら、戦士達を導く戦乙女

の様だった。
　そんな彼女とは対照的に、シェリルと同じく歌姫と称されるランカ＝リーの表情は暗かった。大人しく控え目で、悪く言えばやや引込み思案な彼女にとって、今の状況はかなりのストレスになっているのだろう。
　同じ歌い手でありながらも自分よりも年下なランカが項垂れているのは親友であり、恋敵でもあるシェリルにとって看過できないモノであった。だから自分なりのやり方で彼女を勇気付けてやろうと声を掛けようとした時、彼が現れた。
「シェリル！　ランカ！　無事か!?」
「アルト君!?」
「アルト!?」
　突然、見回りの兵士を叩きながら現れるアルトの登場に、二人の歌姫の顔色が一気に明るくなる。どうしてここにと訊ねるが、彼の後から聞こえてくる足音がアルトを焦らせる。移動しながら説明すると二人の手を引きながら、アルトはここに至る迄の経緯を簡潔ながら説明した。
　蒼の地球と翠の地球、二つの地球に別れて戦力を集めたＺ―ＢＬＵＥは、サイデリアルに反撃を仕掛けるために奴等の本陣であるラース・バビロンの攻略作戦を計画しており、ある意外な人物からの情報によって歌姫二人の居場所を入手、ラース・バビロン攻

略の前哨戦としてネオ・アルカトラズの攻略を敢行。
Ｚ―ＢＬＵＥの全員が願った今回の作戦、歌姫二人を取り戻す事を目標にした彼等は、みんながシェリルとランカが帰ってくることを願っている事をアルトは伝える。その説明に加えて、勿論自分自身もそれを望んでいると告げるアルトの言葉に、二人の歌姫は嬉しそうに微笑んだ。
そんな彼等の前にキメラ兵士達が現れる。陽動部隊である竜馬達が討ち漏らしたと思しき連中の待ち伏せにアルトは舌を打つ。だが、これは陽動部隊の失態ではない。此方の予想していたよりも多くのキメラ兵士が配置されていた事が原因だ。しかしここの支配者たるギルター＝ベローネは短慮で姑息な人間、此方の意図を読み切る事は無い筈。
「てことはバルビエルの仕業か！」
バルビエル。サイデリアルとの戦いで幾度となく苦渋を飲ませてきた皇国軍の幹部、憎悪を司るスフィアリアクターでＺ―ＢＬＵＥを何度も追い詰めてきた凶人。
こんな所でも奴の毒牙が迫ってくる。背後にいる二人を守りながら、如何にしてこの窮地を脱するか。懐にしまっていた銃を取り出すのと同時にキメラ兵士が此方の間合いを詰めてきた時、ソイツは現れた。
「ふもオラァッ！」

突然キメラ兵士の横にあった壁が爆散し、鼠色の何かがキメラ兵士達を蹂躙する。砕けて瓦礫と化した外壁も巻き上がる砂塵も吹き飛び、残ったのは肉片となったキメラ兵士だったモノ。一体何なのだと混乱するアルトが壁の向こうから這い出るナニかに銃口を向け……。

「――――はぁ？」

思わず間抜けな声が漏れてしまった。背後にいる二人もアルトと同様に、困惑の表情で目の前に現れたソレを目にしている。

「ふもっふ！」

三人の前に現れたのは――――ボン太くんだった。とあるアトラクション遊園地にてマスコットキャラとして知られるボン太くん。何故彼がここにいるのかと混乱するアルト達だが、状況が彼等をここに留まらせる事を許さない。未だ近付いてくる敵兵士の足音、ここで立ち止まる訳には行かない。アルトは目の前のボン太くんに通してくれと声を掛ける。

するとその願いが通じたのか、ボン太くんは道を譲るように道端に避ける。ふもふもと相変わらず何を言っているのかは分からないが、それでも敵でないと分かっただけで今は充分。手短に礼だけを告げて三人はボン太くんの横を通り過ぎる。

「――――え？」

その間際、ランカはその声に何処か聞き覚えがある気がした。そんな筈はない、だって彼はあの戦いで死んだ筈なのだからと思い込み、それでもどこか後ろ髪を引かれる思いでランカはボン太くんの背中を眺め続けていた。

『あなたの歌、楽しみにしてますよ』

◇

「ふぃ～、色々あったけど何とかなって良かったよ」

人気の無くなったネオ・アルカトラズ跡。Ｚ―ＢＬＵＥの強襲とグレンラガンの登場、そしてトドメとばかりに現れたガンバスターのお陰で、ネオ・アルカトラズに囚われていたランカちゃんとシェリルちゃんは無事に救出成功。他にも多くの捕虜達も解放されて、今頃は各レジスタンスの拠点に向かっている頃だろう。

これでＺ―ＢＬＵＥも勢いが付いた事だろうし、この勢いでラース・バビロンの方も何とかして貰いたい所だけど……多分、厳しいと思う。

翠の地球で戦力を集めてきたみたいだけど、サイデリアルの力は未だ底がしれない。ガンバスターという火力特化の機体の参入で何とか対抗出来たとしても、スフィアリアクターである連中に勝つには今一歩足りないモノがある。

本当なら自分も協力したいが、今の自分では足手まといになる可能性が高い。トールギスは確かに凄い機体だし、単純な戦闘ではそうそう負ける事は無いが、決定打が足りていない。やはり奴等を全面的に相手取るにはグランゾンの力が必要か……。

ともあれ、ここでの自分の目的は終えた。今後はグランゾンの本格的な修復を目的に行動を続けていこう。そう思いネオ・アルカトラズを後にしようと踵を返したとき――

――彼女がいた。

「……やはり、お前だったか」

Ｃ．Ｃ．さん。綺麗な翡翠の髪を揺らしながら微笑みを浮かべる彼女に、自分は一瞬言葉を失った。

その１４４

「まさかとは思っていたが……本当に生きていたとはな。いや、この場合は生き返ったと言う方が正しいか」
Ｚ―ＢＬＵＥによるネオ・アルカトラズへの強襲、ファイヤーボンバーと囚われていたタカヤ＝ノリコとガンバスター、そして駆け付けてくれたグレンラガンの活躍により二人の歌姫を取り戻した一行は現在、ラース・バビロンに対する一大反抗作戦の準備に取り掛かっていた。
Ｚ―ＢＬＵＥの活躍によって多くの囚われの身となっていた地球の人々が解放されたネオ・アルカトラズに現在人気は無く、あるのは静寂と二人の人影だけ。
「しかし、一体どんな手品を使って甦ったのか、興味があるな。お前の事だから間違いな

くトンチキな方法だろうが……というか」
「ふも？」
「いい加減、それを取ったらどうだ。流石に着ぐるみと話す所は見られたくない」
翡翠の髪を靡かせる女性――――Ｃ．Ｃ．の指摘に、ボン太くんはやれやれと首を横に振り、仕方がないと言う風に背中にあるジッパーを引き下ろした。
ボン太くんの中から現れたのは……蒼いフルフェイスの仮面を被った男、蒼のカリスマ。時獄戦役の時、Ｚ―ＢＬＵＥとの戦いで死んだと思われていた男が、着ぐるみの中から姿を現した。
「何故、私だと？」
「時獄戦役の時、私はお前に一度触れた事があっただろ？　あの時の残滓の様なものがお前から僅かだが感じられたからな」
呆れた様子で溜め息を溢すＣ．Ｃ．に、蒼のカリスマは失礼だなと返す。だが、確かにそう言われて見れば、Ｃ．Ｃ．に自分の事を知られるのも分かる気がする。
時獄戦役の頃、喜び野郎の罠に嵌められて酷い目にあったが、彼女に触れられたお陰でどうにか戦い続けることが出来た。その時に彼女から何らかの干渉があったのならば、Ｃ．Ｃ．が目の前の魔人を特定出来たのも頷ける。
「というより、あんな無茶苦茶な事が出来るのはお前くらいしかいないと思っただけな

んだがな。着ぐるみを着て２０ｍを超える人型兵器と殴り合おうなどと頭のおかしい事を考えるのはお前くらいなものだろう」
「……」
　何故だろう。真剣にＣ．Ｃ．についてアレコレ考えていた自分が馬鹿らしく思えてきた。ハンッと鼻で笑い、相変わらずの不敵な笑みを浮かべるＣ．Ｃ．に蒼のカリスマは無性に腹が立った。
「……で、どうするんだ？」
「何がです？」
「死んだと思われていた男がこうして生きている。それも万全な状態で。その様子ならあの呪いからも解放されたみたいだし、お前が隠れてコソコソしている理由もない。……違うか？」
「……」
「一度だけ、一度だけ私からお前に手を貸してやろう。――――帰ってこいシュウジ。Ｚ―ＢＬＵＥにはお前の帰りを待ってる奴がいる。お前の事を想っている奴がいる。お前の所為で……心が折れそうな奴がいる」
「……」
「そんな奴等に応えることが出来るのはお前しかいない。負い目を感じているのなら私

からも説明してやる。一緒に頭を下げてやる。だから――――」
　戻ってこい。そう言って手を差し伸べてくるＣ．Ｃ．に蒼のカリスマ――――シュウジ＝シラカワはフッと柔らかく笑みを浮かべる。
「Ｃ．Ｃ．さん、ありがとう。貴女のその言葉は素直に嬉しく思うよ。――――でも、ごめん。今はまだその提案は受け入れられない」
「……そうか」
　仮面を外し、シュウジとしてＣ．Ｃ．の前に立つ男は本心からの言葉で返し、丁重にＣ．Ｃ．の差し伸べてきた手を払った。
　自分はまだ戻れない。詳しい説明も無しにそう口にするシュウジに、Ｃ．Ｃ．はやはりといった様子で伸ばした手を引いた。
「……酷いヤツだな。お前は」
「ごめん。その代わりと言っては何だけどこれを……」
「情報端末？」
「其処には自分がこれまで集めたサイデリアルの情報が纏められている。サイデリアルの幹部や各拠点の警備網の様子、そしてソレスタルビーイング号の座標地点もそこに記されてある」
「いいのか？　聞く限りでは大層貴重な情報だと思うが……」

投げ渡された小さな端末、そこに簡潔に纏められている情報の数々はその全てが現在のＺ―ＢＬＵＥにとって重要なモノで、サイデリアルの一部の幹部の特徴や能力も記されている。特に奴等に占拠されたと思われるソレスタルビーイング号の在処は、彼らにとって優先的に取り戻したい案件の一つだ。

今、Ｚ―ＢＬＵＥの求める情報が全てこの端末の中に眠っている。彼等にとってそれは今後の戦いの行方を左右するほどに重要なモノであり、それは同時にシュウジの孤独な戦いの記録でもあった。

それを無償で受け取っていいのか。目の前の男が嘗て味わった苦しみを知る存在の一人としてＣ．Ｃ．は少しばかり申し訳ない気持ちになる……。

「なに、気にする必要はないよ。その情報は何れもＺ―ＢＬＵＥにとって重要なモノだが、ソロで動いている俺には無用の品だ。俺が持っているよりも彼等に預けた方が有用性は高い。ただそう判断しただけさ」

「……本音は？」

「もしＺ―ＢＬＵＥに俺の事がバレたらそれとなく助けて下さいお願いします」

台無しである。この男、死んで甦った事で何やら悟った様に見えたが、その中身は何にも変わってなかった。破界の王や数多くの怪物達を相手に一人で大立ち回りする癖に、こう言う事には本当に急速にヘタレになる。

まぁ、それもコイツの持ち味かと、呆れの溜め息を漏らすＣ．Ｃ．、仕方がないと半ば諦める彼女の元にルルーシュから通信が入る。恐らくは準備が整ったから戻ってこいという帰還命令なのだろう。了解したと簡潔に返事をした後、Ｃ．Ｃ．はシュウジに踵を返して背を向ける。そんな彼女にシュウジは最後の言伝を頼み込む。
「あ、Ｃ．Ｃ．さん、悪いけどもう一つ伝言を頼めないかな」
「なんだ？」
「ごめんね。そして頑張れって、ヒビキ君に伝えてくれないかな」
「それはお前自身の口から伝えるべきなんじゃないのか？」
「……あぁ、そうだね。確かにその通りだ」
先の大戦の決戦で最もヒビキの心を傷付けたのは自分だ。本来なら殴られる事を承知した上で土下座でもなんでもして謝り、事情を説明した方が良いのだろう。だが、それは出来ない。出来ないだけの理由があった。
「今のヒビキ君は奴の術中に陥っているも同然だ。今の彼に近付くのは自分から奴に俺の生存を知らせるようなもの、余計なリスクは負いたくない」
いや、もしかしたら既に知られているのかもしれない。もし奴が自分の生存を知った上で無視をしているのなら、それは恐らく自分がＺ―ＢＬＵＥと合流する事を待ちわびているのかもしれない。

そしてその時は弟分であるヒビキを使って自分を脅してくるのだろう。嘗てリモネシアで自分を貶めた時のように……。そうなってしまったら、今度こそ自分は感情で頭が可笑しくなる事だろう。

そうなれば奴の手中にヒビキ君共々収まる事になる。それだけは何としても避けなくてはならない。

「奴……か。ソイツについても教える気はないんだな？」

「正確には教えるまでもない、というのが正解かな。C．C．さんも本当は気付いてるんでしょ？」

「まぁな。……分かった。確かに伝えておこう。その所為でヒビキがお前の存在に勘づいた時は――――」

「その時は潔く殴られるさ。それだけの事はしたんだからな」

あー、でもやっぱ怖いなー。そう愚痴を溢すシュウジにC．C．は再び呆れ混じりの溜め息を漏らす。しかし、うっすらと目を細める彼女の瞳には何となくだが喜色の色が見てとれた。

「さて、では今度こそ行くとしよう。お前も精々気をつけてな」

「あぁ、その時は万全になった相棒と一緒に駆け付けるよ」

楽しみにしている。それだけ言い残したC．C．は今度こそ振り返ること無くその

場を後にする。彼女の背を眺め、ネオ・アルカトラズから去っていく所まで見送ったシュウジは仮面を被り、ボン太くんを着込みながら暗闇の中へと消えていった。

◇

√月α日

ネオ・アルカトラズでＣ．Ｃ．さんと出会ってから数日、その間世界は目まぐるしく動き、戦況は皇国側の圧倒的有利に傾いている。

やはり、自分の思った通りの展開になってしまった様だ。ネオ・アルカトラズで歌姫二人を救出したＺ―ＢＬＵＥは勢いのままラース・バビロンに攻め込んだのだろうが、三人のスフィアリアクターと後ろに控えていた皇帝に終始圧され、最後は敗走を余儀なくされていた。

しかし、事前にＣ．Ｃ．さんに渡していた情報が早速活かされていたらしく、撤退する際の彼等の行動はとても良かった。一個に固まって集中突破するのではなく、部隊を

三つに分けての分裂作戦。途中で合流してきたシャア＝アズナブル元総帥とダンクーガのチームＤのお陰でより撤退は捗り、トドメにしゃしゃり出てきたアサキムの奴が戦場を掻き回してくれたお陰で、Ｚ―ＢＬＵＥは被害を最小限に抑え、ラース・バビロンから逃げ延びる事が出来た。

自分が出てきては余計な混乱に陥るのではないかと迷ったが、アサキムが出てきたのであれば自分も遠くで眺めてないで参戦すれば良かったと今更ながら後悔している。つーか、アサキムの奴そんなにスフィアが欲しいのかよ。状況を考えず自分の目的で好き勝手動く奴に、いっそ清々しささえ感じる。

兎も角、皇国の追撃を振り切ったＺ―ＢＬＵＥは今も何処かで再起を狙っている筈、今は地球の何処かで落ち延び、疲弊した心身を癒している頃だろう。

このまま無事に逃げ延び、再び彼等は立ち上がる時が来る。そう信じていた矢先……あの事件が起きた。

アマルガムによる陣代高校への強襲と時空振動の発動、ラース・バビロンから離れた自分が次に耳にしたこの情報に、俺は焦りと不安で胸が締め付けられる思いになった。

陣代高校は大貫さんを始め、多くの人からお世話になった場所だ。幾ら大貫さんがいても相手は手段を選ばないテロリスト、奴等の卑劣なやり方で生徒の皆が傷付かない保証は何処にもない。

椿くんや空手部の皆も下手に奴等を刺激したりしないかが不安で不安で仕方がなかったし、何よりアマルガムの連中が大貫さんを本気にさせなかったどうかが一番心配した。

大貫さんは昔ガモンさんと何度も殺り合った人間、そんな人が本気になって暴れたりしたら……想像すらしたくない。

まぁ、そういった話が出ていない所を見ると、どうやら奇跡的に陣代高校の被害は最小限に食い止められたのだろう。その場に駆け付けたとされるＺ―ＢＬＵＥの皆には本当に頭が上がらない。

だが、そんなＺ―ＢＬＵＥも今は時空振動に巻き込まれた事で何処かに転移してしまったらしく、その足取りは未だ誰も掴めていない。皇国が勢い付いているこの状況で彼等に抜けられるのは手痛いが、いない人達に無遠慮な期待を押し付けるのも失礼な話だ。今は彼等の帰還を信じて自分に出来ることから始めていこうと思う。

そういう自分は現在、アマルガムの行方を追う為にナムサクという東南アジアの都市にいる。何でもアマルガムは一人の女子生徒を連れているのだとか。仮にも用務員として過ごしてきた自分としては囚われてしまった女子生徒を放っておく訳にもいかず、噂を頼りにこの地へと辿り着いた。

そこで情報を集めるべくここナムサクで活動している。その仮拠点としているのが

〝クロスボウ〟と呼ばれるＡＳの闘技場チームだ。
オーナーであるナミちゃんに頼み込み、住み込みで働かせてもらっているこの場所で、自分は次の試合に向けてＡＳの整備を行っている。ナミちゃんも機械には詳しいのか、時折自分と一緒に整備していたりもする。
ここナムサクはＡＳ闘技とやらが盛んになっている地域で、これで生計を立てている人は多い。そんな血生臭い土地でナミちゃんがＡＳに拘っているのは、偏に失った故郷の復興を願っているからなのだとか。
幼い頃から碌に教育されてこなかった彼女には昔から触れているＡＳに関する知識しかなく、必然的に今の場所に定着する事になったのだとか。
故郷の復興、そして学校の再建。彼女の過去の話がリモネシアの皆と重なった自分はついつい彼女に入れ込んでしまう。このままではいけない、何とかしてここから抜け出さないと、そう思ったとき、リックから新しい人がここにやって来るという嬉しいニュースが飛び込んできた。
リックは自分達クロスボウの唯一のＡＳ操縦士だ。同じＡＳ乗りである相良君やミスリルの人達と比べれば多少見劣りするものの、腕は確かな人物だ。その人が太鼓判を押すということは、少なくとも即戦力級の新人の筈だ。
明日、試合に向けての顔合わせをするという。名前はその時まで伏せておくという所

にやや不信に思うが、これで自分も本来の目的の為に動けると言うもの。あとは折を見てナミちゃんにチーム脱退の話をしよう。

自分から頼み込んでおいて都合の良い話だが、せめてもの詫びとして今日までここで働いて得た給料は全て置いて行くことにしよう。元々お金なんて求めてなかったのだ。これくらいはしないと後でバチが当たりそうだ。

そんな訳で引き継ぎの事もあるし今日はひとまずここまでにしておこうと思う。やって来る新人さん、良い人だと良いなぁ。

◇

そして翌日、新たな出会いにワクワクと胸を弾ませていた自分は……。

「……」
「……おい」
「……」
「何故、貴様がここにいる。……いや、そもそも何故生きている。答えろ！」
「ちょ、相良、いきなりどうしたんだよ！」
「お、落ち着いて！　シュウジが泣いてるじゃない！」
酷く殺気だった傭兵少年に銃口という素敵な出会いを贈られましたとさ。

嗚呼、泣きそう。

その１４５

√月β日

やっべー、昨日はマジでヤバかったわ。あの時咄嗟の機転が無かったら今頃自分は宗介君に連行されて、Ｚ―ＢＬＵＥから粛清という名のフルボッコを受ける所だったわー。いやー、マジ焦ったわー。

けれど事前にナミちゃんに話していた通り、時空振動に巻き込まれた影響で記憶を失ったという話のお陰で何とか事なきを得る事が出来た。宗介君は最後まで――――――今もだけど――――自分に疑いの眼差しを向けてきていたが、取り敢えずその場は顔合わせだけという事もあり、それで終わりとなった。

で、その後はパイロットである宗介君に合わせてＡＳを調整する事になり、その日はそれで終了となった。最初の出会いがアレだっただけにチームの空気は微妙な感じだったが、自分の説得で宗介君以外の皆をどうにか納得させる事が出来た。

皆の蟠りを解消させた事でチームを一丸とさせた自分は、次の試合を最後にチームか

ら抜ける事をナミちゃんに告げた。前にも説明したが元々自分はアマルガムの行方を追うためにこの町に訪れただけの流れ者だ。本来ならもっと早くここから立ち去るつもりだったし、一刻も早くかなめちゃんを助け出す必要がある。

けれど、それとこれとは話が違う。世話になった手前、最後の別れはキチンとしようと自分はナミちゃんにチーム脱退の話をした。当然最初は驚かれたり行く当てはあるのかと心配されたが、元々そんなに長く留まるつもりはなかったと告げると、それ以降ナミちゃんは自分に何かを訊ねたりする事はなかった。

流石に自分勝手過ぎると思い、これまでの給料を返還しようとしたのだが、ナミちゃんはここで働いて貰った以上報酬を渡すのは当然と言い張り頑なに受け取ろうとはせず、申し訳ないと思うならいつかまたここに来た時に働いて返せと言われてしまった。

そう言われてしまえば従う他なく、自分はナミちゃんの好意に甘える形でチームを後にした。……ナミちゃんかぁ、故郷を復興させるという強い意志の持つ女の子、それはどこかシオさんと似ている気がする。

どうか頑張って欲しい。無責任な事だがそう思わずにはいられない自分なのでした。

√月γ日

アマルガム、マジ許すマジ。幾ら自分達の目的とはいえ、無関係な人間を巻き込むと

かテロリスト以外の何者でもないじゃねぇか。……あ、そういや連中テロリストだったか。

事の発端は自分がナミちゃんのチーム〝クロスボウ〟から脱退し、荷物を纏めて町から出ようとした時の事だった。この時の自分は流石にチームから抜けた自分がナミちゃんの所にいるのは不味いと思い、前の日には彼女の所を後にしたのだが……どうやら、今回はそれが仇となってしまった様だ。

すれ違いのタイミングで始まったアマルガムの攻撃は、町の人達を全て巻き込む形になってしまった。降伏しなければ町と女の安全は保障しない、そう宗介君に勧告してくる連中は自分達の勝利を信じて疑わなかった。

そんな連中を前に、ボン太くんを着込んで連中の所へ単身乗り込んだ自分は奴等にとって理解し難い存在に見えた事だろう。遊園地のマスコットが自分達の所に突っ込んでくるなんて流石に予想出来なかったらしく、自分の色んな意味での不意討ちにアマルガムの構成員は士気も隊列もバラバラになり、危なげなくナミちゃんを救出する事に成功、外に展開したＡＳ部隊も後から現れたＺ―ＢＬＵＥの皆と彼等と合流した宗介君によって壊滅し、無事にナミちゃんと町を守る事が出来た。

その後、ナミちゃんをリックの所まで送った自分はＺ―ＢＬＵＥに見付からないようにまたもや密かに離脱。どうにか気付かれること無くナムサクから離れる事が出来た。

彼女の無事や町の被害を最小限に抑えられた事に嬉しさを覚える自分だが、それは同時に自分がアマルガムを追う情報を失った事も意味している。

何せ襲ってきた構成員は構成員とも呼べない下っ端の下っ端、ナミちゃんを助ける時に軽く問い詰めても役に立つ情報なんてまるでなかった。

これからどうするか、今後の方針について悩んでいると、トールギスを通して自分の所にある人物からの通信が送られてきた。

送り主はトライア＝スコート博士、自分が乗るトールギスを改修したシュナイゼルの協力者の一人。そう言えば彼女は無事だったのかと思い通信を開いてみると、文面にこう記されてあった。

『話があるから来い』

やや強引に見えるが、トライア博士の呼び掛けに応じる以外どのみち他に選択肢も無いので、自分は考える間もなく応える事にした。

博士は超時空物理学とロボット工学に精通している人だ。きっと彼女も何らかの方法でサイデリアルに対抗するべく秘密兵器の一つや二つ開発しているのかもしれない。例えばA（アメイジング）・トールギスの追加装備とか。……まぁ、流石にそれは無いだろうが。

しかし、ここの所激戦の連続でトールギスに掛ける負担も大きくなってきている。今まで自分がこまめに整備して騙し騙し動かしてきたけど、そろそろ本格的な修理が必要

になってきている。
今回のトライア博士の呼び掛けはちょうど良いタイミングだったのかもしれない。グランゾンの事についても博士なら何かしらの助言はしてくれるだろうし、もしかしたら修理を手伝ってくれるかもしれない。
そうと決まれば善は急げ、俺はトールギスとグランゾンの修理を急がせる為、北米大陸にあるスコート・ラボへと急行するのだった。

っておい、スコート・ラボにＺ―ＢＬＵＥも向かっていませんかコレ、しかもお前コレ……ヒビキ君……いますよね？
……もしかして俺、図られた？

◇

日本、ナムサクと二度に渡り戦いを繰り広げていたＺ―ＢＬＵＥは、これからの事を相談するためにメッセンジャーとして送られてきた桂木桂の案内の下、北米大陸にあるスコート・ラボに身を寄せようとした。

その道中、艦内で待機していた宗介は戦友であり親友であるヒビキにあることを告げていた。

「シュウジさんが……生きてる？」

薄暗い部屋の中、明かりも付ける事無く暗闇の中で踞るヒビキに、宗介はナムサクの地で嘗て自分が出会った人物の名を告げた。

シュウジ＝シラカワ。時獄戦役の最後、自らの手で殺したとされる人物が生きていた。宗介から聞かされるその話に、ヒビキは驚きと混乱で目を見開いていた。

「あぁ、そうだ。お前が勝手に殺していたと勘違いしていた奴はしぶとくも生きていたんだ。流石に無事とは言えず記憶の混濁が見えたが、それでも五体満足で生きている。生きていたんだ」

ナムサクの地で奴は自分の事など知らないと言った。ナミやクロスボウのチームの

面々も、彼は何も覚えておらず、気が付いたらあの地にいたという話を聞かされていたらしく、それ以上の情報を得られる事はなかった。

しかし、宗介にとってシュウジの記憶の有無は関係がなかった。奴が生きている。その事実だけで充分だった。

今はＺ―ＢＬＵＥの誰にもこの事を話してはいない。いずれは艦長の誰かに相談する事になるだろうが、今は何よりも親友に自分の兄貴分の生存を伝えたかった。死んでいた奴が生きている。それは幾つもの戦場を生き抜いてきた宗介にとって然程珍しい話ではない。

だが、ヒビキにとって宗介から聞かされるその情報の内容は、彼にとって大きな意味をもたらす筈だ。宗介は自他共に認める嘘が下手な男、隠し事を最も不得手とする人間だ。その男が意味もなくこんな話をする事がないのは、目の前で燻るヒビキにも分かること。

自分には励ましや情けの言葉を捻り出すだけの知能は持っていない。あるとすれば、自分の出来事をそのまま相手に伝える事だけだ。

これで親友も立ち直れるかもしれない。その一心でヒビキだけに告げた今回の話、軍規違反は覚悟の上、粛清を受ける事になっても宗介はヒビキを立ち直らせる事を優先し、選択した。

「……ありがとうな。宗介」
「ヒビキ？」
「俺がいつまでも腐っていた所為で、お前にまで心配を掛けさせてしまった。……そうだよな、かなめさんが拐われて一番辛いのはお前なのにいつまでも俺が落ち込んでいる訳にもいかないよな」
「待てヒビキ、何を言っている。俺の話を聞いて――――」
「ゴメンな、でもありがとう。お陰で俺ももう少し頑張れるよ。……シミュレーションに行ってくる。こんな俺でも少しでも皆の役に立ちたいからな」
立ち上がり、フラフラと覚束無い足取りで通路を往くヒビキ。まるで自分の言葉が届いていない彼に宗介は苛立ちと悪態をぶちまけながら壁を叩いた。
「――――クソッ！」
最早ヒビキを言葉で立ち直らせることは不可能だった。どんなにシュウジが生きていると告げても、ヒビキはそれを自分の思い込んだ幻想だと認識してしまう。
（やはり、あの時に無理矢理にでも連れてくるべきだったか！）
自分の選択の過ちに宗介は後悔し、悔しさに歯を食い縛る。このままでは本当にヒビキは壊れてしまう。そんな最悪な事態となる前に何とかしなくては――――。
「随分と荒々しいな。まるで想い人に振られた様だぞ」

「……Ｃ．Ｃ．か、悪いがお前の軽口に付き合ってやる余裕は無いぞ」
背後から現れる少女、Ｃ．Ｃ．。クスクスと笑うその様はまるで人を弄ぶ魔女の様、この手の女性には関わらない事がベストだと知る宗介は、そのままＣ．Ｃ．に構う事無くその場を去ろうとする。
今のＺ―ＢＬＵＥは陣代高校でレナードによって引き起こされた時空振動で部隊が三つに分かたれている。今後地球で行われる作戦は現状の少ない戦力で対応するしかない。
直ぐ様自分の持ち場に戻ろうとする宗介、だが次に聞かされるＣ．Ｃ．の言葉により、その足は嫌でも止まる事になる。
「シュウジ＝シラカワの事は今はまだ誰にも話すな」
「……なんだと？」
何故、彼女から奴の名前が出てくる。思いもしなかった人物から出てきたシュウジの名前に、宗介は驚愕を隠しきれなかった。
「悪いが、詳しくは話せん。だが、近い内に全てが明るみになるだろう。そうなった時に備えて……精々、ヒビキを支えてやるといい」
言いたいことだけを残して去っていくＣ．Ｃ．、その後ろ姿を宗介はただ呆然と眺める事しか出来なかった。

その１４６

「では、此方でお待ち下さい」
　スコート・ラボ。北米大陸に位置する超時空物理学の研究所。博士号を取得したトライア＝スコートが運営するこの研究所を訪れた蒼のカリスマことシュウジ＝シラカワは案内係である応接室の一つに通されており、仮面を付けたまま室内にあるソファーに腰掛ける。
（やべぇよやべぇよ、Ｚ―ＢＬＵＥ来てるよカレンちゃん来てるよ宗介君も来てるよヒビキ君も来てるヨォおぉっ！）
　仮面の所為で終始表情を読めず、無感情かと思われた蒼のカリスマだが、その内心は焦りと恐怖に染め上げられていた。それもその筈、現在このスコート・ラボには蒼のカリスマだけでなくＺ―ＢＬＵＥまで来ているのだから。
　幸いにスコート・ラボは街一つに相当する広い敷地を有しており、機体を停めた所も

Ｚ―ＢＬＵＥとは遠く離れた場所にある。今ごろＺ―ＢＬＵＥの面々も応接室に通されているだろうが、ここからは遠く置かれた別の部屋に案内されている事だろう。

だが、安心は出来ない。向こうには自分の存在を知っている相良宗介がいる。彼が万が一口を滑らせ、そして運悪くそれが紅月カレンの耳にでも入ったりしたら、忽ち自分は挽き肉に変えられ止めにレンジでチンッされてしまう。

どうかバレないでくれッ！　切実な思いで祈り続ける蒼のカリスマ、神の事など欠片も信用していない彼の祈りは当然ながら届く事はない――――――が、蒼のカリスマの存在をＺ―ＢＬＵＥに知られないようそれとなく手配されたトライア博士の気遣いにより、彼の存在がＺ―ＢＬＵＥに知られる事は無かったので、祈る事自体無意味なのだが……。

そんな打ちひしがれているシュウジの前にあるモニターに光が宿る。映し出されたのは、時の牢獄の破壊に大きく貢献したことにより、サイデリアルに重点的に狙われる様になったトライア＝スコートだった。

『さて、漸く此方の方に回ってこれたか。待たせてすまないね蒼のカリスマ――――――って、なにやってるんだいアンタ』

「いや、ちょっと祈りを捧げて……」

『アンタ、神様なんて信じてないだろう?』
お気に入りの狐の仮面を被る彼女から溜め息を溢しながら受けたその的確すぎる指摘に、蒼のカリスマはグゥの音も出なかった。

◇

「宇宙の終焉、ですか。何ともスケールの大きな話になってきましたね」
『だが事実だ。一万二千年に一度行われる宇宙の終わり、それが根源的災厄……バアルの産みの親だ』
スコート・ラボの一室に通され、通信越しで説明されたこの宇宙崩壊のメカニズム。リモネシアの地下深くに眠っていたとされているプロトカルチャーの遺跡、そこに記された彼等の現代人である自分達に向けたメッセージ、その事実はシュウジに少なからず衝撃を与えた。
確かに彼処にはまだ色々と隠されているのではないかとは思っていた。多元世界と

いうだけあって何かしらの秘密はあるだろうと予想はしていたが、自分が思っていた以上の発見に素直に驚いた。

彼女から聞かされる一万と二千年という周期で行われる宇宙の終焉、〝それは消滅しようとする力〟が〝存在しようとする力〟を消そうとする事、その際に産み出されるのがバアルであり、全ての命に終わりを告げる根源的災厄なのだという。

命の力を宇宙から消す。生命の根底からの否定、それは正しく全生命体に対する脅威の現れだった。しかし、その遺跡に記された内容はそれだけではなかった。

「獣の血、水の交わり、風の行き先、火の文明――――そして、太陽の輝き、か」

『随分と落ち着いてるじゃないか。もしかして、アタシに言われる前に既にこの事は知っていたのかい？』

「まさか、宇宙崩壊のメカニズムに付いては知り得ませんでしたよ。まぁ、何か重大な危機が迫ってきているとは漠然ながらも感じていましたが……」

時獄戦役の最後の戦い、アンチスパイラルとの最後の打ち合いの時、シュウジは僅かながらそれを感じた。この宇宙に起きるであろう脅威、全ての命に対して放たれる絶対的な敵意、それは根源的災厄であるバアルのモノかと最初は思ったが、トライア博士の説明を聞いたシュウジは確信する。

あれは敵意なんて生易しいモノではない。もっと根の深く、それでいて純度の高い殺

意に似たナニか。いや、この場合宇宙から放たれるのだから、或いは宇宙の意志と呼ぶべき代物なのかもしれない。

そして、それに対抗するには命の力――――つまり、存在しようとする力を高める必要がある。その為の手段が……。

「シンカ……か」

何となく呟いた言葉、それを口にしながら思考を巡らせる。確か、それを最後に聞いたのもアンチスパイラルと最後に打ち合った時だった。

あの時はアンチスパイラルを超えるのに夢中で何も考えられなかったが、もしかしたらあの時に何か起きたのかもしれない。

シラカワシステム。確かそれは本家のグランゾンに搭載されていない筈のシステム、これまでは自分の生命維持装置的なモノかと思っていたが、もしかしたらあのシステムは自分が思っていた以上に重要な役割を担っているのかもしれない。

となると、今自分がすべき事はサイデリアルと戦うことではないのかもしれない。勿論連中とケリを付けるのも大事だが、今回で優先順位が少しばかり変わった。

グランゾンの修理、そしてシラカワシステムの解明と博士との対話。今までなぁなぁと先送りにした問題だが、どうやら本格的に向き合う事になりそうだ。そうなると、今度は愛機を直すための施設と資材が必要になってくる。

こうなれば背に腹は代えられない、借金を背負う覚悟でシュウジはトライア博士に、ここでグランゾンの修理を頼みたいと頭を下げようとするが……。

『まぁ待ちな、話はまだ終わっちゃいない。プロトカルチャーの私達に向けて放ったメッセージはまだ続きがあるんだ』

「何だって？」

宇宙の崩壊と終焉、存在の力と消滅の力、そして根源的災厄であるバアルの発生。これだけでもお腹一杯なのにまだ他にあるのか。

『シンカの扉を開いた者は宇宙の終焉へと立ち向かう。そしてそれはやがて訪れる真の終焉を越える力となる……』

「真の終焉？」

『一万二千年……それを一万回繰返し、宇宙は真の終焉を迎える。それこそが最後の戦い、消滅しようとする力と存在しようとする力は全てを懸けてぶつかり……それは全ての並行世界を巻き込むだろう』

「――――――」

トライア＝スコートから告げられる真の終焉、全ての並行世界を巻き込むという言葉に、シュウジは仮面の奥で目を剥いた。

（……待て、待て待て待て、マテマテマテマテ。全ての、並行世界だと？）

世界というのは可能性の限り分岐し、無限に存在している。形、在り方、その有り様はその世界ごとに事なり、けれど確実に存在している。

本来ならばその世界同士は決して交わる事はなく、観測はされても干渉することは有り得ないとされてきた。だから、全ての並行世界を巻き込むという話は普通なら笑って吐き捨てる程に陳腐なモノ。

しかし、今自分達が生きているのは並行世界が交わった多元世界、あらゆる可能性があらゆる形で存在する摩訶不思議な世界。笑って切り捨てるには剰りにも現実味がある内容だ。

だが、それはシュウジにとって承知の話であり、無視できない内容だ。それとは全く関係なく、理由不明な焦燥がシュウジの胸中を掻き乱していく。

全ての並行世界、全ての世界、境界を、在り方を、法則を越えて巻き込む宇宙の終焉、有り得ない。有り得ないと分かっていながらも……。

（ニコちゃん……！）

白河修司は脳裏に浮かぶその〝可能性〟を捨て去る事が出来なかった。

『おい、どうしたんだい。何か様子が変だよ、大丈夫かい？』

「……あ、あぁ。大丈夫です。少々話の大きさに動揺してしまったようです」

トライア博士の心配の声で我に返ったシュウジは、その後も彼女の話を幾つか得る事

ができた。
（シンカ、オリジン・ロー、存在の力、それらがバアルに、宇宙の終焉に立ち向かう為の切り札と言うのなら、やはりスフィアは……）
　頭に浮かんでくる幾つもの情報の欠片（ピース）。さらに今回トライア＝スコートから引き出された情報が、シュウジの脳内で形成されていく。予測、推測、今ある情報とこれ迄の日記に記された過去の記録、それらがシュウジの頭の中で統一されようとした時――――。
「この警報は？」
『チッ、どうやらサイデリアルの連中がやって来たようだね。こんな時になんて空気が読めない』
　施設全体から鳴り響く警戒音、それは敵の襲来の合図であり、街の住民を避難させる報せでもあった。応接室の窓からはサイデリアルの軍隊が直ぐそこに迫っている。既にＺ―ＢＬＵＥが出撃し、彼等を迎え撃とうと少ない戦力を展開させている。
「どうやら、今日はここまでの様ですね」
『――――行くのかい？』
「ええ、恐らく連中は第二陣を用意させていると思いますし、戦力を出し惜しみしている場合でもありません。トライア博士、今回の情報提供に心から感謝をさせて頂きます

よ」

『礼なら不要さね。アタシはアタシで利用できるものを利用させて貰っているだけさ。……さ、行くなら行きな、トールギスの方も一応の修理を終えた筈だよ』

「代金の方は？」

『ツケにしておいてやる』

不敵に笑って通信を切るのと、シュウジが応接室から飛び出すのは殆ど同時だった。

（今、あれこれ考えるのは止めよう。今はこの状況を打開するのが先だ！）

◇

サイデリアルの襲撃、幹部補佐であるサルディアスの狡猾なまでの電撃強襲は、戦力

を分散された今のＺ―ＢＬＵＥには非常に効果的だった。
　住民の避難は完了されているといってもその戦力差は歴然、数少ない戦力で大軍を相手にしなければならないＺ―ＢＬＵＥは徐々に追い詰められようとしていた。
　そこへ更に追撃とばかりに主力部隊の投入、皇国軍司令官補佐のダバラーンの登場に、一同は更なる窮地に追い込まれる。
　そんな時だ。軍を引き連れたダバラーンの艦に狙撃による一撃が叩き込まれた。何事かと狙撃のあった場所へ誰もが振り返ると、そこには懐かしき機体であるブラスタが佇んでいた。
『クロウ！』
『よぉ、皆。元気だったか？』
『この野郎、このタイミングで出てくるとか、美味しいところ持って行き過ぎじゃないか！』
『だろう？　この時の為にズッと裏でスタンバって……というのは流石に嘘だが、我ながら良いタイミングで戻って来れたと思うぜ』
　思わぬ所から現れた思わぬ援軍の登場に、彼等の士気は一気に向上する。戦力的に見ればたった一機加わっただけに見えるが、彼等からすれば百人力にも勝る助っ人の登場だった。

『これはこれはクロウさん、お久し振りですね』
『おぉよ。久しぶりだなぁサルディアス。翠の地球で受けた借り、今ここで返させて貰うぜ』
『おぉ、怖い怖い。久しぶりの再会だというのに随分と物騒ですねぇ』
『そうでもねぇさ、お前の悪辣な罠に比べれば可愛いものだろ。……けど、良いのか？』
『はい？』
『後方、注意だぜ』
『ッ!?』
　クロウの意味深な言葉の直後に感知する熱源反応、それが凄まじい速さで自分の背後から近付いてくる。このタイミングで一体何が……振り返るサルディアスが次に目にしたのは、太刀を振り翳す蒼の光だった。
　次の瞬間、そこには四肢を切り捨てられ、達磨と化したサルディアスの乗機が大地に転がされていた。スレ違い、刹那に勝る一瞬の攻撃、瞬く間に幹部補佐が一人戦闘不能に陥った事にＺ―ＢＬＵＥ、皇国軍の両者は時が止まった様に固まった。
『お、おい。あの機体って……』
『と、トールギスじゃねぇか！』

『しかもあのデザイン、トレーズの乗っていた機体の発展型か!?』
『そしてそれを操る者……まさか！』
『シュウジ……なの？』
突然現れた蒼い機体、その姿と戦い方にＺ―ＢＬＵＥは嘗てのトレーズを、そして彼を通して一人の魔人の姿を幻視する。
問い詰めようと通信を送ろうとするカレン、しかし事態がそれを許しはしなかった。後方から現れる金と黒の艦、皇国軍総司令であるストラウスの艦が遂にここに来てしまった。
欲深な金牛、そして……。
『この感覚、もう一人スフィアリアクターがいやがるな』
『まさか、皇帝アウストラリス!?』
サイデリアルを束ねる皇国軍の皇帝、アウストラリスの登場にＺ―ＢＬＵＥは騒然となる。自分達を倒す為にここに来たのか、追い詰められた状況、このままではとゼロが状況打破の策を捻り出そうとした時、突然それは起きた。
『お、おいこれって！』
『時空震動だと？　このタイミングで!?』
『これも連中の攻撃なの!?』

まるでこの混沌とした戦場が引金となったかの様に唐突に起きた時空震動、それもこれまでとは一線を画すその規模と大きさに、特異点である桂木桂から大粒の汗が溢れだす。

このままではまずい、離脱しろとゼロが命じても時は既に遅く。発生した時空震動はＺ―ＢＬＵＥとクロウ、そして蒼いトールギスをも呑み込み、地球上から姿を消した。

そしてその際、魔人は確信する。

（やっぱり、時空震動は意図的に産み出されたモノか。つまり、何者かが俺達を見ていたという事）

思い出すのは以前にあの喜び野郎から感じたモノと同じ、つまりは人ではないナニかが自分達を監視しているという事。

気に入らない。宇宙の崩壊、終焉もそうだが、高見の見物をしていながら此方を弄ぶナニかに魔人は無生に苛立ち。

やがてそれは彼の者達……テンシと呼ばれる者達に対する明確な敵意となるのだった。

その１４７　前編

「――――何だと？　Ｚ―ＢＬＵＥが姿を消した？」
南米大陸、皇国軍との戦いが激化しつつある最前線、前線付近にあるレジスタンスの拠点の一つにあるその場所で、シュナイゼルの側近として雇われているギュネイは仲間からの報告を聞き返した。
「あぁ、どうやら先日北米大陸で大規模な時空震動が観測されたらしく、そこに居合わせたＺ―ＢＬＵＥはその時空震動に巻き込まれ、姿を消したらしいんだ」
「成る程、相変わらず話題の尽きない連中らしいな」
口では平静を装ってはいるが、ギュネイの内心は焦りに満ちていた。Ｚ―ＢＬＵＥ、その肩書き通り地球最強の強さと戦力を有する彼等は皇国軍との戦いで必要不可欠な部隊だ。戦力も技術力も上である皇国軍に対し、地球の戦力の中枢を担う彼等の存在は切り札であり、人々の希望であった。
彼等の活躍で多くの人々は未だ希望を捨てずにいる。だが、それは逆に言えば人々の希望はＺ―ＢＬＵＥにしか見出だせていないとも言える。もし、彼等の不在が人々に知

られたら、最悪皇国軍に対する戦意を失う事になる。
「おい、この情報、他に知ってる奴はいるのか？」
「実はもうネット上に情報が拡散していて……」
自分の危惧していた事に気付いた仲間が青ざめながらそう言うと、ギュネイは舌打ちして立ち上り、部屋に備われているパソコンに手を伸ばす。
――――やられた。どうやら向こうにはこういった情報戦に秀でた奴がいるらしい。既にネットのあちこちの掲示板にその情報が開示され、その証拠であると言いたいように当時の映像も動画として添付されている。
随分と用意周到だ。こんな局地的に発生した時空震動がどうしてこうも鮮明に映し出されているのか。訝しげに思うギュネイだが、今注意すべきはそこではない。この情報が出回っているのなら、恐らく今後戦局は大きく傾く事だろう。それも此方が追い詰められる方向に……そうなったとき、自分が選ぶべき道は自ずと限られてくる。
さてどうする。真剣な表情で画面を見入るギュネイ、するとそこへ彼の雇い主であるシュナイゼルが部屋へと入ってきた。
「失礼するよ」
「シュナイゼル……」
「その様子だと、彼等の話はもう耳にしたみたいだね」

「あぁ、今事実確認をしていた所だ。所詮ネット上の情報だから鵜呑みには出来んが……」
「その事についてだが、今しがた知人に連絡を取ってみたら間違いないと答えられたよ。Ｚ―ＢＬＵＥが時空震動に巻き込まれて姿を消したというのは誤情報ではないようだ」
「やはり……そうなのか」
「しかも彼女が言うにはどうやら銀河の中心付近にも似たような時空震動を観測したらしい。恐らく、彼等は何者かの手によって銀河の中心へと誘われたらしい」
「なんだと？」
　シュナイゼルから告げられるＺ―ＢＬＵＥの行方不明の真実、そこへ更に付け加えられる衝撃的な事実に、ギュネイは今度こそ驚愕を表情を曝け出す。同じ部屋にいるレジスタンスの仲間も、シュナイゼルの言葉に愕然とした様子で立ち尽くしてしまっている。
　一体何故、どうしてそこまで知っているのか。ギュネイは問い詰めようとするが、それよりも早くシュナイゼルが口を開く。
「済まないが、今はまだこの情報の出所は説明できない。彼女も皇国軍から追われている人間でね、迂闊に名前は出せないんだ」
「そうか、アンタがそう言うならそうなんだろ。なら、これ以上追及するのは止めてお

く。……それで、これからどうする？」
「無論、撤退だ。現在の前線には皇国軍を抑えられるだけの戦力も少ない上に、先の情報漏洩によって要でもあった士気も落ちてきている。ならば僅かでも被害が少ない内に離脱し、後の戦いに力を蓄えておくのが得策といえるだろう」
「蓄える……だと？　その口振りだとまだ俺達にチャンスが巡ってくる様だが、その根拠はなんだ？」
　相変わらず遠い言い回しのシュナイゼルにギュネイは訝しむ。Ｚ―ＢＬＵＥという要の戦力を失い、士気も下がりつつある現在の地球圏の勢力は、圧倒的に皇国軍側が優勢となっている。
　追い詰められつつあるこの戦況、なのにシュナイゼルからは全くの諦めがみられない。そんな強気に出られる理由は何なのか、ギュネイは何気なく訊ねると、シュナイゼルから一枚の写真が写し出されていた。
　それは戦場で戦うＺ―ＢＬＵＥの姿が写し出されていた。状況的に見て時空震動に巻き込まれる直前に撮った写真なのだろう、一体この写真にどんな意味が込められているのだろうと目を凝らし――――気付いた。
　アッと声を漏らすギュネイ、そんな彼を見てシュナイゼルは意地の悪い笑みを浮かべる。

「彼女が言ってたよ。彼等が時空震動に巻き込まれる際に、かの〝蒼〟もそれに呑み込まれたと」
　写真の隅に見切れた形で写り混んでいる蒼い機体、それが少し前まで自分を振り回してきた魔人の機体だと察したギュネイは不機嫌そうに眉を寄せて、乱暴にその写真をシュナイゼルに突き返した。
「意地が悪いな。全部知った上で俺を試したのか」
「いいや、それは違う。何せ私も彼女に似たような問答をさせられてね、これはその意趣返しさ」
「単なる八つ当たりじゃねぇか」
　あっけらかんと応えるシュナイゼル、相変わらず腹黒く、色々ゲスイ元ブリタニア宰相にギュネイは言い表し難い疲労を覚えた。
「何にせよ、これで我々のやるべき事が決まった。彼等が戻って来るまでの合間、可能な限り戦力を残し、戦線を離脱する。君、悪いけどこの事を皆にも伝えてくれては貰えないかな」
「は、ハイッ！　了解しました――！」
　シュナイゼルに命じられ、少し混乱しながらも部屋を後にするレジスタンス、彼の事を見送りながら自身も仕事に戻ろうとシュナイゼルも部屋を出る。

残されたギュネイは渡された写真を見て思う。時空震動に巻き込まれ、銀河の中心に送られたＺ―ＢＬＵＥは今や地球に戻って来られるか分からない絶望的な状況に置かれている。シュナイゼルが彼等が戻ってくる事を確信しているのは、根拠の無い自信から来るものだ。

かつて宰相と呼ばれ、戦場では恐るべき軍師として知られる彼としては、楽観視が過ぎる判断だ。だが、そう思えるだけの材料がこの写真にはあった。

魔人、これまで数多くの窮地をその出鱈目な行動力で突破してきた。だから、きっと今度も自分達には想像も出来ないやり方で帰ってくるのだろう。恐らくシュナイゼルもそう信じているに違いない。

……いや、どちらかと言えばそれは決定事項と言うべきモノなのかもしれない。あの魔人が、たかが銀河の中心に送られた程度でくたばるのなら苦労はしない。どちらにせよ、奴と行動を共にした時点で同じく楽観視されるＺ―ＢＬＵＥに、ギュネイは少なからず同情を感じた。

◇

「なんだ……ここ？」

時空震動に巻き込まれ、その衝撃により一時的に気を失っていたシュウジは、目を覚ました直後に目の当たりにした光景に間の抜けた声を漏らす。

トールギスのモニターを通して目にする宇宙の光景。一体何故、ここは何処なのか、そんな疑問を浮かぶよりも大きな感情が、シュウジの胸中に広がっていた。

美しい。今自分がどれだけ危険な状況にいるのか、それすら分からない事態だというのに、シュウジは眼前に広がる宙の色に見惚れてしまっていた。多元世界の宇宙の様な斑模様ではない――――まるで宝石の様な色をした宇宙、周囲に浮かんだ結晶の様なものがより一層この宇宙を彩っているようで、シュウジはこの宇宙を一種の美術館の様に感じた。

だが、それ以上に何処か虚しさを感じるのは何故か。これだけ美しい色合いの宇宙なのに、生命が感じられないのは何故か。落ち着いてきた思考に湧いてきた疑問、それが何なのか突き止めるよりも早く……すぐ近くで戦闘が起きているのを感知した。

トールギスの索敵に引っ掛かった複数の熱源反応、それがＺ―ＢＬＵＥのモノだとい

ち早く気付いたシュウジは状況の確認、並びに彼等の救援の為にトールギスのスラスターに火を入れ、その座標に向けて急ぐ。

その背後で黒い何かが迫ってきている事に気付かずに――――――。

◇

『クソ、コイツらサイデリアルの連中の切り札かよ！』

『これまでのアンゲロイとは明らかに力が違う！』

時空震動に巻き込まれ、見知らぬ宇宙へと飛ばされたＺ―ＢＬＵＥ、そこで待ち構えていたインベーダーを始めとした人類の天敵達を相手に、彼等は数少ない戦力で奮闘して見せた。銀河の中心地点でありながら平行世界に飛ばされたかもしれない、そんな追い詰められた状況の中でも懸命に戦う彼等の勇姿は、流石の一言と言えた。……そう、奴等が来るまでは。

黒いアンゲロイ。これまでとは違うサイデリアルの戦力と思われる機体と次元獣を

連想させる怪物の出現に、彼等は更なる絶望の淵へと叩き込まれる事になる。
　これまでとはまるで違う強さを持つ黒いアンゲロイ、おまけに因果を操り瞬間移動の様な挙動をする怪獣、唯でさえ不利な状況なのに桁外れな強さを持った奴等を前に、Ｚ―ＢＬＵＥは瞬く間に全滅へと追い込まれていく。
　そんな彼等を蝕む絶望の文字、戦力よりも黒いアンゲロイ達の存在そのものに怯え始めたＺ―ＢＬＵＥは、その屈強だった心に亀裂が入るのを感じた。まるで子供が大人に許しを乞うように、まるで誰かが分を弁えよと叱って来るかの様に、Ｚ―ＢＬＵＥの面々は押し寄せてくる圧倒的敵意と力を前に、軈て抵抗する気力も奪われつつあった。
『くそ、クソゥ！　ここまでなのかよぉっ！』
『終わるのか、俺達が……こんな所で！』
『まだだ！　俺はまだ戦える！　俺の心はまだ折れちゃいねぇ！』
　絶望に呑まれつつありながらも、それでもまだ負けないと叫ぶのは、揺れぬ天秤のスフィアリアクターであるクロウ＝ブルーストだった。スフィアの影響か、それとも彼の本質なのか、黒いアンゲロイ達を前にしながらも尚吼える彼の姿に、僅かだが部隊に再び戦う気力を与える。
　そうだ。まだ自分達は諦めない。諦められないだけの理由がある。操縦桿を握り締める彼等に対し、しかし現実は非情だった。

増援として現れる黒いアンゲロイの群れ、それも大群と成って押し寄せてくる奴等の中には、一体でも彼等を全滅に追い込める怪獣が複数体確認されている。

絶望に次ぐ絶望、圧倒的力の差、この状況を打破するのには最早奇跡にすがる他ない。だが、奇跡は行動を示したモノに必然として為される偉業。戦う気力も失い、死を待つばかりだった彼等に、奇跡など起こるはずもなかった。

『しまった！　抜かれた！』

『ヒビキ、逃げろ！』

圧倒的力の前に遂に機能しなくなった戦線は黒いアンゲロイの一撃によって瓦解し、ヒビキの乗るジェニオンに向かって集まっていく。

心が絶望という黒に染まっていく。それだけならばヒビキは潔く己の死を受け入れたのかもしれない。だが、彼が持つスフィアの性質上彼の胸中には絶望だけでなく、希望もまた存在した。

絶望の大きさに比例して希望もまた巨大化していく。黒いアンゲロイという巨大な絶望に対し、ヒビキの中ではそれに抗うだけの希望も当然のごとく肥大化していく。

『あぁぁぁ……ああぁぁ、うぁぁぁぁぁっ!!』

『ヒビキ!?』

『ヒビキ君!?』

膨れ上がっていく絶望と希望、その結果恐怖と混乱に染まるヒビキにはただ闇雲に暴れまわる事しか出来なかった。スフィアの力に呑まれ、暴走しつつある。
最早ヒビキには誰の声も届かない。親友である宗介の声も、パートナーであるスズネの声も、スフィアに呑まれつつあった彼に届くことはない。
そんなジェニオンに更なるアンゲロイの群れが迫る。襲い掛かる巨大な絶望の波に、遂にヒビキの心が壊れようと――――――。

『――――――猛羅、総拳突き』

降り注がれる拳の弾幕が、周囲のアンゲロイを蹴散らし。蒼の機体――――――トールギスがジェニオンの前に降り立った。

その１４７　後編

『――――今のは、一体』

凍り付く戦場、突然起きた出来事に最初に反応したのは誰なのか、ポツリと溢したその言葉に反応出来る者は誰一人としていなかった。呆けるＺ―ＢＬＵＥを余所に黒いアンゲロイ達は仕掛けてくる。銃口を向けてくる奴等を迎え撃つ為に蒼いトールギスがスラスターに火を噴かし、宇宙を駆ける。

『ま、待っ――――』

我に返ったヒビキがトールギスを呼び止めようとする。が、彼の言葉が届くよりも早くトールギスは単騎でアンゲロイ達の群れに突貫。奴等の陣形に文字通り斬り込んで往く。

浴びせられる黒いアンゲロイ達からの集中砲火、威力、精度、その全てがこれまでのアンゲロイとは一線を画する弾幕の中を、しかし蒼いトールギスは潜り抜けていく。最小限の動きで、縫うように、だけど全く減速はせず、それどころか加速させて奴等との距離を瞬く間に詰めていく蒼いトールギスの動きに、Ｚ―ＢＬＵＥの誰もが驚愕した。

弾幕の中を潜り抜け、すれ違い様に放つ一閃。それは黒いアンゲロイの胴体を二つに切り裂き、トールギスが次の機体に斬りかかる頃にはその機体は爆散。宇宙の藻屑へと消えていく。

一機、また一機と撃墜させていく。黒いアンゲロイ達を相手に引くどころか圧していく、その光景は何処かあの蒼い魔神を彷彿とさせていた。

そんな状況の中、Ｚ―ＢＬＵＥよりも蒼いトールギスを脅威と判断したアンゲロイ達は、その物量で襲い掛かる。銃口を、敵意を、悪意の全てに晒されたトールギスは、徐々にその勢いを落としていく。

加勢しなければ、しかし未だに恐怖から抜け出し仕切れていないＺ―ＢＬＵＥはマトモに動くことも儘ならないでいる。唯一戦う気力のあったクロウ＝ブルーストがトールギスを追って戦闘に加わろうとしているが、気持ちに身体が付いていけず、戦線に参加できずにいる。

そうしている間にもトールギスはアンゲロイ達により追い詰められていく。――――

―更にそこへ向けられる怪獣、原理の力を持つ巨獣が彼の者に牙を剥く。
瞬間移動の如く移動するのは過程を省いた超神速。攻撃するのではなく既に攻撃をしたという結果だけを押し付ける理不尽な一撃、１００ｍを優に越える巨獣が、膝下にも満たない機体にその一撃を叩き込もうとした時―――。
『やめ……やめろぉぉぉっ!!』
ヒビキは自身の心に押し寄せてくる絶望を押し退け、一心不乱にトールギスに向けて飛び出した。同じく搭乗するスズネの安否など気にも止めず、考え無しに敵の群れに突っ込んでいく彼の咄嗟の行動を、誰もが止められずにいた。
先行するクロウを抜き去り突き進むヒビキ、制止を促すスズネの言葉を振り切っておきながら、しかしヒビキは何故こんな行動に出たのか自分でも分からなかった。ただ、己の心が叫んでいた。〝あの人を二度も死なせてはならない〟理屈も根拠もない直感に従いながらもヒビキはトールギスの下へ急ぎ―――トールギスへ迫る巨獣を体当たりで止めてみせた。
ヒビキが起こした行動、Ｚ―ＢＬＵＥが驚愕に面食らうと同時に巨獣の標的がジェニオンに変わる。圧倒的畏怖に睨まれ、身動きが取れなくなったヒビキに巨獣の爪が突き立てられ―――
『人越拳―――捻り貫手』

しかしそれよりも早く巨獣の頭部をトールギスの手が貫いた。そして――――。

『……え？』

その光景にヒビキは嘗ての光景を幻視する。同じだ、あの日彼によって助けられた時の光景、瞼を閉じれば今でも思い返せるあの時の情景、彼の戦う姿に憧れ、少しでも近付ければと見様見真似で練習したあの技。

『……まさか』

先日、親友から告げられた言葉。そんなバカなと、有り得ないと思っていた可能性が、ヒビキの胸中に膨らんでいく。

だが、同時に絶望もまたヒビキの胸中に溢れ出す。生まれてきた可能性という希望に比例し、有り得ないと否定する絶望も肥大化していく。――――心が苦しい。締め付け、壊れそうになる自分の心にヒビキは再び押し潰されそうになる。

『いやぁ、助かったよ。ありがとう、ヒビキ君』

自分にだけ聞かされる様に開かれた秘匿回線、そこから聞こえてくる言葉を耳にしたヒビキの時間は一瞬固まり。

『――――あ』

ふと、涙が溢れた。懐かしい声、聞き慣れたあの人の声、偽りの無い彼の言葉にヒビキの瞳から止めどなく涙が流れていく。同時にこれまで張り詰めていたヒビキの緊張

の糸も解れてしまい、流れ出した涙と共に意識を手放した。
『おっと、……気を失ったか。余程疲れてたんだな』
気を失い、機体の制御を失ったジェニオンを抱き抱える。通信越しから聞こえてくる彼の寝息、それによりヒビキの無事を確認した蒼いトールギスのパイロット――――蒼のカリスマことシュウジは安堵の溜め息を溢す。
弟分の無事に安心しながら、ジェニオンを抱えたままでアンゲロイ達の攻撃を避ける。巨獣を破壊した事により連中の隊列に乱れが生じた様で、彼等の包囲網から抜け出すには然程労力は掛からなかった。
軈て敵陣から抜け出したシュウジは、後から駆け付けてきたブラスタへとジェニオンを投げ渡す。
『クロウさん、ヒビキ君の事、宜しく頼みます』
『っ！　……まさか、本当にお前さんか？　聞いた話では死んだと耳にしたが？』
『すみません。その話はまた後程……さぁ、早く行ってください』
自分にだけしか聞かれないようにワザワザ秘匿回線で接触してきたシュウジ、彼の唐突な生存の話に死んだと聞かされてきたクロウは当然驚いた。
もっと詳しく話を聞きたかったが、状況がそれを許さない。迫り来るアンゲロイの群れへの殿をトールギスに任せることにしたクロウはブラスタを発進させ、ジェニオンを

抱えたままその場を後にする。
何も聞かず、自分の指示に了承してくれたクロウに感謝しながら、シュウジは構えを取って黒い軍勢と対峙する。クロウがＺ―ＢＬＵＥの補給艦に戻り、彼等がこの宙域から離脱するまで戦うのが自分の役割だ。
刀を抜き、今一度突貫しようとした時、それは起きた。
『これは、時空震動か？　しかもこれは……』
この宙域全体を揺るがす大規模な時空震動、それがここへ誘われる時と同種のモノだと察したシュウジは、背後にいるＺ―ＢＬＵＥを見る。
直後、Ｚ―ＢＬＵＥは時空の揺らぎに包まれてこの宇宙から姿を消した。その宇宙にシュウジとトールギスだけを残して……。

◇

「あれ？　もしかして俺……置いていかれた？」
　目の前から消えたＺ―ＢＬＵＥ、それが何者かによる干渉によってのモノだと確信しながら、シュウジは呟く。自分だけが残り、自分だけが対処する事になったこの状況を前に、シュウジは仮面越しに深い溜め息を溢した。
「マジかぁ～、まさかこのタイミングで置いてきぼりを食らう事になるとは……何だろこの切ない気持ち、高校の修学旅行で皆とはぐれた時以来なんですけど」
　確かあの時もこんな気持ちだったなぁ。そう愚痴りながらも仕掛けてくるアンゲロイ達の攻撃を回避するシュウジは、その言葉とは裏腹に内心では安堵していた。
「まぁ、奴に気付かれる前にヒビキ君に接触できたのは大きい、これでヒビキ君も俺の事で悩むことは無くなるだろう」
　この空間は異質だ。言葉で言い表す事は出来ないが、直感的にそう感じた。感覚的に言うのなら、アンチスパイラルとの戦いの舞台となった隔絶宇宙に似ていると言うべきだろうか。
　もしこの宇宙が隔絶宇宙と同様に隔離された場所であるならば〝奴〟に勘づかれる可能性は低い。仮に気付かれたとしても、今の奴の力ではここまで影響を及ぼす事は出

来ないと思う。
　奴の施す呪いは確かに強力だ。だが、その呪いを相手に与えるには、物理的に近い距離でないと施せないのではないかと自分は思う。胸くそ悪くなるが、思い返せばリモネシアで周りの人達を傷付けたのは自分に従わせようとしただけでなく、物理的に間合いを詰める事が目的だったのかもしれない。
　あの詐欺師の事だ。恐らくはヒビキ君には甘い言葉で囁いて信頼を勝ち取り、然り気無く自分に施した呪い、或いはそれに準じる術を施したのだろう。
　多分、奴が次にヒビキ君に何かしようとするならば確実にその間合いを詰めてくる事だろう。それがヒビキ君にとって最大の危機であり、奴にこれまでの借りの一部を返すチャンスでもある。
　そうするためには先ずはこの宇宙から出ていく事が最優先なのだけれど……。
「なんか、さっきより多くね？」
　眼前に増え続ける黒いアンゲロイと巨獣、瞬く間に数を増やし、遂にはその宙域を埋め尽くすほどとなった軍勢に、シュウジは苦笑いを浮かべた。
　早いところ脱出口を見付けなければ……画策を企てながら迫り来る敵の攻撃を掻い潜り続けるシュウジ。アンゲロイを、巨獣を、追い詰められながらも一機ずつ落としていくその姿に、心なしか連中の動きに乱れが広がり出していた。

それを見てシュウジは訝しげに思う。そういえば、なんでＺ―ＢＬＵＥはコイツらに彼処まで畏縮していたのかと。

確かにコイツらは脅威だ。その個体一つがこれまでの相手とは一線を画する強さだ。気を抜けば一撃で此方がお陀仏になる程度には連中の攻撃には殺意が乗っている。

だが、逆を言えばそれだけだ。如何に相手が強く、強大だとしても、それを相手にして尚強くなっていくのが彼等の最大の強みだ。その爆発力は身を以て体験している。

だが、今回は何故かそんな爆発力も見る影もなかった。まるで大人に叱られた子供の様に畏縮してしまったＺ―ＢＬＵＥ、一体何をそんなに怯える必要があるのか。

「って、やっぱコイツ等が何かしたとした思えないよな」

腕の部分を刃の形に変えて斬りかかってくるアンゲロイを避け、すれ違い様に胴体を斬り捨てる。自分の考えに齟齬が無いか今一度思考を巡らせようとした時。

『ほう、　存外足掻くではないか。下等生物の分際で』

『アッハハ、おもしろーい』

頭上から聞こえてくる声、怒りと悦びに満ちた二つの声に反応したシュウジは頭上を見上げ――――そして、言葉を失った。

アシュタンガの群れ、星すら呑み込む巨大な顔の艦、それは嘗てのアンチスパイラルが主戦力として有していた艦であり、自分達を追い詰めた超弩級の兵器。

何故ここにアレがある。動揺するシュウジだが、それ以上に驚愕したものがその群れの奥で佇んでいた。
黒い玉座。圧倒的存在感を放つそれはアシュタンガ達を従え、シュウジを、トールギスを見下ろしていた。
「なんだ……コレ？　つか、人が乗っているのか」
軽く混乱するシュウジ、しかし事態は待ってはくれない。呆けている僅かの間に此方に狙いを定めたアシュタンガが、此方を握り潰そうとその手を伸ばしてくる。
星すら鷲掴みにする巨大な手、回避も防御も間に合わない理不尽という名の一撃がトールギスを襲う。
「な……ロウッ!!」
逃げ場はなく、抗う事も許されない状況の中を、それでもシュウジは抵抗する事を選んだ。極限に集中力を高め機体と一体と化した一撃が、アシュタンガを両断させる。
「やっぱりか、この宇宙、アンスパさんとこの隔絶宇宙と同じ性質を持ってやがる」
通常の空間とは異なるトールギスの火力の上がり具合にシュウジは確信する。ここはアンチスパイラルが統括する隔絶宇宙と同じ、人の意志が反映される空間だと。
圧倒的サイズ差にも関わらずダメージを通せたのがその証拠だ。アシュタンガにダメージを与えられた事で一筋の光明を見出だしたシュウジは、黒い玉座へと向き直る。

恐らくはアレがここの管理者だ。黒い玉座から放たれる圧倒的な存在感を前に、コレからどうするべきか思案する。

『……醜い、己の運命に従わず、無様に抗うその姿、しかし成る程、下等生物らしい生き汚さというのは理解できた』

『そう？　私は見ていて面白いけど？　必死に抵抗しちゃってる様なんて可愛いと思わない？』

「……」

黒い玉座から聞こえてくる声、初老の男性と若い女性と思わせる彼等の言葉に、シュウジは言い表し難い嫌悪感を抱いた。

コイツ等はあのミケーネの神々とやらの連中と同じだ。自分が他人よりも力を得たことで誰よりも特別な存在だと、そう思い込んでいる。此方の言葉には一切耳を傾けず、ただ自分の口にする言葉が正しいと、何の疑いも抱かずに……あたかもそれが当たり前の事だと、コイツらはそう思っている。

瞬時に理解する。コイツ等は自分とは決して相容れない存在なのだと、他者に価値は無いと断ずるコイツ等はあの喜び野郎と根っ子を同じくする、全ての生命に対する脅威なのだと。

剣を構え、スラスターを噴かせる。勢いを加速させ、アシュタンガの群れを突っ切っ

て行きながら黒い玉座へと迫る。
　間合いに入った。加速させた勢いをそのまま乗せて降り下ろす一撃、ここで終わらせるという意気込みを込めた一撃は――――。
『不敬であるぞ』
　しかし、男の呟いたその一言と共に弾き飛ばされてしまう。
　吹き飛ばされ、そこへアンゲロイ達の追撃がトールギスへと襲い掛かる。体勢を整えて反撃に移るも、コレまでとは桁外れの弾幕の威力に瞬く間に追い詰められていく。
（コイツ等、急に活気づいて来やがった！　これもあの黒い玉座の影響か!?）
　アンゲロイ達の猛攻、更にはアシュタンガ級までもがトールギスを追い詰めようと迫り来る。多勢に無勢、窮地への更なる窮地に流石に笑えなくなってきている。
『しかし、あの男には驚かせられる。まさか理の外から自分の因子を育てるとは……流石は深淵の探求者。その知識欲は底が知れぬな』
『だねぇ、まぁ、それで死んじゃう様なら意味無いと思うけどね』
『然り、奴も所詮は下等生物の域から出られぬ未熟者。我等と覇を競おうなどと思い上がりも甚だしい』
「コイツ等、博士の事を言っているのか？」
『故に、その後継者たる貴様はその存在自体が罪だと知れい！』

「っ！」
黒い玉座から溢れ出す力の波動。それが危険なモノだと察知したシュウジはトールギスと共にその場から離れようとする。
溢れ出てくる黒い霧、それはアシュタンガを、奴等の仲間である黒いアンゲロイ達を呑み込みながら加速していき、軈てその宙域ごと覆い、逃げ場を封じる様に魔法陣を展開させていく。
『汝を裁く者、それは天より使われし者！』
『我等は断罪する者、人間では、お前達ではどうやっても辿り着けない場所！』
『そこに我等はいる。さぁ、悔い改めるがいい、深淵の申し子よ！』
具現化されるのは黒い太陽。時空を、次元を震わせる天からの落涙。それらは全て罪ある者へ向けられる断罪の一雫。
圧縮され、濃縮された黒の塊、それがトールギスの側へ落ちた時、周囲の星々を砕き、自らの戦力を巻き込みながら、光が爆ぜた。

◇

『……何という不遜か』
『今ので死んじゃえば良かったのにい、もう、生意気だなぁ』
音が消え、静寂だけとなったその宙域で呆れと怒りに満ちた声が響き渡る。彼等が一点に見つめるその視線の先には、先程の爆発を受けて尚、存在しているトールギスの姿があった。
――――――が。
「あ、あ……グッ」
スラスターは半壊、左腕はその肩口から消し飛び、右足は膝部分から消失。数少ない武装であったライフルも消され、唯一彼等に通用するであろう刀の刀身も、中腹部分からへし折れていた。
一撃、たった一撃を受けただけでこれだけのダメージ。もしもシンカの力で防いでいなければ、今ので終わっていた。
火花が散るコックピット、奴等の攻撃の余波でモニターも死にかけている。文字通り

ただそこに在るだけの状態だった。
満身創痍、黒い玉座から放たれた黒い雫の一撃は、ただ一度放っただけで魔人と呼ばれた蒼のカリスマを追い詰める。
――――仮面に、罅が入る。絶望を越えた圧倒的不利な状況の中、しかしそれでもシュウジは仮面の奥で奴等を睨み付け、その敵意を微塵も揺るがせない。
『つくづく傲慢だな。これだけ追い詰められながらもまだ抗うつもりでいる。不遜、不敬！　あぁ、何故お前達下等生物（人間）はこうも私を苛立たせる！』
「……さっきから口を開けば下等生物下等生物と、良くもまぁそれだけ他人を下に見れるもんだ。なに？　お宅らそんなに凄い奴なの？」
『アハハハ、その事に気付けていない時点で自分が劣等種だって何よりの証拠なのに、やっぱり人間は面白いなー。中途半端に知性があるとここまで愚かになれるなんてねー』
「そうかい？　こっちとしては勝手に怒ったり笑ったりするアンタ達の方が面白いけどね。まるで一昔前のコントを見てるみたいだ」
『ふん、それだけ生意気な口を叩けるならもう少し甚振っても良いだろう。――――最早我々が手を下す必要もあるまい。貴様は重力の底で己の無力を嘆きながら死ぬがいい。それがせめてもの貴様の贖罪だ』

シュウジの精一杯の挑発に触発されたのか、男の声に更なる怒りが募り始める。最後に意味深な台詞を口にすると、トールギスの真下に突然黒い海が現れる。
「っ！　こ、コイツは……！」
思い返すのは時獄戦役の終盤、隔絶宇宙でアンチスパイラルが用意した、螺旋力を吸収する対螺旋族の最大にして最悪の罠。
こんなものまで用意しているのか！　呑み込まれつつあるトールギス。抵抗しようと全力でスラスターを噴かせるが、万全から程遠い今の状態では重力の海から逃れる事はなく、シュウジはトールギスごと黒い海の中へ呑み込まれていった。
『さらばだ。深淵の叡智の後継者よ。貴様の物語はここで潰える』

◇

――――――暗い。光もなく、音もなく、完全な闇に包まれた世界でシュウジ＝シラカワは愚痴る。

「いやぁ参った参った。まさかここまで綺麗に追い詰められるなんてなぁ」

周囲の暗い光景とは裏腹に明るい口調でそう溢すシュウジ、それは達観によるものか、それとも単なる自棄か。

「ここへ来てまさかの超展開、謎のアンゲロイにアンスパの所の主力部隊にオマケに黒い玉座の謎の超パワー。いやぁ、ここまで不利な状況はこれまでを顧みても中々ないわー」

敵はこれまで以上の力を有していた。嘗ての最大の敵が有する戦力も抱え、その規模も全容も未だ未知数と来ている。

――――――直接戦って分かった。あれはサイデリアルよりももっと謎で、もっとヤバく、そしてもっと厄介なモノだ。連中と比較すればあのアサキムだって可愛く見える。そんな奴等を相手にここまで戦えられたのは、偏にA（アメイジング）・トールギスと、トールギスを用意してくれたシュナイゼル達の尽力のお陰だ。

借り物の力でここまでこれた。自分にしてみれば大健闘も良いところ。トールギスをこんなにしてしまった事に対してはトレーズやシュナイゼルに申し訳ないが

……まぁ、見逃してくれるだろ。

自分は頑張った。精一杯やった。だからここで……ここで終わっても。

「――――良い訳、あるかぁっ!!」

吼えた。誰も聞こえない海の底で、重力が今も自分を押し潰そうとしている状況の中で、シュウジはここまでに至る全てに対して吼えた。

「ふざけんなよ、ふざけんなよ!?　何が下等生物だ。何が劣等種だ。自分以外の生命を虫ケラみたいに思っている奴が知った風に語るなよ！」

それは有り余るエネルギーだった。それは理不尽に対する抵抗だった。それは怒りで頭がおかしくなりそうな自分への必死の抑えだった。

どうしてこう、力を手にした者は皆あぁも傲慢でいられるのか。奴等という存在を知り、それでも理解出来ないシュウジはその苛立ちに益々怒りを募らせる。

……が、それは今度は敢えて呑み込む事にした。今の自分は手足がもがれた芋虫、抵抗する事も出来ず身悶える事しか出来ない。

ならばここで奴等の望む通りここで沈む事を選ぶか？　――――それこそお笑い草だ。この世界に来たばかりの自分なら絶望に沈むだろうが、悪足掻きをするだけの理由がある。

「俺は、まだヒビキ君に謝ってもいない。シオさんやジャール大隊の皆もまだ助け出し

ていない。それに――――何よりも」
思い浮かぶのはあの喜びクソ野郎。ヘラヘラと笑い、自分の大事なモノを踏みにじった奴だけは、この手で始末しないと気がすまない。
「俺は、俺達は、まだ終われない。そうだろう？　トールギス」
その瞳にはまだ敵意がある。操縦悍を握る手にはまだ力がある。――――そして。
〝――――なぁ、グランゾン〟
彼には、最強の相棒が今も側にいるのだから。

◇

『人間というモノは、どうしてあぁも愚かなのだろう』

『もう、ドクトリンてば考えすぎー。もう少し力を抜こうよ～』
『そういうお前はいつも楽観的だなテンプティ、もうじき来るべき刻が来るというのに……』
『そうだよ。もうすぐ全てが無に還る。だからこそ私は精一杯今を楽しむのよ。それが〝楽しみ〟のテンプティである私の役割』
『楽しむのも良いが緊張感を持てと言っている……が、まぁいい。どのみち我々のやるべき事は決まっている』
　既に彼等にはシュウジに対する興味は消え失せ、あるのは次に待つ自分達の使命のみ。それまでに準備を進めようと、その宙域から去ろうとした、その時。

〝――――――

その１４８

『――何だと？』

そう言葉を漏らしたのは怒りに満ちた初老の男性、少女からドクトリンと呼ばれる男の疑問に満ちた声だった。

眼前に見える魔神、機体の所々に破損箇所が見られるが、それを補って余りある敵意が感じられている。何故、あの機体が動いている。困惑よりも先に未だ存在し続ける魔人に怒りを覚えたドクトリンは、己が司る感情のままに周囲のアシュタンガに命令を下す。

『――消せ』

最早あの男に掛ける言葉も時間もない。機体の状態から察するにどうやらあの機体は万全では無い様子。壊れかけの魔神になど目を向けるべき価値も無い、そう断じるドクトリンだが――――。

両断され、爆散していくアシュタンガを前にその考えは覆される事になる。爆発するアシュタンガの奥から現れる日輪を背負う蒼い魔神、その手には禍々しくも強大な剣がその手に握り締められていた。

何故、抗う。ただ生きる為だけにここまで抗う魔神、その存在が、その有り様が、自分達に反抗するその姿勢が、自分達を否定するその在り方が何よりも許せず、度し難く、そして理解出来ない。

『ふざけるな……たかがシンカの道に至れた程度で、我等の前に立つか、愚か、実に愚か。何という愚鈍！　貴様は最早存在そのものが罪としれい！』

『……』

激怒、憤怒、憤慨、あらゆる怒りがドクトリンの内側から溢れ、それに呼応するかの様に黒い玉座の出力も上がっている。

『讃えよ！　我等が真徒達よ！　汝等の祈りで眼前の魔神に聖なる鉄鎚を下せ！』

〝オオオオオオ……!!〟

ドクトリンが両手を挙げて掲げ、訴える。するとこの宇宙のありとあらゆる場所から声が聞こえてくる。それは天の遣いである彼等から必要とされる事への歓喜であり、その御遣いである敵に対する憤りであり、その愚かな敵に対する嘆きと哀れみが込められていた。

〝サルース〟　そう一斉に口にする真徒達の大合唱は宇宙に響き渡り、その信仰とも呼べるエネルギーは黒い玉座へと一点に集束されていく。

『……やっぱ、コイツらもあの野郎と同類か』

魔神の中にて忌々しそうに呟くシュウジは自身の中である確信を得る。コイツらはあの喜び野郎とその性質を同じとしている輩だ。此方を見ているようで見ておらず、対等に接しているようでそうではない。自分以外の生命を自分以下と断じる、あのいけすかない笑みを浮かべる男――――アドヴェントと。

決まりだ。奴もコイツ等も自分が始末しないと気が済まない連中だと、シュウジは決意する。耳障りな〝サルース〟の声に苛立ちを覚えながらもシュウジは手にした剣を携え、黒い玉座に向けて突貫する。

『学習能力の無い猿が！』

トールギスの時と同様、突っ込む事で此方の攻撃を邪魔しようとする魔神を、ドクトリンは怒りと侮蔑に満ちた声で蔑む。黒い玉座と魔神の間にある距離は広く、更にそこへアンゲロイと巨獣が間に入り、グランゾンへと押し寄せていく。

一振り、二振り、腕を振り、剣で薙ぎ払うごとに無数のアンゲロイが宇宙の塵へと消えていく。が、それ以上の数と暴力がグランゾンへ押し寄せる。軈て巨獣が一体、また一体とグランゾンに掴み掛り、周囲のアンゲロイ達を一掃する頃には、魔神はその力を

以てしても身動き一つ取れない状態となっていた。
　あぁ、無様。何という無様、これがあの男の因子を受け継ぐ男かと、無知、無恥、なんという醜悪さだ。
『所詮はこの程度か、……さぁ、今度こそ消え失せろ！　醜く、そして愚かな下等生物よ！』
　蓄積された膨大なエネルギー、放たれるその一撃は再び時空を震わせ、その宙域を蹂躙する。魔神の足止めに使われた巨獣達はグランゾンもろとも消滅、彼等の宇宙に静寂が現れた。
　今度こそ、あの醜い魔神は葬られた。これでもう無駄なエネルギーを使わずに済む。周囲から再び聞こえてくる真徒達の喝采にドクトリンは漸く肩の力を抜き、溜め息を溢した。
『全く、サクリファイにも困ったモノだ。よもやあの様な存在までこのカオス・コスモスに呼び寄せようとは』
『まぁまぁ、始末したんだからそう目くじら立てないの。サクリファイだって、もしかしたら探す手間を省いてくれただけかもしれないじゃん』
『……まぁいい、そういう事にしておいてやろう。テンプティ、貴様はこの後どうするつもりだ？』

『言ったじゃん。私はこの宇宙が終わるその時まで全力で楽しむだけだって。それが〝楽しみのテンプティ〟である私の役割なんだから』

ニカッと見た目相応の笑みを浮かべる少女にドクトリンは再び息を吐く。〝怒り〟である自分に対し、〝楽しみ〟を司る彼女はこの宇宙に存在する全てが自らが楽しむ為の材料でしかない。

如何なる喜劇も悲劇も惨劇も、彼女にとってその全てが楽しむ為であり、それだけが彼女の価値あるものと認識する判断素材でしかない。それは悪意か？　と訊ねられても、彼女はそれを否定しないし肯定もしない。

何せ、彼女は〝楽しみ〟のテンプティ。それだけを是とし、それ以外に何の価値も見出だせない存在なのだから。

『じゃあ、最後の残り時間は自由に使わせて貰うね。ドクトリン』

『好きにするがいい』

もうじき全ての世界は消えてなくなる。その時が来るまで自分達で乗り越える準備を整えなくてはならない。何れは隔離し、封印している〝哀しみ〟と一万と二千年前に追放した同胞をもう一度迎え入れる必要もある。

ドクトリンがテンプティに自由時間を与えるのはそのための最後の遊びであり、また喜びを司る彼を探索させるための手段でもあった。訪れる真の終末、それを乗り越える

には揃えるべき駒が幾つも必要になってくる。
『だが、努々（ゆめゆめ）忘れるな。我等の使命は未だ終えてはいない。くれぐれも調子に――――――』

〝ワームスマッシャー〟

――――――刹那、無数の光の槍がドクトリンとテンプティの乗る黒い玉座に降り注がれ、周囲に展開していたアンゲロイ達を貫いていく。
突然の出来事に言葉を失う二人。それと同時に、今まで聞こえていた真徒達の〝サルース〟の声が聞こえなくなっている。

『な、にが――――』

起こっている？　そう口にするよりも早くドクトリンは頭上に佇むその存在に気が付く。馬鹿なと、目に見えて動揺し、驚愕するドクトリンの目に映るのは……。

『成る程、奴と貴殿方の他にもまだ似たような輩がいるのですね。これは良い事を聞かせて頂きました。そのお返しと言っては何ですが――――』

〝あなた方には私達の力を思い知って頂くとしましょう〟

闇に消えた筈の魔神が、燦々と輝きを放ちながらそこにいた。

『――――貴様、何をした』

機体を通しての問い掛け、その言葉の中に並々ならぬ怒りが黒い玉座を通して感じられる。自分達を欺いた事、此方の情報を一方的に盗み聞きした事、そして――――――消した筈の存在が今、現在進行形で自分達を見下ろしている事、その全てがドクトリンにとって許されざるモノだった。

超常たる存在であるドクトリンの怒り、それを受けて尚、シュウジは鼻で嗤った。

『態々此方の手を明かす必要ないのですが……まぁ、いいでしょう。そこまで知りたいのならタネを明しましょう。――――遍在、と言えば分かりますか？』

『っ！』

遍在。その言葉を聞いて全て理解したドクトリンはその顔を憤怒に染め、奥歯をギシ

リと軋む程に噛み締める。
〝遍在〟とは遍く存在する事を意味しており、そこに法則性もなく、ありとあらゆる所に存在するという事。
つまり、今自分達が葬ったのは本当に存在した魔神であったが、同時に奴が生み出した偽物でもあった。
『尤も、その出来栄えはとても遍在と呼べる代物ではないのだけどね。どうも自分にはこの手の搦め手は苦手の様だ。博士が生み出す遍在は自身と遜色が全く無いと聞くし……やれやれ、博士に近付くにはまだ色々と不足しているようだ。――――――で？』
『――――――』
『どんな気分だ？　下等生物と蔑み、見下していた相手に出し抜かれる気分は？』
罅の入った仮面の奥でニヤリと嗤う魔人（シュウジ）、同時にドクトリンからブチリと何かが千切れる音が聞こえた。
『貴様、貴様貴様貴様貴様貴様貴様貴様貴様貴様――――――キッサマァァァァァッ!!!』
『コイツ、生意気過ぎ!』
黒い玉座から溢れる怒り、隣のドクトリンに当てられたのか、テンプティと呼ばれる少女もその表情に笑みはなく、眼前に佇む魔神に明確な苛立ちと殺意を募らせる。

周囲に現れる無数のアンゲロイとアンチスパイラルの主力兵器達、中にはあの巨獣だけでなく、赤と青の二色に別れたキカ?ダー染みた巨人という見慣れない機体も現れている。

ここへ来て更なる未知の機体の出現、上下左右、縦横無尽に展開される敵の群れ、その真只中に居るグランゾン。窮地に次ぐ窮地、圧倒的戦力差を前にしかしシュウジはその口元に笑みを浮かべる。

『――――死ね』

ドクトリンの合図と共に放たれる光、星を、空間ごと薙ぎ払いながら迫り来る光の波。避けられる筈なのに、それでも動きを見せないグランゾン。

熱が星を溶かし、光が空間を抉る。迫り来る超級のエネルギーを前にシュウジは操縦桿から手を離し、自身の前にある機器を撫でた。

『――――今まで、放っておいて悪かった、グランゾン。碌に整備も修理もしてやれなくて。でも、今日からまた一緒に戦える。暴れてやれる。相変わらず情けない主人で申し訳ないけど……また、面倒見てくれるか?』

それは、これからまた一緒に戦える相棒への感謝と謝罪だった。今まで放っていた事への謝罪と、そして待っててくれた事に対する感謝、それらを受け入れたグランゾンは主に応える様にその双眼に輝きを放つ。

『んで、お前もやられっぱなしというのは性に合わないよな。――トールギス』

ワームホールから現れるのは、これ迄共に戦ってきたもう一つの愛機（トールギス）、腕は抉れ、片足を失い、マトモに戦える状態ではない。しかしそれなのに、その機体の眼には未だに光が灯っていた。

――機械に魂は宿るのか？　と問われれば、大多数の人間がそれは無いと応えるだろう。機械は所詮機械でしかなく、作られた者に逆らわず、口答えも出来ず、朽ち果てるまで使われるか、途中で捨てられる物でしかない。機械側にその拒否権は無く、生み出された者に従うしかない。

だが、シュウジはそうは思わない。機械にだって意志はあると信じて揺るがない。彼にはそう思えるだけの根拠があった。

グランゾンは今まで何度も自分に応えてくれた。トールギスも幾つもの窮地を自分と共に乗り越えてくれた。

グランゾンにはシュウ博士が、トールギスにはトレーズ（親）とシュナイゼル（友達）の想いがそれぞれ込められている。様々な人達から贈られたこの機体、それが何の中身の無い空っぽなモノだと一体誰が言い切れる。

いや、言わせない。言わせて堪るか。グランゾンもトールギスも、そして自分もまだ諦めてはいない。諦める道理も理由も無い。

『――――戦おう。他の誰でもない自分自身の願いの為に……だから』

〝俺に、力を貸してくれ〟

獣の血
水の交わり
風の行き先
火の文明
集めるのは意志、束ねるのは命の力。
数多の可能性と道程を往き、今――――――扉は開かれる。

〝シラカワシステムの再起動と搭乗者の真化を確認。グランゾン、原初（ゼロ）に至ります〟

『真化融合!!』

光が溢れ、奔流が溢れ、可能性が溢れ出す。何もかもが白になるその場所であの人の笑みが浮かんだ。

《漸く、ここまで来ましたか。少々遅かった気もしますが……まぁ、良しとしておきましょう》

《ですが、ここからが本番です。貴方は何れ太極を越え、理の外側へ到達しなければなりません。嘗ての貴方の祖母がそうした様に……》

《そしてその時こそ白河修司、貴方に最後の選択が突き付けられる時です》

厳しく、突き放す様な言葉。しかしどこか悲しそうに笑う博士に俺は……。

『――――――』

そう、言葉にする事しか出来なかった。

◇

『……バカな』

絞り出すように言葉を吐き出したのは怒りを司る者、ドクトリン。しかしその表情に怒りはなく、別の感情に支配されていた。

この感情は、一体何であったのだろうか。背筋が寒い、体が震える。自分達が今いる場所に到達してから全く感じ得なかった謎の感覚に、ドクトリンは自らを抑えるだけで精一杯だった。

テンプティも同様なのか、顔を青褪めて震える事しか出来ない。

アレは、一体なんだ？

アシュタンガを、アンゲロイを、無数の真徒達を滅ぼしたあの魔神はなんだ？

変異した日輪の魔神、その手の指先は爪の様に鋭く、その双眼は獣の如く鋭い。機械的でありながらどこか野生の獣を思わせるその風体――――。

外装は鎧となり、より一層の一体感を醸し出している。細くなったのではない、圧縮され、より強固になったその姿はなんだ。

全体的に見れば小さくなっている筈なのに何故か膨れ上がって見える。それになにより……何故自分達はあの魔神に恐れを抱いているのか。

『恐れ？　恐れだと!?　バカな、至高に至った我等に怖れるものなど……』

『――――あぁ』

『っ!?』

『これが、グランゾンか。これがトールギスか。――――漸く、漸くお前達の事、解った様な気がするよ』

　それは正しく魔の神。天意に反逆し、天を滅ぼす破界の魔神。怒り、哀しみ、楽しみ、喜び、それしか知らない者達に〝恐怖〟を与える太極。

原初の魔神（ゼロ・グランゾン）

　混沌とした宇宙に新たな魔神が産声を上げた。

その１４９

混沌とした宇宙、多元世界とは異なり美しくも儚いその空間に一柱の神が産声を上げる。身悶え、捩り、全身で誕生の喜びを顕にしているその様子は正しく生まれたての赤子のソレである。

だが、対照的にその宇宙は悲鳴を上げていた。こんなものを生み出すな、何故こんな化け物を呼び覚ました。この宇宙の主たる彼等に対し、まるで責め立てる様にその宇宙（カオス・コスモス）は軋みの悲鳴を上げる。

その事に反応をしたドクトリン、怒りを司り、同時にこれまでの自分達の行動を決めていた彼は反射的に目の前の魔神を屠る様、周囲のアンゲロイとアシュダンガに命令を下す。

『――――消せ！』

震える声で命令を下す。真徒達にとって天意そのものである御遣（ドクトリン）いの命は至上の喜びにして絶対、故に真徒達はその命令に忠実に従うべき筈なのに……誰も動けなかった。

心が叫んでいる。アレと敵対してはならない、相対してはいけないと。自ら選ばれた存在であると自負する彼等だが、しかしその胸中は一つの感情に支配されていた。

〝恐怖〟それは生命の本能、自分の身を守る為に必要な自己防衛。自らの生命を守る為に、真徒達は絶対とされる筈の御遣いの命令を破る事を無意識に選んだ。

果たして、自らが絶対と信じて疑わない御遣いの言葉を無視した己の所業を理解する日は来るのか……いや、御遣い同様目の前の魔神に対しソレ処ではない彼等に、その事を期待するのは無理かもしれない。

そんな真徒達に変わり、感情も命も無い、機械的に動くアンゲロイと、アンチスパイラルの忘れ形見であるアシュタンガ、ハスタグライ、パダという超級規模の戦闘兵器が、率先して魔神へと押し寄せる。

８つの手足という異名を持つアシュタンガ、移動するだけで星々を砕き、伸びる手足は魔神の逃げ場を無くすように四方八方から攻めていく。

既にその宙域に魔神の逃げ場は無かった。アシュタンガが覆い、後詰めにハスタグライとパダ、そして止めにアンゲロイ達の総攻撃が、魔神ただ一体に降り注がれていく。

覆い被された魔神、微動だにせず、ただ攻撃を受け入れるその様子にドクトリンは思う。やはり、あの真化はまだ不完全な状態だったのではないか？　僅かな希望を胸に光に呑み込まれていく魔神を見て――――。

『――――不動、砂塵爆』

瞬間。内部から吹き飛び、周囲の機体が纏めて消えていく光景に、ドクトリンの表情は固まる。爆散し、欠片も残さず消滅するアシュタンガとその取り巻き達、星よりも巨大な反螺旋族の主力艦が、それに属するアンチスパイラルの主戦力達が一撃で粉砕されていく様は、彼等に恐怖を叩き付けるには充分過ぎる光景だった。

『悪いなアンスパさん、あんたの忘れ形見はここで全部消していくよ』

魔神から聞こえてくる声、その声に同調するかのように背にした日輪が輝きを放つ。甲高く、そしてどこか美しさを感じさせる金属音、生きているかのような発光にその場にいる全員が目を奪われる。

――――瞬間、真徒達が駆る機動兵器が消滅した。

『な……ニィっ!?』

今し方自分達を守りに着かせていた護衛の真徒、彼等は真徒達の中でも特別優秀とされ、その誉れに数少ないゼル・ビレニウムを与えた歴戦の勇士だ。

その彼等が音もなく消滅している。反撃も、抵抗らしい抵抗も出来ないまま、魔神の手によって消されてしまっている。……恐らくは、消された本人も消された事を認識出来ないままで。

拳を突き出してその場に佇んでいる魔神、グルリと首だけ此方を向き、その眼を光ら

せる。
『おい、どうした。何をそんなに怯えている。お前等は人類を超越した御遣い様なんだろ？　俺達人間はチンケな虫ケラにしか思っていないお前等が一体俺達のナニに怯えてるんだよ』
『っ！　おっ、ノレェェッ!!』
『ドクトリンッ!?』
『おのれおのれおのれおのれおのれおのれェッ!!　人間如きが、下等生物が！　我等の想いなど欠片も解せぬ下賤な輩がぁっ！』
〝我等を、見下ろすなァァァッ!!〟
怒り、ただ怒りしかなかった。自分を見下す姿勢が気に入らない。自分達を理解しない事が許せない、自分達の気持ちを察しない性根が腹が立つ。自分達を上回るその力が憎い。
全ての怒りを総動員してドクトリンの操る黒い玉座が力を溜める。圧縮し、収束させていく力の奔流、それに合わせて周囲から真徒達の信仰の叫びが響き渡る。
〝サルース〟
〝サルース〟
〝御遣い様に勝利あれ、御遣い様に祝福あれ〟

真徒達の想いを束ね、連ね、圧縮し、生み出されるのは、先程魔神を追い詰めた黒い太陽だった。宇宙を揺さぶり、次元を震わせる天からの落涙。
『原初の魔神よ。今度こそ、完全に消滅するがいい!!』
『お前が居座る場所なんて、この世界の何処にもありはしないんだよ!』
消えろ、消えてくれ、万感の想いを込めて放たれる黒い太陽は空間を焼き、星を溶かして魔神へ落ちていく。
その様子をただ眺めるだけだった魔神は――――。
『第三の目、開眼』
不意に、その背にある日輪を輝かせる。
魔神の額の部分、縦に裂き、そこから覗かせるのは破界の意志を持った第三の目。
『グランゾン、お前の光で過去を焼き、今を貫き、未来を照らせ』
光が集まり、圧縮され、窮まっていく。
『ゼロ・グラン――――ビーム』
放たれるは破界の光。過去、現在、未来と射線上に存在する全てを壊す極光は周囲の真徒達を、黒い太陽を空間ごと消滅させ――――
『ば、バカな。そんなバカな、こんな……バカなぁぁっ!!』
黒い玉座……プロディキウムの半分を焼失せしめた。

◇

グランゾン（魔神）の放った光、その射線上にあった総てが消えた。機体も、星も、空間も、存在しているとされる総てが消え去った。

残されたのは、グランゾンの放つ光の範囲から偶然外れた真徒達のみ。魔神の放つ破界の一撃は、その場にいる全員に細胞レベルで恐怖を叩き込み、遺伝子レベルで絶望を刷り込ませた。

『嘘だ。こんな事はあり得ない。あってはならない』

半壊した黒い玉座（プロディキウム）から聞こえてくるのは未だ現状を把握出来ていない怒りのドクトリン。彼の否定する言葉は懇願の様で、その姿に真徒達が崇拝する御遣いとしての面影

は微塵も無かった。

『何故だ。何故源理の力が働かない。ここは我々の宇宙だ。何人たりとも我等の法には抗えない筈……なのに』

源理(オリジン・ロー)の力。それ即ち事象制御の力、その力は過程と結果を逆転し、起こり得た事象を書き換える禁忌の力。

この力を使えば如何なる損傷も巻き戻り、攻撃されなかった事象に変わる。今回も同様、事象を操る源理の力を用いてプロディキウムを修復しようとするが……。

『何故、プロディキウムが復元されない！』

『違うよドクトリン、源理の力は働いている。私達の力は正常に働いているわ』

『何だと!?』

掠れた声でそう口にするテンプティにドクトリンは激昂し、次いで理解する。源理の力が働いていながら、それでも復元されないプロディキウム、そして未だ修復されない空間を見て、その理解は確信へと変わった。

『まさか、消したのか!?　我々を、この宇宙をその存在ごと!?』

声が震える、体が凍てつく、魂が消えそうになる。

源理の力、事象を制御する力が正しく働きながらも作用されない理由、それは至極単純、目の前の魔神が過去現在未来と在るモノ、ソレそのものを破壊したからだ。

重力の魔神は元々は破壊に特化した機体、それが真化へと至り、太極へ到達した事により、その力の質はより上位と呼べる段階へ移行した。

破壊から破界、文字通り世界を理ごと壊す事が可能となった破界の魔神、あまねく万物全てを原初（ゼロ）に還す。それがこのゼロ・グランゾンの本質である。

――――当然、魔人ことシュウジはその事に気付いてはいない。現段階でまだ力に慣れていない彼は、目にしたものにしかその力を振るえていない。もし彼の力が目にしたものではなく、認識したもの全てへと変わった時、魔神は正真正銘破界の神へと至るだろう。

『――――さて、終わりにしようか。いい加減この空間から出たいし』

そう言って魔神の前に黒い穴――――ワームホールを展開させる。出てきたのは一振りの刃。柄もなく、鍔もない無骨な一振りの刀。

その刀に銘は無く、在るのは敵対するモノを切り裂くという本来の役割を担う性能のみ。ただ一つ言えることは、その刀身は何処と無く、以前トールギスが愛用していたモノと似ている気がした。

手にした刀を上段に構え、プロディキウムに狙いを定める。最早避けられぬ自分達の末路に、ドクトリンは最期の毒を吐く。

『貴様、貴様こそが人類の……いや、全生命体全ての敵、根源的災厄に他ならない！

悪よ、大いなる暗黒よ、貴様の行く手に呪いあれ、貴様の行く末に災いあれ！　いつの日か、必ず貴様は報いを受け――――』

瞬間、プロディキウムは原初の魔神の一振りにより、その存在ごと両断された。

◇

――――――静寂、そこに残されたのはただ静寂のみだった。生きとし生ける命は無く、怒りも、楽しみもそこにはなかった。

『あぁ、なんという……なんという事、私はただ私達の事を知って欲しかっただけだというのに』

同胞が消滅した事を契機に楔から解き放たれた哀しみの乙女、永い時の中共に生きてきた盟友の突然の消滅に乙女は戦いのあった場所に辿り着くとそこで起きた惨劇にただ嘆き、哀しみ、涙を流す。

残されたのは怒りと楽しみだったモノの残滓、それを慈しむように抱き締め、取り込み、一つとなった乙女はある決意を己に刻む。

『――――許さない』

涙を流す乙女の瞳には全てを憎悪する怒りの炎が。

『グランゾン、原初の魔神。そして……シュウジ＝シラカワ！　お前という存在は絶対に許さない』

その口元には全てを楽しむ歪んだ笑みがそれぞれ宿っている。

怒りと楽しみ、そして哀しみとなった彼女の目の前に在るのは切り裂かれた空間、その先に映るのは蒼い星――――地球があった。

その１５０

「何ですって!?」
「蒼のカリスマ……シュウジ＝シラカワが生きてる?」
「確かなのか?」
　Ｚ－ＢＬＵＥの艦の一つ、プトレマイオスⅡのブリーフィングルーム。あの混沌とした宇宙から脱出し、それぞれ地球圏で合流を果たした彼等は、クロウ＝ブルーストと相良宗介の二人からもたらされた情報に、集まった各艦長達は皆驚愕し、大なり小なり動揺していた。
「ハッ、肯定でありますブライト艦長。以前自分は東南アジアにあるナムサクという街で奴と思われる人物と遭遇、接触しました。当時は記憶喪失と吹聴してましたが……」

「あの空間――――黒いアンゲロイとやりあっていた時に見掛けたアイツはそんな様子は微塵も無かったな。二、三話しただけだが別に記憶喪失って訳でも無さそうだし、誰かに操られているって感じもしなかったぜ」
　クロウと宗介、二人のそれぞれの証言に各艦長達は思案する。二人とも蒼のカリスマの生存していたという共通した証言ではあったが、記憶関係の所は幾つかチグハグしている部分がある。
「相良軍曹の証言が正しいのなら、クロウ＝ブルーストが出会った蒼のカリスマは記憶を失っていながら我々の手助けをしてくれた事になる」
「でも、それなら何故彼だけはあの場から逃げられなかった？　私達を欺く為のブラフ？」
「いえ、そもそも軍曹に言った記憶喪失という話すらブラフなのかもしれないわね」
「もしくは記憶喪失だったのは本当で、何かの拍子に記憶を取り戻し、その後我々に協力、クロウ達を逃がす為に殿を努めたのかも……」
「そもそも、記憶喪失だった人間が記憶を取り戻して日も浅いのにＭＳを乗り回せるのか？」
　出てくるのは疑惑と混乱、考えれば考えるほど分からなくなってくる蒼のカリスマの行動。どんなに議論を交わしても彼の男の目的と思考が何一つ理解出来ない。何故記

憶喪失と偽ったのか、本当に記憶を失ったのか、何故敵対した自分達を助ける真似をしたのか、それらの行動も自分達を騙す罠なのか。

蒼のカリスマ――――――シュウジ＝シラカワの行動に今一つ理解出来ていない各艦長らは遂に音を上げ、降参する様に肩を竦めたり、お手上げとばかり力なく両手を挙げる。

「――やはり、考えても今一つ分かりませんな」

「彼は破界事変の頃からその存在を明らかにしていましたが、その言動は今一つ計りかねない所がありましたからね」

深々と溜め息を溢す艦長達、彼等が悩んでいる姿を見て立場的に何も言えない宗介は、黙したまま隣の少女――C．C．へ目を向ける。

宗介に口止めを強いて、今も静観に徹している彼女は宗介の視線に気付いていながら、それでも尚平然と黙秘を続けている。

肝の据わった女だ。この状況で今も尚何も口にしない彼女の態度に宗介は素直に感心した。だが、いつまでもそれを見逃す訳にもいかない。分不相応な態度ではあるが、宗介はC．C．に情報の提言を求めようとした時。

「C．C．、君なら何か知っているんじゃないのか」

日輪の快男児、破嵐万丈と共にアムロ＝レイがブリーフィングへと入ってきた。タイ

ミング良く切り出してくれたアムロに内心で感謝をしながら宗介は姿勢を正す。
「アムロ、ヒビキの容態は？」
「少し混乱しているが問題はない。医務室で今は安静にしている。容態も快復に向かっているし、数日もすれば元気になるだろう」
これまで部隊の皆の様子を伺いに行っていたアムロ、彼から告げられるヒビキの現在の様子を聞いて、ブライトは一先ず問題の一つが片付いた事に安堵した。
ヒビキは戦力的にも人材的にも非常に重要な人間だ。彼の機体に備わっているスフィアの力はセツコやランド、クロウのスフィアとは異なっている。彼の力は今後のサイデリアル攻略に不可欠な要素になることは間違いない。
そんな彼がこれまで不安定な状態から脱出し、今は落ち着きを取り戻そうとしている。これ迄にない彼の大きな前進に、他の艦長たちも胸を撫で下ろしていた。
特に、一番ヒビキと付き合いの長い宗介は親友の無事に、己の立場も忘れて安堵する。が、此方を見てクスクスと笑うテレサ＝テスタロッサに気付き、慌てて姿勢を正す。
「フフフ、構いませんよ相良軍曹。友人の無事に安堵するのは人間として当然の事、気になさらないで下さい」
「ハッ、失礼しました！」
相変わらず堅苦しい宗介、そんなある種微笑ましいやり取りを眺めていたオットー艦

長は表情を引き締め、アムロに……いや、C．C．を問い質した。
「それで、C．C．……さん？　アンタは一体奴について何を知ってるんだ？」
「なんだ。もうその話か？　良い歳なのだからもう少し余裕を持ってもいいんじゃないか？」
「生憎、我々には貴方に付き合える程余裕も時間も持ち合わせてはいない。そして、それは地球にも同じことが言える」
　現在、蒼の地球はサイデリアルの侵攻により、その全土の七割以上が奴等の支配下に置かれている。重要拠点も幾つか占拠され、他にもアマルガムを始めとした裏世界の秘密結社達もサイデリアルへ付いている。
　既に背水へと立たされている蒼の地球、その状況下で魔女の言葉に付き合える程、彼等には余裕が無かった。
「C．C．、頼む。君の知る全てを話してくれないか。君の情報の有無で俺達は彼に対して態度を決めなくちゃいけない」
「成る程、確かに奴の動きを客観的に見ればお前達が焦るのも仕方がない。アイツは自分の行動が及ぼす影響というものを顧みないからな」
「なら――――」
「だが、残念ながらまだ言えん。言うわけにはいかない」

アムロからの頼みもすげなく断るＣ．Ｃ．、だが彼女の言い方に何かを感じ取ったのか、アムロの目には落胆の色はない。
「……理由を訊いても？」
「理由は単純だ。そういう風に口止めをされたからな。他ならないアイツ自身に」
「……」
「納得出来ないのも分かる。信じて欲しい等と都合の良い事も言うつもりもない。だが、ソレスタルビーイング号の現在の行方と情報を教えてくれたのも奴である事も……忘れないでやってくれ」
そして確信する。奴は、蒼のカリスマは、シュウジ＝シラカワは自分達と完全に敵対していた訳ではないのだと……。
Ｃ．Ｃ．の話を耳にしても誰も信じてはくれないだろう。彼女の言葉に納得出来ないのも無理はない、しかし残された可能性にすがる事しか出来ないのもまた事実。
Ｚ―ＢＬＵＥは不安と動揺を呑み込みながら、シュウジがもたらしたとされる情報を下に――――次の目的地、ソレスタルビーイング号の奪還に向かうのだった。

◇

『チクショウ！　コイツら、ドンドン湧いて出てきやがる！』

蒼の地球、その領域の七割以上が皇国に支配された世界、Ｚ―ＢＬＵＥという最大の戦力を失っていた地球圏は日々サイデリアルの湧いて溢れてくる戦力に苦戦の毎日を強いられていた。

中東方面に展開された最前線、残された弾薬と仲間達で皇国の強攻を阻もうと躍起になっているパトリック＝マネキン。

ライフルで撃ち抜き、サーベルで切り裂いても続々と増えてきている敵の増援に対し、彼はすれ違い様に敵を撃墜しながら悪態を溢す。

状況は圧倒的に此方が不利、勝つことが出来ないと分かった以上、最早この前線を維持する意味はない。どうしようもない状況と自身の力不足に苛立ちを覚える。

そんな時、パトリックの所に友軍機のジンクスⅣが接近してくる。

『マネキン准尉』

『その声、スミルノフ中佐か！』

『この戦い、最早我々に勝機はない。撤退の準備を……』

　ロシアの荒熊の異名で知られる男、再世戦争以来息子のアンドレイ＝スミルノフと共に姿を消した彼が何故今この場に現れたのか。元来細かい事は気にしない性質であるパトリックは全くそんな事など気にせず、送られてきた通信に即座に返答した。
『そうしたい所だが、連中の勢いを殺さない事には動きようがねぇ。せめてもう少し此方に戦力があれば撤退の一つも出来たんだが……』
　ハリネズミの如く打ち出される弾幕、味方諸とも撃ち抜かれる事を承知で襲い掛かってくる無人機の群れと、此方の技術力を遥かに上回るサイデリアルの兵器群、戦況は既に此方の撤退を余儀無くさせていた。
　だが、撤退させようにも今の状況ではそれも叶わない。背中を連中に向けたら最期、瞬く間に此方の戦力は奴等の攻撃に晒され戦線は瓦解、今後皇国に抗う戦力は大きく削がれてしまう事だろう。
　それだけは避けねばならない事態であることはパトリックもよく理解している。しかしこうしている間にも味方機は一機、また一機と墜ちていく。泥沼に嵌まったこの現状、抜け出すのはほぼ不可能となっていた。
『そう、だからこそ私が来たのだ』
『スミルノフ中佐？』
『マネキン准尉、軍を抜け、生き恥を晒してきた私だがそれでも通さなくてはならない意

地がある。今日ここへ来たのはそれを為す為にある』
『お、おい。アンタ、一体何を……』
『この場は私が受け持った。マネキン准尉、君はすぐに部隊を纏め戦線から離脱するんだ』
『なっ！　それじゃあアンタは！』
『既に君の奥方……マネキン准将には話を通してある。君はまだ若い。私の息子、アンドレイと共に未来を繋いでくれ』
　制止するパトリックの声を振り切り、単独で敵陣に突っ込んでいくセルゲイ、止めなくてはと機体のスラスターに火を灯そうとするが、彼の行く手を遮る赤い壁が突如として出現する。
『こ、コイツは!?』
　機体の名はベヒモス。ラムダ・ドライバ搭載の巨大ＡＳが複数体彼の眼前に現れる。
『コイツら、確かアマルガムとかいう秘密結社の奴か！』
『ハッハー！　見付けたぞ不死身のコーラサワー！　いや、今は幸せのコーラサワーだったか？』
『っ！』
　上空から聞こえてきた声、その声に悪意と敵意を感じ取ったパトリックは鍛えられた

己の直感に従い、いない筈の頭上に向けてビームサーベルを振り抜く。
瞬間、火花が散り、機体に重みが掛かる。機体を通して伝わってくる衝撃に驚きながら見上げると、光学迷彩が解け、その姿を現す赤いＡＳの姿があった。
『ほう？　まさか今の奇襲を読むとはな。流石は歴戦の猛者、その実力は折り紙付きか』
『テメェ、何処のドイツだ！』
『ハハハのハハ！　おまけに乗りも良いと来ている。……そうさな、俺は人呼んで〝モミアゲのゲイツ様〟とでも名乗っておこうか！』
『この野郎、ふざけてんじゃ――――』
突如として現れたアマルガムの増援、その事実にアマルガムと皇国が繋がっている事に気付くパトリックは機体の出力を上げ、ゲイツのＡＳ――――コダールｉを弾き飛ばそうとする。
が、既にこれ迄多くの戦場を潜り抜け、それなのに満足に整備をしてやれなかった弊害が形となって現れてしまう。
『っ!?』
推進力の要であり動力源であるＧＮドライブ、そのスラスターから小さな爆発が発生し機体の出力が大幅に低下する。この土壇場に置いての機体の不備、そして当然敵はそれを見逃す筈もなく。

『隙アリィッ！』
『ガっ!?』
　これ見よがしにラムダ・ドライバを発動、その力場から繰り出される圧力によりパトリックは機体ごと大地に叩き付けられる。
　これがラムダ・ドライバの性能か、身を以てその力を体験したパトリックはすぐに機体を起こそうと操縦桿を握り締めるが……。
『クソッ、こんなときに腕が……』
　ラムダ・ドライバの力は強力、機体を通してパイロットにまでダメージを通した事によりパトリックの右腕は折れ、パイロットスーツ越しでも分かるほどに腫れ上がっていた。
『パトリック＝マネキン、お前の不死身っぷりは聞いているぜ。幾度となく激戦を潜り抜けその度に撃墜されながらも奇跡的に生還を果たした男、けどなぁ、アンタは幸せになりすぎた。不死身ではなく幸福を選んだ事によりお前は自らの不死身性を放棄したって訳よ』
『ハッ、確かに今の俺は幸せさ。良い女に出会えてその女（ヒト）と結ばれたんだからよ。いつまでも裏世界で腐っているお前じゃどんなに望んでも手に入りはしねぇ』
『くー！　最期の最期までリア充自慢しよってからに！　……だが、そのリア充人

生もここまでだ。お前を殺し、不死身の名前はこのゲイツ様が頂く。既にあの魔人と二度もやり合ってるんだ。既にその資格は修得済みなんだよ』
『ハッ、モミアゲ頼みのお前にそんなもんあるかよ。真の不死身は譬え選択肢が無かろうと最期の最期まで足掻き続ける奴にだけ与えられる称号なんだよ！』
『ご教授サンクス、お命頂戴！』
単分子カッターを手に飛び掛かってくるコダールｉ、このまま串刺しにされて溜まるかとパトリックは足掻く。痛む右腕に鞭を打ち、操縦桿を握り締め、機体を動かそうと躍起になる。
自分はまだ死ねない。先行しているセルゲイを止めなければならないし、まだ皇国軍の連中から地球を取り戻していない。
それに――――。
（俺はまだ、カティとイチャイチャしたいんだ！）
愛する女の為に絶対に生きて帰る。そんなパトリックの想いに答えるかのように――――死んでいた筈の機体に光が宿る。
一瞬の出来事、しかしその一瞬に全てを賭けたパトリックは、ＧＮ搭載機の切り札であるトランザムシステムを作動させる。
赤く、燃えるように輝くジンクス。手にしたライフルを手に打ち出される一撃は今の

彼の機体が出せる最高の出力。その一撃を放つと同時に機体を動かして離脱しようとするが、今度こそ機体は力を無くし、動かなくなってしまう。
『く、クッフフフ。まさか最期の最期に反撃を喰らうとはなぁ。これが鼬の最期の屁をかまされた者の気持ちか……成る程、確かに腹が立つ』
　砂塵の向こうから姿を見せるのは装甲の一部が剥がされたコダールｉ、聞こえてくる通信の音声からパイロットの無事が伝わってくる。モミアゲのゲイツ、ふざけた奴だが確かに不死身を名乗るに相応しい男なのかもしれない。
『だが、今度こそ終わりだ。お前を殺し、不死身の名を手に入れ、行く行くは幸せの文字も奪う。ゲイツ様のウハウハハーレム人生はここから始まるのだぁ！』
　今度こそ打つ手がない。迫り来るコダールｉ、狂喜と妄想を垂れ流すゲイツにパトリックは悔しそうに口許を歪ませ――――〃。

『ワームスマッシャー』

――――光の槍がゲイツのコダールとパトリックのジンクスの間に降り注がれた。
『なぁっ!?』
『なぁんだとぉっ!?』
無数に降り注がれる光の槍、それは一ヶ所に留まらず、サイデリアル側の無人機やアマルガムのベヒモス達、その全てに突き立てられていく。
抵抗らしい抵抗もできないまま爆散していく戦力達、その非常識な光景に皇国、アマルガム、そして地球側、全ての人間が停止した。
『な、なんだぁ？　何が起こった!?』
余りの非常事態に素に戻るゲイツ、同時に折角の獲物を前に横槍を入れられた事に焦りと怒りが彼の思考を染め上げる。
『地球側の秘密兵器か!?　それともＺ―ＢＬＵＥが戻ってきたのか！　クソッタレめが、出てくるなら出てきやがれ！　この出鱈目な世界だ。今さら何が出てきたって驚きは――――』
言葉が詰まった。息が止まった。思考が止まった。心臓が止まった。
だって、だって、だってだってだってだってだってだってだってだってだって

だってだってだってだってだって……。

『残念ながら、貴方が不死身を名乗るには今一つ品性が足りません。出直してきなさい』

目の前に居ない筈の蒼の魔神（グランゾン）がいるんだもの　。

『前言撤回、驚きましたぁっ！』

混沌とする戦場の中でモミアゲ男の悲鳴が響き渡った。

その１５１

√月（・┼・）日

久し振りの日記、そして久し振りの相棒（グランゾン）の活躍により、今日の自分のテンションはやや高めである。

あの奇妙な宇宙空間から脱出した自分を待ち構えていたのは木星、地球から凡そ７～１０億ｋｍ程離れた場所に自分はいた。

何で木星？　と疑問に思っていたこの時、銀色の奇妙な物体と遭遇。明らかに地球外の存在とされる物体の登場に、自分はこの時思わず変な声を上げた。

もしかしてコイツらも根源的災厄（バアル）の一種なのかと警戒したが、向こうからは特にこれと言った接触はなく、そこらにあるデブリの様にその場に漂うだけだった。……試しに近付こうとしたら避けられたし、敵意や此方に害する意志は無さそうだったので取り合えず銀色の奇妙物体を放置した自分は、元の姿に戻ったグランゾンと共にその場を離脱、地球に向けて一直線に飛ばした。

で、地球改め蒼の地球に向けてグランゾンを飛ばしたのだけれど……いやぁ、速くなったねグランゾン。試運転のつもりで木星から全力で飛ばして来たんだけど、地球圏に到達するまで１０分も掛からなかったんだけど。

確か、光で観測した時の木星って認識するまでに要する時間が３０分から５０分程掛かるって聞いたけど……え？　なに？　グランゾン、光を追い越しちゃった？　そりゃ確かにグランゾンは重力を操って重力干渉による速度減少を取っ払う事も出来るけど……え？　マジで？

――――いや、止めておこう。あの戦いの直後で少し疲れたし、多分自分の勘違いだ。そう、きっと時差ボケ的なモノがあってグランゾンがいつもより速く感じたんだ。トールギスも取り込んだ事で出力も上がったみたいだけどきっと気の所為だな、うん。この話は一度置いておこう、幸いにも加減すれば普通の移動速度で動けるし。通常の移動や戦闘に於いては何の支障もない。

――――そうだと無理矢理にでも納得しないと、本気で動けばそれだけで地球に大ダメージを与えかねない事になっちゃう。

と、ともあれトールギスという今までの相棒を取り込んだ事によりグランゾンは完全復活、破損箇所も真化融合を果たした事で修復され、調子はバッチリ元通り。……

まぁ、確かにそれ以上になった感はあるけど。

そんな訳で想像以上に早く蒼の地球に辿り着いた自分はそのまま地上へ降下、途中大気圏外に展開されていた皇国の艦隊を適当に蹴散らしつつ落ちていく自分が次に耳にしたのは、皇国とアマルガムの連合に追い詰められたパトリックさんの魂の叫びだった。

どうやら機体の調子が悪いらしく、満足に身動きの取れないパトリックさん、幸いにも彼の通信を耳にした自分は通り過ぎがてら武力介入、皇国軍の無人機とアマルガムの戦力を迎撃し、これを撃破した。

ただ、肩慣らしのつもりで何割か手を抜いた攻撃をしてしまったが為、アマルガムの隊長格らしい男は逃がしてしまった。アマルガムの赤いＡＳ……確かコダールだったか？　モミアゲがどうとかやっぱり俺も不死身だとか喚きながら逃げていく様は何だかシュールだった。

その後も単機で突貫し、死に場所を求めていたらしいセルゲイ＝スミルノフさんも無事に回収、機体は随分無理をさせてしまった様でボロボロだったけど、身体に傷らしい傷はなかった。

厄介なのは寧ろパトリックさん。やはり彼の機体も以前から相当ガタが来ていたのか、機体の方はスクラップと化している。よくこの状態で戦ってこれたものだと、今更

ながら彼の技量の高さに驚きを隠せない。

だけど、そんなパトリックさんも遂に負傷してしまった。どうやら先のコダールが奇襲を仕掛けてきた際に負った傷らしいのだ。負傷した箇所は右腕、赤黒く腫れ上がった腕は見ているだけで痛々しく、速やかに治療を受けることを勧めた。

けれどパトリックさんは備え付けの痛み止めを打つだけに止まり、皇国軍の攻撃で住居を失い、難民となった地元住民達の避難誘導をしなければと止まろうとしなかった。任務に忠実でどんなに負傷しても市民を守ろうとするパトリックさんは、正に軍人の鏡と言えるだろう。というか、この人以上に出来た人間なんて俺はまだ見たことがない。トレーズさんとはまた別方向で尊敬できる人物だ。

だが、だからといって重傷者を放っておく訳にもいかない。少々強引だが難民の人達はセルゲイさんとその息子のアンドレイ君に任せ、自分はパトリックさんの応急処置を行った。

テロリストである蒼のカリスマの自分が軍人を治療するのは如何なものかと思うが、今はそんな事を言っている場合じゃない。痛み止めを打った箇所を刺激しないよう処置し、添え木で腕をガッチリ固定しておいた。

当分はこれで持つだろうし、レジスタンスの拠点にいけば薬もある。そこでちゃんとした治療を受けられれば腕の方も良くなるだろう。それまで自分はパトリックさんに

絶対安静を言い渡し、荒熊親子に後を任せる事にした。
自分はこの後、皇国軍の拠点を叩きに行こうと思う。連中を潰し、そこをレジスタンスの人達が有効活用すれば、難民の人達の新たな受け入れ先にもなるし、そこに貯まった物資を使えば、パトリックさんの戦線復帰の後押しにもなる。
パトリックさんは今後の戦いでも必ず力になってくれる人だ。セルゲイさんやアンドレイ君共々Ｚ―ＢＬＵＥの一員になればそれこそ鬼に金棒。きっと皇国軍の幹部連中とだって渡り合える筈だ。
そんな訳でこれから皇国軍の拠点に攻め入るのだが……正直、ちょっと不安です。
いやだって、さっきからグランゾンの機体のあちこちからスゲェ鼓動？　みたいな駆動音が聞こえてくるんだよ。どうやら自分の相棒はまだまだ暴れ足りないらしい。
大丈夫かなコレ、拠点を叩きに行くとは言ったけど攻略という意味だからね？　物理的に潰す意味合いじゃないからね？
真化融合を果たした事でグランゾンとはある程度の意志疎通みたいな事は出来るようになったけど、何かジャジャ馬を扱っている気分だ。
まぁ、悪いことではないから別に良いけどね。後は自分の匙加減次第だ。――――
今日は色々あって流石に疲れた。拠点を制圧したらさっさと寝よ。

あ、因みにパトリックさんに自分が生きていた事についてどう思ってるのか訊ねてみたら「お前がそう簡単に死ぬわけないだろ」と一蹴されてしまった。
……生きていたと信じていてくれた事に喜べばいいのか、死ぬはずがないと決め付けられた事に悲しめばいいのか、イマイチ判断しにくいです。

√月（・ε・）日
先日、予定通り皇国の拠点を叩く事に成功した自分は、取りあえず落ち着いて今後の予定を立てる為に、久し振りに海の底で待機中。
さて、これまでの事を簡潔に言えばただ一つ。このままでは宇宙がヤバイという事だ。お狐博士――――トライア博士の言うことが正しいのなら、自分達のいる宇宙を始めとした全ての並行世界を巻き込んでの大崩壊、終末と呼ばれる時がもうすぐそこまで迫ってきているという。
何とも途方もない話だが、残念ながら事実である。トライア博士も、これがただの昔の人達の戯れ言だったらどれだけ良かったかって嘆いてたっけ。
で、その宇宙の大崩壊をどう乗り越えようかというのが今後の自分達の目的で指針なのだが……正直分からない。

いや、対抗策と言うのなら分かるんだ。何せ宇宙の大崩壊には根源的災厄――――宇宙怪獣やインベーダーの様なバアルがその大崩壊を加速させている。だから、それらを叩く事で僅かながら大崩壊の進行を緩める事が出来るのではないのか、というのが自分の見解だ。

尤も、緩めるだけで解決には程遠いから対症療法でしかないんだけどね。確りとした対策を立てるには、まだ情報が足りていない。

ただ、個人的な解釈を述べるのなら、この大崩壊を何とかするにはやはり、スフィアを持つヒビキ君達の力が必要不可欠になってくるのではないかと思っている。スフィアは次元力、即ち源理の力を引き出すトリガーの様なもの、無尽蔵のエネルギー抽出は理を操るための副作用の産物でしかない。

その源理の力を引き出すに当たって必要なのが……恐らく、感情だ。傷だらけの獅子、悲しみの乙女、揺れる天秤、偽りの黒羊、そしていがみ合う双子。以前にも考えていたが、やはりそう考えた方が一番シックリ来るのではないかと自分は思う。

付け加えて言えば、かのスフィアにはそれぞれ相性があると自分は考えている。〝偽りの黒羊〟の力をアサキムが持つ〝知りたがる山羊〟の力で破って見せたように、他のスフィアにも得手不得手といった相性があると考える。

確か、クロウさんとインサラウムの王子のスフィアも互いに力を高め合う性質だっ

たっけ。あの力で一時は次元獣だったエスターちゃんを、源理の力で戻したという実例が存在している。

ここまで繋がりがある以上、もしかしたらスフィアは元々は一つだったのではないかという仮説も出てくる。スフィアの力を出すには持ち主の感情が必要になり、感情とは様々な種類が存在している。

喜怒哀楽という四つの大きな感情から好奇心、虚栄心、嫉妬、欲望、勇気、といったその人の在り方の要素である人格、もしスフィアが元々は一つの存在なのだとしたら、恐らくスフィアの元となったモノは、そういう人間らしい自我を持った〝ナニか〟だったのではないだろうか？

それこそが、この宇宙大崩壊に関係する最大のキーワードではないかと自分は考えている。だってあのドクトリンとかテンプ何とかって二人組も怒りとか楽しみとか言ってたし、全くの無関係って訳じゃないだろ。

こうなってくるとあの喜びクソ野郎もこれ等に関わってくると考えた方がいいのか……クソ、こうなるなら一時の感情であの二人を消すんじゃなかった。まぁ、反省はしているけど後悔はしていないから別にいいんだけどね。

となると皇国――――サイデリアルの連中も、スフィアを集めるために地球にやって来たと見た方が良いかもしれないな。そして、奴等と例の感情四人組の関係も考えた方

が良いのかもしれない。
　スフィアがすべて集まれば元となったモノが復活する。それが目的なのか、それとも元となるモノの力が目的なのか、まだ考えの余地がある以上、下手な憶測はかえって危険かもしれない。
　あー、こんな時博士が助言してくれたらなぁ。折角グランゾンや他のシステムも元に戻ったと言うのに真化融合を果たした時から、未だに博士からのリアクションはない。こっちから幾ら呼び掛けても、うんともすんとも言わない。
　まぁ、返事がないという事は、余計な答えで自分を混乱させたくないっていう博士なりの配慮なのかもしれない。事実自分はまだ分かっていない所が多いし、スフィア関連にしても推測と憶測の塊でしかない。
　博士は黙っている事が多いけど必要な時は必ず答えてくれる人だ。その時が来るまで自分は待っていようと思う。
　とは言え、このままただ待つのも忍びない。折角蒼の地球に戻ってきてグランゾンと一緒にいるんだ。コレからは裏方だけではなく、堂々と表だって活躍して行こうと思う。……Ｚ―ＢＬＵＥの皆さんが戻ってくる間ね。
　それまでに……そうだな。先ずはサイデリアル側から一つ、スフィアを頂くとしよう。具体的に言えば蠍の奴を。

キャルちゃんを始め、奴の手によって酷い目に遭った人達は多い。その人達の仇討ちって訳ではないけど、このままやられっぱなしというのは少し腹が立つ。ボン太くんの着ぐるみで相手した時も結局は此方の敗走だったし、そろそろ奴にはキツい一撃を見舞う必要がある。もしそれが成功したらＺ―ＢＬＵＥの皆も活気付くだろうし、地球の人達の士気だって上がる事だろう。

だが、奴を相手にするに当たって一つだけ厄介な問題がある。そう、ギルター＝ベローネだ。

奴は蠍野郎の部下の一人だと聞く。その悪辣さ、戦いにおける容赦のなさは敵味方問わず恐れられ、サイデリアルの畏怖の象徴とも呼べる男。

ここ最近は全く奴の噂を耳にしていないが、恐らくはＺ―ＢＬＵＥの様子を伺い機を待ち、絶好のチャンスが訪れるその時を餓えた野生の獣の如く待ち構えているのだろう。指揮官あるまじき剛胆さと歴戦の戦士の如き冷静さと観察眼を持つ、それが自分の抱くギルター＝ベローネという男だ。

奴の狡猾さは自分がよく知っている。ブロッケンは考えすぎだと言うが、自分はそうは思わない。――何せ、敵である自分達処か味方であるはずの皇国軍すら奴の動向を把握してはいないのだ。先日、敵拠点を制圧した際に何人かの皇国の兵士達に奴の居所について吐かせようとしたが、その全てがスカだったのだ。

知らないと本気でそう口にする皇国の兵士達に嘘を言っている様子はなかった。恐らくは事実なのだろう、皇国という巨大勢力の中でも幹部クラスの側近、それが敵はおろか味方にすら感知されないなんて、そんなの単独で動かない限り無理な話だ。

幹部の側近が部下一人連れていないのは有り得ない。つまり、奴は自分の部隊を持ちながら、敵味方から感知されず姿を消したという事に他ならない。

正直、この考えに至った時は思わず身震いした。部隊を運用する難しさは素人な自分でも多少は理解できる。こんな事をやってのけるのは自分の知る中でシュナイゼル位しか思い浮かばない。

ギルター＝ベローネ、恐らくは幹部の側近の中でもかなりの実力者だと自分は考えている。それこそ、下手をすればスフィアリアクターである蠍野郎以上の強敵になるかもしれない。

搦め手を使ってくる奴の恐ろしさは自分も思い知っている。もし奴がシュナイゼル以上の策士だとするのなら、グランゾンでも苦戦するかもしれない。

けれど上等、宇宙の大崩壊を前に奴と決着を付ける必要があるのならそうするべき。ギルター＝ベローネ、グランゾン復活の初戦の相手――――――相手にとって不足なし。

と、珍しく熱く決意する自分なのでした。

◇

――――――さて、そんな訳で件の蠍野郎を探すために取り合えず大気圏外へ飛び出し、翠と蒼の地球の中間地点に赴いた自分なんですけど……。

『ほう？　まさかあの翅無しがまだ生きていたとは、流石は魔神の担い手、生命力はゴキブリ並と言うわけか』

『だが、そんな貴様の悪運もここまでだ。真戦を控え、力を蓄えてきた我等の力、存分に味わってから死んで逝けい！』

現在、ミケーネの主神様（ハーデス）と翅翅五月蝿い男女（ミカゲ）に絶賛絡まれ中。そう言えば、コイツらにも以前（時獄戦役の頃）の借りがあったんだっけ。

今自分は地球に影響の及ばない宇宙空間にいるわけだし、少し位――――本気になってもいいかな？　いいよね？

その１５２

二つの星、蒼と翠の地球を繋ぐ宇宙空間。近すぎず、かといって離れすぎない二つの星は、互いの重力に影響を及ばない一定の距離でその存在を保ち続けていた。
サイデリアルという外宇宙からの侵略者が二つの地球を脅かしているとはとても思えない静かな場所。そんな二つの星の架け橋とも言える宙域で――――一つの光が爆ぜた。
『バカな、我々ミケーネ神が……たかが人間ごときに、敗れるだと!?』
『申し訳ありません。ハーデス様っ！』
無念の言葉を吐き、砂となって消えていくミケーネの神々。既に同胞の過半数が葬られた事に、彼等の首魁であるハーデスはその光景に言葉を失っていた。
『何故だ。何故こうも一方的に……貴様ぁっ！　奴の呪いを受けていた筈ではなかったのかぁ!?』
『一体いつの話をしてんだよ。あんなもの、死んだ時を切っ掛けにとっくに払拭してる

よ』
『バカな！　あの呪いは死ぬ程度で抜け出せる程簡単な代物ではない！　掛けられた者は魂まで隷属させられる最悪のもの、肉体が滅びようとも決して抜け出すことは不可能な筈だ！』
『ンな事知ってるよ。だからワザワザアンスパさんとガチンコ勝負して真化したんだよ。……ま、あの時の真化は不完全な状態だったし、だからこそＺ―ＢＬＵＥと本気で戦っても負ける事が出来たんだけどな』
『――――まさか、貴様！』
　サラリと時獄戦役最後の戦いでの真実を口にする魔人に、ハーデスは戦慄する。
『貴様、捨てたと言うのか！　我々と同じ高次元の領域に足を踏み入れながら、永遠を手にしながら、真戦に挑める資格を得ながら、呪いごと、真化を捨てたのか!?』
　真化とは太極へ至り、真戦に挑み、太陽の時代へ登り詰める高次元の生命体にのみ許された新たな命の可能性。事象を操り、因果すら歪める力を持つ高次元の生命体である彼等にとって、真化とは何物にも勝る存在の証明に他ならない。
　それを呪いから解放される為とはいえ、まるで空き缶を捨てるが如く簡単に手放したと宣う魔人にハーデスは今度こそ驚愕に目を剥いた。信じられないと、自ら永遠を放棄した魔人がハーデスには自分には理解できない化け物に映った。

『そんなに驚く事かよ。お前だって何度もやってる事だろうが。ガラタブラ、だっけ？あれだって一度死んだのにお前が復活させただろう？』

――――違う。力を使って甦るのと自分で捨てるのとでは、その意味合いは大きく変わってくる。自分で捨てるという事は己の存在否定を意味している。真化に至り、太極に近付けば近付くほどその意味合いは大きくなっていき、最悪消滅する。

この場合、消滅とは現世から消えるというだけではない。正真正銘――――消えるのだ。彼の世と此の世だけではなく輪廻からも消滅し、己と関わる全ての命の記憶から抹消され、最初からいないことになってしまう。それが真化の放棄という最悪の禁忌を犯してしまった者の末路だ。

では、そんな最大の禁忌に自ら突っ込んでいった目の前の男は、何故生きているのだろうか？

『いや、だから言ったじゃん。不完全だって。そりゃ本当に真化していた状態だったら死ぬに死ねない状態だったけど、中途半端な状態だったからこそ俺はあの喜びクソ野郎の呪いを撃ち破れたんだ』

あっけらかんと答えているが、事はそんな単純なモノではない。例えるなら幾重にも重なった絵具の色、その最下層にある元の色だけを綺麗に取り出す様に。或いはグチャグチャに混ざり合ったコーヒーとミルクを原子レベルで引き剥がすように――――

奴に掛けられた呪いはそういう〝不可能〟と呼ばれる代物だった筈。
真化という永遠を捨て、自由を選んだ。その事実がハーデスに消えないナニかを刻み込んだ。
『――――お前、何か勘違いをしてないか？』
『何だと？』
『真化ってのは一度手放したら二度と得られないモノか？　違うだろ。真化というのは可能性の先にある一つの到達点。捨てたり、手放したりするモノじゃない。一度そこに行けたんだ。だったら――――何度も挑み、至ってみせるのが人の意地ってもんだろ？』
『――――なん、だと？』
絶句した。ハーデスも、後方で高みの見物をしていた筈のミカゲも、魔人が言い放った一言に口にする筈だった全ての言葉が消え失せた。
人は何度でも立ち上がる。立ち上がり、挑み、到達し、乗り越える。時であれ、空間であれ、真化であれ、如何なる障害も必ず乗り越えると魔人は断じる。
『その証拠として、先ずはこの姿のままお前らを圧倒してやるよ。分かりやすく言えば――――そう、ハンデだ』
『『っ!?』』

『お前等がバカにして、見下してきた人間の底力。その一端を……見せてやる』
瞬間、ハーデスは声にならない叫びを上げて突っ込みグランゾンに肉薄する。その剛腕から繰り出される剣の一撃を魔神は真っ向から受け止め――――。
『あまり、人間を無礼(なめ)るなよ』
ハーデスが持つ大剣ごと、その身体を切り裂いた。

◇

δ月（；・ω・）日
ミケーネ神とミカゲとの戦いから一夜明け、現在自分は翠の地球でサイデリアルの幹部、蠍野郎の行方を追う為に、なるべく姿を見せないよう海底を進行中。

ミケーネ神……ハーデスは自分が手傷を負わせると他の神々を連れて逃走、ミカゲも折角奪った神話型アクエリオンの力を振るうこともなくハーデスと同様に逃走、自分が気合いを入れて始めようとしたリベンジ戦の初戦は、呆気ない幕切れで終了となった。

本当ならグランゾンの力を充分に見せてやりたかったけど、そうなる前に逃げられたのならば仕方がない。……まぁ、あんなに殺る気に満ちていたのにまさか逃げるとは思わなかったから呆けてしまい、まんまと逃げられてしまったという話なんだけどね。

どのみち自分の詰めの甘さで逃がしてしまった事実は変わらない。次は逃がさないよう一気に勝負を決めるつもりで仕掛けようと思う。

とは言え、これでグランゾンを侮った連中の……特にミケーネは此方の見る目を変える筈だ。ミカゲの奴も今後は油断せずにいると思うし、今回出てこなかった宇宙魔王やズールといった暗黒勢力とも近い内出会う事になるだろう。その時に備えて、先ずは自分の目的を忠実に進めていこうと思う。

……そう言えば、前にも述べたけどミカゲって神話型アクエリオンをどうやって奪ったんだろ。っていうか、不動さんは一体何処で何をやっているのだろう？　まぁ、元々得体の知れない人だったし、悪い人ではないから多分大丈夫だろうけど。

もし不動さんが今後何もせず、ミカゲが再び自分の前に現れたら……どうしよう。壊しちゃっていいのだろうか？　あのアクエリオン、一応アポロ君達の愛機だし、出来れば壊したくはないなぁ。

――――――うん。ならいっその事放置しよう。大体アクエリオンには不動さんも深く関わっているみたいだし、後始末という意味でも彼に任せるのが一番いいだろう。少なくとも自分の様な人間がその場の判断で対応するよりはずっと良い筈。

これは責任放棄ではない。そう、所謂適材適所な話なのだ。決してあのオカマの相手をするのが面倒になった訳ではない。そう、決して。

δ月十日

翠の地球の海って、不思議な生物がいるのね。昨日に引き続き海底を進んでいると、大きな光る魚……魚？　いや、イカっぽい感じもするから光りイカ？　と遭遇した。

最初はグランゾンを見るなり敵意と警戒を顕にしていたけど、此方が敵意がないと分かると途端に大人しくなり、身体を光らせながら彼方へと消えていった。

確か、以前ブロッケンと翠の地球で旅をしていた時に聞いた話だと、この星の海には従来の海洋生物の他に、クジライカと呼ばれる巨大な生命体が潜んでいるという。

どこら辺にクジラ要素があるのか疑問に思うが、どうやらこの生物は他の生体と比べて謎な部分が多く、その巨体と時折見せる凶暴さから地元の人達は日々頭を悩ませているのだとか。

凶暴といっても誰彼構わず襲い掛かるのではなく、縄張りに入るモノ、敵意を持つ相手に過剰に反応するだけで、此方が刺激しない限り大人しい生き物なのだとか。実際自分が遭遇したときも、敵意と警戒こそ向けられはしたが、此方に敵意がないと分かると大人しくなった。恐らくは知性が高い生き物なのだろう。此方から刺激しない限りというのも、クジライカ達に余計なストレスを感じさせないようにする為の地元住民達の暗黙のルールなのかもしれない。

ともあれ、自分はクジライカ達に対しこれといった感情はない。精々近くを通る際、彼等に刺激を与えないよう注意する位だ。

そう言えば、以前自分が世話になった船団……ガルガンティアだったか？　あの時以来見掛ける事は無かったら忘れてしまったけど、無事だろうか？　皇国の主戦力は殆どが蒼の地球の方へ向かったけど、翠の地球に残された戦力もゼロではない。ギルターの様な切れ者が再びガルガンティアに目を着ける事もあるかもしれないし、近くを通ったら顔を出してみようと思う。

まぁ、自分の様な不審者が面と向かって彼等に会うのは、彼等にとっても不都合な事

になるかもしれないし、仮に様子を見るとしても、その時は彼等に気付かれない様、静かに接触する事になるだろう。

◇

――――何か、女海賊に絡まれた。向こうは自分の事知ってるみたいだけど……誰？

その１５３

ソレスタルビーイング号。サイデリアルの手により一時期は行方が分からなかった、ソレスタルビーイングが持つ最大規模の外宇宙航行母艦。クィーンと名乗る者と死んだと思われていた蒼のカリスマの情報で得た位置座標によって遂にその場所を特定。Ｚ―ＢＬＵＥの予期せぬ奇襲により配属されていた皇国軍は撤退、幹部であるストラウスもランドとの押し合いに負け敗走。仮に皇国側が手を抜いていたのだとしても、今回の戦いは間違いなくＺ―ＢＬＵＥの、地球側の勝利であることは揺るがない。

それに、嬉しいことは他にもあった。ストラウスとランド、互いにスフィアを有する両者はその力のぶつかり合いにより次元を歪め、源理の力―――オリジン・ローを引き出したのだ。

歪んだ次元から現れたのは複数のＥＶＡシリーズ。互いに相対する様に現れた四機のＥＶＡの出現に戦場は一瞬固まり、一種の膠着状態に陥る。

しかし、直ぐ様此方に加勢するＥＶＡシリーズ達、後の戦闘終了後にＺ―ＢＬＵＥに

合流を果たした彼等の中には、皆がよく知るＥＶＡのパイロット、碇シンジ達の姿があった。
　意外な再会に驚きながらも喜ぶ一同、シンジ達の少し変わった人間関係に少し戸惑うも、慣れ親しんだ戦友との再会に誰もが安堵した。
　そして再会した一同は簡潔な自己紹介をする為、恒例の格納庫で新メンバーに対する挨拶を始める。
　　――――そんな中。
「えっ!?　シュウジさん、生きてたんですか!?」
「あぁ、こっちもあれからいろいろあってな。おかげでヒビキも前の調子を取り戻しつつある。全く、一時期は凄まじく落ち込んでいたというのに現金な奴だ」
「人をお調子者みたいに言ってくれるなよ宗介、お前だって似たようなもんじゃないか」
「あ、あのヒビキさん。こんな事僕が言うのもおかしい気がしますけど……その、良かったですね」
「――――あぁ、ありがとう」
　あの日、時空振動が起きてシンジ達とは別々の世界に別れてからの話を交わす中、聞かされる内容にシンジは驚き、元に戻ったヒビキの様子に安堵する。
　そしてその話を聞いて何かしら思うところがあったのか、遠巻きに佇む式波アスカは

視線だけをシンジ達に向け、彼等の様子を伺っていた。
「なになに、どうしたのお姫ちん。そんなにワンコ君の事が気になるの？　それとも、例の魔人が生きていた事が気掛り？」
「……違うわよ」
「あー、そう言えばお姫ちん、魔人さんには一度もシミュレーターで勝った事もないんだっけ？　なら今度あったらリベンジする？　お姫ちんもあれから腕上げたし、もしかしたら一矢報えるかもよ？」
「うっさいわねコネメガネ、違うって言ってんでしょ！」
強い口調で眼鏡の少女――――マリを突き放したアスカは足早に格納庫を後にする。左目に当てられた眼帯、そして以前と違うどこか近寄りがたい雰囲気を纏う彼女に、周囲の人達は一歩距離を開けている。
恐らく、アスカ達も自分達と別れてから大変な目にあっていたのだろう。だったら今は下手に干渉せず自分から心を開いてくれるのを待とう。アスカ達の様子を見てそう決めた一行だが、それでもどこか淋しいものがあった。
しかし、それも時間と共に解消するだろう。アスカにとってＺ―ＢＬＵＥは以前の自分達の居場所だったし、気の合う女友達もいる。次に戦う時が来たらきっと調子を取り戻しているだろうし……何より、彼女は自分の感情で人を巻き込む程

子供ではない。
　足早に去っていくアスカを横目で見送る銀髪の少年、シンジ達と共に新しいＥＶＡである１３号に搭乗していた渚カヲル。その表情はどこか嬉しそうで、どこか悲しそうに笑みを浮かべていた。
「これも廻り合わせ、か。さて、彼は一体どこで何をしているんだろうね」
　誰かに気付かれる事なく呟くカヲルの視線は上――――何もない筈の格納庫の天井に向けられていた。

◇

δ月（≡・ｘ・≡）日
　昨日、海中を進んでいる途中でラケージと名乗る自称大海賊の人に絡まれたのだが、現在自分は彼女と共にクーゲル船団なる所で厄介になっている。何でもこのラケージ

は、以前ガルガンティアにケンカを売った所特殊なユンボロとやらに敗北し、漂流していた所をこの船団に助けられたのだとか。

で、助けられたのは良いけど、其所は凄まじく胡散臭い宗教団体の様な所で、かの船団の統括者らしいユンボロを神と見立てて、崇め奉っているらしいのだ。いい加減ここの陰気な船団から離れたいから、愛機を直して欲しいというのが彼女の言い分だった。

当然自分は断った。だって明らかに自分に益がないんだもの、幾ら自分でも流石にそこまで手を貸してやるほどお人好しではない。この船団だって確かに胡散臭い上に陰湿な所だけど、自分に直接害が及んだ事もない。幽霊船に捕まったと思って諦めろと突っぱねたのだが、それでも彼女は自分に頷いて欲しいのか引こうとしなかった。

まぁ、気持ちは分かる。ここまで鬱々とした雰囲気の場所は中々ない。活気溢れるガルガンティアとは違い、ここの船団には人間らしい情緒が全くないのだ。地元住民ではない余所者からすれば気が滅入るのだろう。

所謂、この船団には人間らしさがないのだ。徹底した効率主義というべきか。無駄というモノを一切排除した機械染みた生活をしているここの船団の住民には、感情らしいものが欠如している。この船団の統括者は余程機械的な人間らしい。

まるで幽霊の様な住民達、奇妙なフードを被り、時折何かに祈りを捧げる彼等を見ていると、あの空間で耳にした真徒なる狂信者達の声を思い出す。

確かにここは不気味だ。けど、それはあくまで他所から来た自分の主観に過ぎない。ここの住民が今の生活に文句が無い以上、自分が横から口出しするのも可笑しいだろう。ラケージも一応は助けられた身なのだから、その恩を返すまで滞在すれば良いだろうと悟らせようとするが、ここで彼女はある情報を取引に持ちかけてきたのだ。

その情報とは皇国、つまりはサイデリアルに関する情報で、しかも幹部クラスと思われる者がこの翠の地球に降り立ったのだという。

海賊と名乗るだけあって交渉は得意らしい。しかしその情報の信憑性がどこまで本当なのか分からない以上、鵜呑みにする訳には行かない。証拠となるモノを要求すると、彼女は一枚の写真を取り出してきた。

先に逃がした部下からのモノだと先に説明され、渡された写真に映っているのは巨大な基地と、そこに運び込まれる機動兵器の数々。あらゆる箇所、角度から鮮明に写し出されるモノは、確かに皇国軍の兵器だった。

そして気付く。多くの機動兵器が基地に運び込まれる中、異様な外見を有する機体の姿があることに……。

蠍を模した機動兵器、それは自分が何度か相対した、サイデリアルの幹部専用の機体であるアン・アーレス……だったか？　それが写っていた。

間違いない。自分が探していた蠍野郎はこの翠の地球にいる。もたらされた情報に

喜ぶ一方、横ではラケージがドヤ顔で自分を見詰めてくる。
仕方ない。ここまで情報を渡された以上無視するわけには行かないので、写真の場所まで案内させる事を条件に、自分は彼女の船団からの脱出を手伝う事になった。
……まぁ、いいんだけどね。情報を集める手間も省けたし、パッと彼女を見た感じ、嘘を吐いている様子もないし。
そう言う訳で、自分は彼女の知り合いとしてこの船団に一時的入団する事になったのだが、幾つか分からない事がある。
何故自分なのか。彼女自身もメカには詳しそうだし、女性ながら腕も立つのだから、側近の女の子達と一緒に逃げ出せるのではないか？
それに、何故自分を蒼のカリスマと認識できたのか。彼女と自分は初対面だ。確かに不用意に海中から飛び出したのは自分だが、乗っていたのはグランゾンだ。トールギスの時に見られたのなら――――――まぁトールギスの頃から色々暴れてたし、風の噂で聞いたと言われれば納得もできた。
しかし、グランゾンでこの星に降り立つのはこれが初めてだ。加えて言えば、降り立ってから殆どずっと海底に潜んでいた自分が誰かに気付かれる事はないはず。では何故ラケージは自分を、自分達を蒼のカリスマとその愛機グランゾンだと知ることが出来たのか。

そう問い詰めると、何故か表情を赤くした彼女はオズオズとあるモノを取り出した。
それは映像端末、そこに映し出されているのはド派手に流れるとある映画の一場面。
それは、自分がこれでもかとダメ出しした、とある映画のスピンオフ作品。
……どうやらこの女大海賊、あろう事かテロリストである蒼の俺カリスマのファンらしい。

やべ、ちょっと嬉しいと思った俺がいる。

その１５４

「ふむ、取り敢えずはこんなものかな」
とある船団――――の隅にある小さな格納庫。大海賊ラケージの提案に乗り一先ずこの船団に留まる事にしたシュウジは、彼女の頼みであるユンボロの修復作業を終わらせていた。
従来のユンボロとは違い大きく、そしてその巨体に見合った出力を有する機体。技術系統や使われた資材、それぞれがこれ迄とは違うユンボロを前に、しかしてシュウジは一日足らずで修理をやり遂げていた。
「流石ですわね。私のユンボロをこうも簡単に直してしまうとは……」
「単純な機体構成をしていたからね。使われていた部品も俺が知っているもので代用出来たし、比較的楽な作業だったよ」
自分の機体の修理を楽と言ってのけるシュウジに対し、赤髪の女海賊ラケージは尊敬の眼差しでかの魔人を見やる。

蒼のカリスマ。最初は自分の部下達を蹂躙し、此方に手酷い損害を与えた憎い敵でしかなかったが、その存在を知るにつれて彼女はその印象を大きく変えていった。
テロリストとして世界中から敵視されながらも自分の在り方は決して曲げず、孤独でありながらその世界と真っ向から戦う蒼のカリスマ。その姿に海賊というならず者であるラケージが憧れにも似た感情を抱くのに、然程時間を有する事はなかった。
世界という大きな敵に対し一歩も引かず、媚びず、顧みない。己こそが絶対とするその在り方はラケージにとってこの上なく共感できるものだった。
ラケージにとって蒼のカリスマは憧れであり、自分の遥か先を行く先達の人。こうして何気なく言葉を交わしているが、その内心は驚喜と緊張で溢れていた。
「けど、流石に使い古しているだけあって何ヵ所かガタが来ていたからね。そこを重点的に補強させてもらったよ。これでこの機体も大分安定して使える筈だ」
「ほぇ～。頭のユンボロをここまで綺麗にしちまうなんて、やっぱ只者じゃないんだなアンタ」
ラケージの手下の一人である海賊、スキンヘッドで如何にもな顔立ちをした男から送られる素直な称賛。しかし自分よりも馴れ馴れしく話し掛けるその姿が首魁であるラケージの琴線に触れたのか、彼女の眼がギロリと光る。
短い悲鳴を上げ、オズオズと下がっていく手下。そんなに怒らなくても良いのにと思

うが、あくまで自分達は利用し、利用される関係。必要以上の接触は控えた方が良いのだろうと変に納得してしまったシュウジは、ラケージに何かを言うことはしなかった。

そんな訳でラケージの願いを聞き入れたシュウジは今度は此方の番だと仮面を被り、蒼のカリスマとなってラケージに向き直る。これまでつなぎ服だった姿から一転、白いコートを羽織り雰囲気ごとガラッと変わった蒼のカリスマに、周囲のならず者達はその迫力に息を呑んだ。

これがもう一つの地球でその存在を知らしめた最強のテロリストの姿か。憧れであり熱心なファンでもあるラケージは更に緊張に胸を高鳴らせる。

「さて、そちらの願いは聞き入れた。次は君達の番だ」

「え、えぇ。勿論ですわ。このラケージ、結んだ契約は必ず守りますとも」

「本当なら座標さえ教えてくれたら自分で向かうのだが……やはり、そう言った端末は持ち合わせていないのか？」

「はい。残念ながら今の私達はそう言った機械の所持を許されてはおりませんの。なんでもこの船団の統括者の意向らしくて、通信端末の類いの機械はもっと上の人間のみが持つことを許されているらしいのです」

「トップが選んだ一部上位者の優遇……これにより統括は円滑に進み支配した住民に選民思想を植え付ける、か。どうやらここのトップは人間というものを色んな意味で

熟知しているらしい」
「その事については同感しますわ。そして……その悪辣さにも」
　この船団に来てからずっと思っていた事。どうやら陰湿極まるこの船団の統括者は、船の安全よりも船団の支配を重点的に置いているらしい。効率を求める事自体は悪ではないが、それを重点的にしている所為で人間らしさを全く感じられない。
　そして、その事を当然の事のように受け入れている船団の人達もまた異常だ。ラケージから聞いた話だと、この船団は何ヵ月かに一度不要とされる人々を海に投げ捨てているらしい。――――まるで、それが尊い行為であるかのように。
　手足が不自由な者、生まれながら体が病弱な者、お年寄り、そう言った人達を船団の負担であると見なし、供物と称して海に投げ捨てる。
――――おぞましい話だ。最初は冗談かと思っていたラケージの話も彼女の怒りに満ちた表情を目の当たりにしたら、信じざるを得なかった。
　ラケージがこの船団から早く抜け出したいと言うのも理解出来る。こんな船団に長く留まると、気持ちが滅入ってしまいそうだ。彼女がこの船団を悪辣と呼ぶのも頷ける。
「……ラケージさん、貴方に一つ渡しておきたいモノがある」
「え？　な、なんですの」

蒼のカリスマが懐から取り出すのは一個の小型発信器、衣服に取り付けられ、通信機能も有している優れもの。掌に置かれたその機械を手にしたラケージはこれは何だと問い掛ける。

「それは通信機能内蔵型の小型発信器。即席で作った代物だから強度も低く、余り良いものではない代物だけど……これを持って君達は直ぐにここから出ていって欲しい」

「……何故ですか?」

それは唐突な申し出だった。自分達の持つ情報を必要とせず、あまつさえ先に逃げろと言い出す蒼のカリスマに、ラケージは自分が信用できない人間だと遠回しに言われた気がした。

が、それは直ぐにそれは過ちだと気付く。蒼のカリスマは世界中から恐れられたテロリストだ。どういう訳かこの星(翠の地球)では英雄扱いされているが、それは違う。

彼は他の誰よりも自分に正直に生きてきたのだろう。善でも悪でも無く、自分の思う通りに、自分の心のままに行動し、世界と向き合っていた。この船団に行き着く前、ガルガンティアに戦いを挑む以前から蒼のカリスマについて調べていたラケージは、目の前の男の本質に気付く。

自由。そう、この男は何よりも自由を尊重している。人の意思を、尊厳を、可能性を、

己自身同様に大切にしている。
　だから許せないのだろう。人の尊厳を踏み躙る輩が、だから怒れるのだろう。人の可能性を摘み取る存在に。
（あぁ、やはり貴方は私の思った通りの……）
　蒼のカリスマ……シュウジの考えにいち早く気付いたラケージは自分もそれに参加したいと考える。しかし、自分と彼とでは持ちうる力の大きさが違いすぎる。下手をすれば自分が彼の邪魔に成りかねない。
　それはラケージにとって最も許せない事、大海賊と名乗る自分が誰かの足手まといになるなどあってはならない。それこそ憧れに思っている人物のお荷物になるなど死んでも御免だ。
「――――それは」
「いえ、やはり何でもありません。それでは蒼のカリスマ、ごきげんよう。用が済み次第ご連絡をお待ちしておりますわ」
「え？　あ、うん。……宜しく」
　では、と礼儀正しく頭を下げてお礼を述べるラケージはユンボロを動かし、手下達を連れて大海原へと出ていく。無事に外へ出れた彼女達を見送り……。
「さて、ここのトップとやらの顔を見に行くか」

蒼のカリスマは格納庫を後にし、船団の中へと消えていった。

◇

船団の奥、大きく開かれた空間の中でソレは鎮座していた。人よりも巨大で、鋼よりも強靭な体を持つソレは、言うなれば鋼鉄の巨人。船団の人々に神として崇められているモノ、従来のユンボロから大きく逸脱した力を持つその存在は、人々から雷の巨神と恐れられ、畏怖の象徴としていた。

その巨神の前に一人の青年が佇んでいる。緑髪と赤みかかった瞳、人並外れた美貌を持つ青年は何を語る事もなく、静かに巨人を見上げている。

『――――――了解した。貴君らの目的は当機の目的に対し齟齬は無く、また当機の最終

目的にも該当する
。反論は無い』
巨神の瞳が瞬くと同時に聞こえる女性の声、その声色は機械が奏でる人工音声らしく無機質で人の暖かみを感じさせない冷たいもの、巨人と相対している青年も感情を感じさせない無機質なモノとなっている。
機械的な青年と機械的な巨神、両者の間には不必要な会話は無く、青年の瞳から発せられる電気信号のみが巨神との会話を紡いでいく。
軈て全ての情報を与えられ、今この宇宙に何が起きようとしているのか、ソレを理解した巨神は思案する。自分の目的、人類銀河同盟の崇高な使命を果たす事、それを可能とするために、自分は今後どうすれば良いのか。
答えは即座に導き出された。現在の自分はパイロットであるクーゲル中佐を失い、誰の支配も受けていない状態。ならば人類支援啓蒙レギュレーションシステムである自分こそが、人類の思考判断の責務を負うべきなのではないだろうか。いや、そうするべきなのだ。
本来ならパイロットがいることで間接的に判断する筈だった支援システムは、ブレーキの効かない暴走列車と化していた。
自分こそが人類を導く存在なのだと、搭乗者がいないことで自身の判断を指摘する者

がいないシステムは、より自身が人類の統括者であることを自負していく。己こそが絶対なのだと、自身を頂点にし、人類を自身に奉仕する様に促せば、人々は真に豊かになると本気で信じて疑わない。

そして、皮肉にもその考えが人間じみた、俗物的な考えであることも巨人は気付かない。眼前の青年からもたらされた情報に大きく膨れ上がっていく巨人の野望、それが実現しそうになっているという事に巨人が無自覚に昂っていた時に――――。

「ほぅ？　これは驚きました。まさかこの船団にブレラさんがいるとは……妹さんの方は放っておいても宜しいので？」

唐突に感知する熱源反応、声のする方へ視線を向けると何処に潜んでいたのか、客人用のもてなす筈だった椅子に見知らぬ仮面の男が座っていた。

「貴様は!?」

「うん？　――――あぁ、成る程理解しました。どうやら生きていた様ですね。まさか再世戦争の時の因縁に出会すとは運が良いのか悪いのか、いや、この場合良く甦ったと称賛するべきなのでしょうかね？　尤も、欠片も嬉しくはありませんが」

仮面の男は青年が初めて見せる動揺に何を察したのか一人納得しながら席を立ち、此方に向かって歩み寄ってくる。仮面の男が近付くに連れてブレラと呼ばれた青年は後退り、まるで今までの無表情が嘘のように焦りと動揺に染まりきっている。

「ここの船団の統括者に出会うつもりが、まさかこんなモノを吊り上げるとはね。……さて、ブレラさんを乗っ取って今度は何を企んでいるんだ？　なぁ、ギャラクシー船団の皆々様よぉ」

男の雰囲気が変わる。知的で冷静な姿勢から獰猛な野生の獣の様に。

そんな彼の者に割って入る様に巨人が問う。何者かと。

「初めまして、名も知らない巨人さん。私は蒼のカリスマ、恐らくは――――貴方の敵です」

ならば最早問答は無用、敵であるならば排除する迄だと巨人はその目を光らせ仮面の男に襲い掛かる。

――――瞬間、船団の一部が破壊され、船の人々は自らが信仰する雷の巨人が吹き飛ばされる様を見て、その目を大きく剥くのだった。

その１５５

――――――理解不能。

機械とは人が生み出した一種の神器である。記録する機械、造る機械、壊す機械、育てる機械、人類が築いてきた文明の中、機械と呼ばれる物は総じてその時代に於ける代名詞となりつつあった。

形式番号Ｘ―３７５２、機体名ストライカー。人類銀河同盟が保有するパイロット支援啓発システム搭載型マシンキャリバー、人が生み出した究極の機械の一つにして、人類と同じく思考する能力を持った多様性に特化した機械。

パイロットを亡くし、伽藍堂となった己の中でストライカーは思案した。パイロットを亡くした自分は、今後どのようにして人類に対して支援して行けば良いのか、どのような形で、どのような在り方で、どのようにして人類に貢献していけば良いのか、パイロットが残した遺言と呼ばれるメッセージを下にストライカーは考え、考え、考え、考

えた。
思えば、この時点でストライカーは人と同じ存在だったのかもしれない。自問自答を繰り返し、無自覚に悩み続けていたストライカーは〝彼女〟と呼ばれる存在となり得ていたのかもしれない。Ｚ―ＢＬＵＥに所属するブラックオックスを始めとした自律ＡＩ達の様に良い方向に向かい、本当の意味で人類を支えるシステムの一つになり得たのかもしれない。
そう、〝かもしれない〟だ。単機で思考し、誰にも頼らず、他者に意見を求めず、誰かと理解を深めようとしなかったストライカーはその問いに、パイロットだったクーゲルの遺言に対し最悪な答えを見付けてしまう事になる。
自身を全ての生命体に君臨する存在、神に置き換える事で人類を支配しようという狂った答えに至ってしまった。ストライカーがいた場所は碌に外敵のいない静かな海、並のマシンキャリバーとは性能が違う自分は力も、思考能力も地球人類よりも高い事でより自身が人類を支配するに足り得ると確信したストライカーは、そんな狂った思考に気付かないまま無自覚に暴走を始める事になる。
人類は自分に奉仕するべきだ。そうする事で人は最も罪深く且つ苦痛である〝考える〟ことから開放され、世界はより楽園に近付く事になる。
確信……否、そう確定したストライカーはその確定事項に従い、行動し、その成

果を築き上げることに成功した。宗教という形で人心を掌握、神への供物と称して欠陥品と見なした人類を特に反対される事無く効率良く廃棄する事に成功し、自身――――――つまりは神である己に選ばれた事で選民意識を煽り、自身に奉仕する喜びを与える。

あぁ、これこそ自分が求めていた楽園だ。人類を支配し、管理することで人類は繁栄され、文明を築いていく。これが人類銀河同盟の至上の目的であり、自分が行える最高の支援なのだと――――――。

故に、ストライカーは分からない。自分が何故吹き飛んでいるのか、何故自分が空に打ち上げられているのか。

――――何故、自分が人類（ヒト）の手によって吹き飛ばされているのか。

『――――――理解、不能』

並列思考が乱れ、ノイズが走る。思案が纏まらず、情報が定まらない。……取り敢えず、先ずは己の定義から再認識していこう。

『自身の機体名はストライカー、形式番号はＸ―３７５２。人類銀河同盟によって生み出されたマシンキャリバーであり、当機は他のマシンキャリバーの指揮官に当たるタイプである。全高は１０ｍ、重量は装甲に用いられる特殊金属によって構成されており何れにしても人類の肉体のみで持ち上げる事は不可能である』

不可能。そう、どんなに考察してもどんなに思考回路を回転しても、出てくる答えは

有り得ないの一言に尽きていた。人類の腕力では自身を持ち上げる事は叶わない。そう断言出来るのは、これまで他ならぬ人類を観察してきたストライカー自身の記録によるモノだ。

それは人類に備わった腕力の限界だ。人類という生物はトンを超える重量を持ち上げる事は出来ない。だからこそ、これまで人類はそんな非力な自分の出来ることを増やす為、機械という文明の力を発展させてきたのだ。

――――――――なら、何故未だに己はこの状況を理解出来ていない。外壁を突き破り、空に打ち上げられ、未だに体勢を整えられていないこの状況は、一体なんなのだ。

ふと下を見れば、吹き飛んだ己を懐疑に見上げる信者達がいた。このままでは不味い、自身がこれまで築いてきた楽園が崩壊の危機にあっている事に気付いたストライカーは姿勢を整え、腹部にエネルギーを収束させ――――――眼下にいる筈のギャラクシー船団の使者の存在に構わず、その一撃を放つのだった。

◇

「おお、うまい具合に飛んだな」

襲い掛かってきたストライカーなる機体を殴り飛ばして数秒後、外壁を破壊し、そのまま吹き飛んでいく彼の機体を見上げて殴り飛ばした張本人である蒼のカリスマは、素の口調で呑気にそんな台詞を溢した。

人が人型の機動兵器を殴り飛ばす。それは常人ならば夢物語の話であり、それは蒼のカリスマ――――シュウジにとっても同じ事の筈だった。

しかし先日、新日本で危機に陥ったルルーシュ達を助ける為、単身生身（ボン太くん着用）で皇国軍幹部であるバルビエルとその愛機であるアン・アーレスに挑んでいる。人類は学ぶ生き物。経験し、それを糧にし、より高みへと至る知的生命体、これまでの体験で人類に対しそう信じているシュウジはこの時の出来事も当然己の糧にした。

故に、ストライカーに襲われる際に「あ、このサイズ相手にならいけるんじゃね？」という良く分からない且つ頭のおかしい結論に至るのも、ある意味当然で仕方の無い事なのかもしれない。

ただ、思いの外飛んでしまったストライカーに少しばかり驚いたのもまた事実。サイズや殴った際に伝わってきた感触からして、もしかしたら結構軽い素材で出来ているのではないか、それならばあんなに飛ぶのも頷ける。そう変に納得する蒼のカリスマに、サイボーグであるブレラの手刀が襲う。

インプラント化という術式を受け、その身体の大部分を機械に変えてしまったブレラは、従来の兵士とはその膂力から通常の人類とは隔絶した力を有している。岩を砕き、巨木を割り、人を紙切れの様に引き裂く事が可能としているブレラは、正に人類が生み出した最も効率的な兵器である。

反応、反射、何れも人間とは大きく凌駕したブレラの手刀は、確実に蒼の魔人カリスマの首元を捉えた筈だった。ブレラを通してその様子を見ていた者達も魔人の最期の瞬間を予想し、確信し、歓喜の声を上げようとした。

故に、ストライカー同様理解出来なかった。サイボーグで、人間よりも大きな力を持っている筈のブレラがどうして宙を舞っているのか。

「悪いなブレラさん、ちょっと蹴るぞ」

遠慮がち魔人がそう口にしたのと同時にブレラの眼前に靴底が迫る。蹴り飛ばすというより押し退ける様に吹き飛ばされたブレラは、ストライカーと同じく外壁を突き破り外へ投げ出される。

瞬間、自分達が今いた所に翡翠色の閃光が玉座の間を焼いた。立ち上がり頭上を見上げれば、光を放ったと思われるストライカーが佇んでいる。恐らく彼女はあの魔人を屠ったと思い込んでいる事だろう。

だが、ブレラは……ブレラを通して一部始終見ていた者達は全く正反対の考えを持っていた。再世戦争で嫌になるほど魔人と魔神の力を見せ付けられた彼等からすれば、この程度で殺せるとは到底思えなかった。

手は弛めない。何故か奴は虎の子である魔神（グランゾン）を出しては来なかった。時獄戦役からその事を知る彼等はそれを蒼のカリスマが何らかの不具合を抱えているものだと判断し、ここで倒すべきだと決断した。

船団の格納庫から一機のバルキリーが飛び出す。インプラント化による機能で機体を遠隔操作する事を可能にしたブレラは己の機体に命令し、自分の迎えに来るよう指示を出す。初速で音速に達するブレラの機体ＶＦ―２７γルシファー、インプラント化を施し、サイボーグとなったブレラだからこそ扱えることが出来る機体にブレラともう一つの影が飛び移る。

ＶＦ―２７γルシファー――――通称ルシファーは最高速度マッハ５．２という速度を誇り、その推進力と加速力により一瞬にしてその速度に到達することが可能となっている。瞬く間に音速を越え、ソニックブームを引き起こしたルシファーは海面を裂

き、巻き上がる水柱と共に空へと舞い上がる。
ストライカーと共に船団を攻撃しようと画策しているのだろう。予定は大幅に変更されたが、これ以上ここに引き付けられる理由はない。ストライカーと合流し、その算段を伝えようとするブレラの耳にコンコンとノイズが彼の耳に入ってくる。
（……まさか）
そんなバカな。そう思いながら振り返る先でブレラが目にしたのは、機体のハッチに貼り付く魔人の姿――――。
「ヤッホ」
何故だいつから何故だまさか一緒に飛び移ったのか分からない何故だソニックブームに巻き込まれている筈じゃ何故だ本物の化け物か何故だもう嫌だお家に帰りたい何故だもうだめだおしまいだぁ。
目の前の化け物に一気に思考能力を失ったブレラ、命令を下していた彼等も判断能力を失い一方的に彼との繋がりを断ってしまう。
ガクリと項垂れるブレラ、操縦者の意識低下にどうすればいいのか分からないルシファーは取り敢えず操縦者の安全の為に自動操縦に切り替える……が。
「ちょっと失礼」
瞬間、ハッチをぶち破った魔人の手がルシファーの操縦桿を掴む。無理矢理に自動か

ら手動へ切り替わったルシファーはその速度を加速させ、ストライカーへ向かって突貫させる。合流してきたと思い込むストライカー、しかしそこにへばりつく魔人の姿を目にした瞬間再びその思考を停止させ――――。

「人越拳――――捻り貫手」

ルシファーから飛び出し、加速のついたその一撃によって――――右腕を抉り壊された。

δ月（・ω・）日

あー、惜しかったなぁ。あれからあの機体は後からやって来た無人機――――ゴーストV9だっけ？――――に連れていかれたし、ブレラ君も操られていた記憶は殆ど失っていたから、ギャラクシー船団の繋がりはこれで完全に断たれてしまった。

やっぱりグランゾンを使うべきだったかなぁ。でも以前記した通り、今のグランゾン

は絶好調すぎて自分の腕じゃ完全に御しきれていない感じだから、今回のような人質ｏｒ洗脳された味方が相手だと使うのに少し戸惑うんだよね。

ミケーネとかミカゲとかが相手なら全力で挑めるんだけど……まだ馴れていない今のグランゾンではもしかしたらやり過ぎてしまう事があるかもしれない。最悪、ブレラ君を機体ごとクシャッてしてしまうかもしれないし、その事を考えれば今回の戦いは結果的に見れば良かったのかもしれない。

ギャラクシー船団に操られていたブレラ君も、奇妙なアンテナみたいなモノを切除してから途端に顔色も良くなったし、身体の方も問題ないと言ってる。船団の人達も怪我人こそいるけど幸い死傷者はいない。まぁ、結果論だけどね。

今回の戦いは反省点も多かったけど得られるのも多い内容だった。特に人型の機動兵器を相手でもやり方によっては相手に出来るという事が分かった事が大きい。バルビエルに自分がこの星にいることを気取られない様にするには、より隠密に行動する必要がある。

グランゾンでは移動も戦いも派手になってしまう。そうならないよう気をつけるにはやはり自前のこの身体が必要だ。未だガモンさんや大貫さんには届かない未熟者だけど、これなら結構いけるのではないだろうか。

最悪ブレラ君の力も借りればいい。壊した機体のハッチも応急処置は済んだし、ブレ

ラ君も飛ぶことも戦うことも問題ないと言ってたしね。

反省も多かったけどその分得ることも多かった今回の戦い、次はもう少し上手くやれるよう精一杯頑張って行こうと思う。

――――――その前に先ずはこの船団の修理から始めるとしよう。元はと言えば自分が原因だし、船団の人達が安心して暮らせるように仕上げないとね。

δ月（。Д。≡。Д。）日

おいバカ止めろ。俺を崇めるな讃えるな。俺は人間だ。神様扱いとか冗談じゃない。今度俺のお揃いの衣装あげるから、お願いだから大人しくしてくれ。

その後、魔人によってもたらされたこの戦いを船団の人々は〝クーゲルの悪夢〟と恐れる事になり、一部の市民は悪魔崇拝者ならぬ魔人崇拝者となり、蒼のカリスマのコスプレをするようになったという。

　また、この戦いの一件で人々は神に崇拝することは無くなり、通常の船団と同じく助け合う集団に変わったという。
「変えられたの間違いじゃないのか？」
「ブレラ君、何か言った？」
「いや、何も……」

その１５６

皇国の手からソレスタルビーイング号を解放したＺ―ＢＬＵＥ、留守をガランシェール隊に任せた一行はクィーンから特異点であるオルソンの居場所の情報を入手し、彼を救出する為に翠の地球へと急行。ターミナル・ベースと呼ばれる敵の重要拠点に向かった。

道中皇国の妨害に阻まれながらもこれらを何とか突破し、遂には拠点まで目と鼻の先にまで迫る中、一行は作戦の確認と、それらを踏まえたちょっとした座談会を開いていた。

「ほうほう、ではその蒼の某（なにがし）さん改め、シュウジさんはヒビキさんにとってのお姉さまみたいなモノなのですね！」

「兄貴分、て意味ならそうかもしれないな。それと蒼の某じゃなくて蒼のカリスマな」

表情も明るくなり、すっかり元の調子に戻ったヒビキは訊ねてきたノノにそう反す。自分にとってシュウジ＝シラカワは心強い兄貴分であり頼れる人物だ。その感情はノ

ノがラルクに向けるモノに近いかもしれない。
「しかし驚きました。まさかその蒼のカリスマさんが噂のお方でしたとは、私が耳にした話とは全く違うので別人さんかと思ってましたよ」
蒼の地球の出身者が多いヒビキ達とは異なり翠の地球でＺ―ＢＬＵＥに参加したノノ、二つの地球が有する蒼のカリスマの噂の類いの話はそれぞれ異なる内容だった。片や地球政府の半分の戦力を瞬殺した所から始まり銀河規模の破壊も可能とした大魔人、片や少ない戦力で皇国を相手取る救世の英雄。
片やなまはげ、片や救世主。正反対過ぎるその扱いと噂の内容に、ノノや翠の地球の人達は同名の別人かと思い込んでいた。
「そう言えばエイミーも蒼のカリスマの事を知ってたんだよな」
「正確に言うと後で知ったんだけどね。あの時は仮面も被ってなかったし……半裸で皇国の人達を殴り飛ばしていく様を見て普通じゃないと思っていたけど、まさかあのカリスマさんだったなんてね」
エイミーが思い返すのはＺ―ＢＬＵＥが翠の地球に初めて降り立つよりも前の頃、ガロードが船団の護衛役を勤めていた時だった。突如として襲い掛かってきた皇国の軍勢になす術なかった船団の人々、襲い掛かる武力に対し抵抗する手段が余りにも少なかった船団は瞬く間に奴等に侵略され、その全てを奪われそうになっていた。

そこに現れた半裸の男――――いや、死んでいた筈なのに甦った男の活躍により皇国を退けられ、エイミー達は平穏を取り戻した。
本当なら礼の一つでも伝えるべきなのに、その暇もなく男は去っていった。その後Ｚ―ＢＬＵＥの艦に乗せてもらい、外の世界で見識を広めていたエイミーは、翠の地球に留まっていた頃様々な噂を耳にした。
蒼のカリスマと名乗る仮面の男の噂。やれ一人で大軍を相手取り更にその大軍を殲滅したとか、一人で皇国の基地を陥落させたとか、この手の噂には尾ヒレが付くものだがそれにしても規模が大きい。
しかし総じてその話は全て、翠の地球に住む人達を皇国から守ったという形で締め括られている。見返りも求めず、ただ通り掛かったという理由だけで人々の危機に介入するその姿は、昔話に登場する物語の英雄像そのものだった。
故に、翠の地球の人々は蒼のカリスマを英雄として語り継ぎ、それらを耳にしてきたエイミー達は蒼の地球で語られる蒼のカリスマの話に驚嘆した。
「ハッ、まさかかの蒼のカリスマ様が人々から怖れられる魔人様だなんてね。英雄と持て囃されているけど、案外それも彼の計算の一つじゃないのか？」
「どうしたんだよニコラ、やけに突っ掛かる物言いじゃないか」
「別に、自分の力を好き勝手使っている魔人様に呆れているだけさ」

　蒼のカリスマという話で盛り上がっているヒビキ達に皮肉な口調で割って入ってくるニコラス＝バセロン。様々な能力を持つトップレスの面々の中でも年長者として知られる彼の目には、嫉妬と焦りに満ちていた。
「蒼のカリスマとか魔人とか、最凶最悪のテロリストだとか知らないけど、所詮はごろつきだろ？　世を脅かす民衆の敵だと言うのならそれこそ僕達の出番じゃないのか？」
「そう決め付けるのは早いと思うぞ」
「アムロ大尉……」
　蒼のカリスマという話題を耳にしたＺ―ＢＬＵＥのまとめ役の参戦に、ニコラスは内心で舌打つ。
「蒼のカリスマ、彼は一時とは言え俺達と行動を共にしてきた事がある。その時のアイツは正しく俺達の仲間だった」
「でもそんなアムロ大尉達の信頼を裏切って敵対したのでしょう？　だったら、それはもう俺達が打倒するべき敵って事なんじゃないんですか？」
　ニコラス＝バセロンの言い分は間違ってはいない。蒼のカリスマは時獄戦役の時、最後の最後で自分達と敵対した。それは仲間だと思っていたＺ―ＢＬＵＥに対しての裏切りに他ならず、これによりヒビキを始め、彼を慕っていたＺ―ＢＬＵＥの面々に深い心の傷を与えていた。

「それなのにあなた方は未だ蒼のカリスマを仲間として認識している。……正直信じられませんよ」
　それなのに彼等はもう一度蒼のカリスマを信じようとしている。たかが一度助けてもらった程度で、それが自分達を罠に陥れる策略なのかも知れないのに――――。
「お前の言うことも理解できるし、共感も出来る。だがニコラス、覚えておいてくれ。俺達はそうやって今まで戦ってきたんだ」
「――――付き合いきれませんね」
　自分よりも年上のアムロが夢みたいな事を言っている。それが気に入らないと暗に吐き捨てながらニコラスは格納庫に去っていく。途中で翡翠色の長髪を靡かせた美しい女性と擦れ違うも、軟派なニコラスは特に反応を示さなかった。
　その様子に女性は首を傾げて訝しむ。そんな彼女の手に持つお盆と其処に乗せられた握り飯に、エイミーは反応する。
「あ、サクヤさん。ごめんなさい一人で持たせてしまって」
「いいえ、お気になさらないで下さいエイミーさん。お料理、楽しかったですよ」
　サクヤと呼ばれる女性に駆け寄るエイミーは彼女からお盆を預り、その上に乗せられた握り飯を皆に分けていく。それは作戦前の景気づけ、軽く食事を取り英気を養おうという各艦長達の計らいだった。

「あの、宜しかったのですか？　ニコラスさん随分苛立っておられたみたいですが……」

「気にしなくてもいいさ。ここの所ニコラはあんな調子だからさ」

ガロードのフォローらしからぬフォローに、サクヤは「はぁ」と気の抜けた返事で返す。

「しかしサクヤさんも災難だったな。よりにもよってこんな時に俺達と一緒になっちゃって」

サクヤと名乗る女性は、先の皇国の妨害に遭った際にヒビキの手によって保護された女性である。その身嗜みや仕草、礼儀ただしさから高貴な人物であろうと思われる彼女は人質として利用されそうだった所を救出され、その後も成り行きでＺ―ＢＬＵＥと行動を共にしていた。

本当ならもっと安全な所に降ろして身を隠してもらうべきだった。だがタイミング悪くその機会を得ることなく今日を迎えてしまった。申し訳ないという気持ちがヒビキ達の中に積もっていく。そんな彼等の心境を知ってかサクヤはニコリと頬笑み――――。

「お気になさらないで下さい。元より私は天涯孤独の身の上、家族は先の大戦で亡くなり、頼る所もありません。差し出がましい事ではありますが、もう少し私をここに置い

ては下さいませんか？」
「……了解した。貴女がそう言うのなら俺達からは言うことはありません。貴方の希望が叶うよう艦長達には俺から話を通しておきます」
「ありがとうございます。アムロ大尉」
紳士的なアムロの対応に笑みを浮かべるサクヤ。その美しくも儚い彼女の笑顔に男女問わず一瞬ドキリと心音を高鳴らせるが、次に艦内中に発せられる警報に直ぐ様その表情を戦士のそれに変える。
どうやら作戦決行の時間らしい。サクヤに握り飯の礼を言いながら、それぞれの持ち場へと駆けていく。
その様子を悲しげな表情で見送るサクヤ、その様子から彼女がＺ―ＢＬＵＥの安否を気遣っているという事が見てとれる。
しかし、彼等は気付かない。一見薄幸美人なサクヤの瞳に哀しみと怒り、そして楽しみで渦巻きドロドロと濁った色で溢れていた事を……彼等は、未だ気付けていない。
「……」
ただ一人、彼女と同じ翡翠色の髪を靡かせた魔女を除いて。

◇

特異点であるオルソンを救出するにあたり、Ｚ―ＢＬＵＥが用意した策は至ってシンプルなモノだった。自分達の艦を囮に使った陽動作戦、火力もあり機動力にも優れたマクロス・クォーターを用いての電撃作戦は順調過ぎるほどに上手くいった。

マクロス・クォーターが時間を稼いでいる合間に、突入部隊がオルソンを救出しようと基地に潜入する。その際に更なる陽動を仕掛けようと突入部隊を二つに分ける大胆な作戦、陽動を受け持ってくれた竜馬達に感謝しながらヒビキとスズネ、セツコ＝オハラと桂木桂はオルソン救出の為に基地内をひた走る。

セツコ＝オハラは知りたかった。どうしてバルビエルはあそこまで自分を殺そうと

しているのか、何故そこまで自分を憎悪の対象に見ているのか。
スフィアの相性？　人間としての価値観の差違？　それとも男女の意味で？　どんなに考えを巡らせようと答えは出ず、堂々巡りな自問自答だけが過ぎて行った。
もし、もし本当の意味で彼が憎む理由を知っているのなら、自分は彼の助けになってやりたい。傲慢な考えかもしれないが、そうでもしないと彼が余りにも救われない。
憎むことしか知らない生き方なんて悲しすぎる。そう思いながら眼前の扉を開き、中の広い空間に出てきたセツコ達は……信じられない光景を目の当たりにする。
「あ、あ……ぐぁ」
「――――――」
全身を血で染め上げながら呻き声を上げるバルビエル、その彼の首を持って締め上げているのは仮面を被った蒼い魔人。
「まさか、こんなもので済むとは思ってないよな」
顔を隠した仮面、しかしその奥では純粋な怒りに満たされた殺意の眼光が、怨嗟の魔蠍のスフィアリアクターを射抜いていた。

その１５７

――――Ｚ―ＢＬＵＥがオルソン救出の為にターミナル・ベースに潜入する数時間前、シュウジは自身のファンであるラケージから無事に情報を入手し、バルビエルの居場所に向かっていた。
「いやぁ、悪いねブレラ君。あの船団の修復作業を手伝ってくれただけでなく送ってくれるなんて」
「気にするな。お前にはギャラクシー船団から解放してくれた借りがあるし、あの船団の一部崩壊を招いた要因は俺にもある」
「いや、別に俺が何かしたって訳じゃないさ。奴等の洗脳から自力で脱出出来たのはブレラ君自身の力さ」
　蒼のカリスマという魔人の出現により慌ててブレラとの繋がりを断ったギャラクシー船団、その影響で自我を取り戻したブレラは自らインプラントの装置を引き抜いて

これを破壊。
　その際に当然のごとく頭部から出血し、負傷する事になるのだが、後からシュウジの手によって修復され、現在ブレラの頭部には丁重に治療された跡と包帯が巻かれている。
「ていうか、本当に大丈夫なの？　頭の怪我とか俺専門外だし良く分からないから応急処置程度しか出来なかったけど……視界とか、思考感覚とか平気？」
「あぁ、その事に関しても大丈夫だ。奴等は使えない駒は躊躇なく棄てるが使える駒を簡単に捨てるような剛胆な胆力は持ち合わせていない。インプラント化というのも詰まる所命令信号を送り付ける装置みたいなものだ。これを引き抜いた程度で肉体に直ぐ様影響が及ぶ様な危険はない」
「……まぁ、君がそう言うなら信じよう。でもあまり無茶はするなよ。君はランカちゃんの数少ない身内で実の兄なんだ。彼女に余計な心配を掛けたくないのなら、Ｚ―ＢＬＵＥに合流したら直ぐ様メディカルチェックをしておきなよ」
「あぁ、肝に銘じておこう」
　シュウジからの忠告に素直に頷くブレラだが、直ぐにその目を細めて彼の男の様子を訝しむ。今自分達がいるのは地上から数千も上の空だ。加えて乗っているのは音速を余裕で超えるバルキリー、その中でも乗り手に一切の負担を考えないで作られた最新鋭

の中でも狂気の沙汰と分類されるＶＦ―２７γ〝ルシファー〟だ。
窓もといハッチを破壊された事への謝罪という事で一時的にシュウジの手に委ねられたルシファーは無事に修理されたのだが、その際に複座を取り付けられてしまった。
確かにブレラはシュウジをターミナル・ベースに送り届ける事を良しとした。事前にその事で訊ねられたし、許可を得たのも他ならぬ自分だ。なにより自分をギャラクシー船団から解放してくれた礼もしたいし、その位なら別に良いと思っていた。
複座の方も簡単に取り外しが出来る仕様になっているので大丈夫だと言われたから気にしてはいない。いや、実際は複雑なバルキリーのコックピット部分にどうやったら複座を取り付ける程の余裕を作れるのか不思議で仕方ないが、聞いても仕方がないという諦めの気持ちでこれも許した。
自分をタクシー代わりにするのはいい。機体を弄られるのもまぁ許そう。何より気になるのが……。
「……うん？　どうかしたブレラ君？　もしかして君もお腹すいた？　待ってて、今出すから」
「いや、いい。大丈夫だ」
「そう？　欲しかったら言いなよ？　折角船団の皆さんから好意で貰ったお弁当なんだから、食べなかったら逆に失礼だからね」

何故、この男は音速を超える機体の中でのんびり弁当を口にしているのだろうか。
基地に潜入するんだろ？　何でそんな冷静なの？　何で優雅にお握りとお茶を飲んでるの？　一応音速で動いてるんだよ？　パイロットの事なんかちっとも気にしない機体だよ？　え？割と静かでゆったりできる？　知らねぇよなにその感想戦闘機に対する感想じゃないよね？
沸き上がる疑問と驚愕は数知れず、溜め込んでいくブレラの胃がキリキリと悲鳴が上がる。オカシイナー、俺サイボーグナノニナー。
「……シュウジ＝シラカワ」
「うん？　やっぱり何か食べたい？　それとも飲み物？」
「いや、飲食関係は大丈夫だ。それよりも、何故ワザワザ俺を頼る。お前とグランゾンならばより確実に奴等の基地に近付けるのだろ？」
「君の疑問も尤もだ。確かにグランゾンの力を使えば基地に近付けるのは簡単さ、でもそれだと気付かれてしまう恐れがある」
「それは、どういう意味だ？」
「うーん。何と言うか、感覚的？　連中の幹部ってどいつもこいつも感知能力が無駄に高くてさ、強い力に過敏に反応するみたいなんだよ。今俺のグランゾンは少し調子が良すぎるからさ、近付いたらそれだけで相手に気付かれてしまうかもしれない」

「成る程、だから足の速い俺の機体の出番だと」
「タクシー代わりにした事は謝るよ。でも、奴に気付かれず基地に潜入するには君の力がどうしても必要だったんだ。ごめん」
「謝る必要はない。元よりこれは俺も望んだこと、気にするな」
　その説明に納得し、理解を示したブレラは後で頭を下げるシュウジにその必要はないと語りかける。抜けているようで人として当たり前の礼節を重んじる男、魔人と恐れられている男の意外な側面を目の当たりにしたブレラは……。
「――――そろそろ目的の場所だ」
　間もなくその場所に到達するというブレラからの報告に魔人の眼光は鋭くなる。ああ、やはりこの男は魔人なのだなと改めて戦慄するブレラ、目前に迫る基地を前に着陸しようとするとシュウジは御馳走様と手を合わせて呟き、残りの弁当を自身の脇にそっと寄せていく。
「それじゃあブレラ君、お弁当はここに置いていくね」
「何？　おい、ちょっと待て――――」
「ここまで送ってくれてありがとう。それじゃあ――――」
　呼び止めるブレラの声を振り切ってハッチを開いたシュウジは直ぐ様外へ飛び出し、同時にハッチが閉まる。普通なら複座からハッチを開ける事は出来ないとされている。

こんな細工までしていたのかと驚くよりも先に、ブレラは魔人の起こす行動に大きく目を見開かせる。

跳んだのだ。音速を超える速さで飛ぶ機体から、未だ高高度を保っているこの場所から、何の準備もなしに飛び降りたのだ。

自殺行為……いや、自殺そのものに等しい魔人の行動にブレラは血相を変えて彼を拾いに行く。しかし、魔人本人が急降下の姿勢で落下速度を速めている。

このまま地面に叩き付けられれば赤い染みが大地に広がる。その光景を幻視したブレラが次に見たものは……。

「――――何て奴だ」

足から膝、肘、流れるように転んでいき、軈ては無事に着地を果たす魔人にブレラは言葉を失う。一歩間違えれば惨劇になるはずだった未来を、あの魔人は顔色一つ変えずに乗り切ったのだ。

やはり怪物か。あの剛胆な人格も納得だと変に勘違いをしたブレラは、こちらに向けて手を振ってくるシュウジを尻目にその場から去っていく。

（今後、奴と直接関わるのは控えた方がいいな）

でないと俺の何かが音を立てて崩れていきそうだ。目眩を覚えるブレラはやはり診て貰った方がいいなと思いながらＺ―ＢＬＵＥに合流するのだった。

去っていくルシファーを見送ったシュウジは土埃を払い、ワームホールを開いてトレードマークである仮面と白いコートを取り出す。
「さて、行くか」
コートを羽織り、仮面を被った事で蒼のカリスマへと姿を変えたシュウジはその左脇に折り畳まれた段ボールを抱え、正面からターミナル・ベースへ向かう。

「ほう、Ｚ―ＢＬＵＥの奴等ワザワザ陽動を仕掛けてくるとはな。やはり特異点の在りかを嗅ぎ付けてきたか」
ターミナル・ベース内、基地の司令塔を担うバルビエルは人気の無い管制室でモニターに映るＺ―ＢＬＵＥの艦、マクロス・クォーターを見やる。
分かりやすい挑発行動、奴等の目的はここに投獄している特異点（オルソン）の奪還と見て間違い

ないだろう。何処からその情報が出てきたのか興味はあるが、今はそんな事はどうでもいい。自分が行う目的にとって今の状況は寧ろ好都合と言えた。

「感じるぞセツコ＝オハラ、お前もここに来るんだろ？　ハハハ、調度良い、いがみ合う双子のリアクター共々歓迎してやろうじゃあないか」

そう言うとバルビエルは通信端末を取り出し、外にいる部下達に指示を飛ばす。

「おい、ギルターを出せ。あんな奴でも多少の時間稼ぎには使えるはずだ。精々奴等を引き付けて手柄を立てろとでも言って煽っておけ」

乱暴に通信を切り、端末を投げ捨ててバルビエルは管制室を後にする。既に彼にはターミナル・ベースの守衛を目的にはしておらず、特異点の回収もその頭に無かった。

今のバルビエルに興味があるのは自分と対を為すスフィアの担い手、悲しみの乙女のリアクター、セツコ＝オハラにしかない。彼女を生かすべきか殺すべきか、己のスフィアが司る憎しみを全身から滲ませて通路を歩いていた時――――ふと、違和感を感じた。

静かすぎる。Ｚ―ＢＬＵＥという敵対組織がターミナル・ベースに襲い掛かって来ているというのに、基地内部はまるで無人の様に静まり返っている。外では生け贄の様に差し向けられたギルターと複数の部下達が連中と戦闘を繰り広げている。

普通、敵に襲撃を掛けられたと言うのなら基地内部も慌ただしくなる筈だ。迎撃によ

る部隊編成、各々の機体の発進音、大小問わずその音というものは基地全体に伝わってくる筈だ。
　まるで外とは完全に隔離されたかの様な静寂、不気味とも呼べる異様な静けさにバルビエルは僅かばかり怖気を感じ、次に自身が向かう場所へと足を進める。
　開かれた空間、多くの兵士が通るときや資材を運ぶときに使われる大空間、その開かれた場所の中心に――――ソイツはいた。
「――――初めまして、今日は。突然の事で大変失礼致しますが、貴方に一つ訊ねたい事があります」
「な、に？」
「貴方の名前はバルビエル＝ザ＝ニードルで間違いありませんね？」
　白いコートに身を包み、蒼い仮面を被った男。その男が唐突に自分の事を訊ねてくる。一体何なんだコイツは、何でこんな奴が基地の中にいる。不穏と不可思議な出来事に戸惑うバルビエルだが、仮面の男の声にハッとあの時の事を思い出す。
　忘れもしない大気圏での攻防、あの時自分はまんまと一機のＭＳに出し抜かれた。その後も度々サイデリアルの前に現れては自分達を翻弄し、良いように虚仮にしてくれた最悪の魔人。
「何故僕の名を、まさか……きさ――――」

蒼のカリスマ、仮面の男の正体に気付いたバルビエルが懐から武器を取り出すよりも早く、魔人の拳がバルビエルの顔面に深々と突き刺さる。
「これは、お前の所為で自我を失った人達の分」
メキメキと軋む音とバキリと骨が折れる音が拳を通して伝わってくる。人体が破壊される嫌な感触を前に、魔人は仮面の奥で表情一つ変えずに拳を振り抜く。
勢いのままに吹き飛ぶバルビエル、体勢を立て直そうにもダメージが大きすぎる所為で、満足に視界も開かれない。
「そしてこれは、お前の所為で泣くことになったキャルちゃんの分」
静かに、淡々と吹き飛ぶバルビエルに追い付いた魔人は、今までバルビエルがしてきた報復とでも言うように拳や蹴りの雨を叩き付けた。
血を吐き、骨が砕かれ、顔は別人の様に腫れ上がっていく。軈てその場所が血に染まりきった所で、漸く魔人の手は一旦そこで止まった。
「どうした。やり返さないのか？　お前は恨みや憎しみで力を増していく怨嗟の魔蠍だろ？　こんなに好き放題されて、何も感じないのか？」
「ぎ、ぎざ、まぁっ！」
「不意打ちで腹が立ったか？　いきなりの強襲で反応が遅れたか？　言っておくがな、これでもお前がしてきた事に比べれば俺のはまだまだ優しい方だぞ？」

ここまで虚仮にされ、一方的に嬲られた事でバルビエルの怒りは頂点を突破している。よくもと、お前のような奴に、と。

しかし、仮面の奥から垣間見る瞳、その奥から感じられる感情にバルビエルは押し黙る。

〝怒り〟だ。今この男は自分に対して最大限の怒りを以て自分と相対している。完全なる感情の発露、しかしその純粋な怒りにバルビエルのスフィアの力が入り込む余地は何処にもなく、バルビエルはその視線に押し黙る。

首下を捕まれ、戦意を無くしていくバルビエル。抵抗する意識すら無くした彼に、しかし魔人は再び拳を放りあげようとした。

戦意を無くした？　戦う意志が無い？　それがどうした。そもそもこの戦いはお前達が一方的に仕掛けてきたのが始まりだろうが。

脳裏に浮かぶのは自分に泣いて謝るキヤルの顔だ。ゴメンねと、悔しそうに、悲しそうに謝るキヤルの無理して作った偽りの笑顔だ。

キタン、キヨウ、キノン、そしてキヤル達黒の兄妹は暗黒大陸時代で蒼のカリスマ――――シュウジが世話になった恩人達だ。その人達に手を出して、どうしてそのまま放っておける。

どうして兄貴分であるキタンの妹があんな目に遭ったのに、その張本人を許しておけ

る。シュウジは聖人でもなければ優れた人格者でもない、普通に感情を有する人間だ。
故に、この男は許さない。首を握り、拳で今一度その顔に叩き付けようとした時――
――。
「待ってください！」
第三者の声がシュウジの耳に入ってきた。
セツコ＝オハラ、ヒビキ＝カミシロ、そして西条鈴音と懐かしい面々がシュウジの横で待ったを掛けていた。随分と早かったなと関心する一方で、良いところで割って入られたと小さく舌を打つ。
これではバルビエルを討つ事ができない。それとも適当にあしらってコイツのスフィアだけでも抜き取ってやろうか。そう思考を巡らせていた時。
「っ！」
ふと、巨大な何かの気配を感じ取った。驚愕に目を見開くシュウジはバルビエルを解放してしまい背後を振り返る。
だが、そこには何もないただの空間が広がっていた。気の所為？　いや、そんな筈はない。
（あの方角、まさか……Ｚ―ＢＬＵＥにアイツ等みたいなのがいるのか？）
感覚からして思い付くのは、嘗て自分を嵌めて陥れた喜び野郎と、楽しみ女と怒りの

老人だ。だが、あの時の戦いで楽しみと怒りは屠った筈だ。
　では一体誰が？　僅かな動揺を見せるシュウジの視線の先にいるその者は……。
「あぁ、漸く見付けました。そこにいるのですね。私の魔人（ヒト）」
　まるで愛おしいモノを見つめるように、まるで楽しむモノを見ている様に、まるで憎い仇を睨むように、まるで悲しいものを慈しむ様に、翡翠の女は遠巻きにターミナル・ベースを捉えていた。

その１５８

翠の星、サイデリアルの重要拠点として建設されたターミナル・ベース。バルビエルという幹部の一人が支配するこの基地でＺ―ＢＬＵＥのカミシロ＝ヒビキは己の兄貴分であるシュウジと再会した。

しかし、その顔には自分の知るシュウジの気安い笑みではなく、感情の読めない仮面が張り付いている。蒼のカリスマ、蒼の地球で魔人と恐れられている存在がその認識を正しく反映された形で眼前に佇んでいた。

その手には自分達が敵として定めたサイデリアル――――もとい、皇国の幹部であるバルビエルが凄惨な格好で首下を握り締められている。

流石というべきか、自分達をこれまで幾度も窮地に追い込んできた敵の幹部をこうもあっさりと仕留めたその手腕と実力にヒビキは改めてシュウジの強さを実感した。

これで皇国側の戦力も落ちる。幹部の一人を捕まえた事で安堵するヒビキだが、拳を

握り締めて放とうとする蒼のカリスマにその目をギョッと目を剥かせた。
（まさかシュウジさん、バルビエルを殺す気なのか!?）
バルビエルには最早抵抗するだけの気力はない。血だらけとなり、項垂れるだけの案山子に成り果てた彼に魔人と呼ばれる男に反抗するだけの力は残されていない。
だが、魔人の方は未だにその手を収めるつもりはなく、このままでは間違いなくバルビエルは殺されてしまうだろう。確かにバルビエルはそれだけの事をしてきたし、ヒビキとしてもそれが奴の末路と言うのならそれも仕方の無い事だと割り切れる。
それに――――。
（もしかしてシュウジさん、怒っている?）
仮面を被り、表情こそは読み取れないがその上から滲み出る様に溢れる怒りという感情が魔人から読み取れた。怒っている。自分の兄貴分が敵対した時すら見せなかった怒りをバルビエルに向けて放っている。
一体何をしたら普段は温厚な彼が彼処まで怒りを露にできるのか、逆鱗に触れたバルビエルにヒビキは内心で黙祷を捧げていた時、同伴していたセツコ＝オハラが待ったの声を挙げる。
その時だ。セツコの呼び止める声に魔人が此方の存在に気付いたと同時に、さらに彼の視線の矛先が全く別方向に向けられる。一体どこに？　確かあの方角は自分達が

乗ってきたＺ―ＢＬＵＥの艦があるだけの筈だが――――――

「く、ソガァッ!!」

何かに気を取られ、拘束が弛んだ所をバルビエルは全身の力を使って魔人の手から逃れた。どれだけ打ちのめされようが腐ってもそこはスフィア保有者、フラフラと足取りは覚束無いがそれでもその目には先程とは違う憎悪が色濃く滲み出してきた。

「許さない、絶対に許さないぞ！　お前だけは、絶対に!!」

「先程まで借りてきた猫の様にグッタリとしていた癖に現金な奴だ。それとも、怨嗟の魔蠍のスフィアリアクターは単純な所が取り柄なのかな？」

殺意と憎悪に彩られた視線に晒されながらも尚煽ることを止めない蒼のカリスマ、その口調は何処か荒々しく、聞いているヒビキが寒気を感じるほどに冷たいモノだった。

「――――――非常に腹立だしいが認めよう。蒼のカリスマ、お前の力はスフィアリアクターである僕の力を遥かに上回っている。スフィアなんて持っていないくせに、なんてふざけた奴だ」

「そういうお前は嘘みたいに呆気ないな。怨嗟の魔蠍、恨みや憎悪によって増幅されたお前は周囲を巻き込む破壊者だと聞いてたが？」

「……」

蒼のカリスマの指摘にバルビエルは奥歯をギリギリと噛み締める。サイデリアルの

幹部である自分が何故こんな目に合っているのか、何故目の前の男がこれ程までに力を付けているのか、焦りと怒り、痛みと憎悪で感情が振り切れ掛けているバルビエルはそれらの感情を必死に抑えながらこの場から逃げる算段を企てていた。

が、そんなバルビエルの考えなどお見通しと言うように蒼のカリスマは一歩前に進む、足を一歩前に出す、それだけで凄まじい圧を感じたバルビエルは爆発しそうになる感情ごと押し潰される錯覚を覚え、踏み出した魔人に合わせて後退る。

バルビエルは気付いていない。既に己の心は目の前の魔人に折られているという事実に、痛め付けられた怒りや憎悪は折られた心に気付かない様にするための最後の防波堤の様なもの、今魔人が何かをすればその拍子にスフィアが奪われる程バルビエルは弱っていた。

無論、蒼のカリスマことシュウジはそんなバルビエルの様子など気付いてはいない。

――――否、知った所で彼がするべきことは何も変わらない。弱っていようと死にかけていようと報いを受けさせようと決めた以上、余程の事が無い限りシュウジはその振り上げた拳を収めようとしないだろう。

進退窮まった。逃げ場もなく、逃げられる算段も立てられないバルビエル、迫り来る魔人の歩みに圧され、とうとう壁際に追い込まれた彼はその顔に幾つもの大粒の汗を張り付けさせていた。

「――――――待ってください」
そんな時だ。セツコが魔人とバルビエルの間に入り、バルビエルを庇うように両手を広げた。
「……何のつもりです？」
「蒼のカリスマ……いいえ、シュウジ＝シラカワさん。お願いです、どうかここは私に預からせて下さい」
「お断りします」
懇願するように頼み込むセツコの言葉をシュウジは即答で返す。
「貴方が何故バルビエルにそれほどの怒りを抱いているのかは分かりません。きっと私では計り知れない事情を持っているのでしょう。そして私ではそんな貴方を止められる言葉を持ち合わせてはいません」
「……」
「でも、それらを踏まえて敢えて私の言葉を聞き入れて欲しい。お願いします、どうか私に彼と話をさせる最後のチャンスを下さい」
セツコ＝オハラはこれまで何度もバルビエルから命を狙われ、卑劣な手段とやり口で自分の心を折ろうと画策してきた。
他のＺ―ＢＬＵＥの面々もバルビエルに対して怒りは募らせている。この男の所為

で国を焼かれ、人々の心を壊し、大勢の人間を傷付けてきた。それをまるで正当な権利であると主張するように。

蒼のカリスマの抱く怒り、恐らくはＺ―ＢＬＵＥの多くが共感できる思いだろう。しかし、だからこそ彼一人に任せる訳には行かないのだ。

バルビエルの処遇に関しては自分達全員で決めるべきだ。捕虜にして情報を引き出すか、それとも然るべき所に連れて幽閉させるか、彼のその後を決めるのはそれからで十分の筈、言葉や言い方を変えて以上の事をセツコは目の前の魔人に伝える。

それを聞いたシュウジはセツコを意外にも優しく甘い女性だと感じた。芯は強く、戦いにおいては容赦を無くす彼女は正しく軍人気質の人間だと言える。冷静沈着で視野の広い女性、それがシュウジの抱くセツコ＝オハラの印象だった。

しかし、スフィアという要素がセツコ＝オハラの印象を少しばかり変えてしまう。恐らく悲しみの乙女であるセツコは憎しみを司るバルビエルのスフィアと何らかの相互関係にあるのだろう。揺れる天秤と尽きぬ水瓶や傷だらけの獅子と欲深な金牛の様に恐らくこの二人もスフィアによる干渉を受けていて互いに無視できない関係になっているのだろう。

厄介な性質だ。いや、この場合はセツコ＝オハラという人格も関係しているのだろう。どうにか言葉を変えて自分を納得させようとしている当たり、相当バルビエルの事

を気に掛けているのは目に見えて分かる。
それに彼女の言い分にも分からない事もない。バルビエルは自分に対してだけでなく多くの人達を巻き込んできた事がある。この男に復讐してやりたいと願っているのは自分だけではない。そう言われてしまうと少しばかり考えてしまう。
本来ならバルビエルに仕返しを目論む人達にも納得して貰うような凄惨な仕置きを考えていたのに、ここへ至ってそれも萎えてしまった。壁に寄り掛かる様に座り込み、項垂れているバルビエルを見てセツコの言い分を聞いてみようかと思ったその時――。
「僕を、俺を、バルビエル＝ザ＝ニードルを、見下すなァァァァっ!!」
鼬の最後っ屁宜しく、バルビエルの発するスフィアの力がその場一体を包み込んだ。

◇

δ月δ日

してやられた。先日の出来事はこの一言に尽きるだろう。セツコちゃんの言うことを考えて改めようかと思ってた自分が少しばかり甘かった様だ。

バルビエルの野郎、最後にスフィアの力で憎悪を促進させるウイルス見たいなモノをばら蒔いた瞬間体を引き摺らせて逃げやがった。まぁスフィアの力自体はセツコちゃんのスフィアで相殺したからヒビキ君は何ともないからその時は良かったと思ったんだけど、問題は其処から始まった。

西条鈴音さん、ヒビキ君や宗介君達が通う陣代高校の教育実習生の人だったのだけど、何故か彼女だけがスフィアの影響を受けて凶暴化してしまったようなのだ。

ウイルスは遅効性のモノだったのか、自分とヒビキ君達が別れて暫く経った後に効果が現れ、彼女はジェニオンから降りてサイデリアルの連中と共に何処かへ雲隠れしてしまった。

この時の自分は先も述べた様に既にヒビキ君達から離れて行動してたし、止めに行こうにも既に遅かった。

……やはり、残酷だろうとあの時にバルビエルを仕留めるべきだったか。後悔ばかりが募るが起きてしまった事は仕方がない。ヒビキ君とマトモに会話出来ていない

事や彼等の今後の事など考えるべき事は山ほどあるが、対応出来るところから順に答えていくしかない。

それにあのとき感じた奇妙な感覚、恐らくはあの怒り野郎や楽しみ女と同じ超常の存在が近くにいたのだろう。それも多分Ｚ―ＢＬＵＥの皆の所のすぐ近くに。

喜び野郎の時を思い出し暫くは彼等との接触を控えようと直ぐ様あの基地から離脱したが……やれやれ、問題は山積みだ。

真化融合を経て、少しは片付けられると思っていた問題がここへ来て急に増えてきた。やはりどんなに力を得ても人は人、今後も下手に慢心しないで気を引き締めていこうと思う。

と、ここまでは反省として書いておくとしてここからは嬉しい誤算について語ろうと思う。事の発端は自分がヒビキ君達から別れて基地を離脱した所から始まる。大破したサイデリアルの機体から必死に逃げ惑うサイデリアルの指揮官を捕獲出来たのだ。

一見すればただの量産型にしか見えない機体、しかしそこから這いずるように出てくる現れる奴の姿に自分は驚くと同時に納得した。奴の用意周到さと用心深さを考えれば当然の策略だ。

ここまで伝えれば分かるだろう。運良く捕獲出来たのだ奴の事を、これから自分の陣営に引き込むための交渉に向かおうと思う。奴が此方に寝返れば相当な戦力の向上に

繋がるだろう。……まぁ、自分とグランゾンしかいないけどさ。
ともあれここからが正念場だ。バルビエルに引導を渡す事は出来なかったが、それを補って有り余る人材を確保しようというのだ。下手にテンションを上げず、真剣に取り組もうと思う。

（わ、私は一体どうなってしまうのだろう）
人気の無い廃屋の一室で手足を縛られた男、ギルター＝ベローネは焦りと恐怖にその思考を埋め尽くされていた。
度重なる失態と敗北、Ｚ―ＢＬＵＥという疫病に関わってから私の栄光の架け橋は脆くも崩れ去ってしまった。既に部隊の中に私の居場所は無く与えられる機体も動けないがらくたの様な機体ばかり。

事実上、既に私は死兵の様な扱いなのだろう。地位も失い、立場も無くなった私はサイデリアルにとって最早いないモノと同然。

それでも死にたくないと無様に足掻き、運良く生き延びた私は鉄屑となった機体から這い出るように抜け出した。一命を取り留め、生き長らえた私は唐突に訪れた自由と生に酔いしれた。これでもう私を追い詰めるものはいない、これで私は自由の身だと、撤退していく我が軍とＺ―ＢＬＵＥに私は歓喜の雄叫びを挙げた。

これからは安寧に、慎ましく生きていこう。これまでの自分の悪行に目を瞑りながら人知れず生きていこう、それが私に残されたささやかな幸せなのだと自分に言い聞かせながらその場から離れようとして――――――。

奴に出会した。

「おや、起きていましたか。これは都合がいい。（起こす）手間が省くというモノです」

「っ!?」

ギィッと音を立てて扉の向こうから現れる仮面の男に私は一瞬心臓の音が止まるのを感じた。

手間、手間とはなんだ？　ま、まさか、この私を拷問に掛けるつもりか!?

混乱と恐怖に怯える私を愉快に思ったのか、目の前の仮面の男はクククと嗤いながら此方に歩み寄ってくる。

「流石はサイデリアル随一の智将、そうまでして自分の所属組織を庇い立てますか」
　目の前の仮面の男は私を今の立場まで落とし込めた張本人、私を辱しめ、追い立て、追い詰めた憎い仇の筈。しかし、怒りよりも恐怖が、恐怖よりも絶望が私の胸中を襲い、言葉も挙動も制限していく。
「圧倒的不利な状況にも関わらず沈黙を保つその度胸、作戦を立てる時と違い寡黙な人なんですね。……いや、成る程だからこそ智将足り得るわけですか」
　仮面の男、魔人が何かを言っているがその全てが耳に入ってこない。今自分の頭にあるのは生きたいという純粋な願いだけだ。
（頼む、見逃してくれぇ！　もう私には何もないんだ。もうお前達の前には現れない、だから頼む。見逃してくれぇ!!）
　緊張と恐怖、絶望で言葉も発せられない私は黙って頭を下げることしか出来なかった。一秒か、一分か、はたまたもっと長い時間が経過したのか、いい加減何か反応して欲しいとゆっくり顔を挙げようとした時。
「……まさか、仲間を売りたくないが為に自ら首を差し出してくるとは、どうやら私はあなたの事を未だ見くびっていた様です」
「――――はい？」
「分かりました。ならば私もしつこくは問いません。もし貴方が私の願いを聞き入れな

いのであれば貴方の覚悟に応える為その首を切り落としましょう」

え？　え？　なに？　ちょっと、え？

「ではギルター＝ベローネ、誇り高い貴方に一度だけ問います。その知力を生かす為、私の下でその力を振るうつもりはありませんか？」

なんで？　なんでどうしてこうなった？　私はただ命乞いをしただけ、なのになんでこんなことになった？

噛み合わない話の内容、混乱する私の脳にあるのはたった一つのシンプルな答え。

従わなければ殺される。話の内容的に頷かなければ首がポーンされギルターがギ／ルターにされてしまう事を悟った私は静かに頷く事しか出来なかった。

平穏な生活、この男に関わった事でそれが宇宙の彼方にすっ飛んだ様な気がした。

その１５９

――蒼のカリスマが生きていた。これ迄半信半疑で曖昧としていた情報、それが前回のヒビキ達の報告とターミナル・ベース攻略の際に得た情報で確定と断定したＺ―ＢＬＵＥは、ターミナル・ベースで救出したオルソンと共にこれからの行動について話し合っていた。

「蒼のカリスマが生きていたか」

「頼もしい味方が出来たと喜ぶべきか、厄介な奴が出てきたと頭を抱えるべきか」

「判断に悩むね」

これからの自分達の行動を決めるべく、各艦長達がマクロス・クォーターのブリッジで協議を行っている最中、格納庫に待機しているパイロット達は感慨深そうに各々の思惑を吐露していた。

ガンダムマイスターであるロックオン、アレルヤ、ティエリアもその例に漏れず、特に破界事変の頃から魔人のその異質さを目の当たりにしてきた彼等にとって、蒼のカリ

スマの復活は複雑な内容だった。
特に当時のティエリアにとって、蒼のカリスマの存在は化け物染みていた。此方の行く先々にその姿を表し、場合によっては介入してくる。ヴェーダにも解析不能とされてきた蒼のカリスマの動きは、ティエリアにとって天災の様なイメージを受けていた。
「けど、なんだろうな。不思議と怒りとか憎しみとか感じさせないよな。普通敵対した奴が生きてると知ればこの野郎！　みたいに少なからず思ったりするもんだが……」
「僕も……かな。流石に最初聞いた時は驚いたけどね」
「そうだな。僕も二人と似たような感想だな。尤も、妙な嫌悪感はあったが」
それは言葉にすれば台所に突如現れた黒いGを目の当たりにしたような「うげっ!?」という感覚、以前は蒼のカリスマと耳にする度にまたあいつかと苦虫を噛み潰した様な表情になるティエリア、その事を思えば随分柔らかくなったとアレルヤは苦笑う。
時獄戦役の終盤、アンチスパイラルの本拠地である隔絶宇宙で行われた、蒼のカリスマとその愛機グランゾンとの最終決戦。
突然の裏切り、最初から味方ではないと断じる蒼のカリスマに誰もが戸惑い、憤慨した。しかし、何故か憎いとは思わなかった。思えるだけの材料が無かった。
突然過ぎたのもそうだが、自分達と敵対してきた理由が余りにも不明瞭だった。自分

達が成長するのを待っていたとか、アンチスパイラルを倒すために必要な橋渡しだったとか、それらしい事は口にしても、確信と呼べるものは何一つ語らなかった。

その事に対する違和感もそうだが、何よりアムロやカミーユという、ニュータイプの中でも人の機微に対し鋭い感受性を持つ二人が、蒼のカリスマに何か異変が起きたのではないかと仮説を立てているのが大きい。破界事変から何だかんだと関係を続けていた蒼のカリスマ――――シュウジ＝シラカワの人となりも、紅月カレンやヨーコ＝リットナーから聞かされている。

他にも、彼と一時期行動を共にしたルルーシュやスザク、Ｃ．Ｃ．や、今ではアクエリオンパイロットの一人となったジン＝ムソウも、彼の人格について殆ど同じ評価を下している。

曰く、一般人の皮を被った怪物。人の人格評価にしてはあんまりな話だが、しかしその内容は決して悪いものではない。突拍子もなく、やること成すこと通常の人の範疇を大きく外れているが、基本的には善人であり、価値観はともかくその感覚は、間違いなく普通の人間のソレであることを決定付けていると。

ならば何故自分達とわざわざ敵対したのか、それとも敵対せざるをえない理由があったのか、仮説は立てても確証を得ることが儘ならない現状は、今彼の事情を最も知っている筈だろうＣ．Ｃ．の言葉を待つ他無い。

「しかし、そのC・C・も今は頑なに口を閉じている」
「あのお嬢さんは蒼のカリスマに負けず劣らず不思議な所があるからなぁ、いつ口を開くのか分からねぇぞ?」
「だとしても待つ他無いよ」
アレルヤの言葉に「分かってるよ」と短く返すロックオン、分かっていながら待つしかない現状に、少しばかり落ち着きが無くなっていた。
辺りを見渡せば、誰も彼もが蒼のカリスマの話題で盛り上がっている。未だ蒼のカリスマを危険視する者がいれば、そんなことはないと少数ながら熱弁する者もいる。蒼のカリスマと面識を持たない者達はその人物像に恐れ、畏怖を覚えていたりしている。
キリコやヒイロはそもそも話題に興味がないのか、黙々と自身の機体の整備を行っている。不安があるのなら動くしかない、そう背中で物語る二人に少しばかり出歯亀根性が過ぎたなと反省したロックオンは、溜め息を吐きながら己の機体へと戻った。
「……そう言えば、サクヤはどうした?　いつもこの時間は彼女が差し入れを持ってきてくれたのに、今日は来ていないのか?」
「なんだいロックオン、木星に彼女がいるのに心変わりかい?」
「まったく、ちょっかいをかけるのも程ほどにしておくんだぞ?」
「ちょ、違うから、そんなんじゃないから」

ふと感じた違和感、口にした途端ティエリア達からのからかいに反論するも、二人は聞く耳を持たずに己の機体へ戻っていく。
自分の話を聞かない二人に若干拗ねるロックオン、既に彼の違和感は消えてなくなっていた。

◇

「それで、私に何のご用です？　Ｃ．Ｃ．さん？」
人気の無くなった通路、誰も近付かないであろうその場所で、Ｃ．Ｃ．はサクヤに対し無言で銃を突き付ける。
「正直に話せ、貴様……何者だ？」

話さなければ引き金を引く。普段の彼女とは違う本気の眼差し、そこには一切の冗談はなく、彼女の瞳には確かな敵意があった。

C．C．から発せられる本気の殺意、しかし目の前の女性はそんな彼女を前に平静でいながら、その口元を三日月の形に歪めるのだった。

その１６０

「私が何者か、ですか？」
人気の無い通路、その突き当たりの場所でサクヤはＣ．Ｃ．に銃口を突き付けられていた。敵意、猜疑心、Ｃ．Ｃ．の瞳にはサクヤに対し一切の信頼を見せてはいない。Ｃ．Ｃ．は目の前にいる丸腰の女性に対し、殺意に近い感情を抱いている。
対するサクヤは銃口を向けられていながら、怯えるどころか動揺の一つも見せてはいない。まるで銃口を向けるＣ．Ｃ．を脅威と認識していないように、強がっている子供に向ける様な慈愛の笑みを浮かべている。
「あぁ、以前から薄々と気付いてはいたが、今のお前の笑みで確信したよ。お前、普通じゃないな。それもトンでもなく厄介な部類の」
敵意を、殺意を向けても笑みを浮かべるサクヤにＣ．Ｃ．は戸惑いを通り越して怖気を感じていた。サクヤの笑みを綺麗と感じる者はいるだろう、美しいと感動する者もいるだろう。事実、彼女は万人が認める美貌の容姿の持ち主、サクヤの容姿には既にＺ―ＢＬＵＥの多くの面々が男女問わず見惚れている。

しかし、そんな彼女の微笑みをＣ．Ｃ．は悍しいモノに見えた。感情が有る無しではない、彼女の微笑みは何に対しても同じ笑みを浮かべられているのだ。

他人が喜んでいる時も、他人が泣いている時も、悲しんでいる時も、怒っている時も、そして死んでいる時も、彼女は同じ顔で同じ笑みを浮かべていたのだ。

Ｃ．Ｃ．が疑問に思ったのはサイデリアルとある戦いを終えた時の事、不運にも戦いに巻き込まれ、飼い猫を亡くした子供に会った時の事だ。泣きじゃくる子供を前にサクヤは笑顔で諭した。家族同然と思っているのなら最期まで家族として埋葬してあげましょうと、聖女の如く慈愛の笑みを浮かべるサクヤにその場にいた住民は誰もが彼女に共感した。

その場に居合わせたＺ―ＢＬＵＥの多くの面々もサクヤに感激したりと感情を顕にしていた。しかし、Ｃ．Ｃ．は何故かそれが歪なモノに見えた。

人の感情は千差万別、多種多様の色合いを見せるもの、それなのにサクヤの感情は千差万別と言うには余りにも少なすぎた。

人を諭す彼女の笑みには怒りが見えた。人を慰める彼女の笑みには楽しさが見えた。人が努力し、奮闘している姿を見て微笑む彼女の笑みには憐れむような哀しみが透けて見えた。

彼女の向ける笑みには対象が無い。だからこそサクヤの笑みは万人に向けられる。

何故なら彼女の笑みは最初から人に向けられるモノではないのだから。
　人としては余りにも不自然で、それでいて逸脱しているサクヤ、そこから感じられるモノは、以前シュウジに触れた際にＣ．Ｃ．が感知した呪いに酷似していて――――。
「答えろ。お前の目的は何だ？　何故私達に近付いた」
　故に、Ｃ．Ｃ．は直ぐにこの女をどうにかする事を決断した。もし目の前の女がシュウジが危険視している奴と同類の存在なら、この艦に――――Ｚ―ＢＬＵＥに置いておくのは危険すぎる。
　引き出せる情報が無いのなら、直ぐにでも脳天に風穴を開けて艦から放り投げるまで。Ｚ―ＢＬＵＥからは酷く追求されて非難されるだろうが、最悪の事態に陥るよりは何倍も良い。
　――――サクヤは何も変わらない。相変わらず見蕩れる様な笑みを浮かべているだけ、だったら此方もソレなりの対応をしようと、引き金に掛けた指に力を込めた時。
「あぁ、成る程、貴方は彼の……シュウジ＝シラカワの大切な人なのですね」
「なに？　――――っ!?」
　瞬間、５ｍは離れていたサクヤとＣ．Ｃ．の距離はいつの間にかゼロにされ、銃を握り締められていた。Ｃ．Ｃ．はこれまでソレなりの修羅場を潜り抜け、力を付け、今はＺ―ＢＬＵＥの戦力の一つとしてその席に腰を下ろしている。

そんな彼女が知覚出来ない間に、サクヤはC．C．の間合いに入り込んでいた。一瞬の出来事に驚愕するC．C．、しかしそれならばと引き金を引いて撃とうとした瞬間、彼女が手にしていた拳銃はドロリと液体化し、ビチャリと床に落ちた。

物体の突然の液体化に今度こそ驚愕したC．C．は、その表情を真っ青にしながらその場から跳躍して遠ざかる。戸惑いと焦り、そして不安に染まり始めるC．C．を見て、サクヤはやはりあの微笑みを浮かべる。

「やはり、ここに来て良かった。僅かな情報を得てZ―BLUEに近付いた甲斐がありました」

この時、C．C．は初めてサクヤの笑みを見た気がする。歪みに歪み、ドロドロと濁りきった瞳を晒して伽藍堂の笑みを浮かべている。本性というには余りにも醜悪、正体と言うには余りにも歪んでいる彼女に今度こそC．C．は戦慄する。歪んでいく周囲の空間、液体化した拳銃だったモノはサクヤの胎（ナカ）へと消えていく。

「貴方を消したら、あの方は悲しむでしょう。怒り狂う事でしょう。太極に至り、その深淵へと進む彼の者は総てを消して尚止まらないでしょう。しかし、それでも私は成さねばなりません。嘗ての同胞の、楽しみの、怒りの代行者として彼に天罰を下さねばなりません」

天を仰ぎ淡々と語るサクヤ、歪んでいく空間はその侵食を早め、内側からマクロス・

クォーターを呑み込もうとしている。
『そう、我等こそが天の遣い。総てを識り、総てを見据え、遍く世界を守る守護者にして至高の神の代弁者である』
　サクヤの内側から何かが生まれようとしていた。哀しみを、怒りを、楽しみを、彼女の備えた感情が絶頂（ビーク）を迎えようとした時。
「あ、Ｃ．Ｃ．さん、サクヤさん、こんな所にいたんですか」
「っ!?」
　唐突に聞こえてきた第三者の声、振り返ればユニコーンガンダムのパイロットであるバナージ＝リンクスが、こちらに向かって駆け寄ってきていた。
　来るな。そう叫ぼうにも声が出ない。圧倒的存在に魂ごと鷲掴みにされた様な感覚に陥ったＣ．Ｃ．は、駆け寄ってくるバナージに逃げろと視線で訴える事しか出来なかった。
　汗だくで、酷く憔悴し切ったＣ．Ｃ．に不思議に思ったバナージは足を止める。どうしたのだろう。彼女らしからぬ姿に戸惑うも――――。
「バナージさん、私に何かご用がありましたか？」
「え？　あ、はい。サクヤさんの姿が見えなかったから皆心配してたので……そろそろ次の作戦が始まりそうでしたし、一応声を掛けておこうかと」

「あらあらまぁまぁ、それはお手数をお掛けして申し訳ありません。実はその……迷ってしまって、通信で誰かに助けを求めようかと考えたのですが、皆さんも忙しい様でしたので……」
「あぁ、そうでしたか。確かに複雑ですもんね、マクロス・クォーターは」
「はい。でもC・C・さんにこうして見付けて貰いましたので問題は無いかと思います。バナージさん、重ね重ね、ご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした」
頭を下げ、謝罪をしてくるサクヤには先程までの狂気は感じられなかった。
「あ、頭を上げてください。大丈夫です。皆分かってくれますから。兎に角サクヤさんの事は僕から話しておきますので、サクヤさんは自室で待機してください」
「はい、分かりました」
そう言い残し、立ち去っていくバナージ。ニュータイプとして感受性の高い彼がサクヤに対してあの反応と言うことは、アムロやカミーユでもサクヤの内側に眠るあの狂気に気付くことは難しいだろう。
既にサクヤには先程までの狂気は微塵も無く、今C・C・の前には誰もが見惚れる美貌を持った美しき女性が佇んでいる。まるで、先程までの出来事が悪い夢であったように――――。
「ふふ、それではC・C・さん。ごきげんよう。――――貴方を頂く日を、楽しみにして

ますね」
　微笑みながらすれ違い様に口にするその一言に再び怖気を覚えたＣ．Ｃ．は飛び退く。しかしそこには既にサクヤの姿は何処にも無く、嫌な沈黙だけがそこにあった。
「くそ、まさかあんな怪物に狙われるとはな。恨むぞシュウジ」
　壁に寄り掛かるＣ．Ｃ．、あの怪物を生み出した原因とされる魔人に愚痴を溢しながらマクロス・クォーターの天井を仰ぐ。
　けれど彼女は気付いていない。己の望みを理解しておきながら生きている自分に安堵している事を……。Ｃ．Ｃ．は、その矛盾に気付かない。

　その頃、蒼のカリスマことシュウジ＝シラカワは――――――。
「成る程、グランゾンではなく敢えて鹵獲した敵側の機体を使用して敵陣を突破する。ですか。サイデリアルの撹乱と混乱を引き起こしながら同士討ちを狙うとは、流石ギルター＝ベローネ、考えることがえげつない」
「ち、違う！　私は別にこんな事をしたかった訳では……た、助けてくれぇぇぇっ

!!」

捕虜にした知将（ボッチ視点）と共に戦場を駆け巡っていたのでした。

その１６１

ギルター＝ベローネ、それはいつの日か世界を統べ、星間連合サイデリアルの頂点の座に付きこの宇宙の全てを支配しようと目論んでいた偉大なる知将、その大いなる真名である。

翠と蒼、それぞれの地球を制圧し、Ｚ―ＢＬＵＥを打ち倒し、傲慢なる幹部たちを退け、偉大なる皇帝陛下からその玉座を戴く者――――それが、この私ギルター＝ベローネである。

宇宙の全てが私に頭を垂れ、跪き、私にひれ伏す。私に戦き、私に怯え、崇め、奉る。それが私に支配される事の喜びであり、至上の至福なのだ。

逆らうものには死を、従順なる者には至福の隷属を、それがこの多元宇宙における絶対の法であり、何物にも勝る理なのだ。

……なんて、一度でも考えた私への罰なのだろうか？　幾度と無く作戦を台無し

にしてきた私に対する天からの報復なのか？　どちらにしても今私に出来る事は何もない。ただ、私に許されたのは。

「フムフム。成る程成る程、一見無茶苦茶な作戦内容ですがその真理を探ろうとするならば強ち間違ってもいませんね。私が単独で基地内部に潜入し、撹乱、陽動を行いその間に貴方が捕まった人達の救出を行う。そしてその裏で私はサイデリアルの技術を盗み、そこから奴等の目論みを看破する。やれやれ、相変わらずヘビーな作戦ですね」

ちげぇよ。そんなんじゃねぇよ。これはただ適当に書き殴り、適当に文章を繋げただけの落書きだ。こんなモノは作戦でも何でもない。ただの自殺願書だ。

しかし、そんな事を幾ら思っても決して口には出せない。何故ならば目の前の男はこう言った私の作戦とも呼べない作戦を既に何度も完遂しているのだ。しかも、私の予想を遥かに超えた戦果を拵えて。

奴の手で幾つもの我がサイデリアルの拠点が陥落した。機動兵器を用いず、例の魔神も呼び出さず、単独で、生身で、多くの銃器と機動兵器が置かれている基地を静かに制圧していく。

規格外の化け物、我々サイデリアルは喧嘩を売る相手を間違えた。そう思わずにはいられない魔人の圧倒的過ぎる力、こんなん相手にどうすりゃあいいねん。そんなよく分からない言語を内心で呟きながら……。

「ですがやり遂げて見せましょう。この程度の関門を潜り抜けなければ貴方を引き込んだ意味が無い。さぁ、行きましょうか」

嗚呼、今日も今日とて地獄を見るのか。これから自身に訪れる災厄を思うと……死にたくなる。

いっそ誰か楽にしてくれないかなぁ、あはは。

そんな私、ギルター＝ベローネの願いは永劫に来ることは無かった。

◇

ギル月ター日

あの日、私が奴の脅しに屈して奴――――蒼のカリスマと行動を共にして数日、私は奴のその異常性に絶句した。

奴は死ぬことを恐れない。進行方向にサイデリアルの拠点を見付ければ当然の如く潜入し、瞬く間に制圧してしまう。必要以上の血を流さず、外に警戒に出ている兵士達

に全く気付かれずに……。

思えばここで奴の事を皆に話すべきだった。蒼のカリスマが潜入しているぞと、声を大にして彼等に教えてやるべきだった。そうすれば私は蒼のカリスマを追い詰めた功労者として再びサイデリアルのお抱えになれた筈。

しかし、そんな私の願いは瞬く間に崩壊する。奴が基地に潜入して十分弱、漸く侵入者に気付いた兵士が機動兵器を使って基地に戻ろうとした時だ。

妙な着ぐるみを着た何者かが、突然爆発する基地から飛び出し機動兵器に殴りかかったのだ。相手は末端とは言えサイデリアルの機動兵器、着ぐるみの……それもクマだかネズミだか良く分からんユルフワなお惚け着ぐるみ風情が敵う筈がない。そう、思っていた。

繰り出される拳と蹴り、着ぐるみの放つ打撃は機動兵器の脆い部分を的確に打ち抜き、行動不能にして撃破していく。ユルフワな着ぐるみが巨大兵器を蹂躙する。そんな下手なホラーよりも恐ろしい光景に連携の取れなくなった兵士達は立ち所に瓦解し、着ぐるみに全滅させられた。

逃げれば良かった。しかし、震える足では満足に動かす事は出来ず、全て片付けて私に近付いてくる着ぐるみに私は為す術がなかった。

そして、「やぁ」と気軽に挨拶をしながら着ぐるみを脱いでその姿を露にする蒼のカリ

スマに私は今度こそ確信する。私がこの怪物から逃げ出す事は不可能なのだと。

誰か、助けてくれ。

ギル月ベル日

私にはもう、逃げ場はない。先日蒼のカリスマが私の存在は此方が預かっているという一言に私は野に逃げ果てる処か味方であった筈のサイデリアルにさえ狙われるようになった。

それはつい昨日の事、偶々立ち寄った町で珍しく酒にありつけた私が酔いの勢いで溢してしまった本音が原因だった。

私は、誰かに認めて欲しかっただけなんだ。自分という存在を、誰かに、僅かでも、ほんの少しでいいから必要とされたかったんだ。

酒に溺れ、ふと溢れた私の本音。あぁ、この程度の幸福で満足できたのだと、今更ながら思い知った私はこの時感極まって泣きそうになった。

そんな時だ。奴は私に次の行動の指針とその詳しい内容を訊ねてきた今更何だと、そんな私の疑問にも答えず、ただ次はどうすればいいと聞いてきた。

目の前にいる男こそが私をここまで追い詰めた元凶だというのに、今は何故か私に此れからの事を尋ねてくる。知るか、全てはお前が原因なのにどうして私が助言をしなけ

ればならないのだ。

とはいえ、このまま奴に好き放題にされるのも癪に障る。これまでの憂さ晴らしも含め今度こそ殺してやるという意気込みを込めて私は奴にある一つの作戦を提案した。

それは、言い換えれば死刑宣告。遠回しに死んでこいと言う作戦とも呼べない暴挙だった。潜入する基地、その場所以外規模も配置された人名の数も何一つ分からず、更にはいる筈の無い人質の救出という出鱈目な作戦を奴に叩き付けてやった出来るものならやってみるがいい、挑発を込めてそう言い放ってやった。

ザマァミロと、黙する奴に私は痛快な気持ちになった。しかし、それから時間もおかず奴は基地へと向かい、いないと思われていた人質を救出し、おまけに基地を制圧してきた。

開いた口が閉じれなくなった。近くのコンビニに足を運ぶ気安さで、この化け物は一つの基地を制圧してみせやがった。何故思い出さなかった。目の前のコイツは生身で機動兵器を圧倒するんだぞ！

あ、因みに人質にされた女性は何でもサイデリアルに慰み物として献上という名の略奪でこれまで基地内部で監禁されていたのだとか。マジでか。それが、今回私の作戦で救われたと解釈され、私はその女性からありがとうと礼を言われた。

……いつ以来だろう。ありがとうなんて言われたのは。　誰かに感謝をされた

のは、こんな気持ちになれたのは。
もしかしたら、私が本当に望んでいたのはこれなのかもしれない。それならこの怪物に付き合うのも悪くはないのかもしれない。

ギル月ベローネ日
前言撤回！　この蒼スマ野郎やっぱりとんでもない怪物だった！
前回私が行った作戦で完遂したと言われる作戦、その事をあの野郎、翠の地球にあるサイデリアルの拠点基地に私の事を暴露しやがった!!
あぁ、確かに私は誰かに認めて貰ったさ。必要とされたかったさ!!　けどさぁ、こんな事全然望んでいなかったんだよぉ。
なんだよあれぇ、あれじゃあどうみても宣戦布告だろう。何が彼の妙策に気を付けるが良いだ。それ実行してるのお前だろう！　何で私が狙われる様な言い方をするんだ。
これでバカにしてきた奴等に見返してやれる？　いらねぇよそんな気の使い方！
頭おかしいんじゃないのか!?　そんなんだから蒼の地球でなまはげとかいう化け物扱いされるんだよ！
……なんて、力強く言い返す事なんて出来る筈もなく、今日も私はこの出鱈目な化け物に付いていくしかないのであった。

嗚呼、これが私がしてきた事への罰なのか。もし神様と言うのが存在しているのなら、きっとソイツは私の事が嫌いに違いない。
私だって嫌いだよバーカ!!
はぁ、いつか、私に安寧の時は訪れるのだろうか。
誰か、助けてくれくれ……。

ギルター＝ベローネ、サイデリアルの知将と呼ばれる彼に果たして安らぎの時は来るのだろうか。
（絶対に）ないです。

その１６２

　オペレーション・エクリプス。それはＺ―ＢＬＵＥによる、翠の地球を支配するサイデリアルへの反抗作戦。これまでの戦いの中で得られた仲間達と共に遂行される大きな作戦、部隊を二つに分け、それぞれ中央大陸と残されの海へ向かった一行だが、その作戦行動の最中、ある奇妙な噂を耳にする。
　なんと、Ｚ―ＢＬＵＥを様々な卑劣な作戦で貶めて追い詰めようとした、サイデリアルの自称知将のギルター＝ベローネが、サイデリアルを裏切ったというのだ。
　典型的小物で自己保身と顕示欲にまみれ、サイデリアルという虎の威を借りる事しか能がないギルター、そんな奴が何故今になってサイデリアルを裏切るのか、失敗続きで最近は影も形も無かったギルターが遂に自棄を起こしたのかと、誰もが最初はそう思った。
　しかし、奴が関わったとされるレジスタンスはその作戦の悉くを成功に納めている。局地的基地の制圧、人質の無血解放、更には基地の損害を最小限に食い止め、サイデリアルの機動兵器を基地丸ごと略奪に成功している。

戦術予報士であるスメラギや元黒の騎士団総帥のゼロ、傭兵組織ミスリルの指揮官でありダナンの艦長であるテスタロッサ、彼等はその作戦を成功に導くには多大な労力が必要と断じている。

Ｚ―ＢＬＵＥの中でも軍師の役割を担う彼等が口を揃えてそう言うので、もしかしたら何か間違って伝わっている誤情報なのではないかとも考えられた。しかし、実際に制圧された基地を目の当たりにして、中央大陸組はちょっとしたパニックに陥った。

何故ギルターはサイデリアルを裏切ったのか、分からない事は多々あるし、納得出来ない部分も多い。もしかしたらこれまで恥将ぶっていたのはフェイクで、本当はサイデリアルに反旗を翻そうと虎視眈々と狙っていたのかもしれない。そんな微粒子レベルで存在するかどうか分からない可能性すら出てきたギルターへの試行錯誤の考察は、残されの海に向かったもう片方のＺ―ＢＬＵＥの情報によって彼方へと吹き飛んでいく。

何でも、これまでクジライカという残されの海に生息される生物は、レドがこれまで敵対してきたヒディアーズであると判明、人類銀河同盟の兵士で宿敵と再会したレドは、即刻クジライカなるヒディアーズを殲滅しようと動き出した。

しかし、そんなレドの暴挙を彼に想いを寄せるエイミーが止め、Ｚ―ＢＬＵＥの面々も取り敢えず様子を見ようとレドに制止を呼び掛けた。彼等の言葉に渋々と言った様子でレドは一先ずクジライカの殲滅を止めるが、妥協案としてクジライカの生息する海

域の調査を進言した。
ヒディアーズと類似するクジライカ、レド少尉が混同する程に両種族は似ていて、銀河の中心部でヒディアーズと実際に遭遇した他のＺ―ＢＬＵＥの面々も気にしている事から、残されの海のまとめ役であるジェフリー艦長は、戦闘の禁止を条件に許可を出した。
クジライカの後を辿り、その先で巣を見付けたレド。クジライカを刺激しない程度に巣へ侵入したレドはそこでクジライカの……ヒディアーズの起源を知る。
そこでヒディアーズが元々は人類が進化した姿であると知ったレドは自らの戦う意味を失い、戦意を喪失した。対して彼の愛機であるチェインバーは、本能のまま動くヒディアーズを文明を自ら放棄したとして、彼等は最早人類ではないと断じる。が、既に人類銀河同盟から外れ、単独で行動しているレドに強制するべきではないと語るチェインバーは今後自分達はどうするべきか、その判断の全てをレドに預ける事にした。
相棒に委ねられ、全てを自己責任で判断する重みに耐えながら彼が出した決断は――
――戦う事だった。
自分達が戦うべき相手はヒディアーズだけじゃない。サイデリアルや他の根源的災厄も自分達が相手にしなければならない奴等だ。人類銀河同盟も関係ない、これからは自分の意思で闘うことを決めたレドは、皆と共に前に進むことを決意した。

その騒動の中でガルガンティアの長であるフェアロック船長が死亡、後釜はリジットに託され、その最中にガルガンティアの秘密に触れることになる。

その秘密から、絶滅から免れた人類は絶望に挫けてはいなかったと知ったガルガンティアは、前船長の遺志と共にこれからもこの航海を往くと誓うのだった。

その後、襲い掛かるサイデリアルを何とか退けた一行、サイデリアルの主力艦隊のトップであるストラウスを相手にヒビキはかねてより特訓していた成果を引き出し、ランドはガンレオンの真の力を解放する事に成功、戦いを終えた一行は中央大陸の別働隊に合流するべくガルガンティア船団を発つのであった。

◇

δ月δγ日

破竹の勢い。ギルター＝ベローネというサイデリアル最大の軍師を迎え入れられたお陰で、ここ最近の翠の地球におけるレジスタンスの勢いは凄まじいモノがある。

基地の制圧自体はこれ迄のやり方と然程変わりはしないから大した事じゃないように思える。けれど事前に情報を知る事ができれば、それは作戦開始時に大きな武器となり得る。

そう、ギルター＝ベローネは自分やレジスタンスに対し情報提供を用いる事でサイデリアルに反旗を翻すことを決めたのだ。それもただ単純に情報を話す訳ではない、リアルタイムの――――――現在進行形の形でギルターは自分達に常に新しい情報を提供してくれている。

情報というのは流れる水の如く、時間が経てば経つほどその価値を失っていくのに対し、有益な情報というのは重要な内容であればあるほど、その収集に要する時間は大きくなっていく。

それなのにギルター＝ベローネは常に最新の情報を与えてくれる。基地に配備された敵の数やその配置、機動兵器の数や各施設の割り当てまで事細かく伝達してくれる。

基地内部の情報は把握するのに別にそこまで難しくはない。サイデリアルの基地内部はどれも大抵似た構造をしているし、管制室に潜り込めばその全容を把握するのは容易い。それに彼は元々サイデリアルの人間だ。元自軍の基地の事情なんて、彼の人間性

を考えればそれこそ翠と蒼の二つの地球、その双方を知り尽くしていそうだ。
だが、ギルター＝ベローネに驚いたのはそこではない。自分がギルターを驚愕に思ったのは、まるで未来予知をしているのではないかと思えるほどの鋭い観察眼だ。注意しなければ分からない、そんな日常レベルのやり取りで彼はサイデリアルの現在の行動を瞬時に理解し、基地に捕まった人質の存在を導き出す事に成功しているのだ。
僅かな情報を頼りに答えを導き出す。……いや、恐らくは違う。ギルター＝ベローネ、彼は多分翠の地球の全ての基地の状況を常に先読みしながら思考し、そこに敢えて不確定要素を盛り込みながら常に目まぐるしい計算をその頭脳で行っているのだ。
凄まじいまでの並列思考と高速思考、戦場の先読みという一点だけでいうのならシュナイゼルすら上回っているんじゃあないのか？　スカウトする前から只者ではないと思っていたけど、どうやら自分はギルター＝ベローネという男に対し、まだまだ認識が甘かったらしい。
そんな事もあって順調に翠の地球を解放に導きつつある現在、バルビエルというスフィアリアクターを取り逃がし、翠の地球をサイデリアルから解放する事しか現状やることがない自分としては、この順調さは嬉しい誤算だった。
けど、だからこそおかしい所がある。これ程見識のある男がどうしてあんな量産機に乗っていたのか、ギルターを捕まえる際の状況を思い出した自分は、ふと同時にある推

測を思い付く。
恐らく、ギルターはＺ―ＢＬＵＥや自分といった地球の勢力に接触した事で、サイデリアルに反旗を翻すにはこの地しかないと直感的に理解したのだろう。同時に自らを無能として貶めることで部隊から孤立させ、上司であるバルビエルの手から逃れる事を目論んだ。
Ｚ―ＢＬＵＥや地球の勢力と戦い、下手に疑われないように加減しながら戦場をコントロールし、結果的に負ける様に促す。満足に戦果を上げられないギルターは次第に立場を追われ、遂には捨てゴマとして扱われる様になる。
けれどそれこそが狙いだったギルターは量産機に乗り込み、自らを死んだことに見せ掛けようとした。その後、レジスタンスに協力してＺ―ＢＬＵＥを裏から支援してやろうと言うのが、ギルター＝ベローネという奇策士の策略だったのだろう。
けれど、そこで唯一奴の誤算だったのが自分に見付かった事、恐らく死んだふりをするのに必死で自分の存在にまで気を使う余裕が無かったのだろう。あれほど驚愕し、慌てていたギルターを見るのはあの時が最初で最後だった。
自ら死を選ぶという難しさと恐怖は自分にも覚えがある。そこら辺りは流石のギルターも余裕が無かった様だった。まぁ、恐るべき策士といっても奴も人の子だと知ってある意味安心しているけどね。

そんな訳で、ギルターの勧誘に成功した自分は翠の地球をサイデリアルから解放するために、近場の基地拠点に襲撃しては占拠、制圧を繰り返している。自分というイレギュラーに出会し、一度は命を差し出そうとしたギルターも、今では本来の奇策士として充分に活躍している。

時々、啜り泣いたり、怒鳴り散らしたりと情緒不安定な時があるけど、恐らくそれは脳を酷使したことにより起こる一種の疲労困憊な状態なのだろう。ギルターという指示役を得られた事で少し働かせ過ぎたのかもしれない。

自分達はあくまでサイデリアルを地球から追い出すという目的で手を組んだ間柄だ。どちらか一方に負担を強いるのはフェアじゃない。ギルターという貴重な戦力を失わない為にも、少し自分も気を遣うべきなのだろう。

……しかし、バルビエルも馬鹿な男だ。あれほどの逸材を捨てゴマに扱うとは、どうやらスフィアリアクターは力は強くても、そういう搦め手の策略や裏の読み合いは苦手らしい。

ま、自分も得意じゃないから言えないんだけどね。

δ月※δ日

どうやらZ―BLUEも翠の地球をサイデリアルから解放しようとしているらしい。

レジスタンスの人達からＺ―ＢＬＵＥらしき機体を目撃したという情報を耳にしたので詳しく聞いてみると、何でもＺ―ＢＬＵＥは自分達が制圧した基地を訪れているらしく、そこで色々と詳しい事情を集めているとの事。

……そろそろ、彼等にも本当の事を話すときが来そうだなぁ。イヤだなぁ、怖いなぁ。絶対ヨーコちゃんヒビキ君を通して俺の事知ってるよなぁ、カレンちゃんも知らない筈も無いだろうし、会ったら絶対痛い目に遭うんだろうなぁ。

土下座してもその上から踏み潰されそうで怖い。下手すればそのまま電磁ライフルでズガンッされそう。ニュータイプで自分の事情を何とか察してそうなアムロさんやカミーユ君に助けを求めるのも……無理っぽいなあ。

――――止めよう。これ以上この事を考えても仕方がない。その時が来たらその時に考えよう。現実逃避ともいう。

怖いと言えばグランゾンもだ。最近使ってやらない時が多い所為か、此処の所機体の駆動音がヤバイの何の。重力の底、ワームホールに仕舞い込んでいる筈なのにそれを通して訴えてくるのが分かっちゃうんだもの。

こう、《早く私を暴れさせろ》って感じで訴えてくるの。真化融合を果たした影響か、そういうグランゾンの心の叫びを最近特に強く感じ取れるようになった。

お願いだからもう少し待って、あと少し耐えたら好きなだけ暴れさせてやるから、そ

う相棒に言い聞かせるとそれが効いたのか、グランゾンはそれ以降愚図る事もなく大人しくなった。

何だか利かん坊な子供をあやしている様な、そんな気分になる。矢澤家の姉妹達を相手にするような感覚にまさかまた味わえるなんて、ふと懐かしく思う。

まぁ、その後恐ろしい逆襲にあって偉い目にあったりするんだけどね。それもまた矢澤家の人々との交流の楽しさでもあるわけなのだ。……みんな、今頃何してるかなぁ。

ヤバい月ヤバーイ日

ヤバい。ヤバいヤバいヤバい

その１６３

Δ月Δ日

シュウジ　は　グランゾン　の　力　を　使えるようになった！

文字にすれば酷く陳腐な内容だが、実際それが出来事として起こってしまうと何一つ笑えないという事が最近分かった。

昨日の翠の地球の森、森林で生い茂った自然の塊は自分が何気無く起こしたアクション一つで地球上から姿を消した。幸い其処は人気の及ばない地だったから自分が放つ重力波に巻き込まれた人はいない。

不幸中の幸い、と言えば聞こえは良いが、実際この問題はかなり大きい。そもそも、なんで自分がグランゾンの力、その一部を使えるようになっているのか。

やはり、これもグランゾンと真化融合を果たした結果、その影響なのだろうか。確かにあの戦い以降自分はグランゾンの気持ち……心の声というモノをそれとなく察する事ができる。真化融合を果たし、自分とグランゾンは一つの存在に昇華し、その能

力も共有する事になった。

そう考えると、真化融合した時のグランゾンがあの姿になったのも、自分と融合をした影響でああなったと考えると納得もする。トールギスを吸収したのもそうだが、ガモンさんに師事を仰いで空手を扱えるようになった。そんな自分と融合し、自分とグランゾンが最大限の力を出せるのがあの姿という訳だ。

まぁ、確かに通常のグランゾンやネオの状態じゃ純粋な接近戦なんて出来ないし、出来ても精々正拳突き位だ。それが悪いとは言わないが、自分の力を引き出すという点では少々心許ないのもまた事実。

――――ふと、初めてシュウ博士と出会った時の事を思い出す。あの時博士は当時返すつもりだったグランゾンを自分専用だと言った。もしかしたら、博士はこうなることを知っていたのかもしれない。

いや、ほぼ確実に知っていたなあの様子だと。真化融合をしていた時はそれとなく聞き入れていたけど、自分はあのシュウ博士の事を何も知っていないし、お婆ちゃんの事だって聞いていない。

何故お婆ちゃんの事を博士が知っているのか、理を越えるとはどういう事なのか、自分とこのグランゾンの関係性は一体何なのか、今までサイデリアルの事とかで考える余裕が無かったから気にしなかったけど、そろそろその事も頭に入れておいた方が良いの

かもしれない。

……話が大分逸れた。つまり、結局の所グランゾンが自分の事を取り入れてあの姿（原初の魔神）になれた様に、自分もグランゾンの力を一部分使えるようになった。というのが自分の解釈だ。

今の所できるのは指向性（グラビトロン）のある重力制御（カノン）だけだが、もしかしたら今後ワームスマッシャーや他の武装も使えるようになるかもしれない。

流石にＢＨＣは勘弁したいが、もしワームスマッシャーが撃てる様になったら……やべぇ、英雄王ごっこが出来る。それにこの重力制御を上手く扱えるようになれば、単身生身で空を自由に飛び回れる様になるかもしれない。

夢が広がる。本来兵器であるグランゾンをこんな風に扱おうと考える自分は、少しばかり能天気だろうか。まぁ、たまには良いだろう。最近はギルターの協力のお陰でサイデリアルの基地制圧も上手くいっている。この力を制御する意味でも今は少し休む事にしよう。

暫く活動を休止する。その事を伝えたらギルターは泣いて喜び、かと思えば疲弊した老兵の様に深い溜め息を吐いてその場に座り込んでしまった。やはり、此処のところ彼を酷使していた様だ。

ギルター＝ベローネは稀少な人材……いや、人財だ。彼を労う意味も込めて今日

の夕食は少しばかり豪華にしようと思う。当然、疲弊回復の調味料も加えて。

ギルターに料理を振る舞ってみせたら、何故かまた咽び泣いた。喜んでくれるのはいいがあそこまで号泣されると流石に引いてしまうものがある。サイデリアルの連中、普段はどんなものを食ってるんだ？

Δ月α日

サイデリアルに動きがあった様だ。先日顔を合わせたレジスタンスの人達によると、どうやら合流したＺ―ＢＬＵＥがサイデリアルの幹部に襲われたらしく、その際にセツコさんがバルビエルによって拐われてしまったらしいのだ。

まだ当分は動けない筈なのに、バルビエルの野郎意外と根性があったらしい。それとも、向こうには身体を回復させる施設があるのか、はたまたスフィアの力で無理矢理回復したのか。

どちらにしても自分がやることは変わらない。連中が折角姿を現したのだ。自分もそれに合わせてやろうじゃあないか。使いこなしてきたこのグランゾンの力、試して見るのも合わせて自分達も動く事にしよう。

この事をギルターに伝えたら、なんかものスッゴく不気味な笑みを浮かべていた。余程自分の嘗ての上司に思うところがあるのか、クックックとひきつった笑みを見せるギルターに、思わず自分は戦慄した。

やはり、この男を引き入れて正解だった。この調子で奴等と戦う際にはその頭脳をフル稼働させて欲しいものだ。

そうそう、先に重力制御を使いこなしてきたと述べたが、追加事項があります。この度、白河修司は無事に武〇術を会得しました。

ブイブイＶ（　＾∀＾）Ｖ。

◇

セツコ＝オハラがバルビエルに拐われた。彼女を救出するため、Ｚ―ＢＬＵＥは翠の地球におけるサイデリアル最後の拠点に向けて進軍を開始する。
マクロス＝クォーターの内部格納庫、そこではセツコ救出の為に拠点に攻撃を仕掛ける各々のパイロットが、それぞれの愛機の中でその時を待っていた。
『それにしても、まさかバルビエルの野郎が動くとはなぁ』
『アイツ、確かヒビキの言ってた蒼のカリスマ……シュウジにボッコボコにされたんだろ？』
『俺、前にアイツの強さってのを……えっと、パラダイムシティだっけ？　あそこでガドライト＝メオンサムとやりあったのを間近で見たんだけどさ』
『酷いもんだったぜ。一方的なんてもんじゃない。蹂躙っていうのはああいうのを言うんだろうなぁ』
『以前も武闘派のカイエンの後ろをあっさり取ったり、透明化するユノハの位置を見破ったりしたんだろ？』
『端から聞けばまるで化け物だな』
『神出鬼没でならあの不動司令にだって引けを取らないぞ』
『なんでスフィアリアクターじゃないんだアイツ』
セツコを拐ったバルビエルからそのバルビエルをボコボコにした蒼のカリスマへ話

題が広がっていく。己の兄貴分が皆に知られ、畏れられている。その事が何だか嬉しくてこそばゆいヒビキはいけないと思っているのに作戦前ににやけてしまう。
『確か、アムロ大尉だけでしたよね。アイツにシミュレーターで勝てたのって』
『喧嘩も強くて機体の操縦技術も超一流、オマケに顔も良くて料理も得意』
『なんだこの完璧超人』
『もういいだろ。そろそろ作戦開始時刻だ。全員気を引き締めろ』
部隊のまとめ役であるアムロの一言に、これまで和やかだった空気は一変して張り詰めたモノへと変貌する。作戦開始まで後僅か、セツコを確実に救出する為、自分達の役目は陽動に徹底し、突入部隊の時間を稼ぐことにある。
（突入部隊の皆、セツコさんをお願いします）
今頃動き始めているであろう彼等の事を心配しつつ、ヒビキはその時を待つ。その先に自身を待ち構える最大の絶望があるとも知らずに……。
そして。
「まさか、このタイミングで来るとはな。少しがっつき過ぎるんじゃあないか？」
「ウフフフ、言ったはずですよ。貴方は私が頂くと」
翠の魔女の前に最悪の魔女が立ちはだかっていた。

その164

翠の地球を支配するサイデリアルの基地拠点、以前までかの侵略者達が跋扈していた時より少し流れ、現在この星ではサイデリアルの手から解放される為に最後の戦いが幕を開けようとしていた。

バルビエルの魔の手に囚われたセツコと、サイデリアルの支配から翠の地球を解放する為、Z―BLUEは翠の地球におけるサイデリアル最後の拠点施設へと赴いた。

作戦領域に入ると同時に行われた今回の作戦は、早さを重点に置いた電撃作戦。その概要も外の部隊が基地内部の戦力を引き出し、手薄になった所を潜入部隊が強襲を仕掛けて囚われのセツコを救出するという、至って単純な内容だ。

作戦は上手くいった。途中サイデリアルの幹部補佐であるサルディアスが仕掛けた狡猾な罠によって何度も足止めを受ける事になったが、それらを突破して尚彼等の勢いの落ちる事はなく、Z―BLUEは翠の地球に残されたサイデリアルの戦力を撃破して

いった。
　このまま順調に行けばサイデリアルから翠の地球は奪還される。地球側が漸く掴んだサイデリアルに対しての明確な反抗作戦、その第一段階が結実のモノになる。
　そこへ現れるバルビエル。セツコを渡しはしないと、愛憎渦巻く怨嗟の魔蠍の力をフル活用しながら迫るバルビエルとその愛機アン・アーレスはＺ―ＢＬＵＥに戦いを挑む。
　サイデリアルの幹部であるバルビエルの介入、これにより戦場はより激しさを増し、戦いは更なる局面へと向かおうとしていた。
　そんな時だ。潜入部隊からのセツコ救出成功の合図もなく、サイデリアルの基地から彼女の愛機であるバルゴラが飛び出してくる。
　怨嗟の魔蠍のスフィアリアクターであるバルビエルに近付いた事で、間接的にスフィアの深淵に触れたセツコは、自らのスフィアである悲しみの乙女の力を最大限に引き出す事に成功、彼女の助力もあってバルビエルを追い詰め、遂に翠の地球からサイデリアルを追い出すまであと少しにまで迫った所に――――。
　そいつは現れた。
『やぁヒビキ。助けに来たよ』
『アドヴェント!?　それにソイツは……』

『アサキム！』

白の機体に乗る自らをクロノの穏健派の一員と名乗っていたＺ―ＢＬＵＥの協力者、アドヴェント。そしてその傍らに立つのは自分達とこれ迄と幾度となく争ってきた黒衣の死神、アサキム＝ドーウィンがこの戦場に降り立った。

混沌とする戦場、状況から己の不利を悟ったバルビエルは残された僅かな戦力と共に戦場から離脱。奇しくも翠の地球はサイデリアルから解放され、オペレーション・エクリプスは完遂された。

しかし、当然な事ながら事態はそれだけでは収まらない。予期せぬ乱入者達と相対する事となったＺ―ＢＬＵＥは、日頃から疑問に思っていた事を質問する。

何故と、どうしてと、ただ疑問に思ったことを口にした瞬間……反って来たのは無情な攻撃だった。ただ質問しただけ、自分達を味方だと言い切った男から返されたのは、笑顔のまま繰り出される弾幕の雨。

いきなりの攻撃に戸惑うＺ―ＢＬＵＥ、停戦を呼び掛けても全く応える様子のないアドヴェント達にＺ―ＢＬＵＥは否応なく応戦する事になる。翠の地球が解放された直後に行われる連戦、厳しい状況の中それでもＺ―ＢＬＵＥはクロノの精鋭と互角以上に渡り合い、ランド、クロウ、セツコ達三人がスフィアリアクターとして覚醒した事により、厄介だったアサキムも打ち払う事に成功した。

そして、アドヴェントもＺ―ＢＬＵＥに敗れ敗北。搭乗していた機体は爆散し、彼も愛機と共に運命を共にした。

と、――――思われた。

『成る程、確かに君達は強くなった。初めて会った時とは比べ物にならない程に……』

『な、なに!?』

『あの爆発の中で……生きてる!?』

『しかし、それでも私には勝てない』

爆発の中から浮かび上がるように現れるアドヴェントにＺ―ＢＬＵＥの誰もが絶句する。対して、爆発の中でも生きているアドヴェントに、ヒビキは己の中で酷く何かがざわめいているのを感じた。

『あ、アドヴェント……』

『フフ』

『あ、アァァァァッ!!』

『アハハハ！』

嗤う。人の形をしたナニかは悶え、混乱し、苦しむヒビキを前にその顔を満面の笑みを浮かべていた。嬉しさと愉しさ、自分の影響で苦しんでいるヒビキを見て、アドヴェントはこの時、確かに愉しんでいた。

繰り出されるジェニオン・ガイの攻撃、加減も容赦もなく放たれた一撃は、確かに生身である筈のアドヴェントを捉えた。

しかし、その体に幾分の傷もなく、悠然と立ち尽くすその姿にヒビキは言葉を失う。

『さて、お遊びもここまでにしよう。既に運命は動き出しているのだからね』

掲げられるアドヴェントの右手、瞬間空は割れ、大地は砕かれ、ジェニオン・ガイは光に包まれた。爆発と轟音が轟き、全てが収まる頃にはジェニオン・ガイは完全に機能停止。ヒビキとその相棒はアドヴェントの一撃によって撃墜されてしまった。

『嘘だろ。ジェニオン・ガイを……一撃で!?』

『アドヴェント、あの男はやはり……』

『人間じゃ、ない!』

動揺するZ—BLUE、怯み、動揺する彼等を笑みで一瞥するアドヴェントはそのまま倒れ伏すジェニオン・ガイに近付き、ヒビキに真実を告げる。

『アド……ヴェント』

『それなりの付き合いだ。ヒビキ、最後に君に真実を与えよう。君の疑問に答えなかった事、君の要望を聞かなかった事、それは……』

〝君が、私の所有物(モノ)だからだよ〟

『な……』

その言葉に、ただその一言にヒビキは己の足下が崩れていくのを感じた。この感覚は覚えがある。そうだ、これはあの時自分と兄貴分が敵対した時と――――。
『君の事は全て知っている。母親の事も、父親と姉の事も……そして、君が兄貴分として慕っていた彼の事も』
『っ！』
『彼――シュウジ＝シラカワは確かに優れた人間だ。伊達にあの男の因子を受け継いではいなかった。一を聞くことで十を知り、十を学ぶ事で百を己の糧にしている。正に人間の理想系、あれこそが正しく人間の先を行く生命の在り方なのだろう。だが、それ故に彼は私には勝てなかった』
彼の者は人間として当たり前に在りすぎた。絶大な力を有しておきながら他者を捨てきれず、己の足枷にしている。だから容易く此方の意図に絡まれ、身動きが取れなくなってしまう。
『滑稽だよ。彼は力をもて余しておきながらその責務を果たしていない。あれが私達と同じ高みに至れるというのだから、世の中は何が起こるか分からない』
そう吐き捨てるアドヴェントの目には確かな侮蔑の色が滲んでいた。それを目の当たりにしたヒビキは折れそうになった心を怒りの炎で灯し……。
『だ、まれぇ！』

『うん？』
『お前が、あの人を、シュウジさんを……語るなぁぁっ!!』
アドヴェントの一撃を受け、それでも尚立ち向かう意思を持つヒビキは、ジェニオン・ガイを無理矢理に動かした。
何の捻りもないただの振りかぶりの一撃、つまらないモノを見るようにアドヴェントは軽々と避け――――。
『残念だよ。ヒビキ』
その手を再びジェニオン・ガイに翳した。またあの一撃が来るのか、身構えるヒビキだが――――。
『っ!?』
『今、君の心に張っていた精神的バリアを解除した。これにより君の心はよりダイレクトに私を感じ取れるだろう』
『あ、あぁ……』
心が固まる。魂が凍える。目の前にいる超常の怪物に、ヒビキの己の内に眠る根元的恐怖が膨れ上がった。
『あぁ……あぁぁぁぁっ!!!』
『ヒビキ!?』

『その眼、それに両目が!?』
『まさかアドヴェント、お前は!』
『そう。私がヒビキが追い続け、そして怯え続けてきた存在、彼の言葉で言うのなら……』
〝テンシだ〟
『ウァァァァァッ!!?』
心が割れる。魂が砕ける。自身の内に刻まれた恐怖と絶望、その二つに心と魂が折れようとしていた。
発狂し、叫び、人格が崩壊する痛みを受けるヒビキを前に、アドヴェントはその瞳を慈しむように見つめ、目を細める。
奴を前にＺ―ＢＬＵＥの誰もが動けなかった。圧倒的存在、銀河の中心で遭遇したあの黒いアンゲロイ達の時と同じだ。絶対的恐怖と絶望を前にしたＺ―ＢＬＵＥは、苦しむヒビキをただ見ている事しか出来なかった。
そんな時だった。銃声が轟き、アドヴェントの頬を掠めていく。誰もが予期せぬ出来事にアドヴェントを含めた全員が驚愕に目を見開いた。
一体誰が？　不機嫌になったアドヴェントが眉を寄せながら振り返り、銃声があった方角へ目を向けると……。

『……なんだと?』

まず、その人物にアドヴェントは驚いた。何故なら彼の記憶には欠片たりとも覚えがない者だったからだ。

「ひ、ひひ……」

銃を手にカタカタと震える男、男の名はギルター＝ベローネ。サイデリアルの恥将として知られていた男が、アドヴェントに向けて銃口を突き付けていた。

◇

ギルター＝ベローネは後悔した。後悔し続けて、一体自分が何に後悔していたのか分からない位に後悔した。

事の始まりは数時間前、Ｚ―ＢＬＵＥの一員であるセツコ＝オハラの救出に向かうという蒼のカリスマ―――もとい、シュウジ＝シラカワの提案から始まった。

翠の地球に点在するサイデリアルの拠点、その悉くを単独で制圧し、最近になって生身で空を飛び始めた規格外の化け物にギルターはもう抵抗する意識すら消え失せ、彼の話す作戦の内容にただ耳を傾けた。

作戦の内容はシンプルなモノで、彼が基地に潜入している間、自分は外で待機し見張りをするという、相変わらず作戦とは呼べない作戦内容だった。これ迄と殆ど変わらない作戦、なのにシュウジ＝シラカワという男は自分に対し、ある種の絶対的信頼を置いている。

その事に酷い重圧を覚えるギルターだが、今回の作戦は少しばかり興味があった。何せ相手をするのは嘗て自分の上司であったバルビエル、自分を嗤い、見下してきた奴だというのだ。

ザマァミロ、ほぼ確定した元上司の辿るであろう悲惨な未来を前に、ギルターは僅かばかり胸の奥のトゲが抜け落ちるのを感じた。

そんなこんなで始まる作戦、Ｚ―ＢＬＵＥが訪れる数分前に基地へ突入した蒼のカリ

スマを見送ったギルターは、外の見張りをしながら久し振りに落ち着いた様子でいられた。

今頃バルビエルはあの化け物によって良い様にボコボコにされているのだろうなぁ。そんな事を考えていたのだが、数分後、ギルターはＺ―ＢＬＵＥとサイデリアル、並びにクロノの戦いに巻き込まれる事になる。

一体自分が何をしたのか。過激さを増していく戦場の中でギルターは声にならない叫びを上げながら必死に逃げ続けた。剰りにも必死になりすぎてシュウジに助けを求める余裕すらなかったギルターだったが、遂に戦闘終了の時まで生き延びることに成功する。

生命の危機、理不尽な状況とそこから生還したギルターは途端に不愉快さで一杯になった。何故自分がこんな目に合わなければならないのかと、恐怖と混乱と苛立ちでパニック症状に陥ったギルターは護身用に預けられた銃を取り出し、その引き金を引いた。

別に当てるつもりは無かった。自分をこんな目に合わせた理不尽な状況に仕返しがしたかったのと少しばかりストレスを発散したいだけだった。

――――気が付けば、今の自分は混沌とする戦場のど真ん中にいて、且つこの場にいる全員の視線に晒されていた。

（え？　なに？　なんで皆私を見てるの？）

圧倒的やっちまった感、Ｚ―ＢＬＵＥや見知らぬ誰かから降り注がれる視線に、ギルターは遅くも自らがトンでもない事を仕出かしてしまった事を自覚する。

『君は……何かな？』

（ヒィッ!?）

目の前のイケメンから発せられる尋常ならざる雰囲気にギルターは心臓が跳び跳ねる思いをした。瞬間悟る。あ、これ終わった。

ガタガタと震えるギルター。涙を、鼻水を垂れ流す彼に、アドヴェントは有象無象の一つかと思い込む。このままここに捨て置いても別に構わない、が。ふとした瞬間、アドヴェントは目の前の無様な男が誰なのか思い出した。

『思い出した。確か君はギルター＝ベローネ。サイデリアルの幹部、バルビエルの部下の一人だったね』

（っ!?）

目の前の怪物が自分の名前を知っている。その事実にギルターは己の心臓が鷲掴みされる錯覚を覚えた。

『彼のお抱えの補佐官がどうしてここに？　もしかして置いていかれたのかな？　だとしたら気の毒だ。あぁ、とても気の毒だ』

全身が震える。息が出来ない。人とは思えない化け物を前に、ギルターは掠れた呼吸しか出来ずにいる。

『そんな君に私は手を差し伸べよう。君さえよければ私が君の拠り所になろう。どうかな?』

「――――ふぇ?」

途端にギルターには目の前の青年が、よく分からない化け物から自分を救い上げる神のごとき存在に思えるようになった。これまで幾度となく酷い目に合ってきたギルター。それは恥辱にまみれ、後悔と挫折に満ちていた。

『約束しよう。君の未来は私が守ると』

そんなこれ迄の人生が目の前の青年の一言によって救われた気がした。この手を取れば自分は救われる。根拠もないのに何故かそう思えて仕方がない。

対してアドヴェントは目の前のギルターを全く見えてはいなかった。精々捨ての駒を拾い上げる程度の認識、時が来れば自分を慕う連中と同様、使い潰す算段しか持ち合わせていない。

「ほ、本当に私を、このギルターを貴方の側に置かせてくれるのですか?」

『勿論だとも。共に世界の未来を切り開こう』

テンシと呼ばれるアドヴェントは通常の人間とは一線を画す存在、その言葉から人を

巧みに操り、何度も己に心酔する傀儡を生み出し続けていた。
　このギルター＝ベローネもその一人、自分に従い、自分に仕える事を至上の喜びと認識させるなど造作もない事、最早ここには用はない。後はここから立ち去り、来るべき時を待つだけだ。
『君の力、どうかこの私に貸してくれないか？』
　さぁ、早くこの手を取れ。俯くギルターにアドヴェントが最後の煽りを口にしようと

「だが断る」

『――――――なに？』
　瞬間、ギルターから発せられるその一言に、アドヴェントは嘗てない衝撃を受けた。
　何故自分の言葉に従わない。これ迄とは違う対応のギルターにアドヴェントは動揺を隠せなかった。
　アドヴェントは考えていなかった。ギルター＝ベローネという男の姑息さを、顕示欲

と自己保身に長けた男のずる賢い計算の高さを。
ギルター＝ベローネは姑息だ。小心者で狡く、正に俗物の中の俗物。これ迄の幾度となく理不尽な目に合っても、その性根は改善される事はない。
故に気付いてしまった。もしこの男に付いていけば、遠からずあの男とぶつかる事になる、と。
そう、蒼のカリスマと恐れられる常識外れの怪物と、いつかは正面から戦う羽目になる、と。
正体不明の謎のイケメンと正体なんて分かりたくもない怪物、答えなんて最初から出ていたのだ。
幾分か気分が晴れた。自分を絶対の存在と疑わない存在を前に見事一本とって見せた。これまでの余裕の表情から不愉快に表情を歪ませるアドヴェントを目の当たりにして、ギルターは何だか晴れやかな気分になった。
『……そうか、残念だよ』
そう言って右手を振り翳すアドヴェント、極大のエネルギーが暴れまわり、周囲一帯ごとギルターを消し飛ばそうとした――その時だ。
突如、基地の一部から爆発が轟き、そこから一つの人影が飛び出してくる。何事かと視線を向けるアドヴェントが目にしたのは、ここにはいない筈の嘗ての同志の姿があっ

た。

『君は、サクリファイ!?　何故ここに?』

ボロボロの姿で地面に倒れ伏すサクリファイと呼ばれる女性にアドヴェントが驚愕に目を剥いた瞬間、ゾクリと全身を突き刺すような悪寒が彼を襲った。

何だ、この感覚は。理解できない感覚……いや、何処かで覚えのあるその感覚にアドヴェントが戸惑っていると。

「――――どうやら、こっちの方も間一髪だったみたいだな」

『っ!?』

知っている。その声を自分は知っている。

崩落した壁から這い出るその人物にアドヴェントは動揺を隠せなかった。

生きていたのは知っている。小賢しくも自分の手から死ぬことで抜け出し、浅ましくも逃げ延びたことは知っている。

愚かしくも哀れな魔人、それがついこの間までのアドヴェントが抱く魔人の感想だった。

――――だが。

「ヒビキ君、辛かったな。ギルター、いつも面倒ごとを押し付けて悪かった。だけど、もう大丈夫だ。――――何故ならば」

目の前に佇む、あの怪物は――なんだ？

「私が来た」

――混迷する戦場に蒼の魔人が降り立った。

その１６５

――――時間を遡ること数分前。

翠の地球をサイデリアルから解放する為、Ｚ―ＢＬＵＥが最後の敵拠点に攻め込むと同時に囚われているセツコ＝オハラを救出する為の作戦を開始した時刻、潜入部隊と共に基地へ訪れたＣ．Ｃ．はそこで自身にとって最悪の展開を迎える事となった。

眼前に立つ翡翠の魔女、自身と同じ髪色をしておきながらその内に孕んでいるどす黒いモノは、これまで永い時の中で生きてきたＣ．Ｃ．でさえも全く未知なるモノ。

〝サクヤ〟。Ｚ―ＢＬＵＥに難民として乗り込み、生活班としてここまで共に戦ってきた彼女が醜悪とさえ呼べる瘴気を振り撒き、慈愛の笑みを浮かべてＣ．Ｃ．の前に佇んでいる。

何故彼女がここに？　本来ならＺ―ＢＬＵＥの何れかの艦で避難している筈の彼女がどうしてここにいるのか。納得の行かない事態を前に、しかしＣ．Ｃ．はそれ自体を問題視してはいなかった。

あの時、初めて奴に問い詰めた時からこうなる事は予見していた。目の前の人の型をした異形は不死の存在である自分に興味を示している。それは人としてという意味合

いではなく、文字通り〝食糧〟としての興味。
サクヤと名乗るソレは人類を虫ケラとしか認識していない様に、C．C．を自分が食べるのに相応しいかどうかという興味しか持ち得ていない。これまでこの女が自分に手を出して来なかったのは、偏にそう見極めていただけの話。
そして、今回の作戦でその見極めは確定したモノとなった。自分が食べるのに相応しいと判断したこの女は、今日ここで自分を捕食する為にワザワザここまで追ってきたのだ。
……いや、ワザワザという言葉は適切ではない。この人智から外れた化け物にとって、厳重なZ―BLUEの艦から誰にも気付かれずに逃げ出す事など簡単な事なのだ。だからこそ、目の前にいるサクヤがここにいるのに、未だにZ―BLUEから彼女がいないという報せは届いてきていないのだ。
「……一応聞くが、何故私にここまで固執する？　正直面倒なんだがな。お前みたいなストーカーに狙われるのは」
「フフフ。なに、ほんの戯れですよ。ほら、よく言うではないですか。獅子は狩りの際に喩え相手が兎やネズミだろうと全力を尽くすと、私もそれに肖ってみたいと思ったまでですよ」
答えになっていない。が、目の前のサクヤと名乗る怪物が何を言いたいのかは理解し

た。要するにこの女、この状況で尚自分が楽しむ為に遊んでいるのだ。狩りに駆られた狩人……いや、死にかけのネズミを弄ぶ猫の様に、この女は自分を玩具にしようとしている。

（通信も……ダメか。どうやら本当に今の私は追い詰められたネズミらしい）

事前に渡されていた通信端末も、今は何の反応も示さなくなっている。どうやらこの女がこの場に来た時点でここは既に奴の腹の中らしく、この分だと他の仲間を呼び戻す事も出来そうにない。

グニャリ、そんな音を立てて周囲の空間が歪曲する。サクヤと名乗る怪物を中心に空間が歪み、世界が軋みを挙げる。

「さて、それでは始めましょう。数少ない私の狩り、精々楽しませてくださいね」

「誰が！」

両手を広げ、無防備となった所にすかさずＣ．Ｃ．は懐からあるものを取り出し、床へと叩き付ける。

瞬間、辺りに強烈な光が瞬く間に広がり、サクヤの視界を侵食していく。閃光弾という地味ながら有効な一撃が確かにサクヤの眼球に直撃した。視界を遮られ、一時的に視力を失うサクヤだが、その表情には以前として笑みが貼り付けられている。

コロコロと何かが足下に転がる音がする。未だ視力は戻っていないが、何だろうと視

線を下げた瞬間、爆発による衝撃がサクヤの身を包み込んだ。
背後で聞こえてくる爆発音に耳を傾けながら、構わずＣ．Ｃ．は駆けていく。あの爆発程度では精々足止め程度にしかなり得ない、あの怪物を相手にするには少なくともＺ―ＢＬＵＥの総出で立ち向かう必要がある。
直感ではない。これは事実だ。そう思わせるほどの凄みと不気味さがあの女にはあった。未だにその正体と目的は不明だが、一つだけ確かな事がある。
ここから、この基地から抜け出さなければ自分は消える。死ぬ、ではない。自分はあの女に吸収（捕食）され、存在ごと消えてなくなるだろう。
今更自分の命が惜しくなった訳ではない。ただ、意地があった。せめて笑いながら死ねと口にした共犯者（ルルーシュ）や自分の為に心から優しくしてくれるナナリー、そしてＺＥＸＩＳだった頃から関わりのあった人達の事を思い出すと、Ｃ．Ｃ．はどうもここが自分の死に場所には思えなかった。
最後まで足掻いてやる。そう決意しながら足に力を込めて駆け出すＣ．Ｃ．だった

――

『私は哀しいです』
「っ!?」
唐突に耳元で囁かれる声、それにゾッとしながらＣ．Ｃ．は銃を取り出し、声のする

方へ銃口を突き付ける。しかし、それよりも早くＣ．Ｃ．の首は締め上げられる。
尋常――なんて所じゃない。文字通り指ひとつ動かせられない圧倒的すぎる力の差、自分の体が浮かび上がる感覚を覚えながらＣ．Ｃ．はうっすらとその瞼を開け、そして恐怖を覚える。
『どうして貴方達はそうまで抗うのです？　無駄なのに、無意味なのに、無価値なのに』
そこにいるのは能面の顔をしたサクヤ〝だったもの〟。その口から溢れるの呪詛のようで、その目に映るのは何もないただの空洞だった。この時Ｃ．Ｃ．は漸く理解する。目の前にいるのはサクヤ個人ではなく、サクヤの形をした蠢く何かなのだと。
「この、化け物が！」
喉を締め上げられ、呼吸もままならない状態で、それでもＣ．Ｃ．はサクヤだったモノに銃口を突き付け、その引き金を引き絞る。
炸裂音と共にサクヤの顔半分が吹き飛ぶ、返り血塗れになるのを覚悟するＣ．Ｃ．だが、その内にあるモノを見て絶句する。
色だ。赤や黄、青といった感情と思わしき三色の色が剥き出しのサクヤの頭部、その内側で蠢き、犇めき合っていた。
呆然となるＣ．Ｃ．、そんな彼女にお構いなしにソレは無造作に腕を振り、力任せにＣ．Ｃ．を床に叩き付ける。

「かはっ」

衝撃がC．C．の体を襲い、血反吐が肺に溜まった空気と共に吐き出していく。頭も打った所為か視界が揺れる。

更に追い討ちを駆ける様にC．C．の胸元に衝撃が走り、激痛が彼女の全身を駆け巡っていく。見ればサクヤの足がC．C．の胸元にめり込み、彼女の伽藍堂の眼が此方を覗き込んでいた。

『けれどそれでいて私は楽しい。無駄なのに足掻いて、無意味なのに藻掻いて、無価値なのに抵抗するその姿はとても楽しく、見ていてとても面白い』

『しかし、それ故に許しがたい。無価値の分際で抵抗するその姿が、無意味なのに弁えないその在り方が、無駄なのに存在しているその事実が、私はとても許せない！』

支離滅裂、言っている事はちぐはぐで出鱈目な言葉。無意味なのにと哀しみ、無価値だからと楽しみ、無駄なのだと怒るサクヤのその姿は、まるで癇癪を起こした子供の様だった。

感情の爆発、それを加速させるに連れて周囲の空間はより歪んでいく。まるであの時の再現だと察したC．C．は何とかそこから抜け出そうと藻掻くが、まるで抵抗は無意味だと言うように彼女の体は力が入らない。

このままでは不味い。そう思った時だ。

「おい」
『？』
　声が聞こえた。自分達以外はいない筈のこの空間で、しかし確かに声が聞こえた。なんだと思い、辺りを見渡すサクヤが次に目にしたのは……。
「その人を気安く足蹴にしてるんじゃあねぇよ」
　拳だ。眼前に迫っていた拳はサクヤの顔面を捉え、深々とめり込み、そして吹き飛ばした。
　吹き飛んだサクヤに驚くＣ．Ｃ．、しかしそこに佇むその男を見て、彼女はため息を吐いてやれやれと肩を竦める。
「やれやれ、随分遅い到着じゃないか？　ええ？　蒼のカリスマ殿？」
　蒼い仮面を被り白のコートで身を包む魔人、蒼のカリスマ。コートを靡かせ、拳を突き出したまま悠然と佇む彼がそこにいた。
「すいません。お詫びに後で約束のピザ、作りますから」
　それで勘弁してください。と、そう弁解する蒼のカリスマ、相変わらずだなとＣ．Ｃ．は呆れるも、その在り方にどうしようもなく頼りになる、そう思わずにはいられなかった。
「……で、いきなりぶん殴って吹っ飛ばした訳だが、アレはなんだ？　見たところ人間

じゃあなさそうだが――――いやまてよ」

通路の先で吹き飛び、倒れるサクヤを見てシュウジは感じる。目の前の倒れ伏す女性から感じられる圧倒的な存在感とそれに比例しておぞましい程の何か、それは先日のバルビエルをボコボコにした時に感じた違和感と全く同じモノだった。

「成る程、あの時感じた気持ち悪い感覚の正体が分かりました。アナタ、あの空間にいた〝怒り〟と〝楽しみ〟の同類ですね」

蒼のカリスマとしての口調で指差すシュウジは確信を持ってそう告げる。C．C．は何の事だか今一つ理解できていないが、どうやらあの女は蒼のカリスマが警戒をするレベルで厄介な存在らしい。その証拠に、彼の口調は余裕こそあるものの、何処か緊迫した様子だった。

『んふ、フフフ、アハハハハ！』

伏していた状態からゆっくりと起き上がり、此方に振り返るサクヤ、既に撃たれた傷は癒えておりその表情には満面の笑みが貼り付いている。しかし、C．C．は理解していた。今、この女は嘗てないほどに感情を昂らせていると。

『あぁ、会いたかった！　会いたかったですわ蒼の魔人。私の愛し子、私の魔人、私の運命！　あぁ、この時をどれだけ待ちわびた事か！』

「うわー、サイコなお方でしたか」
感情を吐露し、それに比例して空間が捩れる。綺麗な面持ちだったのに酷く歪んだその顔に、蒼のカリスマは思わず素を溢してしまう。
瞬間、床だった箇所が突然隆起し、蒼のカリスマとＣ．Ｃ．に雪崩れ込む。槍のごとく鋭いそれは、後ろに跳躍する事で回避した蒼のカリスマの足場を貫いて余りある威力を誇っていた。
「良かったじゃないか、これでお前も晴れて彼女持ちか。後でヨーコとカレンにも報告してやらねばな」
「やめて、隙あれば俺を追い込もうとするのホントやめて」
跳躍する際、Ｃ．Ｃ．を肩に担ぐ所謂お米様抱っこで抱えて距離を取る蒼のカリスマは、相変わらず辛辣な彼女にゲンナリする。――しかし、そんな蒼のカリスマの余裕を抉り取るように、今度は天井が変形し、無機質な槍となって二人に降り注ぐ。
「ちっ」
軽く舌打ちをしながら空中三角飛びでこれを回避し、しかしサクヤの攻撃と思われるソレは収まらず、その頻度はより苛烈さを増していく。
上から下から、横から背後からと所構わず射出される槍は止めどなく蒼のカリスマに降り注がれていく。

『あぁ、あぁ！　いい！　その苦悩、その葛藤！　ぞくぞくしますワクワクします！　もっと、もっとアナタの表情を見せてください！　アナタの苦痛を、アナタの苦悶を、その全てを私は見たい！』

「随分熱烈な歓迎じゃないか。どうだ、いっそのこと受け入れてやるのは」

「いやもうホント、勘弁して下さい」

縦横無尽に襲い掛かる槍の嵐、やがて槍だけでなく鎚、剣、矢、あげくの果てには大砲など、様々な凶器が二人を襲う。そんな脅威を前に避けきれる蒼の魔人もやはり怪物だった。

「真面目な話、どうなってます？　なんでここの基地ってこんな不可思議な空間になっちゃってるんですか？」

「私にも分からん。……が、可能性として推察する事は出来る。恐らくここは文字通り奴の腹の中なのだろう。奴が感情を高める毎に世界を侵食し、周囲の物理的空間をねじ曲げ、自分のモノ（結界）とする。恐らくは次元力の応用なのだろうが、人の身で良くやる。――いや、もうヒトではないな、あれは」

（自分の力で物質空間に侵食する結界とか、それなんて固有結界？）

だが、お陰で光明は見えた。この空間が奴の生み出した世界（結界）ならば、生み出した本人を叩けばこの空間も崩壊するはず、ならば仕掛けてやろうと一瞬足を止めた時。

『あぁ、我が愛し子よ！』

巨大な基地の通路、その全てを埋め尽くす巨大な槍が歪んだ空間の中から現出する。逃げ場はなく、勢いのまま射出された巨大なソレに対し、蒼のカリスマ――――いや、シュウジは一瞬だけ思考を加速させる。

（まだ実戦では使った事がないから不安だけど……仕方ない、か）

それは諦めにも似た境地、仕方ないと自分に言い聞かせ、迫り来る槍の尖端に右手を翳したシュウジはあの言葉を紡ぐ。

〝グラビトロンカノン〟

瞬間。槍は砕かれ、地面は大きく陥没した。周囲に展開した凶器ごと圧壊し、空間ごと粉砕した。その光景にＣ．Ｃ．は目を見開き、サクヤすら狂喜の笑みを浮かべていながら停止している。

そしてそんな無様といえる隙をシュウジは見逃さない。

「詰みだ」

『っ!?』

いつの間にか埋められていた距離、Ｃ．Ｃ．を抱えながら腰だめに構えた右拳にサクヤは呆然となり――――。

「――――猛羅総拳突き」

眼前に広がる拳の弾幕に呑まれていった。外壁を破り、尚吹き飛んでいくサクヤ、その様子を見ていたシュウジはこの時、かの男の存在を認識する。

その様子からどうやら遂に動き出したらしく、ここからでもヒビキの断末魔が聞こえてくる。

「野郎、やりやがったな」

遂にこの時が来た。散乱する瓦礫を押し退け、適当な所にC．C．を置き、シュウジは仮面の奥で凶悪な笑みを浮かべ、基地から身を乗り出した。

◇

――――蒼のカリスマが生きていた。情報だけなら、話だけなら聞いていたかの魔人の生存報告。まさかと誰もが思った。死んだ筈だと、この目でその瞬間を見た者は誰もがその事実に驚いた。

しかし、同時に疑うこともしなかった。アレほど派手に散っておきながら実は生きていたという蒼のカリスマに、Ｚ―ＢＬＵＥは驚き以上に納得していた。やはり奴は生きていたのだと、疑問に思うよりその方がしっくりした。

そして、その生きていた男が目の前にいる。言いたい事があった者がいた。一言文句を言いたい者がいた。生きていた事に嬉しく思う者がいた。

しかし、誰もかの魔人には近付かない。近付こうとしない。――――否、動けなかった。アドヴェントという圧倒的な未知なる存在、生身でありながらジェニオン・ガイを打ち倒すその力に圧倒され、その戦意を根こそぎへし折られようとしていた。

誰もが動けないでいる中、蒼のカリスマただ一人がアドヴェントに向かって足を進めていく。

全員が注目しながら、しかし此方には見向きもせず、蒼のカリスマ――――シュウジ＝シラカワは彼との距離を縮めていく。

「まさか、再び私の前に現れるとはね。尊敬するよその執念は、驚嘆に値する」

「……」

「で？　その握り締めた拳で私を殴るかい？　まぁ当然だな、君にはそれだけの怒りがある。……しかし、出来るのかな？　君に、私を討つことが。こうしている間にも君の大事な人達が危険――」

そこまで言いかけてアドヴェントの顎が跳ね上がる。血飛沫を折れた歯と共に吐き出し、その体を宙に浮かす。

蹴りだ。煽り、挑発してくるアドヴェントの顎に、シュウジは無言のまま蹴りを入れた。一切の容赦なく、一切の情けもなく、シュウジはアドヴェントの死角から一撃を見舞ったのだ。

「……テメェには一切の問答はいらねぇ。ただ一方的にぶちのめすだけだ。ラトロワさんを、シオさんを傷付けた報い――今こそ受けろ」

構える。両の拳に力を込め、放つのは全身全霊の一撃。

「両手（もろて）・猛羅総拳突き」

ただし、その一撃は一発で終わることはない。一つ一つに殺意を乗せ、殺しきる勢いで放つのはシュウジの得意とする技……その強化版である。

「な、なん――」

「無駄無駄無駄

無駄無駄無駄

その１６６

嘗てＺ―ＢＬＵＥと協力し合った事もあった謎の組織クロノの一員、アドヴェント。時には情報を貰い、時には共に戦場で肩を並べていた者が、突如Ｚ―ＢＬＵＥ（自分達）にアサキムと共に牙を向けてきた。

動揺するＺ―ＢＬＵＥを前にそれでも攻撃の手を弛めないアドヴェントとその部下達、致し方なく迎撃する事を選択したＺ―ＢＬＵＥはアドヴェントとの望まぬ戦いを繰り広げる事になる。

必死に抵抗し、激闘の果て、漸く退ける事に成功したかに見えた。しかし、逃げようとするアドヴェントを追い掛けるヒビキに、アドヴェントはある真実を突き付ける。

自分こそがヒビキとヒビキの父と姉、唯一の家族を時空振動を引き起こして巻き込んで殺害したテンシなのだと。

自らを助け、導き、幾度となく救ってくれた者が何よりも許せない仇であると知ったヒビキは怒りと悲しみ、そして希望だったモノが絶望に変異した事により、肉体よりも

先に精神が壊れそうになった。
錯乱状態に陥り、無抵抗のアドヴェントに必殺の一撃を見舞うヒビキ、しかし破壊された機体から現れたのは宙に浮かび、バリアの様な障壁を張る無傷のアドヴェントだった。
手を翳しただけで天変地異を引き起こし、ジェニオン・ガイを一撃で打ち倒すアドヴェント。その精神性は既に人間の範疇ではなく、その強さもまたＺ―ＢＬＵＥの理解の外側にあった。
誰もが絶句する。機動兵器の攻撃に傷ひとつ負わず、腕の一降りで天変地異を引き起こす絶大な力に。
誰もが驚愕する。他者を自分のモノだと微笑みを浮かべながら断言するその精神性に。
そして――――――。
「ぐ、ぐぅ……」
「いつまで寝ているつもりだ？　立てないならそのまま叩き潰すだけだぞ」
誰もが唖然となり、目を点にする。今まで自分を完全に下に見ていたアドヴェントが、超常の力を有し、遥か高みから見下ろしていたアドヴェントが、血だらけとなって地に這いずるその光景に。Ｚ―ＢＬＵＥとクロノの隊員達、アサキムすらも驚愕と混乱

に陥り、目の前の事態に理解が追い付けずにいた。
アドヴェントを見下ろすのは仮面越しからでも分かる程に怒りを露にする蒼のカリスマ、死んでいた筈の者が生きていたという事実に当然Ｚ―ＢＬＵＥも動揺していたが、その動揺の意味は最早別のモノに刷り変わっている。
ジェニオンですら傷付けられなかったアドヴェントが、同じ生身である魔人に一方的に打ちのめされている。一体これはどういう事なのか、混乱するＺ―ＢＬＵＥが現実に引き戻されるよりも早く、彼の部下の一人であるコードネーム：ブルーが機体を加速させて蒼のカリスマに斬りかかる。
『貴様ァッ!!　よくもアドヴェント様を!』
『ブルー!?』
『おい、よせ!』
以前、彼と何度も戦場を共にしたことのあるランドとクロウから呼び止めの声が投げ掛けられるが、既に彼の目には蒼のカリスマしか映っていない。自分達が慕い、崇拝するアドヴェントが一方的に殴り倒される光景を前に、彼の感情は怒りに振りきられていた。
ブルーと呼ばれるアドヴェントの部下に続き、他のクロノの面子も蒼のカリスマへ殺到する。アドヴェントを救うため、それ以上に蒼のカリスマに天誅を下すため、彼等は

生身である彼の者に容赦なく得物を突き立てる。
人なんて容易く葬れる機動兵器の武装、迫り来る脅威を前にしかし蒼のカリスマは目も向けず……。
「グランゾン」
突如、空間を穿つように現れる黒い孔。そこから伸びた巨大な剛腕は、ブルーの駆る量産型アスクレプスを殴り飛ばした。
波紋の様に広がる孔、そこから這い出てくる蒼い魔神に今度こそクロノの隊員達も息を呑む。破界事変の頃よりその猛威を奮ってきた多元世界最凶の魔神、グランゾン。かの魔神の顕現に、クロノ達の勢いは完全に削がれる事となった。
狼狽え、動揺するクロノの隊員達。しかし蒼のカリスマは彼等に目を向けず、依然としてアドヴェントを見下ろしている。
怒り。ただ怒りに燃えている魔人にＺ―ＢＬＵＥも声を掛ける事が出来ずにいた。遠巻きから眺めていたＣ．Ｃ．も、その様子を見守るだけに留まっている。
尚、ある意味で最も時間稼ぎに成功した功労者であるギルター＝ベローネは白眼を剥いて気絶している。
「思い出すなぁ、リモネシアでの事を。あの時も確かこんな風だったっけ、まぁあの時とは状況も立場も真逆だったが」

「……」
「あの時はお前の策略にまんまと嵌まってしまった訳だが……さて、今回はどうする？　お前を崇拝する部下達に突貫を命じるか？　それとも単独で俺とやり合うか？　俺はどっちでも構わないぞ」
どちらにしても殺ることは変わらない。そう暗に語る蒼のカリスマ――――いや、シュウジ＝シラカワにアドヴェントは歯を食いしばって耐えている。こんな屈辱は初めてだと、自分を頂点に物事を考えるテンシたるアドヴェントは腸が煮えたぎる思いを抱いていた。
「ふ、ふふふ。素晴らしい、本当に素晴らしいよ蒼のカリスマ――――いや、シュウジ＝シラカワ。私にここまでの手傷を負わせるとは、どうやら既にその身は真化の先に至ろうとしているな」
「……」
「成る程、それだけの力があれば私を殺しきる事も出来るだろう。しかし！」
瞬間、アドヴェントの腕のひと振りにより風が舞い上がり、砂ぼこりが辺りに蔓延する。視界を遮った事により魔人の眼から逃れたと確信したアドヴェントは、宙に浮かび空高く飛翔する。
これは逃走ではない。驕り、他者を侮る哀れな人間に天誅を下すため、地に這う人間

にその思い上がりを正す為の必要処置だ。手を空に掲げ、掌握する様に握り締めると、アドヴェントの頭上に広がる天空が音を立てて悲鳴を上げている。

ヒビキを、ジェニオン・ガイを一撃で倒したあの攻撃が再び襲い掛かる。その力の程を間近で目にしたＺ―ＢＬＵＥ、その一員であるヨーコ＝リットナーはシュウジに逃げろと逃走を促す。

しかしもう遅い。既に攻撃の準備は完了した。後はこの一撃に巻き込まれないよう距離を可能な限り広げるだけ――――と、飛翔しているアドヴェントの背後に突如壁が現れた。

「何処へ行く気だ？」

否、それは壁ではなかった。一瞬何が起きたのか理解出来ずにいたアドヴェント、しかしその声が意味することに気付いた彼は恐る恐る背後を振り返ると……。

「まだ、俺のターン（攻撃）は終わってないぞ」

握り拳を掲げ、振り抜く様の魔人がそこにいた。

人は翼など持ち得ず、空を飛ぶことなど有り得ない。人類という種が誕生してから今日まで覆ることの無かった現実、その絶対と言える物理法則を、蒼の魔人はスキップ感覚で飛び越えて見せた。

Ｚ―ＢＬＵＥ一同が固まり、思考が停止する中行われるのは、積もりに積もったシュ

ウジのシュウジによる蹂躙だった。
驚愕に目を見開かせるアドヴェントに拳を捩じ込み、次に膝、蹴りを始めとしたあらゆる打撃を彼の者へ叩き込む。そこに一切の加減は無く、暴力の全てを受ける事になったアドヴェントは悲鳴を上げる事すら許されず、ただ一方的に打ちのめされていた。
「胴回し・踵落とし」
そして勢いを乗せて放った踵落としはアドヴェントの腹部を捉え、そのまま地に叩き落とす。物理法則に基づき、地表へ落下するアドヴェント。
しかしこの時アドヴェントは笑みを浮かべていた。漸くシュウジから離れることが出来た。この隙が自身の反撃の始まりだと確信しながら、蒼のカリスマに向けてその手を広げる。
瞬間、天上から降り注ぐ業火が魔人を瞬時に呑み込んだ。これで漸く始末が付いたと安堵するアドヴェントは、全身に力を込めて再びバリアを張って浮遊する。
「はぁっ、はぁっ、はぁっ、まさか、ここまでの力を付けていたとは……しかし、今度こそこれで終わりだ。私の祝福を受けていながら尚抗うその精神の強さは感嘆に値する……が、やはり君はまだ人間だったようだ」
シュウジもアドヴェントにとってはヒビキと同じ、自分が保有するに値する〝モノ〟だった。真化を果たし、太極へ至ろうとするシュウジ＝シラカワはアドヴェントにとっ

ても予想外で、且つ重要な案件だった。
　しかし自分と敵対するのなら話は別、自分に牙を剥くのなら不要と断じて廃棄するのみ。多少惜しくは思っても自分の目的の障害となるのなら間引くだけ。
「いらない時間を掛けたな、早急に離脱すると――――」
「人越拳奥義」
　〝千手――観音貫手〟
　瞬間、アドヴェントは全身を撃ち抜かれた。痛みよりも困惑、衝撃よりも混乱に陥ったアドヴェントは呆然となりながら、声のした方へ振り返る。
　そこには所々焼け焦げた蒼の魔人が祈るように両手を合わせていた。人を恐怖させ、神々すら足蹴にする様な魔人が今更何に祈るというのか、それが可笑しくもあり、中々様になっている事に変に納得したアドヴェントは目を閉じて意識を手放した。
　軈て地表へと落下したアドヴェントは落ちた際に起きた土煙の中へと消えていく。今の一撃で手応えを感じたシュウジも彼の後を追って地表へ着地する。初めての空中戦だったが上手く行って良かった。そんな事を思いながらアドヴェントのいる方へ足を進める。
　風が吹き、土煙を吹き消していく。まだまだ奴に仕返し足りない所があるが、いい加減Ｚ―ＢＬＵＥに説明をしなくてはならない。ヒビキもあれから何の反応も示さない

し、もしかしたら気を失っているかもしれない。
自分の復讐を一旦中断する事を決めたシュウジ、すると……。
「シュウジ＝シラカワ！」
突然、Ｃ．Ｃ．の方から怒声にも似た声が飛び交ってくる。いきなりなんだと彼女の方へ向き、Ｃ．Ｃ．が指差す方角へ視線を向けると……。
「っ、しまった！」
そこにいた筈の女、サクヤの姿が完全に消え失せていた。まさかと思いながら半ば確信を得ていたシュウジは慌てながらアドヴェントがいる場所へ駆けていく。
大きく窪んだクレーター、その中心にいる筈のアドヴェントの姿が何処にもない。しまった。アドヴェントへの復讐と初の空中戦でサクヤの事を完全に度外視してしまっていた。
けれど、少し安堵している自分がいる。宇宙の大崩壊を食い止めるにはスフィアの力だけじゃなく、四つの感情を司るテンシなる存在である奴等も必要になってくるからだ。あの調子だとうっかり消しかねなかったシュウジにとって連中の取り逃がしは手痛い失態だが、最悪の事態にはなり得ていない。
一方、グランゾンの出現で奥手になっていたクロノの隊員は戸惑いながらも戦域から離脱。アサキムもいつの間にか姿を消し、今この場には蒼のカリスマであるシュウジと

Ｚ―ＢＬＵＥしかいない。
疑惑は増えた。困惑も、混乱もＺ―ＢＬＵＥに混沌と渦巻いている。その事を何となく察したシュウジは小さくため息を溢し……。
「お久し振りですね、Ｚ―ＢＬＵＥの皆さん。積もる話もあるでしょうから……取り敢えず乗せてくれませんかね？」
取り敢えず、Ｚ―ＢＬＵＥに情報を提供する為に艦に乗り込む許可を求めるのだった。

その１６７

サイデリアルから翠の地球が解放されたという吉報は翠の地球に住む全人類に瞬く間に知れ渡り、これまで長く苦しい戦いを強いれられてきたレジスタンスの人々は一時の勝利の美酒に酔いしれた。

サイデリアルという未知の敵によって故郷を、人を奪われてきた翠の地球の人々、彼の者達によって付けられた傷は深く、簡単に癒えたりはしないだろう。

その憎しみは簡単には消えず、失ったモノの大きさは決して小さくはない。しかしこれで一つの区切りは付いた。残すサイデリアルの主戦力は蒼の地球にある新地球皇国のみ、彼等に対する怒りはその時が来るまでとっておく事にしよう。

翠の地球の人々がサイデリアルからの解放に喜んでいる一方、その最大の功労者であるＺ―ＢＬＵＥは重苦しい空気に包まれていた。

プトレマイオスⅡ、ソレスタルビーイングの移動拠点でＧＮドライヴ搭載型のガンダムを保有する私設武装組織、Ｚ―ＢＬＵＥの主力の一端を担うかの戦艦のブリーフィングルーム、所謂作戦会議室にて、その重苦しい空気は最も色濃く充満していた。

「――――と、以上で私の持ち得る情報はこれで最後です。何かご質問があれば受け付けますよ？」

口を開くのも億劫になりそうな重苦しい空気の中で、明るい口調の男の声が部屋に広がっていく。蒼のカリスマ、彼がいる事でその場の空気が重くなっているというのに、当の本人は全くその自覚はなかった。

倒した筈――――否、死んだと思われていた魔人が生存しており、尚且つ自分達の前で堂々と佇んでいる。唯でさえその事実で色々混乱しているというのに、こうも平然とされては警戒している自分達が間抜けではないかと、ネエル・アーガマの艦長オットーは口には出さず内心愚痴る。

だが、そんな風に思っているのはオットーだけではないらしく、各艦の艦長達も彼と同じ様な反応を示していた。あのブライト艦長やジェフリー艦長すら溜め息を溢したり瞑目しながら、魔人から得た情報を必死にまとめようとしている。

明らかに疲労しているであろう反応をする其々の艦長達、色々言いたい事はあるだろうが、今は蒼のカリスマから得られた情報を整理するだけで精一杯だ。

「流石に情報が多かったと思うので、簡単ではありますが此方の端末に纏めて置きました。参考になってくれれば幸いです」

「……あぁ、これはどうも」

疲れた声色で蒼のカリスマから端末を受け取るスメラギ。彼女が受け取るのを確認すると、彼は踵を返し、部屋の出入り口に向けて歩を進める。
「では、私はこれで失礼します」
「ちょっと待ってくれるかしら」
「ん？」
「今の話で、大体の事情は理解しました。あのアドヴェントやサクヤなる者の存在、時獄戦役で何故貴方が我々に敵対したのか、そしてそうせざるを得なかった理由も……」
「……」
「でも、だからこそ敢えて質問させて欲しい。今後貴方は私達と一緒に戦ってくれるの？」
スメラギのその問いは、Ｚ―ＢＬＵＥの誰もが気にしていた質問だった。蒼のカリスマ――シュウジ＝シラカワは時獄戦役から自分に何が起きたのか、何故Ｚ―ＢＬＵＥと戦う事になったのか、その理由と真実を答えた。
誰もが納得した。誰もが理解し、共感した。親しい人達を人質に取られ、従う事しか出来なかったシュウジの悔しさと怒り、それを思えば先のアドヴェントへの強行も納得が出来るというモノ。
訊ねたいことは多々ある。宇宙の大崩壊、それを防ぐ為のスフィアの使い方、そして

真化へ至るには一体どうすればいいのか。
しかし、そんな事よりも確かめたい事があった。果たしてこの男は自分達と肩を並べて戦ってくれるのかと、地球や宇宙の為……人類の為に戦ってくれるのかと。
返ってきたのは、クククという不敵に溢れる笑み。
「そうですね。取り敢えず私達の目的は今の所共通しています。サイデリアルの手から二つの地球を完全に解放する事、それが叶うまで貴方達に協力する事を約束しましょう」
それだけ言って部屋を後にするシュウジ、仮面を被り、その表情は読めなかったが共闘する確約は出来た。他にも聞きたい事があったが、今はこれで充分過ぎるだろう。
モニター越しに映る各艦長達の表情にも喜びの色が見て取れる。これで残る当面の問題はただ一つ。
と、その前に――――。
「あ、あのー……、それで私は……どうすればいいんですかね？　いっそのこと独房にでも入れてくれれば有り難いのですが」
おずおずと手を挙げる元サイデリアルの幹部部下、ギルター＝ベローネ。彼の処遇に付いて再び艦長達は頭を抱えるのだった。

◇

プトレマイオスⅡにある居住区の一室、Ｚ―ＢＬＵＥと合流する際に一先ずの宿代わりに提供されたシュウジ＝シラカワのプライベートルーム。監視、軟禁の用意は無く、当然のごとく用意されたシュウジの完全なる私的空間。

事情を説明したとは言え、自分の為に貴重な一室を提供してくれるＺ―ＢＬＵＥにシュウジは心からの感謝の気持ちを抱いた。このお礼は必ず返そう、人の優しさに感激しながら部屋へと入ると……。

「遅かったな」

当然のごとくベッドを占領している緑の魔女が、ユルフワ系のキャラの抱き枕を抱え

て待ち構えていた。
「……何でいるのん?」
「決まっている、契約の話だ。散々お前に振り回されたんだ。いい加減此方の約束も守って欲しいものだ」
　シュウジの問いにしれっと即答のＣ．Ｃ．、いきなりな訪問と急な話に戸惑うが、言われてみれば確かに今日まで、シュウジはＣ．Ｃ．をこれでもかと振り回してきた。仲間であるＺ―ＢＬＵＥの皆に疑いの眼差しを受けながら戦い続ける日々、Ｃ．Ｃ．自身は然程気にしている様子はないが、仲間を騙す様な毎日はきっと気楽な時間では無かった筈だ。
　その事を考えれば彼女の約束を守ってやるのも当然の義務と言える。Ｃ．Ｃ．の尊大な言い方に思うところは有るにはあるが、今はそれを甘んじて受けるべきだろう。仮面を外し、コートを備え付けの衣装掛けに吊るし、ワームホールを開くと徐に袖を捲り、腕をワームホールへ突き入れた。
「ちょっと待ってて、今材料を取り出すから……」
　これまでの長い放浪生活でピザの材料程度は揃えられている。時獄戦役を経て、グランゾンを復活させた以降も食料の確保に余念は無く、レジスタンスに協力しては彼等の備蓄を少しずつ分けて貰っていた。

あの日、Ｃ．Ｃ．と交わした約束。今日までその事を守ってくれていた彼女にも感謝しなければならない。だったら、約束のピザ位喜んでご馳走してやるというもの。
「あ、ピザを作るんだったら石窯が必要だな。プトレマイオスⅡに石窯ってあったっけ？」
「なぁ」
「ん？」
「お前は様子を見に行かなくてもいいのか？　ヒビキ＝カミシロはお前の弟分なんだろ？」
唐突のＣ．Ｃ．の質問にシュウジの手は止まる。そう、あの戦場から回収されたジェニオン・ガイのパイロットであるヒビキの意識は未だに戻ってはいない。
肉体的に問題があるわけではない。現にヒビキの体は健康優良児そのもので、命の危機にある状況の窮地には陥ってはいない。
肉体に問題が無いのだとすれば、残った可能性は唯一つ、精神……即ち心の問題だ。そしてＺ―ＢＬＵＥにはヒビキが今のような状況に陥った理由に察しが付いている。彼の扱うスフィアは〝いがみ合う双子〟、その力を最も強く引き出す方法は人の希望と絶望、その狭間で揺れ動く人間の心だ。
今のヒビキはその反作用で意識を絶望に沈められている状態だ。戦うに連れて大き

くなる希望、それに比例して肥大化する絶望、その二つに挟まれたヒビキの心はアドヴェントとの一件で遂に限界を迎えてしまった。

一度絶望に沈んだ人間が這い上がるのには生半可な力では不可能だ。それもスフィアの影響でより大きくなった絶望に呑み込まれたのであれば、ヒビキが今後目を覚ます可能性は限り無くゼロに近い。

今頃は彼の友人達がヒビキの身を案じて見舞いに向かっている事だろうし、何か対策を講じているのかもしれない。だが、今回のヒビキの状態は余り単純な話ではなさそうだ。

では、ヒビキはこのまま目を覚まさないのか？　Ｃ．Ｃ．がＺ―ＢＬＵＥの誰もが気にしていた事を敢えて口にしようと――――。

「いえ、彼は必ず戻って来ますよ」

――――する前にシュウジはＣ．Ｃ．の言葉を遮り、力強く断言する。そんな事は有り得ないと、必ず彼は立ち上がると、理由や根拠を口にせず、ただ事実だけをシュウジは口にした。

何故そう断言できる。Ｃ．Ｃ．は自信満々に言い切るシュウジを呆れながらも疑うことはしなかった。この男がそう言うのならそうなのだろう。根拠の無い自信、しかしそこには言葉に出来ない確信があった。

なら、敢えて質問するのも野暮だろう。シュウジの断言に一先ず納得する事にしたC．C．はそれ以上ヒビキに関する問いを投げることは無かった。

「あれー？　おっかしいなぁ、確かここら辺にチーズを置いておいた筈なんだけどなぁー」

そう言いながらワームホールからポイポイと色んなモノを取り出していくシュウジ、一体何処にこれだけの量の代物を隠し持っていたのか。

（まさか、これ全部グランゾンの中に仕舞ってたんじゃないだろうな？）

缶詰めだったり枕だったり、他にもタッパーに詰め込んだ料理の余り物など、様々な代物が部屋に広がっていく。これら全部がグランゾンのコックピットに仕舞われていたのか、勿論そんな事は無くこれら全ては人のいない重力空間に置いていたもの。しかしもしこれらがあのグランゾンの中に置かれていたものだと思うと……中々シュールに思える。

そんな時、カランと音を立てて落ちる一枚のプラカード、何だと思いC．C．がそれを手にして見ると、そこにはデカデカと《ドッキリ》という文字が描かれていた。

「おいシュウジ、これはなんだ？　ドッキリと書かれているが？」

「へ？」

C．C．に言われ振り返ると、彼女の手に持ったプラカードを見てシュウジの表情は

一変する。それは一時の気の迷いから良く分からないノリでつい作ってしまったドッキリ専用のプラカード。

〝実はドッキリでしたー（笑）みたいな勢いで誤魔化せばみんな許してもらえるんじゃないか作戦〟剰りにもあんまりな作戦の内容の為、決して日の目に当たることは無かったシュウジ渾身の失敗作。

そもそも、死んだ筈の人間が実はドッキリでしたーなんてノリで返ってきたらフルボッコ案件不可避である。そんなモノが通用するノリのいい人はＺ―ＢＬＵＥにはいない。それは以前相良宗介と出会した時に嫌という程味わっている。

そんなモノが目の前の魔女に渡ってしまっている。もし万が一このプラカードの存在がＺ―ＢＬＵＥに知れ渡ったりすれば、その日の内に自分は居場所を失う事になるだろう。

冷たい視線、まるで養豚場の豚を見るような目で此方を見てくるルルーシュ、スザク、バナージ、カミーユ、そしてヒビキ達。ヤバいなんてモノじゃない、そうなってしまえば自分はマジでモノホンのボッチになってしまう。

「あ、あーそれ？　おかしいなぁなんでそんなものを拾ってるんだろ？　寝惚けてたのかな？　　アハハ」

あくまで知らぬ存ぜぬを貫き、自分は関わりありませんというアピールをしながら

Ｃ．Ｃ．に近付く。早いところ此れを回収し、後日人気の無いところで処分しなければと思い、Ｃ．Ｃ．の持つプラカードに手を伸ばす。

が、その手はプラカードを掴む事無く空を切る。あれ？と疑問に思いＣ．Ｃ．を見ると――――ニタァァッと、そんな擬音が聞こえてきそうな程の、凄まじく良い笑顔を浮かべていた。

「おやおやどうした？　蒼のカリスマともあろう者が、笑顔が引き吊っているぞ？」

（こ、この魔女ォォッ!!）

気付いていやがる。このドッキリと書かれたプラカードを見て、その経緯と理由をこの魔女は一瞬で見抜いていた。これがお婆ちゃんの知恵袋の成せる技か、なんて傍迷惑な！

しかしそんな事を考えても最早手遅れ、このままではこの魔女に弱みを握られ、ボロ雑巾の如く使い潰されるか、或いはこのプラカードをＺ―ＢＬＵＥの面々に差し出され自分は養豚場の豚となってしまうだろう。

「ふふふ、さぁて折角お前の弱みを握れたんだ。このプラカード、どうしてくれようかなぁ？」

「い、い……」

「ん？」

「嫌だー！」
「のぅわ!?」
　そんな未来は絶対に回避せねばならない。ならばここは力付くでも奪還をせねばならないだろう。力加減は強く、それでいて怪我を負わせないように飛び掛かったシュウジは避けるべき未来の為にＣ．Ｃ．へ襲い掛かる。
　まさかこんな短絡的な行動に映るとは思っても見なかったＣ．Ｃ．も動揺しながら抵抗する。ドッタンバッタン大騒ぎをする二人、幸いここの部屋は防音も完備されている。多少騒いでも問題はなかった。
　しかし――――。
「シュウジ、いきなり入ってごめんなさい。どうしても貴方と一度話をしたかったの」
　シュンというスライド音と共に部屋へと押し入る紅月カレンとヨーコ＝リットナー、両人共に特徴的な朱色の髪をした彼女達は、それぞれシュウジとある意味綿密な関わりを持っていた。
　これまでシュウジと敵対し、死なせた事を後ろめたく思っていた二人、どうして何も言ってくれなかったのか、どうして頼ってくれないのか、一人で何でも出来るだけに誰かを頼ろうとしないシュウジに、二人は複雑な想いを抱いていた。
　しかし、今回明かされたシュウジの時獄戦役での出来事を聞いて、彼女達はシュウジ

にどう問い詰めるべきか分からなかった。頼りたくても頼れない状況、呪いを施され、助けを求めるサインすら出すことを許されず、ただ孤独でいることを強要される。その辛さと苦しさを共感できる術を持たない自分達では、済まなかったとモニター越しで頭を下げる彼に何も言えなくなってしまった。

だからせめて話を聞くだけでもと思い、ここまで重い足を引き摺りながらやって来た。幸い、そう思っていたのが自分だけではなかったのが互いに唯一の救いだった。

これからは私達が彼の助けになろう。そんな気持ちでいざ扉を開けて部屋へと入ると。

「あっ」

緑の魔女をベッドの上で押し倒す蒼の魔人（笑）の姿があった。カラカラと朱の二人の足下に転がる物体、それがドッキリと書かれたプラカードだと分かると……。

「ふ、フフフ……」

「あは、アハハ……」

「ヒイッ!?」

何処からともなく電磁ライフルを取り出し、拳をバキバキと鳴らす二人に、シュウジは変な声が漏れた。

「よっと、それじゃあ私はこれで失礼させてもらうよ。ではなシュウジ、ピザの件楽しみ

にしているぞ」
「この状況で!?　嘘でしょ!?」
　ではなと、手を挙げて部屋を後にするＣ．Ｃ．。残されたシュウジは部屋の隅に追いやられ、迫り来る朱の修羅に恐怖で震え上がる。
「ま、待って！　せめて、せめて話だけでも聞いて！」
　定番な命乞い、言ったところで無駄だと分かっていながらもそうせざるを得ないのは、悪人善人問わないらしい。
　けれど少しは効果が合ったのか、二人の歩みは止まる。まさか通用するとは思わなかったのかどう説明すればいいのか分からないシュウジは……。
「て、て、て――――」
「「……」」
「テヘペロ♪」
　取り敢えず可愛さをアピールしてみた。

「アビャー」

その１６８

△月ω日
どうも、先日〝マジで死ぬかと思ったランキング〟トップ３に入る体験をした者、シュウジです。
カレンちゃんとヨーコちゃん、阿修羅を越えたナニかとなった紅い二人からの折檻をどうにか生き残った自分は、現在救援を要請された月に向かっているＺ―ＢＬＵＥと行動を共にしている。
助けを求めてきたのはムーンレイスと呼ばれる月に住まう人々、その代表であるディアナ＝ソレル嬢からしく、話を聞くとサイデリアルの幹部らしき者が艦隊を引き連れて一方的にムーンレイスの街を占領したのだとか、迎撃しようにも街には地球と同様、多くの人々で溢れている。
彼等を守護する者としてその様な状況になるのは承服しかねる。しかしこのまま彼等を月に居座らせる訳にも行かない、そんな訳でＺ―ＢＬＵＥに救援を要請したのが事の顛末だ。

自分もサイデリアルと戦うのは別に構わないし久し振りの――本当に久し振りの団体戦だ。誰かと協力して戦うというのはこう、熱くなる所があるよね色々と。

そんな訳でＺ―ＢＬＵＥと一緒に自分も月へ向かうことになった。ヒビキ君もすっかり快復したし、あの様子なら激しい戦闘も乗り越えられるだろう。

そうそう、先日アドヴェントのクソ野郎に一時期心が壊れかけていたヒビキ君だが、先の翠の地球から出て行こうとした時に遭遇した戦いの中で、無事に完全復活を遂げた。

経緯を語ると、心を破壊されて昏睡状態だった彼を、Ｚ―ＢＬＵＥの自称マスコットＡＧとクロウさんの二人が動けないヒビキ君を無理矢理ジェニオンに乗せて戦場に送り出したのだ。

当然Ｚ―ＢＬＵＥはこれに猛反発、宗介君を筆頭にヒビキ君と親しかった同世代の子達は、ＡＧに激しい怒りを募らせた。

その後、刹那君はＧＮドライヴ搭載型機体ダブルオークアンタによるクアンタムバーストでヒビキ君の意識領域を拡大、タケル君も超能力でヒビキ君の深層意識へ向かい、Ｚ―ＢＬＵＥの皆と共にヒビキ君を起こしに行った。

その間自分はと言うと、襲ってきたズール皇帝と宇宙魔王、並びにサイデリアルの準幹部となってしまったスズネ先生の相手をしていた。元々歪曲フィールドでＧＮ粒子

を防いでいた訳だし、ヒビキ君を起こしている間の皆の機体は無防備を晒してしまう。自分以外にもシャア大佐――――あれこれ悩んだが結局この呼び方に落ち着いた――――他にもクロウさんといったスフィア組も、ヒビキ君達が戻ってくる間の迎撃に勤めていたけど、相手はＺ―ＢＬＵＥの事を良く知るスズネ先生に、タケル君や鉄人を苦しめたズール皇帝と宇宙魔王なのだ。

特に後者の二名は時獄戦役で随分と貸しを作ってしまっていた。あの時の無様を払拭する為にも、彼等は自分が相手をする事にした。

ネオ・グランゾン。ヒビキ君の復活の予兆にちょいとばかりテンション高くなった自分は久し振りにマハーカーラを解放。ネオとして力を振るい、連中をその取り巻きごと潰した自分は、ここで一つあることに気付く。

ネオ・グランゾン、前より力増してね？　て言うか有り余ってね？　具体的には原初の魔神（ゼロ・グランゾン）になりたいという訴えがスゲェ強く伝わってきて、その衝動が力として溢れ出ちゃってる感じ？

いやね、グランゾンの得意分野である重力操作がさ、割りと洒落にならない事になってるのよ。宇宙魔王の使うブラックホールさ、消しちゃったんだよ。こう、黒い絵の具を大量の水で溶かし消すみたいにサッといった具合に。

確か、以前宇宙魔王がブラックホールを放ってきた時は、自分もＢＨＣで対抗したん

だよな。ブラックホールというのは極端に言えば重力の回転、その極致といえる事象だ。一方通行の重力に逆方向の重力をぶつけて相殺させる、前回はそうやって対処したのに、今回は腕の一振りで消してしまった。

――――もしかしてグランゾン、結構ヤバい事になってる？　俺が思っていた以上に。少しは相棒の事を理解したつもりだけど、まだまだ人機一体には遠いな。なんて、そんな間の抜けた事を考えている内にヒビキ君は完全復活を遂げた。

更には機体を真化させる事に成功。ジェニオンをジェニオン・ガイ、そして新たな姿ジェミニオン・レイへと変容させた。ヒビキ君は己の心の内にある絶望を乗り越え、希望すら超えてジェニオンを自身のモノへと変質させたのだ。

新たな段階へと進んだヒビキ君と彼の相棒ジェミニオン・レイは襲い掛かるスズネ先生を一蹴、残りの無人機達を瞬く間に殲滅してみせた。ズール皇帝と宇宙魔王も「アイエエエ!?　太極!?　太極が二つ!?　ナンデ!?!?!?」と言った風に酷く狼狽えながら後退、見事自分達は彼等との戦いを勝利で飾って見せた。

その後、目覚めたヒビキ君と格納庫で和解。泣きながら謝ってくる彼に自分も済まなかったと素直に謝罪した。何せ自分を兄貴分と慕うヒビキ君を、事情があるとは言えその手を汚させてしまったのだ。一、二発殴られるのは覚悟した。

けど、何故かヒビキ君は自分を殴ろうとせず、そのまま自分を許してくれた。許して

くれるのは嬉しいが、どうしてこうもすんなりと上手く行くのか。疑問に思った自分が訊ねると、そんな顔した相手を殴ることなんて出来ませんと、何故か引き気味に言われた。

……そういやこの時の俺、ヨーコちゃん達にシメられて顔がアンパ〇マンとミイラ男が悪魔合体した様な顔してたわ。確かにそんな相手に手は出せんわな。

まあ、そんな訳で無事にヒビキ君は復活を遂げ、自分も和解する事に成功。その後Ｚ―ＢＬＵＥは月から救援を要請され、現在に至っているという訳だ。

スズネ先生は未だ敵対し、アドヴェントやサクヤ改めサクリファイスも以前として行方は知れず、宇宙の大崩壊は着実に進んでいる。現状はあまり良くないが、それでもＺ―ＢＬＵＥと自分は大きな一歩を踏み出せたと思う。

あ、因みにギルター＝ベローネは現在ネェル・アーガマにてオットー艦長のアドバイザーとして働いている。彼処には他にもレイアム副長という優秀な女性が着いているが……なに、優秀な人間は幾らいたって困るものじゃない。何かあれば自分に話が通る様にしてあるし、問題は何もない。

さぁ、次は月の女王様の助けになる時だ。今度はチームワークを大事にする事を第一に考え、努力していこうと思う。

――一方その頃、ネェル・アーガマのブリッジにて。

「……」

「……」

「……」

「……ご、」

「っ！」

「ごめんなさい――――」

行き場を無くし、血反吐を吐くように、或いは絞り出す様に静かに謝罪の言葉を口にするギルターに、オットー並びにオペレーターのクルー達は思う。

（あぁ、コイツ、苦労してたんだなぁ）

と、元敵ながら同情していた。

その後、ネェル・アーガマでのギルターの扱いは少し優しく……もとい緩くなったという。

◇

――――蹂躙された。一方的に、成す術無く、容赦なく、彼の者は私を、私達を殴り倒した。

感情が渦巻く。怒りが、哀しみが、楽しめない自分の憤りが、渦巻いて、のたうち回って止まらない。

足りない。あの魔人に挑むには今の私達ではまだ足りない。ならば――――。

「そうね。そうするしか無いわね」

足りないのなら、不満ならば、餓えるのならば、渇くのならば――――足せばいい。満

足するまで、満たされるまで、潤い、溢れるまで自らに注ぎ込めばいい。
幸い目の前にはそれを成せるモノが一つ、在る。
「あぁ、アドヴェント。同胞よ、我が分身よ。貴方の魂、心、記憶の一片まで余すことなく私に――――頂戴」
「――――」
応えはない。当然だ。目の前に寝ているソレは未だ先の魔人によって刻まれた痛みから快復仕切ってはいない。しかし、構うことはない。何故なら元よりそうなる事が自分達の目的なのだから――――。
咀嚼する。噛み締め、呑み込み、一体化するプロセスが組み込まれ、実行し、起動する。
そして生まれたのは――――金色の輝きを放つ一頭の獣。鬣の如くその黄金の髪を靡かせ、女は一言口にする。
「これが――――喜び」
歓喜した。誕生した自らを、これから訪れる苦難に、いずれ対立する彼の者達に……。
いや違う。喜びだけではない。怒りが、哀しみが、楽しみが、あらゆる感情が一つに融合し、純化していく。

嗚呼、そうなのか。ここに来て漸く我々は理解した。
「これが、これこそが――――愛、なのですね」
深い深い奈落の其処で、愛を騙るケダモノが顕現した。

その１６８．５

Ｚ―ＢＬＵＥ、現在地球圏の人類が有する最強部隊。年若い若者やベテランの戦士、傭兵が多く属するこの部隊に今日も変わらず朝がやって来た。

朝――――といっても、実際彼等が現在いるのは宇宙空間、日の出など無く徹底した時間管理の中で睡眠と起床が行われている。

起床の時間に覚醒し、時間通りに起き上がる。Ｚ―ＢＬＵＥの一員である早乙女アルトは未だ寝惚け眼な自身の顔に備え付けの簡易シャワーで寝汗を落とし、完全な覚醒を自ら行った。

髪を乾かし、解かし、整えながら着替えを済ませた彼は朝食を済ませる為、マクロス・クォーターの食堂に向かう。

Ｚ―ＢＬＵＥの食事事情は他の部隊と比べて比較的恵まれている。戦闘員だけでなく彼等を支える生活班の手で作られる料理の数々は暖かく、戦いの日々で廃れた彼等の心を内側から癒してくれている。

今日の当番は２１世紀警備保障――――ダイガードのサポート達が担当している筈、彼

の会社の殆どが日本出身である事から今日の朝食は和食である可能性が高い。早乙女アルトも日本に縁のある人間なので、日本の料理には一目置いている。
楽しみだ。戦いばかりをする今の状況、不満を言うつもりはないが、せめてこの時間だけは静かに緩やかに過ごしたい。そんな淡い希望を胸に食堂へやって来た彼が目にしたものは……。
「はい、焼き鮭定食お待ちどうさま。ミカンをオマケにしておきましたから、沢山食べて下さいね」
「サンキュー蒼スマの兄ちゃん！」
割烹着を身に纏い、仮面を被る嘗ての魔人が厨房に立っていた。
思わず腰が抜けそうになる。朝から衝撃的過ぎる光景を目の当たりにしてしまったアルトは、顎が外れそうになる程口を開き、目をこれでもかと剥かせ、プルプルと指を震わせながら厨房に立つ魔人を凝視する。
蒼のカリスマ、先の時獄戦役で隔絶宇宙にて彼の者と戦闘、死闘の末辛くも何とか勝利した、Ｚ―ＢＬＵＥにとって過去最強の難敵だった者。
その裏で隠されていた真実、やむを得ない事情の下自分達と戦うしか道が無かった彼の当時の立場の辛さは、同じ大事な者を抱えるアルトとしても他人事ではなく、そして充分過ぎる程理解できた。

そして全ての垣根が消え、漸く和解する事の出来た自分達は、遂にあの蒼のカリスマを仲間にすることが出来た。心強い味方だ。一部……特に時獄戦役以降に新しく加わった人間が未だ訝しむ中、手放しで喜ぶ事は出来ないが、それでも一つの大きな問題点が改善された事に、その時のアルトは大きな安堵を覚えた。

――――それなのに、目の前の混沌とした光景がその時の自分の気持ちを台無しにしている。何故割烹着なのか、何故厨房に立ちながら仮面を被っているのか、コック帽の代わりのつもりなのか？　なら何故三角頭巾をしている。そもそも何故彼が厨房に立ち、朝食なんて作っているのか。

可笑しいと思うのは自分だけなのか、食堂をグルリと見渡すが特に誰も不思議に思うことが無いのか、皆それぞれ黙々と朝食を食べている。

特に小学生組であるワッ太は和気藹々と白米を頬張っている。隣の金田正太郎は若干戸惑いながらも特別何か気にした様子もなくパンを齧っている。

確か小学生組は前に蒼のカリスマ――――シュウジに勉強を教えて貰ったり、勉学の楽しさと難しさを教え説かれたと聞いており、比較的他のＺ―ＢＬＵＥの面々よりも親しかった。故に先日のシュウジからの事の真実を聞いて、ヒビキに次いで関係を修復出来たのは当然の帰結とも言えただろう。

（でも、だからってああも受け入れられるモノなのかよ、割烹着だぞ割烹着！）

仮面と割烹着というミスマッチ過ぎる格好、端から見れば人を小馬鹿にしているとしか思えないその姿に、何故誰も指摘しないのか。誰か自分と共感出来る者はいないのか。

――――いや、いた。テーブルに伏している一人の女性が、あれはチームＤの一員であり実質のリーダー格である飛鷹葵だ。

「なんで割烹着なのよなんで仮面付けてるのよなんで仮面の上に三角頭巾を付けてるのよなんで自然と厨房に立ってるのよ」

どうやら自分と全く同じ感想らしい彼女に、アルトは言い難い安堵を覚えた。一人彷徨う荒野に自分と同じ境遇の人間を見た。そんな気持ちだ。

すると向こうも此方に気付き、視線を向けてくる。その顔は時間帯は朝なのにも関わらず酷く疲れた顔をしている。目が合い、葵はフッと乾いた笑みを浮かべている。どうやら自分も似たような顔をしていた様だ。

「ここ、座っても良いか？」

「ええ、どうぞ」

向かい側に座ることを快く承諾してくれた彼女に、アルトも自然と笑みを浮かべた。同志、そう言っても過言ではない関係が二人の間に出来ていた。少しばかり話をしよう。普段あまり接点の無い自分達だが、これを機に色々話すのもいいかもしれない。

「おはようございます、葵ちゃんアルト君。今日も一日頑張りましょう。はいアルト君はブリの照り焼きと白菜の浅漬け、お味噌汁は赤味噌が好きだったよね。葵ちゃんはスクランブルエッグとコーヒー、パンは表面固めに焼いておきましたよ」

「「――――――」」

頼んでもないのに出てくる朝食、別にそれは良い。どちらにせよ食べるつもりだったし内容もほぼ自分の望み通りの品だ。

ただ、一つ言えることが在るとすれば……。

「どうして俺の好みを知ってるんだよ」

「どうして私の好みを知ってるのよ」

「？　同じ生活する仲で相手の好みを把握するのは普通の事では？」

心底不思議そうに首を傾げる魔人に、二人は頭を抱えた。

◇

蒼のカリスマ――――もとい、シュウジ＝シラカワのＺ―ＢＬＵＥに合流してからの行動は献身的に尽きるモノだった。格納庫に行けば整備班と共にＺ―ＢＬＵＥの各機体の整備調整を手伝い、食堂に行けば生活班と一緒になって厨房で料理を作っている。

シミュレーションを行いたいと誰かが言えば率先して付き合い、腕を磨きたいと誰かが言えば護身術程度で良ければと自称し組手に付き合う。

そんな献身的過ぎるシュウジの生活態度はＺ―ＢＬＵＥに属する殆どの人間の警戒心を弛めた。トップレスの少年少女達はＺ―ＢＬＵＥに入って日が浅い事もあり当初は蒼のカリスマの存在に懸念していた節があったが、魔人と恐れられる人間の人となりを知ることでその懸念は杞憂のモノへと変わっていった。

「でもさぁ、もう少し手を抜いても良いと思うんだよ俺ァ」

ドラゴンズハイヴにある休憩室、その隅で間の抜けたボスの声が響く。その声には覇気がなく、やるせなさと気疲れの色が濃く滲んでいた。

そんなボスの一言に同調したのか、周囲にいる他の面々も同意する様に何度も頷く。

「だよなぁ。働き過ぎるよあの人、あのままじゃあいつ、いつか倒れちまうんじゃねぇのか？」

同意しながら付け加えるのは貧乏クジ同盟の一人、デュオ＝マックスウェル。その言

葉には心配というよりも呆れの意味合いが強い。
「いや、本人によればどうも好きでやってるみたいだぞ。共同生活が楽しいとか何とか……と、生活班と話しているのを偶然聞いたな」
「流石にそれはねぇだろ」
「寧ろ献身的に働いて此方の反応を楽しんでいる。と言った方が俺は納得するね」
トロワの話を即答でデュオが否定し、同じ貧乏クジ同盟の青山が付け加え、他の皆がそれに同意する。シュウジの働きは献身的を通り越して過剰と思えるもので、その働きぶりは同じ部隊で生活するデュオにとっては、数日経過した今も違和感を感じるモノだった。
というより慣れる方が可笑しい。幾ら操られ、やむを得ない事情があった為とはいえ、自分達は一度あの男と本気の殺し合いをしたのだ。表向きは献身的な態度のシュウジにZ―BLUEの多くは心を許しているが、一部の人間は彼を信じきってはいない。
特にトップレスのリーダー役であるニコラス＝バセロンは蒼のカリスマに並々ならぬ悪感情を抱いているのか、彼を見るニコラスの眼は鋭いモノになっている。
他にも因縁からエレメントのカイエンや、何故かノノも蒼のカリスマを目の敵にしている。カイエンは以前背後を蒼のカリスマに容易く取られている事から、軍人気質であるカイエンが彼に対抗意識を持つのは無理もない話である。

一方ノノはどうなのか。彼女の姉貴分（本人は否定しているが）であるラルクが訊ねた所によると、何でも台詞を取られたらしいのだ。要領の得ないノノの言い分に理解出来ないラルクはお手上げ、蒼のカリスマ本人にも聞いたが、彼自身も心当たりは無いのか首を傾げているばかり。

話は大きく逸れたが、ここにいる全員が抱いている思いはただ一つ、あの魔人こと蒼のカリスマは本当に信用出来るのか？

自分達と戦った理由は聞いた。その事情にも同情しているし、彼が真に自分達と一緒に戦おうとしている気持ちも、ここ数日彼の行動を見ていれば嘘ではないと理解できる。

だがそれでも、どうしてもと思う気持ちが出てきてしまう。どれだけ蒼のカリスマが献身的だろうと、そこに何らかの裏があるのではと勘繰ってしまうのだ。

だって、だって……物凄く胡散臭いんだもの。四六時中仮面を被るのもそうだが、彼が丁寧な敬語で話していると凄まじく怪しいのだ。

嘗て破界事変の時、ヒイロや当時のソレスタルビーイングの面々が彼を遠巻きに監視していた時期があったが、そんな彼等でも彼の蒼のカリスマの真意を見抜く事は出来なかった。

蒼のカリスマ――――シュウジ自身は良かれと思って行っている献身的行動も、その

話し方と身に纏う雰囲気で台無し処か、マイナス方面に振り切っている。
いっそのこと艦長達と同じ部隊を引っ張る立場となってブリーフィングに出れば良いのに、それらの役割は専らギルターが出席していて、心なしかそのギルターも何処か悟った顔をしている。
蒼のカリスマ、シュウジ＝シラカワの行動、その全てが裏があるような気がしてならない。噂によるとテレサ＝テスタロッサもその聡明さ故に、シュウジの思わせ振りな行動にやきもきしているらしい。御愁傷様である。
因みに他の艦長達は諦めの境地でいる。気にしているだけ無駄と悟ったのだろう。ギルターと並び正しい選択である。
そんな訳で蒼のカリスマの事を今一つ信用出来ていない一同は深いため息を溢す。と、そんな時だ。
「成る程、皆さんの私に対するお気持ちは良く理解しました」
「「っ!?」」
突然聞こえてきた声、振り返れば自分達の背後で佇んでいる件の張本人がいる事に彼等は揃って驚き、そしてしまったと愕然となる。
「あぁ、そんなに動揺なさらなくて結構ですよ。盗み聞きしていたのは此方でしたから。……しかし、確かに皆さんの懸念は理解できます。事情があったとは言え私達は一

度本気で殺し合った間柄、いきなり全て受け入れろと言うのは無理があります」
「え？　あっ、そう？」
「ですので、次の戦闘は私一人で出撃させて頂きたいと思います」
「――――ファっ!?」
「Ｚ―ＢＬＵＥの皆さんはここ最近度重なる戦闘で疲弊していると聞きます。幸い私とグランゾンの消耗は軽微」
「ちょちょ、ちょっと待って――――」
「既にこの事は各艦長達に伝えてあります。何故か全員顔が引きつっていましたが、承諾してくれました。そこで皆さんには私が本当に共に戦うに足るか否か、どうか見定めて欲しい」
　では、と軽く挨拶をした蒼のカリスマは部屋を後にしていく。それから少しして艦内に警報が鳴り響き一機の機体が艦から飛び出した。
　一方的、蹂躙とも言えるその光景に誰もが言葉を失った。もういい、もういいからその位にしてやれ、相手泣いてるじゃん。いつもは戦意マシマシで戦場に出るＺ―ＢＬＵＥの猛者達も、この時ばかりは少ししおらしかった。
　その一方で真剣に、全力で戦ったと自負する蒼のカリスマことシュウジはホクホク顔で帰還、これで皆も自分の事を認めてくれるだろう。そんな気持ちで艦に着艦する彼が

待っていたのは苦笑いを浮かべるシャアとアムロだった。
「どうでしょう。私なりに全力を尽くしたつもりなのですが……」
「あぁうん。そうだね、まぁ伝わってはいると思うよ、うん」
「君が真剣なのは……まぁ、分かったと思う」
何処か歯切れの悪いアムロとシャア、しかしそんな事も気にもせずシュウジは意気揚々と格納庫を後にする。そんな彼の後ろ姿を見て二人は思う。
「仮面を外して敬語を止めれば親しみやすくなると思うんだがなぁ」
「怖いものだな。若さ故の過ちというのは」
尚、どんな相手でも一切手を抜かないシュウジのやり方を見たＺ―ＢＬＵＥの面々は、少しシュウジと距離を置いたという。
「何故だっ!?」
「バカは死なないと直らないと言うが、死んでも直らない場合はどうすればいいのやら」
ただ唯一、Ｃ．Ｃ．だけはいつも通り辛辣だった。

その１６９

＃月＊日

――――いつ以来だろう、こんなにも穏やかな気分で日記を書けるのは。いつ以来だろう、こんなにも清々しく日々を満喫出来るのは。

Ｚ―ＢＬＵＥと合流して数日、現在の自分の状態は頗る良好である。あの喜び野郎にも一応ある程度殴れたから気分も良いし、ヒビキ君を初めとしたＺ―ＢＬＵＥの面々とも和解することが出来たし、そのお陰でＺ―ＢＬＵＥでの自分の生活は充実の一言に尽きた。……まぁ、そこに至る過程で二人の紅い修羅から死ぬほどの折檻を受けたけどね。完全な自業自得でしたし、別にいいけどね。

――――――リア充。そう、今の自分は正しくリア充だ。アムロさんやシャア大佐といった年長組からカミーユ君やバナージ君、キラ君達青少年組、ワッ太君等小学生組とも仲良く話をする仲という、以前の自分とは想像も出来ない輪が出来ている。

ヨーコちゃんカレンちゃんもあの日の一件も許してくれたし、今では一緒にシミュ

レーションで特訓をする位には仲良くなっている。ヒビキ君も己の愛機であるジェニオンとスフィアを新しい段階に進めたお陰で調子が良さそうだし、自分との組み手でも見違える程強く、そして上手くなっていた。

そんなこんながあってZ―BLUE内では自由に行動させて貰っているし、先の事情説明で彼等との蟠りは殆ど払拭出来たと言って良い。本当、正直に話せて良かったよ。

そんなZ―BLUEの面々の大部分とは仲良くなれたと自負する自分だが、実は数人ほど自分に敵意を向けてくる人がいる。カイエン君は……まぁ、仕方ないのかなぁ、最初会った時にちょっと脅かすつもりで背後から声かけただけなんだけど、まさかあそこまでムキになるとは思わなかった。

いやさ、いきなり背後から声を掛けるのは失礼だと思うよ？　でもカイエン君やアマタ君、ミコノちゃん達エレメントの皆はあの不動さんとこの生徒達みたいじゃん。不動さんという出鱈目人間を知ってるなら自分くらいいいよねーと、軽いノリでやってしまったのがいけなかったのかなぁ。

次に相良宗介君だけど……うん、これは言い訳できねぇや。完全に自分が悪いもの、親友であるヒビキ君が精神的に追い詰められている中、事情があったとは言えその頃の自分はヒビキ君の為に何かしてやれた事は何一つ無かった。宗介君からすれば自分はヒビキ君を追い詰めた張本人、彼が自分の事を未だに敵視しているのも無理はな

い。

他にも刹那君。彼の場合は敵視というより困惑と言った方が正しいかな、時獄戦役の時、隔絶宇宙での最終決戦……つまり自分との戦いにちょっと色々ぶっちゃけたから、その事についてまだ彼の心に痼が残っているのかもしれない。彼とは何れ話をする必要がありそうだ。

後は……そうだな、理由なく何故か一方的に敵視してくる人がいる。名前はニコラス＝バセロン君、元々はフラタニティと呼ばれる組織に所属していたバスターマシンのパイロットで、トップレスと呼ばれる超能力保有者だという。

超能力と聞いて同じ超能力者である明神タケル君と仲が良いのかなー、なんて思っていたけれど、どうやら彼は気障な性格らしく、それが原因なのか皆とは少し離れた距離を置いているらしい。

そんな彼が何故自分を敵視しているのか、幾ら考えても全く心当たりは思い浮かばない。もしかしたら何処かで何らかの因縁があったかもしれないが、思い出せない内は下手に彼を問い質すのは止めておこう。最悪、余計に拗れてしまうかもしれない。

そして最後にノノちゃんと呼ばれるアンドロイドの少女なのだが、こちらはニコラス君以上に理由が分からない。以前一緒に出撃する時は割りと仲が良かった。人を指差しでラスボス呼ばわりされる程度には……だけど。

そしてその後帰艦してお疲れーな感じで話し掛けたら話し掛けないで下さいと怒鳴られた。何故？　疑問に思っても心当たりは当然無い自分は彼女と一番親しいラルクちゃんに訊ねたがこれまた知るもんかと一蹴され、救いは無いのかと同じトップレスであるチコちゃんに縋っても興味無いわねと両断。あれ？　俺トップレスの子達とは総じて仲悪い？

い、いや違うもんね。同じトップレスのカシオ氏とはそれとなく話をする間柄だからまだまだ仲が悪いとは断定出来ないもんね。そのカシオ氏も、何故か自分と話をする時は絶対に目を合わせないようにしているけど……。

あれ？　そう言えば俺他にも何人か目を合わせないように話をする人が何人か心当たりがあるぞ？　ミスリルの女艦長のテスタロッサ大佐とか、ネェル・アーガマの通信士のミヒロさんなんか、俺を見るなり小さく悲鳴を上げてた様な……。

い、いやいやいや。違うし、嫌われてるとかそんなんじゃないし。アレだよ、ちょっといきなり仮面の男が現れたから吃驚させちゃっただけだし。

そうだよね。いきなり仮面を被った男が出てくれば驚くよ。一応声は掛けたけど、人間何かに集中してると近くの人の声も届かない事とか良くあるし、別に怯えられた訳じゃないし。次からは仮面取るし。

つーか仮に、万が一自分が嫌われているのだとしても自分と仲良くしてくれる人は結

構いるし、２１世紀警備保障の皆さんとか、特に生活班の女性陣とは料理教えたりと割りとフレンドリーだし。

特に黒ギャルな谷川さんとか「蒼のカリスマさんマジパネェー、ウチに入社しちゃいません？」なんて冗談を言われる位親しいから。……その直後に青山さんから会社乗っ取られそうだから止めろと言われたけど、別にそんな事しねーし！

寧ろ貢献するし、警備会社を世界有数処か宇宙に進出する一大企業に成長させる勢いで貢献するし。俺ってばアレだから、一度尽くすと決めた相手にはトコトン尽くす人間だから！

……何をカミングアウトしてるんだ俺？

と、ともあれ、色々問題点はあるけれどＺ―ＢＬＵＥ内に置ける自分の生活は極めて良好、その問題も改善する余地があるならば適応に対処し、集団生活を円滑に満喫出来るよう頑張っていこうと思う。

そろそろ月に到達する時間も近い。今日の所は一先ずこれで終わりにしよう。

◇

ラース・バビロン。新地球皇国の総本山にして、現在の蒼の地球の支配を象徴とするサイデリアルの主力拠点。
その戦力はサイデリアルの中でも随一の精鋭達が属しており、ここからかの幹部達が皇帝の命により出立していく。強固にして堅牢、正しく難攻不落を具現化した宮殿要塞である。
その宮殿要塞の内部、まるで来賓の為に誂えられた豪華な一室に彼女はいた。
シオ――――嘗てはシオニー＝レジスと呼ばれていた女性、その身には自身と同じ純白なドレスを身に纏い、首もとには散りばめられた宝石で出来たネックレスが掛けられている。その有り様はまるで、城に幽閉された囚われのお姫様だ。
「……」

ここへ連れてこられて早幾月、皇帝アウストラリスの温情により身の安全を保障されている彼女は、ただただ無意味に時間を浪費し続けていた。
「やれやれ、相変わらず湿気た顔をしてるわね。笑顔とまではいかないけど、もう少し明るく振る舞えないのかい？」
「……こんな所にずっと飼い殺されて明るく振る舞えるのは、よっぽどの無神経か頭の可笑しい人間だけよ」
「ま、それもそうか」
そんなシオの空間にノックも無しに侵入してくる者が現れた。フィカーツィア＝ラトロワ、シオに遅れてこのラース・バビロンに幽閉されたジャール大隊の隊長である。
既に再会を果たしていた二人、言葉は交わしても視線は向けようとしないシオに呆れつつも、ラトロワは備えられたソファーに座り部屋の辺りを見渡す。
「しっかし、相変わらず何も無い部屋ね。豪勢な作りの割に娯楽に興じれそうなものが一つとしてない。これじゃあ牢屋と何一つ変り無いさね」
「実際、ここは牢屋みたいなものよ。違いがあるのは出てくる料理が中々なのと囚人服が綺麗なのとトイレの清潔が行き届いている所だけ、それ以外は脱出不可能な……ただの牢獄よ」
「随分と豪華な牢獄があったものだ」

シオの口から漏れる皮肉にラトロワは小さく笑う。彼女達がこうして顔を会わせていられるのは偏に、アウストラリスの許しがあるという事だけ。

現在ラース・バビロンの居住区の一角はリモネシアの人々の生活ペースとなっている。親しい者達がある程度の自由を持って生活出来るのは素直に有り難いし、皇帝の勅命があるのかサイデリアルの連中が自分達に暴行を働くことはただの一度も無かった。

けれど、だからと言ってここでの生活を享受し続ける訳にはいかない。どんなに優遇されても自分達は蒼の地球側に取って……いや、〝彼〟にとっての人質だ。いざというときに備えて、脱出する算段は早いところ建てた方がいい。

しかし、そんな彼等の目論見は何一つ通らなかった。ジャール大隊という戦闘のスペシャリストが揃って脱出を企てたのに、その全てが失敗に終わった。それは監視されているとかの問題ではない。

結界。スフィアリアクターであるアウストラリスの能力なのか、それともラース・バビロンの特性なのか、現在シオ達は強大な結界に囚われていた。

目に見えず、されどその結界を突破することは許されない。ある境界から過ぎると必然的に居住区の中心まで戻されてしまうのだ。上も下も、あらゆる箇所を探索しても一定の距離を歩くと強制的に元の場所へ戻される。次元の牢獄、隔絶された空間へと追い込まれた彼等に、出来る事は何もなかった。

どんなに足掻いても逃げれない状況、しかしそんな状況でも彼女達が諦めないでいられたのは、親しい者達がいるお蔭なのと……彼が来てくれるのを信じているからだ。

そう、彼が……シュウジ＝シラカワが来てくれる。彼があの蒼のカリスマだと知り、彼の人間性を知るリモネシアの多くの人々が、彼の到着を心待ちにしていた。

しかし、それを良く思わない女性が一人、それこそがシオであり、彼女が憂鬱となっている最大の原因だった。

「……ねぇ、ラトロワ。貴女はどう思う？　もし彼が、シュウジの奴がここに来てくれたら、貴女はその事をどう思う？」

「――――まぁ、普通に嬉しいんじゃないかい？　普段はヘタレで比較的大人しいアイツが実は噂の蒼のカリスマとか、話題になるには事欠かない話さ。現にウチの子達は最初こそは信じなかったが、今ではアイツに会うことを楽しみにしているよ」

因みにそれは私も同じと、そう付け加えるラトロワにシオは真っ向から否定する。

「それは……とても残酷な話よ」

「シオ？」

「彼は、戦うべき人じゃない。争うべき人じゃない。彼が本当にいるべき場所は……この世界にはない。いいえ、あっちゃいけないのよ」

言葉が強くなる。目を見開いて呆然としているラトロワを前にシオは自分が熱く

なっている事を自覚しつつも止める事は出来なかった。
「彼は……もう、立ち止まっていいの。戦いから身を引くべきなの」
思い返すのはあのノートに記されたシュウジ＝シラカワ本人の感情の吐露、そこには自分達の知らないシュウジの本心が書かれていた。
故に、シオは願う。どうか彼の戦いが少しでも早く終わります様に。神などいないこの世界で、それでもシオは祈り続けた。

その１７０

＃月√日

月を占拠するサイデリアルの精鋭部隊、ハイアデスの連中との戦いを終えて数刻、現在自分達は連中に占拠されていたＤ．Ｏ．Ｍ．Ｅ．に向けて足を進めている。

そんなに時間が無いので簡潔に言わせて貰うと、結果は勝利。Ｚ―ＢＬＵＥはハイアデスの副官であるダバラーンが率いる艦隊に打ち勝ち、見事サイデリアルを月から追い出す事に成功したのだ。

奴等の親玉でもある総司令官ストラウス改め――――――エルーナルーナと雌雄を決した訳ではないから完全勝利とは言えないが、それでも勝ちは勝ち。最小限の被害でサイデリアルの主力部隊を退けたという事実はＺ―ＢＬＵＥにとっても、地球人類にとっても大きな意味合いを持っている。

その最中でもヒビキ君も愛機の新しい力を使いこなしつつあるのか、然程労せず新形態に変身できるようになってきたし、それに合わせてＺ―ＢＬＵＥの各面々も実力を上

げてきている。本当、心強い限りだ。

そんな戦いの中で自分がしてきたのは後方からの援護射撃、ワームスマッシャーによる波状攻撃でハイアデスの足並みをバラバラにした程度だ。

以前艦長達に自分の意見を通してもらい単機で出撃したから、今回は自重して後方で大人しくしていた。だが、どうやらグランゾン的にはそれが面白くないのか、戦闘中ずっと自分にもっと戦わせろと訴えてくるのだ。その所為かワームスマッシャーの一発一発がやたら高威力で、ハイアデスの主戦力と思われる戦艦を二、三発で沈めてしまった。

援護が援護になっていない。後方支援の筈なのにやり過ぎな気がしないでもないが、ここ最近グランゾンのフラストレーションは溜まっていく一方、少しはその発散をさせてやろうと言うことで、自分はそのまま各機体の動きに合わせてワームスマッシャーを叩き込んだ。

そしてランドさんがダバラーンを退けた事で今回の戦いは終了、無事ディアナさん所の住民とD．O．M．E．共々奪還する事に成功した。

で、その後月の女王と呼ばれるディアナさんの案内の下、自分達はD．O．M．E．に案内される事になった。

なんでもそこには黒歴史の真実が隠されているのだとか。個人的には余り興味の無

い話だけど、以前再世戦争の頃、シュウ博士の情報を集めていた際にロージェノム氏から言われた言葉が今になって引っ掛かるので、それらを解消する意味でも自分も付いていこうと思う。

あ、勿論許可は頂きましたよ？

◇

Ｄ．Ｏ．Ｍ．Ｅ．。そこで彼の者によって明らかにされる黒歴史の真実、黒歴史とそこに纏わる最悪の未来と、其処から新たに生まれる可能性の未来。それによって数々の疑問疑惑が証明、或いは解明されるに連れて、Ｚ―ＢＬＵＥの面々は決して少なくはない衝撃を受けた。

「成る程、その黒歴史が記録されたモノが黒の英知であり、それに触れた者が根源的災厄（アバル）による破滅の未来に触れるとされている訳ですか……こうして聞けば黒の英知というのは一種のアカシックレコードにも思えなくもないですね。いえ、この場合はアカシックレコードの小端末と言えますかね」

『そうだね。少し誇張が混ざっている気もするがその認識で大体合っていると思うよ』

D．O．M．E．から聞かされる衝撃の数々、その話をこれまで静かに聞き入っていた蒼のカリスマことシュウジ＝シラカワは何気なくそう口にする。D．O．M．E．もそれに同調し、肯定した。

「つ、つまりどういう事？」

「アマタ君、後で教えて上げるから今は静かにね」

「あっはい」

D．O．M．E．が肯定した事によりシュウジは頭の中で幾つかの欠片が組合っていく様な、そんな感覚を覚えた。黒歴史を含めた宇宙の全てが記されたアカシックレコード、それに類似する黒の英知と次元の力――源理（オリジン・ロー）の力を引き出す鍵となるスフィア。

そしてその二つは元々は一つの起源から生まれたという。

その一言にシュウジは直感で確信する。黒の英知とスフィアは決して別々の存在で

はなく、元々は一つの存在だったのだと。嘗てはこの宇宙に存在し、君臨していたナニかだったのだと、これまで培ってきた知識が、見聞が、情報が、それが間違いでないと語っている。

だとすれば、その一つだったモノの存在は宇宙に影響を及ぼす――――なんて小さな話ではない。正真正銘宇宙そのものだ。

（こうして見ると、まるで神様だな。それもミケーネやミカゲの様な邪神じゃない。少なくとも奴等よりも神性はずっと強そうだ）

太極、源理の力を扱える迄に至ったシュウジだからこそ理解できる、起源となったモノの存在の大きさ。いや、シュウジだけではない。ヒビキもその事に気付いているのか、その表情は何処か青ざめている様にも見えた。

「シュウジ？　どうかしたの？」

突然口を開いたかと思いきや、再び沈黙するシュウジを不思議に思ったカレンが覗き込んでくる。どうやら考えに耽り過ぎたかと思い、シュウジは一旦思考を中断する。

「いえ、なんでもありませんよ。どうぞ続けてください」

あからさまに話題を逸らしたが、今はその事に追及する者はいない。次の話に移ろうとＤ．Ｏ．Ｍ．Ｅ．に質問を投げ掛けようとした時、衝撃が彼等を襲った。

外部からの攻撃、サイデリアルではなくミカゲからの横槍だと知ったＺ―ＢＬＵＥ

は、崩れるD．O．M．E．に別れを告げながらその場を後にする。名残惜しそうに佇むティファもガロードに手を引っ張られ、彼女も漸く覚めることの無い眠りに就けるD．O．M．E．を見送りながら彼の地を後にした。

――――その時だ。

「あれは」

ふと視界の端に仮面の男、蒼のカリスマが佇んでいる姿を目にする。早く逃げろと言いたい所だが、相手はあの魔人、この程度の窮地を抜け出す事など訳はない。一体何をしているのか気になる所だが、今はここから避難する事が先決だ。

去り行くティファ達、D．O．M．E．に残る最後の少女を見送り、自分以外居ないことを確認したシュウジは、崩れる天蓋に向けて口ずさむ。

「なぁ、D．O．M．E．さん。あんたは知ってるのか？　アンタの知る黒の英知の中にグランゾンがいた事を」

それは、嘗てカミナシティでロージェノムから言われた一言、何故今になってその事を思い出すのか、何故それが今更気になったのか。ここに来ればその事も分かるのではないか、そんな淡い期待を抱いていたシュウジに返ってきたのは、物言わぬD．O．M．E．の静寂だった。

やはり無理か。達観し、まぁいいかと気持ちを切り替えるシュウジ。いい加減自分も

離れないとな、と呟きながらその場を離れようとするシュウジの背後に――――複数の映像が浮かび上がった。

何だと思い振り返る。そしてそこに浮かび上がる映像にシュウジは絶句した。

「なんだよ……これ」

画面一杯に浮かぶ超巨大なゲッターロボ、巨神を思わせる白と赤の巨人、黒い天使と黒き銃神、禍々しい姿となった鉄の城と超弩級艦超銀河ダイグレン、獅子の顔を胸に宿した破壊神、他にも様々なロボット達が映像に浮かび上がり、それらが取り囲む様に展開される映像の中心にはネオ・グランゾンの姿があった。

彼等が敵対している？　いや違う。彼等はまるで何かと戦うように一点を目指して進軍している様に見える。一体何と戦うのか、そしてこの後何が起きたのか。追及しようにも既にＤ．Ｏ．Ｍ．Ｅ．からの応答はない。シュウジの前に映し出された映像も崩れる瓦礫と共に消えていく。

――――疑問を解消するつもりがドデカい疑問が新たに出来てしまった。考えをまとめようにも、今の状況にそんな余裕はない。

後ろ髪を引かれる処ではない。強い衝撃を受けたシュウジは戸惑いながらもＤ．Ｏ．Ｍ．Ｅ．を後にした。

その１７１

Ｄ．Ｏ．Ｍ．Ｅ．。嘗てニュータイプの祖として知られた彼の者から黒歴史に纏わる真実を耳にしたＺ―ＢＬＵＥ、その真実と重さに戸惑いながらも自分達の胸の中へと消化させた彼等は襲い掛かる堕天翅ミカゲを迎撃するべく出撃し、これを成功させた。
地球に宇宙怪獣の大群が向かってきているという情報を得たＺ―ＢＬＵＥは逃亡するミカゲを追撃せず、そのまま月から離脱する事を選んだ。
その後もノノが艦を降りる等のトラブルに見舞われながらも、着実に宇宙怪獣達との距離は縮まっていく。確実に近付いていくバアルとの戦いにＺ―ＢＬＵＥの緊張が高まる中、シュウジは格納庫にてマジンガーを眺め続けていた。
「な、なぁおい。なんであの人さっきからマジンガーを眺めてるんだ？」
「もうかれこれ１０分は見続けているわよ」
「ていうか、蒼のカリスマってあんな顔してたんですね」
その様子を遠巻きから見ているのは未だ彼の素顔を知らなかった者達、名前は知って

いても顔を直接見たことの無い彼等にとって、蒼のカリスマ改めシュウジ＝シラカワの素顔は新鮮過ぎて気後れしていた。

「……」

此方を覗き見している整備班の視線を敢えて無視しながらシュウジは考え込む。その原因となっているのは先程のＤ．Ｏ．Ｍ．Ｅ．で目の当たりにしたあの映像だった。

禍々しい姿となったマジンガー、超銀河ダイグレン並に巨大化したゲッターロボ、他にも様々なスーパーロボット達がグランゾンと共に何処かへ向かおうとしているその圧巻過ぎる光景は、目を閉じても瞼の裏に焼き付いて離れない。

一体あれは何なのだろうか。Ｄ．Ｏ．Ｍ．Ｅ．はあの映像を自分に見せて一体何を伝えようとしていたのか、答えを求めても今はそれに応えられる者はいない。

無論、この事をＺ―ＢＬＵＥの面々に話すつもりはない。少なくとも今は。何せ今はサイデリアルとの戦時中にあるのだ。皆が撤退したあのタイミングであんな映像を見せたと言うことは、少なくともあの映像にはＺ―ＢＬＵＥに知らせても意味のあるモノではない筈。

現状に影響を与えないという意味では有難い内容だ。取り合えずＤ．Ｏ．Ｍ．Ｅ．から与えられたあの映像の事は頭の隅に置いておく事にしたシュウジはマジンガーから視線を外し、格納庫を後にしようと一歩踏み出す。

「……？」

ふと、何かの視線を感じた。敵意でもなく悪意もなく、ただ此方を純粋に見ていたかのような感覚、何だと思い振り返ると、其処にいたのは今まで此方を見ていた整備班の人達のみ。

他に人影はなく、また観察されていた様な妙な視線は既に感じない。気の所為だろうか、これまで単独で行動していた弊害か、どうも過剰に反応してしまう自分に呆れながら、シュウジは今度こそ格納庫を後にする。

――その様子を上からという形で見ているモノがいた。鉄の城、ゼウスの力を受け継いだ巨人、兜十蔵の生涯最高の傑作と謳われる、最強にして原初のスーパーロボット。

マジンガーZ、その視線は一人の魔人の姿を捉えて放さない。

（成ル程、アレガ此度ノ――）

誰にも聞こえず、誰にも届かないその声は一体何を意味しての事なのか。そして――――。

（――楽シミダ。ナァ、ゲッターノ）

その呟きはここにはいない遥か彼方の時空へと向けられる。軈てマジンガーZを通して滲み出たそれは煙の様に四散し、別次元へと飛び立った。

暫くすると警報が鳴り、総員戦闘体勢の指示が艦内全体に響き渡る。それを受けた兜甲児は己の愛機に乗り込もうとするが……。

「あれ？　マジンガー、なんか調子良い？」

何時もより出力が上がっているマジンガーに疑問符を浮かべる甲児だが、整備班の人達が上手く調整してくれたのだろうと解釈し、構わずコックピットへ乗り込んだ。

マジンガーZ、その深奥に眠る狂気が目覚めるのはこの時空ではあり得ない。しかし、いつかの世界、何処かの時代にて彼等は合間見える事になるだろう。

これはそこへ至る為の何気ない記録……アカシックレコードにも記されない虚無の記憶である。

◇

宇宙怪獣との接敵までもう間もなくという時間帯、各機が各々の艦から飛び出し、二人一組（ツーマンセル）で部隊を組むＺ―ＢＬＵＥ、珍しくその中で溢れなかったシュウジは組んでくれたシャア＝アズナブルに内心で感謝した。

『珍しいですね、貴方の方から誘ってくるとは。今回はアムロ大尉とご一緒しないのですね』

『なに、私もたまにはそういう気分になるという事だ。君の邪魔になるような事はしないつもりだから安心してくれ』

『元より気にしてませんよ。……しかし解せませんね。気紛れというには私と組むことに突拍子が無さすぎる』

『ふっ、やはり聡いな。ならば単刀直入に聞こう。今回の宇宙怪獣の件、君はどう思う？』

『それは、先程のニコラス君とのやり取りで耳にした話に関する事ですか？』

シュウジが指摘する話、各機が艦から出撃した直後の事、ノノが艦から降りた事で様子のおかしいラルクに皆が心配し、トップレスの補充についてニコラスがそれとなく説明した時の事だ。

〝あがり〟トップレスの能力者が年代と共にその能力を失う現象の事、強力な超能力

を有するトップレスにとってその言葉は恐怖の代名詞となっている。
　その事に触れた事で真意の読めないニコラスに牽制を施したシャアのやり方は決して誉められたモノではないのだろう。しかし、ならばこそ分からない。その話と宇宙怪獣になんの関係があるのだろうか。
『シュウジ＝シラカワ、君は宇宙怪獣についてどれくらい理解がある？』
『根源的災厄（バアル）の一種、という程度ですが？』
『ならば太陽系限定種というのはどうだ？』
『……』
　シュウジはシャアが言わんとしている事が何となく分かった。根源的災厄と恐れられ、宇宙の終焉をもたらすとされる宇宙怪獣。総ての知的生命体の脅威と呼ばれる種が何故、態々太陽系限定種などと呼ばれる様になっているのか。
　姿形が違うから？　生態系が違うから？　宇宙怪獣と呼ばれる種族が態々そんな面倒な事になるのだろうか。
　ラルク達、トップレスの世界から出てきた宇宙怪獣と根源的災厄であるバアル。もしかしたら自分達は大きな勘違いをしていたのかもしれない。
　そして遂に現れる宇宙怪獣。太陽系限定種と呼ばれる何処か機械的な奴等を前に、シュウジは確信する。

『……成る程、そう言う訳か』

恐らく、彼等がここに来たのは自分達と戦う為ではない。後から来る本当の災厄に対抗する為に彼等はやって来たのだ。永い時の中で壊れてしまっても、彼等の中にある使命は今もその体躯の中で生き続けている。

『シャア大佐、先行します。申し訳ありませんが付き合って貰いますよ』

『確信を得たようだな。それで、どうする?』

『一先ず迎え撃ちます。彼等には申し訳ないがＺ―ＢＬＵＥも連戦を続けてきて疲弊している。可能な限り圧倒しましょう』

『了解した』

永い時の中で廃れ、壊れてしまった彼等には敵を判別する機能は上手く働いていない。迫るグランゾンとサザビーを攻撃対象と見なした太陽系限定種は事務的に行動し、攻撃を仕掛けてくる。

そんな彼等をワームスマッシャーで淡々と片付けていくグランゾンはやはり規格外と言えた。その後も現れる本物の宇宙怪獣と邂逅し、それが一億と二千万年に一度現れる真のバアルなのだと言うだけに現れたミカゲを適当にあしらい、それらを迎撃するグランゾンとＺ―ＢＬＵＥ。

その後、バスターマシン７号として覚醒したノノと共にバアルを撃退したＺ―ＢＬＵ

Ｅは、根源的災厄との本格的な戦いに向け決意を新たにするのだった。

その１７２

＃月♪日

宇宙怪獣。宇宙を終わらせる根源的災厄（バアル）、その尖兵である奴等が遂に本格的に地球への侵攻を開始した。

バスターマシンとして目覚めたノノちゃんと共にこれ等を撃破したＺ―ＢＬＵＥ、しかし宇宙怪獣の侵攻は留まる所を知らない。このままではＺ―ＢＬＵＥは全滅してしまう――――そんな時に現れたのが、これまで宇宙怪獣の亜種と思われてきた太陽系限定種の宇宙怪獣……いや、バスターマシンの群れだった。

これまでトップレスが宇宙怪獣と思い込んで戦ってきた宇宙怪獣、それが自分達を守る地球の守護者だったという真実にＺ―ＢＬＵＥは勿論、トップレスの面々は強すぎる衝撃を受けた。

けれど、ノノちゃんの一喝とＺ―ＢＬＵＥのやる気に感化された彼女達はそれ以上動揺する事なく、後から現れた宇宙怪獣を殲滅してみせた。

　その後、嘗て宇宙怪獣と思い込んできたバスターマシンと和解出来たＺ―ＢＬＵＥは、外宇宙から侵攻してくるバアルを迎え撃つ為にその戦域から離脱。彼等を見送りながら、Ｚ―ＢＬＵＥは近い内に待ち構えるバアルとの戦いに決意を新たにしていた。
　で、その後はヒビキ君達によるノノちゃんへの質問攻撃、しかしノノちゃん自身はまだよく分からない事が多く、彼等の質問のその殆どに答える事ができなかった。
　所詮は天然キャラかと呆れられるヒビキ君達に酷いですー！と涙するノノちゃん。実に微笑ましい光景だが、個人的に思い当たる節が一つある。
　地球帝国宇宙軍。バスターマシン７号として目覚めたノノちゃんが咄嗟に口にした言葉、聞く所によると、それはガンバスターの乗り手であるノリコちゃんが属していた組織の名称なのだとか。
　ノリコちゃんは、バスターマシン７号であるノノちゃんとガンバスターとは全く違うから、きっと無関係だと言ってはいるが、恐らくはそう言う事なのだろう。
　技術体系と言うのは時間が、時代が経つに連れて大きく変化する。街一つの電力を補う発電所が軈て手の平サイズになるように、ガンバスター並の馬力を出せる機体が人間サイズにまで縮む様に。
　それを可能としているのが、人間の可能性と、永遠にも等しい時間だ。人は時間さえあればどんなモノも生み出せる力を持つ。

多分、ノリコちゃんも本能的に気付いているのだろう。トップレスの皆がいた世界が、ノリコちゃんの遥か先の時代だという事に。しかしそれを断言しないのは、別にノリコちゃんがその事実に受け入れられないとか、そんな単純な理由ではない。

多分、ノリコちゃんはノノちゃんやトップレスの子達に遠慮しているのだろう。今まで敵対していた太陽系限定種が、実は自分達を守ってくれていたバスターマシンで、彼等を一方的に敵視していた事。それだけでも大きい真実だと言うのにそれ以上の情報を口にしてしまえば、きっと彼女達は混乱する。だからこそノリコちゃんはそれ以上口にすることはなかったのだ。

彼女がそう決めている以上、自分が兎や角口にする必要はない。真実が明らかになる時は近い内に来るだろうし、その頃になれば彼等も、その真実を受け止めきれる程には成長している事だろう。

今、この事を知っているのは、自分を除けばシャア大佐しかいない。彼も他言無用である事を了承していたし、これ以上余計な詮索はされる事はないだろう。

ともあれ、今回で一つの戦いは幕を下ろした。太陽系限定種改め、バスター軍団はノノちゃんの説得の下自分達は敵ではないことを認識して、今後は――――いや、これからも、だな。彼等は地球人類の心強い味方であってくれる事だろう。

そしてこれは余談だが、今回の戦いは相手が宇宙怪獣だった事もあり、久し振りにグ

ランゾンで大暴れする事が出来た。そのお陰か現在のグランゾンは落ち着きを取り戻し、今は他の機体と共に格納庫で休ませている。

戦いの最中、射線上に味方がいないことを確認した上で放ったディストリオンブレイク。真化を果たした影響か、やはりこれまでより強化されたこの一撃は、戦域を埋め尽くしつつあった宇宙怪獣の群れ、その四割を消し飛ばした。

スッキリした。グランゾンが放ったその一撃に言いし難い爽快感に身を浸していた自分、その時何故か一瞬戦場が静まり返った。バスター軍団も戸惑った様子で此方を見ていたし、自分が何かしたのだろうか？　シャア大佐に訊ねても引き吊った笑みを浮かべるだけでなにも言わないし、て言うか目を合わせてくれないし。

で、その後は微妙な空気になりながらも宇宙怪獣を撃破、スッキリしたものの、個人的には何故かしっくり来ない一幕でしたとさ。

そんでもってこれから地球に迫るミカゲに追撃をするのだが……ぶっちゃけアイツの相手ってもう飽きたんだよね。

だって何を言っても話が変わらないんだもの、この間のミケーネの連中を一緒になってボコった所為か多少反応は変わったけど、相変わらず自分達を翅無しと見下し扱き下ろしてくる。正直、自分にとって奴は脅威というか、ただ鬱陶しいだけ。

だから、もし次の戦いで不動さん辺りが出て来ないで自分達に成り行きを任せようと

するならば、自分は率先して奴を叩きに行こうと思う。アポロ君達や不動さんには申し訳ないが、最悪ミカゲはアクエリオン諸とも消えてもらうことにしよう。

故に今から謝っておく。アポロ君、不動さん、ごめんね。

＃月＊日

不動さん、もしかして俺の日記コッソリ覗き見してんじゃね？　そう思えてしまう位には不動さんの出てくるタイミングは神がかっていた。

地球に向かって侵攻するミカゲ、それを阻もうと地球皇国軍の最高司令であるエルーナルーナが率いるネオ・ジオン軍。サイデリアルと手を組み、本格的に奴等の庇護下に入ろうとする現在のジオンの総統であるフル＝フロンタルの考えが透けて見えるその状況に、それに付き合わされるジオンの兵士の皆さんには正直同情した。

これではギュネイ君がジオンから離れるのも無理はない。今度あったら何か美味しい食べ物でもご馳走してやろうと考えた自分は、成り行きのままジオン軍と堕天翅軍を相手にするＺ―ＢＬＵＥと一緒に戦場を駆けた。

ジオン軍のＭＳにはパイロットが死なない程度に攻撃し、その勢いのままミカゲが操るアクエリオンに突貫、これまで良いように暗躍していた奴に、自分は思い切りグランゾンの拳を叩き込んだ。

攻撃する度に悲鳴を上げるミカゲ、いっそ憐れにすら思える程に宣っているが、構うものかと自分はワームスマッシャーを奴に叩き込んだ。奴の憎愛によって力も大きさも膨れ上がったアクエリオンだが、逆を言えばそれだけ攻撃しやすい箇所が増えただけの的に成り下がっただけで、奴が因果を逆転して攻撃を当ててきても、今のグランゾンを止めるには力が足りなかった。

憎しみ憎しみと奴は言うが、そんな事は此方の知った事ではない。奴が俺達に怨恨の言の葉を吐こうが奴の態度に此方はいい加減うんざりしてきたのだ。

動揺しながらも反撃をしてくるミカゲに自分は無言で拳で殴り、剣で斬り付け、ワームスマッシャーで抉ってやった。奴の力は確かに強大なのかもしれない。だがそれは所詮奴個人のモノ、アポロ君達が操るアクエリオンの強さを知ってる自分としては、そんなもの歯牙にも掛ける必要はない。

そろそろ奴の回復が追い付かなくなって来た。このまま押しきってやろうかとグランゾンのギアを上げようとした直後、背後から待ったを掛ける娘がいた。ミコノ＝スズシロちゃん、彼女がミカゲと話をさせて欲しいと自分に声を掛けてきた。

日記を読み返して思ったが、自分って結構こういう風に呼び止められる事多いよね。まぁＺ―ＢＬＵＥには迷惑掛けたし、ミコノちゃんに頭を下げられてまで頼まれたのであれば断るわけにもいかないし……。

正直、あまり気は進まないが、ミカゲの事はミコノちゃんに任せる事にした。もしミカゲがミコノちゃんの優しさに付け込んで何かしようと言うのなら、今度こそネオでもゼロにでもなって奴を消してやる。そう思っていたが、次に現れた人物によって自分の思惑は大きく外れる事になる。

不動ＺＥＮ、今まで行方知れずだった不動さんが今更になってこの場に現れたのである。何でもこれまで次元の迷宮に囚われていたと語る不動さん。その神出鬼没振りに最早驚かないが、その直後に彼が起こした奇跡に流石に自分は息を呑んだ。

なんと、遠い次元の壁の先にいたアポロ君達がミカゲからアクエリオンを取り戻し、太陽の輝きを取り戻してみせたのだ。甦る機械天使、ミカゲはそんなバカなと狼狽するが不動さん曰く陽はまた昇るという納得の一言に、そう云うもんかと自分も思わず感心してしまった。

その後はアポロ君達のアクエリオンとアマタ君達のアクエリオンによる逆転劇、サイデリアルの総司令であるエルーナルーナも退けて、見事勝利をもぎ取って見せた。

唯一不満があるとすればミカゲを逃がした事くらいだが、それは不動さん達に任せる事にしよう。奴の憎しみを物理的に消す事を除いてミカゲの憎しみを何とか出来るのはあの人達位のものだ。

去り際に此方に視線を向けてくる不動さん。恐らくは自分に何かを伝えるつもり

だったのだろうが、目を伏せるだけで特に何も言っては来なかった。
けれどそれで充分。彼には労いの言葉なんて似合わない。精々次会った時はお互い気持ちよく話をしたいものだ。そんな訳で自分達は無事に今回も乗りきって見せたの

「こらぁシュウジ！　いい加減こっち手伝え！　アクエリオンをこんなにボロボロにしたのお前なんだろうが！」
遠くでアクエリオンを整備しているアポロ君から声が掛かる。そう、あの戦いの後どうやら自分が与えたダメージは不動さんの力を以てしても完全には回復仕切れておらず、アクエリオンはそれはもう酷い有り様となってしまっていた。
真化を果たしたグランゾンの攻撃には流石のアクエリオンも堪えたのか、未だ修復仕切れていない箇所は多い。次の戦いも控えている為、大急ぎで修理に当たっている整備班の中にはアポロ君達も混じっていた。
折角の逆転勝利、折角の再会だというのに締まらない終わり方、まぁ、自分がやらかした事だから仕方無いと割り切るしかない。

けれど悪いことばかりではない。アクエリオンに触れ、アポロ君達と話をする事で自分は少し彼等と仲良くする事が出来たと思うのだから。

だけどそれに反して――――。

「やぁミコノちゃん。今から食事かい？　良ければ私が何か作ろう。何が食べたい？」

「あ、あのあのあのあの、すみません！　ごめんなさい！　許してくださーい!!」

何故か、ミコノちゃんから暫く無茶苦茶避けられるようになりました。顔を合わせる度に泣かれるし、アマタ君やカイエン君達他のエレメンタルの子達からは、目すら合わせてもらえなかった。

何故だ!?

「そりゃ堕天翅を一方的にボコッたら怖がられもするよね」

ジン君からの冷ややかな指摘にグゥの音も出ませんでした。

◇

「許さない。許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない！　翅無し共もアポロニアスも、絶対に許さない」

愛に裏切られ、憎しみの権化と化したミカゲ。その怒りは留まることを知らず、その無念は怨念と化して小さい慟哭となってその胸中を満たしていた。

最早彼の無念を晴らす術はない。彼の憎しみは収まる事はない。愛が深い程にミカゲの抱く憎しみも深く、濃くなっていく。周囲の空間すら捻じ曲げるミカゲの憎しみ、しかしその空間に場違いな声が響き渡る。

「あぁ、何て瑞々しいのでしょう。これ程の深い愛とまさかこんなにも早く巡り会えるなんて……」

「お前はっ!?」

自分以外にはいない筈の空間に振り返ったミカゲはその目を大きく見開かせる。鬣の如く揺れる金の長髪、その顔には常に笑みが張り付いており、その目はミカゲを捉えて離さない。

「しかし、それ故に残念です。ミカゲ、貴方はこんなにも愛に満ちていたのに何故憎しみという勘違いをしてしまったのです？」
「……なに？」
「そうです。愛はただそれだけで成り立つモノ、愛憎を同一視する輩がいますが、それは間違いであると私は断言します」
分からない。ミカゲは分からなかった。目の前の存在が自分の憎しみを勘違いだと両断する事に、それをまるで些細な事だと言い切るその姿勢に。
怒りや憎しみ処ではない。完全なる思考停止、軈てミカゲの感情が怒髪天を衝き、怒りに吠えようとした瞬間。
「だって、貴方は間違っているんですもの」
「なんだと？」
「愛とは慈悲、慈悲とは寛容、寛容とは即ち――――受け入れる事。其処に憎しみなどが割り込む余地はありません」
ゾクリ。
「貴方は受け入れるべきだった。貴方を裏切ったアポロニアスを、アポロニアスを裏切らせたセリアンを、貴方はその総てを愛するべきでした」
だって――――。

「その総てを受け入れて、初めて貴方の愛は愛足らしめているのだから」
　足元が沈む。溶けて、混ざり、自身が自身でなくなっていく。その感覚に生まれて初めて恐怖を覚えたミカゲは嫌だと叫んだ。
「い、嫌だ！　嫌だ！　アポロニアス、助けてくれ！　アポロニアスゥウッ!!」
「怯える事はありません。貴方の愛は総てを私が受け入れましょう。本来なら愛に憎しみなど入る余地などありませんが、貴方のその深い愛に免じてかのアポロニアスも連れてきましょう。勿論、そのセリアンも一緒に」
「あ、あぁ……」
「大丈夫、私は総てを受け入れます。貴方の心もきっと愛で満たされる筈です」
「あぁ……アポロ……ニアス……」
　溶けていく。自分が、己が形成されていた全てが。成す術無く消えていく――――いや、取り込まれていく。
「だって、私達は総て――――愛で繋がっているのだから」
　――――トプン。
「故に、今は眠りなさい。愛しい翅の子よ。貴方の愛は必ず報われますよ」
　蕩けるような笑みを浮かべてソレは消えていった。跡形も無く、最初から其処に無かった様に。

特別編　その???

「成人する男性へのプレゼントー?」
「ちょ、お母さん声が大きい！」
とある街、とあるマンションの一室にあるとある母と娘の何気ない会話。唐突に突拍子の無い質問を訊ねてきた娘に、母は素っ頓狂な声を出してしまう。
意外と声量の大きい母の声に娘はワタワタと慌てながら両手でその口を塞ぐ。誰かに聞かれていないか、辺りを見渡すが彼女の妹と弟達はテレビに夢中で、気付いている様子は無い。
ホッと安堵の溜め息を溢す。が、口を塞がれている母はニマニマと笑みを浮かべていて何かを察している様だ。どうやら娘の質問の真意を悟ってしまったらしい。
うっすらと頬を紅潮させる娘、どのみち気付かれる話なので早々に諦めながら彼女は質問の続きを話した。……居間にいる妹弟に気付かれないよう出来るだけ小声で。
「なぁにアンタ、まだ修司君に誕生日に渡すプレゼント決めて無かったの？　ダメよ、あ

んな優良物件中々無いんだからキッチリ掴んでおかないと。ああいうタイプは手離すとあっという間に遠い所に行っちゃうんだから」

「だから、イチイチそう言う話に持っていかないでよ。アイツは私のファンで私はアイツのアイドル、ソレ以上でも以下でも無いんだから」

「えー」

「そんな事より、質問の答え」

娘の素っ気ない返事にブー垂れながらも母はそうねと思考を巡らせる。彼女達の知る彼、嘗てはあどけない少年で年を経る毎に逞しく育っていった。娘の母にとってもう一人の息子とも呼べる青年。

そんな彼が大学へと進み、今年でもう成人を迎える。落ち着きがあり、几帳面な彼の事だ。彼に渡すとすればゲームや漫画といった娯楽の類いではなく、生活に役立てるモノの方が喜ばれるだろう。

最近はバイト先での影響か料理にも手を出すようになり、彼の才能は多方面に向けて広がっている。プレゼントをするならそれの助けになるものでも良いだろう。

現状での彼の生活面から何が必要で何が喜ばれるのか、それとなく選択肢を与える母は腕を組んで悩む娘を見て柔らかく微笑んだ。

今にして思えば娘と彼の関係も随分と長くなったモノだ。最初の頃は随分尖ってい

た印象を持っていた彼も今ではすっかり自分達とも親しい関係となり、彼のご両親とも砕けた態度で接する程度には仲良くなれた。

彼の刺を無くし、彼の心を救い上げた彼女は我ながら出来た娘だと思う。その上負けん気も強く、これまで苦い思い出となっていたスクールアイドルも、今ではその夢が叶う所にまで来ている。

娘にはこのまま何事もなく幸せになって欲しい。しかし、どんな事にも絶対は存在しないし、永遠に変わらないモノもまた存在しない。当たり前のモノがある日突然失われる事があるのかもしれない。

だから、せめてその時が来ても乗り越えられる様に、娘がいつまでも笑って過ごせる様に、これからも見守り続けていこう。

未だに悩んでいる娘を前に、母は静かに微笑みながら見守り続けた。

◇

――――朝日が街並みを照らし、人々が活発し始めた頃、まだ人の少ない通りで彼女は待っていた。
ソワソワと、妙に落ち着きの無い様子で誰かを待ち続ける。するとそこへ黒髪で年若い男性が珍しいものを見た様子で少女に声を掛けた。
「あれ？どうしたのニコちゃん。随分早いね」
おはようと挨拶をしてくる彼に少女も少し無愛想に返事を返す。互いに学校が異なってからは中々直接会う機会が無かった二人、久し振りに顔を見れた幼馴染みに男は嬉しそうに笑みを溢した。
「ち、ちょっと早く目が覚めちゃってね。たまにはアンタの顔を見てやろうと思っただけよ」
「はは、そっか」
「ていうか、そっちも早いのね」
「まぁね。今日は一限からだしゼミの教授にもレポート出す予定だったからね」
「その様子だと、あんまり寝てないんでしょ？　しかもその後にはバイトもあるのに……大丈夫なの？」

「平気平気、今日のバイトは午後の六時からだし、大学だって三限で終わるから昼飯食べたらさっさと帰って仮眠するよ。それに寝不足なのも撮り溜めしておいたアニメを見ていたからだし」
「なによそれ」
軽快に笑う青年に少女は呆れる。その後は他愛の無い話をしながら通学路を歩く二人、まだ時間は早く、その道中に知り合いと遭遇する事はなかった。
変わらない人、変わらない街並み、相変わらず変化の無い日常だが、しかし少女は少し焦っていた。先日聞いた母の冗談混じりの言葉が耳元で反芻される。
「……ねぇシュウジ、アンタって今欲しいモノはないの？」
「ん？　どしたのさ突然」
「良いから答えて」
少し強引ながらも問い掛けてくる少女に青年はそうだなぁと空を見上げる。雲一つ無い澄みきった青空、何処までも行けそうな空を見つめて男はふと呟いた。
「――――手帳」
「え？」
「いやさ、もし今貰えるものがあるなら手帳みたいな奴が欲しいなって、メモ帳とかあれば日記とか書けるし、色々便利そうだからさ」

「ふーん」
　向こうから質問してきたのに反応の薄い返事、しかし青年はそれを不快だとは思わなかった。元々彼女はこう言う理不尽な部分が多々ある人物だし、青年に対して容赦の無い所も昔から変わらないが、その程度で関係が揺らぐ程二人の間柄は小さくはない。
　ただ気になるのは、何故そんな事を聞いてきたのかだ。隣の幼馴染みの真意が今一つ読み取れない青年は、少女にその事を尋ねようとする。が、それよりも早く少女の名前を呼ぶ声が向こうの陸橋から聞こえてきた。
「あれ？　ほのかじゃない」
「もしかしてスクールアイドルの？」
「うん」
　向こうから声を張り上げてくる彼女に訝しむ二人、すると何か思い出したのか少女はあっと声を漏らした。
「そう言えば今日は朝練あったんだ！　ごめん修司、私もう先にいくね！」
「あぁ、頑張れよニコちゃん」
　勿論よ。と、元気良く駆け出していく幼馴染み、友人達と一緒に学校へ向かう彼女達を見送ると青年――――修司もまた大学へ向けて足を進める。
　変わらない日常、代わり映えも無く、退屈で穏やかな暖かい日々。当たり前に過ぎる

毎日が明日もまた続くのだと――――そう、思っていた。
『さぁ、始めましょう。極めて近く、限り無く遠い世界へ向かう為に』
遥か重力の底の底、蒼き魔神が――――目を覚ます。

その１７３

＃月Ω日

ミカゲから神話型アクエリオンを取り返し、いよいよサイデリアルから地球奪還を目標に動き始めたＺ―ＢＬＵＥは、新地球皇国の戦略を崩す為に部隊を三つに分ける事にした。

一つは日本防衛に、一つはネオ・ジオン牽制、そして最後にアマルガムの追跡にそれぞれ分ける事にしたのだ。当然自分達にもどの部隊に組み込むべきなのか各艦長達と話し合いをしたのだが、自分は今回どの部隊にも属さない自由編成という形になった。

自分はグランゾンの力を使えば、地球上であれば時間浪費など考慮せずに瞬時に各部隊に合流できる。つまり自分の仕事は、不利になった部隊に赴いては援護するという内容になっている。

他にも蒼の地球に置いてきたギュネイ君も拾っておかなきゃいけないし、シュナイゼルにも今後どうするか話を聞いておく必要があるし……それになにより、マリーメイ

アちゃんの動向も気になる。
彼女にはレディさんが付いているから心配はないと思うが、アドヴェントやいつぞやの皇族達みたいにゲスのやり方を講じる輩が今後出てこないとも限らない。出来れば見つけ出して保護してやりたい。
そんな訳でＺ―ＢＬＵＥが部隊を分けて行動する間、自分は遊撃ポジションとして自由に動くことを許可してもらった。――――――一応言っておくが、これは別にどの部隊からもハブられた訳ではない。
各部隊の戦力バランスを考慮し、考えに考え抜いた提案である。そもそも、この話を持ち掛けたのは自分なのだからハブられたという事は全く無いのだ。……まぁ、提案を出した瞬間、各艦長達から即答で了承されたのが気になるけど。
兎も角、これで明日からの自分の行動は定まった。他の部隊からも常に連絡を取れる様に通信回線は開いてあるし、これならＺ―ＢＬＵＥの皆が窮地に陥った時に即座に対応出来る。
いよいよサイデリアルを地球から完全に追い出すための作戦、その第一段階が始まろうとしている。作戦の足手まといにならないよう充分に気を引き締めて行こうと思う。
あ、因みにヒビキ君がアマルガムの追撃部隊で、ギルターがネオ・ジオンの牽制部隊に配属されることになった。ギルターは勿論だがヒビキ君も最近は調子が良さそうだ

し、今後も彼等の活躍は期待できそうだ。
特に牽制組のギルターは情報分析のスペシャリストだ。彼の的確過ぎる分析力はきっとオットー艦長の役に立てる事だろう。別れ際に応援のエールを二人に送るとヒビキ君は元気良く返事してくれた。
ギルターは相変わらず自分と話すときは目が死んでいるが……まぁ、あれは彼なりの精神集中の仕方だ。変に追及するのは無粋というモノ、彼は言葉には出さず結果で語る仕事人、その一辺倒な在り方はきっと牽制組の力になる事だろう。
そんな訳で一旦部隊を分けたＺ―ＢＬＵＥ、自分は己の出来る事を為すために単身地球に降下した。

♪月△日
先日Ｚ―ＢＬＵＥと別行動を取ったばかりで速攻で合流するのって、思ってた以上に恥ずかしいモノがあるね。
先に述べた様にギュネイ君やブロッケンを拾ってＺ―ＢＬＵＥに合流させながら、シュナイゼルやマリーメイアちゃんと顔を合わせておこうという今回の自分の行動、その最初の目的となったのがギュネイ君だった。
何でもギュネイ君はシュナイゼルと共に行動していたが、サイデリアルの侵攻が激し

くなるに連れてレジスタンスを分けていき、その時に二人は別れて其々の戦場で頑張る事にしたらしいのだ。

上手く行けば二人と合流出来たのではないか期待していただけに、少しガックリとしてしまった。とは言え当時の二人の判断は間違っておらず、自分の落胆は彼等にとって失礼なモノであるから、決して口には出さないけどね。

その謝罪という訳ではないが、その時ちょうど攻めてきた皇国軍をグランゾンで蹴散らす事で、レジスタンスの人達に助力する事にした。

レジスタンスの人達に協力した後、ギュネイ君に現在のＺ―ＢＬＵＥの状況と、どの部隊に合流するかと訊ねた所、彼が選んだのはネオ・ジオン牽制組だった。今の自分ならネオ・ジオンとも向き合えると語る彼に、自分は彼が良ければと思い、ギュネイ君の愛機であるヤクト・ドーガと共に牽制組のいるソレスタルビーイング号へと向かった。

そこで自分達を待っていたのは、ネオ・ジオンを迎え撃つＺ―ＢＬＵＥの戦場だった。事前にこの事態も考慮していた為に然程動揺せず戦線へ参加するギュネイ君、嘗ての同僚であるジオンの兵達を限られた兵装で無力化していく様は、流石の一言に尽きた。

折角のギュネイ君のＺ―ＢＬＵＥ初参戦、邪魔にならない程度にワームスマッシャーで蹴散らしながら自分はオットー艦長とブライト艦長に通信を繋いでギュネイ君の事を報告、その後彼は無事にＺ―ＢＬＵＥに合流する事となった。

で、その直後なのだがどういう訳か突然シャア大佐が投降を宣言、彼はフル＝フロンタルの側近らしき人物とそのＭＳにより捕縛され、現宙域から離れていった。
途中参戦の為話の流れが読めず、どういう訳かとアムロ大尉に訊ねてみた所、何でもシャア大佐はフル＝フロンタルに思う所があるらしく、自身の可能性とその決着の為に敢えて連中に捕まったのだとか。
相変わらず回りくどい人だ……とは思わない。彼はネオ・ジオンに属していた際、フル＝フロンタルという男の危険性を肌で感じ取った人だ。自らを器と評し、人々の受け皿となることを豪語する男の言う事に、少なからず思うところがあるのだろう。
だったら自分はこれ以上言う事はない。ギュネイ君も自分と同じ意見なのか、シャア大佐の件については自分が訊ねた事以上の問い詰めはしなかった。
そしてその後ギュネイ君をブライト艦長に預け再び地球へ向かおうとするのだが、いやーギュネイ君、暫く見ない間に随分と腕を上げたな。
今のヤクト・ドーガはこれまで地球で激戦を潜り抜けてきた為に限界が迫って来ており、マトモに稼働するのは後数回にまで疲弊していた。
合流する前に応急処置を施したとは言え、今のヤクト・ドーガは自壊寸前、あんな状態で良くもまぁ彼処まで見事に戦えたモノだよ。カミーユ君も相当驚いていたし、今のギュネイ君の実力は下手したらアムロ大尉並なんじゃないか？

……そう言えば彼、シュナイゼルに酷く使われたとゲンナリしていたし、恐らく地球での激闘の日々が彼に力を与えたのだろう。強化人間としてではなく純粋な人としての成長、その成長の土台となったギュネイ君の日々はきっと彼にとって血肉となっているのだろう。

ギュネイ君の思わぬ急成長振りに感心しながら、自分は彼にエールを送り、困った事があればギルターを頼れと言い残して今度こそ地球へ向かった。その際にギルターが何か言っていた気がするがその頃にはワームホールへ突入していた為、彼の言葉は聞こえなかった。

さて、次の自分の目標だが……マリーメイアちゃんの居場所を探す事にした。流石に長い間連絡を取れなかったのは不安だし、彼女が今何をしているのか気になるのが本音だ。

シュナイゼル？　アイツは大丈夫だろ。ギュネイ君もアイツに関しては殆ど心配してなかったし、今頃はどっかの穴蔵で立て籠りＺ―ＢＬＵＥが暴れまわる日を虎視眈々と狙っているだろう。

マリーメイアちゃんにはブロッケンが付いている。奴に持たせた通信機は自分が作った特別製だ。それを使えば今すぐにでも彼女達の居場所を割り出す事が出来る。

そう思いブロッケンが持っている筈の通信機に回線を繋いだのだが……出てきた

のは久し振りに聞いた老人の声。
自分に空手のノウハウを教えてくれた――――ガモン先生の声だった。

◇

「ほう？　ではシュウジ君、近々此方に来るのじゃな」
「みたいじゃのう。こんな小さな機械で此方の居場所が分かるとは、大したモノじゃのう最近の機械は」
とある喫茶店、嘗てサイデリアルの支配下に置かれたその地域で何事もなく談笑する

一組の老若男女。二人の老人が感心する中、外で見張りをしているブロッケンは店の外で乱雑に撒き散らし鉄屑となった機動兵器を目の当たりにし、ガハハと笑う老人達を見る。

(し、シュウジ殿で充分馴れたつもりでいたのだが、いるにはいるのであるな、上と言うものが)

ブロッケンもシュウジに与えられた身体でそれなりに戦える自信はあった。条件付きではあったがこれ迄のマリーメイア達との旅の中で機動兵器を相手に戦った時もあるし、スコープドッグやアマルガムのＡＳ程度ならある程度渡り合えていた。

だが、店の中で呑気に茶を啜っている老人達、あの二人は次元が違いすぎる。端から見ればただの爺にしか見えないのに、その中身はくろがね五人衆が可愛く見える程の化け物と来ている。これ程の怪物がこの地球に存在していた事に恐ろしく感じていたブロッケンは、大人しく見張りを続ける事にした。

「っと、イカンイカン。それで、どこまで話をしたかな？　マリーちゃん」

「ふふふ、山奥で一人の若武者に出会った所ですわよガモンお爺様」

「おぉ、そうじゃったそうじゃった。あれはそう、再世戦争の終盤に差し掛かった頃じゃ。故郷が再び焼かれ、その際に通りすがりの親切な軍隊の人達に保護された儂達リモネシアの人間は、その後頃合いを見て再び故郷へと舞い戻った」

「家は燃え、住む家が無くとも何とかなると息巻いておったが、肝心な資材がないと家が建てられん。そう思った儂は他所から貰えないかと考え、外の国へ足を伸ばしたのじゃ」
「その時じゃ、良い感じの木が育っている山、その奥では剣を奮って汗を流す一人の若者がおったのじゃ。若者は筋が良く、鍛えれば光る才能の持ち主だったから一月ほど指南してやったのじゃよ」
「お前さん、得物を使うのは苦手じゃなかったか？」
「そうなんじゃよ。けれど面白いことにあの若者、儂の動きを剣の動作に取り込んだのじゃ。いやー、天才とはああいうのを言うんじゃの。シュウジに続き彼処まで才を持つ者がいたとは。ゼクなんとかと言う部隊にいた者達もそうじゃが、才能ある若者が多くて年寄りとしては嬉しい限りじゃい」
　その後も続く老人達の談笑、その途中何処か引っ掛かる話に眉を寄せたレディは恐る恐るガモンに質問をした。
「あの、それでその山奥にいた若者と言うのは？」
「あー、そう言えば聞いてなかったのぅ。あの一ヶ月はあの若者がどれだけ伸びるかそればっかり気にしてたから……」
「ガモちゃんそう言う所あるよねー」

「大ちゃんも人のこと言えんじゃろー」
「えー？」
途端に現代っ子風に話し出す老人二人、その様子を見てまさかなと額にうっすらと汗を流しながらレディ＝アンは温くなったコーヒーを呑み込んだ。
一番華奢でかの魔人が危惧していた少女マリーメイア、現在彼女は世界一安全に旅を満喫していた。

その１７４

♪月＃日

マリーメイアちゃんとレディさん、序でにブロッケンも拾って置こうかと彼女達に連絡を取った自分、何故か彼女達と行動を共にしているガモンさんと大貫さんには驚いたが、あの二人が一緒なら安心だ。

あの二人は素人な自分でも一目で分かる程の強者、それこそアマルガムだろうがどこぞの秘密結社が相手だろうがどうとでも出来そうな位にあの二人はとびっきりに強い。

だからこそ気になる。そんな二人が何故一緒になって行動しているのか、どんな経緯でガモンさん達はマリーメイアちゃんと一緒にいるのか。

自分が彼等と合流出来たのはそれから数時間後だった。ブロッケンに渡した通信機、それを辿って行ったから、合流するのに然程時間は掛からなかった。

久し振りの顔合わせ、ブロッケンは当然な事だがレディさんもマリーメイアちゃんも元気な事に一安心した自分は一緒にいたガモンさんと少しばかり話をした。

自分の事、蒼のカリスマとして行動し、時には自分が原因でリモネシアが焼かれた事、何れ他の皆にも話すべき事の内容を一足早く彼に告げる事にした。

返ってきたのは――――お前が気にする事ではないという自分の事を気遣っての一言だった。お前は出来る限りの事をしたまでだと、お前は自分が犯した過ちよりも遥かにリモネシアに貢献していてくれたと、ガモンさんは笑いながらそう語ってくれた。

思い詰めるなと、そう言いたいのだろう。ガモンさんは厳しい御仁だけどそれ以上に優しい人だ。きっと自分の事を汲んで、敢えて追及しない様にしているのだろう。

そんなガモンさんの優しさに自分は甘える事にした。確かに自分はリモネシアの皆に隠し事をしてきたが、それ自体は別に悪意を持っていた訳ではない。何よりこれ以上この事を引き摺っていたらそれこそ皆に対し失礼と言うものだ。

そんな訳で自分の事は一旦これで終わりとし、続いて自分はガモンさんに訊ねた。どうしてマリーメイアちゃんと一緒にいるのか？と。

これも答えは一言……というより一瞬で終わった。偶然だと。どうやら二人がマリーメイアちゃん達と出会ったのは本当に偶然らしく、その経緯はある戦場に居合わせたマリーちゃんが――――本人の希望でマリーと呼ぶことにした――――戦渦に巻き込まれそうになった所へ偶然鉢合わせしたのだとか。

で、その場は戦場を支配していた機動兵器達を蹴散らし、マリーちゃん達を保護した後も何やかんやあって、今日まで行動を共にしていたのだとか。

相変わらず突拍子の無い御方だ。レディさんもガモンさん達に随分と振り回されて

きたのか、その表情には疲れの色が濃く出ていた。や、ホントお疲れ様です。
そしてそもそもの原因として何故ガモンさんと大貫さんが一緒になって行動しているのか、その事を訊ねると、これもまたもや世直しの旅という一言で片付けられた。
どうやら二人も新地球皇国という連中から侵略を受けている現在の世の中に思う所があるらしく、彼等の言う事に何一つ疑問に思う所は無かった。
素朴な理由だし、相変わらず自由な人達、けれどその実力は本物だ。今後も二人がマリーちゃんと一緒に行動してくれるなら彼女に強制する必要もない。
マリーちゃんもまだ地球に残って、戦渦で傷付いた人達の為に何かしてやりたいと決意を固くしているし、ガモンさん達もそれに付き合うつもりでいる。ならばこれ以上彼等に言うことは無いと思いその場を後にしようとするが、ここで自分はガモンさんに呼び止められる。
なんでもガモンさん、あれから自分がどれだけ成長したのか見てみたいらしく、今は喫茶店から離れた広場にて待たせている。
自分もあれから自身がどれくらい動けるようになったのか気になる。久し振りの全力運動、ガモンさんに今の自分を知って貰うにはちょうど良い機会だろう。
そんな訳でこれからガモンさんとの久し振りの組手をしてくる。結果は見えているが、それでも頑張って挑んで行こうと思う。

◇

――――人気の無い街、サイデリアルに支配され、そしてそのサイデリアルも追い出された現在無人と化している名も無き街、その街の一角にある広場にて、二人の男性が相対していた。

仮面を外し、動きやすい胴着の様な格好で準備運動をするシュウジ、その表情は晴れやかで、これから己の護身術（自称）の師であるガモンとの組み手に、久しく抱かなかった感情の昂ぶりを抱いていた。

対するガモンは静かに、腕を組んで佇んでいる。そんな二人を遠巻きにブロッケン、並びにレディとマリーメイアはその様子を緊張しながら見守っていた。唯一大貫だけ

はホッホッホと笑みを浮かべている。
「ガモンさん、まさか貴方から声を掛けて戴けるとは正直意外でした」
「そうかの？　まぁ、お主は何かと忙しい身だからの。そう思われても仕方ないか」
「でも、それ以上に嬉しいです。誰かに目を掛けて貰った事なんて祖母と両親以外いませんでしたから」
「そうか。なら、此度は存分にその成果を見せると良い」
「はい」
訪れる静寂、それに比例して緊張感は高まり、二人を包む空気がピリピリと張り詰めていく。遠くから離れ、ギリギリ目視できる距離まで離れたブロッケン達にまでそれが伝わる程に……。
一体どうなるのか、瞬きや呼吸すら忘れたブロッケンが生唾をゴクリと呑み込んだ――

「っ！」
シュウジが一歩踏み込んだ瞬間、彼の蹴りがガモンに向けて炸裂した。動作など見えなかった、いやそもそも、シュウジがガモンの間合いに入る瞬間が目視出来なかった。
二人の距離は確かに開けていた、少なくとも数十メートルは。なのにシュウジが攻撃するまでの過程がまるで認識出来なかった。音も、光すらも置き去りにしたシュウジの

一撃、少し見なかった間に遥かに実力を上げた現在の主に、ブロッケンは鼻水が飛び出る勢いで驚愕した。

そしてそれをまるで見えていた様に軽く避けるガモン、飛び蹴りを放ち無防備になった所へガモンの拳が放たれる。

しかし、シュウジもこれを体を捻る事で回避、返す刀で拳を見舞い、ガモンもそれに合わせて拳を突き出す。ぶつかり合う拳と拳、行き場の無くなった力の衝突はそのままガモンの足場を砕き、砂塵が広場を覆い尽くした。

瞬間、煙となった砂塵に穴が空き、離れた位置にはシュウジが着地していた。一瞬にしてあの跳躍力、しかしそれに合わせてガモンがまた追撃を仕掛ける。

既にガモンの間合いに入ったシュウジ、しかし彼は避ける選択はせず、敢えて踏み込み自らガモンの懐へと潜り込んだ。刹那の交差、殴り込んだ勢いのまま膝を地に付けていたガモン。僅かばかりの静寂、立ち上がって向き直る彼の頬には少しの傷が付けられていた。

「――――ほう?」

その様を見て大貫は感心の声を上げる。あのガモンに僅かながら傷を付けた。かの男の実力を知る者として、大貫の感心の声は周囲の人間が思っていた以上の意味を含めていた。

目をこれでもかと剥いて驚愕するブロッケン、それに対しレディとマリーメイアは今の状況が上手く理解できず、それぞれ可愛らしく首を傾けていた。
「成る程のう、ガモちゃんが入れ込む訳じゃ」
その後も二人の激闘は続いた。認識出来ない速度、ただ風が吹き荒れる事しか理解できない程に鋭く速いガモンの拳の連打を防ぎ避け、受け流しながら間合いを詰めるシュウジ、二人の戦いは時間が進むと同時により激しく加速していった。
時には跳び、時には飛びながら高速戦闘を繰り広げ、衝撃が廃墟となった街を襲った。楽しそうに、愉快そうに拳を繰り出すガモンを見て大貫は思う、羨ましいと。
「惜しいのう、もう少し早くシュウジ君と出会っていたら儂も色々教えてやれたんじゃが……」
本気で戯れる宿敵に大貫は少しばかり寂しさを感じた。そして二人の組み手もいよいよ佳境に入ったのか、これまで互角の打ち合いを繰り広げていたシュウジが遂にその拳をガモンの胴体に叩き込んだ。
痛み、よりも驚きに目を開かせるガモン。その隙を逃すまいと、シュウジの回し蹴りがガモンの腹部に突き刺さる。
その反動を利用し、背後の電波塔へと足を置く。一瞬の溜め、ガモンの姿が地に足をつけている状態であると認識したシュウジは限界にまで溜めた力を一気に解放、弾丸の

如く放たれたシュウジ。
その拳を握り締め、渾身の一撃を繰り出した瞬間。辺りは衝撃で爆散し、再び周囲は砂塵に包まれた。一体二人はどうなったのか、徐々に収まりつつある砂煙の中を凝視するブロッケン達が次に見たのは、シュウジの渾身の一撃を片手で受け止めるガモンの姿だった。
「――――中々良かったぞ」
ガモンの口から溢れるシュウジに対して心からの称賛、しかし――――。
「じゃが……まだ、甘い！」
ガモンの足元から全身に至るまで全ての筋肉が駆動する。ギシリと音を立ててシュウジの拳を受け止めた掌の中心にその力の全てが集約され――――。
「が、あぁぁぁぁっ!?」
そして、放たれたその衝撃は周囲の建物ごとシュウジを吹き飛ばした。
全身が引き裂かれそうな衝撃、消えそうになる意識の中でシュウジは思った。
〝――――嗚呼、自分はやはり恵まれている〟
いつか、自分に目を掛けてくれた人達に恩返しができれば良いな、そう願いながらシュウジは意識を手放した。

◇

「それで、どうじゃった。お主の愛弟子の出来映えは」
「悪くない。いや、寧ろ以前より格段に腕を上げているな」
　広場から離れ、使われなくなった宿屋のロビー、そこのソファーに寝かされたシュウジを横目に、大貫はニヤニヤと笑みを浮かべてガモンに訊ねた。
　返ってきたのは心からの称賛だった。けれどそれに反してその表情は暗い。
「しかし、それでも足りんな。今のシュウジでは彼奴を仕留める迄には至らん」
「やはりそうか」
　そういって二人が睨むのはかの皇帝が座する居城、直接戦った訳でも出会った訳でも

無いのに二人は断言する。今のシュウジではあの皇帝には太刀打ち出来ないと。
「今のシュウジは精々〝兆し〟といった所か」
「この若さでそこまで至れる時点で大したものじゃが、やはり〝極み〟は遠いか」
「全く、一体どんな反則を使ったのかのうあの皇帝は、ここ数日で嘘のように力を増しおったぞ。それこそ……」
　儂等のいるところまで。遥か遠くに座していながらここまで届いてくる皇帝の圧、分かる者にしか分からない程度の差違ではあるが、それでも二人には明確に感じ取れた。
　今の皇帝は以前よりも遥かに力を増している。その事実に耳を傾けていたレディは驚愕する。唯でさえ強大なサイデリアルの皇帝が更なる力を付けているという事実に、彼女は勿論ブロッケンでさえも絶望に沈みかけた。
「勝ちますよ」
　そんな中、唯一マリーメイアだけは絶望に沈む事なく、眠り続けるシュウジの額に手を置き、優しく微笑んでいた。
「おじさまは、シュウジ様は必ず勝ちます。だって……」
　〝お父様が認めたお方なのだから〟
　そう語るマリーメイアの瞳には自信で満ち溢れていた。確信すらしている。そんな強気の彼女にガモン達も笑顔が綻び、そうだなと頷いた。

「今は、どうかお休みください。そして起きたらまた頑張りましょう。貴方の出来る事を、全力で、一生懸命に」
だから、それまで――――お休み。
優しく撫でるマリーメイアの手、シュウジはこの日久し振りに熟睡したのだった。

◇

『こんな、こんな……バカな事が！』
新地球皇国軍本拠地、ラース・バビロン前。
いがみ合う双子のスフィアの適合者、アムブリエルは自らが搭乗する機体、倒れ付したジェミニアのコックピットで信じ難い光景を目の当たりにする。

異常な程の熱気を立ち上らせ、倒れるジェミニアを通してアムブリエルを見下ろすのは事実上のサイデリアルの支配者、皇帝アウストラリス。その胸にスフィアの輝きを発しながら皇帝は口ずさむ。
「どうやら、俺はまだ己の限界を見誤っていたらしい。感謝するぞ、アムブリエル」
『な、あっ!?』
右腕は砕かれ、左足は切り裂かれ、見るも無惨な姿となったジェミニア。しかしそれを無様とは言わない。そんな軽口が挟める程アムブリエルは弱くはない。
「ど、どうしたんだよアウストラリスの奴、なんで急に、こんな……」
宮殿内から事の顛末を眺めていたバルビエル、憎まれ口を数多く口にしてきた彼でさえ眼前の光景に言葉を失っていた。
「分からん。だが、一つ言えることは――――最早、俺達の知るアウストラリスはいない。という事だ」
バルビエル同様、その様子を眺めていた尸空。その額に大粒の汗を滲ませ、佇む皇帝を眺めている。
「〝立ち上がる射手〟　よもや我がスフィアにこのような使い方があったとはな」
拳を握り、空を仰ぎ見る皇帝。無限に沸き上がる力の衝動に、しかし皇帝には一片の慢心はなかった。

全ては近い内に眼前に現れる敵に備える為、嘗ての同胞を打ち破った蒼の魔人に挑む為。

「さぁ、来るが良い。蒼の魔人、シュウジ＝シラカワ。お前を倒し、俺はお前を糧にしよう」

いつか来るべきその日を、皇帝アウストラリスは今から待ちわびていた。

その１７５

♪月♪日

久し振りのガモンさんとの組手、短いながらも濃密で濃厚なその経験は確かに自分の体に刻まれ、染み込んでいった。

最後はガモンさんの一撃によって意識を断たれその日1日はずっと眠ってしまった自分だが、それに反し体の調子は良好、どうやら自分は無意識の内に身体に疲れを溜めていたらしい。

その事を踏まえた上でガモンさんは自分に組手を誘ってくれたらしいのだ。相変わらず面倒見が良いガモンさん、自分の体調くらいキチンと管理しろと怒られてしまったし、これでまた当分頭が上がらなくなった。

頭が上がらないと言えばマリーちゃんもだ。どうやらガモンさんとの組手の際に気絶してしまった自分を甲斐甲斐しく看ていてくれていたのだとか。適当に寝かせておけば良いのに、トレーズさんの友人だからと言って、自分が目を覚ますまで付きっきり

でいたらしい。
本当、良い娘に育ってくれているよ彼女は。こんな娘がいつかは何処ぞと分からない馬の骨に嫁がなければならないなんて……そんな風に考えるとその馬の骨に殺意が沸いて仕方ない。まぁ、自分がそんな事口にするのは筋違いである事は自覚しているけどね。
レディさんもマリーちゃんに付き合って看病してくれたみたいだし、いつかこの二人にはキチンと礼をしなくてはいけないな。
本当はその場でしなくてはならないが、この時ブロッケンから急な話を耳にした為現在現場に急行中、グランゾンを出してワームホールで移動した方が速いが、それだと相手に悟られてしまう可能性がある為、徒歩で移動している。
どうやらアマルガムの連中、ヤムスクー１なる場所で何かしらの実験を行うつもりらしく、そこには奴等に捕らえられた千鳥かなめちゃんの姿もあったらしいのだ。
情報の出所は吹き荒ぶ忠義の嵐の体現者、ジェレミア卿からで、どうやら彼もシュナイゼルの命令でサイデリアル以外の敵対組織の動向を見て回っているらしいのだ。
その情報を受け取る際に、マーティアル教団がキリコさんの手によって今度こそ壊滅し、その裏で暗躍していたワイズマンを打ち倒してフィアナさんを助け出したと言う嬉しい情報も手に入れた。

そんな彼等が次に向かうのはヤムスク１１なる地、どうやらそこにはウィスパードにまつわる何らかの出来事が隠されているらしく、アマルガムの奴等はその秘密を元に何かしらの実験を行おうとしている様なのだ。

シュナイゼルが得られた情報はそこまでで、それ以上の事は分かっていないが、個人的にはぶっちゃけどうでもいい。奴等の手には千鳥ちゃんの命運が握られている。彼女には自分が陣代高校で事務員として働いていた頃に何かと世話になった事がある。

ウィスパードだろうと何だろうと、彼女が連中に捕まっているなら助ける理由としてなら充分、直ぐに自分も現場に向かい、先に待っているジェレミアさんと合流し、千鳥ちゃんを助けることに全力を尽くす事にしよう。

本当なら大貫さんにも手伝って欲しい所だが、彼にはマリーちゃんとレディさんを守るのに手一杯らしく、千鳥ちゃん達の事は自分に任せると丸投げされてしまった。

少々納得が行かない話だが、ガモンさん曰く自分達はあくまでこの戦乱に於けるオマケの様なもの、この時代の混乱は当時の若者が収めるべきであって自分達老人がでしゃばる事ではない――と、言うことらしいのだ。

そんな事を言ってる場合じゃないと思う一方でガモンさん達の言い分にも一理あると判断した自分はそれ以上大貫さんに頼み込む様な真似はせず、気が向いたら手助けして下さいとだけ言い残し、その場を後にした。

確かにガモンさん達に頼み込めば大概の困難は乗り越えられるだろう。しかしそれではこれから待ち受ける戦いに、自分の力だけしか奮えない状況に陥った時、誰かに甘えてしまう可能性が出てきてしまう。

ガモンさん達はそんな〝甘え〟を持つ人間になって欲しくない為に敢えて自分を突き放したのだろう。だったら乗り越えるしかない、そう思いながら自分はヤムスク１１に向かう事にした。

♪月滅日

失敗した。ヤムスク１１という研究都市にまで辿り着いたのは良かったが、其処で待ち構えていた奴に阻まれ、Ｚ―ＢＬＵＥと合流出来ずに終わり、みすみす千鳥ちゃんを奴等の手に渡してしまった。

言い訳だとは思うが、その失敗した事に対する原因を簡潔に纏めると……奴、サクリファイの奴がかの研究都市で自分を待ち構えていやがったのだ。

久し振りの邂逅、しかし奴の力は余りにも増していた。……いや、増していたなんて生温いモノじゃない。文字通り違っていた。

あの女、俺が始末するべきだったアドヴェントの野郎を喰ってやがった。道理で見覚えのある金髪の筈だよ、最初見たとき「あれ？　こんな奴でも髪とか染めるんだ」なん

て一瞬でも呑気に考えてしまった自分がアホみたいだ。
そしてアドヴェントを吸収したサクリファイの力は尋常じゃなく、あのガモンさんを引き合いに出しても強敵と思わせる程に強くなっていた。つーかあの女、俺が使っている空手の技をそっくりそのまま返して来やがったのだ。
どういう事だと不意に口ずさんでみると、愛の為せる業とよく分からない理屈を宣う始末、お陰で自分は終始奴の相手に必死になるばかりで肝心の千鳥ちゃん救出作戦に参加できなくなってしまった。
つーか何なんだよマジで、なんであの女俺やガモンさんの技をそっくりそのまま手に入れてんだよ。ガモンさんから教わった護身術の空手は一日二日で覚える程容易くは無いんだ。
けれど実際奴は俺と同じ構えで同じ技を打って来やがった。そこは変えようのない事実、問題はそのタネの方だが……そう言えばあの女、俺が拳を打ち込む度にもっと！と頬を紅潮させながら強請って来たっけ。
最初は単に奴が変態的な性癖を暴露して来たのかと思ったが、実は違う意味を含めていたのかもしれない。……受け入れている？　俺がガモンさんから教わった技を奴に打ち込む度に、サクリファイは俺の力と技をその身に刻み付けたと言うのか？
だとするなら奴が俺の攻撃を彼処まで受けていた意味も理解できる。アイツ、喜怒哀

楽の力を手に入れて変質でもしてんのか、以前の奴とは余りにも違いが有りすぎる。いっそ別人と呼べる程に。

その後、アマルガムの連中がヤムスク１１から離れると同時に奴もまた撤退した。今日の所はこの辺でと、最後まで熱を込めた瞳で見詰めてくる奴に自分は薄ら寒い感覚に襲われた。あの有り様は妖艶を通り越しておぞましくすらある。

まだまだ奴には聞きたいことがあったが、逃げられてしまった以上仕方がない。一先ずＺ―ＢＬＵＥに合流し情報を共有しておかないと――――その時、やって来たジェレミアさんの口から告げられた情報に自分は直ぐ様ヤムスク１１から経つ事となった。

ミケーネの神々がハーデスの手引きにより復活し、その際に竜馬さんが甲児君を庇い負傷。意識不明の重体となり、緊急の手当てとしてゲッター線を浴びせたが、それが原因で現在真ゲッターと共に絶賛暴走中。前者は兎も角後者は直ぐにでも解決しなければならない案件だ。

ミケーネの連中は……まぁぶっちゃけどうでも良い。確かに連中は連中で油断出来ない相手だが、既に幾度となく相手をしてきた者達だ。そのしぶとさと身体の頑強さは厄介であるが、自分としては然程気にする相手ではない。

本当にヤバイのは真ゲッター……もとい竜馬さんだ。Ｄ．Ｏ．Ｍ．Ｅ．で目の当たりにした巨大なゲッターロボの事を考えると、竜馬さんの沈静化はミケーネの神々を

相手にする以上に重要だと自分は考えている。
竜馬さんとゲッターの力は底が知れない。向こうの面々の実力を疑う訳ではないが、彼等の力は絶大だ。竜馬さん達に対抗するには少しでも対応出来る機体が必要な筈。
グランゾンなら暴走するゲッターを相手にも通用する筈だ。重力を操るグランゾンの力で抑え込み、Ｚ―ＢＬＵＥと協力すれば被害は最小限に収まる筈。
希望的観測が多い内容だが、やらなければ竜馬さん達の身が危ない。今回はここまでにしておいて自分もグランゾンと共に現場へ急行する事にする。

◇

ヤムスク１１――――地下下水道。過去の実験の影響により、人気は愚か生命の一つ

すら感じられない死の研究都市。
その地下深くで蠢くのは、艶やかな肢体を震わせて身悶えるサクリファイだった。
「あぁ、あぁ、素晴らしい。素晴らしいですわ！　これが蒼のカリスマの拳、魔人の蹴り、シュウジ＝シラカワの一撃！」
全身に刻まれた無数の打撃痕。それを慈しみ、愛でるように撫で回す彼女の瞳は潤んでいた。紅潮する頬、荒くなる吐息、痛みではなく歓喜で身を捩らせる彼女は先程に経験した出来事を思い浮かべる。
先のやり取りで一方的に打ちのめされた記憶、以前の彼女《達》からすれば屈辱でしかないその記憶は受け入れて糧とし、自らの血肉として受け入れた。力も速さも手に入れ、彼の者との実力はこれで拮抗した筈だった。
しかし、蓋を開けてみれば今回もまた一方的に殴られた。殴られ蹴られ、出来たのは精々彼にされた事をそのまま返す程度。
けれど、そのお陰で彼との時間はより濃厚なものとなった。仮面越しからでも分かる驚愕する魔人の様子には、その余りにも純情な反応に、下腹部から異様な熱を感じてしまう程にサクリファイは昂った。
「しかし、えぇ、まだその時ではありません。今の私では彼を受け入れる事は出来ません」

実力の差は未だ開けている。同じ手が何度も通用するほど甘い相手ではないだろうが、それでもサクリファイはこの関係を止める気など毛頭なかった。

次だ。次再び見えた時は今回同様何度も殴り合おう。それでも勝てなければ次、それでも敵わなければ敵う時まで何度も繰り返すだけ。

嗚呼、何という事だろう。これではまるで波打ち際で戯れる恋人達の様ではないか。

「ふふふ、次に会う時が楽しみですね」

薄暗い闇の底で愛を語るケダ獣モノは静かにその時を待ち続けた。

その１７６

♪月δ日

以前から記しているかもしれないが、竜馬さん達ゲッターチームと戦うのは本当に恐ろしい事だというのが、今回の一件で骨身に染みた。

竜馬さんの意識を目覚めさせる為にゲッター線を浴びせた虢君。そのゲッター線に釣られて襲来するインベーダーとゲッター線に呑まれた竜馬さんが真ゲッターと共に大暴れ、周囲の地形が更地になった程度で済んだ事が今でも信じられない程で、暴れまわる真ゲッターと竜馬さんに自分は一瞬だが萎縮してしまった。

イヤだってマジで怖いんだって。初めて会った時から怖くて苦手意識を持っていた自分だけど、今回のゲッターを通して伝わってくる竜馬さんの迫力は、隔絶宇宙でガチで殺り合った時よりも数段増しで怖かった。一瞬ビビった程度で後は意識を切り替えられた自分を誰か誉めて。

で、先にも述べた通り当時の戦場には夥しいインベーダーの大軍が迫ってきており、

しかし竜馬さんが相手で戦力を割く訳にはいかず、やむを得ず自分が竜馬さんと真ゲッターの相手をする事となり、残りの皆はインベーダーの相手をする事となった。

甲児君は自分の所為で竜馬さんを怪我させたのだから自分が相手をするべきだと勇んでいた。マジンガーの防御力は頼もしいし正直前衛を任せたいと思ったが、D．O．M．E．で目にしたあの映像を見た後では彼に任せる訳にはいかなかった。

マジンガーとゲッター、この二機には自分が考えている以上の深い関わりがあるのではないか？　時獄戦役でもマジンガーZは一度ゲッター線をマトモに浴びたと聞く。もしこの二機が何らかの要因で共鳴し、進化し合ったりしたら――その瞬間地球終了のお知らせである。

だから自分は甲児君とマジンガーZを極力真ゲッターに近付けない様に配慮し、全面的に真ゲッターの相手は自分が務める事になった。なったのだが……どうやら、ゲッター線は自分とグランゾンに興味を引かれたらしく、真ゲッターの力は地球上では出してはいけない所にまで高まり、その一撃を迷うことなく振り下ろした。

確か、ファイナルトマホークだっけ？　本来なら真ドラゴンと連結する事で初めて繰り出せる必殺技を真ゲッター単機で繰り出すとは、どうやら真ゲッターも竜馬さんも真化の一端に触れたようだ。

星すら両断する真ゲッターの一撃、流石にグランゾンのままでは抑えきれないのでネ

オ化して対応、手にしたワームソードと巨大化したトマホーク、二つの得物が衝突した瞬間辺りは消し飛び、グランゾンと真ゲッターを中心に大地は陥没、後少し自分の次の行動が遅れていたら、その被害は更に酷い有り様になっていただろう。

真ゲッターの一撃を食い止め、力の緩急……その一瞬の隙を突いてその攻撃を撥ね退け、真ゲッターの間合いに入り込んだ自分はグランゾンの拳でゲッターの腹部を強打。

その衝撃のお蔭か、それとも一緒に真ゲッターに搭乗していた隼人さんや弁慶さんの呼び掛けのお蔭か、竜馬さんは意識を目覚める事に成功、無事に真ゲッターの暴走を食い止める事が出来た。

本人は覚えていなかったけど、どうやら迷惑を掛けたなと軽く謝罪してその勢いのままインベーダーの掃討戦に乱入、先程の暴れっぷりと大差ないような戦い方に自分は決意した。もう二度と竜馬さんの相手はしないと。

もう本当に疲れた。字面ではあまり伝わって来ないと思うが、真ゲッターがあの巨大トマホークを振り回した瞬間、軽く死ぬ覚悟したからね？　それくらいの迫力と殺意がその時の竜馬さんには有った。今になって思うけど、俺ってばよくあんな竜馬さんと正面から渡り合ったよな。やはりこれ迄の経験が自分を成長させてくれたのだろう。そう思えば、これまでの体験も悪くは無かったかもしれない。

しかし、一つ引っ掛かる事がある。グランゾンで真ゲッターを殴った際――――所謂接触した瞬間、何やら奇妙なビジョンが頭に流れ込んで来たのだ。

それはＤ．Ｏ．Ｍ．Ｅ．で見た巨大ゲッターロボ、星すら破壊しながら尚進化を続けるゲッターの艦隊。その司令塔と思われる男からの意味深なメッセージ。

〝お前がそうか……いつか、ここに来るのを待っている〟

朧気ながらも男から告げられるその一言だけは耳に残っている。あれは自分に向けられた言葉なのだろうか。竜馬さんに似ていたあの男性、一体何を待ちわびているのだろうか。

まぁ、気にした所で大した意味も無いだろう。そもそも自分が理解できる範疇を越えている。竜馬さんは無事に意識を取り戻し真ゲッターも元に戻ったのだ。今は余計な詮索はせずその事実に喜ぼう。

――――決してゲッター線に魅入られてヤベーとか思ってないから、決してあの映像に近付きつつあるんじゃないのかとか怯えてないから。その現実から目を背けているわけじゃないから！

♪月β日

何か宇宙組と合流したらハマーン様がいたで御座る。地球にいるＺ―ＢＬＵＥ分隊

から別れて再び宇宙に滞在している分隊と合流した自分は、取り敢えずの流れでハマーン様に挨拶する事となった。

何でもハマーン様は以前から自身の心に迷いがあったらしく、その迷いに決着を着けるべくＺ―ＢＬＵＥに挑み、バルビエルからの横槍がありつつもセツコさんのスフィアとハマーン様の強い意思でこれを打ち破り、その後も何やかんやありながらも迷いを振り切ったハマーン様はネオ・ジオンから離脱し、Ｚ―ＢＬＵＥに協力する事を決めたのだとか。

いやぁ、ギュネイ君に続いて心強い御方が仲間になってくれたものだ。彼女の実力は自分も良く知っているから宜しくと挨拶をしたのだが、どうやら余り良くは思われていないらしく、彼女の自分に向ける視線は妙に刺々しかった。

どうやら自分が仮面を被っている事が不満らしい。そう言えば着けたまま忘れていた自分は仮面を外して軽く謝罪する。すると彼女は柔らかく微笑み、ギュネイ君の事でお礼を言ってきたのだ。

ギュネイ君は強化人間という経緯から多少人格に問題があったが、それが矯正されて歴戦の強者と呼べるまで成長した。今ではシャアやアムロ、カミーユとまで渡り合える程に腕を上げていると自分の事の様に語るハマーン様、その要因となった自分に直接顔を合わせて礼を言いたかったと語るハマーン様に自分は思う。

――――ハマーン様、カリスマヤバくね？　え？なんでこの人ネオ・ジオンの総統じゃないの？　フル＝フロンタル何かよりよっぽどリーダーシップあるよ。下手したらシャア大佐よりもネオ・ジオンの事を考えてくれてるんじゃないの？　話題に上がったギュネイ君も嬉しそうに照れてるし、何でこの人フル＝フロンタル何ぞに顎で使われてたの？

そう思える程にハマーン様のカリスマ性がヤバかったです。純粋なカリスマ性ならトレーズさんに迫るんじゃねぇのこの人。

で、その後フル＝フロンタルの思惑に巻き込まれたと思われるプラントに近付いた自分は、リディ君が率いるクロノの部隊とフル＝フロンタルの息が掛かったネオ・ジオンの部隊を迎撃、途中参戦してきたアスラン君とレイ君と共にこれを撃破。

つーか前も思ったけど何でリディ君クロノと一緒になってんの？　軽く質問しても家の血がーとか、お前には分からないーとか言ってたけど、話をする気が全く無かったので、取り敢えず黒いユニコーンの四肢をワームスマッシャーで撃ち落として大人しくさせて話をする事にした。

後ろでバナージ君が遣りすぎですよ！　とか言ってたけど、興奮状態の相手に話をさせるにはこれくらいの荒療治は必要だ。故にバナージ君の言葉をスルーし、自分は秘匿回線でリディ君に訊ねた。何故、自分達と敵対する？と。

反ってきたのはどうせお前達ではクロノに敵わない、というもの。ラプラスの箱に秘められた秘密を知れば、そう語るリディ君に自分は思わず口にした。
「それって、宇宙生活で新たな人種が生まれたらその人達に政権を委ねるみたいな話？」
「それとも、地球人類は宇宙に進出した瞬間からクロノの支配下に置かれていた事？」
この二つをそれとなく口にした瞬間、リディ君の表情は固まった。……いや、だってこれは前々から分かってた事だし、前者だってその当時の事を考えたら割かし思い浮かぶ内容だよ？　そんなに驚く様な話ではないと思うんだけどな。
つーか、それとリディ君が自分達と敵対するのは別の話じゃない？　口ではリディ君はそう言うけれど絶対他にも理由があるでしょ。しかしそれ以上彼が口を開く事はなく、リディ君は黒いユニコーンのバーニアを噴かせて戦場から離脱。
追撃して捕まえても良かったが、今のリディ君を捕まえた所で爆弾を抱える様なもの、せめて彼に取り付いている邪念が振り払われるまで様子を見守ることにしよう。
……そう言えば、アドヴェントの野郎の腰巾着達、クロノの別派閥の部隊は今頃何をしてるのだろう？　奴は既に取り込まれ、取り込んだ本人も部下を付き従えている様子は無かった。
もしかして何処かで待ち構えているのかもしれない。その事をオットー艦長とブライト艦長、そしてギルターにそれとなく伝えた自分はひとまず休むことにした。

そう言う訳でお休みなさい。

その１７７

♪月＊日

連戦に次ぐ連戦、部隊を三つに分けた事で戦術的に各々に負担が大きくなってきている。その疲労を少しでも解消するべく、自分達宇宙組は一度拠点であるソレスタルビーイング号へ駐留する事となった。

シャア大佐がフル・フロンタルの下へ投降した事で不安を募らせる宇宙組、マリーダさんもここ最近辛そうにしていたから今は医務室で安静にしているし、今の彼等は疲労困憊の状態と言える。

自分も前回の真ゲッターとの一戦で肝を冷やしたし、精神的に疲れた所もあるので、今回の駐留は賛成だった。ただギルターだけは比較的平気なのか、生活班の人と一緒に炊き出しをしているのを見かけたから驚いた。

どうやらＺ―ＢＬＵＥに合流し、本来の役割で且つ余裕のある立場に腰を据えられた事から他の者達と比べて幾分か余裕があるらしい。……逞しいやつだ。や、嫌味とか

そう言うの抜きで、本当にタフな人だと思う。

それに進んで自ら炊き出しの手伝いをしているのだから感心する。中には同じく疲弊している筈のクェスちゃんもいるし、自分だけが怠けている訳にも行かないと思い彼等の手伝いをする事にした。

顔を合わせた時のギルターは相変わらず死んだ魚の目をしていたが、クェスちゃんと一緒に料理をしている時は結構楽しそうにしていた。部隊の若い子達と仲良く出来ているか気になっていたから、仲良く炊き出しをしているギルターを見て少しだけ安心した。他の人達も彼を悪く言う人はいなかったし、皆気さくに彼と話をしていた。

これならギルターも孤立する事は無いだろう。……べ、別に自分よりＺ―ＢＬＵＥに馴染んでいるギルターに焦りを感じてたりなんかしてないんだからね。自分だって最近ハマーン様とかアムロ大尉とか、ギュネイ君とかカミーユ君とかハマーン様とかと色々話をしてるし、時々バナージ君とも話をしてるし！　決して羨ましいとか思ってないから！

……でも、総じて皆何処か一歩引いてた態度をしてたなぁ。何でだろ？　ギュネイ君は割かしフレンドリーに接してくれるけど、アムロ大尉とか最近目を合わせてくれなくなったし、自分なにかしたかなぁ？

――――話が大きく逸れた。そんな訳で自分達はこれからソレスタルビーイング号に乗り込み、物資の詰め込みと僅かばかりの休息に務める事になる。今後も戦いはより苛烈さを増していくと思われるし、休める時に休める様にしておこう。

――――そう、思ってたんだけどなぁ。

「動くなＺ―ＢＬＵＥ、お前達は完全に包囲されている」

なんか、こう言うの久し振りじゃね？

◇

「いやはや、本当に久し振りだな。この扱いも」

ソレスタルビーイング号に残された独房と思われる一室、他のＺ―ＢＬＵＥとは異なり唯一この部屋へと連れてこられたシュウジは、手足を縛られた己の有り様を見て、何処か感慨深くなっていた。

部屋の四方に佇むのは何れも銃を手にしたネオ・ジオンの兵士達、全員目の前の男が不審な動きを見せたら、その瞬間引き金を引くことを上司から言い渡されている。

スベロア＝ジンネマン、彼の手引きによってソレスタルビーイング号はネオ・ジオンに制圧され、Ｚ―ＢＬＵＥの面々は彼等に拘束という形でそれぞれ別室に案内されている。危機的状況、しかしそんな状況の中でもシュウジには焦りの色は微塵も無かった。寧ろいきなり殴られなかっただけでもアロウズよりマシだよねという良く分からない理屈で、ネオ・ジオンに対してある意味好印象すら抱いていた。

そんな緊張感の欠片も抱いていないシュウジに、ネオ・ジオンの兵士達は苛立ちを募らせる。仲間を別々に追いやられ、助けなんて期待出来る状況ではないのにこの余裕……シュウジのその態度は、ネオ・ジオンの兵士達の逆鱗を刺激するには充分過ぎる程の効果があった。

可能ならば今すぐにでも引き金を引いて蜂の巣にしてやりたい。だが敬愛するフル・フロンタルの命に背いて勝手な行動を取る訳にも行かない。そんな彼等の心情を知っ

てか知らずか、シュウジは悪びれもなく欠伸を晒す。
だって疲れてるんだもの、仕方無いよね。そんな彼の胸中など知る由も無く、兵士達が引き金に掛けた指に力を込めた瞬間……。
「フフフ、この状況に於いてその剛胆さ、流石はかの魔人と言った所かな？」
仮面を被るネオ・ジオンの総帥、フル・フロンタルが、側近であるアンジェロ＝ザウパーを従えて部屋へと入ってきた。
「窮屈な思いをさせて申し訳ない。しかし君を放置しておいては、安心して彼等との会談には望めない。故に、今回の様な形を取らせて貰う事にした」
「……はぁ、そうですか」
仰々しく詫びてくるフル・フロンタルだが、本心では欠片もそんな事は思っていない。自らを器としているモノにそんな感情など持ち合わせてはいないかの様に。――――そんなフル・フロンタルに対して、シュウジは気のない返事で応対する。
そんなシュウジの態度が気に入らないのか、アンジェロの眉間に皺が寄る。
「で？　そんなネオ・ジオンの総帥様が何のご用かな？　見ての通り仮面を被っていない今の俺は唯の人間、蒼のカリスマと話がしたいのなら機会を改めて欲しいのだけど？」
「仮面を被っていようとそうでなかろうと君は君だ。そう己を定めているのは君自身、

違うかね？」
「……」
　仮面の奥で頬笑むフロンタルに対しシュウジは押し黙る。まるで自分の事などお見通しだという様なフロンタルの態度に、シュウジの目が僅かに鋭くなる。
「で？　マジで一体何の用だ？　Ｚ―ＢＬＵＥとの会談はもう少し時間があると思ったけど？」
「単刀直入に訊ねよう。蒼のカリスマ……いや、シュウジ＝シラカワ、君はラプラスの箱の真実を知っているかね？」
「うん、まぁ大体検討は着いてる」
　ラプラスの箱の真実。ネオ・ジオンと連邦、その両方に多大な影響力を持つとされている禁断の箱。その奥底に眠る真実について直球で訊ねるフロンタルに対し、シュウジはあっけらかんと即答した。
　周囲のジオン兵士とアンジェロが驚愕に目を剥いている一方、フロンタルはやはりかと思案する。
「では、今一度問おう。ラプラスの箱の真実を知り、それでも君はクロノとサイデリアルに敵対するつもりなのかね？」
「そうだけど？」

やはり即答。迷い無く、いっそ清清しい程に言い切るシュウジにフロンタルは笑みを浮かべる。成る程、これが魔人と呼ばれる人間かと一人納得すると己の理想を語った。
地球の支配からの脱却、スペースノイドの自治確立、ジオンの意思、人の総意、そして未来。淡々と語るフロンタルを余所に、シュウジは終始退屈そうにしていた。
「――――どうかな？　もし君がコロニーの自治確立を認めるなら、地球のサイデリアルからの解放に私達も協力する事を約束しよう」
「いや、なんで俺？　なんで俺に地球をどうこう出来る力があると思ったし」
「君には力がある。比類なき力が。そしてサイデリアルとクロノに対して絶対的な敵対心がある。彼等を一掃する事が出来る君ならば、私の同盟者に相応しい」
「力で物事を自由に出来ると思うのはお山の猿大将と同じだと思うんですけど？」
「貴様、総帥になんて無礼な！」
「それにな、地球には俺なんかより皆を纏めるのにずっと向いている人達が大勢いるの。そんな彼等を差し置いて地球を統一するとか、マジないわー。つーか無理だわー」
フロンタルの理想を聞いても何一つ思う所はない。そう暗に断言するシュウジに、それでもフロンタルの表情が崩れる事はない。
アンジェロが敵意を剥き出しにするが、それを介すること無く向かい合うシュウジとフロンタル。

「……成る程、どうやら私は交渉する相手を間違えた様だ。君とは同盟を求めるのではなく、不可侵を結ぶことを目的にするべきだったか」
「――――いや、どちらにしてもお前と何かを与する事はねぇよ」
「ほう？　その根拠は？」
「だってお前、未来なんて微塵も見てないんだろ？　在るのは現状維持の続き、そんなのは末期の老人に対する生命維持装置の延命みたいなモノ、未来と語るには程遠い」
　理想を語るフロンタルを見て、シュウジは確信した。自らを器としているこの男は自分というモノがない。あくまで器であり、人の総意を受け止めるコップでしかない。
　トレーズやシャルル皇帝とは全く別の王の在り方。それ自体は否定しないが、それを加味してもフル・フロンタルという男には余りにも熱がなかった。
　未来と停滞は違う。未来とは未知であり、絶望と不安で彩られており、それを打倒して掴み取るからこそ未知は希望となり未来へと至り、人は夢を語るのだ。
「現状維持を望むなら一人で時の牢獄にでも入ってろ。永遠の今を望むお前には相応しい墓標だ」
「……そうか、絶望の未来を知って尚進むか。果たしてそれは勇者の行軍か、それとも狂人の暴走か、楽しみにしておこう」
　根底から相容れない両者、それを受け入れたフロンタルは無表情のまま部屋を後にす

る。あとに続くアンジェロが兵士達に何かを指示すると、フロンタルの後を追う。
アンジェロ達の気配が遠退くのと同時に、兵士達の手にした銃から弾丸が飛び交う。たった一人の人間に対して行う一斉射撃、跳弾や同士射ちの危険性を考慮しない射撃。そう、既にフロンタルという男に身も心も捧げた彼等にとって、己の命など勘定に入ってはいなかった。
故に魔人討伐を一切の迷い無く遂行する彼等は正しく組織の歯車の一つだった。彼等の命をもってして任務は遂行される。そう、並みの人間が相手ならば。
「さて、そろそろお休みも終わりか。ソレスタルビーイング号にいるネオ・ジオンの兵士達を無力化しつつ、皆と合流するかな」
あれだけの銃撃の中で当然のごとく無傷で佇むシュウジ、縄を掛けられていた手を擦り、その場を後にする彼の背後には気絶した兵士数名と、無数のひしゃげた弾丸が散らばった独房だけが残されていた。

その１７８

√月♪日

ソレスタルビーイング号からネオ・ジオンを追い出し、改めて留守をジンネマンさんに任せた自分達は世界を壊そうと企むアマルガムの野望を阻止する為、第三新東京市へと向かうヒビキ君のいる地球組と合流した。

向こうにはヒビキ君がいるからと思い殆ど顔を出してはいなかったが、どうやら彼方も色々とあったらしく、戦力やら人間関係やら様々なモノが変わっていた。

まず宗介君だが、これまで彼の相棒であるＡＩのアル君が不在の合間彼はラムダドライバが搭載されてないアーバレストで戦っていたが、先の戦いで遂にアル君と合流。レーヴァテインという新たな機体と共に前線へと復帰、その後もアマルガムの策略に嵌まり一時的に危機に陥ったりしたけど、何とかそれらを切り抜けアマルガムとの決戦にもつれ込む事が出来たらしい。

だが、喜んでばかりもいられない。どういう訳かは知らないがこれまでＺ―ＢＬＵＥを……特に、宗介君にとって絶対とも言える信頼を置いていたカリーニンさんが裏切

り、アマルガムに寝返ったというのだ。
　自分は余り彼と話をしたりしなかったからその人柄は良く分からないが、強面でありながら面倒見が良く、同世代の人達からも色々と悩みを聞いてあげたり、相談されていた様だ。
　そんな人が何故今更になって裏切るのか、理由としてはアマルガムが企んでいる世界を壊す野望が関わっているのだろう。テスタロッサ艦長が言うには連中は利己的に時空修復を引き起こし、自分達が望む世界に転移しようと言うらしいのだ。
　それ自体は別に問題はない。転移して何処ぞへと消えるというのなら自分的には面倒が減って寧ろ大歓迎だ――――のだが、それに伴うリスクの所為でそうも言ってられなくなった。
　利己的に引き起こされる時空修復、しかしアマルガムが行おうとしているのは時空修復と似て非なる時間旅行……所謂、タイムパラドックスを引き起こす過去の改竄に相当しているのだ。こんな筈じゃなかった過去を変える為に、失われるモノを取り戻す為に行われる過去の改変、それが成された時現代への影響力は計り知れないモノとなるだろう。
　人類の危機処じゃない。文字通り存亡の危機だ。奴等の目論見が達成されれば現代の人類の大半は死滅する。最悪、地球に於ける全ての時間軸が破壊されるかもしれな

い。

とても容認できる話ではないし、奴等の計画の中にはかなめちゃんも関わっている。……いや、ヤムスクー1での一件で今のかなめちゃんは別の人格によって支配されているから厳密にはかなめちゃんではないか。

今のかなめちゃんには当時実験で惨たらしく殺された別の少女の人格が乗り移っている。これもウィスパードの特異な性質に依るものらしく、今の彼女からかなめちゃんを引き剥がすのは非常に難しいとされている。

けれど、その程度の障害で狼狽えるＺ―ＢＬＵＥではない。戦力的にはアマルガムを凌駕しているだろうし、どんな敵が相手でも迎え撃つ強い意思と士気の高さが今のＺ―ＢＬＵＥにはある。

勿論自分も全力を尽くすし、必要ならカリーニンさんも連れ戻す所存だ。宗介君からは訝しめられたが、これは本当に本音だ。

……けれど、一つだけ分からない事がある。アマルガムの現在の首魁と思われるレナードなる人物なんだけど、コイツ、以前かなめちゃんに言い寄ってた奴だよね？　妙な機械人形を侍らせたキザな奴。

え？　アマルガムってコイツ一人に乗っ取られたの？　この年若い青年一人に？……てっきり俺、精々開発系の幹部の一人かと思ってたよ。しかもどうやらコイツテ

スタロッサ艦長のお兄さんらしいし。
どうやら複雑なご家庭みたい。もし奴と出会したら遠慮なしに相手をしてもいいのだろうか。
――――今、テスタロッサ艦長に通信を入れて聞いてみた。どうやら遠慮なしで良いらしい。マジか。

√月Γ日
アマルガムとの決戦を明日に控えた今日、珍しく暇を持て余していたので色んな人と話をしていたら、ふと桂木桂さんから興味深い話を耳にした。
何でも時空修復なる方法を正しい手順で行えばこれまで交わっていた世界は元のあるべき所へと帰れるらしいのだ。
それは建物や地形に限った話ではなく、人も元の時代、元の世界へと帰還するらしいのだ。謂わば絡まった糸を解く様なもの、未だ根拠の無い部分の多い話だが、それでも理論的には可能だという。
……もし、もしそうなったとしたら、自分も元の世界へ戻れるのだろうか。そう言えば以前博士も自分さえ良ければ元の世界へ帰る方法を教えてやるみたいな事言ってたし、案外そうなのかもしれない。

元の世界へ帰れる……かぁ、そう言えばこの日記を最初に書いていた時もそれを目的として行動してたんだっけ。随分と遠回りをしてきた様な気がする。

しかしどうしよう。元の世界に帰れたとしても今の自分は少々以前と異なっている。背も伸びたし、髪も変わった。イメチェンの一言で片付けるには……少々厳しいかもしれない。

ニコちゃんとかには絶対からかわれそうだよなぁ。もし元の世界に帰れたらまずは髪を元の黒髪に戻す事から始めよう。そしてニコちゃんと沢山話をしよう、嘘だと笑われてもちゃんとこれまでの出来事を……包み隠さず。

その為にも先ずは目の前のアマルガムとの戦いに集中しよう。アマルガムに勝って、サイデリアルとも決着を着け、そしてサクリファイをどうにかしよう。

未だやることは多い、元の世界に帰るにしてもこれ等を片付けない事には自分は胸を張って帰れない。

だから頑張ろう。いつか、彼女にただいまと言える。――――その日まで。

その１７９

　第三新東京市、嘗ては使徒と呼ばれる異形の怪物達を迎撃し、世界の平和の一端を担っていたＮＥＲＶという組織の総本山だった場所、現在のその地は深々と抉れており巨大なクレーターが街の大部分を占めていた。
　アマルガムの……いや、レナード＝テスタロッサの野望が最終段階を迎えようとしているこの地で、Ｚ―ＢＬＵＥも彼の男と決着を付けるべく、第三新東京市へとやって来た。
　マクロスクォーター、その格納庫内。己の愛機の中でその時が来るのを静かに待つシュウジ、仮面を取り付けて今は蒼のカリスマとしてグランゾンのコックピットに座する彼に、ヒビキから通信が入ってきた。
『シュウジさん、今良いですか？』
「ヒビキ君か。どうしたんだい？　決戦を前に相談事かな？　生憎、私は産まれてこの方彼女なんて一度も出来た事はない。恋愛方面の話なら残念ながら力になれないよ」
『いえ、その事については大丈夫です』

「あ、そう？」

口調の堅さから何処か緊張しているだろうヒビキに蒼のカリスマは自分なりの冗談で和らげようとするが、返ってきた弟分の素っ気ない返事に蒼のカリスマは少し残念に思った。……寂しいとも言う。

そんな蒼のカリスマの通信内容に寧ろ外野の方が騒ぎ立て始めた。今更ながらヒビキとのやり取りはごく普通の通信回線、数少ない蒼のカリスマの情報にＺ―ＢＬＵＥの男女問わず多くの面々が、興味深く聞き耳を立てていた。

『恋愛ではなく、その……アドヴェントについてなんですが』

アドヴェント。時獄戦役の頃、ヒビキやＺ―ＢＬＵＥの窮地に現れては手助けをしてくれた謎の青年、今では蒼のカリスマことシュウジの情報で敵であることは間違いないとされてきたヒビキ自身にとっても他人事ではいられない案件。その名前を出された事で蒼のカリスマは仮面の奥で眉を寄せるが、同時に彼がなにを聞き出したいのか察し、ヒビキの言葉が続くのを待った。

『アドヴェント、アイツはこれまで幾度と無く俺の……俺達の前に現れては助けてくれました。いえ、今では敵だと言う事は分かっているんです。奴はシュウジさんにとっても許されない相手だし、俺の……父と姉の仇でもあります。でも、だからこそ知りたいんです。――――アドヴェントは、本当に死んだんですか？』

「死んだ。と言うのは語弊があるね。正確には取り込まれたと表現した方が正しいと思うな。各艦長の方々にも報告させて貰ったが、既に奴はサクリファイと名乗るあの女の一部となっている。恐らくは自我の一片も残ってはいないだろう」

ヒビキの問いに蒼のカリスマはシュウジとして即答した。最早アドヴェントという男はこの世界に残ってはいないと、唯一その面影を残しているだろう奴の断片は、あの異常性癖女の一部として着飾っている程度しかない。

自分が追い求めていた仇、同時に窮地に追い込まれた自分を幾度と無く救い上げてくれた恩人、言いたい事、問い詰めたい事は一杯あった。奴がどうして自分を所有物と呼んだのか、山程あった言葉が今はもう何の意味も持たない。

けれど、それで立ち止まるヒビキではなかった。アドヴェントという仇と戦う理由が無くなったとしても、彼にはまだＺ―ＢＬＵＥとしての役割が残っている。いがみ合う双子のスフィアリアクターとしてやらなければならない使命もあるし、何よりアムブリエルに支配されたスズネを助け出す最大の目的もまだ残されている。

思ってたよりも堪えていないヒビキに安堵するシュウジ、しかし彼にはまだ心配事があるのか、その表情は未だ晴れてはいない。

『それで、その……話は変わるんですが、シュウジさんは俺達が別れていた間、他の部隊に顔を出していたんですよね。その時にその、クロノの部隊と顔を合わせていたんです

か？』

　その質問にシュウジはヒビキの言わんとしている事に今一つ理解が出来なかった。確かに自分はＺ―ＢＬＵＥが複数の部隊に別れた際に各々の部隊に援護としてアチコチ飛び回った。ネオ・ジオン牽制組や地球組、唯一アマルガム追走組にはヒビキがいるからと言う理由で手助けはしていないが、いずれの戦場にもアドヴェントの手下だった☒達の横槍は一切遭遇しなかった。

　けれどそれが何だと言うのだろうか？　オズオズと訊ねてくるヒビキに今一つ要領が得ないシュウジに、今度は別口の通信から声を掛けてくるものがいた。

　カレンだ。グランゾンの真ん前に位置している紅蓮聖天八極式、燃える様な紅色をイメージカラーにしている紅月カレンが、己の愛機越しに小さく囁いてくる。

　ヒビキが危惧しているのは、アドヴェントの配下にいるマキと名乗る女性の安否に付いてで、どうやら彼女も奴の洗脳によって、現在進行形で操り人形にされているらしい。

　嘗て連中がリモネシアの皆にしたことを考えるととても許されない話だが、良く考えれば奴等もアドヴェントによって思考能力を奪われた憐れな人形の様なもの、その辺りを考えれば、彼らもまた被害者と呼べるのかもしれない。

　で、結局何故ヒビキがその事について態度を変えているのか。要するにアレだ。怒りに打ち震えた蒼のカリスマが、その衝動のままにマキなる女性達を消してはいないか、

不安になっているのだろう。
　ヒビキが心配するのも無理はない。蒼のカリスマと呼ばれる男は優しさと甘さを兼ね備えた男だが、基本的に敵対する☒には容赦がないし、自身を勝手に利用する☒にはもっと容赦がない。嘗ての再世戦争でその事を知っているＺ―ＢＬＵＥの面々は心配するヒビキに内心で深く同意した。
「フッ、そんなに心配しなくてもそのマキという女性には手出しはしないよ。そもそもこれから敵側に付いたかなめちゃんを助け出そうというんだ。今更その話に難色示したりはしないよ」
『ほ、本当ですか!?』
「但し、任せたからには責任を以てやり遂げなさい。君にはそのマキさんだけでなく、スズネ先生も助け出さなくてはいけないのだから、途中で投げ出すことは出来ないと覚えておきなね。……まぁ、俺も少しは手伝うからさ、頑張ろうぜ」
『は、はい！　ありがとうございます！』
　その言葉で漸く不安が拭えたのか、表情に明るさを取り戻すヒビキ、弟分の不安を払拭出来た事、漸く兄貴分として支えてやれた事に、シュウジもまた仮面の奥で安堵する。
　そしてその時だ。テスタロッサからの出撃要請がＺ―ＢＬＵＥの面々に下り、瞬間全員の顔付きが戦士のモノとなる。カタパルトデッキから射出され、各機体が第三新東京

市の地に足を踏み入れる。
千鳥かなめを取り戻し、レナードの目論見を潰すために……。

◇

アマルガムとＺ―ＢＬＵＥ、一組織との決戦の流れはＺ―ＢＬＵＥに傾きつつあった。アマルガムの主戦力であるＡＳやモビルスーツ、他にもファイヤバグという傭兵軍団もアマルガムの戦力として出てきたが、これまで幾度と無く強敵と戦い、そして打ち勝ってきたＺ―ＢＬＵＥに負ける道理はなく、戦いの局面は終始Ｚ―ＢＬＵＥの優勢となって進もうとしていた。
前線で戦うＺ―ＢＬＵＥ、しかし次元境界線が異常数値を示しているという事前情報に警戒をしてなのか、グランゾンは積極的に前に出ていこうとしない。アマルガムと戦端を開いてからは援護射撃のみを続けていた蒼のカリスマ、何か嫌な予感がする。出来

るだけ戦場の全体を見渡せる様に後方へ下がろうとする彼の所に――――。
『やぁ、久し振りだね。蒼のカリスマ』
「……そう言えば、お前もいたんだっけな」
漆黒の翼を翻す機体、シュロウガがグランゾンの前に姿を現した。今更現れる黒衣の死神、薄ら笑みを浮かべるアサキムに、シュウジは目を細めて相対する。
相変わらずの神出鬼没、しかも今度は何か隠し玉を拵えて来たらしい。以前とは違う様子のアサキムに訝しんでいると。
『フフフ、僕だけに気を取られていてもいいのかな？　此処には僕以外の来客も来ているみたいだよ？』
「なに？」
瞬間、背後から襲い掛かる衝撃。突然の強襲、一体誰が、何処からと振り向いた蒼のカリスマが目にしたものは、数々の異形の怪物達――――使徒が蒼のカリスマとグランゾンを囲んでいた。
どれもこれも一度倒した筈の☒達、通信回線からアスカとシンジの驚愕の声が響いてくるが、警戒すべきは奴等だけではなかった。
『蒼のカリスマ……いや、シュウジ＝シラカワ。君のお蔭で、君という不確定要素のお蔭で、僕は真にスフィアの力というものを理解できた。感謝するよ』

「あぁ？」
『僕が持つスフィアは〝知りたがる山羊〟と〝偽りの黒羊〟、〝尽きぬ水瓶〟と〝夢見る双魚〟の四つ、これ等全てのスフィアを使いこなすには随分と骨が折れたけど、漸くモノにすることが出来た』
『もう一度言おう。僕は君に感謝しているよ。君という人間と出会い、戦い、殺し合った。故に、だからこそ僕はここまでこれたんだ』
「まどろっこしいな。何が言いたい」
『君に、最大の敬意と極限の敵意を――――さぁ、シュロウガ、今こそ時獄の檻を食い破り、天元を超え、天獄へ至れ！』
シュロウガに取り込まれていた四つのスフィアが目映い輝きを放ち、シュロウガの姿を変えていく。より鮮烈に、より苛烈に、そしてより邪悪なるモノへと変貌を遂げたシュロウガは、最早Ｚ―ＢＬＵＥやシュウジの知るモノでは無くなっていた。
『さぁ、シュロウガ・シン。今こそ虚空を駆り、目の前の魔神の原罪を裁け！』
シュロウガ・シン、自らに罪（シン）を冠し、新生したシュロウガ。その速さは光速を越え、瞬きする余裕すら奪い、容易くグランゾンの背後へ回り込んだ。
「チィッ！」
突然の速さに面食らうも、今の一瞬でシュロウガ・シンの動きを予測していたシュウ

ジは、させるものかと手にした剣でシュロウガの刃を防ぐ。
　しかし、使徒の攻撃が同時にグランゾンへ押し寄せる。今この戦場で最も危険なのはグランゾンと蒼のカリスマだと認識しているのだろう。使徒とシュロウガの攻撃は奇しくもグランゾンの動きを阻む連携となり、僅かずつだが魔神達を圧し始めていた。
『シュウジさん！』
　珍しくらしくない危機に陥った兄貴分を助けようとするヒビキだが、ジェニオンと彼の前にハーデスと、彼の配下のミケーネの神々が立ちはだかる。
『コイツら、今更なんで！』
『漸く訪れた魔神を屠る好機、見す見す逃しはせん』
『しかり、ミケーネの神やそこの呪われし放浪者の手を借りるのは些か癪に障るが』
『それで太極の一つを屠れるなら安いものだ』
『ズールだと!?』
『宇宙魔王まで!?』
　突如現れる地球を狙う侵略者達、それもこれまで敵対してきた親玉達の登場に、優勢だったＺ―ＢＬＵＥが一気に窮地へと落とされてしまう。
『フフ、ざまぁないねＺ―ＢＬＵＥ。こう言うのって天は彼等を見捨てたって言うのが礼儀なのかな？』

そして遂に現れるアマルガムの現首魁レナード。無数のべヘモスと己の機体と共に彼が現れた事で、戦況は益々不利な状況へとなっていく。

追い込まれたＺ―ＢＬＵＥ、シュウジもシュロウガを振りほどこうと必死の抵抗を見せているが、四つのスフィアを手にしたシュロウガとアサキムは既に物理法則を超え、因果すら掌握しつつあった。

『無駄だよ！　今この場の空間の結果と因果は混濁している。物理法則が緩んだ今のこの地は次元力を引き出すのに長けている。今の君ではどうする事も出来ない！　そして！』

「っ！」

『それをどうにか出来るだろうネオにも最早ならせはしない。言っただろ、今この地は結果と因果が混濁していると！』

因果と結果、物理法則に於いて必然とも呼べる事象の繋ぎ目の乱れ、それを耳にしたシュウジは、一つの仮定を見出だした。

（結果と因果の混濁？　……それって、隔絶宇宙みたいなモン？）

ならば、だとしたら……いけるかもしれない。相当危ない賭けだが、現状を打破するにはこれしかない。意を決したシュウジが改まって通信を開く。その相手は……テレサ＝テスタロッサ、ダナンの艦長たる彼女にシュウジは今一度問うた。

「……テスタロッサ艦長、先日、私が貴方に訊ねた事、もう一度聞いても良いですか？」
『え？』
「良いのですね？　本当に、全力を出しても」
『――――はい。お願いします。貴方の全霊で以て、この状況を打破してください』
一瞬の躊躇、しかし今度こそ本当に何かを決意したのか、聞こえてくるテスタロッサの声には先日とは違う力が籠っていた。
「――――了解した」
『さぁ、これで幕引きとしよう。シュロウガ、転神！』
了承は得た。
『今一度、あの門に到達する為に、果て死ぬがいい！　ジェノシック・ノヴァ！』
後は……この空間が出来るだけ長く持ちこたえるよう、願うのみである。

〝――――真化融合〟

極大のエネルギーと化したシュロウガがグランゾンに直撃しようとした瞬間、世界は光に覆われた。

その１８０

――――真化。

それは、知的生命体が辿り着く一つの到達点。

それは、命在るモノならば等しく秘めている可能性。

その可能性を目覚めさせ、その極点へと到達した⊠が得る宇宙の真理――――それは一つの窮極である。

窮極の一（アルティメット・ワン）、命が辿り着く可能性の一端が今、第三新東京市に顕現された。

圧縮された体躯。凝縮され、濃縮され、仰々しかった鎧と共に一体と化した魔神は、以前のような強大さが感じられなかった。

――――否、感じられないのではない。小さな微生物が広大な海を認識出来ない様に、魔神を目にしている誰もが、魔神から発せられる圧に気付かずにいた。

真化を果たし、太極の極致へと至った魔神が得た新しき姿、その銘は原初の魔神（ゼロ・グランゾン）。

その背に日輪の輝きを背負う蒼き魔神、アサキムの至ったシュロウガ・シンとは異なる極点の極致を目の当たりにした一同は敵味方問わず誰もが思った。

〝何だアレは？〟理解が追い付かず、変貌を遂げたグランゾンをただ見つめるだけ。シュロウガの一撃を受けたにも関わらず、平然としているその姿勢に誰よりもアサキム自身が驚嘆を露にしていた。

――――魔神が、一歩踏み出す。その瞬間空間は悲鳴を上げ、大地もまた断末魔の如く震え始める。

レナードの行おうとしている時空修復とそれに合わせて引き起こされている次元境界線の歪みは、因果と結果を混濁させる一種の隔絶宇宙の様なモノ。通常の物理法則を度外視した規格外的空間だが……所詮は、一個人が生み出した即興の不思議空間。

それは大海の如く質量を持ったエネルギーをたった一つの紙コップで受け止める様なもの、もしこの魔神が現在第三新東京市を覆うこの空間を喰い破ったらどうなるのか。……最悪、ゼロ・グランゾンの存在の圧力に負け、地球そのものが圧壊してしまう可能性すら出てくるだろう。

今の歩みでその事を本能で理解したシュウジは、グランゾンの力を極力抑える事に専念する。ゆっくりと、静かに、己の愛機に落ち着けと諭す。すると、グランゾンは主であるシュウジに答えたのか、徐々にその圧を抑え、鎮静化されていき、それに合わせて地球の震えも収まっていく。

（しかし、それでも周囲の次元境界線は以前として不安定なまま……か。この様子だと

今のグランゾンが戦うのはあとニ、三分が限界って所かな）

己の愛機が原初に至った事への周囲の影響力から、既にもう猶予はない事を悟ったシュウジは、一番厄介なシュロウガとアサキムへと視線を戻す。

「さて、と。折角新しいグランゾンのお披露目をしたい所だけど、生憎と時間は残されていない。……悪いが、すぐに終わらせて貰うぜ」

『っ!?』

己の全力を受けて、それでも尚平然としている魔神にアサキムは怯む処か敢えて前進し、距離を詰めた。そこに彼らしい小癪な策はなく、がむしゃらに振り翳す刃だけがシュロウガの手に握られていた。

四つのスフィアを手に入れ、その全てを使いこなすことが出来たアサキム、永い時の中で漸く手に入れた強大な力、しかし彼は気付く。目の前にいる魔神は、最早スフィアを複数手中に収めた程度で相手取れる存在ではないという事を。

既に太極の――――真化の果てへと手を伸ばしつつある目の前の存在を、アサキムがどうにか出来る筈が無かった。

スフィアの力をフル稼働させてグランゾンの頭上へと跳躍するシュロウガ、転神させ、先程と同じ全力の一撃を放とうとする彼に魔神は微動だにしない。

『君が果てしなく成長を続けるのならば、僕も何度でも立ち向かおう！　受けるがいい

破界の魔神、ジェノシック・ノヴァ！』

黒衣の死神が闇を纏いて蒼の魔神へ突撃する。空が黒くなり、死という概念そのものと化したシュロウガ、その一撃は文字通り神すら屠れる力を宿しており――――

「温ぃ」

しかし、その黒衣の死神は己に纏わせた死ごと魔神の裏拳によって粉砕され、破界されてしまった。

転神が解かれ、宙に舞うシュロウガ。既にアサキムに敵意……というか意識はない、が。

「この程度で終われるとは……思ってないだろう？」

――――渦廻斬輪蹴（うずまわしざんりんげり）

放たれた魔神の蹴りはその全てがシュロウガに叩き込まれ、機体を文字通り八つ裂きにしていく。再生する事も許されず、完全消滅の一歩手前まで追い詰めていくその容赦の無さは、Ｚ―ＢＬＵＥが良く知る魔神の姿だった。

「お前は四つのスフィアを持っているからな。簡単には消しはしねぇよ。直ぐに相手してやるから、今はそこで大人しくしていろ」

バラバラに切り刻まれ、身動き一つ取れないシュロウガに聞こえているかなどお構いなしにアサキムにそう告げるシュウジは、次に使徒とこの地に馳せ参じた侵略者達に視

線を向ける。
　一番奥にいるレナードが乗る機体は後回しでいいだろう。この状況を何とかすれば後はどうとでもなるだろうし、そもそも奴とは宗介君こそが決着をつけるべき相手に相応しい。自分はそれまでの場を整えてやるだけでいい。
　そんな風に考えるシュウジはベヘモスの影に隠れるレナード機、ベリアルに目もくれず、この場に一番場違いな者達――使徒へ標的を定める。
　己が魔神の標的になった事を生存本能で理解した使徒は、その力を駆使して魔神に抗いの姿勢を見せる。
　命乞い等はしない。否、そんな機能等存在しない使徒達は、己の全てを駆使して、迫る魔神を拒絶するしかない。
　使徒特有のレーザー光線、ラミエルやゼルエルと言った攻撃に特化した使徒達の放つ光は、第三新東京市の大地を抉り、引き裂いていく。
　されど、光の中で佇む魔神に怯む様子も堪えた様子もなく、ただ使徒達の様子をジッと観察するように見つめ――そして。
「第三の眼――開眼ッ」
　額に破界を宿す第三の眼を開かせた。
「角度、修正。地球へのダメージを考慮し、威力は最小……さぁ、受け取るがいい。ゼロ・

グランビーム」

原初の魔神が放つ光は使徒達の光を呑みこみ、空を裂き、宇宙まで延びていく。太陽系の土星の輪を抉り、冥王星を掠める事で漸く収まった魔神の光……その後には何も残されていなかった。

「……少し、悪いことをしたかな」

現れた目的も分からず、攻撃してきたから迎え撃っただけ、これまでの敵対してきた相手とは違い、何処か純粋と感じられる使徒達の最期にシュウジは少しばかり罪悪感を感じた。

これで残すは侵略者のみ、宇宙魔王と皇帝ズール、そしてミケーネの神々。残り時間からギリギリと判断するシュウジはそのまま片付けようとグランゾンを動かす。

『おのれ、おのれぇぇ！　何故だぁ！　何故貴様がこれ程の力を持っている！　真化の果て？　太極の極致？　その程度で計れるモノではない！　貴様のソレは、まるで、まるでぇぇ……』

頭を抱えて苦悶し、憤慨し、羨望し、絶望に打ちのめされるズール皇帝を見て、明神タケルは同情を抱いてしまう。

自分が望み、永い時間を掛けて其処へ至ろうとしていたのに、自分よりも遥かに若い小僧が瞬く間にその境地へ足を踏み入れていく。何が違った？　何を間違えた？　ど

れだけ思考を巡らせても、相手を支配することしか頭に無いズール皇帝には、目の前の魔人がそこまで辿り着けた事に理解が出来なかった。

「……別に、そんな難しい事はしてないつもりだけどなぁ」

『――――っ!?!?』

そして、酷く狼狽えるズールについポロリと溢してしまったシュウジの一言が、ズール皇帝の何かを切れさせてしまった。何もかもを度外視した闇雲の一撃、ズール皇帝の放つエネルギー衝撃波は対象の身も心も蝕み、魂すら歪める力を持っている。周囲の大地ごとねじ曲げ、時空すら歪曲させる皇帝ズール。確かにその力は一つの勢力をまとめ上げるのに相応しい力を持っていた。

――――しかし。

「……返礼しよう」

魔神の力の一部が胸部に収束されるのと同時に装甲が展開される。そこに集められるエネルギーは先の光の比ではなく。

「時間と空間、総てを歪曲し、破壊し、終極させる。……さぁ、受けるがいい」

〝ディストリオン・ゼロブレイク〟

『あぁぁぁぁぁぁ……』

天を貫き、その反動で第三新東京市を跡形もなく吹き飛ばした魔神、その余波で時空

修復の影響を受けていた空間とズール皇帝を消滅させ、辺りにはただ静寂だけが残っていた。
巨大なクレーター、一つの街を丸々消し飛ばしたグランゾンは既にいつもの姿へと戻っている。時間切れの変身解除、しかしそれは強制のモノではない。原初の魔神と成ったシュウジは、既にその力を自在に操ることができている。
誰も口出し出来なかった。蹂躙というには圧倒的過ぎる光景、Ｚ―ＢＬＵＥもレナードも、敵味方問わずその場の全員が押し黙る中で……。
「さて、状況が変わった事だし、続きを始めるとしようか」
しかし、蒼の魔人は手を止める気が微塵も無かった。

その１８１

――――消失した。それまでこの地に埋め尽くされていた悪意が、敵意が、憎悪が、顕現された一柱の魔神の力によって瞬く間に蹂躙され、焼却され、消滅された。負の感情で入り乱れていた……そう、嘗て第三新東京市と呼ばれた大地と、その地を覆っていた時空の歪みごと。

誰も声が出せなかった。言葉に出来なかった。魔神の新たな姿と力に圧倒され、次の瞬間敵勢力の半分以上が消えていた事に敵も、そしてＺ―ＢＬＵＥさえも理解が追い付くのに数十秒程時間を有した。

魔神――――グランゾンとシュウジのやらかした光景を目の当たりにしたテレサ＝テスタロッサは、愕然とした様子で艦長席に座り込む。他の艦長達も似たような反応をしており、中でもオットー艦長は顎が外れる勢いで口を開き、目も飛び出す勢いで見開いている。

隣に立っているギルター＝ベローネは感情を失った顔で気絶している。立ったまま気を失うという高等テクニックを人知れず披露しているギルターを余所に、周囲の状況

は我を取り戻した様に動き出す。
『バカな、ズールが、暗黒の化身が、たった一撃で消滅しただと!?』
『は、ハーデス様、我々はどうしたら……!』
『――――っ、撤退だ。撤退するぞ!』
自分と同格の存在だったズール皇帝の消滅、その事実を皮切りに魔神達を屠ろうとしていた者達は蜘蛛の子を散らすが如く撤退していく。原初の魔神（ゼロ・グランゾン）という太極の極致を目の当たりをした事で、士気も戦意も完全に砕かれていた。
部下を引き連れて撤退するミケーネの神々、宇宙魔王もワームホールを開いて姿を消し、残されたのはアマルガムの首魁となり、時空修復を歪んだ形で行おうとしていたレナード＝テスタロッサとアマルガム（その一味）だけ。
しかし、そのアマルガムの中でも最早魔神に挑もうとする者はいなかった。圧倒的という範疇すらも超えた存在を前に、彼等の野心と野望は心の根っこの部分で粉砕されてしまっている。
『次元境界線も安定してきたな。これなら一安心かな、ん？　……あれは』
広範囲に陥没した大地の中央に佇んでいるのは、この惨状の原因であるグランゾンだった。先程までの姿とは異なり、通常の姿でその場に佇む重力の魔神。数分前までの劣勢からの好転とレナードの目論見が破綻された事を確認したシュウジは、各々の反応

を余所に呑気に己の愛機と共に窪んだ大地から浮かんで這い上がる。
その時、奇妙な反応をグランゾンが捉えた。何だと思い視線をそちらに向けると、其処には赤い槍が静かに窪んだ大地の斜面に突き刺さっていた。重力力場の応用で槍を引き抜き、手元まで引き寄せたシュウジは槍を見つめ、この槍が今回の時空修復の鍵の一つだったと何となく理解する。
明らかに普通ではない巨大な槍、通信越しから聞こえてくるアスカの息を呑む様子からして、どうやら本当にヤバい代物らしい。原初の魔神と化したグランゾンには通じないかもしれないが、少なくとも地球には大きな影響を及ぼす様だ。
その事を何となく察したシュウジは、シンジとカヲルが搭乗するＥＶＡ１３号機へ槍を投げ渡す。
『え？　し、シュウジさん？』
未だにグランゾンの起こしたショックから抜け出せていないシンジ、それでも渡された槍をキチンと掴み取る辺り、彼のパイロットとしての技量の高さが伺える。
戸惑うシンジを余所にシュウジはレナードに近付いていく。その際に通信でカヲルから感謝の言葉を送られたが、何の事か分からないシュウジは適当に返事を返す。
『さて、次元境界線とやらが安定した事でそちらの目論見はご破算になったと思うけど……どうする？　まだやる？』

ゼロ・グランゾンの力でレナードが行おうとしていた時空修復、その要となる装置を余波で破壊したとシュウジは解釈しているが、正確には違う。正しく言えば原初の魔神の力は時空修復の装置を破壊したのではなく、歪んだ次元境界線ごと破界したのだ。

しかしシュウジはその事に気付かない。何故ならそれはシュウジがゼロ・グランゾンを使いこなせていない唯一の証明だからだ。

比較的穏やかな口調で降伏勧告を促すシュウジ、しかしレナードの駆るベリアルからは何の反応も無い。と、そんな時だ。激昂したレナードがその感情を魔神に向けて爆発させた。

『ふざけるな、ふざけるなよ！　何なんだよお前はぁぁっ!!』

『おぉう?』

『何故俺の邪魔をする！　俺の目的が上手く行けば皆何もかも幸せになれたんだ！　誰もが傷付かない優しい世界に行けたのに、それをお前はぁぁぁっ!!』

『いやいやいや、その代償にこの世界の多くの人間を犠牲にするとかないから、普通にアウトだから、倫理的に無理だから』

『綺麗事を言って誤魔化してるんじゃない！　お前は台無しにしたんだ！　やり直せる未来を、変えられる過去を、こんな筈じゃない世界から飛び出して、別の人生を送れたんだ。お前さえいなければ!』

　レナードは吠える。お前さえいなければ皆が幸せになれたと。凄惨な過去を、未来に絶望して将来に怯える自分を、今のこの瞬間から逃げ出したい者も、レナードが掲げる理想が成就すれば、何もかもが上手くいっていた。
　その野望が、たった一人と一機の魔神によって台無しにされた。怒りにうち震えながら、レナードは感情のままに吠え続ける。
　しかし……。
『お前にだってある筈だろ！　変えたい過去が、未来が、世界があるだろ！』
『それはない』
　そんなレナードの叫びをシュウジは即答で両断した。
『変えたい未来？　過去？　　そんなもの誰にだってあるに決まってる。けれど所詮それは〝もしも〟の話でしかない』
　時空修復を行えば新たな世界が生まれる。其処では誰もが悔やんだ過去を変えて未来を変えていくその人にとっての理想の世界。
　しかし、それをシュウジは全力で否定する。過去は過ぎ去ったモノであり、己の糧にする事はあっても縛られるモノではない。未来とは未だに来ないモノであり、不透明だからこそ意味がある。
『そんな、そんな綺麗事を……！』

『何より、俺が一緒にいたいと、救いたいと、助けたいと願ったのはこの世界に生きた人達だ。別の世界でその人達を救えてもこの世界で救えなかった事実は変わらない』

リモネシアで面倒を見てもらった店長、数少ない友人、自分を子分と言って最後まで兄貴分として貫いた者、シュウジにとって掛け替えのない無二の人達、それは全てこの多元世界で出会った人達。

別の世界で生まれ、別の人生としてやり直せるなら、それは幸福に満ちた世界なのだろう。しかしそれは自分以外の別の誰かの人生だ。そして其処で出会う人達も、仮に死んだ人達であろうとも、それは所詮別人の話。

『っていうかさ、お前は自分の思い通りにならないから別の並行世界に逃げようって言うけどさ、そこでまた嫌な事が起きたらどうすんだよ？　また時空修復を行って人生をやり直すのかよ』

『そ、それは……』

『そこで言い淀む辺り自分で分かっている筈なのに、何でかなぁ。やはり頭の良い奴の考える事は分からん』

自分なりの正論を説いたつもりだった。ウィスパードという特殊な存在として生まれ落ちたが故に、幼少の頃から悲惨な人生を送ってきたレナード。それは同情されるべき事かもしれないし、憐れむべき話かもしれない。

しかし、それは彼だけに限った話ではない。Ｚ―ＢＬＵＥの中にも凄惨な過去で己の人生に苦痛を感じている者は少なくはない。しかし彼等は、そんな過去すら力に変えて前に進もうと努力している。

悲しい過去、苦しい未来、それでもその先にある微かな希望を信じて抗う者、Ｚ―ＢＬＵＥとはそんな足掻きを見せる人間の集合体なのかもしれない。

『でも、それでも……俺は！』

挫けそうな心を奮い立たせ、最後の悪足掻きとして操縦桿を握り締めたレナードはベリアルと共に立ち上がる。それに合わせて、周囲のベヒモス達も戦闘状態に移行していく。

仕方がない。最期まで戦う姿勢を崩さないレナードに、呆れながらも内心で感心したシュウジは、その気持ちに応えるようにグランゾンの力を奮おうとした。……しかし。

『そこまでにしてもらおうか、グランゾン』

『うん？』

背後には航空戦闘に備えて取り付けられたバックパックを取り外したレーヴァテインが佇んでいた。

『そいつの相手は俺がする。アンタには彼処に転がっているアサキム＝ドーウィンを連

れて一足早く艦に戻ってくれ』
『それは構わないけど、良いのかい？　まだかなめちゃんも助け出してないのに……』
『千鳥も助ける。ただ、アンタにはこれ以上この戦場を引っ掻き回さないで欲しいんだ。やむを得ない事情があったにせよ、今回のアンタはやりすぎだ』
『むむ？』
　呆れた様な、或いは達観に近い宗介の言葉にシュウジは訝しげに周囲を見渡すと……敵であるレナード達からは勿論、味方である筈のＺ―ＢＬＵＥからも言葉にし難い視線が投げられていた事に気付く。
　あれ？　何か既視感あるぞこの光景、何処だっけと腕を組んで感慨に更けると……初めて皆の前でネオになった事を思い出す。確か女王バジュラの首ごとグレイス＝オコナーを屠ったあの時も、皆から似たような視線を受けたことがあったっけ。
　しかし、何故そんな目で見てくるのだろうか、心当たりの無いシュウジは必死で原因を模索していると、一つ忘れていた事があった。
『あれ？　言って無かったっけ？』
　真化の事、太極の事、Ｚ―ＢＬＵＥと敵対し、討たれ、合流するまでに起きたこれ迄の出来事を皆には話したつもりだった。しかし、グランゾンが真化を果たして更なる力を得ていた事だけは言い忘れていた。それに気付いたシュウジは大量の冷や汗を額か

ら垂れ流しながら呟いた。
返ってきたのはＺ―ＢＬＵＥ全員からの聞いてないの大合唱、通信からはカレンやヨーコを含めたパイロット達や各艦長達からの猛抗議が殺到してきている。中でもシュウジがヤバいと思ったのが、普段は冷静沈着なブライト艦長がコメカミに青筋を立てていた事だった。口調は静かで柔らかかったが、口元が僅かに引き攣っていたから間違いなく怒っている。
自分ではなく、自分に全力を出していいと許可を下したテッサ艦長に言って欲しいとシュウジは思ったが、テッサ艦長は顔を両手で覆ってご免なさいと呟くオブジェと化している。
先程までの危機的状況とは違う意味での阿鼻叫喚。シュウジは自らやらかした事に、頬を掻きながら苦笑いを浮かべるしか出来なかった。
結局、シュウジの活躍はその後アサキムとシュロウガを回収するだけで終わり、後の事はＺ―ＢＬＵＥに任せる事にした。その後の展開はと言うと、宗介はレナードとの決着を付ける事が出来て、裏切っていたカリーニンも無事に確保、ソフィアに人格を奪われていた千鳥かなめも無傷で取り戻すことが出来た。
尚、カリーニンは魔神の力を前に抵抗の無意味さを悟り自ら投降、かなめの人格を支配していたソフィアも魔神の力の余波でかなめから引き剥がされ、強制的に成仏させら

れたという。おまけにその余波はレナードが用意していた時空振動弾すら消滅させたらしく、レナード達アマルガムの企みは、シュウジとグランゾンがその気になった時点で詰んでいたのだった。

壮絶な戦いも、各々の覚悟や決意も、戦場ごと無自覚に破壊する。真化融合で更にパワーアップしたシュウジと魔神は訪れる悲劇すら破壊するようになっていた。

グランゾンとシュウジ、彼等の力は今後の皇国との戦闘できっと大いに役立つ事だろう。しかし、その強すぎる力を前にした各艦長達は彼等の力の扱い方に大いに頭を悩ませるのだった。

◇

「いやはや、相変わらずとんでもないな魔人様は、その暴れっぷりは流石の私も予想外だぞ」

「その割には良い笑顔ッスね」
　アマルガムとの決着を終え、千鳥かなめも取り戻したＺ―ＢＬＵＥ、現在彼等は第三新東京市から離れ、少しばかりの休息に入っていた。
　げんなりした様子でマクロス・クォーターの通路を歩くシュウジ、その後ろには緑の魔女が非常に良い笑顔を浮かべて彼の後ろを付いていく。
「当然だろう？　何せあの状況を打破したにも関わらずお前とお前のグランゾンは暫くの間真化融合を禁じられたのだ。その時のアイツ等とお前の反応、見てて楽しかったぞ」
「そッスか、良かったスね」
　アサキムとシュロウガを回収し、艦へと戻ったシュウジを待っていたのは、各艦長達からの真化融合の禁止という命令だった。街一つを片手間に破壊し尽くし、使徒やズール皇帝、更には力を付けたアサキムとシュロウガを瞬殺。彼等がシュウジとグランゾンの力を危惧するのは当然とも言えた。
　尤も、シュウジとしてもあの時は状況が切羽詰まっていた故の対処だったので、本来なら地球で使うつもりはなかった。ネオ・グランゾンが使えないのとあの時の場が異常な空間であったという奇跡的好条件が揃っていたのと、テッサ艦長による後押しがあったから出来た事、同じことをやれと言われても、恐らく二度と出来ないだろう。

シュウジとしても構わないから別に禁止された事自体には何の不満はない。寧ろそれだけでお咎めなしにしてくれた、ブライト艦長達の配慮に感謝すべきだろう。

ただ、真化融合を禁止にした際の艦長達の言葉が、命令というよりも懇願に近いのが多少気になった。もっと口調を厳しくすれば良いのに変に遠慮がちなオットー艦長達、テッサ艦長に至っては涙目でお願いしますと口にする始末。命じられてるのは此方の筈なのに、シュウジは何故か罪悪感で一杯になった。

唯一毅然な態度のままだったブライト艦長だけがシュウジにとって救いだった。その後、帰ってきたＺ―ＢＬＵＥの面々から質問攻めにあったが、何とかそれも乗り切り現在に至っている。

何だか戦闘よりも疲れた気がする。肩を落として終始Ｃ．Ｃ．に弄られていたシュウジだが、ある部屋の前に立つと表情は真剣なモノとなり、Ｃ．Ｃ．も茶化すのを止めた。

扉を開けて中へと入る。明かりの無い暗闇の部屋の中で待っていたのは、これまで幾度となくＺ―ＢＬＵＥとシュウジの前に立ちはだかったアサキム＝ドーウィンが備え付けのベッドに腰掛けていた。

「やぁ、やっと来てくれたか」

「よぉ、随分と寛いでいるじゃないか」

蒼のカリスマとしてではなく、シュウジとしてアサキムに対峙する。蒼と黒、二人の因縁が一つの区切りを迎えようとしていた。

その１８２

マクロス・クォーター内部、アマルガムとの決着を付け、レナードとソフィアの野望を打ち砕き、千鳥かなめを無事に取り返したＺ―ＢＬＵＥ、皆が次の戦いに向けて休む間もなく準備を進めるなか、シュウジとＣ．Ｃ．はある用事から独房室に足を進めていた。

暗闇の空間、備え付けられたベッドに腰掛けていたアサキムは部屋の灯りが付いた事に気にも留めず、部屋へと入ってきたシュウジに向き直る。

スフィアという次元力を引き出すコアを四つも手にしておきながらの完全敗北、しかしそれでもアサキムの表情から微笑みは崩れず、寧ろシュウジが入ってきた事でその笑みはより深さを増していた。

「君以外誰もここへは来てくれなくてさ、まさかセツコ＝オハラすら僕には無関心だなんてね。スフィアリアクターとして成長してくれている事が嬉しく思う反面、少し寂しいかな」

「セツコさんとお前はＺ―ＢＬＵＥの中でも特に強い因縁を持ってるからな。悪いがここへは来れない様にしている」

　アサキムからの問い掛けをシュウジは事務的に淡々と応えていく。セツコを始めとしたスフィア＝リアクターの彼等はアサキムとの接触を固く禁じられており、この部屋には生身での戦闘に自信があるものしか近付く事すら許されない。

　アサキム＝ドーウィンという男の危険さと狡猾さ、その恐ろしさを骨身にまで刻まれているＺ―ＢＬＵＥからすると、捕虜となったアサキムに対する今回の対応は当然とも言えた。アサキムという何をするか分からない爆弾を敢えて抱える事にしたＺ―ＢＬＵＥ、彼の目的を聞き出すべく、彼等は敢えてアサキムを捕らえるという賭けにでた。

「分かっていると思うが一応言っておく。下手な動きはしない方がいい。この独房は常に監視カメラを通して全艦に逐一様子を見られる様にされているし、両隣の部屋にはくろがね五人衆の皆さんがお前の動きに機敏に反応している。彼等にはお前に不穏な動きがあれば直ぐ様仕留める様にお願いしている」

「フフフ、怖いなぁ。確かに彼等が相手では流石の僕も分が悪いし……何より今は君が目の前にいる。確かにこれは下手な動きは出来そうにないな」

　口角を吊り上げ、不敵な笑みを浮かべるアサキムに、シュウジは内心で警戒レベルを引き上げる。確かに今のシュウジは生身でもアサキムを圧倒出来るかもしれない。そ

れこそ命を奪わずに無力化させる位の力の差が、二人の間に明確に存在している。
しかし、それだけで油断出来るほどアサキムという男は甘くはないし、何より彼には死しても甦る絶対の不死性が存在している。喩え此処でアサキムを殺しても何れ何処かで復活し、此方を虎視眈々と狙ってくる事を考えれば、今彼を手に掛けるのは愚策だと言える。
その事を理解しているからこそ、くろがね五人衆も手出しが出来ずにいた。アサキムを手に掛けるのはそれこそ彼が明確な敵対行為、或いは怪しい破壊工作を仕掛ける素振りを見せた瞬間のみに絞られる。下手に手出しを出来ないと察したくろがね五人衆は現在、其々の監視部屋で気を抜かない程度に寛いでいる。
しかし、何時までもこの男をここで野放しにしておく訳には行かない。手出しが出来ないなら少しでも情報を引き出すしかない。故にシュウジはアサキムという怪物を相手に、自ら事情聴取の役割を立候補した。
本来ならここへはルルーシュや竜馬といった知謀策略や腕っ節に自信がある者を連れてきたかったのだが、彼等は彼等で次の戦いの機体整備に追われており、とてもこの場へ来てくれる余裕は無い。来てくれたのは相変わらずシュウジに借りを作ることを企む緑の魔女ただ一人だった。
無い物ねだりをしても意味はない。話を長く続けるつもりも無いシュウジは、アサキ

ムに単刀直入で問い質した。
「アサキム＝ドーウィン、お前の機体であるシュロウガからスフィアを取り出す事は可能か？」
「無理だね。スフィアは既に僕をリアクターとして認めている。僕をここで殺した処で次の瞬間にはシュロウガの中で目覚めるだけ、仮に機体ごと破壊したとしても、其々のスフィアは直ぐ様次の適性者を探して次元を超えて様々な並行世界へ飛び散っていくだろうね」
「……」
概ね予想通りの答えだった。現在アサキムの愛機であるシュロウガの機体に秘められた四つのスフィアは、何れもアサキムが己を扱う主人として認めている。四つのスフィアを使いこなし、シュロウガをシンの姿へと変貌させた事から、その事実は覆る事はない。また、仮にシュロウガ・シンを完全破壊したとしても、並行世界へ飛び散った四つのスフィアを探し出す時間は今の宇宙には残されていない。
「――――なら、その四つのスフィアを使ってお前は何がしたい。セツコさんやクロウさん達にちょっかいを出して彼等の成長を促したお前はその果てに何を願う？」
「聞いた所で君には理解出来ない事さ、僕はただ」
「死ぬこと、だろう？」

「……っ」

アサキムの目的を問い質すシュウジ、当然素直に応じようとはしなかったアサキムだが、横から図星を突いてくるC．C．にアサキムは初めて表情を曇らせた。

「お前も私も、死ねないという意味では同じ立場だ。終わることの無い生、それは言い換えれば永劫に続く地獄と大差ない。お前はそんな終わりの無い連鎖を断ち切りたいと願うから、スフィアを集めて力を蓄えているのだろう？」

「……」

C．C．の追求をアサキムは沈黙で返した。その姿勢を肯定と認識したシュウジは、この時初めて同情の念を抱いた。決して死ぬことの無い生命体、命として完全とされてあるその存在を、シュウジは欠片も感心が湧かなかった。

命は終わるから美しいのではない。尽きるから、いつかは消えるから、その間に自身が通り、刻んだ道があるから、だからこそ意味があり、自分の思いを誰かに託す事が出来るのだ。不老に満ちた世界は幸福か？　死ぬことも出来ず、ただ在るだけのソレを、シュウジは少なくとも進んで成りたいとは思わない。

瞬間、シュウジは思い付いた。アサキム＝ドーウインを少なくとも敵対せずに済む方法が一つ頭に浮かんだ。少々卑怯な取引だが、今はこれしかないと思い、シュウジは固くなった口を開いた。

「……分かった。アサキム＝ドーウィン、お前がそんなに死にたいなら――――――俺が殺してやるよ」
「へぇ？」
「お前も味わった筈だ。俺とグランゾンの力を、真化した俺達の実力を。今はまだ完全には力を使いこなせてはいないから確証出来ないが、少なくともテンシ二人を消滅まで追い込んだ。もしお前が俺達に協力的になるのであれば、お前の望みを俺が叶えてやるよ」
　自らが死刑執行人になるのは多少処ではない抵抗感がある。だが、今優先させるべきはアサキムという脅威を早く無くすことに在る。アサキムの不死性を破れるとすれば、それは原初の魔神と化したグランゾンしか今の所存在しない。
　それを耳にしたアサキムはこれ迄見たこと無いほどに動揺していた。大きく揺れる瞳、震える唇、体全身はプルプルと震え、その手は痛いほどにキツく握られていた。
「……期限は？」
「宇宙の大崩壊を防いで、時空修復を完全な形で終わらせる迄」
「……良いだろう」
　初めてアサキムと交わされる約定。これまで幾度となく敵対してきた相手との突然の和解にＺ―ＢＬＵＥの面々は動揺が隠せずにいた。しかし、誰もシュウジに異を唱

えるモノはいない。皆、気付いているのだ。アサキムの願望を、願いを、終わりたいと願う彼の気持ちに応える事が出来るのは現在にシュウジ＝シラカワただ一人なのだと。

交わされる二人の握手、本来なら友好的な場面である筈なのに何故か凄く不安を煽ってくる。黒の死神であるアサキムと蒼の魔人であるシュウジ、二人の因縁は一つの約束を結ぶ事によって、一旦幕を下ろすことになった。

◇

「ふぃー、取り敢えず今日はこれくらいでいいかなー？」

「すみませんシュウジさん、後片付けまで手伝わせちゃって」

「なに言ってんの、役割は違えど皆同じ部隊で戦う仲間何だからそんなこと言いっこなしだよ。かなめちゃんこそ無傷だったとは言え体に掛かる負担は大きかったんだから、無理しなくても良いんだよ？」

「それこそ心配要りませんよ。皆のお陰でこうして私は此処にいられるんだし、お医者さんからはもう大丈夫だって言われたんです。出来ることは率先してやらないと」
「相変わらず頑張り屋さんだなぁ。本当、無事で良かったよ」
　本日の仕事も一通りこなし、後は其々の部屋で就寝するのみ、遅くまで生活班の仕事をしていたかなめをシュウジは部屋まで送ろうとする。
「でも、信じられないなぁ。あの蒼のカリスマがまさかシュウジさんだったなんて、今もちょっと実感沸かないや」
「そう言えば、俺も最近仮面被って無いなぁ。アレかな、多分それだけＺ―ＢＬＵＥでも素で要られる様になったんだな」
「だとしたらちょっと残念かなぁ。私、実は蒼のカリスマのファンなんですよ。映画も持ってましたし、確かノリコさんも持ってるみたいですから今度一緒に観てみません？」
「止めて、本当に止めて。アレ話題に出されるとキツイから、中２特有の黒歴史を目の当たりにしてるみたいで辛いから、お願いだから止めてください」
　本気で嫌がる素振りを見せるシュウジにかなめは楽しそうに笑みを浮かべる。陣代高校での用務員として働いていた頃から顔見知りだった二人は、共通の話題で盛り上がっていた。

そんな時だ。偶々通り掛かった部屋から激しい物音が聞こえてきた。何事かと思い先のアサキムとのやり取りもあって警戒レベルを最大に引き上げたシュウジはかなめを自身の背後に隠して、扉を開ける。
「や、止めてくださいニコラさん！」
「うるさい黙れ！」
ノノを押し倒し、強引に迫るニコラを見て。
「何やってんだお前」
シュウジは取り敢えず加減した蹴りでニコラの尻を蹴り上げた。

その１８３

――――トップレス。それは超常の力を持った選ばれた者が人類の守護者となる選ばれし戦士、宇宙怪獣の脅威から人類を守る為に戦う者達。

英雄、トップレスを讃える者達はそんな僕らをそう呼んだ。嬉しかった。楽しかった。トップレスという類稀な能力に目覚めたお陰で、周囲の人間は僕達を持て囃した。

嘗て無い優越感、嘗て無い力、嘗て無い全能感、空を自在に飛べて、普通の人間には成し得ない偉業を容易く打ち立てる。特別、そうよばれるのが当然として受け止められる程、昔の僕は増長していた。

そして、そんな夢の様な人生がもうじき終わりを迎えようとしている。トップレスというＺ―ＢＬＵＥの中でも突出した超能力は〝あがり〟という瞬間が来るまでの期間限定の力だった。どんなに強力な力を持っていてもどんなに優れた力を持っていても、〝あがり〟を迎えた瞬間トップレスはただの人へと成り下がる。

嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ!!　トップレスの、この力は僕のモノだ！　何故

奪われなければならない。どうして無くなってしまうんだ！

トップレスの力を失うのが怖い。バスターマシンに乗れなくなるのが怖い。ただの人間に成り下がるのが怖い。この恐怖から、トップレスの力を失わずに済むのなら、僕は魂を悪魔に売り払っても構わない。こんな思いをするのなら、レナードに与して自分の望む世界に逃げ込めば良かった!!

嘆いても遅い。分かっている。分かってるさ！　だから僕は彼女を、ノノの力を求めた。彼女はバスターマシン７号でありバスターマシンそのもの、それはつまり永遠のトップレスという事だ。

彼女を手籠にすれば、彼女の全ては僕のモノになる。彼女の力が全部僕のモノになる。それはつまり、僕もまた永遠のトップレスになれると言うこと。

ああ、それは何て素晴らしい――――

◇

　尻を蹴り飛ばされたニコラはその勢いのまま吹き飛んで部屋の壁へと激突し、顔面を強打する。その痛みと衝撃に意識が飛び掛けたニコラは滴り落ちる鼻血を抑えながら、自身を蹴り飛ばした輩を睨み付けて――――――凍り付いた。
　絶対零度の眼差しでニコラを見下ろすシュウジ、その瞳に感情はなく、シュウジもまたニコラをＺ―ＢＬＵＥの仲間としてではなく、性犯罪者として見下ろしていた。
「ノノちゃん大丈夫!?」
「かなめさん、はい。私は大丈夫です」
　そんなシュウジの後ろでは千鳥かなめがノノに駆け寄っていた。かなめの問い掛けに大丈夫と応えるノノだが、その手は微かに震えている。バスターマシン７号として生まれ、絶大な力を持っていても彼女は女の子、仲間と思っていた相手に突然襲われて平気な筈もなく、無理して笑うノノにかなめは言いし難い怒りを覚えた。
「何だよ、文句あるのかよ」
「アンタねぇ、自分が何をしたか分かってんの!?」
「別に、関係ないだろアンタ達には」
　自分のやった事、それを分かっていながら尚悪びれもしないニコラにかなめは本気で怒りを覚えた。壁に鼻をぶつけた事で血を流しているが、そんな事関係無い。その整った顔をボコボコにしてやろうかと思い腕を捲った彼女を、シュウジが片手で制止す

る。

「……何故、こんなバカな真似をしたのかな？」

「バカ？　そうだね。アンタからすればバカな真似何だろうさ。けどね、こっちはそれどころじゃないんだよ！」

感情を露に激昂するニコラ、そんな彼の叫びを聞き付けてシンジとノリコがやって来た。これ以上人が来れば面倒になると少し冷静さを取り戻したニコラは己の感情を無理矢理に押さえ付け、代わりに親の仇を見るようにシュウジとシンジを睨み付けた。

「タケルやシンジ、そしてアンタには分からないだろうさ。力を失う人間の気持ちが、二度と飛べなくなる人間の気持ちが！」

明神タケルは〝あがり〟という制限の無い永遠の超能力者、シンジは親からＥＶＡを与えられた坊っちゃん、そしてシュウジには最強無敵のグランゾンを持ち、その力を大いに奮っている。〝あがり〟という制限時間に常に怯えているニコラにとって彼等の存在はこの上なく不快で、そして羨ましかった。

どんな事情を彼等が抱えているのかは分からない。しかしそれらを差し引いても、ニコラにとって自由に、永遠に力を行使できる彼等が羨ましくて、煩わしくて仕方がなかった。

「僕は怖いんだよ、力を失う事が！　それは死ぬのと同じ事だ」

「……それだけか？」
「何っ!?」
「言いたい事は、それだけか？」
　心が死にそうになった。小さく、ニコラにしか聞こえない小声だったが、シュウジの圧に完全に呑まれたニコラは心臓を鷲掴みにされる感覚に身動きが取れなくなった。
　そんな彼を尻目に、シュウジはかなめとノリコに視線を向けて、ノノのアフターケアを求めた。
「ごめんかなめちゃん、俺このあと彼と少し話がしたいからさ、ノノちゃんと一緒に食堂へ行っててくれる？　ノリコさんも出来れば二人の事をお願いしたいのですけど……」
「あ、うん。それは別に構わないですけど」
「あまり、手荒な真似は……」
「それは彼次第ですね。それとシンジ君」
「は、はい」
「君がこの世界に来る前にアスカちゃん達と何があったのかは知らないけど、きっと大変な事だったんだろう。そんな君達に気軽に割って入ることは出来ない。けれど敢えて言わせてもらおう。こんな戯れ言に負けるな」

「……で、でも」
「少なくとも、君は恐怖に打ち克つ強い心の持ち主だ。時獄戦役の時、自分とグランゾンを前に最後まで戦い抜いたんだ。もっと胸を張ると良い」
では自分はこれで、とそう言い残してシュウジはニコラの胸倉を掴み部屋を後にする。放せと抵抗するニコラだが、シュウジがそれで止まる筈もなく、二人は通路の奥へと消えていく。
一抹の不安が残るが、今は彼に任せるしかないだろう。それよりも今はノノのケアの方が大事だと思い、ノリコとかなめはノノを連れて同じく部屋を後にする。残されたシンジも、冷たくなった心の内側が少しだけ暖かくなっていくのを感じながら、自室へと戻るのだった。
――――そして、場面は格納庫へと移る。時間も時間で人気の無く、整備員の人達も出払ったこの格納庫にはシュウジとニコラ二人しかいなかった。
「こ、この、いい加減放せ!」
「……」
「うわっ!」
放せと叫ぶニコラにシュウジは彼を乱暴に投げ捨てる。シュウジの腕力にフワリと浮かぶニコラは受け身もままならず固い格納庫の床へと激突、ゲホゲホと噎せながら立

ちあがり、シュウジを睨み付けた。
「何だよ、体罰のつもりか？　意外だな。アンタはもっと冷静な人間かと思ってたよ」
「……」
「だが生憎、僕にはアンタの説教に付き合うつもりは無い。悪いがこの事は艦長達に報告させてもらう。同じ部隊の人間に手を挙げたんだ。覚悟は出来てるんだろうな？」
「――――なぁ」
「あぁ？」
「どうして、お前は〝そう〟なんだ？」
　襟元を正し、余裕ぶるニコラに投げ掛ける問い。シュウジの言いたい事を今一つ理解出来ていないニコラはふんと鼻息荒くさせ、腕を組んで吐き捨てる様に口にした。
「……何が言いたい。僕がノノを押し倒した事か？　それとも君を常日頃睨んでいた事？」
「……そうか、分からないか」
　失望。そう思わせるには充分な程吐かれる深いため息、一体何が言いたいのだと苛つきを募らせるニコラを前に、シュウジは改めて問い詰めた。
「なら質問を変えよう。どうしてお前はそんなにも未来に怯えているのにそれに抗って来なかったんだ？」

「……はぁ？」

「トップレスの力が失うのが怖い？　バスターマシンに乗れなくなるのが怖い？　なら、何故お前は———君はその未来を変える努力をしてこなかったんだ？」

努力をしていない。その言葉はニコラの逆鱗を踏み抜いた。

「努力をしてこなかった……だと？　ふざけるな！　僕が何もしてこなかったと思うのか!!」

これまでニコラは自分なりに最善の努力をしてきた。トップレスの力を失わない為に、バスターマシンに乗り続けられる様に、彼はＺ—ＢＬＵＥの視線を掻い潜り、独自に調べ続けてきた。時には秘密サークルのサーペンタインの双子に怪しい料理を食わされてまで〝あがり〟を抑え込もうとしていた。

必死に努力した。力を失わない様に、バスターマシンに乗り続けられる様に、それなのに目の前の男は自分を努力していないと断言しやがった。

許せない。許せない許せない許せない！　何も知らない目の前の男にニコラは嘗て無い程に怒りを滾らせる。それは既に殺意と呼べるモノであり、正しくニコラはシュウジに殺気を向けていた。

しかし。

「バスターマシンに乗れなくなるのが怖いなら、何故君は他のマシンに乗れる努力をしてこなかった？」
「……え？」
「君はバスターマシンに乗り続ける努力をしてきたと言う。それに対して俺は敢えて言わせて貰おう。そんなものに意味はない」
断言した。両断した。ニコラの必死の抵抗を、抗議を、シュウジは一言で粉々に打ち砕いた。そもそも論点が違っていた。ニコラはバスターマシンに乗り続けたいと言い張るが、シュウジはバスターマシンに乗れなくなるならば、何故別の戦う術を身に付けなかったのかと素直に疑問に思っていた。
戦えなくなるのが怖いなら、バスターマシンで空を飛べなくなるのが怖いというのなら、何故ニコラは別の力を探す努力をしてこなかったのか。
此処にはＶＦシリーズという空を飛ぶにはうってつけのマシンがある。他にも航空機能を搭載したＭＳなど、このＺ―ＢＬＵＥでは戦う術は探そうと思えば幾らでも見付けられる筈なのだ。
Ｚ―ＢＬＵＥには様々な人がいる。シャアやアムロといった凄腕のパイロットや同年代の少年少女達が沢山いて、皆誰もが日々努力を重ねている。戦える術を持っていない人も生活サポートという形で部隊を支えている。

アルトもシンもキラやカレンも、皆自分の出来ることを精一杯取り組み、明日への糧にしている。

成る程、確かにシュウジは恵まれているのだろう。グランゾンという力を与えられ、自分の自由意思で行動し、戦ってきた事を妬むニコラの気持ちも理解出来なくもない。

それはシュウジ自身が誰よりも分かっていた。グランゾンという力だけでなく、これ迄彼は出会ってきた全ての人達に恵まれてきた。

嘗てのエリア11でゴウトに機械の扱いを学び、暗黒大陸時代の黒の兄弟……キタンから狩りと生き延びる方法を学び、リモネシアでは店長に住み込みで働かせて貰い、そこでシオニーと出会えた。

様々な出会いと学びがシュウジを強くした。グランゾンにばかり頼らない様にアムロ達からMSの扱いの手解きを受け、他にも色んな機動兵器に触れた事で、グランゾンが使えなくなった合間もシュウジは戦い続ける事が出来た。

――――分からないのは、理解できないのはニコラだ。自分を妬むのは良い。心当たりは無くとも、それで彼の気が晴れるならそれでも良いかと思っていた。

バスターマシンに乗れなくなる？　なら他のマシンに乗れる様になれば良い。

トップレスの力が使えなくなる？　なら自衛の手段を相良や武術に心得のある人物に教われば良い。

シュウジが理解できないのは怖いと、嫌だと嘆いていながら、それを改善できる場所にいながら、何もしてこなかったニコラの性根だった。
一緒に訓練しようと言ってもその気にはなれないと誘いを断り、一緒に料理をしようと誘われても自分には向かないと袖に振り、いつも斜に構えて薄ら笑いを浮かべる。
挙げ句の果てにはノノを襲って我が物顔、それなのに反省の色が見えないニコラに流石のシュウジも我慢の限界だった。
「――――あぁ、そうか。そう言うことか」
「な、何だよ、何が言いたいんだよアンタ！」
「君は、子供なんだな」
「なっ!?」
「怖いのに、嫌なのに、それなのに何も変えようとしない。分かっていながら自分を変えようとしない君がやっているのは子供の駄々と何ら変わり無い」
「僕が、僕がガキだと!?　　お前に、お前なんかに何がわかる！」
「分かって欲しいと思うならそうなる様に努力しろよ。斜に構えて、ヘラヘラ笑っていれば皆が分かってくれると思ったのか？　　どんだけ愉快な脳ミソしてんだよ」
「な、な、な……」
「そもそも、普段からヘラヘラしているだけのお前がシンジ君達を妬む事自体筋違いだ

と知れ。お前だって彼等の事何も知らないだろうが」
　言葉の端が強くなる。口調が荒くなる自分に呆れながら、シュウジはニコラに突きつけた。
「自分を変えようとせず、何もしてこなかった人間が、一端に恨み節を語ってるんじゃねぇよ」
　恨みを口にするなら、羨ましいと妬むなら、それ相応の努力を、自分のしてきた道を示して欲しかった。そうであったなら、お節介だと言われようと、シュウジはニコラに手を貸すつもりでいた。
　しかし、彼はノノを襲うという過ちを犯した。それだけでなく、自身のエゴでシンジを傷付けた。もう、シュウジはニコラに協力する事は無いだろう。少なくとも彼がノノ達に謝るまで、シュウジはニコラを仲間とは思わない。
　膝から崩れ落ちるニコラを尻目にシュウジは格納庫を後にする。後ろから啜り泣く声を耳にしながら、シュウジはため息を吐いて立ち去った。
「――――随分と辛辣だったな」
「ハマーンさ――――ん」
　その時、横から現れたハマーンに思わずシュウジは彼女を様付けで呼びそうになる。突然現れたカリスマ女帝にシュウジは慌てながら佇まいを直す。

「スマンな。盗み見るつもりはなかったんだ。私も自分の機体が気になってな」
「そ、そうでしたか」
「しかし、貴様ほどの男がああも生の感情を曝け出すとはな。余程あのニコラとやらに腹を据えかねていたのだな」
「……情けない話です。結局俺は彼を責める事しか出来なかった」
「ふん、私から見ればまだ相当甘いがな。もっと強く責め立てる事を期待していたのだぞ？」
　どうやらハマーン様もニコラには常日頃から言いたい事があったらしく、その表情には不満が現れていた。そんな彼女に苦笑いしつつ、ふと格納庫の方へ視線を向ける。
　其処には項垂れるニコラの下へラルクがオズオズと歩み寄っていた。最初は何て声を掛けたら良いか分からないと言った様子の彼女だが、次第にニコラの側へと歩み寄り、拒絶されながらも真摯に彼と向かい合っていた。
　軈て彼女の優しさに触れたニコラは酷く落ち込んだ様子でもラルクと一緒に格納庫を離れていく。そんな二人を見送ったシュウジとハマーンはやれやれと肩を竦めた。
「どうやら、これで奴の事は何とかなりそうだな」
「そうですね。そうあってくれれば良いのですが」
「後はこのあとの展開次第だろう。それでもダメな時は……本気で引導を渡せば良

い」

「流石ハマーン様」

平然と恐ろしい事を口にするハマーン様にとうとう素で様付けしてしまう。そんなシュウジにフッと笑みを溢したハマーン様はシュウジの胸元をトンと叩き。

「貴様もだ。あまり過ぎた事を気にするべきではないぞ。……私が言うのもなんだがな」

それだけを言い残し、ハマーン様は格納庫へと入っていく。己の愛機を見直す生真面目な彼女にシュウジは礼の言葉を口ずさみながら部屋へと戻るのだった。

また、その後生活班と一緒に朝食を作ったり、ノノやシンジ、そしてタケルに頭を下げるニコラを見たという目撃情報があったが、シュウジは敢えて聞かない事にした。

嘘予告

――――多元世界。それは、数多の可能性と無数の歴史によって紡がれる物語。
幾多の戦役を乗り越え、今、戦神達の新たな戦乱の歴史が世界に刻まれる。
「――――ホープス、ここは一体何処なんだ？」
「分かりません。ただ二つ言えることはここが我々がいたアル・ワースの大地ではないと言うこと、あの星が地球だと言うこと」
未知の呼び掛けに応えし鋼の戦士達よ、再び戦乱に包まれる世界を駆け抜けろ！
「沖田艦長！」
「我々は、戻ってきてしまったのか」
「未確認反応多数！　このままでは包囲されてしまいます！」
「人間如きが面白い艦を作るものだが、君達には過ぎたるモノだ」
「ガーゴイル！　貴様の思い通りにはさせんぞ！」
渦巻く因縁、野望、宇宙の覇権を巡り巨大な悪意が牙を剥く。しかし絶望する事なか

れ、悪意が世界に蔓延る様に勇気ある者達もまた存在するのだから。
「準備は良いかね君達」
「万丈の兄ちゃんとなら怖いもの無しだぜ！」
「俺達もやるぞトライダー！」
「勇者特急隊もやるぞ！」
　そして、戦いの中で育まれる友情。時に反発し、時にぶつかり合い、少年少女達は成長していく。
「どうして、どうして貴女はそんなに勝手なんですか！」
「貴方には関係無いでしょ、私は、私の目的の為に生きるだけなんだから」
「ば、バナージ、そこまでにしておけって、アンジュも止めろって」
「渡瀬青葉、お前は余計な事をせず、黙って俺の言うことに従え！」
「ふざけんな！　俺はお前のバディだが奴隷になった覚えはない！」
　合わない価値観、擦れ違う想い、苛まされ、時代と変革に翻弄されながらもそれでも彼等は前に進み続ける。
「僕の名前はワタル！　　一応これでも救世主やってます！　　宜しくねおじさん！」
「お、おじさん!?」
「ふっ、流石の竜馬も純真な子供には勝てんか」

「あれが、アムロ＝レイ。伝説にして最強のパイロットか」
「見たことの無い機体だ。まるで海賊の様だな」
　異なる時代、過去も未来も混雑する世界。投げ込まれた投石は瞬く間に波紋を呼び、それに呼応するかの様に戦いもまた苛烈の一途を辿っていく。
「俺の名は剣鉄也、偉大なる勇者グレートマジンガーの担い手だ！」
「鉄也……だって!?」
「あの男、生きていたのかい！」
　失われる命、繰り返される悲劇、もうこんなことは繰り返させないと誓う戦士達だが、悪意は尚増大して膨らんでいく。
「コイツ、サイバスターに似ている!?」
「成る程、君がそうか。ならば君を倒し、僕の存在を証明するとしよう！」
「マサキ、コイツなんかヤバいニャ！」
「分かってる！　誰だか知らないが俺達に喧嘩を売った事を後悔させてやるぜ！」
　闇に潜むモノ、神を名乗るもの、戦いが激化していくに連れてその深淵に眠る暗黒の眷属達が動き始める。
「ほう？　この宇宙魔王と手を組みたいと？　　ドアグダーとやら」
「その通りだ。貴様にとって太陽の遣いは邪魔だろう？　　此方も救世主ワタルには消

えて欲しい立場だ。互いに損はしないだろう？」
「ならばその盟約、私も混ぜて貰うか」
「貴様は、調律者か」
「然り、君達の力は重々承知している。君達ならば我が盟約者として相応しい」
　肥大化していく欲望、加速する進化。その果てに在るのは滅亡と絶望か。
「これが、これもマジンガーだってのかよ!?」
「我ガ名ハＺＥＲＯ。兜甲児ヨ、我ノ一部トナレ」
「嫌だ！　お爺ちゃんの作ったマジンガーは、悪魔の為にあるんじゃ……ない」
　「これで分かっただろう螺旋の男よ。貴様が戦う意思を見せれば見せるほど、宇宙は破滅へと突き進むのだ」
「そんな事は、そんな筈は……ない！　　人間は、人は、そんなモノ撥ね飛ばして見せる」
　　どんな絶望にも悪意にも負けず、突き進んだ彼等が待ち受けていたものとは。
　　――そして。
「――――そうか、ここは俺がいない多元宇宙の世界なのか」
「お前は……シュウ、なのか？」
「いいや、違う。俺は博士じゃないよマサキ＝アンドー君」

蒼の魔人が再び多元宇宙に降り立った。
「何だよお前！　ノーマのアタシを助けて何しよってのさ！」
「やれやれ、何処の世界でも変わらないなぁ。君は」
「はぁ？」
既に彼を理解できるものはいない。知るものはいない。それでも彼は嘗て受けた恩に報いる為に再び戦う事を決めた。
深まる混沌、激化していく戦乱。孤独の戦いの中でも光を見失わずに戦い続ける彼の前に――――遂に、あの人物が現れる。
「ほう？　まさか私以外にグランゾンの乗り手がいたとは驚きです。で、君は一体何者なのかな？」
「あ、貴方は……っ！」
真なる重力の魔神の担い手、二人が手を組んだ時、戦いは新たなステージへと進む。
遥かな時空の彼方でZとVがX（クロス）する！
スーパーロボット大戦ZVX（ゼブロス）
戦いの水平線で勝利の旗を打ち立てろ。

その１８４

蒼の地球から然程離れた位置ではない座標に巨大なワームホールが出現した。観測していた地球連邦政府からの報告を受けてワームホール出現の原因究明と対処をする事になったＺ―ＢＬＵＥ一行は一度宇宙に上がることになった。

アマルガムとの決戦から然程の猶予もなく次なる戦場へ行く事になったＺ―ＢＬＵＥ、故に裏切ったカリーニン少佐とアサキムをそのまま抱え込む事になった彼等は少なからず不安を抱いていた。

しかし、そんな彼等の不安とは裏腹にカリーニンは大人しくなっており、アサキムの方も蒼のカリスマことシュウジとの取引により怪しい動きを見せず独房で静かに沈黙を保っていた。

また、道中でニコラス＝バセロンとシュウジとの間で諍いがあったと言う話があったが、当の本人達は特に変わった様子もなく普段と変わらぬ態度でいる。ただ一つ変わった事があったとすればニコラスの態度が以前よりも柔らかくなった事だが、彼の以

前からの皮肉屋な態度には目に余っていた所だったのでＺ―ＢＬＵＥの面々は変わり始めた彼に敢えて追及する事はしなかった。

　そんな多少のイザコザはあったものの、Ｚ―ＢＬＵＥは目標の座標に辿り着き各機戦艦から出撃していく。目の前に在る巨大なワームホール、その規模に目を丸くさせる一行は遠巻きに観察を続けた。

『ワームホール、というよりブラックホールだよな。アレ』

『でも、それなら超重力による重力崩壊の影響が出る筈だ。なのにそれが無いって言うのは……』

『このワームホールが、ただの孔（あな）という訳ではないという訳か』

　まるで空間を繋ぐトンネル。周囲を呑み込もうとせず、ただそこに在るだけの孔、物理法則を度外視して存在するワームホールにＺ―ＢＬＵＥは戸惑いを隠せずにいた。

『なら、私が消しましょうか？　あれがワームホールだというのなら同じ重力を操るグランゾンが適任です。下手にいじればあの孔を巨大化させるだけになりますが、そうなれば最悪あの孔を消すまでですのでどうか皆さんは安心して――――』

『『『やめろ』』』

『（・ω・）』

　皆が手出しできない。ならばここは自分の出番だろうと相変わらずの善意全開で自

己ＰＲの様に提案する蒼のカリスマだが、Ｚ―ＢＬＵＥ全員からの有無を言わさぬ拒否反応に蒼のカリスマは二の句も告げれずに押し黙る。

先のアマルガムとの……レナードとの決戦、そこで蒼のカリスマがやらかした事にＺ―ＢＬＵＥは否応なく理解した。この男は確かに他者に対して悪意や害意といった悪感情をぶつけるような下衆な事はしない。常に他人を思いやり、自分の出来ることを出来る範囲で手助けしてくれる姿勢は誰から見ても好印象に映るだろう。

しかし、彼はやり過ぎた。確かにあの局面で彼が追いつめられていたのに手助け出来なかった事は悔やまれるだろう。しかし、だからってアレはないだろう。

圧倒的という言葉にすら当て嵌まらない力、使徒やズール皇帝を一瞬で消滅させ、宇宙魔王やミケーネの神々の恐怖のドン底に叩き落とされた瞬間の引き吊った表情は当分忘れそうにない。

しかもその余波でレナードの野望は頓挫、彼の理想に呼応して一時は此方を裏切ったカリーニンは発見された直後、外国為替証拠金取引（FX）で全財産を融かした様な顔をしていたという。

最早戦略兵器すら凌駕しているグランゾンとその担い手、彼等の力を目の当たりにしたＺ―ＢＬＵＥは誓う。コイツに全力を出させてはならないと。出すにしても彼等の力に耐えられるだけの舞台が必要であるという事を彼等は骨身にまで思い知った。

敵を殲滅して尚余りある力、あの力をあのワームホールにぶつければどうなってしまうのか、考えたくもない事態を前にＺ―ＢＬＵＥはシュウジとグランゾンに手出しはしないで欲しいと釘を刺す。

Ｚ―ＢＬＵＥの、特にテッサの泣きながら止めてくださいという嘆願にシュウジは引きながら取り敢えずこの場では全力を出さない事を約束した。

口約束でもどうにか全力を出さない事を確約したテッサが安堵の溜め息を漏らしたその時だ。ワームホールの奥から銀色の金属体が出現してきたのだ。

それも無数、ワームホールを埋め尽くさんと溢れ出てくる金属群に初見の者達は戦慄する。

『なんだよ、ありゃあ！』

『そ う か、ア ポ ロ 達 は ま だ 知 ら な かっ た な。 あ れ は Ｅｘｔｒａｔｅｒｒｅｓｔｒｉａｌ（地球外） Ｌｉｖｉｎｇｍｅｔａｌ（金属変） Ｓｈａｐｅｓｈｉｆｔｅｒ（異体）、通称ＥＬＳ（エルス）』

『見ての通り、金属生命体と言うべき存在だ』

ＥＬＳと呼ばれる木星圏に現れた謎の敵性生物、有機物無機物問わずに対象を侵食し、同化させるという恐るべき能力を保有する金属生命体。

概要的に伝えられるＥＬＳの脅威、それを耳にした者達はそれぞれ危機感を抱き、緊

張と集中力を高めていく。あんなモノ達を地球に向かわせたら地球に住まう全ての生命体は死滅してしまう。そんな最悪の事態を避けるべくＺ―ＢＬＵＥは行動に移った時。

『ん？　あれって……』

　こちらに向かって突き進んでくるＥＬＳの大群、それが以前カオス・コスモスから抜け出した際に木星圏で遭遇した奇妙な金属だと思い出した蒼のカリスマは隊列を守りながら前に出た。

　ＥＬＳから見えるように身を乗り出したグランゾン、そんな重力の魔神の存在に気付いたＥＬＳは進行を停止、次に向きを変えてその場から離脱、地球圏から瞬く間に去っていった。

『な、なんだアイツ等？』

『逃げた……のか？』

『バカな、金属が逃げ出すなんて……』

『逃げた？　ならＥＬＳには少なからず知性があるという事なのか？　知性があるのならコミュニケーションも可能になる』

『じゃあ、アイツ等はバアルじゃないのか？』

　突然逃げ出したＥＬＳにＺ―ＢＬＵＥの面々は考察する。もしかしたら彼等はバ

アルではないのかもしれない。もしそうなら彼等とのコミュニケーション次第では戦い以外の道が開かれるかもしれない。夢みたいな話が現実味を帯び始めた事に誰もが興奮を隠せずにいた。

――――尤も、ＥＬＳがグランゾンとシュウジを見て逃げ出した。という部分は誰も触れようとしなかったが。

一つの困難が去った事で浮き足立つＺ―ＢＬＵＥだが、事態はまだ終息してはいない。未だに消える様子の無いワームホール、そこから大きな力が脈動した瞬間、再び敵意が押し寄せてきた。

宇宙怪獣、人類に対して絶対的な敵意を見せる根源的災厄の襲来にＺ―ＢＬＵＥは今度こそ戦闘態勢に移行する。激突する両陣営、圧倒的物量を誇る宇宙怪獣を前に一歩も下がらないＺ―ＢＬＵＥ、シュウジもそんな彼等の邪魔にならない程度にワームスマッシャーで援護射撃を続けた。

宇宙空間を埋め尽くす宇宙怪獣の群れ、それをマジンガーの光子力の光が貫き、ゲッターのトマホークが切り裂いていく。

ガンダムチームが弾幕を張り、ＫＭＦとスコープドック、ＡＳが射ち漏らしを撃破していく。サイズの大きい宇宙怪獣にはバスターマシン達が対応し、戦場はＺ―ＢＬＵＥの優勢で進んでいた。

しかし、そこへバジュラ達が乱入。一度は歌を知り解り合った筈のバジュラの乱入により戦場はより混沌に広がっていく。もう一度歌を聞かせて解り合おうとするランカとシェリル、二人の歌に感化されたバサラが盛り上げようとした時、ノリコの視界にあるものが映し出される。

『あれは!?』

それは宇宙怪獣に襲われるマシン――ツインテール級のバスターマシン達だった。何かを大事そうに抱えている彼等を守るために庇うノリコとガンバスター、彼等を守ることに成功した彼女にバスターマシンは抱えていたモノと自らの心臓部分である縮退炉を受け渡し爆散。

『――――ノリコ、待たせてしまってごめんなさい』

『お姉さま!』

もう一つの火を取り戻した事により炎となったガンバスター、ノリコとカズミ。燃え盛る炎は宇宙怪獣を殲滅し、蹂躙していった。

一時は危なかったＺ―ＢＬＵＥだったが、宇宙怪獣を全滅させ、バジュラもシェリル達の歌が届いたのかある程度Ｚ―ＢＬＵＥと宇宙怪獣を攻撃した後戦域から離脱、無事に今回も乗り切った事にＺ―ＢＬＵＥは安堵した。

ガンバスターの本来の力、バジュラとの和解、そしてＥＬＳとも解り合えるかもし

れない事、今回の戦いはＺ―ＢＬＵＥの……いや、人類にとって大きな意味を持っていたかもしれない。地球人類はまだ負けていない、その事実にＺ―ＢＬＵＥの士気は鰻登りだが、まだ事態は終わってはいなかった。

〝あら、もう終わってしまうのですか？〟

『っ!?』

突然耳にする声、この全身に這い寄ってくる怖気のする声の持ち主はシュウジの知る限りただ一人しかいない。

『サクリファイか！』

『え？　ど、どうしたのシュウジ？』

（俺以外聞こえていないのか!?）

耳にするだけで寒気がするサクリファイの声、しかしシュウジ以外誰も聞こえていないらしく、話し掛けてくるカレンはキョトンと首を傾げている。

〝残念です。もしかしたらまたあの時の貴方の力を再び目に出来たかもしれないと期待していたのですが、やはり宇宙怪獣程度では役に立ちませんね〟

〝しかし驚きです。あの金属生命体ですら貴方に畏怖を抱くとは、感情や思考回路の無いモノにまで怖れるとは、流石は私の魔人様です〟

（誰がお前のモノなんぞになるか！　そんなの死んでもゴメンだ！）

〝まぁつれない。――――でも、それも仕方がないのかもしれませんわね〟

瞬間、空間が歪んだ。これ迄静寂を保っていたワームホールが急速に広がり始めていた。

〝今回貴方に話をしたのは他でもありません。私は貴方にお別れのご挨拶に来たのです〟

（なに？）

〝と言っても、それもほんの一時の合間、寂しがる必要はありません。いずれ、私もそちら側へ伺いますので〟

何を言っているのかが解らない。サクリファイの言葉の意味に欠片も理解できないでいるシュウジは苛立ちを募らせる。

〝貴方の力は凄まじい。余波だけとはいえ次元を超え、時空を破り、私達の黒き太陽に触れてしまった。故に、コレは当然の帰結〟

世界が捻れ、宇宙が歪む。次元境界線は異常数値を示しており、時空振動の揺れ幅は加速度的に増していく。

〝またお会いしましょう。蒼のカリスマ、シュウジ＝シラカワ様。今度は幼馴染みのあの娘と一緒に〟

「……なに？」

何て言った？
何て言った？
何て言った？
――――今、あの女は何て言った？
〝しかし解せませんね。何故あんな娘に貴方程の男が大事に想っているのでしょう？　狡い、狡いですわ。私はこんなにも貴方を求めているのに貴方は私に見向きもしないのにあの娘にはご執心だなんて、苦しくて、苦しくて、苦しくて私――――〟
〝あの女を愛殺してしまいたいですわ〟
『テメェ!!!!』
何故、サクリファイが彼女を知っているのか、どうしてあの世界の事を知っているのか、そんな事はどうでもいい。
コイツは消さなくてはならない。迅速に、今すぐに、サクリファイの存在を探してグランゾンの力を引き出そうとするシュウジだが。
《――――シラカワシステム最終段階へ移行、世界旅行起動します》

◇

――――何もなくなった。ワームホールも、Z―BLUEも蒼の魔神とその担い手もその全てがこの世界から抹消した。

〝嗚呼、もうすぐです。もうすぐ私達は一つになる。世界も、宇宙も、遍く全ての命は私と共に一つになる〟

〝愛しましょう。受け入れましょう。私が全てを受け止めましょう。だって、だって〟

――――それはきっと、とても気持ちの良い事だから。

誰もいなくなった宙域で獣は嗤う。狂おしく、愛しく、その時が来るのを彼女は待ち続けた。

――――白河修司、我が半身、我が後継者よ。選択の時は来た。
全ては、ここから始まるのだ。

その185

――――ラース・バビロン。サイデリアルの主力であるスフィアリアクターと彼等を束ねる皇帝であるアウストラリスの居城、蒼の地球の8割近くを占拠しているかの大帝国の本拠地、そこにある居住区という名の牢獄でシオはある人物と面会していた。

「シュウジが……帰った？」

「そうだ」

彼女の前に立つのは新地球皇国（ガイア・エンパイア）の首魁であるアウストラリスその人、大柄な肉体をその外套で隠し、椅子に座っているシオを見下ろしている。何の感情も見せないかの皇帝を前にシオは今一度問い直した。

「本当に、彼は帰れたの？　自分の世界へ？」

「ああ、先程揺らぎを感じた。それぞれ別の世界へ飛ばされたＺ―ＢＬＵＥとは違い、奴だけは遥か彼方へ消えていく様だった。恐らくは〝理の壁〟を超えたのだろう」

アウストラリスの言うことは今一つ理解できない。理の壁とは何なのか、専門的知識は何一つ解らない彼女だが、一つだけ分かった事がある。

もう、彼は戦う必要なんて無いという事、傷付く必要なんて無いという事、穏やかで、健やかに生きていける本来在るべき場所へ帰れたという事、それを知ることが出来たシオは――――。

「よかっ……たぁ」

その眼から大粒の涙を流して彼に漸く訪れた平穏に心から喜んだ。嗚咽を漏らし、喜びを露にしているシオを尻目にアウストラリスは部屋を後にする。

（これで終わりか。シュウジ＝シラカワ、私はまだ、貴様に何も問いてはいないのだぞ）

不満、或いは憤りか、外套を翻しながら玉座へ戻る彼の手はキツく握り締められていた。

◇

――――私は失敗した。

許されない事をした。絶対にしてはいけないのに、絶対に破ってはいけないのに、私はあの御方の意思を背き、己の感情を優先させてしまった。

失敗した。失敗した失敗した失敗した

「――――――ん、んぅ？」

頭が重い。まるで長い夢を見ていた様な倦怠感、全身に掛かる怠さに目を瞑りながら立上がり、辺りを見渡した。

どうやら何処かの街の路地裏らしい。未だに頭に掛かるモヤを払うように首を横に振りながら、シュウジは路地裏の先にある光、大通りらしき所へ向けて足を進めた。

「俺は確か、宇宙で宇宙怪獣とバジュラと戦ってそれで……」

思い返すのは先程まで自分が何をしていたのか、思考は巡らせるほど加速していき、頭の中のモヤも晴れ渡っていく。

他の皆はどうしているのか、Ｚ―ＢＬＵＥの皆もここに来ているのか、兎も角合流しなければと路地裏から出たシュウジが目にしたのは……。

「――――――え？」

街だった。平穏で、穏やかで、ありふれた普通の街。何の変哲もなく、代わり映えの無いシュウジにとって見馴れた街の風景だった。

「……なん、で？」

頭が混乱する。思考が定まらない。今自分が置かれている状況にシュウジは何一つ理解出来ずにいた。

大通りをなに食わぬ顔で行き交う人々、仕事帰りのサラリーマン、夕飯の買い出しの

主婦、子供と手を握り家へと帰る家族。それらを呆然と見つめるシュウジに元気な子供が声を掛けてきた。
「うわー！　スッゲェ！　　ねぇねぇ、コレ何のコスプレ!?」
「え？　」
「うわ、本当だ。良くできてるなぁ、特にその仮面とか手が込んでますねぇ」
「あの、何処かの仮装パーティーの参加していた人ですか？　　ＳＮＳにアップしたいんですけど、宜しければ一枚撮らせて戴けませんか？」
「あ、あの、すみません！　　急いでますので！」
「え、ちょ、ちょっと！」
「うわ、なんだあの人足速ぇ!?」
　自分の格好を見て集まってきた人達、混乱の渦に叩き込まれ、マトモに考えられなくなっているシュウジは言葉短く残して大通りから立ち去っていく。後ろから聞こえてくる戸惑いの声を振り切ってシュウジは駆けた。
（なんだ!?　　何が起きている!?　これもアンチスパイラルとの戦いで見た幻の中なのか!?）
　或いはあの時聞こえてきたサクリファイが何かしたのか、――いや、恐らくは違う。最後に耳にしたあの女の口振りからして、どうやらあの時の時空振動は奴にとっても予

想外の出来事の様だ。
なら一体誰が、荒くなる呼吸を無理矢理整えながらやって来たのは見覚えのあるアパート。そう、そこは以前あの世界に訪れる前までシュウジが住んでいた――――自宅だった。
「ハハハ、マジかよ」
引き攣った笑みを浮かべ、階段を昇る。カンカンと音を立ててシュウジは通路の一番奥にある部屋へ目指す。２０５と掛かれた札の掛かった部屋、それがシュウジの住まいだ。
ドアノブに手を伸ばす。心臓が早く鳴り、五月蝿いほどに脈動している。開けるなと、開けてはならないと本能は訴えるが、それに反してシュウジの手はドアノブに伸び、そのドアを開いた。
――――鍵は、掛けてはいなかった。アパートの住人達も皆顔の知れた気の良い人達だからと心配はないと口答えをすれば幼馴染みのあの娘に怒られた記憶が甦ってくる。
キィィィと小さく音が鳴り、シュウジは一歩前に出て部屋へと入る。懐かしい部屋だ。台所に置かれた用品も、トイレに張ったアイドルのポスターも、部屋に置かれたゲームやアニメグッズも全てがシュウジの記憶通りに置かれている。
そして――――。

「うそ……だろ？　なんだよ、コレ」

寝室、ベッドの上で眠っている自分自身を前にシュウジは膝から崩れ落ちた。

何の冗談だコレは？　アンチスパイラルが見せた可能性の迷宮で見た幻覚もここまで酷くはなかったぞ？　まるで深い谷底に落ちていくかのような感覚、いっそ敵が見せた幻だと知った方が余程心が楽になる。

しかし、現実は変わらない。何故ならこの日この時間、自分はバイト前の仮眠と称してこの部屋で眠っていたのだから。

なら、だとしたら、ここはこの世界は――――自分が元いた世界だというのか？

「俺は……帰ってきたのか」

『――――その通りです』

「っ!?」

返って来るとは思わなかった自身の呟き、自分以外の誰かがこの部屋に来ているのかと辺りを見渡すが、周囲には誰もいなかった。

では一体誰が……いや、いる。この頭に直接語り掛けてくる聞き慣れた声の主、時獄戦役以来滅多に聞くことのなかったシュウジにとって最も心強い味方である筈の男。

『あの時、貴方とグランゾンは〝理の壁〟を越え、この世界へとやって来ました。ここは正真正銘、貴方が元いた世界ですよ』

　愕然となった。頭では察していながらも頑なに認めようとしなかった現実がよりにも寄ってシュウジ本人が一番信頼している人物から突き付けられた。
　帰ってこれた。念願だった、念願だった筈の故郷に帰れた事に。嬉しい筈だ。嬉しい筈なのに何故自分は今、こんなにも気持ちが沈んでしまっているのか。
『――――今こそ語りましょう。シュウジ＝シラカワ、嘗て白河修司だった者よ。君には真実を知る権利がある』
　力なく項垂れるシュウジに最早拒否するだけの気力は残されていない。そんな彼に構うことなくシュウ＝シラカワは語る。シラカワの系譜とグランゾン、その起源を。
　全ては第二次世界大戦、その末期まで遡る。

その１８６

第二次世界大戦、世界の均衡が大きく崩れ、混沌と死が渦巻く文字通り世界を巻き込んだ巨大戦争、日本という極東の島国は最初こそ勢いに乗っていたが、その小さな国土では大量の資源を有する大国には勝ちきれず、日を追う毎に戦況は圧されていき、遂には逆転されてしまった。

東京は大空襲で焼け野原になり、国中の人々が辟易としていた。――その頃だ、赤みを帯びた長髪の女性が地方の集落に現れたのは。

明らかに日本の人間ではないであろうその女性に誰もが怪しんだ。突然現れた外国の人間、当時戦争で敗戦間近もあり、心が磨り減っていた日本の人々はその女性を迫害した。

何故日本人じゃない奴がこの国にいる。きっと敵国の人間だ。出ていけ、この国から出ていけ。怒りと憎しみ、憎悪と悪意で女性を迫害した人々は大人から子供まで皆その女性を敵視した。

遠慮もなく、躊躇もなく、集落の人々は女性を追い詰めた。罵声を浴びせ、石をぶつ

け、戦争で追い詰められた怒りと憎しみを女性に向けてぶちまけた。それが間違っている事だと自覚しながらも、それでも人は誰かに鬱憤をぶつけずにはいられなかった。

しかし。

『ダメね、全っっっ然っっっ!!　なってないわよ！　その程度の責めでこの私が満足すると思って!?』

――――女性は、痴女だった。破廉恥で、下劣で、下品で、露出狂で、それでいて誰よりも己に自信を持ち、美しく、堂々としていた。どれだけ打たれようと、どれだけ悪意に晒されようと、女性は人々の仕打ちに真っ向から受けて見せた。

人々は押し黙った。その女性の堂々とした振る舞いに、若者はアダルトな女性の格好に、年寄りは女性の自信に満ちたその顔に。

集落の悪意は一人の女性によって圧倒された。若く、美しい女性。やがて時が経つにつれて集落に馴染む様になる彼女、しかしそんな見目麗しい女性はどんなに集落の男性に口説かれても靡かず、どれだけ貢がれても応えることはしなかった。

何故なら女性には既に心に決めた人がいて、その腕の中にはいつも泣きじゃくる元気な赤子が抱かれていたから……。

サフィーネ＝グレイス。それはシュウジにとっての育ての親でもあり、大好きな祖母の本当の名前でもあった。

◇

――――――その世界は終わりを迎えようとしていた。圧倒的な無の力に、全てを消滅させる破滅の力に、その宇宙は文字どおり終わろうとしていた。

『――――では、この子の事を宜しくお願いしますね』

『はい、シュウ様。このサフィーネ、命に変えてもこの子を守ってみせます』

『守るだけじゃダメよサフィーネ、ちゃんと立派に育てなきゃ』

『分かっているわよモニカ、貴女こそシュウ様に最期まで仕えるのよ』

『当然じゃない』

終わりを迎えた宇宙、破滅と終焉、そして果てし無い怨念が押し寄せる世界で其処だけは嘘のように穏やかだった。もうじき別れの時が来る。二度と再会する事は叶わ

ない永遠の別れ、しかしそんな中でも彼等の中に希望は消えていなかった。
『――――やはり、口惜しいですね』
それは、男が見せた最初で最期の弱さを見せた瞬間だった。ベッドの上で横たわり、ただ死を待つだけの男を前に初めて二人は表情を曇らせる。
『この身が病などに犯されなければ、この様な結末を迎える事はなかったと言うのに……悔やんでも悔やみきれませんね』
己を自嘲し、情けないと口にする男性。その事に異を唱えることは彼女達には出来なかった。誰よりも世界の為に戦ってきた彼が、誰よりも報われずに終わりを迎えようとしている。こんな結末は認めない、誰よりも彼自身がそう叫びたい筈なのに男性はその想いを呑みこみ、サフィーネに視線を向けた。
『良いですかサフィーネ、これが最期の確認です。貴女はこれより私の最高傑作にその子と共に乗り込み、私の最期の力で理を越え、世界を移動します。これは単なる並行世界への移動ではない、正真正銘別世界への跳躍です』
そこはこれ迄培ってきた常識が一切通用しない世界かもしれない、争いが絶えない世界かもしれない、悪意と理不尽が織り成す最悪の世界かもしれない。
ここで終わる自分達より遥かに困難な道のりになるだろう。絶望に打ちのめされるかもしれない、孤独と不安に押し潰されそうになるかもしれない、しかしそれでも彼女

の課せられた使命は終わらせてはならなかった。

今一度覚悟を問おうとしたが――――止めた。既に彼女の決意と覚悟は定まっている。それこそどれだけ脅しても揺るぐことは無いほどに硬く、頑強になっている。

これ以上の問いはいらない。彼女の瞳を見てそう察した男――――シュウ＝シラカワは病で窶れた体をモニカの助力を得て起き上がらせてサフィーネが抱える赤子に手を伸ばす。

柔らかい感触と、暖かな温もり、生命として尊ぶべき全てが其処に詰め込まれていた。

『この子は確かに普通ではありません。一から十まで私が手製で造り――――いや、生み出した存在、私の因子を受け継がせた私の半身、今はまだその因子は薄いですが、時を、世代を重ねるにつれてその血と因子を濃くさせ、かの絶望達に対するカウンターへと成長してくれる事でしょう』

それは己の野望を乗せた子に対するシュウの嘆願……に似た贖罪だった。自身の完全にして異なるクローンを造り出すという命を弄び、利用している己の罪への再確認だ。自分は外道だ。自分達の希望という言葉で誤魔化し、その全てをこの子とその血族に押し付けようとしている。

地獄へ落ちるのは構わない。もとより自分は其処へ逝く価値すらない。己の不甲斐なさと情けなさから肩を震わせるシュウ、その時だ。震えていた自身の手に暖かな感触

が包み込んできたのは。
『あうあー』
　笑っていた。毛布に包まれた赤子が、自身に重荷を背負わされている事も解らず、その命から利用されようとしている事も解っていない無知の赤子が、シュウの細くなった指を力強く握り締めて笑っていたのだ。
　彼の瞳から一粒の涙が零れ落ちる。許されてはならないと、許してはいけないと今日まで己を責め続けていたシュウの心が、この時初めて救われた気がした。
『……サフィーネ』
『はい』
『この子を、この子の血族を……頼みます』
『はい！』
　その言葉が彼等の交わす最期の言葉だった。シュウの最高傑作、グランゾンに乗り込んだサフィーネの腕の中にはスヤスヤと眠っている赤子が抱き抱えられている。
　その事に安心したサフィーネは向こう側の二人に視線を向ける。崩れ行く宇宙と世界、唯一残された彼等の空間ももうじき消え行こうとしている。
　繰り返される一万二千回の宇宙の終焉、今回自分達はそれを乗り越える事が出来なかった。抗えなかった力なき己への悔しさと怒り、別れの寂しさと悲しさからサフィー

ネの目尻から大粒の涙が溢れて止まらない。

『モニカ、シュウ様……』

どんどん遠く、小さくなっていく愛した男と恋のライバル。やがて消えて見えなくなるまで彼女の慟哭は止まる事は無かった。

そして彼女は決意する。必ずシュウの宿願を果たすと、その為なら自分の命も厭わないと。強い決意と覚悟を抱いたサフィーネは腕に抱えた赤子を強く、愛しく抱き締めた。

◇

『――――以上が貴方の家系、その起源（ルーツ）に纏わる全てです』

「……」

告げられた彼の者からの真実はシュウジの予想を大きく超えていた。自分は、自分達の起源はこの世界のモノでは無かったというのだ。

途方もなく、突拍子もない話だ。笑えない。笑える処の話ではない、否定したくてもする気力もないシュウジにシュウは構わずその後も淡々と説明を続けた。

この世界が選ばれたのは理の壁に阻まれていても比較的コチラ側の影響を受けているという事、漫画やアニメ、ゲームと言った娯楽を通してコチラの世界を映している事があちら側とコチラ側を繋ぐ微かな通り道になったと言うこと。

シュウ博士はこの世界を観測宇宙と読んでいる。決して交わる事も触れる事も無い世界だが、最近ふとした瞬間向こう側の影響がとある形で滲み出てくる事があるという。

それがこの世界の〝スーパーロボット大戦シリーズ〟とロボット漫画やアニメの成り立ち、向こう側の戦いの余波を制作者やそれに関わる人達が思い付きという形で受信し、世間に広めていく。単なる娯楽の一つでしかないゲームや漫画やアニメが、実は余所の世界で起きた実際の話なのだと、一体誰が信じられると言うのだろうか。

端から訊けばまるで自分達が生み出したアイデアではないと思えるが、その時のタイミングや時系列は実際に起きている時期と大きくブレる為、どちらが本物で偽物であるかは重要ではないという。

アカシックレコードに刻まれた事象の一つに過ぎないモノ、真贋もなくただの一つの真実として描くだけなのだからそう言う意味では確かにコチラ側の宇宙は観測宇宙と

呼ぶに相応しいかもしれない。
『そして、シラカワシステム。これは端的に言えば機体と一緒に乗り手を成長させる代物で、段階的にその概要は変わっていきます』
　最初はグランゾンの力をより馴染ませ、引き出させる為に〝起動〟し、ネオ・グランゾンを引き出させる為にシュウ＝シラカワの因子を〝高め〟、更には原初の魔神を使いこなす為に〝シンカ〟を促し、最終的には理を越えるためにその極致へ〝誘う〟。それがシラカワシステムの本来の役割であり、本当の在り方。
　シラカワシステムというのは単に他の名称が思い付かなかった為にサフィーネとモニカが間に合わせで付けただけの仮の名称に過ぎないという。
　そして……。
『本来ならば同一の存在は同じ宇宙に存在することは多元世界の様な特殊な状況下でない限り起こり得る事はない。しかし現に君達はここにいる。何故か、理由は単純、シュウ＝シラカワの因子を受け入れた君は別の存在へと進化し、厳密に言えば白河修司ではないからだ』
「っ！」
『そして、この私もシラカワシステムに搭載されたシュウ＝シラカワの人格を模した擬似人格、所謂コピーです』

　自分は修司ではない。彼の口から告げられる言葉は容赦なくシュウジに突き刺さる。最早言葉一つ言い出せない。突き付けられる真実を前に既にシュウジの許容量は超えていた。
　しかし、まだ分からない事がある。聞きたい事がある。混乱する頭を横に降って無理矢理これ迄の話を頭の隅へと追いやり、シュウジはその場に座り込んで静かにシュウへ……シュウの擬似人格へ語りかけた。
「……博士、貴方がシュウ博士の擬似人格で本人とは違う事は解った。けれど幾つか分からない事がある。質問してもいいかな」
『どうぞ』
「ありがとうございます。なら一つ目、貴方は俺を……俺達を絶望に対するカウンターと言ったけど、具体的に言えば何のカウンターなんだ？」
『それは人類を含めた知的生命体、その全てに対する脅威。その脅威に明確な意思はなく、ただそう在るからそうするだけという一種の窮極（アルティメット・ワン）の一、所謂純粋悪ですね』
「――――純粋悪」
　例えば破滅の化身、例えばユガの終焉、片方は負の概念を形作られた存在で、もう片方は宇宙に終焉をもたらす機械的システム、それを告げる存在、どちらも本質的には根本的に異なっているが、知的生命体にとっては脅威であることに変わりはない。

他にも怨念を束ねし霊帝を始めとした知的生命体に対する脅威、シュウジの血族とグランゾンはそれらに対抗する為に生み出されたカウンターなのだとシュウは語る。

……少しだけ余裕が出てきた。機械的に事態と真実を処理して今は客観的に考えるようにしたシュウジは比較的落ち着いた口調で質問を続けた。

「もう一つ質問です。この世界にシュウジとして戻ってきた俺ですけど、このままこの世界に居座る事って出来ますか？」

『出来ますよ。その場合、グランゾンの使用権利は剥奪され、貴方のその髪も徐々に元に戻る事でしょう』

……すんなりと答えるシュウにシュウジは何処か違和感を感じた。この世界に居続けられる。その答えはシュウジにとって何よりも嬉しい事実である筈なのに何故かそれを素直に受け入れられないでいる。

恐らく、博士はまだ隠している事がある。それもシュウジだけに限った話ではない、恐らくはこの世界に関わる根底的な部分を敢えて話していない。そもそも、自分が此処にいればそこで寝ているもう一人の自分は一体どうなるのだろうか。

尽きない疑問に訝しむシュウジだが、今は追及すべき時ではないのかもしれない。擬似人格とはいえ相手はシュウ＝シラカワ、自分程度の追及ではのらりくらりとかわされるのが関の山だろう。

何より、まだシュウジはこれまでの事実を完全に消化しきれていない。客観的視点で自分を誤魔化しているが、それがいつまで続くか分からない。

「じゃあ、最後の質問です。あの人は、フィーネお婆ちゃんは、最初からそうするつもりで俺を育てたんですか？」

『それは……』

故に、最後の質問は少なくはない感情が入っていたかもしれない。自分を育てた祖母が、大好きだった祖母が、自分達の目的の為に今まで利用してきたのか。他の事はどうでもいい、だからせめて、せめてそれだけはハッキリさせたい。

そんなシュウジの願いが籠った問いにシュウ＝シラカワは――――――。

◇

「変わってないなー、ここも」

日が傾き始めた時間帯、夕飯の買い出しで人が多くなってきたとある通り道、至るところから聞こえてくる人の営みの音にシュウジは懐かしく思いながらシュウから告げられる真実を何とか呑み込もうとしていた。

博士の事、祖母の事、多くの知らされる真実と事実。まだ混乱している、未だに分からない事はある。しかし、それでもシュウジは……。

「帰って……来たんだな」

漸く実感が湧いてきた帰郷に柄にもなく泣きそうになった。穏やかで平和な一時、当たり前の日常、嘗て自分も確かにこの中にあったのだと、当時の事を一つずつ思い出しながらシュウジは街の中を歩く。

……ふと、前方に泣きじゃくる子供がいる。側には母親らしい女性が子供を宥めているが、子供は空に指を向けるだけで泣き止もうとしない。

子供が指を指す方へ視線を向ければシュウジは成る程なと笑みを浮かべる。空高く浮かぶ風船、高さ的にはビル四階程だろうか。今も昇り続ける風船だが、そこは充分手が届く距離だ。

瞬間、シュウジの姿は一瞬かき消え、次の瞬間には其処から少し離れた位置に着地しており、その手には子供が指差していた風船が握られていた。
「はい、これ君のだろ？」
「え？」
差し出された風船、先程まで空高くあった筈の風船が目の前にある事に母親は目をパチクリとさせており、子供の方に至っては目を真ん丸と見開かせている。
「この辺りでは見ない顔ですね。ご旅行ですか？」
「え？　あ、はい。主人が珍しく暇が取れたと言うので折角だから都会の方へと思いまして……」
「そうですか、この辺りは道が複雑ですので迷われない様に気を付けて下さい。この道を真っ直ぐ進めば交番がありますので、何かあったらそちらを頼るようにしてください」
「そうなんですか？　分かりました。ご親切、ありがとうございます」
話題を逸らして風船から意識を外させた事に成功したシュウジは良い旅をとそれっぽく返して再び歩き出す。
「み、み、み、未来ズラァァァァっ!!」
後ろの方から子供――――女の子の驚愕に満ちた叫び声が聞こえてくる。恐らく

は風船を取った瞬間を目撃したのだろう。すっかり興奮しきっている女の子にシュウジはしまったと苦笑いを浮かべる。

一瞬、自分の事が世界中に公表される危機感を覚えたが、ここは秘密結社やサイデリアルが跋扈する多元世界ではない。自分を探したり、命を狙おうとする輩はいないのだ。

自由。嘗てない解放感と充実感がシュウジの内から溢れてきた。……しかし。

「やっぱり、ちょっと苦しいな」

キツくなった胸元、短くなった袖、着なれた筈の衣服が今の自分にはキツく感じている。

今のシュウジは修司の自宅から拝借したもの、自分の住んでた部屋なのだから拝借という表現は正しくないのだが、何故か間違っている気はしなかった。

キツく、小さく感じてしまう自分の衣服、まるで自分だけが別物だと、異物なのだと言われている気がした。

「トドメにこんな髪だもんなぁ、そりゃ違うよな」

紫の髪、サラサラと風で靡いており、顔付きも少し変わった気がする。背丈も伸びたし体つきも見違えた。ガラス張りのショーウィンドに映る自分を見てシュウジは自嘲気味に笑う。

「異物みたい……じゃなくて、異物そのものだな」
　いっそ、受け入れてしまえば楽になるかもしれない。受け入れて自棄になって、何もかも流されるままに生きれば、少なくとも胸の胸中を巡る思いは消えるかもしれない。
『――――それは、私の口からは言えません』
　最後の質問に対するシュウの答え。珍しく言葉を濁してそれ以降語り掛ける事はないが、それがシュウジからして見れば答えそのものに思えてきた。
　祖母が自分を騙していた。厳密に言えば騙したのではなく利用されたと言うべきかもしれないが、そんな事はどうでもいい。
　大好きだったお婆ちゃん。自分にとっては忙しかった両親の親代わりであり、寂しい時にずっと側で自分を支えてくれたフィーネお婆ちゃん。
　それが全て嘘だった――――かもしれない。その事を明らかにするのが怖くて膝が震える。震えて、震えて止まらなくなる。
　何故、自分は帰ってきてしまったのか。こんな気持ちになるのなら、こんな思いをするのなら――――いっそ。
「あれ？　シュウジ？」
「！」

「やっぱりシュウジじゃない。なにアンタ、まだこんな所にいたの？　バイト前に仮眠するんじゃなかったの？」
「ニコ……ちゃん？」
「ていうか、なにその髪？　イメチェン？」
その声に心臓が高鳴った。その言葉に心が暖かくなっていく。多くの真実に打ちのめされ、心身疲れきったシュウジの前に現れたのは……。
「むむぅ、地味に似合ってるわねその髪。普段はお洒落なんか気にしないのに……シュウジの癖に生意気よ！」
嘗ての幼馴染、前のような幻とは違う。正真正銘の彼女が目の前に現れた。

〝――――ウフフフフ、見ぃつけたぁ〟

その１８７

――――言いたいことがあった。伝えたい事があった。自分が向こう側の世界で体験した事、包み隠さず話したいと、何度も……何度も思った。

嘘と呼ばれようと、呆れられようと、君と何度も話したいと思った。もし君と会えたら、これ迄の出来事を話そうと、何度も夢見てきた。

――――なのに。

「ちょっとー？　聞いてるー？　何とか言いなさいよー」

――――君が目の前にいるのに、俺は何一つ言葉を口に出すことが出来なかった。

もう会えないと思っていた。諦めかけていた。目の前の女の子に、もう二度と会えないのではないかと、本気で思い込んできた。だからなのだろうか、あれだけ考えていた言葉の数が一瞬にして頭から消え去ってしまっていた。でも、それはきっと仕方のない事なのだと思う。

――――だって。

「あー、うん。この髪は……そうだね。イメチェンって事にしておいてくれないかな？」
「はぁ？　　相変わらずハッキリしない奴ねぇ。まぁ、そんな事はどうでもいいわ。時間があるならちょっと付き合いなさいよ。……良いわよね？」
「あぁ、勿論だとも」
君を前にして俺は嬉しさで胸が一杯だったのだから。

◇

「へぇ、ここの公園まだ残ってたんだ」
それから俺は二人きりで話がしたいというにこちゃんの誘いを受けた俺は彼女と一緒に落ち着ける場所を探す為に街を少し歩いた。にこちゃんからすれば当たり障りの無い散歩、けれど俺にとっては永い間帰ってこれなかった故郷の凱旋。街の一つ一つがにこちゃんにとっての当たり前で、一つ一つが俺にとっては眩しいモノに映ってい

た。
　そして、俺達はそこへ辿り着いた。俺とにこちゃんが初めて出逢えた場所、今は誰も使っていない寂れた公園。俺にとって最も古い記憶の詰まった思い出の場所だ。
　錆び付いた滑り台、落ち葉の溜まった砂場、ブランコもボロボロで、鉄棒に至っては棒の部分が無くなっている。
　酷い有り様だ。こんなになるくらいならさっさと撤去すればいいのに――――――なんて思う反面、残っていた公園に俺は正直嬉しく思った。
　あの頃から比べ酷く狭く感じるのは俺がでかくなったからだろうか。あの頃から少しは成長出来ているだろうか。そんな事を思いながら俺は公園の片隅にあるベンチに向かう。埃と汚れにまみれた石のベンチ、それらを手で払い予め家から持ってきたハンカチを敷いて、その上に彼女を座らせるよう促した。
「さて、お待たせにこちゃん」
「相変わらず準備良いわねアンタ、なに？　私の思考読めてんの？」
「そんな事はないけど……まぁ、にこちゃんが分かりやすいのは否定しないかな」
「うっさい」
　俺の余計な一言ににこちゃんは軽く小突いてくる。こんなやり取りですら俺の涙腺を刺激してくるから困る。にこちゃんとの話はこれからだというのに、これではそれ

どころじゃなくなってしまう。

目頭を抑えて必死に堪えようとする。そんな時だ、俺の視界の端に小さい小包が顔を覗かせて来た。

「――――はい、これあんたの誕生日プレゼント。まだ少し早いけど、これから私スクールアイドルの方で忙しくなるし、タイミング合わなくなるかもだから」

横を見ればそっぽを向いて此方を見ようとしないにこちゃん。差し出された小包は丁寧に梱包されており、開け口の所には綺麗なリボンが巻かれている。少々女の子向けのラッピングだがその節々には不恰好さが滲み出ている。恐らくはこれもにこちゃん本人がやってくれた事なのだろう。

「――――ありがとう。にこちゃん」

「べ、別にあんたの為とかじゃないから。友達の少ないアンタの事だから仕方なく見繕って上げただけ、哀れに思ったあんたへのアタシからの贈り物、ただそれだけだから、勘違いしないでよね！」

「テンプレ乙」

「うっさいバカ！」

こんなやり取りもいつ以来だろう？　自分が大学へ入学し、にこちゃんが高校に進学した頃からだろうか。あの頃は互いに忙しい時期が重なっていたから登下校の時

間帯以外では禄に顔を合わせていなかったっけ。
　我ながら薄情な事をしたものだ。あの頃のにこちゃんはスクールアイドルで頑張ろうと必死だったのに自分はそれを影ながら応援するだけ、もっと具体的な支えになりたかったのに当時の自分は大学での生活とバイトにばかりかまけていたっけ。
　だからこそμ’ｓというチームとそのメンバーに恵まれた事を心から嬉しく思えた。彼女の夢と同じくする娘達、それまでの間ずっと一人で頑張っていたにこちゃんと一緒になって頑張ってくれる女の子達、いつか会ってお礼を言いたいな。
　時期……と言えば俺の誕生日ってこの世界ではもうすぐだったのか、と今更ながら思う。彼方にいたときはまだ数ヶ月先だった筈なのに此方ではあと数日となっている。
　……まぁ、理とやらを越えて世界を移動するというのだからその辺りの細かな調整は難しいのだろう。少しばかりの思案、自分の考えに耽っている顔を心配そうに覗き込んでくるにこちゃんに俺は笑みを浮かべて応えた。
「ごめん、ちょっと考えごとをしていた。にこちゃん、さっそくこれ開けても良い？」
「え!?　あ、うん。いいけど……あまり期待しないでよね」
　遠慮がちににこちゃんはそう言うが幼馴染の女の子、それもスクールアイドルの一人から直々に誕生日プレゼントが渡されるのだ。その事実だけで充分な程に嬉しいし、それだけで価値がある。プレゼントの中身など実際は二の次なのだ。

とは言え、自分の為に悩みに悩んで用意してくれたプレゼント、それがどの様なモノであれ真剣に受け止めるべきだろう。

期待に胸を膨らませながらラッピングを解き、小包を開封する。何処か覚えのある手触りに何だろうとワクワクしながら取り出した俺の視界に映ったのは……。

（――――は？）

何故？　と疑問が浮かんだ。どうして？　と混乱で頭が一杯になった。そんな筈はないとどんなに否定しても事実は変わらず、俺の手にあるにこちゃんからのプレゼントは確りとした感触で自分の手の中に収められている。

それは――――手帳だった。

馴染み深いのも当然だった。触った感触に覚があるのも当然だった。何故ならそれは向こう側の世界に跳ばされてから肌身離さず持ち歩いていた……俺の日記帳と全く同じモノだったのだから。

（なんで？　なんでこれがここに？　あれ？）

不思議に思いながら懐に手を入れてソレの在り処を確める。……あった。確かに日記帳は自分の懐に変わりなく其処にあった。

偶々にこちゃんのプレゼントが自分の所有物と被った？　いや、それは有り得ない。だって自分はあの時初めて彼女に自分が欲しいものを訊ねて何となく口にしただ

けで、その瞬間まで手帳なんて発想自体頭に無かったのだ。
――――――そもそもの話、自分は一体この日記帳を何処で手に入れたのかその記憶すら無いのだ
心臓の鼓動が速くなる。脳裏に浮かんだ一つの仮説が真実ではないかと俺の心を締め上げる。嘘だ。そんな筈はない、そんな事あってたまるか。
だけど、どんなに否定したくても考えれば考えるほどにその仮説は真実味を帯びていって――――――。
「ちょっと修司、修司ってば！」
「っ!?」
「ちょっとどうしたのよ急に黙り込んじゃって、顔色も悪いし、アンタ本当に大丈夫なの？」
「あぁ、うん。ちょっと疲れちゃっただけだから、ゴメンねにこちゃん、折角誕生日プレゼントなのに禄に返事も返さなくて」
「別に良いわよそんな事、……ねぇ、本当に大丈夫なの？　顔色悪いって言ったけど実際酷い顔してるわよ今のアンタ、今日は無理しないで家で体休めたら？」
「うん、そうだね。そうするよ。ありがとうにこちゃん」
にこちゃんの気遣いも、心配の言葉も今の自分の頭には何も入ってこない。これで

はダメだと分かっているのに、今はマトモに彼女の顔も見れやしない。彼女の言葉の一つ一つに自分の体が拒否してくる様で……。

『――――今の貴方は厳密に言えば白河修司ではない』

今はもう、彼女の顔も満足に見えない。

〝ウフフフフ、アハハハハハ、見付けましたわ。見付けましたわ。愛しの君〟

「っ!!?」

眼前に現れるのは……影。ゆらゆらと蠢き、輪郭もぼやけて今にも消えてしまいそうな陽炎。

そんな陽炎を前に俺の心臓は更に速くなる。最悪の状態で最悪の相手と遭遇――――いや、最悪処じゃない。今の俺の状態では最悪を通り越して最早詰みでしかない。

〝むぅ、やはりまだ壁を越える事は出来ませんか。大崩壊を間近に控えているからもしやと思いましたけど……中々上手く事は進まないものですね〟

「なに……あれ？　人？」

どうしてこんな所に、なんて考えても今は意味はない。俺が来れたのだ。だったら

コイツもここへ現れるのは当然な事なのかもしれない。それになにより、今重要なのは其処ではない。

〝しかし、それでもこれを此処へ送る事には成功しました。さぁ、来なさい――――ヘリオース〟

空間が悲鳴を挙げる。陽炎の背後の風景が揺らめき、ガラス張りのケースの様に破れ、そこから現れるのはシュロウガもかくやと言わんばかりの……黒に染まりきった巨人の姿。

「な、何よ……これ？　映画の撮影？　ドッキリ？」

振り上げる巨人の拳、常識外れの光景、これらを前にただの女の子でしかないにこちゃんが咄嗟に動ける筈もなく。

〝さぁ、愛させて下さい。貴方の渇望を、希望を、絶望を、その全てを、私に見せてください。私はその悉くを受け入れましょう〟

「にこちゃん!!」

振り下ろされる巨人の拳、にこちゃんを抱き抱えて横に飛ぶことしか出来ない俺はその公園を守りきれる事など出来る筈もなく。

思い出の詰まった公園は巨人の一振りで何もかも消し飛んだ。

◇

「――――あ、あれ？」

気付けば、自分は幼馴染の腕の中で抱えられていた。ゴツゴツしながらも暖かい腕、頭も腕も脚も、傷一つなくスッポリと彼に包まれている。

嬉しさと恥ずかしさで顔が赤くなる。しかし彼女の意識は次の瞬間現実に引き戻される。

舞い上がる砂塵、砕かれたコンクリート。周囲からは混乱の悲鳴と怒号で大騒ぎになり、遠くからはサイレンが鳴り響いてくる。

「――――何よこれ、どうなっているのよ」

「にこちゃん、無事か？　怪我はない？」

混乱する彼女の耳に入ってくるのは幼馴染の彼の声だ。自分が知っている彼よりも幾分低くなっている彼の声色、その言葉に我を取り戻した彼女は不意に浮遊感を覚え、その場に丁寧に立たされる。

「う、うん私は大丈夫。……って、アンタ血が出てるじゃない!?」
「俺は大丈夫、この程度いつもの事だから」
「この程度って……」
　額の一部を切ってダラダラと血を流れているのに意にも介さない彼ににこの不安は途端に大きくなる。どういう事なのか説明してもらおうにも、状況はそれを許さない。
「にこちゃん、アイツは俺が可能な限り引き付けるから、君はその間に家族の人達と一緒にここから逃げろ」
「はぁ!?　な、なにバカな事を言ってるの!?　」
　何もかもが現実とかけ離れていた。突如成長した幼馴染と巨大ロボットの襲来、端から聞けばＢ級映画の焼き回しの様な展開。使い古された、お約束の急展開、ドッキリか映画の撮影か何かと言われた方が余程信憑性のある……そんなお話。
　しかし、血を流している幼馴染の姿がこれがリアルの……現実に起きている出来事だと知覚させる。
「頼む。アイツが俺に気付く前にどうか早く逃げてくれ」
「聞ける訳ないじゃない！　アンタが何を気取っているのか知らないけど、あんなのがアンタの手に追える相手であるはずが無いじゃない！　バカな事言ってないで

さっさと逃げ――――」

そうだ。事情がどうであれ、兎も角ここから離れるのが最優先だ。学校の事も、スクールアイドルの事も明日からの日常の事も今は考えるな。今はこの訳の分からない使命感に目覚めているバカな幼馴染を首根っこ捕まえてでも逃げるしかない。

そう手を伸ばそうとするが。

「いいから……行けぇぇっ!!」

返されたのは拒絶の反応。差し出した手は乱雑に弾かれ、邪魔だと言わんばかりにこの体を突き飛ばした。

「っ!?」

……衝撃は思ったほど強くはなかった。しかし、ソレ以上に幼馴染に拒絶された事と彼の見たこと無い表情と迫力に圧され、その目に涙を流しながらその場から立ち去っていった。

そんな彼女を見送ってシュウジは思う。またやってしまったと、これじゃあ初めて会った時と何も変わっていないではないかと。小さくなっていく幼馴染を見送って自己嫌悪をする。しかし、今の彼には後悔の時間すら許されない。

〝勇ましいですね。浅ましいですね。想い人を拒絶しておきながらも貴方は彼女に執心されている。あぁでも、そんな初心な感情も何て甘美なことか。――――私、ゾク

ゾクしてしまいます〃

「うるせぇよ。ここはお前なんかがいて良い世界(場所)じゃねぇ。とっとと失せろ」

グランゾンは……出せない。出すことが出来ない。どんなにワームホールを開こうとしてもその様子は微塵とも現れない。これも理の壁に阻まれている影響か、何れにしてもシュウジの取るべき行動は一つしかない。

ヘリオースを、目の前の黒い巨人を己の肉体一つでどうにかしなければならない。曾て無い状況にシュウジは拳を握り締めて構えるのだった。

その188

――――違う。最初に彼を見付けた時、私の胸中を渦巻いていたのは疑問と疑惑だった。

伸びた背丈、頭髪も黒髪から紫の色へと変わり体つきも逞しくて顔付きも大人びていた彼、正直な所、私は声を掛けるまで彼が幼馴染のアイツだと確信を持てなかった。

なら、私はどうして彼に声をかけたのだろうか。それは多分……似ていたからだと思う。あの公園で初めて出会ったアイツと、同じ顔をしていたから、だから気になって声を掛けたのだと思う。

『あれ？　シュウジ？』

『――――え？』

私の呼び声に驚いた様に振り返る彼、その顔はやっぱり私の知っている彼とはどこか違っていたけれど……うん、やっぱりそうだ。

彼は彼だった。今までコイツの身に何が起きたのかは私には分からない。どうしてこんなに体つきが変わっているのか、どうして髪を紫色に染めているのか、どうして自分一人だけ成長した様に変わってしまっているのか。

疑問は沢山ある。聞きたい事も沢山ある。というより、訳の分からない事しかないが、一つだけ確かな事がある。――今、ここにいるコイツは、このバカは、私の……大事な幼馴染みが苦しんでいるという事。苦しんで、泣きそうになっているのに、強がっている事だ。

だったら、私がやる事は決まっている。私はアイツのアイドルだから、アイツは私の一番のファンだから。

「――こころ、ここあ、そして虎次郎。よく聞いて」

「お、お姉さま？」

「私はこれから行かなきゃ行けないところがあるの。とても危険な場所でアンタ達を連れてはいけない、向こうの橋を渡った所にお母さんが来ているみたいだから、アンタ達だけでそこへ行きなさい」

「お姉ちゃん……」

瞬間、遠くから爆発の音が聞こえてくる。大きい音だ。煙も立ち上っているし、悲鳴も聞こえてくる。きっと、あの巨大ロボットが暴れているんだ。そして、あの化け物を止める為にあのバカが必死に食い止めている。

アイツに言われて逃げてきた。母にも連絡を入れたし、あとはこの子達を安全な所に逃がすだけ。姉として最低な事をしているのは分かっている。本当は一番この子達を

優先しなければいけないのに、私はその責務を放棄しようとしている。
「――――もう、しょうがないですわね。お姉さまは」
「こころ？」
「どうせ、シュウジ関連なのでしょう？」
「お姉さまはシュウジ兄ちゃんの事になると目の色を変えますからねぇ」
「うん、わかりやすい」
「アンタ達……」
「行ってくださいお姉さま、きっと彼も待っていますわ」
「私達の事なら心配しないで下さい」
「ふぁいと～」
　そんな私の我が儘をこの子達は笑って受け入れてくれた。本当は不安なのに、怖くて仕方がないのに、それでも私の為にと、恐怖と不安を抱きながら歯を喰い縛って耐えている。
　ありがとう。ただ一言それだけを口にして、私はこの子達を抱き締めた。私の負担にならないよう、日頃から家事の手伝いをしてくれた優しい子達、私の我が儘を笑って受け入れてくれた妹弟（きょうだい）達、言いたいことも呼び止めたい気持ちも圧し殺して私を送り出してくれるこの子達の好意に甘え、私は燃え上がる炎の出所に向けて走り出した。

「アイツを連れて絶対に戻ってくるから！」
既に騒ぎは大きくなっている。悲鳴の数も大きさも増していき、焦りと恐怖が私の心の内で大きくなっていく。
――――それでも、私の足は止まることはなかった。

◇

――――昔、テレビでしか見たことがなかった。人並みの大きさしかないヒーローが、仲間達と一緒に悪の巨大ロボットへと立ち向かう話。ピンチになったら自分達の巨大メカが駆け付けて、合体変形をして逆転する王道の戦隊ヒーローの物語。
それを、自分が体験するとは思わなかった。ただテレビの戦隊ヒーローと違うのは今この場には自分一人しかおらず、駆け付けてくれる仲間も頼みの綱である味方の巨大メカもいないという事。正真正銘生身一つでこの黒くなった如何にも悪の組織の巨大ロボットらしい怪物とガチンコな殺し合いをしなくてはならないとか、ふざけるにも程が

ある。

〝嗚呼、嗚呼！　聞こえてきますわ。貴方の鼓動が、貴方の焦りが、貴方の輝きの音が！　もっと見せてください。もっともっと私を昂らせて下さい！　絶望と希望の狭間で悶える貴方の足掻きの様をもっと……もっと！〟

しかも超の付く変態のおまけ付きとか、本当に勘弁して欲しい。自分を踏み潰そうと迫り来るヘリオースの足裏、後ろに跳んで避けつつ今度は此方の番だと周囲の建物を伝って跳躍し、自分は握りしめた拳を黒く染まった奴の顔面に叩き込んだ。

拳を通して全身に伝わってくる黒化したヘリオースの硬さと重さからマトモにダメージが入っていない事が伝わってくる。出来たことは精々その巨体を一歩退けぞらせただけである。

グランゾンは使えない。この世界に飛ばされてからグランゾンの様子を見ようとワームホールを開こうとしても、一向にその様子がない。グランゾンとの繋がりは断たれた訳ではないから、恐らくはこの世界に跳ばされた事が原因なのだろう。

仮に使えたとしても、それはこのヘリオースを人気の無い所へ移してからの話だ。もしここでグランゾンを出してしまえばそれこそ向こうはやる気を出して更に激しく暴れまわるだろう。

この街を、この世界を、これ以上壊させはしない。幸い重力制御は生身でも扱える。

コイツを相手に頼りになれるほどの強力なモノではないがそれでも何も無いよりはマシだ。

一歩後退るヘリオースにおまけの回し蹴りを叩き込む。衝撃と重さ、手応えはやはり感じないが、それでも勢いは此方が取った。自分の攻撃を受けたヘリオースが更に仰け反り、倒れようとしている。

「させねぇよ」

しかし、そうはさせない。この街で巨大ロボットが倒れればソレだけで大きな被害が出てきてしまう。手を突き出し、傾けているヘリオースの動きをグラビトロンカノンの応用で止め、そのまま宙へ浮かび上がらせる。

（よし、この質量なら問題なく運び出せる。後はこのまま人のいない所へ移動すれば……）

問題はその場所だ。太平洋のど真ん中か、それとも空か、何れにしてもこのままでは騒ぎを聞き付けた野次馬か集まって来るだろうし、そうなれば戦いの被害は肥大化していくばかりだ。

速くここから離れよう。にこちゃんの事も、自分の事も考えるのはそれからだと、ヘリオースと一緒に自分も重力制御で飛び、街から離れようと空高く浮かび上がったのだが……。

「あらあら、いけずですわね。私もいるのにもう終わらせるつもりですの？」
「っ！」
背後からの声に俺は躊躇なく蹴りを放つ。しかしその蹴りは空を切るだけで、声の主には当たらなかった。
「テメェ、もう実体化を！」
「はい。時間は掛かりましたがお陰さまで私もこの通りです。尤も、大した力は使えませんが、それは貴方も同じこと、まだ少しモノ足りませんが、今はこれでよしとしましょう」
先程まではただの影でしかなかったサクリファイが確かな形を得て、恍惚の笑みを浮かべて自分の懐に潜り込む。不味い、このままコイツをこの世界に馴染ませてしまったら、それこそこの世界が悲鳴を挙げてしまう。
何とかしなければ、そう思考するよりも早くサクリファイの拳が自分の腹部に置かれ。
「不動――――砂塵爆」
「っ!?」
瞬間、衝撃が自分の身体を貫いた。痛みと驚きで思考が乱される。口から血反吐が込み上げてきて思わず重力制御を解きそうになるが、歯を喰い縛りどうにか堪える。

しかし、これだけでは終わらなかった。吹き飛ぶ身体に力を入れて何とか踏み留まらせるが、次に自分が目にしたのは自分の眼前を覆う拳の嵐だった。
「猛羅――――総拳突き」
「チィッ！」
この拳の嵐を回し受けで捌いて見せるが、威力も重さも鋭さもヤムスク１１でやり合った時より遥かに増していた為、何発か身体に直撃してしまう。この女、少し見ない内にまた力を増していやがる。
もしかしたらもう格闘戦では自分に勝ち目は無いのかもしれない。そう思えるほどにサクリファイの力は出鱈目な程に増していた。
「イィ、イィですわ。もっと貴方の血を見せてください。貴方の苦悶を、貴方の慟哭を、私はそれを受け入れましょう。貴方の絶望も希望も、全て私が愛しましょう」
「この、サイコパスがぁ！」
自分に勝ち目は無い。そう心の何処かで思いながらも俺は奴に拳を振り抜いた。ここで自分がやられたら、街は、世界は、にこちゃん達はどうなる。火を見るよりも明らかな悲惨な未来を回避するべく、俺は握った拳を奴に向けて振り続けた。
しかし、当たらない。まるで此方の動きを読めている様に、全てお見通しだとばかりにサクリファイはウザったい笑みを浮かべながら俺の拳をわざと紙一重で避けていく。

やはり、この女受け入れると称して自分の技を吸収していやがる。それもただ吸収するだけではない。自分の技や動きを受け入れる上で最も鋭く、強く、重く、そして効率良く最適化している。余分な無駄を弾き、あらゆる雑を削ぎ落としていく。

その先に待っているのは理想の具現、つまりはこの女、自分という動きをトレースして第二のガモンさんに至ろうとしていやがる。ゾッとしない話だ。そうなる前に何としてでもコイツを倒さなければならない。奮う拳に更に威力と速さを乗せて打ち込むが……それでも奴には当たらない。

「ウフフフ、隙あり♪」

そんな自分の拳をサクリファイは受け流し

「胴回し……踵落とし」

勢いを乗せた一撃を俺の脇腹に捩じ込んできた。砕ける音が聞こえる。耳障りで、嫌な音。不味い、不味い不味い不味い不味い不味い不味い！

今のは受けてはダメな一撃だった。何時もなら避けれた筈なのに、焦りと不安が自分の動きを阻害してしまった。

我慢していたモノが口から吐き出される。赤黒く、ドロッとした液体が口一杯に広がっていく。ヤバい、早く体勢を立て直さなくては……。

「ヘリオース」

瞬間、頭上から伝わってくる熱量に俺は顔を上げる。そこには自分の重力制御から逃れ、天に向けて手を上げるヘリオースが小さな太陽を出現させていた。
（ふ、ふざけるな！　そんなモノをここで使ったら！）
自分だけではない。下手をすれば下の街全てが消し飛びかねない。下にはまだ避難どころか事態を理解していない人達が一杯いるんだぞ！
しかし、そんな自分の心中とは裏腹に奴の顔には満面の笑みが張り付いていた。この女……まさか！
「さぁ、頑張って下さいね」
瞬間、あろうことかこの女、ヘリオースの一撃を自分にではなく街に向けて落としやがった。ゆっくりと緩やかに、嬲り殺しとばかりに超質量のエネルギーの塊が街に向かってゆっくりと降下していく。
「くそったれがァァァァぁっ!!」
有らん限りの叫びを上げながら、俺は燃え上がる太陽に向けて飛び付いていく。その降下速度から追い付けるのは簡単だったが、問題はそこからだった。
「このォォォォォォおっ!!!」
受け止める手の皮膚が焼ける。体の内にある水分は蒸発し、至るところから血煙が立ち上っていく。痛いとか熱いとかのレベルじゃない。焼失の苦しみがそこにはあっ

た。

だけど、この手を放すわけにはいかない。自分の下には街が、自分が生まれ育った故郷が真下にあるのだ。

「この街には……落とさせねぇ！」

気力を、死力を振り絞って耐えて見せる。しかし、そんな自分の思いとは裏腹に太陽はゆっくりと降下し続け……。

「弾けなさい」

瞬間、俺の視界は白に染まった。

◇

――――街は、混乱の渦にあった。突然都市部上空で起きた大規模爆発の衝撃により多くの建物の窓ガラスは破砕され、幾つもの家屋が倒壊の危機に瀕していた。予期

などされていなかった。前触れなど全くなかった。
予想もされず、突発的に起こった突然の大災害。人的なのか、それとも自然的なのか、混乱と混沌で情報は錯綜し、パニックだけが街を支配していた。
しかし彼等は気付かない。あれ程の爆発だったのに、都市を丸々覆う程の爆発と衝撃だったのに被害がその程度で済んでいる事を、怪我人もいるだろう、致命傷も負っている人も少なからずいる。しかし街が形を保っている奇跡に街の人々は誰一人気付くことはなかった。
「おかあさん、おかあさん！」
パニックに陥った人々が横行する中、泣きじゃくる少女の声が掻き消されていく。助けて、誰でも良いから助けてください。幼いながらも必死に助けを求める少女の声はしかし人々には届かない。
「花……丸、私の事はいいから、あなたも早く逃げて」
「イヤだぁ、イヤだよぉ、おかあさん！」
崩れ落ちる瓦礫から娘を庇い、自身が瓦礫の下敷きになってしまった母親、幸いにも体は打ち身程度で済んでいるが、重い瓦礫に挟まれて身動きがとれないでいる。
しかし頭部は少し打ったのか、額からは血が流れている。医学の知識など皆無な少女にはそれが大事なのかすら分からない。不安と恐怖で一杯になりながらもそれでも母

親を助けようと少女は涙を流しながら瓦礫を退かそうと必死になる。
　尖った瓦礫の破片で手を切りながらも、それでも少女は懸命に瓦礫を退かそうともがいた。どれだけ頑張ってもびくともしない瓦礫、いよいよ少女も力尽きようとしたその時だった。
「君、ちょっと退いてくれる」
　聞こえてきた男性の声、何だと思い少女は振り返り……そして絶句する。
　焼け爛れた皮膚、身体中の至る所から血が流れ、脇腹は赤黒く腫れ上がっている。明らかに普通の状態ではない男性は、瓦礫の隙間に片手の指を差し込むと、人を覆い被さる程の巨大な瓦礫を一呼吸で退かしてみせた。
「大丈夫ですか？」
「あ、ありがとうございます。その、大丈夫ですか？」
「はい。俺なら大丈夫です。ここは危険ですから、早く避難を」
　男性に言われるまま、母親は礼を述べた後、娘を連れてその場から立ち去っていく。
　折角の家族旅行なのに申し訳ない事をした。自分をじっと見て視線を外さない少女を見えなくなるまで見送った後、男性は――――シュウジは、自身の前に降り立つヘリオース巨人とサクリファイ化け物に向き直る。
　既に周囲に人の気配は無い。逃げ延びた人々が遠くへ避難している事を祈りつつ、

シュウジは拳を握り締めて身構える。
「――――美しいですね」
「……」
「傷だらけになろうと、致命傷を受けようと、故郷とそこに住む人々を守る為に戦う。確かに今の貴方は守護者足り得ているのかもしれませんね」
「ですが、もっと。もっと私は見たいのです。貴方の発するモノを、美しさも醜さも、強さも弱さも、堅牢も脆弱も、その全てを私は見て、愛して、受け入れたいのです」
　頬を朱色に染めて高らかに謳うサクリファイ。……以前から思っていたが、この女少々自分の欲求に素直すぎるのではないか？　やはりアドヴェントや他のテンシをその身に吸収した事で箍が外れたのかもしれない。
　まるで獣ではないか。ドンドン人としての……いや、知的生命体としての感性が欠落していくサクリファイに、シュウジは渾身の跳び蹴りを繰り出した。
　ガモンとの組手の時よりも速く鋭い一撃、しかしサクリファイはそれを何事も無いように手の甲で軽くいなし、シュウジの身体を弾き飛ばす。
「ヘリオース」
「っ!!」
　瞬間、弾き飛ばされ無防備となったシュウジにヘリオースの巨大な拳が突き刺さ

る。痛みと衝撃で意識が飛びそうになる。それだけはダメだと歯を食い縛って耐えるシュウジだが、地面に叩き付けられてしまいこれ迄耐えてきた全てが声に出して溢れさせてしまう。

「ぐ、が、あぁぁぁぁぁぁぁっ!!」

シュウジの悲鳴、骨は砕かれ、死に体と化した彼の断末魔はサクリファイの欲望を強く刺激させた。目尻をとろんと蕩けさせ、身震いする自身を抑えるようにサクリファイは己を抱き締めた。

ヘリオースの放った一撃により地面は陥没、水道管は破裂し、アスファルトに礫にされたシュウジに大量の水が降り注がれる。このままでは溺死してしまう。何とか立ち上がるシュウジだが、その目には先程までの力強さは無くなっていた。

息も絶え絶えで口の中は鉄の味が充満し、左腕に感覚は無く、一つ呼吸をするだけで全身に激痛が走る。

もう戦える状態ではない。それなのにシュウジは拳を握り締めるのを辞めない。これが自分の意志なのだと、もう一度シュウジは構えを取る。

サクリファイはそれを見て美しいと思った。死に体でありながらそれでも抗う姿を辞めない彼が、美しくて、眩しくて――――そして。

「ウフフフ、アハハハハハ、アッハハハハハハハハハ!!」

とても愉快だった。

「凄いですわ。流石ですわ！　これだけ打ちのめされても、あれだけ痛め付けても、どれだけ嬲っても、貴方は何度でも立ち上がりますのね!!」

「当然ですわ！　だってこの世界は貴方の故郷ですもの！　守りたいでしょう？　壊させたく無いでしょう？　触ったらそれだけで崩れてしまいそうな脆い世界、それは貴方にとってかけがえのない世界なのでしょう。それがどんなに偽りに満ちた世界であったとしても！」

「……ん、だと？」

「惚けるのは止して下さい。貴方も気付いているのでしょう？　貴方はご先祖……いえ、シュウ＝シラカワの計画によって産み出されたデザインベイビー、その血縁。立ち塞がる怪物を破壊し、あらゆる悪徳を滅却する為に、貴方達は創られた」

「――あぁ？」

「貴方達に故郷はない。いえ、元から存在してなかった。在るのはただ用意された箱庭だけ、全ては来るべき時が訪れる迄の飼育小屋に過ぎない。そんなモノを健気に守るなんて、何て美しく、何て健気で、なんて……滑稽なのでしょう」

「お前が決めるな！　ここは俺の生まれ育った場所だ！　大事にして何が悪い！　大事に思って何がいけない！　これは博士やフィーネ婆ちゃんの思惑じゃない。

俺自身の意志と気持ちだ！」
「その大事な場所も、宇宙の大崩壊で全てが消え失せます」
「……っ！」
「一万二千回繰り返されてきた宇宙の終焉、今回行われるのはその集大成、一億と二千万年の果てに訪れる大崩壊は全ての並行世界を破壊し尽くします。当然、それはこの世界も例外ではありません」
「……嘘だ」

「勿論、嘘になる筈でした。如何に宇宙の大崩壊と言えどこの観測宇宙は私達の宇宙とは隔絶された世界。僅かな影響を受けることはあっても理の壁によって阻まれたこの世界に崩壊の巻き添えを受けることは有り得ませんでした。貴方の愛しの祖母、サフィーネ＝グレイスが来るまでは」
「っ！」
「サフィーネ＝グレイスはシュウ＝シラカワ達と同じ向こう側の人間、理が異なるモノが無理矢理壁を越えてしまったら綻びが生まれるのは必定。貴方の愛する世界は貴方の大好きな祖母の所為で滅びの時を迎えるのです。本来なら滅びる事もなかったのに。何も変わらず、穏やかに、健やかにこの世界は巡り続けていたのに、可哀想な事です」

――――今まで考えて来なかった。いや、考えたくはなかった最悪の真実がシュウジの心に深く突き刺さる。全ての元凶は自分の血族に有った。シュウ＝シラカワが自分の血族を創り出さなければ、サフィーネ＝グレイスがこの世界に来なければ、この世界は消滅の危機に晒される事はなかった。

自分は、自分の血族は全てがシュウ＝シラカワの企み通りだった？　大好きな祖母のあの優しい笑顔は、あの日々は、全てが嘘だった？

――――心が凍り付いていく。身体から力は抜け、立っていられなくなったシュウジは膝から崩れ落ちてしまう。

……もう、何も考えたくはない。もう、疲れた。残酷過ぎる真実に戦意と生きる気力も失ってきたシュウジに、最早それをはね除ける力は残されてはいなかった。

崩れ落ちるシュウジを見てサクリファイは満面の笑みを浮かべる。

「悲しいでしょう。辛かったでしょう。ですが心配は入りません。貴方もこの世界も全て私の内に沈めましょう。貴方は充分戦いました。後は何も考えず――――悦楽の海で溺れましょうや」

サクリファイの手がシュウジへと伸びる。――――そんな時だ。

「シュウジいいいいっ!!!」

「あら？」

ツインテールの髪を揺らした幼馴染が、サクリファイに渾身のドロップキックをぶちかました。当然当たることはなく、彼女の蹴りは空を切るが、そんな事など構うことなく矢澤にこはシュウジを庇うように両手を広げ、サクリファイの前に立ち塞がった。

「――――にこ……ちゃん？」

「ごめんシュウジ！　色々あって遅れちゃった！」

見れば彼女の身体もボロボロだった。服のあちこちは破れ、膝からは血を流し、髪や顔が砂埃で汚れている。普段からはスクールアイドルとしての意識の高さで身嗜みには人一倍気を使っていた彼女が、息を切らせてここまで走ってきたのだ。

人波の流れに逆らった事で身体中をぶつけ、爆風により幾つもの傷を作り、それでも彼女はシュウジの所へ戻ってきた。

「――――にこちゃん、どうして？」

「決まってるでしょ、アンタを助けに来たのよ！」

「……俺の事はいい、俺は大丈夫だから、にこちゃんは早く此処から――――」

「放っておける訳ないでしょ！」

「……っ」

「そんなにボロボロになって、血も一杯出てるのに、傷だらけで……そんなアンタを放っておいて私だけ逃げるなんて、そんなの絶対イヤ」

　どんなに逃げろと諭しても、彼女はそれを聞き入れなかった。
「ふふ、フフフフ。まぁ、なんて可愛らしいのでしょう。恐怖と混乱、不安と絶望で今にも泣き出しそうなのに、気丈に振る舞えるとは」
「アンタね、シュウジを虐めたのは！」
「えぇ、彼の全てを受け入れたくてついやり過ぎてしまいました」
　何の力もなく、何処にでもいる普通の女の子。吹けば消し飛びそうな脆弱な存在が目の前にいるのにサクリファイの表情には一欠片の苛立ちの色はなかった。
　寧ろ、良い獲物がやって来たとサクリファイの笑みはより深くなる。より濃く、より深く悦楽と享楽、そして快楽を貪る為にその口を開く。
「しかし、良く彼を貴方の幼馴染だと分かりましたね？　不思議ですねぇ、どうしてです？」
「はぁ？　幼馴染の私がコイツの事を見間違う筈がないじゃない」
「嘘」
「っ！」
「本当は誰よりも彼が彼とは違うことを知ってるのに、自分の知ってる彼とは違う事に気付いている癖に貴女はそれを見ないフリをしている。不安で胸が一杯なのに必死にそれを隠そうとしている。なんて惨めで哀れで――――可愛らしいのでしょう」

だからこそ、私は全てを受け入れたいのです。そう続けるサクリファイの言葉は確かにこの確信を突いた。本心を抉り、本音を暴き、彼女の心の内をその話術で剥ぎ取って見せた。

しかし。

「はぁ？　バッカじゃないの？」

「――――なに？」

「何度も言わせないで、私が此処に来たのはコイツを助ける為、私の知ってる白河修司を矢澤にこが助けに来た。そこに余計な考察や推察なんて入る隙間もない、あるのはたった一つの完全無欠の事実だけよ！」

彼女の、矢澤にこの瞳は微塵も揺るがない。自信に溢れ、己を鼓舞し、周囲の人間すら魅了する。スクールアイドルグループである〝μ’ｓの一人、傷だらけになろうとも尚揺るがない最強最かわの少女の姿がそこにあった。

「――――？？」

「理解出来ないって顔をしてるのなら分かりやすく教えてあげる。〝自分の恋は自分で守る！〟　女の子なら誰でも知ってる事よ、理解した？　お・ば・さ・ん!!」

「――――にこ、ちゃん？」

何故だろう。そんな事を言っている場合でも場面でもないのに――――自信満々

で、どんな存在を相手にしても決して退かない彼女の背中を見て、シュウジの凍り付いた心に暖かいモノが宿った気がした。
「ち、違うから！　恋っていってもスクールアイドルとファンという……その、アレよ！　ファンサービス的な好意よ！　そう言う事にしておきなさい！」
「――――あぁ、うん。分かってる」
顔を真っ赤にさせて誤魔化すにこにこシュウジは取り合えず同意する。しかしそんな彼女に対しシュウジは自分の胸に宿る暖かい気持ちを確める様に胸元に手を置いた。
この気持ちは――――一体何だろう。それ処ではない筈なのに、何故かシュウジには無視できなかった。
「――――恋？　何ですか、それ？」
瞬間、矢澤にこの身動きが突然動かなくなる。地に付いた脚は釘で打ち付けられた様に微動だに出来ず、全身は蝋で塗り固められた様に停止する。
心臓すら満足に動けなくなった彼女は額に大粒の汗を流しながら自身に向けて発している殺気の源へ凝視する。
其処にあるのは――――暗闇だった。大きく開かれた目に色はなく、あるのは底抜けの闇だけ。これまで見たことの無いサクリファイの様子ににこだけでなくシュウジですら凍り付く。

「恋？　知らないですね。分からないですね。それは必要な感情（モノ）ですか？　いいえ、いいえ。そんなモノは必要性が無い。在るのは全てを受け入れる深き愛唯一つ。恋なんていらないのです。知らないのです。いらないのです」
「な、なんなのよ。コイツ」
「ですので、――――あなた、いらないです」
「――――え？」
「にこちゃん逃げろぉぉぉっ！」
　瞬間、知覚できない程の速さでにこの前に現れたサクリファイがその手を大きく振り上げる。逃げる暇は無い。このままでは彼女に直撃する。最悪の未来を前にシュウジが耳にしたのは。
『――――シュウジ、今貴方に一つの真実を伝えましょう。グランゾンの奥底に眠る記憶の海、ささやかでありふれたある女の後悔の話を』

◇

――――漸く、悲願が成就する。シュウ様が己の命を賭して私に委ねた願いが、遂に実を結ぶ時が来た。

この世界に来て８０年近い時が流れた。シンカの力も会得できず、ただ時代に流れて見守る事しか出来なかった私に廻ってきた最初にして最後のチャンス。

白河修司。シュウ様の因子を代々から受け継がれ、遂に誕生した最高の適合者。今はまだ因子は眠っている状態だけど、それでもこれ迄の者達とは隔絶された可能性を秘めた超特大の麒麟児。

三代に渡って紡がれてきた彼の因子が、今最高の形として私の前に現れている。これ程の可能性を秘めた子は、今後千年経とうとも現れはしない。そう確信できるほどにこの子の……白河修司の可能性は飛び抜けていた。

これを逃してはならない。この機会を手放してはいけない。病に身を侵され、寿命という制限時間のある私に最早悠長していられる時間は残されていない。

そう、仕方ないのだ。仕方なくて、どうしようもなくて……だから、迷ってはいけ

ないのだ。この子を向こう側に送り、覚醒を促しシンカへ至らせ、待ち受ける絶望達のカウンターとして戦って貰う。それこそが私達に残された唯一の希望なのだ。

――――だから。

『お婆ちゃん、どうしたの？　どこか痛いの？』

だから、そんな眼で私を見ないで。

『……どうして、そう思うんだい？』

『だって、お婆ちゃん。泣きそうな顔してる』

私に、そんな眼を向けないで。私には哀れむ資格はないの、地獄に落ちて永遠の責め苦を受けるべきなの。貴方みたいな子供を死地に追いやる……悪くて悪くて許されない。醜悪な罪人なのだから。

だから、あなたが私を哀れむ必要なんてないの。あなたは私を憎み、蔑み、生き続ける事を定められた子。

だから！

『いたいのいたいの、とんでけー！　お婆ちゃんからとんでけー！』

『――――っ!!』

『だいじょーぶだからね、お婆ちゃんの痛いところは全部ボクが飛ばしてあげるから！』

『あぁ、あぁぁ……』

――――私は、シュウ様から全てを託された。託されて、紡いできて、今漸くその時がきた。

長かった。８０年近い時の中をただひたすら待ち続けた。あの人の想いに応える為、ここへこれなかったモニカ達の無念に報いる為、必ず役目を全うしなければならなかった。

『お婆ちゃん？』

『ごめんね。ゴメンね』

――――出来ない。

この子から、この子の優しさを、幸せを奪う事なんて……私には出来なかった。

『お婆ちゃん、泣いてるの？』

『ゴメンね。ありがとうね、お婆ちゃん。もう大丈夫だから』

私は失敗した。失敗して、失敗して、失敗した。

私は許されない。モニカ達の、シュウ様の想いを蔑ろにして、裏切って、私は取り返しのつかない失敗をした。

私は許されない。絶対に、誰が何と言おうとも、私は決して許されてはいけないのだ。

――――だって。

『お婆ちゃん、修司に会えて、貴方に会えて……幸せよ』

こんなにも、私は救われて――――幸福(しあわせ)なのだから。

――――嘗て、貴方の祖母は一つの決断をした。それがどんなに罪深くて、許されない事だとしても、彼女は一つの結末を手に入れた。自らの意思で、自らの想いで。

――――長い間、この世界に居続けた所為なのか、それとも年老いた事で情が移ったのかは定かではありません。ですが、一つだけ確かなのは。

――――貴方の祖母は、サフィーネ＝グレイスは、想い人との約束ではなく、今を生きる貴方を選んだ。貴方の未来を、貴方の幸福を選んだ。

――――唯一誤算だったのは、貴方の因子が彼女の予想を上回る程高かった事、貴方のグランゾンが自らの操縦者だと誤認する程に。

――――あなたが向こう側の世界に来たのは完全なる偶然、あなたは本来はこちら側の世界で生を謳歌する筈だった。

――――なぁ、博士。一つ質問いいかな？　　お婆ちゃんがあの選択をした時、アン

タはどう思った？

――――私は所詮シュウ＝シラカワの人格を倣った仮想人格に過ぎません。ここでどんなに言葉を重ねた所で、意味はないでしょう。が、敢えて言わせて戴けるのなら。

――――どのような選択であれ、悩み、苦しみ、その果てに掴み取った彼女の決断を、私は……誇りに思います。

――――そっか。

嘗て、女は一つの決断を下した。想い人の約束を裏切り、彼女は想い人よりも幼く小さな命を選んだ。

その決断に後悔が無いと言えば嘘になる。罪悪感が無いと言えば嘘になる。彼女は己の決断を、死ぬその直前まで苦しみ続けた。

しかし、それでも彼女はその決断を撤回しなかった。一度決めた決断を最期の一瞬まで貫き続けた。その在り方はとても歪で、醜悪で、それでいて……美しかった。

彼女は何を遺したのか、何処から来て、何処へ向かうつもりだったのか。それは今でも分からない。唯一つ、彼女が全うしたのは。

誰に対しても決して揺るがない、彼女自身の愛の在り方だった。

――――胸に灯る暖かさが、この瞬間熱さに変わった。

◇

「――――なに？」
「シュウ……ジ？」
　その変化は唐突だった。
　サクリファイは掴まれていた己の腕に気付かず、矢澤にこは幼馴染が目の前に自身を庇うように立っている事に今まで気付けなかった。
　速さの問題ではなく、ただ認識出来なかった。彼が動いたという実感がこうして目の前にいるのに掴めていない。
「何ですか、その輝きは？　何ですか、この熱さは？」

彼が身に纏う淡い輝きとそこから発せられる熱気、それはこれ迄のシュウジとは明らかに異なっていた。
「――にこちゃん、ありがとう。ここまで来てくれて。俺はもう、大丈夫だ」
その瞳に陰りはなかった。
「サクリファイ、アンタは尊敬出来る人って……いるかい？」
「何を、言っている？」
「俺にはいるよ。沢山、皆凄い人達ばっかりだ」
――男は、絶望を知った。
――男は、希望を知った。
哀しみを知り、怒りを知り、楽しみを知り、喜びを知った。
恩人と親友が亡くなり、哀しみと虚しさに溺れそうになったが、リモネシアの人達のお陰で立ち上がれた。――沈黙の巨蟹、悲しみの乙女。
時代の流れで気持ちが揺れ動いても、シオニーを助けるという目的を成し遂げた。――揺れる天秤。
喩え世界の敵になろうとも、彼は真実を追い続けた。――偽りの黒羊、知りたがる山羊。
世界の悪意が牙を剥いても、愛機のお蔭で乗り越える事が出来た。――傷だら

けの獅子。
怒りと憎しみに染まろうとも、強い欲望があろうとも決して呑み込まれる事はなかった。――――怨嗟の魔蠍、欲深な金牛

祖母の大きな愛と、幼馴染みの応援で、今一度彼は立ち上がる。――――尽きぬ水瓶、立ち上がる射手。
故に、喩え全てが夢幻で終わろうとも、進み続けると決めた。――――夢見る双魚。
そして今日も、矛盾を抱えながらもシュウジ＝シラカワ（白河修司）は限界を超える。彼もまた、ありふれた人間の一人なのだから。――――いがみ合う双子。
――――それは、シンカとは全く別の人間の可能性。多元世界に渡り、翻弄され、それでも育み、芽生えたモノ。
――――それは、人間の極致。独り（ボッチ）であっても孤独ではないシュウジが、多くの人達に出会い、学び、糧にしてきた事で得られたもう一つの到達点。
兆しから極みへ、シュウジは新たな境地へと足を踏み入れた。

その１８９

――――変わり果てた街並み、人気は無くなり、荒廃し、炎と砂塵が舞い上がる街に既に嘗ての面影はなかった。
人の営みに溢れていた光景は悲鳴と怒号に掻き消され、明日への希望は未来への不安へと変わっていく。戦時以来初となる都心部で起きた大災害、病院では多くの怪我人で溢れ、親から離れた子供達が声を張り上げて泣き叫んでいる。
この後に待ち受ける事を考えると矢澤にこは胸が締め付けられる思いだった。もう歌は歌えないのではないのかと、スクールアイドルは続けられないのかもしれないと。最後の高校生活で、漸く出会えた仲間と一緒に夢を追えるかと思っていたのに……。
しかし、その不安は自身の前に立っている彼の後ろ姿を見て四散する。全身を覆うように放たれる輝きと、彼女の不安を焼却する様に溢れ出す熱気。今までとは明らかに異なる彼――――シュウジは全ての元凶であるサクリファイを睨み付けていた。
「これが……貴方の全て、貴方の全霊ですか。――――成る程、成る程成る程成る程成

る程成る程成る程成る程成る程成る程成る程ッ!!」
「素晴らしいですわ！　単身で、己一人の力で、其処までの領域に至れるとは、スフィアもなく、次元力も無く、己の肉体のみで至れた貴方こそがまさに至高の――――」
「なぁ」
「……？」
「こうバカ正直に本当の事を言うのも気が引けたんだが、もうこれ以外の言葉が思い付かないから言わせてもらうけどさ――――お前、キモいよ」
　それは心の底からの侮蔑の言葉だった。呆れと達観、サクリファイに向けられたシュウジの瞳はその輝きとは裏腹に底冷えする冷たさを持っていた。
　そしてその一言が戦いの再開の合図となった。握り締められた腕とは反対の拳に力を込めて、サクリファイはシュウジの顔に拳を振り抜いた。これ程の至近距離、回避は勿論防ぐことも敵わないその一撃は間違いなくシュウジを捉えていた。
　そう、捉えていた筈なのに――――
「――――え？」
　――――なぜ自分は遥か空の上で無様に宙を舞っているのだろうか？　浮遊する身体、呆然となるサクリファイの身に次に起きた変化は全身が砕かれそうな程の衝撃だった。

「!?!?!?」

何が起きたのか分からなかった。何故自分はこれ程まで深いダメージを負っているのか、混乱の真っ只中に落とされながらサクリファイはまさかと思い視線を下にいるシュウジに向ける。

――――一見すれば彼の動きには何も変化もなかった。動いた様子も自分の攻撃に反応した様子もなく、その瞳はただ静かに此方を見据えている。

唯一変化があったのは彼のいつの間にか握られた拳から微かな煙が立ち上っていた事。

（まさか、私を打ち上げた？　ただの拳で？　ただの一撃で!?）

サクリファイの顔が初めて驚愕に歪んだ。楽しみ、怒り、哀しみ、喜びを取り込んだ事で愛という感情を知り、その愛の真髄が総てを受け入れる事だと知った彼女はこの世全てのあらゆるものを受け入れる事で己の力としてきた。あらゆる苦痛、あらゆる感情、あらゆる技能を受け入れたサクリファイはシュウジの拳を受け入れて己の力へと変えた。

既に彼の技は彼と拳を交えた事で習得し、そして凌駕していた。どれだけシュウジが腕を上げようと決して埋まらない差が二人にはあった。……あった筈なのだ。

覆すのは不可能とされてきたその差を彼は一息で飛び越えた。虫の息の筈だった。

深手を負い、死にかけで、心も折れかけていた人間がほんの些細な切欠で立上がり、信じられない底力を見せ付けてきた。
（これが……恋の力？　いいえ、いいえ！　そんな筈はない。そんな事は有り得ない！　私の愛が、慈愛が、慈悲が！　たかが小娘一人の恋心に負ける事は有り得ないのです!!）
恋という知り得ない感情をサクリファイは全力で否定する。己の愛こそ至上だと、己の愛こそが総てを救うのだと、それを信じて疑わないサクリファイは気付かない。
今自分の受けた一撃が彼女が愛すると宣うシュウジのモノだというのに、悦びを抱けなかった事実に……。
「ヘリオース!!」
サクリファイが叫ぶ。己の主の命を受けた黒に染まった巨人は、その眼光を瞬かせて彼女の側へと転移し、片手を上げてエネルギーを集約させていく。
瞬間、街は暗闇に包まれた。時刻はまだ日が昇っている時間帯の筈、不思議に思ったにこが空を見上げると……。
「なによ……あれ」
そこには影に隠れた太陽――――日蝕と呼ばれる現象が起きていた。太陽と月、恒星と衛星が重なり合った末に起きる星の自然現象。人の介在する余地など在りはしな

いその事象を空に浮かぶ化け物が意図的に引き起こしている。
　それを彼女が……矢澤にこが理解することは有り得ない。ただの少女でしかない彼女は今起こっている現象を前に不安に押し潰されず、息を呑んで気丈に振る舞う事しか出来なかった。
「――――大丈夫だよにこちゃん」
「シュウジ？」
　聞こえてきたのは幼馴染みの大丈夫という言葉、彼には分かっているのだろうか？
　何故日蝕が起きているのか、あの女が何をしようとしているのか、そしてこれから一体何が起きるのか。
　矢澤にこは何一つ分からない。ただ一つ彼女が確信を持って言えることは。
「ここから先、俺の後ろには何も通させはしない、君を――――守る」
　彼は、目の前にいる幼馴染みは今、一つの決意を己に刻んだ。絶対に傷付けさせないと、あらゆる脅威も一切の不条理も如何なる理不尽も、自分より後ろには通さず、守ると。
　らしくない宣言。しかし振り返って見せる彼の瞳には一欠片の虚勢や強がりの色はなかった。――――あぁ、やはり自分の知る彼とは違うのだと思う反面、やっぱりコイツは白河修司なのだと、矢澤にこは矛盾の結論に至った。

――――炎が降り注がれる。日蝕の隙間から溢れ出る太陽面爆発（フレア）がたった一人の人間に向けて放たれる。天からの一撃、個人は愚か国一つを破壊するには過剰過ぎる熱と破壊を秘めたエネルギーが濁流となって襲い掛かる。

触れただけで蒸発は確実。逃げ場もないその一撃を前にシュウジは片手を掲げ、受け止める。

幼馴染み諸とも消えるつもりかとサクリファイは眉を寄せる。つまらない、呆気ない幕切れだと嘆息しながら彼女は世界の終わりを見ようとして……。

「――――は？」

その表情は固まった。

炎は間違いなくシュウジを捉えていた。いや、そもそも外れる様な規模ではなかった。全てを焼き払うつもりで、この国ごと焼失させるつもりで放った。

その筈なのに……掻き消えた。まるで最初から無かった様に、極炎の濁流はまるで蝋燭の火を消すがごとく、呆気なく消滅した。何が起こったのかと目を剥かせるサクリファイが見えるのは無傷の矢澤にこと片手を翳したシュウジの姿だけ。

「掻き消した……!?」

ヘリオースの一撃を、嘗ての至高の神の核から生み出された神器の一撃を、太陽の神を冠する存在の炎を、人間が掻き消した!?　それも片手で!?

信じられない……処ではない。許されない所業、あってはならない事だ。自分の繰り出す一撃(愛)は須く受け入れられるべきなのだ。

「ダメ、ダメダメダメダメダメダメ!!　そんなのはダメ!!」

その顔は憤怒の形相の様であり悲哀の顔の様であった。自分の愛が嘗てない形で拒絶されたサクリファイはそれはダメだとシュウジに向って突進していく。

シュウジもまた正面から応えた。降りてくるサクリファイに彼もまた脚に力を込めて跳躍する。交差する二人、着地し、地面に降り立った二人はそのまま相手へと駆け、拳を、蹴りを、技を繰り出した。

サクリファイは総てを受け入れる事で己の力としてきた。あらゆる暴力を、悪逆を、悪徳を、能力を、力を、権能を。愛と称して取り込んできた。

既にその力は嘗ての御遣いとしての力を大きく凌駕し、サクリファイは次の段階に移行しつつあった。肥大化したソレは留まる事を知らずに今尚膨らみ続けている。怪物や化け物、そういった類いからにすら逸脱しようとしている彼女を――――シュウジは圧倒していた。

速さが追い付かない。鋭さが間に合わない。力に抗えない、技を吸収出来ない。以前は視えて模倣し、我が物としてきたシュウジの全てがまるで通用しなかった。

打ち合った拳が跳ね返される。放たれた蹴りはいなされる。突きは逸らされ、膝打

ちは防がれ、サクリファイの放つ打撃は悉く否定された。
対して、彼の打ち出す拳は吸い込まれる様に打ち込まれてくる。拳は容赦なくサクリファイの全身に打ち込まれ、防ごうとする彼女の防御すら破って突き刺してくる。
動きが見えず、動作が読めず、打ちのめされ、叩きのめされる。
「あ、あああぁぁぁっ!!」
狡い。狡い狡い狡い

よりも速く身体が動き、視えないモノまでもが視えるようになっていく。自分の筋繊維の1本1本から大気の流れ、相手の動作、その全てを把握し、どこへ打ち込めばいいのか本能的に理解する。

エネルギーの奔流、その繋ぎ目まで視えてしまう今のシュウジには喩え極大のエネルギーをぶつけても打ち消してしまうだろう。

繰り出されるサクリファイの拳、鼻先すれすれで回避したシュウジは返しの回し蹴りをサクリファイに放つ。放たれた蹴りはサクリファイの鳩尾を撃ち抜き、衝撃と共に吹き飛んでいく。

「どうして？　どうしてなのです？　どうして貴方は私の愛を受け入れてくれないのです？　私は貴方の全てを受け入れます。貴方の葛藤も、貴方の苦悩も、貴方の総てを、なのに……」

瓦礫の中から這い出て来るサクリファイ、その瞳には疑問に満ちていた。何故自分の愛が受け入れられないのかと、この身はあらゆる総てを受け入れる器となっている。受難も苦難も、悪行も善行も一切区別も差別もせず平等に受け入れる（喰い尽くす）形となっている。

なのに何故、目の前の男からは何一つ入ってこないのか。あの輝きがそうさせているのか、そもそも何故彼はいきなりここまでの強さを手に入れたのか。

あの女か。あの小娘がそうさせているのか。悔しい、悔しい悔しい悔しい悔しい悔し

い悔しい悔しい!!　彼の総てを受け入れ(取り込む)るのは私の筈なのに、彼の総てを引き出し、喰らい尽くすのは私しか有り得ないのに!!

理不尽な程の怒りが彼女の内から涌き出てくる。サクリファイの情欲ともいえるソレは彼女を通してヘリオースに流れ込む。嫉妬と怒り、そして焦がれる程の愛を語った彼女は……。

「悪いが俺は童貞でな。アンタみたいな女に俺の純潔を捧げるつもりはない」

的を射ている様で掠りもしないシュウジの返し(カミングアウト)の言葉はサクリファイの何かをブチ切れさせるには充分な威力を秘めていた。

「ヘリオおおおおおス!!」

サクリファイが叫びヘリオースが動き出す。両手を空に掲げ、ありったけのエネルギーを集めて顕現させるのは――――太陽だった。

空に浮かぶ太陽と同質のエネルギーの顕現。都市を覆って余りあるエネルギーの塊、素人の目から見てもただ事ではない現象がそこに現れていた。熱量で上昇気流が起きそうなのにその様子が微塵もない事も周辺の住民達を余計に不安に煽っていく。

矢澤にこはただ祈った。胸元で手を組み、修道女でもない癖に、彼女はただ幼馴染みの安否を祈り続けた。

　この世界が彼を強くさせたの言うのなら、あの小娘が彼の全てを引き出したと言うのなら、世界ごと総てを焼却すればいい。そうなって初めて彼は本当の絶望を私達に晒してくれる。
　そう信じて疑わないサクリファイはヘリオースに造り出した太陽の投擲を命じる。圧倒的熱量、空は燃え、触れた雲は蒸発し、ただ在るだけで全てを蹂躙するエネルギーの塊がシュウジに目掛けて放たれる。
　グランゾンは使えない。重力制御で押し留めるのは難しい。そんなどうしようもない状況を前にして……。
（……笑ってる。ですって？）
　彼は、その顔に笑顔を浮かべていた。
　――――不思議と恐怖は無かった。目の前の脅威に対する不安もなく、状況に対する焦燥もなく、彼の胸の内にあるのは祖母の大きな愛を知り、幼馴染みの応援を受けて立ち上がれた事への感謝という暖かい気持ちで一杯だった。
　思えば、自分は守られてきたばかりだった。祖母に育てられ、祖母の愛で生かされ、祖母の喪失で悲しみにくれていた自分を幼馴染みの少女が自分に立ち上がる力を与えてくれた。
　どうすれば、彼女達の恩に見合うお返しが出来るのだろう。サクリファイと打ち合う

最中、彼の頭の隅にはそんな彼女達に対する恩返しの仕方だけだった。
未だに答えは分からない。だからせめてこの塊を消し飛ばす事から始めよう。
握り締めた拳に力が宿る。シュウジの纏う輝きが、込められた拳に集まり一点に収束されていく。
「人越拳――――終極奥義」
膨れ上がった太陽、爆発まであと数秒という所で――――。

〝絶拳〟

世界は白に包まれた。

その１９０

――――静かになった。

矢澤にこが次に目を開けた時には荒れ狂っていた大気は鎮まり、御伽噺の様な光景もＳＦ染みた巨大ロボットも全てが消え失せていた。

眼前に広がるのは何処までも広がる空、曇天は砕かれ、雲は切り裂かれ、其処には傾き日が沈み始める夕焼けの光景がただ広がっていた。まるで今まで目にしていたものが夢だったかのように。

しかし、それは間違いなく現実だった。辺りは未だに瓦礫の山で覆われ、遠くからはサイレンの音があちこちから耳に入ってくる。普段の日常とは全く異なる惨状、彼女はあの光景がつい先程まであったモノなのだと理解する。

「――――シュウジ？」

次に彼女は気付いた。幼馴染みのアイツが、血だらけになってまで頑張った彼の姿が

無い事に――――このままではいけない気がした。胸に涌き出てくる焦りと不安を覚えたにこは戸惑いながら変わり果てた街を行く。

彼は何処に消えた？　決まっている。僅な思考を巡らせ、答えを見出だした彼女は迷うことなく其処へ向かう為、足を前に進めた。

◇

――――カン、カン、カン。

音を鳴らせて金属製の階段を昇る。通路を歩き一番奥の部屋の扉を開ける。夕焼けの光が部屋の中へと注がれ、舞い上がる塵が光を反射する。

「……やっぱ、そう言う事だよな」

寝室へと入りそこで横になっている男を見て彼――――シュウジはどこか納得した様

子で頷いていた。
寝室に敷かれた布団の上で仮眠を取っている青年、それは間違いなく嘗ての自分で、今も気持ち良さそうに眠っている。外があれだけ騒がれているのに、住まいの屋根が吹き飛んでいるのに、目の前の男はそんな事など知る由もなく寝息を立てている。
ここまでくれば最早疑いようがない。目の前の〝向こう側に行く前〟の修司（自分）は同一の存在たるシュウジ（自分）がいる事で強制的に眠らされているのだと。そしてそれこそが先のサクリファイとの戦いでグランゾンを出せなかった理由なのだとシュウジは察した。
全ての始まりはグランゾンがシュウジを己の乗り手だと誤認した事から始まった。世代を越えて、更に突然変異として生まれてきたシュウジの肉体にはグランゾンを起動するに足るシュウ＝シラカワの因子が過去最高レベルで渦巻いている。祖母であるサフィーネが見誤る程、故に彼女はグランゾンが誤認起動するという未来までは読めなかった。
〝向こう側〟へ送られたシュウジがグランゾンと共に幾つもの困難を越えて力を得て、成長し、進化し、シンカを得てゼロとなり理を越えて元の世界に帰還し……。
そこで折れてしまった。自身の起源を知り、幼馴染みと出会い、自分の居るべき場所が此処だと思い嘗てのシュウジ達は次のシュウジを向こう側へ送り出していた。
それが何回繰り返されてきたのかは分からない。ほんの数回なのか、はたまた百回

以上なのか、今回が初めてなのか……それとも天文学的数値の回数を繰り返して来たのか、それは定かではない。

実際、回数は問題ではなかった。理由も、心が折れたのか、それとも何か訳があったのかはこの際重要ではない。大事なのは今この瞬間、自分もまたその選択肢に突き付けられていると言うこと、今この瞬間が自分が選べる最後の選択なのだと。

向こう側の世界へ戻り、宇宙の大崩壊を阻止するのか、それともここにいる修司（自分）を向こう側に送り出してシュウジ＝シラカワとして戦わせるのか。

だが、その繰り返しの回数には限度がある。ある時は黒歴史の一つとして記されてきたシュウジとグランゾン、幾度と繰り返されてきたその行いはしかして向こう側に正しく反映されはしなかった。嘗ての螺旋王が語ったグランゾンの姿を見たという話も恐らくは其処から来ている時間的矛盾（タイムパラドックス）の一種なのだろう。

何度やり直しを繰り返してきても……宇宙の大崩壊は止められない。ここでまた修司（彼）を向こう側に送っても、それは単なる時間稼ぎであり問題の先送りでしかない。

――――もう、シュウジに残された選択肢は無かった。

幼馴染みの夢を見たいと思ったから、彼女の歌をもう一度聴きたいと願ったから、シュウジ＝シラカワの選択肢は初めから一つしか有り得なかった。例えそれが二度と故郷の世界へ戻れない事を意味しているのだとしても。

宇宙の大崩壊を防ぐ方法、それは１２に分かたれたスフィアを用いての時空修復に他ならない。人の感情を、可能性を用いて向こう側の世界をあるべき姿へと戻す。

それは即ち、この世界との繋がりを断つという事、第二次大戦の時にサフィーネ＝グレイスが理を越えて生まれた綻びを修繕すると言うこと。それはこの世界との繋がりを完全に遮断する事を意味している。

つまるところ、シュウジにはそれしか無かった。向こう側の戦士達、Ｚ―ＢＬＵＥを信じて此方側へ残る選択肢を選んでもそれは二人の白河修司（シュウジ＝シラカワ）という負債をこの世界は負うことになる。いや、下手をすればこのまま修司の方が永遠に目が覚めなくなる……なんて事態が起こりかねない。

歪みを残さず、後腐れなく、綺麗さっぱり問題を解決するにはやはり一つしかない。名残惜しい気持ちはある。心苦しい気持ちはある。本音を言えば戻らず、ここで平穏に過ごしてしまいたい。幼馴染みの彼女の為に残りの人生を費やしたい。

だけど、それと同じくらい向こう側に大事なものが出来てしまっていた。シオやラトロワ、リモネシアの皆、ヒビキや向こう側で出会えた人達、彼等を自分とは無関係だと切り捨てるにはシュウジは向こう側に居すぎてしまっていた。

見捨てるという選択は出来ない。嘗てのサフィーネがシュウではなくシュウジを選んだ事と同じ様に、シュウジもまた選ぶ時が来た。

――――心が締め付けられる。寂しさで泣きそうになる。幾つもの修羅場や死を経験してもやはり自分は情けないままだなと、シュウジは自嘲する。
「――――博士、一つ質問してもいいですか？」
『――――何でしょう？』
「俺がこの世界から去ったら、この世界はどうなります？」
『――――世界にはあるべき姿を保つ為の修正力というものがあります。本来ならば有り得ることはない事象、あってはならない現象を無かった事にするためにその力は働きます。今貴方が世界から修正されないのは既に貴方の存在自体が一つの世界よりも強大だからに他なりません』
「じゃあ、その俺がいなくなったら？」
『修正力は働き、貴方の――――シュウジ＝シラカワがいたと言う事実は抹消されます。あらゆる記録から、あらゆる記憶から、そしてあらゆる事象から、貴方は最初からいなかった事にされます』
「――――そっか」
　普段なら淡々と事実だけを告げる博士だが、何故かその口調は少し感情の色が見えた気がした。それが同情からなのか、それとも別の意図があるかは分からないが、それでも自分に何かしら感情を抱いている彼にシュウジは何処か安心していた。

その時だ。眠っている自身の枕元から携帯の着信音が鳴る。誰だと不思議に思ったシュウジが携帯を手に取り画面を覗き込むと、其処に映し出されている名前に心臓が高鳴った。

――――相手からの電話を受け取るのに然程悩みはしなかった。

「……もしもし？」

『シュウジ！　　アンタ無事!?　　今何処にいるの!?』

「母さん」

それは、自分を産んでくれた女性の声だった。若くして父と結婚し、子育ても碌に出来ず、働く事にばかりで祖母に任せきりだった自身をいつも責めて悔やんでいた母の……慌てに慌てた声だった。

『今、父さんと一緒にそっちに向かってるんだけど、そっちは今どうなってんの!?　ニュースは何処も似たような事しかやってないし、被害状況が分からないの！　　アンタは怪我とかしてない？　　矢澤さん所の子供達と一緒ならこれから言う所に合流して欲しいんだけど!?』

――――笑みが溢れた。自分を心底心配してくれる母を、近くで運転しているだろう父の声を耳にしてシュウジは改めて思い知り、そして思い出した。自分が如何に恵まれていた事を、自分がどれだけ幸せだった事かを。

幼い頃、父と母が忙しかったのは自分を育てる為にその身を犠牲にしてくれたこと、休みの日には必ず家族皆で外出して、近くのファミレスで外食した事。

若い内ならもっと自分の為の事をすれば良いのに、父と母はそれら全てを擲って自分の為に費やしてくれた。祖母が亡くなった後も自分を愛し、育ててくれた。

――――そして。

（あぁ、そっか。俺、その為にバイトしていたんだ）

自分が、何の為にバイトをしてきたのか。寝室の壁に掛けられたカレンダーを目の当たりにしたシュウジは自身の内に最後の悔いが生まれた事を自覚する。

カレンダーに記された三つの赤い丸。それは自身が父と母に対して送る最初のプレゼント、家族旅行の決行の日だ。その前日にバイトのお金が目標金額まで溜まり、父と母の有給が重なる唯一の日。それはこれ迄働き詰めで碌に休んでこなかった二人に対するシュウジのちっぽけな贈り物だった。

（あぁ、くそっ。後悔ばかりじゃねぇか）

電話越しから聞こえてくる母の声に、シュウジの目から大粒の涙が溢れてくる。決めた筈なのに、そうあるべきだと自分に言い聞かせたのに、押し込めた本心が喉の奥から出てきそうになる。

……でも。

「大丈夫だよ母さん。俺は、大丈夫」
　シュウジは喉の奥から出てきそうになる言葉を必死に圧し殺した。無理矢理にでも笑顔を浮かべ、壁に寄りかかり、顔を上げて彼は言葉を紡ぎ出す。
「――――母さん。俺、ずっと言えなかった事があるんだ。本当はもう少し後に言うつもりだったけど、今しかないから」
『――――え？』
　自身を産んでくれた事、自身を犠牲にして毎日自分の為に働いてくれた事、面倒を見てこなかった自身を責めながら、それでも寂しくない様に構ってくれた事、自分の為に本気で叱ってくれた事。
　産んで、育み、見守ってきてくれた全てに対して。
「――――ありがとう。俺、二人の息子で本当に良かった」
『――――シュウジ？』
　通話越しからでも伝わってくる母の唖然とした様子、普段とは違う自分の息子に彼女が問い詰めるよりも速く、シュウジは通話を切った。
「本当、俺ってばつくづくどうしようもないよな。二人の為の親孝行（プレゼント）も碌にしてやれないなんて……」
　自分の不甲斐なさを痛感しながらも、しかしとシュウジは振り返る。眼下に眠るも

う一人の自分にシュウジは聞こえていない事を理解しながらもそれでも言葉を紡いだ。
「ここから先は、お前だけの人生(モノ)だ。精々好きに生きろ。……でもな」
そういってシュウジは修司の額を軽く小突く。多少強めにやったから起きてからのコイツの反応が楽しみだと笑いながら、懐からある一冊の手帳を取り出した。
「悪いが、こっちの新しい方は貰っていく。此方の古いのは置いていくから……好きに使え」
大切に、慈しむ様にその手帳を彼の枕元に置いたシュウジはその部屋を後にした。
既に、この部屋は……もう、白河修司の部屋ではないのだから。

◇

「やっぱり、ここへ来ちゃうよな」
　シュウジが最後に訪れたのは自身の原点とも言えるあの公園だった。既にその面影はなく、ヘリオースの一撃の所為で見るも無惨なモノへと変わり果ててしまっている。
　既にサクリファイはあの一撃でヘリオースと共に向こう側へと追い返している。またもう一度奴が向こうから這い出てくるかは分からない以上、シュウジにはもう悠長していられる時間はない。早いところ向こう側に戻って奴との決着を着けなくてはならない。
　後ろ髪を引かれる思いでグランゾンを呼び出そうとする。今度は上手く呼び出せそうだ。眼前に広がるワームホールを見て安心したその時。
「シュウジ！」
　彼の背中に声が掛かる。嗚呼、何でだ。何故今なんだ。自分の行動の遅さに歯噛みしながら振り返る彼の目に写るのは。
「アンタ、一体……何処に行くつもりよ」
　息も絶え絶えになりながらも、それでももう一度シュウジに会うために全力を尽くした幼馴染みの少女が、そこに立っていた。

その191

――――――最初は単なる好奇心だったのかもしれない。いつも優しそうなお婆さんと一緒にいて、ニコニコと笑みを浮かべている。何がそんなに嬉しいのかと問い詰めたくなる位いつも笑っていて、彼のお婆さんもニコニコとやはり笑顔を浮かべていた。手を引かれて歩いていく二人、そんな日常のごく一部に過ぎない光景を私はマンションの自宅の窓からいつも見掛けていた。

そんなある日、彼一人で公園に向かう所を見掛けた私は気になって後を付けていった。いつも一緒にいるお婆さんはどうしたのだろう、暗い表情でいつも笑顔を浮かべていた子とは全く別人の様に沈んでいた彼がどうしても気になってしまった。

公園に辿り着いた彼がしていたのはブランコやベンチに座るだけでなにもせず、暗くなるまでジッと其処にいた。まるで誰かの迎えを待っているかの様に……。あの辛そうにしているアイツの顔は今でも良く覚えている。

後で母から聞いた話だと、彼といつも一緒にいたお婆さんは病で亡くなったらしく、以来ずっと彼はあの調子で公園に向かっては祖母が迎えに来るのを待っているみたい

なのだ。二度と帰ってくる事はない祖母を、もう会えないであろう祖母の迎えを、彼は今も待ち続けているのだ。

同情はした。気の毒だと、可哀想だと、当時まだ四つになったばかりの私では漠然とそう思う事しか出来なかった。可哀想だから、あの子はお婆さんを失ったばかりで気持ちの整理が付いていないから、話を聞いた父と母はそんな事を言っていたが、私の胸中は別の感情で埋め尽くされていた。

悔しい。何故アイツは笑っていないのか、いつもニコニコと笑顔を浮かべているアイツが、どうしてあんな悲しい表情で下を向いているのか。両親から話を聞かされたのに、それなのに私はそんな気持ちで一杯だった。

翌日、私は依然としてお婆さんを待ち続けるアイツに声を掛けた。下を向いて泣くのを我慢している彼に、私は可能な限り親しげに言葉を投げ掛けた。

『何だよお前、余計なお世話だ。ほっとけよ』

返ってきたのは唸るような声と共に投げ返してきた拒絶の一言だった。当時の彼にとってこの時の私は祖母の帰りを邪魔する障害物にしか見えていなかったのだろう。幼稚園児とは思えない凄みと迫力に負けた私は下腹部から滴る暖かい液体を少しだけ漏らしてしまい、そそくさと逃げ帰ってしまった。

しかし当時から負けん気が強かった私は一度の失敗で折れる程素直ではなく、その日

以降もしつこく彼の所へ歩み寄っていった。どれだけ拒絶されても、どんなに酷いことを言われても、私はもう一度彼の笑顔が見たくて何度も声を掛けた。

それでも一向に笑顔を見せない彼に遂に行き詰まりを感じていた私は、その日テレビに映る歌手の人、アイドルという存在に出会えた。煌びやかで鮮やかに踊り、可憐な歌声で人々を魅了し、熱狂させるアイドル。これならきっとアイツにも届くのではないか、笑うことを忘れた彼に再び笑顔を取り戻せるのではないか。

自分なりの振り付けを考えて歌詞を作り、それらを覚えた私がもう一度アイツの前に現れたのは最後に追い払われてから少し日を跨いだ数日後、この日は雪が降る寒い夜だった。

私は歌った。初めて人の前で、初めて自分の作った曲で。拙く、滑稽に、それでも真剣に、そして何よりも楽しく、私は彼の前で歌い続けた。

しかし所詮は子供の浅知恵、振り付けもバラバラで呼吸も荒く、子供のお遊戯でももう少しマトモなモノを作れそうな――――そんな酷い出来ばえだった私の歌を彼は綺麗だと言って、笑顔を見せてくれた。

――――その後、私と彼の関係は続いた。幼馴染みとして、友人として、彼の隣はいつの間にか私の定位置となっていた。妹弟達の面倒を一緒に見て、彼のご両親とも仲良くなって、ずっとこんな関係が続くと思っていた。

……ねえ、シュウジ。アンタは今幸せ？　いつもみたいに笑えている？　私には、そうは見えない。

だから、一人にさせない。アンタが泣きそうになったら私はいつでもアンタの所に飛んでいく。だって、私にとってアンタは――――――。

◇

「ニコちゃん……」

肩で息をして、疲労困憊となっている幼馴染みを見て、シュウジは表情を曇らせる。開きかけていたワームホールを消して向き直った彼は歯を喰い縛って彼女に言葉を投げ掛けた。

「――――怪我、していない？」
「お陰様でね。明日は筋肉痛確実だけど」
荒くなっていた息を漸く整え、強がる彼女を見てシュウジは苦笑いを浮かべた。
「それで、アンタ今何をしようと……いえ、何処に行こうとしていたの？」
「……それは」
「答えて」
それは珍しく妥協を許さない彼女の強制の言葉だった。誤魔化す事は許さない。嘘も偽りも無く全てを話せと彼女の瞳が訴えてくる。話を逸らす事も許さないだろう矢澤にこの姿勢を前にシュウジは深いため息を吐いた。
街がこうなったのは自分にも責任はある。街に住む人々にも、そして目の前の幼馴染みにも沢山の迷惑を被ってしまった。目の前の彼女が話せと言っている以上、全て話す必要があるのだろう。
シュウジは全てを口にした。自分がこれ迄何をしていたのか、自分が何者で、何の為にこの世界にやって来たのか、そして自分がこれから何をしようとしているのか、掻い摘みながらもシュウジは事の全てを彼女に話した。
彼女は……幼馴染みの少女は静かにそれを聞き入っていた。最初から最後までただシュウジの話を耳にしていた。顔を俯かせているから表情は見えない、怒っているの

か、悲しんでいるのか、人の身でしかないシュウジには分からない。
　しかし、予感はあった。彼女なら、きっと矢澤にこなら、こんな時きっと自分が予想しない事を言い出すのだと。シンカの力とか次元力とか、そう言ったモノではなく、白河修司として彼女と長い間培ってきた直感がそう囁いていた。
「分かったわ。なら、私も連れていきなさい」
　やっぱり。顔を上げてキッパリとそう言い切る幼馴染みにシュウジは思わず吹き出しそうになる。嗚呼、やはりこの娘は自分の知る矢澤にこなのだと、シュウジは笑みが溢れた。
「言っておくけど、私、本気だからね。喩えアンタがイヤだと言っても引っ付いて行くんだから」
　知っている。目の前の幼馴染みが本気になった時はとことんしつこくなる。どんなに拒絶されても、どれだけ酷く扱われても、彼女は目的の為にどんなことにも耐えて頑張れる女の子なのだ。そんな事はあの日からずっと思い知っている。
　自分と一緒に来たら二度と家族には会えない。両親や妹弟、スクールアイドルの皆、夢に向かってこれまで努力してきた毎日、それら全てが消えてなくなる。それを知って尚、彼女は自分と一緒に来ると言っているのだ。
　彼女が一緒にいてくれればどれだけ心強いだろう。きっと、これからどんな苦難に

陥っても彼女がいれば乗り越えられる気がする。耐えて行ける気がする。
きっと誰よりも強くなれる気がする。彼女の言葉を、声を、それらを耳にするだけで自分は何度も限界を超えられる気がする。
――――でも。
「なぁにこちゃん、覚えてる？　君が初めて歌を披露した時の事」
「覚えているわよ。――――忘れられる訳ないじゃない」
「あの頃は随分と君に酷い仕打ちをしたよね。遊びに誘ってくれた君を何度も何度も断って、今更許される事じゃないけど――――ごめん」
「それこそ今更よ。アンタは私のファン1号で、アタシはアンタのアイドルなんだから」
　嘗て酷く当たり散らした事を過去の事だと笑い飛ばすにこちゃん、そんな彼女に自分は何度も救われた。だからこそ。
「なぁにこちゃん。一つ約束しよう」
「約束？」
「これから先、どれだけ時間が掛かろうと必ず君の歌をもう一度聞きに来るよ。君に会いに、君の歌声を聴く為に、絶対戻ってくる。だから――――夢を、諦めないで欲しい」
　彼女は連れては行けない。彼女の意志がどれだけ強く、固いモノだとしても、夢を諦める矢澤にこだけは見たくはない。自分と言う人間を理由に夢を投げ出す彼女

をシュウジは見たくはなかった。
　スクールアイドル、その頂点に立って更にはトップアイドルにも君臨する。矢澤にこの初めて抱いた夢、その情景をシュウジは見たいと思った。
　幼馴染みの小さな体が震える。さっきよりも強く、手を拳に変えて握り締める彼女にシュウジは申し訳なく思った。
　故に、だからこそシュウジは彼女を約束という形で引き剥がそうとする。それが絶対に叶わない偽りの約束だとしても。
「なによ……それ、そんなの、そんな言い方、狡いじゃない」
「……ごめん」
「アンタはそれでいいの？　ボロボロになって、死にそうになって、今も傷だらけなのに……イヤよ。私は、アンタが私の知らない所で怪我するなんて、見たくない」
「俺は平気だよ。向こうで鍛えられたからさ、怪我だってすぐに治るし、そうそう簡単にやられたりは」
「そう言う事じゃないでしょ!!」
「――――っ」
「平気な訳が無いじゃない。幼馴染みが――――好きな人が、ボロボロになっているのに、平気でいられるわけないでしょう」

それは、初めて彼女の流す涙だった。本気で怒って本気で悲しむ、自分の為に涙を流す優しい少女が其処にいた。

嗚呼、そうか。漸く分かった。自分がどうして彼女に執着しているのか、どうして頑なに連れていきたくないと思っているのか。

彼女は自分に取っての恩人で、大切な人で、立ち上がる力をくれた人、優しくておっちょこちょいで、お調子者で、夢に向かって何処までも一生懸命な彼女。

そんな矢澤にこに自分は、白河修司（シュウジ・シラカワ）は――――恋をしているのだ。

やはり、自分は情けない。自覚した途端別れが惜しくなった。胸が苦しくなって、張り裂けそうで、今にも大泣きしてしまいそうだ。

そんな自分の胸中を埋めるようにシュウジはにこを抱き締めた。

「――――っ」

抵抗は無かった。突然の抱擁に硬直するが、震えているシュウジの体に気付いた彼女は彼の大きくなった背中に手を回し、優しくシュウジを包み込んだ。

それは短い抱擁だった。一分も満たない僅かな時間、シュウジからしてきた抱擁はやはりシュウジから離れていった。その事を名残惜しく思いながらも、穏やかな表情を浮かべている彼にニコはもう何も言えなくなった。

「ニコちゃん」

「うん」
「俺を――――頼む。知っての通り情けない奴だから、悪いんだけど面倒を見てやってくれないか」
「シュウジ……うん、分かってる。私、頑張るよ　アイツが幸せになるように、アイツが誰かを幸せに出来るように、私も絶対に頑張るから――――だから！」
「アンタも、自分の幸せを掴みなさい！　使命とか、他の誰かの望みとか関係なしに、アンタ自身の幸せを手にいれなさい!!」
　涙を流して、それでも笑顔を張り続ける幼馴染み。きっとこれが最後の別れになる。それを理解した上で尚シュウジの為に何かを残してやろうと懸命に言葉を探している。
　嗚呼、やっぱり自分はこの人に恋をしているのだと、改めて自覚したシュウジは彼女の額に指を置いた。
　トンっ。軽く、優しい接触。すると途端に彼女の瞼は重くなっていく。これ迄の緊張と疲労、意識を繋ぎ止めていた唯一の糸を断ち切られた矢澤ニコが最後に目にしたのは。
「ありがとうニコちゃん。俺も、これからも頑張っていくからさ」
　優しく頬笑む幼馴染みの心からの笑顔だった。

意識を絶たれ、眠りについた幼馴染みを抱き抱えてシュウジは辺りを見渡す。サクリファイの所為で唯でさえ酷い有り様だった公園が見るも無惨な事になっている。そんな中、唯一無傷だった石造りのベンチを見付けたシュウジは彼女を其処に寝かせた。

「――――こんな形で別れるのは気が引けるけど、良いよなトレーズさん」

時期的には暖かいが夜になればその限りではない。夜風に晒されて彼女が風邪を引くことを恐れたシュウジは親友から受け取った白のコートを彼女の体へソッと被せた。――――これで、本当におしまい。

名残惜しさはある。悔いはある。辛いし苦しいし、正直声を出して泣き叫びたい気分だ。

しかし、それ以上の――――答えを得た。自分なりの、幼稚で浅ましい願いだが、それでも一つ目的が出来た。

好きな人がいる。好きな人が一生懸命に生きていく世界を、好きな人が夢を叶える世界を守ってやりたい。後悔も苦しみも辛さもあるが、それを飲み干して前に進む力を

シュウジは得た。

嘗て、この公園でシュウジは立ち上がる力を得た。どんな困難にも、逆境にも耐え抜き、頑張り続けるという力を得た。

それは、人から見れば呪いにも近いモノに見えるかもしれない。折れて逃げて妥協するのも生き延びる一つの手段、それは決して侮蔑したり軽蔑の対象にはなり得ない。

しかし、それでもシュウジは彼女の歌に希望を見出だしていた。彼女の歌をもう一度聴きたいから、それだけの理由でもシュウジは頑張り続けると決めた。

シュウジにとって矢澤にこは原点（オリジン）だった。自身の始まりで、切っ掛けで、そして――――恋をした人。

そう、あの日シュウジは恋をした。雪降るあの夜から白河修司（シュウジ＝シラカワ）は矢澤にこに恋をしている。

自分の恋は自分で守る。彼女が言ったその当たり前を守るために。

「――――行ってきます」

世界に孔を開け、シュウジはこの世界から旅立った。

『――――バカな子』

「――――」

『あのまま幸せを受け入れておけば良いのに、ワザワザ自分から手放すなんて、お陰で私の決断が無駄になったじゃない』

「――ありがとう。お婆ちゃん、お婆ちゃんのお陰で俺、幸せだったよ」

『小僧が生意気言うんじゃない。――――約束したんでしょう？　幼馴染みのあの娘と、だったら分かってるわよね？』

「うん」

『なら、私から言えるのは一つだけ――――イキナサイ。他の誰でもない、あなた自身の願いの為に』

「あぁ、行ってくるよ。フィーネお婆ちゃん」

◇

「――――うぁぁぁぁ、よく寝た」

大きな欠伸と共に起き上がり、携帯の時刻を見る。何だか長い間眠っていた気がするが、それでも予定より早く起きれた事に少し驚いた青年は枕元にあるモノに気付く。

「――――なんだこれ、手帳？」

それは随分使い古された手帳だった。表紙はボロボロで今にも破れてしまいそうな程に使われた跡のある手帳、こんなもの持っていただろうか？　不思議に思った青年は興味本位で手帳を開くと。

「なんだこれ、何にも書かれていない」

ボロボロの表紙とは裏腹に中身は真っ白だった。新品同様、文字は愚か染み一つな

い綺麗な状態となっている手帳の中身、表紙とは正反対の手帳に不思議に思う青年だが、何故かその手帳を捨てようとは思えなかった。

何故か、とても大事に思えるその手帳を懐にしまい、青年は外出の準備を始める。たまにはバイト前に外を回るのも悪くない。バイトの目標金額まであと僅か、青年は――

――白河修司は逸る気持ちを抑えながら自室を後にした。

「――――ちゃん、ニコちゃん！」

「あ、うぅん？」

「ニコちゃん！」

「はえ!?」

突然耳元で響く大声に少女は慌てて起き上がった。何で自分はこんな所で寝ているのか、辺りを見渡すと自分を心配した様子で見つめる八人少女たちがいた。何れも同じチームのスクールアイドルとして活躍する仲間たち、どうして彼女達が此処にいるのかと混乱する頭で少女が――――矢澤にこが訊ねると。

「ここ、絵里ちゃんの家の通り道だからさ、ここで見掛けた絵里ちゃんが寝ているニコ

ちゃんを見付けて」
「中々起きないからビックリしたわよ。このまま起きなかったらマキのお父さんの病院に運ぶつもりだったんだから……」
「そうだったの、なんか……悪いわね」
「に、ニコちゃんが！」
「素直に謝った!?」
「明日は槍が降るにゃ～！」
「どういう意味よ!?」
　自分の無事を知るとなると途端にいつもの調子でからかってくるメンバー達、色々とあったけど今はこのメンバーとスクールアイドルをやるのが楽しくて仕方ないニコにとってそれはとても嬉しい事だった。
　――なのに。
「ニコちゃん？」
「どうかしたの？」
　何故だろう。どうして自分は何かを探そうとしているのだろう？　何か大事な事があった筈なのに、それが何なのかまるで思い出せない。
　いつも通りの街並み、いつも通りの光景、遠くから聞こえてくる人の営みの音、

何もかもがいつも通りなのに何故か今の矢澤にこには違う光景に思えてしまう。
何故か、大事なモノを見落としている気がする。そんなとき、公園の出入り口から見慣れた一人の青年が通り掛かってきた。
「はぁー、この公園まだあったんだぁ。何だか懐かしい――――あれ？　ニコちゃん？　それに其処にいるのはμ’ｓの皆さん？　どしたのこんな所で？」
瞬間、少女は掛けられていたコートを友人の一人に投げ渡し、青年へと駆け出した。突然胸元へと突撃してくる幼馴染みに驚きながら受け止めた青年は慌てながら彼女にどうしたのかと問うた。
「ど、どうしたんだよニコちゃん、いきなりタックルなんて、俺に何か――――」
「う、あ、あぁぁぁぁぁぁっ!!!」
「に、ニコちゃん!?」
「ちょ、アンタ!!　ニコちゃんに何したのよ!?」
「ヴェェイ!?」
いきなり突撃してきたかと思えば今度は声を上げて泣き出した幼馴染みに青年は勿論少女達も驚愕した。
――――何故、自分は泣いているのだろう。どうしてこんなにも心が苦しいのだろう。

分からない。どんなに必死に思い返そうとしても、その一切が分からない。この気持ちを吐き出せば、沢山の涙を流せば少しはこの気持ちは晴れるのだろうか？

声を張り上げて泣き続けるニコ、そんな彼女を修司は頭を撫でて優しく受け入れ続けていた。

◇

「――――なぁ、俺、これで良かったのかな」

その問い掛けは誰に対してのものなのか。

「俺、間違えてなかったかな。ニコちゃんを、悲しませたりしなかったかな」

視界が滲んでよく見えない。声が掠れて上手く言葉がでない。

「――――俺、頑張るから、また、明日から頑張るからさ。だからさ……今は、泣いても良いよな。グランゾン」

コックピット内で男の泣き声が響き渡る。誰にも聞かれず、聞こえる事のないそれは彼が泣き疲れるまで続いた。

そんな相棒を今は好きなだけ泣かせてやろう。彼の相棒である蒼き重力の魔神は静かに目の前に広がる二つの地球を見据えていた。

その１９２

Ω月ζ日

現在、自分はＺ―ＢＬＵＥに合流すべくグランゾンと共に周辺宙域を探索している。自分達を転移させたワームホールは多くのバスターマシン達によって抑えられており、今の所は安定している。

彼等の労力を減らす為にあのワームホールを破壊して憂いを断とうとも考えたが、まだＺ―ＢＬＵＥの皆が戻って来ているか分からない現在の状況では、そんな事をするのは下策といえる。あの巨大なワームホールを消すのはＺ―ＢＬＵＥの皆が此方に戻ってきてからの方が良いと判断し、今はまだ放置しておくにする。

……いや、違うな。色々それっぽい事言って誤魔化しているが、要するに自分はまだ未練があるのだ。あの世界に、ニコちゃんや両親が住んでいるあの世界に戻ることを、今になってまだ自分は捨てきれていないのだ。

Ｚ―ＢＬＵＥの所在なんて此方から暗号通信を送れば一発で分かるのにそれをし

ないのも、偏にそれが理由に過ぎない。――――情けない、いつまでメソメソしているのだろう。分かっていた事なのに、自分で決めた事なのに、未だに自分は元の世界に戻る事を諦めきれないでいる。

この新しい手帳、新品で手触りも違うのにまるで置いてきたあの日記の続きを書いているみたいだ。まだ自分とあの世界は繋がっている。まるでそう言われてるみたいだ。

――――だから、決めた。いつか、自分は必ずもう一度あの世界に戻る事を、もう一度ニコちゃんの歌を聞きに行こう。あの時した約束を果たしに行くことをこの瞬間自分は決意した。

博士は……何も言わなかった。否定も肯定もせずただ『そうか』の一言だけ呟いて後はそれっきり、今も話すことは出来るのに互いにそれをしようとしない。

今は、そっとしておくべきなのかもしれない。いや、もしかしたら自分の方が博士に気を遣われてるのかもしれない。何かと自分に気に掛けている博士の事だ。きっと自分が立ち直る時を静かに見守っていてくれているかもしれない。

なら、今はその厚意に甘えて気持ちを落ち着かせる事に専念しよう。とてもじゃないが、今の自分は人様の前に立てる状態じゃない。

別れたくない別れがあった。離れたくない離別があった。苦しくて、悲しくて、辛くてどうしようもない気持ちで一杯で、今この瞬間も泣きそうになる。

でも、進み続けると決めた。立ち止まっても、足踏みしても、自分はこの道を進み続けると決めた。――――だから。

今は涙を呑んで笑っておこう。いつかまた彼女に会える日を夢見て、空元気でも笑っておこう。それがきっと明日を乗り越える力になる筈だから――――。

Ω月√日

取り敢えず丸一日ワームホールの前で待ってみてもＺ―ＢＬＵＥが戻ってくる気配がないので、一先ず自分はソレスタルビーイング号に向かう事にした。彼処にはジンネマンさん達がいるし、Ｚ―ＢＬＵＥの皆がいる可能性も高い。

何かしらの情報を得られるかもしれないから何となく其処へ向かおうとしていたその道中、リディ君とスズネ先生改めアムブリエルが率いるクロノ＆サイデリアルの混成部隊と遭遇。そしてそのまま戦闘へと至った。

つーかリディ君まぁだクロノにいたんかい。いい加減機嫌直して戻って来いよと説得してもうるさい黙れの一点張り、アムブリエルの方は私は自由になるんだーと言って、此方はこっちの話すら聞こうとしない。

人の話を聞かずやりたい放題の二人、そんな二人の勢いに乗って調子づく敵部隊、ついこの間まで豆腐メンタルだった自分にはそんな状況がちょっと苛つき……つい、

やっちゃったんだ★

具体的に言えばワームスマッシャーによる広域殲滅攻撃、久し振りのグランゾンによるその攻撃は敵部隊の全てを一瞬にして撃ち抜いた。リディ少尉が乗っていたバンシィもいつぞやの時と同じように四肢を撃ち抜き、アムブリエルが駆るジェミニアにも搭乗者に被害が出ない程度に蜂の巣にしてみせた。

一瞬にして自分の部隊が全滅した事に驚愕するも、アムブリエルの方は動けなくなったバンシィを置いて急いでその場から離脱、その際に彼女は気になる事を口にしていた。

〝皇帝がお前を待っている〟　この言葉から察するに、どうやら自分がこの世界に戻ってきている事は既に向こうに知られている様だ。だったら話は早い、来るべき時――オペレーション・エクリプスに備え自分も準備と気持ちを整えておくことにしよう。

そんな訳で自分は四肢のもげたバンシィと其処に呆然と乗っているリディ少尉を連れてソレスタルビーイング号に合流、この時Ｚ―ＢＬＵＥはＥＬＳと交戦していた様で苦戦している彼等に合わせて戦線に参加したのだが、何故かＥＬＳは自分が駆け付けてきた時に合わせて撤退していった。

……なんか、俺、ＥＬＳに避けられてね？　沸き上がってくる寂しさに何とも言

えなくなったが、戻ってきたＺ―ＢＬＵＥに改めて合流し、遅れてきた詫びとして回収していたバンシィとリディ少尉をブライト艦長に預け、現在自分はグランゾンの整備に当たっている。

バンシィとリディ少尉を引き渡す際にブライト艦長は引き攣った笑みを浮かべていたが……アレはどういう意味なのだろう？　というより、大抵の人は自分と会話をする際決まって表情を引き攣らせている気がする。

ギルターに訊ねても分からないみたいだし、幾ら考えた所で分かる筈も無いから、取り敢えずこの件は考えない事にした。

再会したＣ．Ｃ．さんに盛大にため息吐かれたりしたけど、え？　俺ってなんかいけない事した？　その時の状況に合わせて最適の行動をした筈なんだけど……。

そんな事いったら「だからお前はボッチなんだよ」と返された。酷くない？

◇

「シュウジさん、リディ少尉は大丈夫ですかね」

一先ずＥＬＳからの侵攻を退けたＺ―ＢＬＵＥ達、現在整備班と共に現在はソレスタルビーイング号にて己の愛機の為に尽力していた。

周囲から整備の音が聞こえてくる。そんな中偶々隣り合わせになっていたヒビキは現在医務室で眠っているリディが気掛かりで、彼を間接的にそんな状態にしたシュウジにそれとなく訊ねた。――――因みに、今も彼は仮面を着けている。

別にシュウジを責めている訳ではない。敵対している相手に手を抜けと言えるほどヒビキは機体操縦に秀でてはいないし、殺す気でいる相手を死なせずに遣り過ごす程熟練していない。ただ、彼――――リディ少尉には前々から追い詰められている節があった。何に、どんな理由で自身を追い詰めているのか知らないが、戦場で遭遇する度に彼の心の閉ざし方は尋常では無くなってしまっている。

そんな状態の彼に理不尽の塊であるシュウジが蹂躙する。彼の雄叫びも感情の発露も何もかも破壊し粉砕する。シュウジの容赦の無さを同じ部隊にいる事で否応なく知ることになったヒビキからしてみれば、リディの眠りは彼にとって最後の心の防御なの

かもしれない。
「大丈夫じゃない？　別に彼の身体に傷があるわけでもないし、軍医の先生も過度なストレスで一時的な意識混濁みたいなモノだと言ってた事だしね。真面目な彼の事だ、きっとああなるまで自分を追い詰めたのだろう。若いんだからもっと気楽にすればいいのに」
「あ、アハハハハ……ですよね」
　これだよ。シュウジのそれっぽい持論にヒビキは乾いた笑いで同調する。その中に多分な達観の色を込めて。
（――前々から思ってたけど、シュウジさんて天然な所あるよな）
「でもミネバちゃんが今看病しているし、きっと良くなるよ。彼が味方に着いてくれれば心強いしね」
「……でも、リディさん結構頑固な所あるし、ラプラスの箱の秘密についても話してくれるかどうか」
「ラプラスの箱？　あぁあれね？　別に良いんじゃない？　事ここに至っては余り意味のある情報じゃないし」
「……は？」
「そもそも、環境に合わせて成長・進化を伴うのが生命体の正しい在り方な訳で、それを

政府運営に組み込むことはそれ事態は悪い事じゃあ無いんだよね。問題はその新しく生れた人類とどう向き合うかが重要なだけで。……まぁ、当時の宇宙世紀の人達からすれば大事な話だから仕方ない事だと思うけどさ」

「」

「あとはクロノの教義だっけ？　あれもどうせ〝人類は月に到達した時点でサイデリアルの支配下に置かれていた。クロノはその為の監視役である〟みたいな感じで記されているんだろうけどさ、今更そんなモノで俺達がビビるかっての」

仮面を被っているから今は蒼のカリスマとして此処にいるのに、つい口調が素に戻ってしまう。まぁ相手は気の知れたヒビキ君だし別に良いよね、なんて思いながら最後の仕上げを終えたシュウジは、ふと格納庫に違和感を覚える。

静かだった。先程まで整備の音で充満していたソレスタルビーイング号内の格納庫が、まるで時間が止まった様に静まり返っている。あれ？　何で皆こっち向いて止まってんの？　俺何かした？　自分のした事に一切分かっていないシュウジが首を傾げてヒビキに向き直ると。

「お、俺、何も聞いてませんから!!」

「へ？」

何故かそれだけを言ってヒビキは自身の愛機の整備にのめり込む。まるで何かから

逃げる様に。他の人達も同様に鬼気迫る表情で各機体の整備に打ち込んでいく。
なにやら尋常ならざる勢い、その勢いに乗り切れなかったシュウジは少しの疎外感を味わいながら格納庫を後にした。
シンカを超え、人の極致へと至り、大きな別れを経験しても、やっぱりシュウジ（ポッチ）はシュウジ（ポッチ）だった。

その１９３

Ω月α日

己の愛機であるグランゾンを整備し、整備班の皆と一緒に鹵獲したバンシィの修復作業も無事に終えた自分は今日、何故かジェフリー艦長に呼び出され、そこで待っていたゼロことルルーシュ君とミネバちゃん、そして各艦長達に色々と話をする事になった。（勿論ギルターもいる）

話題になった内容はラプラスの箱について、どうやら昨日の話が巡り巡ってミネバちゃんの耳にも入ってきたらしい。その真意を確める為にブライト艦長が自分から直接確める為に呼び出しをしたらしい。

真剣な表情で「本当にラプラスの箱について何か知っているのか?」と、そう訊ねてくるブライト艦長に、自分もハッキリと即座に勿論ですと答えた。

尤も、メガラニカで出会ったサイアム＝ビストと話をしてそこから憶測を交えたモノだが、恐らくは全くの的外れでは無いと思う。宇宙世紀の歴史を見ていけば割りと推測出来る範疇だし、七割近くは的を得ていると思う。

自分でも割かし自信を以て言える話だからつい熱弁してしまった。ラプラスの箱とクロノの教義、その内容（中身）と確信を以て言える理由を一時間程で話し終えると、何故かブライト艦長達は頭を抱え、ミネバちゃんに至っては遠い目をしていた。

やはり艦長という部隊を纏める立場にいるだけに日々激務に励んでいるブライト艦長達は日頃の疲れというモノがあるのだろう。気分が悪いのならば休んだ方が良いのではないかと具申したが、ブライト艦長は大丈夫だからとやんわりと拒否された。

そしてその後は今後の展開やら作戦の打ち合わせとか色々話し合い、その結果Ｚ―ＢＬＵＥはラプラスの箱が眠っているとされるメガラニカへ向かう事になった。恐らくはフル＝フロンタルも出てくる筈、これから向かうメガラニカこそがラプラスの箱を巡る最後の戦いなのだと。

当然、自分も出るつもりだ。あの赤い彗星モドキ改めてフロンタルは自分を器だからーとか、人類を纏めるには私しかいないーとか言っているみたいだけど、事態はもうそれ処ではないという事をいい加減自覚させなければいけないだろう。

何故なら宇宙の終わり、それも全ての並行世界を巻き込んだ最大にして最悪の大崩壊が、もうすぐそこまで来ているのだ。これは憶測や推測ではない、ラプラスの箱以上の確信が自分の内に根付いて離れないのだ。

そして、それを促しているのがあのサクリファイに他ならない。極大の次元力は時に

宇宙の法則すら歪めてしまう。奴の破滅願望にも似た欲望が、宇宙の大崩壊に繋がっていると個人的に考えている。

と、まぁサクリファイと宇宙の大崩壊の繋がり云々は置いておくとして、取り敢えずフロンタル率いるネオ・ジオンとの決戦には自分も参加させて欲しいといったら、艦長達全員から即答で却下された。

何故自分がダメなのかと訊ねると、どうやら皆は戦場に出るよりもミネバちゃんを守って欲しいらしく、メガラニカに付いたら間違いなく接触してくるであろうフロンタルから彼女の身を守って欲しいと言うのだ。

ミネバちゃんはジオンの統括☒であるザビ家の血を引く者、彼女の言葉を全世界に向けて発信し、全世界に真実を伝える為、その間の護衛を自分に任せたいのだとか。

まぁ、確かに彼女の身の安全を守る人間も必要だろう。バナージ君はフロンタルとの決着もあるだろうし、今回自分は裏方に徹する事にしよう。ブライト艦長達の依頼を引き受ける事にした自分は少し考えてこれを承諾、この時、何故か各艦長らは（特にテッサ艦長）安堵するように深いため息を吐いていた。

で、その後も話は進むのだが、ブライト艦長はある人物達を拘束する為、このまま一旦地球に降りて、その者達の動きを探るつもりでいるらしい。

何でもその人物はカーディアス＝ビスト暗殺の手引きをした容疑者であるらしく、次

の作戦の時に何らかの横槍があるのかも知れないというのだ。
その人物の名はマーサ＝ビスト＝カーバイン、アナハイム社会長の一族の人間であり、カーバインに嫁いだやり手の営業ウーマン、そしてクロノの一員とされるＺ―ＢＬＵＥにとって要注意人物の一人、マリーダさんを洗脳し直した人物でもあるらしきその女が、ラプラスの箱の真実を明かそうとする自分達に何らかの妨害工作を仕掛けてくる可能性があるのだとか。
他にもリディ君の父親であるローナン＝マーセナスもクロノの一員で、マーサと一緒に良からぬ事を企てているのではないかという。既に奴等の位置をソレスタルビーイング号のヴェーダとクロノのクィーンとかいう人物の情報を元に割り出そうとしているらしく、それが解り次第ブライト艦長は地球に降下するつもりなのだとか。
――――これは以前シュナイゼルと会った時にそれとなく耳にしていたけど、どうやらこのマーサなる人物は俺達のトールギスを押収しようと以前からちょっかいを掛けてきたらしく、危うく連中に渡し掛けたとか。
そんな個人的な因縁がある事から自分も同行しようかと思ったが軽く却下された。悪い事を企んでいる連中を相手にするよりも一番狙われている人を護衛してくれた方が今回は良いらしい。まぁ、その方が良いというのは自分でも理解出来るから構わないんだけどね。

兎も角、次の作戦はミネバちゃんをメガラニカへ無事に送り込むことで、自分は彼女を守る事にある。いや、突入する際はバナージ君も来るから、二人を守らなきゃいけないのか。

大変だけどがんばるぞい。

Ω月※日

眠っていたリディ君が目を覚ました。その話を聞いて自分も顔を出そうとしていたけど、医務室前まで来た所で扉の前に立っていたマリーダさんにやんわりと断られてしまった。

どうやらこの時はタイミング悪く、目覚めたばかりのリディ君は軽く錯乱状態にあって、マトモに面会出来る状態ではなかったらしく、しかもその原因となっているのが自分とグランゾンにあるらしいのだ。

全方位からの絶え間なく降り注がれるワームスマッシャー、その一撃の一つ一つがバンシィの装甲を簡単に貫ける威力を持っていたから、終始受け続けたリディ君からすれば、死の雨が上から下から左右からと降り注がれるに等しい体験をしたに違いない。

それも二回、何だか改めて書いてみたら幾ら死なせる気は無かったとはいえ割りとえげつない事してるな俺、まぁ向こうは当時殺す気で来た訳だから反省はしても後悔はし

てないけどね。

そんな訳で錯乱していたリディ君なんだけど、目が覚めるまで看病していたミネバちゃんと後から医務室へ入っていったマリーダさんが何とか彼を宥めて説得して落ち着かせた。

バンシィは人の感受性を悪い方向へ高める性質を持っているらしく、クロノにいた頃のリディ君は思い込みの激しい人間となっていたけど、マーサ＝ビストにより洗脳され直したマリーダさんが親身に語り掛ける事で何とか自分を取り戻すことに成功した。

その後はミネバさんとの語らいもあって改めて自分を見つめ直し、改めてＺ―ＢＬＵＥとして行動を共にすることを決めたようだ。元々彼は気さくで面倒見が良く、ヒビキ君達にも慕われていた善き軍人だ。きっと以前みたいにまた皆と仲良くなれるはず。

そう思って少しの時間間を置いて後でこっそり見ていたら普通に皆と親しげにしてやがった。くそ、心配していた俺の気持ちを返せ！

しかもなんか普通に俺より輪に溶け込んでるし！　バナージ君とも少しぎこちなさはあるけど普通に話をしてたし！

つーかギュネイ君と一番親しげにしているとかどういう事!?　何でギュネイ君と!?　そもそも敵対していた奴とどうしてそんなに早く仲直り出来るの君達!?　俺とは未だに目も合わせてくれない人とか結構いるのに！

そんな風に悔しがっていたらかなめちゃんに肩ポンされて慰められた。――――なんか、トドメ刺された気になるのは俺だけ？

そして通りすがりのアサキムにまで鼻で笑われた。というか何自然と艦内を散策してるのアイツ？　聞いたら普通に許可は出されたという。何でもう自分がスフィアを狙う理由も無いからＺ―ＢＬＵＥに協力する事にしたのだとか。……それでいいのかＺ―ＢＬＵＥ。

ふーん、と思うもコイツに鼻で笑われたままと言うのもそれはそれでムカつくので、取り敢えずパワーボム仕掛けて床に沈めて置いた。

Ｃ．Ｃ．さんといいコイツといい、俺の周りにはマトモな奴が少ない気がする。マトモなのは自分だけか。

なんて口ずさんだらこれまた通りすがったヨーコちゃんに盛大にため息を吐かれた。え？なんで？

ま、まぁ何はともあれこれで一先ず懸念材料は無くなったから、自分も次の作戦に備えて準備しておかないとな。

万全に万全を尽くして事に挑む。必要なら生身でＭＳに挑める位の気持ちで掛からなければならない。ミネバちゃんとバナージ君、二人の身の安全は自分に　掛かっているのだから。

その１９４

――――シュウジ＝シラカワの朝は早い。

朝、地球の時間で午前４時の時間。実際の地上では空が白み初めて日の光が昇り始める頃、マクロス・クォーターの割り振り当てられた一室にて彼は目を覚ます。

この世界に来てから朝早く目を覚ます習慣を身に付けた彼に最早眠気という概念は無く、目を開けてから数秒には生身で全力戦闘を可能にするほどの覚醒が肉体に行われている。仮に眠っている所を襲おうとしても度重なる戦闘経験により条件反射で眠ったままでも迎撃してしまうだろう。

眠っている所へ反応弾を叩き込んでも次の瞬間にはワームスマッシャーで串刺しにされてしまう。そんな怪物を通り越しておっかないナマモノと化したシュウジの始まりは格納庫での自己鍛練から始まる。

事前に用意していた鍛練用の肌着に着替え、日課にしていたトレーニングを行う。マクロス・クォーターには簡易ながらも専用のトレーニング室があるが、本格的に鍛練するには少し狭いし集中するなら誰もいない時の格納庫が一番良い。

護身術（自称）の師であるガモンから教わった空手の型をそれぞれ百回ずつ体に刷り込む様に丁寧に繰り返していく。以前一度だけ1日一万回感謝の正拳突きもやった事あるが、音を置き去りにしても背後に仏像様が出ない事があってから酷く裏切られた気持ちになった為以降は一度も試していない。

そして日課の鍛練を終え、シャワー室で汗を流した後シュウジの次なる行動は厨房での料理である。

本来、手料理を振る舞うのはＺ―ＢＬＵＥに於いて戦う力の無いもの、所謂生活班の面々が担当しているが、シュウジは半分趣味の為に関係なく顔を出してその手腕を振るっている。

パイロット達の栄養面のバランスやカロリーを考え、それでいて食事を楽しませる工夫も怠らない事からＺ―ＢＬＵＥに所属する多くの人間は彼の作る料理に胃袋を鷲掴みにされている。

「やぁ、シュウジ。今日も精が出るね、僕に焼き魚定食くれないかな」

「骨でも齧ってろ」

ニコニコ顔で朝飯を集りに来るアサキム＝ドーウィン、本来ならＺ―ＢＬＵＥにとって許されざる存在な訳なのだが、シュウジが彼の願いを叶えるという形で現在はＺ―ＢＬＵＥの食客という扱いとして部隊に身を寄せている。

　幾ら自身の願いが叶うからとはいえこうも従順になるものなのか、同じくスフィアリアクターとしてアサキムに狙われる立場だったクロウが油断なく身構えながら訊ねて見たところ――――。
『僕の願いは必ず叶えられるからね。今の彼ならば片手間で出来る事だし、彼がその気になるまで暇だからその時が来るまで大人しくしてるよ。――――しかし驚いたな、まさか単独であの域にまで踏み込む人間がこの世にいたなんて、流石はシュウ＝シラカワの切り札って事か、彼ならば〝門〟が無くとも世界を渡れるかもね』
　と、最後はいつも通り意味深で良く分からない事を口にしていたが、取り敢えずもうＺ―ＢＬＵＥに敵対しない事は確約されたので一部の人間以外彼を必要以上に警戒する事はなくなった。
　その一部の人間も普段から無防備で艦内を歩くアサキムに毒気を抜かれてしまい、殺してもすぐに復活してしまう事から今では殆ど自分から彼に関わろうとはしていない。
「ねぇレド君、君の持ってる銃でコイツの脳天撃ち抜いてくれないかな？」
「え？　　え？」
「ちょっとシュウジさん！　　アサキムさんとのいざこざにレドを巻き込まないでよ！」
「いや、でもさ。コイツムカつくんだよ、前に何度も人の邪魔をするわ命は狙ってくるわ

でもう本っ当に最悪な奴なんだよ」
「それでも今はもう仲間なんだから、変に敵意を向けたら可哀想だよ。セツコさんや他の皆も気にしないようにしてるんだから、シュウジさんも分かってあげないと」
「むぅ、それもそうだけど……」
「まぁまぁ、アンタの気持ちも分からんでもないけど、ここは一つ大人として引いてあげなよ。てなわけでシュウジ、ここは豪快にビールを一つ」
「申し訳ないが朝っぱらからの飲酒はＮＧですよマオ姐さん。もうすぐ作戦近いんだから少しは自重しなさい」
「ぶー」
「……なぁ宗助、アイツも一度は俺達と殺し合った癖に何でああも溶け込めてるんだ？」
「奴に関しては考えても無駄だクルツ、俺はもう諦めた」
「あ、チドリちゃんが親しげに声を掛けてる」
「ぐぬぅ」
　そんな日常風景を描きながらシュウジの一日は過ぎていき午後、ここからはシュウジではなく蒼のカリスマとして時間を過ごして行く。
　部隊の食料を始めとした資源の備蓄残量、部隊面々の身体や精神状態、他にも細かい

問題点や改善策をまとめた報告も彼は欠かさず行っている。
「そう言うわけで、此方がまとめた資料になります」
「う、うむ。ご苦労」
「では、私はこれで」
　ブリッジでオットー艦長に報告書を提出した蒼のカリスマは次なる報告をするためにワームホールで次の艦に転移する。目の前で起こる超常現象を前に未だ慣れる様子の無いオットーは額に汗を滲み出して渡された資料に視線を落とす。
　丁寧に纏められた内容だ。分かりやすく目を軽く通しただけで頭に入ってくるから彼の手際の良さが伺える。もしこんな報告書が書ける人物が部下にいたら、部隊はもっと良くなるかもしれない。
　尤も、その報告書を書いたのが世界最悪にして最強のテロリストというのがなんとも言えないが。ていうかなんでこんなことしてんのあの魔人は。
「オットー艦長、諦めて受け入れなさい。その方が楽ですよ」
「危ない宗教勧誘みたいに言うのやめてくれない？」
　横に光を失った目でアハハと笑うギルター＝ベローネ、ああはなりたくないとうんざりした様子でオットーは横にいる副官レイアム中佐に先の報告書を手渡した。
　さて、そんな雑用を自ら引き受けながらも彼の一日はまだ続く。ある時はヒビキに

誘われて組手を行った時。
「はぁぁぁぁぁっ!!」
「踏み込みが甘いよ、ただ突っ込むなら猪でも出来る」
「ごっはぁぁぁぁっ!?」
「ヒビキの奴も懲りないなぁ」
「ていうかあの人、青く光るヒビキ相手に普通に勝ってるんだけど？　あぁなった時のアイツって常人より何倍も速くなるんじゃなかったっけ？」
「そういやこの間普通にスピード負けてたの見たぞ」
「うっそだろおい」
　因みにゲッターチームの竜馬とは敢えて組手をしてはいない。勝つか負けるかではなく、普通に怖いからやらないらしい。竜馬も竜馬で興味本意で仕掛ければ唯では済まないと本能で理解している為、今は様子を見ているだけにとどめている。
　またある時はシミュレーターで。
「ふぅ、流石はアムロ大尉。易々と勝たせては貰えませんか」
「はぁ、はぁ、ま、まぁ、そう簡単には……ぜぇっ、負けないさ。はぁっ、はぁっ……うっぷ」
「可哀想にアムロ大尉、あの体力お化けに付き合うなんて」

「これで何度目だ？１０回過ぎてから数えて無いんだけど」
「つーかシャア元総統はどこいった？　　あの人ならアムロ大尉とローテーションで相手出来るだろ」
「あの人なら通常の三倍の小走りで逃げてったぞ。別件があるっていいながら」
「その割には顔を青くしていたけどね」
「シャア大佐ェ」
「さて、もう一本お願いしますかね」
「ヒェ」
　自分の我が儘に付き合ってくれる先輩パイロットに思う存分胸を借りたりして腕を磨きあったりして時間を有意義に過ごし。
　また機体の整備点検の時も率先して手を貸すなど彼の一日は非常に充実した時間となっていた。
「……なんかマジンガーとゲッターの整備をしてると視線を感じるんだけど、気の所為かな？」
〝そろそろこっち来てもええんやで？〟
〝まぁもう少し待ってやれ〟
　時折巨大な存在から視線を感じたりしているが、特に気にする事もなく作業を進め

ていく。
　そして就寝時間は０時を過ぎ、漸くシュウジは眠りに就く。睡眠時間約四時間、Ｚ―ＢＬＵＥに入ってから休む間もなく働く彼、自分よりも部隊の為に働く彼に正面から文句を言える人間なんて殆どいない為、Ｚ―ＢＬＵＥの面々は色んな意味で頭を抱えることになる。
　また、千鳥かなめやエイミーといった比較的シュウジとマトモに話せる人間はいるにはいるが、本人は今が楽しいから苦にはならないといって全く聞こうとしない。
「ファァァ、良く寝た。さて、今日も一日頑張るぞい」
　そして今日もシュウジの華麗なる一日はこうして始まるのだった。
「止めたくても止められない。まさにボッチスパイラルだな」
「Ｃ．Ｃ．さん、いきなり出てきてそれは酷くない？」

◇

　メガラニカ。工業コロニーであるインダストリアル７の構造物コロニービルダー、通称カタツムリと呼ばれるコロニーの建設を行っているその施設で一つの真実が露になった。
　百年封じてきたラプラスの箱、その真実が明らかにされたとき仮面の男はそれを奪いに来る。
「箱を渡したまえ、ラプラスの箱の真実は私こそが、器になる者が扱うべきだ」
「っ！　危ない、オードリー!!」
「ダメ、バナージ!!」
　向けられた銃口、引き絞られる引金、凶弾が二人を襲おうとした時。

「子供になに危ないモノ向けてるんだよ」
「ゴッペパ!?」

魔人の綺麗な右フックがフル＝フロンタルの頬を撃ち抜いていく。

時は一時間前に遡る。

その１９５

ユニコーンガンダムにより示されたラプラスの箱への最後の座標、記されたインダストリアル７の工業地帯であるメガラニカ周辺に部隊を配置させたＺ―ＢＬＵＥは箱の真実を確めるべく、オードリーことミネバ＝ザビとバナージをメガラニカへ送り出そうとしていた。

既にブライト艦長達は裏で暗躍する者達を摘発するために地球へ降下している。作戦開始まで残り僅かな時間、Ｚ―ＢＬＵＥの面々は二人を勇気づけてやろうとしていた。

「それでは姫様、道中お気を付けて」
「ありがとうマリーダ」
「バナージ＝リンクス、姫様の事……頼んだぞ」
「はい。オードリーは必ず俺が」

メガラニカにはラプラスの箱の真実が封印されている。道中何があるか分からない以上気を緩める訳にはいかない。最悪ＭＳで強引に突入することも辞さないつもりでいろと、ハマーンはバナージに強く言い含めるが。

「皆さんが心配になる気持ちは理解できますが、そんなに気を張り詰める必要はありませんよ。以前私もここへお邪魔していますので、この施設の警備網はその時既に熟知しております。まぁ、その前例があるから幾分か警戒レベルは上がっていると思いますが……然程気にする事はないでしょう」

横から善意全開で色々と台無しにしてくる仮面の魔人にミネバ達の表情が凍り付く。これから宇宙世紀における歴史的瞬間が待っているかもしれないという時に、なんて事を平然と言ってのけるのだ。

人の気持ちを土足で踏みにじるのはハマーンにとっても許しがたい所業だが、この魔人がしているのは人の気持ち(心)を土足で踏みにじるのではなく、丁寧に整頓し綺麗にしていく、まるで掃除のプロの様な所業。

より分かりやすく説明するのならば思春期の少年の部屋を母親が善意で秘密裏に掃除する様なもので、更に言えば隠された秘密(エロ本)をテーブルの上に晒すような行為である。

正に人によっては悪魔の所業とも言える魔人だが、本人は一切の悪気のない１００％の善意から来るのだから、ハマーンも怒るに怒れない。

目頭を抑え、必死に気持ちを落ち着かせるハマーン。ミネバもバナージも遠い目をして明後日の方へ視線を向けている。唯一マリーダだけはどうすればいいか分からずオロオロしていると、気持ちを切り替えたハマーンは魔人――――蒼のカリスマへと向き直る。

「シュウジ――――いや、今は蒼のカリスマだったな。お前にも頼りにさせてもらう。姫様の事、本当に頼むぞ」

「任せてください。バナージ君共々傷一つなく無事に連れ帰って見せますよ」

「あぁうん、頼んだ」

何となく察したハマーンはそれ以上蒼のカリスマへの追及をする事はなく、ただ達観した様子で三人の見送りを行った。ユニコーンのコックピットに乗り込むミネバとバナージ、その手には蒼のカリスマが捕まり、三人はラプラスの箱の待つメガラニカへと進んだ。

そして、そこからはトントン拍子で話は進んだ。バナージとミネバ、共に時代を背負うべき若き世代の進入にメガラニカは招くように二人を奥へと誘導していく。

一角獣の描かれた絵画、聞こえてくる宇宙世紀の始まり、その際に引き起こされたテロによる悲劇、ラプラス事件。聞こえてくる声に戸惑いながらも二人は先へと進んでいく。因みに蒼のカリスマは普通に侵入者扱いだが、本人は用意された対侵入者用のト

ラップを片手間に無力化していく。尚二人はその間これを必死に見ない振りをしていた。

そして、メガラニカの最奥に待っていたビスト財団の屋敷。嘗て自身がここに住んでいた事を思い出したバナージは様々な思いを胸に抱え、ミネバと共に足を踏み入れる。

……そこに待っていたのは父の秘書をやっていた男と、微睡みの中から意識を覚醒させるビスト財団の創始者、サイアム・ビストの姿があった。

「――漸く、たどり着いてくれたか。ザビ家の姫君」

「貴方が、箱の秘密を知る者……？」

「然様。そして、そちらの魔人も会うのは久し振りじゃな」

「先日は強引な訪問、誠に失礼しました。サイアム翁」

魔人らしく白々しい振る舞いで頭を下げる蒼のカリスマ、事実ビスト財団の最高のセキュリティが現在進行形で突破されている事から、サイアム＝ビストにとって蒼のカリスマは色んな意味で目の上のたん瘤でもあった。

魔人の謝罪を取り敢えず受け入れたサイアム＝ビスト、戯れも程々にもうすぐ寿命が尽きることを予見しているサイアムは魔人に構うことなく、ミネバとバナージに真実を告げた。ラプラスの箱の真実、自身の経験と箱の秘密を知る経緯、そこから始まる連邦

との癒着。裏と表、宇宙世紀の全てを語り終える頃には既に二人とも何とか理解してこれらを受け入れた。

そして明かされるラプラスの箱、宇宙世紀がその始まりを告げる際に人々に告げた本当の宇宙世紀憲章、その秘められた最後の条項。その一文を静かに読み終えたミネバは一瞬乾いた笑みを浮かべて遠い目をしていたが、すぐにいつもの凛々しい顔付きに戻り、サイアムにこの憲章を正しく使うという誓いを立てた。

――――その時である。影の中から這い出るように現れた器を自称するもう一人の赤い彗星、フル＝フロンタルが彼等の前に姿を見せたのは。

拳銃を片手に憲章を渡せと口にするフル＝フロンタル、最早ザビ家の忘れ形見であるミネバの言葉も届かず、遂に銃口が彼女に向けられ。

「子供になに危ないもん向けてんだよ」

「ゴッペパ!?」

局面は戻る。危険に晒されたミネバとそんな彼女を守るために庇うバナージ、そしてその危険そのものを排除する為に拳を容赦なく振るう魔人。

軍人であるフロンタルが死なない程度という曖昧な力加減で振り抜いた魔人の拳はフロンタルの頬を綺麗に撃ち抜き、衝撃で仮面は吹き飛び、その体を宙に浮かせる。

宙に浮かび、錐揉み回転しながら落ちるフロンタル。その光景に何処か既視感を覚え

る魔人は二人を己の背後に隠すように立ち、警戒しながら呻く自称人の器へと歩み寄る。
「多少は加減したから死にはしないが、動けなくする程度には力を込めた。諦めろ、お前の目論見はこの瞬間潰えた」
「あ、ぐ、ぐ……」
プルプルと体を震わせ、それでも何とか立ち上がろうとするフロンタル。その気合いと根性は素直に称賛に値するが、如何せん彼は未だに諦めてはいないようだ。
「何故だ」
「ん？」
「何故、君達は抗う。サイデリアルに、クロノに、絶対的絶望にどうしてそこまで抗える。人類は絶望に抗えない。ラプラスの箱の真実を知れば人類はもう後戻りできなくなる」
「……」
「必要ないのだ。その絶望は人類の可能性を殺す。箱はその存在だけで十分なのだ。後の事は私に任せておけばいい。それが人類の為だ」
傲慢。フル＝フロンタルの言い方は他者を鑑みない傲慢そのものな物言いだが、不思議と蒼のカリスマにはそれが責任感のある男の言葉に聞こえた。どれだけ痛め付けられても、どれだけ追い詰められても、最後まで自分の考えを曲げない。

フル＝フロンタル、自らを器と称して人類の総意の受け皿と自称としている男、蒼のカリスマ――――――シュウジ＝シラカワは初めて目の前の男の意地と呼べるモノに触れた気がした。

しかし。

「フル＝フロンタル、赤い彗星の役割を宿命付けられた男、それは違います」

「ミネバ＝ザビ？」

「人は、人類は、もう人一人に全てを押し付ける愚行は犯しません。喩え未来が絶望に染められていようとも人類にはそれを乗り越える光がある」

「だが、何度人がその光を示しても人類は変わることはなかった。幾度となく希望を見せても、幾度も絶望に沈んで行く。信じられる訳がない」

それは、黒の英知に触れたことであらゆる絶望と根源的災厄を見せ付けられた男の慟哭だった。何度も希望を見てきた。幾度となく人類に光が宿る瞬間を見てきた。

しかし、それ以上の絶望が人類を覆った。人が希望を見せても、同じく人類のエゴが絶望となって押し潰したのだ。

（あぁ、そうか。コイツ、俺と同じなんだ）

絶望に呑まれ、希望を信じられなくなったフル＝フロンタル、それは未来に敗れ過

去にやり直しを繰り返してきた嘗てのシュウジ（自分）と何処か似ていた。
未来に希望を見出だせず、過去の自分に押し付けて来たシュウジ、未来への第一歩を踏み出す難しさが如何に難しいか、その身で直接体験してきたシュウジにとって、フロンタルの嘆きには他人事に聞こえなかった。
――――しかし。
「それでも」
「っ！」
「それでも、俺達は決めたんだ！　立ち止まらず歩き続けるって！　どんなに辛くても、悲しい現実に押し潰されそうになっても、だから託すんだ！　託して、歩き続けるんだ！」
バナージ＝リンクス、彼もミネバと同様に世界をＺ―ＢＬＵＥと共に歩き続けてきた人間だ。人の悪意に翻弄された時もあった。人のエゴに心が折れそうになった。数々の理不尽に声を上げて叫ぶときもあった。
けれど、それと同じくらい人の優しさに、暖かさに触れた時もあった。絶望に呑まれるのは簡単だ。自暴自棄になり破滅に向かうのは簡単だ。けれど、抗う事こそが人の本懐なのだとバナージはラプラスの箱を巡る旅で知った。
それでも、と。何度絶望に負けそうになってもそれでもと言い続けろ。自分に人とし

ての心の在り方を知ったバナージ、その彼の瞳には絶望に抗う強い意思の輝きが宿っている。
（そうだよな。そうなんだよな、人は歩き続ける。それが喩えどんなに困難な道程なのだとしても）
　絶望も希望も人が抱える一面に過ぎない。希望に溺れるのも絶望に沈むのも違う、抗い進み続けるのが、人類という知的生命体の本質なのだから。
「フル＝フロンタル、もう一度人類を信じてみないか？」
「なに？」
「俺はお前と違って人の総意と言うのがイマイチ分からないし、それがどんなに重要かなんて知らない。だが、お前が自分なりに人類の事を考えているというのは何となく理解した」
「シュウジ……シラカワ」
「正直、今でもお前の考えは好きになれない。でも、考えてみたらそんなの当たり前だもんな。だって俺達人間だもの」
「人間……？　私が？」
「お前だって何かに苛ついたり不愉快に思ったりするんだろ？　だったら十分お前も人間だよ。出自なんて関係ない。器としてじゃなく、フル＝フロンタルという一人の人

間として、俺達と組まないか？」
「シュウジさん……」
　差し伸べられた手にフロンタルの目は丸くなる。器と自ら律し、これまでシャア＝アズナブルの代わりとして文字通り作られてきた人生、人の可能性は信じるに値しない。
　けど、それなのに、今更になってその可能性に手を伸ばしたくなっている自分がいる。
　Ｚ―ＢＬＵＥという人類最強の部隊に？　……いや、違う。
　目の前の男、蒼のカリスマことシュウジ＝シラカワという一人の人間に。フル＝フロンタルは初めて自身の心が揺れ動くのを感じた。
　バナージ＝リンクスの言葉に拐かされたのか、それともミネバ＝ザビの説得に揺れたのか、しかし、何れにしてももう遅い。
　彼等の、彼の手を取るには自分は些か絶望に呑まれすぎている。今更自分が彼等の仲間に加わるのは余りにも都合が良すぎる。
「申し訳ないがそれは――――」
『そうだよな。出来ないもんな、今更お前が彼等の下に降るなんて、立場的にも心情的にも許されないものな』
「こ、この声って!?」

「バルビエル……」
　辺りに響き渡る他人を嘲笑う嫌な笑い声、その声の主が突然現れた事に驚きながらもＺ―ＢＬＵＥは部隊を展開させる。
　バルビエルの愛機アン・アーレス、その背後には彼の直属の部隊と、ネオ・ジオンの全戦力が控えていた。
「アンジェロ!?　何故彼がバルビエルの下に!?」
『あ、あ……ぐ、大佐、大佐ァァ』
「まさか、奴はネオ・ジオンの戦力をスフィアで!?」
『おっと、特別ゲストは僕だけじゃないよぉ！　さぁ、皆、出てきなよ！』
　嘗てないテンションでカーテンコールをするバルビエル、今まで見たことのない様相の彼にセツコ達も動揺を隠せないでいると、空間が歪み巨大な戦艦と幾つもの機体が姿を現した。
『やっほーダーリン、またあったねー！』
『エルーナルーナか！』
『……』
『尸空も来たのか』
『ハロー、ヒビキ。決着を付けに来たよ』

『アムブリエル！』

サイデリアルの最大戦力、スフィアリアクターの総出にＺ―ＢＬＵＥは動揺する。ここで地球解放の最後の戦いが始まるのか。誰もが緊張に包まれた時。

『戦士達よ、鎮まれ』

瞬間、時間が停止した錯覚を味わう事になる。体験したことのない威圧感、あの黒いアンゲロイとは違う、何かに縛られるような畏怖ではない。

圧倒。ただ圧倒的な存在感にＺ―ＢＬＵＥ達は震え上がっていた。これ程の圧力は幾度となく激戦を潜り抜けたＺ―ＢＬＵＥでも未経験のモノ、他のスフィアリアクターと対峙したときも感じられなかった圧倒的強者の存在感が、その場にいる全員を縛り付けていた。

Ｚ―ＢＬＵＥもサイデリアルも関係なく強制的に行動不能にする存在感、これに該当する者はＺ―ＢＬＵＥにとって一人しか心当たりがいない。

『まさか、そこにいるのか!?　サイデリアルの皇帝、アウストラリスが!?』

エルーナルーナの駈るプレイアデス・タウラ、その操縦席の後で玉座の如き椅子に座る一人の男。静かに瞑目し、それでいても尚圧倒的強者の存在感を垂れ流しにしてしまうその男は、ここへ来て初めてその閉じた瞳を開いた。

皇帝の視線の先に映るのはメガラニカ、地球の人類史に於いて最大の秘密を封印され

たその場所を射抜く様に見つめる先にいるのは。

『――――すまんな、待っていると言っておきながら、つい気持ちが先走ってしまった。許せ』

「……」

蒼のカリスマ――――いや、シュウジ＝シラカワ。彼もまたアウストラリスが居るであろうプレイアデス・タウラに視線を向けている。

初めて合う二人、名前しか知らず顔もまともに見てはいない。しかし互いにこの瞬間理解する。

コイツを倒すのは自分なのだと。

その196

――――数日前、ラース・バビロン内にて。

コツンコツンと床を叩く音が響く。広い敷地内で女性――――シオは皇帝であるアウストラリスに呼ばれ、牢獄となった居住区より玉座の間へと出頭していた。

既に地球に王手を掛けつつあるサイデリアル、その皇帝が一体今更自分に何の用があるというのだろう。皇帝が欲する情報は全て吐いた、皇帝が求めていた彼に関する話しは全て口にした。

皇帝が求めていた彼も時空振動により元の世界へ戻ったとその皇帝自身が言っている。もう私に……私達リモネシアの住民に利用価値は無い筈だ。彼を呼び寄せる撒き餌として選ばれた自分達だが、その目的たる彼がいないのでは最早丁重に扱われる意味もない。

――――とうとう、処理される時が来たか。玉座の間へ後少しという所で死を意識した事で、シオの体は恐怖で震え始めていた。分かっていた事だろう、こういう結末になるのは。覚悟していた筈だ、こういう最期になるのは。

今更怯える自身を叱咤しながら、シオは玉座の間へと到達する。相変わらず開けた場

所だ。そしてその開けた空間を全て見下ろせる位置に――――彼奴はいた。
　皇帝アウストラリス。サイデリアルという軍勢を率いて地球に侵略してきた新地球皇国の皇帝、静かにただそこに居るだけで他者を圧倒する存在感を放つかの男は、瞑目していた目をシオがやって来た事を察知して開いた。
「……来たか」
「待たせてしまって……申し訳ありません」
「構わん。貴様は、貴様達は私にとって重要な存在だ。奴を誘き寄せる為、奴を私の糧にする為、撒き餌として……な」
　何を今更、とシオは内心で呆れた。私達を撒き餌と言っておきながら、その目的である彼はもうこの世界にはいない。今頃は彼の元いた世界で平和で穏やかな日々を送っている筈だ。
　悲しくもない。逃げ出したとも思わない。彼は充分に戦い、世界に貢献した。自分を守り、リモネシアを守り、ボロボロになっても世界を守ってくれた。
　充分だ。彼はもう充分過ぎる程戦ってくれた。だからもういいんだ。ただ惜しむのは元の世界へ戻り平和を謳歌する彼を見届けられないのが残念というだけで――――。
「奴が戻ってきた」
「――――え？」

瞬間、シオの思考は真っ白になる。今、目の前の皇帝は何を言った？　奴？　奴とは誰の事だろう？　誰が何処へ戻ってきたというのか？

混乱する意識の中、ふと此方を見て笑みを浮かべる皇帝の姿があった。

「――――ふっ、そんなに奴の帰還が嬉しいのか？　意思の強い女と思っていたが、存外分かりやすいのだな」

「な、何を言って……」

「自覚がないのか？　顔、笑っているぞ」

言われて自分の顔に触れる。僅かに吊り上がった頬の筋肉、その表情は皇帝が指摘した通り笑顔の形をしていた。

「あ、あぁ、あぁぁぁぁぁ……っ！」

言われて、指摘されて、自覚してしまう。自分は彼が……シュウジが戻ってきている事に喜んでいる。彼はもう充分に戦ったと宣いながら、もう充分だと口にしておきながら、その自分が何より彼が戻ってきた事に嬉しく思っている事実に。

醜い。嘘と虚実で彩られ、薄っぺらい自分に絶望したシオは嗚咽を漏らしながら膝を付く。

そんな彼女を冷たい目で見下ろしていた皇帝は、シオから視線を外し、玉座から立ち上がる。

「……待ち続けるのも些か疲れた。今度は此方から出向くとしよう」
シオに伝える事は伝えた。後は本人次第、玉座の間を後にする皇帝アウストラリスは最後にシオを一瞥すると、今度こそ玉座の間を後にした。

◇

「あれが、アウストラリス……」
インダストリアル７、工業地帯メガラニカ。ラプラスの箱を巡る旅の終着点、ネオ・ジオンと地球人類の両方の今後を決める重要局面にてサイデリアルの最大戦力であるスフィアリアクターの乱入にＺ―ＢＬＵＥは最大の警戒と共に彼等を睨み付けていた。
バルビエルはセツコを、エルーナルーナはランドを、尸空はクロウを、そしてアムブリエルはヒビキを、互いに互いを無視できないそれぞれの両者は今にも戦闘を始めそうな程に緊迫していた。

しかし、その緊迫した空気も皇帝の一言により四散する。敵も味方も問わず、〝鎮まれ〟というただ一言によりその場の全員の戦意を根刮ぎへし折った。
圧倒的、ただそれしか頭に浮かばなかった。これがサイデリアルの皇帝なのかと、初めて目にした時よりも桁違いな力の昂りにＺ―ＢＬＵＥは戦慄した。
スフィアで自我を失いつつあったネオ・ジオンの兵士達を皇帝の発する圧で気を失わせる事で無理矢理解き、その事で異を唱えようとしていたバルビエルを一睨みで黙らせる。同じスフィアリアクターなのに何故こうも格差が生まれているのか、困惑するＺ―ＢＬＵＥを尻目に皇帝アウストラリスはプレイアデス・タウラに簡易に備え付けられた玉座から立ち上がる。
「エルーナルーナ、ここは任せるぞ」
「あいよ、邪魔はさせないからゆっくりしてきな」
「それには及ばん、今回のは顔見せ程度だ。用が終わればすぐに戻る」
「そうかい」
そう言い残して皇帝はその手を掲げると、空間に亀裂が入り、皇帝は躊躇なくその中へ足を踏み入れる。次元の壁を片手間で割って見せる皇帝に驚き、呆れたエルーナルーナは改めてＺ―ＢＬＵＥに向き直る。
「さぁて、我等が皇帝様の用事が済むまで、楽しませて貰おうじゃないか！」

一方的に告げられる開戦の合図、しかしＺ―ＢＬＵＥも負けてはいない。メガラニカにいるバナージとミネバを守るため、スフィアリアクターを止める為、彼等は全力でバルビエル達を迎え打つのだった。

◇

「皇帝、アウストラリス！」
「サイデリアルのトップが、どうしてここに!?」
　空間を割り、虚数空間から這い出てくる皇帝にバナージとミネバは戦慄する。Ｚ―ＢＬＵＥにとって最大にして最強の敵、その人物が単身で乗り込んできた事実に。
　サイアム＝ビストの側近であるガエルはその屈強な体で彼を守るように前に出る。

勝てるとは思えない。対峙するだけで戦意がへし折れそうになる程の威圧感を放つ皇帝を前に、ガエルはサイアムの盾になるだけで精一杯だった。

バナージも惚れた女が隣にいるという理由でどうにか立っていられるだけ、……いや、実際は自分の手を握ってくれるオードリー（ミネバ）のお陰で、そういう風にいられるだけであった。

此処で自分達を始末するつもりか。ラプラスの箱の秘密を明かさない為に、しかし、その割には皇帝に敵意は無かった。

彼の視線はただ一人の男に向けられていた。

「こうして面と向かって会うのは初めてだな」

「……一度は、そっちに顔を出そうとしたんだけどな」

皇帝アウストラリスの視線の先にいる男、蒼のカリスマは仮面を外し、シュウジ＝シラカワとして対峙する。全てを屈服させる程の威圧感を無意識で垂れ流す皇帝を前に平静でいられるシュウジ。二人の会話に割って入れる者はおらず、サイアムもミネバも、そしてフロンタルも事の成り行きを見守るだけだった。

「それで？　皇帝様がワザワザここへ何の用だ？　ラプラスの箱の開封を防ぐ為？　まさか、お前等にとって箱は然程重要な意味は無いだろう？　箱の底にあるクロノの教義とやらも」

「然り。箱や教義に関して我等が知る所ではない。我々が……いや、私がここに来た目的はシュウジ＝シラカワ、貴様だ」
「……」
「よくぞ戻ってきた。――――などとつまらん世辞は不要だろう？　私が来たのは貴様に聞きたい事と伝えたい事があるからだ」
「聞きたい事？」
「然り、先ずは聞きたい事から片付けよう。――――我が盟友、ヴァイシュラバはどのような最期を遂げた？」
「ヴァイシュラバ？」
「再世戦争の折り、貴様が打ち倒した次元将の事だ。此方の世界ではガイオウと名乗っていたそうだが？」
　ガイオウという懐かしい名前を耳にしてシュウジの目が見開く。次元将の盟友、即ち目の前のこの男もガイオウと同じ……いや、詮索考察は今は不要だろう。
「別に、大したモノじゃないさ。ガイオウは……アイツは最期まで自分に正直だった。素直で、勝手で、何処までも自由な奴だったよ」
　ホットドッグを頬張り平和の味だと語るガイオウ、次元将とやらの使命で戦い続けてきた男だが、再世戦争の時の奴は何処か楽しそうにしていた。

自由に生きて自由に戦い、そして自由に死んでいった。ただ自分の心のままに駆け抜けて、そして死んで逝った。閃光の様な男、それがシュウジから見たガイオウという男の在り方だった。

「……そうか」

そのシュウジの口から聞かされる盟友の最期に、皇帝アウストラリスは瞑目して頷いた。目の前に盟友を屠った男がいる。しかし皇帝はシュウジを前に驚くほど静かだった。

「それで？　伝えたい事ってのは？」

「リモネシアの住人、そしてシオニー＝レジス、お前の大切なモノ達はお前を呼び寄せる餌として大切に保管している」

餌、保管。シュウジにとって恩人とも呼べる人達に対してのアウストラリスの言葉にシュウジの目は細くなる。拳を握り締め、全身に気力を巡らせる。今にも殴り掛りそうなシュウジに皇帝アウストラリスは不敵に笑みを浮かべる。

「良い気迫だ。敵意と殺意に満ちている。そうだ。そうでなくてはつまらん」

「……御託はいい。来るなら来いよ、次元将だろうと何だろうと関係ない。元々俺はお前をブチのめす事を目的としてきたんだからよぉ」

「そうか、それは気が利かなくて済まないな……フフフ」

「ククク……」
「フフフ、フハハハハ」
「ククク、クハハハハ」
「フハハハハ!!」
「クハハハハ!!」
　刹那、拳が放たれる。皇帝が、シュウジが互いに相手の顔面目掛けて握り締めた拳を放つ。人一人を撲殺して余りある威力を持った拳、二人の拳がぶつかり合った瞬間何が起こるか分からない。バナージはミネバを庇い、ガエルはサイアム翁の前に立ち、フロンタルだけはその光景を目に焼き付かせていた。
　そして、遂に両者の拳が激突しようという所で――――。
『お二方だけで狡いですわ。私も混ぜてくださいまし』
「っ!?」
　どす黒い泥の影が、二人の間に割って入ってきた。
　極限に高まった思考、周囲の時間が緩やかになっていく中、アウストラリスとシュウジは見た。刹那の時間の中で何事もなく介入してきた愛を騙る獣（サクリファイ）、突然の乱入にアウストラリスが舌打ちを打って距離を開けようとする最中、シュウジはある異変を感じ取る。

何だ？　何かがおかしい。時間の間隔が緩やかに感じているのは極限の集中力における時間の遅滞錯覚かと思ったが、それにしたって遅すぎる。

いや、遅すぎるのではない。巻き戻っているのだ。ミネバを庇おうとしているバナージが、サイアム翁を守ろうとしているガエルが、それぞれ元いた位置に戻ろうとしている。不可解な現象、しかし自分とアウストラリスには変化がない。

どういう事かと戸惑った時、ヒビキの叫び声が周囲に響き渡っていた。

『スズネ先生、あ、あぁぁぁ……うわぁぁぁぁぁっ!!』

「ヒビキ君!?」

断末魔の様なヒビキの叫び声、何故彼の声が聞こえてくるのか、戸惑いよりもその尋常ではないヒビキの様子に不可解に思ったシュウジが外を見渡し……。

そして、目撃する。黒いヘリオースの光に貫かれ、爆散するジェミニア。あの機体には確か、スズネ先生ことアムブリエルが乗っていた筈。

『ヒビキ＝カミシロ、貴方の感情の爆発により彼は禁忌の扉を開かせる。ウフフ、よもやこの世界に太極が二つ――――いえ、三つも顕れるなんて、なんて恐ろ(楽し)しいのでしょう』

完全に余計な事をしてくれた奴にシュウジは無言で拳を繰り出す。ニヤニヤと笑みを浮かべるサクリファイに吸い込まれる様に叩き込まれる二つの拳、横目で見れば憤怒の形相のアウストラリスがいた。

「消えろ」
「死ね」
　二つの拳を受けて、それでも尚笑みを消さないサクリファイは嗤いながら四散する。煙の様に消えていくサクリファイを無視して辺りを見渡すが、やはり巻き戻る時間の流れは止まる様子はない。
「……興醒めだな」
「……」
「シュウジ＝シラカワ、蒼の魔人よ。改めて貴様に布告しよう。我が新地級皇国（ガイアエンパイア）の本拠地、ラース・バビロンにて待っている。リモネシアの人々を、シオニー＝レジスを救いたければ、俺の下まで来い」
　それは明確な宣戦布告だった。貴様を倒すのは俺だと、誰にも譲れはしないという意味を込めていい放たれた皇帝の言葉は、しっかりとシュウジに刻み込まれた。
　シュウジは応えない。ただ敵意と殺気でアウストラリスを睨み付ける。ギラギラと珍しく闘志を剥き出しているシュウジに満足した皇帝は巻き戻る時間の中でも自由に動き、空間に孔を開けてメガラニカを後にする。
　巻き戻るスピードがドンドン速くなっていく。まるで波に取り残される様な感覚、取り合えず倒れ伏しているフロンタルの手足だけでも縛っておこうかとシュウジは予め

持っていた捕縛用の縄を取り出し、フロンタルの身柄を封じていく。
これで一先ずバナージとミネバの安全は守られた。取り敢えず一つの仕事をやり終えたシュウジは、いつでも出撃出来るようにワームホールをいつまでも開いておける準備をして……。

そして、時は巻き戻る。

その１９７

Ｚ―ＢＬＵＥとサイデリアル、メガラニカ周辺で行われる二つの組織の激突は苛烈の一途を辿った。バルビエルとセツコ、エルーナルーナとランド、尸空とクロウ……そしてヒビキがアムブリエルと激突し、その戦場はスフィアリアクターが主軸として争われていた。

バルビエルのスフィア、怨嗟の魔蠍によって自我を失うほどの怒りに染まったネオ・ジオンとの攻防、それに合わせてサイデリアルの追い打ちにＺ―ＢＬＵＥは徐々に劣勢の窮地に立たされていた。

そんな時だ。ヒビキとアムブリエルの間に黒いヘリオースが割って入ってくる。突然の強襲、予兆も前兆も無く、いきなり割って入ってきたその存在。シュウジから事前情報として知られていたが、突然の事態を前に、ヒビキの動きは一瞬止まる。

瞬間、ヘリオースの狙いがジェニオンに定まる。偶々なのか、それとも狙ってなのか、ジェニオンに狙いを定めたヘリオースはその手を掲げ膨大な熱量と光を収束していく。

回避、間に合わない。防御、不可能。眼前に迫る死を前にヒビキは硬直し――――。

『ヒビキ君！』

刹那、アムブリエルの駆るジェミニアがジェニオンの前に立つ。聞こえてくる懐かしい声、その事に呆然としたヒビキが目にしたモノはヘリオースの光に貫かれて爆散するジェミニアの最期だった。

次に否応なしに突き付けられるアムブリエルとスズネの死、その事実を前にヒビキの感情は一気に振り切れる。即ち、事実の――――現実の拒絶である。スズネの死を認めない、その醜くも他者を想うヒビキの願いが奇跡を呼び寄せた。

バルビエル、セツコ、エルーナルーナ、ランド、尸空、クロウ、アウストラリス、そして複数のスフィアを所持しているアサキム、ヒビキを除いたスフィアリアクター（スフィアの持ち主達）は奇しくもこの時一つとなった。

クロウ達はヒビキと同じくスズネの死の拒絶を、そしてアウストラリス達サイデリアル側とアサキムはヘリオースを通してサクリファイの拒絶をそれぞれ願い、そして一つの奇跡を具現化させた。

時間の逆行。スズネの死を、サクリファイの目論見を根刮ぎ否定する奇跡の所業、しかしその事を認識出来るのはアウストラリスを含めて二人しか存在しない。

シュウジ＝シラカワ。彼もまた時の流れを明確に認識し、戸惑いを見せる者だった。巻き戻っていく世界、全てがもとに戻りスズネの死も無かった事にする禁忌の所業。全

てのスフィアがサクリファイを否定する事でこの一瞬だけ一つに纏まった。
　そして時は再び動き出す。ヘリオースが攻撃を仕掛けてくる瞬間、割り込もうとしてくるジェミニアを押し退け、ヒビキは敢えて前に出る。
『っ!?』
『あっ、ぐうううっ!』
『ヒビキ!?』
『マジかよ、今の防ぎやがった!』
『凄いじゃないかヒビキ!!』
（皆、気付いて無いのか？　今のがさっきと同じことの繰り返しだってことに……）
　ヘリオースの攻撃を防ぎ、その余波で苦悶の声を漏らしながら、ヒビキは訝しむ。どうして自分以外気が付いていないのか、混乱し、戸惑うも今は目の前の敵を排除する方が先決だ。
　目の前にあるのは嘗て自分を守り導いてくれた恩人の機体、全ては自分を騙す為の方便であり、全てはアドヴェントの掌の上の出来事だった。もう彼はいない、シュウジから聞いたアドヴェントの最期に僅かばかりの逡巡を巡らせたヒビキは、背後にいるアムブリエルに呼び掛ける。
『アムブリエル、来い!!　お前もジェニオンに乗るんだ!』

『なっ!?』
『ヒビキ、何を言ってるの!?』
突然の言葉にアムブリエルだけでなくＺ―ＢＬＵＥの面々も驚愕に目を剥かせる。
『お前、いきなり何を言っている？　今さっきまで私と殺し合いをしていた相手に……正気か？』
それはアムブリエルだけではなく、宗介達にとっても同意見だった。当然だ。確かにＺ―ＢＬＵＥは嘗て敵だった者達とも和解し、今は共に戦う仲間になっている者も多くいる。
しかし、アムブリエルにこれ迄の前例は当てはまらない。スフィアの力にて元のスズネの人格はアムブリエルによって上書きされ、現在の彼女はＺ―ＢＬＵＥの明確な敵である。説得するのは分かるし納得出来る。しかし、いきなり自分の所に来いと言うのは少々強引が過ぎるのではないだろうか。
戸惑うＺ―ＢＬＵＥを他所にアムブリエルの言動は熱を帯始める。自分はアムブリエルで西条スズネではない。現実を直視しないヒビキにいい加減怒りが押さえきれなくなった彼女に……。
『じゃあ、何でお前は俺を助けようとした！』
『っ！』

『お前は俺を殺したかった筈だ。俺を殺してジェニオンを自分のモノにしたかった筈なのに……どうしてお前は俺を助けたんだ』

『――――』

指摘されてアムブリエルは黙り込む。言い返すことは出来た。ジェニオンはいずれ自分が乗るための機体で無駄に傷を付ける訳にはいかないと、それらしい理屈を捏ねて誤魔化す事は出来た。

しかし、その言葉が上手く口に出せないでいる。アムブリエルの意思ではない、アムブリエルという人格に塗り潰された筈のスズネの意志がアムブリエルに必死に抵抗していたからだ。

『お前がどんな理由で俺を助けたのか、良くは無いが今は良い。お前はアムブリエルでもあり同時にスズネ先生でもある。だったら俺はそれを踏まえた上で二人を守るだけだ!!』

『っ!!』

ストンッ。と、アムブリエルの胸中に何かが収まった気がした。自分をスズネとしてではなく、アムブリエルとして守ると豪語するヒビキにアムブリエルは心の底で己の負けを認めた。

叶わないと、自身の自由の為に何処までも悪辣になれる女は青臭い少年の決意に負け

た。フッと笑みを溢してアムブリエルはジェニオンの副座席へと転移する。それはアムブリエルがジェニオンのもう一人のパイロットとして認められた証しでもあった。

『其処まで言い切ったんだ。合わせろよヒビキ』

『あぁ！』

二人の呼応が合わせ、高まり、ジェニオンの奥底に眠るスフィアの力を呼び起こす。ジェニオンからジェニオン・ガイ、そしてジェミニオン・レイへとその姿を変えていく。

それでも尚、スフィアの輝きは止まらない。寧ろ更に高まり強くなっていく。果てなく、何処までも、限界なく強くなっていく二人の輝きはジェミニオン・レイに新たな力をもたらす。

『行くぞ、ヘリオース!!』

駆ける。音を越え、光に迫るジェミニオン・レイの動きはＺ―ＢＬＵＥは勿論サイデリアルの幹部達の目にも捉えきらなかった。振り抜かれる打撃の嵐、ヒビキのジークンドーを遺憾無く発揮したその打撃はヘリオースに容赦なく叩き込まれる。

『希望も、絶望も！』

『私達は乗り越えていく！』

『『これは、そのための力!!』』

ジェミニオン・レイの翼が分離し、一つの柄の形へと合体する。そこから伸びるのは希望と絶望を越えて放たれる人類の刃。
『『ジ・オーバーライザー・アーク!!』』
あらゆる悲劇を、惨劇を、絶望を両断する。そんな願いが込められた次元の刃は、そのままヘリオースへと叩き込んだ。
ヘリオースに抵抗は無かった。なすがまま、されるがままにジェミニオン・レイの刃を受けたヘリオースは爆発し、光と共に消えていく。倒したのだろうか？　いや、派手に倒された雰囲気ではあるが、きっと完全に破壊できた訳ではない。
その光景を目の当たりにしたサイデリアル、Ｚ―ＢＬＵＥの両陣営は言葉を失う。ヒビキとアムブリエルが見せた輝き、二人の力に彼等はただ見入っていた。
しかし、その瞬間も長くは続かない。ネオ・ジオンをそのスフィアで操り、最もＺ―ＢＬＵＥに苛烈に攻撃してきたバルビエルが、その顔を憤怒に歪ませて吼える。
『アムブリエル、何のつもりだお前ぇぇっ!!』
『悪いな、どうやら私もお前が嫌う半端者だったらしい』
『あーらら、まさかこんな大胆な裏切り宣言があったなんてね』
『……まぁ、想定内だ』
激昂するバルビエルに対し、エルーナルーナと尸空は然程驚きはなく、寧ろ納得し

た様子でアムブリエルの裏切りを容認している。その事が納得出来ないバルビエルは己の機体に力を込めて最大限の一撃をジェミニオン・レイに叩き込もうとするが。

『そこまでだ』

聞き覚えのある声が聞こえてきた瞬間、身動き一つ出来なくなる程の圧が両陣営にのし掛かる。出所を探った先にいるのはエルーナルーナのプレアデス・タウラ、そこに簡易に備えられた玉座に戻ってきた皇帝アウストラリスが座していた。

『なんだい大将、用事は終わったのかい？』

『あぁ、此方の用件は済んだ。撤退の準備を』

『アイアイサー』

瞑目し、もうこの場には用はないと全部隊に撤退を呼び掛ける。呆気ない幕切れ、アムブリエルの裏切りにも特に何かを言うつもりの無いアウストラリスにしかしバルビエルが噛み付く。

『ま、待てよアウストラリス！　アムブリエルをこのまま放置するつもりか!?』

『あぁ』

『ふざけるな！　どうして裏切り者をそのままにしておける!!　……もういい、アンタが何もしないのなら代わりに俺が――』

『バルビエル、止めておけ。それ以上動けば消されるのはお前の方だ』

『な、何を言って――――ヒィッ??!!?』

アウストラリスに呼び止められ、ふと視界を外すバルビエル、視線をジェミニオン・レイに戻した彼が次に目にしたのは此方をジッと見て佇むグランゾンがいた。

文字通り目の前に、何もせずただアン・アーレスを見つめるグランゾンにバルビエルは言いし難い悪寒と恐怖を感じた。一体いつそこにいたのか、気配もなければ音もなく、ただ唐突に現れた魔神にバルビエルは驚愕で呼吸すら儘ならなくなる。

Ｚ―ＢＬＵＥ達も同様で、メガラニカにいる筈のシュウジがいきなり戦場に出てきている事に驚いている。ふとメガラニカの近くにいた者がそちらへ視線を向けると、搬出口からユニコーンガンダムが出てきた。

『どうした？　やらないのか？』

低く、それでいて殺気の籠った挑発。バルビエルが動けばそれこそアン・アーレスごと砕くつもりでいる彼の魔人にバルビエルの憎悪は急速に萎えていく。

以前バルビエルがカミナシティで行った事、シュウジはその事を今でも忘れてはいない。

スフィアリアクターとしての資格が無くなるギリギリの所、折れそうな心を必死に繋ぎ止めるバルビエルのその姿は最早嘗ての脅威はなかった。

バルビエルは恐ろしい敵だ。スフィアで人身を憎悪で掻き立て、更なる悲劇を増幅さ

せる。Ｚ―ＢＬＵＥの多くの人間にとってバルビエルは許されざる敵――――だった。

その不倶戴天の敵がグランゾンとシュウジという二つの魔を前に戦意を失い掛けている。いや、もう彼に戦えるだけの気力は残されていないかもしれない。その証拠にこれまで怨嗟の魔蠍によって自我を失い掛けていたネオ・ジオンの兵士達はバルビエルのスフィアから解放され、我を取り戻して気絶している。

許されない敵、セツコ＝オハラにとって複雑な相手だった者、サイデリアルの幹部の一人が何もされずに心が折れそうになっている。憎悪に呑み込まれる処か、恐怖で竦み上がっている彼の姿を目の当たりにしたルルーシュは嘗て大きな借りがあった相手なのに今は何故か同情の念すら抱いてしまっている。

そんなバルビエルを一瞥した後、近くのサイデリアルの人間に運ぶよう促し、シュウジはグランゾンと共に後ろに下がる。彼にとって最早バルビエルは取るに足りない相手なのだろう。相変わらずシュウジにとってバルビエルは許しがたい敵だが、それ以上の存在になることはないだろう。

見逃してくれた事を内心で感謝しながら、アウストラリスは主力部隊と共に戦線から離脱する。その様子を黙したまま見送るＺ―ＢＬＵＥ、彼等が次元力で跳躍したのを見計らうと、ユニコーンガンダムを駆るバナージが、メガラニカで起こった事を皆に伝えていく。

　そんなバナージを見守りながらシュウジはグランゾンを操り、ジェミニオン・レイの隣へ並ぶ。一瞬向こうからアムブリエルらしき女性の悲鳴が聞こえてきたが、聞かなかった事にしてシュウジはヒビキに語り掛ける。
『いやー、凄かったねヒビキ君。見てたよさっきの一撃』
『い、いえ、俺だけの力ではないから……』
『謙遜……いや、事実か。この場合礼を言うべきかなアムブリエル、弟分を守ってくれた事に対してさ』
『べ、別に成り行きでそうなっただけで、結果論に過ぎないからね。れ、礼を言われる筋合いは無いさ』
　何故だろう。アムブリエルが思っていた以上に吃ってしまっている事に違和感を感じるシュウジだが、アムブリエルからしてみれば挑む度に瞬殺されてきたので目の前の魔人は恐怖の対象以外の何者でもなかった。
　あれほど恐ろしく強敵だったアムブリエルが借りてきた猫の様に大人しくなってしまっている。それが何だか可笑しくてつい噴き出しそうになってしまうヒビキ、するとその時、Ｚ―ＢＬＵＥ全体に向けてオットー艦長から緊急通信が開かれてきた。
『みんな、大変な事になった！』
『オットー艦長、何があったんです？』

『たった今ブライト艦長から連絡があった。ここにコロニーレーザーが発射される様だ！』

コロニーレーザー。オットー艦長から聞かされるその言葉にＺ―ＢＬＵＥに動揺が広がる。それは宇宙世紀に置いて最悪の代名詞とも取れる戦略兵器、一度火を入れれば何もかも消し去る破壊の光、それが間もなく発射される事態にＺ―ＢＬＵＥは決断を迫られた。

『早く現宙域から離脱しないと！』

『待ってください！　メガラニカにはまだオードリーが！』

『ネオ・ジオンの兵士達も見捨てられん！』

『でももう時間が！』

慌てながら、それでも行動に移すＺ―ＢＬＵＥ。人命は無視できない。ネオ・ジオンも、オードリーも、どちらも救いたい。時間と事態に板挟みになり、もがき苦しむＺ―ＢＬＵＥ。

そんな彼等に対し。

『そこか――――ワームスマッシャー』

シュウジはグランゾンのほんの僅かな力を解放させる。グランゾンから放たれる光は遠く離れたコロニーレーザーの動力部を的確に撃ち抜き、その機能を停止させる。

『……ふぇ？』

ふと、そんな間の抜けた声を漏らしたのは誰だったか、グランゾンのしたことに一瞬理解出来なかったＺ―ＢＬＵＥはその目を重力の魔神に向け……。

『ん？　あぁ、ご安心下さい。コロニーレーザーはたった今動力部を撃ち抜いたので機能を停止しています。一応暴発しないよう気を付けて狙ったので大丈夫だと思いますが、念のためここで向こうを監視してますね』

『『あ、はい』』

と、相変わらず善意全開で宣うシュウジにＺ―ＢＬＵＥは力なく答えるのだった。

その１９８

――地球、シャイアン基地地下・コロニーレーザー管制室。
Ｚ―ＢＬＵＥのいるメガラニカ周辺宙域から遠い所にある地球、未だ侵略を行うサイデリアルを前に地球連邦が抵抗を続けるなか、そこは場違いな程に静かだった。
外ではまだ地球人類が懸命に戦っている。大切な人の為に、意地の為に、誇りの為に、今日も何処かで地球の人々は戦いの中で散っていく。
そんな凄惨な現実を前に、管制室にいる多くの面々の表情は穏やかだった。マーサ＝ビスト＝カーバイン、ローナン＝マーセナス、共にラプラスの箱の真実を知る者で地球を裏から操るクロノのメンバー達。箱の真実を、そしてその奥に眠るクロノの教義が暴かれるのを阻止するために、彼等はコロニーレーザー〝グリプス２〟の起動準備に入る。
「……状況は？」
「コロニーレーザーの発射準備は完了した。後は実行を承認するだけだ」
未だ迷いのあるマーセナスに対し、マーサは偉く上機嫌だった。地球は未だに危機的状況から脱してはいないのに、彼女には地球の未来など頭になかった。自分はクロノ

だから、サイデリアルという強大な組織の尖兵であり、人類の進化を監督する存在。
だからマーサは己の安全を信じて疑わない。自分はサイデリアルの人間だから、地球人類はクロノとサイデリアルの下で生きていくしかない。だからそれを邪魔するＺ―ＢＬＵＥを排除する。全ては宇宙の存続を賭けた戦い、真戦の先で生き残る為に。
ネオ・ジオンを打倒するＺ―ＢＬＵＥを自分達が排除する。それを信じて疑わないマーサに対し、マーセナスは顔をしかめている。
それを見たマーサは呆れの溜め息を溢す。何て女々しい男なのだろう。今更迷った所で結果は変わらない。ここまで来ておいて、一体何に迷う必要があるのだろう。地球を裏切ったという自覚はない、何故なら最初から彼女は自らを地球人として定めてはいない。
彼女は〝クロノ〟、その末席に名を連ねる者。故に地球の未来に興味はなく、あるのはただ己の保身だけ。一応クロノの教義を守れれば地球人類の安全は保証されるかもしれない。そうなればこの地球人も選ばれた存在としてサイデリアルに認められるかもしれない。
「では、Ｚ―ＢＬＵＥの最期を見届けるとしましょうか」
「あぁ――――これで、コロニーレーザーの発射は承認された。数分後、Ｚ―ＢＬＵＥはメガラニカと共に消滅するだろう」

割り切った様に、自戒するように口にするマーセナスにマーサは頬笑む。これで良い、これで自分達の目的は完遂される。クロノの教義を守った立役者として、サイデリアルに認められる様になる。

自身の保証された未来を前に笑みを浮かべていると、管制室に一人の男性が雪崩れ込むように入ってきた。マーサの甥、アルベルト＝ビストである。

「何て事を……！」

「今更何を言っても無駄よアルベルト、コロニーレーザーの発射は承認された。もう止める事は出来ないわ」

「マーサ叔母さん！　貴女という人は……！」

笑みを浮かべるマーサにアルベルトはその胸倉を掴んで食って掛かる。

「力で人をねじ伏せる。そんなのは男の論理じゃないか！　男の論理を否定し続けてきた貴女が、結局こんなやり方を取るのか！」

胸倉を掴み、叫ぶアルベルトに対しマーサの目は冷ややかだった。結局、この男は自分の役に立たなかった。Ｚ―ＢＬＵＥに乗り込ませて彼等の妨害をさせようとしたのに、変に感化されてしまう始末。

結局の所、信じられるのは己だけか、未だに喚く甥を視界の端に追いやり、巨大モニターに映るコロニーレーザーの様子を見る。そんな二人を見かねたマーセナスがアル

ベルトを諭すように割って入った。
「手を放せ、アルベルト君。君に一体なんの権利がある?」
「リディ少尉がいるんだ!」
「……何?」
「はっきり感じた!　インダストリアル７には貴方の息子……リディ＝マーセナスがいるんだ!!」
「何だと!?」
「バンシィのパイロットは彼なんだ!!」
　それはマーサによって意図的に隠された情報だった。土壇場でマーセナスが心変わりをしないための布石、酷くショックを受けたマーセナスがマーサに視線で問い詰めるも、彼女は白々しく肩を竦めるだけ。
　……何もかもが手遅れだった。既にコロニーレーザーは発射する段階に入っている。どんなに喚こうと藻掻こうと、定められた運命を覆す事は出来ない。
　マーセナスは手を伸ばす。彼の伸ばした手の先にいるのは子供の頃のリディの姿、一体自分は何を間違えたのか、崩れ落ちる彼が耳にしたのはコロニーレーザーの発射の合図ではなく。
「ご心配には及びませんよマーセナス氏、ご子息は健在です。勿論、Ｚ―ＢＬＵＥも」

「っ！」
聞き慣れない声にマーセナスの意識は浮上する。見上げれば扉の前に二人の男性が立ち並び、自分を見下ろしていた。片方は連邦の将官、ブライト＝ノアでもう片方は――。
「どうして、お前がここにいる!?　シュナイゼル＝エル＝ブリタニア!!」
「こうして面と向かって会うのは初めてですね。マーサ＝ビスト＝カーバイン」
シュナイゼル＝エル＝ブリタニア、嘗ての超大国の宰相が不敵な笑みを浮かべて其処にいた。
「なに、偶々近くを通っていた所にブライト艦長と出会いましてね。あなた方とは面識はありませんが知らない仲ではありません。折角なのでご挨拶とでも思いましてね」
睨み付けてくるマーサにシュナイゼルは微笑みを浮かべて応える。平然とそんな事を口にする嘗ての宰相閣下にブライトは内心呆れ、そして驚愕していた。
地球に残り、サイデリアルを除いた全ての敵対組織の動向を探っていたシュナイゼル、その類い希なる頭脳を駆使して彼はアマルガムやマーティアル教団等の結社の動向を探り当て、人知れずシュウジやＺ―ＢＬＵＥに貢献していた。
そんな彼が最後に目を付けたのはクロノ、地球政府を裏から操り、意図的に地球人類を縛り付けてきた存在達だった。嘗ての立場上、そういう組織があることを昔から知っ

ていたシュナイゼルだが、クロノの組織の大きさと力の強大さに当初は敵対することを望まなかった。

　だが今はＺ―ＢＬＵＥが、何より親友である彼がいる。数多の侵略者や悪の秘密結社を打倒してきた彼等なら、今後の地球の運命を託すのに充分な力を持っている。故に、シュナイゼルは行動した。クロノに属する者達の動向を、目的を、狙いを。

　数少ない情報とそれによる推理と仮説、そしてその人物達の性格と人格を考慮して導き出した答えにシュナイゼルは確信し、その確立された情報をブライトに渡した。

　クロノ――――即ち、マーサ＝ビスト＝カーバインとローナン＝マーセナスの居場所と彼等が使用するコロニーレーザーのある座標を。ブライトとシュナイゼルが鉢合わせたのも彼がブライトの行動を先読みした事で先回りをしたにすぎない。

　マーサという人物の人格と性格、そしてＺ―ＢＬＵＥの現在位置座標、他にも様々な情報を考え、纏め、組み立て、そして導き出したシュナイゼルの回答。彼の出した答えに寸分の狂いは無く、シュナイゼルの読みはその悉くを的中させた。それも限りなく少ない情報と短い時間の中で。

　これがシュナイゼル。謀略と策略、あらゆる智略に長けた男の人間離れした思考能力。ブライトは思う、こと情報戦に於いてはあのシュウジすら凌駕しているのではないかと。

涼しい顔をしてヴェーダ並の情報処理を有するシュナイゼル、そんな彼は未だに敵愾心をぶつけてくるマーサに白々しく肩を竦めた。
「まぁ、本当の事を言えば私はただの案内人、ブライト艦長を貴方達に引き合わせる仲介人でしかありませんが……マーサ女史、貴方には以前ちょっとした因縁がありましてね。それを清算したいが為にここへ参上することにしました」
シュナイゼルの言う因縁、それは時獄戦役の頃にシュウジに改修されたトールギスを渡す事を考えた時。アナハイム社――否、マーサが操るビスト財団はその情報網を駆使してシュナイゼル達が持つトールギスの存在を掴み、徴収しようとしていた。
その事を危惧していたシュナイゼルはビスト財団よりも早く接触してきたツィーネにトールギスを託すことが出来た。確かにシュナイゼルの力ならば他にもやりようがあったかもしれない、しかし今ならばハッキリと言える。
彼女の助力のお陰でトールギスを彼に届けることが出来た。彼に戦う力を与える事が出来た。友の――親友の力になる事が出来た。そういう意味ではシュナイゼルもビスト財団には感謝してもいいのかもしれない。
だがビスト財団が、マーサ＝ビスト＝カーバインがトールギスを狙った事実は変わらない。トレーズとシュウジ、二人の親友によって生み出された機体を己の欲望の為に付け狙った事にシュナイゼルは何も思わない……という事はなく、内心では静かに怒

りの炎を滾らせていた。
　これもシュウジと出会った事による影響か、だとしたら随分自分も変わったモノだなとシュナイゼルは小さく笑みを浮かべる。
「尤も、清算と言っても別に貴方達に危害を加えるつもりもありません。さらに言えばその清算は既に済ませている。私がここに来たのはブライト艦長の案内と貴方達の表情を見に来ただけです」
「何を意味の分からない事を……」
「すぐに分かりますよ」

　マーサにとってシュナイゼルの言葉はどれも要領の得ないモノばかりだった。一体何が言いたいのか、訝しむマーサに次に届いたのは管制室全体に広がる緊急の事態を報せるアラーム音だった。
「何事!?」
　マーサの苛立った叫びが近くのオペレーターに叩き付けられる。コロニーレーザーの様子を映し出したモニターが赤く染まっている。素人からみても尋常ではない様子に、彼女の目は大きく見開かせた。
「そ、それがコロニーレーザーの動力部が、破壊された様で……」

「現在、コロニーレーザーは完全に機能を……その、停止しています」
「っ!?!?」
オズオズと気弱な調子でマーサの問いに応えるオペレーター、彼の口から告げられる信じられない話に彼女の顔は驚愕に染め上げられる。
コロニーレーザー周辺には多くの部隊を配置させておいた。それこそデブリ一つでも見付ければ即座に報告され、対処する厳重警備の中。
敵対組織の襲来はなかった。奇襲も、されたとしても充分対応出来る準備を自分達は進めてきた。なのに何故、コロニーレーザーはその活動を停止させたのか。
整備不良による不具合？　それとも偶然が重なった誤作動？　混乱するマーサに対し、シュナイゼルは嬉々とした表情でポツリと呟く。
「やれやれ、やるとは思ったけどまさか動力部だけを狙って止めるとは。彼の力を考えればレーザーごと跳ね返す事も出来ただろうに……それとも今後再び使う予定があるのかな？」
脳内で駆け巡る幾つもの推察、その考えること自体が最近は楽しくなってきたシュナイゼル、その顔に微笑みを浮かべていた彼は完全に破壊されなかったコロニーレーザーに付いては取り敢えず脇に置き、改めてマーサに向き直る。
「と、以上がささやかな私からの意趣返しとなります」

「――――なにを、したの？」
「私がしたのはクロノである貴方達の居場所とコロニーレーザーの情報をブライト艦長に流しただけ、直接的な干渉はしていませんよ」
「なら、どうやってコロニーレーザーは止まったの？　既に発射の承認は下され、秒読みは始まっていた。あの段階でコロニーレーザーを止める者はＺ―ＢＬＵＥにただの一人も居ない筈！」
「おや？　ご存知でない？　いるでは無いですか。喩え地球の裏側にいようと、それがどんなに小さな的であろうと的確に射抜いてくる魔神が」
魔神。その言葉を耳にしたのはマーサは顔を青くさせてその場に座り込む。自分が何を相手にしていたのか、改めて思い知ったマーサにもうこれ以上抵抗する意思はなかった。
尤も、彼女が蒼の魔神――――グランゾンを軽く見るのも仕方ないかもしれない、確かにグランゾンは強力だ。しかし以前にＺ―ＢＬＵＥとの戦いに一度は敗北の経験がある事から、決して無敵ではない事が証明されてからマーサは心の何処かでグランゾンに勝機を見出だしていたのかもしれない。
コロニーレーザーなら、或いはＺ―ＢＬＵＥごと葬れるのではないかと。どれだけ強い存在だろうと、付け入れる隙があるのならば何とかなる。そんな慢心とも取れる気

持ちが彼女を絶望の底へ落とし込んだ。
誰が想像できる。あの惑星一つ容易く屠れる力を持つ怪物が、遠くの小さな的も当てられる器用な真似が出来るだなんて。
――――詰まる所彼女は、マーサ＝ビスト＝カーバインは、ブライトでもシュナイゼルでもなく、ましてやＺ―ＢＬＵＥでもなく。今は此処にはいない、蒼のカリスマとグランゾンという埒外の化生に負けたのだ。
尤も、仮にコロニーレーザーが発射されてもＺ―ＢＬＵＥによって阻まれるのだから彼女の目論見は何れにせよ外れる事となる。ただそれがＺ―ＢＬＵＥ総出で防ぐのと魔神一機に小さな虫を踏み潰すが如く、容易く覆されるという違いがあるだけ。
力無く項垂れるマーサにアルベルトが駆け寄る。抵抗の意思の無い彼女にブライトは同行を求めた。既に彼女に克己心はなく野望も野心も一人の魔人によって砕かれた。成す術ない彼女はアルベルトと共にブライトに連れていかれる。
「……一体、私達は何処で何を間違えたのかな」
そんな彼女を見送ってマーセナスはシュナイゼルに訊ねた。自分達は何を間違えてしまったのか、家の為に、地球の為にクロノという一員として尽力してきたつもりだった。
それが、いつの間にかこんな所に来てしまっていた。地球の為にこれまで戦ってきた

Ｚ―ＢＬＵＥを亡き者にしようとして、己の息子まで消そうとした。
結局、自分のやり方では何も残せなかった。そんな後悔と共に投げ掛けた彼の問は――。
「まぁ、敵対する相手と味方にする相手を間違えた。としか言えませんね」
そんな考えれば分かる答えを乱雑に返されるのだった。
それもそうだ。とマーセナスは達観の笑みを浮かべる。結局自分は家の立場にしがみつくだけで、誰かを信じようとしなかった。この結果はそのツケなのだろう、ならば自分にはもう出来ることはない。後は若者の役目だと悟り、彼もまたブライト達に続き管制室を後にした。

◇

「よぉ旦那、そっちはもういいのですかい？」
　ローナン＝マーセナスとマーサ＝ビスト＝カーバインの両名をブライト艦長が連行していく様子を見て、同じく基地を後にするシュナイゼルの前に一人の男性が用意していた車の脇に立っていた。
「あぁ、元々彼処には単なる仕返しのつもりで寄っただけだからね。大した用事は無かったよ」
「相手側の手札を容赦なく切り落として置いてよく言う。……まぁ、切り落としたのは宇宙にいる魔神さん達なんだけどよ」
　相手側の切り札として用意された兵器を何てこと無い様に無力化させる。やった側にとって大した事のない話でも相手からしたら悪夢でしかない。それを大した事はないと言ってのける時点で男にとって目の前のシュナイゼルもあの魔人と同類に見えた。
「全く、こんな奴等がいるなら最初からアンタ達に付くべきだったのかもしれんな」
「君にも立場と言うものがあったのだから、それは仕方がない事じゃないかな？　ガドライト＝メオンサム」
　ガドライト＝メオンサム、嘗てＺ―ＢＬＵＥとシュウジの前に敵対していた男はそれもそうだなと苦笑する。Ｚ―ＢＬＵＥとの戦いに敗れ、辛うじて命を拾うも、押し寄

せてきたサイデリアルの大軍に合流する事も諦め、ただ放浪の日々を続けてきた。
しかしある日、ガドライトはシュナイゼルと出会いある人物と巡り会いを果たす事で諦めるという逃避を辞めた。今彼の瞳は酒に溺れて自棄を起こしていた淀んだモノではなく、未来を信じて足掻く人間の輝きを灯している。
「……いつか、礼を言わせて欲しいもんだな」
ガドライトが懐から取り出したのは一枚の写真、愛する女と女が抱える二人の娘を写したそれを見て、ガドライトは優しく笑みを浮かべる。
嘗てシュウジが尸空に自身をサイデリアルの一員として認めて貰う為にジェミナイの最後の生き残りであるアンナロッタ＝ストールスを手に掛けた時の事だ。
シュウジはあの時確かにアンナロッタを死に追いやった。ただし仮の付く死だが。
惑星ジェミナイの人間はその体質故に体は頑丈で、それは女であるアンナロッタも同様。仮死状態であっても暫くすれば息を吹き返し、彼女の目が醒める頃には既に尸空達は立ち去った後であり、誰もいなくなったその場から同様に見逃された部下達と共に急いで離れ、人気のない場所で静養し、その後間もなく出産。二児の赤子を授かる事になる。
アンナロッタは今でも母として二人の子供の面倒を見ている。そんな彼女と娘二人を守る為に再び立ち上がる決心をした。もう二度と大切なモノを失わない為に、ガド

ライトは命懸けで、それでいて必ずアンナロッタ達の下へ生きて帰る事を誓った。
　そして、そんなアンナロッタに再び出会い、巡り会わせてくれたシュナイゼルと、尸空から守ってくれたシュウジにガドライトは感謝した。喩え利用される立場となろうとも、それでジェミナイの未来が守れるならば安いものだ。
　今、ガドライトはシュナイゼルの護衛として側にいる。今の自分のやっている事がジェミナイの未来に繋がると信じて。
「さて、そんじゃ次は何処へ行きます？」
「そうだね。取り敢えずシベリアへ向かおうか」
「シベリア？　……旦那、まさかアンタ」
　次の目的地はシベリアと指示され、ガドライトは一瞬面喰らう。何故ならそこはラース・バビロン、新地球皇国の本拠地に他ならないからだ。
「状況は全てクリアされた。アマルガムを始めとした結社は消え、外宇宙からの侵略者達も地球から手を引いた。現在、地球に残された敵対勢力は新地球皇国のみ」
「そして、そこでは必ず彼等が相対する。我が友シュウジと皇帝アウストラリスが」
　ゴクリと、ガドライトの喉から生唾を呑み込む音が聞こえる。蒼の魔人と皇帝、二人の実力はスフィアのない彼では最早図れる事すら難しい。予想も想像も出来ない戦いを前にガドライトは戦慄した。

「……因みに、旦那はどっちが勝つと思います？」

恐る恐る訊ねるガドライトに……。

「ふ、フフフフフフ……」

シュナイゼルはただ愉快そうに笑うだけだった。その様子を見て、ちょっぴり従う相手を間違えたと後悔するガドライトだった。

その１９９

Ω月β日

インダストリアル７にある工業施設、メガラニカ周辺で起きた出来事から翌日、サイデリアルの襲撃も退けてネオ・ジオンとの和解も成功し、今はミネバちゃんの演説を聞きながらこの日記を書いている。

多くの侵略者や秘密結社との決着を着けた事で、後に残されるのは地球に居座る新地球皇国――――もとい、サイデリアルの連中を叩き出す事だけなのだが、取敢えず今までのおさらいという事であの後に起きた事でない事を簡潔に纏めて記しておこうと思う。

まずＺ―ＢＬＵＥをメガラニカ諸ともコロニーレーザーで消滅させようとしたクロノの連中なのだが、どうやらそっちの方はブライト艦長とシュナイゼルの奴が上手くやってくれたらしく、今は政府機関の中で厳しい取り調べを受けているらしい。

何故そこでシュナイゼルが出てくるのだろう？　クロノの拿捕を目的に動いていたブライト艦長なら兎も角、シュナイゼルの奴が出てくるのに疑問に思った自分だが、

よく考えれば元とはいえアイツはブリタニアという超大国の宰相だった男だ。アイツの立場ならクロノに関連する情報は耳に入ってくるだろうし、恐らくコロニーレーザー発射に関する情報もブライト艦長を通して俺達に教えてくれたのだろう。

相変わらず用意周到な男だが、今回はその計算高さに乗ってやるのもいいだろう。何せアイツが事前にその事を教えてくれたからコロニーレーザーの発射を阻止することができたのだ。……まぁ、無粋な事を承知で言ってしまうと、別に撃たれた所でどうとでも対処出来るんだけどね。具体的に言えばワームホールでそのまま打ち返すとか。

けれど、コロニーレーザー自体はまだ利用価値のある代物だ。今後またいつ宇宙怪獣が地球に攻めてくるか分からないし、その規模が大きかったりするとＺ―ＢＬＵＥだけでは対処は難しくなってくる。

無論、その時は自分も率先して前に出るけど、何事も絶対とは行かない。もしもの時の保険というものは必要になってくるだろう。そうなった時、コロニーレーザーの力は頼りになる筈だ。……まぁ、アムロさんや宇宙世紀の世界出身の人達にとっては複雑な話だと思うのであまり強くお勧めはしないが。

しかし、何も戦争に使う事だけがコロニーレーザーの使用目的ではない。兵器として使いたくなければ、生活の場所として扱えばいいのだ。規格も他の住居型のコロニーとそんなに変わらないし、戦う必要性が無くなった世界でグリプス２というコロニー

レーザーを人の住める環境として変えてしまう。
勿論簡単にはいかないと思うが、これまで世界を悲劇に彩られてきたコロニーレーザーを居住型のコロニーに変えてしまえば、人類の歴史という観点から見てもそんなに悪いことではないと思う。まぁ、あくまでこれは個人的な意見であって押し付けるつもりは無いんだけどね。
ただ、こう言う意見もあるんだよーって事を伝えるためにシャア大佐とミネバちゃん、ハマーン様に資料を提出しただけ、この資料も即興で作った物だから粗さが目立つモノだが、参考程度になればと思いこれを三人に渡した。
三人の反応はどれも一緒で何とも言えない顔をしていたから、あまり期待は出来ないだろう。もしコロニーレーザーを破壊するのであれば自分が責任もって実行すると最後に告げた。
で、そのコロニーレーザーと因縁深いネオ・ジオン、彼等に付いての話だが、彼等の容態はバルビエルのスフィアから解放された事でほぼ全員が無事で、残りの数名は今も各々の艦の医務室で休んでいる。
彼等の処遇はフロンタルに預ける事になった。というのも今回の件でフロンタル自身も何か思う所があったのか、拘束を解いた後の彼の態度は控えめで、ただネオ・ジオンの事は私に任せて欲しいと言ってきた。

彼の言葉にＺ―ＢＬＵＥの多くは懸念の声が挙がったが、意外にもカミーユ君は信じても良いのではないかとフロンタルを擁護した。彼が言うには今のフロンタルからは悪いモノは感じられず、邪気の類いもないと言う。

ただ、やはりまだ人類を信じきってはいない様で、今のフロンタルは迷っている状態にあるという。まぁ、どんなに時空修復を用いたところでその先にある宇宙の大崩壊からは逃げられないと知ったなら、自分の行動に疑問を持つのも仕方ないのかもしれない。

今のフロンタルにネオ・ジオンを預けるべきか、本来ならメガラニカで決着を着けるべき相手だった為にネオ・ジオン、Ｚ―ＢＬＵＥの両者から戸惑いの声が出てくる。

そんな時、カミーユ君に続きシャア大佐もフロンタルを擁護した。ニュータイプとして高い感受性を持つカミーユ君を信じ、またフロンタルの中に芽生え始めた変化に賭けて見ようと。

そんなシャア大佐に続きミネバちゃんとバナージ君、アムロさんと、フロンタルを信じようと言う声が増え、最後にハマーン様が認めた事で、ネオ・ジオンはフロンタルに今一時だけ託す事にした。

フロンタルは言った。今も自分の中には人類に対して強い疑念の思いがあると、幾度も戦いを続ける人類を、何度奇跡を目にしても戦いを止めない人が、本当に未来を担

うに足る存在かどうかを。
だから、これから見つめていこうと思う。自分を人だと言ってくれた人間を、もう一度……と。
詰まる所、ネオ・ジオンとの決定的な決着はまだ終わってはいないのだ。今後、地球政府が間違いを犯せば彼等はまた戦いを仕掛けてくるだろう。それに、これまで多くの恨み辛みを重ねてきた彼等が今すぐそれらを呑み干せるのは無理と言う話だし、今後ふとした事でまた状況は変化するだろう。事実、フロンタルの部下の多くはまだ納得出来てはいない。
しかし、前に進めた。戦うしかないとされたネオ・ジオンと和解と言う一つの着地点（テーブル）に辿り着く事ができた。宇宙世紀の歴史から鑑みても、これは小さくはない変化ではないだろうか。
現在行われてるミネバちゃんの演説が終われば、いよいよＺ―ＢＬＵＥは新地球皇国と最後の戦いに挑む事になる。
そこで俺は奴等のトップ、皇帝アウストラリスと直接闘う事になるだろう。既にその為の作戦がルルーシュ君の立案で話が進んでいる。その内容は自分にだけ未だに伝わってこないが、今はただその時が来るのを落ち着いて待つだけだ。
皇帝アウストラリス。奴を倒し、サイデリアルを地球から追い出して初めて地球は

宇宙の大崩壊に向き合える。故に――――いいや、だからこそここで誓おう。
勝つ。そして今度こそシオさん達に会うんだ。
皆に謝る為に、これ迄の感謝と、精一杯の気持ちを伝える為に――――シュウジ＝シラカワ、頑張ります。
あ、そうそう。ついでに思い付いたんだけどアムブリエルの身柄は現在ヒビキ君の預かりとなっている。彼女も最初は敵側だった為、Ｚ―ＢＬＵＥも中々受け入れ難がったけど、ある理由が切欠で結構早く受け入れられるようになった。
なんと、スズネ先生が戻ってきたのだ。これまでアムブリエルに上書きされたと思われたスズネ先生の魂が、ふとした事で表に出てきたのだ。
くしゃみ。そう、あのくしゃみで、だ。なんとスズネエル（今命名した）はくしゃみ一つで人格を切り替える特殊人間になったのだ。これには流石のヒビキ君も苦笑い。
いやね、俺もそれはどうかと思ったよ？　でも次元力の影響か実際そうなってしまったのだから仕方ないじゃない。くしゃみ一つで人格が変わるとかどっかで聞いた事のある話だぞ？
お蔭でヒビキ君は二人の女性を常に相手にしなければならないわけか。いや、文面だけ見れば凄く羨ましい状況に置かれている訳だからあまり同情しないけどね。それに、先の時間逆行の件で何だか追い詰められていたみたいだし、これも彼にとってはいい気

分転換になるのではないだろうか。

……まぁ、他人事だから軽く見ているだけなんだけどね！

◇

ラース・バビロン。新地球皇国（ガイアエンパイア）の最重要拠点、Ｚ―ＢＬＵＥとの最後の決戦が行われるであろうこの地で、一人の男が絶叫する。

「何故だ！　どうして俺を行かせてくれない!?」

　慟哭の如く叫びを上げるのは怨嗟の魔蠍のスフィア所有者、バルビエル。苦悶の表情で出撃を懇願する彼の姿はその顔に施された化粧と相まってより道化に見える。
「何度も言わせるなバルビエル、もうじきＺ―ＢＬＵＥがこの地へ攻めいってくる。お前も一応戦力の一人なのだから勝手な真似は慎め」
「上から目線でモノを言うなよ尸空、いつから俺はお前の部下になった」
　何時にもなく口数多めで尸空はバルビエルを宥めようとする。が、それはただの火に油を注ぐだけで終わり、彼の激昂を止めるには至らない。
「Ｚ―ＢＬＵＥに用があるのはあたしらも一緒さ、そしてそのＺ―ＢＬＵＥは間もなくここへやってくる。ただ待つだけで良いってのに何が不服なんだい？」
　エルーナルーナにとって宿敵であり決着を着けるべき相手はいる。エルーナルーナにとってランドこそがその相手だというのならバルビエルにとってセツコこそが何としても決着を着けなければならない相手なのだろう。
　だが、そのセツコ＝オハラもじきにＺ―ＢＬＵＥと共にこの地に向かってくる。焦る必要はない、その時がくるまで力を蓄えればいい。
　今の地球の支配者は自分達だ。揶揄でも比喩でもなく、事実として彼等はそう認識している。事実、彼等の力を以てすれば地球の侵略はもっと早く完了できたのだ。そうしなかったのは唯一つ、地球にいるスフィアリアクター達を窮地に追い込んで力を育てる

為である。

全ては自分達の目的の為に……しかし、バルビエルは違った。

「俺はバルビエル＝ザ＝ニードルだ！　怨嗟の魔蠍のスフィアリアクターだぞ！　天意に認められ洗礼を授かった選ばれた存在だ！　このままアイツに、シュウジ＝シラカワに、虚仮にされたままで終われるかぁ！」

彼は、バルビエルは違った。天意というモノに認められた事に誇り……否、執着し、己の存在証明にだけ全てを費やすことを決めていた彼に二人の言葉は届かない。当然だ。何故ならサイデリアルのスフィアリアクターの中でバルビエルだけが天意からの洗礼を受け入れているのだから。

彼は全てを棄てた。過去を、昔の仲間を、守りたかった未来を、天意に捩じ伏せられ、天意に従い、彼は御使いの奴隷となった。洗礼を受け入れ、人としての矜持すらも捨て去った。

「俺は負けてない。負けてないんだ！　俺はバルビエル、天意に認められたスフィアリアクターなんだ！」

そして、残ったバルビエルという名前に執着するだけのモノとなった彼に二人は最早言葉を掛けようとはしなかった。

◇

二人の制止を振り切って己の機体に乗り込んだバルビエルはスフィアの導きのままにラース・バビロンから飛び出していく。

Ｚ―ＢＬＵＥを倒す。セツコを殺しシュウジも倒す。自ら憎しみとして奮い立たせ、スフィアの力を増大させる。そんな彼の前に一人の存在が立ち塞いだ。

『っ!?　アウストラリス……っ！』

宙に佇み、瞑目して腕を組む皇帝にバルビエルはたじろいだ。

『お前も、お前も俺の邪魔をするのか!?　サイデリアルのトップのお前が、天意に認められた俺のおっ！』

もう、バルビエルに正常な思考能力は皆無だった。過去を棄て名に縋り、魔人に悉くそのプライドを蹂躙されたバルビエルに最早寄る辺と呼ばれるモノは無くなっていた。

闇雲に憎悪を撒き散らし、所構わず破壊し尽くす。そんな暴走状態にあるバルビエルとアン・アーレスを――――。

「眠るがいい、火の文明の残滓よ。お前達の無念は俺が引き受けた」

皇帝アウストラリスは打ち抜いた。ただの腕の一振りで、アン・アーレスをバルビエルごと打ち抜いて見せた。

『あ、あぁ……』

どうして、自分はこんな所にいるのか何処で間違えてしまったのか、どんなに考えてもその答えは見付けることは出来ず。

『セツコ、僕は……』

バルビエル――――嘗て遠い世界の地球で一人の人間だった男は最期まで自分が何者だったのか思い出せず、空虚のまま愛機と共に爆散して逝った。

アウストラリスの手の中に光があった。それはスフィアと呼ばれる存在で元はある人造の神だったモノ、それを内側に取り込み、新地球皇国の皇帝はＺ―ＢＬＵＥの……魔人のいる宇宙を見上げる。

「さぁ、いよいよだ。待ちわびた時が、決着の時が遂に来た。Ｚ―ＢＬＵＥ、シュウジ＝シラカワ、お前達を倒した時、俺は更なる高みへ至れる。その時こそ」

〝――――俺は、全てを凌駕する力を得られる〟

その目は野心と呼ぶには剰りにも眩しく、純真と呼ぶには剰りにも荒々しく、皇帝アウストラリスは闘志を漲らせてただその時を待った。

ｉｆ

――――――音ノ木坂学院。古くからの伝統と地域の人々の想いによって受け継がれてきた歴史ある学舎。

三年後に控えた廃校。その運命を覆し、ラブライブの優勝を目指す９人の少女達が今日も屋上で奮戦していた。歌と躍りで人々を魅了し、世間を盛り上げるスクールアイドル。【μ’ｓ】それが彼女達の名前である。

学院の屋上で踊りの練習を続けるμ’ｓの顔は真剣そのもので真面目に反復練習を繰り返し、その度に肉体を無理が無いギリギリの所まで追い込んでいく。

「はい、それじゃあ今日はここまで！」

「お、終わったにゃ～」

「つ、疲れたぁぁ……」

金髪の少女の合いの手と共に告げられる本日の練習の終了の合図に幾人もぐったりと床に倒れる。はしたないと注意する者もいるが、疲労困憊な彼女達には届かない言

葉だった。
「もう、だらしないですよ穂乃果」
「うぇぇ～？　海未ちゃんだって肩で息してるじゃんか～。ほらほら～、こっち来て一緒に床のシミになろう～？」
「な・り・ま・せ・ん！　全く、ラブライブの本選が始まるこの大事な時期になんて怠慢な。そもそも穂乃果は生徒会長としての自覚が足りないのです！」
「まぁまぁ海未ちゃん、練習終わったばかりだし、それ以上は……」
「ことりは穂乃果に甘すぎなのです！」
「二年生組は元気ねぇ」
「凛はもうクタクタにゃ～」
「はぁ～、早く帰ってお米食べたい」
　練習が終わって談笑する少女達、もうじき大事な大会が迫っているのにその表情には微塵も揺らぎがない。皆、それぞれ自分の気持ちを固めているのだろう。強い決意を感じさせる彼女達の雰囲気に年長者である三年生はそれを頼もしく思っていた。
「ふふ、皆気合い入ってる。ラブライブへの意気込みも充分って感じやね」
「そうね。後はこの気持ちを途切れずに本選まで持ち込めば、きっといい結果が待ってる筈よ」

「ふん、精々空回りしないよう気を付けて欲しいものね」
「もう、にこってば」
「そんな憎まれ口を叩く悪い子にはワシャワシャするで～？」
　手を怪しく動かして詰め寄ってくる東條希に、矢澤にこは咄嗟に距離を取り威嚇する。馴れしたしんだ光景、しかしそこにはいつもと違う違和感の様なものがあった。
「あれ？　にこちゃんてばもう帰るの？」
「え？　まぁうん。今日は妹達の面倒も見なくちゃいけないし買い出しもあるから。わ、悪いけど今日はこれで失礼するわ」
　視線を泳がせて歯切れの悪い言い方をするにこ、明らかに何かを隠している彼女を怪しく思ったメンバーは視線で問い質す。
　すると、何か心当たりがあるのか。思い付いた顔をする希は両手をポンと叩き……。
「あぁ、そっかー。今日は彼氏さんとお買い物する日なんやね。それじゃあにこちゃんが逸るのも無理無いなぁ」
「んなぁ!?」
「にこちゃんに!?」
「彼氏ぃ!?」
「うそぉ!?」

「にこちゃんの頭の中だけの彼氏じゃなくて!?」
「実在の!?」
「どういう意味よ!」
　希の爆弾発言とも取れるカミングアウトにメンバーの視線が一気に驚愕のモノに変わる。あの矢澤にこが、スクールアイドルに対して誰よりも真剣な気持ちで接してきた彼女がまさかの彼氏持ちという事実。
　ラブライブ本選間近で発覚するまさかの事実、スクールアイドルとしての云々はさておき、メンバーの興味は既にその彼氏の人物像にあった。
「にこちゃん！　彼氏ってどういうこと!?」
「ずるいよ！　私だって彼氏とかまだなのに抜け駆けなんて!?」
「年齢は!?　年上？　それとも年下!?」
「不純異性交遊なんて不潔です！　不健全です！」
「何処までいったの!?　ま、まままさかキスはもう済ませたとか!?」
「ち、違うわよ！　アイツは別に彼氏でも何でもなくて、アイツはただの……そう、ファン！　アイツは私のファン1号なの！　ほら、私ってばファンを大事にするアイドルだから」
「ふーん、忘れたお弁当をワザワザ届けてくれるファンねぇ」

「ちょ、希!?」
「あれ？　なんだかその話どこかで聞いたような……」
「というか、エリチーも知ってる筈やん。ほら、昔エリチーが不審者ーって騒いで職質紛いの事をやった日」
「え？　あ、あー！　あの人かぁ」
希の言葉に絵里は思い出し頷いた。どんどん信憑性が増していく矢澤にこの彼氏持ち疑惑、どういうことなのか詳しい説明を求める穂乃果達に対し……。
「べ、別にアイツはただの幼馴染みで、ファンで――その、ち、違うからー！」
遂に居たたまれなくなったにこは脱兎の如く逃げ出した。
「逃げたにゃ！」
「皆、追うよ！」
『了解！』
先程までの疲労困憊は何処へやら、逃げ出したにこを追ってメンバー達も逃がすまいと駆け出すのだった。
「というか希、貴女知っててやってるでしょ？」
「んー？　なんのことかなー？」

◇

「んじゃ、お先に失礼しまーす」
「修司君、お疲れ様ー」
バイト先の先輩に挨拶を告げ、店を後にする。外を出ると外気の風が頬を撫でて肌寒さを実感させる。
時期はもうすぐ春に差し掛かりその度に季節は巡ってくる。何も変わらない日常、過度な変化は無く穏やかで平穏な日々、いっそ退屈とさえ思えるこの時間が、最近青年――――修司にとってとても得難い時間だと実感していた。
「やれやれ、幼馴染みからのプレゼント一つで浮わつくとか、俺も結構分かりやすいな」
先日、誕生日と称されて幼馴染から渡されたプレゼント。時にはメモ帳として使い、時には日記としてその日の出来事を書いたり等、色々多様な使い方をしている今は手離せない一品となっている手帳。

今度、自分も何か返した方がいいな。彼女に贈るのはどんな品がいいだろうか。まだ彼女の誕生日は先だというのに、今からプレゼントの事を考えるのは我ながら呑気なものだろう。

ふとそんな時だ。背後からやたらと慌ただしい足音が聞こえてくる。聞き慣れた足音だ。走ってくるだろう彼女の姿を容易に想像出来た修司は苦笑いを浮かべて後ろに振り返る。

「ぜーっ、ぜーっ、ぜーっ……」

「どうしたんだよにこちゃん、そんなに慌てて。買い出しの待ち合わせはまだ先の筈だろ？」

全力疾走でここまで来たのだろう。肩で息をして呼吸を整えようとする幼馴染みに修司は苦笑いを浮かべる。

「ちょ、ちょっとね。ラブライブの本選も近いし、今のうちにスタミナを付けておこうかと思って……」

「頑張るのは良いけど程々にな？　過度な追い込みは自分の体を壊しちゃうからさ」

「分かってるわよ。さ、そろそろ行くわよ」

「今日の夕飯は何にするんだっけ？」

「そうね。最近また寒くなってきたし麻婆豆腐なんてどうかしら？」

「よっしゃ任せろ」
「アンタは手出ししない。今日はこっちがホスト何だから大人しくしておきなさい」
「ウェーイ」
　手厳しくあしらわれながらも、それでも練習で疲れているにこの荷物を持とうとする修司。「持つよ」「ありがと」幾度目かなんて分からなくなる位やり続けたやり取り、しかしそんな二人の間には言葉にしなくても以心伝心で伝わる程の絆が確かにあった。
　そんな二人の様子を遠巻きで見つめる八つの影。
「な、ななな何なんですかアレ!?」
「あれじゃ彼氏彼女って関係って言うより」
「熟練夫婦」
「おしどり夫婦だにゃ～」
　顔を赤くしたり、羨ましく思っていたり、和んだりと多様な反応を見せる少女達。ラブラブという枠を越え、一心同体とさえ言える二人の様子に少女達は何も言えなくなっていた。
「と言うか、あれがにこちゃんの彼氏さんなんだー。なんか優しそう」
「いけません。あのような男は押しに弱く、きっと他の女性に言い寄られればコロッと流されてしまうのです」

「海未ちゃんそれ誰目線？」
　先行く二人にあーだこーだ言い合う少女達を余所に二人の三年生の片割れ、東條希は安堵した様に微笑んでいた。
「希？　どうかしたの？」
　そんないつもと違う希に違和感を覚えた絵里がどうしたのかと訊ねると、彼女の手には一枚のタロットカードが握られていた。
「今ちょっと二人の行く末をカードで占ってみたんやけど、中々好感触でね」
　そう言って見せてくるのは【世界】のカードでその方向は正位置を指し示していた。カードに詳しくない絵里ではそれが何を意味するのかは分からないが、少なくとも悪い意味では無さそうな事に安堵する。
「希ちゃん絵里ちゃん！　早く行くよ！」
「見失っちゃうにゃ～！」
　二人の後輩に引っ張られる形で走り出す希と絵里、まだ出歯亀する気なのかと呆れてしまうが、たまにはこんな日も良いだろう。
　先行く二人に追い付くために走り出す少女達。そんな時、ふと希はにこの隣に並ぶ男性の背後から一人の老婆の姿を目にした気がした。
　優しく、慈愛に満ちた老婆の笑み。その姿は一瞬で掻き消えてしまうが、希はそれが

気のせいだとは思わなかった。
そうか、彼女があの人を守っているのか。どこか納得した希は今度こそ二人に追い付くために皆と一緒に走り出すのだった。

それは魔神に見初められなかった男の、有り得たかもしれない世界での日常の一コマ。
シュウジが修司として生きてこれた――穏やかな一時である。

その２００

――――ネオ・ジオンとの戦いにも一つの区切りを付け、この争いも遂に最後の局面に向かおうとしていた。

ソレスタルビーイング号はジンネマン達に任せてミネバ達の補佐を務め、そのミネバもドーリアン事務次官達と共にネオ・ジオンの残存戦力との折衝に当たり、フル＝フロンタルも彼女に協力していくという。

もうすぐジオンという名前は消える。宇宙世紀の世界にとって歴史上最大とも言える出来事、幾つもの争いの歴史を繰り返し、憎しみ合って殺しあってきた人の歴史に一つの終着点を迎えようとしている事実に、Ｚ―ＢＬＵＥもやり遂げた気持ちを抱いていた。

だが、これで全ての戦いは終わった訳ではない。アマルガムを壊滅し、宇宙怪獣を追い払い、地球を狙っていた悪しき者どもからの侵略を退け、クロノの思惑をはね除けた事で、Ｚ―ＢＬＵＥは漸く奴等との決戦に挑めるようになったのだ。

新地球皇国（ガイアエンパイア）、時獄戦役の終戦間近に現れたサイデリアルの主力部隊。
地球は、未だ奴等の手の内にある。地球各地の抵抗戦力も必死に抗ってはいるが、その時間は徐々に少なくなっている。一つの切欠があれば戦線は確実に瓦解し、地球は瞬く間にサイデリアルの手に落ちるだろう。
そんな事にはさせない。何故なら数多の脅威を退け試練を乗り越え、力を付けた地球最強の部隊Ｚ―ＢＬＵＥがいる。
皇国との決着を付ける為に決戦に赴くＺ―ＢＬＵＥ、しかし会戦迄にはまだ僅かな猶予が残されている。地球に巣くっていたクロノなる組織も壊滅状態に追い込み、万全な状態で戦いに挑めるＺ―ＢＬＵＥは少しでも勝率を引き上げる為、現在準備期間という名の、少しだけの穏やかな一時を過ごしていた。
「へぇー、それじゃあテッサもあれからウィスパードの囁きとか耳にしなくなったんだ」
「はい。アマルガムとの決戦時、カナメさんに取り憑いていたソフィアやレナードの目論見諸とも消滅した事も原因ではありますが、元々アレは未来のカナメさんが行ったものですからね。囁く者であるカナメさんの未来とは完全に訣別してしまった以上、もう私達にウィスパードとしての囁きはもう無いでしょう」
「尤も、私には幼少の頃からの知識がありますので、今後は技術者の一人としてやっていけると思います」

部隊の面々の社交場として使われている艦の食堂、そこではこれから待つ戦いに備えて一時の平穏を味わう者達で賑わっていた。
自分と因縁があった敵組織との決着を付けた事で肩の荷が降りたテッサは、手にしたコーヒーを片手に一息着いている。一時期情緒が不安定だった時期はあったが、ここ最近その様子も鳴りを潜め、現在は完全に調子を取り戻したテッサに千鳥かなめは安堵していた。
「まぁ、流石に艦長と技術者の両立は難しいのでまだ先送りですけどね。サガラさん達が大気圏での作戦行動中は私もソレスタルビーイング号の守りに就きます。あそこの施設を使って調べたい事もありますので」
「じゃあ、少しの間……お別れだね」
「カナメさんもサガラさんも、再会を約束してくれますよね」
「問題ない」
それぞれの戦いの場に向かう者同士、互いに健闘を祈る。必ず戦いに勝つと宗介が必勝を誓う中、テッサは新地球皇国との決戦を終えた後の未来を考える。
Ｚ―ＢＬＵＥが地球を解放する間、カナメが捕らえられていた時に出したアイディアとアマルガムの首魁だったレナードが遺したデータの解析、その力とノリコが提供したデータ、これにより人類は未来を切り拓く力を手に出来るようになる。

「テッサ？」
「あ、すみません。少し考え事をしてたみたいです」
「無理ないわよ。アンタの頭脳は今やＺ―ＢＬＵＥにとって欠かせない要素の一つだもの、でも休める時にはキチンと休まないと。私が言えた義理じゃないかもだけど……」
「いいえ、そんな事はありません。カナメさん、お気遣いありがとうございます」
少々考えに耽っていた事が、目の前の彼女には変に思い詰めていたと思われたらしい。別にそんなつもりはないが、彼女の優しさを有り難く思ったテッサは素直にその言葉を受け取った。
「あら、誰かと思えばカナメにテッサじゃない」
「宗介も来ていたか」
「ご一緒しても良いですか？」
「シェリルさん、ランカちゃんも」
「勿論、構いませんよ」
食堂にやって来たのはシェリルとランカ、そしてアルトの三人。彼が言うには自身の機体の整備を終えた後、手持無沙汰に艦内を彷徨く二人に声をかけ、人のいる食堂に足を運んだのだと言う。
同年代が増えた事により一気に会話が花開く。これ迄の戦いや出来事を振り返り、悲

しかった事や嬉しかった事を語る若者達、時空震動という別次元を繋ぐ災害を通して知り合った自分達、不思議な縁もあるものだと染々としながら語る中、彼等の話題はある出来事に流れ着く。

「ねぇ、そう言えば以前私達って別々の世界に跳ばされた事があったじゃない」

「それって、この間部隊を三つに分断された奴？」

「そう、アムロ大尉達は黒歴史のアクシズ落下の場面でシンジ達は自分達の世界。そしてクロウ達は――――」

「嘗ての、在りし日の聖インサラウム王国だな」

シェリルから始まったその話題に誰もが当時の事を思い出す。時空震動により引き起こされた別世界との邂逅、最初は目の前の出来事に翻弄され、これからどうしたらいいか解らなかった。

右往左往していたＺ―ＢＬＵＥ、どうしたら元の世界に戻れるのか、他の皆はどうしているのか、不安と心配で悩んでいた彼等の前にあの黒いアンゲロイが現れた。

有無を言わさずに襲い掛かってくる連中に立ち向かうだけで精一杯だったＺ―ＢＬＵＥ、銀河の中心部で出くわした黒いアンゲロイに苦戦を強いられながらも何とか撃退に成功した彼等は、その後再び起こった時空震動により元の世界へ帰還する事になる。

今思い返しても不思議な体験だった。あそこでもし歴史に介入したり、その世界に留

まる選択をしていたら、一体自分達はどうなっていたのやら。
「でも、それが一体何だって言うんだ？　確かにあの黒いアンゲロイに苦戦したのは事実だけどさ」
「あら、分からない？　確かに私達はあの時それぞれ別の世界へ跳ばされたけど、一人だけいるじゃない。何処へ行き、何をしていたのか、その一切が不明の人物が」
そう言ってアルトに指差し、悪戯っぽく笑うシェリル。アルトは一瞬何の事か理解できなかったが、すぐに彼女の言わんとしていた事が分かった。
蒼のカリスマ改めシュウジ＝シラカワ。Ｚ―ＢＬＵＥが三つに別たれ、それぞれ別世界で戦いを繰り広げていた間、彼だけは何をしていたのか未だに明らかにされていない。
艦長達はある程度の事情を知っているみたいだが、然程深い事情を知っている訳ではなさそうだ。今更彼が自分達を騙そうとはしていないだろうからその辺りは心配しないが、それでも気になるものは仕方がない。
言われてみればと、不思議に首を傾げるアルト達。一体彼は何をしていたのだろうか、元々が謎の多い人間だから謎が一つ増えた程度今更だと思うが、気になると考え出すのが人間の性と言うもの。
ウンウンと頭を捻って考える若者達。テッサに話を聞こうとしても、彼女もアルト達

と同様其処まで深くは知らない様だ。幾ら考えても答えは出ない。そんな彼等の元へ――――。

「おや、皆さんも休憩ですか？」

「あ、はい。ちょっとお先に休ませて――――って」

「し、シュウジ＝シラカワ!?」

「あ、シュウジさん。どうもです」

「ピィッ」

「大佐殿しっかり！」

アルトの背後に音も立てず現れたのは今話題にしていた仮面を外した張本人。シュウジの突然の出現にアルトは飛び上がって驚愕し、かなめは気さくに挨拶し、テッサは小さな悲鳴を上げる。

「ちょっとテッサ、いい加減アンタも慣れなさいよ。シュウジさんが何をしたのか知らないけど、幾らなんでも脅え過ぎよ」

「カナメさんはあの時の彼の恐ろしさを体験していないからそんな事が言えるんです！」

シュウジに聞こえないように小さな声で言い合う二人、テッサが思い返すのは第三新東京跡地で彼とその愛機が見せた新たな形態。圧倒的という言葉では足りず、顕現した

だけで相手の野望を粉微塵にするその威圧感と力は、敵だけではなく味方全員にまで畏怖と戦慄を叩き込んだ。

レナードが自分の目的達成に費やした計画と時間、その全てが一息で消滅したという事実。彼に協力し此方を裏切ったカリーニンが自決する意思すら砕かれ、壊れた玩具の如く乾いた笑みを浮かべた姿を見たときは、気の毒過ぎて憐れにすら思えた。

そんな出鱈目な力を引き出したのが他ならぬテッサ自身、今ならレナードの気持ちが分かってしまうとは皮肉にも程がある。しかもあれだけの破壊を見せ付けて起きながら当の本人は「いやー、上手く手加減できて良かったよ♪」なんて宣う始末。

この男は一体何と戦うつもりなのか、かなめの背後に隠れて様子を伺う事に徹したテッサ。そんな彼女に不思議に思いながらもまぁいいかと取り敢えず触れない事にしたシュウジは、改めてアルト達に声を掛ける。

「もうすぐ新地球皇国との決戦だ。必然的に大きな戦いになるだろうけど、それを乗り越えるためにも休息は必要だ。羽目を外しすぎない程度にリラックスしておきなよ」

「ど、どうもです……」

「なんて、上から目線で言ったけど。これ迄の戦いを経験してきた君達に言うのは愚問か、邪魔したね。それじゃあ俺はこれで……」

「待って」
「ん？」
　自分がいてはゆっくり休めない。そう解釈し自主的に食堂を後にしようとするシュウジをシェリルが呼び止める。
「ねぇ、蒼のカリスマ――――いえ、シュウジ……さん？」
「呼び慣れないなら呼び捨てで構わないよ？　俺も敬語止めてるし」
「そう？　ならシュウジ、貴方に一つ質問したいのだけれど、いいかしら？」
「俺に答えられる範疇ならば」
　年上相手にも物怖じせずに切り込むシェリル、それは喩え世界を震撼させた魔人が相手でも変わらない。相変わらずの彼女にアルトとランカはハラハラしながら見守る。
「なに、そんな難しい話ではないわ。聞きたいのは以前私達が時空震動に捲き込まれた時の事、三つに分断されたＺ―ＢＬＵＥはそれぞれ別の世界へ跳ばされたという話は貴方も聞いたわよね」
「あぁ、知ってるよ」
「その時、貴方は何処で何をしていたの？　元の世界で私達の行方を探してたりしてたの？」
「――――」

アクシズ落とし、赤に染まった世界、在りし日の聖インサラウム王国。三つの世界で体験した出来事、Ｚ―ＢＬＵＥの誰もが体験した時空を越えた体験。しかしその三つのどれにもシュウジの姿はなかった。

合流してから今まで誤魔化してきた話。艦長や一部の者には何となく察しているのか、納得した様子で受け入れているが、好奇心の強いシェリルはそうはいかない。

相手が元敵対した相手だからとか、警戒心を顕にしての言葉ではない。ただ隠されているのが気にくわないだけ、人のプライバシーにつけこむのは人としてどうかと思うが、一度思ったら追及せずにはいられないのがシェリル＝ノームという歌手の気質だった。

「うーん、何て言ったらいいのかなぁ」

そんな彼女にシュウジは腕を組んで頭を悩ませる。実際各艦の艦長達には単独だった時の事を簡潔に説明してはいたが、それだって殆ど暈しての報告だ。流石に、自分が元いた世界に跳ばされて、幼馴染みと出会ってきたと素直に話すのは、気恥ずかしくて言い辛い。

何て言って誤魔化したらいいか、悩んでいるシュウジにシェリルは何か閃いたのか、悪戯を思い付いた小悪魔の如く頬を弛める。

「そんなに言い辛いなら、私が当てて上げましょうか？」

「うん？」
「だから、この私が貴方が何処の世界へ跳ばされたのか言い当てて上げるって言ってんの！」
（（なんか変なゲームが始まった））
　和気藹々としていた空気が一転してクイズゲームのソレへと移行する。え？　これ俺達も参加しなくちゃいけない流れなの？　彼女の強引な提案に困惑するアルト達、暫しのシンキングタイムの後、彼女の出した答えは……。
「そうね。貴方もシンジ達と同様、元の世界に戻って初恋の人と出会ってきた！　しかもそれが幼馴染みの娘！　なんてどう!?」
（（いや、どうって言われても……））
　アルトと宗介はシェリルの素っ頓狂な解答に心中で突っ込むが彼女も年頃の女の子、他人のコイバナにはある程度の関心はあるようだ。
　かなめやランカもその話題に興味あるのか、目を輝かせてシュウジの反応を観察している。対してアルトと宗介の男二人は有り得ないと断じ、興味なさげにそれぞれ飲料水の入ったコップに口を付けている。
　初恋？　幼馴染み？　有り得ない。相手はあの最強のテロリストだぞ？　幾ら恋の話に興味深い年頃と言っても流石に色々盛りすぎている。

「…はは、流石音に聞こえし銀河の歌姫。まさかこうも見事に言い当てられるとは」
「「――――――――は？」」
時が、止まった。困惑を浮かべながら、しかしスッキリとした顔で笑うシュウジに、言い当てたシェリルを含めて食堂にいる全員の動きが静止した。
アルトと宗介は口に含んだ飲料水を垂れ流し、かなめとランカは口に手を当てて絶句し、食堂の隅で関わらないようにしていた葵を始めとしたチームＤの面々は椅子から転げ落ちたりと、激しいリアクションを見せている。
「では、今度こそ失礼するよ。合流したブライト艦長に話しておきたい事があるからね」
それでは、と固まっているシェリル達に一言告げてシュウジは食堂を後にする。彼女（シェリル）に言われた一言で思い出した彼女（にこ）と交わした言葉、やる気が俄然と沸いてきたシュウジは手にした端末を手にブライトの待つブリッジへと向かった。
――――尚、シュウジの初恋話は一気にＺ―ＢＬＵＥ全体に広まり、それを耳にした赤髪の女性二人がモヤモヤしたというのは別の話である。

◇

「――そうですか、シュナイゼルの奴は既に此方の動きを把握していましたか」
「ああ、コロニーレーザー（グリプス２）の位置座標を私から君に伝える様、君に仕向けたのも彼の仕業だ。やれやれ、ブリタニアの宰相という立場を離れてからやけにイキイキしていないか君の友人は」
Ｚ―ＢＬＵＥに合流したブライトにある話を通すためにやって来たシュウジ、ブライトの口から聞かされる友人のハッチャケ具合にシュウジはただ苦笑いを浮かべていた。
今、地球の抵抗勢力は新地球皇国との決戦に向けて最後の反抗の為の準備を小競り合いを続けながら迎えている。戦線の維持を保つ為に各地で奮闘を続けている地球の戦力達、作戦の開始はＺ―ＢＬＵＥの地球降下に合わせて最後の大一番を仕掛ける手筈になっている。
戦線の指揮をする為にシュナイゼルも当然前線に出るだろう。皇国の戦力を少しでもラース・バビロンから引き離す為、必死の抵抗を続けるつもりなのだろう。
他にも地球にはマリーメイアという親友の娘もいる。彼女にはレディ＝アンやブ

ロッケン、ガモンと大貫という最強の護衛が付いている。心配は要らないかも知れないが、物事に絶対なんてない以上不安は残る。
「それで、君が提案してくれた作戦だが……本気か？」
「残念ながら本気です。地球に新地球皇国との短期決戦を挑むのなら、恐らくはこれが最も効率的かと」
「しかし、これでは君に掛かる負担が大きい。ソレに何より――奴はこれに果たして乗って来るのか？」
「それに関しては間違いないかと、奴――皇帝アウストラリスは自分との戦いを望んでいます」
シュウジから渡された端末、そこに記されたのはＺ―ＢＬＵＥが行う作戦とは別の作戦立案。彼ならばこの作戦は可能だろう。実際にシュウジは既に似たような行動を何度も熟している。
しかし、それでは彼に対する負担が剰りにも大きすぎる。不可能だとは思わない、出来ない事とは思えない。しかし、同じ部隊の一員として戦うと言うのに、シュウジの提案はスタンドプレーに過ぎた。
「納得し難い事を言っているのは承知しています。しかし、奴は自分に言いました。待っていると、だったら自分は――俺は、それから逃げる訳には行きません」

「もっと素直に言ったらどうだ？　ラース・バビロンに囚われたリモネシアの人達を助けたいと」
「……すみません」
　既に、シュウジとグランゾンは一つの戦力として数えるのに過剰過ぎる力を備えてしまっている。通常の状態でも地表に多大なダメージを負わせ、ネオやゼロといった状態なら戦場云々の前に地球そのものが形を保てなくなってしまう。
「なに、気にするな。君の気持ちは承知している。君からすれば我々を囮に使うようで気が引けるかもしれないが、我々が皇国の大部分の戦力を相手している間に向こうの総大将を仕留めるというのなら、我々にとっても有難い話だ」
「っ。では、ブライト艦長」
「ウム、蒼のカリスマ――――いや、シュウジ＝シラカワ、君には作戦開始の時に我々と別行動を取って貰う」
　――――故に、ブライトは告げる。
「君の、君自身の力で以て新地球皇国の皇帝、アウストラリスを討ち取り――――――この戦いを終わらせてくれ」
　グランゾンの力ではなく、シュウジという一人の人間の手で――――即ち、己の肉体のみを以てして、かの皇帝に打ち克てと。

無茶で無謀。されど戦いを長引かせず、完全なる形で決着を付けるのは恐らくこれが最上な手段。

――故に。

「その任務、了解した」

シュウジもまたその任務を快諾する。

地球で起こる最後の戦い。新地球皇国との決戦の――約数時間程前の記録である。

その２０１

「――――そうですか、Ｚ―ＢＬＵＥは地球に降りましたか」
『アタシ等も直に彼等と合流する。一応そこで皇国との決戦に挑むつもりだが……アンタはどうする？』
「事ここに至って私が彼等に対して出来ることはありませんよ。後は私に出来ることを粛々と熟すだけ」
『そうかい。なら精々祈っておくれよ、地球人が侵略者を打ち負かす事を』
「生憎と私は現実主義でしてね。求めるのは結果とそれに伴う過程のみ、尤もそれらも間もなく明らかにされるでしょうけどね」
『過程ね。やっぱりアンタは変わったよ。少なくとも破界事変の時よりもずっと人間らしい、それもアンタの友人の影響かい？』
「否定はしませんよ。その代償にとても痛い一撃を受ける事になりましたが」
『そうかい、それは何よりだ。――――じゃあ、そっちは宜しく頼むよシュナイゼル元宰相閣下』

「そちらも、トライア博士」

簡易に造られたテント型の通信拠点、これから始まる地球と皇国との最終決戦を前に最後のやり取りを交わしていたシュナイゼルとトライア＝スコート、情報交換というより互いを気にかけた軽口混じりの会話は、その言葉を最後に終わりを迎える。

ブツッと途切れる映像と音声、電源の通信端末の席から立ち上がると、傍に控えていたガドライトに向き直る。

「そう言う訳だ。申し訳ないが君もここで前線の維持に注力してくれ」

「構いませんよ、何せこっちは妻子を持った身だ。確かに連中とドンパチかませないのは少しばかり心残りだが、比較的安全な場所で戦えるんだ。それはそれで有難いってもんでさぁ」

「比較的安全……ね」

軽い口調でそう言うガドライトだが、彼が言うほど戦況は思わしくない。圧倒的な物量差、軍事技術一つとっても隔絶された力の差、嘗てスフィアリアクターとして活動していたガドライトを以てしても相手は強大。

一つの戦場での状況で言えば、万に一つも此方に勝ち目はない。しかしこの戦線の指揮を任されたシュナイゼル＝エル＝ブリタニアは、こと負けない戦いをするのに当たって、この地球圏に於いて右に出るものはいない。

相手は強大、力も数も全てが劣っている。勝ち目など初めからなく、自分達に出来るのは精々奴等がＺ―ＢＬＵＥに向かわせない為の足止めと時間稼ぎ程度。

「――だからこそ、面白い」

それは元皇族とは思えない獰猛な笑みだった。勝てる見込みの無い戦い、それはこれまで空虚な自分では考えられなかった選択。優れた頭脳を持つが故に、逸脱した才覚を持つが故に、彼の胸中はいつも空っぽのままだった。

――彼と出逢い、全てが変わった。当時はまだ凡人の枠を出なかった彼が、戦いを重ねる毎に逆境に追い込まれる度に彼は成長し、進化していった。それを目の当たりにしたシュナイゼルが初めて抱いた関心と挑みたいという欲求、何かを成したいと強く願った欲望。それら全てが彼の空っぽだった胸中を埋めて、自身をより高みへと至らせた。

戦況は最悪。しかし挑むには易し、何よりシュナイゼルの内には未だにあの魔人に挑みたいという欲求が今も燃え盛っている。彼を相手にすると思えば、この程度の逆境など苦境には値しない。

その頭脳で何百、何千もの勝つ為の策を巡らせていく。相変わらずおっかない人だ。ガドライトは目の前で薄く頬笑むシュナイゼルに心底敵に回さないで良かったと安堵する。

「さて、それでは始めるとしよう。地球を皇国の手から解放させる最後の戦いを」
通信用のテントから外に出る。二人の眼前に広がるのは広大な大地とその遥か前方から視認できる大きな土煙。
間もなく地球最大最後の戦いが始まる。その後に待つ宇宙の終焉、絶対的絶望の中シュナイゼルの胸中には恐怖というモノは微塵も無かった。
空に一筋の流星が流れていく。遥か彼方を行くソレをシュナイゼルは微笑みを浮かべて見送った。

◇

――――地球と皇国、二つの巨大な個がぶつかり合う。その僅か数時間前、戦場より

遠く離れたその地でマリーメイアは未だ薄暗い空を見上げていた。

「――――もう、私に出来ることはないのですね」

少女は無力な自分というものを嫌っていた。何も出来ず、弱者のまはまでは淘汰されるだけだと、踏み躙られ凌辱されるだけなのだと、幼少の頃よりデキム＝バートンに洗脳紛いの教育を施されてきたマリーメイアは、何も出来ない自分に心底苛立っていた。

遠くの大地では間もなく大きな戦いが起きようとしている。今後の世界の道行きを決める人類史上最大規模の戦いが。

そこに自分の出る幕は無い。如何にトレーズの娘という肩書きがあっても、結局自分は所詮力なき小娘に過ぎない。リリーナ＝ドーリアンの様なカリスマ性もなければ、マリナ＝イスマイールみたいに行き場なくした人々の心の拠り所になることも出来ず、足の不自由さをモノともしないナナリーの様に誰かの為に笑顔を振り撒くことも出来ない。

世界を巡って知ったのはただ自分の非力さだけ、１日を必死に生き延び、それすらもレディやブロッケン達の助けがあって漸く出来た事だ。彼女を今まで護っていた二人の老人もやる事があると言って数日前から行動を別にしている。

マリーメイアがやった事と言えば、立ち寄った難民キャンプでも出来た事と言えば、食料の配膳や小さな雑務程度。

何て、自分は小さいのだろう。デキム＝バートンで培った英才教育は人の上に立ち、人を動かし、世界を動かす帝王学のソレ。自分を特別な存在だと認識させ自己を歪めていたその思想は、この旅を以て完全に砕け散った。

自分は弱い。この世界で誰よりも、何よりも脆弱な取るに足らない一つの命。でも、それで良いのだとマリーメイアは思った。

〝この世に強者なんていない。人類皆が弱者なんだ〟

何処かで誰かが叫んだそんな言葉。深く、重く、それでいて慈愛に満ちたその言葉、未だ未熟な身なれどマリーメイアはその言葉の意味を何となく理解した気がした。

自分は弱い。でも、それはきっと自分だけの事じゃなく、全ての命に対して言える事なのだろう。誰も自分一人で何かを成し遂げたものはいない。マリーメイアが敬愛する【彼】も最初は何も出来ず、ただ状況に流されていただけだと聞く。

この旅はマリーメイアが自分の弱さを、非力さを知る旅だった。誰かを頼り、誰かに縋り、それでも誰かの為に足掻く自分を見付ける為の旅。

悔しさはある。許せないと思う自分がいる。しかしソレ以上に誰かの為に何をしたら良いのか、必死に考える自分がいる。未熟な自分を支えてくれた人、叱ってくれた人、皆に対して何が出来るのか。

その答えはきっとこの戦いの先にある。

「マリーメイア様、此方にお出ででしたか。あまり出歩かれてはお体に障りますよ」
「ありがとうレディ、でももう少し空を見ていたいの――夜明けの空を見ていたいから」
「なら、せめてこれを呑むと良いである。温かいココアは冷えた体に良く染み込む」
「ありがとうブロッケン。貴方にも随分助けられちゃった」
「なに、シュウジ殿の命令でもあるし、これでも我輩は紳士を務めているのであーる。礼は不要でありますぞ」
　自分の様子を思って声を掛けてくる二人、そんな二人の優しさが嬉しく思い、渡されたココアの入ったコップを手に取り一口すする。
　温かい甘味が口に広がる。ココアの甘さが口の中に広がってくると同時にその時は訪れた。
「――マリーメイア様、作戦が開始されました」
「……そう」
「果たして、Ｚ―ＢＬＵＥは皇国に打ち勝てるのであろうか」
　レディから告げられる戦いの開幕、遠くで始まった戦闘。音は聞こえない、光も聞こえない、過ぎていくのは時間だけ。マリーメイアの不安を代弁するブロッケンだが、それに答えられるモノはこの場には――。

「大丈夫ですわ」

「だって、Ｚ―ＢＬＵＥには、この地球には、とーっても怖い魔人さまがいるんですもの」

不安を吹き飛ばすような――――年相応の少女の笑顔、マリーメイアの純朴なその笑顔にレディ達も自然と笑みが溢れた。

ココアをもう一口飲み込んで空を見上げる。すると其処には一筋の流星が瞬き。

「――――どうか、私達に未来を下さい」

これまでの事、これからの事、考え出したらキリがない。故に、彼女が願うのはたった一つ。

両手に包んだコップを手にマリーメイアは祈り続けた。

◇

――――ユーラシア大陸、セントラルベース。
新地球皇国（ガイアエンパイア）が地球侵略の為に設立した最重要防衛拠点。ラース・バビロンへの突入作戦を成功させるにはどうあってもここでの戦闘は避けられない。両者にとって絶対とも言える要の関門、そこで遂に両陣営は相対した。
『フフフ、漸く来ましたかＺ―ＢＬＵＥの皆さん』
『来たぜサルディアス！』
『此処までの道中でお前が用意したエグい罠の数々は、俺達が全部破壊しておいたぜ！』
『人の良心に漬け込んで利用する容赦のない策略の数々、どうやらそちらもいよいよ本気になったと言うわけだな』
『えぇ、何せ此方のスフィアリアクターは皇帝陛下を含めて僅か三人。そしてここはラース・バビロンに続く最大の関門にして唯一地上からの通り道、後が無いのは此方も同じ』
『何だって!?』
『保有者（リアクター）が減っただと？　一体誰が……』
『貴女には分かるのでは無いですか？　セツコ＝オハラ、憎しみの対となる哀しみの乙

女のスフィアリアクターである貴女なら、彼の存在の有無を認識出来るのでは無いですか？』

『――――確かに、ラース・バビロンからバルビエルの憎しみが感じられない』

既にリアクターが一人減っているという事実、サルディアスの得意なブラフによる情報操作かと思えたが、セツコの反応からしてどうやらそれは間違いではないようだ。

巨蟹もいる、金牛も射手もここから離れた地のラース・バビロンにて自分達を待ち構える形でそこにいる。しかし最終決戦とも呼べるこの日に【怨嗟の魔蠍】のスフィア保有者であるバルビエルの気配だけが微塵も感じられないのだ。

『――――成る程ね。どうやら皇帝アウストラリスは既に二つのスフィアを手にしているのか』

サルディアスの言わんとしている事を察したアサキムが嘆息混じりに呟いた。その言葉を意味するのは皇帝がバルビエルを討ち、スフィアを強奪したという意味に他ならない。

『まぁ、仕方のない結末なのでしょうねぇ。元の名前を捨て、傀儡として生きることを由とし、彼が唯一捨てきれなかった憎しみもかの魔神が砕いてしまった。憎しみを力にするものがその憎しみを抱かなくなり、残ったのは惨めな自尊心だけ、彼が破滅するのも時間の問題だった訳です。皇帝陛下が自ら手にかけたのがせめてもの情けって奴です

よ』
『そんな、バルビエル』
『サルディアス殿、戯れはその辺にしておきましょう。我々はこのセントラルベースの守護を任された。ならばその任を全うするのみ』
『そうでしたね。失礼しましたダバラーンさん、上司が先に逝かれた事で私も少々ナイーブだったみたいです』
『でも、それもこれまで。励むとしましょう』
　ダバラーン、尸刻、サルディアス。皇国の……いや、サイデリアルの主力部隊の副官達が戦闘体制に入る。ここまで来た以上余計な感傷は不要、彼等はＺ―ＢＬＵＥに対して特大の敵意で以て迎え撃つ。
　三つの戦力を一つにし、防衛力も殲滅力も格段に増したサイデリアル最強の戦闘部隊。ここを越えなければラース・バビロンで待つ皇帝には到底届かない。
『さて、まずはお前達を打ち倒し、奥で控える魔神を引摺り出す事にしよう。我々にとって寧ろそこからが本番』
『やれるもんならやってみろよ！』
『あんた達を倒し、あたし達はラース・バビロンへ向かう』
『皇帝を倒し、地球をお前達から解放するために！』

『行くよ！　サイデリアルの副将ども！』

魔神、グランゾンは対皇帝への切り札。向こうがそう思い、余計な詮索をされる前にセントラルベースを攻略する。激闘は必死、ここから先は僅かな気の緩みが命取りになる。展開される敵部隊、天と地を埋め尽くす圧倒的物量を前に、ヒビキは空を駆ける流星を見る。

（シュウジさん、後は任せます！）

「ヒビキ君！」

「ボサッとするなよ！」

「あぁ、行くぞォォ！」

ジェニオンのブースターに火を灯し、ヒビキは敵部隊へ吶喊する。

今ここに、地球の行く末を賭けた最後の戦いが始まった。

◇

――――ラース・バビロン。玉座。

静まり返る空間、聞こえてくるのは遠くから聞こえてくる微かな戦闘の音と自身の息遣い。余分な近衛は全て防衛機構に割り振られ、この玉座には皇帝アウストラリスと側に控える様に立つ一人の女性のみ。

シオニー＝レジス。嘗てはリモネシアの外務大臣で今はシオと名乗る者、用意された綺羅びやかなドレスを身に纏った彼女は、何かを待っているように瞑目する皇帝に僅かな苛立ちを含めて問い質した。

「――――一体、今更私なんかに何の用件があるって言うのよ」

彼女の物言いに咎める者は此処にはいない。そんな彼女の問い掛けを皇帝は一瞥せずに答える。

「何度も言った筈だ。お前は奴を呼び寄せる餌だと」

「彼なら来るわよ、私なんかがいなくても。――――ここに他のリモネシアの人がいる。それだけで彼は幾らでも無茶を重ねてしまうんだもの」

あの日、彼の日記を読んだ事でシオはシュウジという人間を理解してしまった。

彼は普通の人だった。与えられた力に困惑し、振り回され、利用され、それでも懸命に生きてきた一人の人間だった。彼を魔人にしてしまったのは自分達だ。自分達に関わった所為で彼は世界の敵となり、たった独りで戦い続けた。

彼をそこまで追い詰めた自分が許せない。何も知らず、ただ側にいるだけでしかなかった自分が許せない。彼を……呑気な旅人だと蔑んだ自分が許せない。

――何より、自分の故郷を捨ててこの世界に戻ってきた彼に、嬉しいなんて気持ちを抱いてしまった自分が許せない。消えてしまいたかった。浅はかで、無知で、恥知らずな自分を……誰かに殺して欲しかった。

自決なんて出来なかった。どんなに大層な言葉を口にしても、所詮自分はただの賢しいだけの小娘にすぎなかった。自ら命も断てず、臆病なままで今日という日を迎えてしまった。結局、自分はあの日、自らの故郷を壊した日から自分という女は何一つ変わっていないのだ。

臆病な自分が嫌い、浅はかな自分が嫌い、弱くて醜い、誰かに頼らなければ生きていけない自分が――――大嫌い。

「自戒はそこまでにしておけ」

「……」

まるで此方を見透かしているような皇帝の口振り、いや、事実彼は分かっていた。ラース・バビロンに幽閉されていた彼女の事を、その眼でアウストラリスはシオという女を見極め続けていた。

「シオニー＝レジス。故郷を破壊し、自戒と嫌悪に満ちた哀しき女よ。汚泥にまみれながらも尚、お前という女は美しい」

「――――はあぁっ!!??」

確かに、シオニー＝レジスという女は愚かかもしれない。アイム＝ライアードに言い様に踊らされ、自らの故郷を破壊し、今日という日まで生き延びてきた。

それはただ生き恥を晒し続けた日々かもしれない。しかし、その中でも彼女は自分に出来る事を精一杯やり遂げてきた事を皇帝アウストラリスは知っている。

若くして外務大臣なんて大役を務め上げ、国の為に憂い、働き、権力者たちを相手に戦い続けてきた。故郷を壊してしまった事もそれを受け止め、彼女なりに背負いながら懸命にリモネシアを復興しようとしてきた。

彼女の努力は無駄かもしれない。彼女の研鑽は無意味かもしれない。挫折と苦悩に溺れながらもそれでも足掻く彼女に、アウストラリスはその在り方を美しいと感じた。

「シオニー＝レジス、俺が認めた美しい女よ。悔やむのもいい、嘆くのも良い、だがその歩みだけは止めるな」

「――――あ、え？　え？」

目の前の皇帝から美しいと評されたシオは未だ混乱の中にいる。伝えたい事は済んだ、全ての憂いを取り除いた皇帝は――――。

「来たか」

玉座から立ち上り、頭上を覆う天蓋を仰ぎ見た。

◇

その流星は地球各地から観測されていた。白い尾を引き、地球という引力に引かれながら飛翔するその姿は、正に流れ星。

それがただの流れ星ではないと気付く頃には既に何もかもが遅かった。サルディアスを始めとした幹部達も、ソレの正体に気付く頃には全てが手遅れだった。

軈て流星だったソレはラース・バビロンに到達した瞬間を見計らって自ら自壊する。当然、直前で気取られ、防衛機構が迎撃のミサイルを射ち放つ。

【欲深な金牛】のスフィアリアクターであるエルーナもプレイアデス・タウラの火力を以て迎え撃つ。放たれる弾幕、しかし一手遅かった。

誰もが流星だと思われていたソレ、その正体はミスリルが誇る巡洋艦トゥアハー・デ・ダナンの武装であるトマホーク巡航ミサイルを改造したものである。

本来ならば長距離の目標を攻撃、破壊するためのソレを運ぶ為に即興で改造されたモノ、迎撃の弾幕を掻い潜り、それでも追ってくる追尾性のあるモノにはフレアで以て誘爆させる。

第二幕を張ろうとした瞬間、突然ミサイルは爆散する。自爆したのか？　疑問に思うエルーナルーナだが、次の瞬間それは間違いだと思い知る。

広がる爆炎の中落ちていく――――否、ラース・バビロンに突っ込んでいく一つの人影、爆風の勢いを利用して。

「閂（かんぬき）――――捻り貫手!!」

次元力で固められたラース・バビロンの防御システム、一瞬の均衡、星の力を吸い上

げて組み上げられたその防御システムは。
一人の人間の手によって、容易く貫かれた。

◇

――――――嗚呼、そうだ。君は、貴方は、いつだってそうだ。
自分よりも他人が大事で、それなのに自分がしたいだけだと開き直る。そんな身勝手な君が、私は誰よりも嫌いで。
でも――――――。
「待たせたね、でももう大丈夫」
そんな貴方に、私は何度も救われた。

「俺が、来た!!」

その２０２

『急げ！　既に戦闘は各地で行われているのだぞ！』

ラース・バビロンから遥か離れた荒野、天地を埋め尽くし目的地へ急がんと走る皇国の軍隊。地球各地で始まっている残存勢力による反抗戦、彼等は地球に残された最後の抵抗を掻い潜り、皇国の要であり心臓部になる防衛拠点であるセントラルベースへ進路を進めていた。

今、地球には奴等の最大戦力であるＺ―ＢＬＵＥがセントラルベースで副将達を相手に粘っている。情報は錯綜し、各地で混乱が起きているが、それでも皇国の指揮官は奴等の目論見がなんであるか読みきっていた。

今セントラルベースへ向かいＺ―ＢＬＵＥを叩けば地球での反抗勢力の士気は一気に失墜し、そうなれば地球は完全に皇国――――もとい、我々サイデリアルの支配となる。

Ｚ―ＢＬＵＥを叩けばこの戦いは終わる。次元力の力が大きく作用するこの星を支配すれば、銀河中心部分で争っていた勢力は一気にサイデリアルへと傾くだろう。

この戦い、我々の勝利だ。まだ何も終わっていないのに指揮官の男はありもしない自身の未来予想図に妄想を広げていると。

『ぜ、前方に生体反応あり！　この反応は――――ろ、老人？』

『はぁ？』

部下である者から告げられる困惑に満ちた報告、それを聞いた指揮官も呆けた顔を晒すが、一応の確認という事で巨大モニターにその光景を映し出す。

超遠望の光学カメラで捉えた光景、風で舞い上がる砂塵の中で佇むのは報告通りにあった二人の老人の姿があった。

片方は赤黒く、血の様な色をした胴着を着用して体慣らしの軽い運動をしており、もう片方は単なる作業着を着て何やら奇っ怪な得物を担いでいる。

……一体、何のつもりだろうか？　二人の老人が自分達の進路を阻む様に立っていて、それを見た指揮官の男は思わず真顔で首を傾げてしまう。

まさか……戦うつもりか？　たった二人の老人が？　生身で？　千を超える機動兵器を前に？　そんな事を考えて男はバカなと一笑する。

一体何を考えているのか、馬鹿馬鹿しいにも程がある。恐らくは迷いこんだ老人をとっとと片付けろと男は部下に命じる。

軍団から突出して先行してくるのは一機の機体、全長は十数メートルもある、人が触

れれば忽ち砕けてしまうであろう無人の機動兵器。
命令に従ったまま、容赦なくその剛腕を奮う。道端に落ちているゴミを片付けるつもりで、路上に落ちていた小石を蹴飛ばすつもりで、その機動兵器は二人の老人に鉄槌を下し――――。
機動兵器は宙を舞った。人の十倍以上の機体が、重さに換算すればトンの値を軽く越える兵器が、まるで羽毛の如く空高く舞った。
言葉を失う。なんて処の話ではない。物理的にあり得ない光景を見せ付けられた指揮官の男は眼球が飛び出る程に目を見開き、顎は外れる程に大きく開かれている。
爆散し塵へと還る無人機、爆風を背に老人は漸く来たかと機体を殴り飛ばした手を軽く叩きながら首を鳴らす。
「しっかし、あのシュ何とかっていうお偉いさんの言う通り、本当にここにきおったのう。彼、もしかして未来が視えとるんじゃないのか？」
「視えているというより、読んでいるんじゃろ。最近の若い者は凄いのう。儂等の頃はそんな芸当出来んかったぞ」
「まぁ、儂らはそんな難しい事を考えるのは昔から不得意じゃったしな、目の前の的をただ殴る斬るしか出来んし」
前方から見える大きな砂塵、空は戦艦で、地上は無人機、兵器で埋め尽くされる天と

地を前に二人の老人はにべもなく談笑に興じる。
セントラルベースへ続く進路、ここを許せばＺ―ＢＬＵＥは挟み撃ちとなり、彼等はより窮地へ追い込まれる事になる。その事態を当たり前の如く読んでいたシュナイゼルは、己の戦力を分散させ伏兵を配置させる事はしなかった。
それだけの余裕が無かったから？　Ｚ―ＢＬＵＥならばきっと乗り越えられるから？　　否、単にその心配がいらない、ただソレだけの話である。
嘗て、ある世界に二人の男がいた。己の肉体のみで世界を渡り歩き、未だ戦乱のただ中だったその世界を己の肉体のみで蹂躙した怪物たち。
二人が出会った事で引き起こされた惨劇は国家の軍隊を以てしても抑えられず、その光景を目の当たりにした人々は彼等を戦神と讃え、畏れた。
触れてはならぬ者、接触禁止の禁忌の化け物。
我聞京四郎と大貫善治、戦神と畏れられた者達、シュナイゼルはそんな二人に盛大に暴れられる遊び場を提供しただけである。
「さて、儂ら老い耄れの最後の大一番。盛大に盛り上げるとするかのう」
「可可可……選り取りみどり、血が滾るわい」
拳を鳴らし、得物を鳴らし、かの物の怪どもは狂い笑う。
「お前さんらには悪いが、ちぃっとばかし付き合ってもらうぞ」

「なぁに、大した事はない。事が終わるまでの間、お前さんらには儂らの相手をしてもらう。それだけの事じゃ」

聞こえはしない。距離的に、物理的に、彼等に二人の言葉は届かない。だが、どんな言葉よりも指揮官の男は二人が何を言おうとしているのか、理解していた。

「「こっから先は通行止めじゃ」」

戦場にて嗤う二匹の鬼、彼等の今宵の犠牲者は幸運にも、地球にとって侵略者と呼ばれる者達だった。

◇

撃ち抜かれた天蓋からパラパラと瓦礫破片が降り注がれる。着地した床は陥没し、衝

撃の強さを物語っている。
　立ち上がり、玉座に君臨する皇帝を睨む。蒼を基にした戦闘衣装、身に纏う白い外套を靡かせて男――――シュウジは陥没した床から歩み出る。
「ほう、まさか仮面を被らずにここへ来るとはな。ここに至って漸く腹を括ったか？シュウジ＝シラカワ」
「別に、そんな大層なモノじゃねぇよ。シオさんを、リモネシアの人達を助けるのに仮面を被るのが何となく嫌だった。それだけの話だ」
　ギリギリまで悩んだけどな。と、最後に呟き、シュウジはシオに視線を向ける。白く輝く美しい髪は肩を越すほど長く伸び、彼女が身に纏う水色のドレスと噛み合って映えて見える。同時にそれが自分と彼女の間に起きた時間の差なのだとイヤほど思い知る。
　しかし、それも今日までだ。明日には皆をリモネシアへ……あの暖かな日々へと送り届ける。傲慢かもしれない、勝手な話だろう、しかし既にそうさせるという決意がシュウジにはあった。
「……どうやら、安全を配慮しているというのは本当の様だな」
「フン、当然だ。リモネシアの民はお前を呼び寄せる為の餌だが、それ以上にサイデリアルの――――俺の所有物でもある」
「……所有物、ねぇ」

シオを、リモネシアの人々を堂々と自分のモノだと宣言する皇帝アウストラリス、耳にしたシュウジは眉間に皺を作り戦意を高めていく。

自分にとって大切な人達を物として扱う皇帝に今更敵対意識が拭われる事はない。が、それと同じくらいシュウジは感謝していた。アドヴェントの呪いに蝕まれ、死から甦り万全の状態に戻るまでアウストラリスは今日までリモネシアの皆を守り続けていた。

自分を呼び寄せる為の人質というのに間違いはないだろう。けれど、アドヴェントや奴の手先であるクロノから守ってきたのもまた事実。怒りを覚えるのも良い、敵対するのも仕方がない事、けれど彼はシュウジには出来ない事をしてくれた。礼を言うのは筋違いかもしれないが、シュウジは筋を通す意味も込めてそれを伝えなければならない。

「一応、礼を言っておくよ。今まで皆を守ってくれて……ありがとな」

「不要だ。元よりこれは俺の望み、貴様が礼を口にする事ではない」

「そうかよ」

シュウジの礼をにべもなく皇帝は不要と断じる。別にそこに思うところはない。だが、その不器用な在り方に何だかシュウジは何処と無く既視感を覚えた。

「我等の間に最早言葉こそ不要、語る言葉も尽きた。ならば後は闘争のみ――――だが」

ふと、アウストラリスは隣を見る。

「どうやら、この者だけは貴様に言いたい事があるようだぞ？」
「……シオさん？」
　アウストラリスに促されてシオは一歩前に出る。一体彼女が自分に何の用があるのだろうか、訝しげに思うシュウジ。今まで自分が蒼のカリスマであることを黙っていた事？　グランゾンという機体で今まで世界を相手に戦っていた事？
　心当たりがありまくるシュウジは罪悪感から冷や汗を流し、彼女の次の言葉を待ったが、それはシュウジの予想とはどれも当てはまらないモノだった。
「どうして……戻ってきたの？」
「――――へ？」
「どうして、貴方は戻ってきたの？　私は貴方に助けてなんて言ってない。それを求めようとも、縋ろうとも思わなかったのに……どうして、貴方はここに来てしまったの？」
　シオの言葉は懺悔の様にも聞こえた。助けを求めていないと、元いた世界にいるべきだと、声を震わせ、体を震わせて、怯えながらも問い掛ける彼女にシュウジは言葉を詰まらせる。
「だって、貴方には何の関係もないじゃない。ただ気が付いたらこの世界に来てしまっただけの貴方が、どうしてそこまでして戦うの？　訳、分かんないよ……」
「シオさん、もしかして……」

「ごめんなさい。私、貴方の日記を読んだの」
掠れるような声の告白、日記を読んでシュウジという人間を真に理解している彼女はそうまでして戦うシュウジがどうしても不思議に思えた。
対してシュウジはそう言う事かと変に納得し、そして確信した。あぁ、やはりこの女性（ヒト）は優しい人なのだと。
「そんなの、簡単だよ」
「――――え？」
「俺はシオさんが、ラトロワさんが、ジャール大隊の皆が、リモネシアという国がどうしようもなく好きだからさ」
「――――」
「店長と一緒に店の手伝いをしたり、シオさんの愚痴を聞いたり、店先での人々の暮らしを眺めたり、そんな当たり前の日々が大好きなんだ」
「そんな、それだけの理由で？」
「勿論、それだけが理由じゃないさ。向こうで交わした約束もある。でもさ、シオさんだって本当は分かってるんだろ？　人間ってのはそんな〝それだけの理由〟でどんな困難にも立ち向かえる生き物なんだって」
「っ！」

今度はシオが言葉に詰まる番だった。分からない筈がない、理解できない訳がない、シュウジの言葉は誰よりもシオが――――シオニー＝レジスが理解出来る言葉なのだから。

シオニーは世界に対して戦い続けた。大国に吸収されない為に決して多くはない国の財産を使ってリモネシアという国を存続し続けた。全ては故郷であるリモネシアという国が好きだから、ただそれだけの理由の為に戦ってきた彼女が、シュウジの言葉を理解出来ない筈が無かった。

「だから、申し訳ないんだけどさ。諦めて俺の手を取ってくれ」

傷だらけで痛々しく、それでも大きくて熱が籠った手。微笑みながら手を伸ばす姿にシオの瞳から涙が溢れた。

「――――シュウジ」

「ん？」

「私ね、叶えたい夢があるの。皆と一緒にリモネシアに帰って、街を治して、人を集めて、もう一度やり直したいの。あの日のリモネシアを、貴方と初めて会ったあの日を」

「出来るさ、シオさんなら絶対」

「そしたらさ、また一緒にご飯食べて、お酒を呑んで、一緒に話すの。これからの事、これまでの事、そんな事もあったねって、笑いながら話したいの」

「シオさんの誘いなら一晩中でも構わないさ」
「うん……うん。だから、だからね、シュウジ」
嗚呼、やっぱり、私は私が嫌いだ。あれほど悩んでいた癖に、目の前の彼に色々言いたい事があったのに、その全てが無駄になった。
でも、でも、罪深い私が、それでも許されるのならば。
「お願いシュウジ――――助けて」
どうか、これから戦う貴方の為に……手前勝手な祈りを捧げさせて欲しい。
「あぁ、助けるよ」
そして、そんなシオの願いをシュウジは快く承諾する。絶対に助ける。そう意思を固めて拳を握り締めるシュウジの前に皇帝が立ち塞がる。
「話は終わったか?」
「あぁ、待たせて悪かったな」
玉座のある上段、階段から降り立ちシュウジの前に立つ皇帝アウストラリス。その大きな図体に見合った覇気は徐々に昂り、ラース・バビロンの全体を震わせていく。
「意外だな。こう言う場面なら大抵の奴は茶番だと一蹴するものだと思ってたんだがな」
「俺は今でこそ皇帝という立場だが、本来は一人の将でしかない。お前の言う言葉の意

味は理解しかねるが、誰かの夢を嗤うほど俺は落ちぶれてはいない」
「そうかい、変な偏見を持って悪かったな。これからは改めるよ」
「だが、それでも一つ言わせてもらうのならば、お前達の語る夢は何とも甘いものだな」
「甘いのは嫌いだったか？」
「いや、久しく忘れていたものでな。新鮮だっただけだ。それに、語るだけならば誰にでも出来る」
　瞬間、皇帝が纏う覇気が溢れだした。ソレは荒れ狂う暴風となって玉座のあらゆる箇所を蹂躙していく。しかし、そんな暴風の中でもシオだけは被害が及ばないようになっている。
　器用な奴だ。皇帝の気遣いに感心しながら、シュウジもまた自身の闘気を高めていく。
「何故なら、貴様達の夢は叶うことはない。ここで俺がお前を打ち倒し、俺の強さの糧にするからだ」
「は、やれるもんならやってみろよ。何せこっちは既に何度も王族貴族を殴ったり斬られたりしてんだ。今更皇帝なんぞにビビるかよ！」
「待ちわびた。嗚呼待ちわびたぞ。この日を、我が盟友ヴァイシュラバを討ち取った貴様を、我が手で屠るこの日を！」

歓喜に打ち震える皇帝の内側から更に覇気が膨れ上がっていく。それは留まる事を知らず、ラース・バビロンだけに収まらず、Ｚ―ＢＬＵＥ達が戦っているセントラルベースを越え、ユーラシア大陸全土に広がっていく。

一つの大陸を覆って尚高まり続ける皇帝アウストラリス、そんな規格外の怪物を前にシュウジは微塵も臆してはいなかった。

「改めて名乗ろう。シュウジ＝シラカワ、蒼の魔人よ。我が名は次元将〝ヴィルダーク〟、貴様の知るガイオウと同じ、次元を司る将である」

驚きはしない。メガラニカでガイオウの事について訊ねられたあの時から、アウストラリスが何者か予想は出来ていた。

つまり、シュウジはこれからあのガイオウと同格の怪物を相手に生身だけで挑まなければならない。

「行くぞ、蒼の魔人よ。俺に倒され、俺の強さの一部となれ!!」

「やなこった!!」

しかし、やはりシュウジは畏れない。恐れず、退かず、皇帝アウストラリスの覇気を一身に受けて尚、その闘気に微塵も揺るぎは見られない。

地を踏み込み、駆け出す二人。音を置き去り、光に迫る二人の拳は遂に激突し。

玉座に音と衝撃が蹂躙した。

その２０３

――――拳戟が唸る。打撃が打たれる度に空気は爆ぜ、衝撃がラース・バビロンの玉座を蹂躙していく。目の前の相手を捩じ伏せる為に奮われた拳、防ぎ、弾く度に音と衝撃は分散され、広い玉座を暴れまわっていく。

「う、くぅぅぅ!?」

その荒れ狂う暴風の中、シオは吹き飛ばされまいと玉座にしがみついて耐えていた。打ち合う度に発生する衝撃、襲い来る風圧を玉座で防ぐことで何とか凌いでいたシオは戦う二人に言葉を失っていた。

だだっ広い玉座の間を縦横無尽に駆ける二人、左かと思えば右、右かと思えば上、人が出せる速さ等とうに超え、尋常ならざる闘いがシオの前で繰り広げられていた。

「ここまで強かった……うぅん、強くなったんだ」

地球を征服寸前まで追い込んだ超巨大組織〝サイデリアル〟そんな連中を従え、君臨していた皇帝と魔人と呼ばれた青年が互角の勝負をしている。自分を守り、助けると口にした彼が堂々と戦っている姿を見て、シオは不謹慎ながらも嬉しく思っていた。

もう、彼女の目には彼しか映ってはいなかった。もっとも、その彼の姿は目に映らぬ程の超スピードで動いている為、時折瞬間的に姿を現す時にしか目に出来なかったが……。

空を飛び、人間の枠を越えた闘い。疑問に思うべき事、追及するべき事は多々あるが、今はそんな事はどうでも良い。

（頑張れ、頑張れシュウジ！）

自分達の為に戦ってくれているシュウジに、せめて応援だけはしようとシオは祈り続けた。どうか無事でいてくれますように、また皆で一緒にいられますようにと、己の恥を呑み込んでシオはシュウジに頑張れと祈った。

「――――あ」

そんな彼女の前に突然【死】が現れた。二人の闘いに耐えきれなくなった玉座の間を支えていた柱、その一部が彼女を押し潰さんと頭上から降り注いできたのだ。

回避など不可能、一秒後に訪れる死を前にシオは目を瞑るが、痛みや衝撃など微塵も感じなかった。分かっているのは奇妙な浮遊感のみ、何かと思い恐る恐る目を開ければ、其処には柱の残骸に押し潰された玉座が眼下で広がっていた。

「ゴメン！　シオさん大丈夫!?」

頭上から聴こえてくる声、シュウジの焦りを思わせる声色を耳にして漸くシオは自身

の現状を認識する。自分は柱に押し潰されたわけでも、その衝撃で吹き飛ばされた訳でもない。柱に潰される直前に彼によって助けられたのだ。

硬くて武骨な彼の腕の感触、呼吸と心音、シュウジという男に今は誰よりも自分が近くにいる。考えるべきではない、不謹慎にも程がある。しかし、これ迄リモネシアの事ばかり夢中で男性経験など皆無に等しい彼女からすれば、お姫様だっこで抱えられた今この状況こそが危機的状況と言えた。

瞬く間に赤面していく彼女に、しかしそんな余裕のないシュウジは地面に着地すると同時にシオを静かに降ろす。

「ごめんシオさん巻き込んでしまって。怪我とかしていない？」

シオに怪我はないか問い掛けるシュウジ、見た限り目立った外傷はない。擦り傷程度はあっても命に支障はない彼女に安堵し――――。

「俺を相手に余裕を晒すかッ！」

皇帝の剛拳がシュウジを捉えた。シオの無事に安堵しその際に見せた一瞬の隙を突かれ、咄嗟に構えた防御の上から殴り飛ばされた。勢いを受けきれず、衝撃に流され、吹き飛んだシュウジはその勢いのままラース・バビロンから外に出る。

砕かれる外壁、吹き飛ぶ瓦礫、膨れ上がる砂塵から切り裂く様に外に出てそれを確認した瞬間、シュウジは空中で体勢を整えて地面に着地した。

宮殿の様に聳え立つラース・バビロン、周囲を見渡して残る敵は何処かと索敵する……までもなく、シュウジはラース・バビロンを囲んで並ぶ二つの機体を前に身構える。【欲深な金牛】と【沈黙の巨蟹】、サイデリアルの幹部その二名がシュウジを見下ろしていた。皇帝アウストラリス――――もとい、次元将ヴィルダークに続きコイツらも同時に相手にしなくてはならない。

外に出たのは間違いだったか？　自分の選択に迷いが生じるが、そんなシュウジの不安に対して二体は一向に動きを見せてこない。静かに、事の成り行きを見守ろうとする彼等に訝しんだ時。

「安心しろ。今回の闘いに限り二人には手出しさせないことを厳命させてある」

シュウジの前に次元将が降り立つ。

「……意外、て程でもないか。アンタ、本当に俺と一対一（サシ）で勝負するつもりだったんだな」

「当然だ。この闘いは俺が望み、挑むと決めた聖戦。そこに余分な戦力など無用、二人はこの闘いを見届ける立会人に過ぎない」

「随分気に入られたもんだ。でもいいのかよ、仮に俺に勝てたとして、次に待っているのはＺ―ＢＬＵＥだ。彼等は必ずここに来るぞ、その時に余力を残さなくて良いのかよ」

「構わん」

シュウジの言葉にヴィルダークは当然とばかりに即答で肯定する。絶対の自信、自分を倒してその後に控えるＺ―ＢＬＵＥを相手にも打ち勝つという信念――――いや、覚悟が目の前の男にはあった。

「さぁ、互いに準備運動は済ませた所だ。貴様の足枷となるあの女もいない、我々の……我々だけの純粋な闘争を始めるとしよう」

王衣の外套を脱ぎ捨て、ヴィルダークは全身に力を込める。練り上げた力が大気を奮わし、高まった覇気が大地を揺らす。怪物、傑物揃いのサイデリアルの軍勢をしてそう思わせる次元将ヴィルダークの覇気。

そんな奴を相手にやはりシュウジは怯えを見せない。

「ああ、様子見もここまでだ。ここから先は正真正銘――――」

本気の勝負だ。

その言葉を口にした瞬間、二人の姿は消失し。

ラース・バビロンの時とは比べ物にならない衝撃と轟音が轟いた。

◇

――――一体、自分達は何を目の当たりにしているのだろう？

眼前で繰り広げられる攻防、弾いて受け流し、防いで返す一進一退の体術の応酬。しかしそれら全てが自分達の予測を遥かに上回っていた。

魔人と皇帝、二人の闘いは激しさを増していき広大なラース・バビロンの拠点区域を瞬く間に破壊していく。拳と拳がぶつかり、その度に霧散する衝撃が大気と基地を砕いていく。それもサイデリアルの幹部である二人が認識出来ない速度で。

『――――なぁ尸空』

『……なんだ』

『あの二人、何処まで行くんだろうな』

『……さぁな』

皇帝の命令により余計な干渉は禁じられた二人、当初はそれを渋ったエルーナルーナだったが、今行われる闘いを前にそれがどういう意味か嫌と言うほど思い知らされた。

皇帝アウストラリス、彼は強くなった。サイデリアルのトップとして君臨し、彼と共にこれまで多くの星々を支配していった。幾多の宇宙、数多の世界を超え、力をつけ続けた。

蠱毒の壺が如き闘争を重ね、幾度、幾星霜の月日の果てにスフィアという力を得て、彼は遂に彼処までの力を手に入れた。生身の状態でアムブリエルの操るジェミニアを圧倒し、名実共に皇帝として君臨した彼を、当時のバルビエルを含めた全員が認めたのだ。自分達を束ね、統べる者は彼なのだと。

ならば、そんな彼と互角に渡り合うあの魔人は何なのだ。グランゾンという機体を使わず、アウストラリスと同じく生身で闘う奴は、一体どんな手品で彼処までの境地に至れたのだというのだ。スフィアを持たず、経歴もなく、元は単なる一般人でしかなかった人間が、何故次元の将と互角に打ち合える。

しかし、その答えを求めた所で意味などない。実際の現実として彼はアウストラリスと打ち合えている。互いに全力で相手を捩じ伏せようとその力を出し尽くそうとしている。

ならばやはり自分達に出来ることはない。精々が此方にやってくるであろうＺ―ＢＬＵＥに二人の闘いの邪魔にならないように足止めをしてやるだけ。

『――――なぁ尸空』

『……今度はなんだ』
『あの二人、どっちが勝つんだろうな』
勿論、二人が支持をするのは自分達の皇帝であるアウストラリス。そこに疑念を挟む余地はなく、また論ずるに値するわけでもない。しかし、ふと思うのだ。あれ程までに高めた二人が、この先決着を着けた時。
果たして、自分達は何を目撃するのだろうか。
呆然と呟くエルーナルーナ、その時遂に二人の闘いに変化が起きた。

◇

「オオオォォォォォッ!!!」
「ラァァァァァァッ!!!」
繰り出される打撃は地を穿ち、空を切り裂き、空間そのものを震わせていく。これ程

の実力、これ程の力、互いに互いの底を読み違いならば此方もと、二人は全力を出し続けていた。打ち合えば打ち合う程に増していく力、防いでは返し、受け流しては返す力と技の応酬。

ヴィルダークは舌を巻いた。よくこれ程まで己を鍛えたと。自身の想像を超え、そして今なお闘いながら成長していくシュウジに次元将は素直に内心称賛した。

一方でシュウジも目の前で打撃を繰り出してくるヴィルダークにその内心で驚愕していた。

頑丈過ぎる。これ迄多くの兵士やルキアーノの様な強者と戦ってきたが、目の前の皇帝は間違いなく今までの相手の中で最強の部類だ。此方が打ち出した拳を難なく受け止め、その巨体を以て此方を圧倒してくる。腕力は当然シュウジの上を行き、此方が十の拳を打つ度に向こうは一撃でひっくり返してくる。

これが次元将の力なのか、嘗ての次元将であるガイオウと比較しても全く劣らない覇気と強さを兼ね備えたヴィルダークに、シュウジは徐々に圧され続けていた。

「負け……るかぁぁっ!!」

吼える。目の前の敵を打ち倒す為に、シュウジは前に出た。刹那の合間に繰り出される打撃は千を越え、一度でも受ければ死にかねない暴威の嵐の中にシュウジは自ら身を晒した。

（死中に活を見出しに来たか！）

そのタイミングはヴィルダークからしても予期せぬものだった。打ち出された拳は最早止まる事はない、なら進んでくるシュウジをその勇気ごと打ち砕く迄だと、ヴィルダークは更に暴威の密度を上げていく。

暴威が更なる脅威となりシュウジを襲う。掠めた肉体は抉られ至る所から血が噴き出し、シュウジの体を鮮血に染めていく。

それでも止まらない。致命傷に受けない事だけを頭に置いて、構うことなく懐に潜り込むことだけを意識する。もっと速く、もっと鋭く、もっともっと――――！

そして。

「――――届いたぞ。ヴィルダーク」

「っ!!」

「ぜぇらぁっ!!」

振り抜かれたシュウジの拳がヴィルダークの腹部へとめり込んだ。

「ご、ハァッ?!」

血反吐をぶちまけ、吹き飛ぶ。この激しい攻防の果てに漸く見出だして掴み取った好機、決して逃しはしない。地を踏み砕き、奴を追う。全身から噴き出す血が軌跡を描き、

ラース・バビロンの基地に一直線の赤い線が描かれていく。
「オラァッ!!」
追い付き、背後に周り蹴り上げる。反撃の様子はない。ここで決着を着ける！　そう意気込み、脚に力を込めたシュウジは重力制御も無しに空を跳ぶ。
音を超え、光へ至らんとする速度。物理法則を超え、世界の理すら超えようとするシュウジ、追い付いたヴィルダークに動きはない、全身に力を込めて持てる力の全てを以てその一撃を次元将に叩き込んだ。
「胴回し――――踵落とし!!」
回転を掛けることで威力を増幅させたシュウジの踵落としが炸裂する。防ぐ余地などなく、避ける隙もなく、その一撃はヴィルダークの腹部を確かに捉えた。
血反吐を撒き散らし地上へ落下、その衝撃で大地は大きく陥没し周囲の地表を隆起させていく。手応えあり、自身の一撃が敵の大将にダメージを与えたという確信を持ったシュウジは大地に降り立ち、油断なく構える。
アレで終わる相手ではないのは分かっている。だが、闘いの流れは今此方に完全に向いている。頬から流れる血を拭いながら、シュウジは巨大な穴ができた陥没した大地を見据えた。

◇

（――――あぁ、やはり奴は強いな）

崩壊した大地、空洞と化した地中でヴィルダークは心の内でシュウジに惜しみのない称賛を送っていた。

シュウジ＝シラカワ。本来ならこの世界に訪れる事なく平穏に平和に生きて生涯を終える筈だった者、ふとした切欠でこの世界へと介入し、闘いの波に揉まれ、いつの間にか世界最強の一角として君臨した、最も新しい魔人。

盟友であり同じ次元将であるヴァイシュラバ――――ガイオウを討ち滅ぼした張本人、ここまで強く、逞しく成長した彼にヴィルダークは一種の安堵を感じていた。

彼ならば、きっと成し遂げてくれる。自分達では為し得なかったかの天に座する者達

を打ち破り、この世界に無限の可能を齎してくれる事を。今、あの哀しみを気取る獣が何処で何をしているのかは分からない。けれどそんな不安も彼ならばきっと乗り越えてくれる。

（――――嗚呼、そうだ。それこそが我らの望み、奴ならば、きっと我らの代わりに我らの悲願を果たしてくれる）

永い、とても永い時間を生きてきた。気の遠くなるほどの時代を生き、奴等の目を欺く為に多くの星々を犠牲にしてきた。その報いを受けるのは今この瞬間にあって他に為し、この結末も悪くない。自分達の求めたモノを次に託せる存在にヴィルダークは満足して受け入れようと――――。

――――否。

否、否否否

「否アッ!!」

闘気が溢れる。思い出し、原点（オリジン）に立ち返ったヴィルダークの内から溢れだしたのは並々ならぬ否定の感情だった。

誰かに託す？　違う、それだけは絶対にあってはならない。多くの同胞が死に絶え、見送り、自分に託してきたのは何の為だ？　永い時の中で闘いに身を置き、奴等の下に付いてまで機を伺っていたのは何の為だ。

「俺だ！　託され、委ねられ、任されたのは奴ではない！　この俺、ヴィルダークだ！」

萎えていた闘志に炎が宿る。燃え上がり、立ちあがり、上を見上げる彼の瞳には剥き出しの野生が露になっていた。

「スフィアよ！　理を司り、理を超える次元の至宝よ！　俺に、俺にもっと力を寄越せ！　勝つ為の力を、奴に打ち勝つ力を、俺に寄越せぇっ!!」

それは勝利への渇望、焦がれ、願い、狂おしい程に洗練された勝利への恭順。

次元将ヴィルダーク、その肉体に宿した二つのスフィア。【怨嗟の魔蠍】と【立ち上がる射手】片方は憎悪によって、そしてもう片方は反抗心によって力を増大させる。

だが、ヴィルダークはシュウジに対して憎悪は抱かない。彼が怒り、嫌悪し、憎悪を抱くのは簡単に自身を曲げようとした己のみ、自身に憎悪をし、シュウジに対して負け

たくないという強い感情がヴィルダークに力を与える。
限界の限界、更にその向こうへ至る境地。二つのスフィアの力を本来よりも高めたヴィルダークはかの領域へ足を踏み込んだ。
《無限力》。源理（オリジン・ロー）の力を司り、事象の全てを掌握した高次元生命体の果て――――《太極》、シュウジに対する対抗心と脆弱な己に憎悪を抱き続けた男は、この瞬間その領域へと至った。

◇

――――光が、天を貫いた。窪んだ大地から溢れ出る光と嵐に、シュウジは戸惑いながらも目を見開いた。

「ンだよ、これ……」
その光の柱から現れる影、ビリビリと痛いほどに伝わってくるこれ迄とはまるで違うソレにシュウジは息を呑んだ。
「嘘だろ、巨大化しなくても成れるのかよソレ」
その姿にシュウジは覚えていた。否、忘れる訳がない。何故ならそれは再世戦争の最終決戦の折りにシュウジが火星でネオ・グランゾンと共に相対した銀の魔神。
『――――シュウジ＝シラカワ、お前に問おう』
次元将、ガイオウと似た姿形をした鋼の巨人が、自分達と同じ背丈で光の柱から現れた。
本来ならば巨体となって顕現する筈だった姿、それをスフィアの力でより強大にさせ、尚且つ人と同じ背丈になることで力を圧縮させた次元将ヴィルダークの新たな形態。
世界が、地球が震えている。目の前の存在から放たれる圧倒的な存在感、桁違いという言葉すら当てはまらない絶対的格差。
『お前は、何の為に戦っている?』
奴の背後から空間が罅割れ、宇宙が広がっていく。その様を目にしながら、シュウジは拳を握り締めた。

その２０４

　セントラルベース。ラース・バビロンへ続く最重要防衛拠点、地球をサイデリアルの魔の手から解放させる為にＺ―ＢＬＵＥはセントラルベースの防衛を任された幹部達……その補佐達を相手に奮闘していた。
『いやはや、これはしてやられましたな』
『まさか自分達を囮にして、かの魔人を陛下達の所へ送り届けるとは』
『へっ、生憎俺達は囮になったつもりはねぇよ！』
『皇帝アウストラリスには奴が相手をし、ギリギリまで体力を消耗していて貰う。お前達を倒し、ラース・バビロンに残る残存戦力を叩く事で、此方の勝利とさせて貰おう！』
　漁夫の利。シュウジが皇帝アウストラリスと闘い勝利するか、或いは限界ギリギリまで体力を消耗させ、弱っている所を彼と合流して容赦なく叩く。
　シュウジの提案に合わせてルルーシュ達が練り上げた今回の作戦。情けも容赦もない無慈悲とすら呼べる作戦だが、生憎自分達がしているのは戦争。一時の迷いや隙を晒

してしまえば、立ち所に追い詰められるのはＺ―ＢＬＵＥの方だ。
より確実にサイデリアルに勝つ為に彼等は知恵を、知識を、叡知を活用していく。自分達が送り出せる最善の策、全てはサイデリアルという最大の侵略者を倒してこの戦争を終わらせる為に。
『成る程、お前達がこの闘いにどれだけ覚悟をしているのかは理解した。……しかし』
『貴方達の見通しは―――甘い』
ダバラーンと尸刻、二人の口から告げられる言葉。Ｚ―ＢＬＵＥを見下しての言ではない、これ迄の闘いを経てサイデリアルにすら比肩する、今の彼らを見下せるほど二人は傲慢ではない。
そしてその事はＺ―ＢＬＵＥにも理解できた。だからこそ分からない、目の前の二人もあの魔人が自分達にとってどれだけ脅威なのか分かっているはず、真化を経て更にその果てへと至らんとする規格外の存在へとなりつつあるかの魔人を相手に、どうしてそこまで平静でいられるのか。
『なに、それは簡単な事ですよ。そんな彼を相手にして、それでも我等の皇帝陛下は揺るがない。ただそれだけの話です』
そんなＺ―ＢＬＵＥの気持ちに応える様にサルディアスが自嘲の笑みと共にその言葉を口にする。サイデリアルの幹部、その補佐でありながらサイデリアルの軍師として

の側面を持つサルディアスの言葉にＺ―ＢＬＵＥの誰もがその真意を計りかねていると……。
『なんだい……これは？』
『どうした博士？』
　サイデリアルとの決戦前にＺ―ＢＬＵＥと合流したトライア＝スコート博士、彼女が生み出した【ソーラリアン】という次元力を応用した戦艦に搭乗している彼女の口から漏れたのは、彼女らしからぬ動揺と驚愕に満ちた声色だった。
『あんた達の親玉、皇帝アウストラリスは一体何に成ろうとしているんだい!?』
　額に大粒の汗を滲ませてトライアは幹部の補佐達に震えた声で問い質す。その口調から尋常ならざる事態であることは何となく察したクロウ＝ブルーストは、落ち着けと彼女を諭そうとするが。
『ラース・バビロンから強大な次元力の反応が計測不能レベルで膨れ上がっていく。このままだと地球にもう一つの宇宙が生まれるよ』
　その言葉を聞いた瞬間理解できた者は数少なく、誰もが彼女の抽象的な言葉に首を傾げた。しかし、彼女と同じく理解した者達は顔面を蒼白させて震え出す。
『作戦変更だ。これより我らは強行を試みて敵陣を突破する。各員、誰でもいい、いち早くラース・バビロンへ進み皇帝を討て!』

『る、ルルーシュ？』
『急げ！　恐らく皇帝は既に二つのスフィアの力を掌握している！　その力を以て奴はシュウジを殺すつもりだ！』
『成る程、そう言うことか』
　バルビエルの死、そしてそのスフィアは既に皇帝アウストラリスが有している。もし彼がアサキム同様に複数のスフィアを御する事に成功していたら、生身で奴に挑んでいるシュウジに勝ち目は無くなる。
『いや、恐らくそれだけじゃない。……驚いたな、かの皇帝陛下はたった二つのスフィアでもうそこまで至ろうとしているのか』
『アサキム、何を言ってるの？』
『済まないが事情を説明している暇はない。急がなければ彼……シュウジ＝シラカワは殺される。それは流石に僕も見逃せないな』
　自分の望みが漸く果たせると思ったら、その願いを果たしてくれる相手が殺される。そんな結末は認められないと、アサキムはシュロウガと戦場を駆け抜ける。
『残念ですが、そうはさせませんよ』
　しかし、当然の如く読んでいたサルディアスが更なる戦力を投入してＺ―ＢＬＵＥの前に立ち塞がる。凄まじい物量、これ程の戦力をまだ隠し持っていたのかとＺ―ＢＬＵ

Ｅは驚嘆するが、ルルーシュは必死とも呼べるサルディアスの策略に違和感を覚えた。
『まさか、これらの戦力は……!?』
『お察しの通り、ここセントラルベースにはラース・バビロンに配備される筈だったモノも含まれております。これも一対一を望む陛下からの厳命でしてね。事が終わるまであなた方にはここで釘付けになって戴きます』
　笑みを携え足止めをすると高らかに宣言するサルディアスに、ルルーシュは表情を歪ませる。
『あぁ、強行突破の姿勢は間違いではないですよ。我々も後がないのでね、ここから先は策は無用。残る戦力全てを以て――――』
『貴方達をここで足止めしよう。他ならぬ陛下の為に』
　セントラルベースを覆う大軍勢。全ての戦力を以て足止めに掛かるサイデリアルに、Ｚ―ＢＬＵＥもまた乾坤一擲に崩しに掛かり――――。
　一つの宇宙がラース・バビロンにて生まれた。

◇

――――その姿に覚えがあった。破界戦役に於ける月周辺で、再世戦争に於ける火星で、シュウジは二度、かの者と戦った事がある。星が震え上がるほどの威圧感、それは肌にビリビリと痛く突き刺さり、ただ其処にいるだけで空間が割れそうになっている。

次元将。かつて滅びの危機に立ち向かう為に人としての全てを捨てた、かの次元の将の真の姿がシュウジの前で顕現される。奴の内から溢れそうになる力の断片、宇宙という形で地球に少しずつ浸食していくその様を見て、シュウジは否応なく力の差を思い知る。

「何の為に闘う……ねぇ、今更じゃねぇかソレ?」

それでも構え、抗う姿勢を崩さず見下ろす次元将を睨み付ける。勝つ、勝たなければならない。目の前の怪物に打ち勝ち、シオ達を奴等の手から解放させる。不退転、決して退きはしないという決意を胸にシュウジは再び挑もうとして――――。

『だが、俺はそれでもお前に訊ねなければならない』

背後に回るヴィルダークに僅かにも気付く事は出来なかった。振り向き様に放つ回し蹴り、空気を引き裂き、機動兵器すら砕く威力を秘めたその蹴りを次元の将は難なく掻い潜り。

シュウジの腹部に拳の殴打による衝撃が襲い掛かった。助骨をへし折り、内蔵を掻き乱す。背中から突き抜けた衝撃は大地を抉り空の雲を消し飛ばし、その先にある宇宙――宇宙に於ける人類の居住領域であるコロニー群を揺さぶらしていく。

「ご、ガハッ」

堪らず膝を着き、吐瀉物をぶちまける。赤と黒に染まるソレを吐き出し、全身を襲う痛みに耐え大量の汗を滲み出しながら、シュウジは歯を喰いしばって立ち上がる。

奴の背後にはもう空間の亀裂は見えない。これでこの星は奴の浸食から守られたと安堵したい所だが……残念ながらそれは間違い、奴は地球という星を自分の世界（宇宙）で覆うのではなく、そのエネルギーすらも己の力とさせたのだ。

まるで見えなかった。自身の意識の境目を掻い潜り、強大な一撃を見舞ってきたヴィルダークにシュウジは改めて戦慄した。怪物、それも力と速さだけならあのガモン達すら上回っているだろう最上級の化け物。

『どうした。もう終わりか？』

「へっ、ンな訳……ねぇだろうがっ!!」

痛みで鈍る体に鞭を打ち、それでもシュウジは諦める事なく叫び、吼えながら拳を奮う。ダメージを負っても尚衰えないその鋭さ、しかしその速さはヴィルダークには遅すぎたのか。

シュウジの拳が届くよりも速く、ヴィルダークの拳がシュウジを捉える。胸元目掛けて放たれた一撃、間一髪それに気付いたシュウジは体勢を無理矢理変えて体を捻って回避する。掠れた箇所の肉が抉られて再び鮮血がシュウジの全身を覆っていく。これ以上血を流したら後がない、更なる怪物へと変貌したヴィルダークに無傷で戦わなければいけない事実に目を覆いたくなるが。

『まだだ、俺達の闘いはまだ終わらん。終わらせはせんぞ』

絶え間なく繰り出されるヴィルダークの乱打がシュウジに休む間を与えない。間断なく、一切の隙間なく打ち出される拳の嵐、その一つ一つが自身を追い詰めた以上の威力を秘めており、奴が拳を打ち出す度に空に孔が空き、その先にあるコロニー群はその都度大きく揺さぶられていく。

「この、好き勝手暴れてンじゃ――――ねぇ!!」

拳を打ち出すヴィルダークの僅かな死角を狙い、シュウジもまた拳を放つ。〝猛羅総拳突き〟シュウジが得意とし、これまで幾度となく強敵を打ち倒してきた自信のある

攻撃。
だが、その悉くがヴィルダークの手によって払われていく。片手で、難なくとあしらわれるシュウジは悔しく思いながらも行動を次に移す。人に向けてはならない禁じ手と謂われている、嘗ては核シェルターすら撃ち抜いた一撃。
「〝人越拳――捻り貫手ェェ〟!!」
血を吐きながら必死の一撃を放つ。全身のバネを使っての貫手、気血を練り上げて打ち放ったその一撃は確かにヴィルダークの胸元に届いた。行き場を失った衝撃が破裂し、大地と空間を窪ませる。渾身の力を込めて放ったシュウジの決死の一撃は――――。
『流石だ。よもやこの姿と成った俺にまさかダメージを与えるとは』
しかし、その一撃は僅かにめり込んだだけに終わった。驚愕し、目を見開かせるシュウジはそれでも負けないと全身に一喝し、吼えながら跳躍する。
「オオオオッ!!　〝胴回し踵落と――――〟」
『それはもう見た』
体を回し、裂帛の気合いと共に打ち下ろす蹴りの一撃をヴィルダークは片手で掴み取る。その言葉に滲む微かな失望、しかし手を抜くつもりはないと、掴んだ手に力を込めて……。
シュウジの体を大地へ思い切り叩き付けた。

「――――っ!!!?」

言葉にならない衝撃と痛み、意識がぶつ切りになり、視界がぼやけてくる。千切り掛けた意識を離してはならないとシュウジは懸命に耐えようとするが……。

『オオォォォッ!!』

何度も、何度も、玩具の如く振り回し、ヴィルダークはシュウジを地面へと叩き付ける。もう意識は保てない、限界に差し掛かったシュウジに更なるダメ押しが襲う。

これ迄の戦いの影響で隆起し岩盤と化した大地、シュウジの頭を掴み其所へ叩き付け、ヴィルダークは地を駆ける。

「が、アァァァッ!!」

文字通り身を削られる思い。固められた頭部は抜け出せず、シュウジは痛みの叫びを上げ、遂にその意識を手放してしまう。放り投げられたその体は放物線を描き、力なく地面へ倒れ伏す。

だが、ヴィルダークの攻撃は終わらない。その拳にこれ迄溜めたエネルギーを集め、空高くへと舞い上がり……。

『受け取れシュウジ＝シラカワ、これが貴様に贈る手向けの一撃だ』

振り下ろされた拳がシュウジの胴体にめり込み、巨大な光の柱が立ち上る。次元すら穿つ一撃、二つのスフィアを取り込み意志の力で太極へと至ったヴィルダークによって

極限に高められた必殺の一撃が、人間であるシュウジに向けて放たれた。

◇

「――お、終わった……の？」

ラース・バビロンの玉座、先程まで響いていた轟音と衝撃は収まり、静まり返った事で戦いの終了を悟ったシオは、隠れていた瓦礫の影から顔を出して辺りを見渡す。様子を見ても変わらず、取り敢えず危険はないだろうと判断したシオは恐る恐る玉座から足を進める。

久方ぶりの外の空気。しかし眼前に広がる光景にシオは言葉を失った。

「これ、あの二人が――やったの？」

窪んだ大地、凹み、隆起し、整地されたラース・バビロンの周辺基地が跡形もなく崩

れてしまっている。まるで戦略級の兵器がぶち巻かれた様な、UCW（宇宙世紀）の世界にて語られるコロニー落としの跡の様な光景がシオの目の前に広がっていた。

到底人の手では為し得ない破壊の疵の跡、これだけの戦いで彼は果たして無事なのか、駆け出してシュウジを探そうとするシオを上からの声が待ったを掛ける。

『まだそこから先は出るんじゃないよ』

「え？　あ、貴方は幹部の!?」

『おうさ、サイデリアルの幹部、【欲深な金牛】のスフィアリアクターこと、エルーナルーナ様だ。で、話の続きだ。悪いことは言わないから大人しく宮殿の奥へ引っ込んでなお姫様、今のあたしらでも余波を防ぐだけで手一杯なんだからさ』

上空から此方を見下ろす巨大戦艦、プレイアデス・タウラから響き渡る女性の声にシオは戸惑いながら辺りを見渡すと、反対側には巨大生物の死骸を形取った【沈黙の巨蟹】のスフィアリアクターである尸空と、その相方である死逝天がシオを見下ろしていた。

「闘いは……終わったの？」

下がれと言う指示を敢えて無視し、怯えながらも戦いの行方を訊ねるシオ、怖い癖にそれでも真実を知ろうとする彼女に何かを感じ取ったのか、嘆息しながらもエルーナルーナは律儀に応える。

『正確に言えばもうじき終わるって所かね』

「っ!?」

戦いが終わる。それを聞いたシオは目を皿にしてシュウジを探すが、何処にも彼の姿は見えやしない。一体何処まで離れていったのか、そして其処は自分の足でも追い付ける所なのか。今すぐ彼の無事を確認したいシオに再びエルーナルーナが声を掛ける。

『そんなに見たいなら見せてやるが……少々刺激が強いぞ、いいのかい?』

それはエルーナルーナの純粋な気遣いだった。このシオという女は良くも悪くも普通だ。凡人で、取るに足らない人間。そんな彼女にあの様子を見せるのは少しばかり憚れる。

しかし、そんな彼女の気遣いをシオは強い意志で以て拒絶する。首を横に振り、いいから見せろと睨んでくる彼女をエルーナルーナは感心し、ならば良いかとシオの前にその映像を投影させる。

シオの前に投影される巨大モニター、そこにはプレイアデス・タウラを通して映し出され――――。

「――――」

その光景にシオは言葉を失った。巨大なクレーター、その中央には上半身の服が消し飛び、血の海に沈み倒れ伏すシュウジが、生気を失った顔で意識の無い彼の顔が映し出されていた。

――――言葉に出来なかった。声が胸の奥で詰り、悲鳴すら上げることが出来なかった。溢れてくるのは拒絶と恐怖と喪失による涙、嫌だ、嫌だと感情が泣き喚く。

何で彼がここまで傷付かなければならないのか、どうしてそこまでして彼は戦わなければならないのか。こんな事になるなら、こんな悲惨な結末を迎えるなら、初めから彼はこの世界に来るべきではなかった。

（違う。それは、それだけは絶対に違う！）

滲み出る涙を首を横に振る事で振り払い、睨み付ける様にモニターを見る。しかし現実は変わらない、どれだけ意志を強く持とうとしても目の前の事実が覆る事はない。

それでも、シオは願った。何故なら、彼女は知っているからだ。彼が今までどんな想いでこの世界を生き抜き、人と触れ合い、戦ってきたのかを。

彼はずっと、戦い続けてきた。時に流され、時に利用され、時に激昂し、時に怯えながら、孤独の中に身を置き、それでもと抗い続けてきた。

自分に出来ることは何一つ無い。でも彼女は、シオは、シオニー＝レジスは知っている。彼が戦うのはいつだって誰かの為とかそれ以前に自分が願う、自身の心が命じるままに――――戦っているのだと。

「……ばれ」

故に、シオニーは願う。立って、立ち上がって、もう一度私に、私達に見せてほしい。

自分の意志で、心のままに戦う貴方の姿を。

「がん……ばれ」

喩え言葉が届かなくても、想いが届かなくても、彼女は願い続ける。自分が想い、慕っている彼にほんの僅かでも……立ち上がる力となるように。

「がんばれ、シュウジィィィーーーー!!!」

画面の向こうで次元の将が拳を振り下ろす。避けられぬ死、変えられない末路を前にしてシオニーが目にしたのは――――。

◇

『見事だった。シュウジ＝シラカワ、お前という男と戦えて、俺は心の底から誇りに思う』

眼前で沈むシュウジを見下ろし、ヴィルダークは己の勝利を確信する。故にその言葉に嘘はなく、自分を此処まで追い詰め、高め、導いてくれたシュウジにヴィルダークは偽りの無い賞賛を送った。

気を失い、生きているかどうかも分からない彼の耳にヴィルダークの言葉が届くかは分からない。しかし、そんな事は関係なかった。自身が認め、そしてその遥か上を行く彼の実力にヴィルダークは本気で誇りに思っていた。

抱くのは微かな喪失感、あそこまで固執し、強さの糧にしようとして、挑み、打ち破った好敵手が今はもういない。その事に僅かな寂しさを覚えるが、これ以上の感傷は目の前の彼に対する侮辱でしかない。

せめて、今一度自分の全力の一撃でその肉体ごと消滅させよう。肉体という器を破壊し、その魂だけでもあるべき世界へ送り届けてやろう。それはヴィルダークに許された最後の優しさ、次元の将として宇宙の大崩壊に挑む前の最後の感情。

握り締めた拳にエネルギーが集束する。次元を破壊し、星すら砕く破界の一撃。過剰だとは思わない。これまで戦い、力を付けてきたシュウジ＝シラカワという男に対する最大の敬意。

拳が振り下ろされる。砕き、壊し、消滅の威力を孕んだその一撃は――――。

◇

――――嗚呼、聞こえた。聞こえたよ、シオニーさん。貴方の声は、言葉は、想いは、全部届いているよ。

情けない。結局の所、シュウジ＝シラカワという男は誰かを守ってきたつもりでいて、その実、自分こそが守られてきたのだ。

その優しさに少しでも報いたい。その想いに僅かでも返してやりたい。目の前の次元の将の覚悟に比べたら、なんて小さく儚い願い。

でも、それでいいのだ。自身が、シュウジ＝シラカワが抱くのはそんな誰もが抱く、当たり前で取るに足らない小さな願い。それはきっと間違いなんかじゃないのだから。

そう、答えなんて分かりきっていた。自分が何のために戦うのか、それは何よりも単

純で何よりも明確な意志。
当たり前で、ありふれたモノ。きっとシュウジ＝シラカワという男はきっと――――。
〝そう言うもので、出来ていた〟

喜びを知り、怒りを覚え、哀しみを抱き、楽しむ事を学んだ。
大切な人達がいた。喪失と哀しみに沈み、嘆きに打ち拉がれていた。――――沈黙の巨蟹、悲しみの乙女。
流されていただけだとしても、それでも果たしたい願いがあった。――――揺れる天秤。
一人で戦い続ける事もあった。泣きそうで、立ち止まりそうになっても、自分を支え、道を示してくれる友がいた。――――傷だらけの獅子、立ち上がる射手。
喩え自身を仮面で偽っても、その胸に抱いた想いは正しく真実で。――――偽りの黒羊、知りたがる山羊。
大事なモノを失い誰かを憎んでも、その欲望に呑まれずに、戦うことができた。――――怨嗟の魔蠍、欲深な金牛。

リモネシアの皆が、トレーズさんが、シュナイゼルが、沢山の人達が自分にその願いを託してくれた。――尽きぬ水瓶。

故に、喩えこの先自分が何一つ得られず世界中から居場所を無くしても、頑張れる。頑張れるだけの力と勇気を既に受け取っているから。――夢見る双魚。

だから、頑張れる。立ち上がれる。戦える。矛盾を孕み、破綻しているとしても、それでもヒトは、命は決してその輝きを失うことはないのだから。――いがみ合う双子。

さぁ、征こう。自分は未だ何一つ皆に返してはいない。

他の誰でもない、自分自身がそう願ったから。

願い、想い、人が抱く当たり前の欲望と感情。それら全てを糧にして――

今一度、極みの領域へ。

◇

『――――なんだと』

驚愕。次元将ヴィルダークはただ目の前の光景に驚いていた。

死に体だったのは間違いない、現に今も自分の前で立っている彼の瞳からは生気が感じ取れない。しかし、だからこそ分からない。そんな死に損なった体で〝どうやって自分の攻撃を避けたのか？〟

何も感じ取れなかった。立ち上がる動作も、避ける素振りも、その挙動も、全てが認識できなかった。

今一度、拳を振り抜く。既にヴィルダークに慢心はなく、一切の油断なく死に体である筈のシュウジに向けて全力の一撃を見舞う。

――――刹那、嘗て経験したことの無い鋭い痛みと衝撃がヴィルダークを襲った。確かな攻撃、見ればいつの間にか自分の懐まで潜り込んだシュウジがその拳を彼の腹部に叩き込んでいた。

堪らず距離を取る。打ち抜かれた腹部に手を当てて、驚愕と期待に満ちた感情がヴィルダークの内から溢れ出る。
「ウォアアアアッ!!」
――――その時、シュウジの内から銀河が溢れた。輝き、瞬き、全てを照らす曙光の如き煌めき。キラキラで、ギラギラで、それでいて熱い。生命そのものの輝き。
それを目の当たりにしたヴィルダークは困惑した。自身の知らない力、スフィアが齎す力とは似て異なるモノ、遥か永い時を経てそれでも理解できない力の具現。
しかし、そんな事どうでも良かった。確かな事は唯一つ、自分達の闘争はまだ終わってはいない事、故に。
『シュウジ＝シラカワ、今の確かな一撃。そしてそこまで高めたこの熱さ――――応えねばなるまい。オォォォォォッ!!』
ヴィルダークは全力を示す。内から溢れ出るエネルギーを掌の一点に集束させ、防ぐことも避ける事も敵わない絶対的な一撃を見舞う為に。
『さぁ、受け取れ！　シュウジ＝シラカワァッ！』
打ち放つ。星を砕いて余りあるソレを、たった一人の人間に向けて。――――しかし。
『っ!?』
やはり、目では追えなかった。放たれたエネルギーの塊は爆発せず、その標的だった

彼はヴィルダークの背後に悠然と佇んでいる。振り返り、拳を放とうとしたヴィルダークが目にしたのは……光だった。

自身の放ったエネルギーを握り潰し、振り抜かれた拳に当たることなく近付いたソレは何事もなかった様にヴィルダークとすれ違う。

何が起きている。理解に苦しむ事象を前にそれでも次の行動に移ろうとした瞬間、先程と同じ衝撃と痛みが無数にヴィルダークに打ち込まれた。

瞬間に耐えきれず、吹き飛んでいく。岩盤に激突し、漸く勢いが止まる。自身に刻まれたダメージに戸惑いながらもヴィルダークはソレを睨み付ける。

軈て光は鱗の様に剥がれ落ち、ソレを顕にしていく。

「……簡単な事だ。ヴィルダーク、俺が抱くのはいつだって単純にして明快、なんてこと無い簡単な理由だったんだ」

「俺が戦うのは、俺自身の為。他の誰でもない、俺自身がそうしたいと願ったからだ」

それは、人の極限。命を抱き、命を願い、想い、そして至る、真化とは異なる可能性の極致。

「月並みの言葉だが、この言葉を送ろう。次元将ヴィルダーク」

〝勝負は、ここからだ〟

極意。静かに闘志を燃やした瞳は次元の将を見据えていた。

その２０４．５

――――ユーラシア大陸で宇宙規模の激闘が始まる。矛盾を孕んだ弩級規模の戦い、次元の力を極大に高め、限界を超え、極致に至ったモノしか辿り着けぬ領域。
【太極】事象を操り因果すら支配するその力を、彼等はただ暴力の為に奮おうとしている。ただ一つの目的の為に、命を懸けてぶつかり合おうとしている。
『――嗚呼、やはり貴方は美しい。この終わり征く世界の中で至高の輝きを放つ貴方は正に天に立てる存在なのでしょう。ええ、ええ、認めましょう。貴方様は強い、強くなってしまった。最早私の模倣程度では届かず、覆らぬ程に』
　宇宙から遠く離れた木星付近、太陽系で最も巨大とされる惑星で、ソレは恍惚の表情を浮かべて嗤っていた。
『でも、それではつまらない。だってそうでしょう？　闘争とは相手と同レベルの存在でなければ成り立たない。戦いとは対等であるべき、どちらが一方的であってはならない。……ねえ、そう思いますでしょう？　　ミケーネの皆々様』

『あ、あぁぐぅ……』
『と、溶ける。力が、意識が、自我がぁ……と、溶けてぇぇぇ……』
『い、嫌だ。こんな終わり方は嫌だ。こんな、こんなぁぁぁぁ……』
太陽系最大規模の大きさを誇る木星、その星を覆って余りある程に広がるのは……宇宙すら蝕む災厄の泥。嘗て翅であるミカゲが取り込んだものと同質のモノがソコに広がっていた。
その中心に立つのは歪んだ獣、四つの感情を内に取り込んだ事で捻れて拗れた災厄の獣が、数多のミケーネの神々を前に微笑みを浮かべる。
蕩け、溶かし、見る者全てを籠絡し堕落させてしまいそうな妖艶さ。奴の泥に捕まった者は皆須らく呑み込まれ魂諸とも吸収されてしまった。自我も意識も、記憶すらも消してしまう無慈悲の泥、力の優劣とは関係無い。呑み込まれれば死すらも超えた恐怖がそこにはあった。
ミケーネの神々の頭領、嘗てはＺ―ＢＬＵＥを圧倒して地球の支配に手を伸ばしたハーデスは、その顔を恐怖と怒りに歪めて泥の上に立つ獣を睨み付ける。
『お、おのれ、おのれぇっ！　何故貴様が此処にいる！　まだ真戦の時では無い筈だ！　まだ我等の戦いは終わってはおらん！　なのに、なのに何故ェッ!?』
『いいえ、貴殿方の戦いはもう終わりました。この上ないほど決定的に、これ以上無いほ

ど致命的に』

まだ自分は戦える。真戦に至り、真戦を越える為にこれまで力を付けてきた。ここで終わる自分達ではない。そんな彼等の訴えをその獣は両断した。

『だって、貴殿方はもう認めてしまっているんですもの。自分では彼等に……いえ、彼には勝てないと、真化へ至り太極となったかの原初の魔神に貴殿方の戦意は砕かれてしまってるんですもの。戦う気力もない、あるのはそんなバカなと吼える口だけ、でしたらここで私を育てる肥料となっても何の支障も無いでしょう？』

思い返すのは第三新東京跡地、アマルガムとＺ―ＢＬＵＥの決戦で目の当たりにした光景。圧倒的という言葉では足りない程の圧を持ち、ただそこに在るだけで星を砕く原初の魔神。一度棄てた真化への道程を再び獲得し、極大の太極として産まれた怪物の中の怪物。

唯の一度光を放つだけで使途達は消滅し、二度目の光で自身と同じ真化へ至ったズール皇帝が跡形もなく、二度と復活出来ないほどに魂ごと消し飛ばされた。自分達と覇を競い合い、真戦で決着を着ける筈だった相手が成す術なく消滅されたのを目の当たりにして――――ハーデスは思ってしまった。

勝てない。勝てる筈がない。あんな怪物を前にして、形ある宇宙を前にして一生命体でしかない自分ではどうあっても勝てる道理がない。頭で理解したのではなく、本能

で悟ってしまったハーデスは、この時無意識に真戦への挑戦を諦めてしまっていた。
力を蓄えると言い訳し、その時ではないと嘘を吐き、自分に付いてきた同胞達を騙し、今日まで無様に生き延びて――その代償がこれである。
怒りと羞恥で頭がどうにかなりそうだ。自分は神だ。真化へ至り、より高次の生命体へと進化した、広大な宇宙の中で限りある選ばれた存在。なのに、なのに何故自分はこんな目に遭っている？　どうしてこれ程の屈辱を味あわなければならない？
『答えは単純にして唯一つ、貴方が敗北者だからですよ。自ら挑み散る道を選ばず、怠惰に、無様に生き延びる道を選んだ。ウフフ、なんていじらしい。嘗てはその名を轟かせたミケーネの神々の一柱がまさか其処まで落ちぶれるとは……』
『き、貴様ァァァッ!!』
『ですが、嘆く事はありません。敗退し、負け犬となった貴方でも、私に掛かれば有用なエネルギー資源となります。良かったですね、貴方のこれ迄の存在に意味を見出だせて』
そう言って頬笑む目の前のケダモノにハーデスは遂に我慢が出来なくなった。もう自分に出来ることはない。真戦への参加を諦め、戦う気概を失い、生きる意味すら無くし掛けた今ではこうして目の前のケダモノに一太刀見舞う事しか出来ない。
だが、それも次の瞬間には叶わない事に気付く。ケダモノの足元に広がる泥は尚拡大

を続け、更にその範囲を広げていく。侵食し、浸透し、蝕んでゆく歪みの泥、一度触れれば魂まで融解する〝消滅〟の具現。全てを呑み込もうと広がる泥がハーデスを捉えた時。

『ハーデス様！』

双頭の龍と髑髏の顔を持つミケーネの勇者、ガラダブラがハーデスを跳ね退ける。

『が、ガラダブラ！　貴様何を!?』

『生きてくださいハーデス様！　貴方の、あなた様の戦いはまだ終わってはおりませぬ！』

『っ!?』

『無礼は承知！　しかしそれでもあなた様には生きていて欲しい！　我等の偉大なる大神よ、真戦を越え、新世界をその手に掴んで下され！　そのお力で今度こそ我々ミケーネに永遠の栄光を！』

『が、ガラダブラ……』

魂が融解し、自我を蕩けさせ、記憶すらも蝕む泥に浸かってしまったガラダブラに最早生存の術はない。もう意識を保つのも億劫な筈なのに、それでも意地を以てハーデスに後を託すその姿は正しく勇者だった。

『なんて瑞々しくも荒々しいのでしょう。嗚呼、いけません。私の内でそのように荒ぶ

まれてしまっては……私、私ぃ――――昂ってしまいますぅ』

しかし、そんな勇者の奮闘も虚しく、淫蕩に湯だったケダモノの泥に取り込まれてしまう。呆気なく、トプンと静かに音を立てて、ミケーネの神々の中でも勇者として称えられた強者は、まるで最初から其所にいなかったかのようにこの世から消滅した。

『ウフフ、中々良い味わいでした。さて、それでは改めて……あら?』

気が付けば、其所にハーデスの姿は無かった。先程まで挑発に乗せられて此方に言われるがままだったミケーネの大神は、此処で果てるよりも惨めに生き延びて逃走するという選択肢を選んだ。

『まぁいいでしょう。虱風情に時間を削ぐのも可笑しな話です。……さて、そろそろ頃合いでしょうか』

その事を蔑みはしない。元々そんな価値すら無いと断じていたケダモノ――――嘗てサクリファイと呼ばれていたモノは、興味をハーデスから二つの地球、その片割れである蒼の地球へ向ける。

彼処には今、二人の怪物が争わんとしている。二人が今どれだけの力を持っているのか、これからどれだけ成長し進化を続けるのか、これまで命という命を貪るだけだったサクリファイには、その片鱗程度しか推し量れない。

『なら、もう少し摘まみ食いをしておきましょうか』
そう言ってサクリファイはその手を横に軽く振るう。瞬間、木星を包んでいたガスの一帯は吹き飛び、そこに隠れていたモノを露にする。
【Ｅ．Ｌ．Ｓ．】地球外生命体とされる命ある金属、地球から離れこれ迄生き延びてきた彼等は極大の邪悪を前に怯えるように身を寄せ合わせている。群にして個である存在である彼等に感情があるのかは定かではない、だが命あるモノとして本能的に目の前のサクリファイに言いし難い悪寒を感じているのもまた事実。
『フフフ、金属が怯えるとはなんて愉快な事でしょう。ですがそれもこれまで、私の内では命も金属も全てが平等、さぁ、共に至高へ至る糧になりましょうや』
泥がＥ．Ｌ．Ｓ．に伸びる。光を呑み、神々すら喰らい尽くす不浄の闇、迫り来る泥を前にＥ．Ｌ．Ｓ．は身動き一つ出来なかった。
瞬間、その汚泥は二つの光によって切り裂かれた。これ迄なかった現象、自分の力にここまで対抗した何者かにサクリファイは訝しみ……。
『成る程、貴殿方でしたか。随分甲斐甲斐しいのですね。これまで観測するしか無かった貴殿方がここまで干渉するとは』
『然り、本来我等は、かの者達の行く末を見守る見届け人に過ぎない』
『しかし、事此処に至ってはそれも叶わぬだろう。今の貴様は剰りにも度し難い』

光に包まれながら現れるのは共に不動の名を冠し、太陽の翼の担い手達を導く役割を持った者。不動ＧＥＮと不動ＺＥＮ、嘗ては一つの存在だった彼等は目の前のケダモノに対し微かな、されど確かな敵意を以て立ち塞がっていた。
『あぁ、今日は何て良い日取りでしょう。ミケーネの神々に続いて今度は嘗ての太陽の翼の担い手まで頂けるなんて……嗚呼、はしたないのに、こんな事いけませんのに、私、再び昂ってしまいます』
二人の不動を前にサクリファイは恍惚の表情を浮かべる。獣に堕ち、その力を際限なく蓄えようとする悪食と化した化生の女、悍ましくも美しい化け物に不動ＺＥＮは一つだけ訊ねた。
『獣よ、あらゆる感情を取り込み際限なく膨れる悪食の獣よ、それほどまでの力を溜め込み貴様は一体何に成ろうとしている』
『まぁ、悪食なんて酷い。確かに今の私に好き嫌いは在りませんが、一応これでも女の身。そして女であるならば誰しもが通る道がございましょう。これはそのための栄養補給でしかありません』
答えるつもりは無いのか、要領を得ない答えで返すサクリファイだが、二人の不動にはその意味が通じたのか、これ迄無表情だったのものが僅かに強張っている。
『まさか、産み落とそうと言うのか』

『この世の全ての罪、原罪――純粋悪を』

二人の頬から一筋の汗が流れ落ちる。その言葉を意味するモノ、それを理解しているが故に二人の衝撃は尋常ではなかった。

『ウフフ、ウフフフフ、アハハハハハハ!!　さぁそれでは参りましょう。彼と見える迄の時間はもう僅か、どうかそれまで私を楽しませて下さいませ』

地球から離れた木星でソレは嗤う。その身から爛れ、崩れ、堕ち行く。何れ来る終末の時を心行くまで楽しむ為に。

最早彼女に嘗ての理想は無い。あるのはただ壊れて狂った――幻想のみ。

その２０５

『はぁっ、はぁっ、はぁっ……』
『やはり、ここまでか……』
『まぁ、時間稼ぎとしては充分でしょう。我々に出来ることはもう……ありません』
ラース・バビロンの最重要防衛拠点であるセントラルベース。そこへ至る道を塞いでいたサイデリアルの幹部、その副官達と彼等が有する現存戦力の全てを退けたＺ―ＢＬＵＥは、疲労困憊ながらも次の戦場へ向かう。
戦意を失い、機能停止した機体の中で抵抗する気力も失ったサルディアス達を尻目にＺ―ＢＬＵＥは駆ける。真っ直ぐ、その先に待つ皇帝とサイデリアルの幹部、そして彼等を相手に一人で戦っているであろう彼の下へいち速く駆け付ける為に。
既に向こうでも戦いが始まっている。星を揺さぶるほどの振動は、離れた位置にあるセントラルベースにまで届いている。彼は、シュウジは今愛機であるグランゾンではなく己の肉体一つで戦っているはずだ。にも関わらず、あれほどの轟音が鳴り響くのはどういう事なのか。

逸る気持ちを抑えながら現地へ向かうＺ―ＢＬＵＥ、その時クロウ＝ブルーストから驚嘆の声が上がる。
『な、なんだなんだ？　何が起きている？』
『どうしたクロウ？』
『い、いやなんかブラスタから急に変な音が鳴り出して……なぁ博士、まさか修理費ケチッたりはしてないよな？』
困惑するクロウを他所に、彼の愛機であるブラスタからは甲高い音が鳴り続いている。クロウは不満足な修理による機能不全の一種かと思ったが、それは間違いだと思い知る。
『ね、ねぇダーリン、これって……！』
『なんだ、一体どうしたガンレオン!?』
『機体に不備はない。これは、何の現象なの？』
『ヒビキ君、これって……』
『スフィアが、何かに反応している？』
見れば、クロウのブラスタだけでなく、ランドのガンレオンやセツコのバルゴラ、ヒビキ達のジェニオンからも、同じように音を鳴らして淡い輝きを放っている。
スフィア同士による感応現象とは異なる事象にＺ―ＢＬＵＥは動揺するが、何かが起

きる様子は今の所ない。その様子をソーラリアンから観測していたトライア＝スコートも、これ迄とは全く違う反応を見せるスフィアの様子に戸惑いを隠せずにいる。

『は、ハハハ、なんだこれ、こんな事があり得るのか』

その中で唯一、アサキムだけは引き攣った笑みを浮かべてラース・バビロンのある方角へ目線を向けている。彼の機体であるシュロウガ・シンも他のスフィア搭載型と同様の現象が起きているが、他の三機と比べてその症状は大きい。

何か知っている様な風のアサキム、しかし他の面々がそれを追及することはなかった。遂に辿り着いたラース・バビロン、そこで行われる光景に誰もが言葉を失っているからだ。

（これも、これも予想の範疇、想定の範囲だと言うのですか。シュウ＝シラカワ。だとするなら貴方は……なんという存在を生み出してしまったのだ）

ソーラリアンのブリッジ、口をアングリと開いて驚愕しているトライア博士の後で彼女のサポートを担っているＡＧは、その光景を前に愕然と目の当たりにしていた。

◇

ユーラシア大陸の北部、新地球皇国ことサイデリアルの最終拠点――――ラース・バビロン。嘗て平地だった大地は度重なる衝撃によりその姿は変えられ、多くの場所で陥没し、また隆起していた。

元々存在していた大地が壁に見間違える程に陥没し、クレーターと化したその中心で二人の怪物は睨み合う。シュウジ＝シラカワと次元の将ヴィルダーク、二つのスフィアの力を十二分以上に解放し、その力は既に他のスフィアリアクターと比べて何段も上の領域に至っている。

人としての在り方を保ちながら、それでいて無限の力を孕んだその身はさながら人の形をした太極（宇宙）に他ならない。一生命体では覆らない力の差が存在していた――――筈だった。

その差を、シュウジ＝シラカワは飛び越えた。その身に命の輝きを纏わせて、膝を付いて此方を睨むヴィルダークを静かに見据えている。

闘気が感じられない。先程まで自分と戦っていたシュウジとはまるで別人の様な様

変わりにヴィルダークは戸惑うが、それ以上にその心は歓喜に満ちていた。
『それが……それが貴様の全力か。成る程、凄まじいな。二つのスフィアを持ち、意志の力でこの境地に至っても尚、貴様の存在を霞程度にしか認識出来んとはな』
「――――」
目の前にはシュウジが立っている。それは間違いない、間違いない筈なのにその存在感がまるで掴めない。先程まで死にかけていた目の前の男はたった一つの切欠で、自分でも捉えきれない程に進化した。
一時的な状態かもしれない。明らかに普通とは異なる様子だが、ヴィルダークは揺るがない。
「――――行くぞ」
静かに、彼の纏う輝きが揺らめく。自ら仕掛けると宣誓するシュウジにヴィルダークは迎撃の構えを見せる。僅かな沈黙、張り詰める緊張の中でシュウジが一歩踏み締めた瞬間――――。
ヴィルダークの頬から鮮血が舞った。
『つ!?』
まるで反応できなかった事に驚愕を隠せない。見逃す事は有り得ない、隙を見せるなど有り得ない。ヴィルダークは僅かな油断も見せず、シュウジから目を逸らさなかっ

た。

一撃受けたのはそのそんなヴィルダークの――――本人すらも自覚していない意識の隙間を踏み越え、飛び越えたシュウジの異常な程の速さが原因だった。音を越え、光に迫り、そして遂には光すらも超えたシュウジの動き、彼がヴィルダークの背後に立ったその衝撃だけで周囲の大地が弾け飛ぶ。ヴィルダークが己の背後にシュウジがいることに気付いたのは、大地が砕かれる前の僅かな刹那の合間である。

『ヌァァッ!!』

振り向き様に放たれる裏拳、しかしヴィルダークの拳は空を切り、その衝撃がユーラシア大陸の大地を更に蹂躙していく。

上を見れば、そこに弾けとんだ大地の欠片を足場に空を行くシュウジの姿があった。逃がすものかとヴィルダークは脚に力を込めて飛翔する。

握り締めた拳で相手に殴り付ける。単純なその動作には、しかして恐るべき威力が秘められている。人を砕き、命を破壊し、魂すら粉砕させる破界の拳、迫り来る死の具現を前に、シュウジは眉一つ動かさずに対応する。

空を切る。振り抜かれる度に空が弾け、拳圧となった衝撃が大気を蹂躙していく。一撃でも当たれば死は免れない、百や千では足りない拳の応酬。しかし、それでもシュウジは繰り出される死の暴風を、容易いと掃き捨てる様に避けていく。

当たらないシュウジに苛立ったヴィルダークの大振り、それを待っていたと両手をクルクルと回してタイミングを見計らっていたシュウジは、大振りとなったヴィルダークの銀色の腕を片手で反らし、右の肘打ちで鳩尾と思われる箇所にめり込ませる。

――――息が詰まった。人を越え、次元の将としての力を発揮しても人型を形とっている以上、ヴィルダークの体にはある程度の急所は残されている。心臓が穿たれようと死にはしない、頭部を撃ち抜かれようと直ぐ様再生される。しかし、人体に於ける中心線にある弱点は、ダメージになっても致命傷にはなり得ない。

しかし、ここへきて例外が発生する。シュウジの放つ肘打ちが鳩尾と呼ばれる急所に打ち込まれた事により、ヴィルダークの動きは停止する。そしてその隙を逃す道理はない。

息が詰まった事で瞬間的に動きが止まるヴィルダークの横っ面に、シュウジの回し蹴りが炸裂する。脳髄が揺さぶられる一撃はヴィルダークを地面に叩き付け、周囲の大地を破壊していく。視界が歪み、意識が途切れそうになる。それでも立ち上り、シュウジがいるであろう空を仰ぎ見たヴィルダークが次に目にしたのは……無数の流星群だった。

「――――両手・猛羅総拳突き」

腰だめに両拳を携え、引き絞られる力で以て打ち出される無数の拳圧。大気との摩擦

により熱を帯て、青白く光輝く尾を描くその様は正しく流星群（スターフォール）。

『ぐっ、がぁっ！　――――ヌゥウゥン!!』

降り注がれる流星群に打たれながらも全身に力を込めてバリアを張る。膨れ上がる銀のバリアを弾けさせ、降り注いでくる無数の拳圧を消滅させたヴィルダークは再び脚に力を込めて跳躍、シュウジに肉弾戦を仕掛けていく。

先程と同じ展開、再びシュウジがヴィルダークの動きを見切り返しの一撃を見舞ろうとするが、ヴィルダークも永い時の中で幾度となく闘争を繰り広げてきた。確かにシュウジは強くなった、劇的に、鮮やかに今ヴィルダークがいる境地を飛び抜け、更なる領域に至っている。しかし、次元将ヴィルダークは伊達に次元の将を冠している訳ではない。

捉えきれなかったシュウジに遂にその拳が掠り始める。永い時の中で闘い続けてきた次元将としての経験が遂に彼の領域に届き始め――――。

「はぁっ！」

『ガァァッ!?』

それが此方の隙を生み出す誘いだと知ったのは顎に衝撃が貫かれた時だった。カチ上げられる顔、意識は吹き飛び掛けて視界が白く染まる。瞬間、無防備を晒したヴィルダークの腹部に執拗な迄のラッシュが叩き込まれていく。

「だらららららら、ダラァッ!!」
『ぐうあぁぁぁぁぁっ!!』
遂にヴィルダークから苦悶の叫びが上がる。吹き飛び、地に叩き付けられ、再び意識が途切れかける中、先程のシュウジの言葉を思い出す。
彼は特別の理由で戦っている訳ではなかった。失うのが嫌だから、無くしたくないモノがあるから、そう自分自身が願ったから戦うのだと彼は言った。
嗚呼、そうだ。それこそがヒトの……命を持つ知的生命体が有する当たり前でありふれたささやかな願い。きっと、自分も彼も変わらないのだろう、抱く願いは違っているが、その根底にある〝祈り〟はきっと生きている者ならば善悪問わず違いはないのだろう。
詰まる所、ヴィルダークとシュウジの間に違いは無かった。共に戦った戦友の無念を晴らし、悲願を成就させたい想いも、それはヴィルダーク自身の内から生まれ出てきたモノであり、シュウジもまた同じ。
結局、二人の戦いを一言で表すのならば――――意地の張り合い。如何にヴィルダークの戦士としての歴史が長かろうと、この言葉を覆すことは叶わない。
(いぃや、だからこそ俺は負けるわけにはいかないのだ!!)
同じだからこそ、負ける訳にはいかない。ここで負けてしまえばそれを認めてしまえ

ば自分の意志の方が弱いという事を公言するようなもの。意地の張り合いならば張り続けなければ嘘になってしまう。

故に、ヴィルダークは再び限界を越える。二つのスフィアに命令し、無限の力を更に高めていく。押し寄せてくる力の波と自我を消し飛ばしてしまう反作用を意志のみで打ち消し、それすらも取り込んでヴィルダークは更なる進化を遂げる。

膨れ上がる肢体、暴れまわる力の奔流をその身に宿し、限界の更に向こう側へと飛び越えたヴィルダーク。迸るエネルギーを纏い、触れただけで命を砕くその力を以てシュウジに突貫する。

予想を遥かに上回るヴィルダークの体当たり、しかしそれを鮮やかに回避しようとするが……シュウジの動きが停止した。動きが止まったのではない、止まるざるを得なかった。今、ヴィルダークの力は自身が思っている以上のパワーアップを果たしている。もしあの力が僅かでも見誤り、暴発でもしてしまったら、それこそ地球は跡形もなく消し飛んでしまうだろう。

故にシュウジは一つの賭けに出る。地球で被害を出させないため、一時的に場所を移す賭けを。その結果、シュウジはヴィルダークの体当たりを敢えて受け止める事にして、その勢いを削ぐ事に勤めた。

極大な次元力の塊となったヴィルダークの体当たりを受け止める。その際に生じた

衝撃を全て受け流し、シュウジは彼と共に空高く打ち上げられていく。大気圏を突破し、コーディネーター達の居住であるプラントの間をすり抜け、瞬く間に二人はとある大地へと着弾する。

『ぬぅぅぅ……』

膨れ上がる力に翻弄されながらもそれでもシュウジを倒さんと睨むヴィルダーク、既にそこは地球ではなく、地球は彼等の頭上に照らし出されている。

月。地球にとって衛星と呼ばれる月面の大地で二人は睨み合う。太極へ至り、物理法則などとっくに越え、世界の理の枠からはみ出ている二人が酸素の有無に気を削がれる事はない。

最終ラウンド、地球から遠く離れた月の大地で二人の闘いはいよいよ佳境に突入していくのだった。

その２０６

――――月、地球から離れて衛星の役割を担い、多くの多元世界にとって重要な存在として認識されている星、月の民（ムーンレイス）の指導者であり、嘗てはクロノの一員の末裔であったディアナ＝ソレルは執務室にあたる部屋で、地球とサイデリアル、二つの勢力の戦いを見守り続けていた、

「ハリー、戦局はどうなっていますか？」

「はっ、それぞれの箇所では今も尚拮抗しており、地域によっては優勢な所もあるようです。しかし大局的に見れば……少々、押されているかと」

「そうですか……」

　言いづらい事ではあるが、真実を隠すべきではないと判断した親衛隊隊長であるハリー＝オードは、モニターに映る映像をそのままに主であるディアナに告げる。

　ディアナもまたそれを事実として受け止めて目を瞑る。決して楽観視していた訳ではない、相手は多元世界に於いて最大規模の戦力を有する組織だ。永い時の中で祖先達

の代からクロノを通してその脅威を知るディアナからすれば、それは想定の事態と言える。

今、月の民からも多くの志願者兵が地球を守るべく、衛星軌道に展開しているサイデリアルの軍勢の足止めをしている。嘗て地球の人間だった月の民達、以前は地球に対して恨みの感情すら抱いていた者がいた筈なのに、今では彼等の助けになろうとしている。

地球と月、二つの星で育まれてきた人類が今は手を取り合っている。それ自体はディアナにとって喜ばしい事だが、その一方で多くの月の民が死んでいく事を思うと、ディアナは素直に喜ぶ事が出来なかった。

分かっていた筈だ。何時かはこのときが来ることを、その時を覚悟して今日まで月の指導者として在り続けてきた。自分だけではない、プラントで同じように戦局を見守っているラクス＝クラインも、クロノの末裔の一人で在るが故に、今頃は彼女も自分と似た気持ちを抱いている事だろう。

ならば、今は見届けよう。この戦いで多くの命が犠牲になろうとも、その罪を背負い続けるのは他ならぬ自分自身だ。だから目を背けず、今も命を掛けている彼等を見守ろう。

――――そんな時だ。突然、激しい揺れと衝撃が月の民が住まう都へ襲い掛かった。

まるで月全体が揺れたのではないか、という衝撃。嘗てない事態にディアナは声も上げられず椅子から転げ落ちる。そんな彼女をハリーが身を挺して庇ったのは、流石親衛隊隊長と言えるだろう。

「ご無事ですかディアナ様！」

「え、ええ、ありがとうハリー……何事か？」

ハリーによって何とか怪我なく済んだディアナは彼の手を借りて立ち上り、周囲の警戒に当たらせているハリーの部下に何事か訊ねる。

まさかこの月にまでサイデリアルの軍勢が押し寄せてきたのか。最悪の事態を想定し、ハリーはディアナの逃走経路を確保しようとするが……。

『な、何なんだよあれ、なんであんな奴等がいるんだよ!?』

『有り得ない、ここは宇宙空間だぞ!?』

通信から聞こえてくるのは親衛隊の驚愕に満ちた声だった。親衛隊である彼等が戸惑い、怯え、恐慌している。それを訝しげに想いながらもハリーは確りしろと彼等を叱咤し、何が起きているのか簡潔に訊ねた。

『……ひ、人です。人間と思われる物体が人の形をした銀色の怪物と――――た、戦っているのだと思われます！』

「何？　戦っているとはどういう事か？」

『そうとしか見えないんです！　あぁ、消えた!?　今度は左？　いや右だ!?　何なんだよ、どうして人が宇宙服も着ずに生きている!?　戦っている!?　なんで瞬間移動見たいな動きが出来る!?　あれは、あんなのが本当に人間なのかよぉ!?』

最早発狂同然に喚く彼等に今度はハリーが困惑した。彼等は曲がりなりにも親衛隊を担う人材。何れもその質は、地球の主戦力にも引けを取らない者達だ。彼等もハリーと同様にディアナに忠誠を誓っている。そんな騎士道の如く精神をもった彼等が、一様に動揺しているのはどういう事か。

埒が明かないとハリーはディアナに許しを貰い、執務室のモニターに外の様子を映し出させる。切り替わる視点、そこに映し出される光景を目の当たりにしたハリーとディアナは……。

「こ、これは……」

「……ユニバース」

微かに映る人らしき影、そして人とは思えぬ戦い、輝きを纏う者と銀色の魔人が拳をぶつけ合う。月面に新たなクレーターが出来上がる光景を目にした二人はそれぞれ驚嘆の声を漏らすのだった……。

◇

――――月面。太陽系に於いて地球に最も近い自然の天体で、その距離感は凡そ３８４，４００ｋｍ。当然其処には酸素など無く、水も無ければ草木の類いもない。月の民が住む都を除けば生命が生きていけない真空の空間だけが、宇宙と連なって広がっているだけ。

だが、そんな事はお構いなしとばかりに二つの拳が激突すると、辺りには振動が拡散し、月という天体を揺さぶらせていく。

『オオオオオオッ!!』

ヴィルダークが吼える。咆哮と共に放たれる剛拳は、しかしシュウジの受け流しによって流れてしまう。触れただけで命を砕く銀色の魔人の拳を片手間で受け流し、シュウジの拳がヴィルダークの腹部へとめり込ませる。

ヴィルダークに自我はない。度重なるスフィアの力を行使し限界を超えた力を引き

出し、その過剰なまでの力の増幅に彼の意識は耐えられなかった。
しかし、自我を失った所でヴィルダークが止まることはない。永い時の中で培ってきた次元将としての矜持が、自我程度を失った所で止まることを許さない。目の前の敵を倒すため、彼はその肉体が滅び、魂が砕け散っても戦うことをやめはしないだろう。
繰り出される打撃の嵐、暴風となったそれは徐々に月の大地を削っていく。このままでは月までもが取り返しの付かない事態に陥ってしまう。ここには月の民や彼等を導くディアナもいる以上、早急に戦いの場を変える必要がある。
『グォォォォッ!!』
「フンッ!」
『ガァァァッ!?』
吹き荒れる死の暴風の中をシュウジは迷い無く突き進み、僅かに見えた隙間目掛けて蹴りを打ち放つ。堪らず蹈鞴を踏むヴィルダーク、苛立ちを隠せない声色を溢し目の前のシュウジを睨む。
対してシュウジは落ち着いていた。力は増し、一つでも受けてしまえば致命傷は免れないヴィルダークの攻撃を、それでも難なく突破して返しの一撃を放っていく。
当然だ。今のシュウジには力の流れというモノを完全に掌握し、制御してしまっている。相手が幾ら力を増していようが、それを奮うに足る意志が無ければ只の暴力に過ぎ

ず、そんな単調な攻撃を貰う程、今のシュウジは甘くはない。輝く光を纏い、油断無く相手を見据えるその姿は正しく極みの境地に到達した佇まいである。

ただ驚くべきなのは、今の自分の攻撃を受けても尚倒れないヴィルダークのタフネスさだ。今のシュウジの攻撃は、それこそ今のヴィルダークには及ばない迄も、それでも並の機動兵器なら一撃で砕く威力を秘めている。それを既に何十発当てたと言うのに、未だその闘志は萎えていない。

自我を失い、獣と化した事で技の洗練さは失くしたが、代わりに異様な耐久力を得てしまったヴィルダーク。このままでは千日手になりかねない。ジリ貧となりつつある現状を打破すべく、シュウジは一つの賭けに出た。

「……少し、上げていくか」

そう言ってシュウジの纏う光がより強く輝きを放ち始める。煌めくその輝きは月を照し、地球に住まう人々の目に留まっていく。

力が上がる。自分と同じように力を底上げするシュウジに、ヴィルダークは雄叫びを上げながら突き進んでいく。一歩踏み込む度に地面は割れ、勢いを乗せた蹴りがシュウジ目掛けて放たれる。

当然の如く背後へ回る事で避けるシュウジだが、獣の本能かヴィルダークはシュウジの俊敏な動きに対応し、次の瞬間にはその手に特大のエネルギーを凝縮させて振り向き

様にシュウジに向けて放つ。
だが、それすらも読んだシュウジは腕を横に薙いでヴィルダークの放つエネルギーの塊を反射する。一瞬の攻防、返されたエネルギーはヴィルダークにそのまま着弾し爆発、構うものかとそれでもヴィルダークは迫るが……。
「セリャァァァッ!!」
『ウガァッ!?』
回転を付けて、勢いを乗せた返しの蹴りがヴィルダークの横っ面を蹴り抜く。カウンター気味に決まった一撃はヴィルダークの体躯を退け、地に膝を着かせる。漸く纏まったダメージが通ったが……様子がおかしい。跪いたまま動こうとしないヴィルダーク、先程までとはまるで違う大人しくなった彼に訝しげに思った――その時だ。
「っ!?」
突然、シュウジの足場が揺れる。すわ地震か？　いや違う。確かに月にも月震と呼ばれる地震があるが、それとは根本的に異っている。まるで月そのものが意思を持って震えている様な……。
瞬間、シュウジを足場にしていた月面は唐突に無くなった。否、消えたのではない。正確には一人の次元将が月を持ち上げた事により、シュウジが月面から振り下ろされたのだ。

「……流石に驚いたぜ」

『グゥゥゥ……ウォォォォォォッ!!』

驚き、目を丸くさせるシュウジに向けて月を投げる。余りにもふざけた光景。だがしかし、衛星である月がその軌道から大きく逸れた事で、シュウジとその背後にある地球は再び激突の危機に陥ってしまう。

再世戦争の再現。嘗てのアンチスパイラルが、地球人類を皆殺しにしようと行った月落としが再び起きようとしているのだ。今頃地球では大騒ぎになっている事だろう。

「月にはディアナ様達もいるんだ。あまり勝手な事をするもんじゃあないぜ」

迫り来る月面、避けようがない月の激突をシュウジは真っ正面から受けて立つ。嘗てはグランゾン（相棒）の力を以て漸く受け止めていたソレを――――。

「人越拳受けの奥義――――〝万物流転〟」

シュウジは勢いをそのままに、降り注ぐ月を返していく。もう一度言おう、ふざけた光景だ。落ち行く月の落下を押し上げ、元の軌道に戻っていくその様子にプラントにいる人々はアングリと口を開けて言葉を失い、コロニーに住まう人々も目をゴシゴシと擦って現実を受け入れがたくしている。

眼前に広がる月を使用したキャッチボール、しかしシュウジが周囲の様子を気に掛ける暇はなく、戻っていく月へ追随し、月面に向けて拳を置く。

もうここで戦ってはいられない、これ以上の戦闘はディアナや月に住まう人々も耐えきれなくなる。その事を配慮したシュウジは、今いる自分とは反対方向にいるヴィルダークに向けて、威力を拳に乗せた衝撃を放つ。

〝鎧徹し〟　武術に於ける防御不可能の一撃を、月を徹してヴィルダークに当てる。所謂〝星徹し〟を打ち放った事でヴィルダークを月から引き離したシュウジは、この好機を逃さないと飛翔する。

月を半周し、ヴィルダークを捉えた。向こうもシュウジを捉えた事でその眼光から熱線を飛ばすが、シュウジは当然の如くこれを避け、ヴィルダークの顔面に拳を捩じ込む。

苦悶の声を上げながら吹き飛ぶヴィルダーク、月の重力圏から離れ、無防備となった彼が次に目にしたのは……並列するように並ぶ無数の黒い孔だった。

ワームホール。それはシュウジがグランゾンと共に真化を果たした事で、より実戦的に扱える様になった、ある一つの直線的奥義。

「――――見様見真似」

ヴィルダークとシュウジの間にある無数のワームホール、それを目の当たりにしたヴィルダークは嫌な悪寒を感じ取り、回避しようとするが……。

「スーパー、イナズマ――――」

『グッ、グギィィ…!!』

「キィィィック!!」

無数のワームホールを通し、重力加速により乗倍に加速された蹴りがヴィルダークの胴体に突き刺さる。声など上げられない、勢いに抗えず月から突き放され、蒼の地球へ落ち行く最中、背中に感じる大気との摩擦熱に悶絶するヴィルダークとシュウジは、再びラース・バビロンのある大地、ユーラシア大陸へと降下する。

その様子を遠巻きに眺めていたＺ―ＢＬＵＥは落ちてくる二人に言葉を失い、ブライトの叫ぶような対ショックの指示によって我を取り戻す。

着弾、次に巻き起こる衝撃と爆風が大地を削っていく。星全体を揺るがす衝撃に彼等はそれでも耐えて見せるが、それ以上彼等の所へ近付こうとはしなかった。

巻き込まれるのを恐れた？　それもある。常識外れな戦いに介入するのが気後れする？　それもある。

だが、それ以上に見てみたかった。二人の戦いを、常識を超え、摂理を超え、世界の理すら超えた二人の戦いの行く末を、Ｚ―ＢＬＵＥは無意識に見届けたくなったのだ。

アサキムももう余計な策略を企まない。目の前で起きている超常の戦いの決着をこの目で見守りたかった。彼だけではなく、Ｚ―ＢＬＵＥ全員がこの戦いの果てにどんな結末が待っているのかを……。

燃え上がる大地、炎で溢れ、立ち上る炎をシュウジは冷静に見据えている。

手応えはあった。ダメージは確実に通ったし、最早ヴィルダークに後はない。だが、それでも予感はあった。あの男はこれまで全てをかなぐり捨ててでも目的を達成するという覚悟があった。

未だ覚悟というモノをしたことがないシュウジだが、覚悟を決めた者の強さを嫌と言うほど実感している。トレーズ、キタン、ガイオウ、聖王。誰かの為に、己の為に、世界の為に、国の為に、覚悟を持って挑んで逝った者達は、皆例外無く強者だった。

故にシュウジは確信する。戦いの決着は近い、だがそれよりも前に……。

『ぬ、ぐぅぅぅ……』

「そうだよな。終われないよな。アンタは今まで沢山のモノを背負ってここに立っている。俺みたいな若造に負けたくないもんな」

「オオオオオオオオオオオオッ!!」

周囲の炎を吹き飛し、ヴィルダークの闘気(オーラ)が噴き出して荒れ狂う。執念、或いはそれ以上のナニか。絶対に負けられない決意と覚悟を以て吶喊してくるヴィルダークに……。

「いいぜ、トコトン付き合ってやるよ!」

シュウジもまたそれを迎え撃つ。時間はない、何時まで自分の今の状態が続くかは分からない、しかしそれでも逃げるわけにはいかない。何故なら負けられない理由は自分

にもあるのだから。

次元将ヴィルダークとシュウジ＝シラカワ、二人の決着までもうすぐそこまで来ていた。

「――――ウフフフフ」

その２０７

『ガァァァッ!!』

最後の打ち合い、最後の勝負、極限に高めた気力を振り絞りヴィルダークは吶喊する。自我を失い、意識を失くした状態で、ただ勝利への執着のみで活動する戦士。

この闘争を避けて回避に徹すれば、ヴィルダークは力尽き、シュウジの勝利は揺るがないモノになるだろう。しかし、そんな選択肢はシュウジの中に存在しない。あるのはヴィルダーク同様、目の前の相手を完膚なき迄に打ち倒して勝利を得ること。

負けない、負けたくない、勝つのは俺だ。互いに拙い意地の張り合い、しかしこの意地の張り合いの果てに待つのが勝利だと言うのなら、尚更引くわけにはいかない。

吶喊するヴィルダークをシュウジは跳躍して蹴りを放つ。両手を交差して防ぐヴィルダークだが、その瞬間無防備になる脇腹へ続く第二撃が蹴り込まれる。

押し出されるヴィルダークだが、しかして堪えた様子はない。距離を開けて狙いを定めるかのように双眸を見開いて睨む、彼の手の内には凝縮されたエネルギーの塊が内包

されている。

『オオォォォォォッ!!』

雄叫びと共に放たれるエネルギーの奔流。大地を掠め、衝撃だけで地表を抉るエネルギーの奔流をシュウジは滑るように避け、沿うように翔ぶ。

エネルギーを放ち、無防備となったヴィルダークへ拳を叩き込む。一発、二発、数を重ねる毎に威力を増しながら、人体の急所となる箇所へ打ち込んでいく。

それでもヴィルダークは退く事はない。どれだけ打ち込まれても耐える次元将に焦りを覚えたシュウジは、ここへ来て自身も最後の勝負に出た。腹部を撃ち抜き、大きく仰け反らせて距離を開けたシュウジは震脚を以て力を溜め、その反動で再び駆けていく。

ならばとヴィルダークも力を溜める。拳を掲げて溜めに溜めたその一撃はシュウジの拳と激突し、その衝撃は大地を貫いていく。

この多元世界の地球は度重なる時空振動により、本来有り得る事の無い稀有な事象を体現している。隣り合わせの二つの日本がその最たる例であり、幾つもの次元が重なっている地球は通常の層の他に次元断層と呼ばれる時空の壁によって守られている節がある。

しかし、宇宙に匹敵するエネルギー同士のぶつかり合いはそんな時空の壁でも耐えら

れる筈は無く、幾度と無く放たれる力の残滓によってゴリゴリと削られてしまっている。許容範囲を超え、遂に耐えきれなくなった地球の大地、ひび割れ、亀裂となっていく地表は二人を中心に捲れていく。

ぶつかり合う二つの力、耐えきれなくなったのは――ヴィルダークの方だった。声を上げて吹き飛び、姿勢を崩された彼の下へ再びシュウジが飛翔し、何度もその拳を叩きつけていく。

だが、これでは終わらない。ヴィルダークもそうだがシュウジにももう後がない。勝負に出て全ての力を出しきるつもりでその身に纏う輝きを強めて決めにいく。

「ハァァァァッ!!」

『ぐ、ァァッ!?』

全身に纏った光を拳に集めて、ヴィルダークの腹部にめりこませる。これ迄とは違う衝撃に　彼の口から苦悶の声が漏れる。そんな彼を逃がさんとシュウジはバク転の要領で蹴りあげる。

ふと、ヴィルダークは気付いた。身動きが取れない、見ればヴィルダークの肢体を光が包み込み拘束している。不味い、本能的に悟ったヴィルダークは必死に自身を包み込む光から逃れようと藻掻く。

その時、彼は見た。両手を前で組んで抑えるように力を溜めるシュウジの姿を。

「ンンンンン――――――!!」

溜める。溜めて溜めて溜めて溜めて溜めて溜めて充分すぎるほどに溜め込んだエネルギーを。

「ダァァァァァッ!!」

放出。両手を広げて溜めていた全てのエネルギーを解き放ち、それをヴィルダークに叩き付けた。天を貫く光、それは軈て特大の爆発となって天地を震わせる。地球が揺れるような衝撃、遠くで眺めていたＺ―ＢＬＵＥは言葉を失いその様子を眺めていた。

――――――遂にヴィルダークは膝を突く。度重なる攻撃のエネルギーをマトモに受けて遂に耐えきれなくなった次元の将が膝を突く。遠くで戦いの行く末を眺めていたエルーナルーナが息を呑み、尸空が目を伏せる。

此処までか。力尽き、銀色の体から力が霧散するように解れていく。もうヴィルダークに勝ち目は無い。後は勝利者であるシュウジが最後の一撃を決めるのみ。

「……行くぞ、ヴィルダーク」

シュウジの拳に力が集まる。光が、粒子が、彼の掲げる拳に集まり集約していく。

それはシュウジがガモンに師事して教わった基礎にして窮極の一撃――――〝絶拳〟。残された総ての力を込めて今放とうとするその一撃は……。

「あ、……がっ」

放たれること無く霧散する。
「ち、チクショウ。此処へ来て時間切れかよ……」
シュウジの纏っていた光も消え、ヴィルダーク同様総ての力を使いきってしまい、搾りカスとなったシュウジは悔しさを露にしながら膝を着く。
血を流しすぎた。一度は止まったかと思われた血は再びシュウジの下で池を作り始め、それに比例してシュウジから活力を奪っていく。
戦いは、勝負の流れは完全にシュウジに傾いていた。しかし、次元将として永年戦い続けてきたヴィルダークの意地と耐久力がシュウジの猛攻から耐え抜いて見せたのだ。
「――――勝負はお前の勝ちだ。事実、俺は途中で自我を失い、スフィアから受ける力の衝動でのみ動いていた。そういう意味では、もう既に俺の敗北は決定していたのだろう」
声がする。血を流しすぎて意識もぶつ切りになってきたシュウジが、それでも自我を保とうと声のする方へ目線を向ける。見ればそこに立つのは次元将としてのヴィルダークではなく、人間の姿をした皇帝が複雑な表情でシュウジを見下ろしていた。
「シュウジ＝シラカワ、お前は強い。ヴァイシュラバを倒し、アンチスパイラルすら屠った貴様は確かに最強の戦士だった。認めよう、貴様は一人の人間としてこのヴィルダークに勝利したのだ」

「く、くぅぅぅ……」
「だが、それでも俺には譲れないモノがある。約束だ。地球とリモネシアの人々は解放しよう。その代わり――――」
「貴様の魂を俺にくれ」
　ヴィルダークの手が手刀に変わる。総ての力を使いきり、マトモに動くことは出来なくとも身動きすら出来なくなったシュウジを仕留めるには十分な力がある。このままでは殺される、なけなしの力を振り絞り何とかヴィルダークの手刀を回避するが、今ので完全にシュウジの活力は途絶えた。
「ぶはー、ぶはー、げほ、ごほ、」
「尚足掻くか。見苦しいが……成る程、貴様らしい。最後まで抗うその姿、嫌いではない」
　確かな足取りで座り込むシュウジに歩み寄る。動けないシュウジとそうでないヴィルダーク、勝敗はヴィルダークの言うようにシュウジの勝利かもしれない、けれど皇帝としてサイデリアルを纏め上げる長として〝結果〟を求められる立場としている以上、最低限の末を見出ださなければならない。
　地球から手を引こう、リモネシアの人々も解放し、自分達は銀河の中心部へ引き返す。その見返りとしてシュウジの魂を頂く。それがこの完全な決着とはいかなかった戦い

に対するせめてもの禊だと信じて……。

（ふざ、けるな。まだ勝負は、戦いはまだ、終わっちゃいねぇ！）

対するシュウジはまだ戦いは終わっていないと必死に抗っていた。血を大量に失い、意識は遠退くばかりで手足の感覚も殆ど無い、気だるさと血を流しすぎた脱力感で一杯なのにそれでも彼の闘志は微塵も揺らいでいなかった。

まだ戦える。死ぬわけにはいかない。僅かな意識を頼りに必死に藻掻くシュウジの下へ……。

「まだだ、まだ勝負は終わっちゃいないよ！」

「なに？」

（……え？）

声が、聞こえた。今まで遠く聞こえていたシオとは違う力強く聞き慣れたあの人の声が、まさかと思い振り返るシュウジの視線に入り込んできたのは……。

「ラトロワ……さん？」

其所にはボロボロのドレス姿を身に纏ったフィカーツィア＝ラトロワが其処にいた。いや、彼女だけではない、彼女の背後から追い縋るように彼女の子供達であるジャール大隊やリモネシアの人々が現れる。その中には当然シオニーの姿もあった。

「全く、さっきからドッカンドッカン煩いから外に出てみれば。何だいこれは、コロニー

でも落ちてきたのかい？」
「爆風は凄いし、熱気はヤバイし、お陰で体のアチコチが火傷と擦り傷で一杯さね。これでもまだ女を捨てたつもりは無いんだよ」
　それはヴィルダークとシュウジが戦っているなか、生身で此処まで来ていた事を意味している。何度も爆発があった筈だ、絶え間なく衝撃と爆風で周囲は荒れ狂っていた筈だ。その中をただひた走ってきたと言うのか、一体何の為に……。
「――――立ちな、アンタはまだ納得してないんだろ？　負けたくないんだろ？　だったら最後まで貫きな」
《――――勝てよ》
「っ！」
　腕を組んで叱咤するラトロワの後ろに店長の姿を幻視した。生真面目で、優しくて、義理堅い、死んだ筈のあの人の不敵な笑みを浮かべた姿が目に浮かんだ。
「シュウジ、こんなことを私が言うのは間違っているのは分かってる。でも、願ってしまったの。また皆と一緒にリモネシアで過ごしたい、何処までもありふれていて、それでも眩しかったあの日に還りたい。筋違いなのは分かってる、貴方に縋るのは可笑しいのも分かってる。でも、でも……お願い、シュウジ！」

〝勝って〟

「――――嗚呼、俺って奴は本当に単純だ。限界だと思ってたのに、もう体が動けないってのに、たった一言、それも女の子からの声援を受けただけで……ほら、立てちまう」

血が噴き出す。膝は震え、手足に力が入らない。満身創痍、限界に限界を超え、その反動で動けなくなった体。

しかし、それでも立ち上がれた。立ち上がれと、打ち勝てと、ここにそう呼び掛けてくれる人がいるだけで剰りにも簡単に更なる限界を超える。単純な自分に笑いたくなったが、それ以上にシュウジは嬉しくなった。

リモネシアの人達が後ろにいる。ここまで来るのに大変な労力だったのに、自分を置いて逃げることも出来たのに、それなのに自分の為にここまで来てくれた。自分に言葉を伝えるために、怪我を負ってまで駆け付けてくれた。

もう、負ける理由は見当たらない。震える膝でふらつきながら、それでも力を込めてシュウジはヴィルダークに歩み寄る。

「そう言う訳だ。悪いな、一対一のつもりだったのに結局こうなっちまった」

「構うものか、俺もサイデリアルの全軍を預かる身。そういう意味では、こうなることで漸く我等は対等となった。ただそれだけの話だ」

自分にも背負うものがある。そう暗に語るヴィルダークにシュウジは不敵に笑う。真面目な奴だ、あのガイオウと同僚なのが不思議に思える位生真面目な男、次元将ヴィルダークにシュウジは内心感謝した。

もう、自分達に戦える余裕はない。あるのはただ一度、ありったけの力を込めた一撃のみ。

互いに相手の間合いに入る。静まる空気、何もかもが静止し、心音すら静まり返った……刹那。

「っ!!」

拳を放つ。互いに総てを乗せた拳、しかしその勢いは体格的に勝り打ち下ろす形となったヴィルダークが僅かに速い。

ヴィルダークの拳がシュウジの顔にめり込む、誰かが息を呑んだ。次の瞬間起こる悲劇を前に――――しかし、シオニー達はそれでも決して目を背ける事はなく。

そして、シュウジはそれを超えた。めり込んだヴィルダークの拳はシュウジの頬を切り裂くだけに終わり、その拳は空を切る。

流れる体、崩れる姿勢、無防備を晒したヴィルダークの顔面に迫るのは、力を溜めた

シュウジの拳。
「俺のオオオオオオオッ！」
「勝ちだアアアアアアアアッ!!!!」
振り抜かれた拳はヴィルダークを捉え、彼を体ごと地面に叩き付けた。

（――――あぁ、これで終わりかぁ）
自分は、これまで立派に戦って来れただろうか。死んでいった仲間達に顔向け出来る戦いをしてこれただろうか。
（なぁ、ヴァイシュラバ、俺は、最後まで戦えたか？　無様を晒していなかったか？）
《相変わらずクソ真面目だなぁテメェは。んなもん当たり前だろうが。いい加減肩の力を抜けって言ったの忘れたのかよ》

――――嗚呼、よかった。

脳裏に浮かぶ盟友の笑み、それを前にして。

《お前は凄ぇよ。ホントお前が俺達と同じ次元将で、良かったよ》

（そうか、ならそれに少し甘えて……）

少しばかり、休むとしよう。

◇

仰向けに倒れるヴィルダークとそれを見下ろすシュウジ、決着は遂に着いた。辺りは静まり返りシオニー達は言葉を漏らさずに二人の様子を見守っている。

　軈て自身の勝利を告げる様にシュウジは己の拳を天に向けて突き立てる。それは戦いの終焉、サイデリアルとの戦いの終わりを意味していた。歓声が沸き立ってくる、背後でリモネシアの人々が喜びの叫びを上げている中……。
（あ、もう無理……流石に、限……界……）
　ボタボタと血を流し、遂に立っているのも限界となったシュウジは力を失い倒れようとして……それをさせまいとシオニーは横から抱き付く形でシュウジを支える。
「ちょ、駄目だってシオさん。今の俺血だらけなんだから……その、汚れちまうよ」
「うっさいバカ、こんなにボロボロになってまで戦って、立っていることも出来ない癖に強がるんじゃ無いわよ」
「い、いやでも、そんな悪いって」
「いいから、これくらいさせなさいよ。そうやって何でも一人でやりきろうとするの、貴方の悪い癖よ。こんな時くらい……少しは頼りなさいよ」
　その目に涙を滲ませてシュウジを支えるシオニー。自分の体重を必死に受け止めながらも懸命に強がって見せる彼女に、これ以上は言っても無理だなと早々に諦めたシュウジは素直に彼女の好意に甘えることにする。
「……ありがとう、シュウジ。助けてくれて」
「――へへ、どういたしまして」

　小さな声で、しかしハッキリと礼を口にするシオニーにシュウジは満面の笑みで受け止めた。向こうからリモネシアの人々が駆け寄ってくる。ラトロワやジャール大隊の子供達、元リモネシア大統領やお年寄りの方々が二人に向かって歩み寄っていく。
　別方向からはＺ―ＢＬＵＥの艦も視認できている、向こうも向こうで無事に突破出来た様だ。これで地球での戦いも終結する。長きに渡るクロノによる束縛も解放され、今度こそ人類は正しい成長を遂げる足掛かりを得ることになる。
「……シュウジ＝シラカワ」
　誰もが歓喜に震える中でシュウジの前にヴィルダークが立ち上がる。途端に警戒するシオニーだが、その心配は要らないとシュウジは首を横に振る。
「見事だ。貴様との戦いは俺の経験した中で最も得難く、そして糧になる一時だった」
「そうかよ。で、これからどうするつもりだ？」
「無論、地球から手を引く。残った軍も引き上げさせ来るべき真戦に備える事にする。……次は本来の貴様、グランゾンと雌雄を決する事にしよう」
　そう言って不敵に笑うヴィルダークにシュウジは呆れた様に溜め息を吐く。あれだけやり合ってまだ戦い足りないとか、一体どこの戦闘民族だ。
「良いのかよ、言っちゃ悪いが俺達は強いぞ？　何せ味方から本気になるのは駄目だって出禁扱いされてるんだ。幾らお前でもただではすまねぇよ？」

「フン、ならば今度は此方が挑む番、と言うことだな。だが、その前に少し休むとしよう、今回は流石に俺も疲れた」
『ヴィルダーク……』
「済まんなエルーナルーナ、尸空よ、負けた」
『気にするな、お前が生きている以上次がある。その時に務めを果たせば良い』
　電子モニターを開き、仲間達に詫びを入れる。申し訳なく顔を伏せるヴィルダークとは対照的に二人の反応は好印象だった。
『いやぁ、凄いの見せてもらったよ。こりゃあＺ―ＢＬＵＥとやり合う時が楽しみだ。次やるときは宇宙、そこはアタシ達の独壇場さ、今回の様にはいかないよぉ？』
　獰猛な笑みを浮かべてリベンジを誓うエルーナルーナ。彼女の相手はスフィアの相性的にランドが相手をするので、取り敢えずシュウジはスルーする事にした。
「では、俺達は去るとしよう。敗者となった以上地球に留まる事は出来んからな、早々に立ち去るとしよう」
「ヴィルダーク」
　そう言って立ち去ろうとするヴィルダークをシュウジが呼び止める。振り返らず、足を止める彼にシュウジは一言言葉を口にする。
「……納得、出来たか？」

それは、一体何を意味しているのか。この戦いになのか、それとも奴と同じ次元将としての道を往く事になったヴィルダーク自身に対してなのか。

軈てフッとヴィルダークから笑みが溢れる。背にしているシュウジには分からないが、その表情はとても晴れ晴れとしていた。

全て、出しきった。気力を振り絞り死力を尽くし、限界に限界を超えた結果の敗北。その結果に意義は唱えない。受け入れ、糧にして次の戦いに活かすのみである。

二人は全力だった。全開で、遠慮なく、手加減なしに戦った二人は正しく満身創痍、そこに他者が意見を割り込ませる余地などない。

そう、二人は全力だった。限界を超え、総てを出し切った。

――――――故に、気付くのが一手遅れてしまった。

「後ろだヴィルダーク!!」

瞬間、鮮血が辺りに散った。

「――――――あ？」

口から漏れる血、見ればその胸元には細く白い手がヴィルダークの血で濡れていて。

「嗚呼、申し訳ありません。二人が余りにも初々しいもので、私ったらつい」

それは愉悦と喜悦に満ちた淫蕩に塗れた顔で其処にいた。

その２０８

　ボタボタと命の溢れる音が聞こえる。嘗てサイデリアルの皇帝であり、次元将の最後の一人として戦ってきた男は、自分の胸元から突き出る手に一瞬呆けた顔を晒してしまう。
　何が起きたのか。停止した思考、虚ろの瞳で背後へ見やれば、恍惚に微笑むケダモノがいた。
「あぁ、あぁ、申し訳ありません。お二人の闘いの熱に充てられてしまい、少々昂ってしまいました。ですがお二人もいけないんですのよ？　あれだけの戦いを繰り広げておきながら、あんなに隙を晒してしまうんですもの」
「あ、あ、……ゴブッ、くぁ」
「ウフフ。本当、無防備な背中ですこと、これを前にして手を出すなどと――――ええ、ええ、それこそ酷い話ですわ」
「ぐ、お、オノレぇぇぇっ!!」

苦し紛れの一振り、横凪ぎに振るわれるヴィルダークの腕は、しかしサクリファイという極大の怪物に当たらない。振り回した腕、その勢いの踏ん張りすら利かないヴィルダークは苦悶の表情を浮かべて地に伏せる。

後へ僅かに跳躍し、わざとスレスレの所で回避するサクリファイ、倒れるヴィルダークを愉悦の笑みで見つめていた彼女は、自身の手についた血を舌で舐めとる。

「フフフ、これでスフィアが二つ私の手の内に……ご協力感謝しますわ」

そう言ってサクリファイは、己の手の内から二つの光を出現させる。それはヴィルダークが手にした二つのスフィア、【立ち上がる射手】と【怨嗟の魔蠍】である。労せずに手に入れた二つの次元の至宝に満悦なサクリファイ。漁夫の利で得たスフィアをまるで玩具を得た子供の様に手の内で弄ぶ。

「では、少々勿体ないですがこれでお暇させて戴くと――――」

用件は済んだと、もうここには用がないと踵を返して立ち去ろうとするサクリファイの顔面に拳が突き刺さる。吹き飛び、倒れ、鮮血で顔を染めながらも微塵も笑みを崩さないサクリファイは、自身を殴り飛ばした者に視線を向ける。

「ふー、ふー、ふー!」

「シュウジ!」

見れば拳を振り抜いた姿勢のままサクリファイを睨むシュウジがいた。その双眸を

怒りで染めて、血を噴き出しながらも佇むその姿にシオニー達は心配の声を上げる。
「フフフ、相変わらず乱暴な方。何故其処まで怒りを露にしているのです？　其方で倒れる虱は貴方の敵、なのでしょう？　何故そこまで気を配るのです？　どうして感情移入しているのです？　　矛盾、無意味、無作為。――――フフフ、なんて面白く、滑稽で、それでいて何処までも愛おしいのでしょう」
「テメェ……！」
「何なの……これ」
　殴られた箇所は一瞬で修復され、やはり笑みを崩さないサクリファイ。悪意を通り越して害意しか感じられず、会話をしているようで此方を見ていないその存在にシュウジは怒りを滲ませ、シオニーは怖気を感じていた。
　人間ではない。その在り方、その性質、外見からは自分と同じ人の形をしているのに、その中身は全く違うと言えるほどにサクリファイという存在は捻れ、歪み、爛れきってしまっていた。最早自分達の間に会話は成立しない。そう改めて確信したシュウジは全身に力を込めて戦闘体勢に入る。
「シオニーさん、皆を連れて逃げてくれ。向こうからはＺ―ＢＬＵＥも来てくれている。彼等と合流するまで時間を稼ぐから――――」
　出血が酷く、ボヤけた景色しか見えていない。しかしそれでもシオニー達を助けるに

は自分が動くしかない。戦意を無理矢理にでも高めて前に出ようとするシュウジだが、それをシオニーは許さない。
「そんな事私が……私達が許すと思う?」
「シオニーさん、でも……」
「約束したじゃない。助けるって、それは私達だけじゃない。貴方も、一緒にリモネシアに帰るって意味なんでしょう。だったら、貴方もちゃんと生きて帰らなきゃダメじゃない」
　その口調は静かで穏やかだったが、そう語る彼女の瞳は強い決意に満ちていた。この厳しい状況の中で、それがどれだけ難しい事なのか。それを承知した上で彼女は口にしている。皆で無事に生きてリモネシアに帰ると。
　彼女のその強い言葉に思い知らされ、そして思い出す。そう、幼馴染の少女に助けられた時の事を。
「フフフ、まるであの時の再現ですわね」
　しかしその思い出も奴の言葉によって貶められる。それが尊いモノが汚された気になりシュウジの怒りをより激しく煽っていく。
「良いでしょう。私がスフィアを完全に取り込むまでまだ時間があります。その時迄の時間稼ぎも兼ねて――――一つ、戯れと参りましょう」

次の瞬間、サクリファイの背後から幾つもの巨人が姿を現す。それは嘗てアドヴェントがまだ存在していた頃、クロノの改革派と称する面々が使用していた量産型の機体。

〝アスクレプス〟　それも何かしら強化を施されたのかどの機体も豹変としており、機械的だった機体が肉体的になっている。それに合わせて外見は凶暴なモノになり、異常さを物語っている。

「喜び野郎が消えてから全く見掛けなかったから気になっていたが……そうか、やっぱりテメェが隠していたのか」

「ええ、彼等は主人だったアドヴェントを失い哀しみに暮れていました所、私が善意で以て救い上げたのです。私の慈悲、私の寛容、私の愛で彼等は文字通り生まれ変わったのです」

嗤い、そう口にするサクリファイにシュウジは改めて嫌悪した。この女が口にしているのは紛れもなく事実、確かにこの女はアドヴェントと同類の存在で、彼等にとっては救いの女神に見えるだろう。

そしてこのクソッタレな女神の宣う生まれ変わったという言葉も、文字通りの意味なのだろう。何せ目の前のアスクレプスから感じ取れる力はシュウジもよく知るモノなのだから。

「テメェ、やりやがったな」

「し、シュウジ？」

シュウジから発せられるこれ迄とは桁違いの怒気にシオニーは戸惑う。侮蔑、軽蔑、嫌悪、ありとあらゆる拒絶の感情が怒りとなってシュウジから噴き出してくる様だった。

「可笑しいと思った。なんでアドヴェントの僕でしかないコイツらが其所まで強くなれるのかって。だが今分かった。テメェ、よりにもよってコイツ等に真化をさせたな、それも――物理的に!!」

真化とは己の半身である機体と意志疎通、或いは思いを重ね、一つの存在へと昇華させる進化の枠を超えた新たな境地。人機一体、その言葉を体現し更なる境地へ至る為の在り方。

それを作為的に、力ずくで成された存在が目の前にいる。物理的に機体と同一し、強制的に昇華された歪な存在が、自分達の前に立ちはだかっている。

見れば、アスクレプスの額に人間の顔と思われるモノが張り付いている。泣いている様な、怒っている様な、笑っているような、何れも人の残滓でしかないその有り様に、シオニー達を始めとしたリモネシアの人々は恐怖と嫌悪で腰を抜かしていた。

「何を忌避する必要があるのです？　進化とは常に己の意思を以て成されるもの、ヒディアーズやインベーダーもそう。そう言う意味では私達も彼等と何ら変わりないの

です」
「――もういい、もう喋るな」
「シュウジ？」
「分かっていた事だ。テメェはもう俺の敵とか地球の、Ｚ―ＢＬＵＥの敵とかそんな枠組みに収まるもんじゃねぇ。この世に生きる命、その全ての敵だ。」
　気が付けば、血は既に止まっていた。怒りで出血が収まり、怒りで体の限界を消滅させたシュウジは今こそ己の愛機を呼び出そうとする。だが、それは一時の誤魔化しに過ぎない。
　シュウジは既に限界を超えていた。今は怒りでどうにか誤魔化しているが、流れ落ちた血と失った体力は戻ってこない。もし何かの拍子で体がその事を自覚すれば、今度こそシュウジは動けなくなる。
「シュウジ、ダメ――」
　それを止めようとするシオニーだが、既に状況は動いた。肉体的になったアスクレプスがその手でシュウジ達を押し潰そうとしたとき。
「イナズマ――――キィィィック!!!」
　一筋の赤い閃光がアスクレプスを蹴り抜いた。

その２０９

シュウジとシオニー、リモネシアの人々に迫っていたアスクレプスの魔の手から庇うように、突如として現れた一筋の紅い閃光が彼の機体を打ち抜いた。
アスクレプスは鑪を踏んで後退るが、胸部辺りが一部凹んだに過ぎない。その凹みも次の瞬間には瞬く間に修復され、何事も無かったかの様に佇んでいる。
「みなさん、ご無事ですか！」
そんなアスクレプスに驚きながらもシュウジ達の前に降り立つのは、紅い閃光の正体であるノノ。　Ｚ―ＢＬＵＥの一員であり、バスターマシン７号である彼女が視線だけシュウジ達に向ける。
「ノノちゃん、来てくれたか」
「はい。間もなくＺ―ＢＬＵＥ本隊も駆け付けます。ご安心ください。皆さんの安全はそれまでこのノノが守ります」
人の型でバスターマシンとして多大な火力を用いるがゆえの先行、恐らくは事態を見守っていたブライト辺りの采配だろうか、兎も角これで戦況は変わった。ノノの一撃の

お陰で時間は稼がれ、遂にＺ―ＢＬＵＥの面々が到着する。各艦から続々と機体が出撃し、ラース・バビロンの大地（凄まじく変わり果てているが）に降り立った。
　スーパーロボット軍団、マジンガーやゲッターを始めとした様々な超科学で生み出された人類の叡智達、状況の変化に伴い臨戦態勢で降り立った彼等は特大の悪意に対して戦意を漲らせる。
『シュウジ、勝ったんだな』
　Ｚ―ＢＬＵＥの艦の一つ、ラー・カイラムの艦長であるブライト＝ノアから安堵の混じった言葉が投げ掛けられる。
「ブライトさん、あぁ……でも」
　サイデリアルとの決着、それ自体は果たされた。度重なる激闘、死闘の果てにシュウジとヴィルダークとの戦いはシュウジの勝利という形で終わりを告げた。しかし、それでもシュウジの胸中にあるモヤは晴れない。
　向こう側で倒れるヴィルダーク。スフィアという核を失った事による弊害か、その体は徐々に崩壊の一途を辿ろうとしている。体の節々から砂の様な状態となり、崩れ始める彼の肉体に、シュウジは言い難い感情を覚えた。
『――――それで、テメェは一体何だ？』
　苛立ちと困惑、そして僅かに滲み出る畏れ。ゲッターチームの竜馬は、眼前に佇むサ

クリファイと思われる女に容赦のない敵意をぶつける。進化の力、ゲッター線に見初められた男の本気の殺気、それを一身に受けて尚、獣の本性は崩れない。
「フフフ、まぁなんて壮観なのでしょう。音に聞こえしＺ―ＢＬＵＥが総出で現れるなんて、あぁ、未だその時では無いと言うのに、私ったら――――昂ってしまいます」
『何だ、この女』
『この女のプレッシャー、今までとは何かが違う』
『此方を見ているようで、何も見えていない。いや、見ようとしていない』
『凝り固まった悪意――いや、もうそんな範疇に収まらない』
『一体、何なんだあれは?』
　常人よりも感受性に優れ、他者の感情を感じ取るに秀でたニュータイプの面々、特にその能力に優れたカミーユやバナージは、サクリファイの異常とも言える気質の一端に触れ、慄いていた。
『バナージ、カミーユ、これ以上あの女に触れようとするな。戻ってこれなくなるぞ』
　そんな二人を引き戻す様にアムロは呼び掛ける。彼もサクリファイの本性には本能的に気付いているのだろう。故に即座に判断する。あの人の形をした怪物とは意志疎通出来るモノではないと。アレはもう人とは呼べない、インベーダーや宇宙怪獣と同類で全ての生命体の敵なのだと。

そしてそれはＺ―ＢＬＵＥ全体にも広がっていく。言葉など交わしてはいない。誰もアムロ達のようにモノの真意を読み取る能力を持ち合わせてはいない。普通なら戦う前に話し合いを設けようとする筈なのに、誰もがそれを口にはしない。

そう、全員が気付いていた。ダイガードのパイロットであること以外は普通の人間と変わり無い赤木やトライダーのパイロットであるワッタ、超能力という特殊な力を持つ明神タケルやトップの面々、野性味溢れるゲッターチームやダンクーガの乗り手である葵、Ｚ―ＢＬＵＥの全員が思い知る。

目の前にいるのは根源的災厄、バアルの一種なのだと。Ｚ―ＢＬＵＥが戦慄する中、サクリファイは見るものを融かすような妖艶な笑みを浮かべている。

「これ程の視線に晒されては昂りを抑えるのも一苦労。故に本来ならばこの場を譲りたい所なのでしょうが……そうさせては下さらぬのですね？」

『あぁ、悪いがお前をこれ以上放置させる訳には行かない。お前がスフィアを手にいれて良からぬ事を企んでいる以上、な』

「まぁ、良からぬ事だなんて。酷いですわアムロ＝レイ様」

『――――敬称呼びをされて此処まで不快感を覚えたのは生まれて初めてだ。答えろサクリファイ、お前はそのスフィアで何をしようとしている』

普段冷静で、状況を広く見ようとしているアムロが珍しく怒りを露にしている。しか

しそれに口を挟むモノはいない。何故ならアムロと同様、他のＺ―ＢＬＵＥの面々も、彼女に対して言い表しの無い嫌悪感を抱いているからだ。

スフィアを用いて何をしようとしているのか、アムロは冷静を装いながら問い詰めるが、サクリファイは笑みを浮かべるばかりでマトモに答えようとはしない。

「ウフフ、そこまで求められるのならば仕方ありませんね。幸い此処には全てのスフィアがそろっています。序でにもう幾つか頂くとしましょうか。ねぇ、アサキム＝ドーウィンさん？」

『……参ったな、此方に狙いを定めてきたか』

舐め回すような視線がアサキムの操るシュロウガ・シンに向けられる。これ迄自身の願いの為にあらゆる非道な行いをしてきた自覚のあるアサキム。シュウジという協力者を得たことによって、今はどんな仕打ちも甘んじて受け入れるつもりではあるが、流石にアレの相手をするのは御免被る。

「さて、それでは皆々様。済度の時は今暫くの間がありますが――慈悲です、戯れと参りましょう」

サクリファイが両手を広げれば、それに付き従う様にアスクレプス達は広がって陣を展開する――と、思われた瞬間、奴等はノーモーションのままＺ―ＢＬＵＥに襲い掛かる。

突如拓かれる戦端、幸いＺ―ＢＬＵＥとアスクレプスとの戦いに巻き込まれずに済んだリモネシアの人々は、少し離れた場所で受け入れ体制に入ろうとする母艦、ラー・カイラムに向けて逃げようとする。
「行こうシュウジ」
「あ、あぁ……」
シオニーに促されるままシュウジは皆と共に避難しようとする。Ｚ―ＢＬＵＥが駆け付けてくれた今、自分がここにいる意味はない。怪我も酷く、意識もマトモに保ってられない以上、戦場に長居するのは自分にとっても味方にとっても悪手でしかない。
Ｚ―ＢＬＵＥの足を引っ張る危険性がある以上、自分はリモネシアの人々と共に避難するべきなんだろう。――――しかし。
「あらあら、もうお帰りになるのですか？　もう少しゆるりとしていけば宜しいではないですか」
そんなシュウジ達の前に、当然のごとくサクリファイが立ちはだかる。突然すぎる彼女の出現、瞬間移動の様に眼前に現れる彼女にシオニー達は面食らうが、唯一彼奴に対して耐性のあるシュウジは顔をしかめて睨み付ける。
どうやら逃がすつもりはないらしい。ヴィルダークに続き、満身創痍である自分まで も手にかけようとするサクリファイの欲深さ。しかしこの女の目論見は、業腹な事に的

を射ている。ヴィルダークとの戦いで、体力の全てを使い果たしたシュウジは立つことすら儘ならない。

一歩、また一歩近付いてくるサクリファイ。やはりグランゾンを呼び出してここで決着を着けるべきか。否、そうすれば近くにいるシオニーやリモネシアの皆にまで被害が及ぶ。

どうする？　一か八かもう一度アレになるか？　出血多量で今は怒りという感情でどうにか抑えられているが、また体が痛みと疲労を自覚すれば今度こそ死ぬ。そうなれば次に狙われるのはシオニー達だ。

迫られる選択、どうすれば言いか思考を巡らせるシュウジの前で、バスターマシン７号、ノノがサクリファイの前に立ち塞がる。

「相手を間違えないでください。貴方の相手はこのノノがします！」

緋色に輝く髪を靡かせ、サクリファイに向けて拳を突き付ける。ノノの瞳に迷いはない。例え自分の力が凄まじく、人に向けるモノではないと理解していても、今の彼女に躊躇はなかった。何故ならば、彼女も他のＺ―ＢＬＵＥの面々同様、目の前の女を人間と思いはしなかったのだから。

「まぁ勇ましい。流石は火の文明の名残、愛らしい姿とは裏腹になんて力強いのでしょう。フフフ、ならばその期待に応えるため、私も少々本気になりましょう」

何処からでも掛かってこい。そう言わんばかりに両手を広げるサクリファイに、ノノは正面から殴り付ける。バスターマシンの力の込められた右のストレート、掠っただけでもその辺の相手ならば挽き肉に出来る彼女の拳を、しかしサクリファイは片手で受け止める。
「っ！」
「ウフフ、どうしました？　折角の可愛いお顔が台無しですわよ？」
自分の攻撃を自分と同じ背丈しか無い女に受け止められた事実に、ノノは驚愕する。が、それでも構うものかとノノはスラスターに力を込めて、空へ向かって駆け昇って往く。
みるみる内に遠くなっていく二人、何とか助かった事に安堵するシオニーは、今度こそシュウジを連れてこの場から離れようとする。
しかし、シュウジは動こうとしなかった。ある一点を見つめて微動だにしない彼を不思議に思ったシオニーは、その視線の先をなぞるように追うと……。
「……うそ、でしょ？」
その光景に絶句した。動ける筈など無かった。その体は正しく死体でそのまま朽ち往くだけの体だった。――なのに。
それでも、立ち上がっていた。立ち上がり、這いずるように歩み出していた。その光

景に息を呑み、言葉を失っていた。
「……ゴメン、シオニーさん。俺やっぱり」
そんな光景を目にして、シュウジは申し訳ない表情で側で支えるシオニーを見る。放っておけないのだろう、互いに命を懸けた死闘を演じ殺し合った癖に、妙な所で紳士になる。そう言うのはもっと別の所で発揮して欲しいのだが……。
「いいよ、分かったわ。でも、アタシも一緒に行くからね」
「――分かった」
自身の我が儘を聞き入れて貰った以上、シュウジにシオニーの言葉を退けることはできない。二人はラー・カイラムに向かうリモネシアの人々とは反対方向へ転進し、歩みを進める。
「なっ、お前達！　一体何処へ――!?」
「ラトロワ！　皆をお願い、アタシ達もすぐに戻るから！」
途中踵を返す二人に声を駆けるラトロワだが、彼女も彼女でやるべき事がある。リモネシアの皆をラー・カイラムへ無事に送り届ける任がある以上、それを放棄する訳には行かない。
「クソッ！　必ず、必ず戻って来なさいよ！」
叫ぶラトロワの言葉を胸に刻み、二人は彼の後を追う。激化する戦場、命を賭した行

軍。彼等の行く先にあるのはアスクレプスによって吹き飛ばされ、地に倒れ付す――
――マジンガー（鉄の城）Zだった。

その２１０

「やぁぁぁぁっ!!」
　手を握り、拳の形へ変形させたバスターマシン７号――ノノの一撃が、地上から遥か離れた雲の上で振り抜かれる。縮退炉を搭載し、圧倒的性能を誇るガンバスターとは系統として姉妹になる、火の文明の人類が生み出した兵器の結晶。その圧倒的力をもって打ち出される拳は、其処らの兵器を一撃で粉砕する威力を秘めている。
「あらあらまぁまぁ、元気一杯ですわね」
　そんな彼女の拳を、ソレは笑顔を浮かべて回避する。ノラリクラリと、まるで遊んでいる様な態度のサクリファイにノノは苛立つが、それ以上に焦りを募らせていた。
　ノノことバスターマシン７号は、その名の通りガンバスターに連なるモノ、人類という種を守護するべく生まれた火の文明の最高傑作、その一つである。並外れた膂力。洗練された火力。宇宙怪獣という人類種の天敵との戦いに用いられる決戦兵器。
　その彼女の攻撃が悉くいなされ、捌かれ、受け流されていく。ノノに油断や慢心の気

持ちは無かった。目の前にいる女は宇宙怪獣以上の人類の――――生命の天敵だというのはノノも充分理解している。人の形をしているからって手を抜ける相手では無いのは重々承知している。

だが、それでもこれ程の差があるとは思わなかった。自分の攻撃を悉く、何の苦もなく対処し、アッサリと攻略してしまうサクリファイ。ノノは焦った。今この女の相手が出来るのは自分しかいない、地上では奇妙な力を得たアスクレプス達がＺ―ＢＬＵＥを襲っている。

Ｚ―ＢＬＵＥが連中を相手に勝利を収めるまで、何としても此処で抑えとかなくてはならない。ノノは一度下――――地上に向けて降下する。

「あら？　もうお仕舞いですの？」

降りていくノノに些かの失意を覚え、落胆するサクリファイだが、彼女から発せられる紅い光がより激しさを増した事を目にした瞬間、それは間違いだと気付く。ノノは逃げるために降りたのではない。地上にダメージを与えない為に下がったのだ。

「バスタァァァァァ――――ビィィィィムッ!!」

ノノの両手から放たれる一条の光。それはサクリファイに直撃する事で二つに裂け、宇宙に向けて飛翔していく。軈て地球の重力により歪曲した光は弧を描き消失していく。

月の様な衛星程度なら容易く貫く光線。周囲の雲は蒸発し、開かれた視界の中でノノが目にしたのは、焦げ目こそついたものの、全く無傷の状態で佇むサクリファイが其処にいた。
「ウフフ、健気ですね。皆を守る為に孤軍奮闘。一人で私に挑む貴女は正しく地球の守護者。矮小で、滑稽で、とても素敵な貴女。嗚呼、何て愛しいのでしょう」
恍惚に微笑むサクリファイにノノは怖気を覚えた。こんな存在がいるのかと、感情を持っているのに、宇宙怪獣とは異なる存在の筈なのに、ノノは目の前の存在とまるで分かり合える気がしなかった。あの女は根本的な部分で捻じ曲がっている。人の心を持つバスターマシン、ノノは改めて目の前の存在が何としても倒さなければならない化け物なのだと思い知る。
「さて、折角の二人きりなんですものね。私も少し場の空気を盛り上げると致しましょう」
そう口にするサクリファイは指先をノノに向け、エネルギーを集束させていく。先程のノノが放ったバスタービームと同等以上のエネルギー量。直撃すればただでは済まない。ノノは何とか回避しようとするが……。
「あら？　避けて宜しいのですか？」
出来ない。何故ならば彼女の後ろには地上が、自分と同じく戦っているＺ―ＢＬＵＥ

の仲間達がいるのだ。回避など、出来るはずもない。
　避ける事は無理、防御も厳しい。だったら残された手段は徹底的に抗うのみである。
ノノは今一度両手を掲げ、ありったけのエネルギーを集束し始める。
「バスタァァァァァ――――」
「ビーム♪」
　迸る二つの閃光。激突した瞬間周囲は白に染まり、ユーラシア大陸に漂う雲は全て消滅する。押し潰されまいと必死に抗うノノ。それを見下ろすサクリファイは、やはり愉悦に満ちた笑みを浮かべるのだった。

◇

『くっそ、コイツら！』
『手強い。一体がそれぞれあの黒いアンゲロイ以上だ！』
サクリファイがけしかけて来た量産型アスクレプス、嘗てはアドヴェントが使用していた機体の模倣体。強制的な真化を受けて、これ迄とは比べ物にならない程に強化された彼等に、Ｚ―ＢＬＵＥは徐々に圧され始めてきた。単純な力押しだけでも脅威。ガンダムや機動力を活かした機体は勿論、ゲッターやダンクーガの様なパワータイプの機体ですら、奴等の力に圧倒されようとしている。
『舐めるなよ、俺達だってあの時よりも強くなったんだ！　こっちだって――――ッ！』
そう、これ迄Ｚ―ＢＬＵＥは何度も窮地を乗り越えてきた。幾度も死地を越え、修羅場を潜り抜けてきた。負ける気は無い、喩え相手がどれだけ強くなろうとも、それを乗り越える力を持っている。
だが、兜甲児のその強気の台詞は最後まで紡がれる事はなかった。アスクレプスの額に縫い付けられた様に浮かび上がっている人の顔。それを目にした兜は、目の前のアスクレプスの異様な外見と強さを無意識に理解してしまった。
『コイツら、コイツらはまさか……』
他の面々も気付いたのか、戸惑い、焦り、力負けしていく。そしてそんな彼等にトドメを刺す様に……。

『マキ……さん？』

ヒビキの口から聞こえてくるその名前に、Ｚ―ＢＬＵＥは否応なく理解する。彼等は、サクリファイの手により己の機体と一体化されている。より上位の存在に至るため、人としての権利や命としての在り方、それら全てを棄却されて、機械と強制的に融合されてしまっている。

言葉を失った。人としての在り方をこれ以上無いほどに歪まされた、マキを初めとした嘗て人間だったもの。トライア博士に確認を取るまでもない。しかし、彼等は元々はアドヴェントに洗脳された一市民でしかない者達だ。そんな彼等を果たしてＺ―ＢＬＵＥは倒すことが出来るのか？

『まだだ！　まだ諦めるには早いぞ！』

『クロウ!?』

『要するにコイツらはアレだ！　あの時のエスターと同じなんだ！　次元力で存在を歪められたのなら、もう一度次元力で元に戻せばいい！』

ブラスタの機動力でアスクレプスの攻撃をどうにか避け続けながら、クロウは動揺する面々に呼び掛ける。そう、彼等は次元力の力でその存在を歪められている。それこそ再世戦争で一度は次元獣となったエスター＝エルハスの様に。

確かにまだ希望は潰えていない、歪められたのが次元力なら、元に戻すのもまた次元

力で可能となるはず。違いがあるとすれば、歪めたのが一国の技術者が手掛けたモノと宇宙すら歪める獣という、出力の違いにあるのだが……。

『アサキム、お前にも手伝って貰うからな！』

『そうしたいのは山々だけど……ねっ！』

迫るアスクレプスの凶刃をシュロウガ・シンも刃で切り払う。複数のスフィアを所持した事で、出力も桁違いのモノとなったシュロウガ。そんな彼等でさえ、一体を相手にするのがやっと。戦況は芳しくない。ゼロことルルーシュや、各艦長達が必死にその頭脳を巡らせて策を練ろうとしているが、一向に打開策は思い浮かばない。

シュウジが命を賭してサイデリアルから勝ち取った未来、ここで摘み取らせはしないと足掻くが……状況はより悪い方向へ流れつつある。

『ぐぁぁぁっ!!』

『兜おっ！』

アスクレプスの圧倒的な火力に、遂に鉄の城（マジンガー）が根負けする。これ迄の戦いで幾度となく最前線でＺ―ＢＬＵＥの盾として戦ってきたマジンガーＺ。しかしここへ来て限界が来たのか、打ちのめされ、大地に叩きつけられたマジンガーの装甲には、幾つもの亀裂が入っていた。

追撃してくるアスクレプスから守る為に真ゲッターが前に出る。

『す、済まねぇ竜馬さん。足、引っ張っちまった……』
『いいからテメェは其処で少し休んでろ！』
　これ迄前に出て守ってきた筈の仲間に庇われる。自分達は同じ部隊の仲間、故にそれ自体を恥とは思わない。何より悔しいのは、鉄の城、神にも悪魔にもなれるという謳い文句を欲しいままにしてきた自分達が、情けなくも敗北した事に他ならない。
　歯を食い縛る。仲間が戦っているのに自分がお荷物になってしまっている。その事実が悔しくて、堪らなくて、どうしようもなくなっていく。
（チクショウ、畜生！　もっと、もっと俺に……）
『力が欲しいか？』
『っ!?』
　ふと、甲児の頭に声が響いてくる。通信による声ではない。誰だと思い辺りを見渡しても、周囲には人影なんてある筈もなく――――。
『お、お前は!?』
　否、一人いた。倒れたマジンガーの足下に、崩壊しかけたサイデリアルの皇帝が、それでも強い眼差しでマジンガーを、兜甲児を見つめていた。
『お前、生きてたのか!?　ていうか何で其処にいるんだよ!?』
『済まないが、その質問に答える暇はない。単刀直入に聞くぞ兜甲児。力が欲しいか？』

『な、なん、だって？』
『今のマジンガーでは奴等には勝てん。勝てたとしてもその時の代償は計り知れんモノがある。シュウジ＝シラカワが万全な戦いを期待出来ない以上、奴等との戦いでカギを握るのは貴様と……ゲッターしかいない』
『俺と、竜馬さんが？』
『お前には今二つの選択肢が委ねられている。このまま皆と共に戦うか、それとも一縷の望みに賭けて新たな力を得るか。取り込まれるかもしれない、自我を失い廃人となるかもしれない。あまりにも無責任且つ分の悪い賭けだ』
『しかし、それでも私はお前に問わねばならん。兜甲児、光の神ゼウスの写し身を駆るモノよ。仲間達の為に、深淵を覗く覚悟はあるか？』
その問いはあまりにも抽象的で、要領の得ない話だった。ただ一つ分かっているのは、この死にかけの男は自分に、Ｚ―ＢＬＵＥに、残された自身の全ての力で彼らの道を切り開こうとしている。
覚悟を訊ねてくる皇帝、次元将ヴィルダーク。彼の問い掛けに僅かな思考を巡らせ……。
『あぁ、やってくれ。それで皆を守り奴等に勝てるのなら、俺は力を得る方を選ぶ』
『分かった。その答え、確かに聞き届けた。しかし一つ訂正しておこう。力を得られる

か否かは俺の匙加減ではない、お前自身の意思の強さにある』

『――――あぁ、分かったよ』

『お前が挑むのは最終にして原初の魔神。負けるなよ兜甲児、奴に言葉を届かせられるのは、今この場においてお前しかいない』

その言葉を最後に、兜甲児の意識は途絶えた。

◇

――――其処は墓場だった。広大な宇宙空間の中で漂う亡骸は、嘗ては最強のスーパーロボットとして語られてきた魔神、鉄の城ことマジンガー。

そこにあるモノの中には、甲児も知らないマジンガーの姿があった。偉大なる勇者の

様相をしたモノ、魔神の皇帝を謳うモノ、様々な形をした嘗ての鉄の城達は、皆凄惨な格好で漂っていた。

どれも屈強な力を持っていた筈だ。それこそ今の自分よりもずっと強いマジンガーもこの中にはいた筈だ。それなのにまるで壊れた玩具の如く扱われたであろうその光景に、兜は息を呑んだ。

〝――――何用ダ〟

『!?!?』

思わず、砕け散りそうになった。遥か頭上から聞こえてきた声。ただ自身に問い掛けてきた言葉の圧に、兜は一瞬魂ごと砕け散る錯覚を覚えた。吹き出てくる汗を拭いもせず、意識と意思を強く以て兜は見る。

そして――――心臓が一瞬止まった。

其処にいるのは〝魔〟だ。其処にいるだけで他者を圧倒し、粉砕せしめる原初の魔神が兜甲児を見下ろしている。

『お前……は、マジンガー……なの、か?』

思わず、そんな言葉が出た。こんな事、初めてだ。……否、一つ覚えがあった。あの時は奴の余りの力の大きさに正しく認識出来なかったが、今目にしている魔神はあの時、第三東京跡地で見たグランゾンと同じモノだ。

〝フン、確カニ今ノ奴ノ力ハ我等ト比肩スルガ、今ハマダ目覚メタバカリノ雛ニ過ギン。同列ニ語ラレルノハ少々心外ダナ〟

『――――』

息が出来ない。意識が保てない。自身の存在すら認識できなくなる迄に疲弊した兜。原初の魔神はそんな彼に容赦なく高らかに宣言する。

〝貴様ノ問イニ答エヨウ。我ガ名ハマジンガーＺＥＲＯ。原初ノ魔神ニシテ、全テノマジンガーの頂点ニ位置スル者ナリ〟

マジンガーＺＥＲＯ。日輪の如く輝かせるその背の背後には、無数のマジンガーの残骸が漂っていた。

その２１１

其処は、マジンガーの墓場だった。あらゆる姿の鉄の魔神が無惨な姿で打ち捨てられ、あらゆるマジンガーの系統を受け継いだ機体が破壊し尽くされた状態で漂っている。

己以外のマジンガーは認めない。そう言うが如く、死に体を晒すマジンガー達を背に、その存在は己の銘を口にする。

マジンガーＺＥＲＯ。最終にして原初の魔神、あらゆるマジンガーの頂点に君臨し、超越者として遥か高次元の彼方で君臨する魔なる神。

その存在は問い掛ける。何用かと。マジンガーＺＥＲＯという極大の存在感に圧倒され、その威圧に魂ごと消えかける兜だったが、魔神の問い掛けによって正気を取り戻す。

『頼む、力を貸して欲しい。今俺達はある連中によって圧されている。もしお前が人に仇なす存在じゃあ無いのなら、人の可能性を信じているなら――――頼む！　お前の力を

俺に、俺達に貸してくれ！』

危険な賭け、と言うのは兜本人が重々理解している。目の前の魔神は人の手に負える存在ではない。人の手で生み出されながら、その範疇から大きく逸脱した超越者である。懇願しても嘲笑われるだけに終わり、下手をすれば取り込まれる。あるいはそれ以上の地獄が齎されるかもしれない。

しかし、それでも兜甲児は願った。今も戦っている仲間達を守る為、近い内に地球へ押し寄せる根源的災厄に立ち向かう為、マジンガーＺＥＲＯの力がどうしても欲しかった。

そして兜は、己の願いが叶うのならば自身がどうなっても構わないという覚悟で懇願している。これだけの圧倒的存在から力を借りるのならば、きっと相応の代価を支払う必要も出てくるだろう。だからこそ兜甲児は願う。自分を代価にどうか願いを聞き届けて欲しい――――と。

〝フム、良カロウ〟

『――――ふぁ？』

思わず、変な声が出た。

〝何ダ、不服カ？〟

『い、いや全然！　全然不服じゃありませんよ!?』

思っていた反応とは色んな意味で斜め上過ぎる。目の前の魔神はとんでもない超越者だ。それは間違いない。これだけの相手なら、一人間でしかない自分の願いなど一蹴されるかと思っていただけに、アッサリと承諾するマジンガーＺＥＲＯに兜は動揺する。

『じ、自分から言っておいてなんだけど、本当に良いのか？　アンタからすれば俺の願いなんて何の価値も無いと思ったんだけど……』

〝フン、マァ単ナル気紛レダ。ソレニ其方ノ世界デ起コロウトシテイルノハ、我等ニトッテモ無視デキナイ話。奴ガ原罪ヲ産ミ落トソウト言ウノナラ、ソレヲ防グノモ我等ノ役目〟

『原罪？』

〝ト言ウカ面倒ナノダ。折角《奴》ト戦ウ段取リガ着イタノニ、余計ナ手間ヲ取リタクナイ。譬エソレガ欠片デスラナイ模造品ダトシテモ……ナ〟

奴、欠片、模造品、目の前の存在から聞かされる断片的な情報の数々に混乱する兜だが、今はそれを精査する余裕はない。

〝ソレニ、グランゾンヤゲッターノニバカリ暴レサセルノモ面白クナイ。何ヨリ《皇帝》デハナク我ヲ選ンダ。故ニオマエニカヲ貸スト決メタノダ〟

『は、はぁ。どうもありがとう』

〝イヤ、正直焦ッタノダ。以前ゲッターノカヲ浴ビタ事ガアッタカラ、モシヤト思ッタガ……ウム、流石兜甲児、ソウデナクテハナ〟

何故だろう。色々気になる情報を得ているが、目の前の魔神が思ってた以上に私情に塗れている事に、兜は別の意味で困惑する。

けれど有難い。目の前の魔神が手を貸してくれるのなら、これ程心強いモノは無い。ならば急いで皆の所に戻らなくては。

〝ダガ、我ガ力ノ一部ヲ与エル代ワリニ条件ガアル。我……イヤ、マジンガーノ力ヲ手ニスル者ヨ、我ガオマエニ求メルノハ唯一ツ。勝利ダ〟

意識が徐々に薄れていく。最後に兜が耳にしたのは原初の魔神からの最後の通告。

〝マジンガーニ敗北ハ許サレナイ。モシオマエガ敗ケヲ認メル日ガクレバ――――我ガ総テヲ破壊スル〟

それは一切の妥協を許さないモノだった。マジンガーは最強であると、人の可能性の光を信じても尚、それ自体は拘り続けるＺＥＲＯに兜は不敵に笑みを浮かべる。

そしてそれを了承と捉えたマジンガーＺＥＲＯも笑みを浮かべた――――様に見えた。

◇

「まだか、マジンガーよ。兜甲児、まだ原初には届かないのか」
周囲がスーパーロボット達が戦いを繰り広げる中、瀕死のヴィルダークが呟く。彼が手を伸ばした先には、マジンガーが未だ沈黙を保ったまま倒れている。急げ、もうじき尽きる自身の命を無駄に消費させない為に〝扉〟を開けと、一縷の望みを託したヴィルダークは兜甲児の帰還を願った。
「おい」
そんな時だ。背後から聞き慣れた人物の声が聞こえてくる。視線を其方に向けると自分と同様に瀕死となった好敵手、シュウジ＝シラカワがシオニーを支えに佇んでいた。
「――何か、手伝える事はないか？」

理由など求めない。自身の最期の力を振り絞り、何かを成そうとしているヴィルダークをシュウジは問詰せず、ただ何か手伝える事は無いかと訊ねた。

自身を察してくれた宿敵に、内心感謝しながらヴィルダークは瞑目する。しかし、今彼に出来る事はない。今自分が行っているのは、次元力の応用の中でも更に異端な部類の荒業だ。最早手遅れな自分なら兎も角、〝奴〟に対抗しうるシュウジを捨て駒にする訳にはいかない。

故にヴィルダークは口を開こうとした。何もないと、自分と言う死に損ないを相手にせず、シオニーと共に仲間の下へ逃げろと。

そんな時だ。彼等の頭上を巨大な影が覆ったのは。見上げたヴィルダークは口許を緩め、もう一つの賭けを思い付く。上手くすればこの地に特大な戦力が生まれる事を期待して……。

「ならば、一つ頼まれてくれるか」

「あぁ、分かった」

そしてそんなヴィルダークの頼みを、やはりシュウジは即答で了承するのだった。

◇

『チィ、コイツら！』
『強く、速く、そして堅い。成る程、確かにコイツは厄介だな』
『冷静に分析している場合かよ！』
アスクレプスに圧され、ジリ貧に追い詰められつつあったＺ―ＢＬＵＥ。度重なるサイデリアルとの戦闘で疲弊した今の彼等では、強制的に真化を施されたサクリファイの尖兵を相手にするのは厳しい。
クロウが強制的に真化融合させられた彼等を、どうにか元に戻せないか模索しているが、経過は芳しくない。しかし彼等を元に戻せる可能性がある以上、それを捨て置く訳にはいかない。
相手は強大、その上此方は疲弊した状態で、加えて本気で相手するには躊躇ってしまい、その所為で徐々に追い詰められてしまう。このままでは事態はより取り返しのつか

ない方向へ向かいかねない。やはりここは強行するしかないか。ヒビキや知り合いのいるクロウ達には申し訳ないが。と竜馬達ゲッターチームが覚悟を決めて、アスクレプスに攻撃を仕掛けようとして……。

『竜馬！　こっちだ！』

『號!?』

見上げれば、其所にはＺ―ＢＬＵＥの艦の中でも指折りの戦闘能力を誇る真ドラゴンがいた。

『お前ら、何でここに!?』

『後方で援護に徹していたんじゃないのか!?』

『話は後だ。いいから真ドラゴンに乗れ、お前達を待っている人がいる』

竜馬達の疑問の言葉を他所に號は三人に真ドラゴンはその頭を垂れる。有無を言わさず早く乗れと急かす號に不思議に思いながら、真ドラゴンの頭部へ飛び移る。一体誰が待っていると言うのか、ゲッターチームの疑問はすぐに解消される。

「よし、何とか合流出来たか」

『テメ、シュウジ＝シラカワ!?』

『退避していたんじゃなかったのか?』

『それに一緒にいるの……もしかしてシオニー＝レジスか?』

血塗れで今にも死にそうな顔をしながらも、シュウジは眼前の真ゲッターを見上げる。そんな彼に対し竜馬達は、何故ここでシュウジが出てくるのかと疑問に思った。彼の役目はサイデリアルの皇帝ヴィルダークを倒す事であり、それは既に終わっている。

ならば何故ここにいるのか。竜馬が口を開いて訊ねるよりも先に、彼等の前に影が舞い降り、その手には人型のバスターマシンが握られていた。

『ノノ!?』

「ウフフフ、見た目に似合わず頑張るモノですから、ついやり過ぎてしまいましたわ。ごめんなさい」

首を掴み、愉悦の笑みを浮かべるサクリファイ。恍惚に歪んだ口元を隠しもせず、指を艶やかにノノの体に這わせていく。

「さぁ、貴女も私と1つになりましょう。私の愛は総てを溶かし、総てを呑み込む。それは機械であっても例外ではありません」

『ノノから、離れろォォォォッ!!』

取り込もうとするサクリファイの魔の手から妹分を救うべく、ラルクはディスヌフと共にサクリファイへ切り込む。相手が生身の人間だろうと関係ない。自分をお姉様と慕ってくれるノノを助け出すため、ラルクはディスヌフを操り巨兵の拳を振り抜こうとするが……。

『っ!!』
　ディスヌフの振り抜かれた拳は黒に染まった太陽、邪悪なるヘリオースの手によって簡単に受け止められてしまう。
「フフ、元気が良くて大変結構です。しかし戯れもここまで。名残惜しいですが、そろそろ幕引きと致しましょう」
　瞬間、ヘリオースを中心にエネルギーの奔流が荒れ狂う。地を砕き、天を裂き、星を揺さぶり、それでも止まらない力の濁流。その様子を観測していたトライアは言葉を失う。
　軈て、Ｚ―ＢＬＵＥの頭上には禍々しく燃え滾る太陽が具現化していた。赤黒く、脈動し、全ての命を拒絶する破滅のエネルギー。
『くそ、あの女また何か始めようとしてやがる!』
「だな、もう猶予はない。この一回で成功させて見せる」
『なに?』
　一刻も速くあの太陽をどうにかしなければならないのに、シュウジの口から溢れる言葉は至って冷静なモノだった。アレを見ても全く臆していないシュウジを不思議に思うゲッターチーム、しかし、シュウジに彼等の疑問に答える暇などなかった。
「シオニーさん、本当に良いんですね?」

　これから行われるのは、シュウジとしても初めての体験、近くにいるシオニーを当然巻き込んでしまうが、もうここまで来た以上彼女を放り投げることも出来ない。
「と、ととと当然よ！　ここまで来たんですもの！　私に構わず、さっさと始めちゃって！」
　そんなシュウジの問いをシオニーは笑顔で即答する。怖いくせに、足を震わせて今にも腰抜かしそうな癖に、それでも気丈に振る舞うシオニーに、シュウジは心の底から彼女に尊敬の念を抱く。
　膝を着き、真ドラゴンに触れる。瞬間、真ドラゴンと真ゲッターの両方から凄まじい迄のゲッター線が溢れ出す。
『な、何だこりゃあ!?』
『予想を遥かに上回るゲッター線の奔流、だと!?　シュウジ＝シラカワ、一体何をした!?』
「これから、〝門〟を開く」
『何!?』
「ヴィルダークから聞いた。次元力を操り、ある境界線を越えた者には、ここと違う別のナニかへ通じる〝門〟の開閉を行うことが出来ると。それが時空振動なのか、それとも時空修復の事なのか、それは定かではない」

「本来ならばただ別世界、別次元、別時空へ繋がるだけの荒業だが、今この場においてそれはなされない。何故ならここには、ゲッターとマジンガーという二つの要素が加わっているからだ！」
『な、何を言って――――』
「条件が整っているんだッ！　今、この瞬間、全てのスフィアと全ての因子、全てが此処に揃っている！　頼むゲッターチーム、頼んだゲッター線、あんた達が正しく進化の極致に入るのなら、この瞬間だけでいい、力を貸してくれ!!」
「――――いけませんわ、自分達ばかり楽しんでは」
　ゲッターが光輝く中、ディスヌフを下したサクリファイがヘリオースと共に迫り来る。しかし、奴の行く手を二つの機影が遮った。
『悪いけど、ここを通しはしないよ』
『この刹那に、俺達の総てを賭ける』
　それはプレイアデス・タウラと尸逝天、エルーナルーナと尸空の二人だった。突然の乱入にサクリファイの目が見開かれる。僅かな刹那の攻防。その僅かにして最大の隙をサクリファイが晒した瞬間――――戦場にて光が溢れた。

◇

――何だ、ここは？

――ここは、ゲッターの……ゲッター線の中なのか？

――俺達は、ゲッターに取り込まれたのか？

上もなく下もなく、ただ漂う様な感覚。ゲッターという力に取り込まれたのかと弁慶は危惧するが、それに反して忌避感はなかった。死とは異なる魂と肉体の別離、竜馬は本能的に悟った。今この場には自分達の他に彼等がいるという事を。

――へ、成る程。そういう事かよ。

――なっ!?　そ、そんな!?

――う、嘘だろ!?

其所にいたのは、もうこの世にはいない筈の者達だった。早乙女博士、ミチル、そし

て――武蔵。何れも先の戦いや事故で亡くなった者達に、竜馬を除く二人は驚愕に震えていた。

〝――どうやら、間に合ったようじゃな〟

――成る程、理屈は分からねぇが、どうやら俺達はゲッター線。その飛びっきり深い所へ飛ばされたらしい。

〝――シュウジ＝シラカワ。かのシュウ＝シラカワと連なる者。奴が残してくれた最後の遺産。よもやこの様な形で助けられるとはの〟

――ミチルさん、まさか、また会えるなんて。

〝フフ、話をしたいのは山々だけど、残念ながら今はその時ではないわ〟

――ど、どういう事なのか、俺にはてんで理解出来ねぇや。先輩、一体どうなってんだよ？

〝考える必要はねぇさ。お前らはただあるがままに受け入れればいい。ゲッター線を理解し、共に進めばいい〟

〝竜馬、隼人、弁慶。お前達はもうワシの敷いたレールなど必要ない。必要なのはただ前に進む意思のみ。忘れるな、進化の意味を。間違えるな、進化の在り方を〟

意識が遠くなっていく。視界が白み、全てが遠くなっていく。笑みを浮かべて自分達を見送ってくれる博士達に想いを馳せながら、竜馬が最後に見たのは――――。

星よりも巨大な――――銀河すら呑み込む巨大なゲッターロボだった。

◇

それは、進化に目覚めた竜の化身。
それは、最終にして原初の魔神。
その光景を目にした者は口にする。神話の始まりと。
吹き飛んだアスクレプス達。宙を舞い、大地に叩き付けられる様を見てＺ―ＢＬＵＥ達は戸惑う。アレは何だ、と。
原初（ＺＥＲＯ）を模した日輪を背に、鉄の魔神が大地に降り立つ。

進化の力を得、新たな姿へ移行した竜が空へ舞う。
そしてそんな二体を先導する様に、日輪を背負う重力の魔神が前に出る。圧巻、壮観、そして圧倒的。
『あぁ、間に合ったか』
『何だよ、凄いじゃないか』
ヘリオースに機体を貫かれ、死を前にしたエルーナルーナと尸空は思う。良かったと。自分達の献身は無駄ではなかったと。本来の予定とは大きく外れているが、新生した彼等を見て二人は安堵する。
軈て爆散し、スフィアごと命を奪われる。しかし二人に一切の後悔はなかった。後を託せるに充分な力を持った彼等ならば、きっとやり遂げてくれると信じて。エルーナルーナと尸空。サイデリアルに属していながら、その上位存在に反旗を翻そうとしていた二人は、確かな達成感を得ながら消えていった。
それを見届けながらヴィルダークは見上げる。もう、自分に出来る事はない。己の無力さと、同時にやり遂げた充足感を得ながら、ヴィルダークは一言口にする。
「――――後は、頼んだぞ」
手足が灰となって崩れ、立てなくなったヴィルダークは、彼等の背を目に倒れ込む。彼の呟きは風に溶けていき、空の彼方へ消えていく。

『あぁ、任されたよ』

だが、その想いは確かに聞き届けられた。日輪を輝かせ、強い意思をその目に宿した鋼の戦士達は、眼前の巨悪を前に闘志を滾らせる。

マジンガーＺＥＲＯ

真ゲッタードラゴン

ネオ・グランゾン

それら三体を前に、それでも歪んだ慈愛は悦を溢す。

しかし気付かない。その歪みに歪んだ笑みが僅かながら軋んでいた事に、微かながら輝入っていた事実に奴自身も気付かない。

さぁ、今度こそ、今度こそだ。地球に於ける最後の戦いが、今こそ開かれる。

今こそ、決着の時だ。

その２１２

エルーナルーナと戸空、サイデリアルに属するスフィア所有者の最高幹部は黒に染まった邪悪なる太陽（ヘリオース）に機体ごと貫かれ爆散し、愛機と共にこの世を去った。

守るべきモノで、本来なら自分達の総大将であるヴィルダークに託す筈だったスフィアは怨敵であるサクリファイに奪われてしまう。しかし、死に逝く二人に後悔はなかった。

戦場に顕現した三つの機影、鉄の城だったモノはネオ・グランゾンと同じＺＥＲＯ（０）を模した日輪をその背に携えて禍々しくも荒々しい出で立ちで新生し、竜（ドラゴン）の名を冠するゲッターもまた、進化の力により更なる変貌を遂げていた。

そしてその二体を先導する様に前に出るネオ・グランゾン。本来ならば、地球圏での戦闘では極力封じ込めていたその力を、今は惜し気もなく表している。

原初（ゼロ）の力を用いれば戦局はより圧倒的格差となるが、下手に力を全開にすれば、それこそ戦闘の土台である地球そのものが耐えられなくなる為、それは出来ない。

故に、シュウジはネオ・グランゾンまでに留めておく事にした。だが、先に述べた通りグランゾンは真化を経てその力を更なる高みへ至っている為、ネオに成ってもそれは変わらない。

気力に満ち、戦意に溢れ、負ける要素など微塵も感じられない新たな存在の誕生に、エルーナルーナと尸空は爆発の中、満足に笑みを浮かべながら消滅していく。敵だったモノの最期の悪足掻きとその散り様に、敵対していたクロウ、ランドの両名は僅かな空虚な感情を抱いて見送った。

『あ、あれ私達……』

『ここ、真ゲッターのコックピットだよな？　どうして俺達、ここにいるんだ？』

『――――』

一方、これまで真ドラゴンに搭乗してＺ―ＢＬＵＥ艦隊の一つを担っていた渓、剴の二名はいつの間にか真ゲッターに乗り込んでいた事に戸惑い、號だけは何かを悟った様に笑みを浮かべている。

他のＺ―ＢＬＵＥの面々も突然の事態に戸惑いを隠せないが、戦況はそれを待ってはくれない。これ迄戯れと称していたサクリファイの顔に未だ笑みは崩れていないが、その表情には何処か焦りが見えている。

ヴィルダークに続いてエルーナルーナと尸空の二人からもスフィアを強奪したサク

リファイは、佇む三機に向けてアスクレプスに命じる。殲滅せよ、総てを亡きモノにせよと一切の遠慮と躊躇、戯れを捨て去って即座に指示を飛ばす。

強制的な真化を施された事によりその力を存在ごと格上げされたアスクレプス達は、断末魔に似た雄叫びを上げてグランゾン達に殺到する。極大のエネルギーを纏っての吶喊、当然Ｚ―ＢＬＵＥの指揮官等は三機のフォローに回るよう指示を飛ばすが……。

『――――驚いたな』

その必要は全くと言っていいほど無かった。迫るアスクレプス達の攻撃を片手で受け止める真ゲッタードラゴンは勿論、ネオ・グランゾンは強化された歪曲フィールドで防ぎ、禍々しい姿となったマジンガーＺＥＲＯに至っては無防備で受けながら平然としている。

明らかに異なる力、異なる存在へと昇華されたゲッターとマジンガーにＺ―ＢＬＵＥは動揺を隠せないが、それを追及する者はいない。何せ搭乗している本人達が動揺を隠せていないのだ。

これ迄とは違う何段か繰り上げられた強さ。真化とは別方向への変化に搭乗者自身が戸惑って仕方がないが、何時までもその事に振り回される訳にはいかない。

『これなら、いける！　竜馬さん！』

『おうよ！』

目の前の敵を打ち破る。手にした力を翳し、この困難を乗り越える為に振るわれる新たな力、それは正しく神を超えて悪魔すら滅ぼすスーパーロボットの新たな境地。
メキメキと音を立てて変貌するマジンガーの右腕。元々あった刃が成長、変形し、まるで一つの巨大な矢となったそれは空に佇むアスクレプス達に向けられる。
『いっけー！　アイアンカッター!!』
放たれる巨大な刃。空を切り、余波だけでも大地を抉るその一撃はアスクレプス数体を巻き込み、宇宙に向かって天へと昇る。軈て両断されたアスクレプスは数秒遅れて爆発し、その姿を消していく。
『ひゅー、甲児の奴派手にやるなぁ』
『あれが原初の魔神か。その名に偽り無し、だな』
『感心している場合じゃねぇ！　俺達も殺るぞ！』
真ゲッタードラゴンの肩から巨大な斧が射出され、それを手にして肩に掛ける。その質量と大きさから明らかに質量保存の法則を超えているゲッターだが、今さらそれを指摘する者はいない。
『往くぜサクリファイの手下ども。ゲッターの恐ろしさ、その骨身に叩き込んでやる！』
真ゲッタードラゴンは真ドラゴンを圧縮し、真ゲッターと同等のサイズにまで押し込めた異類のゲッター。見掛けは勿論中身まで桁違いに生まれ変わったドラゴンの力は、

戦艦であった頃よりも数段上の出力を誇る。天を裂き、地を砕き、星を割っても尚余りあるその力は、当然の如くアスクレプス達を三体程纏めて切り払う。
　圧倒的な暴威を奮い、これまで此方を圧していたアスクレプス達を押し返して吹き飛ばすマジンガーとゲッター。両名の強さを近場で観察していたネオ・グランゾンもまた参戦しようと前へ踏み出す。
「シュウジ、平気なの？」
「ゲッター線に触れたお陰かな。出血は完全に止まったよ。後は意識を繋いでいられる間、奴等に意趣返しするだけさ」
　未だ傷跡は多く残るが、それでも血は止まり、先程よりも顔色の良いシュウジにシオニーは安堵し、そして辺りを見渡す。此処が彼が今まで見てきた世界なのだと。グランゾンのコックピットに乗り込み、彼の膝の上にいることで、シュウジが今までどんな視線でこの世界を見てきたのかを知ることが出来たシオニーは、僅かに微笑みながら彼の頬を撫でた。
「し、シオニーさん？」
「シュウジは、凄いね。こんなに近くで戦場の中にいて、戦って、傷付いて、一度は死んじゃって、でも、それでも頑張って……こんな事、私なんかが言えた事じゃないけど」
「もう、背負わなくていいからね」

「――」

別に、シュウジ自身は何かを背負っているつもりは無かった。やり遂げたい事があるから、だから戦っているだけだと。覚悟というのは全人類を本気で想い、憂う者が抱き……それこそ、トレーズの様な人物こそが背負えるモノなのだと、シュウジは思っていた。

けれど、シオニーは違うと断じる。決意とは、覚悟とは、暗闇の荒野に進むべき道を切り開く事なのだと、彼女はシュウジの日記を読んでしまったあの日に気付いた。

彼はこれからもそんな道を進み続けるのだろう。　暗闇の荒野を、光なく、一人で孤独に進み続けるのだろう。自身が抱く想いの為に何処までも進み、道を切り開くのだろう。

だからこそシオニーは口にする。貴方はとっくの昔に覚悟という想いを抱いてきた。だからこれからの彼の歩みの邪魔にならない為に、シオニーは此処でシュウジの重荷を取ることにした。

背負わなくていい。自覚も何もなかったが、シオニーのその言葉はシュウジに確かに届いた。ふと、体が軽くなった気がする。気力が満ち溢れ今まで出来なかった事が出来るようになった気さえしてくる。

微笑むシオニーにシュウジもまた笑みを浮かべた。そしてそうしている一方で此方

に狙いを定めたアスクレプス達が襲い掛かってくる。
「買い被りだよシオニーさん、俺はいつだって自分が出来る限りの事をしてきただけ、何かを背負ったりするなんて器は……俺にはない。でも」
「ありがとう。シオニーさん、俺、なんだか今凄く体が軽いや。有り体に言えば……そう」
〝負ける気がしない〟
瞬間、ネオ・グランゾンの日輪は音を立てて輝きを放ち、その力を増幅させる。
『ワームスマッシャー！』
一度に六万を超える目標を同時に攻撃できる光の槍が、迫り来る数体のアスクレプスに向けて放たれる。絶え間なく降り注がれる光の嵐にアスクレプスは細切れに分解され、爆発すら呑み込んで破壊していく。
あれほど苦戦を強いられたアスクレプスが一瞬で消し飛んでいく光景に、Ｚ―ＢＬＵＥは息を呑む。しかしそんな彼等に反して、サクリファイは笑みを深めるばかりだった。
「フフフ、まさか此処まで圧倒されるとは。いやはや人類とは恐ろしいモノですね。其処までの力を得て、一体何がしたいのです？」
『ハッ、その台詞をテメェが言うのかよ！』

『今の俺達には過ぎた力だというのは、俺達自身が重々承知している。だが、それでも地球を、人類を護り、お前を倒せるというのなら、俺達は喜んで修羅になるさ』
『尤も、お前みたいに堕ちる所まで堕ちたりはしないがなぁ！』
笑みを浮かべてはいるが、それでも何処か動揺している様に見えたのは、きっと初めてサクリファイは、シュウジ達を無意識に脅威だと認識したからなのだろう。新たに二つのスフィアを以てしても尚抗えない力の奔流。地球を粉微塵にしても可笑しくない存在の圧力を、不思議にも完全に制御している事実に。
しかし、それでもサクリファイは揺るがない。何故ならこの女もまた超弩級のエネルギーを有する怪物なのだから。
それとなくサクリファイが指を鳴らすと、それまで消滅したと思われたアスクレプス達が何もない所から姿を現した。
『な、何だと!?』
『アイツ等、確かに倒した筈じゃあ……』
『やはり、次元力の応用か』
『いや、ちょっと違う』
『シュウジ？』
『あの女、次元力を使って因果を書き換えたんだ。甲児君と竜馬さん達が奴等を倒し

たっていう現実を、奴が塗り潰したんだ』

サクリファイが行った仕掛けにシュウジが解説すると、それを理解した面々は息を呑む。因果を書き換える。事実を別の真実によって塗り替え、在った事を無かった事にされる。それがどれだけ馬鹿げた能力なのか、優秀な頭脳を持ったトライア博士や元ウィスパードであるテッサは、目をこれでもかと見開いて絶句する。

「ウフフフ、流石に分かってしまいますか。ならばどうします？　我が同胞を屠った時の様に、貴方の魔神も原初の力を解放しますか？　確かにそれなら幾らでも打開策はあるでしょうが……さて、それまでにこの地球は、果たしてその形を保っていられるでしょうか？」

くつくつと笑い挑発するサクリファイに、シュウジの顔は僅かに曇る。悔しいが奴の言う通り、ヴィルダークとシュウジの戦いで酷使された地球はこれ以上の規模の戦いに耐えられない。仮に奴の口車にのって原初（ゼロ）の力を解放すれば、それだけで地球は圧壊されてしまうだろう。

このままではじり貧になり、先程の繰り返しになってしまう。そもそも、その間に地球が崩壊してしまっては意味がない。迫られた選択肢。どうにかして切り抜けようと思考を巡らせるシュウジに兜甲児の声が上がる。

『へっ、だったら簡単だ！　そっちが事実を変えるって言うんなら、此方も同じことをするまでだ！』
『こ、甲児君!?』
『兜、オメェ何言ってんだ!?』
　唐突に閃いたと語る甲児に、さやかとボスがＺ―ＢＬＵＥを代表して戸惑いの声を挙げる。彼の言うことがイマイチ理解できない。しかしそう語る前に、マジンガーの日輪が甲高い音を立てて輝き出す。
『……まさか』
『そうさ、そのまさかだ！　因果を操るのはお前だけじゃない。このマジンガーも、原初の魔神も同じ芸当が出来るってことさ！』
『無理ですね。あり得ません。まだ其所へ至ったばかりの貴方にそこまでの力を操る事など……ハッ！』
『そうさ、俺一人じゃあとてもそんな真似は出来ない。いや、だからこそ可能なのさ!!』
『っ！　そう言う事か！』
『クロウ、ランド、セツコ、ヒビキ！　スフィアリアクターはマジンガーに集まりな！』
『アサキム、お前も来い！』
『やれやれ、人使いが荒いな！』

　甲児の言葉に、いち早く理解したシュウジとトライアが即座に指示を出す。それをさせまいとサクリファイが、今度はヘリオースと共にアスクレプス達を率いて妨害しようとするが、そうはさせまいと真ゲッターと真ゲッタードラゴン、並びにガンバスターが前に出る。
『揃ったね。兜！　あんたのそのマジンガーなら本当に因果を操れるんだね!?』
『あぁ！　このマジンガーは己の勝利を具現化させる力を持っている！　ならそれを応用すれば、あのサクリファイと同じことが出来る筈だ！』
『全く、いきなり出てきてとんでもない能力を引っ提げて来て！　後で詳しく説明してもらうよ！』
『それよりも博士！　俺達は何をすればいいんだよ！』
『あんた達スフィアリアクターの役割は回収さ！　マジンガーが座標を示し、私ン所のソーラリアンが道を作る！　ＡＧ、準備はいいね！』
『やるっきゃないというのは理解してますよ！　もう、いきなり前人未踏の領域に踏み込むとか、鬼畜ってレベルじゃねーですぞ！』
『文句は後にしな！　クロウ達は神経を集中、自身の内に潜り込む事をイメージしな！
　そうすりゃ後はこっちで何とかする！』
『瞑想って奴か。正直、いきなりで混乱しているが』

『でも、やるしかないっていうのなら、やり遂げるまでですよ！』
『先生、皆、マキさんを助ける力を貸してください』
『勿論よヒビキ君！』
『それじゃあ、始めるよ！』
　トライア博士のゴーサインと共にマジンガーから光が溢れる。周囲を呑み込み、支配する因果律操作の光。それは戦場を呑み込む様に周囲へ広がり、侵食していく。
　因果を支配し、理をねじ曲げるその力は一つの解を導き出す。神をも恐れぬ所業。今彼等が行おうとしているのは、過去の改竄に他ならない。
　軈てスフィアリアクターの機体も光を放ち始める。クロウのブラスタ、ランドのガンレオン、セツコのバルゴラ、ヒビキのジェニオン、そしてアサキムのシュロウガ。
　サクリファイが保有する以外のスフィアが揃った事により、不可能だった筈のそれは現実のモノになっていく。サクリファイの周囲にいたアスクレプスは光の粒子と共に消滅し、その中からそれぞれ人が解放されていく。
　それを目の当たりにしたサクリファイは、全てのアスクレプスを消滅させまいと指を鳴らして消していく。しかし、その間に大多数のアスクレプスが光となって消滅し、その数の分だけ人が解放されていく。
『やった！　やりましたぞ！　成功です！』

『よし、回収部隊は即座に行動を開始せよ！　一人たりとも死なせるな！』
　遂にサクリファイの手から解放された人々に、ブライトが直ぐ様回収部隊を送る。真化を施されたアスクレプスの大多数が消滅された事で、戦局は覆された。これでサクリファイの手は残されていない。しかし、それでもサクリファイの抵抗の意思は挫ける事はなかった。
「――よもや、ここの人類がそこまでの領域に踏み込んでいようとは、些か侮りが過ぎたようですね」
『漸くあの気色悪い笑みが崩れたか。だったらどうする？　このまま大人しく引き下がるか!?』
「そうですね。此度は素直に敗けを認めましょう。皆様は本当に強くなられた。――なら」
『っ!?　か、火星の軌道上に重力力場の異常を感知！　こ、これは!?』
『どうした!?』
『宇宙怪獣、並びにインベーダーの大群です！』
『な、なんだとぉっ!?』
　サクリファイが片手を天に向けて掲げたと同時に、火星近郊に孔が穿たれる。広がっていく時空の渦から大群となって押し寄せてくる根源的災厄の情報に、Ｚ―ＢＬＵＥに

動揺が広がる。
「さて、如何致します？　ここで私と決着を着けるのもいいですが、そうすれば火星に住むインサラウムの人々は死に絶えますよ？」
『て、テメェ!?』
　サクリファイの平然と行うその邪悪なやり口に、Ｚ―ＢＬＵＥの一同は揃って吐き気を覚えた。元々人間だとは思っていなかったが、いよいよ外道へ堕ちていくサクリファイ。
「それでは皆々様、済度の日取りまで今暫くのお別れ――――っ!?」
　しかし、奴のその目論みは崩れる事になる。異空間を広げ、地球圏から去ろうとするサクリファイとヘリオースの眼前には、いつの間にか剣を手にしたグランゾンがいて……。
『これは、ヴィルダークの分だ』
　逆袈裟にサクリファイをヘリオースごと斬り捨てた。
『その傷なら暫く動けねぇだろ。とっとと失せろ』
　特大の殺意と侮蔑を込めてサクリファイを睨み付ける。これ以上交わす言葉はないと、グランゾンは踵を返す。
『ふ、フフフフ。嗚呼なんて良い一撃なのでしょう。そう、やはり貴方はそう来なくて

は』

　その言葉を最後に、今度こそサクリファイは地球圏から撤退する。これで地球は完全に解放された。しかし、残された問題がある以上、諸手を挙げて喜ぶ事は出来ない。

　こうしている間も、火星には宇宙怪獣とインベーダーの脅威が迫っている。休んでいる暇はないが、度重なる連戦でＺ―ＢＬＵＥの多くの機体は限界に迫っている。今、ここで連戦に挑める機体はネオ・グランゾンと真ゲッタードラゴン、そしてマジンガーＺＥＲＯの三機である。

『竜馬さん、甲児君、行けますね？』

『おうよ、ちゃっちゃと行って終わらせようぜ』

『俺も何時でも行けるぜ』

　二人からの快い快諾にシュウジは笑みを浮かべ、次いでシオニーに視線を向ける。彼女も決意が固いのか、恐怖で震えながらも強い眼差しでシュウジを見詰めている。それを是と受け取り、シュウジはグランゾンを操りワームホールを展開させる。

　各艦からは制止の呼び声が聞こえてくるが、今はそれに応える時間はない。一刻も無駄に出来ないと判断したシュウジはマジンガーとゲッターを連れてワームホールへ潜り――――火星へ向かった。

◇

――――――既に、宇宙怪獣とインベーダーの群れは火星の目と鼻の先まで侵攻していた。現在火星はそのリソースの殆どを火星移住への資源に充てており、マトモに戦える戦力は限りがある。

現在戦えるのは嘗てのインサラウムの騎士であるマルグリットと僅かなアークナイツのみ。己の愛機であるパールネイルと共に同志達と前線へ赴いているが、宇宙すら埋め尽くす数の暴力の前に恐怖を抱いていた。

皆、ここで死ぬことを覚悟している。迫り来る根源的災厄を前に死力を尽くそうとする彼女達の前に、三体の機影が降り立った。

『よし、狙い通り目的地に着いたな』

『連中との距離も充分、これならいけるな』
『ならば早急に終わらせ――――む？　其処にいるのはマルグリット女史？』
突然現れた三体の規格外な存在にマルグリットは言葉を失う。なんの前降りも脈絡もなしに現れたグランゾン達を前に、マルグリットを含めた騎士達は動揺よりも困惑が勝り、動きが思考と共に停止していた。
『丁度良かった。貴女方にも連絡を入れたかったのですよ。これより私達が根源的災厄――――通称バアルの群れの駆逐に入りますが、インサラウムの皆様には後詰めをお願いしたいのです。万が一討ち漏らしては笑えませんからね』
『俺らがそんなヘマするかよ』
『保険って奴ですよ。そう言う事ですから、皆様はもう少し下がって下さいね。巻き込まれないように出来るだけ遠くに……ね』
『り、了解した。貴君らの武運を祈る』
最早一通りの礼儀の言葉しか口にできなかったマルグリットは、仲間たちと共に戦線から離れていく。彼女達を見送ったグランゾン達は今度こそバアルの群れへ向き直る。
宇宙怪獣。その数と巨大さから人類の天敵種と定められ、今日まで絶対の敵対者として宇宙の彼方から飛来する怪物。インベーダーも命と進化を求めて全宇宙に勢力を広げ、知的生命体の怨敵とされている化け物。

その軍勢を前に三機は僅かも揺るがない。退く気も負ける理由も見付からなかった。
『さて、いい加減腹が減ったんだ。とっととケリ着けて帰るぞ』
『だな、俺もいい加減うんざりしてきた所だ』
『ならば、この一撃で終わりにしましょう』
三機からそれぞれ力が脈動する。ネオ・グランゾンはその腕の中でマイクロブラックホールを形成し、真ゲッタードラゴンは全身から額にゲッターのエネルギーを集約させ、マジンガーＺＥＲＯはその胸中に膨大なエネルギーを圧縮させる。
その熱量は宇宙空間を歪ませ、その力の余波は太陽系を震わせる。高めに高め、集約に圧縮させたその力の奔流は――――。
『ゲッター――――』
『ブレスト――――』
『ブラックホール――――』
退くことも出来ないバアルの群れに向けて――――。
『ビィィィィムッ!!』
『ファイヤァァァァァッ!!』
『クラスターッ!!』
一切の容赦なく放たれた。

三種三様に放たれた極大のエネルギーはバアルの群れを呑み込み、軈て出入口となった力場すら破壊し。
太陽系を白という光に塗り潰した。

その２１３

「――どうやら、向こうも終わったようじゃのう」
新地球皇国（ガイアエンパイア）の最重要砦、セントラル・ベースへ続く荒野。周囲に機動兵器だった残骸に腰掛けた老人、大貫善治は激しい戦いがあったであろうラース・バビロンの方へ視線を向ける。
「一時は強大な邪気が現れたからどうなることかと焦ったが、何とか切り抜けたようで何よりじゃわい」
それに同調するようにガモンは大貫の隣に立つ。Ｚ―ＢＬＵＥやシュウジの戦いに僅かながらの支えとして、増援となる皇国軍の足止めとしてこの地へ訪れた二人。一先ず地球の行く末を賭けた戦いが無事に終わった事に安堵し、二人はやれやれと息を吐きながら体を解していく。
「さて、ワシ等もそろそろ嬢ちゃん達に合流するとするかの」
「そしてマリーメイアの嬢ちゃん達を、無事に地球連合の本拠地に送り届けた後は、ワシ

等の役目は終了というわけじゃ。やれやれ、この冒険も終わりと思うと何やら寂しい気もするのう」
「ハッ、よせやい。今更感慨に耽る様な歳じゃなかろう。戦艦を豆腐の様に切り裂いて何を言うておるんじゃ」
「ガモちゃんだって巨大人形をこれでもかとぶっ叩いておったじゃろうが。餅つきじゃあるまいし、乗ってた兵士が唖然としておったぞ」
「全く、乗っている鎧が壊れた程度で嘆かわしい。いつの時代も最後に頼れる武器は己の肉体だというのに、最近の若者は弛んどるのう」
　闘争に於いて最も信頼できるのは、己が培ってきた肉体と技。生涯それを実践し続けて貫いてきたガモンは、機動兵器等という鎧に現を抜かす皇国軍ことサイデリアルの兵士に僅かな失望を抱いていた。
「宇宙の覇権を争う軍勢と言うのなら、もう少ししゃんとして欲しいものじゃ」
「ワシ、これ知ってる。パワハラって言うんじゃろ？」
　剰りにも一方的、且つ理不尽な物言いに大貫はケラケラ嗤って指を差す。しかし、それでも人生の最期に大暴れが出来たのだ。二人の顔に不満の翳りは見えず、最後まで戦い抜いた満足感で満ちていた。
「さて、そんじゃあそろそろ行くとするかの」

「そうじゃな。……なぁガモちゃん」
「ん？」
「――――良かったな」
大貫のその言葉に一体どれだけの意味が込められていたのか、それを知るのは本人達しかいない。大貫の言葉に一瞬面食らうガモンだが、応ッと短く返答し、二人は足並み揃えて合流地点へ目指す。
足跡を残し、荒野から去っていく二人の背後には、サイデリアルの軍勢だった機動兵器。その全てが鉄屑となって荒野を埋め尽くしていた。

◇

火星圏から根源的災厄、インベーダーと宇宙怪獣の群れを殲滅し、無事地球へ戻ってきたシュウジ達。
ここに地球圏に於ける全ての闘争は幕を引く事になる。漸く齎せた安寧の時間。それが僅かな一時のモノだとしても、それを喜ばないモノはこの星にはいなかった。
地球へ戻り、グランゾンから降りて、クレーターの中心で間もなく消滅しようとする者へ、シュウジは歩み寄る。
「――どうやら、やり遂げた様だな」
「あぁ、大元は逃しちまったけど……アンタのお陰で一矢報えた。ありがとな」
「礼など無用、俺は俺に出来ることをしたまでだ」
「……そっか」
倒れ、空を見上げることしか出来ないヴィルダーク。両手両足は既に灰となって消え去り、残った体も既に胸元まで消えかかっており、彼の死は覆る事はない、彼の終わりは既に決定付けられており、本人もまたそれを受け入れていた。
もう、二人の間に言葉はいらない。少なくともシュウジ自身から言える事は何もなかった。戦い、争い、殺し合うだけの関係だった二人。しかしその中で、二人の間には言葉に出来ない奇妙な縁が生まれていた。

言葉ではなく拳でこれ迄の自分を語ってきた二人。そんな二人を邪魔しようとはせず、Z―BLUEも大人しく見守っていた。
「――シュウジ＝シラカワ、最期に一つ言っておこう」
「……なんだ？」
「お前は強い。人として成長し、進化し、真化を体得し太極へ至りしお前は、今後も戦いに身を置く事になるだろう。だが、だからこそ忘れないで欲しい」
「命を、軽んじるな。命は際限があり、有限であり、脆く拙いが……だからこそ尊く、眩いのだ。シュウジよ、終わりなき戦いに挑みし者よ。どうかこの事を忘れないで欲しい」
「――あぁ、忘れない。忘れるものかよ。命の大切さと暖かさは俺も良く分かっている」
「ならばこそ、貴殿にこの言葉を贈ろう。永い刻の中でも失われる事のない絶対の理を――」
〝――命の輝きこそが、永久不変〟
まるで詩編の一節の様な言葉を遺し、次元の将ヴィルダークは完全に消滅し、この世を去った。最期に満足し、やりきった充足感に満ち足りた笑顔を浮かべて。
次元の将ヴィルダーク。サイデリアルの統率者にして、新地球皇国の皇帝。彼の行っ

た闘争によって、地球の至る所で悲劇は起こされた。亡くなった者も大勢いて、孤児となった子供も沢山生まれる事だろう。彼の侵略者の悪逆を、地球人類は未来永劫忘れはしない。それはシュウジもそうだった。

けれど今だけは、どうか今だけは彼の死を想う事を許して欲しい。力を求める為に、嘗ての仲間たちと共に戦い抜いた男へ、最後の祷りをどうか許して欲しい。

「ヴィルダーク、ありがとな、シオニーさんを、リモネシアの皆を守ってくれて」

空へ消えていく灰。光を受けて、まるでダイヤモンドの様に輝きながら消えていく、最後の次元将に別れを告げる。

地球とサイデリアル、二つの勢力の戦いはこの時を以て幕を降ろすのだった。

◇

――――それから、数日の時が流れた。
サイデリアルとの戦いに勝利した地球連合は、戦いの疵を少しでも癒そうと奔走し、その労力の多くは復興に勤しんでいる。幸いにも、投降したサイデリアルの兵力の殆どが地球の再建に協力的で、復興作業は思いの外進んでいる。
幹部である尸刻、ダバラーン、サルディアスの三名は、残ったサイデリアルの残党を引き連れて地球圏から離脱。どのような目的なのかは不明とされているが、それを確かめる術は今の所存在しない。
そしてZ―BLUE。度重なる戦いで機体と自身の肉体を酷使した為に、その殆どは今後の戦いに備えて英気を養おうと、各地で愛機と共に体を休めている。高校生や小学生と言った学生組はそれぞれの日常に戻り、青年大人の組は自分なりの休みを満喫している。
故郷に還る者、友人と共に休みを満喫する者、心休まる場所で心身を癒す者、それぞれが各々のやり方で心と体を休める中。
「お～いシュウジ、そっちが終わったら今度は向こうを頼むわぁ！」
「了解です。おやっさん！」

新日本、未だ潰えずに残ったアンダーグラウンドで、ゴウト＝ブールーズの下で油まみれになっていた。

その２１４

α月Δ日

サイデリアルのトップ、次元将ヴィルダークとの激闘から数日、現在自分はこれ迄世話になった人達に礼を言うために世界を巡る巡礼の旅をしている。

本当ならシオさん達と一緒にリモネシアでゆっくり戦いの傷を癒すべきなんだろうけど、次に始まる戦いはこれ迄で最大規模……つまり、全宇宙の命運を懸けた戦いになる。これは次元力に詳しいおキツネ博士ことトライア博士と彼女が作った次元力航行艦〝ソーラリアン〟による観測で得られた情報、信用は十二分にあるだろう。

近い内にインベーダーや宇宙怪獣を始めとした根源的災厄が銀河の中心部から地球圏に押し寄せてくる。奴等は宇宙に存在する全ての生命体を駆逐する終末装置、奴等が本格的に動くという事は即ち、宇宙の終焉を意味している。

そしてその原因となっているのが、クソッタレテンシこと哀しみのサクリファイ。これは自分の勘だが、インベーダー達が動き出したのは奴の行動による連鎖的なモノだと

思える。
奴は既にこの宇宙に未練はない。そもそもアドヴェント達を吸収した時点で奴の自我は殆ど破綻している。あの女に宇宙の存亡に関する興味は微塵も存在していないと思った方がいいだろうし、何なら終わらせるつもりでいる。
それが何の為なのかは知りたくもないが、奴が地球圏から去ったのと同時期に根源的災厄が動き出した事から、恐らくこの推測はあながち間違いではないのだろう。火星で奴が寄越してきた宇宙怪獣達も多分其処からやって来ただろうし。
宇宙の終焉が近い。しかし、それでも自分達がする事は変わりない。サクリファイと決着の準備をする為、自分達は自分達に出来ることをやるだけだ。
他のＺ―ＢＬＵＥの面々はそうしているし、戦いに備えて英気を養っている者もいる。自分が世界中を回ろうとしているのもそれに似たものだしね。決戦の時は近付いている。でも、その時まで気を張り詰めているのも疲れるだけだ。
今の内にやりたいこと、やっておきたいこと、人類に待ち受ける史上最大の試練を乗り越えるため、自分はこれ迄世話になった人達への巡礼の旅をすることにした。
まず最初に訪れたのは自分がまだこの世界に来て間もない頃、整備のいろはを教えてくれたゴウトさんの所だった。ゴウトさんはこの世界に来たばかりで右も左も良く分からない俺を、その面倒見の良さで世話してくれた恩人の一人。

今にして思えば、身なりからして学生気分で彼方からしたら胡散臭い俺を良く面倒見ようと思ったものだ。そんな懐の深いゴウトさんに恩返しのつもりでここ二日間整備のお手伝いをしたのだけど……。

いやー、変わってなくて安心した。初めて会ったキリで碌に顔を合わせていないし、あれから色々あったしで不安だったけど、当時と変わらず元気なゴウトさんに俺も何だか嬉しくなった。向こうも俺のこと覚えてくれていたみたいだし、顔を見ると否や手伝えと来たものだ。

相変わらずバトリングの興行やらに精を出しているが、整備の腕前も衰えてはいないようだ。俺もあれから色々機械弄りをしてきたから多少は知識量も増えたし、ゴウトさんと色々話をすることもできた。

一番嬉しかったのは整備の腕を褒められた事、様々な機械に手を入れた事で俺の手はもう一人前の整備士の手だとゴウトさんに褒められた。

その後もバニラ君やココナちゃん、キリコさんやフィアナさんと談笑しながら仕事を手伝い。今日、ゴウトさんの所を後にした。

本当なら蒼のカリスマの事も話しておくつもりだったのだけど、俺達の話で盛り上がった所にそんな話を投げ込むのも気が引けた。何より、ゴウトさんが蒼のカリスマの正体に興味が無いのなら、変にその事を伝えるのも野暮というものだろう。

キリコさん達も話すつもりはないし、蒼のカリスマの件についてはゴウトさんに告げる必要はないだろう。最後に、初めてキリコさんと会った時の台詞を口にして、俺はアンダーグラウンドを後にした。

◇

「ったく、相変わらずおかしな奴だったな。なんだよ〝むせる〟って」
「まぁ、ここは硝煙の臭いとか凄いしね。噎せるのも仕方ないんじゃない」
「しっかし懐かしいな。確かアイツ、キリコに初めて会った時も同じこと言ってなかったっけ？」

去り行くシュウジを見送り、店へと戻るゴウト達。その会話に寂しさによる哀愁の色はなく、その顔は懐かしい者に会った嬉しさで満ちていた。
「……」
「どうキリコ。今の彼、初めて会ったときと何処か変わった？」
小さくなっていくシュウジの背中を最後まで見送るつもりでいるキリコに、フィアナが声を掛ける。少し茶目っ気を見せる笑顔を振り撒いてくる彼女を愛おしく思い、キリコの表情も僅かに弛む。
「確かに、これ迄の戦いと経験は奴を成長させたのだろう。しかし、その本質は変わっていないようだ」
「ねぇ、今の彼を相手にしても貴方なら勝てる？」
言われて思い浮かぶのは時獄戦役の時に相対した魔神とシュウジ、当時の彼等は確かに強かった。けれど、その裏でアドヴェントに支配され、そうせざるを得なかった彼が本当の……いや、本心から本気だったかと言われれば首を傾げるだろう。
故に、キリコの返答は決まっていて。
「……奴を相手にするのは、二度とゴメンだ」

◇

α月γ日

ゴウトさんの所から出立して二日目の今日、現在自分は新大陸で世話になった人達に会いに行くべく、新大陸行きの船に乗っている最中である。

本当ならグランゾンで一瞬で行けば済む話だが、これはこれ迄世話になった人達への感謝を伝える巡礼の旅、自分の足で巡ってこそ意味があると、途中で出会ったアレルヤ君やマリーちゃんも言ってた。

まぁ、確かにそんなに急ぎの旅路でもないし宇宙怪獣達が押し寄せてくる迄の時間もまだ残されている。それにいざとなれば走ればいいし、そうなったらそれこそグランゾン無しでも数時間もしない内に目的地に辿り着けるだろう。

と言うか、実際走ったし。自分と同様旅に出ていたアレルヤ君とマリーちゃん達と出会した際に、列車に乗り遅れて途方に暮れていた所を自分がグランゾンで送った後、駆け足で戻り確認すると時間は然程遅れていなかったしね。

咄嗟に相棒を使ってしまった訳だけど……知り合いを送るくらい別にいいよね。帰りは自らの脚を使って戻ったし、ヘーキヘーキ。別れ際の二人の表情が引きつっていた気もしないかもしれないけど、気にしない方向で前向きにいこう。

そんな訳で順調に旅を進めていたのだけど……妙な事になった。いざと言う時の為の連絡用に持っていた通信端末から呼び出しの音が鳴り響き、手にとって見ればあら不思議、連絡してきた相手はシュナイゼルの奴だった。

現在国連の建て直しにナナリーちゃん達と一緒に忙しい思いをしているアイツが、何故俺の連絡先を知っているのか、気にはなるが……なんか怖いから止めておいた。

で、そんな奴から頼みたい事があると言うから渋々聞いてみると、何でも現在新大陸では一風変わった新興宗教が一大勢力を築き上げているのだとか。

その新興宗教の名は《蒼神教》偉大なる蒼のカリスマと彼の魔神グランゾンを崇め奉るという過去に類を見ない宗教組織だとか。

……うん、突っ込んでいいかな？どうしてそうなった？

何で俺が崇められてんのさ？　何で俺が奉られてんのさ??　そんな風にされる覚え

は俺に一切無いよ？　何でそんな訳分かんない事になってんのさ？
理由を聞いてもシュナイゼルは分からないの一点張り、つうかそう連絡してくるときのあの野郎、絶対笑ってやがったぞ。時々吹き出してたし、何だってそんな宗教が出来始めてんのさ。
て言うか、俺テロリスト。正体こそ明らかにされてないけど、蒼のカリスマは未だにこの星じゃなまはげ級の厄ネタだからね？何で国連はそんな宗教の設立を見逃してんのさ。……て、先も述べたが今の国連はサイデリアルの戦いでの損耗を補填するために忙しいんだったか。
しかもその宗教、どうやら結構規模が大きいらしく新大陸では人種問わずに勧誘していて、その上宗教内容が良いのか熱心な信仰者が多いという。何故に？
それでここからが本題なのだが、その宗教はちょっとした暴走状態にあるらしく、現在カミナシティでは信仰者とそうでない人達による衝突で小規模ながらちょくちょく暴力事件を起こしているらしい。
いや、人の名前使って何してんのよ？　しかもよりにもよって世話になった人達と街に迷惑掛けるとか、俺からすれば洒落処では済まない話である。
そんな訳で現在国連もＺ―ＢＬＵＥも満足に動くことが出来ないから、代わりに俺へと話が回ってきたわけである。まぁ実際他人事じゃないし、そう言うことなら受けない

訳にはいかないので、俺はシュナイゼルからの頼みを受けることにした。
その際にあの島での予定をすり合わせをした後、何回か会話を交わして通信を切った。取り敢えず、元気そうで何よりだ。
……そういえばシュナイゼルの奴、念のために助っ人を何人か送ると言ってたけど、一体誰を送ってくる気だ？　もしかしてルルーシュ君達？
取り敢えず、上陸に備えて今日は早く寝よ。ったく、折角の巡礼の旅だと言うのに面倒なことになったものだ。

◇

国連本部の数ある執務室の一室、積み上げられた書類を淡々にこなし、シュウジとの

話し合いを終えたシュナイゼルは仕事が一区切り着いた事で首を鳴らし、その背中を背凭れに預ける。
「さて、これで一応は王手（チェックメイト）を掛けた事になるのかな」
「宜しかったのですか？　彼だけを向かわせて。相手は新興されたばかりの宗教ですが、どうもあの組織には裏がありそうです。〝例の国〟もありますし、念には念を入れるべきでは？」
「確かにそうかもね。全く、彼の知名度にも困ったものだよ。彼の強さは最早信仰の対象となってしまい、これ迄の彼の活躍が明るみに出ようとしている。全く、つくづく厄介な男だよ」
そう憎まれ口を叩いているが、何処か嬉しそうに、楽しそうに語るシュナイゼルに、従者であるカノンは人間らしくなった主を見て、微笑ましそうに笑みを浮かべる。
蒼のカリスマことシュウジ＝シラカワは、嘗て世界最大にして最凶のテロリストとして名を知られていた。多くの外敵を滅ぼし、それ以上に国連を追い詰めた、Ｚ―ＢＬＵＥに単独でありながら匹敵する巨大戦力。
魔神激昂事件。嘗てリモネシアで起きた大事件、彼の魔神ことグランゾンとその操縦者である蒼のカリスマを討伐せんと送り込まれた、当時の世界の全戦力の半数を打ち倒した怪物、しかしその実態は何処までも人の味方をした善なる者。当時はアロウズに良

いように情報操作された誤認の情報も、今は調べようと思えば誰もが真実を知ることが出来る。

喩え世界から疎まれても自分の道をひたすらに突き進む。端から見た蒼のカリスマの行いはそんな風にみえるのだろう。そんな聖人染みた善性も相まって、件の宗教が大きくなってしまった要因の一つになってしまっている。

「全く、大衆にも困ったものだよ。これ迄は悪の親玉の様に恐れていた癖に彼の本性に触れた途端これだ。これこそ熱い掌返しと言うのではないかね？」

「シュナイゼル様も相当毒されている様で何よりです。……何処の掲示板を覗いてきたんですか」

「蒼スマｃｈさ、例の新興宗教もあって現在大炎上中でね、蒼のカリスマって呼び捨てにしたら〝さんを付けろよデコ助野郎!!〟って全方位から叩かれるってさ。因みに僕も叩いた」

「何をしてるんですか貴方は」

予想以上にはっちゃける様になった主にカノンは軽く目眩を覚えた。

「ま、流石に暴動を起こされた以上放っては置けないからね。彼には悪いが火消しを担って貰うとするよ」

「助っ人の方は如何します？」

「それについては問題ないよ――――と、来たみたいだね」

扉越しから聞こえてくるノックの音、それが助っ人の到着だと察したシュナイゼルは姿勢を正し、どうぞと呼び掛ける。

執務室に訪れたのは国連に属する制服を身に纏う複数の男女、何れもブリタニア人と思われる年若い少年少女達だった。

「〝グリンダ騎士団〟、全員只今到着しました。シュナイゼルお兄様、ご用件は何でしょう？」

並び立つ少年達から一人の少女が一歩前に出る。その姿は何処までも可憐で、一見すれば凡そ騎士団の団長とは思えないか弱い少女。

しかし、その瞳の奥は何処までも強気だった。何処までも強く気高い騎士を思わせる少女、凛とした敬礼を見せる彼女に、シュナイゼルは満足そうに笑みを浮かべた。

◇

――――新大陸、某所。
「オズ、本当にこの国に彼がいると？」
「あぁ、〝魔女〟からの確かな情報だ。この大陸の何処かに《蒼神教》の開祖、蒼のカリスマはいる」
「オズ、分かってはいるが……」
「安心しろズィー。流石の俺も奴にはいきなり手を出さないさ。ただ俺は……知りたいだけだ。何故奴は世界から敵視されても折れずにいられたのかを」
カミナシティのとあるホテルの一室、摩天楼から少年が見据えるのは部屋から見える街並みの遥か先、彼の世界最凶の魔人の背中だった。

その２１５

　破界事変と再世戦争。それは多元世界が大きな転換期を迎えたＡＤＷと呼ばれていた時代、多種多様な技術が世界中に溢れ、ブリタニア帝国が未だ世界に多大な影響力を秘めていた頃。
　マリーベル＝メル＝ブリタニア……当時の私は念願叶って対テロ組織への騎士団を創設し、世界の平和の為に様々なテロ組織と戦ってきた。
Ｗｏｒｌｄ（世界）　Ｌｉｂｅｒａｔｉｏｎ（解放）　Ｆｒｏｎｔ（戦線）、通称ＷＬＦやその後釜の暁の牙、宇宙から侵攻してくる敵対組織、再世戦争の時には当時の黒の騎士団やカタロンともブリタニア帝国の下で仲間達と共に戦ってきた。
　何度も死線を潜り、時には追い詰められた時もあった。我がグリンダ騎士団の筆頭騎士であるオルドリンにそっくりの少年と戦場で出会したりと、様々な経験を重ねてグリンダ騎士団は一つの家族のようにその絆を強く固く結び付かせ、強固な戦闘集団へと成長を遂げた。
　そしてそんな折り、国連からの要請でブリタニア帝国はある作戦参加をする事になっ

た。破界事変の頃より出現し、その強大なる力で人々を恐怖の底へ叩き込んだ存在。
それは嘗てのインペリウム帝国や当時のインサラウム王国よりも危険視されていた存在、魔神グランゾンとそれを操る魔人蒼のカリスマの討伐。
慢心など無かった。油断も、増長などする筈がなかった。蒼のカリスマは当時から世界を相手取っている地球最強の個人と恐れられ、その実力はブリタニア帝国最強の騎士、ナイトオブラウンズにも引けを取らないとされている。
故に、世界は当時の半分の大戦力を以て奴を撃滅せんとした。激しい戦いになるのは容易く想像できて、死闘になるのも簡単に予見できた。もしかしたら私達の誰かが帰らぬ人になるのではないかと、皆、強がっていながらも何処か内心緊張していた。
そして、奴を誘き出す為に当時復興途中だったリモネシアを焼き払った。この頃の私はテロリストを全て消す為にどんな手段も厭わず、肯定としていたから、然程気に病んだりはせず、寧ろ何故リモネシアの住民を避難させなければならないのか理解出来なかった程だ。
嘗てのリモネシアの実質的支配者、シオニー＝レジスは故郷を使ってあのガイオウを召喚し、後のインペリウム帝国として世界を震撼させた。ＷＬＦとも繋がりがあったようだし、そんな国など戦略兵器であるメメントモリで諸とも消し飛ばせばいいとすら考えた。

そして、リモネシアを焼き討ちして半ば疑っていた私の疑念は確信へと変わった。グランゾンは、蒼のカリスマはリモネシアと何かしらの関わりがあると。

全てのテロリストは絶滅させる。今は蒼のカリスマを、そして次はＺＥＸＩＳに所属している黒の騎士団を打ち倒す。士気を向上させ、当時のラウンズと共にグランゾンへ吶喊した私達は……。

その日、隔絶された力の差を思い知らされた。

『マリー、マリー！　そっちは大丈夫!?　返事をして！』

『あ、あぁ……』

戦艦が燃えている。機体が、世界を守護する名だたる兵士の愛機達が為す術なく地に崩れ落ちていく。アロウズの精鋭も、ブリタニア最強の騎士であるラウンズも、グリンダ騎士団の旗艦であるグランベリーも、私の精鋭騎士達も、皆、等しく破壊されている。

燃え上がる炎の海を見下ろす影、それは自分達が倒すと決めた世界最強の魔神……グランゾン。その肢体には傷一無く、戦略兵器を受けて尚平然としていた。

そんな奴が私達を見下ろしている。地に這いつくばる虫達を見るように、その目は何処までも冷たく機械的だった。

嗚呼そうか、奴にとって所詮私達は殺す価値もない雑兵だったのか。どれだけ私が憎悪を滾らせても、どれだけ憎しみに身を焦がしても、コイツに届くことはあり得ないの

だと。私を、騎士達を殺さないで見下ろしているのが何よりの証拠。

この日、私の心は折れてしまった。どれだけ殺意と怒りと憎しみに囚われても、勝てない相手はいる。今は皆のお陰で幾分か立ち直ってはいるけれど、私の心の内には今もあの魔神の姿がこびり付いている。

そして、この日を境にブリタニアは衰退の一途を辿ることになる。幸運だったのは、当時から国連に在籍していた私達が、祖国からの非難の的にならなかった事だけ。

その後、ブリタニアの代表シュナイゼル＝エル＝ブリタニアが起こしたエリア11でのグランゾンとの戦いを契機に、ブリタニアの貴族制度は完全に撤廃。ブリタニアという巨大国家は、たった一人と一機に敗北したのだった。

◇

「マリー、朝だよ。そろそろ起きないとまたシュバルツァー戦略顧問に小言を言われるわよ？」
「……おはよう、オズ」
　窓から差し込んでくる日差しと幼馴染みの声でグリンダ騎士団の団長、マリーベルは目を覚ます。寝ぼけ眼で声の方へ視線を向けると、微笑みを浮かべた幼馴染みの顔が視界一杯に映り込んでいた。
「大丈夫？　やっぱり疲労はまだ取れていない感じ？」
「んーん、何とか平気。移動時間は結構あったし、それなりに眠れたから大丈夫よ。起こしてくれてありがとう。オズ」
　心配そうに覗き込んでくる筆頭騎士に大丈夫と諭し、体を伸ばしながら起き上がるマリーベルは周囲を見渡しながら、改めて自分に置かれた状況を思い出す。
　今、自分達はシュナイゼルの命令の下、彼の宗教への内部調査と摘発、可能であれば解体をすることを目的に、進路を新大陸へ向けて進行している。
　自分達が乗っているのは再世戦争より破壊されたグランベリーを一新させ、先のサイデリアルとの戦いで傷付いたモノを更に改修させたもの。名付けるとすればネオ・グラ（新生）

ンベリーと言うべき飛行航空戦艦だ。
着替えを済ませ、簡単な朝食も終わらせたマリーベルは筆頭騎士であるオルドリン＝ジヴォンを従え、ブリッジへ訪れる。グリンダ騎士団の旗艦が有する戦闘航空艦ネオ・グランベリーのブリッジ、そこには自分を主として付き従う騎士達が姿勢を正し、綺麗な敬礼を行う姿が写し出されていた。
「おはようございますマリーベル団長、もう間もなく目的地であるカミナシティへ到着致します」
「了解しましたわ。ヨハン将軍、着陸の際の準備は？」
「滞りなく完了しております」
自分達の戦略顧問でありマリーベルに次いで作戦指揮の権限を持つヨハン＝シュバルツァー、その丁寧な物腰から告げられる報告はマリーベルの問いに完全に応え、その用意の良さに満足したマリーベルは騎士達を見渡して口を開いた。
「全員、楽にして聞いてください。これより我が隊は新大陸の統治者であるロシウ大統領と謁見、その後街へと調査となります」
「新大陸か～、以前は暗黒大陸なんて呼ばれててちょっと怖い印象があったけど、大グレン団だっけ？　あの人達の活躍を見るとそんな印象ふっとんじゃったよねー」
「賑やかな人達みたいだし、ソキア辺りは意気投合出来そうだよね」

「それよりも私、キャルちゃんに会いた～い。何でもカミナシティのご当地アイドルって言うじゃない？　一度会ってみたいな～」
「それよりも俺はステーキ食いたいな。確か大グレン団の創設者であるカミナもお気に入りの店があるとか……」
「き、貴様等なぁ」
緊張感無く、観光気分で盛り上がる年若い騎士達に、年配者であるヨハンはその額に大きな青筋を浮かべる。そんな彼等を見てマリーベルも微笑ましく笑みを浮かべるが、そろそろ着陸の時間だ。準備を整え出発する用意をせよと指示を出し、グリンダ騎士団は彼の地へと降り立った。
広大な空港の来賓用の発着場へと降り立つネオ・グランベリー、専用の搬入口を開いて備え付けの軍用車へと乗り込み、外へ出ると雄壮な新大陸の大地が彼女達を出迎えた。
「ふわぁー、グランベリーから見ていたけどやっぱり広いわねー新大陸って」
「次元境界線の影響で一時期は外界と隔離されたらしいけど、たった十数年で此処まで発展出来るモノなのか」
空港から出て、そのままカミナシティへとやって来たマリーベル達。新大陸の大地の広さと人が生み出した文明の発展の高さに驚いていると、瞬く間にカミナシティの心臓

部、新政府の総督府へと辿り着く。出入り口で待っていたのは大統領の秘書とされるメガネの似合う女性、キノンと名乗る彼女に案内されたのは来賓用の客室だった。
　そこで待っていたのは白い白衣に似た意匠の服を身に纏う男性、カミナシティと新大陸を統治するトップ、ロシウ大統領と彼の護衛である獣人と思われる男性がいた。
「ようこそお越しくださいました。グリンダ騎士団の皆さん、そしてマリーベル騎士団長殿。此度の来訪、カミナシティの代表として嬉しく思います」
「ありがとうございます」
「本来なら空港までお迎えに上がりたかったのですが、何分サイデリアルとの戦いの事後処理が終わっていないので、こんな形になってしまいました。申し訳ありません」
「どうかお気になさらないで下さい。その件については此方も重々承知の上でしたので」
「そう言ってくださると此方としても有り難いです。それでは此方へ」
　ロシウ大統領に促され、用意された席に座るマリーベル達。向かい側にはロシウが座り、彼の側には護衛の獣人が控えるようにロシウの背後へ立つ。
「それでは早速ですが、調査の前に話を聞かせて頂いても宜しいですか？　件の宗教団体について」
「はい。勿論です」

　その後、ロシウから聞かされる蒼神教なる宗教団体の話は何れも逸脱した内容はなく、宗教としての在り方は大人しく、つい最近までは街のゴミ掃除を行うボランティア活動をしたり、慈善団体の面が強く出ていてカミナシティの住民たちも然程気にしてはおらず、政府も静観を保っていた。
「しかし、ある日を境に彼の宗教は変わってしまった。これ迄隣人を思いやる人達だったのに突然乱暴な宗教勧誘までするようになってしまった」
「ある日を境に……ですか？　もしかしてそれは」
「Ｚ―ＢＬＵＥが地球皇国軍――――いえ、サイデリアルに打ち勝った日です」
「……失礼ですが、その日に何か異変があったりは」
「……実は一つだけ、気になる点があるんです」
　サイデリアルの首魁、皇帝アウストラリスこと次元将ヴィルダークの討伐、その表向きはＺ―ＢＬＵＥの手によって為されたと報じられている。当然ながらその一報は新大陸にまで伝わり、解放された地球に当時のロシウ達もまたその話に大いに沸き立ち、喜んだ。
　それ以前に、バルビエルの齎したスフィアの力によって感情を支配されていた人々が解放された事もあり、当時のカミナシティは安堵に包まれていた。バルビエルの被害にあった人達の多さから、見舞いに病院に駆け込む人々がいたのも事実で、その時国境の

見回りに配備された者もまたいた。
流石に国境の見回りに配備された兵士を長時間持ち場を離れされるわけには行かない。当時は交代制を通常より多くして人数の配備も多くしたのだが……やはり、万全な警備体制には至らなかった。
「これは当時の国境付近に付けた監視カメラからの映像です。薄暗く判別は難しいですが、ここに複数の人間が侵入している様子が映し出されています」
テーブルから表示されるモニター、そこには暗闇の中で蠢く複数の影が見て執れる。その動きは素人のソレではなく、訓練された熟練の傭兵を想起させる。
そして、このモニターに写る侵入者がこの国に来てから蒼神教はおかしくなった。慈善活動に精を出し、良き隣人であろうとした彼等が、まるで盗賊の様に乱暴になってしまった。
「我々はこの者達を蒼神教に良からぬ知恵を吹き込んだ首謀者達の手先と考えています」
「手先。ではロシウ大統領はまだこの件に黒幕が存在すると?」
「恐らくは。そしてそれを立証させる為には蒼神教に接触し、潜入、調査をする必要があります。本来ならばこの国で起きた問題は我々が対処するべきなのですが……」
するべきこともやるべきことも全て分かっていて、なのに何もできない。先のサイデ

リアルとの決戦で多くの国が力を失っている。ロシウが治める国もその一つ、唯でさえバルビエルの所為で戦力を枯渇している自分達では満足に調査をする事もままならないし、かといって彼等に頼るのは余りにも忍びない。

「地球の命運が刻々と迫る中、皆さんに頼ってしまうのは心苦しいのですが、何卒事態終息の為に力を貸してください」

頭を下げて頼み込むロシウにマリーベルはフッと微笑みを浮かべ。

「勿論です。その為に我々は来たのですから」

◇

「さて、これで全員支度は完了したわね？」

ロシウ大統領協力の下で用意されたホテルへ案内されたマリーベル達は、カミナシティの市井に馴染むべく、私服へと着替えてロビーに集合している。

蒼神教の内情を知るため潜入捜査を試みるには年若い男女がよく勧誘されていると聞く、その情報に肖り出来るだけ違和感無く私服を着る彼女達は、年相応の少年少女のように見えた。

「さて、一応潜入捜査って体で動くわけだけど……何処から行きましょうか？」

「やっぱり、ここは路地裏からでは？　薄暗いところは反社会勢力の温床になりがちですからね」

「なら、カミナシティの路地裏には先ずは僕とレオンハルトが行くとしよう。オズもこの場は普通の女性として振る舞ってね」

「あらティンクさん、私達をそこらのお嬢様と一緒にするのかしら？」

「いや、此処ではそうして貰わないと困るから。今言ったばかりだよね？　これ、潜入捜査だから」

「うぐ、わ、分かってるわよ」

「ホントに～？　ヨハン戦術顧問が後方の待機組みだからって浮かれてたりしない～？」

「そ、そんな訳ないでしょう!?」

「お嬢様、声、声が大きいです」
　早速騒がしくなる我が騎士団達にマリーベルは呆れると同時に頼もしくあった。破界事変から続く戦争、その激しくも苦しい戦いの日々も、サイデリアルとの戦いを経て一つの区切りを迎えることが出来た。
　経験も重ね、騎士としても人としても強くなれたと自負している。だからだろうか、今回の司令を受理してマリーベルは思う、あの時と違う今の自分達なら、何処まであの魔神に食らい付けるのだろうと。
「しかし、蒼神教か。その宗教を仮に叩いたとして、あの蒼のカリスマが出てくるんだろうか」
「……」
　蒼のカリスマ、その名前を出した途端に、マリーベル達の空気は一気に重く苦しくなっていく。思い浮かぶのはリモネシアで起きた惨劇、世界の半分の戦力をたった一機で叩き潰した規格外の魔神。そんな相手と再び戦うかもしれない、確かにあの頃より自分達は強くなった。機体もあの頃より改修され、性能も劇的に向上している。もし今の自分達ならばあの頃のグランゾンにも一矢報いる事が出来るかもしれない。
　しかし、いざ奴を前にした時、自分達は果たして動けるのか。恐怖に負け、身動き一つ取れなくなるのではないか。相手は世界すら相手取る最強の個、奴に付けられた恐怖

と言う名の疵は、今も彼女達の内に刻み込まれている。
「大丈夫よ。そうなったとき蒼のカリスマはこの私が相手にするから！」
「オズ……」
「確かに、グランゾンは強大よ。それは私にも分かる。唯でさえ怪物なアイツが更にその上があると知った時は思わず泣きたくなったもの。でも、それでも私は戦うのを諦めたりしない！　だって私はマリーの騎士なんだもの！」
　強がりなのは分かっていた。不安に思い、恐怖に震えるのはオルドリンも同じ。それでも戦うと高らかに謳う彼女に、マリーベル達を包んでいた重苦しい空気は一瞬にして散っていった。
「それに、何もグランゾンと馬鹿正直に戦う必要はないのよ。相手がグランゾンを出してくるならそうする前に蒼のカリスマ本人をふん縛ってやればいいのよ！」
「た、確かにそれはそれで正攻法かも知らないけど」
「オズ、ちょっとセコい」
「いや、いい案じゃないかな。少なくともグランゾンと正面から戦うよりは余程勝率がある。まぁ相手もそれなりに腕は立つだろうけど、魔神そのものと相手するよりは全然気が楽さ」
「それにこっちには筆頭騎士と肉体派の団長もいる。案外いけるんじゃないか!?」

「フフフ、レオンハルト。それはどういう意味かしら？」
「ヒッ、い、いえ特に変な意味では……」
　嗚呼、やはり彼女は私の騎士だ。あの魔神を相手にしなければならないという不安を彼女は一声で霧散させてしまった。オルドリン＝ジヴォン、彼女とならばきっとこれから待ち受ける困難にも立ち向かえる筈。そうだ。私達ならばきっと成し遂げられる。こんな事で歩みを止める訳には行かない。
　蒼のカリスマ、グランゾン、何するものぞ。極東の島国こと日本では大和魂なる精神論があるとされているが……成る程、指揮を高めるにはこう言った空元気もバカに出来ないモノだ。
「さて、それじゃあ先ずは僕達が先行するよ。適当な路地裏や酒場に入って情報を仕入れてくる」
「オズとソキアは団長達をお願い。一時間後、近くの喫茶店で落ち合おう」
「えぇ、お願い。それじゃあ――――」
　簡単な話し合いも終わり、一旦解散する一同。男子組の二人がそれぞれのやり方で情報を得ようと街に溶け込んでいくのを見送った後、オルドリンは主君であるマリーベルと従者であるトト、同僚のソキアに向き直る。
「さて、それじゃあ私達も行こっか」

「とは言え、有力そうな候補は既に二人が向かっているから、私達が出来そうなのは街の人達から話を聞くことくらいだけど」
「余り派手に動くと蒼神教の信者に勘づかれるかもしれません」
「そう？　寧ろ相手からすれば自分達に入りそうな人間がやって来たって思われそうじゃない？　ホラ、団長もオズも見掛けはお嬢様だから」
「成る程、そう言う見方も……て、それどういう意味よソキア！」
「これは少々、お仕置きが必要かしらね？」
「ヒェッ、トト～、二人を止めてー！」
「自業自得かと」
　取り敢えず自分達も街の人達から話を聞いて少しでも有益な情報を聞き出そう。その際にソキアから余計な茶々が入ったが、それすらも街に溶け込む為の要因となし、カミナシティに観光に来た一般人を装う事に成功した二人は早速街中を探索しようと足を進めた時。
「お嬢さん達、蒼神教に興味があるのかい？」
「「っ!?」」
　ソイツは唐突に現れた。物腰や口調、言動から街のチンピラと思われるその男は値踏みをするようにオルドリン達を見ると、その笑みを一層深くさせ、彼女達にすり寄って

くる。
「貴方、蒼神教の信者の人？」
「あぁそうさ。俺達は魔人蒼のカリスマ様の在り方に感動し感嘆した蒼神教の信者さ。良いぜぇ蒼神教は、今はまだ鳴りを潜めているがその内デケェ花火を上げる予定だ。一山当てたいって言うのなら、俺から幹部の人に話を通してやってもいいぜ？」
（花火？）
「貴方にそれほどの権限が？　申し訳ないけど信用できないわ」
　早速蒼神教の信者と思われる人物と遭遇し、且つ有益な情報を得ることが出来た。蒼神教は何かを企んでいる。それが知れただけでも僥倖だが、今はこれ以上踏み込むかは図りかねる。情報を引き出す序でに逃げ道を確保しようとするオルドリンだが、信者の男はそれに介さず話を続ける。
「ケケケ、警戒心が強いお嬢さんだ。まぁ取り敢えずこれでも読んでみな。多少は為になるからよ」
「何これ？　蒼神教自由への教え？」
「そう、抑圧された人の欲望や野心を上手く解放させる教典さ。ソイツを読んで少しでも興味があったら――――」
「おい、何時まで話し込んでやがるんだ！　いい加減終わらせろ!!」

「あ、おい！」
　怪しげな信者から渡される一冊の本、それを訝しげに思いながら受けとると男の後ろから見上げるほどに巨大で屈強そうな男が突然割って入ってきた。
「なにこの人、デッカ⁉」
「な、何ですか貴方は！」
「ハッ！　どいつもこいつも育ちの良さそうなお嬢様ばかりだぜ！　これなら幹部の連中だけでなく俺達にもお零れが貰えそうだぜ！」
「っ！　それは、どういう意味だ！」
　巨漢の男の言い方ではまるで既に犠牲者がいるような口振りに、オルドリンの怒りのボルテージは急激に上昇していく。ただ、男の出番は信者の男にも予想外だったのか、その表情は苦虫を噛んだように渋い。

「おい、こんな街のど真ん中で騒ぎを起こす気か！」
「構うことはねぇよ。俺達はあの蒼のカリスマの一派だぜ？　相手が大グレン団だろうと国連だろうと怖いものはねぇよ」
「――――愚物が」
「あん？」

「下がりなさい下郎！　貴様のような輩が私達に気安く触れるな！」
「っ、テメェ！」
　下卑た笑みを浮かべて尚且つ不快な言動をする男への牽制、その堂々たる佇まいはまさに騎士。貴族制度は廃止され、マリーベルとオルドリンの間に嘗ての主従という関係は最早存在しない。けれど、オルドリンは誓った。自分がマリーベルの剣であり騎士になると、その決意は今も変わらず彼女の中で生き続けている。
　しかし、挑発を受けた男にそれを解する頭はない。触れるなと一喝され、生意気な女としか見ていない男に最早制止の言葉は届かない。振り抜かれた拳、大きさも重さも並みの成人男性をゆうに越えているその大きさにオルドリンは正面から受け止めようとして――――。
「あ、危なーーい！　ブベラッ!?」
　それを突然現れた第三者によって防がれる。振り抜かれた男の拳を身を呈して防ごうとしたのはメガネを掛けた男性、身体全身を使って防ごうとしたその男性は男の拳をマトモに受けて吹き飛び、近くにあったごみ捨て場へと直撃する。
「ちょ、あの人１０メートルは吹き飛んだよ!?」
「だ、大丈夫ですか!?」
「あいたた、ごみ袋が無ければ即死だった」

ゴミまみれになりながらも立ち上がるメガネの男性、その様子から特に怪我は無さそうだが、自分の攻撃を防がれたことに猛る大男の怒りの矛先がメガネの男性に向けられる。

「テメェ、なにいきなり人の邪魔をしてくれてんだ。あぁ!?」

「い、いや。流石にこの往来で女性に絡むのはいかがなものかなと思って……わ、悪気は無かったんだ。ぼ、暴力反対！」

「この野郎、ふざけやがって！」

「そこまでだ」

胸倉を掴み、無抵抗の相手を殴ろうとする大男に待ったの声が掛かる。何処までも響き渡る覇気のある声に一同が振り返ると、其処にはロシウとの会談で見た側近の獣人が部下を引き連れて此方に歩み寄っていた。

「あ、あの人は！」

「ゲェッ!? ヴ、ヴィラル!?」

オルドリン達よりも大きなリアクションを見せるのは大男達の方だった。

「一般市民への暴行、及び宗教への強制的な勧誘、何れも現行犯だ。最早言い逃れは出来んぞ」

「い、いやだなぁヴィラルの旦那。俺達は別にそんなんじゃ……」

「聞こえなかったのか？　言い逃れは出来んと言ったぞ」
　手を擦り、胡麻を擦ってくる信者をヴィラルはただ一言で両断する。既に二人にはヴィラルの部下達が囲んでおり、その挙動を厳しく監視している。最早彼等に出来る選択肢は少ない、しかしそんな事は認めないと、大男はメガネの男性を放り投げてヴィラルに殴り掛かる。
「ふ、ふざけるな！　俺達は無敵の蒼神教だ！　たかが獣人に言いようにされてたまるか！」
「獣人如き……か。言ってくれる」
　振り抜かれた拳、人一人訳もなく吹き飛ばせるその拳をヴィラルは難なく片手で防いで見せる。とんでもない膂力、Ｚ―ＢＬＵＥの一員でもある彼の実力の一端を目撃したマリーベル達は彼の強さに目を見開いた。
「なっ、て、テメェ!?」
「フンッ」
　自分の自慢の一撃を簡単に受け止められた事に驚愕する大男、そんな大男の反応すらヴィラルは気にも留めず、鎧袖一触とばかりに返しの拳を大男の脇腹にめり込ませる。その痛みと衝撃に耐えきれなかった大男は白目を剥いて崩れ落ちた。
「連行してくれ。そっちのお前もだ。無闇に抵抗すれば痛い目に合うぞ」

「く、くそったれ」
　その後、勧誘しに来た男達を瞬く間に捕らえて連行していく部下達を見送り、ヴィラルはマリーベル達に向き直る。
「来て早々大変だったな」
「い、いいえ！　此方こそ！」
「お手数お掛けして申し訳ありません！」
「気にするな。今回の奴等は俺達から見ても予想外だった。連中、どうやら形振り構わなくなってるようだ。気を付けろよ」
「は、はい！　ありがとうございます！」
「あと、それと一つお願いが……」
「そこで伸びてる奴なら俺が介抱しておく」
　大男に投げ飛ばされ、目を回している男性を介抱すると言われ、安心したオルドリンはマリーベル達と共に今度こそその場を後にする。
　どんどんその背中は小さくなり、遂には見えなくなった彼女達を確認すると、ヴィラルは一度呆れた様に溜め息を溢し……。
「行ったぞ」
　その一言を呟くと、今まで気を失っていた筈の男性は、目をパチクリと開けて立ち上

がる。
「よっと、ありがとうございますヴィラルさん。態々こんな茶番に付き合ってくれて」
「別にいい。件の信者達を捕らえられたしな。これくらいはどうという事はない」
「そう言って下さると此方も有難い。それで、どうでしたか？　貴方から見て彼女達は」
「……恐らく、お前の助っ人として来ている訳では無さそうだ。あくまでも自分達が調査にきたという体で調査に向かっている」
「マジか。シュナイゼルの奴、なにやってんだ。こう言うのは報連相が大事だってアイツだって分かってる筈なのに」
「恐らく、面子の問題なのだろうな。資料で見たが、アイツ等は先の戦いでお前とグランゾンにこっ酷くやられた様だ。そんな奴と協力しろと言われて直ぐに順応は出来ないだろうよ」
（いや、あの事件は厳密に言えば俺がやらかしたんじゃないんだけどなぁ）
　現在蒼の地球に伝わっている魔神激昂事件。その首謀者は蒼のカリスマことシュウジではなく、彼を通して現れたシュウの仕業であるのだが、それを知るものはＺ―ＢＬＵＥしかいない。
　シュウジからすれば風評被害の様なもの、しかしだからと言って彼女達を放っておく訳にもいかない。罅割れたメガネを外し、スペアのメガネを掛けるとシュウジはヴィラ

ルに背を向けて歩き始める。
「じゃあ、ここからは俺も調査に乗り出すよ。二、三日すれば事態は動くと思うから、そうなったときの対処はそちらにお願いするよ」
「了解した。……因みに、ヨーコ達への連絡は？」
「絶対にやめてね」
シュウジの声はどこか震えていて、その返しはまるで命乞いの様だった。そんな遣り取りの後、シュウジはその場から去っていく。相変わらず神出鬼没な奴、そう思いながらヴィラルはシュウジの背中を見送り。
ふと、思い出した様に懐から一本の通信端末を取り出し。
「あ、もしもし。ヴィラルです。其方にヨマコ先生はいらっしゃいますか？」
速攻で裏切るのでした。
（済まないなシュウジ＝シラカワ、恨むのなら碌に説明しないで姿を眩ました自分を恨め）
そう言って両手を合わすヴィラル。その背中は何処と無く哀愁が漂っていたのだとか。

その２１６

『何故ですシュナイゼルお兄様！　どうして私達に進軍の随伴を許してくれないのです！』

それは再世戦争の頃、エリア１１でシュナイゼルが反旗を起こした時。揺れ動く国連に変わり、ブリタニアの力を世界中に示そうとした決戦の時。

リモネシアでの一件でブリタニアの権威は地に落ちようとしている。それを少しでも払拭する為に私達グリンダ騎士団もその列に参加しようと、当時のブリタニアの宰相である第二皇子、シュナイゼルお兄様に嘆願した。

しかし、帰ってきた返答は拒絶の一言。何故、どうしてと訊ねる私にお兄様は淡々と答えた。整えられた軍備、用意できた戦力、外部からの助力、持てる手段を全てを打ち、これ以上は蛇足だと言う兄にそれでも私は納得できず、食い下がった。

『私達はブリタニアの剣です！　祖国ブリタニアの為に奮われる一振りの剣！　国の権威が懸かっている戦場なのに何故私達が参加出来ないのですか!?』

『違うな。それは間違っているよマリーベル、君達はテロリストから人々を守る盾であり剣だ。剣なき人々の為にその刃を奮う事を許された義憤の剣、祖国の権威を示すための暴力装置ではない』
『ですが！　あの魔神と、グランゾンと戦うには些か以上に不安が残ります。それはシュナイゼルお兄様も重々承知の筈です！』
『――ほう？』
　当時、未だ誰にも知られていなかった筈の蒼のカリスマとグランゾンとの戦闘。彼を、蒼のカリスマと戦うつもりでいたのはシュナイゼルお兄様を含めた数人のラウンズ達だけ、誰にも知られることのない情報を私が知っていた事にお兄様の目は僅かに見開かれた。
『どこでその情報を得たのか、それを問い質すのは止めておこう。君がその戦いに参加したいのは偏に彼にリベンジする為かい』
『最早誤魔化そうとは思いません。開き直るようで申し訳ありませんが、我々グリンダ騎士団はテロリストを討ち滅ぼす剣！　ならば、世界の最大の脅威であるグランゾンを打ち破るのは我等が果たすべき使命！　故にお兄様、お兄様の戦列に我等グリンダ騎士団も参加させて下さい』
『……気持ちは嬉しいけど、やっぱり止めておくよ』

『な、何故ですか！』
『剣や槍は折れればまた打ち直し、鍛え直せばいい。けれど人はそう簡単には直らないものなのだよ』
『お兄様？』
『マリーベル。震えているよ』
『っ!?』
　言われて、自分がどれだけ震えていた事か漸く認識できた。私の手足はまるで生まれたての小鹿の様に震えている。必死に生にしがみつくように、みっともなくブルブルと震えさせている。
　何故？　決まっている。恐怖しているからだ。蒼のカリスマと言う一人の男が齎した圧倒的力に、私と言う女は心の底から恐怖していた。魂魄にまで染み付いた感情は簡単に抜け落ちる事はない、それを見越した上でシュナイゼルお兄様は私の戦闘の参加要請を受け取ろうとはしなかった。
『恐怖に囚われた人間を戦地に送り込むほど、私は酔狂ではないよ。マリーベル、君の力と威信は此処で示すべきではない』
　私は、蒼のカリスマに怯えている。それを指摘された私はシュナイゼルお兄様の言葉をはね除ける事は出来ず、ダモクレスが落とされるその時まで遠巻きで見学している事

しか出来なかった。

◇

「マリー、マリーってば！」
「っ！　……あ」
「さっきから呼んでたけど……大丈夫？　顔色、悪いわよ」
自分を呼ぶ声で我に返ったマリーベルが辺りを見渡すと、自分を中心に騎士の皆が心配そうに見つめてくるのが分かった。そうだ。ある程度情報を集めた自分達は近くの喫茶店に集合したのだと思い出したマリーベルは、バツが悪そうに咳払いをする。

「ンン、ご免なさい皆、少々ボーッとしてたみたい」
「もう、気を付けないとダメじゃないマリー。私達の団長なんだからしっかり気を引き締めないと……」
「それオズが言う～？　さっきまでお店のメニュー表をガン見してた癖に～」
「ち、違うわよソキア！　私は別にブタもぐらのステーキに興味がある訳じゃないのよ!?」
「誰も聞いていないのに自爆していくスタイル。流石オズ」
　ソキアとティンクの指摘に耳まで真っ赤にさせるオルドリン、敢えて愉快に振る舞う仲間達を嬉しく思いながら、マリーベルは改めて話を進めるように促した。
「では、これ迄集めた情報を照らし合わせて見ましょう。先ずはレオンハルトからお願いします」
「ハッ、路地裏に住まうチンピラ達の話によりますと、蒼のカリスマの宗教が誕生したのはサイデリアルとの戦いが終局に向い始めた頃とされており、当時はボランティアを中心とした良識ある集団だったようです」
「ロシウ大統領の話とも差異はありませんね」
「ええ、ですがサイデリアルとの戦争が終結した後、その在り方は加速的に歪んでいったそうです」

「これまでボランティアに精を出していた集団がお布施と称して金銭を荒稼ぎしたり、時には乱暴したりなどトラブルが絶えなくなっているそうです」

レオンハルトとティンクからの報告に事態は少しずつ不味い方向に進んでいる事をマリーベルは予見する。このまま蒼のカリスマの一派が悪化すれば、何れは世界をも脅かす惨事になりかねないと。

「しかも……これは、あくまで噂なのですが」

「レオンハルト？」

「何でも、蒼神教にはＫＭＦやＡＳに酷似した機影が複数目撃されているようです」

「なんですって？」

更に告げられるレオンハルトからの報告に、マリーベルだけでなくオルドリンも息を呑んだ。新大陸に於ける主戦力は主にガンメンであり、あとは国連から借り受けた数体のＭＳ位とされている。ＫＭＦとＡＳは基本的に使用されず、その機体が新大陸で目撃されることは殆んどない。

そんな機体を新大陸の、しかも蒼神教が有している。単なる噂でしかないし、情報が裏付けされたわけではない、そもそも見間違いの可能性すらある話だ。だがマリーベルにはそうは思えず、彼女が抱える嫌な予感はより一層膨れ上がっていった。

「……ＫＭＦにＡＳか、一気に穏やかじゃなくなったね」

「でも、それ本当なの？　いや、仮に本当だとしても一体何処からその機体を持ち込んだのよ？　それに資金源だって……」
「――――トト」
「はい」
「貴方はこれから大統領府に戻りロシウ大統領にこの事を伝え、念の為に武力介入の為の許可を貰ってきて頂戴」
「了解です」
　噂が本当なら、近い内に新大陸で大きな戦闘が始まる可能性がある。蒼神教に運ばれている様々な機体、先に出会った宗教勧誘の男が溢した〝デカイ花火〟という単語（ワード）、これらを組み合わせると碌でもない結論が嫌でもマリーベル達の脳裏に浮かんでくる。
「……未だ可能性の域は出ませんが、それでもこの街が危機に瀕しているのは事実、剣なき人々の為に我等が立ち止まる訳には参りません」
「そうね。その為の私達だものね」
「蒼のカリスマ一派との衝突かー。ま、腹を括るしかないかにゃ」
　蒼のカリスマとグランゾン、奴等と再び戦うかもしれない。その恐怖に抗いながらもグリンダ騎士団は立ち上がる事を決めた。ならば、団長である自分が立ち止まる事は許されない。

「あの勧誘者には感謝しなければなりませんね。彼のお陰で私達の捜査は次の段階へ進めるのですから」
「マリー、それじゃあ」
「これより、グリンダ騎士団は蒼神教の拠点へ潜入。調査を行います。皆、準備は宜しいですね」
「「イエス・ユアハイネス！」」
ブリタニアの貴族制度が失われ、久しく聞いていなかった言葉。もう自分は皇族ではないのに、それでもそう呼んでくれる彼女達にマリーベルは内心感謝した。
目指すは蒼のカリスマの本拠地、勧誘してきた男が渡してきた蒼神教の教典にはその居場所が書かれていた。当然、罠である可能性は高い。
それでも、彼女達は進む。全てはあの日打ち拉がれた自分達を乗り越える為に……。

◇

カミナシティから少し離れた荒野にある古ぼけた洞窟、その中でパソコンを弄り情報収集に当たっていたズィー＝ディエンは唐突に届いてきたメールを開き、その内容にニヤリと笑みを浮かべる。
「オズ、イクスから連絡が来た。どうやらお前のお姉さんも新大陸に来ているらしいぜ」
「なに？　……いや、成る程な。確かあの部隊だけ意図的に他の基地から外されていたな。恐らく、シュナイゼル辺りの差し金だろう。あとズィー、俺が兄でアイツが妹な」
「拘るねぇ。で？　どうする？　合流するか？」
「その必要は無いだろう。俺達も奴等も今回はあくまで蒼神教の調査だ。変に顔を合わせればややこしくなる」
「素直に顔を合わせるのは恥ずかしいって、何で言えんのかねコイツは」
「噛み砕くぞ？」
冗談混じりのやり取りを交わす二人、彼等もまたこの多次元世界にて多くの経験と修

羅場を潜り抜けてきた戦士で、嘗てはテロリストとして知られてきた者達。グリンダ騎士団とはその際に幾度となく激突し、殺し合いを繰り広げてきた間柄だ。
オルドリンとオルフェウス、嘗てブリタニアに存在した忌むべき風習によって引き裂かれた双子の姉弟は、一人の魔法使いの奮闘のお陰で、再世戦争の終盤にはどうにかその仲を取り持つ事が出来た。
時獄戦役でも共闘する事が多くなり、今ではグリンダ騎士団の幻のメンバーとして扱われていたりする。尚、今ではどちらが姉で兄なのかで争っており、その衝突はある意味敵対していた頃よりも激しくなっている。
機体の調整を行いながらズィーの冗談を流していると、話の流れは蒼神教の開祖である蒼のカリスマへと向けられる。
「しかし、何だって今さら宗教なんて起こしたんだ蒼のカリスマは？　裏でＡＳやらＫＭＦやら運んでいるし、これどう見ても戦争の準備をしているよな？」
「さぁな。巷では魔人なんて未だに恐れられている奴だ。その考えは俺達には計れんよ。いや、案外サイデリアルとの戦いで疲弊した地球を征服する為に本格的に動き出したのかもしれんな」
「それ、笑えないから止めてくれ。噂ではあの仮面野郎、とうとう空まで飛べるようになってるらしいぞ？　何でも生身で大気圏を離脱したり突入したり、腕の一振りで大陸

を一つ破壊出来たりする！　な～んて言われてるんだぞ？」
「いや、それは尾ひれが付きすぎだ。そんな人間いるわけないだろう」
「まぁ、俺もそう思うけどよ。そう噂が囁かれるほど強いって事なんだろ？　何れにせよ、万が一の時は覚悟しておいた方がいいぜ」
「あぁ、そのつもりだ」
　万が一蒼神教に此方の事がバレ、蒼のカリスマと敵対した場合の事を考え、オズは気を引き締める。これから自分達が挑むのは世界最強の個が支配する土地、グリンダ騎士団に助けを求める訳にはいかない。そんなことしてしまえば彼女達に余計な負担を強いる事になってしまう。それだけは避けねばと気持ちを切り替えた時、洞窟内に緊急事態（アラーム）の報せが鳴り響く。
「敵襲！」
　いち早く反応したオルフェウスが己の愛機に乗り込み洞窟から飛び出していく。コックピットから視認出来る距離にまで迫るのは無数のミサイルの群れ、何故自分達の居場所が知られたのか、疑問を解消するよりも状況の打開を優先し、オルフェウスは愛機――――白炎を駆る。
『薙ぎ払う！』
　搭載された七式超電磁砲を展開し、ミサイルの群れに向けて発射。放たれる弾丸は周

囲のミサイルを巻き込み、新大陸の空を広く照らしていく。
『正気かよ！　幾ら街から離れていてもミサイル群をいきなりぶっ放すかぁ!?』
『ズィー、無事か！』
『あぁ、何とかな！』
　通信越しから聞こえてくる相方の無事にオルフェウスは安堵する。しかし、荒野の向こうから現れる三体の機影に彼の目線は自然と鋭くなる。
『――――何者だ』
　口から出るのは緊張と敵意に満ちた声、久し振りの緊迫した空気にオルフェウスは白炎を操り油断なく構えると。
『何だかんだと、ンン聞かれたら』
『あ、答えてあげるのが世の情けェ！』
『世界の崩壊を防ぐためン』
『世界の平和を守るためェ！』
『愛と真実の悪を貫く！』
『ラブリーでキュートな敵役ゥ！』
『ゲイツ！』
『ベルク！』

『銀河を駆ける蒼神教の二人には！　そう！』
『ホワイトホール。白い明日が待ってるぜェ！』
ふざけた口上を口にしながら現れるのは、銀色のＡＳと巨大な蠍を模した機体。間違いない、今のミサイル攻撃はコイツらが仕掛けたものだとオルフェウスは確信し。
そんなオルフェウスを他所に、二体は後ろに佇むもう一体のＫＭＦに視線を向ける。何かを待っている風な二体に……。
『いや、僕はやらないからな!?』
両脇に盾を載せた機体からそんな困惑に満ちた少年の声が聞こえてきた。

その２１７

――――ジルクスタン王国。

そこは新大陸から地続きで繋がっていた国、嘗てのＥ．Ｕ．や中華連邦よりも小国でリモネシアよりも資源に乏しいとされてきた国で国連に属さず、今日まで生き延びてきたかの国は通称〝戦士の国〟と称され、近隣諸国から畏怖と畏敬の念を集めていた。

ジルクスタン王国が最大の資源とされるものは――――人間。即ち、兵士や傭兵として育てた彼等を最大の輸出品として各国に派遣し、其の際に生じる利益を国益として扱い、国の経済を支えてきた。

優秀な傭兵を生み、育んできた事で利益を得てきたジルクスタン、戦う事で国を潤し、戦う事で国を守ってきたその国にとって、今の地球の状況はお世辞にも良いとは言えなかった。

国の兵士を財産として扱う国にとって戦争こそが利益の源。内乱、紛争、戦いの種類に差別は無く、求めれば派遣するのがジルクスタン王国の在り方だった。インペリウム

帝国が暴れた時も、インサラウム王国が侵略してきた時も、外宇宙からの侵略者が襲ってきた時も、サイデリアルがやって来た時も、敵味組織方分け隔てなく兵士達を派遣していった。

アマルガムという組織にもマーティアルという宗教にも、ＷＬＦというテロ組織にも、その思想や理想を問わずに多くの傭兵を送り、得られた財産を国益としてきた。ジルクスタンの黄金期、そう呼ばれる程に一時は国庫も潤い、この砂漠と荒野に覆われた国は栄えていった。

だが、今のジルクスタンに潤いを維持する力はもう残されてはいなかった。度重なる大戦に兵士達は減っていき、戦えるものが少なくなっていた。兵士が少なくなるということは国益に繋がる資源が失われていくという事、人の命と国の経済を直結していた為にジルクスタンの経済が傾き始めるのはそう遅くはならなかった。

加えて、昨今のサイデリアルを地球から追い出した事により現在の地球は嘗て無いほどの平穏が訪れ、ジルクスタンの兵達の活躍の場は一瞬にして消滅してしまった。

平和という世界に兵士達の居場所はない。故にジルクスタン王国の女王――――シャムナは神殿に備えられた玉座にて使者として訪れた女性から告げられる話を棄却する。

「クドいぞ。アザディスタンの王女よ。私の意思に変わりはない。我々は国連に参加することは有り得ない」

「しかし、サイデリアルも地球から去った事で漸く人類は一つに纏まれるようになりました。外宇宙から訪れる災厄に備え、地球人類皆で生き残る為にもシャムナ様達にも協力して欲しいのです」

アザディスタンの王女にして国連大使の一人、マリナ＝イスマイールは鋭い眼光で此方を睨む女王を前に強がりながらも懸命に説得を試みていた。

蒼と翠、サイデリアルという脅威から解放された二つの地球は遂に手を取り合って外宇宙からの脅威に対応する事が可能となった。来るべき戦いに備えるため、人類最強戦力である彼等に万全な状態で送り出してやりたい為、各国に一致団結を呼び掛けて回っているのがリリーナやナナリー、そしてマリナと言った国連大使の役割だった。

これ迄多くの犠牲を出してきた。多くの血を流し、沢山の命が失われていった。悔やんでも悔やみきれない負の連鎖、その中で唯一得られた平穏の時間にマリナ達は今こそ地球人類の意思を一つに纏めようと各国に説得を試みていた。

国連に属しているか否かを問わず、全ての国を巡る勢いで諸国を巡っていたマリナだが、このジルクスタン王国で思わぬ返答に足を止めてしまう。

「それはお前達の都合だろう。我等ジルクスタン王国の民は建国の頃より誰の手も借りず、この国を守ってきた。他ならぬ自らの力と血と命でな」

確かに、人の自由意思を縛る権利は誰にもありはしない。人の数だけその人の考えが

あり、在り方も主義も変わってくる。シャムナが力を貸せないと言うのなら、それを尊重するのがマリナのやり方だ。

ジルクスタン王国は戦いを基盤にしてきた国、戦いがあるから資金が潤い、争いがあるから経済が回る。自らの命と引き換えに利益を得る国。平和を説くリリーナ＝ピースクラフトやマリナ＝イスマイールとは対極に位置する在り方。

しかし、それでもマリナは退けなかった。シャムナの鋭い眼光を前に気丈さを失わずに佇む彼女は、ジルクスタン王国の女王を真っ直ぐに見つめながら言葉を投げる。

「争いが長引けば、それだけで多くの命が失われます。その時に犠牲となるのはなんの力もない子供やお年寄りばかり、争いばかりが人の在り方では無いはずです。この国の人達だって……！」

「知ったことを言ってくれるなマリナ＝イスマイール、アザディスタンが国連の旗下に降ったことで羽振りも良くなったか？　持つものが持たざるものを諭すのは些か以上に刺激的だぞ？」

この国に入り、マリナは目を見張った。破界事変、再世戦争、そして時獄戦役と続いて起きてしまった数々の大戦。そんな激動の時代を自らの国力のみで乗りきったジルクスタンは、嘗ての力を大きく削げられていた。

このままではこの国の民が飢えてしまう。嘗て貧困に喘いでいた自国の様子を思い

出し、アロウズによって焼かれた光景を想起したマリナはどうにかして国連に参加させるよう説得したかった。戦いの為に協力して欲しいのではなく、嘗ての自分と同じ目に合わせたくない一心で、マリナはシャムナに呼び掛け続ける。

下心もなく、純粋に此方を想っての言動。故にシャムナはマリナを無碍に扱おうとはしなかった。

「お帰り願おう。マリナ＝イスマイール殿、貴殿はもう、この国に来ない方がいい」

「シャムナ様！」

以降、シャムナが口を開くことはなかった。語るべき事は語り、これ以上交わす言葉は無いと未だ食い下がるマリナにシャムナは沈黙で返す。

既に交渉の余地は過ぎ去った。シャムナからの返答に俯くしかなかったマリナは退室の言葉を最後に玉座を後にする。

「……マリナ＝イスマイール、喩え世界に争いが無くなってもそれは所詮次の戦いの幕間に過ぎないのよ」

戦いから平和、そして平和からの革命は次の戦いへと続いていく。どんなに文明を発展させても人はこの螺旋のような円舞曲（ワルツ）から抜け出せることは出来ない。

「戦いこそが人を導く。ねぇ、貴方もそう思うでしょ？　――――トレーズ」

「でも、私はその円舞曲から脱却して見せる。アマルガム、レナード＝テスタロッサは良

いものを遺してくれた」
　玉座から立ち上がり、予言の巫女は背後にある隠し通路へと足を進める。暗闇の向こうから見える光源はこのジルクスタンの希望を示唆しているかのようだ。
　〝ＴＡＲＴＡＲＯＳ〟、棺のような形をしたそれは、嘗て新世界を生み出そうとした男が遺した異端技術の結晶。
「アザディスタンの様に世界に媚び諂う国やリモネシアの様な敗北の国とは違う。私達は私達が願う新世界へ向かうのよ」
　喩えこの世界の人間全てが犠牲になろうとも、祖国と愛する弟の為にシャムナは己の道を進むと決めた。
「Ｃの世界、ギアス、ＴＡＲＴＡＲＯＳ、そして……時空振動、これ等全てを利用して創ってみせる。私達の楽園を！　それこそが蒼のカリスマへの恩返しなのだから！」

◇

「申し訳ありません二人とも、折角護衛の付き添いに来てくださったのにこんな結果になってしまって……」
　来賓用に用意されたホテルの一室、良き返答を貰えなかった事に申し訳ないとマリナは同室している二人の付き人に頭を下げる。
「お気になさらないで下さいマリナ様」
「俺達が来ているのはアンタの護衛だ。そのアンタが無事でいることこそが俺たちにとっての最上の結果だ」
　頭を下げるマリナに気にするなと諭すのはカトルとトロワの二名、サイデリアルとの戦いの後に自分達の出来ることは無いかと、来るべき戦いの前に暇を潰す意味を含めて二人は現在要人警護を担う仕事に就いていた。
「しかし、兵士が輸出品とはな」
「思えばこれ迄のテロリストや裏組織の戦闘員は時々独特な動きをしていましたね」
「強さ自体は然程ではないが、各々が様々な機体の操作を会得していると考えると、中々侮れん」

多元世界は様々な世界の技術と文明が入り交じった世界。似通った技術がある世界があれば全く異なる文明を築いた世界が入り交じる混沌とした世界だ。

その世界を代表する様々な兵器、ＭＳやＡＳ、ＡＴやＫＭＦなどガンメンを除いて、機体のサイズから形まで多くの機動兵器が存在するなかでジルクスタン王国の兵士は何れも特筆した強さは無いものの、全ての機体に乗り込んでも問題ないほどに洗練され、成熟されている。

主な兵力はＫＭＦだが、それでも街の至るところにはＭＳやＡＳ等の機体が見えている。節操がないと他国は口にするが、見方によっては各機体の短所と長所を熟知している様にも見える。

「ジルクスタン王国、これ迄の大戦で小国でありながら生き長らえたと言うのは誇張ではないらしいな」

兵力を国益にしているジルクスタン王国の執念にも似た何かを感じたトロワ。外から見える街の景色を目を細めてそう溢す彼の心境は付き合いの長いカトルにも計り知れない。

だが、共感できる部分もあった。この国は未だに戦いに縛られ続けている。このまま戦いを続ければいつか取り返しの付かない事になりかねないという事も。

しかし、どんなに憂いた所で自分達に出来るのも戦いだけ、ままならないなと溜め息

を溢すカトルとトロワにもう一人の護衛者が部屋へ入ってくる。
「あ、五飛。帰ってきたんだ」
「街の様子はどうだった？」
「ＭＳやＫＭＦが跋扈している点以外では普通の街だな。物流もあるし、インフラも普通に機能している。だが、街を見回っていた途中、奇妙な宗教に誘われた」
「宗教？」
「あぁ、蒼神教と言うらしい。何でも、あの蒼のカリスマを崇めている宗教だとか」
「っ!?」
「なんだと？」
　蒼神教、噂で聞いた宗教の影がこの国にまで及んでいる事実にカトル達は驚きを露にする。なんせあの蒼のカリスマが宗教として祭り上げられているのだ。この事を本人に知られたら、どう転んでも騒ぎは大きくなる。
「俺も、ナタクと共にこれから独自に調査に向かう事になる。ロシウ大統領にも話は通した。お前達にはマリナ＝イスマイールの護衛を引き続き頼みたいのだが……」
「――――仕方ない。せめて報告だけは怠らないでくれよ」
「あと少しで刹那も来てくれるみたいだし、マリナ様の事は任せて！　」
「あぁ、頼む」

ジルクスタン、新大陸、そして蒼神教、全ての中心点にはいつも蒼のカリスマが居座っている。事の真相を探るべく、五飛もまたカミナシティへと向かう。
そして、その中心人物はと言うと……。

「おら、ここで大人しくしていろ！」
「ぐっ」
「くそ、チクショウめが！」
薄暗い牢獄、傷を追い、乱雑に包帯を巻かれたオルフェウスとズィーは乱暴に扱われながら牢屋の中へと放り込まれる。
笑いながら立ち去っていく看守らしき男、忌々しく睨みながら見送る二人は早速これからの事について話し合う。
「済まないオズ、俺が足を引っ張ったばかりに……」
「気に病むなズィー、お前がいてもいなくても恐らく俺は捕まった。奴等め、まさかあれ

だけの力と兵を集めていたとは……！」
「ラムダ・ドライバ搭載機にナイトギガフォートレス、そしてあの巨大兵器。まさか蒼神教がここまで力を得ていたとは」
「これはなんとしてもロシウ大統領に伝えなくてはならないな」
「折角訪れた平穏な世界、崩されてなるものか……っぅ！」
　意を決してここからの脱出を試みる二人だが、体に刻まれた痛みがオルフェウス達の動きを鈍らせてしまう。そんな時だ。
「あの、今はあまり動かない方がいいんじゃ……」
「っ！」
「誰だ！」
　怪我を追い、使命感に駆られて自分達以外の気配の索敵を怠ったオルフェウスは拳を握りしめて声の主を睨み付ける。幾ら体が痛んでも人一人くらい倒すことは出来る。恵まれた身体能力をフルに使おうとして……。
「あぁ待って待って！　怪しいものではないよ！　俺も偶然捕まっただけなんだ！　ぼ、暴力反対！」
　その動きを止めた。何故なら、目の前にいる男はどう見ても普通の人間、それも何の力のない一般人にしか見えなかったのだから。

「……何者だ？」
「俺？　俺の名前はシュウジ＝シラカワ、ごくごく普通の旅人さ」
蒼のカリスマ、その正体と本名は一部の政府役人とＺ―ＢＬＵＥ以外知る者はいない。

その２１８

カミナシティから車で数時間、行けども行けども続く荒野の世界。時折水辺へ立ち寄り小休止を挟みながら、マリーベル達は勧誘者が残した教典に記された蒼神教の本拠地へと向かっていた。
「ええ、はい。ではその手筈でお願いします。では」
「マリー、シュバルツァー戦術顧問はなんて？」
「直ぐに行動を開始してくれるそうよ。ロシウ大統領にも許可を戴いたし、これで万が一に備えての保険は完了したわ」
「サイデリアルが地球から撤退したとはいえ、よく他国の軍事を受け入れられるな」
「それだけ私達の事を信頼してるんでしょ、流石一国のトップ。器がデカイにゃー」
ティンクが運転するジープの車内、マリーベルの通信内容を把握したグリンダ騎士団の面々は、もしもの時に自分達の愛機が飛んでやってきてくれる事に一先ず安心した。
「本当は、戦闘にならないのが一番なんだけど……」

「レオンの懸念も当然ね。まぁ、あくまで私達の目的は蒼神教の内部調査だし、戦闘は万が一の手段として頭の隅に入れておきましょ」
「まぁ、個人的にはほぼほぼ黒なんだけどね。幾ら宗教団体とはいえ、ＫＭＦやＡＳの目撃情報があるのはおかしいし」
「やはり、どこかの裏組織が介入しているのでしょうか」
　カミナシティでマリーベル達が得た情報の中にはＭＳやＡＳと言った機動兵器らしきモノが度々目撃されている。マーティアルの様な大規模な宗教ならいざ知らず一介の、それも新興されたばかりの宗教団体が短期間の間に機動兵器を有するまでに成長するのは有り得ない。
　これも蒼のカリスマという名前による影響なのだろうか。確かに蒼のカリスマの強さは絶大だ。一度はＺ―ＢＬＵＥに討たれたとしても、別に蒼のカリスマとグランゾンが弱くなった訳ではない。その蒼のカリスマが援助を求めれば、その強さに目を眩んだ他国が手を貸すのは容易に想像できる。
　問題なのは、仮に援助する国があったとしても、それがどこの国で、何の為にそんなことをするのかだ。
　蒼のカリスマだって相手を選ぶだろうが、如何せんあの蒼のカリスマだ。あの力を自国の一部に一時的にでも出来るのなら、その引く手は無数にあるだろう。だが、サイデ

リアルは去り、国連が軍を建て直している今の地球の状況なら少し話は違っている。
度重なる大戦を経て、世界は今一つに纏まろうとしている。これ以上誰かの血を流さない為に、一つ一つの国々が一丸となって世界を建て直そうと必死に頑張っている。状況が分からないのはそんな国連に加盟していない一部の諸国だけ。
「……与している組織、もしかしたら当たりが付けられるかもしれないわね」
「マリー？」
マリーベルはその優れた頭脳を以て蒼神教に関与している組織に幾つか候補を割り出して見せる。一気に解決策が見え始めたが、それ以上に嫌な予感がする。顔色が僅かに青くなるマリーベルにオルドリンが心配そうに覗き込む時。
「見えた。あそこだ」
ティンクの一言に車内にいる全員の視線が外に向けられる。見えてきたのは巨大な岩山、双眼鏡で見れば機械仕掛けの巨大な扉と、岩山には所々窓の様なものが見えることから、その様相は自然に見せ掛けた要塞の様だった。
気持ちを切り替え、潜入調査の体を隠しつつ、扉の前まで来たマリーベル達は真剣な面持ちで身構える。扉の前に立つ男は顔立ちの整っており、その表情は何処か不機嫌そうだった。
「――止まれ、何者だ」

「は、初めまして、私達は蒼神教に入信したくやって来た者達です」
「……そうか、ならば入れ」
（あ、あれ？）
（検問とかしないのかしら？）
　不機嫌な表情の割には入信したいと口にするマリーベル達を碌に調べず通す男、機動兵器すら通せそうな巨大な扉なのに検問もせずに通そうだなんて、一体どういうつもりなのだろうか。
　訝しむもそれだけで実際に扉を開ける男、気にはなるが、何故調べないかを聞いて不審に思われるのも避けたいマリーベル達は今は深く追及せず、開けた門を潜るのだった。
「――――全く、何故誉れある我がフォーグナー家が門番なんてしなくてはならないのだ」
　マリーベル達を門の奥へと通した男、シェスタール＝フォーグナーは不満と苛立ちに満ちた愚痴を人知れず溢す。こんな雑用如き仕事、自分がする仕事ではない。プライドと傲慢さに凝り固まる男はそれでも仕事には手を抜かず、やるべき事を行う。
　懐から取り出すのは一個の通信端末、繋がっているのは自分の直属の上司であり、父親である人物。
「――――父上、今しがたマリーベル＝メル＝ブリタニアとその騎士達を〝工場〟へ通し

ました。ええ、では後は此方の手はず通りに」

◇

「――――いやぁ、まさか電子ロックの錠を外せるとは、お前さんやるなぁ」
「仕事柄、物弄りには自信がありましてね。上手くいって良かったです。へへ」
牢から脱出し、人気のない通路を走るのは自称旅人のシュウジとズィー、そしてオルフェウスの三人。牢を閉めていた最新型の電子ロックに懐から取り出したカードで触れるや、いとも簡単に解錠してしまったのは、流石のオルフェウス達も目を見開いて驚愕した。

「……ただの物弄りにしては手際が良すぎるな。お前、本当は何者だ？」
「いや、だから今の俺は唯の旅人なんだって、新大陸へ来たのも元々あった用事と友人に頼まれて来ただけだし、本当に大した人間じゃないんだって」
　明らかにシュウジという男は何かを隠してる。怪しさもそうだが、何よりも軽薄そうな態度がオルフェウスには気に入らなかった。自分を偽り何か都合が悪いこともあるのか、後ろめたい事でもあるのか、此方が何度質問してもはぐらかすシュウジという男に、オルフェウスは少しずつ苛立ちを募らせていた。
「……まぁいい。お前が錠を外したお陰で俺達は自由に動けた。それについては感謝している」
「いやぁ、良いってことさ。兄さん達が手際よく見張りの奴をやっつけてくれたから、こうして上手くいったんだから」
「――だが、もし何か怪しい事をしたらその瞬間俺はお前の敵になる。胆に命じておけ」
「う、うん。分かった」
　此方の脅しに震えながら頷くシュウジに取り敢えず釘を指すことができた。それにこの程度の脅しで震えるなら本当に唯の旅人なのかもしれない。沸き上がる罪悪感を圧し殺しながら通路を走り続けると、三人は広い空間に出て。

「っ!?」
「ここは……!?」
そこで信じ難い光景を目の当たりにする。
何処までも広がる地下空間、そこにあるのは無数の機動兵器。組み立てられ、建造され、完成されていく平和を脅かす無数の鉄巨人。ＫＭＦやＡＳだけではない、ＭＳやＡＴ、世界中のあらゆる兵器が新大陸の地下深くにて造られていた事実に、オルフェウスとズィーは驚愕に目を剥かせる。
しかし、驚愕すべきはそれだけではなかった。機動兵器の数々を作っている機械を操っているのはこれ迄蒼神教に入信していたとされる多くの若者達の姿があった。
「もう、もう家に……家族の所に帰らせてくれ～！」
「私達はただ、蒼のカリスマ様にお礼を言いたかっただけなのに！」
「折角世界が平和になったのに、どうしてこんな事に……」
「お父さん、お母さん……」
「うるせぇぞテメェら！　泣き喚いてないでとっとと働けぇ！」
老若男女問わず、全ての人間が重たい機材を運び、機体を組み上げ作業している。普通なら全て組み立て用の機械で運んだりする筈なのに、この工場にはそれがない。必要最低限の機械以外多くが手作業で行われてしまっている。

「ここのところ新大陸への検問が厳しくなってきて、運搬用の機体はめっきり入って来なくなっちまった。大型の機体以外は皆規格の小さい物ばかりなんだ！　ちゃっちゃと働けやこのぼんくらどもが！」

倒れる者を容赦なく鞭で叩き付ける。原始的でありながら何処までも野蛮な光景。

それはまるで古代の奴隷制度を見ているかのようだった。人を人と思わぬ所業、蒼のカリスマという名前を使い、彼に恩を感じていたもの達を捕え、労働力にしている。人が感じる感謝の気持ちを利用する悪辣さに、ズィーもオルフェウスも激昂する。

「ひでぇ、これが蒼神教の正体かよ」

「……」

二人とも怒りを露にする中、シュウジはただ静かに眼下の人々を見つめて……。

「――――野郎」

その表情は幸いにも二人に知られる事はなかった。

その２１９

教典に記された場所、そここそが蒼神教の拠点だと確信したマリーベル達は入信する信者を装い、教団内部への侵入を試みた。
巨大な扉は開かれ、門を潜っていく中で、これならば調査も何とか上手くいくのではないか。慣れない潜入捜査に緊張していたオルドリンが楽観的だと自覚しながらも内心そう思った時、視界に飛び込んできた光景に一瞬だが言葉を失った。
見渡す限り立ち並ぶ機動兵器の数、ＫＭＦからＡＳ、更にはＭＳなどこの世界に存在するあらゆる機動兵器が鎮座されている光景にマリーベル達は言葉を失った。
「なんだよ、この兵器の数は!?」
「これが、蒼神教の実態?」
「教団というか、まんま格納庫にゃー……」
夥しい兵器の山、軍隊規模の数を優に上回る兵器の数にマリーベルは戦慄し、恐怖を感じた。これだけの機動兵器が一斉に動き出し、各国首都制圧に動き出せば世界は再び

戦いの炎に包まれてしまう。
蒼神教は、蒼のカリスマは、これだけの軍団を率いて今度こそ世界を征服するつもりなのだろうか。混乱する思考、それでも騎士団の団長として部下達に指示を出さねばと我に返るよりも早く。
「おおっと、そこまでだぜお嬢ちゃん達。下手な動きはご遠慮してもらうぜ～？」
相手側の方が展開が早かった。いつの間にか潜んでいた銃火器を手にした集団が、機動兵器の足下から姿を現す。
十や二十では利かない規模の人数、その何れもが特徴的な装束に身を包んでいる。軍人というよりは野盗や山賊の類いのそれに近い。または粗野な態度が消えていない傭兵あがり、彼等に対する印象はそれだった。
そんな野盗達を割って来る様に現れたのは猫背姿の大男だ。体格の大きさとその風格から野盗達のリーダーのように思えた。
「――――貴方は、この蒼神教の関係者の方ですか？」
「応よ、俺様は蒼神教の最高幹部。ベルク＝バトゥム＝ビトゥル様よ。おお哀れで迷える子羊達よ。蒼のカリスマ様に慈悲を求めてやって来たのかな？」
口調も言動も巫山戯ている。宗教団体の幹部とは思えないベルクと名乗る男の下賤な態度にオルドリンを始めとした騎士達は不快感を抱くが、それ以上に隙のないベルク

の姿勢に息を呑んだ。
強い。大柄な体格に見合った覇気、その巫山戯た言動は此方への揺さぶりなのだとオルドリンが勘づけたのはこれ迄の戦いと挫折、そして経験による賜物だった。
このベルクという男は強い。肉弾戦はモチロン、指揮官としても恐らくはオルドリンより上。悔しく思いながらも格上相手にどう切り抜けるべきか思考を止めないでいると、ベルクの背後から更にもう一人の男が現れた。
「よぉ兄弟。新しいお客さんかい？　対応するのも結構だが、現場での指揮も怠けないでくれよぉ？」
「おっと、それは悪いことをしたなぁ。兄弟、けど元とはいえブリタニアのお姫様が来てるんだ。国賓待遇で相手しなくちゃ失礼だろぉ？」
「おっと、そりゃ失敬。配慮が足りなかったのは此方だったか」
ベルクに負けず劣らず、人をおちょくる言動をするのはベルク以上に不気味な雰囲気を醸し出す男だった。その男の印象を一言で現すのなら……殺し屋、人を殺し、命を奪うことに何の躊躇いも迷いもない人でなしの人種。まだこんな奴が教団にいるのか。
「貴様、まさかゲイツか!?」
「おや？　俺様のファンの子かな？」
「レオン、知ってるの？」

信じられないものを見るような目で見開き、驚愕を露にするレオン。様子のおかしいレオンを訝しむもオルドリンにティンクが代わりに返答する。
「あぁ、裏の世界じゃ名の通った奴だよ。嘗てＺ―ＢＬＵＥに倒された裏組織アマルガムの一員。まさか生きていたなんて……」
「ハッハァ！　そう、確かに一度俺様はＺ―ＢＬＵＥにやられた。死ぬかと思ったし実際に死にかけた。しかし、天が俺を見放さかったのさ！　俺はまだ死なないと！　それもその筈、俺は過去幾度となく蒼のカリスマと対峙し、その度に生き残った！　不死身のコーラサワーから不死身の座を受け継いだのさ！」
Ｚ―ＢＬＵＥ……相良宗介と彼の新しい相棒レーバテインに敗れ、そのまま死亡するかと思われたゲイツ。しかし、彼は生き残った。体の大部分をサイボーグと化する事で延命し、今日まで生き延びることが出来た。
自らを不死身を受け継いだと豪語するゲイツに奴を知るレオンとティンクは戦慄する。
「まぁ、その話はどうだっていい。それで？　ブリタニアの元皇族様が何のようだ？
あぁ、蒼神教に入信しに来たんだったか？　なら盛大に歓迎するぜぇ、何せ元とは言え皇族の参加だ。この話をバラ撒けば噂を信じてやってくるバカは大勢増えるだろうよ」
「あ、あんた達はバカなの!?　今は唯でさえサイデリアルとの戦いで世界中が疲弊仕

切っているのに、また争いの種を撒こうとしているの!?」
「そんな事になったらまた世界は戦争の時代に逆戻りだ」
これまで多くの犠牲の上で漸く掴めた平和の時代、この巨大格納庫に存在する機動兵器が全て動き出したら、世界は再び戦火が渦巻く動乱の時代に戻ってしまう。
そんな事になれば、今度こそ地球人類は滅ぶ。宇宙の崩壊を防ぐ処の話ではない。Z―BLUEが何とかする前に人類の歴史は崩壊してしまう。
だが、危惧するマリーベル達を他所にゲイツとベルクの反応は何処までも平坦だった。
「フハハハ！　まぁ、流石にそんな事はしないさ。俺達も其処までバカじゃねぇからよ」
「あぁ、寧ろこれ以上の入信者は必要ねぇのさ。既に兵器達の製造は完了した。街ではそろそろロシウの坊っちゃんが勘づいているだろうし、国連のお偉いさん達も気付く頃合いだ」
「そもそも、俺達の目的は戦争じゃねぇ。俺達が向かうのはそんな血生臭い場所じゃねぇのさ!!」
「理想郷。いやぁ、まさかこの年になってそんな所に行けるなんてな。お宅の巫女様は大したもんだ」
理想郷。ゲイツの口から紡がれる言葉にマリーベルは訝しみ、また凄まじく嫌な予感

が彼女の直感に囁いた。
「おいおいしゃべり過ぎだぜ兄弟。その話は控えろって言われてるだろ？」
「おっと、これは失礼したぜ兄弟。けれど許してくれよ、幸いにも口数ってのは少なくなるものだからよぉ」
　向けられる銃口、マリーベル達を囲む全ての銃が彼女達に向けられる。このままここにいれば全滅は免れない。急いで車を動かしてここから逃げようとして……。
　瞬間、遠くから爆発音と格納庫全体を震わせる振動が響いてきた。突然の事態にマリーベル達は勿論、ゲイツやベルクの目も驚愕に目を見開くことになる。
「おい、何の騒ぎだ？」
「だ、第四ブロックから火の手が上がっています！　報告によれば、捕まっていた者達による反抗だと思われます！」
「っ！おい、確か其処には例の奴がいた場所だよな？　奴は最新の電子機器で施錠した特殊な牢にぶちこんだ筈だぞ！」
　騒ぎを聞いてその首謀者である人物を予想してベルクはふざけるなと声を荒げる。何せ奴が捕まっているのは最新設備の牢獄、抜け出すのは勿論力でこじ開けることも不可能とされている特殊なモノだ。
　だが、現実として騒ぎは起きている。ベルクは急いで現場に向かおうとするが。

「そう慌てるなよ兄弟。起きちまったモノは仕方ない。逃げ出す信者どもは勿体ねぇが、今はこいつらをどうにかするのが先だ。そうだろ？」
「……あぁ、そうだな。奴の事はあとで対処すればいい。それに向こうにはアイツが向かっている。今頃は同士討ちでもしているだろうよ」
突然の事態に熱くなったベルクがゲイツの言葉によって瞬く間に冷静さを取り戻している。どうやら混乱の隙を突く事は無理そうだ。向けられる銃口は一切此方から逸れる事はなく、マリーベル達の眉間を狙って放さない。
ここで死ぬつもりはない。分の悪い賭けだが、それでも黙って殺されるつもりはないと、オルドリンは一縷の望みを掛けて車に載せられた剣に手を伸ばそうとしたとき。
「あら、ダメじゃない。よそ見は」
一発の銃声と共にベルクの手にした銃が何者かによって撃ち抜かれた。
再び起きる予期せぬ出来事、ベルクは勿論ゲイツ迄が驚愕していると、赤く長い髪を翻しながら一人の女性がマリーベル達の前に下り立つ。
「だ、誰だテメェ!?」
「――――チッ」
「それは此方の台詞。人様の故郷にこんな基地を作って、一体何なのよあんた達は！返答次第じゃ、アイツに変わって鉛玉をぶちこむわよ！」

一人の女性の登場にベルクは動揺し、ゲイツは忌々しく舌を打つ。
ヨーコ＝リットナー、ヴィラルからの要請を受けて緊急参戦。

◇

「よし、これで退路は出来た！　オズ！　良いんだな!?」
「あぁ！　先に皆を連れて脱出してくれ！　殿は俺がやる！」
騒ぎの現場である第四ブロック、多くの機動兵器に囲まれた格納庫内にて、持ち前の器用さで爆薬を作り、それを以て壁を爆破させたズィーは舞い上がる煙の中で聞こえているであろう相方に声を飛ばす。

「気を付けろよ。そいつ、ジルクスタン王国の暗殺者（アサシン）だ」
「あぁ、分かってるさ」
「白炎の方も任せておけよ。俺の予想ならお前の機体はまだ無事――――おわっ!?」
走り去って行く音が聞こえたから、どうやら相棒は無事に脱出出来たらしい。その間際、突然現れた黒い孔にズィーが呑み込まれたなどついぞ気付けなかったオルフェウスは目の前に佇む暗殺者を睨み付ける。
「さて、どうしてあの電子錠の牢屋から抜け出したのか、そろそろ教えて貰っても宜しいかな？　なぁ、ピースマークのオズ！」
「既にピースマークは解体された。そういうお前達こそ、何故蒼のカリスマの名を使い新大陸でＫＭＦを製造している。答えてもらうぞ、ジルクスタンの暗殺隊長スウェイル＝クジャパット！」
「フンッ、吐かせて見るんだな！」
手にしたナイフで交差する二人、オルフェウスとスウェイル、共に修羅場を潜り抜けてきた両者の間には明確な力の差は無く、手にした刃は奮われる度に互いの服や肌を切り裂いていった。
嘗てテロリストとして世界と対峙した者の一人、オルフェウス。数々の戦場を通して培われた彼の戦いのセンスと技術はブリタニアに存在した帝国最強の騎士達にも匹敵

する。しかし、そんな彼の力で以てしても目の前の暗殺者を倒すには至らない。
「流石にやるじゃないか。どうやら分が悪いのは此方の方みたいだなぁ」
「無駄口を叩く余裕はあるようだがな」
「そうでもないさ。これだけ騒ぎが起これば近い内に他の部隊の奴等が来る。そうすればそいつらに俺の失態が上に報告され、俺の給料が減る。まぁ、つまり……俺も出し惜しむ場合じゃないって事さ」
　瞬間、男の眼が赤く瞬き緋色の翼がはためく。その輝きをギアスによるものだと瞬時に理解するオルフェウスだが、防ぐには一手遅かった。
　自分の迂闊さに呪いながら目を開ければ、其処には今さっき別れた筈のズィーが佇んでいる。
「――――人の姿を真似るギアスか！」
「そうとも。知ってるって事は過去に似たようなギアス保有者と戦ったか？　だが生憎、俺のギアスはそれだけじゃなくってさ」
「っ、煙幕!?」
「ついでだ。楽しいショーの幕開けといこうか」
　瞬間、辺り一帯に真っ白な煙幕が充満する。これで視界は防がれた。相手の動きを読むためにオルフェウスは集中し、意識を高めていく。

そして、背後から物音が聞こえてきた。奴だ。ギアスを使って結局は不意打ちが狙いなのかと呆れながら手にした刃を振り抜こうとすると。
「ヒィッ！　や、止めてくれぇっ!!」
「っ!?」
ズィーの姿をしておきながら予想と全く違う反応を見せる姿にオルフェウスは驚愕し、咄嗟に手を止めてしまう。
（まさか、奴の能力はっ!?）
気付いたのはいいが、やはり一手遅かった。動いてしまった事により晒してしまった己の死角に暗殺者の刃が襲い掛かる。瞬いた銀閃がオルフェウスの肩を切り裂いていく。
「ほう、あのタイミングで避けるとはな。しかも初見で俺のギアスのタネを暴くとは。本当に大したモノだ」
「――――」
「お察しの通り、俺のギアスは相手の視覚情報を弄くること、何とも小癪だがこと暗殺に冠してはとびっきり相性の良いギアスでな。俺も重宝してるのさ」
相手の視覚に自分の知る人、異なる人の情報を入れ替え、植え付ける厄介きわまりない性質のギアス。恐らく先程の怯えていたのは避難していた人間の誰かなのだろう。

未だ格納庫には避難出来ていない被害者達が残されている。
心理的余裕も奪われ、戦いの優勢は完全に相手に奪われてしまった。煙幕さえ晴れれば打開の一つも思い付きそうなものだが、それを待つほど相手は甘くないだろう。
「さて、そろそろこれで終わらせてやるか……ん？」
懐から拳銃を取り出し、惑うオルフェウスに銃口を向ける。これで奴も終わりだと、不敵に笑みを浮かべるスウェイルは近付いてくる人物に視線を向ける。
その男は確かこの基地の周辺で彷徨いていた奴で、それを発見したシェスタールが捉え、牢にぶちこんでいた筈の男だった。
何故、コイツは逃げないのか。不審に思うスウェイルだが、それは恐らく自分の煙幕によるものだと察し、自分の不手際に呆れてしまう。
「やれやれ、さっさと逃げれば良かったものを……まぁ、運が悪かったと諦めてくれや」
折角のオルフェウスを殺す機会を失ってしまうが、煙幕が完全に晴れるにはまだ時間がある。ギアスの効力も切れない以上、戦局は未だ自分に有利になっている。
まずは、目障りなこの優男から殺してやろう。手にした拳銃を男に向け、引き金を絞り銃弾を撃ち放つ。間違いなく、その銃弾は奴の眉間に向けて放たれた筈だ。
しかし、その銃弾は男の眉間を撃ち抜く事はなく。人の頭蓋を撃ち抜いて余りある威力を持ったそれは、男の手によって何ともなく掴み取られてしまった。

「――――はっ？」
一瞬、何が起きたか分からなかった。目をパチクリさせて混乱するスウェイルが最期に眼にしたのは拳と見馴れた格納庫の天井、並びに何処までも広がる青空だった。

「っ、なんだ。今の爆風は!?」
突然起きた暴風、吹き荒れる風は煙幕を引き裂き、煙に包まれた格納庫を露にしていく。何事かと瞠目するオルフェウスだが、辺りには何も変化は無く、ただ煙幕と同時にスウェイルの姿も消えていた。
一体何だったのか、不思議に思うオルフェウスだが、向こうからやってくる優男に咄嗟にその拳銃を向ける。
「ちょ、ままま待ってくださいよオルフェウス君！　俺だよ、シュウジだよ！」
「――――本当か？」
「嘘ついてどうするのさ！　それより早く此処から出よう！　他の皆はもう全員逃がしたから、後は俺達だけだよ！」
その言動からどうやら奴では無さそうだ。そう判断したオルフェウスは取り敢えず

銃を下ろす。
「……そうか。了解した。だが、逃げるのはお前だけにしろ。俺はまだここでやることがある」
「え？　で、でも……」
「お前に心配される程、俺は落ちぶれてはいない。さぁ、早く行け。直にこの基地は爆破する。巻き込まれる前に逃げろ」
「わ、分かった。なら、この端末を持っていってくれ。ここの見取り図だ。きっと君の役に立てる筈だよ！」
「なに？　それは有り難いが……随分と手際が」
「じゃ、オルフェウス君も気を付けて！」
　投げ渡された端末、そこに描かれているのはこの基地全体の図と今の自分の居場所を記されていた。監視カメラの位置や管制塔に当たる施設まで、基地内のあらゆる情報がこの端末に書き込まれている。この短時間の内にどうやってそこまで調べあげたのか不思議に思うオルフェウス。
「――――どうやら、運良くここの端末を手に入れたらしい。何とも、運の良い奴だ」
　成る程、自ら調べたのではなく最初から記されていた端末を持ってきただけか。これだけの規模の基地で良くそんな端末を見付けられたものだと感心しながら、オルフェウ

スはその場を後にする。
　その時、オルフェウスの頭上にある天井には青空まで見える穴が出来ているのだが、それを彼が気付く事はなかった。

その２２０

機動兵器の装甲すら撃ち抜く電磁ライフルを携えて、オルドリン達の前にヨーコ＝リットナーが降り立った。突然の来訪者の登場に動揺するベルク達だが、唯一ゲイツだけは苛立ちを露にするだけに留まっていた。
「長い髪に凄腕の狙撃……まさか、彼女がヨーコ＝リットナー？」
「ヨーコ＝リットナーって、あのＺ―ＢＬＵＥの中でもトップクラスの狙撃手の!?」
Ｚ―ＢＬＵＥのメンバーについてはオルドリン達も情報だけで言えば把握している。その中でも腕利きの狙撃手として知られる人物の登場に、オルドリン達も驚きを露にしている。
「確かに彼女は新大陸の住人、恐らくはロシウ大統領からの情報を得て、独自にここへ調査に乗り出したのでしょう。彼女とロシウ大統領は同じ大グレン団の仲間だと聞いてますから」
「流石ロシウ大統領、手際が早い」
「……」

ヨーコの登場に驚くが、マリーベルの分析で直ぐに彼女が来てくれた事への疑問が解消され、ロシウ大統領への賛辞を送るオルドリン。本当は全く別の人間からの別の案件でここへ来た訳なのだが、敢えてヨーコはそれを否定することはしなかった。
「全く、厄介な奴が来てくれたもんだよ。ヨーコ＝リットナー、一応聞いておくが……お宅、一体何しにここへ来た？」
「――――勿論、あんた達を此処からぶっ飛ばす為よ」
一瞬だけ空いた間が気になったが、ライフルの銃口を向けてくるヨーコにゲイツは再び舌を打った。
「断っておくが、一応俺達は戦争を仕掛ける為にここにいる訳じゃないんだぜ？　全ては巫女様の予言に従った迄さ。サイデリアルをやっつけて折角世界は平和になったんだ。お互い、穏便に事を済ませようとは思わないかい？」
「白々しいわね。多くの人達の気持ちを踏みにじっておいて、何が蒼神教よ。アイツの名前を利用して、こんな兵器を作っておいて！」
「んん？　今、アイツって仰りました？　お宅、もしかしてあの蒼のカリスマと……まさか、そういう関係だったりしちゃってたりしますぅ～!?」
「っ！　コイツ！」
蒼のカリスマ――――シュウジ＝シラカワはヨーコにとって無視できない存在だ。こ

れ迄幾度と無く助けられ、時には支えられた。
けれど、それに比例してヨーコがシュウジに出来たことはあまりにも少なかった。破界事変の時にはそもそも蒼のカリスマがシュウジだと知らなかったし、世界中から敵視されていた頃も何の手助けもする事が出来なかった。
敵対し、殺し合った時だって全てはあのアドヴェントが仕組んだ事だった。奴の呪縛から解放される為だからって死を受け入れ、それでも立ち止まること無く進み続けるアイツにヨーコは漸く自覚した。
アイツの、シュウジの助けになりたい。今はもう最初の頃とは別人の様に強くなってしまったアイツだけど、それでも何でも良いから支えになりたかった。今回の件だって少しでもアイツの力になりたいが為の行動だった。
それを、目の前の男が嘲笑う。蒼のカリスマという男を下衆の勘繰りで汚されたくない。目の前で嗤うゲイツの眉間を撃ち抜こうと、ヨーコは引き金を引こうとするが……。
「おっと、それは隙ありだぜボインの姉ちゃん」
「っ!?」
横から、大男の蹴りが飛び込んでくる。咄嗟にライフルを盾にするが、男の――――ベルクの蹴りは想像以上に重く、ヨーコは勢いに負けて吹き飛んでしまう。

それでも、空中で体勢を整えて無事に着地するのは流石の身体能力だった。学校の教師となって毎日ワンパクな子供たちと肉体言語で相手をしていた為か、その動きは何処までも繊細でしなやかだった。

しかし、それでもダメージがあるのは間違いない。ライフルを盾にしても相手は大柄な男の蹴り、直撃は避けても襲い来る衝撃に、ヨーコは全身に迸る様な痛みを感じていた。

「おいゲイツ、そろそろ遊びは終いにしようや。機体に火を入れろ」

「……どうやらその方が良さそうだ。そんじゃベルク、暫くの間時間稼ぎは任せたぜ」

「っ！　ま、まて！」

この場から去ろうとするゲイツを逃がさんとレオンは追跡を試みるが、幾人もの男達がレオンの行く手を阻んでいく。皆、どれも山賊染みた格好をして、それは何処と無くベルクと似た者達だった。

「おうテメェ等、適当に客人達の相手をしろや」

「す、凄い数だにゃー」

一体どれ程の人員がこの基地に隠れていたのか、圧倒的戦力差を前にオルドリンは主であるマリーベルに目線を送る。

もう、誤魔化す必要はない。既にその段階は過ぎ去っていると、マリーベルもまた覚

悟を決める。
「臆するな。我がグリンダ騎士団の精鋭達よ。汝の剣は力無き民達の剣、相手は平和を侮蔑する破壊の徒、ならばここそが我が騎士剣を奮う場所に他ならない！」
　既に自分達の武器はヨーコが登場した際に車から下ろしている。その手に其々の得物である剣を握り締めて、マリーベルは己の騎士達を鼓舞する。
「戦えグリンダ騎士団、悪逆のテロリストを断罪するのです！」
「「イエス・ユアハイネス!!」」
　既に、マリーベルは皇族としての地位を失っているが、それでも自ら主君を立てるのを止めないオルドリン達にマリーベルは僅かに頬を緩ませる。
　相手は多数、状況は最悪。なれど我等がグリンダ騎士団は、一騎当千の精鋭達。山賊風情に負けはしない。そう高らかに口にするマリーベルにベルクはニンマリと笑みを溢す。
「おほぉ～、かぁっこいいねぇ。流石は本場の騎士様だ小綺麗でいらっしゃる。……んじゃ、殺せ」
　ベルクのその合図と共に戦闘は開始された。多くの雑兵が手に武器を握り締め、数に物を言わせて雪崩れ込んでくる。しかも、ただ襲い掛かってくる訳ではない。一人一人が連携を持って効率良く襲いかかり、グリンダ騎士団の面々は外見に見合わない華麗な

連携に目を見開いて驚愕した。
だが、それも一瞬。これ迄の幾度と無く経験してきた大きな戦いを経て、オルドリン達の強さも洗練されている。飛び交う銃弾の雨の中を掻い潜り、時には手に待った剣を以て切り裂いたりと、その実力は既に嘗てのラウンズにも劣りはしないだろう。
それに、戦っているのは彼女達だけではない。加勢に来たヨーコもまた、そのライフルを巧みに操って棒術代わりに雑兵達を薙ぎ倒し、銃を構える者達を瞬時に構え直して撃ち抜いていく。
「ヨーコ＝リットナーさん、ご助力感謝します！」
「しかし、いいんですか？　貴女は来るべき戦いに備えて心身共に休んでおくべきでは……」
「気にしないで頂戴、本当はこんな風に関わるつもりはなかったし、これは完全な私の独断。それに、あの連中にはキッチリとお返しをしてやりたいしね！」
銃を味方に当たらないように計算しながら相手を撃ち抜き、それでいてオルドリン達と違和感無く即座に連携していくのはグリンダ騎士団の誰もが驚愕していた。
これが、Ｚ―ＢＬＵＥ。一度は蒼のカリスマとグランゾンを倒し、サイデリアルから地球を救った地球圏最強の部隊の一人、その名に一切の偽り無し。
だが、それにしても相手もまた強固だった。数でこそ圧倒されても此方もまたブリタ

ニアの中でも精鋭を誇った部隊、それでも勝ちきれないのは奴等もまた幾つもの修羅場を潜り抜けてきた猛者だと言うことか。

「オラァッ！　こんなものかよ騎士様よぉっ！」

「くっ!?」

特にこのベルクという男、その図体に見合わず俊敏で奮われる攻撃の一つ一つが重い。相手をしているオルドリンはその家柄から剣の扱いは人一倍得意で、その冴えはラウンズにも匹敵している。

なのに、そんな彼女ですら防戦するので手一杯だった。相手の読みにくい動きも合わさって手出し出来ず、奴の腰に据えられた銃に手を伸ばさせないようにする事だけで精一杯。

当然、ベルクにもオルドリンの狙いは読めていた。自分の動きを見切る為に防戦に徹している事も、距離を開けられて銃を手にしないように必死に食らい付いていることも。

小賢しいが、実際オルドリンの判断は間違っていない。此処で自分が万が一敗北すれば、瞬く間に戦局は覆される。数で埋めようとしてもそれを覆す強さと勢いがグリンダ騎士団にはあった。

故に、ベルクは一つ奸計を思い付く。策と呼ぶには稚拙で悪意に満ちたそれを。

「しっかし、流石は蒼のカリスマ様だ。アイツの名前のお陰で俺達の負担は大分減ったよ。嘗ての恩人の為に一言礼を言いにワザワザやって来るバカ共、いやぁ。ここ最近笑いが止まらなくて腹筋が辛かったぜ」
「っ！　それは、あんた達が蒼のカリスマの名前を勝手に使ったんでしょうが！」
「おうよ。だがここまで影響があるとは思っていなかったんだぜ？　来ても精々数十人程度と予想してたんだが……クク、まさか千人規模の人間が世界中から捕まってくれるとはなぁ！　流石の俺様も予想外だぜ」
　千人。笑いながらそう口にするベルクにオルドリンは驚愕を露にした。何故そこまで被害が大きくなっているのに政府は何もしないのか。それだけサイデリアルとの消耗が激しかったのか？　それもあるだろうが……多分、違う。
「疲れちまったんだよなぁ！　世界が、戦うのを！　もうこれ以上戦えないって、戦いたくないってなぁ！」
「っ！」
「だから政府の連中は見捨てたのさ、蒼のカリスマなんて広告塔に群がるバカ達を、助けてやるほど暇じゃねぇってな！」
「お前ぇっ！」
　吐き捨て、嘲笑うベルクにオルドリンの沸点は一気に頂点を超える。人の善意を、誰

かに感謝する気持ちを、純粋な気持ちを踏みにじるこの男を許せないと。
「ハハッ、怒ったか？　だがこれが事実だ。所詮この世界はやったもんが勝ち、騙された方が間抜けなんだよぉ！　そしてぇ、テメェ等もその一つだ。グリンダ騎士団！　いいやぁ、マリーベル＝メル＝ブリタニア！」
　しかし、ベルクの標的は別の者に代わる。その矛先は雑兵相手に剣を振って蹴散らす元皇族の姫君、マリーベル＝メル＝ブリタニア。
「知ってるぜぇ、テメェの事。魔神激昂事件、蒼のカリスマとグランゾンに大敗北をした当時の連邦の軍隊の中にテメェ等グリンダ騎士団がいたこともなぁ！」
「それが、どうしました！」
「怖ぇんだろ？」
「っ!?」
　ベルクのその一言に、マリーベルは自らの心臓を鷲掴みにされる感覚を味わった。
「分かるぜぇ。あの蒼のカリスマ、あのグランゾンだもんなぁ。地球の全戦力の半分を潰しちまう力、聞いただけの俺様もブルッてたもんさ。で？　その恐怖はあれから少しでも和らいだのかよ。敗北の皇女さまよぉ？」
「黙りなさい！　今の言葉、撤回しなさい！」
「っ！　だめ、マリー！　下がって！」

ベルクの挑発、何時ものマリーベルならそんなモノに乗せられる事はなかった。だが、彼女は思い出してしまった。蒼のカリスマとグランゾンに何もかも打ち砕かれたあの日の事を。

その時の恐怖を、羞恥を、屈辱を、マリーベルは今も振りきれていない。恨みや憎しみといった感情こそは薄まっても、恐怖という色は今も彼女の心の中で色濃く残っている。醜くも愚かな自身の心情、それを指摘したベルクにマリーベルは我を忘れて斬りかかる。

それを止めようとするオルドリンだが、その一瞬の隙を突かれてベルクの蹴りによって吹き飛ばされる。遠退いていくマリーベル、オルドリンが目にするのは怒りに我を忘れた姫に死角から襲い来るベルクの刃、それが彼女の首に触れようとした、その時。

「下がれマリーベル！」

「っ!?」

唐突に現れた第三者が、横からベルクの刃を弾き飛ばした。

「お、オルフェウス!?」

「な、何故アイツがここに!?」

「え、誰!?」

誰もが驚いている中、ヨーコだけがオルドリンにソックリの男性に目を丸くしていた。
「来やがったかピースマークのオズ！　何でテメェがあの牢屋から出てこれんだよ！」
「貴様こそ、いつ大監獄から出てきた！　監獄長はクビにされたか？」
「只今休職中さ。テメェ等残らずぶち殺したらまた戻る……さっ！」
腕を振り抜き、オルフェウスを振り払うベルクだが、その腕には僅かながら切り傷が刻まれていた。あの一瞬で切りつけたオルフェウスには感心するが、それ以上にあれだけ打ちのめして尚立ち向かってくる事に、ベルクは苛立ちを感じていた。
「オルフェウス、貴方……どうしてここに？」
「話は後だ。それよりもこの状況を打開する事を考えろ！　直ぐに奴は仕掛けてくるぞ」
浮かんでくる疑問よりも目の前の状況を乗り越えることを優先する。オルフェウスの一喝に思い直したオルドリンは直ぐに構えを直し、ベルクへの対応を始める。
しかし、ベルクから仕掛けてくることはなかった。奴の性分ならより苛烈となって襲って来ると思ったのに、意外なほど静かな奴に二人は違和感を覚えた。
「――――残念ながら時間だ。続きは外でやろうや」
ベルクがそう口にした瞬間、基地内の至る所から爆発し、それに合わせてこれ迄全く

動きのなかった機動兵器達が起動し始める。
「これは、なんで!?」
「コイツら、さっきまで何とも言わなかった癖に、まるで自動人形みたいだにゃ!」
「人形……まさかっ!?」
「ハッ、流石にバレるか！　そうさ、お察しの通りコイツらにはモビルドールシステムが組み込まれている。嘗てのＯＺの総帥トレーズ＝クシュリナーダの遺産、詰まる所ここは蒼のカリスマとトレーズの夢のコラボ施設って訳さ！」
　何処までもふざけた言動にヨーコは堪らず引き金を引く。しかし、既にベルクの姿はそこには無く、爆発と火の手ばかりが勢いを増していく。
　このままでは基地の崩壊に巻き込まれる。急いで基地から脱出を計ろうとするオルドリン達だが、火の手の勢いに呑まれ、マリーベルと引き離されてしまう。
「っ！　マリー!!」
　炎の中へ呑み込まれようとする己の主を手を伸ばして助けようとするも、爆発と爆風が二人の間を裂くように引き離していく。オルドリンの慟哭の叫びが崩壊する基地に木霊する。
　しかし、その一方でヨーコは気が付いた。マリーベルが炎に包まれる直前、一つの影が彼女を炎から拐っていった事に。やはり、アイツもここにいた。その事を確信した

ヨーコは放心するオルドリンを連れ、基地から脱出した。

◇

『爆発だと!?　一体何が起こっている!?』
『方角から恐らく、オルドリン達が潜入している蒼神教の本拠地かと思われます!』
『何故、自らの拠点を……』
　マリーベルの要請を受け、機体を乗せたグランベリーと共に蒼神教の本拠地へ向かっていたヨハン＝シュバルツァーとオペレーター達は、突如として起きた爆発によって立ち上る黒煙に驚きを露にしていた。
　これも蒼のカリスマの策略か、得体の知れない策に混乱するヨハンだが、直ぐに状況

確認の為に檄を飛ばす。
『っ、直ぐに団長達の通信を繋げ！　団長、オルドリン達の状況はどうなっている!?』
『通信、繋がりません！　恐らくは爆発による影響かと思われます！』
『ぬぅぅ……』
　やはり、マリーベル達はあの拠点にいる。しかも恐らくは最悪に近い状態で孤立、もしくはそれ以上の被害が出ている可能性すら考えられてしまう。自らの拠点を破壊してまでオルドリン達を亡き者にしようと言うのか。一般的戦術論から余りにかけ離れた策略、しかしこれも蒼のカリスマの罠だと考えれば、納得してしまう自分がいる。
『あっ、生存反応を感知！　これは……オルドリン達です！』
『っ！』
　そんな時、オペレーターから朗報が届く。モニターに映せば、煙の中から出てくるジープにオルドリン達の姿が確認できた。無事だった事に喜ぶのも束の間、嫌な予感を感じ取ったヨハンは即座に次なる指示を飛ばす。
『各ＫＭＦの降下を！　恐らく、敵は直ぐに出てくるぞ！』
『了解！』
『ランスロット・ハイグレイル、スタンバイ！』
『並びにブラッドフォード・ブレイブ、ゼットランド・ハート、シェフィールド・アイ、

降下準備完了！』
『よし、降下開始！』
　オルドリン達が脱出した絶妙の距離感で彼女達の機体が新大陸の大地に降り立つ。流石の手際だと一同はヨハンの手際に感謝するが、その一方でその表情は何処までも暗い。
　車をオルフェウスに任せ、機体に乗り込んだオルドリンが待っていたのは懐かしの愛機のコックピット、彼女の搭乗と共に愛機であるハイグレイルは起動し、全てのシステムが正常に稼動する。
『皆、良く無事だった！　状況の報告を急いでくれ、中で一体何が起こった！』
『ヨハン戦略顧問。その……マリーが』
『なに？　姫様が、マリーベル団長がどうかしたのか!?』
『……っ』
　ソキアの言葉にヨハンは設問するが、誰もそれに答える事は出来なかった。否、それに応える間もなく、状況は更なる変化を迎える事になる。
「来るわよ！　全員気を引き締めなさい！」
『『っ!!』』
　浮遊するバイクに股がり、通信に割り込んできたのはライフルを担いだヨーコだっ

た。ヨハン達はＺ―ＢＬＵＥの一員である彼女の登場に戸惑い、オルドリン達は否応なしに目の前の光景に釘付けとなる。

燃え盛る炎の中から現れる無数の機体、その中でも特に巨大なその影は、機動兵器に乗るオルドリン達も見上げるほどに巨大だった。

『な、なによ……これ』

『この、大きさは……』

『連中、何てものを造り上げたんだ！』

それは、破壊を意味する巨大ＭＳ。それ一体だけで幾つもの都市を殲滅できる大規模な破壊兵器。嘗てナチュラルとコーディネーター、人類が対立した世界で全てを破壊せんと生み出された悪魔の兵器。

そして、対するはその構造上からそのシステム無しでは動かすことは不可能とされてきた、嘗ての裏組織アマルガムが作り出した獣の名を冠した巨大ＡＳ。

デストロイガンダム、そしてベヘモス。無数の機体の群の中でも飛び抜けた巨体を誇る機体がそれぞれ五体、合計十機がオルドリン達の前に君臨していた。

『どーよ、俺達が造り上げた汗と涙の結晶。喜んでくれたかい？　この日の為にパパ、一生懸命頑張ったんでちゅよ～』

耳朶に響いてくるのは何処までもふざけた言動を貫く男、ゲイツのものだった。奴の

乗っている機体は血の様に紅く染め上げられている。
　そしてそのＡＳの横には蠍の形を模した巨大な兵器、ナイトギガフォートレスと呼ばれる大型ＫＭＦがゲイツの操るＡＳの横に並んでいる。その位置からして、恐らくはベルクが乗っているのだろう。
『なぁパパさんよ。折角プレゼントをお披露目したんだ。このままカミナシティまでパーティーと洒落込もうじゃねぇか！』
『おっとベルク君、それはグッドアイデアだ。後でアイスキャンディをやろう』
『さて、そう言う訳だから騎士様達よぉ、もうお前らに興味はねぇんだ。逃げるんなら、止めはしないぜぇ？　尤も、この軍勢から逃げられたらの話だがよぉ！』
　嘲笑うベルクに、しかしオルドリン達は何も言い返せなかった。圧倒的戦力の差、普段のオルドリン達ならば負けじと応戦するだろうが、彼女達の柱でグリンダ騎士団の象徴であるマリーベルの不在が、今のオルドリン達に大きな影を落としていた。
「ちっ、流石にこの数は骨が折れるわね。それにあのデカブツ、こんな事なら私もガンメン持ってくるんだった！」
　そして、ヨーコもまた追い詰められた状況に冷や汗を流す。見上げるほどの巨大な機動兵器、何れもが強大で一部隊や個人では手に余る。このままではなぶり殺されるだけだ。そう誰もが思った時、ふとベルクがある疑問を感じた。

『あん？　そういや、シェスタールのお坊っちゃんはどうした？』
『あぁ？　あの坊やがどうした？』
『いや、こう言う時口うるさく言ってくるからよ。やけに静かだから気になって……』
いつもならこのタイミングで食って掛かってきそうなモノなのに、今日に限ってそれはない。不思議に思ったベルクが辺りを見渡したとき……それはいた。
砕かれ、残骸となったＫＭＦ。それは先程までシェスタールが乗っていた機体だった。何故奴の機体があんな事になっている。不思議に思うベルクだが、それ以上に近くで佇む優男に目が行った。
優男の後ろには目をパチクリとさせているマリーベルが佇んでいる。何故彼女が見慣れない男と一緒にいるのか、恐らくはあの優男も蒼神教にノコノコ入信してきたバカの一人なのだろう。逃げ遅れ、基地内を彷徨っていた所にマリーベルと遭遇、命からがらここまで逃げてきたといった所だろうか。
その割には衣服に煤や汚れが着いていないことが不自然だが……余程運が良かったのだろう。いやこの場合はその逆か。
『ほほう？　まだ逃げ切れていない間抜けがいたのかよぉ。バカだなぁ、そんな女見捨ててとっとと逃げれば良かったのによぉ。まぁ、運が悪かったと思って諦めてくれや』
「――その前に、一つ聞いても良いだろうか？」

『あん？』

「何故、こんな事をした？　どうしてワザワザ蒼のカリスマの名前を使い、こんな真似をしたんだ？　捕まっていた人達は老若男女問わず、皆疲弊し、傷付き、廃れていた。サイデリアルという脅威から解放され、漸く自由に生きる事が出来るのに、何故お前達はそれを縛る。誰かに感謝するという気持ちを踏み躙れる」

『――――ぶ、ブハハハハッ！　おいおいマジか!?　お前マジで言ってんのか!?　おい聞いたかよゲイツ、コイツ本物のバカだぜ。この期に及んで命乞いじゃなく俺を追及してきやがった』

『良かったじゃねぇか兄弟。ファンが出来て』

『いらねぇよこんなカス。おい、質問に答えてやるよ優男、そんなもんはな強い奴にとって関係ねぇんだよ。この世は弱肉強食、弱く、騙され、陥れられた奴が悪いのよ。感謝の気持ちぃ？　んなもん勝手に抱いたのが悪いんだろぅがよぉ！　利用され、バカみてぇに踊らされてなぁ！　いやぁ、見ていて愉快だったぜ。蒼のカリスマの名前に吊られてホイホイやってくるバカを見るのはよぉ！』

「――――そうか」

『それに、あのトレーズだって言ってただろうがよ！　闘いこそが人の本性だってなぁ

！　俺達ジルクスタンの人間は闘いこそが生き甲斐。ならよぉ、俺達の生き方もまた肯定されるべきだって事だろうが！』

「……そうか」

『疑問は解消されたか？　ならとっとと死ねやぁ！』

男からの質問を嘲笑うベルクは、そのお返しとばかりに己の機体を動かしていく。蠍の尾が動き、先端が開くと、そこから目映い光が降り注ぎ、男とマリーベル諸とも呑み込んだ。

光は軈て爆発し、紫色の煙が空に向かって昇っていく。サクラダイトの光、その光景を目の当たりにした誰もが（ヨーコは除く）絶句していた。

『ハッハァ！　どうよ兄弟、綺麗な花火だったろぉ？　今度はカミナシティでもっとド派手なモノを打ち上げてやるからよ』

『ソイツは楽しみだ。花火大会なんてガキの頃に見たきりだったからなぁ……あん？』

ふと、ゲイツは違和感を感じた。ベルクの機体の放つ光は間違いなくマリーベルもあの優男も呑み込んで消し炭にした筈。なのに、煙の中から見える影は消し炭処か、未だ人の形を保っている様に見える。

もしや意外にも威力を抑えて放ったのか？　ベルクの意外な爪の甘さに訝しむと

……。

「――――成る程、弱肉強食か。確かにお前の言うことも尤もだ」

煙の中から現れるそれに誰もが凍り付く。オルドリンも、ゲイツも、オルフェウスも、ベルクも、グリンダ騎士団の面々も、そして……マリーベルも。

やがて驚愕は恐怖となって伝播していく。それは嘗て世界中を恐怖に陥れ、ブリタニア失墜の切っ掛けとなった男。

「だがな、それは獣の理だ。お前らが獣に成り果て、それでも尚理不尽に力を奮おうものならば――――」

誰も、言葉を発せない。口を開くことが出来ない。恐ろしくて、体が言うことを聞かない。

何故ならば。

「良いだろう。そんなに戦いがお望みなら、俺が相手をしてやる」

怒れる魔人を前に、抗える者など……この場の人間には誰一人いないのだから。

その221

――――破界事変と再世戦争。立て続けに起こる大規模戦争の頃、僕達の国は一度滅びの危機を迎えようとしていた。

ジルクスタン王国の世界に誇れる唯一の輸出品は《兵士》、世界中のあらゆる軍隊、組織に雇われその報酬を国の経済として回してきた戦いの国。この国に生まれた人間にとって闘いこそが収入源となり、戦争こそが僕達の生きていられる場所だった。

戦い、殺し、殺され。そうすることで大国が集まる国連にも負けず、埋もれず、その日まで生きる事が出来ていた。

けど、そんな祖国にある日危機が訪れる。当時、破界の王を名乗るガイオウなる怪物が操る次元獣が、一斉にこの国に押し寄せてきたのだ。

勿論、僕達ジルクスタンの兵士達も次元獣に抗うために出撃、これを撃破しようとした。けれど、次元獣の強さを知らなかった僕達はこれに敗れ、軍隊を初めとした各機能

が全て停止し、この時の僕は国と共に死ぬものだと覚悟していた。
コックピットからでも見える凶悪で醜悪な次元の獣の開かれる顎、これが自分の死に場所かと恐怖で覚悟が揺らぎ始めた時……それは現れた。
グランゾン。世界に多大なる影響を与えていた当時から囁かれる地球圏最強の魔神。それを操るのは後の最強のテロリスト、蒼のカリスマ。彼等が繰り出す光の槍はそこにいた全ての次元獣の体を貫き、鎧袖一触と言う風に掃討していった。
圧倒的。そうとしか言えないほどにグランゾンは強く、眩しかった。その有り様は物語に出てくる魔王の様で、とても禍々しく、それでいて堂々としていた。
子供ながらで、稚拙だけど、今でも僕は思っている。彼等の様になりたいと。強く、何処までも強い彼等の様にいつか自分もああなるのだと、僕は姉にそう誓った。
蒼のカリスマ、グランゾン。僕にとって彼等こそが力の象徴。一度はＺ―ＢＬＵＥに敗北しても、僕が抱く情景は依然として変わらない。
いつか、貴方のように強くなる。それこそが蒼のカリスマというジルクスタン王国の恩人に対する恩返しなのだと……。
この時僕は、そう信じていた。

◇

『ほ、本物か？　コイツ、本当にあの蒼のカリスマだってのか!?』

舞い上がる爆煙と砂塵の中から現れる、蒼いフルフェイスの仮面と白衣の様な白い外套を身に纏う者、それはこの世界に生きる人々にとって恐怖の代名詞とも呼べる人物。

魔人。嘗てこの地球に破壊と恐怖を撒き散らし、表裏問わず全ての武力組織に恐れられ、世界と単独で渡り合ってきた最強の個体。

蒼のカリスマ。ただの優男だと思われていたその男は、マリーベルを庇うように新大陸の荒野にて顕現する。まさかの本物の登場に動揺するのはベルクだけでなく、驚きとその畏怖はマリーベルを始めとしたグリンダ騎士団にまで伝わっていく。

『な、何故蒼のカリスマがここに!?』

『本物……なのか？』

レオンとティンクが口にするのは一様にして目の前の魔人が本物かという疑問

……否、それは疑問というよりそうであってほしいという懇願に近かった。
蒼のカリスマがいるという事は近くにはあの魔神、グランゾンも控えているという事。魔神激昂、当時の事を今でも覚えているレオンの脳裏に、半ば強制的にあの時の光景が脳裏に浮かんでくる。瞬く間に落とされ、粉砕され、蹂躙されていく部隊。地獄と化したその世界の中心に佇むのは蒼のカリスマの最大の愛機、グランゾン。
もし此処で蒼のカリスマがグランゾンと共に暴れだしたら、新大陸は死の世界と化してしまう。そうなる前に何とかしなければとティンクは考えるが、思考が纏まるよりも早く蒼のカリスマは行動を始める。
「さて、暴れる前に憂いは出来る限り無くしておくか。ちょっとオルフェウス君、彼女を彼処の母艦にまで送ってやってくれないかな？」
無数の機動兵器の群を前に自然体で佇む蒼のカリスマに、少し離れた位置で状況を見ていたオルフェウスは突然の指名に驚きを露にする。何故ここで自分を呼ぶのか、単に自分が一番近い所にいたから丁度いい、なんて蒼のカリスマの思考は、当然の事ながらオルフェウスには届かない。
隠れてやり過ごすつもりだったのにこれなら出てくるしかない。そう思いながらも蒼のカリスマへの接近にテンションが高くなるのを自覚したオルフェウスは、顔が熱くなるのを感じながらも極力顔に出さないよう努めながら、蒼のカリスマの側まで車を回

す。

「……蒼のカリスマ、なのか？」

車から降り、開口一番に出てきたのはやはり戸惑いの言葉だった。自分の目の前にいる魔人、それがまさかあんな優男だと見抜けなかった自分が滑稽に思えてしまう。

騙していた事に怒りはしない。それを見抜けなかった自分こそが間抜けだったのだ。故に、それ以上オルフェウスが蒼のカリスマに詰問する事はなかった。

「……騙していたみたいで申し訳なかったね。でも今はどうか控えてほしい。ここから少し事は荒くなる。彼女を連れて可能な限り離れてくれ」

「了解した。そして、此方こそ済まなかった。貴方の意図を見出だせず、足を引っ張った事」

「……え？　あ、うん。ドンマイ？」

何でオルフェウスが謝るのか本気で分からない蒼のカリスマは、取り敢えず状況を進めることを優先し、余計な事を言うのを止めた。そして、オルフェウスに連れられて離れていくマリーベルを見送り、改めて蒼のカリスマはベルク達へと向き直る。

「コホン。さて、ベルクと言ったかな。先程、随分とおかしな事を言ってくれたそうじゃあないか。確か……広告塔、だったかな？」

『っ！』

「人を広告塔扱いするのなら、それなりに代償を支払うべきだ。交渉をするなら常に対等な取引でなければならない、社会での常識だ。そうだろう？」

『ぐ、ぐぅぅぅ……』

一歩、歩み出る。それだけで空気が一段階重くなったのはきっと気の所為ではないのだろう。重力を操る奴の機体は未だに出てきていないのに、何故か物理的に感じる威圧感。これが蒼のカリスマ、初めて相対する魔人にベルクは自身が歴戦の傭兵であるにも関わらず、言葉に出来ない悪寒を味わっていた。

間違いない。目の前にいる蒼のカリスマは本物だ。対峙して初めて分かる威圧感にベルクは完全に呑まれていた。

早すぎる。本当ならもっと事態が進んでから蒼のカリスマを此方に呼び込む手筈だったのに、一体何処から情報が漏れたと言うのか。

このままでは蒼のカリスマが呼び出すグランゾンによって全てが蹂躙される。恐怖に怯えながらも傭兵としての役割をどうにかして果たそうとベルクが躍起になった時、突如蒼のカリスマに無数のミサイルの群れが雪崩れ込んでいく。

連鎖していく爆発は軈て周囲を巻き込み大規模な爆炎と変化する。辺りを凪ぎ払う凶悪な爆撃にグリンダ騎士団はその場で踏ん張る事しか出来ず、ヨーコは伏せることで何とか堪え忍んでいた。

人に対して過剰な程の攻撃、一体何処からとベルクが振り向けば、其処には形態を変化させたデストロイガンダムが佇んでいて、その近くにはゲイツが搭乗しているＡＳが控えていた。
『なぁにをボサッとしてやがるよベルク！』
『げ、ゲイツ……』
『相手が蒼のカリスマならやることは二つだ。グランゾンを出す前に徹底して叩き潰すか、一目散に逃げるかだ！　そして今は奴を屠る最大の好機！　無理難題な状況を覆すのが傭兵稼業の辛いところよ。覚悟は出来たか？　俺は全く出来ていないぜ！』
いつもより三割増しのテンションの高さ、蒼のカリスマという最大の脅威を前に、ゲイツは逃げるよりも此処で蒼のカリスマを殺すことを選択した。
蒼のカリスマは確かに恐ろしい。その伝説は裏組織では知らない者はおらず、破界事変から続く逸話の数々はいつでも自分達の度肝を抜いてきた。
しかし、それもグランゾンありきの話。蒼のカリスマがどうして最初にグランゾンを出さなかったのかは不明だが、それでもノコノコと自分達の前に無防備で現れるのはゲイツにとって好都合な出来事であった。
これなら蒼のカリスマに勝つことも可能かもしれない。これまで受けてきた屈辱の数々、その裏には必ず奴の姿もあった。パトリック＝コーラサワーや荒熊親子を仕留め

ようとした時も、奴は平然とこちらの思惑を簡単に潰してきた。
今日こそ、そんなこれ迄の屈辱の歴史を清算する時。逃走を計るのならその後でも間に合う筈だ。それが最大の間違いであることに気付く筈もなく、ゲイツは続けて追撃をベヘモス達に命じようとして……。
「初手は譲った。次は此方の番だな」
『……は？』
轟々と燃え盛る炎の中から聞こえてきた声に言葉を失った。嘘だ。そんな筈はない。否定と拒絶の言葉ばかりが脳裏に浮かんでくるが、その現実は覆る事はない。
デストロイガンダムという機体は一機で都市部を壊滅させる超規模の機動兵器であり、その火力は移動する要塞であり、その圧倒的な殲滅力は嘗てのメメントモリの様な戦略兵器に分類（カテゴライズ）される程の規格外な兵器である。
人を消すには余りある火力、直撃すれば生き残るのは勿論のこと、肉片の一片まで消し飛ぶのがこの巨大機動兵器であるデストロイガンダムの恐ろしいところ。
なのに、目の前の仮面は肉片と化す処か煤の一つも付いてはいない。どうやってあの爆発から逃げ延びたのか、ヨーコを除いたその場にいる誰もが驚愕し、目を大きく見開かせる中――――彼は動いた。
疾走。それは正に風の如くの速さで戦場を駆け抜け、デストロイガンダムへ向け跳躍

する。人の身では決して到達し得ない高さまで跳んだ蒼のカリスマは何もない筈の宙を蹴り、更に勢いを加速させていく。

標的となったデストロイの胸元にある三つの砲門にエネルギーが集束されていく。それは都市部を一撃で壊滅させる威力を誇る高威力の熱エネルギー。圧倒的火力を誇るその光は蒼のカリスマごとその背後にあるカミナシティまで焼き尽くせんと放たれるが……。

「人越拳――――捩り貫手」

一振りの槍――――否、一発の銃弾と化した蒼のカリスマは放たれる閃光をものともせず、目映い光ごとデストロイを貫いた。

貫通。胸元から背中まで人一人の穴を開通させた蒼のカリスマはそのまま地面へと着地。デストロイガンダムはそのまま仰向けに倒れ爆散、戦略兵器に相当するとされる機動兵器は呆気なく荒野の塵と化した。

『『『――――――』』』

その光景に敵味方問わず絶句する。オルドリンもオルフェウスも、グリンダ騎士団も、ゲイツもベルクも、そしてマリーベルも、目をこれでもかと大きく剥かせて驚きを顕にしており、戦略顧問であるヨハンに至っては口をも大きく開かせて腰を抜かしている。

誰もが驚愕に腰を抜かしている中、無人機である兵器たちは止まらずに蒼のカリスマへ雪崩れ込む。巨大な大太刀を振り上げるのは全長４０ｍの巨大ＡＳであるベヘモス。その総重量数千トンとされる質量の怪物は、その体積を最大限に活かした攻撃を蒼のカリスマへ打ち込んでいく。

爆発や火力でダメなら純粋な質量で叩き潰すまで。繰り出された一撃は間違いなく蒼のカリスマへと打ち込まれ、衝撃に耐えきれなかった大地が亀裂を生み出して悲鳴を上げていく。

普通……いや、物理的常識を鑑みれば蒼のカリスマは汚い潰れたトマトと化している筈。これで蒼のカリスマは斃された。そうベルクが確信するよりも早く、ベヘモスの太刀が浮かぶ。

それは、ベヘモスによるものではない。ベヘモスによって振り下ろされた超質量の一撃は、しかして蒼のカリスマという人間の片腕によって押し止められていた。

誰かが、コックピット内で噴き出した。どういう事だと。どんな理屈だと、人間は当然ながら機動兵器すら圧壊される筈の質量を、どうして片腕だけで防げるのかと。

そんな彼女達の疑問が解消される事なく、蒼のカリスマは動く。片手で持っていたそれを両手持ちに切り替え、自身を軸に回転を描いていく。

――――ベヘモスは数千トン規模の超大質量のＡＳである。それは決して人間の、そ

れも人の手によって持ち上がる代物では断じて無く、ましてや振り回される事なんて断じて有り得ない。

しかし、事実としてマリーベルの目にはそんなふざけた光景が広がっている。赤く、悪魔の一つとして現しているべヘモスは一人の人間の手によって物理的に振り回されている。

「フンッ」

そんな悪夢みたいな光景は更なる悪夢によって塗り潰される。玩具のごとく振り回されたべヘモスはその勢いのまま蒼のカリスマの真上へ放り投げられる。空中での戦闘など想定されていないべヘモス、そもそも投げ飛ばされることなど前提として有り得ない大質量の塊は、ただ木偶の如く呆然としているだけ。

べヘモスのカメラアイが最期に映したのは再び跳躍し、蹴りを繰り出す蒼のカリスマの姿。

「渦廻斬輪蹴（うずまわしざんりんげり）」

繰り出される無数の蹴撃はべヘモスを粉微塵に切り刻んでいく。ショートし、爆発するも爆炎や爆風すらも刻まれていくべヘモスは、まるで最初から存在しなかった様に世界から消滅する。

クルクルクルと、回転しながら着地する蒼のカリスマ。その後ろ姿は何処までも無防

備だが、不思議と誰も攻撃しようとは思わなかった。そう、人格など持ち合わせていない筈の機動兵器すらもまるで恐怖に震えているかの様に、不思議とその場から動こうとはしなかった。

そんな時、蒼のカリスマは戦域から離脱しようとする二機を捕捉する。ゲイツのＡＳことコダールとベルクの愛機であるナイトキガフォートレス、戦局の不利を悟るや否や機体性能をフルに活用して逃げ出すのはある意味流石と言えるだろうが……生憎、彼等が相手にしているのは唯の人間ではない。

――――気付けば、ゲイツとベルクは蒼のカリスマの前へと転移されていた。本人達が転移された事を自覚できないまま、ワームホールによって位置を戻らされていた。

『な、なぁ!?』

『なんで、何で俺達ここにいるんだよぉ!?　なんで目の前に蒼のカリスマがいるんだよぉ!?』

未知なる恐怖が二人を包む。しかし、どれだけ泣き喚こうと、蒼のカリスマの胸中に慈悲という文字はない。

コイツらは、余りにも好き勝手をし続けてきた。自分の名を語り、偽り、利用し、多くの人々を傷付け、更には……親友であるトレーズの気持ちすら踏み躙った。

トレーズ＝クシュリナーダは人を、人類を愛していた。人と闘争は切れないと語るの

も、その先にある未来を勝ち取ることが出来る事を信じていたからだ。断じて、このような行いを赦す免罪符ではない。

既に蒼のカリスマは怒りで埋め尽くされている。相手がどんな手段を用いようと、全て正面から叩き潰すつもりでいる。

そんな怒れる彼に目を付けられた者に一つだけ送る言葉があるとしたら……。

「知らなかったのか？　魔私人からは逃げられないと」

その２２２

機動兵器とは、自動手動問わず人が生み出した文字通り動く兵器の総称である。ＭＳ、ＫＭＦ、ＡＳ、ＡＴ、スーパーロボット、この多元世界には規格から規模、用途、サイズまで多岐に渡って様々な兵器が存在しており、嘗ての地球ではこの機動兵器を用いた大規模な戦乱が地球全土で起こっていた。

ある時は国同士で、ある時は地球外や別次元別世界からの侵略者に対抗する為、多種多様な機動兵器が造られていた。

しかし、そんな機動兵器にも共通点がある。特殊な素材による装甲、機能、システムとＭＳだけでも数多く存在する中で一つの共通点があるモノ。

それは重量である。大小問わず存在する機動兵器には必ずと云って良いほどに金属が使用されており、どんな特殊な素材であってもそれが十数ｍの巨大兵器となればどんなに低く見積もってもトンの領域から出ることはない。

例外があるとすればそれはＺ―ＢＬＵＥに所属する嘗てのバスターマシン７号こと

ノノ位なモノで、サイズの小さなアーマード・トルーパーですら装備次第では総重量が１０ｔに迫ることがある。

つまり、マリーベルを始めとした人間が目にした出来事は実際には有り得ない光景であるということ。背丈２ｍに満たない男性が自身の何十倍も巨大な機動兵器を貫き、持ち上げるなど決してあり得てはならない事象だという事。

それを為すのは正しく人から外れた人外の所業。しかし、マリーベル達は思い出す。自分達の眼前で佇む仮面の男が何と呼ばれ、世界中から畏怖されてきたのかを。

〝魔人〟。そう、彼女達の前にするのは世界最強のテロリストにして最凶の魔人。人の身でありながら人を凌駕する理解の埒外の……怪物である。

「これが……蒼の、カリスマ」

「グランゾンだけじゃなかった。規格外なのは彼自身も同じ！」

機動兵器の群れと戦略兵器に匹敵する巨大兵器を前に、臆すること無く対峙する蒼のカリスマの背中にオルドリンは戦慄する。侮っていた訳ではない、舐めていたり、慢心していたつもりもない。自分なりの評価を以て仮面の魔人を最大限に警戒していたつもりだった。

その認識は砂糖菓子よりも甘く脆いものだと認識するのも当然の帰結だった。自分ではあの蒼のカリスマに敵わない、そう確信するには充分すぎる光景だった。

だが、分からないのはどうして蒼のカリスマが奴等と敵対しているのかだ。蒼神教は蒼のカリスマの名を騙り、蒼のカリスマに恩を感じる者達を一方的な搾取の対象として呼び込む舞台装置でしかない。蒼のカリスマ本人に直接的な害がない以上、本人が出てくるのは意外なことではないかとオルドリンは思う。

（もしかして、蒼のカリスマって私達が思っていた以上に人間味があったりする？）

やっていることは人外のそれだが、もし蒼のカリスマ本人がここへ出てきたのが単に自分を一方的に利用する事が許せないというのなら、蒼のカリスマは自分達が思っていた以上に人間臭い人物だ。

これまで、リモネシアでの惨劇から蒼のカリスマは残虐で冷酷、普通の人間とはその思考から隔絶した人物かと思っていたが、もしかしたらそれは間違った認識なのかもしれない。

……まぁ、やっていることは人外のソレだが（大事な事なので以下略）

ともあれ、蒼のカリスマ一人に任せるのは余りにも忍びない。自分達は騎士、主の下に集い主の為に剣と為す騎士団、そして自分は敬愛するマリーベル＝メル＝ブリタニアの筆頭騎士。

で、あるならば。

『マリー、指示を。私達に指示を頂戴！』

『っ!? お、オルドリン?』
『私達は貴女の騎士、貴女の為なら命だって懸ける。戦うのも、逃げるのも、貴女の気持ち次第よ』
オルフェウスの操る車につけておいた通信機器から主であるマリーベルの息を呑む音が聞こえる。恐らく、彼女も迷っているのだろう。突然現れた蒼のカリスマと魔人と恐れられる彼の力を間近で見せ付けられた恐怖、恐らく今のマリーベルは嘗てのトラウマを想起させている事だろう。
でも、オルドリンは敢えて助け船を出すことはしなかった。自分に出来る事はあくまで騎士として主である彼女から指示を受け取り、それを実行すること。薄情だと思われるかもしれない、自分はマリーの騎士に相応しくないと、そう彼女に拒絶されるかもしれない。
けれど、オルドリンは信じている。自分が慕い、自慢で誇りである彼女がこんな所で俯いたままでいることはないと。
『――――ごめんなさい。オルドリン、心配掛けちゃったわね』
『マリー!』
『ヨハン戦術顧問、私の機体を!』
『りよ、了解!』

団長であるマリーベルの指示に従い、旗艦から己の愛機である機体が投下される。ランスロット・トライアル、赤い色合いのその機体は例え血に染まろうと厭わない鋼の意志を示したマリーベルの決意の証。

オルフェウスの案内のもと、機体へと辿り着いたマリーベルはそのまま搭乗。備え付けられたインカムを耳に取り付け、オープンチャンネルに同調させる。

『総員、敵戦力を迎撃！　蒼のカリスマと協力し、蒼神教を打ち倒し、真実を明らかにしなさい！』

『『イエス・ユアハイネス!!』』

主の命に従い、騎士達は狂暴な猟犬と化す。ランドスピナーを回転させ、機動兵器の群れへと吶喊する彼等の動きはその数の差から自殺行為に等しかった。

しかし、彼女達もこれ迄多くの修羅場を潜り抜けてきた戦士、多勢に無勢な状況は腐るほどあったし、これ以上に絶望的な戦況も多々あった。数こそ多いが、それでも所詮は人の意志を持たぬ機械人形。これ迄多くの経験を重ねてきたグリンダ騎士団にとってそれは苦になる理由にはならなかった。

地を駆けるＡＳやＡＴを撃破し、空を飛ぶＭＳを撃ち落とす。連携に連携を繋げ、火力を重ねて敵の陣営を崩していく。旗艦のバックアップを受けながら一気に攻めるその姿はまさにブリタニアの先駆けと言えた。

そんな彼等を見て蒼のカリスマは感心する。良くできた動きだと、ベヘモスやデストロイといった巨大兵器には梃子摺っているものの、他の機動兵器は瞬く間に撃破し、その動きはどこまでも鮮やか。単純な連携だけならＺ―ＢＬＵＥにだって見劣りしないグリンダ騎士団の猛威に、仮面の魔人は素直に見事と誉めた。
「さて、騎士団の皆さんもやる気を示した所で、此方も始めるとしようか」
『ぐ、ぐぅ……』
『ヌグゥ……』
「本当なら、私もここまででしゃばるつもりはなかった。対抗できる者がいるならその者達に任せ、自分は裏方に回り支援に徹しようと。幾ら私の名を騙った所でそれは私の不手際、やり遂げると言う者がいるならば、それに手を貸すだけに留めておこうと、少し前の私はそう思っていた」
「だが、お前達はやり過ぎた。人の善意を踏み躙り、他者を嘲り、彼の思いも無碍にした。可哀想とは思わんよ。既にお前達はそんな段階を過ぎている」
『……ハッ、蒼のカリスマだとか魔人とか言われても、所詮は人間かぁ！　私情丸出しだバカがっ！』
ベルクが吼え、機体の尾の部分から熱線が放たれる。並みの装甲なら一瞬で熔解する熱線、それだけに留まらず全身の至るところから砲門やハッチを開き、銃弾やミサイル

の雨を蒼のカリスマに降り注いでいく。
相手が魔人だろうと構わない形振り問わずの見境なしな攻撃、爆風が地を抉り、熱線が大地を焼いていく。蒼のカリスマが見せた私情を隙と見て撃ち放った弾薬と全てのエネルギーは余すこと無く蒼のカリスマへ叩き込められた。
舞い上がる黒煙、天にも達する大規模なその煙の規模はカミナシティの総督府からでも確認できる程だった。
『は、ハハハハ、バカが！　どんなに体が強くても所詮人間なんだ。だったらよぉ、兵器の攻撃に耐えられる訳ねぇだろぉがぁ！』
大量の汗を流しながらベルクは嗤う。全てを出し切ったと、これで駄目なら諦めるしかない。傭兵として好き勝手生きてきた自分だ。死に対する覚悟はとうの昔に出来ている。
そう、自分は屈しない。喩え死だろうが自分を屈する事は叶わない。自分は恐怖など抱かない、何故なら、此処で死んだとしても巫女が創る新しい世界には自分の幸福が約束されているのだから。
だから、恐怖を抱くことなど――――。
「なんなんだぁ、今のはぁ？」
『ひぃっ!?』

（やっぱ無理ぃ。恐すぎるぅぅ!!）

黒煙の中から無傷で現れる魔人にベルクの心は悲鳴を上げる。勝つ負けるの問題じゃない、そもそもこの化け物とは出会してはならない類いのモノだ。

そう思っても既に時は戻らない。コックピットから脱出しようとするベルクだが。

「ワームホール、展開」

蒼のカリスマが右手を上げると、幾つもの黒い孔が空間を穿ち現れる。なんだと思うのも束の間、蒼のカリスマはワームホールへと飛び込み、重力加速によって速度を爆発的に引き上げる。

高速から音速、そして亜光速へと至り一筋の蒼い閃光と化した魔人は拳を突き出しＫＧＦ――――バタララン・ドゥごとベルクを貫いた。

『あ……ぱぁ?』

痛みは無かった。痛みや驚きよりもただ恐怖と戸惑いしか無かったベルクは自身が何をされたのか最期まで理解できないまま、愛機と共に爆発。骨も残らないまま消え去った。

残りはお前だけだと蒼のカリスマの視線はゲイツへと向けられる。彼の操る赤いコダールは特殊なシステムであるラムダ・ドライバの恩恵を受けている。その性能は純粋な戦闘力ならばベルクの駆っていたＫＧＦよりも勝っている部分が多い。

だが、それでもゲイツは全く勝てる気がしなかった。相手は生身でも規格外な超弩級の怪物、マトモに相手をした所で結末は見えている。だったらいっそのこと蒼のカリスマに降ればいいと思ったが、相手の様子からしてその気は毛ほどもないだろう。

傭兵である自分だが命は惜しい。何故なら自分は生粋のサディストであり、同時に快楽殺人者。楽しいから殺し、楽しくなくても殺す。仕事だから殺す。殺して殺して殺すのが我が稼業。

平和な世界などクソ喰らえ。今回のあの国に加担したのだっておまんまを食いっぱぐれるのを防ぐためでしかない。

『そうさ、俺は死なない！　何故ならば、俺様には最高のお守りであるこのモミアゲがあるからだ！』

「だったら、そのモミアゲごと根刮ぎ刈り取ってやりましょう。頭髪もろとも、ね」

『怖すぎィ！　しかし挫けない。何故ならば私は努力する人間だからだ！』

そう言って、ゲイツは逃走を計る。無駄な事だと理解しながらも、それしか方法は無いと傭兵であるゲイツは任務よりも自身の命を選択した。

もうアマルガムは存在しない。このまま逃げ切り何処か遠い場所で傭兵を続けよう。未来の自身の人生設計を描くという現実逃避をしながら。

『悪いけど、裏切り者に逃げ道は用意してないよ』

『ふぇ？』

その言葉を最期にゲイツもまた己の機体と共に消滅した。自身に何が起きたか理解できぬまま。

呆気ない最期となったゲイツを尻目に蒼のカリスマは目の前に現れるＫＭＦを注視する。両肩に楯を取り付けた独特なフォルムな機体、それを目にしたオルフェウスは驚愕に目を見開かせていた。

（今の加速、スザクのランスロットやカレンちゃんの紅蓮とも違うな）

残像を残すほどのハイスピード、ＫＭＦが出す限界速度を遥かに超える機体性能に蒼のカリスマは訝しむ。まるで乗り手を考慮していない機体だ。これ程の機体を操るのは相当の実力者でないと成り立たない。

一体どんな奴が……そんな風に考えていると、眼前のＫＭＦは跪き。

『お待たせしました我が神よ。貴方を我がジルクスタン王国へ案内致します』

「……あぁ？」

思わず素の声が出てしまった。

その２２３

「……聞き間違いかな。今君は私を神と呼んだのかな？」
『はい。御身は我がジルクスタン王国にとって最大の恩人であり、我等の神。手前勝手ではありますが、今はそう呼ばせて戴きたい』
聞き間違いかな？　半ば現実逃避のつもりで訊ね返すが、返ってきたのは肯定の言葉。その声色からまだ成人にも満たない子供であろう少年の台詞に蒼のカリスマは憤慨や敵意以上に強い呆れを覚えた。
『我等が神、蒼のカリスマよ。どうか私達の国へと足をお運びください。どうかその力で我等を未来へ導いて欲しい』
「――――勝手な事を言いますね。私の名を騙り、偽り、無関係の人間を騙して酷使していた君達に今さら協力しろと？　いやそもそも、何故私を神と呼ぶ。そこまで私を神格化させたい理由はなんだ？」
『お怒りはご尤も、しかしどうか聞いて戴きたい。本来ならば蒼神教はあのような兵器

開発の工場拠点ではなく、純粋な神殿として活用するつもりだったのです』
「では、あの様は一部の者達による暴走だと？」
『誠にお恥ずかしい限りです。私がここへ訪れたのも御身のお迎えと同時に指示を履き違える者達に制裁を加える為なのです』
目の前のＫＭＦに乗る少年だと思われる子供の言葉に蒼のカリスマは自身を奉る神殿の様相を思い浮かべてゲンナリと精神的に疲労感を覚える。一部の部下達による暴走、その粛清の為に単機でここへ訪れたと語る少年に蒼のカリスマ――――シュウジは一応その言葉に嘘はないと察した。
言葉を鵜呑みにするわけではないが、ゲイツとベルクが死した今、蒼神教に関する情報を知るには目の前のＫＭＦから得るしかない。
「――――それで、そのジルクスタン王国が私に何のようだ？　恩人、と君は言っていたが私はそんな記憶はないのだが？」
『……無理はありません。あの時、貴方は私達を省みる程の余裕は無かったようですから』
何処か達観の混じった声にシュウジは訝しむ。まるで自分と目の前の少年は何処かで出会っているかの様な、当時の自分の事を知っているかの様な口ぶりにシュウジは些か以上に興味を抱いた。

そして、ＫＭＦのハッチが開かれる。通常とは異なる作りをしているＫＭＦ、コックピットというよりそれはまるで人を無理矢理生かしている生体ポットの様なそこから現れるのはパイロットスーツ越しからでも分かる程に痩せた体躯の少年。バイザーを付け、全身に管を指した少年が浮かべるのは満面の微笑みだった。

その顔にシュウジは何処か既視感を覚える。

「――――君は」

『僕を覚えていますか？　僕はシャリオ、嘗て貴方と貴方の相棒に命を救われた者です』

その言葉にシュウジは嘗てとある街で起きた僅かな戦いの出来事を想起する。

それは当時、とある街で起きた悲劇。ガイオウとアイム＝ライアードが率いるインペリウムが世界中を破界しようと次元獣をけしかけ、大小問わず多くの国々が滅び、統合を繰り返してきた。ジルクスタン王国もその一つで戦うことを生業としている兵士達だが、それでも次元の力を有する獣相手に優勢に立ち回る事など出来はしなかった。

燃え盛る街並み、圧倒的な力で暴れ回る次元獣。その力に為す統べなく他の小国と同じ末路で終わるのだと戦場に出たシャリオと遠くでそれを眺めていたその姉も悟った時――――彼等が現れた。

グランゾン、そして蒼のカリスマ。最大最強にして最悪のテロリスト。素性も目的も一切不明な彼が街で暴れ回る次元獣を粉砕。正しく、鎧袖一触だった。

その様を見せ付けられたシャリオは病で悪くなった視力をフルに使ってその姿を脳裏に刻み、その姉もまた荘厳とさえ思えるグランゾンの姿に控えていた。あれこそが戦いを全てとするジルクスタンが信奉する神なのだと。

それから、ジルクスタンのトップである二人は蒼神教なる宗教を設立し、その影響を少しずつ国内に広めていった。結果、ジルクスタンは蒼のカリスマとグランゾンを信奉する宗教国家となり、国民は戦いに対して神聖視すらするようになった。

蒼のカリスマ――――シュウジもまた思い出す。確かに自分はインペリウムの放つ次元獣を倒し、その途中で次元獣の群れに襲われている街を見付け、そこに武力介入した事。多くの機動兵器が倒れる中、これ以上暴れさせてやるものかと次元獣をいつもより多く屠った事、その出来事全てが思い起こさせる。

「君は、そこにいたのか」

『はい。僕はあの時貴方に……蒼のカリスマによって救われました。圧倒的な力で、ジルクスタン王国を守ってくれました』

「――――私は、別に救うつもりはなかった。ただ次元獣に、インペリウムの好きにさせるのが癪だったから、一方的に介入しただけだ」

『それでも、僕達はあの時滅びずにすみました。蒼のカリスマ、我等が神よ。どうかその力を以て我々の行く道を巫女と共に照らして欲しい』

そう言って深々と頭を下げてくる少年に蒼のカリスマは掛ける言葉を見失う。もしかしたらこれは自分の不手際かもしれない、と。

あの日、あの時あの現場に出会せず、武力介入しなければ、こんな事になることはなかったかも知れないのに。でも、例えそうだとしても当時抱いた自分の気持ちもまた、否定する要素はない。

ならば……と、シュウジは仮面の奥で溜め息を溢し、自身のやるべき事を見いだす。

「……良いでしょう。ならば、連れていくと良い。君達の神になる気など毛頭ないが、私には関わった以上最低限の責任を果たす義務がある」

『っ！　ありがとうございます』

「ただ、ここで暴れていた連中の身柄はロシウ君達に預からせて貰う。君達の民とは言えここは新大陸、無関係な人々を貶めた償いをさせる必要がある」

そう言って蒼のカリスマは未だに空で滞空しているＭＳを始めとした起動兵器に乗っているベルクやゲイツの部下達を睨み付ける。既に彼等の戦意は先の二人が死去した事で根っこからへし折られており、蒼のカリスマが相手という事で残党達は反意を見せる事なく投降、機動兵器から降りた後はグリンダ騎士団によって身柄を拘束される事になる。

そんな彼等を目にした後、蒼のカリスマはシャリオの操るＫＭＦの掌へと乗り込んで

いく。その様子をヨーコは呼び止めようとするが、その声が彼に届くことはなかった。
何故なら。
「ヨーコ＝リットナー、アンタの腕を見込んで一つ頼みがある」
「貴方は……」
「俺はオルフェウス。アンタさえ良ければジルクスタン王国への侵入に護衛として雇われて欲しいんだが……」
ヨーコが静止の言葉を口にする直前、それはいつの間にか隣にまで来ていたオルフェウスによって止められる。彼の口から出される提案、一瞬迷うヨーコだがその間にも蒼のカリスマことシュウジはＫＭＦと共に空へと昇っていく。
（……どうして、貴方は何も言わないの？　どうして私に、私達に何も言わないで一人で行動するの？）
ずっと、彼はそうだった。辛い時も弱味を見せず、敵に洗脳されかけた時も必死に自分を偽り続けてきた。苦しい筈なのに、決してその事を口にはしない彼がヨーコにはどうしても我慢ならなかった。
故に、彼女は決断する。
「いいわ。その提案乗らせて貰うわ」
「そうか、有難い」

「でも、その前に一つ良い？　もう一人、この件に絡ませたい友人がいるの」
その笑顔は何処までも無邪気だった。

◇

――――ジルクスタン王国。荒野と海に囲まれた国、資源が乏しく、サクラダイトという科学燃料と子供を兵士として育て、それを輸出品と称して各地の内紛に送り込む世界屈指の傭兵国家。
そんな国家の信仰心が厚いのは偏に一人の女性によるもの。〝予言の巫女〟、度重なる国家の危機をその類まれな予知能力によって回避、ないし乗り越えてきた傑物。
そんな彼女の座する玉座に一人の仮面の男が通される。蒼のカリスマ、未だに世界から恐れられている最凶のテロリスト。彼を知る他の国々からはなまはげの如く恐怖の

象徴として語られており、あのオーブですらコメントを控える程の怪物。
対してそんな人物を前に玉座に座る巫女は微笑みを浮かべる。漸く会えた。漸く巡り会えた。度重なる〝やり直し〟の中で漸く彼女は目の前の魔人と出会えた。
「初めまして、蒼のカリスマ。この度は我が国に訪れて下さり、誠にありがとうございます」
「――――――」
余りの喜びに思わず声が上ずってしまうが、それに対して目の前の仮面の男は何処までも冷たい。けれどそれでいい、それでこそだと女は笑みを深める。
「我が大恩の君、蒼のカリスマよ。どうか我が望みを聞き入れて欲しい」
「……望み、だと？」
長い金の髪を靡かせ、玉座から立ち上がり蒼のカリスマとの距離を縮めていく。一歩歩みを進める度に仮面の魔人からは凄まじい圧力を受けるが、今の彼女にはそれすらも心地よい。
「その対価に、全てを捧げましょう。私も、私の弟も、この国全てが貴方のモノとして献上致しましょう」
サラリと口にする女、彼女の言動に蒼のカリスマは何処と無く奴を幻視する。自分はおろかこの国全てを明け渡すと語る予言の巫女、破綻者とすら思えるその言動に蒼のカ

リスマは不快感を覚える。
　さっさと断りを入れて、とっとと終わらせよう。口を開こうとする蒼のカリスマだが、それよりも速く巫女が言葉を紡ぎ。
「私の願いは唯一つ。私を妻として娶り、新たな世界でのジルクスタンの王となって戴きたいのです」
「ごめんなさい。タイプじゃないんで」
　思わず、素の声でお断りをしてしまった。

その２２４

「私では……不服ですか？」
「ある意味そうと言えるかもしれませんね。少なくとも、貴女を前にしても私は微塵もその気にはなれない」
　目の前の巫女、シャムナからの唐突なプロポーズに思わず素で返答してしまった蒼のカリスマだが、彼女がショックを受けている間にどうにか気持ちを持ち直し、持ち前の振る舞い方を取り戻す。
「勘違いさせたようで訂正しておきますが、別に貴女が醜いという訳ではありません。私には既に気持ちを固めた相手がいる。彼女が幸福な人生を歩めるまで私は誰ともそういう関係になるつもりはない」
「成る程、既に想い人がいらっしゃると。かの魔人にその様な人物がいると知れたのは収穫です。ですが……」
「申し訳ないが、金品の類いを幾ら積まれた所で貴女方の望みに応えるつもりはない」
「それは……リモネシアがあるからですか？」

シャムナから告げられるリモネシアの一言に蒼のカリスマ――――シュウジの眉が僅かに吊り上がる。動揺はしない、相手が予言の巫女と称されている以上この程度調べられている事は想定済み。寧ろこれくらいの情報は簡単に集められるという判断基準が得られた程だ。

恐らく、向こうは此方の素性も調べている。世界中に自国の兵士を輸出品として扱っている国だ。兵士が稼ぎに外へ出向するという事は、それだけ外の情報は得られるという事。各国の主義主張、精神や信仰問わず、兵士という中立な立場で忍び込む究極の人海戦術。

恐らくはその情報を以てこれまでの情勢の中生き残って来たのだろう。それらの情報を統合すれば未来予知にも似た芸当も可能、ソレスタルビーイングの量子演算機構であるヴェーダクラスの情報整理能力があればの話であるが。

それが可能なのは現状シュナイゼルしか心当たりがない。目の前の巫女が彼ほどの情報を操る能力があるのかは不明だが、それは違うのではないかとシュウジは仮面の奥で訝しむ。

「何故、貴方ほどの御方がリモネシアという小国に固執するのです。その気になれば世界すら手に入れられる貴方が、どうしてそこまでリモネシアに拘るのですか？」

「貴方が私をどう見ているのかは知りませんが、私に世界をどうにかしようなどという

分不相応な野心は抱きません。第一面倒です。その様な事を考える暇があれば、明日の夕飯の献立を考える方が余程有意義だ」

蒼のカリスマ――――シュウジは、どれだけ力を得ようともその根っこには一般的な倫理観が遺伝子レベルで染み付いている。世界を支配するなんて大層な野望は抱いた事などこれ迄を振り返っても皆無だし、そもそも企む意味がない。

そう遠くない未来にこの世界、この宇宙は破滅を迎える。全てを巻き込んだ大消滅、避ける術は現状ただ一つしか存在しない中、そんな状況で力を以て世界を支配した所で、待っているのは短い優越感のみ。

「では、此処ではない別の世界ならばどうですか？」

「――――なに？」

シャムナの溢したその一言に、シュウジは一瞬仮面の奥で真顔になる。別の世界、この様々な世界が融合した多元世界に於いて、その言葉は文字通りの意味を指している。目の前の予言の巫女は冗談や酔狂でそんな戯れ言を口にする女ではない事は、この短い時間の中のやり取りで理解できた。

だからこそ解せない。別の世界への転移、それだけの次元力の応用がこの国では可能となっているのか。不思議に思うシュウジだが、ふと一つだけ可能となる手段があることに気付いた。

「……まさか」
「ふふ、流石に気付かれますか。そう、この神殿の奥には嘗てのアマルガムが所有していたシステム、ＴＡＲＴＡＲＯＳが稼働準備に入っております」
　現地球に住まう大半の人々の命を犠牲に時空振動を起こし、時空修復を行う禁忌のシステム、まさか完全に破壊されず回収し修復されていた事実に、シュウジは自身の詰めの甘さに眉を寄せる。
「蒼のカリスマ様、貴方に我が国の祖神になって頂きたいのです。確かに我が国は争いしか知りません。戦い、奪い、踏みにじる事しか知らぬ国ですが、漸くその因果から抜け出せる算段が出来たのです。嘗てトレーズ＝クシュリナーダは言いました。戦いこそが人の本質だと、それに倣うのであれば、我が国こそが人の本質を最も色濃く顕しているのではないかと」
「人は戦い、争い、その果てに平和という理想を手にする。彼の言葉にはそういった一面もあると思いますが？」
「ですが、その戦いの中で失われた命は戻ってきはしないのもまた事実です。理想と仰いましたね？　ならば、その理想に辿り着けない国は一体どうすればいいのです」
　そこまでシャムナが口にした事で、シュウジは彼女の云わんとしていたモノを察した。彼女が行っているのはＴＡＲＴＡＲＯＳを用いての脅しや命令ではない、シャムナ

というジルクスタンの支配者は蒼のカリスマという自分にすがり付いているのだ。
これ以上戦いが起これば、兵士という国の財産は無くなり、収入源を失ったジルクスタンは滅ぶしか無くなる。ジルクスタンという国に未来はない、やり直さなくても分かる避けようのない結末に彼女に残された手段はこれしか残されていなかった。
世界の人命の半分を失ってもジルクスタンを守る。それを可能としたのが時空振動と時空修復、そしてＴＡＲＴＡＲＯＳなのだ。
嘗て同じＴＡＲＴＡＲＯＳを用いて人生をやり直そうとしたレナード＝テスタロッサとは違う。逃げる為ではなく、国を守る為に時空修復を行おうとしているシャムナに、シュウジは一瞬だけ言葉を詰まらせた。
今の彼女は嘗てのシオニー＝レジスと酷似している。滅びの危機に瀕した祖国を救うため、必死に足掻いてもがいて、これしかないとすがり付く思いでアイム＝ライアードに固執した頃の彼女に……。
「蒼のカリスマ――――いいえ、シュウジ＝シラカワ。貴方もこれまで多くの戦いに身を寄せていたのでしょう？　ならば、もういいではありませんか。貴方はもう戦わなくていい、それだけの結果を今日まで世界に示し続けていた貴方に誰も責めたりはしません。それこそ、世界の半分の命を報酬として支払ってもお釣りが来る位には……ね」
「俺はそこまで打算的にはなれんよ。俺が戦う理由はいつだって自分の心に従ったまで

の結論に過ぎない。これまで戦ったからその報酬？　ふざけるなよ。俺はそんな言い訳の為に戦ってきたんじゃない」

それでも、シュウジはシャムナを否定する。戦ってたのはジルクスタンの兵士達だけじゃない。Ｚ―ＢＬＵＥもリモネシアの皆も、地球人類も、この宇宙に住まう全ての命が明日も分からぬ未来の為に戦っている。

滅ぶのが嫌なら、誰かに頼ればいい。自分なんかにすがり付く位なら国連にでも頼ればいいのに、弱味を見せることの意味を履き違えている輩が多すぎる気がする。

「アザディスタンは世界と共に生きる道を選んだ。リモネシアも何度も立ち上がる意地を見せた。なら、アンタの国だって同じことが出来るんじゃないのか？　戦いしか出来ない？　そんなの言い訳だろ？　戦いしか出来ないんじゃなく、戦いしか知ろうとしないから、いつまでもこの国は停滞したままなんじゃないのか？」

「……随分と、勝手な事を言う」

「事実だ。それに、仮に別の世界に転移してそこでやり直そうとして、どうやってジルクスタンを立て直す？　やり直した所で一つしかやり方を知らないあんた達が、どうこの国の人々を導くんだ？」

国を守る為に世界を渡り、そこでまた戦いを繰り返すのであれば、それはもうやり直す意味がない。その大事な部分を自分ではなく蒼のカリスマである自分に丸投げして

いる時点で既に先は見えている。シャムナという巫女もまた先行きの暗い未来に絶望したのだろう。故に別世界へ転移し、少しでも滅びの未来を先伸ばしにしようと画策する。

「シャムナ、あんたは間違えた。頼る相手を、手を伸ばす相手を。なぁ、これまであんたには多くの人間が手を差し伸べたんじゃないのか？　本当はアンタにも親身になってくれる人がいたんじゃないのか？」

言われて、思い出す。国連に媚を売る情けない女と内心で吐き捨て、それでも何度もしつこくこちらに歩み寄ろうとした一人の真摯な女性の事を。

シャムナは選択を間違えた。別世界への転移と蒼のカリスマという絶対的力に固執するのではなく、困難でも誰かと共に今いる世界で精一杯生きるべきだった。

だが、既にシステムは止まらない。稼働段階だったＴＡＲＴＡＲＯＳが遂にその機構を起動させる。

「それでも、これしかない。私達が、ジルクスタンを生き残らせるにはもうこれしかないの！　シャリオ！」

瞬間、神殿の天涯が崩れ、あのＫＭＦがシュウジの前に立ちはだかる。どうやら此処で戦うつもりらしい、見れば玉座の奥へ繋がる通路へシャムナが駆け込んでいく。恐らくはあの先にＴＡＲＴＡＲＯＳがあるのだろう。

しかし、それは出来なかった。加速を着けたＫＭＦがその加速で蒼のカリスマを機体ごと外へ投げ出したからだ。
神殿から弾き出され、遠く離れた街中へと落とされる。舞い上がる土埃の中から現れるシュウジが目にしたのは夥しい数のＫＭＦだった。
『残念ですよ。貴方がこちらについてくれれば、ジルクスタンの未来は約束されたも同然なのに』
「誰かに行く末を委ねる未来に意味はあるのか？」
『意義はある！　姉さんが築く未来を僕が守る！　ジルクスタン王国は不滅だ！』
まるでそれしかないと語るシャムナの弟シャリオ。悲鳴のような叫び声を上げる少年に果たして大人気なく本気を出しても良いものか。自分を包囲するジルクスタン王国の軍隊、流石に戦いを生業にしている国だけあってその軍事力は確かなモノ。
ラース・バビロンで至ったアレになるか。シャムナのＴＡＲＴＡＲＯＳ稼働まで時間が無いことから迷っている暇はない、仕方ないなと未熟な自分に呆れながらも自身の奥底に眠る可能性を引き出そうとした時。彼が現れる。
『手が足りないか？　ならば今は俺が貸してやる!!』
「！」
空から現れる巨大な影、そのサイズからＭＳだと思われるその機影は、蒼のカリスマ

とシャリオの間に割って入る様に着地する。

「き、君は……」

その機体に覚えがあった。それは以前生きる場所を失った兵士達の代弁者と称し、一度はヒイロ達と敵対する道を選んだ男。シュウジがトレーズの友人だとするならば、彼はトレーズの理解者。

『ジルクスタンの兵士達よ！　お前達の正義、この俺に見せてみろ!!』

張五飛（チャン＝ウーフェイ）、誰よりも兵士に寄り添った男がジルクスタンの国へと降り立った。

その２２５

ジルクスタン王国。ＫＭＦやＭＳ、規格やサイズの異なる機動兵器が数多く配備される首都、そのど真ん中にて蒼のカリスマことシュウジは一国の全戦力と相対していた。ジルクスタンは兵士そのものを国の財力としている国、そう豪語するだけあって小国でありながら、彼らの軍事力は目を見張るモノがあった。四方八方に配置された機動兵器、その銃口の全てが自分一人に向けて狙いを定めている。

一歩でも動けば即座にその銃口の全てから銃弾が放たれるであろう緊迫した状況の中、意外な人物が突然空から割って入ってきた。

彼の名は張五飛、嘗てはヒイロやデュオ達と同じコロニー側のガンダムとして世界と戦い向き合ってきた少年。愛機であるアルトロンガンダム（通称ナタク）と共に現れた彼は、得物を片手にジルクスタン王国の兵士に問う。お前達に正義はあるのかと。

『張五飛だと!?　貴様は今マリナ＝イスマイールの護衛に付いていた筈、何故ここに!?』

「え？　マリナさんも来てるの？」

憤慨した様子で訊ねるシャリオにシュウジが反応する。どうして平和主義の彼女がこんなおっかない国へわざわざ来ているのか、これも国連に属する偉い人の立場故のお仕事なのか、オーブのアスハ代表や今はプラントのクライン女史も何だか忙しそうだし、大変なんだなぁと緊迫した空気に対してシュウジの心境は何処までも平凡だった。

そんなお偉いさんが来てるなら尚更こんな事をしている場合ではないだろうに、それともそういう一切合切も全てどうでもいいというのだろうかあの巫女は。だとするなら少し急いだ方がいい、行動を移そうとするシュウジはこの場を五飛に任せていいかと訊ねる。

「五飛君、今状況は切迫しています。これから私はシャムナ女史を拘束しに行きたいのですが……」

『了解した。ならば殿は俺がやろう』

「感謝を」

短いやり取りの中で必要最低限の会話で役割を決めた二人、シュウジはシャムナの暴挙を止めようと跳躍し、シャリオがさせまいと前に出る。それをナタクのビームグレイヴが薙ぎ払うように奮いこれを防ぐ。

『つ、邪魔をするな!』

『言った筈だ。お前達の正義を俺に見せろと!』

『正義だと!?　そんなもの、決まっている!』

ＫＭＦとＭＳでは規格サイズが異なっている。その機体差から物理的に押し負けるシャリオとその愛機は持ち前の機動の高さと技量を以て五飛のガンダム、ナタクの一撃を受け流す。その若さに似合わぬ卓越した技量、確かにこの少年は戦士と呼ばれるに相応しい実力を有している。それこそ、悲しいくらいに……。

『姉さんと、ジルクスタンを護る!　如何なる手段を用いても僕達の国を、未来を護る!

それが、僕の正義だ!』

『ならば問おう!　国を、姉を護る事が正義と言うのなら、何故貴様は戦うことに固執する!』

『決まっている!　それは、僕がジルクスタンの兵士だからだ!』

シャリオの愛機ナギド・シュ・メインの各所から光が溢れ、その機体は爆発的に速度を加速させていき、それに合わせて周囲の兵器の群れがナタクへ照準を合わせる。この街のど真ん中でこれだけの数の銃弾砲弾を一斉に受ければ、幾ら頑丈なナタクであろうとも無事では済まない。

いや、被害はそれだけに留まらず周囲の建物すら吹き飛ばしてしまうだろう。まだ周辺には事態を呑み込めていない民衆が留まっている筈、五飛は叫んだ。これがお前達が求めている勝利なのかと。

『これが、お前達のやり方か！　ただ一つの勝利の為に多くの犠牲を強いるこんなやり方が！』

『民達は生き返る！　姉さんが創る理想の世界で！　皆、とうに死ぬ覚悟は出来ている！』

シャムナの思惑、それはシャリオにも重々承知していた。姉の企てる計画が為されれば多くの犠牲が生まれる事を。

けれど、それ以上に幸福な世界が待っていることも知った。その世界に到達すれば全ての負債がリセットされる。これまで犠牲になったモノを全て取り戻す事ができるのだと。

シャリオは姉を誰よりも信じている。彼女の言葉もその計画も、何もかもを知りながら、彼はこの道を往くことを決めた。妄信的と言われようと、それが兵士である自分の役目なのだとシャリオは信じて疑わない。

対して五飛は歯を噛み締めた。相手の目論見が何なのか今一つ分からないが、どうやらコイツらは相当ヤバい事案に手を出そうとしている。念の為にと事前にトロワ達に連絡を取り、マリナ＝イスマイールをジルクスタンから遠ざけたのは皮肉にも正解だった訳だ。

砲弾が放たれる。機動兵器にすら通じる質量兵器が惜し気もなくナタクへ降り注い

でいく。着弾による爆発を覚悟する五飛、しかしその衝撃が訪れる事はなく。
　代わりに深紅のエネルギー波が全ての兵器による攻撃を防ぐ。突然の現象に戸惑うジルクスタンの兵士達、だが五飛にはこのような色をした事象に心当りがある。
『今の光は輻射波動……まさか！』
『どうやら、間に合った様ね』
　上空から降り立つ深紅のＫＭＦ、朱い翼を広げてナタクの隣へ降り立つその機体は、Ｚ―ＢＬＵＥ及び黒の騎士団の特攻隊長、紅月カレンとその相棒だった。
「どうやら、向こうは間に合ったようだな」
「なら、私達はアイツを追いましょう。急がないと勝手に事態は終息するわよ」
　遠くで様子を眺めていたヨーコとオルフェウス、援軍の無事の到着に一先ず安心し、自分達も目的の為に行動する。ナタクの優れた望遠カメラがその様子を捉えていたが、五飛は取り敢えず見なかった事にした。
『紅月、来てくれたのは感謝するが……いいのか、お前も今は休養中だった筈だが』
『仕方ないわよ。ヨーコを通じてロシウからの応援要請だし、一番現場に近かったのは私だし……それに』
『この新しくなった紅蓮のテスト、済ませるのに絶好のチャンスみたいだしね』
　それは来るべき決戦に備え、ロイドを始めとしＫＭＦの権威が総出を上げて仕上げた

次世代ＫＭＦの一機。それがこの〝紅蓮特式〟である。

『一機増えた所で！』

シャリオが叫び、再び地上から弾幕の雨が放たれる。避ける事は至難、ならばと紅蓮はその得意な右腕を掲げ、再び輻射波動のバリアを展開。周囲の建物を最低限の損壊に留めさせる。

『生憎と、その程度の弾幕にやられる程私と紅蓮は甘くないわよ』

コックピット内で不敵に笑うカレン、その視線の先には彼が向かっているであろう神殿へと向けられていた。

◇

『何故、こんな事になってしまったのだ』

ジルクスタン王国の将軍、褐色の城壁の異名を持つボルボナ＝フォーグナーは、既に進退が定まりつつある自国の行く末に些か以上の不安を抱きながら、ガン・ドゥ・グーンのコックピット内で部下達に聞こえないように一人愚痴を溢す。

我がジルクスタン王国は既に度重なる大戦により多大な損害を受けている。破界事変に再世戦争、時獄戦役に続いて今回の戦乱。既に軍事力の大半は失われ、兵士を国力としているジルクスタンは既に滅びの一途を辿っている。

それを防ぐには他の小国と同様に国連に助力を要請し、同盟として国連の一部になる他ない。だが、どれだけ言葉を尽くしてもこの国のトップに立つ姉弟は聞いてはくれなかった。

シャムナもシャリオもそれぞれ特筆した能力を有しており、それ故に国民からの信頼は厚い。ボルボナ自身も大将軍と呼ばれる程には部下や国民から確かな信頼を得られてはいるが、その影響力は予言の巫女の力を持つシャムナには及ばない。

そんな彼女が今は新たな世界を創造するという妄言まで吐くようになってしまった。

彼女に任せれば全てが上手く行く、そう信じて疑わない多くの民草によって、この国は破滅の道を突き進もうとしている。

将軍として、止めに入るべきなのだろう。しかし、彼女の計画は既に後戻りの出来ない状態にまで来ているという。アマルガムという裏組織が壊滅したと聞いた時から感じた奇妙な違和感。恐らくは自身の後ろにある神殿に棺桶のような設備が運び込まれた時点で、彼女の計画は止まれない所まで来ていたのだろう。

ボルボナはこの国を愛している。喩え野蛮と蔑まされようと、この国で生まれ、育ち、そして死んでいくのだと決めていた。

だが、それももう叶わないかもしれない。次元力とギアスによる応用で新たな世界を生み出すと言われても、具体的な話が全く見えないシャムナの計画を心の底から賛同することは出来ない。

そもそも、今の世界でジルクスタンは建て直せないと諦めている者が、どうして新たな世界でやり直せると言えるのだろう。だが、似たような台詞で何度忠言をしても、彼女は首を縦に降る事はなかった。

もう、自分には止められない。ならばいっそのこと、現在こちらに向かって来ている彼にトドメを刺された方が、ある意味まだ救われるかもしれない。

『閣下、来ました』

部下から繋がれる通信から思考を現実に引き戻す。重い瞼を開けながらその眼に映すのは、己が搭乗する機体のカメラ越しに見える外の様子。

都市部にまで伸びるこの大橋の向こうから蒼い仮面を付けた魔人が駆けてくる。さっさと己の愛機である魔神を喚べば決着も早まるだろうに、そうしないのは彼なりの気配りなのだろうか。

我がジルクスタンに於いて最大の恩人。押し寄せる侵略者の軍勢から見返りもなく助けてくれた救世の英雄、一部の民衆からは神同然として崇められている恩人が、今度は滅ぼす為にやってくる。

皮肉な話だ。しかしこれこそがジルクスタンの救いかもしれない、彼の愛機であるグランゾンをいつまでも呼ばない事に違和感を抱きながらも、ボルボナは部下達に一斉掃射の命令を下す。

瞬間、蒼のカリスマの前方でミサイル等の弾幕が視界一杯にまで広がっていく。このままでは橋は吹き飛び、ジルクスタン王国に経済的大打撃が打たれてしまうだろう。

避ける事は叶わない。ならば撃ち落とすしかないと、蒼のカリスマ――――シュウジは己の意識と肉体を加速させる。

踏み込んだ足がコンクリートの地面にめり込む。脚に溜めた力を一時的に爆発させ、一瞬の内に残像を残すほどの速さを得たシュウジは、その手足を以て放たれる弾幕を

次々と撃ち落としていく。
銃弾を弾き、砲弾を蹴り上げ、ミサイルは爆発させないよう信管だけを抜き取っていく。圧倒的な物量のそれらをふざけた芸当で次々に無力化されていく光景に、ボルボナを含めた彼等の部下達は言葉を失った。
あれだけの弾幕が全て爆発せずに鎮圧されている。呆けてしまうボルボナだが、これが蒼のカリスマかと戦慄を覚えながら、部下達に第二波の指示を飛ばす。
『ひ、怯むな！　魔人とはいえ相手は一人、数で圧倒しろ！』
「悪いが、これ以上はさせないよ」
ボルボナの耳に届く聞き慣れない声、気付けばその声の主は最後の防衛ラインである部下達のＫＭＦの間をすり抜け、既に此方の懐にまで侵入を許していた。
（こ、これが蒼のカリスマ、なんという突破力！　もはや人間では――――）
そうしている内に蒼のカリスマはガン・ドゥ・グーンを体ごとぶち当たる形で貫き、ボルボナの機体は爆発。自分達が慕う上官の最期に辺りから絶叫にも似た悲鳴が木霊する。そんな中、爆炎の中二つの人影が飛び抜け――――。
悠然と地面へと着地する彼に再び言葉を失う。
「ば、バカな。何故私は生きている」
「見た感じ、アンタはここの事情に詳しそうだ。話ついでに付き合ってもらうぜ」

蒼のカリスマの肩に担がれている我らが大将軍。部下達は勿論、死ぬかと思っていたボルボナは突然の事態に戸惑いを隠せていないが。

そんな彼等の心境に構うことなく、シュウジは再び駆け出すのだった。

その２２６

シャリオと彼の機体によって引き離された神殿との距離は、シュウジの尋常ならざる脚力を以て零に縮められた。圧倒的な速力から生み出されるスピードは前面に打ち出された弾幕を全て打ち落とし、指揮官であるボルボナ＝フォーグナーをほぼ無傷でコックピットから引きずり出す等の人並み外れた力を見せ、遂にその足は神殿内部へと踏み入れた。

肩にボルボナを担ぎながら長い神殿の通路を進む。背後から追走の様子が無いことを確認したシュウジは周囲に人の気配が無いことを確認すると、ボルボナを通路の壁へと預けるように下ろす。

「――と、悪いな。乱暴に扱って、一応怪我が無いように気を付けたが……どこか、痛むところはないか？」

「……お気遣い痛み入る。だが、それ以上に疑問がある。蒼のカリスマ、我等が大恩ある魔人よ。何故私を生かした？　何故、ジルクスタンを滅ぼそうとしない」

「あぁ？」
「我が国の巫女、シャムナ様はこの世界との訣別を選択した。新たな世界で今一度ジルクスタンを立て直そうと、世界中の人の命と引き換えにこの世界からの脱退を決意した。貴殿からすれば酷い裏切りの筈、ならば貴方の魔神で何もかも吹き飛ばそうと考えようと……そう、思われる筈です」
「いや思わねぇよ。どんだけ物騒な奴扱いされてんだよ俺は。確かにテロリストと呼ばれてますけども」
　切羽詰まり絞り出すように己の内情を溢すボルボナにシュウジはいやいやと首を横に降る。確かにシャムナの企てる事は凶悪の一言に尽きるが、だからと言ってその国ごと滅ぼすといった乱暴極まりない手段を取ることはない。シュウジがするのは精々彼女をそうさせる根拠となっているモノを破壊するだけ、別にジルクスタンそのものをどうこうする意思はないと伝えると、ボルボナは安堵の溜め息を吐き、その表情を幾ばくか明るくさせた。
「そう、でしたか。少し安心しました」
「その様子だと、どうやらアンタはシャムナとは違う考えみたいだが？」
「ええ、我がジルクスタンは兵士の国。争いを生きる種として今日まで生き繋いで来ましたが、サイデリアルとの決戦以降戦乱は全くと言っていいほど無くなりました。戦い

という生きるための術を失い、途方に暮れていた我々でしたが、シャムナ様が計画を話した時に思ったのです。いい加減ジルクスタンも、我々も変わるべきなのだと」

ポツリポツリと話すボルボナ、彼は彼なりにジルクスタンに対する深い愛情と視野を持ち合わせていた。これ迄の国の在り方を変える。それは口にする以上に簡単な事ではない、批判も葛藤も当然あった。けれど、国を繋いでいく以上何れ何処かで根本的な部分を変える必要があるのも事実。

幾度となくボルボナはシャムナに進言した。国連に加盟しようと、度重なる大戦で本来なら潤う筈の国庫が、今は国民を飢えさせないよう維持するだけで精一杯。いい加減戦うこと以外の生きる術を身に付けるべきだと、彼はそう忠言した。

しかし、返ってきたのは決まってそれは〝次の世界で行う〟という達観の返事だけだった。戦うこと以外知らない自分達が次の世界へ逃げた所でどうにかなるわけではない。けれど彼女は言った。全ての理は次の世界で造ればいい。

世界を生み出すなどそれこそ神の所業、支払われる命は多大だが……成る程、彼女の言葉が真実ならば確かにそれに見合う価値はあるのだろう。

「だが、そうは思えん。そんな都合の良い話など在るわけがない。確かにアマルガムのレナード＝テスタロッサはそれを為そうとした。自分の都合の良い世界を、自分だけに優しい世界を」

「しかし戦いとは、思い通りにならぬもの。だからこそ私は戦うことに真摯にあろうとした。それさえ出来なければ我々は匹夫にも劣る獣、畜生に成り果てるというのに……」

ボルボナの呟きは哀愁で満ちていた。ジルクスタンという兵士の国で戦ってきた彼だからこそ生きるということに貪欲で、真摯に向き合ってきた。生きること、それこそが戦いなのだと。

しかし、今のジルクスタンにその理念はない。あるのは新しい世界で始まる新しい人生についてだけ、誰もそこに疑問を抱くことはしない、するだけの気力がない。今のジルクスタンの国民達が抱くのは〝早く楽になりたい〟という疲弊した想いだけ。

戦いに明け暮れ、戦いに疲れた兵士の国の末路。そんな疲弊した国を少しでも良くしようと、ボルボナは自身を慕う部下達と共に、祖国を変えようと様々な手段を用いて今日まで活動してきた。

だが、それももう遅いのかもしれない。結局シャムナの意思を変えることは出来ず、目の前の魔人を呼び寄せてしまった。ジルクスタンの滅びは覆らない、喩え新たな世界へ至れたとしてもそれはもう自分が愛したジルクスタンではない。

もう、いい加減疲れた。戦う意味と意義を見失った今、ジルクスタンに先はない。通路の窓から見えるジルクスタンの光景を目にこれ迄の日々を思い返していると。

「なら、今度こそ変えれば良い。アンタのその気持ちを今度こそあの巫女様に伝えてやれよ」
「なに？」
「要するに、あの巫女には自分の理想が叶う装置があるから話を聞いて貰えないんだろ？　だったら、話は簡単だ」
　そんな装置なんぞ、ぶち壊してしまえば良い。項垂れるボルボナに手を差し伸べる蒼い魔人、その顔は仮面で隠れて見えないと言うのに何故か笑っているように見えた。

◇

神殿の最奥、玉座の間の更に奥深く。長い通路の果てに広がる空間、その中心にシャムナはいた。人工的に造り出された空間のあちこちには何かを観測している装置とそれを管理する従者達が忙しなく動き回っている。
「シャムナ様、ＴＡＲＴＡＲＯＳとの接続完了しました」
「Ｃの世界との同調……８０％まで上昇」
「カウントダウン、いつでもいけます」
「ありがとう。お前達にも随分世話になったわね」
目的の成就まであと少し、新たな世界への門出を前に、これ迄付いてきてくれた部下達にシャムナは惜しみ無い感謝を贈る。これで自分達が新たな世界でやり直す段取りは完了した。後はその時が来るのを待つだけ、本来ならば次の世界で自分達の導き手として蒼のカリスマにも来てほしかったが、拒絶された以上拘る意味もない。
「これで、全てが変わる。ジルクスタンの運命、シャリオの運命、そして……この私の運命も」
思えば、此処まで本当に長い道のりだった。多くの失敗と挫折、そしてその都度繰り返してきたやり直しの旅。弟シャリオが死ぬ度、ジルクスタンの民が死に絶える度、何度もシャムナは死と再生を繰り返してきた。
意識だけを過去に飛ばすギアス。死亡した瞬間自分だけが六時間ほど巻き戻るその

力のお陰で、彼女とこの国は今日まで生き延びてきた。死に戻り、それがジルクスタンを支えてきた予言の正体である。

けれど、その死に戻りのギアスを以てしても経済が傾き困窮するジルクスタンを救う手段には成り得ない。度重なる戦乱に多くの兵士が死に、その結果世界は嘗てない平穏を手に入れる事が出来た。

その結果、国益となる兵士は減少し収入を得る戦争という糧も潰えた。今の世界ではジルクスタンを維持出来ない、思い詰めたシャムナが辿り着いた最後の答え。

「レナード＝テスタロッサには感謝するべきかしらね。彼がアマルガムを実質支配したから、私たちという小国が付け入る事が出来た。そしてＺ―ＢＬＵＥが彼を打ち倒した事により巡り巡ってこのシステムを得る事が出来た」

ＴＡＲＴＡＲＯＳ、それはレナード＝テスタロッサが己の人生をやり直すために生み出した禁忌の装置、オムニ・スフィアを転移反応させて物理的に干渉を行う、ラムダ・ドライバの究極形態。

歴史的干渉すら行えるＴＡＲＴＡＲＯＳにギアスユーザーである自身を組み込む。死に戻りという己のギアスの力を利用して連鎖反応を引き起こし、時空振動と時空修復を行う。擬似的な次元力、その力を以てジルクスタンをまるごと新しい世界へ転移させる。

それがシャムナの計画の全容。それが為された暁にはジルクスタンは永劫の繁栄が約束されるだろう。理論上なら死んだ者だって生き返らせる事が出来るし、歴史の改編という超常の力を用いれば弟の病による足や目も直すことが……否、最初から病など無かった様に書き換える事が出来る。

誰もが幸せになれる世界、自分達はそこへ往くのだ。

――――しかし。

「生憎だが、そうはさせない」

「――――来たのね」

そう、現実はいつだって思い通りにはいかない。どんなに自分達を守ろうとそれ以上の理不尽が自分達に襲ってくるのだ。

蒼のカリスマ、その後ろにはジルクスタン軍部の最高責任者、ボルボナ＝フォーグナーが佇んでいる。彼には蒼のカリスマの足止めを命じていた筈、だというのに彼と共にいるという事は……つまり、そういう事なのだろう。

「そう、裏切るのね。ボルボナ」

その言葉は何処までも平坦で怒り等の感情は一切込められていなかった。彼女自身こうなることはどこか分かっていたからだ。ボルボナ＝フォーグナーは自分の計画に

明確に賛同してはいなかったし、シャムナの言葉にも何処か否定的だった。
そんな彼が蒼のカリスマに付くのは然程不自然な事ではない、厳密に言えば彼は裏切ったのではなく、シャムナの考えに賛同出来なかっただけの話なのだ。
「巫女様、もう止しましょう。我々は負けたのです」
「いいえ、まだ終わってはいないわ。私の、私達のジルクスタンは此処から始まるの。何者にも脅かされず、恐れず、自由に生きられる世界。あと少しで私達はそこへ到達するのよ」
「その代償にこの世界の命の大半を支払って？　申し訳ないが此方は貴女の駄賃になるつもりはありませんよ？」
そう言って一歩前に出る蒼のカリスマに竦み上がる程の圧を感じた。蒼のカリスマは怒っている。主であるシャムナを守ろうと身代わりの盾になる従者達、槍を手にして威嚇しようとしているが、その手は震えてしまい上手く力が入らない。彼女達も気付いているのだ。目の前の魔人と呼ばれる者がその気になれば自分達なんて瞬きの合間に挽き肉に出来ることを。
そんな従者の女性達を前に一瞬だけどうするか迷ったシュウジが次に目にしたのは、懐から取り出した拳銃を自身のこめかみに突き付けたシャムナが、躊躇なく引き金を引いた瞬間だった。

◇

――――繰り返す。私は何度でも繰り返す。シャリオの為、国の為、私自身の為に私はこの死に戻りを幾度となく繰り返す。約束された未来、そこで待っている幸福の為に私は決してこのやり直しを止めるつもりはない。

尤も、このギアスを阻める者など存在しない。この世界に生きる全ての命にとって死とは絶対なるもの、死をトリガーに発動する私のギアスは、決して破れる事のないこの世の理そのものだ。

それは、あの蒼のカリスマに対しても同じことが言える。かの魔人ですら死という絶対の理には抗えないもの、死を幾度となく繰り返し死を克服した私には蒼のカリスマですら捉えることは不可能。

とは言え、次に蒼のカリスマと対峙するまで対策は必須、あの魔人を相手に時間稼ぎをすることが我が悲願を叶える最後の障害。きっと、何度もやり直しを迫られる事だろう。

けれど、決して諦めはしない。喩え万分の一の確率だろうと、可能性が僅かでも在るのならばその時点で私の勝利は揺るがないものとなっている。

その先にジルクスタンの輝かしい未来があるというのなら、私は絶対に立ち止まったりはしない。私の野望はまだ終わってはいないのだから！

『いいえ、貴女はここでおしまいです』

（なん……ですって？）

時間の流れが逆行していき、シャムナの意識が過去へと飛んでいく最中、突如として時間の流れは停止する。まるで強い力に押さえられているかのような圧迫感、これまで一度たりとも体験した事のない事象にシャムナの思考は混乱の渦に叩き込まれる。

時間という概念の中、認識できるのは己のみ。なのに聞こえてきた声の主はそんなシャムナを嘲笑うかのように姿を表す。

『真化、太極、これらの領域に至っても我が半身は未だに未熟。今回の貴女のように賢しい相手に出し抜かれるとは、成長している様に見えても彼もまだまだという事ですか』

誰だ。この逆行する時間の中で悠然と佇むこの男は……一体なんだと言うのだ。何処と無く蒼のカリスマ――――シュウジと似ているその男にシャムナはただ混乱するばかり。

『しかし、未熟という事はそれだけ成長の余地があるという事。ククク、彼が一体何処まで至れるのか楽しみですね』

（お前は、貴様は一体!?）

『さて、シャムナといいましたか？　この度は色々と画策してくれたようで、私としても思うところがあった為、今回特例として介入させて頂きました』

『貴女のギアス、それは確かに強力だ。死を切っ掛けに発動する以上、次元力を除いての干渉は至難の技。……しかし』

『我が重力からは、何人だろうと逃れられませんよ。シャムナ、貴女の死に戻りはもう通用しないと知りなさい』

（や、やめ……）

引き戻される。流れていく時間が元の状態へ引き摺られる様に強制的に戻されていく。意識が薄れていく中でシャムナが最後に聞いたのは。

『さぁ、己が運命を受け入れなさい』

まるで死刑を執行する断罪者の声だった。

その２２７

その異変に気付いたのは蒼のカリスマことシュウジだけだった。目の前にいたシャムナが手にしていた拳銃は、間違いなく自身のコメカミに押し付け引き金を躊躇なく引き絞った。

脳漿が血と共にぶち撒ける光景も覚えている。だというのに等の本人であるシャムナは呆然とした様子で佇んでいる。鮮血が辺りにぶち撒けられた様子はない、まるで数秒前の出来事が幻であったかのような錯覚。

（何が……起こった？）

言葉では到底説明できない摩訶不思議な現象、その違和感に何となくのレベルであるものの感じ取れたシュウジは戸惑いながらも整理する。

まるで波打ち際に立って足下が削られ引き寄せられるよな感覚、それが全身に渡って僅かだが感じ取れたシュウジは感覚的にだが理解した。

時間が巻き戻った。ボルボナや他の従者達がどうなのかは分からないが、少なくともシュウジには今この瞬間に時間の逆行が行われたのを感じ取った違和感から推理した。

何故ならこうした出来事に直面するのは今回が初めてではない、次元将ヴィルダークと初めて顔を合わせた時にも時間の流れに深く関わった事を体験しているからだ。

あの時はもっと体感的に感じ取れたのに今回は僅かな合間しか感じ取れていないのは、近くにスフィアリアクターがいないからなのか、それともあのときよりも規模が小さいから察知する事が間に合わなかったからか。何れにせよ仕掛けのタネについてはシャムナ本人に任せるしかない。

いや、今は考察している場合ではない。未だ放心しているシャムナに向かってシュウジは持ち前の脚力を以て彼女との距離を詰めていく。瞬きの内に懐に潜り込まれたシャムナは、今一度自決をしようと銃口を自身の頭部に打ち付けようとするが、それよりも速くシュウジの手が握り締めた拳銃を払い落とす。

初めて目にする魔人の身体能力に驚く暇もなく、次いで奮われる手刀に彼女の意識は強制的に落とされる。これが蒼のカリスマの強さ、グランゾンばかりに気を取られ蒼のカリスマ自身の戦闘能力を見誤っていたシャムナは、悔恨や苦渋の呻きも吐くことなく呆気なく蒼のカリスマの腕の中へ抱えられる事になった。

「ふう、どうにか止められたか」

シャムナが意識を失った事でＴＡＲＴＡＲＯＳはその機能を停止させる。これで残る問題は、外で戦っているであろう五飛の所へ戻り戦いを終わらせる事だけだ。周囲に

は未だ戸惑いながらも敵意を抱いた従者達がその手に持った槍を此方に向けている。余程シャムナに対して忠義に厚い人達なのだろう、その瞳に畏れはあっても立ち向かう気力は失われていない。間違いなくシュウジと刺し違えるつもりでいる。

　そんな彼女達をボルボナが宥め、彼女達を諌めた。

「もうよい。我等の戦いは終わった。これ以上血を流す必要はない」

「ボルボナ将軍閣下、しかし……」

「良いのだ。もう、戦うな。お前達も、私も、変わるときが来たのだ」

　ボルボナの説得に渋々ながらも受け入れた従者達は手にした得物を地面に落とし、泣き崩れる。自分達の国が無くなる事への不安感、それ故にすがるしかなかったシャムナのやり方、どんな理由があろうともシャムナのやり方には賛成できないが、それでも彼女達には彼女達なりの理由があるのだとシュウジは理解し、これからのジルクスタンに幾らか口添えをすることに決めた。

◇

○月▽日

――なんか、長らく日記を書いていなかった気がする。まぁ、それはいいとして今回の騒動について例に習い大まかにだが纏めていこう。

とりま結果だけを言えば、ジルクスタン王国は無くなることはなかった。ＴＡＲＴＡＲＯＳとかいう物騒な代物が使われることは結局なかったし、シャムナがやろうとしていた事は結局自身と一部の人間にしか伝えていなかった事から、公的にジルクスタンは制裁を受けることはなかった。

ただ、蒼神教という厄介な宗教団体を創設し、あまつさえそれを利用して一般市民を巻き込み傷付けた連中の雇い主としてそれ相応の報いを受ける事になった。

具体的には更迭、シャムナというジルクスタン王国のトップだった人間の身柄はシュナイゼル……もとい国連の所へ送られる事になり、彼女の代わりにボルボナ＝フォーグナーを国のトップとしてすげ替える事になり、ジルクスタン王国は国連に加わる事となった。

表向きは来る戦いに備え、世界を一つに統合するという建前で、本当は国連に参加す

る恩恵の代わりに監視下に置かれるという事。シャムナがやろうとしていた計画の重さから、これからジルクスタンは暫くの間少々窮屈な思いをすることになるだろう。

とは言え、国連に参加することで経済にも余裕が生まれる事だろう。国民との気持ちの整理はボルボナ将軍とその息子に頑張って欲しいモノだ。因みに息子さんは死んではいない、蒼神教の拠点の門番としていただけだから少しばかり脅かしただけだ。

そしてシャムナの弟、シャリオ君だがこちらも五飛君と後から乱入したカレンちゃんが上手く相手してくれたお陰で、彼と彼が引き連れた軍隊を何とか無力化出来たらしい。俺が来る頃には全てが終わっていた。

流石に全くの無傷で終わった訳ではなく、戦闘のあった周辺では戦いの傷跡があちこちに刻まれていたが、それでも人的被害が殆ど皆無だったのが不幸中の幸いらしい。

五飛君もカレンちゃんも度重なる戦いで戦闘技術は世界でもトップクラス、相手を殺さずに無力化出来る術は持ち合わせていたらしく、ジルクスタンの兵士も重軽傷者は出ても死傷者が出ることはなかった。

それに今回の戦闘の被害で被ったのはジルクスタン側、これを補填する意味を含めても国連への参加は意味のある決断だろう。

しかし、シャリオ君はこれを頑なに反対した。姉上は渡さない、僕達から戦いを奪ったら何が残ると言うんだって、コックピットから引きずり出された後も喚き散らすもの

だから、堪らず自分はあることを彼に施した。
次元力。個人から惑星単位にまで命あるものには差異はあれど等しく持っているとされる力、これ迄の戦いを経て、特にヴィルダークとの一戦以来次元力をある程度使えるようになっていた俺は、シャリオ君の脚と目、数々の病を治しておいた。
多分、こう言う力はあまり多用してはいけないんだろうなぁ。次元力は文字通り万能に通じる力だけど、それ故に扱う者に対して厳しく律する能力が必要なのだと自分は思う。五飛君もカレンちゃんもビックリしてたし、取り敢えず二人に口止めをすることにした。
それでシャリオ君だが、戦いしかないと宣う彼には申し訳ないが、正直それは甘えなのではないかとこの場を借りて言わせてもらうとする。長い間戦いに明け暮れていたのはシャリオ君だけではない。Ｚ―ＢＬＵＥ、特にミスリルに属している相良君だって、シャリオ君より小さい頃から戦場にいたと聞いてるし、そんな彼も今では平和な日常に馴染もうと努力しているし、不器用ながらも年相応の人間らしさを手にいれている。
つまり、環境次第で人は幾らでも変わるんだ。それがニュータイプであろうとイノベイターであろうと、人は変わろうとする意志が有る限り幾らでも変革は起こせるという事だ。

シャリオ君には既に立ち上がれる脚がある。前を向ける目も立ち向かえる体も裏技であるが取り戻している。もう、自身の体を理由に言い訳はできない。それだけを告げると彼は何も口にする事はなく、ぐったりと項垂れてしまった。

少々年下相手に大人気ない事をしたかもしれないが、彼も一国の軍を担っていた人物、いつか戻ってくる姉の為にそれまでに国の在り方を変えられるようボルボナ将軍達と頑張って欲しいものである。

そしてシャムナだが、彼女にはどうやら死に戻りのギアス（多分これで間違いないはず）の保有者で、具体的には死した瞬間彼女は死ぬ六時間前へ意識だけ戻せるギアスを持ち主らしい。

何とも便利そうで不便そうなギアスである。死ぬ瞬間発動するとか、だったら寿命で死ぬときは一体どうするんだよ。永遠にｏｒ延々と生と死の六時間を繰り返すの？それなんて無間地獄？

それを何気なく本人の前で言ったら、なんか顔面蒼白になってた。考えたことなかったんかーい。国のことばっか気に掛けて自分のこと何も分かってないやん。

まぁ、縁があればまた逢えるしその時になったら何とかしてやるって言ったら、震えながらコクコク頷くシャムナに取り敢えず大丈夫かと思っておく。……敵対した相手にらしくもなく温情だねと通信越しにシュナイゼルにからかわれたが、元を辿れば今

回の原因は自分にも僅かながら関わってるし、一度助けた事がある以上ちゃんと責任は取るべきだろう。

そんなわけで蒼神教、並びにジルクスタンでの騒動はこれにて終わり。あ、ＴＡＲＴＡＲＯＳは念のためにグランゾンで破壊しておいた。取り敢えず冥王星辺りに持ってってディストリオンブレイクで粉微塵にしたから、これでもう悪用されることはないだろう。

やたら威力が増していたのは気になったけど……なに？　グランゾンまたストレス溜めてるの？

設計図等の回収と消滅もシュナイゼルが信用ある部下を使って確実に行うって言ったし、今度こそ一件落着。これにて漸く本来の目的であるキタンさんへの墓参りにいけるというものだ。

ただ、一つ気になったのがオルフェウス君……だったかな？　なんか彼ってば自分に対して妙に畏まってるんだよね。グリンダ騎士団ってシュナイゼルの部下？　の彼女達に話し掛けても反応がよそよそしいし、心当たりのない自分としては首を捻るばかりである。

ともあれ、新大陸で起こった騒動は終わりこれからまた自分の旅は始まるのだ。……その前に、目の前の紅いお二人からどう逃げるのか、それが問題だ。

――――ナントカニゲキッタ。

その２２８

○月×日

自分こと蒼のカリスマを崇める蒼神教から端を発したジルクスタン王国での騒動、シャムナの身柄をシュナイゼルの所へ預けジルクスタンを国連へ加盟させる事で落とし所となり、漸く本来の目的であるキタンさんの墓参りをする事になった自分はカミナシティの郊外にある墓地へ訪れる事が出来た。

どうやら既に多くの人達が墓参りに来ていたようで彼の墓には多くの献花が添えられている。自分もそれに倣おうと慎ましやかだが花を添え、次いでに線香も焚こうかと迷っていると、久し振りに彼女達と出会った。

黒の兄妹の三姉妹。キヨウさん、キノンさんキャルちゃん達である。キヨウさんの腕には長女アンネちゃんが抱かれており、自分を見ても笑いながら手を伸ばしてくる人懐っこさを見せてくれた。

キノンさんもロシウ君の秘書をしているだけあって普段は険しい表情をしているが、

兄の墓参りで久し振りに家族とゆっくり顔を合わせているからか、昔のような優しい顔も見せるようになっていた。

そしてキャルちゃんだが、バルビエルのスフィアによる力の影響も先の戦いの終盤に差し掛かった頃に解放され、今は特に後遺症もなく以前と同じ生活を続けられるようになるまで回復したという。

彼女達もこの世界に来たばかりの頃の自分がお世話になった人達だったから、無事に元気な姿を見られた事に安心した。久し振りに会えたのだから昔の話をしながらお茶しないと誘われ、特に急いでいる事もないので自分はキヨウさん達の誘いに乗ることにした。

墓に花を供え、祈りを捧げ終えた自分達は再び会いに来る約束をしながら墓地を後にする。この時、気のせいかもしれないがキタンさんが笑みを浮かべて手を振っている姿を見たような気がした。

さて、アンネちゃんを抱かせてもらったりしながらカミナシティへ戻ってきた自分達は先日起きた蒼神教関連の騒動の話を含めて世間話を街にある喫茶店で続けていると、ある一つの話題に触れる事になった。

キヨウさんの旦那さんであるダヤッカさん、リーロンさんを初めとしたグレン団の多くの面々がまだ帰ってこれていないのだとか。

そう言えば、ダヤッカさんやリーロンさんは超銀河ダイグレンの面々だ。そんな彼らはサイデリアルに強襲されて国民を人質に取られ、その後は何処かへと幽閉されたのか今まで音沙汰なかった。サイデリアルが地球から撤退した今、彼等も解放されている筈、なのに戻ってこれていないという事は今もどこかで幽閉されたままなのか。

現在は超銀河ダイグレンの位置を探ろうとシモン君を始めとしたチームが躍起になっているらしい。ダイグレンのメンバーの中にはニアちゃんの名前もあったし、シモン君が必死になるのも分かる。

アンネちゃんがいるから気丈に振る舞っているキョウさんだが、その表情は何処か暗い。ダヤッカさんも世話になった人の一人だし何とかして力になろう。自分とグランゾンなら大抵の事は何とか出来るだろうし、シモン君のグレンラガンと組めば次元の穴だって抉じ開けられるだろう。

そう思い立ち上がると、俺の端末に通信が入る。何だと思い端末を開けば、そこには一つの情報が記されていた。

――木星近郊でＥ．ＬＳ．の大群が進行中。

この一言にキョウさん達にも動揺が広がっていく。恐らくは彼女達も知っているのだろう、Ｅ．Ｌ．Ｓ．という金属生命体がどういうモノなのかを。

急いで宇宙に上がろうと自分は三人に挨拶を済ませて店を後にしようとするのだが、

途中でまたもや思わぬ人達と再会した。
不動ＺＥＮさんと不動ＧＥＮさん、何処と無く似た雰囲気を纏う二人は日頃から見せる落ち着いた様子とはかけ離れたボロボロの様子で佇んでおり、彼等に似あわない必死な様子で自分に訴えてきた。
彼等が言うにはどうやらＥ．Ｌ．Ｓ．は襲いに来ているのではなく逃げ延びてきているだけなのだと、故に自分には迎撃ではなくＥ．Ｌ．Ｓ．　を落ち着かせる様に尽力してくれと言われてしまった。
決して本気にはなるなと、グランゾンを使うとしてもネオ以降は絶対に使うなと、それはもう強く言われてしまった。
……なんで俺、不動さん達に危険人物扱いされてるのだろう？　自分はそんなに危ない人間だと思われていたことに少なからずショックを受けたのだった。
そして彼等の格好がボロボロになった経緯についてだが、詳しく説明をされることはなく今はＥ．Ｌ．Ｓ．に集中しろと言う事であやふやなままに終わったが、恐らく不動さん達は奴と出会したのだろう。
何故木星で奴と出会ったのかは知らないが、奴と戦ったことで少なからず傷を負った二人はそこに巻き込まれたＥ．Ｌ．Ｓ．を逃がす為に尽力し、何とか地球にまで戻ってきた。そう考えると今回の件と辻褄が合うし、あの二人が彼処までボロボロだった事も

頷ける。
あの女、既に不動さん達を退けるほど強くなったのか、自分も初めてこの世界に来たときと比べて大分強くなったと思えるけど、まだまだ余裕ぶっている場合では無さそうだ。
ともあれ、先ずはE．L．S．だ。あの機械生命体とも色々関わったことがあるし、顔見知り（？）である以上何とかした方が良いだろう。

○月α日
さて、先日不動さん達に謂われた通り月付近にまで迫っていたE．L．S．を宥めようと現場まで急行した訳なのだが、どうやらこの時のタイミングは中々悪かったらしい。Z―BLUEに代わって地球を守ろうとしている地球の艦隊とE．L．S．の大群が今まさにぶつかろうとした所へと転移してしまったのだ。
地球艦隊の皆さん達もそうだが、突然のグランゾンの出現はE．L．S．達の方が驚いた様で、自分の姿を見るや即座に転身、一目散と逃げ出してしまった。
いや、そこまで怖がる必要ないじゃない。ぼく、悪い仮面じゃないよ？　と内心で愛想を振り撒きながら重力操作でE．L．S．達の動きを封じ込める。地球艦隊の皆さんにも心配要らないという話を通し、戦いをどうにか止めることが出来た自分はさてこ

れからどうしようかという所で彼等が来てくれた。
ソレスタルビーイング。武装介入によって扮装根絶を体現しようとした彼等がイオリア＝シュヘンベルグの意思の下に最後のミッションを完遂しに来たという。
まぁ、人間とは異なる異種生命体との対話と意思疏通を目的として作られたＧＮドライブを搭載した彼等のガンダムなら何とかなるだろう。少なくとも力でしか場を収められない自分よりは余程安心して任せられると判断した自分はＥ．Ｌ．Ｓ．達を封じたまま彼等の母星らしき球体の巨大Ｅ．Ｌ．Ｓ．へ近付いた。
彼らと直接意識を交流させるには母星の中心部へ赴く必要がある。そう語るティエリア君の言葉に従い、グランワームソードで少し母星に切れ目を入れた自分はそのまま刹那君のダブルオークアンタと共に中心部へと向かった。
中心部へと辿り着いた刹那君、初めて行う異種との対話に緊張しているのか、その表情は硬い。少しでも緊張を和らげてやろうと話し掛けても彼の表情は益々硬くなっていく。無理もない、何せ彼が今回の行ったのは人類初の試みだ。きっと彼の胸中では自分程度では推し量れない不安と緊張で一杯になっているのだろう。
せめて何かあったときのフォローに回ろうとダブルオークアンタの後ろで待機していると、刹那君はトランザムバーストを発動させてＥ．Ｌ．Ｓ．との対話を開始する。
再世戦争で見せた時以上のＧＮ粒子が辺り一面に満ち溢れていく。その幻想的とも

思える光景にしばしば見とれていると、ティエリア君から通信が届いてきた。何でも自分がここにいるとＥ．Ｌ．Ｓ．が怯えて対話処ではないらしい。
て言うか、何故刹那君の機体からティエリア君が通信してくるの？　意識の共有？はえー、スッゴいなぁイノベイドって。
少々納得し難いが、刹那君の邪魔になるのも不本意な為、何かあったら直ぐに駆け付けると言い残してその場を後にした。事実、既にＥ．Ｌ．Ｓ．内部の空間座標は既にグランゾンと自分の頭に刻まれている為、万が一があっても対処できる。
その後は引き続き外にいるＥ．Ｌ．Ｓ．達を抑えたり、近くの空間で引きこもっていた超銀河ダイグレンを引っ張り出したり、スメラギさん達と談笑していると、漸く対話の方が終わったのか、巨大な花へと変質させるＥ．Ｌ．Ｓ．から刹那君とダブルオークアンタが戻ってきた。
怖がっていたＥ．Ｌ．Ｓ．を落ち着かせるのに一番苦労したと語る刹那君、Ｅ．Ｌ．Ｓ．も地球人類に協力すると約束してくれたと言ってるみたいだし、これで本当の意味で地球人類は最後の戦いに集中出来るようになった。
これで残った問題も僅か、それが一番大変だけどどうにかして皆で乗り切ろう的な話をして、自分も解散しようとした時、刹那君から呼び止められた。
何だと思い立ち止まるが、返ってきたのはやっぱり何でもないという一言のみ、彼に

しては珍しい歯切れの悪い台詞を不思議に思いながらも特に気にすることなく現宙域から離脱するのだった。
そろそろシュナイゼルとの約束の日も近い。今回の旅の最後の締め括りとしてこのまま買い出しに向かうことにする。

◇

ワームホールを広げ、瞬く間に転移していくグランゾンを見送る刹那は、その背中に一体何て言葉を送ろうか真剣に迷ってしまっていた。
あの時、母星型Ｅ．Ｌ．Ｓ．の中心部で見た光景。Ｅ．Ｌ．Ｓ．とは別に自分の意識に流れ込んできた全く別の風景。

そこは平和な世界だった。争いもなく、誰かの血が流れる事なく、ありふれた日常が続く平和な風景。そこに彼女がいた。

黒髪で、小柄な女の子。特に特別な力も能力もないその世界と同様で平凡で何処までもありきたりな少女。

しかし、その少女は輝いていた。目映くて目が眩みそうなほどに輝いて、その笑顔はその世界の何よりも尊く見えた。

嗚呼そうか。この光景は、この少女はこの記憶の者にとって何よりも大切な人なのだと、刹那は確信した。何故今更になって奴の記憶が見えてしまうのか、再世戦争での時は全く見えず、読めなかった奴の本心が、どうしてこの時だけ見えてしまったのか。

分からない。けれど一つだけ確かなのは……。

「お前は、その大切なものを捨ててまで選んだ道があるんだな」

大切なものを守るために大切なものを捨てる。何処までも矛盾したその在り方に刹那はこの日、シュウジ＝シラカワという男を理解した気がした。

その２２９

――――先日起きた大群のＥ．Ｌ．Ｓ．による襲撃から数日、世界は特に大きく変わる事なく、世界終焉の日を前に人類は最後の日常を謳歌していた。
地球に住まう人々の頭上には太陽と月の他に金属の花が咲き、新たな時代の到来を予見させている。ここ、名も無き無人島にも月と花が映し出す幻想的な風景を作り出していた。
「フフ、まさか世界の最後を飾る前にこんな幻想的な光景を目にする事が出来るとは、人生と言うものは分からないモノだ」
頭上に浮かぶ満月とそれに寄り添うように開いたＥ．Ｌ．Ｓ．の花を仰ぎ見て、シュナイゼル＝エル＝ブリタニアは微笑みを浮かべる。其処には嘗ての虚無感は無く、人としての感情の色が濃く滲み出ていた。
「ほら、君も来るといい。折角の墓参りなんだ。そう畏まってはお父上も寂しがってしまうよ」

後ろに振り返り、シュナイゼルが隣に来るように促す相手は嘗ての親友の忘れ形見、マリーメイアが緊張した面持ちで佇んでいる。

「で、ですが本当に私なんかがお邪魔しても……その、良いのでしょうか？　お父様の……トレーズ様のお友達は貴方とシュウジのおじ様の筈、私なんかが割ってはいる訳には……」

遠慮しがちにそう語るマリーメイア、彼女もまた世界と戦争によって人生を振り回された人間の一人、人としての尊厳を失くし、デキム＝バートンの操り人形と化した彼女。父であるトレーズの思いすら踏みにじろうとした自分が、果たしてここへ来る資格なんてあるのだろうか。隣に佇む従者であり以前の旅で支えてくれたレディ＝アンは、目を伏して沈黙を保っているだけである。

因みにもう一人の護衛者であるブロッケンはこの場には来ていない。「そろそろ我輩も自分の道を見つけるべきなのかもしれないのである」と言ってマリーメイア達と別れ、現在日本のとある温泉宿にてバイトとして働いているとか。

父の思いを無下にした自分に墓参りをする権利はない。旅をして世界の広さを知り、人としての生き方を学んだマリーメイアはそれでも尚、自分の犯した罪を許せずにいた。こんな機会はこれから先二度と訪れはしない、けれど、それでもこれ以上前に踏み込む勇気が今の彼女には無かった。

そんな彼女にシュナイゼルはどうしたものかと頭を悩ませる。実際には言葉巧みに操って彼女をトレーズの墓前に立たせる事も出来るが、それでは彼女の為にはならないし、何より彼に再び殴られてしまう。ここ最近生身でも人外的な力を手にした彼に殴られては、今度は錐揉み回転では済まなくなる。流石にそんな最期は遠慮したい。

そんな時だ。月明かりの照らされた無人の島に一つの影がシュナイゼル達を覆う。マリーメイアとレディ＝アンは何事かと驚き、シュナイゼルが漸くかと上を見上げれば、其処には蒼の魔神グランゾンが此方を見下ろしていた。

「悪い、待たせたか？」

割れた空間――――ワームホールの奥へと消えていくグランゾンの中から一人の男性が降り立つ。地上から数十メートルの高さから飛び降り、骨を折る処か怪我一つ見せないその男に今更驚く人間は此処にはいない。

「いや、まだ時間にはなってないよ。相変わらずの五分前行動か、相変わらずだね君も」

「まぁな、これでも成人した社会人だ。約束の時間くらい遵守するさ」

そう言って辺りを見渡し、自分以外来ていないのかと訊ねる男にシュナイゼルは男の後ろを指す。

「っと、そっちにいたかマリーメイアちゃん……って、なんでそんな離れてるんだ？」

「フフ、どうやら彼女は慣れない事に緊張しているらしい。何せ初めて父親と対面する

のだからね」
「あ、あう」
「そう言うもんかね？　まぁ、確かにあの二又眉毛には少し威圧感は感じるが……」
シュナイゼルに自身の心の内を見破られ、萎縮してどうすればいいか分からず年相応にオドオドするマリーメイアに男――――シュウジは笑みを浮かべて近付いていく。膝を曲げてマリーメイアと目線を合わせるシュウジは彼女に手を差し伸べて……。
「ほら、マリーメイアちゃんも深く考えないでさ、一緒に行こうぜ」
目の前に出された手をマリーメイアは戸惑いながらも触れた。大きく、硬い岩石の様な手だが、その奥からは血の通った暖かさが感じ取れた。
一歩、前に足を踏み出す。それが彼女の意思だと受け取ったシュウジは側に控えるレディ＝アンに目配りして確認を取る。シュウジの意図を察したレディ＝アンは承諾するように頷くと、この場を二人に任せるように静かに姿を消していく。
一歩ずつマリーメイアの足は前へと進んでいく。彼女の歩幅に合わせるシュナイゼルとシュウジは、父親との対面に緊張しながらも歩みを進める彼女を優しく見守っていた。
五分か、或いはもう少し時間が経過した頃、マリーメイアの前髪を風が撫でた。眼前に広がるのは大海原と草原に包まれた開けた場所、月と星の明かりが照らすその場所に

は……。

トレーズ＝クシュリナーダ。嘗てのＯＺの総帥で人類を愛し、人類の為に散った偉大なる敗北者――そして、シュウジとシュナイゼルの親友でマリーメイアの父親の墓が其処にはあった。

「へぇ、思ってたより綺麗なままなんだな」

「まぁね。私もちょくちょくここへは来ているし、カノンに頼んで周辺の手入れを任せているからね。景観を損なわない程度には整えさせて貰っているよ」

「おおう、カノンさんってばマジ有能」

海を一望できる位置に建てられた木で打ち立てられた簡素な墓、それがトレーズの墓だと理解したマリーメイアはゆっくりとその墓へと近付いていく。

「……お父、様」

瞬間、ふと暖かい風がマリーメイアの頬を撫でた。海風の様な冷たいモノではなく、先ほどのシュウジの様な武骨ながらも暖かい感覚。まるで誰かの手に頬を触れられた様な感覚にマリーメイアはハッと息を呑んだ。

理解した。今、この墓の下には自分の父親が眠っている。顔なんて合わせた事なんてないのに、目の前の木で作られた墓からマリーメイアは父の温もりを感じ取った。

自然と涙が溢れる。ポツリポツリと頬を伝って流れ落ちる滴はトレーズの墓の側に

咲くタンポポに落ちていく。
「お父様、マリーメイアです。貴方の……娘です！」
　これ迄、胸を張って言えなかった事をこの時初めて口にできた。自分はこの人の娘だと、漸く自信を持って口にできた事にマリーメイアは涙を流しながら笑みを浮かべていた。その様子を少し離れた所で見守っていた二人は満足そうに見つめている。
「成る程、彼女を呼んだのはこう言う事だったか」
「まぁな、マリーメイアちゃんは賢い子だけどそれ以上に子供なんだ。子供なら父親に逢いたいと思うのは当然の感情だろ？」
「トレーズ＝クシュリナーダの遺児、大抵の人間なら政治的利用することを考えるだろうに。君はあくまでトレーズの娘として扱うんだね」
「当たり前だろ。あの子はトレーズさんの娘で、俺達はあの人の友達だ。だったら、最期まで出来る限りの事はしてやりたいだろ？」
　友達だから、そんなありふれた理由で当然の事だと断じるシュウジをシュナイゼルは何処までも甘く、そして眩しく見えた。
（嗚呼、そうだな。そんな君が相手だから私も本心で語れる事が出来たんだ）
　何処までも一般的な感性を持ちながら、何処までも成長し続けるシュウジ。そんな彼だからこそシュナイゼルも虚無感から脱し、トレーズもまたそこに未来と希望を見出だ

していた。ブリタニアの貴族とＯＺの総帥、どちらも人より高い地位にいる自分達をある意味で対等に接してきたシュウジ、そんな自分達だからこそ今日まで友達という関係でいられた。

「さて、そろそろ此方も準備を始めるか。シュナイゼル、用意は出来てるな？」

「ん？　あぁ、言われた通り食材関係は用意していたけど……一体何をするんだい？」

以前からシュウジに言われてきた食材の数々、料理が得意だと豪語するシュウジに言われるがままに用意していたシュナイゼルだが、彼の頭脳を以てしてもこれから何を作られるのか予想出来ずにいた。

疑問を口にして訊ねるシュナイゼル、そんな彼に応える様にシュウジがワームホールから取り出すのは一つの大きめなちゃぶ台とガスコンロ、そして……。

「折角の友人とその娘との団欒、だったらやることは一つでしょ」

見事な造形の……鍋だった。

◇

亡きトレーズへの墓参り、そして最後の親睦会による鍋パーティーはつつがなく行われ、シュナイゼルとマリーメイアは戸惑いつつもその独特な味わいに舌鼓を打った。その間に紡がれる話は世界を揺るがしかねない重大なものから当たり障りのない雑談まで、まるで世間話の様に語るばかりで、世界を旅して情勢を知るマリーメイアとしてはシュウジとシュナイゼルの話に目を回してばかりだった。
「そんじゃ、ジルクスタン王国の巫女はお前の協力者になった訳だ」
「表向きはね。そもそも蒼神教は彼女が起こした宗教だから、新大陸で起きた騒動も必然的に彼女の責任になる。それを少しでも軽くするためには彼女が国連に降るという形が必要だったんだ。彼女を私の下に来させたのもギアスについて色々と知っておきたいと思ったからさ」
「ま、これを機にあの国も戦う事以外の道を探すだろうよ。ボルボナってやり手の将軍さんもいるみたいだし、建て直すのに然程時間は掛からないだろうな」
「全く、君はつくづく面倒な事をしてくれるな。ボルボナ＝ファグナーは軍事的にも政

治的にも有能な人間だ。政界に出てきたらまず間違いなく国連での発言権を狙ってくるだろう。そうなれば必然的に彼の相手は私がする事になる」
「いいじゃん。お前だって暇を持て余すのにも飽きてきたんだろ？　そろそろ腹黒宰相様の本領……いや、本性を発揮してもいいんじゃね？」
「フフフ、それもそうかな？　それはそれとして話は変わるが、マネキン准将が些か憤慨していたよ？　折角のＥ．Ｌ．Ｓ．対策に費やした時間が台無しになったって」
「あの戦力は最後の戦いに備えて温存してもらったんだよ。そもそもＥ．Ｌ．Ｓ．には敵対する意思何てものは無かった。Ｅ．Ｌ．Ｓ．が望んだのは自分達が生きていられる環境、居場所が欲しかっただけなんだよ」
「金属生命体との対話、イオリア＝シュヘンベルグは見事自分の望みを叶えた訳か」
「いやぁ、どちらかと言えばこれからじゃね？　あの人の計画って全部望みを叶えるための準備段階って感じだし」
　次々と世界とその未来について語る二人にマリーメイアは割って入ることが出来なかった。蒼神教なる蒼のカリスマを神に据えた宗教が存在していたのは知っている。Ｅ．Ｌ．Ｓ．という金属生命体が大群で地球に迫っていたことも。けれどその二つが自分が思っていたよりも遥かに速く終息していた事に、マリーメイアは戸惑いを感じずにはいられなかった。

二つとも一日二日で終わる話ではない、Ｅ．Ｌ．Ｓ．に至っては地球存亡の危機に瀕していた程だ。それがまるで始めから無かったかの様に世界は平穏を取り戻し、変わった事があると言えば頭上に月の他に花が咲いた事くらい。地球の危機も蒼のカリスマことシュウジにとって取るに足らない出来事らしい。
「っと、ごめんなマリーメイアちゃん。ほったらかしにしちゃって、鍋、食べたかったら温め直すけど？」
「い、いいえ、お腹の方はもういっぱいですから」
「そう？」
どうやら退屈を持て余していると思われたらしい。実際にその通りだが、それを素直に言い出せるほどの勇気はマリーメイアには無かった。本当なら父であるトレーズの話を聞きたかったが、本来であるならば自分はこの場には来る筈の無かった人間だ。父の墓前に来れただけで満足しよう、そう思ったとき意外にも助け船はシュナイゼルの方から出された。
「所でシュウジ、君はトレーズとはどういう出会い方をしたんだい？　時期的には再世戦争の頃だと私は睨んでいるが、そろそろその話を聞かせてはもらえないだろうか」
「ん？　あぁ、そう言えばその話はしてなかったなぁ」
自分が今一番気になる話題にマリーメイアは顔を上げる。視界の端にはどう話した

ものかと空を仰ぎ見るシュウジと此方を見て微笑むシュナイゼルがいた。どうやらシュナイゼルには此方の心境はお見通しらしい、ウインクすら飛ばしてくる微笑みの貴公子にマリーメイアは自身の顔が紅くなるのを感じた。
「まぁ、ぶっちゃけて言えば成り行きだったな。あの時の俺はまだグランゾンの力を引き出しきれていなかったし、結構気絶とかしてたからな。あの時も気絶していた俺をトレーズさんが介抱してくれてさ。そんでなんやかんやあって――――」
「あ、あって？」
「殴り合いをした」
「え、えぇ!?」
　サラリと溢すトンでもない内容にマリーメイアは目を丸くする。少し離れた位置で控えていたレディ＝アンも驚愕を露にしているし、シュナイゼルですらも目を丸くさせている。
「いや、俺はそんなつもりはなかったよ？　でもトレーズさんってば勝手な理屈で殴ってくるんだもの、それも手加減なしに。だったら此方もやり返すしかないかなって」
「や、やり返すって……」
　幾ら理不尽を嫌うシュウジだからって当時ＯＺの総帥であるトレーズと殴り合いをするなんて……そう思うマリーメイアだが、同時にだからこそ二人は友人になれたの

だと理解した。
「成る程、だから私を殴り飛ばしたのも抵抗がなかった訳だ」
「そう言うこと、まぁ簡単に言えばヤケクソだな」
そう言って当時の事を思い出したのかシュウジは満面の笑みを浮かべて話を続ける。破界の王ガイオウとも悪友関係だったこと、そしてシュナイゼルの目を盗んで行動する為に女装もしたこと。特に女装の下りではあのシュナイゼルですら噴き出し、その際に出会ったトレーズの天然な対応にまた盛大に笑いだした。
それからも三人の談笑は続いた。シュナイゼルと共に朱禁城に赴いてゼロとチェスした事、実は内面焦りで一杯だった事、他にも蒼のカリスマ本人から語られる当時の出来事と心境に、マリーメイアはまるで冒険譚を聞いている気持ちだった。
話も大分長引いてそろそろ鍋パーティーも終わりを迎えようとした頃、シュナイゼルは徐に口を開いた。
「なぁシュウジ、最後に一つだけ質問させてはくれないか？」
「うん？」
「君はこれ迄多くの戦いを経験した。グランゾンと共に時には逆境と呼べる状況の中、君は時代に翻弄されながらも戦い続けた。そして、もう間もなく最後の戦いが始まり、その結果次第ではこの世界は消えてなくなる」

「もし、君達が無事に勝てたとしよう。喜ばしいことだ。世界は救われ、すべての人類、生命は歓喜に震えることだろう。……しかし」

――――――果たしてその時、君の居場所はあるのかい？

先程までの笑みは消え、真剣な表情で訊ねるシュナイゼルにシュウジは困った様に笑うのだった。

◇主人公＆機体紹介

◇主人公紹介～その２～

～主人公紹介～

◇名前

白河　修司

シュウジ＝シラカワ

◇人物・人格像紹介

何処にでもある平凡な家庭環境に産まれ、健やかに育ち、本来であれば人並みの生活を送る筈だった青年。その正体はある世界線のシュウ＝シラカワの因子を受け継いだデザインベイビー、その子孫である。

世代を重ねて尚、シュウジの持つシラカワの因子はこれ迄の一族の中でもブッチギリで濃く、グランゾンのパイロット適正値はグランゾンが誤認するほどであり、その潜在能力の高さはサフィーネですら把握しきれなかった程でその適正の高さからある日を境にグランゾンに認められ、世界の壁を越えて多元世界にやってくる事になる。

普段は温厚で知的な人格者として知られているが、グランゾンの搭乗者となり幾度となく因子を高めグランゾンの力を引き出すにつれてその人格に少しずつ影響され始め、普段こそはいつも通り温厚で滅多な事では怒りを露にしないが、一定の条件を満たすと凄まじい程の怒りの感情を見せる事がある。

破界事変、再世戦争と度重なる戦乱によってその力を増大させていくが、時獄戦役の際にヒビキの家族の仇であるテンシの一人、アドヴェントの策略によって祝福と言う名の呪いを受ける事になる。

時獄戦役の終盤ではその呪いに負けてその直後にＺ―ＢＬＵＥと敵対し敗北、死亡する。その後、事前に施しておいたシンカの力による命のストックのお陰で息を吹き返すが、甦った反動か一時期記憶の損傷があるものの、その後に起きる戦いを幾度も繰り返すにつれて記憶を取り戻し、蒼の地球へ降下する頃には完全に記憶を取り戻す事に成功する。

その後、時獄戦役で傷付いたグランゾンに代わりシュナイゼル達が用意してくれたＭＳ、アメイジングトールギスを駆って戦場を潜り抜け、その途中翠の地球の頃から圧倒的知略者として警戒していたギルター＝ベローネを引き入れ、シュウジの行動は更に加速していく。

その後、自分が生きていることを極力隠しながら行動し、時には別の機体に乗ったり、

時にはボン太君になりきるなど暗躍するがネオ・アルカトラズにランカとシェリルの救出作戦に（一方的に）参加した時にはＺ―ＢＬＵＥの一人であるＣ．Ｃ．に看破されてしまう。

何度か他のＺ―ＢＬＵＥと接触しながら、アドヴェントと彼に従うクロノ、そして地球皇国ことサイデリアル達をどうやって地球へ追い出そうかと悩んでいた所にテンシによる時空振動に遭遇、カオス・コスモスへ誘われ其所で待ち受けていたテンシ達に追い詰められながらもトールギスとグランゾンと共に真化融合を果たしシュウジは新たな力を得る事になる。

その後、一度は元の世界に戻り想い人である矢澤にこと再会するが、このとき明らかになった自身の出生の秘密、そして果たすべき使命を全うする為、修司は己をシュウジとして元の世界と訣別、矢澤にこの夢と彼女のいる世界の未来を守る為に今度は自らの意思で戦いの道を選ぶことになる。

そしてアドヴェント達三人のテンシを吸収した《哀しみ》を司るサクリファイの妨害を退かせながら、地球皇国の皇帝アウストラリスこと次元将ヴィルダークと戦ってこれに勝利し、紆余曲折を経て遂にサイデリアルを地球から追い出すことに成功。尚、表向きはＺ―ＢＬＵＥによる勝利だと認知されている。

シュウジ＝シラカワの戦いは終わらない。人の、命の可能性が脅かされる限り、彼は

いつだって戦い続けるのだ。

◇機体紹介

機体名：ゼロ・グランゾン

グランゾンとアメイジングトールギスが融合し、シンカした本作オリジナル機体。

その機体性能はネオ・グランゾンすら凌駕し、シュウジとの親和性を極限まで追求した機体となっている。その理由から外見は細く見られるが、シンカの力で圧縮されただけで頑強さで言えば寧ろ増しており、シュウジの身体能力を引き出す為の形態である。

それ故に従来の機能である重力制御の他に格闘性能も格段に飛躍されている為、ネオの時とはまた違った強さを発揮することが可能となっている。

司る力は《破界》、世界を理ごと破壊する事から〝消滅しようとする力〟そのものを操っている様にも見え、その反面乗り手であるシュウジが次元力を行使し、傷を癒すなどしている事から〝存在しようとする力〟、即ち《創造》にも適用されると思われている。

尚、シュウジの後見人（自称）であるシュウ＝シラカワ博士（擬似人格）はこの形態すらも想定の範囲内であり、これを超えることが本当の意味でのシンカを迎える事にな

るという。

◇武器・武装紹介

？ワームスマッシャー

ワームホールを開き、対象との距離を関係なく狙い射ちができる汎用性の高い武装。通常形態とネオに続いてゼロとなった状態でも使用可能となっているが、《破界》の力を有している為、加減の利かないある意味使い勝手の悪い武装となってしまっている。

敵対戦力を殲滅する際には下記に記される各武装（一部除く）の何れにも劣らない性能だが、ゼロ自体が格闘戦を得意とするシュウジに適応されている為、使用される頻度は低い。

？格闘

ゼロ・グランゾンへと至れた事でパイロットのシュウジの全力を遺憾なく発揮できるようになった攻撃、音を超え、光すら超越した乱打連撃の嵐に耐えられるモノは先ずいない。

存在そのものを《破界》する事をデフォルトにしているゼロ・グランゾンにとって唯

一原形が残される攻撃である。

？ゼロ・グランビーム

ゼロ・グランゾンが有する光学兵器、《破界》の力を練り込み放つことで射線上にある如何なる物質、空間を原初（ゼロ）から抹消させる武装。その存在ごと破界する事から対象の大小は問わない為、反動は小さい事から色んな意味で使い勝手の良い武装である。

モデルは破壊神シヴァから第三の目。

？無銘の太刀

グランワームソードを圧縮し、日本刀―――野太刀の形へと変異させた鍔なき一振りである。

その形状はアメイジングトールギスを使用していた時の主武装に似ていて彼の機体の残しを思わせる形となっている。

元々から重力波を纏わせておりその切れ味は凄まじく、今回はそこへ《破界》の力を纏わせている事から如何なる防御壁も意味を為さなくなっている。

尚、切れ味が良すぎる為に普段は従来通り重力空間に収納されている模様。取り出す際はワームホールからなので実質的に空間そのものが鞘となっている。

?ディストリオン・ゼロブレイク

胸部装甲を開き、《破界》の力と重力波を放出するゼロ・グランゾンの砲撃。ゼロ・グランビームよりも広範囲の敵を殲滅するときに用いられる対宇宙規模の敵を想定した武装であり、主に宇宙怪獣やインベーダーが対象になっている。

反動が大きい為に極力地表での使用は控えるべき武装で使用後はテスタロッサ艦長を始めとした艦長達による嘆願で地球での使用を禁止とされている。

尚、この武装の最初の対象となったズール皇帝はその存在そのものごと《破界》されたので、本編では二度と出てくることはない模様。

?ブラックホールクラスター

グランゾンの代名詞とも云われる武装、シンカしゼロとなった事でその威力は未知数扱いとなったのだが、パイロットであるシュウジは何となく把握しているようで……曰く、隔絶宇宙の様な特殊空間でない限り〝絶対〟に使ってはならない武装なのだそう。

?縮退砲

説明不要。説明不能。
ただ一言。
宇宙「ダメ絶対」
????
シュウ「フフフ、まだ秘密ですよ」

尚、グラビトロン・カノンだけはゼロの形態になった際使用不可となっており、その原因は未だに不明である。
ただ、ゼロ・グランゾンに唯一攻撃し生き残ったアサキムの証言によると、当たる瞬間に攻撃が掻き消された模様。
もしかしたら、彼の機体には武装だけでなく受けた攻撃すらも《破界》する機能があり、それがグラビトロン・カノン、並びに歪曲フィールドの変異したモノなのかもしれない。
以上の性能から、この原初の魔神と戦うには同じくシンカ融合を果たした機体でないと相対することすら難しいと思われ、並の攻撃で決して届かないと考えられる。

その２３０

「俺の居場所……か」

目の前のシュナイゼルから投げ掛けられた問いにシュウジの表情から笑みが溢れた。

これからの事、地球を、宇宙を、滅びの定めを乗り越える為の戦いに、人類を始めとした多くの知的生命体がその戦線に参列する事だろう。戦いの規模はこれ迄と比べても余りにも強大、それでいて不透明で不確かな相手、唯一分かっているのはサクリファイが自分達の前に立ちはだかるという事。

奴、そして曾て地球に侵略してきた怪物達、宇宙魔王やミケーネ帝国の首魁であるハーデスも今頃は最後の戦いに備えて力を蓄えている事だろう。

曾てない規模の戦い。全宇宙の命運を掛けた戦いがもうすぐそこまで迫ってきている。だが、目の前の親友が危惧している事はそんな事じゃない。

シュナイゼルは恐らく気付いている。これから待ち受ける戦い、一万二千年の繰り返しの果てに待つ絶対的破滅の運命……それらを越えた先の世界で待つシュウジ＝シラカワという男の末路に。

優しい男だとシュウジは思った。腹黒く、人を貶めるのが好きな奴だけど、それでも誰かを思い遣る優しさを見せるシュナイゼルに、こんな友人を持てて良かったとシュウジは心の底から嬉しく思った。

――――だから、言うことにした。これ迄の自分と全てを終えた後に待つ自分の先の事を。マリーメイアにも、包み隠さず三人にだけ話した。シュナイゼルと墓下で眠っているトレーズ、そしてその娘であるマリーメイア。彼等には嘘を吐きたくないから。

最初は信じられないといった様子のマリーメイアの様子がドンドン暗いものになっていき、最後まで言い切る頃には俯き、その表情を見る事は出来なかった。

「と、まぁ色々語ったが結局はそんな所だ。まぁ、全ては終わった後に解ることだからまだ決まった訳ではないけどな」

終わり行く宇宙、その運命を変えるには時空修復が必要。桂木桂とオルソン、始まりの特異点である二人と全てのスフィアが揃って成り立つ超大規模な時空修復。それが先の戦いで見つけたおキツネ博士こと次元超時空科学物理の権威であるトライア＝スコート女史の結論である。

それは原典への回帰、本来ならば交わることのなかった世界を元の形へと戻す作業。未だ正式に対抗手段を発表されてはいないが、太極に至りシンカを果たしたシュウジがその事を把握しているのはある意味当然と言えた。

全ての時空をあるべき形へと戻す。そうなればこれ迄一緒に生活してきた人々とも必然的に別れる事になる。兜甲児、アムロ＝レイ、流竜馬、碇シンジ、多くの人々が元いた世界へ戻る事になるだろう。
たった一人を除いて。
「俺、選んじまったからさ。此処へ戻ってきた時点でそうなる事を、さ」
シュウジは選んだ。自分の往く道を、大好きな女の子の夢を守りたいが為に、少しばかり長い遠回りをする事を……。
「まぁ、でもこの選択に後悔はないよ。シュウ博士……俺の保護者も一応俺を第一に考えてくれてるし、うん」
やはりというか、場の空気がすっかり重くなってしまっている。シュナイゼルは目を伏せているし、マリーメイアに至っては俯いている所為で表情が見えない。きっと怒っているのだろう、これから始まる問詰にシュウジが身構えようとして……。
「――――叔父様、その気持ちは今も変わりありませんか？」
「え？　あ、うん」
「分かりました。では、シュナイゼル様」
「あぁ、分かっているとも」
聞こえてきたのは一つの問い、その気持ちに嘘はないかと語るマリーメイアにシュウ

ジは反射的に肯定した。すると、突然シュナイゼルは懐から携帯端末を取り出し、何処かへと連絡をしだした。
「私だ。あぁ、例の案件を……うん。それで構わないよ。それじゃあ、後は宜しく」
「お、おい」
簡単なやり取りをして通信を切り、満足そうな表情をするシュナイゼル。一体何をしたのか、問い詰めようとする前に……。
「蒼のカリスマ、シュウジ＝シラカワ。君の指名手配を本日を以て解消とする」
「――――へ？」
歴代最高額にして歴史上最悪のテロリスト、蒼のカリスマの消滅という事実にシュウジは目を点にして驚きを顕にした。
「意外かい？　けれど、これ迄君が地球にもたらした実績を考えれば妥当な落とし処だと思うけど？」
「で、でも……何で今さら？」
そう、今更だ。今更そんな指名手配にシュウジ＝シラカワが臆する事はない。喩え二つの地球全ての勢力が相手になろうと負ける事はないと自負している。如何なる敵が相手だろうと片手間で滅するだけの力が今のシュウジにはあった。
「これで、リモネシアの皆に会いに行けるだろ？」

「――――」

けれど、そんなシュウジの心の片隅にあった刺を――未練という刺を、シュナイゼルは簡単に引き抜いてしまった。

「サイデリアルとの戦い以降、君はリモネシアには決して立ち寄らなかった。自分を通じて彼等を巻き込むのを恐れた。だから君は誰にも頼らなかった。一人で、孤独に、戦う道を選んだ」

「……別に、一人で戦っているつもりはなかったよ。実際、戦っていたのはＺ―ＢＬＵＥの皆だったし」

「でも、以前まではその皆の中に君は入っていなかっただろ？」

諭すようにそう口にするシュナイゼルに、シュウジは今度こそ何も言えなくなった。一人で戦っているつもりはないと口にしても、実際にそうであった事はこれ迄あまりなかったから。

一人に出来ることは限られている。それはグランゾンという力を以てしても例外ではなく、これ迄の多元世界での戦いでそう思い知らされた時は幾度となくあった。その最たる例がアドヴェントによる強襲だ。

自分と関わりがあった所為で本来であれば無関係な人が傷付いた。その事実が今もシュウジの背中に重荷となっている。それをシュナイゼルはどうしても許せなかった。

「これが、私に……私達にできる最大限の報酬だ。そして遅くなったが――――シュウジ、私達の地球を守ってくれてありがとう」
「――――あ」
　ありがとう。何て事はないただの感謝の一言、けれどそんなたった一言でシュウジの体はこれ迄にない解放感が溢れてきた。それは楔からの解放で、無自覚な重荷からの釈放で……本当の意味で自由を手にいれた瞬間だった。
「……どうやら、喜んでくれたようだね」
「頑張った甲斐がありましたわ」
「まさか、これ、マリーメイアちゃんが？」
　まさかと思いマリーメイアへ視線を向ければ、年相応の無邪気な笑みを浮かべた少女が悪戯が成功した子供のようにピースサインをしていた。
「此処まで来るのに結構大変だったんですのよ。戦時中なのに有志の方々の協力を募る為に世界各国を回ったりするのは。途中で捕まったりしましたし」
「せ、世界を回って見識を広める為って……」
「勿論、それもありますわ。ですが、恩人に恩を返すのも私の旅の目的の一つだったんですのよ」
「ま、前に一度会ったときはそんなこと一言も……ブロッケンだって！」

「はい。驚いて戴こうと思って隠してました！」

そう言ってウィンクするマリーメイアに何故だかトレーズの面影を見た気がした。自分の為に世界を回り、署名を集めて蒼のカリスマの無罪を訴えるマリーメイア、年幾ばくもない少女がそんな活動していたなんてついぞシュウジは気付けなかった。否、気付く暇がなかった。

「勿論、これは私だけの成果ではありません。ナナリー様やリリーナ様、マリナ様、パトリック様、他にも多くの著名人達があなた様の無実を訴えてくれたんです」

――――いつの間にか、自分はまた多くの人達に助けられたのだと思い知る。破界事変から続く蒼のカリスマの恐怖、誤解とすれ違いから始まった敵対関係。根強く植え付けられた先入観をこれ迄多くの人達との出会いがそれを払拭してくれた。

嬉しい……よりも、戸惑いの方が大きい。いきなり蒼のカリスマは世界の敵ではないと言われても一体どれだけの人が納得してくれるだろう。確かに次元獣やインベーダーに襲われている街や国に武力的介入はしたことあるし、それを助けられたと受け止める人もいるだろう。けれど、これ迄何度も地球の人々と敵対してきたのもまた事実で……。

「シュウジ、もういいんじゃないかな？」

「シュナイゼル……？」

「君は、君が思っている以上に君に救われている人間がいる。確かに過去は覆らないし、無かった事にはできないさ。けれど、それと同じくらい誰かが君の事を感謝している。その事を認めてもいいんじゃないかな？」
　シュナイゼルのその笑みにシュウジは漸くそうであっても良いと、思えた気がした。
「シュナイゼル」

「うん？」
「俺さ、お前が苦手だったよ。腹黒でなに考えているのか分からなくてさ、その癖裏で色々暗躍してて、時々とんでもないこと企てて、人を振り回して……正直、面倒くさい奴だって思った時もあった」
「い、言ってくれるね」
「でも、さ。だからこそ言えるよ。お前がいてくれて、お前と友達で――――良かった」
「ありがとうシュナイゼル。俺、お前が親友で良かった」
「それは、此方の台詞だよ」
「マリーメイアちゃんも、ありがとう」
「それは、此方の台詞ですわ」
　笑い合う三人、これが最後のやり取りであると分かっていても今はそれを忘れて笑い

あった。
　そんな彼等をトレーズ＝クシュリナーダが静かに見守っていることを誰も知ることはなかった。

◇

「じゃあ、俺、行くよ」
「あぁ、シオニー――――いや、彼女に宜しく伝えてくれ」
「叔父様、どうか。お元気で」
　暗かった夜は明け、朝陽が水平線の向こうから顔を出してくる。波打ち際にやって来たシュウジ達は此処を最後の別れの場とした。
　ワームホールからグランゾンを呼び出し、出発の準備をする。もうこれで彼等との再

会はないのだと極力考えないようにしながら、シュウジはグランゾンの足下に歩いていく。
　これで、本当におしまい。もう二度と会えないという確かな予感を抱きながらもそれでも前に進むシュウジを。
「シュウジ」
「ん？」
「いつか、また会い。そしてチェスをしよう」
「シュナイゼル様？」
　それでもシュナイゼルは一つの約束を取り付けた。無理矢理に、半ば強制的に。お前は孤独なんかじゃないと、言い聞かせる為に。
　そんなシュナイゼルに感化され、マリーメイアもまた口にする。
「わ、私は！　最初からシュウジ様を、蒼のカリスマを人類の敵だなんて思ってません！　だって、貴方は何時だって自分に正直でした！　自分の為に行動して、自分の為に戦って、それはいつも誰かの気持ちに応えてくれていました！」
　インベーダーや次元獣に襲われた時もアロウズに人々が影で脅かされていた時も、何時だって彼は助けてくれた。
　自分もそうだ。操られ、言われるがままだった自分を彼は見返りもなく助けてくれ

た。サイデリアルに捕まった時もそうだ。親友の娘だからという側面もあっただろう。でも、立ち上がり立ち向かう貴方の背中は、私にとってのヒーローだった。

「シュウジ様！　お父様に会わせてくれてありがとうございます！　私、マリーメイアはシュウジ＝シラカワ様を――――お慕いしています！」

勢いのまま口にしたその告白にシュナイゼルは目を見開き、茂みに隠れ控えていたレディ＝アンは撤回させようと慌てて出てくるが、それを同じく控えていたカノンがレディ＝アンの腰に纏わりついて妨害していく。

思わず言ってしまった告白、恐る恐る目を開けたマリーメイアが目にしたのは。

「あぁ、またな！」

再会の約束。満面の笑みを浮かべてそう口にするシュウジにマリーメイアは見惚れていた。

嬉しそうだった。もう会えないと思っていた所に約束という言葉で彼との繋がりをもう一度出来た事にマリーメイアもシュナイゼルも満足した。

彼は一人じゃない。そう思えるだけの説得力があの笑顔にはあった。グランゾンに乗り込み空高く舞い上がっていくその光景を二人は決して忘れはしないだろう。

瞬く間に去っていくグランゾン。残されたのは登り往く朝日と水平線、そしてそれを眺めるシュナイゼルとマリーメイアだけ。

（シュウジ、これから訪れる君の苦難の道のりは私程度ではとても推し量れないものだ。でも、どうか今だけは忘れないでほしい。今の君にはリモネシアという帰れる場所があるという事を）

これ迄戦ってきた戦士に対して余りにも安い報酬。彼が望むのなら全てを召し上がる覚悟を持っていた。命も誇りも、そしてこの星すらも、シュナイゼルは捧げるつもりでいた。他ならぬシュウジの為にシュナイゼルは何時だって彼の味方であるつもりでいた。

でも、それはきっとシュウジ自身が望まない。彼は何よりも平和を尊ぶ人だから、本来ならば何処にいてもおかしくはない平凡な人間だった筈だから。

（いや違うな。平凡で、ありきたりな君だからこそ、私達は友達になれたんだ）

最初はただの好奇心だった。中華連邦で出会い、挙動が面白かったから接してみただけの、ただの興味本意のつもりだった。

それがゼロとのチェスを切っ掛けに好奇心は刺激され、彼がグランゾンのパイロットで蒼のカリスマだと知った時は如何にして彼を倒そうかとそればかり考えていた。

出会い、敵対し、打ちのめされ、満たされて、自分に無かったもの全てを与えてくれた彼は、その実誰よりも在り方が凡庸だと知った時は柄にもなく大声で笑ってしまった。

本当はチェスだけじゃなくもっと色んな遊びをしたかった。ボーリングやテレビゲーム、ボードゲーム、自分には知らないモノで一緒に笑い楽しみたかった。

「でも、それは次へのお楽しみにしておこう」

そう。自分達はこれで終わりじゃない。何せかの魔人から再会の約束を交わされたのだ。違えるには余りにも興味が深すぎる。

「さぁ行こう。我々が望む未来のために」

いつか果たされる約束の為にシュナイゼルもまた歩き出す。彼らが望むのは何時だって最上を超えた極上の未来なのだから。

◇

朝日がリモネシアの浜辺を照らしていく。その様子を眺めながらシオは一人、波打ち際を歩いていく。

あの戦いから少しだけ時間が流れた。地球皇国ことサイデリアルに囚われた自分達は無事に故郷であるリモネシアに戻る事が出来た。

相変わらず復興作業は滞っており、ライフラインも最低限なモノしか稼働してない祖国だが、それでも今のリモネシアには嘗てない穏やかな時間が流れていた。

こんなに気持ちが満たされているのはいつ以来だろうか。相変わらず資源も少なく観光しか自慢する所のない寂れた国で空腹や不便さに苛まされていても、それでも、この心の内で満たされる気持ちが失われる事は無かった。

それもきっと、彼に起因しているからだろう。思えば自分はこれ迄ずっと空回りをしていた気がする。自国の為に頑張ろうとしても、結局は騙されて裏切られ、自分一人ではとても今日まで生き残る事は出来なかった。

国を裏切り、世界を敵に回してもそれでも自分を助けようとした者がいた。彼が、自分を助けてくれた。彼が、自分とリモネシアの皆との橋渡しをしてくれた。彼がいたから今も自分達は此処にいる。一緒に生きていられる。

ラトロワがいる。ガモンさんがいる。お年寄りや子供達、皆がいる。……でも。

そんな中で唯一人、シュウジだけはここにはいない。彼が蒼のカリスマだから？　世界を脅かす稀代のテロリストだから？　それもある。けど、これ以上に彼が此処に来ないのは偏に自分達を守る為だから。

きっと、彼は二度と此処には来ない。自分達との繋がりはあの戦いを最後に断たれてしまった。会いに来れないのは、心が辛くなるから。

彼が優しいのはあの初めて会ったときから分かってた。日記を見た後は彼が何て事はないグランゾンという力を持つだけの唯の一般市民だという事も分かって、それでも戦うと決めた彼の強さも理解できた。

だから、彼はきっとこの国には戻ってこない。それが彼の決めた事だと言うのなら、黙ってそれを受け入れよう。

――――でも。

「逢いたいよぉ。シュウジぃ……」

もっと話がしたい。もっと一緒にいたい。笑って泣いて喧嘩して、何処にでもいるありふれた時間を皆と一緒に過ごしたい。

嗚呼、やっぱり私は浅ましい人間だ。一時は彼の帰還を喜んでいながら、いざ彼がこの世界にいると思えばこんな甘ったれた思考が浮き彫りになっていく。

こんな自分がどうしようもなく嫌いで、それと同じくらい胸に抱くこの気持ちも

……嘘じゃなかった。

逢いたい。どんなに願っても敵わないと知りながら、世界の終わりが間近に迫っていると分かっていながら、それでも逢いたいと願うシオニーだが。

ふと、波打つさざ波の音に混じって砂浜を踏み締める音が聞こえてきた。

誰かが来た。恐らくは島にいる誰かが自分を呼びに来たのだろう。もうすぐ朝の集会の時間だ。目尻に浮かぶ涙を脱ぐって何時ものシオに戻ろうと振り向いた先に待っていたのは。

「――――え？」

彼が――――いた。申し訳なさそうに頬を指先で掻いて、其処に立ち尽くしていた。

頭が混乱する。何を話せばいいのか分からない。気持ち（感情）が一杯になって言葉が出てこない。そんなシオの心情を察してか、先に口を開いたのはシュウジの方だった。

「その、散々迷惑を掛けといて……図々しいとは思ってるんですけど、その……情けない話で、行くところがなくって……」

其処にいるのは世界最悪のテロリストでもなければ地球最強の戦士でもない。唯の何処にでもいるありふれた一般人、シオニー＝レジスがよく知るシュウジ＝シラカワだった。

聞きたいことは沢山あった。問い詰めたいことも、これからの事も、一杯あった。

けれど、今はその全てがどうでもいい。だって、シオニー＝レジスにとって今この瞬間こそが彼女が待ちわびた瞬間だったから。
「あーくそ、こんな時なのに俺、何て言ったら良いのか分からなくて」
不安なのは彼も同じ。それがおかしくて、つい笑みが溢れてしまった。
「バカね。そんなの決まっている事じゃない」
今の私は、泣いているのだろうか。それとも、怒っているのだろうか。いや、きっと違う。
「お帰りなさい。シュウジ」
今の私は、きっと誰よりも笑っている。だって……。
「――――ただいま」
目の前にいる彼の笑顔は何よりも素敵に見えたのだから。

その２３１

Ω月#日

シュナイゼルとマリーメイアちゃん、多くの人達の協力もあって、世界最恐のテロリストとして恐れられた蒼のカリスマは世界の敵という分類から除外される事になった。皆には感謝している。本当なら協力してくれた人達一人一人に頭を下げにいくべきなのだろうが、世界各国の政府機関は未だ多元世界における最後の戦いに備えててんやわんやしていて、そんな彼等にいきなり頭を下げにいっても迷惑になるのは目に見えている。

故に彼等への感謝の気持ちはこれから訪れる最後の戦いで結果という形で返していこうと思う。というか、そうしろと言われた。他ならぬシオニーさん達に。

今、俺はリモネシアにいる。子供達や年配の方々、元大統領にジャール大隊の皆、ラトロワさんとガモンさん。そして……シオニーさん。皆が此処にいる。

嘗て蒼のカリスマ並みに世界中の敵として認識されていたシオニーさんも世界最後

の日を前にその名前を解禁している。未だシオニー＝レジスの名前は破界事変に於ける最大の敵対組織インペリウムの一人として認識されているが、蒼のカリスマの敵対の除名を機にシオニーさんも自らの本当の名前を名乗ることにしたという。

まぁ、認識はされていても別に今更世界政府がシオニーさんをどうこうしようとは考えていない事などシュナイゼルを通じて知ったから自分はいいのだが、矢鱈覚悟を決めて名乗るシオニーさんに少しだけ罪悪感を覚えた。

ともあれ、無事に再びリモネシアに戻れた俺はいつぞやの時と同じように街の復興作業を手伝いながら穏やかな日々を過ごすことになった。電力や地下水道、最低限のライフラインは整備されているが、未だリモネシアは国として機能できていない部分がある。

これからのリモネシアの皆の事を考えるればやるべき事がまだまだ沢山ある。時間は有限、皆に対するせめてもの恩返しの為にも可能な限り問題を片付けて行こうと思う。

――――なんて考えたらシオニーさんに怒られたでござる。そんな事をする暇があるならお年寄りや子供達の世話をしろって、強制的に仕事をブン盗られたで候。

ジャール大隊の皆、特にキール君やヤーコフ君はいつの間にか機械弄りに関する特殊資格を持っているらしく、何とも慣れた手付きで電力発電を自力で作成し整備修繕する

事が出来る様になったらしい。
　他にもイリーニャちゃんやトーニャちゃん、ナスターシャちゃん達女子組は料理の腕が劇的に向上していてお年寄りや子供達の面倒など家事全般を得意としているらしい。
　ラトロワさん曰く、サイデリアルに捕まりラース・バビロンに幽閉されていた頃に取得していた技能らしく、暇をもて余していた間そうして時間を潰していたらしい。マジか、ラース・バビロンもといサイデリアルってそう言う社会的保障制度もあったの？なにその社会に優しい侵略者。
　それでも資格を取得する際に結構落とされた子もいたらしく、中には試験官である尸空に勉学を教わったりもしていたとか。……マジか。
　突っ込み処は多々あるが、それでも未来に向けて自分に出来ることを精一杯やろうとするジャール大隊に俺も負けてられないと奮起する。最初こそは手を出す度にシオニーさんは休んでいて欲しいと渋い顔をするが、こうした方が落ち着くという自分の言葉に折れてくれて、最終的には「ま、その方が貴方らしいか」と認めてくれるようになった。
　ジャール大隊の皆、島の人達で少しずつ積み上がっていく復興の兆し、幾度となく壊されてきたリモネシアは今度こそその形を取り戻しつつあった。

Ω月α日

今日、俺は一つの恩を返す事が出来た。自分でそうハッキリと言えるほどに今日の出来事は濃厚だった。ガモンさん……本名を我聞京四郎、世界を旅していると宣う自分に護身術として空手を教えてくれた俺の師匠。

出会った当時は快活なじいさんにしか見えなかった彼は半ば強制的に空手を教え、度重なる無茶な鍛練によって自分を鍛えてくれた恩人。その人と俺は今日、戦った。

始まりは唐突だった。皆と変わらぬ日常を過ごし、仕事に励み共にご飯を食べる。そんなありきたりな時間を過ごしていた自分にあの人は前触れもなく口にした。

「――よし、なら戦るか」

なんの脈絡もなくそう口にするガモンさんに気付けば自分も了承していた。恐らく、ガモンさんは気付いていたのだろう。自分が――俺が、リモネシアにいられる時間はもうそこまで長くないという事を。

この組手の誘いはガモンさんからの最後の教え、不祥な弟子に送る最期の手解きと受け取った俺は周囲の声を余所にガモンさんからの誘いを受け取った。場所は波打ち際の浜辺、ガモンさんに最初の試練として訪れた海割りの場所だった。

呆れ顔のラトロワさんとシオニーさん、ジャール大隊の皆は賭け事を始め、子供達は俺達の応援をし、御老人達は怪我の無い様にと心配して……そんな、皆が見守ってく

れている中で始まった俺とガモンさんの最後の組手は始まった。
長い、とても長い攻防だった。時間的には然程経ってはいないだろうが、時間の感覚が鈍るほどにガモンさんから繰り出される拳、蹴り、技の数々、その全てが凄まじかった。きっと、次元将であるヴィルダークと戦っていなければ瞬きの内に倒されていると思うほどに、ガモンさんの繰り出す技は速く鋭かった。
そんなガモンさんと打ち合えたのはきっとこれ迄自分が体験してきた全ての出来事のお陰なのだろう。苦しい事、辛かった事、悲しい事、悔しかった事、それら全てが自分を此処まで鍛えてくれたのだと、今なら言える。そしてガモンさんはそれを気付かせてくれる為に俺をこの組手に誘ってくれたのだ。
戦いの結果は――――信じられない事に、俺の勝利となった。決め手は最後の一手、それまでガモンさんの技に圧倒されていた俺が出したのは最初に教わった正拳突き。それが俺とガモンさんの勝敗を分けた。
視界全てに埋め尽くされる拳の弾幕、避ける術も受ける体力もない自分に出来た無意識の一撃、その一撃がガモンさんのミクロよりも小さな隙の孔を穿ち、ガモンさんの胸元を叩く事が出来た。
傷だらけで満身創痍の自分に対して殆ど傷のないガモンさん、端から見ればどちらが勝者か歴然としているのにガモンさんは笑って自身の敗北と俺の勝利を高らかに謳い

上げてくれた。
瞬間、盛大な歓声がリモネシア中に響き渡った。賭けに負けたもの、決着に興奮するもの、大事なく終えた事に安堵するもの、反応は人それぞれで、けれどその何れもが俺達の戦いを讃えてくれたモノだった。
子供達から凄いと駆け寄られ、ガモンさんには年配の方々から労いの言葉を掛けられ、シオニーさんには心配を掛けた事へのお小言を言われたが、この時はそれすらも心地よかった。
そして、ガモンさん直々に言われた。お前はもう儂を超えていると、殺すつもりで放った最後の技、お前はそれを乗り越えるだけに留まらず、儂を殺さずに勝つことを選んだと。殺すか殺されるか、二つに一つしか無かった道をお前は第三の選択を以て凌駕したと、笑いながらそう語るガモンさんに誰もが驚愕した。
イヤなにサラッと物騒なこと言ってんのこの人ー!? その時のガモンさんの言葉に全員が目を丸くし、シオニーさんに至ってはスゲェ剣幕で怒鳴り散らしてた。いや本当、あのガモンさんに土下座を要求するんだもの、余程キレてたんだなぁ。
そんなシオニーさんの追求をかわしつつ、「冗談じゃ」の一言で場を和ませたガモンさんは自分に胸を張れと言ってその場を後にした。あの時は冗談なのかと流していたが、今になって思う。

最後の拳を交わす瞬間、ガモンさんの拳には確かな殺気が乗せられていた。殺すか殺されるか二つに一つ、もしガモンさんの言っていた言葉が真実だとするのなら、もしかしたらガモンさんは……死ぬつもりだったのかもしれない。いや、単に殺し合いを楽しんでいただけ？

未だにあの人の真意は読み取ることは出来なかったけど、それでも一つだけ分かることは……俺は今日、ガモンさんを超えることが出来た。その目論見も、企みも、己の力で以て覆すことが出来た。

ならば胸を張ろう。ガモンさんがそう口にした様に、嘗てガモンさんは言った。師を超えることが弟子に出来る最大の恩返しなのだと。なら、俺もこの日記に記すことでそれを誓いにするとしよう。今日という日を決して忘れない為に。

ありがとうガモンさん。俺を鍛えてくれて、俺を貴方の弟子にしてくれて。

俺は今日、一つ強くなりました。

ＰＳ．

因みにジャール大隊の中でラトロワさんを除いて自分が勝つ方に賭けてくれたのはナスターシャちゃんだけだったらしい。何で自分に勝つ方を選んだのか、不思議に思い訊ねたが五月蝿いと一蹴されてしまった。

まぁ、理由はどうあれ自分が勝つと信じてくれたのは事実なので嬉しくてありがとうと礼を言ったのだが、今度は罵声ではなく沈黙の蹴りが飛んできたでござる。

解せぬ。

◇

「おーいてて、全く、若者の相手は堪えるわい」

喧騒から離れた所で最後の仕事を終えたガモンは身体中弟子に打たれた体を擦りながら近くの足場に腰を掛けていた。

「そう言う割には随分楽しそうだったみたいでしたけどね。お義父さん」

そんな彼に声を掛けるのはジャール大隊という子供達の母、ラトロワだった。自身を

義父と呼ばれた事に少なからず驚きながらもガモンは嬉しそうに笑みを浮かべる。
「久し振りじゃのう、お前さんが今一度父と呼んでくれる日が来ようとは……これは、益々シュウジ君に感謝しなければならないの」
「本当は迷ったんですけどね。私も貴方も、共にあの人から離れた薄情もの、貴方は戦うこと以外に生き方を見出だせず、私もまた戦場以外に生きる術を見出だせなかった」
「それでもアイツは、息子は、儂らの為に、居場所の為にリモネシアに帰る場所を守ってくれた」
「だから、ですか？　貴方がシュウジを気に掛けたのは」
「息子が気に掛け、息子の死を誰よりも嘆いてくれたんじゃ、それを知らない振り出来るほど儂は人でなしでは無かったと言うことじゃよ」
　遠くでシオニーの説教の声が聞こえてくる。それをシュウジが苦笑いをしながら頭を下げ、それを周囲が揶揄してくる。ほんの数年前までは考えられなかった光景、それをもたらしてくれたシュウジに二人は慈しむように目を細める。
「儂は、親にはなれんかった。親のいない儂はただ拳を奮う事でしか生きられんかった。力を奮い、血を啜り、暴力を以て生を得る。その在り方は妻を娶り息子という宝を得ても変わることは出来んかった」
　思い返すのはこれ迄の自分、動乱の中で力を奮わなければ生きられない修羅の時代。

殺し殺され、その無限地獄でしか生きられなかった者が抱く獣の如き感情。

伴侶を得て、子供が出来て年を老いてもその在り方を変えることは出来なかった。そんな自分が嫌でガモンはリモネシアから飛び出し、傭兵としての生き方を選ぶことになった。

戦いに戦いを重ねてきたそんなある日、ある悲報がガモンの耳に入ってきた。リモネシアの壊滅、破界事変の頃に起きた大災害、それによって唯一の肉親が死んだことにガモンは言い知れない恐怖を覚えた。

急いでリモネシアに戻ってきた彼の目に飛び込んできたのは降り頻る雨と即興で作られた墓場、そしてその中で膝を地につけて絶望の中で倒れる青年の姿だった。

「息子の墓の前で泣くシュウジ君に、思い知らされたよ。儂は自分の在り方を言い訳に家族を捨てた腰抜けなのだと。そしてそれは正しかった。何せ儂はシュウジ君とは違い涙の一つも流す事が出来なかった」

息子が死んだ。その事実に涙すら流せず呆然とするしかなかった自分に対して、シュウジはその後生き残ったリモネシアの人々の手で息を吹き返した。暖かいスープを口にして再び立ち上がる力を得た彼はグランゾンと共に戦う道を選んだ。尤も、彼があの蒼のカリスマと気付けたのはもっと後の話なのだが……。

そんな獣である自分と違い、己の意思で生き方を決めた彼の姿は何処までも眩しく見

えた。そんな彼に羨望し、同時に嫉妬したガモンはこの日を境にある計画を企てる。即ち、己を終わらせてくれる者を育て上げるという計画を。
「けど、そんなあんたの思惑をシュウジは乗り越えて見せた」
「本当、凄い男じゃよ」
　しかしそんな己の企てもシュウジは完全に超えて見せた。殺すか殺されるかだけしか残されていないあの刹那の選択を〝死なさず殺さず乗り越える〟という有り得ざる第三の選択を以て凌駕された事にガモンは自身が負けた敗因を知る。
　結局、ガモンはそれしか知らなかった。戦いと血に狂い、獣でしかなかった自分では自らの意思で可能性を生み出す者に勝てはしないのだと。殺す気で放った己の業、それを見切られた時点で己の敗北だとガモンは認めた。
「それで、これからどうする？　死ぬつもりだった命を拾った手前、そうそうに投げ出すことは出来ないと思うが？」
「そうだな。いい加減逃げ回るのは止めよう。リモネシアの為に、皆の為に、何より自分のためにこの命を使う事にするさ」
「自分の為？」
「情けない事に、教わったのさ。嘆くのも挫けるのもいい、だがそのままでいることだけはダメだと、拳を通して彼に教えられたわい」

胸元に刻まれた小さな打撃の痕、拳の形となってガモンの体に刻まれたその痕はまるで脱け殻だった自分に力が注がれている様な暖かさを感じる。きっと、これがシュウジを彼処まで強くさせた力の源なのだろう。自分と同じ武を得ながら、自分とは全く異なる道を選んだシュウジにガモンは羨ましく思い、それ以上に嬉しく思えた。彼ならば自分のような修羅に堕ちることもない、当たり前の事を当たり前に大切に出来る彼ならばきっと———。

「———さて、皆が呼んでいるな。そろそろ私達も戻るとしよう」

「あぁ……」

離れた所から自分達を呼ぶ声が聞こえてくる。先行くラトロワの後に続こうとガモンが一歩歩み出した時、ふと視線を感じた。

振り返る先には……何もなかった。あるとすればそこは嘗て息子が営んでいた店があった場所、視線なんてあるはずがない。気配なんてあるわけがない。

でも。

『親父』

『アナタ』

『『おかえりなさい』』

何故だろう。心の奥が熱くなり、涙が流れるのは。

――幻だったのかもしれない。幻覚で、その全てが嘘で、自分の都合のいい妄想が偶々耳に入ってきただけかもしれない。
けれどこの日、我聞京四郎は確かに――救われたのだ。

深い深い奈落の底、星の光すら届かない深淵でソレは静かに嗤う。
もうじき、全てが終わる。それを理解し、熟知しながらもソレは既に止まる事はない。
狂い、歪み、爛れたおぞましい願望。その果てに待つ終末を前に。
「あ、動いた」

その脈動は静かに蠢いていた。

その２３２

「そうか、蒼のカリスマ……シュウジは遂に自由の身になれたか」
地球連邦に属するとある軍事基地、格納庫で機体のチェックを行っていたアムロはブライトから告げられる話の内容に安堵の息を吐く。
元々、蒼のカリスマがテロリストとして知られた発端は嘗てのマクロスギャラクシー船団の一員、シェリル＝ノームの元マネージャーであるグレイス＝オコナーによる策略から始まっている。それ自体は彼女達の企みが明るみに出て、更にはシェリルとランカの二人が彼の誘拐を否定しているから当時のＺＥＸＳＩＳは然程気にしてはいない。
それ以降の対立もその殆どが蒼のカリスマから仕掛けたモノではなく、時にはＺ―ＢＬＵＥ（自分達）と手を組んで地球を狙う敵対勢力と共に戦ってくれた事も多々あった。
時獄戦役で敵対したのはアドヴェントの洗脳によるモノだし、復活した後だってサイデリアルから地球を救う為、独自に色々と動いて此方に有益な情報をもたらしてくれた。
なにより蒼のカリスマが皇帝アウストラリスこと次元将ヴィルダークを倒した事で

得られた平穏、これが蒼のカリスマを地球の敵対者から除外された最大の理由であった。
「リリーナ＝ピースクラフト、マリナ＝イスマイール、ナナリー＝ヴィ＝ブリタニア、彼女達が蒼のカリスマに罪はないと呼び掛けてくれたのが大きいな」
「更に驚きなのが彼女達の何れかも彼と面識があった事だな」
リリーナ、マリナ、ナナリー、何れも現在の地球連邦の政治体制に大きな影響力を持つ者達で一度シュウジと顔を合わせた事のある人物達。そんな彼女達が蒼のカリスマは悪人ではないと断じた事も今回の決定の大きな後押しになった。
これ迄彼が辿ってきた旅路、孤独に思われてきた彼の歩みが報われたことにアムロは自分の事のように嬉しく感じた。
「まぁ、俺としてはこのままリモネシアで大人しくして欲しい所だがな。彼の行動は全てが悪意から来るものではないと知っていても……些か刺激が強すぎる」
嬉しく思うアムロに反し、ブライトの表情は何処か暗く、そして窶れているように見える。まぁ、分からない事はない。何せこれ迄彼が見せた力は個人が抱えるには剰りにも強大で、いっそ清々しい程に絶対的だった。時獄戦役の終盤、アドヴェントによる洗脳された身で致し方なかったとは言え、当時の蒼のカリスマと敵対した時は命が幾つあっても足りないと思えるほどに彼とグランゾンの力は圧倒的だった。

　その後のサイデリアルや敵対組織との対決に於いても彼の魔人達の強さは頼もしさ以上に恐ろしくもあった。その最たる例がテレサ＝テスタロッサの一言によってもたらされたあの惨劇である。
　別にシュウジに非があるわけではないし、責めてるつもりもない。当時の状況から彼の行動や選択に間違っている部分は無かったし、単独行動をするときも納得のある説明があった。もたらした戦果と情報、その悉くが此方の胃の許容量を超えてきただけである。
「彼、しれーっと言ったそうじゃないか。ラプラスの箱の謎を、クロノの教えの秘密とやらを、格納庫で、雑談のように」
　普通なら渋りに渋っていざという時に暴露するべき情報を井戸端会議での雑談のネタ代わりに口にする彼に当時のゼロを含んだ各艦長達が両手で顔を覆ったり、天井を見上げたりするなど、当時は辟易とする思いを体験した。
　ある意味問題児よりも問題児なシュウジにブライト達の胃は悲鳴を上げていた。何より厄介なのが彼にとってそう言った情報が本当にその程度の価値でしか無いことで、其処に一切の悪意が無いことである。
「そう言うな。彼がそう言うつもりで口にした訳ではないのはお前が一番分かってるだろ？　それに、これから先に待つ戦いで彼が一番重要な役割を担っている事も……な」

そう。アムロのいう通りこれから待つ戦いはこれ迄とは一線を画する超規模の大戦。多くの種族が滅びを退ける為に抗う前代未聞の領域、その戦いの最前線に立つのはグランゾンと彼だ。

既に猶予はそんなに残されていない。様々な機関が様々な手段を用いて少しでも滅びの運命を変えようと足掻いている。今アムロが最後の調整に携わっている機体もその手段の一つ。

型式番号ＲＸ―９３―ν２。機体名はＨｉ―νガンダム、これから迎える戦いへ挑む為の……アムロ＝レイの最後の専用機体である。

「ベルトーチカか、突然νガンダムを改修したいと言い出した時はどうなるかと思ったが……良い仕事をしてくれる。どうだアムロ、いけそうか？」

「あぁ、行けそうだ。この分なら並の相手にならそうそう遅れは取らないだろう」

シュウジと行動を共にしていた頃、空いた時間で彼と幾度となくシミュレーションでの特訓を経て純粋なパイロットとして腕を上げたアムロは既にνガンダムの反応速度すら上回り、その実力は数あるＺ―ＢＬＵＥのパイロットの中で頂点に位置している。

シンやカミーユ、キラといったガンダムパイロットだけでなく嘗てシュウジと対峙した多くのロボットパイロット達がその技量を劇的に高めている。

――まるでシュウジ＝シラカワの成長に引っ張られるように。確証はない、だがそ

う思える事例が既に二つ存在している。
兜甲児のマジンガーと流竜馬達のゲッター、次元力を用いて引き出された二体の力は単純に計算しても国連の全戦力よりも上回っている。それこそ、あのグランゾンと比肩出来るほどに。
そんな超級の戦力を用いらなければならない戦いが、もう間近に迫っている。なのに不安はあっても恐怖を感じていないのはどういうことなのだろうか。
度重なる大戦を経て、自身の精神に異常が出てきたか、或いは滅びの運命を心の何処かで受け入れているのか。……いや、違う。
「アムロ」
「ん？」
「頼りにしてるぞ」
「あぁ、此方こそ頼らせて貰う」
彼には何を以てしても守るべき女性がいる。自分の帰りを待っていてくれる人がいる。
ブライト＝ノア、彼もまた運命という壁に挑む戦士の一人だった。

◇

夜の帳が降り、星と海が一望できるその場所をシオニー＝レジスは歩いていた。人の喧騒から離れ聞こえてくるのは小波の音だけ、嘗て無い穏やかな時間に自然と頬が緩んでしまう。

外務大臣として各国を飛び回っていた頃には想像できなかった。心は殺伐としていつも大国に祖国を搾取されないように必死に立ち回り、常に余裕がなく何かに怯えて追い詰められていた。国を思うが故の責任、その圧力に負け、アイム＝ライアードの口車に乗せられ、自らの手で故郷を一度滅ぼしてしまった。

守りたかった故郷を壊し、爪痕を残し、何もかもが嫌になった。死にたいと思っても死にきれず、結局は覚悟を決められなかった自分。果たして少しはそんな自分から変わ

ることは出来たのだろうか、
（なんて、こんなことを考えている内はきっと変われてないんだろうな）
伸びてきた髪を弄り、過去に思いを馳せる。自分のしてきた事は許されない事だ。一度はシオニーという名前を捨てたのにそれを今一度名乗るのはそんな嘗ての罪に対する自分なりの向き合い方の一つだから。
シオニー＝レジスは自分の罪を忘れない。けれど、それは決して負い目からくる贖罪の為ではない。これから変わらずに未来を生きるためのシオニー＝レジスの決意の現れだった。
そして、そう思わせるだけの出来事をシオニーは体験できた。
『シオニー＝レジス。泥にまみれても尚、お前という女は美しい』
嘗てこんな自分に美しいと呼んでくれた次元の将、彼の言葉に恥じない生き方をしていく為にも先ずはこの名前を堂々と名乗る事から始めよう。それが出来て初めてシオニー＝レジスは再び自分の道を進むことが出来るのだから。
「……ん？　あれって、シュウジ？」
気持ちを新たにしたシオニーがそろそろ皆の所へ帰ろうかとした時、彼女の視界にシュウジの姿が映った。静かに佇み水平線の方へ視線を向けるシュウジ、一体何をしているのか、気になったシオニーは彼の元へ歩み寄っていく。

「シュウジ、そこで何をして――――」

声を掛けて何か話そう。そう思って近付いていくシオニーの足が……止まる。何故だろう、目の前にいるのはシュウジの筈なのにシュウジとは思えない。そんな矛盾した気持ちを圧し殺しながらシオニー＝レジスは目の前の男へ問い掛ける。

「貴方は……誰？」

「――――こうして貴方と話をするのは、これが初めてですね。初めましてシオニー＝レジス、私の名はシュウ＝シラカワ、この度は貴方に言いたいことがあって彼の体を借りて参上しました」

シュウジじゃない。目の前にいる男はシュウジの筈なのに致命的な迄に異なっている。戸惑うシオニーとは対象にシュウ＝シラカワは何処までも冷静だった。

その２３３

「シュウ＝シラカワ？　シュウジじゃ……ないの？」
「ええ、今現在。彼の体の主導権は私が握っています。今の我が半身は眠っている様なもの、ここでの話は彼に聞かれることはないのでその点は安心してくれて結構です」
　目の前のシュウジであってシュウジでないもの、彼を半身と語り、此方に安堵させるような気遣いを見せてくるが……何故だろう、全く安心できない。
　少くとも無防備に話し掛けて良い相手ではないことを理解し、無駄なことだと思いつつもシオニーは警戒心を抱きながら油断なく話を促す。
「えっと、そのシュウさんが私に言いたいことって何ですか？　私、貴方に目を付けられるような事をした覚えはないんですけど……」
「なに、そう謙遜する必要はありません。今回私が貴方の前に現れたのはこれ迄シュウジを想ってくれた事、彼の為に命を懸けた事、その感謝と忠告を伝えにきただけですので」

「は、はぁ……」

感謝、と目の前のシュウはそう言うが、如何せん胡散臭さが半端じゃない。本当に感謝しているつもりなのかもしれないが、仕草と口調がまるで合わさっていない。これまで外交関係で本音を隠す為の技術はシオニーもある程度持ち合わせているが、目の前のシュウなる男はそんな比ではない。イメージとして一番近いのはシュナイゼル位だろうか、人の心を此処まで隠し通す男にシオニーは更に警戒心を募らせていく。

「半身、シュウジ＝シラカワは随分と貴女――――いや、このリモネシアに住まう人々に心開いていましてね。先ずはその事について感謝させて頂きたい」

「え？」

「本来、彼は一人孤独に戦いを積み重ねていく筈だった。リモネシアに立ち寄らず、常に世界から追われ、狙われる筈だった彼は貴女とこの国に住まう人々と触れ合ったことで心が休まり、過酷な状況下でも戦い続ける事ができ、インペリウムに属する貴女を救出するという目的を抱くことができた」

それは、もしかしたらあり得たかもしれないｉｆ。リモネシアに立ち寄らず、世界に自分とグランゾンの存在を知られたら、立ち向かう力も決意もなしにシュウジはグランゾンと共に戦い続けなければならなくなっていた。敵対者しかおらず、理解者も共感してくれる者も持ち得ないまま戦い続ける日々、その先に待つのは

行き止まりと言う名の破滅（DEAD END）、新たな黒歴史が生み出されるのを未然に防げたことに当時のシュウは安堵した。

強い力を持つものは孤独を強いられる。けれど、今回のシュウジはそうはならなかった。共に戦う戦友はおらずとも、支え、想われる親友を得て強い想いと無自覚ながら覚悟を抱き、大切な人やモノを失い苦難にまみれながらもそれでもと立ち上がる強さを手に入れた。

その切っ掛けとなった女性……シオニーにシュウは大きな感謝の気持ちを抱いた。今の半身が此処まで来れたのも、彼女の想いが起因の一つとなっているのだから。

故に、シュウ＝シラカワもまた決断する。他ならぬ半身とシオニーの為に。

「シオニー＝レジス。貴女のシュウジに対する気持ち、とても嬉しく思います。浅ましくも矛盾し、それでも純粋な気持ち、それもまた一つの愛の形なのでしょう」

「へ？　あ、愛ッッ!?」

胡散臭さ全開の男から紡がれる愛という言葉にシオニーは警戒心すら忘れて動揺する。

「故に、一つだけ忠告を。これ以上、彼に関わるのは止めなさい」

「――――え？」

「彼は、既に一つの決断を下した。一つの世界――――いや、たった一人の少女の未来の為

にシュウジは自身の存在そのものを懸けた」
何故だろうか……嫌な予感がする。シュウが口を動かす度に、言葉を一つ紡ぐことにシオニーの胸の中にある不安が大きくなっていく。
「彼が選んだ選択は世界からの除外。史上最悪の大崩壊から自分のいた世界(にこ)を守る為に、彼は世界から抹消される道を選んだ」
止めて
「既に、彼のいた世界に彼を知るものはいないでしょう。全ての記録にも、全ての記憶から、シュウジ＝シラカワという人間の存在は消えてなくなりました」
止めて
「時空修復、それも全宇宙を巻き込んだ大崩壊を防ぐ程の超規模、理を修復し、多元世界は多元ではなくなり、世界は元ある形に戻っていくでしょう」
心音が、早くなっていく。目の前の男から淡々と紡がれる事実にシオニーの動悸は激しくなっていく。これ以上言わないで欲しい、そう願っても現実は止まる事なく。
「――――しかし、シュウジ＝シラカワにはもう戻る場所はない。時空修復により閉じられた理の壁はもう二度と、永遠に開かれる事はない。時空修復が施された瞬間、彼は全ての世界から弾かれる事になり」
「同時に、多元世界に在る全ての人々(アカシック)の記録(レコード)と記憶からシュウジ＝シラカワは抹消され

るでしょう」

「――――」

その真実はやはり何処までも残酷だった。

その２３４

シュウジ＝シラカワは幼馴染みの世界と彼女の夢と未来を救う為、文字通り全てを投げ捨てた。嘗ての痕跡を、これからの道程も、それら全てを白河修司へと明け渡し、自らの意志で戦う道を選んだ。グランゾンという強大な力を得たことで手放したモノ、それは――――自身の存在の証明。

シュウジは強くなった。短期間の内に度重なる激闘死闘を経て、数年足らずに多元宇宙の中でも屈指の実力者へと成長と進化を遂げ、強く――――否、強くなりすぎた。

その強さの質と量は既に一つの星に収まる許容量を超え、本来（原初）の力を発動すれば宇宙全体が悲鳴を上げる怪物に成り果てる。シュウジ＝シラカワはもう、人と呼ぶには剰りにもかけ離れた力を手にしてしまっている。

そして、その道を選んだシュウジにはもう戻るべき場所も、帰るべき世界も存在しない。終わりなき闘争への参入、人類を含めた知的生命体を脅かす怪物達へのカウンターとしてシュウジは戦い続ける事を決めた。

元の世界を手放した者に戻れる道は最早ない。例え全宇宙を巻き込んだ大崩壊を乗り越えても其処に彼がいられる世界はなく、シュウジは弾かれる様にその世界から消え失せるだろう。

そして、その後に待っているのは全ての世界の修正。嘗ての形へ戻すために行われる次元修復は本来のあるべき世界へと戻していき――――そして、シュウジ＝シラカワの痕跡を抹消するだろう。傷付いた痕を治す人体の狭窄作用の様に、綺麗に跡形もなくシュウジという人間の存在の痕跡は抹消されるだろう。

それが、シュウジが選んだ道、永遠に続く孤独の道程である。

「――――以上が、これから彼に待つ結末のあらすじです」

満天の星空の下で告げられる真実、キラキラと瞬く星々とは真逆の薄ら暗く重いソレにシオニー＝レジスの鼓動は早くなっていく。シュウジが選んだ現実と未来、宇宙の大崩壊という未曾有の危機を乗り越えても報われない結末、それらを余すことなく伝えられたシオニーは自身の足下が崩れ落ちる錯覚を覚えた。

彼がこれからも戦い続ける？　宇宙の大崩壊を防いでも、決して報われる事のないその終わりにシオニーの感情はより大きく膨れ上がっていく。

何故、彼がそんな目に遇わなければならないのか。

何故、彼に其処までの地獄を味あわせるのか。

何故、彼を忘れなければならないのか。
「――――どうして」
「……」
「どうして、そんなに淡々と言えるの。貴方にとって彼は、大事な半身なんじゃないの？　どうして其処まで彼を、シュウジを追い詰めるの！」
シオニーが抱く大きな感情、突然の真実を告げられた彼女の胸中には怒りという感情で渦巻いていた。何故、目の前の男は此処まで冷徹にいられるのか。シュウジを半身と呼んでおきながらどうしてそこまで無頓着でいられるのか。事実だけを述べるシュウ＝シラカワにいよいよ我慢の限界へと差し掛かってきた時。
「それは、私が彼にそうなる様に造ったからです。正確には、私が生み出した私の因子を受け継いだデザインベイビー（人工生命体）の第三世代に当たる最高傑作ですが」
「――――え？」
「彼は、私が造った創造物。その末裔と言ったのです。末裔とは言え彼は私が生み出したもの、で、あるならば――――」

〝彼をどう扱おうとも、私の勝手でしょう？〟

　シュウ＝シラカワがそう言い切る直後、彼の頬はシオニーの手によって張られた。パシンと乾いた音は小波の中へと消えていく。
「……ふざけないでよ」
「……」
「彼の命、人生を弄んで、どうしてそんなことが言えるのよ！　彼は、シュウジ＝シラカワは貴方の玩具じゃない！」
　冷たい眼光、頬を張られたまま向けられる氷のような冷たいその眼で睨まれているにも拘わらず、シオニーの怒りの叫びは止むことはない。
「私は、貴方を許さない。彼を追い詰め、彼を利用し――シュウジの人生を歪めて弄んだ貴方を、絶対に、絶対に許さない！」
　シュウジはシオニーにとっても大事な人だ。リモネシアの為に戦い、世界の敵になろうとも、彼はいつだって自分の気持ちに従い戦ってきた。痛ましく、それでも嬉しく思えた彼の献身を、その全てが目の前の男が望んでいたモノだと思うと、悔しくて堪らなくなる。
　目の前の男がどれだけ規格外だろうと、シオニーは自分の言葉を撤回したりはしない。今ここでこの男を糾弾しないで、誰が彼の想いに報いるというのだ。シオニー＝レジスはシュウ＝シラカワを許さない、彼の身体で、彼の顔で、好き勝手に振る舞うこの

男を――許すわけにはいかない。
一通り叫び終えた後、待っていたのは沈黙だけだった。シュウは未だに此方を見据えているだけ、報復しようものなら自分なんて抵抗すらできずに叩き潰されるだろう。恐怖と怒りの感情が溢れ涙が溢れてくる。震える体に力を入れてそれでもシオニーはシュウを睨み付ける。
どれくらいの時間が流れただろう。聞こえてくるのは小波と海風の音と鈴虫の鳴き声だけ、何時までこうしていればいいのか、感情の波も治まり始めてどうすればいいか分からなくなってきたシオニーがそろそろ限界に差し掛かってきた時に――――。
「……成る程、彼が入れ込む訳だ」
ふと、シュウ＝シラカワから笑みが溢れた。
「――――え？」
「そんな貴女だからこそ、彼は助けたいと願い行動した。……本当に、運が良かった」
「何を……言って……」
「シオニー＝レジス、貴女は一つ勘違いをしている。確かに我が半身シュウジ＝シラカワは私が生み出した者の末裔、彼等からすれば私は創造主。……ですが、私は彼の行動に助力したことはあっても、その行動と意思に介入した事はありません」
「なっ！　そ、そんな事、信じられる訳――――」

「最初に言った筈ですよ。貴女に、この国の人々に出会えたのは幸運だったと」
　その言葉の意味を理解して、シオニーは今度は別の意味で憤慨する。要するにこの男は自分という人間性を試したのだ。誰かの為に、シュウジの為に心の底から怒れるか。ワザワザこんな回りくどいことをして。
　態度こそが先程よりは軟化しているが、上から目線での物言いは何一つ変わっていない。こんなやつの血をシュウジは受け継いでいるのか、笑えない冗談にシオニーが何か物言いをしようとするが。
「ですが、だからこそ貴女はこれ以上踏み込まない方がいい。我が半身の望みは、あなた方の幸せなのだから」
「――――え？」
「私からは以上です。ここから先は貴女自身が決めてください」
　そう言って、ニヒルな笑みを浮かべてシュウ＝シラカワは背を向ける。最後に残した意味が理解できず訊ねようとするも彼の気配は既に消えていた。
「――――ん？　あれ？　俺、何でここに？　確かさっきまでグランゾンの整備をしていた筈だけど……て言うか、何か頬が痛い？」
　それはシオニー＝レジスがよく知る彼だった。何故自分が此処にいるのか混乱している様子だが、それでも変わらないでいてくれたシュウジを見てシオニーは自然と笑み

を浮かべた。
それと同時に、シオニーは自分の本当の気持ちにも気付けた。どうして先程自分は彼処まで感情を顕にしたのか、漸く気付けた気がした。
いや、本当はもっと前から分かっていた筈だった。それを見ないようにして、心に蓋をしてその感情と向き合わないようにしてきた。自分と彼は違う人間だと、彼と私とでは決して結ばれてはいけないと。
でも、ガルガンティアで一度死んだ彼を見て、胸の奥が裂けるように痛かった。悲しくて辛くて苦しくて、どうにかなりそうだった。
そんな彼が生き返って自分達の為に戦っていると知って、どうしようもなく嬉しかった。そう、シオニー＝レジスの感情は何時だってシュウジに振り回されてきた。まるで、乙女の様に心を弾ませてきた。
自分と彼はきっと結ばれてはいけない。それは私だけでなく、きっとシュウジもそう思っている。自分の辿る結末を知って、それでも尚進むと決めた彼に私はいつか……付いていけなくなる日がきっと訪れる。シュウ＝シラカワが言った言葉はきっと、そう言う意味が込められているのだろう。
でも、それでも、この胸に抱く気持ちに――――もう、見て見ぬふりは出来ない。
「ねえ、シュウジ」

「うん？」
「私、好きです。貴方の事が」
だって、この気持ちに嘘はないのだから。
素の表情のままで固まるシュウジ、そんな彼に私は――――恋をしている。

◇

※月δ日
――――――なんだろう。書くことがないや。いや、あるにはあるんだけど……こう、言葉が上手く出てこないや。
あの日、後から知った話だとどうやらシュウ博士は久し振りに俺の体を勝手に使って

シオニーさんに色々言ったらしいのだ。具体的に言えば、俺の待っている未来について。

何でワザワザそんな事言っちゃうのかなぁ、まぁ博士なりの心配の仕方なんだろうけど、言い方ってあるよね。変に遠回しに言って自分を悪役に仕立て上げようとする辺り、シュウ博士も中々の不器用な人だ。

今はグランゾンの中で大人しくしてくれている。思えば博士には色々と世話になっているから、いつかその恩を返したい。本人を模した擬似人格、故に気にかける必要はないのだと当人は言うが、そんな事は関係ない。擬似人格だろうと博士には助けて貰ってばかりいるのだ。やはり人として一人前を気取るにはそう言った事をハッキリ出来る人間になりたいよね。

あとは……シオニーさんの事だけど、ね。どうしたらいいんだろう。自分、告白したいと思った事はあっても告白される事なんて一度もないから、どうしたらいいか全く分からんでごわす。

あの日、シオニーさんから突然の告白を受けた自分は呆気に取られてしまい、一瞬何がなんだか分からずパニクっていた。何かを言った方が良いのではないかと思ったが、喉はカラカラになって口も良く動かず、結局自分はシオニーさんが立ち去るのを眺める事しか出来なかった。

なんで、シオニーさんは俺なんかに好きだなんて言ってくれたのだろう？　俺、心当たりなんかまるでないんだけど？

それに……俺はあの時、なんて応えれば良かったんだろう？　ただ断るのも違う気がするし、受け入れるのも……うーん。

ただ、シオニーさんの方は何というかスッキリした様子だった。あの後自分と接した時もいつもと変わらなかったし、うん。いっそあの告白が夢だったのではないかと思えるくらい普段通りだった。

シオニーさんは俺の返事を待っている？　でも、今の自分にはそんな事出来るほど余裕があるのだろう。

――――先日、トライア博士から連絡が来た。グランゾンを通して寄越してきたその連絡の内容は大崩壊の期日と対抗策の準備の完了。

二週間後、地球人類は多元宇宙最後の戦いに挑む。俺も、いよいよ腹を括るときが来たようだ。

答えは未だに出てこないけど、せめて一生懸命考えよう。それが正面から気持ちを伝えてくれたシオニーさんに対するせめてもの礼儀だと思うから。